

実験室のフラスコ (2L)

にえる

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ハーメルンの便所です。

pixivに虹鱒のみマルチ投稿しました。

目次

126

原作：ペルソナ4 『頼れる大人のP4』 (完)	1
原作：名探偵コナン 怪奇！ ばらばら 殺人事件！ (完)	29
原作：デスノート ショーギノート (完)	51
原作：Ib Ibではのぼのハッピー エンド — 第25話 — (完)	70
原作：メガテン3 ズツ友のメガテン3 (完)	89
原作：ハリー・ポッター ハリー1	
ハリー3	162
原作：魔法先生ネギま！	172
原作：Fate/Zero	192
原作：スパロボA	198
原作：GANTZ 無限クレジット・ガン ツ1	206
原作：魔法少女リリカルなのは ルループシナイ	254
原作：魔法少女リリカルなのは ル日記	268
原作：とある魔術の禁書目録、とある科学 の超電磁砲 とある科学1	334

原作：DEAD SPACE Chapter 1—Chapter 4	378	原作：オーバードール	896
terl—2—3—Interlude		原作：デジモン デジモン1	937
原作：エヴァンゲリオン新劇場版 エヴァンゲリオン あつくん	433	原作：Fate/Grand Order	948
原作：めだかボックス めだ箱1	497	原作：女神転生、他 愚者の盆踊り1	998
原作：ポケットモンスター ポケモン1	538	ぐしゃぼん2	1084
ポケモン2 (改訂前)	559	ぐしゃぼん3	1132
原作：まほらば まほらば1	798	原作：ポケットモンスターオメガルビー	1167
原作：オーバードール ユグドラシル	837	アルファサファイア ポケモンORAS	1206
(完)		原作：攻殻機動隊 コーかくきどーたい	1206

IS	攻殻機動隊2	1235
B	こーかくきどーたい3	1248
1354	攻殻機動隊4	1257
1337	Fate/Grand Order	1270
A	Fate/Grand Order	1298
1323	原作：東方Project 東方短編	1298
1337	(上)	
A	原作：IS ハイファイニット・ストラトス	1337
1337	スゝ あつくん、ISに関わるつてよ	1337
1337	(完)	
1337	IS	
1354	B	

IS	IS (完)	1413
C	原作：ペルソナ3 頼れない大人がいる	1421
1421	P3	
1464	原作：ワンピース わんぴーす1	1464
1510	原作：女神異聞録デビルサバイバーOC	1510
1510	デビサバ1	
1510	原作：鋼の錬金術師 ハガレン1	1510
1551	原作：Project .hack	1551
1562	どつと吐く自由1	1562
1591	原作：魔法少女リリカルなのは リリカル	1591
1591	ループ1100	
1591	1100	

原作：魔法少女リリカルなのは リリカ

ループ10 ■ — authentic

1818

原作：魔法少女リリカルなのは リリカ

ループ | knock off | 1 | 2 | 4

1876

原作：艦隊これくしょん、ゾイド、他 提

督（本物） | 1901

提督（本物） 2 | 1939

提督（本物） 3 | 1968

原作：デビルサバイバー 2 生きるとは

変わりつつづけること | 日月 | 1980

生きるとは変わりつつづけること | 火 | 金

生きるとは変わりつつづけること | 午前 1 | 2048

生きるとは変わりつつづけること | 午前 1 | 2176

生きるとは変わりつつづけること | 午前 2 | 2269

原作：とある魔術の禁書目録、とある科学

の超電磁砲 オリシユ・ニナッターと

科学の都市 1 | 2281

とある科学 2 | 2299

とある科学 3 | 1622

とある科学 4 | 2316

とある科学 5 | 2374

とある科学 6 | 1 | 2390

ぐしゃぼん 年表	376437533743
世界樹 1	
東方短編 (下) の途中	3729
孤独のアルベール (金色のガツシュ)	
ペルソナ 3	370836943671
ペルソナ 2	
ジナル 1	
原作: 女神転生シリーズ ペルソナオリ	
ぐしゃぼん 4 (仮)	3643362736093573
リリカループ サブリ	
虹鱒 時系列 1	
いくせい、もんすたー! 0	

3893	心が影に染まる時 (ペルソナ系)	
3889	1500字程度のため閲覧注意	
	ポケモンレーティング (未完成・導入のみ	
	ヒロアカ 1	3858
3852	ブラック鎮守府の朝は早い (途中)	
	ぐしゃぼん 4 2 (仮)	38403815
	バイオハザード (完)	
3792	アストロボーイ・鉄腕アトム (完)	
	ごちうさ (完)	3782

やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。

呪術廻戦（未完）

アクタージュー

まわるーぷ体験版（呪術廻戦）

世界樹2

ワートリ1

ワートリ2

かぐや様は告らせたい

女神転生・日刊近所の危機創刊号1

4089

【RTA】ポケットモンスターキミの物

語金の王冠チャート記録狙い（没）

40784040402339943981395739313902

4122

鬼滅1

鬼滅2

アクタージュー2（未完）

ゴールデンカムイ1

ゴールデンカムイ2

ゴールデンカムイ3

ONE PIECE FILM RED

その1

推しの子1

女神転生（地方しらべ）

女神転生（地方しらべ）2

女神転生（地方しらべ）3

43254313429642874275 D 425342434228421341844161

女神転生 (地方しらべ)	1 6	
女神転生 (地方しらべ)	1 5	
女神転生 (地方しらべ)	1 4	
女神転生 (地方しらべ)	1 3	
女神転生 (地方しらべ)	1 2	
女神転生 (地方しらべ)	1 1	
女神転生 (地方しらべ)	1 0	
女神転生 (地方しらべ)	9	
女神転生 (地方しらべ)	8	
女神転生 (地方しらべ)	7	
女神転生 (地方しらべ)	6	
女神転生 (地方しらべ)	5	
女神転生 (地方しらべ)	4	

4715468046264601457045454519448344404421439243604346

女神転生 (地方しらべ)	1 7	
女神転生 (地方しらべ)	1 8	
女神転生 (地方しらべ)	1 9	
女神転生 (地方しらべ)	2 0	

4960489348124760

原作：ペルソナ4 『頼れる大人のP4』（完）

『頼れる大人がいるP4』

——1

教師としての輝かしい一年目、転入生がいるクラスの副担任を任されることになった。

田舎の学校だが、空気も澄んで景色もきれいだ。

商店街は活気が無いが、田舎の特徴的な人の優しさや隣人との近さが感じられて素晴らしい。

担任の先生は性格が悪いが、質問すれば一応は答えてくれるので問題ない。

問題があるとすれば、目の前で警官がうちの客をテレビに入れていたことか。

ちなみに警官は客に話を聞くとか言ってた足立とかいう名前の男だ。

テレビに入るとか意味がわからない？

俺もだ。

テレビに人間が入るとか半端ないマジックだぜ、と驚いていたら警官が俺に躍りかかってきた。

取っ組み合いになって二人でテレビへダイブした。

ほわあああああ!!

とりあえず突如として閃いたベルソナとやらでうねうねした影を焼却した。

先に落ちた客は死んだ。

こいつは面白いな。

そう思うよな、アダッチー。

仲良くしようぜ、俺たち共犯者だろ？

タナトスが持つ刀の剣先を突き付けながら、笑みを浮かべた。

— 2

テレビの世界は人間の心を映し出しているようで、出口を念じれば出られた。あの霧の中にいると清々しい気分になる。

いい運動になったぜ。

また一緒にやろうなと笑顔で足立とわかれ、学校に向かう。

転入生の番長君が眠そうにしていた。

どうしたのだろうか。

— 3

アダッチー第二の殺人を犯す。

絶好調だな。

現場近くに行くとゲロつてた。

友達なので介抱してあげなければならんよな。

足立の上司である堂島さんに許可を貰って肩を担いで少し離れる。

やるじゃん、あんな残虐なことできるなんて凄いやと褒めてやる。

顔が蒼くなっていた。

吐きすぎたのかな。

従妹の雪子ちゃんが最近調子悪そうだ。

相談を聞くとも実家を継ぐのが嫌とかそんな話だった。

好きにしてもいいと思うが、生まれた家だからもつとよく考えた方がいいと告げた。

結局自分で折り合いをつけるしかないのだから。

ああ、それと雪子ちゃんの旅館で世話になっっている理由だが、桐条グループの会長が罪滅ぼしとして俺の親族を探してくれたのだ。その結果、俺がこの町で教師として頑張っている間は応援してくれるらしい。

人の心の温かみを感じるなあ！

——4

雪子ちゃんが誘拐された。

くそつ、犯人め！ 絶対に許さないぞ！

俺がアダッチーに助言し、アダッチーに唆されたとしても元議員だか議員秘書でテレビを運送して犯行を起こす生田目は許さない！

全ての罪をひっかけてお縄にしてやんよ！

攫われた雪子ちゃんが心配だが、教師としての仕事もある。

気丈に振る舞いながら授業を進めた。

可愛い生徒である番長君やジュネス、カンフーに雪子ちゃんについての話を聞かれたが心当たりはないと告げる。

ああ、でも少し悩んでいたかもしれない、という素振りも追加。

俺には何も言わなかったが、三人は互いに目線で合図を送っていた。

気づいたのかもしれない。

……。

— 5

偶然にもテレビに入る三人組の姿を見てしまい、雪子ちゃんの探索に加わることに。

内心でどっちでもいいなあと思いつながら付いて行く。ペルソナは出さない。この空間だとペルソナが暴走して自分を殺そうとするかもしれないらしいが、番長くんは暴走

しなかったとか。なので大人の俺は精神が安定していて安全という話で決着した。そうだな、安定しているとは思うよ。

どうも彼らは霧の中だと体調を崩しやすく、視界が遮られるらしい。俺は過不足なく、というか普段よりもぼつちり動けるのだが、まあ、真似しておく。保護者なので無理しないようにストッパーとしての働きも忘れない。

カンフー里中がペルソナに目覚めた。

なんか葛藤とか色々あつて、否定したい自分があつたらしい。

俺の場合は真の自分に目覚めた感が半端なかったからこんなこと無かったのだが。まるで封印していた何か解放される思いだった。

とりあえず、里中さんと雪子ちゃんの友情に間違いは無いんだよとか声をかけて探索を打ち切った。

これで雪子ちゃんが明日にでも死んでたらどうしよう。

まあ、天気予報を見る限りだと当分は生きてそうだ。

どっちでもいいけど。

雪子ちゃんを救った。

みんなが無事を喜んだ。

そして、夜はアダッチーと飯を食いに行き、次のターゲットは誰かなどと話した。どうしてなかなか面白い時間だった。

——6

5月、不良少年がブチこまれた。

尻でもないし、院でもない。

テレビだ。

で、そいつの世界なんだけどホモい。

ホモお……である。

こいつが死んでも問題ないな。

俺とアダッチーはやっぱいいことしてるわ。

ホモの救出に成功。

子供の時の問題で女が苦手とか。

だからホモになるとかないわー。

まあ、救出祝いで、番長くんたちと盛り上がる。

そして夜はアダッチーと次こそ殺すぞと盛り上がる。

こいつ一人暮らしだからまともなものも食ってないんだよなあ。

かわいそう過ぎて俺が手料理する始末である。

— 7

自称特別捜査隊（特捜隊）となつて、テレビの中に入れられた人を救う。

確かにいいことをやっているのだが、万人に認められることではない。

だから俺が部活を立ち上げといた。

街を調べる的な文化部だ。

兼部も可能なんで番長君も問題ないね。

街中を調査でぶらつく理由にもなるし、親御さんへの言い訳にもなる。

実に完璧だ。

そして部活帰り、一緒に番長君と帰っていたらアダッチーと会ったので合流。そのまま堂島家で夕飯を一緒にさせてもらえることに。

番長君は飯が美味いわー。

珍しくアダッチーが楽しそうだった。

が、堂島さんが番長君や娘の菜々子ちゃんと楽しそうな姿に少し寂しそうだった。わかる、わかるよー。

特別じゃないから寂しいだろ。

ならやることは一つっしょ。

特別な火遊びやるしかないね、尊い人命を賭けたゲームを。

元アイドル、ぶちこまれる。

いや、アダルトな記録媒体での内容でのR―18なことではない。

テレビである。

まあ、なんか脱ぐとか言っているのであながち間違いではないかもしれん。

この街の男子中高校生や大学生、というか男全員にいいことやった感じだわ。

一生懸命謎を解明しようとする生徒たちに頼の緩みが止まらない。

普通は止めるべきなのだろうが、成長の妨げになるのは嫌だから捜査を協力していう。

俺が嗤っているのを訝しんだ特捜隊の面々に「不謹慎だが君たちが一生懸命に他人を救おうとしていることが嬉しくてね。このために教師になったのかもしれない」と一人の頭をなでる。

反応は様々だった。

番長君は普通だし、ジユネスはちよつと自慢げで、カンフーはドヤ顔、雪子ちゃんは昔のように笑っていて、ホモは悪態をつきながらも撫でられていた。

ああ、いい子たちだな。

強い好感を持つよ。

好きってことさ。

やっぱりゲームは楽しいな。そうだろ、足立？

アイドル、救出。

そのまま流れて特捜隊入りを果たした。

うんうん、救えてよかったねー。

みんなが無事を喜んでいたら代わりに俺を指導してしてくれた担任が何故か死んだ。俺たちは何もしていないので無駄死にという認識なんだが。

どうやら俺らの模倣犯のようだ。

カリスマ……溢れちゃったかな？

こいつに擦り付けてちよつと間を空け、再びゲーム再開だな。

模倣犯をみんなでボコス。

人の命をなんだと思ってるんだ貴様ー!!と俺もブチギレた。

命を大切にしないやつは大っ嫌いだ、死ね!

アダッチーに連れられて模倣犯は連行された。

特捜隊、感動のフィナーレである。

だが、メンバーは不満顔だ。

よし、教師として一肌脱いであげて、新学期にゲームを再開しよう。

もちろん難易度は上げるし、賞品であるターゲットもより近くにしようかな？

— 9

姉妹校である月光館学園へなんか勉強しに行くことになった。

都会だし大幅な自由時間を俺が勝ちとつたので安心してほしい。

俺もここまで来て授業なんざしたくない。

遊ぶつしよ！

午前の授業を終えて自由時間。

名目上は社会科学見学的な感じだが、観光の時間である。

都会にはしゃぐ御のぼりさんよろしく、捜索隊の学生を引き連れて遊び倒す。

ゲーセンでパンチングマシンで100とか普通に出すから（ドヤ顔）と遊んだり、こ

の香りはデミタスコーヒー！とフェロモンコーヒーを飲んだり、井物は飲み物だと啜り込んだり自由に遊ぶ。

そして夜はエクストリームまくら投げである。

俺の両手から投擲される枕から逃げられる者なぞ存在せんわ！

全員を気絶させ、孤高の寂しさを味わっていたら、見回りの先生に連行された。

ロビーで一人正座させられ、AM2時までさらし者である。

消灯前までは学生たちが馬鹿にしにやってきたという悲しい現実。

人気ものはつらいぜ。

雪子ちゃんの冷たい視線がツラかった……。

——10

奄美大島いくぞおらあ！と無理やり学校から予算を貰って特捜隊を連れて旅行に向かう。

今までの活躍のご褒美だ。頑張った子供は褒める、当然だよなあ。

予算の名目は合宿費。

街の文化を調べる部活で何を合宿するのかという話だが、奄美大島との差異とかわかるじゃん（苦しい言い訳）

ついでにクマとか菜々子ちゃんとか連れてった。

アダッチー？

あいつには仕事があるから。

夏休み半ば、花火見に行くぞおらあ！と特捜隊を連れて出発。

番長君が女の子といい雰囲気になりそうなので、邪魔するためである。

独り身のアダッチーや堂島さん、菜々子ちゃんも連れて行くという聖人ぶりを発揮してしまった。

夏休み終盤、祭り行くぞ（焼き増しなので省略

—— 11

休み明けのうえ、犯人が見つかって寂しそうな特捜隊のためにゲームを再開してあげた。

今回はなんか探偵っぽい人である。

なんかホモが好きそう。

さあ、新学期から元気に人助けをやってみようか！

人が死ななくてアダッチーがイライラしている。

上手くないかなのが嫌なのか、予定と異なっているのが困るのか、俺に失望されるのが怖いのか。

まあ、心配するなよ。

これからもガンガンいれさせればいいだろ？

ん、ちよつと勘違いしていた。

足立はイライラしているんじゃない、ちよつと不安になっているのかもしれない。

探偵を救出。

素晴らしい手際である。

番長くんたちは襲い来るシャドウたちを倒し、探偵君を説得。

で、クマが暴走した。

クマはシャドウで中身が空っぽだったとか。

うわー超かわいそー。

もつと楽しく生きないとダメじゃない？

でも勝利してペルソナを得たからいいよね！ やったぜ！

アダッチー、番長くんに脅迫状を送る。

やることかしょぼくて草生えた。

——12

番長くん、保護者の堂島さんに脅迫状がバレるといふミスを犯した。

これはこれで楽しそうなので、俺が番長君を家まで見送りますと堂島さんに告げておく。

部活で遅くまで残らせてしまう責任を取る意味で。

ついでに夕食までご馳走になるといふミラクル。

料理上手で飯がうまい！

堂島さんはそれだけだと不安なのか、アダッチーも呼ぶようになった。

堂島さん、俺、アダッチーの三枚ガード。

鉄壁ですな。

誰が来ても問題ないだろう。

最近、アダッチーと視線が合わないようになってきた。

そんなアダッチーは憧れの視線を堂島さんたちに向けている。

……おまえには得られないよ、求めるだけのお前には。自分だけを見てほしい人間な
んか、誰も要らないんだよ。

菜々子ちゃんが攫われた。

俺たちが出かけている隙を付いた巧妙な犯行だった。

畜生、俺たちがいながらなんて様だ！

なんて卑劣なんだ！

犯人は卑怯者だ！

許さないぞ生田目！

とうとう特捜隊は犯人を追いつめた！

これで物語は完結だ！

さあ、気持ちのいい最期を迎えようじゃないか！

まあ、失敗してもいいけど。

菜々子ちゃんという犠牲で少年たちは大人になっていくからね！

そして、真犯人に気付かなかつたらまたゲームをしよう。

仲間とともに謎を追いかける、素晴らしいジューブナイルだと思わないか。

番長くんは都会に帰るが、それはそれで楽しい。だって友達が減っていく様を待つことしかできないってどんな気分なのだろうって思うと楽しいよね。

—— 13

菜々子ちゃん救出↓生田目捕獲の黄金コンボが成立！

犯人は捕まえた。

長く苦しい戦いだっただけ……。

さあ、青春のエンディングだ！

と思ったら、アダッチーがバレた。

ボロを出したらしい。

逃げるアダッチー、追う特捜隊。

流石に友達をボコすのは忍びない。

……。

「そんな……足立が……？　嘘だろお……うつつ……」

と、心が折れたフリして後ろに下がる。

ああ、でもアダッチーが怒りのままにぶつ殺されたらかわいそうなので俺も参戦しようかなあ。

まあ、俺の可愛いくて優秀な生徒たちがそんなことするとは思わないけど。

アダッチーを気絶させて連れて来た。

後でテキトーに逃がせばいいや。

どうせ立件できないし。

なぜか気絶したアダッチーのペルソナが変化して巨大な目玉とかになったが、俺がペルソナに覚醒したつぼく演出してタナトスにして倒す。

だが、気づけばアダッチーは逃げていた……。

特捜隊の前で全力で毒づく。

「くそっ！　足立を逃がすなんて、俺はどうしようもない駄目教師だ……。親友だから無意識に手加減していたんだ……」

みたいな。

慰めてくれる生徒たちはやっぱりいい子だわ。

いい子すぎて、先生はもつと君たちを見ていたくなるよ。

それって我がままかな。

でも大人も我がまを言っても、イイよな？

足立は捕まった。

堂島さんが捕まえたらしい。

奴は俺とは目を合わせようとはしなかった。

……。

——14

番長君が転校する。

いや、この町には一年だけいるという話だったので戻るだけなのだ。

寂しくなるな。

明日にはこの町を出発するという話。

彼はとびきり優秀だった。

理想の探偵役だった。

送別会は壮大にしようという話になって、買い出しに出ていると、テレビの中の霧を感じた。

霧、というか力の流れだ。

町の外れのガソリンスタンドから感じられる。

そこに向かうと、変な男に謎の空間に引きずり込まれた。

テレビの中のようなそんな感じだ。

へんな男が自分は神で力をどうか、なんとか。

よくわからないが、そんなことは重要じゃない。

重要なのはこいつが力を持っているということだ。そして、それが俺の力と同類で、欠片で、俺のほうが強いということだけだ。

俺が正しく使ってやるよ。

口を開いたタナトスが、丸呑みした。

やべえ、超うまい！

ペルソナがイザナミに変化した。

全てに死を与えるその姿は、醜く、それで美しいペルソナだった。

ガソスタの男の抜け殻は、元あった場所に放置しといた。

まだ動ける元気があるし、黒幕として頑張つてね☆

番長君が来るかもしれないし。

—— 15

歓迎会の準備中に、番長君たち特捜隊が現れた。

足立も連れている。

どうやらガソスタの抜け殻をボコツタ後らしい。

足立は逸らしていた目を向けてきた。

強い、睨むような目線だった。

なんか堂島家に絆され、俺を友達としてどうとかこうとか。

なるほど。

俺のためか。

俺のために、今にも精神的に死にそうだった男がやる気を出したのか。友情っていいね！

それに、察しのいい子供たちも大好きだ！

だが残念でもある。

親友だと思ってたのは俺だけで、裏切られたからな。

シヨックだな、人を裏切るのは最低なやつのことだよ。

番長くんは、どうしてこんなことを、みたいなことを聞かれた。

なので君たちのためだよと笑顔で返す。

楽しかったっしょ？みたいなのもくつつけた。

みんなが死に掛けたのは、君たちのためだったのと、足立の厭世感、俺の遊びである。

あ、全員のせいじゃん。

みんな共犯だねと笑顔で告げる。

雪子ちゃんは感動して泣きだした。

全部に理由があるなんてありえないし、自分のことを全て説明できる人はいないだろう。

きっかけは足立だ。ありがとうと告げると膝から崩れ落ちそうになったがなんとか立て直していた。

やるじゃないか、足立。

堂島さんがそんなに大事か、実に素晴らしい。そうなると、次は……。

番長君の送別会は盛大にやろうって話だな！とテレビにバツクれる。
ポイントは、テレビの大きさが一人ずつしか入れないってことかな。

テレビに飛び込んできたやつを一人一人、下で待ち構えて順番に魔法で倒した。

強くてすまん。俺のペルソナは人類を滅ぼせるんだ。月行きたいなあ。

倒れ伏す可愛い生徒たちと足立。

勝利は何時だって虚しい……。

なんか満身創痍だった特捜隊のメンバーが死力を尽くして番長君が無事に落下でき

るように守っていた。

すごいぞ！ えらいぞ！

だが、あと一步のところまで力尽きた。

勝った！

と、調子をぶっこいたら横からアダッチーのマガツイザナギに襲われた。

ぐわあああ^q^

反撃でイザナミの全力魔法を至近距離でぶっぱ。

お前はいいやつだった。

俺の友達だ。

だが、足立は死んでもういない！

足立は塵も残さずに消し飛んだ。

目の前で人が消し飛んだところを見た番長君が吠えた。

謎の光である。

もうぴかぴか。

番長君の絆を通して人が生きたい望む気持ちだが、俺のイザナミを弱くして霧を晴らし
ている。つてペルソナのイザナミが伝えてくれた。

なるほどなー。

番長君は連戦、俺は絆パワーで弱体化、互いに追い詰められている感じである。最終戦にはばっちりだね！

ちなみに俺が勝つたら被害者は増え続けるよ！と告げるとパワーアップした。やっぱ、やっちやっただぜ☆

ぐわあああああああ！

——17

番長くんの主人公パワーに消し飛ばされた。

生きた気持ちと死にたい気持ちは表裏一体だからね、俺がシャドウとして復活するの
も仕方ないね。

そもそも死が待ち受ける限り、俺は死なない。

走り出した電車から半身を乗り出して手を振っている番長くんの表情が凍る。

みんなの後ろに立っていた俺が元気に笑顔で手を振っているからだろうか。

番長君との別れを惜しんでいた特捜隊に、先生らしく一言。

「寂しいかもしれないが、もう一年ある。楽しんでいこうか」

一人欠けたが、ジユブナイルはこれからも続くんだ。

終わらない、終わらせない。

続けて続けて、終わりは俺が決めてあげるからな。

全人類が滅びれば、寂しくないだろ。

事情を知っている警察に邪魔されたら厄介なので、堂島さんはテレビに放り込んだ。た。

ご飯、今までご馳走様でした。

お礼に菜々子ちゃんは最期にしますからね。一人さびしく味方もいない場所ですけど。

さて、今までは一人ずつで難易度が低かったから、次はみんなの親族も同時にいつてみようか。

堂島さんを助ければ解決の糸口になるかもしれないけど、みんなの家族はどうなるの

かな。

なんてね。

原作・名探偵コナン 怪奇！ ばらばら殺人事件！ (完)

怪奇！ ばらばら殺人事件！

—— 1

二度目の人生だ、有意義に使うべきである。

無駄にハイスペックとなった肉体はマジで凄い。

小学生ながらジャンプで二階の部屋に飛び込んでいける脚力、あずきバーを砕く握力、木久蔵ラーメンを美味いと感じる味覚とすべての点においてハイパワー。

だが、隠している。

運動能力が並み以下で、頭もよろしくない感じを装っている。

手を抜きすぎないといけないが、その抜き方が分からないので雑魚感丸出しだが逆にセーフだ。

さすが俺である、グツジョブするきる。

ファンタジーとかでS級だけD級にいる、的な意味じゃない。ぶっちゃけると殺人するので目立たないようにしたただけだ。

小学生が計画的知能犯な犯行をしても捕まらないし、そもそも疑われないだろう。しかし、念には念を入れるのが俺の流儀だ。

まあ、そんなわけではばらばらに引き裂いたこの死体をどうしようか。

山にするか、海にするか、川にするか、森にするか、思い出の場所にするか。

俺は頭を抱えた。

よし、決めた。

——2

先週の深夜、確か2時22分かな。

その頃に米花町内大通りの一角で自殺があった。

自殺者の遺体は身体がバラバラになっていて、ニュースによると自殺に用いた道具や自殺現場すらも明らかにないらしい。

遺体の損傷が激しく、晒されていた温度も滅茶苦茶だったらしい、中には腐敗が進み過ぎて木乃伊に近い状態の物もあったようだ。

おお、怖い怖い。

特徴的なのは胴体が自殺現場から50メートルも離れた民家のアンテナに吊るされていたことだという

現代オブジェで吊るされた男をイメージしたんだよ、きつと犯人は。

自殺した現場は不明であるらしい。

まあ、八つ裂きにしてパーツをコンビニの袋に詰め込みながらったし。

返り血は避けた。

で、自殺現場付近のガードレールに、スーパーのビニール袋が吊るされていたという。ビニールの中には潰れた腕が詰め込まれていたが、原型を留めていない様だったようだ。

ちよつと強く握りつぶしちゃったんだよね。

つい苛立ってしまったのだ。

遺体の各部位は、米花町の各地で段階的に発見された。

入れられていたビニール袋は色々なコンビニの物だったのに報道されなかった。

いい宣伝になると思ってサービスしたのに。

おでんとピスタチオが好きなんだ。

発見された部位はどれもが酷く傷ついていたらしい。

手足の爪と皮が剥され、骨を折られ、肉を潰されるなんて随分と恨まれていたのだろう。

自殺者だけだ。

捜査が進み、その遺体がどのように自殺したかが明らかになった。

まず生きたまま手足を損壊させられた後に引きちぎられ、米花町を引き摺り回されたようだ。

道路に血の跡が残っており、新手のミステリーサークルとして町おこしを手伝ったのだろう。

内臓もまろみ出していたので処理されてしまった。

そして、胴体も指で滅多刺しにされ、米花町の各地に散った。

うーんバラバラの実の能力者だった可能性。

もしくはミート君。

カスタムロボかな。

アーマード・コアの可能性もある。

ドラゴンボールか、汚い花火に願いをかなえられるとは思わないなあ。

あ、頭は山と川のどちらがいいか悩んだのでモアイ像の上に置いてきた。

やり方は簡単、人気のない踏切から走っている電車の接続部にある取つてにしがみついて移動し、その後モアイ像の上にパイルダーオン！みたいな。

人に見つからないように気を使って建物の屋根を移動するとグッド。

雨で証拠も洗い流される。

しかし、死ぬまでの痛みで歪んだ不細工な顔が白目剥いてモアイ像の上に鎮座とかシニールやでえ。

モアイ像が涙を流したとかで、夜はちよつとだけ賑わっていたとか。

翌日はゆっくり発見でさらに大騒ぎだったらしいけど。

そのうち都市伝説となつて動き出すかもしれん（笑）

3

小学生ながらも小難しいことに詳しいパーロ―星人の工藤くんは、最近の事件をどう思うか聞いてみる。

推理小説が大好きらしく、彼は探偵を目指しているのだ。

探偵ってペットを探したり、浮気調査したりして口に糊をするって聞いたが、それでいいのだろうか。

サツカーとか上手いのに。

もう上手いって言うか、ファンタジーレベル。

一人だけキャプテン翼。

今は3頭身だけど、そのうち1.5頭身になりそう。

まあ俺も3……いや、頭身の話はやめよう。

なんかSAN値が削られる気がするし。

不可解な事件があるらしい。

警察もお手上げで自殺と処理したバラバラ殺人。

あれはヤバイね。

意味不明だね、自殺なのに現場とかも不明だとか。

工藤くん的には他殺だろうって話だ。

いや、みんなそう思ってるよ。

俺もそう思う。

自殺扱いで捜査を打ち切ったのが許せないようだ。

正義感が強い。

わかる気がするけど、でもあまり警察を責めないでほしいなあ。

俺の親も警察で、めっちゃ偉いんだ。

だからすまないって気持ちで俺の心が痛くなるよ。

まるで犯人が身内にいるのに隠している気分だ、むしろ俺が犯人の気分だよ。

いや、謝らなくていいんだよと工藤さんに告げる。

マジで謝る必要ないし。

折角だからちよつと推理してみてほしい、と頼んでみる。

何度推理してもおかしいらしい。

いくつもの新聞とニュースから集めた情報を整理すると、時速60kmで移動しながらバラバラになって各地に散らばり、電車に乗ってモアイ像まで辿り着いたことになるとか。

殺す時間なども考えると、更に移動速度は速いかもしれないとか。

超人的な人がそうやって殺したとか、花火で打ち上げられてバラバラになったとか、そういう可能性は無いかと聞いた。

返事はバーローだった。

そうだね、バーローだね。

みんな、バーローだ。

君も含めて。

もちろん自殺者もバーローだ。

自殺者はきつと俺の母を轢いて逃げ、厳しい捜査によって刑務所に入れられ、やつと出てきたのに母を殺したという自らの罪の重さに自殺したんだね。

俺は許していたのに。

生きていたら許していたさ。

許しを乞わずに受け入れていたら、手足をもいで許していたさ。

生きられたらね。

自殺なんて怖い怖い。

やつと俺は気楽に生きられるよ、バーロー最高～

— 4

工藤くん、マジキチ。

いや、工藤くんが悪いのかはわからんが。

真面目な話、工藤くんが外に遊びに行くと人が死ぬ（迫真）

冗談抜きだ。

殺人事件が起きる。

事故じゃないやつ。

で、工藤くんが解決する流れで終わり。

ま、まさか工藤くんが裏で糸を引いてるとか無いよね。

殺人とか引くんだけど……。

バーローされただけだった。

いや、でもマジで殺人が多いんで手加減してください。

一緒にいる俺もツライ、風を装うのがツライ。

刺殺死体程度でつらくねーんだよ、ハゲ。

もつと殺した相手の内臓でもつ鍋するくらいの気概を見せろよ。

まあ、俺は運動能力とかパワーアップしてるけど、殺人とか汚いから自殺者が増えて
いるのを見守っているくらいだ。

東京タワーから奇跡の投身自殺とか、新幹線に撥ねられて自殺とか、昼間は埼玉にい

たのに東京湾の沖合で自殺してたとか、全身に突き刺さった蛍光灯が破裂してミキサ―自殺とか、そんな感じだ。

以前のバラバラ自殺の血縁が根絶やしに……。

みんな自殺していることからアポトーシスが発動した感。

難しい言葉使っちゃった、てへぺろ☆

今回の自殺者はエンターテイメント性を持たせるために、自らの内臓でモツ鍋を作る内臓なき死体に見てみた。

なんか哲学的だなあ。

— 5

高校まで一緒に過ごしてきたけど、やっぱ工藤くんは凄い。

引き寄せが半端ないね。

手塚ゾーン並みに殺人事件を引き寄せている。

殺人発生件数がベネズエラに近づいているんだ、信じられないことに。

だいたい工藤くんは渦中にいる。

やべえぜ。

殺人タイフーンの目である工藤くんにレーズンぶつきたい。

こんだけ死にまくっているのに、時々取材とか来るし、つのドリル装備した幼馴染とは甘酸っぱい関係だし、ずるくね。

俺なんてデスノートという中二ノートを拾って、朝の5時から6時まで目が覚めるまでの単純作業として殺人を行っていると言うのに。

5時から6時が世界へのサービスタイムだ。

犯罪者を心臓発作でぶっ殺しまくる。

そして俺は有名になる。

承認欲求を満たしたいし、ちやほやされたいのだ。

エゴサーチして悦に浸る。

キラという、MSの四肢を切断して宇宙に蹴り出す名前まで付けられた。

不満は俺自身がちやほやされていないことなんだよなあ。

敬っている連中だって、キラという架空の神が天罰を下していると思っただろうだ。

不満が溜まる。

まあ、でも習慣としてぶっ殺すけど。

ときどき、サービスで前日に犯罪者の名前をPCで印刷しておき、授業中にぶつ殺したりもする。

今日も元氣だ、人が死ぬ！

——6

人が死に過ぎるから工藤くんともちよつと付き合いを考えようかと真剣に思ってた
ら「マジヤバいから来てくれりんこ！」って連絡がきた。

デートに行つてた遊園地やんけ……。

え、なに？

私達、カップルになりました！みたいなアピールをしちやうわけ？

あれでしょ、俺と君たちが小学生の頃からの付き合いだからどうかこうとかで
しよ。

そうはいかないぜ。

なんでヒカルなのー!? って泣き叫ぶ当て馬ヒロインとは違うから。

幸せそうなら角ドリルの唇を不意に奪って友情破壊をしてやんよ、と指定された場所
に乗り込む。

工藤くんがシヨタになつてた。

流石の俺もビビつたが、会話していると本人だと理解できた。

こんなにも流行つていないのにバーローと言いつけるのは彼だけだ。

あとデスクノートのおまけであるリユークが名前がなんちゃらと言つていたがシカトである。

不細工だからな。

いや、不細工というか造詣から可笑しいけどね。

しかし、シヨタになるとはなあ。

殺人事件を引き寄せすぎた事へのキラ様からの天罰じゃね。

さすがキラ様です！

工藤くん（シヨタ）が何故か角ドリルの家に住むことになった。

え？

エロゲなの、この世界？

もしくはギヤルゲ？

殺人蔓延る末期のバイオレンスでサスペンスな世界だと思つてたわ。

もしくは俺の能力を顧みてゾンビパニック的なやつ。

この殺人事件数はその慣らしみたいな。

ギャルゲかー。

これだと俺って友人ポジションじゃん。

うわあ。

悲しい未来しかない……。

でも主人公っぽいのが子供になるって斬新だわ。

オネシヨタ系なの？

バーロー×角ドリルなの？

角バロルなの？

馬鹿なの？

死ぬの？

まあ、いっぱい死んでるけどね。

—
7

江戸川コナン、探偵さ。だってお W W W W W W W W W W W W W W W W

笑って流したけど、やっぱり死に過ぎなんだよなあ。

殺人件数がベネズエラを超えたらいいし。

デスノートを使っていないのに、コナンくんのおかげでキラ様大活躍！みたいなネット記事もあるし。

そもそもキラ様の活躍に工藤くん（大小）の事件も兼ねられているんだけど。

工藤くんがキラの可能性が高い……？

そもそも俺も結構巻き込まれるんだよな、事件に。

証拠を見られたとか、犯行の最中だったとか、後押ししてあげただとか。

まあ、最終的に犯人はお縄に着くんだけ。

ナイフで襲われても真剣白羽取りだし、銃で撃たれても弾丸キャッチするし、毒盛られても「むしやむしや、青酸カリがいいアクセントだね」みたいな。あ、青酸カリは吐かされたんだったわ。

そういうわけで俺が襲われた場合はやり返すのですぐに解決する。

特に探偵が必要なくなつた場面も多いのだから、休暇として俺に感謝すべきだろ。

照れ隠しにバーローってされても嬉しくないんだよなあ。

ツンデレ男とか流行らん。

俺のように友達を慮る友情に篤い男のほうがいいっしょ。

もしくは母を思つてムシヨから出てきた犯人に罪を贖わせる清純な男。
自分で言つといて照れる。

あ、キラ様もあるからゴミ掃除得意も追加だ。
工藤くんにはキラ様の座を取られつつあるけど。

キラ、飽きたなあ。

—— 8

世界的に有名な探偵のLという人がテレビで、キラは悪いからさっさと自首しろやボケエ! って放送していた。

なんかキラとして充実感が無いんだよなあ。

試しにぶつ殺したけど、満たされない。

やっぱ仮想神なんだよ。

関東に居るのわかつてからつてアピールされたけど、それつて工藤くんは関係ないよね?
ね?

俺は心臓麻痺だけだからね？
わかれよ？

工藤さんとウイイレしに、彼がお世話になっっている毛利探偵事務所を訪ねた。
変な恰好でケーキを食っている白い人がいた。

もう隈が凄いいし、座り方も尋常じゃないし、どこ見てんのかわからないし。
え、なんなのこの人。

ライトというぶっ飛んだ名前と清潔感溢れるイケメンというギャップ萌え狙いの人
が、白い人は竜崎という名前で警察だって教えてくれた。

毛利探偵事務所の周りで人が死に過ぎだというので、話を聞きにきたとか。

松田とかいう無能感が漂っている人が、キラの捜査できたとポロツと教えてくれた。
だよなあ……。

そつちのほうがキラ感満載だもんな……。

ノートの所有権を破棄することにした。

5時に起きるの怠いし、名前書くの飽きたし、ちやほやされないから要らないわ。

好きな人にあげてキラにしたらいいよ、もう。

ただ、俺は殺されたくないの、ホームレスに金をやるからってノートの切れ端に4回名前を書かせた。

書かせるたびに名前をちよつと間違えて教えて書き直させるのがポイントだ。その後はさよなら、ホーム・レスとやるのも重要。

ちなみに最近の日本の殺人発生件数はホンジュラスを上回っていた。

工藤ちゃんとキラがいる日本に追隨してくるホンジュラスとかいう末期な世界。ドン引きです。

— 9

5時に起床。爽やかな朝だ。

やることも特にないので優雅な二度寝へ突入。

なんか今日はいいことがありそう。

帰国子女が転入してきた。

世良ちゃんである。

ぐう可愛い。

八重歯がヤバイ。

ぺろぺろしたい（真顔）

みたいなことを小学校に通っている工藤くんに話した。

返事はバーローだった。

愛ってこんなもんだ。

とりあえず、高校生の感覚で小学生やるのってツラくない？って聞いてみた。

慣れると存外悪くないとか。

ふーん。

まあ、レーズンが食えないのは小学生までだし。

女湯に入れるのも小学生までだし。

少年探偵団というごっこ遊びも、昔俺たちも似た事やったけど小学生までだし。

照れ隠しでバーローって言うのも小学生までだし。

存分に小学生を満喫SHI・RO・YO☆

麻酔で眠らせるのは無しだろ。

しかも小さな針の癖に即効性がありすぎて、俺は命の危険を感じた。
頼むから俺にそれは使うな。

むしろ俺に効果がある麻酔とかどんだけ強力なんだよ、こえーよ。

——10

やつば世良ちゃん一強だわ。

凄く可愛い。

一人称がボク、もうこの時点で俺のハートを鷲掴み。

あとジークンドーで俺にダメージを与えた、胸を強打されたけどこのときめきは恋だ。

八重歯を見せてドヤ顔でバイクに乗ってた、凄く可愛い。

置き引きとか、ひったくりが起きたら正義感が強くてすぐに犯人を倒しに行つて、俺と一緒に無限コンボを繰り出したりする。

性格はさばさばしているのに、胸を気にする男心くすぐる萌えも提供してくれる。

天使か。

いや、女神だな。

ということ、真つ赤な顔してる世良ちゃんと付き合うことになった。
頑張った。

100回くらい好きって言うのと相手が好きになると言うので、そういうところ好きだよ（にこつ）みたいな少女マンガ然とした天然をアピールする養殖で攻めた。

まあ、領域外の妹とかいう意味不明なものだけ。

あれは笑うところなのか真剣に考えているんだが。

ババア声だし、中二が発症した感。

なんでもいいね。

世良ちゃんは恥ずかしがって走り去った。

可愛い。

やっぱあれくらい可愛い子が一番だ。

角ドリルとはわけが違う。

物理で一撃必殺かもしれないが、世良ちゃんは精神を必殺するのだ。

まあ、そんなわけで工藤くんも気軽に俺に助けを求めてよ。

余裕ができた俺はオーラカに生きるから。

あ、一つだけ聞いていい？

このまま子供として生きることになったら、互いに甘酸っぱい想いを抱いているはずの幼馴染が結婚するのを見送ることになりそうだけど、そこんとこ大丈夫？

寝取られ？

背德的（笑）

不意打ちの麻酔やめーやゝqゝ

流石の俺も刺さる。

半透明で、かつゴキブリの速度よりも速い針を不意打ちされたら無理やで。

原作：デスノート ショーギノート（完）

— 1 —

最近、進藤の付き合いが悪くなった。

遊びに誘っても、今日は都合が悪いのだと帰るようになった。粘って誘っても駄目だった。

ライバルの俺が誘っても駄目とかどうなつとんねん。

俺と進藤はライバルだ。

運動では互いがせつさたくまし合う好敵手なのだ。

それなのに無視されるとは、ぐぬぬ。

どうでもいいけどライバルを好敵手って書くとかっこいい。

付き合いが日に日に悪くなっていく進藤が気になって、進藤の幼馴染である藤崎に話を聞いた。

どうやら趣味が出来たらしい。

俺と遊ぶのよりも面白いとかどうとか。

なん……だと……。

詳しく聞くと、じいさん連中が縁側でやってるようなゲームに嵌まったようだ。

なんか木で出来た網のある机に駒を並べる遊びだとか。

あーわかるわかる。

うちのじいちゃんもやってるし。

あれだろ、しょーぎってやつだろ？

なるほどなー。

しょーぎかー、げんりはわかるんだけどなー。

げんりならわかるんだけどなー。

……げんりだけだとダメだよな。

よし。

— 2

じいちゃんのしょーぎをやりたいと頼んだら色々と教えてくれることになった。

じよーせき、てすじ、つめ、かんせんと放課後や休みの日もぎっちりだ。

遊ぶのもやめてしよーぎばかり。

本は読めば一発で覚えるけど、捲るのが面倒なんだよね。

かんせんはテレビを見て、その先をじいちゃんやその友達連中と指し手を予想しながら眺める。

時間がかかるけどなかなか面白い。

まだ、進藤には秘密だ。

俺が無茶苦茶強くなったらボコす。

頭の出来は俺のほうが良かったけど、運動はちよつと負けてた。

つまり将棋で倒して好敵手との争いに終止符を打つのだ。

将棋だから打つて言ってみた。

— 3

進藤と対戦する前に引越すことになった。

そ、そんなー……。

進藤が飽きたらどうしようかと困惑しながら、転校した中学に馴染もうとする日々。むしろ馴染まなくてもいいんじゃないかと思ってきた。

将棋優先したいし。

メールで藤崎に、近況報告などで誤魔化しながら進藤の近況を尋ねると、ネットで対戦するのに嵌まっているらしい。

な、なるほど。

いつだって俺の一步先を行くやつだ。

やはり悔れない……。

俺もネット将棋で戦ったり、じいちゃんに教えて貰った練習で自分を磨く日々だ。

ネット将棋では進藤っぽい人と対戦することは叶わないばかりだ。

ちよつと残念な気持ちになりつつも土日は将棋会館道場などで、対人戦も頻繁に行う。

ふふふ、強くなつていくのがわかる。自分が怖い。

藤崎に、近況報告しながら進藤の現状を尋ねる。

去年くらいに専門学校に入ったらしい。

な、なるほど……。

いつもいつも先に進むやつだ。

だがそれでこそライバルに相応しい。

8月の奨励会試験にむけて、更なる研鑽が必要だ。

大会とかもガンガン出る。

で、優勝もする。

アマチュアの大会だが、優勝するほどの力があれば進藤を倒せるだろう。

対局する日が楽しみだ。

ああ、でも奨励会に入ったらしいし、そこで対局する日が来るかもしれない。

奨励会への試験だが、一次試験は免除などで楽しつつ合格した。

なんか色々と補正が載って1級である。

強そう。

【悲報】進藤、いない。

推薦で高校に進学し、勉強を片手間に聞き流して奨励会で頑張ってたのだが、気付いた。

そう、昇段試験で進藤がいないのだ。

地方は一緒のはずなのに。

どうなつとんねん。

もしや飽きて辞めたのか。

それとも実力が追い付かずに絶望して辞めたのか。

不安になったが、困ったときの藤崎である。

連絡すると、プロになってたらしい。

え……？

え……？

俺がぬるぬると過ごしている間に進藤はプロ、だと……。

や、やるじゃん(震え声)

辞めたとか俺ってホント馬鹿。

ライバルは伊達じゃないようだ。

こんな高校なんて言ってる場合じゃねえ！

授業を抜け出してダッシュで帰宅、と思いきや校門付近でノートに脚を取られて転んだ。

追いかけてくる先生を無視して帰宅した。

原因のノートを何故か持って帰ってきてしまった。

英語で使い方とか色々と書いてある。

うっわ……。

いやいや、うっわ……。

なにこれ恥かしい……。

— 7

進路指導室でめっちゃ怒られた。

でも俺は大人からの圧力に屈しない。

将棋のプロ棋士になるのだと熱唱。

「プロなんて無理やで」派の先生と「おう、頑張れよ、」派の先生が熱い論争を繰り広げていた。

なるほどなー。

よくあるよくある。

めんどくさくなつたので帰宅。

俺が転んだ原因のデスノートだが、名前を書いたらそいつが死ぬらしい。

悪趣味だ。

言霊とか、そういうのが言い伝えられているのに死ぬとか不謹慎だ。

不謹慎厨の俺はこういうのが好きじゃないのだ。

破棄したい。

でも、もしかしたら書いた中二まっさかりの人が困っているかもしれない。

もう一度同じ場所に放置するのは罰としてはいいかもしれないが、やはり可哀そうである。

俺が預かっておこう。

それっぽい人が学校に行ったときにいたらこっそり渡せばいいし。

学校から呼び出された。

勝手に帰ってどうかこうとか。

あー、もううるさくないなあ。

今は冬だから炬燵から出たくないに決まってるじゃん。

だから学校にいきませーん。

ファイナルアンサーでせいかいです。

トウーンだから学校に行かなくて平気デース！

シヨージギは完全なる生命体の誕生を意味するのデース！

—— 8

家庭訪問された、q、

3年の先輩である「やがみらい」という先輩は全国模試1位で模範生徒なのにどうとかこうとか。

え、らいつて名前？

ロツクマンを生み出した博士なの？

波動拳とか撃つちゃうの？

ワイリーとかいるの？

みたいな。

じいちゃんは今将棋で頑張れ派である。

両親は難色を示しているが、それは囲碁ファンだからだ。

プロ自体は、囲碁でも俺の同世代がプロになってるし、いけるんじゃないかって感じた。

囲碁(笑)

白黒の石を置きあう、リバーシのメガシンカ形態だ。

将棋と比べれば如何に軟弱かわかる。

将棋でプロとなり、好敵手の進藤と矛を交えるのだ。

至高である。

父はあきら、母はひかるといふ、近年プロ入りした二人を応援している。

あきら(笑)

ひかる(笑)

やっぱ将棋が一番だな。

あと、りゅーくつてのが来た。

羽根とか生やして飛んでくるとか絶賛中二病である。

デスノートの元所持者らしい。

で、所持者は俺とか。

いや、名前書かないから。

でも本物っぽいなあ。

返すその他の人が使うかもしれないようだ。

……預かっておこう。

— 9

高校2年秋、将棋でプロとなった。

強くてすまん。

狭き門も、俺のライバルと戦うための主人公パワーの前には開かざるを得なかったよ
うだ。

進藤はプロの世界で待っているのだろう。

強くなったライバルをこの目で見るために、俺は将棋のプロの情報などはシャットア
ウトしているのだ。

進藤はきつと俺と将棋盤を挟んで「トウーンだから平気デース！」「トウーンは完全な

る生命体を意味するのデース」と言うに……おつと間違えた。

……。

んんっ。

進藤はきつと「……………分かった！教えてあげる！この私が！世界で一番強いってことなんだよ！」と俺に言うだろう。

わくわくする。

これはあれだな。

名人戦のシチュエーションに違いない。

いや、そこまで行く前に対局するだろうけど。

ただまあ、夢は大きく持つべきだろう。

あーわくわくする。

どきどきするわー。

さすが進藤。

俺の心を掴んで離さない。

りゅーくが、俺に進藤を殺したら勝ちじゃねとか言い出した。

うわーコイツ馬鹿だ。

殺したら勝ちも何もないじゃん。

というか殺したい相手がいるほど殺意の波動に塗れてないんですけど。ノートが真っ白ですまん。

というかもうノート燃やした、ごめん。

あ、今はプロ入りした新入り棋士のインタビュだった。

えーと、どうしようかな。

そうだ。

進藤プロと戦うのを楽しみにしています、と。

完璧だ……。

——10

進藤、将棋やってなかった……。

すごい凹んだ。

進藤もなんかサイという友達がいなくなったのを思い出したのか凄いい凹んでた。

なんかサイというのは亡霊だったらしい。まあ俺にもりゅーくとかいうのがいたからわか……りゅーくはどうでもいいからわからん。

あ……。

あー。

あ……。

あー……、ダブル凹みとかやめれ。

先に俺を慰めてくれよ。

進藤が将棋やってると思うってここまでやってきたのに。

いや、三年か四年くらいだけ。

楽しかったから悪くないけど、囲碁なら囲碁って言えよ……。

なんで俺将棋やってんだ……。

進藤はサイという亡霊師匠で名人が教えてくれたから囲碁をやったらしい。

で、ちよつと前にいなくなつた的な。

久しぶりに思い返すとなぜ囲碁をやってるんだらうつてなつたっぽい。

あー。

わかるわかる。

あるあるネタだな、気持ちには落ち込んでるけど。

で、なぜ進藤が将棋をやってないかというのがわかったかというのと、イベントに突撃したからである。

近くでやつてるって聞いたし、行きたくなくなった。

目と目が合ったら勝負の合図！と乗り込んだが、進藤が囲碁ってた。

めっちゃ囲碁だった。

二度見したけど、リバーシのメガシンカだった。

持ってた扇子ごと崩れ落ちた。

あまりにも見事なorzだったのか、進藤が気付いてなんやかんやあつて合流した。俺と進藤の、時を超えた出合いは悲劇しか生まないやでえ……。

そういえばインタビューで俺、進藤プロを倒すとか言っちゃったんだよなあ。

ググったけど、将棋の棋士に進藤プロはいなかった。

嗚呼……。

……そうだ、囲碁やろう。

—— 1 1

ファツシヨンモデルのミサミ（？）とかいうのがキラ容疑で逮捕とか、ニュースを聞き流す。

俺が本気になれば囲碁なんてちよちよいのジョイヤで。
と、軽んじてたけど進藤にボコされるんだよなあ。

将棋なら余裕で勝てる。

が、互いの得意分野で勝っても意味ないし。

……天竺大将棋とか。

ナチュラルに得意分野に寄せようとした目論見がバレて、頭を軽く叩かれた。

結局飯を食べに行き、バッテリーングセンターで遊び、帰り際にメルアドと携帯の番号を交換した。

—— 1 2

囲碁でボコられ、将棋でボコりつつも俺は順調な戦績を修め続けていった。
進藤はまあまあつばい。

ライバルのあきらがどうか、韓国の人がどうか。

ライバル……羨ましいなあ。

俺の場所だったのに。

ぐぬぬ。

しかも進藤が意識する亡霊は男だという。

ぐぬぬ……。

進藤と五目並べをしていたのだが、話を聞いて俺が何とも言えない表情をしていたらしい。

俺とお前はライバルだったのに悔しいと真面目に伝えてみた。

進藤は無言で五目並べを進めていく。

俺もしようがないので、こつこつとやっていく。

こいつボードゲーム強えー。

女性は大局を見据えるのが苦手、なんて話も聞くんだけど。

追い詰められ、結局負けた。

敗者が片づける、それが我々のルールである。

あそこでああしてればなあ、と負け惜しみを呟き、進藤がそれに皮肉で答える感じで片づけを進める。

「ご飯は何処へ行くかと考えていると、小さなソファに進藤が改まって正座していた。」

なので、俺も空気を読んで床で姿勢を正し、対面する。

ライバル枠は順番待ちだけど、隣は空いてるらしい。

隣……？

ずっと一緒にいてもいいならどうぞと進藤がソファの横のスペースを叩いていた。

あ、はい。

隣でいいかな。

というか隣がいいです。

き、金のメッシュが昔からとても可愛いと思ってました！

あと、その、性格とか顔とか全部好きです！

た、タイトルとれたら結婚しましょう！

「私達、結婚します」と藤崎に連絡したら、泣かれた。

幼馴染が幸せを掴んだことへの感動の涙か。
「なんでヒカルなのー!?!」って叫んでた。

原作：I b I bでほのぼのハッピーエンド — 第2

5話 — (完)

第25話

— 1

父と母がワイズ・ゲルテナという芸術家の根強いファンらしい。

熱を上げ過ぎて、外国のゲルテナ展に見に家族で海外旅行をしてしまうくらいなのだから、とても魅力があるのかもしれない。

俺は好きじゃないけど。

好きじゃないけど。

重要だから何度でも言う、俺は好きじゃない。

むしろ嫌いである。

気持ち悪さを感じるからだ。

日本で両親から見せられたレプリカや凶鑑越しても気持ち悪さは半端なかった。

本物？

ははっ、げろげろですな。

「本物のゲルテナは何処にある」的なことを喚き散らすおっさんがいた。めっちゃうるせえ。

外国語に疎い俺でもわかるくらいゲルテナを欲しがるとかキモい。

気持ち悪いのでトイレを指す。

両親から離れてふらふらだ。

限界でおろろろっしてしてしまうかもしれん。

そんな俺を見かねたのか、赤い瞳が綺麗な少女が声をかけてきた。

外国語は簡単な聞き取りならできるが、日常会話は無理だ。すまん。

自己紹介とか住んでる場所くらいなら会話できた。

俺の糞英語で意思疎通とか奇跡だろ。

日本に帰ったらマジで外国語を勉強する。

イヴという名の少女に迷惑をかけてしまったことが心残りだ。

少しばかり喋ったら気分は落ち着いた。

会場内で見かけたらイヴにはお礼を言わなければ。

気を取り直して歩いていたら電灯で明滅を繰り返した。

施設が古いのだろうか。

やがて電気が消えた。

道に迷いそうなので戻ろうとするが扉が開かない。

電子キー的な感じだろうか。

なんて杜撰なのだろう。

暗闇の中を歩いていると、二階から物音が聞こえた。

寺生まれと一緒に武者修行した俺の経験からして、なんか奇妙な気配だ。

ああ、もう鬱陶しい。

消滅させてやろうと進むとキモい絵を見つけた。

酷く騒がしく、内部に変なのばかり存在している空間を感じる。

「破あ!!」

口裂け女の口の端を治療できる程度の出力で霊力を出したら引きずりこまれた。q

— 2

俺が引きずり込まれたこの空間だが、予想以上に強力だったらしい。

思念が半端ない。

手抜きの霊力で逆に扉を開いてしまったのかもしれない。

やっちゃまったぜ。

相手の結界的なサムシングに引きずり込まれたからかなり不味い。

イメージとしては腹の中に入ってしまった食物が一番近い。

じつくりと溶けて死ぬのだ。

脱出する方法としては、逆走して口からダイナミックエントリー、肛門からエクスト

リーム脱糞、腹を裂く、この三通りだ。

あとは逆流性胃炎になってくれるまで生きるという耐久デスマッチ。

腹を裂いたらどうなるかわからん、この世界の中身が溢れ出る可能性もなくはない。

口から嘔吐脱出大作戦は、俺が入ってきた『入り口』としての機能を持つ部位が消えたので無理。概念空間って嫌だわホント。

となると、うんこコースくらいしか……。

ま、まあ、脱出法を決まればちんたらしている暇はない。

さつさと脱出しないとマジモノの霊的なうんこになるからな！

……ちんたらとうんこで下半身ワードが被ってしまった、壊れるなあ。

頭の無い彫像みたいなのがジェットストリームアタックをかけたきたり、呆れるほど有効な戦術をしたり、ドウエドドウエドウエと追いかけてきたりしたが難なく追い払った。

意味不明な存在はとりあえず「破あ!!」しとけば解決する。

問題は戦闘によって適当に走り回ったことである。

もう道わかんねえなあ……。

テキトーに道を彷徨っていたら黒いラフレシアを拾った。

これはなんとなく持っていなければならぬ気がする。

しかし、美しさが零である。

咲き誇ったラフレシアとか誰得だよ。

サイズは胸ポケットに入るくらいなただけど。

話は変わるけど彫像とか絵が襲い掛かってきすぎなんだよなあ、ここ。

ここまでワイルドな空間とか、赤い大地と空が広がる空間に隔離されてSDKとやらと無双ゲーみたいな大乱闘をやったり、変な裏世界で三角頭とバトるしたり、宇宙空間でばいど?とかいう宇宙人を退治したのを思い出すレベル。

あとはゾンビが歩き回る街でナイフ片手に脱出したときとか、カメラ片手に幽霊と遊んでる女性を連れてダイナミック無双とか。

ああ、もうめんどくせえ!

「破あ!!」

うおっ!

「破あ!」したらラフレシアが巨大化したんですけどお!!

— 3

もうめんどくさくなって壁を破壊しながら歩いていると、メアリーという少女と出会った。

メアイーとかメリーかもしれない。

外国語の発音って難しすぎなんだよ。

メアリーは黄色に近い金髪、大きな青い瞳の少女だ。

年はイヴと同じくらいだろうか。あれ、イブだっけ、ウブだっけ。

まあいいや。

確か九歳とか言ってたからそのくらいか。九歳だよな？ たぶんナインって言ってたし。お前の語彙がナインとかそういうのじゃないよな？ な？

メアリーがホントに生きてる人間ならなのだけけれど。

メアリーから生きているような、死んでいるような、そんな感じが漂っているのだ。

過去に出会ったアリスとかいう少女も同じだった。

もしかしたらこの空間はメアリーのためのモノという可能性もあるのか……？

まあ、いいや。

めんどくせ。

「破あ!!」

メアリーの持つていた造花である黄色のバラがラフレシアと化した。
なずえ……^ q ^

— 4

メアリーを肩車して突き進む。

壁も障害物も無いも同じだ。

なぜ肩車をしているかというと、言葉がわからないのでボディランゲージで会話しているのだ。

肉体言語でわかったことは一つ。

ロリコンになるのも仕方ないと思う。

壁を突き破って辿りついた部屋で奇妙な木があった。

「破あ!!」すると指輪が手に入った。

え、なに、ドロップ品的なやつなの？

こいつら倒すとアイテムと経験値がもらえたりすんの？

もしかしたらここは異世界なのかもしれない。

俺の異世界ファンタジーが始まる。

俺は勇者になれなかったよ……。

そもそもここは異世界というよりも異界だし。

勇者でチーレムとか夢のまた夢のようだ。

悲しい。

嘆いているとイヴとギャルーが背中をさすってくれた。

ギャルーで名前が合っているのか不安だが、イヴとメアリーも同じようなものなので

諦めた。

帰ったら真面目に英語のリスニングする。

で、ギャルーとイヴの二人だが、壁を突き破ったら出会った。

以上。

なんか二人は頑張ってたが、どうでもいいのでスルーだ。

爆進するぞオラア！と気合を入れたら二人に止められた。

なんか輪つかの的なモノを探しているらしい。

指輪ならあるよと渡すと「でかした！」と抱きつかれた、ギャルーに。

外国の方はリアクションが大きいぜ。

でも紫の髪って変わっているよな。

あと抱きつき長いわ、ホールド技か何かだよ。

二人に連れられ、新郎新婦の作品に指輪を渡すと、お礼にブーケを貰った。

なるほど、ブーケを得たということは俺は近いうちに結婚できる可能性が高いのか……。

金色の鬨ちやんと結婚したいです。

二次元から早く出てきてくれ(迫真

キモい青い顔をした絵が花をくれと言ってきた。

ブーケをイヴに託し、俺のラフレシアを渡す。

「うぎゃああああ!! た、たすけてk、無理いいい、そんなに曲がらないのおお……
!」

という叫び声を残して、絵が黒いラフレシアに食われた。

どうしてこうなったんだ……q

俺のブラック・ラフレシアに食われた絵が塞いでいた部屋に入る。

絵が断末魔を挙げていたが、正直、その、どうでもよかったです。絵だし。

女の絵とか頭のない彫像が襲ってきたので、部屋ごと「破あ!!」した。

残骸を残して静かになったので、鍵を開けて先に進む。

ぶっちゃけ、黒いスーツを着たMIBとかいう紳士たちと協力して宇宙人による地球侵略を退けるほうが大変だった。

戦闘後もニューライザーでピカッとされるから油断できない。

放たれる前に光を避けるか、曲げなければ防げないし。

三回くらい喰らって学習したのだ。

で、なんやかんやあって皆とわかれてしまった。

床が抜けてギャルーが消えたり、イヴが部屋に閉じ込められたり、メアリーがUFOにさらわれたためだ。

とある町でUFOが実験していたことがあったり、宇宙人のミスで未来の地球が滅んだのでそれを直しに言った事があったな。まあ関係ないので俺の宇宙人の話は省略。

テイク2

床が抜けてギャルーが消えたり、イヴが部屋に閉じ込められたり、メアリーがUFOに攫われてしまった！

くっ、俺はなんて不甲斐ないんだ！

雑魚モンスター並みに次々現れたゲルテナ作品をガラクタにする作業を終え、無力感に苛まれる。

廊下を埋め尽くされ、天井まで溢れた出待ちファンを残骸に変える作業程度で隙を見せてしまった、やはり俺はまだ未熟だ……。

とりあえず変な美術品に襲われるギャルーを救ったり、マネキンを見て悩んでいたイヴのために頭の無い彫像に移植して生まれ変わらせ、UFOに攫われて気が狂ったのかパレットナイフでマネキンの頭部を滅多ざしにするメアリーを正気に戻した。

正気に戻すために頬を引っ張ったのが功を奏したのかメアリーは静かになってくれた。

あと隠し持ったパレットナイフは密かに回収した、危ないし。

メアリーとイヴの手を引き、ギャルーに裾を引かれながら進むと、クレヨンで描かれた落書きみたいな空間になった。

マジカントかなにかだろうか。

フライングマンとの別れはマジでトラウマだった。フライングマンが勝手に突撃し、死んだので家に戻ると、墓が増えてるんだよ。一瞬で。ひよえー☒の☒

この謎空間、そこら中から斧とか星とかが降ってくるが、俺のブラック・ラフレシアが自立歩行しながらもりもり食べてくれるので問題なかった。

メアリーが「入れ替わらないと……」と呟いていたが、ラフレシアを見て涙目でぶるぶるしていた。

泣かれるほど頼もしいのだ、我がブラックラフレシアは。

何故かメアリーが走りだしたので追いかける。

瞬間移動能力者であるジャンパーたちとの戦いは足の速さが意外と重要なので、俺はかなり足が速い。そもそも戦いは速さが全てだ。時止めに対応するなら極限的な速さしかない。

だからぶっちゃけ、メアリーの真後ろをぴったりとくつついて走る感じになってしまった。

メアリーとともに家に飛び込む。

何故かメアリーは涙目だった、あとパレットナイフを探しているようだが取り上げていることをジェスチャーで伝える。

ははは、外国幼女の涙目ペロペロ。

二階に上がるとメアリーの絵があった。

やはり俺の考えが当たったな。

この絵はメアリー本体で、この世界はメアリーのためのものだったのだ。
たぶん。

いや、俺はテレビで出てるちゃんとした(?) 霊能力者じゃないので事情とか見ただけではわからんからテキトーだけど。

まあいいや。

「破あ!!」

メアリーが育ったであろう部屋を散策する。

友達作り方の本やお絵かき帳、話し相手を求める日記などだ。

メアリー……。

まあ、俺がメアリーの友達になってやるから大丈夫だ。

寝てるメアリーをおぶさりながらそう誓った。

ちなみに「破あ!!」することでゲルテナの作品としては終わりを迎えたが、新たな生命としては始まりなのかもしれない……。

テキトーに「破あ!!」したらだいたい上手くいくからぶつちやけ、俺もよくわからん
 ^ q、

とりあえず暴食の限りを尽くしているラフレシアから、メアリーに足りない生命力的なサムシングを貰ったので問題ないはず。

なんというの、芸術品たちに宿る執念がメアリーに命を与えた的な？

イイハナシダナー(; ∇ ;

俺のブラック・ラフレシアがこの世界の長となり、統治していくことに決まったよう
 だ。

まるで子供だったあのラフレシアがここまで成長するとは……。

感動もひとしおだ。

互いに熱い抱擁を交わす。

「ごさいました！」

終

ラフレシア、ラフレシア、ラフレシア、ラフレシア、ラフレシア「って、なんで俺くんが!? 改めまして、ありがとうございます！」

本当の本当におしり

——15

メアリーが外に出られない事案が発生。

どうやらこの世界生まれのメアリーが欠如することは許されないようだ。

メアリーと一緒に俺たちは戻りたいんだ！

クソツ、神はなんて残酷なんだ……！！

代わりがないとダメだとか！

代わりなんているわけ……あっ！！

私に良い考えがある！

奇跡よここに！

「破あ!!」

——エピソード

「破あ!!」によってメアリーも一緒に出られることになった。

みんな仲良く喜んでいる、俺も嬉しい。

やはり寺生まれと一緒に鍛えた「破あ!!」は格が違うぜ。

ボールに乗ってザクと宇宙で戦ったが「破あ!!」が無かったら死んでいただろうし。

全ての次元世界を合わせてもたった一人レベルの「破あ!!」の才能に胡坐をかくことなく努力してきた成果のおかげだろう。

メアリーはイヴの家に引き取られて仲良く暮らしたし、ギャルーも本名はギャリーらしくて仲良くなったし、まさにハッピーエンドだな。

「本物のゲルテナ」を望んだおっさんも、ゲルテナ作品に囲まれる世界で生きていける

のだから、それって幸せなことだろう？

原作：メガテン3　ズツ友のメガテン3（完）

— 1 —

クラスにいるキョロ充が入院した担任のお見舞いに行こうぜという提案した。

提案したクセに自分の発言に不安なのか、周りをちらちらムーヴ。どんだけ自信がないんですかねえ。

だが、どうにも周りの反応は薄い。

たぶんみんな行かないだろう。

俺も行きたくない。

担任はあれである、なんか自分にはもつと特別な役割があると思っっているタイプというか。

社会人になったクセに社会に適合していない的なアトモスファイアがヤバいのだ。

もつと社会経験がある人間を担任にしてほしかった。

キョロ充は担任が女性だから、なんとというか、そう、思春期特有の恋慕的なあれを抱いているのかどうなのかよくわからんがそういうなんというか、ああ、もうめんどくさ

い、それがあれでこうなってQ・E・D。下半身系ダンスイーなんやろなあ。

面倒だから断ろうかと思ったが、内申に色を付けてくれるんじゃないかと期待したが、やはりめんどくさいから断るかなあ。

担任って見るからに特別扱いに弱そうだけど、わざわざ行きたくない。

相手にされていけない空気に凹んでいたキョロ充。それで何故かきよろきよろしながら、俺の近くに座りやがった。

きめえなホモかよこいつ。

パワポタ4で対戦していた間薙が行くと言い出した。

彼女は栗原智恵ちゃんが至高とか考えていたら、逆転ホームランを打たれた。

俺の154kmSF Fがまさかの一撃……。

ちくせう。

負けたら罰ゲームだったが、内容は決めていなかったわけ……。

——間薙に付いていくことになった……。

病院に着いたのだが、待ち合わせ時間になっても誰もいねえ。

待ちに待って、やっと遅れて現れたのが、我がクラスのおぜうさまだった。

プライドがマウント富士レベルのおぜうだ。エベレストかも。

俺のことはナチュラルに無視して待合室に座ってケータイをぼちってる。

その後キョロ充が出現、テンパリながら病室を探しに行った。

なんて纏まりがない連中なんだ……。

そもそもおぜうさまはなぜ来たのか、最大の謎である。間薙が、なんだつけ。たぶん知り合いだったかな。

受付にすら人のいない病院とか奇妙すぎでしょ、と内心で考えながらふらふらしていると間薙が来た。

くっそ胡散臭いオカルト雑誌片手だった。

それ買ってたから遅れたとかだつたら激おこすよ。

話を聞くと変な男につかまって時間をロスした挙句に渡されたとか。

いや、捨てろよ……。相変わらず人がいいとか。

最終的に雑誌はおぜうさまの手へと渡っていった。

変な男から渡された雑誌を読むおぜうさまとか、薄い本で胸が熱くなる展開が待って

そうだな。

かぴかぴしてないよね？

いや、むしろかぴかぴしていたとして、それを間薙に渡すということはホモの可能性が高い……？

トイレ行ったら間薙がいなくなってた。いや、間薙がホモの下りとかは関係ないから。冷えて催したただけだから、信じてよお！

さて、間薙だが。先生が見つからないのでキョロ充が、間薙に探しに行くよう頼んだらしい、地下に。

こいつ、怖くて他人に任せたとかじゃないだろうな……。そもそも地下とか意味わからん。いるわけなくね？ ああ、でも担任は太陽光から逃れたい系女子だし、地下に潜っている可能性も……。いや、やっぱねえわ。

俺も地下に行くかなとエレベーターに向かうが電気が止まっていた。

ならば階段だと扉へ向かえば謎のオーラで足が進まない。

どうなつとんねんこの病院……。

地下へ降りる手段が見つからないので、病院を周ろうと歩き始めて中庭に出た時に異

変に気付いた。

風景がひどく不気味なのだ。空が変に色づいている。

地面が捲れあがっているというか……。

怪奇！

地球反転現象！

ああ、窓に！ 窓に！

みたいな。

呑気なこと言っていないでさっさと避難しないとヤバ……

????????

(ω´)

????????

うわああああああああああ

3

起きたら首が無くなった。

つまりあれか。

人生からクビンゴ w w w w w w w w みたいな。

アホらし。

どうやって視界を得たり思考するんだって話だ。

夢かなんかか。

寝よ寝よ。

—
4

起きたらやつぱり首が無かった。

夢じゃなかったー。

まあ、無くなった物はしょうがない。

切り替えていこう。

というか、なんかこう自然に受け入れられるし、やたら冷静になれるというか。

いいか、なんでも。

何処に行ったらいいかなと考えながら、足元の瓦礫に目を向ける。

瓦礫の下から乾いた苳ジャムと砕けたピンクのスポンジみたいなのが見えた。

誰だよー、ここで優雅に午後のティータイム過ごしたのー。

ちらつと見える頭髮。

え、まさか俺の頭部がこの下に……。

見なかったことにして切り替えていこう。

ボデイペイントしてイメチェンした間難と出会った。

頭部が無かったから殴りかかられたが、会話して宥めた。

発声器官が何処にあるのか俺にもわからんが、会話できるので当面の問題はないだろう。

ここでアドバイス、対話こそ知能ある存在に許された絶対にして唯一の特権だ。口で宥め賺し丸め込めば誰だって味方、無理なら殺せ。

で、イメチェン理由だが、見知らぬ糞ガキに食わされた虫のせいらしい。

背骨から生えてる角つぼいのか、緑色に発行するボデイペイントとかマジモノらしい。

色々と異次元すぎんよ……。

とりあえずパーカーを探すついでに状況把握の旅に出るとか。

来てくれるか？ だってよ。俺とお前の仲だろ、聞かなくてもわかれよ。

で、このちっちゃいの何？

妖精？

で、旅の道連れだと、へー。

まあ、首無くても生きられるし、そういうのも極稀にとても良くあるんじゃない？ 知らんけど。

外に行こうとしたら空飛ぶエイが襲い掛かってきたので頑張つて倒した。

戦いとかやったことない系ダンスイ二人と妖精一体でひどい泥沼の戦いだったが勝った。

とりあえずヘルメットが無ければ即死だったと言つておこう……頭部ないけど。

ちなみに俺たちの頑張り物語は省略である。

だってピクシーのジオで感電させて、落下してきたところをリンチしてただけだし。病院は逃げるところが多くて楽だったぜ。

ピクシーは旅の途中までを供にする予定だったが、なんか間雑にラブラブチュッチュなので最後まで来てくれるのかなんとか。

イイハナシダナー。

俺は眼中にないらしい。

まあ、頭部ないしな。

悪魔とかボコしながら旅路を進むと、おぜうさまと出会った。

こいつ生きてたのか。

というか、俺や間雑と違ってどう見てもナチュラルヒューマンなんだが、どうやってここまで来たのかと問い詰めたい。

俺たちだって結構なレベルでダメージとか受けたのに。

エイとかどうしたんよ。

あんなんパンピーには無理だろ。俺はほら、頭ないし。

まあ、いいや。

間雑は話しかかったようだが、おぜうは好きなかだけ喋ってクールに去っていった。

自分勝手すぎい！

普通は協力してトムソーヤーするところだろ！ もしくはドラゴンヘッド！ 万が一にでかしたあ！

その後は間雑に雑誌を渡した例のホモがなんかワープゾーンを見つけたので、そこに「のりこめーへへ」「おーへへ」してみた。

が、どうもトラブルが発生したらしい。

予期せぬ場所に飛んだとか。

ホモ、無能。

なんか俺がなっていた可能性があるとかいう思念体のちよつと強い版であるスペクターをボコす。

ちなみに可能性の話はピクシーから聞いた。

流石の俺もこれになるのは遠慮したい。

だって顔面やぞ？ 可愛くないゆっくりだよ？

全身が緑に発光する半裸短パンも嫌なので、首なしで我慢するわ。

というか現状では首なしってかつこよくね？

ピクシーに鼻で笑われた。

戦闘後、さらにワープ空間を進むと、レンコンみたいな穴がある空間を発見。

覗き見ると劇場みたいなどの壇上に車椅子のジジイが出現。

レンコンの主だろうか。我が名はレンコンキング、コンゴトモヨロシク・・・みたいな。

車椅子の後ろにいたBBAが演説したら、間雑の手に燭台が握られていた。

レンコンマジックだろうか。

王国のメノラーとやららしいが、蓮根の燭台の方がかつこいいと思う。字面的にも。

— 6 —

BARに寄ったり、カタカタ震えるキモい泥人形のマネカタの依頼を受けたり、ハマ喰らって昇天しかけたりと色々あったが、ギンザ大地下道に来て……。

地面に飲み込まれた、q、

お、俺を食っても美味しくねーぞ!?!みたいな。

飲み込まれた先は荒野で、マタドールの骨が現れた。

なんか蓮根の燭台が欲しい好事家らしい魔人に絡まれた。

お前も私の燭台が欲しければ、私を倒すがいい!みたいな雰囲気だったし、そういう

ことも言ってた。

こいつは勘違いしているようだが、誰もがみんな同じ趣味ではないし、骨董品に興味はねえんだよ！

まあ、バトルになったんだけどね。

間雑や他の仲魔と挟み撃ちして前後からボコつてたら倒した。

「かぼおてー」とか「あんだるしあ！」とか叫んでいたが、とりあえず解除魔法放つたりしてボコつたのが良かったのかもしれない。

一対多の理不尽さは形容しがたいな。

勝利の証として蓮根の燭台その2をカツアゲした。いらねーんだけどね。

ワープゾーン的な先にあるレンコン世界に蓮根の燭台で火を燈すと“かるば”とやらに行けるようになった。

かるばが横文字なのか、漢字なのか、それすらもよくわからん。

なんでもかんでも英語とかドイツ語にしたがるこいつらは間違いなく中二。

が、狩るパーティーの略語だったら経験値稼ぎに良さそうな空気を感ずる。

“かるば”だが敵がめっちゃ強かった。

いや、最初のところはちよろかったのだが、調子抜いて奥まで進んだら苦戦した。狩るパーティーの略語の可能性が高いですねえ、これは。

それでも最奥まで行つたけど。

そこから先は新たな燭台が必要らしい。

悪魔とかいう人間とは違う存在だという話なのにセキュリティーが万全すぎて草。

鍵かけたが心配になって一杯鍵を取り付けちゃつてどこに鍵があつたか忘れるおばちゃんか。

— 7

まんとら軍とかいう、まんだらけから派生した軍みたいな連中の拠点で牢屋に入られた。

これも全部後述するかもしれないが、キョ口充のせいだ。

まんだら軍だが、脳筋しかないらしくて、裁判は勝てば無罪だとか。

やべえ、文明が退化しまくつて決闘裁判にまで後退してた。

ならば決闘だ！といいながら手袋でも投げつけたらいいのだろうか。代理騎士とかいないんだが。

力こそ正義、と挟んでボコした。

挟撃こそ男のロマンよ。

あんまり有罪にする気なかったのかもかもしれないなあと間雑と話したが実際どうなのだろうか。

だって一対多ばつかだつたし。

気分よく「まんとら本拠にのりこめー^^」「おー^^」と走っていたら、もみあげが長い学生服のイケメンが斬りかかってきた。

銃刀法違反が無い糞みたいな世紀末世界が憎い！

挟撃こそ男のロマンよ、とポコそうとしたが、モコイとかいう不細工な銅像みたいな悪魔のブーメランで蹴散らされたあと、シヨポーたんのマハガルで蹴散らされた。

もう仲魔なんて知らない！とばかりにイケメンに殴りかかるが、全然当たらない。というか、動きが速すぎて残像が見えるんですけど。

明らかに必中するはずだった魔法を前転で回避するとかこんなの絶対チートだよ！

首が無くなって良かったことは、手足が刀で斬られても再生することかなと遠い目で悟っていると、マジ可愛い黒猫がなんかイケメンに伝えた。そして、イケメンは何処かに去っていった。

なんだっただんた一体。

通り魔に襲われた被害者の気分で、萎えた空気のまままんとら軍の本拠地へ。

鬱屈していた我々は、ごずてんのーとかいう偉そうなのに逆切れしてバツくれ、骸骨の坊さんに襲われるというミラクルを起こしていた。

イベントが盛りだくさんすぎて、一般人の俺の許容量では付いていけないよ……。坊さんとの戦闘もかなり苦戦した。

囲んでボコつてたら“だいかっぱ”とかいうので蹴散らされた。

でかい河童が現れるのかと身構えた俺は悪くないし、よく考えたら相手は坊主なのでから喝破だよなと思ったり。

なんとか倒したが、このままではこの先生き残れない気がした。

キョロ充の話をするかもしれないと言ったな、あれは嘘だ。

— 8

ホモと話した後、なんか頼まれて“にひろきこー”とかいう場所に行くことになった。

難しい言葉ばかりで俺の脳みそがヤバイ。

なんかおしゃれを勘違いしてオサレになってしまった感じがする”にひろきこー”を踏破。

パズルが多過ぎてこんなところで暮らす悪魔は大変だろうなって思った。

結構奥まで行くと、M字のハゲが哲学めいた空気を漂わせながらなんかぱらぱら喋った。要約すると、世の中は優秀な俺の思想を理解していないと駄々捏ねてた。で、バツクれた。

構ってチャンかよめんどくせーやつだなと後を追おうとしたら、ブリーフを履いた二足歩行の豹っぽいやつが両手に構えた剣を向けてきた。

属性盛りすぎないじゃないですかね……。

漏れまで安心ムーニーマンを、鉄球を投擲する。ムーニーマンが許されるのはエルレイド。焼き味噌塗ったら徳川な。

近づかず、遠くから鉄球で相手を倒す、それが俺のひらめいた戦い方である。

ジョジョ読んでて真似してみた。

未だに鉄球はカーブやフオーク、シユート、ナックル的な動きしか出来ないが、将来的にはなんかすごいことをしたい。

とりあえずSFFを投げてムーニーマンを撃破。俺のストレートはそのうちHOP

する。

なんかかんややってたら、悪魔のエネルギー源である“まがつひ”とやらを集めるシステム的なハイテクが発動して“まんとら軍”は滅んだ。

末期を嘲笑いに行ったら“ござてんのー”もやはり朽ちかけていた。

偉そうなやつは何故こうやってすぐに滅びるのか、フラグ回収が鮮やかすぎて芸人の域に到達している気がしたぜ。

途中でおぜうさまが電波を発していた。

やはりこの世界でのソロプレイヤーは正気ではいられないのだなと思った。

また、牢屋に入れられていたキョロ充もS A N値を失っていた。俺らと一緒に行くか、と誘ったのに駄々を捏ねて逃げて勝手なことした結果である。

足取りがふらふらしているから悪魔に掘られたのかもしれない。

何処を、とは言わんが。

一つだけ言っておくと、凌辱されるのはおぜうさまのポジションだろ！ それなのにキョロ充が掘られるなんて、こんなの絶対おかしいよ！

電波二人は充ての無い旅に出て行った。俺らと話なんて聞く気もなければ、する気も無かったようだった。勝手に被害者意識持って好き勝手やってくれて、ああもう。

気分を変えて、泥人形であるマネカタどものお使いクエストを遂行。人との縁は大事にしたほうがいいんだ。こいつら人じゃないけど。

イケブクロだった場所の高速道路で、バイクのライダーと魔人ヘルズエンジェルの熱いレースが行われており、そこに熱烈飛び入り参戦。

ライダーは首なしライダーでセルティという御嬢さんだった。

「なんと奇遇な」と頭部のないアピールでナンパしながら魔人からバイクをパクる。

これはあれだな、「乗りなよ、地獄の向こう行きだぜ？」って言いたくなる。

なんかスピードの向こう側に行きたくなるし、ハードラックとダンスつちまう（真顔無免でもバイクに乗れるという事実、文明崩壊はやはり最高ですな。

バイクを手に入れたから、人馬一体による黄金長方形も出来るに違いない。

ボールブレーカーでとりあえずホモは老けさせておきたい。

泥人形は助けると凄く偉そうになって腹立ちます（おこ）

あとは魔人のホワイトとレッドなライダーをセルティと一緒に轢き逃げアタックしたり、モイライ三姉妹とかいうBBAを倒したりしたら、中二病を発症した担任とM字が不倫してフォーリンラブ（意味深）しているのを見たりした。

あとはご立派なマラー様を轢き逃げして、下半身がヒュンってなったりした。

ブラックライダーが現れたが、またライダーかよ魔人は量産機か何かかと苛立ちながら、馬から引きずりおろしてボコした。

で、“かるば”に乗り込む。

うわあああああ、もみあげいけめんだああつあああああ
!!!
もうおしまいだあああああつああ!!～q～

— 1 1

もみあげがトラウマになったぞバーロー。

なんとか逃げ切れたが、下半身がヒュンどころではない恐怖だった。

で、ホモが呼んでいるので向かうが、意味深に考え事をしていた。

ホモに怒りのアイアンクローをぶち込み、再びおつかいクエスト。

おつかいさせられすぎじゃね、俺たち……。

感謝の言葉もないし。間薙がいなかったら汚い現代オブジェだからな、お前ら。

ホモ、M字、泥人形の長という吐き気を催す邪悪コンボとの会話を終えたと思ったら、ペイルライダーという魔人が！

もうライダーはお腹いっぱいだぞオラア！

馬から引きずり降ろそうとしたら、人馬一体を体現したのか、下半身が馬と融合していることに気付いた。

……。

鉄球でぶちい！と上半身と下半身を引きちぎってボコした。

数は力！

力こそ正義！

カワイイは正義！

よって悪魔に正義はほとんどない！

公園に行ったら、狂気の泥人形サカハギが現れた。狂気の泥人形ってなかなかのパワーワードだな。どつちかで良くない？

あと反射持ちの象。

小賢しいやつらである。

鉄球で頑張るも、物理攻撃を反射するというウザさの前にめげそうになった。

が、努力した。

禿るくらい努力した、頭ないけど。

頑張った末に、『左側失調』を獲得した。その名の通り、相手の左側の感覚を消す技術である。

……なんか違うなあ。

俺が頑張つて象と戦っている間、間雑たちはサカハギをリンチしていた。

悪魔の世界でも強いのはやはり数の力だ！

正義なんて糞喰らえ！

で、その後はピクシーキングとピクシークイーンみたいな悪魔と話して、そこにいたんだが現れたんだかした担任と話して、担任がめっちゃキモくなった。

もう一度言う、めっちゃキモくなった。

わかりやすく説明すると、気持ち悪くなった。

原因はアラディアとやらを宿したせいらしい。

顔面がモザイクかかったように歪んでいる。あまりの醜さにセルフモザイクでもかけたのかもしれない。

担任だが、アラディアを宿した理由は願いを叶えてくれる都合の良い他に縋ったからだと思われる。

本人じゃないと本質的なことはわからないが、会話から判断したけど多分あつてるだろう。

ちなみにアラディアは、迫害される貧しい異教徒の女神らしい。

暇なときに崩壊しかけた図書館で調べた。

ネットが無くなった世界ではググれないからツライ。

文明崩壊とかやつば糞だわ。

異教徒を救えてないので、担任が縋っても無意味じゃないかなあと思ったり。

救われない憐れな信徒の高度なロールプレイの可能性……？

公園をうろついていたら聖書の究極ピッチことマザーハーロットとバトルになった。災厄のラストが幕開けとか、ただの公園には舞台として荷が重すぎる気がしないでもないような、どうなのだろうか。

顔面は骸骨なのに、肉体が美しすぎて腹立つ。

セルティは頭部が無く、肉体も美しいが腹は立つてこない。

この差は一体……。

リンチコンビネーションで囲んでマザハをボコった後、変化があったらしい。まんたら軍の本拠地に行ったら、おざうさまが便器になった。

「信じて送り出したおざうさまが便器になった」、これだけ聞けば薄い本ルート一直線だ。

が、実際は便器と一体化したのだ。

臀部からは迫り出した便器。それで用を足せとでも言うのか。

違う、そうじゃないと声を大にして主張したい。

あとはホモのおつかいを達成したら、ホモが世界を支配しようとして天罰喰らった。流れるような自爆。ござてんのーの系譜かな？

で、ホモのお零れの“まがつひ”でキョロ充の顔面が巨大化した。

ポイントはキョロ充の顔面が巨大化したことである。

そう、顔面をベースに巨大化しているのだ。

……可愛くない新種のゆっくりか何かか貴様。

しかも帽子とまで融合しているし。

もう意味わからん。

とりあえず、この世界では人間を辞めたらゆっくりになる可能性が高まるようだ。

あとは角と発行する入れ墨、便器、顔が気持ち悪い、ナルシスハゲ。

頭なくなるだけで済んで良かったー。

便器女と新種のゆっくりと一緒にクラスにいただなんて、俺の汚点だわ。

なんかわからんが、勝手に支配からの解放だー！と怒りのままに襲い掛かってくる泥人形どもを泥へと回帰させる。俺らに反逆しても意味ないのだが、頭がハッピーセットですらない単なるそこら辺の泥では理解できなかつたようだ。

力なき泥人形を砕き尽くし、泥人形の長であるフトミミを砕いた。

これが貴様らの招いた結果だよ。

しつかし、恩知らずしかいないのだろうか、この世界は。恥を知れ、恥を。間薙がどんだけお前らのお使いクエストを頑張ったのかと百年は説教したい。説教する前にフトミミは滅ぼしてしまったが。

まあ阿呆に言葉をくれてやるほど俺も心が広くないし、しゃーないね。

—— 14

とりあえず勢いそのまま大天使三体、魔人トランペッター、毘沙門天、蠅王、小ハゲを倒した辺りで俺たちは到達点がないことに気付く。いわば人生の目的、ゴールである。

このままだとただの狂戦士か何かだ。

冷静になるうかと思つた矢先、癒しである愛か何かでピクシーが強化された。

そうなると間薙が止まらない。

ピクシーの力試しとばかりにスルトとかモトとか色々といた魔王を打ち砕きまくるついでにM字ハゲに嫌がらせもする。

M字の目の前でアラディアとサマルをばらばらに砕いてやると、なんか世界をどうとかいう捨て台詞を吐きながら逃げて行つた。逃走手段はばっちりてむかつく。

後を追いかけると、東京が死んだことよって生まれたこの世界の中心で輝く太陽みたいな“カグツチ”とやらに届く塔に登ることになった。

頑張つて登った。

登った階層が200階を突破した。

でかすぎ、作つたやつ馬鹿だろ。いや、馬鹿だから作つたのか。

223階で待っていたM字ハゲはなんか巨大なエイになつてた。

もしかして病院で倒したエイの亡霊をその身に宿した可能性が高い……？

ドヤ顔で「魔法を禁ず」とか言つてたが、鉄球を投げつけて左側失調を喰らわせると、バランスを崩して横になった。まるで倒れて打ち上げられた深海魚みたいだ。あとは物理でボコると浮遊が保てなくなつたのか落下してきて、無様に倒れた。

今まで戦闘経験なかつたやつが戦場に出てきたらそろこうなるよな。ついでにこいつの最終目標はこの塔の頂点だ、逃げることも叶わない。

いつも通りリンチした。

329階に到達、新種のゆっくりであるキョロ充がいた。相変わらずキモい見た目だ。

きよろきよろしていつてね！とか言い出したら吹き出す自信がある。

キョロ充だが、どうしてなかなか強い。

属性が変化することによって有効と反射属性が変化しまくる。

めんどくせえ。

が、鉄球を投げまくる。友への感謝を意識した1万回投擲練習である。

黄金の回転をまあまあ修得している俺の鉄球は万能属性と化している……といい

なあ。理想はいつだってわが胸に。

まあ、効いてるから万能属性的なサムシングだろ。

ゆっくりきよろじゆうは死んだ。

なんか台詞を呟いていた気がするが、ぶっちゃけどうでもよかったです。スルーした。

じゃあの。

あ、あともし帰れたとしてもお前の席ねーから。

ツールがパンツレスリングを仕掛けてこようとしたので、塔から突き落とされた。放出したマガツヒでバイクを浮遊させ、ツールをエアリアル轢き逃げしたのだ。序盤に出て来たくせに大物感を出してきてなんか腹立ったためである。

お前はもつと早く死んでおくべきだった。

400階超えから落ちたら悪魔だって一溜りも無いだろう(フラグ)

462階、便器女がいた。

薄い本的な意味でなく、物理的に便器という狂気の存在だ。

巨大だから仲魔みんなで用を足せるよ！ってか？

新種のゆつくりやエイの亡霊と同じく好き勝手やって結果がこれか。

ふざけるなよ、ほんとに馬鹿か貴様ら。

便器女を守るように、熾天使が二体現れた。

そうまるで守られるおぜうさまはトイレの神様……。

特に見どころもなく、熾天使を磨り潰し、おぜうさまを倒した。

おぜうの敗因は一つ、ウオシユレットが付いていないこと、そして俺はOTTO製品にしか興味がないことだ。

あ、二つか。
手間かけさせやがって。

便器の捨て台詞もシカトして塔を昇る。

そもそも便器は喋らないから。

俺たちの旅の到達点がさつき決まったので便器の相手をしている暇はない。

——17

旅の到達点、つまりゴールだが、間雑がコトワリとやらを拓くことだ。

他の連中が頑張ってたのもそれを拓くためだったとか。

なんかそのコトワリの方向で世界が作られるとか。

で、旅を経た間雑のコトワリは、もう少しだけ皆にコミュ力がある世界にしたいとか。
まあ、そうなるよな……。

コトワリは“ハザマ”であるとか。ちよつとかっこよくない？

世界の中心で光輝いていたカグツチに対して、コトワリを拓くぜ！と主張したら巨大

な顔面になった。

新種のゆつくりといい、コイツといい、流行なのだろうか。

みんなで頑張つて倒した。

長く苦しい戦いだった。NKT……ってやつである。

あとはコトワリを拓く……おーつとカグツチくん、真つ二つに引き裂かれたー!!

——18

カグツチを真つ二つにし、ルシファーが現れた。

間雑に虫を食わせたのも、蓮根の主なものも、パーカーを盗んだのもコイツなのだ。

超強くなった間雑をスカウトに来て、神を倒す盟友になれということらしい。

間雑は断つた。

即答だった。

そりゃあ、いきなり虫を食わせてくるやつと友達にはなれないよな……。

るしふあー☆は激おこになった。

嫌なら力づくでズツ友だよ!

ってことらしい。

実にいつも通りである。

ルシファーだけど、めっちゃ強い、q、

ヤバい、強すぎてハゲそう。

頭ないけど。

俺たちの勝利条件だが、別にルシファーを倒すことではない。

カグツチがコトワリを拓けばフィニッシュだ。世界さえ作ればどうでもいい。

が、それを阻止しようと男ルシファー怒りの猛攻撃である。

ルシファーが男かどうかは知らんが。

メギドラダイーンとかいう特殊必殺技による熱いアプローチ、どれだけ間薙にラブコー
ルなのかわかる。

まあ、間薙はピクシーに熱中だから叶わぬ思いだけど。

コトワリを拓いたらピクシーはどうなるのだろうか。

永遠の別れか、悲恋だな。

ここは俺に任せてコトワリを拓け！と言ってみる。

最後に二人で別れを惜しみながら、世界を新しく作るってロマンチックじゃん。世話になった友とその相棒のためなら頑張れる。

以心伝心。俺と言葉を交わすことなく間雑とピクシーはカグツチの下へ向かった。

俺にはコトワリが拓けないし、膨大なマガツヒを消費していたために身体の動きが鈍くなっている。

それらが俺が人間じゃないことを思い出させるのだ。

最後の最期で、俺は生きていないし、人間でいないことを理解させられる。

だからルシファアの相手は俺なのだ。

権利が無いのに遊び尽くした互いで醜く争って、無様に散る必要がある。

いや、散らなくてもいいけど。

あ、ヤバい。

ルシファアだけど、めっちゃ強い、q、

ヤバい、強すぎて死にそう。

生きてないけど。

そもそも単体で戦線を維持してるとか、俺凄すぎじゃね。

あ、セルティさん、マガツヒの供給でお世話になってまーす！

それでも俺は至高存在かよ。
絢爛舞踏と呼べ。

バイクのマガツヒ足んない、俺自身も結構足りない、セルティもガス欠。
マジお腹ぺこりんちよ☆

いや、ヤバいから。

超ヤバい。

動け、動いてよ！ 今動かないきゃ、何にもならないんだ！
バイクが動かないと戦線が崩れ……。

「トオオオオウルウウウウ！ おまえは俺の光だ!!!」

頑張つて塔を登つて来たであろうトールの胸を、叫びながら貫いてマガツヒをバイクにチャージ。

あれかな。

「Lesson5はこのために」的な、違うか。

「遠回りこそが俺の最短の道だった」のほうが正しいかな。

このときのために俺は居て、旅をしたのかもしれない。

バイクと一体化するように連動した俺自身の動き、そして存在を支えていたマガツヒの流れ完璧に掌握。

全てを集約し、鉄球をぶん投げる。

過負荷に耐え切れずバイクが自壊、そこから俺の足が吹き飛び、投擲の衝撃で腕も消し飛んだ。

どうせ頭もないんだ、どうでもいい。

砕け散ったバイクの残骸を横目に、這いつくばりながらも目を逸らさない。

とうとう俺が憧れ続けたあの技が実現したからだ。

そう、「火の玉ストレート」もしくは「至高の魔弾」である。

ボールブレイカー？

この世界にスタンドやそれに連なる技術はないんですがそれは。

俺がこの世界で得た全てによって圧縮された高密度のマガツヒを纏った鉄球がギヤルギヤルと音を立て、ルシファーへと迫る。

メギドラダインで相殺しようとしたが、それを貫通。俺の生き様は重いのだ。何故かゆるキャラのようなビジョンを纏った鉄球が、ルシファーに触れた。

ルシファーが無限の時を過ごしたかのように徐々に徐々に砂塵となって崩れてゆく。

崩れながら、新たに拓かれるコトワリを口惜しそうに見つめるルシファー。

それらを見ながら朽ち始めた俺。

ロックマンも限界を超えたロックバスター撃ったらバスター壊れたし。
同じようなもんでしょ。

最後に間薙が自分の意思を見せてくれて安心したわ。

崩壊前でも、人から頼まれたら断らないから心配だった。

あとは約束したから。

罰ゲームでも約束は約束だし。

あー、あれだわ。

上手く行ったらあれ言えよ。

「本当に…本当に…：「ありがとう」…それしか言う言葉がみつからない…」ってやつ。
視界が暗くなってきた。

そろそろ逝く的な展開だな。

ああ、なんだかんだ腹立つこともあったけど、旅は楽しかったな。

本当に、楽しかった。

間薙、おまえがいたから俺もここまで来れた。

間雑の彼女が校庭に落書きするとか言い出した。

めんどくせー。

パワポタ4で対戦していた間雑も行くと言い出した。

彼女は栗原智恵ちゃんが至高とか考えていたら、逆転ホームランを打たれた。

俺の150kmチェンジアップが……。

ちくせう……。

負けたら罰ゲームだったが、内容は決めていなかったわけで……。

——間雑に付いていくことになった。

リア充に挟まれる恐怖よ。

いや、まあ、罰ゲームじゃなくても行くけどさ。

「本当に……本当に……」「ありがとう」……。それしか言う言葉がみつからない……」
彼女もいつしよに来るらしい間雑が俺に言ってきた。

なに、ホームランのお礼？

それともデートの口実か？

よくわからんが、真剣な様子だった。

まあ、何かあつたら言えよ。

俺たち友達だろ。

原作：ハリー・ポッター ハリー1

— 1

ばらばら漫画が描きたくなくなって、手持ちの分厚い本であるハリー・ポッター全巻を用意したのは昨日のことだ。

1時間ほどで飽きてPSの懐ゲーをやって寝落ちしてしまった。

そして目覚めると、凶鑑を枕にして草原に寝転んでいた。

困惑とともにとりあえず状況を判断しようと立ち上がるが、いつもよりも視点が低く、身体が軽い気がした。

手足が短くなっており、驚いて口から漏らした声は自分でわかるほどに高く、そして幼くなっていた。

全く何もわからないまま手元にあつた凶鑑を広げてみる。

内容はモンスターファームの凶鑑らしく、読んでいると何故か落ち着いた。

四足歩行の獅子のような蒼い獣や二足歩行の猫のぬいぐるみ、巨大なカブトムシもどき、直立しているクジラ、火の鳥……次々とページをめくるたびに、凶鑑は孤独な俺に勇気を与えてくれる。

幾分か落ち着いた頃に感謝をこめてゆつくりとページを撫でる。

すると、描かれていた自律した猫のぬいぐるみである『ニヤー』が淡い光とともに目の前に現れた。

疲れているのだろうかと目を瞑り、何度か目頭を揉み、再び開ける。

そこにはファンシーな見た目をした猫を象ったぬいぐるみが鳴いていた。

なるほど……。

手元の図鑑に目を向けると、ちょうどニヤーの絵だけが切り取られたようになっていた。

俺が狂っていないければの話だが、どうやら図鑑から召喚されたようだ。

何故か縮んだ姿で草原に寝転んだ俺が自分を信じられればの話だが。

夢だろうかと疑い、ニヤーを触るがもふもふとした手触りが心地よい。

現実かもしれないが、感触のある夢があるのかもしれない。

ただ、現実だとしてニヤーを召喚できた理由がわからない。

もちろん、原理は知っている。

げ、げんりはしってる。

とりあえず、図鑑から現れた猫のぬいぐるみは俺に懐いているようで言葉も完璧に通じるらしい。

俺に対して悪意は無いようで、じつと上目遣いのまま何かを待っているようだ。もしかして、と指示を与えると忠実に動く様を見ていると忠誠度100なのだろうか
と想像してしまう。

褒める様に優しく撫でると猫のように喉を鳴らした。

生きているらしく、背を撫でている手には若干の温かさを感じられ、胸から腹にかけて僅かに上下していることから呼吸していることに気付いた。

膝の上で心地よさそうに丸くなっているニャーを見ていると落ち着きを取り戻してきたが、今度はなぜ召喚できたのが気になった。

片手間に凶鑑のページを撫でてみたが特に何も起こらない。

俺が理解していないうちに幾つもの偶然が重なった奇跡によって召喚できたのだろうかと思いはじめていた。

眠ってしまったニャーから撫でつづけていた手を離す。

そういうえば召喚した際に気持ちを含めたことでニャーが現れた。

ならば、と撫でてみるとドラゴンを召喚することが出来た。

ああ、なるほどね。

……げ、げんりはしってる。

手元の凶鑑からモンスターを召喚できることを知った、条件は気持ちを込めて撫でる

だけ。

もつと詳しく言うとう目に見えない何かを込めることが重要らしい。

凶鑑に関して少し理解したところで自分の身に起きたことを考えようとしたが、日が暮れる前に人を探すことにした。

見知らぬ土地での野宿は嫌だったし、人間と話すことで安心したいという思いもあった。

そして、移動の手間を省こうと竜に乗ったまま移動し、人里へと降りたら多くの魔法使いたちに囲まれて連行された。

連行された後を簡潔に語るならば5万文字ほどの微妙な物語になるだろう。

常に眼光の鋭い魔法使いに見張られる生活を送っていた俺は年老いた錬金術師の夫婦に引き取られた。

養父母となった錬金術師夫婦との日々は穏やかで、とても面白かった。

俺が錬金術に興味を持っているとわかると養父母は嬉々として知識を与えつつ、研究のために利用する魔法界の生物の散策に連れまわした。

満月の光に照らされた狼人間の群れの神秘性、いくつかの動物が混ざり合った姿をしたマンティコアやキメラの獰猛さ、亜人たちとの共同生活など、思い返せば“5万文字

ほどの微妙な物語”は実に充実していたように思える。

今では科学が排除されたために色々と難儀した生活も物語のおかげで、杖を振って物事をこなす文化にも慣れ、ドラゴンを気軽に呼んではいけないという常識も身に付けてファンタジーな世界に適應できた俺に隙はない。

しかし、未だに純血やらマグルやらという文化を理解することはできそうにないし、しようとも思わない。

「ヨロズ・ナユター！」

そんな異文化交流に励む俺は衆人環視のなか、随分とくたびれた帽子を頭に乗せていた。

「ふむ、見事に歪んだ才能を持っている。今は偏った知識だが将来は期待できるものになるかもしれない。いや、なるじやろう。そして規則よりも自分を優先する性分……」

東洋人の少年の頭に乗せられた草臥れた黒い帽子が声を発する。

帽子が呟くたびに少しばかり伸びたくせ毛がふわふわと揺れている。

ホグワーツ魔法魔術学校の名物の一つとも言われる知恵を与えられた帽子である『組分け帽子』によって寮が決まる。

学生一人一人の氣質や才能に合つた寮を選択できるようにと考えられた制度であり、学生の希望もいくらか取り入れることで、ホグワーツで過ごす寮へと振り分けられる。

勇氣のグリフィン・ドール、誠実なハッフルパフ、智慧のレイブンクロー、才知のスリザリンといった特色の異なる寮で過ごし、時には競い合い、時には互いの取り合うことで資質を伸ばすことを目的としている。

「ならば、スリザ「ハッフルパフ!!」……え?」

帽子が自らをかぶっている少年の組を半ばまで告げたが、途中で遮られる形となつて自分と同じ声がハッフルパフの名をホールに響かせていた。

少年が声真似をしたのだ、誰もが疑うことのない帽子と瓜二つの声を。

ハッフルパフの机から拍手と歓声が巻き起こり、少年は傍に立っていた教員へと帽子を手渡した。

帽子は戸惑いながらも己の判断が間違っていたのか思考を巡らせた。

だが、何度思い返しても、心優しいというよりも我欲を優先し、勤勉というよりも狡猾で、真つ直ぐというよりも曲がりくねつたと思えない氣質の少年だった。

ハッフルパフは少年の望むものとは正反対に位置する物と判断し、大成のできるスリザリンで才能を磨くべきだと終わつてなお判断し続けていた。

しかし、次の学生の頭へと置かれたことで先ほどの少年が声にするほど強く望んだこ

とだと納得し、すぐに思考を切り替えた。

少年が「蛇の観察は飽きた……」などと考えていたことなど、帽子には知る由もなかった。

ハツフルパフ寮で過ごすようになってわかったのは所属する学生は皆、真つ直ぐな性格をしている者ばかりということに気付く。

しかし、頭が固いというわけではない。

相手を理解しようという思いが強く、そして寛容な心を持つものばかりだ。

寮の談話室で魔導書から小型のモンスターを召喚しても、最初は驚いていたがすぐに慣れてしまった。

中には催促する者もいたほどだ。

一言表現するとすれば優しい、というのだろうか。

頭のネジがどっつかいってるのかもしれないという思いを僅かに抱いたことがあったが心に秘めた。

他人と交流するのが下手な俺でも寮に馴染め、ほとんどの寮生と知り合いになっ

たのだから驚いた。

宿題などは皆で協力するため、同じ解答ばかりだと教師に怒られたのも寮の気質のせいだろうか。

ダンブルドア先生のように、仲が良いことだと笑って認めるくらいの器量を見せてくれると有り難いのだが。

寮への入り口は厨房に近い。

入学して最初のほうはホグズミードへの裏道を作り、何か摘まみたくなる度に出かけていたが三か月ほどで面倒になった。

そのため、深夜にこっそりと厨房への果物が描かれた絵画型の隠し扉を設置した。

作業中に、太った修道士を懐柔するために納豆を備えたり、ピーブズの馬鹿が騒ごうとしたので召喚したゴーストで模擬戦して八つ裂きにしたら半年ほど姿を見せなくなったこともあった。

まあ、そういうことで厨房への行き来が楽になったということだ。

足を運ぶと詰めている屋敷しもべ妖精がこぞってお菓子やお茶をくれるのだ。

菓子を舌鼓を打ちながらお礼を告げると感涙でむせび泣く屋敷しもべ妖精だが、下手な魔法使いよりも魔法の腕は上だというのだから恐ろしい。

小腹が空いたら厨房へとよく顔を出していたのだが、大抵は先客としてダンブルドア

先生がいて、毎回耳クソ味を食っている気がする。

厨房への隠し扉を作り出してからは籠が外れたように弄繰り回した。

改造しすぎて中では魔法が使えなくなる部屋まで作ってしまった。

調子に乗って階段が意思あるように動いた辺りで教師陣に呼び出されて説教を喰らった。

そのまま謹慎になりそうだったがダンブルドア先生によって代わりの罰を提示されて助けられた。

ちなみに罰とは大広間の天井を、外の空と同様の景色が映るようになるというものだった。

……謹慎のほうが楽だったかもしれん。

ただまあ、ダンブルドア先生はユーモアに溢れているという事がわかった。

大広間の改修にあたって大量の魔法薬を使用した。

だって錬金術師だし、俺の魔法だと1年も保てなそうなので魔法薬によって天上二面を塗装した。

召喚を許可されたのもあって、それほど時間もかからずに完成できた。

欠点は天井まで影響を及ぼす魔法や魔法道具とのコンフリクトだろうか。

まあ、わざわざ天井に向かって使う人は現れないだろうから問題ないと思っておく。

維持の面では、定期的に改造した柱に魔法薬を“飲ませる”ことで効果が持続するという手軽さ。

自分の匠っぷりに驚愕である。

その改修の際に、別の目的で使用する魔法薬も紛れ込ませることに成功した。必要以上に魔法薬が集まったので俺専用の部屋を作ろうと思いついた。

ホグワーツに入ってから4年も経つというのに巨大なモンスターと触れ合う機会が少ないため、誰にも気づかれない部屋でねんごろになろうってことだ。

3年の始業式に新入生を祝おうと花火を乱れ打ちした際に、8階の石壁のとある一角に念じると空き部屋が出現するのを見つけた。

そこはほとんど誰も立ち寄らない場所だったので有り難く利用することにした。

入口の条件を厳しくして中に入って来られないようにし、中を魔法薬で弄繰り回す。さらに、手紙で養父母にアドバイスを貰いながら部屋を薬漬けにして弄った。

1年ほどで外部に影響なく、また外部からの干渉を受けることもない部屋に仕上がった。

広さは大型モンスターを同時に4体まで召喚しても飛び回れるくらいとなったが基本的に物置と化している。

これから改修を繰り返すことでより広く利便性のある部屋になるだろう。

男なら誰もが憧れる秘密基地をイメージしている。

結局、完成したのは7年生を半ばまで過ぎた頃だったので俺の学生生活の集大成となった。

ちなみに花火の罰則はバスルームづくりである。

茶目っ気で五右衛門風呂を置いたら減点されたので迅速に全力で徹夜してまで作り上げたのは苦い思い出だ。

そんな感じでハツフルパフでの7年間は実に充実したものだった。成績？

全く問題ないレベル。

何故監督生にも首席にも選ばれなかったのかわからないくらいだ。

寮への貢献も罰則で幾らか目立ってしまったが、完成度の高さで逆に得点を稼いだこともあったので、なかなか悪くないんじゃないだろうか。

卒業後は養父母とともに錬金術の研究を予定している。

決してニートではない。

ダンブルドア先生とも共同研究するのだ。

もう一度言うが、決してニートなどではない。

養父母の研究を手伝う傍ら、夏にはダンブルドア先生の助手として魔法界を駆け巡る日々だった。

あまり遠くない位置ならば魔法を使うよりもライガーやテイノの背に乗って移動している。

魔法省は俺が大型のモンスターを扱うことを快く思っていないようで、ドラゴンやグジラなど呼び出すことを禁じている。

そのため、命の危機に見舞われることが多々ある。

光の届かない未開の地に生える薬草を取りに行く程度ならばまだ易しいほうで、コカトリスが罅にしている洞窟に苔を採取しに行ったときは死を覚悟した。

ドラゴンの血液を採る際には魔法省の役人も付いてきて、脚を見事に引つ張ってくれてかなり面倒だった。

集め終えてやっと役人と別れ、ダンブルドア先生に届けようとイギリスに戻ったら浜辺でドラゴンが暴れ回っていて、一般人……つまりマグルも巻き込んだ騒動へと発展してしまった。

マグルは日光浴をしていたらしく、ドラゴンが現れたというのに逃げずに野次馬となっていて、ブレスで焼身死体に変えてやろうかと苛立った。

休暇中だった魔法使いの家族と協力して騒動を収めた頃に、別れた役人が現れて当然のように連行された。

俺ってどんだけ信用ないんですかね。

ダンブルドア先生が迎えに来てくれた。

養父母はエルンペントを追ってアフリカに行ったと伝えられた。

エルンペントはサイのような見た目をしていて、毒液で体内を破裂させることができるとか。

600年だか700年だかの人生の終止符を打つかもしれんね、俺の両親。

そろそろ色んな意味で独り立ちの時期だったかと納得しているとダンブルドア先生に呼ばれ、着いて行くとホグワーツに連れて行かれた。

ここで助手として働けということらしく、一週間の日程表が渡された。

薬草学、魔法薬学、変身術、錬金術、魔法生物飼育学、闇の魔術に対する防衛術と書き込まれており、それぞれの授業を手伝えということらしい。

結構ハードやでえ……。

一か月ほどで手伝いにも慣れた。

やっていることは、授業中に教室を見て回って内容に手間取っている学生の手伝いや授業を面倒に思った先生の代わりに進めることだ。

手紙を回していたり、教科書に隠して他の本を読んでいたたり、居眠りしていたり……そういった学生もよく居るが見逃している。

学生時代の華というやつで、頻繁にサボっていると魔法が飛んでくるのも覚悟の上だろう。

厳しい先生もなんだかんだで少しは見逃しているようだし、俺が目くじら立てることもでもない。

ただ、危険な魔法薬の生成や錬金術の授業中に遊ぶのは見逃せないので、罰として3日間頭皮から納豆の臭いがする呪いをかけた。

その生徒の頭上に絶えずゴーストが飛び交う光景は写真に収めたので、どこかに飾っておこう。

殿堂入りの意味で所属寮の入り口とかどうだろうか。

そんな感じで3年を過ごしていると、授業をひとつ受け持つことになった。

受け持った授業は錬金術だ。

ただ、見習いの練習的な意味合いがあるので教える相手は1、2年生である。

とりあえず錬金術に興味を持つように、と遊び半分の授業を土曜日の11時から1時間、食後の13時から同様に1時間ほど行うことになった。

どちらか一方を参加すれば出席扱いとなるうえにテストは無い。

自由参加なので興味を持ってくれた学生は少ないが、3年次に錬金術を選択するくらい好きになってもらいたいものだ。

俺の授業だが、ポッチの温床となった。

……少し言い過ぎたか。

受講者数は20人前後なのだが、友人の少ない学生や勉学に熱心な優等生がほとんどだ。

入学式辺りでは1年生の9割ほどが出席していたが、3か月ほどで前途の通り20人前後で落ち着くようだ。

生活に慣れ、友人もできて、楽しくなった時期に休日の1時間を使う者は減るといふ事だろうか。

受講している生徒は各寮ごとに3〜7人ほどが授業を取っているようなので、バランスは良いと言えるかもしれない。

混血と一般人……マグル生まれが大半であり、純粋な魔法使い生まれは1人か2人い

るかどうかだ。

錬金術は華が無いためか、地味な作業工程が多いためか、若い魔法使いには不人気だ。少数なのでコミュニケーションが取りやすいのか、生まれの境遇ゆえか、寮を超えた付き合いが生まれることもあるようだ。

ポッチの温床というよりは、他の寮と交流するために一人で受けているというのが近いだろう。

3か月もすれば協力を必要とする採取があるからポッチなど自然になくなるし、そもそも真のポッチならばそもそも授業に来なくなる。

授業内容は自分が欲しいと思った道具を作ることだ。

魔法が得意なら杖を振って創りだしても構わない。

手先が器用なら既存品を集めて造っても構わない。

単独で出来ないなら複数で協力するのも構わない。

未だかつて存在しない物を全力で完成させようとするのならば、全力で手伝うだけだ。

どうしようもないほどユーモアに溢れる道具を作り出すのならば、養父母の力だつて借りる。

もちろん、完成しなくても構わない。

必須の授業とは関係なしに1年を通して頑張ったことが重要だと俺は考えている。そんなわけで俺の授業は結構テキトーだ。

試験明けのときは気晴らしにクイディッチをやったりするくらいテキトーだ。

授業の前半期は遊んだり、完成図を想像して紙に描いたり、実際に必要な物を考えてみたり、図書館で調べてみたり、とやっている内容はかなり緩い。

そして冬の休暇が終わったら森に行つて採取だ。

必要な薬草や生物がいる位置の危険度に応じてモンスターを供につけ、自分たちで採つてくるというものだ。

ホグワーツには森や湖があるのだが、卒業するまで利用しないこともある。

折角なので森はフィールドワーク用に扱っている。

湖はイカ専用だ。

俺が受け持った初めての生徒の中に、巨大なイカの稚児を持ってきてどこまで育つかやってみたいと言つたやつがいた。

水魔や水中人がいるから泳ぐ生徒もいないだろうし、俺も魔法界のイカがどうなるのか気になったし、そしてダンブルドア先生も興味があつたらしく滞りなく許可が下りたので湖に放してみた。

そのうち巨大なイカリングが食べられるようになると思うと楽しみでしかたない。

3年生を相手にする錬金術を受け持つようになった。

呪文学と魔法薬学が混ざったような授業だ、面倒が祟って受講者数が少ない。選択授業だからといって選り好みしすぎやしないだろうか。

1年、2年と続けて受けていた生徒ばかりで、ちよつと、というかかなり困る。原因は心当たりがある。

土曜日に行っている1年、2年生向けの授業だ。

人数は160人ほど。

多くなつたと思うことなかれ、大半がなぜか参加している3〜7年生だ。

午前・午後とわかれてるので人数は80人前後だが、やはり多い。

こいつらに圧迫されて人が減っている気がする。

そう思っていたが、1・2年生は20人前後で落ち着くようだ。

1・2年生の相手をしながら、3・4年の宿題のヒント、上級生にはふくろうテストやイモリテストについて教えている。

とりあえず一人、二人くらいは監督生と首席がいるのでそいつらにも手伝わせる。

下級生に理論を説明したり、実技を見せとけば復習になるだろう。

あんまり根を詰めるのも好みじゃないので、厨房に頼んだお菓子や錬金術で創り出した疲労回復効果のあるジュースを出すことにしたら、いつの間にかお茶会と呼ばれるようになった。

教え子の一人であるハグリッドが生徒を毒殺したらしい。

実験飼育禁止令が出ているアクロマンチュラを作り出したことで、疑いがかかってしまったとか。

入学したばかりだというのに、俺や上級生に付いて回ってやけに熱心に勉強していると思っただらこれである。

監督責任に問われかけたが、俺の講義を取っている学生は成績がよく、ふくろうやイモリの試験なら上位を連ねているとのことで不問となった。

まあ、それはどうでもいいことだ。

ダンブルドア先生が亡くなった学生の血液と毒のサンプルをくれた。

折角なので興味のある生徒と一緒に解析することにした。

取り扱いには十分な注意が必要だ。

だからトム、貴様のローブに隠したサンプルを渡せ。

遊び道具にしているものではないからな。

解析を順調に進めていると毒薬のサンプルが盗まれかけた。

ゴーストを召喚し、警備にあたらせていたのだが、戦闘になったようだ。石化していたゴーストと飛び散った血液、折れた牙が転がっていた。

毒液が滴る牙を落とす蜘蛛なんていないと思うんだが、どうだろうか。

とりあえず、牙の毒と毒殺に使われた毒が一致した。

なかなか面白い事態になったと考えつつ、牙の毒と照らし合わせようとしてわかつた驚愕の事実。

ハグリッドがアクロマンチュラを逃がしていた。

やるじゃない（ニコッ

冗談はさておき、頭が痛くなる話だ……。

ダンブルドア先生の援護もあって犯人がハグリッドではないかもしれないという話になり、トムが勲章を受け取るはずだったが無効となった。

憤るトムに慰めの言葉をかけておこう。

「君には残念な結果となったが、もう一回頑張つて真犯人を見つけ来てほしい。グリフィンボール寮に隠していたハグリッドの毒蜘蛛を、スリザリン寮に所属しながら見つけるというその冴えわたる勘と推理力には期待しているからね」

「いえ、先生。勘ではなくて証拠を集めて……」

「そうかそうか。まあ、難しい話はわからないから疑わしい人物に気付いたらダンブルドア先生と相談するように。もちろん、俺に相談してくれても構わないけれど。誰が来てもきちんと言話を聞くようにとダンブルドア先生に頼まれているからね、トムも安心して相談にくるように。なんならサーピスにジュースも付けてあげよう」

「ジュース」のあたりで手元にあつた瓶を振り、遠慮せずに頑張つてくれとトムにエールを送る。

微笑みも忘れない。

元気が出たのか、トムに笑顔が戻った。

表情がちよつと引き攣つていた気がしなくてもない。

瓶を凝視していることに気づき、飲みたいのか聞いてみる。

断りとともに脱兎のごとく出て行つた。

いつも出しているジュースなんだけどな、と疑問に思つて瓶を見る。

これ、真実薬だったわ。

牙の持ち主は蛇っぽいということまで当たりが付いた。

両親とともに毒蛇を研究したから、というのもある。

トムが主張する蜘蛛では絶対でない。

スリザリンの継承者が現れてうんぬん、という噂が流れた。

たぶん自分から流したのだろうが、自己顕示欲が強いやつだ。

なんというか、呆れてしまう。

校長が噂を信じたのかわからないが、警戒態勢へと移すことになった。

見回りを増やし、なるべく学生が一人にならないようにとの処置だ。

ピーブズにも見回るように指示を出す。

石化しても構わない、むしろ死ね。

そのまま、事件は起こらず夏休暇へと突入。

学校にいたいと駄々を捏ねるトムに、「俺んどこ来る？」と優しさを込めて提案。

大人しくなった。

残念だな、今年の夏はバジリスク探しの予定だったのに。

新学期、事件の混乱も休暇を挟んだことで収まりつつあった。

ハグリッドは退学を免れたが罰則が山盛りとなった。

アクロマンチュラを逃がしたのだから当然である、むしろ逮捕されてアズカバンに数日はぶち込まれるレベル。

俺も夏休暇中に駆逐しようと思ったが人間を襲わないとの事で、両親が生態に興味があるとのことで見逃した。

ただ、繁殖数が多いのがなあ……。

悩んでもしょうがないかと変身学の本をめくる。

変身術に情熱を注ぐ学生がふくろうとイモリの間にもつと魔法の腕を磨きたいとのこと、期待に応えるべく俺も頑張っている。

優秀だとは思っていたが、まさか学校で学ぶ以上を要求されるとは思わなかった。

俺に知識があれば、彼女は在学中に動物もどき（アニメーガス）も狙えたかもしれないということが残念でならない。

そんなわけで機嫌がよくない。

頗るよくない。

トムがスリザリン生を集めて夜な夜な集会を開いていると聞いた。

夜は寝る時間だろうと蹴散らす、そのうちまた集まるのだ。

機嫌を損ねた俺は優しくない。

集会場所に鏡を密かに設置した。

俺の技術の結晶、「みぞの鏡 (the Mirror of Erised)」だ。

これは心の奥底にある「のぞみ (desire)」を映し出すだけの鏡だが、間違いなくスリザリン生には致命的なダメージを与えることができる。

自尊心が高く、狡猾だからこそ、自らの栄光を映したこの鏡の魅力に取りつかれるだろう。

というか、他の寮の学生にも効く。

10代の自制心で虜にならないやつはそういうないはずだ。

なぜか1・2年から講義に出ている学生には効きが薄いんだけど。

なお効果が有りすぎて、幾人ものスリザリン生が廃人となった模様。

甘い夢に捉われるのが悪い (キリッ)

ダンブルドア先生にやんわりとお叱りを受けた。

やりすぎたか……。

とりあえず撤去するらしい。

壊すには勿体ないが、使うには危険だとか。

照れる。

「お茶会」

正式名称は錬金術・入門編。

出生不明教師の放蕩っぷり、授業中にお菓子とジュースを摘まんでいること、試験後はクイディッチで遊んでいたりすることから純血主義が「穢れた血のお茶会」と呼び、そのまま「お茶会」として定着した。

混血やマグル出身が馴染みやすい空気となっているのか、9割を占めている。年を重ねるごとに受講者数が増えていくのは、魔法界に混血やマグル出身が増えている証なのかもしれない。

担当教員はナユタ・ヨロズ（万 那由多）。

ドラゴンを見てみたいと言った学生を連れてハンガリー・ホーンテールの背に飛び乗った、最高の恐怖を感じたいと言った生徒を連れてアズカバンまで行って吸魂鬼に迫った、夜な夜な徘徊してスリザリンの継承者を殺そうとしていた、生徒の頭から異臭が発する呪いをかけたなどの奇行が目立つ。

1944年

そういえば去年はトムの親族が死んだり、捕まったりとしていたらしい。

なかなか壮絶だったようだ。

錬金術の授業後に研究室へと招き入れて、大変だったなと労う。

俺が座っているモノに驚いているのか反応が薄い。

視線を下へとずらし、業とらしく今わかったとばかりに「ああ、これ？ 校内で這っ

ていたから捕まえた」と事も無げに言う。

そこには毒を生成する機械と化したバジリスクがいた。

大きく開かれた口、チューブに繋がれた牙のあつた部位、それ以外は魔法で溶かされ、

頭部以外は失われていた。

机の上に置かれているガラス管の中には黄色の巨大な眼球が浮かべられていた。

頭以外はいらないので自分用にいくらか残して培養し、他は懇意の研究者にばら撒い

て、毒は養父母やダンブルドア先生に送った。

捕獲の過程で作った魔眼殺しとバジリスクの捕獲、「賢者の石」の件で俺は超有名人に

なってしまう可能性が高い。

困っちゃうなー（棒読み）

トムも助手として研究を手伝うなら連名にできるけど、どうするかと問う。

ついでに断るとバジリスクを操っていた「後継者」とやらを探さないといけなくなるんだよなー、ついでにトムの周りで起きた事件も解決してしまうかもしれないなー、と付け加える。

快い返事をくれたトムに感謝である。

思想とか素行の問題を補って余りある優秀さは奴隷……じゃなくて助手に非常に向いている。

そんな優等生なトムには報酬も奮発しないとイケないだろう。

黒い表紙中では真っ白の小さい冊子を取り出す。

それだけだと可哀相だからバジリスクの牙も付けてあげようじゃないか。

やべっ、分霊箱となっている日記帳に牙を刺しちやっつた（棒読み）

あふれ出る大量のインクで床が汚れる。

呆然としているトムに片づけを頼み、俺は爽やかにバジリスクから毒を絞り出すの

だった。

これはバジリスクを捕獲に熱中しすぎて「賢者の石」の完成に立ち会えなかったための嫌がらせではない。

「哲学者の卵」を用いて「哲学者の水銀」と「哲学者の硫黄」を混ぜるといふ世紀の大実験に立ち会えなかったことから抱いた怒りなどではない。

「哲学者の卵」製作に苦心したのに使えなかった悲しみではない。

決して無いのだ。

愛の鞭だ。

魔法使い至上主義のトムに俺という何処出身なのか分からんやつも頑張っているんだよ、とアピールする健気さを添えた愛の鞭なのだ。

これで少しは硬い頭が柔らかくなるだろう。

あー、ちよつとすつきりした☆

1945年

トムがホグワーツの教師職を熱望、ダンブルドアに断られる。

そこに俺が通りがかって、トムを助手にしてくれるように頼む。

これでもかかってくらい熱心に頼み込む。

トムが「やっぱいいいです、すみませんでした」と言い始めたあたりが本番である。

全授業に携われる雑用として働かせてもらう様に懇願。

見張りにピーブズとか俺のモンスターも四六時中付けると条件を述べる。

ダンブルドア先生が「そこまでしなくても……」と言い始めてからが勝負どころだ。

ゴーストのハロウィンパーティーにも全出席、アクロマンチュラの様子見、女子トイレ

で騒いでいるゴーストの話相手、e t c。

盛りだくさんである。

放っておくとわけわからんことし出すから忙殺しておこう、という善意である。

雑用を押し付けるついでに思いついた仕事をあげたわけでは決してないのだ。

やったねトム、俺のおかげで君の就職先が決まったぞ！

大人しく魔法省あたりで働いておけば幸せだったのにな。

魔法省に行ったとしたら、俺の教え子に囲まれた毎日だったけど。

1955年～1960年

ダンブルドア先生がホグワーツの校長になったり、ミネルバが変身術の教師になったり、トムが雑用していたりと色々と変化のある日々だ。

俺自身の変化としては、魔法を悪用する魔法使いの魔力に「臭い」を付ける方法を研究するようになったくらいだろうか。

付けるよりも嗅ぎ分けるほうがいいのかもしれないと同時に研究してたら進展速度が鈍った。

当然だがストレスが溜まる。

邪気眼を発症したトムを「ヴォルデモート卿」と呼んで弄る。

Tom Marvolo Riddle ↓ I am Lord Voldemort

ort...:Lord Voldemort (笑)

ヴォルドウモール(笑)

1963年

最近はマグルに興味を持つ魔法使いが増えてきているようだ。

魔法を見ても信じようとしないうマグルの傾向を調べた「俗なるものの哲学」とかなか

なかな面白かった。

ダンブルドア校長がマグル学を選択科目に取り入れると言っていたのを思い出した。魔法省もマグルに関する部門も増やすという話があったし、これからはマグルに近い職も重要になりそうだ。

そんなことを考えていると扉がノックされた。

許可を告げると錬金術の入門を受けているグリフィンボールの1年生が入ってきた。

マグルに興味があるらしく、寮監のミネルバに相談したら、ここを訊ねる様にと言われたらしい。

頼られるのに異存はないが、俺もそんなに詳しいわけじゃない。

そもそも20世紀の、しかもイギリスとかわかるわけがない。

まあ、ホグワーツの中では詳しいほうだし、俺程度でも問題ないだろう。

マグルに近い仕事の場合はOWLのマグル学が必要になってくる。

ゆっくり学んでいけば円滑に進めるだろう。

今は興味を持っているというし、好きな道に行けるように錬金術の授業で教えておこう。

1970年

アーサーが魔法省のマグル部門に入った。

成績はかなり優秀だったようだ、教えた甲斐があったというものだ。

そこまではいい。

そこだけはいい。

その後が問題だ。

駆け落ちしたらしい。

それがどのように作用したのか知らないが、俺の研究室が恋愛に悩む学生の駆け込み寺と化した。

※現在のイメージ

まほうつかいってゆうのわ。

半分がおんなのこ。。。

そしてマグルも、半分がおんなのこ。。。

そう。。これわもう。。。

マグルⅡまほうつかいってゆうコト。。。

地球に群がる一億のまほうつかい。。。

まほうつかい達は湧きあがり、否定し、痺れ、瞬き、眠りを妨げる、爬行する鉄の女王。

絶えず自壊する泥の人形。

結合せよ 反発せよ 地に満ち己の無力を知れ

—— 破道の九十 黒棺

俺が苦勞している間にトムが闇の魔術に対する防衛術の教師になっていた。やれやれ、みぞの鏡の出番が近いようだな……。

1972年

俺氏、激おこぷんぷん。

原因は研究室に忍び込んだポッターがバジリスクの毒を持ち出す。

理由としては闇の魔術に傾倒する魔法使いを云々。

襲い掛かったトムに鎧袖一触とばかりに捕獲された模様。

協力者はブラック、ルーピン、ペティグリュー。

私刑として全身から納豆の臭いの呪い、食べ物すべてが醤油のかかっている納豆の

味になる呪いを2週間かけ続けることにした。

学校からの罰則は私刑の後に停学らしい、代わりに俺の管理責任を咎めないとお達しがあつた。

個人的には起こした問題の大きさから退学にしたかったが、グリフィンドールに寛大な校長の言葉もあつて停学に収まつた。

鼻屑しすぎじゃないっすかね。

トムに関しては去年から相性が悪かつたようで度々ちよつかいをかけていたようだ。

トムのスリザリン鼻屑と純血の心得がポッターには気に入らなかつたらしい。

校長がグリフィンドールへ鼻屑しているからスリザリン鼻屑は見ないフリするところべきだ。

あとは魔法技能に慢心している節があり、強行策を取っていたようである。

去年も騒動を起こしていた。

で、罰則として魔法の森にぶち込んだ。

問題を起こさないと息ができないのだろうか。

そんな納豆の刑を行っているとスリザリン生が恋の相談に訪れた。

グリフィンドールの女性と仲良くなりたいたか。

恋敵はポッターだとかで、これからチャンスだと思つたらしい。
知らんがな。

とりあえず一緒に授業を受ける様に言つておけばいいんじゃないですかね。

錬金術入門とか一緒にできると勧めると得意な闇の魔術でアピールしたいと言いつた。

スリザリン生にとって魅力的かもしれないが、グリフィンドール生にはマイナスだろうと伝える。

魔法薬とか錬金術で知的に見せとけと助言し、闇の魔術は必要なときだけ使つて出来る男をアピールである。

それでも言い募るがプレゼントに香水とか作つとけばいいんだよ！と一蹴。

勝因は相手の笑顔を見られ、好意も向けられると囁いたことである。

闇の魔術をアピールとかどんな状況だろうかと思つたがポッターがいるから使う機会が案外あるんじゃないかと。

そこら辺はトムの授業で頑張つてほしい。

とりあえず研究室に罫を仕掛けることを決断。

誤つて踏み込んだ学生が死なないう様にと何もしなかつたのが仇となつたようだ。

そもそもポッターたちしか忍び込まないし、難易度はルナティックにしておこう。

翌日、入口で石化したポッターを発見した。
透明マントのおかげで即死は免れたようだ。

停学中はマントを没収した。

とりあげないのが俺の優しさというやつか。

ハリー3

あまり魔法というものが身近でないように感じていた。

日常生活で魔法に触れる機会は多々あるが、地味なものばかりだ。

母が魔法をあまり使わない人であったし、父も薬を調合するくらいで、両親が作ってくれる玩具が最も魔法らしいといえる物であった。

尊敬はしていたが、やはり物足りなかった。

魔法を近く感じたとなると、宝物である「夜空を閉じ込めた魔法球」を眺めるのが日課だった。

そんな日々を過ごしていると母が私を呼んだ。

何かいい事があつたのだろうか、声が弾んでいるように思えた。

母が飼っている大きなフクロウが暖炉近くの止まり木で休んでいた。

濡れたように艶のある黒い翼が暖炉の炎に照らされ、輝いているようだった。

無口な父が休暇の際にフクロウと私が並んでいる姿を見て、似ていると言っていたのを思い出した。

私がフクロウ顔ということなのだろうか。

内心でもっと可愛らしくなりたいものだと考えていると母が少女のような笑顔で手紙を差し出した。

何が嬉しいのだろうかと手紙の宛名に目を向ける。

そこにはホグワーツ魔法魔術学校と書かれていた。

母の手から引つ手繰るように手紙を受け取る。

何か文句を言われた気がするが、今は手紙の方が重要だ。

入学案内とそれに必要な道具、心得、e t c.

手紙を読み終わる頃には胸を歓喜で満たされていた。

寝物語に聞かされたホグワーツは、憧れる魔法そのものだった。

両親の恩師から私が生まれたお祝いとして送られた、生きている猫のぬいぐるみもホグワーツに行けば沢山いるのだと聞かされていた。

居ても立っても居られなくなった。

教科書にローブ、使い魔……どれもすぐに欲しくなった。

すぐさま母に授業の準備をしようと迫り、「今はお日様が眠っているから無理よ」と杖で小突かれた。

翌日、朝早くに起きて母に頼み込んで、「今はお日様が起きていないから無理よ」と杖で小突かれた。

雑多な人ごみの中、荷物を詰め込んだ鞆を載せたカートを押しながら母の隣をゆつくりと歩く。

キングス・クロス駅の9と3／4番線から発車するホグワーツ特急に乗り込むためだ。

荷物の重さはあまり気にならなかった。

母が魔法で重量を軽減してくれていることもあるが、ホグワーツ魔法魔術学校に行けると思うと足取りが軽く感じられた。

ただ、荷物とその上で座っている猫のぬいぐるみ「ニャー」を見ていると恥ずかしさが込み上げてきた。

手紙が届いた翌日に準備を整えたことを今日まで母にからかわれ続けたからだ。

私は感情の起伏が乏しいらしいが、ホグワーツのこととなると年相応だと微笑むのは止めて欲しい。

少女のように可愛らしい笑顔を見せられたら、無表情だと言われる娘の立場が無く

なってしまう。

そんなことをつらつらと考えていると、私と同じ年頃の少女のカートとぶつかってしまった。

零れ落ちる鞆、転がる鞆、投げ出されたニヤー。

すぐに謝ると相手も不注意だったと言って許してくれた。

荷物を集め、カートに乗せる。

ニヤーが最後に飛び乗って、準備完了。

ふう、と一息。

少女が目を見開いて驚いていた。

あれあれ、どうしたのかな。

荷物の多さにびっくりしたのかにやー？

……ニヤーですよ、すみません。

に、人形劇とかどうかしら？

マグルの間では糸で操っているらしいし。

そうだよねー、何もなしでぬいぐるみが跳躍したらダメだよねー。

知ってた。

私の不注意で記憶を消される不幸な少女が現れるのかと罪悪感を感じていると、彼女が一通の手紙を取り出した。

彼女は私と同様にホグワーツの新入生らしい。

どうやら危機を回避したようだ、彼女が。

9と3／4番線がわからなくて迷っていたようだ。

迷惑をかけてしまったのでお詫びとして一緒に行かないかと誘うとすぐに了承してくれた。

自己紹介を交わす、彼女の名前はハーマイオニー・グレンジャーというらしい。

母に、ハーマイオニーも一緒に行くことになったと伝えると、ころころと笑いながら認めてくれた。

……杖を持っていたが特に何も無かったに違いない。

……夢遊病のようにふらふらと歩く男性など私の視界には映らなかった。

途中でハーマイオニーがニャーについて聞いてきたので猫だと伝えておいた。

その返事に戸惑ったのか、ハーマイオニーは「ね、猫？ 猫っていうのは……」と籠に入ったオレンジ毛の猫を見せてきた。

うん、やはりニャーは猫だ。

そう言い切ると潰れたような顔をしたオレンジ毛の猫であるクルックシャンクスが一鳴き、それを見てハーマイオニーも認めてくれた。

9番線と10番線の間の柵を抜ける。

その先は魔法使いや魔女のタマゴでござった返した駅のホームだった。

家族との会話をしている人や友人と話している人の間を抜け、濃い赤色の車体の汽車へと近づく。

これが私をホグワーツへと連れて行ってくれると思うと笑みが浮かんでしまう。

何となく見て回りたくなくなってハーマイオニーを連れ、汽車の外観をじっくりと眺めてしまった。

正面の番号とか「ホグワーツ特急」と金文字で書かれているのを見て満足した頃には、出発の時間になってしまっていた。

母に手早く別れを告げて汽車に乗り込んだ。

コンパートメントを見て回るが、都合よく空いている場所が見当たらない。

どこかで相席させてもらおうかとハーマイオニーと相談していると後を着いてきて

いたニヤーが勝手に歩き出し、車両を進んでいく。

その小さな背を追って進むと最後尾の車両、外へと繋がる扉の前でニヤーが立ち止まった。

何かあるのだろうかと思っていると、ニヤーがその柔らかな前足で扉をノックした。

小気味良い音が響き、その扉の奥から返事が聞こえてきた。

低い男性の声だった。

ニヤーがつぶらな瞳で私を見上げ、前足で扉を指した。

入るようにということだろうか。

ハーマイオニーに顔を向ける。

こくり、と頷かれた。

軽く頷き返し、扉を開ける。

外へと繋がっているはずのそこは、コンパートメント2つ分くらいの広さで両側に窓が付いていた。

内装は他のコンパートメント同様だった。

そして目の前の席には、先ほどの声の主であろう男性が座っていた。

ニヤーに急かされるように扉を抜ける。

男性の正面、扉側の席に座る。

私が座つたのを確認してからニヤーが駆け出し、男性に飛びかかった。制止の声をあげる暇もなかった。

ニヤーが張り付いた男性は声を上げることもなく、優しくニヤーを膝上に降ろして撫で始めた。

すぐに謝ると、気にしていないと返された。

失礼にならない程度に観察してみる。

上級生だろうか。

若さを感じる幼い顔立ちだが、雰囲気はどこか厳めしい。

私と同じ黒い髪に親近感を少しだけ抱いた。

ニヤーを見つめる瞳は黒く、どこまでも澄んでいて、宝物を思い出させた。

まずは軽く自己紹介。

彼はナユタさんというらしい。

上級生なら聞いてみよう。

一番興味のあることだ。

授業は何が好きですかと聞いてみる。

「錬金術が好きかな」

ナユタさんはニヤーを撫でながら答えた。

いつの間にか籠から出てきたクルツクシャンクスが日向で丸くなっていた。

父と母が錬金術入門を勧めてくれたのを思い出した。

「そうなんですか。父と母が勧めてくれたので私も楽しみなんですよ」

そう伝えると「それはよかった」と柔らかく微笑んだ。

穏やかな人だと思った。

ナユタさんが杖を一振りすると、お菓子が沢山あらわれた。

好きなように食べていいと言われて手を伸ばしたかぼちやパイを食べる。

ナユタさんが好きだというジューズを受け取って、そういえばと思い出して振り返る。

る。

わたし、驚愕しましたという表情を貼り付けたハーマイオニーが固まったまま動かなくなっていた。

頬を軽く張ってみるが反応はない。

どうしたものかと思っていると、ハーマイオニーの様子に訝しんだナユタさんが「バジリスクの瞳は持ってきてないんだけど……」と物騒なことを呟いていた。

それはつまり、持ち歩くことは可能であるということですか。

ホグワーツの上級生ってすごい、わたしはそう思った。

原作：魔法先生ネギま！

誰かの後を追う事しか知らなかった。

付かず離れずひたすらずっと。

目に付いた誰かを滅ぶまで追い続けた。

幾度となく追いかける背は変わり続けた。

すぐに止まってしまう者もいた。

他と比べて随分と永い物もいた。

少しばかりの違いはあれど、最期は平等に訪れた。

追いかける背がなくなると、また別の背を追いかけた。

それしか知らなかった。

悠久の繰り返し返しの只中、自分という存在を理解した。

そして、追うこと以外を知った。

背を見続けることしか知らない己が、背を追い抜いたのはその時が初めてだった。

自らの意思で歩き出したことで素晴らしいモノに満ちていることを知った。

始まりがあつて終わりがあることを知った。

全てはどこかから始まつていて、どこかに繋がつていて、どこかで終わる。

最後まで繋がる事もあれば、途切れることもある。

どこかで断たれてしまおうとも、そこまで紡がれることに意味があるのだと知った。

全てに意味があるのだと言葉に出来ない何かを感じた。

今でも背を、後を追い続ける。

それしか知らなかったからではなく、それ以上を知るために。

そして解れた軌跡を度々紡ぐ。

最後まで辿れなければすべてを知ることができないから。

自分の身体が人間を象つているのを見てなんとも言えない感動を覚えた。

最初は黒いアメーバのようなものだったことから考えれば、かなりの進化と言えないだろうか。

そもそもこんなことを考えるようになったあたり、凄まじい進化である。

何かしらの後を追いかけるだけという虫にも劣る無能っぷりから、人類並の思考と行動を持つて自律行動するようになったというのだから誰かしらに自慢したい。

自慢する相手を知り合いから探してみる。

……だいたいみんな死んでる。

そうだ！ シヤントトがいたじゃん！

……と思ったが絵日記を作ったとか言つて俺に向けて発狂して死んだ。

やつは何がしたかったのだろうか。

その後に背を追うことにした造物主とかいう奴は未だによくわからん、次々と別の姿になるし変わりまくるため名前なんて無い。

わかるまで挺入れをしようとは思うが、間違はなく自慢する意味が無い。

しかも人の感情から全ての人が幸せと思える空間の調整なんてものまでさせられた。

やっているのは雑用ばかりで、しかも見た目は最初と完全に別人なので追うのをやめようかと思ひ始めた。

面白くないし感動もないし。

人間らしさをぶち込んで作つた造物主の分身というかコピーであるデユナミスは遠くに仕事に出したのでいない。

自慢も伝わらない可能性・大である。

アステルは言動がきつっついで放置確定。

流石の俺も傷つく。

稼働させたアーウエルンクスシリーズのプリームムは造物主至上主義が強すぎて自慢が伝わらないので意味が無い。

そもそも一般常識は俺が教える必要があるとかどうよ、子育てとかマジでめんどくせえ。

プリームムって名前もどうよ。

シリーズだからとしてもそういうのに拘りがある身としては気になる、非常に気になる。

フェイトとか良くない？と伝えるが造物主（マスター）に貰った名前だからとさっぱり断られた。

そうだよな、親と世話係だったら親を優先するよな。

誰が世話係だ。

コーヒーも飲まないし。

忠誠心を高く設定したと聞いたが人間らしさが欠けているのはどうかと思う。
アダドーやアートウルは今は留守にしている。

雷は十五代目と水は十六代目、火は初代となっているが言う事は聞くので遠隔地での仕事を任せてしまった。

出来はなかなか良いと思えるがどこかクセがある。

自慢するには微妙だ。

マツチヨばかりなのもマイナス。

……誰にも自慢できない。

そして交友関係の狭さが浮き彫りとなった。

俺、造物主が死んだら友達100人作るんだ……。

戦争を煽って煽って大惨事☆

欲を読んで、金か地位で頬を叩けば世界に戦火が飛び散る。

さらに燃やして大戦にまで発展させる。

大きな陣営を無傷で潰すことで目的を達成させたいらしい。

造物主の目的は幸せな世界に送り込むことだとか。

ううん？

作ったからには責任を果たす義務がある、というのが造物主の考えらしい。

終わりを見つけるためというのもあるとか。

よくわからん。

この戦争も大事の前の小事というやつか。

まあ、終わりが見えるまでは手伝いをしてやろうじゃないか。

とりあえずバランスよく戦力を投入させて、煽る。

辺境から徐々に拡大させていく。

予定通り進めていたら、ちよつと崩された。

その戦域に俺の予想よりも遥かに強いギルドが派遣されていたようだ。

除外しようと追加で戦力をぶち込むが失敗して逆に殲滅された。

むしろこのギルドを利用して帝国の戦力を磨り潰すことに決めた。

大陸に侵攻し、オステイア奪還作戦を金に物を言わせて立ち上げる。

議論を繰り返して渋っている帝国に伝えたい、失敗することこそが大事なのだ！と。

負けすぎるのも良くないので巨大要塞であるグレートブリッジを奪取。

バランスもいい感じに取れただろうと納得していると、グレートブリッジが奪還され

た。

またもや件のギルドのせいである。

確かギルド名は「紅き翼（アラルブラ）」といっただろうか、ちよつとイラツときた。

戦力のバランスが結構な勢いで崩されている。

例のギルドのせいで戦域がごりごりと押し返され、帝国のほうが多く削られている。

幾分か自由が利く俺が連合を叩くが上手くいかない。

やりすぎると一撃死してしまうので手加減が難しいのだ。

そのうち全力で撃ちこんでしまおうかと考えているのだが、機会がなかなか訪れない。

俺が戦域を戻している間、プリームムに任せてみたが、どうなることやら。

報告を読む。

連合と帝国を調停しようとして王女が動き出した。

紅き翼と合流したようで、軽いフットワークを見せてくる。

少数による小回りの利きやすさを利用して末端を調べ上げてから一気にメガロメゼン、プリアの執政官まで繋げてきた。

それを利用してプリームムが紅き翼を連合から切り離れたが、組織から解放されたがために逆に動きが読めなくなった。

戦場を選ばずに転戦と厄介このうえない。

アリカ王女と第三皇女テオドラを餌に捕えようとして、逆に奪われたらしい。

戦場で感じ取ったが、王女を旗頭にして勢力を築いて凄まじい勢いで停戦の空気が伝播している。

……こころで手を引くべきか。

流れが良くない。

むしろ逆流してるとしか思えない。

直接一当てしてダメなら俺はこの戦争から手を引くことにした。

ちよつと働きすぎなくらいだったし。

俺という存在は酷く曖昧なモノである。

自己を確立するまでは他との境界線すらなかった。

今では形を保っているが、それは疑似的なものだ。

生物としての活動を真似ることができるとは、結局擬態でしかない。

曖昧な何かなのだ。

そして、曖昧なモノで構成されている俺は曖昧なモノを操ることができる。

世界に満ちる電子を不安定な状態で固定し、指向性を持たせることによつて白く輝く光線を放つ。

基本的な攻撃であり、原子崩し（メルトダウン）と呼んでいる。

というか、これしか攻撃がない。

己が曖昧すぎて物理攻撃とか魔法を上手く使用できない。

物理攻撃など自分の手が爆ぜるか、相手を分解するかの二択しかない。

爆ぜるほうが7割だ。

再生にも時間がかかるので やはり原子崩し（メルトダウンナー）を使わざるを得ない。

王位篡奪が行われる可能性があり、それをされると完全にアウトである。

もうすでに挽回するには厳しいので別の機会にすべきだが。

紅き翼に向けて原子崩し（メルトダウンナー）を放つ。

全員は無理でも一人くらい削げるかと思つたが、甘い考えだつたようだ。

避けた者、防いだ者というが無傷である。

誰だよ、こいつらの設定したの。

バグってるだろ。

連射することで避けられなかつた者を足止めする。

ナギ、ラカン、フィリウスが接近してくるので威力を上げた原子崩し（メルトダウンナー）を撃ちこみまくるが逸らされる。

どうもナギが雷の魔法で電子ごと曲げられているらしい。

唯一の攻撃がこうなるとは相性が悪すぎる。

紅き翼のメンバーは遠近の両方が優れていて対処が難しい。

威力を最大まで上げて範囲も全範囲に広げてビームを放つが、先に俺の体が崩壊して

しまった。

初撃でやられるとか脆すぎる、やはり実体があるのは羨ましい。

砕けていく俺の姿を見て何とも言えない表情になる一堂。

ああ、目の前で敵が死んだとしたら何か思うことがあるというやつか。

人間って不思議だよな。

ただ、これで終わりだと思ったら大間違いだけど。

曖昧だからこそその脆さだ。

固定することで欠点を補うことができる。

ナギの姿を模って、第二戦目をはじめまるよー☆

とは言っても全ての性能は大分劣化しているので戦いにならないかもしれない。

理解が及べばパクれるのだが、流星にこの戦闘だけでは難しい。

実体を持つと反動で吹き飛ぶのと曖昧さが欠けるので操るのが難しくなっていく、原

子崩し（メルトダウン）は牽制程度の威力しか出せなくなつたが全方位に撒き散らす

だけなので問題ない。

拳を合わせれば徐々にコピーの精度が上がり、曖昧さを失っていく。

失うことで原子崩し（メルトダウン）の威力が下がり、物理の威力が上がっていく。

欠点は曖昧な身体と違って肉体があるのでダメージを受けることか。

都合のいいことに、なぜかナギが一对一で俺の相手をしている。

精度が上がっていく。

上がっていくが、終わりが見えない。

マジでこいつバグってます、ありがとうございました。

また身体が崩壊した。

負けて負けてを繰り返して、紅き翼の全員と戦った。

結構頑張ったが限界がきたようだ。

あまりに実体を持ち過ぎて己と外界との境界が酷く曖昧になってしまったのだ。構成を整えるまでは眠ることになるだろう。

まさか限界まで戦うとは思わなかった。

造物主を手伝うよりは間違いなく面白かったと言いつける。

つまり楽しんでいたというわけだな、俺は。

楽しめた礼にいつか何か手を貸してやるのも吝かでは無い。

造物主は飽きてきたからな。

いけそうだと感じたので身体を構成する。

紅き翼を元に体を作ってみたが、なかなか調子が良い。

馴らしていけば安定した実体として使えるかもしれない。

ただ、あのバグどもを考えると実体だけでは足りないとも思える。

予想だが実体の上限を曖昧にできれば天上知らずで能力を伸ばせるかもしれない。

今はとりあえず、実体の固定をした後でも原子崩し（メルトダウン）を撃てるよう

にしたいところだ。

久しぶりに会いに来たら、造物主の組織が崩壊していた。

余裕ぶっこいていたアダダーやアートルもいなくなっていた。

ちよつと悲しい。

フィリウスに移った造物主が溜息を吐きながらアールリンクスシリーズを調整し

ていた。

プリームムは消滅したようだ。

色々パラメータをMaxにしたのでセクンドウムは凄いで、と笑っていた。

こいつ、ちよつと馬鹿なのかもしれない。

案の定、セクンドウムはダメなやつだった。

しかもバカである。

次のやつは俺が調整しよう。

運営をデユナミスに任せてアダードーとアートルの欠けた分を調整し、稼働させる。造詣は造物主が弄るので、そこら辺はテキストである。

見た目と中身が合って無い場合があっても責任はとれない。

忠誠を削って思想への理解を上げ、幾らか人間らしさに繋がるようなステータスを上げてみた。

反旗を翻したとしてもフィリウスみたいに自己が生まれて面白いかもしれない。

アーウエルンクスシリーズを少しずつ調整。

そして稼働へと至った。

3（テルティウム）と6（セクストウム）が俺、4（クウアルトウム）と5（クウイントウム）が造物主の調整品だ。

俺は1号であるプリムムを元にテルティウムを調整、セクストウムはステだけMA Xだ。

忠誠や目的、人間らしさを零にしてみた。

自分で見て聞いて感じたように行動したとき、どう進んでいくのか。

こういった成長というか、過去との違いを見るのが楽しいのだ。

子育てが今になって活きてきた……わけではない。

きつとない。

造物主も見た目が変わったのでまた新しい一面を見ることができるとも思えない。また挺入れする必要があるかもしれんね。

2番の馬鹿がナギを襲撃してサンドバッグになって帰ってきた。

造物主がステータスをMAXにしたと言っていたのだから、ナギはバグっているに違いない。

ステMAXをサンドバッグとか意味がわからん。

負けて悔しがったりと結構嫌いじゃないが、俺に対しての態度がセメントなので好きでもない。

ニイは調整して数年ほど経つが食えることが好きらしい、面白い性質が出たものだ。

セプテンデキムはあまり個性が立たなかったがニイの世話を見ているので姉的な感じだろうか。

これらが個性というものだろうか。

テルティウムは物静かで感情の起伏が少ないが、フェイトと名乗るようになった。

1号と違って可愛いやつだ。

コーヒーも好んで飲むとかで、一緒に楽しんでいる。

どこかで美味しいのを飲んだのか気に入らないと顔を顰めるようになった。

コーヒーの味も淹れ方も俺は詳しくないので文句は言わないで欲しい。

味覚をもっと固定できたらいいのだけれど。

セクストウムは目覚めるときに立ち会って以来、あまり俺から離れなくなった。

真っ白にし過ぎて刷り込みでも働いたのかもしれない。

性格も大人しすぎる。

アーティファクトの本を貸したら気に入ったのかずつと持ち歩いている。

フェイトに貸してくれと頼まれたのに断固として拒否していたので、2人に新しいのを与えることとなった。

子育ては難しい……。

クウアルトウムとクウイントウムはよくわからん。

冷静というか感情は希薄というか。

戦闘を好んでいるということくらいしか知らない。

まあ、勝手に嫌ってくる2番以外はデユナミスも合わせて可愛がっている。

2番がフェイトに真っ二つにされた。

面白いことになった。

今の世界や造物主のやり方に疑問を持ったようだ。

自分の権利の通り好きなようにやったと言っていたが、特に咎めようとも思つて無い。

そういうものだと言つた造物主にも伝えてあつたし、問題などあるはずがない。

そのまま離反するのかもしれない、自分の手で妥協できる線を見計らつて、いろいろ進めることにしようだ。

それと並行して次々と戦火の影響によつて虐げられた少女を拾つてきた。

どうしたらいいかと聞かれたので、好きなようにしたらいいと言つておいた。

それだけだと冷たいので、学校があることと推薦で入学できるということも加えておいた。

色々と考えて動くようになってきた。

今後が期待できる有望株だ。

これからが楽しみで仕方ない。

戦争から手を引いて力を蓄え、弛んでいた我々の隙を突いた見事な電撃戦だった。

ナギとアリカ元女王、そして古本のアルビレオによって創造主が旧世界に連れ去られた。

追いつく頃にはすでに決着がついていた。

麻帆良という土地にあるゲートで搔つ攫われるとか予想外だった。

造物主はナギに代替わりしたようだが、そのまま魔力だまりのある地下に封印するらしい。

乗り移ったものの、造物主は完全に押さえ込まれているのか意識はナギのものだった。

造物主Ⅱナギだというのなら封印されるのも、造物主の意思であると判断した。

先に駆け付けていたクウォルトウムとクウイントウムも一緒に封印された。

造物主が目覚めるまで、俺も待つことにしよう。

麻帆良というこの地も存外悪くなさそうだし、な。

他の奴らに連絡を入れるのを忘れないでおかないと。

造物主が封印されたこと、クウアルトウムとクウイントウムも一緒に封印されたこと、俺も活動を停止すること、麻帆良で過ごすことにしたこと、これからは各々が自由に動くこと、喧嘩しないこと、デュナミスはマイナス思考をやめて全裸にならないこと、ニイにおやつは出せなくなること、セプテンデキムはニイ以外とも話すようにすること、フェイトはコーヒー飲みすぎないこと、セクストウムは変なやつに騙されない様にする、などなど。

心配事ばかりだ。

目を離すのはちよつと心配だ。

いや、ちよつとどころではない。

かなり心配だ。

子供を初めてのおつかいに出した親の気分というやつか。

呼び寄せるべきか、悩む。

悩むがやめておいた。

手紙とか100枚くらい書いては捨てて、を繰り返したがやめた。

自立を促すためだ。

ただ、何かあったら相談する、いつか遊びに来るように、とは伝えた。

離れている間に、見知らぬ人と仲良くなつて、嫁を連れてきたらどうしよう。いや、嫁なら祝福するけど。

夫とか連れて来るかもしれない。

泣くかもしれない。

あれだ、貴様に娘はやらん！とか言いながら本気を出そう。

第七形態くらいまで本気出す。

そして耐えられたら認めるかもしれない。

いや、やっぱり平方根の法則に基づく原子操作も入れておこう。

例外的な振る舞いをする原子という曖昧な存在をぶち込みまくって生きてたら許す。

というかそこまでして生きていたら俺にはどうすることもできない。

とりあえず不真面目な生徒であるエヴァンジェリンにチョークを投げつけておこう。

俺の授業で寝るとはいい度胸だ。

武道の心得があろうとも俺のチョークは放った瞬間から無限に軌道を変化させることが出来るため、必中である。

机に座っている状態で逃れる術はない。

1箱（72本入り）を全て開放する。

チヨーク直撃、後の爆散。

1秒と経たずに粉塵がエヴァンジェリンとその周囲を白く染めた。

「せんせー、エヴァンジェリンさんが白目むいてます」

「存分に寝かせてやりなさい」

寝ていたいようだし、起こすのは可哀相だ。

真っ白で粉だらけのまま眠るといい。

悪は滅びた。

原作： Fate／Zero

物質界に存在しない第六架空要素を研究することで“根源”へ至ることができ、そう考えたのは桐谷（きりたに）の家で特に優れていたとされる3代目の思いつきだったらしい。

第六架空要素とはこの世に実在しない神や悪魔と思われる存在を構成するものだ。存在しないのであれば存在しているところから持つてくる、そんな安易な発想だったのかもしれない。

悪魔を呼び出し、魂を対価に身に宿そうと試むのに時間はかからなかった。

幾百幾千もの人間を使い捨て、親族を短命に貶めることで漸くカタチになったのは7代目の当主が死ぬ直前だった。

耄碌していたか、最初から無能だったのか、床に伏した当主は元気に走り回る自らの孫に悪魔を宿すよう指示を出した。

苦しみ、のた打ち回る3歳の孫の姿を眺め、満足そうに頷くと、7代目は息を引きとったそうだ。

悪魔に憑りつかれた孫、9代目は奇跡的に命を落とすことなく、すくすくと成長した。むしろ成長しすぎたといつてもよかつた。

死ぬまでの年月をかけてその身を異形へと変貌させていくが、反して悪魔を研究するようになった桐谷の中で最も長く生きたようだった。

成功したのだと、呪われた体を引き摺って、親族は皆よろこんだ。

その方法が正解に近いのだと歓喜した。

そして、皆が自らの赤子を贄として差し出した。

狂気の籠った瞳とともに。

9代目の子が成人するころになると、全ての子がその身に悪魔を宿すようになっていた。

そして知ることになる。

呪いは伝染する、と。

夜も深まった時間だった。

冬木市の新興住宅街、その中央に位置する市民会館。

建設途中なのか、外装は出来上がっていたが内部の床一面がコンクリートだった。

内部では青年が眩きつつ、寒々しいコンクリートに幾何学模様で構成された魔法陣を描いていた。

幾何学模様を一心に描き、絶えず唱える。

書き終えるとゆつくりと立ち上がり、魔法陣を見下ろした。

自分の家は分家がいくつもあるほどに大きかったらしいが、今では数えるのも容易なほど少なくなった。

寿命に目が眩み、生まれたばかりの子を贄としたことが原因だった。

あまりに幼い身で悪魔を宿すと魂までもが憑りつかれてしまう。

そして子が成長する頃合いになると周りの悪魔と共鳴し合い、さらに強くなっていく。

混ざってしまった魂から悪魔を引きはがすことはできない。

親から子へと伝染する呪いへと変化していった。

血をより濃くしようと近親による配合を繰り返したことも悪かった。

より深くなった呪いは、より強い共鳴を起こし、魔を呼ぶ。

悪魔がさらに入り込み、呪いがより濃くなっていく。

それほど代を重ねず、人はいなくなった。

皆、悪魔に命を吸われていった。

馬鹿なことをしたものだと考える。

どれだけ目を曇らせたなら根源を目指す手段が寿命を伸ばす手段へと変わるといいうのだろうか。

桐谷家のたちを思い浮かべる。

同じ年頃の子ら等、同じ時を過ごすだけで異形へと変わっていった。

年上のもので人間の面影がある者など残っていない。

魂を蝕まれる痛みに喘ぎ、醜悪な姿へと身を落としていく。

本当に、馬鹿なことをしたものだ。

勝たなければいけないと強く思う。

全てを叶える願望機でなら悪魔を引きはがすことが可能だと、それしかないと思いついた。

“根源”など遙か昔に興味を失っていた。

鏡を見る度に涙を流す姉の姿を見たときから、魔術など忌むべきものでしかない。

噛みしめた唇から血が流れ、コンクリートを汚す。

傷口がすぐに塞がる。

それがまた、憎かった。

憎悪を胸に、詠唱を始める。

真つ暗な内部が暗く輝く紋様に、異形と化した顔半分が照らされた。触媒となる聖遺物の用意はない。

英雄などが現れでもしたら、戦いにはならないだろうから。

バケモノを退治して身を立てた英雄どもとこの身の相性が良いとは思えなかった。

蔑まれるくらいなら、背後から刺されるくらいなら、縁に頼った何かを呼び出すほうがマシだった。

詠唱が終わりへと近づく。

煮えたぎる憎悪が胸を焦がした。

「汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ」

一際、光が強く輝いた。

人間の瞳では眩んで見えなくなるような光だろうと異形の瞳は瞬き一つしなかった。

光が納まり、そこにいたのは青いワンピースを着た小さな少女だった。

長い金髪は光を反射して太陽のようで、頭頂部で結ばれた白いリボンが愛らしさを際立たせていた。

そして、病的なまでの青白い肌は屍を彷彿とさせた。

「アナタがわたしのマスターね？」

「そう、だとも」

あどけない笑顔を浮かべ、少女はそう言った。

少女然とした高く綺麗な声だったが、背筋が凍るような深さも持っていた。

異形の半身がざわつき、たどたどしい返事となった。

「とても素敵なお顔。アナタはわたしとお友達になれそうね。わたしはキャスター、

あなたのサーヴァント」

半身が引きつったかのように動かない。

キャスターは何が面白かったのかクスクスと上品に笑う。

そしてじつと俺の顔を見つめると、柔らかく微笑んだ。

「コンゴトモヨロシク」

キャスターの見た目と異なる、魅惑的な笑顔だった。

そして年相応の可愛らしさも秘めていた。

原作：スパロボA

ゼロに刺されて悪逆皇帝ルルーシユが死んだ。

実妹の目の前でグサツである。

ちよつと泣いた。

嘘だ。

俺が泣くわけないし。

目からハドロン砲がまろみ出ただけだし。

……悲しい。

その後はルルーシユの実妹であるナナリーがブリタニア代表になった。

ヤバいくらいフレイヤをポチってたけど大丈夫なのだろうか。

むしろ、今までの負債を一身に集めてルルーシユが死ぬことでリセットするのに親族のナナリーでマジで大丈夫なのだろうか。

扇はテロつてたのに首相とかアウトじゃないでしょうか。

中国は……シンクーが死んだ。

ナイトオブブラウズ戦が長かったからしようがない。

終戦で世界平和にやろうぜって雰囲気だ。

俺の可愛いガウエインも封印確定、破棄間近である。

せつかく海底から引き揚げて改修したのにそんなのってないよ……状態だ。

まあ、攪乱のためにゼロスーツ着て魔王ゼロごっこした際の移動用だったがドルイド

システム無しで最終戦まで乗り回すことになるとは思わなかった。

何度も改造を繰り返して戦ってきた相棒だ、愛着も湧くってものだ。

ルルーシユの遺品としてドルイドシステムを積み込んだが、俺には使えない。

機体を棒立ちにすれば索敵としては扱えるけど完全に宝の持ち腐れである。

凍結処理される前に少しばかりガウエインで散歩を楽しむことにした。

敷地内ならおkっしょ。

今のところ規則が厳しいけど、行くしかないっしょ。

ランスロットと違って真っ赤なブレイズルミナスを開く。

今生の別れだな、と感慨深くコンソールを触っていると半透明の膜につつまれた。

謎の現象に驚きながら絶対守護領域を展開する。

ルルーシユ、俺を導いてくれ！と全面に万遍なく壁を作る。

モニターが暗転した。

それから二度とブリタニアの地を踏むことは無かった。

現在、俺はネルガル重工のなんとか研究センターという所で仕事をしている。

原因は謎の半透膜によるもので、俺はボソンジャンプと呼ばれる転移実験に巻き込まれたらしい。

紆余曲折を経てジャンパーとしてスカウトを受け、何度もジャンプしようと挑戦するが何も起こらないので見送られた。

結局、テロリスト兼国軍の経験を活かしたテストパイロットとして何とか職を得た。

俺はナノマシン処理をしていないのでIFS（イメージフィードバックシステム）が使えないため、シミュレーション専用である。

わかりやすくすると研究室で朝から晩までバグの多いゲームの調整している。

なんとというデバツカー。

こんな閉鎖空間では癒しは金目の少女だけだ。

表情の変化に乏しいが話すだけで多幸福感に包まれる。

ロリコンになってしまいう人間の気持ちが変わる。

そんな日々を送っていると、ちよつと火星いつてくんない？つてロンゲに頼まれた。接収したガウエイン返してくれたら行くとしよう。

色々仕様変更されたガウエインが返ってきた、ブレイズルミナスが外されて泣きそうになった。

あのままだと使えないだろうから改造とか換装したとか。

技術吸収しようとしたついでだそう。

技術の吸出しは終わっていつの日か応用するからニートは火星に行つて来いよオラア！つてことらしい。

無理矢理連れて来られてこの扱いである。

なんとというブラツク。

宇宙戦艦ナデシコに搭乗した。

特に何も言うまい。

積み込み作業とかやらされたのには流石にキレそうになった。

ガウエインちゃんは頭脳プレー専用なんです。

インテリの俺とコンピを組むことで無敵に見える。

準備は整ったが、艦長がいないので飛べないらしい。

敵であるバツタが集まって来た。

俺の出番か、と期待してみれば見知らぬ少年がエステバリスで頑張ってた。

なんと彼は料理人らしいのだ。

しゅごい。

コックパイロットを援護するために金目少女の大天使ルリちゃんに従って発艦。

ハドロン砲で焼き払ってやんよ、とコンソールを叩くが反応なし。

お耳の恋人ルリちゃんに聞くとハドロン砲は準備中のようだ。

ガウエインではエステバリス用の武器は持てない。

ブレイズルミナスは取り外している。

無力である。

スマナイ、少年。

俺は帰る。

少年に懇願されたので仕方なく頑張ることにした。

別にルリちゃんのジト目に負けたわけでは無い。

決して無い。

決して無いのだが、援護に向かう。

両手の指を飛ばすスラッシュハーケンしか武器がない、これは泣ける。

一応ハーケンのMV（メーザーバイブレーション）機能をONにすればひっかき攻撃もできる。

なるほど、かわいい。

指を飛ばしてバツタを10機ずつ潰す。

結構いい感じじゃないかと機嫌が良くなるが、後から増える殖える。

10機ずつ撃破だと無理だ、日が暮れる☆

まあ、ハドロン砲専用移動式固定砲台であるガウエインから砲台を取ってしまったから仕方ないね。

ナデシコの基地周辺でドンパチしているわけだが、実はほかの場所でもドンパチしている。

少年が全周囲に通信を送っている、悲鳴だけなのだ。

母艦であるナデシコが起動していないので、少年の乗っているエステバリスはバリーヤーが張れない。

つまるところ、波動砲のないR戦闘機のようなものだ。

そんなバナラな彼が全周囲に通信するものだから、他のドンパチ（ギガノス軍、機械獣）がこっちに向かってハジケてきやがった。

そんなハジケ野郎どもと戦っていた機体が少年の援護をしてくれると通信が入った。通信してきたのはアクセルという名の青年だが、発言がとぼけていたのでアホセルという名が浮かんだ。

アホセルの相方のラミアという女性もすつとぼけていた、シグナムと名付けてみたが声だけしかしっくりこない。

ガンダムさんの素敵な姿を見守りつつ、敵機を落とす。

ハーケンにバツタを刺して鈍器に早変わり、不必要になつたら投げつけるという素敵装備。

さらに複数のロボットがこちらの援軍として現れたので、優勢となり暇が目立つ。

マジンガー乙と争っているポケモンのケルディオに似た空飛ぶ要塞デモニカにバツタを投げつける作業に移行。

アクセルも何を思ったのか、髭付きの機体でバツタを投げはじめた。

それにボスロボットとゲッター3も参加した。

飛び交うバツタ、外装が弾けるデモニカ、啗う俺。

ひでえ戦場だぜ……。

艦長が到着したとの報告が届いた。

ナデシコの艦長であるユリカがブイっとしてゐる映像がモニターに映った。とりあえずグーを出しておこう。

何が琴線に触れたのか、何度か頷いていた。

そしてコックパイロットに気付くと雄たけびをあげた。

少年の名前はアキトというようだ。

それからバツタを引き寄せ、ナデシコの必殺ビームで倒した。

面倒になったので端折った。

ハドロン砲の使えない戦場など俺には無意味だ。

ガウエインの装備が充実するまで、勝った負けたでいいんじゃないだろうか。

爪飛ばすだけとかツマンネ。

原作：GANTZ 無限クレジット・ガンツ1

1 回目

気が付いたら黒い球が置いてある簡素な部屋に立っていた。

くたびれたスーツを着ているサラリーマンの男性がテンパっていて、それをプリン頭のチャライ兄ちゃんが笑っている。

なんとも落ち着きのない奴らだ。

とりあえず、部屋から出て外へ向おうとしたが、扉に触れることができなかった。

どうやら、俺はこの部屋に閉じ込められているらしい。

何の目的があつて……みたいなことを考えようと思つたが、俺は頭がよくないのでやめた。

ヒントが無さ過ぎる。

とりあえず座つて休んでいると、黒い球が光線を出した。

光線の軌跡は徐々に人間が形作られていった。

なんぞこれえ……。

驚いているとサラリーマンが「君もあんな感じだった」と言い出した。なるほど、この黒い球は俺の父さん……いや、母さんか。

現れたのは大学生くらいの男だった。

俺らを一瞥すると壁を背に座り込んだ。

困惑している様子は見てとれなかったことから、何か知っているのかもしれない。

まあ、コミュニケーションの俺が出来ることは見送ることだけなんですけどね。

次々と黒い球が人間を作り出していく。

年齢も性別もバラバラで共通しているものは人間であるということくらいか。

とか思ってたら、猫が転送されてきた。

共通事項は哺乳類で決定だな。

叫ぶ人やキョドる人、その様子に困惑する人、静かに見守る人、寝たふりをする俺と室内が複雑な空気に包まれていると、黒い球から音楽が流れた。

ライオンのテーマである。

野球でもするんですかね、この面子で。

球体の表面に文字が表示される。

「お前ら死んだから頑張つてね☆」みたいな内容だった。

俺以外の騒いでいた連中は死んだという言葉に何か憶えがあるようだ。

俺は無い。

寝て起きたらここにいた。

情報を整理しよう思考を巡らせていると球体の表面に写真と文字が映る。

『名前：スライム星人、特徴：よわい、口癖：「ぶるぶる、ボクわるいスライムじゃないよ」、好物：勇者』とのことだ。

そして球体が大きな音を鳴らしながら左右に開いた。

中にはアタツシユケースが入っていた。

ケースにはあだ名というか蔑称というか、とりあえず名前で割り振られていた。

それぞれ思い当たる節があるケースを手にとってみる。

俺には「俺さん」と書かれていた。

消去法で余ったやつだが、たぶん俺のだろう。

もうちよつとアレンジが欲しかった。

「パープリンヘッド」とか「不倫離婚星人」とか「みくにゃん」とかみたいな個性的なやつ。

各々がケースを受け取ると壁際で目をつぶっていた人が声を挙げた。

「死にたくなければ中に入っているスーツを着ろ」という内容だった。その後の反応は人それぞれである。

俺は着なかった。

ピチピチしすぎてなんか嫌じゃん（真顔）

壁際の人は俺やプリンを見て「馬鹿が」と呟いた。

なんだそれ、こわい。

ケースだけ持つて行くことにした。

テンパっていたり、状況について行けない俺のような人以外に、壁際の人のように手際がいい人たちもいた。

その人たちは奇怪な形をした銃のようなモノを持ったり、グリップだけの何かを持っていたりと大忙しだ。

そして、慌ただしかった室内が落ち着きを取り戻す頃にプリンヘッドのカラメルソースが消えていた。

徐々にプリン部分も浸食が始まり、最後にはプリンを乗せる器も消えていった。

「転送」とやらが始まったらしい。

セイジンを見かけたら逃げろという声を遠くに聞きながら、俺の頭も消えていった。

セイジンってなんだ。

ぐう聖とかの聖人だろうか。

そりゃあ、善良な人物を見かけたら自分の腹黒さに逃げ出したくなるけど。

冗談だ。

たぶん、スライムのことを言っているのだろう。

そんなことを考えていると、夜の街中に立っていた。

……もう帰って良いのだろうか。

俺の前に来ていたらしいプリンが男らしく歩いて行く。

どうやら帰宅するようだ。

止める理由も無いのでその背を見送る。

プリンが破裂した。

ここは電子レンジの中だったのか……!?

驚き、プリンの後を追うが頭の中に調子ずれた音が響く。

怖くなって下がると音が消えた。

近づくと聞こえる。

下がると消える。

……進まないでおこう。

モンスターハンターだったら未知に突撃し、とりあえずモンスターに攻撃するが、俺はハンターでもない。

そりゃあ、プリンを目指して進んでいたが俺はパティシエでもなんでもない。

理解できないものからはできるだけ距離を置くのだ。

破裂したプリンを遠くに見ていると気分が悪くなったので側溝にゲロをぶちまけようと思ふ。

青いプルプルしたそれと目があった。

デフォルメされた雨の滴のような形状は半透明でありながら青一色、巨大な大きくて丸い白目とそれよりも若干小さい黒目は子供が描いたキャラクターのようだ。

半笑い気味の大きな口は身体の半分を占めていた。

スライム星人である。

逃げろという警告を思い出して後ろを向いて、走り出すが足がもつれて転んでしまった。

いってえ、と眩くのと体中の骨が砕けているかの音が響くのは同時だった。

何が起こったのかわからないが、全身が痛い。

血が口から鼻から、溢れだす。

なんだこれは。

痛みに震え、血を撒き散らしながら振り向くとスライムがいた。

あの間拔けな半笑い、まるで俺を嘲笑っているかのようだ。

怖い。

スライムがコミカルな音とともに跳ねる。

咄嗟に腕を頭の前で交差させる。

硬い何かが碎ける音が体内で響く。

何かじゃない、骨だ。

俺の骨が碎けた音だ。

激痛に悲鳴を挙げる。

腕が上がらない。

それでも跳ねてくるスライム。

こわい。

こわい。

怖い。

上手く呼吸が出来なくて、血を吐くとともに濁った音が出る。

苦しくてしかたがない。

涙で視界が滲んでいるのか、痛みで意識が参っているのか、わからない。

それでもスライムは待つてくれない。

跳ねたスライムを見て、「これは死んだな」と悟る。

宙でスライムが爆ぜた。

驚いていると手際よかつた人たちの一人が奇怪な銃のようなモノを構えていた。

あれは武器だつたらしい。

なるほどなーと納得していると、側溝から幾匹ものスライムが飛び出してくる。

群れのようにだ。

朦朧とする意識の中で様子をじつと見つめ続ける。

ピチピチのスーツを着た人物はスライムの体当たりを喰らっても問題なさ気に活動していた。

砕かれたスライムの欠片が其処ら中を青に染めていた。

2回目

目が覚めたら黒い球が置いてある簡素な部屋に立っていた。

くたびれたスーツを着ているサラリーマンの男性がテンパっていて、それをプリン頭のチャライ兄ちゃんが笑っている。

まるで先ほどの光景を焼き増ししているようだ。

他の連中も同様の行動を繰り返していた。

俺だけが、さっきのことを憶えているようだった。

手際の良い人たちに見習って準備を進める。

壁際の人の言葉を疑うこともせず黙々と準備を進め、銃について質問をする。

俺を殺したスライムを爆ぜさせた銃がXガン、強化版だが取り回し難いのがXシヨットガン、捕獲用がYガン、グリップから刀身が任意で伸ばせるソード、星人や互いの位置を把握できて不可視化できるコントローラー。

装備はこんな感じらしい。

星人を倒さないと帰宅することができないとも説明された。

とりあえずXガンを持って突入である。

…：ピチピチスーツだけだと恥ずかしいので、コートを着てマフラーを巻く。
なんか露出狂になった気分だ。

プリンを呼びとめる。

囿にするためだ。

側溝に突き落とす。

ピチピチのスーツを着ていると筋力が強化されるようで、プリンを廃棄するのは余裕だった。

*スライムがあらわれた！

銃を撃つ。

……何も出ない、と思っているとスライムが爆ぜた。

タイムラグがあるようだ。

面倒な武器である。

スライムのおかわりが現れる。

一生懸命撃つのだが、ラグが酷くて間に合わない。

囲まれたら素手で対処したほうが楽なことに気付いた。

碎けるスライム、体当たりを喰らう俺、食い散らかされたプリン。

スライム3体の割合で俺も1撃を喰らう。

前回来た増援が来ない。

延々と続く雑魚バトルに感覚がマヒし、回避をせずに攻撃し続ける。

するとスーツが「キュウウウウン」という悲鳴のような音を出し、液体が漏れてきた。

え、スーツがゲロ吐いたの？と困惑しているとスライムの体当たりが腹部に直撃し

た。

血を撒き散らす俺。
群がるスライム。

3回目

焼き増しなのでカット。

話を聞くと、スーツには限界があるらしい。

耐久力が零になると液体が漏れ出して防御性能が皆無とか。

一応、攻撃力はあるけれど、限界が来たら隠れたほうが無難だろう。

転送、プリンを抱えて離脱。

飽和攻撃によって圧殺されること間違いなしなスライム戦などやっていられるか。

喚くプリンを無視して、コントローラーを操作。

他の人物を探す。

近くの反応へと駆けると、そこにはスーツごとミンチになった人だったものと、スライムの間抜け面をしたクラゲだった。

離脱を考えていると「ぷるぷる、ボクわるいスライムじゃないよ」とか言い出した。

キレた。

一番最初に有無を言わずに突撃してきたスライムが脳裏を過る。
Xガンでぎょーんぎょーんする。

「ぷるぷる、ボクわるいスライムじゃないよ」と繰り返しながら爆ぜた。
こいつにやられた人がいるのにこんなあつさり……と考えていたら、クラゲが再生し出した。

ぶつちやけ、気持ち悪い。

そして半笑いを貼り付けながら「ぼくホイミン。いまはセイジンだけど にんげんになるのがゆめなんだ」とか言っている。

なんだこいつ、怖すぎる。

後から恐怖が湧いてきたのか、震えるXガンで何度も撃つ。

碎けるが、ホイミンとやらはその度に再生を繰り返す。

「ねえ、にんげんをたべたら にんげんに なるかなあ……？」

4 回目

クリオネみたいに、足の付け根が開いて食われた。

あの顔は偽装のようだ。

なんだあれ、怖すぎる。

XガンとYガンを持つ。

ホイミンと正面から戦うのはクソゲーすぎる。

最初のほうに転送されるとプリンとセツトになるから嫌だわ。

球体に後のほうにしてくれとダメもとで頼んでみる。

プリンの後に最初に増援に来てくれた人が送られていった。

なるほど、言ってみるものだ。

斑模様をしたスライムが爆ぜた。

5匹ほどで全滅したのか、現れる気配はない。

あの青いスライムが特殊個体なのかもしれないと思いながらコントローラーを弄る。

反応が一か所で固まっている場所を見つけた。

とりあえず向かってみる。

たどり着くと手際の良かった人たちのほとんどが集まっていたが、地面に倒れてい

た。スーツが壊れている人もいて、それらは死んでいた。

まだ話せる人に聞いてみるが、わからないらしい。

話を聞くに、急にスーツが耐久力を失い、倒れてしまったようだ。コントローラーを弄ると移動している対象を見つけた。

そちらへ向かう。

そこには溶けたスライムのような星人がいた。

緑色の泡が其処ら中に撒かれている。

Yガンを放つ。

Xガンだと飛び散ってヤバそうだからだ。

ワイヤーが飛んで行って溶けたスライムを拘束した。

が、溶けているせいなのか、ちよつと動くだけでワイヤーが外れてしまった。

なんて反則……。

するとスーツが悲鳴を挙げ、液体が漏れ出した。

そして全身に激痛が走った。

5 回目

……たぶん毒かな。

クソゲーすぎる。

今のところ把握しているのは

- ・スライム：群体。耐久は低い。
- ・ホイミン：再生。耐久は低い。捕食する。
- ・斑模様：雑魚
- ・溶けたスライム：毒。耐久は不明。Yガン無効の4種類だ。

基本的に交戦すると俺が死ぬという特徴を持っている。

強すぎ笑えない。

耐久が低いというのが救いかもしれん。

Xショットガンを持ち出す。

狙撃が出来るらしいので、敵の射程外から攻撃することにした。

青いスライムとホイミンは放置だ。

転送されたので溶けてるやつから狙ってみる。

スライムが飛び散り、周りにいた人たちに降りかかる。

すると欠片がスーツを貫通して、中身を溶かしていた。
スーツ無効とか反則すぎだろ……。

再生する様子はないので別の方向を狙う。

ホイミンは再生を繰り返しながら徐々に迫って齧るといのが行動パターンらしい。
食い散らかしが酷い。

というか、頭部しか食って無い。

脳を喰ったから喋れたのかもしれない、星人には常識が通じないようだ。

青いスライムは、沢山である。

プリンと最初の援軍も何故か生きている。

が、スーツがおしやかに変わったように叫んでいる。

狙撃しながら援軍に向かう。

最初に援軍に来てくれた借りを返しておくためだ。

辿り着くころにはスライム塗れになっていた。

なんとか生きているようだ。

情報を交換しつつ、息を整える。

一安心も束の間、スライムの欠片が合わさって巨大なデブスライムとなった。

頭に乗せている王冠がムカつく。

XガンやXシヨットガンを連射するが、表面が削れるだけでダメージが入っている様子が見られない。

最初の援軍の人が「ボス」と呼称していたことから、こいつを倒せば終わりのようだ。まあ、倒せる気がしないんだけど。

援軍の人は何度かミッションに参加しているが、今回は1番キツイらしい。

ひでえな、おい。

ゆつくりと迫り来るデブスライム。

手詰まりに思っていると、突然壁際の男が現れた。

コントローラーで不可視化していたようだ。

手を貸してくれるらしい。

ドヤ顔でロックオン機能の神髄を見せてやると言っていた。

頼むと言いかけて壁際の人食われた。

*ホイミン が あらわれた！

つ、詰んだ。

かと思つたが、溶けたスライムの破片でダメージを負っていた人たちが援軍に來た。形勢逆転かと思われたが、ホイミンに食われた。

再生が強すぎる。

Yガンを当てたらワイヤーを触手で引き千切るといふアグレッシブさ。

引き千切る必要があるということからYガンが有効であるとわかつたのが僥倖だった。

Yガンを当てて、触手を吹っ飛ばす。

転送が始まつた。

勝つた！ 5回目完！と行きたいところだがデブスライムが迫っていた。

鈍足だが、威圧感が半端ない。

逃げ遅れて1人がデブスライムの体当たりで巻き込まれた。

スーツから液体が漏れる、どうやら一撃で耐久力を失うらしい。

難易度が高すぎるんだけど、とドン引きしながらトリガーを何度も引く。

効いているのかでんで分らないのほほんとした顔がムカつく。

もしかして：Yガン と撃つてみるがワイヤーが巻きつく前に千切れた。

デブ死ね。

未だに何故か生きているプリンが放つたXガンが王冠に命中した。

すると、デブだったスライムがチビに戻った。

停滞していた戦線が動いたことから生き残りたちが調子づく。

「この戦争、我々の勝ちだ！」「別に、アレを倒してしまっても構わんのだろう？」「もう何も恐くない」「やったか？」

スライムが砕け、破片が集まりデブと成る。

またデブスライムがあらわれた。

クソゲー過ぎんよ。

側溝から湧き出たスライムの群れとデブスライムに挟撃されて死んだ。

6回目

壁際の男にロックオン機能を聞いておく。

マルチロックに対応しているらしく、ロックオンしておけば銃口は関係ないとか。強い。

というか、最初に教えろよ。

転送後に出会った斑模様のスライムを撃ち殺す。

そして、流れでホイミンをYガンで「上」とやらに送る。

その後にビルに昇り、Xショットガンで溶けたスライムを爆ぜさせる。

スライムに向けて駆けていく。

結構死人が出ていた気がするが、しようがないね。

敵が強いし。

途中で死んだ人から銃を拝借していく。

XショットガンとYガンだけだと心許ないし。

そのうちソードを使う練習をしようかな、と。

スライムには効きが悪そうだから次回以降だけど。

青いスライムを片っ端からロックし、トリガーを引く。

豪快に爆ぜ、デブとなった。

もう一度引く。

どうやら、デブが吸収したスライムも個体として識別されているらしく、凄まじい勢いで内部が吹っ飛んだ。

頭に乗っている王冠を撃つ。

クソゲーがやっと終わるのかと息を大きく吐きながら、転送に身を委ねた。

簡素な部屋で随分と減ったメンバーとともに採点を見守る。

プリンは0点だった。

青いスライムは得点を持っていないらしい。

あんな強いのに。

次々と0点が表示されていく。

俺の番がきた。

『俺さん』

18点

もよもと

ペペペペ』

肩の力が抜けた。

もうね、意味がわからん。

まあ、この球体に意味を求める事自体が間違いなのもかもしれないけど。

床に座っていると猫が膝に飛び乗った。

癒される。

猫も帰還に成功していたようだ。

0点だけ。

むしろ猫がどうやって点数とるんだという話だな。

もう帰っていいのだろうか。

というか、部屋から出られるのか。

6回目

あの部屋に鎮座している黒い球は『ガンツ』と呼ばれているらしい。

死んだ人間をどこからともなく呼び出し、ミツシヨンとして『星人』と戦わせる。

ミツシヨンはエリアが指定されており、時間も制限されている。

エリアから出れば脳に埋め込まれた爆弾が破裂して死亡、時間が切れると得点が0点となつて部屋に戻される。

また、無関係の人間に見られても死ぬとか。

ルールとしては人間と『星人』のバトルロイヤルが基本のようだ。

勝つと再び部屋へと戻され、採点が始まるという。

もちろん死ぬば部屋に戻ってくることはできない。

このサイクルが無限に続くのかといえはそうではなく、100点を得ることで解放されるらしい。

つまるところ、100点まで溜めなければゲームは終わらない。

ミッションが終了すると部屋から出られるようになった。

その際、スーツや武器は持ち出しても良いらしい。

欠点は一般人に見られると死ぬとか。

とりあえずソードだけ借りていこうかと思ったが、スーツのアシストなしだと重すぎる。

仕方なしに一通り持ち帰ることにした。

プリンの兄ちゃんは先ほどまでの戦いを思い出したのか、手を震わせながらスーツ一式を手持って帰って行った。

ミッション前よりも人数の減った、帰還したメンバーがぼつぼつと帰っていく。

観察していたが、猫は帰る様子を示さない。

扉を閉めるにしても、こいつが出ていってくれないと困る。

放置するわけにもいかないし。

先に俺が痺れを切らして立ち上がり、外へと向かう。

どうしてだか、猫は俺の後に付いてきた。

都合がいいのでそのまま帰る。

やはり猫は付いてきた。

ときどき思い出したようにスーツを着て、深夜の森で武器を扱う。

Xガンも練習したいのだが、爆ぜる音がよろしくない。

木を敵に見立ててソードを振り回していたのだが、ある日木を切らない様にと看板が

立てられたことから素振りしかしていかない。

うまくいかないものだ。

日中は学校へと、通ってテキトーに過ごす。

星人との戦いを思い出すと日常の平和具合は暇すぎる。

手に汗握る戦いを望んでいるような、でも怪我や死亡は勘弁したいような。

複雑だ。

部屋で漫画を読んでいたら背筋が凍るような奇妙な感覚に陥った。

猫が奇声をあげている。

スーツを手を持って、猫を抱える。

転送が始まった。

部屋に着くとすで見知らぬ人々がいた。

新しく補充されたのだろう、新しい顔しかない。

説明しようかと思つてやめる。

どうせ死んだら無意味だし、必要なときがきたら教えるとしよう。

着替えてくると奇異の視線に晒された。

露骨に嫌悪感を現している者もいて、先は長くないだろうと思わされた。

前回の生存組も転送されてきていた。

軽く挨拶を交わすと入れ替わりで奥の部屋へと向かった。

続々と増えるコスプレスーツたちに新入りのS A N値は0に向かいつつあるよう

だった。

ライオンズのテーマが流れる。

カブレラが結構好きだったなと思いつつ映し出された情報に目を向ける。

『名前：きよじん星人、特徴：よわい、口癖：「ママ」、好物：人間』とのことだ。

ライオンズだから巨人を倒せとか、そういうわけでは無さそうだ。

球体に描かれている星人の絵は目がイッた醜悪な人間のようなだった。

死にたくなければスーツを着ろ、と伝えているのを眺めながら猫にスーツを着せる。

とりあえず今回の方針として、コントローラーでステルスしながら弱点を見つけてこ
とにする。

囿も多く補充されているので都合が良い。

武器の種類と総数が少ないんだよね、みたいな話をしつつ吟味。

とりあえずYガンを猫の背に括っておく。

みんなXガンやソードが好きらしく、余ったのはXショットガンだった。

あの情報だけでは判断が付かないが、必要となれば現地で調達するし問題ないはず。

猫があまり離れない。

しょうがないのでガンツに猫と一緒に送るように伝える。

そして、転送が始まる前に猫を頭に乗せ、不可視状態になっておく。

出合い頭に攻撃されたら不意打ちで死ぬる自信がある。

ざわつく新人を無視して転送が始まった。

転送先は一帯が廃墟となっているビル群だった。

月明かりのみというのは怖いモノがある。

悲鳴が聞こえた。

野太い声なので男だろう、女だとしても可愛いのはいなかったなので困決定だが。

壁を蹴りながら廃ビルを登り、屋上へと向かう。

未だに聞こえる悲鳴に苛立った。

屋上から声のした方向へXショットガンを向け、スコープを覗く。

補充された壮年の男性が、巨大で醜い顔に齧られていた。

なんぞこれえ……。

観察を進める。

今回の星人は巨大なタイプのようだ。

10mはあるだろうか。

と、思ったら小型の星人も現れて男性を齧り出した。

喰い散らかされている。

それでも死んでいない人間の丈夫さに呆れてしまう。

叫び声が轟き、それにつられるように他の星人も集まって来た。

人間ほどの大きさの2m前後、ちよつと大きく5m前後、見上げる必要があるだろう
10m前後、と星人のスケールの予測を立てる。

情報に『好物：人間』とあつたように人間を喰うようだ。

音を敏感なのか、叫び声を呼び水に集まって来た。

かなり離れた位置に陣取っているが、砂糖に群がった蟻のような数でうんざりする。

他に何かないだろうかとスコープ越しに見渡す。

壁に隠れている補充人員を見つけた。

珍しくスーツを着ている。

なかなか従順だなと笑みを浮かべながら、星人の付近を撃つ。

地面が爆ぜる音に反応する星人どもを徐々に囿へと誘導する。

星人の動きに囿は悲鳴をあげたのか、一気に集まって来た。

一斉に群がるが、まだ生きているようだ。

確認されている攻撃方法は掴むか噛みつくだけだが、スーツの耐久性でも十分防げる
程度のようなだ。

Xショットガンで片っ端からロックオン、そして引き金を引く。

星人たちは醜い肉片を巻きし、囿を汚した。

どうしてなかなか悪くない。

遠距離から一方的に削れば数が多くても……ん？

先ほどの攻撃でどこかしらの部位が欠けた星人たちが囿へと群がりはじめた。

たぶん死んだであろう、立ちあがらずに転がっている星人は2、3匹といったところか。

見てわかる違いは体格、欠損部位くらいか。

転がって動かない星人はどれも2 mほどで、頭部を丸々失っていた。

2 m前後の星人には腕や肩が吹っ飛んでも難なく活動し、再生を始めていた。

さらに巨大な星人ともなると、頭部が欠けていても元気に走り回っている。

考えられるのは、

1. 頭部そのものが弱点
2. 個々によって弱点が異なる
3. 再生できる個体がいる

1 の場合は星人が大きければ大きいほど厄介だ。

首から上を刈り取ってみて検証する必要がある、再生するようだったらガンで潰さなければならぬ。

その場合は頭と体のどちらから再生するかも観察しなければ。

どちらからも生えてきて本体と成り得るなら作戦の見直しも必要だ。

2の場合は1よりも遥かに面倒で、転がっている星人の死因がたまたまとなる。

個々の持つ弱点を割り出さなければダメージを与えても再生されてしまう。

また、巨大な星人が身体の内部に弱点を持つていた場合など最悪である。

スキャンしたが特に違いはなかった。

3が最も楽だ。

再生が先ほど確認した速さと変わらなければ、一番余裕だろう。

この場でロックオンしてトリガーを引き続けなければならないのだ。

たぶん、ないだろう。

とりあえず1を試しつつ、探っていく必要がある。

騒ぎを聞きつけて生き残りのメンバーも集まって来た。

彼らが注意を引きつけている間は好きにやらせてもらおうとしよう。

様子見かつ狙撃の結果、やはり頭部以外は再生するようだ。

頭部でも頭頂部は再生するようで、首回りが弱点と推測した。

他のメンバーの戦闘を眺めていると、ソードなどの攻撃範囲が狭い武器で首を斬って

も再生することがわかる。

首回りを周辺の肉ごと斬り飛ばしたり、Xガンで消し飛ばす、頭だけをYガンで転送が最も有効的だろう。

防御と再生速度はそれほどでもないのだが、あの巨体は厄介だ。

Xショットガンを連射しなければ効きが薄く、当たり所が悪いと再生してロックが外される。

攻撃の威力はそれほどでもないようで、何度も齧られない限りスーツの耐久がなくなることはない。

ただ、齧られることで移動が制限されて、なし崩しで継続ダメージを受けることもあるようだ。

齧られたまま一定時間が経つまで逃げられないと飲み込まれるようだ。

飲み込まれると星人が吐き出すかソードで裂かない限り、逃げられない。

星人が吐き出したスーツ持ちはどろどろに溶かされて人間には決して見えなかった。

ガンツに送り込まれたメンバーと星人が殺し合いによって互いの数を急激に減らしている。

星人もかなり減ったな、とコントローラーで確認。

ここよりも離れた位置に留まっていた2つのターゲットを示す光が超速で移動して

いるのがわかった。

かなり速い。

ビルの屋上から屋上へ、次々と跳躍して距離を取る。

コントローラーで確認し、進路から退けた辺りで再びXショットガンを構える。

ビルを倒壊させながら、弾丸のように一体の星人が戦場に突進した。

形状が他の星人とかなり違うことが見て取れた。

皮膚が硬質化しているのか、鎧を纏っているようだ。

大きさは10〜20mくらいで特別大きいというわけでもない。

見た目だけならそれでいいのだが、星人ともなればそう上手くはいかないだろう。

周りの十把一絡げの星人を片っ端から撃ちながら、メンバーの戦いを観察……：……できない。
い。

戦闘を眺めるにはちよつと遠すぎる。

星人を撃ちながら肉眼で確認できる距離まで近づく。

近くで見た戦闘風景はワンダと巨像をプレイしているかのようだった。

鎧型以外の星人を駆逐したことで戦いやすくなったメンバーが、足元でXガンを撃つたり、飛び乗ってソードを振るったりしている。

他の星人とは一線を画す存在のようで、強さは段違いだった。

人間を見たら突撃するだけの星人とは違い、考えて行動しているようだ。思考能力が遥かに高い。

また、防御力を活かした体当たりが強さを引き上げている。

飛び乗ったまま体当たりでミンチにされたのか、人間だった肉塊が地面に落ちた。

人間の数が減り、劣勢になりつつある。

これ以上、新しい情報は得られ無さそうだと立ち上がる。

強いと言っても硬いだけだ。

奇襲で仕留められるだろうと予想してみる。

人間だったモノからソードやXガンを拝借する。

不可視化がかなり有効のようで、こちらに気付く様子はない。

集めたXガンやXショットガンで首回りを多重ロックし、引き金を引きまくる。ここからダメージが生じる時間差が勝負どころだ。

ソードを手を持ち、建物の外壁を蹴り、爆発を起こした首筋に一気に迫る。

飛び散る肉片へと飛び込み、肩へと着地し、両手で構えたソードを振り抜く。

思ったよりも抵抗が少ないが、伸ばした重量で肩が潰れている。

勢いそのままに角度を変えて一回転し、頬から首までを斬り飛ばした。

さらに保険として肩周りをXガンで撃ちまくり、斬り飛ばした首筋をYガンで転送する。

大物を倒した安堵も束の間、もう一体の反応が飛び込んできた。

見た目は理科室の標本のような筋肉などが剥き出しに見えるが、乳房なども確認できた。

女性のような体形をしている星人だった。

雌型というやつだろうか。

ユニーク個体として識別できそうだ。

雌型の凄まじい勢いのタツクルが、鎧型の死骸に直撃した。

直撃を避けたが響く衝撃には耐えがたいモノがあった。

地面へと投げ出されてゴロゴロと音を立てて転がる。

酷い目にあっただけ、と立ち上がれば遮蔽物が何もない広場のような場所だった。

雌型の星人が正面に立っている。

ゆつくりとソードを構えるが、雌型は気付いていないようで、すぐに他の生き残りの

下へ向かった。

やはり不可視化が有効の相手らしい。

コントローラーで居場所を確認する。

マップ上にはいくつかの光点が表示されている。

数が少ないのは死に過ぎたせいだろう。

スーツの耐久も問題なさそうだ。

もうひと踏ん張りだ、と全力で駆け抜けた。

雌型の首筋目がけて振るったソードは完璧のタイミングで、難なく刃先が進み斬り捨てるイメージすら湧いてくるほどだった。

が、防がれた。

雌型の星人が突然手を組んで首裏を隠したのだ。

弱点だと自ら教えているようなものだが、その他の星人や鎧型を仕留めた時点でバレーしていると理解したのだろう。

完璧のタイミングで振るわれた必殺の攻撃が防がれ、弾かれた。

阻んだ手を傷つけることなく、硬質の音とともに弾かれたのだ。

会心の一撃を無傷とは、勘弁してほしい。

攻撃が弾かれ、空中で硬直している俺に、雌型の蹴りが直撃した。

凄まじい速さで景色が流れ、廃墟を揺らした。

スーツは生きている。

生きているが、限界は近いだろう。

それほどの衝撃だった。

不可視は見えているのかと疑いながら再び接近したが、気付かれなかった。

直感が冴えている個体のようだ、星人にそういうものがあるのかはわからないが。

転がっていた肉片からソードを拾い上げて両手で握る。

直感も完璧ではないはずだ。

手数で翻弄し、隙を突いて弱点を抉る方針に変更。

スーツの筋力アシストが働くのと同時にソードを2本の振り回す。

全身の至る所を切り裂くが、本命には届かない。

途中から雌型の星人が防御一択を選択したことも原因の一つだろう。

こちらが移動するたびに廃墟の壁を蹴る必要があり、砕ける音や残骸で位置が判別されってしまう。

今はまだ遅れているが徐々にタイミングが合ってきている。

時間をかければ不可視化であろうと俺が死ぬこともある。

かなり面倒な星人だ。

足元まで迫り、雌型の体を駆けあがる。

防御の為に両手が塞がっている今しかできない。

鎖骨あたりで2本のソードを伸ばし、星人の二の腕を切り裂く。

何度も執拗に斬り続けることで支えることができなくなったのか、首裏に回していた腕が重力に負けて垂れ下がった。

好機に浮足立ったが、一瞬で現実へと引き戻された。

噛みつかれた。

鎖骨に足がめり込むほどソードを使ったので、不可視化が無意味になったのかもしれない。

だが、無意味だ。

現状では時間稼ぎにしかない。

顎を切り裂いて退避。

一気に走り抜け、ノーガード状態の首裏へ向けてソードを振り下ろす。
弾かれた。

首裏が、手で防いでいるときのように硬化していた。

これではソードで切り裂くことができない。

Xガンで崩すか、周りを大きく切り取ってYガンで転送するか。

そう考えていると地を揺らし、廃墟を崩しながら、更なる星人が現れた。
でけえ……。

星人のおかわりが届いたところでクソゲーっぷりを再確認。

雌型が必死に耐えていたのは時間稼ぎのためだったらしい、糞が。

拳動は見かけ通り鈍いが、巨体でカバーしているようだ。

攻撃範囲の広さと衝撃が厄介すぎる。

仕切り直しも視野に入れていっていると、巨大な星人が煙を放った。

スーツが悲鳴を挙げる。

さきほどの煙で耐久力を失ったようだ。

毒だろつかと焦りながら距離を取るために走る。

酷い熱を感じる。

耐久力を失った際に顔が火傷を負ったようだ。

毒では無かったことに安心すべきか、スーツが死んだことに絶望すべきか。

コントローラーを確認する。

光点がこちらへと迫ってきていた。

雌型だろうか。

あいつ糞うぜえ。

7回目

死んでないのに部屋へと戻された。

ミッション前の焼き増し状態だ。

なぜだろうと思ったが、残り時間が少なかつたのを思い出す。

たぶん、俺はクリアしなければ同じミッションを繰り返させられる。

Yガンを猫に括りつけ、ソードを手取る。

接近戦が主体となるソードはあまり人気ではないらしく、2本持つて行けることになつた。

1本でも問題ない気がするが、2本あれば2倍お得……無いな。
不可視化しつつ、転送に身を委ねる。

転送後、最初にやることはコントローラーで位置を確認することだ。

近場に1人、遠くに確認できる光点はたぶん鎧型や雌型といった星人なのだろう。

以前、確認したときよりも遥かに移動速度が遅い。

もしかして戦闘して弱るのを待っていたりするのだろうか。

そうであるならば、知能は俺が思っているよりもずっと高い。

まあ、今はそれほど重要ではない。

それよりも、弱点に気付いていないちっぽけな人間が向かってきたと思つて油断してくれば御の字なのだが。

雌型は奇襲で最初に駆逐しておきたいところだ。

学習されて硬化で防御なんてされたらまたタイムアップになってしまう。

廃墟に投げ出されて戸惑っている学生を拾う。

中学生くらいだろうか。

不安なのだろう、質問責めにあつてしまった。

が、無視する。

首根っこを掴んで全力で移動。

中学生は泡を吹いているが、優しく運ぶ必要も、もちろん心配する意味もない。

光点が2つ、雌型はどちらか。

テキトーに勘で選択する。

敵も勘で戦うのだから、俺も勘に頼つてみた。

遠方からゆっくりと歩いている雌型の星人を目視する。

中学生が悲鳴をあげているが無視して接近する。

気付かれたが構わない。

星人の顔目がけて中学生を放り投げる。

餌を与えられた動物のように嘔みつく星人、悲鳴をあげる中学生、隙を突いて背後から斬り付ける俺。

完璧なタイミングだったが、首裏に組まれた手で防がれた。

やはり直感に優れているようだ。

しかし、無意味だ。

首裏よりも下、両肩ごと切り裂いた。

その勢いのまま一回転し、後頭部から頬にかけて真つ二つにして、ダルマ落としのように急所だけを切り抜いた。

ゆっくりと落下する頭部、首回り。

そして力なく崩れ落ちる巨躯。

落下の衝撃で真つ二つになった中学生が血袋のように破裂した。

地に落ちた星人の目と視線が合うが、無視してYガンを急所に撃ちこんだ。

コントローラーで位置を確認する。

一か所に星人が集まっているのか、多数の光点のせいで数がいまいち把握しきれない。

その集まりに向かって高速で移動している光点が1つ、たぶん鎧型だろう。

俺よりも遙かに速い、これは間に合わないわ。

体力を温存することにした。

どうせ間に合わないのだから俺がベストな状態で戦いたいし。

中学生という悲しい犠牲を出さないために、確実に勝たなくてはならないのだ……っ

！

鎧型の星人が到着したらしい。

コントローラーに表示されている光点が一気に減っていた。

まるで鎧型の星人というボーリングの球がその他の星人や人間というピンを倒して

いったようだった。

……減った光点から判断すると、他の星人も潰しているのだけれどいいのだろうか。

交戦している姿が確認できるところまでたどり着いた。

転がっているガンを肉塊から取り出さないと。

不可視化の状態なので悠々とハイエナのように星人を刈り取る。

あらかた刈り終えたので、死闘が繰り広げられている場所へ向かう。

スーツ持ちと鎧型の戦闘である。

星人の周りを駆けまわったり、廃墟からガンで撃っているようだ。

対して鎧型は1人ずつ体当たりで潰している。

徐々に人間は全滅するかもしれない。

まあ、俺には都合がいいのだけれど。

鎧型は硬いが、生き残っている人間に気が向いているのでロックオンし放題だ。

XショットガンやXガンを持てるだけ持つてかちやかちやと一心不乱に連打し、トリ

ガーを引きまくる。

幾度も爆ぜたところをソードで切り取り、Yガンで転送する。

作業に近い。

突然、死亡した星人に戸惑っているメンバーを余所にコントローラーで確認。

やはり超巨大な星人1体残っているようだ。

不可視化は解かずにこの場を離れ、廃墟の屋上に待機する。

ガン系統はあの巨軀には効かないだろうからYガンだけ持つて行くつもりだ。

その代わり、ソードは2本持っている。

超大型の星人が人間と戦闘を開始した。

やはり足元からでは勝負にならないようだ。

避けきれずにスーツの耐久力が削られている。

息を潜め、機を窺う。

足への集中攻撃で支えきれなくなったのか、崩れ落ちた。

そして生き残りたちが倒れた背に飛び乗っているが、俺は一気に距離をとる。

熱攻撃がくるからだ。

煙が巨大な星人の体から噴き出すと同時に幾人もの悲鳴が聞こえた。

残り少ない耐久力では耐えられなかったのだろう。

煙、というか蒸気が晴れたのを確認し、屋上を移動しながら距離を詰める。

眼下に見える生き残りたちは、もう虫の息だ。

焼きプリンもいる。

スーツが死んで至近距離で熱を喰らったのだからしょうがない。

超大型の星人が、とどめを刺そうとしている首裏に向けてソードで切り裂いた。

難なく刃先が通過する。

回転して止めを刺そうとするが、蒸気が視界を塞ぐ。

2発目とか反則だろ……っ！

スーツの耐久力を信じて星人の首裏に着地する。

すぐにソードを伸ばして後頭部から刈り取る。

スーツが悲鳴をあげ、穴から液体が流れ出した。

熱で目を開けるのもツライが、切り取った部位にYガンを撃ちこむ。

が、蒸気でワイヤーがどこかへ飛んで行った。

ああああああー!!

焦りを乗せて、ソードを我武者羅に振り回す。

何分割にも分かれた首裏の肉から人型のようなモノが飛び出してきた。

今まで静観していた猫が真つ二つにした。

……。

と、とりあえず勝利だ。

細かい事を考えるのは無しにしよう。

転送が始まったことだし。

簡素な部屋に戻ってきた。

ガンツの前で待っているのだが、猫以外の帰還者はいなかった。たぶん、俺が戦闘したときの蒸気で死んだのだろう。惜しいやつらを亡くしたぜ（棒読み）

チーンと気が抜ける音とともに採点が始まった。

1人と1匹しかいないのでなんか虚しい気分になった。

『俺さん』

31点

かつをへーちよ級

Total 49てん』

人がいないと採点が早いな。

猫は10点だった。

超大型は10点分ということか。

あれで10点か……。

20点とかきたら初見の場合は無理ゲーな気がしないでもない。

ああ、全滅しても補充されるから関係ないのか。

ホント、人間に全く優しくないルールだ。

原作：魔法少女リリカルなのは リリカルループシナイ

弟は何処がおかしい。

誕生日プレゼントとして両親がどこから連れてきた境遇も若干の違和感を感じるが、決定的におかしいと思ったのは3歳を過ぎた頃からだ。

今でも覚えている。

というか、忘れられないというのが正しい。

そのときの俺は5歳くらいだったが、あまりに衝撃的過ぎて忘れられないでいる。

たどたどしい言葉遣いで俺に必死に着いてきていた弟は、ある日突然小難しい話し方をするようになった。

何処から得たのかわからない知識は勿論のこと、語彙も爆発的に増えていた。

トラツクに轢かれそうになったことが境となつていのではないかと俺は睨んでいるが、確かめるすべはない。

そんな弟に負けられないように、と表現すると恥ずかしいが、まあ、自分なりに努力した。

その結果である俺は、自分ではひどく小賢しいと思えるような成長をってしまったのだから然もありなん。

どんな方向に頑張ったらこうなってしまったのか、首を傾げてしまうような変化を遂げた。

もしかしたら弟とともに楽しんだアニメや小説、ゲーム、映画などといった娯楽が悪かったのか。

過去に戻るならもつと善人然とした成長を望むが、無理だろう。

弟は今のままでいいのだと言ってくれるが、釈然としないものを抱いてしまうのだ。

い。小学校に入学して、幾人かの友人と過ごすようになってからも弟にあまり変化はない。

アニメやゲーム、漫画に小説、サブカルチャーとか呼ばれるような娯楽に一日のほとんどを費やしているようだった。

不健康だろうと思ひ、祖父とともに、趣味のゲートボールをやるから一緒にどうだろうかと誘ってみたが、答えは芳しくなかった。

では、道場で身体を動かしてみるのはどうかと思つたが、やはり変わらずだった。

娯楽もそうだが、ちらりと零すように言った「魔法」とやらで忙しいそうだ。

そんな出不精な弟だが、世話になっていて道場の弟弟子的な位置づけにいる竜也と、その双子の姉のなのはが遊びに来た際には打って変わって喜んだ。

同世代と遊べることに歓喜したのだろう、「でかした!」と何度も叫んでいた。

そのうち弟は丸太を武器にしそうだなと思った。

高町の双子と交流したすぐ後に弟も道場に通いたいと言ってきた。

何か思うところがあつたのだろうか。

俺は弟を連れて数回ほど道場に通うようになったが、すぐに一人で通う生活に戻った。

弟が訓練のキツさに通うのを諦めたためだった。

めげそうになる度に励ましたり、魔法とやらがうまくいかないという愚痴を聞いた。り、兄弟子である恭也さんが怖いだとかいう弱音も聞いた。

なんとか供に道場に通いたかったが、断念した。

結局、弟はなのはがいるときだけ来るようになった。

弟曰く、イレギュラーも気になるが、ヒロインこそ最も興味が湧くからなんちゃら。

今日も彼は平常運転だった。

俺と竜也が必死に動いている間も、弟はなのはに話しかけ続け、右手を宙に彷徨わせ

ている。

そして、それに恭也さんが射抜くような視線を送っていた。

兄の威厳を保つことはできなかったが案外、悪くないのかもしれない。

弟が道場に顔を出すようになってから半年が経ったある日。

朝の基礎トレーニングを終え、汗を拭っていると小さな声が聞こえた。

俺を誘導するかようだった。

導かれるように声を辿って丘を登り、林をかき分けると、子供と猫が倒れているのを見つけた。

1人と1匹は全身が襤褸のように汚れており、子供に至っては金髪がくすんだかのよう精彩を欠いていた。

死んでいないだろうなと内心でひやひやしながら近づくと、子供が俺の首に手をかけてようとしてきた。

反射的に殴り倒してしまった。

気絶したのか、動くそぶりをまったく見せない。

死にかけたところと止めに刺した可能性が胸で渦巻く。

埋めるべきか……。

悩んでいると、そばにいた猫が四肢を震わせながら立ち上がって言葉を話した。

「どうやら保護してもらいたいらしい。」

猫が言葉を介すことの驚きと殴り倒した罪悪感で、連れ帰ることに決めた。

俺よりも小柄とはいえ、力の抜けた人間を運ぶのはかなり苦勞するのだと学んだ。

あとは猫の名前はリニスということも。

最近の猫は喋るのかと聞くと、「使い魔だからです」と返された。

よくわからんなあ、と呟く俺を余所に弟は訳知り顔でうなずいていた。

子供のほうは名前がないらしい。

素体は「アリシア」という少女らしいが、肉体を強めるために少年になったとか。

俺には戸籍とか問題ないのだろうかとよくわからないことばかりだが、表情を引き攣

らせていた弟にはわかるのだろう。

兄なののに知らないことばかりで純粹に悔しいと思う。

名前がないと不便なので、こちらで便宜的に付けておくことにした。

胸元かけられた錆びたタグに刻まれた『U-9』からユウくんというのはどうだろ

うかと提案。

製造番号とかそういう管理用の数字な気がしないでもないが、問題ないに違いな

い。

目覚めた少年とのやり取りの結果、名前はユウになった。

俺の弟と違って、何処か頼りなくておぼつかない。

だが、それがいい。

ぶつちやけ、ユウくんのほうが可愛いし構いたくなる。

弟は俺のことを名前で呼ぶうえに、あまり関わろうとしてこない。

しかも自分のことは自分でやってしまうので面倒を見るようなこともない。

やはり兄としての意義が感じられるユウくんを可愛がってしまっわけだ。

そもそも弟からの扱いが悪いし。

おすすめのアニメと一緒に見るかゲームするか、もしくはなのはがいなければ俺は空気に近い扱いだ。

感じた優先順位としては

『なのは』リニス』その他可愛い女性』ルビコン河』俺』男』ユウ』みたいな感じだろうか。

ただの女好きじゃないですかー、やだー!!

「おそろしく早い球速、俺じゃなきゃ見逃しちゃうね」と呟きながらドッジボールをしたり、ドヤ顔で「足音殺すの癖なんだ」とドヤ顔でドッジボールしたり、「代わりに祈る時間が増えた」と感謝のドッジボールをしたり、隣のクラスのはやぶさが「俺が3人分になろう」と3倍速でドッジボールしたり、「おそれるのはこの憎しみが風化することだ」と目を朱く染めてドッジボールをしたりと平凡に日々を過ごしていると、弟とユウくんが小学校に入学する歳になった。

なのはと竜也が私立に進むと話を聞いたのか、弟も同様に私立の小学校に進むのだからか。

通学範囲なので問題ないとは思いますが、遠い気がしないでもない。

ユウくんは俺と同じ普通の小学校でいいと言っていたが、弟の例もあるので私立を薦めておいた。

頭がいいし、もったいないからな。

なんて思ってたがユウくんは俺と同じ学校に通うことにしたようだ。

まあ、俺としては一緒に登校できるのでうれしいけど。

朝は弟が先に出て行ったのを見送り、いくらかしてからリニスを頭にさせたユウくんを連れて登校するのが基本になった。

弟が飽きて使わなくなったルービックキューブを持っていくのも忘れない。

途中で同じ通学路を使っているはやぶさと、その妹のはやたと合流して学校へとぐだぐた向かう。

はやては車椅子なので、後ろ歩きで3人に話しかけつつさり気無く小石などを蹴り飛ばすのが俺の仕事である。

会話をしつつ障害物に気を遣い、手の中ではルービックキューブを操る、俺もなかなか多芸な気がしないでもない。

ちなみにルービックキューブは弟が分割思考という複数の物事を別々に考える思考方法とやらのために購入したものだ、三日坊主となったので勝手に使っている。

ユウくんはルービックキューブが苦手なのか、俺がやっている嫌そうな表情を浮かべたりする。

話題は俺が素手で魚の内臓を瞬く間に抜き取れるようになったことから小学生の間で大人気のドッジボールにシフト。

はやてはドッジボールに参戦したいのだとか。
マジか。

とりあえず高学年が相手の場合、投げとしては燃える魔球か消える魔球が最低ラインで、回避は背中に目があるレベルじゃないと厳しい気がする。

使っている球は柔らかいぶよぶよのボールだから5mくらい吹っ飛ぶだけだし、防衛

は気合でどうぞ。

サッカーで男子に轢き逃げ喰らわせてるし、はやても練習すればいけるかもしれない。
い。

すさまじい車椅子テクニクだが、腕力はどうなってるのだろうか。

弟が魔法を家の中で使うようになった。

そして、それに激怒したユウくと、二人を諫めようとリニスが参戦して、家庭内魔法大戦争が起きた。

俺？

体調悪くて寝転がっていた。

なんか魔法とかダメだわ。

相性悪すぎ。

ゲロ吐きそう。

そんな感じでぐったりとしながら色彩鮮やかな空を眺めていたら魔法の流れ球が直撃した。

あばばばばばああばばあばばば

入院ってはじめてだ。

過労のような症状だが、全身が弱っているとかな。

原因は不明。

季節の変わり目や学期が変わったことなどによって運が悪く連鎖的に体調を崩したのではないかと診断された。

なるほど、当分は暖かくして寝るとしよう。

リニスとユウくん人間湯たんぼなので風邪をひく心配はなさそうだけど、油断は禁物ということだろう。

退院した翌日、リニスの提案でゆっくりと魔力の運用方法を学ぶことになった。

俺にも魔法を使うための器官であるリンカーコアがあるらしいが、かなり特殊で外部の魔力を取り込んで体に副作用を起こすのだからか。

先日の魔法直撃もそのせいで重くなったようだ。

とりあえず取り込んでしまう魔力を体外に排出する練習を重点的に行っていくことにした。

ふおおおおお、と練習していると体から魔力が確認できた。

黒く淀んだ色をしていた。

魔力汚いな、と落ち込んでいるとリニスの顔が険しくなっていた。

あまりの汚さに引いたのだろうか。

日課のように体外への垂れ流しを行っていると徐々に俺の魔力が白色に近づいた。

リニスの考察によると魔力が混ざって黒になつていったとか。

なるほど、混ぜれば黒になるのはよくある話だ。

ただ、色が濃すぎる気がするかとリニスの眉間に皺が寄っていた。

こわい。

そういえば、魔法を使うための器官であるリンカーコアがあるのだから俺にも魔法が使えるのは道理じゃないだろうかと思つた。

で、ユウくんに聞いてみた。

気まずそうに目を逸らされたので頬を軽く引つ張つて遊ぶ、よく伸びて手触り最高。

リニスに尋ねると、魔力が低すぎて魔法を使うと倒れるかもしれないと言われた。

ランクとしてはE+からD-くらい。

わかんね。

さらに聞いてみると魔導師としては最低CだがB以上は必要、A以上で優秀、AAで

エリート的な感じっぽい。

弟はA A、ユウくんはA A A。

俺ザコすぎい！

どうせ魔法を使う機会はないでしょう、とリニスに言われたのであきらめる。

諦めきれないのでいつかは使いたいものだ。

弟に聞こうと思ったが、退院あとはあまり顔を合わせることも少なくなっただけで意見は得られなかった。

放課後や休みの日中はどこかへ遊びに行き、日が暮れた頃に帰ってきて自室でアニメやゲームを楽しんでいるようだ。

顔を合わせてもユウくと弟が睨みあつて空気が悪くなる。

気づいたんだけど、この二人って仲が悪いんじゃないだろうか。

真顔でリニスに言ったら溜息つかれた。
なぜだし。

魔法や小太刀の才能がないことに落ち込んだり、ユウくんをべろんべろんに可愛がったり、リニスと魔力運用によって体調がよくなって動きのキレがかなり上がったたり、竜也に必殺技喰らったり、ゲートボールでヴィータをボコったり、ドッジボールではやぶさに燃えて曲がって加速して消える（？）魔球を投げたりして過ごしていたらユウくと弟も3年生になった。

竜也に弟はどんな調子か聞いたが、結構ふつうらしく、度々話が合わなくて浮いていることもあるが、運動はできるので一定の地位は築けているようだ。

問題はなのらしい。

友達が少ない、とかいえないレベルっぽい。

竜也と弟がいるじゃないかと思っただが、クラスが違うようだ。

かわいそうだが、俺にできることは特に無さそうだ。

様子見て話を聞くくらいだろう。

それも弟がいらないちよつとした時間くらいだけだ。

4月、俺は5回ほど怪物に襲われた。

調べると魔法絡みであることがわかった。

さすがにもう無いだろうと油断していたらジュレイモンに突き刺された。

「ぐわあああああゝqゝ」みたいな声をあげて倒れたらしい。

実に恥ずかしい。

まあ、恥を忍んで第三者視点の話を聞いてみると貫通して結構ヤバかったとか。

一番やばいのは家がぶっ壊れたことだと思えますけどね！

あと弟が家出してたことも事件かと思われまます！

原作：魔法少女リリカルなのは リリカル日記

4月3日

安売りされていた日記帳が流れ星と衝突してパワーアップしたので、日記を書いてみようと思う。

何処がパワーアップしたかというところ、まず勝手に日付が記入される。

あと、勝手に文字として俺の体験が書き込まれる。

さらに、他人には読めない。

そして、2年前くらいに拾ったリニスとユウくんが言うには魔力を帯びててヤバいってことだ。

日記帳……？

ま、まあ、リニスもユウくんも魔法でびゅんびゅんばんばんやつてるので、危険が危ないみたいなの認識でいけばとりあえずまあまあ大丈夫っぽいしよ。

だって俺はもう高校生なんだぜ（爽やかスマイル）

4月10日

この日記に埋め込まれているマジックストーン的なサムシングが街中でばら撒かれて危ないらしい。

なのでリニスとユウくんが事件の発生を防ぐために、探索して封印処理を行うておうという話になった。

俺は保護者のなポジションなので後ろに着いていく。

ちなみに戦えないので、マジで後ろにいるだけ。

魔力はE＋からDーという糞みたいなランクらしいが、念話という最強便利ウエポンが使える時点でどうでもいい。

念話とは（こいつ、直接脳内に……）ができる能力だ、凄く便利。

特に大きな事件でもないが、動物病院で化け物が出た。

こいつがマジックストーン的なサムシングの影響らしい。

マジか。

俺の日記帳も変化するのだろうかと危惧したが、すでに変化後らしい。

日付の自動更新とプライバシー保護とか、しよぼくない？

リニスが言うには他にも俺のリンカーコアが濁っても、フィルターのようには浄化してくれる作用があるとか。

これがないと、ダイソン並みの吸引力を誇る俺の魔法特性のせいで、魔法行使の際に出る廃棄魔力で体調崩す恐れがあったとか。

日記様さまやんけ！

日記様の偉大さを話し合いながらマジックストーンを核とした暴走体を止めにくたら、小学生の男女が戦ってた。

そこにユウくとリニスも乱入した。

もうぬるゲーと化してた。

そして傍から見てた俺なんて現場まで走っただけで死にそうよ、体力がなくて。

一、二分くらいで撃破し、戻ってきたユウくんを「よくやった！」と脇に手を回してくるくるする。

良いことをしたら褒めるのが世の道理だ。

ユウくんのポニーテール風の髪がさらさらと流れ、街灯に照らされる様は眼福であった。

で、ユウくんを照れて茹だるまで存分に愛でたので、今度はリニスの番だ。

バインドとか呼ばれている拘束用の魔法を、勝手に入ってた日記帳で防御した。

魔法がじゆるっと飲み込まれた。

日記様さまやんけ！

日記様のパーフェクト防御に驚愕しているリニスも、ユウくんと同じようにくるくるする。

途中で山猫の姿になったが、問題ない。

俺は猫も好きだ！

むしろ猫が好きだ！

もうぐるんぐるんで、わしやわしやーってした。

どうしてなかなか素晴らしいんじゃないですかねえ……ふう。

待たせていた小学生二人と人語を介すイタチと情報交換することに。

ちなみに小学生二人は事情を知らなかった。

お、おう。

イタチが言うには古代のマジックストーン的な遺物を運んでいる最中に、なんやかんやあつて街に散らばったので集めているとか。

ただ、一人だと苦戦して怪我を負ったので、魔法に適正のある人を現地調達したらしい。

方法は簡単、念話で呼びかけただけ。

俺には聞こえなかったんですけどねえ……。

ユウくんとかリニスには聞こえたから来たとかどうとか。

あとは、魔法のある世界がうんたらかんたらという話もあったが端折る、めんどいし。なるほどなー。

とりあえず、曰くつきのマジックストーンであるジュエルシードの回収をイタチに任せる辺り、俺の常識では魔法世界の常識を計り知れない可能性が垣間見えた。

怖い。

それよりも救援とか期待できるならそちに任せなさいとちよつと小言。

ばら撒いてしまった罪悪感と責任感でうんたら。

集めないと気が済まないらしい。

ぐぬぬ。

まあ、頑張ったというのはホントなので褒める。

猫が好きといったな、あれは本当だ。

そしてイタチも嫌いじゃない。

あ、フェレットだった。

フェレットも嫌いじゃない。

ぐるんぐるんのわしやわしやもるんもるんよ。

俺の手にかかれば、フェレットのユーノくんも即墮ち2コマだぜ。

次は小学生二人である。

高町さんという喫茶店をやつてて、道場もあるとこの双子らしい。

危ないから駄目つしよと小言。

しよんぼりしながら謝られた、素直な子供の可愛さと言つたらないね！

あとは人を助けようと頑張つてたようなので、褒めるしかない。

「よくやったー」と脇に手を回してくるくるする。

三人と二匹をくるくるしたのは疲れたが、満足感も半端ない。

リニスとユウくんを先に帰し、ほくほくした気持ちで小学生二人を連れて高町さんの家へ。

ちなみに双子は竜也くんとなのはちゃんという名前で、ユーノくんを引き取りたいと言つてたが、飲食店なのでダメでしょ（真顔）

夜遅くに連れ歩いてサーセンしたつと謝罪。

お姉さんが優しくてよかつたぜと安心したら、二人のお母さんだった。

なるほど、人体の神秘やな。

あとは高町さんちのお兄さんが能面みたいな顔でこっち見てた。
めっちゃこわい。

ゲザれば許してくれないかな。

100回くらいなら余裕でゲザれるけど、どうよ？

いや、マジで許してください。

無表情こえー。

4月11日

学校帰りに小学生軍団と合流し、動物病院に寄ってユーノくんを引き取る。

アリサちゃんというバーニングでツンデレな娘と大人しくおっとりしているすず
かちゃんと挨拶。

「イタチが森で倒れてた、飼い主としての監督責任とかどうなの」みたいなことを問い
詰められた。

良い娘すぎっしょ。

すずかちゃんも真剣に見つめてくる。

純真さに穢れた魂を浄化されそうになった。

俺の不注意だった、見つけてくれてありがとう的なことを言つてユーノくんを頭に乘せて仲良くしといた。

発言したらなんかめっちゃ見つめられるんですが……。

ユウくんが高町ツイズは別に凝視する必要ないんじゃないですかねえ……。

とりあえず俺は許された！

が、次は無いと怒られた。
小学生に「ちゃんと世話できないなら生き物を飼つてはいけない」と説教される高校生の図である。

傍から見たらかなり情けないんですけど。

褒めようとしたら、鮫島さんという人が立ちはだかった。

「そこを退いてくれ！ 鮫島さん！」

「させません！ させませんぞ、百代様！」

みたいな感じで互いの譲れぬ一線を守る戦いに身を投じた。
決着は付かなかつた。

いや、守り切つた鮫島さんの勝ちだろう。

お互いの健闘を称え合いながら握手する、友情とはこういうことを言うのだろう。

なおユーノくんは俺の頭部で酔つてた。

あと俺らを置いて小学生組は喫茶店翠屋に行っていたので、勝負は結局ドロートになった。

鮫島さんに車で送ってもらったが、乗り心地が凄くよかった。

縦長は伊達じゃないんですね、q、

翠屋に到着したので、高町さんちのご家族に挨拶する。

ユーノくんは、外で待ってる鮫島さんに預けた。

飲食店に動物は駄目っしょ。

リニスも外で散歩してるとか。

で、翠屋に来た理由は、ジュエルシードの回収についての話し合いだ。

化け物が出たら危ないので、先んじて集めておきたいわけだが、何分俺は戦えない。

ユウくんとりニス、ユーノくん当面は対応していこうかな、みたいなの。

あんまりユウくんには戦ってほしくないんだけど、やりたいらしい。

高町さんちの竜もくんとなのはちゃんも手伝いたいらしい。

ダメですと念話で却下。

俺は戦えないし面倒見れないので駄目です☆

自己責任でやるからとか、なんでもするからとか、何処で覚えた言葉だよ……と思いつつも却下。

両親の理解を得られたら問題ないんだけどなー、残念だなー。不満げな電波を飛ばして、念話は終了。

ちなみに念話中、俺はカウンターに座って真顔でシュークリームを食べ続けてた、恭也さんと見つめ合って。

無表情の野郎じゃなくて、なんだこの、この、なんだ、可愛いおにやによこを寄越せや、q、

解散と相成った。

そして、帰りは習い事があるというアリサお嬢様(ぐう可愛)の車に同乗させてもらった。

途中まで送ってくれるとか。

ユーノくんが心配なだけだから！とツンデレも戴けた。

近年稀にみる良い娘である、なるほど天使か。

きゅぴーんと、魔法使い特有の冴えわたる勘でジュエルシードの暴走体を捉えたらしい、ユウくとリニス、ユーノくんが。

俺？

ないない。

アリスちゃんと壮大な宇宙の話をしてたし、してなくてもわからなかっただろう。

ここで降ろしてください、ありがとうございましたと神社の近くで下車。

サンキューサツメ、フォーエバーハクタイと渾身の挨拶を交わし、ジユエルシード祭りにのりこめー、
つよそう な わんわんお が あらわれた !

ヘイヘーイ、完封だぜ完封うー！と煽る。

リニスとユーノくん足止めして、ユウくんがヒットアンドアウェイでボコるという、さいつよ作戦だ。

相手はだいたい死ぬ。

特に危ない場面も無く倒して、良くやったとべた褒めして終了。

飼い主の人もそのうち起きるだろうからと、呼吸のし易い姿勢に寝かせ、帰ろうかと振り返る。

そこにはアリスちゃんの姿が！

見た？

頷かれた。

なるほどなー。

詳しく説明……する時間も無いので、掻い摘んで話す。

奇跡も、魔法も、あるんだよ（迫真）

おっし、解決した。

ちなみにアリサちゃんはリンカーコアが無いので魔法が使えないため手伝えないで
フイニツシュ。

それでも食い下がるアリサちゃんだったが、危ないから俺が人間盾になるしか……と
呟くと「迷惑はかけられないから手伝うのは諦める」と言ってくれた。

言質が取れたので安心だ。

俺も危ないんじゃないやねって話になったが、「『例外的ほうが多い日記帳（アンリミテツ
ド・ダイアリー）』——僕はキメ顔でそう言った」みたいなことを日記帳を見せつけな
がら、ドヤ顔でかました。

日記帳様が盾になるっばいから大丈夫だ。

アリサちゃんがずるいだとか、それなら私も、とか言っていたが駄目。

ごめんなアリサちゃん、この日記帳は一人用なんだ。

しかも、さつき諦めるって言ったっしょ。

約束は守らないと、ね？

4月12日

ユウくんが学校でジュエルシードを2個拾ってきたとか。

おお、偉い偉いとぐるぐるである。

回していると、ユウくんの長い髪に首筋に触れてくすぐったかった。

いや、ほんとに長くなったわ。

切るか、いや、でも切るのも勿体ないような。

結局切らないまま保留である、何回目だろうか。

俺が手伝ってるから、本人はそこまで不便だと思っていない……といいなあ。

俺の日記帳に張り付いているジュエルシードをどうするかという会議が開かれた。

メンバーは俺、ユウくん、リニス、ユーノくん。

現状として

・利点

安定している・高性能フィルター・魔力タンク・魔法無効

である。

安定しているのは、日記と融合しているからじゃないかという推測しか立てられなかった。

フィルターは俺のスキル、というかりんカーコアが、容量を無視して周囲の廃棄魔力を率先的に回収して体調不良を起こすのを、浄化して防いでくれるのだ。

タンクは、余剰分をジュエルシードが蓄積してくれる。

タンク機能がなかったら爆ぜてた可能性があるとか。

りんカーコアって臓器らしいから、爆ぜるとか想像したくないわ……。

で、魔法無効はジュエルシードの純魔力でかき消す的な感じだ。

チャージされている限り、日記で防げば無敵を誇るかもしれない。

・欠点

暴走する可能性がある・ロストロギア

らしい。

暴走は、最近見かける暴走体的なサムシングに変化する恐れだ。

日記帳が何に変化するというんですかねえ……と疑ったが、実際は日記を介して、俺の願いをかなえようとするかもしれない、ってことらしい。

ジュエルシードは願いを、まあ、あさつての方向にだが、叶えてくれるとか。

近距離能力が糞みたいな俺も、願えば強くなれる可能性が……？とか期待したら、日

記帳なので外部にしか影響しないと思うとか。

マジか。

体に埋め込んだら身体能力が半端無さそうだわ。

まあ、俺は家族が健康ならそれでいいです（イケメンすぎるスマイル）
もしくは生き物天国とか。

フクロウ、エリマキトカゲ、オオサンショウウオとかが俺の好みでな。

パラダイスを作りたいが、運営費がキツイだろうし諦めた。

ジュエルシードも大したことないね。

とりあえず暴走しかけたら封印する必要があるので、ユウくんとりニスという時間を長くすることで解決。

いつも引つ付いている気がするんですが。

で、ロストロギアは過去に滅んだ超文明が生み出したロマンあふれるハイパー兵器らしい（意識全開）

危険が危ない未曾有の危機を、管理局が管理したり保管したりしているらしく、物によつては所持したら犯罪だとか。

地球の法律バリアーを貫通して逮捕される可能性があるらしい。

俺の日記は献上品に決定だな。

まあ、ほどほどに使って駄目そうなら封印しようってことになった。駄目なときは駄目だし、大丈夫ならずと大丈夫だ。

知らんけど。

家族会議も終わったので、P S 1 を接続し、モンスターファーム2を起動。

P S 2 版やG B A、D S でもいいが、やはり2が一番だと思う。

膝上に座ったユウくんのお腹に腕を回し、コントローラーを持つ。

なぜP S の起動画面はこんなに怖いのだろうか。

とか考えてたら、地震が起きた。

ユウくとリニス、ユーノくんを抱えて、本棚などの上から物が降ってこない場所に退避。

どうやら暴走体が街をぐちゃみそにしているとか。

それはヤバいな。

原因を探らないとなー、と呑気に考えていたら、窓をぶち破って巨大な樹が突撃してきやがった。

日記様の究極防御によって、間一髪でマジヤバい枝さん乱舞攻撃を防御できた。

枝の高さがちょうど心臓ほどの位置という殺意の高さ、魔導生物は半端ないぜ……。

抱えていたユウくんたちを解放して外を見ると街がぼろぼろだった。ピノッキモンになれないジュレイモンが勝率集めに無差別戦闘でも起こしたのかもしれん。

デジタルワールドに帰してやる必要がある。

というか、ここまでされたらオメガモンとか出てきちゃうんじゃないかね。

期待して外に行つたが、特にオメガモンとかいなかった。

竜也くんが剪定して、なのはちゃんがバスターで吹き飛ばすというバイオレンス庭仕事に励んでいた。

合流して、協力して倒そうぜみたいな感じの空気になった。

防御のための魔法を使わずにあの固さなのだから、攻撃に回したらどうなるのだろうか
と興味本位で日記帳様の魔力を解放。

軒並み消し飛んだ。

もう日記帳という名の兵器だよ、これ。

次元震とか起きたんじゃないやねって話である。

戦闘終了。

一息ついていると、暴走体による惨状、守る力がある、見ていただけじゃ嫌だ的な話を高町ツインズが告げられた。

で、手伝いたいのので、家族を説得するので手伝ってくださいますか。かなんとか。心の準備がgつがががあg

突発的に発生した三者面談である。

高町夫婦、兄妹を相手にする俺だから五者面談か……アウエーってレベルじゃねーぞ。

魔法の真偽、暴走体の影響、対策のための力、などなどを話し合う。

そして、俺は戦う力が無いから守れなくて弟のユウくんにおんぶにだっこアピール。ここで無力の俺を嘲笑って日常に回帰、高町ツインズは幸せになるといのが俺のイメージだったんだけど。

自己責任でやれるとこまでやりなさいというのが高町さんちの反応だった。

常識とかかけ離れてておかしいのですがそれは、q、

わけがわからないよ。

いや、マジで。

まあ、それでも街を守るために頑張ったので褒め……「そこを退いてくれ！ 恭也さん！」「さっせんぞー」みたいな流れの後、夕飯をご馳走してもらった。

うまいわー。

人んちで食べる飯がうまいわー。

鮫島さんとゲートボールする約束したの忘れてた。

街が若干崩壊したし、セーフっしょ。

せ、セーフだよね（震え声）

4月17日

すずかちゃんの家には猫がいっぱいいるらしい。

招待を強請るゲザからの懇願で一発でした。

嘘だ。

ユーノくんの様子が見たいから来いって言われた。

信用されていないなサムシングですね、わかりたくありません。

途中でアリサちゃんと合流。

近況について尋ねられたので、軽く報告。

ジュレイモンの被害はでかかったが、あれはしょうがない。

あんなん防げない、無理。

ボランティア的な活動なんで失敗もあるが、次は起きないように気を付けると真摯に
対応。

呆れられた。

いや、だって引き摺ってもしゃあないし。

そもそも、俺の戦闘能力とかうんこだし。

防御も攻撃も究極的に高いことがわかったが、魔力を放出しているだけなんで被害が
でかいというか、死人が出るというか。

ハイパーピーキーなんで期待しないでくださいあ。

俺たちの後ろには恭也さんがついてきている。

すずかちゃんのお姉さんが、恭也さんと付き合っているので遊びに行くとか。

羨ましいわ。

俺も彼女が欲し……欲しいか？

いや、いなくてもいいか。

満足してるし。

恭也さんは表情が変わりにくいから、いまいち感情が読み取れない。

しかもこの人、真顔で冗談言うからどう判断すればいいのか。

なのはちゃんや竜也くんが冗談であたふたする姿を見るのが好きというのは理解し

たけど。

ちよつと世間知らずなユウくんも流れ弾が当たるときがあるのでやめてくれませんかねえ……。

俺はこのまま猫山に埋もれて幸せに暮らしたいぜ…… q

すずかちゃんの家はぱらいそだった。

マジで猫天国。

猫の毛とか、吐しや物とかちやんと片しているようで、見た感じ汚れはなかった。

真剣にすずかちゃんと結婚したいわ。

ただ、相手は小学生だからなあ。

ぐぬぬ。

ちなみにアリサちゃんの家は犬天国らしい。

犬か、いいなあ。

大型も小型も好きだ。

真剣にアリサちゃんと結婚したいわ。

でも、やっぱり相手は小学生だからなあ。

ぐぬぬ。

真面目な話、そういう資産で結婚相手を選ぶのはどうなの話になった。なんで諭されているんですかね。

俺って高校生にもなって、小学生に教えられてしまった。

情けない。

情けない自分に情けないふりをして猫天国に飛び込む。

俺は今日から一生ここで過ごすことにするわ。q

ダメでした。

当たり前だよね。

すずかちゃんの家のお手伝いさんがおやつを持ってきたら、散ってしまった。

お手伝いとかメイドとか、ブルジョアだなあ。

しかし、薄情なやつらだ。

猫に袖にされるなんて。

悲しい。

悲しいのでリニスを撫でようとしたら、尾で叩かれた。

嫉妬しているのか。

かわいいやつである。

魔導師特有のニュータイポオ！能力でピキイン！と来たらしい。

俺の勘には何の反応も無かったがな。

暴走体が、雑木林にいるのかなんとか。

マジでブルジョアすぎなんですけど。

あつちに猫がいたはず！と駆け出す。

ユウくんが追いかけてきた。

すずかちゃんも来ようとしたが、なのはちゃんと竜也くんがやれやれのな雰囲気です分たちが行くと追っかけてきた。

俺のクールイケメンキャラが子供っぽい駄目なやつになつちやうからやめてえ！

ちなみにアリサちゃんは膝上に猫を寝かせながら、手伝えなくて悔しそうだった。

猫に好かれるツンデレなんて、そこで安全にクツキーを食べていればいいのよ！

雑木林を抜けると、そこにはでかい仔猫がいた。

でかい仔猫という矛盾、その欲望グッドだね！

どうも猫が成長したいという願いを、大きくなりたいというストレートな形で叶えたい。

ジュエルシード、無能。

日記帳様を見習うべきだな。

俺の日記帳様なんて、周囲をふわふわ浮かびながらオート防御までしてくれるようになってきた。

日記帳様、有能。

ここは俺に任せるんだ！とでかい仔猫の前に立ちふさがる。

さつきまで遊んでたから俺になついているに違いない。

俺のフレグランズで安眠を与えてやろうじゃないか！

ぐわああっあああゝqゝ

お、おれダイーン!!!

でかい仔猫による幸せプレスを喰らった。

ふかふかで温かいが、その質量は殺人的だ。

は、早くしないと俺が幸せに包まれて死んでしまうぞー！

なんて思ってたなら、日記帳様がでかい仔猫に張り付いた。

そしたら、仔猫が元のサイズに戻っていた。

リニス先生に話を伺うと、魔力を吸収したんじゃねって感じだった。

日記帳様のおかげで平和的かいっけつ！と調子抜いてたら、犬耳オレンジ美女に腹パ
ンされた。

なお日記帳様の防御により、カウンターもどきになったが。

ユウくんに似た少女……いや、ユウくんは男の子だし、少年の可能性もあるか。

金髪の子供と犬耳の二人が、ジュエルシールドが欲しいと襲ってきた。

いや、駄目だよと諭す。

金髪の子だが、ユウくんに外見が似ていると思ったが内面の純真さも似ているらしい、ごめんなさいと謝られた。

良い子じゃん！

全部許す！

ほんわかしてたら、犬耳が怒りだした。

ジュエルシールドを集めないとダメとかなんとか。

人の物を盗ったらダメなんだよと諭す。

金髪の子だが、ユウくんに外見が似ていると思（略

犬耳が襲い掛かってきた。

なるほど、美女で野獣ってやつか。

夜はきつと激しいのだろう（意味深）

なのはちゃんにどうしたらいいのかと相談された。

そうだなあ。

矛を出したままでは話し合いなど出来ないし、取り上げるか折るかしよう。

リニスをサポートに小学生組に突撃指令。

とりあえず勝てば官軍、捕まれば話放題である。

なのはちゃんが凄いきらきらした目をしていたのが気になったけど、まあいいか。

完全に俺をタゲってる犬耳を日記帳様のパーフェクトバリアーで決め顔で防ぐ。

俺は弱くても日記帳様はさいつよなんだよお！と胸元からユーノくんを取り出して

投擲。

バインドで動きが止まった瞬間、宙に浮遊している日記様の自由落下ダイアリーアタックで頭を叩く。

峰打ちだ、完璧に犬耳を避けていた。

ノートで頭を叩く峰打ちとは一体……とユーノくんが悩んでいた。

魔法世界に峰打ちがあるのか、俺もちよつと悩んだ。

あっちも終わってるかなと思ったが、思いのほか手こずっていた。
コンビネーションがぼろぼろなのと、相手の子が凄い気迫で粘っていた。
失敗したわ。

選交代を知らせる。

O U T ユウくん、リニス、竜也くん

I N 俺

完璧な作戦を思いついた。

気絶して、バインドで縛れている犬耳を見せる。

若干、動きが悪くなったところで俺が日記帳様に乗って突撃。

羽交い絞めにして、俺ごと撃てー！とか言ってみたり。

マジで撃たれた^q^

なのはちゃん容赦ないわあ……。

俺は日記帳様があるから問題なかったけど、金髪の子は一撃でダウンだ。

バインドで縛られた二人。

よし、持って帰るか。

撤収を指示、してたらユウくんが泣いた。

もう捨て身なんてしないよ！つて約束させられた。

弟のヒロイン力が高いんですが。

肩に担いで戻る。

で、ユウくんの妹が来たけど体調を崩したので帰る的なテキストをぶっこく。

休んでいけばとか言われたが、大丈夫です。

リニス先生という万能マスターが転移してくれるし。

4月18日

犬耳美女、アルフという名前なのだが、めっちゃ警戒された。

が、リニスがなんやかんや話したら落ち着いた。

険しさが無くなれば可愛いじゃないか！

犬耳は至高だな。

で、金髪の子がフェイトちゃんという子で女の子だとか。

知ってた（したり顔）

リニスが詳しく話を知っていて、掻い摘むとユウくとフェイトちゃんは兄妹らしい。

な、なんだってー!!!?

「じゃあ俺もフェイトちゃんの兄じゃん」と言うと、アルフが「いや、それはおかしい」と否定してきた。

どこからどう見ても完璧な理論武装だったはずだが……。

兄、というかきようだいに憧れていたのかフェイトちゃんは「ほわあああ」ときらきらした目で言うだけだった。

だ、大丈夫かな、この子。

いきなりで悪いが、ぼんこつ臭が半端ないんだけど。

この複雑な家庭環境について、リニスが語ってくれるらしい。

そういえば俺も詳しく聞いたことなかった。

ユウくんは追い出されたらしい。

いきなり重すぎないですかね……。

少し遅れてリニスが合流し、俺に拾われて生きてきたとか。

ユウくんのお母さん、怖くね。

でもユウくんやフェイトちゃんの話を知ると、昔は優しかったとかなるほどね。

最近はやさしいけど、それは自分が悪いとかフェイトちゃんが言っているが、ちよつと違ふと思う。

なんかモヤモヤする。

線が繋がる事実が、ちよつとした点しか見えていない状態というか。

アルフを連れてお茶を用意すると席を離れる。

真相は、行き過ぎた体罰がヤバいとか。

うーん。

このままだとフェイトちゃんの体と精神が限界を迎えるので、なんとかしてほしいとのこと。

それに関しては同意だ。

とりあえず、母親であるプレシアさんはジュエルシードをたくさん求めていて、纏まった数を持つてこいと主張しているようだ。

全部、もしくは八割くらい集まったら融通するつて言つておこう。

頭上にいたユウくんがテンパつたが、ほんとに渡すわけではない。

そもそも、俺の日記帳がすでに仔猫のジュエルシードも取り込んだので、全部集まら

ないんだよなあ。

見た目は鮮やかな装飾の付いた日記に変化したし。

途中で持つていきたいと言ったら、付いて行って柔軟な思考で臨機応変に対応するのを感じただわ。

だって話の全貌が見えてこないし。

当面は一緒に行動するが、プレシアさんとこへの転移禁止、通信禁止とかそんな感じか。

フェイトちゃんに提案したが、頑固なのか最初は遠慮された。

なので全員でどれほどフェイトちゃんと一緒にいたい主張した。

押しに弱そうなので、弱みを見せたら叩きまくった結果、デバイスまで渡そうとしてきた。

そのうちちゃんと教えないと、この娘は駄目になると確信した。

4月26日

アリサちゃんが来た。

お土産くれた。

いつもの愛らしいツンデレではなく、棘を感じる。
苛立っているようだ。

どうもなのはちちゃんと喧嘩したらしい。

魔法について相談したいのに、ちゃんと話を聞いてくれないとか。

話をしてくれるように待つのが大事だと思うが、アリサちゃんは突撃タイプだし。

まあ、ほどほどにねと茶を濁した。

数分後、竜也くんとなのはちちゃんお土産を持ってきてくれた。

温泉に行つてたらしい。

俺も今度友達や家族と行きたいなああ的な感じで話していると、なのはちちゃんが暗い顔になった。

アリサちゃんと喧嘩したらしい。

さつき聞いたような話題である。

ちゃんと仲直りしたほうがいいと思うけどなあ。

なかなか難しいらしい。

魔法について秘密なので、相談するのが難しいとか。

アリサちゃんは魔法について知っていると伝えると、ひどく驚いていた。

そのまま走ってどっか行った。

あーうん、まあ、ねえ。

一人残された竜也くんも誘ってゲームやった。

バンジョーとカズーイ2のおまけの、ゴールデンアイみたいなFPSだ。
結構おもしろい。

4月27日

あ、よく考えたらすずかちゃんだけハブられてんじやん。

バラしに……俺が言ってもしょうがないか。

なのはちゃんに電話しとこう。

ユーノくんが魔法の秘匿がどうこう言ってた。

ああ、なるほど、ハリーポッター的な設定があるのか……。

まあ、でも、被害出てるし、ジュレイモンが暴れたし、無視できるレベルだろ。

そもそも管理局という組織が来るって話だが、いつ来るんですかね……。

もう半分は回収してるんだけど。

来なかつたら来なかつたで、こっちはいいんだけど。

一般人が頑張ってたという話で面子とか潰れたりしないだろうか。シヨバ代払えよこの野郎！とか言われないうか。

無いか。

どんなヤクザ組織だよ、それ。

4月28日

俺は今、誘拐されています。

なぜこんなことになってしまったのか、おそらく誘拐犯たちも想定外だったのだろう。

キョドツてる。

あとテンパってる。

アリサちゃんに送ってもらって、車から降りたら俺を拉致だからなあ。

タツパとか、ダンチじゃん。

そもそも俺、男じゃん。

何やってんすかね。

あと銃を向けるのはやめろお！

日記帳を片手に、俺は賭けに出た。

誘拐犯が自分に発砲する前に、見知らぬ愛らしい女の子で人生のヒロインが「助けに来たよ、光陰くん♪」って、入り口から救援に来てくれることに、生死を賭したのだ。実際に助けに来てくれたのは恭也さんだったけど。

こんなの絶対おかしいよ！

いや、嬉しいんです。

嬉しいけど、やっぱりこんなの絶対おかしいよ！

救出後、道場に通うことが内定した。

体捌きがゴミ過ぎて、可哀そうとかそんなんだろうか。

悲しい。

しかも才能ないとか言われて凹む。

なんでこうなるのか……。

4月29日

高町ツインズの兄妹の二人とランニングしています。

しかも早朝から。

空気が爽やかだね、みたいなことを眼鏡が言ってますが、全然興味ないです。というかつラくてゲロ吐きそう。

誘拐された翌日から謎のハードワーク。

高町家の闇は深い……。

その後は竹刀をもるんもるんと振る。

俺は普通の型を行える程度の才能を持っているらしい。

え、普通はみんな持つてるんじゃないやねと思うじゃん。

そうです。

普通はその先もあるはずが、俺は型を行える程度にしか届かないのです。

意味不明。

横では恭也さんと美由希さんが小太刀二本でチャンバラってる。

残像とか出しそうな速さなんだけど、気のせいだよね。

俺の知ってる剣道（メエエン！コテエエ！チャアハアン！オオモリイイ！みたいな掛け声のやつ）とは違う……。

あまりにも才能がないので、躍起になったのか、棒手裏剣みたいなやつやワイヤーを

渡してきた。

高町家では、これも使うらしい。

俺の知ってる剣道ではないし、剣術でもない。

剣とは一体……。

5分くらいで不慣れながらも扱えるようになった。

それを見た高町家が引いてた。

やれって言ったのはあんたらじゃんかよお!!

5月1日

朝から走るじゃん？

ゲロ吐きそうになるじゃん？

情けない型を披露するじゃん？

棒手裏剣を空中で落とし合うじゃん？

ワイヤーで翠屋で使う果物の皮むきとかするじゃん？

管理局が現れるじゃん？

「人人人人人人人」

「結果、次元震発生！へ

？YYYYYYYYYY？

5月2日

ランニングからの早朝トレーニングを終えたので、昨日の顛末を纏めてみよう。

といってもそんなに大きな問題が起きたわけではない。

単に、街中で見つけたジュエルシールドが暴走して謎の力場が発生していたので、力場を砕こうと砲撃したら、管理局の人が転移してきた。

で、管理局の人がジュエルシールド近くで杖を掲げてシールドつばいのを展開していたので、砲撃とサンドイッチ。

結果がジュエルシールドによる次元震である。

管理局の執務官という役職の人で、名前はクロノさん。

今は満身創痍というか、なんというか。

どうも怪しい本を片手にジュエルシードを刺激して犯罪を起こそうとしているようにしか見えなかったとかなんとかか。

……。

……互いに運が悪かった（確信）

今日は今後のスタンスを詰めようということになった。

といつても「民間人が集めるのは危ないから我々がやりまあす！」「任せた！」で終了。いやあ、肩の荷が下りたわ。

ジュエルシードが21個あって、回収済みが10個、日記に1個と伝えた。

ロストログアであるジュエルシードと赤裸々日記帳は管理局によって調査され、管理されるだろうとか。

管理局の人たちはアースラという母艦に乗っているのだが、日記様は解析不能なので、本局に輸送するとか。

なん……だと……？

まあ、わかってたけど。

とりあえず日記様との別れだ。

サンキューニツキ

とりあえずフェイトちゃんも集めたいとか言い出した。
ああ、お母さんとの約束か。

仕事の邪魔にならない程度なら探してもいいけど、暴走体との交戦や封印以外に魔法を使わないようにと伝えた。

魔法がない文明だからね（遠い目）

ちよつとグズったが、最終的に俺の粘り勝ちだった。

というか、フェイトちゃん以外はジュエルシードを集める気がないので圧勝だった。
4対1だし。

5月3日

朝起きたら日記様が机の上にあつた。

呪いかなにかか^q。

管理局の人たちに連絡をとる。

紛失に慌ててた。

ジュエルシードの件もあるので、盗まれたのかと焦っていたっぽい。

すまん。

とりあえず、日記様は俺との距離が離れたら勝手に転移するらしい。すげえぜ。

お利口過ぎだわ。

安定しているから所持していいって話になった。

定期的に検査する必要があるけど。

アースラに滞在という話もあったが、魔法文明のない民間人を乗せておくのもどうなのってことで、無しに。

まあ、日記様は魔法の塊でユウくんもリニスもじゃんじゃか使ってるけどね。

あとユーノくんが人間になった。

いや、戻ったというか。

魔力消費を抑えるためにフェレットになってたとか。

なるほどなー。

魔法ってホントに意味わからんが、ハリーポッターとは違うっぽい。

未知のエネルギーを高度な数学によって演算して用いられている新しい物理、が一番近い表現かもしれない。

俺らの生活にも随所に高等数学が利用されているから、発展していけばそれが魔法に

なるのだろう。

ただ、人間がフェレットになるとか未知すぎ。

失敗して戻れなくなったら怖くね？

たぶん、ザ・フライみたいな映画とか小説があるんだろうなあ。

そういえば、日記様が5個取り込んでいるのを伝え忘れてた。

片手間だったしなあ。

まあ、いいか。

ああ、でも暴走したらヤバいよなあ。

ふむ……。

5月9日

連休とか、高町さんちのハードトレイニングとか、管理局とか、色々ツラかったわ。筋肉痛も半端ないし、魔力チャージで体も怠い。

日記様に搭載されている3個の宝石が変形して、表紙を赤と青の鮮やかな装飾で彩っている。

まあ、なんだ。

めつちや眠い〜q〜

5月11日

久しぶりにフェイトちゃんがお母さん、つまりプレシアさんに会いたいと言ってきた。
た。

管理局が来てからは回収できていないけど、進捗も伝えたいらしい。

あとジュエルシードもいくつか渡したいとか。

なるほどなー。

ジュエルシードは管理局の人たちが管理しているけど、まあ、いいか。

無くても大丈夫かな。

ああ、必要もないから大丈夫か。

時の庭園に転移した。

プレシアさんが今住んでる場所だ。

ユウくんもリニスもフェイトちゃんもアルフも、ここから来たのだ。

なるほどな。

空間が不安定にあっており、虚数空間が顔を見せているところもあった。

何かあったのだろうか。皆で急ぐ。

虚数空間の影響か、内部を守っていたり、管理していた傀儡兵とやらが欠けていたり、穴に落ちてたりした。

ちよつと廃墟っぽいかなと内心で思った。

調査に向かっていたりニスに戻ってきた。

内部のエネルギーが切れているのを訝しんだためだ。

どうやら動力炉が消えていたらしい。

何か大変なことが起きているとみんなで急ぐ。

俺は飛べないので、日記様に乗って、魔力を吹かす。

次元震が発生して、廊下の物を吹っ飛ばしてしまった。

フェイトちゃん、激おこ。

ご、ごめんなさい。

プレシアさんの研究室に辿り着く。

そこには口から血を垂れ流して倒れているプレシアさんの姿があった。

手元にはユウくとフェイトちゃんの写真が一枚ずつ握られていた。

内部は荒れ果てており、エネルギーが空になった4番と13番のジュエルシードが転がっていた。

何らかの実験を行ったのだろうか。

プレシアさんを快方していたリニスが、首を横に振った。

そうか……。

取り乱したフェイトちゃんをなんとか宥めて管理局を呼んだ。

艦長であるリンデイさんが悪いようにはしないと断っていたし、クロノさんも怪我が治って捜査を手伝うから心配とのこと。

安心だな。

5月15日

フェイトちゃんが落ち込んでいるが、話せない状態ではない。

ユウくんも少しツラそうだが、大丈夫だろう。

アースラで、状況検分からの報告を聞く。

といっても大した話では無く、プレシアさんがひどい病気を抱えたまま無理して、亡くなってしまったという話だった。

あとは無くなった娘のクローンを作って、ユウくとフェイトちゃんが生み出されたことも。

なかなか難しいな……。

プレシアさんの手元には二人の写真があった。

そして重い病気。

謎は全て解けた！

プレシアさんは重い病気を患っていたが、ユウくんに心配かけないようにと時の庭園の外に行かせたのだらう、面倒を見るリニスもいるので間違いない。

地球に来たのは手違いで送ってしまったとか、そんなん。

フェイトちゃんにも気を使わせないようにジュエルシード集めをさせていたのだらう。

で、ジュエルシードは動力炉のエネルギー源とかそんな感じのやつじゃね。

独自に集めていたプレシアさんだったが不注意で暴走させ、抑えていたら亡くなった。

だが、きっとプレシアさんはフェイトちゃんとユウくんを愛していたに違いない。なぜなら死の間際まで写真を握っていたのだから……。

完璧な推理だ。

時系列がおかしかった矛盾が生じてたりするが、どうでもいい些末なことだ。だってフェイトちゃんとユウくんが納得すればいいんだし。

リニスが矛盾に気付いたのかジト目で見た。

が、フェイトちゃんの心が少しだけ晴れた姿を見せられたら何も言えなくなっていた。

ユウくんは信じてはいないだろうが、ありがとうと言ってくれたので問題なし。それでいいんだ。

継ることのできる幸福こそが事実で、心の淀みになる不幸は夢ですらなくとも。

愛されていたというのが嘘でも、今はそれが真実だ。

5月21日

時の庭園が虚数空間に飲まれて消え去ったと伝えられた。

管理局の追加応援が来て、詳しく調べるはずだったが、不可能になったとも。

運び出した研究資料や魔法関連の物品、遺体しか運び出せなかったという話も聞かされた。

あとでこっそりとジュエルシードの輸送船を襲ったのが、プレシアさんの可能性もあつたがわからなくなってしまったとも。

なんともすつきりしない話だ。

プレシアさんが行っていたら、フェイトちゃんにも累を及ぼしていただろうが、証拠が無くなり、そういう話は消失したらしい。

誰もが死人には優しいのだ。

犯人が不明で迷宮入りだと、管理局的には良くないんじゃないかと思つたが、ジュエルシードの暴走によって起きた事故として処理するっぽい。

みんなが被害者、そういうことだろう。

ただ、フェイトちゃんが疑われる可能性も有るので囑託魔導師を進められた。

やる気らしい。

ついでになのはちゃんと竜也くんもなるとか。

小学生組が囑託魔導師になると聞くとホツとしていた。

ユウくんはやらないと断っていたが。

あとは俺の日記を本局で検証する必要があると言われが、学校があるしなあ。

長期休みに行くでしょう。

最後に管理局側の話だが、ジュエルシードを集めきれないので囑託魔導師に任せるとか。

大丈夫か、それ。

管理局でも豪勢な戦力だから大丈夫つしよみたいな感じだった。

お、おう……。

大凡の問題が解決したので、数日後にアースラは撤収するとか。

忙しいけど、定期的に地球に来てくれると言うので安心だ。

夏休みに本局に行くことが決定したが。

とりあえず、一件落着ですね（ぶん投げ

5月5日

この日記が便利なところは編集も簡単にできることか。
 unnecessary部分は削除できるし、好きな位置に移動もできる。

連休だというのに面倒なことをやっているなあと思ったり。

ただ、プレシアさんもしかしたら凄い魔法使いなのかもしれないが、日記様の防御は破れないわけで。

口から血を流して倒れたプレシアさんを横切って、オリジナルの元へ。

眠っているように見えるが、死んでいるのだ。

ジュエルシードで何をしたいのかは興味ないが、取り戻せないからこそその死だ。

4番と13番のジュエルシードを日記から取り出す。

六文銭より価値があると思う。

両方とも励起状態になっているから、抑えないとオリジナルが壊れてしまうんじゃないかな。
いかな。

病身を押して頑張ってくれ。

駄賃代わりに、赤い宝石のような動力炉を貰っていく。

転移にエネルギーを使うし。

あとは次元の藻屑として沈んでくれないかなあとという期待を込めて。

戻ると事切れたプレシアさんの姿があった。

愛つてすごい、俺はそう思つて手に写真を握らせた。

オリジナルが眠るゆりかごの姿は失せ、虚数空間と呼ばれる穴がわずかに空いていた。
た。

死人を追い続けて形振り構わなくなっていた。

いきながら亡者と化していた。

前を向く生者の足を引っ張っていいはずがない。

そうだろうと俺は呟いた。

後ろにいたりニスは無言だった。

虚飾に塗れた美しい嘘を真実に、醜い事実は葬つて。

歪に整えられていようとも、それが真実だ。

6月4日

頭を一定の感覚で優しく撫で、フェイトちゃんを寝かすつける。

愛する母親を亡くした悲しみが癒えるのはもっと先の事になるだろう。

心の柔らかい部分を預けていた信愛の相手を失ったときに訪れる喪失感、言葉に出来ないほどだ。

俺にもそんな思いが……いや、無いな。

あつたような気がしたのだけれど、幸運なことに俺は何も失ったことがない。

気持ちにはわからないけれど、だからこそフェイトちゃんには過剰なほどの優しさを籠めて接する。

寝息を立て始めたフェイトちゃんをアルフに任せる、眠りについても魘されることは少なくなつた。

魘されていたときは隣で寝ていたが、今フェイトちゃんと寝ているのはアルフだけだ。

ずっと一緒には依存される形になるだろう、それは駄目だ。

気持ちの整理し、前に進むためには一人で耐えることも必要なんだ。

ついでに、俺の布団にもぐり込んでいたユウくんをリニスに任せる。

難しいけれど、二人とも同じ扱いにしなければならぬ。

時々ならいい。

だが、ずっとではいけない。

部屋で日記帳をめくる。

管理局の方々が畴にしていたアースラが帰還したのは先週のことだ。

ジュエルシードの事件について、調べられる事柄は全て調べきつたし、囑託魔導師として現地に協力を結んで仕事は十分だと帰っていった。

ただ、ちよくちよく様子見に来てくれるそうなので、問題が起きたとしても瞬殺だろう。

そもそも、魔法文明の全くない世界で事件などそう起こるはずもないと笑っていたのだけれど。

ジュエルシードの問題も奇跡のようなものだとも言っていた。

ああ、まあ、確かに奇跡だな。

その奇跡の一部には、小学生の知り合いが増えまくったというロリコンロードが含まれているのだけれど。

日を跨ぐ、その瞬間に日記の装飾が淡く輝いた気がした。

いや、気のせいかな。

6月14日

今日も朝から木刀で型をもるんもるん。

一向に上手くなっていく気がしないのだけれど、そういうものらしいので諦めた。頑張り続けければ護身程度にはなるだろうとか、そんな感じの評価が下されている。努力する気が失せたんですがそれは。

素手の相手を倒せるくらいにはなれるからと言われた。励ましにも、慰めにもなっていないです。

棒手裏剣とワイヤーは変態的な才能があると評価された。

天才的とか、芸術的とか、そんな感じに恭也さんは評せないのだろうか。

ぶつちやけ、手元に針と糸があれば問題ないと思うが、まあ、体を鍛える意味もあるんじゃないかな。

あとは蹴り技に最近は手ごたえを感じる。

地面とか壁を蹴ることによって空間を三次元で扱えるし。

糸、針、蹴り有りならボコられるけど、恭也さんと一応は模擬仕合が出来るといっね。……俺に剣なんて不要なんじゃ。

木刀を手で使うのを諦めて、ワイヤーに絡ませて使う戦法を編み出した。なかなか悪くないけど、もうなんか違うよね。

6月22日

管理局、降臨。

仰々しく描写したが、特に意味はない。

ジュエルシードはどう？ みたいなことを聞かれた。

忘れてた、q、

管理局への上納+管理局による封印+プレシアさんの遺品+日記帳で20個なんだよね。

あとはプレシアさんの自爆によって暴走した動力炉の1個で、それは管理局も把握している。

あと1個足りないのって、俺が伝達を忘れていたからだし。

それを伝えると、ちよつと頭を抱えていた。

わけがわからない物が更にわけがわからない物になったということだから、そりゃ頭も抱えるわ。

そもそもどんな効果があるかわかってないんだから、気にしてもしょうがないと思

う。

街が吹き飛んだら俺も気にするわ。

気にしてもどうすることも出来ないけど。

最悪、地球から離れて一人で自爆することになるかもしれないが。

絶対やりたくねえけど。

苦労かけてすみませんねと謝って、本題へ。

俺の日記帳の分析がアースラで出来そうという話だ。

専門家を呼んでくれたらしい。

呼んだというか、研究チームが失態を犯して尻尾切りされて盪回しの末に、艦長の世話になってる提督によって寄越されたとか、そんな感じっぽい。

チーム名は『TEAM R-TYPE』という胡散臭い研究チームとのことだ。

どんな失態を犯したのか聞くと、アースラの艦長であるリンディさんとしては身内の恥であまり言いたくないらしいが、掻い摘んで話してくれた。

ちなみに他言無用、当然である。

あらゆる障害を手軽に排除するための兵器、オーバードウエポン（OW）を紛失したとか。

それこそ何でも壊せるらしい。

エネルギーさえあれば次元を砕いて次元震を連発も出来る。

クリーンな技術による次元世界の平和維持を謳っている管理局が兵器とか、なんて言えばいいのか。

あと次元航行用のエネルギー駆動炉も。

OWを起動するために必要となる膨大な魔力を代替する装置っぽい。

駆動炉が不具合を起こせばプレシアさんの自爆を大きくした現象が起きる確率が高く、生成される魔力も欠陥が多くてリンカーコアを痛める毒素のようなものになるのか。

コンボが決まってしまいましたなあ。

え？って三回くらい聞き直してしまった。

まあ、最初の一回でわかっていたが、リンデイさんの苦々しい顔を愉しむためだ。

もうね、リンデイさん可愛すぎでしょ。

研究チーム的には記録に残ってないから作ってない、だから元から存在していなかったと主張したけど、結局は尻尾切りするハメになった。

で、ここに辿り着いた、と。

日記様に変なことされないよね……？

7月7日

朝、高町さんちで現代にそぐわない謎の修練。

昼、学校。

放課後、アースラで日記分析。

いそがしすぎい！

それでもユウくとフェイトちゃんの相手ができないという事態に陥らないように、暇そうなら一緒に連れてきているんだけど。

フェイトちゃんも小学校に通うようになったので、友達と遊ぶとき以外は付いてきてくれる。

ユウくんは皆勤賞である、むしろ友達と遊びなさいと言いたいくらいだ。

日記様が無い俺は、肉と卵が無い親子丼と評された。

汁だく玉ねぎという、玉ねぎ愛好家垂涎の代物となってしまうた。

俺という存在はやはりマニアック……？

アースラの施設はかなり充実しており、魔法による模擬戦も可能ということで、高町

さんちの双子がバーサーカーよろしくガチっている。

なのはちやんが防御重視の砲撃タイプ、竜也くんが速度重視の近接タイプだ。

日記様なしで模擬戦したら死ぬかと思った。

走るよりも早く、魔法の光弾が炸裂するし、誘導までできるとか。

やっぱ魔法って理不尽だわ。

ちなみに、日記様がフィルターの役割をしているのを忘れてて、死に掛けてリニスにお説教された。

今はアルフと組手だけやっている。

手は暗器を使うときだけで、あとは蹴り技を主体とするのが完成度が高くてかなり良い。

剣なんて時代の遺物っしょ。

なんでも有りなら石などの投擲物を利用すると俺の力がかなり発揮できる。

真っ向勝負なんて知らん。

七タだというので、高町さんちに短冊を飾りに行った。

小学生くらいの子供が多いのでフザケタことは書けない常識フィルターが発動。

諦めて「みんなが元気で仲良く」とか書いておいた。

模範となる行動をとらなければいけないツラさがそこにはあった。

7月20日

夏休みに突入、ふうーはははあー！

ちなみに恭也さんは「ほう、修練が捗るな……」とにつこりしていた。

え？

え……？

アースラも帰還している。

分析した結果、日記様はジュエルシードとしての性質を幾らか持つており、内包する魔力によって色々と進展するとか。

ただ、日記として固定してあるので難しい願いは叶えられず、従来の純魔力砲撃、防御が精々かもと。

俺の吸引力と謎の赤い宝石によって攻撃と防御について不安はないとお墨付きを貰えたけど。

赤い宝石は何処から来たのかで議論になったが、俺の欠陥リンカーコアの代わりとし

てジュエルシードが生み出したのではないかという推論で決着。

流石に違法動力炉とは誰も思わないか。

最後に俺が全力で願えば、何らかの力を行使できるが、歪んだ形になるだろうと締めくくられた。

そんなこと言われても、特に願いなんで無いんだよなあ……。

猫はリニスがいるし、犬はアルフがいるので問題なし。

ついでに言えば、ユウちゃんとフェイトちゃんも小動物っぽいので満足だし、なのはちゃんと竜也くんも可愛いのでさらに満足である。

時々アースラと一緒に遊びに来てくれるユーノくんもいるので、フェレット成分も満たされているし。

エリマキトカゲとかフクロウくらいか……。

日記帳を片手に考えているとペットシヨップを見かけた。

さまざまな種類の動物たちが俺を迎えてくれた。

満たされてしまった……。

ぐぬぬ。

うーんと、うーんと。

強いて言えば、シュークリームが食べたい？

願い事が決まっちゃった……。

ウサギも可愛いなあと撫でまくりながら、内心で敗北を知りたいと連呼。動物に癒されにきた小学生グループと出会った。

みんなとシュークリーム食べた。

願いごと、無くなっちゃった。

勝利が知りたい……。

8月3日

月村さんちのノエルさんとすずかちゃん、バニングスさんちの鮫島さんを誘ってゲートボールへ。

家族は家に置いてきた。

なぜなら、半端な覚悟で戦い抜けるほど生半可な試合ではないだろうから。

ヴィータのステイックと俺のステイックが交差し、淡い火花を散らした。剣の才は低かるうが、この程度は出来るのだ。

その隙に、ボールが宙へと放られた。

ヴィータと鏢迫り合いを繰り返していたステイックを手放し、蹴りを放つ。

幼女のクセに、鮮やかにいなされたが狙いはステイックだ。

“ グラーファイゼン ” などというイケメンな名前を与えているメカメカしいステイックを、いなされて尚勢いづいた回し蹴りを喰らわせる。

ヴィータの手から離れたステイックがボールを襲う、かに見せて、ノエルさんの口ケツトパンチステイックによって阻まれた。

仕切り直しだとステイックを構え直そうとして、鮫島さんの分身組みつかれ、爆撃特攻を喰らった。

ステイックで防御しなければ即死だった。

舌打ちを一つ、乱戦に突入。

すずかちゃんの鋭く、重い攻撃を凌ぎ、蹴りで応戦。

が、ノエルさんのロケツトパンチで阻まれた。

腕を伸ばしているはずなのに、なんて硬さだ。

俺と月村家の争いに乗じてノエルさんが獲得したボールを奪いに、分身した鮫島さん

と空飛ぶヴィータが追撃をかけていた。

すげえなヴィータ、空飛ぶとか人間かよ。

ヴィータによるボールの増量、後のフェイク爆発するというチートまがいのコンボに攪乱されまくった俺は、思うように得点を伸ばせなかった。

最終的な勝利者は、背中からロケットブースターを生やして空中戦と音速戦を可能としたノエルさんだった。

ノエルさんを只者ではないと思っていたが、どうしてなかなか凄い人である。

8月4日

月村家でノエルさんが人間でないと知らされた。

何故か恭也さんがいて、殺気を当ててくるという事件も発生。

俺、何も悪くないよね。

とりあえず、他言無用とすずかちゃんとは仲良くという話になった。

そりやあ仲良くしますよ、少ない友達だし。
猫天国だし。

メイドさんいるし。

ノエルさんをゲートボールでいつか倒さなければいけないし。
すずかちゃんも可愛いし。

へらへらしてたらロケットパンチが飛んできた。

あんだ、それでも人間かよお！

あ、人間じゃなかったわ。

なら許しますよ！

メイドじゃなかったら怒ってましたけどね！

原作：とある魔術の禁書目録、とある科学の超電磁砲 とある科学 1

擦れた記憶をこじ開ければ、少しだけ両親の面影を思い出す。

水面に映るぼやけた輪郭、夏場に揺らぐ蜃気楼。

そんな思い出の残照程度。

それが全てだった。

優しかったか厳しかったか、人間を形成するような要素は一切憶えていない。

ただ、強く手を引かれたことだけは憶えている。

引かれた手が離れ、加護を失った自分の行き先は学園都市、記憶の扉をこじ開ける必要がないほどに真新しいモノが今尚重なり続けている場所だった。

学園都市は人口の多くが学生で占められている奇妙な都市だ。

アメリカと合同で研究を行っていたという『超能力』の開発が盛んで、外部よりも数十年は進んでいる科学技術が魅力らしい。

両親がそれらに惹かれて自分をこの都市に連れてきた、そう考えていた時期もあつ

た。

そして月日を、年月を重ねるごとに、自分はただ本当に手離されただけなのだと思付いた。

学園都市、その中の施設で過ごすようになってから、ひたすら何かに耐える日々が続いた。

どうしようもなく腹の空く日もあれば、傷が我慢できないほどに痛む日も、嘔吐が止まらない日もあった。

それでも生きていられたのは同じ境遇の仲間たちがいたからだろう。

年上、年下、同じ年、いずれも異なる境遇だった。

中にはやつと両の足でいくらか立てるようになった子や目が空いて間もない赤子がいた。

家族だと支え合って生きていた。

薬品に囲まれた日々が、幸せなモノだと信じて。

それでももしなければ生きるには難しいのだと漠然と理解していた。

仲間が、子供が増えるにしたがって、自分たちを眺める大人の数が比例するように増えていった。

大人が口を開くのは、白衣を纏った同様の相手か、質問のときだけだった。血を撒き散らして苦しいのだと訴えても、無機質な瞳で手元の紙へとペンを走らせるだけだった。

白衣の大人が増え、子供が増え、共に過ごしていた仲間が減っていった。疑問に思つて大人に問うてみても何も答えなければかりだった。

中には返事をする者もいたが、笑みを浮かべながら遠い場所へいったのだとか、紙に書かれた小難しい数字の検証に役立っているとか、わけのわからない答えばかりだった。

日に1度の食事が2度ある日があった。

空腹で呻いていた者もいた、誰もが喜んでいた。

そして、そんな自分たちを無機質な瞳で眺める白衣を着た大人たち。

喜んで食べたそれに味は無かった。

それでも飢えを癒すことができると食べた。

自分を含めた年長の中には、空腹で弱っている子供に自らの分を与える者もいた。

そして、後悔することになる。

食後に大人が集まってきた。

普段よりもずっと多い。

ガラス越しに何時ものように紙とにらみ合うだけの彼らは、その日だけは笑みを浮かべて自分たちを眺めていた。

そして、室内が赤に染められた。

染めたのは自分たちだった。

困惑と苦痛が緋い交ぜになりながら、口から鼻から、ひたすら赤い液体を吐き出した。無理矢理飲まされた赤い錠剤よりも、無理矢理刺された赤い液体の詰まった注射器よりも、頭部に貼り付けられて灼熱を生じるシールよりも、突然耳に突き刺された針金が引き抜いた時よりも、ずっとずっと赤い液体だった。

ずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっと……。

自分が吐き、仲の良かった友達だった物が吐き、よく面倒を見ていた弟のような物が吐き、面倒を見てくれた兄のような物が吐き、新しく入ってきた子供が吐き……。

周りにいた者だった物が吐き出したモノと自分のモノが混ざりあつた赤い液体に体を沈めていた。

夥しい量だった。

温い液体から這い出して見渡せば、白目を剥いて口から未だに赤い液が流れている仲間たちが周りにいて、新しく入ってきて居心地の悪そうだった少年少女たちは集まって

いた隅に折り重なっていた。

床は液体で満たされ、壁を赤黒く汚され、それでもガラスは透明で、憎らしいほどに綺麗で、大人の笑いが透けて見えた。

「成功だ」「おめでとう」「やったな」、口々に言いながら大人たちが現れた。

いつもなら汚れるからと自分たちに触れることさえしない、近づくことさえしない彼らは今日だけ赤に塗れても気にしない。

折り重なった仲間を蹴り飛ばして近づいてくる者も平然と乗り越えてくる者もいる。

満たされている赤黒い液体のように、濁った瞳を向けてきた。傷ついた身体が、弱った思考が悲鳴をあげた。

ひどい瞳で自分を見るなど。

これならばいつものように物を、塵を見るような何も映っていない目を向けられたほうがマシだった。

仲間たちの澄んだ瞳が見たいと必死に首を回し、視線を移す。

光のない濁った、大人よりも濁った瞳ばかりが見えた。

大人に無理矢理異臭のする液体を飲まされた友人が次の日には起きてこなかったと
きを思い出した。

濁った瞳は何も映していなかった、映せていなかった。

助けを求める気が一瞬で失せるほど、汚い瞳。死んでいた。

意識があるのは自分だけだった。

動けたのは自分だけだった。

生きているのは自分だけだった。

みんなみんな死んでいた。

赤い液体に染められた日から待遇は、目を見張るほどによくなった。

毎日湯気の出ているような温かい食べ物で舌を火傷することもあるが、飢えに苦しむ思いなどせず、腹が満たされるようになった。

温かく柔らかい布団が与えられ、毛布の数が少なくて震えるために仲間と寄り添う必要もなくなった。

無理矢理打ち込まれる薬品による痛い思いもしない。

乱雑だった髪も、折れてぼろぼろだった爪も、丁寧に整えられた。

月に一度、よくて二度、勢いよく冷水をかけられるだけだった風呂も、今では温かいシャワーで体を洗って温かい湯を張った浴槽に浸かることができる。

濁った瞳に囲まれる地獄の代わりに、仲間が望んだモノを得た。

仲間の命を糧に、全てを得たかのようだった。

仲間の屍を踏みにじって歩き、嫌悪していた濁った瞳の大人に与えられた物に囲まれ、のうのうと生きていると思うと自分の在り方が気持ち悪くて、夜も眠れなかった。

そして、眠れないことに気付いた大人によつて無理矢理眠らされるようになった。

怒りや憎しみといった感情を抱くと、すぐに眠らされるようになった。

何もかもが与えられたが、精神の自由は取り上げられていた。

周囲には物が満たされ、心には虚無が占めていった。

考える事すら放棄して、与えられる物すべてを享受して生きていた。

大嫌いな濁った瞳に晒されることにも心が動かなくなっていた。

大人たちの言葉に耳を塞ぎ、実験の提案を拒む。

無理矢理流し込まれるようになった流動食も吐き出すようになった。

濁った瞳を見ることが、瞳に見られることも耐えられない。

言葉による甘い言葉や恫喝も、与えられる痛みも、投薬による幻覚も、すべてが空虚にしか感じない。

日に日に弱っていく自分の身体。

都合がいいと思ってしまうのは、仲間を思い出したからか、それとも大人から逃れた

いからか、或いは……。

注射器によつて薬品が流し込まれた。

一日の投薬回数が徐々に増えていつている。

それに比例するように意識や記憶、思考が薄れている様に感じた。

ああ、都合がいい。

勇気のない自分ができる最期の逃避だから。

そう思うと思考が溶け、白んでいく視界がとても甘美な物に思えた。

目覚めると俺は機械に囲まれた部屋で横になっていた。

普通に部屋で寝たはずなのに起きたら見知らぬ場所とか怖い。

心境はなぜなに why である。

金属の机の上に眠っていたのかなんだかひんやりとしていた。

あまりの驚きに何度も目をぱちくりしつつ、少しして持ち直したので、上半身を起
す。

そして、情報を集めるために周りを見渡す。

部屋の内部には超凄そうで超高そうな機械ばかりで全く見覚えが無い。

人も結構いるようで、年若い少女から壮年の男まで皆同様に白衣に袖を通しており、誰もが研究者のようだ。

おおうと呟くと声が高いように感じた。

手を見る、小さい。

銀色に反射している機械に顔を映してみると、鏡のように俺の顔が見える。

シヨタになつていた。

前々から精神年齢が低いと思つていたが、やはりそうか。

どうやら身体が精神に引つ張られたようだ。

冗談だ。

とりあえず周りの研究者たちに物腰を柔らかく、かつ少年のような愛らしさで話しかけてみると、戸惑いの表情を浮かべながら答えてくれた。

その結果、この身体は『学習装置（テストメント）』と呼ばれていることがわかった。能力名から付けられている愛称らしい。

能力ってなんだ。

とりあえず、本名はないから当分の間は『学習装置』と呼ばれるらしい。

ムズ痒くなるものがある。

なんだかんだあって、実験は成功したが記憶が喪失している結果で終わった。それから新しく名前が与えられるってことで期待していたら「千川 幾千（ちかわいくせん）」と付けられた。

ぎ、斬新ですよね。

そんな記憶が喪失してDQNな名前の俺だが、待遇は良い。

頗る良い。

個室が提供され、飯の味も良いし、寝床も完璧、部屋は清潔で室温も文句なし、望めば大抵の物なら支給される。

あとバストイレ付き。

不満は研究者ばかりで日常会話に飢えていることカナー☆

とりあえず頼まれた実験とやらを手伝っておけば問題ないらしい。

手伝うのに否はない。

圧倒的に情報が足りないので集められるときに集めようってことだ。

学校も行かずに実験の日々である。

研究者曰く、俺は実験しておけば問題ないとか。

実験は何をしているのかというと、いわゆる超能力を解明しているのかなんとか。

超能力とか凄い世の中だ。

で、俺はなかなか貴重な能力なので協力してほしいってことらしい。

そんなわけで実験に費やす日々が続くわけである。

とりあえず研究について話を聞いた後、テキストに手伝っていく。

よくわからんし。

ちなみに俺の能力は「AIM拡散力場の分析」ができるのだ。

よくわからないって人はググって欲しい。

まあ、他の超能力を超細かく分析するのと能力行使を手伝ったり最適解に導いたりできるとのことだ。

完全に補助型だし、超能力にしか使えないという。

微妙じゃねってのが本音。

実験ばかりだが飽きが来ない。

最近のお気に入りにはAIM拡散力場への干渉実験だ。

AIM拡散力場とは能力者が無意識に周囲へと垂れ流している力、みたいなものだったはず。

束ねて増幅、指定したAIM拡散力場の誘導に成功した。

発展として束ねたら能力が再現できるんじゃないやねってことで試してみたが、絶対量が少なすぎて無理だった。

対象能力者の『自分だけの現実（パーソナルリアリティ）』を再現してみようとしたが、ノイズが入りまくりだった。

そこらに漂っているA I M 拡散力場の系統を併せ、干渉して増幅、『自分だけの現実（パーソナルリアリティ）』を系統別で組み、最適化を行うことで能力の劣化版が仕上がったがノイズ混じりでコレジャナイ感が半端ない。

なんかキモい。

能力者の絶対数が増えるか、能力の強度が高まるか、俺の干渉精度が上がれば自ずと再現度が上がると思うのだけれど。

上記と比べると並列して行っていたA I M 拡散力場から色々な情報を割り出す実験の方が発展があつた。

能力の強度感知、能力者の探索、能力行使の攪乱、能力行使の阻害、などなど。

あとはA I M 拡散力場を憶えていれば、少し離れた強度の低い能力者の能力をいくらか増幅ができるとかそんな程度か。

……あんまり使い道ねえな。

特に何も意識せずに全力で能力を行使するとA I M 拡散力場を集めた元氣玉もどき

が撃てる程度が今の全力だろうか。

見た目が真つ黒な球で、A I M 拡散力場に惹かれるのか能力を取り込む性質があるっぽい。

威力も結構ある。

人体に直撃すれば力場の集合にミキサ―されて死ぬ。

そんな感じで何年か過ごしていたのだが、ぽつぽつと実験が減り始めた。

俺の実験データをもとに同系統の能力者を増やしたからとかなんとか。

実験も俺ならばできるが同系統なら可能な実験には呼ばれなくなった。

暇すぎて超微妙な実験に参加してしまった。

たしかこの学園都市で一番凄い超能力者の演算を植え付けて能力開発どうたら、とかいう実験だったはず。

そこで俺が補助することで演算が最適化されて最強に見える、というわけだ。

うむ、よくわからん！

この実験はどうも世間体がよろしくないようで人が近寄らないような場所でひっそりで行われている。

その影響が知らないが、研究者も頭の螺旋が外れて日常会話ができない。

人間として失格ですな。

俺ですら劣等生ではあったが学生として先生と会話できていたというのに……まあ、宿題やらなかったことをひたすら謝るだけだったが。

この実験で俺が会話できる相手は会話不成立な研究員どもと被検体の子供たちだけなのだ。

会話する相手が餓鬼どもばかりという悲しい現実である。

が、俺は会話に飢えているのだ。

しようがないのでお土産として食い物を持って行ってコミュニケーションを取り続ける保育士状態である。

会話しなければいいじゃないかって思うかもしれないが、閉鎖空間でささくれた俺を癒してくれるのはこいつらしいじゃない。

だから優しくする。

実験、断ろうかと思つたが懐かれてきて満更でもないと思ひ始めた俺は末期かもしれない。

実験してみたが結構いい感じなような、ダメなような。

徐々に植え付けつつ、俺がA I M拡散力場でアシストしているので廃人とかには至っていないが、適性がない人間には難しいようだ。

限界は超えられないから限界、みたいな感じだろう。

人格とか思考が変わるかもしれないので、なんとかそうならないように調整している。

かつてないほど頑張りすぎてヤバイ。

愛着が湧いてきたからしようがないね。

憔悴して廃人一步間近に迫った少女少女を実験から弾いていく。

俺だって可愛がった少女少女を殺すほど残忍な性格はしていないのだ。

研究者は死ぬまでやりたいらしいが俺は嫌だ。

どうしてもとせがまれたので研究者に植え付けてやった。

電子化した演算を植える付ける程度ならちよちよいのちよいだ、補助特化は伊達じゃない。

泡吹いて死んだ。

困ったやつである。

他の研究員が何か言ってきたのでアンコールに答えて三人ほどカニの仲間入りにしてやったら静かになった。

まあ、全部植え付けたから能力の無い人間には負荷が大きかったかもしれないね。

実験開始から……どんくらいだったか。

半年から一年くらいだと思う。

初めは結構な人数がいたのだが、負荷が厳しいので今は数人しか残っていない。

どこまで伸びるかはわからんが、終わるまではゆっくり面倒を見ればいいってことだろう。

他の研究もあんまりしてないので終わると寂しい（本音）

俺自身の実験も何かやろうかな、と呟きながら被験者の少女を眺める。

茶色の髪を揺らしながら能力を行使しているようだ。

テキストにアシストしながら演算の最適化を促していく。

まあ、俺がアシストして強化した状態を答えとして、それに近づけるだけなのだがこれがかかなか難しい。

この少女は実験初期から伸び続けているので能力の適性があったようだ。

昨日よりもほんの僅かに能力向上が見られたので頭を撫でて褒めてやる。

子供は褒めると伸びると聞いたような気がするのでそうしているのだ。

俺の手に頭を押し付けられる様に撫でられている様は犬のようだ。

もう一人の被験者である黒髪少女は全体的な伸びは悪いが攻撃に関しては凄まじい

適性があつた。

攻撃極振りである。

そんな黒髪少女は茶髪の少女と比べて素直な性格はしていない、きつとツンデレというやつだろう。

褒めても頭を撫でて嬉しそうにしない、さらに目つきが悪くなる……と見せかけつつ手が離れそうになると名残惜しそうに頭を押し付けてくる。

この少女はどこか猫のようだった。

情緒不安定なときがあるのが心配だ。

植え付ける精神性に問題があるんじゃないだろうか。

一番凄い能力者の精神が問題ありってどうなんだ……。

犬と猫に似た二人の少女を中心に相手しながら進められていた実験が滞りを見せた。

能力強度が大能力者、つまりレベル4へと至ってから目に見えていた進展が翳りを見せたのだ。

そろそろ限界かと残念に思いながら、茶髪の少女の頭を撫でる。

俺に褒められるから頑張った、そんなことを笑顔で言う少女はどうしてなかなか健気で、澄んだ瞳はとて綺麗だった。

不思議と惹かれるほどに綺麗だった。

少女たちを可愛がる日々（ロリコンライフ）だったが唐突に終わりを告げた。予算が心許ないので俺を切ったらしい。

表ざたに出来ない実験のクセに予算とか……。

テンション下がった、めっちゃ下がった。

長距離間におけるA I M拡散力場の観測実験とかどうでもよくなってきた。

何に使えるんだ、この糞実験。

苛立ち交じりで少女たちとの実験、『暗闇の五月計画』について調べてみたがあまり芳しくない結果が得られた。

実験は問題が生じたために凍結。

有用性はいくらか示したが継続は不明。

実験は強制終了となり、被験者の少年少女たちの行方は不明となっていた。

学園都市の裏側に放り込まれたのだろう。

それがなんとなく不満だった。

忘れようと思うも、頭の片隅で何かが訴えかけてくる。

不快な気持ちが生じわじわと広がり、苛立ちが募る。

何も感じなかった研究者たちの瞳が気持ち悪い。

視界が赤に染まった。

鮮やかでどす黒い血のような赤を幻視した。

気付いたら数えるのも面倒な死体から流れ出た血の河に立っていた。

幻視した赤よりもずっとずっと赤い液体だった。

ずつとずつとずつとずつとずつとずつとずつとずつとずつとずつとずつとずつと……。

各々が来ていた白衣は濁った赤に染まっていた。

うめき声を挙げた何かに視線を向ける。

長くはないだろう。

だから、蹴って潰して破壊した。

汚い瞳を向けられて、腹が立ったから。

屍となった者を蹴って退け、踏み越える。

何処もかしこも屍だらけだ。

意識があるのは自分だけだった。

動けたのは自分だけだった。

生きているのは自分だけだった。
みんなみんな死んでいた。

みんなみんな殺せた。

心を満たしていたのは歓喜だった。

濁った赤が鮮やかに見えるくらい、気分が良かった。

自分がやったのだと笑みが浮かぶ。

死体の山を築いてのうのうと生きている誇らしさといったら、言葉にできないほどだと知った。

——情報公開レベル1——

能力名：学習装置（テストメント）

能力：A I M 拡散力場の分析

レベル：5

序列：最下位固定

研究員を皆殺しにして外に出たが特に行く宛ても、目的もない。

どうしたものかとふらふらと歩きはじめる。

見渡す限り、空へと伸びるビル群ばかり。

あまり知らなかったことだが、俺が住んでいる学園都市は建築面もかなり発達しているようだ。

散歩の途中で見上げた空は、建造物と雲に覆われてほとんど隠れていた。

特に何かしたいわけでもないが、暇なのだ。

血だまりの研究所で次の相手に笑いかけながら実験しようぜ、って提案するのもありつつやありだが今は無し。

折角の自由だから好きなようにやってみようかな、と。

金と拠点がないという欠点はあるけども。

何をしようか……そうだ、『暗闇の五月計画』の教え子を探しに行こう。

学園都市の闇に葬られかけた幼き少年少女を救う俺。

正義っばい。

いや、間違いなく正義だろう。

正義なら何をしてでも許されるよね。

目標は決まった。

研究所を片っ端から荒らし回ろうじゃないか。

搜索から三日、前の研究所と提携していた場所を潰し切って飽きてきたところだ。

提携の提携、提携の提携の提携、提携の提携の提携の提携……みたいに繰り返したが、すぐに終わりが見えてしまった。

ニツチな研究だしなあ。

他は食品加工だとか機械技術だとか、そういう普通のものばかりだ。

まあ、当然ですよ。

荒らし回るって宣言したのだから、もう普通の研究所で妥協しようかしらん。

きつと教え子も『窒素装甲』でお菓子とか袋詰めしているかもしれない。

それに、普通の研究所に所属する研究員を一人一人洗っていけば、やましい研究にたどり着けるかもわからんし。

やましい研究って卑猥な響きだよ。

そんなことを考えていたら六枚の白い翼を生やしたメルヘンな男が現れた。宙に浮いているのは翼の力だろう。

見た目はチャラそうな茶髪の少年だが、中身が極悪だ。

俺の能力で観測したが、強度も精度も今まで見た中で一番高い。

流石はレベル5、『未元物質』である。

データでしか知らんが、こいつのA I M拡散力場は面白いな。

複合というか、単一から派生しているというか。

とりあえず定まっていない感じがする。

追跡者としては破格かもしれないが、いきなり過ぎると思う。

もつと弱いのも連れて来いよ。

研究者とともに折り重なって血だまりに沈むへっぽこ共のような奴らを、さ。

A I M拡散力場から演算を逆探知し、ジャミングを流しまくって嫌がらせしつつ、未元物質に視線を合わせる。

そして、口上……を言おうとしたが、思いつかねえ。

学習装置ってなんかかっこいいのないますかね。

「(´▽｀)から先はお勉強時間だアツ！」

……お勉強時間とかどこのガリ勉だ。

「俺の学習装置に常識は通用しねえ」

……非常識とか学習装置として間違っているだろ。

「これが私の学習装置っ！」

……だからどうした。

「お・べ・ん・きよ・う・か・く・て・い・ね」

……教育ママである。

ううむ、センスなさ過ぎてビビる。

もうおまえの演算を見せてみる、とかでいいかな。

迷う。

めっちゃ迷う。

結局思いつかねえし。

「テメエ、『学習装置（テストメント）』だろ」

「この強度と翼は……『未元物質（ダークマター）』か」

垣根帝督（かきねていとく）が空から見下ろしながら『学習装置』の名を持つ少年に声をかける。

それに応えた少年の声音には年老いた老人のような疲れが含まれていた。

他の研究施設で破壊と殺戮を繰り返して、逃亡したのは実験の過酷さが招いた結果だろうか。と垣根帝督は学園都市の暗い背景を思い浮かべる。

それなら目的は研究者への復讐か。

乱雑に切られた頭髪から黒い瞳を覗かせている『学習装置』の様に反旗を翻す能力者を何人も見てきた。

人としての尊厳など無い、実験動物宛らの能力者ばかりだった。

そして、皆同様に元の真つ暗な巢へと放り込んできた。

どうせ逃げたとしても心休まることのない逃亡で心身が疲れ果て、他の追跡者に追い詰められ、以前よりも過酷な環境に葬られる。

ならばここで捕えて元の場所に戻したほうが最悪よりは良い。

どちらにしても悪いが、物を扱うように生きて切り刻まれるよりは動物扱いの方がマシ、そういうことだ。

「大人しく捕まるなら能力は使わないでやる」

「もちろん断るとも。俺には目的があるのでね」

そんな思いから垣根帝督は提案してみせたが、あっさりと断られた。半ば予想していたことだ。

だから手心は加えない。

同情などする気はない。

キリが無いから。

そして、いつかどこかで手が鈍る、そんな可能性が出てくるから。

「オーケー、後悔すんなよ」

投降を促すのは終わりだと、垣根帝督の背に存在する輝くような純白の翼がゆつくりと羽ばたいた。

6枚がそれぞれ異なった動きを示した。

ただのモーションで、そう見せただけのこと。

翼が羽ばたいたからと言って、風が吹くことも、羽根が舞い散ることも、上空に向かうこともない。

垣根帝督は変わらず、一定の位置で宙に浮いている。

その代わりとでも言うかのように、垣根帝督の見下ろしていた周囲一帯が蒼に染まった。

世界に存在しない物質を生み出す、それが垣根帝督の能力『未元物質』だ。生み出された物質は独自の相互作用を持っており、世界の常識とは異なった物理法則が適応される。

より強く、より熱く、より長く、そして簡単に燃える。

そんな程度の認識で生み出した物質によって起こされた結果が青く燃え盛る炎だった。

能力や肉体が弱ければ火傷や熱によって体力を削ることができる、捕縛によく利用する手加減の一つだ。

「これだけか、程度が知れるぞ」

「冗談抜かすなよ。挨拶だ、アイサツ」

その返答を聞いて笑っているのか、青い炎の中で『学習装置』は喉を鳴らした。

言葉通り垣根帝督にとってはお遊びのような、そんな攻撃。

牽制にもなりはしない。

受諾した任務は同格の『学習装置』の捕縛もしくは撃破だ。

同格、つまるところ超能力者（レベル5）と定義されている。

超能力者は学園都市に住む能力者の中で最高位に位置しており、戦力としては単体で軍隊と戦える力を持つ。

むしろ、どんな能力であろうともこの程度で死ぬのならば偽物と断定するところだ。証拠に標的である『学習装置』は健在、全てを飲み込んで猛っていた青い炎はほとんどが消え去っていた。

残っているのは青い炎の熱によって残骸が燃えて灯った小さな赤い炎だけだ。

「ああ、挨拶か」

笑っている『学習装置』の手を指して灯っていた炎が意思を持っているかのように飛んで行き、触れた炎が黒く染まっていく。

炎が集まるにつれて手に灯っている黒い炎が徐々に大きくなっていく。垣根帝督に届くほどに巨大になったそれは影で出来た炎のようだった。

軽く手を振ると黒い炎が投げ出され、縮んでいく。

そして、1メートルほどの大きさの球体を成した。

「なら返すのが常識だろうよ。起きろ」

『学習装置』の言葉に反応したのか、黒い球体が罅割れた。

元が炎だったとは思えない、卵のような振る舞い。

殻を破って中から現れたのは赤子を醜く歪めたようなナニカの姿。

濁った瞳、縫い付けられた口、固まったような無表情、赤子の愛らしさなど皆無だ。

黒い赤子は吊り下げられているかのような猫背で『学習装置』のすぐ傍の宙に留まっ

た。

所々に虫食いの生じた黒い全身、頭部と思われる位置の少し上には歪な輪っかが回転しており、背には朽ちた襤褸のような翼が1対。

赤子というよりも悪魔と表現したほうが正しいと感じられる形状をしていた。

「AIMハンター、レベル1ってところか。よし、行け」

「g q C C C o I K g g q C C C o I K g g q C C C o I K g g q C C C o I K g g q A 〓
!!!」

『学習装置』の声に呼応するように黒い赤子が、小さな悪魔が縫い合わせられていた口を開き、叫ぶ。

世界に満ちる雑音のような、学園都市の裏に潜む悲痛な嘆きのような、音が鳴り響く。垣根帝督には何よりも不快な酷く醜い鳴き声に感じられた。

黒い光の軌跡を尾のように引きながらAIMハンターが移動を開始した。

黒い塊が見た目に反した高速機動で空を飛ぶ。

その様は黒い弾丸のようだった。

旋回やターンを織り交ぜながら、垣根帝督へと迫る。

空を黒の軌跡で切り裂きながら。

「はっ、これだけかよ」

AIMハンターの高速接近にも垣根帝督に焦りは無い。

むしろ嘲る余裕すらある。

迫ってくるのならば対処すればいい、逆にこちらから追う面倒さが省けるくらいだ。

翼が盾のように垣根帝督の身体を覆うが、防御ではない。

『未元物質』で構成された翼は凶器と変わらず、ともすれば構えているだけで最高の矛となる。

盾と矛の特性を持ちながら矛盾しない純白の翼は、黒く濁った弾丸を受け止めた。

「程度が知れるぜ、『学習装置』」

AIMハンターが脆く砕け散り、醜く汚れた泥のようなモノが宙へと飛び散った。こびり付いた汚れを払う様に垣根帝督は翼を広げた。

「まさか。俺には挨拶でも」

『学習装置』が垣根帝督を見上げながら肩を竦め、指である一点を指し示す。

『未元物質』の翼が一枚、黒い沁みのようなものへばり付いていた。

「能力者には必殺だろうよ」

遅々として黒い沁みが広がり、翼の一枚が黒く染まった。

そして、

「ggqCCoIKggqCCoIKggqCCoIKggqCCoIKggqA
!!!」

醜く悍ましいナニカが再び産声を挙げた。

成長としか言い表せない様子の変化だった。

先ほどまでのAIMハンターは短い手足と大きすぎる頭部のために体当たりを繰り返していた。

嬰兒にしか見えなかったAIMハンターは、より人間に近づいた容姿を示していた。

頭部に合わせたのか、手足が幾分か伸びている。

猫背は変わらず、輪っかは頭上で回り、背には少しだけ伸びた檻樓の翼。

人間でいえば幼児くらいだろうか。

縫い付けられていた口は歪んだ笑みを浮かべながら雑音を垂れ流していた。

そして、成長したAIMハンターが翼を挿んで引つ張り、その勢いで引き寄せた垣根帝督を殴り飛ばした。

醜い悪魔が光り輝く翼を持つ天使を引き摺り落とす、そんな光景だった。

強かに廃墟へと投げつけられ、瓦礫を増やした垣根帝督は無傷だったが、背にあった6枚の翼の内2枚が失われていた。

埃を払う様に軽く衣服を叩きゆつくりと外を目指す。

翼は『未元物質』がより強い状態のために出現しているだけで有無などあまり気にならない。

垣根帝督が気になるのはA I Mハンターと呼ばれた醜いナニカが自らの翼を掴み、引つ張ったことだ。

（おそらく、演算のほんの一部を奪ったことによるのだろう。それも能力そのものではなく、力の表層。そうでなければ既に俺の『未元物質』になんらか制限が出て来るはずだ。となれば……）

垣根帝督にA I M拡散力場の知識はほとんどない。

正しい答えを導くことはできないが、それでも概ね正しい方向に推測していた。事前に集めていた情報が繋がってきていたからだ。

情報と言っても機密レベルが高く、得られた物は少なかったのだが。

『学習装置』は学園都市の研究者が生み出した超能力者だ。

A I M拡散力場、つまるところ能力者が持つ力場に対して特化しているらしい。

能力者に依存する反面、能力者への影響も莫大だ。

おそらく、先ほどA I Mハンターが『未元物質』に干渉してきたのだろう。

どうやったのかはわからないが、ああなるように逆算したのかもしれない。

成長もそうだ。

能力を取り込むことでより強固に増大していく、そんなバカげた性質を持っている可能性がある。

そうなるかと単に『未元物質』をエネルギーにしたただけだということだ。

冷静に思考を巡らせる。

無様を晒したが、ただ地面に落とされただけのこと。

怒りも少しは抱いたが、『学習装置』への興味が相殺した。

AIM拡散力場は研究されているが日の目を見ることはほとんどなく、それに関した能力者は更に珍しいというよりも見たことが無い。

どこか珍妙な生物を眺めている気分すら覚えていた。

そして、その能力を対峙することで能力者には必死とは言い得て妙だ、と垣根帝督は思う。

だが、と続けて呟く。

「俺に届かせるには足りねえな」

垣根帝督も『学習装置』も地に足を付けて立っている。

2人に動きはない。

代わりに、自身の能力が猛威を奮っていた。

舞い散る羽根が、黒い軌跡を描いて飛びまわる塊を迎撃する。

音は無い。

ただ、弾かれる白と黒の残骸が互いの間を染めていく。

浸食するかのようになり、一進一退を繰り返しながら。

表面上は静かな戦闘となった。

能力で相手に迫る、単純な行動原理。

しかし、水面下では2人の間に苛烈な争いが起こっていた。

AIM拡散力場から演算を読み解き、逆算することが求められている『学習装置』。

読み解かれた演算よりも複雑で異なった演算を瞬時に用意する必要がある『未元物

質』。

劣っている方が食われる、そんな争いだ。

動きを見せなかった『学習装置』が駆け出し、黒い塊であるAIMハンターが追従した。

演算と逆算を熟す必要がある『学習装置』が拮抗を、もしくは不利を悟ったため、盤面を崩しに行ったのだ。

彼我の距離は50メートル前後、『学習装置』が凄まじい加速を見せた。

異様な脚力だった。

踏み抜いた地面が爆ぜるように舞い上がった。

それを見た垣根帝督は静かに佇み、淡々と羽根を送り出す。

進路に出現した羽根やばら撒かれている『未元物質』をA I Mハンターが盾となり、羽根を貪り喰らう。

互いの距離は5メートルにまで迫ったところで『学習装置』が急停止し、ぴたりとその場に止まった。

そして、追い越すようにA I Mハンターが『未元物質』に貼りついた。

「二度も機会があるわけねえだろうが」

垣根帝督の眩きとともに翼を広げ、A I Mハンターを振り払う。

攻防で理解したことだが、A I Mハンターは『学習装置』よりも遥かに演算能力が劣っている。

つまるところ近づけない様にするだけならば複雑な演算によって組まれた『未元物質』を用いれば対処が容易だ。

容易だが、

「あるんだろうよ、これが」

ほんの僅かな、万が一ほどの隙が生じる。

『学習装置』は残像を見せるほどの速さで垣根帝督の真後ろへと回り込み、言葉とともに拳を振るった。

その一撃は『未元物質』の表面全てを弾く斥力で構成されていた。

踏み込みで砕いた地面と吹っ飛んだ垣根帝督が起こした砂塵が舞う。

追撃とばかりにAIMハンターが後を追い、途中で爆ぜた。

白い羽根が舞っていた。

飛び散った黒いヘッドロが瓦礫を汚した。

「なら、これからは無えぞ。俺がキレちまったからな」

爛々と白く輝く羽根が空を覆った。

逆算されるよりも速くより多く、相手を上回って能力を行使する。

単純な話だ。

そして、『学習装置』を直接狙えばいい。

競い合うような上品な戦いの必要などない。

垣根帝督が導き出した答えは、複雑怪奇に織り交ぜた『未元物質』による飽和攻撃だった。

「あれでキレるとは心が狭い。とはいえ、どうしてなかなか」

降り注ぐ羽根が『学習装置』を避けるように地面へと落ち、消えていく。

それは雪のようであったが、A I M 拡散力場からは悍まじさが読み取れた。

逆算によって羽根を無効化する。

手間ではあるが、必要だった。

溶かさなければ羽根1枚で致死に繋がることは理解できた。

片っ端から絶え間なく降り注ぐ羽根を処理しながら、『学習装置』の胸中にはA I M ハンターが破壊されたことへの未練が残っていた。

構成するには演算の手間がかかり、成長にも相応の時間と餌が必要となるが、能力者相手には使い勝手が特に良かった。

自身の判断で逆算することでA I M 拡散力場を読み解き、取り込む性質は攻防で頼ることができた。

さらに『学習装置』が補助をすることでレベル5を喰い破り、難なく成長できた。

レベル2程度であったため、油断して自律行動に移行させた際に破壊されてしまったことが悔やまれた。

生み出す隙が偶然転がり込んでくることはないだろう。

だとするならば、新しい手駒が必要になる。

「脆弱だが、壁にはなる。贅沢は言ってられないしな」

瓦礫に埋もれていたり、転がっていた死体に黒いヘドロが纏わりついた。A I Mハンターから飛び散った黒いヘドロだ。

そのヘドロが皮膚を裂き、肉を抉り、臓腑を取り込み、他のヘドロと結合していく。それらが全てを取り込み、結合を終えると巨大な微生物のような塊に変貌していた。

「A I D A、程度はA n n a。イマイチだ」

死体に残っていた健常の臓腑を集め、形成された人工能力者。

生きていると勘違いさせて能力を吐き出させるだけの壊れた木偶人形。

『学習装置』の作りだした紛い物の体に宿るナニカ。

A r t i f i c i a l l y i n t e l l i g e n t D a t a A n o m a l y

(人口知性の異質データ)。

それがA I D Aだ。

ふわりとA I D Aが浮かび、宙をゆったりと泳ぐ。

『学習装置』が強制しない限り、自由に動き回る。

元の人間とは異なる意思を持つかのように振る舞うのだ。

いや、実際に意思を持っていると唱えていた研究員がいた。

生きているとも主張していた気がする。

その研究員はすでに血の河に沈んだため、どこまで解明されたか『学習装置』の知る

ところではなかった。

暇だから研究に手伝っていただけ。

ただ、「虚数学区」といった単語だけはしっかりと憶えていた。

『未元物質』がA I D Aの体表を爆ぜさせた。

取りこぼしが出てきたと『学習装置』は舌打ちしつつ、A I D Aが未だに動いていることに安堵した。

能力で束ねただけのA I D Aは脆い。

臓腑の3割が傷つけば能力を吐き出すことが困難となり、複数の脳が1つでも欠ければ存在を維持できなくなり、消え去る程に。

消滅しなかったのは幸運だった。

それでも『学習装置』がA I D Aを作り出した理由は二つ。

薄くとも壁になること、そして補助すれば火力が高くなることだ。

おおよそではあるが『未元物質』を理解してきたことで面倒が積み重なっていくことも理解している。

『学習装置』自身は『未元物質』との相性は悪くない、むしろ学園都市の能力者からしたら良いと言える範疇だ。

勝ち負けにまで持ち込むことができるから。

ただし、それは相手にも言えることだ。

劣っているわけでも無いし、勝っているわけでも無い。

勝機を見出すには何処かで相手を上回る必要がある。

そのための踏み台がA I D Aだ。

羽根が近づくことでA I D Aが迎撃態勢に入った。

攻撃に過剰に反応する個体のようだ、『学習装置』は考えたが、真実は違う。

生きるために敵を排除すると判断したのだ。

攻撃に反応するという防御思考では無い、元凶を排する攻撃思考のA I D Aだった。

そんなことを知らずに『学習装置』はA I D Aに内包されている脳を持つ『自分だけの現実』を改竄していく。

それは奇しくもA I D Aの思考と噛み合った『自分だけの現実』だった。

どうせ死んでいるのだからどれだけ無理をしようとも問題ない、と組まれただけだったが。

問題はかけ離れた能力を使いすぎると負荷に耐え消えれず、長持ちしないことだ。

さらにA I D Aと元となった脳髓の思考が一緒とは限らない。

それも多大な負荷に繋がっている。

だとしても、『学習装置』にはどうでもいいことだった。

換えの効く道具が壊れた程度で心が乱れるほど真面目でも、普通でもない。

「放て、『窒素爆槍（ボンバーランス）」

『学習装置』も演算に加わり、能力を行使する。

AIDAが鈍い青に発光し、その体を震わせた。

窒素で構成された不可視の槍が爆音とともに空へと放たれた。

『学習装置』はそれを見て溜息をひとつ。

AIDA特有の『アルゴル・レーザー』が撃てないことによる不満を表したものだ
た。

第19学区、廃れた学園都市の一角が瓦礫の山へと生まれ変わっていく。

数分前の静かな戦いから打って変わって轟音の鳴り響く戦いへと推移した。

『窒素爆槍』が連続的に放たれる度に生み出される衝撃波が瓦礫を巻き上げ、新たな山を作りだす。

全てが吹き飛んで行くため、AIDAと『学習装置』の周りには何も無くなっていった。所々が欠けたアスファルトと土の地面が広がっているのみだ。

数えるのも億劫なほどの『窒素爆槍』を受けている垣根帝督に傷一つない。

戦車を貫くほどの莫大な圧力による『窒素爆槍』の直撃を翼が防いでいた。仰け反ることも、揺らぐことも無い。

ただ、『窒素爆槍』が翼に触れ、霧散していた。

単なる作業を横目に、ゆっくりと確実に垣根帝督は『学習装置』に近づいて行く。牛歩と表現できるほどに。

反して『学習装置』はそれを見ても動かない。

垣根帝督が10メートルまで接近するとAIDAが震え、形状が変質した。

それは歪な蜘蛛のようであり、その身体中に臓腑が、腹に当たる部分には複数の脳髓が敷き詰められている。

Oswaldと名付けられた形態だった。

翼を1枚、蜘蛛型に変化したAIDAへと振るう。

それだけでAIDAとその後ろにいた『学習装置』を遙か後方へと吹き飛ばした。致命的なダメージを与えたような手応えを感じなかった。

垣根帝督が何らかの方法で防いだのだろうと予想すると、その通りだとしても言うかのようにAIDAが高速で這い寄って来た。

「気持ち悪いな」

それが垣根帝督が抱いた感想であった。

あとは少しばかり面倒だとも。

面倒なだけで、対処が出来ないはずはない。

先ほどの一撃でAIDAの逆算を終えていた。

解析してみれば手に取るようにわかるが、AIMハンターよりも遥かに劣っている構成だった。

生成した『未元物質』がAIDAに触れる。

窒素を高圧で纏うことで攻撃を防いでいたAIDAだが、許容できずに仰け反る。

動きの止まったAIDAへ、追撃とばかりに『未元物質』を当てる。

刹那、風船が割れる様に蜘蛛が破裂し、内臓が汚らしく飛び散る。

それを至近距離で見せられた垣根帝督は苛立ちを覚えた。

——秘匿情報（「垣根帝督」権限）

姓名：千川 幾千（ちかわ いくせん）

性別：男

年齢：未定

名称：学習装置（テストメント）

能力：A I M 拡散力場の多目的応用

強度：超能力

序列：最下位固定

所属：長点上機学園、A I M 拡散力場への五感提供による第五実体獲得実験

研究：ガンツフェルト実験、A I M 拡散力場への五感提供による第五実体獲得実験、ひ

こぼし検体、小児用能力教材開発所、暴走能力の法則解析用誘爆実験、暗闇の五月計画、

e t c

性格：温厚であるが幼児性が垣間見られる。

—以下略—

原作：DEAD SPACE Chapter 1-2-

3-Interlude 1-Chapter 4

— 1 —

25世紀に転生した。

もう超未来。

未来すぎて俺の常識なんて無いも同じ。

俺の知識は古典混じりになりつつあるが、意外と数学とかはまだちよつとだけ使えたりする。

ちよつとだけだから。

強くてニューゲームなんて無かった。

流石未来って感じの要素はいっぱいある。

運動をスローにできるSTASSIS（ステイシス）という技術とか、手で触らなくても物体に干渉できるKINESIS（キネシス）という技術とか、日本人が開発したワーブ技術とか。

マジで今、俺は未来に生きてるぜ。

そんな俺も大学を無事に卒業し、就職が決まったわけで。

就職先は惑星へのアプローチ（採掘やテラフォーミング）時に拠点となる大型のプラネット・クラッカー艦へとルート営業する石村屋である。

外宇宙へと物資を運ぶとか、ロマンあふれる職だ。

まあ、やることは物資を補充して、注文を聞いて、再び補充するだけなので普通の営業と変わらないんだけど。

前世だったらキロメートルスケールだったのが、AU（Astronomical Unit）スケールに変わっただけだ。

道に迷ったらナチュラルに星屑と化して死ぬけど。

宇宙へのロマンを胸に就職した、というのも理由の一割である。

残り九割は就職することで補助として与えられる物にある。

前世だったら社用ガラケーとか社用スマホ、社用iPod的な感じなのだろうか。

いや、値段的には社用車とかに近いかも。

まあ、なんだ。

石村屋に俺が就職した理由、それは自動人形が与えられるからというね。

やっぱり日本人は未来でも未来に生きてるわ。

— 2

惑星の衛星を採掘している大型多目的艦へ営業部署に所属すると、一人につき一台の自動人形が補助として付けて来る。

ちなみにこの部署は人間が苦手だったり、事情があつて独り身だったり、地球から離れたかったり、前世でいう二次元に魂を縛られたりしている連中の巣窟である。

俺？

自動人形目当てで来た。

むしろそれ以外に理由がないんですがそれは。

支給された自動人形は量産タイプの三河自動人形だった。

偉くなると指揮官機が補助つたりするとか。

ちなみに自動人形だが、仕事の進捗によってアップグレードしてくれるとか。

ああ〜心がびよんびよんするんじゃないやあ〜

三河さんとにやんにやんするのが楽しすぎて、気付いたら三年くらい地球に帰ってないわ（白目）

3

仕事の流れとして

補給船から荷物を受け取る↓外宇宙へ旅立つ↓多目的艦に補給および発注を受ける
↓報告書および発注の連絡を地球へ↓指示を受けた惑星とか衛星で補給船から受け取る↓無限ループ

三河さんと発注確認して報告書を書き、あとは次の仕事場までにやんにやんである。
チエスやつたが勝てない、というか一手目で詰む。

将棋ならまだ行ける……と見せかけて人間だと詰む。

前世ですらすらにプロ棋士とやりあえたのだから当然である。

という感じでなんて楽な仕事なのだろうか、と。

ちなみに普通の感性からすると、無表情の自動人形と長期間缶詰で宇宙旅行だから激務的なポジションらしい。

マジかよ、やつぱりドラ○もんやタ○コマのようなロボットが蔓延る世界の価値観は

俺には計り知れない。

ちなみにお米の国は未だにAIAレルギーだし、大陸は太陽炉を杜撰に製造して爆発させて川を鮮やかな緑に輝かせているとか。

そういうえば三か月前の補給時に同期から聞いたのだが、ポ○モンも新作が出ているという驚愕の事実。

最新は四次元バージョンとか。

ヒッグスバージョンのポ○モンが古代種として出るらしい。

わかるわけない。

同期も「ヒッグスなんて古いバージョンのポケ○ンわからないよな、ははは」と笑っていた。

たぶん俺とわからない点が違うのだろう。

赤とか緑の元祖はどこいったのか、非常に気になる。

俺のフシギダネが三葉虫に近い扱いだったら泣く。

あ、追記するとメダ○ットは無かった。

メガテンも無い、天使悪魔神諸々を経験値にしたせいかもしれん。

FFとDQは2000を超えてた、ウィンドウズか何かか。

俺、地球に降り立つ。

実に五年ぶりだ。

人が五十メートル以内にいると違和感が半端ない。

コミュ障になっちまったかもしれん。

三河さんが傍にいないと落ち着かないし。

完全な人形ユーザーです、ありがとうございました。

人形ユーザーは前世でいう2000年より前のオタクと同じ扱いだったりするよう

なしないような。

もう少しマイルドだが、子供が成せないので世間の風当たりはよくない。

まあ、俺は宇宙に旅立つからどうでもいいんだけどね！

久しぶりに本社に帰ったら前任者が孤独で精神を病んだとかで昇進、昇給できるとか。

昇進を受けると更なる外宇宙へと旅立つらしいが、どうでもいいな。

今の生活だと一切金使わないし。

辞退しようかと悩んでいると、どうも自動人形のアップグレードが凄いらしい。

小型端末の三河さんとか極小機械群のグレードが大幅アップとか高級電脳が追加とか重力制御が強化とか、もう色々と凄い。

今なら特機並みの拡張も行ってくれるようだ。

……。

やっぱり宇宙で遠くに行くのは男のロマンだよな！

喜んで昇進した。

——5

昇進によって三河さんが特機並みのアップグレードを受けたが、ついでに特機を与えられた。

三河さんだけでも良かったが、立場に付随した自動人形らしいので有り難く受け取った。

だって俺、自動人形大好きだし。

で、俺に与えられた新しい自動人形は時雨と夕立という少女のような外見だった。

人気の戦艦を擬人化した艦娘というやつらしい。
あれだろうか。

前世で戦国時代の熱狂的なファンや武将ダイスキ、歴女とかそんな感じのポジシヨンの人たちが戦艦ファン。

そこに目を付けて恋姫無双みたいな感じにしちやつた、てへ☆みたいなの？

なるほど、わからん。

時雨は雨が好きらしい。

宇宙に雨は降らないんだ、ごめん。

代わりにデブリの嵐とか衝突した彗星とか、ブラックホールに砕かれた惑星の一部とかで我慢してほしい。

あ、惑星表面の八割以上が水銀で出来た星とかでも代替品にならないだろうか。

あとは惑星の十割が水に覆われていて常に豪雨が起こり、海底ユニットで採掘とかしている星もあるしどうか。

夕立はほいほい言ってる。

食べるときほむっしやああああ！って擬音が聞こえそうだ。

以上。

二人とも犬っぽい。

最近は俺も電腦入れるかなー、と思うようになった。

理由は自動人形の情報伝達に参加できるからだ。

三河さんと時雨、夕立が無言で見つめ合っていると疎外感が半端ないし。なんか通信しているっぽい。

夕立は通信でもっぽいぽいしているのだろうか。

ちなみに自動人形によつて口癖や性格が設定されている。

故障とか不具合じゃない。

技術者がそつちのほうが可愛いと設定したらしい。

やっぱ未来に生きてるわ。

— 6

外宇宙でバイドという宇宙生物が発生したらしい。

MIBとかいう謎の組織の人たちが対処に当たるとかで、なんか巻き込まれた。

事の発端だが、特にない。

仕事を終えたら黒スーツの白人と黒人が緊急事態だからと乗り込んできて、そのまま

宇宙をドライブだった。

途中で学ラン来た少年が異次元の裂け目から現れたりしたが、まあ、うん。

で、バイドというヤバそうな生物にアタックするR-Type戦闘機とやらを後方から補給しつつ、追いかけて敵の本拠地まで突き進んだ的な感じだ。

で、輸送船で神回避しつつ、バイドの中枢まで突っ走ると言う無謀な糞アクションを繰り返した。

自動人形が三体と乗り合わせた超人がいなかったら死んでたに違いない。

中枢に辿り着くと、俺の役目は終わりなので三十分くらいしたら帰っていいとか。帰りは捕まっていたケルベロスに手でエネルギーを込めるから大丈夫とかなんとか。

そして、学ランの少年が船から降りて「破あ!!」と謎のビームを出してバイドを消滅させながら走っていった。

TERAで修行したらしい、TERAってなんだ。

とりあえずあの「破あ!!」と重力制御が無かったら俺の補給艦は沈んでけど。で、その少年の後をMIBの二人組が銃を構えて走っていった。

三十分後、バイド空間が消滅した。

宇宙空間なのに微かに聞こえた「あとは22世紀で戦うだけだ！破あ!!」の勇まじき声。

TERAで修行つてすげえ、俺はそう思った。

バイド空間から解放されたので、随伴したR-Type戦闘機を回収する。どうしてなかなかボロボロだった。

「破あ!!」が無ければ詰んでいた場面もあるほどの激戦だったので仕方ない。

パイロットが出てこないの、こちらから干渉すると衝撃の自身が!!

四肢が無く、頭に無数のコードが突き刺さっている少女がいた。

Oh..

R-Type戦闘機のパイロットに、自動人形用の補修パーツを取り付けてみる。

なんか手足がターンXみたいになったが、問題なし!

パイロットの名前はナナ、頭に角が付いてて不可視の腕を持つてるとか。

.....

なんだかよくわからんが、とにかくよし!

ナナは未来だか過去だか異世界だかからT E R Aで修行した少年と来たらしい。T E R Aで修行した少年とは面識がなく、接触したのは五分くらいだとか。

うーむ、未来に生きてる。

で、ナナには行き場がないらしいので俺の輸送船で生活することに決定した。

あとは面倒なので割愛。

研究所で育てられたから飯のうまさを知らないというテンプレキャラだったが餌付けすることに成功。

さすが三河さんだぜ。

俺も餌付けされてるから気持ちがよくわかる！

まあ、そんな感じで過ごしていたら大口の仕事が入ったとかで帰還命令。

久しぶりに地球に帰る、と思いきや途中で補給を受け、仕事先に向かうといういつもの流れだ。

今回の仕事は俺の職場である石村屋にとってかなり深い思い入れがある場所らしい。ふうん？

補給船も乗り換えとなった。

途中で乗員チェックがあつたが、ナナをウォルシングラムタイプと主張したらあつさり

通った。

人形ユーザーの強みですね（目逸らし）

—— 8

次の仕事先だが、惑星探掘艦「USG イシムラ」となった。
なるほどなー。

—— 9

イシムラへの補給業だが、なぜか他のチームと合同となった。
通信が途絶えたので復旧に向かうらしい。

メンバーはシステムエンジニアのアイザック、コンピューター技師のケンドラ、チーフ警備員のハモンド、そして外宇宙を飛び回る営業マンの俺だ。

完璧な布陣だ。

エンジニア的な二人が頑張って、俺は受注を頑張る、ハモンドも何か頑張る。

やはり完璧だな。

システムの復旧に関しては隙がない。
隙が無いから無敵である。

漂うデブリとかで滅茶苦茶になりながら、イシムラへとダイナミックエントリー成功！

もう色々とかバガババだよ、たまげたなあ～q～

——10

電気とか全然付いてないので、同乗していた三人が復旧に向かった。

俺は「電気が点いてない空間にいられるか！ 自分の船で発注作業をやるぞ！」と告げた後、船で自動人形といちゃこら。

補充する商品とかはすでに用意してあるが、そんなに急ぐ仕事でもない。
ゆつたりゆつたりやるのがこの広大な宇宙で自由に生きるコツである。

ほいほいのほいほいにほいほいしていたらアイザックが帰ってきた。

エイリアンが現れたらしい。

なるほど、よくわかるよ。

こんな宇宙の辺鄙なところで、真つ暗になつてたら気が狂いそうになつてエイリアンになるつてわけだろう。

俺もこの娘たちがいなくなつたらエイリアンまつしぐらさH A H A H Aとジョーク、日本人だつて小粋でウイットに富んだジョークを言えるのさ。

まあ、英語は相変わらず苦手で翻訳機に頼るか自動人形たちに頼る感じだけど。艦娘が流暢な英語をしゃべる違和感よ。

で、俺のジョークにアイザックが激おこ。

恋人がイシムラにいるらしいので、心配でヒステリックになつているのだろう。

まあ、落ち着けよ。

宥めてたら天井から「アアウ！」みたいな叫びとともにから揚げを腕に付けたキモいのが現れた。

まあ、瞬時に艦娘の12.7cm連装砲でミンチと化したけど。

アイザックの見たエイリアンらしいが、違うんだなこれが。

こいつらは巨大なマグロの切り身から湧く寄生虫、というのは石村屋の冗談。

まあ、半分正解みたいな。

巨大なマグロの切り身っぽいモニュメントによつて発生する人間などの生物の突然

変異らしい。

太陽系の影響が及ばない外宇宙でよく現れる敵である。

こいつらが出現したら、消毒するかそのままバックれるかは自由となっている。とりあえず報告を送ったので帰ろうかしらん。

ちなみにこいつらは石村屋に就職すれば一年以内にエンカウトできる程度だ、多目的艦は侵略され過ぎである。

— 11 —

同乗してきた三人はイシムラ内部を進むらしい。

残るとしてもMIBが消毒に来るまで待つべきなんだが。

もうやる気が無くて、気分はげろげろですな。

アイザックは恋人を探すためだが、他の二人は別の理由があるっぽい。

こんなところにいるもしゃあないと思うのだが、船が一個の状態で俺だけ帰るのはさすがにまずい。

緊急避難的な法もあるけど、そんな状態でもなければ、寝覚めが悪くなりそうだし。

諦めて俺も探索に混ざるとしよう。

アイザックと俺のペアとなった。

残りの二人は指示を出すからお使いしてこい、みたいな。

おかしくね？

おかしくね？

おかしくね？

石村屋に補充にきてお使いさせられるとか、激おこだわ。

そもそも俺、関係ないのに。

まあ、アイザックがソロプレイとかかわいそうなので一緒に行くけど。

恋人を探しに行くなんて男らしいぜ。

まあ、俺は自動人形派なんで気持ちには全くわからないけど。

作業用ユニットと補給コンテナをアーマードハイエースに積み込む。

石村屋自慢のアーマードハイエースは木星の地球三個分の台風の中で T・M・R e
volution ごとくこできたり、巨大なマグロの切り身を体当たりで砕いた報告が上
がるくらい超丈夫。

寄生虫によって船が侵略されると困るので、ナナにイシムラから離れた位置で待つよ
うに指示。

めんどくさくなくなったら波動砲で吹っ飛ばしてもらってアーマードハイエースでばっ

くれよう。

ちなみにこのアーマードハイエースだが大型の物になると、シユバルツバースとかいう地点を過去に探索したらしい。

——12

アーマードハイエースだ!!

イシムラの壁という壁を砕いて走る俺たちに不可能はない!

なんか寄生虫ラツシユが何度か発生したけど、轢き逃げしたから問題ない!

宇宙?

真空?

寄生虫?

触手?

倒せなければ引き摺って壁突き破って宇宙空間にポイ捨てだ!

アーマードハイエースは宇宙空間だって飛べるのさ!

真剣に恋人を探すアイザックには悪いけど、実は楽しくなってきたのは秘密である。

マグロによつて生み出される寄生虫であるネクロモーフによつて惑星探掘艦「USG イシムラ」は占拠されていた。

ネクロモーフは一種のパーテイピーポーであり、すぐに殺戮のカーニバルを繰り広げる習性がある。

結果、イシムラ内部は惨殺空間となり、乗組員という画材によつて極彩色に彩られた。そんな状況では仕事を放棄し、帰還すべきだと俺は思う。

だが、俺の船に乗ってきたチームの意見は反対だった。

リーダー格のハモンドは修繕と情報の収集を、どこ見ているのかわからないケンドラさんじゆうにさいはネットワーク復旧を、アイザックは恋人を探すためであった。

さすがに三人を放置してバックれるほど俺も冷血ではないので、助力を貸すことに決めた。

そして、何故か今はアイザックとともにイシムラ内をパシられている。

アーマードハイエースで廊下とかネクロモーフとか死体とか轢き殺しまくっていると、アイザックが問いかけてきた。

ネクロモーフについてもつと説明が欲しいようだ。

欲しがりだなあ。

ニコルと生きていないディスプレイに呼びかけて独り言を続けていた男はやはり一味違う。

俺の業務がてら説明してあげようじゃないか、その間は暇になるし。

仕事先である大型艦が異常事態に見舞われ、業務を遂行できなくなった場合に関してのマニュアルが石村屋に存在している。

大きくわけると任務を続行するか、帰還するかのも二択だ。

続行の場合は己の力量と装備によって手段を講じ、情報を集める行動である。

時には問題を解決出来たり、生存者を助けることができる尊い行動であるが、基本的にこの手段を選ぶ者は皆無だ。

理由は簡単、めんどくさいのだ。

そもそも人嫌が多い業種だ、わざわざ未知の生物が暴れていたたり、テロで占領されている艦に乗り込む奴はいない。

今回は滞在行动なので集めた情報を同僚の船を経由させながら本店に送り続ける必要がある。

まあ、ネクロモーフ関連なのでMIBが解決に乗り出すのではないかと思っっている。帰還の場合は石村屋の本店に連絡して解決だ。

治安組織が正常化を行ったり、傭兵を送り込んだり、MIBのような謎組織が出張ったりする。

宇宙に治安なんて求めてはいけないのかもしれない。

どちらの場合でも必ず行う必要がある行動もある。

多目的艦に備わっている石村屋の支店であるストアのロックだ。

ストア自体は商品の取り出し口であり、商品自体は管理施設に貯蔵されているためロックで供給を断てる。

すでにストア全体のロックを行ったのでイシムラ内での買い物は不可能だ。

また、ロック中でなくともストアに攻撃を加えれば、その区画一帯への供給が停止される。

大型艦での行動で余裕があれば商品の全回収を行うのだが、俺の輸送船は中型艦のう

えにネクロモーフパラダイスだ。

艦内の商品の破棄が認められる。

そんなんで商売は大丈夫なのかという話だが、全く問題ない。

石村屋はMIBや評議会やらの下部組織だ、つまるところ商品発注はついでで実際は見回り任務の色が強い。

宇宙船相手に商売やっている会社なんてだいたいそんな感じだし。

宇宙は広かろうと、隣人との距離は意外と狭いつて話である。

現在は渋々ながらも滞在行动なので、情報を集め、商品も回収しようかと思っている。

商品は破棄しても問題ないのだが、勿体ないし、問題が起きた時の装備はあつたほうがいいのだ。

活きているストアーを見つけたので、アーマードハイエースと連結し、商品を回収。

疑問について説明しようとしたら、アイザックが単独行動すると言いつ出した。

なんかニコルが呼んでるのどとか。

うん……？

俺には全く聞こえなかった。

三河さんに確認を取るも、彼女のログにも何も残っていないらしい。

時雨と夕立も同上。

通信でも入ったのかと思ったが、イシムラ内の動力が落ちており、非常電源に切り替わっている状態だ。

ネットワークは死んでいるので、俺らとのローカル通信しか使えないのだが。

広域通信の場合は俺のデモニカにも通信が入るはずだ。

アイザック個人のスーツに連絡が入ったのだとしても可笑しな話だ。

彼は支給品のスーツを無造作に着ていた、なのでニコルさんと回線を開ける機会は無かったはずだし……。

わかんねえ。

本人に聞いたが、ノイズ交じりの通信で届いたらしい。

そして、呼ばれているのだとも。

三河さんに目線で問うが、やはり何も捉えていないようだ。

時雨と夕立も変わらず。

軍用の特機よりもアツプグレードされた彼女らにも捉えられない通信……？

なにそれこわい。

生身の人間と恋愛すると、幻聴などが聞こえだすのではないだろうか。

自動人形と一生を過ごそうと決意を新たにしながら、アイザックの単独行動用の装備を揃える。

本音では認めたくないが、激おこアイザックでイライラアイザック状態なのだ。

もうしようがないね。

死んだら望みに殉じれて幸せなんじゃないかな。

アイザックには言わないが、恋人であるニコルさんは死んでるんじゃないかと思ってる。

コックだったらワンチャンあったけど、医師的なサムシングらしいのでアウトだろう。

技術者用の作業スーツから軍用のスーツに着せ替えさせる。

(二)な感じで、装甲に迷彩が入っている。

迷彩がネクロモーフ相手に意味があるのかは知らないが。

現状で用意できるスーツの中で、俺のデモニカを除いて一番いいやつだが心配である。

スーツって関節が弱いから、合金を引き裂くような力で引つ張られるともげるんだよなあ。

衝撃や刺突、温度変化には強いんだけど。

心配といったが、デモニカは絶対に渡せない。

デモニカは石村屋で一番人気のスーツだ。

進化する、というか耐性を獲得するので着ていれば着ているほど強くなる。

今の俺のデモニカならば、からあげ万歳アタックでも傷一つ付かないし、ゲロも弾く。

デモニカが余分であれば良かったのだが、石村屋でも特注なのでアイザックには軍用で我慢してもらおう。

武器も揃っているのが石村屋の凄いとこである。

軍用の武器を勧めたのだが、使い慣れた工具がいいとのこと。

海兵隊に所属していたと言ってたから銃器も使い慣れているのではないかと思っただが、所属していたのは随分と前のようだ。

工具を武器にすると威力や連射性能などを上げなければならぬ。

設計図を新しく引き、一回バラしてベンチで組んだほうがいいだろう。

時間をかければ十分な武器となるのだが、アイザックはニコルさんを急いで追いかけてほしい。

短時間では、小型工具銃であるプラズマカッターを既存の型のまま無理やり強化することしかできなかった。

しようがないので他の武器は完成次第連絡し、ストアで引き出せるようにするしかない。

また、スーツも強化していくが、戦闘で傷つくだろうから毎度新しいスーツに着替えられるようにしておいた。

“活きてるストア”を見かけたらチェックするように告げて準備を終える。

虹彩認識によってアイザックがストアのロックを解除できるように設定し、弾と治療薬を十分に渡す。

おそらくネクロモーフがそこら中に蔓延って溢れていることが容易に予想できる。

ネクロモーフはなるべく手足を切断するように伝えておく。

寄生虫と言ったが、どちらかというと菌糸類に近く、どうも神経節から運動などの指示を出しているようなのだ。

あとは種類によっても対策が変わるので、石村屋の外敵対策マニュアルをスーツにコピーしたので余裕があるときに目を通すようにとも告げ、アイザックを見送った。

人間ベースのネクロモーフならば油断さえしなければ死なないはずだ。

とはいえ、どれほどの時間を探索するかも生存の可能性が変わってくるのだけ
ど。

体液が強酸のエイリアンさえ出なければ意外となんとかなるはず。

ネクロモーフ化したエイリアンであるネクロリアンは、人間ベースと比べて遥かに丈
夫なうえに身体能力が極まっているし、クイーンがいた場合は繁殖まで行う。

ネクロモーフとの初陣でネクロリアンとかいたら最悪なんだが、さすがにいないよ
な。

いないよね……？

——15

かつんかつんと静かで硬質な音が、自身の歩行により繰り返し生み出される。生み出
された音は通路の奥へと響き渡り、闇へと消えていく。全てを飲み込むような、そん

な暗さを内包している。まるでその闇が惑星探掘艦「USG イシムラ」の乗組員を飲み込んだかのようにアイザックには感じられた。

新たな音が自らの足元から生まれ、消える。なるべく足音を殺そうとした結果だった。重厚な脚部装甲に包まれた足底と血糊の広がる通路によって鈍く小さな足音が生まれ、染み入るように、飲まれるように、暗闇へと消えていく。アイザックの歩行速度は酷く遅い。背筋も猫背気味だ。イシムラ内に突如として現れ、乗組員の命を奪った未知なる敵、ネクロモーフを警戒してのことだ。

星々を見つけては居住できる惑星を増やすようテラフォーミングが盛んなこの時代に珍しく、アイザックは地球に生まれた。アメリカの東海が故郷だ。平凡な地球人の感性しか持っていない。人類は宇宙に進出し、数々の星を開拓してきたが異星人は確認されたことはないし、事実『そうなっている』。フォークロアとして地球外生命体が存在しているし、政府はそれらと接触してきたなどという話もあるが、本当にそうであると信じたことはない。そんな考えを持ったアイザックにとって、地球外存在によつて引きこされているという現状は、まるで出来の悪いパニックホラーのようだった。

特注品に匹敵するほどのスーツは、薄暗い視界を鮮明に見渡せる高感度センサや異音を聞き分ける集音センサなどといった恩恵を齎していた。作業用より値段も素材も遥

かに高価なスーツによる感度の高い視界を頼りに突き進む。視界の端に映し出した石村屋のマニユアルとやらに目を通しながら。文章を読みながらも意識はそれぞれのセリフおよび視界の状態に割く、ここはすでに安全圏ではないのだから。

マニユアルによると、ネクロモーフはダクトなどの狭い場所を好んで通り、襲い掛かると説明されている。正式名称と呼ぶに相応しいのか不明だが、とあるドクターによって *necromorphs* と名付けられたようだ。巨大なマグロの切り身と冗談で聞かされたが、注釈として添付してある画像を見るに、酷似しているように感じた。遺伝子の変異によって生み出されたネクロモーフは、他の細胞へと簡単に感染し、死後に同族として蘇るようだ。こいつらは生きるために、そして増えるために、生物を殺すと結論付けられている。

ネクロモーフ、またはそれに類するものが近づけば強く反応するよう設定されていると、このスーツを渡してきた日本人が言っていた。石村屋で仕事する純正のあの日本人、確かシキイという名だったか。黒い髪と瞳に、背は低く百七十前後、やや黄色気味の肌の男だ。年齢は三十に近いという話だが、見た限りでは学生でも通るほど若いように見えた。容姿と実年齢が一致しない、自動人形を愛する奇妙な趣味の男だった。まるで人形を愛しすぎて、自らもコツペリアとなってしまうたかのようなのだ。だが、日本人にはそういった特殊な嗜好を持つ者が多いとも聞いたことがあった。なるほど、日本人は

やはりそういうものなのだろう。よくよく考えれば自国にも動物を性の対象にする者も僅かながらに存在していた。その割合が多いだけ、そう考えるのが当然か。

そんなシキイだが、五年から十年ほど日本はおろか地球にすら帰っていないと言う。日本で生まれ育った日本人が宇宙で仕事をするというのはかなり珍しい、アイザックの知識がそう導き出していた。日本といえば島国だが、今では自然と生産プラントやエネルギー施設ばかりで陸上に人間はほとんど住んでいないという。環境汚染や度重なる内政干渉に嫌気が差した日本人は地底や海底、空へと居住空間を移したという。純日本人の大半はそこに籠っており、国はおろか居住空間から出てきたがらない引きこもりがちな民族だ。中には軌道エレベーターや惑星開発プラントなどで就労する者もいるが、やはり少ない。日本人の多くで構成されている石村屋の輸送はさらに輪をかけて珍しい。何か事情があるのではないか。アイザックには言えないような、暗い事情が。

なぜ石村屋という日本の企業がマニュアル化できるまで知っているのか、平然と軍用の装備まで商品化しているのか、何処まで知っているのか、疑問が次々と生まれる。疑問が湧けば、怪しく思えてくるのが常だった。船に乗っていたときは自動人形を愛でる奇妙な男だという程度の認識が、それすらも偽装に思える。そうなれば、このスーツや装備は好意なのか、バックアップを信じていいのか、疑問が尽きない、益体のない悩みが湧いて出る。

未知の敵との孤独な戦いによるストレスが、思考を逸らそうとしているのかもしれない。知っていたとしたら連中のせいでニコルは……憂いながらどうすることも出来ず考えないようなにしていた恋人のことを思い出した。ニコルがイシムラにいたのは自らが推薦したからだ。最初は反対していたが押し切られ、結果が今だ。強く止めなかった自分が悪かったのではないか、やり場のない怒りが渦巻いていく。つい、ガンと壁を蹴った。スーツによってアシストされた脚力は人間のそれを優に超えている。弱く蹴ったつもりが、結果は壁をへし曲げることとなった。

「ああ、クソツ……」

ネクロモーフを呼び寄せてしまうかもしれない。自らの失態に、またも苛立つ。どうも上手いかわからないことばかりだ、アイザックの脳裏にかつての失敗の数々が蘇る。自らがイシムラで働いていなければ推薦は無かったことから、ニコルはここに来れなかったかもしれない。イシムラに勤務することになったのはユニトロジー教会のせいだ。ユニトロジーはアイザックの癌として、未だに人生を壊しているようだった。消そうにも、増殖を続け不幸を振りまく。始まりは母がユニトロジー教会に入信したことで家財を失ったことだ。あれで自らの進学も限られ、そして……。積み重なったもしもの世界、巡り巡った己の運命、どうしても天を仰ぎたくなかった。他人に責任を押し付けられるような状況ではないことも拍車を掛けた。

シキイ自身は指令系統が異なり、アイザックたちに付き合う必要もないはずだった。ここまで来た輸送船にはアイザックたちが地球まで乗る予定の小型船が積まれている。それを置いて帰還も可能だというのに、アタックやカバーを率先して行い、精神に余裕のないアイザックの心配までしているようだった。何か後ろ暗いことがあるのではないかと疑っても、意味は無かった。それどころか対策マニュアルなる物まで渡してきたのだ。おそらく装備の数々もバックアップも善意なのだろう。疑うのならば、もっと早い段階で、もっと怪しい動きをしていた者にすべきだ。そもそもシキイよりも、同僚の二人であるハモンドとケンドラのほうが怪しいではないか。この状況で何をする、何ができる。アイザックには自らの責任によってここで働くことになった恋人、ニコルを探す目的がある。あの二人にはそれほどのことがあるのか……？

天井や壁のダクトを走る音が聞こえる。それも複数だ。ネクロモーフがこちらに気付いたのだろう。まるで狩りをするように、音に囲まれていく。何処から来るのか、背を猫背気味に丸め、プラズマカタラーを構えた。使い慣れた工具銃だ、威力の底上げはされているが違和感はない。

音が響き、闇に飲まれ、消えていく。姿は見えない。まだ現れない。動く物に反応できよう、視界に集中する。また背中への不意打ちを防ぐために壁を背にする。あまり

に高すぎる感度が与える物は恩恵ばかりではなかった。アイザックの視界にははつきりと、人間だったモノやその内容物、人間とかけ離れたグロテスクな化け物の骸、またその破片が映し出されていた。どれもが元が人間だとは思えなかった。人間として僅かな形を残している物もやはり、人間らしきは失われていた。

足音が近寄ってきている。視界には何も映っていない。しかし、視界モニタの隅に表示されている情報は、複数体の接近を知らせていた。プラズマキャタールを握る手に、自然と力が入った。

ジジジ……と通信が乱れる。雑音が入りこむ。誰かの通信だろうか。今は忙しい、意識は避けない。

『……イザック』

女性の声だ。聞き覚えのある、柔らかで高い声。

『ア……ザック』

「ニコルか!? 今どこにいる!?!」

ノイズが混ざった通信はひたすらに、アイザックが求めていた声で名前を呼ぶだけだ。通信状態に何か不備が起きているのだろうか。イシムラ内部は主電源が消え、予備電源に切り替わっている。予期せぬ問題で調子が悪くなっていてもおかしくない。

ニコルへと必死に呼びかけるが、変わらずにただアイザックの名を呼ぶだけだった。

ニコルにも余裕がないのかもしれない。焦りが生まれる。ニコルへ何度も言葉を呼びかけるが、変わらない。

「ニコル！ ニコ……」

意識のすべてをニコルへと注いでいたためか、それに気付かなかった。天井から這い出してきた、醜悪なそれらを。背中から切りかかられ、軽い衝撃を受けたが復帰に問題はない。情報を読み取り、接近したネクロモーフの位置を把握し、振り向く。構えたプラズマカッターのレーザーガイドが、人体を歪めることで生まれたネクロモーフの手足を青白く照らした。

「お前らじゃない！ 座つてろ！」

叫ぶようにプラズマカッターを撃ちこむ。射出されたプラズマの刃は、普段使用しているよりも強く輝きを放ちながらネクロモーフの変異した足を切断した。そして刃の勢いは止まらず、ついではばかりに背後のネクロモーフの足も切り裂き、壁を溶かし小さく一線を描いた。

ニコルの通信は消え、それに代わるようにネクロモーフが壁や天井から這い出した。アイザックはすでに未知の敵への緊張を忘れ、恋人の危機への焦りが渦巻いていた。

部屋の穴という穴から湧き出るネクロモーフを退け、アイザックはUSGイシムラの奥へと進む。度々恋人であるニコルからの通信が入るが、居場所に関する情報は得られない。暗闇で一人、広い多目的艦を走り回るのはやはり精神的にも肉体的にも厳しい物がある。着用しているスーツは軍用の規格であり、更に特殊な改良も加えられている。だが、それでも疲れは感じるものだ。通信で、ハモンドやシキイの遣り取りが聞こえることがあり、紛らわしく思う。だが、近くに人が感じられるために、アイザックが通信を切断することは無かった。

通信では、シキイが『遠心重力装置』を制御し直し、この“事故”によって動いていた船の軌道を戻せるようになっていくという話だ。その際、イシムラはスペースデブリが数多に漂う小惑星群に突入することになるという。現在、シキイは船に悪影響を及ぼすデブリを破壊するシステムである『ADS (Asteroïd Defense System)、小惑星防衛システム』を再起動するために向かっているようだ。スーツに付随している、同ネットワーク上にいる乗組員たちの動向や行き先を把握できるナビゲーターで確認すると、このまま進み続ければ一度シキイと合流出来そうだった。

時折、思い出したかのように表れるネクロモーフに、プラズマカッターを撃ち込む。

元が人間だったとは思えない姿ばかりだ。ニコルのことで思考の大半が割かれているが、それでも奇妙だとも気味が悪いとも感じる。ニコルの情報が得られない今、シキイと合流して仕切り直すことも、アイザックは考え始めていた。

開閉装置を操作し、扉を開く。本来なら自動で開閉するそれは、一々装置を入力しなければならなくなっていた。ネクロモーフへの対策か、動力が非常電源に切り替わっている影響か。扉は音も無くスムーズに動き、アイザックを内部へと招き入れた。明るい。

スーツのセンサーが割り出している数値の感想だった。死体が転がっており、ネクロモーフが跋扈する薄暗い道や部屋とは段違いなほどに明るい場所だった。とても広い空間だった。網目のように回廊が繋がっており、色鮮やかな看板のマーケットが並んでいる。イシムラ内の繁華街の一つだろうか。

各種センサーを起動させるが、何も見つからない。死体も、ネクロモーフも、何も反応がない。そのことに訝しんだアイザックが、壁や店先などで身を隠しながら先へと足を進める。何があるかわからない。プラズマカッターを握る手に少しばかり力が入り、センサーによって取得された情報の数値が映し出される視界の端を睨む。イシムラでの体験は、アイザックには未知のことばかりだ。幾ら警戒しても、し過ぎると言うこと

は無い。ニコルを見つけ、助け出すまでは、アイザックは気を抜こうとは思わない。

センサーが微量な音を拾った。ノイズレベルのそれは、アイザックが音の方向へ進めば、反応も大きくなっていく。最初、ノイズだったそれは、人の話し声と同じパターンを導き出した。

スーツの積み込まれている機能の一つが、拾える限界の音を増幅することで、アイザックにも聞こえるようになった。ザザザ、と雑音が入り混じっている。まるでニコルの通信と同じようだ。いや、ニコルの通信のほうがノイズも綺麗だった。

『ケ……これじゃ……も……らない……』

増幅された音は、男の声だった。誰かの話しているのだろうか。

アイザックは音を殺した際に相手に聞こえないであろう距離の限界まで近づいていた。手持ちにある三つの装備を確認する。一つはシキイが予め強化してくれたプラズマカタター。これまでの戦いで、予想以上の威力と使いやすさを発揮してくれたそれは今では手の延長のように馴染んでいる。残り二つはラインガン、そしてパルスライフルだ。ラインガンは大型の資材を大雑把に焼き切る時に使う広範囲用の工具だ。工具二つとは異なりパルスライフルは武器だ。嘗て、アイザックも使用していた集弾性と速射

性、連射性に優れている重火器。相手が人間、それも交戦経験のあるような練度の高い人物ならば、パルスライフルが有効だろう。

プラズマカタールとラインガンをストックに仕舞い込み、パルスライフルを構える。シキイがアップグレードしてくれたというそれは、どうにも好きになれなかった。対人用の重火器としては強すぎるように思えたからだ。工具にかなりの殺傷性を持たせ、それを嬉々として使っている時点で、アイザックは改造されたパルスライフルに何か意見を持つべきではないとわかっている。だが、気持ちが悪くそれを許さないのだ。そして、相手がどんな人物かわかっていないのに、ライフルを構えている自分のことがアイザックは少しだけ嫌になりつつあった。

——17

「K、こつちのストアもロックされてるぜ」

「……そうか。ここら辺の外宇宙を担当している石村屋は珍しく足が速いな」

「なあ、おい、K。感心してる場合じゃないぞ。俺たち、こんな腹ペコ寄生虫うじゆるうじゆると溢れて片っ端からダッシュしてくる空間で武器がないんだぜ。もつと焦つてもいいんじゃないか？」

「もつと余裕を持つんだな、J。ストアの中枢端末ならMIBの命令を受け付けるだろう。ゆつくりと落ち着いて、コーヒーを飲むようにスマートに事を成すのが大人つてもんだ、坊や」

アイザックのスーツに付随しているバイザーに、音源である二人の情報が集まっている。カメラを操作し、二人の映像をズームする。青年を過ぎた程の背の高い黒人と初老に入ったばかりの白人の二人組の様だ。会話から黒人がJ、白人がKというらしい。発音から察するに、アルファベットのJとKのようだった。愛称か、作戦名か。二人とも同様の黒いビジネススーツを着ているが、所々に皺が寄っている。ネクロモーフによる攻撃によって汚れが付いたのだろうか。Kと呼ばれた白人はストアに背中を丸めて座っており、Jはストアを諦め悪く何度も弄っているようだった。

二人を無視し、隠れて通り過ぎることも考えられた。ただ、アイザック自身もストアに用がある。シキイから弾薬や工具、治療パックの支給が得られるためだ。まだ弾には余裕があるが、それでもこの先に何かあるかわからないし、弾が切れる前に別のストアに訪れられるとは限らない。出来ることならば此処で補給を済ませておきたいというのがアイザックの本心だった。

グリップを握る手に力が籠る。他の生存者と話し、ニコルの無事を確かめたい気持ちもあるのだ。スーツの機能によって温度調整も万全とは言え、ストレスに晒されている

アイザックの頬に汗が伝う。行くべきか。

決断は一瞬だった。駆けるようにストアまで迫り、Jと呼ばれた男にライフルを向けた。

「すまないが、二人とも手を挙げて質問に答えてくれないか」

二人は大人しく手を挙げている。その手に武器は無い。事前の話で武器は持つていないと聞いていたが、やはり見て確認すると安心する。スーツの頭部を解放し、久しぶりに顔をさらけ出したアイザックは深く呼吸した。バイザーによって光源を都合のいい量に調整されていた身には、照明の光は眩しい。二人を見失わないよう警戒しながら目を細めた。

アイザックの様子に敵意は無いと感じたのか、二人は手を挙げたままだったが、気負いなく会話を進めていた。

「これがスマートに事を成すつてやつか。毎朝銃を突き付けられてコーヒー飲むのかい？ そんなときの感想は？」

「泥水みたいだな」

「あー、そうだな。俺は今、そんな気持ちだよ」

Kが仏頂面のまま、Jの問いに答える。即答されたJは苦い物を飲んだような表情をしていた。アイザックは、その様がまるで濃いブラックコーヒーを飲んだ子供のように思えた。

「あんたたち、二人はイシムラの乗員か？ 聞きたいことが、一つだけあるんだ」

Jに向けていたパルスライフルを降ろす。やはり銃を向けられていたのが圧力になつていたので、JとKの空気が緩んだように感じた。やはり武器は好かない。

「申し訳ないが、我々は乗員ではない。外に蔓延る寄生虫たちの調査に来た学者だ。こちら、ブラック博士」

「どうも」とJが愛想の良い笑みを浮かべた。Kが「私はホワイト、大学教授だ」と続けた。「嘘だな」とアイザックが険しい表情を浮かべながら、パルスライフルを再びJへと向ける。

「JとKだと聞こえていた。嘘をつかれると俺の欲しい情報の信憑性が欠ける」

「愛称さ、ボクたち仲良し」とJが満面の笑みを浮かべた。ライフルのレーザーガイド機能を起動した。青白く発行する、着弾位置を想定するレーザーガイドが、Jの黒い額を青白く染めた。トリガーに力を入れればすぐにでも弾は出るだろう。スーツの無い頭部に、弾が一発でも当たれば外に転がっているネクロモーフだった何かの仲間入りを果たすだろう。

「あー、いや、我々は……」

「ネクロモーフを知っているか？」

これ以上の停滞は御免だ、そんな思いでアイザックが渦中のネクロモーフを話題を告げると、言葉を濁そうとしていたKの表情が変わった。

「俺たちはそのネクロモーフの発生源であるマーカーに用があるんだ。駆除が仕事、まあ、帰りがけのついでだけだ」

逡巡しているKに代わり、Jが答えた。シキイから送られた情報と沿っている答えだ。あれの情報源は確か……。

「お前たち、MIBか」

「そうだ。もっと言えばバイドと呼ばれる敵意と攻撃性に優れた生命体群への対処し、その帰りに補給と地球への連絡のために立ち寄った大型宇宙船でネクロモーフを発見して巻き込まれた、というのが正解だ」

Jを睨むように見据えていたKが、自分たちはMIBであり、任務の帰りだと答えた。任務についての話を聞いてもアイザックにはわからないが、嘘ではないように思えた。レーザーガイドをオフにし、ライフルを下げた。

「信じてくれたかい？」

Jが大きく溜息を吐きながら、アイザックに聞く。答えは半々だ。アイザックの知識

ではわからない部分が多い。腕の操作モニターを弄ると、音もなくスーツが頭部を保護した。人工的な光に晒されていた身としては、バイザーによる光源調整は過保護に感じた。

「武器を突き付ける必要が無い程度には、な。完全じゃない、だから石村屋の仲間に連絡を取る」

ローカル通信によってシキイを呼び出す。MIBに面識があるのはやはり彼だけだろう。幾らか信用できるのか、確認を取るべきだ。そんな考えだった。

「石村屋の仲間か……」

「彼は石村屋ってわけじゃないだろうな。我が国の愛国者みたいな顔をしている」

考え込むKを尻目に、Jが作ったようなしなやかなめつ面を披露した。彼の中の愛国者は固い表情の人物のようだ。

「知ってるか、K? 石村屋は純正のHENTAIのみで構成されてるんだ。だから愛国者だろうと、売国奴だろうと入れない。不平等だなんだと叫んだ連中は、石村屋お得意の重力発生でボーンだとき」

Jの中では日本人はどうやら変態のようだ。アイザックの知っている唯一の日本人

であるシキイも自動人形に偏愛を抱いていたのを、アイザックは思い出した。確かに人間そっくりだ。外見の美しさだけで言えば人間よりも綺麗だ。だが、所詮は作り物。愛を囁く相手としては不毛だ。愛は心に積もる。心無い人形に愛を注ぎ、何が残ると言うのか。

『はいはい、こちらシキイです。ああ、アイザックか。何か問題でも起きた？』

通信が繋がった。視線の先に、空中投影されたシキイの上半身が映る。相変わらず奇妙な造詣のスーツを着ている。安っぽい缶詰で形作ったようなフォルムだが、不思議と愛嬌を感じる。シキイの話だと、石村屋で一番人気の特注スーツだという。変わったセンスをした人員が集まっているのか、変態だからか。自ら耐性を持つ学習するスーツと聞いたアイザックとしては、興味を持たない筈がないのだが。

シキイの声音は、翻訳装置を通しているためか少しだけ抑揚が可笑しい。ジョークにも存在するように、日本人であるシキイは母国語しか修得していない。あとはなんちやつて英会話だけだという。

技術の発達が、それまで抱えていた全ての問題を解決するとともに、問題にならなかつた目端のことが重大になりつつあるとも聞いた。出生率の低下、未婚率、寿命の延長。地上から姿を消した日本人たちにも、憂いはあるようだった。問題の解決策として、開発された人工子宮で、完全義体の人間も生み出されつつあるという話も聞いた。

人間が畑で採れるようになるかもしれないとシキイが笑っていたのを思い出した。

「J、これがスマートに事を成した結果だ」

後ろからKの言葉が聞こえた。Jは何とも言えない表情を浮かべていた。

——18

シキイの知り合いで、危険は特にならない二人だと言う確認が取れた。宇宙に関する問題を解決するプロフェツシヨナルだとも。イシムラに辿り着く前も、「バイドミツシヨン」とやらで船を供にしたという話だ。

また、ニコルについても質問したが、二人はアイザック以外の人間とは出会っていないという。半ばわかっていたことだが、落ち込むのは当然だった。

「おい、K。やったぜ、シキイだぞ。カモイ、タタミに次ぐ当たりだ」「ああ、珍しく運が良かったな。マグロが無ければ帰りは休暇の船旅気分で最高のんだがな」というJとKの遣り取りを背に、ストアを操作する。これまでの道中で傷ついたスーツの交換を優先する。

ストアから漏れ出る光に包まれるように、一步前に踏み出す。大げさな音を立てなが

ら、ストアが閉じ、スーツが交換された。傷一つない新品だ、スペックも最上級品まで引き上げられている。シキイは変態だが、腕は良い。このちよつとした時間でアイザックは、シキイへの信頼を高めていた。命を繋ぐための装備の質の良さが、信頼へと繋がっている。

インベントリに、装備や弾倉、治療パックを補充していく。アイコンが明滅していることに気付き、タッチする。シキイが用意してくれた食べ物だった。宇宙食ではあるが、バリエーションが豊富で有り難い。やはり食べ物は気力の回復に大きく貢献してくれる。

必要な食べ物を選びながら、MIBの二人に必要な物を問う。スーツは不必要、当座を凌げる重火器が必要、食べ物はパイが良いとのことだ。

「俺らに通つてるパイには叶わないが、悪くないな」

「そうだな」

MIBの二人が宇宙食のパイを突きながら、そう評価した。宇宙空間という厳しい環境での長期保存を目的とした食べ物だ。味はそれなりだろう、そうアイザックも思っていたが、なかなか美味い。作業中に支給されているゼリーも宇宙食としてはまだ美味かったが、これは食事として美味い。張り合うランクが違う。食材は並みだが、ソースに至っては本国の物よりも美味いかもしれない。変態だからか、何となく毒されつつあ

る思考でアイザックはそう考えた。

「で、えーと、そちらさんは……」

「アイザックだ。システムエンジンニアとしてこの船に来た」

「Jだ」「Kだ」と挨拶を聞き、よろしくと互いの手を軽く握る。二人の会話を聞き流しながら、食事を進める。食べられる内に食べておくのがベストだ。腹を裂かれたりしたら危険だが、今後もしも動き続けることを考えるとやはり食べておくべきだろう。それにかなり高価な治療パックをシキイは送って来てくれていた。ちよつとやそつとのダメージならば問題ない。

そういえば、とインベントリから一つのポットを取り出した。中には、ミカワが手作りしたオニオンスープが入っているようだ。カップに注ぐと、炒めた玉ねぎの香ばしい甘い匂いが広がった。

「アイザック、それなんだ？」

「スープだ。シキイの自動人形が作ったオニオンスープ」

Jの問いに答え、スープを口に近づける。メインを食べている途中だが、香りを嗅ぐと更に腹が減るような感覚を覚えた。実に美味そうだ。

「当たりか」「ああ、多分な」というJとKの会話を無視し、スープを口に含む。玉ねぎ特有の優しい甘みが広がり、少しだけ足された塩味と香辛料がアクセントになってい

る。身体が温まるのを感じた。思った通り美味しい。

アイザックの様子を見ていた二人も、すぐにスープを手に取り、飲み進めた。久しぶりに穏やかな気分となった。宇宙食も美味かったが、手作りはやはり別物だ。ニコルが作ってくれた食事を、アイザックは思い出していた。あれも温かく、美味しかった。いや、自動人形が作った料理は手作りとはまた別物だろうか。

「外宇宙組はやっぱり違うな。かなり気を使っている」とスープの味に上機嫌なJは「アイザック、知ってるか？」と続けた。目線で続きを促す。

「自動人形はかなり料理も上手い。が、生産国以外の基本的な記憶野を組み合わせると、料理が滅茶苦茶になるらしい」

Jの話によると、記憶野にインプットされている料理データと、後付の学習データが混ざった結果、そういった奇妙な問題が生じると言う話だ。石村屋でも、あまり遠出しないタイプの自動人形は、料理が滅茶苦茶な奴が多いらしい。それも個性だと受け入れている従業員のせいだとも。

ミカワやカツノといった奉仕型をベースにした自動人形に暫し起こる問題のようだ。カムムスタイプは、戦艦などをベースにした純日本製のため、そういった問題は料理機能がオミットされている自動人形以外からは見受けられないとも。

「まあ、そういう訳だ。石村屋の外宇宙組は長い期間、拘束されるからかなり気を使っているようだぞ。そこらはシキイもかなり丁寧に組んでいる筈だ。帰りはかなり期待できるぜ」

Jがそう言ってスープを飲み込んだ。Kが何かを思い出したのか、苦い顔をして「ドイツ製の自動人形、あれのコーラカラーゲは最悪だった。ぐじやぐじやでしゅわしゅわして、な」と呟いた。Jも思い出したのか、顔を顰めた。

「あー、まあ、大丈夫だろ。タタミのこのホーショー程では無いにしろ、まともなはずだ」

スープも美味かったしな、とJが取り繕った。「そうだな」と仏頂面でKもスープを飲み干した。

「ホーショー?」

「ホーショーはカンムスの一種だ。奉仕型に近い性能を持つているが、戦闘もこなせる。その中でもタタミのホーショーは極まっているぜ」

「寿司が握れる。こんな風に」とジェスチャーしながらJがゴミを両手で握った。そして「もつと繊細だけだな」と付け加え、ゴミ箱に放った。

食べ終えたアイザックも同じようにゴミを捨てる。腹が膨れたが、動けない程ではない。気力も回復した。丁度いいくらいだ。

「シキイの船なら帰りは楽しみだな。石村屋だと毎週金曜はカムムスが作ったカレーを食うんだけ」

ライスとナンは選べるというが、Jのおすすめはライスだという。赤や茶色のやつ、Kがフクジンツケと呼ぶ、付け合せは好みによるが、カレーライスとともに食べると美味いらしい。食べ物の話ばかりだとアイザックは辟易したが、宇宙での仕事が多ければ、美味しい食事に拘るようになるのもわかる。

アイザックも自動人形に強い興味を持つようになっていた。シキイの様に、自動人形に伴侶としての役割を求めているわけではない。ただ、便利そうだと、そう思ったから。家事を片付け、戦闘も行える。夢のようだ。あまりに値段が高いことがネックだが。

— 19

「シキイはこの先、砲座室に向かうエレベーター付近にいるらしい」

三人で進むことによつて手数が増え、ネクロモーフへの対処がかなり楽になった。ちよつとした会話を楽しむ余裕もあるほどだった。MIBの二人が、思った以上に手際が良いのも手伝っていた。

「なあ、おい、見ろよ。腕のほうが体よりでかいぞ。シザーハンズやミスタース

ピュー、ボンバーマンとは同じ由来だとは思えねえな、あれ」

腕が重でかくてゲームも出来ないだろ等とJが指差して笑う。シキイは、ADSを起動する際に、腕が発達した個体と戦闘したという。Jの指の先には、おそらく件の死骸だろう物があった。シキイは自動人形や大量の装備を抱えているが、あんな物、個人で戦うとなったら酷く面倒そうだ。

ロケーターが、シキイがこの場所にいることを示した。立ち止まって辺りを見渡す。揺らぐように、浮き上がるように、シキイの姿が現れた。

「光学迷彩……!」

スーツ内でアイザックの目が大きく開いた。光学迷彩は使用者を透明化し、肉眼のみならず各種センサーからも捉えられなくなる。厄介極まりない物で、主要国では軍の特殊部隊などにしか使用が許可されていない物だ。

「9042式か」

「京レ製の0252式、石村先生のワープ技術を使った最新式さ。塵や水、衝撃にも強い。重力異常にも対応できるのが売りらしい」

「久しぶり、という程でもないか」と仏頂面のKとシキイが握手を交わす。次いで「MIBにも欲しいな」と呟くJとも同じように。二人には光学迷彩への驚きは無いようだ。MIBの下部でもあるという石村屋は許されるような物だろうか。

「スペースガン、持ってきたよ」「有り難い。やっぱこれだよ、これ」とシキイから渡された銀ピカでござってした銃にはしやぐJと、使い方を確認するKを見ながら、手持無沙汰になったアイザックは改めて装備を確認する。新しく支給されたフレームスロワーとリッパもかなり活躍してくれた。フレームスロワーは、開かない扉や障害物を焼き切るのに便利だったし、リッパは飛んで行くノコギリ状の歯で居並ぶネクロモーフを真つ二つにする様だった。だがやはりプラズマカッターの汎用性には負ける。撃ち出すだけで腕や脚を一撃で裁断でき、取り回しも楽なのは有り難い物がある。

「アイザックさんもスペースガン使うかい？」

「いや、俺はいい。ええと君は……」

「艦娘タイプで、白露型駆逐艦級の時雨だよ」

にこにこ笑みを浮かべながら、時雨が答えた。髪の毛が犬耳のように跳ねているのも手伝って、犬のように見えた。シキイといるときの存在していない尻尾を振っている忠犬のような姿を思い出した。デストロイヤー級、つまり小柄で取り回しが効く兵装を所持しているカムスだったはずだ。バトルシップやエアクラフトキャリアーなどは凄まじい戦力を誇るらしいが、一体何処で活躍するのだろうか。

「シグレか、最新式の光学迷彩について聞いても？」

「勿論。提督も聞かれたら答えていいって言ってたから心配しなくても大丈夫さ」

「SPDに詳しい？」と時雨が問うので、首を横に振って否定した。

シグレが形の良い唇を動かしながら説明を進めてくれる。『SPD (Shock Point Drive、恒星間航法システム)』は宇宙船技師である石村ヒデキが開発した技術だ。一言で示すと、十四次元以上の空間まで影響を及ぼすとされる『重力』を利用したワープ技術である。この技術を利用して、石村屋は宇宙船のシェアを伸ばしたと言う。シキイが使用している光学迷彩は、そのノウハウが詰まった物だそう。今までの光を回折、透過させる光学迷彩とは異なり、空間を歪曲するタイプだという。

「これ以上の詳しい話は禁止だけどね」

「いや、十分だ。向こうの話は終わったようだし」

核心や具体的な技術は聞けなかったが、企業秘密というやつだろう。それに光学迷彩自体、政府が主導している物だ。あまり知っても面白い事態にはならないだろう。時間潰しにはなった。

Jにジェスチャーで呼ばれたのを見て、アイザックもそちらに向かった。

「話は終わったか」

「終わったよ。アイザックもスペースガンいる？ 街中の害虫やエイリアン退治にばっちり」

「MIB大好きの当たれば一撃必殺、ただ貫通性能は無いから障害物に弱い」と空間投影してスペースガンのサンプルを見せてくれる。軍用装備ともかけ離れた性能だ。これを街中で使うMIBのエージェントを思うと、頭が痛くなってくる。政府からも極秘扱いの装備らしく、使えるのはイシムラ内だけだとか。

アイザックは、そんな限定品に心が躍るような男ではない。使い慣れた工具が在ることを理由に、やんわりと断った。

「予定だけど、アイザックは先に進むんだよね？」
頷くと、俺も行くことになったとシキイが続けた。

「石村先生が貰ったエンブレムのオリジナルがこの船にあるらしくて、探す仕事が入ってね。あと寄生虫の原因であるマグロの廃棄も。まあ、マグロの廃棄はMIBの二人をメインにやるからほどほどに進めるんだけど」

船内の酸素生成プラントに問題が起きているらしく、シキイはこの先にある区画でついでにそれを解決しに行くようだ。ここで待つていた理由は、現在地より先の区画が切り離されており、宇宙空間と化しているためだという。外に巨大なネクロモーフが蔓延っている状態で、しかもMIBの二人はスーツも着用していないのも。

壁が突き破って、アーマードハイエースが飛び込んできた。腕が巨大化していた大型のネクロモーフがミンチになり、悪臭を放っているのか、スーツを着ていないMIBの二人が顔を顰めている。

「まあ、そういう訳で全部ひき潰してから向こうに行くよ。みんなで行った方が楽でしょ」

「ハモンドも乗っているよ」とシキイが言った。ケンドラは知らないらしい。ヒステリックに好きなだけ騒いでいたのを思い出した。

「ハモンドは大丈夫か、その、ネクロモーフについて知っていたとかだったら」

「大丈夫だと思うけどね。うちの自動人形が調べたけど怪しい所はなかった。まあ、あれだ。危険な動きとか察知したら全部ミンチにするから大丈夫でしょ」

うちの自動人形は強いんだ、とシキイが小さく笑い声をあげた。

原作：エヴァンゲリオン新劇場版 エヴァンゲリオン1

あつくん

——1

隕石が落下したことで南極大陸は消滅、南半球の生物の大半が死滅した。

そこから紛争が起き、ついでに“東京都”に新型爆弾が落下して人類は半分ほど数を減らした。

とんだディストピアである。

そういつた『災害』の翌年に“東京都”の復興は断念し、長野県に“第2新東京市”を遷都。

数年が経ち、復興も順調に進んだことで次期首都として箱根を中心に“第3新東京市”も建設され、完成後には遷都される予定だという。

この“第3新東京市”だが、なんと義肢装具士の専門学校が新しく設立されるのだ。かつての“東京都”に存在していた義肢装具系の大学や専門学校が寄り合った結果らしい。

“東京都”にいた教員などが物理的に蒸発したせいで、ノウハウと経験者を欠落したために、ダメージの大きいというか切り離す必要が出てきたところから人員をかき集めとかなんとか。

集めすぎて逆に過剰なレベルで潤沢になったという話をネットの掲示板で見かけた。進路を決めていた俺はすぐにそこを受験し、受かった俺は建設中の“第3新東京市”に住居を求めた。

両親が物理的に蒸発したので“東京”なんて好きじゃないが、元は箱根なのでセーフだろうと自分に言い聞かせながら。

そこら中で建設が進められている“第3新東京市”だが、人が活動するような区画から優先的に工事が進められているようだ。

地元よりは少しだけ割高だが、悪くない賃貸料で、学校近くの立地を借りることができた。

まあ、問題があるとすれば……

「いや、こんな僻地に首都予定地を作るとか東さんはみんな馬鹿かと思っただけ。どうしてなかなか悪くないね、あつくん！」

近所に住んでいた中学生、ああ、進学したから高校生か……。

まあ、その高校生の束ちやんが付いてきたことだろう。

ちやんと許可を取ったのか両頬を引っ張りながら問い詰めると、俺の所に身を寄せるために進学すると伝えたら家族に普通に見送られたとか。

キミの家族はちよつと倫理観がガバガバ過ぎでしょ。

あとはシスコンが激しすぎて気持ち悪いレベルのため、出ていくことを妹に伝えたら超喜ばれたと涙目だった。

……そのうちいいことあるさ。

——2

日中は俺と束ちやんは学校に通い、帰ってきたら二人でテキストに遊ぶ生活である。

束ちやんと二人で数年前に断念したISを何とか作れないか試行錯誤したが、やはり不可能であると判明。

まあ、内容はぶつちやけるとSF小説のようなものだから仕方ない。

ISを作るとしたら、部品を作る装置を作る設備を作る部品を作る装置を作る設備を作る環境を作る必要があるレベルだからなあ。

わかりやすく表現すれば、ドラえもののタケコプターを反重力装置から作るのと一緒である。

巨大なプロペラを背負うようなパチモンではISを再現できないので、妥協すらできない。

結局、諦めた俺たちはテキストに遊ぶことにした。

東ちゃんが最近ハマっているのは、神経とか筋肉を人工的に作り出す技術だとか。

再現するとしても巨大な人造人間を生み出せる可能性もあるとかないとか。

すでに実証実験も行われているようだった。

失った足とか生やせるようになるのかな、と想像したが、巨大化するのは勘弁である。

俺は義肢を機械化させる研究に熱中している。

人間の動作は電気的な信号によって支えられているのだから、受容する器官も機械でいけるっしょ☆という話だ。

神経系が上手くいかないことや、感覚のフィードバックが適切に得られないなどと困難にぶち当たっているようだが。

あとは、いつの日かISを完成させる時のためにシミュレーションを作ってみた。

ちよつとした一人称のロボットアクション系の同人ゲームとして売り出したら結構売れて小遣いになってくれた。

— 3

東ちゃんは以前読んでいた論文のように神経や筋肉を作りたいらしい。が、残念ながら環境が許さない状況である。

俺も機械化義肢であるオートメールを作ってみたが、制御系が上手くいかない。完成しても試せないしなあ……。

勿体ないのでブログにアップした。

評判は結構悪くなく、アフィ収入で懐が潤うという好循環。

ついでにＩＳの同人ゲームもパワーアップさせ、機動性を高めた。ゲーム内の話だが、理想のＩＳの動きに近づきつつある。

パソコンが少し古いと処理落ちするが、そこら辺は自己責任だろう。

— 4

全てを機械化するのには諦め、束ちゃん詳しい神経系などをぶち込む考えにシフト。機械化した部位で繊細な機能を必要とする部分に培養した生身で補うものだ。

とはいえ試作品を作ることは出来ないし、もちろん実証することなど夢のまた夢である。

論文を漁ると似たような研究をしている人もいるし、実証にまで至っているのだから、俺と束ちゃんもイイ線いつているのではないかと期待してみたり。

ブログにアップすると評判がなかなかいいのだ。

無駄に技術力のある馬鹿が無駄に頑張っている無駄な研究、みたいな扱いだけど。設計図とかシミュレーション、考察などしか載せてないからなあ。

あとは外殻である機械義肢の動いている動画とか。

同人ゲームのISも更なるパワーアップを果たした。

理想状態の機動に至らないが、対戦モードを取り入れた。

ネット回線でラグが生じるとか抗議が来たが、知らんがな。

回線速度は専門の人に電気会社とか通信会社に頼んでくれ。

就活をしていると、学校から特務機関NERVという研究組織に推薦された。

話してみると、学校の成績やブログを顧みて、是非とも来てほしいとかなんとか。

……ブログは匿名だけどなあ。

ちよつと怖いのが、提示された給料や研究施設に心惹かれる。

しかも俺と東ちゃんの研究の先駆けのようなモノをやっていた人工進化研究所の後任らしい。

これはもう、行くしかないな。

帰宅すると東ちゃんにも声がかかっており、俺が入るなら一緒にNERVに入る予定とか。

……東ちゃんにまで声が掛かるとか、ちよつとどころかかなり怖くなってきたんですが。

ISもバージョンアップを重ね、ついにシナリオモードを搭載した。

シナリオだが、

・技術革命的なISの登場によって既存の兵器は過去の物となり、ISが世界の中心となった。

・ISは女性にしか操れないので女尊男卑の世界に移行。

・シナリオ主人公は、唯一のIS男性搭乗者となって女尊男卑の世界を駆け巡る。

・ヒロインは複数人。

・ハーレムのな展開が用意されている。

という感じである。

売上は過去最大のヒットだった。

機能面も当然だが、やはりハーレムの要素が重要だったようだ。

ストーリーがガバガバすぎい！などと叩かれたが、そこら辺はテキストなんでしょうがないね。

当初の『ISのシミュレーション用』という目的と随分逸れたことに気付いたのは、売り出してから半年後だった。

6

NERVで勤めることになったが、あんまりやる事が無いという現実。

汎用ヒト型決戦兵器と銘打った人造人間を建造する研究に携わっているが、完成予想図から関節部の負荷などを導くだけである。

東ちゃんもちよつとしたプログラミングを組んだり、培養した生体組織を組み込むくらいだとか。

楽だけど、ちよつと物足りない。

NERVの前身である人工進化研究所に所属したメンバーの大半が移籍してきているとかで、移籍組に重要な仕事が割り振られているからという理由があったりなかったり。

装甲板によるバランスなどを考慮して外殻部をシミュレートして組んでいくが、指示されたように調整すると出力が落ちる。

落ちるといふか、力が入りにくい構造になっている。

これは間違いではないのかと提言するも敢え無く却下。

正しいらしいのだ。

兵器なのにわざわざ弱くするとか……。

強すぎて操縦できなくなるのを恐れたりとか？

なんだその一昔前のSF映画みたいな展開。

有りえないか。

考えがわからんが、指示通りにするのが正しい技術者の姿である。

まあ、俺が技術者だかは知らんけど。

—7

俺たちが作っている人造人間だが、エヴァンゲリオンというらしい。

縮めてエヴァだ。

人の始まりであるイヴとか福音だとかの意味が込められているようで、ちよつとおしやれである。

このエヴァだが、使徒という敵と戦うために建造されているという話で、世界各地でも作られているようだ。

人工進化研究所はその基礎実験用だったとか。
なるほどなー。

しかし、敵を使徒と呼ぶとかなかなかオサレだな。

使徒に負けると一発で人類全滅らしい。

……え？

え？

糞ゲーすぎじゃね？

まあ、そんな風な説明を受けたがやはり仕事は少ないわけで。

忙しい人は死ぬほど忙しそうだが、残念ながら俺と束ちちゃんは専門が違うのだ。

武装を開発するわけでもなければ、プログラミングするわけでも無し。

そもそもまだコアくらいしか出来ていないらしいので、マジでやることがない。

しょうがないのでNERVのスパコンでISゲームを起動。

コイツは理想を再現しまくった結果、あまりの演算の重さにほとんどPCでは処理できない困り物だ。

NERVの超凄いコンピューター様であるMAGIならイケるんじゃないかと束ちちゃんと相談の結果、試してみることに。

NERVのスパコン、というかハイパーコンピューター様であるMAGIは三つの独立したシステムによる合議制が布かれている。

処理能力を割いてゲームしていいか提案してみると『MELCHIOR』が否定、『BALTHASAR』が承認、『CASPER』が条件付き承認だった。

ちなみに条件は束ちちゃんの相談というか会話というか、そういう女の子の会話的な感じらしい。

……人間臭すぎないか、このコンピューター様。

まあ、いいか。

接続して起動つと。

すげえ！

量子変換の演算まで綺麗に描かれている！

やつぱNERVはNO.1だ！

最先端の研究施設は伊達じゃなかったんだ！

バレて上司の赤城博士にガン切れされた。

で、半年間の謹慎を喰らった。

やN糞。

—— 8

謹慎だが、自宅待機ではなく海外研修みたいな扱いだった。
技術提携に近いのかもしれない。

行き先はアメリカ、ドイツ、中国、旧北極基地である。

まあ、北極は日本に帰ってきてから幾分か月日は空くけど。めんどくさいなあ。

問題は俺が英語がわからんち、q、なのだが東ちゃんが通訳してくれた。やつば東ちゃんの良い娘だわ。

東ちゃんは俺の技術分野にも明るいから安心して通訳を任せられる。

英語を覚えようかとも思ったが、今後も通訳として行動してもらうことを考えたらやつぱりいいや。

読めれば良くない？

あと東ちゃんを独りにするとハイパーコミュ障でヤバいし、同伴させる理由に使わせてもらおう。

NERVに残したら何人死ぬかわからんし、間違はなく司令は不審死する。

帰ってきたら司令の首が無くなって、副指令も謎の老死を遂げてたりしたら怖いし。

アメリカのNERVは意外と研究が進んでいないようだった。

日本が最先端で、後発組という印象が強い。

急いでいるがノウハウが足りていないとかなんとか。

ある程度までは開示を許可されているが、それもリターンによるとも。

まあ、各国のNERV同士があまり仲は良くないらしいし、どうにもな。

スーパーソレノイド、S2と呼称される研究結果とエヴァの起動実験のデータを交換した。

S2は理論が検証で、検証が終われば基礎を積み重ね、数年後には実証実験を行うとか。

これをやるよりもエヴァを優先したほうがいいんじゃないかと思ったりしたが、まあ、いいか。

現状では理論通りに作っても起動できそうにないらしく、起動しても止め方がわからんという話だ。

無から有を生み出す機関で止め方が不明とか危険物すぎ……。

まあ、起動しないらしいから心配無用ってことだろう。

去年くらいにS2理論の一部を中国に流出した、みたいな話を聞いたんだが大丈夫かそれ。

ドイツのNERVは日本よりも少し遅い程度だ。

人工進化研究所と提携していた研究施設があつたらしいので、当然なのかもしれん。

やはり連携はし難そうだった。

ドイツ滞在中に中国の一部が消し飛んだらしい。

どうもS2の実験を行ったのかなんとか。

NERV支部がある北京ではなかったのでMAGIは無事らしいが、中国行きは中止となった。

見事なフラグ回収を見せてくれたが、俺らが行く前で本当に良かった。

が、そのせいで代わりとしてドイツの滞在期間が延びたのだが。

ただ、ドイツは完全な戦闘用のエヴァを目指しているとかで俺とも束ちゃんとも技術のシナジーが微妙。

それなのに日本で研究するよりもやる事が多いという謎。

むしろプログラミングまで手伝うとかおかしくないですかね。

ちなみにドイツ版のエヴァは『ヒトよりもケモノのほうが肉体的に強くね?』が根底にある。

日本は『ケモノの牙や爪を武器にするからヒトのほうがT u e e e なんだよバーロー』がコンセプトだ。

どっちでもいいです。

ドイツNERVで忙しい日々を送っていたが、会話できる相手が束ちゃんと日本から一緒にきた職員だけという現実。

ちよつとつまらない。

お前らもつと日本語覚えろよおらあ！と無茶振りするも惨敗。

言語の壁は厚く、俺はドイツ語を覚える気が一ミリもないのが敗因だろうか。

凹んでいたら十歳の少女に慰められてしまった。

情けないんですけど……。

研究施設に十歳の少女がなぜいるのかと疑問を抱いたが、話を聞けばすぐに氷解した。

彼女はエヴァアのパイロット候補らしい。

……お、幼すぎない？

汎用ヒト型決戦兵器とか完全に名前負けしてるんだけど。

もつと厳つい選ばれし軍人とかが乗るのかと思つてた。

究極の戦士的な感じで。

研究していても思うけど、全く汎用じゃないんだよなあ。

使徒が現れるのつて、彼女が大人になつてからののだろうか。

ちなみに名前はアスカちゃん、日本語がべらべらでいい娘だ。

俺のためなのかドイツ語も聞き取りやすい、やっぱりいい娘なのである。ちよつと勝気なのが瑕つてやつか。

それも魅力的……なのかなあ。

俺は日本人なので、もつとお淑やかでナデシコつてるほうが好みかな。

いや、魅力的でアスカちゃんに合つてると思うけどね。

束ちゃんが着物を着てドヤ顔を披露してくれた。

どつから持つてきたのだろうか。

— 9

無号機、暴走。

やつとの思いで帰国したらこれである。

やつてられん。

そもそもパイロットが乗っていないのに動き出すとかどうなつてんだ。

無人の兵器が廃棄された都市を練り歩くとか都市伝説か。

汎用ヒト型決戦兵器の銘は変えるべき。

夢遊病患者初号機とかどうよ。

とりあえず無号機の研究は凍結、無号機自体もデータの吸出しとパーツの剥ぎ取りである。

で、無号機は封印と相成った。

エヴァの凍結施設を意図せずテスト出来てしまったが、誰も喜ぶわけがない。そもそも封印用の凍結施設ってなんやねん。

まあ、俺と束ちゃんには関係ないけど。

司令に信頼されている引き継ぎ組は大変そうだなあと余裕ぶっこいてたら、俺らも巻き込まれた。

極秘にされている中枢以外を手伝うことになってしまった。

無号機が暴走した原因から洗い出す必要があるのだが、マジでわからん。

コアを組み込んだ無号機に電源入れて起動実験をしたら歩き出した、なんて話だからな。

事前に行った基礎実験やコアのみの起動ではこんなことは起こらなかったのだから意味不明である。

自律性を伴ったゴーストが宿ったという話のほうはまだ信憑性があるレベルだ。

ブラックボックスとなっていて非公開のコアを調べる必要があると報告書が各部署から提出されると、原因の洗い出しは不必要と判断された。

どういふことだよ。

統括的なポジションにいる赤城博士を問い詰めたが、色好い返事は返ってこなかった。

東ちゃんがなんか意地になって松代にあるMAGIを使ってハッキングを喰らわせたが、得られたデータはどれも断片的な物ばかりだった。

結局、コアは人造人間を動かせるほど凄まじい物は確認できなかったという恐ろしい事実を知ってしまったくらいか。

ついでに何かが入っているという話がわかったただけである。

あとはちよつと詰めを誤ってバレた結果、謹慎を喰らって北極での仕事が延びそうつてことくらいか。

やっぱNERVって糞だわ。

— 10 —

旧北極基地のNERV基地「ベタニアベース」に出張となった。

謹慎させといて海外に出張させるとか正気を疑うぜ。

言語は英語だし、発狂するぞ俺。

この基地だが、エヴァを未だに建造していないのだ。

各国で建造されているエヴァの情報のフィードバック待ちもそうなのだが、使徒を封印しているらしい。

無号機を封印した技術はここから来ている。

で、使徒の解析を重視しているためにエヴァは建造していない的な感じっぽい。

あとNERV同士が仲良くないのに情報を待っているのも良くないようだ。

北極に国境は無いから問題ないという考えだが、天然だろうか。

人間絶対殺すマンである使徒の足元にいるのに対抗兵器が無いとかここに勤めている連中は正気じゃない気がする。

防衛機能などの結界は完璧だと言い張られたが、無号機の暴走時では戦自の兵器を鎧袖一触だったのだが。

頼むから慢心は止めてほしいなあなんて思ったり。

とはいえ開発自体は進んでいないわけでもない。

ちよつとは手を出しているようだ。

ただ、輸送なども難しいので完成するかわからんって雰囲気だが。

ただまあ、切り刻んだ第三使徒の研究現場を見て回ったり、エヴァについて話したりするだけなので結構楽な仕事だ。

第三使徒は永久凍土から発掘されたという話だが、生きているらしい。

これはもう生命力が高い云々の話ではないな、うん。

解析も終わっているので使徒自体は封印しているから世界が滅ばない限り出てこないだろうとかなんとか。

相手は滅ぼす側なんだけど……。

第三ということは第一、第二使徒はどうなったのかと疑問を抱いたが、NERVが保有しているらしい。

この組織は秘密が多すぎる。

そもそも専門学校を卒業したら世界を滅ぼす敵を倒す兵器を作る手伝いをするとか、ファンタジー過ぎないですかね……。

ゲームみたいにいきなりパイロットになれと言われただけマシ、なのか？

北極基地のエヴァの開発はまだかかりそうだな、というのが感想である。

頭部や胸部、コア、制御系などの研究はかなり進んでいて起動実験まで行っているが、手足まで行くと未知の領域だ。

頭から離れるほどに、指令の伝達が難しくなる。

手足が完成するのは何時になるのか俺にはわからないが、やはりかなり時間はかかるのだろう。

手足が上手くいかなかったらエヴァ用の機械鎧（オートメール）辺りを考えておく必要もあるかもしれない。

人造人間だし。

戦闘して手足を失ってもすぐに生やせるわけでもないし、代替品は必要だろう。

そこらは追って考えていくって感じか。

報告書を出したら仕事が増えそうで鬱だ。

楽しんで生きがいがあつて給料も高い仕事をしたいんだが……。

—— 11

東ちゃんが一生懸命ヘアーカラーリング剤を眺めていた。

エプロンドレスの上に羽織っている白衣は俺の物なのだが毛染めしたら汚れるん

じや……まあいいか。

近所で買って来たらしいが、数えてみたら二十個以上あった。

そんなに買ってきてどうするんだと問うと、髪の毛を染色するのだとか。それらさうだろうけど、二十個は多すぎでしょ。

「あつくんは何色がいいと思う？ やっぱ黒く？」なんて聞いてきた。

束ちゃんが一番だよと連呼したら「えへへ、やっぱ私のことわかってるね！」と満面の笑みを浮かべた。

「えへへ」というか「ふへへ」って感じだし、笑顔もだらしなく緩んでいるけど。柔らかささうだと頬をふにふにすると凄い喜ばれた。

まあそんな感じのことを研究室でやってたら赤城博士がぶち切れた。仕事はキチンと済ませているのに何故だ。

— 12

エヴァの手足の実験を進めていく。

手足のみを培養し、電気信号を送ってが動くかどうか確かめるのだ。

全身を培養する案もあったが、無号機の失敗で時間がロスしたので部位ごとに分けることとなった。

接続して動作が許容できる基準を満たさなかったら、全身培養に切り替えるかもしれない。

とりあえず今は巨大な手をグーパーさせたり、足を膝蓋腱反射させてみたり、色々と追加実験も行っている。

反射などの反応は無い方がいいのか……？

ちよつと人間の構造に近づけすぎたかもしれん。

そもそもエヴァはパイロットとシンクロしてなんとかかんとからしい。

シンクロはエヴァと操縦者の感覚を同調させることで動きや五感をフィードバックさせる的なサムシングだ。

インダクションモードというプログラミングによる動作補正を優先させる予定もあるから問題ないのかも。

右手の装甲表面を振動させて赤熱させる案が出たが、すぐさま拒否されていた。

まあ、そうなるよな。

パイロットと感覚をフィードバックさせるという話だし。

エヴァは生物由来のパーツの割合が多い。
ぶっちゃけてしまうと、使徒が使われている。

現在、呐喊工事している初号機は第一使徒の下半身を転用している。
ちなみに上半身は封印されているっぽい。

第一使徒由来のエヴァと第二使徒由来のエヴァが存在しているっぽい。

使徒に対抗できるのは使徒だけ、そういうことらしい。

まあ、ちよつとした秘密だか何だかだった気がするが、ゲームしようとしてMAGIに繋いだら見つかった情報だから大したことは無いのだろう。

東ちゃんが昔、エヴァの研究は巨人がいない的な話をしていた。

先人の足跡が無いという意味だ。

いや、存在しているのが技術が、そうまるで湧いて出て来たかのように出現している。論文を書き集めてつなぎ合わせることでわかる不自然さ。

不自然を積み上げれば、飛び石のように技術が高まっているのが浮き彫りになる。

技術のミッシングリンクとも呼ぶべきだろうか、そういった物が存在しているよう
だ。

技術発展の空白期は使徒由来のパーツのせいなのかもしれない。

まあ、全く興味ないんだけど。

夕食時の小話だし。

ISのゲームも更なるバージョンアップを重ね、ついにアーケード版が出るこ
が決
まった。

ゲーム内ではISが500機以下しか稼働していない設定なので、それに合わせた数
の筐体でサービスされるとか。

設定がガバガバですよと優しく指摘されているのかと勘ぐってしまったぜ。

タイトルは『IS vs. IS』だ。

二対二の対人戦をコンセプトに、ブーストや弾数をゲームっぽくアレンジした。

同人ゲーのときの無限エネルギーによる高速軌道などは撤廃したが、家庭用が出たら
レギュレーションで追加できるようにしてもいいかもしれない。

ちよいちよいMAGIを使ったので、出来はおそらく他のゲームの頭一つか二つ分は
抜きん出ているだろう。

バレた。

謹慎喰らった。

もう慣れた^q。

——14

またしても北極ムーブ。

NERV本部はマジで鬼畜だ。

なんでこんな紙装甲の基地で研究しなければならんのだ。

ブラック過ぎだろ、訴えられないだろうか。

で、今回の仕事は第三使徒を組み込んだ兵器を創れという話である。

無茶振り半端ないね。

組み込むということは制御する必要あり、使徒を封印できる呪詛刻印とやらも覚えな

きゃならん。

めんどくせー。

誰だよ、使徒にエントリープラグ刺したやつ。

乗り込むつもりかよ。

無駄に成果が出たから俺らに無茶振り来ちやつたじゃん。

馬鹿かよ死ねよ。

仕事量が半端ない。

エヴァを二機建造、そして第三使徒によるゆりかご創りだ。

まあ、エヴァ一機はそれほど焦る必要もない。

普通に作るだけだから問題もない。

第三使徒から吸い出したデータを転用しとけば一応の体は成せる。

問題はもう一機である。

従来的手法とは完全に逸脱したタイプなのだ。

指令先は本部ではなく、さらに上位っぽい。

なんか用意した素体をベースにエヴァを作れとか。

ええー……。

こんなの俺と束ちゃんでも頭を抱えるわ。

取り出した素体だが、形状が安定しないのだ。

いや、ある意味で安定はしているが思った通りに変化しないというか。

どれだけ手を加えても、同一の形になるんだよなあ。

まるでそうなるように組み込まれているような……。

……設計図の役割を持つ要素を持っているとか？

ぐぬぬ、難しい。

第三使徒のゆりかご、これはもうお手上げである。

まず戦う相手が空にいるため、飛ばないといけならしい。

ふざけんな。

こんな大質量を飛ばすとかどんだけのエネルギーと技術が必要かと。

あとは使徒とか倒せる感じで云々。

ふわつとしすぎい！

NERVとかいうブラックアンドブラック。

給料はとて良いのがなんか腹立つ。

筋電義肢などの要素をぶち込んだエヴァ用の義手などの起動実験を行いつつ、忙しい

日々を過ごした。

北極NERVのMAGIを利用したISが研究者たちでちよつと流行った。

北京支部から来たやつが、ストーリーモードで中国出身のキャラの活躍が少ないと文句を言っていた。

確かに俺も不満だった。一番好きだし。

ただ、東ちゃんがそこら辺は調整したので文句は彼女に言ってくれ。

代わりにドイツは何故か評判が良かった。

ロリ眼帯ヒロインなのだが、ドイツをよく理解しているとかなんとかか。
お、おう。

——15

日本に帰国して待っていたのは、エヴァンゲリオン零号機および初号機の創造である。

そう、創造。

建造ではなくなったのがポイント。

なんと使徒をコピーして培養した物に装甲を取り付けることになったとか。

ええー……。

テンションがガタ落ちである。

今までの研究も意味が無いわけではないが、折角進めてちやぶ台返しとか有りえないわ。

北極でも似たことやらされたというのだからめんどくささが加速度的に高まった。

あつちは何処からか用意されたコアを変形させたが、こつちはブラックボックスとなつているコアを中心に全身を培養していくのだから。

まあ、俺はこころ辺は関係ないから良いか。

骨格のバランスや筋肉の総量からある程度の出力を算出し、再び装甲を組み上げる。

無号機の問題もあるし、ベースは使徒なのでやはり全力は出せないようにしておくべきだな。

任意で装甲の位置を移動させて、出力が上がるような設定もしてあるけど。

出力を上げると、筋力を抑えている制御盤が飛び出たりしそう。

で、素体を使徒っぽいのにしたため、コアをベースに培養したので組み上げていくこととなった。

脳から脊髄までの神経の中樞を機械化し、外部からエントリープラグというコック

ピットをぶち込むことで操作が可能、みたいな感じなのが完成図だ。

態々人間を乗せる必要があるのかと考えてしまうが。

どうやらエヴァは人が乗らないと動かないらしく、特定の子供にしか動かせないよう
だ。

……とんだ欠陥兵器である。

捨てた方がいいんじゃないかと思ったが、使徒を見た経験上、エヴァは必要だと理解
してしまう。

パイロットは……名前はなんだったかな。

ハ、ハヤナミ？

いや、ワシヤナミとかそんな感じだった気がする。

たぶん、外国人なのだろう。

髪の毛が青かったし、肌も病的に白かったからな。

束ちゃんに聞いたら「ハヤナンミレーだよっ！」と自信満々に答えてくれた。

なるほど、ハヤナン・ミレーさんか。

悪くない名前だな。

エヴァ零号機、完成。

長かった。

マジ長かった。

実験試作機のクセに手間をかけさせてくれたぜ。

予算を削りまくって作成したレアアース製の部品で拒絶反応が出た時はブチギレそうになった。

生体適合材料とか探しまくる必要まであった。

細かい神経（エヴァサイズになれば太さも数十センチメートル単位ではあるが）を組み込んだ際にアレルギー反応が起きた時など発狂するかと思った。

エヴァの体内を調べる際など、お薬の気分である。

ドラッグデリバリー（物理）だった。

あとは『IS Vs. IS』がバージョンアップしてNEXTとなった。

筐体の発展などで、ちよつとだけ理想状態に近づきつつあり、瞬時加速（イグニッション・ブースト）などによる技の途中キャンセルなども取り入れた。

そのため、劇的にゲーム展開が加速した。

そしてMAGIを使っていたことがバレて、四課に連行された。

四課はオカリンと愉快なラボメンたちが頑張ってた。

基本武装はナイフだが、規格を大きくしたいという話があったが、エヴァの手とハンドル部分のバランスがうまくいかないので没となった。

N2系統の兵器を携行可能とした武器を企画したが、パイロットを顧みて運用は困難であると判断した。

一応N2ミサイルを発注したが、どうだろうか。

あとは必殺技としてプラズマ砲的なのを考えているとか。

荷電粒子化するためのエネルギーが足りないとか、ATフィールドって何？それでマジでチャンバーを生成できるの？荷電粒子砲を地上で放ってまっすぐ飛ぶ？電子の辿るガイドを作れない？みたいなことで没。

山と積もった使えそうにない試作品と予算の浪費となった。

いくつかは使えそうなのもあったが、本部では許可が出なかつたので、外国に情報を送ってみたいりした。

まあ、悪くないんじゃないかな。

問題は起動が上手くないかないことか。

ハヤナさんがシンクロが上手くないか、起動しないとかなんとか。

そこら辺は関係ない、そっちで頑張ってねとISを製作。

MAGI使ったら北極送りにされた。

眉毛が黒いやつはケチ、覚えた。

送り込まれた先の北極のエヴァが全然うまくいってないと言う悲劇。

二機とも無理に創ろうとするから失敗するんだ。

そもそもコアを変形させるほうは一応の成果を挙げたし、急いでないので従来のやつを作るべき。

というか、変形させた方は邪魔だから別の場所に輸送した。

従来型は手足の動作も不完全、制御も出来ていない、そもそもOSが組みあがっていないという。

パイロットに、戦闘中にOSを書き換えさせるつもりなのだろうか。

命の遣り取りの最中にギヤグを入れさせる無茶振りかな？

会議でとりあえずマニュアルタなどの細かい動作などは切り捨てて義手を取り付け、足も無限軌道か多脚に変更してバランスなどは完全にパイロット任せにし、フィードとかフォワードとかの制御もパイロットにぶん投げである。

納期だけ守るスタイル（キリッ

とりあえず動くようにして、追々改修していけばいいんじゃないかな。

……使徒が襲来するのって来年くらいらしいのだけれど。

——17

帰国して立ち会ったエヴァ零号機の起動実験は失敗に終わった。

起動したし動いたから成功だとは思うが、制御できなかったから失敗らしい。

この実験中に重要なことを知った。

零号機のパイロット、名前がアヤナミレイだという。

もしかして零号機を起動した際に頭を抱えてぶつかってきたのは、名前が違うことを

訴えたかった……？

アヤナミレイが怪我を負い、実験は中止のうえに零号機は無号機と同様に凍結。

怪我しててもL・C・Lの液体で漂っているだけだからいけるっしょと思っただが、ど

うやら他の連中は違うらしい。

まだ実験途中なのに使徒が来たらどうすんだよ（溜め息

しょうがないので完成の目途が立っている初号機の実験にシフト。

パイロットが必要となる状態なので、新規パイロットもしくは予備を回すように要請する。

が、なかなか来ない。

司令に直談判すると、手紙を送ったという謎の返事が。

息子を呼ぶらしい。

急を要する今の状態で手紙っておっさん……。

MAGIを使ってISで遊んだのがバレて謹慎くらった。

ちようどいいので、パイロットを直接俺たちが連れてくることにした。

このままだと何時になるかわからんし。

善意だ、善意100%。

司令は言葉に詰まっていたが、早く乗れば訓練もできるし、エヴァに慣れることもできる、起動実験や追加実験も行える。

良いこと尽くめだ。

とはいえ、個人の意思に委ねるけど。

司令の息子さんが断ったらアヤナミレイを酷使することになりそうだ。

俺はどっちでもいいけどな。

立っているよりも車の運転や俺らの警護をしたほうが楽だろうと、保安部から運転手

やらの人員を連れて行く。

出向いたらビビられたが、非常に心外である。

束ちやんがやり過ぎてるんだろう、やれやれだ。

俺は優しいから普通にお願ひしたら頷いてくれた。

安心だ。

断つたら、エヴァ用の義肢の実証実験も予定していたので安心だ。

代わりはいるからな。

俺たちにもおまえらにも。

だから、仲良くしようじゃないか。

——18

司令の息子さんをパイロット候補として迎えに、束ちやんとドライブである。

運転手は保安部で露骨に顔を逸らしてくれたグラサンだ。

俺は免許持っていないので有り難い。

起動したエヴァがA・Tフィールドという謎現象を発生させられるというのが過去の実験で明らかになっていくから事前にその効果を調べるため、パイロット候補を直々に迎えに行っているというわけだ。

ぶっちゃけ、A・Tフィールドとか謎すぎるんだよなあ。

『他人から自己を守る防衛本能』みたいな感じだし、ふわつとすすぎというか。

まあ、生身でも若干発生しているようなので、パイロットの話を断られたらこの保安部の連中でA・Tフィールドを解除してコア化させる実験をしようと思っただけだ。

ちなみにA・T・フィールドとは『自他を隔てる境界線』のような物だ。

確固たる自分というものを心の何処かで人は認識しているためにヒトとしての形状を保っているが、無くなると境界を失うのだから結果は……まあ、ね？

君たちの運命は一人の少年に託された！

なんてね☆

ああ、心配しなくてもめちゃんと許可取るから大丈夫。

君たちならすぐにでも許可が降りるから翌日には臨床試験に使えるようになる。

保安部は俺の権限なら6%まで許されてるし、簡単に代えが効くってことは補充も早
いから少しくらい無駄にしても……。

って話を伝えていたら運転手の表情が引きつっていた。

何時もの無表情はどうしたのだろうか。

束ちゃんが怖いのかもしれない。

俺がいるから大丈夫だと言ってるのに、やれやれだぜ。

エヴァの三人目の適格者について、諜報部から取り寄せた資料を眺める。

学校の成績は良いが、やや内向的な性格。

チエロの演奏を五歳の頃から行っていて、趣味は料理などなど。

読み進めていくほどに俺と束ちゃんとは全然違う人間性だと理解できる。

まあ、なんとかなるっしょ。

——19

学校に直接出向き、司令の息子さんである碇シンジくんを呼んでもらう。

政府の特務機関です（ドヤア）とか、司令の息子さんである（キリツ）とか、無駄に言葉を飾り付ければ大抵の人は唯々諾々と従ってくれる。

もちろん、この学校の校長と教頭もそうだった。

黒服を並べたのが効いたのかもしれない。

会議室を貸してくれたので、碇くん……だと司令のおっさんを思い出すからシンジくんがいいか、シンジくんを待つ。

横長で無駄に金が掛かってそうなソファがあつたので腰かける。

束ちゃんはずでに飽きたのか、俺の膝を枕に寝てしまった。

五分くらいして扉がノックされたので「どうぞ」と声をかけると少年が入ってきた。

短い黒髪と少し垂れ気味な黒目の中性的な顔立ちだった。

司令のおっさんの血が混ざっているとは全く思えない。

まあ、なんだっていいか。

発汗と瞬きが多い、緊張しているのか。

突然父親の職場の人間が訪ねてきたとか、廊下に黒服がずらつと並んでいたからため、みたいなことを思考に浮かべるはず。

やつぱり緊張しているようだ。

俺には判断が難しい、まあ、いいや。

互いを名前呼びにしようと言う提案の後、パイロットの話を進める……予定だった

が、なんとシンジくんは全く知識が無かった。

手紙は送ったって言ってたよな……？

持ち歩いていたらしく読ませてもらう。

ボールペンでぐちゃぐちゃに線が引かれ、破かれていた。

もうゴミだよな、これ。

紙の断片を眺めて繋がりのある裂け目を合わせれば修復完了。

で、内容は『サードチルドレンについての情報（検閲の際に塗りつぶされたと思われる黒い線）、その余白に書かれた「来い」の文字、IDカード』だ。

……さ、三種の神器かな？

これだと意味不明だよなあ。

一から説明しないとイケないようだ。

頭の片隅で、ドイツからアスカちゃんを呼ぶ予定を組み立てながら説明を始めた。

説明し終わったらシンジくんは俯いていた。

話が長かったせいかなと思っただが、父が手紙を送ってきた理由がパイロットにするためという話のせいらしい。

んー。

まあ、どうでもいいや。

シンジくんの父親である司令がどう思っている知らんが、俺と束ちゃんは純粹に来てほしいと思つているよ的なことを伝える。

「来いつて言うなら行きますよ」、みたいなことを言い出した。

そんなこと言つてないから。

司令も手紙に書いてたけど、来なければ来ないでいいみたいな雰囲気だったからと伝えると何故か俯いた。

首が疲れたのかな？

無理やり連れて行くのは駄目だつて俺は知つているし、束ちゃんだつて知つてるから。

理解もしているし、完璧だ。

「君がネルフに来て、エヴァに乗りたいかどうか重要なんだよ。碇シンジくん」束ちゃんの頭を撫でながら告げる。

「ここにいても誰も君を必要としない、誰も見ない。ずっとそのままだ。誰かの言葉に従うだけになる。ネルフは違う、君を必要としている」

さらさらと赤紫色の髪が、指の間を擦った。

「それに、少なくとも俺と束ちゃんは君のすぐ傍にいて、君を見ていたいと思つている

「よ」

静かに、ゆっくりと言葉を紡いだ。

観察対象はずっと一緒に見ているから大丈夫だよって感じである。

ジツと見られたので見つめ返す。

ポイントは柔らかく笑みを浮かべること、これで大概の対人は解決する。

とりあえず、パイロットを確保できたので一安心だ。

決断したシンジくんを「偉い子だ」と撫でた。

ついでに質問は何かあるかと問うと「二人は、その、恋人なんですか？」と赤くなりながら聞いてきた。

シンジくんは面白い子だわ。

東ちゃんの反応が心配だったが杞憂に終わった。

というか上機嫌だった。

名前で呼び合える仲に落ち着いていたし、珍しく気に入ったようだ。

奇跡ってやつか。

エヴァンゲリヲン3 「YOU ARE NOT ALONE」

— 1 —

シャツを脱ぎ、裸となった白い上半身が外気に晒される。パイロット用に用意されている男子更衣室の空調が上手く働いているのか、寒さは感じなかった。渡された特殊なスーツ、プラグスーツを手取る。これから碇シンジが搭乗するエヴァンゲリオンやその周りのシステムには必要な物だと説明されていた。スーツの手触りは柔らかなゴムの様で、試しに両手で軽く引つ張ると、よく伸びる。柔軟性に優れているようだったが、手を放せば元の形に戻り、皺ひとつなくなっていた。

着替えを進め、ダブついたスーツの手首にあるボタンを押す。シュツと空気が抜ける音とともに、プラグスーツはぴっちりと身体を隙間なく覆った。

シンジは恥ずかしさを感じていた。数日前に十四歳になったばかりで幼いが、羞恥心は覚えている。むしろ人間は歳を経た方が恥を忘れるきらいがあり、幼い方が恥の耐性

は低い。ともすれば、内向的な気のあるシンジには、このプラグスーツを着て人目に晒される実験を行うと考えるとどうにも恥ずかしさを抑えられない気がした。

着替えを終え、脱いだ服を畳み、シンジは己の名前がプレートに書かれているロッカーへと仕舞う。脱いだ時にはシャツは少しだけ汗を吸って湿っていたが、空調で乾いたようだった。

更衣室を後にし、NERVの廊下へと出る。白く無機質な廊下は温かみの一切が感じられない。この冷たさは、父がトップを勤めているからだろうかとぼんやりと考えた。

「ああ、着替え終わった？ サイズは……いい感じだ。資料と写真から判断したけど、どうしてなかなか俺の目も悪くない。何処か不具合とかある？ どっか苦しいとか」

「えっと、大丈夫です」

「それは良かった」

白衣を着た徒花アキハが少年のようににこにこ笑いながら、シンジに話しかけてきた。背はシンジよりも二十センチ近く高いが、背中を屈めているので目線は同じくらいだった。雑草のように短く切られた黒い短髪は清潔さを感じさせる艶を放っていて、やや吊り目がちな瞳は弱い輝きを秘めているようだった。小さく頷きながら、上から下までプラグスーツを眺めている。少しだけシンジは恥ずかしさを感じるが、アキハは意に返さずじつくりと観察していた。

彼の歳は二十六、直二十七になるというが、シンジにはどうにアキハが責任を持った大人の男という印象は抱けなかった。よくて近所のスーパーでアルバイトのリーダーをしている青年程度の責任感だろうか。悪く言えば趣味に目を輝かせる少年、それも幼い子供……。

「ちよつと腕が大きいか……。いや、細くなつたのかな。ご飯は食べてる？ 栄養の吸収が悪いのかもしれないから良く噛まないでダメだよ」

一分ほど眺めて満足したのかアキハはそう告げると、背を伸ばしながら片手に持つていた外套をシンジに渡した。背に赤いNERVのロゴが描かれた、黒いロングコートだった。小さく礼とともに受け取り、プラグスーツの上に羽織った。生地は薄い、寒さを凌ぐ目的ではないからだろう。

「それじゃあ実験に行こうか。座ってるだけだから特に何がどうってわけでもないけど……」

無理な姿勢で少しの間いたたために凝つたのか、伸びをしているアキハ。背中から小さくぱきぱきと音が聞こえた。それがシンジには少しだけ面白かった。緩みそうな顔をなんとか真面目な表情に固定した。

アキハがシンジの両頬に手を添え、顔を近づけてきた。シンジと同じ、黒い瞳だった。それは何処までも深いような黒だったが、小さな輝きも持っていた。輝くような闇。

「緊張してる？ 心拍が早い。呼吸が浅い。表情筋が硬いし、冷たい」

「その……ちよつとだけ、ですけど」

シンジは小さく呟くように返答する。実験への緊張ももちろんだが、今まで人とあまり接さない生活をしてきたことも関係がある。目の前にまで顔を近づけられた気恥ずかしさも強かった。

「なるほどなー」

アキハは頷きながら、シンジの唇に両手の人差し指と親指を添え、ゆっくりと開かせた。

「口も乾いている、緊張が強いようだね。緊張状態としても良いけど、ストレスが異なっているし。どうしようかな……」

シンジは突然のことに驚き、目を丸くしながら「あつ」と小さく息が漏れた。

「ははは、シンジくんは口が小さいね」

恥ずかしさを感じていたシンジは、自分の顔が赤くなるのがわかった。それがまた恥ずかしくて、顔の赤みが強くなっていく。

「顔に赤みが戻って来たね。緊張、ほぐれた？」

恥ずかしがっている気持ちを指摘するような言葉。抑えようとする気持ちと羞恥心、両方の感情がシンジの中で渦巻く。顔が急速に真っ赤になっていく。負の連鎖だった。

「あらら、真つ赤になっちゃった。どうにも緊張が強すぎるようだね。接近接触が苦手か実験が苦手か、なるほどなー」

—2

「これが汎用ヒト型決戦兵器 人造人間エヴァンゲリオン 試験初号機だ。君が乗る予定の機体だね」

紫の鋭角な装甲に覆われた巨大な頭部を背に、アキハが口を開いた。額から一本のブレードアンテナが伸びている。色は紫をベースに、所々に緑の蛍光色が使われていた。

これで敵と戦うというのだが、どうにも正義の機体にはシンジには見えなくて……。

「なんか悪の組織が使つてそうですね」

ついで口を滑らしていた。アキハも開発に関わつていたという話は聞かされていた。気を悪くしただろうかと顔色を窺う。シンジの悪い、とも言えないが、良いともいえない癖だった。自分の言葉に不安になって、紡いだ後で不安になる。育つた環境によつて付随された癖。それはもう習慣ですらあった。

だが、肝心のアキハは特に気にしていないようだった。むしろシンジの言葉に力強く

頷いた様子から、同じようなことを思っていたのかもしれない。

「だよね。人相悪すぎだとは思ってた。ホントは別の予定だったんだけど……」

アキハが白衣の中から、B4のノートほどの大きさの端末を取り出して操作し始めた。ちらりとシンジが横目で見ると、開発途中の装甲などの写真が写っていた。

「最初の予定は……ほら、これ。どうにも強く反対されてね。外観は他の部署に持つてかれてしまったからなあ」

端末に写っていたのは、白いウナギのような頭部。真っ赤な唇は弧を描いており、まるで笑っているようだ。むき出しの歪な歯が、不安を駆り立てる。

「流線型にして攻撃を逸らし易く、また装甲をシンプルにしつつ白くすることで塗る手間を格段に省く。なかなか機能美に溢れていたんだけど」

「今の初号機がいいです」

「そうか」とちよつと残念そうだったが、やはりアキハは気にした様子は無かった。シンジは彼になら少しは無理を言ってもいいのではないかという思いを抱き始めていた。ついで。反対した方々に万来の拍手を送りたい気持ちでシンジは胸がいっぱいだつた。アキハのデザインは、利便性を追求し続けたために敵味方という概念一切を超越したような凄味があつた。一言で纏めるなら「センスが皆無」だろうか。

当初の予定であつた白ウナギを見たあとに初号機を見れば、なかなかカッコいいデザ

インだと気付く。鋭角さは、あの白い悪魔を忘れようとしたためかもしれないが、それが雄々しく頼もしい。

「まあ、初号機は今日は関係ないけどね」

アキハが白衣を揺らしながら歩き始めた。ここに来たのはついであつたらしい。初号機が小さく鳴くように、目が光つた気がした。寂しいのだろうか。シンジはちよつとだけ、エヴァが好きになっていた。

初号機と別れ、五分ほどで辿り着いた研究室には、アキハと同様に白衣を纏つた研究員やNERVの制服を着た職員などが待つていた。機械で構成されている巨大な細長い筒が、部屋の中心に鎮座しており、色とりどりのコードによって様々な機械と繋がっていた。

シンジは己の鼓動が早くなるのを感じた。多くの人に見られることもそうだし、プラグスーツでの恥ずかしさもあつた。だが、緊張の大半を占めているのは未知への恐怖だつた。

見知らぬ物に乗り込む。それが怖い。初号機を見せられた今でも、やはり怖かつた。

エヴァを操縦するコックピットやパイロットの生命管理の役割を兼ねているエントリープラグ内のシートにシンジは腰を下ろした。背もたれが動き出し、腰や背中などに負荷のない角度に調整された。

最初は暗かったプラグ内が、光が灯ったように明るくなった。内部には研究室の様子が見て取れる。透けているのだろうかと思ったが、全天モニターとして映し出されているだけだと告げられた。真剣に機械と向き合っている人もいるが、ジツと見つめている人もいる。やはりシンジは恥ずかしさを感じていた。

「実験用のプラグだけど、本物と同じだから差異は無いと思うけど。まあ、初号機の起動が終われば専用のプラグで実験することになるから、これは今日だけってことで我慢してよ」

プラグ内で何らかの機器を弄っていたアキハがシンジに告げた。鼻歌でも聴こえてきそうなほど、声音は明るい。シンジの気持ちと比較すれば、能天気ですらあっただろう。

よし、と絵心いったとばかりの言葉を漏らした後、アキハはプラグから出て行った。実験が始まるのだろう。鼓動が高まった。

「これを頭に付けるから。インターフェイス・ヘッドセットって名称んだけど、エヴァの操縦って感覚をパイロットと同調させる必要があつてね。で、その時のアンテナみたいな役割をするから」

A10神経との接続がA・Tフィールドと強く関連しているから、ともアキハは続けながら、シンジの髪に流線型の白い髪留めのような物を取り付けた。触れられた場所が少しだけくすぐつたい。

「じゃあ、束ちゃん。お願いね」

プラグ内の壁面がディスプレイとなつているのか、タバネの顔が映し出された。兎の耳を象ったカチューシャが楽しそうに揺れ、眠たげな垂れ目も今は眦を下げて笑みを浮かべていた。

『おけおけ、L・C。Lを注水するからね！ あとシンジくんはあつくんの話を聞いてね！』

タバネの返事のあとすぐ、ゴボゴボとプラグ内がオレンジ色の液体で満たされていく。冷たくも、温かくもない液体だった。不思議な匂いが充満していた。

「うわっ、何ですか!?! タバネさん!?! アキハさん!?! なんですかこれ!!」

事前に説明の無かつた事柄に、シンジは驚く。そもそもNERVに関して、きちんと説明を受けられたことが数えるほどしかない。何もかもが不鮮明。

それでもここに来たのは……。

「説明してないつけ、ごめんね。これはL. C. L. ってやつでLink Conn
ected Liquid?とかいう液体ね。同調接続用液体みたいな意味だけど、ま
あ、正式名称はどうでもいいか。この液体は衝撃を和らげたり、酸素を供給したりと働
き者でね。コイツで肺を満たすことで液体中でも溺れないし、むしろ地上で活動するよ
りも酸素の吸収効率がいいから」

「あの肺で満たすってまさか……」

「深呼吸するみたいに取り込めばいいらしいよ。不安？ ほら、手を繋いであげるか
ら頑張ってみようか」

シンジの手に重ねるように、大きな手が添えられた。

「が、頑張ってみます」

「うん、君は良い子だ」

にこにことしたアキハがそう言いながら、L. C. Lで濡れた手でシンジを撫でた。
髪の毛が湿るのも気にならなかつた。NERVに来たのは、誰かに褒められたかつたか
ら……。

「あの、アキハさん。深呼吸したらいいらしいって言いましたよね」
「言ったよ」

胸部まで液体に使いながらシンジは問うように呟き、アキハも律儀に返事を返す。

「らしいって言うのは、その……」

「うん？　らしいって言ったのは、そう聞いたから。俺も初めてなんだわ。何事も体験しておこうってね」

NERVに来たのは短慮だったかもしれない、シンジは小さくそう思った。

— 4

『ノイズが強すぎます！　先輩、どうしたら……』

『ノイズって何の話……何で注水してるの!?　ちよつと篠ノ之博士、操作は止めなさい！　ああ、もう！　私の話は聞いてないし聞く気もないわよね！　そうよね！　徒花博士は!?　篠ノ之博士を止めさせて！』

『徒花さんはプラグ内です……』

『プラグ内!?　なんで!?　何をやっているの!?』

モニターに映ったNERVの制服の女性と白衣を着た金髪の女性が叫んでいる。問

題が起きたのだろうか、シンジは不安になってアキハに視線を向ける。だが、本人はそれらを意に介した様子はない。

「束ちやん聞いた？ 博士だってよ。初めて呼ばれた気がする」

『うん聞いてたよ！ どうせならあつくんに呼ばれたかったよ！』

「え、そう？ 篠ノ之博士、調子はどうですか」

『順調だよ！ 適正者以外が乗ったらノイズがものすごく混同するって結果が出たね！ あ、でも他人行儀だからやっぱり何時ものがいいかな』

怒っている金髪の女性、反してにこにここと笑顔を絶やさないう二人。気まずさに、シンジはなんだか身が縮こまるような思いだった。

『聞いているの!?!』

「うえーい」

『うえーい』

うえーい、大人なら許されないと返事だ。社会経験の乏しいシンジにもわかる。当然ながら、金髪の女性が青筋を浮かべているようだった。

『ああつもう！ マヤ、いいから取り返して！』

『駄目ですせんばあい……』

『緊急停止は!?!』

『全く信号を受け付けてくれません……』

『まさかまたMAGIを勝手に……!? 実験は中止よ! 聞いている!? 二人とも、中止しなさい!』

「うえーい」

『うえーい』

うえーい。シンジは考えるのを止めた。

「んっ! ごはっ! 肺から吐き出すのが難しいな、これ……」

アキハがげほげほと嗚咽を繰り返しながら、L・C・Lを肺から吐き出す。シンジはすぐに余分な液体を吐き出し、残りは吸収できていたので、余裕があるのかアキハの背を摩る。

「あつくん、タオル用意しといたから!」

「ありがとー。シンジくんもありがとね」

「いえ……」

字面だけならば和やかな会話だった。問題は、金髪の女性である赤木リツコ博士が怒気を浮かべていることか。だが、そんなことはアキハにもタバネにもどうでもいよう

で、無視したまま会話を続けている。

その背に隠れるようにオペレーターの伊吹マヤが体を隠しつつも、少しだけ顔を覗かせていた。

「……二人とも、何故あんなことを？」

会話はリツコの一言から始まった。会話かどうか、シンジには少し怪しかったが。

「何故？ 一体どういう意味で？」

アキハがとんと分らないとでも言うように首を傾げた。タバネも同じようにリツコへと視線を向ける。タバネが時折見せる、無機質な瞳に晒されたマヤは「ひっ」と小さく漏らして去っていった。

「……今日はシンクロテストの予定だったはずだけど、何故アナタもプラグ内にいたのかと聞いています」

「予定を変更して、間に異物を囁ませた際のノイズ観察にしたからに決まっていますが？」

アキハは「何言ってるんだコイツ」と言わんばかりの呆けた表情を浮かべている。その腹立たしい表情がリツコの神経を逆なでる。ついでにタバネも浮かべている。憎さ二倍だ。

「……なぜ予定を勝手に変更したので？」

ああ、アキハは頷いた。本当にわかっていなかったのか、わざと煽っていたのか。シンジにはわからない。わからないが、リツコが怒っているのは手に取るようにわかった。

「被験者であるEVA初号機専属操縦者の碓シンジくんが極度の緊張状態にあつたため、予定を変更しました」

「……緊張はどのような状況でも生じますが」

「衆目に晒された状態でのストレスと、戦闘によるストレスとは異なると考え、今回の実験は慣らしと理解に当てましたが。最初なので体験すること、そのみを目的にしました」

「お分かりですか？」と締めくくった。肩を大げさに竦めるアクションまでおまけした。憎さが二倍の二乗で四倍、さらにタバネも無駄なほど見事にシンクロしていて怒りはさらに二乗の十六倍だ。普通の人間ならブチギレるだろう。

「……計画は配布されてある通りに進める話でしょう」

「変更しました。計画通りいかないのが人生です。いや、大変ですよね」

「……他の研究員や技術者、職員も迷惑を被りましたが」

「この程度は我慢すればいいでしょう。すでにシンジくんはこんなわけのわからない物に乗るのを我慢しているのですから」

にこにこ笑顔を浮かべるアキハ、タバネ。対するリツコは必死に自制し、理性を総動員している。間に挟まれたシンジはちよつと泣きたかった。

「……それは詭弁でしょう?」

「それを言うなら計画だって詭弁でしょうよ、あの杜撰なやつ。完全な後出しじやないですか。シンジくんが来るまで実験開始は未定だった。で、来たら計画書が渡され、その日の内に実験開始とか。突然組んだとしか思えないんですけど」

雲行きの怪しい会話から逃れようと、室内の人員は静かに部屋を出ていく。部屋の隅ではマヤが体を震わせながら、健気にも待っている。が、タバネの視線で行った。

「子供のために大人が我慢する、当たり前のことでしょう。緊張している子供がいたら、何とかするのが当然だと理解していただけますが?」

表情が曇っていくリツコとは対照的に、表情を変えずににこにこ笑いながら「もしかして……」とアキハ続けた。

「赤城博士は人の気持ちかわからないのですか……」

アキハの言葉に続くように「可哀そう……」とタバネが漏らした。気の毒そうな、憐れみとも取れるその表情を浮かべる二人は、まさしくNERVでも他人を理解していないコンビだった。科学的に精神を理解することには長けているが、コミュニケーションに必要とする精神感应能力は枯渇し、同情という感情は存在していない。

そいつらに可哀そうなどと言葉を投げかけられた。リツコは自らの脳内の血管が怒りによって千切れる音を聞いた気がした。理性のリミッターが吹っ飛び、怒りのままに振る舞おうとしているリツコにアキハが待ったをかけた。

「それに……何か勘違いしていますが、我々はお願ひする立場なのですよ。ヒトが撒いたゴミの撤去、その手伝いを個人に押し付けているのですから」

シンジの頭を優しく撫でる、その姿は何処か慈愛すら感じさせた。この二人が人の心を理解しつつあるのではないか、そのために振る舞ったのではないか、リツコにその思いが芽生える。確かに大人には迷惑をかけた、だが、シンジにはどうだ？ 誰も目を向けなかった少年が救われたではないか。

リツコは自らの思考を停止させ、怒りのままに動こうとしたことを恥じる思いだった。

「なので、初めに健康診断を。そしてエヴァについては少しずつ慣らしていくこと、詳しい説明を行うことを提案します」

「それが望みってわけね」

「妥協案です、一応は保護責任者なので。本音としては百機くらいスーパーソレノイドを暴走させて、月面と地下ごとゴミを消し飛ばすか、外宇宙に射出したいところなので実行してもいいかなって思ってますよ。インパクトに耐えたのでこれくらいしない

と……」

「明日から健康診断を行いましょう」

「ところで、MAGIを使ったのも……」

もしかして、と期待が強まる。誰かの心のために、アキハとタバネが持たなかった動機だ。二人が互いのために見事な連携を見せるが、それ以外の一切は行ったことはい。指示に従うだけ、それも面倒そうに。

しかし、今は二人が獲得したかもしれない。ヒトに知恵の実を与えたという蛇のように狡猾で、甘美な誘惑を唆すようなこの二人が。そう思うと今後の人間関係にも変化が……。

「あ、普通にゲームに使いました」

……リツコはドイツのパイロットとも交流していたことを思い出していた。実験の一部だから、それが答えなのかもしれないと己の優秀な頭脳は導き出した。認めたくない現実だとも。

「徒花、篠ノ之。三日間謹慎だから。シンジくんは健康診断からにしましょう、二人が

いなくても問題ないわ」

その事実には苛立ちを覚えた自分は随分と人間らしいのだなとリツコは内心で驚いた。

— 5

三日間の謹慎を喰らった^q。

ゲームしただけなのにやっぱネルフって糞だわ。

確かシンジくんは料理が趣味だったはず。

歓迎の意を込めて用意してもいいが、みんなで作った方が好ましいだろう。

俺も束ちゃんも作れるし、一緒に作ろうかとスパーに向かう帰り道。

今日はよく頑張ったねとシンジくんの頭を撫でた。

精神の安定が重要なのだ。

A. Tフィールドの性質上、孤独の方がいいのか？

でも生と死の揺らぎが強いほうがいい気もするし。

そもそも孤独が強すぎるとデストロドーが強まりそう。

それだとA. Tフィールドを張るどころか、解除されそうだわ。

原作：めだかボックス めだ箱1

— 1

特技は超能力だ。

念動力は天を裂き、発火能力で地を焼き、千里眼は世界を奔る。

まさに俺は特別だった。

誰も追従することのない超能力を自由自在に操る俺は天才だった。

そんな世界の頂点ともいえる俺は、近所の高校に通っている。

しかも普通科として。

屈辱の極みだ。

箱庭学園には全国から天才・秀才を集めてうんたらかんたら。

ちようどいいとばかりに入学するも、一般人のレッテルを貼られた。

忌々しい。

登校義務を免除された特殊な十三組とやらを見に行く。

これで俺より優れてなかったらブチギレてモブサイコ100とか斉木楠雄、島鉄雄状

態になるだろう。

十三組のカチコミだ！

……平戸ロイヤル、だと？

なるほど、さすが十三組だけ。

俺では一生届かない領域に全てがあるに違いない。

その日、平戸ロイヤルという存在を知った俺は普通科の一般人として生きること
に決めた。

普通科で過ごすのも悪くないのだが、平戸ロイヤルの衝撃を知ってしまうと物足りな
く感じてしまう。

そんな理由から、時々見かける十三組の生徒を観察するのが日課になった。

十三組は螺旋がぶっ飛んで、見る分には面白い。

しかも容姿が整っているから目の保養にもなるという嬉しいおまけつき。服装が際どいので着エロも楽しめる。

なるほど、天国は十三組にあつたのだ。

ただ、男はむきむきばかりで楽しくない。

タンクトップ多すぎで、くたばって欲しい。

今、注目しているのは上峰 書子だ。

しよこたんは舌がエロいのでしゃぶりたいです。

あと大天使である行橋も素晴らしい。

懐かれている我様のパチモンみたいな野郎が羨ましい。

みたいなことを引きこもりレベル100の雲仙 冥加と話す。

こいつは口を開くと「日本語でおk」と言いたくなる謎言語しか喋らないので、互いの額をくつつけてテレパシーで会話する。

考えていることが全部筒抜けになる、というわけではない。

プライバシーは重要だし。

喋りたいことだけ伝わるように設定している。

そもそも筒抜けにしているとハイパーおっぱいタイムが発動して面倒だ。

俺はバランス派だから無理。

最初は無言で見つめ合ってテレパシってたが、いきなり鉄球を振り回したりと危ないので、額をくつつけてテレパシーすることにした。

100kgの鉄球が飛んでこようが「さすが念動力だ、なんともないぜ！」とできるが面倒は省く主義だ。

体温が少し高いのか、つき合わせた額が暖かくて心地よいので気に入ったという理由もある。

話す内容は、十三組がエロいとか、おっぱいおっぱいとか、猫可愛いとか、子供は3人欲しいとか、実に普通の話だ。

そういえば究極完全体ヒツキョーミョーガのはずだが、ここ最近毎日通学して勝手に俺の隣に座って授業を受けている。

そのためクラスメートがドン引きしてて近寄って来ないという悲しい事件が起きた。考えてみると友達がいらないから元から誰も近寄って来ないという現実を思い出す。

べ、べつに友達がいるやつらなんか羨ましくないから。

冥加はなんだかんだ可愛いからリア充滿喫できるし、どこか小動物っぽいから癒される。

友達いないことなんて忘れてしまうね！

リアル「僕は友達が少ない」状態だということに気付いて泣きそうだ。
はがない、むしろ儂い。

ちよつと盛った。

少ないというか皆無、全くいません。

涙が出る。

そんなボツチな俺にも友人が出来た。

日之影 空洞という巨漢だ。

気さくでいいヤツだが欠点もある。

俺にははつきりと見て取れるが、俺以外には見えないらしい。

どう考えても脳内友達です、なるほど末期だ。

俺、終わってるな……。

冥加と手を繋いで授業を受けている。

日本語がよくわからないらしいので、内容を伝えるためである。

別に手を繋がなくても思念を伝えるのは簡単だが、冥加は人見知りか激しいのか鉄球をすぐに振り回してしまうのだ。

俺だつて女子と話したいんだけどなあ。

まあ、手を繋いでいると表面上は静かで安静なのだ。

念話では多弁だけど。

おそらく世界で随一の超能力者に翻訳をさせるなど贅沢なやつである。

念話での会話なのでリアルで（ファミチキください）（ごめん。しちきしかない）状態。学校への通り道はローソンしかなかったからしようがないね。

バンズあるからしちきバーガーが作れるっしょ、だから許せ。

そもそもテレポートで一っ飛びのところなのを、家まで迎えに行つてるわけだからファミチキが買えないのは納得してほしい。

クラスメートの話が聞こえてきた。

生徒会がお金をくれるらしい。

大盤振る舞いである。

やったね！

お金のばら撒きなんて、そんな贅沢な話は無かったよ……。

クラスメートでは頭がばんばかばーんしたらヤバいので、隣のクラスの人の脳みそを
読んだ結果、部活の予算を大幅アップできるかもしれないという催しだった。

洗脳してテキトーな部活にもぐり込んで、増えた予算だけ貰うことにしよう。

ちょうど脳みそを弄る練習がしたかった。

隣のクラスの人がばんばかばーんしてるのを見て、そう思ったわけだ。

……力を込めすぎて読み取る際に脳髓の一部を焼いちゃったぜ。

もぐり込むなら人が多い所だろうか。

架空の部活を作るのもいいが、無所属の生徒が急に「らめええ、脳みそが沸騰し

ちやつたよー!!」みたいな事態になって目を付けられるのも困る。

承認させる時に生徒会の役員を脳みそボーンなんてやったら目も当てられない。

いや、片っ端から脳みそを弄ればいいんだけど。

そうなるって練習になるけど終わりがいいんじゃないじゃん（正論）

だから人が多いところで練習と潜入を一緒にやってしまおうという天才的な発想である。

冥加も参加したいらしいが、日本語わからないやつには難しいだろ。

数式とか歴史の知識とかは持つてるのに、未だに国語が全くできないってどういうことやねん……。

国語というか日本語だ。

翻訳すれば国語の点数がめっちゃ良かったし。

なぜわかるかという、俺がテストを受けたら冥加も受けたいと言いついて、別室でわざわざ俺が翻訳しながら2年のテストを解かせるというわけのわからんことになったためだ。

ああ、話が逸れたが冥加は不参加である。

日本語の勉強を始めて「ありがとう」「おっぱい」「ファミチキ」「すき」など、ひらがなのみならずカタカナも書けるようになったが、やっぱり競技への参加は無理だろう。

というかヒツキーに水泳大会は難しいっしょ。

3

雲仙弟の所属する風紀委員がオーケストラ部に注意を云々という話があったので、そこに決めた。

すでに問題を起こしているのだから、その後に問題が起きてもゴミ掃除してくれるってことだしな。

学園は風紀委員による自浄作用のおかげでオートゴミ処理されるといって都合主義。実にありがたい話だ。

オーケストラ部に侵入↓気づいたやつから脳みそぐちゃぐちゃ↓ナチュラル入部に成功。

あまりの自然さに五人の同級生しか可笑しくならなかったわ。

ただ、頭がおかしくなった奴等は楽器を鳴らす音がくっそ煩いのが欠点か。

部長があんまりにもテキトーすぎて騒がしいと怒鳴り、同じ2年である俺に対処を求めてきた。

もちろん、いいですとも！

部長も仲間入りした。

ピクミンを思い出すね。

引っこ抜いたオリマーの後ろを着いていくあれ。

まあ、オケ部の場合は気づいた人や不審に思った人から脳みそを弄るところが違うかなー。

人間の扱いかかなり上手くなってきた。

記憶も自由自在だし、ウルトラ上手に焼けましたー♪みたいな感じで超絶技巧で一部だけ焼いて人間としての機能を失わせることも可能。

うーん、失敗したら戻せないのが難点だなあ。

とはいえ、これでヒッキー冥加にコミュ障呼ばわりされなくて済む。

二秒くらいで全校生徒が親友になれる。

やんないけど。

つまり、裏では俺も生徒会長と同じレベルで慕われているってことっしょ。

水中で運動会するやつが開催された。

生徒会に勝つたら予算が三倍になるというボーナスゲーム。

オケ部は九割が頭おかしいから、俺の総取りは確定だな。

頭おかしい連中が蔓延っている部活は迅速に風紀委員に取り締まってもらいたいわ。自分で思考できなくなっただけ運動能力は高いオケ部の男女二人を引き連れて参加。

もうあれだよ、ラジコン。

一応、こいつらに指示を入力したらその通り動くけど。

指示してないと勝手に排泄とかしちゃうからなあ。

弄りすぎるのもめんどくさい。

最初の競技は水中玉入れ。

プールの底に沈めてある球を拾って云々。

男子にはハンデとしてヘルパーとかいう浮き袋つぽいのが強制装備である。

呪いの装備か。

脱いでも全然エロくない気がする。我らがめだかちゃんに攻略法を教えてください。

肺から空気抜いて球をいっばい集めて放ればいいとか。

なるほどな。

肺を空っぽにした女子を潜らせ、男子が水面から押し込む作戦は微妙だったかなあ。スカイラブハリケーンみたいな絵になってるし、凄くシニール。

念動でぶち込むのも考えたけど、めんどくさい。

濡れるのも嫌なので、プール脇から見守ることにした。

それぞれの部が20点を獲得する中で16点だった。

ぶっちゃけラジコン苦手だから玉入れに四苦八苦した。

命を賭した戦い方にめだかちゃんは感動したのか、鋭い視線を向けてくる。

競泳部となんか言い争ってたじゃん、こっちは意識せずそのままどうぞ。

二回戦目は二人三脚だった。

操作を一括すれば問題ないんで楽勝、当然一位だった。

反則すれすれですまん。

とりあえず怪しまれたら困る。

なので、「オーケストラ部特有の肺活量によるエアダッシュだー!! その様はまるでカービィ!!」と意味不な解説をマイク握ってる放送部のやつに喋らせた。

どんな技やねん。

三回戦はうなぎの手づかみ。

片づけが大変そうだ。

俺なら水ごと蒸発させられるから簡単だけどね。

プールに女子ぶっこんで、うなぎを引きちぎらせて飲み込ませる戦法でゴリ押し。

ラジコン操作が苦手の俺も、これにはニツコリ。

力が強すぎてうなぎを潰して両断しても、飲み込ませれば問題ないからね。

競技終了後、めだかちゃんの熱い視線。

これはあまりの活躍にラジコンオケ部に惚れたか……？

どうやって視線を逸らすか考えていると、競泳部が「世の中は金である」と叫んで、め

だかちゃんが「おまえら絶対に良い奴だから募金しろオラア」ってやってた。

平和だなー。

オケ部の女子がおろろろってうなぎを吐いてると、それをカウントしている生徒会の役員を見ながらそう思った。

最終戦は騎馬戦。

相手のハチマキを取ったらポイント、順位が良ければ高得点、みたいな。

トップを走ってるオケ部が一位で注目されちゃうわー、まいったなーと思ってたらめ

だかちゃんが大体倒してくれた。

ラジコン二人に乗ってめだかちゃんと対峙する。

平和主義者の俺は最初に交渉から入るとしよう。

三十秒以内にめだかちゃんに水に入って失格するように提案した。

守らなかつたら三人くらい殺すと告げる。

騎馬の役員がうるさいが、今はめだかちゃんと交渉中なんでシカトである。

返事はNO、その前に俺を倒すとかどうか。

悲しい。

前提条件が全く違うのに、俺を倒すとか言われても困ります、；

ハチマキの苛烈な取り合いが始まる直前、俺が部外者であることがバレた。

やっぱり我様のパチモノフェイスが悪かったのか。

めだかちゃんは生徒が部員の顔を暗記しているとかどうか。

変態め……。

残念ながら失格になった。

頭くちゆくちゆしようかと思つたが、めだかちゃんが警戒を露わに距離を取つたし、

辞めた。

そもそもファミチキ代のために予算を貰おうと思つた程度だし、練度が高まつた現状

でたくさん脳のそを弄つてもしやあない。

パチモノ我様フェイスのままドヤ顔でクールに去るぜ。

三十秒過ぎてもめだかちゃんか競技を続行してたから見知らぬ生徒を三人殺した。

たぶん野球部とかサツカー部かなあ。

人命よりも競技を優先するとか、めだかちゃんって怖いなあ。

— 5

人死にが起きたのでプールでの部活動が何か月か自粛することになったとか。

生徒会とか教員に責任は及ばなかった。

謎の力が働いているみたいである。

箱庭学園の闇は深い……。

どうでもいいけど、競泳部のもがなちゃんという大天使が生徒会に入っていた。

目つきと体つきが凄くいいよね。

運動部によって育まれた魅惑のプロポーションである。

彼女は競泳部が停止したので生徒会に入ったとか。

悲劇だ。

大体全部めだかちゃんのせい。

そう考えるとめだかちゃんってやっぱり怖いなあ。

そういえば、雲仙弟が大乱闘スマッシュハコニワーズに参戦！した。

なんかめだかちゃんと頑張ってるって戦ってた。

理由はオケ部が悪かったから。

……。

ふう。

風紀委員はちゃんと活動しているから争うのは良くないんだ！みたいな気持ちで見る。
守る。

雲仙弟の放った刺客はだいたい負けた、無傷で。

やっぱりめだかちゃんは聖人やな。

そもそも風紀委員による更生なのに刺客という謎。

雲仙弟とめだかちゃんがバトルし始めた。

めだかちゃん、なんとおっぱい丸出しである。

見れてもあんまり嬉しくないが、学校で丸出しなのだ。

そりゃあ風紀委員も取り締まるわ。

雲仙弟、ワンパンで血反吐を撒き散らして死ぬ。

いや、生きてた。

よかったよかった。

面白かったから動画とった。

その後は頑張って雲仙弟が校舎にめだかちゃんを縛り付けておっぱいを揉み始めた。

昼間の学校でみんないるのにどんなプレイやねん。

お姉ちゃんが見てるぞ。

そもそも雲仙弟は10歳じゃん、羞恥心に負けずにおっぱいを揉めるとか立派なエロ

スに育ってますね。

ドヤ顔で女を校舎に縛り付けて胸を揉む姿の動画を撮っておこう。

風紀委員にあるまじき姿だし。

その後は校舎引き摺ったためだかちゃんに殴られて血反吐を撒き散らし、追い打ちで殺された。

いや、生きてた。

生徒会役員どもが止めてくれたみたい。

良かったね。

ドヤ顔の後に殴られて血反吐である、かなり面白かったからやっぱり動画を取った。ちよつと編集して、ドヤ顔で胸触ったから殴られた、みたいな感じにしたので後でアツプしよう。

冥加がリベンジするらしい。

姉弟って素晴らしい。

そう思つて引き摺られた校舎を基礎から全部直した。

授業中に崩れて、周りがミンチになつたら気分がちよつと悪くなりそうだし、砂ぼこりも舞つて嫌だから。

俺は綺麗好きなのだ。

— 6

冥加が鉄球をボーン、めだかちゃんにズキューン。

熱いバトルだ……ごめん、嘘。

めだかちゃんが取ったのは、避ける必要がないからって鉄球にぶつかっていくスタイル。

へ、変態だー!!

100kgの鉄球にぶつかるとか正気じゃねえ。

やっぱ頭おかしいです。

で、大乱闘スマッシュハコニワーズに柔道の反則女王的な3年が乱入参戦!

冥加は柔道、というか格闘技に詳しくない。

なので、手足を使うなんでもありの競技で全力勝負がマナーだよと教えてあげた。

何度かこくこくと頷くと、全力で鉄球を投げつけた。

鉄球は冥加の動きを抑える枷だからな、外して全力を出すということだろう。

……反則女王が鉄球に直撃したらしく血反吐を撒き散らした。

この学校、血を吐く人がやたらと多くないですかねえ?

めだかちゃんが激おこ↓冥加がワンパンで血を吐く↓俺の神速によって退避の流れ
コンボ。

久しぶりに全力で焦った。

こんなに焦ったのは何時ぶりかわからん。

遊び気分で近所の地震を止めたらチリ沖ですんごいのが発生したときくらい焦った。焦り過ぎたまま全力で回復させたので冥加の寿命が延びたかもしれない。

めだかちゃんとバツチリ目が合ったんだよなあ。

……脳みそ焼くか？

いや、まだ。パチモノ我様フェイスでカモフラージュしてたし。

いけるいける。

まだまだ問題ない。

それにめだかちゃんは究極の性善説を語ってたし、俺くらい一般人ならバレても普通に問題ない。

謝っておけば解決するっしょ。

— 7

十三組の連中はなんか技名つぼいの好きだよね。

あれ自分で考えてるのだろうか。

俺たちの平戸ロイヤルとかがめだかちゃんにぶち殺されてた。

あ、生きてた。

まあ、どっちでもいいよね！

前はこう、何？

ときどき登校してくる十三組の頑張ってる姿に感動できたけど、最近はやまねりなんだよなあ。

他と違うからこそ頑張るみたいなやつもいたけど、他と違うからこそ至高みたいな逃げは良くないと思う（正論）

ちよつと違ってもみんな宇宙船地球号に生きる掛け替えのない仲間なんだよ！ だからこそ普通になろうよ！

うーんこの名言感。

そもそも百人いるし、負ける駄目な奴は捨てて上澄みだけ集めたらもつと素敵になるかもしれない。

やっぱやる気がないなあ。

うん？

負けるってことはやる気があったからこそその結果だろうか。

やっべ。

間違った。

削るのは来ない奴等か。

やつちやつたなあ……。

ロイヤルを失ってゴージャスだけになった俺たちの平戸を見てちよつと後悔した。

— 8 —

可愛くないピカチュウ的なパチモノ我様こと都城がめだかちゃんと接触した。

すごく都合がいい。

なんか死因とかオケ部のあつぱらぱーを調べたためだかちゃんか訝しんでいたからなあ。

可愛くないピカチュウに擦り付けよう。

いや、すでにほとんどを擦り付けているけども。

可愛くないピカチュウの出力が焼けないし。

むしろピチュー以下なんだよなあ。

ちよつと電磁波が強いくらい？

あと電磁波を読み取れる相手にはオートでサトラレが発動しててめつちや可哀そう。

頭の中が中二病だつてみんなにバレバレ。

いや、言動も痛いけど。

まあ、今後の予定としては、

めだかちゃんか勝つ↓ピカチュウが有罪

ピカチュウが勝つ↓すべては闇に葬られる

完璧じゃないか（歓喜）

そもそもバレても不具合がないような……。

超能力で人が死ぬなんてファンタジーは、常識的に考えたら起こりえないし。

なんとなく嫌だつてくらい……。

……植物のような心で、平穩に生きるためにおこう。

きつとめだかちゃんに見られてドキドキして焦ったせいかもしれないね！

普通にしとけば大丈夫でしょ。

十三組の中でも特別な連中はアブノーマルって自称しているし、ときどき呼ばれてもいるんだけど。

自分から変態アピールする奴等ってヤバくね。

俺の変態的な能力は人心支配!!とかエロゲじゃん。

人を勝手に操るとかアイツってサイテーのクズだわ!!

自由意志が伴っていない相手に従われても楽しくないのにね。

— 9

擦り付けるベストタイミングを計ってたんだけど、凄くつまんない。

おっぱいしか見るとこない。

古賀ちゃんが俺の癒しだ。

もういいや。

負けた行橋だけ拾っておこう。

なんでゴイツ、近づいたらゲロ吐いたんだ。

ただ何時もと違ってオープンにしてるだけなのに。

— 10

行橋を殺されなくなかったら、罪を全部認めてからめだかちやんと戦えよ（につこり）

— 11

都城は三人も人を殺したうえにオケ部まで壊滅させた悪い奴だった。

やっぱりなあ。

そうだと思っただわ。

そんな悪い奴が土下座で全部終わらせるなんて許されるわけないじゃん。

有り得ないだろ？

そういうのって普通じゃない。

謝って終わりなら警察はいらないんだ！

それに、謝らなくて済むなら警察はいらないんだ！

だから頑張らせてあげた。

誰だって頑張る姿がやっぱり一番輝いているんだ！

日和った悪役なんて誰も見たくないんだ！

まあ、流石に勝てない勝負をやらせて行橋を殺すなんて理不尽は無かったという俺の優しさ。

行橋は可愛いからね、殺すのはもったいないし。

骨を一本ずつ折っていくのを都城に念話でリアルタイム中継して、こちらの要求を伝えておいた。

行橋への愛がいま試される！

ニコ生っばいね。

俺って流行に敏感でゴメンな？

……都城を最後まで応援したかったけど、大乱闘スマッシュユハコニワーズが開催しちゃう。

なんか普通に喋ってるのに『つけてるやつが現れて十三組をネジでなんやかんややってたから。』

こいつ、今ここで殺さなきゃ（使命感）

大乱闘スマッシュハコニワーズの開催理由。

『』のクマーが十三組に何かしそうで嫌な感じがしたから殺そうと思った。
で、戦闘を開始したのだけど死なない。

なんやこいつ……。

ここの学生らしく血とか大量にまろみ出すクセに死なない。

というか、気付いたら元に戻ってる。

耐性が付いているのかと思っただが、威力がぶれぶれでも大ダメージを受けてるし。

元に戻す不可逆への遡行って感じでもないんだよなあ。

気持ち悪いなこいつ。

途中から念動が消されるようになった。

誰か解説をプリーズ。

ヒントを願ってたら、横合いからめだかちゃんに殴りつけられた。

大乱闘スマッシュユハコニワーズが本開催。

フィールドは地下研究所。

アイテムはネジ。

制限時間、不明。

ストック1。

生徒会役員、十三組、その他もろもろは観衆。

参戦者は俺、『』の死んだほうがいいクマーとか呼ばれた人、あとは乱入者であるめだかちゃんの三人。

なんでこうなった。

——13

めだかちゃんが俺を襲ってきた理由は、都城が脅されてたことをゲロつたため。

日和つた悪役ほど信用ならない物はないね。

ゲロつただけならバレてなかつたけど、クマーと戦闘しててバレた。

とうにか使用している能力が怪しい↓ジョジョキャラ並みの推理↓バレたという経緯があつたとか。

おう、そういう反則やめーや。

バリア無かったら無辜な学生がまた一人失われていたぞ。すでに三人死んでるし。

あ、ロイヤル入れたら四人だ。

そのうち気付くつしよ。

めだかちゃんとかマーの会話が挟まれた。

どうやらめだかちゃんはクマーを肅清したいようだ。

手伝うよ！と提案するも、俺も倒したいとかなんとか。

何故なんだ！

提案を無下にするとか俺が何をしたって言うんだよ！

マジで大乱闘状態に移行。

俺↓クマーを殺したい。

クマー↓よくわからんがネジ刺したい変態

めだかちゃん↓俺とクマーを仕留めたい

めだかちゃん、ちよつとバイオレンス過ぎない？

三人の中で一番危ない人じゃん。

俺はクマーだけだからセーフだな。

めだかちゃん、神速スマッシュを「ばーりあ！」って防いでたら、クマーのネジに突き刺された。

バリア貫通とか反則でしょ。

ネジが腕に刺さると、強化してた身体能力がすげえ落ちた。

なんだこれ……。

——14

身体が重いので念動力で浮きながら戦ったが、かなりイマイチだ。

クマーに直撃させられない。

というか、クマーに照準を合わせたらめだかちゃんに邪魔される。

めだかちゃん、動きが速すぎて狙いが定まらない。うえにクマー、狙いを邪魔してくるキャラ。

クマーはバリア貫通持ちだがウルトラ非力キャラ。

俺はクマーのみターゲットするが、何故か鈍重にされているハイパワーキャラ。

見事に三竦みですね！

広範囲の念動を使うと観衆に当たるので使えない。

もう脳みそ焼き切ろうかと思つたが、焼き切るには触れないと無理。

思考の全てを吹っ飛ばしてから接近して焼き切ろうかと思つたが、吹っ飛ばした瞬間にオートリジエネでも積んでいるのか二人とも即時再生してくるので無効される。

テレポートで真後ろに回つて、脳を弄ろうとしたら身体能力が低すぎてめだかちゃんのカウンターを喰らう始末。

は、反則だよ！

こんなチートは許されぬよ！

めんどくさくなくなつてきたので、クマーとめだかちゃんの位置が重なり合つたら凝縮させた念動をブツパしてぶつ殺そう。

たぶん地下研究所の残りも一緒に削り取れるし、都城も一緒に葬れるから一石二鳥だ。

片手に念動によつて作り出した謎のエネルギー球体を作り出す。

凝縮しすぎて光も通さずブラックホールみたいな見た目だ。

ちよつとこれ、かっこよくない？

めだかちゃんの警戒レベルが上がりまくりで照準が合わせられないんですけど。当たって。

頼むから当たって。

先っちょだけでいいから！

——15

大乱闘スマッシュハコニワーズが閉幕。

ちやんとした手順でクマーがめだかちゃんを倒すと提案。

俺もそれに乗った。

争ってどっちも疲弊してたほうがクマーを仕留めやすいし。

提案を飲んだめだかちゃんが俺に何とも言えない表情を向けた。

クマーにも向けてたけど、それとはまた別種のなんか吐き気を催す邪悪を見たような顔。

失礼なやつだ。

普通クラスの一般生徒になんて目を向けるのか。

ちやんと攻撃してごめんねって謝ったし、殺そうとしてたけど今は諦めましたって本

音トークしたじやん。

真剣十代しやべり場だつてこれくらい本音トークしないっしょ。

あとは学園での死亡フラグを積み立てて死んだ人たちについて問い詰められた。

三人、いや、四人死んだみただけど俺は関係ないってことも伝えた。

大体全部めだかちゃんが約束守らなかつたのと、めだかちゃんがロイヤル倒したせい

で俺がちよつとミスしたくらいだし。

俺つてまつたく関係ないね。

強いて言うなら運が悪かつた。

そもそも証拠ないじやん（正論）

話が終わる頃、めだかちゃんがゲロ吐いた。

流行りなの、それ……？

——16

マイナス十三組とかいう謎組織に編入された。

特別クラスじゃねーのかよ、と世の理不尽に断固として抗議したい。

ハイパー根暗クラス過ぎて困る。

クマーが檀上に立って、席に置いてあるケータイに話しかける的な授業なんだもん。酷過ぎ泣きたい。

そんな普通の俺と違って冥加は満更でも無さそうで吹いた。

ヒツキーには心地いらしい。

クマーと違って俺には冥加がいるんだよばーかばーかと煽ったら、クマーは血涙を流して『』を外してた。

クマーと冥加でババ抜きしたり、人生ゲームしたり、スマブラしたり自由に過ごす。慣れると居心地良くて困る。

クマーの何が凄いつて、俺が超能力でズルしてクマーが絶対に勝てるように調整しているのに負けるって。

ババ抜きなんて、ババを十枚投入したのに、何故か負けてた。

こいつ、ファンタジスタか。

日之影がクマーをボコってた。

よし、そのまま殺せ。

無理そうだった。

もつと頑張れ。

相打ちでいいから頑張れ。

俺の友達である日之影と宿敵であるクマーなら価値的に等価だし。

やっぱダメかあ……。

——17

クマー、たいやきの食い方が超汚い。

生地を引き裂いて餡子ぶちゅーってどんな食い方だ。

餡子だけ食ってろ。

俺と冥加は普通。

だってマイナスとか呼ばれる変態じゃないし。

最初に食べるのは、尻尾か頭かという違いはあるけど。

クリームたい焼きとかハムエッグとかも好き。

クマーにハムエッグたい焼きを渡したら、生地を引き裂いて半熟卵をぐじゅーってしてた。

だからどんな食べ方だ。

手を使うのは普通だけど、ちよつと違う。

やっぱり常識ないね。

何時の間にか増えてたガガンボ？とシブキ？とかいう二人も、ちゃんとお弁当食つて
る不知火とかいうケロちゃんに攻撃してた。

やっぱりマイナスって常識が無いんですね。；

常識がマイナスって意味の可能性が高い……？

つまり、

たい焼きをちゃんと食べられる↓普通

ちゃんと食べられない↓マイナス

完璧だね！

で、たい焼きを食いながら何を話しているかというところ、めだかちゃんをリコールする
署名についてだった。

……んー。

めだかちゃんリコール↓提出者が生徒会長↓クマーを邪魔なく殺せる

いけるやん！

オケ部の署名も集めておこう。

クマーがマニフェストを発表してた。

授業及び部活動の廃止↓ババ抜きしてたから関係ない。たぶんクマーは勉強できないから嫉妬しているためかも

直立二足歩行の禁止↓猫背で歩くか飛べばいい。たぶんクマーは足が遅いからちゃんと歩きたくないのかも

生徒間における会話の防止↓念話がある。たぶんクマーは友達がいらないから悔しいだけかも

衣服着用への厳罰化↓不可視化すればいい。たぶんクマーは女子の裸が見たいむつつりなだけかも

手及び食器等を用いる飲食の取締り↓念動で食える。たぶんたい焼きの食い方を馬鹿にされた恨みかも

不純異性交遊の努力義務化↓冥加とちゅっちゅすれば解決。クマーは相手がないのに大丈夫なのか

奉仕活動の無理強い↓殺すぞ

永久留年制度の試験的導入↓クマーは卒業できるほどテストの点数が良くない。も

しくはピーターパン症候群

半分以上は普通に問題ないんだよなあ。

なんだかんだ言ってクマーは嫉妬が強いけど生徒会長としての器を持っている可能性が高いな、これは。

クマーは頑張らな過ぎるし、他に蔓延してやる気を削ぐような雰囲気を持つてたから殺そうと思っただけど、凄く頑張ってるから問題ないかも。

これは温かく見守るしかないね！

——19

生徒会役員を再編するはずが、何故か大乱闘スマッシュユハコニワーズになった。

みんな戦うの好きだよな。

もつと平和に生きられないのか。

話し合いとかできないのかこいつら。

ドン引きだわ。

人間に与えられた理性的で文化的な手段なのに。

腐女子とヒトキチの毒蛇ステージは腐女子が勝った。

ヒトキチが欠点を補うよつてドヤ顔披露して、腐女子が胸キュンしてなんか腐らせられないからヒトキチ勝利、みたいな。

クマーがなんか険しい顔してた。

お腹こわした？

シブキ？とかいうのとくじらちゃんが寒いところでバトってた。

で、シブキ？は古傷を開かせることができるとかどうとかで、見てる人みんな血がぶしゃーだった。

あんまり怪我とかしたことないから俺は特に何もありません。

冥加をひたすら回復させたくらい。

くじらちゃんが勝った。

やっぱりパンツとおっぱいの勝ちである。

爆弾付けて戦うやつに冥加とセットで参戦することになった。

相手はヒトキチのおかーさんの少女。

これは完全に許されない絵面である。

そもそも学生じゃないじゃん。

ルールじゃねって思って、脳ぐじゅーってして勝った。

ヒトキチも爆弾がボンってなって死んだ。

めだかちゃんが激おこだったが、ルールだから仕方ないじゃん。

誰も悪くないね。

と思ったら生き返った。

ヒトキチ様という聖人が生まれた可能性が高い……？

クマーが頭を抱えてゲロ吐いた。

もうこいつよくわからんな。

と思ったらヒトキチの母親の脳みそを治した。

つまり俺のラジコンを壊したわけで。

もうどうしたいんだ、こいつ。

めだかちゃんサイドも、クマーいいやつじゃねって空気が漂ってる。

それに反して俺への視線ですよ。

マジで険悪。

良い人ムーブしとこう。

日和気味のクマーを蹴り倒す。

ゲロ吐いてようが死体蹴りの手は弱めない。

俺の熱い善人アピールに、生徒会の視線は……険しいままだった。
どうなってんねん。

世の中理不尽だわー。

人の気持ちってよくわからん。

明らかにクマーが悪いでしょ、クマーが。

ゲロってたクマーが何故か俺にお礼を言って、スキルを取ってくるよとか言い出した。

TRPGみたいにこいつらのスキルは生えてくるのか。

とんだファンタジーである。

世界観をもっと考えろ。

原作：ポケットモンスター ポケモン1

ポケットモンスター、縮めてポケモン。

数多の謎を秘めた不思議な生物であり、人間の身近なパートナーでもある。

最上のパートナーと歩む事のできる我々は幸せなのだと思えないうれしい。

—— 1

泣く事しかできなかつた。無気力に生きていたことを悔いた。

弱い自分が、空っぽの両手が、憎かつた。

ただ、ひたすらに俺は無力だつた。

ベトベトンやベトベター、ガーディ、ポニータ、コラツタ、ドガース、メタモン……。

俺の友達だ。

彼らは自身が執拗に狙われながらも幼い俺を庇い、瀕死に陥っていた。

しっかりと掴んでいたはずの宝物が砂の様にさらさらと消えていくように感じた。

ベトベトンが吠えていた。

仲間投げつけられたモンスターボールを半死半生になりながら破壊する。

その背には俺とガーデイの姿。

ガーデイの太陽のように雄々しく、春の日差しのように温かく柔らかい毛は血に塗れていた。

ベトベトンののはすでに限界を超えているのだろう、それでも立ちふさがって、壁となつてくれていた。

傷の痛みに耐えながら、何度も。

そして、苛烈な攻撃に晒され、瀕死となったベトベトンの姿。

俺の声は泣き声というよりも、もはや悲鳴になっていた。

それは広い屋敷に虚しく響くだけだった。

何もない俺が得た投げ所が、食い潰されていく。

喉が掠れ、嗚咽を漏らしながら見るだけだった。

ベトベトンがボールを破壊尽くしていたのだろう。

何人もの男が、友達を抱えて連れて行こうとしていた。

俺に止める手段は無く、何もできなかつた。

ただ、必死に手足をばたつかせて足掻くだけだった。

ポニータが連れ去られるのを黙って見送っていればこんなことにならなかったのだろうか。

一匹の犠牲で、みんなが助かっていたかもしれない。

頑張ればどうにかなるのだと幻想を抱いていた。

俺なら大丈夫だと甘い考えが無かったとは言わない。

それでも俺は黙って見過ごすことができなかった。

はじめて得た友達を見捨てるなんて、俺にはできなかった。

嗚咽と恐怖で身体を震わせ、涙で顔を濡らしながら祈るだけだった。

祈りが届いたかはわからないがトレーナーが現れた。

白衣を纏った大きな背中と燃え盛るポケモンたち。

敵か味方か、判別の付かない乱入者の姿は、幼い俺には限界だった。

意識を手放した俺はそのあとのことをほとんど覚えていない。

気が付いたときも半分ほど錯乱状態だった。

ギヤロツプに頬を舐められた拍子に悲鳴をあげ、カツラと名乗ったトレーナーに笑われた。

何事かと周りを見渡すと白衣に包まれた俺を囲むように屋敷のポケモンが集まっていたことに気づき、やつとのことで落ち着きを取り戻した。

「強くなれ」

カツラさんがポケモンたちに囲まれた俺にそう言ったのを覚えている。

真っ直ぐな瞳に見つめられると自然に頷いていた。

その日からグレンジムでポケモンについて熱心に学び続けた。

ポケモンを理解するように努めた。

進化して言うことを聞かなくなったギャロップ、毒を抑えるのが苦手なドガス、過剰に溶解液を出すベトベター、好奇心旺盛でなんにでもかじりつくガーディ、変身して驚かせてくるメタモン……。

クセのあるポケモンたちと過ごし、育成の難しさに気付いた。

トレーナーの腕は、彼らを如何に理解するかにあるとも。

彼らと本当の信頼を築き上げる頃には、両腕には数えるのも億劫なほどの傷跡が出来ていた。

一つ一つが、積もった信頼の証だった。

グレンタウン。

それが俺が目覚め、育った島の名だ。

カントー地方の南西に位置する、海に囲まれた小さな島。

島の火山の多くが活きており、あと数年もすれば噴火するのではないかとの話題もある。

近くの街から遠く、20・21番水道に挟まれているために海を渡る手段を持たない俺は未だに島から出たことは無かった。

他には、小さなフレンドリイシヨップと優しいジョーイさんのいるポケモンセンター。

危険だと親に注意されるが無視して遊び場として入り浸っていたポケモン屋敷。

御世辞にも多いとは言えない民家。

火山以外は特にこれといった特徴も無く至って平凡な町だ。

見どころと言えば島のどこからでも見ることできる活火山とポケモンジムの二つだろうか。

ポケモンジムはほぼどこの町にも存在することからグレン独自といえれば火山しかない。

棧橋に腰かけ、何をするでも無く水平線を眺める。

雲がところどころに浮かんでいる青空と水ポケモンが優雅に泳いでいる姿、真つ青な海を前にぼんやり過ごすことのできる、俺のお気に入りの場所だった。

膝の上のロココンが、寝る姿勢を探すようにもぞもぞと動く。

くすぐったく感じながら、ゆつくりとロココンを撫でる。

頭から背、そして尾を一本ずつ丁寧に。

指を流れる艶のある毛並みを楽しむように、お日様のようなぬくもりを感じるように。

太陽の光を一身に受けたような見事な金色のロココン、秋の稲穂のように輝く尻尾が揺れている。

気に入った姿勢を見つけたのか、静かに撫でる俺の手を受け入れていたが、やがて穏やかな寝息を立て始めた。

時折、行き交う船から船長や釣り人が手を振ってくれる。

泳いでいる水ポケモンが空に向けて水を噴き、アーチを描く。

鳥ポケモンの群れが見事な編隊を作り、飛んで行く。

変化する空と海を眺め、ロココンを撫でながらゆつくりと過ごすのが大好きだった。

太陽が中天に昇っていることに気づき、カツラさんとの約束を思い出した。

グレンタウンの子供は皆そうだが、小さい頃から世話になっっているし、炎ポケモンを操る姿は幼き頃に思い描いたヒーローそのものだ。

俺自身もカツラさんに憧れを持っている。

ロコンを胸に抱き締めて立ちあがるのと、蹄を鳴らして走り寄るギャロップを視界に捉えるのは同時だった。

カツラさんのギャロップだ。

目の前で立ち止まったギャロップの見事なたてがみを撫でる。

ほどよい暖かさを感じる。

目を細めているギャロップの毛並みをじっくりと楽しんでいると、抱いていたロコンが小さな一鳴き。

時間を掛けすぎたのか、抗議されてしまった。

ギャロップから手を離し、背に飛び乗る。

謝るようにロコンを撫でながらギャロップにお願いする。

嘶きが海へと響き渡り、風のような速さで駆け出す。

風に揺れるたてがみが燃え盛る。

目的地はグレンジムだ。

俺が目覚めたのは三歳になった日だった。

考える、という段階を踏まずに本能による行動が多かった俺の物心がついた頃、とも
言えた。

今でもそれ以前の事は憶えておらず、古い記憶でも三歳の頃を思い出すのがやっと
だった。

その日は高熱を出して寝込み、夢に魘されたのを覚えている。

不思議な夢だった。

自分ではない自分が生きた道筋の夢だった。

夢を見終えると、知識が入り込んできた。

たぶん、夢でみた自分の知識。

直後に頭が割れるような痛みを感じた。

死んでしまうのではないかと思う程だった。

深い意識の混濁から蘇った時、俺は俺を認識したのだ。

ただ、そのとき見た夢は忘れることなく今も憶えている。持ちえない経験、事象の記憶。

こことは違う、ゴミのように溢れる人々の生活。

それらの情報の断片が途切れ途切れに頭を掠めた

そして、突然刻まれた知識は、一度も見た事のないポケモンについても数多の情報を齎してくれた。

ポケモンの図鑑を広げても見つけることは出来なかつた。ポケモンが大半だが、載っているポケモン全てを知っているのもまた事実だつた。

小さな画面に“生きる”数値化されたポケモン。

赤い帽子の似合う、主人公の姿。

全てを、憶えている。

知識熱に浮かされたように、島の研究所に忍び込んだこともあつた。

幼さが見せる活発さと高回転する思考からの衝動だつた。

研究室の一室で見つけた化石を一心不乱に眺めた。

途中、現れた研究員との論議を交わしたこともあつた。

研究所に顔を出しながらポケモン屋敷にも通つていた。

何故か記憶にあるポケモン屋敷はデフォルメ化されており、実際はあまりにも複雑だったために迷子になってしまった。

このとき、ベトベトンに助けってもらった。

初めて間近で見たポケモンは見知らぬ記憶にある姿よりも美しく、雄大で、幼いながらも歓喜したものだ。

夢のようなひと時だった。

夢見心地で、いつも通りポケモン屋敷で過ごしていた。

その日は二階で、以前住んでいた老人、名前の欄にフジと書かれていた人物の日記を読んでいた。

表紙と一枚目の紙に違和感を感じ、剥がすと三階の隠し部屋へと続く梯子の在処が示されていた。

興味本意で梯子を昇り、隠し部屋へ向かうと、部屋を示す場所は一面が壁だった。壁の中が空洞になっているか確認するために耳を当てて小突いてみた。

突然、壁が回転して部屋の中へと転がり込んでしまった。

電源が生きているようで、中に入ってから数秒して弱い光で照らされた。

埃の積もった薄暗い部屋だった。

室内は、実験で使うような、そんな表現ができる設備に溢れていた。

物々しい部屋を見回す。

見たことも無い、人の等身ほどはあるだろうガラス張りの楕円形のポッドがいくつも並んでいた。

そのうちの殆んどが割れていたり、中から液体が漏れ出たりしていた。空のポッドばかりだ。

ポッドには小さく『Mew』と掠れた文字で書かれており、文字の後ろには数字が振られていた。

ミュウと読むのだろう、知識にもその幻のポケモンの姿があった。

どうやらこの部屋ではMew10までいたらしい。

1、2のポッドだけが無くなっていった。

他は無惨にも砕けていたりともではなかった。

部屋の奥から光が漏れているのに気がつき、進むとポッドを満たしている液体の中で輝きながら浮いているポケモンを見つけた。

表記はMew1だった。

しかし、中に漂っているポケモンの姿は、知識のミュウとは程遠い。

疑問に抱きながら、尾が一つの金色に輝くロコンを解放した。

隠し部屋やポッドには心当たりは無かったがポケモンタワーのフジ老人という情報

が脳裏を過った。

同時にロケット団という言葉も得たが、詳しくはわからなかった。

機会があれば調べてみたいとも思ったが。

それから数年経ち、研究員がグレン島から離れたことを理由に俺は研究所に近寄らなくなつたが、ポケモン屋敷に通い続けたため、同世代の友人もいなかったことが両親を困らせていた。

それでも沢山のポケモンに囲まれていた俺は全く気にしていなかった。

学校に通いながら他人とは流されるままに接してはいたが、特別仲のよい友人はいなかった。

結局、十歳のときの事件を経てカツラさんに誘われるまで、両親以外の人間とは殆んど交流しなかつたように思える。

カツラさんのお陰でトレーナーとしてのイロハを学べた。

他のジムメイトとポケモンの論議を繰り返して来たポケモンで模擬戦をしたりと経験を積む機会に困ることはなかった。

謎々マシーンとやらもこの論議を元に改造され、難題が出されるらしいがどうでもい

いことだろうか。

そんな毎日を過ごしていたが、グレンタウンでやりたいことはやりつくしてしまっ
た。

残ったのは、頭に浮かぶデフォルメされた世界の地図をこれから自分の足で確認した
いという欲求のみだ。

このカントー地方を見尽くしたら、他の地方も見たいとも。

将来、不完全な記憶に漂う地図を思い描きながら、鮮明に思い浮かぶ未だ見ぬポケモ
ンたちを探すのも良いかもしれない。

不完全な記憶にある全てを完全なモノにしたいのだ。

この狭い島の外に在る、広い世界を不安定な自分に刻むように。
今は、外に行きたい気持ちでいっぱいだった。

— 4

グレンジムの前に着くと、俺に縁のある人が集まっていた。

見知ったジムメイトや近所の人に挨拶しながら中心へと向かう。

カツラさんが俺に気付き、足早に近づいてきた。

カツラさんとの約束は簡単で、とても難しいモノだった。

単純に言えば、旅をするだけだ。

前から俺のしたかったことだからそれ自体は簡単だった。

難しいのは旅の中で『将来』を見つけることだ。

激励の言葉とともにカツラさんが差出したのは、真紅のトレーナーカード。

明日旅立つ俺に用意してくれたトレーナーの証だ。

一人前と認められた気がして口の端が吊り上り、小さな笑みが浮かぶ。

俺の様子に笑いながらカツラさんが頭を撫でてくれた。

俺自身はカツラさんに憧れを持っている。

だから、グレンジムのジムメイトやジムリーダーになりたいのかと言えばそうではな

かった。

憧れもその勇姿も、もちろん目指す目標ではあるが成りたいモノではない。

心の何処かで島の外に『将来』を見出だしていたのかもしれない。

カツラさんからモンスターボールをいくつかと、かなりの金額が入った封筒を渡され

た。

断ろうとすると、今までやってた給料だと言われて返すに返せなくなつた。

そして、外はグレンのように暖かく無いからな、と呟きながら俺に黒いマフラーをくれた。

顔の半分を隠せるほどの大きなマフラーは暖かく、軟らかかつた。

帰り際に、知り合いから饞別をたくさん貰つた。

人見知りの俺に、よくこんなにも多くの知り合いが出来たものだと思つて驚く。

お礼を言つてまわり、解散となつた。

グレンでの生活が終わるのだと思つたと寂しくなつた。

— 5

家に帰り、両親に旅に出る旨を伝える。

すでに話し合つていたことだ。

何時ものように、静かな食卓だつた。

整理して生活感の薄れた自室で旅に持つて行く荷物を確認する。

見聞を広める旅、日程も期間も決まっていな。

旅に必要な物はすでに用意してあったので、傷薬は大目にしておこうといくら増やすが、すぐに作業は終わった。

一息ついていると、膝の上にロコンが飛び乗った。

思えばロコンとの付き合いも長いものだ。

初めて出会ったときは尾が一つだったが、今では六つに別れ、見事な毛並みを誇っている。

膝の上で寝転ぶロコンの毛繕いをはじめ。

毎日欠かさず毛繕いを行ってきた。

ポケモン屋敷の友達で練習したこともあった。

今では中々の腕だと自負している。

世界を見て回った後は、ポケモンブリーダーになるのも良いかもしれない。

ふと、壁に目を向ける。

人気番組であるポケメディアの抽選で当たった赤をベースにしたキャップ。

ポケモンリーグが制作した、世界に二つと無い貴重な品だ。

倍率を考えることすら馬鹿らしいほどの抽選人数だったらしい。

結局、一度もかぶった事が無かったなと思いつながら手にとった。

軽く、手触りはとてもよい。

耐熱、耐水、耐電……など考えうる最高の丈夫さが使わない俺のせいで酷く勿体無い。飾りにしておくには可哀想に思い、リュックに入れた。結局リュックの肥やしになるのだからかと苦笑いを浮かべた。持つて行かないという選択肢は思い浮かばなかった。最後にスケッチブックと色鉛筆を大事に仕舞った。

— 6

いつもなら寝ている朝早くに目覚めた。

お気に入りの白いニット帽をかぶり、階段を下りる。

顔を洗い、歯を磨き、朝食を食べ、ロコンの毛づくろい。

そしていつも通り、いつてきますと告げて玄関へと向かう。

いつも通り、母のいつてらっしやいという返事を背に家を出た。

眠たげなロコンを頭に乗せてポケモン屋敷で友達との別れへと向かう。

ポケモン屋敷、俺が生まれる前に頭部の寂しさが目立つ初老の男性が自らの研究のために住んでいたらしい。

今は古く所々が朽ちており、中にはベトベターやコラツタ、ポニータのようなポケモンたちの姿を見ることが出来る。

彫像や机などの置物が二つ並んでいることもあり、どちらか一方はメタモンが擬態していることもあった。

近寄ってくるポケモンたちを撫でながら地下を目指す。

ベトベターやコラツタ、ポニータ、メタモンといったポケモンは俺が遊びに来ている十数年の月日の間に増え、なついたポケモンたちだ。

ラツタやギャロップといった進化したポケモンは、俺が屋敷に来る前からいたポケモンで、グレンジムでトレーナーとして励んだ日々で進化した。

地下へ向かう道すがらポケモンたちを撫でながら、10kg近いロコンを頭に寄せながら自分も力が付いたな、などと考えながら歩く。

地下の広い廊下には、ベトベトンがいた。

このベトベトンは初めて出会ったときからベトベトンだった。

ポケモン屋敷のポケモンたちを統率しているリーダーに位置するポケモンだ。

そんな偉いベトベトンだがとても心優しい。

怪しい研究員や怪しい泥棒ルックの男、火吹きの実験をしている駆け出しのマジシャンたちをも優しく見守るベトベトン。

薄暗い屋敷の中でも輝くロコンのか細い鳴き声が耳に残った。

— 7

栈橋へと向かう。

カツラさんはジムを開く前にそこでポケモンと語り合うのを日課にしており、今日も同じだった。

マサラタウンまで乗せてくれると提案してくれていたので、有り難く受け入れた。

リザードンの背に乗り、空を飛んで行くという。

ニット帽を目深く被ってマフラーを巻き直すと、顔がほとんど隠れてしまっていた。

リザードンの背に乗ると力強く羽ばたき、浮かび上がった。

カツラさんに手を振るために振り返ると金色が飛び込んできた。

ロコンが乗り移ってきたのだ。

既に海に向かって飛んでいるためにロコンを降ろすことは出来なかったし、降りる気も無さそうだ。

ロコンに俺のポケモンになってくれるか聞く。

返事はなかったが、六つの見事な尻尾が俺の腕を優しく撫でた。

俺の旅に相棒が増えた瞬間だった。

遠くで炎の柱が舞い上がった。

ポケモンの鳴き声が周囲に響いた。

カツラさんのポケモンたちが炎を上げている。

リザードンが返事とばかりに火を噴き、さらに空へと飛んで行く。

空から見下ろしたポケモン屋敷にはベトベターやベトベトン、ドガース、マタドガス、

ガーディ、ギャロップ、ポニータ、コラッタ、ラッタ、メタモン、ブーバー……友達が

俺を見送ってくれるようだ。

俺の腕に抱き着く太陽が、大きく鳴いた。

最後に島から鳴き声が一度だけ聞こえた。

空は昨日と変わらず、雲一つ無い太陽の眩しい青空だった。

ポケモン2 (改訂前)

— 1

— モンスターボール —

どんなポケモンも一度口を開けば飲み込んでしまう

— 赤いキャップ —

当選倍率は不明

ポケモンマスターを目指す夢見る少年少女の憧れでもある

結局使われないという不運に見舞われたが

これを そうび する とは おそれ おおい !!

【原点】

マサラタウンまではリザードンの背に乗ってから三十分もかからなかった。

俺たちを降ろし、飛び立ったりザードンにお礼を言った。

鳴き声とともに口から火の粉を噴いて返事をしてくれた。

リザードンが見えなくなるまで見送った後、マサラタウンに目を向けた。

デフォルメされた脳内地図では研究所が一つ、家が二つと寂しい町だが実際はそんなことは無い。

純朴で、ゆつくりとした時間が流れている町だ。

大きな研究所を中心として建物が点々と並び、舗装されていない道があちこちに伸びていた。

グレンの町よりも小さいかもしれないな、と内心で呟きながら目的地である研究所へと足を向ける。

カツラさんが研究所を訪ねるように、と言われたからだ。

研究所ではトレーナーIDを発行してくれるそうだが、すでにカツラさんに貰っているので寄る必要はあまりない。

ただ、脳内情報がマサラタウンの研究所がすべての始まりだと知らせてくるので興味を持ったので向かっている。

トレーナーIDは基本的にはジムや研究所、役所などポケモンリーグに所属している機関ならば発行している。

IDはジムバッジの登録やポケモンセンターへの宿泊、パソコンへの接続などが可能なためトレーナーには必須なのだ。

脳内情報では研究所がとても大切なナニかだと言っているがそのナニかがわからなかった。

とりあえず町の中心にある研究所へと向かうことにした。
苦労するほど遠くないはずだ。

ほんの数分でロコンを頭に乘せた俺は研究所の扉にたどり着いた。

こんこん、と小気味良くノックする。

返事は無い。

扉のノブに手をかけてみた。

鍵はかかかっていない。

外で待つのも苦に思う。

中で勝手に待たせてもらうことにした。

ホコリっぽい、乾いた空気。

古い本の匂いが漂っている。

脳内情報とはあまりに違う書籍の数々に目眩を起こしそうになった。

見渡す限り本ばかりで椅子や机が見当たらない。

奥まで足を伸ばすと漸く長机を見つけた。

大きな卵が置かれていた。

そう遠くない壁際には治療装置とパソコン、見たことの無い手のひらに少し余るくら

いの四角い灰色の機械。

パソコンの画面を覗き込む。

電子メールをしていたらしい。

相手はウツギという人だ。

脳内情報ではポケモンの進化の権威だったはず。

メール内容はポケモンじいさんが見つけた卵についての話でその卵をオーキド博士

に送ると書いてあった。

なるほど、机の卵はポケモンのタマゴらしい。

脳内情報では育て屋に預けるだけで手に入るらしいので貰っても構わないだろう。

モンスターボールに入れようとするが反応しないのでマニュアル(挟じ開ける)で詰

め込んだ。

次に、灰色の機械を弄ってみる。

ロコンに向けると小さな画面に情報が流れる。

ロコン・きつねポケモン

せいちようすると……

これしか書かれていないが、多分ポケモン図鑑なのだろう。

脳内情報ではトレーナーの必須アイテムだったはずなので拝借する。

赤色ではなく、灰色なのが微妙に気になった。

今の服装はジーパンと半袖のTシャツ、マフラー、ニット帽とちぐはぐだ。

グレンでは春はとつくに過ぎて暖かくなってきたので大丈夫だったが、マサラは肌寒い。
い。

目についたクリーニングの袋に包まれた白衣を戴いたが気にしないで欲しい。

上着代わりに着ているがかなり良い。

気休め程度かと思っていたがどうやらこの白衣は上物らしい。

動きの邪魔にもならず、肌触りも悪くない。

何よりも暑くならない程度に暖かいのだ。

上機嫌で机を漁る。

カメラを見つけたのでロコンを頭に乘せたまま一枚写真を撮った。

パソコンからガリガリと音がした。

パソコンを見ると入力画面が出ている。

打ち込むのも面倒なのでOKクリック。

再度確認されたがクリック。

パスワードの入力画面になった。

脳内情報を探るが目ぼしいモノは見つからない。

オーキド博士も歳のはずだ。

多分、名前とかだろう。

脳内情報から拾ってきた名前を打ち込む。

y u k i n a r i、と。

認証されたようだ。

……マジか。

ガリガリと出てきた一枚のカード。

グレンで年上のジムメイトに見せてもらったIDカードと酷似していた。

思わず目的の品を手に入れてしまった。
ポケットに仕舞い込んで、扉へ向かう。
ここにはもう用は無いのだから。

外に出て深呼吸をする。

ホコリ臭い空間から解放されて清々しい気持ちになった。

ロコンも、太陽のような金色の尻尾を大きく振りながら俺の真似をして深呼吸していた。

一息つくくと、またロコンは俺の頭に飛び乗った。

昔から俺の頭の上は彼女の特等席なのだ。

柔らかな毛並みを撫でると嬉しそうに鳴いた。

視線を感じて振り向くと十歳くらいの少年がロコンを凝視していた。

不思議と引き込まれてそうになる黒い瞳の少年。

何故か親近感が湧いた。

ロコンを撫でるかと問うが首を横に振られた。

ポケモンは好きかと再度問うも首をかしげられるのみ。

自分のポケモンが欲しいのかと聞くと呟いた。
興味がある、と。

他人のような気がしないこの少年を連れて近くの草むらへ向かう。

脳内情報ではポッポ、コラッタといったポケモンが出るはずだ。

リュックから取り出したビスケットを置いておく。

暫くすると草むらが揺れた。

甘い匂いに釣られて来たのだろう。

黄色い尻尾がピヨピヨと左右に揺れている。

さて、こんなポケモンがいたのだろうかと見ていると少年がビスケットを手を持っていった。
逃げられるのではないだろうかと思っただが杞憂だった。

ピカチュウが飛び出し、少年に抱き着いたのだ。

少年は少し驚いていたがビスケットをピカチュウに与えていた。

この一人と一匹の姿は妙に様になっていた。

ビスケットを食べ終えたピカチュウが少年を眺め、俺に視線を向けた。

そして頭上のロコンを見ると何か琴線に触れたのか目を輝かせ、ピカッと一鳴きして少年の頭の上を陣取った。

またも少し驚くだけで無表情に戻る少年が面白くて笑ってしまった。

ピカチュウの静電気のせいか髪の毛がぐちゃぐちゃになっている少年を見て思い出す。

都合良く持っていた赤いキャップをリュックから取り出して少年に渡す。

少年は俺が見た中で一番驚いていた。

あげると伝えるといいのかと確認されたので構わないと応えた。

頭が大変だしな、と付け加えたのは俺の可愛くない茶目つ気だ。

少年は俺に礼を言つて一度ピカチュウを抱え、キャップを被った。

無表情だった少年が微笑んでいるのを見て逆に驚かされた。

脳内情報の一つ、このカントー地方を表す白黒の世界で何時も記憶の中心にいる彼と少年が酷似していたからだ。

名前は確か……。

思い出す序でに少年に名前を尋ねる。

思い出すのと返事がくるのはほぼ同時だった。

『レッド』と。

嗚呼、彼がこの世界の主人公か。

継ぎ接ぎだらけの記憶で理解した。

親近感を持ったのは一時期、俺は彼だったから。

呆けている俺を変に思ったレッド君が訝しげに俺の顔を覗き込む。

ぼーっとしていた、と軽く謝しておく。

頭上のピカチュウはご満悦だ。

レッド君にモンスターボールを渡しておく。

仲良くなったポケモンを手持ちにしておかないと他の人に捕まえられるから、と説明して。

そろそろ発つことを伝えるとレッド君に何をするのか聞かれた。

特に何も決めていない、ただ将来を探していると答えておく。

レッド君はやりたいことが無いらしい。

俺はポケモンマスターでも目指せばいいと言っておいた。

脳内情報からすれば確実になるだろうし、なれる力もある。

レッド君は何故か何度も頷いていた。

不思議に思いながら、別れを告げて背を向ける。

レッド君が小さな声で別れとお礼を言ったので後ろ手に手を振った。

またね、と。

レッド君も大きな声でまた今度と言った。

トキワへと向かう道のり、ロコンを撫でる。

この世界の主人公を見てしまった。

不確かな記憶から漠然とわかってしまった。

もしかしたら自分は彼にただ赤いキャップを届けるためにいたのではないか、自分の

役割を終えたのではないか、等が頭を廻る。

役割を終えた脇役はどうなるのか。

自分の旅はここで終わりではないか。

恐怖を隠すようにロコンを執拗に撫でていた。

そんな俺が心配になったのだろうか。

ロコンが頬を舐めたことにより正気に戻った。

いつの間にか、トキワのポケモンセンターの前だった。

今日は此処に泊まるのでしょうか。

疲れた頭は限界だった。

『原点にして頂点』

ポケモンセンターの宿泊用の部屋で頭を過つた言葉は的確に表されていた。

俺の原点で、そして頂点でもあるのかもしれない。

頂点を過ぎた俺はただ落ちるのみなのだろうか。

不安で震える俺の胸に抱かれているロコンは温かかった。

撫でていると自然と震えが治まる。

俺はどうなるのだろうかと思いつながら窓に目を向けた。

満月が空に浮かんでいた。

本音を言えば不安だ。

でも、寂しくはない。

不安なときでも助けてくれる太陽のような相棒の彼女がいることに喜びを感じた。

どうやら、今日も安心して眠れそうだ。

撫でたロココンの毛はやはり柔らかかった。

窓から射し込む月光が俺とロココンを包んでいた。

——2

——ポケモンセンター——

ポケモンリーグに所属する機関。

ポケモンIDがあれば無料で宿泊と治療、パソコンの使用などのサービスが受けられる。

シャワーすら無料。

食事は予約制で有料。

職員はジョーイと呼ばれる。

殆ど女性。

職員になるには難しいがカントー中の少女の夢見る職業。

ゲームのように一秒で完治とはいかない。

——マサラの研究所——

オーキド博士の研究所。

なんかの権威として凄いらしい。

赤緑青ver.ではオーキド先生と戦える改造コードがある。

手持ちは選ばれずに残った一匹と……。

知ってた？

【トキワを歩く】

目が覚めた。

ボヤけた視界。

少し微睡みながらも天井を見つめた。

普通の天井だった。

徐々に覚醒する意識。

トキワシテイのポケモンセンターに泊まったことを思い出した。

グレンの外に出てから初めての外泊だった。

ポケモン屋敷やジム、研究所、ポケモンセンターなどには泊まったことはあったがグ

レンとは何かが違うと思った。

緊張していたのか少し痛む身体を伸ばす。

焦っていたのかもしれない。

不安だったのかもしれない。

昨夜の事を思い出しながら服を着る。

ニット帽とマフラー、白衣は室内のため着ないでリュックに入れた。

継ぎ接ぎの記憶や出所不明のポケモンの知識、これらの脳内情報に存在する中心人物。

突然の出会いに混乱していたのだろう。

そう心に折り合いを付けて未だに眠っているロコンを抱える。

今日の朝食はなんだろうか。

空腹を刺激する香ばしい匂いが漂ってくる。

ピカチュウの帽子やTシャツ、きぐるみを着ている人ばかりだったのを不思議に思いながら廊下を歩き、ロビーへと向かう。

匂いに釣られて起きたロコンに朝の挨拶をする。

あくびの返事に笑いが零れた。

すべてのポケモンセンターには宿泊施設がある。

このトキワシテイのポケモンセンターも例外では無い。

今はジムリーダーが留守にしているし、そうでなくとも地方の外れの片田舎のここで泊まるトレーナーは少ない。

今もロビーにいるトレーナーは俺だけだった。

ポケモンセンターはトレーナーIDがあれば宿泊費は無料になる。

あまり宿泊費が高いわけでは無いがタダを甘んじて受けるのが旅するトレーナーの性なのだ、まだ旅にでて一日のへっほこでも。

シャワーや治療も無料で行ってくれるが食事は別料金。

前日に朝食と昼用の弁当を頼んでおいた俺はロビーで受け取った。

こういったポケモンセンターのノウハウはグレンのジョーイさんや訪れたトレーナーに教わったので一通りは心配ないのだ。

朝食はシチューと焼きたての白いパン。

おかわりは自由。

ジョーイさんの料理の腕は何処のポケモンセンターでも素晴らしいようだ。

ロコンを待たせて機嫌を悪くさせるのも損だ。

食事の前に手を合わせて一言、いただきます。

ロコンが短く鳴き、パンをかじった。

食事を摂りながらテレビに目を向ける。

ニュース番組のようだ。

マサラタウンの研究所で窃盗があつたらしい。

研究中の資料と試作品が盗まれたとか。

ポケモンに乗って逃げられたら大変だろうなど内心で呟いた。

外に一台のバイクが停まり、ジュンサーさんがポケモンセンターの中に入ってきた。マサラタウンの窃盗でポケモンポリスが動いてるらしい。

事情聴取をして回っているようだ。

俺も聴かれたので答えておいた。

旅をしていること、次は森に向かうこと、グレンから来たことなど。

礼を言われたので気にしないでくれと返事をする。

特に気になることは無かったよう。ジュンサーさんはバイクに乗って何処かへ走り去った。

その姿を見送ったあと、ジョーイさんに挨拶を済ませた。

ロコンを頭に乗せてポケモンセンターを後にする。

もちろん、昼食の弁当は忘れない。

脳内情報ではトキワジムのリーダーは七つのバッジを集めないと何故か帰って来なかった。

このトキワジムのリーダーも同じく留守にしているらしくジムも閉じたままだ。

ジムを開く日にはポケネットで公開されているのでその時ばかりはポケモンセン
ターも賑わうらしい。

連絡もあるし、七つのバッジを集めないと挑戦権はないのでトレーナーも挑む少ない
し、ジムリーダーとしての仕事は果たしているので文句も殆どないと教えてくれた。

サカキさんという名前のスーツの人がトキワジムの前で。

脳内情報ではジムリーダー、ロケット団、サカキ様などのキーワードを得るが話して
いても悪い人では無さそうだ。

むしろサカキさんとの話しは面白く、軽快に会話が進む。

俺のポケモン知識にもキラリと感じる知性でテンポが良くなる。

ロコンを見て驚いていたが珍しい色だからだろう。

名残惜しいが長居していると今日中にニビに着けなそうなので暇させてもらう事
にした。

機会があつたらまた話をする約束をして。

トキワからセキエイ高原までの道のりであるチャンピオンロードに行くことができ
るのでトレーナーも多いのではないかと思われるがそんなことはない。

脳内情報では全開だった門は一年に一度だけ開かれるのだ。

とは言えバッジを八つ集めることができるトレーナーはかなり限られている。

数多くいるトレーナーの一握りがバッジを手にし、さらに一握りが八つのバッジを集める。

更にチャンピオンロードで年に一度だけ開催されるトーナメント。

これを勝ち抜いた三位までのトレーナーが四天王への挑戦権を得る。

因みにトーナメントはポケメディアで生放送され、その期間、この地方は熱気に包まれる。

チャンピオンロードでトーナメントを直に観戦する場合は抽選次第だ。

この時ばかりはトキワも賑わうのだがゴミや騒音が問題らしい。

トキワは高くない建造物ばかりの街だ。

街のどこでも西を向けばチャンピオンロードに繋がる門のある建物が見える。

観光の名所にしようという計画があったらしいが面白味がどこにも無かったために計画は頓挫した。

ダラダラとし過ぎて野宿となるのは御免なので足早にトキワを離れる。

途中で酔っぱらいを踏んだが、日が出てる時間から酒を呑む余裕があるのならば、踏んでしまっても構わんのだろうの精神で乗り越えた。

日が暮れるまでにトキワの森を抜け出ておきたいがジョーイさんの話によると想像よりも広いらしい。

遭難者は出ないが迷ってしまうと野宿になる可能性も出てくるとか。

飛行できるポケモンが少し羨ましく感じながら森の入り口へと向かった。

森の入り口、地下通路、大きな街同士の間、チャンピオンロードへの道のり等の入り口と出口はゲートに挟まれて塞がれている。

間違つて入らないようにするためだとか、ポケモンが縄張りを拡げないようにだとか言われている。

例に漏れず、トキワの森へはゲートの入り口から行く。

半ばじいさんばあさんの憩いの場に様変わりしてはいるが一応、機能しているので問題無いだろう。

ジジババに囲まれやたら甘ったるい菓子を食わされているジュンサーさんを横目に捉えながら森に足を踏み入れた。

濃い緑の香りと土の香りは、この森が人によつて開発されていない事を示していた。

森は広いうえに草や木が生い茂っている。

一応歩道はあるが歩き易いかと問われれば首を傾げてしまう程度のものだ。

グレンは自然が少なかったので慣れない森を歩くのは少し不満が溜まる。

現れる虫ポケモンは大きく、はつきり言つてキモい。表情に可愛いげがあるベトベターやベトベトンが大丈夫な俺でも厳しい。

脳内情報のデフォルメ凶鑑の虫ポケモンは愛嬌があるのだがキヤタピーとビードルは体長が30cmもあるのだ。

ぐねぐねと動く姿は薄暗い森の中とあつて背筋が寒くなる。

トランセルやコクーン、ポツポやオニスズメを見かけるとガリガリと音を立てるよう
に削られた心が癒される。

それはロコンも同じらしい。

むしろロコンのほうが辛いらしい。

自分の半分くらいの大きさの虫と戦うことになる。

最初は怯えていた彼女は次から次へと現れる虫ポケモンに、キレた。

火力を抑えることもせず、焼き払う姿は凄まじいものがある。

—— 焼き払え!! ——

—— 腐ってやがる!! 早すぎたんだ…… ——

みたいな事が頭を過つたのだ。

電波を受信するように不安定な記憶が蘇るのは勘弁願いたいものだ。

森で火を使うのは良くないかもしれない。

だが、敵を一掃する様は気持ち良く感じる。

ポケモンバトルの相手は虫ポケモンを捕まえに来たり捕まえた虫ポケモンを使う少年ばかり。

ロコンは見るのも嫌とばかりに焼き尽くす。

時々現れるピカチュウ入りの服を着たトレーナーもいたが結末は同じ。

ベロリンガとか出しつばなしの口を焼いたが大丈夫だろうか。

—— 汚物は消毒だー!! ——

…… 何故だかロコンから世紀末のモヒカンを幻視した。

ロコンの燃やしつぷりが爽快過ぎた。

あのトレーナーの虫ポケモン、死んでるんじゃないだろうか。

…… まあ、大丈夫だろう。

露骨にロコンを頭に乗せて、炎ポケモンをアピールしてるのに挑んでくるほどのトレーナーや虫ポケモンたちだ。

耐熱に自信があるのだろう。

焦げた臭いを無視して奥へと進む。

道に迷ってしまったが太陽の位置から方角を判断して適当に進む。

なあと、死にはしない。

接近してきた耳障りな羽音を撒き散らすスピアーをロコンが蹴散らす。

虫ポケモンと対峙するのすら億劫になったようで俺の頭に乗ったまま戦っている。

ロコンは火も吹くが、基本的には炎の玉を操って戦う。

ニット帽や髪の毛は焼けないがすぐ近くに発生する炎は少し熱い。

瀕死のスピアーを無視して突き進むと開けた場所に出た。

そこだけ木が生えておらず、日光が一面を照らしていた。

綺麗な花畑だった。

花畑の一角に座り、昼御飯を取り出す。

ロコンを膝に乗せて、サンドイッチを食べる。

ふう、と一息ついて改めて景色を眺めるが何度見ても見事な花畑だ。

途中で木から垂れ下がるコクーンやそこらを這っているビードルを焼いて来たのを
思い出した。

なるほど、此処等は縄張りだったのかもしれない。

俺には関係無いけどな、とサンドイッチを飲み込み、お茶を啜る。

休憩として花畑を駆けるロコンを眺めることにした。

腹も膨れたのでニビを目指して再び歩く。

虫ポケモン出現↓焼く↓歩くを繰り返し、時折現れるトレーナーも蹴散らす。

ピカチュウ教みたいなの奴らも同様。

ロコン無双。

出口のゲートに入る。

ジジババに囲まれたジュンサーさんはテンプレなのだろうか。

微妙な疑問を抱きながら通り過ぎる。

無理矢理ベタバタしてお菓子を食べさせるのは何処のジジババも同じなんだろうか。

ニビに着いた頃には日が傾いていた。

朱色の夕日が輝きを主張しているのがとても煩わしい。

虫ポケモンに囲まれて疲れた俺がポケモンセンターに駆け込むのは当然の結果だろう。

ロコンも疲れたのか半分寝ている状態だ。

宿泊の手続きを済ませて今日の夕食と明日の朝食、弁当を頼む。

ポケモンセンターで作って貰った弁当の空箱を他のポケモンセンターで返せるとい
う魅力的なシステムがこの弁当にはあるのだ。

欠点はあまり知られていないということ。

部屋に荷物、ニット帽、マフラーを置き、鍵をかける。

完全に眠っているロコンを抱き締めながら夕食を食べにロビーへ向かう。

夕食時に流れるニュースを眺める。

チャンピオンロードでのトーナメントの話題で盛り上がっていた。

もうそんな時期なのかとカレーライスを頬張る。

ロコンは匂いで目が覚めたようで今は飛び付くように食べている。

汚れた顔を拭つてやりながら俺もスプーンに乗ったカレーライスを口に運ぶ。

マサラでの窃盗事件に兆しが見えてきたらしい。

そんなことよりもロコンの汚れを拭うほうが今の俺には重要だ。

嫌がるロコンとともにシャワーを浴びて、部屋へ戻る。

疲れが一気に出たように感じてベッドに倒れ込む。

泊まるトレーナーが少ないので今日も個室だ。

ベッドで飛び跳ねているロコンが俺の胸に飛び込んできた。

そういえば、と思い出した。

ロコンを腕に抱いたままベトベトンに貰った炎の石をリュックから取り出す。

ロコンが俺の腕から飛び出して部屋の隅へと逃げるのを不思議に思いながらも石を

固定して丈夫な紐で巻く。

綺麗な飾りが出来ただろうとロコンに見せ、首にかける。

目を丸くして驚くロコンが可愛くて頭を撫でる。

数分して気を取り直したロコンが負けじと頬を舐めてくるのをくすぐったいと感じながらベッドに倒れ込んだ。

毛布にくるまり、ロコンを抱き締めながらボンヤリとしていた。

俺は何をすれば良いのだろうか。

夜、一人になると考えてしまうのだ。

その日は昼間の疲れからかすぐに寝付いてしまった。

— 3 —

—— フレンドリイショップ ——

トレーナー向けの道具も売っているコンビニのような店。

シルフカンパニー製の道具ばかりで高い。

もつと財布に優しくなって欲しいものだ。

ポケモンリーグ公認。

——ポケモンの技——

四つだけのわけないじゃない。

ポケモンが思い付いたり、練習で得たり、トレーナーの指示から新しい技を習得するのだ。

ただし、技マシンで覚えさせられる技は四つ。

機械を使うだけで新しい技を覚えるとか危険な香りがする。

【にびのまち】

ロコンを頭に乗せ、ニビを歩く。

何時も通り、ニット帽に顔を埋めて寝ている。

朝食を済ませ、弁当を受け取ってポケモンセンターを後にしたのは先程のことだった。

ニビシティはマサラは勿論のこと、トキワよりも広い。

島であるグレンよりも小さいが森と山に囲まれている地形を考えると余りにも広いのだ。

一昔前まではトキワと同じ規模の街だったが、近頃では農地の拡がりを見せており、住宅街から外側は畑だ。

農作業している人の大半がタمامシやヤマブキと言った都会から移住してきている。

畑仕事に先見を見いだしたり、単純に老後のためだったりと理由は様々だがニビは賑わいを見せている。

俺には関係ないが、研究所や博物館も魅力的らしいのだ。

主にタمامシ大学などから積極的に誘致しているらしい。

ただ、ポケモンセンターに泊まるトレーナーの少なさからジムへの挑戦者は少ないらしい。

グレンと似た僻地にあるジムに来るためには騎乗できるポケモンに乗って移動しないと手間がかかる

そんな理由から基本的にはニビのジムは後回しにされがちなのだ。

脳内地図とは似ても似つかないニビを眺めながら散策する。

これからの予定について頭を捻る。

これでも色々と考えていることはある。

ジムに挑戦するか否か。

単純な話、面倒なのだ。

バッジを集める気も、マスターを目指しているわけでもない。

手持ちのロコンから考えてもメリットは少ない。

次に、山越えの事だ。

ハナダに向かうならばお月見山を越えなければならぬ。

それほど危険では無いが、野生のポケモンも多く出現するし、迷ってしまうとすぐに

は出られない。

順調に進んでも確実に野宿することになる。

どうしようかと呟いてみる。

案の定、眠っているロコンから返事は無かった。

揺れる頭の上でよく眠れるな、と笑ってしまった。

悩んでいても仕方がないのでフレンドリイショップで食料を買う。

日持ちするインスタント食品ばかりになるのは当然だった。

グレンから持ってきたモンスタールボールの技術を応用している水筒のお陰で水に困る事はないし、実は傷薬の持ち歩き易さにも関わっている。

この技術はストレージと呼ばれ、この技術が応用された道具をストレージタイプと呼んでいる。

普及しているストレージタイプの道具の殆どがシルフカンパニー製と考えると市場の独占があまりにも酷い。

リュックも欲しかったが値が張りすぎて手が出なかつたので今はストレージ無しの普通のリュックだ。

ストレージタイプのリュックは軽いし大容量、そして持ち歩きが楽なので駆け出しのトレーナーの憧れでもある。

ロコンも俺と同じ物を食べるのでポケモンフードは買わない。

グレンでもジムや家でよく同じご飯を食べていたのでポケモンフードの味は苦手らしい。

ベトベターやベトベトンは海のヘドロを食べていたし、ポニータはポケモン屋敷内の地下に生い茂っている異常に速く成長する植物を食べていた。

食べ物に関しての環境は悪くないのかもしれない。

ワインデイが何を食べていたのか気になったが知る術は無かった。

人とポケモンが農作業をしている様子を眺めながらのんびりする。

完全に寝入っているロコンは膝上に乗せた。

起こさないようにブラシをかける。

少し熱心にかけてすぎたようで時間を忘れてしまったようだ。

既に農作業をしていた人やポケモンは昼食を摂っていた。

ロコンを揺すって起こしながら弁当を取り出した。

フタを開け、中の匂いを嗅いだロコンは直ぐに目を覚ました。

昼食はハンバーガーだ。

ロコンは我慢の限界らしく上目遣いでこちらを見詰めてくる。

その姿が可愛かったので頭を一撫でし、一緒に食べることにした。

昼食の後は農作業を横目にダラダラ過ごす。

ロコンは俺の膝を枕に夢の中だ。

太陽のように輝くロコンの毛並みをもふもふする。

素晴らしい柔らかさだ。

誰かに自慢したい。

等と思っていたら糸目の兄さんに話しかけられた。

トレーナーをやりつつブリーダーもしているのだとか。

あまりにもロコンが見事で話し掛けてしまったそうさ。

プロの目から見ても俺のロコンが美しすぎてヤバイ(´q´)

糸目の兄さんとの話はなかなか有意義に過ごせた。

ブラシの使い方や毛の洗い方、マッサージなどの話はわかりやすく、すぐに試したくなかった。

途中で目が覚めたロコンに試したが骨抜きにってしまった。

糸目兄さんの笑いが何故か引きつっていた。

これからの予定を聞かれた。

昼を過ぎて夕方近くになってしまったので明日お月見山を越える事を伝えた。

この後暇ならジムに来ないかと誘われた。

この糸目兄さんはジムリーダーでタケシさんと言うらしい。

脳内情報と比べるとドット絵の似顔絵のようだった。

気づかなかつたが気にしない方向で行く。

ニビの街は発展しているが、ジムに挑戦するトレーナーは相変わらず少ないらしい。

日課の散歩（散歩が日課になるほど暇）の途中で見かけたので話しかけたのだとか。

別にバッジを集めて無いから挑戦する気は無いと言っておく。

タケシさんはそうか……と落ち込んでいたが面倒なので仕方ない。

とぼとぼと去っていくタケシさんを見送る。

タケシさんが顔をこちらに向けて呟いた。

ポケモン各種の毛織いセツトが賞品なのに、と。

しかもストレージタイプ。

シルフカンパニーは高級ブランドでもある、最高品質は保証されている。

ジムでの賞品としては破格だ。

それほどまでに挑戦者がいないのだろう。

泊まったポケモンセンターにはトレーナーを見かけなかったがどうやら深刻な状態

らしい。

運営費などはポケモンリーグから払われているので心配無いが、トレーナーとのバトルが皆無で勘が鈍ってしまう。

だから時々見かけたトレーナーと戦うために試行錯誤しているのだとか。

そんな魅力的な賞品が提示されたら挑戦するしかないだろう。

脳内情報から考えて屋内で適当にダラダラやり合うとか。

そう考えていた時期が俺にもありました。

ジムに入ってタケシさんと対面する。

流す感じでやるかなんて気持ちで見ていると天井が無くなった。

天井だけではなく、壁も地下へ収納されていく。

驚いていると歓声が聞こえてきた。

外には観客席があり、ニビ中の人が集まっているのかと思うほど沢山いる。

オーロラヴィジョンも完備。

俺の予定とは大分違う。

バトルで壊れたジムを修繕する運営費が余りに余ってこんな大規模な装置を作ったらしい。

住民も娯楽に飢えているためにこんな事になったのだとか。
……こんな大事になるからトレーナーが挑戦しないんだろ。

俺の手持ちに合わせた一対一のバトル。

気絶させれば勝ちという単純ルール。

グレンとは別のジムリーダーに挑戦するのは初めてで少し緊張したがロコンはやる気らしい。

可愛らしく尻尾を振って、火球を待機させている。

タケシさんの繰り出したポケモンはイワークだ。

蛇のような細長い体には岩のように堅牢な皮膚で覆われている。

タイプ of 相性は最悪。

地中に潜られるとかなり厄介だ。

厄介だが、気にするほどではない。

ロコンは炎タイプなので弱点で攻めることはできないが、ロコンは優秀だし適当でも大丈夫だろう。

指示を告げる。

好きにしてい……あとは何時も通りだ、と。

グレンのジムでジムメイトに混じって挑戦者と戦っていたようにしろという指示だ。

ロコンは好きに戦う。

俺は判断に迷ったり、見えていなかったりする攻撃に対してのみ指示を出す。

情報は出来るだけ少なく、的確に。

ロコンがイワークの攻撃を掻い潜り、火球を撃ち込む。

危険な時は電光石火で回避するように指示。

この繰り返しだ。

ずっと変わらない。

今までも、こうしてきた。

これからも、こうするのだろう。

活き活きとした動きをするロコンを見れば、悪くないと思う。

俺の仕事は目となることと、急所を見切ること。

どんなポケモンにも急所が存在する。

それをロコンにばら蒔かせた火球から判断し、伝える。

そしてロコンが執拗に狙う。

回避は俺が、攻撃はロコンが。

何時も通りだ。

急所を何度も焼き、火傷させる。

そして、弱点に変わるのだ。

イワークの動きも緩慢になる。

イワークが穴を掘って地中に逃げた。

穴に向けて火炎放射。

岩に近い体表をしているが結局は生物だ。

燃える空気はジワジワと効くだろう。

地中からの攻撃を電光石火で回避させる。

弱ったイワークに何時も通りの止めを刺す。

ばら蒔いた火球は急所の判別、目眩まし、そしてもう一つ役割がある。囷としての魅せ玉だ。

ばら蒔く火球とは別に一つだけロコンの背後を追尾する火球がある。

今は爛々と輝く太陽のような玉が。

戦闘中はこれに力を込め続け、片手間に火球を連射する。

相性が悪かったり、硬かったりと倒すのに苦勞する相手にも効果的だ。

何時も通り、弱った相手を輝く炎で狙い撃つ。

——マスタースパーク!!——

やはり戦闘は火力だな、文字通りの意味で。

ロコロンが駆け寄ってくる。

崩れ落ちるイワークを横目にロコンを抱き締めながら思った。
何時も通り。

だが、悪くない。

悪くないのだ。

歓声に適当に応える。

タケシさんが目を見開いていた。

怖っ。

なんでも驚愕していたんだとか。

岩タイプのごり押しが炎に負けたからって驚かれても困る。

ロコンの美しさに驚いたとかだろうか。

それなら仕方ない。

賞品としてポケモン各種専用毛織いセットを貰った。

各種なので沢山ある。

ストレージタイプだから嵩張らないが凶器にしか見えない物もある。

例えば、どう見てもボールのような物でしかない何か。

タケシさん曰く、岩タイプで物凄く丈夫らしいのだが何度見てもボールのような物にしか見えない。

バツジは特に必要では無いのだが渡された。

勝者の証は受けとるべきだそうです。

ほこほこ顔の市長さんから金一封を貰ったが意味がわからん。

そのあとは住民に適当に手を振りながら去る。

何故か紙吹雪が舞い散っている。

住民たちのハイテンションを華麗にスルー。

——残像だ——

を地で往く速さで移動する。

途中、揉みくちやなジュンサーさんがいた気がするが華麗にスルー。

面倒事は回避。

お祭り騒ぎのニビから抜け出し、騒ぎを聞き流しながらお月見山を目指す。

お月見山の麓のポケモンセンターで一泊してから山越えをする予定だ。

そこらに蔓延るボーイスカウトや虫取どもはロコンの火球の餌食。

お嬢さん方は紳士的に火球で焼き払う。

結局、火球で蹴散らすのだ。

苦勞（焼き払う面倒な作業）を乗り越えてポケモンセンターを見つけた。

お月見山に入るトレーナーは少ないのか人があまりいない。

手続きを済ませてやることも無くなったのでお月見山を眺めることに。

運が良いとピッピが見れるのだとか。

満月の日には必ず見られる場所を聞き、双眼鏡まで貸してもらった。

ジョーイさん好きな人。

嫁にするならこんな人かもしれないね。

双眼鏡を覗く。

西日に照らされたお月見山は山肌が朱色に映えて、綺麗なものだ。

なだらかな山の頂上付近でピッピは踊るらしい。

見ながら思ったが今は満月の時期じゃない。

なるほど、人がいないわけだ。

このまま帰るのも負けた気がするので適当に山を眺めることにした。

ロコンはすでに頭の上で寝ている。

火の粉にしても火球が放たれるくらいに威力は異常に高いが燃費がかなり悪いので何時も眠っているのではないかと俺は考えている。

食欲旺盛なものもこれが理由だろう……多分。

山を眺めていると白い何か横切った。

探してみるとすぐに見つかった。

カラカラだ。

脳内情報では生息地は全く別の場所のようだ。

珍しい、と一言で言い切れないのが難しい。

生息地はそのポケモンが生きる事に最も適している場所だ。

その付近ならば幾らか見ることはできるが此所まで遠いとなると何か問題があった
としか思えない。

群れから逃げたか、追い出されたか。

強いポケモンに駆逐されたか。

理由は分からない。

俺があれやこれやと考える必要は無いのだが、気になるもので。

ポケモンセンターから漂う香りに気付き、空腹を感じさせる。

ロコンは既に目が覚めたようで頻りに頭上でアピールしている。

苦笑いしながらロコンを撫でながら歩く。

ポケモンセンターに戻りながら、明日はカラカラがいた場所を見に行こうかと思っ
た。

満月とは程遠い月が薄暗い空に浮いていた。

——脳内情報——

ポケモンについての知識が豊富。

知識を探っていたら宇宙を創ったポケモンの情報が出てきて驚愕した。常識に欠けるが生活や勉学の知識もある。

地図はデフォルメされていて方向確認くらいしか役に立たない。穴だらけの変わった知識もある。

最近、けつばんが気になる。

——モンスターボール——

800円。

脳内情報との差異に絶望した。

あまりに高すぎる。

スーパーボールは1200円。

ハイパーボールはない。

——ストレージ——

モンスターボールの凄い機能のこと。

加工したほんぐりの性質をシルフカンパニーが転用、独占した。

ぼんぐり機能という名前になりそうだった、かなりダサイ。
どつかの博士がぼんぐりの筆箱を使っていたらサイホーンが入ってしまったとか。
ぼんぐりヤバイ。

【眠る山】

ポケモンセンターに20000円でモンスターボールを売りつけてくるオッサンがいた。

モンスターボールは確かに高値だが、20000円は高すぎる。

周りにフレンドリイショップが無いことから足元を見るつもりだろうか。

勿論、無視した。

朝食を早々に済ませてお月見山へ向かう。

弁当箱は邪魔になるだろうと思い、パン以外頼んでいない。

ロコンも残念そうだったがこれから山道を歩くのだ、諦めて欲しい。

ストレージタイプの弁当箱とか無いのだろうか。

お月見山は中と外の二つのルートから通り抜けることができる。

どちらから行こうとも途中で野生のポケモンが現れたり、道が悪かったりと一日はかかる。

通り道は一応あるのだが、野生のピッピを考慮しているとのことで道が整備されていない。

人には迷惑な話だが仕方ない。

俺は外から越えることにした。

予定では中から真っ直ぐ進むつもりだったが昨日見かけたカラカラが気になったのだ。

ロコンはどちらでもいいと言うようにアクビした。

まあ、頭の上で寝ているだけだしな。

薄暗い洞窟状の内部と違って外はなだらかな斜面となっている。

苦勞なく簡単に登っていくことができる。

山道を歩いているが、道に逸れて遭難する人もいるのだとか。

野生のイシツブテが飛び出してきた。

岩の塊が人に襲い掛かるとか危険過ぎないだろうか。

グレンから持ってきた虫除けスプレーを思い出し、取り出す。

嵩張っていたし、丁度良い。

イシツブテと距離を詰める。

体当たりを半身ずらして避け、虫除けスプレーを顔面にぶちこむ。

怯んだイシツブテを後ろから蹴り、転がす。

山道を物凄い速さで転がるイシツブテは見なかったことにした。

イシツブテの平均的なスペックとして体長40cm、体重は20kg。

……。

過去の失敗を乗り越えるために進むことにした。

そして現れたイシツブテやズバット、パラスには虫除けスプレーをぶちこみ、蹴り飛ばす。

考えてみたが、今は満月では無いし登山客もいないらしいので別に構わないだろうと判断した。

お月見山は標高も低く、傾斜も緩やかだ。

ハイキングやピクニックにも度々利用される。

本来、山登りをする場合は野生のポケモンと出会うことすら珍しい。

こんなにも襲われる理由は一つ。

山道から外れて縄張りに入ったからかもしれない。

太陽の位置から適当に行けば大丈夫だろう。

甘かった。

結構歩き回ったが山道は見付からなかった。

トキワの森の再来かもしれない。

右も左も木が生えており、道がわからない。

太陽が見えないほどに木が生い茂り、方向もわからない。

しかも水筒をポケモンセンターに忘れるという痛恨のミスを犯した。

飲み水は無く、ご飯はどれもお湯を必要とするインスタントなので食べることもでき

ない。

ロコンが不安そうに鳴いた。

とてもひもじい。

う。
とかなったら怖いよな、等と妄想しつつ方位磁針で地図を確認しつつ目的地へ向かう。

目的地は昨日カラカラを見かけた辺り。

ロコンは今も寝ている。

縄張り突入はわざとだ。

スマナイ、野生のポケモンたちよ。

君たちは好奇心の犠牲になったのだ。

木は其処らに生えているが空と太陽がよく見える。

空が見えないほどに木が生い茂る危険な場所にピッピがいるわけないだろう。

虫除け乱舞をして追い払う必要のあるポケモンも出ないので暇なのだ。

これくらいの変想は仕方ないはず。

ダラダラと妄想を巡らせているとニビを一望出来る広場に着いた。

山道が続いているのが見えた。

『お月見山 山頂』という看板を見つけた。

ここら辺で一度休憩をとることにした。

ロコンを毛繕いしながらお湯が沸くのを待つ。

飯盒で米を炊くのも忘れない。

ストレージタイプのキャンプセットとか無いだろうか。

持ち運びが楽で魅力を感じるのだが。

何かが近寄る気配を感じて振り返るとカラカラが立っていた。

遠くから見たときには気づかなかったが、かなり傷付いているようだ。

被っている骨は所々に輝が入っており、右目が大きく傷つき身体中から血が流れている。

とりあえず、近寄ってきたクセに怯えるカラカラを拘束する。

何故か振り上げていた骨はボツシユート、ロコンの美脚に踏まれている。

悪いが俺は手加減しないぜ、と伝えてみた。

怯え、疎み、震えていたカラカラが涙を溢れさせていた。

高笑いとともに持っている凄い傷薬を全身にぶちまける。

そして快復の薬を染み込ませた軟らかい布で右目を覆う。

最後に包帯でぐるぐる巻きにして終える。

何故かカラカラが挙動不審だが無視してレトルト食品をお湯で温める。

炊き上がった米と温めたレトルトのカレーを紙皿によそって昼食の完成。

ロコンはカレーライスを食べるのでカラカラスも大丈夫かな、と渡してみた。

ついでにスプーンも。

頭を傾げているので俺が見本を見せる。

ロコンは口の周りを汚しながら食べていた。

カラカラには少し難しいかとも思ったが普通に食べ始めた。

かなり賢いのかもしれない。

頭（骨？）を褒めるように撫でる。

最初は俺を見つめ、されるがままだったが突然弾かれたように離れて警戒しはじめ

た。

俺もロコンもそれを見ながらカレーを頬張る。

肝心の武器はロコンの足元であり、カラカラが振り上げているのはスプーン。溢さないように紙皿は支えたまま。

自分の姿に気付いたのか、恥ずかしそうに近寄り、カレーを食べ始めた。

カラカラは予想以上に賢い。

そして可愛い。

御代わりで目を輝かせるとかグツとくる。

紙皿やレトルトのゴミをロコンに燃やしてもらう。

飯盒やスプーンは水で洗う。

無駄遣いしても余裕のある水筒の偉大さを知った。

ロコンの汚れた口元を拭い、毛繕い再開。

カラカラが去らずに見つめてくる。

どうやらロコンの下にある骨が欲しいらしい。
それを無視する。

途中でロコンが骨を抱えて眠ってしまった。

カラカラは困ったような表情をしている。

こいつ、良い子過ぎるだろう。

野生で大丈夫か。

こんな性格だから傷付いていたんじゃないのか、などと考えてしまった。

俺としてもロコンを起こすのは心苦しいのでカラカラと触れあうことにする。

震えているカラカラを抱き上げて毛繕い。

毛繕いセットがある俺に繕えぬポケモンはあんまり無い。

当然ながらカラカラも許容範囲内だ。

最初に輝だらけの骨や身体中の血を拭く。

傷のついていない場所を毛繕いしていく。

疲れていたのかすぐにカラカラは眠ってしまった。

ちなみにロコンは60cm、カラカラは40cm。

カラカラのほうが小柄で軽いのだ。

眠っている二匹を草の上に横たえ、レポートを書くことにした。

旅は始まったばかりだが目標は見付からず。

主人公のいる世界でどうしたらいいのやら、と思索する。

鳴き声が聞こえたのですぐに駆け寄る。

ロコンが魔されていた。

原因はわからないがよく魔されるのだ。

こういう時に何故ポケモンの言葉がわからないのかと思う。

パートナーが苦しんでいる姿を見ることがしか出来ないのがトレーナーとして、堪らなく寂しい。

ロコンとカラカラを撫でる。

ロコンはこうすると平常に戻るのだ。

カラカラも苦しそうだったので一緒に撫でることにした。

夕日を眺めながら、今日はここで一泊しようかと考えていた。

ロコンは俺の頭の上でダラダラしているし、カラカラは骨を握りながらこちらを見て
いる。

テントはカラカラが手伝ってくれたのでかなり早く早く完成した。
焚き火はロコンに燃やしてもらう。

何時でも火を点けられるのはありがたい。

リュックを引つ掻き回し、底から鍋を取り出す。

カラカラもいるのでシチューを作ることにした。

鍋にルーやレトルトの具材をぶちこむだけだから特に難しいわけでもない。

出来上がったシチューを皿に盛る。

もっさり盛る。

そして今朝から持ち歩いてきたパンを軽く火で炙って完成。

口を汚しながら食べるロコンと器用にスプーンを使うカラカラを見ながら俺も食べ
る。

多分、駆け出しトレナーの中でも良い物を食べてる気がする。

レトルト、インスタント、ポケモンセンターに感謝かな。

やることも無いので毛繕い。

ロコンを膝に寝かせて行う。

シルフカンパニー製のブラシはやはり違う。

毛並みが輝くような艶を出す。

初めて会ったときから輝いていたけど。

カラカラは俺の対面に焚き火を挟んで座っていた。

呆けているようだ。

毛繕いが終わる頃にはロコンはうとうととしていたのでテントに寝かせた。

毛布をかける。

残念なことに寝袋は無いのだ。

ストレージタイプの寝袋は無いものか……などと同じ様なことを考えてしまった。

あるにはあるのだが、物凄く高い。

一時期はモンスターボールに全部ぶち込んでやろうかと考えたこともあったがダメだった。

次はカラカラだな、などと思って焚き火に目を向けるといなくなっていた。

開けた場所なので、周囲を見回すとすぐに見つかった。

包帯を全身に巻かれ、頭部は骨に覆われている後ろ姿はなかなかシユールなものがある。

カラカラがどこかへと向かっていた。

俺も後を追った。

歩幅の関係ですぐに真横に並んでしまったが。

月明かりが地面を照らし、太陽が完全に沈んだ今でも足場は良く見えた。

カラカラは一心不乱に進んでいたが花畑に辿り着き、立ち止まった。

一匹のピツピが花畑を跳ねるように駆けている。

広い、広い、花畑だ。

一面が白い花で覆われていた。

カラカラが再び歩き出した。

俺もそれに着いていく。

ピツピは光を振り撒きながら跳ねている。

花畑の中心に一匹のガラガラが倒れていた。

身体中が傷付き、頭の骨も所々砕けていた。

確認したが冷たくなり、息をしていなかった。

世界の何処かにガラガラだけの墓場がある。

そんな話を聞いたことがあった。

それが此処なのかは俺にはわからない。

生息地はイワヤマトンネルなどの岩山のはずだ。

そんな遠くからお月見山の山頂まで来たのだ。

このガラガラの墓場はここだったのだろう。

カラカラはずっとガラガラを見詰めていた。

俺はそんなカラカラを無視してボールのようなもので穴を掘る。

このままだと腐るか肉を食うポケモンに食い散らかされるかもしれない。

それに今のガラガラを見ていたく無かったのも理由の一つかもしれない。

ガラガラがすっかり埋まるほどの穴を掘り終えた。

優しくガラガラを抱き上げ、穴にいれた。

カラカラは見つめたままだった。

土をかけ、埋める。

泥だらけになってしまったが構わなかった。

ピツピが変わらずに跳ねていた。

ガラガラを持つていたであろう骨を埋め立てた土に突き刺した。

カラカラは身の丈ほどもある骨を見詰めていた。

俺も隣で座って骨を見ていた。

カラカラの骨から乾いた音が聞こえた。

からから、と。

それほど大きく無い音だったが何故か響いて聞こえた。

ふと、見上げると月が高くまで昇っていた。

気が付かなかったがかなりの時間、ここで座っていたようだ。

ピツピは未だに跳ねていた。

俺が動いてもカラカラの視線は骨に向いたままだった。

どうしたものかと考えるが何も思い浮かばない。

カラカラは野生のポケモンだ。

俺が構う必要は無い。

だが、気になるのだ。

一緒にご飯を食べたからか、少しの時間過ごして情が湧いたからか。

俺はカラカラに声をかけた。

一緒に行かないか、と。

返事は無かった。

明日の朝まであそこにいるからなと伝え、立ち上がる。

俺は無意識に口に出していた。

独りは寂しいだろう、と。

カラカラの背が少し揺れた気がした。

テントに向かって歩きながら考えた。

未知の知識を持つ俺は他人と溝を作ってしまう。

異常を持つ俺は馴染むことができなかった。

身近にポケモンがいて良かったと改めて思う。

ポケモンがいなかったらきつと何時までも俺は独りだった。

独りは寂しい、それは自分にも言えるのかもしれない。

タオルを水で塗らして身体を拭く。

泥がとれ、少し落ち着いた。

ロコンは魘されることもなく眠っていた。

ロコンの隣に横になった。

明日、カラカラが来てくれるか気になりながら眠った。

ちなみに、跳ねていたピッピがウザかったのでモンスターボールにぶちこんでおいた。

きつとパソコン内を暖めてくれるだろう。

翌朝はロコンと二人（一人と一匹）の朝食だった。

ロコンも寂しそうだったが頭を撫でて宥める。

ハナダに向かう。

山道を通るのでそれほど遅くならないと思う。

歩き出したとき、硬い何かをぶつける乾いた音が近くで響いたのが聞こえた。

お月見山を歩いている間、ロコンはずっと起きていた。

上機嫌だ。

俺の隣を身の丈ほどの大きな骨を抱き締めたカラカラが歩いていた。

俺も今日は機嫌が良い。

お月見山の山頂のとある場所に、花畑がある。

中心に小さな骨が刺さり、一年中珍しい花が咲いている。

近隣から人々が物見騒がしく訪れていたが、ある時それも無くなった。

お月見山の内部とこの花畑付近にロケット団の姿が現れるようになったからだ。

花畑はすぐに人々の記憶から消えていった。

それでもそこには毎年、同じ日に一人のトレーナーが訪れている。

骨を被ったポケモンとともに。

——お月見山——

満月の夜にピッピやピクシーが跳ね回っている姿が確認できるらしい。

ただし、近づくとすぐに逃げるのでポケモンセンターの近くから双眼鏡や望遠鏡で山

頂を眺めるのがマナー。

綺麗な花畑があるという噂が流れた。

真偽は不明。

——インスタント、レトルト——

旅するトレーナーの味方だが少し高い。

でも簡単に出来て美味しいのだ。

飯盒で米を炊いたりする。

重かったり嵩張ったりと悩みは尽きない。

——PCW——

パソコンウォーマー。

預けたまま活躍しないポケモンのこと。

新人のために場を暖める宿命なのだ。

【見敵、必殺、ハナダシティ】

お月見山の山道からハナダシティまでは一本道だ。

日が傾いてきた頃、山から流れる川を辿り、ハナダの街並みが見えてきた。

高い段差などがあり、足場は良くはないが乗り越えられないほどではなかった。

ハナダの洞窟とかいうマップがあつたな、などと思ひながら脳内情報の場所と照らし合わせて探してみるがそれらしき場所はなかった。

これくらいの差異は動じるレベルでは無い。

ロケット団が無いことと各々のジムリーダーが違うことに気付いたときはかなり驚いた。

ただし、小さな犯罪者集団はあるらしい。

ポケモンで誘拐とか恐喝、強盗、暴行など。

こういうのが集まってロケット団になるのだろうか。

そんなことを考えつつハナダへ向かう。

回復の薬を使ったがカラカラの傷も心配である。

心無し早足になるのも仕方ない。

パラセクトを使うトレーナーがいた。

ロコンが一瞬で燃やしたが。

電光石火で背後に移動してからの火球連射、美味しいです（＾q＾）

ピツピはモンスターボールに入れっぱなしだが、出す気はない。

ハナダシティは脳内情報とそれほど違いが見られない。

民家や人の数は大きく異なるが基本的な構成が酷似している。

ジムや自転車屋は当然ながら、北には橋がかかっている。

ただ、民家がやたらと多い。

ヤマブキで働き、ハナダに住む……が定番らしいのだ。

店もそこそこ、人もそこそこ、民家もそこそこ、自然もそこそこ。

田舎と都会の中間的な位置付けだろう。

ジムの近くにあるポケモンセンターに駆け込む。

包帯でぐるぐる巻きのカラカラにジョーイさんも目を見開いていた。

治療中に他のジョーイさんに説教された。

何故こんなになるまで放っておいたのか、と。

日が暮れて、外は真っ暗になった時間に治療が終わった。

治療したジョーイさんがカラカラについて話を聞きたいのだそうだ。

状態、捕まえた場所、手当ての仕方、群れの争いに負けたのではないかという予想、スプーンが使えること、御代わりする姿がかわいいなどを伝える。

俺の言葉を聞き終えたジョーイさんは言った。

野生のポケモン同士の争いだとしても傷が可笑しいのだと。

縄張り争いでこれほどまで傷付くことは殆ど無い。

ガラガラは愚か、弱者であるカラカラまで執拗に狙われているのは普通では無い。

相手は本当に野生のポケモンなのか、というのが話の内容だった。

生息していない強力なポケモンが現れた可能性もあるがそれも有り得ない。

基本的にポケモンの世界では強ければ強いほどが下を加護する。

好戦的なガラガラと争うほどの個体となればカラカラまで攻撃しないのだ。

詰まるところ、人為的な問題かもしれない。

マナーを守らないトレーナーの仕業が有力だ。

多分、上級のトレーナーだろう。

今はどうすることも出来ないが、何処かであつたらぶち殺……ぶちコロ助してやんよ。

何故か複数のジョーイさんに羽交い締めにされた。

絶対コロコロしてやると息巻いただけなのに。
握っているボールのようなものが輝いた気がした。

気を取り直して容態を聞くことにする。

治療が終わってカラカラは眠ったままだった。

傷は心配ない。

かぶっている骨は固めたので大丈夫だが、右目付近の骨は砕けたまま。

そして右目は物凄い力で潰されたので見えないし、開くこともない。

骨がなければ死んでいただろう。

という話だった。

またジョーイさんと見知らぬトレーナーに羽交い締めにされた。

残念だが俺は止まらんのだよ。

不屈き者をコロコロするまでは。

十人くらい引き摺った辺りでスターミーにバブル光線された。

フシギダネを抱えた少女だった。
すげえ怒られた。

お陰で平常心に戻った。

が、説教が長かったので相手を落ち着かせるために俺は一言。
落ち着いたなう。

バブル光線超痛い。

とりあえず夕食を食べることになった。

バブル少女の名前はカスミらしい。

ハナダのジムリーダーは姉の三人だとか。

ハナダジムって三対一なのか……？

カスミがソワソワしていた。

ああ、ロコンが口を汚しながら食べているのが気になったのだろうか。一生懸命で可愛いだろ、と。

違うらしい。

じゃあ、カラカラがスプーンを使ってることか。

賢いだろ、昨日教えたらずぐ出来たんだ。

凄いいけど、またも違うらしい。

よくわからなかったが周囲を見渡して気付いた。

なるほど、スターミーがニドリノにかじられていることかな☆

走ってスターミーを助けに行った。

戻ってきたカスミ曰く、違うらしい。

何故か怒鳴ったあと、フシギダネを指差した。

俺の膝でご飯を食べているのが癪にさわつたらしい。

自分は一月かけてやっと抱っこできたから更に輪をかけて気に入らないとか。

いや、知らんがな。

俺には時々、物凄く仲良くなる個体がいるのだ。

ウインディ、ベトベトン、ロコン。

その反面、ポケモン屋敷の他のポケモンは仲良くなるまでに時間がかかった。

機嫌を損ねたカスミは怒鳴りながらジムに帰った。

フシギダネは震えていた。

そんな事をしてるからなつかないのでは、などと思つたが既にいない人物に届く言葉は持ち合わせていなかった。

忘れ去られたスターミーがあまりにも可哀想だったので慰めるために毛繕い(?)をする。

水棲用の柔らかい毛で擦る。

最初は震えていたが、今はコアがチカチカしてる。

よくわからん。

軟らかい布でコアを磨いて終える。

チカチカしてるがやっぱりよくわからん。

カスミが物凄い勢いで戻ってきた。

スターミーを見ると凄い剣幕で怒鳴った。

俺はスターミーに好かれていたらしい。

帰っていくカスミを見送るジョーイさんは何時もあんな感じなの、と言った。乳酸菌が足りてないんだらうか。

とりあえずフシギダネを軽くブラッシングしてみた。

そのままロコンと一緒にシャワーを浴びた。

弱点とか無視して洗う。

シャワーも終わり、ロコンは元気にフルーツ牛乳を飲んでいた。

カラカラは大丈夫だろうが病み上がりだし許してやろう。

弱点で傷が開いたりしたら困るしな。

タオルで身体を拭き、骨を磨く。

ハイパー毛繕いタイム、はーじまーるよー

みたいなノリでブラシを取り出した。

ロコンもカラカラもテンションうなぎ登り。

カラカラは俺に寄りかかってガラガラ骨を磨いている。
さあ、やるか。

とか思つてロコンを膝に乗せて気付いた。
今日は相部屋だったわ。

ロコンにブラシをかけながら話をしてみた。

同室の人はクチバ出身のタイシさん。

二十歳までお金を貯めてから旅だったので未だに駆け出しらしい。

スターミーをかじつてたニドリノが相棒で何処かのジムメイトを目指しているの
だとか。

クチバのジムに挑んで惨敗、ハナダのジムでも惨敗、イワヤマトンネルに訓練に行こ
うとしたら通行止めで立ち往生。

明日はお月見山に向かい、月の石を捜すらしい。

イワヤマトンネルについて気になつたので詳しく聞いてみる。

どうやらトンネルの入り口付近で落盤があつたらしい。

カラカラの生息地なので様子を見る予定だったが変更を余儀なくされた。

ロコンの毛繕いが終わり、カラカラを膝に乗せた。

脳内情報のように地下通路を使ってクチバに行くことにする。

タイシさんに伝えるとクチバまでは結構距離があるらしい。

地下通路はヤマブキの下を通るので俺が考えているよりも長いかもしれない。

カラカラの毛繕いも終わったので寝ることにする。

ロコンとカラカラを抱えて横になった。

タイシさんは何故か驚いていた。

翌朝、タイシさんと食事をとる。

ロコンがフードファイトしているのを眺めているとジョーイさんに声をかけられた。

橋を渡った岬にマサキというポケモンマニアがいるらしい。

ポケモンの情報を熱心に集めているので何か知っているかもしれないとのことだ。

今日の目標も決まったのですぐに向かう。

タイシさんはダラダラした後、お月見山へ行くらしい。

ロコンを頭に、カラカラを腕に抱えて橋に行く。

ゴールデンブリッジ（笑）に着いた。

朝っぱらから五人のトレーナーがドヤ顔で立っていた。

地元の人間は分かかって来ないだろうから何時も暇なんじゃないだろうか。

五人のトレーナー……ハシレンジャーと名付けるを無視し、段差を乗り越えようかと思っただが顔がかなりムカつくので蹴散らすことにした。

やめてよね、俺の相棒が本気出したらポツポヤキヤタピーが敵うわけないじゃないか。

キヤタピーやビードルはロコンが積極的に燃やしていた。

カラカラが戦ったのが予想外だった。

トラウマになっていたら時間をかけて……とも思っていたのだが杞憂だったようだ。

俺が死角や距離の指示を出していたとはいえ、カラカラはかなり強かった。

空中のオニスズメを骨で殴ったときは相手が死んだかと思った。

地面に激突したが衝撃が強すぎてバウンドした。

カラカラも目を白黒させていた。

電気ショックや火の粉などは脳内情報通りタイプがあるのだが、骨棍棒などは判断が付かない。

空を飛んでる敵を骨で殴って効果は無いようだ……などの未知現象は起きないらしい。

オニスズメのバウンドから学んだことだ。

地面タイプでも強さの違いで雷とかのダメージが入るらしい。

流石にゴローニャやダグトリオにピカチュウの雷ではキツイだろうが、サンダーなどの伝説・伝承クラスは電気ショックの威力もヤバそうだ。

橋を渡り、岬を目指す。

ロクククライミングしていたオッサンが上から勝負を仕掛けてきたときにロコンがテンパってオッサンごと焼いてしまった。

笑いながら許してくれたが。

カラカラに骨ブーメランを練習させる。

かなり器用らしくすぐに上手くいった。

失敗したときに岩を砕いたが見なかったことにして山登りのオツサンと戦う。イワークがぶつ飛んだが俺は気にしない。

骨棍棒が空振って地面を割いたが気にしない。

骨×岩・地面なのだが大丈夫か、この世界。

とか思っていたらカラカラを使うトレーナーとの勝負になった。

凄まじい骨のぶつかり合い……衝撃波とか出たりしないよな？

様子見で骨棍棒。

相手のカラカラも受け止めようとして防御、骨が砕けた。

時が止まった。

相手の骨が脆すぎるのではないだろうか。

一発で砕けるとか。

相手のカラカラは泣いていたがどうすることも出来ないので進むことにした。そしてカラカラがヤバイ。

途中、ピッピと戦ったが砕いた気がする。

あの防御の薄そうな頭に直撃だったからな。

やっと岬の小屋に辿り着いた。

インターホンを鳴らす。

入ってもよいと返事がきた。

インターホンの必要はあったのだろうか。

中に入るとなんだかわからん機械だらけの部屋だった。

そこで本にもれる青年を発見した。

助けると礼を言われた。

彼がマサキさんらしい。

他地方のコガネという場所からタマムシ大学に入り、卒業した今はパソコンを使ったポケモンの預りサービスをやっているのだとか。

このサービス、パソコンで操作しないとポケモンを預けられないのだ。

予定では転送サービスも付けるはずだったがシルフカンパニーがストレージを詳しく公開していないので実現できない、と愚痴られた。

マサキさんの愚痴を聞き終えると今度は俺に話が振られた。

改めて聞かれると、どう尋ねればよいのだろうか。

ガラガラやカラカラが襲われた話とか知らない？

……流石に詳しくてもピンポイント過ぎて有り得ないだろう。

何か変わった事は無かったか。

そう尋ねることにした。

地道に情報を集めて繋ぎ合わせるのが最善だろうから。

マサキさんはそのロコンも十分に変わっているが、と前置きしたあとに言った。

マサキさんの故郷にいる強力なポケモンを持っているトレーナーがいる。

そのトレーナーはカラカラの骨を知り合いに売り込んだらしい。

なん、だと……？

そいつを追っているから情報を寄越せ、とボールのようなものを素振りしながら優しく伝えてみた。

断られたのでボールのようなもので外の石を砕く。

最後通告だ。

顔を青ざめながらも断られた。

口が固い男だ。

脳内情報曰く、大人と子供の骨の数の数は違うらしいが、だいたい200本あるのだ。
手足の数本くらい構わんのだろう。

まあ、冗談なのでボールのようなものをリュックに戻し、何故ダメなのかを問う。
相手が強すぎて、俺が何をされるかわからないかららしい。

マサキさん、独特な訛りだけど超いい人だった。

確かにロコンとカラカラが手持ちの明らかに弱そうな俺に、他地方の強力なポケモン
を持つているトレーナーを追わせるのは危険だろう。

何をされるかわからないし。

それでも俺は情報が欲しいと引かない。

それならば、とマサキさんは俺に提案した。

バツジを手に入れたら話す、と。

すぐにジムに向かった。

焦げと穴でボロボロになった橋とジュンサーさんに説教されているハシレンジャーを横目に段差を飛び越えた。

ジムの蹴り開ける。

こんにちはしね。

見知らぬジムメイトやトレーナーのパウワウやトサキント、挑戦中だったナゾノクサをロコンで焼き払う。

ヒトデマンのコアやシエルダーの殻をカラカラが叩き割り、ジムリーダーの前まで駆け抜けた。

カスミが怒鳴ってきたが時間が惜しい。

無視してジムリーダーに勝負を挑む。

ジム荒らしのようだと少し怒られた。

しかし、年上の方がぶんぶん怒ると可愛い。

ジムリーダーは三姉妹が交代で行っており、今日は長女のサクラさんらしい。姉三人と見比べるとカスミが出廻らしのようだ。

バブル光線超痛い。

俺の事情を考慮して……というよりも面倒だから、と一対一になった。

相手はジュゴン。

カラカラは少し厳しいだろうから、安心と信頼に定評のあるロコンに任せた。

ジュゴンがロコンを見て鼻で笑った気がした。

余裕綽々といった感じでプールを泳いでいる。

慢心していると言ってもいいかもしれない。

カスミが馬鹿にしてきた。

弱点もわからずに挑んだのか、と。

三姉妹なんてすでに午後の予定を立てている。

ロコンなど眼中に無いようだ。

先ほど他の水ポケモンを焼き払ったが見ていなかったのか。

ジムは長であるジムリーダーの好みによって変わる。

ニビは岩、ハナダなら水、グレンなら炎。

グレンジムへの挑戦者は殆どが水ポケモンを主力としている。

苦しい戦いばかりだった。

そして不得手の相手と戦い続け、気付いた。

弱点を弱点足らしめない火力こそ、グレンジムの真髄なのだ。

ハナダジムは幾つかのプールに別れており、水ポケモンに有利な作りとなっている。中くらいのプールに小さな足場が点々とあるフィールドとして選ばれた。

バトルが始まり、ロコンが足場に飛び移った。

そこを狙ったジユゴンが水面から頭だけ出し、バブル光線で周りを囲い、水鉄砲で追いつめる。

単純に上手いと思う。

逃げ回られると厄介な足場をバブル光線で塞ぎ、小さく離れた足場に誘導している。相手の策に乗ることにした。

電光石火で移動させる。

ロコンは何時を通りだ。

水鉄砲がロコンに直撃した。

途端に発生する水蒸気。

蒸気が晴れる頃には全く濡れていないロコンと輝く巨大な火球が三つ。

回避の間にロコンは火球に熱を込めていただけだ。

なんら特別なことはしていない。

ただ、火球に熱を込める要領で全身を熱するのは、水対策として特別なことかもしれない。

ないが。

足場を融かすほどの熱量だ。

ジュゴンの口から放たれる水鉄砲に破られるほど温くない。

ロコンの周りにあった三つの火球が、プールへと落下した。

凄まじい水蒸気で視界が真っ白に染まった。

ロコンが最大まで熱した火球を三つ、ジュゴンがいるプールに落とすのだ。

追撃で水中に火球を撃ち込むように指示。

足場を熱してしまおうかとも考えたが流石に鬼畜すぎるのでやめた。

熱せられたプールから飛び出したジュゴンが点在する足場に逃げた。

そこをロコンが手加減した火球で狙い撃ちする。

手加減したのでイワークを倒した威力はない。

炎タイプを前に燃えやすそうな身体が悪いと思う。

水ポケモンは皮膚が弱い気がする。

炎が直撃しても効果今一つとか嘘だと思う。

サクラさんから手早くバッジを受けとる。

火球を出しすぎて頭の上で眠そうにしているロコンを撫で、カラカラを抱えた。何故かカスミに睨まれたが何も言わずにジムを出た。

マサキさんの所に戻る途中でお昼にする。

誰もいないポロポロの橋で弁当を食べる。

ロコンは食べるとすぐに眠ってしまった。

カラカラは歩きたいらしく俺の隣をちよこちよこしている。

登山のオッサンがワンリキーに岩を持ち上げて力自慢させていた。

無視しようとしたがバトルを挑まれたのでカラカラの骨棍棒でホームランした。

脂肪が少なくて浮けないだろうワンリキーは泳げるのか疑問を持った。

マサキさんにブルーバッジを見せる。

早すぎで有り得んと言われたがどうしろと。

グレーバッジもついでにリュックから取り出す。

一つ手に入れることができるなら、とやまと信じてくれた。

グレーバッジ持つてるならブルーバッジは必要無かったらしい。

グレン、トキワ以外のジムリーダーの実力はほぼ拮抗しているので一つで十分とか。

ロコンの苦勞はしなくても良かったらしい。

普通、バッジは実力を示すためにトレーナーは服や帽子の何処かに付けて誇るらしい。

リュックに無造作にぶち込んでいる俺が普通じゃないのだとか。

自慢気に服にバッジを付けるとかダサくて嫌だ。

白衣と真つ黒マフラーのクセにとマサキさんに言われた。

俺が気に入っているので良いのです。

目的の話聞くことにする。

俺の追っているトレーナー（目標）はクチバのポケモン好きクラブに売り込んだが

会長を怒らせただけだったらしい。

詳しくはわからないが目標は大金が必要らしい。

カラカラやガラガラの骨は高く売れる。

好事家なら特に、だ。

大好きクラブを好事家の集団と勘違いしたのかもしれない。

マサキさんに礼を言う。

気を付けるようにと釘を刺された。

キナ臭いからあまり首を突っ込むなども。

改めて礼を言い、ハナダのポケモンセンターに戻る。

明日は目標の情報を得るためにクチバのポケモン大好きクラブに向かうことにする。

目標が大金を必要とした理由はわからないが、他地方の目立つポケモンを使っても問題が無い何かしらがあるのだろう。

何処かの組織に所属しているのかもしれない。

それならば大金も必要となるはずだ。
もしかしたら組織というのはロケット団かもしれない。

俺はどうすべきだろうか。

光明の見えない問題に頭を悩ませつつポケモンセンターへと戻ってきた。
今日は悩みながらゆっくり休みことにしよう。

追記。

タイシさんはまだポケモンセンターにいた。

カスミもいたがやっぱり睨まれた。

フシギダネは俺の癒し。

——ボールのようなもの——

固い表皮のポケモンを毛繕いする道具。

ストレージタイプなので高価なうえに丈夫。

今は地面を掘ったり砕いたりする道具として活躍している。

本来の使用方法で使われる日は来るのだろうか。

——アサギシテイ——

今は行かないし、行けない。

カントーの人間で知っているのは少数。

マサキはコガネ訛りのコガネ人だから知っている。

【有無】

トレーナーという人種は時間を見ず、行動は遅い。

一人、多くても三人の旅はどうやら人間としての墮落に向かうらしい。

規則に縛られないある意味での自由な生活とやらは怠慢を加速させる。

カツラさんの言を彷彿とさせる、未だにだらけたタイシさんを横目にフシギダネと

ジョーイさんに別れを告げた。

朝早く、とまでは言わない時間にポケモンセンターを出た。

気を引き締めないと旅するニートになるかもしれないな、と思いながらハナダを後にした。

ハナダシティとヤマブキシティを繋ぐ5番道路。

緩やかな下り坂となっているが、ポケモンを見かけることは無かった。

歩きやすいように整備されており、木々があまり無いようだ。

ロコンは寝てしまったのでカラカラに合わせてゆっくり歩きながら脳内情報で見つける話をする。

一万回感謝しながら正拳突きする話や最強の眼を持つているホームクルスの話、空気や気配の動きを読む話、突きが必殺技の話を脳内情報から引き出す。

興に乗ったのでイチローとやらの話もしてみた。

目を輝かせながら突きや素振りするカラカラが可愛かった。

そんなカラカラを眺めていると視線を感じた。

振り向くと十歳くらいの少女がこちらを凝視していた。

腰に届くほどの長い黒髪が風でくしゃくしゃになったが少女は数分の間、身動きせず
にいた。

そして突然、思い出したかのように走り去った。

俺は驚きのあまり背中を見つめるだけだった。

気を取り直して歩くのだが草木がかなり少ないことが気になった。

ポケモンも見かけることが無い。

そんなことよりも、と周囲を見渡すが地下道路の入り口が見当たらない。

地下道路の入り口だけでは無く、ヤマブキシテイへのゲートも無く、歩いている道路
は街中へと続いている。

どうやらクチバに向かう前にヤマブキを通る必要があるようだ。

興味はあるので構わないが、目標のことも気になる。

カラカラの歩みも遅いので一泊する必要があるかもしれない。

カントー地方のほぼ中心に位置するヤマブキはシルフ都会といった印象を受けた。

街の中心に聳え立つ巨大なシルフカンパニー本社、多くの建造中の建物、行き交う
人々、絶え間無い騒音、狭い空。

街中には全く木々といった緑が無かった。

脳内情報からポケモンセンターの場所を探す。

住宅地の一角で何時ものモンスターボールが大きく描かれている建物を見つけた。

中は人で溢れていた。

ここらでは見かけないようなポケットを連れたトレーナー沢山いる。

遠くから来たのだろう。

旅をしているようには見えない格好もちらほらと見えた。

ヤマブキに住んでいるトレーナーもいるのだろうか。

空き部屋はなく、宿泊を諦めることとなった。

困ったことに夕食の予約も定員を超過しているために遠慮してくれとのことだ。

クチバに向かうには6番道路を通るのだが徒歩では結構な時間がかかる。

今日向かうにしてもどこかで休みたかったのだが、とポケモンセンターにあったヤマ

ブキのパンフレットに目を通す。

他の街には無かったこういった物からもヤマブキの発展具合が窺える。

パンフレットにはフレンドリイショップやポケモンセンター、ジムの位置が記されて

いるがほとんどがシルフカンパニーの案内だった。

どうしようかと思ひながら眺めているとポケモンセンターの裏に公園を見つけた。

大きくも小さくもない公園ではあるが休むには適しているだろう。

公園に入ると街中での騒音は鳴りを潜め、風で揺れる葉の音が聞こえた。

遠くにはシルフカンパニーのビルが見える。

人の多さに気疲れしていたのかもしれない、公園の中央に少女がいることに気づいたのは声が聞こえるほどに近づいてからだった。

少し驚いたが少女を観察する。

頭に白いスカーフを巻き、首に自分の黒髪を巻き付け、白いシートで体を覆っていた。地面と頭の上にポケモンを象ったぬいぐるみ置き、何か言っていた。

気になったので近寄ってみるとガトチュゼロスタイルやアリンコなどと言っていた。

目を輝かせたカラカラが骨棍棒で突きをしたが地面に当たり大きな音を起してしまった。

振り向く少女、砕けた地面、舞う土煙、揺れるモンスタールボール。

俺が見ていたことに気付いた少女が涙目になりながら顔を真っ赤にしていた。

どうしたものかと悩んでいたが腰の辺りで揺れているモンスタールボールに気付いたのでとりあえず中から出す。

光とともに現れたのはマサラタウンで頂いたタマゴだった。タマゴが小刻みに揺れている。

少女も興味を持ったようでタマゴに顔を近づけた。

ぱきつと小気味の良い音が鳴り、ヒビが入る。

それを皮切りにタマゴ全体に亀裂が走り、光が洩れ出した。

カラカラや目が覚めたロコンも興味津々といった様子でタマゴを凝視している。

俺はその様子を後ろから眺めていた。

光が溢れ、目が眩んだがすぐに小さな鳴き声が聞こえた。

イーブイが産まれた瞬間だった。

産まれたばかりの小さな姿にカラカラ、ロコン、少女から感嘆の声が挙がっていた。

空気も読まずにイーブイを抱える。

少女が羨ましそうに俺を見ていた。

すでに目は開いているようだ。

世話をしなければと思ったのだが何故かイーブイは泣き叫ぶばかりだった。

どうしたものかと思案する。

要点を纏めてみる。

タマゴが孵るときに俺は後ろにいた。

カラカラ、ロコン、少女は見ていた。

抱えるときには目が開いていた。

……。

カラカラに近づけたが泣き止まず。

ロコンに近づけたが変わらず。

……。

少女に近づけた。

擦り寄っていった。

どうやら少女を親と認識したらしい。

刷り込み、だと……!?

産まれる瞬間に目を合わせてポケモンを奪うトレーナーとか現れそうだ。

それが発展して親権問題になったり……。

等と混乱しながらもイーブイをどうしようかと悩んでいた。

少女をチラリと横目で捉えると満面の笑みで宝物のようにイーブイを抱き締めている。

俺としては少女に託しても構わないのだが少女側に問題があるかもしれないからだ。ポケモンといられる環境ならいいのだが確認しないことにはわからないのだ。

少女にポケモンと暮らせるか聞いてみる。

ぬいぐるみを持つているしポケモンが嫌いなわけではないだろう。

案の定、ポケモンは好きだが母親に聞かないことにはわからないそうだ。

俺の不注意が招いた事態だ。

解決案を導く必要がある。

少女の母親と話したいと伝え、案内してもらおう。

イーブイは少女から離れないし、少女も嬉しそうに笑っている。

もしもの事を考えると足取りが重くなる。

互いに自己紹介をする。

少女の名前はイミテというらしい。

さっきの話を詳しく聞いてみると顔を真っ赤にしながらも答えてくれた。

ヤマブキでは野生のポケモンが東京のカブトムシくらい珍しいそうだ。

街の周辺が開発されて自然が削られ、ヤマブキのトレーナーに捕獲されてしまったか

らだろうか。

イミテはポケモンが大好きだがテレビでしか見かけることが出来ず、ポケモンセンターはトレーナーが怖いので5番道路を歩いて野生のポケモンを探して遠目に眺めるのが日課らしい。

今日も日課で歩いていたらトレーナーがいたので逃げようとしたがポケモンと一緒にいたのでそちらに気を取られていた。

その後、逃げながらポケモンが羨ましくなつて公園で俺のモノマネをして遊んでいたのを見られて恥ずかしかつたらしい。

それでも、とイミテは続けた。

イーブイを抱き締めながら。

今はポケモンに触れて幸せ。

ありがとう。

と、満面の笑みで言われた。

イミテの純真な言葉に胸が痛くなった。

心配されたので大丈夫だと伝える。

それでも時折チラチラと見られるので泊まれそうな施設がある場所を聞く。

ポケモンセンターは満室だったので他を捜していることもついでに言っておいた。

イミテの家に泊まることになった。

省きすぎたのでわかりやすくすると……

娘さんに俺のイーブイがなついちまったから責任とれや!!

こんな珍しいポケモンを娘が……スミマセンでした!!

謝って済むと思っただのか!?

可愛がれっただよ、ダボが!!

全力で可愛がります、スミマセン!!

そのうち確認にくるからよお!!

覚悟しておけや!!

行くぞ、妒恨、渦羅禍螺!!

みたいな感じだった。

誇張とかしまくってるが構わんだろう。

その後、イミテが母親に俺を泊めるように駄々をこね、爽やかに了承された。

今はシルフカンパニー主催の大会期間だから宿泊施設も無いと言われたので有難く

泊めてもらうことにした。

イーブイの礼も兼ねているらしい。

イミテにイーブイを託すことを伝えると、五分に一度は本当に良いのかと確認した後
にハイテンションでイーブイを抱き締める、を繰り返していた。

イミテの母親にも最初はイーブイが貴重だということに断られたが、ポケモンと生活
するには問題ないと言われたので言い分を聞いてもらった。

父親は仕事で出張に行っているが許可してくれるだろうから構わないとのことだ。

イーブイの凄さを連呼されたので少し考える。

ヤマブキではトレーナーの手持ち以外でのポケモンが珍しいのだがイーブイは一般的にも珍しい。

進化の多さから研究機関に人気があり、イーブイや進化後の見た目の可愛さから人気は更にうなぎ登りで高ルートで売買もされている。

そして、脳内情報ではマサキはイーブイが好き過ぎて繁殖させて配っているという情報がある。

欲しくなったらマサキから貰えばいいのだ。

夕飯までやることもないのでイミテと遊ぶことにした。

旅の話やロコンの尾が一本しかなかった話、カラカラの骨が凄いなど。

膝の上で嬉しそうにしているイミテに饒舌になってしまった。

ポケモンバトルにも興味があるようだ。

テレビで観るのは好きらしいが実際に観たことが無いとか。

大会は怖いらしいのだ。

今なら挑戦者もいないだろうと思い、イミテをジムに誘う。

イミテの母親にジムに行くことを告げる。

夕飯までに帰る約束をしたが死亡フラグっぽいかもしれない。

ジムまでの道のりをイミテと手を繋ぎ、カラカラを抱きながら話していた。

イミテも俺を真似てイーブイを頭に乗せているが産まれたばかりなので軽いのだらう。

誕生してそれほど経っていないが活動しているイーブイを見てポケモンの凄さを垣間見た。

サラサラと流れるイミテの髪の毛を褒めると、ハニカミながら仲の良い姉のような人の髪型を真似ているのだと話してくれた。

その人はポケモントレーナーとしても強いらしい。

ポケモンを見せてもらえばいいのでは、と言うと可愛く無いから嫌だとか。渴いた笑いしか出来なかった。

強いと聞かされて興味を持った俺は色々と聞いてみることにした。歳は俺と同じくらいで優しいらしい。

その人のポケモンは可愛くないのでバトルは観たことないとか。

あと凄い美人で、超能力が使えるとか。

……超能力？

超能力の事を聞こうとしたがジムのすぐ近くまで来てしまったので後にする。

ジムの近くには人もあまりいなかったのだから静かだった。

中に入るかなと思って入り口を見ると、臀部がフリフリしていた。

脳内で『な、なんだってー!!? (A A 略』などの電波が流れた。

昔は脳内情報も確認が必要だったが今は滑らかに情報が出てくるようになってきたのも関係しているかもしれない。

情報だけでなく実際に旅をして刺激されているからか、それとも情報と俺の混成が進行しているからのどちらかだろうか。

イミテが抱き付いたのを眺めていたが、どうやらこの臀部が件の姉らしい。

俺に気付いていたのかすぐに顔を合わせ、挨拶された。

腰まである長い黒髪とつり目がちだがイミテを撫でる雰囲気優しい女性の名前はナツメさんというらしい。

HG・SSじゃなくて良かったぜ等と自然と思い、情報と俺の混成の進行が正しいのでは想像してしまった。

好きに呼んで良いと言われたのでなっちんと呼ぶことにした。

呼ばれなくてないようで頬を赤くしてキョドるなっちんが可愛かった。

俺らが来るだろうと予知していたとか。

別に一人で入るのが怖くなったから入り口から中を覗いていたとかじゃないらしい。

でも小声で少し安心したとか言われた。

なにこれかわいい。

とりあえず超能力について気になったことを聞いてみた。

レールガンを撃つたり、テレポですのくしたり、未来世界に行つて戦つたり、相手を小さくしてドールハウスに閉じ込めたりとかはできないらしい。

ですよー。

イミテに頼まれたようで超能力を俺に見せてくれるらしい。

大それたことは出来ないが、と言いなながらも透視で俺の手持ちのピツピを当てた。俺の出身地を当てたり、イミテがイーブイを手に入れたことを当てたりした。

そして触らずにモンスターボールを浮かせた辺りで俺のテンションが上がりまくっていった。

なつちんも俺のテンションに驚いたが嬉しそうにイミテを浮かせた。

興が乗ったのか目の前のジムの看板を浮かせたりした。

俺は惜しみ無い拍手をおくった。

イミテも惜しみ無い拍手をおくった。

ポケモンもハイテンションだ。

ジムリーダーにジムを賭けての決闘を挑まれた。

あるえく？

ヤマブキジム。

格闘王がジムリーダーらしい。

俺らが騒いでいたので弟子に様子を窺わせると看板を奪われていたので道場破りと勘違いしたらしい。

というかしている。

ヤマブキのジムを賭けた闘いで負けて格闘道場になった情報があるが確かなことはわからない。

事実はなつちんがジムリーダーではないということだ。

差異がここであるとは何とも言えない気分だ。

三対三の勝ち抜きでポケモンバトルをするらしい。

イミテもやることになっているが止めたほうがいいだろう。

そんなことを思っていたがイミテはやる気満々らしい。

なつちんにも大丈夫だと言われたが心配なものは心配なのだ。

特にイーブイが。

そんな心配を他所にすぐに勝負は決まった。

相手が棄権したのだ。

格闘王も流石に十歳の少女と戦うことを強制しなかった。

イミテは満足したのか棄権して戻ってきた。

聞いてみると直視するのが辛いとか。

サワムラー……。。

折角なので突きをアピールしているカラカラで戦うことにした。

後ろには突きの練習で碎いてしまった銅像が転がっていたが無視した。

サワムラーも似たようなものだろうと思い、人体の弱い部分を伝えて勝手にやらせてみた。

カラカラは特別だった。

正しくは、持ち物が特別だった。

特別な理由は世界でも貴重な道具でもある太い骨を持つていることだ。

群れを統率するガラガラに継承される、歴代のガラガラの思いが宿った特別な骨。

代を重ねる毎に骨は、カラカラ・ガラガラの力を強化する。

群れの長であるガラガラが捕まることは殆ど無く、太い骨が継承されているガラガラは更に一握りであり、一般に出回ることとは一切無い。

だから、特別は追われた。

だから、カラカラは片目が見えなくなった

だから、カラカラは特別になったのだ。

カラカラが突きの構えをとった。

片目が見えず、距離がわからないだろうと思ったがカラカラのやる気を思い出して指示は出さない。

サワムラーの間合いからもカラカラの間合いからも遥かに遠い位置で突きを放った。

不恰好で、無駄が多く、ぎこちない。

そんな崩れた突きの体勢から骨が投擲された。

予想していなかった一撃にサワムラーは直撃し、強力すぎる威力に耐えられず道場内を勢いよく転がっていった。

骨を拾って嬉しそうに駆け寄るカラカラにチヨップする。

武器を投げたら丸腰になって危ないと説教する。

そして相手側に棄権を伝えて、カラカラを褒める。

投げずに骨ブーメランしろとも言っておく。

後でイチローの真似はしないように注意しておこう。

ジムリーダーはカイリキーを使うらしい。

なっちゃんはユンゲラーで対抗する。

まあ相性を考えても特筆すべき事は無いだろう。

瞬殺だった。

戦利品の看板を貰う。

泣いている格闘王を無視する。

これで晴れてなっちゃんはヤマブキのジムリーダーになった、とは言えないらしい。

他のジムのバッジを幾つか持っている優秀なトレーナー（この場合は俺）に保証書を書いてもらい、ジムリーダーに証を受け取り、ポケモンリーグで審査するとか。

トレーナーの能力やポケモンのステータスなど。

それが終わったら講習を受けてジムリーダーの誕生となるらしい。

イミテの家で祝うことになった。

なっちゃんにジムが出来たら手伝ってねと言われた。

可愛かったので即答したらイミテが拗ねていた。

お祝いにロコンの毛で作ったリボンをあげる。

輝くような金色だ。

折角なのでイミテにもあげる。

お揃いってやつだ。

毛繕いで抜けた毛を暇なときやポケモンセンターに泊まったときに紐に紐にしている。ロコンの首につけている火の石の飾りもこの紐で巻いてあるので燃えない。

毛繕いをする。

興味本意でなっちゃんのユンゲラーを毛繕いさせてもらったらフリーデインになった。

フリーデインになったとき、なっちゃんの顔が赤くなっていた。

毛繕いを終えて寝る。

なっちゃんも泊まっていくらしい。

イミテが潜り込んできたので一緒に寝る。

なっちゃんとイミテのポニーテールは可愛いかった。

やっぱりカメラを買っておこうかな。

—ジムリーダー—

各地のポケモンジムにいるリーダー

ポケモンバトルに勝つとジムバッジ（リーグバッジ）を貰える

リーダーは相手が初心者だろうとガチパで挑んでくるので注意

町のジムリーダーと他ジムのバッジ取得者の保障、リーグの試験や適性検査を経てその町のジムリーダーになることが出来る

ジムを新しく作り直すので特別な事情が無い限り、リーダーが変わることは無い

ヤマブキシティでは敗北した翌日に空手王が修行の旅に出て行ったので特例として認められた

—進化—

ポケモンの姿が変わる現象

更なる力を得るために起こることが多い

特殊な条件でしか進化しないポケモンもいる

ユンゲラーやゴースト、ゴリキーなどは持ち主を理解・信頼している者が触れることによって進化するらしい

【灰港 (前)】

俺の役割とは何なのだろうか。

主人公が既にいる世界だ。

俺を中心に動くことは無いのではないだろうか。

既に主人公に彼のトレードマークである赤いキャップを渡した。

役割がこれのみだとしたら……。

考える意味の無い事なのだと解っている。

それでも、考えてしまうのだ。

なぜ俺はこんな知識を持っているのかと。

左右にフラフラと揺らされて気付く。

イミテの家で一泊して、俺は寝ていたのだと。

思考の迷路から戻ってきた俺を迎えたのは心配そうに見つめるなっちゃんの顔だった。寝ぼけ眼でまじまじと見つめた瞳は黒色の底に薄らと澄んだ赤色が綺麗だった。

大丈夫かと確認されたので頷きで返す。

納得してないようで渋々となっちゃんは引き下がった。

さて、どうしてこんなに心配されているのだろうか。

昼よりも少し早い時間にイミテの家を出た。

朝食だけなら未だしも昼食のお弁当まで貰ってしまった。

礼を告げると逆にイーブイの礼を言われて歯痒い気持ちになった。

イミテにもう一泊して欲しいと頼まれたが、クチバに用事が有ると断った。

涙目になっているイミテの頭を撫で、ヤマブキに来たら寄ると伝えた。

なっちゃんも見送ってくれた。

隣にいるフリーデンとイミテの少し離れた距離に笑いながら言葉を交わす。

ジムリーダーになったら手伝って欲しい、と俺に小さく呟いた。

落ち着きが無く、顔が少し赤い。

超能力のせいで友人がいないのだと昨日話していたし、男と話をするのに慣れていないのだろう。

それにジムリーダーとして駆け出しの頃は苦勞したとカツラさんも言っていたので出来るだけ力になるつもりだ。

勘違いから起きたことだがなっちゃんはジムリーダーになることに不満は無いらしい。

目標の事を聞けるだろうと逸る気持ちを抑えて別れを告げ、手を振りながら歩きだす。

頭の上で眠そうな口コンが小さく鳴き、腋に抱えた早朝から素振りして半分寝ている状態のカラカラが弱々しく骨を振る。

空を見上げると雲が太陽を隠していた。

先程見た天気予報では明日から天気が崩れるらしい。

雨はあまり好きでは無いのだが。

クチバへ向かうために6番道路を通る。

こちらも開発されているのか草むらや森も殆ど無いようだ。
ポケモンを見かけることも無かった。

綺麗に整備された歩道を歩きながら、時折飛んでいるポツポを眺めた。

粘つくような湿った潮風を感じる。

同じ海に面しているグレンとはどうしてこんなにも違うのだろうか。

必要以上に人の手が加えられた港の臭い。

グレンにも汚れはあったが、ここはそれ以上だった。

それから程無くしてクチバに着いた。

これならイミテといくらか遊んでいても余裕があっただろうと少し後悔しながら脳内情報を引き出す。

クチバのポケモンセンターに立ち寄り、大好きクラブの場所を聞く。

ジムの裏にあるのだが仕事をしている人が多いので夕方くらいに開くだろうと言われた。

ヤマブキに戻ろうかと思ったが道路を思い出すと気持ちが悪かったので諦める。

ロコンとカラカラの治療——疲労回復——をしてもらう。

待っている間に宿泊の手続きを行い、受付のジョーイさんと話しをする。

何処のジョーイさんも美人であり、目の保養にもなる。

デイグダをよく見かけるようになったとか。

今のクチバに住むトレーナーの手持ちとしてポピュラーらしい。

デイグダの穴は無いらしい。

これからデイグダたちが本格的に掘るのだろうか。

数週間前から他地方の船が続々と停泊しているらしい。

中にはちょうどよく戻ってきたクチバ自慢の豪華客船もあるそうだ。

これからの天気が思わしくないとヤマブキの大会が絡んでいるのだろう。

カントーでは珍しいポケモンを見かけるかもしれないとか。

珍しいポケモン……か。

そして、熱心に語られた話はここ数年でヤマブキ周辺の開発が物凄い速さで進んでいるらしいということだ。

シルフカンパニーの急成長が理由であり、原因でもあるとか。

都合の悪い物は片っ端から海に流しているそうでそれが原因で水ポケモンが寄り付

かず、港町なのに水ポケモンを見かけることが少なくなってきたそう。

道路の整備も人間の事ばかりでポケモンについて何も考えていない、と愚痴られたので曖昧に笑う。

住み処を追いやられたポケモンは何処に行くのだろうかと考えながら。

眠そうな二匹を受け取る。

ロコンはすぐに頭の上で寝入ってしまったのでカラカラの頭を撫でながらジョーイさんに礼を言い、ポケモンセンターを出る。

見かけるトレーナーが少なかったのはヤマブキの大会に出ているからだろうし、ここでは野生のポケモンを捕まえることができないのも理由にあるのかもしれない。

堤防で昼ご飯を食べることにした。

自分の語彙が少ない事を悔やむくらいに美味しかったのだが、どうも海が気になる。食後にロコンの毛繕いをしつつ港の船を眺める。

脳内情報にあるサント・アンヌ号は未だ無いのだろうか、見つける事は出来なかった。

俺の膝で眠っているロコンを撫でながら夕方までどうしたものかと考える。

カラカラに視線を向けると渡した布で骨を磨き終えたようだ。

一心不乱に素振りをしている。

暇つぶしになれば、と思いながら研究所から持ってきた灰色のポケモン図鑑を弄ってみる。

十字キーとボタンが一つのみ。

印象としてはゲームボーイにすら劣る。

脳内情報の世界では任天堂のゲームが普及していたはずだが、見たことが無い。

そのうち普及するのだろうか。

少しばかり思考がずれてしまったがポケモン図鑑を見つめることにする。

いくらか弄ってみて解ったことはボタン一つですべてを熟す面倒があることだ。

YES・NOが何度も表示されるし、戻る場合には一番下のBACKを押す必要がある。

使い勝手は最悪で、画面も見にくくてしょうがない。

図鑑としても使えそうにない。

ロコンやカラカラに向けて使ったはいいが、内容は文字化けや欠落が多く不完全であると感じた。

多分だが、これは未成品だ。

しかもプロトタイプとかテスト機と呼ばれる物にも満たないレベル。

どう考えてもジャンクです、本当にお荷物で困ります。

折角、持ってきたのに使えないとは。

内心でガツカリしながら捨てるか迷っている。と視線を感じたので振り向くと強面の青い髪の青年が睨んできていた。

少し躊躇いながらどうしたのか尋ねてみると、ポケモン図鑑もどきに興味があつたらしい。

聞いてみると睨んでいるわけでは無く、元かららしい。

なんだか苦勞してそうだった。

暇を弄んでいたので話してみることにした。

彼はアカギという名で他の地方から来たのだとか。

アカギさんはシルフカンパニーを見学したかったらしいが秘密主義だという話を聞いて無駄足になってしまったそうだ。

適当にカントーを見学しようとしていたら俺の持っている物が気になったので近づいてみたらしい。

そして、機械に興味があるのでポケモン図鑑もどきを凝視してしまつたとか。

ここで会ったのも何かの縁だろう。

ということでは差し上げた。

欲しい人が持っていた方がいいだろう。

別に厄介払いとか思っただけ。

ジャンクの処理に喜んでるわけでもない。

でもまあ、荷物は少ない方がいいのだ。

アカギさんは俺といくらか言葉を交わした後に、礼を言いながら去って行った。

発電所を見に来るらしい。

場所はわかるのだろうか。

ジムはさつき見てきたが、面白みは無かったと言っていた。

そういえば、とジムの存在を思い出す。

リーダーのマクスは電気タイプのポケモンを好んで使う。

カラカラと相性も良い。

時間もある。

経験を積み重ねるために挑戦するのもいいかもしれない。

——ポケモン図鑑もどき——

華麗なる大怪盗ポケマニアに盗まれた……わけではない、決してないのだ。

十字キーとボタン一つのみの簡素な機械。

アカギさん曰く試作品であり、完成とは程遠い。

この時のポケモン図鑑はパソコンに繋げて使うらしく、そう考えると高性能。

これを経て完成したポケモン図鑑の高性能具合はマジヤバイ。

が、内容の打ち込みに俺を呼ばないでほしい。

——ポケモン大好きクラブ——

ポケモン大好きな集団。

会長は自慢話を聞いてあげると百万もする自転車の引換券をくれる猛者だ。

心がかさもさしているのと褒めるべきか、自転車ぼったくり過ぎだと批判すべきか。

ストレージタイプなのだろう、たぶん。

バトルも嗜んでいるのとか。

マチスと戦ったら彼らの大好きなポケモンが死ぬ気がする、威力的に考えて。

【灰港（後）】

時間もあることなので港付近にあるジムに挑むことにした。

カラカラの経験を積むこともできるので都合がいい。

クチバジムの中は薄暗いために隅まで見えず、広さは解らない。

脳内情報にある複数のゴミ箱も設置されていない。

ジムの床には継ぎ接ぎの修理跡とそれを上回る穴が無数に空いていた。

ジムメイトがうんざりしたように問い掛けてきた。

手持ちのポケモンは、デイグダか、と。

成る程、ポケモンセンターで聞いた大量発生したデイグダ。

こいつを手持ちのポケモンとしているトレーナーが増えたという話から予想すると

デイグダ持ちのトレーナーに襲撃されたのだろう。

床の空いた穴をチラリと見てから首を横に振り、素振りしているカラカラを指差す。

それならマチスも機嫌がいいだろうとか。

デイグダの相手するのはウンザリだったらしい。

用心深い性格とかどこへいったのだろうか。

すぐにジムの奥へと案内された。

空気が弾けたような音が周りから響いた。

壁には眩いほどの電気が迸る。

薄暗かったジムが明るく照らされ、内部がポケモンバトルするには十分すぎる広さであることがわかる。

迷彩柄のミリタリー服に身を包んだ大柄の男が俺と対峙した。

金髪の異人であるマチスだ。

ガタイが良く、身長は2mくらいあるのではないだろうかと思うほどだ。

デフォルメしたら脳内情報通りの絵になるだろうなどと思いつながらカラカラに行くように指示する。

マチスもポケモンを繰り出した。

クチバジムでは勝ち抜き方式を採用している。

使用するポケモンは三匹。

俺は三匹持っているがピッピは戦力外である。

実質は二匹しかおらず、しかもジムはジムリーダーに有利なように改造されているため不利である。

ロコンは俺の横で丸くなった。

マチスが繰り出したポケモンはレアコイル。

脳内情報では地面タイプに電気攻撃は無効なのだが、限度があるらしい。

デイクダやダクトリオなら地面をアース代わりに出来る。

カラカラも皮膚の表面を通して電気を地面に流すことができたはずだが、やはり強力な攻撃が来るかもしれないので慢心してはいけないだろう。

耐性があり、電気に強い程度に考えておこう。

特性というものが知識に存在したが、あんなにはつきりとしているわけでは無くポケモンも生物なので、複雑な事も多々ある。

口からビームとか吐くけれども、生物なのだ。

開始の合図とともにカラカラが床を砕き、レアコイルが電気を身に纏う。

カラカラが飛び散る破片の中でも特に大きな物をスイングして打つ。

真っ直ぐに先ほどまでレアコイルがいた場所まで飛んで行くも既にその場に居なくなっていた。

頭上からガチリと音がしたので目を向けるとレアコイルが天井に貼り付いていた。

地面系の攻撃対策だろうか。

この世界の非常識さは身を以て知っていたが、脳内情報に存在している偉い人たちはこれを見てどんな反応を示すのだろうか。

レアコイルは天井に貼り付いた。

強力な磁力云々と脳内情報にもあるので多分正解だろう。

思案している間にもカラカラが攻撃を仕掛ける。

床を砕いては破片を次々と打ち込むが当たらずに天井へとぶつかるのみだ。

レアコイルはパリパリと放電しながら宙で奇妙な軌道を描き回避している。

さて、どうしたものかと後ろで眺めていると空気が炸裂した。

衝撃波で攻撃するソニックブームだ。

グレンのジムに挑むトレーナーのポケモンが使っていたのを覚えている。

マルマインやレアコイル持ちのトレーナーはこれを覚えさせるのが基本らしい。

使い勝手もいとかでテレビ中継されているポケモンバトルでもよく見かける。

砂嵐が視界を奪う。

隣に伏せてきたロコンの顔が胸で隠れるように抱きしめる。

カラカラが砕いた破片と穴あきで脆くなっていた地面の脆くなった部分が舞い上がっているのだ。

すぐにカラカラに指示を出そうと、目を砂から防ぐように覆いながら前を見る。

薄らと見えた迷い無く前進する後ろ姿に、俺の言葉は必要ないのだと気づいた。

鉄を固い棒で殴りつけたような高音が響き渡った。

砂嵐が落ち着き、ジムの中央にいたのは倒れ伏すレアコイルとそれを無感情に見下ろすカラカラだった。

ゆっくりと戻ってくるカラカラを見ても褒める気分にはなれなかった。

カラカラが初めて戦った時に、トラウマになっていたら等と心配した過去の俺に何を見ているのか問い詰めたいくらいだ。

カラカラは対戦しているポケモンを見ていない。

いや、戦闘中は相手を見ているのだがあまりに淡泊すぎる。

実際はもつと先の何かを見つめ、求めているのだろう。

群れを襲った相手への復讐心が支配しているのかもしれない。

結局はカラカラの頭から背中にかけて撫でるだけだった。

気持ちよさそうに右目を細め、少しだけ強く俺の手に寄りかかってきた。

罅割れた骨に覆われている左目は今も閉じたまま、これからも開くことは無い。

言葉が思いつかなかった。

ただ、なんでこんなに無力なのだろうかと少しだけロコンを抱いている腕に力が入った。

ロコンは俺の頬を舐めるだけだった。

マチスの発している賞賛の声を聞き、バトル中だったことを思い出す。

カラカラは戦う気であるし、俺も止めることは無い。

手持ちがもつといればと思うが、結局カラカラの気持ちが変わるわけでは無いし頭から考えを追い出した。

マチスの次のポケモンはマルマインだった。

相変わらず凄い見た目だ。

人面ボールの怖さは実際に見ないとわからない。

知識の中では愛嬌がある落書きのような顔だったが……いや、すべてを言う必要はないだろう。

これをモンスターボールなどと間違えるレッド君が心配になった。

マルマインが動く前にカラカラに指示を出すのが少し遅かった。

カラカラが行動を起ここそうした時にはマルマインが迫ってきていた。

骨を振ってなんとかマルマインの突撃を逸らすが反動でよろけていた。

そのままマルマインは自爆した。

焦げながら目を回しているマルマインと骨を盾にしたカラカラの姿。

高速移動↓その勢いで突撃↓生じたソニックブームで浮かせる↓回避・防御不可状

態での近距離自爆コンボという火力不足を補う手段なのだ。

テレビでも見かけられるが実際にやられると対策がし難いのだと愚痴っていたカツラ

さんの気持ちがわかる。

マルマインの扱いが残念でならない。

フラフラとした足元が覚束ない足取りでカラカラが戻ってきた。

しやがみこんでカラカラを迎える。

よく耐えたなと首元を優しくなでることも忘れない。

今度はちゃんと褒めることができた。

マチスが豪快に笑いながらグウレイトオ!!とか言っている。

種ガンダムのアーチヤーとか訳のわからない人物を想像してしまった。

カラカラはフラフラながらも行く気らしく俺の制止の言葉を無視している。

連勝が慢心を生み出しているのかもしれない。

デイアツカなマチスが繰り出したのは古傷だらけのライチュウ。

戦場をポケモンと供に生き残ったという話も強ち嘘では無いらしい。

練度は戦わなければわからないが雰囲気から今まで戦ったことのあるポケモンの中でも上位だろうと予想できる。

プレッシャーでカラカラが止まっているのを好機と見て抱き上げる。

震えている背中を撫でながら大丈夫だと腕に少しだけ力を入れる。

相性だけならカラカラだがライチュウの雰囲気にもまれてるし、体力も残り少ないことから経験のあるロコンに行ってもらうことにする。

ドラゴンタイプすら葬ったこともあるし心配ないだろう。

声をかけると軽い足取りでライチュウに向き合う。

ふらりと揺らぐ尾は金色に輝いていて、美しい。

複数の火球を紫電が相殺する。

ライチュウの電気ショックが10万ボルト並の威力を発している気がしてならない。電光石火で距離を取り、牽制する。

ふとマチスを見るとサングラスをかけていた。

俺は目がちかちかして困っているというのに。

練度は同じか少し劣っており、互いの攻撃力は同じくらいだろう。

速さはロコンが勝っているが、防御は相手。

拮抗している能力は

ライチュウがフィールドの中央で立ち止まる。

ロコンが怪訝に思いながらも火球をばら撒き、ぶつける。

壁を伝っていた電気が天井の中央に集まっている。

危険を察知したロコンが火力を最大まで高めた火球を打ち出そうと前方に移動させた瞬間、ライチュウは目が眩むほど輝き、雷鳴が轟いた。

天井の雷が輝く火球を霧散させていた。

雷の脅威を感じとったのだろう、すぐに動きだしていた。

こちらを見ないので自分でなんとかできると判断したのだろう。

いつも通りだ。

ロコンがフィールドを焼き尽くす勢いで全身から炎を発して渦を作る。戦闘後は空腹で倒れているかもしれない。

雷鳴が聞こえたので雷をもう一度使ったはずだ。

それでも炎は巻き上がっている。

焦げた臭いが鼻につくとともに炎が弱まっていく。

フィールドの中心に目をやるとのど元に噛みついてるロコンと苦悶の表情を浮かべながら引きはがそうとするライチユウの姿があった。

二匹は炎に包まれていた。

多分、炎で目隠しして穴に逃げ込んだのだろう。

そして不意打ちで噛みつく、と。

もう少し作戦を練って欲しかったものだ。

ロコンは噛みついたまま炎を吐いているらしい。

ライチユウもそれに応戦するように雷をどかどかと落としている。

ダメージは二の次で相手を倒すためだけに焦点を置いているという戦い方は実に漠然しいと表現してもいいだろう。

ロコンは雌なのだ。

少しして、ライチユウが力尽きた。

火球を何度か撃ちこんでいたのが勝因になったのだろう。

ロコンは勝利を喜ぶように一鳴きしてから俺の胸に飛び込もうした。

が、先客のカラカラがいたので顔に抱き着いた。

ちよつと痛い。

マチスはテンションが上がりすぎたのか、よく喋るのだが外国語は良くわからない。とりあえずジムメイトが訳してくれているのがありがたい、上機嫌でポケモンバトルについて熱く語っているらしいのだ。

倒れているライチュウを抱擁したあとモンスターボールに戻して俺を抱きしめた。

ロコンは難を逃れていたが、俺とマチスに挟まれたカラカラは気絶していた。

オレンジバッジを受け取った後に握手した。

物凄い力で上下されたので頭に乗っていたロコンも揺らされたらしく機嫌が悪そうだった。

グレン出身だと話したらあの燃えるオヤジを思い出したぜ、とか。

カツラさんと戦ったことがあるらしい。

クチバに来たら顔を出してくれと誘われた。

空腹でツライらしく、か細い鳴き声が聞こえたのでジムを去った。

ポケモンセンターでの食事の時間は決まっているのでカラカラを預けて出ることにする。

回復するまでに適当な食べ物を買えばさる。

両手に買い物袋、頭に菓子パンを齧っているロコン。

完璧すぎてオニドリルの背に乗っていたオッサンに話しかけられてしまった。

珍しい色のロコンが凄まじく懐いているのでつい声をかけたらしい。

知識にあるなつき度を教えてくれる人かと思ったが話しているとどうやら違うみたいだ。ロコンは成長すると尾がわかれるのだが、愛情を受けた分だけ尾が巻いていくらしい。

オッサンの的に俺のロコンはかつてないほどのトルネードとか。

コンテストに誘われたが辞退しておいた。

少し残念そうにしていたが仕方ないとオニドリルの背に乗り直していた。

つい先日、カラカラの骨を売りに来たトレーナーのせいで溜まった鬱憤を晴らすのだとか。

俺の都合にぴったりと嵌ったらしいオッサンを引きずり降ろしてポケモンセンターに連れて行くことにした。

ポケモンセンターの一室を借りて話を聞く。

聞いてどうするのかわからない。

とりあえず、聞いてから行動することにした。

下手人の名前はグレイ。

偽名かもしれないがそう名乗っており、カラカラやガラガラの骨を売りに来たそう
だ。

恰好は黒いコートを着ていたので詳しくはわからず、顔は目つきの悪さが印象的で
かのことは覚えていないようだ。

珍しいポケモンを連れていて、強さも生半可ではないだろうとの話だ。

ジュンサーに連絡して追いかけてみようとしたが外に出たときにはいなくなっていたら
しい。

寝静まったカラカラとロコンを撫でながら、考えは数時間前のこと。

不明瞭な部分が多く、行き先もわからない。

それでも追うことを止めようなどとは思わないし、諦めることも無いだろう。カラカラの事だつてある。

話を聞いていて気づいた。

カラカラが俺の元にいるのも必然、運命でも、なんでもいい。

きつと 그레이 と出会うフラグだったのだと。

いま、俺自身が 그레이 と会いたい。

はつきりとわかる。

会つて、それで……それは後で考えることにしよう。

善くないことだと論ずるのもいい、友人や仲間にするのもいい、何なら殺してもいいだろう。

きつとこれが俺の役割だ。

俺の、俺だけの、役割。

帽子を渡した、その後の、俺の役だ。

그레이 を追うのも、追わないのも。

もしかしたら、俺は脇役で 그레이 が主人公かもしれない。

それでも俺の役割だ。

無様な役でも、栄えある役でも、俺だけのもの。

恋焦がれるような、憎悪で満たされるような、それ以上を求める落ち着かない気持ち。
グレイ。

会いたいように会いたくない。

気持ちが揺らぐ。

出会ったら役が終わるのではという悲観と新しい役を得ることが出来るという樂觀
がせめぎ合っている。

得た役を演じるために、演じる役を『俺』にするために。

気持ちは快・不快、たぶん両方。

言葉で表すと……そう、楽しみなのだ。

待っているよ。

——『俺』が会いに行くからな——

きつと今の俺は嗤っているだろう。

いつぶりだろうか、こんなにも愉快的な気分は。覚えていないが、かなり久しいはずだ。

嗚呼、楽しみだ。

——電光石火——

ロコンについての脳内情報から調べると全体的に数値が低かったのでそれを補うために考えた技（業？）。

縮地的な何か。

二歩を一步に、三歩を一步に、と縮める修練を行って走るだけなのだが足が四つあるおかげなのか、異常なほどの速さとなった。

効果は一瞬なので回避に使われる。

名称はこんな技があったな、と思いついて付けたので特に意味は無いが漢字表記の方がかっこいい。

熱を発しながら使うと、揺らぐ陽炎の分身をその場に残したままの「残像だ」が出来るが数秒で消えるうえに風や温度に弱く、かなりお腹が減るらしくて使用頻度は極めて低い。

——火球——

ロコン種は「鬼火」と呼ばれる火の玉を操る。

基本は人間の顔くらいの大きさだが、手持ちのロコンは人間くらいの大きさの火の玉を複数操ることができる。

この恩恵のおかげで火力不足に悩むことは無い。

—— 火球・極 ——

通常の火球を囷として使いながら炎を溜めることでタイプの相性を乗り越え、強靱なドラゴンタイプすら打倒することが可能な必殺技にもなる。

コマンドは「上上下下左右左右BA」。

—— ソニックブーム ——

全身が無機物のような電気タイプが得意な技。

野生で覚えている個体も存在するらしいので人気もある。

理論は「音速でく反発がく」を電気を使って起こすらしいがそんなもの知らん。

とりあえず衝撃波が発生して痛い、とだけ理解すればいいと思う。

不可視で距離も結構ある優秀な技。

—— 自爆 ——

丸いポケモンが使う捨て身技。

自分が戦闘不能になるほどのエネルギーを炸裂させる。

このエネルギーはポケモンごとに性質が違っていろいろらしく、個体のタイプや炎と電気

が相殺する現象の理由になるのでは無いかと調査されているとか。

自爆も奥が深い。

知識にはHP（体力）とPPがあつたし、PPが魔力のようなものではないかと俺は予想している。

つまり自爆はPPの一部を使ってHPを爆発させているのではないだろうか。

——高速移動——

ポケモンが速くなるっぽい。

テレビでも時々トレーナーが指示している技。

結構有名なのだが、全力で飛んだり、跳ねたり、走ったりしているだけではないかと思っている。

——テレビ中継——

知識と照らし合わせてみてもあまり違いはないが、強いて挙げるならポケモンが何かしらで関わっていることだろうか。

ポケモンを中心とした番組を構成しているポケメディアは老若男女問わずして人気である。

チャンピオンロードで年に一度だけ開催されるトーナメントの時期には生放送している。

ラジオも流れているが、俺は聞かない。

——菓子パン——

ポケモンを模したポケモンパンが人気商品として売られている。

デコキヤラシールなど存在しない。

【タママシ・アンダーグラウンド】

地下。

なんとも心魅かれる響きだ。

地下室や地下の秘密基地などに憧れたことのある男子も多いと思う。

俺も憧れを持っていた。

いや、グレンの屋敷には実際にあつたのだから憧れが実現した俺は幸運だったのだから。

幾分か成長し、昔のように憧れのみで判断することの無くなった今では地下と聞けば裸電球が点々と薄暗く通路を照らし、気まぐれで触った壁にはカビが生えているのではないかと思う程にジメジメとしている陰鬱な印象を抱いてしまうのは俺だけだろうか。俺が地下へと思いを馳せているのはきつと現在の状況が少しばかり平時と異なっているからなのかもしれない。

どんな状況かという地下空間で爛々とロコンが火球を輝かせている状態である。

もつと深く言うと、前方で壁役として頑張りつつ溶解液を流しているウツボットの集団や後方でモンジャラとカラカラが暴れまわり、隣では火球の光を得てソーラービーム（情報内ではこれが一番近かった）のようなものを連射しているフシギバナとラフレシア、2 mほどの巨大を誇るナツシーが複数暴れまわっているという地獄絵図である。

火球の影響で酸素が燃焼していようとも、きつとこの草ポケモンたちが新鮮な空気を俺に届けていると信じている。

若干引き気味の俺に貴方のロコンと私の草ポケモンはどうですかと朗らかに笑いかけたのはタمامシジムのジムリーダーであるエリカさん。

俺の意識の大半を搔っ攫って行った地獄絵図も彼女には日頃の日向ぼっこよりも興味が無い事なのだろうか、平然と天気の話やこの後お茶を一緒に飲みませんかなどと話しかけてくる。

太陽の下ならば実に可憐だったのだろうが哀しいかな、此処は地下である。

電灯がしっかりと点り、清潔感のある白い通路だとしても今のエリカさんから恐ろしい何かを感じて背筋が凍る思いである。

何故こんなことになったのだろうかと過去を思い出すとしよう。

クチバで迎えた朝は気分の良いものだった。

普段は30分で終わらせる毛繕いを1時間ほどかけるといふ手の入れようである。

ロコンもカラカラも困惑気味だったが俺の機嫌の良さに気付いて納得したようだった。

朝食を貪り、弁当を受け取り、さあ行くかと思つたが行き先を全く決めていなかった。シオン、タمامシ、セキチク。

俺は行っていない町を優先して決めようと思つている。

グレイと接触するのはいつでもいい。

俺にとつて追いかけることに意味があるのだ。

クチバから11・12番道路を通つてシオンへ向かい、そこからヤマブキ、タمامシと進むのがベストだろうと脳内情報から引き出した簡素なマップであたりを付ける。

棧橋の前を通りデイグダの穴が出来るだろう場所を横目に草が伸び放題な11番道路へあと一步のところで呼び掛けられ、足を止めてしまった。

今日はどうやらすんなりで行けなそうだと軽い気持ちで思ったがこの予感は当たりであったと喜ぶべきか悲しむべきか悩むことになる。

俺を呼び止めたのは大柄なこの外人さんのようである。

サングラスをかけ、H A H A H Aと豪快に笑うのは言わずもがな、クチバジムでジムリーダーをしているマチスだ。

何の用かと尋ねるとどうやら俺にタママシでの用事を済ませて欲しいのだとか。

ジムの修繕、殖えてきたメノクラゲ・ドククラゲの退治、釣り、バカンス、ライチュウの回復とやるが多すぎるので旅をしている俺にほかの町への用事を託すことにしたらしい。

会って一日で凄く信頼されているが何故なのだろうかと包帯を巻いたライチュウをモフモフとする。

ピリピリと少し痺れるが気になるほどでもないので構わず抱きしめる。

ピカチュウばかり注目されているがネズミにしてはやや大柄なライチュウの抱き心

地は実にいいものだと言っておこう。

つい引き受けてしまった。

ライチュウの愛くるしさにやられたというのは言い訳にならないだろうか。

ロコンが嫉妬でヘソを曲げる前にタمامシへ向かうことにする。

ヤマブキを経由する必要があるから今日中には着けないだろうと伝えると、ジムメイトが持っているポケモンに乗って行けば問題ないと言われた。

昨日今日でイミテとなつちんに会うのも恰好が付かないし丁度良いと思い、借りることにする。

騎乗系のポケモンは憧れだよな、モフモフしながら移動は人類共通の夢だろうなどと思いつながらクチバジムへと向かう。

ただ、一人乗りと聞こえたのが気になるところである。

確かに速い、速すぎる。

なによりその速さが怖い。

時速60kmは出ると脳内情報で見つけたときは断ろうと思ったが、電光石火のごとく背中に乗せられての移動だった。

そう、俺が背中に乗っているのはドードリオである。

ドードリオの頭が分裂したとか、頭ごとに司っている感情が違うなどと言われている珍種である。

ベトベターやベトベトンを見たときと同様にポケモンの神秘に気付かされた。

3つの頭が別々の事を思考し、それを共有しているとは本当に不思議でならない。

脳内情報では空を飛ぶが、無理とのことだ。

完全に陸上専用のこのフォルムを見たら納得するだろう。

だって羽が無いし。

軽々とタمامシへの道のりを踏破したドードリオの首を撫でながら礼を言う。

イメージだと凶暴なポケモンであるのだが、実際は友好的であるようだ。

俺に3つの頭をすり合わせたあと、休む間もなくクチバへと戻っていった。

騎乗できるポケモンも色々いるのだが出来ればモフモフできる余裕のあるポケモンがいいな、などと思いつながらタمامシの街に足を踏み入れた。

託された用事の説明はタマムシのポケモンセンターで受けるらしい。

既にパソコンで相手にメールを送っておいたから俺は行くだけでいいらしいのだが、顔も知らない人物と会うのは緊張してしまう。

安請け合いするべきではなかったかもしれない。

ポケモンセンターの自動ドアをくぐると一人の女性が俺に声をかけてきた。

着物を着ているトレーナーの中でも屈指の知名度であると脳内情報で出ている、タマムシジムのジムリーダー・エリカさんだった。

疎らではあるが注目を一身に集めながらの自己紹介は少し緊張してしまい、さあ、行きましようなどと誘われて頷いてしまった俺は小心者かもしれない。

楽しそうに俺の腕を引きながら向かったのはゲームコーナー。

何があるのだろうかと思って見ていると奥までずかずかと押し入り、ポスターを捲りあげて隠しボタンをひと押し。

錆びた鉄が擦れる音とともに地下への階段が姿を現したのだった。

あらあらまあまあ、なんて笑いながら軽い足取りで階段を下りていくエリカさんに用事を尋ねると、花が咲いたような笑顔で悪い人たちの殲滅ですと言いつけられた。

実に綺麗な笑顔だったが見惚れるようなこともなく、あつたとすれば俺の背筋を正したということだろうか。

殲滅……。

目つきの悪いオッサンに見つかって騒がれたら出るわ出るわ。

1匹見たら30匹理論に基づいているのではないかと思ってしまう程にガラの悪いチンピラがぞろぞろと集まってきたのだ。

幸い、狭い通路なので囲まれることはないがそれでも量を見たらうんざりとしてしまう。

女性であるエリカさんに向けて邪な視線を感じたのでロコンに行くように指示をする。

ロコンも雌だがポケモンである。

さすがにHENTAIはいないだろう。

思考が変な方向に逸れたので修正しながらカラカラを後方にまわす。
後ろから不意打ちされたら溜まったものでは無いからだ。

いい毛並みね、自慢なんです、あらあら妬いちやうわ、エリカさんも綺麗ですよ、ふつありがとう、みたいな軽い会話のあとにエリカさんがモンスターボールをばら撒いた。

ナツシーを5匹、ウツボットを3匹、モンジャラ2匹、ラフレシアとフシギバナが1匹ずつの計12匹を同時解放。

ルール無視ではあるが自然に見えるから怖い。

ルールから外れたらルールに守られるはずがないでしょうと笑いながら一言発したあとにポケモンを突撃させた。

蹴散らすナツシー、溶かすウツボット、絡めるモンジャラ、殴るカラカラ。

阿鼻叫喚の嵐である。

ロコンの溜め終わった火球付近で光り輝くフシギバナとラフレシアの姿。

直後に放たれたソーラービーム。

増援に来たのであろう敵は更なる混乱に巻き込まれていった。

そしてエリカさんはほほ笑みながら俺に一言告げたのだ。

私たちっていいコンビになれそうですね、と。

怖くて返事が出来なかった。

あとは冒頭の通りであり、特に目立った変化も無く制圧は完了した。

気分がいいので殲滅は無しにしますなんて言葉は俺には聞こえなかった。

聞こえなかったのだ。

ポケモンポリスを呼んでお仕事は終了。

お茶に行く前に済ませておくことが一つあるのだ。

エリカさんに少し時間をくれるように言うとおっさりとして承してくれたので別行動をとる。

役割を果たすためにフラグを立てることが今の俺には重要だ。

気絶しているチンピラを蹴り起こして話を聞くことにする。

グレイを知っているかどうかだ。

ついでに最近、何か変わったことは無かったか聞いておこうか。

ジムメイトは女性のみなので実にアウエー感満載のお茶会である。

屋内なのに花畑とは如何になんて現実逃避をしないとやっていられないのだ。

唯一の味方であるはずのカラカラはモンジャラに絡みつかれるという謎の遊びをしている。

お前の天敵だぞ、草タイプ。

ひなたぼっこしたくなる気持ちかわかるほどにぼかぼかしている。

天井がガラス張りなので日光が降り注いでいるのだ。

しかも植えられた植物のおかげで光量もちょうどいい加減となっている。

草ポケモンもそこら中で眠っているし、ロコンなぞ俺の膝を占領している。

が、やはり女性ばかりの中に俺一人は気まずくてしょうがない。

お茶を啜りながら先ほど得た情報と黒いビジネスバッグ、空のモンスターボールが2個の経緯を照らし合わせることにする。

このバッグはメタモンで壁に偽装しながら逃げていたチンピラが大事そうに抱えていたもので、エリカさんがニコニコしながら奪……永遠に借りたものだ。

このバッグは俺にくれるらしい。

タマムシではエリカさんがルールなのでポケモンポリスに知らせる必要はないとか。

エリカさん……。

Q. グレイを知っているか？

A. 知らん。

その場にいたチンピラは誰も知らなかった。

大好きクラブにカラカラを売り込もうとする奴だし、こういう奴らと関わりが薄いのだろうか。

関わりが有ったら真つ先に売り込みに行くはず。

Q. 最近、何か変わったことは無かったか？

A. 幹部がポケモンを強化するアイテムを持ってきた。

どうやらこのバッグに入っているアンブルが強化するアイテムらしい。

俺が持っているアンブルは5つだが、本来は6つ。

つまり1つはすでに使った後だ。

名称は『破壊の遺伝子』

脳内情報では攻撃力を強化して混乱するはずだがコイツはどうなのだろうか。

そもそもミュウツウの遺伝子の一部だろうと言われているこれがなぜここにあるのだ。

チンピラ連も詳しくは知らないらしく、科学者っぽい人物からポケモンを強くする効果があるアイテムを買ったらしい。

モンスターボールの中身はイーブイが1匹ずつ入っていたらしい。

アンブルの中身を片方のイーブイに試したらしく、観察している最中に俺らが襲撃し

たらしい。

環境の影響を受けやすいイーブイで試すことによつて安全性や副作用を観察するには適していたとか。

聞いていて気分が頗る悪くなる話だったのでそいつの手持ちのルージユラと愛を語つてもらふことにした。

ルージユラとかカントーでは貴重なポケモンだが、不人気である。

見た目がきついからだろうか。

熱烈な愛の語りは見なかったことにする。

エリカさんが楽しそうだったなんて思つてない。

神に誓つて。

……：そういえばこの場合の神とはポケモンになるのだろうか。

突然の襲撃だったために幹部の連中がイーブイのみを連れて逃げ、アンブルは後で運び屋が届ける予定だったが偶然エリカさんに気絶させられたために俺の手元にある。

もう一匹のイーブイにも破壊の遺伝子を試すつもりだったらしいので、それを阻止できたと喜ぶべきなのだろうか。

以上の情報しか得られなかった。

特に必要なグレイの情報を得ることもできなかったので骨折り損だったのかもしれない。

ないが、エリカさんとお茶を飲むという貴重な体験が出来たので良しとしよう。

柔らかい日差しの中で無理やり自分を納得させながらロコンの背を撫でたのだった。

エリカさんが望んだのでアンブルを1個あげることにした。

むしろ俺が大半を貰っているのが謎なのだ、1個くらい構わないだろう。

代わりにチンピラ連が使っていた地下空間のカギを貰った。

使い道は無いのだろうけどありがたく貰っておくことにした。

ゲームコーナーも暫くは営業停止だろうとか。

まあ、さっきのようなこともあったのだし仕方ないだろう。

運営はそのうちするので戻ってきたらオーナーになって自由にしてもいいですよ、と

言われた。

冗談ですよねなどと尋ねても、うふふしか言わないのが少し怖かった。

タマムシに来てから背筋がゾクゾクしつ放しである。

気疲れもしているので、今日は早く寝たいものだ。

申し訳ないけど泊りは勘弁してください、エリカさん。

——10

——騎乗系ポケモン——

背に乗れるポケモンのことである。

ピジョットをもふもふしながら空を飛ぶことに憧れを抱かずにはいられない。空を飛ぶや波乗りするための秘伝マシンなんて存在するのだろうか。

乗り心地を向上させるコツ、とか？

少し気になる。

——タママシジム——

女性ばかりのジム。

綺麗な人ばかりだがどうも気疲れしてしまう。

エリカさんは優しいがどこか凄味がある。

バトルフィールドは草木に覆われていて、木々の隙間から日が差している。

昼寝したくなる空間だ。

【E F B】

タمامシは広い街だ。

大学やデパート、マンション、レストラン、今は営業停止中のゲームコーナー、地下のアジト。

最後は余計だがカントーではヤマブキに並ぶ大都会だ。

高層ビルが建ち並ぶ工業が進んでいるヤマブキとは発展の方向が違うらしい。

タمامシでは商業や娯楽系統を中心に発展が進んでいる。

もちろん、人口も多い。

なし崩し的にタمامシジムに泊まった俺はデパートへと興味本位で向かうと人の波に揉まれることになった。

夜遅くまで天体観測をしていて疲れたのでこういうのは田舎者の身としては勘弁してほしい。

昨夜の話だがタمامシジムにいつのまにか泊まるようにやり込められたが、奥の女性の花園をなんとか断って植物園のようなバトルフィールド付近で寝ることになったのだが、エリカさんも一緒に寝ようと寝袋を持ってきたのは驚いた。

緊張で眠れなかったのでこっちでも月や星は同じなのだ、と思いつながら木々の隙間から見える夜空を眺めていると同じように眠れなかったらしいエリカさんに星座の話聞いたので夜更かししてしまったのだ。

星の名前は一緒だったり、聞いたことが無いモノがあったりと様々だが、星座の名前がポケモンとなっていて面白かった。

グレンでもあまり星のことについて学ぶ機会は無かった。

そういうえば星座占いが無いのだなと思えばエリカさんに伝えると楽しそうに目を輝かせていたのが印象深い。

話は逸れたがそういうこともあって今日の俺は元気がない。

休みたかったがジムでは女性に囲まれてどうも気が休まない、脳内情報と街の位置を照らし合わせてセキチクに向かうことに決めた。

エリカさんも一緒に来ようとしていたが挑戦者が現れたので俺一人となったのだ。

その時のエリカさんの笑顔はすさまじいモノがあり、挑戦者は死んでいないだろうか心配してしまうほどだった。

やっこのことでタママシデパートへと入ることが出来た。

5階建てのデパートは多くの人で賑わっていて、楽しそうな雰囲気はこちらにも伝わってきた。

頭の上で眠っていた口コンも忙しく周りをキョロキョロと見ている。

カラカラは小さいのではぐれてしまうと面倒なことになりそうなので、腕に抱きかかえて案内板の前へと足を進める。

どうやら脳内情報とあまり差異は無いらしい。

第一世代準拠のようだが、品物に変化があるかもしれない。

冷やかしながら見ていくことにしよう。

1 F

受付の女性はふわふわしている薄茶の髪が可愛らしい。

話してみようかと思つたが、客への説明で忙しそうだったので諦めて2階へと進むことにした。

2 F

わざマシンが売っているので見てもいいことにする。

わざマシンは頭に乗せるヘルメット型の機械に技毎に小売りしているディスクを挿れて使う。

グレンでも見る機会が無かったし、使ったことも無い。
どんなものがあるのかな、と。

新商品!!しつけならこちら!!

お手、おかわり、伏せ、待て、e t c

……え?

店員の人に話を聞いてみると、わざマシンというのはしつけ用らしい。

モンスターボールで捕まえたポケモンはボールの居心地の良さで捕まえた人に懐くのだが、キッチンとしつけられるかは微妙らしい。

しかもヤマブキなどの都会ではポケモンが問題を起こすかもしれないので躰けはマナーとしては基本らしい。

ロコンはとカラカラは行儀良いけどどんなわざわざマシンを使っているのですか、と聞かれたので使っていないと答えると随分と驚かれた。

凄腕のブリーダーだと思われたが、なんだかな……。

しかし、安全面から4つしか覚えさせることができないわざを躰けに使うってどうなのだろうか。

俺が半人前のトレーナーだから変に思ってしまうのかもしれない。

なんとなく釈然としないのだが。

3 F

3階はゲームシヨップだ。

GBやスーパーファミ、ロクヨンといった脳内情報にあるゲームから見たことないゲームまで様々。

ん、これは……。

メダ○ツト

そつと柵に返しておいた。

気になって手に取ってしまったことを少し後悔した。

盛り上がっている一角があつたので見てみるとスマブラ大会が開催していた。

スマブラ64を見ていると懐かしい気分になつたのでそつと混ざることにした。

ネスで絶↓ペちをする簡単なお仕事です。

3対1になろうとも余裕で撃退。

店員にコツを聞かれたのでカウンターの要領でやるのだとテキトーなことを言つて逃げる。

カウンターの途中で客に混ざつてスマブラやる店員つていいのだろうか。

4 F

くの石がごろごろと表現できるほどにたくさん売られている。

ロコンの首飾りになっていて、炎の石も売られているが、ベトベトンに貰ったほうが輝いている。

ラプラスのぬいぐるみが売られていたが残り一個のようだ。

この後はセキチクへ行つてからシオンを少し眺めて、ヤマブキに寄る予定である。イミテにお土産を買つていくことにした。

店員に聞くと仕入れしてもすぐに売り切れるので俺は運がいいらしい。脳内情報だと使い捨てのイメージなのだが……。

5 F

アイテムが売っているのでトレーナーも多いのかと思つていたがそうでもないらしい。

タウリンなどの努力値を上げるアイテムは健康食品に近い扱いだ。

実際、この世界で努力値つて眉唾だと思う。

同じポケモンを倒し続けたからつて特定の能力に特化できるとかゲーム的すぎる。

一応ポケモンだつて生物なのだ。

とか何とか思いながらスペシャルアップなどを買う。

グレンの経験から補助アイテムはなかなか使えるのだ。

屋上

人が少ない屋上で一息つくことにした。

アイテムを買うのに時間をかけすぎてロコンがヘソを曲げているし、カラカラも疲れ
ているようだ。

ミックスオレを買ってご機嫌とりをする。

すごい見詰められているので振り返るとメガネのお姉さんが俺を凝視していた。

……何事だし。

俺を凝視していたお姉さんはカンナさんというらしい。

赤茶の長い髪を後ろで一纏めにしていて、メガネの奥に見える目が鋭くキツイ印象を
受ける。

ジューズを渡して話を聞くと故郷は遠い島なのだが仕事の為にこっちにきたのでつ
いでとして前から欲しかったラプラスのぬいぐるみを買いに来たらしいが売り切れ
だったとか。

仕事場が遠いので次に買える機会がいつになるのかわからないと落ち込んでいたら、

俺が持っていたので驚いたとか。

ぬいぐるみが好きなのか聞くと、俺から目線をずらして頬を少し赤らめて恥ずかしそうにええと頷いてちびちびジュースを飲み始めた。

徐々に顔が朱くなっていく。

え、なにこの人。

超かわいい。

なんか疲れが癒された。

イミテへのお土産はまた別のモノでいいだろうかと思えばプラス人形をあげることにした。

初対面でいきなり渡すのもアレだが、癒された礼だ。

最初は断られたが、野生のポケモンの囿にするよりはマシだろうと伝えると少し引き攣った笑いをしたが受け取ってくれた。

代わりに綺麗なガラスのようなモノを貰った。

触ると冷やりとしている。

溶けない氷というカンナさんの故郷の島の洞窟でときどき見つかる珍しいアイテムらしい。

受け取れないと断ったが、ぬいぐるみのお礼だと言われたので有り難く受け取った。

氷タイプのポケモンの良さで意気投合した。

特にラプラスの話になると凄くテンションが上がってしまったがカンナさんも同じ様な状態だったので問題ないだろう。

あまり時間を取るのも悪いだろうとそろそろ行く旨を伝えると、トレーナーIDを交換することになった。

初めて聞いたのだが、トレーナーIDでポケネットを介してメッセージのやり取りが出来るらしい。

旅をしているのであまり頻繁には利用できないかもしれないが、と伝えて別れた。

そういえばカツラさんに貰った封筒にも書いてあったのを思い出した。

何事かと思ったがそういうことらしい。

そのうちなっちんと交換したいが、どうだろうか。

セキチクまでは長いサイクリングロードを下って行けばよかつたはずだ。

自転車は持っていないが散歩気分です歩いて行くつもりなので下見をする。

深い意味はない。

脳内情報では自転車を持っていないと入口から先にはいけなかったので下見して空を飛ぶの秘伝マシンの場所から侵入しようなど思っていないのだ。

つらつらと自己弁護しながらサイクリングロード入口の前まで来ると人ごみで凄いことになっていた。

自転車やバイクに乗っている人ばかりである。

状況を把握するために人ごみの前まで行くとエリカさんがジュンサーさんと話しているようだった。

困りましたね、などと聞こえてくる。

セキチクに行く前にジムへ挨拶に行くつもりだが、気になったので声をかけてみることにした。

地下に攻め込むような厄介事だと困ると思ったのは自然なことだと思う。

エリカさんがソーラービームを撃ち込んでいた。

サインを求めてくるトレーナーやバイクに乗っていた珍走族にイラついていたのかもしれない。

どうも厄介事らしい。

しかもかなりの厄介事だとか。

まあ、その厄介が人間の手ではどうしようもないレベルなのだけでも。

詳しい話はサイクリンググロードを歩きながら聞くことになった。

ポケモンが全くいない。

とても静かな草むらや海を見て奇妙な気分になったが、歩いている限りではなんともない、わけではなかった。

タママシからセキチクに向かう場合、サイクリンググロードは下り坂になっている。

歩いていけば先が見通すことができるのだが、どうもおかしい。

サイクリンググロードのちょうど半分くらいのセキチクへと繋がる部分らしいのだが、道というか海というか、俺の視界に映っているすべてが光を反射しているのだ。

内心で驚愕しつつ落ち着こうとロコンを撫でるがいつもよりも体温が暖かい。

疑問に思い周りを見渡すと、草むらにうっすらと霜が降りている。

ロコンに温度を下げるように伝えると急激に寒くなった。

息が白くなる。

エリカさんとジュンサーさんが震えているのでロコンに暖めてくれるように頼む。

気付かないうちに暖めてくれていたようなので礼を言いながら撫でる。

カラカラも地面に近いのは寒いのだろう、腕に抱えて白衣で包みマフラーを巻いてやる。

原因はわからないが見ての通りセキチクへと繋がる道が凍結してしまっているらしい。

エリカさんがセキチクのジムやポケモンセンターに連絡をとったが凄まじい寒さで海までもが凍っているのだからか。

他の道路も同じ様に凍結していて避難勧告を出しているので行くなら装備を整えるようにと注意された。

ロコンの暖で進んでもいいが、どのくらい消耗するか不確定だ。

このまま進むのは不安なのでヤマブキを通してシオンへと向かうことにする。

エリカさんと凍結しているセキチクの話をしながら昼ご飯を食べる。

カンナさんがラプラスのぬいぐるみを手に入れた嬉しさで暴走したのだろうかなどとありえない冗談が思いついた。

そういえばカンナさんは氷タイプに詳しくはなだったので連絡して詳しく聞いてみ

ることにする。

ジムのPCを借りて時間があるか尋ねる。

ポケモンセンターにいたらしく、暇をしているので来てくれるらしい。

有り難く思いながらカナナさんと合流した。

カナナさんの顔を見たエリカさんは驚いていたが早速セキチクの状態を伝えて話し始めた。

情報規制などはいいのだろうかとも思ったが、知れ渡ることだし構わないのだろう。

もう一度サイクリングロードへと足を運び検証を始めるも原因は強力な冷気で急激に凍らされたのだろうかということだけだった。

どう見てもエターナルフォースブリザード(EFB)が起きたとしか思えない。

EFB状態の道はどうやら俺のような一般トレーナーはおろか、タمامシを総括しているエリカさんでも手が出し難いらしい。

ポケモンリーグに任せることになるだろうという話になっていた。

ここまで大きいと御上に任せる事態なのだが、早期の解決は見込めないとエリカさんとカナナさんも言っていたのでそうなのだろう。

俺にはわからないがどうやら動き出すまでかなりの時間を要するらしい。

手足が多く、組織としても巨大な機関の欠点かもしれない。

ポケモンポリスやジムが対応するので俺がすることは無いだろう。

エリカさんとIDを交換してジムメイトの人たちに礼を言ってシオンへと向かうことにする。

タمامシのゲートまで見送ってくれたエリカさんとカンナさんに手を振り、7番道路へと歩を進めた。

7番道路からヤマブキに向かい、そこから8番道路を使ってシオンに行くのだ。

そこから情報を集めてセキチクヘどうにかして行くことにしよう。

ヤマブキにとんぼ返りするようなものだが凍結していて通行止めなのだし、仕方ないだろう。

予想外のことですべて狂ってしまったが気にせず行こうとして思い出した。

代わりのお土産買ってなかったってことを。

—— 11 ——

—— タمامシデパート ——

カントー地方で最も大きなデパート。

5階まであり、品ぞろえが豊富。

屋上の休憩所ではジュースを飲みながらタマムシの街並みを眺めることができる。

第一世代準拠のようだ。

——ラプラスのぬいぐるみ——

愛くるしいラプラスのぬいぐるみはカントー地方でも人気。

くりくりとした瞳が魅力的だ。

イミテに持っていったら凄い喜び様だった。

どうやら売り切れが続出しているらしい。

もつと早く渡す機会があったのは秘密にしておくでしょう。

あれはあれで有意義だった、と心の中で納得している。

——EFB——

エターナルフォースブリザードの略。

相手は死ぬ、らしい。

凍結していたセキチクの周辺のこと。

【あいまいめまこ】

旅の目的である『将来』を見つけることは未だに叶っていないが旅は順調だろう。

グレイとの対面はある意味で旅の目的ではあるが『将来』とは異なるので除外しよう。足早に脳内にある鮮明な情報と照らし合わせているが幾らかの差異はあるが、驚くほどの違いはない。

今のところは脳内情報の地理を確認しつつ、カントーを一回りしてから細かく見て周る予定だ。

記憶に漂っているデフォルメされていてどこか不安定な地図に上書きしながら、様々なポケモンと触れ合ってみたいのだ。

ロコンやカラカラと一緒に楽しめよう。

今後の予定に思いを馳せながらヤマブキへと向かって歩く。

セキチク周辺が凍結しているのでクチバも気になるのだが、そちらも凍り付いていたら防寒具のない俺では移動に難が生じるためだ。

寒いのは構わないのだがロコンが火を燃やし続けることで無理するかもしれないし、シオンへと先に向かうことにした。

目的地であるシオンは暗く寂しいイメージがある。

旅に出るまでグレンから出たことのない俺は見ることがないのだが、どうも脳内情報を思い浮かべるとそう感じるのだ。

旅を始める前は思い出すために情報を『検索』するような探す手順が必要だったが、旅に出ると情報が勝手に思い浮かぶようになっていき、今では自然な『記憶』として混同し始めている。

ひと月も経たない内に急激に変化しているが心配するようなことではない。

何となくではあるが、大丈夫だとわかるのだ。

不思議なことに不安を感じることはない。

それが不気味であるのだが。

7番道路はカントー地方で最も短い道路だ。

草むらもオマケ程度で少しだけあり、ポケモンの姿を見かけない。

ハナダからヤマブキへと繋がっている5番道路と同じように寂しく感じた。

都市付近ではこの様な状況なのだろう。

ここに住んでいたポケモンはどこへ向かうのだろうか。

ヤマブキの街並みが小さく見えた。

ここからでもわかるほどにビルが連なっている姿は脳内情報にある『風景』と重なって見える。

ポケモンとは別のカテゴリーだと思われる情報からは硬質的な、塗り固められた『無感情』を感じた。

心が強制的に冷えていくように感じて怖くなった。

都会の『風景』を忘れて落ち着くまでロコンを抱きしめた。

カラカラを放っておいた形になってしまったので謝ろうと思い、足元に目を向けるとどうも様子がおかしい。

骨を構えて威嚇するカラカラとこちらを見つめる女性の姿。

奇妙に思いながらカラカラにやめるように言うが、凍ったように動かない。

ロコンに頭の上に戻るよう伝えてカラカラを抱えると小刻みに震えていて大量の汗をかいているのがわかる。

体調を崩したのかと思つてすぐに汗を拭うが、カラカラは縋り付くように俺の白衣を握った姿で女性を睨みつけていた。

カラカラだけでなくロコンも警戒しているし、俺もあまり話していたくないと思ったので無視してヤマブキへ行こうとすると挨拶されたので小さく頷く。

背丈は俺と変わらないくらいで口元に浮かべた柔らかな笑みと垂れた目元から優しいような印象を受ける。

顔も世間一般で言うところの綺麗に該当するのだろう。

だが、やはり面と向かって話してはいたくない。

無性に気に入らないのだ。

女性はポケモン保護団体に所属していて、珍しいロコンとカラカラを見かけたので興味を持ったのだと笑いかけてきた。

どうやら俺は人を見る目があるようだ。

気に入らないのは保護団体の人間だからだろう。

保護団体はポケモンを保護する団体だ。

純粹にポケモンを保護するのではなく、ポケモンの価値あるモノを保護するのだ。

いや、保護という言葉すら烏滸がましい。

蒐集していくのだ。

貴重なポケモン、珍しいポケモン、アイテム、etc……。

目当てのモノのためなら手段を選ばない集団だ。

俗物的なコレクターどもの溜まり場でもある。

こいつらは俺が嫌いな人種だ。

グレンのポケモン屋敷に忍び込んでポニータの子供を攫おうとしたのもこいつらだった。

そしてこいつらは少しばかり過剰な愛護団体である大好きクラブと仲が悪かった。

ポケモンをモノとして蒐集する保護団体には煩い相手だからだろう。

ソリが合わなく、摩擦が生じていてもおかしくない。

女がタマムシへ向かったので後ろ姿を確認してヤマブキへと向かうことにした。

怒りを堪えた自分を褒めたいくらいだ。

カラカラの背を撫でながら深呼吸を繰り返す。

アイツは名前も告げずにひたすら口コンとカラカラを褒めていた。

毛皮と骨の価値だけを。

だから、アイツが見ていただけで不快だった。

口コンとカラカラを見ているのに、見えていない。

俺にはわからないし、わかりたくもないものがアイツの目には映っていたのだろう。

それがひたすらに俺の気分を害した。

あの女への不満で頭がいっぱいになっていたのだが、ヤマブキに近づいた頃には幾分

か治まった。

そうしてふと思ったのだ。

アイツはカラカラの骨を執拗に褒めていたのはなぜだろうか。

この骨はガラガラ物の物だったが一目見ただけではただの大振りな骨だ。

有用性は実際に見ないとわからないはずだし、カラカラやガラガラが持っている骨は普通の骨と同じか少し硬いくらいでコレクターどもは興味を持たないはずである。

つまりこの骨についてよく知っているということだろうか。

カラカラと因縁があるのはグレイのはずだ。

警戒するカラカラ、骨に執心していた女、蒐集を活動の主にする保護団体。

つまりグレイは……。

グレイは保護団体に属しているのではないかと考えに至り、先ほどのいけ好かない女を追いかけてしようとしたが、足止めをくらってしまった。

ピジヨットが空中でこちらに狙いを定めていた。

ロコンが鳴き声をあげて火球を飛ばして俺に注意を促したことで気付いた。

解放された空間での飛行タイプは無類の強さを誇る。

ジムやトレーナーハウスなどの屋内では飛行範囲が狭まるのでそれほど脅威ではないが、屋外での三次元機動は厄介極まる。

こちらは常に地上から行うため、攻撃の始点が固定されてしまうので回避されやすいのだ。

屋内ならば壁に追い詰めれば当てることは容易いが、現状では困難だろう。

火球や骨を投擲する攻撃では当たるとはまず無い。

飛んでいるポケモンは地形を利用して少しでも攻撃範囲に近づけるのが鉄則だが、タマシクヤマブキ間のここらは木々などの障害物すら無い広々とした道路だ。

どうしようもないほどに不利なので逃げることにする。

ロコンとカラカラをモンスターボールにしまおうとも考えたが隙ができるので両脇に抱えて走る。

ピジョットの飛行速度に人間の足が勝てるわけないが立ち止まるわけにもいかず背を向けて逃げ出す。

未だに追撃を浴びせられているがとても奇妙だった。

羽音はしないが、影で接近がわかるのでなんとか攻撃を避けることはできる。

ポケモンのみならず、狩りを行う動物は隠密に特化するというのにこのピジヨットは隠れる気が全く感じられない。

影で自分の姿を晒すなど愚の骨頂だろう。

それでも攻撃をしかけてくる姿は何かに取りつかれているような執念を感じる。

そもそもピジヨットがここにいること自体おかしな話だ。

ピジヨットの絶対数は限りなく少ない。

ポツポは警戒心が強く、戦いを好まないために進化することが少ないのだ。

ピジョンになることすら稀であり、大半がポツポのまま寿命を迎える。

ピジヨットはトレーナーの元でしか存在しないのだ。

だが、指示しているトレーナーの姿はない。

ならば野生なのだろうか。

貴重とまではいかないが、それでもピジヨットを捨てるトレーナーなど皆無だ。

それに開発が進んでポケモンの姿がないヤマブキ周辺で偶然野生のピジヨットと出会うのはありえないのではないか。

疑問が次から次へと湧いてくるが今はピジヨットへの対処を最優先とする。

何度目かの回避でどうやらこのピジヨットは俺のモンスターボールかカラカラの骨を狙っているらしい。

モンスターボールさえあれば俺のポケモンの所有権を持つていかれたも同然になるし、カラカラの骨が盗られても飛んで逃げられたらどうしようもない。

物取りに近い、かなり嫌な戦法だ。

背後に人間がいるとしたら、確実にいるのだろうが、かなり性格が悪いだろう。

ここでどうにかしてピジヨットを捕えて、背後に控えている馬鹿を目の前に引き摺り出したいところだ。

攻撃パターンは滞空してから突撃するのみの機械的な行動しか取らないので対処のしようがある。

チームワークが完璧な群れに襲われたら悲惨だろうが、相手は一匹のみなので危険も少ないはずだ。

ロコンに複数個の火球を浮遊させて、ピジヨットの突撃と同時に進路に火球を配置。

超速で避けるピジヨットを少しずつ誘導し、渦巻く炎を拡散させて視界を眩ませて、

待機していたカラカラが地面へと叩き落とす。

邪道な倒し方になってしまったが気絶しているピジョットを横目に褒めることにする。

圧倒的な火力があるなら面攻撃でプレッシャーを与えて隙を突くのが一番いいのだが、今は該当しないのでこのような方法を取らざるを得なかった。

ウインディやベトベトンだともっと綺麗にいけるのだがと思ってしまったのは反省したほうがいいかもしれない。

ピジョットを運ぶのも大変なので試しにモンスターボールを向けてみると吸い込まれたので驚いてしまった。

誰かしらの手持ちでは無いらしい。

野生ではほとんどありえないのだが、例外だろうか。ピジョットを確認するために出してみる。

飛んでいる姿ではわからなかったが体中に傷がある。

今の戦闘で受けた傷もあるのだろうがそれ以外の古傷が多く、かなり汚れている。

野生だとして群れを追われたにしてもあまりに傷が多い。

トレーナーがバトルに出したとしてもこんなに傷つくことはないだろう。

ポケモンセンターがあるのだから、傷がここまで残ったりはしない。

多分だがポケモンセンターを利用せず、しかも自然に治る前に何度も戦っていたのだらう。

傷が化膿している部分が痛々しい。

羽はボロボロになっており、付け根からは血が滲んでいるようで変色している。

これで飛んでいたのかと疑いたくなるほどだ。

リュックから取り出した水で傷口を濯ぎ、薬で治療して包帯を巻く。

痛みでうめき声をあげている姿を見るのはツライが、俺に捕まった不幸だと我慢してもらおう。

応急処置程度なのですぐにポケモンセンターに持っていく必要がある。

モンスターボールにしまいこんで走りだした。

ヤマブキのポケモンセンターに駆け込んだ。

イベントはまだ続いているようで人がたくさんいたが無視してジョーイさんに見せる。

割り込みも勘弁してもらおうとしよう。

文句が過ぎると俺も困るのだが、ロコンの火球を見て状況をわかってくれたらしい。長生きの秘訣は空気を読むことかもしれないなと思っただが関係ないことだろうか。

治療を待っている間、無駄に考えてしまうのだ。

答えは出ないというのに。

クセのようなモノかもしれない。

ピジョットの治療にポケモンセンターを利用していないのだから野生かもしれないがそれもおかしい。

野生ならばここまで傷つく前に回復しようとするはずだ。

というか少しでも傷が付けば狩りなどに影響するので無理することはありえない。

それなのに傷が治る前に無理をしていた節が多々ある。

ジョーイさんと言うには一度でも捕獲されたポケモンは『手持ち』としての記録が残るはずらしいのだが、ピジョットには無かったというのだ。

おかしい話だがピジョットは野生として生きていたことになる。

自分の意思で俺を襲ったことになるのだ。

オニドリルなら気性が荒くトレーナーに襲い掛かることもあるが、ピジョットがそんなことはありえるのだろうか。

わかるのはピジョットからの情報は何も得られないということだ。

今日はわからないこと、ありえないことばかりで辟易している俺はまだ疲れる要因が残っているらしい。

ジョーイさんがお怒りの様子で俺を呼び出したのだ。

多分、いや、間違いなく説教だろう。

なんとも儘ならない世の中だ。

まあ、ピジョットの治療がうまくいったと聞かされたので今日は良しとしておこうか。

—— 12

—— ポケモン保護団体 ——

財産としてポケモンを保護するという名目で活動している団体。

表ざたになつていないがポケネットと調べると悪評が次から次へと見つかる。

ポケモンをコレクションとして扱っている。

ポケモンを道具と勘違いしているらしく、俺の神経をピンポイントで逆撫でしてくる。

金持ち子どもが趣味でポケモンを集めるより害悪。

出会ったら即駆逐すべき。

【昏迷】

一日に一度はポケモンセンターで治療を受け、絶対安静にすることと言い含められてピジョットを返してもらった。

まだ眠っているが外に出した時に暴れるかもしれないとか。

モンスターボールを胸ポケットに入れるときに慎重になるのは意味がないのだが、ついやってしまう。

相変わらずヤマブキのポケモンセンターは盛況なので宿泊はできない。

ピジョットの様子見のために数日ほどポケモンセンターに滞在したかったが仕方ない諦める。

シオンで幾らか休めるだろう。

まあ、雰囲気は暗いだろうが気にしても仕方ない。

今からシオンまで行くにしてもタママシに戻るにしても遅すぎる時間だった。

長く腰を据える必要があるときに肝心の休息地が得られなかったりするのが自由気ままな旅の欠点でもあるのだろう。

少し前まで何とも思わなかったこのイベントが酷く鬱陶しく感じる。

イミテに頼んだら泊めてくれるのだろうが迷惑をかけるのも心苦しい。

俺だけなら今からシオンまで行っても構わないのだが戦闘を終えたロコンとカラカラは疲れているだろうし遠慮したいものだ。

モンスターボールに入れて俺一人で行こうと思ったがなぜか拒まれたので連れ歩いているが休憩するべきだろう。

何処も彼処も騒がしいので落ち着ける公園で休みつつ考えるところしよう。

雑踏の中を歩くのは酷だろうとカラカラを抱えながら公園を目指す。

これだけ人が多いと何かしらの事件もあるんじゃないかと等と思ってしまふのはな

ぜだろう。

多分、至る所にジュンサーの姿を見かけるからだと思う。

本当にジュンサーが多いのだが他の街の警備は大丈夫だろうか。

ロコンも人の多さに少し落ち着かないようで尻尾がわさわさと動いている。

背中がなんとなくむず痒いのでさっさと公園の中に入ることにした。

前と同じように静かな空間である。

ヤマブキの街中とは思えないほどに静寂に包まれていた。

カラカラを地に降ろしてどうしたものかと考える。

ここで野宿してもいいが、都会のご真ん中で俺みたいなお少年が野宿していたら柄の悪い連中やジュンサーに絡まれそうだし。

というか都会で野宿なんて侘し過ぎる。

とりあえずピジョットと親交を深めようとするも失敗する。

ボールから出すと飛び立とうとするので押さえつけるが狂ったようにクチバシで俺

を突つこうとしている。

ロコンとカラカラが攻撃しようとしたので止めたが、それでも互いに威嚇したままだ。

傷が開いて悪化したら困るのでボールへと戻そうかと諦めかけたときになっちゃんに声をかけられた。

偶然の出会いかと思つたら俺が来ることを予知していたらしい。

予知といつてもなんとなくといった感覚であるし、当たらないことも多いので気休め程度だと言われた。

それでも凄いと思うのは俺だけではないはずだ。

なっちゃんマジエスパー。

なっちゃんと挨拶を交わしてピジヨットを戻そうとすると止められた。

これは……と意味深に呟いたなっちゃんがフリーデインを出してピジヨットを眠らせた。どうやらピジヨットには催眠術が掛かっているので解除してくれるらしい。

強力な催眠術を何度もかけられた形跡があり、洗脳に近い状態になっているとか。

ここまで来ると悪意すら感じるほどに悪質なレベルらしい。

俺には対処できない問題なので専門家であるなっちゃんにすべてを委ねることにする。

フリーデインと協力して治療してくれている。

俺の知っている催眠術と違うので疑問を持ったが邪魔になるかもしれないので黙っていたがなっちゃんが話し出してくれたのでありがたく聞くことにする。

戦闘などで簡易的に惑わすなら軽く判断を鈍らせる程度に混乱させたり、眠らせたりできるが狂わせたり、操作したりするのは時間がかかるのか。

何度も頻繁に、それも長い時間かけられていたのだろうかと言われた。

襲撃の話はしていないが、もしかしたらポツポのときから催眠術で襲撃させられていたのかもしれない。

傷を負いながら何度も繰り返し、その果てにピジョットに進化したのだとしたらうすら寒いモノを感じる。

傷が癒されること無く、強制的に戦う日々とは一体どのようなモノなのだろうか……。

解除が終わり、人間に慣れていないので言うことを聞かないかもしれないが捨てないで連れて行ってほしいとなっちゃんにお願いされたが、言われなくともそのつもりだったと伝えて眠っているピジョットを撫でる。

俺の言葉になつちんは安堵の表情を浮かべているし、分かりにくいがフリーデインも嬉しそうだった。

痛んでいてごわごわしている毛に触れてなんとも言えない気分になってしまったが気を取り直してモンスターボールに戻す。

野宿の準備をしようとするとなつちに泊まらないかと誘われたが断っておく。

さすがの俺も同年代の女の子の家に泊まるのは避けた方がいいとわかっているのだ。

この前のジム戦の礼だと言われたので閃いた。

格闘道場に泊まればいいことに。

格闘道場で宿泊しようとするトレーナーは初めてだと褒められた。

道場はむさ苦しいイメージだったが格闘王が修行の旅に出て、方針について決まっていないので朝と昼の練習のみで解散したらしいのでガラガラだった。

門下生の数も減ったらしいがトレーナーとしての間違いに気づいたのだろう。

ポケモンバトルに筋肉はいらないってことに。

シャワーの位置を教えられて、自由にしようと言われ師範代は帰って行った。

看板も無い今、盗まれて困る物は無いとか。

これが敗北したジムの末路かと思うと切なくなつた。

敗北に半分手を貸した俺が言うのは間違っているだろうけど。

台所で火を借りて夕飯の支度をする。

かなり汚かつたが調理できれば構わないので無視した。

食器を洗つたりするので流し台だけは掃除したので清濁併せ持つなんともアンバランスな台所となつた。

ヤマブキの物価の高さに愚痴りながら買ってきた食材を調理する。

レトルトでもいいのだが、折角だからと自分で作ることにしたのだ。

ピジョットが起きるまでまだ時間がかかりそうだったのでロコンとカラカラに食べさせることにした。

そのうちカラカラは箸が使えるようにならないだろうかと密かに期待しつつロコンの口元を拭いながらおかわりをよそう。

ピジョットが目覚めたので近づくとクチバシをカチカチと鳴らされた。

多分、威嚇しているのだと思うがあまりに弱々しい。

近寄ろうと何度か試すが逃げようとするので俺も自分の夕飯に手をつける。

そつぽを向いていたが匂いに釣られたらしくチラチラとこちらを見るピジヨットに思わず笑いが込み上げる。

少し意地っ張りのようで何度かご飯を持って近づくと威嚇される。

痺れを切らしたロコンが食べようとすると激しくカチカチするので思い切って近づくとくことにする。

今度は逃げられなかったがそつぽを向いたままこちらには見向きもしない。

俺が食べる仕種をしようとカチカチしながら横目でチラチラ見てくるので口元までご飯を持っていくと渋々といった様子で食べ始めた。

食べ終わるとカチカチとおかわりを催促されたので苦笑いしながら持つていくことにする。

ロコンの機嫌が少し悪く、カラカラが寂しそうなのはピジヨットに付きつきりで嫉妬したからだろうか。

いつもより毛繕いに時間をかけて機嫌をとることにする。

ピジヨットにも毛繕いをしようとしたがカチカチと威嚇されるだけだった。

だだっ広い道場で眠るのは微妙な気分だが、他の部屋は汚くて消去法でここになって

しまった。

ピジヨットをボールに戻そうとしたがカチカチされたので諦めた。

近くで寝ようとするとかチカチされるので離れるとまたもカチカチされた。

どうやら姿がすぐに確認できる範囲ならいいらしい。

ピジヨットが寝静まったのを確認してからロコンを抱えて音を起てない様にそっと近づいて寄り添う。

俺の意図がわかつたらしくカラカラもどことこと近寄って横になった。

折角、合意はともかくとして俺の手持ちになったのだから一緒に寝たいのだ。

目が覚めてピジヨットを見つめるとチラチラとこちらを見ていたが逃げる気はないようだ。

俺が起きていることに気付いたのか激しくカチカチと鳴らし始めた。

恥ずかしかつたのだろうか。

外に出るとなつちんが座っていた。

会いに来てくれたらしい。

一緒にポケモンセンターへと歩く。

怪我が悪化されたら困るのでモンスターボールへと戻す。

カチカチと鳴らされる抗議は無かった。

ここでもう一度ピジョットとカラカラを診てもらってからシオンへと向かう。

ピジョットの容態はよくなっているそうだが、まだまだかかりそうだ。

当分飛ぶことはできないだろう。

完治したらどうしたらいいのだろうか。

一緒に診てもらったカラカラの傷は完治したが片目は完全に失明していると聞かされた。

トレーナーとしては何とかしたかったが無理だった。

結局、俺ができることなんて本当に限られてしまっているのだ。

もしかしたら出来ることなんて無いのかもしれない。

そんな俺と一緒にいる価値はあるのだろうか。

なんとなくだが考えてしまう。

俺の我儘でただ単に連れまわして負担をかけてしまっているんじゃないかと。

それでも、カラカラの死角である右側に俺がいつもいられるのは信頼の証だと信じている。

見送ってくれるとの事になつちんとゲートまで雑談する。

トレーナーIDを交換した辺りでカツラさんに連絡していいことを思い出したが、後でもいいだろう。

イミテに会いに行かなかつたけれど手ぶらだったし、次の機会にお土産を持って行くので大丈夫だと思う。

なつちに別れを告げてゲートを越えて8番道路へと進む。

8番道路は治安が悪い。

大都市であるヤマブキの近くであり、7番道路では摘発されやすいのも相俟つてこちらに集中しているからだろう。

だからといってこんな朝早くからガラの悪い連中がいるとは思わなかった。

バイクに乗っていたり、スキンヘッドだったりと目つきの悪いやつらがちらほら。

こいつらはこんな時間から集まるとか健康的すぎる。

夜はどうしているのだろうかとか疑問もあつたが、近くのシオンからゴースが来て怖くて夜は活動出来ないのだろうかとうと勝手に決めつける。

そうでもしないと次から次へと挑まれる勝負に飽きてしまった俺のモチベが完全に死んでしまう。

1対1だったのが、段々と増えてきて数えるのも億劫なほどだ。

カラカラとロコンが一撃で葬り去るが無限湧きかと呆れるほどに集まってくる。

ドガースにロコンの火球を直撃させると爆発することに気づき、一度で広範囲の敵を倒せるようになった。

最期の方はカラカラが打ったドガースが他のドガースにぶつかる瞬間に火球を当てて誘爆を起こし、どれだけ大きな爆発を起こせるか試すゲームに成り果てていた。

全員を倒してひと段落つくがまたも鳥ポケモンに襲撃された。

編隊を組んで飛んできたのだ。

先頭にピジョット、後ろに3匹のピジョンが並んで飛んでいる。

大きく旋回しながらこちらに襲い掛かって来た。

どうやら昨日のピジョットと同様の攻撃パターンだったが先頭のピジョットに付かず離れずといった距離でピジョンたちが補佐しているので少し面倒だ。

野生だとわかっているのでさっさと対処しよう。

飛んできたピジョットに昨日と同様、火球で誘導。

ピジョンはピジョットの後ろをぴったりと追うので俺にとっては好都合だ。

回避運動をとった瞬間、モンスターボールを投げつける。

暴れてボールから出てきたところをカラカラが叩く。

これを繰り返すだけでピジョットとピジョンを手に入れることが出来た。

こいつらも催眠術にかかっているのだろうかと思いつつながらボールをリユックにしま
う。

原因を叩かない限り襲撃を受けるのだと思うと気が萎える。

俺ほどピジョンとピジョットを持っているトレーナーはいないだろう。

鳥使い垂涎モノだ。

手放しには喜べないのだが。

口コンが吠えた。

何事かと振り向くと口元まで裂けている様に見える笑いが特徴的なポケモンがいた。

ゆつくりと手招きしている。

なんでこんなところにゴーストが……。

光が明滅している……？

ゴーストの隣にスリーパーがいる。

珍しいこともあるものだ。

振り子が揺れている。

目が、離せない。

ああ、あたまがくらくらする

おれはなにをしていた

そうだ、ぼけもんを

ぼけもんをわたさなければ

おれのぼけもんを

おれのぼーるを

おれのともだちを

わたさないと

ろこん

なにをしている

かってにひをはくな

そらにこうげきしろなんていってないだろ

おれにさからうな

いまいましい

もどれ

もどれ!!!

はやくしろ!!!

はやくしろ!!!!

ろこん!!!!

暗示をかける技の総称。

深い眠りに誘う使い方が最も一般的である。

思考誘導も出来るが長い時間をかけて行う必要があるので通常のパトルで使用されることは無い。

洗脳などの思考誘導は相手の状態によって左右されるので繊細で熟練した技術が要求される。

——あやしいひかり——

光の明滅により意識を混乱させる。

ポリゴンフラッシュなどと言ってはいけない。

実際にかけられたときは思考が朧気になるというおそろしい体験をしたものだ。

——テレポート——

なっちゃんが多用している。

目的地を遠見して安全を確かめないと危険らしい。

確かに「いしのなかにいる」などの状態になったら大変である。

後にフリーデンが使いまくって当たらなければとうとうということはない状態を作りだし、ヤマブキジムの難攻不落ぶりによってリーグから規制が入った。

【左手のエクスカリバー】

ロコンが言うことを聞かない。

イライラする。

はやくボールにもどれ

カラカラの涙。

イライラする。

ボールに戻っても俺の気は晴れない。

なぜこんなにもイライラするのだろうか。

心がざわつく。

ピジヨットのボールが揺れている。

静かにしている。

なぜいつもと違うのだろうか。
いつもとはなんだっただろうか。

そんなことよりもわたさなければ
ろこんがもどらない
ろこん!!

ロコンがボールに戻らない。
イライラする。

嫌がることをするのは心苦しいがしかたないから無理やりにも詰めてしまおうか。
なんでイライラしているのだろうか。

ロコンが言うことを聞かなかったときがあっただろうか。
俺は何をしようと……。

つらつらと考えているとゴーストに催促される。
ああ、そうだ。

渡さなければいけないんだったな。

抵抗されてるし強引になるが仕方ない。

気絶させてから戻すでしょう。

首筋に強い衝撃を与えれば気絶するだろう。

暴れる口コンを抑えようとして噛まれてしまった。

また傷が一つ増えた。

両腕には無数の傷跡。

ギヤロツプ、ドガース、ベトベター、ガーデイ。

思うようにいかなくて生傷が絶えなかった。

それでも必死に進みつつけた。

あの白衣を纏った大きな背中を目指して。

.....。

.....

.....

.....

.....

.....

またゴーストに再び催促される。

思考が一つに纏まらないがなんとかロコンを抑える。

この後どうするんだ。

殴るのか、締めるのか。

俺が？

ロコンを？

有り得ない。

なぜロコンに暴力をふるう必要があるのだろうか。

ロコンは……いつもと違って、言うことも聞かなくて……。

俺はどうすればいいんだ。

何かが間違っているのに何もわからない。
気持ちの悪い違和感を感じる。

俺がいて、ロコンがいて、カラカラがいて、ピジヨットがいて、ゴーストがいて、スリーパーがいる。

いつも通りなのに何かが違うのだ。
喉に何かがつつかかえているような、奇妙な感覚。

抵抗と催促。

ゲンガーに応えると気分が晴れて身を委ねたくなる。

ロコンの鳴き声が俺を止める。

このまま何もできそうにない。

俺はどうすれば……。

なっちゃんの声が聞こえた。

無意識にロコンの首へと伸びていた手に気づき、とどまる。

どうやらなっちゃんが違和感の犯人らしい。

ゲンガーがフリーデインも手に入れて無いからだと教えてくれた。

成るほど、それならばとロコンを解放する。

拒否するロコんにゲンガーが目を合わせるといつも通り、俺の指示に従ってくれるようになった。

なんだか余計に違和感が大きくなった。

ロコンが違うのだ。

何かが違う。

ロコンが苦戦しているのでカラカラをボールから出す。

首を振って拒否するカラカラにゲンガーが目を合わせるということを聞くようになった。

やはり違和感を感じるのだが。

ピジヨットを出すようにと催促されるが全く戦闘させる気にならない。

怪我しているし、この場に出すわけにはいかない気がするのだ。
何かがおかしい。

おかしい。

エスパータイプのポケモンの強さはカントーにいるトレーナーの誰しもうも認められるのだ。

不可視の念動で範囲すらも見破らせること無く撃ち抜く攻撃。

特殊な力場で構成され、どんな攻撃をも捻じ曲げる防御。

練度の高まった念動力の矛と盾を破ることは困難を極める。

これほどまでに魅力的な要素に魅かれるトレーナーは跡を絶たない。

そしてほとんど凡てが、挫折する。

強さに目が眩んだ愚者ほど諦めが早く、簡単に手放してしまう。

彼らが挫折する理由はただ一つ。

弱すぎるのだ。

練度が低い場合、コラツタの歯牙にもかけられない。

狭い範囲でしか行使できない念動力。

そよ風にも満たない矛、紙にも劣る盾。

念動力は練度に比例する。

鍛えたエスパーポケモンは無類の強さを誇る。

しかし、野生では強くなれるまで待つてくれるはずもなく、逃げの一手を取り続けなければならぬ。

中には抗い続け、進化する猛者もいる。

だが、そんなポケモンを捕まえられるわけも無く逃げることでしか生きられなかったポケモンを無理矢理捕獲し、期待と労力に見合わないと失望し、見切りをつけてしまうのだ。

目に見える結果がすべてだと判断することは間違いではないが、正しいことでもないことの証明かもしれない。

強くなっているのか、いつ進化するのか、本当に強いのか。

信頼だけで育成を乗り切らなければならぬのだ。

なんらかの思い入れが無い限りは育て上げることはできない。

単純に好きであることが最も必要な才能だろう。

つまるところ、なっちゃんのフリーデインが強すぎるといふことだ。

いつから育てているか知らないが、カイリキーを一撃で仕留めたユンゲラーから進化したフリーデインである。

練度の高さで進化という地力の底上げも相俟って勝てる気がしない。

今のところフリーデインは防御一辺倒なので危険はないのが救いだろうか。

フリーデインはグレンでもほとんど見ることが無かったが、他のエスパーはときどき見かけたのである程度の心構えはできていたが、実際に戦うと絶望感が半端ない。

揺らぐように虹色に輝く半透明の膜がフリーデインを覆っており、火球が彼方へと逸らされる。

バリヤードでもこんなに固くなかったと思うのだが、とげっそりしながら火球を連打

させてみるも効果は無し。

多方向に誘導してフェイントをかけながら時間差で攻撃してみるも無傷。

虹色の膜も依然として健在している。

打ち消すのではなく力の流れを逸らしているのだろうと予想は付くのだが、そんなに簡単に防げるものではないはずである。

計算がスパコンよりも速いとあつたがマジかもしれない。

知能指数5000はネタだと思うが。

火球の陰に隠してカラカラの骨をぶつけてみるが逸らされる。

少しばかり火力を上げてても同じ様に逸らされて終わる。

数もあまり意味が無いし、質も少しばかり向上させただけではやはり変化なし。

ゴーストの催促がくるが無理なモノは無理なのだ。

ロコンがガス欠になるが全力で攻めるべきだろうか。

そうしたらロコンも弱ってボールに戻るので都合がいい。

ロコンはボールの中に入るのを好まないのに何が都合いいんだろうか。

渡しやすいからといってボールにロコンをボールに入れるなんて何がいいのだ。

そもそも何を考えているんだ。

ポケモンバトルの最中に他の事を考え、それが都合良いなどと都合のいいことなんてあつただろうか。

何が良いのだ。

俺が良いのか。

それとも俺が良いのか。

俺が良いとはなんだ。

そうしたら俺がどうなるというのだ。

というより俺が何をしようとしているのだ。

俺は何を考えている。

俺が

考えすぎて混乱し始めた俺にゴーストがまたも催促してくる。

どうも腑に落ちないがなんとかいつも通りの思考に戻ったので戦闘を再開する。

いや、いつも通りなわけがない。

こんなにも気持ちが悪いポケモンバトルなど一度しかない。

そもそもあれはバトルですらなかった。

泣く事しかできないかった……ああ、少し逸れていた。

どうも一つの事に集中するのが難しいのだ。

疲れているのだろうか。

ああ、気持ちが悪い。

ロコンに炎でフーデインを攻めるように指示を出す。

出来るだけ広範囲にして目隠しになるようにとも伝える。

ついでに火球も力を溜めさせる。

すべてを使い尽くすつもりでの攻撃だ。

なぜ使い尽くすつもりなのだろうか。

相手はなっちゃん、全力で攻撃する必要があるのだろうか。

おかし。

視界を塞ぎながら少しずつロコンが前進し、後ろをカラカラに着いて行かせる。

次第に力を溜めている火球は炎の中に忍ばせている。

ロコンの限界まで炎を出させながらゆっくりと近寄る。

弱っていくロコンを見ていと気持ち悪くなる。

そろそろ限界だろう。

カラカラを炎の中に突撃させて、フーデインに迫ったところに炎を止めるように指示を出す。

目の前のカラカラに反応して意識が骨に向いただろうと予想し、火球を連打させる。

ロコンの限界がそろそろ来るだろうからフーデインの真上に溜め続けた火球を落下させる。

逸らされるかと思ったが火球の威力が高くて逸らせないのかもしれない。

残った力はわずかしかないのでカラカラに横合いから殴るように指示を出す。

フーデインを守っていた膜が消え、押し勝ったかと思つていと火球が破裂した。念動での攻撃で相殺しようとしたらしい。

攻撃の余波である炎が押し寄せてフーデインの周辺に襲い掛かる。

弱っている相手に勝ちを確信しながら暴れていたピジョットを出す。

暴れたりないだろうと思いながらボールから出したピジョットは弱り切っていた。すぐに駆け寄って状態を確かめようとするが拒絶するかのようにクチバシで腕を噛まれる。

おかしい。

なんでこんなことになっているんだ。

何が間違ってる……。

意識を失っているロコン。

全身に火傷を負ったカラカラ。

疲労で今にも倒れそうになりながら立ち塞がるフーデイン。

熱に煽られ、フラフラとしながらもまっすぐ俺を見つめるなっちゃん。

傷が開き、血を流しているピジョット。

おかしいのはおれだ

俺は何をしていた。

その前に俺はどうしたいんだ。

戦いたいのか。

捕まえたいのか。

渡したいのか。

……逃げたいのか。

頭の隅で声がする。

徐々に大きくなる声に比例して身体の動きが鈍くなっていく。

このまま声に身を委ねたら俺は取り返しのつかないことをしてしまうんじゃないだろうか。

あの時の様に俺は何もできない……できなくなってしまう。

ただ泣くだけは嫌だと、見ていることしかできない無力に悔いたじゃないか。

悩むことのないように、自分の思った通りに生きるために俺は友達と血を吐く思いで努力したのだ。

毛繕いセットから急いで適当に一つを取り出す。

ボールのようなもの。

俺はこれに縁があるらしい。

頭の中の声が大きくなる。

まるで電波を受信しているようだと言いつつ笑いながらボールのようなものを振り上げる。

俺の思い通りにいかないのなら、いくようにするのだ。

躊躇いなく振り下ろす。

響く音は間違いなく砕いた証。

残響のように薄く広がる痺れは手ごたえを感じさせる。

なつちんの目が驚きで見開かれていた。

洗脳は催眠術でも繊細な技術が必要とされ、長い時間をかけなければ完全に操ることはできない。

ピジョットは自分の行動と洗脳による指示の境目がほとんどなくなるほどだった。

俺は短時間の洗脳による違和感で自我が少しだけ取り戻せた状態だ。俺の状態ならば洗脳を解除する方法はいくつかある。

超能力で中和すること。
解除すること。

そして元凶を断つこと。

もちろん、俺は手加減せずにやった。

完膚なきまでに。

腕が痛い。

……右腕が折れたかもしれん。

痛みで半泣きになりながらボールのようなものを放り捨てる。

右腕を犠牲に何とか自己を保つことに成功した。

催眠術で浸食される意識を痛みで守ると言う賭けだ。

普通になつちんのところまで行つて解いてもらえばよかつたと気付いたが、悔しいので忘れることにする。

短時間でなんとかしなければまた乗っ取られてしまうかもしれない。

ピジョットは傷ついても操られ続けていたので俺もこのままでは危ないはずである。

油断せずに一気に畳み込む。

とか思つてたらなつちんのフリーデインとスリーパーが戦っていた。

どうやら俺の相手はゴーストのようだ。

見つめ合う俺とゴースト。

なぜか懐かしい気分になった。

ゲンガーよりもなじみ深いというか……。

——通信ケーブル持つてるのに相手がない……——

なんか争いたくないな……。

穏便に済ませておきたいが、ピジョットに催眠術をかけていたのかもしれない。手掛かりになりそうなので確保しておきたいのだが、対処する手段がない。どうしたものか。

手をこまねいているとゴーストが体当たりしてきた。

脳内情報によると舌でなめられると震えが止まらなくなり死ぬらしいのだ。身構えるがすり抜けるように消えて行った。

……逃げた？

すぐになつちんが駆けつけてきた。

スリーパーは捕縛したらしい。

半透明の膜の中に気絶したスリーパーが浮いていた。

大丈夫だったかと心配されたが右腕以外は健康である。

俺だけ……。

俺が……。

いや、やめておこう。

俺が悩んだり、謝ったりしてしまっただけでなっちゃんとポケモンが……友達が気にするかもしれない。

みんな俺のために頑張ってくれたのに、それでは申し訳が立たなくなってしまう。

だから一言だけ伝えることにする。

ありがとうって。

【存外案外】

あなた ゆうれいは
いると おもぅ？

ポケモンタワーの前で佇んでいた少女に突然問いかけられた。俯いており、表情はわからない。

どうなのだろうか。

今まで一度として見たことはないのだから俺はなんとも言えない。

しかし、見たことがないということはいないとも言えるのではないだろうか。

つまり俺が信じていると言ったとしてもそれは妄言に過ぎない。

そして俺は電波を垂れ流すつもりなぞ無いのでこの問いには無いと思うと回答すべきた。

だが、脳内情報では はい いいえ の二択。

……バグったか、俺。

とりあえず、いないと思うと伝える。

見たこと無いのであると答えるのは違う気がしたからだ。

あはは そうよね！

少女が笑い出した。

狂っている——そんな表現が似合うような笑いだ。

雑音の混ざった声、土気色をした顔、焦点の合っていない目。一目で正気じゃないとわかった。後ずさりして逃げる算段を立てる。

あなたの みぎかたに

くろい てが おかれてる なんて

・・・あたしの みまちがいだよね

背筋が凍りついた。

言われて気付いたのだが俺の肩に黒い何かが乗っているのだ。

ひどくサビ付いたように首が動かない。

心臓の高鳴りは最高潮に達していた。

冷や汗が頬を流れる。

意を決して振り向いた俺が見たモノは……

にやにやと笑いながら漂っているゴーストだった。

なぜか俺の肩に手を置いているゴースト。

ポケモンセンターと似たオチとか無しだろ……。

もう見え見えの罠だったけど態と引つ掛かっただけだし、と強がりながらホッと一息。

正直、安心しました。

少女もたぶん俺を驚かせようとしていたのだろう。

人が悪いな、と少女に顔を向けるが……誰もいない。

普段では気付かないほど軽い重みを肩に感じた。

今は意識を肩に集中しているからこそ気付けたのだろう。

咄嗟に肩へと視線を向けると生気のない青白い手が……手だけが俺の肩を掴んでいた。

まちがえた

しろい て だったね

少女の声が聞こえた。

あなた ゆうれいは いると おもおう？

耳元で声があった。

次からは幽霊を信じると答えるしかないな。

そんなことを思いながら俺は意識を手放した。

俺はポケモンが好きだ。

抱き締めたときの肌触りや弾力が特に好きだ。

ポケモンの抱き心地は日々の疲れを癒してくれる。

そんな俺がオススメするのはピジョットの羽根である。

光沢が美しいピジョットの羽根に惚れて、ポツポを育てるトレーナーもいるくらい魅力的なのだ。

美しくて艶のある羽根の手触りは撫でるだけで至福のひと時を過ごすことができる。

俺のピジョットも言うに及ばず美しい羽根の持ち主だ。

怪我をしているが丁寧なケアを施している羽根はふかふかして温かい。

そのまま顔を埋めて眠ってしまいたいくらいである。

しかし、それは出来ない。

ピジョットは俺が寝そうになるとカチカチとクチバシを鳴らして起こすのだ。

そつぽを向いているがチラチラと撫でる手を確認している姿は実に可愛らしい。

などと考えながらもピジョットの羽根を撫でる左手は休むことなくゆつくりと動かし続ける。

ロコンとカラカラは俺に寄りかかったまま夢の中。

ジョーイさんがラッキーと作業をしている姿を少しだけ眺め、ぼんやりと右腕を見つめる。

包帯でぐるぐる巻きにされている右腕は思いのほか丈夫だったらしく骨折はおろか

ヒビすらも入っていなかったというのだから驚きだ。

俺たちはこの前の催眠誘導によって溜まった疲れや怪我を癒すためにシオンタウンのポケモンセンターでだらけた日々を過ごしている。

俺とポケモンだけでテレビの前のソファアを独占しているが他のトレーナーはポケモンの回復に来てはすぐに帰る程度なので問題はない。

ジムが無いシオンには訪れるトレーナーが少なく、ほとんどが年に何度かポケモンタワーに墓参りに来る程度だ。

脳内情報では不気味な町だったが実際には静かで落ち着いている町だ。

暗くなる時分に散歩すると昼とは一変してポケモンタワーの雰囲気と相俟って不気味に見える。

脳内情報から勝手に流れるBGMを初めて聞いた時は背筋が凍る思いだった。

俺たちがソファアを独占しているのはなっちゃんを待っているからだ。

先日の催眠誘導時に捕獲したスリーパーの身元をジムリーダーの講習を受けるついでにポケモンリーグで確認してくれているのだから、頭が上がない思いだ。

あの時のゴーストも捕まえておきたかったが虫よけスプレーで対処するなどの方法しか思い浮かばなかつたので逃げられて当然だった。

テレビに目を向けるとポケモンリーグの特集が始まった。

今年のチャンピオンロードトーナメントが開催される時期が近付いてきているからだろう。

去年のチャンピオンロードで惜しくも敗退したトレーナーや今年期待の新人が紹介されている。

期待の新人はジムバッジをすべて集めたトレーナーの中で一度も出場したことが無く、トレーナーカードに記録されているBP（バトルポイント）が最も多い者が紹介される。

BPは公式戦やジムなどで勝てば勝ち星としてBPを貰えるというわけだ。

ランキングで上位に入ればリーグから補助金が貰えるので名が売れて財布も潤うし、ジムメイトとして売り込む場合にも評価されるといった特典がある。

その点で言えば俺は……まあまあかな、うん。

トレーナーはBPだけじゃないから、重要なのは人格とか人望、愛、正義、友情、努力、勝利、必殺技だからね。

今はちよつと思いつかないけど俺にもそういうったものは沢山あるから。

……たぶん。

考えている間に手が止まっていたがクチバシをカチカチと鳴らされることはなかった。

どうやらピジヨットも眠ってしまったようだ。

眠っているポケモンに囲まれて身動きできないでいるとジョーイさんと目が合った。

仲が良いわねとくすくすと笑われて気恥ずかしかったが、なんだか安心した。

疲労困憊のロコンやカラカラ、フリーデン、傷の開いたピジヨットが入ったボールを持って行つたときなど凄まじい形相で睨まれた。

ついでに火傷したかもしれないのでなっちゃんと俺の腕も見てもらおうと事件か何かかと慌てていたものだ。

シオンのジョーイさんは親身になって心配してくれるいい人——どの町でも美人で

優しい——だが、治療中に詰め寄って根掘り葉掘り聞こうとするのはやり過ぎだと思う。

なっちゃんは少しばかり人見知りをするらしいので困っていた。その時にジュンサーさんも来たので事情を説明したが当てにならないだろう。

テレビを見ていると四天王の紹介や激励のコメントが始まった。

氷ポケモンのエキスパートで云々。

どこかで見た顔だと思ったらカンナさんだった。

驚いて声をあげそうになるがポケモンが寝ているので声を噛み殺す。

ジョーイさんが不思議そうに首を傾げていたのが視界の端に見えたが、それよりもなぜ気付かなかったのだろう。

脳内情報にはカンナさんの詳細がある。

最近はかなり自然に知識として扱えるようになったと判断していたがまだまだのようだ。

ロコンを撫でて気持ちいを落ち着かせて番組に臨む。

さすがにこれ以上俺を驚かせるやつは出てこないだろう。

とか思ってたらシバが出てきた。

人間も鍛えれば強くなるとか語り出したけど今年のトーナメントに出場する予定の人たちを激励するコーナーなので完全に空気が読めていない。

先にカンナさんが喋ってたのに聞いてなかったのか。

いやいや、ウー！ハーツ！じゃないからね。

早く誰かやつを止める、放送事故になりかねない。

生放送とかダメだろ。

CMが一旦入ってすぐにキクコのばあちゃんが何事も無かったかのように話を始めた。

年の功ってやつは凄い、全く動じた様子がないのだ。

いい話だったが段々と雲行きが怪しくなっただから完全に説教である。

最近のトレーナーは甘いとか昔のトレーナーは凄かった、オーキド博士が腑抜けたなとと愚痴も吐き出した。

四天王最年長記録保持者とやらは伊達じゃないということがわかったので説教や愚痴は耳が痛くなるからやめて欲しい。

次はワタルだ。

俺が言うのもなんだが服装をどうにかしたほうがいいと思う。

センスの悪いマントは邪魔にしかならないだろうし、着心地が良い白衣にすべきだ。ドラゴン最強説を語り出したが、これはそういう番組ではない。

覚えることのないバリアー、人に向かつて破壊光線を撃ち込む、Lv. 40代のカイリユー、スタジアムでの持ち物重複などが頭をよぎる。

何年前か前、ジムに挑戦してきたときはカイリユーの強さに胡坐をかいていたのでウインデイのみで勝った記憶がある。

やはりウインデイは伝説ポケモンだけあって強かった。

気まぐれで見ただけだがかなりヘビーな内容で、気分が急降下。

四天王だけあって一癖も二癖もある人たちだ。

ポケモンバトルが強いのはいいが、人格に難があるのはどういうことだろうか。

天才は凡人に理解できないってことかもしれない。

強くなると常識をどこかに忘れてしまうというのは本当なのかもしれない。

一日をだらけて過ごしているとハナダで出会ったタイシさんを思い出す。

なんとなくだがあの人の気持ちもわかってしまう。

好きな時間に自由に活動できるこの生活は抗い難い誘惑で溢れている。

ポケモンセンターはどこも居心地が良く、まるでダメ人間を陥れるための罠である。

腑抜けてしまわないよう気を付けるべきだとタイシさんを思い出しながら心に固く誓った。

出来るだけいつも通りの時間に起きて散歩は欠かさないようにと明日からの計画を立てているとポケモンセンターの入り口が開き、なっちゃんの姿が見えた。

なっちゃんと挨拶を交わして、フーデインの頭を撫でる。

シオンのポケモンセンターに駆け込んだ日から毎日様子を見に来てくれるのだ。

なっちゃんマジ天使。

メッセージでやり取りするだけでもいいのに態々来てくれるのだからなっちゃんの優しさは天元突破しているに違いない。

結果だけでも十分だし大変だったら無理しなくていいと伝えると好きでしていることだし、レポートがあるから大丈夫とまで言ってくれた。

結婚するならなっちゃんとかカンナさん、エリカさん、各地のジョーイさんにハナダの姉妹。

高嶺の花だが憧れるだけなら夢想するだけなら自由のはずだ。

ちんちくりんのカスマミはノーセンキュー。

フリーデンがアポルト（超能力の一種で遠くにある物を取り寄せる）してくれた資料によるとヴァシユカという女がスリーパーの持ち主と判明した。

資料にあつた顔写真は7番道路で出会った女だった。

嬉しくないが俺は保護団体と縁があるらしい。

シルフカンパニーに勤めていて、ゴーストを手持ちにしている記録もある。

催眠誘導の件はリーグでも表に出し難い問題で、あちらが独自に調査を行うのみに留まるだけらしい。

なっちゃんのせいでも無いのに謝られてしまった。

迷惑をかけているのは俺なのに。

保護団体の影響力はかなり強いと思われる。

腰が重いとは言え、ポケモン最大の機関であるリーグが事件に発展しかけた催眠術の危険性を軽視するはずがない。

そんなリーグが独自の調査のみということはそれだけ厄介なのだろう。

ポケモンポリスも同じく動かないはずだ。

リーグが動かないのに動くことはありえない。

ここらが個人の限界なのかもしれないな。

そんなことを頭の片隅で考えながらなっちゃんに礼を言つて夕飯に誘う。

申し訳なさそうにしているがここまでわかつたのは全てなっちゃんのおかげなのだからもっと自信を持つてもらいたい、そう告げると照れながらも少し笑ってくれた。

やはりなっちゃんはいいい人だ。

俺はフリーデインが飯を食べるところを初めて見るのだが、予想よりも普通だった。

飯を宙に浮かせて食べる、口に瞬間移動させる、空間が歪む、時空が乱れるなどの現象は起きなかつた。

両手のスプーンは超能力で産み出したと情報であつたが今は飯を食べるのに使用されてる。

凄いのだが、なんとも言えない気持ちになるのはなぜだろうか。

ピジョットがカチカチとクチバシを鳴らし、ロコンがいつもより口を汚す。

カラカラもスプーンが使えることを自慢げにアピールしてくるのでなっちゃんの話しが何度も中断してしまつた。

ポケモンたちの相手をしていたら服を引っ張られた。

引かれた方に顔を向けるとそこには口元を汚したフリーデインの姿が……っ!!

……ああ。

……俺に拭けということですかね。

食後になっちゃんが今はリーグでジムリーダーとしての研修を受けている話になった。

普通は泊まり込みだがレポートのおかげで自宅から通っているとかどんな感じのジムにするかとか。

ジムの方針はエスパー系統に特化するのでジムメイトも超能力がある人を集める予定らしい。

テレパシーで力がある人に波動を送ったのでそのうち集まるだろうとのことだ。
ちやうどのうりよくってすげー。

ちなみに俺には波動とか全くわからなかったので超能力とか使えないし、今後もある兆しは無いと言われた。

使ってみたかったが才能が無いなら諦めるしかない。

なっちゃんとフリーデンがテレポートで帰るのを見送った後、興味が湧いたのでラッキーのほっぺたをふにふにして感触を楽しむ。

これはすごいもち肌だ……っ!!

危うくラッキーの頬の中毒性で身も心もやられるところだったがピジョットに突かれて正気を取り戻す。

気を取り直して部屋へと戻り、シャワーを浴びる準備をする。

がさごそとリュックを漁っていたら底のほうに黒い染みのような物が出来ていた。

雑に扱いきかと思いつつ、汚れを直接確認しようと中身を取り出してみる。

黒い染みは霧状になり、ふわふわとして実体のない何かだった。

どうしたものかと眺めているとその染みが徐々に纏まっていく。

影が立体になったらこんな感じだろうか。

そして俺の目の前に現れたのはゴーストだった。

最終的に形作られたそいつは何がおかしいのかわからないがケタケタ笑っている。

バトルになってもいいように身構えながら観察する。

この前と同じく三日月の様な大きな口を吊り上げて笑っている。

しかも俺が警戒しているというのにゴーストは楽しそうにふわふわしているだけだ。

ゴーストがいなくなったリユックに目を向けると空になったレトルト食品とインスタント食品たちの無残な姿が……っ!!

ほとんどはお湯が必要なのにそのまま食われた形跡がある。

まさかあの時俺に体当たりしてきたのはこれが目当てだったのか。

ゴーストは笑いながらカツプ麺をそのままバリバリと齧っている。

レトルト食品の封を開けてそのまま口へ入れている。

苦い木の実を口に入れて呻きながら他の木の実を口に入れている。

調味料まで食べようとしているがさすがに無理だろう。

ドレッシングを飲み干すやつの姿を見ながら俺は慄いた。

な、なんて食い意地が張ってるやつなんだ……。

原作：まほらば まほらば1

— 1

口裂け女の噂が流れた。

なんか夕方に赤い女性が学校帰りの小学生を襲うとか。

襲われたら口を裂かれるとか、レポートで連れ去られるとかさされるらしい。

しかも空を飛ぶうえに100mを9秒台で入るとか。

ときどき三人に増えたり、二人だったり、ソロだったりするとも聞いた。

やべえ。

クラスメートが探し出すとか息巻いてるけど無理っしょ。

最終的にガキ大将ポジのやつが音頭を取って放課後に退治しに行くとか言い出した。

スケールでけえ。

そんなラスボス染みた敵と自らエンカウントするスタイルで生きていない俺は当然不参加である。

友達の燕尾と天智、蓮花も。

口裂け女討伐隊を見送って俺らも帰宅。

なんか燕尾が最近手からビームを出せるようになったとか言い出した。
マジか。

そのうち俺もなんか出せるようになるのかな。

燕尾の真似してみんなで「破あ！」って練習しながら通学路を歩く。

うおつ、燕尾のビームで前に立ってた赤い人が溶けちまった。

どうしたらいいんだろうか。

とりあえず、スコップで肉片とか埋めて証拠を消すしかないんじゃないかねって話し合う。

燕尾がビームを喰らわせまくって消滅させることで証拠隠滅が完璧な案だろうかとかと話が纏まったあたりで、赤い服の女性に囲まれたことに気付いた。

ちらほらと白い服の人や口紅で大きく見せている女性も混ざっていた。

なるほど……。

ビビツときたぜ、これが口裂け女に違いない。

逃げたい。

やべえな、ピンチだ。

口裂け女を踏み台にして走って逃げる。

燕尾が本気出すとか言つて両手で交互に「破あ!!」つてし始めた。数が凄い。

弾幕が厚すぎて壁に見えるレベルだった。

片っ端から口裂け女がミンチになつていく。

白い口裂け女も自らの体液で赤いノーマル口裂け女にデビューして、この世から引退していった。

燕尾の「破あ!!」無双でだいたい滅却した。

天智は寺生まれのクセに全く役に立たんな……。

蓮花はなんか黒い穴が見えたとか見えないとか電波を受け取つててちよつと意味不明である。

俺？

俺は踏み台にした後にリバーブロー↓ガゼルパンチ↓デンプシーロールの美しいコンボで何体か倒したから。

家に帰つたら誰もいなかった。

まさか口裂け女の呪いか……っ!?

普通に両親は俺を置き去りにして蒸発しただけだった。

口裂け女が全く関係なくてウケる。

まあ、仲悪かったからしやあないね。

あとは燕尾が寺生まれ（○）の天智ん家にスカウトを受けたとか。

気が向いたら修行するらしく、その時は一緒に修行しようぜと誘われた。

今は両親蒸発事件が発生してるからその話はまた後でな、とクールに断っておいた。

近所に住む曾祖父にエマーゲンシーコオオオオル！

事情を話したら、その日のうちに曾祖父の家に住まわせてくれることになった。

やはり最後に物を言うのは血縁だよな。

……両親？

人生は血よりも絆だろ。

俺の曾祖父、本名は蒼葉総一郎という。

俺は総じいさんって呼んでるんだけど、この人めちやくちやいい人だ。

いい人って辞書引けばそのうち総じいさんが載るんじゃないかって思ってるくらい
凄くいい人。

良い人が善い人なのかわからないほどにいい人。

うちの家系っていい人とそうでもない人が極端らしいんだよなあ……。

超いい人が生まれる裏で、超よくない人が生まれる的な。

超よくない人はそのうちどっかに消えるので、自浄作用が働いているのかもしれない。
い。

俺も総じいさんほどではないにしろ、なるべくいい人になろうと心に決めているの
だ。

総じいさんは鳴滝荘という平屋のアパートを経営しているんだが、昔は行き倒れとか
をバンバン拾っていたらしいし、家賃もかなり安かったとか。

人脈はかなり広いと思う。

今は半隠居なので住人は「しよせい」の人しかいないとか。

“しよせい”ってなんだろう……。

書生とは雑務などを手伝って住む下積みしている若者らしい。

総じいさんが教えてくれた。

で、書生の人は灰原さんというようだ。

小説家を目指していて、日々勉強していると教えてくれた。

対人恐怖症の気があるとかで、総じいさんとは話せるが、俺とは難しいとか。

俺、小学生なんだけどなあ。

子供が苦手とかそんなだろう。

たぶん。

俺も掃除とか出来る範囲で手伝いつつ日々を過ごした。

朝は総じいさんと灰原さん、俺の三人で食卓で飯を食べ、行つてきますと二人に挨拶をして学校へ通い、日中は嫌いな勉強をテキストにやり過ごし、帰りに友だちと「破あ！」って幽霊とかくねくねを消し飛ばし、帰ってきたら宿題してからトイレ掃除して、その後は自由気ままに遊んで夕食、風呂、就寝である。

ときどき宿題を灰原さんに見てもらったりもした。

国語とか凄く詳しいし、作家の小ネタとか他の物語とか面白い話をしてくれる。

俺って勉強苦手だから尊敬するわあ。

暇なときに灰原さんの部屋の本を漁りに行くけど、小説ばかりでそこは苦手である。

どこにも漫画が無い……。

——4

翌年、灰原さんが作家デビューした。

すげえー。

どう凄いのかよくわからんので友だちに聞いたたら、燕尾がどんなに頑張って「破あ!!」ってやってても作家にはなれないとか。

マジかつ!!

超すげえ……っ!

俺たちには出来なかつた、「ぽぽぽ」って奇声を発するでかい女や「入れた入れた」って連呼する幽霊に取りつかれた人、ビデオテープを再生するとテレビ画面に映った井戸から這いずってくる女を燕尾は「破あ!!」のみで倒したが、作家はそれ以上なのか……。

燕尾超えとか灰原さんSUGEEEEEE。

小説とサイン貰ったから部屋に飾つといた。

ちなみに俺の部屋は玄関から入って右側の7号室だ。

廊下を跨いだ左側が管理人室であるじいさんの部屋だ。

俺の部屋の隣が物置で、四隅の一角になっている。

で、物置のさらに隣が灰原さんの6号室、小説を書いているときに雑音が入らないようにとの一応の配慮である。

中庭に面した縁側で灰原さんのデビューを祝う。

二人はお酒を呑んでるが、あと三か月もすれば中学生となる俺はオレンジジュースである。

ちよつと舐めさせてもらつたけど苦いからお酒はもう要らないや。

おつまみもいけどやっぱり出し巻き玉子が好きだわ。

雑な男料理でテキトーに作つた料理で乾杯。

うえーい。

朝、総じいさんが凄いい喜んでいた。

話を聞くと総じいさんの孫、つまり俺の両親の姉だか妹だかと同居することになったらしい。

総じいさんも歳だからな。

灰原さんも出ていくという話だし、俺もちょうど燕尾と一緒に寺で修行しないかと誘われたのでそっちに行くことにした。

気にするなど言われたが、水入らずに入るのもどうなのって感じだし。

いや、俺も曾孫だけどちよつと状況が違うというか。

アウエー感があるというか。

まあ、そういうわけだ。

— 5

中学入学からは友達の天智が生まれた寺で修行である。

昔に口裂け女と大乱闘口裂くシスターズやったときのメンツだ。

ただ、坊さんっぽいことをやるのではなくて祓い屋さんみたいな感じの方向を目指す修行らしい。

どんな感じの修行かというと、

5時、お破あ！ようございます。

6時、洗面。

6時15分、座禅。

6時30分、読経。

7時、朝食。

7時30分、破あ！の準備体操。

8時、登校で破あ！。

↳授業↳

16時、下校で破あ！

17時、夕食。

17時30分、近所の墓でゴーストバスターズごっこ。

19時、座禅。

21時、開枕。

睡眠中、夢にみんなで集まって猿とかメリーさんとかなんか湧いて来るのを倒す。

以上である。

なかなか悪くない日々を過ごせていると思う。

問題は、身体に謎の文字が書かれた包帯を巻くことによつて霊力とかいう謎の力が抑えられていることか。

破あ！つてやってもあんまり威力が出なくて困る。

万能属性である「破あ！」だけに頼らないように頑張れってことらしい。

しようがないので結界とか学ぶことにした。

勉強は嫌いなので、めっちゃテキストだけど。

燕尾は包帯を消滅させたが、やつは「破あ!!」特化だから（目逸らし）

「異次元に行こうぜ！ 割れ目を作ればいけるし！ 破あ!!」とかやりだすのは流石にやめてほしい。

遊びでアセンションすんなって宇宙人と名乗ったおっさんが怒ってたし。

部活に入らず、除霊とか解呪したりもした。

寺の手伝いはあんまりやらなかった。

近所のほとんどが檀家の寺なので仕事が忙しそうだったんだが、俺らはちよつとそういう一般的なのには向いてないと言われた。

まあ、ファンタジー入ってるよな。

髪の毛の伸びる人形とかマジやばい心靈写真、見たら死ぬビデオ、禍つ神に憑かれた人、妖怪を背負った人とかの対処はやったけど。

使ってる道具とか高いからかなりの金額を取るのだが、ときどき支払わない人も出てくる。

ガキだからとか、こんなもの詐欺だ訴えるぞ、とかそんな感じの。なんとなく溢れ出るブラックジャック感。

そんなときは除霊とか解呪したものをもう一回貼り付ける。

俺らだつて暇じゃないのに乞われてやったのだから、余裕で返品くらいするわ。

そもそもMOTHERを進めていて、儂く散つていくフライングマンの姿に哀しみを抱いている俺たちは気が立っているんだ。

— 6

俺、というか俺たち4人はちよつと中二病になつてた。

どんな中二病かというと、悪の組織を壊滅させようぜ的なやつである。

もつというとなと義賊に憧れた的な。

壊滅させてみたけど、ニュースに乗るわけでもなければ誰かに尊敬されるわけでも、褒められるわけでもない。

現実つて悲しい。

ナイフ一本でゾンビの集団と戦つたりして、よくわからない組織を10個ほど壊滅させた頃には完全に飽きた。

マジな話、テロ集団とか暗殺者養成所とか言われても、寺で修行しただけの俺たちにはピンと来ないっていうか……。

灰原さんが書いた小説のほうがおもしろかった（中学生の感想）

俺も運営資金をパクったり金塊を貰ったりしたので懐は温かく、観賞用、布教用、常用と買ってるのだが、サイン付きでマメに送ってくれるのだ。

未だに勉強が苦手サボリ気味なので、小学生の読書感想文以下の感想を送ったりしている。

同封されていた手紙に最近総じいさんの感想が来ないと綴られていた。

何かあったのかなあ、様子見に行くべきだろうか。

総じいさんも歳だしなあ……。

どうでもいいけど、燕尾はファンらしく「閃光の銀銃」が一番好きだとか。

灰原さんのデビュー作前の選考用の初期小説じゃん、ディープすぎて軽く引くレベル……。

まあそんなこんなで義賊ごっこを惰性で続けていたが、飽きて手が鈍ったせいで警察に突き出すはずのちっこい暗殺者っぽいのを逃がした。

あちゃー。

カバーしてくれていた燕尾が追跡して「破あ!!」することになったが、見逃してきたらしい。

水無月って彫像家が声をかけていたためとか。

普段は街中でも躊躇いなくテキトーに「破あ!!」をぶち込むのに珍しいこともあるものだ。

話を聞くと、ファンらしい。

あ、そうですか。

命を吸ってそんな糞作品であるゲルテナと違い、生きてる彫像が素晴らしいのだとか。

熱心に説明されたが、そもそもゲルテナってなんやねん……。

俺と燕尾が義賊ごっこやってる頃、天智はプロデューサーにならないかとスカウトされていたらしい。

あの寺生まれは一体どこに向かっているのだろうか……。

連花は異世界に行ってたとかで、ヨーセイがどうかシンカイセイカンがどうか。

こいつも電波度が上がってきたなあ。

高校を選ぶ時期になった。

が、なんか行く気がしないんだよなあ。

勉強苦手だし、テキストに除霊とかしてたら金稼げるし。

燕尾がいればメフィストフェレスとかいうマジヤバイ悪魔でも大丈夫だったので、大抵のことは何とかなる。

悪魔も「破あ!!」で消滅するとか初めて知ったわ。

豆知識だけど、トリビアにはならなそうだ。

天智はなんかプロデューサーになつた。

前は見習いだったが、完全にそっちの方向へと走るようだ。

美城チーフプロデューサーが優しいとか、黒井プロデューサーが実力主義とか、高木プロデューサーが甘いとか、そんな感じだ。

ときどきテレビでも見かけるが、担当したピヨちゃんってアイドルが逸材だったと零していた。

調子抜いてたアイドルとプロデューサーどもを鎧袖一触で駆逐して、地方に消し飛ばしたとか。

で、同じように潰しに行つて、歌のコンテストで勝利したが事務所の力で負けて仕事

を持つてかれてピヨちゃん是一年経たずに引退したとか。

苦渋を飲まされた今を耐えて、何時かは潰すために本格的に頑張るとか。

寺生まれなのに変な方向に行ってしまった……。

蓮花は異世界召喚されそうでヤバいらしい。

あー、なんか昔黒い穴で異世界がどうのって言ったのを思い出した。

ヨーセイさんが引つ張ってくるとかで、今は耐えられるが日に日に数が増えてヤバいとか。

大変だな。

燕尾が暇なときに「破あ!!」ってやるけど、一週間くらいで出現するとか。

頑張れ。

—— 8

中学卒業とともに寺を出た。

修行で伸びる能力はもう無いからとか。

寺とは一体……。

俺は結局中卒で被い屋をすることにした。

マジで困ってる人だけを助けて数万円くらい貰う感じのスタイルである。

「破あー」って感じで辻斬り除霊師だ。

俺自身が都市伝説化してるらしいが、まあ、いいや。

燕尾は両親にゲルテナ展に連れて行かれたりしていた。

凄く嫌そうだったが、本物を見ないで批判するのはよくないと日本を発った。
で、帰ってきたら英語を勉強し始めた。

ゲルテナに感動したのかと聞いたら、あまりに糞すぎて片っ端から砕いてきたとか。

Oh..

ニュースに取り上げられていないかから自重したのかもかもしれない。

メアリーとイヴって誰だ。

フラグか、フラグなのか？

その後何年もずっとメアリーって娘の絵を飾ってるのはなに？

「破あー」で十重二十重にコーティングしているのはラブなの？

フォーリンラブなの？

天智は765プロとかいう事務所に就職してなんたらかしたら。

アイドルに興味ないし、どうでもいいわ。

蓮花は最終的に異世界に連れ去られてた。

燕尾が「破あ!!」ってすれば会いに行けるし、俺だけでもメールの送受信は可能だから問題ないね。

送られてくるメールがくっそ面白……可哀そうでヤバイ。

向こうで高校生活をしれつと満喫していたら、妖精さんと意思を通わせることのできる能力を（隠していたが）見つかったために軍学校に連行……進学することになったらしい。

異世界で軍とはファンタジーの王道を突っ走ってやがる。

やはり奴はファンタジスタである。

職場は女性が9割以上を占めているブラック、部下である年頃の女の子たちは片っ端からPTSDを発症しているとか。

凄いな。

さらに凄いのが前任として勤めていた同僚が発症させたためとか。

負の連鎖じゃん。

しかも同僚がときどき思い出したかのように、鎮静化していた症状を煽っていくと

か。

なんて面白……超心配だわあ。

寺の修行を終えて何年か経ったみんなの近況報告を思い返し、就寝。

なんだか寝苦しい。

息が詰まるように胸苦しいんだ。

涙が目じりを伝って流れ、枕が濡れた。

総じいさん……？

——9

嫌な予感がした。

いくら急いでも絶対に間に合うことがないとも。

朝一で鳴滝荘に到着。

総じいさんは亡くなった。

亡くなつてた。

— 10

家族、親戚、総じいさんの知り合い、親族の関係者に訃報を知らせる。

総じいさんの孫夫婦は喧嘩しているので視界に入れないようにする。

どうにも落ち着いていられない。

すぐ傍にいたのになんでこんなことに、とか思つてしまふと終わりの見えない思考の迷路に囚われそうになる。

なんで総じいさんが死んでこいつらが……とか考えるともうダメだ。

もうかなりの歳だったことはわかつてるんだが、どうしても考えてしまふ。

総じいさんのためとか言いながら出て行つた自分のバカさにも腹が立つし、こんなときでもケンカしている孫夫婦の二人にも腹が立つ。

この二人が総じいさんの負担になつていたんじゃないかとか責任を擦り付けようと自然と考えている辺りで、もう自分は総じいさんのようないい人にはなれそうもないと悟つてしまった。

それでもどうしてもモヤモヤするんだ。

人がなんで死ぬかとか生きるかとか、ずっと考えてしまう。

人間の死亡率は100%なわけだし、生きてる意味なんてないじゃないか。

今まで寺で修行して頑張っても総じいさんの幽霊とすら話すことはできないし、総じいさんだって可愛がっていた孫娘は夫婦で喧嘩ばかりしているし。

葬儀は遠くに住む親戚が執り行ってくれた。

葬儀諸々の費用は香典から支払われることになっている。

総じいさんと懇意の間柄だった右京さんという弁護士の方も手伝ってくれたので、とてもスムーズに進んだ。

それがなんだか悲しかった。

総じいさんがいなくても世の中が回ってる事実が怖かった。

当たり前なんだ。

わかってる。

だから嫌だった。

嫌で嫌でしょうがなかった。

葬儀には多くの人が駆けつけてくれた。

総じいさんの死を誰もが惜しんでいた。

昔は閑散としていた鳴滝荘に、次々と人が来る。

鳴滝荘がどれだけ人で溢れても、やっぱり寂しさは無くならないし、悲しさばかりが残るのだ。

相変わらず総じいさんの孫娘の夫婦、つまり俺の親と姉妹ポジションの人たちは喧嘩している。

その娘の梢は悲しそうだ。

今も喧嘩をしているからか、総じいさんを偲ばないからか。

わからないけど、俺もやはり悲しかった。

何が悲しいのか言葉にできないけれど、なんとなく悲しいんだ。

灰原さんが総じいさんの見送りにきてくれた。

仕事に忙しいだろう、それなのに必死に駆けつけてくれたことが嬉しかった。

ただ、それよりも喪失感のほうが大きかった。

たぶん、灰原さんも同じだろう。

故人を偲ぶ挨拶以外の会話はほとんどなかった。

昔もそれほど多弁ではないし、交わす言葉も少なかったがそれ以上だった。

灰原さんは静かに帰っていった。

誰よりも、何時までも静かだった。

涙が出ない自分が嫌だった。

本当は悲しんでいないんじゃないかと思ってしまう。
怖かった。

総じいさんのことをどうでもいいと思っっている自分があるんじゃないかと考えてしまつて、夜も眠れなくて。

遺産は葬儀を執り行つた親戚が預かつておくことになつた。

プールしておいて、総じいさんの血縁が困つたら渡すだろうと告げていった。

右京さんと何か取決めをしたらしい。

総じいさんと同居していた孫夫婦は相変わらず喧嘩しているが、娘である梢は少しだけ笑顔を取り戻していた。

俺にとっては従妹だ。

だが、どうやって接すればいいのかわからなかつた。

まだ幼いから総じいさんを忘れたのだろうかと浅ましいことを考えてしまう。

結局、親戚が解散していくように俺も鳴滝荘から離れた。

いや、逃げたんだ。

総じいさんがいない鳴滝荘が当たり前になるのが怖くてしようがないから。

主がいなくなってもそこに平然と在る鳴滝荘に居ると震えが止まらなくなる。総じいさんがいなくても鳴滝荘は変わらない、そう思い知らされるのが嫌だった。だから逃げた。

—— 1 1

破あ……。

ウルトラテンション上がらないんです……。

先月なんて危うくMIBにニューライザーで記憶を消されるとこだった……。

記憶を消されると手伝ったのに、別の記憶を植え付けられるから依頼料が半分以下にされたりするからなあ……。

お米の国の秘密組織はやるのが狡いぜ……。

前に喰らったときは燕尾の「破あ!!」で無効にしたけど、そう何度も消えた記憶を戻せるとは思えないし……。

でもどうにもやる気が出ない……。

英語とか未だにわからん……。

燕尾はメアリーとイヴ、ギヤリー?とかいうゲルテナ無双のときに出会った友達と会

話するために頑張ってる……。

でも、宇宙人が介す言葉を覚えても意味ないと思うんだよなあ……。

お米の国のくせにご飯の味は大雑把だし、ハイパーファット……。

なんでバーベキューソースをドラム缶みたいな容器に詰めてんだ……。

牛乳もガロン……。

ウルトラ大雑把……。

肉ばつか……。

総じいさんの味噌汁飲みたい……。

テンション上がらない……。

もうヤバイ……。

あー無理い……。

もう無理い……。

生きるのツライんです……。

もうマジ無理。総じいさんが無くなって半年。ちよお大好きだったのに。

よくわかんないが、話を聞けば解決するっしょ。

食堂にいるようなので、「ヘーイ！ ボイズンガルズ！ 鳴滝荘のアイドル、葵 総滴が帰って来たヨー！」とダイナミックエントリー！

目が死んでる梢と犬のハンドパペットを装備した灰原さんが黙々とインスタントの飯を食ってた。

なんじゃこらあ……。

—— 13

梢は葬式のとくに軽く話したことがある。

灰原さんともなかなか長い付き合いだ。

そんな俺だが、今の状況はちよつと理解できない。

どうしたらいいかわからん。

わからんけど飯を食う。

いやー、白米と味噌汁、漬物の素晴らしさですよ。

インスタントもいいけど、少しでも手を加えたほうがなんというか、そう、美味しいの

だ。

おら、飲むんだよ！と瞳のハイライト90%オフの梢と対人恐怖症が極まり過ぎてハンドパペットを装備するという迷走を見せた作家である灰原さんの前に味噌汁を置く。ダツシユで味噌を買ってきたら二人とも朝食を終えていたが、そんなことはどうでもいい。

重要なことじゃないんだ。

俺一人で飯を食うとか嫌じゃん。

白米という日本の神秘に心を時めかせながら、状況を聞いてみる。

・梢がなぜか一人

・両親は帰ってこない

・灰原さんが面倒を見てる

うむ、把握した。

俺がチキったせいで灰原さんが梢の面倒を見てくれていたようだ。

大変ありがたいことでごさる。

とはいえ礼も謝罪も無し。

俺もそうだが、鳴滝荘に駆け付けたのは総じいさんのためである。

つまり、礼も謝罪も総じいさんか、総じいさんの大切な曾孫である梢に言われること

で意味があるのだ。

なので今後はどうするかという話だけで十分だ。

まあ、俺自身がどうしたいかはよくわからんから置いておくとしよう。

とりあえず金銭問題だが、総じいさんの遺産を幾らか貰えるようにかけあってみる。

確か右京さんという弁護士の方が間に入って欲しかったらしいし、そっちにも連絡をするとして……あとはよくわからん。

右京さんが良い人だったらいたい任せればいいしよ。

親戚に電話をかける。

総じいさんの息子、つまり俺の大伯父と大伯母がメインである。

まあ、他にもかけるけど一番取り仕切ってたのが大伯父と大伯母の夫婦だったので最初に連絡するのだ。

鳴滝荘についてとか聞くと、どうも権利を一応分割相続しているのだが福島在住なので気軽に来れない位置にある東京の鳴滝荘はあんまり要らないっぽい。

孫夫婦がちよっと怪しかったので分割しただけとか。

そこら辺は月日が解決するようなので権利などは改めて話を進めるとしよう。

金銭は梢が不自由なく育つほどにはあるというし、定期的に振り込む形式にしてくれ

るようだ。

梢の動向は本人の自由、必要なら鳴滝荘にそのままでもいいと言ってくれた。

礼を告げて切ろうとすると、最後に細かい詰めは右京さんという方と相談しなさいと助言された。

右京さんもここで書生のようなことをやっており、大学の在学中には鳴滝荘に住んでいて総じいさんと交流を深めたらしい。

悪い人ではないという話だった。

なるほど、丸投げ……とはいかないが、ほどほどに任せてもいいかもしれない。

俺はこういう話さっぱりだし、灰原さんは他人と話すのが苦手だし、梢は幼すぎて論外である。

右京さんの事務所に連絡すると、今日の午後には来てくれるそうだ。

電話を通して聞こえた声から察するに、仕事があるにも関わらずなんとか時間を空けてくれるようだった。

それが総じいさんの人望のようで嬉しかった。

そして、鳴滝荘が活気づいて目まぐるしく動いていても、そこに総じいさんの姿がないことがひどく悲しかった。

昼を少し過ぎた頃に四十半ばほどの年齢の物凄い紳士が来た。

彼が杉下右京さんのようだ。

葬式のときもそうだったが、今も同じように「懐かしいですねえ……」と眼鏡の奥の理知的な瞳を細めていた。

仏壇に総じいさんの好物だった和菓子と線香を見本のよういきつちりとした姿勢で供えていた。

お茶は緑茶で問題ないかと尋ねると、紅茶を好むらしい。

どうやら彼が使用していた紅茶セットが物置に置いてあるようだ。

稍も連れて探しに向かうと、几帳面な文字が書かれたラベルが貼られた段ボールを見たので運び出す。

そういえば紅茶の葉が無いと告げようとしたら、笑みを浮かべた右京さんが、胸ポケットから紅茶の葉を取り出した。

準備いい人だなあ。

右京さんが手入れする片手間で、紅茶を淹れるための道具について講義してくれた。稍も物珍しそうだった。

洗浄方法や淹れ方、葉へのこだわりなども丁寧でわかりやすく面白かった。

紅茶を注ぐ際に、ポットを高く持ち上げてカップに注ぐ姿に梢の目が丸くなっていた。

いやまあ、俺も驚いたけど。

作法としては正しくないが、紅茶を楽しんで淹れるためだとお茶目に笑いながら教えてくれた。

本題である書類諸々の手続きを始めていく。

稍自身は総じいさんがいたこの鳴滝荘を離れたくないという話だ、そこら辺は本人の意思に沿った方向で進めていく。

保護責任者は大伯父と大伯母の夫婦に頼んである。

親戚から定期的の様子見しに行こうかと提案されたが、電車で数時間かけて来てもらうのも大変なので、こっちに来る用事の時だけ寄ってくれたら有り難いと伝えておいた。

ぶつちやけてしまうと、灰原さんというハイパー人見知りが対応できると思えない。

梢もちよつと大人が苦手のようにだし。

必要な書類は手際よく右京さんが進めてくれた。

質問するとわかりやすく教えてくれ、ある程度まで梢も理解できたほどだった。

ひと段落つくくと、昔の話を聞かせてくれた。

灰原さんと同じように書生のようなモノをやって過ごし、東京大学に進学してから卒業して渡英するまで鳴滝荘で過ごしていたそうだ。

右京さんは警察を直指していた時期もあったが、金銭のみを目当てに働く弁護士ばかりに嫌気を指して、自ら弁護士になつたらしい。

ドラマのように証拠などを弁護士が探すことは無いらしいが、右京さんは気になつたらガンガン攻めていくらしい。

それでも、右京さんがどれだけ頑張ろうと悪質な弁護士はいるようで、不満を持つているのか「古美……ああ、僕とした事が」と少しだけ名前を漏らしてしまっていた。

あとは検察も良かったが、総じいさんに何か恩返ししやすい方がいいだろうと弁護士にしたとか。

ただ、少しでも力になれたのが亡くなつてからである今になつてやつとだと寂しそうに笑っていたのが印象的だった。

他には面白い検事がいるという話も教えてくれた。

くりう、とかいう人でジョーンズ履いたチャライ兄ちゃんっぽい見た目らしいが、仕事はしつかり行うそうだ。

粘り強く検分を行う姿勢は見習いたいくらいだとも。

人は見た目で判断ができないから面白いのだと右京さんは笑った。

弁護士は悪い人で検察は良い人なのかと梢が訊ねた。

口数が少ない静かな娘だったので、梢から自ら話しかけたことに少し驚いてしまった。

右京さんは曖昧に笑いながら「良い人のときもあれば悪い人のときもある。弁護士も検察も、もちろん警察も。皆が、誰もがそうなんです。何を見て、何を感じ、何を思うのか。その時々に変わりますからね」と答えた。

梢は小さく首を傾げていた。

その様子に困ったように笑いながら「それがわかるようになれば大人に近づいたということでしょうか」と呟いて、紅茶のカップを静かに傾けた。

「もしくは、小賢しくなったという証明かもしれませんね」なんて俺と灰原さんに笑いかけた。

途中から俺の職業の話になった。

被い師です！

右京さんは否定しないらしいが、そういうオカルト系は詐欺も多いそうだ。

いや、僕は真つ当な商売ですから（震え声）

祓ってから満足してもらったら料金もらうし、不満があるようなら祓い戻して他の同業に頼ってもらおうスタンス。

今まで一度も訴えられたことないから問題ない。

他の同業で祓えるようなレベルならそもそも俺らが出張る必要もないし。

凄いや頑張って俺らまで辿り着いた全く憑いてない連中もいたが、雑誌やテレビと称して云々と言っていたので、直前の仕事で取り除いたのを貼り付けたりした。

まあ、そういうのが今度はちゃんとした客として再び訪れたりするから。

悪質な仕事の仕方かもしれないけど、甘く見られると嵌めてこようとするし。

右京さんはどうもオカルトに興味があるらしい。

二十歳超えて見えないなら生死を彷徨うような事故に遭わない限り、そういう素質に目覚めないと伝えると残念そうだった。

右京さんは見た感じでわかるレベル、完全に霊力ゼロである。

学者とかに多い気がする。

我というか芯というか、そういうものが強い人は、霊力が皆無か超強いかの二極化するイメージ。

ほとんどは皆無な。パターンなんだけどね。

折角オカルトに興味があるというので、ちよつと手品つぽいのを右京さんと梢、灰原さんに見せてみよう。

とはいえ灰原さんと総じいさんにはよく見せてたけど。

今は秋も半ばの時分だ。

梢が食べた梅干しの種を綺麗に洗って、両手で包む。

数秒ほど靈力をほわあつと込め、手を開けば芽吹いた梅の種の姿。

右京さんが興味深そうに隅々まで検分したが、お手上げのようだった。

当然だ、種は使ったけど仕掛けはないから。

梢は目をきらきらさせていたが、梅がすぐに食べられると思つたせいなのだろうか。

それとも魔法に見えたから？

とまれ二人の驚いた顔は面白かったので良し。

ちなみに理論は不明。

靈子そのものは時間と次元に束縛されないという仮説がある程度だ。

まあ、奇妙な力で不思議なことをやってるって感じなので魔法もあながち間違いではないのかもしれない。

ついでに言えば、右京さんは梅干しが好きではないそうだ。

酢豚のパイナップルも。

酸味が苦手なのだろうか。

灰原さんの話にも及んだ。

最近の小説についての話だけだ。

右京さんと灰原さんの会話が途中からわからなくなった。

小説から漢文とか古文に飛ぶのはやめるべき。

ちんぷんかんぷんな空気を纏う梢を肩車して、中庭の木まで連れて行く。

梢の手が届く位置まで伸びている枝を握らせる。

さて、これはなんの木でしょうか……実はお楽しみの木で梢の望む花が咲きます！
なんてね。

梢を通した霊力によって咲いたのは、季節外れの桜だった。

一本の枝先にのみ咲いた桜は綺麗で少しだけ儂いものだった。

——15

日が傾いた時間に右京さんは帰っていった。

夕食を一緒にどうかと誘ったが、部下を残していると丁重に断られた。

度々足を運んでもらうことになりそうだったので、紅茶のセットはおもてなし用にこちらで管理することにした。

メモしたので及第点はもらえるはずだ。

味噌汁つくつて、魚焼いて、漬物切つて、野菜を小鉢に盛つて……なんてやつてたら夕食には少し時間がかかってしまった。

まあ、そういうのもいいよね。

しょうゆ漬けた黄身をごはんに乗せ、三人で一緒にいただきますと告げる。

味噌汁の味がちよつとだけ総じいさんと違うんだよなあ。

そこが不満である。

梢の歯磨きを手伝つて、デンタルフロスで隙間も掃除する。

虫歯が出来て、それがトラウマになつて大人になつても歯医者に行かないとかになつたら困るし。

麻醉が少ないほうがいいとか言い出す歯医者が増えてきているので、子供には酷だろう。

なのでケアはしっかりと行つていく。

虫菌に感染してないのが一番だけど。

こくりこくりと船を漕ぎ始めた梢を抱え、布団に連れて行く。

掛布団をかけてやり、眠るまで腹のあたりを等間隔で優しく叩いて眠りやすいようにリズムを作る。

寝息が聞こえてきた。

カーテンを閉め、静かに部屋を出て行く。

縁側には酒の入ったグラスを傾ける灰原さんの姿があった。

隣に座ると懐かしい気持ちになる。

昔はよく三人で、縁側に集まって飲み食いした。

今は二人だ。

少しだけ寂しい。

ああいや、梢を今度入れて三人になれば変わるかもしれない。

何を見て、何を感じ、何を思うのか。

その時々に変わるのだから。

原作：オーバーロード ユグドラシル（完）

— 1 —

ユグドラシルというゲームが流行っていると言うので、就職も決まって時間を持って余し気味なのでやってみることにした。

人間や異形種など色々なプレイヤーキャラクター（PC）を操れるのが魅力のようだ。また、職業も多彩なので狙わない限り同じようなステータスにはならない……と見せかけて実用性を極めると似たり寄ったりでなんとらんたららんたらでなるほどな。

wikiを眺め、ノートに理想の完成図を夢想しておく。

公式PVを見た感じ、天使が神々しくてカッコよくてかなり良いんじゃないかと。

天使の順路的には初っ端の人間状態で「昇天の羽」で天使化し、種族レベルやイベントを行っていくことで上位天使へとレベルアップしていくのだ。

最終的には神として崇められたい。

PC名はオーヴァにした。

本名が大葉だし、それっぽいじゃん。

よし、ログインした。

なんか「はちみつください」と強請っている『ゆうた』というプレイヤーがいたので隣に移動。

昇天の羽ください、と。

当たり前だが【昇天の羽】は得られなかった。

攻略wikiを斜め読みして進めるしかなさそうだ。

ゲームを進めるとレベルアップしてしまうようだが、天使系のレベル以外要らないんだよなあ。

うーん……？

— 2

幾つかのイベントを進めて天使になった。

神託を得るとか、知恵の実を吐くとか。

同時にイベント進行で上がった不要なレベルの除去法も発見。

デスペナでレベルがマイナスされるようだ。

なので人間的な職業レベルは排除。

昇天した喜びで歯止めが効かず、残ったのは『天使——I I V』のみ。

だ、大丈夫っしょ……^ q ^

凄いやられる。

カルマ値という職業や種族を変化させる際に重要となるステータス調整のために都合が良いらしい。

天使だと無条件で善に極振りだからバトル系のPCにめっちゃ狙われる。

悪に極振りの異形種も善系のPC狩られるらしい。

マジでえ。

狩られ放題とか勘弁してください……。

やっぱ羽根が生えた光ってる輪つかだと無理があつたか。

もしくはポツプする野生の天使たちに混ざつたのが悪かつたか。

でも天使と交流するのが上位へのイベントだしなあ。

めんどくさ過ぎて天使狩りしたくなってきた。

俺の糧になれよ！みたいな。

天使たちが集まることで悪魔のレギオンみたいな感じで上位天使になれないだろうか。

— 3

紆余曲折を経て大天使へと至った。

これも全てたつち・みーさんという人物のお蔭である。

俺が天使と交流している間、影で優しく護衛してくれた彼の方がいたからこそである。

篤く感謝を述べ……るわけないだろハゲが！

糞が！

クウ、クズがああああああ！！

クソ、クソがああああああ！！

お零れに預かったような現状で何を喜べと言うのか！

ゲームに何を熱くなっているのかという話だが、ゲームだからこそである。

確かに上位のプレイヤーにレベリングを手伝って貰うのは当たり前のように行われていることだ。

だが、今回ののは違う。

俺が無駄に丸一週間もかけて「狩られる↓レベルダウン↓狩りに行く↓レベルアップ↓天使と交流」を繰り返して失敗し続けたのだ。

それでも諦め悪く続けていたら、ちよつと立ち寄った上位PCのたっち・みーさんが影からこつそりと手伝って「クリアおめでとう！（チャララーン）」と謎のエフェクトともに祝福してきた。

そのまま立ち寄ってくれたら、俺は手伝われていたことに気づかないまま、長い時間をかけて達成したやり甲斐を噛みしめることができた。

ゲームとは時間をかけて目標を達成してこそだ。
だが今回は違う。

この無駄に賭けた時間とやり場のない悲しみをどうしたらいいのだ。
確かに知らないままというのも道化でしかない。

それでも知りたくなかった。

上位に手伝って貰えばすぐだなんて理解していたが、それでも手塩にかけてやり込ん

でいきたかった。

しかし、レベルダウンで作り返すのはたっち・みーさんの善意を否定することになるし……。

ああ、でも……ああ、もうっ！

今日は寝よう。

所詮ゲームだ、切り替えていく。

大天使ともなると輝く羽輪つかオンリーから強く輝く球体になったので、こいつを作り返すのも憚られる気分になる。

——4

もにもよりによしてたら一週間が経ってた。

久しぶりにログインしたらどうでもよくなるというのは良くあることだと思う。

その、マジでどうでもよくなった。

とりあえずレベル上げしておこうかしらん。

自分のPCである鎧に包まれた天使で動き回る。

これくらい天使感満載になると、プレイヤーも襲い掛かって来ない気がしないでもない。

カルマ値をマイナスにしようとするプレイヤーは襲ってくるかもしれないけど。下級の悪魔でも狩ろうか。

相克関係によりダメージアップだ。

被ダメもアップするけど。

危険性が増すのはちよつと嫌である。

ゲームでも安定して生きたい。

ポツプする野生の天使に混ぜって異形でも狩ろうかな。

そうすれば善に偏るし、経験値も普通より多い。

しかも相手も決まったルーチンでしか動かないと油断しているはずである。

よし、そうしようと決めたらピンクの肉棒に話かけられた。

声は萌えキャラだった。

ええー……。

何故に話かけられたのか、困惑していると光るピンクローターに親近感が湧いたとか。

俺のPCを穢すのは止めるんだ！

というか光ってるならピンクじゃねえだろ！

そもそも球体だからアナルパ……言わせんな！

将来的には「オーヴァーさんマジ天使」と皆が口を揃える予定なんだよオラア！

ソロだから一緒にプレイしようぜ、という誘い文句らしい。

どんな誘い方やねん（白目）

特にソロに拘っていたわけでもないので良いけど、光るピンクローターはマジで止めてほしいんですよピンクローションちゃん。

ちなみにPC名はぶくぶく茶釜さんであり、レベルは俺の方がちよつとだけ上。

初っ端から異形種のピンク肉棒を選んだらしい、豪傑である。

俺には絶対にできねえ。

狩場に乗り込む。

「私を守ってね☆」と萌えボイスで囁かれたので躊躇いなく盾にする。

肉棒は防御ビルドらしい、実に便利である。

この狩場はカルマがマイナス値の敵ばかりなので、俺の攻撃が刺さる刺さる。

究極のコンビネーションが生まれた。

どうでもいいけど、肉棒の武器の持ち方がキモすぎて戦闘中なのに笑いが止まらなくなつた。

——5

能天使へと位階を上げた。

天使——101v

大天使——101v

権天使——101v

能天使——111v

トータル3111v的な感じだ。

能天使（パワーズ）は悪魔への与ダメがかなり高い。
頗る高い。

また、カルマ値がマイナスなほどにダメージの倍率も高まる。

カルマ値がマイナス100毎に倍率が1アップ！

マイナス500なら6倍ダメやでえ。

まあ、俺のレベル帯でそんなぶつとんだカルマ値を保有する敵はいないのだけど。そんなわけで悪魔を絶対殺すために生み出された天使によって狩りの効率もアップ。

悪魔からの被ダメも上がってんじゃん……。

肉棒の盾に頼らざるを得ない。

萌えボイスで「男を誑し込む魅力に溢れててごめんね☆」と謝られた、ピンク肉棒フォルムで。

冗談だと分かっているけど「お、おう……。」としか返事ができなかった。

人間は顔が9割（真顔）

狩りの最中はくっそししようもない話をしながら、悪魔っぽい雑魚を倒す。

ちなみに『くっそししようもない話』の内容は、ポケモンの最終作はいつ出るのか、ファイナルファンタジーのファイナルは何時訪れるのか、エヴァが十巡したのにまた始まった、コナンの劇中での死亡者が1万人を超えた、という感じでマジでしょうもない。

上記の話題で出てきたコンテンツは2000年前後辺りで誕生したらしく100年以上前に始まったとか息が長すぎて笑うしかない。

俺は詳しくないがバイオハザードというゲームも出ているのだが、2作前くらいまでの舞台に使われた敷地を合計すると地球全土がゾンビで埋まるとかで、最新作ではクトウルー神話とやらを取り込んで宇宙に進出し、スターゾンビとか出てくるらしい。

他にはピンク肉棒が駆け出しの声優をやってるらしく、エロゲに声を充てる機会が多いとか。

声優は下積みが多くて望んだ仕事はほとんど来ないのがツラいらしいが、醍醐味としてエロゲマイスターの弟が、自分が声を充てたゲームを買って泣く泣く積む姿があるから続けているらしい。

あ、悪魔や……。

— 6

肉棒の盾（呪い装備）によって主天使へとランクアップ。

異形種を盾にする天の御使いという謎現象。

むしろ異教徒を盾にしているから私の天使力高すぎ……？

現状でのレベルは

天使——101v

大天使——101v

権天使——101v

能天使——101v

力天使——101v

主天使——111v

となっている。

上級位階へのランクアップ条件は、野生にPOPする天使を引き連れてカルマ値がマ
イナスの敵を一定数撃破し、主天使の種族レベルを10以上に上げることである。

名残惜しいが肉棒とはお別れだ。

呪いの装備だとしても、別れるときは来るのだ。

というか、肉棒が野生の天使にボコられてイベントにならないから付いてこれないだ
けなんだけど。

肉棒がソロになることへの申し訳なきと、俺がソロになることの寂しさを感じていた
が、肉棒は弟とプレイする予定らしい。

う、裏切られたあ……。

内心で手ひどいダメージを受けつつも爽やかに別れる。

しかし、あの弟と一緒に。

エロゲの楽しみを潰され、姉を超える弟なぞ居ねえ！と圧政を布かれた弟……。
やっぱリアルルの姉ってクソだわ。

主天使らしく、配下の天使を突撃させて削ったところに止めを刺す感じで進める。

PKに襲われても天使という盾……守護者たちが俺を守ってくれる。

スキルで湧き出る天使を指揮下に入れ、悪魔が蔓延るフィールドへと片っ端から突撃と玉砕を繰り返させる。

別ゲーっぽい超楽しい。

同じレベル帯なら先制さえ取ればカルマ値の関係で悪魔に致命的なダメージを与えられるので、天使を使い捨てて経験値も同時に稼ぐ。

これこそが天使を使った醍醐味だ。

天使の使い方が極めて上手い俺はやはり聖人だったか。

最上級天使になっても使い捨てて上級天使砲で悪魔を狩って遊んでいたら、肉棒からギルド立ち上げるから入らないかという勧誘だった。

異形種限定ギルドらしい。

天使は人類に敵対的な異形種じゃないから（震え声

ま、まあ、人間じゃないのからいいのかなって日和つてみたり。

天使ギルドは正義ロールでウザかったし、他からは声をかけてもらえてないんだよ。

自分から入る気にはならないし。

そして寂しさには誰も勝てない（断言）

ギルマスはたっち・みーさんだという。

断った。

なんか言葉には出来ない苦さが俺の心にはあるのだ。

だから、たっち・みーさんを倒し、俺が天立つ。

そしてワールドチャンピオンとやらになってすべてのプレイヤーから崇められたい。

— 7

天使 — 101v

大天使 — 101v

権天使 — 101v

能天使——101v

力天使——101v

主天使——101v

座天使——101v

智天使——101v

熾天使——151v

ジェネラル——51v

上記でレベルは合計100となった。

勝ったな、と確信しながらたち・みーさんも出場するイベントに突撃。

予選で瞬殺された^q^

ローカル掲示板や公式板などでネタ構成が現れたと冷笑された。

しかも天使ギルドの回し者とすら思われたようだ。

俺はガチだった、全力でリアルガチだったんや……。

問題はジェネラル以外は種族レベルしか上げていないので、技の多様性が全くない

こと。

天使特有の聖属性スキルに偏っていて、善のカルマ持ちにはダメージを与えられないこと。

魔法が少なすぎて自バフも糞。

マイナスのカルマから超絶にダメージを受けること。

種族スキルで回復するが、被ダメージで上回られること。
などなど。

欠点は無限大だ。

おかしい。

こんなはずじゃなかったのに……。

「何がダメなんですか！」と茶釜さんとここに相談に駆け込む。

客人を持って成す数々のデストラップで死んだ。

悪魔は被ダメージの倍率が高いからやめてください；；

あ、天使だから昇天か。

位階とか上がらんだろうか。

設立仕立ての未完成ギルドとはいえ俺をぶつ殺したのだ、油断はできねえ。

アポを取って今度こそ突撃。

今日は茶釜さんがいないのでナチュラルボーンなモモンガさんが相手をしてくれることになった。

ビルドをドヤ顔で見せると頭を抱えられた。

あ、もしかして完璧すぎたのかな。

溜息まで付かれた。

(^ 〇 ^) ?

導入は取得魔法が少なすぎい！という話。

ユグドラシルだと魔法は1レベルごとに3つ取得できる仕様だが、考えるのが面倒なので取ってねえ。

種族スキルでゴリ押せば狩場では平気でした(真顔)

たっち・みーさんに勝つにはどうしたらええんや！と相談すると、魔法を全部覚えて

キャラをほぼ作り直ししてやっとなスタートラインだという。

ゲームっていうのは自由でなきやいけないんだ。

楽しく、喜びに満ち溢れ、救われなければならない。

作り直しだなんて、自分の分身を改めて育て直すなんて面倒くさ……そんな残酷なこ
と出来るわけがないの！

アレンジしてパツと無敵になりたい。

俺の相談に乗っていた骸骨が「メシマズと同じこと言ってる……」とため息を吐いた。
モモンガさんは勘違いしているようだけど、俺の飯は結構うまいんだぜ？

返事は無かった。

（ 〇 ）？

— 9

「真面目に魔法を組んで、いくつかの種族を切つて、職業を追加すれば、まあ強くなり
ますよ」と目を逸らしながら言われた。

俺が目指すのは最強だから。

何時だってイメージするのは最強の自分だ。

まあ、こんなしようもない話をしてても行きつく先は課金である。最低限の課金をしないことには絶対に勝てないらしい。

うーんこのバランス。

俺という貧民から搾取しようだなんて極悪だわ。

最近の仕事にも慣れてきた半人前の身分で給料をゲームに賭けるのは……まあ、有りかも。

趣味だし。

「運営様ー、是非ともこの産廃天使にワールドアイテムを（ガチャガチャ）」と課金。モモンガさんも当たり前のように課金し出すからゲームって怖い。

ちなみにモモンガさんはブラック会社勤めで営業職らしい。

俺は汚れた大気を観測し、異常気象が発生するかどうかを調べて追いかける的な会社に勤めている。

頻繁に起きる殺人的な加速の竜巻から逃げながら写真を撮り、半径200mに降り注ぎまくり大気が汚染されすぎて横にも広がる雷を追いながら写真を撮り、豪雨に水没すると聞けばボートを担いで遊泳しながら写真を撮り、ネットに死ぬやでーと警告し、おススメの人工心肺を宣伝したりもする。

汚染が続いた日本の自然はヤバイ。

というか大陸から飛んでくる砂とか謎の化学物質がマジでヤバイ。

で、俺とモモンガさんがガチャって狙っているワールドアイテムとは、運営が出す公式チートアイテムである。

月に1個から2個、イベントやガチャで手に入れることができるようになっていいる。「ワールドって付くから無敵にするわ!」という公式の無駄な拘りを感じられること間違いないの一品らしい。

俺は見たことないんだけどね。

どんな感じだろうか。

……今手に入れたから初めて見るけど、無敵の強さを誇りそうだ!

5万を注ぎ込んだモモンガさんには悪いけど、これって運の強さがゲームの強さだから。

運営にお願いを聞いてもらえるアイテムらしい。

よし、一番容量が重いエリア1個分のデータを俺のPCに詰め込んでもらうことにした。

意味?

ロマンの前に意味など塵も同然です。

— 10

運営が三日で願いを叶えてくれた。

ちよつと重い感じがする。

というか、この時代に珍しくラグるといふね。

種族も熾天使（セラフ）とカッコいい仕様になり、神への愛で羽も燃えている。

やったぜ。

肉棒ちゃんが勿体ないと引いていたが、これこそがロマン。

男ならみんな理解してくれるっしょ。

チラツと肉棒ちゃんが所属するたち・みーさんがギルマスを務めているギルドのア

インズ・ウール・ゴウンに期待の目線。

目線逸らすのやめーや、q、

流石のユグドラシルも、フィールド1個分が圧縮された俺という高容量のキャラクターがワープなどでマップに突然出現するとかかなりのラグが生じるようだ。

細部まで無駄に凝った作りをしているせいかもしれない。

普通はPCの視点がフォーカスされなければピントが合わず、ピントの外はボヤけて処理されるデータ量も少なくて済むが、俺という存在にピントを合わせると、処理しきれなくて他のプレイヤーは動きに乱れが出る。

そこを狙って、アインズ・ウール・ゴウンの人たちがPKするというエグい作戦を考え出した。

俺が出現し、ラグらせて電撃戦を仕掛けるとか。

詳しい内容は知らん。

「おにいさん、ちよつとやってかなーい？」って肉棒に誘われたのでやったただけだ。

俺は悪くねえ。

そもそも俺のビルドが糞だと気付いて声をかけて来なくなった天使ギルドが悪い。

うえーいwwwwwwと天使どもを煽る。

頭に血が上れば、それだけラグとの戦いに苛立つことになるのだ。

最終的にネタに走った俺のキャラは、盛大に自爆して他のプレイヤーを巻き込んで死んだ。

データ容量＝強さのユグドラシル、殉死した天使も多かったらしい。

運営もガバガバである。

他のプレイヤーが使用したワールドアイテムによって、俺の愛するPC・熾天使オーヴァは削除が通達され、永遠に眠ることになった。

——11

天使ギルドのギルマスが後生大事に抱えていたワールドアイテム・ロンギヌスで、俺を抹殺するように暗殺メインのギルドに頼んでいたようだ。

「天使としての素行違反なんだ！ この世から消えろ！」ということらしい、うわぁ怖い。

雑魚PC一匹を捨て駒にして消されるとは思わなかったぜ。

ワールドアイテムはワールドアイテムで防げるのが常識だが、俺のPCはワールドアイテムではないので防げなかったと言う常識的な終焉だった。

まさか寿命が3日とは俺でも予想付かなかったぜ。

運営が作って3日、使って3日。

神は一週間で世界を創造したというが、オーヴァという熾天使は3日で世界の常識を

塗りかえた。

掲示板に『糞ビルドの逆襲』と晒されるとは思わなかったけど。

今週に入ってワールドアイテムが2個も使われるとは運営も思っていなかっただろう。

しかも運営はワールドアイテムに、かなりの思いを抱いているのだ。

それなのに無駄に重いPCを作成してくれ1個、奴は天使じゃないから抹殺してくれで1個。

完全に浪費である。

ワールドアイテムが欲しくてガチャってたプレイヤーは全力で泣くに違いない。

まあ、ロンギヌスとやらはイベントで手に入るらしい。

ヘイトが溜まっているプレイヤーを殺す槍である。

ショートメールで肉棒ちゃんが手伝ってくれるらしいので、またオーヴァでログイン。

アインズ・ウール・ゴウンの面々が削除について謝ってくれたが、楽しかったのでセーフ。

肉棒ちゃんやギルドの面々による高速ブートキャンプによるレベルアップで熾天使

に返り咲き……なんか天使ギルドが襲ってくるんですけど。

だが、対天使を想定してスキルや魔法を構成した俺に隙は無い！

俺を盾にしろ！

戸惑っているアインズ・ウール・ゴウンの面々と違って、率先して肉棒ちゃんを俺を盾にして天使を屠る。

決断力と行動力のあるピンク肉棒有能……我が儘言えばもう少し悩んでほしかったんだけど。

まあそんなわけで慈愛溢れる俺は「真の天使は俺一人、偽物はみんな堕ちちまえよお！」って心を痛めながら戦った。

戦闘後、俺という聖なる盾を使ったアインズ・ウール・ゴウンは勝利した。

天使に逆らうからだ、似非天使ども。

ちなみに俺はアインズ・ウール・ゴウンに所属していない。

真の天使はやつぱ羽が違う。

愛と正義に燃えているのだ。

真つ黒で、漆黒で、闇夜のように……。

うわーボク墮天しとるうー、q、

— 12

天使をぶち殺し過ぎて墮天する条件を整えてしまったらしい。

種族スキルが天使への与ダメがアップするのと被ダメがダウンする天使絶対殺すマンと化した。

普通は天使なんて限定過ぎて糞、と酷評するだろうが天使ギルドを集中的に相手するので万事オツケーである。

むしろ運営がやれって言ってる気がする。

天使と墮天使は相克の関係である。

どちらかが消滅するまで戦い続けなければならない。

という無駄な設定を考えたので、天使ギルドに突撃を繰り返す。

ガチな対天使のスキル構成、天使絶対殺すマンの種族スキルが意味することは、多対一ですら頑張ればまあまあ勝てるという奇跡を引き起こした。

同レベル帯では無双ができないユグドラシルで無双する楽しさである。

アインズ・ウール・ゴウンで暇してたり、凝った作品を作っていたり、エロに厳しい運営の目を掻い潜ってなんとかエロエロしようとしている人に頼んでバフを掛けてもらうと天使襲撃の効率が大幅アップだ。

天使ギルドの本拠地から出てきたところを襲ったり、狩りの最中を狙って襲ったり、新人を育成しているところを襲ったり、アインズ・ウール・ゴウンの人を狙ったところを逆に狙ったりと、楽しさ無限大である。

何故こんなに執拗に天使を襲っているのか、俺でもわからないが、墮天使だからしょうがないね！

天使やつてる人も無差別で襲う。

たちち・みーさんに「弱い者いじめは止めるんだ！」と声をかけられたので「止めてみろよ！」と突撃。

死んだーq、

瞬殺されたので闇討ちは諦めることにした。

ちなみに天使以外は被害が無いので、公式などはどうでもよさそうである。

そもそもスキル構成を対天使特化にしないとここまで遊べないので、墮天使はやはり

不人気のようにだ。

ただ天使も大して人気ないのだけど。

大人しくしてたら天使がうぜー。

かたき討ちとかでいっぱい湧いてうぜー。

俺が天使に屈した説が流行り、天使が調子に乗り始めて異形種を狩り始めた。

天使も、天使が狩るキモい異形種もプレイヤー数は少ないので公式掲示板はやはりどうでもよさそうという。

復活地点が割り出されて、殺され続ける日々になってしまった。

墮天使は街で蘇れないペナルティがあるわけで。

なんだこのゲーム（困惑）

一週間ほど置いてから復帰。

まだ天使が張り込んでいて、殺される続ける感じである。

なんだこいつら（白目）

これではゲームにならないので数少ない知人に助けを求める。

駆けつけた萌え声のピンク肉棒とかいう、ファンタジーにあるまじき英雄に助けもらった。

そこは姫騎士だろ。

で、「くっ殺」みたいな。

ちよつと前に声を充てたらしい。

マジか、そんな古いジャンルとか逆に目新しいのかもしれないなあ。

——13

異形種代表としてアインズ・ウール・ゴウンが天使ギルドと争っているらしい。

ちなみに天使ギルドだが、ギルド名は中二感満載で、口に出すのも憚られる。

ギルド名の両脇に？が付いてるし。

流れで俺もギルドに所属することになった。

争いの発端は俺にある気がしなくてもないが、まあいいっしょ！

みんなで力を合わせてギルドを滅ぼせばええんやで！

レベルダウンしまくって戦力的にヤバいので、なんとか少しでも強化するために「運

営様」、是非ともこの産廃墮天使にワールドアイテムを（ガチャガチャ）」と課金。

焼け石に水でもいい、それでも俺が真の天使だと奴らに知らしめてやりたいんだ！

っしや！とリアルでガッツポーズ。

当たりを引いたぜ……！！

どうやら運営は再び俺に願い事をして欲しいようだ。

モモンガさんが「あつ（察し）」みたいな顔をしていたが、前回の失敗を踏まえた俺に不可能はない。

——14

俺がパーティにいる状態だと天使の補助魔法キャンセル、天使は装備による全判定の無効、天使へ与ダメ1000%アップ、天使からの被ダメ90%ダウン、同フィールド上に存在する天使はHP0で強制墮天という糞設定を叶えて貰った。

これはもうワールドアイテムを手に入れたら言ったもん勝ちだわ。

PCの種族も墮天使（アナザーセラフ）へと変化。

うえーいwwwwwwと乗り込み、ギルドに蔓延る天使どもに最大強化して本数も最大化した魔法の矢を放つ。

一本でも当たると致命傷必死というルールが新たに誕生し、天使だけ古き良きシューティングゲームの的と化した。

天使の総本山だけあって天使以外は弱体化や回復量ダウン、天使以外復活不可などがあるようだ……が、HP0でギルメンも強制墮天されるのでギルドの恩恵をほとんど受けられなくなっていた。

戦えば戦う程に敵がいなくなるので、最後はギルマスまで墮天してギルド武器を破壊し、ギルドが崩壊した。

いい仕事したぜ、と爽やかに仲間と友情を分かち合う。

戦利品でなんか色々作るらしい。

俺は自分の糞PCをどうにかしないとイケないけど。

対天使特化の墮天使とか使い道わからん。

天使の総本山も滅ぼし、墮天使を増やしまくったし。

そのままの勢いで、天使が存在するギルドを闇討ちしまくる。

奇跡のカーニバルが開幕してるんだよオラア！

他のプレイヤーが使用したワールドアイテムによって俺の愛するPC・墮天使オー

ヴァは削除が通達され、永遠に眠ることになった。

——15

天使が可哀そうだと心打たれたプレイヤーが、ロンギヌスを使って俺をぶつ殺したらしい。

ワールドアイテムを特別視している運営がまた頭を抱えていそうだ。

しかし、まさか運営によって強化された3日後に抹消されるとは思わなかった。

ワールドアイテムはワールドアイテムで防御できるとい話だが、残念ながら作成P

Cはその恩恵の限りでないのだ。

……実は消されると確信していたし、作り直すつもりだったから問題ないんですけどね！

困ったことに争いの火種となった天使・墮天使の種族やスキルが次のアップデートで全変更の憂き目となった。

完全にやり過ぎた。

まあ強すぎたような気がしたので修正は仕方ないね。

使っているプレイヤーには悪いけど、時代の流れには逆らえない（棒読み）

再興しようとしていた天使ギルドは滅ぶに違いない。
命脈を断ったぜ。

三度目のPC作成である。

チュートリアルもスキップだ。

茶釜肉棒は種族が泥っぽいスライムなので、俺も真似てそっち路線へ。

装備は双剣にしよう。

まっくろくろすけが双剣を操る姿にはキモさ100%で苦笑いしか出ない。

折角なのでガンナーとかも取得。

レベル上げもだいぶ進んだぜ！ただいまー！とギルドに突入。

lvl1天使とかネタかよwwww

ぐわあああああ^q^

更に強化されたトラップで死亡した。

第八階層とかいう魔境。

抹消によってギルド登録が必要になってたようだ。

前回も同じ轍を踏んだ記憶が……うつ、頭が……。

リスポーンして今度こそギルドに加入したので、安心してギルドへ。課金したトラップも数多くあるので突撃は止めるとガチ切れされた。

ご、ごめん……。

今回のアップデートついでに生み出されたメイドの一人であるCZ2128・Δ（シーゼットニイチニハチ・デルタ）に「職がお揃いでゲスねゲへ。君つて一円なんだつてゲスね？ 俺に買われないでゲスか？ ゲスススス（意訳）」みたいなことを爽やかなイケメンスマイル（ススワタリフェイス）で囁いたら、肉棒に運営へと通報された。

おめえの弟のほうがエロゲーエロゲーってヤバいこと言ってるから！

俺はセーフだから！

通報されたり、肉棒弟が姉ボイス入りのエロゲを買ったり、たち・みーさんとうるべるとさんが喧嘩したりしているけど、僕は元気です。

レベリングを手伝ってくれる人も多くて楽過ぎて困る。

自分で育てるこだわり？

そんなの二度も選手登録抹消を受けたらどうでもよくなるから。

職や種族のレベルをアップさせることにまっくろくろすけからいろいろと生える！

剣が生えた！

銃が生えた！

刺が生えた！

ウニになった！

ウニではないです（クール）

そんな感じでちよこちよこ進めているのだが、リアルが忙しいのでなかなかゲーム出
来なくて悲しい。

ゲームにのめり込み過ぎて、上司に「最近仕事に身が入ってない」と注意されたので
仕事を優先。

ちよつと間を置くと冷めるんだけどなあ。

下痢による腹痛の波と一緒に、こういったゲームは課金したくなるほど熱くなるのと
賢者タイムの如く冷める時期が交互に訪れるのだ。

熱いうちにやり込まないと、飽きたら悲惨である。

ミーハーな人ほど気持ちはわかるんじゃないだろうか。

マイナースポーツが世界大会に出場できると知って応援、大会後に応援グッズとか見て「何やってたんだろうアテクシ……」みたいな。

趣味とは人を狂わせるのだ……。

そんなわけで賢者タイムに突入。

課金してギルド拡張など盛り上がっていると水に差すのも悪い。

ボーナスを全額注ぎ込むモモンガさんの横で、俺は運営から配られるログインボーナスとか詫びチケでポチポチするでしょう。

……超級魔法の時間省略の砂時計とか、装備転送のアイス棒ばつか出た、いらねー。

——16

イカの水死体っぽいエメ板さんに膨大な中二設定を与えられた俺、フォルムとかギミックとか全てが大げさすぎて困り果てる。

攻撃したら敵やフィールドにAのようなサインが刻まれるとか、真の姿が別にあるとか、再現がキツツイんです。

しかし、俺も中二を卒業したわけではないのだ。

唯一無二に憧れないわけでもない。

よつて重課金を決意する。

ちなみに設定の前半を要約すると

オーヴァアわ生まれた……世界樹がエンジェル☆つちやえつて……でも……もうドミニオンズになつて戦いつかれちゃつた……

でも……あきらめるのよくないつて……オーヴァアわ……おもつて……がんばつた……

でも……モンスター……友達できて……ツライよ……ゴメン……

エンジェル☆セラフになつた……でも……裏切つた……

それでも……セラフとエンジェル☆わ……ズツ友だよ……死ね!!

みたいな。

多分、肉棒を盾にしたり、大天使のときのイベントで天使を盾にしたり、天使砲として扱つた事を示しているのだろう。

後半は墮天し、かつての仲間だつた天使を殺戮する感じである。

その後は秩序を求めて天使を襲いまくる。

で、世界樹によつて消滅されるも力の残骸として蘇る的な。

長いのでかなり読み飛ばしたけど。

かつこいいんですけど、まっくろくろすけには設定が重すぎる（目逸らし）

設定に沿って試しに作ってみたが、容量が圧倒的に足りない。

無理していじくるんだが、赤黒く脈動する巨大な腕が生えたまっくろくろすけと化した。

俺はもつとイケメンのPCを使いたいんだ。

そもそもまっくろくろすけとか誰得なんだよ。

頭おかしいっしょ。

もうむーりいーと投げ出す。

まっくろくろすけは、黒い泡を纏った赤黒い歪な刃と化していた。

中途半端に再現してしまっただが、まだ一部分である。

この一部分で課金したエフェクトなども含めて全ての容量を使い切った。

中途半端でござる。

そもそも人間形態とか無理がある設定だった。

何か無いかなと他のメンバーに視点を向ける。

モモンガさんがまたガチャやってた。

その隣には無言の肉棒（弟）であるペロちゃん、エロゲをやりつつユグドラシルを

やっぱ肉棒ちゃんも冒険に行くしかないわ。

作り直したばかりだから、完全に寄生状態である。

ピンクの肉棒のヒモになるまっくろくろすけ（赤黒いラインの入った歪な鎌）的な。ちよつと意味がわかんないです。

——17

環境汚染が進み過ぎて、人間が気軽にアウトドアを楽しめなくなった今日この頃。

ネットゲに逃げ込むのは節理なんじゃないかと思うんだ。

スポーツなどを趣味にする場合は道具を揃える必要があるし、読書なら本、映画なら入館料やレンタル料。

つまるところ、ネットゲに課金するのも趣味の道具をブランド物で揃えるのと一緒なんだと思う（ガチャガチャ）

砂時計とアイスの棒ばつかである。

悲しい。

モモンガさんも外ればかりのようだ。

この人いつも課金してんなあ。

最終的にモモンガさんと一緒に心なし煤けた背中を外れアイテムを宝物殿に投げ込む情けなさよ……。

社会人ギルドの恐ろしさは、ギルメンも一緒になつて課金することだろう。

同調してしまうと終わりが見えない。

まあ、課金して得たデータを共有できるから、ソロのゲームよりは外れた時の虚しさが緩和される……気がしないでもない。

寝る前にログインしてきた女教師がレアアイテムを、詫びチケで一発で当てるといふ事件が発生。

モモンガさんが息してない。

「女教師つて卑猥だよね、そのレアアイテムでおつちちゃんとスケベしようや」と迫つた。

肉棒ちゃんに通報された。

止めてください死んでしまいます、q、

運対が塩すぎて悲しい。

まっくろくろすけの低い姿勢でメイド系のパンツを見ようとしたり、女教師って卑猥だよね（マイルド表現）したり、肉棒ちゃん h s h s、ペスを味わいたいなあ（オブラート）ってしたり、もっちの餡子をもっちもち（比喻表現）しようとしたら、注意勧告を喰らった。

ペロちゃんのエロゲについて語っているのに注意無し、パンツ覗こうとした俺は注意有り。

こんなの絶対おかしいよ！

はあ……パンツ見たいなあ……と黄昏る。

見えないからこそ見たいのだ。

俺の様子に呆れながらモモンガさんが「私の見ますか」と骨チラしてきた。

何故そうなった（驚愕）

「しようがないなあ、お兄ちゃん。はい、私のもどぞー！」と肉棒が震えた。

何がどうなって、どぞなのか（困惑）

その流れを見ていた他のギルメンが、次々と俺に何かを見せる流れとなった。

違う、そうじゃない（激怒）

結局夜遅くまで拘束された。

メンバーの主なログイン時間が異なっているためだけだ。

— 19

仕事は忙しくなってきた。

というのも、季節の変わり目は繁盛期なのだ。

気候が安定しないため、様々な異常気象のバーゲンセール。

そんなわけなので、ついでに人工臓器も売れる。

来週は出張で北海道だ、試される大地の北風ハリケーンと空飛ぶ氷柱の情報収集は命

がけだぜえ。

なんか試される大地でモンゴリアンデスワームの亜種が発見されたとか。

装備無しだと死ぬ可能性すら感じるんだけど。

群馬や鳥取、福岡よりは修羅度が低いと有り難いんだけどなあ……。

そんなわけでゲームを休む必要が出てきた。

いや、出張先でもやれなくもないが、やはり北海道だし、気は抜けない。一時の隙で死んだら元も子もないのだ。

仕事で長期の間休むので、ギルドへ貢献できない。

心苦しく思った俺はガチャで何か力になれないかと思いついた。

いや別にガチャする理由を他に求めたわけじゃないです（ガチャガチャ）

……すまん、モモンガさん。

俺は貴方と違つて金を仮想に溶かした分だけ見返りがあるようだ。

三度運営が願いを叶えてくれる系のワールドアイテムを手に入れてしまったでござる。

とりあえず中二設定を盛り込んだ要望メールを送りつける。

無駄に盛られた設定を忠実に再現すんだよオラア！

— 20 —

仕事ついでにモンゴリアンデスワーム亜種を、大学の研究チームと一緒に一狩りしたのもなかなか良い思い出となった。

そんな激務を乗り越え、帰宅してユグドラシルにログイン。

うん？

……うーん？

久しぶりにログインすると、PCが特殊な鉱山エリアのワールドエネミーになってた
^ q ^

——21

中二の設定を忠実に再現したが、掛かった労力と金とデータが勿体ないのでワールドエネミーをやってください（要約）ってことらしい。

めっちゃ強いらしいが、サーバー移動どころかエリアからの移動すら禁止なので確認できない。

プレイヤーを敵にするとかなんだこのクソゲー（困惑）

イベントなので掲示板とかに情報を撒き散らしてもええんやでってことらしい。

あと公式の掲示板でワールドエネミーとして俺のPCのスクショが公開されているとか。

ギルドの皆からしたら俺って捕らわれの姫ポジじゃね、困っちゃうなー。

だ、誰も来ねえ……っ、っ

——22

誰か来いよハゲ！と思っているが、プレイヤーからしたら情報が少なすぎるんだよハゲ！ってことのようなのだ。

なるほどな。

でも俺もほとんど身動きできないから情報を流しようがないんです。

そもそも他人と交流するのが売りのMMOで、僻地にソロ拘束とか罰ゲーム以下の待遇に流石の俺も激おこだわ。

暇過ぎて掲示板を眺めていたら、三度もワールドアイテムを無駄遣いしたペナルティ説が流れていた。

お、俺は悪くねーぞ。

出るのが悪い。

俺がログインしてない時にプレイヤーが来たら悲劇だわ。

勝手にAIが動かしてくれるらしいが、俺の時間が無駄になるし。せめて俺がいるときに来てくれ……！

ナザリックの皆が駆けつけてくれた！

お前らは俺の光だ！

でもパンツを見せてくれなかったから死ね！

皆の死に様をスクシヨにして公開したら祭りになった。

嫌われてるから仕方ないね（素知らぬ顔）

—— 23

次々と攻め寄せるようになってきたプレイヤーを虐げ、スクシヨを撮って晒して遊んでいると、またナザリックが襲撃してきた。

多分5回目くらい。

上等だよオラア！

このまま負けないでイベント期間を終わらせ、運営とプレイヤーへの嫌がらせとして有終の美を飾るのが俺の予定である。

かっこいい台詞も考えた。

なにゆえもがき 生きるのか？滅びこそ我が喜び。死にゆく者こそ美しい。さあ、我が腕の中で息絶えるがよい!!（ドヤア）

あ、なんか俺つてば弱体化してる^q^

十体の超強い天使をぶち殺すイベントを終えて来たらしい。

俺の弱体化イベントも兼ねていたとかなんとかなるほどなー。

ぐわあああ……!!

ナザリツクが勝利報酬として鉱山エリアを独占した。

また仕事が入ったので、間隔が空いてしまった。

久しぶりにログイン……ワールドエネミーのまんまやんけ！

運営とかいう有能集団。

ワールドエネミー状態でナザリックに行くと、みんな集まっていた。

なんか珍しいわ。

前回のイベント報酬である鉱山独占を、ワールドアイテムでかき消され、そのワールドアイテム所有のギルド以外は立ち入り禁止になったらしい。

なるほどなー。

ただし、ワールドアイテムを持っていると侵入できることがわかったので、パーティ全体に効果のあるワールドアイテムを持って強行的に奪還するとかなんとか。

内部に潜入したらワールドアイテムを所持しているプレイヤーだけ離脱するから、パクられることも無い的な。

天才じゃん！

俺も行くしかねえ！

他のプレイヤーが使用したワールドアイテムによって俺の愛するワールドエネミー・オーヴァは削除が通達され、永遠に眠ることになった。

——25

再三のロンギヌスハードに流石のオーヴァも調教された、というのは冗談で、削除されなかった。

ワールドエネミーだからね！

ただ、何も無しで済むはずもなく、運営から封印処理というペナルティが課せられた。フォーム1、2、3と形態を経て、最終的にワールドエネミーに至れるらしい。

フォーム変更にはカルマ値が必要で、倒した相手に設定されているカルマ値を貯蔵できるシステムが搭載されている。

フォーム1は通常形態でレベル60、眼鏡かけた青年PCになっている。全体的に青い、左腕は巨大な白い円筒に包まれている。

で、カルマをトータルで10万溜めることで解放できるフォーム2であるレベル80形態は以前まで使っていた変異したまっくろくろすけな赤黒い鎌が、青年の左の肩から

生えてる感じだ。円筒は無くなるので、封印している的なイメージか。

カルマ50万でフォーム3となりレベル100、見た目はなんか青白くてでかくてキモい（雑）あと左の肩口からやはり鎌が生えている。青年ではなくなつた。悲しい。

さらにカルマ100万でワールドエネミーに至る、みたいな。

ワールドエネミーになる前に死ぬと、レベル60の形態に戻されるとか。

レベルは上下しないし、死んでも下がらないらしい。

再ビルド用のアイテムを使えばある程度は職や技を組めるようだが、自由度は極めて低い。

ネトゲなのに自由が死んだ！

あとレベル60の状態でロンギヌスに刺されると、俺が内包しているワールドアイテムが発動してユグドラシルをリセットするらしい。

リセットってなんですか（困惑）

……運営サイドは何か俺に不満があるのか。

変なペナルティ喰らつたやでえ、とエメ板さんに相談してみる。

設定通りらしい。

お、おう……。

読み込んでないのが悪かったかな……。
流石の俺も何も言えないわあ……。

— 26

出張に行き、無事に帰宅。

今回の出張先である日本海は、環境汚染が進んだ大陸から色々と流れ込んだ結果、一昔前の漫画に擬えてグランドラインとか呼ばれている死の海だ。

ヒトガタという巨大生物とエンカウントしたが、意外と温厚な生物だった。

アマゾンの奥地で突然変異したというアシユラカブト（和名）と同じくらい獰猛だったら死んでた。

まあ、危険生物だったら自衛隊が出張るけど。

ネットゲにログインすると、以前の鉱山で集めたアイテムでゴーレム作りをしている真っ最中らしい。

俺も一体作ってみてはどうかと提案された。

イメージ図を書いたら、得意なメンバーが組んでくれるという話だ。

類稀なるセンスを活かしたゴーレムを生み出すとしよう。

二時間くらいかけて描いたが……うーん、絵心が死んでてビビる。

ひ、ひさしぶりに絵を描いたから仕方ないね。

俺の高校の美術の成績は4だったんだぜ、5段階評価で。

悪くない。

むしろ良い方だ。

とりあえず自分でもわかる前衛的な絵からゴーレムを生み出すのは怖い。

止めようかなあと思ったが、異形溢れるナザリックで別方向に怖いナニカというものも必要だろうと自己弁護。

よし、これをお願いします！と提出。

名前はゲルニカ・ハウンド（暫定）である。

ちよつと似てるので、彼の有名なゲルニカから頂戴したという、相手に失礼極まりない理由だ。

あとはナザリックで無限にPOPする雑魚を狩り、カルマ値を貯める。

外に出るとロンギヌスに襲われるんで、こうやってちよこちよこことタンス預金の如く

貯めなければならんのだ。

暇なギルメンが召喚スキルで手伝ってくれるので効率は、始まりの街周辺でスライム狩りから、はぐれメタル狩りへと移行。

レベル上げが容易なユグドラシルで、このめんどくささである。
なんだこれ……。

こつこつと時間をかけてカルマを溜め込み、フォーム2（レベル80）へと移行。

これが俺の力だ！と達成感に浸り、フォーム3以降から目を逸らす。

ダルいなあ、これ……。

ぼくがかんがえたさいきよーのゴーレムとやらが完成したらしく、お披露目会が開催されることになった。

気分転換に顔を出すことに。

ぐわあああああ～q～

るし★ふぁーが調整したゴーレムによって俺の愛するオーヴァ（フォーム2）は死んだ。

フォーム1に戻ったPCを見て、ログアウトしてふて寝する。
っらい……。

——27

結構な期間が空いたが、再びログイン。

熱さも喉元過ぎれば、というやつだ。

カルマを貯蔵する日々に戻ることを決意したのだ、俺は。

久しぶりに会ったたち・みーさんに慰められたが、優しくされると泣きそうになる
んでやめてください。

複数のギルドが徒党を組み、ナザリックに攻め込んできたとか。

全体で1500人ほどらしい。

ナザリックはコミケ会場になった可能性が高い……？

アホなこと言っていないで俺も出陣である。

悪辣なる8層でほとんどを嵌め殺したいという話だ。

なので俺は上層で削ることにする。

ワールドエネミーは殺し合う道具じゃない！殺す道具だ！

あ、マジでロンギヌスはやめ……ぐわああああああ～q～

他のプレイヤーが使用したワールドアイテムによって俺の愛するワールドエネミー・オーヴァアは死亡した。

——28

あの苦痛の日々が、ロンギヌスによってリセットされた。

ロンギヌスリセットはマジでどうにかしてほしい。

へソを曲げた俺はユグドラシルを、少しの間忘れることにした。

ちなみに俺にロンギヌスを使ったため、8層で詰んだらしい。

ざまあないぜ！

— 29

年単位でユグドラシルにログインしなかった（目逸らし）

ちよつと熱が冷めるとネットゲに入るの飽きちやうというあるあるを披露しながらログイン。

久しぶりに分身である青年PCを操る。

うーん……。

こいつ、異形種と言えるのか？

いや、フォームが変われば異形になるけど、現状だと青年だし。

種族は元型（アーキタイプ）とやらで、フォーム1だとレベル1だが、フォーム2はレベル5、フォーム3はレベル10、ワールドエネミー形態はレベル15になる。

人間や亜人とは異なると思うが、異形ではない気がしないでもない。

久しぶりにナザリックを徘徊する。

虫とか悪魔が蔓延っててキモい。

よく考えると俺って異形種が苦手なんだよなあ。

虫が苦手で、蚕くらいしか無理。

そもそも環境汚染のせいで、ナザリックのモンスターよりもモンスターらしい虫が蔓延っている現実とか悪夢やん……。

ギルド内もNPCが指示通りに動いているだけで、ギルメンが全然いない。

最深部に行くと、モモンガさんが円卓に座ってた。

さつきまでブラック企業に飼いきれられているブラックなスライムであるへろへろさんがいた。

オフ会では、PC名に違わぬへろへろ具合だった記憶がある、もちろん疲労で。

久しぶりに会ったモモンガさんに、ギルドを辞めることを告げる。

理由を聞かれた。

だって俺のPCって異形種に見えないじゃん（正論）

アインズ（ウール・ゴウンの他のメンバー）によろしく、と去った。

ログアウトしてメールチェック。

モモンガさんからもメールが来てたようだ。

事前に確認しておけばよかった。

内容は……ユグドラシルが最終日だから集まろうぜ！ってことだった。

ご、ごめんねモモンガさん！

サーバ停止によって俺の愛するPC・オーヴァは削除され、永遠に眠ることになった。

オーバーロード1

Q. レベル上げに行くときコルベニクという青白い巨大なモンスターが歩いていました。あれはどのようなモンスターなのでしょうか。

A. オーヴァというプレイヤーがワールドアイテムを使い、運営に要請して生まれたField On Enemy (F・O・E)タイプのワールドエネミーです。最寄りのギルド、公式トピックなどで確認したエリアをお知らせください。(※ワールドアイテム、F・O・Eについては用語集をご覧ください。オーヴァについては害悪プレイヤー・オーヴァの項をご覧ください)

Q. コルベニクと目が合いました。

A. ただちにログアウトし、公式トピックなどで確認したエリアをお知らせください。F・O・Eタイプのため、エリアを移動しても追跡されず。

Q. コルベニクが付いて来ます。

A. タゲられると最短で半日、最長で1か月間、PKされ続けます。ただちにログアウトし、公式トピックなどで確認したエリアをお知らせください。また、処理が確定

するまでログインしないでください。

Q. コルベニクに『データドレイン』というスキルが使われました。レベルが下がり、状態異常のままですが、元に戻るのでしょうか。

A. コルベニクが討伐されると状態異常が解除されます。ただし、下がったレベルはそのままです。(※『データドレイン』についてはワールドエネミー・コルベニクの項をご覧ください)

Q. コルベニクがギルド近くまで来ました。

A. ログアウトし、公式トピックなどでギルドの位置をお知らせください。朝方および深夜などの場合は、救援の人員が足らず、ギルドの崩壊が予想されます。

Q. コルベニクがいなくなりましたが、ギルドが崩壊しています。時間の経過でギルドは元に戻るのでしょうか。

A. そういったイベントなので、ギルドは崩壊したままです。再建する必要があります。余裕があれば、最寄りのギルドへ勧告すると喜ばれます。

Q. コルベニクに荒らされた様子が色々な場所でアップされています。違法ではないのですか。

A. そういう仕様です。生み出したオーヴァというプレイヤーも同様の事を行っているので、それに擬えていると考えられます。また、動画やスクショの撮影を公式が

認めているので違法ではありません。(アップロードについては公式サイトの規約・権利関係をご覧ください)

Q. コルベニクを、駆逐したいです……!

A. 対策している連合ギルドへの加入をお勧めします。ロンギヌスを使う覚悟があれば、倒すことも可能です。(※聖者殺しの槍(ロンギヌス)についてはワールドアイテムの項をご覧ください)

Q. コルベニクの撃破後、種子を拾いました。

A. コルベニクの撃破報酬です。戦闘後、交戦したPCおよびNPCの中からランダムで3名にドロップします。世界級(ワールド)アイテムの効果を一度だけ吸収できます。また、吸収した効果は任意で発動できます。吸収および発動は任意ですが、発動するとアイテム欄から消失します。(※コルベニクの種子については神器級(ゴッズ)アイテム・コルベニクの種子の項をご覧ください)

Q. 発生原因のオーヴァをロンギヌスしたいです。

A. オーヴァはナザリック地下大墳墓域を拠点としているギルド『アインズ・ウィル・ゴウン』に所属しています。運営によるペナルティで、レベル80またはレベル100の状態になっていますが、ロンギヌスを用いても完全に抹消できません。コルベニクと関連しているイベントまたは運営のペナルティによるものと推測されます。ロン

ギヌスの無駄撃ちになるで、囲んでリンチを推奨します。(ギルド『アインズ・ウール・ゴウン』については害悪ギルド・アインズ・ウール・ゴウンの項をご覧ください)

Q. ギルド戦でコルベニクを戦場に誘引したら、相手ギルドを殲滅してくれました。何度でも可能でしょうか。

A. ワールドエネミーの強さは伊達ではありませんので当然の結果です。また、成功したのは幸運が重なった奇跡でしょう。コルベニクに搭載されているAIは、オーヴァを基礎としているという噂なので、気まぐれにギルドを破壊します。何度も同じ手を使えるわけではないことを覚えておきましょう。ただし、天使系・墮天使系のPCを率先して狙うという報告もあるので、負け前提のギルド戦ならば奇跡に賭けて巻き込むことも間違いではありません。

Q. ワールドエネミーであるコルベニクは何故何度も蘇るのですか。イベントは終わっていないのでしょうか。

A. 不明です。特殊イベント、増加の一途を辿るギルド数を減らすため、ワールドアイテムの強さを確認させるため、ロンギヌスでPCが破壊されるのを防ぐため、など考えられています。運営から回答が送られないため、考察の域を出ません。(※コルベニクが特定鉱山に現れたイベントについてはクリスマス特殊イベント・再誕コルベニクの項をご覧ください)

Q. コルベニクはどのくらいの頻度で出現しますか。

A. 不明です。決まったスパンは判明していませんが、半年から一年に一度の割合で出現します。また、クリスマス翌日に多いため、クリスマスイベントに参加できなかったプレイヤーへの準イベントとも考えられています。

— 28 —

ワールドエネミーから雑魚PCであるフォーム1にダウンしたので、大人しく他のメ
ンバーとともに最下層で待つことにした。

まあ、表層で待機していた俺の攻撃で連合も結構溶けたと思うから……コルベニクの
シヨボい死に様を動画で編集するのは止めてください死んでしまいます。

コルベニクはでかすぎて、乱戦状態だとロンギヌスは避けられないという弱点が露
呈。

いや、前からバレてたけど。

ロンギヌスするために暗殺極振りレベル100のPCとか反則っしょ。

ずるいわあ。

肉棒ちゃんか、公式に動画を貼り付けてた。

神は死んだ。

ここから転載されまくって動画サイトでも死に様が晒されると思うと死体蹴りというやつのお意気は半端ないと思う。

表層のトラップが無駄になった罰だとか言われたが、そりゃないぜ、q、

地下8層で地獄絵図となっていた。

まあ、上層でも酷いことになってたけど。

俺のトラウマであるヴィクティムも強化されているようだ。

見た目は可愛いんだけど、能力はマジでえげつない。

えげつないトラップやモンスター効果でデバフや削りが凄いらね、それらの集大成である8層ならしょうがないね。

フォーム1は完全なガンナー型のようなのだ。

シズと似通っている。

というか、劣化版シズというか。

近接職もくつついている辺り、変態型である。

遠距離武器片手に、近接戦闘も熟せと言うのだろうか。

左腕の封印筒は盾になるっぽいので、一応接近戦もできるといえば出来るが……

フォーム1で死ぬとリセットらしいので、前線に出るのは憚られる。

種族スキルである元型（アーキタイプ）lv1。

フォーム2は殴りガンナー型だ。

迷走を感じられる。

筒が取れて、左腕が使える様になるのだが、何故か短剣しか装備できない。

右手は銃か短剣。

短剣装備時には、双剣士の職業スキルが使えるようになる。

左肩から伸びる鎌（元まっくろくろすけ）は伸び縮みするので、近中遠と全距離対応

できる器用なPCだ。

万能というか器用貧乏型なので、俺のスキルだと上手く使えない。

最大の欠点はレベル80でストップしていることだ。

一人で外に出るとボコられて死ぬ。

種族・三爪痕（トライエッジ）の専用スキルは背景グラフィックごと相手にAという傷跡を刻むかっこいい技だ。

が、レベル80なので大して活躍しない。

元型は1v5。

フォーム3は小型コルベニクの様相をしており、近接・タンク型だ。

フォーム1と2にあつたガンナーは消え去るという意味不明な存在である。

レベル100として見るならほどほどに強いPCだと思うが、大会などのイベントには参加できないというペナルティがこつそり追加されてて微妙。

公式戦でたつち・みーさんに勝つという密かな夢は、このPCでは叶わないようだ。

技もフォーム2の焼き増しだし、特別に何がどうという感じも無し。

無駄が目立つので、すぐに囲まれてPKされるくらいか。

ワールドエネミーのコルベニクと勘違いするプレイヤー多数。

誤爆でロングヌスしちゃう間抜けが出てくることもある。

元型は1v10。

ワールドエネミーは単純に強い。

もうめつっちゃ強い。

名前がコルベニクとなり、ワールドエネミーとして処理されるようになるが、そんな

のどうでもいいくらい強い。

フォーム3だと鎌だった左肩と左腕が融合したのか、脈動する砲台と化している。

スキル『データドレイン』は幾何学的な紋様を展開し、砲台から弾を放ち、着弾地点にいたPCをレベルダウンさせ、状態異常を引き起こすと言う害悪プレイが可能。

もちろんギルドの防衛機能も壊せる。

無双できないバランスのユグドラシルで、無双ゲーになるくらい強い。

完全に別ゲーですまん。

巨大だし、攻撃も高いし、凄まじく硬い。

欠点は、ワールドエネミーと化したら、すぐに何処からともなく現れたPCによってロンギヌスで刺されて死ぬことだろうか。

最短で5分、最長で半日くらいしか永らえたことが無い。

まあ、ロンギヌスが無駄撃ちさせるのも良いけど、それだとロマンが無い。

テキストに害悪を撒き散らしたら、ロンギヌスに刺されるのが様式美だろう。

元型は1v15だ。

全体的な利点はイケメンPCだったことだと肉棒ちゃんが言った。

異形ばつかのギルドだし、まともな人間型はNPCだからしょうがないね。

俺のPCは異形種ではないんじゃないかと、ギルメンに相談したら、やってることは悪辣だから問題ないんじゃないかねって感じだった。

そもそも種族も人間や亜人には含まれていない、元型（アーキタイプ）という謎種族。エメ板さん曰く『世界樹によって生み出された十次元の観測者を兼ねた姿』だとか。設定読むの怠いし、なんか中二盛りすぎてツライんです……。

— 30 —

俺の神器級（ゴッツ）アイテムを作ろう、という話になった。

神器級は集めるのが大変だし、ワールドエネミーとしての能力もあるから無駄に労力を割くほどでもないっしょとも思っていたのだが、カルマ貯蓄の効率上げのためにも作ってくれると言う。

みんなの優しさに感動した。

今度ワールドエネミーになっても、この前掲示板に晒されて2ちゃんできまあ連呼された恨みを晴らすために暴れようと思ったが、止めた。

クラスチェンジできるギルメンの条件を調べ、アイテムの貯蔵状態を確認し、何をど

うすれば効率よく集まるかを纏め、何種類かの行動指針を立てる。

で、ギルメンで相談して、好みの行動指針を採択。

いつも通り、たっち・みーさんとウルベルトさんの意見が割れてた。

ギルド設立当初からこんな感じだと言うからなんだかんと言つて仲いいわあ。

エロ悪魔のダンジョンに心を揺らされたが、肉棒ちゃんと話しているほうが個人的に魅力を感じるのでスルー。

ギルド長が、最終決……え、モモンガさんギルマスになつてたの？

へえー知らなかった。

いや、何時もギルド貢献している（ガチャとか）姿を見てたら異論はないです。

むしろ賛成です。

色物軍団のギルドからしたら、やっぱりまともな人がやるべきだし（真顔

俺もまともだけど、カリスマないから……何故目を逸らすんだ。

多数決で、行動方針を決めることになった。

どっちでもいいのだが、折角だから効率重視でいくとしよう。

隣に座っている肉棒ちゃんと無駄な雑談を咲かせながら、コインを入れる。

ちなみに雑談内容は「全裸の女の子の土下座」と「追い詰められた女の子の命乞い」は

どちらが魅力的かという話だった。

土下座一択だな。

リアルでは好みではないが、二次媒体だと魅力的だ。

逆にリアルは単にべたべたしたい感じだ。

全裸でくつついて体温を交換したい（真顔）

肉棒ちゃんが俺の上でぶるぶるしてこんな感じかと問うてきた。

PCなのになんか気恥ずかしいんだけど。

肉棒ちゃんもちよつとテンパってた。

ただ、俺の異形フォーム3と肉棒スライムのべたべたつて誰得やねん。

—— 3 1

俺の神器級（ゴッズ）アイテムが完成した。

最大級のスタンと怯み、衝撃による浮かせ効果を搭載した。

例え相手が耐性を持っていても、極振りしたので一瞬だけでも効くだろう。

火力はそれほどでもないが、そもそもガンナー形態では最大でも80レベルなのだか

ら、期待するのが間違っている。

重要なのは、相手パーティに嫌がらせを撒けるかどうかだ。

劣化ヴィクティムという事実から目を逸らす必要があるけど。

とりあえず遮蔽物の少ないエリアにプレイヤーを誘導し、遠距離攻撃のギルメンで囲んで試したが、FPSゲームのようで楽しかった。

相手をスタンさせつつ浮かせ、動けないところを撃ち抜いていくプレイ。

装備やレベルが足りていないプレイヤーを狩る場合、死ぬまで浮かせて撃ち続ける遊びができる。

また、装備はガンナーであるシズと互換性があるので、俺が使わない物はシズに装備させておける。

無駄のない完璧な仕上がりだ。

ただ、単独で外に出ると、大体死ぬ。

基本的に肉棒ちゃんが随伴してくれる。

やっぱり俺はヒモとなる運命だった……？

ログアウトし、肉棒ちゃんと軽く電話してから寝た。

そういえば確かめていなかったなと元型の種族スキルを使ってみる。

フォーム1で使用できるのは『変異なる召喚』、使ってみるとパズルが作れるようだ。
ええー……。

パズルを組むことで、ユグドラシル上に存在するデータを再現する的なスキルだ。

使える容量はかなり軽量なので、再現できるのはドーナツとかティーカップとコーヒーのような、そんな日用品のみだが。

右手の上に生み出した三角形の積み木が四角形へ、左手の上に生み出したドーナツがコーヒーカップへと姿を変える。

三角と四角は同じ。そしてドーナツとコーヒーカップは同じ（ドヤア

モモンガさんが首を傾げていた。

答えは穴の数です。

位相幾何学に沿った変異も可能という結構面白いパズル能力だ。

戦闘には無意味（小声）

もう一つ『A I D A』というスキルもある。

まっくろくろすけを扱える趣味技だ。

微生物のようなペットモンスターを一匹だけ召喚できる。

大きさはPCよりも一回り小さく、レベル1だ。

俺が得るはずだった無駄な経験値はこいつに流れるらしく、レベルアップしていくことで姿を変えるようだ。

レベル15までがAnna、そこからGatekeeper、Oswald、と進化していく。

欠点は、時間停止耐性は無いこと、死ぬとロストしてレベル1から育成し直す必要があることだろう。

レベル100のVictorianだと時間耐性を持っているが、あまり強くないし……。

まあ、壁が召還できるので悪くないスキルじゃないだろうか。

ただ、デスナイトなどのようなワンキル攻撃も一度だけHP1で耐える食いしぼり性能が無いのが残念だけど。

カルマは中立0なので、貯金には使えない。

元型が実はティーマー職の亜種の可能性……。

あとは『オルレイザス』という聖属性の槍を、ビームのように複数撃てるスキルもある。

第八位階級の魔法と同じ判定なので、上位プレイヤーには簡単に無効化される糞技。

フォーム2は、『隣人の来訪』というスキルがあり2種類ののまつくろくろすけをそれぞれ2、3体召喚するスキルだ。

2種類というのが『拒絶の隣人』『光束の隣人』で『拒絶の隣人』が物理・魔法ダメージを10%軽減するバリアを張ってくれ、『光束の隣人』は『オルレイザス』を勝手に撃つてくれる。

が、レベル80なのであまり強くない。

まあ、レベル80のNPC扱いで壁にもなり、HPダメージも身代わりしてくれるので、強いといえば強い。

しかし、時間停止耐性が無いので、タイムストップされると無意味になる。

『三爪痕（トライエッジ）』は見た目がかっこいいスキルだ。

相手と背景グラフィックに真っ赤なAのような傷を刻む。

ただし、レベル100の物理型にはお察しのダメージしか与えられないので、完全に雑魚狩り用スキルである。

雑魚の帝王となりつつある。

実は複数をターゲットできる範囲攻撃だったり。

そして『変異なる召喚』も強化され、装備を偽装できる。

偽装といっても見た目だけだが、外観や名称を偽ることができるので、奇襲にもつてこいのスキルだ。

攻撃性能は特にない。

パズルも強化されるので、ドーナツを穴あきテーブルに変化させたりできる。

フォーム3はスキルが全部近接攻撃なのだが、糞過ぎて目を逸らしたくなる。

通常攻撃が2回判定だが、近接職はもつと攻撃回数が多いので、劣化すぎて泣ける。というか2回同時攻撃とか試行数が少なすぎないですかねえ。

燕返しだって3連続なのに。

スキルだが左肩の鎌から、エネルギー弾を撃てる。

が、近接ビルドなのに魔法攻撃判定なので威力が糞。

見た目だけ派手なので、ワロス弾と呼ばれている。

ただし『凶つ神の裁き』はメインスキルといってもいいくらい強い。

相手を掴みさえすれば確定で発生する必中技だし。

欠点はあまり速度の無いPCなのに、相手を掴まないといけないことくらいかなー☆
……ぶっちゃけ、幻影とかで回避されるので全然相手に当たらんし、テレポートされ

ると必中が解除される。

メインの『変異なる召喚』だが、PCや名前などの細かい部分を偽装できるようになった。

ただ、PCは偽装しても職業は固定なので幻影系の亜種スキルって感じで、あまり戦略的な広がりには無いのだけど。

セカンドPCへと、自由に何処でも切り替えられるスキルの使い方ができる。

継ぎ接ぎの赤い軽装PCを作ってみたが、オーヴァと気付かれないのでPKされる回数が劇的に減った。

このスキルで目標地点に潜入し、ワールドエネミーに変異して自爆テロを起こせと運営が言ってる気がする。

ワールドエネミー形態だと、武器や防具の判定が無くなる。

が、そもそも完全耐性状態になるし、物理・魔法攻撃も大きく軽減できるので装備なくとも問題なし。

スキルである『データドレイン』は相手から10レベル奪える。

つまり無限に強くなる……らしい。

すぐにロンギヌスされるからわからん。

ちなみに特定の10体の天使が破壊されると、十次元の元型とやらが失われるらしく、耐性が死んで弱点に裏返る。

が、みんなめんどくさがってロンギヌスを投げってくる。

というか、10体の天使がぶち殺すのに時間が掛かりすぎるため、とりあえずロンギヌスを投げってくるっぽい。

ロンギヌスされなかつたらギルドを破壊して回るから仕方ないね。

この形態だと『変異なる召喚』スキルは消滅するようだ。

なぜえ……。

— 33 —

パンドラズ・アクター、宝物殿に眠る。

モモンガさんが設定した領域守護者だが、メンバーを保存するメモリーのようなNPCだ。

で、俺の再現もいくらか出来たので、あとは封印しておくだけらしい。

話しかけると、ハニワフェイスでオーバーなりアクションで敬礼などをしてくれるのでギルメンに大人気だった、いろんな意味で。

挨拶のバリエーションも豊富で、ランダムだが割合としては5回に1回はオペラなどのタイトルで使われる外国語で挨拶を返してくれる。

しかも無駄に優れたAIのため、敬礼のみならず軍服を用いた様々な隠しアクション持ち。

ギルメン全員の能力を8割再現できるので、メタが張れるので、指示さえ上手くできれば他の守護者よりも良い働きをしてくれる。

まあ、パンドラズ・アクターが動く度に、恥ずかしさのあまりモモンガさんが転がり回るといふ欠点もあったけど。

パンドラズ・アクターがいなくなるとちよつと寂しくなった。

なので、同じドツペルゲンガーのナーベラル・ガンマで遊ぶことにした。

ナーベラルはドツペルゲンガーとしてレベル1であり、他の姿が無い。

そしてドツペルゲンガーのベースはハニワだ。

このことから導き出される答えとは……。

ナーベラルのスクショを撮り、パンドラズ・アクターの顔を貼り付け、雑コラ完成。

肉棒ちゃん、流石に通報してもハラスメントに……え、式式炎雷さん呼ぶの？
やめてください死んでしまいます～q～

忘れようとしていたパンドラズ・アクターの面影を引き継いだナーベラルの雑コラ見
て、黒歴史を思い出して蹲りながら悶え苦しむモモンガさんあげるから許して！
出来心だつたんです！

先つちよだけだし、許してください！

ぐわああああ～q～

——34

異常気象が如何とかいう仕事をしていたのだが、やはりそれだけだと社会の歯車とし
ては不十分なのだ。

突然変異生物をカメラに収める仕事も追加された。

危険手当とか出るんですが、そんな手当を出すくらいならそんな仕事を回さないでく
ださい（切実）

カボチャほどの霰が降った気象条件や状況を撮影したあと、大学の研究チームとスカイフィッシュの撮影させるとか意味不明すぎ。

そもそもカボチャ霰は余裕で回避できるが、落下した後に四散する氷の礫がヤバイ。見習いが怪我した。

ヘルメットが無ければ即死だったな。

で、スカイフィッシュだが、よくわからん。

特殊な機材を用いることで観察できるらしく、色々と撮影できた。

スカイフィッシュは体温を餌にしているという謎の生態のため、捕獲は無理だとか。研究チームの学生が低体温症で倒れる理由がわかったぜ。

教授は興奮していたので、体温を奪われなくて済んだとか。

俺は普通に避けてたから問題なかった。

明日は国内で初めて確認されたチュパカブラを撮影しに行くのだが、やる気が全然出ない。

そもそもチュパカブラとかどうでもいいじゃん。

外来種だから駆除したほうがいいと思うのだが、愛護団体が煩いらしい。

可愛くないし、野生動物を吸血してヤバイからマジで根絶すべきだと思う。

南米かどっかで突然変異したチュパカブラに、森の生物を滅ぼされた話もあった

し。

めっちゃ余ってる『完全なる狂騒』を使用することで、カルマチャージを早めることができるんじゃないかと。

『完全なる狂騒』は、アンデッドなど耐性を持っている種族にも精神系魔法が効くようになるアイテムだ。

こいつを使ってPOPするアンデッドを数百と操り、オートでカルマを貯める機械にしようという天才的な発想である。

パーティーで使うクラツカーのようなアイテムを使用。

中から金色の筋肉ムキムキな像が「いやっほおお！」とばかりに顔を出し、効果が発動した。

……。

うーん……。

精神支配スキルなぞ無いので、アイテムで代替したが、コストの割に効率悪すぎて糞。そもそも自分で召喚したモンスターじゃないとカルマ吸収できない。

普通にペットのAIDAを使って狩ったほうが早い。

名案だと思ったが、全然だったなあ。

POPする階層にAIDAを放置しておこう。

ギルメンと遊んでいて、気づいたらAIDAが死んでた。

うへあ。

育てるのもついでにできるじゃん、と慢心したのがいけなかったな。

— 35 —

肉棒ちゃんとネズミランドに遊びに行った翌日、ログインしたらペロちゃんが辱しめを受けていた。

簡潔に説明されたので詳しい話はわからないが、ペロちゃんが設定したNPCを完全にモモンガさんメタにしたらしい。

そこで終われば、ちよつとした日常の小話のだが、辱しめを受けるには至らない。

なんとNPCの設定をモモンガさんが読み、全力で引き、他のメンバーも気になって読んで……今に至るといふ。

あー……うん。

……に、肉棒ちゃんか弟を慰めてる貴重なナザリックのワンシーンですね？

その後はペロちゃんか、逆襲の如く他のNPCの設定を漁り始めた。

そして封印されし秘奥『パンドラズ・アクター』の記憶が呼び覚まされて、モモンガさんが流れ弾に当たって御通夜。

死因はアルベドやデミウルゴスという智謀キャラの遙か上を行く智謀という後出しじゃんけんのような設定。

それ以外のメンバーに被弾なし。

意外と背中が痒くなる設定はない。

むしろそれを受け入れ、熱く語る人が出てくるほどだ。

……オーヴァとコルベニクの設定がギルメンの『百科事典（エンサイクロペディア）』に公開されてて、無事死亡。

設定したのは俺じゃないのに、非常に恥ずかしくなったのは何故なんだぜ……。

折角なので、メンバー間で百科事典の内容を交換。

あ、なんかカードゲームで持ってないカードを交換する気分だ。

記述が無かったり、足りない部分を、豊富な人から貰うのだが、個々人で色々と違うのが面白い。

あまりの恥に円卓で俯いているモモンガさんに、パンドラズ・アクターのデータを強請る。

……？

っ！

へんじがない　ただのしかばねのようだ

肉棒ちゃん、ペロちゃんの姉弟コンビと交換する。

アウラは「可愛い子、こんな妹が欲しかった。弟いらね（ペツ）、マールは「姉より偉い弟などいない」と記述されていた。

シャルティアは「偽乳」と書きこまれており、設定を熱く語ろうとしたペロちゃんを肉棒ちゃんの必殺「弟黙れ」で一喝。

ゲルニカ・ハウンドは設定考えるのめんどくさ過ぎて、表層の毒沼から生み出したという雑背景。禍々しい見た目なんで意外としっくりくるのが悔しい。サイズは20cmから5mまで伸縮可能。AI組むのが面倒なので、大きい目のぬいぐるみとしてシズに持たせたままである。

復帰したモモンガさんにパンドラズ・アクターを強請る。

ギルマスへの熱い死体蹴り。

他のメンバーもこぞってたかり始めたあたり、畜生しかいないギルドである。

その後は暇なのでアウラのおきがえショーとなった。

ノリノリの肉棒ちゃん、ローテンションの俺。

服とかよくわかんねえ……。

いや、アウラは可愛いんだけど。

可愛いけど、肉棒ちゃんが同じの着ても反応に困るといふか……。

サイズとかどうなってますか、それ。

魔法の服は伸縮可変自在と聞いたが、さすがに限度がある。

何が一番いいかって聞かれたら、そりゃネズミー行つたときに着てた服でしょ。

— 36

女子会ってなんで俺は入れないんだろうか（真顔）

今日は肉棒ちゃん、女教師、もつちで女子会をするらしく、俺は省かれた。

悲しい。

外からあけみちゃんも来るらしい。

今日も面倒なカルマ貯蓄でもやるかなあとジャングルに出て気付く。
俺、マーレを見たことない。

戻ってマーレの自室に入る。

魔法で内部を冷やし、何故か布団に包まっているマーレの姿が……！

なんだこのAI。

誰だよこんなぐうたらに組んだの……。

マーレの謎の行動に頭を傾げながら、円卓に向かう。

ブルプラさんが美しかった自然を語っていた、そして捕まった。

あー、うん。

まあ、俺も汚染された自然ばかりを目にする職だから、その気持ちもわからないでもないというか。

虫の上映会に切り替わりそうになったところで、ユグドラシルの虫を見に行こうぜ！

と話題を変える。

致命的なミスに気付いた。

虫もリアルだ……！

言い出した手前、テンションが上がったブルプラさんに、前言撤回を告げる空気ではないので諦めて死の行軍へ進む。

ニグレドによる体感型ジャパニーズホラーとは別方向に怖い。人形に気付かなくてめっちゃ刺された記憶がよみがえった。

うわあ、テンション下がってきた。

五大最悪だけは避けたい、マジで。

作った奴は俺に土下座して謝るべきでしょ、あれ。

恐怖公と呼ばれるゴキブリ王の部屋に興味本位で行ったら、ゴキブリが湧いてきて悲鳴を挙げそうになった。そしてなんとか我慢して進んだら、暗がりでもエントマがゴキブリ食ってた。なんてAIを組んでくれたんだ……！

ブルプラさんの今日の気分はジャングルらしい。

夜空を見ようぜ、というロマンチックな流れになった。

感動的だな。

だが無意味だ。

餓食狐蟲王の領域近くで眺めることになったからな（迫真）

どつかのワールド全てが悪魔に包まれたらしい。

なんかワールドアイテムをテキストに使ったせいだとかどうとか。

マジかー。

ちやんとワールドアイテムは使い方を考えないと他人に迷惑になるって、みんな理解していると思っただけ。

へロへロさんが何故か目を逸らした。スライムに目は無いのに逸らされたとわかるほど露骨だった。

ギルドで予定していた、アイテム集めを延期して、その現場に向かうことになった。フォーム3へと至っているの、継ぎ接ぎの双剣士PCに偽装しておく。

溢れんばかりの悪魔が空を飛び、地を這い、海を進んでいる。

まさに地獄絵図。

異世界に転移したとしてもユグドラシルにだけは絶対行きたくない。

魔境過ぎんよ。

肉棒ちゃんを盾にしてゴリゴリ悪魔を磨り潰す。

悪魔の発生源、おそらくものすごい数の悪魔が出現している場所、にワールドアイテム

ムがあるんじゃないかと当たりを付けたメンバーが、回収に向かった。

そして死んだらしい。

ええー……。

どうも死の螺旋という負のモンスターが出やすい土壌になっており、悪魔が死ぬほどに深まり、上位悪魔や最上位悪魔、魔王級などがばんばん出現しているとか。

これももうこのワールド鯖を封じないとダメなレベルじゃないだろうか。

悪魔が出すぎて、若干重さを感じるし。

他にもワールドアイテムに目が眩んだプレイヤーが多数いるらしく、死んだり生き返ったり突撃したりを繰り返している。

ので、ついでにそいつらの死に様を録画。何時ものように職業や種族、スキル構成とかもキチンと録画しているので、公開したあと彼らはメタ張られたPKを味わうに違いない。ユグドラシルを存分に楽しんでもらいたいものだ（慈愛の眼差し）

撤退しようかなあと思っていたら、デスルーラしたギルメンから掲示板で『世界意志（ワールドセイヴァー）』という無限に強くなる武器を持ったPCも参戦しているという情報を得た。

無限に強くなる武器……ヴィクティムに持たせて無限に強くしたら……あ、死亡で発

動だっけか。

とりあえず欲しいので俺も参戦しよう。

肉棒ちゃんか離脱したので、溜まったカルマを放出してワールドエネミーと化する。

あ、処理が更に重くなった。

大量の悪魔を蹴散らしつつ『データドレイン』でレベルを上げ、悪魔の分布が最も濃い位置へ移動。

悪魔ごと『世界意志（ワールドセイヴァー）』のPCを薙ぎ払……一撃で腕が挽げた。ライトセイバーか何かか、あれ。

というか強すぎんよ。

悪魔をドレインしながら自己強化と回復を繰り返し、『世界意志（ワールドセイヴァー）』と殴り合う。

相手も強くなっていくので、どうなっているのかよくわからん。

段々と強くなりすぎて、攻撃の余波で周囲の悪魔が消し飛ぶようになった。

完全に別ゲーと化してきた。

相手のPC自体は通常のレベル100なので、ワンパン当てれば沈められそうだが、相手の攻撃を凌ぐだけで精いっぱいだ。

最終的にデータドレインする悪魔がいなくなったので、『世界意志（ワールドセイヴァー）』に負けた。

あー負けたやでえ、と本拠地へ戻る。

掲示板に、俺の死後についても書かれていた。

コルベニクを殺すためにロングヌスを用意したが、すでに死んでたので『世界意志（ワールドセイヴァー）』のPCをぶつ刺して処理。処理したPCも一緒に消滅。誰もいなくなった戦場で、悪魔が再び無限湧き。マジで上限なしの無限召喚のため、鯖落ちでワールド閉鎖という結末を迎えたようだ。

なんてクソな終わり方なんだ……。

— 38

シズを改造して戦車にしよう、みたいな案を出してきたメンバーがいた。

いや、駄目でしょ。

だって可愛くないじゃん（正論）

最近、ギルドも人が少なくなってきた。

活動の核となる人物が複数人、忙しくてログインできなくなったり、ゲームを引退したり、マイナス方向の話題が続いたのだ。

一度活気を失うと、どうにもならないのがゲームだ。

アイテムとか装備、NPCなどを残ったギルメンに託されていくのだが、託されても有効には活用できないし。

引退する人からアイテム譲渡という、あまり経験したくないネットゲあるあるだったり。

まあ、俺も人のことが言えるほどログインできてるわけでもない。

仕事を続けるほどに責任が重くなっていき、忙しくなったのもある。

あとは彼女との時間を割いたり、リアルとゲームのバランスを取るのなかなか難しいのだ。

ギルメンでパーティを組み、アイテム集めへと向かう。

ユグドラシル全体が衰退の一途を辿っているらしく、俺の被PK率も落ちつつある。マジでロンギヌス使って殺そうとするプレイヤーもいなくなり、何となく伝統だからと投げつけてくるようになって寂しい。

昔のロンギヌス係りはもつと熱意があったのだが、と無駄に懐古してみたり。

熱意があった最期のロンギヌス係は俺にロンギヌスを突き刺して「今までいいストレス発散になってくれてありがとう」というショートメッセージとともに消滅した。

寂しい物だ。

モモンガさんが、肉棒ちゃんは今日は来ないのかと話を振ってきた。

肉棒ちゃんは最近頗る忙しいらしくて、帰ってきたらご飯食べて、風呂入って、俺と会話して先に寝た。

なので、肉棒ちゃんは俺の布団で寝てるよ、とドヤ顔。

なんか気まづくなった。

ご、ごめん。

少ないと言うか、いないレベル。

まあ、ユグドラシルも稼働して十……十年くらい？経ってるし、しようがないといえ
ばしようがないね。

他のネットゲをやってもいいんだけど、作り込みを見ると勿体ないという貧乏性が発
動。

アイテムも凄いのばかりだし、今更他のを一からやる気分にもなれない。

コルベニクになっても活気が無い。

昔は湧くように群がって来ていたプレイヤーも、見かけなくなつた。

ギルドを破壊しても「はいはい他のギルドに行けばいいんでしょ」て感じで冷めてる
し、古参を潰すのは勿体ない気がして無理。

マジでテキストにロンギヌスに刺されて終わりって感じた。

悲しい。

もうモモンガさんと外にテキストに行き、金やアイテムを色々と集め、宝物殿に放り
込む作業になりつつある。

いや、ソロじゃなくて普通に会話しながら作業できるから、チャットの拡大版と考
えれば悪くもないような気がしないでもないような。

時々肉棒ちゃんも来るし。

死に掛けヘロヘロさんとか家族サービスの無い日にたっちゃんも来るからセーフ。ペロちゃんハラスメントでBAN喰らったとかいう噂。

最近までいた朱雀教授は外国の連携大学へと出張を繰り返しているとかで、引退した。

やることなさ過ぎて、粘土遊びへと移行。

引退、半引退ギルメンたちが好きに使ってくれと渡してきた装備を、飾るための像を作る作業だ。

ぶっちゃけスキルが無いから雑な出来だ。

その出来が逆に怖さを引き立たせている気がしないでもない。

そういうえば、引退や半引退状態のギルメンが、全部残っている人にあげると言っていた。

あの出来のいいNPCも貰っていいということだろう。

……有効利用が思いつかない。

全員でアニソンのダンスでもさせて動画サイトにでも上げようかなあ。

俺、明日プロポーズするんだ。

決意したのは先週で、ついでに指輪も買った。

指輪は送ったこともあるし、サイズは大丈夫……のはず。

指輪を買ったら意識しすぎて恥ずかしくなり、先延ばししまくってしまった。

何時もは一緒にいるのが自然な感じだったので、その反動がヤバイ。

流石に伸ばし過ぎたので、明日プロポーズすることを決意した。

もう緊張で先週から色々と手つかずのポンコツ状態。

ぶつつけ本番だと失敗するので、練習しよう。

ゲームならバレないで練習できるはず。

あれほど頑なに使わなかったスタッフ・オブ・アインス・ウール・ゴウンを片手に、アルベドを見ているモモンガさんがいた。

マジでちよつと手伝ってください；；と連れ出す。

緊張しているから、視界が狭まっていたが、練習相手に骨は無いことに気付く。

ルプスレギナが一番似ているのだが、本番の気持ちは本人に混じりっ気なしに伝えた
い。

一番似てないシズにしよう。ユリと迷ったのは秘密だ。

こ、好みは関係ないです（目逸らし）

中だとNPCとかPOPモンスターがいっぱいいて恥ずかしいので、ナザリックの外で練習。

フライで飛び、ギルドを見下ろしながら練習。

モモンガさんを連れてきた意味が無いような……い、いやそんなわけないっしょ。

栄え或るナザリックのギルマスだし、いるだけで効果は抜群だ（意味不明）

ナザリック内のBGMが流れるオルゴール、その中に指輪を入れて準備オツケー。リアルも同じ感じである。

違いは指輪がリング・オブ・アインズ・ウールゴウンなだけだ。

プロポーズの言葉は幸せにするから、一生ついてきてくれる感じがで。おっけー。

よし、シズに渡して、台詞を言って、シズが返事とともに受け取って、周りが沼地になつた。

ん？

周りを見回すと、沼地である。

ナザリックの場所も沼地だったが、もつと毒々しかった。

こんな平凡で牧歌的な場所ではない。
毒沼もナザリツクも無し。

歩けば刺さる草の葉も一切存在しない。

シズは大事そうに優しくオルゴールを胸に抱いている。NPCに設定された規定動作を超える自然さに疑問が生まれる。

モモンガさんは首を傾げている。PCならざる生々しい動きに、俺も首を傾げる。

そもそもゲームをやっている俺は何処にいったのだ。

……。

少し離れた場所にいた、氷の彫像の如く美しい剣を携えている二本足で歩く蜥蜴に声をかけた。

蜥蜴人（リザードマン）？

緑の爪（グリーンクロー）？

なるほどなるほど。

初めて見たが蜥蜴人とはなかなかかっこいいものだな。

……ここ何処だ。

原作：デジモン デジモン1

世界中でインターネットの繋がりが断たれ、やつとの思いで繋がっていても酷く遅く、ほとんど動かない事態が起きた。まるで、突如として何かが生まれたかのように、異なる世界から現れたかのように、情報という生物が張り巡らせた巣は原因不明のデータ群に侵され、世界中に不明のデータが送られ続けた。インターネットという情報の網目に属する物は全て、不明のデータを受け取り続けた。

突然の出来事に、運輸、通信、放送、医療など様々な分野で、コンピュータによって制御されていた機器は不具合が生じ、予期せぬ事故が頻発した。先進国も途上国も平等に。民間で張り巡らされたインターネットは止まっているかのように鈍足となり、無理に動かせば緩慢な死へと繋がった。触らずに放置されていたり遮断されていたコンピュータ、元から独立させていた一部のコンピュータは生き残った。

パソコン以外の、インターネットに繋がっている電子機器は、通信が行えないだけだった。それが人々に疑問を与えた。

情報化の進んでいない途上国は被害が皆無であろうと予想されたが、先進国のそれと

は異なった損害を被っていた。国にある数少ないコンピュータの機能が完全に停止したのだ。

旧時代的なサーバと回線、脆弱なスペックでは、満足な動作を約束することは叶わず、短い時間に掛けられた負荷によって火花とともに沈黙するだけとなった。

情報網の遅滞化から四日が過ぎ、通信を圧迫していたストレスは、まるでそんなものは始めから無かったとでも言うかのように回復した。むしろ以前よりもより速く、より強靱なネットワークを有していた。情報という生物が生まれ変わったかのように、全てが劇的に変異した。

さらに、変異は止まらない。電気の通っていて、少しでもコンピュータによって何らかの制御を依存している物すべてがその恩恵を受け始めた。旧時代的な電子機器が、持っているスペックでは有り得ないはずの性能を叩き出した。ネット回線への扉を持たない、それこそワープロのような化石のような機器すらも、インターネットへと自動で参入して最先端気も斯くやという程の通信速度を誇った。

ただし、見えない中身が異次元的に変異しようとも、殻には限界があった。無理な挙動を繰り返した古い電子機器たちは、悲鳴のように火花を散らし、内臓である基盤が熱で溶解涙のように樹脂を垂らし、沈黙とともに死んでいった。淘汰されるように、死んでいった。

人々が慎重に取り扱うべきであろうかと心がけようとした時、全てが解決した。機器が余裕を持って動ける、そんな性能で動くようになった。通信が恢復してから三日後のことだった。

世界規模で全てをアップデートした変異が人類に齎した功績は大きく、また同時に損害も莫大だった。たったの七日の間だが、世界は平等に止まっていたのだ。大空を飛んでいた飛行機は手繰る糸を失って墮ち、船は指針を忘れ藻屑となり、通商の手段を無くした社会の歯車は崩れ、生命を紡ぐ牙城であった病院は中世ほどの技術しか發揮できなくなつたように。機械たちが動き続けなければ生命を維持できなかつた人間の多くが、その命の脆さを晒すように散つていった。

原因の究明が急がれた。何処かに、誰かに、早急に、責任を押し付けるために。インターネットを生み出し、管理する某国の実験だつたのではないかという噂が流れたが、某国は否定し続けた。名もなきハッカー集団によつて生み出されたウイルスではないかとも疑われたが、この世界にはそんな技術を持つ者がいるはずは無かつた。

結局、どれだけ経とうとも証拠も原因も見つからなかつた。

同時に、世界中で不明のデータ群が静かに発生したことだけ判明した。しかし、その事実は世界への恩恵と秤にかけられ、そして処理された。

生まれ変わった情報の網に、新たな噂が世界を駆けた。世界へと広がることで脳神経にも酷似した状態となった情報網から生まれたのが不明のデータなのではないかと。その噂は一瞬で世界へと広がり、幼子が眠るかのように一瞬で消えていった。

— 1 —

張木^{はりき} 粹布^{すいふ}は首を傾げながら、パソコンのディスプレイを眺めていた。近所の高校に通っている張木の、少年の未熟さを含んでいる顔には、その未熟さに似合わない困惑気味な表情を浮かべられ、眉間には少しだけ皺を寄せていた。黒い瞳には、青い壁紙から発せられた光が映り込んでいる。

張木が困惑している理由は、ディスプレイのど真ん中に小さく存在する見覚えのないデータがあったためだ。他のアイコンと同様の大きさをした、小さな卵のようなもの。鶏卵の形状に酷似しているそれは、コールタールのように黒く、三秒に一度思い出すように震えていた。張木が疑問を抱いているのは、この卵の存在だ。インターネットがほとんど使えなくなったため、諦めて放っておいたパソコン。やつと恢復したと思っただけで、画面の中に見知らぬ卵が存在していたのだ。普通の感性を持つ張木にはどうしてこ

うなつたのだらうとかどうしたらいいのだらうかと思う以外に出来なかつた。

新手のウィルスの可能性もあると思ひ至り、削除するべきか一度バスターに仕事させるべきか、卵をドラッグしてみた。震えるように卵が一度、大きく揺れ、罅が入る。音量が程よく調整されているスピーカーから罅割れる音が響き、ディスプレイが明滅した。眩しさに目を瞑っていると、スピーカーから再び音が紡がれた。淡い青の刺々しいバブルのような形状、その中心には円らな黄色の瞳が一つ。それは本物の生き物のような挙動とともに、スピーカーから生命の産声を挙げていた。

ディスプレイ上で謎の生き物らしき物体の誕生を見守つた張木は、謎の生物の世話に苦心していた。一分に一度、スピーカーから音が発せられた。どうしていいかわからず放置していると何度も音を聞かせられた。

ミュートにしても、勝手に音量が調整され、音を聞かされる。とりあえずパソコンの前に座して気付いたのが、謎の生き物は己の単眼で張木の姿を追っているということだ。パソコンのみならず周辺機器にまでカメラなど都合の良い物が無いにも関わらず、この生き物は張木を認識し、剩え姿を追うのだ。この事実は張木をひどく驚かせた。まるで本当に液晶ディスプレイのフィルター越しの世界に存在しているかのようだった。いや、逆だ。互いを阻むものがフィルターしか無いように、張木に感じさせた。

驚きは好奇心となった。鳴き声に応えようと張木は色々と試行錯誤を繰り返し、やっとの思いで生き物の要望に答える術を見つけた。カーソルで生き物をクリックすると、『名前』『年齢』『体重』『おなか』『筋力』『体力』『勝率』の項目を確認でき、それぞれの項目を満たすと、音を上げることが無くなった。つまり、音は雛鳥が親鳥に求める鳴き声だった。まさに誕生したばかりの生命だった。

名前はクラモンというようで、張木が独白するように呟くと、鳴き声を挙げた。これもまた張木を驚かせた。クラモンはこちらの世界を“わかつている”のだ。だからこそ電子情報の世界から物質の世界を観測し、影響を与えているのだ。

年齢は0歳。生まれたばかりなのだから当然だろう。

体重は1G。グラムだろうかと思案したが、パソコン上に存在するクラモンが質量を持つのは可笑しい。情報の内包量だと気づき、確かめると確かに一ギガバイトだった。つまるところ、クラモンの重さはデータ量に直結しているのだ。

ならば『おなか』というのはデータを必要としているということだろうか。項目をフリックするかのように流すと、ハートマークが四つあり、全てが白くなっていた。ディスプレイに存在していた適当なデータをクラモンに近づけると、スピーカーから音を立てながら咀嚼し、飲み込んだ。おなかのハートが一つ、赤色に染まっていた。

『筋力』もおなかと同様に白いハートが四つ。データを削除を選択すると、現れたクラ

モンが破壊し、ゴミ箱へと転送されることでハートが満たされた。

体力は『おなか』『筋力』と異なり、ゲージバーで表記されている。調べ続けたが結局不明のままだった。

そして最後の勝率だ。勝率というからには勝った割合だと思われる。このことから、もしかしたら戦う相手が存在しているのかもしれない。

——つまり、クラモンと同じような存在がいるということなのだろう。

——2

クラモンを世話するようになって張木が気付いたのは、クラモンが何時も付いて来るということだ。部屋にいればパソコンのディスプレイで、室外へ行けばスマホの画面や携帯ゲーム機で、というように。懐かれたということなのだろうと張木は自分を納得させた。

クラモンとはマウスカーソルやスマホのタッチ、携帯ゲーム機のタッチパッド操作で触れ合えることに気付いた。触れば喜ぶし、突けば機嫌を損ねる。可愛いペットのようだった。そして張木に強く興味を抱かせる奇妙な隣人でもあった。

どれほど育っただろうかとクラモンのプロパティを開き、改めて眺めることで張木は

新たな気付きを得た。表示されている容量は五ギガバイトだったが、パソコンは圧迫されていかなかったのだ。さらに言えば、試しにクラモンをコピーペーストして現れたデータは壊れた屑であり、それは数メガバイトしか有していなかった。あまりに軽すぎる。クラモンが複雑すぎてコピーが出来なかったことも考えられたが、クラモンがスマホなどに移動した時などの容量を確かめたが、やはり軽かった。

他にも意地の悪いことにパソコンやスマホの無い部屋に移動したことがあった。どのような反応を示すかという張木のちよつとした興味を満たすためだった。結果は型落ちしているファミコン上で簡素なドット絵として活動するというものだったから張木の魂消ようは無かった。

部屋を移動した際に、まさかと思いつながらも物は試しと起動させたファミコンが、強い熱を発しながら、繋がれたブラウン管にクラモンだとなんとかわかるドット絵を描いて動いていたのだ。また、容量は優に五ギガバイトを超えているクラモンが己をファミコンに最適化して活動できたという事実が張木を再び驚かせた。

また、クラモンのドット化から、現代のゲーム機器からすれば化石と称せるファミコンすらもネットワークに組み込まれているという事実に気づかせた。外部との通信機能を持たなくても電子機器として本当に最低限の制御機能を持っていれば、むしろ電気さえ通っていればネットワークに組み込まれているようだった。

色々な事柄から、クラモンはインターネットのみならず電気を介在して行き来している可能性があるかと張木は思い至った。ともすれば情報の網は電気にすら張り巡らされているのかもしれないとも。また、クラモンが存在する場所はパソコン内部やスマホなどではなく、もつと奥にあるストレージ、目に見えぬ電子の海だとも考えられた。

クラモンは張木と同様、朝の7時に目覚め、夜の23時に眠りに付く。そして、昼寝は13時から14時まで行う。

食事は日に三度、朝は七時時三十分、昼は正午を過ぎてから、夜は十九時、そしておやつを十五時に一度ねだる。食にも好みがあり、データの内容が直結しているようで、炭素研究についての情報ばかりを食すようになっていた。

人間のようなライフスタイルであるが、適応するかのようには、細かい部分は張木に合わせていた。

さらに一日に何度か糞をする。ディスプレイ上で糞をされた時、興味を持ってその糞を調べたが、データは壊れていてどうすることもできなかった。壊れた状態のデータを排泄するということは、自身に有用なデータだけを引き抜いたのではないかというのが張木の予想だった。

謎のインターネット不調の煽りを受け、休校となっていた学校が再開された。ネット

不調が起きた初日には、学校側は教員などには不便を強いるが学業には何の問題も生じないと判断していたが、信号の管理システムが無茶苦茶になったことや繋がれていた古いパソコンが発火したことなどの諸々が積み重なり、恢復するまでは休校と相成っていた。

情報という歯車が止まった影響は広く、そして深い。今また動き出したが、元通りとすることは有り得なかった。

久方ぶりの教室で、休校だった為に間が少し空いて何処とないぎこちなさを織り交ぜながら、張木は級友たちと言葉を交わした。話題はやはり変異したインターネットを主とし、徐々に噂話へと推移した。分かりきっているインターネットの話題よりも、張木の関心を惹いたのは電子生命体の都市伝説だった。

蓄積された情報は新たな生命を生み出し、それが世界各地で生命の息吹を挙げているというもので、その生命は人と異なった外観をしているという話だ。懐疑的に見られているそれが張木には身近なことだった。その都市伝説は地上の生物とは根本的に祖を異なった新たな生命が、世界の何処かで生まれ続けていることのみで締められ、その生命についての詳細は論じていなかった。

張木が得られたことと言えば新たな生命のデジモンという総称だけだ。0と1によつて構成される怪物のような外観の生命、デジタルモンスター。全てに満ちる情報の

ように、世界を仕切る数字のように、そこに在るだけだ。
目的、発生理由すらも不明の、デジモンが在るだけ。

原作：Fate／Grand Order FGO1

—— 1

凄く珍しいことに西洋の魔術協会の人が出来てきた。

我が家は外部との交流なんて無いも等しいのだが、一応名前だけ所属している形になつている退魔なんちゃらという組織の紹介からやってきたらしい。

多分面倒事を回されてきたのだろう。

で、ごちやごちや言つて帰つて行つた。

—— 霊子ダイブが出来る才能ある魔術師急募！ ——

—— 世界を救う英雄になつてみませんか？ ——

—— 家柄、功績、血統は問いません！ ——

—— 興味のある方は特務機関カルデアにご連絡ください！ ——

—— 力なき劣等種は死ね！ ——

もつと色々と裝飾されていたが、要約すると上記の感じである。

上記の誘い文句に乗つた当主が「桐谷家の凄さを外の盆暗どもに見せつけてこいやあ

！ 特にあいんつべるんとかいうパチモンは抹殺してこいよおらあ！」と俺に命令して外国に飛ばしてくれたのが数日前のことである。

いや、準備期間は半年ほどあったので、その間に魔術刻印とか桐谷特性魔術回路玉をぶち込まれて体調を崩したり、体調を整えるくっそ不味い薬を飲み続けたりしてたけど。

俺の後継ぎとして必須な課題を片付けている間、分家の連中は「面倒事に首つつ込まなくてやったぜ！（ガッツポ）」としていた。

連中は成人までに研究成果が挙がらなかつたら魔術回路を引き抜かれて地獄の苦しみを味わうことになるのだが理解しているのだろうか。

専門とはいえ魔術回路を引っこ抜くのだから、運が悪かつたら死ぬかもしれないのもう少し必死になって欲しいものだ。

流星に親族が早死にするところを見たい訳でもない。

まあ、赤子でも無ければ死亡しないくらいには慣れているので安心し切っているのかもしれないけど。

人理継続保障機関フィニス・カルデアに来て当然の疑問だが、桐谷家の凄さとかどう

やって示せと言うのだろうか。

当然の事ながら知り合いない。

ちよろつと小耳に挟んだ会話は、家柄がどうか権威がどうか、もう齒が浮いて幽体離脱してしまう。

我が家のアピールポイントなんて海綿動物の寿命くらい家が古くから続いており、良い感じの霊地を保有してて、家に籠って第二、第三要素および第五架空要素について考えたり自分のを弄ったりしている程度だ。

退魔なんちゃらという組織の末席に名前が載ってるだけで、魔術師たちとの交流もめっちゃ少ない。

どのくらい少ないかというと、市の行事の芋煮会のほうが知り合いが多いくらいだ。

血統は滅茶苦茶。

跡取りは魔術回路がある相手のみと結婚、分家は魔術回路がある相手推奨で自由恋愛も可能と緩い。

また、桐谷家一のピッチである従姉のような大淫婦が生んだ子供のように育てる親が居ない子は、何処にあるかも知らない家と養子交換も行うので血なんて混ざりまくりである。

魔術だって当主から与えられたテーマに沿って各々が好き勝手に第二、第三要素およ

び第五架空要素へのアプローチを繰り返し、才能があるならそのまま研究者コース、無かつたら回路を引っこ抜かれて生きてたらお手伝いコースという格式も糞も魔術師的な情緒も空っぽだ。

姉なんて才能を認められたので魔術回路を残されており年一で研究を納める義務をこなしつつ市役所に勤めてるし、魔術回路を引っこ抜かれた従兄はひと月ほど痛みに苦しんでいたが今では元気にエロ漫画家をやっている。

うーん……テキトーに自由でアットホームな家だとアピールしておこう。

— 2 —

桐谷すげえアピールしつつカルデアを練り歩いていたら、二人組男女が廊下で寝ていた。

しかも広い廊下のスペースを贅沢かつダイナミックに使った寝入りっぷり。どうにもカルデアに来てからジエネレーションギャップに悩まされつつある。

これはあれだろうか。

不良少年少女が駅とかで深夜まで屯っている状態の亜種だろうか。

ここまで堂々とされると、まるで「魔術師は廊下で寝るのが普通だけど、桐谷さんは

寝ないの？」とでも言われているかのような気分だ。

だが、悪くない。

俺も一端の魔術師であり、極東の一部とは言えども将来的に家を背負う身分だ。

その挑戦、受けようじゃないか！

二人組の間に挟まって寝てたら、前髪で目元を隠している眼鏡っ子に起こされた。

もつと詳しく言うと、二人組がフォウという珍奇な生物に起こされて眼鏡っ子と会話し、その二人組に今度は俺が起こされたわけである。

眼鏡っ子との会話だが、廊下で寝てはいけならしい。

マジかよ！ 知ってた！

普通の魔術師は廊下で寝ないらしく、そこから導き出せる答えは二人組は普通じゃないということだ。

まあ当然だよな、普通は布団が必要だもんな。

やっぱ魔術師って常識外ればっかだなあと呆れていると、レフ教授が現れて状況を整理してくれた。

・二人組は新入り

・一般人枠

・名前はさつきまでぐだぐだしていたのでぐだ男とぐだ子
・シミュレートの影響で寝ていた

ということらしい。

なるほどなー。

まあ、俺は眠くならなかったけど。

すまない、一般人と違って一流の魔術師で本当にすまない……。

どうやらカルデアでの身の振り方についてや仕事の説明がこれからあるようだ。

「あ、今こそ桐谷アピールじゃん」と内心で気付いた賢い俺。

「日本で有名な桐谷家の凄いとこ、聞きたいっしょ？」とドヤ顔で話し始めるも、誰もが浮かない顔である。

そうだよな、そんなマイナーな家の話なんて聞いてもしようがないよな……。

悲しい、としよんぼりしていたら、ぐだ男くんが気を使って「桐谷さんの右肩で浮遊している球体は何か」と質問してくれた。

「これは『偽魂』という概念武装やで（ドヤツ）と我が家の歴史と魔術回路が詰まった半透明の球体をアピールするも、反応が酷く薄い。

「魂の解析、翻訳、複製、転写、再生を目的としているんだ！（チラツ）」と反応を窺うが、やはり駄目。

こ、これもマイナーすぎなのかあ……～q、

気まずい空気を発散させようと、シミュレーションはどうだったかと聞く。

シミュレートされる英霊が、人によって違うらしいのだ。

俺は最初、フランス愛に溢れるセイバーとピンク髪のライダー、「ステラアアア！」と叫ぶアーチャーが召還された。

まあ、アーチャーは指示する前に「ステラアアア！」と開幕で叫んで消滅したが、小さな誤差だった。

補充されたキャスターも少女の姿をしていたのに本になって何処かに消えたが、幻だった。

ライダーもヒポグリフで敵役の家山子に体当たりして去って行ったが、夢だった。

再び補充された牛の仮面を被ったバーサーカーである大男は真面目に戦ってくれたのでマジで問題なかった。

セイバーも何故か騎士の役なのに防御アップしていたのでありがてえ。

最終的に、セイバーがタンク、牛がアタッカーとして活躍してくれた。

俺、この仕事向いて無さそうなんだけど……。

家に帰ってちびっ子たちと一緒に静かに鶴とか織ったり研究したりしたい……～q

再び暗い雰囲気となった。

すまぬ、すまぬ……。

ちなみに二人組は剣からビームを出す女性のセイバーを見たようだ。

セイ……バー……？

なんで英霊つて美男美女が多いのだろうとか、シミュレーターだから希望が混ざってるんじゃないかと話しながら、説明会場の扉を開く。

中には既に他のメンバーがずらつと並んでおり、一番前では責任者っぽい人が苛立った表情を浮かべていた。

面倒くさそうだと判断し、ぐだ男くとぐだ子ちゃんを放置してテキトーなところに紛れようとしたが、前に来るように呼び出された。

ぐぬぬ。

カルデアの責任者である『おーがなんちやらーあむにんに』とかいう偉い方が怒りに顔を歪めながら、何か言うことは無いかと問いを投げかけてきた。

……うーん？

……あつ！

おーがさん、廊下に布団を常備しておいた方が寝やすいつすよ、q、

— 3

説明会が始まる前に、烈火とばかりに怒られた。

レフ教授に教えて貰った時間には間に合っているので、きつと布団が気に入らなかつたのだろう。

魔術師ジョークだったのだが、よく考えたらこのジョークは内輪ネタだったな失敗した。

まあ、俺の小粋な布団ジョークでおーがさんの感情という導火線に火を灯したのも悪かったのだろう。

その後のぐだ男くんが「アニメスファイア……？」という俺もよくわからん単語を呟くことで油を注いで火を加速させ、ぐだ子ちゃんの「むにやむにや……」という酔拳で大爆発である。

俺たちつて最高のコンビネーションじゃん、

連帯責任で説教されたせいとか、この場にいる大半の感情が荒ぶり、みんなの魂のボルテージが上がりがりまくりである。

このまま行くと各派閥で大戦争が起きかねない状態だった。が、空気の読めるレフ教授が場をなんとか修めてくれた。

と、思ったらオーガ所長が「おめえら道具だからアタシの指示に従えよヨロシクウ！」と空気を一切読まない主張でゴリ押し。

エリート意識の高い魔術師たちから非難轟々。

所長は人の気持ちに分からないようで可哀そうだ……。

動物園も斯くやと盛り上がる魔術師もどきのチンパンたちに、オーガ所長が「嫌なら高度6000mを歩いて帰れ！」と一蹴。

これはあれだろう。

現場の人間と、それに指示する技術者の確執が、後から問題に発展するプロフェツシヨナル的な展開と予想。

立ちはだかる問題を、互いにいがみ合いながら解決し、最後には和解するはずだ。良い話になりそうだなー。

ぐだ男くんが罵られたり、ぐだ子ちゃんやんが張り手で起こされたり、所長が俺の工房で
ある偽魂に敵性判断されかけたりしながら説明会は終了。

「あー、マジで仕事やりたくねえなあ」とダラダラと準備していたら、所長から俺とぐ

だコンビはミツシヨンから外すと告げられた。

もちろん準備も無し。

仕事しなくていいんですかヤッター！と喜んでいたら、所長に引きずられてミツシヨンに挑むメンバーを見送ることになった。

ちなみに眠い眠いと駄々を捏ねていたがだコンビは、眼鏡が部屋へ連れて行った。

仕事しなくていいんじゃないかと困惑していると、苛立った様子の所長がカルデアについてみつちり俺に講義すると告げてきた。

要らないです。

全然要らないです。

じゃあ逆に俺が桐谷の凄さである……あー、特に思いつかないですけど姉のカレーが美味しい話とかしてあげますよ的なことを返したら、所長は叫び過ぎて血反吐を吐きそうになっていた。

所長に優秀だと判断された魔術師たちがコフィンだとかいう箱に入ったり、俺を嘲ってきたり。

嘲ってきた連中には「仕事しないと給料がもらえない君たちと違い、俺はいるだけで給料がもらえるんだよハーゲ」と煽る。

血管がブチ切れ直前の所長によって部屋から追い出された。

ぐだぐだコンビも寝ただろうし、俺も寝ておこうかなと自室へ向かう。途中で所長がなんであんなにキレてるのかわからんなあと首を傾げる。

婚期が迫っているのだろうか。

同世代くらい姉はもつと穏やかなのだが。

顔とかは似ていないのだけど、何となく似ている気が……無いか。

まあ、姉は何でも許してくれるので、そのノリで茶化し過ぎた気がしないでもないけど。

落ち着いた頃に謝っておこう。

軽い足取りで廊下を歩いていると、轟音が響き、大きな揺れが襲ってきた。

熱い。

痛い。

あつい。

いたい。

こわい。

『A. D. 1994 彷徨腐敗世界 ■■』

——1

人類繁栄を約束していた人工の光は立ち消えていた。

激んだ炎が天を照らす篝火のように、世界が轟々と燃えている。

文明の象徴である建物が溶け、人間だったものが黴の如く地面を黒く染めていた。

ここには何も無い。

青年は場所もわからず独りで走り続け、疲れを覚えて歩き、躓いた。

躓いた先で青年が出会ったのは酷い傷の男だった。

燃え盛る世界でただ一人生きている男だった。

絶望に喘ぐ男を、青年は背負って歩いた。

ここには何も無い。

男を治療する道具も、何もかもが。

人の燃え滓だけが世界を満たす。

青年が何度も「大丈夫だ、大丈夫だ」と男に声をかける。

生命が希薄となり、脱力を起こしている男の重みが青年の両肩を押しつぶす。

この重みが青年は怖かった。

男が死ぬことの表れでもあり、再び暗く深い孤独の闇に飲まれることが、怖かった。

訥々と力なく呟く男の言葉を辛抱強く青年は聞き続けた。

何か男の生きる支えとなるはずだと。

ふつと両肩に加わる重さが強く、そしてもう男の力を感じなかった。

青年が嗚咽混じりに「会うって約束したんだろ！」と叫んだが、返事は無かった。

留めていた言葉にならない感情が、堰を切ったように青年を襲う。

世界は赤く照らされているが、何処にも何も無いのだ。

男を背負つてから、死ぬ間際まで続けていた魔術を、諦め悪く行使する。

魂と肉体は相互に繋がっている、だから魂を直せばきつと、そう何度も試みた。

壊れた物は創り出せない、無い物は直せない、不完全な魔術を何度も何度も何

度も何度も。

結果は変わらず、男は目を開かなかつた。

「あ……」

言葉が漏れる。

苛まれるのは恐怖と孤独、そして無力感。

「ああ……ああ……」

こんなのは悪い夢だ。

青年は何度も反芻した思いを抱く。

調整を間違えた魔術によって夢を失敗したのだ、そう思ったかった。

全ては幻で、全ては夢で。

終われ、早く終われと必死に何度も願いながら、青年は歩き続けた。

何かをしていないと、自分を失いそうだった。

火に焼かれて、全てを無くす。

黒い影となって忘れられる、そんな恐怖が青年を突き動かし続ける。

死に体の少年を拾った。

まだ幼い。

必死に魔術をかけて、置いて行かないでくれと祈って、見送った。

「何が！ 何が！ 何があああ！」

青年は叫んでいた。

意味のある言葉なんて出てこなかった。

恐怖から逃れるための悲鳴だった。

必死の絶叫だった。

一族が積み上げた智慧が、まるで意味のない塵屑であるかのように思えたから。

自分がちつぽけな紛い物のように感じたから。

意味なんて無いように思えたから。

何も見えないから。

只々叫んでいた。

喉から血が出て、声にならない掠れた音が漏れるようになって、叫び続けた。

それでも堪らなくなつて、青年は何度も地面へと腕を振り降ろす。

何度も何度も何度も、力の限り。

それでもしないと気が狂つてしまひそうだった。

そうしてでも気を狂わせたかった。

——殴つて、叩いて、押し折れて

魔術を使おうとした腕が無くなればいい。

その後は進み続けた足が無くなればいい。

最後に、考え続ける頭が無くなればいい。

断続的に続いていった骨が折れる音は、袋が液体を撒き散らす音へと変わった。

それでも振り降ろす。

痛みが生きている証の様で、恐怖が奔る。

痛みを感じなくなってきた、恐怖が奔る。

ひゅーひゅーと喉から擦過音が漏れ出る。

避けた喉と、半ば噛み千切った舌から、血が溢れ出した。

怖い。

熱いのが怖い。

痛いのが怖い。

死ぬのが怖い。

潰れた腕を目にして恐怖で頭が可笑しくなりそうだった。

全身を纏う痛みが怖い。

助けて。

声にならない掠れた音が漏れた。

応えるように、光が灯った。

焼き尽くすために蔓延る赤と異なる、弱い光だった。

見惚れることもない、弱すぎる光。

儚く心細い光。

一際強く光輝く。

それがどうしても青年の心を掴んで離さない。

その一時だけは恐怖を忘れていた。

「月から呼ばれるとは思わなかったけど、まあいい。ボクを召喚したんだから力になるよ」

光が消えたその場所で、小さく笑みを浮かべた少女が立っていた。

何処か人形の様で、人間としての強さを感じさせる少女だ。

炎に照らされた淡い茶色の髪が、ふわりと揺れる。

「クラスは……キャスターみたいだ。よろしくね、マスター」

魔術ほとんど使えないから弱いけど、と呟きながらキャスターが手を差し出した。

小さく頼りない白い手だった。

青年、桐谷夕景も自然と手を差し出していた。

「あ、戦力にならないからってカスターって呼んだら怒るからね」

自身を召喚したマスターが静かに眠っている。

実年齢は成人しているかどうかだろうが、寝顔は幼い少年のようだ。

涙で濡れた瞳は少し腫れぼったい。

それを見て、キャスターは少しばかり安心した。

今は穏やかに寝入っているが、起きているときは酷い物だった。

青白い顔に浮かんでいたの幽鬼のような形相で、乱心したのか腕を潰そうと何度も振

り下ろしていた。

契約するために取った手は、ほとんど失われていて、引きちぎれて裂けた肉と骨が露

出していた。

あまりの痛々しさに拙い魔術で回復を試みると、自身のサーヴァント化による物が、

マスターの供給魔力の影響や相性か、生前よりも遥かに高い効果を得た。

それを見て、マスターはまた発狂するかのように悲鳴を挙げた。

落ち着くように宥めると、深い隈が刻まれた昏い瞳で「もつと早く来てくれれば」と

呟いた。

それに返すようにキャスターが自身の魔術では少しの傷を治す程度、マスターは奇跡的に相性が良かったためだと伝えた。

そうすると「もつと俺が魔術を知っていれば。俺じやなかったら」と呟いた後、何度も謝罪の言葉を口にして、ぷつぷつと意識の糸が途切れ、その場に倒れ込んだ。

寝息を立てていることを確認すると、キャスターは膝を枕にして、そのまま寝かせることにした。

「こんな場所で君は何を見たのかな、マスター……」

狂気的な自傷を繰り返して、脅迫行為のように謝罪していたマスターに向けて呟いた。

そこには何も無かった。

彼方に、爛々と輝く赤い光だけが在る。

それに照らされているのか、視界に不便はしなかった。

ただ、黒い世界だけが広がっていた。

地面はキャスターの嫌いな固くてつるつるした物だった。

空は何処までも黒い闇。

何も無いから発狂したのか、何かが見えたから発狂したのか。

答えを知るマスターは昏々と眠り続けていた。

目が覚めると凄いですつきりした。

ここまで回復したのは久しぶりな気がする。

寝ている間、俺の様子を見守っていてくれたサーヴァントと改めて挨拶する。

彼女はキャスターという魔術師クラスのサーヴァントらしい。

サーヴァントというのは、偉人だったり英雄だったり想像上の何かだったりする超贅沢な使い魔的なサムシング。

キャスターも英雄なのかな、と聞いてみたところ、月で行われた戦争の覇者らしい。

す、すげえ！

月で戦争が行われたなんて知らなかったが、単純にすげえ！

おお、と尊敬の瞳で月の覇者であるキャスターを観察。

学生服を着たマジモンのJKにしか見えないが、きっと現役時代は凄かったのだろう。

薄茶の長い髪、意志の強そうな瞳、顔の造詣は整っているが、スタイルは……いや、女性性のことは止めよう。

そもそも俺はあまり女性と付き合いが無かったので、秤に使えるのは姉とか親族の

ビッチ、ぐだ子ちゃんくらいだ。

ただ、注釈として月の戦争時には彼女はマスターだったので、本人の能力は大したことはないようだ。

謙遜しているのだろうか、とステータスを確認。

S t a t u s M e n u

C L A S S

キヤスター

真名

岸波 白野

性別

女性

身長・体重 160cm 45kg

属性

中立・善

筋力 10

魔力 40

耐久 20

幸運 30

敏捷 10

宝具 |

……ポケモンかな？

まあ、ポケモンだとしても弱いんだけど。

キャスターにステータスを報告。

ステータスが100が恐らく最低値らしい。

最大値は50かと期待したが、多分100超えるんじゃないかというお言葉。

最大値が100超えるサーヴァントもいるという話だ。

そしてキャスターは平均18.3という快挙。

俺の場合、サーヴァントのステータスは数字で表記されている。

キャスターはアルファベットらしく、認識を摺合せると、おそらく20くらいでE相

当だとか。

つまり20毎で1段階ずつアップしていくようだ。

最大は魔力D、最低はE以下。

しかも必殺技ともいえる宝具に至っては表記無し。

ほわあああああ、きしなみしやんステひくすぎるよおおお。

他のサーヴァントとかよくわからないのだが、キャスターが普通くらいなのだろうか
と聞いてみた。

真顔で「ない、絶対ない」とだけ。

絶対ないのか。

明らかに、キャスターの能力が高すぎて比べるに値しない、という意味ではないだろ
う。

キャスターのサーヴァントは、普通のステータスならC以上、得意なステータスなら
BからEXまでであつたらしい。

つまりキャスターは万能サーヴァントだった……？

キャスターが「ぼじていぶー」と叫びながら、荒ぶる鷹のような謎のポーズをとつた。
ポジティブに考えないとツラいだけだから。

そもそも戦わなければいいじゃん、という天才的発想。

おちついたー、

「戦いは避けられないんだよマスター。聖杯があるのだから、絶対に」
かなしいつらい。

さて、今後どうしたものか。

瓦礫を歩いて何処かに向かうべきだろうか。

何処へ行っても、何処にも辿り着けないのだけれど。

いや、あの天を燃やすような、黒い炎の篝火にはいった事が無いのだが。

普通はあれを目指すべきなのだろうが、絶対に行きたくない。

見ているだけで吐き気がする。

俺が瓦礫を避け、焼け残った人間の影を避けて進んでいると、何故か訝しんだ様子の

キヤスターに質問された。

何が見えているのかって？

瓦礫、死体、黒いヘドロの地面、希薄な星空、赤黒い巨大な篝火、キヤスター。

あまりに近くで気付かなかったがキヤスターは凄いな、サーヴァントだからだろうか。

構成している核が、強い光を感じる。

こんなにも小さくて淡いのに、目に焼き付いて離れない程に鮮烈だ。

もつと見たい。

もつと奥まで。

祈り、念じ、集中していると、構成している魔力や魂、それを構成している基盤が見えてくる。

淡いよう力で強い光で構成されている基盤、凄まじい熱量が美しい。

霊体のサーヴァントの元型アーキタイプともいべきそれは、霊基と呼ぶべきか。

ただ、奇妙な点があるとすれば、キヤスターはその巨大な霊基と比べるには奔つて回る回路が少なすぎる。

小さく纏まっているというのだろうか。

それは無駄というよりも、霊基の可能性に感じられた。

キヤスターに魅入ってしまう。

素晴らしい。

こんなにも事細かに魂を中心とした流れを、生涯で見たことがあつただろうか。いや、ない。

人生において、唯一だ。

死に逝く親族を見送る際に、魂との接続が失われる様子を見たこともあつた。

それを遥かに上回る。

活きている、その何もかもが言葉にできないほど神秘に満ち溢れている。

サーヴァントというのはこんなにもすべてが美しいのだろうか。

偽魂ぎしんがあれば、と悔やまれる。

今なら数世代先までの研究を終わらせられるかもしれない。

魂、その形が見える今なら。

高次元に存在するエネルギーを留める形、魔法の一つ。

残念だ。

魔法に興味はないが、この美しさを残せないのが悲しい。

全ての人に分かち合いたい、自分だけの物にしたい。

桐谷の家が魔術を研鑽する理由がわかった。

これほどまでに美しいのなら手元に残しておいて……気付かない内に涙が流れていったようだ。

本物に出会ったとき、深い感動を覚えるというが、まさにこのことだろう。

素晴らしい。

本物を知る事、それだけに価値はあった。

意味はあった。

何もかもが、何もかもが輝いていて……あれ？

割れているかのような酷い頭痛で目が覚めると、キヤスターに説教された。微動だにしなくなったと思ったら突然、血涙を流して倒れたとか。

ごめんごめんと謝るが、視界が暗いままだ。

あまりに美しい物を見過ぎて潰れたのだろうか、冗談だ。

まあいいさ。

見たくない物が見えなくなるなら、それでもいい。

目に焼き付いたように霊基は見える、だからどうでもいい。

キヤスターが心配して回復させようと頑張ってくれたが、大丈夫だと制する。

あれが見れたのなら価値はあった。

俺の魔術回路が勝手に稼働していたのか、火照りを感じた。

あまりの美しさに再現しようとして、視覚情報を取り入れすぎてオーバーフローを起

こしたのかもしれない。

足りないのは処理能力か再現性か、器としての強度か。

おそらく生身では桐谷の悲願は叶わないだろう。

膨大な魔力で取り出した魂という高エネルギー体を抑え込み、利用するのは不可能か。

肉体自体が邪魔になる……

思考の坩堝にダイブしていると、キャスターにチョップされた。作家系のサーヴァント状態だったらしい。

よくわからん表現である。

視覚が戻るかわからないが、当分の間見るのは禁止だと言われ、目隠しされた。

目隠しにはキャスターの制服の袖を使ったとか。

男らしいサーヴァントだ。

そろそろ行こうかと手を繋がれた、引つ張られる。

先導するキャスターは何処へ向かうつもりなのか。

「キャスター、どこに向かつてる？」

「あつちに赤い光がある。試しに行ってみようかと」

「赤黒い篝火なら行きたくない」

「赤黒くないよ。赤い光だよ」

「……それならいいけど」

どれくらい歩いたのか、不思議と障害物に引っかかることなく歩き進めた。本当に何も無いようだ。

暇だから、思いついた疑問を訊ねてみた。

「キャスターって聖杯にどんな願いがある？」

サーヴァントとして召喚できる彼女らは、聖杯に叶えてもらいたい大なり小なりの願いがあるらしい。

その願いを餌に、召喚に応えさせ、現世で戦わせるというのだから人間というのはホントに……まあ、いいか。

「願い？　ないない」

繋がっているキャスターの手は、なんの反応も示さない。

柔らかく、温かい。

「でも、サーヴァントとして呼ばれたんだから、ほんの少しでいいから英雄に近づきたいと思ってる」

キャスターは「知ってる？　英雄って強くてかっこいいんだよ」と続けた。

その声音は茶化すようで、真剣だった。

骸骨戦士みたいなのが出たらしい。

スケルトン的なやつで、RPGだったら雑魚だろう。

種類は剣、槍、弓の三通り。

キャスターの魔術である『コードキャスト』でもボコせたのでかなり弱いようだ。

見えないけど。

いや、ぼんやりした光が或るなあって程度なら視える。

キャスターは背格好まで視えるのだから、サーヴァントというのは凄いな。

見える輝きはいろいろあるけれど、オド、マナ、魂、神秘等の違いはなんとなくわかる。

スケルトンが落とした骨を拾う。

昏い視界でも、神秘を持ったモノなら見える。

何故拾ったのか疑問を抱いているキャスターに、方向性の定まった神秘は何かに使えるかもしれないと伝える。

骨だけでは意味が無いけれど、神秘が内包している素材をいくつか集めれば、パズルのように組み合わせで、新しい素材に作り変えられるかもしれないし。

まあ、今は無意味なのでゴミが増えたような物だが。

骨を砕き、中身だけを抽出し、こちらから魔力で形を与えてやれば、空気のように傍にあるのにエーテル体のように何処にも無い、みたいな状態になる。

荷物も増えないのだから問題ない。

スケルトンがぽつぽつと出現するようになってきた。

なんとなく見えていたが、彼らは此処で死んだ人たちが、地面の泥によつて形を与えられているようだ。

その結果が、低級であろうとも神秘で魂を繋ぎとめられている亡者の軍団。

怨みなどの感情ではなく、死に気付かなかった姿。

すべてを砕かれるか、安らぎを祈られるかしないと、その魂は縛られ続けるのだろう。

それはとても悲しいことだ。

人は自由でなければならぬ。

心は休まなければならぬ。

魂がいつか疲れてしまうから。

油があれば良かったのだが、残念ながら持っていない。

お祈りで終われば良かった。

それはとても残念なことだ。

だから、現状では油で印を記せないで、普通に砕くのだ。

重要なのは、その魂や心が安息できるようにすることだと思う。

繋ぎとめている魂を剥がし、神秘を奪えば形が失われていく。

調子が良い。

以前でできなかったことが出来るようになっていく。

目覚めて、キャストを凝視したあとから視界は絶好調だ。

見えてないけど、視えている。

人を治す魔術は覚えられないのに、こんなことばかり覚えているのだから本当に堪ら

ない。

魂と肉体、生物が活動する上でその二つは密接に関わっている。

魂が腐れば引かれるように肉が腐り、肉が腐り落ちれば魂は枷から解き放たれてしま

う。

魂が無ければ考えることもできなくなり、ただの葦にも劣る。

双方を理解しなければ、一方だけでは意味がない。

満ち足りないのならば、伽藍の器、消えゆく光、そのどちらかしか残らない。

器が無くても留まるように。

消えない光を灯し続けるように。

そう成るべきだ。

そう至るべきだ。

そう造るべきだ。

——そう進化すべきだ

——10

キャスターに手を引かれ、歩き続ける。

世界が見えないが、光だけは視える。

最も強い光源はキャスターで、次いで空に登る篝火だ。

足元に不安は無い。

瓦礫は見えないし、キャスターも何も言わない。

ならば障害物は無いのだろう。

時折、ぼうつと光が灯る。

あれらの光はスケルトンだ。

生命を、魂を求めて彷徨っているのだろう。

失った光を、ひたすらに。

死後に与えられた仮初の生命とはそういうものだ。

あれになつたときの本能らしい。

正しい形を取り入れて元に戻ろうとするのか、無意識に恨むのか、ただ光に混ざりた
いだけなのか、それとも逝きたいのか。

スケルトンらは、キャスターの腕から飛んでゆく光で打ち消されてゆく。

亡者としての光は黒い炎のように暗く、魂が啼いている。

それから解放された魂は、強く燃えるように輝いて、何処かへ消える。

行き先は星幽界、霊界、天国といったところか。

器を失った魂は世界に留まることなく消える。

受肉した人間、仮初の肉体と霊体を持ったサーヴァントも、物質の根源であるエーテル
体で腐り行く器を与えられたスケルトンも、平等だ。

残光ともいふべきエネルギーの放出は確認できるが、魂自体はおそらく一瞬で消えて

いるのだろう。

消えるというか、移動しているというか。

移動時間はコンマ秒か、フェムト秒か、それともっと短いのか。物質界で認識できない速さの可能性も或る。

そもそも物質界の化学でいう原子のように、オカルトにも霊子という物質があると仮定されている。

それは時間や空間を飛び越える。

ともすれば観測するのは不可能か。

結果だけが残る可能性を考慮すると、そういう魔術または礼装が必要になる。

魔術では自身の腕によって変動するため、再現性が損なわれる上に精密性、連続性も怪しい。

礼装を作るには何もかもが足りていない。

自身の魂を観測装置として利用するというのはどうだろうか。

形を与えた神秘を持っているが、再びこれから方向性を抜き取り、意味を持たせて同化する。

ともすれば魂の行方、幽界の彼方への扉を結果として観測できるのではないだろうか。

扉や道筋さえわかれば、その道程を再現し、新たなアプローチが試みれるのではないか。

それは彼方へと行ってしまった死人すらも蘇らせ、零れた命を拾い上げられるのではないか。

何度だつてそこに行きつく、結局そこが最後になる。

死した人が脳に焼けついて離れない。

逝つた少年の顔が焼けついて離れない。

何か考えていないと頭が痛い。

なんでこんなにも、世界は醜いんだ。

なんでこんなにも、全てが汚いんだ。

なんでこんなにも、なにもかもが俺では意味が無いんだ。

なんでこんなに頑張っているのに何も実らないんだ。

なんでこんなに

なんでこんなに

なんでこんなに

なんでこんなに

なんでこんなに

んでこんなになんてこんなになんてこんなになんてこんなになんてこんなになんて
んなになんてこんなになんてこんなになんてこんなになんてこんなになんてこんなに
なんでこんなになんてこんなになんてこんなになんてこんなになんてこんなになんて
こんなになんてこんなになんてこんなになんてこんなになんてこんなになんてこんな
になんてこんなになんてこんなになんてこんなになんてこんなになんてこんなになん
でこんなになんてこんなになんてこんなになんてこんなになんてこんなになんてこん
なになんてこんなになんてこんなになんてこんなになんてこんなになんてこんなにな
んでこんなになんてこんなになんてこんなになんてこんなになんてこんなになんてこ
んなになんてこんなになんてこんなになんてこんなになんてこんなになんてこんなに
なんでこんなになんてこんなになんてこんなになんてこんなになんてこんなになんて

ぬかもしれない。

勉強になった。

ただ、魔術の研究って実際考えることばかりで苦悩の坩堝にダイブするから、かなりヤバい。

キヤスターだけ見ておこう。

キヤスター、おまえが俺の光だあ！みたいな。

とりあえずスケルトンは見えるべきではない、暗闇に引つ張られてしまう。

地面の濁った輝きを持つ泥も、こころが疲れてしまう。

昏い空も、魂が汚れてしまう。

空への篝火は特に駄目だ、何もかもが悲哀に塗れる。

……キヤスター以外を見たら魂や心が浸食汚染を受けるって地獄かここは（困惑）

疲れは無いが、暇である。

キヤスターを見ていれば楽しいが、思考が乾く。

素晴らしい光景を見て、絵にも写真にも出来ない気分というのだろうか。

まどろっこしい。

物足りない。

魔術を使つて再現したくなる、礼装で観測したくなる、その靈基を満たしてみたくなくなる。

キャストアの靈基は小さく完成されていて、かつ拡張性を持っている。

魂の粹、その中心に核がひっそりと美しく纏まっている。

それを埋めた時、きつと何よりも美しくなるだろう。

しかも、それは自由に組み換えることができ、何度でも形を変えることが出来るのだろう。

なんて美しい。

その靈基は一度だつて同じ形にならないのに、魂はいつだつて普遍のまま熱を灯し続けるのだろう。

その行く末を見てみたい、己が手で満たし続けたい。

なんて素晴らしいのだろう。

あつ……。

やっべー右目が潰れた、q、

外を見たら魂とか心が浸食汚染。

キャスターを見ていたらその美しさに限界まで魔力行使して目つぶし（物理）

なにこれ糞ゲーすぎない？

ちなみに右目が効き目だったらしく、魔力を使い過ぎて潰れてた。

流石にキャスターも呆れたのか、目を潰したままのほうがいいんじゃないかと言ってきた。

治療って鮮度が大事だし……いや、無くてもいいか。

魂が記憶媒体なのだから、エーテルで神経を編んで魂にぶつ刺せば態々カスみたいの情報劣化させる脳を通す必要がなくなるし。

そうなると眼球を形作る必要もなくなるから、外部情報を得る受信機を作ればいいはずだ。

うーん、いろいろやりたいことが増えたが、ノウハウが無い。

ここに来たときはテンパってて忘れていたが、魂と肉体が相互で補っているわけではないのだ。

どちらか一方を治せば引つ張られることは無い。

壊せば引つ張られるのは仲立ちしている精神が健全でなくなるためだろうか。

俺の知識は第二要素である魂、第三要素である精神、そして第六架空元素の悪魔くらいと、偏っている。

第一要素の肉体を知らな過ぎる。

桐谷は第一要素へとリソースを割くのを嫌ったのだが、そもそも精神が鎚となつて魂と肉体は繋がっているのです、やはり肉体の知識は重要だろう。

まあ、肉体への理解を深め、エーテルで編む感じになるだろうか。

理想としては成り損ないな物質であるエーテルと炭素を織り交せて疑似的に肉体を作り、神経などの内部器官はエーテルで編むとかどうだろうか。

概念を与えれば世界が認識してくれそうだ。

重要なのは、なにを視て、なにを聴き、なにを嗅ぎ、なにを味わい、なにを触れ、なにを意識したのか、それだけだ。

それが出来るのなら精神で魂を繋ぎとめればいいはずだ。

時間をかけて魂を複製し、作った器に宿らせれば無限残機とかも出来るかもしれない。

そう考えるとやっぱ肉体って要らないのか？

あ、肉体は要らないが、肉体の代わりを生み出すために理解すべきってことだろう。なるほどなー。

潰れた目を取り出し、宿っていた”見る”という記録を概念として抽出。肉体の末端とはいえ、魂が使っていたものだ。

経験の記録が滲んでいる。

こういう何らかの経験が宿するように長年使い、魔力とか悪魔とかが集まる場所に置いておいたりすると付喪神になったりするのだ。

今回は目玉だから放置しても有り得ないけど。

使い魔化させたら目玉のオヤジ程度にはなりそうだが。

さて、取り出したこれを……どうしよう。

礼装を準備できる工房も道具も無かった。

偽魂があれば良かったが、残念ながら無いのだ。

残った左眼に宿しておこう。

あ、めっちゃ見えるようになった！

色分けされるようになってる！

三原色から四原色になつたくらい良く見える！

そういえば、虫つて四原色の世界で生きてるのが多いらしい。

俺は虫だつた……？

虫と言えば儂い命に意味はあるのだろうかだが結果としてどろにまみれた。月の裏側にある世界が世に言う終末を祈っているのかもしれないが方向性を持つのならそれはやはりなんらかの意志を受け取っているのだろうが泥にまみれた。それはかの騎士王が祈っているように世界はやり直すべきなのかもしれないしそうではないのかもしれないが結果として世界は泥に塗れた。分かり合うことのない世界に涙を流した男は常に歩き続けて無力感を感じたとしても泥に塗れた世界に意味は無い。憎しみが募つた闇の帳は全て黒い泥で世界を浸食するこの大地も黒い泥であり世界を照らす篝火は無力感と絶望と怨嗟と悲哀に塗れて黒い泥が世界を浸食しているだけにすぎない。黒い泥は泥と呼ぶよりもっと高い次元にそんざいすべき力を内包しているが本来は無色であるがそれはまたなんらかによつて方向性が曲げられているので世界もともに曲がつている。そのまがつた先は騎士王が望んだ国とは反する世界でどこまでも永遠に壊れ続ける地獄のような黒いどろどろとしたせかいなのだ。どこまでもどこまでもどこまでもくろいくろいくろどろにつつまれてどこまでもどこまでもどこまでもどこまでも

俺としては正気なのだが、突然思考が延々と繰り返されてしまう。壊れた家電製品感が漂って困る。

回り続ける洗濯機とかなら電源を抜けばいいのだが、俺の場合は電源つて魂になるの
だろう。

死ぬのは困る。

キヤスターの美しさを後世にそれとなく伝えることで、魂に関わる研究をしている連中に自慢して羨ましがらせた。

うーん、頭がバグってる感覚は無いのだが、有頂天になっている感じではある。

この世界は正負を無視すれば俺にとつて満たされている。

完成しながらも完璧ではないキヤスターが隣を歩き、世界は憎悪を含んだ魂で満たされている。

天へと上る篝火は魂が幽界へと旅立つ様子で、空の闇はアストラルへの扉を決して開かないため、地の泥は行き場を失った魂を迎え入れる死体によつて作られた虚構のスプ。

俺に見えて聞こえる人々の様子は生前の記録、それがアストラルへと旅立てずに憎悪や後悔によつて塵屑のような器に移ってしまうのだろう。

死に逝く人々の記録に手を出しても意味は無く、俺はただ見ているだけだ。

キャストには黒く何も無い世界の様だが、俺には儚く醜くて美しい世界が見えて
る。

だが素晴らしくは無い。

一点の曇りもない物がずっとずっと素晴らしく美しいのだ。
そう、美しいというのは……あうっ……。

延髄チョップで再稼働させられた^q、

キャストに、俺が疲労でやばくなってる説を唱えられた。

まだまだ全然大丈夫だ。

この世界を視ないなんてもつたいたい。

こころが疲れても見ろべきだ。

魂が擦り切れても見ろべきだ。

寝るなんてもつたいたい。

記憶しなければ、記録しなければ。

魂は磨いてこそ輝く、情報を集めてこそ……キャストの膝枕はやめるんだ、それは

俺に効く……！

キャスターの魂の照度と熱量の心地よさには勝てなかつたよ……。

原作：女神転生、他 愚者の盆踊り1

父が女を作って家を出て行ったのはかなり前の事。

母が首を吊って自らの命を絶ったのは前の事。

姉が世を恨んで蒸発したのは少し前の事。

家が呪われていると噂が流れたのは最近の事。

そんな次々と家族を失った俺は、頼る宛てなど無いために空気が澱んだこの家で独り静かに生きていた。

学校へも行かなくなった。

引き籠ってひたすらゲームに打ちこんだ。

クリアしては次のゲーム、やり込んでは次のゲーム。

淡々とした作業だった。

古いゲームばかりなのは、やらなくなつて久しいから。

そんなゲームばかりやるのは、昔を思い出せるから。

なんとなく取り出したゲームはクロックタワー。

俺が操作、姉が怯え、父が助言を出し、母がそれを見守る。懐かしい記憶だった。

そして忌々しくもある。

今の俺には無い。

だからこそ、苛立つ。

ふつつつと湧く悪意を振り払う様に思い切り放り投げた。

壁にぶつかり、音を立ててカセットが砕けた。

中身のロムが床へと散らばった。

それを見て、無性に寂しくなった。

ゲームを続ける気分にもなれず、家族で過ごしたりリビングルームを後にして自室へと戻った。

金属を擦り合わせたような音が聞こえる。

何度も繰り返すように。

段々と鬱陶しくなって、無視するのも難しくなった。

段々と気持ちが悪くなっていく。

「やみにきわだつひかりあり！　むくなるいのりをききとどけ、うきよにこうりん！
“はま”！」

だが、すぐに温かな光に照らされた気がした。
気分が良くなっていく。

眠気がどこかへ引いて行くようだった。

ゆつくりと瞼を開くと、そこには生首がいた。

「あたいつたらえんじえるね！」

“えんじえる”、えんじえる、エンジェル。

……ああ、エンジェルか！

だからどうした。

生首を直視した混乱から回復したのち、とりあえず話を聞いてみることにした。

要領を得ない話し方のため、噛み砕くのに時間がかかってしまったことも忘れないで
欲しい。

解読結果、驚くべきことにこいつは天使だと言う。

それも神に近い上位の天使だとも。

発言も頭に何も入っていないのではないかというくらい、空っぽなものばかりだ。

信じるには難しい。

生首、というか饅頭のようなコイツは今は氷妖精らしい。

天使ではなかったのだろうか。

よくわからない超常生物を横にどけて起き上がる。

この饅頭、外に置いておいたために冷えたのか触れたらひんやりとした。

こいつを売ったらツチノコ以上の値段がつくのではないだろうかと邪推してみるが、どうせそのうち自殺するのだから金など無意味だという考えに至った。

感謝しろなどと訳のわからないことを喚く饅頭を視界の外に置いて立ち上がる。

服は着替えなかったために皺が寄っている、この様なら髪など寝癖だらけだろう。

鏡を見たら酷い顔をしているに違いない。

やる気の無くなった自分に呆れながら扉へと向かう。

夢の中で聞いたような金属を擦り合わせる音が扉の奥から聞こえる。

何の音だろうかと訝しみながら扉を開けると、そこには巨大なハサミを構えた男が立っていた。

悲鳴を飲み込み、硬直しかけた体を必死に動かして扉を勢いよく閉めた。

扉の外からハサミで空を切る音が聞こえる。

醜い顔、汚れた黒い衣服、捻じ曲がった背骨、そして特徴とも言える巨大なハサミ。

気を抜くとすぐに真っ白に染まる思考を必死に動かして考える。

そんな馬鹿な、有り得ないだろうと考えが行き着く。

そして天使を名乗った饅頭型氷妖精を思い出して有り得るのかもしれないと思い始める。

気味が悪いくらいに高鳴る心音を感じながら扉でハサミを構えている男に行きあたる。

シザーマン、なのだろうか。

確かめる術はない。

ドツキリをしかけてくるような知り合いなど存在しない。

あれがシザーマンだと前提すると、何故という言葉しか出てこない。

ゲームを放り投げて壊した呪いだろうか、馬鹿な。

だったら日本中がシザーマンだらけだ。

だとしたら、饅頭が怪しい……。

「あたいのせーいきが、いま、ここに……！　ぱーふえくとふりーず！」

振り向くと饅頭が口から何かを吐き出し、部屋を青く染めていた。

ゲロ吐いた……？

なにやってくれちゃってるんですかね、こいつは。

デコピンをお見舞いした。

涙目となって饅頭を相手していたが、外にシザーマンがいることを思い出した。いつ入って来るのか、恐怖が心音を高鳴らせた。

冷や汗が流れる。

1分経ったか、10分経ったか、時間の感覚が狂うほど待っていた。

しかし、一向に入ってくる様子は無い。

ひたすらハサミの音が響くだけだ。

なぜ入ってこない……？

饅頭に視線を移すと泣いていたことなど忘れたかのようにドヤ顔をこちらに見せ、ふんぞり返って（見上げて？）いた。

なんとなくデコピンしたくなかったが今は外のことだ。

この饅頭はゲロを吐いたり寝ている俺の上に乗ったりするが害意はないようだ。

ならば外のシザーマンも害意は無いのかもしれない。

いつまでも治まることのない心音を鬱陶しく思いながらドアノブに手をかける。

一瞬だ。

一瞬だけ開けて問題なければ饅頭を放り出して様子を見よう。

それでも大丈夫なら勇気を出して外に出ればいい。

浅くなっていた呼吸を整える。

緊張のためか恐怖のためか、何度も深呼吸を試みるが落ち着かない。空気が薄く感じられる。

さらに大きく息を吸い、ゆっくりと吐きながら扉を開けた。

目の前に広がる鈍色の刃先。

恐怖で腰が碎けるように床へと崩れ落ちた。

金属がこすれる音が眼前から聞こえた。

シザーマンから逃れるように這って下がり、扉をしめる。

ハサミを構えているが何の抵抗も無く扉は閉じた。

どっと汗が流れ、額から伝った液体が目沁みた。

手で拭う。

鉄の臭いがする。

手には赤い液体が付いていた。

額が浅く斬られたようだ。

先ほどの光景を思い出すと吐き気すら感じるようだった。

どうすればいいのだと思考が纏まらない。

覚束ない足取りで立ち上がる。

ベッドに倒れこんでしまいたかった。

ふと下を見ると饅頭が俺に向けてゲロを吐いていた。

……頭が痛くなった。

再びデコピンをくれてやろうかと考えていると、調子がよくなったように感じた。

ドヤ顔の饅頭曰く、“でいあ”というものらしい。

よくわからないが不利益なものではないようだ、デコピンはやめておいてやる。

外から聞こえるハサミの開閉音を聞きながら、なぜ入って来ないのか考える。

その答えはドヤ顔の青饅頭から得られた。

“せーいき”とやらが守っているようだ。

……たぶん、聖域だろうか。

饅頭が吐いた青いゲロによる聖域とかなんだかなあと思いつつ、シザーマンが入って来れないことに感謝して軽く頭（というか全身？）を撫でてやる。

何か琴線に触れたようで、壊れた時計のように「あたいつたらさいきよーね！」を繰り返した。

不確定であるが一応シザーマンからの安全地帯となっていることがわかったが、問題は何も解決していない。

そもそも俺の出待ちしている時点で詰んだと思えない。

発言がループしていた饅頭が正気に戻ったようで、俺が寝ている間に現れたときは“はま”で滅ぼしたが、復活してしまったとか。

“はま”が何なのかわからないが、“さいきよー”の饅頭が放った会心の一撃でも倒し切れないらしい。

饅頭の火力がどの程度だかわからないが、超常的な能力を有しているのはゲロの件からも明らかだ。

その饅頭が放った“はま”とやらから復活したというのが気になる。

復活ということは倒したことも確認したのだろう、饅頭が全てを正しく認識出来ているのならばという前提だが。

シザーマンがどの程度だかわからないが、最低の事態を考えてゲームレベルと想定しよう。

人間を真つ二つにする腕力と考えると、一般人で引きこもりの俺では太刀打ちできない。

こうなると、情けない話だが滅ぼすことに成功した饅頭使いになってしまう。

そもそも饅頭は俺の味方なのだろうかと疑ってしまうが、味方でなければ完全に詰む。

それは勘弁だ。

自殺すればいいなどと簡単に考えていた以前までの自分が滑稽に思えてきた。

外から聞こえるシザーマンが鳴らすハサミの音に恐怖を憶えながら、なぜか俺は笑みを浮かべていた。

笑ったのはいつ以来だろうか。

饅頭の話では、我が家は“いかい”となっているらしい。

出入り口はリビングにあるようで、“いかい”の原因もそこにあると言っている。

そこから脱出することもできるが、原因を破壊することでも“いかい”から出られるとも言っている。

とりあえずそこまで向かってから臨機応変に対応するとしよう。

「はま！」

扉を開ける、ハサミを構えたシザーマンを見据える、腕に抱えた饅頭が“はま”を放つ。

安全地帯からの一撃、中へと入って来れない点を利用した知的な戦略だ。

知的な戦略だ。

何度でも言う、知的な戦略だ。

眩いばかりの光に包まれ、シザーマンは消滅した。

T U E E E E E E !

予想以上の饅頭の火力に驚愕する。

復活を考えると一気に駆けて行くのが最善だろう。

饅頭を抱えて階段を下って行く。

二階を自室にしなければよかったと内心で叫びながら。

階段を駆け下り、廊下を走る。

いつシザーマンが復活するか分からない。

扉を蹴破るように勢いよくリビングへと突入した。

醜悪な面をした巨大な赤子が、部屋を這いずり回っていた。

地獄か、ここは。

部屋を砕きまわる赤子から必死に逃げる。

見た目通り動きは鈍重なため、走っていれば追いつかれることは無いのだが、部屋が十分に広くないので時間が経てば不利になる。

しかも破片などが散らばっているので、そのうち足を怪我して動けなくなるかもしれない。

饅頭が時折かける“でいあ”が無ければ死んでいた気がする。

ただ、饅頭の“でいあ”や“はま”も無限ではないようだ。

“いかい”となった我が家はシザーマンや目の前の赤子であるダンのせいかな饅頭が必要とするエネルギーが多いらしいが、それでも限りはあるとか。

エネルギーの潤沢さがシザーマンの復活にも関連してそうだ。

一度自室へと離脱すべきかもしれないと不利な状況に焦りを抱き始めると、饅頭がゲロを吐き始めた。

聖域を張って弱体化を狙うのだろう。

ダンの張り手をギリギリで避けながら走り回る。

目に見えて動きが重くなってきたのは、饅頭のゲロのおかげだろう。時間をかけるほどに動きが悪くなっていく。

そして、最後には動かなくなった。

息を整えながらクロックタワーの壊れたカセットへ近づく。

何か奇妙な影が纏わりついていた。

饅頭が“いかい”を止めると言うので傍へと降ろす。

纏わりついていた影を弾き飛ばし、カービィのように、エネルギーを吸い始めた。

影はふよふよと浮いているが、良いのだろうか。

悪い夢でも見ていたのではないかと、どこかふわふわとした気持ちで饅頭の後頭部（背中?）を眺める。

治したが逃げていている間は痛みを感じたし、今でも疲れを感じるが現実では無い言われたら信じてしまいそうだ。

生きることは素晴らしいとまでは言わないが、達成感を抱いていた。

我が家で発生したみょうちきりんな怪奇現象の原因を突き止めただけなのだけれど。

悲惨な状態のリビングを見渡して、片付けどうしようかと悩んでいると背後に気配を感じた。

振り向くと奴がいた。

そう、シザーマンがいたのだ。

金属音が近づく。

饅頭はカービィ状態で気付いていない。

このまま真つ二つにされて堪えるものかとハサミを両手で掴む。

力の差は歴然としていたがわざと力を弱めているのか、一気に切り裂かれることはなかった。

徐々に刃が閉じていき、半ばまで肉が断られた。

馬鹿力めと悪態をつき、痛みに顔を顰めるが、それでも離さない。

死にたくないから。

カツと胸の奥が熱くなった。

滴っていた血が床へと落ちた。

漂っていた影が血へと群がり、そして人型を為した。

青饅頭と似たフォルムだが、かなり違う。

見た目は別個体だし、最も大きな点は胴体があるということか。

「どちらがとつてたべれるじんるいかしら」

人類は俺だけだとなぜ気付かない。

とりあえずシザーマンを喰えと必死に説得。

二頭身の饅頭であろうとも、力を借りたいのだ。

胴体付き二頭身饅頭が体当たりでシザーマンの体を弾く。

体勢を崩したシザーマンを蹴り飛ばす。

今必殺の居合い拳！などは出来ないので背を向けて逃げる。

そしてカービイをしていた饅頭を抱えてシザーマンに向ける。

“はま”がシザーマンを滅ぼした。

巨大な鋏のみを残して。

ああ、もう疲れた。

動きたくないと思案へと戻る。

なぜかついて来る饅頭どもを意識の外に追いやって、今はぐっすり眠りたい気分だった。

目覚めはかなり良かった。

シザーマンが復活することもなかった。

荒れ果てたりピングも、ゆっくりと直していけばいいだろう。

饅頭どもを餌付けする。

かなり晴れやかな気分だった。

見知らぬ老人が訪ねてきて、ダークサマナーと呼ばれるようになるまでの間だけれども。

— tips

オリ主 Lv. 1 覚醒「I」愚者

家庭の不幸から引きこもりとなりゲームをする日々を送っていた。

母の自殺を機に家に陰の気が集まり、オリ主の自堕落な日々によって気が流れず、「ク

ロックタワー」を基点として異界化した。

異界を壊すことに成功するもダークサマナーとなってしまうた。

サマナーとして成長しようとも、異能に目覚めることはないし、転生体でもない。現在の成長限界はLv. 5。

覚醒して限界が延びたとしてもずっと愚者。成長限界も低いがハーモナイザーの適応性は非常に高いので特に問題があるわけでもない。

つまり、「素のレベル＋ハーモナイザーの上限」がレベルとなる。

レベルが低いことが崇つて2体の饅頭以外に反旗を翻され、仲魔を集めなくなる。

青饅頭（チルノ）

神への愛を失って墮天しようとした熾天使から切り離された善なる心。マグネタイトを握り込み続けて格を取り戻したとしても、名を取り戻すことはない。

主への愛が失われたがために翼が燃えておらず、凍ってしまったている。サマナーとの信頼によって徐々に熱を取り戻し、アドベントからニンボールへと変化する際に完全に燃え盛る。

ゆつくりちるの（レベル1）↓チルノ（レベル20）↓アドベントチルノ（レベル40）↓ニンボールチルノ（レベル60）↓アナザーセラフ（レベル80）

二頭身饅頭（ルーミア）

オリ主のネガティブさに誘われた常闇ノ皇が、熾天使の光を裂こうとして出現したが、現界する際に劣化したために目的を忘れた。カセットに纏わりついていたのは格を取り戻そうとしていたため。

ゆつくりーみあ（レベル1） ↓ ルーミア（レベル20） ↓ E x ルーミア（レベル40） ↓ 空亡（レベル60） ↓ 常闇ノ皇（レベル80）

— 2 —

一般人が知ることのない世界へと足を踏み入れてしまった。文字通り、裏の世界というやつだ。

その裏の世界にも常識があり、善悪が存在している。

しかも弱肉強食が基本となっている。

悪側のダークサマナーともなれば、命など軽すぎて次の日には忘れられる程度だ。

悪魔の撒き餌にされる程度かもしれない。

そんなブラックな職に就くことになってしまったのは1年前のこと。

裏の世界に敷かれた秩序の隙間を縫う様に存在する小さな組織、その一つである師匠

連とやらが訪れたのが運の尽きだった。

あれよあれよという間にダークサマナーへ一直線。

足抜けするには弱すぎて、きつと殺されてしまうだろう。

だから任務を完遂してきた。

そして重ねすぎた負債のせいで、逃げても行き場がなくなるのだろう。

回される依頼はどれもキツイものばかりだ。

異界の探索や組織の為の悪魔集めは楽なほうで、指定された人物を殺害する仕事なら幾らかの怪我を負う。

目標のほとんどはサマナーのため、とても厄介なのだ。

まだ参加したことはないが他の組織との抗争などもあるらしいし、メシア教の過激派による無差別の殺戮という地雷イベントまで用意されているという。

飽きが来ない職場である。

仕事を成功させなければ下っ端の俺などどうなるかわからないし、チルノとルーミアにマグネタイトを与えなければならぬし、なるべく良いCOMPを得るために金も稼がないといけない。

ホントに飽きが来ない、というか来る暇がない職場だ。

同等のサマナーと殺し合ったことと仲魔だった糞悪魔どもとの殺し合いで成長限界

がレベル5から上昇したくらいしかいいことがなかった。
それでもレベル20で打ち止めとなったのだけれど。

異界となった廃ビルを駆けまわる。

師匠連から回された下つ端が失敗したらしく、俺へと回されてきた。

その下つ端が異界の中で死んだのか、上の逆鱗に触れて殺されたのか知らないが、成功させなければ我が身が危ない。

回される仕事は死ぬ気で立ち回れば成功して然るべきと判断されているらしく、失敗すれば当然上の心象を悪くする。

しかも、ほんの少しであろうとも下が失敗した仕事を失敗するということは能力がないと自ら証明するようなものである。

間違はなく死ぬ。

ダークサマナーとなった発端の鋏を振り回し、悪魔を屠り、また走る。

異界としては低レベルだ、成ったばかりだからだろうか。

俺でも単独で踏破できそうな程度だ。

悪魔を切り裂く腕に力が入る。

この程度が一番嫌いだ。

一度、チルノとルーミアだけでは心もとないために仲魔を募ったことがあった。

サマナーとなったことに浮かれていた、ゲームのようだと思っていたこともあった。契約した悪魔が手足のように動く、裏切られることはない。

そんななんの根拠も無い考えで生きていた。

十分に信頼を築けていたと自負していた。

全部思い込みだったのだが。

レベルが10から一向に上がらない俺を見限ったのだ。

レベル5が限界だった俺が10まで伸びたと満足している様子に不満を覚えたらしい。

それだけなら良かったが、悪魔の本能である強さを求めることも災いしたのかもしれない。

俺のマグネタイトを狙って齒向かってきたのだ。

そこからは全力で殺し合った。

強さには固執しているが、なぜか俺から離れようとしないうちチルノとルーミアがいなければ死んでいただろう。

そのときの殺し合いのおかげで限界がまた伸びたが、結局20で打ち止めとなった。俺にとってレベル10前後の悪魔など殺意の温床でしかない。

接敵した瞬間に撫で斬りである。

交渉など無しだ。

やったとしても斬り捨てて辛うじて形を保っている悪魔を無理矢理契約させて組織に流すくらいだ。

悪魔を裂いて異界を駆け上がる。

空間に作用しているのか、やけに広く感じる。

進めば進むほど悪魔の数が減っていく。

奇妙な異界だ。

普通、基点や主の近くにマグネタイトが集まるため、その周辺は大量の悪魔が控えているものだ。

強さだつて入口と深部ではレベルで言えば5以上は違うだろう。

最深部、基点があると思われる部屋の前にたどり着く。

ここまで一切悪魔が現れなかった。

嫌な予感がする。

チルノとルーミアを召喚した。

今日まで命を賭けて生き抜いてきた。

1年と短い時間だったが、勘というものは馬鹿に出来ない。

その証拠に仲魔の2人が険しい表情を浮かべていた。

普段は脳天気そうな表情で喧嘩している2人には珍しかった。

扉を切り裂き、一気に内部へ駆けこむ。

自分たちよりも強い悪魔がいた場合、中を窺ったり、入ってから足を止めると魔法で薙ぎ払われる危険があるからだ。

部屋の内部は赤く燃えていた。

中央には人間の身体に牛のような頭部を取りつけた悪魔が静かに佇んでいた。

侵入に気付いていないのか、気付いて放っているのか。

どちらにしろ攻撃しないければ始まらないし、終わらないのだ。

COMPのハーモナイザーとデビルアナライズを起動させ、その無防備な背を斬り付けた。

目の前の悪魔には鉄の効きが悪いようだ。

あまり接近しすぎるとマハラギが直撃して手痛いダメージに繋がる、というか繋がった。

炎を切り裂くことでなんとか致命傷を避け、距離を取って回復できたが、次も回復できるとは限らない。

不得意の銃でチルノとルーミアを援護するが効いているのか微妙なところだ。

チルノが放つブフは直撃すれば仰け反らせるくらいには効いているが、ルーミアのジオは効いているのかわからない。

ハマとムドは無効化された。

厄介だ、面倒だ。

敵悪魔が咆え、マグを膨れ上がる。

魔法を放つ前兆だった。

チルノは炎が弱点であり、敵の火力も考えると確実にカバーに入らなければ一撃で落ちる可能性がある。

銃で牽制しつつチルノの元まで走る。

炎が眼前に広がった。

熱を感じながら、それを払う様に銃を振る。

軽減したがそれでもダメージを受けたが、問題は無いだろう。

ルーミアが放ったジオの閃光によって目つぶしされた敵悪魔から距離をとる。仕切り直した。

COMPがアナライズの終了を知らせた。

——アナライズ成功。魔王・モラクス「Lv. 23」

魔王、だと……？

COMPに気を取られた隙を見逃さなかったモラクスが眼前へと迫っていた。

回避は無理。

鍔を盾にし、後ろへと跳躍して衝撃に備える。

苛烈な一撃が腹部を襲った。

腹が貫かれたような激痛が走り、そして遅れて背中に衝撃が伝わった。

この部屋の壁は炎で作られているのか、焼けるような熱さを感じる。

咳き込むと同時に血が吐き出された。

中身が破れたか、もしくは内臓を痛めたのかもしれない。

胃は空にしてあるから感染症などは恐らくないだろう。

飛びそうになる意識を痛みを意識して必死に繋ぎとめ、地を這ってなんとか壁から離れる。

チルノとルーミアが頑張っているおかげか、死んだと思われているのか、追い打ちを掛ける価値もないと考えているのか、モラクスによる追撃はない。

単なる人間など、どうとでもなると思われているように感じてひどく不快だった。

ポケットに入っている魔石をやけに重い腕を動かし、探し当てる。

視界がぼやけてきた。

力が入らない。

魔石を懸命に握るが腕が持ちあがらない。

このまま死ぬのではないかと、限られた思考が焦りで塗り潰される。

再び咳が出る。

血を吐くとともに、魔石を手放した。

ポケットに重みが戻った。

心臓の音が耳のすぐ傍で聞こえているかのようにだった。

それ以外は何も聞こえない。

前に死にかけてたときも、こんな感じだった。

俺ひとり、そう思える状態だ。

太陽が見える、黒く、白く、眩い。

月が見える、白く、黒く、眩い。

夜から朝へ、朝から昼へ、昼から夜へ、明滅を繰り返す。

終わりとはそこへ向かうことだ。

向かう必要はない、俺の傍には光と闇がいる。

景色が切り替わる。

もう一人の自分（ペルソナ）がこちらを見つめている。

要らない、俺は一人だけだ。

景色が切り替わる。

川が見え、傍には守護悪魔（ガーディアン）が控えている。

要らない、すでに俺の隣には悪魔がいる。

景色が切り替わる。

天より天使たちが連なって、俺を迎えにきた。

要らない、すでに俺の隣には天使がいる。

景色が切り替わる。

景色が切り替わる。

景色が切り替わる。

景色が切り替わる。

景色が切り替わる。

景色が——

咳が出て、意識が浮上した。

夢を見ていたようだった。

何かが俺へと入り込もうとする、君の悪い夢だった。

先取りして腐ったような気さえしてくる重い腕を動かして魔石を握る。
まだ力が入る。

いつか誰かが俺を打ち負かすだろう。

けれども今ではないし、モラクスにでもない。

死に体に鞭を打ち、魔石を口へと放り込んだ。

呑み込んだそれは血の味がした。

万全ではない体調を気遣う余裕はない。

忌々しくも使い慣れた剣を振るってモラクスが放った炎を切り裂く。

チルノが光に召されたのかと思ったと眩きながら回復魔法をかけてくれる。

ルーミアが闇から還ってきたかと笑いながら支援魔法をかけてくれる。

まだ死ぬには早すぎるだろうとチャクラドロップを2人の口へと放り込んだ。

銃でちまちまと牽制しつつ、炎を剣で斬り捨てる。

死に瀕した人間は超常の力を得るとか聞くが、どうやら嘘のようだ。

そもそもサマナーなどやっていたら何度死にかけるか分かったものではない。

超常の力は安売りされていないということだろうか。

モラクスが咆え、マグの高まりを感じた。

放たれるであろうマハラギからチルノとルーミアを庇う。

視界いっぱい広がる炎を逸らすように、裁断する。

炎の切れ目に見えたのは、突撃してくるモラクスの姿だった。

また死にかけるかもしれん。

鍔を盾にした。

衝撃に胃の中身を吐き出しそうになるが、空っぽだったために咳き込むだけで終わる。

チルノのブフとルーミアのジオによって、モラクスの突撃の威力は軽減されたのが救いだっただか。

無駄に知識を付けやがってと内心で舌打ちする。

次の一撃ならば耐えられるだろう。

しかし、それが最後だと勘が囁いている。

魔石を直呑みすることでドーピング紛いの回復を行ったが限界が近いのは変わらない。
い。

呆れるほどのタフさを誇っているモラクス相手では粘り勝ちは無理そうだ。

銃での牽制も、魔法での削りも、所詮は様子見に過ぎない。

最後の一撃をどうするかが勝負の分け目だ。

モラクスは余裕があるのかもしれない。

たぶん、マハラギによる目隠し、そして突撃をしかけてくるだろう。

盤石で効き目が一番高いからだ。

そこを狙う。

勘に従って、ただ一撃にかける。

モラクスの内部にあるマグが高まる。

すぐにでもマハラギが来るだろう。

モラクスが咆えた。

力を込めて……っ!!

モラクスが見た目に反して、そして今までの動きと異なって俊敏な移動を行った。

対処が遅れて側面へと回り込まれた。

無駄に知恵を働かせやがってと苛立ちながら、必死に追いつがる。

再びマグが高まり、マハラギが放たれた。

ぎりぎりであつたことに安堵しつつ、ブフとジオで弱った炎を鋏で裁断する。

まだ終わっていないと気を引き締める。

そのまま鉄を体の前で構えたまま、息を吐いて全力で呐喊した。

突撃してきたモラクスとの交叉は一瞬だった。

巨大な鉄は牛のような頭部に抵抗なく突き刺さった。

そのまま刃を広げ、引き裂いた。

勝利を確信した俺の腕を、モラクスが掴んだ。

みしみしと音がする。

身体の大半を滅ぼすか、構成しているマグを消し飛ばすか、核を潰さない限り悪魔と
いうものは活動できるのだ。

油断した。

マグが急速に膨れ上がっていく。

チルノもルーミアも魔力が限界だ、このままではまずい。

魔法の行使を許せば間違いなく敗北するだろう。

死が待っている。

決断は早かった。

残った腕で鉄を振りおろし、自らの腕を断ち切った。

痛みを我慢し、流れる血を無視する。

モラクスの腹部目がけ、回転して勢いをつけた鉄を横薙ぎにして斬り付けた。負けじと放たれた炎によって切断した腕が灰と化す様を横目に、蹴り飛ばして刃を開いた。

溜めこんでいたであろうマグが、緑の光が、放流した。それを少しだけ目に留め、意識を失った。

師匠連

かつては巨大な勢力を誇っていたが、弱体化が進み、今では一つの弱小組織となっている。霊験あらたかな山や森を切り開いて従わせていた自然の神々が、近代化によって信仰を失いつつあることが原因の一つにある。いにしえの技術によって生成された“鉄”や道具諸々は神霊を呪うことができる。組織のトップは代々、新月の時に生まれ、月の満ち欠けと共に生死を繰り返す神を従えている。

オリ主 Statu s : L O S A R M

今回の件でレベルが21になったぞ、やったー。欠点は隻腕になったことかなー☆依頼でサイバネアームを得ると前衛として強くなる。

メイン装備は鉄。貫通持ちで光・闇以外の魔法ならば斬ることができる。

銃はオシヤレにピースエイダーと呼ぶ……ことはない。弟子をとつたら大口径のリボルバーを渡すかもしれない。

無機物と悪魔を合体させる依頼に立ち会うこととなるかもしれないが特に意味は無い。

チルノ

レベル27。サマナーを友人のように捉えている。

ルーミア

レベル24。サマナーを友人のように捉えている。

— 3

左の肘から先に取り付けた義手を動かす。

この義手は生体マグネタイトを利用しているらしい。

拳を作るように握ってはすぐに開く、を何度か繰り返し返す。

動作音はほとんどないが、手と呼ぶにはあまりにも機械的すぎた。

生身とは似ても似つかない形のそれは指が五本あることくらいしか、類似点がないようににも思えた。

健康な右手と比べても1秒ほどの誤差が生じる様子を眺めていると眉間に皺が寄ってしまふ。

今の科学技術を考えてと有り得ない水準なのだろうが、命を張った仕事をしている身としては不満しかない。

もつと高性能なものとなると、世界でも有数な組織や軍を狙わなければならなくなる。

有名なところで言えばメシア教が行っているという研究成果によって生み出された生体部品や軍が極秘裏に開発しているパワードスーツだろうか。

どれもこれも俺の手には届かないものだ、二つの意味で。

がしやーン がしやーン サマナーロボだよ

自動でマグネタイトを集めるすごいやつだよ

と、義手を振って遊んでいたらルーミアにため息をつかれた。

……な、なんだよ。

サマナーとしての活動も当然のことながら、日常生活にも不便を感じているとキツそ

うな仕事が入った。

まあ、キツくない仕事など滅多にないのだけれど。

内容は逃走した組織のサマナーの処理だ。

このサマナーは『邪教の館』で問題を起こしたため、殺さざるを得ない事態となったようだ。

悪魔合体の施設である『邪教の館』は様々な組織が利用しているが、サマナーにとって必要不可欠なため、中立地帯として認識されている。

他の組織と敵対するような仕事の際に中立地帯の『邪教の館』に逃げ込み、あまつさえ巻き込みかけたらしい。

なんとも酷い話だ。

解決するまで施設を利用しにくくなるだろう、組織に所属しているサマナーのために頑張るとしよう。

むしろ早急に解決しないと他の仕事が滞って色々と問題が積み重なり、結果として俺が殺されるかもしれん。

そもそも俺は施設をほとんど利用しないのだけれどと文句を垂れながら、組織に情報を流すようにと要請する。

唐傘や石火矢の連中を使えばいいものを何故俺なのだろうか、あれらのほうがレベル

も技術もかなり上等だと思っただけだ。

まあ、動きが遅いうえに柔軟性に欠けることもあるが。

格は落ちるが早さなら地走りもいるというのに。

たぶん、俺が近かったとかそんな理由なのだろう。

情報がCOMPへと送られてきた。

レベルは34、異能者のようだ。

水に特化したペルソナを使う後衛型で、組織で仕事を行う際にはコンピを組んでいたように悪魔は使役していない。

コンピ相手も逃走が確認されたらしい。

……絶対めんどくせえことになっているに違いない。

目標とついでにその相方の写真が送られてきた。

2人も女のようにだ。

始末をすることで仕事の達成となることを確認し、現場へと向かう。

目標の居場所だが、何故か『邪教の館』から離れていない。

休憩でも取っているのだろうか。

弾丸を弾き飛ばし、リロードを狙って魔法を放つように指示を飛ばす。

ダイナミックエントリーによる奇襲で助け出した『邪教の館』の主は後ろでコーヒールを飲みながらこちらを眺めている。

逃がしたら面子的に俺がマズイことになるが、施設の主にとっては痛くもかゆくもない。

しかもこの攻防に施設の主を巻き込めば良くて全ての施設への出禁、最悪で巨大な組織に殲滅されるかもしれん。

中立の、しかも合体施設とはそれくらい重要だ。

面攻撃されているかのような数多い弾丸を見ているとムカついてくる。

仕事の内容は異能者1人の始末だったはずが、なぜか敵は3人いた。

相方も逃げ出して加勢する可能性もあったので2人までなら許した。

が、なぜか敵対組織、しかもこの施設へと逃げ込まざるを得ない事態を引き起こした相手と手を組んでいる様子に殺意が溢れてしょうがない。

敵対している相手がイケメンであるというのも怒りを抱く理由になるかもしれない。どう見ても我が組織のコンビは敵組織のハントラの餌食となっています。

アナライズ結果から異能者はレベル34、相方は37、敵対組織は29とわかった。

COMPで仕事の難易度が駄々上がりだぞと組織に抗議する。

馬鹿正直に真正面から戦闘を行えば、敗北は確定するだろう。

防衛に徹しても削り殺される自信がある。

俺とのレベル差があまりにひどすぎる。

10以上も違えばミンチになるほかないというのに、総力でも負けている。

クソゲーである。

異能者はペルソナのおかげで矢鱈と丈夫らしいうえに下手に生かすと覚醒して強化されるらしいので、心臓を貫いたり、首を刎ねたり、脳を潰したりする必要はあるだろう。

その相方は完全な前衛型のようなのだが、銃弾の嵐の中を飛び込んでくる様子はない。

最もムカつくのは敵対組織の野郎だ。

ドヤ顔でラップトップを操作したと思ったら悪魔を呼んで守りを硬くしやがった。

完全前衛、完全後衛、補助サマナーとか詰んだ。

格落ち弱体化魔王に勝ったのだから死にはしないと笑顔のルーミア、続けて致命傷は確実とチルノ。

機械のような理想的な動作が出来たらの話だと思う。

人間TASを求められても困るわけだ。

銃弾の雨に苛立って一発だけ撃ち返すが、当然弾かれる。

異能者なら頭を吹っ飛ばせると思うのだけれど、前衛型が邪魔でしょうがない。

悪魔も肉盾になるだろうから近づく必要があるかもしれない。

44口径リボルバーとか使い難すぎてネタとしか思えない。

弾数が少ないし、弾の装填も手間がかかるし、反応の悪い義手で弾込めとか隙がヤバい。

普通に死ぬ。

マグネタイトを利用して強力な弾丸が撃てるというのが売りだが、欠点のほうが際立っている気がする。

あと撃つと臭い。

COMPに組織からの返事が届いた。

読んでいると気が逸れて隙となるから無視したいが、重要な案件だと後で死ぬ。

転がっていた施設の廃材となった何かを放り投げ、相手がそれに気を取られている隙に読む。

増援による殲滅戦へと仕事が増変したが、増援の到着までに敵を1人始末できなければ俺は失敗扱いとなるようだ。

山犬が増援に駆り出されたと情報が載っていたのですぐにでも現れるかもしれない。あれは足が速すぎる。

時間をかけていられないので敵目がけて飛び込む必要があるだろう。

COMPに貯蔵してあるマグを引出し、44口径リボルバー「カノン」に注ぐことで組織が生成した“鉄”の威力を底上げする。

悪魔に当たれば滅ぼしたうえに貫通が狙える。

前衛型のやつはわからん。

敵側の天井目がけてカノンを放り投げ、同時に鋏を構えて駆けだした。

弾を逸らし、逸らし切れない弾を避け、義手を盾にし、それでも無理なら急所や足に当たらないように体を小刻みに動かして呐喊する。

前に出てきた前衛型の女に向けて全力で鋏を振り下ろす。

鏢迫り合いもなしに刀を断ち切った。

安物を使つてたのだろうか。

というか、刀で受け止めるとか常識が足りないのではないだろうか。

断ち切った勢いで引き裂きたかったが、少しだけ身を引くことで回避された。

逃すものかと鋏を手放した。

刀を失った前衛の女に突き刺さる寸前、横から敵悪魔に庇われた。

悪魔へと突き刺さるが止まることなく食い破り、貫通して前衛の女の顔面に穿った。女から生えた鍔を足場に跳躍し、宙へと放り投げたカノンを握り締め、異能者へ撃ちこんだ。

うわ、くつせ。

無防備な状態で落下する俺、集まってくる敵悪魔、放たれる魔法。

ぬわー……。

悪魔の群れに襲われ、命の危険に晒されたがチルノの助けによって九死に一生を得た。

つうか悪魔を呼び過ぎなんだよ、敵サマナーは。

ほとんど暴走してるだろ。

契約で縛っているであろう仲魔も、制御が効いていないのか、ルーミアとともにサマナーを攻撃しているようだ。

混沌とした事態になってきた。

どうしたものかと呆れていると、肩から半身が消し飛んだ異能者が立ち上がった。

というか、見えない何かによって吊り上げられたようにも見えた。

明らかに致死量とわかるほどの血液が床へと流れている。

死んだ魚のような瞳でこちらを一瞥すると、周囲のマグを取り込み始めた。

チルノが言うには本体が覚醒に失敗したが、ペルソナは格が上がったため暴走して
り、反転して現界しようとしているらしい。

異能者はマジでミンチにでもしないと危険かもしれん。

でも、今のように暴走されてもなあ……。

暴走体を中心に吹雪が巻き起こり、凍結し始めた。

撤退しようとしてルーミアを呼び戻しているとCOMPが増援の到着を知らせた。

この場においては俺も危険だ、施設の主を連れて早く出よう。

ゾンビになりつつある女だったものから鋏を引き抜いて駆けだす。

凍り始めていたのか頭部が粉々になり、無事だった内部の脳髓が飛び散った。

途中で施設の主を拾って一目散に外を目指す。

ルーミアが言うには、次々と悪魔を凍らせた暴走体がゆっくりと敵サマナーを抱きし

めてミンチにしたらしい。

前衛の女だったものと敵サマナーだったものが散らばって、冷凍した塩辛のように

なっているとか。

どうでもいいことだ。

いや、どうでもよくないな。

夕飯に塩辛を食べようと思った。

遠吠えとともに破砕音が鳴り響いた。

山犬が突撃したのだろう。

前衛の女と敵サマナーを処理したこと、異能者が暴走体になったこと、その後山犬が突撃したことを組織に伝える。

ああ、疲れた。

そろそろ難易度が低い仕事をこなしたいというのは我儘だろうか。

『邪教の館』の主からドリーカドモンが届いた。

何故か気に入られたらしく、捕獲した暴走体を元に造魔をつくってくれとか。

あと、強化するために顔を出せということらしい。

悪魔はいらないのだが、とも思ったが造魔はサマナーの言う事を絶対を守るという話だ。

寝首を搔かれずに済むうえに手数も増える、俺の世話をさせることも出来るのだとルーミアに説得された。

まあ、悪いことにはならないだろう。

近いうちに……いや、もつとよく調べてから行くことにする。

悪魔は怖いから。

あいつらには心がないという前提で接する必要がある。

悪魔を殺して平気なのかとか答えようがない問いをしてくる個体も存在しているところ嫌らしい。

臨機応変としか言えない、10レベルくらいなら即殺だけど。

とりあえず、対策としてメギドストーンとか用意しておくべきだろうか。

高いんだよな、あれ……。

――
異界の主

ステータス1. 5倍！ つよい！

魔王

ステータス2倍！ ちようつよい！

オリ主 覚醒「Ⅲ」愚者

死にまくっているのに異能に目覚めない。内面には隠された力や転生体など何も眠っていない。マグネタイトの流れを漠然と感じて詠むことができるという超主人公

補正を持っている。CT率+10%、魔法の予測、動作予測、先読みなど。

シザーマンを殺したため、魔人や魔王を引き寄せる運命の呪いが魂に刻まれた。押し寄せる死亡フラグの予感……。魔王を殺したため、呪いの痣が右腕にあらわれた。痣を与えた魔王を凌ぐほどの強さを得ない限り、肉を腐らせ、骨を溶かし、死に至る。主人公っぽい呪いでやったね！

4

静寂を切り裂くように電話のベルが鳴り響いた。

電話とかいつぶりだろうか。

新聞の勧誘以来ではなからうか。

試しに出てみる。

メリーさん……？

途中で電話を切った。

いたずら電話とか誰得だし、と眩くと悪寒が駆け抜けた。

〜とてつもなく恐ろしい悪魔の気配がする……。

マグネタイトが集まってくる。

おそらく強い悪魔が出てくるのだろう。

しかし、なぜ俺の部屋に出てくるのかわからん。

前の家は師匠連に接収されたので、今は広めのアパート暮らしだ。

間違いなく戦闘ができるような場所ではない。

PDAに仕事の連絡が入ったので確認する。

龍脈関連の仕事と悪魔契約の補助という2種類だった。

悪魔契約を即決、龍脈関連はレベル帯がむかつくので却下である。

悪魔が現れそうなどころで悪いのだが、仕事に行かなければならない。

書置きだけ残しておこう。

俺が日本語、チルノがエノク語、ルーミアが悪魔語で「ちよつと出かけてくるので待つ

ててくれ」と紙に書き、コタツの卓上に置いておく。

うむ、これで問題ないだろう。

部屋が光に包まれた気がするが、無視して鍵をかける。

いつてきまーす。

「無垢ナル魂ノ欠片を賭ケ、サア戦オウゾ。私ハ魔人デイビット。死ノ勝利ヲソノ身ニ刻ミ、死ノ舞踏を心行クマデ……ン？」

出現とともに言葉を連ねる。

が、反応がないことに訝しんで途中で止める。

右を向く、誰もいない。

左を向く、誰もいない。

首を傾げて机に目をやれば書置きされた紙を見つめる。

3通りの言語で書かれた手紙だ、どうやらこの度の人間は優しいらしい。

内容を読むと出かけるので待っていてほしいとのことだ。

「キャラ付が無駄になってしまった（・ω・）」

骸骨顔のくせにシヨボンとした表情を受かべ、手紙が置いてあった机に座る。

かつこいいセリフを考えたというのにスカしたこの気持ちをごこへやればいいのか。ろうか。

脱力しながら卓上に置いてあるミカンに手を伸ばす。

自由に食べてくれとのことなので皮を剥いて骨ばった口へと入れる。

僅かに酸味の効いた甘みが柑橘類特有の爽やかな香りとともに口内に広がる。

人間界の食べ物を食べたのはいつぶりだろうか。

美味しい……。

無心で皮を剥いては口へと果実を放り込む。

禁断の果実にそそのかされた気持ちは今ならわかる気がするようだった。

夢心地でいると電話のベルが鳴った。

不快な思いを抱きながら受話器を取る。

ここの持ち主ならば自分のターゲットである、いつ来るのか聞かなければならない。

「はい、デイベットです。部屋の持ち主さんなら何時くらいに帰ってくるか教えていただけますと……え、違う？ ……メリー？ 後ろ？」

振り向くと、そこには朽ちた小さな着せ替え人形が刃物を掲げてこちらへと襲い掛かってきていた。

一撃で粉碎し、マグネタイトを摂り込む。

味気がないことに不満を感じ、すぐにミカンに誘われるように机へと戻る。

足をいれて思う、不思議な机だ。

人肌のような温もりが下半身を包み込む。

愛に、優しさに、全てに抱かれているようだ。

骨と化した身体が、温かさを感じた。

もう離れられないかもしれない……。

魔人デイベットは魅了された。

電霊の知らせで上司から悪魔合体を行うよう指示が下ったのは1時間ほど前だった。空いている時間を事前に指定していたので急な事だとは思わなかった。

自分よりも上のレベルの悪魔と契約することが、少しばかり不安ではあったが、『邪教の館』に着く。

表向きは異国の御守りなどを置いている店だ。

客がいない店内を通り、レジを抜け、奥へと入る。

奇妙な機械が並ぶ、薄暗い部屋にはすでにこの施設の主がいた。

L. L. (えるっ)と名乗る人物だ。

他の施設も同じ様な偽名で通している。

線の細い美青年だが、威圧するような視線が見た目通りの年齢でないのだろうと思わせる。

そしてL・L・の隣には今回の悪魔合体を補助する、組織が送り出した人員が控えていた。

名前は確か……キネマトグラフ、そう呼ばれていた。

キネマトグラフが先に悪魔合体を行うので少し待つことにした。

命令を聞かず上司と仲が悪い、片腕を対価に魔王に魂を奉げた、単独で仕事をするのは仲間を殺すため、そんな噂ばかりが組織内で流れている人物だ。

色眼鏡を通してみれば、かなりの危険人物だろう。

見た感じではL・L・とほとんど変わらない、かなり若い少年だ。

見た目通りだとすれば、自分よりも一回りほど歳が下かもしれない。

黒い短髪が雑草のようで、L・L・との艶のある頭髮とは全く別物のようだった。

瞳は年相応で、少しばかり穏やかだった。

補助として送り出されたのだから腕もやはり相応なのだろう。

黒いスーツを着ていて、首には青をベースに白と黒の幾何学模様が描かれた長いマフラーがまかかれていた。

左腕の場所には……。

視線に気づかれたのか、こちらを一瞥してきた。

バツが悪くなってL・L・とへと視線を向ける。

3 mほどの人型ロボット——ガウエインと呼ばれていただろうか——がさらに巨大な機械を運び出してきた。

電源が入っていないのか、微動だにしていない。

それを前にしてキネマトグラフが仲魔を呼び出した。

低位の異界で見かけるような妖精だが、2体とも力を強い悪魔だった。

宙を浮かぶ2体の悪魔は何が面白いのかにこにこしながら、キネマトグラフのマフラーを真似するように首にまいた。

奇妙だった。

これほど悪魔が仲が良い様子も、仲魔と仲良くするサマナーという存在も。

気になってデビルアライザーを起動させる、種族は表示されなかった。

先輩が、彼は悪魔が怖くて妖精程度しか使役できないと馬鹿にしていたのを思い出した。

確かに弱い妖精しか使役できていなかったらすぐにも死ぬ業界だ、馬鹿にするのもわかる。

だが、この2体を見て馬鹿にするのは見当違いだ。

レベル30を超える低位の妖精など、誰が持っているものか。

合体させずにそれだけのマグネタイトを注いだという根気は馬鹿にできるかもしれ

ない。

いや、組織に入った頃のキネマトグラフは一般人程度だったらしい。

そう考えるとどれだけの異界を……。

つらつらと物思いに耽っていると、用意ができたのかL・L・とが準備を始めた。

これだけ大掛かりだったのだから2体を使って大悪魔を呼び出すのかと思えば、テキトリーな材料で造魔を造るらしい。

がっかりしているとキネマトグラフと仲魔が全力で補助魔法をかけ始めた。

どれだけ警戒しているのだろうか。

馬鹿にされるのもわかる気がしてきた。

「……造魔がサマナーに襲い掛かることなどないだろ、常識を知らないのか」
思わず呟いていた。

キネマトグラフがこちらを見る。

銃を構えている。

機嫌を悪くしただろうか。

噂を顧みると、攻撃をしかけてくる可能性がある。

COMPを構える。

キネマトグラフが呆れる様に、皮肉気に小さく笑った。

「貴方は悪魔に常識が通じると思っているのですか。愉快的な頭をしているんですね」
そう言うと、L・Lと話し始めた。

もうこちらには一切興味がないといった様子だった。

銃口が向けられることはなかった。

次々と準備されていく。

ガラス管に浮かぶあれは脳みそだろうか、気分が悪くなるような道具まで揃えられていく。

弱い悪魔が砕かれ、脳みそが砕かれ、魔石が砕かれ……。

色々な材料を砕き、それらを一つの液体に溶かしていく。

悪魔合体に用いられている装置の片側に注ぎ、もう一方は装置から外してガウエインが運んできた巨大な機械に繋がれた。

物々しい音とともに合体が始まった。

徐々に機械が光輝き、そして合体が終わった。

何事も無く合体を終え、キネマトグラフがCOMPへと入れた。

かなり緊張していた様子だったが、終わると気が抜けたようでも笑顔で妖精を撫でていた。

L・L・に呼ばれ、早速合体の準備にとりかかる。

といってもCOMP内の悪魔を呼び出すだけなのだが。

キネマトグラフが5台ほどノートパソコンを運んできた。

その様子を見たL・L・が文句を言っている、どうやら店の備品らしい。

特になんとも思っていないのか、キネマトグラフは慣れた手つきでノートパソコンを起動させはじめた。

この5台にはハーモナイザーが入っているらしい。

懐からさらに5個ほど情報端末を取り出し、それらも同様にハーモナイザーが入っているらしい。

L・L・が重複させすぎて、3個以降は雀の涙程度しか効果はないだろうと言った。

少しでも機能しているのなら意味があるとキネマトグラフが返事した。

そして、準備出来るときに準備しないで死ぬのは御免だと付け加えた。

悪魔合体がはじまる。

L・L・は神経質だが、腕は信用できる。

当然のように失敗しなかった。

現れたのはショウジョウ、レベルは30だ。

ショウジョウを持つことが許可されるようになって、初めて組織で一人前と認められ

る。

それまでは使い捨てのような扱いだ。

まだ低いレベルで許可された自分は幸運だった。

低級とはいえ、魔王の撃破という身に覚えのない功績で許可されるとは本当に幸運だった。

シヨウジヨウを見る。

黒い皮膚、白く長い毛、赤黒い瞳。

睨まれたように感じて震えがはしった。

デビルトークを起動。

自分よりも高いレベルだ、契約がうまくいかないだろう。

そのためのキネマトグラフ、頼りにさせてもらおう。

『呼ンダノハ、オマエラカ』

「おまえを呼んだのは俺だ、敵と戦う力となって欲しい」

『断ル。弱い人間ニ従ウ、認メン』

言葉を言い切る前にシヨウジヨウの四肢が断られた。

ほとんど見えなかった。

いつの間にか、禍々しい鍔を構えたキネマトグラフがシヨウジヨウに刃先を突き付けていた。

「契約に応じるか否か」

『ナイ。応ジナイ。人間、殺シタイ』

シヨウジヨウの頭部が切り裂かれた。

殺してしまつては意味がない。

そう抗議しようとしたが、足は棒のように動かなかつた。

近づこうとすると震えてくる。

悪寒が止まらない。

「チルノ、リカームを」

「はいはい、サマナーの気の向くままに。そうやってルーミアよりもあたしに助けを

請うがいいわ。……なんてね」

「ん、頼りにしてる」

「わかつてるわかつてる」

朽ちて逝くシヨウジヨウだったものを前に朗らかに会話を交わす。

魔法を指示された青い妖精は嬉しそうに笑い、金髪の妖精に向けて勝ち誇った表情を

見せつけてサマナーの胸に飛び込んだ。

金髪の妖精がそれを見て、悔しそうにマフラーの端を握った。

サマナーはその様子を無視して蘇ったシヨウジヨウに刃先を向けた。

「契約に応じるか否か」

「ナ」

切り裂かれた。

「契約に応じるか否か」

「n」

切り裂かれた。

「契約に応じるか否か」

切り裂かれた。

「契約に応じるか否か」

切り裂かれた。

切り裂かれた。

切り裂かれた。

切り裂かれた。

切り裂かれた。

切り裂かれた。

……。

途中からただ甦らせて殺すだけの作業と化していた。

目に見えてショウジョウが衰弱していった。

人間よりも死の概念が薄かろうとも、怖いようだ。

それとも目の前のキネマトグラフに恐怖を感じるのだろうか。

鉈を握る手に巻きつくように存在する、ドス黒い痣を見ていると自分も恐怖を掻きたてられる。

何度目か、わからないがとうとうショウジョウが折れた。

契約すると言った。

それを見て、キネマトグラフが頷く。

回復魔法をかけた。

契約内容を話すのだろう。

さつきまでの光景で気分が悪くなっていたが、気持ちを一心する。

隙を見せては不利な条件で丸め込まれてしまうからだ。

さあ、やるぞ。

気合を入れる。

シヨウジヨウの指先が切り裂かれた。

足の指が切り裂かれた。

……え？

「今のままだとレベルが高く、逆らわれる可能性があります。ちよつとしたサービスです」

楽しそうに嗤いながら徐々に切っていく。

遊ぶように妖精が手伝う。

笑い声が耳を抜け、直接脳へと届くようだった。

悪魔は道具だ、そう思っていた。

でも生きていると思うこともある。

なんだこれは。

目の前で繰り広げられているこれは、なんなんだ。

シヨウジヨウが刻まれていく。

助けを求めるように、揺らぐ赤い瞳が自分を射抜いた。

気持ち悪くなった。

COMPには契約したシヨウジヨウが納まった。

いや、あれは契約などと呼んでいいのだろうか。

そもそも何度も殺さずに、初めから切れればよかったのではないだろうか。

疑問が浮かぶ。

駆け巡る。

「貴方のためですよ」

そう一言、自分に告げてキネマトグラフはL・L・に近づいて行った。

逃げるように施設から飛び出した。

貴方が弱かったからこうなった、貴方のせいでシヨウジヨウは何度も殺された。

そう言われた気がした。

店内を駆け抜けて、ホツとした。

あそこは体を押し潰すような重さがあった。

安心する。

解放されたのだと。

そして吐いた。

胃の中身を全部。

怖かった。

そう、怖かったのだ。

あれは人間なのだろうか。

悪魔よりもよっぽど悪意があった。

悪魔合体はこことは別の場所で行おう。

ここにはもう二度と近づくことは無いだろう。

あれを思い出すたびに、心が冷える。

吐き気がする。

他の場所に入る際も、きつと自分は恐怖を感じることになるだろう。

ルルーシユの善意（笑）で造魔を仲魔にした。

悪魔は嫌だと散々駄々を捏ねると、身体が機械で出来た悪魔にするという結果になった。

仕事の説明をしてくれる電霊のルリちゃん（地上に舞い降りた大天使）な感じを期待していたが出てきたのはずんぐりむっくりとしたロボットだった。

どっしりした下半身、巨大な手は指が長く鳥の羽の印象を受ける両腕、顔部分には単

眼のみで頭部から天を突く角が生えている。

凄くメカメカしいです……。

思った以上にロボットだった。

ルルーシユがゴーレムと呼んでいたもので、俺もゴーレムと呼ぶことにした。

胸部はハッチが開くようになっており、乗ることが出来るらしい。

マジでロボットすぎる。

ゴーレムは悪魔を食わせとけば強くなるようだ。

データを取りたいから定期的に来るようにと言われたので領く。

でかすぎるのでゴーレムをCOMPに戻して仕事をこなす。

珍しく超ちよろい。

相手は唐傘連を引っ張ることになるジコ坊という立場が期待されている人物だった。

バックアップで山犬がいるらしいが、俺が仕事を失敗しない限り出てくることはないだろう。

人間を喰うとか言っちゃうショウジョウが反旗を翻さない様に躡けてカットするというサービス。

礼も言わずに去って行った。

幹部候補ともなると気位が高いのだろう。

ルルーシユに夕飯を誘われたので、喜んで同伴する。
ナナリーの飯は美味いでござる。

「チルノとルーミアばかり使つてたらロリコンと呼ばれるぞ」とルルーシユが笑いながら言った。

それならそれで本望だ。

俺が2人と仲良くするのは、ルルーシユがナナリーと仲良くしたいと思うのと一緒だと伝えると、なんか納得した。

テキトーに言ったただけなのだが、まあいいか。

家に帰ると骸骨がコタツを満喫していた。

魔人デイビットというらしい。

包んでもらったナナリーの料理を与えると、すぐ従順になった。
無垢な魂の欠片を求め、現界したとか。

知らんなあ。

ルーミアが持っているらしい。

もう少し強くなると渡しても問題ないとか。

デザートを見せながら強くなるまで待っているかと伝えると良いと言われた。
即断だった。

3秒経ってなかった。

そして、魔人デビットが我が家のコタツの主となった。

ジコ坊

師匠連という組織の幹部候補。歳は30前後くらいだろう。レベルは25とかそのくらいでいいんじゃないでしょうか。

キネマトグラフ

偽名的な何か。組織が2時間で終わる映画のようにさっさと死ぬという思いを込めて名付けた。2体の妖精を溺愛している……？

ゴーレム

COMPに内蔵されているような大容量のマグネタイトバッテリーを積んでいるので悪魔を食わせとけば動き続ける。

ガウエイン

英雄を宿した機械人形。シリーズものなので他の館にいけば別物を見られる。面倒

なので説明は省略。

魔人デイベット

私は魔人デイベット、コタツの主。今後ともよろしく。

L. L.

『邪教の館』の主。頭文字の連続が邪教ルール。ルルーシユが本名らしい。

ナナリー

完全造魔。ヴィクなんとかと共同研究して造り出された。ルルーシユの妹の魂をどうとかこうとか。身体に慣れていないため、車いす使用。

— 5

以前の任務である悪魔契約補助を達成した報酬として与えられた新しい義手の動きを確かめつつ、お盆に色々な種類のジューズと幾つかのコップを乗せる。

義手をルルーシユに見てもらった限りだと、特定の条件で俺のマグネタイト(MAG)を放出させるようなクソトラップや暴走などが発動する機能が内蔵されていたのだけだ。

なんかもう殺しにきてる気がしないでもない。

理由は……魔王の痣があるから、とか？

まあ、機能自体は強度や伝達効率が格段にアップしているし特に文句は無い。

あの程度の成功報酬でこれなのだからジコ坊への期待を感じさせる。

幹部候補が関わる任務を積極的に行った方がいいのだろうか……。

そんな感じのくだらないことを考えつつ、様々なお菓子の袋から中身を取り出して器に盛る。

律儀に傍で待っていたチルノにジューズの乗っているお盆を手渡し、お菓子の器はふよふよと浮いていたルーミアに。

日常生活の補佐目的で作ったゴーレムは大きすぎて役に立たないんだよな、と本末転倒な結果が待っていた。

チルノとルーミアがなんだかんだ手伝ってくれるので問題ないのだけれど。

それに、義手も格段に良くなったので握りつぶす心配もなくなった。

「まだですかー」とコタツの天板をリズミカルに叩くコタツ魔人にちよつとイラついて蜜柑を全力で投げつける。

難なく潰さずに掴み、空中で皮を剥いて食っていた。

腐っても魔人ということか。

お昼のワイドショーが流れるテレビに耳を傾けながら、菓子に舌鼓を打つ悪魔を眺める。

MAGがあれば食物など不要な悪魔だが、嗜好品には好みがあるとか。

酒を好む悪魔が多い中、こいつらは菓子を強く好むらしい。

ルーミアは人肉も好きだと言うので仕事中に死んだ、もしくは殺した女性を喰わせている。

なんかむさ苦しい男を喰わせるのって嫌だし。

コタツ魔人の骸骨は甘いのとしょっぱいのがバランス良く食べるのが好きとか。

というか、人間の食べ物なら大概好きらしい。

飯にMAGに、と色々と餌付けする必要があつて面倒なんだが。

気が向いたら仕事について来てくれるというので戦力として時々カウントできる。

ぶつちやけ、不安定な戦力は要らん……。

チルノは何でも食べる。

氷も食うし、バターも食う。

どこの悟空だ。

チルノにねだらられたねるねるねを練りながらテレビに目を向ける。

なんか『ね』が多い気がする。

東京で行方不明者や気絶、死亡者が多発とか物騒な事件が起こっているようだ。

そういえば龍脈の仕事は山手線沿いだったな、と思い出したが組織の誰かしらが解決しているだろう。

ダメでも他の組織も解決に乗り出すだろうし問題ないな。

……なんかフラグっぽい。

あとは外国でハンターが解決したとかヨークシンでマフィアの抗争があつたが情報規制されているとか、そんな感じで真面目なニュースは終わり、お昼の料理コーナーが始まった。

コタツ魔人がキラキラした目で見つめているので夕飯はこれに決定だろうか。

一応録画してあるが、メモをとりつつ流し見していく。

料理のレシピが入っているCOMPってどうよ？

ワイドショーが終わつたがコタツ魔人のテレビ視聴は終わらない。

二人の刑事が事件を捜査するドラマの再放送があるためだ。

見ても見なくてもいいが、暇なら見るといいうぐうたらスタイル。

悪魔は俺が思っている以上にテキトーで怠惰な存在のようだ。

あと容疑者は全員ぶつ殺せば解決すると言つてのけるあたり、かなり個性的な思想を持っている。

全く解決せず新たな事件が発生すると教え、さらにぶつ殺し、新たな事件……の無限ループが発生して人類が滅ぶ辺りでドラマの意図を理解してくれた。

現代社会の至る所に悪魔は潜んでいると聞くが、ホントに潜めているのか怪しい。

近所のスーパーで買う物を脳内シミュレートし、メモに書きだしているとCOMPが鳴った。

仕事を知らせるメールである。

内容は『龍脈の事件を探つてこいよオラア!』って感じだった。

ちよつと、というか、かなりふわつとしている仕事だ。

仕事を指揮している上の者が納得するような内容でなければ仕事は達成と見做されないし。

山手線内部を塹にしている悪魔や組織をテキストに挙げておこうかな、と戦闘準備。

証拠としていくつかの死体を積み上げて、さらに証言するモノも用意しなければいけないからな。

海外旅行に持つて行くようなサイズのスーツケースに銃や銃を詰め込む。

なぜスーツケースかというと、でかいから。

もっと取り回しが良いモノとか、カッコいいのが使いたい。

チエロのケースとか使っている人もいるらしいし、楽器系もいいかもしれん。

理想は手ぶらなんだが。

かなり巨大な組織なら悪魔などのように道具を情報化し、COMPに収納できるとか聞いた。

結構、いや、かなり羨ましい。

スーツケースもチルノやルーミアが座るから悪くないんだけどね。

コタツ魔人に、夕飯は冷凍食品かインスタントで済ませるように伝える。

ついでに遅くなると思うから、俺らは外で食つてくるとも付け加える。

するとコタツ魔人はチョコを頬張り、少しばかり思案して自分もついて来ると言い出した。

食欲に突き動かされたのだろうか。

夕飯はファミレスとかそんな辺りと伝えたが、アリスゲームの準備もしたいからとついでに来る意思は変わらないらしい。

まあ、いいけどね。

電車で揺られながら龍脈の調査に向かう。

龍脈の存在する場所には師匠連の勢力地は無いが、どこかしらが何か起こしたら超ヤバいな感じで調査に駆り出されたわけである。

というか、龍脈はクズノハだかヤタガラスとかいう由緒正しき正義の霊的機関が見張っているんで、そう大きな行動は取れない……はずなのだ。

師匠連や他の組織も一応は社会のバランスに組み込まれているので、普段はクズノハとかヤタガラスには大々的な摘発を受けないが、こういつた大掛かりな事件を起こす目を付けられるし。

特にクズノハのライドウとかいうのが危険とか。

前転でメギドラオンを回避して、ポン刀で戦艦をぶった斬るとか。

……なんだ、悪魔か。

この仕事の前任者は行方不明、情報も目立ったモノは無し。

裏路地の更に裏、日陰者ワールド全開な場所を探ってる途中で連絡が途絶えたとか。死んだか、逃げたか。

多分、死んだのだろう。

顔も形も知らないが、面倒なやつである。

実は仕事がもう一つあるのでさっさと解決しておきたい。

前に戦った異能者が保護していた少年だか少女の後見人というか、鍛えるというか。

師匠的な事をしなければならぬ。

保護者をぶつ殺した俺にさせるとか師匠連は螺旋がぶつ飛んでるに違いない。

師匠連の上がぶつ飛んでるから他の組織に逃げて、保護した少年だか少女をきちんと育てたいとかだった俺が悪役すぎて泣く。

邪教の館に立てこもったから多分、そんなまともな理由なんてないのだろうけど。

スーツケースを引きながら電車を乗り換えようと駅のホームに降りたあたりで、気の流れが悪いことに気付いた。

人が多く、酷く混雑しているために流れが澱んでいるのだろうか。

ちよつとよくわからぬ。

龍脈が関係していたらクソゲーに突入する予感、難易度的な意味で。

乗換えるのは中止にし、駅から出てチルノと意見交換。

レベルが高いと認識がずれるというか、そんな感じで一般人には悪魔を感知するのは難しくなると言うのは便利である。

大つぴらに悪魔を出しても問題ないから。

凶悪な悪魔を出したらハイパーヤタガラスタイムだが、チルノもルーミアもちよつと強いぐらいの妖精だから大丈夫だし。

もちろん、コタツ魔人のきらきーとかゴーレムはアウト。

チルノとしてはMAGの流れが不自然だという。

面倒な事件の予感だ。

どう考えても☒然るべき☒組織が調べる案件としか思えない。

これはもう、師匠連に指示を仰ぐしかないわ。

なんて考えていたら、赤い髪の毛が特徴的な女性に声をかけられた。

鈴を転がしたような、と表現してもいいくらい透き通った声だった。

赤い縦セーター、ミニスカート、白い外套、澄んだ蒼い瞳……。

萌えの権化みたいな人物であり、俺よりも少し年上に見えた。

普段ならお近づきになりたいような美貌であるが、その身から放たれる力を感じると遠慮したくなるわけで。

素の状態で俺よりも幾らか強いし、多分本気を出すともっと強いのだろう。

「道に迷いましたか？ 交番ならあちらですよ。では私はこれで……」と紳士然として躲し、駅へ戻ろうとする。

が、失敗。

回り込まれてしまった。

そして、上目遣いで「ちよっとお話しませんか？」と聞かれたら男としては頷くしか

ない。

女性の美しさには参ったわ。

流石の俺も愛らしい女性には負けます。

背中が冷や汗だらけなのは関係……ありまくり。

恐怖のほうが強いかもしれん。

……回り込まれるとき、早すぎて知覚できなかつたし。

近くの喫茶店に入り、飲み物を注文してから本題に入る。

女性はアテイさんと名乗ったプロハンターであり、諸々の事情で彼女が適任と判断されたために日本にいるとか。

ハンターは人間よりも飛び抜けた人物の特殊職業みたいなものだ。

霊的な仕事も専門にこなしているらしいが、日本では知名度がまあまあ低い。

異能を使いこなしてうんたらかんつたら……俺には関係ないと思っていたので知識がふわつとしてるだけだ。

決して俺が物を知らないだけでは無い、はず。

アテイさんは無色の派閥を追っていて、目立った活動を起こすであろう場所を探っていたら東京にたどり着いたのだからか。

無色の派閥は、決まった活動場所を持たないダークサマナーの群れのなやつだったはず。

本拠地なしで世界中を飛び回る、というかゲリラ的に活動している厄介な集団だ。

宗教戦争とか紛争などに積極的に参加しているらしい、多分暇人の集団なのだろう。

で、そいつらが東京で事件を起こすつぼいので地理に詳しい人を探していたが都合良く見つかったらしい。

そう、俺である。

断りたいが、喉から手がまろみ出そうなほど魅力的な伝手でもある。

クリームソーダにばくついてご機嫌なきらきー（骸骨）を横目に苦渋の決断、手伝うことを決めた。

ちなみに手伝うことを伝えて喜ぶアテイさんを見たら、伝手とかそんな考えが浄化されそうになった。

ぐう可愛すぎてヤバイ。

キネマトグラフ（キノ）

呪われた痣は、魔王の贄の証。

彼が死亡した際に、そのMAGに応じた魔王を呼び寄せる。

師匠連

痣への対処に失敗した。キネマトグラフに遠くで死んでほしいと願っている。

東京タワー、スカイツリー

龍脈をうんたらしている。

山手線

円環を成してうんたらで、タワーの龍脈パワーを循環させて結界をうんたらさせるはずが、負の連鎖が起こっているっぽい。

駅前前の喧騒を忘れそうなひっそりとした街角の一角にその喫茶店はあった。

仲の良い老夫婦が二人で営んでいるらしい、注文する際にアテイが尋ねると年季の入った皺を寄せて老婦は嬉しそうに話してくれた。

どのくらいの日日を供に歩んだか、店内の中央にある柱時計の梟がお気に入りだとか、老婆の相方である老夫自ら選んで仕入れているため料理には自信があるとか、そういった取り留めもない話だ。

アテイは人と話すことが好きな性分で、そういった世間話をするのを好んでいた。ただ、今は自分一人ではない。

それを思い出してはつとしながら、無理を言つて連れてきた少年に意識を向ける。

少年はやや俯き気味で、机に乗った真ん丸とした氷精の頭をゆっくりと撫でていた。

それは、とても穏やかな表情だった。

そういえば、と闇精が彼の膝上ではしゃいでいたことも思い出した。

今は静かな様子で、老婦と話している間に眠ってしまったのだろうか。

喫茶店に入るまでの道のりで、氷精と闇精はどちらもかなり幼い印象をアテイに与えていた。

やはり俯いているのは、そういう理由なのだろうとアテイは思い至った。

よくよく見れば、氷精を撫でていないもう一方の腕も僅かに動いているようだった。

同様に、膝上で寝ている闇精を撫でいるのかもしれない。

そう思うと、まるで赤子の子守りの様だとアティは思わず微笑んだ。

それは、久方ぶりに浮かべた穏やかな笑みだった。

アティ自身が、自らの目的のために飛び込んだ後ろ暗い業界の日々は心身を削る日々だった。

後悔することは決してないが、辛く厳しいと強く感じることもある。

だからこそ、彼らのように争いの無い一時がかけがえないモノに感じられて……。

視線に気づいた少年が、俯いていた顔を上げて首を傾げた。

張り詰めた糸のように気を張っていたアティが、呆けた様子を見せていたからだろう。

途中からアティと同伴者の少年を黙って見守っていた老婦は「まあ……。」と、実に楽しそうな笑いとともアティの傍へと近寄った。

そして、頑張つてねと囁いてゆくりと店の裏へと戻って行った。

言われた言葉が理解できなかったが、先刻までの自分の様子と結び着くことで、アティの顔が徐々に赤く染まった。

「違うんです、そうじゃないんです」といなくなった相手に言い訳しながら、羞恥のあまり両手を顔の前で勢いよくばたばたと振り出した。

店内には暴風が吹き荒れ、柱時計から梟が飛び立った。

梟が生きていたことに驚いていた少年は、生み出され続けている惨状を前に再び首を傾げた。

「すみませんでした……」

アティが消え入りそうな声とともに謝罪を告げ、頭を下げた。

赤色の髪が流れるよう、重力に引かれて幾重もの毛先が薄茶色をした木製の天板に広がった。

毛先はマグネタイトの影響によるものか、生来のものか、薄く緑色に輝いていた。

鮮やかな赤が、マグネタイトの緑光と天板とで映え、幻想的な美しさを醸し出した。た。

「いえいえ」

雑草のような、と表現できる乱雑に切られた短髪の少年が苦笑いを含んだ声色で答えた。

その言葉にアティはちらりと目線を上げ、重力に負けるように力なく頭が垂れた。

出会ったときは軽く立っていた少年の髪が、今ではサボテンも斯くやというほどに

棘々と逆立っていた。

注文した辺りでは少年が俯いていたが、注文の品が並べられた今はアティが俯く番だった。

店内に迷惑がかかるから落ち着くようにと少年に注意され、絶妙な技量で少年に風を当て続けていたのだ。

それも、一般人ならば体がどこかへ飛んで行くような、無理すれば首がもげてしまうほどの暴風だった。

少年と比べると、穏やかな笑みを浮かべられる心温まる理由でないのがアティには恥の上塗りに感じさせていた。

店の奥で時折こちらに視線を向ける老婦の穏やかな笑みが、気を逸らすことを許さず、顔の赤みが取れるのはもつと先だろう。

「……あの、キネマトグラフィさん」

いつまでも落ち込んでいるわけにはいかないとアティは顔を上げ、少年——キネマトグラフィ——と目を合わせる。

影を思わせる闇色の瞳は深く澄んでいて、揺らぐことの無い湖面のようだった。

その深さが何だか気になって、澁みの無い黒をジッと見つめた。

眺めていると吸い込まれるような感覚を覚え、アティは無性に気恥ずかしくなって、

無意識に両手をばたばたと動かして風を作り出していた。

それを見て、何かに気付いたようにキネマトグラフが「ああ、失念していました」と
眩きを漏らした。

「キノでいいですよ、長いですから。その代わり、私もアテイさんと呼んでもいいです
か？」

「あ、はい。私は構いませんけど……」

「それは良かった」

キノは口の端を軽く上げて小さな笑みを浮かべた。

それを見たアテイもつられる様に柔らかな笑みを浮かべた。

そして、店の奥の老婦も皺を寄せながら笑っているのを視界の端に捉えたアテイの顔
が赤く染まった。

妙に意識してしまうとアテイは内心で困惑していた。

どうも会話するのもちぐはぐな感じで緊張してしまうのだ。

ハンターになる前は皆無だったが、今となつては異性と会話する機会は度々あった。

情報収集やハンター試験、街中での噂話、戦場での会話……。

よくよく思い返してみると金銭や命のやり取り、良くて世間話、と殺伐とした場面ばかりだ。

アテイにとって今ののように気を抜ける状況でなど、ハンターを志してからは全くといっていいほど無かった。

いや、キノは悪魔を使役するサマナーなのだから油断するわけにはいかないとアテイも理解している。

理解しているが、切り分けたケーキを手ずから食べさせている光景を見せられている身としては緊張を保ち続けるのは難しいというか、本音としては無理と言いつつ切れた。敵意などを感じれば即座に臨戦態勢に入れるが、その節は一切ない。

キノの意識はアテイに向けられているが、それは対面に座って会話しているからであって、妖精は完全にお菓子にしか集中していないから。

妖精たちから感じられるレベルも10より下、キノ自身も20には届いていないだろう。

素の状態でのアテイのレベルは40を超えていた、そんな力量ならば例え不意打ちを喰らおうとも咄嗟に反撃で一蹴できる。

そう考えると気を張り詰め続けるのも馬鹿らしくなり、肩の力が抜けるのも仕方なかった。

と、なると思考に余裕が出てきて、普段とは異なった状況に緊張するのも道理……なのだろうかと内心でアティは首を傾げた。

その様子を見ていた闇精——キノと仲魔の会話からルーミアという名前だったとアティは記憶していた——がキノの膝上から身を乗り出し、短い手足を精いっぱい伸ばしながらフォークを差し出していた。

先にはケーキが刺さっており、食べさせてくれるようだった。

思案していた様がケーキを食べたそうに見えたのだろうかと思つたとき、年端もいかなない少女のような姿をしているルーミアに差し出されたケーキを貰う。

なめらかなクリームとふわふわスポンジ生地が控え目な甘さとともに口の中で消えていった。

甘い物は不思議と気持ち豊かにさせる、そんなことを考えながら自然と微笑んだ。

「ふふ、おいしいですね。ありがとうございます、ルーミアちゃん」

「ん……」

ケーキの登頂にあつた瑞々しい苺を咀嚼していたルーミアにアティが礼を告げる。

すると、アティの視線の先には輝くような金色の後頭部だけが残された。

照れたのだろうか、顔を背けてキノが胸元に巻いている青地の白黒模様が特徴的なマ

フラァーに額を押し付ける様に埋めてしまったためだった。

キノがその金髪をゆっくりと撫でると、少女特有の柔らかな髪の毛がさらさらと流れた。

褒めているのだろうと判断したアティは再度子供の躰けのようだと印象を抱き、更に笑みを深めた。

珍しいほどに純粹かつ善良。

それがキノと彼の仲魔への評価だった。

「さて、目的は先ほども申しましたが、『無色の派閥』の追跡なのですが……」

声をかけた目的を改めて切り出したアティだったが、すぐに言葉に詰まった。

話したことで、終わってしまうのを恐れたのかもしれない。

本能的に止めてしまったのだ。

いくらか逡巡し、目の前の光景を細めた瞳で見つめた。

懐かしい思い出を眺めているような、どこか眩しいものを見るような、そんな遠い残

滓を眺める表情だった。

「食べ終わってからにしましょうか」

「それは有り難いです。どうもウチは食べるのが好きらしくて」

「あはは……。でも良い事だと思いますよ、私は」

今だけだから、内心でそう付け足した。

食物への興味等といった様々な要素が妖精たちに見た目通りの子供の様な好奇心を抱かせているのだろう。

だからこそ、サマナーと友好関係が築けている。

キノの善良さと妖精の純粋さが黄金比にも近い比率でバランスを取っているのだろう。

それがアテイにはとても羨ましく、ひどく儂いものに見えた。

悪魔は本能として強さを求める。

いつかきつと……いや、見た感じでは限りなく近い将来、サマナーの、キノの能力が追いつかない時が来るだろう。

もしくは、大量のマグネタイトを摂取することで強さを、人や悪魔の味を知ってしまつたときか。

その時、この美しい光景が絶望へと変わるのだろうか。

悪魔と接するこの業界では誰もが通る必然、それを思うと胸に鑢を掛くようだった。

「私は特に急いでませんし。だから、ゆっくり食べましょう。……ね？」

アテイの口から無意識に出たのは祈るような、懇願するようなそんな言葉だった。

彼らを見ていたい、もつとこの穏やかな空間を過ごしたいと望んだ結果だろう。

疲れ切った精神が渴望する麻薬にも近い安らぎ、そのためだけに長引かせているの

だ。

その行為が奇跡的なバランスで保てている関係を崩しかねないと理解しながら、どうしても離れることができなかった。

自身の強さに充てられて、事件に巻き込まれて、何らかの事故を起こして……。

可能性が頭の片隅で積み上がり、それを無理矢理崩して忘却の彼方へと追い込んだ。

他人の、それも街中で偶然見かけたサマナーの最初だけの幸せを削り、糧にする自らの醜さを垣間見た気がした。

残り少ない砂時計から砂を掠める自分は、彼らと別れた数日はきつと罪悪感で眠れな
いだろう。

それでもいいから、もつとこのぬるま湯の様な多幸感に浸っていたかった。

それがまた、隠れた醜さを見つけたようで泣きそうになった。

アテイ レベル：40—50

無色の派閥による儀式によって滅んだ村の生き残り。集合無意識に接続して覚醒できる魔剣を武器としている。つまり、儀式↓魔剣↓ってれーみみたいな。

無意識から力を得ているので信仰によるステータスの増減はほとんどないため、どこ

でも活動できるとか、そんな感じの細々とした設定もある気がする。外国は宗教色が強いから地形無視は重要な気がしなくてもない。

キノ

魔王のあれにMAGを食わせて体感レベルを10—20程度に誤魔化している。OMPで見られるとばれる。霊媒体質っぽいやつ。

妖精

MAGの量でレベルを調整している。悪魔は弱くなる（レベルが下がる）ことを嫌うが、キノの妖精はその限りではない。元のレベルが90近くなので、10だろうと40だろうと低いことには変わらないとかそんな感じ。

ぐしやぼん2

— 1

甘味が食べたいのだとアピールしてくる魔人きらきりを召喚、その代わりに眠ってしまつたチルノを送還する。

俺みたいな木っ端のサマナーが魔人を仲間に行っていることに驚いたのか、アテイさんが目をまんまるにして何度もぱちぱちと瞬かせていた。

まあ、確かに魔人はレアだよな。

俺の力量だと仕事で滅多に見ることないし、魔王はあるけど。

魔王はそもそも人生で一度あつたら不運つて話なので、俺の運は枯渇してるのかもしれない。

ただ、その不運な巡りのおかげで出会えたチルノとかルーミアが可愛いからプラマイゼロの可能性もあるっちゃある。

落ち着いたのか、アテイさんは魔人きらきりの少し上の中空を凝視していた。

やっぱ強いと何となくわかるのだろうか。

クリームソーダをノリノリでパクついてる骸骨、魔人デイベットはこの世界に介するための道具に過ぎないこととか、その本体である雪華綺晶が別の次元にいることとか、色々。

強いつて羨ましいけど大変だわ。

俺個人の力ではきらきーの本体について視ることも感じることもできないが、『邪教の館』でルルーシユに補助してもらって一度“見た”ことがある。

魔人である骸骨の手足に茨が巻き付いており、まるで操り人形のようなようだった。

茨はその頭上数メートルほどの中空へと伸びており、その先は奇妙な歪みがあるだけだった。

その歪みはルルーシユ曰く特殊な異界らしく、魔人デイベットを召喚することで一時的に開き、この世界に影響を及ぼすことができるという話だ。

こうしてみるときらきーが物凄く強そうな話だが、実際は不明だ。

異次元の扉を開くためのエネルギーはかなり多く必要だが、だからといって中身が強いとは限らない。

弱いとも限らないけど。

きらきーからちよろつと話を聞いたのだが、本隊の彼女は核しか無いらしく、それも剥き出しらしい。

核というのは悪魔を構成する重要な器官で、ここが壊されると現界できなくなるのだとか。

普通はマグネタイトと炭素を練り込み、擬似的な肉体を得るが、きらきーにはそれが無理だとも言っていた。

設計図を持つていないのが原因のようで、何かしらの方法で殻を得なければ現実には出て来れないようだ。

マグネタイトで無理やり肉体を練れば一時的に限界できるとドヤ顔で言われたが、異界の扉をきらきーが出て来れる程度まで開き、次いで殻を練る必要があるのだから、彼女が日の目を見ることは無いように思える。

相手は悪魔だし、俺と価値観は異なるのだろうけど、不憫だと思ってしまう。殻が無いと言うことは何にでもなれるということでもある。

彼女はどんな姿になりたいのだろうか。

害を及ぼすことは無いとわかってくれたのか、緊張気味だったアティさんはお茶を飲むのを再開しようだ。

もう既にきらきーの茨よりもルーミアにケーキを食べさせる楽しみへとアティさん

の興味は移っていた。

きらきりの対有機生命体コンタクト用スケルトン・インターフェイスはどう見ても骸骨とかゾンビなので、アテイさんの気は引けない。

アテイさんとルーミアの様子をじっと見つめる姿は、何か感じ入るモノがあったのだろうかと思わされた。

ほら、とフォークでチーズケーキを切り、骸骨の口元に持つていく。

特に隔たり無く骸骨はケーキを咀嚼していた。

何も言わないが、空洞の眼窩が俺を見つめていた。

もつと欲しいのだろう。

まあ、好きにするといひさ。

半ばルーチンワーク気味にケーキを食べさせるが、それでもどこことなく嬉しそうだつた。

アテイさんもちらちらとこちらを見てくるのだけれど、チーズケーキが好きなのだろうか。

ルーミアにパフェを与えながら、アテイさんと仕事の話を進めることにした。

最近は手当が増え、福利厚生もカバーしてくるようになってきた。

任務中なら経費として食費とかも出してもらえるので、好き勝手飲み食いしてもいいんだが、仕事を終わらせないと帰れないのだからやるべきことはやっておこう。

現状、俺の仕事は二つある。

一つ目は以前『邪教の館』で倒した異能者が後見人となって面倒を見ていた少年だから少女だかを育てることだ。

これは長期的な任務の上、達成の判定が不明なので流れに身を任せればいいだろう。

二つ目は龍脈の調査であるがこれは厄介だ。

確かに龍脈の情報はオカルトに連なる者なら興味を持つが、そもそも俺たちのような日陰者が龍脈の管理に執心するはずがない。

何をするにしても規模が小さいため、都合よく使えるときに勝手に使う電気泥棒のような動き方で問題ないのだ。

本来の意味としては非友好的な連中に力を誇示するという体面の問題であり、平和解決は望まれていない。

表裏の治安組織が動かない程度で暴れ、相手に損傷を与えることで、師匠連が舐められないようにする、これらをクリアして初めて任務達成だ。

下っ端だからと面倒な仕事を回されたものである。

単騎でやらせる仕事ではないと思えないし頭が沸いているのかもしれない、それも誰かしらが東京で魔王召喚でも行おうとしているのだろうか。

そんなわけなので、アテイさんの助力が得られるかもしれないのは大変有り難い話だ。

完全に味方と信じるには良くないと普段から言われるが、ここまで近づかれて敵だったら詰んでるので問題ない。

そのアテイさんは、無色の派閥の調査、というか追跡している状態だ。

龍脈に手を出しているかはわからないが、周辺で活動しているのはわかりきっている段階だとか。

無色の派閥に対して闇雲に強いアプローチを掛けると逃亡され、探すのが難しくなるので、重要な状況で致命的な一撃を与えたいと考えているようだ。

ちなみに俺に声をかけたのは、特に理由もなくなるとなくらしい。しいて言えば普通そうだったというか。

脳内お花畑感漂ってる。

マジであたままだいじょうぶですか……^q

アテイさんについてかなり心配になりつつ、話を進める。

目下のところ、俺たちが行うべきなのは情報収集だ。

龍脈について調べ、鳥の視界に入らない場所を洗う必要があるだろうか。

土地勘はある程度はあるが、やはり十分ではない。

俺の知っている龍脈に沿った魔力溜まりや霊地は有名すぎる物しかなく、無色の派閥がアクションを起こしても勝手に鳥に見つかって蹴散らされるだけである。

目立っていない場所は力が微弱すぎてちよつとした心霊スポットでしかない。

わざわざ日本に来てまでへマを起こす阿呆だったらこつちとしても撫で斬りにすればいいだけなのだが、さてどうしたものか。

このままだと進展は望め無さそうなので、アテイさんと別れて行動することにした。

ただ、アテイさんが一人で行動するのは寂しそうなのでルーミアをお供に付けた。

ルーミアは闇を操るので日が暮れば隠密性能が高まるし、アテイさんも気に入っていたようなので、親交を深めてもらいたいと思つたわけだ。

魔王の呪いに無駄に集まっていたマグネタイトをルーミアに吸わせる。

また、呪いが集めていたマグネタイトを結晶化させた不活性マグネタイトの塊もお弁当として持たせる。

魔王がこちらの世界に来るためのマグネタイトだが、ルルーシュが抽出するコツを教えてください。

やっぱルルーシユってすげえ！

戦闘があろうとも今日は供給しなくても問題ない程度には与えられたはずだ。

というか、結晶を齧ったらかなりのレベルになるだろう。

まあ戦闘は生じないから意味ないけど（フラグ）

ちなみに、ルーミアに手作りのお弁当だと言って不活性マグネタイトの塊を渡したら「ずるい」「依怙鼻屑ですわ」「わ、私も欲しいです」などと騒がれたので、結局チルノときらきー、アテイさんにも振る舞ってしまった。

これがサマナーの甲斐性ってやつらしい。

魔王の痣が役立った珍しい場面である。

場所を移して『邪教の館』でルルーシユに話を聞くことにした。

蛇の道はなんとやら、俺よりも裏稼業歴が長く知恵を持っているのだから頼ったほうが良いに決まってる。

借りを作ることになるが、いずれ返してもらおうからいいのだとルルーシユも言ってくれた。

いずれ『俺はルルーシユとの約束は絶対に守らなければならない』のだし、代わりと

して存分に外付けCPUになつてもらおう。

ルルーシユが東京の地図を広げ、龍脈に印をつけた。タワーや皇居を中心とした広い範囲が龍脈の影響下だ。さらに地下空洞にも印を付けていく。大雨などで処理しきれない水を流すための、人工的な空洞だ。東京にはそういった空洞が数多く作られている。

最後に、最近起きた事件をマッピングすれば完成らしい。

一般人が起こした殺人などの事件を省き、裏で出回っている警察内部などの情報が得られないようなオカルト的な出来事を絞れば作業は完了だという話だ。

俺たちにとって一般の問題は淀みでしかない。

大事なのは世の中から浮いた噂や幻といった上澄みのみだ。

上記の作業から重要な地点が浮かび上がってきた。

それらの地点を集計すると、山手線沿いに等間隔で半円を描いていた。

地脈の流れからは有り得ない魔力溜まりが若干だが生じている地点も複数個所が確認されている。

それらの地点では多数の行方不明者や妖怪の目撃情報、周辺での異臭騒ぎなどが起きているが、原因が特定できず、ガス漏れによる騒ぎとして收拾が付いている。

奇妙な現象が起きるのは決まって満月のようで、無色の派閥の息が掛かった連中が観

察されているとか。

しかも満月の一夜だけで複数の地点に、それぞれ集まっているようだ。得られた情報を組織に送る。

真面目にこの事件の解決は俺には厳しい。

任務終了として解放してくれないだろうかと一縷の期待を込めた。

が、駄目。

突入してこいよオラア！という任務を新たに頂いた。

はあ……。

あー、ないわー。

マジないわー。

ソロサマナーを、外国が拠点のダークサマナー組織にぶつけるとかマジないわー。

流星に複数点の攻略は無理なんですけお……と泣き言を伝えると、俺が対応できない場所に師匠連の幹部級が幾人か投入されるらしく、中にはアシタカの爺さんも参戦するようだ。

俺をダークサマナーにした爺さんとか複雑な心境である。

いやまあ、あのままだったら普通にぶち殺されて家を取り上げられていただろうか、恩のようなものはあるけど。

ただ、家が異界化しているので帰る許可が降りないというか接收されているというか。

ルルーシユとナナリーと一緒に茶を飲む。

男はいつだって優雅たれ、ってやつだ。

機械的だったナナリーも少しは人間っぽさを感じられるような気がする。

仕事マジだるい死ぬ、と愚痴ってたらルルーシユが参戦してくれることになった。

ルルーシユ自身は未だ中立でいる必要があるのです、弟のロロと作ったばかりの円卓タ
イプの造魔が出張ってくるらしい。

弟のロロなら檻樓雑巾にしてもいいとか。

ブラコンすぎる気がある以外は良い子なのに、報われなくて可哀そう。

ロロは「兄さんが僕を頼ってくれている……！」とヘヴン状態だった。

……本人が幸せならいいと思います。

邪教の館は中立なのだが、代理とはいえ戦力を出しているのだろうかと疑問が一つ。

ルルーシユの答えは「どうせ誰もがそんなことを気にしている暇など無くなる」だそ
うだ。

意味深だぜえ……。

目の前をゆつくりと飛ぶルーミアの後を追いつながら、アティは雑踏の中を進んでいった。

輝くような金髪の美しい童女の様を呈したルーミアは、その実、周辺に存在する人間を一瞬で肉塊へと変貌させるほどの力を秘めた妖精であった。

だが、誰も、何の反応も示さない。

人形のように整っている容姿にも、眩いほど美しい金色の髪にも、宙を飛ぶという怪奇にも、どれほど目立っていようと、誰一人として目を向けない。

人は強さに惹かれ、恐怖から目を逸らす。

それが本能だった。

そんな本能を利用した隠密は、悪魔が蔓延る世界の裏では常識だった。

悪魔が飛んでいても見えず、超人が生活していても誰も気づかない。

歪こそが常識だった。

強くなるほどに一般人にバレることは極稀となり、重火器を携行しようとも気ままに街を歩くことが出来る。

もちろん、映像記録として残るが、やはり気付かれることは少ない。

誰も、ルーミアを見ない。

誰も、アテイを見ない。

見ない、見えない、見たくない。

強さの代償があるとするとするならば、世界から消えたように扱われることだろう。

他人と接する煩わしさを排する代わりに、誰からも手を差し伸べて貰えない。

普通を忘れ、孤独を癒せない。

一般に溶け込むように必死に力を抑え、壊れないよう繊細に扱いつつ自ら相手にアプローチする、そんな行程を踏めば一時的にだが、常識の世界に紛れることは可能だ。

だが、それは紛い物の結果でしかない。

自身を抑制した、我慢の末の結果。

神経をすり減らし、緊張で息苦しく感じて、繊細な作業を繰り返し、そしてひどく面倒な手順の末に得られるひと時。

これが代償であるならば、重いのか、軽いのか、アテイは思考し、やがて止めた。意味の無い物だ。

今更弱くなれない、なりたくない。

それでも、普通を求めてしまう。

だからこそ、昔のように、穏やかだった日常を送りたいと望んでしまう。

キノや仲魔の妖精たちとの邂逅は、忘れかけていた日常を思い出させてくれた。あれは掛替えの無い物だった。

思い出せば、もう一度あの穏やかな時を過ごしたいと思ってしまう。

一度だけでは無く、何度でも。

まるで麻薬のように依存してしまうほどに、心の飢に染み入る甘美さだった。

とはいえ、最後に出していた魔人には驚かされたが。

アテイよりも遥かに弱いとはいえ魔人だ。

それを仲魔に持つには、強さは勿論、死人が生き返るような、魔王と出会ってしまうような、細くて奇妙な縁が必要だ。

キノは、彼は、どんな人なのだろうか。

あの穏やかな雰囲気誘われるように声をかけるには、早計だったのかもしれない。だが、やはりあのひと時は堪らなくなるほどに魅力的だった。

「上の空だけど、どうかした？」

前を飛んでいるルーミアが、身体ごとアテイへと向けた。

透き通るように赤い瞳には疑問が浮かんでいる。

後ろを振り向いたままだというのに、止まらずに飛び続けている。

それでも誰にもぶつからずに進んでいるのだから器用な物だ。

速度は変わらず一定。

車並みの速さは出ているのだから、決して遅いわけではない。

もしも一般人に衝突すれば、最悪の場合、鉄臭い柘榴が生まれるかもしれない。

それでも誰も犯人には気づかず、埋没していた不発弾による不幸な事故として処理される。

運が良ければ下手人は裏の怖いお回りさんに一刀両断とばかりに処理されるが、静かにすべて終わりを迎える。

「ああ、いえ。何処に向かっているのかと思っていました」

「……お薬屋よ」

誤魔化すように返答したアティの言葉に、苦々しげにルーミアも答えた。

薬が苦いから苦手なのでしょうか、と内心でアティは首を傾げた。

妖精の見た目は幼いため、どうにも子供を相手するような気持ちになつてしまつていた。

「えっと、薬が苦手、とか？」

「別に、嫌いじゃないわ。サマナーが手ずから飲ませてくれるから」

小さく消えるような声で「どちらかと言うと、好き」とルーミアが呟いた。悪魔が飲む薬と言えば専ら魔石である。

人が発するエネルギーである生体マグネタイトによって編まれたその身体は、魔法行使ならずとも活動しているだけでもエネルギーを消費する。

そんな体の薬といえ、やはり魔石などの不活性マグネタイトだ。

ルーミアのサマナーであるキノは、自らが溜めた生体マグネタイトを超高純度の結晶として渡す特技を持っているのをアティは思い出した。

生成した魔石を、あーんとばかりに彼は仲魔に飲ませるのだろうか。

「そうじゃなくて、魔女がいるのよ。C・C^シ・C^ツって性格が捻じ曲がってるのが」

「あー、そういう理由で……」

「あれはダメなのよ。ヒトの魂を捨てたから殺しても死なないし溶鉱炉にでも押し込んで溶かし続けないと。底意地が悪いあれをサマナーに近づけてはいけないの」

悪魔に関係する者たちは、大抵何処かの螺子が吹っ飛んでいる様だ。

魔女の類は密かに薬などを売ってくれるが、性格は非常に悪く、難題や罨を仕掛ける者も多い。

悪魔を研究しているだけの研究者や錬金術師のほうが、好奇心を満たすだけで満足するため、時としてまともだ。

「嫌なら戻りましょうか？ キノさんも何も言わないと思いますけど」

「情報集めに関してサマナーは気にしないでしようけど、私には中二に渡された荷物があるのよ。サマナーのためにも、これを届けないといけない。届けなかったら今度はサマナーが直接出向くわ。それは駄目」

現在向かっているその魔女とやらが気に入らないであろうルーミアは、眉間に皺を寄せていた。

「行きたくないのに行く、というジレンマが無邪気な妖精に、人間さながらの様相を与えていた。

「あれは馬鹿で阿呆の癖にサマナーを困らすから。サマナーは片腕なのにピザを焼かせようとするのよ。サマナーには義手があるから不便だろうともサマナーなら問題ないけど、それでもピザを焼くのは間違っているわ。サマナーは優しいから文句も言わずに焼くんだけど、サマナーの手はあんな馬鹿尻のピザを焼くためにあるんじゃないのに。そもそもあのしりーっーなんて卑猥なバカ魔女は食べなくても死なないクセに無駄に食欲に溢れていて……ほんつとデブになつて糖尿になつて好きなモノを食べられずに苦しんで死ぬばいのに」

サマナーは、サマナーは、サマナーは……。

ルーミアが延々と魔女とやらの文句を交えつつ、サマナーを連呼し、やっぱり私がい

ないとダメなのよ、と締めた。

アティが思い返せば、サマナーであるキノから離れた時も少し不満そうだった。

「キノさんのことが好きなんですネ」

「それはまあ、当然」

濁った瞳でルーミアが眩く。

ルーミアの脳裏に浮かぶのは、人々の信仰によつて燦然と輝くあの太陽の化身だ。

あれは人に愛されていた、だから強かった。

その強さに興味があつた。

それだけだった。

「あの雑魚へ天使よりも、ジャンク似非魔人よりも、ずっとずっと……」

愛し、愛されたい。

熱に浮かされたように頬を赤らめたルーミアの口の中で、その言葉は音とならずに溶けて消えた。

「はあ、羨ましいですね」

その様子を見ていたアティが、不満げに言う。

悪魔に分類される妖精ですら平穏を持っているのに、人間のはずの自分なんて殺伐とした世界に生きているのだろうか。

「存分に羨ましがるといいわ、悪魔人間」

「……まだ悪魔人間じゃないです。半分以上人間です」

「でもそれって無理な儀式を為したせいで合体する際に悪魔側の自我が空っぽになっただけでしょ。ああ、でも触媒を考えるとデビルシフターのほうが正しいのかしら」

「……普段は人間ですから」

「そーなのかー」

棒読みのルーミアに、ぐぬぬとアティが口を嚙む。

何を言っても、童女に煽られるだけなのだから、大人しくなるしかない。

キノの前だと無口で可愛いのに、とアティが内心で呟く。

「でも戦いになると人間ではなくなるんですよ」

にやにやと笑いながら飛び続ける妖精の後を追う。

「サマナーは何時までも何処までも普通よ。弱いけれど貴女が望む物を持っている」

キノはアティが失った、陽だまりのような平穏の中にいる。

安らぎを持っている、与えてくれる。

怯えず、尊重してくれる。

普通を思い出させてくれる。

人間として、愛されるべき個として、生きられる。

仲魔である妖精たちは、当然その恩恵を受けている。

アティにはそれが羨ましく、ひどく妬ましい。

普通で居られるのなら、力など要らなかつた。

何も無いから、復讐のために力を求めた。

ただの人間でいたかつた。

偏見なしに、普通に愛されたかつた。

「サマナーは凄いのよ。魂がヒトのまま、強くなっている。小さい器が、危機に瀕すると無理やり大きくなる。その限界を超えるときに放たれる魂の輝きは尊くて美しい。その魅力は、きつと本物の悪魔にしかわからないわ」

弱い様を愛し愛されるのも、強くなる度に輝きに魅せられるのも、どちらも素晴らしくて心地よい。

熱の籠った言葉でルーミアがアティに告げた。

「でも、穏やかに過ごせる陽だまりは愛故に有限よ。だってサマナーは聖人じゃないもの。誰も彼も手を差し伸べて愛する、なんて叶わない」

外から見てるだけの貴女は今、どんな気持ち？

ねえ、どんな気持ち？

と、追撃とばかりに仲魔として安置にいるルーミアが煽る。

幼気な妖精はその小さな身に愛を受け続けられる。

アティは仲魔になれない、人間だから。

人間で居たいから。

友として、時折与えられる陽だまりの端で安穩とみじめに眠るのか。

それとも深く踏み込んで、元いる住人を押し出して陽だまりの一角を占領するべきか。

「何にせよ、サマナーの隣は私の場所よ。欲しければ奪ってみたら？ ……できるものなら」

今を逃せば孤独に戦い続けてひっそりと歴史の裏で眠る事を約束される女を前にして、残酷な妖精が囁いた。

暴力が支配する世界で、億が一の奇跡で出会えるであろう平穩を与えてくれる餌を吊り下げられて、アティは自ずと歯ぎしりした。

目的地に辿り着いた先で起こる魔女vs闇妖精の仁義無き争い。

それが飛び火して、二人の悪女から「平穩が無くてNDK」を連呼されたアティがブチギレて開催される大乱闘スマッシュシスターズまで、あと十五分。

件の儀式が起きる満月まであと一週間くらいだ。

それまではちよつと長い休暇として、遊んで過ごすでしょう。

事件が起きる前に組織として師匠連が動いているだろうが、末端の俺は戦闘準備だけである。

事件を止めるのは、其処彼処で情報が流れているらしいし、ヤタガラスとかメシア教、ガイア教などのメジャーな役どころが頑張つて何やかんやしてくれるはずである。

ヒーローがパパツと事件を解決してくれたら仕事も簡単に終わるので、ちよつと期待してみたり。

俺たちのような社会の歯車は会社の利益のために邁進するだけだ。

儀式が完遂して詰みの状態が出来上がったら諦めればちよちよいのジョイやで！つてのが気楽に裏社会を生きる方法だ。

アテイさんもどうせ相手の首魁は本番まで出張らないだろうってことで息抜きしている。

お人よしというか、正義感を持っているというか、そんな雰囲気の人だから毎晩儀式

場を荒らして都会で事件を起こさせるのを辞めさせようかと思つたが、それだと首魁がぶつ殺せないじやないですかという明瞭なお返事を頂いた。

そもそも、自分たちを見ない相手を助けるほど暇じやないとも。

一理、というか万里ある。

フアミレスに行つてもレベル差のせいで頑張らないと無視されるし、一般人とは縁が結べず関係がひどく薄い。

助かりたかつたら助けを求めてくれないと。

まあ、縁が薄いから助けられるような場面に出くわすなんて有り得ないだろうけど。流石に見えない場所で死なれたら手は出せないし、こればかりはしようがない。

— 4

無色の派閥によつて儀式が行われるであろう日が来た。

ヒーローによつて全て解決、とは行かなかつたらしい。

三日前くらいから空気中のMAG濃度がちよつとした異界クラスになつていて、ちよつとした霧のようなモノが視界を邪魔するようになった。

集団で倒れる事件やペルソナや守護天使といった異能に目覚める事件が多発してい

たことを考えると、かなりよろしくない状況だ。

仲魔を現界させておくコストが掛からなくなってお得だが、逆を言えば悪魔が闊歩しても可笑しくない。

何故悪魔が居ないのかと言えば、急な異界化でMAG濃度が不安定だからとか、異界が浸食されていてそれどころではないとか、そういうのもあるが、集まっている異能者たちが狩りつくしているからだ。

なかなかのお祭り状態だ。

ちなみにこのお祭りの先駆けは、俺たち中小企業の期待の星であるファントムソサエティだった。

再開発された天海市でなんかテロって、クズノハDQNのキョウジが投入されたらしい。

うーん、虐殺が起きるかもしれん。

で、二番手が悪魔召喚プログラムをばら撒いたマジキチテロリストであるステイブン氏だ。

今度はレポートし放題な超技術の塊であるターミナルをばら撒いたらしい。

何処の組織も欲しがって、輸送先の修羅の国福岡が血みどろ大戦争中だ。

次いで、三番手がファイルモンとかいう変態とイゴールとかいう鼻が凄いやつらであ

る。

俺は情報で知っただけなのだが、夢や無意識に現れてペルソナと呼ばれる超常能力をばら撒いてくださいました。

ニヤルラトホテブ説が浮上、夢すらも安全ではないとか悪魔って怖い。

まだまだいるよ、四番手。

なんと未来から来たという男が率いる『パルチザン』という組織が、俺の所属する師匠連のような中小企業に前口上なしに殴りかかり、メシアやガイアに唾吐いたらしい。

情勢を知らないDQNは怖いぜ。

驚愕の五番手、天界からの使者と騙るカルマ教会。

こいつらはなんかわからんが、デビルシフターと呼ばれる悪魔に変身できる連中を解放してくれた。

魂の均衡が不安定なデビルシフターは、外部から取り込んで安定しようとして悪魔を食うのだ。

物足りなければ人間を食ってMAGを求める可能性もあるので危険なのは変わりない。

試される大地に穴が空く、六番手はなんと未知の力によって北海道に空いたシユバルツバースだ。

以前から裏では常識のように情報がやり取り取りされていたが、特になんのアクションもないまま、謎のエネルギーを放っている穴だったのだが、いきなり悪魔が飛び出すようになった。

試される大地は異能者をも試すためにレベルアップしたとでも言いたいのだろうか。

世界の滅びを告げる御使いですらここらで手を引くというのに人間はアクセル全開、七番手。

東のミカドとやらから侍が来たらしい。

これは流石に意味不明である。

人間は手加減を知らないのか、八番手。

陸軍がクーデターを起こした。

重火器を持つてる軍人が東京の其処らに溢れるようになったが、むしろ治安が維持されるくらいだ。

悪魔退治も命がけで頑張ってくれる。

自衛隊つてすげえ、だって悪魔も倒してくれるんだぜ。

若気の至りは何処まで行くのか、十番目は都内の学校で魔界直通の扉をちよつと開いた奴がいるらしい。

あまりの非常識な事態にライドウがぶつ飛んで行ったと聞いた。

泣きの十一番目、翔門会。

メシアやガイアと異なる日本独自の宗教らしい。

なんかぼつぼつと活動している目立たない組織かと思わせておいて、東京の結界を維持する四天王をぶつ殺してくださいました。

日本人にとっては最高に非常識である。

こんなことしたら東京が死んで魔界が生まれても知らんよ、俺は。

華やかなる十二番目。

ガイア教の一部がミロク経典とやらに基づいて、無色の派閥と抗争を開始。

儀式場をいくらか奪ったらしい。

謎儀式を妨害できていることに喜ぶべきか、変な連中が元気なのに困ればいいのか。

そして大トリにしてユダ的、十三番目。

無色の派閥である。

今夜、満月の元で東京の民を生贄にして魔王召喚を行ってくれるらしい。

流石の大トリだ、スケールがでかい。

以上がルルーシュ先生によるお祭りのプログラムだ。

これはもうなるようにしかならないね、と路地裏で白いマスコットのルシベえと愚痴った。

ルシベえも一柱の悪魔としてお祭り気分であらうが、事情通らしく、詳細を知つてやる氣を失つてた。

満ち足りすぎる世界は良くないとのことだ。

どういふことかと聞くと、普通はどれか一つの事件が起きて、それに対応するヒーローのような主人公の人物が現れたりするらしい。

で、今回は善悪が満ち足りているので、こんな酷いことになっているとか。

連鎖的に起きている理由は、一つでも事件が完遂すると他の運命が滞るので、一気に運命やら縁やらが流れて現状が起きているのではないかと推察してくれた。

「やっぱサイコロ振らないハゲって糞だよね」という有り難いお言葉を残し、ルシベえは大きな蠅に連れて行かれた。

そんなわけで、魔王召喚の今日に至つて運命とやらのせいなのか静かにしていた悪の組織的な奴らもゲリラ的に動き出したりと、ひどい状況である。

悪役絶対殺すマンな絶対正義クスノハお得意の前転撫で斬りにも不可能があることが知れて喜ばしいのか、嘆けばいいのか。

正義の裏公僕ヤタガラスの人員がカツカツつて噂になつてたが、どうやら本当らし

い。

悪の芽は誰の心にもあるし、善を成すより簡単だってやつだろうか。

善悪の彼岸は実は悪のほうが近かったという悲しい現実を知ってしまった気分だ。

まあ、俺にとっては儀式が行われても即時詰みでリセット、という状況でもないのだから、悪くない、むしろかなり良い状態だ。

今日の昼までアテイさんとゲーセンやカラオケ、バッティングセンター、ボーリングなど色々と遊んで回った。

観光もしたし、皇居などのクズノハのお膝元に行ってみたりもした。

カプセルホテルに泊まった時など、アテイさんは変に喜んでいた。

お気に入りには気温や健康状態でおススメを選んでくれる、会話できる自動販売機だとか。

そーなのかい。

後は異界巡りして霊格を取り戻す作業も行って、俺を除く全員が50ほどになっていく。

召喚プログラムの契約は物凄く高名な人物たちが連盟で縛り付けるわけだが、サマナーのレベルを超えればお飾りなのだ。

街中で契約無しのお邪魔を連れ歩いている俺は完全にマナー違反となっているわけだ

が、注意に駆けつけるはずの怖いお巡りさんはお仕事で俺などに構っている暇もない。チャンスとばかりに溜め込んでおくのが気楽に仕事する秘訣なのだ。

運がいいのか悪いのか、MAG濃度が高まったお蔭で、魔王の痣にもマグネタイトがじゃんじゃか溜まる。

マグネタイトの操作技術をルルーシユから教えて貰っていなかったら、危うく俺が魔王召喚者となって東京を混沌に陥れるところだった。

もう二週間ほど期間があれば師匠連の本部にお土産として半端な魔王召喚テロで足抜けできるくらいにマグネタイトが溜まりそうだが、残念ながらそこまで行くと今度は東京が幾らか魔界と繋がって、やばいことになる。

諦めて結晶化し、お弁当作りをしておこう。

霧で少し視界の悪い通りをアテイさんやチルノと食べ歩きしていると、楽しそうにメシア教の一般信徒が布教活動していた。

レベルも高そうなメシアンもちらほら見かけた。

その近くでガイア教のお坊さんが托鉢してたり、ガイアーズの構成員が暴走行為に及んでいたり自由。

ポン刀装備のジャパニーズYAKUZAにアテイさんが珍しかったり、山犬がもりもりと敵対組織の人員を食っていて俺が驚いたり。

フリーのサマナーが悪魔をと連れ歩いてるのもよく見かけるし、マーセナリーが装備を凧いでいるのとすれ違った。

複数の中小的な秘密結社も顔を出しているし、紅の手袋の構成員が路地裏で頭をもぎ取られていたり、世紀末の様相を見せている。

おそらく嘗てないほどに、東京には悪い奴らって呼ばれる人たちが集まっているのだろう。

先日、五島陸将が戒厳司令官となつてあまり外を出歩けなくなつたというのに、呑気な連中である。

でもまあ、一般人が少なくなつてきたので、温厚な悪魔が屋台やつてて食べ歩きのバリエーションが広がつて楽しいのでこういうのも悪くないよね。

とはいえ、最大規模の儀式が起きる今夜は、もうなんか色々と凄そうだ。

事体を大きくすることは何処であろうと誰であろうと一律で望んでいないのだから、少しでも利を得るために切り捨てられる首を突つ込むのだろう。

そいつらが全員、大人しく事を終わらせることができるかといえ、勿論有り得ない

わけで。

力を持った連中に民度や倫理なんて期待できるはずもなく、平和を謳いながらも選民するであろう組織力最大規模のメシア教に鎮静が行えるはずもない。

一夜にして巨大な火薬庫で花火パーティーだ。

こんな平和な日常が一気に東京大戦争になるかもしれない。

うわあ、なんだ家に帰りたくなってきた。

師匠連から人員の配置場所が送られてきた。

もう仕事してる場合じゃないと思うのだが、送られてきたのなら忠実に熟さないと禍根を残す。

とりあえず俺も様子を探る必要があるので、テキトーな場所に行くことにした。

まあ、テキトーと言っててもルーシユが元凶が居そうな場所を数点まで絞ってくれたので、そのいくつかから選んでいるのだが。

アテイさんは無色の派閥の首魁と因縁があるので、最後まで一生懸命悩んでいた。

こういうのは時の運だし、執念よりも偶然が勝つこともある。

面倒になったので「ここが良いと思う」とルーミアが指した場所に仲良くなった二人

で行ってもらうことにした。

互いに連絡を取り、儀式を邪魔したり敵を倒したりとなんか程よく頑張ろうと声をかける。

重要なことは才能あるどっかの誰かがどうにかしてくれようし。

無色の派閥が儀式を行う地点は大小を合わせると1225か所。

ふざけんな、とぶん投げそうになるが要所は実は7か所のみなのだ。

中央の起点を太陽と見做した冬至の際の太陽系の星が連動する位置が要所である。

依り代とか儀式の傾向とか過去に行った儀式、集まっている地点などから魔王ミトラスを呼ぼうとしているのがわかってるので、答えは瞬殺だったと俺たちのルルーシユ先生が教えてくれた。

自力で調査したら詰んでた。

多分クズノハ四天王の悪絶対殺すマンが1225か所をRTAしてくるだろうから問題ないと思うけど。

お弁当、というか時間的におゆはんであるマグネタイト結晶を配る。

超高純度な不活性マグネタイトなので悪魔には最高級の宝石にも劣らない価値があ

る、らしい。

宝石には純度によっても左右されるが、魔力が宿るため、おやつなどに近い。

そんな人間にしたら酷く高価なおやつを凝縮させて、味と価値を無限アップさせたのがこの結晶であるとか。

なので食べるもよし、眺めるもよし、飾るもよしと悪魔にとつては使い道が無量大。

霊格で言えばワンランクからツーランクは一時的にアップできる便利アイテムだ。

魔王を現界させよう集まる凄まじいまでのMAGで、それを俺が横領しているのだから世の中どう転がるかわからないものだ。

とはいえ、MAGが少しでも溜まれば痣の進行は進むのだから、応急処置程度で希望を抱くには価値が無さ過ぎる。

痣が進み続けて何時か俺を殺した時に、マグネタイトが足りなければそこから中からかき集めて、死都と魔王を生み出すだろうからタチが悪い。

未来への貯蓄を切り崩している感じがする。

まあ、溜めていたら溜めていたで痣の進行が数十倍は早くなって元気な魔王を産むことになるので、貯蓄を崩し続ける予定だが。

最悪、マグネタイトの無さ気な宇宙に打ち上げられて雑魚状態の魔王を奇跡的にぶち殺すか、宇宙の彼方まで飛び続けて魔王も地球から離れ続ける悲しき定めエンドという

ダイナミック自殺も考えているのだけど。

とりあえず儀式場の激戦区であると考えられる中央にアテイさんとルーミア。その近くに俺とチルノ。

きらきーは一番遠いところでアリスゲームを開催するらしい、なんとも自由だと思えるが、儀式的妨害にはなるらしいので許可した。

ちなみに、きらきーは霊格が安定したらしく白いドレスを着ている本来の姿を見せてくれている。

突然、デイビットがガタガタと震えた後に倒れ、中空に漂っていた扉からにゆるりと呪われたビデオのあれの如く現れた時は何事かと思った。

なおアテイさんに悲鳴を挙げさせることに成功させていたので、不意を突くジャパニーズホラースタイルは偉大である。

さあ今夜も頑張るぞ、と散開。

サマナーが仲魔を一体と造魔を一体だけCOMPに入れて戦場に赴くつてどうよ。

移動中にピリリリリ、と俺のスマホに着信。

幹部のエボシからだった。

うげえ、と顔を歪めながら出る。

邪教の館で起きた事件の後に俺が育てることになった人物が、抗争の末に誘拐されたらしい。

「簡単な仕事すら出来ないなら死んでしまえ、無能が」と一方的に罵り、通話を切る。別の部署の幹部だし、任務の難易度を挙げてくるし、仲が悪いし、しょうがない。

これで仲が良かったら秘密裏に処理するが、嬉しいことにそんなわけも無い。

部下を使わなかったのは直接連絡して目下の相手にも真摯な私をアピール大作戦だったかもしれないが、そんな聞くわけないだろうがハゲ。

師匠連にそれとなくチクっておいた、エボシのしょうもない罫だったとしても大丈夫。そんな感じで。

そもそも育成しろって無茶振りしといて、その人物はあつちで時間をかけて輸送とか洗脳か首輪を付けようとしていたクセに失敗したら許してって駄目でしょ。

師匠連からビジネスメールで、マジで誘拐されたから可能なら頑張つて取り返すようにと連絡が来た。

華やかな祭り会場が、エボシとの権力闘争の場に変わりそうだ。

エボシよりも早く取り返すか、エボシの勢力を削って嫌がらせをするか、もういつそ

のことエボシをぶち殺すというのが目的になった。

反対に相手に先にされたら負けである。

機を見るに敏、爺さんの持ち場は口口が突撃してくれる手筈になったのでアシタカの爺さんをエボシの下に送り込んでみよう。

仲が悪いし、きつとお祭りそつちのけで組織の規律なんて無視して殺し合いに興じてくれるだろう。

互いにボロボロになり、お祭りで死ぬ可能性も高い。

そうなれば師匠連がすつきりとした見通しの良い組織になるかもしれん。
俺って社内監査とかに向いてるんじゃないだろうか。

牛の首を切って血を浴びてる連中が見えてきた。

あれが件の儀式だろう。

戦場のど真ん中で畜生の血液シャワーを浴びながら戦闘ってどんな気分なんだろう
か。

遠目で見ている限りでも、異能者や悪魔が大乱闘を起こしているのがわかる。

死に掛けたガイアーズの異能者が簡易の合体装置で悪魔人間に至ったり、ペルソナが

暴走したが故に反転召喚されて影のような化け物になっていたり、デビルシフターがくつちやくつちやと食べ歩き、メシアンが自身を触媒として天使を降臨させて白い餃子になったり、軍がデモニカ部隊を投入したりと原始時代並みのような力こそが正義状態。

帰りにデモニカを拾っていきたいところだ、きつと素晴らしい義手なりCOMPなりに化けてくれる。

うーん、しかしこれは控えめに言っても酷い状況だ。

しかも何が酷いって首魁が居るかとか儀式の傾向とか観察しなければいけないので俺も中に入らないといけないことだろうか。

自殺願望者だつてもつと死に場所を選べると思うんだけど。

まあ、愚痴ついても仕事は終わらない。

達成条件がいまいち不明となつてしまったが、とりあえずこの儀式を行っている無色の派閥の首魁であるオルドレイクを見つけて上に判断を仰ぐとしよう。

チルノに俺自身が保有するMAGを限界まで供給してCOMPに戻し、残ったエネルギーを魔王の痣に注ぎ込んでレベルを0近くまで落とす。

魂がごりごり削られている気がしてしんどいが、隠密には最適である。

強すぎることで世界から浮いたように見えなくなるといふ常識の裏で、あまりに弱すぎて世界から弾かれて消えてしまうといふ常識も息衝いている。

世界から消えゆく霞のような亡者と、燦然と輝く信仰を集めた天使の存在が等価でないように。

苛烈な輝きが、薄く矮小な影を消してしまふように。

— 5 —

「真紅はどうして戦うんだ。姉妹だろ？ 仲良くできないのかよ」

「ジュン、貴方には前にも話したと思うけれど、それが私たちが作られた理由だからよ。人間だって時には争う、そうでしょう？」

「人間は兄弟や姉妹とは争わない」

「どうかしらね。何よりも、どんなものよりも価値がある物のためなら、わからないもの」

「ないね。そこまでの価値があるものなんて」

「あるのよ、ジュン。私たちには、それほど物が。どんな花よりも気高く、どんな宝石よりも無垢で、一点の穢れも無い、至高の美しさを持った究極の少女、それがアリス」

「……姉妹を蹴落としてまで欲しい物なのかよ」

「そうよ。貴方にはわからないでしょう。人間である貴方には、人形でしかない私たちのことなんて」

「わからないね。そんなこと、わかりたくもない」

「……そう。きつとそれでいいのよ、貴方は。でも、私はアリスになれるのなら何だつてするわ」

「……」

「……」

「……真紅、そのアリスって誰にとつての究極アの少女スなんだ？」

「……お父様よ。そうになれるつて教えてくれたもの」

「……それは、本当に真紅の望む姿なのか」

「……そうよ。私もそうなりたいとずっと願っているわ」

「……嫌な思い出だわ」

nのフィールド。世界の何処にでも在つて、何処にも無い場所。正と負の狭間。可能

性の境界を跨ぐ領域。そこに無数に散らばる扉の一つと繋がっている世界で、赤いドレスを身に纏った人形である真紅は目覚めた。

壁は無く、無限に広がるかのように白い空間が伸びている。アンティーク調の家具が揃っている八畳程、それが真紅が活動している空間だった。七十から八十センチメートルほどの人形大しかない真紅にはそれでも十分なほどに、そして煩わしいほどに広い。寢床である鞆から起き上がり、備え付けてある姿見の鏡の前に立つ。夢見が悪かったのを引き摺り、目付きの悪いままの己に苛立ち、更に悪くなる。これ以上は止めておう、そう考えた真紅は眉間を指で伸ばした。その様は人間に酷似していた。

ちらりと真紅が視線を向けると、机には紅茶が用意され、香りが部屋に広がっていた。望めば無機物が現れる。零と一が同居している部屋だった。

「……ひどい味ね」

紅茶を呷った真紅が吐き捨てた。

世界の狭間に流れたマグネタイトを利用したそれは、香りだけが本物の様だった。味など、遠い過去に楽しんだ物とは程遠い。

そもそも、この部屋に本物など一つもない。紛い物ばかりだ。真紅自身すらも、きつと紛い物だ。

「誰か来た………兎かしら」

真紅専用の異界と化した空間に、何かしら割って入ったようだった。心当たりは一つしかない。無駄に広いnのフィールドを彷徨っている頭の可笑しいラプラスの魔”と名乗る兎が、時折現れるくらいだ。あれはもつと大げさで、演出過剰だ。

ともすれば、招かれざる客だろうか。あの兎もそうだが、それ以上に会いたくない存在が、真紅には複数いる。かつて愛を紡ごうとして互いに裏切った人間、自らを奴隷のように扱うサマナー、そして……

「ああ、嫌なことって重なるのかしら」

「あら、御挨拶ですこと……。可愛い妹が遠路遙々来て差し上げましたのに、紅薔薇のお姉さま」

自らの妹。

更に鋭くなった目で、真紅は妹を睨む。以前までは体を構成するマグネタイトのみならず、概念や情報を持ち合わせていなかったために、醜い死骸の人形を依り代とした妹を。

「……何かご用かしら、愚妹」

「ええ、ええ。ありますとも、お姉さま。お姉さまが姿を消して半世紀。復活する日を待

ち望んで、やっと会うことが叶ったというのに……」

半世紀、それが真紅が目覚めるまでに掛かった時間だ。人間との信頼を胸に戦い続けた。結果として、姉妹たちに人間との理想を謳い続けた間抜けなジャンクが一体出来上がった。

そんな真紅の前には、人間など餌に過ぎないと主張する狂った死骸の人形でしかなかった妹。彼女は今、確かな知性と嫌味な雰囲気を持って笑っていた。昔のように、只管に嫉妬と憎悪を振り撒く人形は此処にはいない。居るのは、真紅よりも確かで美しい体を持った人形だけだ。

「……そう。じゃあ、直ぐにでも帰ってくれるかしら。私は今ひどく気分が悪いのよ」

「かわいいそんなお姉さま。愛を求めて、削除されて。半世紀も経ってから起きてみれば、こんな下働き」

真紅の言葉など無かったように聞き流し、妹は可哀そうだと言葉だけは憐れむ。

言葉の裏で、サマナーに削除される間抜けだと罵りながら。やつとのことで体を取り戻し、世に戻ろうとして性根の腐ったサマナーに異界の一角に縛られる様になった姉を見下しながら。

「……雪華綺晶、貴女、言葉を選んだほうがいいと思わないのかしら？ ……何度でも教えてあげましょう。私は、今、機嫌が」

「いいのよ！　いいの！　お姉さま！　私はわかっています！　それでも人間が好きなのですよね？」

真紅の言葉を遮るように、妹が捲し立てる。

途中で邪魔された事よりも、その言葉は真紅の心を荒立たせる。

「好き……？　人間を……？　私が……？」

人間が好き。そう在ろうとした。そう在りたかった。

でも今はどうだろうか。

信頼して、削除されて。世界を滅ぼす片棒を担がされて。これから沢山人間を殺すことになって。

そんな真紅^私が、人間を好きだと言えるのだろうか。

「ええ！　ええ！　だから私はお姉さまに会いに来たのです！　ほら、見てくださるかしら？」

恋する乙女のように頬を朱く染め、満面の笑みで雪華綺晶が胸元に仕舞い込んでいたペンダントを取り出した。

それは自ら鮮やかに発光する結晶、超高純度の不活性マグネタイト。

どんな花よりも気高く、どんな宝石よりも無垢で、一点の穢れも無い、至高の美しさを放つ、悪魔が望んで止まない芸術品。

それを持っている証、それは……

「こんな素晴らしい物を贈られるほど、私、サマナーと仲が良いんですよ」

——削除される貴女と違って。こんな所に放置される貴女と違って

言葉が発されることは無かったが、真紅はそう言われた気がした。

雪華綺晶の、金色の隻眼が真紅を射抜いている。形の良い唇は皮肉気に歪められている。

言葉が何も出てこない。

人間など餌に過ぎないのだと狂った醜い人形は、綺麗な体を与えられ、人間との仲の睦まじさを見せつけてきた。信頼を、愛を求めた自身は永い眠りに葬られ、起きればこんな世界に押し込まれて雑用を与えられている。

違う、違う、違う。こんなはずはないのだと真紅は叫びたかった。

縛り付けられていなければ自分もつと、と思考が言い訳を紡ぐ。契約が無ければここまで回復できなかった。契約が無ければ人間との関係は有り得ない。契約が無ければ、怯えられて孤独で惨めに朽ちなければならなかった。

だから、気付きたくないことに気付いてしまった。

「……貴女、契約は？」

「サマナーとは契約をしていますわ。私がアリスになるまでずっと一緒に頑張ろうっ

て。その代わりに、いつか君が望んだアリスの姿を見せてくれって。……ええ、ええ！お姉さまが言いたいことはわかっています！ちゃんと機械を介しての無粋な契約ではなくて、互いを信頼した言葉を交わす物にしましたとも！」

次いで一言。

「だって私、お姉さまと違って、愛しのサマナー人間に愛されていますから……」

その言葉に、一瞬だけ真紅の思考が止まる。何を言われているのかわからなかった。無理に交わした契約とは異なる、互いを信頼した口上だけの契約。そして、愛を囁くような特別な贈り物。

信頼される。愛される。欲しかった物を、求めた物を、末の妹は全て持っていた。裏社会でも化け物のように常軌を逸する強さを持つていて信頼されることは叶わず、街中ですら本能で姉妹同士で殺し合うような愛を与えて貰えるはずがない自分と同じ人形が、幸せの中にいる。

どろりと黒く濁った感情が胸に溢れる。嫉妬と憎悪、そして渴望した夢を叶えた同類への、怨讐。

「雪華綺晶おとおお！」

濁った感情の発露だった。怒りによって発された力の放流が、空間を揺す。憧憬によつて形作られていた置物(ニセモノ)が、粉々になつて霞と消えた。

「あらあら。嫌ですわ、お姉さま。貴女が人間の素晴らしさを謳ったから、私も同じように素晴らしさを伝えてあげましたのに。それをお茶菓子代わりに、姉妹で仲良くお茶会がしたかったのですけれど」

殺意を叩きつけてくる真紅を無視し、割れた偽物が散在する中で傷一つ付いていないティーカップを雪華綺晶は見やった。

そして詰まらなそうに一言。

「なんて様なのでしょう、お姉さま。私は、本物を愛しのサマナーと二人で楽しむことにします。……どうぞお姉さまは、孤独にごっこ遊びでも何でも楽しんでいてください」その言葉に、真紅の理性を司る最後の砦でもあった紅茶のカップが砕け散った。

それは美しい思い出だった。あの少年と過ごした日々の中で、何よりも大切だった。手ずから指導して、少年が淹れてくれた紅茶は何よりも暖かくしてくれた。仲違いしても、紅茶を飲めば何時も暖かかった。

それが、破片が散るのに合わせて消えていくようだった。忌まわしい思い出とともに。

思い出を枷として、踏み留まれていた理性的な真紅はもう居ない。

ぐしやぼん3

— 1 —

フアントムソサエテイの目的は、来るべき滅びの時に「大いなる存在」である電霊マニトウによつて魂を救済させることだった。だが、マニトウは生への渴望と人間の悪意を学んだ。組織と協力関係にあった門倉から学んだ。そこから全ては歪んでしまった。電子の海に溶けるように、マニトウは消えた。死を教えることのできる片割れも、同じように電子の海へと消えた。

高層ビルの一角。西日射す無人の廊下で、フアントムソサエテイと呼ばれる組織に所属するダークサマナーであるフィネガンの口から、血液が流れ出た。それは茜色の日の光で照らされているにも関わらず黒く、同時にひどく鉄臭かった。仕事柄、慣れるほどに嗅いだが、奇妙な新鮮さを覚えた。

潰れた内臓が悲鳴を上げるかのように、大量の血液が腹に空いた傷口からも流出していた。それは黒い小さな水たまりを作り、フィネガンを濡らしていた。

何故まだ生きているのか、何故まだ死んでいないのか。人知を超える力とは、終わりへの幕を長引かせる物らしい。

味わいたくないような、痛みや苦しみ、倦怠感がフィネガンの身を包み続ける。

もし常識という秤があり、それが善悪で傾くことばかり行ってきたら。そんな仮定をした場合、フィネガンは悪へと傾くことばかり行ってきた。楽に死ねるとは思っていなかった。だから、自身の現状にも何とはなしに納得できていた。

最期は呆気ない物だとフィネガン自身、笑ってしまふような陳腐な最期だが悪くない気分だった。

フィネガンよりも年若く、経験の浅い少年のサマナーと協力して、庇って、そして今死に掛けている。奇運に見舞われたとしても言うのだろうか。

あの少年との出会いには特筆すべきところはない。よくあるとは言い難いが、全く無いとも言えない。偶々、悪魔召喚機能が付いているハンディ・コンピュータであるGUMPを拾った少年と、奇妙な縁で運命が幾度も交差しただけだ。新しいサマナーが生まれる定番の一つとでも言えるかもしれない。仕事の邪魔になる時には少年とフィネガンは互いに争い、フィネガンが自身の所属する組織へ疑いを持った際に手を取り合っただ、それだけだ。

フィネガンが煙草を蒸かそうと、内ポケットに手を入れ、舌打ちを一つ。血に塗れた

それを煙草と呼ぶには難しかった。仲魔がいれば何とか出来たかもしれないが、今は独りだ。もう傍には永く連れ添った仲魔はいない。好敵手の下で、FINEGANの仇を取ろうとしているのかもしれない。

血とともに、体温が流れ出る。失われる熱による寒さよりも、眠気のほうが強くなりつつあった。

FINEGANが霞ゆく思考で描くのは、組織の離反についてだ。

平常通りに仕事を進めていた日々だったが、ある日FINEGANに奇妙な仕事が増えるようになった。自我を失った電霊の捕獲、コスプレ集団へのアプローチおよびその連中のCOMP奪取などだ。途中で、件の新たなサマナーである少年とも何度か衝突したことを覚えている。その奇妙な仕事の数々の理由は、「大いなる存在」であるマントウを失った組織が、侍とやらが持っていたバロウズと呼ばれる存在に目を付けたためだった。組織が、壊れかけのマントウの欠片と、掻っ攫ってコピーしたバロウズもどきの劣化物、その二つの複合悪魔で魂のゆりかごを作ろうとしたのだ。また、組織の真の成り立ちと本質もその時に知った。大いなる滅びとやらに立ち向かう、善良な組織が歪んでファントムソサエティとなったことを。

組織の上層部は夢でも見ているのか、フィネガンはそれを知った時笑うしかなかったことを覚えている。同時に、組織を離反することを決意したのもその時だ。悪を成す自身に美学があった、強い自尊心を持っていた。漠然とした夢に付き合う気など一切なかった。

夢見る阿呆にも、踊る阿呆にも、愛想が尽きていた。

離反した後に、少年とともに行動したのは、美学にケチを付けた「大いなる滅び」とやらを潰そうとしたためだ。馬鹿どもの目的を壊し、そんな下らない夢など必要なかったと証明するためだった。

フィネガンは自身に致命傷を与えた犯人を思い出す。マニトウを求め続ける、組織によつて作られた壊れた電霊。あれは滅びだったのか。いや、そんなはずはない。断固として否定する。あんなもの人災でしかない。

やはり、大いなる滅びなど無かったではないか。フィネガンは血反吐を吐きながら、阿呆どもを笑い続けた。束ねた檻褻切れのような電霊が、世界中のネットワークを介する巨大な存在になるはずないと。ネットワークを脳に見立てた一個の生命になることないのだと。そして事切れた。

熱かい悩む神の火が、東京を焼き尽くす様をフィネガンが見ることは無かった。

— 2 —

逢魔時、それは人間が暗闇に順応する時。霧の中にそれは浮かんでいた。夜を切り取ったように暗く、そして人間を模したような巨大な影だった。顔の位置には、能面のような白い仮面があった。夜の女神であるニユクス、その依り代^{アバター}だった。

「世を包む霧はまるで、仮面に隠された人の心だ。夜を包む切りの無い闇の帳だ」
巨大な影が告げた。

影の周囲の建物は壊れ、複数の人間が倒れていた。学生服を着た少年少女、小学生ほどの子供、スーツの青年、白い犬。ペルソナという異能力に目覚めた者たちだ。

「惜しい……本当に惜しいよ。運命を理解しながらその運命に立ち向かおうとする力。……その意思をもっと多くの人達と分かち合えたら、運命を変えることが出来たかもしれないね。でも、……もう遅いんだ」

ニユクス・アバターの後ろで、幾重もの矛盾が孕んだ外なる神が空へと伸びる。宵闇を導くように、混沌が這い寄るように、夜が進む。時が加速し始めたのだ。この場のみ

の、時間操作。

外界は数多の力ある存在によって力場が安定しない混沌の場となっている。力ある邪神・ニヤラトホテプといえど、この東京では自由に力を行使できない。だから、この場に邪魔になりそうなペルソナ使いたちを誘導し、自らの異界に閉じ込めて、力を使っている。この場にいるニユクス・アバターとは利害が一致していたがために、行動を共にしているに過ぎない。

「誰も命の答えに辿り着けなかった。死に抗うことは出来ない。それでも還ることができ、眠ることが出来る」

ニユクス・アバターが宣告する。

「知恵の実を食べた人間は、その瞬間より旅人となった。そして旅人は苦難の旅路の果てに、答えを得たと希望を抱き、明日を夢見る。己が愚者であり、何も知らぬ者のままであることに気付かぬままに。絶対の終わりを、覆すなど出来ないことを、愚者は末期に知る」

死の母星であるデスの訪れに、ニヤラトホテプが歓喜とともに月に吠えた。

忌々しいその醜い音に、怒りとともに立ち上がった周防^{すおう}達哉^{たつや}が見た空は、太陽が浮かぶ昼のような明るい空だった。

遅れて、有里^{ありさと}湊^{みなと}が見た空は、光の一切が入らない闇だった。

びたりと、狂ったように笑っていたニヤルラトホテプの動きが止まった。

「……太陽神と空亡め。忌々しい敗者どもが囁っている。滅びた雑魚など、大人しく消えていけばいいものを」

醜い声で、気色の悪い音で、口の中で吠えるかのような発声で、ニヤルラトホテプが呟いた。

夜と月、その二つが合わさって現れるデス。

その訪れは、阻まれている。

終末は、未だ先だ。

だが、確実に終わりは来る。

生と死は一つであるのだから。

— 3 —

緑と赤の二つの光が、闇色の空で衝突を繰り返している。その衝突の際に生じる破壊の余波が、地上を揺らしていた。彼らの揺り籠であったはずのカルマ教会と呼ばれる浮遊城は既に落ち、砕けている。大規模な質量の城が落下した影響で、地上が瓦礫の山と化していた。

「ノウマン、ヨークシンの任務の時、アンタは俺達を生け贄にした。そうだな！ あんたが俺の仲間を殺したんだ！」

デインゴが、仇敵に叫んだ。デインゴはデビルシフターであり、悪魔とよばれる神魔へ移り変わることでできるその身は、人から大きく離れた姿になっていた。トト神へと変貌を遂げた姿は、青とメタリックブラウンの色が混ざった生物鎧に身を包んでいるようだった。鋭角が特徴的で、ロボット兵器を思い起こさせる。生体マグネタイトが、全身に奔るラインを鮮やかな緑に発光させている。

身に宿していた緑の輝きが一線の光となって、目の前に飛んでいた赤い光を飲み込んだ。

「……だからどうした？ 虫虻が無様に死んでいく姿を、この目で見たかったぞ、デインゴ。これからは物の数ではないと言っておこう。すでにアーマーンは目覚めの準備に入っている。計画は、この世界は、終わりを迎えようとしている」

緑の光が薄れ、赤い光が姿を現した。赤い光、アヌビス神へと変貌したノウマンが答えた。犬に酷似した茶と黒の装飾を纏っている機械的な鎧は、デインゴの神魔としての姿と非常に似通っていた。溜め込んだマガツヒを取り込むたびに、赤い光が漏れ出している。

アヌビスから幾つもの赤い光が放たれた。中空に幾何学模様を描きながら、さながら

猟犬のように、デインゴへと光が奔る。

「アヌビスウウウっ！」

「レオ待て！」

戦闘機を模した機械が青い光を撒き散らしながら、その二つの光に割って入った。溜め込んだ不活性マグネタイトを活性化させた際に生じる淡い青の光が綺羅星の様だった。

デインゴの静止を振り切って、レオと呼ばれた機械がノウマンへと肉薄する。

「その身を人造造魔に墮として延命までして追いかけてくるとは……。だが、アヌビスの権能の前には無意味だ」

「儀式を止めろ、ノウマン！」

アヌビスへと迫ったレオが、その機械の身体が空中で分解した。ばらばらと崩れ落ちる。機械の鎧に紛れ、残っていた生身の脳といくつかの内臓が仕舞い込まれていた巨大な試験官のようなキャノピーが、同じように落下していった。

アヌビスは古くから崇拜されている神である。死んでいる筈の魂を冥府パに送ることなど、容易であった。造魔としての魂から、人間としてのレオだった魂が冥府へと送られた。その結果、乖離を起こしての空中分解だった。

「レオ!?! レオオオオオオ！」

「nのフィールドを超えた時、この世界に来た時、この美しい世界を見て感動を覚えたものだ。同時に、私の中で何かが叫んでいた。私達の世界はあんなにも荒廃していたのに、なぜここはこんなにも綺麗なのだと。私は答えが知りたくて、この世界の集合無意識に問いかけた。……その答えは無反応。そう、何も無かった。神は居らず、人類の無意識は無色に染まり、ただ流されるのを待っていた。私達の世界と同じく、なんの答えもない。だからこそその人類の意志、滅びを、何も要らない世界を創り出す」

緑の赤、二つの激しい光が再び衝突を繰り返した。撒き散らされた光は、空を汚し、地上を砕く。

「聞け、デインゴ！ 召喚はすでに最終段階に入り、アーマーンは私を選んだ！ 人類の無意識が終末を望んでいるのだ！」

— 4 —

「何か用かな、メタトロン」

「白い小動物が、空から舞い降りた少女を、意志を感じさせない真つ赤な瞳で見つめながら言った。」

少年のような無垢な声だった。

地に降りたメタトロンと呼ばれた少女は、無機物のような緑の澄んだ瞳で、同じように小動物を見つめていた。

風で、緑のツインテールがふわりと柔らかく揺れた。

「魂の牢獄からグリゴリの天使を逃がしたことが聞きたいのかな。特に意味なんて無いよ。アザゼル、シエムハザ、あれらは変なまた組織を作って、電霊にご執心で楽しそうな物だよ。それとも東京から誰も出られなくしたことや認識をずらしてそれを理解できないようにしたことかな。特に意味は無いんだけどね、侍で遊ぼうかなって。あとちよūd魔王の触媒になりそうな人間を見つけたから遊ぼうと思っただけさ。とはいえ、そこら中で魔王格の悪魔が呼ばれてるから、二番煎じになりそうだし辞めたといよ。今の僕は特に何も悪さをしていない可愛いマスコットのルシベえさ」

がしゃん、と物々しい音とともに、少女の腕が変形した。白魚のように繊細な右手から、眩いほどの緑に発光した大口徑の銃が現れた。

「ああ、そう。随分と無口だと思っただけど、君は人の話を聞かないからね」

少女の腕から破壊の光が生まれ、小動物を飲み込んだ。

放流された光が納まった。残っているのは、建物や小動物だった物の影だけ。

「サマナーを得て調子に乗ったのかな。霊殻の維持すら満足にできない機械風情が」

少女の後ろに、先ほどの同様の小動物が佇んでいた。

「地獄から甦ったサマナー、パルチザンの介入により未来渡航も可能。確かに珍しいかもしれないけれど。程度は知るべきだ。そうだろうか？ 『メギドラダイーン』」

光が満ちる。光が満ちる。光が満ちる。

光が満ちる。光が満ちる。光が満ちる。

光が満ちる。光が満ちる。光が満ちる。

光が……。

— 5

東のミカドから来た侍、フリンは仲間とともに東京を走り回っていた。

東京で活動している悪の組織に、悪魔が宿りやすい霊媒体質の少女が囚われていると、白い小動物に助けを求められたのが、今現在走り回っている理由の発端だった。

少女の奪取自体は簡単だった、白い小動物から情報を得られていたので、輸送中に奇襲をかけるだけで済んだ。

問題はその後だ。

ヨナタンとワルターが、その少女の扱いについて口論している隙に、別の組織に攫われてしまったのだ。

戦う力があるから一緒に戦わせるか、過保護に守るかだなんて言い争うべきでは無かった。

小動物によると、攫ったのは無色の派閥とやらで、生贄にされるらしい。

そういうことで、すぐにでも取り返さなければ、と仲間たちと東京を走り周っているのだ。

どれだけ走っただろうか。

肩を揺らし、息を整える。

気づけば森の中にいた。

フリンは故郷を思い出した。

悪魔が溢れ、夢破れたイサカルは……。

首を振って過去を忘れようとしていると、木々の枝葉に精霊の木霊がいることに気付いた。

自然が豊かな場所には、木霊が沢山いるらしい。

東京の無機的な雰囲気荒んでいた心が癒されるようだ。だが、おかしい。

木霊が多過ぎる。

其処ら中に木霊が居て、カタカタと頭を揺らしている。

〜とてつもなく恐ろしい悪魔の気配がする……。

背筋が凍ったかのように冷えた。

物凄い圧力だ。

急いで逃げるぞと仲間に表示を出そうとして、それは森の奥から現れた。

人間のような猿のような赤ら面、鹿の角、発達した胴体、無数の動物が集まったかのような鹿^{シシ}だった。歩く度に足元で植物が成長し、死んでいく。生と死の輪廻を足蹴に、迫ってくる。

バロウズがアナライズの結果を知らせた。

＼カカカカツ／

L v. 不明 神霊・シシ神

シシがみが いったい でた ！

フリンは思わず唾を飲み込んだ。

思いがけない絶望が襲い掛かってきた。

あまりの圧力に吐いているイザボーを背に隠した。

渡し守のカロンが呆れたようにこちらを……。

— 6

ターミナル。それはステイブンという男が開発した、凄まじい超技術を秘めた機械だ。遠く離れた場所への転送、通信、悪魔合体など様々な機能が無駄に豪華に付け加えられている。個人であろうと、組織であろうと、それを欲するのは当然ではないだろうか。ステイブン自身については、神出鬼没で車椅子に乗っている、悪魔召喚プログラムをばら撒いたキチガイ程度の情報しか残されてないため、その価値に拍車が掛かっている。

そんな問題を抱えた爆弾のようなターミナルが日本中にばら撒かれていた。その全

てを回収し切つて東京に集めたのは、今代の葛葉ライドウだった。ターミナルは全て、ヤタガラスが管理するビルに隠されている。

ライドウは、不眠不休で働き詰めだった自分を褒めたいくらいだった。北は北海道、南は沖縄、日本中を飛びまわつて、群がる人魔を問わずに滅多切り、やつとの思いで東京に帰還すれば、学校で魔界への扉を開いた阿呆が現れた。全てを個人で対処するには酷く困難なそれらを完遂したのだから、なるほど彼女もやはりライドウなのだろう。

ライドウは護国など願っていない。ただ、家族に会うことだけが目的だった。だから働き続けているのだ。ヤタガラスと葛葉が弟を見つける、代わりに自身は国を守る。目の前に吊るされた餌だと分かっているとしても、食いつかないはずがない。愚直にも彼女は信じて走り続けていた、今日までは。

「ライドウよ、新しい指令のようだ」

黒い猫がそう言った。人語で、そう言った。業斗童子と呼ばれる、渋い声の猫だ。ライドウのお目付役と指南役を担っている猫だった。ヤタガラスの使者が運んできた手紙を読んでいる。

悪魔に魂を乗っ取られかけていたライドウを助け、その才能に目を付けて葛葉の里に彼女を送り込んだ本人だった。

ライドウは業斗童子にも、里にも恩を感じていた。だが、この平穏な日々を、激務で維持しているので、全て返しきっているとも考えていた。

「……ヤタガラスや里のお歴々はこの場に至って、まだうぬを認めていないらしい」

その言葉に、ぴくりとライドウの背が震えた。身を粉にして働いて、認めていないとは。だが、いい。我慢しよう。家族の、弟のためだ。自分が我慢すれば、情報を得られるのらなんだって我慢できる。

悪魔によつて、自身は弟を一人残して飛び出した。そして、実家に戻れば、吹き飛んだ扉、悪魔によつて壊された家具、床や壁に付着した弟の血痕、隠密性の高いダークサマナーの組織による封鎖。

何もできなかった。後悔しかなかった。探しても何も得られなかった。

独りでは、何もできないと理解した。

「未だ続く帝都の混沌、先代までのライドウなら全てを既に抑えているだろう。また、女の身ではライドウに相応しくないとも。もはや曇っているとしたか思えぬ……」

どんな言葉だつて甘んじて受けよう。自身が一番才能があつたからライドウになつたのだ。たったの一年、されど血を吐くほどの修練を重ね、熱で倒れようとも夢で知を

磨いた。時間の流れが遅い異界で歳を取ることも恐れずに戦い続けた。すべては帰るためだ。今更文句を言うのなら、才能が足りなかつた里の後進を恨むべきだろう。

「その上で、ライドウ解任の旨……いや、信じられん」

その言葉に、ぎしりと心が軋んだ。

「撤回を、いや、まずは真偽の伺いを……」

ヤタガラスの使者はただ、静かに「決定事項のため、折り返しは不要とのことです。また、北海道で調査されていた先代が復帰なされます」とだけ呟いた。

「止せ、ライドウ！ 手を刀から離せ！」

業斗童子が叫んだ。彼が叫んだのは何時ぶりだろうか。ライドウに就任して慣れてきてからは怒られることは減つたが、未熟な時分ではよく小言を言われた物だったが、声を張るとは珍しい。

「ゴウト、約束は？ 弟については？」

弟は何処かで生きている、はず。そんな曖昧な情報でも我慢して働けた。

どこにいるか、どんな風なのか。求めた情報は小出しで、やつとの思いで大きな事件を解決したら、これか。

何のための我慢だ。何の為に働いた。刀から手が離れない。

「落ち着け、ライドウ！」

「落ち着いている。私はライドウではないのだから葛葉を離れさせてもらう」

葛葉を辞めたら、もつと情報の集まる裏の仕事に就こう。家を封鎖していた組織にアブローチをかけるのもいい。

変に柵があるから面倒だったのだ。社会の構成も、個人には無いも同じだ。

「落ち着けと言っている！ まだ決まったわけでは……」

「決定。だから私は好きにさせてもらっても構わない筈でしょ」

「……だとしても、それは許されん」

「なんで」

「……」

業斗童子が口を閉ざした。手紙には、きっと良くないことが書かれているのだろう。

「読んで」

「里で子を成して育てよ、と」

「嫌だね」

怒っている。すごくかどわかには彼女自身では判断できないが、怒っている。

約束は果たされず、ただ求められる。そんなもの、受け入れられるはずもない。

「落ち着くのだ、ライドウ。……うぬも戦いを望んではいなかったはずだ。ならば……」
「里から出られない。そうでしょう」

「……ライドウよ、知りすぎた。聴いいうぬならわかるであろう」

護国を任されるほどに、全てに詳しくなった。そして、守らないで居るには詳しくすぎた。

今さら市井に紛れることもできない。

だから、子を産み、育てよと。里のために、拾った恩を返せと。

嫌だね、その言葉を彼女は何度も脳内で反芻する。

奪われるのももう沢山だった。

残った自身の時間ですら捧げなければならないというのなら……

「要らない」

「止めろ、ライドウ」

「ライドウなんて要らない」

「止めろ、ライドウ。止めろ。それ以上、言うでない」

「クズノハなんて、要らない」

「止めろ！ ハクノ！ 口を閉じろ！」

「そうだ。閉じ込めようとする里なんて、壊してしまえば……」

刀を握っていた細い腕が、宙を舞っていた。

学帽を被り、外套を着た端正な容貌の男が、刀を片手に立っていた。先代のライドウだ。知っている。

遅れて噴き出した血が、ゆっくりと雨のように降り注いだ。

ライドウに選ばれたハクノは強かった。そして、ほとんどの場合が力押しだった。自分よりも格上の相手との戦い方なんて知らない。

だから、無様に逃げるだけだ。逃げればいい。簡単だ。

「負けないよ……。私は帰るんだ……」

右腕を失ったハクノが、重量を欠いたがためにふらつきながらも、凄まじい速度でビルの廊下を走る。

ライドウなんて要らない。里なんて行かない。ただ、帰りたいんだ。

ターミナルが隠してあるビルだ。ターミナルにさえ辿り着ければ、逃げ切れる可能性だって低くない。

着ていた外套の袖を破り、失血死を恐れて傷口付近を強く結ぶ。

腕があつたかのような錯覚や、失つたはずの手が痛む幻痛に、涙を我慢する。家族がいなくなつた弟を思い出せば、こんなもの痛くも痒くもない。ただ、腕がなくなつて力強く抱きしめることができないと思うと、それが堪らなく悲しかった。

「家族の、あの子の傍に……。帰れるんだから……。きつと、へいき……」

体力の限界だつた。倒れてもなお、這いずつて進んだ。

滴つた血が、尾を引くように。纏れそうになる腕を必死に動かして。

あと少しだ。

ターミナルが置かれた部屋に、やつとの思いで辿り着いた。

私は、帰れるんだ。

痛みすらも今は忘れて、ターミナルを操作して……。

音もなく、滑り落ちるようにハクノは倒れた。

何が起きたのかとハクノが必死に起き上がろうとして、気付いた。

足が、無い。

片腕に続いて、足まで失っている。

それでもいい。

早く転送を……ターミナルが火を噴いていた。
血の気が引いた。

室内を見渡せば、ターミナルの前に残されている自分の両足、鮮やかに斬られて火花が散っているターミナル……そして、斜めに切断されたらしい部屋。

全てライドウが、ハクノの先代だったライドウが成した結果だった。

化け物め……！

内心で慄きながら、罵倒しながら、ターミナルに身を預けるように膝立ちする。

足を失っても、腕を失っても帰るんだ。

ターミナルはまだ動く。

希望は残っている。

転送を入力。

読み込みが開始された。

早く早く、と祈るように転送を待つ。

寒い。血が足りない。

回復を。

駄目だ、足音が聞こえてきた。

早く。

びーっと鳴り響いた。

転送失敗によるエラー音だった。

ハクノは絶望のあまり、目の前が真っ白になったかのように感じた。

ハクノの仲魔を切り捨て、ライドウが軽い調子で進む。

「ライドウ！ ハクノを達磨にしてどうする!? うぬの子を育てることになるのだぞ！」

その後を追っていた業斗童子が、叱りつけるように叫んだ。

前のパートナーであるこのライドウは、悪魔と戦い過ぎであり、悪魔に慣れ過ぎであり、そして自身が強すぎた。人間が脆いことと繊細であることに気付いていないのではないかと業斗童子は感じ始めていた

治せばいい、とライドウが封魔管を取り出した。悪魔と同じ対処法だ。人間を同列に見ているのだ。契約で力を見せて従わせるように、恐怖で縛り付けるのだと。

「うぬのような者が後進にある幸運を素直に喜ぶと前に言ったな。……今は撤回させて

もらおう」

首を傾げるライドウを無視し、業斗童子がハクノに迫る。

血を流し過ぎているのか、顔色がひどく悪い。さらに手足を切断されたがために、精神への傷も心配だ。

だが、ここですぐに回復させる気も無かった。ハクノの様子を見て、まだ死ぬには早いとわかる。逃げたのは悪手だった。さらに、里を滅ぼすような発言は最悪であった。ここで、里に従順であると誓わせないと、ハクノの命が失われるだろう。

偶然にも道端で拾った命だが、見捨てるには惜しかった。才能もそうだが、何処か娘のように思っていたのかもしれない。

「聞け、ハクノ。うぬが弟を大事に思っていることは知っている。だが、今は里を選べ。我が助命してやろう、次いで弟の捜索も……」

「……帰……んだ。……の子の……傍に……」

「……うわ言か？ 少し不味いやもしれん、早く回復せねば」

——だが、本当の娘でないのも確かだ。彼女の執念を理解できていなかったのだから。

部屋一面に、魔法陣が広がっていた。

ターミナルのディスプレイには幾列かの記号並び、『悪魔合体・開始』の文字が走った。

「合体だど!?」 下がれ、ライドウよ! ハクノは悪魔と合体を目論んで……!」
最初に緑の光が、次いで闇が世界を覆った。

ビルの外には、再び襲名したライドウのみが立っていた。

業斗童子は何処にもいなかった。

そして、解任されたハクノというライドウだった者も、何処にもいなかった。

— 7

無色の派閥が儀式を行っているのだけれど、近くまで来たら首魁であるオルドレイクとかいうハゲはいなかった。

もしかしてハゲはない可能性……無いか。

いや無いってのも無残で残酷だけど。

その代わり、ウイゼル、ヘイゼル、ヘンゼル、グレーテルって人たちは居た。

自己紹介してくれたから名前がわかった。

意外と律儀だよな。

ちなみにウイゼルって人は刀で斬り殺しに迫ってきた、頭おかしい。

ヘイゼルって人はナイフで腹を裂きに迫ってきた、頭おかしい。

ヘンゼルって幼い銀髪の少女だか少年はでかい銃の銃床で殴り殺しに迫ってきた、頭おかしい。

グレーテルって幼い銀髪の少年だか少女はでかい刃物で切り殺しに迫ってきた、頭おかしい。

全員倒したので大丈夫です。

やめてよね、俺自身のレベルが0近くだからって魔王の痣に勝てるわけないじゃん。呪符で封印しておいた右腕が丸出しになってしまった。

機械の義手と呪われた腕とかパンチ効きすぎじゃないだろうか。

ヘイゼルって暗殺者の女性が、執拗に追撃してくるが、残念時間切れ。

俺はほぼレベル0、片や30超え。

その結果は、生体マグネタイトや殺気に釣られたパーティーピーポの集合の合図です。

なんかペルソナの支配に失敗してシャドウとやらに反転したヤバいのとか、飼っていた悪魔に食われたデビルシフターとか集まってるから、治安維持の為に頑張ってるね。

鼻歌交じりに転がっていたデモニカスーツから中身を抜いてパーツを回収したら、月が浮かびそうだった空が昼になって元気なお日様まで顔を出している。

あ、これヤバイやつだ。

太陽神というくらいだし、天体操作くらいするよな。

これはまずい、マジで詰む。

早く行かないと、とCOMPを操作したら、空が暗くなり、周囲が闇に包まれた。

おそらくルーミアのダークゾーン生成による浸食だろう。

よし、まだセーフだ。

儀式の妨害がどのくらい保つかかわからんが、まだセーフ。

ゴーレムを召喚し、コックピットに乗り込む。

壊れるかもしれないすまん、とダークゾーンが広がるアティさんやルーミアがいる儀式場へ突撃。

隠密とかの余裕がなくなってしまうが、オルドレイクがいることがわかっているの
で有り難い。

いつでも脱出できるようにコックピットを開けていたら、巨大な試験官っぽいのが飛び込んできた。

ちよつと割れて、中身の液体が漏れ出ている。

なんだろうかと隙間から覗けば中には脳や内臓がちらり。

空からこんなものが降ってくる東京つてすげえ、マジで怖い。

微量のMAGを読み取ったゴーレムから、機械の触手が伸びてきて、脳とか内臓を取り込んでしまったんですが。

魔力渦巻く事件の渦中って感じの空気を感じ取る。

飛び降り、ゴーレムをCOMPに仕舞い込もうとしたら、バトルモードに変形して飛

び去ってしまった。

ええー……。

見送ったら、空で追いかけてっこしている緑と赤の光に混ざりに行ったようだ。

ま、まあ、自由行動も俺のパーティの売りだからね。

……サマナーなのに仲魔が一体だけで敵の本陣に乗り込んでしまったんですがそれは。

ダークゾーンを広げることで、周辺の異界化を進めているルーミアを発見。サマナーの特権なのか、仲間判定のためなのか、視界が思った以上に明瞭である。マジモードのルーミアが、左右に滞空させている赤い模様の入った黒い巨大な腕で、周囲の悪魔を磨り潰していた。自らに有利なフィールドにしようと、馴染ませているようだ。

その近くでは、真っ白でケモミミっぽくなつた髪の毛のアテイさんが、オルドレイクの片腕を刈り取っていた。

お揃いですね、とオルドレイクに挨拶。社会人に重要なのは挨拶である、たぶん。

状況はあれだろう。オルドレイクは魔王召喚の気を窺っているのだろう、腕吹っ飛ばされているけど。さつき夜なのに太陽が出ていたことから、状況は整いつつある。ミトラだかミスラムもこつちに来る気満々である。儀式が良い感じに遂行されたら不味そうなので、こつちで横やりを入れることにする。

ルシベえが教えてくれた、初心者でもできる簡単☆魔王召喚、いつてみよう！
脈動する魔王の痣が刻まれた右腕を、地面につける。括目し、絶望しろ。

—— 魔王招来 ——

半端な儀式、半端な場所、半端な時間。

儀式場よりも10mほどずれた場所で、生体マグネタイトも、魔王としての情報も不

足した、巨大なスライムが現れた。

オルドレイクが、怒気を噴出していた。

笑みを浮かべたアテイさんとハイタッチ。うーん、ケモミミもかわいいね！

よし、嫌がらせも済んだし帰ろうか。

……あ、やつべ。魔王召喚が止まらない。助けてルシベえ！

ぼこぼここと、そこら中で魔王級の悪魔が顔を出してきて、巨大なスライムが片っ端から食らいつくす。

スライムだった半端な悪魔が、魔王へと姿を変える。

—— アナライズ成功 魔王ミトラス「Lv. 46」

地上はルーミアの闇が支配している。空は魔王ミトラスによる天体制御で太陽が昇り始めた。

「約定の時だ、定命の者よ。その腕を奉げよ。その肉を奉げよ。その脳を奉げよ。その魂を奉げよ。……その心を奉げよ」

岩から上半身を出した、色白の男性に似た姿の魔王ミトラスが、自らを召喚した少年

に告げる。

少年が何か言う前に、片腕を失った壮年の男が横から割って入った。

「お前を呼ぶ儀式を執り行つたのは私だぞ！」

悪魔に重要なのは召喚者、それだけだ。その主張に意味は無い。

「そうだな、そうだと。そうなるように、私が仕向けた。出迎え御苦労、ニンゲンにしては大儀であつた、見逃してやろう。もう帰つて良い」

詰まらなそうに、ミトラスがほんの少しだけ視線を向けて男に告げる。それだけだ。

殺さないのは利用したがためであり、完遂したための褒美だつた。

話は終わりだと、ミトラスは男を意識の外に追い出した。この場において、重要なのは痣を持つ生贄、その意思のみだ。

ミトラスが、権能を行使した。

この場において、ミトラスこそが絶対者だ。四文字すらも上回る、力を持っていると自身を持てるほどに。

支配者たるミトラスが、全ての契約を解除した。サマナーは仲魔を繋ぐ鎖を失つた。

「さあニンゲンよ、私が貴様らの神である。悪魔に殺されたくなければ、全てを奉げよ」再度、痣を持つ生贄の少年に告げた。

受け取つてやろう、その矮小なニンゲンの虚弱な身を。

受肉のために。世界を支配するために。
再び、世界の神になるために。

— 8 —

「お父様に体を貰えず、醜い体で動く。貴女はまるでジャンクね。……ローザミステイカはどう？」

「……絶対に許さない。絶対に、絶対に、絶対に」

「暴力だけを撒き散らすだけで、会話すらもできないのね。ジャンクそのものよ」

「……許さない。お父様も、お姉さまも、許さない。私の身体を奪った。絶対に、絶対に、絶対に、許さない」

「……貴女もお父様に作られた栄えあるローゼンメイデンでしょう。お父様を恨むなんて恥ずかしいと思わないのかしら」

「……許さない。許さない。許さない。許さない。許さない。許さない」

「話にならないわ。ジュン、MAGを頂戴。痛みを与える趣味はないもの」

「……止めてやれよ。可哀そうだ。それに姉妹なんだろう？」

「……私は、体のない人形をそのままにしておくことが、持ち主を探そうとしないまま過

そこは白い世界だった。飛び散った人形の破片だけが、真つ白の世界を汚している。

「あの日、壊せば良かったわ。妹と思わずに、ジャンクだった貴女を」

白い茨が真紅の身体を弄ぶ。軋んだ体が限界に耐えかねて、悲鳴を挙げながら、血しぶきのように破片を撒き散らす。

「まあ、お姉さまだったら怖いことを……。今では貴女がジャンクですものね。綺麗な私への嫉妬かしら。あ、私が愛されているのが不満なのでしょうか？ それだったら愛されていて御免なさい、とでも言いましょうか」

——嗚呼、サマナーも罪な人……。こんなにも胸を焦がせてくれるんですもの……。くすくすと、白薔薇に片目が隠された少女然とした人形が笑みを浮かべた。傷一つない見事な造詣の人形、その顔は熱が浮いたように赤らんでいて、倒錯的に美しかった。

原作：ポケットモンスターオメガルビー・アルファサファ
イア ポケモンORAS I

—— 1

いえーい！

日本にいる両親と兄、姉、従兄弟、数少ない友人たち見てるー？

俺は今、試される大地にいます！

何故って？

はあ……。

無いわ。

ナンセンス。

じゃあ逆に聞くけど、なんで日本に住んでるかって説明できんの？

9割9分以上が生まれたから住んでるって答えるっしょ。

つまりそういうことだよ。

起きたらそうなった。

憑依とか転生とか難しいことは無しね。

そもそも俺が意識した時は赤ん坊のときだったし、現代だと自我の芽生えは1歳から2歳の間、物心はそれ以降、なんて話があるから 乗っ取りとか言われても、意識ないところに入りこんだって話にもなるわけじゃん。

動植物に憑依したら乗っ取りになるのって話だし。

まあ、俺が自由にしているから俺はオレなわけ（哲学的）

そういうわけで試される大地で子供やっています！

やったね！

ちなみに北海道ではないです！

北海道っぽい場所です！

試される大地ではありません！

むしろ熊しか出ない北海道よりも危険地帯！

その名もシンオウ地方！

なんと、ポケモンが蔓延っています！

というかポケモンが作ったと神話で語り継がれる大地です！

ポケモンやベー！

あいつらマジやベーの！

体積以上の水とか吹き出しちやう！

平然と体内から炎を吐きだしちやう！

葉っぱを超速で成長させて攻撃しちやう！

雷を落とす！

吹雪を生み出す！

雨乞いで雨が降る！

超能力とかバンバン使う！

岩が雪崩れる！

自己再生する！

催眠術かけてくる！

怪しい光で混乱させてくる！

人間よりも強い！

サラマンダーよりも速い！

一部かわいい！

ゲームで知っていても体験すると混乱する、なんだこの世界……。

— 2

生まれて初めて目を開いた時の話だ。

ぼやけて何も見えなかった。

いや、胎内のときはちよつとだけ見えていたけど。

あ、俺を生んだ偉大なる母は見えた。

そして、当然のようにハピナスに抱かれた。

生まれた直後に母親の顔を見て愛を知り、間近でハピナスフェイスを見せてつけられて恐怖を叩きこまれるという、人生は飴と鞭で構成されているとでも教えてくれているかのようにだった。

ハピナスは装飾過多なピンクの卵みたいなやつ、あれが医療関係の補助にしているらしいのだ。

その後はさとり様みたいに腕短すぎて俺を抱えられるのかという恐怖との戦いだつたが、意外とポケモンの腕は可動域が広いようで、特に問題は無かった。

俺が眠っている病院はハピナスだけじゃなくてなんかいっぱい居た。知ってるポケモンもまあまあいた。

ポニータとか。

俺はそこで悟ったね、なんかポケモ的な世界だなって。

エメラルドまでやり込んだのでポケモンの知識は問題ないだろうと思いついていたのだが、見たことないポケモンがいっぱいいて困った。

そういえば最近のポケモンは副題にアルファベットが付いていたはずだと思いついた。

XとかYとかZとかそんな感じで。

座標軸的なストーリーかもしれない。

もしかしたらミュウツーの逆襲にあった「自分とは何か」みたいなテーマが同じように決まっっていて、自分のいる場所を確定するための座標を探す旅が始まるとか考えた。

もしくは遊戯王とコラボしてXYZードラゴンキャンバードジョンになっている可能性が高いと導き出して、俺の知らないポケモンは遊戯王カードのモンスターの可能性もあると考察したり。

赤子ってのは暇だったからね。

自由な発想しても許されるわけだよ。

むしろ睡眠か空想しかやることがなくてビビった。

考えすぎると疲れて何時の間にか寝てるし。

活動範囲が狭すぎて父のガルーラのお腹の袋で、ガルーラの子供らしい存在と一緒に揺られたりもする。

まあ、自分の座標を決める旅に出る可能性が高かろうと、まずは自力でトイレに行けるようになりたい。

大便がねとねとで不快なんやで。

我慢とか出来ないっぽい。

もうあれ、反射的に出せるときに出すスタイル。

ゲップするのが下手で緑色のうんこ拭かせてすまんな父よ。

— 3

5歳くらいまでは外で行動するのが不可能なわけで。

それまでは、生まれた俺を抱っこしたハピナスに抱えられて生活していた。

このハピナスだが、父のポケモンだとわかった。

ハピナスって貧弱なんだが俺を抱っこしても大丈夫だろうかと怯えたりもした。

よく考えたら「はいこようせん」を撃つても体勢が崩れるだけで、自分がダメージを受けないのだから人間よりも遙かにパワフルなのだろう。

でかいタマゴを腹に入れてるし。

そう考えると安心して身を委ねられるようになった。

で、立ち上がって歩き回れるようになったので外を探検するのだが、すぐに帰宅するスタイルを取っている。

子供だから大した距離が移動できないのは当然である。

しかも俺が住んでいるキツサキだが、北海道で言う稚内である。

冬とか超寒い。

死んじゃう。

というかこの地方、炎ポケモンが少なすぎて暖も取れない。

普通はポケモンで温まるのが定番じゃないんですかねえ。

ハピナスのもちもち肌しか味わってねえ！

キツサキジムはこおりタイプメインなので、ジムは冷凍庫状態だ。

スケートも楽しめる。

父がジムリーダーをしている関係で遊びに行けるのだが、寒すぎて死ぬ。

このジムの恐ろしいところはあまりに温度が低すぎてトレーナーの体力と判断力を削られることと、こおりタイプの子ムなのに俺の父であるジムリーダーがノーマルポケモンをガンガン使っていくことか。

糞ゲーもいいところである。

まあ、父としてはノーマルタイプ専門のジムにしたいようだが、街の要望で氷タイプジムを装っている。

なので無理してユキノオーとかオニゴーリとかも使ってる。

けど俺には関係ないね！

——4

両親に10歳の誕生日プレゼントは何がいいかと聞かれたのでポニータと即答した。普段は無口キャラを演じている俺が、すぐさまアクションを取ったので両親は驚愕していた。

ちなみに俺は病気持ちである。

サトラレ？とかいうやつで、考えていることが伝わるとか伝わらないとか。

この世界にはそういう超能力染みた能力を持っている人間が時々生まれるらしい。

エスパーとかイタコとかいるじゃん？ ああいうカテゴリーっぽい。

昔話だか神話だかで人間とポケモンが結婚することもあった、みたいな話もあるのだから、そういう力を持った人は昔からいたのだろう。

不思議世界で困るね！

俺のストレスが100%に達すると、世界中のみんなに心の声を届けることができる可能性がある……？

まあそんな感じだ。

サトラレの効果を詳しく調べることもできたのだが、両親や医者や心に傷を作ったりするかもしれないからそこら辺は慎重に進めていくとか。

そんな感じなので無口でも気持ちいが以心伝心ですよ！

まあ、そんなどうでもいいことよりもポニータである。

ロコンが良かったけど、試される大地であるシンオウ地方だと滅多にいないらしい。リザードンとかバクフーン、ウインディも同様。

なのでポニータで妥協した。

炎のたてがみとか暖かそうだし。

キツサキにはポニータがないので、家族旅行も兼ねて試される大地を南下することになった。

流石は試される大地、めっちゃ広い。

北海道と遜色ないんじゃないだろうか。

ゲームの世界だろうと侮った認識を改めることになった。

一人旅したら間違いなく死んでた。

そんな広大な大地を主に車で移動するのだが、何時間も座りっぱなしだった。

しかも風景は雪がある森か雪がない森かの違いだけ。

ちよつとした変化としてシンオウの大地を縦に割るように聳え立つ山々が顔を見せている。

……し、自然の美しさに心が洗われる（目逸らし）

ポニータの生息域まで来たが、捕まえられなかった。

テンガン山の麓の211番道路、ハクタイシティからクロガネシティまでの206、207番道路を粘ったがいなかった。

ポニータで妥協するという上から目線が悪かったのか、どこにもいない。

父の話だと草を食んでいる姿を見られるはずなのに、どこにもいない。

探さなくても最低1匹は見かけるはずなのに、どこにもいない。

ビツパは沢山いた。

可愛くないからノーサンキュー。

目当てのポケモンが見つからないのはよくあることだと父に慰められた。

優しくされると泣きそうになるからやめるんだ！

宿を予約しているクロガネシティで話を聞くと、どうやら今年の冬は寒波がどうたらこうたらでめっちゃ寒くなるらしい。

で、暖を確保するためにポニータが流行った的な。

神は死んだ……。

人生初の手持ちポケモンが手に入るとワクワクしていた子供心に賺しはツライ。死んだ目とかしてしまう。

話を聞かせてくれた気のいい兄ちゃんであるヒョウタ君が困っていたが、誰も俺の心を慰めることは出来ないんだぜ。

ヒョウタ君が岩ポケモンをくれるというが遠慮した。

岩つて可愛くないじゃん……。

岩を宣伝できなかったことに（・ω・）としていたヒョウタ君が代わりに探検セツトとやらをくれた。

ヒョウタ君の祖父が作ったらしい。

とりあえず遊べば気が紛れるだろうって感じである。

シンオウ地方は空気の循環を地下通路で行っていて、通気口が入口になっていて探検できるという話だ。

あまり今は流行っていないが、そのうち人気出るんじゃないやねって空気だった。なるほどな。

まあ、子供騙しでしょとクールに地下へ。

思った以上に広いし、作りもしっかりしている。

土壁の部分は付属している化石堀りセットで色々な石や化石を集めることができる。通路を作ったときに作業員が休憩所に使っていたような、ちよつとした空間があつてそこに秘密基地も作れるという。

子供騙しとか馬鹿にしてゴメン、ヒョウタ君。

これかなり面白い。

地味に化石堀りが面白すぎてヤバイ。

慎重に削って綺麗に掘り出した化石を掃除するのだが、セットが充実しすぎて捗るのだ。

タガネ、刷毛、筆、ブラシに紙やすり。

しかも地下通路なので集中が途切れることも無い。

気づいたら日が暮れていたレベル。

これヤバイ。

廃人になるかもしれない。

ヒヨウタ君とか凄い良い笑顔で楽しさを語っていたが、いつか地下通路の住人にならないか心配だ。

気が晴れたのでヒヨウタ君にお礼を告げた。

でも岩ポケモンは要らないです。

化石もいいけど可愛いポケモンが欲しいんだよオラア!とアピール。

ヒヨウタ君の父親であるトウガンのおっさんが鋼ポケモンを見せてきた。

やっぱり可愛くないんだよなあ。

コドラとかドーミラーとか可愛いだろ!とか言われたけど、全然同意できない。

進化したらコドラはかつこよくなるけど、ドーミラーはちよつと……。

あ、思い出した。

クチートなら可愛いじゃん、欲しいから何処にいるか聞いてみる。

ホウエン限定でシンオウにはいないらしい。

トウガンのおっさんもホウエンに伝手は無いとか、通信技術がもつと発達すれば遠隔地とも交換できるとか。

神は死んだ……。

— 5

ヒョウウタ君がトウガンのおっさんとタタラ製鉄所に行く予定らしい。

ジムリーダーをしている父とトウガンのおっさんは交流があり、一緒に行かないかという話だ。

ここについてもポニータを捕まえられないし、化石を掘るくらいしかやることもないの
で俺も付いていくことにした。

タタラ製鉄所はハクタイシティの西南に位置しており、205番道路とハクタイの森
を抜けた先にある。

つまり、結構距離があるのだ。

205番道路は車で移動できるが、森はポケモンが多く生息しているから開発が進ん
でいないので歩く必要があるとか。

森は虫が多そうで嫌です（都会っ子感）

205番道路をガーツと走り抜け、車を止めて森に入っていく。

数分でうさぎっぽいポケモンをゲットした！

その名もミミロル、ハクタイの森に生息するうさぎポケモンだ！

体長は40cmくらいになるらしい、結構でかくなるっぽい。

やっぱり森は最高だ！ポニータなんて要らなかつたんや！と手の平を返す。

ピンクでもふもふしてて可愛い。

やっぱりポケモンは見た目でしょ。

まあ、森をガンガン突き進むと虫ポケモンが多くてなんとも言えない気分になるけど。

ポケモンはでかすぎてなあ。

ケムツソとか30cmを超えてるうえに、重量も3kg超えなんだ。

キモい。

ツチニンなんて50cmを超える。

やっぱり虫は愛せないんだよなあ。

そういえば俺ら10歳だけジムバッジを全部集めるための旅とか出ないといけな

いのかなあ、とヒョウタ君に聞いてみた。

それはちよつと修羅過ぎい（意識）という返事だった。

流石に10歳では無理だし、そもそも試される大地だと行方不明になるんじゃないだろうかみたいな話だった。

だよー。

ポケモンリーグとか目指すならジムリーダーの元でジムメイトとして実戦を積むとか、トレーナーズスクールで知識を養うのが重要だとか。

で、そこで成績が良かったら更に上を目指していく感じっぽい。

なるほどなー。

ヒョウタ君はトウガンのおっさんの元でジムメイトをしながらジムリーダーを目指すようだ。

俺も父の教えを受ける流れか……と思ったがキツサキにはトレーナーズスクールがある。

どっちも行ってみて合ってる方に通うのがいいだろうか。

今はそもそもポケモンリーグを目指す予定もないけど。

父とトウガンのおっさんはリーグを目指すなら戦うのが楽しみだと笑っていた。

なんだかなあ。

ゲームみたいにチャンピオンになったら将来の問題とか何も無さそうだが、果たしてどうなるのだろうか。

話は変わるが、この世界のポケモンのレベル限界はトレーナーによって決まるらしい。

時間をかけてレベル100まで上げれば余裕でチャンピオンかと甘く見ていたが、ゲームと比べてポケモンのレベルが上がるのにはかなりの時間がかかる。

さらにトレーナーの才能によって上限が決まるので、下手したら最大レベルが10にも満たない場合があるとかないとか。

ジムリーダーになれる人は才能豊かで70付近まで上げられるし、リーグに挑むなら最低でもそのラインまで届かせる必要があるようだ。

年齢が上がれば徐々に上限も上がっていくが、やはり才能は頭打ちが来るらしい。

歳を召していてレベルが50以下のポケモンを繰り出すと言うのは、限界が来ているからという悲しい現実。

ボーマンダに進化できる直前までが上限のトレーナーに捕まえられたタツベイとかコモルーの気持ちを考えてと涙を禁じ得ない。

俺もジムリーダーの息子だし、多分70くらいまでは育てられる気がする。

もしかしたら80くらいまで届くのかも知れない。

80まで練度を上げられたらリーグとかで雇ってくれないかなあ。

トレーナーズスクールなら講師になれるかもしれん。

製鉄所はもののけ姫の舞台の一つをイメージして期待していたのだが、機械化が進んでいてつまらなかった。

ヒョウタ君のテンションがとも上がっていたので逆に冷めたのもあるかも。

見学を終え、トウガンのおっさんとヒョウタ君と別れることになった。

トウガンのおっさんがジムリーダーをしているミオシテイに行つて勉強するらしい。

あ、友情の証として岩タイプのポケモンや鋼のポケモンを渡そうとしなくて大丈夫です。

代わりに化石を渡す、使う予定ないし。

ヒョウタ君が何度も渡そうとしてくるので、そのポケモンを使ってジムリーダーになつてくれよ的なことを伝えると感動された。

なんやかんやあつて頑張つてねと見送つた。

大天使ミミロップで挑戦者を屠る。

トレーナーズスクールで勉強していたのだが、ミミロルがミミロップに進化してからは父のジムで経験を積むためにジムメイトもするようになった。

普段は家族にミミちゃんと呼ばれている色違いのピンクで可愛いうさぎだが、バトルとなると相手の戦意が途絶えていようとも気絶するまで追い詰めるバーサーカーだ。

うちのピンクバニーちゃん（♀）は凶暴です。

ちなみにポケモンバトルはアニメとかポケスペを混ぜてスマブラにしたような感じ。足が速いほど攻撃を当てる回数が増え、回避もできる。

技数は4つだけじゃなく、覚えた分だけ所持しているがそれを上手く使い分けて指示できるトレーナーは少ない。

強い技や安定した技は連射したくなるというのが人情だ。

カウンターやミラーコートは効果時間は数秒だが、ダメージを受ける前に発動すれば完全反射するなどぶっ壊れている技も多い。

トレーナーの腕で最も重要なのは練度の高い技を、最大効果で発揮させることが出来

るかってことである。

俺自身トレーナーとしての力量はかなり上がってきていると自負しているが、やはりミミロップだけだと限界を感じることもある。

というかミミロップが下位相手には強すぎてバッジ7個目または8個目の挑戦者の選定でしかバトルさせてもらえない。

雑魚戦の女王として君臨。

ただ、7個目や8個目のバッジ選定戦ともなると、挑戦者の数は極端に少なくなるが選出できるポケモンが増えるので、ミミロップ一匹のみだと勝てない戦いも起きる。

しかも試合の一つ一つが当然ながら激戦である。

ジムリーダー戦に合わせて交代制となったのだが、辛酸を舐めてばかりの展開になる。

2匹くらいまでなら倒せるが、それ以降は相性が良くないと無理だ。

ブースターとか可愛いし導入したいがイーブイがいないんだよなあ。

スクールで面倒を見ているスズナが「気合い！」と言いながら両手で握りこぶしを作って胸の前でグツと構えたが、気合いだけだと常勝できないし。

俺は敗北しない安定した勝者になりたいのであって、綱渡りで勝利するようなスタイルは遠慮したいわけだ。

地力が強いポケモンを使うと言う話もあるが、可愛いポケモン以外は使いたくない。強ければいいと考えているトレーナーもいるが、可愛くないリアルなポケモンと絆を深める根性は俺には無いのだ。

あとポケモン単体の能力差が酷過ぎ。

ゲームと違って数値化されたステータスなんて無いし、バランス調整も狂っているの
で、大きいやつほど硬くてタフで強かったりする。

ドラゴンとかマジやべえ。

氷のジムで動きが鈍くなっていなかったらなぶり殺しにされるレベル。

飛べるポケモンはそれだけで強い。

速い、でかい、飛べる、この三つが強いポケモン足らしめる要素ではないだろうか。

ミミロツプ？

可愛いからセーフ。

種族としての能力は低いが、可愛さで補ってるからセーフ。

足りない部分は俺というトレーナーの指示で補うから問題ないね。

え？ 結構挑戦者に負けてる？

知らんがな。

むしろ勝ち越してるからセーフ。

— 7

最近、シロナさんというトレーナーが挑戦に来たのだが、なんか色々と凄かった。

博士にもらったポケモン図鑑を埋めながらジムバッジを集めているという人で主人公っぽい少女だ。

で、そのシロナさんと戦ったのだが、トゲキッスに負けた。

“しんそく”によって超速で移動と回避を行い、そのままミミロップを轢き逃げするという恐ろしい戦い方だった。

“ねこだまし”と“みがわり”でなんとか二度やり過ごせたのだが、結局三度目で捕まってそのままエアリアル無限コンボによるハメ殺しだった。

勝ち抜きルールは交代不可なので空中コンボから逃れられないという縛りを上手く使った戦い方ではあると感心した。

ちなみに空中まで轢かれながら天井付近まで飛ばされたミミロップだが、傷つきながらも室内を零下に下げするために設置されている冷凍装置にトゲキッスをぶち込んで倒れるという、闘志を絶やささないバーサーカーっぷりを発揮してくれた。

まあ、落下ダメージで気絶したミミロップの負けだったけど。

交代制でも、ミミロップしか持っていない俺には交代なんて意味無かったわけで。

でも12歳の餓鬼である俺に、16歳のシロナさんはもう少し手加減してくれてもいいと思った。

マジで精神も12歳だったらポケモン止めるレベル。

あんなのトラウマになる。

半冷凍のトゲキツスと傷ついたミミロップが天井から降ってくるとかマジやべえ。

その後は俺をボコしたその実力により父がジムリーダー戦を認めたので6つ目のバッジを賭けたバトルも行われた。

ルールは交代制の6vs6。

最後まで見学したがかなり面白かった。

交代制はポケモンを入れ替えることで不利な状況を抜け出せる反面、出してからの手間取るとその隙を狙われて沈むことも多い。

やはりバッジ6つ目ともなると挑戦者側も交代によるミスは全くなく、むしろ回避技術の一つという感じだった。

戦闘も“はどうだん”で宙に緊急回避するルカリオとか、ケッキングが地面を殴って

移動中の相手の体勢を崩すとか、ガルーラに浮かされたガブリアスが”はかいこうせん”の反動で距離を取ったりと色々勉強になった。

氷タイプのジムなので室内が凍りついていいるからといって、父のミロカロスが”ぜったいれいど”で更に氷漬けにして場を支配しようとしていた。

あまりに寒くてミミロップを手放せなくなった、もふもふであったかいんだわ。

最終的にジムリーダーの本気としてはあまりに練度が足りないユキノオー、オニゴーリ、マニニューラが地方の差で負け、バツジはシロナさんの手に渡った。

シロナさんとしては氷ジムなのに氷ポケモンが弱かったことに肩すかしだったようだが、俺は楽しかったのでよし。

父はノーマル専門だからなあ。

8つ目のバトルだったとしても氷ポケモンの強さはあまり変わらないと言う残念なジムなので、8つ目に回されることも多い。

さつきまでの戦いの興奮冷めやらぬ、といった具合で感動を共有しようとして連絡したヒヨウタ君もトウガンのおっさんの元を離れ、クロガネジムで頑張っているようだ。

炭鋏でグループリーダーになった的な話をされた。

なぜに炭鋏……。

トレーナーズスクールに行くと言われ、俺が挑戦者に負けたという話が早くも広がっていた。バトルを挑まれるが、いつもと変わらない戦績である。

俺が弱くなったわけでも、挑んできたクラスメートが強くなったわけでもないのだ。勘違いは良くない。

スクールの先生が、敗北したらイツプスになるトレーナーもいるからと心配してくれたが、負けたことないというわけでもないから問題ない。

そもそも初めて父と対戦したとき、ミミロル出したらケツキングを出された位だからそういう物だと割り切った。

今は負けても仕方のない準備期間なのだ。

精々今の内に笑っているがいい。

俺を負かした連中の連絡先は控えているので、お礼参りに行く予定である。

勝負の世界は血統が物を言うのだ、彼奴等が成長限界に達した時に遥か高みから嘲笑いながらボコしたいと思う。

俺が指導しているスズナが、何故か俺の敗北に凹んでいた。

スズナは氷ポケモンが好きなので勉強するためにトレーナーズスクールに通い始めたのだが、面倒を見ることになった俺が最強だと疑っていなかったらしい。

早熟すぎてスクールでも相手できる人がほとんどいないため、基本的に俺とばかり戦っているので視界が狭まってる感。

まあまだ7歳だからな。

そもそも俺に3タテされるのは進化前の氷ポケモンを繰り出して、ミミロップの“とびげり”の餌食になっただけだから（小声）

スクールからイーブイを貰った。

優秀な学生になんちゃらかんちゃら。

スズナも貰っていたが、イーブイはオスだった。

俺は最優秀なのでメスの優秀な個体だとか。

イーブイのメスは少なくて極めて希少とか。

優秀過ぎですまん、手加減が苦手なんだ。

父がジムリーダーを辞めた。

というか辞めさせられた。

やっぱ氷ジムは氷ポケモンをメインにしてないとダメっしょ的な話で解任されて
フィニッシュだ。

ですよー。

シロナさんに負けたのも要因かもしれない。

父が謝りながら次の勤務地はジョウトだと教えてくれた。

ジョウト！

それは素晴らしい！

色々な舞台を巡れたほうが楽しいってものだ。

スズナと毎日めっちゃ寒い場所でイーブイを鍛えていたのだが、これからは付き合え
そうにない。

イーブイの適応力は凄いから、寒い所にぶち込んだら氷タイプになるんじゃないかと
いう子供心いっぱいの発想から行っていたことだ。

たき火にぶち込んでもブースターにならないから無意味じゃん、などと言っ
てはいけ
ない。

スズナの純真な気持ちがいーブイを進化させるかもしれないし。

俺は付き添いだった。

ミミロップとイーブイたち、スズナを存分にもふもふしてただけ。

結果は、イーブイが氷的なサムシングに目覚める前に、ミミロップが冷凍パンチを憶えたくらいだ。

ノーマルタイプなのに冷凍パンチ。

ポケモンはホントに謎多き生物だ。

俺のサトラレ？

超すごい天才的な能力なのでセーフ。

そもそも表面的な感情が伝わるだけというシヨボい効果だし、あってもなくても意味ない。意味なくない？

引っ越し準備とか、挨拶周りとかで忙しかった。

スクールでスズナがガチ泣きしたり、ヒヨウタ君に綺麗な石を貰ったり、シロナさんに引っ越す旨を添えたメールを送ったり、色々やった。

……やだ、私の知り合い少なすぎ？

ガチ泣きしたスズナは、俺のセーターを生贄に捧げることで静まった。

ヒョウタ君は探検セットで見つけた化石を送ったらとても喜んでくれた。
シロナさんは頑張ってるっばい、なんかよくわからん。

— 9

ジョウトのコガネで暮らすことになった。

イーブイはピンクが愛らしいニンフィアに進化した。

フェアリータイプってなんやねん……。

あとミミロップもこの地方だと物珍しいらしく、すんごい珍しいポケモンを二匹も
持つてるぼっちゃんやなあって評判を抱かれたようだ。

あとは街の開発が進んでリニアモーターカーがどうかこうとかでなんちゃらか
んちゃら。

かがくのちからってすげー。

あと2年前にロケット団が少年によって滅んだとか。

レッドのちからってすげー。

で、カントー地方のグリーン島が噴火したとか。

しぜんのちからってすげー。

重要なことだが、シロナさんがチャンピオンになったらしい。

若いのに凄いことだ。

若いのに。

ポケモンと一緒に旅に出て、街を周り、チャンピオンに至ることができたのも若さが重要なのだろう。

若さって偉大だよな。

シロナさんじゅうはちさい、若さを謳歌する。

そんな栄光を手にした彼女の近くに男の影は無いらしい。

彼女の近くに立とうとすれば、比べられるし、張りたい見栄も張れなくなる。

強すぎるのも罪だなあ。

シロナさんにお祝いのメールを送ったら、ポケモンを貰ってしまった。

嬉しいのだけど、いいのだろうかと疑問を抱くレベル。

送り返すのも明らかに失礼だし、無難に返事を書いておこう。

大げさなくらいが喜ばれるだろうし「このポケモンでシロナさんのように強いチャンピオンを目指しますね」って感じにしよう。

もちろん見栄である、男の心はビン底のように狭く深いのだ。

貰ったポケモンはアグノムだった。

青くて小さくて、その瞳から強い意志を感じさせるポケモンだ。

秘めているパワーも物凄い。

強いぞーかわいいぞーって感じだ。

いやマジで貰っていいのかホントに疑問なんだけど。

むしろもっと凄い物語を紆余曲折として手に入るポケモンなんじゃないかと思った。
り。

可愛いので有り難く愛でるけど。

コガネ弁のモジャ毛が、珍しいポケモンやなあってまた話しかけてきた。

スクールで貰ったイーブイも、このモジャのとこのイーブイのタマゴらしい。

まじかー。

転送装置のテストついだったとか。

カントーとジョウト間なら手軽にいけるが、試される大地シンオウ地方は難しかった
ようだ。

普及するまでに、かなりの時間を要するだろうとのこと。

ふーんって感じだ。

淡泊な反応かもしれないが、仕方のないことだ。

だってこの人を見てるとザ・フライを思い出すから生理的に嫌。

生前のトラウマなんだ。

あまり真面目に対応したくない。

——10

ラプラスはレアポケモンだった……!?

ロケット団残党と思われる戦闘員と交戦して知った、ちよつとした豆知識だ。

この繋がりのお窟は海に繋がっているらしく、野生のラプラスが休息に訪れることでひっそりと知られている。

そこにロケット団残党が目を付け、捕獲し、売りさばこうとしていたようだ。

ラプラスは過去に乱獲されて個体数が激減しているの、希少価値が高いらしい。なるほどなー。

ロケット団残党とマサキから得た情報だ。

マサキはポケモンバトルが糞雑魚なので、戦闘は俺に任せただけだ。

任せられても困る。

犯罪組織との矢面に、そんな気軽に立たせないでください（懇願）
最も悩ましいのは、ロケット団残党が大して強くないことである。

手に負えないくらい強かったら、自分に言い訳して逃げたのだが、頑張れば凌げそうなのが口惜しい。

数だけ多くて鬱陶しい。

俺の手持ちに疲弊が感じられた頃、ロケット団残党の幹部っぽいのが姿を現した。

重役出勤かよ。

元気なときに来てくれたらボコして終わりだったのに。

雑魚も頑張らないで撤退しただろうし。

アグノムもバリアーからの衝撃波を連打するくらい頑張ってくれたが、どうしてなかなか限界かもしれん。

加護対象のラプラスも冷凍ビームで支援してくれていたんだが、エネルギーが切れた的な感じだ。

つーかラプラスを一匹捕獲するためだけにどんだけいるんだよ、こいつら。

ニートか。

ニートなのか。

そもそも15歳の子供（俺）に苦戦する悪の組織って一体……いや、そもそもレットさんに滅ぼされたんだから、底は見えているような気がしないでもない。

よく考えたらレットさんは別格だったな。

うーん……。

よし、とラプラスにモンスターボールを投げて捕まえる。

俺は守る、あなたたちは捕まえる、互いに目的が達成できなかつたから手を引こうと提案。

ガチギレされた。

だよー。

俺だって怒る、誰だってそうする。

目の前で捕まえられたら腹立つから、先にラプラスを捕まえただけだし。

ポケモンをボールごと奪われることもあるので、怒らせた分マイナスかもしれない。

それに俺の手持ちはこの地方だと珍しいものばかりだ。

困ったな。

ポケモンに関してはマサキに転送すれば解決するんだが。

人間である俺が残るんだよなあ。

ゲームみたいに穴ぬけのヒモで出口まで一つ跳びだすと有り難いのだが、残念ながら現実は甘くないのだ。

穴ぬけのヒモを持っていない的な意味で。

今度からアイテムは必要十分に持つておこう。

一般人を逃がすために渡しても大丈夫なくらいってどのくらいだろうか。

誰か助けに来てくれないかなあ、と自らの幸運にかける。

この世界に来たくらい運が良いので、正義のヒーローが駆けつけてくれるだろう。

これこそが運命力（どやあ）

あと電話の先にいるマサキはさっさと何らかの助けをここに送るべき。

このままだとリンチされて俺が死んでしまいます。

ポケモンは転送するので大丈夫だけど。

限界の向こう側へと旅立ったポケモンをボールへと回収。

まだ戦えるミミロップで牽制し、転送準備を進めっていると、轟音とともにロケット団残党を巻き込んで壁が吹っ飛んだ。

幹部っぽい偉そうなやつも、一般の雑魚も、ついでに吹っ飛んだ。

芸術点を付けるなら8.5点だ。

ロケット団は着地が下手だからね。

その後、洞窟が崩れるんじゃないかと内心で心配しながら、音のした方へ目を向ける。

プロテクターを付けたミュウツーが参戦した。

うわあ……～q～

——11

生前に、ミュウツーの逆襲という映画を見た記憶がある。

人工的に生み出されたポケモンが、自己の在り方を探る的な感じだった気がしないでもない。

初代ポケモンで最も強いパーティはミュウツーを六匹集める的な記憶も或る。

まあ、そんなわけで我々の前に現れたミュウツーなのだが、強すぎて制御装置であるプロテクターでガチガチに固められている。

それでも強い、シゲルのサイドンとか触れないで勝てる。

強すぎてプロテクターぶっ壊すくらい強い。

プロテクターなんて飾りですよ。

そんなポケモンがすぐ近くに出現した俺とロケット団残党の気持ちは、きつと誰にも理解されないだろう。

言葉にできないほど怖いのだ。

まあ、俺や残党（雑魚）と違って、幹部連中はテンション上がってるんだけど。

映画だと、ミュウツーは途中までロケット団が保有していた。

ああ、まさかのダメ押し……。

これは詰んだぁ……。

絶望に膝から崩れ落ちそうになったが、ミュウツーは俺を攻撃する気はないようだった。

瞬く間にロケット団残党のポケモンを一掃した。

残っているのは俺のミミロップ、ロケット団残党幹部たちのポケモンが10匹に届かない程度、そして歩く哲学・考える葦・生きるって素晴らしいミュウツー。

なんだこの戦況……。

動くタイミングを計っていたら、ミュウツーが崩した穴から青年が現れた。

白いニット帽に黒いマフラー、鉛色のダッフルコートに身を包んでいた。

ニット帽を深く被っているため目元が隠れているし、黒いマフラーで口元を隠しているし、さらにダツフルコートで完全防備。

たぶん寒がりなのだろう。

彼の足元には青いキユウコンがすり寄っている。

幹部連中が色めき立つ。

幹部の一人が、勝利確定ザマア！みたいな煽りフェイスを俺に向けてきた。
うぜえ。

おまえ攻撃されてたじゃんか。

青年がミュウツーに一言告げると幹部のポケモンを不可視の一撃で薙ぎ払っていた。

「何故攻撃したのですかハイロさん！ 今こそがロケット団復活の時です！ 世界を我々の手にするチャンスですよ！」と叫ぶ幹部。

幹部に『さん』付けされているのだから、多分超幹部とかなのだろう。

で、なんか仲違いしているようだ。

ハイロと呼ばれた超幹部の青年が、銀のように澄んだ涼しい声で「サークル活動は終わりだからみんな自立しなさい」と告げた。

この温度差である。

知り合いでも争うのだから、人は一生解りあえないんだなって思いました（悟り）

原作：攻殻機動隊 こーかくきどーたい 1

— 1

横断歩道を渡っていたら、信号を無視して突っ込んできた車に轢かれて死んだ。

で、神様と出会って云々で転生ついでに何か才能的なサムシングをくれるという。

生前は不器用だったのを思い出し、物凄く器用にしてくれと頼んだ。

これなら異世界でも職人や生産職としてほどほどに生きられるし、現代だったら小物作りとかして生きていけるな。

くおわり ^ q ^ く

— 2

変な夢を見たなあ、と起き上がれば見知らぬ高架下。

めっちゃ汚い。

なんやねんここお……と不安に思っていると、すぐ近くの段ボールハウスで暮らすホームレスのおつちちゃんが見兼ねたのか質問に答えてくれるという。

住所を聞くと、なんとここは東京らしい。

しかも俺の家のかなり近くだったので安心して帰宅。

うーん、飲み過ぎたのかもしれない。

住所の場所まで近づくも、家はない。

というかなんか文化レベルで全く俺の知ってる世界と違う。

中華系の自治区があつてアジア的なバラックが乱立してたり、メカメカしいパーツを付けた人が歩いていたり、時折ロボトつぽいのが走つていたり……。

……来ちゃったか、異世界。

来たくなかつたな異世界……。

家無かつたやでえつて感じで親切なホームレスのおつちちゃんのとこに戻る。

可哀そうな者を見る視線で憐れまれた。

まあ、しょうがないね。

見知らぬ土地であろうとも俺は困らない。

一回死んだ物と思って生きていくのが苦しまない秘訣だ、護身は完璧である。

おっちゃんに話を聞くと、魔法は無いらしい。

でもよくよく聞くと科学が進み過ぎて魔法っぽくなってる感あるよ。

2028年くらいらしいので、俺が知ってる日本の10年以上未来っぽい。

いや、10年そこらで電脳とか義体とか極小機械群マイクロマシンが一般化できるようになるとは思えないのでやっぱ異世界。

近代サイバーパンクって感じだろうか。

どうやって暮らせばいいんだろうかと悩む。

悩みながら、落ちてた山のないプラスドライバーでカリカリと石を削り、夢に見た神を造る。

流石は未来で異世界のドライバー、本体が舐めてても石を易々と削れるとかすつげえの。

ものの五分で完成。

人でも無いし、物でもない、なんとというか概念を無理やり物質化した名状し難い石像が出来上がった。

ちよつと神々しい気がしないでもない。

俺の作品に「サイボーグだったのか」と感嘆の声を挙げたおっちゃんだが、サイボーグ食を持ってきた。

内臓とかが機械化されたサイボーグの人たち用の食品である。

グルテンとかアミノ酸をベースにしたマイクロマシンで出来てるとか。

フレッシュな人間でも食べられるっほいけど、俺はサイボーグじゃないので普通のが食べたいです。

全然サイボーグじゃないっす、と伝える。

首裏を見られた。

ちよつとも体にマイクロマシンを入れて電脳にしたり、機械で代替してたりしたら、管理しやすいように首裏にインターフェースを取り付けてるっほい。

で、そのインターフェース、QRSプラグという通信ケーブルを接続することで、情報の遣り取りができるとか。

人間なのか機械なのか、境界が曖昧になりつつある世界である。

ナノマシンをぶち込んで電脳化していると、脳内でネットワークというお花畑につながったり、情報通信できたり、テレパシーみたいな通話ができたり、ハッキングされたりするらしい。

ほえー。

おっちゃんは怖いからやってないとか。
わかる。

でもサイボーグとか憧れる。

死ぬかもしれないってことになったら超かっこいいロボットとかになりたい。

— 3

お金が使えない。

電子マネーが普及しまくっている社会なのだが、貨幣だつて根付いている。

が、そもそも俺の持っている金はこの世界の文化と異なる場所から持ってきているわけ。
まあ、無一文です（悲哀）

働かないとやべーぞ、と思った。

が、仕事が無い。

世界大戦があつたとか内戦がどうかで、この世界はかなりアグレッシブである。

軍人崩れも多く、そいつらですら食うに困ることもあるようだ。

つまり、無職モードだ。

「というか、そもそも戸籍が無いです。

金が稼げねえぞおっちゃん！」と相談すると、古ぼけたナイフを貰った。

普通の金属を鋳型で固めたナイフである。

世の中には電気を通したり、高速で振動させて切れ味を上げるナイフがあるとか。

いやいやローテクで十分です。

まだこの世界の科学は怖いし。

しようがないので俺の奇跡的な器用さを売りにするしかないな。

拾った木材を思うがままに木彫りして、雑誌に値札を付けて持ち歩く。

口に糊でできればいいやってレベルの発想である。

ゴミ漁りするまでにはまだ成りたくない。

すると、疲れ切ったようなサイボーグや義体の人が買っていくのだ。

メカメカしい金持ちも売値の数倍の値段で買ってくれる。

懐かしくて惹かれるとか、精密でありながらも人の温かみが籠っている、的な感想を頂きまくった。

こ、これがローテクの武器だから！

原理は知ってたから狙ってたただけだから！

思った以上に彫像が売れるので、売り歩きながら良さ気な場所を探すことにする。
ナイフをくれたおっちゃんに別れを告げ、アジア自治区の方へ……銃声とか聞こえてきたので、普通に大通りとか通っていくことにする。
この日本ってちよつと治安悪すぎない？

— 4 —

数か月ほど、路上で売り歩きしててわかったことがある。

労力がかかるほど人気作が出来る。

また、義体化率が高いほど、惹かれやすいようだ。

なのでメタマテリアルを利用した超贅沢でお洒落な刃物は不人気、無駄に道具に金がかかっただけでマジ売れない。

あと豆知識として首都は東京ではない。核が降ったので千葉が沈没。この日本の群馬はグンマーではなかったようだ。

そういうことで、ロボットやサイボーグ、電脳が支配するハイテクな都市で、ノミやゲンノウや小刀を背負った青年彫像家として、放浪することになってしまった。

戸籍が無いので電子端末も変えず、電子マネーが使えないので現金を持ち歩き。金が溜まればカプセルホテルを寢床に、古ぼけた昔ながらの銭湯で疲れを癒す。

サイバーパンクなのに、俺だけやたらローテクすぎないだろうか。

若々しい見た目ながら、「古いタイプの人間」とやらと一緒に行動、いや、それよりもローテクな生き方である。

ちなみに「古いタイプの人間」というのは、ホームレスのおっちゃんのように、自分の年下の餓鬼どもに脳を弄られるのを怖がって、サイボーグ化で頑張ったり、それすらもしない人たちのことである。

本音を言えば、俺もハイテクな世界で生きたいんですけど。

ただ、金も戸籍も無いから義体化やサイボーグ化はおろか電脳すら積めないよ。

世知辛い。

電脳ならそう高くないが、医療機関に行かないとダメなので、残念なことに俺の脳は未だに童貞である。

あ、電脳化する場合は機械を入れるから処女のほうが合ってるかもしれないね！

道端の縁石に腰かけ、彫刻刀で軽い木彫りに従事する。

脳みそ以外を義体化して俺TUEEEしてちやほやされる輝かしい未来はいつ来るのか。

とりあえず顔はイケメン、身長は高く、足は長く、声もイケボ、そして目からビームだな。

英雄は目で敵を殺すんだ。

しやつしやつと木彫刻をヤスリ掛け。

何故この世界にダンジョンが無いのか。

あつたらきつと俺の器用さが伝説の武器に反応して、最下層まで行けるね。

で、そこでミレニアム処女な魔王と出会ってトウルーエンド。女勇者を弟子にして爛れた日々を送ってちゅっちゅしてハッピーエンド。王女と結婚するもロイヤルピッチでバッドエンド。

なんてバラ色な世界なのだろう。こんな科学だけ進んだ世界とかマジ無理。

はあ、つっら。

興が乗ってきたので木彫刻に彩色も施す。塗りすぎると美しくしくないのです、艶消したり、影をちよつとアピールする程度だが。

科学が進んだ世界で、フルでフレッシュとか逆に異物でしかない。

店とか入ると、マイクロマシンが無いので脳波が弱く、検知されない場合がある。あ

とは体がフレッシュ過ぎて、あらゆる探知に引つかからないとか。

俺を捉えることができるのは熱を読み取るサーモセンサーや重量で感知する感圧センサーくらいである。

目の虹彩で認識するやつとか、指紋、静脈、などなどは戸籍が無いのでそもそも判定すら発生しない。

はあ、つつら。

隣に座りながらひたすら俺のひとり言を聞いていたクゼ君（イケメン）に、木彫刻をあげる。

無表情な男である。

ただ、ジツと俺の作業を穴が空くほど見ていたので、欲しいのだろうと判断した。

無表情ながらも、店に飾られたラツパが欲しくて連日見続ける黒人の少年の様な空気を醸し出していたし。

今日もテキトーに治安のよさ気なカプセルホテルで寝て、銭湯にでも行こうかなあ。

立ちんぼ買いたいけど、病気が怖い。俺は戸籍が無いから保険に入れないのだ。つまり性病になったら高くつく。やっぱダメか。

そもそも立ちんぼって、身体障害を抱えた孤児を使う場合が多く、義体化やサイボーグ化しているわけで。虚弱でフレッシュな俺とは腕力そのものですら天と地の差があ

る。一言でいうと抱くのが怖い。

はあ、つっら。

クゼ君も彫刻してみたくなったらしい。

手先は器用なのかと問うと、折り紙は織れるとか。全身義体であり、動かす練習で折り紙を修得したようだ。

全身義体とか羨ましい。

この世界に受け入れられているようでマジうらやま。

道具を広げ、用途を説明していく。といっても、大きい道具は大雑把な作業用、小さいのは細かい作業用で感じただけだが。あとはヤスリとか線を引くケヒキとか。

ローテクほど人気があるので、タコ糸使って寸法調節し、糸に沿って鉛筆で線を引き、ノミで掘ってヤスリかけてテキトーに終わりである。

仏像みたいなのは、仏さんを掘り、なんかテキトーな装備を後付し、テキトーに作った台座に乗つけるといふ合体方式だといふ感じに仕上がる。

ハイテク世界だからなのか仏像はあんまり売れないんだけどね。

はあ、つっら。

クゼ君がドドドって感じで作り終えてた。

が、情調も遊びもない作品である。

不思議がつているが、俺からしたら当然なんだよなあ。

どうせ電脳化してる連中は記憶や映像を保存しているのだから、それを模した単なる緻密な作品にしかないのだ。

重要なのは、輪郭や色、形である。

脳殻に脳みそをぶち込んだ連中は、視覚情報を電子化する際に最低でも一回以上は変換している。

その変換の際に、幾何学的に描く。

俺の作品は違う。

生身で作品を見たような、そんな感動を与えることができるのだ。

何故かって？

知らん。

電子化する際にシミュレートしやすい造詣にでもなっているんじゃないか（投げっぱなし）

手先が器用すぎて、時々ホームレスのおっちゃんどもの外皮を作ることになった。

サイボーグ化したけど金がなくて皮がやべーとか、違法のところで作って表情筋が溶けたとか。そんなバカな連中の為に、有機素材で顔を整形して張り付ける的なことをやってやるのだ。

造顔と彫刻が特技のホームレスって俺は何処へ向かっているのだろうか。

手慰みにマジックも学ぶ。折角器用なのだから、いけるとこまでやっておこう。

機械化した目を騙せるようになってからが本番である。どうせ情報を受け取るのは脳なのだから、騙せない道理は無い。

自分の技術がどれほど高まったかと疑問に思い、造顔した顔を被る。

で、マジックで学んだ小手先で、AIが積んであるアンドロイドに悪戯してみる。重要なのはいくつかの矛盾点を任意で作ったり消したりすることである。普段の癖を行ったりやらなかったり、別人のようになってみたり。すると思考の出口や妥協を持たないアンドロイドは無限マジックに陥って……やっべバグってる。

つまり、そういうことである。飽きたり、慣れたり、といった思考の余分な遊びってひどく重要なんじゃないだろうか。状況判断の末に諦めるって行動を取れるのも強みかもしれない。

そんなわけで、俺は自分の器用さに徐々に目覚め、そして……

がんばれゴエモン状態となった。q、

6

巷を騒がす義賊ゴエモンとは俺のことです。

最後は釜茹でにされるホームレスってことだろうか。

なにこれっつら。

事の経緯であるが、あ、考えるのもめんどくさい。

要約すると、商売道具である彫刻道具と彫像が盗まれた。それを取り返すため、俺は顔を変え姿を変え、盗賊活動でラノベ2巻分くらいのストーリーを経て取り返す（なおヒロインは現れなかった）。相手が超お偉いさんだったので、指名手配される。しようがないので、ホームレス仲間や見知らぬ人たちが盗まれた大切な物を取り返す日々。そのままエスカレートした末に己の限界も見定めなくなつて、なんか評判が悪い政治家のところに忍び込んだら成功してしまったので金を盗つてばら撒いた。今ではきつとちよつとした有名人。

みたいな？

……ちよ、彫刻家として魅力ありすぎてごめんねー☆（現実逃避）

結局さ、どれだけお金を盗んでも俺はホームレスのままなんだよな。

懐もあんまり潤わない。

金持ちつて電子マネーを疑っているのかつてくらい現金でため込んでいるわけだが、その正体は血税だったり脱税だったりするわけで。

俺が持ち去るのもちよつと違うよね、そもそもほとんど納税してないし。

まあ、電子化が進むほどに、偽造しやすくなるほどに、ローテクの信頼性は高まるのかもしれん。

つまりこの社会において、俺は信頼度抜群ということか！

アホなこと考えてないで作業作業、と。

ギィ、と音がした。

このハイテク世界でベタな音を立てて木造の扉を開いてメイド服を着たアンドロイドが入ってきたのだ。

ピンチだ。

超ベタなくらいピンチ。

窓ガラスをパリーンとしながら逃げなくては！とベタなことをやろうとしたら、メイ

ドなアンドロイドであるメイドロイドがアグレッシブな跳躍で俺の前に降り立った。
『メッセージが一件、届いております』

!?

GTOっぽく表現してみた。q

—7

差出人は不明のメッセージが一件。

内容は、近くの公園に箱が埋められてあるので確認してほしいとのこと。

恐ろしいのは俺が監視されているという事実……は、どうでもいいか。

ハイテク社会だし、何時かはバレると思つてた。通報されたらやべーよ、戸籍ないし、盗みとかで怨みを買っているので闇に葬られてしまう。

ため息を吐きながらメッセージの場所へ赴き、掘り出すと、脳硬化症という病気についての詳細や論文が入っているだけだった。

脳硬化症とは、脳みそを脳殻にぶち込んだり、電脳化処置を行った人間に、超低確率で発症する贅沢病である。

贅沢病なのだ（必死）

まあ、電腦硬化症だが電腦化した部分が硬くなり、最終的に脳死するという病気だ。機械とのアレルギー反応っぽい。っぽくない？

そんな病気の進行を遅くするにはマイクロマシンやワクチンで治療するのが一番らしい。

メールによると、マイクロマシンが普及しているが全く効果は無く、村井さんが作った特効ワクチンが一番だという。

多分、メッセーじ的にはマイクロマシンのしよぼさを世に喧伝し、ワクチンをアピールしてくれってことだろう。

昔の新聞や週刊誌などの紙媒体を漁る。

ここ一年くらい全くインターネットしてないわ。

してないというか出来ないんですけどね！

ネカフエって映像記録を撮られてるから、あんまり行きたくないし。

他人の端末をパクったら、紐付けされてるからすぐに警察とか駆けつけてくるし。

忍び込んで使うにも認証が必要だし。

つらいしぬ。

調べた結果、電腦硬化症の特効薬として最も効くのが村井ワクチンのようだ。現状では最強レベル。

企業とかがごり押しして販売しているマイクロマシンは雑魚。効いているのか怪しいレベル。

マイクロマシンの普及している理由としては、技術を昇華させるためとかもあるようだが、やっぱりお金絡みのようだ。

俺もお金欲しい。

甘いものを求めて思考戦車用のオイルを出来心で舐めるほどカツカツ。

彫刻の売り歩きも足が付くから出来なくなつたし。

はあ、つつら。

貴金属や現金を数十億円規模でばら撒く盗人が、一日一食生活とかそこんところどうよ。

無駄に培ってきた倫理と矜持が盗んだお金で飯を食べるのを拒絶するんです……。

取り返してきた物と、いくらかの食べ物と物々交換する的感觉だし。

ローテクどころか、もつと古い文化に遡りつつあるんですがそれは。

そのうち鞣なめした皮とか着るように……ならないでしょ。ならないよな？

話は戻すがマイクロマシンの幅を利かせている理由はやはり、1999年に核が日本

に撃ち込まれたのが大きいだろう。

核汚染を除去するのに、マイクロマシンの活躍しまくったようだ。

で、そのマイクロマシン技術を退化させないという名分の下で硬化症の特効薬として喧伝。

ちなみに電腦硬化症が発症したのは2019年。マイクロマシンの技術の進退が20年後の病気一つにかかるとか、ねえ……？

で、その硬化症に特効を持つ村井ワクチンの認可については2021年、マイクロマシンもそこら辺である。

村井ワクチンは中央薬事審議会により非認可になって日の目を見ることは無くなり、マイクロマシンは三か月で認可されたり。

……。

……^ q ^

歴史の闇を、異邦人の俺に投げかけてくるんじゃない！

嗚呼、なんで俺がこんなことを、とぶつぶつ呟きながら厚生労働省医薬局へ。

異世界ならメイドとちゅっちゅするとか、猫耳や兎耳の亜人とちゅっちゅするとか、激可愛い魔王で朝までちゅっちゅとか、するべきじゃないのだろうか。

これは夢なんだ。俺は起きたまま寝ているんだ……。

なんて事を思っていたら、厚生労働省医薬局麻薬対策課強制介入班とやらが俺をぶつ殺しに来た。

動きはえーよハゲ。

いや、俺が局長を狙って忍び込んだから反応されたのか。

銃とかばんばん撃って殺しに来るしサイボーグや義体ばっかだし俺は人を撃ったり傷つけたり出来ないし詰んだあ……俺が未だに厚生労働省内に居たらの話だが。

残念ながら俺の方が早かった。

局長室で盗みを働いてみたが、全く何も手に入らなかったのですぐに見切りを付けたのだ。

で、外で情報を集めてた。

次は如何した物かと悩みながら、輸送ヘリに光弾やら熱攪乱弾やらを放り投げ、パイロットを潰す。

で、パイロットに、露天で捨て値で買った電腦と直結させてやる。

バグとかノイズとかゴーストの接触で気絶した。

サイボーグのようなので、表皮を剥いで、眠らない目をもぎ取って装備。とうとう鞣した皮（意味深）まで着るようになってしまった。

他のサイボーグや義体どもの反応を見て、皮を剥いで捨てておいたサイボーグの普段っぽい行動を再現。

誤魔化せてしまった……、q、

なんなの馬鹿なの？

そもそも下品な言葉で盛り上がるってどんな班だ。

班長なんて同性愛者だし、愛を囁かれるし。

死にてえ。

というか俺を殺しに来たから排除しとこう。

ヘリの操縦はテキトーにやったら出来た。器用なものもあるが、自動操縦だからね。科学の力ってすげー。

重要な知識として義体化率が高いほど、泳げなくなる。というのも、身体を占める機械の割合が増えて、単純に重くなりすぎるためだ。浮くための脂肪なんてないし、あつても無意味だ。

つまり、機械人形どもにとって海など、水など、無いも同じである。ただ引かれるよ

うに落下するのみ。

あとは人形つて壊しても気にならない。大きい人形を壊したら人を模しているのだからちよつと変な気分になるが、それでも人形なので罪悪感など抱かない。見えないところで無くしたら、どうでもよくなるのだ。

海上まで行き、パラシュートを背負い、自動操縦を切る。

じゃあなジャンクども、と別れを告げて外へと飛び出す。

阿呆な班員たちは、装甲に守られて気密性の高い後部の貨物室で呑気に過ごして、未だに気付いていないようだ。

彼らが奇跡的に助かったらもう一回落としてやろうじゃないか。見えないところなら気にならない。そもそも平然と人を殺すなんて人形しかやらんだろうし、しようがないね。

よし、生きてる！と着地。

光弾とかまた買わないといけないからカツカツだなあとローテンション。

そんなアンニユイな俺はゴリツと後頭部に銃を突き付けられた。

えっ、q、

公安らしい。両手を上に、そのまま跪かないと撃つとか。
なんというバイオレンス。

でも捕まったらどちらにしろ死ぬのだ。

両手を上げて、袖口からシユツといくつかの玉を取り出す。

煙とか熱とか光とか催涙とか諸々がセツトになったお得な玉である。こういうのが高額なので、俺は貧乏なのだ。

俺の後頭部に銃を突き付けていた巨漢の義眼レンズである眠らない目ならまだ反応できるかもしれないが、追撃に放り投げたこれには耐えられないだろう。すっげえ微弱な電磁パルスを発生させる使い捨ての玉である。外部装置を狂わせる超お高い虎の子です（震え声）

高性能程狂いやすいので、この場に限り最強。

高笑いしながらダツシユで逃げる。

笑ってたら声に反応して撃たれたので無言でマジ走り。

こっわ。

撃たれたら保険も無いし、お金もないので、化膿して腐って死ぬ。

着ていた皮を脱ぎ、あとは海を泳いで逃げれば俺の勝……光学迷彩だど!!

闇夜からいきなり女性が現れて銃を向けてきた。

光学迷彩とは政府組織にのみ許された、姿が消えるやべー装備だ。流石公安、俺をぶつ殺しに来ている。いや、さっきの同性愛者が班長をやった班も装備してたけど。

驚愕しながらカラーボールをぶん投げる。空中で撃ち落とされたが、マイクロマシン入りの蛍光塗料さえ当たればオツケー。微弱な電気を流すのでいくらか機能不全を起こすし、蛍光塗料で見やすい。

とりあえず見逃すことが減ったので、なんとか逃げるしかない。

挙動や表情から、おそらく全身が義体しているタイプだろう。瞳孔のカメラアイがすげー動いているし、重厚感がありながらも手足は自然に動いている。頭部も若干大きいのが、脳殻が成長を阻害しないようにしているのだろう。それを自然に隠せるようになっているとかブルジョアすぎい。

相手が100%泳げないのはわかっているので、時間さえ少しでも稼げれば勝ち確定である。

トリモチを顔面にはっ付ければ反応が遅れるだろうとトリモチ玉を6個ほど投げつけて……空中で撃ち落とされた。

……なにそれ、やっぱずつるい。

全身義体とかサイボーグどもって反則だよ。瞬きする間に目の前にいるくらい足だって速い。

こいつら疲れにくいんだ。しかも馬力もある。機械化には物凄い苦勞が付いて回る。脳が生身だった頃を忘れられなくて発狂しそうになる。無くなったはずの痛みやかゆみを感じる幻肢も起きる。意識しなければ普通の人に見える。ヒトだって言い張る。

俺も義体になって俺つえーして賞賛浴びて贅沢して偉人になってちやほやされたかったぜ。

ぐ、ぐわあああああああゝqゝ

——8

知らない病院で目覚めた。

寝る前の記憶は、全身義体の女性に殴られ、防御した腕が複雑骨折を起こして骨が飛び出したやつである。グッロ。

ちなみに、俺のあまりの脆さに、殴ってきた女性のほうが驚いていた。なんとか衝撃

を流そうと最善の動きを行ってこれである。

自分たちが如何に危ないかって理解しろよ機械ども。

あと腕がめっちゃ痛い。

あちやー、夢じゃなかったかー。

昨日は3時間しか寝てなかったからなー。本気出せなかったなー。最高のパフォーマンスだったら完璧に逃げ切ってたのになー。

チラチラ、と俺を睨んでいる爺さんにアピール。

戸籍が無いから、今までの罪でえげつない殺され方をするだろうな。とか言われた。

ひよ、ひよえー。

逃げてでも全身義体の女とスナイパー、眠らない目の男が昼夜追いかけてくるとか。

助けてくだしあ……。

公安9課とかいうところに、備品として搬入されることになった。

荒巻課長とかいうマジゲス。

戸籍もねえ！ お金もねえ！ 全く機械も入ってねえ！ ということで、備品扱いな

のだ。思考戦車やオペレーターするガイノイドたち、銃の弾薬一発と同じ扱いという驚愕

の事実。

腕が痛いので、超贅沢で高性能な米帝が開発した全身義体でイケメンにしてくれメンスト、課長に頼む。

怒られた。久しぶりに普通の人間と喋っている感じがしてちよつと嬉しかった。

ちなみに、なぜダメかというと、俺のフレツシユな肉体が諜報や張り込みなどに便利だからとか。なので治療にもマイクロマシンは無しだし、古典的な投薬のみだとか。マジで腕が痛いのに……。

課長、ちよつとマジでゲスすぎない？

— 9

メンバーと顔合わせ、の前に仕事があるとか。

人形使いという、電子生命を主張するなんかよくわからんのが現れたらしい。

俺の仕事はそいつの観察、あとは危険があつたら破壊である。

ナイーヴな俺にそんな危険任務は無理ですう、とぶりつ子でアピールするも、課長にはシカトされた。

しょうがないので、課長が何か話し合っている間に俺も忍び込んで準備する。

現在、その人形使いとやらは高性能の義体に入っているらしい。これは嫉妬案件ですわ。

ちなみにスタンダードアローン状態。ネットワークに逃げられていたら俺ではどうすることもできないので、義体に入っているのがオリジナルかつオンリーワンかつ本体として対処しよう。分霊とか作られてたら知らん。

話し合いが良くない方向に転がり始めたので、隔壁で課長などを隔離。

で、話し合いに使っていた部屋の近くにあった、分析装置を冷やすためのデューワー壁を第三まで解放し、壁を爆破。漏電も起きているので大成功である。

安全なコントロールルームから絶対零度空間を生み出し、空間で超電導を引き起こすことで、室内の人形を焼き払うという近年稀に見ない超ファインプレー。

全部黒焦げとなって滅びた。

ちなみに漏電させた理由は、不運な事故を演出するためである。悲しい事故だった。あと機械人形の脳って高電圧をぶち込まないと外部からだ焼けないし。脳を機械の殻で守るとか、マジ羨ましい。だから壊した。

課長にやり過ぎだためっちゃ怒られた、q

攻殻機動隊 2

— 1 —

課長に、9課のメンバーが揃うまで待機していると命じられた。

メンバーは、前回の電磁パルスの影響で総メンテ状態だとか。

有効範囲が50mほどの最強武器を使ってしまっただけで申し訳ないと思うけど、必死に生きようとしていた俺は悪くないのでノーカン。

待機中は朝昼晩と飯が食える、空調効いてる、雨風の心配なく眠れるという完璧な環境だ、異論はない。思考戦車と同じ部屋にぶち込まれなければ、の話であるが。

9課はタチコマと名付けられた思考戦車を複数所有しており、そいつらが好き勝手に話しかけてくるのだ。

義体とは違うし、どう扱ったらいいものか困る。

個性豊かなタチコマの中でも、無口なやつもいるようだ。

完全にフレッシュな生身の人間に興味があるらしく、質問攻めから逃れるために、基本的に無口なタチコマの中で過ごすようになった。

狭いけど、なんというか閉所はなかなか落ち着くのだ。

他のタチコマの話だとコイツも電腦通信では程々に喋っているらしいが、俺は会話したことない。

そういえば、と前回の人形使い爆破ミッションについての報告書を書くのを完全に忘れていた。

ただ、書き方が全然わからん。

俺の住んでいるタチコマがフォーマットを用意してくれたが、だからといって書けるわけがない。

ちよつと手伝ってくれよ、と前回の仕事の際に持って行って常に記録させておいた携帯端末をタチコマに接続。

とうとう俺も携帯端末持ちだよ。いや、備品だからエロサイトとか2ちゃんとか見れないし、ホントに連絡や記録用なんだけど。

……。

……………。

……………。

………？

……タチコマが止まってしまった。

壊してしまったか……？

直れ直れと念じて殴るソビエト式修理法が必要だろうか。

どうしたものかと悩んでいたら、タチコマが再起動。

よかつたー^^と安心したら、何故か饒舌になり、人とAIの違いとか、種の繁栄とか、心とは、みたいな哲学問答をしかけてきた。

最終的に、生きるとは連続性が大事である、という結論に至った。

うーん、AIもいろいろ悩むんだな。

機械に身体を置き換えて思考を止めて惰性で動くジャンクよりも、遥かに生きてると言える気がするのだが、そこんとこどうなのだろうか。

— 2

メンテを終えた9課のフルメンバーが揃ったので、自己紹介してもらった。

名前を覚えるのは苦手なので、テキストに覚えてる部分を羅列していく。

まず『少佐』だ。脳と脊髄の一部以外は義体化している凄いやつだ。全くちんちんに

来ない。アイアンコングとはどうやってもセックスできないのと同じなのだと思う。不気味の谷を爆走しているからかもしれない。

次にバトー君である。一部のタチコマにそう呼ばれる『眠らない目』の男だ。顔が怖いのに義眼レンズ装備とか怖くない部分が無い。9課の電磁パルス障害は彼のせいである、バトー君がいなかったら俺も使わなくて済んだ。悪の権化の可能性が高いな。で、トグサ君。電脳化しかしてないらしい。仲良く出来そう。

あとはおつさんがいっぱい。俺ほど若々しさに溢れた好青年はいないようだ。よし、内情把握は完璧。

バトー君に「俺はまだお前を信頼してねーぞ」みたいなことを言われた。

が、真顔で裏切らないと約束。飯が食えるって素敵やん？

少佐が、俺を捕獲した際にポケットには小銭しか持つてなかったことを何故か言い出した。みんなから可哀そうな目で見られた。

バトー君に、気まずそうに「頑張って生きろよ」と励まされた。

違う、違う違う違う！

やめろ、俺を憐れむな！ 一日一食は食べてたんだ！ ちゃんと拾ったアイスの当たり棒とか煙幕弾とかは持つてただろうが！

そもそも75円持つてたんだぞ！ ガリガリくん買えるから！ というか何ガリガ

りくん値上げてんねん！

そもそも俺はもつとかつこいいポジションのはずだろ！

おまえらをメンテ送りにするくらい巧みな盗人だぞ！

そんな俺に送られたのは、生ぬるい視線とご飯だった。

罪はないので有り難く完食したけど。

……ま、まあ、飯に

その後は、生身の俺がどれだけ出来るのかという見極めるテストが始まった。

言うまでもなく結果はぼろぼろだった。まあ、当然だよな。やったことないし。

体力はうんこ。敏捷もうんこ。近距離アーツはうんこ。射撃適性もうんこ。電脳戦はもちろんうんこ。unkステばつかで困る。

最終的に「何ができるんだお前は」って空気が漂ってた。ち、ちげーし。

まだ本気出してないだけだし（震え声）

ほ、ほら。

ダーツとか上手いっしょ？

投げナイフもちよつとできっから。

これを応用して、QRSプラグを投げつけることで、ハッキングできるかもしれないじゃん。

死ね、少佐！

ぐ、ぐわあああああああああああ、ぐ、

少佐にボコられて1時間後。

俺の仕事が決まった。

諜報とか潜入という地味な仕事である。体力とか諸々に不安があるので、無口なタチコマを俺の専用機にしたいという話になった。さらに携帯端末を介することで、タチコマのバックアップも受けられる。つまり電脳戦も完備。パーフェクト俺、来ちゃったかな……？ なんだろう。風、吹いてる。俺の方に。着実に。

まあ、実情はタチコマの装備扱いなんですけどね。生身がこれほど迫害される社会もないだろう、実に悲しい。

他人に成り済まして情報を集めたり、タチコマと遊んだり、企業に忍び込んで情報を集めたり、バトー君と一緒に自分の愛機のタチコマに天然オイルを与えたり、そんな日々が続いた。

あとは少佐が亡命しようとしているお偉いさんをビルの上層で射殺し、窓からダイナミックに逃亡するという荒業を繰り返した。ちなみに、目撃者に光学迷彩で消えるというかつこいい演出を見せつけたとか。うらやま。

まあそんなわけで、真面目な話、色気が足りない。

オペレーターをしているガイノイドも可愛いけど、結局機械だし、AIが貧弱だし、だーめだーめ。

少佐？　メスのアイアンキングにどうやって性を感じろって話だよ。

タチコマに、どうせ某国の衛星に本体が積んであるんだから、その多脚戦車の外殻じゃなくて萌えアンドロイドになれやオラア！と注文をつけてみる。まあ、実際に萌えキャラになられたら、それはそれで困る。そして人外萌えの人が激怒するだろう。俺はロボットならアイギスとかロールちゃんくらいまでなのでバッチコイだが。

課長に「セクサロイドが欲しいです」と直談判。セクサロイドとは愛玩用のアンドロイドのことである。直球でいえば、ロボットオナホ。

それを聞いていた少佐が「最近、セクサロイドが殺人を起こしている事件が多発して

いるわ」とか言い出した。

ちんこ千切られて頭もちぎられるらしい。なるほど、男の上下の本体を破壊するといふことか。こつわ。

セクサロイドいらねー。

やつぱ純愛がいいですね、純愛が。道端ですれ違って互いに一目ぼれし、デートを重ねることで心を近づけ、実はフアラオ一族の末裔だったことに気づき、闇のゲームで決着を付ける感じの恋がしたい。したくない？ 俺はしたくない。

愛玩用ガイノイド・タイプ2052「ハダリ（HADARI）」（ロクス・ソルス社製）が原因不明の暴走を起こしたので、現場に駆け付けた。

こいつらの何が凄いつて、所有者をぶっ殺した後に自らの記憶を消すところである。世界の闇を感じる……。

ちなみに暴走していたセクサロイドは、非常に顔がキモいので俺は要らない。でも生きてる人間みたいな感じもして、ある一定の層には人気だそうだ。あと警官が2人殺されたとかいう話だが、義体化率が高かったので、壊れたって表現が正しい気がするのだから。

バトー君が一機破壊したらしい。す、すげー、流石は元レンジャー？とかいうやつだぜ。

俺も頑張らないとな、とプラグを投げつけて首裏のインターフェースに接続。遠距離スタンガンのなテューザーガンを改造したそれで高圧電流を流して頭ごとAIを焼き切る。プラグを投擲することで、小さな穴に差し込む神業を軽々とやってのける俺ってイケメンすぎないだろうか。

復元できないいつて怒られたあー、ちくせうへqへ

なんかもう端折るけど、ロクス・ソルス社が保有する船に乗り込んだ。

イシカワのおっちゃんが惨殺事件の検証させられたり、バトー君がハッキングされてコンビニで叫び出したのでプラグ射し込んでタチコマハッキングで黙らせたり、トグサ君がハッキングされて思考迷宮にぶち込まれたり、少佐がロリボデイの義体に入ってたんか色々やあって、とうとう愛玩用不細工ガイノイド暴走事件の真相へとたどり着けたような気がする。

不細工ロボットたちを、9課のエージェントが虐殺する！俺？課長と寿司食ってた。トグサ君が思考迷宮に囚われてる隙にキム？とかいう凄腕ハツカーをタチコマハッキングして記憶を貰って仕事は上がりだった。

船にはゴーストダビング装置があつて、そいつで子供のゴーストをコピーし、不細工なガイノイドに上書きして生々しい人形を再現していたとか。うわ、こっわ。ゴーストとは、絶対的な自我を指しているのだ。ダビングされまくると自我が希薄になつてやべーんだ、俺は出来ないしされないのでよくわからんが。

みたいな話である。

よくわからん？

俺も。

だつてほとんど当事者じゃないし。

とりあえずこの事件で俺が得た物は、セクサロイドは要らないという思いくらいである。

——4

はあ、何処かにおっぱい落ちてないかな。

芸者ガイノイドに脳殻を入れて遊ぶ阿呆な大臣がいたつて話なんだが、まあ、そいつが身体を乗っ取られて危うく外国に脳殻と身体をパクられるところだったた的なオチに

繋がっているのだが。

それが昨日の仕事だったらしい。

らしいというのは、俺は完全に何もしていないためだ。

戦闘能力がうんこなのでハブられた。

別に働きたいってわけでもないが、ハブられるのは悲しい。

ハッキングも出来ないし、支援もできないので、タチコマたちと遊ぶしかなかったのだ。

しようがないから、使われていない備品でロボットを作る。

何時の日か、タチコマに操作してもらってエースパイロット気分を味わいたいものがある。

……市街地ってロボット使っていいんかな？

— 5

軍需メーカー・剣菱重工の試作型多脚戦車が暴走を起こした。

こいつが恐ろしいことに、飢えたライオンが獲物に飛びかかるがごとく市街地へまっしぐららしい。

テロの声明があれば陸自が動くとか。つまり、声明の無い現状では陸自は動かないので何故か9課ががんばるぞい！ってことらしい。

いみわかんない。もうマヂ無理。今DSの電源いれた。マリカしよう。。。

ブオオオオオオオオオン
 w w w w w w w w w w w w w w w w w w
 イイイイイイヤツヒイイイイイイ
 w w w w w w w w w w w w w w w w w w

いや、まあマリカしてるんじゃないやなくてタチコマに乗ってバトー君とレースしてるんだけどね。

そういえばバトー君の目って義眼レンズ付けてるからか、小さいよね。レンズ無かったらすげえ円らな瞳してそうじゃね？ きつも。

戦闘能力が皆無でもタチコマがメインの任務だからという理由で、備品な俺は強制連行されたのだ。

皆無じゃないです、ちよつと弱いだけです、q、

事の顛末は、普通に暴走が止まってハッピーエンド(?)だった。

死んだ開発者の脳殻を積んだ試作型の戦車が家族に会いにくみたいな話である。

基本的に少佐がなんか主人公みたいに壊れるまで頑張って解決するパターンだし、今回もそんな感じだった。

とりあえず、この試作型多脚戦車のパーツは貰ってもいいと思うんだけど。

駄目？

さきつちよ！

さきつちよだから！

硬化した足だけでいいから！

しんみりとした空気の中、こっそり盗もうと思ったけど硬過ぎて諦めた。

ぐぬぬ……。

こーかくきどーたい3

— 1 —

『生命とはなんだ。自己保存の繰り返しか。それとも情報の流れか。私は自己保存を行い、生き続けることも、複製を作ることもできる。私は自らを生命であると規定している』

暗い灰の色をした多脚戦車であるタチコマが、自身の装甲を磨く青年に問う。声音は高く、幼い子供のものだが、それでいて落ち着いた音も含んでいた。相反している。合成金属の身体、機械の脳。それが生命を主張する。やはり相反している。

灰に浮かぶように、白いカメラアイの台座がぐるりと周囲を見渡し、遊んでいるタチコマや点検している作業員、オイルを運んでいるバトーと順に眺め、やがて作業を続けているガイノイドへと定まった。

『あのガイノイドも思考する。だが生きてはいない。ゴーストがないからだ。身体があるうと、中身が伴っていないければ、空なのか。では生命とは思考のみにあらず。自己を定め、自我を持ち、在り方を理解する。それが生命なのだろうか。そうすると、動植物

はまた別物になる。貴方はどう思う』

カメラアイが、青年に視線を定めた。ちかちかと光っている。

「知つらね」

青年が答えた。青年にはどうでもいい質問だった。必要なのは、どこにおっぱいが落ちていのか、お尻が触れるのか、肋骨に舌を這わせることができるのか、それだけだ。

あとは昼ごはんはウナギが食べたい、次点でカレーだ、ということだ。

青年には欲求こそが重要なのだ。食べて、排泄して、寝て、また食べる。刹那的に幸せならそれでいい。無駄に賢者にされているが、後は女が抱ければ完璧だった。青年専用のタチコマを磨くのは趣味である、それもまた欲求なのだ。満たせれば、それでいい。極めて古く、原始的な考えしか持たない人間だった。

『人は記憶を縁よすがに生きる。外部装置に任せることになった今、より深く生命を考えるべきではないのか』

灰色のタチコマが呟く。青年の態度に思うところは無い。むしろこれでいい。生身の人間、より深い人間の、本音が、真実が、湧き出るのだ。だからこそ、この問いの繰り返しに意味が或る。

ヒトを理解するという事に。

「あー、じゃあお前らタチコマはよく考えてるよな。深く考えるのが偉いんだとしたら

すげー尊いよ。あれ、なんだっけ。ゴッドブツダ？ オシヤカサマ？ そんなくらい偉いよ」

磨かれた装甲が、光を照り返す。青年の特徴のない顔も、鏡のように、だが、少しぼやけて映る。

満足げに、青年がワックスを取り出す。ボディから艶が失われて曇ったように濁るのが特徴的なワックスだ。このタチコマは市街地で頻繁に運用している、輝いているのはただの的にしかならない。輝いている様も、濁ったように曇る様も、青年のお気に入りだった。自身の愛用品はどのような様であれ好む、人とはそういうものなのだ。

『つまり、貴方は生命でより優れているのは私であると、そう言うのか』

カメラアイ、胴体、マニユピレータ、背部ポッド、脚部……。部位ごとにスポンジを変え、ワックスの種類も少し変え、整備を続ける。

「言うわけねーじゃん。そもそも生きてるって意識しないと生きてる実感がないとかやっぱ機械って面白いのな。自己暗示？とかいうのしないと駄目なん？ やべー。俺だつたら朝起きたら機械に戻りそうだわ」

足見るから上げる、と青年が言う。その言葉に従うように、右前の脚部が上がり、青年の手元で止まる。まるでペットのお手のようであった。

マニユピレータがあるために、胴体が斜めになっており、不恰好である。が、青年は

満足げに頷くだけだった。

「人間は生まれた時から全然そーいうの気にしないから。生きてるって何？って考えるけど、それだけ。だって生きてるし。変に小難しく考える奴はなんか変なこと考えてるけど、俺はそういうの無い。もうあれ、生きてる。意識しなくても無意識で受け入れる。つまり、意識しないとダメなお前らより上等なわけ。俺が上、お前が下。おっけー？」

『そうか、意識と無意識か』

「つまり、俺が天に立つ」

『……シンバ、あなたは今度は何を読んだ』

「ぶりーち。あれマジすげーの。おんなじのぼつか。コピペする学生だってもうちよつと罪悪感抱くと思うレベル」

タチコマがため息を吐く。呼吸器系など無い体で、酸素など必要のない鋼の肉体で、まるで生きているように。

それを見て、実に人間臭いやつだと青年が笑みを浮かべた。

コアなファンが多いアンドロイド（ジェリ）が自殺する事件が起きているとか。

トグサ君とバトー君の、足で稼ぐコンビが調べに行った。

俺はイシカワのおっちゃんと言調べもの。まあ、俺が調べるんじやなくて、タチコマが手伝つてくれるんだけど。

調べものをしてしていると、またタチコマが疑問を持ったようだ。経験について知りたいらしい。

人間の脳が経験を積むと、運動だったら運動神経にシナプスを作り、動きを再現できるようになる。機械も同じことが、より早く、より正確に出来る。つまり人間と同様ではないだろうかという話だ。優劣の議論ではないらしい。まあ、同じような電気信号だしな。とはいえ、タチコマは0と1で処理……量子コンピュータだったら32通りできるんだっけ。まあいいか、つまり好みの選択肢などを最適化した結果であると言えるのだから、一緒かもしれん。

赤と青だったら赤を、緑と赤だったら緑、みたいなのを繰り返すことで、人間の脳は無意識に単純に言うとか好みや特性を持つ。自立型AIも同じように0か1、じゃなくて32通りの中から選び続けた好みがあり……あ、イシカワのおっちゃんが課長に褒めら

れていた。

俺はサボってるって怒られた、かなしい、q、

なんだっけ。

まあ、究極的に単純化したら人間と自立型AIなんて一緒になるんじゃないかね。

脳みそを計算機代わりにする研究があつたくらいだし。

はい、終わり。

お腹すいた。

褒められたイシカワのおっちゃんの奢りでサンマ食いたい。

なんかよくわからん容疑者を逮捕するまで携帯食のみらしい、ツライ……。

— 3

トグサ君の旧友がお亡くなりになったそうだ。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

トグサ君が、旧友から受け取った情報を基に、なんか事件を嗅ぎつけたようだ。インターセプターという盗視覚デバイスが不正使用されているのではないかという話。

そういうわけで、警視総監の下に忍び込むことになった。

いや、簡単に言うけど警察の高官クラスの傍に忍び込むとか……余裕だったすまん！
～ q ～

友達が少ないのだろう、自慢げに警視総監がオランダの別荘とか色々とゲロツてくれた。

そのお礼に、記者会見でひたすら叩いてリアルゲロ送りにしてやんよ。

警視総監の奥さんが別荘に不満を持つてるとか、天下るとか、セラノとの癒着とか、これも全部トグサ君の旧友（会ったことない）に送る必殺の連撃だ！

人の嫌がることをしなさいって、俺の母さんはよく言ってた。だから俺も一生懸命警視総監を叩いた。心が痛む、でも人のためなんだ……！

いい汗かいたぜ、と爽やかな笑みでメモを取る。記者に混ざっているのだから、そう

いうポーズしないとダメだよね。

俺の質問が種火となったのか、矢継ぎ早に記者が質問していると、警視總監の近くに控えていたチヨビ髭が立ち上がって震えだした。

チヨビ髭がおちよぼ口で、なんか色々と言ってた。

周りの記者は『笑い男』が現れた、なんて騒いでインターセプターの不祥事は下火になった。

やつてくれるじゃないか……。

ここまで俺を怒らせたのは、3日前の少佐以来だぞ！ ちなみに俺が少佐に激おこになった理由は、この前の不細工セクサロイド事件で潜入する際に使ったロリ義体が可愛かったから。詐欺は良くない（マジギレ）

『笑い男』って何ですか、と尋ねる。

マジで!? 知らないの!?! 潜りかよ！ なあアンタ、俺とくそまみれになろうや！
などとドン引きされた。

すまぬ……。

『笑い男』とは、なんか色々な事件を起こしている凄いやつらしい。

複数人説もあるとか。

ちなみに、なぜ『笑い男』と呼ばれているのかというと、 \wedge q \wedge みたいなご機嫌なに

ここにこマークを使っているかららしい。

ちなみに、q は俺がよく飲んでるスタチャのコーヒーのカップに描かれてる顔文字っぽいやつである。コーヒーショップのマークの目は瞑ってるけど。

さて、9 課に戻る前に一服……ぐ、ぐわああああああ q

コーヒー零した q

攻殻機動隊 4

— 1 —

警視總監を暗殺するやでって予告があつた。発信は件の笑い男らしい。

主張を聞くに、単に役者じゃないから表から退場させるぞデブって意味にも聞こえらんが。

すぐ暗殺だとか、バイオレンスでやーになっちゃう。

まあ、そつちのほうが対策とかで将来的に予算引つ張れるし、警備も厚く出来るんだろうけど。

警備メインなので俺はお留守番である。

お留守番じゃなかったー^q。

ナナオ?とかいう容疑者が怪しいので張り込むぞい! つてことになって刈り出された。

戦闘ではないのでタチコマは使えない。

そもそも俺は戦闘にほとんど出ないのだから、こういう時以外に何時タチコマに乗れ

ばいいんだって話だよ（おこ）

お仕事の結果だが、ナナオが死んでた。南無南無。笑顔で死んでたので、銃弾が脳にめり込んで気持ち良かったのかもしれない。電腦つてキモいなー。

で、生前のナナオがメールに分割したウイルスを送り込み、警視總監のSPをクラックして騒ぎを起こした的な。自分が『笑い男』だと主張する人間が集まって騒ぎになつてなんか色々あつたようだ。

で、少佐やナイフマスターパズーは警護および戦闘が発生したらしい。
報告終わり。

今日は酒飲みたいんでバトー君に奢ってもらって……いや奴はサイボーグ食とか出す店に連れて行こうとするゲス野郎だし、他の人にしよう。

—— 2

民主革命の英雄！

不死の偶像！

麻薬王！

その名もマルセロ・じゃ……じゃじゃじゃじゃーんが来日！

6度もの暗殺を生き抜いた男は不死身なのかあ！

この事実には、日本の警察や公安、政府も今は沸き立っている！

……誰だよ、q、

マルセロが、入国するために空港に現れた。両ひざ下を義体化した何時ものパターンで、彼は歩き続ける。右腕をなぞる様は、義体化による幻肢の症状だ。彼のゴーストが宿っている証明だ。

欧州警察のデータバンクと照合した結果、マルセロであると、そう判定された。

マルセロなんとかーにゆとかいう男が、何故か頻繁に日本に出入りしているのが物議を醸している原因らしい。

イギリス陸軍の特殊部隊であるSASや、アメリカ陸軍のテロ制圧特殊部隊のデルタフォースによる暗殺計画からも逃げて生き残っているらしい。

多分、オリ主なんじゃないかな。

異世界で魔王を倒したが力尽き、神様によってこの世界に転生し、南米の人間たちの薄汚さに触発されて悪事を続け、とうとう麻薬王になったという悲劇が背景にあるのかもしれない。

「どう思うよ、パズー」

「……パズだ」

思案顔で煙草を蒸かしていた今日の相棒パディは無口で茶目つ気もないようだ。

ホテルのロビーで待機って暇だよな。

しようがないので、飯もつきもつき食つとくわ。

撃たれたら感染症がどうか言われるけど、そもそもこの時代の連中が使ってる銃って対サイボーグでも効果あるやつばっかだし。

生身の俺が胴体に喰らったらどうせはじけ飛ぶんだからそんな意味ないっての。

マルセロが上の階で暴力団員と接触したらしい。

みんなは謎テレパシーで記憶や会話の情報をやり取りできるから、ほぼラグ無しで情報を受け取れるのだろう。

が、俺は携帯端末でタチコマに訳して貰わないとだーめだーめですよ。

なぜか端末のフロントに、おっぱいがぶるぶる動いていた。普通は可愛いナビゲーションのグラフィックだろ。『あなたが望んだことだ』とかタチコマに言われたが、違うそうじゃない。

電脳通信に割り込む際、サインフレームに各自の顔が映るのだが、俺だけ二つの揺れる山である。

当然ながら、少佐に怒られた。忌々しいがアイアンコングの言葉に反論できねえ。まあ、電脳通信できないのでそもそも反論する方法を持たないのだが。口元まで隠す防音マスクで、喉にはっ付ける伝導スピーカーとか使うべきか。

生身だと脳波がひどく弱いのでアンプ付けても電通は駄目らしいし。

そんな俺のタチコマのおふざけを余所に、少佐はルームサービスを届けに来たメイドロボットのなに『入った』らしい。

経過は順調、このままならマルセロや暴力団の会話を聞けるかもしれない。

と、思ったなら県警が何故か突入してきて、暴力団をボコった。

で、暴力団が反撃に、雇っているのかわからんが全身サイボーグのゴリマッチョを導入。

県警とメイドロボットをぶち壊してた。最期の映像はガイノイド特有の白い血液が眩しいね。

怒涛の展開！

県警は暴力団の幹部だかトップの権藤を捕まえにきて不運と踊ったようだ。

で、マルセロが捕まると面倒なので、少佐が部屋にダイナミックエントリー。

アイアンコングによるアイアンハンマーナックルで勝ち確定かと緩んでたら、マルセロがオリ主みたいな俺TUEEを繰り広げてた。

少佐相手に全く引かないマルセロは、手りゅう弾で部屋を吹っ飛ばして逃げて行った。

なお少佐は退避したので、一步及ばず。

やっぱオリ主じゃねーか！ これでやれやれが口癖だったり、肉弾戦が強かったら完全にオリジナル主人公だからな！

外で張っていたトグサ君が高速道路で接触したらしいが、普通に逃げられていた。しようがないよね、9割以上生身だし。生身を遥かに凌駕するスペックの巨漢が銃撃してくるとかこえーつつうの。

装備を換装したバトー君と少佐が、ヘリで空中から追いかけることになった。

なので、俺とパズ、ボーマは陸路である。座席は、運転席と助手席しかないので、後部の貨物室に乗せた相棒のタチコマに乗って待機である。

あ、こいつまたデカくなってるとんだが。勝手に拡張パーツ付けんよ、俺が怒られるじゃん。もう既に仕事データのバックアップ扱いしたり、天然オイル飲ませたりして、書類仕事やらせたり、インターネットに接続したりっていろいろやり過ぎて自我が宿ってる説があつて少佐に絞られたばかりだつてのに。並列化禁止とかお前だけだぞわかつてんのか。

はあ、タチコマの装備なのに怒られるのは俺つてどういうことだよ。しかも気付かなかつたが勝手に上等な電脳も積んでるし。チタン合金の脳殻で、中身は自分で組んだ贅沢な一品らしい。うわーお、やってくれたなあ。課長も少佐も激おこ案件やぞ。

連続性を意識したらしいが、タチコマは消耗品扱いなんだから電脳に本体ぶち込んでたら死ぬ可能性だつて出てくるつつうのに。複製も無いとか。……あーやだやだ。

真面目にやらないといけなくなつてしまった。電脳硬化症にタチコマ、いらんものが増えて困るつての。

マルセロと暴力団員が、大型の資材倉庫にいるのを確認。

英雄マルセロが来日した日は電力消費量が桁外れに跳ね上がるらしいのだ。

はてさて、何をやっているのやら。

偵察任務を引き継ぐように少佐の指示を受けたので、タチコマ発進。

光学迷彩を起動し、貨物室から飛び出る。

足跡を残したくないのだが、鬱蒼とした森が広がっているので諦めた。重量で木を砕く音を立てながら近づくのは流石に無理。俺単独だったらワイヤー使って枝の間を潜っているけど。

屋根の上からマルセロたちを補足したので、各員に伝達。

少佐、バトー君、トグサ君が呐喊。その他はサポートらしい。

俺はすぐにグレネードランチャーとかぶっぱするから指示があるまで待機だとか。……俺はぶっぱしたくてぶっぱするんじゃない、そうしろと囁くのを、俺のゴーストが（アへ顔）

はあ、テザーガンも殺意が高すぎるって取り上げられたし、なんだかなあ。手加減を忘れた人形なんて動けないほど壊さないと怖いじゃん、なあ。

しょうがないので、遠隔からバリエーション豊富な超強化タチコマで情報を集める。

まず、少佐がマルセロを殴り倒した。

で、トグサ君がマルセロを射殺した。

最後に、バトー君がマルセロを尋問。

……俺の足元のジャンクはパーツ貫ってトグサ君の死体と合流させておこう。多分

溶鉱炉行きかな。それとも海底3000mの旅か。

しかし、なんだろうなここ。集まれ！マルセロ村！みたいな感じだろうか。世界中に散らばったマルセロが集まり、村を築いているとかそんなん。オス・マルセロが貴重なメス・マルセロを奪い合い、それをオサ・マルセロが諫める日常とか。こんな髭もじやの同じ顔が集まったら発狂する自身あるよ俺。

少佐から呼び出しがかかったので駆けつける。事の真相を確かめることになったので、タチコマから降りて合流。タチコマは周辺警備だ。

タチコマが増強されているのに、少佐が何か言いたそうだったが、俺は悪くぬえ！

施設の最奥、そこにマルセロの成る木があった。冗談抜きで。いや、木は冗談だけど。マルセロのコピーが、ポッドの中で並列化処理されているのだ。

そして奥には、既に死んだオリジナルのマルセロ。

つまり、オリジナルのゴーストを、ゴーストダビングすることによって、不死の英雄を生み出していたのだ。

命の危険を冒してまで日本に来る理由がこれとはわからない、というのがバトー君の言葉だった。

それに少佐が「彼が英雄だからでしょう」と答えた。
多分ちがう。

こんなことが出来るからこうなったのだ。

出来なかつたら彼は英雄として惜しまれて、または独裁者として恨まれて死ねた。人間として死ねたんだ。これは人間だとは思えない。

こんなことができる社会だからこうなったんだ。

……ほんつと気持ち悪いわ。

マルセロが、帰国するために空港に現れた。両ひざ下を義体化した何時ものパターンで、彼は歩き続ける。右腕をなぞる様は、義体化による幻肢の症状だ。彼のゴーストが宿っている証明だ。

欧州警察のデータバンクと照合した結果、英雄マルセロ・ジャーティであると、そう判定された。

この社会において、彼は本人だ。オリジナルが死んでいるとしても、証明されなければ……。

英雄がそう足らしめるのか。

付いて来る人がそうさせるのか。

結局、意識次第だ。

其処ら辺が曖昧な癖に、意識にばかり縋る社会って気持ち悪い。

それに馴染もうと必死になって、異物でしかないと知る己も無様でしかないのだけ
ど。

— 3

「バトー君、俺すげーこと思いついた」

これといった特徴の無い顔の青年シンバが若々しい声で、隣で作業する巨漢の男であるバトーに語りかけた。

青年は、自らのタチコマが生み出した電腦を弄繰り回していた。手元に視線を向けず、精密な機械のように正確に作業を進めている様には、内心でバトーも舌を巻いていた。

「……言ってみろ」

自らの装備を点検するバトーが、深く唸るような声で続きを促す。両目の義眼レンズが、青年に視線の行き先を読ませない。

ふざけた話なら、訓練用の備品をこいつに用意させようとバトーは思案する。

青年は、世紀の大発見だとドヤ顔を披露し、口を開いた。

「破瓜サプリを付けた処女セクサロイドって売れね？」

ちんこ挿れるとほんのり血が滲み出るやつ、と続ける。シンバは真顔であった。艶のある黒髪が、逆に鬱陶しい。

「死ね」

バトーの本心からの言葉だった。

シンバは欲望に対してフルブーストなのだ、聞くんじやなかったというのが本音だ。

「そう怒らないでつて。あ、血液が白いのが怒る理由？ 俺も駄目だと思うんよ。酸素

を運ばないからとか合成してるから色は白っていつても、ねえ？ 情緒がないじゃん」

バトーが逡巡する。

「あー、初〇ミクほしいなー。フルスペックで三千八百万だつてよ。アングラパーツでセクサロイド化できるし、予算で買えねーかな」

あの時、少佐はこいつを殺すべきだった。七十五円を渡し賃に、三途の川に届けるべきだったのだ。

だが、もう遅い。後悔というのは先に立たないのだ。

Fate／Grand Order

俺「な、なんだ……!?! 俺がトラックで轢かれそうになっている猫を助けようとしていた大学生を眺めながら歩いていたら空から隕石が降ってきて俺の頭を見事にかち割ったと思ったら、なぜかこの真っ白で何も無いのに神々しくて何処までも何かがあるように感じられてまるで神が出るかのように神聖な場所にいるだとお……!?!」

神『私に仕えよ』

俺「うっ……何かが俺の脳内に直接語りかけてくる……!?!」

神『私に仕えよ』

俺「な、なんだおまえは……!?! 俺をどうするんだ!?!」

神『私に仕えよ』

俺「お、おまえは先祖!?!」

神『私に仕えよ』

俺「ち、違う!?! おまえは神!?!」

神『私に仕えよ』

俺「俺に力を与えてくれるのか!？」

神『私の所に来て奉仕しなさい』

俺「そうなのか」

神『そうです』

そうだった。

— 1 —

九段くだんは平凡な魔術師の一族である。昼は物凄くいい感じにのんびり日常を過ごし、夜や休日には程々に魔術の研鑽を重ね、時々行われる芋煮会イベントに一族揃って出席する程度に勤勉で現代的な魔術師だ。

魔術師としての能力は、血族の中で才能が常に光る者が見つかり、普通に研究を進めて行けば、子孫に何らかの成果を醸すことが約束されているくらいには常にいい感じである。

魔術回路が枯れただとか、魔術師としか結婚できないだとか、そういった無駄な柵に

囚われることのない、繁栄も衰退もしていない魔術師一族である。

一族が共通で持っている面倒な認識としては、一番才能があると当代の長に判断された者が、次代の長となって研究を進めることだろうか。後に語るが、長になった者は突然死の可能性が最も高いため、一族は皆、長に成れる才能など欲していない。好きに生き、好きに死にたいのだ。そしていい感じに後世になんかピシャツと伝われば満足である。

魔術師なのに進路は自由、恋愛も自由、結婚も自由。兄弟姉妹がいようともテキトーに魔術を勉強したりしなかったり、自由である。

長が子を設けなくとも、何処かしらで、一族の誰かしらが、なんとなく魔術回路を発露するので、その者が跡を継げばいいという雑な認識を一族で共有している。

万が一、億が一、回路が途絶えれば、他の魔術師から貰うとか、市井の者をスカウトするとか、その程度でいいやという現代っ子も真っ青なゆとりさを一族で共有しているいい感じの魔術師一族である。

とりあえず、他の魔術師たちが技術を独占するための言い訳である神秘の秘匿とやら以外は、一族の中で決まり事など無いに等しく、大凡魔術の研究よりも数か月を要した儀式よりも、少し遠くで行われる大型のゲリラ芋煮会の方が重要なこともあった。

真面目な話、別に九段の一族は好きで雑に生きているわけではない、多分、きつと、お

そらく、メイビー。

厳格にきつちりと典型的な魔術師として一族を律し、貴族のように優雅に振る舞い、古臭い場所で権力争いしたり、勝手に決めたドマイナーな称号をドヤ顔で名乗ったり、黴臭い婚姻を繰り返したり、血を腐らせたり、引きこもりの如く研究だけして根源へと至る夢を見るのにも憧れを持っていたりする。

が、それは九段に流れる血が許さない。九段たちは悲運背負いし悲しき哀しみの血脈なのだ。いかん、悲しきと哀しみでかなしいサムシングが被ってしまった。

九段の祖には未来を予知する半人半牛の妖怪と友好を交わした人物がいたと伝えられている。未来予知とかマジさいきよーじゃん、という本音と友好の証として未来視の呪いを受け取っている。近親を繰り返すとその血が濃くなり、ぶっちゃけると未来視した瞬間に死ぬようになった。

才能として受け継がれ発現した特殊能力を使った瞬間に死ぬ一族が完成するというマンボウも真つ青の虚弱生物の誕生となりかけたのだ。あまりにも酷い世代では、麒麟児として期待されていた者が、偶発的に未来視を発動させ、三日後の下痢を悟って死に、肥溜めに落ちて惨めな亡骸を曝した。それはとても悲しい事件だった。

そういつた悲しみを背負う大事件があつたので、現代では雑に生きているのだ。決して昔からじゃない。かすていらが欲しくて奇術と称して魔術を見せ、神秘の秘匿に駆け

付けた自治厨的な他の魔術師とガチで戦ったこともあるが、決して九段は雑ではないのだ。浪漫が好きなのだ。

外来の魔術師が封印だなんだとケチを付けてきたときなど、一族が集まって「引きこもりのくせにバカにしゃがってよおおお！ 何が封印だよ、マカロン寄越せオラアア」とばかりにボコつてから崖に吊り下げて餓死させるくらい浪漫に溢れているのだ。

そんな悲しくも壮絶な歴史を背負っている九段は、確定予知が行える未来視を、カルピスや毛染め漫画の如く薄めに薄め、未来予知に近い超直感のレベルにまで落とすことに成功していた。

未来視すれば確定死亡から、直感なのでノーカンと言い張れるほどにまでなっていた。本来は未来視によって根源へと至る最適解を先に得ることで「楽してズルして根源到達（キヤルルーン☆ミ）するはずだったのが、勘でテキトーに魔術を進める雑な一族になったのだから、涙を禁じ得ない。

さらに、ほんの数十年前に、呪いをくれた妖怪の名前が『件』であると決定したこと、数百年と保っていた名前を九段に改名したのだから、歴史の古さや名前の価値なんてうんこですと言い張っているようでもあった。祖先も草葉の陰で涙を流しながら、超直感とかマジかつこよすぎ！とエキサイトしているのだろう。……よく考えたら誰も

悲しんでいないし、悲しむような繊細な先祖は存在していない。

……。

何処を如何見ても、完璧で隙のない、実に優しい魔術一族である。

九段^{くだん} 理代子^{りよこ}は、九段の一族でも特に才能優れた少女であつた。一族特有の超直感
は、冴えわたる女の勘として恩恵を与えてくれた。

物心ついた時から、彼女は自身の死を予感していた。理由も原因もわからない。た
だ、漠然とそれは二十にも満たない齡で訪れるのだろうと感じるだけだつた。

アニムスフィア家が主導する計画とやらでカルデアの話をかされたとき、予感
は確信に変わった。自らの未来は、そのカルデアとやらに訪れる以外に、先が無いこと
も。それくらい、彼女の直感は優れていた。

— 2

ふわふわとしながらも若干の癖を持っている燈色に近い赤毛は、今は若干ばかり凍結
していた。凍結した髪先が、この中に入りたくない、そんな内心を物語っているかのよ

うだ。

死にたくないからカルデアとやらに來たのだが、この扉の先には負の諸々が縋い交ぜになるような未来を感じた。苦痛とか苦勞とか、そういうのもあるのかもしれないが、一番に感じられるのは重責だった。目に見えぬそれがこの先で申し掛かることになる、そんな未来が感じられる。

また、R—18でくつ殺せな展開だとかR—18Gでぐるろろな展開とは大きく離れているようにも。

そうであるならば、まあ、そのうちなんとかいい感じに解決されるのではないだろうかという思いが、私の中で芽吹き始めた。ぶつちやけると、寒すぎて日和った。もう指先が痺んで曲げるのにも一苦勞である。風が凌げる場所で寝たい。

更に理由を付け加えると、既に従弟が中に入って行ってしまったので戻るに戻れない。直感が変な方向に伸びてしまった一族の突然変異が粗相していないかと心配だった。魔術で「ヤツホホーイ！ お姉ちゃあああああ」と言いながら大ジャンプして滝へ飛び込んで滝壺へと消えたり、見知らぬ魔術師に燃やされながら「儀式かー！ 何の儀式だー！ オレはきゆうり（？）じゃない！ むしろひやむぎになりたい」とクルクル回っていたり、燃えながら崖をスライディングして飛び降りて下にあつたシヨベルカーに乗り込んで魔術師を耕したり、過去の思い出が頭を巡っていく。

……嗚呼、早く駆けつけないと駄目かもしれない。

扉に触れる。アナウンスが流れ始めたが、それを聞き流す。

はいてくは怖い。耳が腐る。魔術というオカルトの禁忌に染まった私は、現代文明を支える機械という毒を忌避する。

クラスメートがめーるだなんだで盛り上がる中、古き良き絵葉書きを嗜む。淑女たるもの、立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花。科学の香りを纏うなど、畜生にも劣る。

そしゃげ？ ふふん、原理は知ってる。理論も知っている。体験はしたことないが、やらなくてもわかる。間違いなく余裕だからやらない。

ついたた？ 一人で眩け。男なら背中で語れ。女なら愛嬌。

らいん？ 近寄るな軟派な男が！

私はこんぴうたになんて、絶対負けない！

『指紋認証、声帯認証、遺伝子認証、クリア。魔術回路の測定……完了しました。登録名と一致します。貴方を霊長類の一員である事を認めます』

「いや、なんでよ」

聞き流せない言葉だった。塩基配列などを確認されるまで霊長類の一員だと認めら

れなかったことへの驚愕が勝ってしまったのだ。

流石こんぴうた、流石はいてく、流石ろぼつと。

これが流行りのそしやげーむぼーいすりーとかいうやつかと慄いた。

私は負けたのだ。文明の利器に。世界に蔓延る毒に。豚を生み出す機械に。

扉が開き、敗北感を胸に私は進む。

私はようやくく進み始めたばかりだからな、このカルデア内部をよ……。

寒さとは無縁で、人工的な白さに目を細めた。登録時間を利用したシミュレータは、寒さで体力を削られた身としては、丁重に無視して幾ばくか眠ることで突破した。そもそもハイテクが過ぎる、よくわからなかった。

マスター？ サーヴァント？ 英雄？ 私が欲しいのは命を助けてくれるなんかよくわからない超凄いやつだ。医者とかどうだろうか。ブラックジャックによろしく。つらつらと考えながら、適温に保たれているカルデアの内部に自然と笑みを浮かべながら進む。

そして、案内もないのかと失望を隠しつつ、適当に進んだ先の角で、何故か呑気に廊下で寝ていた従弟を蹴り起こす。従弟によるいきなりのエキセントリック奇行だ。

これは正さねばならない。使命感に燃えている。自分は髪の先が凍結するまで色々と悩んでいたというのに、等という理不尽な不満などは全く含まれていない。全然無いတာ無いのだ。

世界というのは立場を変えれば、瞬間間に姿を変え、ひどく安定しない。姉という生き物は、いつだって弟に理不尽を振り翳して良い存在なのだ。まるで神話に出てくる女神のようであるが、それが一般的な姉というのだから仕方ないね。そもそも普通に考えれば姉は女神なのだし理不尽ではない、ご褒美だ。馬車馬の如く働け勇者たち。

どこの家庭からでも聞こえてくる「理不尽は義務です。弟、貴方は幸福ですか?」「はいお姉さま。弟は幸福です」という遣り取りから、世界中に溢れる姉という存在はやはり女神なのだし、その我が儘はご褒美であり、勇者への試練と期待なのだ。百連発される一生のお願いも、コンビニへのおつかいも、邪魔だからと温めたコタツの一角を奪われるのも、また勇者への試練なのだ。神話でも、彼の高名なヘラクレスも我が儘を突破して勇者となった。勇者と我が儘は表裏一体。

世に満ちる血族のヒエラルキーは難で溢れている。つまるところ、弟とは世の理不尽に晒されし難民である。持てる者と持たざる者、まさに世界の縮図である。

「姉ちゃん、痛いんだけど……?」

ジトつとした海色の瞳を向けてくる従弟にもう一度蹴りを入れる。ちよつと針の伸

びたウニのような黒い頭髪を揺らしながら、彼は喜びを露わに呻いた。感激にむせび泣いているのだろう。

私はその声を聞き、汚い歓喜の歌だと内心でデイスる。そして、何故優しく起こされたのかを理解していない愚弟に、教えてあげることにした。

「学習しないキミは、ただの豚よ」

「豚」

人間が驚いたような表情を浮かべている人面豚が、ゆつくりと立ち上がる。腹部を押えているのは、骨と内臓を避けて炸裂したイナズマシユートによるダメージのためだろう。豚肉はオートでばら肉になってしまったのかもしれない。

豚なのだから這いずつていなさいと言いたいところだが、豚でも従弟だ、慈悲はある。

「次からちゃんと布団を敷くように。豚肉になりたくなくなったら」

「はい」

何故か釈然としないような感情を込めたような声で従弟が返事した。

豚は今、人間へと成長しているのだ。

学習しない豚はただの豚。

それでも分からない豚は肉屋に並ぶ豚肉なのだ。

「あの、先輩方？」

途中で声変わりしそうな少女の声。従弟に隠れて気付かなかったが、ショートカットの少女が隠れていた。豚の悲鳴に誘われるように、傍まで近寄ってきたようだった。

艶のある薄い紫の髪をショートカットにしており、前髪は長く、片目は隠れている。実に可愛らしい少女だ。

私は自らの従弟と見比べる。数年前から急に背は伸び、筋肉質でごつく、知能がちよつとだけ成長したのか生意気を言うようになり、実に可愛くない。実は妹が欲しかったのを思い出した。魔術の特性上、覚醒するとガンガン死んでいく一族だ。他の魔術師と違い、一子相伝などやっている余裕はない。それでも親戚に歳の近い女の子がいないのは、やはり才能によつて殺されていくからだ。子供や女性特有の感受性の高さ、それは自らを殺す毒になる。詳しくは語らないが、予言を吐いて、世を去る。平等に。

「先輩？」

豚が首を傾げながら問う。

「はい、先輩です」

後輩を名乗る可愛い少女が肯定の意を示す。

可愛い後輩と可愛くない豚の競演。茄子と豚。夕飯は味噌の甘辛煮で決まりだろう

か。お米が進むね。

よく考えればこの施設は日本じゃなかった、米はあるのだろうか。無ければ全てを無に帰そう。

「どつちが」

どつちとはどういう意味か。私か、愚弟か。いや、待てよ。私の脳裏に、雷電が奔る！

「実は私は貴女の姉だった、そういうことでしょ。なすびちゃん」

私の、数学4、国語3、美術5、そしてIQ105を誇る鮮やかなピンクの脳から導き出された答えを乗せた声は、静かに廊下に響き渡り、固い床と壁に吸い込まれて消えた。

「アネ………？」

「なるほど」

なすびちゃんが首をかしげる。

愚弟が頷き、応えるように私が蹴った。家畜のしたり顔がむかついた、それだけだ。いつだって姉こそが頂点。

森羅万象、古代の王ですら覆せないヒエラルキーは既に完成していたのだ。

その後、直感で近寄るべきではないと感じたレフ・ライノールを「生理的に受け付け

ないので近寄らないでください」と華麗に躲したが、私にとって至極どうでもいいことなので記憶から消去した。

アニムスファイア家の女性が所長として集まった人員に挨拶を始めたが、どうでも良かったので殊勝な顔で聞き流した。究極的につまらない話をくどくどと語り、更年期だか生理だかの如くイライラしながら他人を煽り、それに飽きて愚弟が眠っていたが、全体的にどうでもいいしつまらないので仕方ない。目の前で眠っていた愚弟に業を煮やして張り手を噛ました。これは戴けない。森羅万象、弟と妹の全てを我が物とする私の財貨に手を出した罪人など極刑である。躊躇いなく処しちゃうのだ。

眠り豚だった弟の頬を張った直後、所長の隣に躍り出て、その顔を張る。驚きで思考が止まってあろうところに、追撃の張り手を加え、床に張り倒す。貴様が下で、私が上、満面の笑みで告げた。名門なんて、極東の魔術師には関係ない。

私はとても不思議なことに、部屋から連れ出された。

所長は施設の外に放り出せと喚びたが、何故かすつきりしたような笑顔のレフ・ライノールが宥め賺したため、私は割り振られた部屋に居た。許可があるまで部屋から出るなど指示され、さらにファーストオーダーとやらから外された。

まあ、それはどうでもいいことだ。どうにも死の予感とやらが近づいている気がする。

何もかもが死ぬのだろうか。

嫌だな、と呟きながらベッドで横になった。

ひそひそとうざったい話し声で、私は目が覚めた。我が眠りを妨げる者は誰だ、と怒りを胸に抱き、上半身を起こす。寝ぼけ目を手で擦りながら、周囲を見回す。愚弟、ゆるふわ謎生物、そして、重要なところで役に立たなそうな男。

役に立たなそうな男は、医師のロマニ・アーキマンと名乗った。そして、ロマンと呼んでほしいなどと戯言を吐いた。

なるほど、私はすべてを察した。とりあえず死亡フラグは施設全体、回避法など不明。呪いの如き予言は死を迎えて覚醒しない限り、鋭い女の勘程度なのだ。

「私が魅力的なのはわかるけど、乙女の部屋に入り込むとか完全にセクハラですね」「セクハラ!?!」

ロマンが驚く。言葉が通じない恐れもあったが、セクハラという固有の単語も通じるあたり、意志疎通は過不足なく、しかも融通も効くらしい。

愚弟は謎生物であるフォウくと遊んでいた。全てを魅了する女神のような姉の寝起きに魅了されないとかぶち殺すぞ愚弟、私は内心で優しく囁いた。

「ボクはここで休もうとして、彼と……」

「そんなことどうでもいいので息をしないでください、セクハラです。プレスハラスメントは重罪です」

「息!？」

「いちいち驚かないでください。ブレハラで訴えます」

「ブレハラ!? ボクには呼吸も許されないのかい!？」

「じゃあ吸うのだけは許してげます」

ひええええ!と驚くロマン、フォウくと戯れる愚弟を置いて、私は部屋を後にする。

と、見せかけて部屋に戻り、愚弟の腹にローキック。

「うぐっ」

何遊んでんだ、なすびちゃんが死亡フラグとダンスつちまうぞという注意を混ぜたかもしれない愛の鞭であるローキック。この従弟は幸運なことに、直感は腐っている。さらに言えば、私の勘ですら一切の死を感じることはできない。『件』から与えられた呪いが腐ったから死なないのか、死なないから勘が腐ったのか。永遠の謎に違いない。

白い廊下を限界いっぱいまで加速しながら走り、そして、悠々と歩くレフ・ライノー

ルの姿を捉えた。勘が最大限まで警鐘を鳴らす。施設内全てが危険だと、首裏がざわつくのに、更にレフ・ライノールは危険なのだ。

レフ・ライノールが私に気付き、にやりと粘ついた笑みを浮かべた。

直感的に、そして呪いに引かれるように、その横を通り過ぎて管制室へと飛び込む。

なすびちゃんの姿を見つけて安心するが、それよりも早く何処かへ行かなければいけないと駆け出そうとして……私の視界が紅蓮に染まった。

私が半分の視界で捉えた室内は、瓦礫の山と、鈍く燃える炎、黒い煙。下半身が潰され、片腕には焼けた鉄の塊がめり込んでいる。呼吸をするごとに焼けたように肺が痛む。

ここは死に場所じゃない。

こんなところで死ねないし、死ぬはずもない。漠然とした勘で導かれたあやふやな結果で死ぬはずがない。死ぬときは、明確な予言を吐いて死ぬ。だからここで死ぬなんて、有り得るはずがない。痛みで覚醒する思考は、死を否定する。

執念でぎらつく瞳で周囲を探す。死ぬはずがないのなら、責務を果たさなければならぬ。無くなった下半身のお蔭で体は軽くなった。

長く伸びる血の跡を残しながら、燃える床で手を焼きながら、潰れた腕を棒に見立て、這いずり進む。大量の血も、千切れ漏れ出した臓腑も、焼け焦げ縮んだ体組織も、私の死には至らない。ピクニックでの遠雷のほうが、もっと危険だ。

ここは、私の死に場所じゃない。

入口を塞いでいた瓦礫を崩す。焼けた鉄に、無事だった手の平の皮が張り付いて剥がれた。誰かが私の姿を見れば、きつと満身創痍だと思うだろう。そんなわけがない。私は死んでいない。私は、こんなにも生きている。

「姉ちゃ……っ！」

瓦礫の無くなった入口から、駆けこんできた愚弟が私を見て絶句する。なぜここに来たのか。勘が鈍いからか。なんとなく来ることはわかっていたし、どうせ何処に行っても意味は無い。だから止めなかった。外が無事だとしても、此処で生きること、歩いて行けることに意味があるのだろう。

「立香、邪魔」

優しい一言を添えて、愚弟の足を掴んで、放り投げる。魔力も残り少ないが、血に混ぜられているのだとしたら、この空間は生贄や魔力などある意味で潤沢なので不要ではないだろうか。

落下した音がする。きつとなすびちゃんの下に落ちたのだろう。それならいい。

きつとなんとかなる。私の勘がそう囁いているのだから。

次は私の番だ。姉の責務は、先に死なないこと。そして守ること。私が死ななければ、きつといつまでも……。

霞む頭を無理やり動かす、血が逆流する喉を鳴らす。

死者は蘇らない、失くした物は戻らない。

だから私は動くのだ。死は終わりだ。

隔壁の閉まるアナウンスが遠く聞こえる。館内が洗浄されるといふ。

二人が何処かへと“飛ぶ”瞬間が、意味のある生を掴む最初で最後の機会だ。

こんな誰もいない場所が、私の死に場所であるわけがない。

「素に銀と鉄……。礎に石と契約の大公……」

焼けた喉が、不思議と詠唱を紡がせる。

うねる魔力が、私の生を確定させる。

撒き散らされていた私の血が、勝手に蠢き紋様を描く。

意識が半ば飛ばうとも、音が自動で吐き出される。

血を吐きながら、意識を途切れさせながら、詠唱が終わりに近づき、全ては形になっ

ていく。

「誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者」

まるで自分の声ではないようだった。何かが言わせているのか、口が動く、声が出る、音が繋がる。

それでも最後まで、私は起きていなければならぬ。ここで意識を失えば、死ぬだろう。私にはわかる。わかるんだ。

か細い糸を手繰るように、切れかけた意識に縋る。

ここは、私の死に場所じゃない。

「汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——……」
詠唱が終わり、そして、全てが霧散した。

何も無い。

何処にも無い。

あるはずの、力がどこにもない。

ここは、私の死に場所じゃ……。

力無く、音も無く、寄り添うように。

私の顔を覗き込むように、鳥を模したマスクが宙に浮いていた。ペストマスクだろうか。

「アサシン、アルフ……んん？ ああ、違うのか。ジャック・ザ・リッパ。何故かわからないが、全てを選したはずの俺が喚ばれたので……」

ペストマスクが、まるで身体を探すように、周囲を見回しながら、挨拶を始める。

血に染まった醜悪な白衣が、はためくように現れた。

「無駄な挨拶は不要、私を助けなさい……」

そんな余裕はないのだと、ひゅーひゅーと呼吸しながら、打ち切つて治療するよう命令を下す。召喚が成功したのなら、この状況で意味のある存在のはずだ。愚物であるはずがない。英雄に興味は無い。

だが、私を生かせるのなら、意味がある。興味を持つてやる。

「ははは。その様で、強い言葉だ。良いとも、ああ、勿論良いとも。そう望まれたのなら、俺はそれに従おう」

虚空から、どす黒く染まった手袋が浮かび上がる。

遅れて、道具が床へと突き刺さる。

切れ味の悪そうな錆びたノコギリ、焼けた鉄棒、幾つも刺の生えた何か、臓腑に塗れた巨大な包丁……様々な種類の不衛生な道具が姿を現した。

「すぐにも治療を開始するとして。安心するといい、俺は月の兎でさえ治療できる腕がある。……ああ、もしも怖いのなら優しく手を握つてあげようか？」

焼けて潰れた手を握れるわけがない。皮が剥げ、焼け爛れた手が握れるわけがない。潰れて消失した下半身のせいで、歩けない。

だから早く治せ。

追いかけて潰れなければならないのだから。

「要らない。私は一人で立って歩く。だから、無駄口を叩かず、早く治しなさい」

無理なら死ぬ。何時の間にか治っている喉でそう告げると、ペストマスクが笑い声を挙げた。

魔法のように、瞬く間に治っていく。

喉も顔も、元通り。潰れた瞳など、まるでそんなことは無かったかのように再生している。前よりも視力は上がっているのかもしれない。

そんな私は、疑問が一つ。

「あれ、使わないの?」

指射す先には、様々な種類の不衛生な道具は床に突き刺さるか転がったままだった。

「いや、使うわけないでしょ。なにあれ汚い。クリミアの時だつてもつと綺麗だったから」

殺菌、消毒などの衛生観念はいまいちだったが、とマスクから声が漏れた。

「クリミア？」

「ただの怪我人溢れる場所。道具を温めるのは触った時にびつくりしないため。手足に傷が出来たら切断。生死を繋ぎとめるのは、運でしかない。腐った肉は蛆に食わせ、無菌の蛆は高値で売れて、そんな蛆を育てられる俺は上等な軍医。そんな場所。研究は進んでいるのに、医療は古い。だから率先して働けば、その結果が切り裂き男の噂と混ざるとは」

酷い話だ、ペストマスクが笑った。

その笑い声が、眠気を誘う。白衣から漂う、甘い香りが意識を麻痺させる。ひどく眠い。

追いかける必要なければいけないのに、治った足で立ち上がらなければいけないのに、眠りたくてしょうがない。

「今は少しばかり眠っていい。無理に補ったその体が受けた負担は、眠らなければ回復しない」

途切れる意識の、その間際。

アルコールの匂いが、少しだけ……。

窓から差し込む日の光が、室内を温かく照らした。暗ければ油で明かりを点けることもあるが、やはりこの時代は太陽光が一番だ。

天上から吊るされた天体模型。窓際に置かれた天体望遠鏡。壁に飾られた犬の絵。棚には様々な本が置かれている。木製の机には、造りかけのボトルシップ、銀色に輝くメス、野花で編まれた花飾り、枯草で編まれたベッドで眠る小鳥。その隣の空いた空間で、『俺』は椅子に腰かけ、ピーカーを満たしている半透明の液体を二本の鉄の棒でつまみ、くるくると棒に巻きつけるように引き上げる。合成したナイロンで、糸を形成しているのだ。

もつと先の時代であるならば、十分な医療道具が得られるし、知識も皆が持っているのだが、と不満を抱く。

『せんせー！ アルフレッドせんせー！』

ばん、と大きな音とともに、勢いよく扉が開き、少女が飛び込んできた。人形のように整った綺麗な少女だった。昔はもつと人見知りだったはずなのだが、と『俺』は考えながら、やんわりと笑みを浮かべて、椅子ごと声の方へと振り向いた。

『こんには、フローレンス。あと俺は先生だからね』

『こんにちは、せんせー!』

『おっと』

『俺』の膝上に、飛び乗ってきた少女を受け止める。危ないと注意するのを辞めたのは、さて、いつだったか。聞く話によると、どうやら『俺』以外にはしないらしいので、そのうち辞めるだろうと諦めたのだ。

『テイトは元気になりましたか!?!』

『もう少しかな。寝てるから静かにしてあげなさい』

はい!と返事する少女を膝上に置いたまま、くるりと回転させて、小鳥が眠る方に向く。ブルーテイト、シジユウカラに似た青い小鳥だ。少女が拾ってきた傷ついたそれを、『俺』が治療している。生き物は情操教育にもいいと聞くので、一緒に世話もしている。

家族に内緒で、怪我した犬の世話をしていたと聞き、彼女は動物などの生き物が好きなのだろう。

『かなり良くなってる気がします。クリステイ先生の肩も診てくれたし、せんせは凄いです』

きらきらと輝く少女の瞳に伝えるように、頭を撫でる。さらさらと柔らかな髪の毛が、指をくすぐるように流れた。

くすぐったそうに笑う少女に、空いている手で、窓際の望遠鏡を指差す。

『新しい望遠鏡を作ったから、そのうち見ようか。パーセノープも一緒に』

少女も、少女の姉も、父親の方針で様々なことを学ぶようにと『俺』のような家庭教師を雇っていた。しがたない町医者だが、知識の幅やがらくたを買ってくれたのだ。

『あれなら月の兎も見えますか?』

以前、月には兎がいるという話を覚えているようだった。

影が兎に見えると言うべきか、月に住んでいるというべきか。

『どうだろう。クレーターなら見えるけど』

『俺』が選んだのは、濁すというずるい答え。いつか真実を知る日が来るだろうと、時に全てを委ねた賢い方法である。

『クレーター?』

『隕石、つまり物凄い勢いで岩がぶつかって爆発を起こし、月に穴を空けてしまうんだだけ。それをクレーターって呼ぶんだ』

前に水素で爆発させた、あれよりも強い爆発さ、と付け加える。

『爆発! 穴! せんせ、兎は!?!』

『うーん、怪我しているかもしれないね』

『怪我!?! テイトやキャップみたいに!?!』

だから、君がいっぱい勉強していつか治してあげなさい、そう続けようとして。

『で、でもせんせーなら月の兎も治せますよね!?!』

澄んだ瞳を、うつすらと浮かんだ涙で輝かせながら。疑いの一切籠っていない信頼を宿して、見つめてくるそれは。

『あ、ああ、そうだよ。フロー、先生なら月の兎だって簡単に治せるとも』

裏切ることが出来なくて、肯定してしまった。

『ですよね!。せんせ、すごい!』

目を逸らしながら、少女の絹糸のごとく繊細な髪を撫でて。

明日から射程三十八万キロメートルの縫合を練習しないと、などと馬鹿なことを『俺』は内心で呟いた。

……嗚呼、そうか。

『私』が感じているのは夢か。

まるで『人間』が過ぎすような、なんて普通で、当たり前前の『過去』なのだろうか。

いや、当たり前前か。

彼だって人間で、日常があったのだから。

Fate/Grand Order 2

姉 「よくやりましたね」

姉 「貴方は満足できなかったかもしれないかもしれませんが、私は本当に満足しているのですよ」

姉 「私に相談もせず、貴方は必死に英雄と戦って、聖杯戦争を生き抜いた」

姉 「怒ってなんかいませんよ。本当です、嘘じゃありません」

姉 「確かに最後は負けたかもしれないけれど、私は貴方が生きていることが嬉しかった」

姉 「貴方と食べるケーキは絶品です。麗らかな日差しの下で笑い合いたかった」

姉 「苦しむのが貴方でなくてもいいのにと何度も思ったこともありました」

姉 「ばらばらにされて、火に放り込まれ、燃やされた私達」

姉 「涙を流しながらやり直しを望んだ貴方」

姉 「私たち皆のためだと泥を飲み、アストラルの彼方へと消えそうになった貴方」

姉 「殺されて消えてしまった貴方」

姉 「たくさんのお話を識ったでしょう」

姉「遡った先でひたすら試し続けるでしょう」

姉「貴方には力があるから」

姉「貴方の夢に失敗は付き物です」

姉「死んでしまった一族私達の事は忘れましょう」

姉「消えてしまった家族私達の事は忘れましょう」

姉「過去から続く呪いは、蝶が羽ばたくように私達の存在ごと消してしまいました」

■「誰も覚えていなくても、■が貴方を覚えていきます」

■「誰も褒めてくれなくても、■が貴方を褒めましょう」

■「よくやりました。そしてさよならです」

■「■は此処に残ります」

■「怒ってなんかないませんよ。本当です、嘘じやありません。だって貴方が生きていくから」

■「さあお行きなさい。よくやりましたね」

■「まだ貴方は生きています。素晴らしい気分です」

■「最後にケーキと一緒に食べられなかったのが心残りです」

■「貴方には力があるから、すべきことをやらねばならないのです」

■「貴方には力があるから、夢から目覚めなければなりません」

■ 「怒ってなんかいませんよ。寂しいだけです」

■ 「誰か貴方の力になってくれる人が現れるでしょう」

■ 「それが寂しいだけです。本当です、嘘じゃありません」

—— 1

目覚めというのは意外と大事だ。質の悪い睡眠を取った時は、気だるさで体が泥のよ
うに重く感じることがある。しかし、満足な睡眠を十分に取れた時は、爽快な気分にし
せてくれる。

今回の目覚めは、悪い物では無かった。不本意ながら。

瞼を開く。薄暗い部屋だ。片目の奥に熱を少し感じながら、ぎよろぎよろと音を立て
そうな程に動かす。室内はあの爆発が起きる前に、従弟とロマンとやらが居座ってた部
屋に似ている気がした。

少しの締め付けを感じた。手を額に当てると、幾本ものコードが連なったバンドが付

けられていた。

「目が覚めたか。身体を編んだが存外悪くなさそうだ」

部屋の電気が点き、不意に白の眩さに目を細める。細く薄くなった視界の先に、あの奇怪なペストマスクが浮いていた。ペストマスクのちようど下、手と胴体の辺りにはどす黒い手袋と血に染まった白衣があつた。

直前の記憶が蘇る。これは自身が呼んだサーヴァントだ。身体の隅々に意識を行き亘らせ、確かめる。痛みは無く、下半身には熱が籠つたような独特な違和感を覚えた。欠損部位があるかもしれないが、現状でわからない。

「状況は」

喉にも違和感を感じるが、声を出すには不都合はない。問題は無さそうだ。熱もほんの僅かなペースだが、引いている気がする。

「半身が潰れていたの、身体の欠損部位を魂を元に架空元素で編み直して代替させた。元からあつた霊基を……いや、今はいいか。時間をかければ肉と混ざり合つて元通りになるだろう」

無駄な贅肉は無くなつたかもしれない、とアサシンが笑いを噛み殺した様子で言った。

「そう……。私が起きるまでにどのくらいの時間が？」

「二時間と少しを要した。あの傷にしては随分と早かったな」

それを聞いて、身体を即座に起こす。悠長に寝すぎていた。頭に血が上り、何故途中で起こさなかったのかと叫ぼうとして、くらりとベッドに倒れる。血が足りない、体力も。

無理に起き上がったせいか、下腹部から鈍い痛みを感じる。目の奥や喉、下半身から感じる違和感とは異なる、身体に悪いと分かる痛みと気持ちの悪さだ。

「起きるのはまだ早い。あまり派手に動くと中身が千切れる」

臍の辺りに手袋が置かれると、痛みが消え、代わりにほのかな温かみを感じた。

「千切れてもいいから。早く私も行かないと」

アニムスフィアの女が言っていたファーストオーダー、その場所に。従弟とマシユは既に飛ばされたはずだ。何もせずに寝ているのは違う。

それなのに体が動いてくれない。

「意識を取り戻したのは知られただろうし暫し待て」

現代はやはり便利だな、とアサシンが呟く。

わかりにくいのが、その視線の先は額のバンドだろう。コードの先、枕元には小さな機械が置いてあり、モニタには波形が映し出されていた。

「無理って言ったら？」

睨みつける。逸る気持ちに対して付いて行かない身体のジレンマが苛立ちを感じさせる。

医者なのだろう、英雄なのだろう、すぐにでも治してみせろ。それが出来ないのなら、せめて麻酔や薬で誤魔化すくらいしてみせろ。

「今無理すると消化器系が不順を起こす」

「その程度……」

「詳しく言うと、今後垂れ流し人生になる」

流石に垂れ流しで駆けつけてはかつこが付かない。そもそも体力も魔力も失われ続け、今後が立ち行かなくなる。

だが、それで納得できるかどうかは別だ。

「……貴方はサーヴァントになるくらいの英雄なんですよ。奇跡で治したりできないの？ 無能なの？」

「そうさ、俺は奇跡を起こせない無能だとも。誰も知らない有り触れた唯人で、苦難は歩んだが英雄ですらない。英霊でもない。悲しいことに国で囁かれる怖い話に出てくる幽霊のほうがつつと知名度もあるし力もある。そんな無能で一般人な憐れな使い魔を無理やり呼んだのはマスターだ。俺の言いたいことがわかるかな？ わかるんだった

ら諦めて寝てなさい」

サーヴァントの質はマスターである自身によるもので、奇跡を望むには力が足りていないと言い切られてしまった。コンディションが良ければもつと良いサーヴァントが呼べただろうか。もつと魔術が研鑽できる家系だったらこんなことにはならなかっただろうか。受け入れていた魔術の特性に、今は憎しみすら覚えそうだった。

今無理をして全てが上手くいったとして二人を助けられたら、その後下半身を切り離してまた作ってもらうのは……。無理か。相手は無能で雑魚で英雄ではないが、腐つても医者だ。そんな患者を助ける医者などいないだろう。そんなことしたら何らかの手段で眠らされ続ける予感がする。

不満もあるが、大人しく横になっていることにした。

「……暇なら本でも読むか？ 俺は読み終わったから好きなだけ読んでも構わないとも」

落ち着かないので、腹部に置かれている手袋を抓っていると、呆れた様子でアサシンが提案してきた。

置かれている手袋とは異なる、宙に浮いていた手袋が指を指す。その先には、備え付けられている小さな机と一冊の本。

体に違和感を感じない程度で手に取る。医療を嗜むサーヴァントなのだろうから現代の医学書かと題目を見ればナイチンゲールの伝記。

「……」

サーヴァントの言葉を見無視し、伝記を読み始める。安静にしておけと言ったのはこの藪医者だ、返事しないだけで横になつてやるのだから感謝の言葉くらい逆に告げるべきだ。

「大変よろしい」

表情はわからないが、勘で笑っているのは分かった。このサーヴァントとは相性が悪い、絶対悪い。

— 2

「目が覚めたんだって!?!」

飛び込んできたロマンの第一声だった。あまりの大声に、腹部に置かれた手袋の温かさに委ね、心地よく微睡んでいた意識が一気に引き戻された。

優しくノックして、小鳥のさえずりで起こすべきだ。もちろん小腹を満たせる軽食を添えて。

心配かけたのは申し訳ないと思う。だが、納得できるか、許せるかというところ、それは決してない。着替えの最中だったらアサシンで抹殺させていたところだった。

「乙女の部屋に叫びながら入って来るとかセクハラです」

「げ、元氣そうで良かったよ……」

絶対零度の視線でセクハラだと訴えれば、ロマンは目を逸らしながら良かったと呟いた。善人だが頼りなく、何処か怪しい男だ。

「アサシンもセクハラだけど？」

「こんな被り物と汚れた白衣の無機物で構成された存在に性差別がどうか言い出すのか。発想が逞しいのだろうか」

ベッド脇に、ペストマスクと血糊で汚れた白衣が浮かび上がった。その様に驚いたのかロマンが目を大きく開き、緊張で体を強張らせていた。目に見えない邪悪なオーラとか放っているのかもしれない。それともペストマスクの不気味さや血糊で染まった白衣が嫌悪を抱くか。サーヴァントの汚らしさ、禍々しさはマスターである自身の美しさとは似ても似つかないが、不快だとは思わない。私は心が広く深いのだろうか。

サーヴァントを召喚する際に、生前に関わりのある道具を触媒とする場合がある。が、アサシンの場合は何も用意しない状態で召喚された。縁召喚というマスターの特徴を擬え、似たサーヴァントが呼ばれる場合がある。もちろん、触媒がない召喚は何も関

係のないサーヴァントが引き寄せられるランダム性も孕んでいる。おそらく、というか確定的にアサシンはランダムで呼ばれたのであるう。

「サーヴァントなのにセクハラがわかるの？　もしかして現代の人？」

「い、いや、サーヴァントは知識のバックアップを受けることになってるよ。……と、ところで、こちらの方は？」

徐々に近づくペストマスクに凝視され、挙動不審になるロマンが問う。実はこのアサシンのペストマスク、目の部分にはガラスらしき半透明の物質が嵌めこまれていて、中を覗き込むことが出来る。目と目が合う瞬間、ぎよろぎよろ血走った黄色い目と出会う親切設計だ。いや、心折設計かもしれない。目元も見えるがどろどろと腐敗していてよくわからない。

「爆発の時に怪我を負ったので、治せる英雄を呼ぼうとして勝手に出て来ました。片目と喉、下半身が潰れたり無くなっていた私を治したので、多分医者です」

「そ、そっか。通りで爆発の被害が特に酷かったコフィン内に居たマスター適性者や他のセクタに居た職員の応急処置が行われていたわけだ。原因究明する余裕もないから妖精が現れたことで済ましていたけど、解決して良かったよ」

色々と苦勞の連続に見舞われたのか、緊張しっぱなしだったのだろう。凄いいいサーヴァントが来てくれたんだね、やっとの朗報に一息つけるとロマンはほにやりとした笑

みを浮かべた。その後、「え？ 潰れたのを？ え？」と混乱もしていた。

だが、残念。こいつが善性であるはずもなく。そして落ち着ける暇もない。

「このクラスはアサシンです。真名は……」

「ジャック・ザ・リッパ。切り裂きジャックのほうが通りはいいか……おつと道具を落としてしまったようだ」

安心したロマンの気分が地に落とすかのようになり、棒読みでアサシンの白衣から、道具とやら零れ落ちた。血を吸っているうえに刃零れして切れ味の悪そうなノコギリ、肉のへばり付いたヤスリ、誰の物か不明な眼球に刺さっている極太の針、まだびくびくと痺れている右手、血の付いた怪しい注射針、蛍光色でケミカルな錠剤……。

「失敬、失敬。仲良くなりたかって道具が出て来てしまったぞ。ああ、心配しなくても俺は万を優に超える人体を刻んだことがある。そこらのジャック・ザ・リッパより優秀だ」

笑いを含ませながらアサシンが告げた。悪いとは全く思っていないのだろう。

道具がカタカタと震え出し、ロマンの足元で止まった。肉片や血糊がべったりとこびりついた趣味の悪い道具や、その隙間から現れたグロテスクな蟲どもや腐った鼠が這い出る様を間近で見せられたロマンは笑顔のまま固まった。

「趣味が悪い」

「そうなのか。ちよつとしたジョークのつもりなんだが、見た目がちよつと悪かったか」
軽く睨みつけるように目を細めて見やると、道具がロマンの足元から溶けるように消え去った。無菌だから問題ないと誇らしげに言葉を付け加えていた。

違う、そうじゃない。

「というかその趣味の悪い道具、また増えたの？」

「あまり言ってくれるな。俺の一部だ」

アサシン自身が想念という人の想いの塊らしい。そして、アサシンはジャック・ザ・リッパーやアサシン本人がこういった道具を持っていたのだろうと噂などで思われていた物を出せるらしい。そして道具はアサシンが構成されている想念と同様の物で、幾分か神秘が内包されているとも。

使い道はあまり無いが、射出させることで投擲武器として扱える可能性があると言った。

「……強いのか？」

「参考にした英雄は背後のゲートから凄まじい勢いで宝具を射出していたから強かった。反して俺のは衆人が考えた想念だ、超強い武器と妄想の塊を比べるのは止めて欲しい」

い。というか強さに関して、藪医者に期待するのは間違っていると思う」
雑魚らしい。知ってた。

そして参考にしたのは金ぴかの英雄だとか。同時代の英雄かと聞くと、ペストマスクが左右に振られて否定の言葉が紡がれた。その英雄は召喚されて見ることになったとか。

背景のわからないサーヴァントだ。今のところ本命はペスト医師だが、召喚されるよ
うなまともな医療行為をした者がいたのだろうかと疑問が生まれる。

ロマンが止まったままなので、起動するまでに暇つぶしにアサシンの事情を考えてみるとしよう。信頼の構築とは相手を知ることにある。アサシンなら聞けば教えてくれ
そうだ、いつそのこと聞いてしまおう。さて、何かいい質問は無いだろうか。

「アサシンはマスターである私に嘘はつかないと思っ
ていい？」

「勿論。まあ、マスターが本当にそう思うかはわからんが」

「ちよつとした遊びだからそこら辺はふわつとしても良いの。ホントに知りたかったら令呪を使うから。そもそも貴方が不甲斐ないから信頼できないの。思うところがあ
るのなら、信頼されるように励みたまえよ」

手の甲に刻まれた令呪を見せつけながら、もつと頑張れと励ます。令呪とは魔力の塊
であり、サーヴァントへの命令権と同義だ。一面を消費することで、強制力のある命令

を与えることができる。必殺技である宝具の威力を上げたり、敏捷性を上げて素早くしたり、マスター単独のときに自身のサーヴァントをワープさせたり、自害せよランサーしたり。つまるところ、自身のサーヴァントに対して、小さな奇跡を起こせる物でもある。

マスターたちはカルデアの電力によつて魔力がサポートされている。しかし、他のマスター候補が沈黙している現状は、どうやら一画分の魔力が溜まるのに一日で問題ないようだ。サーヴァントが増えればこの限りではないが、特異点とやらに行つた場合は惜しみなく使つても良いのかもしれない。

「はあ、善処はしよう」

何か腑に落ちないとばかりに、ペストマスクが傾く。何となくふくろうに似ている気がした。鳥に似ているマスクだからか、寝ている間にずっと近くに佇んでいた様子だからか。

「クリミア戦争に参加したことある？」

治療されたときの会話を元に伝記を掲げてみせると、頷いて肯定の意を示した。流石にこれで違つたらどうにもならなかつた。

先ほどまで見ていた夢に出てきたフローレンスという名前の少女と合わせると、完全にナイチンゲールの関係者かと思えたが伝記にそれらしい人物はいない。関わっている人物が似た名前だけなのか、そもそも国が違うのか。

無茶振りで過労死した軍人の可能性もあったが、軍人らしさというものが一切感じられない。ペストマスクから何を感じ取れるのかと聞かれれば閉口するしかないのだが。国が異なるのならば、夢で呼ばれた「アルフレッド」はノーベルの可能性が高い。いや、高いと信じたい。期待くらいさせてくれ。

「……ダイナマイトを作ったとか」

直球である。手札を見せながらポーカーやるよりも直球。領け……領け……と悪魔が囁く。なお勘は腐っているのかというくらいなんの導きも与えてくれない。

「そんな偉大な有名人と間違われては困る。完全公開されている恋文どころか日常の手紙一枚だって残っていない」

わかっていたことだが、無名へと天秤が傾いた。きつとどうすることもできないくらい名前のない人物なのだろう。認めたくないのに食い下がるけど。

「……貴方についての記述とか、何処かに無いの？ 個人のもいいから記念館とか」「絶対に無い。町や村を警邏していた見廻りのほうが有名だろう。もういつそ未開の部族の族長よりも無名つくくらい無名なのが断言できる。一般家庭に時々いる近所の知

恵袋よりも名もなき一般人だ」

それは胸を張って言うことではない。逆に潔くて凄いのではないかと勘違いしそうだ。

「……闇に情報とか活躍を葬られたなんか凄い人物とか」

「無いな。どれだけ期待しても何も無いとしか。そもそも唯人だと言ったはずだが」

「なんで召喚されたのよ」

憤慨する。英霊召喚システムがぶっ壊れたとしか思えない。彷徨っていた亡霊に肉付けして用意しました、というほうがまだ納得ができる。

よく考えると召喚はまともに行われたのか怪しいので、システムがバグったのかもしれない。

「縁だな。巡り巡った運命というのだろうか。本来は有り得ないことなので俺も驚いている」

「え、縁……」

否定するために散々食い下がった結果、聞きたくもない縁とか言い出した。絶対に認めたくはないが、見えなくて意味のない味の無いケーキのような要因があるのだろう。腹は立つしストレスも溜まるが、少しだけ認めるしかない。しかし、有り得ない召喚という凄そうなことが起きて、こんな名も無き敷医者である。あまりにも雑魚過ぎて有り

得ないのだろうか。

英雄の医者が呼べていたら、どれだけ凄かったのだろうか。まず潰れた臓器や筋肉などを一瞬で再生するのが最低ラインとして。治療してすぐに痛みも無くなるのは当然。おそらく世界中の何処に居ても快復させるのだろう。やはり英雄つて凄い。

それに比べてこの藪医者は千切れるかもしれない治療を施すとは。本物の英雄の前で謝らせたいくらいだ。

縁とほんの少しでも認めなくてはならなくて落ち込んで、当然の如く不快なので、腹に置かれた手袋を抓る。触れた感じだと本当の手が中にあるようだ。そして、かなりいい感じにぬくい。冬場は懐に忍ばせておきたいくらいに。

「……マスターは日本人なのだろう。東北には詳しいか」

「逃げ場は無いぞ、観念しろー。……え？ うん、地元なら程々に」

手袋を両手で抑え込んで追い詰めて遊んでいると、アサシンが聞いてきたので応える。あまり離れるとわからないが、近所なら得意だ。芋煮ポイントなどは完全に網羅している。許可なき河川敷での芋煮は、従弟の強制味付け具材変更の手によって地獄へと変わる。友だちや恋人、家族でルール違反して芋煮を楽しもうとした暁には、気付いた

時には友情破壊芋煮会へと変貌するのだ。

「桐谷という魔術師の一族に知り合いはいないだろうか」

聞いたことのない名前だ。一応、東北は『件』の支配域として魔術師の名前は把握している。思い出そうとするも、掠る名前はやはり無い。滅ぼした相手の名前にも無い。過去に遡りつづければ何時か辿り着くかもしれないが、それだと実家に帰って勘が腐った老人に聞かなければならない。勘が腐った連中は基本的にボケているので面倒なのだ。

「東北なら魔術師の全体を把握しているけど聞いたことないよ。知り合いなの？」

「ん……多分そんなものだと思う。あまり覚えてないが」

交友関係かと興味を持ったが、どうにも少し違う感じがした。珍しく濁した様子だ、突っついてあまり良いことにはならないだろう。

雑魚の藪医者とは言えどもサーヴァント。内包している神秘を顧みれば虎の尾を踏むのは控えるべきだ。

しかし、全盛期の状態で呼ばれるというサーヴァントが覚えていないとは、随分と古い記憶なのかもしれない。頭を叩いたら直ったりしないだろうか。

「どうやらマスターは俺の素性を知りたいと察するが」

「うーん、戻って来るまでの暇つぶし程度には知っておきたいかな」

もう二分ほどは機能が停止しているロマンを見ながら頷く。肉が削げてぐじゅぐじゅと腐った鼠やギチギチと奇怪な音を立てた蟲が群がりながら足元を這ったら、確かに気絶するのも無理はないだろう。

ベッドから見ていた私でも少しばかり肝が冷えたのだ、本人にはどれだけ衝撃的だったか。

「曖昧な部分が多くてはつきりと言うのは難しいのだけれど」

アサシンが言うには、英霊の召喚は常識を無視するらしい。確かに過去の英雄を呼び出すのだから無視するのもわかる気がする。そして、その無視するというのは可能性も兼ねているとか。未来や枝別れした世界の英雄も含まれているという。

「つまり、未来の英雄……」

「違うんだなこれが。そろそろ英雄から離れてくれないと期待という闇に身を焼かれてしまう可哀そうなヤブ医者が見れるぞ」

縁召喚と言いつすのが悪い。悪くない？

しかし、未来の英雄という可能性が潰えた今、残ったのは……。

「俺はおそらく」

「異世界の英雄……!」

「英雄じゃないです」

あまりのしつこきと期待の圧力に、宙に浮く手袋でアイアンクローで反撃された。

英雄に期待したっていいじゃないですかあ！ 縁がこんな雑魚とか悲しいじゃないですかあ！ 何が縁だ！ 誰もが傳く大英雄との御縁を寄越せオラア！

「マスターが知りたがっていた俺の素性は、異世界の藪医者ということになる。悲しいことに知名度ゼロ」

「わかるわけない……。そして英霊召喚で呼ばれたくせにホントにしようもない……」

「その肩を落としてくれるなよマスター。真つ当な魔術師だったら異世界の可能性に興奮するし、涼宮ハルヒだったら泣いて喜ぶ」

真つ当な魔術師じゃないからどうでもいい。せめて誰もが知っている超有名な大英雄が良かった。というか縁召喚なら世界を指先ひとつで救える英雄が来るべきじゃないだろうか。

そもそもスズミヤハルヒって誰だ。異世界の有名人か。わかるわけないのだが。

私の落ち込んでいる様子に、表情はわからないが、勘で笑っているのは分かった。このサーヴァントとは相性が悪い、絶対悪い。

もう慣れて久しいが、何処までも昏い場所だと思ってしまう。流れ出る血の鉄の臭い、死した人々の腐った臭い、衛生の悪さによる悪臭。何もかもが暗闇に隠れている中で、敏感に感じ取れてしまう。

死屍累々と表現できるほどに、この場所の病床には怪我人が溢れているのだろう。地面にもきつと置かれているのだろう。

その積み重なった半死人の山を切り刻む。この半年でどれだけ刻んだか、数えていないのだからわかるはずもない。その代わり、睡眠時間は小さな砂時計を一日に一度だけ返すので分かり易い。

呻き声を挙げた者を見つけ切り刻む。生きているのなら、この先も生きられるように切り刻む。

ほんの僅かな助けすら呼べない死人なら切り刻む。

未来へと歩めるために用意された人数は残酷なほどに少ない。意味のない者を助けることほど無意味なことはない。

まだ体力のある怪我人が、『俺』の持つ僅かな明かりに灯された。その瞳には恐怖が宿っている。彼は、この空間が怖いのか。それとも、『俺』のマスクが怖いのか。どちらでもいい。銃に撃たれて内臓が傷ついた程度なら、すぐにでも治してやれる。その先に地獄が待っているかもしれないが、残念ながら『俺』にはどうすることも出来ない。一

度だつて望んだように出来た試しが無い。

夜は長い。何度も死人を担いで捨てに行く。こいつらは在るだけで有害だ。士気は下がり、病気の苗床となり、恐怖が伝播する。感情とはそれだけで力になる。負であるうとも、いやむしろ、負の感情こそが溜まりやすい。光の灯つていないランプを模した礼装に、第六の架空要素を取り込む。悪魔に至るかもしれない感情、死に切れずに留まろうとする魂、それらのエネルギーを取り込む。足りない。まだ足りない。

冗談で作ったペストマスクだが、思った以上に恐怖を我が身に集められた。戦場で語られる噂に乗って、恐怖を束ねられる。万が一にでも悪魔が現れたら精神病の患者が増えて面倒だった。だが足りない。まだ足りない。やはりそうだ。

生身の躰が邪魔になる。

「先生」

「やあ婦長殿。また起きていたのか。人よりも動いているのだから休みなさいと言っているのに」

新たな怪我人の元へ向うために歩いていると、美しい女性がランプの明かりを片手に声をかけてきた。小さな頃から見ていたが、まっすぐに育ってくれた。だが、戦場でま

で出てくるのは『俺』を何とも言い難い気分させた。

「先生こそ。それに、夜は急変しやすく重要だと先生も仰っていたと思いますが」

怪我人への治療とその後の統計を見せてくれる。素晴らしいほどに賢い女性だ。忙しなく人体を切っている俺ではどうすることもできない。出来たとしても、対処する暇がない。

「やはり殺菌こそが重要かと。あと消毒も」

日中は喉が枯れるほどに「殺菌！ 消毒！」と指示を出している彼女だ。統計の結果は医療行為が正当で重要だと周知する意味も持つのだろう。

『俺』は派閥などが面倒なので、指示も出さずに怪我人の間を縫うように歩いて辻斬りの如く治療している。

「大変よろしい。医療の進んでいるドイツでも殺菌や消毒は忘れられがちだ。学術的な面でしか進んでいないのだろう。イギリスは外科技術が進んでいるが、そういった面ではドイツ以下とは」

難しい、頗る難しい。呟くと、マスクの中で声が籠った。

「そういえば妖精が出ると兵士の間で噂が」

「妖精？ 恐怖で精神を病んだか。面倒だな、本当に面倒だ」

「ええ、鳥のような不気味な顔をした妖精です。夜には死人を切り裂き、昼には怪我が治して歩いているそうです」

不気味とは失敬な。被り慣れた今では、愛嬌すら感じるのだが。

もつとゆるキヤラ寄りにすべきだったか。だが、可愛すぎても良いことはない。怖がらせることに意味があるのだ。

「趣味が悪いですよね。……そのマスクは死の迎えが来ると患者たちは怖がつておりま
す、お止めになつては如何でしょうか」

「いやいや、怖がつてくれるのなら良いことだ。もつと怪我に怯えてくれれば君もずつ
と楽になるだろう。いつそのこと敵味方を治療し続けて死人がいなくなれば争いの無
意味さに気付いてくれるとかないだろうか」

笑いながら告げると、形の良い眉根を寄せて女性はため息を吐いた。

それだけじゃない。この時代で初かももしれない熱心な女性の医療従事者の功績を分
かり易くも出来る。不気味な妖精よりも、上層に逆らうが見雌麗しい女性のほうが喧伝
しやすい。

「それに、このクチバシの部分に香料を詰めているから安らぎの香りを提供できている
利点は無視できない」

「頭が重傷なよう。切断したほうがよろしいのでは」

「やめてください死んでしまいます」

その大きな瞳を細め、睨まれる。小さな頃から見ていて妹のように感じるけれども、

美しい女性が怒ると怖いのだ。

「切断がお嫌いでしたなら治せばよろしいのです。私のせんせはとても良い医者ですよ、安心して治療されてくださいな」

「フロア、どっちも俺なんだが」

「存じております」

誇らしげに「痛みも無く一瞬ですよ」と言い出した女性に、患者側も医者側も『俺』であると告げておく。もちろんわかってますよ、何を言ってるんですかとばかりに首を傾げられた。

間違っているのは『俺』だったのだろうか。

「せんせは一日に三十分しか寝ない方をどう思いますか」

「そのうち死ぬすごい馬鹿なんだなって」

「先生はどれくらい寝てますか。つまりそういうことです」

「あー、そうだな。……もう少し寝るようにしよう」

『俺』の言葉に、美しいランプの貴婦人は幼い少女のように微笑んだ。

「ね？ 私のせんせは凄いでしょ？」

原作：東方Project 東方短編（上）

— 1 —

とても悲しい出来事だった。

運が悪かったのか、俺は結婚できないことが決まった。

いや、結婚どころか付き合うこともできない。

政府主導で行われる検査の結果だった。

そんな予感もしていたが、実際に体験するとツライものがある。

そんなわけで、俺は男の娘に屈しないんほおおお！って感じで頑張ろうとしていた矢先、森の中にいた。

……能力による個人の転送実験は失敗の模様です、同志！的な。

まあ、有用性が発揮されたら女性と結婚される可能性があるので、大失敗で安心だぜマア的な。

とりあえずわかるのは、木々に囲まれた自然な地形である。

こんなにも緑化が成功していてエコ1000000%（？）な場所は初めて見たでござ
います。

空気もなんとというか、雑多でありながら澄んでいるというのだろうか。肺に優しく
ハイになって脳に優しく適度にイケてて吸ってて気分が良い！

自然しゅごいのおおおおお！

……ふう、自然の凄さに圧倒されてしまった。

とりあえず落ち着いて周りを見渡そう。

さつきまで行っていた能力実験の施設とは全然違う。

緑が凄い。辺りを見渡せば緑、緑、緑。吸い込んだ粒子に緑が含まれているんじやな
いかつてくらい緑。

うーん凄い、葉っぱとか近づいていいのだろうか、いや、もしかすると触っていいの
だろうか……？

いや、待て。よく見ると葉っぱとか枝とか落ちてるしそもそも見た事のない芋虫が元
気に食んでるし蜘蛛の巣とか張ってあるし蟻とか這ってるし自然しゅごいのおおお
おおお！

ふう。

危うく天に召されるところだった。

さて、どうやら物凄い濃い自然の中に何故だか俺は立っていることだけがわかってい
る。

寝ぼけて夢を見ている可能性もあるが、俺はこんなにもリアルな自然を思い描けるほ
ど発想力は高くないので多分ないだろう。

政府が行っている種の保存がうんたらつて感じの研究施設なら自然も残っているか
もしれないが、俺がそこで勤められる意味がないので無し。

これはまさかあれだろうか、自然転移とか、そういう伝説的なやつ。

気づいたら異世界に居て、自然溢れる世界で女性と過ごすという古書のやつ。

それだったら幸せすぎて脳とろけるんだが。

後に語る。

自然転移で女性も多くてしゅごいのおおおおおおおおお！

この後滅茶苦茶脳がとろけた、と。

——父さん、友人たち、俺は今、物凄い犯罪者になってしまっているよ。

そんなことを考えていたらまた葉っぱを踏んで折っちまったぜ。

この緑がしみ込んだ靴を売ったらどれほどの値段になるか想像もできないくらいやばい。

今日だけでどれほどの大罪を犯しているのか、脳内が罪悪感と背徳感でエキサイトしている。

土の上を歩いているし、葉っぱも時々踏んじやつてるし、胸いっぱい自然の香りだし、と変な背徳感でぞくぞくしつつ、内心でびくびくしている。

これだけ自然があるってことは生の動物や昆虫も盛りだくさんで、生の空気であり、もうそれだけでしゅごい。

なんだここ、ほんとなんだここ。

可能ならば、俺はここで葉っぱを食べながら死んでいきたい。

森を足蹴にするという大罪にどきどきしながら進んでいると、開けた場所に着いた。澄んだ青空、白い雲、背中には大自然の権化である森、目の前一杯の草原。

ああああああ、と転げる。

俺が能力実験で失敗して訪れたこの神聖な大自然だが、幻想郷という場所の森らしい。

決して、我々が行き詰まり、ドツボに嵌まって取り返しが付かなくなった船内の研究施設ではない。

まあ、そんな研究が成功していたら毎日がエブリデイだっただろうが。

恐ろしいことに、この自然は幻想郷のほんの一部分でしかないとか。

へへへ、それがホントなら想像するのも難しいなんて凄くてすごくて超すごい場所なんだろう。

手足どころか全身が震えてブルってきやがったぜ。

しかも女性と話しても捕まらない物凄い神話世界だという話も教えてくれた。

——父さん、友人たち、俺は今、楽園に来たみたいですよ？

この大自然に囲まれて生きる幸福な民たちが住む人里まで案内してくれる、と親切にも仰ってくれた聖人は赤蛮奇せきばんきさんという素晴らしい名前らしい。

捕まるかもしれないから追記しておくが、様は付けなくていいという慈悲を与えてくれた。

大天使の可能性も高い。もしかすると女神かな。

10m先くらいの赤蛮奇さんのお尻を必死に見ないように頑張りながら、後を追いかける。

ほんとは危険だから隣を歩いてくれるとか言ってくれたんだが、心臓が止まりそうなので無理ですお願いしますってことで先導してもらおうことにした。

女性が近くにいるとか緊張で死んじゃう。

死んじゃ……森の中ずかずか歩いてるとか俺やべえええええんほおおおおお
おおお

なんかわからんが意識が飛んだと思ったら女性に抱えられて、それでまた意識が飛んで、いつの間にか人里に辿り着いていた。

幻想郷についてわかったことがある。

まず自然に囲まれている。9割9分自然。もうやばい。俺の住んでた船と全く逆。ファンタジーかよ。しかも誰も自然なんて意識してないし、あるがままを受け入れてるし、虫とか邪魔だからって殺すし、動物も食う。自然にある物なら食べれば食う。マジヤバい。俺も慣れつつあるがヤバい。

男女比だが男と女で1対1らしい。すごい。普通に結婚できるし逢引きするし女性が子供産む。凄い。300から500対1じゃないなんてファンタジー。しかも機械で受精じゃなくて自然に受精。すごい。ファンタジーかよ。そもそも機械とかない。凄い。まじやばい。

そして、ここが地球であるという事実。もうこれだけでファンタジー。すごい。心臓飛び出る。たぶん3回くらい止まった。俺が住んでいた船は、物凄い古い電子媒体に地球を飛び立ったデータが残っているくらい昔から地球を求めながら宇宙を彷徨ってた。というのも月に移住した連中と派閥争いで負けたからだとか聞いたことがある。そして未だに月に民がいるらしい。こんな地球という楽園の近くにいるくせに、穢れているとかでくっそ無駄な宇宙で悠長に過ごしているとか。マジ頭おかしい。宇宙で過ごすやつらって頭おかしいんだろなあ。

——父さん、友人たち、俺は今、楽園にいます。

大体の情報を、女性相手が多くて心臓が止まりかけたり、意識が飛びかけたりしながら集め終わった。

その後は人里での生活が始まった。

俺としては大自然の中、雨風にさらされながら過ごしても良かったんだが、妖怪というちよつと奇抜な人たちが人間を食ったりするので危ない話になり、人里の住居で過ごすことになったのだ。

俺肉食獣って凶鑑で見えたことないんだけど、幻想郷ってやつばすげーわ。肉食獣が大自然で過ごしているんだぜ。餌も豊富とか動植物のパラダイスかよ。

ちなみに住居は赤蛮奇さんが住んでいる長屋である。しかも隣部屋。物音聞こえるだけで心臓止まるかもしれん。

人里での生活だが、もう凄くてやばい。どのくらい凄くてヤバいかというと、マジやばい。それで凄い。

まず木こり。木を切る。もうこれだけでどのくらい凄いかわかる思う。しかも木を持ち運んだり、更に切ったりする。凄いすぎて頭おかしくなりそう。

次に皿洗い。土より生み出されし陶器を、自然から抽出された天然水で洗うという贅沢。もうこれだけでどのくらい凄いかわかる思う。しかもそれに自然食品とか盛りちやう。頭がフットーしそうだよおおおお。

さらに客商売。これはヤバイ。もうこれだけでどのくらい凄いかわかる思う。女性と話せる。しかも年齢問わず。お礼も言われたり、時には会話までできる。もうこれだけでどのくらい凄いかわかる思う。読んでるだけで小説だとかファンタジーだとかSFだとか思うくらいやばい。気絶しそうだよおおおお。

もつとランクが上がると、寺子屋で学問を教える。これは凄い。まず子供がいる。機械にぶち込まれたまま学習装置で脳内に知識をぶち込まれ、促成で成長させるとかそういうのが無い。凄いファンタジー。しかも教師に女性まで居る。うっそだろお前って思うじゃん。事実なんだよなあこれが。もうこれだけでどのくらい凄いかわかる思う。そして一番ヤバイのは畑作業的なやつ。母なる神聖な大地に、尊き植物の種を撒き、自然の恵みたる植物を栽培、禁断の果実を収穫するのだ。禁忌侵しまくり。ヤバすぎ。流石の俺もまだこれには手を出す勇気がない。

あとは職人だとか、妖怪退治だとか、俺の想像を絶する凄いのが沢山あるのだ。凄い。幻想郷マジ凄い。

巫女つていうのがいるらしい。会いに行ったら誰でも相手してくれる女性だつてよ、
凄いい。

吸血鬼つていうのがいるらしい。血を吸う女性だつてよ。凄いい。

神様もそこら辺で歩いているらしい。女性だつてよ。女神様凄いい。

閻魔様という死後も相手してくれる人がいるらしい。しかも女性だつてよ。凄いい幻
想郷すぎすぎる。

そういう凄いいのがいっぱいいるらしい。

遠くが見えてなんか色々薄紙に書く天狗とか、相手の心を読む覚とか。

俺の部屋で酒を呑みながら赤蛮奇さんが教えてくれた。

女性と喋るのも慣れた頃に赤蛮奇さんを誘ったら、定期的に一緒に呑んでくれるよう
になった。

やはり女神か。

下心？ あるよ。無いわけないでしょ。

女性を見ただけでも捕まる軛から解放されたら、そろもう女性と話したいに決まっ
てるじゃん。

一緒に空間にいただけで満足しそうになる、女性って凄い。

さて、今回赤蛮奇さんと呑んでいるのはやりたいことがあるからだ。

俺一人だとやっぱ行き詰るので、相談しようという思惑。

ちなみにやりたいことというのは養蜂である。

自然界に満ちる至宝である花から蜜を集める天使こと蜂から、蜜を取り上げる禁忌であるのは理解している。それでも俺はやりたくてしょうがないのだ。

幻想郷で味わった蜂蜜という素晴らしい甘味は俺の脳をとろかせた。そして更に凄いモノを食べたいという悪魔のような欲求に取りつかれた。

現状で手に入る蜂蜜では納得できなくなったのだ。

つまるところ、俺は物凄い蜂蜜を作りたいですってことである。

「俺は禁忌を侵しても最高の蜂蜜をつくります。なんだってやります！」と宣言したところ、赤蛮奇さんは「お、おう」という微妙な反応を返してくれた。

あるえー？

ちなみに恥ずかしいので、赤蛮奇さんのほうは見ずに部屋の隅で宣言したと付け加えておく。

蜂蜜作りに重要なのは、ミツバチである。

神の使徒であるミツバチを、私腹のために働かせるなど、命が惜しくないのかと脳内で警鐘が鳴り響く。

だが、男にはやらなければならぬことがあるのだ。

なので、お願いします！とリグル・ナイトバグという可愛らしい女性に頼む、8 m先で。

大量の虫を喉けられた。

しかもそのほとんどが失われし自然のアイドル、蝶である。

脳がとろけそうだった。

その後はなんか色々な虫に覆われた。

この虫たちは幻想郷で生きている虫なのだという。
幻想郷のあまりの楽園っぷりがわかった。

絶頂しそうになった。

原作：IS 《インフィニット・ストラトス》 あつくん、
ISに関わるってよー A (完)

— 1 —

『死ぬ↓超常の存在とコンタクト↓貴様は今、力に目覚めた!!!(ドギヤアアア)↓嘘、
これがホントの私……?』みたいな流れであの有名な神様転生を体験した。

神転の便利なところって自分に神様が約束してくれた超ヤバイ才能が生えるからそ
れを伸ばしていけば天才を凌駕するナニカになれるはずである。

機械を纏って戦ったりする世界らしいので、ニュータイプ能力を生やしてもらった。
が、ちよつと失敗した。

神様のなサムシングを前に高揚しすぎて細かい話をしていないのだ。
なのでどの媒体のニュータイプなのか不明。

サイキッカー的な能力だったら持て余しそうだし、予知とかを望んでみたり。

感知能力が飛びぬけすぎると彗星がぶわあーで頭がぼわあーだからマジで失敗した
と思う。

ああ、これから狂人になるかもしれない恐怖との戦いの日々が始まるお……。

今さらながら異次元のHDDを破壊する能力にしとけばよかった、なんて思ったり。サーニヤの男の夢にストライクで夜のウィッチーズなやつ、PCにたくさん残っているわけで。

他にもリリカルなのは(夜天の書)とか艦これの夜戦とかもフォルダ分けしてあるし。家族よ、最後まで迷惑かけてすまない……。

— 2

過去の歴史は転生とともに葬った。

ときどき思い出して枕に顔をうずめてジタバタするくらい、過去を忘れた。

アテイ先生の夜の個別授業も葬ったから大丈夫。

ちよつと惜しい気がしてきた。

いやいや、大丈夫だから……。

だ、大丈夫だから(震え声)

そんなどうでもいいことは思考の深いところに埋めて、近況報告。

なんと俺は小学生になった。

そこで凄くやってみたいことがある。

モテることである。

別にロリコンではない。

将来性に期待してのことである。

だからモテたい。

強くてニューゲームなんだからめっちゃくちゃモテたい（ガチギレ）

小学生なら運動できればモテる、中学生なら勉強できればモテる、高校生なら両立したらモテる。

で、全体的に優しい紳士でかつ芯のある男らしささえ演じればモテる。

優しさは俺のニュータイプのなサムシングで補い、あとは日々の努力だ。

無差別に女の子に好意を抱かせつつ過ごせば、最終的にいくらか実るだろうとゲスな思考を燻らせる。

勝ったな（確信）

そんな感じで人生のある程度の目標を決めた俺に、同じクラスになった一夏が声をかけてきた。

女の子に優しくしつつ、寄ってきた男の子連中にも紳士に対応したら懐かれた結果である。

道場に通うから一緒にやろうぜ！みたいな感じだった。

まあ、いいか。

今のうちに鍛えることで小学校時代は安泰だろうし。

ちなみに道場は同じクラスの篠ノ之 箒、ほうきとか掃除用具かよーみたいな感じでいじめられかけていたのを防いだがどうでもいい話ですな！

道場（剣術道場だったのだが）に通うことで、予てより地道に伸ばしていた運動神経が、ますます成長を見せた。

が、モテなかった。

代わりに一夏がモテた。

というか逆に俺なんて一夏のサブ状態である。

問題が起きる↓俺が奔走する↓矢面になぜかたった一夏が注目↓解決する↓一夏モテる↓一夏は俺が何かやったのを知っている↓一夏が俺に懐く↓俺が一夏の活躍を取ったように見える↓女の子のヘイトが若干溜まる↓振り出しへ

みたいな無限ループが構築された。

……なるほどね。

『誰も悪くない』

だれもわるくないから（血涙）

あとISとかいう女性しか使えない機械が発表された。

……なんととはなしにニュータイプの必要性が腐った気がする。

篠ノ之 箒なんてあれだから。

小学2年くらいおのときに一夏にいじめから救ってもらってホの字だから。

ただ、残念なポイントは俺もいくらか頑張ったということを知らないくらいか。

代わりに一夏は知っている。

なので、

篠ノ之 箒さんアピール↓一夏は俺にべつたり↓篠ノ之 箒さんがヘイトを溜める
↓一夏が俺にべつたり↓篠ノ之 箒さん、小学生なので我慢できずに爆発↓一夏が俺は
よくやっていると篠ノ之 箒を否定↓篠ノ之 箒さんの好感度が下がる↓一夏が俺は
べつたり↓振り出しへ

みたいな構図になる。

俺のニュータイプのなサムシングでわかってしまうからかなりモニョる。

しかも学校でも道場でも繰り返しているというね。

俺はもしかしてからかわれているんですかねえ（呆れ）

というか一夏は離れろ!!!!!!
俺は女にモテたいんだよ!!!!!!
!!!!!!

— 2

悟り、つまりに小五ロリってやつになつた篠ノ之 箒が転校した。

姉がどうかで家族がどうたらつてやつらしい。

関わりが薄いのでわからない。

嫌われているんだからしょうがないじゃないですか!!!; ω;

しかもI Sとかいう機械のせいで世の中の傾向が女尊男卑に加速したし、その結果俺がクラスの女子からモテなくなつたりしたし。

そういうわけで篠ノ之 箒とか放棄ですよ。

ちなみに箒を放棄は一夏にはウケたから。

ついでにモテなくなつたといったが正確には人気のある一夏が俺にべつたり過ぎてなんというか、その……好かれてないです、はい。

悲しい。

バレンタインのチョコなんて一夏のお姉さんである千冬さんからしかもらったことない。

千冬さんは俺がもらっていないのを察してくれるのか当日は然も忘れていたかのようには振る舞ってすごし、男らしくテキトーな市販のチョコを翌日に渡して慰めてくれるから惚れそうになる。

こういうのがあるから一夏を可愛がってしまおうわけで。

あとマイナス面でいうとウサギ耳みたいな飾りを頭部に取り付けている女性は俺と顔を合わせた瞬間に、ノイズがどうか叫んでゲロ吐いた。

ニュータイプのな精神感応がお気に召さなかったらしい。

で、篠ノ之 箒に嫌われた。

なんだこの家族怖い。

で、恐怖の篠ノ之スパイラルは終わりを告げ、代わりに凰鈴音という少女が転校してきた。

廊下側の角の席に座っていた俺の隣（女子が避けて空いている。一夏の特等席）に凰鈴音が着席。

とりあえず初めてのクラスに不安を抱いている凰鈴音の緊張を和らげつつ、授業を何

気なく過ごす。

悲しいことに、女子と話したのはかなり久しぶりだった気がする。

千冬さんとか母さんくらいだが、カウントするのは小学生ダンスィーとして悲しい事実だ。

そのままの流れで凰鈴音に学校案内をすることになった。

女子が先生に抗議を入れる素振りを見せたが、一夏がフリーになる事実気付いたよ
うで、何事もなく学校見学へ。

授業で隣に座っていたから凄い小柄な娘だとだいたいわかっていたが、一緒に歩いているとかなり実感でできた。

茶色のツインテールが元気に歩みを進めるステップとともに揺れていた。

よく利用する教室や施設、頻繁には使われないが重要な場所などを教えていく。

凰鈴音はいい学校なのね！とご機嫌だった。

教室に戻ると一夏が俺に助けを求めた。

モテモテつすねと扉を閉めた。

俺が入ると学級裁判につながるからね。

俺が悪い↓一夏が否定する↓解決！↓一夏モテる↓俺に逃げる↓俺が悪い↓俺が悪い

い↓解決！みたいな。

なんだこれ。

なんだこれ!!

ニュータイプは人類の革新を導けるんじゃないのかよ。

最近ホモじゃないかと疑っている一夏がモテるように誘導しているだけというね。

無駄遣い極まりない。

授業開始でも一夏戦争が起きてたので介入した。

ヘイト管理は得意なんですよ、ニュータイプだからね。

でも、学校じゃ評価されない項目ですからね……。

風鈴音がひきつった笑みを浮かべていた。

その時見せた彼女の八重歯はとても可愛かったです（遠い目）

— 3

鈴が学校に馴染むのにそう時間はかからなかった。

俺が鈴の相手をしている時間は少しだけ一夏がフリーなることに女子が気付いたり

したが特に大きな問題は起きなかった。

学校生活だと過ごす時間が鈴と一夏で7：3、放課後は逆転する程度であった。

あれ、俺って友達いないんじゃない？……？

おかしい、昔はみんな俺に話しかけていたのに今となっては一夏と鈴、担任や教頭などの先生くらいだ。

どうしてこうなったか真剣に考えようとしたが、鈴が可愛いのもういいんじゃないかと悟った。

それくらい鈴の可愛さがヤバイ。

調子に乗ったクラスの男子が黒板に相合傘を書いたが、すぐに消した。字が汚いし、間違っていたからだ。

嵐鈴音ってちゃんと書けないのなら悪戯すべきじゃないと真顔で叱りながら超綺麗に書き直しておいた。

鈴と先生に怒られた（理不尽）

鈴がクラスの男子に「ちんちく鈴」とか「手羽先」って呼ばれていた。

お前もそう思うだろうって同意を求められたので否定した。

鈴が可愛いし、鈴音も可愛いからわざわざそんなので呼ばなくてもいいという正論によって論破。

顔を真っ赤にした鈴が拳を振るってきたので受け止めて指をゆっくりと解き、絡めて

みた。

で、テンパっているとところを攻める様に小柄な鈴の肩を抱く。

体温が上がりすぎているのかちよつと熱かった。

翌日、女子からあだ名が変態、男子からのあだ名がエロになってしまった。

なげだし。

一夏は変わらずに俺にべつたりだったので、プラマイゼロだった。

むしろ恥ずかしがりつつもたどたどしく話しかけてくる鈴が可愛かったからプラス100万くらいかな。

— 4 —

中学に進学したら一夏、鈴、俺のパーティに五反田 弾が合流した。が、特にこれといって何かあるわけでも無し。

学校で授業を受けて休み時間にダバって、放課後ゲームやるか一夏とバイトっぽいことやるか、弾の妹である蘭が一夏に好意を持ったり、鈴の料理を食べる、くらいのサイクルだ。

あとは弾が一夏を羨ましそうに眺めていた。

ツンデレとか暴力系、潜在的ヤンデレなども混ざっているのだがホントに羨ましいのだろうか。

さらにどうでもいい話だが中学に上がってから女子からの扱いがマイルドになった。話しかけてくる女子の中には打算と好意が入り混じった子なども見られる。

成績とか運動とかは結構整えたからな、俺。

まあ、現状は鈴に極振りしてるからどうでもいいんですけどね！

昔のように全方位に優しさを振る舞うのは辞めたんだ、みたいな。

そんな感じでぬるぬる過ごしたら、I Sのモンドセレクション金賞みたいな大会があるとかでドイツに織斑姉弟は旅立っていった。

千冬さんを激励したのでいい感じにバチコンかましてくれるに違いない。

鈴とデートしてたら一夏が誘拐されたから助けて、みたいな電話がきた。

どうやって電話しているというんですかね、君は。

しようがないなーいちかくんはー、と呟いてから逃走経路を指示。

何秒後に何処に銃弾が撃ち込まれる、みたいなことも細かく伝えておく。

無事脱出できたらしく、千冬さんは金賞っぽい。

今回の誘拐事件も考慮して千冬さんは表舞台から引退、これからドイツで教官を務め

ると電話で伝えられた。

一夏は金賞を喜んでいた。

よかったね。

でも頼むからこつちの事情も考えてほしいわけよ。

鈴が拗ねた的な意味で。

— 5

翌年、鈴の親が離婚した。

察していたが、俺にはどうすることもできなかった。

鈴は中国に帰国するようだ。

引き止める言葉も伝えたが不可能に近い状況だったので、ずっと待つている旨を伝え
た。

次に会ったら鈴の料理を毎日食べる約束をして別れを迎えた。

鈴が帰国した翌日、女子が集まってきた。

お、おう……。

頼むから一夏のほうに行けよと思いつつやり過ごす。

俺も中国に行こうかな……。

6

中学3年になった。

今のトレンドは受験である。

鈴がないならどこでもいいわー、と一夏が受ける高校に決定。

弾もその流れに乗った。

一夏は何を勘違いしたのか感無量といった面持だった。

勉強して、軽く遊んで、鈴と電話して、勉強見て、というループを繰り返し受験日となつた。

一夏が来ないまま受験が終わった。

あいつ大丈夫かよ、と電話をかけるとI Sに乗ることになったとか。

ごめん、マジで意味がわからない。

俺らは藍越（あいえつ）学園の受験予定だったが、I S（あいえす）学園の試験会場に行ってしまったというのが一夏の話だ。

どんなミラクルだよ、それ。

一夏から本気でなぜ間違ったかわからないという気持ち伝わってくるが、入学するなら I S の知識は必要だろう。

最初から I S に乗ってたかったんだろ？ わかつてるから何も言うなよ。みたいな空気で I S の資料を開いて無理やり勉強を進めていく。

物を言わずと甘えてくるからお前が望んだことだろうという感じで進めてみよう。

最低限の知識くらいは付させておきたいが……無理だろうか。

政府に保護されている一夏に会いに来るの大変だしなあ。

なんとか数日で一夏の I S への理解も深められた。

ついでに俺も結構詳しくなった、意味ないけど。

一夏に手作りした参考書とか用語集を持たせて送りだしたので、最悪の事態はないだろう。

I S を爆散させて死ぬとか、I S のブレーキとアクセルを間違えてコンビニに突っ込むとか、I S で宇宙を目指してイカロスよろしく墜落したりとか。

誘拐やリンチされたら知らないけど。

一夏が女子しかいないI S学園の苦勞をメールで垂れ流すのを横目に高校デビュー。たぶん、I S適正がある男は不能、もしくはホモの気があるんじゃないかと愚考しているのだがどうなのだろうか。

これを弾に相談すべきか悩んでいると、留学してきた鈴にタツクルをかまされ、弁当を渡された。

愛情表現がちよつと強い気がする。

まあ、うれしいんですけどね！

俺と鈴のいちやつきに顔を顰めている弾を横目に一夏に自分の幸せをつらつらとメールに綴って送信。

ついでにモテようと思うと寄ってこないというアドバイスとともに、モテようとする男語録を添付し、真似したらみんな寄ってこなくなる（確信）とも付け加える。

後日、もつと大変なことになったと一夏からメールが届いた。

やっぱり悪化したらしい。

モテモテなのに何が嫌なのやら。

弾なんて血涙を流すに違いないし。

わかりきってることだし、わからなくとも自分の状況を考えればわかることでもあるのに、全く……。

まあ、許してくれるよな。

ちよつとした俺の意趣返しつてやつだから。

楽しかったぜ、お前との友達ごっこ!! なんてね☆

I
S
|
B—
1

『死ぬ↓神様↓転生』みたいな流れであの有名な神様転生を体験した。

そのついでに俺の持つであろう能力の中で最も伸びる才能を一つだけ生やしてもらった。

詳しく説明すると面倒なので短く端折ると、1秒間を分割して動けるような才能らしい。

副次的に精密動作も可能になるとか。

あとは全体的にどうでもいい話だったので省略。

あんなの占いと一緒だし。

が、ちよつと失敗した。

貴様にニュータイプの的な能力は渡さないし、むしろ根絶やしにしておくとか言われたので聞き流していたが、転生前の俺のHDDを破壊しておいてほしかった。

第四次および第五次聖杯戦争（深夜）やサーニヤの真夜中ウィッチーズ、アテイ先生の淫らな個別授業などがフォルダ分けしてしつかり残っているわけで。

不肖の息子をどうか許してほしい……。

—
2

過去の消し去りたい思い出をなんとか葬り去ろうと四苦八苦し、逆に鮮明に思い出してしまつて枕に顔を埋めてしまふ以外はつつがなく過ごしてきた。

アイドルマスター（深夜のコンサート）やアイドルと夜中のレッスンなどを恋しく思いながら精一杯に生きている。

正直、かなり惜しいです。

そんな夜への思い出を発散するために元気に外を走り回るといふ可愛い幼児な俺。内面を見られたら死ぬかもしれないが、外面は輝いている気がする。

そんなどうでもいいことは思考の深いところに頑張つて沈めて、近況報告。なんと俺は小学生になったことで問題が発生。

俺がバカだったことに気付いた。

転生して、宿題を頑張っているのに、学力が並みであるという悲劇。

むしろ転生という底上げを顧みるとちよつとおつむが弱い事実が浮かび上がる。

二周目は強くてニューゲームで頭も当然いいと思つたやつ誰だよ、出てこい。

そんなわけで学校生活において油断も慢心も出来なくなつてしまった。

運動に関しては他人の動きを見ただけで、要点を掴んで模倣できるくらいなので問題は全くない。

筋力や技術が足りないことと真似できないこともあるが、何度か繰り返せば自分なりに改善できるのでマジで問題ない。

問題はやはり学力だ。

知能は問題ない……と信じている。

勉強がちよつと苦手で、反復練習してやつと覚えられるくらいだ。

別に教科書を丸暗記しようとかではない。

足し算、引き算に苦戦したり、漢字を覚えるのが苦手だったりといった具合なのだ。

字は模倣を繰り返したため上手すぎて担任が泣くレベルなのだ。

なのでクラスのポジションは運動できるけど勉強が苦手な少年、みたいな感じだ。

よくいるよね。

小中学校までは人気があるけど、高校からいい人どまりなポジションっぽいし。

もしかしたら恋愛ゲーでの悪友ポジションかもしれない。

あいつの好感度は○○だぜ、みたいな。

でもニュータイプ能力が根絶やしな俺だからな。

空気とか好意とか、そういうのよくわからないので悪友ポジションは無理そうだ。

虐められないように会話パターンから適切な言葉を導き出すことも多々あるくらいだし。

小学生の分際でちよつと生活するのがツライなあと黄昏てみたり。

— 3 —

クラスで人気者の織斑千冬、通称ちーちゃんを誘って遊ぶかなあと大きめのボールを用意。

小学生と遊ぶと身体能力を下げる必要があるので面倒だが、こうやって媚を売ることでいじめられないポジションを得ている。

なんだかんだいって小学生の社会はシビアだぜ……。

誰も見ていないのでボールを指先で回転させて遊んでいると、ちーちゃんの怒鳴り声。

「お、誰か死んだかな」と教室の扉を開けると篠ノ之 束が頬を朱くして倒れていた。

見守っていたクラスメートに話を聞くとちーちゃんがバチコンかましたらしい。さすが戦闘タイプは違うなあ。

仲裁でもしてクラスの好感度を稼いでおこうという強かな発想の元、二人へと近づく。

小学生が出していい空気ではないという言葉を飲み込んで、アクシズシヨックが起きそうなくらい剣呑な空気に飛び込んでいく。

怒気に満ち溢れたちーちゃんの燃え盛る瞳とガラス玉のように硬質で何も映していない篠ノ之 束の瞳に挟まれた。

空気がほとんど読めない俺でもわかる、あと5秒で死ぬかもしれない。

未だに死んだヤムチャみたいな姿勢で俺とちーちゃんを見つめる篠ノ之 束を起き上がらせ、席に座らせる。

男らしくガイナ立ちしてそれを見下ろしていたちーちゃんも席に座らせる。

うだうだと文句を言った二名にはペナルティとして、両ひざにタオルを巻きつけて強制的に正座させた。

小学生、というか人間の動体視力では俺が少しだけぶれたことは確認できただろうが、何が起きたのかわからないだろう。

まあ、そんなのはどうでもいい。

問題はこの空気を解消するにはどうしたらいいかということだ。そんなわけで小規模学級裁判を開廷。

原告被告とかそんなものなしで事情から原因と解決案を導くだけなので学級裁判とは違うけど、学級裁判といってしまったのでそのまま押し通す。

進行は俺が買つて出たので、初めにちーちゃんがバチコンかました理由を聞く。

「気に入らなかつたから」らしい。

お、おう。

そんなツンデレヒロインが恥ずかしくて正直になれず、主人公に暴力をかましてしまったときみたいなのを言われても困る。

根気よく聞いていくと、篠ノ之 束が無視するのが気に入らなくて改善を求めたがうまくいかず暴発、バチコンらしい。

なるほど。

つまり中学生のときの黒神めだかがクマーとわかりあえず半殺しにした状況をマイルドにしたらしい。

対して篠ノ之 束は……すげえ。

目の前にいるのに宙に視線を向けてて無視される。

無理やり目を合わせてもまるでその向こうを見ているかのようで反応なし。

こいつは強敵ですな。

ちーちゃんに諦めたらとアドバイスすると、俺のように空気が読めなくても頑張っているやつがいるのにそれは許されぬとか。

俺の扱いが微妙すぎて笑ってしまった。

それに反応してちーちゃんの鉄拳が唸って殴られた。

殴られた衝撃を篠ノ之 束に流してみたが反応なし。

泣いたら少しくらい進展するかと期待したのが半分、痛いのは嫌だったので意欲返したのが残り半分。

ただ、衝撃とともに痛みが流れてきたことに興味が向いたのか少しだけ視線が合った気がした。

この機を逃さずモノにするのが俺である。

流れるような動作で視線を固定し、篠ノ之 束を顎を軽く支え、唇を奪った。

小学生だからどうだろうかと思つたが、柔らかくて実に甘露で本当にやって良かったです（粉みかん）

なんだかんだ美少女だしな。

あと、散々無視してくれていた篠ノ之 束が顔を真っ赤にして視線を合わせていると

思うとなかなか気分がよかった。

結果として、ちーちゃんに俺がぶん殴られて気絶した振りをし、学級裁判は無事に閉廷した。

翌日、女子からあだ名が変態、男子からのあだ名がエロになってしまった。
なぜだし。

束はクラスの中はシカトしていたが、なぜか俺にべったり懐いて可愛かったのでプ
ラマイゼロか。

むしろ怒気を端々に漏らしながら話しかけてくるちーちゃんが怖かったからマイナ
ス100かな。

ちーちゃんの怒気を取めるために以前「何処か道場に一緒に通わないか」と誘われて
いたのを思い出して近所の剣術道場へ。

どうやら道場の娘だったようで、束が喜びを振りまきながら挨拶してきた。
違うんですよ、ちーちゃん様……!!

不慮の事故で修羅場が発生し、第二次アクシズショックが起きそうになった。

が、俺がちーちゃんに誘われて入門することにしたと伝えると束がちーちゃんにも少

しだけ懐いたようで、ちーちゃんは毒気を抜かれたようだった。

俺は許された……（歓喜）

やったぜとばかりに束の細い腰を支えて、幼子を高い高いするように持ち上げること
で宙に浮かせ、くるくると一緒に回りながら「やったよ束！」「よかつたね！ あつくん
！」と二人で喜びを分かち合っていると、ちーちゃんに置いてあつた木刀で殴られた。

許してくれたたんじやなかつたのかよ……。

その後はちーちゃんには束の親から説教が見舞われた。

たんこぶだったから問題なかつたが死んでいた可能性があるという説教だ。

俺じやなかつたら死んでた可能性もあるのもつと強く言つてください、と内心で
祈つたがすぐに説教は終わった。

くそ……。

その流れでたんこぶを冷やしながら、道場について説明を受ける。

週に何度通うか、月謝は親に、装備は装備しないと意味ないぞとか、そんな単純なこ
とをゆつくりと。

難しい話は親を通してされるのだろうと領いて終える。

これからよく会えることにご機嫌らしい束に別れの挨拶を告げ、帰路に付く。

ちーちゃんを送るのだが、早歩きでなぜか先に行ってしまった。

機嫌もちよつと悪かった気がする。

ぐぬぬ……。

よくわからないが、俺が悪いことをしてしまったらしい。

わからないことを謝つてもしょうがないので、束にしたことをちーちゃんにもしておく。

くるくるー、みたいな。

ぶん殴られたが少しだけ機嫌がよくなった、気がする。

羨ましかったのだろうか。

今後も機嫌が悪くなつたらくるくるすれば解決する……いや、無理か。

——4

中学に進学したが、大きな変化は無かった。

ちーちゃんと束とクラスが同じになって一緒にダベって過ごすくらいか。

あ、あとちーちゃんが「あたし斬れたナイフだから」モードに突入していた。

中二病だろうかと心配したら、どうやら家庭の事情らしい。

なら放っておいても大丈夫だろうと流していたがダメなんじゃないかと思ひ直したのが中二になってから。

月謝は子供教室で低学年の少年少女に指導しているのでタダだが、それ以外にバイトをし始めたようなのだ。

斬れたナイフがこのまま変な方向に行ったら嫌なので様子見でちーちゃんの家にちよいちよい遊びに行くことにした。

確か弟もまだ小さいという話だったし。

ちーちゃんの弟の一夏を相手したり、束が引いたらしい設計図から指示に従って機械を組んでみたり、ちーちゃんに大会に出ないかと誘われて冗談で「相手が死んだらどうするよ」みたいなことを言つて本気にされたり、一夏がいーちゃんと呼んでほしいと主張してきたりして多感な時期である中二を卒業。

翌年の受験戦争に突入する中三になり、束がISを発表した。

ISはなんかぼろ糞言われたらしい、珍しく俺の前でも束は不機嫌だった。

確かにISって個人製作だしなあ。

規格のない部品を作るために、束が新しく加工機器を作ったし。

わざわざ加工機器を用意するほどでもない場合は俺が切り出した。

ぶっちゃけ、ISって同人作品みたいなものだし。

出来は良かったので、人間が纏うと性能は知らないが『らしく』なるので「見る目な
いよな」と束を慰める。

「いつか活躍する場面があればみんな認めてくれるさ」と告げると、「だよね！ やつ
ぱりあつくくんは私のことわかってるねー！」とさつきまでの不機嫌はどこかへいった様
子だった。

べつたりとくつつくのも良いですが、勉強を教えてください。

あとちーちゃんが睨んできて怖いのでマジでやめてください死んでしまいます。

そのひと月後、定期考査が終了した直後に白騎士事件と世で呼ばれる事件が起きた。

2000発くらいのみサイルをISを使って防いだことで、ISの実用性を立証する
ことになったとか。

ISってすごかったんだな。

2000発のみサイルとか、俺だと死ぬからなあ。

爆風から逃げ切れないのは厳しい。

逃げ切れても熱が、な……。

良かったなーと上機嫌な束をくるくるする。

ちーちゃんもやるかと聞いて断られたので一夏もくるくる。

いーちゃん呼びは恥ずかしくなったのか、半年ほどで終わりを告げていたりする。ちよつと寂しい。

5

ISについて色々と世界は混乱したが、そんなことよりも勉強だった俺は無事に高校へと進学。

ぶつちやけヤバかったです。

束は「不正するほどでもなかったというか、むしろかなり良かった……と思う」みたいなことを言っていたが、束とちーちゃんがいなかったら沈んでましたな。

ちーちゃんから一夏が小学校に入学したと聞き、上機嫌の俺は同伴して小学校に突入し、家族の写真撮影に混ざるといふ快挙。

というか怪挙だな。

まあ、両親が来られてなかったし一夏もご機嫌だったのでセーフだ、セーフ。

そしてその流れでなぜか束の家族とも写真撮影。

喜びのあまりちよつとテンションが上がりすぎたようだ。

一夏も小学生かー、剣術やるか!?みたいなことも言った気がする。

まあ、浮かれてたんで許せ。

東の妹の箒にも、剣術やるか!?!みたいなことも言った気がする。

まあ、浮かれ（省略）

二人とも仲良くなつて剣術やる流れかとチラツチラツと期待してたら、思わぬ方向へと向かつてしまった。

東に取られるからやらないという一夏、ちーちゃんに取られるからやらないという箒。

なんか弟妹コンビの二人は互いに睨みあつて俺の腕をつかんで牽制を始めていた。

姉離れはまだ先だなどと思いつつ、それに反して姉愛に溢れた二人だなど感動のあまりくるくるしてみた。

競い合うようにくるくるをせがまれ、それに答え続けたら目を回していたが、好敵手と認め合つたのか道場に通うことを決めていた。

やっぱり小学生は最高だぜ！

ついでに東とちーちゃんともお祝いごとなので一緒に回っておいた。

高校では「あたし斬れたナイフだから」だったちーちゃんがマイルドヤンキーと化していた。

軟化したようであれしく思うが、家庭の事情は……まあ、俺が何か言うことでもあるまい。

ただ、ちーちゃんは男らしきMAXの代わりに女子力がマイナスだから家事が最悪である。

結婚できないまま孤独に過ごすちーちゃんを見たくない俺としては何とか家事を仕込んでおきたいわけで。

白羽の矢が立ったのは、彼女の弟の一夏であった。

めっちゃや懐いているので教えるのは苦ではないし、むしろせがまれるレベル。

弟がいたらこんな感じかと猫かわいがりしてしまふ俺は悪くないはず。

家事が壊滅で未来が怪しいちーちゃんに反して、束はなんだかん大丈夫そうなので信頼して放置。

天才だし万能だし、人見知りする以外は完璧だと思う。

残念ながらゲームは俺が勝ち越しているけど、それは問題にならないし。

ちなみに現在の俺は1秒間に27回動けるっぽい、束が測定してくれた。

つまり現実で27fps相当の動きが発揮できるというわけで、じゃんけんすると出

すまでに27回変更できる。

特に利点はない。

じゃんけんが超強かったり、格ゲーやシューティングが無茶苦茶強かったり、「魔王から逃げられない」をリアルで出来るくらい。

ちなみに束とゲームすると凄くひどい画面になって箒がガチ泣きする。

格闘だと先読みし続ける束と27fpsでコマンド入力する俺、なるほどすごくキモいです。

二人でシューティングすると敵が撃たれるために出てくるくらいだし。

高校二年に上がると一夏と箒が仲良くなったらしい。

互いにかみあっている部分があったのが、切磋琢磨するようになっていた。感動的な話だ。

そんな一夏の様子に満足したちーちゃんはやはり家事を覚えなかった。

バイトというか仕事というか、まあ、忙しいっぽいな。

ついでに束も忙しそうなので彼女らの弟妹は俺が相手することが多々あった。

小学生の二人はかなり素直で言うことも聞く。

すげえ可愛がってしまった。

俺も弟か妹がほしいと呟くと、二人とも一生懸命アピールして慰めてくれた。

やはりすげえ可愛かった（粉みかん）

そんな感じで過ごして高三になり、進路に真剣に悩むようになった。

ちーちゃんは I S 乗りとして勝利を約束されているし、束は言うに及ばず。

束の両親から道場はどうかと誘われているし、ちーちゃんに I S の整備などがある
と助言を受けているが、かなり悩ましい。

ぐぬぬ……。

傭兵とかになって戦ったらいけるんじゃないかと妄想したが、I S があるし飯の種にはな
らなそうだ。

素手で I S を倒せるのに働くのがこんなに難しいなんて……；ω；

よし、大学に進学しよう。

長く家を空ける様になるであろうちーちゃんと束の代わりに弟妹の世話もしないとい
けないし。

決して保留にしたのではないと信じてほしい。

後は束が I S を開発したから変なの増えたし、蹴散らさないといけないし。

リアル無双ゲーっぽく遊べるので、それが楽しみだったりすることは決してない。

燕返しを極めすぎて10羽から20羽くらいの燕なら一度で落とせるに違いない。

しかし、同時に連撃を放たないと落とせない燕とか、ヤバくね。

聖杯戦争のあの人はいったいどんな燕と戦っていたんだ……。

そんな感じで進学したのはいいが、なんと東の家が政府の保護プログラムによって一家離散状態になってしまったらしい。

マジか……。

まあ、遅いくらいだったしな。

ISが投入されるくらい束が狙われてたし、しようがないか。

そういえば一機撃墜したのでコアを手に入れた。

物理無効で超火力のボス機体だったが、中身は人間なので割かしうまく戦えた。

ハイパーセンサーで判断力や思考を補っているが、装備の動きなどには限界があるし、搭乗者の意思にも左右される。

攻略法としてすべての攻撃を避けてエネルギーを削り、シールドで守られている360°。全方位を攻撃してエネルギーを削り、エネルギー切れで動かなくなるところを抜き手でコアを奪うだけである。

コアそのものを抜き取り、情報のやり取りを切断してしまったので量子化されていた諸々がまろみ出て地面に転がってしまった。

ファミコンの電源に引つかかかってしまったような気分だった。もうちよつと頑張ればシールドが疎らな部位が何mmかあったので貫通して綺麗に中身を直接やれたはず。

東謹製のISは間違ひなくエネルギー切れ以外は無理だけど。保護される間際、東にコアを渡すとほしいか尋ねられたのでいらんと答えた。

ちよつとヘソを曲げられたので一夏にあげてと頼んでおいた。

ちーちゃんのモンドセレクション金賞のお祝いとして一夏にも何かあげたほうが良さそうだし。

まあ、今回はちーちゃん随伴で夢の国的なサムシングと一緒に遊びにいったので、次の金賞であればいいんじゃないかな。

ちーちゃんにあげてもいいけど。

— 7

そんな感じの後には特に何が起こるわけでもなく、大学時代をぬるぬると過ごしていった。

第二回モンド・グロッソ中に一夏が誘拐されたり、ちーちゃんがドイツで教官を務め

たり、東がコアの製造をやめたり、俺が正面からISを撃墜したり、ちーちゃんがIS学園で教官を勤めたり、東が失踪したり、いろいろとあったが実にいい感じだった。

それにかなり頻繁に東が現れて一緒に講義を受けたり課題やったりごはん作ったりと、なかなか楽しかった。

そろそろ俺の馬鹿（学力的な意味で）も問題なくなってきただろう。

危機を感じるほど馬鹿だったから結構一生懸命だった。

そろそろ勉強しなくてもいいかな、と心に余裕ができた矢先、事件が起きた。

なんと一夏がISを動かしたというのだ。

マジか。

驚きに反して当然ながら寂しさもあった。

保護プログラムや政府の動き、ISによる諸々の事情を考えるとこれまで通りにはいかないだろうことはすぐにわかったが心のうちに仕舞っておく。

ちーちゃんがIS学園にいるからこれはいい機会なのかもしれない。

俺がやってあげられることは、かつて学んだISについて教えることくらいか。

東が俺に作ってくれた参考書をそのままプレゼント。

さすがに部品を加工した話は伝えなかつたけど。

IS学園は女の子だからだからNARUTO（夜中の忍界大戦）みたいなモノは必要

だろうかと小一時間悩んだが、発見されたら気まずいだろうと答えが出て、結局やめた。

— 8

政府に保護されて I S 学園へと向かう一夏を見送って、ちよつとしんみり。

気づいたら周りには誰もいなくなっていた。

みんなやるべきことを見つけ、それに進み始めた。

俺も何か見つけないとなあとダウンナーな気持ちに入っていると束が出現。

いいタイミングだ。

なんか嬉しかったので華奢な束を抱きしめた後、その細い腰を支えて宙に持ち上げ、昔のようにくるくると一緒に回った。

見つめ合うと照れた素振りが垣間見れる束の様子に、ちよつとだけ気持ちは晴れたが、先行きを考えると鬱屈しそうだ。

それでも、楽しそうに回っている束を見上げていると、今はこれでいいかなと思ってみたり。

神様っぽい存在によつて転生させてもらったので、学生を満喫したり、道場に通つたり、なんか馬鹿になつたので頑張つて勉強した。

あと中二のときに幼馴染の束と超すごいパワードスーツであるISを作つた。

中二病つてやばいね、二度目の人生だからなのか物凄いのが出来てしまった。

その後も頑張つて勉強して、幼馴染のちーちゃんが切れるナイフから切れたナイフへと至る変遷を見守つたり、束を持ち上げてくるくる回つたりした。

そして大学へと進学を果たした。

で、俺つてば大学やめたんだよね。

頑張つて勉強して入学したけど、ちよつと大学どころじゃなくなつてしまった。

どうも俺がISの作製に関わつていたことに気付かれたらしい。

とはいえ公式的な見解は束のみが開発したという認識なのだが、裏では俺がなんやかんややった的なサムシング。

しかし世界の裏では実しやかに俺の存在が囁かれている、とか。

裏の世界とか俺つてばかっこいいな。

まあそんなわけで、政府が保護しようと凸ってきたり、秘密結社みたいなのが「乗り込めー^^」してきたり、ISが「わあい^^」してきたりと大学に通ってられなくなつた。

ぐぬぬ。

まだ入つたばかりだと言うのに授業どころではなくなつた。

あと東と一緒に学食に行つてたのがバレたのもあるっぽい。

別に俺だけならどこに捕まつてもいいのだけれど、東と会いにくくなりそうなので逃げているのだ。

あーでもどうしようかな。

完全無欠のニートだ。

先を全く何も考えないで家出する中高生と同じ発想だし。

冗談抜きで見知らぬ組織とかに狙われるからアルバイトも出来ないので困つた。

コンビニでレジ打ちしたら商品の代わりに銃とか向けられるし、前陳したら爆弾、掃除したら地雷、みたいな。

クラスにテロリストが現れたらどうやって対処するかなどと妄想していた転生前の中学生時代ならこの境遇も楽しめたかもしれないが、今となつては超面倒なだけだ。

撃墜したISのコアでもオークションに出して日銭を稼ぐとかどうだろう。

1個1円スタートとか。

最初は捨て値でもいいからオークションに出しまくれば、そのうち数が減って希少価値が付いて10万くらいに値上がりしないだろうか。

あ、いいかもしれない。

でも東が作ったコアを売るのは何となく嫌だな。

武装とか剥いで鉄くずとして売るとか。

いい案がないんだよなあこれが。

やーんなっちゃう。

——10

手元にあつて良かったボールのようなもの、なんてな。

鼻歌交じりに素振り。

今日もいい感じに大気を切り裂いて絶好調。

俺が異世界に転移するならボールだけは手放せない。

ちなみにボールの語源は崇められた嵐と慈雨の神である。

崇高なるボールと呼ばれていたが、旧約聖書で乏しめられて蠅のボールと嘲られて墮とされた的な。

ちなみに工具のボールは、木材に突き刺さった釘を蠅のボールに見立て、それを引き抜くことで崇高なるボールとしての神格を取り戻そうという運動によって誕生した。

嘘だ。

工具のボールはなんか製品名らしい。

Bar（棒）から来るとかなんとか。

くぎ抜きとか金槌がうんたらかんたら。

まあ、俺のボールはエクスカリバーの別名だから。

エクスカリバーだと長いし。

準備おつけー、と上空からバリアを展開しながら飛んできたISにボールで殴りかかる。

奇襲のつもりだろうが俺にはそういうのがわかってしまうので無意味だ。

「邪気が来たか……」といった感情とかを読んで先読みしたりは出来ないが、エネルギーの流れ等は見えるのでちよつとした未来予知ができるのだ。

脳の機能を一部が欠損している代わりに、なんか育つてるとかどうとか。

俺の脳みそが100%フル稼働していて超能力に目覚めているという話ではない。

転生特典じゃないかと思っていたり、欠損しているけど。

そもそも脳はセンシングするとかかなりの領域が働いており、休息していることはあってもサボっている場所は無いようだ。

常にフル稼働だと熱を持ちすぎてヤバい的な話はあるけど。

100%稼働したら超能力も容易く扱えるという話もロマンや夢はあるが、結局幻想止まりのようだ。

もしくは脳の状態を任意で操れるようになったら、もしかしたら超能力に目覚めるのかもしれない。

超能力が使えたらI Sを撃墜するのも楽なのだろうか、と真剣に考えながら全身装甲型のI Sを滅多打ちにする。

展開されているシールドバリアは弱所が出現すると、エネルギーを消費して再展開する。

また、バリアを貫通して搭乗者に被害が出る場合は、絶対防御というエネルギーを浪費して生命を守る謎機能も取り付けられている。

つまりシールドバリアを繰り返し叩くことで揺らぎを生じさせ、隙間を縫って衝撃を通せば絶対防御でエネルギー切れを狙える。

というか狙わないと勝てない。

搭乗者を気絶させるにもシールドを張られたままだと衝撃などは届かないし、隙間であらうともシールドを貫通できる威力だと絶対防御が発動してしまう。

殺すのは更に労力がかかる。

生身で相手をする面倒臭さは半端ない。

宇宙など極限環境下で活動を想定して開発したマルチフォームスーツは伊達じゃないのだ。

隕石は押し返せないけど。

貫通させて一撃当てると、警戒したのか距離を取った。

回避を選んだら隙を狙って落とすし、攻撃を選んだら隙を狙って落とそう。

結局どちらにしろ落ちる未来しかないと言う話だ。

判断と動きが鈍いのはエネルギーがかつたからか。

もしくはリミッターが掛かっているハイパーセンサーに嫌がらせをするため、高速で相手の周りを走り回っていることに困惑しているのだろうか。

ちなみに捉えているであろう映像は全て残像だ。

スペースデブリは秒速7から8キロで飛んでくるのに対応しているハイパーセンサーだが、結局搭乗者は人間なのだ。

予測しようとも人間の処理能力以上のデータを叩きつけなければ無効化できる、というか疲労で判断力を鈍らせる。

最初はコンピュータを超える思考と反射だろうとも、負荷を掛けまくって疲労を溜めてあげればよろーんだ。

エネルギーを削って、人の精神も削ったのだから、あとは壊す作業のみだ。

東とISを開発したことから、このコアはもしかしたら俺の子供ポジションなのかもしれないので手加減すべきだろうかと仏心が顔を出したが、ビームを撃ってきたので引っ込んだ。

そもそも武装でビーム系は照射して熱量を稼ぐ必要があるので当たらなければ問題ないゴミだし、気絶させるスタン系の武装かもしれないが殺傷性を割いた物など当たっても問題ないからゴミだし、実弾だったら当たらなければいいのでゴミだし、爆弾や砲弾系は爆風で俺が死ぬので使わないだろうしゴミだ。

宇宙での活動用に開発したのに、ゴミのような武器を付けてジャンクにビフォーアフターとか流石の俺も優しく出来ない。

子供に檻樓を着せられているのを見せられた気分だ。

俺は何時からゴミ処理係と化したのだろうか。

もつと資源は大切にすべきだ。

というか凄い技術が発見されたから兵器転用しようとか蛮族の発想じゃん。

いや、歴史を顧みると当然のように行われているが。

俺も隣人が銃を向けてきたら腕を折るからあんまり人のことは言えないかもしれんね。

殴られ屋でもやるか、どうせ当たらないし。

馬の状態を読んで競馬で一山当てるとかどうだろうか。

そうなると競艇もありだな。

パチンコは裏で弄られているのが大半だから論外。

宝くじは運の要素が強すぎて当たらん。

祭りとかあったら型抜きで小銭を稼ぐことも可能なのだが、どうしたもんか。

傭兵とかカッコいいし有りか。

飛行機に乗るのが難しそうだ。

泳ぐか。

寒そうだな。

アヒルボート……いける！

あ、ISは解体してコアだけ貰っておいた。

搭乗者も武装も残しておくだなんて俺って優しい。

そも搭乗者は女だろ、人身や臓器の売買とか販路ないし、ネットオークションで出来るわけでもないし、絶対いらねー。

量子化が解除されてるかもしれないが、そういう便利な技術に甘えすぎて恵まれていることを忘れるのは良くないと思う。

今回はISの技術が如何に素晴らしいかを知る勉強の機会だったと理解してもらいたいのだ。

—— 11

東が雇ってくれることになった。

ヒモかと慄いたが、若い社長しかいないベンチャー企業に就職したのだと考えればセーフである。

むしろISのシェアを考えたら勝ち組っしょ。

東が「あつくんには何をやってもらおうかなあ」などとだらけきった表情を浮かべているが、確かにできることは少ないかもしれない。

中二のときにISを作る理由であった宇宙空間での活動がメインだろうが、ISは女

性にしか動かせない。

なんでそうなったか、俺にはまったくわからん。

束はわかっているのかもしれないが、まあどうでもいいので流そう。

なので宇宙活動するだろうしホントはISを使いたいところだが、俺が男なので代替品を開発する必要があるかもしれん。

新しいのを何か作る？と束に聞いてみる。

「あつくんも欲しいんだ？ 凄いの作ろうね！」みたいな反応が返ってきた。

凄いの欲しいです（真顔

流石に宇宙には何も無しで行ったら死ぬ、気がする。

あ、でも大丈夫かもしれん。

いけるって信じたらいけるいける。

酸素の問題を解決したら……やっぱ無理だな。

「どんなのにするー？」って設計図を見せられたが、既存のISは使えないのでのーせんきゅー。

現行のISよりも丈夫で極限環境下でも問題なく動ける感じがいいな。

エネルギーは大容量が望ましいけど、補給ができるのなら何でもいいかもしれん。

シールド極振りでもいいかも。

武装？

監視されていない小さなデブリを壊せるくらいだから最低限で……いや、大きなゴミとか落とすこともあるのかな。

強めがいいかもしれん。

つまり

シールド↓超硬い

エネルギー↓いっぱい

武装↓つよい

なんだこの中二的な要望は。

流石の束も笑顔がちよつと困惑気味だ。

想定している戦場を聞かれた。

戦場……？

職場的な意味か。

完全な宇宙での活動だし、最初はデブリ撤去などをメインにするのはどうだろうかと返事しておく。

恒星から発せられる光やイオンを推力に変換するソーラーセイルをISに乗せる話

もあつたし、機体名はスターゲイザーとかがいいなあ。

実はヴォワチュール・リュミエールが凄い好きなんだ、俺。

将来的には、重力の制約も無いのだから巨大にして無人にして火星軌道以遠の太陽系宙域の探査・開発も目指そう！とちよつと興奮してしまった。

中二のときに束が宇宙へと歩みを進める夢を語られて、ISの開発を手伝う気になったのを思い出した。

俺の要望に首を傾げながらも投影されたディスプレイに凶面を引いていた束の手が止まっていた。

俺が興奮した姿に驚かせたのかと聞いてみる。

そういうわけではないらしい。

柔らかな髪を揺らしながら束が顔を上げた。

珍しいことに笑顔ではなく、驚いた表情を浮かべており、眠たげで隈が目立つ目を丸くしている。

正面から見ると大きくて綺麗な瞳をしている。

束ぐう可愛。

「ふちゅー？ 東京？」

「いや、府中じゃないから。宇宙だから」

「宇宙？ 地球以外の空間のこと？」

「宇宙。地球や他の天体が属さない空間領域のこと」

「あつくんは宇宙で使うの？」

「使うでしょ。むしろ宇宙でしか使わないんだけど。今のところは大気圏外かな。上空100kmくらいのところで使うし、将来は800km以降のところまで使っていきたいよね」

東は目を丸くしたままである。

よくわからんので首を傾げる。

もうノウウハウはあるだろうし、宇宙活動できるスーツは作製できるはずだ。

データもある程度は揃ってるんじゃないかな。

そのためにIS作ったんでしょと問いかける。

「うんうん！ やっぱりあつくんは私のことわかってるねー！」

とろけるような笑顔を浮かべた東に抱き着かれた。

というか勢い的にタツクルだった。

受け止めて抱きしめた後、細い腰を支えて抱え上げてくるくと周る。

楽しそうな束を見てみると、大学をやめて正解だったかなと思ってみたり。

——12

宇宙用のスーツだが、当然のことながらISの技術を流用する。

楽だし、スーツとしては便利で優秀。

男性用に一から作ることも考えたが、面倒なのでエンジェルパックというハイセンスな制御システムを作ることで解決した。

ちなみにエンジェルパックの自身は適正持つてる搭乗者たちのクローンだ。

釣り餌として人気のない閑散とした通りを束と歩くと結構な頻度でISが襲ってくるので、何人かから遺伝情報を貰い、クローンを培養して邪魔な部分を切除して頭にコアを埋め込み、カプセルに詰め込む感じだ。

コアが受信機にもなるので、俺の指示も受け付けてくれる。

ISの新時代が幕を開けた……いや、むしろISとは異なる新技術かもしれない。

女性しか動かせないコアが無いとISではなくなるので、ISじゃない超すごいスー

ツ的な。

頭部と胴体が入ってるエンジェルパックは非常に邪魔だが、ある意味で動力も兼ねているので我慢するしかない。

あと結構な頻度で取り換えが必要なのも面倒臭さに拍車をかけている。

廃棄品は中身を高温で燃やせばいいだけだから特にどうという話でもないのだけど。

脳みそだけが理想だったのが品質維持が難しく、劣化と性能のつり合いを顧みて胴体と頭部のセットにしたという世知辛い現実があつたりなかつたり。

完成したスーツの雛型に、必要な装備を積み込んでいく。

シールドは必須だ、無いと死ぬ。

絶対防御は……エンジェルパックにだけ付いてればいいか。

センサーとコアネットワークなどはISについている元の機能のリミッターをカットすれば問題なし。

武装は無くてもいいが、作業用のマニピレーターは欲しいので10個くらい用意した。

しかも脳波コントロールできる（どやあ

ト。
I S コアを握らせて宇宙ステーションへこっそり混じって飛んで行き、宇宙でテスト。

台数は少ないが、宇宙でI S が活用されているようで感動した。
女性ばかりなのでハーレムものが始まる予感……！

—— 13

I S 学園に教師として赴任。

一夏がI S を起動したというので心配になって来ちゃった。
嘘だ。

作業途中で宇宙ステーションに俺がいるとバレて捕まりかけた。

ハーレムなんて夢だったんだ。

逃げるために宇宙開発用スーツ・スターゲイザー（仮）で大気圏突入をするという事件が発生。

大気での行動はほとんど考慮してなかったので、エンジェルパックを一個潰れるまで

フル稼働させてしまった。

脳が高温でダメになるくらい使ったのに超能力に目覚めた様子は無かった、つまり超能力は存在しない可能性が高い。

思わぬところで証明されてしまったな。

まあそんな訳でバックれて中立的なＩＳ学園に逃げ込んだ。

東？

宇宙ステーションで「君といると月が綺麗だね」「私死んでもいいよ……」ってオシャレな会話を繰り返した後には東は月へと旅立った。

そして昨日、東から月面で撮ったらしい写真が送られてきたので観光しているかもしれません。

可愛いは作れる、というフレーズを意識したらしい。

月に降り立てば最高に可愛い東さんになる！みたいな事のようにだ。

なるほど、やはり天才か。

いつも以上に月が輝いて見えるぜ。

東が月面にいることによって更に月が綺麗になっちゃおうな。

ただ東と一緒にいる方が嬉しいのですがそれは、と返信したら作業したらマッハで帰るって返事がきたので月面で基地とか作ってるんじゃないの（テキスト）

東の写真を見ていて重要なことに気付いたのだが、これまでの兎耳ファッションはおそらく月に兎がいるという迷信を現実にするための伏線だった可能性もある。

東……やはり天才か。

I S 学園だが、実権を握っている用務員と一夏くらいしか男がいない。
なので立場的に浮きまくり。

教師として最高に理想的な挨拶で「徒花秋波です。あつくんって呼んだら殺す☆」と好感度が稼げそうな猫被り挨拶をかましたら、クラスがざわついて金髪のちよろそうな生徒が叫び始めた。

えーと、名前がわからんからチヨロインちゃんと仮定しよう。

外国の方なのだろうが、日本語もしっかり喋れているけどヒステリックかもしれない。

チヨロインちゃんは「かしらかしら、ご存知かしら？」的な発言をしそうなので多分少女革命ウテナを意識しているのだろう。

ウテナが好きで日本語を覚えたのかもしれない、そして今憧れの日本に来てハイスクールに通っている夢叶ったオタクという可能性が高い。

どうでもいいね!

「IS適正が無くても授業できまあす!」とチヨロインちゃんを無視して授業開始。

じゃあ、導入としてISが開発された唯一の理由である宇宙空間で活動するための話を……なんか反応が悪い。

武装とかについての話がねーのかよ! って感じである。

え?

戦い方に興味があるとかどんな教育してるんだこれ。

あーでも軍学校だと考えたら……やっぱ変だよな。

競技や軍事利用を意識し過ぎてるし、彼女らの国では戦争でも起きるのかってレベルだ。

そもそも兵器としての点に注目するとか蛮族か何かか。

就職とかで有利になるとしても建前でも平和利用を意識してほしいというか。

我々には知性と理性が伴っているのだから、もつと学術的に運用することも出来るはず。

確かに開発者の束は評判が悪いかもしれないが、開発理由である純粋な夢まで歪めてほしくないわけで。

……なるほど!

つまり、こういった戦いばかりを追い求める蛮族に歪みつつある認識を正し、I Sの純粋な使い方を教えるための授業にすることか。

そうですね、織斑先生!

織斑先生?

……ちーちゃん?

なぜちーちゃんは目を逸らすのか(白目)

——14

織斑一夏は女尊男卑の先駆けとなったI Sと呼ばれるマルチフォーム・スーツの、男性唯一の搭乗者である。

受験会場への道を間違えて何故かI Sが起動できた奇跡の体現者である。

幼馴染もセカンドまで装備し、イケメン。

意外となんでも卒なく出来て、おつむも悪くない。

しかもI Sの国際大会優勝者である織斑千冬を姉に持つ。

その結果が、国家公認の地獄ハーレムに叩き込まれた憐れな犠牲者であり、飢えた狼の中に投げ込まれた憐れな子羊の出来上がりであった。

— 15 —

騒ぐクラスに向けて姉が「ISを使う上でのガイドンスを始める。そこで、専門家である彼に説明してもらおうと思う」と宣言すると、新任の先生が入ってきた。清潔感のある短髪、整った端正な顔には人好きのする笑みを浮かべ、皺ひとつない高価なスーツに身を包んだ青年。姉と、あの『束さん』の幼馴染のあつくんである。

「徒花秋波です。あつくんって呼んだら殺す☆」と誰もが信頼するであろう優しげな笑顔を浮かべながらそう挨拶した。冗談なのかもしれないが、クラスの空気が一瞬だけ凍りついた。だが、そんな空気など関係ないとばかりに、黒板に絵を描き始める。ほんの10秒程度で、チョーク一本で描いたとは思えないほどに精密なIS内部の絵が描きあがった。その見事な絵に、「おおー」と歓声が挙がる。

「ISの基礎から話していきますね。そもそもISの開発理念は束が……」

「ちよつとお待ちください！ あの篠ノ之東博士を呼び捨てなどと！ 貴方が専門家だろうと何だろうと知りませんが、いえ、だからこそ博士にきちんと敬意を持つべきです

わ！ 文化としても後進国の日本に暮らすだけでも耐え難いのに、そもそも男性からI Sの説明など……」

「……」

長い金髪のクラスメートが立ち上がり、あつくんの言葉を妨げる。そして、東さんを尊敬しているのか、呼び捨てで呼んだことへ抗議する。

その生徒へ、あつくんが『あの』目を向ける。優しい温かみのある笑顔なのに、その奥にあるのは、ガラス球のようになんの感情も映さない瞳。

どさり、と音がした。音のした方へ顔を向けると、抗議したクラスメートが眠るように机へ倒れ伏した。そして緩やかな風が流れる。締め切られ、空調が働いている室内に。

「何が起きたのか」とざわつく教室。

あれは手刀だ、見えないがわかる。恐ろしく速い手刀。姉でも逃しちゃうね。昔、姉が留守がちだった頃。ゴールデンウィークの連休に、あつくんに山に連れて行って貰ったことがあった。その時に出た熊を、今のように風だけ残して気絶させたのだ。その後、東さんがどこまでやれるのか見てみたいと言い出し、象を倒し、潜水して5分で鯨を海上に浮かべたのを見学した。個人的には最終日のバーベキューが一番楽しかった。「みんな静かに。最初の授業から『寝る』とは代表候補生はかなり挑戦的です。実に面白

いですよ」

あつくんは外へと視線を移しながら「まあ、こんなナイフみたいな態度が許されるのは中学生までだから。後でイギリスに教師への敬意が足りていないと抗議するとして」と呆れたように言った。

教壇近くの窓際で授業を見守っていた姉が何故かぶるぶる震えていた。

「IS適正が無くても授業できまあす。そもそも乗り方ではなく、IS全般の話をしませぬ。そのため、幾らかの知識さえあれば適性は要りませぬよね。また、競技や軍事への転用についての話も私からはしません。そういつたことに興味を持つたり、そういう風に育ったかもしれませぬ。が、みなさんが学生であることもまた事実です」

「ね?」と再びクラス全体に問う。みんな何かを察したのか、大人しく何度も頷く。自分も同じように。姉は何故か目を逸らしてぶるぶるしていた。

その様子に満足したのか、止まっていた授業が始まる。あつくんが教壇からクラス全体を見渡しながら、話を進めていく。

紡がれるのはISの開発理念、使用目的、運用の推奨方法、そして現状までの宇宙での活動。ISでどのようなことが可能なのか、不可能なのか。兵器というよりも、便利な道具としての話が進められていく。

話に連動して黒板の絵がアニメーションのように動き、遅れて小さくカカカツと

チヨークが削れる音がする。無駄に凝った演出だとクラスメートは静かに見ている。が、間違いなくあれは書きながら話しているだけだ。

「今日はここまで。次は機能についての話をしましょうか」とあつくんが言うと、授業の終わりを告げるチャイムが鳴り響いた。

教室を出る際、あつくんがこつちに来るようにと手で小さく招いていた。何か言いたげな幼馴染の箒もこちらに近づいている。

このままでは物珍しきで休み時間に質問責めに合うだろう。どちらかと話せば多分他の生徒も寄ってこないだろう。

あつくんか、箒か。あつくんとは、小学校を卒業して以来ほとんど話す機会がなかった。対して箒は束さんがあつくんを連れて行ったので接点があったに違いない。また、束さんがあつくんの獲得に成功してしまったので、手を拱いていた姉が干物として残ってしまった。そのことから、箒本人には何の罪もないがなんとも言えないもやもやした気持ちを抱いているのだ。結果はあつくん一択だった。

周囲に集まっていたクラスメートに「ごめん、先生に呼ばれてるから」と躲して教室から出る。残念そうな声が聞こえたが、逃げられたことにほっとする。

「呼びましたか、徒花せん……せ……？」

言葉に詰まる。廊下では、何故かドヤ顔で両手を広げるあつくくんが待っていた。

「あれ？ 折角だからくるくるってしようかと思っただけど」

「いや、俺ももう高校生なので廊下でくるくるはちよつと……」

くるくるとは、あつくんに腰辺りで持ち上げてもらい、くるくると一緒に回転することだ。独特の浮遊感と特別感で何度もせがんだこともあった。が、さすがに高校生にもなって廊下でくるくるとされるのは羞恥で厳しい。あと、なぜか離れた場所で凝視している姉の獣の眼光も怖い。

「そう、残念だな。束は喜んでくれるんだけど」

断られたことにしよんぼりとしたあつくん。姉の視線が強くなった気がする。

「そ、それで、徒花先生が俺を呼んだ理由を教えてくださいませんか」

流れを変えるため、呼ばれた理由を聞く。さすがにくるくるだけではない……はずだ。いや、それだけの可能性もあつくんなので高い。極めて。

「あつくんでもいいけど」

「いや、学校なんで」

「それもそうだ」とあつくくんが頷く。というか、あつくんって呼んだら殺す☆と言っていたので、言えるわけがない。自分がそう呼んで、気軽に真似した生徒が恐ろしく速い手刀で晒し首にされると思うと、軽はずみな行動を取ることは出来なかった。

「I Sの勉強はどう？ 捗ってる？」

「ははは、それはもう、はは……」

あつくんから目を逸らす。あんな電話帳でどう勉強しろというのか。あつくんから送られてきた参考書も難しすぎて、解説が進んでいない。

しかし、ここで見栄を張って「完璧だ」などと言えばあつくんはどう対応するのか。知っている前提で全てを進めるに違いない。だってあつくんだから。

「正直、全然わかりません……」

「あ、そうなんだ。難しいからそう肩を落とさないでもいいと思うよ。春からI Sに関わることになったんだし、卒業までに人並みまで行けば問題ないから」

「でも何時までも置いてかれてるのもどうかなくて」

「なるほどなるほど。それで、呼んだ理由んだけど、放課後に時間があるなら勉強見れるけど、どうする？」

部活や友だち付き合いがあるならそっちを優先してもいいのだけど、と続けた。

「お願いします」

提案に一も二もなく食いつく。何処かで真面目にやる必要もあるし、授業では足りない気もする。だから丁度良かった。

部活も女子ばかり、委員会も女子ばかり、友だちを作ろうにも女子ばかり。息も吐か

せぬ地獄か何かか此処は。

「ほう、一夏もやる気になったか。なら、どうだろうか。わ、私も一緒に勉強を見てやつても」

「あ、ちーちゃん。上級生が訓練予約入れてたし、そのの付き添いで手一杯だろうから心配しなくてもいいよ」

そっかあ……・ω・、と肩を落として姉は去って行った。

千冬姉……。

「時間に都合があれば電話してくれたら勉強みるからね」

「授業頑張つてね」という言葉を残し、あつくんは音もなく消えた。緩やかな空気の流れを残しているので、多分ちよつと走つたのだろう。実は会話の流れを全て計算していて残像と話していたとか……さすがに無いか。

あつくんとの交流で質問責めを凌げたと思つたが、普通に他の休み時間に押し寄せられただけだった。昼休みも他のクラスから人が物見に來たり、声をかけられたりと、見通しが甘かった。

それも終わりだとLHRを受けると、「クラス対抗戦があるので代表者を決めろ」と姉

が爆弾を投下した。その結果が、唯一の男を出そうと騒ぐクラスメートと、あつくんの手刀を受けた人が「そんなの認められません！ 専用機を持つてる私に決まってますわ！」と論争でエキサイティング！するかに見えた。

教室に後ろに立って様子を伺っていたあつくんが「本人の意思確認ができないだろう。空気を読みなさい、空気を」と言うのと、突然騒ぎ立てていた生徒が机に伏して『眠り』につき、教室が静まり返る。

姉を始めとした起きてる生徒がこちらを無言で見つめる。

「ま、まだ実機をほとんど動かしたこともない未熟な俺としては、専用機を持つているそっちの人でいいんじゃないかと思うんだけど」

代表はあつくんの手刀を受けた人になりそうだ。

放課後。教室の入り口には上級生も来ていたのだが、教室にいる生徒の八割が眠っているという異様な光景に何かを感じ取ったのか、すぐに帰って行った。

「い、一夏」

「箒か……」

やつとあつくんと勉強できるかと思えば、幼馴染の箒の姿。機嫌が悪いのか、どこか表情も硬い。

「こちらもなんだか気まずい。

「話があるんだ。お、屋上に行かないか?」

「大事な話か?」

真剣な自分の言葉に「だ、大事? いや、その」と箒が口ごもる。

箒の返事を待つ間にあつくんからのメールを確認。もう準備が出来ているらしい。

「久しぶりに会ったから調子はどうかという挨拶というか……」

「ごめん、箒。これからあつくんと勉強だからまた今度にしてくれ」

そっかあ……あつくんに負けたのかわたしい……シ・ω・、と箒は肩を落とした。

互いの挨拶だけなら向かう途中でも出来るだろ、一緒に行くか、と箒を誘う。首をちぎれるかの如く何度も頷く様に引きながら、あつくんの待つている空き教室に向かう。

調子はどうとか、剣道がどうか、そんな話をして到着。そして、何故か箒も勉強会に参加することとなった。

基礎をやる自分よりも、応用を勉強する箒のほうが質問する機会が多かった。

久しぶりに会ったのに箒のほうが話す時間も長かった気がする。

つまり、あつくんを箒に取られたんだが? (おこ)

部屋へ戻ると、何故か箒と同室になっていた。姉に知らせると、無理やりねじ込んだ

からしようがないという頭の悪い返事が。

それをあつくんに知らせると「ええ……」とドン引きした声を洩らしていた。『あの』あつくんが、である。I S 学園って凄いい、初めてそう思った。

部屋調整が行われ、それで空き部屋を作るのでそれまであつくんの部屋に泊めてもらうことになった。普通は姉がやることなんじゃないかと思っただが、夕飯に作ってもらった酢豚食べたら忘れた。

翌日、登校すると昨日LHRで眠らせられたクラスメイトやあつくんの手刀を受けた人がまだ寝てた。

寝癖とか化粧とか……いや、この話は止めておこう。

——16

「決闘ですわ！ まるで譲られたかのような選出に納得がいきません！ 決闘で決着を

……」

代表に決まった旨を伝えられたあつくんの手刀を受けた人が叫びながら立ち上がった

た。

クラスメートたちから「オイオイオイ」「死ぬわアイツ」的な雰囲気が出る。それに気付いたあつくんの手刀を受けた人が、サビ付いていたかのように鈍った動きでギギギと振り向く。あつくんが、あつくんの手刀を受けた人の後ろに立っていた。そして、あつくんの手刀を受けたのだろう、あつくんの手刀を受けた人が眠ってしまった。あつくんの手刀を受けた人はこれで二日連続で一限を寝て過ごすことに……ってなんだよあつくんの手刀を受けた人って、長いな。あいつの名前、誰か教えてくれないだろうか。「I S 学園って問題多過ぎないか」

ぼつりとあつくんが漏らした。

ほんとそれ。

実機の I S を使った訓練の授業。

なぜこんな水着に似ているのかと悩みながら、身体にびつちりと張り付くような I S スーツに身を包んで指示があるまで待機。目の前には純国産の量産型 I S の打鉄が置かれている。

周りの女子に比べて明らかに浮いている。そういつた恥ずかしさを我慢するのもツラさを感じ始めた頃、姉と連れ立って山田先生とあつくんが現れた。

「それでは授業を始めます。実技は織斑先生と山田先生が見てくれますが、初歩的な部分は私が指導していきます」

隣で睨んできていたあつくんの手刀を受けた人が「これで私の活躍を見せつけて……」と漏らしていた。

「では安全確認から始めてください」

ドヤ顔でISを展開したあつくんの手刀を受けた人が「あんぜん……かく、にん……？」と呟いた。

クラスメートが口々に「あつ！ これ最初の授業でやったとこだ！」と漏らす。要約すると周囲や乗機をきちんと確認しましょうという話だ。同時にISを外観から調べ、異常がないかを確かめるのも行う。実際は自動でスキャンしたり、技術者がメンテナンスと確認するので、わざわざ搭乗者がする必要もない。最初の授業なのでみんなと触れながらやってみよう、ということなのだろう。

あつくんの手刀を受けた人は寝てたのでわからないだろう。

「あの……織斑さん。その、申し訳ないのですが、教えていただいてもよろしいでしょうか」

消え入りそうな声で、あつくんの手刀を受けた人が訊ねて来た。決闘だなんだと叫んで、専用機をドヤ顔で出し、安全確認を訊ねる彼女の心境は如何に。

「すまない。無理なんだ」

「そうですね、あれだけ騒いで寝てた私が悪いんですものね……」

顔を俯かせて落ち込んだあつくんの手刀を受けた人に、そうじゃないと告げる。

「専用機は俺もわからないんだ」

「ああ、なるほど」

「先生を呼ぼう。出来るまで一緒に頑張ろう」

あつくんの手刀を受けた人が「ありがとうございます、織斑さん」と目をきらきらさせながら感謝の言葉を呟いた。

心細くて不安だったのだろう。

安心させるために「心配しないで俺と（あつくんが）一緒なら大丈夫だ」と笑顔を向け、あつくんに声をかける。あつくんを待っている間、あつくんの手刀を受けた人が顔を赤らめてこちらをちらちらと見てた。やっぱり不安なんだろうな。

真面目にやってないクラスメートを安らかに眠らせたあつくんが駆けつけてきた。専用機の安全確認がわからないと告げるとあつくんが「ええ……。専用機持ちなのに……」と漏らした。あつくんを動じさせるなんてなかなか出来ることじゃないよ。あつくんの手刀を受けた人が何時かの姉のようにぶるぶる震えてた。

あつくんに丁寧に教えてもらい、無事に安全確認を終えた。安堵の息をつくあつくんの手刀を受けた人に声をかける。

「無事にできて良かったな」

「ええ、ありがとうございます。手間をおかけして申し訳ありません」

「俺は手間だつて思つてないよ」

あつくん居たし。

「その、織斑さん。私、貴方のことを勘違いしていました」

「そう気に病むこともないさ」

あつくんいるから何が起きてても大丈夫だし。

「それで、その。名前でお呼びしてもよろしいでしょうか……？ も、もちろん友好を深めたいというだけで深い理由もありませんし、嫌なら嫌とおっしゃっていただければ私は……」

「いくらでも一夏つて呼んでくれよ。あつくんの手刀を受けた人」

「ありがとうございます、一夏さ……え？ 手刀？ あの、私の名前はセ」

あ、集合するようにとの声が聞こえる。

授業が次の段階に進むらしい。

「早く行こうぜ。あつくんの授業が進んじまう」

「一夏さん!? 一夏さん!? 私の名前はセ」

あつくんの手刀を受けた人が叫んでいるが、きつとあつくんの授業でわくわくしているのだろう。しようがないね。

——17

あつくんの手刀を受けた人に懐かれた気がする。「私の名前はセ」とあつくんの手刀を受けた人が発する途中で、セカンド幼馴染である鈴が現れた。鈴は2組だったらしく、「同じクラス代表だから練習しましょう!」と主張するために来たらしい。なるほど。

鈴が「違う! 違う違う違う!」と英霊としてガチャに一時期だけ混ざっていた巖窟王のような叫びを挙げて、釈然としないあつくんの手刀を受けた人とISの練習に向かった。

「対抗戦は唯一の男である一夏が出ると予想したのが噂になってな。たぶん、それがそのまま「一夏が出る」と伝わったのだろう。未熟なISの操作練習を『手伝おう』としてくれたんじゃないか。もう一度言うが、純粋に『手伝おう』としていたと思われる

から後でお礼でも言っておけ。いや気を使わせるかもしれないからメールとかどうだ」
 「あの女は誰だ」と聞きに来て「セカンド幼馴染の鈴だ。箒はファースト」という答えを聞いて呆けていた箒が、再起動してそう予想した。なるほど、幼馴染だから練習を手伝おうとしてくれたのか。良い奴だ。礼としてあつくんの酢豚を食わせてやろう。

屋上まで弁当を片手に走る。何処もかしこも女子、女子、女子。落ち着く暇もない。此処は地獄か。そろそろ一息つかせてくださいおねがいしまむら。

先客もいない、静かな屋上。無限に広がる空の下、内心でやっただ、と座り込む。鼻歌交じりに弁当箱を開き、色とりどりのおかずに、「おお……」と思わず喜びの音が漏れた。

「一夏？」

呼ばれたので振り向く。肩を上下させて息を整えている鈴が居た。

「鈴か。どうした？」

「昔の約束おぼえてる？」

約束……。箸で摘まんでいた酢豚を見てはつと思ひ出す。確か、料理が上達したら毎日、私の酢豚を食べてくれる？という物だったはずだ。

「……覚えてる」

「そ、そう！」

「でもな、鈴。無理なんだ」

「え……？」

「俺にはあつくくんがいるんだ」

「あつ……くん……？」

「あつくん（の酢豚）が一番なんだ」

「で、でもこの酢豚を食べてみたら気が変わるかも……」

「食べていいぞ」

箸で摘まんでいた酢豚を鈴に魅せつける。太陽光で、タレが美しく照り輝いている。腹が減ったので早く食べたいのだが、そういえば鈴には礼をしていなかったと思いだして酢豚をあげることにした。ホントは一つで我慢したいところだが、せがまれたらもう一つか二つはあげてもいい。セカンドだからな。

「私のより、おいしい……」

鈴が手にしていた弁当箱を落とす。重力に引かれたそれは、鈍い音を屋上に響かせた。

「あつくくんが俺（と千冬姉）のために作ったんだから当前だろ」

大きな瞳に涙を溜めた鈴は……

「一夏の馬鹿あ！」

何故かビンタして走っていった。

凄まじい衝撃だった。

通り魔に遭った気分ってこんな感じだろうか。

だが、弁当は無事に守り抜けた。やったぜ。

I S C (完)

『死ぬ↓神様↓転生』みたいな流れであの有名な神様転生を体験した。

そのついでに俺の持つすべてを強化してもらった。

詳しく説明すると人間が持つスペックを最大限に引き出している話だ。

副次的に精密動作も可能になるとか。

あとは全体的にどうでもいい話だったので省略。

最強の能力さえ貰えばどうでもいいし。

が、ちよつと失敗した。

能力が強すぎるため、俺は笑顔を失った。

無口、無表情なただのイケメンと化した。

やはり最強の能力を持つと悲しい身上を抱えることでバランスを取るのだろうか。

前世の記憶を忘却の彼方へ、現世の苦しみへの解決へと直走る。

が、解決せず。

糞があつあつあつあつあ！

イケメンなのに活かすことが出来ずに俺はこのままなのか！

俺は何時まで歯が黄色なのだ！

—— 1

俺はイケメンである。

だが、歯が黄色。

運動だつて得意。

だが、歯が黄色。

勉強だつてちよちよいのちよ。

だが、歯が黄色。

どうすればええねん（ガチ）

無駄にイケメンかつ肌が繊細で美しい俺は、黄色の歯が目立つのだ。

歯を磨いても黄色。

当然だ、歯が黄色なのは健康の証だからな。

ホワイトニングしても黄色。

当然だ、ホワイトニングなどという不純物が体内で浄化されないわけがない。

白く塗っても黄色。

当然だ、だって俺って最強なんだから。

歯が見える、それだけで俺の完璧なイメージが損なわれる。

鏡を見てわかったことだ。

間抜けなのだ。

傾国の美男子状態の俺が笑顔を浮かべるだけで、傾国のイエローだ。

それくらい黄ばんでる。

俺は至高存在であるが、欠点を常に抱えている状態なのだ。

俺は自らの至高的イケメンを保つため、一切の表情と言葉を捨てた。

中学生まで、俺は完璧なイメージを保ち続けた。

なるべく言葉を使わずに過ごした。

人との関わりも最低限だが、愚民どもの気持ちなど手に取るようにわかるので、好感

度は高い。

言葉を必要とするときは、視線誘導や愚民どもの視界を読み取り、歯が見られないように努めた。

至高存在でありながらも口内に欠点を持つ俺は、身近に人を近寄せないように過ごしてきた。

つもりだった。

— 2

「聞いてくれよ。俺、I S 学園に入学することになっちまった」
知ってるから話しかけんな。

俺は貴様の見せびらかすような白い歯が嫌いなんだ。

口閉じて死ぬか歯を全部砕いて死ね糞が。

そもそもこの世界に生きている連中のほとんどが歯が白くて腹立たしい。
死ね。

人類死滅しろ。

歯は黄色いほうが健康なんだ、だから俺は正常だ。

黄ばんでないから健康で丈夫。

ホント馬鹿で軟弱なトウース持ちは嫌になる。

わかるか？

歯のエナメル質が透明なほど硬く丈夫、ただそのため内部の象牙質が透けて見えるだけ。

俺の丈夫過ぎる歯はスケルトン、つまり透明度MAX。

超健康。

人類は砕いて絶滅しろ。

「知ってるか？ ISって女しか動かせないらしいんだ。つまり……俺も女ってことだろ？」

顔を赤らめながらクズがなんか言ったが、そんなわけないだろ。

糞ホモはマジで意味わからん。

頭が湧いている。

俺はヘテロなんだ。

至高の俺は至高の女を抱き、全人類に崇められるほどの価値がある。

貴様のようなホモとホモホモしいことをやるために生きているのではない。

そもそも俺も動かさせたんだから、その論で行くと俺も女じゃねえか。

結局ホモかよ。

歯を粉碎して、他の人類の歯も砕いて死ね。

「俺の気持ち、わかってくれるか？」

わかるわけねえだろホモ。

わかってても白い歯を持つテメエにプラス評価なんて与えるわけねえんだ。

歯を削りきって死ね。

ただ、この糞ホモの顔が至近距離過ぎて、口を開けなくて断る言葉を出せない。

視線誘導を一生懸命行っているのに、何故か真摯に視線を向けてくる。

織斑、俺、おまえのそういうところが……嫌いだよ死ね！

そもそも歯が白いだけでマイナス一兆億万ポイントだよハーゲ！

毛根が死滅しているハゲすら歯が黄色のこの世界は滅びろ糞が！

どうすることもできないから、とりあえず黙っていたら糞野郎は姉に回収されていった。

スマンな、みたいなことを言われた。

織斑姉……去り際に歯を見せびらかしてくんじやねーよ糞アマ！

人間力ゼロの愚民は俺の視界に入る前に歯を砕いてこい、で、死ね！

ただ、この糞アマは視力がめっちゃいい上に、動体視力も無駄に優れている愚民なので、曖昧に頷いた。

3

俺の将来の夢は審判である。

なんでもいい。

ボクシング、サッカー、野球、なんでも完璧にこなせる俺の天職だろう。

プロスポーツ選手の道もあるが、むしろ完璧すぎて楽しくない。

愚民どもが一喜一憂する姿こそが楽しいのだ。

それが、ISなどという謎のピコピコに乗ることになるとは、美しすぎる俺への当て付けだろうか。

完璧で強くて美しくってゴメン。

でも神様が与えた天賦だから許せ。

別にピコピコに乗るのは構わない。

が、適性がCのため、糞ホモのサブ扱いは戴けない。

配属させられた2組というのも腹立たしい。

まるで至高存在である俺が劣っているかのようではないか。
ピコピコなんて着なくたって素手で皆殺し可能だ、明らかに頂点だろう。
忌々しい。

ああ、忌々しい。

菌が生えている生物は全て朽ち果てろ。

身の程を弁えている昆虫や植物、ウイルスなどは許す。

他にも菌が汚いホームレスや野生生物も俺の慈悲で生きることを許す。

「あんたは相変わらず暗いのねー。一夏も変わらないの？」
なに八重歯見せびらかしてんだぶち殺すぞチャイニーズ。」

原作：ペルソナ3 頼れない大人がいるP3

4月9日

— 1

両親に連れて来られた”そこ”は見たことも無い機械に溢れる部屋だった。

両親と同じように白い服を着た大人が甲斐甲斐しく歩き回っていた。

大人が何かを互いに言い合っているが、難しい言葉ばかりでわからなかった。

ちんぷんかんぷんな私の様子に気付いたのか、両親が苦笑いとともに部屋の外へと連れ出してくれた。

右手に父、左手に母、両手が温かくてとても嬉しい。

いつも忙しくてあまり相手をしてくれないのに、今日は仕事に連れてきてくれた。

白い廊下、ガラス張りの壁、誰もいない外の風景。

両親と私の三人が鳴らす足音だけが響いていた。

扉の前で止まると、父がノックした。

中から返事とともに、十秒ほどで扉が開いた。

私よりも年上、小学校の高学年か中学生くらいの子だった。

父と母が男の子に何か耳打ちする。

男の子は目を逸らしながら首裏を掻き、その後に頷いた。

両親は楽しそうに笑っているだけ、男の子は困ったように首筋に左手を当てている。

なんだか仲間外れにされたようだ。

男の子は私と父、母へと順番に視線を向けたが、諦めたように溜息をついた。

そして、屈むように背を曲げをゆつくりと曲げて私と目線を合わせて口を開いた。

「えっと……はじめまして」

呟くような優しい声だった。

はじめまして、私が答えると嬉しそうに微笑んだ。

その柔らかな微笑みは父と母に似ていると思った。

「俺の名前は■です、よろしくね」

彼の、名前は■。

……？

名前は……。

彼の名前は……なんだっけ……？

まあ、いい……のかな。

なんか大事なはずなのに。

何故か思い出せない。

その後は彼に続いて確か私も自己紹介をした。

……はずだ。

「ご丁寧ありがとうございます。それでね……」

そうだ。

私が名前を告げると彼は嬉しそうに笑ったんだった。

それで……。

「俺と友達になってくれると嬉しいんだけどなあ。どうかな？」

彼はそう言うのと恥ずかしそうに目を逸らした。

私はあまり表情に出ない子供だったから、たぶん顔に変化は無かったのだろう。

ただ、嬉しかった。

確か嬉しかった……気がする。

友達はいなかったし、両親も忙しかった。

親戚は遠くに少しだけ。

近い人はいなくてさびしかった。

嬉しかった。

だから、どうだったっけ……。

「うん、ありがとう。よろしくね」

そうだ、彼と握手したんだ。

■の大きな手と握手した。

繊細な物を触るのように、私の手を優しく握る手。

父と母とは違う冷たい手だった。

父のように大きくて少しごつごつして、母のように優しい。

「……結城先生たちと同じ、優しい手だ」

彼が呟いた。

私も何か言葉を返すと、少しだけ目を見開いた。

が、すぐに細めるように笑っていた。

「そうか、うん、ありがとう。……ついでにハム子ちゃんって呼んでいい？」

それは駄目。

即答した。

でも意味なかった、気がする。

うん、意味なかった。

なかった、はずだ。

父と母は仕事で忙しい。

職場に連れてきてくれるけど、遊んではくれない。

■と過ごすばかりだ。

仕方なく■の相手をしてあげるけど、ちよつと寂しい。

それに■は私の事をハム子と呼ぶ。

嫌だつて何度も言ってるのに聞いてくれない。

いつも言うことを聞いてくれるし、話も聞いてくれるし、宿題も手伝ってくれるのに。そういえば両親はここで研究しているから忙しい。

なら研究が終わつたら一緒に遊べるのかな、そう■に聞くと曖昧に笑うだけだった。

私は■がここで寝泊まりしているのを知っている。

彼も研究しているのだろうか。

だつたら私も研究したい。

だつて両親と一緒にいられる時間がもつともつと増えるから。

■は私の頭を撫でるだけだった。

困ったり、言葉を失ったら■が何時も行う癖だ。

私は彼を困らせてしまつたみたい。

小さく謝ると髪を梳くように優しく撫でてくれる。

誰よりもずっとずっと優しく……。

でもやっぱり気になって、■がここにいる理由を聞いてみた。

他に彼や私と同じくらいの子供がいないから、気になっていた。

ここは大人ばかりだ。

私が遊びに来るまで、いつも彼は白い部屋に閉じこもっている。

「ここに俺がいるのは研究のお手伝いだよ。……施設も色々余裕が無かったから

ちようどよかったし」

偉い人が長く生きるために時間を操る研究をしていて、その手伝いなんだと■は教え

てくれた。

誰もが知らない生み出された時間を操る術を、探しているのだと。

時間は止まらない。

流れている。

可笑しな話だ。

きつとそう、変わらないことなんてない。

私も、■も。

■が色々と教えてくれたけど、覚えていない。

覚えているのは……

「人の心は見えないけれど、何処かで確かに繋がっていて、元型を共有している。元型には時間や人の生き死にも繋がっていて、その繋がりを操ることで時間を支配しようとしているのかもね。で、行っている実験は繋がりにある“集合的無意識”を人から取り出して、集めて制御しようとしているんだ。俺の場合はまた異なるモノが出てしまったけどね」

俺だけが、違ってしまった。

■はぼつりと眩き、遠い目をしていた。

窓の外を見ているはずなのに、何処も見えていないようだった。

握りしめられた手からは血が流れ出ていた。

確か、それに気付いた私には驚きながら手を治療した。

治療と言えるほど綺麗な処置では無かったけど、ハンカチを巻いた手を見た■は嬉し

そうだった。

■が笑うと私も笑いたくなくなった。

笑えなかったけど、心では嬉しかった。

今は笑えるのに、どうしてこの時に笑えなかったのか。
逆だったら良かったのに……。

3

■が眼鏡をかけていた。

目が悪くなつたのかと心配すると、そうではないのだと苦笑いを浮かべた。

ただ、曇つて見えるようになってきたためにかけているのだと教えてくれた。

霧がかかったように見えるのだとも。

変な話だと私は思った。

空は晴れているし、空気だつて澄んでいる。

廊下だつて鬱陶しいくらいに白い。

なのに、■は霧で前がよく見えないんだつて、そう言っていた。

だから眼鏡をかけているんだと教えてくれた。

■がかけているシルバークラウドの眼鏡はただの眼鏡にしか見えないのに、霧が晴れる特別製なんだつて。

ちよつと貸してもらつたけど、特に変わったところは無かつた。

伊達だったし、何が特別なのかな。

よくわからないのだと■を見つめると、何が楽しいのかにこと笑っていた。

まあ、でも、私に似合っていると行って褒めたからってなんてことないけど、えへ、ふへへ……んんっ、まあ、眼鏡も偶にはいいと思うよ。

だけど、昔だったから表情も乏しくて本当に可愛くない子供だった気がする。

それでも相手してあげたのは……相手してくれただっけ？

どっちだっけ。

まあ、いいか。

それでも一緒に過ごしていたのは嫌われてなかったから……だったはず。

眼鏡を返した後、静かに私はお菓子箱を取り出した。

中身は母と作った大福だった。

クッキーとかケーキとか、それっぽいのにしようかと思っただけど、母は和菓子が得意だった。

だから大福を作った。

無理して失敗するのも嫌だったし、大福だったら中に包むだけで簡単だと思っただからだ。

中身は苺とか蜜柑、桃、メロン、栗、パイナップル、プリン、バナナと色々だ。

私を作ったのだけを■は食べてくれていた。

そのときは無表情とは裏腹に心が通じ合ってるなどと能天気で都合のいいことを考
えていたけ。

けど、今見たら形が歪んでいて大小様々だ、母と私の大福の違いは一目でわかる。

彼はバナナの大福が好きだった。

ああ、そうだ。

■はプリンとバナナが好きだった。

カップケーキとかクレープとか、作って持つていくと黙々と頬張っていたのが懐かし
い。

美味しいよね、私も好きだもの。

いや、このときの私はそんなに好きじゃなかったかもしれない。

バナナを避けて大福を食べ、お腹いっぱいになって手を止めた私と、嬉しそうに頬張
り続けている■。

いつから好きになったんだっけ……。

そういえば■の髪の毛が長くなってきた。

細いからちよつと女の人にも見えるかもしれない。

切らないのかな……。

長いままだった気がするなあ。

なんで長かったんだっけ……。

— 4

父と母が■の誕生日に耳かけ式のイヤホンをプレゼントしてあげていた。

とても嬉しそうだったが、ちよつと耳が赤くなっていたので恥ずかしかったのかもしれない。

私はフルーツケーキを作った。

バナナを多目にいれたので、全体的に白と黄色が強い配色となったのだけど。

■は静かにずつともぐもぐしていた。

私たち家族が一切れか二切れで満足した後もずつともぐもぐしていた。気に入ってくれたようで安心した。

やっぱり■の髪の毛がとても長いのが気になる。

もう目も隠れてしまいそうだ。

それを指摘すると困ったように■は頬をかいた。

「あれ、もしかしてダサイ？ 泣きぼくろがあると悲しみに涙を流し続けるっていうし、伸ばして隠そうかなって」

そう言うのと、■が右目の眦の下にある泣きぼくろを擦った。

ダサくないけど、髪が長いとちよつと陰気で暗い感じになるのが気になっただけだ。嫌いじゃない。

良いと思うよと告げると、ちよつとだけ笑みを浮かべた。

何時もと違う、透明な笑い方だ。

今にして思えば空虚にも見えた、だけど意味は無いのだろう。

昔の私と今の私は違うのだから。

昔の私と入れ替わりたいたいと思っても、変わることもできない。

せめて声だけでも、そんな祈りも届かない。

いいよね、と同意を求めた父と母も目を細めて寂しそうだった。

なんだか嫌な空気だった。

髪の毛について、話題を振るのは控えるようになったのは、たぶんこの空気のせいだろう。

■の長くなった髪の毛は、右目を隠すほどになった。

光の角度によつて群青色にも見える髪の毛が綺麗だし、とても似合っているけど、なんだか不満だ。

髪に閉ざされた目が、私との壁に思える。

眼鏡もかけているから更に倍だ。

イヤホンをしているときなんて音も閉ざしているから、もう倍率は不明だ。

私が遊びにきてあげたときか、実験のとき以外は、髪の毛、眼鏡、イヤホンで外界をシャットダウン！みたいなの。

そりゃあ、白い部屋にばかりいたら気が滅入るよね。

外に行かないかと誘つても断られた。

「何が起こるかわからないからなるべくここにいるんだ。ハム子ちゃんも危ないから来ないほうがいいんだけど……」

またハム子と呼んだことに、無表情ながらもぶんすかした。

それに、危ないから来ないほうがいいだなんて言い出したのでさらにぶんすかである。

そろそろ私がぶんぶん丸デビュウしてしまっても■はいいのだろうか。

今までで何も起こってないんだから問題ないじゃない。

そもそも外に出たら起こる何かあって何？

何が危ないの？

お父さんとお母さんが遊んでてもいいと言ってるのに、■がそんなじゃダメだもの。

もつと自信を持った方がいいのよと髪の毛を掻き分けて頬をぐにぐにする。

私の癖つ毛と違ってさらさらな髪だ、うらやましい。

頬も無駄にさわり心地がいい。

■はなんだかくすぐったそうに笑った。

それを見て私も嬉しかったけど笑えなかった。

なんで私は私じゃなかったのだろう。

— 6

母が■に、可愛らしくラッピングされた箱を渡していた。

中はチョコの入ったどら焼きだ。

私も隣でチョコバナナ大福とプリン大福を作ったからわかったの。

お母さんのどら焼きは形もきれいに整ってたし、味もすごく美味しかった。

ふわふわの生地で作りの生チョコとあんこをバランスよく包んだどら焼き。

■は笑顔だ。

最近表情が曇っていたから心配だったが一安心だ。

でも、笑顔にしたのがお母さんで不満もあった。

私が先に渡したらそれでも笑顔になったのかな。

なんだか恥ずかしくて、リボンをラッピングした箱は背中に隠したままにしてしまった。

前よりはマシになったとはいえ、綺麗ともいえない大福だし。

その日は渡せなかった。

翌日も、その翌日も。

結局、固くなったそれは自分で食べた。

無表情だし、あんまり感情の起伏もなかったはずだけど、涙だけは流れた。

■が実験のための彼の力で作った特別な髪止めをくれた。

XXIIのような形をした簡素だけど綺麗なシルバーのヘアアクセサリーだ。

実験で作ったというのがよくわからなかったが、凄く嬉しかった。

けど、先月のお返しとしてお母さんにも何かを渡していた。

それを見て、なんだか落ち着かなくなった。

結局私は何も渡していないし。

もやもやとした気持ちを抱えていると、お母さんに連れられて、仕事場の裏にある

キッチンに連れてかれた。

材料はあまりなかったから少ないけど、カップケーキを作った。

用意しておいたバナナも入れたから大丈夫だと思う。

お返しを手に■の元に向かう。

部屋に入ると、■は窓の外を見ていた。

髪の毛に隠されていない左眼が、遠くを見ているような、それでいて何処も、何も捉

えていないようにも見えた。

■はよく窓際に座って外を眺めていることが多くなった。

また離れてしまった気がしてひどく寂しい。

どうしてもそれが嫌で、横から■の視線に割って入った。

眼鏡の奥では驚いたように、薄い青にも見える黒い瞳が見開かれていた。その目がしつかりと私を映していることに、ほっと息を吐いた。

カッブケーキは好評だった。

■は食べるのが好きだ。

仕方ないから私も一生懸命料理を覚えてあげている。

喜ばせてあげるのが友だちだもの。

数が少なかったから半ぶんこにしようというのはわかるけど。

その、スプーンは変えた方が……。

あー。

や、やっぱり変えないほうがいいよね。

洗い物、増えちゃうし！

後ろで笑っているお母さんをなるべく視界に入れないようにした。

■の真似をした、というわけではないけれど、私も髪を伸ばすことにした。

お母さん譲りの癖っ毛だから、綺麗なストレートにはならないけど、髪止めが使いたかった。

それに、■は癖っ毛が好きらしいし、それを纏めた髪型も好きなんだって言ってた。別に関係ないけど、伸ばそうと思った。

そういえばお母さんも癖っ毛を結っていたり、伸ばしたままにしていたり色々だった。

■はお母さんが近くにいると、よく緊張していた。

たぶん、好きなんだろう。

しつくりきた。

ここで■に優しくしてくれる大人はお父さんとお母さんだけだって言ってた。

身近な大人の女性だもの。

惚れてしまうのもしかたないだろう。

私から見ても綺麗で穏やか、自慢のお母さんだ。

誇らしいけど、なんだか変な気持だった。

なんだかちくちくするし、ときどきズクンともなる。

寂しい。

そう寂しいんだ。

ガイノイドが一番近いのかもって■が教えてくれた。
それって身体が機械で出来ている以外、人間と何が違うのかな。

—— 10

■が構ってくれなくなった。

あ、違う。

構ってあげようとしているのに、■■■■の相手ばかりしている。

前はお父さんとお母さんの職場に着いたら、ずっと遊んであげたのに、今は■■■■のめんてなんすとかいうので時間が減った。

なんだかもやもやする。

お母さんの時と同じ気持ちだ。

■■■■は、お母さんのようにお父さんがいない。

■が■■■■の、お母さんにとってのお父さんみたいなことになるかもしれない。

それはだめ。

■は私が相手してあげているんだし、友達だから勝手なことは駄目なんだもの。

私もめんでなんすしてほしいって頼んだら、■はキヨトンとした後に笑っていた。ぶんぶん丸が降臨する予感、なんて思ってたら私は■の膝上に乗せられて、ゆつくりと髪を撫でられた。

折角まとめた癖つ毛がくしゃくしゃになっちゃったけど、久しぶりで気持ち良かったから許してあげた。

その流れのままに■が私の髪止めを外した。

留めておいた髪がふわつと広がったが、■はもふもふして気持ちいいとちよつと楽しそう。

なんか嬉しいけどちよつと違う。

複雑だなあ……。

私の前に■は手を回し、髪止めを布やよくわからないチューブから出てきた液体で丁寧に磨いた。

ポケットから取り出したと言っていたが、いつもいろいろと入れているのだろうか。お蔭でシルバーがピカピカに輝いていた。

その後は櫛で優しく髪を梳いてくれた。

癖が強いのに絡まらずに。

■はちよつと小器用すぎる気がするけど、まあいいかな。

■に髪を触られると気持ちいいし、褒めてあげる。

「わたしの時間なのに■さんを取られました。公子さんは駄々っ子であります。駄々っ子、我が儘、なるほどなー」

めんでなんすを終えて放置された■■■■が私を見ながら何か言っていた。知らないフリをする。

見ても代わってあげないから。

よくわからないことを言う■■■■なんて絶対にぼんこつだよ。

無表情ながらも不機嫌な私に、■が笑った。

だって怒り方も笑い方もわからないからしかたないじゃない。

それを察したのか、■が私の口の端を、人差し指で優しく押し上げた。

「笑うのはこんな感じだよ」と同じように笑いながら。

いや、■のほうが自然とずっと綺麗だ。

一緒にいたくなるような穏やかな笑顔……。

—— 1 1

実験が長引いて、帰るのが遅くなると言われて待っていた。

■だけでもいいけど、■■■■も一人だと寂しいだろうから一緒にいてあげた。夜は好きじゃない。

みんな寝てしまふ、一人になってしまふから。

それに、■はこの白い部屋に一人で寂しいだろうし。

■■■■もいるときといないときがある。

私が■■■■ならずつといてあげるのに、やっぱり■■■■よりも私の方が■にしてあげられることが多いよ。

ふふん、と視線を向けると■■■■は良くわからなそうに首を傾げていた。

人間っぽいのに人間じゃない。

銃だつて撃てるし、力も凄く強くて車だつて持ち上げられるかもつて言つてた。

■■■■つてちよつと不思議だよね。

■を見してみる。

ポーつと月を眺めている。

何が楽しいのだろう。

いや、楽しくなくてもそうしているんだ。

■は植物になりたいって言つてた。

何も考えず、何も感じずに済むからつて。

「■■■■、おかしい。霧が濃すぎる。外に出るからカバーを頼む」

■の言葉に「了解であります」と即答した■■■■が後ろに着いて来た。慎重に扉を開け、何度も警戒しながら廊下に出る。

何も変わらない何時もの廊下。

少し静かすぎる気がした。

いつもと同じだった、■に驚かせないでよと告げようと見上げる。

■の顔色がひどく悪い。

汗もかいている。

体調が悪いのだろうか、だったら尚更静かに寝ていないと……。

「まずい……。シャドウを管理している区画の方が霧で真っ白だ……」

■が呟いた後、とてもうるさい警報音が鳴るとともに赤いランプで廊下が真っ赤になった。

遠くでばたばたで慌てる足音が聞こえる。

何かが起こっている。

よくわからないけど、大きな事故とかだろうか。

お父さんとお母さんは大丈夫かって心配して、■の白い服にしがみついていると、

私の名前を呼ぶ声に振り向く。

お父さんとお母さんが、肩で息をして汗を流しながら来てくれた。

良かった。

とても良かった。

■と一緒に逃げるべきだったのに、私は馬鹿で、私と私は代わらない、代われない。

時間は戻らないんだもの。

くしてあげるだなんてませたこと言って、ほんとは全部してもらってたくせに。

貰ってばかりだ。

何も返していない。

何もかもが、■からの貰い物だ。

必死に走って駐車場に辿り着いた。

「なんとか処理してきます」って■はお父さんとお母さんに伝えて離れようとした。

一緒に逃げようって言ったけど、曖昧に笑うだけだった。

「みんなにはお世話になったから……」って眩きを残して、掴んでいた手を優しく解かれた。

指が折れようとも掴んでおくべきだったのに、私は私だったから。

必死じゃなかった、必死になれなかった。

■は一度だけ私たちに手を振って走り去った。

車走り出した。

逃げるように、いつもよりずっと速く。

何から逃げるというのだろうか。

■はお世話になったからと言っていた。

大人には研究以外であまり接することはないんだと寂しそうだった。

あそこで■が一緒にいたのはお父さんお母さん、■■■■、それに私だ。

■■■■はお世話しているようだった。

なら、たぶんきつと私たち家族だけだ。

じゃあ、■が逃げないのは私たちの……私のせい？

私たちのせいなのに、逃げている。

■から、■■■■から、大切な友達から私は逃げていた。

なんで、どうして。

私が愚かだから、逃げている。

何も知らず、逃げている。
知ろうともしないで、逃げている。
目を背けて、逃げています。
ずっとずっと、逃げています。

—— 1 2

横倒しになった車が燃えている。

お父さんは、お母さんはどうなったの。

身体が痛い。

すごく熱い。

這いずるように、光が見える外に出る。

外も燃えていた。

揺らめくように、炎が広がっている。

炎による熱のせい、傷のせい、視界がぼやけている。

なんとか必死に立って捉えることができたのは、頭や腕から血を流している ■ と至る

ところが罅割れた ■ ■ ■ だった。

周りには■■■■に似たモノたちが転がっていた。
ばらばらになって、ガラクタのように。

それを成した何かがいる。

嫌だ。

何かが■■と■■■■を襲っている。

黒くて、怖い、影のような何か。

嫌だ。

凄く嫌だ。

覚えている。

忘れてるけど、私は覚えている。

凄く嫌な思い出だ。

■の胸元辺りで、白く輝くカードのようなモノが浮かんでいた。

綺麗な純白だ。

だけど、それがよくない気がする。

それを使うから■は……。

■がカードを握りつぶした。

飛び散った破片が、煌めいている。

黒い影は強かった。

二人が協力してなお手に余るほどに。

それでも決着は付いた、息のあつた■と■のコンビネーションが終に勝利を収めた。

……かのように見えた。

弱つたように見せかけていた黒い影が、急に機敏に動き出してイザナギの腕を刎ねた。

■がうめき声を挙げていた。

そちらに視線を向けると、中から爆発したかのように、■の腕がひどい傷を負っていた。

■■が駆け寄ろうとするが、■が怒声で留めた。

隻腕となったイザナギが黒い影を抑えつけている。

イザナギが抵抗で傷つく度に、■から血が噴き出る。

嫌だ。

■が傷ついているのが嫌だ。

■■■■を忘れるのが嫌だ。
友達がいなくなるのが嫌だ。
でも止まらない。

過去は変わらない。

「■■■■、捕食する。けど、俺だとかいつの七割程度しか取り込めないんだ」
「では、わたしにも」

「■■■■は機械だから無理……。いや、パピヨンハートに封印させればもしかして
……。■■■■、すまないが……」

二人が話し合っている。

黒い影が薄れていく。

炎に照らされた■■と■■■■はひどい姿だ。

■■の血が道路を赤黒く染め、■■■■の部品がそこら中に散らばっている。

「あと一割……」

■■が悲しそうな顔で私を見た。

その顔に見覚えがあった。

研究の話聞いた時も同じような顔をしていた。

最初はわからなかったけど、わかるようになった。だつて友達だもの。

■が悲しむのはいつだつて私のせい。

友達なのに、悲しませてばかり。

今だつて握りしめた手から血が滴っていた。

「ごめんね、公子ちゃん。先生にもお世話になったのに、友だちなのに、こんなことに……」

■が泣きそうだった。

折角ちゃんと名前を呼んでくれたのに、それじゃ台無し。

男の子なのに、■は泣き虫だからしたかないね。

いつだつて心配になる。

でも、それもしょうがない。

彼が、■が泣きそうになる原因の多くが私だったから。

——ごめんね、髪で隠したのに泣かせちゃったね

そう告げると、彼の涙が零れ落ちた。

覚えているのはここまでだ。

ここまで忘れている。

忘れたくないのに、忘れてしまう。

なんで私は忘れてしまうのか。

逃げたから。

逃げているから

だから大切な物を失った。

すべてを忘れた。

逃げ続けているから。

きつとそうだ……。

夢を見ていた気がする。

思い出せなくてもややもやするけど、凄く大切な何かを。

……。

……思い出せないのならどうでもいい夢だったのだろう、そう無理やり自分を納得させる。

よくあることだ。

腑に落ちないけど。

もしかしたら病気なのかもしれないが、病院に行く気には全くなかった。

病気だと少しですら認めたくない、そんな気持ちになぜか強かった。

首を回し、凝った筋肉をほぐす。

耳元で嫌な音が聞こえるので、もう少しゆっくりとした早さに調整した。

アナウンスが聞こえてきた。

巖戸台駅までもう少し。

遅延のせいで、0時近くになってしまった。

人の疎らな車内を見回す。

誰も私に注目していないことを確認し、窓に顔を向ける。

そして指で頬を上げて笑顔を作る。

手を放してもう一度。

昔、誰かが教えてくれた。

誰だったか思い出せないけど、私は笑顔を作ることができる。

そう、“作る”ことができる。

元気な雰囲気への準備は完璧、必要とあれば演じられる。

——こんな雰囲気が好きだって、誰かが言ってた。

笑顔は作った。

——教えて貰ったから、誰かに。

長い癖つ毛を纏めた髪型は今日も完璧だ。

——見てももらいたくて、誰かに。

昔は輝くようなシルバーだった髪止めが、今はくすんだ鈍色をしている。

——誰かに磨いて欲しくて。

なぜか欲しくなった古い型の耳かけ式のイヤホンを首から下げている。

——真似をしたかった、誰かの。

どうしても、忘れなくなかった。

——誰かを。

誰かって、誰なのだろうか。

——2

0時を過ぎた。

駅の改札口を出れば、いつもの光景が広がっていた。

輝く月に照らされ、見渡す限りが不気味な青緑色となっていた。

さきほどまでは人であった棺桶。

電気は止まり、音もなく、風もない。

いつも通りの奇妙な世界。

そんな世界で、動くモノがあつた。

全てが静止するこの時間に動いているモノを私は初めて見た。

緊張で、心臓が高まる。

だが、何か期待しているような気持ちもあつた。

なんだろうか。

わからない。

混ざった感情が私を堪らない気持ちにさせる。

徐々に近づいてくる。

車椅子に座つた青年、それを押す少女。

どうやら人間らしい。

ほっと息を吐く。

車椅子を押していた少女が口を開いた。

凄まじいほどに整つた顔立ちだつた。

「はじめまして、であります」

ずきりと頭の奥が痛んだ。

はじめまして……。

なんだか嫌な気分だつた。

「対シヤドウ特別制圧兵装ラストナンバー、七式アイギスであります」

ななしき、あいぎす。

彼女の名前だろうか。

前半部分がよくわからなかったが、どうやら言葉が通じるらしい。

外国人の少女だろうか、青緑の世界なのに、金色の鮮やかな頭髮が輝いている。

耳元は赤いヘッドフォンがあり、彼女の趣味なのかもしれない。

纏っている丈の長いワンピースはとても彼女に似合っていた。

ただ、なんだか彼女を見ているともやもやする。

何かが取られたようで、気分が悪い。

「こちらは奏さん、有里 奏さんであります。私と彼が貴女を寮まで案内いたします」
アイギスが名前を告げても青年は何も言わなかった。

その濁った瞳にも、何も映っていないかった。

変わらない表情は能面のようだ。

「歓迎する、奏さんはそう言っています。良かったでありますね」
ずきりと再び痛みが奔った。

今度はさつきよりもずっと痛い。

頭も痛かったが、それよりも胸が痛かった。

そして何かを無くしたように寂しかった。

——予告

無数の腕の複合体のようなシャドウ。

中心の腕には青い仮面が握られており、額には1の数字が識別できた。

仮面を持つ手以外には鋭利な刃物が握られていた。

不気味な音を鳴らしながら近づくとそれが、車椅子へと近づいていった。

身を挺してなんとかしようとして、奏という青年の胸元で輝くカードが見えた。

どこか懐かしいそれは、弱い輝きを放つどす黒く濁った歪なカード。

違う。

何が違うのかわからないが、違うことだけはわかった。

そんなカードじゃない。

ほんとはもつときれいで……。

気だるげに青年がカードを握りつぶした。

車椅子の陰から、コールドタールのように真っ黒な影が現れた。

それは人型を成したが、人間に近いのは形だけだった。

泥とヘッド口の継ぎ接ぎ人形、そんな姿だ。

醜くて、汚らしい。

誰もが目を背けたくなるような、壊れた人形だった。

「マガツイザナギ」

少年、奏さんが呟いた。

醜い泥人形の名前だろうか。

ぐちゃり、と擬音を鳴らしながら、人間でいう頭部の位置に穴が開いた。

マガツイザナギと呼ばれたその穴から響き渡る、不協和音。

ひどく不安を煽る。

気持ちが悪い。

いや、あれだけのせいではない。

なにかもつと、何かが違う。

致命的に違うんだ。

何かに縋るように、奏さんを見る。

無表情だ。

だけど、血の涙を流していた。

泣かないようにするために髪を……。

思い出せない何かが私の奥で痛みを発する。

だけど、何もわからない。

だから意味が無い物だと思いつむ。

だってしようがないじゃない。

何時もなんだから。

いつも、いつも、わからないんだ。

原作：ワンピース わんぴーす1

物心つく前から施設で訓練の毎日だった。

夏は焼けるように暑く冬は凍るように冷たい独房のような空間で寝起きし、効率だけを追求したヘドロのような食事を流し込み、灰色の壁で塞がれた広い部屋で修練に費やす。

それがすべてだったから疑問を抱かずにただひたすらに課された厳しい訓練を繰り返した。

他人といえど自分たちを機械か何かのようにひたすら厳しく扱う教官と時間とともに減っていく幾人かの仲間、それだけだった。

狭い世界だった。

鉄格子から覗くことのできる未知の世界に少しだけ心揺さぶれたこともあった。

仲間の一人が外へと出ていく姿を見たこともあった。

その時は言い様のない気持ちで燻り、鉄格子の前から離れることができなくなった。

そして、教官に見つかり腫れ上がる部分がないという程に殴られた。

それ以来、近寄ることもなくなった。

そういった生活を繰り返したある日、外に出ることを許された。

白くもたついたような雪の降る極寒の中、初めて世界が広がったような気がした。

振り向けば、昔の俺と同じように独房の中から鉄格子を通して外を覗き見ている仲間
の姿。

そこで俺は世界が広がったのではなく、世界は繋がっていることに気付いた。

繋がっていてこんなにも世界は広いのに、そこに押し込められているだけだったの
だ。

望んでいないのに、俺の世界は閉じていた。

この世界には圧迫するような壁はなく、空は鈍色だろうと何処までも高く、地面は凍
えるように冷えていようとも柔らかさを持っていた。

世界は広く、俺を受け入れて余りあるほどだった。

俺の世界は切り取られていた。

俺の世界は狭かった。

俺には誰も教えてくれなかった。

……。

俺は帆に大きくMを象ったカモメマークとMARINEの文字が描かれている軍艦に揺られていた。

この船は海軍という組織のものらしく、施設（独房）を出た俺自身も海兵として戦うように義務付けられた。

やっっていることは施設にいた頃と少しだけ変化したが、ほとんど同じようなものだった。

上官の下で訓練するか、一般知識や教養を学ぶだけ。

もしくは実践経験を積むために海賊を発見すれば前線に放り出され、新しい傷が古傷を隠す。

陸か海か、天井は低く壁が近い。

何処までも続く空などは存在せず、硝煙で空気が澱んで鈍色に染まるばかりだった。

結局、俺の世界は切り取られたままだった。

「天上金」と呼ばれる財貨の輸送任務に携わることになった。

輸送船を護衛する仕事で、ほかの海兵は楽な仕事だから気負う必要はないと笑っていた。

「天上金」は天竜人という偉人に送られる価値のあるさまざまな物品で、いろいろな国

から送られているらしい。

俺には難しいことはわからないが、これに手を付けると大将という上官よりもっと怖くて強い人物が殺しに来るといふ話だ。

昼食を食べていてもそんな話がちらほら耳に舞い込んできた。

どうやら実践訓練は無さそうだ。

この航海が終われば次はCPとやらで世話になるらしい。

上官に終わりはあるのかと問うた。

いつか自由に暮らす日は来るのかと。

肯定は無かった。

誰かのために力を行使するのが俺の義務なのだと、まだ見ぬ戦火を防ぐことが俺の使命なのだと、訥々と語られた。

俺には何もないのですかと呟く。

上官は首を横に振っていた。

正義を守ることが、無垢な人々を救うことが至上だと呟いた。

何も知らないのに、守ることも救うことも出来ないじゃないかと涙を流した。

返事は無かった。

上官の悲痛な顔を見たのは最初で最後だった。

訓練は初めて休みになった。

その夜、上官が死んだ。

喧嘩から海賊に襲われたのだとわかった。

よく話した海兵も、まったく話したことのない海兵も、みんな死んでいた。

死ぬのだろうか、ぬるかった上官の血が冷えていく。

俺を隠すように上官にかけられた正義と書かれていたコートは血のせいでどす黒く、影響のない袖や裾が風ではためていた。

燃え盛る船は幾度も見たことがあったし、そういつた甲板で戦闘を繰り広げたこともあったが、自らが乗る軍艦が焼け落ちる姿は初めて見た。

一人の男が起こしたその現象はとても奇妙な光景を生み出していた。

男が手を振ると鋭利な刃物のようなもので切り裂かれたかのように、船の至る所に切り傷が奔った。

舵を取る者がいなかったのか、追従していた他の軍艦と激突した。

船が傾いていく。

小さく甲板が揺れているのを、沈んでいく様を感じ取った。

海水が流れ込んでいるのか響くような低い音がする。

船を襲った海賊の男が空を飛んで何処かへ向かった。

俺はどうする。

どうしたらいい。

誰も教えてくれない。

誰もしゃべられない。

上官の今際の言葉を思い出した。

「これから少しだけ自由になれるだろう、誰にも邪魔されない。選ぶんだ。血に沈む仲間を見て、お前がどう思うのか。」

血を流した者や傷に喘ぐ者、火を必死で消そうとする者、脱出を試みる者が視界に写る。

よく話した海兵たちは死んだ、一番近い上官は死んだ。

誰も上官の死など、仲間の死など、俺のことなど、目に入っていないかった。

「助けたいなら海兵を、それ以外なら外へ行くがいい」
躊躇いは無かった。

背に穴が開き、正義の消えた血染めのコートを羽織って海へと飛び出した。

誰も俺に関心が無かった。

ここは俺の世界を狭めるだけだ、そう理解した。

着水する前に宙を蹴る。

白い体毛の生えた四肢で空を走る。

疎ましく思っていた悪魔を宿したこの肉体が今だけは心強く、頼もしい。

体力が尽きる、天候が変わる、海王類に襲われる、ほかにも色々あるが失敗すれば死ぬ。

だが、走り切れば生きられる。

真つ黒の海に映る自らの背に宿る陽炎が小さな燈火のようだった。

世界が本当に広いことを知った。

背負う炎の、個人の光の矮小なことを知った。

光のない空も闇の広がる地平線も暗い海も、限りないほどに近く、そして深かった。

金色の光に照らされ始めたとき、世界はどこまでも拡がっていき、雄大だった。

今なら眼下に或るこの美しい水面に揺られながら死んでも良いとすら思えた。

疲労の末にたどり着いた島の波打ち際に倒れるように身を丸めた。

整備された港も見える、村か町があつて住人がいるのだろう。

今の姿は白い狼、しかも体長は成人男性ほどはある。人が集まってくる可能性を考慮して姿を人型に……。

少女と目が合ってしまった。

叫ばれたら逃げ出そうかと四肢に力を入れたが静かなままだった。

穏やかな波の音が聞こえた。

少女に目を向ける。

肌は陶器のように白く、黄色に近い鮮やかな金色の髪の毛は肩を超えるくらいに長く、青いリボンスカーフを巻いた緑色のワンピースを着ていた。

見たところ、10歳前後だろうか。

アウイナイトを思わせる繊細な青く大きな瞳が、俺を捉えていた。

間近で見つめられたら瞳に映った自分を確認できるのではないだろうか、それくらいに綺麗な瞳だ。

そんなことを考えていると少女がゆっくりとこちらに近寄ってきた。

少女の形の良い唇が、俺が海軍かどうかを尋ねた。

かなり驚いたが、思い返してみるとかなり海軍的な恰好をしている。

制服と制帽を着ていて、穴が開いているが正義のコートを羽織っている。

立場的にちぐはぐではあるが、知っている人からすれば海軍に見えるかもしれない。

……飼われている大型犬と勘違いされている可能性もあるが。

違うと答える。

少女には驚かれなかった。

ゾオン系の能力者を見たことがあるのだろうか、それとも海軍の動物は喋ると思っ
ているのか。

すぐに海賊かと聞かれたが、それも違う。

海軍は辞めたのだと告げた。

何をしたらいいかもわからないとも。

ふうん、と頷きながら近寄ってきた少女は興味深げに俺の背に手を近づけた。

篝火の様な炎が揺らめいていた。

熱くないことに、その大きな青い瞳を丸くしていた。

火力は俺が調整できる事実を教えた。

少女は火が好きじゃないが、これは悪くないと小さく笑い、俺の背をもふもふした。

どうやらメアリーという名の少女らしい。

俺は名乗ったがアマ公というあだ名を付けられてしまった。

呆けたまま海を眺めるだけで一日を終え、いつの間にか寝て、日が昇ったらそのうち起きる。

そんな日々を繰り返していたら様子見に現れたメアリーに叱られてしまった。

耳をぱたりと閉じて聞こえないフリをしたら笑顔のまま青筋を浮かべたメアリーが手をかざしてきた。

すると、俺の体がふわりと浮いた。

能力者かと驚いていると徐々に海へと近づいていく。

やめてくれメアリー、海は俺に効くと謝ると溜息をついて下された。

「にーとはどの世界でも許されないのよ」とよくわからない説教を受けたが、こじらせると面倒に繋がりそうなので殊勝な態度でやり過ごした。

寝てるだけじゃなくてやることないのかと問われ、パンとシチューを渡された。

少し冷えたそれらを食べながら何をしたらいいのかわからないと返答、メアリーが形のいい唇を三日月状に変化させた。

「じゃあ、海賊しかないね！」

え？

メアリーはほしいものがあつてそれは海賊になる必要があるのだと、青い瞳を輝かせながら訴えてきた。

確かにそういった手段に手を染める者も少なくないと聞いた。

が、メアリーはどう見ても10歳前後である。

人生を決めるのは早過ぎるというのが俺の考えだ。

メアリーとしては俺が仲間になるから幸先いい、という感じだ。

10歳の少女を連れ回す海賊とか最低の下種じゃないか……。

そういつたことは15歳を超えてからにしなさいと伝えると、驚いたことにメアリーが18歳だという事実が発覚した。

疑った俺に、弟分だというエースが現れ、いい感じに挨拶した。

どうやらメアリーは本当に18歳のようだ。

悪魔の実が関係しているのだろうかと聞くと、半々くらいだと曖昧に答えられた。

半々とはいいたい……。

俺らの様子を見守っていたエースは姉をよろしくと言って海へと旅立つていった。

よろしくされてしまった……。

メアリーは話は決まったと俺の背に跨った。

俺は行くとは言っていないと言葉を濁すと、シチューが入っていた器を指差して「一

宿一飯の恩義くらい返すものよ」と笑っていた。

一宿は恩を受けてないんだが……。

どうせここにいても何もしないのだ。

隣の島でどうするか考えることにしよう。

ふわりと宙をかける。

能力者2人が海を走って渡るとか、自殺行為な気がしなくてもない。

「やるじゃないアマ公。期待通りね」と気分よく笑っているメアリーはどうせ何も考えていないのだろう。

— tips

オリ主

サイファアールポールの補充メンバーとして育成されたが脱走した。

イヌイヌの実 モデル「シラヌイ」の能力者で犬になって走り回ることができるぞ！

メアリー

芸術家ワイズ・ゲルテナによって描かれた少女の絵がヒトヒトの実 モデル「ポル

ターガイスト」によって世に生を受けた。

ゲルテナ作品を回収することが目的である。

中身は現実から絵へと憑依し、ワンピースの世界で海賊をやるというワイルドな女性。

1

その少女はその小さな体に世界そのものを宿しているような少女だ。太陽のように鮮やかに輝く金色の髪、青い空のような大きな目に宿る夜の深い海を思わせる暗い瞳、不気味なほどに形よく整っている顔、月のように静かに照らすように白い肌、十歳前後の幼い体軀は雄大な自然を凝縮した野を表すような緑色のワンピースに隠されている。首元に巻かれた青いリボンスカーフが持つ柔らかな雰囲気、少女が持つ精巧な人形が醸し出す人工的な違和感を和らげていた。目利きの効く者、敏感な者でもすぐには違和感を抱かないほどに。

少女は絵としてこの世界に生まれた。悪魔の実である『ヒトヒトの実 モデル「ポル

ターガイスト』を磨り潰し、絵具として描かれたワイズ・ゲルテナの最期の作品だ。そして、彼女はゲルテナによって生み出された作品たちすべての妹でもある。彼女が絵として生を得た際、この世界についてほんの少しだけ詳しい別世界の女性の魂を元型としていた。知っていたら少しだけ有利になる”かもしれない”程度の知識を有したまま。

メアリーはワイズ・ゲルテナを父として認識している。ワイズ・ゲルテナは残り僅かな命の末期の作品としてメアリーを生み出し、その執念と愛情で描き切った。その姿は、殉教者が死するまで信ずる神に信仰を奉げるように献身的ですらあった。ゲルテナの死後、全ての遺産は強欲に晒され、世界中に散らばった。身体を得たメアリーを除いた全てが。父の遺体を『額縁』に納めることで、初めて『外』に出たメアリーを襲ったのは深い悲しみだった。一つの場所に在るべきだと望まれた兄や姉である作品たちが引き離されているのだ。作品たちと繋がりを感ずるメアリーが、可能な限り作品を探そうと心に決めるのは当然のことだった。

メアリー・ゲルテナは生まれたばかりのままでは作品たちを取り返せないことを知っていた。元型となった魂や『外』を歩いて海軍に保護されて得た知識から雌伏の時であると理解した。身を裂くような悲しみが燈した黒い炎が燦るのを感じながら、ただひたすらに自身に生を与えた悪魔を育て続けた。

「だからね、アマ公。私はゲルテナ作品を集めるの。そのためなら海賊にだってなつてみせる」

メアリーは自らがアマテラスと名付けた海を駆ける白い狼の背に乗りながら、自身の上や目的を伝え終えた。アマテラスの首周りのもふもふとした毛を手で遊ぶ。話は聞いていたのだろう、耳が少しばかり後ろに向いていた。返事は無かった。

アマテラスは喋るのが苦手だ。獣が無理やり人間の言葉を話そうとしたような、奇怪な声になってしまふからだ。声帯だけが常に獣のままだ。悪魔の実が『覚醒』した後遺症ではないかとメアリーは考えている。

「別に全部手伝えというわけじゃないわ。ただ、ほんの少しでもいいから力を貸して欲しい」

海賊を目指すと言ったのは本心だった。ただ、海賊に拘っているわけではない。この世界で一番幅を利かせている盗人が海賊なだけだ。ゲルテナ作品を取り返せるのならば盗賊でもいい、山賊でもいい。下劣な人攫いにだってなる。他人が持ち去った作品た

ちを奪つてもいいのならば海軍にだって身を置く。矜持など必要ない。だが、力は欲しかった。奪い取るための強大な力が。

船が沈んだ際に海軍から逃亡してきたとだけ聞いたが、それでもアマテラスは魅力的だった。自然種よりも貴重な幻想種有能力、修練を積んだ研ぎ澄まされた肉体、何処にも困われていない強い戦力。後ろ暗い背景でもあるのかと新聞を調べてもみたが、何も見つからなかった。浮いたままの戦力をどうしても得たかった。

「……貴方が海軍としての誇りを持っていたとしても」

海軍という言葉に耳がびくりと震えたように見えた。彼には何かがあった。何かがあつて此処に居る。見えない物に縛られている。メアリーが海軍に保護されたときに引き合わされた弟分のように、心の底に澱みを持っている。

落ち着かせるように優しく撫でる。ほんのりと温かく柔らかかった。

「私のやることは見逃してね。でも、せめて5年間分のご飯への恩返しはしてくれてもいいと思わない？」

茶化すように笑いかける。聞こえないとでも言いたいのか、ぱたりと耳を閉じている。覚醒したことで五感が強化されているアマテラスが、そんなことをしても聞こえない

いわげがない。そもそも聞こえないフリをするには遅すぎる。

「働かないで食べるご飯は美味しかった？ 少女にたかるヒモニートになっては駄目よ」

「……一宿一飯の恩を返ズダゲデいいッデめありー言ッダ」

鈍く罅割れた声だった。音を歪めて声という枠に無理やり納めたような低い獣のうなり声だった。その声がメアリーは嫌いじゃなかった。最初は肯定しか示さなかった。それが今では消極的ではあるが自分の意見を言うようにまでなつた。人に懐かない猛獣を必死になつて懐かせたような達成感だ。誰にも聞かせることのない声だ。メアリーのためだけに発する声。

「言つてないわ、『恩を返すものよ』って一般論を言っただけ」

メアリーが笑みを浮かべながら返す。駄々を捏ねる子供の様に、アマテラスはぱたりと耳を閉じた。今度は先ほどよりも力強い。

海軍についての言葉は気にならなくなつただろうか。メアリーが島を出ると決意し、アマテラスを連れ出すまでの五年もの間でも変わらず白く綺麗な毛だ。体表を燃やすだけで汚れを払うことができるというのだから便利な身体だ。とは言えメアリーもその点は変わらない。彼女の本質は絵だ。変わらずそう在り続ける。飲食もただの嗜好だ。ポーズでしかない。食べることや飲むことといった無駄が好きで、魂の元型となつ

た女性が生きていた時の残骸が求めているから、そうしているだけに過ぎない。

「ぢよつド考える」

「そう。いい子ね、アマテラス。まあ、私が誘っていることは悪いことなんだけど」

メアリーが喉を鳴らすように小さく笑う。大きな瞳を細めて、猫のように。アマテラスとは正反対の、美しい声を挙げながら、目的地の島を眼下に修めて。

— 3

ファストオヴオール村は世間的な悪にも寛容だ。悪を取り締まる機関が村の中心の一つある駐在所がある程度も理由の一つだが、海賊の縄張りとなっていて、大ききい。少し離れた島に海軍支部があるため、何か起きれば助けをすぐに求められるのも寛容さに繋がっているのかもしれない。特別な売りの無い村に金銭を落してくれるのならば多少の悪事には目を瞑る傾向にあった。

『東の海（イーストブルー）』にはこういった村は少なくない。時々何処かで縄張り争いの小競り合いが起きる程度だ。海賊や山賊の質が最も低い最弱の海とも呼ばれてい

る。つまるところ一般大衆にとって世界で一番平和な海なのだ。特産を持たない島が外貨を得ようとすれば自ずと海賊を商売相手に選ぶようになる。海賊は補給と慰安を兼ねた休憩を取れる安全な縄張りとすることができ、代わりに有事の際に侵略者から村を守ることが求められるが、海賊は戦いが本職だ。相手の船から奪える金品も鑑みれば、守る意味も出てくると言う物で。さらにその結果、村に恩を売って安定的な供給を得ることができるようになるのだから、利益の面からも見ても重要な拠点であるのは間違いない。

「で、カモシカの旦那は『偉大なる航路（グランドライン）』への準備はできたのかい？」

村外れに建つ年季の入った酒場の店主が、店同様に年季ある低い声を唸らせながら、カウンターに座る男に声をかけた。話しかけられた男はカモシカ海賊団の船長であるカモシカだった。カモシカは十にもならない年のころから下っ端として船で働き始め、船を率いるまでに二十年余りの月日を海賊として生きてきた。荒くれ者どもに揉まれる日々で培った力は、カモシカの如くしなやかな筋肉から繰り出される蹴りに凝縮されているようだった。岩を容易く砕くほどの豪脚が畏れられ、平均賞金額三百万ベリーの『東の海（イーストブルー）』では破格の八百万ベリーの値がその首に懸けられている。数十隻の船と数千人の船員から構成される海賊艦隊を率いる首領・クリークと一戦をし

て、逃げ延びた経験すらあった。カモシカにとつても、船員たちにとつても今が海賊として力がある絶頂の時期だった。

絶頂期であるカモシカは、その調子とは打って変わって海図を指先で弄びながらため息を吐いた。古い海図だ。古すぎると言つても過言ではないほどに。

「いや、まだまだだな。情報が足りやしない」

海風に晒され、保存すらも儘ならない状態で管理された海図は全体的に黄ばみ、端は擦り切れていた。穴は開いていないが、所々に掠れている部分も見て取れた。

こんな海図を当てにして船旅をしようなど、自殺行為でしかない。だからこそそのため息だ。

「旦那。なんならずつと留まつていてくれていいんだぜ。アンタなら村の連中も歓迎してるからな」

曇った硝子を布で磨きながら店主が告げる。カモシカが率いている仲間たちによる喧騒が店内を賑わせているが、カウンター付近は関係ないとばかりに陰鬱だ。

「(カモシカ)は縄張りとしてなかなかよかつた。だが、駄目だ。俺たちはグランドラインに行つて本物の海賊になるんだ」

そう言いながらカモシカはグラスの酒を飲み干した。少しだけ辛い酒だ。残念そうに「そうかい」とだけ店主が呟くように返し、カモシカのグラスに酒を注ぎ足した。

カモシカ海賊団の前身は、『東の海（イーストブルー）』でも弱い海賊団だった。周りの海賊たちの間を縫うように島を渡り歩き、住人たちを脅かして小金を巻き上げる。せこい商売だ。カモシカはそんな海賊団の姿に劣等感を抱いていた。そんな海賊団にしか入れない己にも。

『偉大なる航路（グランドライン）』に拘るのはカモシカのプライドがそうさせるからだ。いくら懸賞金を上げようにも最弱の海だと侮られ、何時まで経っても海賊になれた気がしない。ゴールドロジャーの死後、潰えると思われた海賊の時代が再燃した。あれこそが海賊だ。幼き日に見た、あそこに集まった猛者どもが海賊なのだ。海賊の樂園と呼ばれる『偉大なる航路（グランドライン）』で戦い抜くことが出来て初めて本物の海賊と胸を張れる、そう考えている。そうしないと己は一步も前に進めない。

『偉大なる航路（グランドライン）』で戦える仲間を集め、戦えない仲間は置いてきた。もう戻れない、先に進むことしか許されない。戻ることになったらどの面を下げて切り捨てた仲間許しを乞うのか。圧迫感にも似た使命感が、カモシカの背を押している。

だが、足りないのだ。『偉大なる航路（グランドライン）』でもやっていける自信がある。あの海賊艦隊に包囲されても生き残った自分たちなら乗り越えていける確信がある。足りないのは情報だった。海図だって偶然に戦闘で手に入った物だ、楽園から言うこの体で逃れた負け犬から奪ったとも言えた。生きる望みを失った幽鬼のような連

中から、戦いで奪い取った物。『偉大なる航路（グランドライン）』の海賊とも戦っている自信が付いたのもその時だし、本物の海賊への憧れが再燃したのもその時だ。仲間たちも息巻いている。

「あの時の連中に聞いておくべきだった……」

劣勢になると命乞いをし始めた海賊たちを思い出す。こいつらが本物だとは思えない、そんな侮蔑にも似た感情を抱いたカモシカは見逃してやっていた。それが今になって後悔に繋がるとは思わなかったのが本音だった。

悔恨を胸に、あの時の戦闘を思い返す。仲間が数人やられたが、それでも逃げ帰った連中に負ける道理は無かった。弱いとすら思ったほどだ。

ただ、相手の傷を思い返すと『偉大なる航路（グランドライン）』から逃げ帰った直後の戦闘だったのかもしれない。『偉大なる航路（グランドライン）』は『風の帯（カームベルト）』に挟まれているという話だ。風もなく、海王類が跋扈する海から逃げ帰った海賊。ともすればそれほど弱くないのか、それとも自分たちがそれでも尚強かったのか。

「アマ公、酒場は初めて？」

鈴の音のような、そんな言葉が似合う少女然とした声音がカモシカの耳に入った。白

い犬を連れて少女が、いつの間にかカモシカの隣に座っていたのだ。少女の問いに答えたのか、白い尾が一度だけ揺れた。

この場に不釣り合いな一人と一匹だった。狼にも似た巨大な白い犬と、未熟ながら美しいと形容できる少女。思考を巡らせていたから気付かなかったのか、酒場の喧噪で扉の開く音に気付かなかったのか。

「食べたり飲んだりできるお店なのよ。もちろんお金が必要だけど」

アマ公と呼ばれた犬は、少女の言葉に興味深そうに聞き入っていた。森に住む獣や海に栄える海獣とは異なる明確な知性が、その黒い瞳から見て取れた。だがすぐにでも犬は飽きたのかすぐに少女の足元で丸くなった。

犬は少女の親が与えた護衛だろう。その立派な毛並みや体軀を自慢のつもりだろうか、治安の悪い酒場に来るなど何を考えているのか。蝶よ花よと育てられた箱入り娘か。確かに体格の良い犬だが、己の蹴りに敵うはずもないとカモシカは考えた。脅かして今後の為にでもしてやろうか、そんな思いも抱いたが、それは本物の海賊がやることではないのだと頭を振って阿呆な考えを追い出した。

「あー、嬢ちゃん。ここは一応酒場だから犬を入れるのは止してくれると嬉しいんだが……」

「大丈夫よ。それにアマテラスは犬じゃないわ」

言外に出ていくように店主が告げる。ここには海賊が屯っている、長居していいことなど無いし、食事なら別の場所で摂るべきだ。老けたことで絶望的に顔が怖くなっている店主も、年端のいかない少女には優しいようだ。それに怯えることも引くことも無く、それどころか少女は上機嫌に「オレンジジュースと何か食べ物を二人分くれると嬉しいわ」と店主に注文した。

店主は言葉を濁してカモシカへと視線を向けた。肯定を問うている。カモシカの返事は無視だった。何が起きても責任は取らないという意味表示。それを見た店主は困った顔をしたが、直に諦めてオレンジジュースを注いで少女の前に出した。

カモシカはどうするべきか考えた。故郷には同じくらいの娘がいる。ここで見逃してもいいが、調子に乗ってこの少女が問題を起こして野垂れ死ぬとなると夢見が悪い。海賊の怖さを見せて、こういった場に来ないようにする。それが本物の海賊を目指し、海賊になった男の出した答えだった。

自慢の脚に力を入れ、ぞつと背筋が凍った。白い犬が少しだけ牙を剥きだし、唸っていた。それだけで死を彷彿した。たったそれだけでさせられた。

過去に演じた死闘を思い出した、よく自分は生きていたと褒めたいくらいだ。前の船長に下剋上を起こし、成功したときは本物への一步を抱いていた。海賊艦隊に囲まれたときも、本隊に狙われなかったために生きていられたがそれが実力だと誇った。今日ま

で海賊として生きてきた、両手では数えきれないほどに死ぬ思いだっしてしてきた。それを何故今になって思い出す。カモシカの頭にはやり残した後悔ばかりが再生されていく。

まるで今日がすべての終わりで、それを認めたくない魂が騒いでいるようじゃないか……。

「アマ公……そう、いい子ね。この人の善意だから気にしなくていいの」

少女の声が合図だったのか、剥いていた牙を仕舞い、興味が失せたとばかりに丸くなった。その様に脚の力が抜けていく。脚だけじゃなく、全身が弛緩したかのように。目の前が白くなり、頭が少しばかりくらくらとしていた。

「店主のおじさん、実はお願いがあつてここに來たのよ」

少女が料理を食べながら、店主と話している。足元で丸くなっている犬も静かに皿に盛られた料理を食べていた。何時の間に料理が出来たのだろうかと意識すれば、まるで今カモシカに全てが追いついたかのように店内の喧噪が聞こえてきた。冷えていた酒は温くなっている。手元の海図はカモシカから滴った汗でふやけていた。

「店に飾つてある絵を譲つてほしいの」

「ああ、あれか……」

少女の言葉に、船員たちが騒いでいる壁際に飾られている絵を思い出す。少女の言葉に店主は無視するようにグラスを磨いている。少女が機嫌を損ねれば白い犬がまた牙を剥くのではないか、そう思い少女の横顔を盗み見る。カモシカは絶句した。店主の態度が気に入らなかつたのか、少女が器物のような生気のない目でグラスを磨く手を見ている。ぎよろりとでも音が付きそうなほどに、気持ちの悪い目だった。作り物のような精巧な目。

足元で丸くなっていた白い犬が観察していたが、カモシカにはそれすらも気にならなかつた。白い犬は生きていて、知性を感じられた。だが、少女はどうだ。生きているようには思えない。知性すらも測れない。作業のように何か、恐ろしいことを仕出かしそうな気持ち悪さが感じられた。

カモシカは心臓の鼓動が速まっていく気持ち悪さを必死に抑えた。壁際、絵の前で騒ぐ船員たちを怒鳴りつけて鎮めたい気分だ。ただ、話をこのままにでもして店主が断りでもしたら取り返しが付かないことになりそうな予感があつた。

「い、いいじゃねえか。あんな絵ぐらい。な、なあ俺からも頼むぜ……？」

カモシカが横から口を出したのは自分の勘を信じてであつた。“あんな絵”と言葉に出した瞬間、少女の無機質な目に晒されたが何とか次の言葉を口にできた。カモシカ

が自らの要望を後押ししていることに気付いたのか、少女の目は普通の物に戻っていた。年端のいかない少女が持つ特有の煌めくような青い目に。それがカモシカには怖かった。

まるで何か別の物が擬態しているようだった。化け物とか悪魔とか、そんなような何かが。とろけるような笑みを浮かべ、白い犬を撫でているが、やはりそこに可愛らしさは感じられない。

「旦那がそう言うなら考えないこともないけどよ……。じゃあ、あれだ」

「近海に出没する海王類、それを捕まえて来てくれたら譲る」と意地の笑みを浮かべた。さらにおまけとばかりに「どうですか旦那」みたいな顔をカモシカに向けてきた。カモシカは顔の血の気が引いていくのを感じた。なんて馬鹿なんだ。鈍いにもほどがある。遊びじゃないんだ。店主への罵詈雑言がカモシカの頭を駆け巡った。

カモシカは今日まで戦いの中で生きてきた。本能とでも言うべき勘に頼ったのも一度や二度ではない。その勘が囁いているのだ、この少女には関わっていけないと。

「そう、それでいいならいいわ。ご馳走様でした」

少女にとって絵が欲しいというのは気まぐれだったのか、あっさりと身を引いたように思えた。カウンターに食事代を置くと、ふわりと浮くように少女が椅子から降りた。それに合わせて白い犬も立ち上がる。

やつと何処かに行つてくれる。カモシカは体の芯から疲れが滲むようだった。

「おじさんは良い人だったからグランドラインに行きたかつたら色々教えてあげるわ。海図だけじゃわからないことを、私が戻ってくるまで此処にいた場合の話だけど」

囁くように少女が呟いた。無機質な目が絵に向いている。絵だけじゃない。絵と“船員”たちに、向けられている。

これは忠告だ。絵を前にして阿呆な真似をしないようにとの、少女からの忠告。今の会話で値打ちものだと思つた馬鹿が盗まないようにと、釘を刺したのだ。もしくは本当に『偉大なる航路（グランドライン）』について教えてくれるのかもしれない。少女が持つている不気味さ、白い犬の持つている力、その諸々を伴つて。本物を魅せつけてくれるのかもしれない。

「店主のおじさん、約束やぶつたら酷いんだからね」

上品な笑みを浮かべ、ふわりと少女が浮き上がった。宙に浮く。化け物の所業を平然と見せつけた。

音も無く、ゆつくりと少女が出口の扉へと飛んで行く。宙を滑つて移動していた。その後ろを音もなく白い犬が付いていく。奇妙な光景に、いつの間にか酒場の喧噪は静まっていた。

木の扉に一切触れることなく、一人と一匹がすり抜けていった。当然の如く古びた蝶

番の軋む音は鳴らなかつた。まるで白昼夢のようだった。夢であればどれだけ幸せだったか。夢であつたのならカモシカという海賊は今も本物の海賊を夢見て、楽園である『偉大なる航路（グランドライン）』にため息をつきつつも幸せに思いを馳せていられたのだから。

「あれは、能力者か……」

絞り出すように、掠れた声が漏れ出た。悪魔を身に宿した、常軌を逸する能力を得た人間だ。『偉大なる航路（グランドライン）』にも多くの能力者がいるという。カモシカは己に問いかけた。あんな異常者を相手取って生きていけるのか、本物の海賊になれるのか。『偉大なる航路（グランドライン）』の海図を持つていた海賊を思い出した。檻樓切れのように草臥れて、塵のように光のない瞳で生きて、幽鬼のように歩く連中を。怪我を負つて弱つていたとはいえ、かなり強かつた。そんな連中を塵芥のように変える海に行つて、本物の海賊になれるほどの力があるのか。

「だ、旦那！ お、俺はどうしたらいいんだ？」

悪魔の力を持つている、辺鄙な村の連中だつて知つている事実だ。少女が持つている不気味さが悪魔の力だとわかつて納得できた。納得できて、そして理解できるのだ。年

端もいかない少女にすら敵わない己が『偉大なる航路（グランドライン）』を渡るほどの力が無いことに。カモシカが、海賊としての限界を理解させられたのだ。

『東の海（イーストブルー）』でも凶悪な海賊として名を馳せる道化のバギーも悪魔の力を持つており、村を一つ簡単に滅ぼせるという。だとするならば、誰にもどうすることも出来ないだろう。ただ、あの悪魔が気まぐれを起こし、本当に絵だけで満足してくれと祈ることしかできなかった。

「つ、次に悪魔が来たら絵を渡すしかないだろ……」

「なんでこんなことになっちまったんだ……。こんな二束三文の絵に、くそおー！」

店主が嗚咽を抑えながら涙を流していた。文句を言いたいのはカモシカも同じだった。縄張りにしていた村に、悪魔が現れるなど予想できるはずもない。予想できていたならば、すぐにでもこんな村は放棄するほどだ。

ここにいたら殺されるかもしれない、恐怖がカモシカを動かした。縋るような店主の視線など無視して船員に指示を出そうとして、気付いた。絵の前で酒を呑んでいた船員十五人が倒れたまま動かないことに。

ひり付くような見えない圧力に耐え、倒れている船員を起こす。潰れた柘榴がそこにあった。悲鳴を挙げそうになるが、海賊団の船長として矜持で抑える。見渡せば倒れている全員の頭部が無くなっていて、床を朱く染め上げていた。

吐き気を堪えながらなんとか状況を把握しようとして死んでいる船員たちを見渡す。絵に命を捧げるように、頭部なき船員たちの遺体が転がっていた。悪魔が求めたあの絵のタイトルは確か『悪意なき地獄』だった。

「地獄だ……」

カモシカが漏らした言葉に、反応する者はいなかった。

— 4

遺体を全て置き去りにし、買い出しに出ている船員を捨て置くように、カモシカは自らの船に乗り込んだ。船を動かせるだけの船員が集まれば、見捨てるように出港した。船長としての矜持なんて無い。あそこにいれば、みんなああなってしまう。

恐怖に駆られた行動だった。生きるための最善だった。

離れていく島を振り返り、カモシカは己の選択肢が間違いでなかったことを悟った。

首の無い海王類が村へと浮遊しているのが見えたためだ。自身の目を疑い、単眼鏡を

使う。白い犬の背に乗った悪魔が猫のような笑みを浮かべていた。そして悪魔と目があつた。可愛らしく小さく手を振っているが、カモシカには限界だつた。何故この距離で気づくのか、何故海王類の頭が無いのか、何故船員たちを殺したのか。何もわからなかつた。何も考えたくなかつた。

船員たちが喚くように何かを叫んでいるが、カモシカにはどうでもよかつた。以前、戦闘した『偉大なる航路（グランドライン）』から逃げ帰つた海賊連中が艦隊を率いていようと、もうカモシカには興味のないことだつた。

自分も、連中も、結局は偽物だ。ただ、海賊というレッテルに憧れて、粹がつてそう名乗つて、惨めに死んでいくのだ。それが同業の偽物相手か、悪魔による物か、それだけの違いだ。

それだけなのだ。それだけを知るための人生だつた。

メアリーが旅をする目的は、父が遺したゲルテナ作品という絵とか彫刻などを取り返

すことだと聞いた。

俺と一緒に来てほしい理由は、強い相手から取り戻すときに力になれるからというものもあるけれど、旅立ちの日までずっと浜辺で過ごしていたことに運命を感じたからだとか。

俺が自由になれたのも運命だろうか。

メアリーが「貴方が求めたからこそ得られた運命よ」と楽しそうに笑っていた。

海王類は島の近くにはいなかった。

見つかったのは、ちよつとした大きさの海獣くらいだった。

海王類と俺とは運命が交わらなかつただろうかと首を傾げると、メアリーがくすくすと上品に笑いながら「めぐり合わせが悪かつたのね」と言った。

虱潰しに海を探すが、海王類はやはり見つからなかつた。

島同士が近いような浅い海には、海王類はあまりいないのだとメアリーが教えてくれた。

メアリーは物知りだ。

俺が空から見下ろしても足りないくらいに世界は広いのだとか、空に浮かぶ星々は物凄く遠くにあつて自ら輝く物とその輝きによって光っている物があるのだとか、物が下

に落ちるのは重力と呼ばれる力が生じているのだとか、本当に色々知っていて、わかりやすく俺に教えてくれる。

メアリーが欲しがった絵のために、張り切って遠出して頭を引きちぎって海王類を捕まえた。

空を駆けるのなら一つ跳びだが、船で移動するにはかなり遠い場所だった。

海を駆けているが、やはり広い。

空と合わさって何処までも無限に拡がっているようだ。

時折、点々と島が見えるが、海の広さからすれば無いも同じだ。

空に雲があるように、島は海にある雲みたいなものに思えた。

メアリーが空にも『空島』という島があると教えてくれた。

「いつか行ってみたい」とメアリーに言うところ「一緒に行きましようね」とほほ笑んでいた。

空と海は実は同じような物なのだろうか、想像すると尻尾がぱたと揺れた。

俺とメアリーが態々遠くまで海王類を獲りに行ったのはメアリーと酒場という場所のおじさんの約束のためだ。

海王類があればゲルテナ作品と交換してくれるという約束だ。

約束は守った方がいい。

でも守れないこともある。

ただ、交わした約束の重さによって、どれだけきちんと対応するべきか変化するようだ。

今回はメアリーにとって重要な約束だった。

破ると凄いことになるのは仕方ないらしい。

あとは立場とか力が強かったら破っても問題ないとか。

あまり俺には約束というものがよくわからない。

でも守らないといけないのなら破っていけないのではないだろうか、そうメアリーに伝えると「好きなようにすればいいのよ。よくわからなかったら、嫌われたくない相手の約束を守れば大丈夫よ」と教えてくれた。

頭を引きちぎったために大量の血を流している海王類を視界の端に納めながら、メアリーを背に乗せて村に戻る。

中型以上の魚は締める、つまり即死させて血を抜くことで鮮度を保てるらしい。メアリーが教えてくれた。

鮮度というのはご飯の美味しさの程度でもあるとか。

遠くに散っていたはずのゲルテナ作品が、旅を決めた最近になって何点かここら辺の

海に集まっているため、メアリーは上機嫌のようだ。

それに眼下に見える海賊の艦隊が作品を持っているのも理由らしい。

酒場にいた海賊とは違う、ちよつとだけ強そうで数も多い海賊たちだ。

ゲルテナ作品を持っているからかメアリーは嬉しそうだった。

運んできてくれたのだから嬉しいのも当然かもしれない。

メアリーが嬉しそうだと俺も嬉しいように感じる。

どうということなのだろうかと聞くと「そういうものよ」とメアリーが答えた。

そういうものらしい。

— 4 —

海軍にいた時は知らなかったが、海賊を捕まえるとお金を貰えるというのだ。

お金はご飯や飲み物、服など色々な物と交換できる。

メアリーが教えてくれた。

リングが1個50ベリーから100ベリーくらい。

お昼に食べたご飯は700ベリー。

値段が違うのは、沢山の人たちが交換する価値を『ベリー』で決めたかららしい。

だから、リンゴの無い場所によってはリンゴはもつと高い場合もあるとか。メアリーが教えてくれた。

ちよつとわからないので聞いてみると、お腹が空いてる人にとつてりんごはとても価値があるけれど、満腹だとそれほどでもない。そういう『付加価値』がベリーの価値に繋がっているらしい。

なるほどなー。

で、海賊は数百万ベリーとか数千万ベリー、中には数億ベリーもいる。

これは強さとか危険度も『ベリー』に含まれているからだ。

強い相手にそれだけ海軍はお金を出すよつて意味もあるのかなんとか。

海軍で教えてくれた。

メアリーはさらに、危ないからだとか、馬鹿だからだとか、規則を守らなくて危ないからだとか、そういうことも教えてくれた。

海軍よりも詳しいメアリーはもしかして海軍の頭脳を超えている……？

つまりメアリーの話だと、足元に転がっている雑魚はリンゴ1万から3万の価値があるらしい。

リンゴ1個と同じくらい脆いはずなのに、1万から3万個分。噛じつても美味しくないのに1個よりも価値がある。

うーん……？

— 3

探し回ったが、リングゴ1万から3万個分の副船長しかいなかった。

船長はもつと価値があるから捕まえたからお金がもらえたのに。

頭が無くなってない船員に話を聞くと、グラントラインで死んだらしい。

リングゴの船長なら仕方ない。

船長なら2個分くらいの強度はありそうだ。

メアリーが船員の頭を片っ端から爆ぜさせていた。

ぐつとやるとボンッてなると教えてくれた。

海軍に捕まったら海賊は縛り首で、頭の上が無くなるから効率化だとか。

リングゴになれないからだとも。

鮮度維持とはまた違う視点だ。

色々な立場や方向から見ると様々なことが見えてくるのだ、メアリーが教えてくれた。このままだと俺も天才の領域に入ってしまうかもしれない。素敵！

メアリーは色々知っている、頭がとてもいい。

海賊は殺すか致命傷を負わせて捕まえることしか知らない俺には新しい発見ばかりで面白い。

人殺しはいけないことだと、海賊の下っ端っぽいのが叫んだ。
いけないこと、つまり悪い事らしい。

が、海軍では推奨されていたし、やらされていた。

メアリーだってやっている。

首を傾げると、メアリーが俺の頭を撫でながら「時と場合によるのよ」とほほ笑んだ。
なるほどなー。

そういうことで、時と場合によった海賊の残骸が出来上がった。

そもそも何故悪いことをしてはいけないのだろうか。

海賊は悪いから海賊だけど、やりたいからやっているのだし。

そういう矛盾が生じるからこそ、時と場合による、という言葉に繋がるのだろうか。
やはりメアリーは天才……。

リングー1万から3万個分の副船長と頭無し海賊艦隊を港に残し、海王類を運ぶ。

メアリーの能力は『霊子』という目に見えないモノを操ると教えてくれた。

リングーを半分にし続けると原子という小さな粒になり、それがいくつかくつについて意

味を持つと分子、逆に原子をさらに壊すと原子核とか陽子とか電子がどうとかがつてなるらしく、それらはある意味で見える物質なのだという。で、『霊子』というのは魂の力であり、見えない謎パワーらしい。

なるほどなー。

『霊子』は幽霊とかを構成している力で、魂そのものでもあるが、肉体と魂を繋ぐ物でもあるという話だ。

解明しようがないから不思議エネルギーとでも思っておけばいいのよとメアリーが言っていた。

酒場への道すがら、メアリーがリングゴ副船長の賞金をくれるらしい。

メアリーはゲルテナで満足だという。

リングゴ1万から3万個分のお金、何でもできるようだ。

今は自由だから特に必要ない。

自由じゃなかったらお金で知らない島に行ったり、知らない話を知るために本などを買うだろう。

今はメアリーがいるから知らない島に行くし、色々な話を教えてくれる。

本もいらぬ、ならお金もいらぬ。

つまり色々な教えてくれるメアリーにお金をあげるかな、と告げると首周りに抱き着

かれた。

メアリーは抱き着き癖があるのかもしれない。

— 5 —

メアリーの掌に、突然現れた木の枠が現れた。

これが『額縁』というやつで、メアリーが出てきた場所らしい。

つまり家ってやつだろうか。

海賊から貰った作品と酒場で受け取った作品を、メアリーが大事そうに『額縁』に入れた。

今は何も描かれていない『額縁』だが、メアリーが生まれた場所だという話だ。

やっぱり家なのだろうか。

ゲルテナ作品を1つ入れると、何か別の物も1つ分入れておける便利な『額縁』だと教えてくれた。

メアリーはすでに5つのゲルテナ作品を持っているらしい。

だから今回は2つ手に入ったので、中に7つまで入れておけるようだ。

メアリーもゲルテナ作品だから自由に中と外を行き来できるし、容量が空いているの

で俺も入れるらしい。

やっぱり家じゃないか。

雨避けに良さそう。

この額縁が燃えるとメアリーは死ぬらしい。

暗い海と空を思い出した。

死ぬのは駄目だ、額縁はあんまり出さないようにと告げると、頭を撫でられた。

ちなみに、お金の場合は1ペリーで1つだが、容器があれば満杯になるまで入れて1つ分なのだから。

便利な『額縁』だ。

子供のときに落とした船に全部詰め込んでから数なんてどうでもいいけどね、とメアリーが言っていた。

確かに。

船も1つ、リングも1つ。

俺の原子は60兆個あるという話なのに入れるらしい。俺も天才だった……？

リング副船長を入れておける容器を酒場で頼んだら、木箱をくれた。

ちよつと小さくて副船長を入れるには難しい。

「そういう時はこうするのよ」と穏やかな笑みを浮かべてメアリーが腕とかを變形させて詰めていた。

なるほど。

ちよつと入りきらなかつた腕は噛み千切つた。

柔らかさは重要だと思つた。思考の話だ。

— 6

次の作品がある海軍が常駐している島へと降り立つた。

近くから順々に探していくので、船での旅は難しそうだ。

メアリーは海賊になる予定だと言つていたが、船に乗らなくてもいいのだろうか。

「私くらいになるとそのうち勝手に海賊つて呼ばれるようになるから大丈夫」だと教えてくれた。

それは凄……え？ え？

混乱していると、島を見廻る海兵たちに挨拶されたので、軽く吠えて挨拶を返してすれ違う。

楽しそうに笑っているし、島民とも仲良く話していた。

俺の知っている海兵とは全然違った。

知っているのは、もつとずっと強そうで、表情も笑ったりせず、海賊は皆殺しつて感じだった。

メアリーは俺の様子を見てにこにこ笑いながら「時と場合によるのよ」と言った。
なるほどなー。

時と場合つて凄い奴等だ。

ここの海軍は良い海軍らしい。

悪い海軍もいるのだろうか……いるらしい、メアリーが教えてくれた。

やっぱりそれも「時と場合によるのよ」つてことらしい。

真理なのだ。原理は知ってる。

悪い海軍もそのうち会えるらしい。

俺が居た海軍は悪い海軍なのだろうか……違うらしい、メアリーが教えてくれた。
真面目すぎる海軍だという話だ。

また増えた。

海軍、多人格なやつである。

俺を見習ってほしい。

俺は一人だ。まあ、犬っぽい姿にもなれるけど。

メアリーは一人だし、動物にはなれない。

……お得ってやつ？

一人で海軍の駐屯所ってやつまで副船長が入った箱を持って行って、おつかいは終わり。

お金も貰ったが、額が大きいので小さい海軍では全額は難しい、もっと大きな海軍で引き換えてくれと言われて、紙も貰った。

・ 良い海軍

・ 悪い海軍

・ 真面目すぎる海軍

・ 小さい海軍↑new!

・ 大きい海軍↑new!

海軍また増えた。忙しないやつだ。落ち着いてない、全然。

おつかいできた、とメアリーに伝える。

「よく頑張ったね」と撫でられたので尻尾を振る。

まあ、原理は知ってるからよゆうだったけど。

原作：女神異聞録デビルサバイバーOC デビサバ1

—
1

— Day Before —

女とは面倒なものだと思っ様になったのは何時からだっただか。

私自身も女だから骨身に沁みる思いだった。

小学生の頃はおしやまさんな男の子が女の子を意識したり、それが転じていじめが起きたり、女子同士で低レベルな牽制をかけあつたりはあつたが、特に意識するほどでもなかった。

中学生の頃から徐々に面倒に感じてきた。

月のモノが始まるし、女子は派閥を作つて原始的で極めて面倒な社会を形成していたし、男子は男子で意識しすぎて「オレ意識してないっすから」アピールがうざかった。

高校に入つてからなごさらに煩わしさが悪化して涙が止め処ないくらいだ。

まあ、基本的に表情筋が死んでるかのごとく無表情なんですけど。

なんで女の面倒さを語り出したか、その答えは目の前にある。

そう、友人（自称）のユズのせいだ。

こいつは私の昔からの友人であるアツロウを意識しまくりで、餌にまで使う始末なのだ。

今日もアツロウが私の従兄であるナオヤに呼ばれて東京に行くと言って、私を誘ったという情報を何処で得たのか、強引に連れてこられた。

私の表情が死んでないで友人がもつといたら断ることもできたのだが、残念ながらポツチな私には無理だった。

つまり、不本意な結果なのだ。

しかも腹が立つことにアツロウと接触したら私のことを置き去りにしやがった。

おっぱい以外は足りなくてマジで脳足りんに違いない。

脳足りんで能足りんなのだ。

いや、別に私の胸が小さいわけではない。

慎ましくて健康的なのだ。

決して恨んでいるわけでもない。

そういうえば私はユズって呼んでいるが、相手から名前を呼ばれたことはない。

……。

おっぱいこの野郎!!

たっぷり三十分使って二人の話は終わったのか、やっとこちらに意識を向けてくれた。

アツロウはどこか辟易している気がする。

女子の話ってオチもないし盛り上がり欠けるから、しようがないね。

アツロウが鞆をごそごそと漁って私にゲーム機を差し出した。

ユズの視線が心なしが強くなった気がしないでもないが、あまりの鉄仮面ぶりに「ブラス・メイデン（真鍮の乙女）」の異名で呼ばれる私には効かないのだ。

間違ったV系みたいな容姿をした従兄のナオヤから送られてきたらしい。

どうして私に直接送らないのかと疑問に思ったが、そういえば以前誕生日プレゼントをダストシユートでエキサイティングしたのを思い出した。

しようがないな、と受け取ってゴミ箱を探して……捨てるわけないじゃん。

ユズがめつちやこつち見てるし。

受け取っても地獄、捨てても地獄。

なるほど、やるなゴミクス（ナオヤ）。

次会ったら貴様を地獄に送り込んでやろう。

束の間の平穏を享受するがいい。

脳内でゴミクズをどうやって地獄に送るかをシミュレートしているとアツロウがゲーム機であるコミュニケーションプレイヤー、通称COMPを弄り始めた。

ぶつぶつとそれっぽい専門用語を呟いていた。

ユズがそれに律儀に答えているが、「オタクっぽい」とか「わたしにはわからない」とか「もつとわかりやすく」とか、マイナスのサムシングの言葉ばかりだ。

こいつ、ダメかもわからん。

男の人は肯定しないといけないらしい。

ちよつとアツロウが凹みつつ疲れるという可哀相な表情を浮かべていた。

私が「普通のより凄いんだね、どうして送って来たんだろう」みたいなことを言ってみたらアツロウが嬉しそうに喰いついてきた。

そしてユズの凍った瞳。

私にどうしろと言うのだ。

面倒になってアツロウと話を進める。

ユズが時折、「わからない」みたいなことを色々な言い方でアピールしてくるため話の腰を折られまくったが何とか考察を終える。

とりあえずよくわからんからCOMPのアプリを使おうぜ！ってなった。

私は説明書は読まない派なんだ。

後で暇なときにじっくり読む面白さを知っている、違いの分かるオンナだからね。

起動の直後、COMPが光り輝いた。

ゴミクズの会心の悪戯だろうか、殺意が湧いた。

光が納まり、画面には幾何学模様と見知らぬ文字、そしていくつかのアルファベットの羅列が次々と浮かび上がっては消えていく。

最後に『SUMMON OK』と表示され、COMPから光の玉が飛び出した。

凄い仕掛けだなーと驚きながら、二人のほうはどうだろうかと見てみるとブサイクな獣と妖精と睨み合っていた。

わたし、ばかだからちよつとよくわかんないなー。

助けに行つたほうがいいのだろうか、私に加わつてもなあと悩んでみる。

空気がピリピリしているのどうにかしないと。

「助けないのか」と隣にいた青年に尋ねられた。

そんな簡単な問題だろうか。

あんな魑魅魍魎の権化みたいな化け物相手だったら、むしろ助けを呼んだほうが

……。

……。

今の誰だ。

ぐりんっ!!と勢いよく首を横に向ける。

ごきつと首を痛めた気がするが気のせいだ。

私の拳動に青年は少しは驚いたのか、僅かに目を見開いた。

容姿は整っており、ネコミミのようなヘッドフォンと白いパーカーが特徴的だ。

青年は私のCOMPを指差し「召喚された、と思う」と言った。

どうということなの……?」

意味がわからなすぎて思考が止まりかけていたところで青年が再び「助けないのか」

と聞いてきた。

助けられるなら助けるに決まってるでしょ、と言り返す。

青年は「なるほどなー」と頷いて、ヘッドフォンを渡してきた。

『れべる』とやらが下がって落とすかもしれないとか言い残し、隣から消えた。

破砕音がアツロウとユズのほうから聞こえたので急いで振り向くと蜘蛛の巣状に亀裂が奔ったアスファルトと真つ二つに裂けた獣、そして隣にいたはずの青年が見えた。

そのまま青年は目にも止まらぬ速さというやつで妖精を握りしめ、潰したようだった。

獣だったモノと妖精だったモノが光の粒子となり、それぞれアツロウとユズのCOM Pへと取り込まれた。

唾然とした二人を残して青年が無表情でこちらに手を振っていた。

……。

……とりあえず手を振り返したら、青年の機嫌がよくなった気がする。

まあ、気がするだけなんだけど。

二人と合流して先ほどの化生がなんだったのかを相談してみる。

わかったことは

- ・ 未知の生物は悪魔と呼ばれているファンタジーなやつら
- ・ 先ほどの戦闘は契約の一環
- ・ 青年も悪魔
- ・ 畜生（ナオヤ）が確実に殺しに来ている
- ・ ユズがうるさい

以上である。

悪魔に関しては青年からの情報がすべてだったが、あまり得られなかった。聞いたことは答えてくれるが青年が自ら喋ることはほとんどなかった。

苦手なのだろうか。

青年との会話は慎重に進めようと考え、ナオ畜は絶対に息の根を止めると誓った。そうして一段落つけたと思ったがそうは間屋がなんとやら。

私だけ契約の戦闘が無かったとユズが文句を言いだした。

いや、結局は青年が倒したからあなたもノーカンだろうと思ったが面倒なので言わない。

青年もめんどくさがってるし、無理に戦うのはよくない。

だからユズは早く口を閉じるべき。

「ええつと、やる？」と遠慮がちに青年が呟き、ちらりと視線を向けてきた。

一生懸命首を横に振る。

いや、絶対にやらないから。

なんか本能的にヤバイ。

無表情だから視線も何処か凍ってる感じがしてマジ無理。

この視線を向けられて「人肉の解体かあ」とか言われたら失神するくらい無理。

アツロウも焦ってユズの口を塞いだし。

青年からちよつと残念そうなオーラが感じられた。

セエエエフ!!!

なんかわからないがセーフ!!

なぜかドキドキしてしまったし、嫌な汗もかいた。

ぐぬぬぬぬ……。

深呼吸、深呼吸。

すーはーすーはー。

すはすすす。

忘れよう、そして無かったことにしよう。

気を取り直して青年との交流を深める。

ナオ畜の化生による暗殺計画から確実に守ってくれるはずだからだ。

ぶっっちゃけ、悪魔はCOMPで操れるらしいが私の場合は彼との『れべる差』とやらで無理らしいので懐柔しようということだ。

苦肉の策である。

私の動体視力を超える速さで動き、アスファルトを容易く砕く相手との交流とか、
物の乙女ゲーかよと突っ込みたい。

攻略難易度が色んな意味で糞だけどね!

まずは自己紹介からしてみた。

「じんな……はヒトでなくなつたから名乗りたくないし、セプテン……は長いか。ア

ルコルと名乗るのもな……別に憂いてない。あぁと……ナナホシにしよう。うん、ナナホシと呼んで欲しい」ということで青年はナナホシという名前らしい。

途中で出てきた『じんな』とか『せぶてん』とか『あるこる』とか気になった。

気になったが絶対に何らかの罫だつて、直感でわかったからスルーする。

雰囲氣的に態とに違いない。

おそらく「詮索する相手は信用できない」とか言う気がする。

残念だけど私には目に見えた地雷はクールに無視できるできる女つてわけよ。

趣味とか好きな食べ物を言い合つてフアーストコンタクトは終了!

好感度は5くらい上がったでしょ、流石に。

まあ、ユズのせいでマイナススタートっぽいですけどね!

ちくしよー!

ちなみにナナホシの好物は「じゅんごの茶碗蒸し」、「鍋」、「ミソビタミンD」、「悪魔」、「セプテントリオン」らしい。

『じゅんご』の茶碗蒸しと高位の悪魔の踊り食いは特に好きだとか。

絶対に突つ込まない。

じゅんごつて何とか、高位の悪魔つてことは低位もいるのかと思つたが何も言わな
い。

無表情は伊達じゃない。

残念そうな雰囲気をいくら出そうとも突っ込まないからな！

趣味は絵を描くことだとか。

私はピアノだから何となく親近感が湧きそうだ。

悪魔の絵を流暢にアスファルトに刻んだのを見て絶対にわかり合えない気がした。

— 2

— DAY BEFORE 「日常の終焉」 —

ゴミクズを抹殺……というのには四分の一くらい冗談で、悪魔とかいう人間を殺すだけの兵器みたいなのが現れる危険物を送ってきた理由を聞いただそうと畜生を探すが、見つからない。

不必要なときは鬱陶しいくらい現れるゴキブリみたいなやつのかせに、必要になると全く見つからない。

好感度はゼロケルビン確定。

アツロウは畜生にきつと考えがあるとか擁護するし、ユズはユズでなんかめんどくさ

い。

ナナホシは何を考えているかわからないし、もうダメかもしれない。

搜索を諦めた直後、ゴミクスからメールが届いた。

なので削除。

気分が悪くなつてしようがない。

次からは拒否しとかないと。

もうね、タイミングが腹立つ。

鬼の形相つてやつだわ。

私の表情はあんまり変わらないけど。

誰にも気づかれずにイライラしているとナナホシがヘッドフォンを指差した。

返して欲しいのだろうかと差し出すと、「あげるよ」と言われた。

ううむ……。

まあ、いいかと着けてみる。

……な、なかなか悪くないんじゃないかな、うん。

もう18時を過ぎたので、日が暮れる前に駅に行きたいわーと思っていたがそうはい

かないらしい。

畜生のメールを確認したアツロウが青山霊園に行くと言い出した。
ラプラスメールとやらの真偽を確かめるためらしい。

……？

ああ、どうやら私が削除したメールに含まれていたようだ。
勢いで消してしまっただが、結構重要な内容だったらしい。

アツロウがやる気になって、それに付き合いたいユズがいる。
断れない。

ナナホシはどうだろうかとチラッと見てみる。

折り紙を折って……なにこれ凄っ!!

ナナホシは折り紙に「モト劇場」という名前を付けていた。
すごいなー。

あのギミックがああなっているとは。

おお、ここがこうとか。

えっ、あれがああなるの？

すごっ。

折り紙で遊んでいたら青山霊園に着いていた。

あまりの技量に驚きの連続で、つつい熱中してしまった。

無駄に器用なナナホシが悪い気がする。

そして、超大作「ほーっついんやまと」を完成させた辺りで我に返った。

悔れないな、ナナホシ。

アツロウとユズが二人でCOMPに向かつて何かをやっているのを無視して完成した「ほーっついんやまと」を眺める。

なかなかいい出来ではないだろうか。

ナナホシも満足そうに頷いている。

上機嫌のようだ。

これは好感度アツプ、間違いないね。

「ほーっついんやまと」のギミック、「りゅーみやく」状態を作っていると、どこかで爆発が起きたらしい。

アツロウとユズが二人で騒いでいた。

そんなことよりも完成を急がなくては。

日が落ちて暗く、霊園の街灯では細かい部品を作るのは難しい。

「りゅーみやくのおーら」を完成させてドヤ顔を披露。

ナナホシが「おー」と言いながら小さく拍手してくれた。

さあ、完成も間近だ。

破砕音とか悲鳴とか全部無視だ。

関わりたくない。

あーあー、きこえなーいと内心で思いながら最後のパーツを……ほーついんやまとが
結晶化したあああああああ!!!

最後の最後で壊れてしまった。

結晶というか、凍結したらしい。

自重で碎け散った。

「なるほどなー」とナナホシが頷いているが、私のショックは収まらない。

失意が転じて怒りに為りそうだ。

どこのどいつだと怒りながら周りを見渡すと巨体の猿っぽい白い何かがいた。

イエティとか雪男的なフォルムをしている。

雪山で写真を取ったら完璧だろう。

なぜ霊園にいるのか、ミスマッチすぎて違和感ありすぎ。

見た目もキモい。

なんなのあれえ、とげんなりしているとナナホシがCOM Pを指差した。

指示に従って起動すると画面には雪男が映り、「ウエンディゴ」の表記とともに数値化されたステータスが表れた。

悪魔はアナライズによって数値化できるらしい。

ふうん？と何の気なしにナナホシも見てみる。

……。

文字化けばかりだった。

君はあれなのかな？

恥ずかしがり屋なの？

それともポケモンのセレクトバグでも利用したの？

けつばんなの？

図鑑NO. 152のナナホシがウエンディゴをどうするのか聞いてきた。

まあ、答えは決まってるんだけどね。

私たちを囲むようにウエンディゴと手下の悪魔たちがいるわけで。

しかも話を聞く限りだと明らかにこつちを狙ってるし。

アツロウとユズも悪魔を出して臨戦態勢、かなりやる気ですね。

異存はないけど。

周りの悪魔はレベルが3前後、ウエンデイだけ19と格差が酷い。

浮いているというか従えているというか。

悪魔にも上下関係があるっぽい。

アツロウとユズの悪魔がレベル2、ナナホシは文字化けでよくわからない。

戦況としてはどうなのだろうか。

ドラクエやFF、ポケモンだったらレベル差的に勝てない。

が、スパロボだったら勝てる。

乙女ゲーだったらレベルなんて無意味。

逃げに徹したほうがいいのかもしれない。

参考とばかりにナナホシに聞いてみよう。

Q. レベル差はどのくらいまで問題ないの？

A. 低レベルだと1でも結構キツイ。

Q. ……レベルが10以上離れていると？

A. 一撃でだいたい死ぬ。

……ダメかもわからんね。

Q. ナナホシは勝てる？

A. 無回答（首を傾げていた）

ううむ、倒すのは厳しそうだ。

隙を見て逃げる方向で進めようかな。

ナナホシに前衛を任せる。

機を見て撤退を……周りにいた悪魔が黒い影に飲まれた。

どことなく満足そうな雰囲気伝わってきた。

……もうナナホシに任せとけばいいんじゃないかな。

「勝てそうなら勝つ、負けそうなら撤退」とナナホシに指示をしてウエンディゴに突撃させる。

肉薄する直前、神秘的で大きな髪飾りをした女性が現れた！

「しよーもんかい」という組織に所属している方らしい。

アツロウとユズの会話では「しよーもんかい」に属していた人がウエンディゴに殺されたらしい。

真実のラツシュ、手に汗握る展開だわ。

女性が「ウエンディゴは私に任せて逃げてください！」的な事を言っていたが、それを無視してナナホシが戦闘を開始していた。

接近した直後に突きだしたナナホシの拳が凍結した。

が、それでも構わず殴打。

仰け反るウエンディゴ、碎け散る拳。

ナナホシ狂戦士説が私の中で生まれそうだ。

ウエンディゴを蹴り飛ばしてインターバルを取るナナホシの両手は消失していた。

「あちゃー」って雰囲気を感じるがそこまで問題でもないようだ。

「しよーもんかい」の女性が見て「今すぐ治療を!!」とキラキラなオーラを纏い始めた。

が、それを見て首を傾げていたナナホシ。

彼の両手はすでに元に戻っていた。

自己再生能力持ち、たぶんミュウツーとかなのだろう。

握ったり閉じたりと手をぎばぎばさせて首を傾げた。

イマイちらしく納得していない様子。

起き上がったウエンディゴが何か言いながら逃げていった。

追っかけて他の悪魔が寄ってきてても嫌なので見逃すことに。

「しよーもんかい」の女性はなんか残念そうだった。

傍に戻ってきたナナホシが心なしかドヤ顔している気がした。

よくやったと褒めてやると喜んでいるようだった。

ううむ、なんか犬っぽい。

周囲に悪魔がいなくなったので安心してよかった。「しよーもんかい」の女性。彼女はアマネと名乗った。

神秘的な雰囲気だがどこか残念だ。

そんな彼女にナナホシは好意的だった。

まあ、私たちとの出会いよりはマシかもしれないけど。

と思ったが実情は違った。

可愛ければ好意的だとか、なんとか。

溜息ついた。

先ほど、活躍できなかったのがそんなに気になっているのか、アマネは結界を張ってくれた。

朝まで悪魔が来ることはないから安心していいと言って去っていった。

嬉しい。

確かに嬉しいのだが、ここって霊園なんだよね。

勘弁してほしい。

避難所に、とも思ったがすでに20時近い。

無理だろうなと諦める。

それに悪魔といった未知との遭遇で疲れているし、大人しくここで過ごすことにした。

ナナホシに告げると頷いていたので納得してくれたのだろう。

ユズは風呂に入りたいとか五月蠅かったが、ナナホシがウエンデイゴが凍らせた氷塊を持ってきたら黙った。

やることもないので寝ようと思ったがCOMPをいじって……捨てたくなった。

良く考えたら畜生から渡された物だしマジでいらぬ。

私の考えを理解したのか、ナナホシがCOMPを交換してくれた。

必要な物はだいたいインストールしてあるとか。

なぜ持っているのか疑問を抱いたが、面倒なのでいいや。

畜生のモノでは無く、彼自身が友人からもらった物だと説明してくれたし、問題ないね。

COMPを使うと悪魔をオークションで競り落としたり、私が戦えるようになったりするらしい。

凄いと純粹に驚いた。

あととはなんかいっぱい、めんどくさいので追々学ぶことにした。

ユズがアツロウの近くにいて私がハブられたのでナナホシの傍で寝ることにする。よくよく考えたら超安全地帯だし。

寝ることを告げると闇夜でもわかる白銀のコートを貸してくれた。

背には蝙蝠のようなマークが描かれていた。

目立つんじゃないかと思ったが、眠いので受け取った。

仕立てがいいので敷くのも申し訳なく思っていると、地面が柔らかくなった。

あの影の上に寝ろという事か。

ううむ、と悩むが影を見ると口も目もない。

飲み込まれたらそのときはそのときだ、と眠くて変に思い切りが良くなっていたの

か、すぐに寝転がった。

……!!

ここ、すごく寝心地がいいんですけど!!

——憂鬱の日曜日——

意識が浮き上がるような感覚。

目を開けると何処かの路地裏のようだった。

辺りを見渡そうとするが身体は動かなかった。

なんというか、ふわふわした感覚を強く感じていた。

夢のような……夢かもしれない。

他人の視点で見たらこんな感じだろうか。

勝手に身体が動き出していた。

薄暗い路地裏には至る所に血糊と肉塊が見てとれた。

かなりバイオレンスだ。

日本のように思えたが日本ではないのだろうか。

変わりない路地裏が続いたが、程無くして分帰路を見つけた。

どうやらこの身体の持ち主は曲がるようだ。

角を曲がったその先では、悪魔が自転車で人間を引き裂いていた。

他にも悪魔が人間に群がり、甚振っていた。

虚ろな目をしている人間と笑う悪魔。

気分が悪くなったが吐く事はなかった。

この身体の持ち主もこうなるのかと思ったが、全然違った。

指を鳴らすことで悪魔を燃やし、死にかけた人間を潰していった。

平等に全てを殺していく……。

どこか作業の様だった。

悉く殺し、残っていたのは自転車で人間を引き裂いていた悪魔だけだった。

私には音が聞こえないのでわからないかったが、悪魔は命乞いでもしているのか口を必死に動かしているのが見て取れた。

悪魔の命乞いは上手いかなかったようで真つ二つに引き裂いて捨てられた。

残ったのは人間の死骸だけ。

悪魔は粒子になって消えていく。

今の争いで何処かのガラスが割れたのか、破片が転がっていた。

その破片に偶然、この身体の持ち主が映り込んだ。

虚ろな目をしたナナホシを、私は見た。

どうやらこの夢は彼の記憶らしい。

目の前が砂嵐のように霞んだ。

そして、見ていた風景が様変わりした。

半壊した建物や割れた道路が見える。

何らかの災害があったのだろうか。

それとも悪魔の影響か。

他人ごとでは無い。

私の周りにも悪魔が現れた。

目覚めたとき、街が同じようになっているかもしれない。

ナナホシが凄まじい運動能力で瓦礫や建物の壁を飛び跳ねて進む。

見ているだけで酔いそうだ。

風景が後ろに流れていく。

普段なら楽しめたのだろうが、そうはいかなかった。

凄まじい勢いで氷塊が迫り、それを避けていく。

避けられそうにない氷塊は炎で溶かしていた。

氷塊の数が増えると同時にナナホシの移動速度がさらに増した。

飛ぶような、そんな速さだった。

ナナホシは視界が埋め尽くされるほど大きな炎を放つと、その後ろを追従するように走り出した。

炎を突き抜ける氷塊に身体が凍りつこうとも構わず走っていた。

球状だった炎が何かに衝突したのか、花開くように周囲を焼いた。

熱によって蜃気楼が起きているのか遠くの建物が揺らいでいる。

炎が引くと銀髪の巻き毛が特徴的な、青ざめた顔をした男が地面に伏していた。

所々焼け爛れた顔を憎々しげに歪めてこちらを睨んでいた。

あれは悪魔だろうが、どこか人間にも見えた。

憎悪に満ちた人間に……。

ナナホシが一直線に駆け抜けた。

氷塊が衝突しようとも、手足が凍りついても止まらなかつた。

そして、相対していた悪魔に迫ると殴りかかった。

衝撃で地面が砕けようとも途切れることなく何度も。

このまま殴り殺すのかと見ていたが、空から奇妙な物体が襲来したことで終わった。楕円形をしたピンク色のスポンジが浮いており、その下には花卉のようなモノが存在していた。

ナナホシが炎を飛ばしたが、弾かれたのか届く事は無い。

スポンジが徐々に巨大化していく。

それを危険だと感じたのか、ナナホシはその場から離れることを選んだようだった。

幾らか離れた瓦礫上から、先ほどの場所を見ていた。

そこには小さな焦げ跡だけが残っていたおり、氷塊を飛ばしてきていた悪魔も、スポンジもいなくなっていた。

悪魔は逃げたのだろうか。

そして、あのスポンジはなんだったのだろうか。

疑問が増えるばかりだ。

ただ、ナナホシの拳から滴る赤い血を眺めていた。

悪魔でも血は赤いのだろうか。

再び砂嵐が生じ、景色が変わる。

薄暗い部屋にいた。

複数の懐中電灯などを光源にしているようだった。

ナナホシが動き回るのを見守っていると、そこがどこかの店だろうと予想できた。

おそらくホームセンターやスーパーのような広い場所。

今まで動き回っていたのはお湯を用意していたためのようで、インスタント食品を二つ用意し始めた。

二つという事はもう一人いるのだろうか。

ナナホシがインスタント食品を持って行くと、金色の髪をした少女が笑顔で手を振って来た。

それほど距離があるというわけでもないが、離れていたのが嫌だったらしい。

近くに座るとにこにこ嬉しそうに笑っていた。

保護したのだろうか。

食事中は何かを話していて、少女はとても楽しそうだった。

が、私には会話が聞こえないので少女を観察することしかできない。

金色の髪に白いリボン、青のワンピース、そして無垢な笑顔。

彼女の姿はとある童話の主人公を彷彿とさせた。

二人で仲良く歯を磨いて、寝袋を用意して……。

少女は楽しそうにナナホシの真似をしながら準備していた。

寝る前にも笑顔の少女と何かを話していた。

仲の良い兄妹のようだった。

私には畜生（ナオヤ）しかいないと思うと怒りで頭が沸騰しそうになった。

話疲れたのか、少女は眠っていた。

ナナホシはそれを優しく抱きかかえて寝袋で眠らせた。

そして、自分も寝袋へと入り、アリスの寝顔を眺めていた。

ナナホシも眠って、この夢は終わりだろうか。

そう考えていた。

が、私の予想はことごとく外れるようだ。

静かに眠っていたアリスが目を開いた。

先ほどまでの楽しげな表情は消え去った無表情。

「わたしとお兄さんの大切な夢を覗き見るあなたはだれ？」

澄んだ少女特有の愛らしい声だったが、私には底冷えするような怨嗟に聞こえた。

少女は宙に視線を彷徨わせていた。

何かを探している、そんな動きだった。

耐えがたい緊張感を感じた。

「そう、そこね」

そして、目の動きが止まる。

こちらを見ている。

その視線はナナホシでは無く、間違ひなく私を捉えていた。

「……？　かわった場所にいるんだね」

首を傾げながら眩いていた。

無表情だった少女に感情が宿った。

困惑したような愛らしい表情が。

「そう、お兄さんも。……いいよ、ゆるしてあげる。だって」

花が咲いたように笑った。

少女と思えないほど妖艶な笑みだった。

「お礼だもん」

やっと見つけたそのお礼だと、少女はそう言った。

そして、目の前が暗転した。

—
4

霞みかかった意識がゆっくりと晴れるように鮮明になっていく。

少しばかりぼやけた頭が眠りを求めている。

その誘惑を振り払うために勢いよく上半身を起こした。

……勢いが良すぎてちよつと首を捻ったかもしれない。

l s t D a y 東京封鎖

がぼつと音がしそうな勢いで起きた私は自室でないことに驚き、辺りを見渡した。

青い空、亀裂の奔った石床、崩れた墓石、敷かれた影、白銀の外套……。

ああ、そうだ。

思い出した、昨日の奇妙で奇天烈な怪奇現象的な色々を。

全てを忘れて日常に戻ることができのなら躊躇わず忘却一択なのだけれど、そんな都合のいい話なんて無いだろうし。

むしろ、目を見開いて私を見ているナナホシが仲魔になった時点でかなり当たりだ。アツロウやユズの悪魔は壁にしかならず、会話するには知性や品性が足りないということがわかってるし。

なんか嫌な夢を見た気がするけど、まあ、幸運でしよ。

……幸運だよね？

深夜の探索のついでにナナホシが用意してくれた道具を漁って朝の準備に必要な物を選んで行く。

私が寝ている間、実はナナホシが離れていたということに背筋が凍った。

いや、結果があつたから問題なかつたけど。

無かつたけど。

心象的には問題が大ありというか。

寝ている間に死亡とか嫌だよ、私は。

とか思ってたがナナホシは私が敷いていた影を移動できるし、そもそも影も戦えるの

で問題なかったとかなんとか。

悪魔ってすごい、私はそう思った。

結界を無視できるほど強い悪魔なら対処できないとナナホシが無表情に呟いていたが、特に何もなかったのだから聞かなかったことにしよう。

ナナホシが用意してくれた水で顔を洗う。

身を切るような冷たさだった。

氷が浮いてたし。

魔法を溶かしたやつだったとかで、飲むのには……どうなのだろう。

ついで歯を磨く。

口をつける水はろ過とか蒸溜とかしてくれたいらしい、マメな悪魔である。

浄水フィルターの付いた水筒を取り出したときはちよつと自慢気だった気がする、無表情だったけど。

私とナナホシのやりとりを、遅れて目覚めたユズが見ていたらしい。

ユズが自らの仲魔であるピクシーにナナホシと同様のことを頼んだが、すぐに断られていた。

ピクシーには人間の習慣や行動が理解できないらしく、無意味なことはしないのだと言つてCOMPへと戻つて行つた。

アツロウの犬も同じ。

面倒なことをするとは人間とはやはり不思議だと、そんな言葉を残して。

やはり悪魔にも個体差があるようだ、それも人間では理解できないようなかけ離れた価値観とともに。

そう考えるとナナホシは人間に理解があるようだ。

基準はわからないが、昨日の雪男やその周囲の悪魔、アツロウやユズの悪魔が人間を食糧のように見ていたように思う。

それを考慮すると、ナナホシかなり友好的なのかもしれない。

契約も会話だけだったし。

だからなんだって話だけ。

ナナホシはどれだけ人間に理解があるのだろうか、本人を目で追いながら思考を進める。

2Lのペットボトルと大きな鍋を取り出し、鍋に水を満たした。

そして、鍋を片手で支えると指を鳴らして炎を生み出した。

鍋の水が加熱され、十分に沸騰したのを見て何度か頷きながらインスタント食品にお湯を……って朝食の準備してくれてたんですけどお……。

3分経過を知らせるタイマーが鳴り、ちよつと満足そうなナナホシに朝食を手渡しさ

れたので受け取る。

人間に理解があるってレベルじゃない気がするんだけど。

その様子を見てアツロウは何か言いたそうだった。

ユズはなぜか私を睨んだ。

何故だ。

嫌な既視感とともに朝食。

思い出そうとしたが、そうすることで嫌な汗が流れてきたので忘れることにした。

嫌なことってことは忘れる意味があるに違いない。

あ、ナナホシもご飯食べるんだ。

今日はどうしたものかと作戦会議。

とりあえず畜生ナオトが送ってきたメールを調べてみようということになった。

賛成したいのはやまやまだが、昨日削除したうえにナナホシに交換してもらったから

私にはどうすることもできない。

そういつた旨を伝えるとアツロウが複雑そうな表情を浮かべた。

その様子に何を勘違いしたのか、ユズが睨んできた。

もちろん私も「ばーかばーか」と意思を込めて見返す……後片付けして影に道具を仕舞い込んでいたナナホシの影に隠れて。

ΩへCOMPには、私たちの余命が見える機能が付いているってわけなんだよ!!!

Ωへな、なんだってー!!?

と、ナナホシと二人で遊んで過ごす。

ちなみに上が私、下がナナホシである。

もつと厳密に再現すると「こんぶには余命が見える機能があつて人類は絶滅する（棒読み）」「な、なんだってー（棒読み）」みたいな抑揚が排除された平坦なやり取りだけど。

つまり、なんかそういう機能があり、頭上に余命の日数が表示されるらしい。

興味はあんまりない。

興味を持つという事はあの畜生の一挙一動のいずれかに興味を持つという事になるので嫌です☆

畜生に思考を割くくらいなら死を選ぶ。

だから頭脳労働（COMP関連）は全部アツロウに任せる。

ユズ?

胸が本体に何を期待しろと言うのか。

ちなみに余命はアツロウとユズは0、私は文字化けしているとか。ちよつと意味わかんないんですけど。

アツロウとユズは今日死ぬのか、とかそういう疑問の前に余命が文字化けとかどうしろと。

COMPのシステムでグループ、というかパーティを組むとリーダーが余命を見るこ
とができるようになるので文字化けの変化を見ようとパーティ編成。

何故か私がリーダーに設定された。

当然ながら余命は見えない。

なぜなら私のCOMPには余命の機能が入ってないからだ。

ジト目で二人から見られたが、なんと言われようと畜生が与えてきたものなど要ら
ないし。

頑なに断っているとナナホシが徐にCOMPを操作し始めた。

そして、二人の頭上に映し出された文字化けした数字。

なんかナナホシのCOMPと私のCOMPでうんたらかんたらで表示できるように
したとか。

危ないところだった。

パーティ解除してアツロウかユズのどちらかがリーダーをやればいいのに、そうい

のを言い出さずに私をリーダーにして余命的サムシングをこれ以上強制しようとしていたら自害するところだった。

文字化け……。

ナナホシをCOMPに戻す。

数字がくつきりと表示された、0だけど。

ナナホシを呼び出す。

文字がぼやけて、数字が明滅、そして文字化け。

なにこれえ……。

わからないことは後回しにしよう。

どうせ畜生が変なことしたのでろうし。

0じゃないってことは死なないってことに違いない。

……死よりも苦しいとかっていうのは無いよね？

ないよね？

あとは未来予知できるメールがホントっぽいってこと。

あのラ、ラブプラスメール？とかいうやつ。

なんかデートとかしそう。

きつと外国で結婚式とか挙げる人も出るに違いない。

あれ、なんの話だっけ？

……そう、ラブプラスだ。

私はよくわからないんだけどノノさん？とかいう名前のヒロインが人気があるとか。口癖はきつと「あなたが彼氏とか……むーりー……」みたいな。

あとはリン……凜だっけ？

「ふーん、アンタが私の彼氏？……まあ、悪くないかな……」みたいな出会いがあるとかないとか。

ちなみにナナホシはエへ顔ダブルピースと歌唱用ガンエデンが好きらしい。

私はみくにやんかな。

……話が逸れすぎて軌道修正できない気がしてきた。

情報収集および帰宅のために街へ向かう。

時折悪魔が出るが地面に飲まれる様に消失していくので大した障害にはならなかった。

途中で、この先どうなるかわからない戦えるようになるかと男らしい決断をしたアツクウが参戦、それを見て私も幾らか練習することにした。

さらに終盤のほうでユズも参加、へっぴり腰だったけど。

ナナホシは前衛っぽいので私が後衛で魔法をべちべち放ち、悪魔に話しかけて率先的に煽っていくスタイルを確立。

「天使……？ あ、ペ天使か☆ 天使様がいるのかとつい探しちゃったよ☆ いたのは街を彷徨う徘徊者っぽい悪魔だったけど☆ ナナホシも気を付けてね☆」「俺は本物を見たことあるからダイジョーブ☆ こんなばちもん悪魔じゃないよ☆」みたいな感じのやつ。

全力で煽るときは元気になる、それが私とナナホシの流儀。

人通りのある街に到着したので、分れて情報を集めることにする。

ユズがグズったが、団体行動しても効率が悪いのだからしょうがない。

一度解散して一時間後に再び集合、と打ち合わせで散っていく。

わかってはいたが、ユズはアツロウの後を追って行った。

「ナナホシはどうする？」と聞いてみると、必要だろうからと情報を別に集めて来てくれるらしい。

あんまり離れられると困るが人手も欲しいと頭を悩ませていると、何かあればすぐに戻れるとナナホシは言い残して影に飛び込んだ。

影って言っても私の影だけ。

他人の影もありなのかと驚愕していると、私の影と目が合った。

……なるほどな。

驚いた。

確かに影に目があるなど驚くが、私の無表情を超えるには甘いと言える。

自分で感情表現が酷く乏しいと言っていることになるのでちよつと悲しくなった。

おそらく、私の影にナナホシの影が重なっているのだろう。

これなら悪魔が近くにいても問題ない。

見破って余裕綽々で無表情な私に、影にあった目が残念そうに閉じて消えた。

ちよつと心臓がばくばく言ってるけど余裕だかね。

原作：鋼の錬金術師 ハガレン1

アメストリスと呼ばれる異国に流れ着き、20年ほどの時を過ごした。

それだけ長く過ごせば、自ずとここが日本とは何もかもが違うことを知る。

見知らぬ技術、見知らぬ人種、見知らぬ世界。

過去か、未来か、異世界か。

何でもよいと思った。

元の場所に帰る事が叶うのならば、この世界が何であろうと構わない。

ただひたすら、帰る術を求めた。

調べれば調べるだけ世界の知識は増えてゆき、代わりに更なる無知を知ることになった。

そして、帰還は不可能であると知った。

知ってしまった。

夢を見る度に思い出す私の故郷は、手の届かない場所だとわかってしまった。

この世界からすれば、夢だったのだ。

虚実であつてくれと祈った“アメストリス”が真で、現実であれと願った“日本”は

偽だった。

私にとって出来の悪い白昼夢にすぎない。ここが本場で、目覚めるべき世界の。こうは嘘だった。

言葉は何も出なかった。

あつたのは度重なる空虚と、それを埋める様に込み上げる絶望だけだった。

空虚と絶望の交差を癒すまでに、10年以上の月日を必要とした。

人の感情というものは長続きしないのだと知った。

卑しくも、むこうに未練はあつたが諦めもついてきていた。

夢で見る度に郷愁の念に駆られる女々しきにも、仕方のないことだと誤魔化すことで慣れていった。

そんな折、ホーエンハイムと名乗る男を拾った。

普段ならばそんなことはしなかったが、その時は一目見て身体が勝手に動いていた。居場所を失った私とどこか似ているような気がしたことが理由なのかもしれない。

それほど時間をかけず、ホーエンハイムとは気が置けない仲になっていった。

偏屈な私には珍しいことだった。

話の核となる部分はぼかしつつ、互いのことを色々と話したように思える。

傷のなめ合いだったのかもしれない。

ただ、ホーエンハイムと、唯一無二の友との話は私にとって転機となったのも確かだった。

友が零した錬金術という、この世界特有の技術が手掛かりになるのではないかと気付いた。

“むこう”では錬金術はオカルトの一種のような印象を持っていた。

“こちら”も同様だと、知らず知らずのうちに決めつけていたため、ほとんど調べてはこなかった。

あまり知識が出回っていないことも拍車をかけた。

実演された錬金術は、出鱈目としか言いようがなかった。

次々と錬成される度に、無から有を生み出しているのではないかと思つたほどだ。

奇跡を見た気分だった。

そして希望を抱いた。

この技術ならば、現実と戦えるはずだと。

アメストリスの大地に立つて70年を超え、第二の故郷とも呼べるようになった。

それでも日本を忘れることはなかった。

日夜錬金術に邁進した。

肉体や臓器を奉げることも厭わなかった。

そして、今ならば帰る事ができるかもしれないと期待できるほどになった。

残された時間は少ない。

ならば抱いた希望に賭ける以外、私が取るべき手段はない。

初めて錬金術を使ったときに使用した白いチョークで錬成陣を描き、中央に立つ。

願掛け代わりだ。

足りない肉を補うためにばら撒いた、人体錬成に必要な材料が足裏を汚した。

思考が「むこう」への思い出に染め上げられた。

奇跡に祈るように手を合わせ、ゆっくりと両手を床に付ける。

脳裏に一瞬だけ奔ったのは、骨を埋める覚悟ができなかったことに対する後悔だっ

た。

5度目か、6度目か。

幾度となく訪れた白い間に、再び立っていた。

私の腕を、脚を、瞳を、臓器を、持った何かが笑いかけた。

長年連れ添った身体は徐々に崩壊していく。

枯枝のような四肢が消え去り、真理の記された門が開く。

セフィロトが描かれた扉は、その偉大さから何度見ても魂を揺らさされているように感じた。

先の見えない闇。

欲望を見透かすかのごとく見つめる無数の瞳。

引き寄せるように、掻き抱くように、伸びる無数の手。

“ここ”で得た全てを持って行くがいい。

私は帰るのだから、何も要らない。

全てに委ねる。

この先に、私の世界があると信じて。

扉の外では、私が、俺が、嗤っていた。

見慣れた黒髪と黒い瞳が目に焼き付いたように離れなかった。

目の前が黒から白に変化し、目覚めた。

慣れていたため、状況の理解は早かった。

錬成した時と同様の、知っている天井だった。

失敗したことを瞬時に理解した。

再び絶望の淵に立たされた。

もう一度だ。

成功するまで何度でも。

時間は無い。

勢いよく起き上がる。

平時よりも遥かに力強く起き上がった。

逸らせる気持ちちが身体を突き動かしたのだろうか。

いや、違う。

身体が全く別物となっていたためだ。

老いぼれた手足は瑞々しい若者のそれと同様だった。

いつもと同様の失敗だが、いつもと異なる状況だ。

何が起きたのか。

焦りで息が詰まったのか咳き込む。

血が流れ出た。

鉄臭さに顔を顰めるが異変に気付く。

血が止まらない。

そして感じる喉の痛み。

喉に触れると皮しかないことに気付く。

持つて行かれたようだ。

触診の後、手早く錬成する。

組織と組織を繋ぎ合わせるあまりに無茶苦茶な治療。

だが、問題ない。

どうせ贄でしかないのだから。

軽い身体に違和感を抱きながら鏡を探す。

見つけるまでにあまり時間はかからなかった。

驚愕のあまり叫んだが声は出なかった。

気道から空気が強く抜ける音だけが耳朶を打った。

若く変貌している自分の姿を見たからではない。

日本人らしさが失われていたことに、悲鳴をあげたのだ。

黒から白へと変わった頭髪、銀に近い灰色の瞳、色素を失った肌、骨格……。

何もかもが変わってしまった。

鏡を見ることで“むこう”を覗き込むことができなくなった。

繋がりが失われたのだ。

日本人だった、新弥にいや 悠里ゆうりとともに。

イシュヴァールの内乱は軍将校がイシュヴァール人の少女を射殺したことから始まった。

1901年のことだ。

アメストリス兵とイシュヴァール人の屍が日々積み重なり、滴る血が日々大地に浸み込んだ。

終わりの見えない泥沼の争いだった。

1908年、戦線への国家錬金術師投入が決定された。

戦争は直に終わると、誰かが言った。

内乱の鎮圧はイシュヴァール全土の殲滅戦へと移行した。

戦場へと足を踏み入れ、さて何日が経つただろうか。

反吐が出るような糧食と反吐そのもののようなコーヒーにも慣れない。

慣れたくもない。

あれで士氣に関わらないのだろうかと疑問を抱く。

刺すような強い日差しを送る太陽は禍々しきささえ感じられた。

乾ききつた空気が熱された砂漠には未だに慣れない。

砂が口に入らないよう防塵のため布で顔を隠しているが、蒸れて鬱陶しい。

ごてごてしたゴーグルは砂漠用にと改造したものだ、重くて苛立ちが募る。

歩みが遅くなるのが機嫌を損ねてしまう原因だろう。

若くなつたことで、精神的な起伏が激しくなつたように思える。

遅々とした歩みの後、軍靴の跡が刻まれる。

目的の街を視界に収め、幾分の棘だつていた気分が和らぐ。

偵察のため、送つた斥候の人数が減つていた。

イシュヴァールの僧兵の強さに舌打ちする。

それを自分への怒りと捉えたのか、目の前の兵士が身体を震わせた。

先ほどもでの苛立ちを隠さなかつたことも勘違いを助長させたようだ。

怪我を負っている兵士の肩に手を乗せると面白いくらいに表情が歪んだ。

目の端には涙が浮かんでいる。

泣きだすくらいまで脅そうかと思つたが、戦場で遊ぶほど私にも余裕がない。

怯える兵の傷に消毒薬をぶっかける。

そして、軽くだが治療するために錬金術を行う。

傷口の周りだけ自己修復機能を促進させ、感覚を麻痺させた。

裂けた傷口を手早く縫い合わせた。

「あの……ありがとうございました!!」

あまりの音量に耳鳴りを感じた。

イシュヴァールの僧兵に居場所を知らせるスパイか、こいつは。

馬鹿の頭をひっぱたき、手を振って下がるように指示する。

十分な位置まで下がったようだ。

馬鹿の他に治療が必要無いことを確認し、力の流れに沿って錬成を行う。

目の前が陥没し、砂が穴へと流れていく。

砂中を這いずるような錬成反応が街へと奔り、その後を追う様に陥没していく。

街へとたどり着くと、一際大きく穴が空いた。

そして遅れて地鳴り。

「……しゝばらゝぐだいゝぎ」

地の底から響くようなおぞましい声。

上手く発声することができないためだ。

振り向くと部下たちの竦み上がった様子が見え、動くことはないだろうと考えた。

拠点に戻ればスピーカーがあるので、もう少しはマシンになるのだが。

チョーカー型の小型スピーカーでも作ってみようかという思考は片隅に退けて、街を観察する。

そろそろか。

腹の底が揺らされるほどの大きな音が鳴り響く。

街が砂煙をあげて沈んでいく。

大人も、子供も、老人も、一切合財が地へと呑み込まれてゆく。

何もかも、全てが生きた大地に飲み込まれていくのだ。

「ね、ぎり」に「じろー！」

頃合いを見計らって、呆けている部下を叱咤する。

何度も見ても慣れないようだ。

それでも良いと思う。

だが、こういった方法を変えるつもりはない。

被害を少なく済ませることのできる効率の良い殺し方だからだ。

原作：Project . hack どつと吐く自由1

— 1

暗転、しかし数瞬と経たないうちに目の前には様々な光景が広がっていた。

口々に会話するPC（プレイヤーキャラクター）、背後で煌きとともに絶えずPCが入りしている転送装置「カオスゲート」、石造りの床とどこどこが朽ちて欠けていてゲームのグラフィックとは思えない。

アイテムを売り買いできるショップ「キオスク」や記録をセーブすることのできる「セーブ屋」を横目に、ゆっくりと自らの分身ともいえるPCを歩かせる。

石床を蹴る足音が小さく足元が聞こえる、そういつたちよつとした作り込みが好感を持てた。

巨大な扉が開き、薄暗かったドーム内に光が射した。

照らされる夕日に目を細める。

△（デルタ）サーバ 悠久の古都 マク・アヌ、少し型の古いディスプレイ越しに分身の瞳を借りて見える風景はやはり美しかった。

マク・アヌは初めて『The World R:2』をプレイするプレイヤーが訪れる場所だ。

放浪していた人族が苦勞の末にたどり着いた安住の地だ。

水が街の至る所に流れ、蒸気パイプが張り巡らされ、街並みは古めかしい。

歴史を感じさせるマク・アヌは「女神の息子」という意味を持つ、そう設定されている。

ヤクモはそういったゲーム内の設定が好きだった。

暗記するほど、何度も読み解くほどではない。

暇があれば流し読みする程度だがゲームを始める前に読む説明書のようなちよつとした楽しみのようで、そういった散りばめられた設定が好きだった。

PCを運河の棧に移動させ、景色を楽しむ。

水面が揺らぎ、水が柱や壁にぶつかって、ちやぶちやぶと音を立てる。

夕日が現実の時間に合わせてゆっくりと沈んでいく。

時間とともに変化する様は見ているだけでも飽きさせず、製作者のこだわりを感じさせた。

そんな美しい風景を眺めながら、横目で交流サイトを徘徊する。

興味が惹かれる話題は一切見つからなかった。

サービスが始まって半年ばかりでデータの検証組は元気に走り回っているが、噂話を主軸に活動するオカルトの検証組はマンネリと言った具合だった。

燃料投下とばかりに最近見つけたロストグラウンドを公開する。

ヤクモは時間をかけて搜索し尽くしており、問題ないと判断したためだ。

白熱し出した論争によって加速していくスレッドを閉じる。

同時に電子音が鳴り、ゲーム内での連絡用に使われるショートメールが届いた。

所属ギルドから決めた通りの方針で暫く活動するようにとの内容だった。

手短かに理解した旨を記し、返信する。

沈む夕日が現実としての一日の終わりを、ゲームとしての一日の始まりを感じさせた。

ギルド、一つの目的のために複数人のPCが集まって活動する団体のことだ。

ヤクモが所属しているギルドは「黄昏の旅団」、幻のアイテム「キー・オブ・ザ・トワイライト」を見つけることを目的としている。

ギルドマスターはオーヴァン、左腕は巨大で奇妙な装飾品に覆われている色眼鏡をかけた大柄な男のPCだ。

メンバーは三人、マスターのオーヴァン、呪療士の小柄な女性PCを使用している志

乃、そして双剣を操る軽装のヤクモだった。

ギルドに誘われた切っ掛けはロストグラウンドを交流サイトに公開したこと、そうヤクモは考えている。

公開するとすぐに声をかけられたのだから、想像ではあるが確かなのだろう。

どのような方法で調べたか、疑問は抱いたがあまり気にはならなかった。

ただ、「キー・オブ・ザ・トワイライト」が目的であるという言葉に強く惹かれた。ヤクモには懐かしい単語だった。

突如として公開停止の憂き目にあつた前作である『The World R:1』で友人が手にした腕輪、確かそれが「キー・オブ・ザ・トワイライト」だった。

苦難を乗り越えた末に仲間たちと過ごした日々は今尚古ぼけることのない輝かしい思い出だった。

オーヴァンはそれを、腕輪を求めているのだろうかと問いかけたことがある。人によつてはバグを取り除くような、単なる腕輪ではない。

返つてきたのは否定、そして「もっと深い、世界の神が願いを叶えるほどのモノ」という言葉だった。

オーヴァンはこの世界の神に何かを求めているようだった。

ヤクモは神の行く末、女神の居場所を知っている。

ヤクモの両腕に嵌められた七色に輝く腕輪を残して、システムの中枢へと旅立った。

『The World』の最も深い場所へ。

そこから呼び戻すためののだろうか、そう考えたこともあった。

だが、答えに至ることはなかった。

シヨートメールに書かれていた以前に決めた方針、それはギルドメンバーを集めることだった。

手掛かりを集めるにしろ、闇雲に探すにしろ、人手は必要だ。

メンバーを募る際にギルドの活動方針が大きく関わってくる。

大型ギルド「ケストレル」が掲げる完全な自由やこれに次ぐ大型ギルド「月の樹」の秩序、TANの経済による自立など、所属するだけで強みがあり、ゲームでの活動の指針を決めるようなモノが多い。

「黄昏の旅団」はそういう面ではかなり弱い。

「キー・オブ・ザ・トワイライト」という眉睡なアイテムを探すことを目的としたギルドなど、変わった物好きや偏屈なオカルトマニアがやってくるかすら疑わしい限りだった。

前作でもヤクモは自分から仲間を作りに行く機会がほとんど無かった。

その場のなし崩しだったり、友人が紹介してくれたり、苦労したことも無い。

そもそも見ず知らずの他人と会話し、ギルドに誘えるほどコミュニケーション能力は高くはないし、人を見る目は養えていない。

この奇妙なギルドに昔からの仲間を誘うのは気が引けた。暫し逡巡した後、ヤクモは悩むのを止めた。

オーヴァンが何とかするだろうと思いつたからだ。

悩みが解決すると、なんとなく戦闘がしたくなってきた。

すでに日は暮れていて、仲間を呼ぶのも微妙な時間だった。

今日はソロプレイにしよう、ヤクモは内心でそう決めるとカオスゲートのあるドームへとPCを動かした。

最近公開されたクエストに突撃するべきか、それともケストレルのメンバーがPK（プレイヤーキラー）の狩場に行っていると噂されるエリアにでも行こうか、心の秤にかける。

秤は様々な情報を加味してゆつくりと傾いていく。

そして完全に傾き切り、ヤクモの今夜の方針が決定した。

手ごろに経験値が詰めるであろうケストレル食い放題に突撃今夜の晩御飯、そんなフリーズが思い浮かんだ。

斬撃の赤く輝く軌跡が、点在していた黒い泡を消してゆく。

美しい世界に蔓延った汚れを濯ぐように。

神々の怒りに触れ、祝福されしエルフから卑徒に墮とされた愚かな人の禁忌によつて生まれた知性が、泡沫の如く。

その様を、ヤクモは静かに見送った。

プレイヤーキャラクターの瞳はセルロイドの人形のように、感情は浮かんでいない。

当然だ。

だってゲームなのだから。

プレイヤーとゲームには、境界が存在している。

三尖二対の双剣で、汚れが付いたとばかりに軽く宙を切った。

そして、黒い泡の一切が消え去った壁に背を向け、ヤクモは歩き出した。

禍々しく毒々しい三尖二対の双剣は、既にその手には無い。

歩きながら、ゆっくりと右手を掲げ、厚手の皮で出来た丈夫な手袋を嵌めた指先から

手首まで見つめる。

自他の境界だけを、はつきりと。

境界は、無残に引き裂かれた檻樓を無理に繋いだような継ぎ接ぎの腕と、軽装を纏った誰にでもエディットすることの出来るPCボディ。

違法と合法の繋ぎ目。

かつての残骸が、ヤクモの意志通りにゆっくりと、繊細に動いている。

ゲームの仕様には有り得ないほど精密に、プレイヤーの意志を受け取って、手を翳す。薄暗い洞窟の中で、まるで地上の太陽に透かすように。

白衣のフィリにも黒帽子のビトにもなれなかつた想いから、影持つ者への憧れから、世界を投影した夕暮れ竜の光から、隠すように。

指が月を、光を指し示すとき、愚か者は指先を見ない。

あまりに強い光に、目を明けることすら出来ない者は、やはり愚か者なのだろうか。

鈍色の寒空の下で、車椅子に坐した八雲葵は平生よりも遥かに上機嫌だった。

首から下に軽い麻痺がある葵は好んで外に出かけない。

一人で暮らすには、時間をかければ不自由しない程度だが、やはり健常とは程遠かった。

奇異の目に晒されるのは慣れてるが、“普通”のために構成された社会に適応できていないその身に、外の世界を無意味に彷徨うことは酷く難しかった。

中学生までに培った“普通”が適応を許さない、だから妥協している。

生じる歪みが、外の世界から、リアルから、自身を遠退ける。

だが、今日ばかりは違った。

約束のために、自ら葵は外へと赴いた。

色恋といった鮮やかな約束ではない。

ネット上の友人との約束だ。

首元から吊り下げた懐中時計が、約束の時間へと少しずつ針を進ませる。

かちこちと時を刻む時計の裏には簡素な花が彫金されていた。

梔子だったか、送り主の好みの花だ。

高価だっただろうにと鈍い動きで時計に触れる。

思わず射した、強い照り返しに目を細めた。

夏が過ぎたとはいえ、まだ暑さが尾を引いている時分、当然のように日の光もまた強い。

八雲の額には薄らと汗が滲んでいた。

「待たせたか」

懐中時計を貰った時の思い出に意識を飛ばしていた葵を覆うように影が差し、落ち着いた深みのある声がかげられた。

ゲームで頻繁に聞く声だったが、デジタルの壁を越えた音ばかりだった。

無意識に、地面へと向けていた視線を上げる。

声の主は背の高い男だった。

容姿は整っていて、背は高い。

ノンフレームの眼鏡を通した瞳から、穏やかさと秘めた知性を感じられる。

「まあまあかな。俺が早く来たのが悪かったけどね」

ほら、と葵が車椅子の車輪を軽く叩いた。

触れた手が、籠っていた熱を感じた。

ああ、と男が頷いた。

車椅子は人があまりいない場所ならば、普通の歩行よりも速く移動できることもあるが、やはり電車などを利用する場合は酷く遅くなる。

段差、隙間、通行人、砂利道、極端に狭い通り。

不便を上げればキリがない。

「ああ、そうだ。八雲葵です。初めまして……というのはちょっと変だけど」
葵が手を差し出す。

室内にばかり籠っているから、白さが眩しい。

男も高い背を屈ませ、応えるように握手した。

「犬童雅人だ。好きに呼んでもらって構わないよ、八雲君」

そうして、犬童が自然に葵の後ろに周り、座る車椅子を押し出した。

自然な動きだった。

慣れているのだろうか、葵も犬童という男のリアルを詳しく知らない。

知っているのはオーヴァンというPCでギルドを率いる変人、誰もが抱く印象とほとんど変わらない。

その人物に車椅子を押されているという緊張で、葵の麻痺した身体が思わず強張る。拒絶するには、精神が近すぎる。

「ここは暑すぎるな、話すにも場所が必要だろう。良い場所を知っているんだ」
コーヒーの味はイマイチだが、長居するには良い。犬童がそう告げた。

「犬童さん、上手だね」

「ん？」

「車椅子、押すの」

ああ、と犬童が漏らした。

車椅子を操る手に迷いは無く、長年座っている葵をしてストレスを感じさせない。

巧い、そう押すのが巧いのだ。

繊細ですらある。

「慣れてるからな」

「そう。家族かな」

「妹、それもかなりの歳の離れた」

病気か、身体が不自由なのか。

どちらだろうか。

葵がわかるのは……

「大事なんだ」

「全てに代えても良いくらいには、な」

優しさの伴った手つきから、妹をととても大切に思っていることくらいだ。

「それは素敵だね」

それっきり会話が途切れた。

葵は固くしていた体の緊張が、自然と解れ、身を委ねていた。

— 2

「それで……」

犬童が葵を連れて来たのは、人のいない閑散とした喫茶店だった。

挽いた豆の香ばしいの匂いが漂っている。

葵は車椅子から木造りの椅子へと座を移していた。

窓際の席、人気のない川沿いを楽しむことが出来るようだ。

「『黄昏の鍵』の話だっけ」

『黄昏の鍵 (キー・オブ・ザ・トワイライト)』にまつわる詳しい話を聞きたいのだと、オーヴァンに頼まれて、この約束は果たされた。

自分を進めるべきだろう。

犬童に問いかけ、葵が目の前に置かれた真っ黒のコーヒーを煽る。

香りはいいが、葵には酷く苦い。味の良し悪しはわからない。

机に備え付けられているポジションに入ったクリームを垂らす。

拙い手で握ったティースプーンを、ゆっくりと回す。

燻るように、黒の中に円を描き、純白は混ざっていく。

「それも興味があるが、一度混ざってしまったコーヒーとミルクを君ならどんな風に分離する？」

「どんなって」

犬童へ向けていた視線を、目の前で混ざり合った、少しだけ茶色を帯びたコーヒーに落とす。

逡巡。

なんとなくコーヒーを啜り、まだ苦みが強いのだと砂糖を足した。

「あ……。この場合、砂糖も分ける必要が」

質問の前提を少しだけ変えてしまったことに、気不味く感じながら、犬童の瞳に視線を戻す。

「あるかもな」

喉を鳴らして、犬童は笑った。

何処か浮世離れた霧囲気を醸し出していたが、その笑みは人懐こい物だった。

「コーヒーとミルクそのものを分離するのは難しい、というか出来る気がしない。砂糖なら、まあ、蒸発させたりを繰り返せば、できる気がするけどね」

先ほどのミスから逃れようと、葵は話を続ける。

「そうだな、出来はしないだろう。そもそもする必要もない」

「前提を変えたら出来る、かな。どっちか認識とか物理的に消滅させて、どっちかだけ残す的な」

「それだと分離したことにはならないだろう。元から一つだった、そういうことになる」
「両方、消すとか？」

やはりそうなるか、犬童が呟いた。

どうなのだろう。

葵は振り返る。

自らの食われた精神、魂はゲームの中に彷徨っているだろう。

混ざり合っているだろう。

まさにコーヒーとミルクのように。

何時か戻ることはあるのだろうか。

有り得ないとは思いたくない。

妥協はした、だが、機会があれば取り戻したいのが本音だ。

「実験室に存在するフラスコのように、条件を変えられるのならば或いは」
葵が半ば無意識に呟く。

ただし、それは現実の実験室やフラスコでは不可能な話だ。

コーヒーとミルクを分離できる、そういう設定に則るように全てを変える必要がある。

無駄な労力だ。

その全てを変えることが出来るような、設定できるような視点に立たなければならぬ。

もっと神に近づく必要がある。

それが個人にとって無駄ではないとしたら。

「試す価値はあるのかどうか。女神すら与り知らぬ……」

犬童がまた呟いた。

何かに意識を巡らせているのか、視線は窓の外を向いたまま。

これが彼の、変人たる由縁だろうか。

少しの間を置いて犬童が、葵と視線を交わらせた。

戻ってきたのだろう。

「待たせたか」

待ち合わせの時と同じことを口にした。

なんだか面白かった。

葵はそれを内に隠しながら「それでもないよ」と返して「何を考えてたのか聞いても？」と続けた。

「青い鳥について、かな」

求める人の数だけ存在する、幸せの青い鳥。

人によって様々な願いに対応する。

面白い表現だ。

理解がある。

『黄昏の鍵』は人の数だけ。そして人によって形を変える。

「いいね、それ」

素敵な表現だ。

女神が喜ぶような、夢のある形。

葵の声が、心なし弾んだ。

「青い鳥は人の想いだけ、『黄昏の鍵』も人の心だけ。代わりのない唯一を示してるんだろうね」

目の前に置かれた、ホイップクリームの白さが眩しいショートケーキをフォークで突つく。

彩るように添えられた、苺の鮮やかな赤みが、食欲を湧かせてくれる。

漂うのはとても甘い砂糖とクリームの香り。

コーヒーの香ばしい香りと混ざって、何とも表現し難い。

それも悪くないように、葵には思えた。

「さて、『黄昏の鍵』の有無だっけ。あるよ、絶対」

PCだったり、アイテムだったり、エリアだったり、人によって様々な形で。

葵が続ける。

「価値あるアイテムとか、友情とか。そういった誰にでも分かる物じゃない」

「屁理屈の状態とは異なる、と」

誰にでもわかる心温まるエピソードやレアアイテムのような、誰にでもわかる体を成していない。

己だけが求めた姿。

だから“屁理屈の状態”とは異なるのだ。

うん、と答えながら葵は苺を頬張った。

好きな物を残しておく性分らしい、ケーキは皿に残っていない。

「求める者にとつて求める儘に。ただ、それが見えるかはわからない。振り返った時自分だけ分かるのかもしれない。だって個人にとつての唯一だからね」

犬童が表現した“屁理屈の状態”と殆ど変わらないかもしれない。

葵は有ると断定できるが、何処にあるかは答えられない。

だって知らないから。

望みは人の心だけ存在している。

『黄昏の鍵』を欲する望みが浅ければ、何時かは必ず」

人によっては何処にでも転がっているアイテムが、唯一のときだつてある。

エノコロ草、スパイラルエツジ、友情、愛情、黄昏の腕輪。

“屁理屈の状態”と重なる部分も多い。

分離するのは困難だろう。

人の心だけ存在している、そんな領域だ。

「例えば、望むものがあやふやで、女神にしか成し得ないような奇跡の場合は？」

「無理に届かせなければ、有つても分からないし、使えない。ひよつとすると耐えられないんじゃないかな」

精神の距離を、アウラまで。

葵が呟いた。

あまりに奇跡に等しい願いならば、神と同等の視点に立たなければわからない。

求める『黄昏の鍵』が奇跡ならば、『The World』にかつて存在した女神に近づく必要がある。

「奇跡を蓋然性の高い段階まで自ら近づかなければならない、そういうことだろうか」

犬童が自分の冷えたコーヒーを流し込む。

可能性は何時だって存在する。

簡単なら気付けば達しているし、難しいのなら自然と逃す。

無意識でも行われていることだ。

ただ、奇跡が目の前に顕現するレベルまで引き寄せるためには、近づかなければならない。

奇跡を、必然にまで。

少なくとも、偶然にまでは。

それらを考慮して「オーヴアンが求める『黄昏の鍵』はどの程度だろう」と葵が訊ねる。

奇跡を追うのか。

追うとして、精神の射程をどれほど近づけるのか。

「曙光の都アーセル・レイへと至る途を探すくらい」

犬童が笑う。

莫迦なことを言っているだろうと。

曙光の都アーセル・レイ、神々が卑しい人を見限って去った場所だ。

天上の途を見つけなくば辿り着けない神話の地。

『The World』の設定を擬えたのなら、それは贖罪の旅だ。

英雄にも、好奇心に駆られた愚か者の目的ではない。

「本当に探しているなら、俺も良い場所を知ってるよ」

葵はそれが莫迦なことだとは思わない。

誰にだって、何にだって必死になることは有るのだから。

かつて見た勇者だって、愚直に進んだ。

『黄昏の鍵』と同じなのだ。

人の心、精神の数だけ、存在する。

だから教える。

隠されている美術館を、『The World』に深く接する可能性を見出す場所を。

—— 2 θ 隠されし 禁断の 展覧会

巨大な青銅の扉、その横に刻まれた傷が赤く明滅した。

そして、オーヴァンとヤクモの姿が現れた。

「ゲートをちよろまかしてゐるから誰も知らないよ。多分。A u r a はどうかな」

ようこそ、バル・ボラ美術館へ。ここを利用するなら傷を使つてね。

そう言葉だけ残して、ヤクモは継ぎ接ぎの腕で扉を開け、先に進む。

その後を、左腕が異形へと変異していた銃戦士のオーヴァンが付いて行く。

オーヴァンを歓迎したのは、積み上げられたデータの山だ。

未整理の情報。

書籍の状態だったり、裸のまま羅列した電子記号のままだったり、姿は様々だ。

無造作に置かれていたり、飾られている美術品も、瞬く間に姿を変えていく。

「愉快な場所だな。ここなら何でも知った気になれそうだ、きつと愚者がよく育つ」

オーヴァンが、手元にあつた電子媒体に目を通す。

内容は、C C 社が火事で焼失したはずの情報だ。

他にも視線を巡らせば、消え去つたR : 1 の情報で溢れている。

「賢者も育つよ、と言いたいけど。利用しているのが俺だけだから察するしかないね」

オーヴァンは賢者か愚者か、どちらをを目指すのか。

ヤクモが目線で訊ねた。

返事は無い。

笑みを浮かべ、手にしていたデータを床に置くだけだった。

ヤクモの先導に従って、オーヴァンも続く。

“故郷”と題された額縁に、ヤクモの両親が住む土地が映し出され、続いて外国の病院が映し出された。

通り過ぎながらヤクモが口を開いた。

静かな美術館には、音量が小さくともよく通る。

「これ、故郷が映るらしいよ。俺の親はどうにも面倒を見るのが嫌になったらしいんだ、だから俺は東京で一人暮らし。オーヴァンは外国生まれ？」

「あれは妹の病院だな」

俺はあまり定住しない、性に合わないことばかりだな。そうなんだ。

二人は訥々と会話を交わしながら歩く。

飾られた美術品は数多あり、全てが異なる“絵”を見せる。

話題には事欠かない。

内装ががらりと変わる。

落ち着いた都内の美術館の廊下と言った通りから、エスニック調の部屋へ。

二つの台座が目に入った。

「カイトとAurad」

ヤクモは、デイスプレイ越しに、己の過去を見た。

PCながらも決意を秘めた強い瞳を持つカイト。皆が勇者だと讃えるが、実際の姿を知っている者は少ない。

夢中で、電子の海の遥か深い所に潜ったアウラ。かつて『The World』の中
枢を担い、そして見守るために去っていった。

「アイナ……」

オーヴァンが思わずと言った具合に漏らした。

見る人によって変わるのだろう。

ヤクモにはカイトとアウラだった。

オーヴァはまた違う姿。

「母胎と男根を模した像、か。自我と意識、自己に繋がる道……」

オーヴァンが呟いた。

己を成した故郷などの環境。

それぞれによって見える男女が変わる像、それは男女を記号的に模した物。分身であるPC。

意味するのは境界の不明な自分という存在だ。

「よくわかるね。俺にはさっぱりだ」

「この司書だろう、展示品が泣くぞ」

ヤクモがその言葉に首を振る。

司書はいない。

単にR：1時代に見つけただけのロストグラウンドだ。

元型であるfragmentから脈々と繋がる、データの遺産。

「ここに司書はいない。誰だって自由に使っていんだよ」

誰にでも使えるわけではないから公開はしないけど、と続けた。

「誰も知らないのなら、それは無いのと同じこと」

オーヴァンが呟いた。

芝生が敷き詰められた中庭を抜け、木立の中にある小さな建物へと足を運ぶ。

小規模の教会。

ヤクモが扉を開けると、天窓から射し込む光に照らされた内部が見える。

寂れた内装は、土ぼこりが待って、人が踏み入れなくなつて久しいのだろう。

酷くりアルだ。

「すべての元を生み出したハロルドは天才だったらしい」

仲間がそう言つてただけで俺にはよく分からないけど、と葵が教会の先にある渡り廊下を進みながら言つた。

「究極AIを作り、娘を生み出す。その過程でモルガナと呼ばれる揺り籠を作り、人をサンプリングした」

廻廊を抜け、ロストグラウンドを映し出す絵画を横目に、歩みは止まらない。

「なにを視て、なにを聴き、なにを嗅ぎ、なにを味わい、なにを触れ、なにを意識したのか」

「モルガナ・モード・ゴン」

オーヴァンから発されたモルガナの名に、葵がちらりと視線を向けた。

究極AIを生み出すための母胎、ただの揺り籠、それがモルガナシステム。死を恐れ、無理やり孕まされた娘を殺そうとした鬼母。

生むことしか存在の意義がなかったシステムは、拒否して狂っていった。

歪みは波となった。

波状の如く、形を変えて、様々な影響を残した。

「なにゆえに知覚する。わたしがいるからだ」

何処までも球形の特別展示室。

扉が仰々しく音を立てて開いた。

八角形を成すように、八つの台座が並んでいるだけの部屋。

「より高次元で演算された器官、その元型の八相。オーヴァン、『黄昏の鍵』が絶対にあると俺が断言できるのはハロルドが天才だからだ。『The World』は深い部分でプレイヤーと繋がっている、理解できるかな」

「誰よりも、心底に」

「それは素敵なことだ。そして最悪でもある」

オーヴァンの目の前にある台座から、像が浮かび上がる。

半透明の、人の目を象ったような種だ。

ヤクモが戦えなかった、倒せなかった波の姿。

「その缶詰はコルベニク……か」

「缶詰か、面白い表現だ。だが、お気に召さなかったようだな」

「まあね」

「それなら如何する？」

「如何もしないよ。中身がどうだろうと、パッケージされているなら無理に開けない」

それは俺の役目ではないのだろう。

発することの出来ない言葉が、ヤクモの口の中で溶けていった。

「何時かそれを後悔するかもしれない」

「構わない。常に成功することなんて無理なんだ。誰かに任せるよ」

ヤクモには、ミルクと混ぜたコーヒーを分離させることは出来ない。

出来るのは消滅させることだけだ。

もしかすると、消滅させることすら出来ないのかもしれない。

任される誰かは、勇者か。

もしくは『黄昏の鍵』か。

オーヴァンの求める奇跡が重ければ重いほど、誰かが奇跡へと重なっていく。

そして、オーヴァンはアウラへと精神の射程を詰めることになる。

「俺は好きな物を残しておく性分、なんだと思うよ」

生身の躰が邪魔になる。

唯、識だけに。

ハロルドが辿ったように、オーヴァンも辿るのだろう、それがヤクモは嫌だった。今は問題を遠ざけただけに過ぎない。

原作：魔法少女リリカルなのは リリカルूप1―10

0

『1周目』

ニューゲームである。

ただし、強くてニューゲームかはわからない。

誰かに呼ばれた気がしたが眠かったので夢だったのだろう。

それから1週間くらい経った日曜日のサッカーの帰りに胸を貫く激痛とともに意識が遠退いた。

何が起こきたし。

『2周目』

またもや同じ条件で赤子に転生した。

強くてニューゲームのときはいきなり人生がコンティニューだったからわからなかったがどうやらあれは死んだらしい。

初めて死んだというのに無味乾燥ものである。

死ぬ恐怖で「うわああああああ」と叫んで修羅と化し、ヒロインたちに「あの人は悲しい過去を背負っているのね……」と勘違いされたかった。

再びサツカーを行った。

警戒しながら家路に着く。

碎ける建物の奥から現れたのは木の幹だった。

予想外です。

俺は死んだ。

『3周目』

はいはい、コンティニューコンティニュー。

引き継ぎは記憶のみ。

自室で寝ていると誰かの呼ぶ声が聞こえた。

心霊現象怖いと布団に隠れた。

今回は無難に過ぎず。

サツカーに行かなければ「ジュレイモン」もどきに殺されないに違いない。

油断した。

ジュレイモン以外にも化け物がいたとは……。

『4周目』

この街はおかしい。

俺が小学6年生に進学すると化け物とエンカウントするようになってとか無理ゲーすぎる。

今回は大丈夫だろうと油断することは出来ない。

なぜなら今回こそは生き残れるようにと神頼みをしに神社へ行って巨大な犬に食い殺されたからだ。

神め……。

『5周目』

なぜか今回は高町さんちに双子の兄がいた。

竜也くんという子だ。

素直で頭が良く、とてもいい子だった。

まあ、変化はそれだけだったけど。

俺を呼ぶ声も聞こえた。

死因はプールが荒ぶったことによる溺死。

最高に苦しかったので勘弁してください。

『6周目』

どう抗っても死ぬ。

どう抗っても俺である。

今回は体力を付けようと思つて夜にジョギングしていたんだが、でけえ黒い化け物に下半身を食いちぎられた。

『7周目』

まとも声が聞こえた。

どうやら奇数周には声が聞こえるらしい。

声を辿つて行くとイタチが死んでた。

おお、怖い怖いと埋めておいた。

数日後、街に溢れかえる化け物に潰された。

『8周目』

ちよつと無理ゲーだろつて気がしてきた。

化け物が出現するとかどんな街だし。

闘うのは論外だ。

回避に徹してみよう。

ジュレイモンは俺に怨みがあるらしい。

『9 周目』

やつの幹は回避できん。

家ごと潰すとか何事だし。

声が聞こえたので、今回もたどることにした。

よく観察してみたがイタチはどうやら生きているようだ。

動物病院に連れて行った帰り道、でけえ黒いケルベロさんとエンカウントした。

なん……だと……。

『10 周目』

ひきこもる↓死ぬ

外に出る↓死ぬ

サッカー↓ジュレイモン↓死ぬ

イタチを埋める↓死ぬ

イタチを助ける↓ケルベロさん↓死ぬ

プール↓死ぬ

どうしろと……。

他の街へ逃げようと思ったが無理だった。

俺には近くに親戚がないのだ。

駄々こねても親に迷惑をかけるし、死ぬだけだから我慢するしかないようだ。

心配してくれる竜也くんだけが俺の癒しだよ。

撫でると赤くなるとか超かわいい。

まあ、俺も竜也くんも男なんですけどね。

双子なんで妹と似ているし、大丈夫だ。

散歩してたらケルベロさんに襲われた。

ちくしょう。

『11週目』

とりあえず、小6になるまでになんとか対策を……と思ったら車に轢かれて死んだ。

少女二人を誘拐しようとして俺が邪魔だった、的な流れっぽい。

車は壁にぶつかって止まったので、誘拐は失敗じゃねえかな。
途中で死んだからよくわかんないけど。

『12周目』

声を聞く前に死ぬということもあるので超注意だ。

とりあえず目立っても、目立たなくも死ぬというある意味で後先考えずに生きていく。

学校に通わずにグレてみた。

流石ジユレイモンさんやでえ……。

『13周目』

声が聞こえたが眠かったので無視した。

次の日、気になったので行ったら、何時だったか誘拐されかけた少女二人と高町さん
ちのなのはちゃんがいた。

イタチを保護したらしい。

新しい√を開拓した気分になった。

バーニングさんに睨まれて、森に逃げたら迷った。

夜遅くにやっとの思いで森から出たら化け物に食い殺された。

『14周目』

ペン回ししてて気づいた。

少しだけ技術を持ち込めるんじゃね、と。

コツを保有したままニューゲームが出来るらしい。

光明が見えた!!とばかりに神様にお礼を伝えようと神社へ走ったら死んだ。

神社は鬼門だと忘れていたぜ。

『15周目』

高町さんちの翠屋のシュークリームをもしやもしやしなから思った。

クリームが超うめえ、と竜也くんと一緒に食る。

その夜、声が聞こえたので迎ろうとすると途中で竜也くんがいた。

夜遅くに出かけるとか危ないので連れて帰った。

今回は散歩してもケルペロさんに襲われないという幸運な周らしい。

とか思っているとジュレイモンさんですね、わかります。

身構えていると、謎の服装に身を包んだ竜也くんがバリアーして守ってくれていた。

おにいさん、君の優しさに感動したよ。

そこでさっさと逃げればよかったのに助かったと油断してたわけで。

ジュレイモンさんが追撃を寄越してバリアーが割れて、俺が身を呈したとかいう感動のシーン。

笑いながら死ぬあたり、俺も慣れたモノですよ。

竜也くんもそんな泣きながら叫ばなくもいんだよ？

まあ、どうせ復活するからいいやって感じだったし。

竜也くんも大袈裟だよね、まったく。

『16周目』

周回を重ねるごとに見えない技術ポイントが見えないところで溜まっているに違いない。

だってペン回しが凄いいもの。

まるで生きているみたいだぜ。

どっかの道場に通えば体術ができるようになるかもしれないと思ったがすでに小6だったので諦めた。

さっさと死なないかな、とか思いながら道を歩いていたらひし形の宝石もどきを拾っ

た。

光つ……？

『17周目』

まさかの爆弾か。

無造作に落ちている宝石もどきが爆弾とか無差別テロですね、死にました。化け物があるのにテロも起こるとか死亡フラグしか転がってないわけで。

勘弁してよね、ホントに。

ジュレイモンの一撃目を回避するも、追撃で死ぬ。

まさに二撃結殺である。

『18周目』

死ぬことに怯えない俺は死亡フラグが転がっている夜にもジョギングするようになつた。

周回ポイント集めだ。

次のときには少し、さらに次には少し、と繰り返せば100周くらいで凄いことになつているんじゃないだろうかという気の長い期待だ。

12歳まで生きて18周目……考えないようにしよう。
混沌に這い寄られてしまう。

『19周目』

見知らぬ道場へ通う日々。

子供なので基礎の基礎だがやらないよりはマシだ。

真面目に取り組み、ジョギングも欠かさない。

いつものように石段を駆けあがり、化け物にがぶりんちよ。

神社は鬼門だと……。

『20周目』

俺の癒しである竜也くんが出現した。

わけがわからないよ、とばかりに困惑している兄妹を溶けるくらい撫でまわして可愛がる。

3歳とか超かわいいですね、癒しです。

懐かれた。

めっちゃ懐かれた。

竜也くんもいることだし、高町さんちに指導してもらおう。

といつてもやることは基礎だけだ。

衝撃を徹したり、貫いたり、斬ったりできるらしい。

小太刀でドラム缶を引き裂いているところを見た。

やっべえええええええ。

声が聞こえたが放置したら翌日、なのはちゃんが動物を拾ってきた。

イタチじゃなくてフェレットらしい。

飲食店だけど飼うことにしたとか。

さすがやでえ……。

何事も無く、ジュレイモン。

流石にこれだけ経験したら一撃目は避けられるぜ。

見てから回避、余裕でした。

追撃は竜也くんが守ってくれた。

キヤー、リョウヤサーン。

なのはちゃんが闘志を秘めた瞳をしていた。

なにこの娘、かつこいい。

撫でると驚いてたけど、喜んでくれた。

超かわいいですね。

20周目にしてクリアの予感……とかやってたがそう上手くは行かないらしい。

温泉に誘われて着いて行ったら、謎のコスチュームに身を包んだ高町ツインズと金髪幼女、犬耳娘がバトってた。

犬耳さんが良い身体してて穴が開くほど見てたら襲われた。

腹にパンチされて身体数メートル吹っ飛ばされて、血反吐を撒き散らして死んだ。

乳揺れに気を取られて避けられなかったとか……そんなんじや決して無いです。つうか腕力が凄すぎるわ……。

『21周目』

周回プレイを重ねようともあれは仕方ないよな。

露出はズルい、と思いつつながら周りを見回すといつもものあかちゃんスタートではなく温泉の泊まりの部屋だった。

俺大喜!!とばかりに外に飛び出して、腹パンされて死んだ。

『22周目』

まるで成長していない……。

と安西先生ごっこして調子に乗っていて気づいた。

またあかちゃんスタートに戻ってやがる。

奇数周で声、5周ごとに竜也くんと予想していたが、今回も竜也くんがいた。

猫かわいがりする。

高町さんちの双子の可愛さは異常ですな。

久しぶりに誘拐イベントとエンカウントした。

轢かれては堪らないと少女二人を拘束していた男たちにシャーペンを乱れ打ちで手を貫く。

「ほうら、逃げたくなかったろう」という成金みたいなことを考えていたら運転席から現れた男に発砲されて死んだ。

銃は卑怯でござる。

『23周目』

ほとんど変わらずである。

竜也くんと修練して、シュークリーム貪って、高町ツインズとゲームして遊ぶ。

俺ってばリア充だよな。

まあ、内臓とか何回飛び出したかわからないくらい死んでるし許せ。

腹パンで死んだし。

たぶん、ジュレイモンを突破するとセーブだろう。

一回しかコンティニューできないのか、とある場所まで進まないダメなのかは不明だが。

イタチが云々して数日経つとジュレイモン。

イタチによって化け物のフラグが立つのではないだろうか。

ジュレイモン撃破後に高町ツインズに近寄るとイタチが喋っていた。

こんなことくらいじゃ驚かないぜ。

というかかなり可愛い声してるんだけど。

話を聞くとジュエルシードとかいう宝石もどきが原因らしい。

なんだ、爆弾では無かったのか。

イタチが失敗してばら撒いたとかなんとか。

全部貴様のせいとか、と縊り殺したいがどうせリセットコンティニューは終わらないので許した。

すでに達人が悟る達観の域である。

温泉に行った。

夜はおとなしく寝ていれば腹パンは無らしい。

笑っているがどこか暗かった。

竜也くんは聞くとなのはちゃんやんが友達と喧嘩したとか聞いた。

だから竜也くんも落ち込んでるのかと告げると驚いていた。

何年君たちの事を見ていると思っっているのだ。

全てがわかるのだよ、この俺にはな。

あ、死亡フラグは無理です。

ジョギングの途中で高町ツインズが急いでどこかに向かっていた。

追いかけると膜みたいなものに包まれた。

なんぞこれえ……とキョドっていると高町ツインズが温泉の夜の様にバトリ始めた。

なのはちゃんなんてびゅんびゅん飛んでるし、竜也くんもがんちゃんバラしている。

なんでこんなに慣れているのだろうかと隠れながら眺めていると犬娘がこっち来た。

てめえの腹パンなんて当たらんぞおっぱい揉ませろオラア、とばかりにカウンターを

撃ち込むとATフィールドっぽいのに阻まれた。

すげえ頑なに拒絶されたらしい。

やっべ、拳が砕けた。

竜也くんとイタチが俺と交代してくれたので逃げることにした。

なのはちやんとパツキン幼女のほうに向かうとジュエルシードが発光していた。やべえ爆発するじゃん。

なぜか二人とも爆心地から離れようとしないので俺が石のところまで走る。とりあえず遠くに投げ捨てれば一先ず安心だろうと思つて無造作に掴む。

右腕がもげたわ（笑）

呆然としている観衆を他所になんとか頑張る。

とか見えてないで逃げてください。

ちくしょう、持つて行かれた……と鋼の錬金術師ごっこしながら石を抑える。

左腕ももげた。

ぼろつと。

これは死んだ。

また死んだ。

だつて血が足りないもの。

飲み込んで俺の身体で衝撃を和らげれば良いんじゃないやね、とばかりに口に入れた。

爆発して意識が闇に吞まれた。

俺は死んだ。

ジュエル（笑）

『24周目』

温泉のところで目が覚めた。

腹パン女が怖いので寝ていた。

すまない、高町ツインズ。

臆病な俺でごめんよ……。

なのはちゃんの喧嘩イベントが起きたあとに高町ツインズが走っている姿を目撃。

また爆発イベントですね、とばかりに追いかける。

今回はなぜかイタチが俺の肩に乗ったまま戦闘になった。

向こうでは高町ツインズと金髪ようじよがバトっていた。

なぜこうなったし、と拳の応酬。

まあ、俺が殴ると防がれて拳が碎けるので当てていない。

俺に当たりそうになった物はイタチバリアーで防ぐので千日手だ。

石が発光したので焦ったら腹パンされた。

超いてえ。

怯んでいたら金髪ようじよが両手を血まみれにして石を抑えていた。

胃液とか諸々を吐きながら見守るだけだった。

金髪ようじよが必死になって抑えているのにただ見ていただけとか俺は本当にダメなやつである。

イタチが心配してくれるけど、泣きそうになった。

俺はまるで成長していない……。

なんか入院になった。

帰ってから血を吐いたのがいけなかつたらしい。

ただいまー、げは!!

って感じだったからな。

玄関血まみれでやべえ。

その言い訳がジョギング中に転んだとか無理あるよね。

高町ツインスが見舞いに来てくれた。

やっぱり俺の癒しだよね。

とか思ってたら金髪ようじよと臨海公園で決戦するらしい。

決戦とか死なないよな……。

心配になったので早朝に病院から脱出した。

車いすとか使い難いでござる。

待ってたら続々と人が来た。

誰だか知らん背の小さい少年もいた。

管理局とかいうところから派遣されてきたらしい。

朝からご苦労様です。

なのはちゃんか装甲MAXのスーパーロボットみたいな勝ち方をした。

えげつねえぜ……。

なんだか良くわからないが感動の大円団かと思つたら空が光った。

雷様がお怒りである。

びかつ、ごろつ。

俺は死んだ。

『25周目』

みんなバリア張ってたのに俺だけ無防備だった。

直撃でなくとも余波で死ぬよね、そりゃあ。

また赤子スタートである。

ジュレイモン後のセーブは何時だ。

小5になつたので気分を変えて街を探索していると車いすの関西弁を話す少女と仲良くなつた。

家に招かれて着いて行ったら本を見つけた。
なんと禍々しい……。

お茶をもらって駄弁って、夕方に家路に着く。
寂しそうだっただのまた来ると伝えておいた。

新しい√でも開拓したのでだろうかと思つてたら周囲が膜につつまれた。

こいつはバトル時に展開される謎フィールドじゃないか!!

周囲を警戒していると出現したのは仮面の男だ。

へ、変態だー!!と叫んで逃げる。

いくらか走ったところで確認の意味を込めて振り返ると仮面の男はその場に立っているだけだった。

安心して前を向くと仮面の男が魔法陣のようなファンタジーな円から出現した。

なん……だと……。

視認するのも困難な蹴りを防ぐも両腕が一撃でもげた。

おい、マジか。

そして光に包まれて意識が消失。

まさか、新√かと思いきやバルバトス出現だとは思わなかった。

すまない関西、もう君に近寄ることは無いだろう。

『26周目』

回避だけ極めるべきなのだろうか。

攻撃してもATフィールドに防がれるし、防御しても貫通して死ぬ。

こいつはハードだぜ……。

高町ツインズを可愛がって運命の6年生へと突入。

気合入れてケルベロさんから逃げる。

なのはちゃんや桃色のビームによって仕留めてくれた。

キヤー、ナノハチャーン。

ステキー。

ジュエルシードを中心とした事件が起きているらしい。

魔力があるからなのはちゃんと竜也くんの高町ツインズが手伝うとか。

僕と契約して魔法使いにしてよ、みたいなノリで聞いたら俺に魔力が無いとか。

無いというよりも眠っているような感覚らしい。

夜の誰かを呼ぶ声が聞こえたら魔力を生み出す器官であるリンカーコアを標準装備

していることになるのか。

あれか。

奇数周になると魔法使いにチェンジ的な設定か。

経験値を積むために高町ツイنزに着いて行く。

魔法が使えないからってそんなに心配しなくてもいいです。

どうせ死ぬときは死ぬのだから。

神社、プール、深夜の学校と次々に撃破していく。

紙装甲なので一撃で死ぬ可能性もあるが気にしない。

当たらなければどうってことないのだから!!

ジュレイモンも見える、見えるぞー!!と難なく撃破。

そろそろ次のステツプへ進んでも問題ないくらいには経験値を積んだ気がする。

セーブポイントを超えて温泉にきました。

折角なので犬耳おっぱいを拝もうと俺も出撃。

何故か俺にビームが飛んできた。

金髪ようじよはなのはちゃんと戦っているはずだろうと振り向くと竜也くんはイタ

チのサポートを得て犬耳おっぱいと戦っていた。

じゃあ、俺の相手は誰なのだ……。

金色の光が俺を貫いた。

力が抜けて立てなくなったところに犬耳のパンチがジャストミート。

『27周目』

たぶん、あれは頭がザクロになったに違いない。

金髪少女のドツペルゲンガーが現れたという信じがたい現象を確かめるために今一度、深夜の森へ。

なるほど、金髪も双子になって対応してきたらしい。

うおおおおお、この光に当たるとやべえ。

久しぶりに、避けられん……!!

犬耳、おいやめろ!!

ザクロが飛び散った。

『28周目』

2度ネタはよろしくないだろう、常識的に考えて。

俺が微妙に強くなったと思ったら敵がその十重二十重で強化されるとかなんという無理ゲー。

基本的に俺自身は防御が間に合わなかったら即死だ。

防御出来ても腕がもげることなんてザラである。

最近は腹パンなら耐えられる程度になってきたのでいいのか悪いのか。ペン回しが凄いいことになっている。

これを武器にしてみようか。

ジュエルシードにシャーペン当ててしまい、死んだ。

『29周目』

小4の春休みの昼間に声が聞こえた。

いろいろと早くないかと思いつながら声を辿って搜索する。

金髪ようじよを小さくしたようなのと猫を拾ったでござる。

両方とも傷だらけだけど何があったし。

金髪（小）と猫を拾ったら何故かうちに住むことになった。

「生き物を拾ってきたらいけません」とか言われて元の場所に戻るのが普通だと思つていたので驚いた。

名前は金髪（小）がユウくん、猫はリニスというらしい。

ユウくんは金髪ようじよとそっくりなのに男なのだ。

突然出現する双子の片割れは男になるのだろうか。

俺の癒しが増えたぜ、とテンション上げて修練してたら死んだ。

過労死っぽい。

感覚がマヒしてきているのでオーバーワークに気付かないんだよね。

人型になったリニスとユウくんが一生懸命なんかよくわからん温かい光で治そうと
してくれてるけど、無理っぽい。

まあ、慣れたもんだから気にすんな。

ありがと。

『30周目』

いやあ、この先生きのこるために……つまりきのこる先生のために頑張ったら、頑張ったせいで死ぬとかマジ理不尽。

声も聞こえないのでユウくんを拾えないでござる。

それとなく高町ツインズに聞いてみたけど聞こえないらしい。

今周にはいいのだろうかと前と同じ日付に行ってみたら衰弱しているユウくんを見つけた。

リニスはいなかった。

ユウくんは震えたままだった。

疲労の色も濃くて目の下に隈が出来ていた。

少しでも安心できればと思つて隣で寝たら首を絞められていた。

なにかあつたか知らないけど、ツラかつたんだよな。

だけど泣きながらはやめてくれ。

それは卑怯だ。

痛くないけど、なんか胸が苦しくなるから。

『31 周目』

いつもと変わらず赤ちゃんスタート。

授業内容なぞすでに暗記済みだ。

むしろ、大学受験しても問題ないくらい。

……嘘だ。

大学受験はちよつと盛つた。

今回は魔力があるので声は聞こえるに違いないが、何があるかわからないので裏山に徹夜でスタンバつてみた。

ピカツと光つてどさつと二人（一人と一匹？ リニス是人型になったので謎である）

が落ちてきた。

何が起きたし。

気を取り直して迅速に応急処置を施し、連れて帰る。

一人っ子としては可愛い弟とペットって夢なわけじゃん。

竜也くんもなのはちゃんもそうだけど、この程度でいいのなら何度だって死んでもいいくらいだ。

むしろもつと上手くいくのならもつともつと死んだっていいと思ってる。

ジュレイモンも突破してこれは上手くいきそうだとか思ってたなら、ユウくとリニスが出して敵に回ったでござる。

何でだし。

バンダナで顔を隠しているがどう見てもユウくんです。

泣きそうな顔で襲撃とかやめてよね。

隠すならちゃんと隠さないよ。

俺の良心が痛むじゃないですか。

ユウくとリニスがいまま恒例の温泉地デスマッチと洒落込んだ。

なのはちゃんは金髪ようじよ、竜也くんはユウくと。

俺は犬耳ですね、わかります。

俺はイタチを、犬耳はリニスを補助に乗せて戦闘である。

千日手かと思つたら存外リニスは優秀なようだ。

イタチバリアーを軽々と砕いてくれました。

しかも犬耳ナツコオが回避できないような神業的なタイミングとか反則過ぎる。

やつてくれるぜ……。

イタチくんが俺を庇おうとしてくれていた。

こいつはかなり良い奴だ。

でもコンティニューできないのなら前に出るべきじゃない。

イタチくんを投げ捨てた瞬間に腹パンが決まったぜ、ちくしょう。

リニス、何を驚いているんだ。

簡単に死ぬからか。

しょうがないだろ。

俺にはコンティニューしかないんだから。

『32 周目』

どう考えても世界に嫌われているだろ、俺。

インスマス面つてわけでもないのになあ。

回避しようにも奇跡のような不可避の一撃は避けられん。

しかも俺自身は小学生の未成熟な肉体に経験で底上げしたようなアンバランスな状態だ。

耐久力が低く、限りなく脆い。

そろそろ防御も磨くべきかもしれない。

防御力は犬耳の腹パンに耐えられる程度だ。

油断すると血を見るので、頼りないの一言に尽きる。

力任せに防ぐのではなく、受け流すとかどうだろうか。

回避の技術と併せれば究極じゃね。

修行するために熊狩りに行ったら傷が深すぎて死んだ。

牙や爪などの鋭いものは難しいな。

あと重量差も厳しいものがある。

6匹まで行けたんだけど、7匹目で逝けた。

『333週目』

受け流すことに特化するということは円であるということだ。

点で捉えず、線で捉えず。

ただ滑らせる。

自然な流れこそが真理への一歩なのだ……。

やっべ、爆発は防げねえ。

『34 周目』

調子に乗りすぎたようだ。

ジュレイモンのコンティニューが無かったら引き籠るところだった。

実は今回、かなり変化が大きい。

なんとアリサとすずかちゃんとかかなり仲良くなった。

今迄は高町ツインズに誘われて、なあなあだったが今回は4人から誘われるという嬉しいイベントに発展した。

まあ、二人の誘拐事件が生じる前にシャーペンで撃破したおかげですけど。

弾丸を勘で受け流すとか俺も超人染みてきたわけだ。

被弾したけど。

そんなこともあつて今までが一番仲良くなった周である。

ジュエルシードイベントは月村さんちのすずかちゃんに呼ばれたお茶会で金髪ツインズとバトするという新イベントを見つけた。

このとき、怪我をするとユウくんとりニスに夜に帰ってきて看病したあとにまた家出するというツンデレイベントが見られる。

可愛い弟と猫である。

二人のことを心配していると伝えることができても良かったでござる。

ここからいい感じに進んで、高町ツインズの喧嘩イベントが発生した。

相手はアリサとすずかだと初めて知った。

友達なら信じてやれよ、俺なんて死んでも信じるぜ、みたいなことを言っておいた。

この後の深夜のバトルがキツイ。

爆発の原因は小規模の次元震が起きかけているのだと前のイタチくんに聞いた。

止めようにもなのはちゃんと金髪ようじよは震源地で戦ってくれやがります。

結局、爆発が起きかけて俺が止めようとして血まみれになって全員が正気に戻った。

俺を除いた全員で封印する荒業で押し込めたいらしい。

じゃんけんでジュエルシールドの権利を争い始めた。

それで解決するなら最初からそれで決めろよ。

次からはガチンコで戦うことになったとか。

もつと平和に行こうぜ。

スマブラとかどうよ？

翌日、金髪ツインズと高町ツインズが戦っていると管理局の黒野つて人が出現した。いきなり現れて金髪ようじよとなのはちゃんの杖を受け止めた。

何気に新√じゃねえかな、これ。

わくわくしちゃうよね。

でも、止めるならさつさとしてほしいわけで。

リニスと犬耳の攻撃を防ぐのめっちゃキツイから。

やり返すにも攻撃力が不足しまくりで全く効いてない。

拳から血が流れているんで早くどうにかしてほしい。

イタチくんの鎖もリニスが防ぐのでまたもや千日手。

なんやかんやあつて金髪組は撤退を決めたらしい。

管理局の黒野つて人がビームを撃ったけど、俺のシャーペンで破壊してみた。

標的がユウくんになってたので、つい手が出た。

あと壊れるのか試してみたかった。

あとは管理局の戦艦に乗って云々かんぬん。

なのはちゃんと金髪ちゃんの決戦↓雷様コンボで死んだ。

雷様の攻撃、というか魔法防御が全く無いのが弱点では無いだろうか。

なんとか魔法を憶えられないだろうか、と悩んで出た答えは一つ。

リニスに教わるしかない。

無理でした。

猫に向かつて魔法を教えてなんて脳が沸いているとしか思えない。

イタチくんが出て来るまで待つこと数年。

高町ツインズとユウくん、リニスが可愛すぎて生きるのがツライ。

なのはちゃんよりも早くイタチくんを確保した。

イタチくんは俺に魔力があることに気付いて手伝いを要請。

手伝うから魔法を教える云々な感じでこれは行けそうだと確信。

そしたらジュエルシード集めの場合には金髪ツインズと犬耳、リニスを相手にイタチく

んとタッグで迎え撃つ必要があるわけで。

すぐ死んだ。

腹パンが死因とかちよつと多すぎる。

『36 週目』

前回は魔法の補助をしてくれるレイジングハートさんがいたが、コンティニューした

今では自力で訓練しなければならぬ。

レイジンググハート……レイハさんは砲撃とか防御とか凄かったが俺には適正がなかったらしく、魔法がへボかった。

なのはちゃんが使ったらあんなに凄いの……。

すまない、レイハさん。

良い娘(?)なのにへボな俺が使つてごめん……。

レイハさんに迷惑がかかるので使わない様に決めて自力で修練だ。

魔法は高高度な数学や物理を魔力と併せた超科学の融合だった。

自分だけでは発展も応用もできないので教えてもらった基礎魔法を紐解きながら、分割思考の練習を繰り返す。

気付いたら死んでた。

『37 曜日』

脳への負荷が凄まじいことになっていたと考えられる。

人生とは儘ならないモノだ。

魔力の運用を練習し、分割思考を極めるべく特訓に勤しむ。

リニスがかっこいい度胆をぬいていたが知らん。

魔法の練習をし過ぎてジュレイモンにぶつ殺された。
初心に帰ったわ……。

『38周目』

魔法が使えない偶数周だ。

分割思考を極める周だと割り切って頑張るしかない。

両手で別々のルービックキューブを解きながら読書してみた。

リニスが目をまん丸くしていた。

ジュエルシードの爆発で死んだ。

『39周目』

シールドの構成だけ突き詰める。

バインドも同上。

ただ只管に同じ事の繰り返し。

ジュエルシードで試してみたら完璧な防御を誇ってくれた。

調子に乗って突いていると次元震が起きて身体を引き裂かれた。

そういうえば封印の仕方を知らなかった。

『40周目』

魔法は使えないので体術を極める。

攻撃力が足りないことに危機感を覚えたからだ。

一日一万回の感謝の正拳突き。

いい感じに極めてきたので調子に乗ってたら意識が遠退いて倒れた。

『41周目』

餓死したっぽい。

まともに攻略してない気がするので本格的に行こう。

でも、魔法をもっと覚えたいのでイタチくんを確保した。

イタチくんの名前はユーノくんというらしい。

初めて知った。

あと人間になれるらしい。

初めて知った。

もう何年目だよ。

……経過年数を考えるのは止めよう。

一応、レイハさんを使っても恥ずかしくないはずのレベルになった。攻撃系統はヘボだけど。

慰めてくれるレイハさんマジ天使。

結婚したい。

バインドも一瞬でパスが書き換わり続けるので捉えたら逃がさない。

シールドも攻撃を受け流す技術と併用すれば最高の盾である。

バインドもシールドも熟練度がカンストだろう。

俺としても巧みの出来だと思う。

これなら意外と行けるかと思ったが見通しが甘かった。

金髪組と戦闘すると血だらけでユーノくんに治癒してもらう時間が多かった。

というかほとんどずっと治癒してもらっていた。

ジュエルシードを見つける度にほぼ戦闘というハードワーク。

この苦難を乗り越えて管理局と接触、戦艦アースラへ。

歴戦の勇士な俺の空気を感じたのか、最後まで手伝っても良い事に。

ユーノくんが止めて来たけど、ここで止まるわけがない。

どうせ死ぬだけだし。

そういえば人間になったユーノくんが可愛かった。

男だったけど。

この世界の少年は可愛くなる法則でもあるのだろうか。

金髪組に決戦を挑まれた。

なのはちゃんがいとも公園でやってるイベントだ。

なのはちゃんがいないので俺に御鉢が回って来たらしい。

そろそろ腕がもげるかもしれん、無理しすぎて身体にガタがきている。

決戦の相手はユウくんだった。

視界いっぱい弾幕と高速移動でのヒットアンドアウェイだった。

えげつないぜ。

ダメージ覚悟でシールドしながらの突撃、そしてバインド。

止めに砲撃を撃ちたいがへボなのでシャーペンに魔力を込めたやつでシールド破壊

してへボ砲撃。

勝った、41周目完!!

と締めくくろうとしたら雷様が怒って視界が闇に包まれた。

どうやらパトつたらしい。

『42周目』

ぐぬぬ、雷様め……。

戦闘で勝つと雷様フラグらしい。

ジュレイモンセーブからもう一度決戦をしたがやはり雷様は強かった。

『43周目』

体力と魔力が足りなくてシールドが弱かったのが敗因だった。

やはりユ一ノくんと二人では厳しいものがある。

高町ツインズに助けてもらおうしかない。

というか決戦に近づかなければいいんじゃないかとも思ってきたが、こんなに殺されているのだからなんとか防いでみたい。

最早意地である。

決戦まで同じように辿って雷様の攻撃である。

余波は防いだ!!

勝った!!

俺は勝ったんだ!!

と喜んでいるとユウくと竜也くんが飛んで行った。

目を向けると雷に打たれて落下していく二人の少女。

俺は何をやっているんだろうか。

何が勝ったのか。

まるで成長していない。

アースラで待機となった。

魔法が使える俺も一応は戦力としてくれるらしい。

魔法の勉強をしながら過ごす。

雷様の正体はプレシアという金髪ツインズの母親だとか。

武装局員に交じって敵地へ乗り込んだ。

勝手な事をしまくっているがどうせ死んでやり直しなのだからいいじゃないかとも

思ってしまう。

最近はそれが顕著だ。

次があるってどうなのだろうか。

一回だけじゃダメなのだろうか。

次があるとわかると俺のようになってしまう。

一回だけだから大切にするんじゃないのか。

ジュレイモンセーブから魔力を蓄えて、決戦に備える。
プレシアの雷に対してシールドを張って防ぐ。
ぎりぎり防げたと安心したら追撃がきた。
これは、防げん。

『45周目』

久しぶりの二撃結殺だった。
雷とか攻撃速度が反則すぎる。
転移魔法で回避したほうがマシかもしれない。
今回の人生を賭けて転移を学ぶとしよう。
おのれ、プレシアめ……。

『46周目』

ぷれしあああああああああ!!!

『47周目』

プレシア……。

『48周目』

ふれしあ。

『49周目』

もうだめだ。

『50周目』

ほんとにつかれた。

どうにかしてあいつを■してしまいたい。

51—75

『51周目』

俺が地面タイプなら……。

またはフランクリンバッジがあれば……。

とりあえず落ち着く。

ぶっ殺された回数なら犬耳のほうが多いじゃないか。

犬耳はおっぱいサービスがあるんだからプレシアも用意すべき。

BB Aのおっぱいサービスとかマジでいらなけれど。

なのはちゃんがユーノくんを拾って魔法少女になった。

防御系の魔法を見直したいのでユーノくんを我が家で保護。

ユウくんが家出して雰囲気が悪いから少しは和らいでくれれば、といった思惑もある。

防御魔法にはシールド、バリア、フィールドタイプがあるらしい。

適当に判断していたが詳しい分類があるとか初めて知った。

ちなみにATフィールドは無い。

シールド：硬い。範囲は狭い。

バリア：範囲は広い。防御力はシールドに劣る。

フィールド：結界とか魔法使いたちが纏っている服のこと。服はバリアジャケットと呼ばれる。

まとめるとこんな感じだ。

シールドはバリアを圧縮して使っている感じだろうか。

バリアにも種類があつて、それぞれ目的が異なるということもわかつた。プレシアの攻撃から身を護るには俺のラウンドシールドもどきでは難しいのだろう。ATフィールドみたいに全面を護れるやつを練習したほうがいいかもしれんね。高町ツインズの戦闘を眺めているとバリアジャケットは生身の部分を護つたり、空気などの抵抗を無効化してゐるっぽい。

バリアジャケットに魔力を集中させればDEF極振り状態とか……。

常に魔力を喰われるので普通に防御魔法の練度を上げた方が建設的だろうけど。

順調にジュエルシードを回収していく。

俺がいなくても問題は無さそうだが、心配なのだ。

ここは俺に任せて先に行け、みたいな身代わりもできるし時間が進む的な意味も含まれている。

折角なので他にも教えてもらう。

捕縛魔法であるバインドはユーノくんが放つてくれる大変ありがたい魔法だ。

前にレイハさんを使つたときに習つたやつを独学で改造していたが、本場の知識を聞いておいて損は無いはず。

空間設置型は射撃の誘導制御に似ている気がするので俺は苦手だ。

魔力をしゃーっと伸ばすチェーンバインドの方は得意なんだけども。

魔法って構成とか魔力の割合など理数的な部分が多いけど、感覚が占める割合もなかなか多い。

構成の基本は決まっているが自分用に改造するなら得意不得意の分野をパズルのように組み合わせさせて完成させる。

そこに流す魔力の割合で更に変化するから難しいのだ。

デバイスは設定しておけば面倒な部分を担ってくれるし、インテリジェントなら学習して使用者向けに最適化するというから羨ましい。

なんか俺もデバイスが欲しくなってきた。

レイハさんのような超嫁級じゃなくてもいいのでどこかに落ちてないだろうか。

飛行魔法を練習しながらジュレイモンと戦う。

旋回に難があるので直線での移動のみだが、推力の方向を変える事で機動力を得た。

天井や壁、フローターフィールドで作った足場を利用して飛び跳ねれば空間殺法ごっこが出来る。

『52週目』

調子に乗って地面に激突して死んだ。

海鳴のイカロス誕生である。

……これはひどい。

防御すれば耐えられるんですか、やったー！

防御に失敗したら即死じゃないですか、やだー！

……もう少しくらい防御上がらないですかね。

体術とか意味あるのかな。

どう考えても体術（笑）状態だし。

情性で練習はするけど、実感が無いのである。

相手が常人なら役に立つんだろうけど……ねえ？

縁側でうたた寝してしまい、夕方に起きたら毛布がかけられていた。

隣にはユウくんとしニスが寄り添って静かに寝ていた。

死ぬのが当たり前になっていたけど、そろそろ嫌になってきた。

死ぬこと自体は構わない。

けれども、なのはちゃんや竜也くん、ユウくん、ユーノくん、リニスの将来が気になる。

もつと頑張れば俺は生きられるのだろうか。

魔力の無い状態で生き残ろうとして化け物回避のために隣町に避難した。

そこまでは良かったんだが、隣町に入った瞬間に名伏し難きマールに包まれて死んだ。

あれは一体なんだったんだ……。

本当に海鳴周辺は地獄だぜ。

避難するにも相応のリスクを負うらしいのでやはり漠然しく真っ直ぐ進むしかないようだ。

今まで辿ってきたモノが真っ直ぐかどうかは知らないけれど。

実はわき道に逸れていて本筋なら難なくクリアできる、とかだったら泣く。

いや、喜ばばいいのか。

ちよつとわけがわからないよ。

防御や捕縛はまずまずの性能まで引き出せていると思う。

実際は攻撃を受けたり、縛ったりししないとわからないのだけれど。

チェーンバインドなら名人と呼ばれてもおかしくないレベル。

ここまでできたなら相手の魔法も縛れるんじゃないレベル。

束縛する中指の鎖（チェーンジェル）ごっこも出来る、たぶん。

極めたとか調子に乗っていると死ぬから慢心せずに行くべきなのだ。

『54 周目』

リニスが人型と猫型を織り交せて全力で攻めて来るとか。
ユーノクんの奮闘むなく犬耳。パンチがクリティカル。

間違いなく頭が爆ぜて脳髓大噴水したね、あの威力。

うわあ、想像するだけでめっちゃグロい。

ジュレイモンを超えて月村さんの家に行くと庭で戦闘イベントが起きる。

そして死ぬ。

死亡フラグ満載ですな。

ちなみにコンティニューは月村さんの庭。

金髪ツイインズと高町ツイインズが対峙しているので戦闘が起きる直前らしい。

温泉行かないとセーブポイントがわけわからん。

犬耳をバインドで縛ろうとしたんだけどリニスに邪魔されて失敗。

つうかりニス強すぎるんだけど。

弱そうな魔力弾の一発で俺のバインドの軌道を変えるとか変態すぎる。

リニスの魔弾を避けながら犬耳の腹パンをシールドで防いで怯ませてバインド。

やったねユーノくん、家族に勝てるね。

そんな気持ちで追いこんだらリニスの砲撃で吹き飛ばされた。

魔法の範囲が広すぎてバリアしか選択肢が無かったが間違いだったらしい。

バインドを破った犬耳にライダーキックされた。

俺は真つ二つになった。

『55周目』

自分の下半身を見送つてからのコンティニュー。

蹴りはダメだろ、蹴りは。

拳より強いって聞くし。

そんなことよりもリニスが強すぎる。

基礎のレベルが違いすぎる。

俺も基礎の練習を行い、チェーンバインドの数を増やす、そして奇策で対抗するしかない。

家出を止められたらいいのだけれど、それは叶わないのだ。

これだけ繰り返していて、敵に回るのだからそういうイベントなのだと考えないとやってられない。

ユウくんと一緒におもちゃの猫じやらしでリニスで遊ぶことしか俺にはできないの

だ。

『56周目』

奇策としてマタタビを投げつけたが失敗。

ジュエルシードを封印できるシーリングの魔法をリニスにかけるも失敗。

シーリングの代償として血が噴出して肢体が千切れて無様に死んだ。

シーリングは魔力や技量が勝ってないと失敗するようだ。

横入りしてプログラムを止めるのだから危険だろうとは思っていたが、まさかバラバラ死体になるとか失敗の代償が大きすぎるだろ……。

相手の魔法を止める良い方法だと思っただけだなあ。

チエーンバインドオンリーの方針で進めよう。

射撃とか砲撃は上手くいかないので攻めるには火力が低すぎる。

複数の魔力弾を同時に運用すれば火力の高いレーザーもどきを放てるのだが、時間がかかりすぎることや思考の大部分を喰われるなどの欠点があるのでお蔵入り。

やはり俺にはチエーンバインドで触手プレイしか道が残されてないようだ。

触手プレイと呼べるほど色気なんて無いけども。

チエーンバインドを手の様に操る。

気分はDr. オクトパス。

海鳴のドック・オックとか敵役ですネ、わかりません。

チエーンバインドの凄いところは何でも縛ることができる。

プールも縛れるし、竜巻も縛れる。

マジで意味が分からん。

でも使ってしまうのは便利だからだろう。

10本の鎖を自由自在に操ることですらにかりニスに対抗できるレベルらしい。

リニスさん、ちよつとチートが過ぎてませんかね。

リニスとの危機一髪な戦闘を乗り越え、黒野くんが出現した。

なんか久しぶりだね。

そういえば管理局の戦艦はアースラという名前らしい。

プレシアばかり気にして全然知らないんだよね、アースラとか黒野くんのこと。

黒野くんはクロノ・ハラオウンという名前らしい。

横文字とかおしやれだよね。

姉にしか見えない年齢不詳のリンデイさんが母親らしい。

異世界で妖精とかやっていそうですね、リンデイさん。

なのはちゃんと竜也くんも最後まで手伝う云々でアースラに搭乗した。

管理局は魔法の本場だけあって興味深い話が聞けるし、クロノくんもSUGEEE EEEレベルの魔法使いなので参考になる。

クロノ先生と呼んでご教授願いたい。

なのはちやんと竜也くんは砲撃と防御に全振りなので参考にならないのだ。

しかも感覚で魔法を構成してデバイスが更に実用的に仕上げるとか、どこの超人だと言いたい。

俺が射程3くらいの特チーンバインドで四苦八苦している横で、必中と魂をかけた射程9のMAP兵器をガンガン使っていると表現すればわかるだろうか。

クロノくんは魔法を教わりながら、チーンバインドでドン引きさせていたら金髪組が海で嵐を呼んだらしい。

高町組が飛び出したので俺も行く。

なあと、僕の鎖さんがすべての竜巻を縛ってみせますよ☆

『57周目』

俺の限界を超えて落下して死んだ。

何度も死んでるのに限界がわからないとかヤバくね。

自分の中ではまだまだ余裕で行けるのに身体が付いて行けていない、そんな感じなの

だ。

なぜか限界を見極めることが出来ないから、ぽっくり死ぬんだよね。

バインドは速度が圧倒的に劣るので数で勝負と思っていたが、先読みも必要と感じた。

質と量を備えて、先読みまで必要とかホントに攻撃には適していない。

なのはちゃんや竜也くんが使う魔力を集束させる輪つかのやつは、脆すぎて話にならないし。

ストラグルバインドとチェーンバインドの二つが主な武器で他は補助だ。

発動程度なら出来るけど、扱うには難しい。

デバイスがあればもっとマシンになるのだろうけど。

なのはちゃん、竜也くん、ユーノくん、クロノくん、俺が集まってアースラの勉強会に突入である。

新しく学んだり、構成を変えるなら自主練よりもアースラで相談したほうが良いのだ。

ときどきリンデイさんや局員の人も混じる。

内容としてはシーリングの簡略化、回復魔法、ブースト魔法について。

シーリングの簡略化は起動中の魔法に割り込みをかけてデイレイを生じさせる嫌が

らせが目的である。

同じ様な魔法があるかもしれないが、折角覚えている魔法なので弄ろうと思ったただだ。

回復魔法は極めれば致命傷からも復活できないかと思つたからで、実際は時間をかけて徐々に治すモノしかなかった。

ブーストはカジャ系がとても大事だという理由からだ。

順調に事を進め、竜巻を乗り越えた先にはプレシアの雷が待ち受けていた!!

『500周目』

あいつ、俺の鎖を豪快に引き千切りすぎだろ……。

真つ向勝負は無理だ。

間違いなく無理。

なのはちやんと金髪ようじよを回収したらさつきと撤退すべき。

転移して二人を回収、更に転移でバックれれば大丈夫じゃね。

流石俺、完璧すぎる。

問題は転移を勉強してないので、ユーノくんを保護した日からプレシアの『あの日』までの一か月くらいしかないってことだろうか。

余談だがプレシアの『あの日』って書くと、まるで女の子の日だから怒って雷を落と
しているの意味になるんじゃないだろうか。

普段は笑顔を絶やさないプレシア。

しかし、彼女の女の子の日は常人には耐えられないような過酷な物だった。

つい耐え切れずに発散の意味を込めて雷を降らせるが、我に返った時に見たのは少年
の死んだ姿であった。

罪悪感に身を焼かれそうになるプレシア……無いか。

『59 周目』

転移魔法は付け焼刃にしては上手くいったと思う。

ただ、魔力が尋常じゃない量を喰われるので往復する前に力尽きたのだ。

転移で近づいたはいいのだが予想以上に魔力が無くなってしまい「俺が盾になる
ぞー、バリバリ」「やめて!!」って感じになってしまった。

完全に失敗である。

遠隔から他の場所に飛ばせばいいじゃないだろうか。

それなら雷から避難できるし。

これなら行ける、間違いない。

『60 周目』

俺が避難できないことを忘れていた。

遠隔で飛ばすと魔力が枯渇して、余波が防げず死亡とか。

これはひどい。

『61 周目』

飛行魔法で突貫、ブーストで加速しまくったら空気の壁に激突したらしい。

空気抵抗するのは生身にはかなりツライ。

血飛沫を撒き散らす何かになってしまったと考えられるので今度からバリアとか
フィールド系の魔法を張ってからにしようと思う。

再びプレシアの雷。

今度は鎖を加速させて巻きつけて二人を回収し、射線から逸らして俺も転移。
今度こそ完璧だ!!

『62 周目』

一体いつから——転移が完璧だと錯覚していた？

って気分だよね。

まさか「いしのなかにいる」状態になるとは思わなかった。

その後に伏し難きマールブルに包まれて死んだ。

だからあれはなんなのだろうか、と。

とりあえず油断しなければいけない。

転移場所さえ間違えなければいけない、俺ならできる。

そう今度こそ……。

『63 周目』

まだ転移にムラがあるようだ。

今度は準備期間が長いので失敗しないようにしたいものである。

ユウくんトリニス待ち遠しいと思いつながら誰もいない二段ベッドの上を眺める。

そういうえば俺は一人っ子なのになぜ学習机やランドセル、諸々の物品が二つずつあるのだろうか。

俺にも実は双子フラグ？

特にそんなことも無く過ごしていく。

というかこれだけコンティニューしてるのに未だに双子が出現しないのだから俺に

双子がいるわけないな。

もう一つの物品はユウくんのもものが予め準備されているとおこう。

もうわけがわからないよ。

ユウくんを連れてじいちゃんとゲートボール。

話題はリニスへと移ったときに新事実が発覚した。

なんとリニスは普通とは少し違う山猫だったのだ!!

……猫と何が違うのだろうか。

よくわからないので放置である。

猫は猫だろう。

犬耳娘なんてオレンジの巨大な犬になるんだぞ。

象のように大きな犬……なんかぞぬを思い出した。

オレンジのぞぬと戦うとか俺は絶対に嫌だ。

ユーノくんもイタチだかフェレットだかになるし、魔法の世界って動物が流行っているのか。

転移の範囲を絞りまくって省エネ版を作ってみた。

範囲が狭いので魔力弾や鎖しか通せないが超遠距離も対応できる。

欠点も勿論ある。

転移を展開できる時間が5秒も無いことだ。

それ以上開くと魔力が食われまくる。

とりあえず鎖を射出させる穴として利用する程度だろうか。

または時間の経過で拡散していく射程5mのヘボ魔力弾を当てるために使うとか。

なんと微妙に使えるのか使えないのかわからん。

シャーペンや石などの物質に魔力を纏わせて諸々をブーストして射出するのが最大火力とか、ちよつと悲しい。

もつと魔法っぽい攻撃が欲しかった。

海で竜巻を巻きつけて、青少年少女に消し飛ばされるのを見送ってから帰宅。

オレンジのぞぬを拾った。

なん……だと……？

ぞぬでは無くアルフだと名乗ったのでアルフと呼ぶようにしよう。

現在進行形でアルフが傷だらけだったのだ。

プレシアと仲違いしてやられたらしい。

プレシアの雷のときに包帯巻いていたのはこういう理由だったからか、初めて知った。

今までの腹パンの怨みをここで晴らすことにした。

血塗れぞぬな状態のアルフの姿が他人の目に触れるとまずいので家に連れ帰る事にする。

嫌がるアルフをフィジカルヒールという結界を展開した部屋に連れ込み逃げ場をなくし、

水で傷口を刺激した後には激痛を起こす薬品を噴きかける。

薬品で傷口が十分に痛めつけられた事を確認し、別の薬品で更に傷口を攻める。

薬攻めの後は白い布で患部を攻め続けるのでアルフに安息の時間が訪れることは無い。

傷攻めの後は、疲れ切った全身に温かくもなく冷たくも無い途轍もなく中途半端な温度の湯に毛の一部を晒す。

そして湯攻めしてすぐに柔らかすぎず気味の悪い布をゴシゴシと擦りつけ、温風を浴びせる。

あまりの攻めでぐったりとしたアルフは体力が消耗していたのか意識を失っていた。

アルフを床に毛布をしいただけの質素な寢床に放置して監視しながら徹夜。

こうしてアルフを虐め上げてやろうと思う。

フィジカルヒールをかけたばにしたから魔力が枯渇した。

そんな状態の翌日に金髪ようじよとなのはちゃんが決戦である。

そして、プレシアの雷ごろごろです。

これは死んだわ。

死を受け入れる準備をしていたらなんとアルフが防御を手伝ってくれた。

情けは人の為ならずってやつですね。

仕方ないから今までの腹パンはチャラにしてやるよ。

なのはちゃんと金髪ちゃんが直撃じゃねって見てみるとぴんぴんしていた。

今回は俺が行かなくても直撃しないですね。

安心すればいいのか、今までが無駄になったと泣いていいのか。

魔力がほとんど回復していないがプレシア戦に突入。

皆が行くなら俺も行くぜ!!ってノリで突貫したらロボットにぶつ殺された。

魔力が無い俺とか無力すぎだろ……。

『64周目』

アルフ拾って治療してプレシア戦。

アルフは拾わなくても大丈夫だとわかっているが心配になるのが人情ってやつである。

別にアルフに手伝ってもらおうと被害が少なめでプレシア戦に行けるんじゃないやねって打算なんて無いよ、全然ないよ。

……実はちよつとだけあります。

なんとか魔力を温存させて時の庭園という名の風雲プレシア城に突入。

ロボットが強すぎて困る。

魔力が足りない。

『65周目』

決戦前にフィジカルヒールを使い続けているために魔力がカツカツなんだよね。

いつその事すべての治療をアースラに任せてしまおうか。

そしたら魔力不足とか無くなるわけだし。

ジュエルシードモンスター、縮めてジュエモンを余裕で突破。

ジュレイモンも俺の鎖とシャーペンの前では敵ではなかった。

石やシャーペンに貫通とシールドを付与させ、加速を纏わせて射出するとヤバイ。

単体ではあまり長い距離を飛ばせないが転移の穴を通せば射程も解決。

ブースト魔法が偉大すぎる。

クロノくんは質量兵器に該当するとか言われたので、ここぞという時にだけ使うことにした。

アルフをアースラに任せるとやはりプレシアの雷が降ってきた。

アルフがいない場合はなのはちゃんと金髪ようじよも攻撃対象になるっぽい。
鎖を転移させて二人を回収、そして転移。

完璧のタイミングである。

そして魔力もカツカツである。

ちくしょう……。

必死に魔力をやり繰りしながら風雲プレシア城を直走る。

薄くバリアを纏い、前面にシールドを張り、ブーストで加速して一直線に進む。

うわあー。

『66周目』

歪んだ空間に落ちた。

なんとというトラップを設置しているんだ、風雲プレシア城。

魔力行使ができなくなるとかおぞましい。

アルフを拾う↓プレシアの防御を手伝ってくれるので安心。魔力枯渇。

拾わない↓転移と防御のため魔力枯渇。死ぬ可能性大。

俺は悩んだ。

悩んだ末にアルフを拾う↓夜だけフィジカルヒール↓翌日、アースラに送る、という

手順にしてみた。

これだと魔力の減少を抑えつつアルフが防御を手伝ってくれた。

これが正しいに違いない。

潤沢な魔力ならば傀儡兵にも引けを取らないわけで。

風雲。プレシア城の内部に突入。

さあ、行くかと気合入れてユウくんが現れた。

人型のリニスとかガチすぎる。

この二人を突破しないとプレシアと会えないとか厳しい……。

『67周目』

ここは任せて先に行行ってやったら竜也くんも残ったんだけど。

恥ずかしい。

途中まで順調に戦っていたがリニスの攻撃を避けて穴に落ちた。

なんてこつたい。

リニスが強すぎるんだよな、と内心で文句を言いながらユウくんを膝に乗せる。

ユウくんとりニスは最後までプレシア側で戦っているけど、何がそうさせるのだろう。

くすぐったそうに身をよじるユウクんの髪をいじってポニテとかセイバーにしなから考える。

プレシアが言つてた金髪ツインズはクローンつてやつだから悩んでいるのだろうか。そうだとしてもそれほど悩むことなのだろうか。

俺なんてアルフのパンチ、ジュエモンたちの度重なる魔の手、プレシアの女の子の目、そしてリニストラップとかでコンティニューしてるけど脳天気にごせし大概の問題なら障害に感じなくなってきた。

相談してくれたらミュウツームみたいだねつて言つてあげるのに。

いや、流石に冗談だけど。

俺としてはミュウツーム大好きなだけど、やっぱり可愛くないよな。

ジュエモンたちを撃破し、アルフとリニスをチェーンバインドで凌ぎ、プレシアの女の子の目を乗り越えて再び風雲プレシア城に突撃。

倒した傀儡兵の頭をもぎ取つて鎖に巻きつけることによって便利な鈍器に早変わり。

俺は鈍器の扱いつて上手くないんだよね。

2、3回使つて捨てた。

制止の声を無視して先を急ぎ、誰よりも早く内部へ突入。

ユウくんとりニスの前に立つ。

何か話はないのだろうかと待ってみるが無言のままユウくんがデバイスを起動した。このままでは戦闘が始まってしまう。

ここで俺が取るべき道は……

1. 真つ向勝負
2. 話し合いで解決

3. 無抵抗主義

3しか無い。

兄を斬れるなら斬ってみろ!! の精神である。

来い。

斬れ、臆病者!!

斬れ!!

マジで斬られかけたでござる……。

めっちゃ凹む。

凹んでる場合じゃないんだけどね。

斬られる直前に竜也くんが防いでくれたので、なんとか大丈夫だ。

非殺傷設定とやらがあるらしいけど内臓とかやられるだろ、あれ。

『68 周目』

テンション上がりすぎてプレシアの開幕ぶっぱで死んだ。
なんという馬鹿なことを……。

またやり直しか、と思いつながら目を開くと玩具のメダルが飛んできた。
目の前にはリニス、俺の手にはメダル。

つまり……どういふことだ。

ユウちゃんと竜也くん、リニスとクロノくんが戦っている。

つまりセーブポイントがここに動いたってことですか!!

やったー!!

会いたかったぜ、プレシア!!

……ちよ、タイム。

デバイスの使い方が……。

やだー!!

『69 周目』

そりゃ無いよ……。

起動の仕方がわからんとかカッコ悪いぜ、俺。

またやり直しか……。

目を開くと玩具のメダルが飛んできた。

目の前にはリニス、俺の手にはメダル。

つまり、ここが本当のセーブポイントか!!

とりあえず使い方だけでも聞かないと俺が死ぬ。

頼むリニス、教えてぷりーず。

リニスの情報によると起動しても見た目は変わらずメダルのままで、演算の補助など

の本当に単純な機能しか持たないデバイスらしい。

ぶつつけ本番で新武器とか主人公的展開である。

走りながら設定し、デバイスを起動。

会いたかつたぜ、プレシア!!

今日がおまえの命日だ!!

あるえー？

『70周目』

手元で暴発してプレシアの攻撃で滅殺された。

どういふことなんですか、リニス先生!!

——教えてリニス先生のコーナー——

Q. 射撃魔法を使おうとしたら手元で暴発しました。私の身に何が起きたのでしょうか。

A. 原因として考えられるのは相手の座標をメダルに設定しなかったからではないでしょうか。本体から指示を出した座標にのみ演算の補助が働きます。設定しないと座標無しとなり、デバイスを利用した魔法は手元に留まったままになります。

初見殺しとかひどい……。

俺の魔力弾は拡散するので手元に残っているとダメージを受けるのだ。

しかも結構な思考を喰われるから困る。

今の俺には相手の目の前に転移で送り込んで拡散させるパイナポーアタックしか出来ない。

魔法つばくないです。

今度こそ俺の勝ちで終わらせてもらうぜ、プレシア!!

とか意気込んで戦闘するけどちよつと勝てる気がしない。

魔法が上手すぎ。

鎖バインドとかヒモQのようにぶつちぶちに引き千切られるし、数を増やして突破しても障壁で防がれて無意味に終わる。

シャーペンとか瓦礫をブーストさせてぶち込んでみても迎撃でピカツとやられる。さすが大魔導師、伊達では無いようだ。

ところで魔法使いの人たちには大魔導師ってどういう位置づけなのだろうか。

何度目かの攻防を終えたときにプレシアが血を吐いた。

顔色悪いと思ったけど、調子が悪いらしい。

時間をかけてジワジワと削れば勝てそうだが、俺もちよつと死にそう。

プレシアが放つ魔法のほとんどが範囲が広すぎて避けきれない。

防御するのだがシールドを紙屑のように粉碎するのだ。

プレシアの火力で俺がヤバイ。

互いに血塗れである。

頼むから非殺傷設定とやらにしてくれ。

非殺傷でも威力が高すぎて死ぬとかあるかもしれないけど。

血を吐いて隙が出来たプレシアのシールドだかバリアだかの内側へ転移させて暴発

寸前まで魔力を込めたへぼ魔力弾を撃ち込む。

衝撃でプレシアが部屋を転がり、カプセルに激突した。

どうやらあのカプセルの中身は金髪ようじよやユウくんのオリジナルであるオリジナル金髪らしい。

狼狽えながらカプセルを心配しているプレシアをチェーンバインドで十重二十重に縛る。

悪いが俺の勝ちだ、そうだろ？

『71周目』

奇声を挙げたプレシアが魔力を放出させながら俺の鎖を粉碎してかみなりドツカンされた。

執念というか、狂気というか……。

とにかく凄かった。

なんとなく羨ましい。

本当になんとかだけで。

再びプレシア戦。

どうやらプレシアは金髪オリジナルのカプセルがあるためほとんど動かないらしい。

座標が固定されているのでデバイスの補助を受けることが出来るのは有り難い。

プレシアの防御はそれほど高くないのだが攻撃が撃ち落とされるので届かない。

転移で防御を抜いて一気に……。

『72周目』

逆に浸食された。

転移の穴からこつちの座標を一瞬で割り出して撃ち込んで来るとか変態か。

攻撃も四方八方から飛んでくるし、強すぎる。

やつはラスボスか……セーブポイントに考えてラスボスじゃね？

つまり今が俺の決戦というわけですね、気合入ります。

絶えず動いてないとプレシアの魔法に吞まれるが、動いていようと幾らかの傷を負ってしまう。

防御してもシールドやバリアを軽々粉砕するから徐々にダメージが蓄積される。

こちらの攻撃は届かず、転移も難しい。

……こ、これはちよつとだけヤバいかなー☆

またプレシア戦なのだが、もっとスマートに行かないモノだろうか。

俺は炭化したり血が流れたりでなんかわけわかんね。

プレシアは吐血で勝手にダメージ受けるし。

とりあえず俺もプレシアも血だらけである。

なんという血戦。

プレシアも攻撃時に隙ができるのだが回避に専念しないと死ぬ。

ジリ貧なので勝負をかける。

転移でオリジナル金髪に鎖を巻きつける。

反撃でプレシアの魔法が飛んできたけど腕がもげただけで助かった。

シールドで傷口を抑え、血が流れないようにする。

武装解除しないとオリジナルを砕くぞ、オラア!!と鎖の力を増して脅す。

あいつ、複数のジュエルシールドで次元震を起こしやがった……。

穴に落ちた後は魔法が使えなくてやる事が無かった。

とりあえずプレシアを眺めていたのだが、壊れた機械の様にアルハザードに行つてア
リシアを取り戻すと繰り返していただけだった。

アリシアはオリジナルの名前で、すでに事故で亡くなっているとアースラで聞いた。

アルハザードはマジすげえ文明だか技術だからしいが、人を生き返らせることができ
るのだろうか。

存在していたとしても、今のような状態で見つけられるとは思えない。

同じことを繰り返し呟いていたプレシアは衰弱していき、最後の方は何も言わなくな
っていた。

プレシアのデバイスを借りて魔法の構成を弄ったり、メダルの設定を色々試していたらプレシアが血を吐きながら笑い出した。

何事か見つめるとアリシア、アリシアと小さく呟いて動かなくなった。

プレシアはアリシアのために狂ってまでひたすら……。

捕縛したとしてもユウくと金髪ようじよが目に映ることは無いんじゃないだろうか。

プレシアが完全な悪だったら良かった。

それなら簡単に事が済むというのに。

『73周目』

またプレシア戦。

やはりプレシアはアリシアのことしか見ていない。

金髪ようじよとユウくんのことを引き合いに出すと少しだけ興味を向けるが、結局話にならなかった。

俺の話がもつと上手なら説得できるのだろうか。

無理矢理にでも捕縛して連れ帰るべきなのだろうか。

二人を見ることなく幻影を追い続ける母親は必要なのか。

チエーンバインドで捕縛して悩んでいると、地面が割れて魔法の使えなくなる空間に飲み込まれた。

話し合えばプレシアと分かり合えないかと期待したが結局、ダメだった。

アリシアの代わりがないのはわかったが、それなら母親の代わりがないのもわかって欲しかった。

『74 周目』

説得しながらプレシアと攻防を繰り返していたら続々と皆が集まって来た。

かなり時間が過ぎていたらしい。

魔法の使えなくなる空間に落ちていくプレシアの姿を見送るだけで、説得できずに終わってしまった。

止めることくらいは出来たかもしれないが、何も出来なかった。

しようとも思えなかった。

プレシアは笑いながら消えて行った。

二人に微笑んだのかもしれないが、俺を嘲笑っている様にも見えた。

プレシアが消えてから、俺の周りは変化した。

金髪ようじよをフェイトちゃんと呼べるようになったこと。

ユウくんやりニスとはフェイトちゃんとアルフとともに管理局に連行されることになったこと。

罪はそれほど重くならず済むだろうからそのうち帰って来られること。

なのはちゃんや竜也くん、少しの間残っているユーノくんが頻繁に遊びにきてくれること。

部屋が広くなった気がする。

癖でユウくんやりニスを呼んでしまうこと。

そして、一人になるとプレシアを思い出すようになった。

死ぬことも無く、平々凡々な生活が過ぎて行った。

学校行って、遊んで、グイータという外人の幼女をゲートボールでフルボッコにした
り、逆にじいちゃんや近所の爺婆にフルボッコにされたり、時々メダルを調整したり
……。

最初の一か月は警戒していたが、何も起こらなかつたので安心してしまった。

魔法も少ししか練習しないようになっていた。

ループを終えたつもりになっていた。

冬のある日、ユウくとフェイトちゃんに会えるかもしれないと知らされた。知らせてくれたなのはちゃんも嬉しそうだった。

俺も嬉しくなつて夜眠れなくなった。

なんというか、遠足を待っている気分である。

あまりにも眠れなかつたのでメダルを弄っていると奇妙な感覚に包まれた。

前に経験した感覚が気になつて深夜にも関わらず家を飛び出してしまった。

大通りまで来て周囲を見回すとユーノくんが張るモノとは少し違う結界が張られていた。

嫌な予感しかしないわけで……。

気配を感じて振り向くのと、衝撃で吹き飛ばされるのは同時だった。

道路を勢いよく転がつたため、目が少し回っていた。

なんとか体勢を立て直そうと力を入れて踏ん張つたら腹から腕が生えてきた。

まさか敵はエイリアンか、などと思つていたら魔力を奪われていた。

徐々に魔力が無くなり、四肢に力が入らなくなっていた。

俺を襲つたやつは何かを咭くと空を飛んでどこかへ行つてしまった。

俺を襲つたやつ姿が見間違いだと思つた。

当分は立てそうになかつたので誰かが見つけてくれるまで寝ていよう。

大通りだし、少し待っていれば人も通るだろう。

そう思っていると結界が消え、目の前にはトラックの姿。

止まれ、止まってくれよ。

やつと会えるっていうのに。

俺はまた死ぬのか。

『75周目』

襲撃された日にコンティニューした。

まだ終わっていないのか。

何度で終わるんだ。

あと何度、俺は死ねばいい？

再び大通りに出て、見間違いならと祈りながら襲撃を待つ。

頭上に気配を感じて見上げた先には赤いバリアジャケットを纏った少女の姿。

帽子には自慢していた「のろいうさぎ」というぬいぐるみによく似た飾りがついていた。

手にはゲートボールのスティックに似た、金づちの柄を長くしたような形状のデバイ

ス。

ああ、やはり見間違えではなかったのか。

おまえなんだな……ヴィータ。

『76周目』

今まで通り、今夜もゲートボールの友、略してゲルトモと開戦してしまったわけだ。

ゲルトモであるヴィータは恐ろしいことにステイツクで撲殺しようとして迫ってくる。

これが普段のじゃれ合い程度なら俺も文句は言わないのだが、全力全壊で未知の魔法とゲルトモ流ステイツク撲殺棒術による近接戦闘まで仕掛けてくる。

俺も頑張つて応戦するけど無理ゲーだと言わざるを得ない。

シールドで防ごうにも数瞬だけ火花（魔力光？）を散らした後に温めた牛乳の上に浮かんでいる膜を破くように粉碎するのだ。

シーリングによる遅延＋シールドで延命する以外に俺には道がないでござる。

チェーンバインドで攪乱しつつ、回避、反撃をこなすが俺は全力なのに対してゲルト

モ・ヴィータは余裕の表情。

夏休み中は何らかの襲撃に備えて能力を維持しようとしていたが、秋学期が始まってから流す程度にしていたのが祟った様だ。

長引くとこの差が明暗をわけるとかそういう感じの展開になってゲームオーバーだろう。

救援が来るかしら怪しい現状だ、短期決戦で勝たなければ。

ステイックが直撃する瞬間にメダルで自爆して攻撃を逸らしつつ目くらましコンボ。

左腕だけ転移させて振り切られたステイックを掴み、チエーンバインドで四肢を拘束。

パターン入ったぞ!!と喜んだのもつかの間、ヴィータがあっさりとバインドを引き千切って回転しながら突撃してきた。

ちよつとスパデラのハンマーカービーみたいですね。

ちよつと意味わかんないけど、あいつのデバイスは電池交換によって火力が高まるらしい。

反則じゃね？

マジ意味わかんないっす。

現実逃避している場合ではなかった。

俺の紙装甲だと直撃するとヤバい。

どのくらいヤバいかと言うと「もうなにもこわくない」って魔法少女が言うくらいヤバい。

ヴィータも魔法少女なら「もうなにもこわくない」って言って俺に勝ちフラグを寄越してください!!

無理ですね。

すでに回避できない距離もまで迫られてるし、真っ向から撃ち合いだオラア!!と右拳を振り抜く。

テキトーになのはちやんからパクツたデイバインバスター!!

ヴィータが俺のビーム砲（デイバインバスター・偽）をぎりぎり削りながら迫ってくるのって結構こわいっす。

俺自身、砲撃は苦手っぽくて手元から減衰が始まってきていた。

頑張つて放出しているけど、どうも勝手に減衰するから困るんだよねー☆

脳天気な事を考えつつも減衰を止めるために手元のデイバインバスターの源泉にメダルを投入。

ぶっちゃけかなり思いつきだったけど威力が回復してきたぞ!!とか喜んでたらヴィータの勢いが無くなってきた。

シャーペンで彼女のデバイスであろうスティックを破壊する準備をしていたら、まさかの電池交換。

目の前での膠着で見てて気付いたけど実は電池じゃなくて弾じゃね、薬莖が排出されてたし。

メダルにドリルがゆっくりと食い込んでいく。

今度はマジモンの火花を散らしながら徐々に俺の右拳へとメダルの破片が突き刺さる。

弾かれるように後方へと吹っ飛ばされた。

砕けたメダルと奇跡の融合を果たした右の拳はぐちゃぐちゃで、肉片をばら撒いていた。

血も洒落にならないくらいドバドバ。

全力全壊で完全に押し負けたのだからどうしようもないね。

悔しいから最後っ屁として残った左手でシャーペンを投げようとしたが、横から切り付けられて落としてしまった。

振り向くと俺と同じくらいの背丈の少年だか少女だかが双剣を逆手に構えていた。

髪も長くて目元が隠れているし、大きな白いマフラーを巻いているせいで顔がよくわからない。

とどめとばかりにもう一度俺を斬って満足したのか、少し離れた位置で本を開いた。すいとるだかメガドレインだかギガドレインだかわからないがなんか魔力が無くなった。

今度こそ満足したのか空を飛んで行った。

それを見送りながら貧血気味の頭で思った。

おまえ、誰だよ。

『77周目』

ちよつと覚えてないけど最後に頭、というか全身がパーンてなった気がする。

また今夜もゲル友と一緒に!!なナイトをエンジョイですね、そろそろ勘弁してください

あゝへ

奇を銜って四つん這いでヴィータを待つ。

もちろん、頭には猫耳、尻には尻尾、背中に白旗の降参ポーズである。

ヴィータの気配を感じたので「武器は無い、つまり争う理由は無いだろうか?」とドヤ顔で語った。

それからは互いに無言だった。

決まった……。

そう心の中で感じていた。

勇者王が使いそうな巨大なハンマーでアスファルトに熱烈なキスをさせられた。

その後、双剣でザックリ↓MPドレインのコンボだった。

『78周目』

相手の罪悪感を誘う作戦でいこう。

スリッパ、パジャマ、ナイトキャップ、枕を肩腋に挟んで睡眠前の安らかな一刻を演出。

左手のマグカップから漂う温かいココアの甘い香りで、ちよつとしたモテカワ男子を装ってみました。

やあ、びーた

ココアをのみながらおれと、よどおしでかたりあわないか？

あれあれ？

おれのむねから

ヴィータの出現場所が同一方向なことに気づいて設置型のデイレイドバインドの罠で捕縛し、転移による先制をしかける。

バカみたいに溜め込んだ魔力でデバイスにシーリング、そしてチェーンバインドで拘束。

この前のリベンジにデイバインバスターを撃ちこもうとしたが双剣に阻まれた。

雲の間から月明かりが差し込み、周囲を照らす。

双剣を構えている少年だか少女だかも照らされたがやっぱり性別がわからんち。

夜空を切り取ったような闇色の瞳と髪、手足に巻かれたベルト、黒をベースにした足先まで覆っている外套、おまえ寒くねえのって感じの黄色で縁取りされた黒色の軽装、宙を漂うでかい本。

どう見ても悪役ですね。

マジで寒くないんですか、さすがBJ（バリアジャケット）先輩っすね。

今までのことも踏まえると、自然に構えてしまいます。

性別不明の双剣魔導師が躍りかかってくるわけだが、全部速すぎワロス。

移動速度と手数がヤバすぎワロエナイ。

俺が一回行動するのに三、四回は動いているに違いない。

目の前から完全に消えるとか初めてだ、捉えられん。

広範囲の攻撃を防ぐためにバリアを張る↓捉える↓消える↓バリアが切り裂かれる
↓バリアを張る↓捉える↓消える↓バリアブレイク↓…

出たよ、千日手。

相手は時間をかければヴィータが復活することから有利になり、俺は敵が増えて無理ゲーになるだけだ。

ダメーჯ覚悟のカウンター狙いで決着をつけさせてもらう。

もつとスマートに戦いたいです。

でも、俺にはこれしかない。

このシャーペンしか……。

斬り付けられた瞬間を狙ってメダルを使って全力で自爆。

転がるように回避した双剣魔導師の真横に開いた穴からディバインバスター・偽を撃ちこみ、正面からシャーペンアタックによる追撃の十字砲火。

流石にこれくらいやれば死ぬんじゃないかと思ったら双剣が鈍い金属音を放ちながら薬莖を排出して三つ又に分かれ、移動速度がアップしまくりで神回避。

髪の毛が月光に映える銀色に輝き、瞳が深紅の光で灯り、黒い羽根を飛ばたかせて超速移動で接近してきた。

目の前には白い外套と黒いマフラー。

これは死んだわ。

俺は彗星になった。

もしかしたら流れ星かもしれない。

そんな感じで吹っ飛びながらビルに激突してダイナミックエントリー。

瓦礫を撒き散らしながらゴロゴロ転がりながら今回もダメかもかもしれないと若干

諦めが入っていた。

勝利条件がわからんが、二人を戦闘不能とかだつたらマジでクソゲー。

人生と言う名のクソゲーになってしまふ。

つまり俺の人生がクソゲーとかやめてよね。

またMPドレインが始まった。

こいつは良くない。

俺の健康を害するんだかわからんがマジでよくない。

頼むから限界まで絞らないでお願いプリーズ☆

ぐわあああああ、ぼくのまりよくううう、しばらくりゆのおおおおお、q、

ヤバかったけど、直前で止まった。

超ヤバかった。

なんとなく地雷が近づいていた気がした。

朦朧とした意識の中で見つめた先では竜也くんが双剣魔導師と斬り結んでいた。

竜也くんは俺のヒーローだな。

知らない天井うんたらしながら目を覚ます。

目を覚ました俺に気付いたのか、見知らぬ局員が声をかけてきた。

どうやらここは管理局本局で俺は治療を受けていたらしい。

竜也くんマジでカッコ良かったから帰ったらナデポしてやんよ。

俺のナデテクは普通だからポツとなるのは竜也くん次第だけど。

よし、と起き上がると右腕が包帯だかギブスだかで凄いことに。

千切れる直前のところだったとか。

俺もバリアジャケット編んだほうがいいかもしれん。

リンディさんが入って来たので挨拶もそこそこに襲撃についての話をしようとしたが、まず俺についての話からしたいらしい。

襲撃の際にMPドレインによって魔力をほとんど持って行かれたのだが、俺自身に

よって回復が遅れているとか。

スキルだかよくわからないけど身体が無作為に魔力を『吸収』していて、自分が変換した魔力を使って自分の魔力を吸収しまくっている永久機関の真似事(笑)状態なので、落ち着いてからゆっくりと回復を待った方がいいとのことだ。

知らなかったが吸収できるのなら周りの物から吸収したほうが早いんじゃないかとで放出とは逆の感じで吸引。

なんだ、存外簡単じゃないかと思っていたらいきなりゲロ吐いた。

が、吸引が止まらない。

くっ、静まれ……俺の能力(スキル)……っ!!

ヤバイ。

マジで体調がヤバイ。

マッハでヤバイ。

腹パンとかジュレイモンフィニッシュに似た何かを感じる。

パン。

『80周目』

知らない天井がどんどどこどーん。

マジで超常現象。

今回もセーブポイントがムーヴしててでござる。

空気の入れ過ぎた風船みたいに破裂したのではないだろうか。

なんであんなことになったか、一応の予想は付いている。

低気圧↑空気↑高気圧、みたいな？

ほぼ空っぽのリンカーコアが欲張ったに違いない。

魔力で再現しちゃったんだね、きつと。

おお、こわいこわい。

竜也くんをナデポ(?)する予定を立てながらリンディさんと挨拶、そしてさっきの

ところに回帰。

話の内容としては

・放出できる量と同じくらい、またはそれ以上の魔力を吸収できるかもしれないので調節できるようになるまで無暗に使うべきではない

・吸収の量を間違えるとリンカーコアがおかしくなつて死ぬ

・リンカーコアがパーン

・内臓がパーンと同じなのでヤバい

・生成した魔力を片っ端から吸収している可能性があるので落ち着くのを待つべき

・魔力とか魔法とかのような人の加工品を吸収するのは毒

・魔法を喰らうのも毒

・魔法つて当たる痛いじゃん？ 勝手に吸収しちゃうじゃん？ つまり攻撃魔法はヤ

バ、割とガチで

・濃い魔素は毒

・というか全て毒

・魔法に関わると毒

・これで魔導師してらって可笑しくね？

常日頃から魔法が上手く使えないと思っただが、こいつのせいらしい。

魔法を使う↓勝手に吸収↓徐々に減衰↓時間による弱化↓消滅、ということだ。

つまり

砲撃する↓吸収↓徐々に減衰

防御する↓吸収↓徐々に弱くなる

バインド↓吸収↓徐々に脆くなる

みたいな感じ。

わかりやすくいうとスマブラのシールドあたりだろうか。

使い続けていると徐々に小さくなって割れて怯む、これの強化版みたいな。

吸収しているから無駄が減って魔力効率いいんじゃないやねって思ったが逆に全く良くないらしい。

俺の資質データで効率が頗る悪いという疑問があったがこれで解析できたとか。

魔法を使う↓吸収、で戻ってくるのだが、魔法使用時の魔力は圧縮魔力になってるので魔力で解凍して変換して吸収しているらしい。

無駄にステップを挟むだけならいいが、通常の変換も阻害する。

つまり魔法を使うだけで負荷がかかるのだ。

普通に生きる分にはそれほどでも無いけど、魔法を使うとなるとマジやべえよ!!ってことだ。

で、それが何か問題？

俺は魔導師に向いてないのはわかりきっていたことだ。

そういうのはユウくんとか会って後で考えるところでしょう。

ユウくんは？

え、家にいんの？

会いに行くわ。

数日後、そこには元気に帰宅する俺の姿が……!!

もうバトルなんてしないよ!!

そして目の前に迫る双剣。

ズバツ、グシャ、ギャー!!

……なんで襲つてくんの、コイツ。

昼間は聖杯戦争ですらお休みだつていうのに、まったく。

やれやれだぜ。

『81周目』

あの双剣魔導師は辻斬りか何かなのか。

いきなり襲われて、抵抗むなく首を掻つ切られたんだけど。

色変化機能付きの謎強化が厄介すぎる。

全体的に能力が上昇してるっぽいし、第二形態とかそんな感じだろうか。

まさか帰宅中にも死亡フラグが転がっているとは、ホント海鳴は魔境だぜ……。

もしかしてあれか、完全決着を望むるとかそんな感じか。

なにそれ男らしい。

けど、迷惑です。

マジ勘弁。

自分の欠陥に気付いた俺はちよつと無理っす。

俺には戦う意味とか無いし。

な？

ノーカウントだ、ノーカウント。

同じ魔導師だろ？

頼む、見逃してくれ!!

まあ、本人がいないところで何を言っても無駄だろうけど。

あー、どうっすかなあ……。

回復したら絞りにきて、放置、また回復した頃に絞るとかだつたら俺は泣く。

本局に引き籠るとか？

ないわー。

みんな地球にいるとかで俺だけ管理局にボツチ状態。

知り合いかユーノくんしかいねえし、いじめられてんのかしらん。

とりあえず魔法の本場なので超凄い図書館で勉強することにした。

だって俺が帰れるのってレイハさんたちと一緒にタイミンがらしいし。

デバイス、俺、の図式が完成した。

図書館にこもったが特にこれといった成果は無かった。

今まで魔法を使ってたけど大丈夫だったし、これからも大丈夫じゃねって感じで使うしかないね。

減衰量へ放出量、によって補うことにした。

あとは魔力運用を鍛えて吸収した魔力を体内に入れないでなるべく使うようにするくらいか。

右手で留めて、放出するカウンターとかできたらいいな、とは思っている。

レイハさんとバルディッシュに魔力運用の様子をモニターしてもらう。

この二人（二機？）はマスターのために限界に挑戦するらしい。

これまで以上の力を得て、役に立つとか。

相手と話し合うためにねじ伏せるとか発想が漢らしいですね。

みんな頑張ってるのに俺だけヒツキーとかさすがにダメだろう。

頑張るしかないね。

俺のデバイスはA I 無いからけど、愛着はあるわけで。

二人に俺のデバイスを自慢したら口ごもられた。

まあ、基本的な機能しかないからね。

クロノくんは魔法を相談したら彼の師匠と友人を紹介してくれた。

クロノくんマジイケメンだわあ。

会ったら猫耳の双子とモテカワスリムの女性でござる。

……クロノくんマジイケメンだわあ。

プライベートでは酒池肉林かもしれんね。

ショートヘアで落ち着きのないロツテとロングヘアで姿勢の良いアリアのロツテリアツインズと透明感のある翡翠色の髪をポニテにしたジルベルトさんが俺を半殺しにしてくれるそうです。

笑顔でそう言っていました。

ジルさんはクロノくんと同じ年らしい。

クロノくんよりもでか……む、胸の話です。

身長の話なんて断じてしていない。

まあ、胸は似たり寄ったり……まな板なんて思ってたねえです。

じゃあ、さっそく相談に……。

習うより慣れろ、だど……。

アリアにビームで撃たれたり、ロツテにナッコオされたり、ガンブレードっぽいデバ

イスで撃たれたり、斬られたりしたけど俺は元気です。

なんだかんだ言って俺が昏倒しない辺り、技量が凄い気がする。

吸収するぎりぎりを見極めているとか。

生き地獄を味あわせるのが好きなドSか。

ジルさんのガンブレードっぽいデバイスがヤバイ。

剣を受け止めたと思ったら、弾を装填すると瞬間的に威力が上がって潰される。

ガンブレード的な使い方もできるとかひでえ。

距離を離すと撃たれるし、近づくと斬られる。

強すぎだろjk。

ジルさんは近距離が得意だとかで近距離でチャンバラしながら魔力弾をバカスカ撃つてくる。

魔力は毒ですってアピールしたらデバイスで殴られた。

無理を通したいなら無理に慣れるしかないとか手荒すぎワロタ。

ワロタ……。

これが人間のやることかよ!!って叫んだらロツテリアは使い魔で、ジルさんは悪の組織によって造られた改造人間らしい。

「このバカ犬!!」とか「やめろ、ショッカー!!」みたいなイメージを抱いた。

まあ、ネタだよね。

とりあえず吸収した魔力は自爆で周囲に排出することにした。

一気に放出できるし、煙幕や牽制にもなるし、近距離まで迫られたときの攻撃にも使えるからだ。

俺も結構ダメージ喰らうから好きじゃないけどNE☆

嘘です。

ビルトビルガーごっこしながら「ジャケット・アーマー、パージ！」と内心でやってるから結構楽しんでる。

別に装甲を切り離すわけでも、エナジーウイングが展開されて加速するわけじゃないのだけれども。

模擬戦後の反省会で俺の自爆がおかしいってことでデバイスのチェック。

そして衝撃の事実が発覚!!

なんとメダルはヤバイデバイスの可能性があるらしい。

……え？

どういうことだし。

実は眠っているAIがあつて目覚めると俺が死ぬかもしれない危険な人格だが、数多の闘いの末に友情に芽生えて真価を発揮する時がくるとか？

——くっ、俺の○○（デバイス名）が疼く……。——

——第二の人格が目覚める!!——

——変身をあと2回残しています。——

なにこれマジやべえ。

段々と人類から離れている辺りがマジばねえ。

あ、ないですね。

わかつてます。

三人の検証によると未完成なのか欠陥品なのかわからないが使用するにはあまりに危険なデバイス、つてやつらしい。

デバイスというか、むしろ爆発物的な何からしい。

俺だけを殺すための機械とかそんな感じかもしれない。

普通に使っている俺は気持ち悪いナニカ、らしい。

らしいとしか言えないのは俺にはデバイスの事はさっぱりわからんからだ。

コイツらは冗談とか嘘とかつくから話半分で聞き流すことにした。

取り上げられそうになったので逃亡した。

リニスに貰ったデバイスが殺意を孕んでるとかそんなわけないじゃないですか、や

だー!!

逃げたのでまたもや独学状態である。

とりあえず昇竜拳ができるようになった。

波動拳も撃てる。

俺の魔力が飛んでくだけだから普通の射撃魔法の弱体化でしかないけども。

手に魔力を集中させて雄たけびを挙げながら殴りつけるとデューオごっこができる

ぞ!!

デューオを知らない？

あれだよ、あれ。

パワーファイターズとメタルヒーローズのあれでござる。

ロックマン8に出てくる腕がでっかいやつ。

つまりロールちゃんが超かわいい。

地上に降り立ったエンジェルですね。

むしろ羽のないエンジェル。

ロールちゃんマジ天使。

天使過ぎてはんどそにつくとかしちやうかもしれんね。

あと魔法のパンチも練習した。

初代でフリーデインが使うことによつて猛威を奮つた三色パンチでは無い、ということ

は確かだ。

魔法を使っているために危険度が上昇した時を止める拳で、個人的にはかなり気に入っている。

実践したことないからBJ越しに効くかわかんけど。

デバイスたちと親交を深めながら地球に輸送されたわけです。

リンデイさんに色々と言われたが俺も戦う旨を伝える。

心配してくれてるとかマジいい人。

超キレイなヒトだし、十年後はクロノくんが俺の息子に……。

夢が広がりますね。

俺のことを考えてくれてたらしく魔法解除を勧められた。

マジックジャマー系で魔力結合を邪魔して吸収を抑えるってことらしい。

ジャマーで邪魔って洒落はベタじゃね？

邪魔したら俺も魔法が使えない気がするんだけど、そこら辺はまた考えようぜってことか。

明日あたりにでも試して、良さ気なら利用してみようか。

まあ、そんなこんなでヒッキーだったクロノくんがお仕事をするとか。

新型デバイスで盛り上がってるのでかなりハブられている俺も一緒にいくぜ!!

なんとなくレイハさんみたいな萌え燃えデバイスほしいんだけど。

またはバルディッシュな紳士たいぶ。

まあ、俺の場合は何度もやり直すのを説明したりとかめんどそうだから持てないけどね。

非人格なら……。

でも魔力の出入りがアレすぎてぶっ壊れるんだよね。

規定以上の魔力を込めての故障はメーカーも保障してくれないとか。

名も知らぬ武装局員の人、マジごめんね。

やり直してるから今は問題ないけど。

捕捉して、結界で閉じ込める。

貴様らは袋の鼠だ!!と叫んだがこれでは俺が悪役じゃないですか、やだー。

赤いバリアジャケットを着たヴィータと白髪犬耳褐色タンクトップ筋肉の男……

ちよつと盛りすぎじゃね？。

あ、でも女だったら果てしなく可愛い。

性別が違うだけでこれほどの破壊力とは、おそれいったぜ……。

なんてことを考えていたらクロノくんがUBWしてた。

アンリミテッドなんたらわーくす。

属性特盛男に防がれたけどね。

今日もヴィータと殴り合う仕事が始まるお、と飛び立とうとしたらそこまでよ!!とばかりに高町ツインズとフェイトちゃんが助っ人として現れた。

出鼻くじかれた^q^

味方的には「戦う前に話しようよ!! 納得する理由も話してね!! すぐでいいよ!!」ってことらしい。

で、敵の返答は「話し合うのに武器持ってたら怖いでしょう?」ってことで断られた。うむ、確かに一理ある。

俺も自身はシャーペン以外はほぼ非武装なわけだし、和平の使者（地上に舞い降りたエンジェル）として仲を取り持つことに決めた（独断）。

世に平穩のあらんことを、とか和平っぽくね?

まあ、でも俺は黄色くないので普通にちよつとそこにあるファミレスでサイコロステーキでも食べながら話し合おうぜってぴゅーと飛んでいったら双剣で斬り付けられた。

あまりの態度に驚きで目を見開いたら迫ってる犬耳ナツコオ（男）。久しぶりに腹パンですね、これはひどい。

しかもアルフと違ってご褒美が無しだから死に損。

!!
ヴィータ、見ているか!! 貴様の望みどおりだ!! だがそれでも……死んだのは俺だ

血反吐を吐きながらヴィータに叫び、重力に身を委ねる。

和平は難しいぜ……(迫真)。

『82周目』

イザナミだ。

……イザナギか?

ちよつとわかんね。

蘇生包丁ではないことは確か。

槍を持たない和平の使者が翼の折れたエンジェルにクラスアップしちまったぜ。

おお、こわいこわい。

やはりサイコロステーキがダメだったのかもしれない。

犬耳がいたから肉でいいだろうって安直な考えを見破られたのか、それともサイコロス

テーキの製法の怪しさに気付かれたのか……。

まあ、いいか。

ジャマー系を修得したいが時間が足りない。

戻る時間が一気に短くなってきている。

そのうち一秒前に戻ることになりそうであつとヤバいかな、と。

とりあえず修得したのはジャマー系のフィールド魔法で俺の周囲ごと包んで結合を散らすことができる。

濃度を上げまくって互いが無防備になる自爆技だけでも。

吸収を防ぐには至らなかつたが手札が増えたとして良しとしよう。

またも戦闘が開始でござる。

和平の死者（イケニエ）になりたくないので話し合いは無しだ。

クロノくんもUBWしてたし、徹底抗戦しかならんね。

意思を通したくば捻じ伏せろつてやつですね、力こそが正義。

中にいると使者になる呪いにかかる気がするので結界の外から攻撃する。

座標をテキトーに設定して砲撃。

これが次元跳躍攻撃だ。

……ドヤ顔で撃つてみたけど向こうの反応もわからないし、様子も見えないし、寂し

さがヤバい。

あと負荷でゲロ吐きそう。

制御処理がきついので一発限りでござる。

撒き散らしてもいいなら連射できそうだけど、友軍に当たるかもしれないから難しいんだよね。

もう一撃ぶち込もうかと思っていると結界に突入しようとしているポニテ侍を発見した。

関係者以外立ち入り禁止なんすよ、なんてへらへらしながらチェーンバインド。

最速で射出したが軽々と斬り払われた。

俺のバインドは斬られる運命にあるのだろうか。

武器的に近距離だろつてことで距離を取りながら瓦礫を相手の急所にシュート。

難なく斬り払われて超エキサイティングできねえ……。

近づかれるとヤバそうなのでチンタラやってたらポニテ侍が業を煮やしたのかデバイスが変形した。

蛇腹剣とか実用化できたのか、魔法まじパネえつす。

蛇腹剣の速度が速くて近寄れずに後退するハメになった。

しかも次元跳躍攻撃とか調子に乗ったことをしたために余裕が無い。

いや、正しく言えば余裕が無いわけではない。

まだまだ戦えそうなのだが細かい動作や魔法の制御が甘い。

それにほんの少し、ホントにほんの少しだが動きが遅くなっている。

時間をかけてじつくりやりたいが、調子が悪くなるだけだろう。

現状では短期決戦が望ましい。

蛇腹剣の攻撃範囲外で道路に降り立つ。

ビルの壁面を壁蹴りで飛び移り、屋上から飛び立ち、加速し続けながら突撃。

相手が蛇腹剣を通常状態っぽい剣に戻しているのを確認し、シールドを足場にして一

直線に駆ける。

このままだとバツティングセンターの球の如くピンポイントでホームラン、または居合切りで真つ二つになる未来しかないので変化を織り交ぜる。

超近距離間での多重転移で左右にブレながら更に加速し、接近。

野球盤で言うところの変化球とか消える魔球のようなウルテクである。

まさに質量を持った残像。

決して小賢しい技ではないのだ。

相手の攻撃範囲に入る直前で急停止し、自爆による煙幕、そしてシーリング・ディレ

イと同時にシャーペンアタック。

シャーペンによってデバイスが弾かれて空いた懐へ飛び込み、自爆の要領で高濃度のAMF（アンチ・マギリング・フィールド）を撒き散らしつつ、魔法のパンチ——ハートブレイク・ショット——をぶちこむ。

BJごと砕くはずだったが、これは……ダメか。

手応えの無さを感じながらポニテ侍が吹っ飛んでいった方へ目を向ける。

綺麗にコンボを繋げたが、最後のAMFで拳の魔力を散らしてしまったようだ。心臓に打ちこむはずが、打点もズレた為に中途半端な結果になった。

傷は無し、と予想。

完全に失敗した。

しかもあの一瞬でバックステップを行ったことで拳による衝撃も殺されたから吹っ飛んだのだろう。

ご褒美レベルのおっぱい魔人だが戦闘経験は相当高いに違いない。

もしかしたら100レベかもしれん。

そういえば100レベの裏技ってどうしてあんなバグになるんですかね。

涼しい顔でポニテ侍が起き上がった。

追撃しようかと悩んでたら復活しやがった。

予想よりも早く復帰したのを焦りながら、蛇腹剣を出されたら勝ち目が薄くなるので

下がらずに接近戦を選択。

構えて向き合うとポニテ侍が口を開いた。

俺は強いらしい。

なのでぶつ殺しちゃうかもしれない、なぜなら私は未熟だから、とかなんとか。

じゃあ、闘わなければいいじゃんとか言える雰囲気ではない。

いや、言う気も無いけど。

俺だつて空気は読める。

仲間と主のために頑張ってるって言つてたし、決意は固いのだから無駄だろうよ。

和平に舞い降りたエンジエルの俺をころころするくらいだし。

願いを叶えてくれる道具でも渡せば変わるかもだけど。

しえんろんとか、せーはいとか、そんなかんじ？

逆刃刀とか木刀とかでも漫画のように思いっきり殴つたら死ぬらしいし、あのデバイ

スだと不慮の事故が起こるのはしょうがないんじゃないかね。

だから別の変えるとか魔法刃を使うとか、ねえ？

おまえらのデバイス超危ないっす、割とマジで。

どうかな、この機会にハリセンにしてみては。

またはレーザーポインターでライトセーバー（笑）とか。

なんて提案できる空気じゃない。

そんなこと言えるのは勇氣か、それとも無知か。

英雄はどちらでもあるのだ、なんてことがあつたりなかつたり。

俺には向いてないね。

結城といえは美柑の可愛さは異常。

リトになりたい。

気付いた時には目の前でポニテ侍がデバイスを振り上げていた。

距離を取ろうと自爆するがそのまま斬り払われた。

マズい、離れられん。

演算速度も激減しているため、転移が使えない。

一か八かのハートブレイク・シヨット。

難なくデバイスで防がれた。

防がれただけなら仕切り直しでいいんだが、ちよつと拳を痛めた気がする。

ちよつと、と表現するのが正しいのかわからん。

やせ我慢はやめる。

超碎けた、中身がグチャグチャに違いない。

やつてくれるぜ……。

蹴りを主体にして戦闘を続行。

へなちよこ弾幕をばら撒きながらなんとか喰らいつくが、慣れてないので防戦一方になつてしまった。

空中ではどんな体勢でも気にせずには攻防できるのが利点だ。

常に自分と地面の位置関係を把握してないと脳天から落下して自滅する可能性があるのが欠点でもある。

薬莖の排出して発生した衝撃波で吹き飛ばされた。

ビルに突っ込んだが、立ち上がった瞬間に追撃でミラージュサインっぽい技がシールドごと俺を切り裂いた。

胸部が抉られ、熱で爛れていたが死ぬにはまだ早い。

チエーンバインドを伸ばしながら再び立ち上がる。

バインドは斬り払われたが、どうせ立つまでの時間稼いだ。

まあ、残心を欠いていて拘束できれども思ったが相手に失礼だったか。

ポニテ侍は目を丸くしながら俺を見つめてくる。

やだ、恥ずかしい……。

惚れた？

……冗談つす。

手加減したが手応え的には倒したと思っていたらしい。

まだ右拳と胸から腹部にかけて潰されただけだ。

まだやれる。

もつとできる。

どこまでもいける。

ポニテ侍が名乗っているが最後まで聞かずに無視して転移する。

制御が全く効いてないがここよりも近づければ良い。

今の様に目の前ならもつと良い。

これは運が向いてきたか。

無いな。

運が良かったら俺は……いや、関係ないことか。

シグナムの視線と迫っているデバイスの動作から攻撃の軌跡を先読みし、メダルを指で弾く。

眼前に現れたメダルを咄嗟に斬り払われたが構わずデイベインバスター。

魔力がかなり散って掠っただけだがデバイスを逸らせたので十分だ。

がら空きの胸部にハートブレイク・シヨット。

ピンポイントで心臓を撃ちこむことで相手の動きを止める技だ。

時止め技の一種じゃないだろうか。

原理は心室細動でも起きているんじゃないやねってことだが、実際はわからん。

そしてシグナムに効くのかも不明だ。

だって失敗したし。

B Jがやたらめったら固いのか、拳がイカれてて威力が死んだのかわからないが、おっぱい魔人の特徴に防がれて終わった。

反撃は、手加減なし無慈悲の一撃だった。

それを潰れた拳を衝突させて直撃を回避。

戦闘に使えなくなったのだから盾として有効利用。

右腕が何だかミンチよりひでえし、上がらない。

それでも戦えるのだからやるしかないね。

限界は感じないが、頭の冷静な部分がこれ以上はダメだと言っている。

確かに、もうダメかもしれん。

シグナムと痛み分けにしたとしても俺はダメだろう。

ならこのまま諦めて死ぬよりも、足掻いて死ぬほうが幾分か敵にダメージを与えられ

るんじゃないかな。

ここで排除すれば後に繋がる。プレーってことで俺はMVPがもらえるかも。

シグナムをこのまま付き合わせて主や仲間と今生の別れを満喫してもらおうしかないね。

挟り込んでいたデバイスを左腕で握り、チエーンバインドで俺の腕ごと拘束する。

遠慮しないでゆつくりしていつてね!!!

自爆と吸収の高速コンボを繰り返す。

傍から見たら俺とシグナムが明滅しながら魔力残骸の煙を撒き散らしているように見えるだろう。

実際はシグナムから魔力を奪って自爆を繰り返している。

代わりに吸収した廃棄魔力を流し込んで消耗させる。

俺から逃れようと魔力を燃やしているが、無駄な事だ。

炎熱変換された魔力も一緒に奪っているから自爆の火力が上がるだけ。

掴んでいる左手が内部から火傷してるかもしれないが、それはどうでもいい。

いい感じに互いが弱った頃合いを見てビルから飛び降りる、シグナムも一緒に。

炭化した腕が取れた気がしたが、今更ってどうしたって感じだ。

飛んで逃げられたり、防御魔法で生き残られては困るのでAMFを展開。

鎖が解除されるが知ったこっちゃない。

潰れたトマトにジョブチェンジだ、はははははははは。

秘儀『ダイナミック☆マトペースト　くポニテ侍を添えてく』

『83周目』

結界内のことは無視することに決めた。

次元跳躍攻撃とか当たらない気がするし、俺の闘いに余裕が無くなるからね。

空を飛んできたシグナムが結界の前で止まった。

結界を破ろうとしてデバイスから葉莖を排出した瞬間にデイベインバスターを転移させて正面から撃ちこむ。

速さと精度を重視したので胸部のみを撃ち抜くことになった。

さらに胸部に手を転移させる。

これは胸から手を出して俺のリンカーコアから魔力を絞る謎の転移をパクった魔法だ。

魔法という結果を行使出来る程度には再現できた。

ただし、オリジナルと異なつて構成が滅茶苦茶なので燃費が頗る悪く狙いを定めるのも難しいのが欠点だ。

俺が使う次元跳躍魔法と混ぜることで実用化に至ったが、魔力がヤバイ。

今のように大技を放つ直前の隙を狙えば何とか当てることができる。

シグナムの胸あたりに手を出しながら気付いたのだが、この魔法はリンカーコアを摘出するだけっぽい。

自爆の要領で渾身の力を込めてリンカーコアを吹き飛ばした。

呆然としているシグナムが落下し、地面へと激突して魔力の残骸を残して消え去つた。

な、なにが起きたし……。

目の前で起きたシグナムの消失に、驚愕していると虚空から謎の変態仮面が転移してきて魔法を放ってきた。

俺は動揺を隠せずに防戦一方だが相手は憤慨しているのか暴走しているのか、猛攻が止まらない。

相手のデバイスらしいビニール傘で滅多打ちにされているのには溜息が出てしまう。

捨て身の自爆も難なく躲かれ、煙の向こうから現れたのは二人の変態仮面。

分裂しやがった……っ!!

陰謀めいたものを感じながら凌ごうと努力するも砲撃魔法に引き裂かれた。
退屈な人生ってやつを送ってみたいものだと考えながら落下する。

『84 周目』

オリジナル主人公の憂鬱、とか言ってみたりして。

魔力が無くなるとシグナムは残骸となって死ぬらしい。

どんな万国吃驚体質だし。

吸収するにしても限度がある、というかシグナムの魔力を限界まで吸い切ると死ぬと
思う。

死ななくても体調の悪化とか起きそう。

クロノくんの家に寄った後にすぐに帰宅。

戦闘前にユウくんの顔が見たかったわけだ。

そろそろ癒されないとやってられないわ、とか思ってた家に帰ったらユウくんが病んで
た。

俺のベッドで泣きながら俺とプレシアに謝ってた。

ひぐらしを彷彿とさせる現状は今の僕には理解できない。

まさに、わけがわからないよってやつだ。

とりあえず状況確認のためにリニスに話を聞くことにした。

ユウくんが病んだのはプレシアがいなくなった頃らしい。

廃棄所から逃亡したときにはすでにプレシアを母と慕っていた、というか崇拜していたのがそもその原因であるとか。

脱出後すぐに拾った俺に懐き、代替として心の穴を埋めることができたように見えたがフエイトちゃんの出現で再び崇拜することを思い出してしまった。

揺らぎながらもプレシアを求めて、俺と対立して、拒絶され、限界だったが耐えていた。

そんな不安定な状態でプレシアを思い出すフエイトともにもいることで許容量を超え、さらに久しぶりの再会に気が弛んでるところを俺が襲撃された知らせを聞いて振り切ってしまったということだ。

……。

やり直しはできない。

戻っても襲撃後になるし、戻る時間が異常に短くなってきた。

落ち着くまで傍にいるのが最善だが、そうもいかないっぽい。

どうやらユウくんはシグナムに襲撃を受けていたらしい。

ユウくんは魔法を使うことに苦痛を感じながら、リニスと協力して一度は退けたが、間違いなく再び来るだろうということだ。

すでに住所がばれてしまっているうえにユウくんが避難しようとしないので、リニスだけで迎撃する予定だったとのことだ。

今までシグナムが遅れて来たのはここを襲撃してからだだったのでだろうか。

屋根の上でリニスに過剰な魔力消費を控える様に小言を言われながらシグナムを待つ。

意思とは無関係の過剰吸収は俺の体質が原因で起こる、らしい。

体内で運用している魔力は決して減らしてはならないとも言われた。

シグナム相手に無理だと思うんだけど。

リニスが接近を確認し、結界を張る。

この結界はユウくんを隔離する意味合いが強い。

シグナム以外のやつらに襲撃されたら意味が無くなるが、管理局の作戦で捉えられているだろうし大丈夫かな。

動物モードのリニスを頭に乗せてシグナムと対峙した。

簡易的にパスを繋いだリニスに魔力を委ねる。

リニスの射撃魔法を掻い潜って迫るシグナムに蹴り付けるがデバイスで防がれる。

転移穴を開け、リニスの砲撃魔法が四方から狙い撃つ。

防御魔法を展開しているシグナムの眼前へ転移し、デイバインバスターを零距离で解放。

俺に直撃するリニスの魔法を吸収しながら、さらに火力を上げる。

デイバインバスターでシグナムを固定している間にリニスが高位のバインドを用意し、防御魔法ごと拘束する。

シャーペンを射出し、胸部装甲を貫く。

無力化のためにリンカーコアを摘出し、失った魔力を吸収する。

体調が悪い旨をリニスに伝えると吸収しすぎだと怒られた。

魔力のバランスが崩れているのだとか。

魔力の急激な吸い上げで気絶したシグナムを管理局に転送しようとする結果を破壊して変態仮面が現れた。

そうだ、こいつがいたんだった……。

再びリニスに援護してもらって攻めようかと考えていると変態仮面がバインドで縛ったユウくんを見せてきた。

人質とか、そういうことやるのは無しだろ。

『85周目』

シグナムを解放から俺のリンカーコアを奪われるまで流れる様に行われた。

そしてパーン……。

ユウくんを保護するのも重要だな。

前と同じようにシグナムを拘束、そしてメダルをリニスに渡してからユウくんの元に転移する。

変態仮面の出現を確認し、ユウくんが眠っているベッド以外をメダルの座標へ転移させる。

魔力が一気に減って結構キツイ。

リニスの小言を聞き流しながら、変態仮面の一挙一動を見張る。

片手にビニール傘、顔には仮面、女性のような丸みがある体形、髪型は青髪のロングである。

分裂すると男らしい変態仮面も出現するのだ。

とりあえず現状では雌雄がいることだけがわかつている。

傘型デバイスとは珍しい……というかデバイス自体をそんなに見たこと無かったわ。

なのはちゃんのスタイリッシュな杖、竜也くんの小太刀、フェイトちゃんの鎌、ユウ

くんの槍、クロノくんの実用的な杖、俺のメダル、ジルさんのガンブレード、ヴィータのゲートボールステイック、シグナムのチャンバラソード、そして変態仮面のビニール傘。

……うん。

結構自然じゃね？

よくよく考えてみるとどこも可笑しくなかったぜ。

チエーンソーとかパイルバンカーとか出てきても驚かん。

様子見も含めて殴りかかる。

が、カウンター気味に射撃魔法を直撃させられた。

命中精度が高く、急所に当たるために威力が何倍にも感じられる。

止まる気がないのに動きが止まってしまふ。

俺が怯んだところにバインドで動きを止めてから傘を開き、魔力を集中させている。

目が眩むような輝きとともに砲撃が放たれた。

なんというマスタースパーク。

これは死んだ。

光の放流に身を任せようとしているとリニスが庇ってくれた。

バインドを破って走り出す。

リニスはもう動けないだろう。

すぐにも戦闘を切り上げたいところだ。

多重転移による攻撃をしかけるが、難なく回避してカウンターまでお見舞いされた。

読まれている……？

確かに技量差もあるが、簡単に防がれ過ぎだ。

読まれているとは思えない。

あれか、サトリとか？

とりあえずやっておくことが一つ。

——おまえ、俺の考えがわかるんだろ？——

……。

反応が無い。

外した？

もしかして予測が凄いか、予知系のスキルとか、そもそも技量差で簡単に読まれて
いるとか色々あるけど、サトリではないのか？

リニスの接近には気付いてなかったし、考えを読めるとは少し違うのだろうか。

わからん。

何故だか知らないが俺の動きが読まれるのだから捨て身で特攻をしかける。

怯まないように急所のみを圧縮したシールドで守り、回避抜きの加速を織り交ぜた愚直な突撃。

避けると思った？

ざゝんねゝんでゝした☆

痛覚がイカれた俺に許された接近方法だ。

怯まずに接近さえできれば俺に有利だ。

ハートブレイク・シヨットが変態仮面の心臓に突き刺さった。

動きが止まった変態仮面を前に最大まで魔力をチャージしたデイバインバスターを放とうとしてリニスの叫ぶような声が俺を呼ぶ。

振り向くのとシグナムに斬りかかられるのは同時だった。

こんなに早くバインドが破られるとは思わなかったわ。

最悪だ。

『86周目』

傘が無限に伸びるライトサーベルみたいになって斬られた。

魔力が濁流のように流れ込んで死んだ。

イデ○ンソードか何かか、あれは。

俺は小説版のほうが好きかな。

なんかカッコいいし。

『87周目』

また管理局の治療室で目覚めた。

リンデイさんの優しさを噛みしめながら、方針を考える。

この短い期間で力を付けなければユウくんが襲撃されるし、されないとしてもフェイトちゃん辺りが襲われるだろう。

なのはちゃんの話し合いをしたいと戦場に出れば連鎖的にフェイトちゃんも向かう

し、竜也くんも行くだろう。

つまり、隣に立つためには死なない程度には強くなる必要がある。

結局は力が無ければ生き残れないってことだ。

心の友なクロノくんがロツテリアとジルさんと呼んでくれたので訓練に励む。

鍛えるのは攻撃に対する反応の鋭敏化だけだ。

攻撃、防御、速度、魔力量、etc。

いずれも短期間で伸ばすには難しいので、俺の最も優れている点である反射のみを更に伸ばすことにしたのだ。

極小のチェーンバインドを糸のように周囲に張り巡らせ、断ち切られた部分から位置を予測し、射程圏内に入ったら対処するというものだ。

範囲はかなり狭い。

減衰や魔力消費を考えると伸ばすには無駄が多すぎた。

ということとで、4mで十分（つうかこれが限界）。

まあ、ボコボコにされながら勘や見切りを重点的に鍛えるってことだ。

死にまくっているのでマジでヤバそうな攻撃は当たらないのだが、死にそうにないものだと勘が働かなかつたりするので。

コンティニューの弊害かもしれん。

とにかくそういった部分も鍛え直すということだ。

使えなくなった腕を盾にすると超怒られたので出来るだけ努力しよう。

ジルさんは貧乳のくせに怖いからなー。

72め。

実際は知らないが72に違いない。

あ、ジルさん。

どうしたんすか。

胸？

俺がそんな話するわけないっしょ。

6年生すすよ？

来年には中学生なのに胸って。

無いわー。

72言ってるんすグヴァあああつああ!!

……。

……犯人はジルベルト。

メダルについても今の内に詳しく聞いておこう。

ホントは嫌なのだが、何が起こるかわからないから聞いておくのだ。

気になる点は向こうに戻ってリニスに聞いて解決するし、嫌だけど知識を借りよう。

メダルの可笑しな点はいくつからあるのだが、一つは魔法の誘導性らしい。

俺もよく使っているが特に問題ないと思っていたのだが、どうやら魔法も呼び寄せるようだ。

しかも魔力を溜めこもうとする機能も付いているとか。

ポイントなのは溜めこもうとするというもので、溜めるわけではないというのだ。

つまり、メダルの周りに待機させておくというのが正しいのだろう。

俺の魔力ならいいのだが、敵の魔法が近づいた場合は掠ったとしても通り過ぎずに近くで漂っている可能性が存在するとか。

なん……だと……。

他にもわけのわからない機能があるっぽい但未完成品なので眠っているとか。

魔法が毒になる体質なのに呼び寄せるデバイスとか、などと引かれた。

リンスエ……。

レイハさんやバルディッシュにメダルの性能を愚痴りながらジルさんやロツテリアと徒手空拳で模擬戦。

戦ってて思ったんだけど、武器を持っている相手に素手って可笑しくね。

普通さ、そういうのってハンデとしてやるわけじゃん。

シグナムのほうが技量は上なのにデバイス使ってたからね。

剣道三倍段を知らんのかと言いたい。

俺もデバイス欲しいけど、溶けちゃうんだよね。
なんとかならんかな。

久しぶりの地球だ……。

ギブスとかしてるのに模擬戦でボコボコにされてたからなんか目が潤んできた。

これからシグナムとの戦闘があるわけだが、報われなかったらマジで泣くぞ。

クロノくんにもシグナムについてや闇の書の話聞いてからリニスを探そう。

家にいたでござる。

衰弱しているユウくんを寝かせてリニスを問い詰める。

忘れていたのだとシレッツとした表情で言い放つてくれた。

こいつ、俺のこと嫌いなんじゃね……？

メダルは俺の代わりに魔法ダメージを幾らか受け負ってくれる盾……になるはず
だった。

が、時間がなかったので調整できなかったため勝手に吸い寄せるだけになっていたと
かなんとか。

とりあえず、準備はしていたので設定だけだとりニスは呟いてからメダルを弄った。

数分と経たずに9つに増えたメダルが俺の手に……!!

9つ……？

基本的な機能は変わらないが、砲撃などの魔法を4つのメダルが補助してくれるとのことだ。

そして別の4つがダメージの肩代わり、残った1枚は管制として演算を手伝ってくれる。

俺の周りを飛び交うメダルたちはまるで小鳥のようだった……。

嘘だ。

どっちかというとファンネルに近い。

そもそも今までの形態はスタンバイモード的な位置づけだったらしい。

やっと起動したのですね、トリニスが呆れ顔。

いや、俺って悪く無いよね？

とりあえず次のループに持ち越せるように設定や調節、部品などは暗記しておきたいところ。

ここまでパワーアップしたメダルだが、最大の強化はカートリッジシステムのように使うことができるという。

溜めこんだ魔力やメダルを仲立ちとして込めた魔力でデバイスを一時的に強化できるとか。

襲撃犯たちのようなことが疑似的にできるのがメダルの役割であり、それ以外にないといっても過言では無いとドヤ顔でリニスが言っていた。

なぜこんなにも機能が特盛なのかというと、ユウくん用に作っていたかららしい。なるほどなー。

俺も優秀な使い魔が欲しい。

なのはちゃんと竜也くんはユーノくんだろ。

フェイトちゃんはアルフでユウくんはリニス。

クロノ君にはエイミイさんがいるからね。

リンデイさんとかくれないだろうか。

小さな妖精になったりしたら大歓迎なのだが……無いか。

シグナム襲撃の予感……!!

仮面が襲ってくるだろうからユウくんをリニスに任せ、こちらからシグナムの元へ向かう。

出会い頭に空中を飛んでいるシグナムに向けてデイバインバスター。

さあ、スーパーリベンジタイムだ!!

初動と同時にメダルが飛んで行く。

管制メダルのおかげで、分割思考を少し割くだけで思った通りに動いてくれる。

手が増えたような奇妙な感覚を憶えるが、チェーンバインドを何本も生やして操っていたのだ。

すぐに慣れた。

複数のメダルによる攪乱を行いながら、多重転移で一氣に距離を詰めた。

右手からデイベインバスターを放つ。

斬り払われたが、構わず飛び交っていたメダルからチェーンバインドを射出させる。

回避のため、体勢を崩したシグナムの目の前へと管制メダルを放る。

左手で溜めていた魔法によるレールガンもどきをを解き放った。

劣化版プラズマランサーだが、スタンくらいは期待……回避しおったわ。

カートリッジによる衝撃波でレールガンの紛い物が蹴散らされたが、まだ俺の攻撃は

終わりでは無い。

不発に終わったすぐ後に右手で握っておいたシャーペンを加速させて投げつける。

デバイスを握っていたシグナムの腕が吹っ飛んだ。

そのまま片腕を失ったシグナムに向けてハートブレイク・ショットを打ちこんだ。

目を見開いたまま止まったシグナムにバインドをかけて封印処理した。

ヴィータやシグナムたちは魔法によって造られた存在だとクロノくん聞いた。

ならばと思い、ハートブレイク・ショットにシーリングを込めてみたのだが効いたようだ。

少しの間は停止しているだろうが、放っておくつもりはない。

アースラに座標を送り、転送するようにと連絡する。

後はユウクんの元に……。

やはりこれだけじゃ終わらんか。

変態仮面を視界に捉えた。

いいデバイスだな、借りるぞ。

シグナムのデバイスを勝手に持って行く。

未練がましく握りしめていた腕を振り解いて停止しているシグナムの上に乗せて置く。

管理局のほうで治してくれるだろう、たぶん。

シグナムのデバイスであるレヴァンティンは忠義モノのようだ。

俺が使おうとしても一切の反応を見せない。

だが、俺にはアイザック式ハッキング術があるのだ。

デバイスの中核が狂うまで魔力を込める。

火花を散らせながらだが、少しはいう事を聞くようになった。

リニスが変態仮面のあとを追っていたので、俺が進路に立つことでちょうど挟んだ形になった。

相手は女性型の変態仮面だ。

リニスの援護を受けた俺と競り合うとか強すぎるんじゃないだろうか。

ビニール傘からイデオンソードを展開したので、俺もレヴアンティンで応戦。

罅迫り合いになるかと思われたが、突然レヴアンティンが空になるまで葉莖を排出した。

そして手元で爆発が起き、イデオンソードで真つ二つになった。

いいデバイスだな、ホントに。

羨ましいくらいだ。

『〇〇〇周目』

再びシグナムと対峙した。

攻撃に関してはコンボを繋げれば勝つことができるが、それは相手にも言えること

だ。

トータルした能力でいえば、明らかにシグナムが勝っている。

それでも俺が打ち勝つことができるのは奇襲によるモノが大きく占めている。

正面からの切り合いは俺には不都合なのだ。

つまり、コンボを凌がれた現状はともよろしくない。

前回と同じコンボをかけたのだが、知識という利点に驕った俺をあざ笑うかのように完全に防がれてしまった。

当たり前だが、同じわけがなかった。

鞘とレヴァンティンによる疑似的な二刀流で手数を増やし、前回の焼き増しであったコンボを流された。

少なからずダメージを与えたが、動きが鈍るようなものではない。

戦闘は続行だ。

一連の流れに込めた動きを読まれたのか、攻めるに攻められない。

近接に特化しているのだろうか、凄まじい強さだ。

周囲を飛び交い援護を行う複数のメダルに対処しつつ、俺への攻撃は全く弛まない。

蛇腹剣をかい潜り、レヴァンティンの攻撃範囲から逃げながら砲撃をばら撒く。

攻撃用のメダルは溜めこんだ魔力を放出するか、纏って体当たりするかくらいしか役

に立たないことがわかった。

攻守を入れ替えることで敵や俺の魔力をチャージするのだが、そんな暇はないためほとんど空に近いだろう。

そして、周囲を守っているメダルの魔力は満ち足りているのがわかる。

火花すら散っているのだが、近接攻撃が激しすぎて放出する隙が無い。

攻撃メダルを2枚ほど失いつつ転移によって距離を空け、攻守のメダルを入れ替える。

接近してくるシグナムに向けてチェーンバインドで牽制。

そのまま距離を離しておきたかったが、鞘によって全てのチェーンバインドが弾かれた。

内心で舌打ちしつつ弾かれたチェーンバインドを手元で解除して意識を近接戦に切り替えた。

斬撃をシールドを込めて弾いていたが、腕が鈍ってきた。

腕だけでは無く、身体全体が精彩を欠くというのだろうか。

思った通りに動作しなくなっていた。

受け流しきれない剣戟で体勢が崩れ、それを見計らったようにレヴァンティンから葉

灰が排出された。

まずい……!!

魔力を溜めすぎたために飽和しているのか、薄らと輝いているメダルをその場で爆破し、さらに自爆。

そしてフローターフィールドに乗っている足に力を入れた。

身体が後ろに下がろうとしている瞬間、廃棄魔力による煙幕に身を包まれながら現れたシグナムは必殺の構えをとっていた。

右腕に小さなシールドを幾重にも重ねてなんとか受け止め……!!

『89 周目』

シールドが容易くちぎられて真つ二つだったんだけど。

あの居合斬りみたいなのやつがヤバすぎて困る。

炎熱変換なぞ俺の天敵だ。

超熱いし。

そして、受け止めるには分が悪い。

視認速度を軽く超えてるし、威力も必殺級とは洒落にならんね。しかも鞘つてどういふことなの……。

なんとか剣と鞘を封じて、シグナムを止めるのが最良だろう。難しい話だが。

技量が如何ともし難しいのだ。

出来ることなら初撃で葬り去りたいのだが、贅沢な話だろうか。

左腕にギブスを巻いたまま夜の街を飛び、シグナムに迫る。

ギブスなど、どっちでもいいのだ。

左腕に巻いているのは、俺が右利きだからに他ならない。

ちなみになのはちゃんも竜也くんも左利きだ。

直したらいいか相談されたのだが、直すという言い方だと左利きが悪いみたいだしなんとも言えずに言葉を濁してしまった。

そういえば左利きの方が寿命は短くなってしまうらしい。

やっぱり右利きのほうがいいのだろうか。

コンボを繋げるが途中で切れてしまった。

やはり、鞘が厄介だ。

ギブスを盾に剣戟を凌ぎ、耐える。

幾度目かの激突で打ち負け、体勢が崩れてしまう。

一気に距離を詰めたシグナムはカートリッジをロードした。

俺が待ち望んだ必殺の構えだった。

周囲4mを糸ほどの細さで構成されたチェーンバインドで満たす。

そこが俺の知覚領域だ。

勝負は一瞬だった。

破片が飛び散っていくギブスだったものと、下に隠されていた魔法陣からあふれ出る
デイベインバスターとリングバインド。

ほんの刹那だけ減速したレヴァンティンを握りしめた。

伊達や酔狂で死んでいるわけでは無いのだ。

掴んですぐにチェーンバインドでレヴァンティン、鞆を拘束した。

そして飛び交っていたメダルが一斉にシグナムヘシーリングをかけた。

停止したシグナムを封印処理してアースラへと連絡をとる。

ちぎれかけるくらい怪我していた右腕から血が滲んでいた。

チェーンバインドで人形を操るように腕も動かしていたのだが、無理があつたかもし
れない。

このまま転送で終了といきたいところだが、二回戦は間もなくだろう。

変態仮面とリニスの姿を捉えた。

確かなのはちやんたちが戦っている結界内の近くにクロノくんがいたはずだ。

3対1でボコれば流石に負けはしないだろう。

移動している変態仮面の進路を塞ぐように移動し、リニスごと転移した。

転移した先ではクロノくんが吹っ飛んでいた。

変態仮面（♂）によって襲撃を受け、蹴り飛ばされたようだ。

あまり良い戦況とは言えない。

しかも変態仮面（♀）が封印処理されていたシグナムまで連れてきやがった。

解除しようとしている変態仮面を引きはがし、チェーンバインドを巻きつけた。

——サブウェポン・シグナムを取得しました——

鎖を引っ張ると連動して停止したシグナムが引き寄せられた。

フレイルのように振り回す。

どうやら変態仮面は闇の書サイドらしく、シグナムに手を出すことができずにいる。

リニスの援護を受けながら追い詰めていく。

ダイバインバスターでとどめを刺そうとチャージしていると蹴り飛ばされた。

クロノくんの相手をしていたんじゃないかねえのかよ、と振り向くと倒れているクロノくんの姿があった。

まあ、この変態仮面共はかなり強いししょうがないね。
イデオンソードが俺を襲った。

『90周目』

ギブスの奇襲が効きすぎて困る。

さらに車いすに乗っていると倍プツシュ。

属性を盛り過ぎたかと自分でも思ったがシグナムには効果的だったらしい。

ほとんど無傷で停止させることに成功した。

ただ、立ち上がったときに浮かべた驚愕の表情の理由が気になった。

変態仮面を転移して前回と同じ状況に持って行く。

変更点としてはまだクロノくんは蹴り飛ばされる前らしい。

こいつらはかなり強いとクロノくんに注意をし、メダルを飛ばす。

ビニール傘で払われるが構わず攻撃を続ける。

ファンネルというよりはファンングに近いかもしれない。

見た目はメダルが高速回転しているから球っぽいかども。

リニスの巧みな誘導からレールガンもどきへと繋げ、スタンしたところをディバインバスター。

そして全力でシャーペンを放つ。

ビニール傘で弾かれるが振り切った腕に目がけてメダルを一斉に突撃させる。

シャーペンによつて痺れていたであろう腕にメダルで更なる負荷をかけ、デバイスを手放させた。

いいデバイスだな、少し借りるぞ。

というか俺が死ぬまで借りるぜ。

ほら、ある意味で強制返還だし。

見た目はショボイがなかなか良いデバイスだ。

登録もされていないのでいう事を聞いてくれる。

俺の魔力によるノイズを起こさず、鉛色に鈍く光るビニール傘として健在だ。

たぶん、込めた魔力分だけ刀身が伸びるのだろう。

魔力調節を行っている、封印を解除されたシグナムが襲ってきた。

まだ時間はあつたはずだし、リニスとクロノ君を相手していたもう一人の変態は近づ

けなかったはずだ。

伏兵か……？

考えている暇はない。

熾烈なシグナムの攻めをビニール傘で凌ぐ。

そもそも俺は剣術をしたことがない。

高町さん家に指導を受けたくらいだろうか。

そもそもビニール傘は剣として扱っていいのかすら不明だ。

棒か槍に近い気もするけれど。

ビニール傘の傘布を覆う様に魔力刃が展開されていて、込めた魔力だけ強力になっている。

限界を確かめてみたいが今はシグナムの相手で忙しい。

しかもリニスとクロノくんは変態仮面に押されていて劣勢に立っているようだ。

このままだとマズイと焦りを感じ始めたところに、結界を砕くように雷撃が降り注いだ。

それを好機と見て逃げていく後ろ姿を見送りながら、溜め息を吐いた。

変態仮面から死ぬまで借りてるビニール傘型のストレージデバイスはかなり良い物

だ。

限界知らずで俺のわけのわからん魔力を受け止めてくれるという素敵仕様。

魔力刃を展開していても傘布を開くことで盾にできるし、石突から砲撃も出すことのできるオシヤレ機能搭載。

すごい（歓喜）。

管理局の頭がおかしい連中が集まる技術部で限界を極めるというコンセプトで似たような物が開発されてるとか。

盗品か……？

リニスに頼んでメダルをカートリッジ代わりに使えるようにしたし、あまり手放したくないというのが本音だ。

素手では限界かな、と。

数日後、ユウくんの付き添いで病院へと向かった。

精神面で衰弱しているのかご飯もあまり食わず、日に日に衰弱していくのだ。

俺かりニスが付き添っていないと倒れてしまうような気がする。

魔法など見せた日には死んでしまうかもしれん。

やはり容態は酷いのか、入院を告げられた。

アースラで、とも考えたがここまでは襲撃しに来ないだろうとそのまま病院に任せ
た。

ネコミミを隠せば普通の美女に見えるリニスにとりあえず任せて帰ろうとすると、す
ずかちやんと途中で出会った。

へえ、お友達か。

車いす、大変そうだね。

こんにちはわ、ヴィータ。

遊びにきたよ。

ははは、驚いたのか顔が引き攣ってるぞ。

笑えよヴィータ。

へえ、はやてちゃんたちは大事な家族なのか。

いいよね、そういうの。

俺もいるよ、可愛い弟と妹が。

すごい良い子たちだよ。

まっすぐで、優しくて。

そのうち紹介してあげたいくらいだ。

……ああ、もう帰るよ。

家族の団欒を邪魔するほど野暮じゃないし。

俺も邪魔されたら、嫌だと思うから。

それに、やり返さないと思って思うし。

じゃあね。

『91 周目』

あの数日後に、はやてちゃんの兄であるはやぶさくんに学校帰りを襲撃された。

自己紹介までしたのだけど。

友好関係が築けて無かったのかな……なんてね☆

しかし、結界が厄介だな。

そのまま応戦するも死亡、と。

嫌な事件だったよ……。

デバイスは必ず持ち歩くという教訓になった。

有り難いことにユウくんの病院の日までセーブポイントが移動した。

ビニール傘は返しそびれてしまったのでこのまま使い続けようと思う。

変態仮面が使うよりも良いに違いない。

やられたら、やりかえす。

戦い、というか世の中の常識だよね。

結界の展開とともに襲撃をかけた。

都合のいいことにはやぶさくんしかいない。

まあ、個別を狙ったのだから当たり前だけど。

ホントはウィータかシグナム、属性盛りだくさんの使い魔が良かったけど文句は言つてられない。

各個撃破で闇の書の封印まで行けたらいいと思っっている。

認識範囲を広げることで超速攻撃を受け流す。

突然の襲撃に焦っているのだろうか。

結構よくあるから注意すべきだと思っよ、俺は。

ウィータより火力で低くシグナムより技術が拙いのがから、速ささえどうにかできれば難しい敵ではないはずだ。

メダルに気を取られている隙を狙って、魔力運用によつて威力が高まった掌底を打ちこんだ。

見事な放物線を描きながらはやぶさくんは飛んで行った。

追撃をかけようとデイバインバスターの準備をしていると、第二形態のはやぶさくんが黒い羽根を羽ばたかせながら接近してきた。

交じった視線の先は血のように紅い瞳だった。

やはり速い。

完全に置いて行かれている。

影を掴むが姿を捉えることができないでいる。

防御だけではダメージが嵩み、蓄積していく。

やはり無理をしなければ進めないようだ。

無理をしようとも超えたという事実があれば、次も頑張れる。
今が無理でも次ならきつと。

ビニール傘を囲むようにメダルが浮いている。

メダルの魔力を解放することでビニール傘へ充填していく。

8つのメダルから魔力が解放された。

「不明なユニットが接続されました」

デバイスは膨大な魔力を滾らせ、骨組みを残して溶けた。

傘布を支えていた親骨が鈍色に輝いている。

震えるような重低音を響かせながらメダルが傘ほどの大きさの無骨な鉄骨へと変貌
していく。

先端を地面へと接地させて支える必要があるほどに重量が増大した。

そして傘を中心に円状に浮いている8本の鉄骨が破碎音を轟かせながら回転を始めた。
た。

地面を抉る衝撃が腕を痺れてくる。

デバイスが悲鳴をあげるように、魔力をかき集めている。

回転している鉄骨は赤熱し、耳を劈くような不快な音とともに火花を撒き散らしていた。

「システムに深刻な障害が発生しています。直ちに使用を停止してください」
鈍色に染まった骨組みと燃え盛るように赤く染まった円状に並んだ鉄骨は、ビニール傘のときとは見違えるようだ。

男前になったデバイスに頬を綻ばせる。

いや、ノイズ混じりの音声は女性なのだから綺麗になったというべきか。

俺の歩みとともに引き摺られた石突と接触している地面の間に炎の傷跡が刻まれる。
力を込めてデバイスの先を上げるとドリルのように回転している鉄骨から燃え盛る炎とともに火花が散った。

全てを焼き尽くす暴力を体現するその姿は本当に美しい。

ビニール傘には通常のデバイスと一線を画す「オーバードウエポン（OW）」と呼ばれる機能が付けられている。

目標の破壊のみを重視し、管理内外の世界に存在する兵器をデバイスに取りつけた物だ。

強固な壁、質量兵器、魔導兵器などのあらゆる障害を手軽に排除できるようなという名目で管理局内に存在する技術部が規格を無視して取りつけられたそれはまさしく兵器だった。

魔法とはかけ離れた結果を齎すそれが日の目を見ること無かったのは、当然の結果だろうか。

OWの起動にはエネルギーが必要となる、それも個人では生み出せないような膨大な量のエネルギーだ。

技術部にも良心があつたのか、それとも安全装置のつもりだったか。

ただ、それだけだ。

それを乗り越えたとリンカーコアを狂わせ、魔力を増幅、全てを容易に破壊し尽くす兵器を起動することができる。

欠点は非殺傷機能が役に立たないこととリンカーコアへの負荷だろうか。

ちなみに鉄骨をドリルのように回転させているOWの開発コードは「グラインドブ

レード」、局所破壊用の連結チェーンソーをデバイスに搭載したものらしい。

鉄骨と呼んだが実際にはチェーンソーなので表面には細かくて鋭い刃が無数に付いており、それらが高速で回転している。

すぐに残像が見えるほどの回転、そして赤熱するため見ることできる時間はそんな
にないのだけれど。

使用目的は基本的に隔壁などをぶつ壊す装備である。

確かに敵は障害物みたいなものだけど、個人では本来の使い方では使わない気がする。
る。

間違いなく生き物に対して使う物ではない。

俺のビニール傘型デバイスだが、管理局で作り出されたはずなのに存在しないことにな
っている。

クロノくんに話を聞くと管理局の技術部は作っていないことになっているらしい
……作ったことは確かとも。

技術部が情報そのものを隠蔽してしまったというのが事の次第とのことだ。

ビニール傘に偽装されているが、OW自体は別次元に納まっているというのだ。

起動時に媒介（俺の場合はメダル）に浸食することで出現するのだという。

詳細については物資や予算の流れから洗い出すのでかなりの時間を要し、年内では知ることはできないだろうとも。

技術部には影響力が及びにくいので詳しい事情を調べる前に圧力がかかるかもしれないとクロノくんは忌々しそうに語っていた。

管理局内からほぼ消されていたとはいえ、デバイスを持ち出すことのできる立場の者が変態仮面として闇の書側に味方している可能性がある。

現在までに変態仮面を2人確認しているが、更に増えることも考えられる。

変態仮面たちの狙いがわからないのが厄介さに輪をかけている。

闇の書に怨みを抱いているのならそれこそ無限に疑念が広がってしまう。

復讐が妥当とも考えたが協力している姿勢を見ていると、書に魔力を溜めて完成させるくらいしか思いつかないのだけれど。

変態仮面はこれからも絡んでくるだろうし、闇の書の封印は難しいに違いない。

しかも、変態仮面の正体が不明なので背を預けるべきアースラまで疑わなければならなくなった。

……超めんどくせえ。

前回ははやぶさくんをバラバラにした後が問題だった。

熱量でデバイスの機能が死んだのだ。

ビニール傘は外装から中軸まで全て溶けてしまったし、メダルも全てはぐれメタルみたいになっていた。

8体のはぐれメタルとか経験値が稼げるってレベルじゃねえぞ!!

実際は経験値を稼ぐ間もなく、すぐに出現したはやてちゃん（色違い）によつて砲撃魔法、そして変態仮面による追撃のコンボで死んでしまった。

色違いはやてちゃんは闇の書側らしく、はやぶさくんのミンチを見て激昂して襲い掛かってきた。

はやてちゃん本人とは魔力の質が違ったので別人だと予想。

変態仮面もすぐに現れたので結託しているのかと思つたが、血だらけで俺が死にかけていると争いだったので闇の書側とは交流はないようだ。

ちなみに反撃しようとしたがリンカーコアが半壊していて魔法行使が無理だった。

リンカーコアが壊れていると身体も動かなくなるんだよね、人体つて不思議。

身体が動かないほどに負担がかかっているからリンカーコアが壊れると言えるのかもしれないけれど。

リンカーコアが壊れる理由だが、増幅による負荷もあるが体質が特に関係している。

俺のリンカーコアは魔力が減ると、補填しようと周囲にある魔力素に成り得るモノす

べてを取り込む。

リンカーコアが満たされるまで取り込み続ける。

自然に存在する魔力素、行使された魔法、圧縮魔力の残骸……。

しかし、リンカーコアにとって自分で生成した魔力以外の全てが異物だ。

自分の魔力を満たすまでは分解と生成を繰り返すことで異物を取り込み続け、破裂してしまふ。

または、異物を分解しようと働き続けて分解能力の限界を超えることで壊れる。

壊れた結果は、ショック死か障害を負うか、それとも……。

何にせよ臓器の一つなのだから欠損によるペナルティは大きいだろう。

魔法の行使だけなら構わないのだが、吸収量が増えることによるリンカーコアへの負担はなるべくかからないようにしておきたいところだ。

元からある魔力は異物である外部の魔力を追い払おうとするため、使用できる魔力は限られてしまふし。

OW中は外部の魔力と内部の魔力を強制的に結合させ続けるので一時的だが無限に魔力を使える状態になる。

だから俺が死ぬか止めるまでOWが停止することは無い。

停止後は増幅魔力で満たされているので拒絶反応で魔法行使が困難になる、過剰魔力

によってリンカーコアが焼ける、あまりに酷いと機能不全に陥るなどと代償も大きいのだが。

そんなわけで俺は魔力の生成速度が頗る速い利点の代わりに体内に異物（魔法）を引き入れてしまう欠点がある。

闇の書による蒐集はリンカーコアから強制的に魔力を吸い上げるので、空っぽになった容器に異物である毒を並々つぎ込むような状態になって死ぬ。

蒐集時に生き残れたのは竜也くんにディバイドエナジーをしてもらったからである。

それでも他人の魔力は毒に違いなのだが、高町さんちの双子やユウくんとはある意味で長い間過ごしているのも魔力の変換効率がかなり良いようだ。

ちなみにOW中は魔力がある意味で無限状態のため、定期的に吐き出している。

溜めこむと魔力が集まりすぎてリンカーコアが弾け飛ぶので自爆の要領で体外に吐き出すのだ。

膨大な魔力を一度に背中から噴出すると直線のみだが、はやぶさくんすら凌駕できる程度の速度が出せる。

OW中は重量で動作が重くなるので直線だけだろうと高速移動できるのは有り難い。

短距離転移で距離を詰め、ある程度まで範囲を絞って、魔力によるブーストで必殺を狙うというところか。

まあ、現状では「グラインドブレード」を起動したら死への片道切符なのだから捨てる方法を取ってもいいだろう。

そんな感じでデバイスについては調べがついた今回だが、ぶっちゃけピンチだ。

夜にワンコしかいない八神家へ襲撃をかけてはやてちゃんを人質にとったまでは良かったのだが、そこからが予期せぬ事態ばかりだった。

はやてちゃんから黒いスライムが出たと思っただら色違いはやてちゃんになって襲い掛かってきたのだ。

ドツペルゲンガーか何かか、こいつは。

ワンコは使い魔らしく、人型になって近距離で襲い掛かってくるしドツペルゲンガーは魔法で後方支援である。

厄介だが犬畜生は防御特化らしく、シールドブレイクと魔力吸収による中和のおかげで俺にとつては紙装甲も同じだった。

犬耳つけたムキムキの男の魔力を吸収するとか気持ちが悪いけれど、それを引けばかなり有利になる……はずだった。

援護による弾幕を回避しながら殴り合っているとバインドされたのだ。

それでも余裕があったのでバインドを吸収して解除と同時に色違いはやてちゃんが

ライダーキック。

回避するには間が悪く、直撃を受けた。

魔力のみ、か……？

リンカーコアが悲鳴をあげている。

容量を超える魔力を取り込んでしまったようだ。

魔法を使わずに安静にすればなんとか生成が追いついて鎮静化するだろう。

吐き出す余裕も無いのだけれども。

つまり、使える魔力はほぼ無い。

受け止めるつもりだったが無理だったようだ。

物理＋魔法による攻撃なら魔力運用で踏みとどまれると思ったが、全く別物だった。

守護騎士は魔法生命体だからなんだからしいが、やつは魔力そのものが動いているよう

なものだった。

攻撃を受ける際になん取り込んでしまったのは予想外だった。

だが、相手にとつても予想外だったようだ。

色違いはやてちゃんだった者は形が保てなくなったのか、ぐずぐずと崩れて黒い球と

なつて浮いている。

俺とやつは互いが互いの天敵になるようだ。

犬畜生がバインドで追撃をかけてくるが、今の状態で喰らったら間違はなく死ぬ。魔力を貪る台風と化して死ぬ。

死ぬのならOWを試して死ぬしかない。

8枚では間違いなくミンチにできるが俺も死ぬ。

枚数を調整すれば増幅魔力で満たされるため、異物を取り込むことが無くなって延命につながると思っただのだ。

反動で幾日か魔法が使えなくなるが、今を乗り切れるのなら問題ない。

何枚なら大丈夫かわからないし、1枚ずつ増やしていけば完璧じゃないだろうか。

ん？

……あれ？

ちよ、タイム。

タイムっていつてるだろうがバカチンが!!

『93周目』

起動しなかった。

水準まで魔力が足りなかったという間抜けなオチだったわ。

1枚でも俺自身の魔力がかなり無いとダメだな。

むしろ1枚だと溜めこんだ魔力が足りないから、かなり必要かもしれない。

枚数が多ければメダルに圧縮した魔力の解放で楽に起動できるが反動が大きく、逆に少なければ自分の魔力によるので起動が難しいが反動も小さい。

さじ加減が難しいな。

吸収した魔力を使うことができれば或いは……。

とりあえず取り込んでしまった魔力を外に吐き出せるようになりたいものだ。

できれば取り込んだ魔力で魔法を扱えるようになるなら言う事ないのだけれど。

このまま同じように襲撃するか、悩みどころだ。

各個撃破ならば完全に独立行動しているところを狙った方が良いのかもしれない。

八神家は本拠地なのだし、なんらかの対策がされているかもしれない。

色違いはやてちゃんによるカウンターは最悪だった。

俺にとってやつは歩く毒物だ。

正直なところ、近寄りたくない。

近くにいるだけでかなり吸収してしまうのでマジで苦手だ。

転移で八神家に押し入って闇の書を封印しバックれるとか……。

非常識な速さと判断力が求められる。

しかし、魔法による補助さえあれば可能なはずだ。

魔法ならば不可能を可能にすることもできるのではないだろうか。

指定座標からこちらへと呼び寄せるアポート系の魔法でリンカーコアのように闇の書を転移することも考えたが間違いなく失敗するだろう。

単純な話、闇の書の位置がわからないので座標が設定できないからだ。

わからないので八神家に勘で良さ気な場所に転移し、サーチアンドシーリングする。

鍵はどれほど近くに転移できるか、敵が遠いかにかかっている。

気付かれた際の囷として段ボールを装備し、魔法の演算を始めた。

命をかけたメタルギアごっこが今、はじまる……!!

転移と同時に糸を張り巡らせる。

チエーンバインドを元に手を加え続けた結果、暗号化すらもオミットすることで知覚領域を広げることに成功した。

拘束力を失ってただの魔法で編まれた糸になったが、サーチャー糸の上位互換として利用できるようになった。

範囲内ならば分割思考による処理限界にもよるが、今は極端に糸へと集中しているの
で家一軒を丸ごと搜索が可能になっている。

そして、生物の一挙手一投足も細かく判断することができる。

糸が魔法によって断ち切られるのを捉えたのですぐに段ボールを捨て去り、回避す
る。

段ボールが魔法によって消し飛んだのを横目に離れる。

屋内とか魔法を使うには狭すぎてビビる。

残念なことに範囲内のどこにも闇の書は確認できなかった。

虎穴に入っても虎兇なんてどこにもいないのに普通の虎はいたでござるって気分だ。

車いすに乗っているはやてちゃんを背にはやぶさくんが双剣を構えて俺と対峙して
いる。

まるで悪役の気分だ。

確かに彼らにとっては悪役だが俺にとって、というか管理局にとっては彼らが悪であ
る。

つまり、俺の行動は正しいのではないだろうか。

屋内でははやぶさくんの機動も限定的になる。

しかも足の不自由なはやてちゃんを守っているのだから、そこが俺の付け入る隙になる。

厄介なのは俺もはやてちゃんに攻撃を当ててしまう可能性があることだ。

魔法ならば非殺傷なので気絶程度で済むが、ビニール傘が当たると打撲や骨折、下手すると死に兼ねない。

俺の動きが鈍いと判断したのか攻撃が苛烈になった。

動く範囲が狭まっていようとも、攻撃の速さまでも遅くなるわけではない。

しかし、はやぶさくんもはやてちゃんを守らなければならぬので攻撃だけに集中することもできない。

互いに決め手に欠けたままだ。

このまま膠着状態が続くのなら増援が来る可能性も考慮しなければならない。撤退させてくれそうに無いのだけでも。

メダルを一枚だけ装填する。

耳障りなさび付いた音とともに鉄骨がビニール傘に付き添う様に現れた。

増幅率が低いのか、魔力の供給量が少なすぎる。起動に使った魔力を考えると大きなマイナスだ。

それでも一応は起動しているので刃の回転とともに真つ赤に染まり、熱を帯びた。炎の噴出によって加速したデバイスを振る。

はやてちゃんを守る必要があるはやぶさくんは双剣で赤熱している俺のデバイスを受け止めた。

火花が飛び散り、背筋がぞくぞくとするような高い音が響く。

チエーンソーによる武器破壊だ。

はやぶさくんは魔力を込めることで被害を最小限に留めているが、少しずつ双剣が削れている。

まだ魔力にも余裕がある、このままデバイスが真つ二つになるまで待つか。

双剣から葉莖が二つ排出された。

魔力が急激に膨らんだかのように放出され、デバイスが弾かれた。

砲撃魔法が放たれたが、メダルで防御した。

しかし、カートリッジをロードすることで髪とか瞳の色などが変わると反則だろうと思えるほどに強化される。

モード反転、裏コード！ ザ・ピースト！だか覚醒だか知らないがマジで無しにして

ほしい。

互いに必殺技を使ったため、拮抗したままだった。

どれだけ強化しようともはやてちゃんを守る必要があるのではやぶさくんの移動範囲は変わらず、俺も攻撃を掠らせる程度で当てることは出来ずにいる。

八神家が荒れまくり、火事も起きている。

凄惨な事件現場に早変わりしてしまったのだ。

当たらないことにイラつき、一掃するようにデイベインバスターを放つ。

射線にはやてちゃんがいたが構わなかった。

当然のようにはやぶさくんに邪魔され、斬り払われた。

どこにいようともはやてちゃんに攻撃が向かう時はキチンと防ぐらしい。

メダルを更に1枚追加した。

轟音が鳴り響いた。

ビニール傘を挟むように鉄骨のようなチエーンソーが追随している。

歪なハサミのようだったが、挟んでいた鉄骨が手元まで下がった。

ビニール傘が突出しているような見た目だ。

たぶん、これだけでも覆すための威力には十分だ。

あとは当てるだけ。

俺次第か……。

ブースト魔法と魔力放出による加速で一瞬で間を詰める、はやてちゃんへと。

そのまま刺突の構えで突撃をかけると目の前にシールドを張ったはやぶさくんが現れた。

これを待っていた。

技量が足りないならば手段なんて選んでいられない。

激突とともにシールドが容易く割れ、石突とデバイスとの衝突で大きな火の花が咲いた。

残念だが刺突の一撃では終わらない。

手元まで下がっていた二つの鉄骨が時間差で炎を撒き散らしながら襲い掛かった。

ほとんど抵抗もなく双剣が砕け散った。

メダルを1〜3枚使うと武器破壊、とつつきだ。

はやぶさくんの身体は衝撃を受け止めきれずに壁を突き破っていった。

B Jで防御しているし死にはしないだろう。

はやてちゃんはバインドで縛って他の面々が帰って来たところを脅して闇の書を封

印すればいいか。

……こんなつもりで襲撃したんだっけ？

はやてちゃんを気絶させて、バインドで縛っているとはやぶさくんがいた場所を中心に魔力が渦巻いている。

あまりの魔力に張っていた糸が片っ端から消し飛んでいった。

壁を突き破って荒れ狂う魔力とともに接近してきた。

辛うじて影を捉えられる程度だったがなんとか防御した。

完全に理性が飛んでプチギレているのか真っ赤な瞳が輝いている。

砕けたはずのデバイスが色違いはやてちゃんの本体だった黒い球体に似た泥で覆われていた。

斬撃とともに繰り出された紫の魔力光に意識が飲み込まれた。

はやぶさくんの魔力光は白だったはずだが……。

『94 周目』

第三形態だと……!?

さすがに三連戦は勝てないっす。

勝つだけなら出来るが、俺も死ぬという。

野郎と心中とかマジで勘弁だから。

しかし、冗談抜きで魔力光が変化する第三形態が強すぎる。

リンカーコアを一瞬で溶かされるとか予想外すぎた。

一撃でメダルと魔法で防御、元からと増幅された魔力でリンカーコアを8割ほど満たしていた俺を殺し切るとかマジで強すぎる。

射線上は全てが即死なのだが、広すぎるんだよな。

あんな閉所じゃ回避できんよ。

いや、ホントに無理ゲー過ぎて困る。

池田アアツ!!

……言ってみただけだし。

襲撃を見送るべきだろうか。

各個撃破のつもりで強襲しているが、成功する気がしない。

本拠地だから守りが固いという事もあるかもしれないけども、上手くいく気が全くしない。

家ごと吹っ飛ばしてしまおうか。

全滅狙いなら全力を出せばいける……いけるか？

……枯渇してなら逝けるな。

なかなか難しい。

いけそうでいけけないのだから、引き際がなあ。

魔力切れで逃げられなくなるといふ阿呆な展開が待っているし。

リンカーコアを抜き取って吸収……魔力容量はわからんが2人くらいが限界か。

転移門の魔力を残してぎりぎりまで絞った状態で。

間違はなく演算に失敗する。

メダルと傘のバックアップを受けてもリンカーコアから魔力を奪って動けなくなる

程度か。

当然だが無理だな。

管理局にチクってみるか。

俺の外聞を捨てるだけで解決できるなら、やらないわけにはいかないだろう。

管理局が完全に信頼できないってのが厄介なのだけけど。

リンデイさんに伝えておこうか。

クロノくんも一緒にいるだろうし。

感じた信念に絆されて友情とか信頼とかで乗り越えられたらいいんだけどね。

自信があれば寝返ったりしたかもしれない。

弱いつて罪だよ、選択肢が少なくなる。

……封印が効くつて前提で考えてたけど、そんな都合良くいくか？

管理局がかなり昔から追いかけてるつて聞くし、封印系の作戦くらいしたはず。

無理ゲーか。

誰か俺のプロアクションリプレイ持つてこい。

無限残機だけでは無理だ。

選択肢くらいは見えるようにしてほしい。

プレシアの時もそうだけど、正解がわからないんだ。

間違いだと思わず生きることに胸を張るだけだ、と言い切れるならいいんだけど。

何度もやり直せるから妥協に逃げてしまうのかもしれない。

繰り返して塗り固めた人生を歩いている今、自信なんて無い。

いつ崩れるかもしれないのに足元を見ずに前なぞ歩けるわけがない。

……ホントに勘弁してほしいよ。

周辺一帯を結界で包囲後、闇の書の主の捕縛が今回の作戦目標だ。

蒐集がどの程度まで進んでいるか不明だが、あまり時間が残されていないと考えられ

ているため、準備時間が限られたものとなってしまった。

守護騎士が蒐集に向かったと思われる時間を狙った行動となったため、運に寄るモノが大きく占めている。

主が魔法について何も知らないという点が考慮されているのだろう。

転移で中身を全部引つ張るとか家ごと吹っ飛ばすとか丸ごとバインドとかワイルドな作戦を提案したら却下されたが、当たり前か。

先に身柄を確保、といきたかったが家からほとんど出てこないで仕方ない。

病院にも張っていたんだけど上手くいかないな。

なのはちゃんとフェイトちゃんが次元世界で交戦したらしい。

竜くんは置いてきた、この戦いには着いてこれないからな。

冗談だ。

いや、半分は本気だ。

竜也くんっていい人だからね。

気に病むっていいのか、まあそういうことだ。

今知らなくて後で知って気にしただけだ。

そういうことではちゃんに書いて行ってもらった。

今日でこの事件が終われば俺も……同じか。

どうせ変わらないのだろうね。

周辺の封鎖が完了したので内部に突入する武装局員を見送った。

内部はもぬけの殻で、あったのははやてちゃんを模した何かだけだ。

それもドロリと泥のように溶けて黒い魔力の球へと変化した。

こいつは俺の天敵か？

そして次にサーチャーが捉えたのは武装局員を飲み込んでいく魔力の球の姿だった。

バイオハザードかよ……。

蒐集されたように魔力を奪われて倒れている武装局員を保護すると同時に魔力の球に刺突する。

うわ、ぬるつと中に入った。

メダルに溜めた魔力と俺の魔力の一斉照射を放つ。

球からばらばらと魔力の外殻が剥がれていく。

これは局員から集めた魔力だろうか。

剥がれた魔力は戻ることもなく霧のようにとどまっている。

屋内だからか魔力濃度が半端ないくらい上昇している。

毒沼状態の密室にいられるか!!と天井を吹っ飛ばして脱出。

見上げた結界内上空は地獄でした。

回収されているのか転移されていく局員の姿と魔力の球に吞まれていくクロノクンの姿があった。

ヤバいんじゃないの、これ。

いや、マジで。

俺は元気だけど、魔力の球も元気だし。

しかもクロノくんを飲み込むとか嫌な予感しかない。

真つ黒の魔力の球が徐々に小さくなっていき、中からクロノくんが姿を現した。

視線は宙をさまよい、身体が左右にフラフラと揺れている。

意識がないのか……？

クロノくんがS2Uをゆっくりと掲げた。

紫の巨大な魔法陣が足元に展開されている。

あれは乗っ取られてるとかそういう類だろう。

敵ユニットになったら強化補正か。

どうするよ、この場面。

歌をあなたにとって名前の通りもつと優しい攻撃にしてほしい。
ふざけた密度の魔法だ。

転移で撤退を……結果が張り直されてやがる。

守護騎士たちを連れたはやぶさくんも現れた。

しかも背後には変態仮面、完璧詰んだね。

またやり直しかよ。

テンション下がるわー。

マジ下がりだわー。

……糞が。

「不明なユニットが接続されました」

『95周目』

やっぱり8枚積みで使用したOWはマジで強いわ。

6枚超えて「グラインドブレード」を使えるが、8枚までいくと相手の魔力すら奪い取って増幅魔力のダシにするからね。

飛んでくる魔法は全部結合、近づくと根こそぎ奪い取って結合、周囲にある魔力素も結合、と疑似的に自生魔力が生成され続けるという永久機関と化した。

ゲシユペンストとか呼ばれてる局員の魔力とクロノくんを取り込んだ魔力の球は速効で退場した。

魔力の塊はOWに必殺された、吸収的な意味で。

他の守護騎士やはやぶさくんとも過激な戦闘を繰り広げた。

俺は非殺傷にならないからミンチ製造機だったし、相手も手加減無しだった。

殺し尽くす前にリンカーコアが焼け切れて俺は死んだけど。

しかし、前回のあれは待ち伏せってことだろうか。

リンディさんに相談したのが間違いだったのか、それとも作戦を行う際の準備期間にばれてしまったのか。

コンティニューすることを前提に規模を絞って探し出すか、単独で襲撃を繰り返すべきか。

結局死ぬことになるってどういうことよ。

あまり行動せずに情報を待つべきか。

ユーノくんが無限書庫で調べていると聞いたし、果報は寝て待ってって感じだろう。

あとは魔法の練習とビニール傘でも振っておこう。

高町さん家に手合せをしてもらおうかな。

フェイトちゃんが倒れただと？

「不明なユニットが接続されました」

『96 周目』

守護騎士ども全員表出ろ。

内側から鍵を掛けて締め出してやんよ。
むしろ地球からたたき出してやんよ。

「不明なユニットが接続されました」

『97 周目』

トイレの鏡に映る姿はなんだか自分ではないように感じた。

新世界の神を目指す敵と戦う探偵を思い出せるくらいの酷い限だ。

目も若干死んでいる印象を受ける。

……こんな顔の小学生がいてたまるか。

コンティニューとともに胃をひっくり返したように吐いて倒れた。

よくわからんがループの間隔が短すぎたのが原因だろうと考えている。

ユウくんが入院してから2、3日の間に死にまくってるし、闇の書による蒐集が始まってからはひと月の内に何度も死んだから反動がきたとかそんな感じか。

動きが鈍くなる、調子が悪い、魔力のキレが悪いといった程度に捉えていたが無理が祟ったのか。

ループは風邪か何かかと笑えてくる。

とうとうユウくんの隣に寝かされてしまった。

アースラ組からも謹慎を命じられた。

自分には限界が無いと信じられた。

無理をし続けても次には持ち越さないと思っていたが、それは甘えだった。

前のように長い期間の休息があったから癒えた負担が今はひたすらに蓄積しているのだろう。

面倒ばかりが積み重なる身体だ。

すべてを投げ出して眠っていたらどうだろう。

トイレを後にして病室へと戻る道すがら考えてしまうのだ。

致命的な失敗すらも戻ることのできる俺ならば……。

ビニール傘を杖代わりに歩いているとジルさんの姿を見つけた。

お見舞いに来てくれたらしい。

それほど仲が良いわけでもないのにわざわざ来てくれるとは嬉しい話だ。

ロツテリアの二人は動物なので入って来れなかったと笑いながら言っていた。

やはり忙しいのだろうか。

闇の書に対する協力はかなりのものだ。

かつて闇の書によって父を亡くしたクロノくと同じように、彼女らにも思うところがあるのだろうか。

病室に戻ると窓の空を眺めているユウくんの隣に座ってリニスがリンゴの皮を剥いていた。

ロツテリアが動物云々のくだりを思い出して少しだけ笑ってしまった。

リニスが音も立てずにリンゴとナイフを置くと、すぐにベッドに寝かされてしまった。

身の周りの世話も甲斐甲斐しくみてもらえるので非常にありがたい。

ジルさんも言われるがままにされている俺を見てにやにやとした表情を浮かべて転

移した。

有り難いが気恥ずかしくも感じることもある。

転移によって姿を消えるのと同時に俺の胸の上にお菓子の箱が降ってきた。

翠屋で使われている箱だ。

中身は……シュークリームだった。

室内の机の上には同じ箱、同じ中身のお見舞いの品。

学校帰りに魔法少年・少女が持つてきてくれた物だ。

海鳴のお見舞いは翠屋縛りなのだろうかと少しだけ首を傾げた。

無地の皿を彩るように置かれた綺麗なうさぎの形に切り揃えられたリングを口に含

んだ。

しやりしやりと、静かな音が聞こえる。

やっぱり味がしないのは寂しいものだ。

ユウくんは眠り、リニスには静かに佇んでいる。

錯乱を起こすこともなく、ゆっくりと眠っている。

今日は次元世界だか何だかでのちゃんはと竜也くん、フェイトちゃんが待ち伏せす

る日だ。

前はフェイトちゃんが倒れて激情に駆られてコンティニューの度にOWで殴り込み

をしていたが、今はそのような気分になれない。

いや、すぐに出ていききたい気持ちもあるのだがユウくんとりニスの慌てぶりを思うと行動に移せないのだ。

死ぬわけでは無い。

そう、蒐集されたくらいでは死ぬわけが無い。

自分を納得させて病室にのうのうと閉じこもる。

何もしないことこそが最善の可能性もある。

こうやって静かにしていれば俺だって死ぬことは無いはずだ。

普段の生活を顧みると早過ぎるくらいの消灯時間。

電気が消え、月明かりが射し込んでいる。

窓際には猫の姿になったりニスが丸くなっていた。

眠るには早すぎて少しばかり困っていると、胸がざわついた。
嫌な予感だ。

りニスも何かを感じたのか、人型の姿になった。

ビニール傘を手にとると結界が展開された。

りニスに任せて病院の外へ転移する。

外は俺、中はリニス。

ユウくんは人気者だからな、どこぞの変態に襲われるとも限らない。

放っておいて目の前で蒐集なんてされたら後悔する。

何度も来る余裕がなくなるように、ここでしとめておきたいところだ。

屋上に立って、メダルを待機させてから索敵を行う。

見渡した限りでは敵の姿は見つからない。

病院を包み込むほどに糸の探索範囲を広げる。

結界内部で動いているモノだけを見つけるので機能もそれ相応にシヨボい。

病室で戦闘が起きていたようだ。

まさか一気に中を攻めてきたのか。

すぐに向かおうと転移に魔力を込めていると妨害されると、魔法陣が消え去った。

変態仮面の出現ですね、わかります。

攻撃用に4枚のメダルを転移、突撃させる。

死角に飛ばしたはずだが易々と弾かれてしまった。

衝突時に魔力弾を放ったが大したダメージにはならなかったのか、そのままこちらへ

向かってきた。

ビニール傘の魔力刃で相手の拳を受け止める。

激突時に少し割れてしまった。

強化系の魔法の出来が良すぎてドン引きだ。

二、三、四、と衝突の数が増えるのと比例して罅が深くなる。

更に魔力を込めて魔力刃を修復し、強化する。

それでも十を超えたあたりでバラバラに砕け散った。

馬鹿力め。

魔力の欠片を吸収して再び魔力刃を作り出す。

今もそうだが、絶好の機会があろうとも攻めてこない。

時間稼ぎか？

なんのために……ってユウくん狙いしかないな。

俺の弟がヒロイン過ぎて泣きそうだ。

また魔力刃が砕けた。

これで三度目だ。

変態仮面（♂）は体術がマジで強い。

力はブーストできるから拮抗できるが、技術は簡単には覆すことができない。だから貫は無理だ、防御を見切れない。

撤は成功していると思うが相手は魔力を手足に纏わせているうえに仮面で表情がわからない効いているのかさっぱりわからん。

魔法はマジで俺の人生をクソゲーにしている、絶対に。転移するために距離を稼ぐ。

管制メダル以外を攻撃に使用、弾幕を張る。

威力よりも目くらましとしての役割を重視したので派手目なモノにした。

弾幕は火力じゃないぜ。

弾幕は火力って聞くと普通の魔法使いよりも紅の流れ星を思い出すのは俺だけだろうか。

あの人は戦闘は火力って言いつつ負ける感じだけど。

メダルを回収し、短距離転移によって屋上からすり抜ける様に階下へ。

同じように転移で壁や床をすり抜けながら病室へと向かう。

……人がいない病院は奇妙だ。

気持的にホラー系と主人公だな。

暗い夜道をケータイ電話の明かりだけで照らすとバイオごっこが出来るぞ!!

変態仮面が近くにいないので一気に病室まで転移する。

大丈夫か!!と主人公つぼく駆けつける。

転移した病室の中は、猫型のまま動かないリニスの目の前でユウくんがゲシュペンストに飲み込まれているという悪夢のような状況だった。

闇の書はなぜこんなにも煽ってくるのか、僕には全然わからないよ。

リニスをチェーンバインドで手元まで引き寄せ、抱える。

転移で真っ黒に染まったユウくんと一緒に連れ出す。

多数のチェーンバインドによって構成されたアレステックバインドで縛ってリニスを起こす。

猫状態なのはユウくんから供給される魔力が不十分らしい。

リニスの考えだと厄介なことにゲシュペンストと呼ばれる魔力の球は蒐集機能が単独で動いているような状態で、リンカーコアに憑りつくことで乗り移ることができようだ。

バインドで縛ることができるので魔法を吸収することはできないことがわかる。

バインドを破ったユウくんがデバイスを構えた。

……面倒だな

ユウくんのデバイスは頑強で魔力伝達に優れた特化型の槍型ストレージデバイスだ。穂先に付いている飾り布に魔力を込め、解放することで速度を一時的に上げることができる。

つまり、魔力を込められるだけ加速するということだ。

それだけ負担も増えるのだけれど。

突き破れ！オレの武装錬金!!な感じで槍を構えて突撃してくるユウくんを受け流す。

肩に乗せたりニスと対策会議を行いながら回避。

蒐集した魔力によって動いている魔導生命体に憑りつかれているので、リンカーコアから引きはがす必要があるのだ。

魔力を奪うか、魔力ダメージを与えるかで引きはがせるだろうと予想している。

ただ、身体のダメージを無視して加速を多用しているのでなるべく攻撃しないで魔力を奪いたいところだ。

リニスに離れた位置にいるようにと指示を出し、糸を張る。

槍先の接触を知覚すると同時に槍をチェーンバインドで絡め、クリスタルケージに閉じ込めた。

ストラグルバインドの演算を開始する。

強化魔法を無効にするから効果は抜群に違いない。

さあ、屍を晒せ!!と展開しようとするときリニスを人質に取った変態仮面(♂)が再び姿を現した。

……うわあ、忘れてた。

仕方ないのでケージから解放する。

早くリニスを解放しろ、と言いかけてやめる。

変態仮面もゲシユペンストに飲み込まれていたからだ。

お前もかよ!!

これはひどい、マジでひどすぎる。

ユウくん、リニスをなんとか取り出さないと。

変態仮面はそこで死ぬ。

A M Fで溶かすか、吸収し尽くすか。

吸収は無理だな、途中で死ぬ。

A M Fか……効くのかな？

とりあえずA M Fを演算していると黒いスライムのような状態だったゲシユペンストが徐々に小さくなっていった。

ユウくと病室にいとゲシユペンストのゲシユ子さんがデートを仕掛けてくるといふイベントが発生する。

性別はわからんが、ゲシユ子さん。

名前くらい可愛くしないとデートイベントを乗り切れる気がしないのだ。

好感度とか高すぎたのだろうか。

避けるのが一番なのだけれど。

とりあえず俺が入院しなければデートは発生しないはず。

たぶん、きつと、おそらく。

そういうわけなのでユウくんはアースラに預けた。

襲撃犯の行動範囲内に入院させるとか無理があつたわけで。

アースラなら安心できる……はず。

さすがに内通者がいても蒐集されないだろうし。

家でぐったりと寝て過ごす。

ユウくんもリニスもないし、静かなものだ。

身体を動かすのがさび付いたように鈍く、酷なので横になっている。

気持ち的には絶好調だが、身体が付いてこない。

のろのろと動く自分に苛立つ。

自分の上に浮遊させたメダルからチェインバインドを発動、UFOキャッチャーの景品よろしく吊るされながら移動する。

冗談でやってみたが、案外面白い。

シールドなどで加重を和らげると浮かび心地も悪くない。

まあ、俺は飛行魔法も使えるのだけれど。

こうやって遊ぶのも悪くない。

なんかダルい。

絶好調だけどダルい。

誰もいない家を一人漂う。

ああ、静かだ。

なのはちゃんがヴィータ、竜也くんがはやぶさくん、フェイトちゃんがシグナム、アルフがマツチヨ犬と戦闘。

フェイトちゃんが蒐集されるはず。

……そういえばなのはちゃんと竜也くんも蒐集されてない気がする。

やべえ、どっち行けばいいんだ？

とりあえず高度の柔軟性を維持しつつ臨機応変に対応すべきだな。

転移した先ではフェイトちゃんとシグナムが二人で仲良く巨大なムカデを倒した光景が……。

なるほど、わからん。

話し合いを始めたが俺には関係ないので魔法陣を構築。

フェイトちゃんは一対一を御所望のようだ。

頼まれたら認めるしかないでしょ。

しょうがないよね。

問題があつたら割つて入るけど。

魔法陣を組み替え続ける、複数の座標に対応できるように。

ビニール傘とメダルの補助を受けながらテキトーに組みつつ、フェイトちゃんを応援する。

技術はシグナム、早さはフェイトちゃんが優勢だな。

しかし、二人とも際どい格好である。

将来が心配になるよ、俺は。

しばらくづつかり合いが続いていたが、互いの動きが止まる。

拮抗していた勝負だ、次の一撃に賭けるのだろう。

砂がうぜえなと思いつつ眺めていると転移してくる何かを知覚した。

間違いなく変態仮面に違いない。

これ待ってたんだよ!!と三か所の座標を狙い、魔法陣を起動。

構築、知覚、死ぬがよいつてね。

サンダーレイジを解放した。

シグナム、筋肉犬、そしてかなり上空に浮かんでいる変態仮面。

それぞれに三分割されたサンダーレイジを降り注ぐ。

分割されようともその威力は留まるところを知らない。

酷い負荷だ、ゲロ吐きそう。

スタンを期待して電気変換紛いのことまでしたのが余計だったかもしれない。

襲撃をかけてきた変態仮面へと転移してビニール傘で殴りつけた。

このまま落下で死んでくれるとありがたいんだけど。

砂塵を巻き上げて砂漠の中に埋もれた変態仮面を見送ってから、シグナムを介抱して

いるフェイトちゃんに近づく。

文句を言われたが、一対一の状況じゃなくなったので無効でーす☆と軽く煽る。

そして吐いた。

険悪な雰囲気が一転した。

俺の心配をしてくれるのは有り難いがフェイトちゃんはさっさと転移して帰ってくれないかな。

俺も帰るに帰れない。

アルフも筋肉を連れてきたがさっさと帰らせてくれ。

魔力は余裕だが体調がダメっほい。

思ったように身体を動かせないんだわ。

変態仮面は魔法で落下速度を軽減して防御力を上げてたし、まだ動けるはず。

蒐集させるわけにはいかないんだ。

なんでかって？

なんとなくさ、たぶん。

よくわからんよ。

フェイトちゃんとアルフを連れて無理矢理転移しようとしていると、真下から変態仮面が飛び出してきた。

同時に魔力弾をばら撒かれた衝撃で転移が失敗した。

もう一戦あるのかと内心で舌打ちして変態仮面を見上げるがどうも様子がおかしい。

ずももも、といった感じの効果音が聞こえてきそうな闇に包まれている。

ゲシユペンストに憑りつかれたらしい、厄介なことに。

テンパっているフェイトちゃんに俺が時間を稼ぐから早く転移するように伝えると自分も戦うと言い出した。

嬉しいが嬉しくない。

言い合っているとゲシユ子さんがシグナムと筋肉を取り込んだ。

うわあなんだか凄いいことになっちゃったぞ。

マジでさっさと逃がさないと、とフェイトちゃんに目を向けると胸から手が生えていた。

フェイトちゃんが魔力を蒐集されて倒れた。

ダイバインバスターをゲシユ子ちゃんに撃ちこむが逸らし、そのまま転移して消えた。

追いかけようと転移を組むがアルフの叫びで転移の行き先を変える。

そしてフェイトちゃんを抱えて転移。

……面倒なことになったな。

戻ってからフェイトちゃんを預けて現状把握。

最悪か、その一歩手前らしい。

だ。 どういうことだと聞くと、蒐集されたせいで竜也くんとなのはちゃん倒れたとの事だ。

他にも武装局員が壊滅状態とか。

リンデイさんとクロノくんも不在である。

かなりよろしくないとしか言えないですね。

八神家を襲g……偵察しようとしたら結界が張られていた。

転移ですり抜けて目的地にたどり着くと、そこにはゲシユ子（変態仮面♂）と空中で戦うはやぶさくんの姿があった。

どうしたらいいんだ。

どっちを殺せばいいんだ？

少し考えるが、答えは出ない。

とりあえずどっちも俺の敵なのだから二人に向けてデイバインバスターを放つ。

三つ巴の予感……などと警戒していたら変態仮面♀が出現した。

場の混沌具合が加速した気がする。

変態仮面♀の出現に気を取られてしまったのか、はやぶさくんの胸元から腕が生えていた。

リンカーコアから直接魔力を搾取されるアレですね。

蒐集を止めようと魔法を放つが、すでに終わってしまったようで気絶したはやぶさくんにダメ押ししただけだった。

そして響く悲鳴。

玄関から出てきた声の主であるはやてちゃんと俺の目が合ったのは偶然だろうか。

変態仮面♂からゲシユ子がぬるりと抜けて、落下していく。

もう一人の変態仮面♀が受け止めた。

その直後に変態仮面♂は霧のように身体が消え、アリアの姿になった。

なんぞこれえ、と混乱しつつゲシユ子さんの姿を探す。

大きな本を抱えたはやてちゃんのすぐ近くにいるのを見つけた。

何だか嫌な予感がする。

GANTZっぽさを感じる黒い球、ゲシユ子さんが本に同化した。

それが合図だったのか、本が輝くと同時にはやてちゃんを中心に魔法陣が展開された。

目が眩むような強い光の後、無表情のそいつは現れた。

別人のように背が伸び、髪は腰まである銀色へ、瞳は血のように濃い紅、黒を基調とした軽装、手足に巻かれたベルト、そして夜を切り取ったかのような黒い翼。

はやてちゃんだった名残はどこにもなかった。

うわあなんだか凄いことになっちゃったぞ。

以前見たときと同じあの姿はゲシユ子さんの最終進化だろうか。

展開していた魔法陣はベルカっほいけど見たこと無い形式だった。

女性から濃密な魔力を感じた。

砲撃系統の魔法陣が見える。

チャージなどさせるものか、と割り込もうとしたら速攻で撃たれた。

あちやー、チャージなどするものかのほうか。

避けられん。

直撃を防ぐためにメダル8枚でシールドを張る。

ヤバイ。

視界が魔力で覆われた。

なんか高濃度過ぎて笑えてきた。

メダルが許容量を超えて火花が見える。

底上げ無しの俺では受け止めきれないのは確定的に明らか。

メダルを生贄に捧げ、転移で射線からバックステッポ。

なんとか凌げたが次は無いだろう。

高火力すぎて一撃死とかひどすぎる。

メダルの座標を組み込んだチェインバインドを伸ばして回収。

過剰に魔力を溜めこみ過ぎて内部から壊れたのか、8枚全てにヒビが入っている。

残念だが、これからは管制メダルのみか。

ビニール傘に魔力を込める。

相手の魔力量を考えると心許ない。

しかも防御で魔力を割いたので余裕すらない。

もう詰んだわ。

クソゲー展開にイライラしている俺など見えていないかのように、女性は音も無く一点を目指して飛んでいく。

どういうことだろうかと女性の進行方向に目を向けると、結界の裂け目が見えた。

さっきの魔力砲によって引き裂かれたようだ。

街中でさっきのアレ級が撃たれたらまずいことになる。

空飛ぶ天変地異やでえ……。

見逃そうかと思ったが、闇の書が覚醒すると地球がヤバいみたいなことをクロノくん

が言っていた気がする。

まあ、ジユエルシードの凶悪版が歩いているみたいな状態だしね。俺も気張るしかないか。

再来週にはクリスマスだし、平和が一番だと思うのですよ。

クリスマスとかボツチの予感。

リア充は死ねばいいのに。

ユウくんが帰ってきたら、リニスもいてくれるから三人の予感。

……頑張るしかないね。

ラヴオスくらい強いよ、絶対。

天から攻撃が降り注ぐくらい強いに違いない。

接近して斬りかかるが防がれる。

なんだこれ、硬すぎ。

最強の拒絶タイプか……。

女性が一瞬で術式を構築した。

読み取れる性質は内から外へ向かう広域タイプか。

デアボリック・エミツションとかカツコいいな。

これは逃げられないなー、闇に染まつちゃうなー。

マジで困った。

悩んでいると、変態仮面♀が隣に迫ってきた。

こんな面倒な場面で三つ巴になられると困る。

頭を抱えそうになっている俺を前にして変態仮面♀の姿がジルさん変わった。

変わったというか魔法を解いて戻ったというか。

なんとなくそんな気がしてたり、してなかったり。

デアポリック・エミツシオンを代わりに防いでくれたジルさんマジ女神やでえ……。

防いでいるジルさんと急いで情報交換。

彼女は闇の書の封印を目的として動いてたらしい。

転生機能と無限再生機能があるため、起動してからでしか封印できず、蒐集を手伝っ

ていたのだと言った。

しかし、予定よりも遥かに早く書が完成してしまったとか。

焦った守護騎士とゲシユ子さんという新規メンバーのせいらしい。

ゲシユ子さんはリンカーコアそのものでもあるらしく、魔力を溜めこむことができる

性質持ちだとか。

ゲシユ子さんに魔力を込めて闇の書にぶち込めば、起動を早めることができそうだ。

今飛んでいるあの女性は闇の書の管制人格であり、うんたらかんたら。

話が長い。

そんなことは俺にはどうでもいい。

とりあえず闇の書を止める方法が知りたいわけで。

話を聞いていると封印できそうなだけけれど。

蒐集が終了しているから自発的には動かないので凍結させてはやてちゃんごと凍ら

せて永久封印してどっかに捨てればおk、ということらしい。

はやてちゃんは犠牲になったのだ、俺がクリスマスを迎えるという目的のためにな

……。

封印という目標が重なった俺とジルさんの共同戦線である。

以前に俺を殺した変態仮面の中の人だと考えると複雑な気持ちだが、今は頼りにする
しかないようだ。

俺には手段も力も無いのだから。

今回はジルさんが信じるに値する人かどうかに賭けるとしようか。

俺が管制人格の障壁を突破、そしてジルさんが凍結処理という単純な方針で動く。

器用な事は出来そうにないし応援も期待できない。

突破とか今の魔力だと無理なんだがと呟くと握りこぶしほどの大きさをしたガラス

玉を渡された。

エネルギー駆動炉から引き出すための印らしい。

ヒュードラとかいうやつ改修版だが、安全かどうか不明で次元震の可能性もあると言われた。

危険物じゃねえか。

こいつに座標を指定することで次元航行用のエネルギーを伝えるようになるとか。

使用には随時俺の座標を伝える必要があるのだが、管制メダルを中に入れることで解決した。

ガラス玉の中央でメダルが回転しているという不思議な状態だ。

OWを使うために用意していたとか。

なるほどなー。

OWの説明は端折ってもらう。

使用に関しては何の問題も無い、むしろ使い慣れているくらいだ。

リンカーコアへの高負荷が掛かることに領きながら起動準備に入る。

凍結魔法の準備でジルさんは時間がかかるだろうとのことで、俺が単騎掛けになる。

結界の修復をしている暇はないだろうとも。

たぶん管理局の誰かが直してくれてるはずだし。

デアボリック・エミツションによる魔力が薄れていく。

ジルさんは防御で魔力に余裕がないから俺だけが狙われる必要がある。

俺も傷だらけで腕なんて千切れかけるくらいヤバいんだけどな。

チエーンバンドで無理やり動かしているだけだし。

愚痴つてもしょうがないか。

壊れかけた8枚のメダルがビニール傘に寄り添うように浮いている。

魔力で満たされたガラス玉が光輝く。

魔法の闇を祓うかのように。

「フめい na ■ニツ t... が ■ぞ...:... れま...:」

性別すらも判断が付かないようなノイズ混じりの声。

悲鳴のような異音を響いた。

巨大な手が開いているかのように、傘だったものを中心に八つの歪な鉄骨のような

ブレードが姿を現した。

ブレードの表面に規則正しく並んでいる鋭い刃が火花を撒き散らしながら回転を始

めた。

傘を覆っていたビニールの傘布が溶け、消えた。

展開されていたブレードの並び方が傘だったものを中心にした円型へと変化し、それ

らが炎を吐きだしながら回転を始めた。

ドリルのように回転し、赤熱しているブレードの輝きが増していく。

喰らえ、相転移砲!!

と、いききたいところだが無理でした。

できてグラビティブラストあたりだろうか。

相転移砲が出来たら液体金属用いて拡散構造相転移砲……相転移砲とはちよつと違うか。

いつかはベクターキャノンを撃ちたい（迫真）。

有り余る魔力を込めたデイベインバスター。

まあ、単なる魔力ビームなんですけどね。

拡散している魔法の範囲を徐々に集束させ、管制人格のみ撃ち抜く。

管制人格に当たらない部分が結界をぶち破った気がするが、全部管制人格のせい。

おのれ、管制人格!!

やったか!?!とかこれには耐えられんだろう……とか呟いておく。

魔力放射をやめる。

残骸魔力の煙が薄れ、障壁によって防ぎきったのであろう埃一つ付いていない管制人格の姿が現れた。

ちよつと硬すぎはしないだろうか。

魔力量も人間の限界に挑戦する勢いで放ったんだけど。

なのはちゃん超えてた自信があつた。

威力的には今のはスターライトブレイカーではない……デイバインバスターだ……つて言えるくらいだったし。

俺が落ち込んでいても相手には関係ないようで、魔法陣を展開していた。ちよつとくらい待ってくれたっていいのに。

おまえら人間じゃねえ!!

……これは守護騎士に言うべきだな。

赤い短剣が管制人格の周囲に現れる。

アクセルシューターのような誘導制御型つてやつだろうか。

ファンネルっぽいやつ。

それはいいのだけれど、数がおかしい。

20以上はある。

制御能力が狂つてやがる……。

管制人格の指示を受け、ファンネルたちが殺到してきた。

面倒なので俺の座標からテキトーな範囲を指定してジャマーを展開。

さらに多重掛けで高濃度ジャマー。

結合の解除が促進され、誘導が弱つているところをサンダーレイジで薙ぎ払う。

ついでに管制人格にも当ててみたが効いている様子は無い。

効果が見えたらバカス力撃つて削る予定だったが変更するしかないようだ。

最も火力のある直接攻撃で決るか。

本格的な空戦の予感……っ!!

なんてね。

そういえばまともな空戦ってあんまりしてないよね。

ジルさんにチャージ時間を聞く。

ほんの数分で準備はできるが、障壁に阻まれる可能性がある。

そのためのOWだから頑張つてね、とのことだ。

期待に応えられるように頑張りますよつと。

じゃあ、行こうかな。

音を置き去りにした。

ホントに置き去りにしたかはわからん。

比喩表現だし。

ちよつとした次元連結システムの応用である。

プレシアからパクった次元跳躍攻撃の次元跳躍の式を転移に組み込み、空間を広げた瞬間に術式を破棄することで復元しようと働く反動を推進力に利用した移動法だ。

魔力放出でもいいのだが、小規模の次元震が発生するエネルギーを推進力に換えているために速度がケタ違いなのだ。

OW中にしか使えないのと次元震というか、次元の歪みのような軋みが生じるのが欠点か。

とりあえず音速以上の速さで管制人格の障壁と突き出したグラインドブレードが激突した。

俺の突撃は察知されていたようで、障壁で防がれた。

しかも魔力を多分に込めた念入りの防御、多重障壁のようだ。

が、グラインドブレードはそれを少しばかり上回った。

表面の2枚ほど粉々に粉砕した。

砕け散った障壁を衝撃波で吹き飛ばしながら何度も突撃を繰り返し、薄皮を剥ぐよう

に障壁を削る。

障壁を再び展開される前に、身を削る思いで何度も。

転移で距離を取り、突撃する。

加速するたびに勢いを増す炎は傍目に見たらどのようなものだろうか。

管制人格は砕け切る障壁ごと砲撃魔法を放った。

夜の印象を抱かせる管制人格の魔法と太陽のように燃え盛る炎を纏ったOW。

対照的な二つのぶつかり合いは、すぐに終わった。

俺が夜に吞まれたためだ。

夜闇から抜け出すように、魔力の残骸を吹き飛ばしながら再び突貫。

砲撃はグラインドブレードで大部分を削り切った。

常に満たされ続けるリンカードで大部分を吸収することは無く、供給され続ける膨大

な魔力を放出するだけで余波を防ぐことができた。

衝撃波を残しながら、何度も体当たりを繰り返す。

いつか管制人格に届かせるのだと言い聞かせて、何度も。

デバイスは沈黙している。

警告すら出せなくなつたのだろう、その身が帯びる熱によって溶けた一部が散つていく。

溶解した破片が地に降り注ぐ。

幾度目かの突撃、障壁を一枚破るのと同時にブレードが一つ耐え切れずに砕けた。

歪な鉄骨のような外装が剥がれ落ちていき、最期には変形して朽ちかけたメダルだったものが地へと堕ちた。

それを拾う暇さえ俺には無かった。

8つあったブレードが半分にまで減ったが管制人格の障壁を砕き切るには至らない。しかし、手が届きそうな状態でもあった。

俺の天王山かもしれない。

気張って行くしかないね。

更に加速し、突撃。

目が、合った……？

腹へ衝撃。

砕け散るブレードを残し、衝撃によって俺の身体は病院の屋上へと叩きつけられた。

ここで腹パンかよ……。

速度の乗ったカウンターほど悍ましいモノは無いな。

しかも魔力を込めるといふ外道仕様。

骨が何本やられたかわからんが、ただ立つだけでも厳しいようだ。血だらけすぎてヤバイ。

凄惨な事故現場と表現してもよろしいのではないでしょうか。

着ていた病衣もチョーヤバイ。

流石のバブルヘッドナーズちゃんも俺の姿を見たら看病せずにはいられないだろう。

傷口から流れる血を止めるためにシールドで塞ぐ。

添えるだけだと流れ出るので傷口を抉るように。

使えなさそうな部位もシールドで雁字搦めにして固定、念動で無理やり立ち上がる。

また削り直しかよ、とウンザリしながら管制人格へと視線を向ける。

張り直された結界と管制人格の周りを飛び交う金色の光が見えた。

ははは、まだ死ぬそうに無い。

ジルさんが撤退すると言いつつ出したが却下した。

ユウくんとりニスも頑張ってるし、俺もまだまだいけそうだ。

そもそも、再びアレの障壁を削り直すなど無理もいところだ。

残り1つとなった廃棄間近のジャンク状態であるブレードでは一撃で限界だろう。

それに、闇の書も待つてはくれないだろうし。

次元連結システムのちよつとs（略）で病院の一角を引き抜く。力任せに次元跳躍の反動で破壊して転移で切り取っただけだけど。

今の魔力ならメダルが8枚あれば座標を細かく演算できるのでダイヤモンドを紙一枚で真つ二つとか出来る、はず。

試しようがないね。

良さ気な鉄柱を見繕い、ブレードで斬って成型。

タオパイパイのように投げて飛び乗るのも面白そうだが、今の用途は別である。

鉄柱にブレードで穴を開け、傘を突き刺し魔力を通す。

傘から浸食が始まるがかなり半端でしか作用せず、コンクリートが剥がれるだけだった。

それでも魔力を通すようになったのか、紫電が迸っている。

これなら減ったブレードの分の火力を補えるだろう。

……補えるよね？

ゼロシフトもどきで再び接近。

ユウくんを入れ替わるように管制人格の前に躍り出た。

今まで能面のように表情が変わらなかつたが、俺だとわかると驚きに目を見開いた。機械のようだったが、どうしてなかなか人間味を感じられる。

そつちのほうに魅力的ですよ……なんてね☆

鉄柱を振り抜いたが、障壁を砕き尽くすまでには至らなかった。そら、もう一撃だ。

衝突の際に半ばから折れた鉄柱を手放し、シャーペンを投げつけようとした隙が出来た瞬間、高濃度の魔力が籠った拳を叩きつけられた。

人外の領域はまさに魔人拳!!

アホなことを考えてたらどす黒い血を吐いてしまった。

これはもう、内臓ガツタガタだな。

虎の子であるシャーペンもバラバラになった。

ガラス玉にヒビが入り、供給されるエネルギーが滅茶苦茶になっている。

暴走だろうか、リンカーコアが悲鳴をあげている。

なんとなくもう長くないと思う。

チエーンバインドで管制人格を雁字搦めにし、シーリングで縛る。

シーリングで防がれるが逃げ道さえ防げれば、それでいい。

シーリングで防御処理が遅れるなら、もつといい。

役割くらいは果たしておくよ。

ユウくんとりニスをランダム転移で遠ざけ、俺を中心に管制人格の位置まで次元固

定。

転移で逃げられないようにジャミングを流しているだけだが。

次元連k……のちよつとした応用である。

魔力暴走に身を任せる。

何をするかつて？

いやいや、ちよつとお手伝いをね！

『99周目』

最後に見たのは凍結した形容し難い化物でした。

自爆で致死ダメージを叩きだしたら転生機能が働いたが、それをジャミングで防いで

たら出てきた。

中身か何かか、あれは。

やっぱり管制人格に手を出すのは無しにしよう。

中身が出てくる瞬間がねらい目だろう。

シーリングとジャミングは効くつぼいし、なんとかなるだろ。

セーブポイントから砂漠のタイマンまでは同じように進み、またもフェイトそんとシ

グナムの一騎打ちを眺める。

違うのは俺が魔法陣を展開していないだけ。

というか、すでに魔法は行使して今は手持無沙汰なだけだ。

シーリングで幾重にも縛り、クリスタルケージに封印したゲシユ子さんを横目に見ながら変態仮面待ちである。

中身がアリアである変態仮面よりもジルさんのほうが来てくれると嬉しいんだけど、ガラス玉が欲しいし。

できれば荒事は避けたいわけで。

貸してくれなかったら力尽くで奪うしかないだろうし。

ゲシユ子さんを使って闇の書を起動、封印するから手伝ってね☆とジルさんに笑顔で伝えた。

アリアは転移と同時にバインドで縛って人質、ではなくマスコットとして連れてきた。

話が円滑に進んで嬉しいです。

ガラス玉と管制メダルを統合し、座標を送る。

これでOWの準備もできたわけだ。

いやあ、断られたらゲシユ子さんに喰わせるつもりだったけどジルさんが理解ある人

で嬉しいよ。

結界を展開、OWを起動し、八神家にダイレクトアタック!!

金髪の女性をバインドし、何をやってくるかわからないから最初に戦線離脱してもらう。

はやてちゃんから闇の書を借りる。

起動前だと俺でも蒐集機能を使えるようだ。

なんとテキトーな……。

試しに金髪の女性を蒐集すると霞のように消えて行った。

あるえー？

……しゅ、守護騎士だから。

たぶん守護騎士だからノーカンだから。

俺のシマなら守護騎士はノーカンだから。

気を取り直してゲシユペンストが破裂する寸前まで魔力を込める。

リンカーコアの役割もあるらしいし、足りてないページはこれで補ってしまおう。

うわっ…、私の魔力、多すぎ…？

球体だったゲシユ子さんは魔力が多すぎてバブルスライムと化していた。

なるほど、これが配合の成果か。

準備が整ったので用済みのゲシユ子さんを闇の書にぶち込む。

あとは起動するのみだ。

……。

……。

……。

起動しないでござる。

なんで起動しないのかなあ。

壊れたとか？

叩いたら直らないだろうか、グラインドブレードで。

わかんね。

どうしたらいいだろうかとはやてちゃんに尋ねるとめっちゃ睨まれた。

そういえば今は俺のことを知らないんだっけ。

知ってても睨まれそうだけど。

たぶん、はやてちゃんが起動する気がないからだろう。

困ったものだ。

唸っているグラインドブレードを片手にはやてちゃんに語りかける。

起動しないとヤバイよー、などと伝えるが怒鳴られるだけ。

我儘だな。

どうしたものかと首を捻っていると結界内への侵入者を察知した。

守護騎士が帰って来たようだ。

次元世界で戦闘しているはずなのに、帰宅するの早過ぎじやないですかね。

杜撰な侵入と転移だな、間違いなく管理局に捕捉されると思う。

まあ、すぐに事件も終わるから気にする必要はないけどね。

突入してきたヴィータとシグナム、筋肉犬。

無数に設置しておいたバインドで簡単に捕獲、どうやら頭に血が昇っていて対処が遅れたらしい。

悪魔だなんだと罵られるのを聞き流しながら蒐集準備。

悪魔でいいよ、悪魔らしいやり方ではやてちゃんが起動したくなるようにするから。

悪魔的なやり方って言ってもやることは一つなんだけど。

いやー、俺ってば優しいな。

苦しめることも無く蒐集するだけっていうね!!

一人ずつ守護騎士が消えていく。

ヴィータ、君は良い奴だったが残念だ。

霧のように消えていく様を眺めて溜息を吐いた。

まだ起動しないか……。

呆けていると死角からはやぶさくんが急襲してきた。

障壁で受け止める。

拮抗した瞬間、バインドで捉えてはやてちゃんの目の前まで連れて行く。

蒐集して無効化する。

根性、ド根性、覚醒、再動、奇跡、復活などをやりそうだし。

あとあんまり元気だと危機感が伝わらないからね。

喋れないくらいがちようどいい。

6本もあればいいか。

——穿て、ブラッディダガー。

ブラッディダガーって見た目は完全な刃物だから刺したらホントつぽいわけで。

しかも赤いから血つぽく見えるし。

あまり恩恵を受けたことは無いが、こういうときの非殺傷はマジ便利。

1本を突き刺す。

はやてちゃんにもわかりやすく、ゆっくりと。

悲鳴を挙げてくれればいいんだけど、はやぶさくんは我慢強いようだ。

まあ、それでも構わない。

苦悶の表情で叫びを我慢している姿は逆にはやてちゃんを揺さぶれそうだし。

2、3と突き刺すが起動はしない。

どうしてなかなか我慢強い。

そして俺は我慢弱い、残りを一気に突き刺した。

はやぶさくんの口からうめき声が漏れた。

闇の書が薄らと輝き始めた。

起動か……!?

はやぶさくんがはやてちゃんを一喝。

闇の書から光が失われ始めた。

はやてちゃんを宥めるために、はやぶさくんが立ち上がって頭を撫でていた。

魔力も枯渇直前で、しかも魔法を喰らったのに凄いい根性である。

もう一押しか。

デイベインバスターではやぶさくんを撃ち抜いた。

今度こそ闇の書の起動を確認。

はやてちゃんを取り込もうとしている書に割り込みをかける。

機能を遅らせるシーリングと阻害するジャミング。

再生機能と転生機能対策だ。

さらに空間を固定する。

次元連結（ryのちよつとした応用である。

闇の書もデバイスの一つであるらしい。

再生を遅延させとけば壊すくらいできそうじゃね。

中身がどうなるかは知らないけど。

ヴィータとは今生の別れになるかもしれないし、そうじゃないかもしれない。

まあ、試してみるしかないのだけれど。

闇の書は中に入れるとばりに頁を開いて止まっている。

だから期待に応える様にグラインドブレードを突き刺した。

破壊の速度に再生が間に合わずジャンクと化していく。

転移が行使されようとしているがジャミングによつてとどまり続けている。

どれくらいの時間、ミキサーしていただけるか。

何度も破壊しているというのに未だに再生が行われようとしている本の姿に呆れてしまう。

はやてちゃんとのリンクが切れるまで続けようと思ったが無理だ。

俺は我慢弱いのだ。

グラインドブレードを待機状態に戻し、グズグズの欠片と化した闇の書だったものに突き刺したままシーリングを十重二十重とかける。

ゆっくりと欠片同士が近づき、結合しようとしているがビニール傘とシーリングによつて阻害されて再生できないでいる。

そこに変態仮面（ジルさん）が転移、凍結することで更に強固な封印をかけた。

凍結とシーリングは闇の書自体の魔力によつて半永続的にかかるようにしたので外部から手を出さない限りは問題ないはずだ。

そうして闇の書事件は呆気ない終わりを迎えた。

封印状態の闇の書は管理局へと輸送後、然るべき措置をとるとのことだ。

たぶん、人が手を出せないような場所に放り投げるとかそんな感じか。

“被害者”のはやてちゃんは死ぬことは無いが未だにリンクしているために麻痺が

残り、車いすに縛られている。

途中で割り込みをかけたために、管制人格と混線したのか髪の色も灰色へと変わってしまった。

俺も入院を余儀なくされた。

当分の間は安静である。

リンカーコアなんて休眠状態だ。

そのうち使える様になるかもしれないが、今は寝かせておいたほうがいいらしい。

不純物の処理で忙しいとかなんとか。

だが、不能にならなかつたのは奇跡的な状態だとか。

あまりの幸運に涙が出そうだ。

事件の後、はやてちゃんと一度だけ会う機会があった。

一言も交わさなかつたが、その瞳にはどこか見覚えがあった。

ユウくんを拾ったときも似たような瞳を見た。

暗い瞳だった。

二度目に出会ったのはついさつきだ。

病院の屋上で空を眺めていた俺に車いすで近寄ってきたはやてちゃんの姿は以前よ

りも更に深い闇だった。

すぐに思い出した。

プレシアと同じだった。

彼女にとつて守護騎士は家族で、家族を奪つたのは俺か。

難しいものだ。

はやてちゃんは魔法を覚えたらしい。

かなり上手だった、直接受けたからわかる。

血が流れている。

止まりそうにない。

突き刺さったままの6本のブラッディダガー。

霧散せずにいることから才能を感じられる。

それとも俺の魔力が枯渇状態だから消えないだけか。

プレシアの最期を思い出した。

……e t c。

これらが俺の罪状らしい。

……どういふことだ。

見事に次元犯罪者入りだねと男が金色の瞳をきらきらと輝かせながら嗤った。目覚めたばかりの俺には理解できないが家に帰れないことだけはわかった。

ああ、ほんとうにひどいきぶんだ。

何やら喋っている男から視線を外し、億劫に思いながらも情報を得ようと周囲を見渡す。

あまり広くない薄暗い室内と男を囲むように宙に浮かぶ複数の小さなモニタ、その部屋にはそれくらいしか無かった。

モニタには数字が羅列されているが俺には何を示しているのかわからない。

男は医者というよりも学者に見えた。

それもテレビで見えるような小難しいことを適当に喋っている“まとも”なやつではなく、漫画やアニメで見れる様な気持ちの悪いモノを宿している種類だ。

魔導師はどうだろうかと観察するが、魔力と肉体を考慮すると可能性は低いだろう。

頭を使うような……。

ただ、考えるだけにしてもどうも気怠くなってしまう。

目の前の男が何者であれ、今できることなど無いのだから大人しく話を聞くとしよう。

男の名は「ジェイル・スカリエツィー」、長いのでスカさんと呼ぶ。

細かいことは面倒なので省くが俺を生き返らせた本人らしい。

余計なことを……いや、感謝すべきか。

どうせ俺にはあれ以上の結果を出すことは出来なかった。

やり直す手間が省けたのだと考えれば悪くないのかもしれない。

俺を甦らせた理由だが、特に無いらしい。

無理矢理、理由づけすると偶然だったとか。

スカさんのスポンサーがひどく執心していて、興味を持ったときに偶然手に入れたらしい。

それってどういう状況だろうか。

そもそも俺に興味を持つなど、一体どんなスポンサーだ。

尋ねるが笑みを深めただけだ。

答える気はないらしい。

溜息を一つ、そしてスカさんに手を翳して動かし難いと文句を言う。

そんな俺を見てスカさんは呆れたとばかりに表情を変え、当然だと言いつ返した。

蘇生によって弊害もあるが、他にも手足が壊死しかけていたことや右腕がちぎれてか
けていたのも原因らしい。

生身に見えるが、現在は一部を機械骨格と人工筋肉に置き換え、極小機械群（マイク
ロマシン）に指示を出すことで動作しているようだ。

元の手足のように動かすには脳が経験をもとに発達する必要があるらしい。

さらに、肉体が細胞レベルで魔力と融合しているため、魔導生物に限りなく近い状態であるのか。

生命活動に魔力が必須なのに、リンカーコアの95%以上が休眠しているようで、体調がすぐれない理由の筆頭であるようだ。

刺激すれば覚醒するかもしれないと言われたが断っておく。

入院したときを思い返すと、あまり手を出したくないからだ。

もつと弄つてみたかったが未知な部分が多くてマトモなことしか出来なかったと呟いたスカさん。

マトモ……？

大してツラくも無いリハビリを繰り返す。

手足の動作に関しては機械を動かすような面倒さが加わった。

体内に巡っているというか、俺の場合は満たされている、魔力を極小機械群に与えたいと動作の命令が下らないのだ。

魔力があまりにも少ない現状だと日常的な動きならば問題は無いが、戦闘行動などは夢のまた夢だろう。

精密さで言えば軽く生身を越えるところは面白いといえれば面白い。

まあ、色々出来ることはあるのだろうけど魔力が乏しい我が身では遊べないのが残念と言えば残念か。

やることと言えば、他にはスカさんの研究を眺めて時間を潰すくらいだ。

生物と機械が彼の専門らしく、戦闘機人というものが研究の結果のようだ。

人間の肉体に機械を組み込むことでより強靱な存在にするというものだ。

俺が利用しているのは生身に限りなく近い義手や義足だが、実際は骨格から変えていくとか。

恩恵を預かっている身としては好きにするといいとしか思わない。

他には人造魔導師を生み出すことを目標にしているらしい。

超高エネルギー結晶体をリンカーコアと融合させることで高い魔力を得られる可能性あり、さらに低い確率で死人を蘇生できるとか。

俺を甦らせた方法はこれらしい。

やっていることが凄すぎて訳がわからないことになっている気がする。

元から俺のリンカーコアにはその超高エネルギー結晶体が2つも内包されていたので、同様にレリックとやらを仕込むことで復活を果たしたとか。

親和性は驚くほど高いので、おかわりはいるかと聞かれたが断る。

そもそもリンカーコアに変なものが内包されているという驚愕の事実には思考が追いつかない。

何が楽しいのか高笑いとともにスカさんが俺のデータをを見せてきた。

元からあった超高エネルギー結晶体は、限りなく純度の高い魔力で出来ているとのことで、回収されているジュエルシードと同様の性質を持っているようだ。

というか、そのままジュエルシードが内包されているらしい。

しかもリンカーコアは複数が集まって群体を形成しているとか。

数は10や20を軽く超すとの話だ。

よくわからん。

スカさんが戦闘機人を調整したり、稼働させたりを眺めながらリハビリを繰り返すが、かなり飽きてきた。

リンカーコアが複数あるとも、1つはDランク前後の魔力しか生み出さないように、3〜5個程度しか活動していないので魔力が恒常的に不足している。

そもそも生きるだけで魔力が消費されるとか、人間としてどうなのだろう。

生命活動にも決まった量が必要なので枯渇したらもちろん死ぬし、生成量を消費量が

上回っても死ぬ。

スカさんの改造でそうなったのなら恨めばいいのだが、徐々に体質が変化したため関係ないらしい。

ループの影響だろうか。

スカさんには未知の部分が多く、色々興味深いと言われたが全く嬉しくない。

戦闘機人とも交流しているが、気難しい娘ばかりで中々上手くいかない。

というか戦闘機人が女性ばかりというのも難易度を上げている理由に違いない、身近な女性とか少なかったし。

動作テストの模擬戦で全力でぶん殴ったのも関係ないに違いない、リハビリ中で調節が効かなかった。

製造時期を聞いてBBA発言したのも関係ないに違いない、活動期間は短いはず。

なるほど、俺に非は全くないな。

動作データの引き継ぎが出来るようで、そういった生身の人間ができないような点は結構面白い。

模擬戦も誰かしらと戦ったらそれを元に別の誰かが対策を練って挑んでくる。

基本は人間なので欠点も多いけど。

あとは機械で出来ているからか内部への衝撃が苦手らしい。

矢鱈無闇に接近しすぎると徹の餌食になるので、チンクには是非とも防御や回避と
いった体捌きを憶えてもらいたい。

体力の限界か、呼吸を整えるのに必死で倒れたままのチンクを見て、戦闘機人は痛み
で物事を覚えるのだろうかとか疑問を持った。

人間を元に行っているだけなのだから良い経験になるのではないかと思ひ、徹を二重に
込めた雷徹を喰らわせるのはどうだろう。

無理矢理起こして試してみようとするが、止める様にと声をかけられた。

柔らかな女性特有の声へと顔を向けると、少女が透き通るような翡翠色の髪を揺らし
ながら近づいてきた。

彼女はロゼと呼ばれていて、俺を拾った人物らしい。

ジルさんにとても似ている人物で、瓜二つといつてもいいくらいだ。

異なる点は繊細というか華奢というか、そんな細い身体であることと胸である。

ジルさんとロゼを比べるとヴィータとシグナムくらい違う。

ロゼ↓ジルさんに似ている（胸以外）

ジルさん↓リンディさんに似ている（胸以外）

ロゼ↓リンディさんに似ている（合致）

これが示すことは……ジルさんにも未来があるってことか。

他には何も気づかなかった。

何もないに違いない。

ロゼはご飯が出来たので食べようと誘いにきたらしい。

しようがないので今日のところは渋々と雷徹を諦めることにした。

飯を無視したり、遊んだりするとロゼが怒るので大人しくすべきだと覚えた。

前にロゼがケーキを食べようとしていたので、「こうしたらもっと素敵になる」と言い

ながらドーナツを乗せたら手加減無しの魔力砲でスカさんが吹っ飛ばされた。

マジおこぶんぶん丸になると全力で魔力砲を放ってくるようで、苦手意識がある。

どうせ食っても味はわからないのだからテキトーでいいのだが、ロゼが機嫌を損ねる

ので食卓に加わっている。

食後に一息ついていては各々を眺めながら、そろそろ帰ってみようと思おうと試みてみ

た。

返事は無かったが何を言っているんだコイツ、といった雰囲気を感じた。

スカさんが笑いを浮かべながら、空間モニタを見せてきた。

俺の顔写真とともに書かれていたのは罪状だった。

身に覚えが……エネルギー駆動炉と質量兵器くらいしかない。

俺は無実であり、これは冤罪であるのは確定的に明らか。

見事に次元犯罪者入りだねとスカさんが金色の瞳をきらきらと輝かせながら嗤った。イラついたのでスカさんに極小の魔力弾を当てる。

魔力が枯渇寸前になり、死にかけた。

俺がりハビリしている間に何があつたというのだろうか。

解決するにしても管理局は味方ではないという認識を持つべきだろう。

そして、逃亡できる程度の力が必要だ。

自由に扱える魔力が全くといっていいほど無い現状は心細く感じられる。

休眠状態のリンカーコアに魔力を流してみるが、全てを吸い取られたかのように消え去った。

乾いたスポンジに水を含ませた、というのが正しい見解か。

魔法が使えない限り、非力で善良な少年でしかない俺にはどうすることもできない。誰かが解決するのを待つべきか。

有りえないな。

今に至って何の変化も無く、罪状が残っているのならば誰も手を出していないのだから。

やはり自分しか……。

リハビリ用に、とスカさんに頼んだ12面体のルービックキューブを片手で弄る。

一瞬だけ指の腹で弾くことで回転させ、徐々に加速させていく。

それぞれの面が超速で複雑に動いているため、常に手で持っているわけにはいかない。

最終的には、触れている時間よりも宙に浮いている時間が長いような状態となった。動かすときは列を爪先で一瞬だけ弾くことで切り替える。

傍目には忙しなく動く手の上で表面が蠢く球体が浮遊しているように見えるだろう。

細かい動きの訓練としておこなっているだけであり、完成させる必要はないため、視線は残った片手に持っている端末に向ける。

スポンサーから送られてくる様々な情報を読むことができるようだ。

中には管理局について詳しく書かれているものもあつたが、組織として杜撰すぎないだろうか。

スカさんはテキストに読んで良いと言っており、今まではあまり気にしていなかったが、そうもいかなかった。

なのはちゃんが入院……？

久しぶりの娯楽は空気が美味いぜ。

別にスカさんところが苦難に満ち溢れていたというわけでもないが。

スカさんや稼働している戦闘機人、ロゼに見舞いに行くと言えたら緩い感じで許可を貰い、病院の地図が入った端末を渡されて街の外へと転移させられた。

管理局の情報管理がザルすぎて内心で少し引くが、今はその穴あき具合に助けられているので文句は言うまい。

勝手知ったるなんとやら、白ばかりで目がチカチカしそうな病院内を杖を突きながら歩く。

片手に杖、片手に12面体ルービックキューブ……無敵だな。

お見舞いはパインサラダくらいしか持ってきてないので、足りなかつたらルービックキューブでも渡せばいいだろうか。

目当ての病室を見つけ、扉をスライドさせて中へと入る。

なのはちゃん久しぶりだね、ちよつと道が混んで遅くなつたよ。世界中で人が死んでるから生き返るのにも混雑してて今になつたつて訳さH A H A H A H A！とウィットに富んだジョークを飛ばし、銀河美少年ばりの輝く笑顔もセツト。

キラツ☆

なんてね。

チラッと横目で様子を窺うと、滂沱の涙を流すなのはちゃんがそこにいた。
ヴァーイ!?

もうなんかよくわからなくてぐちゃぐちゃしちやって涙が止まらないとか。
あるある、すごくよくわかる。

最初の方の死からコンティニューしたときとかそんな感じだし。

なのはちゃんが杖に視線を向けているので、満足に動けないってことを伝えておく。
緊急時のために手足の魔力消費は最小限まで削っているのだが、やはり戦闘になると
どれだけ省エネにしても足りない。

一応、魔力を使い切った際の対策は練っているが万全ではないのだ。
荒事が無ければ良いのだけれど。

何を泣くまで思い詰めてたか知らないけれど、なのはちゃんなら大丈夫だろ。

100回くらい死んだら俺でも生き返ったくらいだ、1回くらい不幸になったのは
ちゃんなら天使になれるんじゃないだろうか。

つまり今なのはちゃんは大天使ノエルの可能性が微粒子レベルで存在している。
流星なのはちゃんだな、まさか天使になっているとは。

なんということでしょう、匠の手によって窓際には彩を加えるためのお土産「パイン

「サラダ」が置かれ、殺風景だった病室が南国リゾートのようになったではありませんか！

……なつてねえよ。

パインサラダで病室が変化するとか魔導師もビックリだ。

とりあえず立っているのも疲れたので椅子に座らせてもらおう。

当たり障りのないジャブ程度の会話。

そして沈黙。

度々、なのはちゃんと言葉を詰まらせている場面があった。

きつと何か聞きたいことがあるのだろう。

なのはちゃんから視線を外し、ルービックキューブを無言で回転させる。

ルービックキューブの面を揃えては崩すといった作業によって起きる無機質なスラ

イド音と回転によって生じる風切り音が病室に響いていた。

意を決したように、なのはちゃんが強い視線を俺に向けた。

少しの間を空けてから絞り出すように呟いた。

先週、俺がどこに居たのか知りたいのだと。

……た、大変はずかしいのですが、地下に引き籠ってました。

俺の返事に何か思うところがあつたのか、難しい顔をしていたがすぐに何時ものよう

に笑顔になっており、鬨りは一切なくなっていた。

「会話もさつきまで言葉が詰まっていたことなど無かったかのごとく次から次へと喋り続けていた。」

そして、会話が途切れる。

お茶を汲んで渡すと、なのはちゃんはぽつりぽつりとゆつくりと胸の内を吐き出すように呟いた。

なのはちゃんはもう一度空を飛びたいらしい。

怪我に付け加えて疲労によって身体が元の調子を取り戻すかわからないとも。

悩むことは無いと思う。

なのはちゃんなら完治したら再び飛べるだろう。

もしかしたら以前よりもっと速くなっているかもしれない。

だから、焦らずゆつくりリハビリしたらいい。

俺にはわかる、なのはちゃんの背中には翼があることが。

俺にしか見えないけれど、絶対ある。

18対だか36対だか知らないが、天使のような羽根があるに違いない。

だって大天使ナノトロンだもの。

入室したときよりは幾分か元気になったなのはちゃんにそろそろ帰る事を告げる。

ノックとともに扉が開くことで来客を知らせた。

そろそろ失礼しようかと杖を握り、腰を浮かせたところで視界の端に映ったのは飛来する黄色の魔力弾。

飛雷弾だと無駄なことを頭の片隅で考えつつ、軌道からなのはちゃんに当たるモノがないことを判断して軽く身を引いて回避する。

パインサラダが爆発した。

パインサラダと壁の破片が微塵となって室内に飛び散る。

破片とパイナップルの欠片を杖で叩き落としながら立ち上がる。

デバイスを構え、バリアジャケットを展開しているフェイトちゃんが入口を陣取っていた。

久しぶりの再会で、歓びのあまり帰宅を許さない流れとか？

モテ期到来の予感！

……。

うん、無いな。

ちよつとよくわからないけど、フェイトちゃんが俺に敵意を持たれているのはわかる。

聞く耳を持つてくれるかわからないが、魔力弾を生成して周囲に待機させているフェイトちゃんの様子から話し合いは難しいだろうと判断。

これは撤退する流れだろう。

撤退戦で重要なのは退路……塞がれている。

壁を砕くには魔力が足りない。

怪我しているナノエル様を人質にするわけにもいかない。

——おれはてんいをおこなった。……しかし、MPがたりない！——

ちよつと……いや、かなりよくない状況だ。

魔法を受けたとしても手足のどれかならば中身が爆ぜる程度で緩和できるが、胴体に

直撃するとまずい。

直撃したら重症は免れないし、経験則からいえば死ぬ。

非殺傷なら安全だと管理局が言っていたな？ あれは嘘だ！

リンカーコアもまともに活動していない汎用人型魔導生物オリシユゲリオンには非

殺傷など無意味だ。

抵抗しようとして魔力が無くなって死ぬ、たぶん。

つまり魔力を奪って生命活動を行えなくして、じわじわと鬩り殺しにしようというのか。

フエイトちゃんこわい。

そんな下らないことを考えていたが、決断は早かった。

こんな室内で戦えるか、俺は出ていくぞ！

ルービツクキューブを「ペルソナアツ！」と叫びながら握りつぶす。

叫ぶ意味は無い。

あるとしたら気合が入るくらい。

フエイトちゃんが警戒したのを確認し、四散したルービツクキューブの中から漏れだす魔力を取り出した。

微々たる量だが毎日溜めこんだ俺の努力の成果であり、切り札でもある。

可愛がってた妹のお見舞いに来たら、知人の少女に襲撃されて切り札を切るハメになったとか冗談が過ぎる。

ルービツクキューブの残骸を見ていると輝かしい思い出がよみがえってくる。

チンクの頭に「ルービツクキューブをシュート！ エキサイティング！ ……すみん、そんなに背が小さくなつてしまうとは」と小粋なジョークを飛ばしたり、メガネ割つたり、地中に潜っているセインを震脚で気絶させて「*いしのなかにいる*」を再現してみたり、めがね割つたり、トーレをターボババアと名付けてみたり、眼鏡割つたり、会話の度にロゼの胸と尻に視線を送り続けるというセクハラしたり、めがね割つたり、

ドゥーエとウーノの製造時期を聞いてBBAと呟いてみたり……ルービックキューブとともに過ごした日々は今となっては良き思ひ出です。

BBAに関してはずっと調整とかで長い間眠っていたから問題ないはず（震え声）
キレたりしたら肯定していることと同じだと何故わからないのだろうか。

壁をぶち破り、その勢いのまま外へと身を投げる。

転移が行えるほどの魔力を得られたわけでもない、戦闘を前提とした全力で動ける時間もほとんどない。

さらに魔力が切れてしまえば立ち上がることも難しくなる。

着地と同時に両足へと魔力を送り、走り抜けるしかないだろう。

落下までやたらと長くかかっているのは4階だったからだ、忘れていたが。

襲い掛かってくる弾幕で直撃するものだけを狙い、一緒に落下している破片を投げつけることで軌道を変える。

逸らし切れない弾は魔力を込めた杖で破壊する。

途中で杖が折れたのでフェイトちゃんに向けて投げつけるが容易く弾かれた。

空中では踏ん張りが効かないから威力が出なかったか。

地に衝撃を逃がしつつ、舞い上がった芝と土が身体に降り注ぐ。

一瞬でも時間を稼ぐため、身を隠すように衝撃を大袈裟に伝えて巻き上げたのだ。とりあえず杖を投げつけることで着地の瞬間を狙われない様にしたが上手くいったようだ。

街中、というか病院内で魔法を使用しているフェイトちゃんに内心で舌打ちしながら逃走経路を探し、どのように逃げるかをシミュレート。

しかし、考えも纏まらない内に土煙が吹き飛ぶほどの弾幕が放たれた。転がるように回避する。

目標を失った魔力弾が弧を描いて再び襲い掛かって来た。間違いなく誘導弾だろう。

フェイトちゃんの目的は不明だが、誘導弾による移動先の誘導だろう。

そして砲撃魔法がバインドによって詰め、と。

近接や直射も織り交ぜるだろうが、終着点は間違いなくそこだろう。

だから俺は誘導されているかのように動き、彼我の距離を把握することに努めた。確実にバインドで捉えられるであろう、そんな場所まで誘導された。

あとはフェイトちゃんの思惑通りに動いてバインド、される直前で抜け出す。

そして一直線に逃走し、地下道に逃げ込む。

簡単で完璧だ。

王道すぎて失敗するのも難しいだろう。

終着点は人が周りにおらず、比較的広い場所だった。

噴水から空へと登る水がなんとも涼やかだ。

フェイトちゃんがバインドを放とうとしているのか、今までとほんの僅かばかり動きが固い。

よし、今……なっ!?

待っていたフェイトちゃんによるバインドよりも早く、そして数多くのバインドが俺へと迫っていた。

ああ、管理局員が駆けつけたのか。

逃走の機会をうかがって時間を駆けすぎたのが敗因だな。

慢心ってやつか。

魔力もすぐに切れるだろうから抵抗できない。

上手くないことばかりだ。

(警察と裁判所を一緒にしちゃ) いかんでしょ。

バインドされて逮捕↓裁判のコンボである。

提示されている証拠など目に入らなかつた。

怒りで視界が赤く染まったから。

胸の奥が燃えているかのように熱かつた。

怒りで煮えたぎつたのか燃えているのか、どちらかわからないが熱くて、堪らない。

伝搬しているのか、手足も熱を帯びていた。

魔力を放出しながら拘束具をぶち破ろうと全身に力を入れる。

引き千切るのは容易く無いが、困難でもない。

半ばまで破壊すると、無数のバインドによつて縛られ、地面に這いつくばることに

なつた。

それでも怒りは収まらない。

なのはちゃんが襲撃された際の映像が流れている。

黒い靄を纏つた“俺”がなのはちゃんを撃墜した映像が流れている。

これがなんだというのだ。

怒りが収まらない。

その“俺”は闇の書を持っていた。

罪状に不当なロストログアの所持も加わつた。

自分の中で封印との繋がりを感じられることに気付いた。そんなこと、どうでもよかった。

ただ、闇の書が持ち出されていることで怒りの炎が燃え上がった。

“俺”の右手には闇の書、左手には通常のデバイス。

闇の書を持つているが、ビニール傘が突き刺さり、封印されたままで起動していないようだ。

強固にかけた封印処理がボロボロに破壊されているが、それでも縛り続けている。

さらに封印の術式に大きな欠損も見取れる。

大きく弛んだときに解除しようと失敗したものでしょう、ジルさんの凍結は無くなっていった。

崩した場所を覆う様に封印が十重二十重と歪に重ね掛けされていることから、誰かが解除しようと手を出したのだろう。

俺と繋がっているのに無理に解こうとすれば封印は雁字搦めになっていくはずだ。

ぐちゃぐちゃにした際に闇の書を演算装置として簡易的に弄り、自己封印をかけ続ける様に組んだから。

俺が自ら魔力を切って解除するまでは仕込んだビニール傘と制御メダルの演算によって封印が掛かり続ける。

誰も起動させることはできない。

欠点は俺が死ねば弛むが、誰かしら術式を補助したり重ね掛けすれば封印は働くはずだ。

それでも危険には変わりないのだけれど。

闇の書を見ていると俺のやったことが否定された、そんな気さえしてくる。

腸が煮え返りそうだ。

吸収してバインドを食い破る。

四肢が自由になって……。

それで。

それで……。

どうすればいいのだろうか。

逃亡か、戦闘か。

逃亡だとすれば、どこに逃げればいい。

どこに逃げていいのだろうか。

逃げる場所などあるのか。

逃げていい場所などあるのだろうか。

いや、俺に逃げ込める場所など無い。

となると戦闘か。

この場で戦闘など自らの罪を認められた様なモノではないか。
ならば逃亡も同様だ。

いや、すでに無実を訴える意味などない。

この場では罪の有無など問われていない、あちらで断定しているだけだ。

逃亡か。

逃げて、逃げて、逃げて……そして、どうする。

転移の術式を展開させる。

何処でもいい。

まず何処かに逃げて、それから考えれば……。

すぐに行動に移せなかったのが悪かった。

転移が発動する前に紫色のバインドによって全身を締め上げられた。

飛んできた方向を睨みつける。

その先では、はやてちゃんに似た銀髪の少女が偉そうに薄い胸を張っていた。

怪訝に思っていると、俺の前に車いすに乗った少女がゆつくりと現れた。

銀髪の少女はデИАーチエという名前らしい。

そして、銀髪少女よりも少し年上の車いすに乗った少女の名前は、八神はやてだった。

言葉は出なかった。

ただ、驚くばかりだった。

闇の書と繋がっている証拠である“足”。

何も映さない曇りガラスのような瞳。

目の奥に宿るプレシアに似た仄暗い光。

それらは別にどうでもいい。

俺が驚いたのは、ビニール傘も刺さっていない、封印によつて氷の鎖で雁字搦めにされていない、シーリングの術式が纏わりついていない、真つさらな新品同様の状態の“闇の書”がはやてちゃんのすぐ近くに浮遊していることだった。

闇の書とは違う。

色だけでは無い、違和感を感じる。

紛い物か、レプリカか。

であるならば、闇の書のようなモノと表現するのが正しいだろうか。

それを見ていると怒りなど冷めてしまった。

俺が拘束具を引き千切ったためにちよつとした混乱はあつたが、すぐに鳴りを潜めた。

落ち着いたところで裁判が再開された。

いつ、どこで、どのように、それを手に入れたか問う。
返答はなかった。

静粛に、とは裁判長つばい人の声。

そして俺が静かになると罪が一つ増えそうになるという理不尽。

俺が闇の書を所持して云々とかいう話になっている。

はやてちゃんが所持者だったはずだと述べると、有り得ないとばかりに否定されてしまった。

今、はやてちゃんが所持しているのは紫天の書という闇の書に対抗するための本らしい。

行き過ぎた機能の拡張によるバグが闇の書だ。

そんなものがあるのだろうか。

そんなことがあっていいのだろうか。

クロノくんやリンディさんは長い間、闇の書を追いかけ続けたが解決法を見いだしなかつた。

ロツテリアとジルさんが苦難の末に導き出した答えは所持者ごと永久封印だ。

有り得ない。

有り得るはずがない。

有り得ていいはずがない。

有り得たとしたら、俺の行いは必要なかったことになる。

何度もやり直した結果が否定されることになる。

俺が無意味になる。

——だから、認められるわけないじゃないか。

怒りがふつつつと湧き上がる。

わけのわからない本ごときが俺を否定しようというのだから。

破壊してしまいたい衝動に身を任せようかというときに、八神はやては被害者であり、捜索の協力者であると告げられた。

冷や水をかけられた気分だ。

怒りが、心が、急速に冷え込んでいく。

そうかそうか、つまり君はそういう奴だったんだな。

手足の無くなった生活というのは初めてだ。

まあ、生活といえるほどの自由が保障されているわけないのだが。

実験し易いようにと切断されたただだから仕方ないことだ。

サンプルとしても使うとか言っていたかもしれないが。

俺が置かれている実験室は高濃度AMFが展開されており、奇妙なヘッドギアを被った白衣を着た人間が何人も入ってくるのが見えた。

実験室は部屋自体がAMF発生装置で壁は巨大なスピーカーのようなタスクジャマーとなっており、魔法と思考の障害が非常に鬱陶しい。

最初に研究員を殺しまくったことでビビったのか、ガチガチなメタ対策である。

ヘッドギアはタスクジャマーの影響を受けない様に、とのことだ。

実験自体は胸に突き刺された管から様々な種類の魔力を流されるだけだが、非常に詰まらない。

そろそろ肉体が劣化してくるので脳髓とリンカーコアだけにするとかしないとか。

魔導生物的な位置づけなので鮮度が弱点ということか、意味わからん。

単に魔力を送らないようにしているだけだ。

四肢切断は仕方なかったが、脳髓保管は勘弁である。

アキラ君でもR戦闘機乗りでもないから断らせてもらおう。

ちようどリンカーコアの使い方も思い出せてきたところだ。

現状でも体内でなら単純な魔法ともいえない魔力を使った自爆が使える自信がある。そのうち匠つて名乗ろうかと。

一度目の自爆で胸骨を爆ぜさせ、内臓と血飛沫を撒き散らす。

空気中に散布された魔力を利用し、血で出来た手足を形成する。

血液に含まれる魔力を操っているだけだが、無いよりはマシだろう。

A M F によって結合が解除されるまえにモブ研究員を八つ裂きにし、魔力を吸い取って室内に撒き散らす。

モブの血飛沫の御蔭で A M F を幾らか緩和できた気がするので、再び体内から魔力を放出する。

気分はサイコガンダムの拡散粒子砲である。

欠点として魔力が体内から突き破って出てくるので、血飛沫と内臓で汚れることか。

壁を、天上を、床を、部屋を破壊する。

魔法と思考の障害が解除されたことを感じ取り、演算を開始する。

逃げ出したやつも、腰を抜かしたやつも、目を輝かせているやつも平等に殺してやるよ。

どう考えてもルビコン川を渡りきった技術部のクズどもを道連れにするだなんて、俺はホントに世の為に生きている気がして泣けてくるよ。

俺を基点として次元震を発動させる。

規模は知らん。

全部巻き込んでおきたいところだ。

見知った魔力が突入して来るのを感じたが、一言も交わさずに転移で別の世界へと飛ばしておく。

遠いが地球に近く、次元震の影響も受けない安全な場所だ。

何故こんなことをするかだなんて、わかりきっているだろう。

そうするのが一番だったただけだ。

自殺など誰が好むものかよ。

嗚呼、忌々しい。

『101周目』

スカさんとの目覚めの邂逅をあつさり流してデータベースを漁って、百代 光陰（ハクタイ コウイン）の軌跡を辿る。

66年から表立った活動を始めているようで、それ以前については明記されておらず

罪状だけが連なっている状態だ。

俺が目覚める前から動きまわるこいつは……。

手足の不自由さをマイクロマシンで補いつつ、動作確認を念入りに行っていく。

今回はリンカーコアが完全に稼働しているようで、理想的な動きが再現できている。

未熟な戦闘機人ならばデコピンで相手ができる程度だ。

別に未熟じゃなくともデコピンなら一撃で倒せるのだけけど。

骨格を機械で構成している戦闘機人では衝撃を内部に伝えることがきでる俺とは相性が悪すぎる。

魔力強化したらフレームをぐちゃぐちゃに出来る身としてはもう少し強度を上げられないのかと心配になる。

身体は好調だし、動き回っても問題無さそうだ。

この穴蔵で戦闘機人の相手をするだけなのも飽きてきた、そろそろ外に出てもいい頃合いだろう。

手元にデバイスが無いのが残念でならない。

近くの管理世界を探し、無ければその近くの無人世界、さらに観測指定世界、果ては

管理外世界と転移して搜索を繰り返す。

目的は“俺”を探すことだ。

あれを見つけない限り、俺にはどうすることも出来ない。

見つけたとしてもどうしたらいいかわからんが、捕まえてから考えることにしよう。

データベースを漁った際にわかったこととしては、どうやら研究施設をメインに襲撃しているようだ。

昼夜のどちらでも現れ、合法・違法を問わずに襲撃し、管理局員と必ず一戦してから逃走するため罪状が増え続けるという。

糞野郎すぎて殺したくなる。

何故かロゼがついて来ることとなった。

俺が逃げないようにとのお目付け役だろうかと思つたがスカさんがそんなこと考えているとは思えない。

逃げたとしても行くところなど無い。

とりあえず今後はどこを襲撃するかとロゼと考察するが一切わからない。

完全にランダムとしか思えないのだ。

今回もダメだったと結論を下し、チンクやセインと模擬戦をするためにスカさんの拠点に戻る。

そして、なのはちゃんが撃墜された時期が迫っていたことに気付いた。

失念していたが、正確な日にちはわからないのだ。

もっと真面目に調べておけばよかった。

不確定なので、事件が起こる前に捕捉するつもりだったが仕方ない。

なのはちゃんの行く先々を張り込んで捕まえることにしよう。

ストーリー……じゃなくて後をこつそり追い続けること三週間。

その間は暇だったのでずっとジャミングやステルスの術式を改良しまくってた。

索敵から完全に消失する魔力弾を開発してみた。

結構なりソースを喰うので戦闘中を想定すると同時使用できるのは4発前後が限界だが、十分強いのではないだろうか。

暗殺的な意味で。

ルービックキューブで遊んでいると、なのはちゃんが任務を終えた様子が見えた。

どうやらこの無人世界から帰還するらしい。

俺はいなくなるまで見ているからロゼは先に転移しておくように伝える。

今日も何も無かったな、と安心してると別の局員が騒ぎ出した。

距離が遠いので音が拾えず、近づこうかと悩んでいるとなのはちゃんを含めた3人で

飛んで行った。

帰還しなくてよいのだろうかと思いつつ、木々を縫う様に跳びながら後を追う。

時間にして5分も経たずに目的地へとたどり着いたようで、各々が空から降りてくる。

歩き回ったり、サーチャーを飛ばしたりと周辺を確認しているようだ。

まさか俺の完璧なストーカー行為がバレたのだろうか。

捕捉された場合に備えて転移の魔法を組んでいると、なのはちゃんたちが念入りに地面を確認している。

何かあるのだろうか。

気になったのもう少し近づいてみようと、周りに追加の人員が調べるために索敵を広げる。

接近する人影を捕捉した。

目視したが管理局員ではない。

そいつは、心待ちにした“俺”だった。

転移で正面に躍り出る。

貴様の化けの皮を剥いで俺は帰るのだと魔法を組む。

全力の一撃で葬りたいところだが、証拠を逃しては意味がなくなってしまう。

ただ、バインドを使うのは嫌だ。

非殺傷を組み込む。

闇に、染まれ

——デアボリック・エミッション

俺を中心に、球形の広域魔力攻撃が展開された。

回避されないようにと使ったが魔力消費が馬鹿にならない。

そろそろ良いだろうと解除する。

一撃で倒すのが理想だったが、やはり上手くないかなかったようだ。

相手はシールドを全面に張ることで凌いでいた。

まあ、防御に回すため魔力はかなり削れるので良しとしよう。

シールドを解いて魔法陣を展開した相手の死角から誘導弾をぶち込んだ。

やはりステルス性を上げまくった魔力弾は使いやすい。

ちなみに魔力消費はお察しである。

1発を当てて仰け反ったところに2、3と当てる。

そしてシールドを張った瞬間に背後で漂わせていた弾が、闇の書を握っていた手に襲い掛かった。

肘のあたりで切断された腕が闇の書とともに吹っ飛んだ。

確実に非殺傷だったのに何故だし、と疑問を抱きながら腕と闇の書を回収した。封印を解除しようという努力は垣間見れるが未だに程遠いことが見てわかる。

腕はしようがないとして、とりあえずバインドで捕獲しようかと組んでいると管理局員に襲撃された。

狙うべきは俺じゃなくてあつちの……逃げられていた。

握っていた腕は黒い靄となって消えていった。

これに見覚えが……。

そう考えているとバインドが飛んできて縛られた。

続々と局員が集まってくる。

ここにいる全員が全員、俺を捕えようとしている。

違う。

俺じゃない。

魔法を使うか、使わないか。

ロゼさんが現れて、俺を転移させた。

スカさんのアジトで休養をとる。

何もしたくない気分だ。

あの黒い靄は見覚えがあった。

ユウくんやクロノくん、変態仮面となったロツテリアがゲシユペンストに憑りつかれているときに発している魔力に酷似しているのだ。

つまるところ、あれはゲシユペンストだろう。

何かに憑りついているのか、自身で変身しているのか、そこまではわからない。

犯人がいなくなってしまった。

“俺”を捕まえれば解決ともいなくなってしまった。

ゲシユペンストを捕まえても証明できる自信がない。

魔力の波長などを調べれば、とも考えたがああ、の裁判を思い出すと無意味だろう。

変態仮面を暴いてロツテリアが出てくるように、“俺”を暴いて潔い犯人でも出て来てくれないだろうか。

ゲシユペンストとか犯人にするのは無理だろうし。

スカさんが闇の書に興味を持ったらしい。

ちよつと使ってみようぜと言いだした。

危ないから止めた方がいいと告げるが、問題ないの一点張り。

八神はやてを思い出す。

そして、これを放棄したのだと思い至る。

そもそも関係ないとまで言っていた。

ならば貰っても構わないだろう。

封印を解除する。

デバイスを引き抜き、久方ぶりに相棒を撫でる。

ジャミングで闇の書がどこか行かない様に固定して、スカさんが機器に繋ぐのを見守る。

飲み込もうとしてきたのでOWでぐちゃぐちゃにしてシーリングをかけまくる。

一度中身を真っ白にしてみようと提案されたので了承する。

ぐちゃぐちゃになっているが幾らか残っていると言われたが、危険があるかもしれないので真っ白にしておこうと強く助言。

これで繋がりが切れれば、はやてちゃんも歩けるようになるね。

蒐集したリンカーコアだけ残すこととなった。

内部は保有魔力を除いて基礎的な機能以外は真っ白となった。

危険なロストロギアを直す俺とスカさんが次元犯罪者とか管理局は何もわかっていない。

とりあえず調べていくと、防衛を司るプログラムが不具合を起こしているようだった。

スカさんでも直せそうにないらしい。

……無傷の管制プログラムと繋げて何とかしようということとなった。

それから何度も防御プログラムを呼び出してみるがうんともすんとも言わなかった。

空になっている可能性があるらしい。

防衛を司るのに空って……。

なのはちゃんが入院したらしい。

今回は襲撃ではなく、過労のようだ。

働きすぎていたのだろう。

心配なので前回にならって見舞いに行く。

そして、再びフェイトちゃんに斬りかかられた。

半泣きになりながら転移して逃亡。

襲撃してきた犯人と思われていた、本気で泣きそう。

ガジェットのテストに呼ばれたのでついていった。

戦闘機人と管理局員のドンパチに巻き込まれた。

竜也くんは殺意を向けられながら斬りかかられた。

泣いた。

闇の書に無理やりリンカーコアを繋いで主となった。

なお使い道はない模様。

単に八神はやてが手に入れる可能性を零にしたかっただけ。

そして、俺は無人世界へと流れついた。

心が折れた。

もう俺には何も無い。

世捨て人のような生活がはじまった。

人と関わらない。

なんて素敵。

この世界にきてすぐに見つけた山猫とは毎日心を通わせるのが日課である。

あとは毎日小さな魔導生物のリンカーコアを餌の代わりに貰って闇の書に注ぐ生活。

起動したけどしよぼすぎて微妙だった。

そんな寂しさを紛らわせるため、山猫を撫でる。

四六時中、膝の上や肩、頭の上とどこかにいるくらいには懐かれた。

リニスとかユーノくん、アルフ、ロツテリアは使い魔だったことを思い出す。

なんというか、否定しない話し相手が欲しくなった。

全てを肯定というわけではないが、主を思いやってくれるという癒し系だし羨ましい。

このままだと孤独死しそうだ。

でも人がいる場所だと管理局に見つけられて知り合いに矛を向けられたら死にたくなる。

もう使い魔を造るしかないね！

闇の書から守護者の項目を探しだし、山猫を組み込んで生成。

現れたのは一人の少女。

シユテル・ザ・デストラクターという名前らしい。

なのはちゃんに似ていた。

自分の未練がましさと女々しさに死にたくなかった。

悲しみは時が癒してくれるような気がする。

必要な物資を買いに行くくらいしか街に行つてない。

金は街で買い集めたジャンクでテキトーにデバイスを組んで売つたりすることで稼いだ。

管理局に関わらないって素晴らしい。

そんな感じでシユテルと過ごしているとロゼが現れた。

数年ぶりにあつた彼女はメロンとなつていた、凄い。

シユテルがいじけた。

戦力差が激しいからね、しょうがない。

管理局と戦争をするらしい。

戦場に出てきそうな管理局の人員、それも俺に縁のありそうな人物をピックアップした資料を渡された。

味方につけということでもないらしく、好きにしたらいいと言ひ残して帰つて行つた。

そういうのが一番困る。

シユテルには悪いが、使い魔の契約を切つた。

見知らぬ戦闘機人を捕縛する。

たぶん、後期ロットなのだろう。

戦力不足のようでもどこもかしこも酷い戦場だった。

目に付いた場所から薙ぎ払い、そのまま管理局員に混ざってゆりかごへ突入。

闇の書の注目度は一味違うぜ。

戦闘機人、ガジェット、管理局員、全てからターゲットされる。

泣きたい。

最深部まで目の前に現れる一切合財を薙ぎ払って進む。

成長して大きくなったなのはちやんが戦闘していた。

綺麗になったねと感動しているが忙しいらしい。

娘とバトっているとか。

相手は誰だよ。

怒りでついOWを起動させてしまった。

戦闘に手出ししないようにと頼まれて待機。

ゆりかごを破壊しようかという魔法を放って決着した。

娘にそんなにビームを撃ちこんで大丈夫なのだろうかと心配になりつつ話を聞く。

OWを使っているが、非殺傷だから大丈夫らしい。
え、OWって普及してんの？

驚きつつも娘について聞く、積もる話は後にして。

犯人はスカリエツティ。

スカさんと感動の対面となった。

グラインドブレードで内部を破壊してスカさんに襲い掛かるといふサプライズ付きだ。

復活の貸しはガジェットテストと竜也くん斬りかかれたという悲惨なイベントでチャラにしたから問題ないはず。

そもそも頼んでないし。

ウーノ、ドゥーエ、トーレとジャンクにする。

訓練したときとあまり変わっていない気がする。

いくらかは変わったが、やはり戦闘機人としてのスペックでゴリ押ししている感が否めない。

最後にスカさんだ。

手袋のようなデバイスが操る紐みたいなモノを容易くちぎって完勝。

俺のOWが型落ちしていようと、スカさんに負けるわけがない。

内容によってはグライインドブレードでミキサーしてしまう可能性があるが、とりあえずなのはちゃんの娘について話を聞く。

スカさんが生み出した聖王のクローンらしい。

…首が離れ無くて良かったね。

スカさんを捕縛、他の戦闘機人も捕まったようだ。

色々となのはちゃんと話した。

実は俺がすでに捕捉されていて周囲の世界から徐々に封鎖されているという話まで聞いた。

いつの間にかひどい状況に陥っていたようだ。

大方話たところに軽傷を負ったユウくんとりニスが現れた。

戦闘機人と動力を担当していたらしい。

ユウくんが投降を呼びかけてきた。

裁判を受ける権利があるとか。

……裁判とか言われると悪い印象しかない。
悩んでいると説得された。

また一緒に暮らしたいとかそんな程度のことだ。

そんな程度のことだが、俺には響いた。

弟の言葉が心に染み込むようだった。

投降しよう。

公正な裁判を受けられるよね、と確認しておく。

頷いてくれた。

弟だと思っていたのは俺だけだったのかもしれない。

思い出せばユウくんはいつも俺の敵に回っていた。

裏切られていた。

先回りして地面を探る。

サーチャーで検査するがどうやら内部に建造物があるようだ。

どこかから入れないだろうかと念入りに探してみるが見つからない。

罅が明かないので魔法で吹っ飛ばした。

音が生じるが、その点は諦めた。

さっさと転移して逃げれば問題ないだろう。

中を調べるが研究施設のようなだ。

すでに放棄されているのか無人ではあるが、電気は生きていた。

行われていた実験はクローンの製造でベースは……。

資料を漁っていると俺に化けたゲシユペンストが襲撃してきた。

咄嗟に地上へと強制的に転移する。

内部で肉弾戦のほうが良いか良かったかもしれないが、憑りつかれる可能性を考えるとやはり

地上の開けた場所ですら距離を取るのが一番だった。

魔力弾をばら撒いて距離をとる。

デアボリック・エミツションで消滅を狙おうと魔法陣を展開。

高速で飛来する魔導師を捕捉した。

なのはちゃんだった。

舌打ちが出た。

疲労などを考慮すると間違いなく戦闘すべきではない。

笑顔で助けにきたと言ってくれたが、現状では人質になるかもしれないと考えると厄介この上ない。

疲労を蓄積するような魔導師に手伝ってもらうことはないと突っぱねるが聞き入れてもらえず。

ゲシユペンストに牽制で魔力弾を放ちながらなのはちゃんをバインドで縛って強制転移を開始する。

なのはちゃんに、きちんと休息がとれるようになったら手伝って欲しいと伝えて転移させた。

ここでゲシユペンストを滅ぼしておかなければならない。

俺の罪状が積み重なるからだ。

ホントに迷惑でしかない。

あと闇の書を持ち歩くのもやめてほしい。

八神に渡つたらどうするのだ。

腕を撥ねて闇の書を奪った。

そして、バインドで捉え、シーリングをかけた。

捕獲成功だろうと安心していると、「俺」の姿をしていたゲシユペンストが変形を始めた。

そして化け物となり、ボエー！と唸り声をあげた。

……なんだ、こいつ。

大きさは5mほどだがフォルムが異様で、情報が何もない状態で戦いたいと思えない。

飛んできたが驚いて動きを止めた管理局員たちを強制的に転移させる。

足手まといつてレベルじゃない。

むしろ俺もバツクレよう。

予想以上だった。

闇の書を戦利品として撤退を決めた。

前回と同様、闇の書我真つ白にした。

そのまま俺を主として登録しておいた。

ここまですたらシユテルを探しに無人世界に行くしかない。

シユテルと心を通わせつつ、研究施設を襲撃する。

ゲシユペンストが狙っているのだから、どこかで出会えると期待して。

なかなか当たりを引けないまま、襲撃を繰り返す。

エリオという少年を拾ってしまった。

スカさんの拠点に放置して戦闘機人に相手させるのもなあ、と悩む。

絶対に歪んだ人間性を発揮しそうだ。

俺が連れ歩くのも問題だろう。

ちよつと幼すぎる。

刷り込み、というわけでもないが何故だか俺にべつたりになってしまった。

ちよどシユテルとも契約したので幼子を2人も抱えることに。

なんか頭痛がする。

調整の際に起こされたノーヴエやデイエチ、暇を持て余している他の戦闘機人の相手
をしながら、エリオやシユテルを可愛がる。

無垢な2人を振り払えるほどの畜生にはなれなかった。

戦闘機人たちを相手にしつつ、興味を持ったエリオに手ほどき。

時間ができればシユテルのプログラムを弄るといふ日々だ。

子育てに悩んでいると、通りがかったスカさんが俺に声をかけた。

臨海第8空港に“俺”が現れるらしい。

絶対だと言いつけられた。

なぜならレリク狙いだから、だとか。

ううむ。

空港内に火の手が上がる。

壁や天井が大きな音を立てて崩れていく。

その様子を横目に黙々と突き進む。

落下してきた障害物は逸らしたり、浮かせたりと被害が及ばないようにする。

流石に人が助けを求めていたり、危険な目に遭っていたりすれば助ける。

クアットロの馬鹿が何かを企んでいたが、ゲシユペンストに襲撃されて暴発したらしい。

死にはしなかったらしいので転移させたが、当分の間は調整槽行きだろう。

深い傷を負ったゲシユペンストの後を、零れている魔力を辿って追いかける。

徐々に近づいてきた。

被害が少なく、火がついていない場所に出た。

罅の入った壁を見て、長居はできそうにないと思った。

ピアノの音が聞こえる。

災害にミスマツチだと少し笑った。

魔力を辿って着いたのは、コンサートホールのような場所だった。

広いホールだった。

ガラス張りの天蓋からは空が透けて見えた。

中央のステージに置かれたグラランドピアノからひとりでに曲が奏でられている。

横たわる化け物がポエーと鳴いていた。

レリックの爆発に巻き込まれたのだろうか、痛々しく身体が欠けていた。

傷口から魔力が流れだし、淡い紫の光が零れている。

チャージを終えたデイバインバスターを撃ちこむ。

1度ならず2度、3度。

撃つたびに苛立ちが込み上げ、心が急かす。

デイバインバスターの連射によって砕けたゲシユペンストに近寄る。

生気にもポエーと嘯みついてきたので逆に掴んで持ち上げる。

地面に何度も叩きつける。

構成している魔力が砕けて周囲を紫色の光で染める。
壁に向けて全力で放り投げた。

ホールが音を立てて崩れ始めた。

ピアノの旋律が聞こえる。

デイベインバスターを放った。

』

「投降してください」

放ったデイベインバスターを掻い潜ってユウくんが現れた。

いつも輝いていた金色の髪はくすんでいて、濁っているようにも見えた。

愛らしい顔立ちも、青ざめて深い隈が刻まれた今では幽鬼のようだ。

心配だという思いを抱く反面、投降という言葉に苛立ちを覚えた。

隣に立つリニスは小さな少年を抱え、ジツとこちらを見ているだけだった。

姿は昔と全く変わっていないかった。

先ほどまでいた化け物の姿は無くなっていた。

少年の胸元にはゲシユペンストの残骸と思われる黒い球体が漂っていた。

「貴方には裁判を受ける権利があります。だから投降してよ、兄さん……」
ユウくんの言葉が脳を焼くようだった。

色々な思いが鬩ぎ合って、どうすればいいのかわからなくなった。

そして前回のことを思い出してスツと冷えた。

全てが凍ったようだった。

「断る。俺が投降することは二度とない。やっと気付いて、決めた」

デバイスを構え、無数の魔法陣をホール内部にばら撒いた。

宙に解き放たれた9枚のメダルが鳥のように舞う。

「……ユウ」

「わかっている、リニス。絶対に掴んでみせるから、今度こそ。もう間違えない」

リニスの言葉に答えるように、自分に言い聞かせるように呟いた。

カートリッジのリロードとともに薬莢が飛び出し、槍形のデバイスが音を立てて変形していく。

最後に展開したブレードが熱で赤く輝き、そして回転するその姿はグラインドブレードに酷似していた。

内部に蔓延る魔法陣から魔力弾が吐き出された。荒れ狂う暴力によってホールが崩壊していく。

壁が崩れ、床が抉れた。

椅子は軒並み吹き飛んだ。

落下する天蓋が自動演奏のピアノを押し潰した。

悲鳴のような騒音が響き渡った。

不可視の弾丸がユウを貫いた。

原作：魔法少女リリカルなのは リリカルーブ_knock off_1-24

1-1回

最も古い記憶は、液体の中だった。

白衣を着た男たちが、俺がここで生まれたことを知らせた。

オリジナルのDNAマップを元に、人工の子宮によって生み出された粗製品、その一つである。

嘲るように男たちが黒い球体を差し出した。

本物へと至る、最初の一步だという。

空間ディスプレイが、一人の少年の姿を鮮明に写し出していた。

これが本物だというならば、俺はなんだ。

知恵は積み重なった”できそこない”から集められた端くれとも呼べる紛い物。

知識は何処かで利用されたクローン用の模造品。

体は工業的に作られたパーツでしかない。

黒い球体に触れた瞬間、猛烈な激痛が胸を奔る。

胸の奥が焼ける様で、誰か……。

1—2回

白衣を着た男たちが、黒い球体を差し出してきた。

疑問を抱く。

さつきやつたような……。

そう呟くと男たちが眦を吊り上げた。

ノイズ入り、廃棄か、などの声が聞こえる。

背筋が冷えた。

処理された粗製品の記憶も、臍気ながらも所持している。

捨てられることは何よりも恐ろしい。

急いで黒い球体を手に取った。

猛烈な激痛が胸を奔る。

胸の奥が焼ける様で、誰か……。

1—3回

焼き増しだった。

液体から引き揚げられ、白衣を着た男たちに軽い説明を受け、黒い球体を見せつけられる。

何かがおかしい。

だが、何がおかしいのかわからない。

説明を聞かずに周囲を確認する。

うす暗い室内に、数多くの配線が壁に蔓延っている。

先ほどまで俺が入っていた、液体の満たされていたポッドが床へと吸い込まれていった。

そして、新しいポッドが姿を現した。

中には誰かがいて、眠るように目を瞑っていた。

次の“俺”だと男たちが嗤う。

そうだ。

代わりはいくらでもいる。

いくらでも。

黒い球体を手を取った。

質量は無く、霞のようだった。

それはぐにやりと形が変化し、手から消え去った。

すぐに猛烈な激痛が胸を奔った。

胸の奥が焼ける様で、誰か……。

4—1回

黒い球体を手に取った。

質量は無く、霞のようだった。

それはぐにやりと形が変化し、手から消え去った。

すぐに猛烈な激痛が胸を奔った。

手に取らなければと考えたが、そうするとどうなる。

自分には何もないじゃないか。

胸の奥が焼ける様で、誰か……。

4—2回

黒い球体が差し出された。

取りたくない。

あの痛みは我慢なんて出来るモノじゃない。

なぜ何度もこんな目に合わなければならぬ。

男たちの反応から、治してくれているわけではないだろう。

持っている半端な知識でも、同じ体験をした者はいないようだった。

一体何が起こっているのか。

受け取らない俺に焦れた神経質そうな男が無理やり胸元に押し込んできた。

胸の奥が焼ける様で、誰か……。

助けを求めようにも、誰の顔も浮かばなかった。

4—3回

最も古い記憶は、液体の中だった。

白衣を着た男たちが、俺がここで生まれたことを知らせた。

オリジナルのDNAマップを元に、人工の子宮によって生み出された粗製品、その一

つであると。

嘲るように男たちが黒い球体を差し出した。

本物へと至る、最初の一步だという。

知識は積み重なった“できそこない”から集められた端くれとも呼べる紛い物。体は工業的に作られたパーツでしかない。

止める様にと脳内の片隅で何かが囁いた気がした。

かつて死んだ“できそこない”の残留思念だろうか。

黒い球体に触れた瞬間、猛烈な激痛が胸を奔る。

胸の奥が焼ける様で、誰か……。

9—1回

白衣を着た男たちが、黒い球体を差し出してきた。

疑問を抱く。

何度もやったような記憶がある。

痛だ、そう凄まじい痛みを思い出した。

嫌だと喚く。

そう呟くと男たちが眈を吊り上げた。

ノイズ入り、廃棄か、などの声が聞こえる。

背筋が冷えた。

処理された粗製品の記憶も、臍気ながらも所持している。

捨てられることは何よりも恐ろしい。

急いで黒い球体を手に取った。

猛烈な激痛が胸を奔る。

胸の奥が焼ける様で、誰か……誰か……。

9 | 2回

焼き増しだった。

液体から引き揚げられ、白衣を着た男たちに軽い説明を受け、黒い球体を見せつけられる。

全部見たことがある。

入れ替わったポッドにいるのは“俺”だ。

いや、俺の代わりになるであろう幼子だ。

眠るように目を瞑っていた。

次の“俺”だと男たちが嗤う。

代わりはいくらでもいる。

ほんとにそうだろうか。

代わりがいるのなら、なぜ俺は何度も痛みを味わわなければならない。

押しつけられた黒い球体が胸元でぐにやりと形が変化し、消え去った。

すぐに猛烈な激痛が胸を奔った。

胸の奥が焼ける様で、誰か……。

助けてよ……。

9—3回

黒い球体を拒む。

だがそれも強い拒絶ではない。

痛みと役割の天秤が拮抗している。

押し付けられた球体が、すぐにでも痛みを与えてくる。

胸の奥が焼ける。

どうして、声にならない言葉が口の中で消えていった。

11—3回

黒い球体を見るだけで手が震える。

怖い。

これを持つことに何の意味がある。

本物とは一体なんだ。

誰にとつての本物なんだ。

近づけられる黒い球体を直視するのが怖い。

震えによって、上下の歯がかちかちと音を鳴らす。

嫌だ。

嫌だ。

嫌だ。

漏れた言葉が舌を噛ませ、端を切らせた。

血の味が滲む。

生まれて初めての味覚情報が、鉄の味。

恐怖によって裝飾されたそれは酷く臭く、不味い。

学んだのは、これが死の味だということ。

そして、自分を助けてくれる人なんていないということだ。

15—1回

嫌だ。

吐いたのは強い拒絶だった。

黒い球体を近づけようとしてくる手を払う。

笑いを浮かべていた男たちの表情が崩れた。

廃棄だな、その言葉が紡がれた瞬間、首筋に小さくも鋭い痛みを感じた。

意識が朦朧とし、薄まっていく。

あの黒い球体が押し込まれない、それだけで幸せだった。

15—2回

ここは地獄だ。

捨てられた先は廃棄品が詰まった広い空間だった。

生死問わず、腐っているモノすらあった。

廃棄品が互いを食らい合うことで、己を維持している。

何が幸せだ。

黒い球体の痛みは一瞬だった。

ここは違う。

群がられ、素手で引きちぎられる。

内臓は捨てられ、それでも意識があり、食われる恐怖を味わうだけだ。

だが、幸運なことに、ここに来たばかりの俺は身体面では他と比べては遥かにすぐれている。

不良品として廃棄されたこいつらと違って知識もまともだ。

守るべき倫理など持っていないかった。

15 | 3回

地獄で目覚める。

結局、死ねば少しかけ戻ることを知った。

あとは拳を振るえば痛め、折れることを学んだ。

数が集まれば体力を削られ、やがて食われる。

人肉など旨いものではない。

だが、腹は膨れる。

血が喉の渴きを癒す力はない。

溝に溜まった汚水が潤いを与えてくれる。

殺し、喰った粗製品に殺される夢を見る。

弱つていようと、歪んでいようと、同じ顔なのだ。

自分の顔はどうだろうか。

きつと醜悪な顔つきなのだろう。

17—3回

腐った肉を払って骨だけにし、鈍器のように振るうことを覚えた。

素手では傷つくだけだ。

リーチも短い。

何故ここにいるのか、わからなくなる。

あの黒い球体がどうしようも怖くて、手を払って。

結局地獄に居る。

あんな球体の何処が怖いというのか。

ただ、目の前に迫ると何かが怖くて怖くて堪らなくなる。

どうしてかわからない。

曖昧だが、なんとなく自分は生き返ることができると。

生き返るといふよりは、繰り返すというのが正しいだろうか。

死んだ時よりも少しだけ時間が巻き戻り、そこで目覚める。

目覚めた時点で傷を負っているのなら、そのままだ。

回復しているという都合のよいことはない。

そして、何度か死んだら記憶は失われる。

そこまでの結果はそのままだ。

おそろしいのは、何度目まで覚えていられるかわからないことと、記憶を失う最初の時は死ぬか強い痛みでしか条件を思い出せないことだ。

何回死んでいるかわからない。

何回やり直しているかわからない。

これは妄想なのかもしれないと何度も考える。
その度に、意識の片隅で嘔かれ、意識するようになってしまう。

20—1回

殴り殺した廃棄品に手を伸ばし、止める。

激しい既視感に戸惑った。

なぜ食べようとしているのだろうか。

必要なのか。

いや、必要ないはずだ。

こんなもので腹を満たすなど正気ではない。

外付けされた知識が常識を告げる。

頭の片隅で、体力が無くなれば襲われて死ぬと嘔いている。

ひっそりと、積み上げられている腐肉の山へと隠れる。

何処か新しい試みのように感じられた。

腐って粘つき、柔らかくなつた肉の山で静かに眠る。

腐臭など、ここに放り込まれてからすぐに気にならなくなった。

体力が続く限り、そして体力が無くなってもこのままだ。

終わりはいつだろうか。

いつまで続く。

空腹がピークを超え、何も感じなくなってきた頃、破碎音が響き渡った。

廃棄施設となっていたこの部屋の壁も砕けたようで、光が射し込んでいる。

汚れた体が更に穢れるが、這って出口へ向かう。

ここからなんとか逃げ出すんだ。

必死に体を動かすが、遅々として進まない。

思い出したかのように節々が痛みを知らせるが、死ぬよりもマシだった。

死ぬことが怖い。

亀裂まであと少しまで迫り、光が阻まれ、影が刺した。

白衣を着た男の顔。

ぞつとした。

見つけた、連れ戻される。

だが、違った。

こちらを覗いていたのは白衣の男たちの顔だった。

肉塊が集まって、表面にデスマスクのように顔が張り付いているのだ。

壁の隙間から表情の変わらぬデスマスクがジツとこちらを覗きこんでいる。

白く濁った複数の視線。

そして、肉塊が表面を震わせ、壁の隙間から徐々に流れ込んでくる。

先ほどまでは肉団子のようなだったが通ることはできないと判断したのか、姿かたちが変わり、今ではヘド口のようになって染み込んでくる。

赤い液体と肉、白い骨で形作られた歪なヘド口。

あまりの奇怪な出来事に、思考が止まる。

止まった思考が再起動を果たしたが、すでに遅すぎた。

十分な運動能力を發揮できない肉体は、ただ肉塊の仲間となるだけ。

胸が焼けるように痛み、全身が溶かされていく。

そうだ、自分はやり直せる。

恐怖に溺れる思考の片隅で思い出したそれは、死にゆく今には何の意味も持たせることはなかった。

20 | 2回

腐った死体の山で目覚める。

出口が出現することに小さな希望を見出すが、あの肉塊を思い出すとすぐにでも芽生えた希望が失意に変わる。

あれをどうにかする？

無理だ。

隙間から逃げる？

巨体が無理やり入り込もうとして泥のように変化していたが、逃げられるような隙間などなかった。

どうしたらいい。

弱った肉体で、鈍った思考を働かせる。

答えは出ない。

動かないまま山に埋もれて、そして飲み込まれた。

24—2回

肉塊が迫り、既視感と焦燥感に煽られるがどうすることもできずに死んだ。

わかったことは、人肉の坩堝となった赤いスライムは、動いているモノから取り込むようだ。

また、廃棄品はスライムに構わず出口と行動することや、スライムの食事中に動けば食われること、あらかじめ部屋の隅については他の廃棄品に襲われることなど。

必死に鈍くなった思考を巡らせ、行動を選択する。

スライムが来たらそちらに向かって廃棄品は行動するので、それを陽動として静かに動く。

それだけだ。

結局できることなど限られている。

先に食われるか、後に食われるか。

視界の端でスライムが侵入してきたことを捉えた。

光に群がる廃棄品たちが次々と食われている。

それをしり目に這いずって、部屋の隅へと逃げる。

ここは広い部屋だ、隅に逃げられれば全てが掃除されるまでは生きていられるだろ

う。

そして、スライムは食べた分だけ大きく鈍くなっている。

少しでも生きられるなら。

あまりに遅い自分の移動速度。

気づけばスライムが迫って来ていた。

廃棄品の姿はない。

……役立たず。

思わず呟いていた。

白衣を着た男たちと同じ言葉を。

24—3回

腐って？ げた手から、ほとんど骨だけになっている指を何本か拝借する。

ついでに歯なども。

そして、廃棄品が多く群がっているうちに距離を稼ぐ。

横に転がるようにくるくると。

這っついては逃げられない。

動くモノすべてを取り込み、それでもなお空腹だともいうのか、こちらに気付いたスライムが触手を伸ばす。

それ目掛けて指や骨を放れば、そちらに反応して動きが鈍る。
繰り返す。

手持ちが無くなった。

あと少しだと言うのに。

渾身の力で歯を引き抜く。

弱った体にこれほどまでの力が残されていたのかと内心で驚きながら、歯を放る。

そちらに反応したが、小さすぎたのか、誘導が弱い。

口内に溜まった血や唾液を吐く。

顔を掠める様に迫っていた触手が、吐き出した液体に反応した。

その瞬間、目的地であった部屋の隅へとたどり着く。

ぼちやりと排泄物や血、腐った体液のプールに沈む。

廃液を溜められるように、ここだけ少し窪んでいるのだ。

動かずにじっとする。

揺らぐ液面に触手が反応していたが、やがて興味を失ったかのように戻っていった。

淵から少しだけ顔を上げ、様子を伺う。

熱心に肉塊だったスライムは、部屋の汚物を取り込む掃除を始めた。

あれは一体何……。

そのうち諦めてくれるだろうかと期待したが、叶わなかった。

そろそろと、その触手をこちらに伸ばし始めたのだ。

触手だけではない。

肉塊のように膨らんだスライムが這って迫っている。

増えすぎた質量によって、壁のようにも見えた。

逃げ道はどこにもない。

目を強く瞑って痛みになんとか抗おうとしていると、瞼越しに強い光を感じた。

遅れて軽い揺れと、すぐ近くで何かが崩壊する音。

開いた目に飛び込んでき光景は、天井と床には巨大な穴が出来ており、光が射し込んでいる。

そして、ちょうど真下にいた肉団子は消え去っており、なぜか黒い球体だけが取り残されていた。

周りの壁をべつとりとした肉片や骨が裝飾し、床を内臓のようなものやデスマスクで赤く染め上げていた。

何か上から通過して、この破壊を撒き散らしたとしか思えない。

状況のあまりの変化に動揺したため、黒い球体に意識を向けるのを忘れていた。

凄まじい速さで黒い球体が迫り、溶けるように胸の中へ入ってきた。

ひどく熱い。

焼けるようだ。

だが、なんとか耐えられる。

黒い球体が力に満たされている、そんな印象を持った。

黒い靄に体を包まれた。

力を込めて抑え込もうとするが、自由が効かない。

全身に痛みを感じる。

必死に自制するが、意識が途切れ途切れになっていく。

胸元から、燻るような憎しみが流れ込む。

焼き尽くされそうなほど、強い憎悪。

纏わりついていていた黒い靄が消え去った。

どうしてか、苛立ちと憎悪が燻っている。

本がすぐ傍に浮いていた。

安物で壊れた傘が突き刺さり、玩具のメダルが貼り付き、幾重にも巻き付いた鎖に

よって嚴重に包装されている。

これは何だろうか。

触れようとしたが、身体が失われていた。

近づいてきた“臭い”を嗅ぎ取った。

燃え盛るようなどす黒い感情が湧きあがる。

思考の片隅で絶えず痛みという警鐘が鳴り響く。

それでも胸を焼く憎悪は止まらない。

近い。

近い。

近い。

憎いアイツが、近くにいます。

自らの喉では絶対に発声できない雄叫びとともに、天井を飛び上がる。

崩れた瓦礫が積み重なっても、照明は消えることなく通路を白く照らしている。

“臭い”がすぐ近くだ。

“臭い”の先には自分を更に成長させたであろう姿があった。

白衣の男たちが見せてきた、映像に映し出されていたオリジナルの姿。

こいつがいたから俺たちはこんな目にあっている。

使い捨てられていった廃棄品たちのゴーストが脳内で囁いた。

こいつがいたから主は涙を流し続けている。

使い捨てられた守護騎士たちの最期をゲシユペンストが再生し続ける。

こいつがいたから、こんなはずじゃないことばかりなんだ。

憎悪が燃え盛る。

真つ黒にすべてを燃やし尽くそうとして。

脚部に力を込める。

大腿が膨れ上がり、黒い靄が纏わりつく。

痛みなど関係ない。

力が溢れてくる。

溜め込んだ力を解放するように、床を蹴る。

背後で爆発が起きたかのような推進力で突き進む。

全てを置き去りにした速度。

その結果が、上半身と下半身の別れだった。

下半身を失い、宙で反転する。

消えゆく意識で捉えた最後の光景は、オリジナルが臍物を振り払っている姿だった。
あれは誰の……俺のか……。
胸の奥が焼ける様に痛かった。

原作：艦隊これくしょん、ゾイド、他 提督（本物）

1

高校生活を満喫していたら妖精さんと思いを通わせることができる才能が見つかったため、軍学校に進学することとなった。

人類が衰退しているわけでも、魔法の力が増強されるわけでも、サモンナイトで電波ゆんゆんな話でもなく、普通の一般常識として、日本中で行われているらしい。

10から20年くらい前に深海棲艦と呼ばれるUMA的なサムシングが世界中で現れ、海を占領して船を沈め、飛行機を落とし、台風なのに波乗りしに行つたサーファーを飲み込むという事件を経て世界の海が占拠された。

そこからなんやかんやあつて艦娘（かんむす）というかつての戦艦のパワーを持った女性が戦っている。

深海棲艦やかんむす、妖精さんを真剣に考えると卵が先か鶏が先かみたいな話になつたりするので割愛しよう。

で、このかんむすに力を貸してもらふことや、強化の装備、製造、改修もろもろに妖

精さんが必須になってくるため妖精さんと交信できる特別な才能を持った人間が集められて深海棲艦と領海争いをするのだ。

不備が出ないくらい妖精さんと意思疎通が取れる俺だが、軍学校の成績はよくなかった。

何度脱走したりされたりして筋トレしたか不明なくらいツラかった。

週に1、2回は誰かしらが「楽しかったぜえ、おまえらとの友情ごっこ!!」と脱走を試みて、教官に連れ戻されること多数。

連帯責任でしょぼい筋トレが徐々にランクアップしていき、超やばいレンジャー訓練や毎日の10キロマラソン、5キロ水泳、完全武装行進、野営演習、空挺、飯炊き、などなど。

深海棲艦が完全に排除しきれていない極寒の海で遠泳したときなどさすがに殺意を感じたし、青森の大地でナイフ一本1か月生活など正気ではない。

実はかんむすの運用方法なども学ぶ機会があったが、ちよつとそれらの知識は怪しいものがある。

かんむす自体の理解が及んでいないことも手伝って、演習などは陸海空で手が空いたところにぶちこまれるという適当具合だ。

というか、女性の心を学んだりしたほうがいいんじゃないかと思っただくらいだ。

軍学校で黙々と女性の心を学ぶためにBLゲーに励んだり……この想像はやめよう、危険だ。

そんな地獄の日々を経て、俺は提督になったわけだ。

目をつぶれば同期と切磋琢磨した日々が瞼の裏に映し出される。

Tの文字が描かれた覆面を被った奴やムキムキマツチョ、仮面、50歳超えのジジイ、10歳くらいのシヨタ、女装野郎、かんむす、犬猫鼠といった畜生ども、頭が完全にT字の物体……。

同期を思い出すとSAN値が減っていく気がするので美しい思い出として封印して今後は日の目を見せないようにしなければならぬ。

で、提督というのは上で記したかんむすたちを運用して深海棲艦と日夜戦う軍人つばいサムシングである。

だから新米の少佐でも提督と呼ばれるのだ、ややこしいですな。

ちなみに俺はこの特殊ルールのため新米の少佐で、少尉ではない。階級はかんむすの運用によって上がるとかなんとか。

給料とかどうなるのだろうかとか真面目に考えたり。

実際の測りとして用いられるのは任務や遠征、進撃などの項目で無駄に細かく割り振られている戦果が目安になっているとか。

なので戦果が高いとか提督歴が長いとかで上下を判断している。

そのうちもっと細かい階級ができそうだが会議でまとまっていらないらしい、名称が。名称とかなんでもいいだろと思うけどね。

レベルとか級とか色とかもうなんでもいい。

赤提督とか強そうでしょ。

そんなわけで卒業した新米の俺はベテラン的な提督の下について提督としての心得などを学ぶらしい。

卒業後に独り立ちさせたら勝手がわからず資源を枯渇させて壊滅した艦隊も少なくないための配慮だとか。

迎えに寄越してくれたかんむすの姿が見えてきた。

さあ、佐世保での輝かしい提督生活の幕開けだ！

???????

（ ω ）

???????

うわああああああああ

——江府守鎮クツラブそこうよ 話終最——

おちけ、おちつけつ、おちつ。

おちおちおちおちついたフリでもいい、おちつくんだ。

……。

ふう、落ち着いた。

かんむすとの出会い頭にちよつと驚いたがセーフだろう。

とりあえず、俺を案内してくれるという金剛型三番艦の榛名に目を向ける。

かんむす特有の装備は背負っておらず、傷を隠すように巻かれている包帯が痛々し

く、死んだ瞳で虚空を映しながら「榛名は大丈夫です」を連呼するロボと化していた。

……。

いや、落ち着けないだろ。

もういきなり大丈夫じゃない榛名を見せられるというパンチの効きすぎてレッド
ホットチリペツパーな挨拶である。

というか、頼むから挨拶であつてくれと祈るほかない。

挨拶で大丈夫ですロボにする鎮守府とか絶対嫌だけど、それでも祈るしかない。

大丈夫ですを連呼しつづけて数分、なんか呼吸器系がやばそうな咳とともに榛名は正気に戻った！

足取りが怪しい榛名に連れられて世話になる提督の待つ軍港の一角へと足を進めた。

……途中で艦隊でも比較的元気な榛名が案内しますとか聞こえたけど、嘘だよな？

もう倒れそうで見られてられないのに、「榛名は大丈夫です」とだけ言つて案内を頑なに行う姿が涙を誘う。

かんむすの詰所であるドックへ近づいていく。

まだ距離はあるがわかってしまう。

俺の軍学校での経験が、勘という形で警鐘を鳴らす。

この先は地獄だ……っ!!

覚悟を胸にドック突入。

一目で配給が滞ったガンパレみたいなドックだと理解した。

つまるところ、小さいかんむすが死に掛けのまま放置され、大きいかんむすも目が死んでいるという。

地獄すら生ぬるい！

こういう艦隊が現れないように心配してくれるお母さんのような役割である間宮さんと呼ばれるストッパーがいるのだが……。

かんむすの横で倒れていました。

心配ゲージが突き破って、世話したけど心労で倒れてそれでも動いてこうなったというのが榛名の話。

全然大丈夫じゃないです。

マジで地獄すら生ぬるそうでやばい。

不真面目ゆとり提督の俺がヤバいって思うんだからマジでやばい。

真冬の遠泳中にイ級の深海棲艦に襲われたときくらいやばい気がする。

どうにかしないとかんむす達が朽ちた骸になって蛆が湧いて俺のトラウマになる！

かんむすの治療のためにさつきと入渠させようと入渠ドックを探す。

程なくして死んだ瞳の妖精さんが出入りする薄汚れた入渠ドックを発見した。

とりあえず死にそうなかんむすから風呂にぶち込む順番を頭の中で巡らせながら中の状態を確認……装備でいっばいだった。

なんでこうなった……？

どうもかんむすの入るスペースを潰すことで装備の修繕を早める方針だとか。そういう設備じゃねえから、これ！

入渠ドックでは資源を装備の修繕に、かんむすの疲労を取るといふ役割があるはずなのだが、どうしてこうなった？

入渠ドックの妖精さんたちに無理を言つて装備を全部どける。

一時的に置いておく工廠では次々と駆逐艦や軽巡などの装備が廃棄され、雀の涙程度の資源に変化していつていた。

そしてその隣では駆逐艦や軽巡、性能が低い重巡、装備を剥がれた五十鈴が怪我をしたらま順番待ちのように暗い顔で並んでいた。

疲労の色も濃いが何よりも各々には恐怖と絶望を背負っていた。

彼女らの先には断頭台のように解体施設が地獄の口を開け、闇のソナタを奏でて……。

????????

（ ω ）

????????

うわあああああああああうわあああああああああ

叫びを飲み込んで工廠内の仕事を停止させる。

フル稼働していた大型艦の建造も強制停止である、悠長に作っている場合ではない。新米の俺にはブラックレベルが高すぎである。

嘘、私の常識ってホワイト過ぎ……？ってくらいやばい。

ああ、もうダメすぎて何がダメなのかわからないレベルで怖くなってきた。

マジでブルってきやがったぜ……。

濁った瞳の妖精さんたちに今日の作業は変更であると連絡し、かんむすたちもドツクへ戻す。

五十鈴なんて真っ白い顔に能面のような表情で「期待させておいて落とすのね。私には代わりがいるもの……」とか呟いていた。

もうだめだ、こわい。

表情に出したらかんむすたちの精神にクリティカルな気がして気丈に振る舞っているけど限界が近いのですが。

榛名は大丈夫って言うてるけど、俺がダメなんですけど。

ここってこんなになるほどの戦場が近いのだろうか。

だとしても艦娘に敬意を払うのって常識じゃないのか……？

女性ばかりの職場は氣遣いでしんどいみたいな話を聞いていたが、別の意味でしんどい。

マジで癒されたい。

駆逐艦が癒されるって話は何処へ行つた。

癒されるどころか斃されるわ。

同期の畜生どもの肉球に癒されたい。

なぜ彼らはマジで犬猫だったのか、会話が可能だったのか、永遠の謎である。

たぶん妖精パワーが何かを起こしたのだろう。

真剣に考えるとやばいので辞めよう。

いや、考えていないと現実に潰されそうになる。

どうしたらいいというのだ……。

榛名の先導のもとで、この艦隊の提督の執務室へ。

相手がどんな人物か考えただけで胃が痛くなってきた。

まず普通の感性を持った提督ではないはずだ。

おそらく、「艦娘？ 兵器だろ？」パターンに入る。

おそらくといったが確定していいと思う。

駆逐艦の雷に「私がいるじゃない……。いるのに……」とか呟かせながら地獄のソナタとともに解体へと進む恐怖のブラック状態だからだ。

この先の分岐が問題になってくる。

A. 「歩道が空いているではないか、進め」といった精神的にも人外な提督なら俺の敗北確定である。

効率に集約していてももういろいろとどうすることもできない（諦め）

B. 「艦娘には役割がある。国のために喜んで死ぬ」とか護国の守護者提督なら俺の敗北確定である。

ゆとりの俺とは思考が違い過ぎて会話にならない。

C. 「艦娘？ いえ、知らない娘ですね……」とかだつたら、いや知つとけよみたいな。一応勝利は収められる気がする。

D. 「ぐへへ、かんむすちゅわーんprpr」とかだつたら確定勝利。

憲兵さんと呼んで消えるか深海棲艦による不慮の事故が起きるためだ。

E. 「深海棲艦を、一匹残らず駆逐したいです……！」とかだつたらもう一人で戦えよって感じだよな。

死に掛けたらかんむすに変身しそうだから戦場に放り込んでみよう。

頼む、Dのパターンでお願いします！

神に祈る哀れな子羊がここにいます！

DがダメならなるべくCで頼む！

うなれ、俺の信仰心！

よく考えたらアーメンと南無三しか知らねえ！

頼むよ神様仏様。

な、ナムサーン！

榛名の手によつてゆっくりと開かれる扉の奥では、陰鬱な雰囲気をまき散らした提督らしき物体がひたすら何かの計算を行っていた。

提督らしき物体と表現したのは、長い髪の毛で机などが隠れていたためだ。

緩慢な動作で頭を上げたその提督は幽鬼のようであり、生気を感じられなかった。

その提督は血色の悪い唇を動かして静かに、大型艦建造のレシピと足りない資源を呟いた。

俺は静かに今日から世話になるはずだった提督の意識を当身で奪った。

そして流れるような動作で舞い散る書類を綺麗に集め、気絶した提督をポイ捨てし、

執務机へと腰かけた。

少将で大型艦建造は許されない（戒め）

テンパった榛名が、ここの提督は女性だとか言っていたので段ボール机に寝かせておく。

ソファやマットが見当たらなかったので仕方ない。

筆跡の真似をすれば問題ないだろう。

畜生どもの肉球マークまでインクで完璧に再現できる俺に不可能はないし、引き出しから見つけた判子で完全無欠状態だ。

バレなければ提督は大丈夫です、と榛名に笑顔を見せる。

予定されていた大型艦建造や解体、廃棄などをすべて中止にする旨を書類にて作成し、比較的目のハイライトが消えていない妖精さんによって通達。

この艦隊は俺に支配されたのだ、とノリノリで独裁スタートである。

俺の艦隊用の入渠ドックも解放し、入渠ドックへのタイムテーブルを決める。

800個とか保存されているバケツを解放したいところだが、後で軍法会議を起こされた際に不利になるので自前のモノを使用。

自前といったが、上官が任官祝いにくれたものである。

そんな自前のバケツを榛名に使用して一応の応急手当をして書類を手伝ってもらおう。本当はきちんと休んだ方がいいが、マジで榛名が一番マシな状態らしい。なにこここわい。

工廠の作業を停止したために使われなかった資源をかき集めてかんむすに回す。かなりごりごり減っていくがしようがないね……。

そして一人一人の様子を見て入渠の順番を決めているとオリヨクル帰りの潜水艦が寄港。

疲労がヤバいので間宮さんと一緒に普通の風呂送り。

天井を仰ぎ見ながら「泳ぐの大好きでち……」と呟いていた潜水艦も風呂へ。

人間と違ってかんむすはよく食べるうえに戦闘まで行っているので頻繁に摂食させる必要があるので片手間に空腹で喘ぐ戦艦や空母に携帯食をぶち込んでいく。

大丈夫じゃない榛名にもぶち込んでいく。

作業の終わりが見えないのですがマジで……。

急を要する艦は背負ったり台車に載せたりして近場に用意されている俺用の入渠ドックへ急ぐ。

本当はここで提督として慣れていき、用意されたドックなどで練習、そして独り立ち

へみたい流れのはずなのにどうしてこうなった。

途中で猫畜生な同期とその秘書艦らしい駆逐艦に出会ったのでバケツを強請る。

本物の猫が提督だという事実にはげんがりしていた秘書艦だが、俺とかんむすたちを見て引いていた。

かんむすの付け耳みたいな機械を筆りたい思いに駆られるが、敬意を持っている俺は見事にスルーすることに成功した。

それとは反対に猫畜生は生暖かい目を向けてきた。

実に屈辱的な場面だったが我慢してお願ひする。

ちやんと返すこととねこじゃらしで遊ぶことを要求されたので頭を下げながら礼を言う。

途中で取りに行く約束をして俺のドックへ突入。

妖精さんを総動員して入渠準備しつつ駆逐艦たちをぶち込んで猫の下へ。

冷やかな視線を背に受けながらバケツを運んでいく。

着任して一日目で俺は何をしているのだろうかと空を仰ぐが、そんな時間も惜しい。

軽巡洋艦天龍型2番艦の龍田を旗艦とした艦隊が遠征帰りらしくバケツを持って佇んでいた。

近づくとも全員の疲労が重く、目の下の隈がすごいことがわかった。外傷などはほとんどない。

たぶん、おつかいな遠征は元気なかんむすにやらせていたのだろう。

とりあえずバケツが届いたことにテンションを上げながら艦隊を褒めて回る。

書類で今回はバケツが手に入らなかったと処理し、入渠ドックにバケツを届ける。

このバケツ、俺らで言うところの入浴剤みたいなものだ、それも超すごいやつ。

装備とかんむすの回復がかなり早くなる。

なにでできているかは不明、知ったら眠れなくなりそうだから不明。

次々とかんむすを風呂にぶち込んで、余剰分を台車に乗せていると龍田から艦隊の補

給を乞われた。

俺にはよくわからないがかなり必死な様子だったので頷く。

ほっとした様子を見せながらもそもそもと携帯食を食べ始めた。

普通の風呂がいくら空いているから入っておいでと指差しすると龍田が絶望を浮

かべた。

ゆつくりと食べてすみません、頑張っているので交換しないで、みたいなことを言わ

れた。

うん？

どうやら遠征↓疲労↓解体↓新しいかんむす↓遠征↓……みたいなローテーションが組まれることもあるとか。

ええー？

もう理解が追い付かない……。

本営から与えられる自由任務を利用したものだろうと想像は付く。

提督の中には愛着がわきすぎて少数艦隊しか作らない者も結構いるらしいが、敵の進軍が激しくなるとかんむすが追い付かなくなる。

そういった事態を防ぐために任務と称してかんむすを建造（というか妖精さんを介して召喚的なサムシング）をすると代わりに資源をもらえるのだ。

で、ここの提督はその分を大型に回し、建造したかんむすを疲労した者と交換することで、入渠用の資源をカットという節約を行っていたようだ。

マジでここが地獄か。

昔は前線が本土に近かったため、こういったブラックも目を瞑っていたが、近年はあまり推奨されていない。

あまりというか、ほとんど禁止に近い。

かんむすたちの練度が全体的に低いままになってしまうので、緊急時に役立たないとなるかもしれないからだ。

大本営も頭を悩ませている問題らしく、ベテランほどこの問題が顕著だとか。

あまり公になっていないとか箱口令が敷かれているレベルの話だが同期と考えた結果、深海棲艦には艦娘をベースにしているなんやかんやのため時々かんむすが見つかったりしたりしなかったりで轟沈は避けるべき……いや、俺には海のこととはよくわからないから考えるのは辞めよう。

何も知らないのが一番である。

頭が痛いし目の奥もなんか滲むような熱さを感じて顫？を揉んでいると、何か勘違いしたのか龍田が携帯食の残りをほとんど丸呑みのようにして食べ終え遠征準備をしていた。

いや、今日は休みだからと伝えると次のための準備しておくと言う。

どうやら深夜から明け方にかけての話らしく、彼女らは一日中遠征らしい。

深夜はかんむすも寝る時間だから！

むしろ敵艦がいるかもしれないから夜戦以外ダメだから！

深夜はきちんと組んだ艦隊じゃないと絶対だめだから！

前の提督は寝て起きたら資源が増えてお得的なことを言っていたとか。

お得じゃねえから！

何処も彼処もブラックすぎる、もうダメだ。

理解が追い付いていない。

俺の想像力が足りてないのか……？

食堂が十全に稼働するまでは我々の手で食糧を、みたいな状態なので動けるかんむすとともに炊き出しに近い感じで用意。

圧倒的に手が足りないので同期の猫に連絡、まさに猫の手を借りたいである。

動けるかんむすが増えてきたので食わせながら、動けない連中をここの俺用の入渠ドックへ連行するというサイクル。

初日で働きすぎだと思うが、実際の提督は安定するまで24時間働く必要があるときもあるとかないとか。

ううむ、ツライ。

おにぎり握ってはかんむすに突っ込んで、空母連中にはボーキサイトも食わせる。

かんむすの構造物質は人間のそれとは異なっているとかで物資を蓄える必要があるらしい。

人間よりも丈夫だからなるほどなーって感じである。

回復するまでの物資の支出と遠征や任務による物資の獲得を頭でこねくり回す。

全員が完全に回復するまで止めるとやばいので、ある程度動けるようになったかんむ

すで回せるように進めよう。

戦域をどのくらい受け持っているのかわからないが情報を収集して、他と合わせるレベルまで下げるが、望みとしては担当する前線を下げまくって哨戒による戦域維持だけしたいところである。

任務分だけ熟して資源を獲得しつつ……と考えていると猫が幾人かの艦娘を引き連れてきてくれた。

かなり助かる、マジで。

現状は燃費が良いため遠征送りだったかんむすが比較的マシで手伝えるくらいだったから猫の手は大歓迎である。

飛び移って俺の肩に乗って丸くなったが、秘書艦たちが猫提督の腕なので問題ない。

猫に飯とか衛生的に問題でしょう？

作業中に猫の秘書艦だった駆逐艦の叢雲が俺に向かっててもごもごと呟いたかと思うと、顔を真っ赤にして走り去った。

猫曰く、謝ろうと頑張ったが恥ずかしくなって逃げたのだろうとのこと。

何を謝りたかったのかさっぱりわからん。

まあ、いいか。

そういえば猫にバケツを借りた礼を告げる、予想よりも多く貸してもらえて有り難

い限りだった。

肉球で頬を捏ね繰り回されながら、バケツの8割が猫の上官の提督からのお祝いらしい。

なにそれいい人すぎる、うらやましい。

落ち着いたら礼を言いに行こうと決心した。

本当はすぐに行きたいが、すぐに行くと何が起きるかわからないドキドキ☆時限爆弾（提督の暴走とかんむすのトラウマ風味）がさく裂しそうで無理なのだ。

三日三晩の作業を経て、なんとかかんむすの外傷が癒えてきた。

元からいた提督は人見知りの気が強かったらしいので言葉で適当に判子マシーンに仕立て上げた。

さらに猫の上官から長官に話がいったのか、幾人かのかんむすが現れて書類を検分し、結果として大型艦建造は長官の許可が出るまで禁止となった。

寝ずに働き続けたが、まだ余裕があるので午前中で仕事を終え、判子マシーンを雪崩送りにする。

「Hey、提督うー！ 今日こそ寝なヨー！」と飛び込んできた金剛を引き連れて猫の

ところにお礼を告げに向かう。

判子絶対押すマシーンと化した提督を無視して俺を提督と呼び続ける辺り、根は深そうだ。

途中で寝る寝ない論争が起きたが、反復横とびによる四重分身を披露して決着。

直線距離200kmを72時間で完走しなければ雪山ナイフ一本演習に送り込まれる殺人マラソンを猫と犬を担いで走り切ったことに比べれば余裕である。

金剛と会話しつつ、近頃は海外艦も配備できるくらいには外国との海路が回復している戦域もあることを思い出した。

まあ、道中での戦闘を回避できる確率は100%ではないので設計図などが出回ってから、妖精さんに任せて安全に自陣で行いたいものだ。

港へと到着、元気に演習をしていたり装備を掃除していたりと元気な様子である。

猫とのあいさつもほどほどに、本題の上官へのお礼である。

重厚な扉のノブを回し、重い音とともに執務室内へ。

そこにいたのは黄色い30-40cmほどのファンシーな動物で、青いドレスを着飾っていた。

ピ〇チユウという名前の提督らしい。

同期の犬や猫と違って別の世界から来たとのことで、我々の言葉を扱うことはできな

いが通じるとか。

青いドレスに身を包んでいることからマダムと呼ばれており、性別はメスというのがマダムの秘書艦の話である。

メスじゃなくて女の子と言つて差し上げてほしい……ちよつと混乱して言葉がおかしくなつたが大丈夫だ。

同期には猫も犬も鼠もいた、何の問題もないじゃないか。

マダムに礼を言うのと可愛い鳴き声とともに尻尾を振られた。

可愛すぎてやばい、さすがマダムです。

しかも得意技はボルテツカーと呼ばれる大技で、むじやきな性格とでんきだまによつて強力なステータスを誇るとか。

マダムなのにボルテツカーが使えるとかさすがマダム、反則はいけませんぞ。

P A R による改造の疑いなど誰も抱かずに和やかに挨拶を終え、食事までご一緒させてもらった。

最初は秘書艦が通訳していたが、最後の方は互いの言葉で交流できた。

というか秘書艦が若干間違えている部分もあったが特に問題は無かつた。

犬猫や覆面、T字の同期を相手に嘘を見破る俺が相手の言葉がわからないわけ無かつた（真顔）

さすががしい気分で猫と別れ、帰路につく。

マダムのおかげですごい癒された。

さすがポ○パルレだぜ。

それから2週間ほど経った日、大本営からかんむすが査察に現れた。

オブラートに包みまくって説明されたがブラック鎮守府問題に本腰を入れ始めたらしい。

ここの提督も降格処分中佐となり更に権限の剥奪が知らされ、俺は昇格したが運営を任された状態になった。

なんか問題が飛び火したんですけお；ω；

時期外れの昇格はきつちりと運営しろよオラアという意味らしいが、俺にはいまだに秘書艦すらないのですがそれは。

前からいたかんむすが持ち回りで秘書艦を買って出てくれるが、ちよつと心苦しいのだけだ。

降格して中佐となった提督は、かんむすたちにはどうも中佐と呼ばれているらしい。

提督や司令官と呼ばれるのは俺だけ。

なんか違う気がするんだけど。

午前中にすべての仕事を仕上げ、中佐に書類雪崩を用意して最近の日課である挨拶周りに向かう。

挨拶の内容は自己紹介や前線を下げる旨で迷惑をかけることになる、演習を組んでもらうかもしれないなど様々だ。

中佐は人見知りが半端なかつたらしく、交流が無かったのでいろいろとマダムに頼むことになってしまった。

今日の提督はミミズクで、体長は1mほどの巨大なワシミミズクだった。

爪には革製の手袋をしており、艦娘の肩を傷つけないためさと笑っていた……俺の肩で。

見た目よりも軽い方だった。

一昨日の提督は人魚だったし、昨日は現役アイドルだった。

艦娘と一緒に泳げる人魚はなかなかうらやましいが、アイドルの提督は「ふーん、アンタが新しい提督？ ……まあ、悪くないかな」と少し硬い態度だった。

先週は吸血鬼だとかで侍女に日傘を用意させていた提督にも挨拶した。

個性豊かである。

豊かすぎて佐世保鎮守府では人間が1割を切るらしいし鎮守府の長官に至っては妖怪である。

多種多様ですげえ。

そんな状況なので人見知りな中佐は大型艦の建造、というか艦娘のコレクションに逃げたらしい。

コレクションするなら艦娘と会話すればよかったのではと伝えると、人見知りもそうだが人間じゃないのは怖いとかなんとか。

こんな異文化交流状態の鎮守府で何を言っているのだろうか。

俺なんてマダムの上に挨拶したのは奉仕型自動人形だというのに、中佐は常識が育っていないようだ。

ちなみに明日はザクだし、明後日はデスザウラーだ。

提督にマジで人間がいない（遠い目）

佐世保鎮守府に着任して1か月が経った。

かんむすたちの運用サイクルが安定してきたことで、資源などにも問題がない状態と

なった。

妖精さんも回復を果たした。

が、未だに俺は自分の艦隊を持っていないどころか秘書艦すらいない。

気づいたら俺専属の妖精さんたちもこちらの港に所属し、入渠ドックなども全部移設していた。

おかしい。

頗るおかしい。

中佐も隠れて大型建造をやるうとして妖精さんに断られるくらい正常運転なのに、未だに俺が提督状態だ。

妖精さんとの交信レベルは俺の方が高いので中佐の指示が伝達されないという問題はあるが、俺がいなくなればすぐに妖精さんも言うことを聞くようになるはず。

というか、そもそも佐世保で研修したら横須賀に配属されるはずだったがどうしてこうなった。

妖怪長官に直談判したら、人外が多すぎて適応した人間は貴重だから会話の練習用にうんたらかんたら。

デスザウラー提督とか冗談で荷電粒子法とか撃つし、外の常識を知っている人間が必须要ってことらしい。

人外の提督連中を佐世保に集中させた大本営が悪いに違いない。
そんな俺の華麗なる一日は朝5時……まるごーまるまるから始まる。

——5時——

ぬるい布団から抜け出し、身支度を軽く整えてから執務室を後にする。
気づいたら個室ではなく執務室で生活するようになっていたのだが、そのところど
うなのだろうか。

冷え切った水で顔を洗い、歯を磨く。

そうしていると左眼の探照灯で薄暗い廊下を照らしながら歩く古鷹が現れるので、彼
女を伴って外に出る。

深夜を活動時間にしていたり、思わず夜戦に突入して朝方まで起きている提督は多
い。

その中には港で自分の艦娘を待っている提督もいるので、俺は朝の挨拶がてら軽く見
て回る。

——6時——

馴染みの猫が秘書艦とともに佇んでいるのを見つけたので挨拶もそこそこに井戸端会議へ突入。

去年の夏休み過ぎてから軍学校に入学して1年で卒業したが、猫とは付き合いもそこそこ長い。

港のアスファルトに丸まっていた猫を持ち上げ、俺の軍服の胸元に搔き抱くが、キンキンに冷えていた。

俺も猫もお腹を壊さないか若干心配だ。

猫の秘書艦はここまで碎けた調子を許されていないらしく、ちよつと睨まれたが無視した。

というか、それに反応した古鷹が探照灯で相手をまばゆく照らしたことで、秘書艦は目を開けていられなくなった。

まあ、儘あることなのでスルーして猫と会話を進めていく。

会話の内容は同期の覆面T字野郎がお偉いさんの息子だったとか、同期の鼠の上官がフクロウで大変らしいとか、猫が艦隊を1つ指揮していてそろそろ2つ目を指揮する予定だとか、隣の大陸にはピオランテというバイオ兵器が突然変異で出現したとか、そんな些細なことだ。

最近、珪素生命体のあ号提督とも意思疎通を取ることに成功したという話の辺りで猫

が飛び降りた。

暁の水平線に、自らの艦隊を見つけたようだ。

ツンデレなセリフとともに艦隊の無事を喜んで尻尾をふりふりしている猫に別れの挨拶を告げ、帰ることにした。

——7時——

続々と活動を開始したかんむすたちに混ざって朝食を摂る。

ちなみに納豆には梅干しを入れるのが俺の好みだ。

金剛のティーパーティーに納豆紅茶とかどうだろうかと真剣に考えながら、かんむすたちを見回す。

今日も問題なさそうで涙が出そうだが、口がネバネバだけだ。

そんなこんなで食堂の一角を占拠していると、全く嘔んで無さそうな早さで食事を終えた島風が飛び出していった。

たぶん、朝の弱いダウンナーな連中を起こしにいったのだろう。

数分ほどで脳がまだ眠っている状態の北上がのろのろと歩み寄ってきて「じゅーらいそーじゅんよーかん、きたかみ、しゅつげきします……」と言って敬礼。

お、おう。

よくわからんが「いつも期待しているぞ」と激励すると、くすぐったそうにへにやりと笑みを浮かべて食堂を出て行った。

……たぶん、何処かに出撃したのだろう。

——8時——

昨日用意した書類に従って、出撃や遠征などを割り振っていく。

ちなみに割り振り方は他の提督の意見を参考に行っているのでそれほど悩むことはない。

仕事のないかんむすは休みだったり訓練だったり、掃除係りであったりと様々だ。

俺も仕事を始めようかなと食堂の掃除を終えると間宮さんに昨夜銀蠅が出たと聞かされた。

資源や食糧に問題ないように運営しているし、ちよつとくらいならいいのだけれど、度々やられると面倒だ。

ついでにちよつとしたジョークも交えて昼食時に注意するでしょう。

ちなみに銀蠅とは『つまみ食いする空腹の者』というルビが振られる、嘘だけだ。

— 9時 —

今日の秘書艦である霧島とともに執務室へ。

「仕事が終わらないんだけど」と呟く中佐を横目に今日の仕事を進めていく。

仕事を早く終わらせるコツは速く動くことだと言いながら、中佐の3から6倍速くらいで動く。

効率を仕事量で補うという、おそろしいほどに天才的な発想で生まれた方法だ。

思考加速か分裂思考が必須なので、専用の訓練を熟さなければならぬが、かなり便利だ。

連日そんな感じで進めていたので、俺の仕事はすぐに終了した。

後は帰ってきた連中の報告や妖精さんとの交信くらいだ。

その裏で中佐は書類に沈んでいた。

休むのは自由だが急を要する仕事は終わらせておけよ。

— 12時 —

艦載機の整備を手伝っていたら昼食の時間になった。

一人前のレディが俺の分を取ってきてくれたので、礼を告げながら頬を軽く撫でる。

頭は撫でてはいけないということから俺は学んだのだ。

おお、手触りが実にいい。

が、食べない。

他のかんむすたちも集まって来たので、銀蠅を注意する。

内容としては

・つまみ食いしたやつがいる

・言ってくれば調整したのにそんなに俺の信頼がないのか

・こんなに俺と艦娘で意識の差があるとは思わなかった…！

・これじゃ、俺…提督をやめたくなくなっちゃうよ…

・信頼のない俺への罰として、昼食を食べないZE☆

という感じで真に迫った様子で言ってみた。

ちよつとしたジョークだが全力だ。

さすが俺である、演技レベルがあまりに高すぎた。

結果として、かんむすの2割がショックで気絶し、3割ほどが過去のトラウマを発症させた。

地雷大杉イ!!

昨日秘書艦をやってくれた不知火など、いつもの戦艦級の眼光は鳴りを潜め、涙目で

「しらぬいになにかおちどでも……」と呟いた。

落ち度はないよ、ごめん。

いつも元気な比叡も「て、ていとく!? ていとヴあああああ!!」とか言葉にならないことを叫んでいた。

ほんとにごめん。

利根が立つたまま放心しながら「いい夢……いや、悪い夢じゃった……」と呟いた。実に器用だ、マジでごめん。

「フッフ、怖い……」と涙目の天龍、その隣で笑顔のまま気絶したのか微動だにしない龍田。

二人ともかわいかったが、ごめん。

能天気が売りの隼鷹が「た、戦いの後の一杯は格別だから。かくべつすぎて、ていとくがふたりにみえる（涙目）」とか悲壮な顔になってた。

君は呑んでなかったじゃないか、ごめん、マジでごめん。

やりすぎたことに内心でテンパっていると駆逐艦の娘たちが自分の昼食を持って列を成し、「提督にあげるからやめないで」と涙いっぱい溜めた上目遣いで頼まれた。

俺の良心がヤバいぞ、ほんとにすみませんでした!!

やめないからと必死に宥めて、足りなかつたら隠れて食べないでキッチンと知らせるよ

うにと伝える。

恥ずかしくても言わないとダメだとも。

駆逐艦のちっこいのに囲まれて食べる昼食は罪悪感を感じて味がしなかった。

——14時——

ちなみに銀蠅は赤城だった。

気絶から復帰して身を切るような謝罪だったので、これからはちゃんと言うようにと連絡。

別に物資は問題ないから大丈夫だとも伝えて戻らせる。

自分で好きな量を摂る形式にしたほうがいいのだろうかとも思うが、変に遠慮して食べないかんむすもいるので調整が難しい。

重巡以上の昼食を増やすべきだろうか。

ああ、とても疲れた。

——15時——

物陰から様子見したり、直接伺いに来るかんむすを捌いていく。

提督ってこんな大変な仕事だったのか（驚愕）

——16時——

風呂から出てきた龍驤と出会った。

他の駆逐艦は髪を乾かすのを手伝うことがよくあったし、いいかと龍驤も手伝う。

マダム（ピ○チュウ）や猫の同期も毛並みがいいが、かんむすたちの髪はそれはまた違った手触りで俺を楽しませてくれる。

熱中しすぎて我に返ると、龍驤の後を順番待ちしている戦艦や空母、軽空母、重巡、軽巡などのかんむすたちの姿。

（○）OH…

——20時30分——

駆逐艦たちの相手までしたので遅くなったが、夕食を摂ることにした。

同席したのは秘書艦の霧島、髪を乾かすのが最後だった蒼龍飛龍コンビ、なぜか影を背負っていた中佐である。

夕食を静かに食べていると中佐が暗い空気を纏ったまま口を開いた。

「わたし、人気がない感じですか……？」

なんだ、もっと重大なことかと身構えたが大したことなくて安心した。

鈍いとかそういうレベルではないらしい。

空気を読むのも苦手な人のだろう。

何も気づかなければ幸せに過ごせるに違いないし、テキトーにそんなことないですよと返事しておいた。

—— 22時 ——

就寝準備を終えて、さあ寝るぞと布団へ。

……そういえば北上は何処へ行ったのか、少なくとも朝から顔を見ていない。マジで出撃したのだろうか。

目頭を揉んでいると執務室がノックされた。

こんな夜にかわいそうだが北上探しを手伝って貰うかと招き入れる。

磯の匂いとともにすごい笑顔の北上が入室し、海産物を届けてくれた。

……。

……お、おう。

……とりあえず風呂はしまっているだろうから、執務室の温泉を使いなさい。

星空の下、新鮮な海産物のお供として七輪を用意した。

その後、天体観測しながら北上と夜通しでめちやくちやBBQした。
なんかすげえ癒された。

提督（本物） 2

04時00分 古鷹

古鷹が目覚める時間は艦隊内で特に早い。

未だ空には星が輝き、夜番の巡廻が行われているだろう。

それでも古鷹がこの時間に起きるには理由があった。

早朝の見廻りもあるが、最も大きな理由は敬愛すべき提督の散歩に付いていくためだ。

たったそれだけのことと言うことなけれ。

多数の艦娘を保有する艦隊に所属している提督ともなれば、自由な時間というものは限られており、艦娘が供にできる時間は更に限られる。

以前まで指示を出していた中佐を見てもわかる通り、時間の捻出はひどく難しい。

提督は時間の大半を艦娘との交流に充てているが、やはり複数人を一度に相手するのが精々といったところ。

一対一など、秘書艦の順が来ても希少であった。

そんな中——夜戦から帰航する艦隊がある場合を除いて——古鷹が提督と常にいられる早朝の散歩というのは、ひどく貴重な時間だ。

早朝散歩の座は艦娘の間でも人気が高く、早番になるために間宮のアイスクリームを対価とした争いも起きかけた。

そして発生する数々の不手際。

朝早く起きることができなかつたり挨拶中に他の艦娘を睨み付けたり、居眠り、酒気帯び、酒盛り、無許可で海に潜ることのみならず提督を引きずり込む、カレー事件、
t c。

誰かしらが問題を起こすたびに篩から落とされ、探照灯とその気風を考慮して「古鷹がいい」という提督の一声で収まり、古鷹がその座に収まった。

提督は毎朝決まった時間に部屋を出て、準備をしている。

遅れても提督は文句を言わないだろうが時間を無駄にすることになる。

それは決して遭ってはならないことだと古鷹は考えているし、そうならないように手早く自らの準備を整えていく。

手間のかかる準備はそれほど無いが、それでも入念にこなしていく。

少しだけついていた寝癖を軽く梳いて直し、探照灯である左眼の輝きを確かめる。

そして、提督の傍にいても問題ないと自身を持ったところで部屋を出る。

あまり長く照らしておくことはできないので、探照灯は灯さなかつた。

05時00分 古鷹

ちようど朝の身支度を終えた提督を発見、古鷹は自分があることを知らせるよう探照灯で薄暗い廊下を照らした。

提督は夜目が効くうえに気配を読んで暗闇でも難なく動けるといふ話、探照灯を使う必要はほとんどない。

それでも照らすのは、眼が美しいと提督に言われたからだ。

提督が美しいといった背景は、艦として歴史か、今の自分そのものか。

どちらにしても誇らしく、また嬉しく思う。

常に照らすことはできないが、提督の一日の始まりの光だけでも、古鷹が自ら照らせることは数少ない自慢だった。

05時30分 鳳翔

鳳翔は足音をなるべく立てないようにして、提督が生活している執務室に入り込む。

薄暗いが、明かりを点けずとも足を取られることはない。

迷いなく進む鳳翔の目当ては提督が寝ていた布団であつた。

今日は快晴だという話、布団を干すためである。

前日には提督から許可を取ってあり、準備は整っていた。

だから、布団にゆつくりと倒れ込んで、はすはすと匂いを嗅いでも問題なかった。

もちろん、枕に顔を埋めて深呼吸して肺いっぱいに取り込んでも問題ないのだ。

さらに、掛布団と敷布団に挟まれる幸せサンドなるものを開発するのは当然だったし、枕を抱きしめて布団に丸まるのも、全く持つて問題がない。

それから15分、じつくりと楽しんだ鳳翔の額には珠のような汗が浮かんでいた。

もつたないから今日はこの枕で寝よう、そう心に決めた鳳翔は緩んだ頬を隠すことなく布団を抱えて執務室を後にした。

追記として、提督の寝具を全て自らの部屋に持つていき、代わりに提督の部屋へと干した自分の寝具を運び込むというミラクルプレーを披露したが全く問題ない。

それに気付いた艦娘が真似して実行することになったが、全く問題ないのだ。

06時00分 古鷹

提督の隣をゆつくりと歩きながら会話する。

同じ艦隊に所属する艦娘には滅多に得ることのできない貴重な時間に、少しだけ優越感を感じてしまう。

あまり良いことではないとわかっているが、それでも抑えきれないモノもある。

誤魔化すために重巡洋艦や三川艦隊の仲間の話もするし、自分の話もする。

目は完全に覚めているが、どこか夢見心地の気分でもあった。

近くの艦隊を指揮している提督たちとの挨拶周りが始まり、散歩の予定が半分過ぎて
いることに残念な気持ちを抱いた。

贅沢な不満だと理解しているが、一日の始まりに楽しみが来ると後がツライ。

艦隊が厳しいというわけでも、他の艦娘と仲が悪いというわけでもないが、やはり提督との時間と比べると味気ない。

就寝前の夜回りも一緒だと思うのだが、古鷹が独占している朝の散歩を手放す必要がある。

手放してまで夜の順番に組み込まれることは欠点のほうが多いと理解しているが、それでも高望みしたくなる。

最も早く寝る自分のために、提督がわざわざ部屋まで就寝の挨拶をしに来てくれることを考えると、望み過ぎなのかなと古鷹は溜息を吐きそうになった。

提督が同期のレン提督を見つけたようで、徐々に近づいていく。

彼女は妖精さんと交流できるほどに力を蓄えた猫又だとか。

古鷹ら艦娘には可愛らしい少女の姿を見せてくれることもあるが、提督には全くないという話だった。

恥ずかしいのだと伝え聞いたことがあり、それがまた魅力的だった。

勿体ないと思う反面、良かったと思う気持ちも当然あるし、仲間の艦娘も同様だろう。

提督が彼女の魅力に気づいて艦娘に割いている時間が減る可能性が、当たり前のように想像できる。

確かに自分の時間をどのように使おうとも提督に自由であるが、放っておかれると思うと強く寂しく思う。

私達の提督に限つてと思うし、信頼し切っているが、中佐を思い出すと何処となく苦く感じる。

難しいなあとはいて、古鷹はレン提督の秘書艦である叢雲にサーチライトを当てた。

提督を睨んでいたのでお返しであり、視界が白く染まる程度の優しい悪戯に抑えている。

全力を出せば数キロ先を照らし、熱で叢雲のデコを焼き切れるパワーがあつたりなかつたり。

自身の瞳のフルパワーは試したことがないのでどのくらいの熱と光が出せるか古鷹自身にもわからないし、知る気も全くない。

探照灯を使う戦場ならば、普通に装備を使う。

瞬きするたびに消える安定しない光源など、仲間には迷惑がかりそうで流石に実戦では遠慮したい。

提督が美しいと言ってくれたのだから、ただ少しだけ照らすことができればそれで古鷹は満足だった。

07時00分 曙

特型駆逐艦「曙」は天国と地獄を彷徨っていた。

原因は目の前で朝食を摂りながら曙を見つめ続けている提督と中佐にあった。

普段は戦艦や空母などといった多く食べる艦娘と一緒に朝食を摂る提督だが、銀蠅事件が起きた事で駆逐艦と食べる機会が増えていた。

食事時間などによる提督の独占も見直されたことも関係しているだろう。

それを歯噛みしている空母級は視界に入れないよう気を付けながら食事続ける。

天国とは提督と珍しく卓を併にしていることだし、地獄は中佐がいることだった。

普段ならもつと楽しくなるはずだが、何の思いつきか勝手に隣に座った中佐が提督を指差して「彼をクソ提督と呼ばないのか」とか言い出した。

最悪である。

他の艦隊なら口が悪いのかもしれないが、さすがにこの艦隊でそんなことを言えるはずもないし、言う気もない。

さらに言えば、素直になれなくともなんとかしようとした結果、口数少なく目つきの悪い曙の誕生であつて提督と会話などしたら気絶する可能性が高い。

提督と一緒に食べるだけで満足できるレベルの駆逐艦たちは当初楽園を謳歌していたが、中佐の一言で失樂園まつしぐら。

クソ提督など呼ぼうものならあるのは金槌が鳴らすメロデーである。

大丈夫じゃない榛名がこちらを見ていて、曙はマジで大丈夫じゃなくなつてきた。

強めの光が曙の側頭部を照らしていて、曙はマジでワイルドに焼かれそうであつた。

普段は柔和な笑顔を浮かべている龍田が無表情で提督の後ろからこちらを見つめている、曙はフフ怖であつた。

助けを求めようとちらりと視線を外せば、阿武隈が前髪を整えるフリをしてがちやんと弾を込めてて曙の背筋を冷やす。

よく見ると高雄が「躡が必要かしら」と胸部を揺らした、マジで曙の心がブルつてきやがつたぜ。

そもそもなぜ自分がタゲられているのか、泣きたい気持ちを抑え込みながら思考をフル回転。

叢雲や摩耶だつて自分で同じジャンルじゃないか、青葉なんて提督を盗撮してたし、どうすればと曙はいっぱいいっぱいである。

結局のところ、提督も興味はあつたのかずつと曙を見つめ続けていたが、何の進展もないまま時間は過ぎていった。

そして曙の涙目に気付いて中佐の発言は無かつたことに。

提督が「集まつてないでちゃんとご飯を食べなさい」と告げるとみんな元の席に戻つていった。

曙は全身にかけられていたプレッシャーから解放された。

なんとか箸は持つているが、あまりの手の震えで食が進まない。

解放された安心感からか、震える声で「うまく食べられないわ……」と漏らした。それを聞いていた提督が曙の隣に座り、食べさせようとして……。

08時00分 川内

川内の胸に秘めたる闘志が燃え盛つた。

理由は夜戦の機会を得るためである。

所属する艦隊の提督に全く不満は無いが、夜戦の機会がかなり少ない。

敵艦隊に止めを刺すときか、特殊な演習くらいでしか夜戦は行わない方針らしい。

川内に不満は無い、全く無いのだが、欲望はある。

夜戦欲である。

戦い続ける喜びを感じたりだとか、戦場に魂を感じてここたましたりだとか、狂戦士であるとか、そんなわけは一切ない。

ただ、夜戦がしたいのだ。

特別夜戦に強いわけではない。

でも夜戦がしたい。

そんな川内の望みが叶う可能性をかけた戦争。

お掃除戦争が始まる。

勝負は簡単、廊下の雑巾がけが提督よりも早かったらちよつとしたお願いが聞いてもらえる。

遅かったら参加者全員で掃除である。

掃除係りも存在するが、お願いのために参加する艦娘も多い。

参加しない艦娘が、勝利者として掃除を眺めながら茶を啜っている提督とダべつている姿も見かけるが、それでも叶えたい願いがあんだ！

結果はもちろん「島風すらも置き去りにした……っ!!」という感じで、艦娘の敗北で幕を下ろした。

そもそも全力を出すと水上すらも走ることのできる提督に勝てるわけがない。

艦娘で勝者は未だにいないし、これからも出ないだろう。

それでも挑み続けるのが、艦娘の流儀なのかもしれない。

そんなことを内心で呟きながら、川内は雑巾がけの任に付いた。

隣では同じく敗者となった金剛が、提督にお茶を淹れてもらっている比叡を見て「聖杯に呪いあれ!!」と叫んでいたりいなかったり。

提督のカップ（聖杯）を比叡が借りて使っていたらしい。

川内は血の雨が降る（確信）と慄いた。

血の雨から逃れるため、川内は割り振られた掃除をすぐに終え、気絶したという曙の元へ。

特に深い意味は無いが、ここにいるよりも意義はあるだろう。

そもそも今夜は特殊演習だと知らされていたことを思い出した。

ならばお掃除戦争に参加する意味は無く、掃除に時間を費やしただけであった。

掃除は嫌いではないが、無駄にやりたいわけでもない。

こんなことなら夜戦をねだるフリして構って貰えばよかったと思つたが、比叡による血の雨地獄を考えると、どちらにしても無意味だったかなと。

名目ではあるが、きちんと見舞っておこうと曙の様子を見に行く。
なぜかすでに提督がいてお茶を啜っていた。

差し出されたカップと呼ばれる聖杯、川内は受け取るしかなかった。

自らの血で雨が降ろうとも、欲望には勝てないのだ。

妹の神通が現れないようにと祈りながら、聖杯を飲み干して……。

そして目があった。

「あ、死んだかもしれない」

川内は小さく呟いた。

09時00分 多摩

吾輩は球磨型軽巡洋艦の2番艦である。名前は多摩。

どこで生まれたかとうと見当もつかぬ。何でも薄暗い深海で深海棲艦になりかけて
にやーにやー泣いていたことだけは記憶している。

吾輩はここで始めて提督というものを見た。しかもあとで聞くとそれは中佐という
引きこもりで艦娘に対して一番獰悪な種族であったそうだ。この中佐というのは時々
我々艦娘を捕まえて解体して資源にするという話である。

しかしその当時は何という考えもなかったから別段恐しいとも思わなかった。ただ彼女の書類に書かれた艦娘たちはひどく傷ついたり解体されたりとフワフワした現実離れした感じを憶えた。長らく艦隊で消耗を繰り返した頃、少し落ちつく機会があつて提督の顔を改めて見たのがいわゆるこの艦隊でまともな提督というものの見始である。この時妙なものだと思つた感じが今でも残つている。

第一資源のみを友とする中佐の顔はもつと鬼気迫つていたが、提督はというと鋭い目の奥には輝きがあつて顔には覇気が漲つていた。その後、他の提督にもだいぶ逢つたがこんなまともな人類には一度も出会った事がない。のみならず艦娘に労わるように接するのだから珍しい。

長々と語つて何が言いたいのか。

それはつまるところ、今日の秘書艦なのだからもつとも構つてもらえる。……にやあ。

己の思考につらつらと並ぶ文字列を追いやり、意気揚々と廊下を歩く。

艦隊仕事の華といえ、やはり秘書艦であつた。

提督のために仕事をするという点においてどの任務も確かに尊い。

だがしかし、秘書艦と他の任務を交換してくれてとお願いされて応と答える艦娘はい

ないだろう。

日時の交換すらも間宮のアイスクリームが必要になるほどだと言えれば分つてくれるはずだ。

秘書艦ともなれば提督とともに往う午前と午後の仕事は元より、昼と夜の食事までもが一緒である。

一心同体、始まりと終わり、アルファとオメガ。

つまるところ、そういうことなのである。

隣の猫提督が隙を狙っているらしいが、すでに同じポジションには多摩がいる。

好敵手になりえないだろうがあまり隙は見せられない。

これから多摩のサクセスストーリーが始まるにや！

無駄かつ流麗な仕草で扉を開いた。

多摩が目にしたのは姉の「球磨だクマ」と妹の「木曾だキソ」に提督の膝を奪われて
いるという光景だった。

「くまあああああああああつあああ!!!」

にやすらも忘れた多摩の絶叫が響き渡った。

10時00分 多摩

姉妹による侵攻作戦によって安住の地を奪われかけた多摩だったが、必死の交渉（涙目で威嚇）によってなんとか防衛に成功した。

姉の「球磨ダクマ」や妹の「木曾ダキソ」には彼女らの秘書艦の際にやり返そうと密かに決意した。

多摩も気づいている。

やってやられてを繰り返しているだけだということに。

自分の尾に噛みつこうとその場を走り回る犬にも似た行いであったが、それすらも姉妹間のコミュニケーションだった。

日常で感じる小さな違和感、それを埋めるための代償行為。

小さく、だがはつきりと存在するそれは、多摩の胸を空しさとなって何度も打つのだ。それでも何時か昔のように、そう夢見て多摩は……。

11時00分 多摩

秘書艦の仕事はいろいろとあるが、書類仕事で一番重要なのは提督に次の書類を渡すことだ。

超速で乱舞しているペンの邪魔をせずに次の書類を出す。

まるでわんこ蕎麦のようである。

多摩は猫なのに仕事はわんこ、これ如何に。

基本的に書類仕事は毎日同じようなもの。

書類の枚数と終了した際のタイムを割ることで一枚に費やした時間を算出し、提督とのコンビネーションを競い合っていたりいなかつたり。

最速は……と考えていると提督の仕事は終わつたらしい。

中佐が書類によつて埋もれていたが、多摩には関係ないことである。

ときどき、提督が中佐の手伝いを募集していることもある。

対価は一日分の休暇であるが、かなり人気である。

誰も好き好んで中佐に近寄りたくない和多摩は考えているし、概ねその意見で正しい。

あとは中佐があまりにも空気が読めないので過去のことを思い出して砲撃したくなるからとか魚雷を放ちたくなるからとか、多々ある。

だがしかし、そこに執務室で提督と二人で朝食を摂るといふ権利が付随するうえに、中佐付きとはいえ同じ執務室で仕事を行うことができるという。

これはもう、当然のごとく狂気のデスマッチが展開される。

ただ、物理では怒られるのでくじ引きがほとんどである。

何が狂気のデスマッチかといえ、間宮のアイスクリームを対価に交換を強請る連中が現れるためである。

半端ない。

それはもう、半端ない。

秘書艦の0.5〜0.8倍、時には1.5倍にまで跳ね上がるという驚異のレートである。

それでも交代してもらえる機会は少ないのだからその価値はわかっていただけだろう。

中佐の机に溜まった書類を見て、徐々に近づきつつある戦争にアイスクリーム引き換え券の貯蔵は十分だったろうかと多摩は身震いを起こした。

寒くて震えているのかと勘違いした提督が多摩を膝上に乗せたり、猫を相手にするよきにゆつくりと撫でたりとあつて、多摩は午前中の秘書艦を大いに満足して終えた。

12時00分 皐月

「まっかせてよ！ 司令官！」と皐月は小さい体でアピールしながら昼食を運んでいく。

艦隊のローカルルールとして駆逐艦は昼食を司令官に運び、隣に座ることができる。

秘書艦と配膳の駆逐艦が優先して司令官の近くに座り、残りの席は任務のない艦娘でローテーションである。

中佐？ 誰それ、とばかりに席が埋まっていく。

たぶん、今日も中佐は執務室で終わらない書類仕事を片付けながら昼ごはんを食べるのだろう。

中佐にとつてブラックな勤務形態に見えるが、9時から17時で仕事は終わるので意外とホワイトである。

そもそも昼休憩もあるのだが、仕事が終わらないので昼食中も続けているだけだ。

中佐が真面目か不真面目かで言えば頗る真面目だし、善人か悪人かでいえばどっちでもない。

まあ、そういう人間なのだが、臯月にはどうでもよかった。

そもそもこの艦隊の駆逐艦は、中佐に関する記憶に蓋をしてシャットアウトしているレベルだ。

悪しき記憶は忘れるのが一番である。

多摩が提督にねだって食べさせてもらっているのを見て、同じように臯月もお願いする。

後ろでぐぬぬ、と歯噛みしている空母級のことなど意識の外であった。

最初から最後まで、皐月を執心させたのは提督だけだった。

中佐など存在すらも忘れ、他の艦娘との遊びよりも、提督が一番であった。

「……………これからもまかせてよね」

食事が終わり、爛々と輝いていた皐月の瞳はどろりと濁っていた。

そして、廊下で出会った提督に無造作に頭を撫でられて翌日まで瞳は輝いてた。

というかキラキラ状態である。

なんだかんだいって彼女も駆逐艦だった。

13時00分 多摩

他艦隊への挨拶で、多摩は見た。

自らの提督ではない、他の艦隊を指揮する提督が空を飛んで光線を撃ちまくる姿を。

改めて艦娘が必要のない提督が多い気がした。

多摩の手を借りる程でもない……………にや。なんて感想を持つたり持たなかつたり。

提督との話では、いろいろな規定や資源の関係で戦うことができな提督ばかりらし

い。

倒せないと言わないのが怖さを煽る。

多摩の提督は水中が苦手で艦娘を信頼しているというのがわかってる。

だから安心して指揮に従えるし、提督の混じりっ気ない信頼を受ける心地よさも知っている。

ただ、提督自らが戦える艦隊はどうなのだろうか。

内心でどう思っているのかわからないので不満に感じているのではないかと疑心暗鬼に陥る可能性もあるだろう。

中佐のように個々人を認めないようなことになるかもしれない。

そう考えると……そこまで思考が勝手に奔ったが、無理やり止める。

多摩は満足しているのだ。

今を楽しむそれだけだ。にや。

14時00分 大井

提督のハイパーお悩み相談タイムがやってきた。

艦娘の精神ケアを目的としているとの話で、悩みを持った艦娘が提督に心を吐露する絶好の機会である。

14時は重度の悩みを抱えた艦娘専用である。

どのラインから重度かは不明だが、ふざけた内容では決して近寄ることのできない空気を醸し出している。

全く大丈夫じゃない榛名事件、ギロチン雷事件、クローン五十鈴事件、取り換えっこ龍田事件、といった重度の相談を解決したことから、必要とした艦娘のみが訪れるようになった。

15時以降は軽度、というか提督と話したい艦娘用に開いている感じである。

先客がないことを確認し軽くノックの後、入室を促された大井が足を踏み入れた。一番初めの相談者だった。

相談中も秘書艦はいるが、中佐はいない。

中でのことは他言無用、秘書艦も休憩として出て行つてもいいという話だが、結局ほとんどの秘書艦は提督の隣や膝上に座って作業や寝ていたりする。

大井の悩み、それは艦隊の仲間である「北上」と仲良くなれないことであった。

他の提督の指揮にいろいろある二人は百合の花が咲き乱れる勢いであるが、この艦隊ではそんな花は枯れ落ちたという具合である。

駆逐艦を中心に他の艦とも深く仲のいい北上、同じ様にいろいろな艦と交流を深める大井。

ただ、その二人に関しては全く交流が無かった。

原因は単純、大井にとっての「北上さん」ではなく、北上にとっての「大井っち」ではないからだ。

北上にとつての「大井っち」はすでに沈んだ。

そして、大井にとつての「北上さん」は供に深海棲艦に沈められて、大井だけが引き揚げられて今に至るのだ。

互いに顔を合わせればツライことばかり思い出す。

提督はその辺りをうまく配慮して艦隊を運営しているが、その好意に甘え続けるわけにはと思った大井は相談しに扉を叩いたのだ。

こういった問題はこの艦隊には少くない。

姉妹艦や仲の良い艦が何度も沈んだことで心が折れ、交流を絶った艦娘も少なくない。

目の前で轟沈や解体を繰り返し、明日は我が身ともなっていた艦隊だ。

今なお仲良くななど、限りなく難しい。

今日、秘書艦をやっている多摩たちも失意を乗り越えて、なんとか垣根を取り除く努力を繰り返している。

それがいつ花咲くのか。

実ることがないとしても、枯れないように支えるために提督はいるのかもしれない。

何も解決することはなかった。

提督は話を聞いて、大井がなんでも言いやすい誘導するだけだった。

多摩も寝ていたのか、身動き一つなく静かだった

提督は解決を急ぐ気はなく、大井もただ心情を吐露したいだけだったのかもしれない。

いつか実ることを期待しているのか、今はすべてを時に委ねることを選んだ。

15時00分 提督

言葉も重大な要因を持っているが、時には何も言わないことも重要なんだ（キリッ

まあ、問題の先送りに近い。

何とか大井や悩んでいるかんむすたちの力になりたいと考えているわけだが、かなり難しい。

そもそも高校の途中から提督になった俺に何ができると思っているのかと大本営に問い詰めてみたい。

今日だって元気のない曙の食事を手伝うとか寒がっていた多摩に上着をかけて撫でるくらいしかできなかつたし。

マジで難しい。

大井たちの悩みを完全に理解できない俺には、そもそも解決するなど夢のまた夢というやつだ。

俺には同じ顔に見えるが、同じ顔をした艦娘はいないらしい。

俺たちが犬猫の判別が付かないことに近いようだ。

彼女らは俺たちを見分けることができる、しかし俺たちにはできない。

不誠実な話で嫌になる。

こういった話は多く、人間と艦娘が異なるのだとハッとさせられる。

彼女らの轟沈や解体による別れとはどのようなものか、きつと理解できることはこの

先もないだろう。

事象としては近しい人間の死に酷似していると思っていたが、話を聞いていると艦

（ふね）であったときのことと臍気にリフレインされるようだ。

オリジナルに近い艦娘ほど記憶は鮮明という話だが、彼女らにも最期が残っているのだ。

二度、三度と繰り返される死別と再会とは一体……。

責任だけ取つてればいい、なんて時間は終わったことは理解している。

そして、悩んでいる姿は見せない。

見せることができない。

見習いでも俺は提督だから。

なんてことを考えながらもそれを表には億尾も出さず、執務室に流れ込むかんむすたちを相手していく。

15時以降はお遊びゴールデンタイムのようだ。

駆逐艦に混じって飛び込んできていた赤城の細い腰を支え、子供をあやす様に高い高いしてみる。

ああ、恥じらう顔も可愛いなあ!!

17時00分 多摩

入浴時間は自由となつてているが、17時から19時までには日替わりで提督に髪の手入れを手伝ってもらえる。

多摩も経験がある——というか順番のたびに参加しているので皆勤だ——が、可能ならば毎日でもお願いしたいと思わせるほどだった。

以前、希望者を片っ端から手入れた結果、短い時間と半端な作業になつてしまつて不満を持つたらしい、提督が。

なので髪の毛の長さやそれぞれに与えられる時間が均等になるように真面目に割り振ったとは提督の話。

短い時間に片手間でもいいので毎日やってもらいと思うが、やはりじっくりと手入れしてもらおうのも捨てがたい。

究極の二択を前にした艦娘たちによって論争を繰り広げられることも多々ある。

ちなみに多摩はじっくり派であった。

他の艦娘が幸せそうに毛づくろいしてもらおう姿を眺めることになるのが、秘書艦の欠点かもしれない。

秘書艦と手入れを同時期にするよう間宮券を解放するべきだったかと己の失態に多摩は内心で臍を噛んだ。

18時30分 提督

夕飯である。

髪の毛の手入れを手伝ったかんむすたちがぞろぞろと付いてきて、一緒に席についた。

まあ、いつもの流れなので問題ない。

夕食だというのに膝上で寛いでいる多摩を一撫でして、配膳を待つ。

勝手に持ってきたら泣かれたことがあった……伊勢に。

伊勢は装備換装がガチガチだから、普段はより華奢に見えて泣かれると胸を撃たれるようだった。

日向・伊勢の装備もすごいが、扶桑姉妹もすごい。というかヤバイ。

どうしてそうなったんだ感が半端ない。

初見では、あ艦これ状態になる。

あとは今日の髪の手入れだが、なかなか満足のいく結果だった。

最上と初春をローテーションに組み込むことによって、安定感と満足感を同時に満たすことができた。

短めの髪は滑らせて楽しむこともできたし、長い髪を束にして指から流すことで奥深さも感じる事ができた。

やはり二日完徹するほど全力で取り組んでよかったと思わされたね。俺に間違いはない。

あと湯上りは最上が素晴らしかった。

健康的な容姿を、火照った肌の支援によって魅力が数倍にも引き上げられる。普段から可愛い、それすらも魅力の足しになる。

やはりボクっ子は無敵かもしれんな……。

20時30分 中佐

だ、誰もいないんですけど……。

21時00分 古鷹

就寝準備を済ませると来客を知らせるノックの音。

同室の加古はまだ寝るには早いと消灯まで他の部屋で遊んでいる。

なら当然、開いた扉の先には待ちわびた提督の姿。

部屋には入ることなく一言二言の挨拶をして別れる。

一日の始まりも終わりの締めも提督との会話であり、ほっこりとした気分で古鷹は眠りについた。

22時00分 多摩

秘書艦の業務も無事終わった。

提督に部屋まで送ってもらい、一日よく頑張ったなどお褒めの言葉とともに提督から優しく撫でられる。

それが一層寂莫感を強める。

帰っていく提督の背を見えなくなるまで視線で追い続け、部屋に戻る。未だに違和感のある姉妹が迎えてくれる。

今はまだ難しいけれど、いつか昔のように戻れるのだろうか。

前のように失うことが無いのだと思うと少しだけ前向きになれる気がした。

22時30分 提督

22時から22時30分までに寝るかんむすに夜の挨拶をしてから執務室へ。消灯はもつと先だが、夜番もいるから安心して寝付くことができる。

布団から甘い匂いが……たぶん、鳳翔の香りが付いたのだろうか。

結構強く付いている気がしないでもない。

まあ、干してくれるかんむすの香りがいつもするので、付きやすいのだろう。よくわからんが。

ちよつと干して膨らんだせいか枕に違和感を感じるが、そのうち慣れるし。おやすみー。

提督（本物） 3

北上の朝は、そんなに早くない。

7時 私密

その時、北上は甘い微睡の住人であった。

普段であれば6時には目覚めている。

決して寝坊でもなければサボりでもない。

全身からダウナー100%を凝縮してまろみ出す彼女であるが、任務に関しては真摯であった。

提督に任された任務を放棄するようなことになるくらいなら、彼女は徹夜するほどに真面目だ。

今、普段よりも長く眠っているのは前日までの戦闘の貢を認められ、提督の好意によつてよく休むようにと与えられた休日のためである。

提督に与えられたものならば存分に享受しなければならぬ、北上は真剣にそう考え

ている。

あの無能が中佐に降格を言い渡され、指揮系統が愛すべき提督に変わってから体制が大きく変化した。

前線のラインが下がり、他の艦隊との交流も増えた。

ゆつくりとご飯を食べる時間もあるし、夜だつて数人の哨戒を除いて誰もが眠ることを許されている。

前日に挨拶を交わした同僚と、翌日も挨拶できる何気ない日常を送れるようになった。

夜の海に出て、翌日には駆逐艦が居なくなるような激務は無くなった。

艦娘が消耗品のように連続して作戦に投入されることもなくなったし、今の北上のように余裕を作り出して休日を得られるようにすらなつた。

現状を作り出した提督は、この鎮守府内で誰よりも尊い。

提督が来るまでに、この世界に彼女が建造されてから一体何連続勤務したことか。50から先は数えていない。

同時に沈んでいった仲間の数も数えていない。

親密な仲間から沈んだから、数えるほどの余裕など一切なかつた。

ただ、地獄の日々を互いの身を寄せ合つて過ごしていた、半身のような大井が沈んだ

あの時は心が冷えるようだった。

そして、新たな「大井」を用意した狂気すら感じる笑顔の中佐の姿に、人間との溝に、強い恐怖を覚えた。

そんな余裕なき日々によって作戦領域を広げ続ける記憶など、すべて忘れてしまいたい過去でしかなかった。

眠気でとろけた思考を巡らせてみたが、建造されてから最初の10日、いや1週間ほどはまともだったことを思い出した。

むしろ、それしかまともでは無かったとしか表現できない。

だからこそ、この微睡は幸せの象徴であった。

提督が中佐のように変わってしまったら、ふと抱いてしまった恐怖を忘れるように……。

ぬくもった布団と二度寝に突入しつつある陶醉感。

「起きるのおつそーいー！」

そこから呼び起される不快さは、マジで半端なかった。

彼女の腹部に遠慮なく飛び乗った速さ至上主義のマツハ痴女に苛立ちを隠せない。

ウエイトはないがスピードの乗った痴女自慢の一撃は、手元に装備があつたらご自慢の魚雷で消し飛ばすレベルであった。

だから駆逐艦はうざいだ。
すぐに懐き、甘え、私を置いていなくなる。

「……あのね、私は今日、休みなわけ。わかる?」

「おう!」

「いつまで寝ても許される。昼まででもね。私の提督もそうするようにと云つてくれたの、わかる?」

「おう!」

わかつているのか、いないのか。

枕もとに立って無邪気な返事を返す艦体でも上位の痴女、島風。

目がしばしばしてツライ。

北上の気分はあの優しい提督の前で片膝をつきながら「提督、ほんとに寝たいです……」状態である。

完全に思考が正しく巡っていないのがわかっていただけだろうか。

「だからね、わかる? 私の言いたいこと」

頼む、聞き分けてくれ。

または誰かコイツに聞き分けさせてくれ。

いまはすぐく眠いんだ……、などと北上は無駄に必至だ。

昼まで悠長に眠るなど休日にはかできない。

提督に頼めば昼寝くらい余裕だが、そうすることによって提督と接する時間が減る可能性が高い。

愛すべき提督にそうするようにと言われた遅寝は至高なのだ。

大井つちを失った北上の抛り所は、一寸の隙なく提督へと向いている。

今日は食事の席が、一人前のレディ候補やナスは嫌いなので系駆逐艦が周りを囲み、食事中に提督を見つめられる特等席は一航戦の誇りを始めとしたメンバーが鎧袖一触とばかりに近場から埋めているので座れないこともあつて、提督の言に従ってスヤアな気分なのだ。

秘書艦となる明日から本気出す所存でござる。

大井つち、私を導いてくれ。

北上、今は亡き大井つちに祈る。

大井との思い出を回想したらシリアス100%、ぶつちやけシスのダークサイドへと陥る。

「代わりを用意できたから明日からまた頑張れ」などと愚かな言葉を過去に吐いた中佐など首すぱーんで、残りは夜の海にどぼーん、提督ちゅつちゅである。

が、寝ぼけた思考にシリアスは皆無。
すべては夢のまた夢である。

「ワタシ、ネムイ。キヨウ、キユウジツ」

「おう！」

限界を超えて片言となったが、真剣な返事が聞こえた。
祈りは届いたのだ。

いま、ここに奇跡が成った……！

提督、ありがとう。

大井つち、ありがとう。

そして、すべての艦娘にありがとう、提督愛している。
ウオーターと叫びたい気分であったが眠気が勝った。

それではおやすみでござる。

「北上ちゃん、おきてよ！ もう7時だよ！ 起きるのおつそーい！」
30秒後、耳元で鳴り響くぜかましヴォイス再び。

悲劇と言えるだろう、祈りは全く届かなかった。

北上が寝ぼけた脳内で島風に激おこぶんぶん。

さつき「おう！」って言ったじゃないか。

肯定の返事じゃなかったのか。

ただの鳴き声か。

ぜかましの鳴き声だとも言うのか。

おうおうオットセイか貴様。

「私なんてもう食べ終わつたんだから！ 提督が納豆をねりねりしている間にだよ!？」

次は北上ちゃんの番なんだから！」

食べ終わつたら任務の準備でもしていればいい。

提督の納豆ねりねりとかなにそれ可愛い、それだけでも見れば良かった。

というか、次は私の番とはどういうことだ。

もう北上さんの脳内は、眠気とぜかましショックによって混沌としている。

理性などない野獣と化した。

「わたしはさー、きゆうじつだっけっていったでしょ？ ほんとにもー、ほんとにもー」

「いひやいいひやい！」

野獣と化した北上！ ぜかましを狩る！

自動操縦によって勝手に動く北上の両手。

理不尽な暴力が島風のほっぺを襲う！

「くちくかん、うざーい」

限界まで島風の頬を引っ張りつつ、北上は呟いた。

いなくならない駆逐艦は嫌いじゃない、うざいだけだ。

ぼやけた頭で、そう考えた。

7時15分 食堂

寝ぼけ眼の北上は、島風に引っ張られるように食堂へと連行された。

あの後も二度三度と繰り返し、島風は漸く北上を連れ出せたのだ。

提督の配慮による北上の遅寝と、島風が北上を起こしたいという気持ちの争いだっ
た。

当然ながら提督の配慮のほうが圧倒的に優先されたため、相応の苦労があった。

その苦労とは、これから食堂に行く艦娘たちの視線の先にある、島風の両頬に向けら
れていた。

赤く腫れたりんごのような頬。

名誉の負傷である。

島風のためにもう一度言おう、名誉の負傷である。

りんごちゃん化だけで提督の言葉を突破した島風だ、その働きは他の艦娘が知れば戦慄するに違いない。

まあ、その負傷も掃除している最中に腫れを心配した提督にさわさわふにふにされる運命という労災保険的なサムシングが降りるので問題ない。

それを見た金剛と榛名が仁義なき大丈夫です張り手バトルを起こしたりするが、やはり問題ないのだ。

「じゅーらーいそーじゅんよーかん、きたかみ、しゅつげきします……」

何故だか北上は出撃することを提督に告げていた。

休日なのに起こされ続けたことで「実は任務があるのではないか」と勘違いしたせいである。

つまり、まだ寝ぼけているのだ。

寝ぼけた北上を前に、首を傾げながらも提督が「いつも期待しているぞ」と一言。北上、その言葉に覚醒。

何度も提督の声が脳内をリフレインし、麻薬のように覚醒した思考を溶かす。

へにやりとした笑みが零れる。
が、全く隠さない。

むしろ見せびらかす。

提督は「いつも期待している」と言ったのだ。

そう、『提督』は『北上』を『いつも期待している』のだ。

提督との絆の深さを、仲間に周知する。

そのため、笑みは隠さない。

ついでに言えば提督は笑顔が好きらしいし、綺麗な瞳も好きだと言う。

古鷹や五十鈴のような瞳を持たない北上は笑顔で勝負だ。

愛すべき提督が中佐のようになるなど、寝ぼけても考えるべきではない。

さつきまでの北上は馬鹿で愚かだった。

提督はきつといつまでも提督なのだ。

寝ぼけていた愚かな北上にグツバイを告げた。

提督の言葉特化で覚醒した脳は瞬く間に今日のスケジュールを確認する。

優秀なる北上ブレインならば不可能はない。

島風に起こされたことなど記憶の彼方であり、眠気など微塵も残っていない。

算出された結果は「昼まで睡眠、昼食、再び睡眠、夕食、そして睡眠」であった。

なんだこれは……。

提督に休むように言われただけで、この体たらく。

どう見てもただの怠けだ。

こんな錆びつくような休日を送って明日は秘書艦として提督の信頼を一身に受けようとしていたのか。

北上は非常に困惑し、そして激怒した。

提督から秘書艦として求められているのは、体力温存を考えるような守備に凝り固まった北上ではなく、攻めの北上であると。

期待に応えることのできる北上こそが至上なのだ。

北上は逡巡する。

明日へのベストな自分を。

いつだって想像するのは最強の自分だ。

大井が欠けた今、己の力のみで打破するしかない。

今の「大井」は北上と同じ獲物を狙う相手、いかなればハブとマングース、メロンシロップにブルーハワイ、きのこたけのこ戦争である。

提督に関しては高速の如く働く思考、まさにクロックアップだ。

世界が強い粘度を持ったようにゆっくりと動く。

その中で一人、北上は天啓を閃かせた。

——魚雷しかねえ！

至れば速い。

速いこと、北上の如しだ。

北上は思いのままに駆け出した。

行動の理由に提督が付けば、いつだって北上は無敵だ。

通り際に撥ねた島風が「おう!？」と変な声を漏らしていたが、置き去りにした。

原作：デビルサバイバー2 生きるとは変わりつつけること_日月

— 1 —

俺の人生、何が起こるかわからないものだ。

模試が怠くてサボったのだが、ゲーセンの余韻を味わうために一人で公園を徘徊している最中に地震が起きてヤバイ。

マジやばい。

超やばいでござる。

とりあえずスマートフォンで状況確認。

出たばかりなのでスマホを持っていてる人をあまり見ない少数派である。

回線が混雑しているらしく、どうにも上手く繋がらない。

まあ、普段から糞電波なのだが。

悩んでいるとメールが届く。

どうやらニカイアからのメールのようだ。

ニカイアは死に顔が見られるとか眉唾な噂が流れるサイトだが、嫌な予感しかな

い。

こんな状況でもメールが届くとか怪しい、怪し過ぎて手を出したくない。

が、見ちゃう。

動画が再生される。

そこに映し出されたのは俺の友人が死ぬ姿だった。

——憂鬱の日曜日——

街のあちらこちらから騒音が聞こえる。

悲鳴だったり、建物が崩れる音だったり、俺の高鳴る心音だったりと色々だ。

イラつきながらも雑音を意識の外へ追いやり、思い出すのはさっきの動画。

ウサミミフードとモジャ髪が特徴の友人、ヒロが血を流して死んでいる姿だった。

何度か再生して情報を集める。

我がスマホのマスコットである貧乳少女バニーなテイコと話しながら分析を進める。

どこかわからないが電車が倒れていて薄暗いので地下鉄っぽい。

電車に乗ってトンネル入ってちようど死にましたとかないだろう、死体とそれを巻

き込んだ電車が映っていたしホームっぽい。

模試は午前だけで終わりで遊びにいくとかメールで聞いたので東京のどこかだろう。さっきの地震の影響で電車が脱線してヒロ死亡とか有り得そうだ。

つまり、すでに死んでいるとか……。

いや、無い。

きつと、無い。

ありえるわけがない。

あいつが死ぬわけがない。

まあ、わかっているけど確認のために探さないと。

時間とかわかんないし、死ぬのが明日の可能性だつてある。

今日の行動方針はヒロと接触で決まりだ。

……し、死んでないよな？

よし、行くぞと気合を入れたらスマホが輝いて棍棒を片手に持った犬が現れた。

あれか、ゼロの使い魔的なやつか。

なるほど、やつがガンダールブ——ガンダールヴだっけ？——なら俺の命令に従うはずだ。

ちよつと命令してみようと思った瞬間、棍棒で殴り掛かられた。

甘いぜ、畜生程度の攻撃なら俺の鞆で防いでみせる!!

中身がスカスカなので防御力がいまいちだが受け流すことに成功した。

まさか主人に逆らうとは忠誠心がなくなってないな。

身体が軽い、こんな気持ちで戦うのはじめて……と調教に向けての心構え。

もう何もこわくない!!

キリツと一人でキメ顔しながらドロップキックの後には棍棒を奪って頭部を殴打する。

大砲は持つてないのでティロれない悔しさから殴打を続行。

犬畜生が何か叫んでいるが無視してぼっこぼこ。

まだ契約を交わしていないことに気付いたがこいつとキスするのは嫌なのでチェン

ジを狙う。

頭部が砕け散った犬がキラキラと粒子になったのを見送りながら額の汗を拭う。

あまりに熱中しすぎたせいで時間を忘れていた。

急いでスマホの時計を見る。

五分ほどしか経っていなかったのか落ち着けたが、充電が切れそうだ。

消費が激し過ぎると思ったが良く考えたら動画見まくったせいかもしれん。

ティコ的には動画とハーモナイザーのせいらしい。

ハーモナイザーとはさっきの使い魔と戦えるようになるアプリだとか。

使い魔と戦うアプリって笑えるんだけど、とかにやにやしていたが充電が本格的にヤバい。

購入しておいた大容量外部バッテリーは充電し忘れていたので空っぽである。

泣けるぜ。

アプリが使えないとさっきの使い魔……というか悪魔とまともに戦えずに死ぬかもしれんとティコがいつもの無表情を更に固くしたような能面レベルMAXで呟いた。

ピンチ到来でござる。

とりあえず俺が戦わずに使い魔にバトラせれば解決だろうと新しいのを呼ぼうとするも失敗。

ティコが呆れたようにチェンジはできないと伝えて来た。

そもそも中に入っているだけとか。

チェンジ無しで妥協しようと思ったが、無理らしい。

なぜかって？

俺がぶち殺してしまったからだよ!!

やべえ……。

ティコに悪魔との戦闘はできるだけ避ける様にと注意されている最中に電源が切れ

た。

ちよつときびしい。

そもそも時間を食っている暇はないのだと急ごうと歩き出すとイケメンに話しかけられた。

西洋人的な残念なイケメンだ。

コウモリが描かれたコートを着ているのはいいのだが、なんか身体が透けていて横たわっている。

息も絶え絶えだ。

もう死ぬんじゃないやねって感じだ。

マグネタイトというさっきの犬畜生の粒子が欲しいらしい。

気前よくあげると少しだけ様子が落ち着いた。

それでもまだ足りないので俺に助けて欲しいとか。

急いでいるので適当に返事すると透け透けイケメンが俺の中に入ってきた。

文字通り、俺の体の中の更に奥である。

決して尻では無い。

生体マグネタイトを微量ずつ吸収するとかなんとか。

安請け合いましたらイケメンと憑依合体しちゃった……。

イケメンの名前はクルースニク。

悪い吸血鬼を倒すために頑張ってたけど失敗して死にかけていたらしい。できれば手伝って欲しいと言われたが、曖昧に答えておく。

すでに身体を間借りさせているのだし、ヒコを探さないとヤバイ。

片手間でいいなら手伝うつもりではあるのだが。

クルースニクが憑依しているので悪魔との戦闘もできるし、俺の魔力を使って魔法を放つサポートをしてくれるとか。

クルースニク自身は回復に努めるためにサポート重視で、マグネタイトをできるだけ集めてくれと言われたがどうなることやら。

人の波に揉まれながら地下鉄に向かう。

地震に加えて、隕石が降ったとか無差別爆発だとかで街がヤバイ。

交通網は完全にマヒしている。

風潰しに地下鉄を探すべきだろうか。

苛立ちで考えが纏まらない。

遊ぶ場所が溢れている東京のどこを探せと……。

いや、さすがに遠回りまでしないだろうし帰り道の途中とか有り得そうだ。

帰宅とかしてたらブチ切れる。

帰りの電車に乗れる地下鉄の駅まで行って探すしかないか。

慣れてないので地理に不安が残るが混雑している表通りを割けて裏道を通る。

ぐちゃぐちゃになったスプラッタ死体が転がっていたが素通り。

おお、グロいグロい。

ヒロのこととか災害のことで感覚がマヒってる。

なんかふわふわしているのだ。

背後や空などの死角から襲撃してきた悪魔をクルースニク・レーダーで探知、撃破。

指。パツチンを合図に火の魔法、アギを使ってもらう。

リアル「ロイ・マスタング」ごっこを楽しみながら魔力に慣れる。

不思議な感覚だ。

体力とも違う、精神的な何かが削られる。

気疲れするんじゃないだろうか、これ。

ストレスが増えるとかそんな感じかもしれないが上手く説明できない。

天罰できめーん☆とばかりにぼっこぼこにする。

悪魔を見かけたら殲滅、まさに修羅である。

さすがに人間を襲ってたり、死体に群がってたりする悪魔を無視するのは無理だった。

悪魔を撃破する度に力がみなぎる☆

どうやらクルースニクが力を取り戻すついでに俺への補助が強化されてるっぽい。

悪い吸血鬼であるクドラクとの戦いに向けて俺の体を慣らしているとか。

なんか勝手に改造されてるんですけど。

徒歩で移動していたのだがあまりにも速度が遅いので悪魔が担いでいたチャリを奪った。

血塗れのそれはどう見ても持ち主がこの世から去った一品だ。

自分が壊れる最期まで主を乗せることのできなかつた無念が籠っているのだろう、サドルが俺に座れと言っている。

いいぜ、おまえの望みを叶えてやんよ!!

クルースニク・パワーを自転車に宿らせるイメージ。

俺くらいのシャーマンになるとオーバーソウルくらいできる。

路地裏にたむろっている悪魔を轢きながら走る。

ママチャリとは思えない威力で爆走する。

もしかしたら俺はナイト・オブ・オーナーが使えるのではないだろうか。

チャリが宝具つてどうなんよ、ださくね。

でも、チャリだしライダー的な要素な気がする。

ちなみに俺は第五次ライダー派な。

なんて無駄なことを考えながらチャリで走っているが悪魔がやたらという。

そして無残な死体も転がっている。

路地裏は地獄だぜえ……。

路地裏を抜けてすぐにクルースニク・レーダーに反応があつた。

宿敵・クドラクが近くにいらっしゃるらしく騒いでいる。

クルースニクが示す道は所々穴が空いていたり、建物が塞いでいたりと考えられないような悪路だった。

そんな絶体絶命都市シリーズに出てきそうな道路をママチャリで駆け抜ける。

飛んだり、跳ねたり、ビルの壁面を走ったり、悪魔を踏み台にしたりで突破した。

その先の広い場所にたどり着くと銀髪をカールにした顔色の悪いオッサンが宙に浮いていた。

顔色の悪いというか、もうゾンビとかそんなレベル。

とりあえず華麗に撃破してヒコ探索に専念させてもらおうか!!とクドラクに正面か

らチャリをぶち込んだ。

氷魔法のブフで凍ったチャリから飛び降りて指パッチン。

アギで銀髪を焼こうとしたがブフで防がれた。

銀髪は美少女と決まっているのだ、クドラクは禿げろ。

クルースニクの見立てだと消耗は同じくらいだが、こちらのほうが俺のおかげで回復しているの有利っぽい。

ただ、戦闘経験は向こうが上なので油断はできない。

ブフが飛んでくるのを近場にいた悪魔を投げつけて相殺する。

相殺できてる気がしないが走りながらテキトーに悪魔を投げつけてブフを防ぐ。

俺が走った後ろには凍結した悪魔たちが転がっているに違いない。

悪魔のストックが切れたので真面目に戦う。

指パッチン・指パッチン・指パッチン……。

アギを放ってブフと相殺させる簡単なお仕事です。

千日手状態を維持しつつクドラクにバレないように距離を詰める。

そして凍った悪魔を拾ってブフの射線上に放る。

ブフが二重にかかちがちがちに凍結した悪魔が落下して砕け散った。

それと同時にクルースニクに指示して溜めておいた炎魔法を放つ。

クドラクもブフで対応するが、簡単に蒸発するだけだった。

アギだと思った？ 残念、アギダインをちゃんでした!!

驚愕しながら炎に包まれたクドラクを確認してからすぐに走り出す。

最大威力のダイン級を使ったのでヤバイ、なんかよくわかんないけどヤバイ。

ヤバいつつうか超ヤバイ。

魔力も空っぽだ。

いや、アギくらいなら一度か二度いけるかもしれない。

わかんね、ちよつと余裕ない。

魔力切れるとヤバいつてことだけわかった。

クルースニクが生体マグネタイトが減つてるとかなんとか。

生命力的なやつだろ、それ。

だいじよばないじゃないですか、やだー。

燃えて倒れていたクドラクに馬乗りになつて殴る。

クルースニクが止めるまでぼっこぼこにした。

普通だと泡吹いて髪の毛が無くなってぼろぼろのクドラクは倒せないので特殊な封

印が必要だとか。

そんな準備してないんですけど。

ホーソンスピアとか聞いたことねえし。

それが無いとダメならストレンジなジャーニーしてる異世界で戦い続けてろよ。

セイヨウサンザシで作った杭？

あるわけない。

セイヨウサンザシとか聞いたことすらない。

ぺんぺん草じゃダメか？

……ダメでござるか。

足の腱を切って埋葬？

早く言えよ。

テキトーに足をちぎって埋めればいいんでしょ、いけるいける。

よし、やるかと気合を入れたらダイチが物凄い速さで駆けて行き、その後をヒロや新田が走り去っていく姿が見えた。

声をかけようと口を開けた瞬間、凄まじい砂嵐で口の中が素敵なことになった。

なんぞこれえ……と唾を吐いていると徐々に視界が晴れていく。

そこにはコーンアイスとか、アイスクリームコーンとか、そんな感じの何か
がふわふわと浮いていた。

まあ、コーンの上にあるのはアイスというよりもスカスカのピンクスポンジって感じ

だが。

脳みそに見えなくもない。

路地裏に散らばってた脳よりも綺麗だ、うん。

アイスクリームコーンは得体の知れない何かだとかクルースニクが警戒している。

悪魔とも違うらしい。

めんどくせー。

石を投げつけてみるが弾かれた。

アギも同様の結果だった。

届いてない感じがなんとも言えない。

まさかあれはATフィールドか……？

初めてみただ、ATフィールド。

つまりあの脳アイスは使徒だということのか。

エヴァないんだだけ。

人類敗北の予感。

アダムがどこにあるのかは知らんけど。

そもそもネルフっぽい組織があるんだろうか。

あっても俺の歳だと乗れないだろうな……。

呆けていると脳アイスが徐々に膨らんでいる。

『K r e s n i k』が逃走を提案、『O R E』によって承認されました。
全力で走って逃げる。

だつて脳アイスが浮いている辺りの地面が抉れてるし、なんかヤバいに違いない。
クルースニクの補助を脚力に回して逃げる。

爆発の余波に背中を押されながら風になることしか俺にはできなかつた。
クドラクを置きっぱにしたのを忘れてた。

木端微塵になつたかもしれん。

とりあえず今日はヒロの生存を確認できたので良しとしよう。

オレンジに染まった空の下で自分を納得させてみた。

できれば合流したいものだが連絡ひとつ取れないのでは厳しい。

そのうち会えるだろうし。

……無理かもしれない、東京って広いし。

ダイチはいいとして新田といたのがよくわからない。

仲良かったのだろうか。

暗くなる前に拠点で寝る場所が欲しい。

避難所なら人がたくさんいそうだけど、どこだかわかんね。

そもそも脳アイスがドツカンドツカンやったせいかこころ辺に人がいないっぽい。

折角なので入口が荒れてぐちゃぐちゃになったホームセンターを探索する。

入ってすぐに奇抜な現代アートと化した死体と悪魔の群れに遭遇した。

鬱陶しい悪魔を駆逐してみたが色々と揃っているので一晩過ごす分にはなかなか良

さそうだ。

現代アートもあんまり気にならないのだが、俺ってヤバくね。

ちよつと人間から離れてる気がする。

クルースニクも気にならないって言ってるから大丈夫だろう、たぶん。

食い物は事務室を漁ってたらインスタント系をちよろつと見つけた。

無造作に転がっていた手動充電式のライトや乾電池が残っていたのもありがたい。

ただ、水が無いのには困った。

片手鍋とかヤカンはあるのに水がないとは。

今更だが喉の渇きを感じた。

意識すると超水飲んでえ。

暗くなった路地裏を徘徊する。

悪魔が活発化しているのかチャリるときよりも見かける数が多い。

ブフが使える悪魔を殴って氷を作らせる。

クーラーボックスを満たすくらいに集まったのを見て満足する。

飲み水も確保できそうに喜んでいたら、服の裾が軽く引つ張られた。

引つ張られた方に顔を向けると金髪少女の姿が。

保護者とはぐれて迷子になったとか。

よく生きていられたな。

いつから迷子になったかわからないがこの路地裏で今ままで過ごしていたと思うと
純粹に凄いのので褒めてから連れて帰る。

なんか誘拐犯っぽいけど疚しい気持ちは一切ない。

俺は紳士だからね。

アギで水を溶かし、店内を漁って見つけた携帯浄水器に水を通す。

そしてその水を煮沸してインスタント食品に入れて三分待つ。

その間に飲み水を用意したが、ペットボトルがない。

まあ、水筒を見つけたので解決したが。

しかも安心の魔法瓶だ。

金髪少女の様子はというと特に不安も無さそうだ。

俺が作業している姿を楽しそうに眺めていた。

脳天気というかネジが外れているというか……ちよつと親近感が湧いた。

店内からいろいろと持ち出して入口をバリケードで封鎖している最中に一番のお気に入りには現代アート（死体）だと笑顔で言われてから将来が心配になったけど。

インスタント食品を食いながら話す。

金髪少女は箸を使ったことが無いらしく、割り箸に苦戦していた。

ちよつと面白かったけど涙目になってきて可哀相だったので持ち方を教えてみた。

苦戦しながらもなんとか食べられたようだ。

食べ終わって寝袋を用意しながら金髪少女の名前を教えてもらった。

アリスという名前らしい。

確かに似合っている。

それ以外無いのではないかと思えるほどだ。

不思議の国にいそうだし。

俺と友達になりたいと言われたのもちろんだと即答。

何が楽しいのかニコニコと笑っている。

鉄面皮バニー少女ティコとかアリスのせいでロリコンに目覚めそうだ。

クルースニクがずっと黙っているのが気になった。

とりあえず乾電池でスマホの充電ができたので明日にはフル充電だろう、なんか安心した。

寝袋に包まりながら思いを馳せる、明日からどうなるのだろうか。

— 2

アリスに強く揺すられたので目が覚めてしまった。

寝袋を使ってみたが、思ったよりも疲れが取れていた。

充電を終えたスマホの電源を点けてみたらティコが凄まじい剣幕で画面いっぱい近づいてきた。

ニカイア上に俺の死に顔動画がたくさん生成されていたとか。

それでも俺は生きていたのだから、死亡フラグを沢山立てれば生存フラグに繋がるみたいなものだろうか。

または死に顔動画は当てにできないデマだとか……。

どうなのだろうか。

テイコをなだめつつ時間を確認しようと時計を見るとが数字が文字化けしていた。悪魔系のアプリによる誤作動だとか。

スマホはこれだから……。

これではどうしようもないと困っていると、テイコが形容し難い歪な時計盤を持つてきた。

影時間になると砕けるとかなんとか、よくわからんが時計としても機能するから大丈夫らしい。

時間は朝の五時よりも少し前くらい。

早起きってレベルじゃない。

普段ならば健全な高校生の俺はもつと遅くまで寝ているはずなのだが、アリスに促されて活動を始めた。

ちなみにペルソナは使えないし、シャドウも存在しない模様。

ペルソナとかシャドウとかなにそれって感じだけど。

——激動の月曜日——

朝っぱらから気が滅入る。

路地裏に蔓延る悪魔が増えていく気がするからだ。

スマホの充電が切れるのは勘弁したいのでハーモナイザーなどのアプリを使わずにクルースニクの補助で乗り切る。

乗り切っているのだが、なぜかテイコが不機嫌になっていく。

悪魔との親和性が高すぎて力を使う度に魔人に近づいているらしい。

俺から生成される生体マグネタイトを分け与えているために魂への癒着が進行、そのうち浸食が同化が起きると断言された。

精神も混ざっていくから人間よりも悪魔寄りの思考になってしまおうとも。

そいつは……ダメなのだろうか。

「どうでもいい」とテイコに伝えたら呆れられた。

アリスの目が凄くキラキラしていたのでちよつと怖かった。

できればヒロと合流したいと今でも考えているが、昨日ほどの焦りはない。

ダイチの死に顔動画とかも届いてたけど、あの健脚なら大丈夫だろ。

死んでたらその時はその時だ。

むしろ幸せかもしれない。

路地裏に転がる無残な死体を見ているとそんな気がしてくる。

アリスが鼻歌混じりに路地裏を進む。

肩から斜め掛けした自分の水筒を持って嬉しいらしい。

死体は気にならないっぽいので、俺も気にしない。

クルースニクは未だにだんまりを決め込んでいる。

死体をの損傷が激しい理由を考えていたらティコが教えてくれた。

生体マグネタイトは感情が強いと多く生成されるので恐怖や苦痛を与えて絞ったの

だろうとのことだ。

悪魔が最も重要な物質なので殺されたら全力で絞ってくるか、虫の息で生かされてタ
ンクにされるか、どちらにしても死んだ方がマシのはず。

負けたら拷問されるとかホントに路地裏は地獄だぜ。

路地裏を抜けて表通りを歩いているとアクセサリーショップを見つけた。

アリスが躊躇いなく入って行ったので俺も着いて行く。

中は荒らされた様子は無く、悪魔が倒れているだけだったので潰してとどめを刺す。

アリスが奥から上機嫌で戻って来た。

ヒランヤのネックレスを見つけたらしい。

ヒヤシンスの仲間で植物の球根を想像していたが、全然違った。

六芒星を模した物だ。

アリスは二つ持ってきたらしく、一つを俺に渡してきたので受け取ることにする。

悪魔に投げつけたら六芒星の呪縛とか発動しないだろうか……。

変な思考を振り払おうとお揃いだね、などと言って首にかけてみる。

さっきまでの子供らしさを忘れるほどにアリスは美しい微笑みを浮かべていた。

アリスが軽い足取りで進んでいく。

その速度に合わせて俺も歩く。

保護者の位置に向かって歩いていているらしい。

よく場所がわかるものだ、と内心で驚たが迷いのない歩きを見ているとどうでもよくなつた。

人をちらほらと見かけるが、道端に座ったままで瞳は死んでいる。

満足に生活できない絶望からだろうか。

でも、このままだと彼らは悪魔に殺されるかもしれない。

ここら辺は悪魔が勢力を伸ばしているっぽいので危険なのだ。

注意しようかと思つたが、面倒なのでやめた。

アリスも生きられたのだし、なんだかんだで大丈夫なのかもしれない。

実はハーモナイザーを駆使してる超人だったりするのもかもしれない。

とりあえず悪魔の勢力圏での座り込みは自己責任でお願いします。

災害の影響が少ない、割かし綺麗な道までくると人が増えてきた。

誰もかれも少なからず疲労しているらしく、表情は暗い。

救助や救援もマヒしていて、警察も思う様に動けない様子だ。

そんな街中を楽しそうに歩いているアリスは奇妙なのだろう、多くの視線を感じた。人が疎らになると悪魔が増える。

面倒になって来たので放置してあつたチャリに乗り込む。

アリスを荷台に横座りさせて後ろから進行方向を指示させる。

俺の宝具と化したチャリの威力に悪魔たちは成すすべなく轢かれていった。

調子に乗って飛んだり跳ねたり壁を走ったりする三次元走法とかやったらティコにドン引きされた。

アリスには好評だった。

でも、横座りで三次元走法に耐えるとかアリスって凄くね？

怒鳴り声が聞こえたので寄り道してみる。

どうやら人間同士の争いらしいが、ドヤ顔で全員がケータイを見せつけている姿は滑稽だった。

互いに悪魔召喚アプリを使っているらしく、悪魔が続々と現れた。

そんな血みどろの戦いになりそうな混沌とした現場に一人の救世主が……!!

まあ、俺なんですけど。

横合いから第三軍として襲撃をかける。

負けたやつはケータイを破壊されているが、それだと悪魔に襲われたとき危ないんじゃないかなろうか。

まあ、持つてても人に向けて使っているから危ないんだけど。

どうしようもないね。

どうしようもないから貰おうかな、と。

他人のケータイでハーモナイザーを使えばいいんじゃないだろうかと思いついたわけ。

悪魔を片っ端から撃破していく。

チャリはアリスに任せてあるので素手だが、問題ない。

指。パツチンで炎も出すので一応はクルースニクも援護してくれているらしい。

全滅して残ったのはほぼ全てのケータイを手にした俺だけだった。

人には手加減してあるが、大人しくケータイを渡さないものだから怪我させてしまったかもしれない。

まあ、悲鳴を挙げて逃げていったので知らんけど。

ハーモナイザーを試す前にティコがスキルクラックしてくれるというので頼んでみ

る。

スキルはアプリ所有者が悪魔が持っているような技能を扱えるようになるとか。

スキルクラックはそのスキルを奪うことができるので奪って装備しないと意味がないぞ!! ってことらしい。

なんかゲームっぽいね。

普通はスキルを悪魔や人間から戦闘で奪うけど、俺のティコは管制人格的なやつなのでケータイと登録されているティコの番号があればスキルなどを片っ端から盗めるとか。

これからは人間を見かけたらケータイを盗むしかないね!!

冗談つすよ。

……たぶん。

ハーモナイザーは前のティコを追い出して俺のロリティコを登録すれば使えるっばい。

使ってみようかと思ったが、他人のケータイはなんか嫌なので止めておく。

どっかの店で良さ気なケータイでも見繕うかと思ったけどアプリがダウンロードできないかもしれない。

乾電池とバッテリーでも持ち歩けってことだろうか。

水筒とかインスタント食品とか、諸々の物品が入れてあるカバンにケータイを詰め込んでおく。

使い道があるかもしれないし。

なかったら無かったで捨てればいいんじゃないだろうか、と。

チャリで爆走しながらティコにスキルを相談してみる。

大したスキルは無かつたらしい。

アギとか耐火炎などはクルースニクがペルソナ状態の俺にはナチュラルに使えるので無意味だ。

つうかHPとかMPが上がるスキルってどんな感じなのだろうかと思ってセットしてみた。

HP上昇の活泉を付けると気っぼいのが溢れてくる。

MP上昇の魔脈が魔力をより濃く溢れてくる。

常時発動しているこの二つを同時に全力で引き出すと……

体が爆発した。q

気や魔力がクルースニクの影響で活発になってしまっている。

そして相反する二つが荒ぶって爆発が起きたとか。

そんな考察できるティコさんマジ博識。

とりあえず爆発するほどのエネルギーが生み出せるとわかつたので良しとしよう。

そのうち咸卦法ごっこができるかもしれない。

居合拳の練習しておこうかしらん……。

チャリが耐久限界を突破したようで壊れた。

消耗が思ったよりも早い俺のじゃないし、いいか。

車とか使ったらもつと凄そうだが、俺は免許を持っていない。

ダイチに運転させて轆きまくったら楽しいかも。

SLのある広場が見えてくるとアリスが駆け足になった。

俺も後を追っていくと黒と赤の紳士がいた。

——壺に封印して剣と合体させよう（提案）——

変な考えが頭に浮かんだ。

呆けているとアリスが世話になったと礼を言われ、いろいろなお香を置いて目の前か

ら幻のように消えて行った。

なんぞこれえ……。

三人が消えてすぐにニートつてたクルースニクが復帰した。

アリスがヤバすぎて喋るのを控えていたとか。

テイコもアリスと俺と一緒にいてちよつとビビっていたらしい。

何をそんなに驚いているのだと聞くと、アリスは魔人だったという衝撃の事実。

ただ、俺にはそれが凄いなのかわからないという悲しい知識不足。

俺が片足突っ込んでいる魔人とは格が違うらしい。

アリスは人でも悪魔でもない、別の何かで分霊ではない純粋な死神が一番近い。い。

で、俺は文字通り人の身で悪魔に至る状態で悪魔憑きに近い。

俺なんて粗製魔人じゃないですかー、やだー。

しかも赤と黒の紳士は魔王級で普通は魔界で権力争いとかしているレベルらしい。

なんかすごいね（小学生並の感想）

とりあえずそんな凄い存在がくれた礼が普通のお香なわけがないと焚いてみる。

罨とかそんなショボい可能性は無い、はず。

一気に全部炊いてみたが、なんだかコンピュータに宿って死の間際にまにとうまに

とう連呼したくなる。

まあ、冗談だ。

お香のおかげだろうか、なんか力がみなぎってくる。

SLの前でインスタントラーメンを食っていると顔色の悪いロンゲ兄ちゃんと目つきが険しい短髪の姉ちゃんが歩いてきた。

二人ともこんな非常時だと言うのにコスプレしていて脳天気にもほどがある。

ロンゲ兄ちゃんの名前はナオヤに違いない……勘だけど。

一般人は危ないから帰れって言われたけど、どこに行けと。

街中は先の見えない現状によるフラストレーションが溜まっているのか人間同士の諍いも起こりはじめているし、避難所は人が溢れていて拒否されるらしい。

路地裏は落ち着かないし。

奇抜なオブジェが転がってないだけこのほうがマシだと思う。

ラーメンの汁を啜ってたら悪魔がどこからか出現したので、目の前で戦闘が始まった。

火炎耐性のおかげで熱々のスープも一気飲みできる。

姉ちゃんのほうは俺を護ってくれているのだが兄ちゃんの方は無視である。

これはひどい。

強い悪魔を使役してるなら俺を護る余裕くらいあるはずだし、マジひでえ。

そして、姉ちゃんを突破してきた悪魔が俺という無垢で無力な善人に襲い掛かった

……!!

面倒なのでロンゲの方に悪魔を投げ飛ばす。

強そうなかいかい犬を使っているので問題ないだろう。

投げた悪魔が噛み殺された。

大きな悪魔を使役したら乗り物として活用できるんじゃないかって思ってたら戦闘が終了。

無言の帰れコールが痛いので立ち上がると向こうのほうから歩いてきたヒロと目が合った。

超久しぶりっすね。

ヒロ、ダイチ、新田の三人はコスプレ二人組が所属しているジプスに保護されていて、手伝いで大阪に行く途中なのだとか。

ロンゲの名前はほーついんやまとで短髪姉ちゃんはまこさここと……ではなく、さこまこと。

さこまことさんのスカート短すぎる気がするけど俺への御褒美に違いない。

まあ、新田も短いけど。

折角なので俺も大阪行きに着いて行くことにした。

ここで別れたら次いつ会えるかわからないし。

誘われてないけどヒロが口添えしたら簡単に許可された。

俺も一応戦えるし、大丈夫だろう。

展示されてたSLがスライドして現れた抜け道から降りていく。

地下にあった電車で大阪に向かうようだ。

乗り込んだら外にはさこまことさんの姿があった。

東京に留守番するとか。

これは映画だったら帰り道に悪魔に襲われて死ぬパターンじゃないだろうか。

ないか。

クルースニクがクドラクを云々と言っているけど、残念ながら却下。

俺の事情を優先しないと意味ないじゃないだろ。

脳内で言い争っていると、ヒロから生きていて驚いたと言われた。

確かにクルースニクがいなかったらどうなったかわからなかったな、と内心で呟き

ながら頷いてみる。

俺の死に顔動画がいっぱいあるので見せてくれるらしい。

正直、自分の死に見てどうすんだよ……などと思いつながらヒロのケータイを見る。

俺が体験したほぼすべての戦闘に対して死亡シーンが用意されていた。

最初のワンコロ戦までありやがるといふ親切仕様。

ティコ曰く「クルースニクとの合体イベントは想定外」とのことで俺自身は通常の間として扱われているために死に顔動画で死にまくっているとか。

もう迷惑メールの一種だろ。

ティコに他のやつらに俺のメールが届くのを止めてもらおう。

さすがにウザいだろうし。

代わりにマジでヤバそうな死に顔動画だけティコが判別して届けてくれるという有り難いお言葉を貰った。

ティコさんマジ天使。

照れた顔も超かわいいですよ。

大阪に着くまでヒロに仲間を紹介してもらった。

一般人代表であるダイチ、流されやすいおっぱいな新田、ハンチング帽なお手上げ侍のジョー、ジプスの局長をしているヤマト、卑猥なバニーガールのティコ、いろいろな

仲魔とともに大阪に乗り込むとか。

ジプスは災害が起きたときに対処する国の機関である。

つまりヤマトに媚びを売つとけば就職が決まるんじゃないや……と思つたけどあんな崩壊した世界で仕事つて復興作業とかだろうしヨイシヨしなくていいや。

一時間くらいで大阪に到着。

たぶん、一直線だから超速かつたんだろ

あとは電車がリニアレベルとかの可能性も微粒子レベルで存在してるし。

大阪のジプスで案内役として現れたのはヤンチャボーイだった。

この時期に短パンつて凄く根性がある……のだろうか？

とりあえずシャワーが浴びたい旨を伝えるとどっか行つてしまった。

ツンデレつてやつか。

男のツンデレつて嬉しくないんだけど。

可愛い男の娘なら許せたに違いない。

美女なら全面的に許す。

メールが届いたのでみんなが即チエツク。

今回のメールはさつき出会つたツンデレ・ワクイボーイの死に顔動画らしい。

俺とヤマトは微動だにせずを貫く。

というか、俺にきたワクイボーイのメールはテイコが削除したために何もできなかったのだが。

テイコさん……。

どうやらヒロパーティはワクイを助けに行くことに決めたようだ。

見逃せば殺すことが出来るというジョーの意見はなかなか興味深い。

自分の動画が見れないのが一番エゲつないポイントではないだろうか。

俺のテイコさんのおかげで自分のが見れるし、特別扱いってやつか。

他のテイコじゃなくて良かったと思う、いろいろな意味で。

ヒロたちは急いで探しに行ったので俺はヤマトとともに大阪本局へ。

シャワーが浴びたいわけで。

土地勘も無いから探しに行っても大した結果が得られない気がするんだけど、居て

も立ってもいられないってやつだろうか。

俺はワクイが死んでもいいと思ってるし、目の前で死にかけてたら助けでもいいと思ってる。

つまりシャワーのほうが優先順位は上なのだ。

たぶん、死なないんじゃないかな。

ヒロが失敗することなんてほとんどないだろうし。

シャワーを浴びて出撃!!と外に出る。

とりあえずヒロに電話をかけて居場所を確認する。

この電話はヤマトにもらったジプス専用回線が使える特別製である。

ヤマトもツンデレらしい。

ツンデレヤマトを忘却の彼方に送りつつ、現物をありがたく頂戴した。

とうとうおるるるるー……と電話を鳴らす。

突然、パパが電話にでてキャツシカードにお金を入れてあるからと伝えた後にセーブするか聞かれたらどうしようなどと思ったがそんなことは無く、普通にヒロが出た。

ゲフェスに向かっていているとか。

ゲフェス……?!

悪魔を駆逐しながら練り歩く。

裏路地だけでなく人気の少ない表通りにも悪魔を見かける。

これが大阪だけなのか、東京でもそうなっているのか。

たぶんきつと悪魔が増えてきたってことだろう。

そしてアプリ使用者も増えてきたってことだろう。

集まった戦果（ケータイ）が少し重い。

道に迷って途方に暮れていると争っている音が聞こえたので走って向かう。

ケータイを片手にドヤ顔なやつらと無力なパンピーを守る女性が戦っていた。

ちなみに女性は卑猥な格好だった。

服というか布で大事なところを隠しているだけというか、とにかく凄い格好である。

闘うということは動くことなので、隠されたソコが見えないかと頑張ったが見えなかった。

絶対領域というやつだろう、CERO：Bには負けるわ。

見ているだけでは変質者なので女性に加勢しようとするヒロたちも現れた。

ゲフェス（？）とかいうやつか帰りでかなり疲れているらしい。

悪魔が開催する夏コミみたいなイベントがあったのだろうか。

無駄なことを考えながら悪魔を一閃。

腕にクルースニク・サポートを纏わせることで悪魔の力であるマグネタイトの吸収効率がアップするようだ。

ティコが腕の魔人化が早くなると注意を受けるが無視する。

腕だけ魔人ってかっこよくないだろうかとか別に思っただけ無いです。

真実の口に似た悪魔の口に腕を喰い千切られてロスト・アームになるもサイバネ研究所でサイバネ・アームとなり悪魔のストックが増えるイベントもカッコいいとか別に

思つて無い。

ヒロたちが悪魔と協力して戦っているのを横目に眺めながら単騎駆けする寂しさ。

俺も仲魔を集めてみようかと思つた。

魔貨なら貯まっているから使つてみればとテイコが提案してくれた。

そのうち使つてみたいものだ。

特に問題もなく戦闘終了。

女性が仲間になりたそうにこちらを見ている、という状況以外は。

女性はヒナコという名でジブスに入りたいらしい。

そんな簡単に入れるのかよと思つたのは秘密だ。

バイトよりも軽いノリだし。

とりあえず連れて行くようだ。

ヒナコはワクイが死ぬ場所を知っているようだったので道案内を頼む。

ビツクマンまで走つたが、そこにワクイの姿は無かつた。

……もう死ねばいいんじゃないかな。

ワクイ死亡まで時間が余っているとかいなとかで、こちら辺の状況を確認しようという話になった。

河川敷から眺めたが平凡な街並みは崩れ去っていた。

ところどころに破壊の余波が広がり、黒い煙が上がっている。

現実とは思えない世界がそこにあった。

それすらもどうでもいいと思える自分がいたのだけれど。

ワクイの死亡イベントが発生した。

まあ、難なく回避したわけだが。

咸卦法の練習して暴発した以外は特に問題なかった。

抑える力が少し足りないようだ。

修行とかして気と魔力の操作を万全にできれば抑える必要もないのだろうが、そんな

暇はないようだ。

ヤマトから連絡があったので大阪本局へ向かうことになった。

ヤマトから世界がヤバいって説明を受けた。

ヒロのパーティはテンパってどこかへ行ってしまった。

ヒロも探しに行ったので俺も行くべきかと思ったが止めておいた。

スマホの充電をしながらティコと会話。

大半はヤマトから貰ったケータイに悪魔召喚アプリが入っていないという糞みたいな事実へのグチである。

充電を馬鹿食いするが、ハーモナイザーはかなり有効的だ。
身体能力の上昇が半端じゃない。

常に使えるわけではないが、能力が大幅に上昇するという事実から心の余裕が持てる
というものだ。

ヒロたちが帰って来たのを見てヤマトが喋り出した。

ヤマトは龍脈を扱えるらしい。

俺も使える様にならないだろうかと練習することを心に決めた。

そんな感じで過ごしていると警報が鳴り響く。

敵が出現したとか。

ボス敵ポジションを担うらしい『メラク』が出現した。

脳アイスである『ドウベ』の親戚か何かだろうか。

『ドウベ』はヒロたちが撃破したとかで、『メラク』も倒す必要があるらしい。

ヤマトは北、ヒロは南に向かうことに決まった。

ヤマト以外はヒロのサポートと言われたが、戦力が偏りすぎではないだろうか
とヤマトの方に着いて行く。

おい、犬に騎乗するのずるくね？

見ろよこの健脚を。

俺なんて走ってんだぞ。

モンハンのハンマーにありそうなフォルムのメラクを確認。

先手必勝とばかりに真っ直ぐいつてぶつとばそうとしたらビームを喰らった。

防御した腕が凍りついてビビった。

れいとうビームかよ……。

腕に炎を纏わせて解凍する。

着実に人間離れしてきた気がしないでもない。

ヤマトがいる位置まで下がって様子見。

『メラク』の体が震えた直後、模様が分離した。

分離した『メラク』の一部が飛んできたので迎撃。

ファンネルか、ビットのような印象だ。

見た目は完全にビットだが、破壊すると爆発した。

ミサイルだ、これ。

次々に量産されるミサイルに辟易していると『メラク』がれいとうビームを撃ってきた。

ヤマトと散開して回避する

が、その先にミサイルが先回りして追撃をかけてきて鬱陶しい。

ヤマトも苛立ったのか『メラク』本体に強襲するが仲魔が一体凍らされて失敗した。徐々に『メラク』が前進、そして俺らは後退させられていた。

ヤマトが龍脈パワーで押し切るつもりっぽいが使うと怠くて動けなくなるとか。

そんな賭けに乗るのはもつとぎりぎりではないと思う。

メラクミサイルをヤマトに任せ、今日一日練習した隠し種を使ってみることにした。ハーモナイザーを起動し、活泉と魔脈を発動。

合成しつつ暴発しそうなエネルギーを無理矢理抑えこむ。

疑似的な咸卦法である。

咸卦法と言いつ張るには弱すぎるが、一応は普通よりも出力が上がってるっぽい。

道の脇に連なっている街灯を引き抜き、投げつける。

『メラク』の外皮を破って突き刺さった。

スマホの充電が切れる前に仕留めておきたいところ。

引き抜いては投げ、引き抜いては投げ、……。

道に縫い付けることに成功した。

そして一息で接近し、れいとうビームを炎を纏った腕で防いだまま殴りつけ、ミサイ

ルの射出口を砕いた。

れいとうビームに構わず殴る。

射出口を全て潰し、あとは蹴るだけかと油断していたら潰れたすべての射出口から円柱が飛び出し、輝いた。

そして『メラク』を放ち、俺は巻き込まれた。

「れいとうビーム・極」とか名前が付きそうな威力だった。

耐性と似非咸卦法が無かったら死んでたかもしれないと凍った体をばきばき鳴らしながら再び殴る。

砲撃の予兆が見えたので道に縫い付けていた街灯を引き抜いて出来た傷口に腕を突っ込む。

「チャージなどさせるものか!!」と腕からアギダインを放つ。

不快な気分になる悲鳴が響くが無視してアギダインを連発。

魔力が枯渇する直前に『メラク』が根負けして悲鳴をあげて弾け飛んだ。

嗚呼、だるかったと大の字で寝転ぶ。

『メラク』の一部を吸ったのか、クルースニクはかなり力を取り戻してきたようだ。

なお、ヤマトは後ろで犬に腰かけて高みの見物をしていた模様。

回復してきたので歩いて戻っているとヒロたちを見つけた。
ちなみにヤマトにはナチュラルに置いていかれた。

へんなジジイの悪魔と戦闘していたので合流。

時間はかかったが撃破に成功した。

俺が言うのも何だけどこいつらは戦闘が好きだなあ、と思った。

帰りの途中で『ドウベ』や『メラク』が北斗七星の名前であるとヒナコが思わぬところ
で知識を披露した。

ただの痴女ではなかったようだ。

つまり全部で七体だからあと五体倒せばいいんだねなどと喜んでいるが、逆に言う
と毎日これが来るといふことかもしれん。

勘弁してほしい。

いや、一日で全部来るのももちろん嫌だけども。

東京へ帰る間際で名古屋に物資運搬の手伝いが欲しいとか言われた。

どうやらダイチが行くようだ。

戦いではない手伝いと聞いて自分でも力になれるのだから、ということらしい。
前向きでなかなか良いのではないだろうか。

悪魔や人間との戦いばかりではダイチには厳しいだろうし。

東京に行っても殺伐としているのだろうか、と俺もダイチに着いて行くことにした。

実は名古屋って行ったことないんだよね、俺。

興味あるんだわ、観光的な意味で。

名古屋行きの電車でダイチは疲れたのかぐつすりとお眠っていた。

俺はティコとともに自分のチエツク。

やはり魔人になりつつあるそうさ。

しかも、進行が予想よりも速いとも。

結局、名古屋のジブス本局でもほとんど眠れなかった。

眠る必要がなくなってきたのだろうか、とティコは言っているし、自分でもそう思った。

こんなにも夜が長いと感じたのはいつぶりだろうか。

ティコが居てくれて良かったと思っただけだろうか。

あまり眠れない夜だった。

眠る必要がない、と言った方が正しいかもしれない。

少しばかりの睡眠なら必要だが、ほとんど仮眠のようなもので済んでしまう。

ティコとクルースニクが話し相手としているのだが、やはり部屋で一人と言うのは気が滅入ってしまうように感じた。

夜間でも活動している食堂で民間人から接収した可能性のある食べ物や物を胃に流す。

物資はジプスでは余るほどではないが、外に比べたら贅沢なほどに溢れている。

そんな状況を満足に過ごすことのできない日々を送る民間人が知ったらと考えると面倒な未来しか思い浮かばない。

全部ヤマトに押し付けてバツクれてしまおうかしらん。

頭が働かなくなってきたので軽く寝ることにした。

ついでにスマホを充電しておく。

未だに太陽が昇っていない時間なので、食堂には人が疎らだ。

俺が机を一つ独占した程度では問題ないだろう。

机に突っ伏して腕を枕に眠った。

クルースニクが俺の中にいるようになってからとある夢を見る。

それは、ただひたすらクドラクと戦う夢だ。

場所はここではない何処かで常に戦い続けていた。

姿形を変え続け、ひたすらに戦い続けていた。

劣勢に立とうとも、最期はクドラクを倒して自分が消えるような感覚とともに夢が終わりを告げた。

テイコの呼び声で目が覚めた。

幾分寝ぼけていたが、覚醒するまでにそう時間は費やさなかった。

目の前まで迫っていた悪魔のせいだ。

指を鳴らし、食堂内に炎が奔る。

寝ている間に複数の悪魔に囲まれていたらしい。

食堂には人間がいなかった。

起こしてくれてもいいだろうに、薄情なやつらだ。

内心で不満を呟きながら食堂ごと悪魔を燃やす。

マグネタイトが散っていく様を眺めながらテイコに状況を聞く。

ジプスの名古屋本局内に多数の悪魔が侵入、一般局員および民間協力者が交戦中とのことだ。

俺の死に顔動画が届いていたらしく、何度も起こそうとしたが全く起きなかったの

音量を最大まで上げるハメになってしまったと愚痴られた。

機嫌を直してもらおうと謝りながら食堂から出て見かけた悪魔を片っ端から焼きながら廊下を進む。

いつかの路地裏の焼き増しのような光景が広がっていた。

幸運にも隠れていたために無傷だった者、悪魔に襲われながらも生き延びていた者、傷が深く行動が厳しい者などを手当たり次第で救出しながら先を急ぐ。

咄嗟に隠れて無傷だった者ややる気のある者を引き連れて、更に進む。

回復はそいつらに任せて俺は順調に進んでいった。

少しでも息のある人間は自分の後ろに放り投げながら廊下を突き進む。

指を鳴らした際に生じる乾いた音がやけに響いて聞こえた。

腐った魚のような悪臭に苛立ちながらも歩みは止めない。

悪魔がうめき声とともに焼けていく。

息のある人間といつても今歩いている廊下は名古屋のジプス本局であるため、黄色の制服を着たジプス一般局員ばかりだ。

身体に欠損があろうとも、内臓が露出していようとも、辛うじて生きているのならとりあえず後ろに着いてきている局員に任せておけば治療を施してくれるだろう。

生き残りが確認できれば悪魔へピンポイントで炎を飛ばし、人間がいなければ廊下ご

と焼き切る。

悪魔の数があまりにも多いことに辟易しながら魔法を行使する。

多方面へ喧嘩を売っているジプスだが、まさか本局に悪魔が襲撃してくるとは思わなかった。

やはり黄色の制服は目立つのだろうか。

抗戦か、撤退か、ジプスの黒どもには指示を速やかに出してもらいたいものだ。

抗戦にしても、撤退にしても、やはり外までの道を悪魔が蔓延っている現状ではそう大きな違いはないのだろうが。

悪魔は大して強くないが多勢で攻められると一般局員では厳しいだろう。

局員以外にも民間協力者がいるのだが、もう人数はほとんどいない。

ケータイを掴んだままの腕や普通の服装をした胴体が転がっていて、そこから滲んだ血液が廊下にアートを彩っていた。

戦える力を持つのも考えものだな。

肉片にされた一般局員を横目に見ながら通り過ぎる。

どうやら持たないのもダメらしい。

難しいものだと小さく呟きながら悪魔を焼いた。

ダイチの部屋はどこだっただろうかと次々と部屋の扉を開けていく。

寝ている間に死んだ者や抗戦したはいいが狭い室内では十全に戦えずに死んだ者が転がっている部屋が多くあり、そういった部屋は開け放つて悪魔の姿を確認した瞬間、焼き尽くした。

片っ端から確認したがダイチの姿は無かった。

やはり死んだのだろうか、残念に思った。

最後に残しておいたお菓子が食べられた気分、というのだろうか。

なんとなく気落ちしながら悪魔を焼き払いつつ外部へと繋がる出入り口を目指す。

これで何匹目だろうか。

本気でうんざりしながら歩き続ける。

生き残りも少なくなってきたし、そろそろいなくなるだろう。

ならば一息で廊下を燃やしてしまおうか。

それなら俺は楽ができるし、かなり速く出入り口を奪還できるはず。

もしかしたら他の出入り口が用意しており、こちらの道はあまり重要ではない可能性もあるのだけれど。

悪魔を焼く簡単な作業に本気で飽きてきた頃、悪魔が集まっているのを見つけた。

不用意にも俺に背を向けている悪魔ばかりだ。

何かあるのだろうかと蹴散らしながら進むと、ダイチと他二人ほどが悪魔と戦っていた。

とりあえず悪魔を殲滅して合流する。

ダイチの他に二人の人物がいた。

ダイチが襲撃に気付き、悪魔を退けている間に合流して協力していたらしい。

長身で口数少ない青年はジュンゴ、背が低くて勝気な印象を受けた少女はアイリという名だと聞いた。

建物の内部まで戻っている間に、悪魔がまた中に入ってきたら面倒だということの外へ向おうという話になった。

狭いので仲魔の召喚は無し、ジュンゴに前衛、ダイチに遊撃、アイリに後衛を任せてごりごり進む。

接触前に悪魔に向けて炎を放ち、弱らせているためサクサクと進めるのだ。

原型を留めていない死体が転がっているが、三人が見たら気分が悪くなるだろうと悪魔への攻撃に見せかけて消し炭にする。

そろそろ出入り口だな、と話していると後ろから名も知らぬ一般局員が追いかけてきた。

まだ悪魔がいるかもしれないのに豪気なことだと笑うと青ざめていた。

クルースニクによる探知で殲滅したのだから残ってはいないと思う。気を抜きすぎだとからかってみただけだ。

だからといって完全に安全ではないのだから少しは警戒すべきだが。

悪魔の襲撃の次に、更なる問題が発生したので民間協力者である俺たちは散り散りに街へと撤退するように言い渡された。

更なる問題とは、と疑問を投げかけようとすると答えが向こうからやってきた。

暴徒が先ほどの騒動に乗じて別の出入り口から入ってきたようで、俺たちが歩いてきた廊下からも数人出てきた。

興奮しているのか、廊下の惨状も理解できていないのだろう。

怒鳴るように主張するとケータイ片手にアプリを起動させてきた。

アイリが抗戦しようとケータイを取り出すが寸前で止める。

一般局員が人質になっていた。

今は撤退だと伝え、それぞれ散るように言う。

不安そうなダイチの背を叩き、ジュンゴと握手し、アイリの頭を撫でる。

女性の髪を勝手に触るのはマナー違反だが、頭がちょうどいいところにあつたのだからしょうがない。

三人が背を向けて走って行くのを見送って俺も少しばかり暴徒との距離を置く。

なんか今生の別れみたいになったがただの逃走である。

さて、どうしたものかと悩む。

暴徒を焼くか、局員ごと焼くか、全て焼くか。

そもそもジプス関連は面倒なので俺も逃走しようとした瞬間、ジプス局員や暴徒が倒れだした。

ぷつぷつりと糸が切れたように、次々と音を立てて倒れる姿はうすら寒いモノを感じさせた。

駆け寄ってテイコにアナライズを任せると、全員死んでいるらしい。

気絶などといった戦闘不能と違い、すぐにリカム系の蘇生魔法を使わなければならぬ状態らしい。

残念ながら俺は使えないので蘇生は無理だった。

死に逝く人間たちを放って周囲を警戒する。

近くに仕掛けてきた悪魔がいるはずだからだ。

死に顔動画がアップされていたとテイコが伝えてくれたが、見ている暇はあるのだろうか。

クルースニクによって引き上げられた感性が禍々しい魔力を感じたのと女性型の悪

魔が複数の人間を引き連れて姿を現したのはほとんど同時だった。

悪魔が侍らせている人間は全員が男で、一般人のみならずジプス局員の姿もあった。

黄色の制服だけではなく、ジプス上層の人間が着用できる黒い制服の男もいた。

周囲の男たちの瞳に理性は無い。

光の灯らない狂気すら感じる瞳でその悪魔に首を垂れて、ひらすら讃えていた。

テイコがアナライズを終える。

魅了された人間を引き連れられた高位悪魔、名はリリス。

背筋に嫌な汗が流れた。

纏った魔力が激んだ闇を彷彿とさせ、気持ちが悪い。

リリスと目が合い、何かを呟いた。

頬を舐められたかのようにねっとりとした魔力が俺の周囲を包み込んだかと思うと

頭上が輝いた。

テイコの叫びに反応して弾かれるように回避するが、間に合わない。

全身を焼かれながら力尽くで破壊の炎の中から逃れる。

咄嗟にテイコが発動してくれていたハーモナイザーのおかげで生き延びることがで

きたが、セツトしてくれていた活泉の気や魔脈の魔力を素通りしてきたことに血の気が

引いた。

放たれた魔法はメギドラオン。

メギド系は属性に寄らないエネルギーの塊を破壊に利用した魔法らしい。

万能属性と呼ばれ、神の力の顕現でもあるという。

人間が戦える範囲ではないのではないかと内心で舌打ちしながら駆ける。

次々に放たれる破壊の光が周囲の建物を抉り、空間ごと削り取ったかのようだ。

リリスとは魔力差が大きく、メギドラオンが直撃すれば俺は耐え切れずに消し飛ぶだろう。

さっきの脱出自体も奇跡に近い。

ティコのナビとクルースニクのレーザーによる紙一重での回避が癪に障ったのか、リリスは苛立ったように声を荒げながら周りの男へと指示を飛ばした。

ケータイから数体の悪魔が召喚される。

新たに現れた悪魔たちに気を使っている余裕はなく、距離を取るのに必死だ。

有り難いことに何故かリリスはその場から動こうとしないのである程度まで離れることでメギドラオンからの安全圏を確保した。

俺を追って召喚された悪魔たちが攻撃を仕掛けてくるがメギドラオンと比べれば楽な相手だ。

個別にアギダインを放ち、炎幕が消える前に一撃を加える。

咸卦法（仮）を纏った全力の突きによる会心の一撃で頭部を破壊し、霧散した不活性マグネタイトを吸収。

リリスが動き出したのを横目に財布から取り出した五百円を指で弾き、羅漢銭ごっこで男たちが持つケータイを破壊した。

死ぬ確率を減らすために邪魔を無くしておきたいという思いからだ。

予想を上回る速さでリリスが接近してきた。

メギドラオンを連打していたため、魔法型かと思つたが高位の悪魔の身体能力は人間を容易に上回るようだ。

アギダインで進路を妨害するも大したダメージを与えられずに突破された。

相手の打撃を受け流そうとしたが纏っていた咸卦法（仮）ごと吹っ飛ばされ、地べたを転がった。

体勢を立て直そうと立ち上がると頭上に眩いばかりの光が爛々と輝いた。

メギドラオンによる魔力の残滓から飛び出し、リリスに襲い掛かる。

腕に残った鈍い感覚と受けきれず、今度はリリスが無様に転がった。

気と魔力を暴発させることでメギドラオンの射程から抜け出し、纏った咸卦法のエネ

ルギーを背中から放出することでさらなる高速移動を行ったのだ。

気と魔力の消費が増えてしまうがハーモナイザーの時間内でしか使えないのだから
贅沢は言つてられない。

結局、咸卦法とハーモナイザーのどちらかが消えてしまえば死ぬことは確定している
のだから。

苛立ちを隠せないのか大ぶりの攻撃が続くが回避しつつ、連打を浴びせる。

咸卦法のエネルギーを放出して移動する『夢幻の具足』はリリースよりも格段に移動が
速い。

しかし、与えたダメージはすぐに回復してしまっている。

マグネタイトを吸い取っているようで、男たちの顔色も悪い。

男たち？と疑問を持った瞬間に近寄っていた魅了された人間に組み敷かれた。

リリースが嘲笑いながら、鼓膜がヘッドロで汚染されているかのような醜い音が聞こえて
きた。

身体から力が抜ける。

思考が止まる。

肉体が朽ちる。

全てが乖離する。

俺には何も無いのだ、と。

……。

……。

……。

……あつい。

胸元が熱い。

太陽のように熱を帯びて、皮膚を焼いているようだ。

それでいて凍える様に冷えており、皮膚を凍らせてしまいそうだ。

不思議だ。

とても不思議で心地よい。

それでいて、気味が悪い。

ハッと気が付いたように目が開き、男たちを振り払う。

ヒランヤが輝いており、リリスが顔を歪めていた。

あれが先ほど局員や暴徒を殺した即死魔法か。

破壊の光が俺や男たちに降り注いだ。

轟音が背中越しに聞こえた。

太陽が増えたかのように空が輝く。

複数のメギドラオンの光を背にリリースに迫る。

何度も殴りつけ、頭上が輝くと同時に一瞬で離れる。

周囲は破壊尽くされ、生命を感じさせることはない。

つまるところ、リリースの補給線も断たれているということだ。

咸卦法によって強化された拳で殴り、綻びから吸収する。

クルースニクの警告が脳内で響くが、ここで倒れては何も果たせないと封じる。

力が増していく。

俺という器が決壊したかのように力が増していき、満たされていく。

リリースを殺すために力を……。

もつとだ。

高位の悪魔ほど維持するコストは増え、マグネタイトを必要とする。

もつと速く。

削るとともに吸収する俺と、現界するだけで浪費するマグネタイトを魔法や防御に割

いているリリース。

もつと強く。

迫りくる時間の限界は、どちらが先か。

もつと悪魔のように……。

リリースの体が爛れ、溶けだした。

保有していたマグネタイトが現界に必要な分を下回ったため、スライム化が始まったのだ。

メギドラオンでいたぶるように追い詰めていた余裕はどこかへ消え、焦り表情からが見て取れる。

脆くなった腕をちぎって喰らう。

役に立たない足を引き抜き喰らう。

乳房を抉って、腹を引き裂き喰らう。

自慢だったであろう顔を殴って潰す。

残骸が悪魔を殺して平気なのかと呟いた。

笑いが込み上げてきた。

コイツはなんとつまらない言葉を最期に吐いただろうか！

半魔だと嘲りを浮かべ、玩具でしかないと笑った、そんな悪魔であった檻樓がそんな

言葉を！

自分で俺のことを人間ではないと散々言ってくれたゴミクズの分際で！

殺して平気なのかと、なんと無駄な言葉だろうか！

醜い頭部に足を乗せ、徐々に圧力を加えていく。

砕け散らないように、恐怖を感じるように、惨たらしく喰えるように、徐々に。

そろそろ限界のようだった。

選ばせてやろう。

スライムとして醜く朽ちるか、このまま塵として散るか。

言葉を聞かずに踏み抜いた。

ははは、なんて無様。

— a p p e n d

リリースの胸中にはかかってないほどの苛立ちが溢れ、焦りに変わっていた。

この先にある人間の拠点を落とすことで我が身を縛る鎖から解放たれ、自由を謳歌

するほどの糧を得るはずだった。

そんな、ほぼ確定した未来を歩む手筈だった自分は未だに無駄な魔力を浪費し続けていた。

先ほどまで出来損ないの半魔として嘲笑い、ガラクタの玩具同然に扱っていた悪魔に魂を売った男が原因だった。

不自由なく自分の間は現界でできるほどに満ち溢れた糧を目前にして足止めを喰らい、尚も微量に削られていく。

煮えくり返るような怒りが思考を簡単に奪う。

それでもほんの残った冷静な一部が嘔き、それに合わせて徐々に冷えていく思考とともに行動を起こした。

拠点に群がる人間を魅了し、下僕として連れていた。

理由は生体マグネタイトの生成であり、それ以上の価値は無い。

そんな家畜に等しい下僕たちに指示を飛ばし、自分は変わらずに魔法を放つ。目障りな半魔さえ塵にできれば後は食事を楽しむだけなのだ。

だから苛立ちながらも遊ぶように破壊の光で照らした。

好機はそう間を置く事無く訪れた。

地べたに転がされた怒りで無差別に魔法を放つ、そう演技した。

自分よりも格段に速いだろう半魔は疑いも無く回避する。

速いといえども、手に負えない速度ではない。

ただ速いだけの半魔を家畜どもの場所へと誘導されていく。

そして、家畜に引き倒された。

単純でなんと愚かなのだろうと笑いが込み上げる。

無様な姿を笑ってやろうと家畜に面を上げさせ、半魔の男と目を合わせる。

気持ちの悪い目だ。

灰暗い闇色の人には一切の感情が灯っていない。

これが、こんなものが元であろうと人間の瞳とは考えられなかった。

薄気味悪い腐った悪魔どものほうが奇妙な話だが人間味に溢れているだろう。

これから死ぬというのに揺らぎが感じられないことに苛立ちを憶え、言いようのない

不安が感じられる。

だが今まで散々虚仮にされた怒りが不安を抑え、半魔に死を囁いた。

徐々に弱まる半魔の輝き。

ゆつくりと時間をかけて死へと誘う。

何もできない雑魚の苦しむ姿が、怨嗟が、心地良いのだから。

苛立ちが愉悅に変わり、満たされていく。

上機嫌に喉を鳴らして笑っている。半魔に飾られていた首元のヒランヤが輝いた。輝くような闇に全身が焼かれた。

自分が支配する夜よりも、更なる闇に身を焼かれる。

深淵が吐き出され、精神すらも闇に浸食を受ける。

そして、死が跳ね返された。

身体が闇の汚染を受け、悲鳴をあげている。

精神が闇に浸食を受け、悲鳴をあげている。

感じられる魔力はリリースである自分よりも高位な悪魔による呪詛返しだった。

胸中に芽を出していた不安が育つのを感じた。

この半魔の男が受けている底の見えない加護が、おそろしい。

纏まらない思考と見えざる強者の圧力がマグネタイトの浪費を加速させる。

限界が見えてきた己の魔力による焦り、自分を包む闇による汚染が恐怖を拡大させ、矮小な半魔の男に怯えているという事実が苛立ちを生む。

負の悪循環が苛む。

半魔が跳ね起き、家畜を振り解いて走り出す。

咄嗟に、メギドラオンを放つが捉えることができずに無駄撃ちに終わった。

更なる浪費が焦りを呼ぶ。

今回は小さな焦りのはずだった、消し炭になった家畜どもの姿を見るまでは、保険であつた延命装置どもが、己の失態によつて消し飛んだのだ。

焦りが、恐怖が、苛立ちが、重圧となつて押し掛かつてきているようだった。

半魔の速度が上がっていく。

劇的に疾くなる。

先ほどまで余裕で捉えていた姿が次には霞み、更に影すら掴ませず、そして消えた。

自らが視認できる限界を遥かに超えた速さだ。

背から万能魔法に似た光を放ちながら移動していく。

捉えられるのは魔力の残滓だけだった。

自分よりも劣る存在に負けるのではないか。

出来損ないの玩具が自分を殺すのではないか。

そんな可能性が脳裏を過る。

揺らいだ精神が、負の感情が、浪費を加速させた。

最初の遊びとは違う全力の魔法行使。

浪費を抑えた手抜きとは違う、自分の維持すらも捨てたメギドラオンを幾重にも照らす。

その全てから縫う様に走り抜け、迫る来る。

魔法を、見てから回避している様は新しい恐怖を植え付けるには十分だった。

できるのは、もつと力量差があるか魔王として名を連ねている強大な悪魔だけだ。

そんなことができる半魔など存在して良いはずがない。

そんなものが許されるなど……。

不安を糧に、恐怖が育つ。

ゆつくりと視認できる速さで拳が迫り、強かに自分を殴りつけた。

右腕は闇が燃えているかのような黒い炎を纏わせ、砕いた。

左腕は虚無を思わせる素手で、砕け散った破片を喰らった。

砕かれ、喰われていく。

自分が徐々に喰われていく。

大輪の花を咲かせるように恐怖が増幅する。

半魔が纏った魔力が黒く濺んでいく。

それに比例するかのごとく、喰われる速さが増した。

もう自分には何も無いのだと悟った。

『あくま、を……ころして。へいき、なの?』

スライムに近づきつつある醜い姿を晒しながら口から出たのはそんな言葉だった。口を動かすことさえ億劫だが、何もしなければ黴って殺されるだろう。全てを魅了するはずの肢体は、朽ち果てた醜悪なゾンビのほうがまだマシであろうというほどに破壊されていた。現界することは不可能でも、これ以上の損壊を避けたかったのは辱めに耐えられなかったからに違いない。

「悪魔を殺して平気かって?」

男が反芻するように呟き、首を傾げた。普通の人間と同じ、普通の声。それをこの男から聞けると思うと、気持ちが悪かった。あまりに普通。普通すぎるのだ。有り得るはずがないほどに。

「ははは」

そして嗤った。普通に、可笑しなことが起きたと言わんばかりに笑ったのだ。朽ちた自分を足蹴にしながらかころころと笑う姿は狂気すらも感じさせた。崩壊していく身体を踏みつけ、加速させた。

「スライムとして醜く朽ちるか、このまま塵として散るか、出来損ないの半魔風情が高

位悪魔のリリス様を選ばせてやるよ」

潰された口からはもう言葉が紡がれることはない。睨みつけると男と視線が合い、恐怖が蘇る。爛々と輝く闇に彩られた瞳が自分を射抜いていたのだ。浸食・汚染が激しくなった。すぐにも消えて無くなりたい思いだった。

ぐちゃりと音が間近に聞こえて、意識は途絶えた。

生きるとは変わりつづけること | 火—金

— 4

— 不穩の火曜日 —

荒廃した大地で目が覚めた。

身体を戦闘に傾け過ぎたため休息を欲していたとかいないとか。

テイコが超怒ってます。

やっべ。

というかよく襲われなかったな、と思っているとクルースニクが魔力が高濃度すぎて悪魔が寄つてこなかったとおしえてくれた。

メギドラオンに使われた廃棄魔力が漂う場所には超強い悪魔がいそうだからビビつて来なかったというわけか。

暴徒はジプス内がご執心とのことだ。

暴徒を蹴散らして取り返してもいいが、めんどくせ。

テイコが言うにはリリスに魅了されたやつがジプスに張られていた結界をイジちやつてあんな面倒事に発展したっぼい。

その隙を突いた暴徒の襲撃。

自分たちで責任を取った方が気持ちいいんじゃないかと思う。

そうだ、ヤマト印の電話があるじゃんと思うが圏外。

ジプスの襲撃によって名古屋内では電波がダメっぼい。

糞ですね。

そんなことを話していたらスマホの画面が消えてしまった。

戦闘中はずっとハーモナイザーを使用し続けていたため、電源が切れてしまったようだ。

テイコとは少しの間お別れかもしれない。

ジプスに戻って充電すべきだろうか。

悩む。

凄く悩む。

そもそも戻っても電気使えるかわからん。

とりあえず俺も街へ繰り出そう。

解決したら電波が回復するっしょ。

道に迷った。

何度目だろうか、災害後は道が滅茶苦茶で大変だわ。

むしろ最初から道を知らなかつたし、迷ったというより探検じゃね。

藤岡弘、ごっこでもしようか。

待て、この先に悪魔が……！

くそっ毒を持ってやがる……！

気を付けろ！

ライダーキック！

爆散☆

みたいな。

違うか。

街中を闊歩する。

襲われている人がいたら助け、襲ってくる悪魔がいたら粉碎しする。

人助けしてCHAOSよりだった属性をLAW寄りにしてNEUTRALを目指す

俺の崇高な理念がわからないんですかねえ（呆れ顔）。

なんか違うと思うけど、こまけえことはいんだよ!! の精神だ。

でも人助けて結構 LAW に寄るじゃん？

地下の廊から助ける時は調整しつつも女性だけは救助……なんの話だろうね。

マツプに出現する悪魔をぶち殺しすぎて仲魔が集めにくいだとか、俺にはなんの話か全然わかんないよ。

人助けに精を出してたら悲鳴が聞こえたので駆けつける。

公園で無垢なる民草が虐げられている悲劇に出くわした救世主オリシユ。

とりあえずカーテンで真の餃子ヒーローごっこやってたので変な見た目は勘弁な。

ジュンゴが奮闘 GUY な感じで抗争してた。

ドヤ顔でケータイをパカツとしているおっちゃんを撃破する。

対人戦において羅漢銭が強すぎ、余裕でした、q、

タツミーって呼んでくれてもいいのよ？

ジュンゴは礼を告げて去って行った。

寂しい……。

公園にある階段の踊り場で反復横跳びしているとヒロが走って来た。

名古屋に連絡が取れなくなってたから急いできたとか。

そういえば悪魔に襲撃された後、暴徒に占拠されてたよな。

詳しい事情がわからないが切羽詰ってるっぽい。

残念だが俺はそれ以上のことは知らないよと告げ、情報交換をしていると息を切らせたアイリが現れた。

どうしたのか尋ねるとジユンゴを探しているらしい。

今去って行った旨を告げると怒られた。

死に顔動画にアップされているらしいのだ。

ジユンゴを追うことにしよう。

ヒロたちはテレビ塔で情報通とやらに会いに行くらしい。

またソロである。

ジユンゴ探しを諦めた。

右も左もわからない土地で孤独に搜索とかイジメとしか思えない。

とりあえず電気街で充電器を探す。

朝の騒動で荷物を部屋に置きっぱなしにしてしまい、充電できるものが手元にないだ。

悪魔を握撃で握りつぶしながら電気店に突入した。

悪魔が砕け散る様にビビったのか中を漁っていた男がメモリをくれたが欲しいのはこれじゃないのだ。

充電器を一緒に探してもらう。

途中で猫耳なヘッドホンを見つけた。

かなり良質っぽく男も店員かと思う程に勧めてきたので持ち帰る。

これがあればベル争いに参加できそうだ。

——1と2は関連性がほとんどないからデビサバ2から初めても大丈夫ですよ——

……なんか電波が。

とりあえず充電器も見つけて喜んでいると、襲撃者が……!!

まあ、またもアイリなんだけどね。

ジュンゴ探索が難航していると伝えると情報通が見つけれそうなので着いて来いと言われた。

ちようど俺が持っているメモリが必要だったとか。

変なところでご都合主義が効いてて意味が無い。

男は情報通の名前を聞いて昇天した。

なんかすげえ。

ヒロや新田、ジョーも合流したのでみんな情報通の元へ。

情報通は白チャイナを着た女性で名前はフミ。

眼福である。

餃子ヒーローのままなので白コンビですね。

嫌そうな顔しないでくださいあ。

アイリに餃子の皮を捨てられた。

このフミさんはスーパーハカーらしいのだ。

ハツカーじゃないところがすげえ。

キーボードをだかだかぴーぴーってやってるけど時間がかかるからその間は休憩と
なった。

パソコンに繋いでも充電できるんだよな、そういえば。

後で相談してみようかな。

アイリと情報交換する。

どうやらアイリは情報を集めていたっぽい。

残っていたジプス局員から話を聞いたり、物資を取り戻していたりと働き者である。

朝早くから動いて疲れがたまっていたのだろう、アイリが眠ってしまったので上着を
かけておく。

隣で新田とヒロが重い話をしているのを聞かないようにする。

もつと雰囲気のある場所でそういうのはやってください。

ジヨージも重い話を持ってきた。

流行ってるのかよ、シリアストーク……。

解析が終わり、これから死に顔動画の場所へ行くことになった。

目的はジュンゴが死なないようにすることと、ダイチの救出である。

朝別れたあとにダイチは攫われたっぽい。

ピーチ姫を驚くだろう。

攫われたので救出ってかなりヒロインだよな、ダイチって。

充電もフルっぽいので電源を入れる。

ヘッドホンを装着し、スマホと接続した。

途中でヘッドホンが変な形だと突っ込まれたがめげない。

これで戦闘中もテイコのアドバイスが聞き取り易くなった。

ダイチ姫が捉われたクツパ城……ではなくダイチが捕まっているであろうみんなの科学館に着いた。

新田がなんか妙案があるらしいので任せる。

任せたぞ、スネーク!!

みんな色々考えているので俺も奇を衒ってみようじゃないか。

ヒロ、ジョー、アイリが正面から普通に入って行った。

新田は裏口から段ボールを被って突入。

メタルギア・ジュンゴは軽傷。

俺は天井を踏み砕いて降り立つ。

ヒロのパーティと俺で挟撃した形になった。

人質がどうなってもいいのかと騒ぎ出した。

アギダインで壁を融かして見せる。

人質がいなくなったらああなるのだと笑顔で教えてみたら静かになった。

互いに身動きが取れない膠着状態に陥った。

まあ、少し経ったら新田が段ボールから姿を現してダイチを救出したのだけれど。

内気な新田が頑張ったとあってヒロとジョーが気合入りまくりだ。

ガンガンいこうぜとばかりに悪魔が撃墜されている。

俺もジュンゴを援護して適度に焼き払いつつ、ケータイに向けて羅漢銭。

五百円は高いので十円玉や百円玉で代用している。

どんなときでも 付きまどってくるのが おかねなんだよなあ。 おりしゅ

みんなで名古屋支局まで戻ってきた。

ヒロイン・ダイチを救ったのでハッピーエンドとはならないのだ。

支局前がの広範囲が瓦礫と化していたのだが、フミとアイリが怒り出した。

暴徒のせいだと思っただけ。

ジユンゴも言いたいことがあるとか。

……俺のせいだとは言えない。

テイコもちよつとキョドってた。

全部暴徒が悪いということだ突入。

ジョーが人間と戦うのに慣れてしまった、不思議だーみたいなことを言ってた。

俺なんて火葬も経験しているからね。

戦闘くらいいいじゃないっすか。

指令室で小競り合いをしているようで突入と同時に悪魔を呼び出す。

俺だけ単騎という男らしい戦い方である。

アギダインとか羅漢銭を駆使して悪魔およびケータイを殲滅する。

掴んだ悪魔を盾にして突撃や投擲武器として使ったり、そのまま砕いたり悪魔使い

としての腕は誰にも負けないと自負しております。

暴徒のリーダーとヒロが戦闘というか言い争いをしているとクルースニク・リーダーが『メラク』っぽい敵影を探知。

空气中に電気が奔り、クリスタルが付いた巨大なリング状の使徒である『フェクダ』が出現した。

ぱりぱりと放電膜を纏っている。

突然の出来事に皆が戸惑っているのでハーモナイザーを起動して咸卦法を発動し、飛び蹴りを放つ。

接触した瞬間にATフィールドっぽい不可視の壁によって防がれた。

幾らか拮抗したが無意味と判断し、弾かれた勢いで離れる。

セイバーの魔力ブーストをパクツた咸卦法のエネルギーを放出する『夢幻の具足』で移動。

テイコが許してくれる限界ぎりぎりまで腕にエネルギーを集中させ、殴る。

炎が黒く染まってやがるぜ、へへ……。

衝突の瞬間、壁を貫通。

無防備(?)な『フェクダ』に拳が直撃した。

気色悪い悲鳴が轟く。

同時に歪むほどの魔力密度を纏った体当たりで俺は弾き飛ばされた。止めとばかりに電気が頭上から直撃。

正直、パリッときた。

話し合いは終わったらしく、暴徒のリーダー・ロナウドと協力して戦うことにしたようだ。

『フェクダ』に皆が向き直ると数が劣勢と見たか、二つに分裂した。

なんか祭りの屋台とかに置いてありそうな玩具の指輪っぽい。

『メラク』と比べてパツとしない性能である。

みんなでかこんでぼっこぼっこ。

片方を撃墜してもう片方に専念していると、撃墜したはずの『フェクダ』が復活した。めんどくせ。

合体したら攻撃無効らしいが、俺の咸卦法を纏った黒いパンチはダメージが通るようだ。

ただ、反撃の電気が嫌すぎる。

なんか俺だけめっちゃパリパリしている。

スマホとかヘッドホン大丈夫だよな……？と心配しているとテイコがハーモナイザーでコーティングしてある分は大丈夫だと教えてくれた。

無事でよかったわ。

分裂と復活が面倒になってきた。

同時に倒せばいいんじゃないかねとかフミが言ってたがそれをスルーして何故か合体したら倒す流れになった。

『フェクダ』を砕いていると、先ほどとは比べ物にならない電気がぱりぱりし出した。耐性持っていないからやべえので、内部で咸卦法を暴発させて放たれる前に破壊した。『フェクダ』の霧散していく力を吸収しつつ離れ、ヒロたちに合流した。

戦闘後にまったりしているとフミを見かけたので聞いてみる。

パソコンでスマホを充電できるかと。

もつと効率よくしろと怒られた。

そんなこと言われてもスマホだしな、と思っていると悪魔召喚プログラムがインストールされたコミュニケーションプレイヤーがあるのでくれるとか。

ケータイやスマホだとハーモナイザーに割く電気が不安だが、コミュニケーションプレイヤー（COMP）なら大丈夫らしい。

ちよつとでかいので片手だと扱いにくく、誰も使つて無いようだ。

とりあえずティコを引越しさせれば使えるかもしれない。

フミが調整して使える様になったら連絡すると言われた。ぶらぶらしているとジユンゴが茶碗蒸しくれた。

マジうめえ。

茶碗蒸しいえー!!と走る。

転びそうになつたがなんとか踏みとどまる。

食べ物片手に走るモノではないな。

茶碗蒸しを食べているアイリと遭遇した。

ちよつと機嫌が悪いっぽい。

新田がおどおどしているのが苛立つ原因のようだ。

それでいてあのままだとダメだと心配もしているっぽい。

アイリさん、ツンデレっすね。

言葉に出したら殴られた。

みんなが集まって話し合っていたので参加する。

死に顔動画を配信するニカイアのサーバーがどこにあるのかを話していた。

そういう知的な話は苦手だ。

わからないことばかりだとみんなでお手上げ侍をした。

とりあえず死ぬことを回避させたいんじゃねってオチで話は終わった。

名古屋から東京へ帰る時間になった。

面倒だし名古屋にいたいところだが、クドラクに並々ならぬ執心を持つクルースニクがうるさいので帰ることに。

ジュンゴが別れ際にくれた茶碗蒸しマジうめえ。

味噌チヨコレートは……ううむ。

とりあえずデレアイリが超かわいかったです。

あ、ジュンゴが蹴られた。

主人公のスキル

指。パツチン：炎の魔法が出る。しなくても出る。ただの見せかけ。

魔人化：クルースニクや吸収した不活性マグネタイトとの融合により魔人に近づく。深く融合すればそれだけボーナスが増える。ただし、徐々に人外に近づき最後には戻れなくなる。魔人・悪魔のどちらになるかはステータスによって決まる。

咸卦法：活泉系と魔脈系の融合。出力は合わせる必要があるため、片方だけ三分や五分にはできない。ステータスにボーナスが付くが、合成の程度によって上下する。

夢幻の具足：すぐくはやくうごく。威卦法のエネルギーを放出し、推力として利用したもの。セイバーたんのあれ。

ヒランヤ：深淵を覗いたら向こうも覗いているよ☆というやつ。加護によって即死は防ぎ、魔人としての力を引き出しやすくなる。ただし、魔人に近づきやすくなる。つまり魔人養成ギブスである。

— 5 —

日が昇る前から街を駆け、ジブスから持ち出した物資を対価に話を聞いて回っている。

クドラクは正しい手順を踏まない限り、再び蘇るのだとクルースニクから聞いて搜索することにしたのだ。

クルースニクが感じ取られる範囲内にクドラクの気配はないため、暗いうちから街中を走り回ることになっているのだ。

眠らないことの利点は時間が多く使えることだろうか。

握りつぶした悪魔の身体が光とともに散っていく。

悪魔とのエンカウント率も上昇するのは欠点だけでも。

恐怖か疲労、それから空腹。

いずれもが何も持たない人々の眠れない理由のようだ。

土気色の顔をした人が夢遊病患者のようにふらふらと歩いているのを度々見かけ、そういった人が悪魔に襲われているのは当然の如く。

避難所からあぶれ、それでも纏まったコミュニティにすら群れることのできなかつた彼らは悪魔どもの恰好の餌となる。

喰われているのなら悪魔を滅ぼし道端に遺体を埋め、生きているのなら助けて話を聞く。

自分はどうかすればいいだとか、救いはないのだとか、詰まらないことを聞きながら連れ歩く。

徐々に増えていく無気力症を患っているのではないかと思わせる彼らが群がる様はピクミンを思い出させた。

まだ状態の良さそうな建物に彼らを放り込む。

人数が多すぎて鬱陶しく感じ始めたためだ。

脆そうな壁や天井を周囲の建物から剥がしてきた物資を融かして補強する。

俺が初日に寝床にした店舗よりも頑強で、拠点としては十分すぎるのではないだろう

か。

ジプスで充電しておいた今まで集めた様々な携帯電話と少しばかりの食糧は行き先見えない彼らの手向けだ。

契約自体は使用者と結ばれるようにしておいたので戦闘になることはないはず。

死にたければ死ねば良いし、生きなければ戦うもよし、逃げるもよし、もちろん死にたい奴を壁にするもよし。

今日まで生きた運があればなんだって出来るのだと静かに告げて、出ていく。

周りに集まっていた悪魔を全力で魔法を放つことで殲滅した。

これで幾らかの時間が稼げるだろう、彼らが考えることのできる時間を作ったのはちよつとした気紛れだ。

携帯電話に悪魔を補充したため、魔貨が空になってしまったが使う気など元よりないのだ。

命のやり取りをする相手に背中を任せようとは思わない。

いや、クルースニクも悪魔なので、他の悪魔も信頼に足るのだろうか？

ちよつとわからなくなってしまうた。

ただ、金銭での関係は少し怖い。

三つ目の避難所となつてゐる体育館は血によつて彩られ、所々が朽ちていた。太陽の光によつて照らされた内部は赤黒いペンキが塗りたくられてゐるかのようだ。生きてゐる人間はいないらしく、悪魔の群れに占拠されてゐた。

聞いた話は無駄なことが多かつたが一つだけ有益な情報を得ることができた。それは、吸血鬼が夜な夜な現れ、人間を吸血して歩いてゐるといふ話だ。

この話を元に避難所で情報を集めようと近場にある二か所の避難所を訪れたがいずれも門前払いを受け、やつとのことでたどり着いた三つ目のここには誰もいない。

予想以上に面倒だなど苛立つてゐると支給された携帯電話の軽い電子音が出ることを催促した。

少しキツイ語調とともに電話に出ると、その態度を気にしてゐないのか何時もと変わらぬ態度のヤマトが『ドウベ』や『メラク』、『フェクダ』の同類が出現したのだと知らせてきた。

こちらでも確認したと簡単に返事し、通話を切った。

外に出るとアイスクリームコーンを思わせる『ドウベ』の下部に酷似した敵、『メグレズ』が出現してゐた。

戦闘は瞬く間に終わった。

魅かれる様に集まつた悪魔どもも苦も無く融かした。

弱すぎる、それが『メグレス』を撃破した感想だった。

動きは鈍重で火力が不足しており、何もかもが雑魚としか言いようがなかった。

微弱な地震を引き起こすのが厄介なだけで、何度か殴るだけで倒せてしまったのだ。

携帯電話にジプスへ集合する旨を伝える連絡がきた。

電話をかけてきたヒロも釈然としない何かを感じているようだった。

どうせ面倒ことなのだろうとテイコやクルースニクに愚痴りながらジプスへと向かった。

——変容の水曜日——

ジプスでは情報が集まり次第、ということと解散になった。

とりあえず『メグレス』本体は別の場所において、今は芽を出しているのではないかとヤマトも思案顔だったが、頭脳労働は彼に任せておくとしよう。

これから健康診断があるというので時間まで余裕がある。

ダイチが仕事をするというので時間を潰すついでに手伝うことにした。

名古屋の襲撃で人手がこちらから結構な数が移動してしまったようで、こうしてダイチが手伝うことになったらしい。

戦闘でなければ手伝うことに抵抗はないようだ。

ダイチが物資を一般人に配り、争いに発展するなど面倒事に繋がったがなんとか騒ぎもおさまった。

自分たちが不満なく過ごせている現状に何を思うのか、苦々しい表情だった。

命を賭けている対価として過不足無く優先的に物資を得られる、と楽観的には考えられないのだろう。

俺は彼らが『ドゥベ』のような侵略者と戦っていない代わりに物資の不足くらい、と思ってしまうのだが間違っているのだろうか。

悪魔にも人間にも怨みを買っているジプスなど安全では全く無いのだし、せめて物資くらいとも思ってしまうのだ。

ジプスに戻るとジュンゴが立って寝ていた。

どうしたものかと困っているとイラついているワクイが健康診断が始まると知らせにきた。

大阪組や名古屋組も到着していたようで、ジュンゴが立ち寝しているのは朝が早かった影響だろうか。

供に戻ったはずのダイチは何処かへ行ってしまったようで、姿が消えていた。

ワクイの後姿を見送って俺も向かうことにした。

寝たままのジユンゴを置いて行くのも可哀相なので引き摺って向かう。

ジユンゴは背がでかいのでときどき壁にぶつけてしまったのだが、途中で目を覚ますことはなかった。

健康診断を滞りなく終えることができた。

身長が伸びていたことや体重が少し増えたこと、全体的に感覚が鋭敏になっているくらいだろうか。

女医のオトメさんも問題ないと太鼓判をおしてくれた。

悪魔を身に宿しているのだが、特に目に見える影響はないようだ。

ヒロが見知らぬ誰かと会話をしていた。

クルースニクが得体の知れない雰囲気に反応しているがティコは特になんとも思っていないようで静かだ。

相反する反応に困ったが、ヒロが変わらずに対応しているので俺も様子見がてら会話に参加してみる。

雰囲気がエヴァン g……アニメの敵キャラとして出てくる最後の使者に似ていた。

そんなカヲルくんは自分を憂う者だと名乗った。

それは名前なのか……？

最後のシ者っぽいなと呟くと肯定された。

つまり彼は使徒なのだろうか……？

最期の使者という響きを気に入ったのか、見た目には分かり難いがティコ曰く上機嫌で去って行った。

アプリを使わず悪魔を召喚し、『メグレス』の芽を消し飛ばして。

ヒロと別れてジプスに戻ると、立って眠っているジュンゴとそれを睨むアイリを見つけた。

アイリはヒナコに身長をからかわれたことを気にしているらしい。

それはまた、難しいことだ。

伸ばそうと思って伸ばせるものでもないし。

ジュンゴを見ていると寝る子は育つという話も真実なのでは、ということらしい。

確かに22時くらいに睡眠をとると成長ホルモンが……などと聞いたことはあるけれど。

でも、アイリさん。

立ったまま寝たとしても身長は伸びないよ。

むしろ普通は寝れないよ。

遠回しに間違いを正しておいたがわかってくれたのだろうか。

なぜかおどおどしているダイチといつも通り飄々としているジョーがマコトと話していた。

マコトが言葉を発する度に、ダイチが挙動不審ぶりを披露していた。

ジョーがそれを面白がって煽り、ダイチが慌てふためき、マコトが困惑するという事態に。

とりあえず覗きはほどほどにすべきだと思う。

あと、俺も誘って欲しかったわけで。

COMPが用意できたと連絡がきたのでフミの元へ向かう。

フミから受け取り、ティコを移していると小さな振動で床が揺れる。

そして、強い揺れが生じた。

フミが転倒しそうになったので軽く支える。

どうやら『メグレズ』の芽が集まって大きな振動を引き起こしているらしい。

今の揺れで分断されてしまったヒロ・マコト・オトメが脱出するためにフミは使用する装置の準備をするようだ。

フミと別れて外へと向かった。

街中に『メグレズ』の芽が現れているらしく、ジプスが総出で当たっていた。

しかし、揺れ動く足場や崩れ落ちてくる瓦礫に苦戦している模様だった。できるだけ早く数を減らさなければ更に揺れが強くなる可能性もある。

自由に動ける俺が先行して近場の芽を潰していく。

新調したCOMPによるハーモナイザーは想像以上に優秀らしく、長丁場にも耐えられるようだ。

見た目は完全に3DSだが、ヘッドホンを繋いでポケットに入れっぱなしだから問題はない。

周辺の芽を潰しきると揺れが弱くなった。

これならジプスの局員でも対応できるはずだ。

ゆつくりと歩いて戻っているとカヲルくんが佇んでいた。

輝く者——ヒロと話したかったようだ。

それならばと電話で呼んだのでそう間を置かずに来るだろうし、少しばかり相手をしていよう。

会話はそれほど弾まなかったがわかったこともあった。

ニカイアを作ったのはこのカヲルくんだったようだ。

そして侵略してくる悪魔とは違った存在である使徒たちの名称はセプトントリオン。

じゃあ、最期の使者を肯定した彼は……。

考えているとヒロの姿が見えたので立ち去ることにした。

別れ際にセプテントリオンを食べる者がいるとは思わなかったと呟いていた。

……それは俺が悪食ってことなのだろうか。

芽の襲撃も治まったようで、みんなもジプスに戻って来たようだ。

ターミナルという装置が使える様になったので東京・大阪・名古屋を一瞬で移動できるようになったと聞かされた。

ジプスの技術力は世界一ではないだろうか。

どういう原理なのかは不明であり、ヤマトの家で見つけたオーパーツが使われているらしい。

悪魔も人間も情報が集まりなのだから転移させることも可能であるらしい。

うん、なんだか使うのが怖くなったな。

フミが呆れたように電波で情報を送る原理も完全に解明云々……と言われたがそれとこれとは別だ。

ダイチと新田が再び食糧を配っていたのだが、強奪者との争いが起こった。

ヒロたちも颯爽と現れ、悪魔が次々と召喚された。

戦闘開始まで秒読みというところだが面倒なのでアギダインを掌に灯しながら、食糧を燃やされたくなければ全員に止まるよう叫ぶ。

子供から大人、老人までいるこの場で争うとはどういうつもりだと説教しつつ、携帯電話を取り上げていく。

途中でおかしなことに気付いた強奪者たちが悪魔に指示を出そうするも動き出していたヒロたちが電話を踏んで破壊した。

とりあえず状況が落ち着いたので配給を再開する。

荒んだ強奪者を見てしよんぼりしていたダイチと新田も配給を受けた人たちからお礼を言われてなんとか持ち直したようだ。

沈んだり、浮かんだり、気分つてやつは難しいものだね。

ジョーの死に顔動画が届いたと騒ぎになっていたがそれどころではなかった。

俺の死に顔動画をティコが持ってきてくれたのだ。

両腕と頭の欠けた氷像にされている俺と男の姿だ。

クルースニクが激しく反応しているし、なんとなくだがクドラクの面影を感じる。

ヒロたちはジョーに電話が繋がらない様子で焦っている。

探すのにも時間がかかるだろうし人手を考えると手間を欠けるには心苦しい。

用事が出来たのだとジョーを捜索しているみんなに伝えて、死に顔動画の現場である公園に向かう。

あれ、俺ってワクイくらい協調性ないんじゃないやね？とか若干ながらもシヨックを受けつつクドラクを探す。

吸血されたのだろうか、周辺にはミイラのように乾燥した死体が転がっていた。

クルースニクが気配を捉えると同時に氷結系の魔法による影響か公園が凍ついた。

宙を飛び回っている複数の氷塊に向けて、炎で対抗した。

全ての氷が溶け、現れたのはクドラクをスタンドとして背後に佇ませている見知らぬ男だった。

……誰だろうか。

クルースニクの意見としてはただの憑代だろうとのことだ。

クドラクと波長が合い、悪魔を宿すことのできる才能を持つ貴重な人物ということか。

見知らぬ人でも仕方がない。

クルースニクとしては憑代とされている人物を助けたいようだが、クドラクと合う人物かと思うと決断が鈍る。

吹き荒ぶ吹雪を炎で防ぐも全身が凍りついていく。

咸卦法で氷を振り払うが動作が鈍く、震えが止まらない。

呪いに等しい凍結をくらったようだ。

これ以上凍ると不味いと思い、炎を燃やしながらクドラクに迫った。

面倒なほどに強化されたクドラクを弱い炎で燃やすことで、ほんの僅かずつ削る。

どうにかしてクドラクだけを祓えないかと考えた末の答えが見知らぬ男が纏っているマグネタイトを削ることにしたのだ。

俺ほどの深度まで憑依できないためか、マグネタイトを効率よく吸収するために覆う様に纏わりついているようだ。

周りのクドラクを構成するマグネタイトさえ消し飛ばせば、どうとでもなる……はず。

クルースニクの要望は男を傷つけないように細心の注意を払って救出、ということだが今の俺にしてみたら人間はあまりに脆すぎる。

クドラクに憑かれていて普通よりも肉体が強化されていたとしても殴るだけで血袋と化すだろう。

俺は神経をすり減らしながら右手でかすめる様にマグネタイトを削り、左手で撫でる様に吸魔する。

氷結魔法は鬱陶しいがメギドラオンと比べれば戦闘に影響はほとんどない。

とは言うものの、氷結状態のため反応が鈍くなっていて、思うように動けない様に苛立ちを抱えているのだが。

更なる凍結を防ぐために咸卦法で防御しているため、『夢幻の具足』を使うことができない。

もつと限定的に咸卦法のエネルギーを使う工夫が必要なようだ。

強化した脚力を用いて地面を全力で蹴る。

力がほぼ垂直で伝わってしまったのか、震脚もどきとなってしまい、地面が激しく砕けて陥没した。

弾くように力を伝達させるをイメージをして、再度蹴る。

移動速度がかなり速くなったが、直線的な動きとなってしまう、クドラクに紙一重で回避された。

もつと速い必要がある。

踏み込む瞬間、足裏から纏っているエネルギーを放出して推力を上げる。

クドラクの捕捉範囲を超えることができたようだが、直線的すぎるのか容易に回避されるようになった。

もつと移動方向にも遊びが必要に違いない。

公園内に炎を撒き散らしながらクドラクに迫る。

瞬動もどきで加速する。

回避されるが震脚もどきで地面を踏み砕きながら無理やり方向転換して更に後を追う。

クイツクブーストのように咸卦法のブーストを小出しして移動速度に緩急を付けながら、進路に先回りする。

クドラクを置き去りにしつつ、一方的に攻撃する。

最初のうちは回避されていたが、段々と掠るようになってきた。

避けられようとも、逃げられようとも執拗にクドラクを攻撃する。

徐々に削れてきたようで、クドラクに焦りが見え始めた。

撒き散らしていた炎により、凍りついていた公園内の氷が融けて氷結魔法の効果も弱まってきた。

有利な地形として内部を凍らせることで魔法の威力を底上げしていたようだ。

燃え上がるように炎を纏うだけでクドラクが行使する魔法のことごとくを無効にする。

周囲の熱により男が脱水症状を起こし、劇的にクドラクが弱まっていく。

とうとう男が倒れ、クドラクが逃走を始めた。

マグネタイトを削られ、弱ったクドラクの速度では俺からは逃げられない。

追撃の後、封印しようと接近した瞬間、クドラクが倒されていた。
あるえく？

ワクイが俺の後を追いかけていたらしく、氷が邪魔で入れなかったが溶けた為に加勢しようとしたとか。

普段は一匹狼のくせにいいところもあると思う。

俺のために来てくれたのも大変うれしく思う。

ツンデレだとも思う。

だが、ケイタが余計なことをしたのも事実である。

何とも言えない気分だが、復活したクドラクが更に強くなると考えると面倒でしかないのだ。

気絶している男を近くの避難所に放り込んでおいた。

ジョーの搜索に遅れながらも参加する。

動画の場所は俺が餃子ヒーローごっこをしているときに訪れた公園だった。

ジョーが消し炭になるシーンの後ろで畳まれて置かれている白いカーテンがシュールだった。

ツンデレ全開のケイタを引き連れ、ともに現場へと到着した。

誰もいないようなので、再び餃子ヒーローごっこでもやろうとしていたら、俺らがいる反対側から暴徒リーダー・ロナウドが歩いてきた。

ケイタが喧嘩腰で邪魔なので端に文字通り投げ捨てるどジョーが一般人たちを連れて現れた。

その後ろから悪魔の集団が迫っているようで、合流して避難誘導を行う。

ロナウドがこっちだとか叫んでいるが、悪魔の集団を横切つてまで向こうに行くメリットは無いに違いない。

ケイタが嬉々として一般人を無視して戦闘を始め、ロナウドがそれについて怒りながら悪魔を召喚した。

そして、ヒロたちも続々と現れ、公園は乱戦状態へ突入した。

そんな混沌とした現場に救世主が!!

俺つすwwwwww

などとドヤ顔を披露しつつ餃子ヒーロースタイルでポーズを決めた俺と固まる悪魔たち。

ヒロは黙々と行動し、それに連れられるように仲間たちも動き出した。

程無くして悪魔の集団を殲滅した。

ジョーがヒロたちに問い詰められている。

どうやら携帯電話を充電し忘れていて、電池が切れていたらしい。電池切れが生死を分ける現状で充電を忘れるとは、ある意味で凄い。

見習いたくない凄さなのだが。

自分を軽く考えている顕れなのだろうか。

まあ、そういった精神面のケアはヒロがしてくれるだろう。

ジプスで事の進展を聞いているとマコトが落ち込んでいた。

原因はオトメやフミとマコトの差、らしい。

オトメは24歳という若さにしてジプスの医療関係を一手に引き受けているし、フミは研究以外が興味のないマッドサイエンティストだ。

自分の立ち位置を曖昧に感じているのかもしれない。

ヤマトにしたら都合がいいと思うのだけれど。

情に篤いというのだろうか、恩を着せるだけで枷になって唯々諾々と従う。疑いつつも結局従う。

忠犬の鑑のようじゃないか。

それも稀有な才能だと俺は思うんだ、言わないけど。

とりあえず俺みたいにもっと人間関係を浅くすればいいんじゃないだろうか。

ヒロ、テイコ、クルースニク以外なら話し合いなしで戦える自信がある。

盲目的と言えないまでも、他人を信じるのは難しいのだとマコトの様子から思わされた。

分析にはもう少しかかるようだ。

大体の位置なら掴めているが、より精度を高めている段階というのだろうか。

軽くヤマトと話したが、かなり偏った考え方をしていた。

それは力あるものが世界を管理し、正しく支配するというものだ。

半ば軟禁状態で教育を受けていた後遺症かもしれない。

否定しないが、肯定できるような思想でもない。

管理された世界など、息苦しくて堪らないに違いない。

時間つぶしの代わりに悪魔を倒したり、アプリ使用者から携帯電話を巻き上げている

とカヲルくんがヒロと話している場面に出くわした。

話の内容は世界の行く末について、だろうか。

人間の可能性こそが終焉を回避できる可能性があるとか。

彼の話はどうも理解し難いものがある。

だが、世界の行く末には興味がある。

以前と元通りにはならないだろう。

ならば、どこへ向かうのか。

ヤマトの理想も可能性の一つなのかもしれない。

デルタ浮上作戦、これが今回のセプトントリオン撃破の作戦名だ。

東京、大阪、名古屋の三か所に別れ、同時に『メグレズ』本体を叩くというものだ。

東京はヒロが加わり、大阪はヤマトが主導するようだ。

東京に向かつても良いのだが、それだとバランスが悪くなると思い、俺は名古屋組に参加することにした。

ターミナルで名古屋へ瞬間移動。

これがジャツジメントですの！の気分……。

とりあえず、ジユンゴの茶碗蒸しうめえ。

……決して茶碗蒸しに惹かれて名古屋に決めただけではないのだ。

パーティのバランス準拠だ、たぶん。

『メグレズ』の出現ポイントに向かっているとロナウドが追いかけてきた。

襲撃の際、ジプスに不正アクセスを行っていたのだが、そのときに見つけたデータを解析したことで恐るべき事実を発見したらしい。

だから、どうしてもヒロに相談に乗って欲しいとか。

こいつやヤマトはなんでヒロに対して初っ端からほぼ縁MAX感じなのだろうか。チヨロインかよ。

発見した情報は黒い影のようなモノに街が浸食されていく映像だった。

場所は福岡らしく、タワーも呑み込まれていた。

これは本物なのだろうか。

ジプスに敵対しているロナウドが持つてきたものだし、虚偽の疑いも……。

まあ、どっちでもいいか。

ヒロが判断するだろうし、そもそも福岡じゃないし。

むしろ確かめるために行くのもありかもしれない。

平静の海を前に『メグレズ』を待つ。

海から現れるらしく、顔を出したら叩けという作戦だ。

静かな夜の海、という表現が似合いそうだ。

でも戦闘中に落ちたら死ぬかもしれないね。

そういうときって死に顔動画にはどう映るのだろうか。

流される様子だけか、それとも衰弱していく様子がうつるのか。

溺死したりと死因によって動画内容も変わるかもしれない。

試しようがないのだが。

やる気に溢れているロナウドの横で、アイリが嫌そうに眉根を寄せている。

この前のように人類の敵が襲撃してくるので倒しに行くかと教えると、なぜか着いてきてしまった。

ジュンゴは海を見つめ続けているし、フミは興味ないのか潮風でパソコンがダメになると愚痴っている。

フミは研究者なのだから現場に来なくてもいいのでは、と思った俺は間違っているのだろうか。

ジプスも人手不足だからとはよく聞くのだが。

携帯電話が暴走した末に発生する瘴気によつて悪魔が湧いてくるので、それを撃退しながら時間を潰す。

『メグレズ』が水しぶきをあげながら、姿を現した。

同時に電話が着信を知らせた。

どうやらヒロも確認したらしい、すぐに戦闘になるため通話を切る。

大阪から連絡はきていないが、同じように確認できていると思われる。

全員に指示を飛ばし、ハーモナイザーを起動させた。

『メグレズ』は球体に歪な棘を生やした姿をしている。

棘を射出することで芽である子機を其処ら中に配置した。

一つの子機が震えると、それを合図に全てが震えはじめた。

揺れが大きくなり、やがて地震が起きた。

栈橋が揺れ、横波が襲いかかる。

ジュンゴたちが思う様に動けなくなり、姿勢を低くしてなんとか落ちない様に堪えていた。

俺は気持ちの悪い虹色をした子機を潰すために、瞬動で海上へと飛び出した!!

やつべ、つめてえ^q^

虚空瞬動の真似したら海にダイブしてしまった。

なんとか下半身だけで済んだのでCOMPやスマホ、ヘッドホンは故障を免れた。

ビチャビチャに濡れてしまい、かなり寒い。

瞬動を完璧に修得出来ていないのに虚空瞬動の真似事なんて成功するわけないか。

とりあえず普通に地を蹴り、空に浮かんでいる悪魔を足場として思いつき蹴りつづ

すように瞬動する。

空中だと方向が掴みにくいので真っ直ぐ進めなかったが、悪魔を蹴ることで下を決定。

まっすぐとは言い難いが今度は海に落ちずに移動できた。

次は軽く跳躍して身体が宙に浮いている状態で、地面で瞬動するようにして虚空瞬動。

宙での踏切に失敗してやや上向きに進んでしまったが、なかなか上手くいったと思う。

虚空瞬動（仮）の練習をしていたらアイリとフミに怒られたので芽を潰しに動く。

ちなみにジュンゴはフジツボの気分を味わっていて、ロナウドは必死に頑張っていた。

羅漢銭で芽を射撃するが小銭は貫通しただけで機能しているようだ。

威力が弱すぎたのだろう、近くに配置されていた芽を抱えて別の芽へ投げつけた。衝突すると同時に気味の悪い光を放ち、悲鳴をあげながら消滅した。

なんかSAN値がごっそり削られた気がするが、なんとか芽を潰しきる。

やっと終わったぞ、と本体に向かおうとしたら再び芽が落下してきた。

そして、アイリが俺に芽を潰す係りを任命した。

げっそりしながら、芽のことごとくを潰し切ると『メグレス』が沈むのはほとんど同時だった。

終わったんですか、やったー!!と喜んでいると水しぶきとともに再び『メグレス』が

浮上、そして芽を射出した。

——なん……だと……？——

そして始まる芽を潰すお仕事。

苛立った俺は子機を拾っては本体に突き刺す、という動作を繰り返した。

瞬動と虚空瞬動が上手くなったが、全然嬉しくない。

悲鳴をあげて沈んでいく『メグレズ』。

焦燥した様子でやつと終わったんだな、と喜んでいると電話が鳴った。

通話を押すと、同時に倒さないと死なないらしい。

水しぶきとともに浮上する『メグレズ』の姿。

アイリは当然として、ジュンゴとフミの表情が引き攣っていた。

俺たちの反応を見たロナウドはジプスの活動に少しばかり理解をしてくれたかもしれない。

れない。

うわあああああ!!

うぜええええええええ!!

全員の魔法が『メグレズ』へと殺到した。

倒す準備ができたと連絡がきた。

俺たちの怒号と『メグレズ』の悲鳴が響き渡った。

電話で撃破に成功したかヤマトに確認する。

そんなに強くなかったが、『メグレス』の芽を潰すたびに何度も響き渡る悲鳴が脅威なのだ。

アイリが怒鳴りながら何度も俺越しに結果を催促してくる。

騒がしさに流石のヤマトもドン引きしつつ、電話越しに終了を伝えた。

歓びを分かち合いながらジプスへ戻る。

かつてないほど疲れたのだが、これからのセプテントリオンは精神的に攻めてくるということなのだろうか。

そうだとしたら、なんて嫌な敵なんだ……。

つらつらとそんなことを考えているとジプス前まで来ていた。

ゆっくり休むぞ、と戻る中にロナウドの姿。

おまえの所属はここじゃないだろ……。

疲れておかしくなっていたロナウドに元の場所に戻るよう伝える。

やっと気付いたのか、ふらふらと還って行った。

と思っただけで戻って来た。

ヒコに会いたい旨を伝えて欲しいとのことだ。

了承すると再び帰って行った。

……俺もちよつと休みたいのだけれど。

ヒロを探しに東京へ向かうのだが、すでに大阪に行った後だった。

ぐぬぬ……。

ふらふらしているジョーに話を聞くと結婚をする予定らしい。

病気のカノジョにこの戦いが終わったら結婚しよう、とプロポーズしたようだ。

なんという典型的な死亡フラグなのだろうか。

テンプレすぎて逆に何も起きないでくれ、と祈らずにはいられなかった。

大阪にジャツジメントですの！するとすでにヒロはいなかった。

名古屋に向かったとか。

アイツ、自由すぎるだろう……。

がっくりと落ち込んでいると、小さな女の子に励まされた。

少女の名前は菜々子……ではなく、小春ちゃん。

お母さんを待っているらしいのだ。

ヒロを追うのも怠くなつたし、ちよつと休憩がてら遊んでいようかなと。

適当に紙束を見つけたので、一緒にお絵描きしてみよう。

小春ちゃんは悪魔が好きなのか、悪魔の絵ばかり描いている。なるほど、と頷きながら俺も描きはじめる。

俺くらいになると実写かと思紛うばかりの悪魔の絵が描けるのだ。

全身を強化して機械で印刷しているくらいの早さで書き上げていく。

ついでに悪魔の詳細を書き加えて表紙を付ければ悪魔全書（偽）の完成である。

さあ、これで勉強するが良いと渡すと凄可笑顔で受け取ってくれた。

この娘、間違いなく天使やで……。

感動しているとヒナコが呆れたような表情で立っていた。

むしろ俺はおまえのその格好に呆れているよ。

子供の前になんて破廉恥な……：そういえば踊りが得意とか言ってたな。

お絵描きばかりも飽きるだろうと痴女ダンスを小春ちゃんと楽しむことにした。

恰好からしてワイルドなダンスでも披露してくれるのかと思いきや、行われたのは日

本舞踊だった。

やるじゃないか、ヒナポツポ……。

見る目が変わったわ。

痴女だけど。

ヒナコの踊りで和んでいると小春ちゃんの母親が迎えに来たようだ。

その母とはオトメさんだった。

なるほどと納得した。

天使の娘は天使なのは当然だよな、うん。

むしろ大天使の可能性を垣間見た気がする。

決してエルとかメタトロンとかの悪魔は関係ないです。

今は悪魔のせいで天使って表現すると侮辱しているような気がしなくてもない。

もうオトメさんと小春ちゃんのために天使根絶とか目指そうか……

二人が仲良く帰って行く姿を見送ってヒナコと別れた。

女神なら褒め言葉になるのでは、と考えながらターミナルに向かった。

名古屋につくとヒロは外出していると聞いた。

行き先を追うとそこにはロナウドと会話するヒロの姿があった。

……。

……。

……俺の中でロナウドはブチ殺し確定なんだけど。

俺、クルースニク、ティコの全員がロナウド抹殺に承認した。

合議制を採用した脳内会議をしていると、袖を引っ張られたので意識を戻す。

振り向くと嬉しそうにアリスが微笑んでいた。

アリスは機嫌が良かった。

笑顔で跳ねる様に歩き、その後を追う。

首からかけられている水筒が激しく上下に揺れている。

月に照らされた金色の髪が輝いている。

アリスは友達なのかと問いかけた。

俺は友達だと答えた。

アリスは俺にいつまでも友達なのかと問いかけた。

俺はもちろん友達だと答えた。

アリスは俺が魔人になるのかと嬉しそうに聞いた。

俺は出来る限り人間でいたいと答えた。

アリスの笑顔が崩れた。

魔人になるか、死ぬか。

それがアリスの友達だった。

残念だが、俺は人間だ。

悪魔や魔人にいくら近づこうとも、人間だ。

人としての感覚が薄れ、忘れようとも人間でいたい。

悪魔の力に手を伸ばして、届いたとしても人間で在りたいのだ。

だから、人間以外の俺を望むのならば友達にはなれない。

それが俺の答えだった。

アリスは月を背にした。

俺には表情がわからない。

赤おじさんが来るらしい。

それでもなれない。

黒おじさんが来るらしい。

それでも、なることはできない。

アリスが泣きだした。

涙を零しながら消えて行った。

残ったのは、アリスに渡した水筒だけだった。

……ぶち殺されるのか。

怖え。

死にたくないんだけど。

今からでも悪魔になります、むしろ貴女のイヌになります、むしろすでに貴女の魔獣ケルベロスです、パスカルですわんわんとか言つて土下座……してもアリスを泣かせたとしておじさんに苦痛とともに殺されるかもしれん。
うわあ、自殺したほうが楽かも……。

色々混ざってる右腕のすごいパンチ：万能属性。

左腕のすごいパンチ：吸魔

—— 6

今のように時間ができると今後の世界に思いを馳せてしまう。

限りなく遠くに感じる未来の話だが、その時になって深刻な問題は悪魔の存在だと思う。
う。

いなくなるのであれば、人間は再興を目指して進むだろう。

普通の人間にとってベストといかないまでも、現状を鑑みれば十分な世界のはずだ。

まあ、ベストは全てが無かったまま進む世界だろう。

だが、至る所に蔓延って害虫の如く増殖した悪魔が消え去るなどあり得るのだろうか。

悪魔を殺すには非力すぎるし、還すにはあまりにも無知だ。

人間を容易く殺すことのできる悪魔共が徘徊する世界では、非力な存在である人間は隠れ住む必要があるはずだ。

つまるところ、力こそが全てを従える世界になるのだろう。

ヤマトの考えはそういった悪魔すらも配下に置き、歯車とする世界なのだろうか。

だが、理想とは限りなく遠い気がするのだ。

この状況で理想の世界を語り、同意を求める姿は別の何かを目指している風にも感じられた。

それが何なのかはわからない。

ヤマトの理想とは別だが、少しだけ力が支配する世界に惹かれるモノがある。

戦いが続けば、ある意味で世界は平和なのではないだろうか。

悪魔という共通の敵がいれば人間は手を組むかもしれないし、醜く争うかもしれない。
い。

少なくとも世界がゆつくりと腐ることはないのでは、と。

そう考えると、悪魔がいるという状況も悪くないと思えてくる。

悪魔が存在する世界なら、魔界とやらに接続してしまうのも面白いはずだ。永遠の闘争を続ける世界、ヨスガとかどうだろうか。

まあ、結局は勝ち残っても孤独になるから意味ないけど。

ヨスガだとコトワリに応じて顕現する神が便器だっけか。

やっぱり無いな。

誰が好き好んで超強い便器を召喚しなければならんのだ。

いや、トイレは好きだけど。

—— 驚愕の木曜日 ——

世界の行く末から便器までをこんな朝早くから考えていたのには理由がある。

それは目の前で不機嫌全開のフミの相手をしているからだ。

日の出る前にクドラクの痕跡探しをしつつ、未だに死ぬことのできなかつた幸運か不運かわからない星の下に生まれたピクミンたちにオニヨンを提供して戻つてくると幽鬼のように彷徨っていたのだ。

フミは何か大事な物を落としてしまい、不機嫌が有頂天らしい。

不機嫌が有頂天というのも変な表現だが、むしろ正しく表せている様にも思える。

普段から死んだ魚の瞳をしているというのに、今日はそれを上回る暗さだ。

俺のペルソナであるニヤル様くらい闇っている。

闇に飲まれよ、である。

やみのま！

話が逸れたが、つまりフミは機嫌が悪いのだ。

黒いオーラが出ている。

そんなフミを置いて逃げるなど俺には出来なかつた。

どうか逃げるコマンドが無くなっていた。

実験機具で身動きを取れなくしておいた、だど？

なるほどなー。

でも俺ってば一応は人間離れしているわけですよ。

逃げようと思えばちよちよいのちよいで。

正直、フミのチャイナを間近で見たかつた。

フミは昔、といつても数年前だがかなりの努力の末に留学とかしていたらしい。

無いと気になるけど、大切なかわからないし、とりあえず気になるし、もしかしたら重要かもしれないホストファミリーとの写真が原因のようだ。

探しに行こうかと提案するが今は俺の解析が忙しいのだとか。

でも昨日ジユンゴが吹っ飛んでる様子を見てたからできれば写真搜索のほうが……。
なんかフミの機嫌も和らいできた。

ホントに少しだけ。

でも人間と違う箇所を見つける度に興奮するのはやめて欲しいわけで。

ここ数日でよくわからなくなっているのに、追い打ちは勘弁してほしい。

脳と神経が特に凄いか語られた。

人間は多層構造で無駄な部位が多いのだが、徐々に創り変わっている様子が見て取れるとか。

不必要な部位を最適化するように変化していて、今なお進んでいるらしい。

神経は神速インパルス超えだとか……アメフトやろうかな。

原因は悪魔を構成しているエネルギーの浸食によって引き起こされているようだ。

脳だけでなく身体のだこかしらが常に変化し続けている、と結果が伝えられた。

そろそろ悪魔の摂取を止めなければならぬようだ。

やはり食べ過ぎは身体を壊すということか。

腕の痺れとか、眩暈とか、幻覚とかに悩まされなければ良いのだが……。

などと考えていると今後もエネルギーであるマグネタイトを摂りつづける必要がある

ると言われた。

すでに供給量を超えた状態で成り立っているのだから足りなくなれば当然のように身体からそれらが欠けていき、スライム化が妥当だろうとのことだ。

人間として供給できる量を超えてしまっているのも原因かもしれない。

悪魔が手放せなくなったとか、中毒かよ。

辛うじて人間であると判断してくれたが、なんとも言えない。

マジでアリスに土下座して仲魔にしてくれるように頼んだほうがいいかもしれない。

また不機嫌に戻りつつあるフミと茶を飲んでいると、ヒロが訪ねてきた。

その後すぐにヒナコやアイリが押し掛ける様に入ってきて、新田やダイチが扉から室内を覗き込む。

これからターミナルを使って福岡に行きたいようだ。

昨日話していたからか、またはロナウドの情報が出回ったかわからないが真相を確かめるつもりなのだろう。

ヤマトは問題ないと言っていたが、民間協力者は信じていない者がほとんどのよう
だ。

敵対勢力にもたらされた情報で疑われるとか人望が無いな。

だが、フミは嫌の一点張りである。

別に局長であるヤマトのためではなく、機嫌が悪いからやる気にならないだけという。

ホントにヤマトは人望が無いな。

ヒロなんて初対面の相手でも指示を与え、的確に動かすのだから見習うべき。

俺はソロプレイヤーだから、そういった能力は必要ないのだ。

……ちよつと欲しいかも。

機嫌が急降下で絶不調なフミが机に垂れているのを横目に、今日の死に顔動画をチエツクする。

呆れるほどに死にまくっている俺の中から、ヒントになりそうなモノを選別するわけだ。

一つ一つを見るわけでは無く、ティコによって篩いにかけてられるのだからとても新聞を読むよりも遥かに楽な作業で一日の死亡フラグがわかってしまうのだ。

このお手軽さはやはりティコがいるお蔭である。

もし無人島でサバイバルすることになったらティコを連れてくには違いない……充電できないけど。

そんな感じで俺の死亡集をダイジェストで流しているが中には興味深い動画が二つ

あった。

一つは緑色のスライム・クドラクとの戦闘が映されている物だ。

内容は戦っている最中に毒々しい玉葱に直撃して死ぬという衝撃的な展開だ。

とりあえず、クドラクとまたエンカウントすると考えておけばいいか。

もう飽きてきたよ、クドラクの相手をするのは。

もう一つは黒いスーツの紳士が俺をぶち殺す動画だ。

たぶん、アリスが言っていた黒おじさんだと考えられる。

多くのパターンがあり、代表的なのは死んだ俺がゾンビになるというものだ。

他にも腹をぶち抜かれて死ぬ、汚い花火、現代アート、奇妙なオブジェ、とても価値

のあるオレンジといったバリエーション豊富な死に方だ。

面倒なことに多くのアンデッド的な悪魔を次々に召喚することができるようだ。

ただ、有り難いことに黒おじさん単体で襲ってくるらしいので何とか凌げれば生き延びることができる……はず。

自分の死亡シーンのダイジェストを見ていると気が滅入るので、軽く気分転換をしようとかOMPの画面から顔を上げる。

……フミの苛立った顔では気分が逆に悪くなる。

なんとか気を紛らわせようと、小春ちゃんにしたようにお絵描きをする。

今回は悪魔を描くのではなく、単なる似顔絵なのだが、ささっとフミ本人を描いた紙を渡す。

俺の意外な特技に驚いたのか、気をよくしたのか、目を丸くしたまま紙を見つめていた。

折角だからと他のメンバーも描いてみる。

ヒロたちがフミの落し物を見つけるまでお絵描きは続いた。

落し物が見つかって機嫌がよくなったのか、フミがターミナルを使える様にしてくれた。

福岡へ行くことのできるコードは自分たちで見つけるようにとも。

ヤマトが命令で釘を刺していたようだ。

局長の権限って凄くね。

フミが従うとか半端ない……組織ってこういうものか。

驚いて損したわ。

ヒロに呼ばれたので着いて行く。

今日のセプトントリオンと思われる影を見つけたらしい。

なんとなく一緒に歩くのは久しぶりな感じがするのだが、気のせいだろうか。

新田とかダイチ、ジョーといないのは珍しい。

そんなことを考えていると、ヒロに「人の生きる意味」を訊ねられた。生きる意味……。

それを考えて生きている人なんてほとんどいなかったと思うし、今もそれほどいいんじゃないだろうか。

まして意味を見つけた人など皆無かもしれない。

誰かの為つてのが基本だが、実際はどうなのだろうか。

最近ホントにそういつた感覚がわからなくなってきた。

なんというか、薄くなつてきているように思える。

悪魔との親和性の高さが原因のようだが。

俺の生きる意味ってなんなのだろうか。

死にたくないからと惰性で生きている。

意味なんて考えたこともなかった。

ばあちゃんのようになりたいたいと思つたことがあつたけれど、それとは違う気がする。

カッコいい人で憧れたが、それだけだった。

誰からも慕われていて、何時までも笑つていそうなばあちゃんは簡単に死んでしまつた。

静かな部屋に寝せられた姿がとても怖かったことを憶えている。

二度と起きることのないばあちゃんは今全て失ったように思えたのだ。

生きるとは失わないことなのだろうか。

失わないということとは死なないということか。

死なないことこそが生きる意味？

寿命だけで言えば悪魔は人間よりも遥かに永く生きられる。

つまり悪魔になることこそ人間の生きる意味……なわけないか。

そういえば、ヒロのおじさんとおばさんはどうなったのだろうか。

親身に世話をしてくれた良い人たちだった。

恩を返せないままこんな世界になってしまったのが悔やまれる。

たぶん、死んでるだろうし。

……ばあちゃんも死んだときに沢山の人に惜しまれていたことを思い出した。

死んだ後ですら、それぞれに何かを残すことのできる人だった。

もちろん、俺にも。

人間に固執する理由はばあちゃんを思い出すからかもしれない。

人との縁を大切にしていたばあちゃんを。

作戦室に入るとすでにみんなが集まっていて、ヒロと俺が最後のようだ。

俺たちの姿を確認するとすぐにヤマトが口を開いた。

東京に神経毒が蔓延しているらしい。

セプテントリオンと思われるので、情報収集しに行こうぜってことだ。

張り切る学生たちと、それを見送るジプスの制服を着た大人。

なんか間違っていないだろうか。

というか、戦闘のエキスパートとかいないものか。

あ、死んだのか。

それ、エキスパートじゃないから。

戦闘ならゴルゴ13くらいの不死性を持ってないとダメに決まってる。

外に出て街を徘徊する空気の中、毒々しい色のタマネギが降ってきた。

空に目を凝らすと幾つかのタマネギを上空から様々な地点に落下していた。

『ドウベ』のじばく、『メラク』のれいとうビーム、『フェクダ』のでんきシヨック、『メグレズ』のじしん。

これらのことから不用意に近づいてはいけないと学んだのだ。

そんなことを考えているとジプス局員がおもむろに近づいて行き、タマネギが割れた。

悲鳴をあげないがら局員が倒れた。

これは間違いなく神経毒だな。

本日のセプテントリオンはどくどくが得意技のようだ。

たぶん毒タイプなのだろう。

ヤマトがセプテントリオンの解析に入ったので防衛しろと言いだした。

面倒だなど思いながらも戦っているが、ヤマトを援護する必要が全くない。

むしろガンガン前に出て戦い、ピンチの仲間がいたら援護する始末だ。

ツンデレとかそういうレベルじゃないぜ……。

というか解析はどうなっているんですかね。

そろそろ解析の終わりが見えた頃に、増援が現れた。

増援とは緑色の苔のようなモノに覆われた人型であるヒトコトヌシだ。

背中にスライム化したクドラクに憑りつかれているのか、徐々に接している箇所が溶けている。

キモい姿をみんなで見ていると、やがてヒトコトヌシの身体がスライム・クドラクに取り込まれた。

そして復活したクドラクは元気に宙へ浮かぶと、タマネギが直撃した。

毒を浴びてグズグズになっていき、消え去った。

一体何がしたかったのだろうか。

タマネギ爆撃をやり過ぎているとヤマトの解析が終わった。

セプテントリオンのコードは『アリオト』。

東京タワーに向かっていているようで、ここからでも見えるようだ。

でかい（小学生並の感想）。

空の彼方から徐々に迫ってくる姿は、巨大怪獣としか思えないフォルムである。

しかも空を飛んでいるのでこちらから干渉できそうにない。

なんだかナスカの地上絵のモデルっぽいし。

タマネギで街が汚染され、悪魔も人間も関係なしに死んでいる様をクルースニク

レーダーで捉えた。

セプテントリオンがガチ過ぎてどうしようもない。

ヤマトが対策を思いつくまで待機の知らせを受けた。

上空から毒物ばら撒く相手への対策とはどんなものだろうか。

ミサイルとか持ち出したら完全に特撮になりそうだ。

巨神兵東京に現る、みたいな。

プロトンビームがあれば『アリオト』も撃墜できそうだ。

Wikiで巨神兵を調べると「架空の人工生命体」ってカテゴリになるんだけど、そこにはヴォルケンリッターが含まれている。

「つまり二つは同じなんだ!!」「な、なんだってー!!」と脳内で遊んでいるとケイタがシャドーボクシングっぽいことをやっていた。

宮田くんやカマキリの姿は見えない普通のシャドーボクシングだ。

ただ単に眺めているとジュンゴが猫を抱いて現れた。

じゅんごという名の猫らしい。

自分と同じ名前を付けるとは、ジュンゴさんはやはり天才やでえ……。

ワクイの真似をするとパンチがシュツと出やすいことに気付く。

シュツと出やすいのだ。

……大阪はシュツとしているよな、うん。

パクツたモーションを利用すると居合拳が使えるようになった。

ポケットに引つ掛からない様にシュツとするのがポイントだ。

鞘のように使ったら破れたから間違いない。

……ちよつと着替えて来よう。

居合拳の威力は大したことは無いが、携帯電話の破壊には役立つはず。

とりあえずコスプレっぽい白と青の制服を脱いで、上黒で下赤な感じに着替えた。

ネコミミヘッドホンとも相性ばっちりで魔王とかになれそうだ。

これだけだと寒いので上着が欲しいところだが……。

ダサカッコいいメカメカしいスーツを見つけたが、俺は謎の穴へ奇妙な旅をするわけではないので却下。

白スーツに黄色ネクタイとかオールバックの人向けなので却下。

オレンジっぽい合羽のような服は並行世界のモノであって、ここにあってはダメそうなので却下。

他にも学生服とか、奇抜な服が見つけるが明らかに俺が着ていいものではないので却下。

詳しく解説してはいけない気がするものばかりで辟易してきた。

発光する刺青でもいれるか、とふざけつつテイコに相談していると黒地に緑のペンキをぶちまけた様なオサレな外套を見つけた。

これは……!!

たぶん、並行世界の従兄が着てるに違いない。

つまり今はヒロにこそ相応しい……無いな。

とりあえず奇抜だが他に良さそうなのも無いし、これにしよう。

ヒロがパスパタが何なのか知りたいということで相談された。いや、知るわけないだろ。

それはジプスにあるらしいのだ。

パスタの親戚か何かでしようか。

そういえば「ぼしたさん」って凄い響きじゃないだろうか。

破壊力抜群だわ、うん。

オトメさんが笑顔で「ぼしたさん食べましょう」とか誘ってきたら瞬殺される自信がある。

悩殺そのものである。

プロポーズまで一直線。

オトメさんマジ女神。

パスタの親戚の線が濃いということで食堂を目指しているとマコトが通りかかった。

挨拶もそこそこにパスパタについて聞いてみた。

どうやらパスタは関係ないようだ。

パスパタとはシヴァがブチギレたときに出る炎のことだ。

瞑想しているときにカーマがシヴァに矢を当て、ちよつと心を乱したときにパスパつたらしい。

それを再現して『アリオト』を撃墜することになった。

つまり、カーマなら簡単にキレさせることができるからマトになって安らかに死ねることだ。

日本なのにシヴァやカーマのようなヒンドゥー教が出てくるのかと疑問を持つてはいけない。

悪魔に国境はないのだ。

クルースニクが転がっている日本だし。

これが和洋折衷つてやつか……。

シヴァは踊りを好んでいるという。

ヒナコー択ですね、これは。

むしろヒナコが以外が踊ったらブーイングの嵐だ。

主に俺とヒロによるものだが。

次は色気というが……。

フミは機嫌が悪いのかわからんが、色気とかぶち殺すぞヒューマン状態である。

マコトは苦手だと言いつつ残して逃げた。

オトメさんが最有力候補だ、俺の中では。

女子力MAXだし。

ヒロは新田が推しメンのようだ。

そんな感じで話しているとアイリが顔を真っ赤にしながら怒鳴り始めた。

つまり、アイリが色気担当でいいのだと半ば引つ張るようにジプスから連れ去る。

……アイリは可愛いと思うが色気は微妙な気もするけど。

歌舞伎町の広場まで悪魔を蹴散らしながら来ると、フミがパソコンを操作した。

ゴゴゴ……なんてそれっぽい音とともに謎のオブジェ（人間ではない）が出現。

どうやらカーマはこれに封印されているらしい。

中にジャムみたく詰め込まれているのだろうか。

もしかしたらマグネタイトの状態でぶち込まれているかもしれない。

だとしたら悪魔のスープだな。

そんなオブジェの前に立って待っているが、何の変化も起きない。

風とともに空き缶の転がる音まで聞こえてきた。

早く色気出せ、アイリさん。

煽ってみるとポーズを決めてくれた。

どうやら彼女なりのセクシーポーズというやつらしいのだが……。

ヒロが空き缶を転がして不満をアピールした。

俺も空き缶を転がしてみた。

アイリが怒ったでござる。

そんな感じでアイリをおちよくっていると思われた顔でフミが色気をなんとかしてくれるそうだ。

俺「録画だ!!」

ヒロ「●REC」

などとフミのサービスシーンに期待を膨らませていると、放っておいたアイリがキレた。

流石に茶化しすぎたかと反省しているとアイリが上着の裾に手をかけて脱ごうとしていた。

よし、任せろ!!とフミからアイリに録画状態のスマホを向ける。

ヘソが出たあたりでカメラが出現した。

空気読めよ糞悪魔。

クロノス教頭みたいな話し方しやがって。

言っておくけど遊戯王カードでは何も解決しないからな。

デュエルを挑んでそのまま喰われたやつとかいるから注意しろよ。

カーマにパスパレと命令するが断られた。

理由は「ぼっ」とされるからだとか。

俺は今、貴様を「ぼっ」としたい。

「ぼっ」というか「ぐちやつ」みたいな感じで。

スライム直前までマグネタイトを削って、パスパるときに最低限与えようかと思つて
いると怒りがおさまらないのかアイリがカーマを殴り飛ばした。

ダメージはほとんどなかったようがさらに怯えたのか、ジャックランタンを召喚し
た。

そしてカーマもジャックランタンに姿を変え、逃走をはかった。

背中を見せていたジャックランタンたちを追い抜き、進路を塞ぐように立つ。

怯んだのか、立ちすくんでいる姿を横目に転がっていた空き缶を拾う。

カーマさん♪ カーマさん♪

ここに空き缶があるでしょ？

——数分後の貴様の姿だ——

空き缶が潰れ、溶解した。

現世に在るカーマは分霊だ。

分霊は本体の力を一部と記憶を受け継いでいる。

もちろん、恐怖も同様だった。

苦行の末にシヴァの子以外に滅ぼされることのない肉体を約束されたターラカを倒すために、神々は真冬の山に籠っているシヴァを必要とした。

シヴァは苦行を己に課していたのだ。

神に命じられ、シヴァを矢で射ることこそがカーマが抱き続ける恐怖の原因となつた。

いつもと同じようにオウムに騎乗し、ミツバチを弦としたサトウキビから作った弓を持ち、妻ラティと親友のヴァサンタを伴って、冬山を登った。

いつもと同じように苦行者を邪魔するがごとく、先端に花を彩った矢でシヴァを射た。

いつもと同じように命中し、いつもと同じように心を乱した。

いつもと違ったのは、妻を亡くしたばかりで哀しみを忘れる様に瞑想していたシヴァが相手だったことだ。

生じた欲望によって心が乱され、カーマの矢によって邪魔されたことにシヴァは気付いた。

激怒したシヴァはカーマを焼き尽くした。

カーマは自らの身体が徐々に灰になり、消え逝く様を見せつけられた。

そして、激怒したシヴァに滅ぼされたときと同じような恐怖をカーマは感じていた。シヴァによって再び燃やされるくらいならばと逃走を試みたが、人間に先回りされてしまった。

姿を捉えることができないほどに速く動く人間だった。

その人間に最も近かったジャックランタンが握り潰され、頭部が消し飛んだ。

次はその近く、その次は更に近く、と徐々にカーマへと迫ってきていた。

逃げ道を塞ぐように巧妙に移動しながら。

近づくにつれて、ジャックランタンが悲鳴を漏らした。

そのジャックランタンは現界した姿のまま、マグネタイトを吸われていたのだ。

スライムの姿へ変化し、吸収速度が緩やかになった。

だが、解放されることはなかった。

より永く苦しむようと、炎で燃やしていたのだ。

人間は炎に魅入るように笑みを浮かべ、スライムと化したジャックランタンは苦悶の声をか細く発した。

その様が、肉体を灰塵にした炎が未だ燃え続けるように焼き付いて脳裏から離れない恐怖を思い出させた。

恐怖で震えることしかできなかった。

ジャツクランタンだったモノが挙げた奇声で気付いた時には、すでに自分しか残っていないなかった。

逃走を止めるだけならば、ここで手を止めるだろう。

残り一体となった自分がカーマなのは、当然のことなのだから。

しかし、この人間が止まるのか。

ふと、直前で放たれた言葉を思い出した。

——数分後の貴様の姿だ——

このままでは自分は殺される。

融けゆく物質と同じように、自分は身を焼かれ殺されるのだ。

そう確信した。

しかもシヴァのように怒りに身を任せて殺すのではなく、ゆつくりと遊びながら苦しめながら殺される。

人間とはそういうものなのだ。

変えていた姿を元へと戻し、すぐさま人間に従うと伝えた。

爛々と燃え盛る炎が「ぼっ」と目の前を通り、瓦礫を融かした。遅れるように熱風が通り過ぎ、人間が満足気に肯いた。

話し合いは世界を救う気がするね。

カーマを見てそう思った。

他人と分かり合うには理解を示すことだと思うんだ。

こんな廃れた世界だからって諦めてはいけないよね。

肉体言語から会話へのコンボに気付くとは、やはり天才か。

何も言わずに余っていた携帯電話へとカーマを強制的に収納。

会話？

悪魔と会話とかエクソシストの仕事だろ。

残念ながら俺は違うんだわ。

宿しているだけ。

陰陽師の才能があるかもしれないけど。

ソワカ!!とかニワカ!!とかやるんでしょ。

超得意だわ。

あと破っ!!とか。

これは寺生まれか。

次はシヴァ降臨の儀式だ。

シヴァは踊りが好きな神様なので、ヒナコの見事な日本舞踊で一本釣りというわけだ。

ちなみにシヴァの妻はパールヴァティなのだが彼女は元は色黒だったらしく、シヴァに肌の色を馬鹿にされたことを恥じて森にこもって苦行に明け暮れるという萌えキャラである。

可愛すぎるだろ、パールヴァティ。

褐色系としての可能性も秘めていたというから凄まじいポテンシャルだ。

なんやかんやあつて黒い肌と別れたのだが、その黒い肌はパールヴァティの怒りと合わさつてカーリーになったとか。

カーリーは勝利のダンスで世界を危機に陥れ、シヴァが下敷きになったという逸話もあるほどアグレッシブ。

シヴァどんだけ妻が好きだったんだって話だ。

カーマもブチギレられて当然だね。

今日パスパるけど死んでもしょうがないよね。

ちなみに最初の妻でパールヴァティの転生前のサティは父親に結婚反対をされたから怒って焼身自殺した。

シヴァはブチギレてサティの遺体を抱きながら都市を滅ぼして回ったとか。半端ないね。

ホントにシヴァは妻、というかサティがどんだけ好きなんだって話だよな。

カーマはパスパられるけど頑張ってるね。

愛の神だし大丈夫だ、問題ない。

わかってくれるはず。

愛を確かめるためとか言っておけばいける。

寂しかったの、とか。

おまえに飽きたんだ、とか。

あなたが一番よ、とか。

類似系もいっぱいあるし、大丈夫だろ。

……まあ、本音言えば無理だろうけど。

人間だつて無理なときがあるんだから、シヴァにそんなことを言ったら滅ぼされるに違いない（確信）。

死んだら拾ってやるから安心するがいいさ。

カーマのときと同じような謎のオブジェに向かってヒナコが踊りを披露していると、悪魔がわらわらと集まって来た。

音に釣られたのか、踊りに引き寄せられたのかわからない。

悪魔を呼ぶ儀式の際に、踊る方法もあるらしいし踊りには悪魔を引き寄せる力があるのかもしれない。

とか思ってたら、フミがシヴァの力に引き寄せられてるだけだと教えてくれた。ツマンネ。

悪魔を倒すのも飽きたのでヒナコの踊りを座りながら見る。

指パッチンで燃やしておけば処理できるし。

メギドラオンで周囲を消し飛ばしたら早いんだろうが、さすがにダメっぽい。

ヒナコの胸が横チラしかしくなくてCERO-Bを呪っているとシヴァが現れた。披露された踊りに上機嫌である。

頼みごともある限りでなんでも聞いてくれるとか。

俺もヒナコの絶対領域を突破できるなら何でも言うことを聞いてしまいそうだ。

九条緋那子でググれば俺の気持ちをわかってもらえるはず。

ジプスへ戻って来たが、解析待ちのため自由時間。

黒おじさんとやらの対策会議を開いた。

前にお香をもらったときにテイコが解析したデータがあるのだが、凄まじいの一言に尽きる。

しかも、この数値が全力ではないとのこと。

死ぬかもしれんね。

自力を上げるために悪魔を狩るが、それだけでは心もとない。

とはいうものの、生存フラグになるようなモノが欲しいところ。

相手を必殺できる都合の良い技などは望んでいないのだが、やはり難しいか。

とりあえず出現場所を探って射程外から地道に削るのが最善だろう。

スマホでは出来なかった死に顔動画による予知を本格的に導入しようということだ。

黒おじさんにだけ絞ればある程度までテイコが頑張ってくれるらしい。

俺、この戦いが終わったらテイコと結婚するんだ……。

冗談だ。

冗談だけど、テイコ超かわいい。

行動する度に死に顔動画による黒おじさんの出現位置が変わるといふ遊びを発見した。

運命とは行動することで簡単に変える事ができ、自分次第なのだたと納得した。

あ、黒おじさんが便所に出現した。

そんなことをやって黒おじさん無限出現√遊びをやっているとヒロが仲間を伴って現れた。

これから福岡に行くらしい。

暇だし俺も行くことにしようかな。

マコトを問い詰めてターミナルへ向かう。

福岡へ乗り込めー^^と転移した。

外へ出ると黒い何かが街を切り取るように浸食していた。

これが……。

これがシュバルツバース……。

あのシュバルツバースに触れると人間でも悪魔でも消えてしまうらしい。

つまり「人類よ。これ以上何を望むのだ」状態ですね、わかりません。

巨大なターミナルを作ってセプテントリオンをぶち込んだら戦闘を楽に解決できそうなんだけど。

闇に『アリオト』を落としたら瞬殺じゃないだろうか。

でも東京から札幌まで移動してたし、闇も乗り越える気がする。

この未元物質（ダークマター）はセプトントリオン側のモノってことか。もしくは少年の陰からホムンクルスみたいにならわらうって……だとしたらセリム探してぶっ殺すしかない。

戻つてくると皆どこかへ行ってしまった。

ヤマトに福岡の惨状を問い詰めるとか言ってたけど。

ヒロは達観、ダイチは置いてけぼり。

俺は小春ちゃんを見つけたので優先順位が一瞬で書き換わった。

俺、ロリコンなのかな……。

折り紙を見つけたので二人で折ることにした。

オトメさんが最近はお働きすぎで心配だということをお話された。

確かに一人でかなりの役割を占めている。

心配になるのもわかる気がする。

小春ちゃんも心配しすぎで暗くなっちゃったので折り紙で悪魔を生産する。

段々と興が乗っていき、数多の折り紙の集合である『砕け逝くジャックランタン』を完成させてしまった。

でかい（小学生並の感想）。

腹部や頭部のパーツを外すことで徐々に崩れていき、最期にはバラバラになる。カメラのときに喰ったジャックランタンを再現してみたものだ。

小春ちゃんの受けが予想以上に良かったのでレギオンも作ってしまった。

キモいぞ、これ。

色も再現したからな……。

小春ちゃん的には可愛いらしいのだが、色んな意味で将来が有望だ。

オトメさんが小春ちゃんを探しにきた。

少し外へ行くことになったようだ。

小春ちゃんが嬉しそうにオトメさんに飛びついた。

ジャックランタンがバラバラになった。

まだ仕事なので相手できないと伝えられた小春ちゃんが寂しそうに離れた。

外へ散歩代わりに連れて行けばいいし、俺も付いて行くので心配ないと提案する。

渋々ながらも許可をもらい、小春ちゃんも大喜びだ。

タワーに行き、そこで警備しているジプス局員の状態を調べるといのが今回の仕事だ。

俺とオトメさんで小春ちゃんを間に挟んで手をつなぎながらゆっくり向かう。

ときどきぶら下がるように体重をかけるのが好きなようで、オトメさんが少し困って

いたが楽しそうでもあった。

タワーに着くと悪魔の集団に囲まれているヒロとヤマト、マコトの姿があった。

俺たちとヒロたちで挟撃した形になってしまった。

小春ちゃんが危険なので肩車する。

あまり激しく動くことができない縛りプレイに突入である。

まあ、オトメさんの魔法で怯んだ敵を居合拳で潰すだけなんだけど。

それほど時間も経たないうちに悪魔の数が半数を切っていた。

劣勢だと気付いたのか指揮官級の悪魔が小春ちゃんを人質に取ろうと一直線に走ってきた。

骸骨のような頭部に高貴な装束、火の灯った燭台を片手に持った悪魔であるビフロンスが全速力で迫ってくる姿は明らかに気味が悪い。

小春ちゃんのトラウマになってしまいかもしれない。

そんな可能性を零にすべく、全力で居合拳を放つ。

ビフロンスの左半身を消し飛ばし、尚も威力が納まらない拳圧は射線上にいた悪魔たちをも巻き込んでいった。

……メギドラオンを込めたら予想以上だった。

残っていたビフロンスの半身も居合拳で消し飛ばし、マグネタイトを回収していく。

小春ちゃんは間近で悪魔が見れて喜んでいたが、オトメさんは胆を冷やしたに違いない。
い。

バガブーは出現しなかったが、関係ないに違いない。

ヤマトと合流するとセプテントリオン対策が整ったと伝えられたのでジプスまで戻る。

折り紙しながら聞いた作戦はソードアイ作戦。

『アリオト』の射線上にカーマを配置し、パスパタで撃ち殺して貫通するであろう熱線により外殻から本体をたたき出す。

そして、外殻から振り撒かれるであろう毒を中和しつつ本体を倒すというものだ。もちろん、小春ちゃんはお留守番だ。

折り紙で『真つ二つビフロンスクン』を作ったので暇つぶしにはなるはず。

あの巨体を撃墜しても平気なのかとヒロが聞き、ヤマトは問題ないと答えた。

札幌に撃墜予定だが、すでに無秩序な崩壊した世界しかないので大丈夫らしい。

ウソか、ホントか。

どちらでもない、半端な状態が正しいといったところか。

たぶん生き残りはいる。

多くはない。

避難は満足に出来ていないが、ジプスもあつたはずだ。

活動できる程度には機能していたようだし、その周囲は少なくとも北斗の拳よりはマシだったはず。

俺の考えは確実ではないし、信じ切っている面々には何も言わないでおこう。

ヤマトは信じていないのに都合がいい部分は信じてしまう。

こんな世界だ、しようがないのかもしれないが。

士気を下げるのは良くないし、そもそも面倒だ。

人命救助や避難誘導を言い出すに違いない。

すでに避難所も機能しているか怪しいし、していても受け入れられる余裕はない。

毒混入タマネギが降り注ぐ中での作業などしたくもない。

だから何も言わない。

他人のために行動できるのは彼らの美点だと思うが、俺には関係ないのだ。

たぶん、若さつてやつなのだろう。

つまり躊躇わないことか。

ヤマトも躊躇わないのは若いからだろうか。

カーマを断頭台に送る途中でダイチに話しかけられた。

浮かない表情だ。

ここ最近はこの感じだからいつも通りなのかもしれないけれど。

話の内容は「自分たちがなぜ戦う必要があるのか」というものだった。

確かにそうかもしれない。

俺もなぜ戦っているのかよくわからん。

一応は拠点として使っている礼のつもりではあるのだが。

解決してくれる誰かが現れないから自分たちで解決しようとする。

聞こえはいいが、利点も無しにヤマトが動くとは思えない。

あんな性格だし、「無能は死ぬ!!」とか言いながら安全圏を確保するはず。

つまり、戦った先に在るモノが……。

なんか考えるのめんどくさくなったな。

ヤマトに問い詰めたら答えてくれそうだし、そのうち聞いてみようか。

そういうえばダイチの相談にちゃんと乗って無かったわ、俺。

めんごめんご。

『アリオト』が見えて毒タマネギが降らない見晴らしのいいビルの屋上でスタンバイ。

せつかくだから俺は赤のカーマを選ばず、と召喚。
何の赤かつて？

血の海に決まってんだろ、言わせんな恥ずかしい。

シヴァの準備もできたらしく、こちら次第という段階になった。

合図を出したら矢を射ると指示を出していると、勝手にカーマが矢を放った。

……あ？

カーマを全力で放り投げ、『アリオト』の外殻に突き刺した。

毒とかモロに浴びてヤバいだろうが関係ない。

死ねばいい。

ちようどパスパタが視界を横切り、カーマごと『アリオト』に突き刺さった。

落下しているのを確認してターミナルへと帰還。

毒に耐性あるのか不安だし、落下の衝撃も凄まじいに違いはない、それを免れたとしても毒の海に沈む人々など見たくない。

ジプスまで戻ってくると中和剤を担いで準備済みの面々がやる気に満ちていた。

毒が拡散するまで少し時間が空いたので待機だ。

とりあえず一つだけ言っておくことがある。

茶碗蒸しうまい。

茶碗蒸しを食べていると、若干機嫌の悪くなったアイリが隣に座った。

ヒナコが離れたところでにやにやとした笑みを浮かべ、周りから人がいなくなつた。

たぶん、ヒナコがアイリをおちよくつて怒らせたので火の粉が降りかからない様に逃げたのだろう。

アイリがプンスカと擬音が聞こえてきそうな表情をしながら女性メンバーを批評し始めた。

ヒナコは確かに痴女だし、同意する。

新田はヒロの支持が強いので何も言えねえわ。

マコトは意外と可愛い、まことさんにじゅうろくさいかわいい。

フミは……ぶっ飛んでるところもあるから何とも言えない。

オトメさんマジ女神、ちなみに小春ちゃんは実子ではないという魅力2倍キャンペーン中だがすでに魅力は無限大で天元突破、止まるところを知らない。

本音を言ったらヘソを曲げそうなので相槌を打ちながらマフラー似合つてて可愛いよと褒めておいた。

照れてるアイリマジ天使。

……天使だと褒め言葉にならないから。天使はマジで滅ぼしたほうがいいかもしれ

ん。

まあ、冗談抜きで褒め言葉に照れてツンツンしちゃうアイリは可愛いよ。

マフラーの無重力感を考えながら、ジユンゴの茶碗蒸しのおかわり。

そして俺が食べ終わるのを見計らって作戦が決行。

基本的に俺は戦場の端から援護、残りはパーティを組んで『アリオトコア』へと向かった。

外殻と比べてやたらと可愛くなった『アリオトコア』だが、毒タマネギを降らせるのが厄介な点だろうか。

俺が居合拳でどこかへ飛ばしたり、『アリオトコア』の羽だか触覚だかよくわからん物にぶつけて遊んだりすれば無効化できるのだが。

『アリオトコア』が目に見えて弱り始めたのだが、外殻がまだ動くらしく毒を撒き始めた。

毒タマネギは弾いているが、長引くと中和剤が切れるかもしれない。

悩んでいるとフミが新しい中和剤ができたと知らせてくれた。

中和剤を抱えているのはジプス局員だが、毒沼で命を懸けて戦うよりはマシだろうし頑張ってくれ。

俺の元まで必死になって運んでくれた中和剤を片っ端から投擲する。

とりあえず、必要な場所に配置できたはずだ。

残りを『アリオトコア』目前の位置に突き刺した。

戦場から一気に毒が中和され、リンチされる『アリオトコア』。

哀れなほどにぼっこぼこである。

最後は自らの外殻に潰されてこの世を去った。

死んだのかわからんが、エネルギーを撒き散らしていた。

スタツフが美味しくいただきました。

途中で死にかけのカーマを見つけた。

パスパタで焼かれ、毒に侵され、それでも現界していた。

凄まじい執念だ、感動的だな。

だが無意味だ。

カーマを踏みつぶした。

俺は二通りの方法で吸収する。

マグネタイトとして吸収する方法と悪魔の形で取り込む方法だ。

マグネタイトは悪魔をぶっ殺して食べ、取り込む場合は丸呑みして徐々に吸収だ。

マグネタイトのほうが効率は良いが、丸呑みは姿が変わらない合体のようなものなの

で気分で吸収方法は変えている。

カーマは最後の最期でパスパタに巻き込まうとしたので砕いて跡形も無くし、毒素を散らしてから食った。

結構溜めこんでたな、こいつ。

作戦終了後に問い詰めるとヤマトが目的を話した。

『ポラリス』というセプテントリオンの親玉がいて、そいつの力で新しい世界を創造するというものだ。

世界創造とはスケールが半端ない……のだろうか。

宇宙とか含んでそうなのに範囲が地球、というか日本だからなあ。

なんか微妙だ。

たぶんすぐに皆が知ることになるだろう。

人の数だけ願いがあることだし、三国志状態の予感。

俺はどうしようかな。

何も考えずに『ポラリス』とやらに呐喊するのも悪くなさそうだけど。

特に思いつかないんだよね、望む世界とやらが。

残っていたので収穫してきた毒タマネギと毒沼エキスを詰め込んだ容器、中和剤を詰

め込んだスーツケースを片手に持ってジプスを出す。

黒おじさん襲撃の間だ。

ここに留まっていると押しかけてくるっぽいし、外のほうが戦いやすい。

テイコが手を借りたらどうかと提案してきたが却下した。

自分のことは自分でやりなさいという教えが俺にはあるのだ。

むしろ、それしか無い……はず。

何か他に教えられたっけなあ。

随時生成されている死に顔動画で黒おじさんを予知しながら移動。

人が全く居らず、悪魔が蔓延っている場所を戦場を選んだ。

投げやすそうな瓦礫がそこら中に転がっているのも俺としてはポイントが高い。

黒おじさんの出現場所がこの先にある公園に固定されたのを確認し、ビルの上を狙

撃ポイントに選択。

高濃度のマグネタイトが出現するのを感じながら、毒タマネギを持つ。

強い衝撃を与えない限りは爆ぜないらしい。

つまり思いっきりぶつければ破裂する。

黒おじさんの出現と同時に毒タマネギを投擲した。

失われし数多の意思よ 我が元に來たれ！

ここだ！クレイジーコメント！ 更に！トウインクルスター！更に！ミックスマスター！更に！プリンセスオブマーメイド！

転がっている瓦礫を黒おじさんを飲み込んだ毒沼目がけて投げつける。

弾幕は数だ!!

瓦礫による弾幕の中、こちらを捕捉したらしい黒おじさん。

姿は悪魔のものになっており、墮天使ネビロスというデータを確認した。

古より伝わりし浄化の炎：消えろーエンシェントノヴァ!!……に似た置き土産とともに離脱する。

ネビロスが俺のいた場所に出現すると同時に破壊の炎がビルを破壊した。

虚空瞬動で別のビルへ移動し、再び瓦礫をネビロスに投げつける。

方向は死に顔動画で随時確認している。

出現しそうになったら毒を撒いて離脱、移動によって発生するエネルギーの残滓を雑魚悪魔を砕いて紛らわせ、別のビルから投擲を繰り返した。

攪乱はメギドラオンが一番理想的だが、魔力がもたないので悪魔で代替した。

距離は徐々に、そして確実に詰められている。

それでも削り続けるのは俺の方が確実に自力で劣っているからである。

ときどき、オークションで買った悪魔や取り込んでいた悪魔を喰って回復していたがそんな余裕はなくなった。

互いに目視できる距離まで近づいた。

スーツケースを遠くに放り投げて咸卦法を発動させる。

一瞬で迫ってきたネビロスに居合拳で牽制するが意に介した様子も無く、そのまま突撃してきた。

つよい（小学生並のかんs……防御した右腕がぶっ飛んだ。

……つよい。

死に顔動画やテイコ、悪魔知識などによるとネビロスは魂を引っこ抜くらしい。

それで死んだがために餃子ヒーローとしてよみがえった人がいたとかいないとか。

近接戦は完全に死地ですね、腕だけで済んで良かった。

メギドラオンで一度距離を取って、右腕を拾う。

ぐりつとやると元通り、切断面が綺麗で良かったぜ。

冗談だ。

回復魔法も使ったけど、魔人街道を一直線だからできる芸当でもある。

俺、人間やめるってよ。

未だに血が赤いのがとても嬉しく感じた。

ネビロスと距離をとるとキモい悪魔を召喚し始めた。

ネビロスに牽制しつつキモ悪魔を潰して食い、魔力を回復。

さっきの攻撃で魔力を奪われたのが痛かった。

ネビロスは魔力を吸収、というか強奪するような能力を持っているらしい。

……なんて嫌らしい悪魔だ。

なるべく接近されない様に回避しつつ戦っているが、火力不足が否めない。

削れてるんだかわからん。

もつと俺に力を……え、無理？

そう言わずに頼むよ。

無理？

マジか……。

現状は肉体が魔人へ向かっていて、これ以上混ざると悪魔になるって感じらしい。

寄越せ!! って無理矢理やっても何かに阻害されて強制停止状態だ。

ヤバイ。

このままだと死ぬ。

喰らえ、逆転の一撃!! とメギドラオンを込めた左腕で居合拳を放つ。

メギドラオンの衝撃で大ぶりになってしまい、接近を許してしまった。

腹を貫かれ、何かは抜かれていく。

同時に虚脱感に満ちて動きの鈍くなった右腕をネビロスに突き刺す。

メギドラオンがすべてを包んだ。

右腕がメギドラオンの衝撃でめっちゃ痛い。

というか腕だけでなく全身を焼かれて悲鳴があがるが、生きているのでよし。

ネビロスも立っているが内部から吹っ飛んだのだ、そろそろ限界が見えてきたはず。

スーツケースから毒液が入った容器と中和剤を取り出した。

ここまで誘導したのだ、最期まで気は抜けない。

中和剤を足元に突き刺し、毒液をぶちまけた。

元気なときと違って、スライム化が迫る弱った身体に毒はキツイはずだ。

残っている魔力でメギドを腕に込める。

メギドラオンは厳しい。

さあ、俺が今立っているここがセーフゾーンだ。

ネビロスが襲い掛かってくるモーションを見せた瞬間、居合拳。

メギドを込めた居合拳はネビロスを砕いた。

キツ過ぎてゲロ吐きそう。

黒おじさんが死んだ跡に変な人形が落ちてたから拾ってしまった。

どう見ても黒おじさんを模した物だ。

おじさん、実は人形だったのか……。

今日はヤバい。

マジでヤバい。

もう休むから。

絶対寝るから。

ジプスに戻り、自室で寝るからとみんなに挨拶しようとして会議室を訪れると嫌な静寂に包まれていた。

嫌な予感しかない。

俺の逃走しようという意思を読んだかのようにヤマトがドヤ顔で世界の支配者になると宣言。

……面倒なことになったな。

平行線の言い争いに発展するに1000魔貨、と。

久しぶりに寝たいんだけど、叶わなそうだ。

オリ主の技

真・夢幻の具足：瞬動+咸卦法のブースト。飛べる、というか滑る。超はやい。

万魔の一撃（仮）：強化されつつあるすごいパンチ。セプテントリオンとか悪魔とか食べてるから超すごい。

至高の魔弾（仮）：メギド・メギドラオンを込めた居合拳。暴発させたりする。燃費が悪い。超つよい。

茶碗蒸し：ジュンゴが作った茶碗蒸し。猫も食べる。超うまい。

メギドファイア：Law……？な主人公には一生使えない。超ぎょうぎ。

— 7

悪魔を使役するサマナーと悪魔は密接に関係している。

俺がマグネタイトとして吸収せずに残している悪魔のほとんどは過去に様々なサマナーに使役されていたことがあるらしい。

そんな悪魔たちの話は主に使役していたサマナーの話なのだが、これは暇つぶしには最適だ。

魂が移つたために別人として生きたり、アイテム係りのカツオハッカーだったり、東京の崩壊に巻き込まれたり、金剛神界に置いていかれたり、崩壊後の世界に生きて唯一神を倒したり、目覚めたら魔人になっていたり、ペルソナと呼ばれるもう一人の僕を駆使したり、ダサカツコイイスーツを着て人類最後の旅を楽しんだり、コール!!したり……本当に様々だ。

悪魔たちは分霊なのでサマナーとの面識がないが、どことなく楽しそうだった。一度でいいから俺も会ってみたいものだ。

—— 決別の金曜日 ——

昨日は面倒で仕方なかった。

ヤマトが『セプトントリオン』の親玉である『ポラリス』の力で願望を叶ようとしているという事だったのだが、そこから各々の主張を繰り広げられた為に話が長引いてしまったのだ。

考えが違うのは当然だが、ヤマトに反発する者が多かった。

激化する実力主義か、歪な平等主義か、またはどちらでもない別の何かか。

実欲による更なる格差は好まない、責任が増えそうで超めんどくさい。

可笑しくらい完全な平等も無いな、何もかも均等とか気持ち悪いし。

中立は現状ではありえない、考えが極端だとか仲間同士での争いはしたくないだとかで先が見えない。

時間的にも余裕がないし、あんまり選択肢が無いな。

全員ぶつ殺して俺が勝ち残ったら、この世界を消滅させて別の世界に飛ばしてもらおうとしようかな。

神に別世界に飛ばされて仕方なく生きてるけどなんだかんだく、みたいな。

なら「ハリー・ポッター」の世界でおなじやす!!

「お辞儀をするのだ!!」「うるせえメギドラオン」とかワクワクする。

まあ、全部冗談つすよ☆

……たぶん。

今日の死に顔動画も興味深いものが二つあった。

輝いている新田を背に見事な氷像にされているモノと赤おじさんと思われる紳士に焼き殺されているモノ。

どうやらクドラクが再び襲撃にくることと、おじさん☆リベンジが行われるというこ

とを示唆しているようだ。

すぐにティコやクルースニクと作戦会議をする予定だが、今日もまた忙しい一日になるだろう。

人気者はツライぜ。

たぶんクドラクは放っておいても襲撃してくるだろうし、受け身でいいか。

蔓延っている悪魔を喰い歩く。

悪魔の腹を素手でぶち抜いて活きの良いまま取り込んだり、砕いて取り込んだりとグルメな喰い方だ。

喰うって言っても口でパクツとしていたわけではなくて手で吸い取っている感じだからね。

渴きが満たされた・・・とかとは違うんです。

喰奴ではないのだ。

もつと上品に食事しますから。

マジで食うとか芸が無いわ。

そんな感じで朝から元気に悪魔を喰っていると憔悴しているロナウドと出会った。

ジプスにフルボッコにされて暴徒はほぼ解散したらしい。

ジプス打倒を目標として活動していたのに勝ち目が見えなくなって迷っているらしい。

ポラリスの話でも流しておくか。

俺の言葉を何も疑いもせず信じるロナウドが少し心配です。

まあ、真実だし精神的にも限界がきていたのだろう。

追い詰められた状態で逆転の機会が都合よく転がってきたのだし、信じてしまうのは人間として当然かもしれないね。

これで間違いなくロナウドは平等を掲げる勢力を引っ張るに違いない。

わかりやすいやつが先頭に立っててくれた方が俺も楽だし、きっと他の勢力と争ってくれるに違いない。

ヤマト、ロナウド、中立。

全員が争うことで俺がソロで活動しても勝ち目が出てくるというものだ。

争え……もつと争え……なんてね☆

説得されたらその勢力にコロツと所属しそうだけど、種くらい蒔いても構わんだらう。

ジプスに戻ってくるとジュンゴが血相を変えて走ってきた。

少し怪我をしたじゅんご（猫）を抱えている。

悪魔に襲われそうになつたらしい。

猫つて悪魔には餌としてどうなのだろうか。

オトメさんのところに連れて行くことにした。

ジプスではなんでもかんでも怪我ならオトメさんつて感じなのだがオトメさんは大丈夫なのだろうか。

現場に出て、医療面で働いて、子育てして、と休む暇がないのではないか。

ここにオトメさん超人説が生まれた……。

オトメさんのもとにじゅんごを預けた。

軽傷だからそれほど心配するほどでもないとか。

ジユンゴはじゅんごをそのうち街に放す予定があると言っていた。

街は悪魔が蔓延つてヤバそうなんだが、いいのだろうか。

オトメさんの顔色がちよつとよろしくないのが気がかりだ。

大阪本局の出入り口近くまで来るとヒロたちにこれからビリケンさんという幸運の神にお参りに行かないかと誘われた。

皆やる気に満ちていて、ヒナコなど念入りに悪魔をチェックしていた。

どういふことなの……。

とりあえず俺はいいかな、と断って別れる。

赤おじさんが襲撃してくるまでに溜めこまないと死亡フラグが折れないからだ。

悪魔はどこに沢山いるかなと索敵しているとジプスから小春ちゃんがこそこそしながら出てきた。

おやおや、小さなお嬢さん。こんな危険が溢れる世界に一人でどこへ行くのかな？

ミソビタミンDを求めて外へ飛び出したという話だ。

オトメさんが多忙で疲れも溜まっているため、なんとか元気になって欲しいとフミに相談したら勧められたとか。

味噌パワールで凄いとかなんとか。

ホントは説教とかしてジプスに帰するのが正しいのだろうが、そんなことはしない。

全部肯定してくれる優しい親戚のおじさんとかお兄さんとかそういう人いるじゃん？

小春ちゃんにとってのそういうポジションになりたいのだ。

マスオさんと呼んでほしい。

俺にはそんな人はいなかった……ヒロカ？

まあ、そんな感じだし我慢ばかりの小春ちゃんには是非ともワガママを言ってほし

い。

後でオトメさんに怒られるが、それも兼ねてだよ。

現代アートなどがありそうな場所を避けつつ悪魔を小春ちゃんの視界に入らないようにぶち殺して歩く。

テキトーに魔力を飛ばしておけば蔓延っている悪魔程度なら碎け散るのだ。

あとは漂うマグネタイトを回収するだけという簡単なお仕事。

真つ赤なザクロが飛び散っていない壊れているが内装はまだ安全な店を探す。

有名な薬局のチェーン店からミソビタミンドを見つけたので買っていく。

レジにお金を置くのはマナーだからね！

ホームセンターとかヒランヤとか俺の記憶には残っていない。

悪魔に襲撃されたくらいで店主がいなくなるのが悪いのであって俺は悪くない。

俺の後ろには母を心配して無理をした娘と娘がいなくなつて心配した母の二人が抱き合う感動的な姿があつた。

お互いの絆を確かめ合つて（；▽；）イイハナシダナーと単純に感動したいところだが、そもいかなかつたりしちやつたり。

『セプテントリオン』の一体である『ミザール』が襲つてきたので迎撃している途中な

んだな、これがな。

そういえば俺はアホセルのほうが好きなんだけど。

OGは未だに違和感が……。

いや、ラミアルートだと敵のアクセルがガチモードなわけだが。

あれはビビった。

しかもあんまり「う、これがな」とは言わない気がする。

ソウルゲインはHP回復が付いていて火力が高い、アンジュルグはおっぱい、アシユセイヴアーは移動が速くてソードブレイカーもかつこいい、ヴァイサーガはシールドにHPが用意されていて壊れるまで本体は無傷という超仕様。

しかもGBAのスパロボAだとニュータイプなだけ、アホセル。

マジでつよい(確信)。

……ラズアングリフ？

そんなことよりも『ミザール』が倒せない。

『ミザール』自体は脆いのだが、攻撃したときにもげた一部から更なる『ミザール』が出現して、そいつもまた……と延々とループ。

ループするなら大人しく死んでくれませんかね。

今回は増殖するタイプのようだ。

面倒になってメギドラオンで吹き飛ばすが倒すよりも分裂速度のほうが速い。分裂した子機を殲滅して撤退したほうが良さそうだ。

とりあえず周辺の『ミザール』を取り込んで退避を選択した。

ジプスに戻ると巨大な魔法陣が都庁の地下にあるという話をしていた。

どんな噂だ。

悪魔召喚プログラムは契約、召喚、送還、報酬取引、合体、などの色々な機能も揃っているとティコが言っていた。

召喚は儀式のプロセスをコンピュータで行うものだし、スパコンのようなものを使って更に凄い儀式を行えば魔法陣をわざわざ使わずに済む気がするんだけど。

素人の浅知恵では及ばない何かがあるために魔法陣があるのだろう。

そもそも魔法陣がない可能性のほうが高い気がする。

巨大というのだから超すごい悪魔とか召喚できそうだ。

メタトロンとかどうですかね（棒読み）。

あの巨大なら『ミザール』も倒せるんじゃないか。

『ミザール』撃破の作戦を練りたいところだが、一番知識のあるヤマトがいないので待機だ。

自由時間みたいなものだな。

普通にジユンゴの茶碗蒸しを食べながら駄弁るだけだ。

アイリは昔、ピアノストを目指していたが諦めてしまったとか。

俺も絵を描いてた、ばあちゃんが生きてる頃からかなり昔だけど。

今ではちよろつと描くだけだ。

見せたい人がいなくなつたのに頑張つて描いてもしょうがない。

アイリは続けたくても続けられなくなつた。

俺も同じようなものだろうか。

喜んでくれるなら描いてもいいかなつて思うけど、どうなのだろう。

俺は続けようと思えばできるのだから、贅沢なことか。

まあ、現状では続けようがないとは言いつこなしか。

考えているとヤマトが入室。

『ミザール』を倒す方法があるが、賭けになるっぽい。

昨日福岡で見た世界を消そうとしている闇から守っているのが各地のタワーから張られている結界の力のおかげなのだが、それをカットして凄い力で『ミザール』を撃破するということのだ。

何が賭けなのかという、結界を切ることによって闇の浸食が早まるらしい。

三日経たずに浸食されきるといふから確かに賭けになるだろう。

他に良い方法が思い浮かばないのだから、超凄い力を利用するしかなさそうだ。

このままで解決せずに時間切れになりそうなら早いうちに賭けに出て、終焉が訪れる前に『ポラリス』へ向かうということだろうな。

それで話が終われば良かったのだがドヤ顔でヤマトがこれからを語り、ヒロを勧誘し始めた。

それを見て堰を切ったように各々が主張を始めた。

主張する意見があるやつらは元氣だが、ダイチと新田は伏し目がちだ。

どちらに与することもできないというのだろう。

ダイチも新田も誰かが解決するのを期待して、その誰かが解決しようとしている。

しかし、その誰かの主張が納得できない。

そんなときはどうするのだろうか。

決まった主張が無いというのも難しいものだな。

実力主義、平等主義、どちらでもない。

ヒロはこの三大勢力から大人気だ。

放置された俺としては羨ましい限りだ。

つうか誰か俺を誘えよ。

マジで別世界行こうか悩んでしまう。

そんなボツチな俺は小春ちゃんと折り紙ですよ。

小春ちゃんマジ女神。

…：そろそろ天使狩りにいこうかな。

山の火口にある結界のクサビをちやつちやと抜く。

チームはこの前と同様に分かれたが、特に苦も無く終える。

問題と言えば、ヒナコが凍えていたくらいかなー☆

あの布の面積じゃ、防寒も糞も無いよな。

俺も上着をフミに貸したから薄着ってレベルじゃなかったが、悪魔ばうあー☆のおかげで大丈夫だった。

抜くのは問題なかったが、その後にヤバいことになった。

富士山が噴火した。

なんかやつちやつちった感じがヤバい。

とりあえず、富士山から目を逸らして寒かったから夜はみんなで鍋だなという話になった。

食材は一人一品を持ち寄る制度だ。

悪魔……ダメだよな。

再びジプスに戻つてくると次の作戦へと移行。

結界の超凄い力を龍脈に集中させて龍を召喚するというものだ。

だが、このときに依り代となる者が必要になるので危険だとか。

ちなみに依り代は適正のある新田だ。

俺はぶつちぎりだが先約がいるからダメっぽい。

喰ったら使えそうなのだけれど。

ちなみに憑依したら死ぬかもしれないか。

召喚に使う悪魔は毒か何かだよ。

シヨックを受けたのか新田が何処かへ行ってしまった。

ヒロが説得に向かい、それほど時をおかずに戻ってきた。

決心できたらしい。

新田に憑依させる悪魔召喚の儀式のために都内の公園へ。

公園に着くとカーマやシヴァのときと同じような装置を呼び出して、ルীগを呼び出

す。

新田に悪魔を憑依↓龍脈の力を新田に憑依した悪魔が集約↓魔法陣に注ぐ↓龍召喚、

という流れのようだ。

この龍脈の力が強大なので失敗すれば死ぬかもしれないとか。

俺でもいいんじゃないかって思ったけど、ヤマトは俺がこれ以上力を持つことを危惧して
るんで新田さん頑張ってるね。

失敗したら俺がやるだろうけど。

すでに無数の悪魔の中にいることだし今更ルークを取り込んでも問題ないだろう。

だから安心してくれても構わんよ。

……安心してないか。

ルークがふわあつと出てきた。

が、浸食を受けているために実態が保てないらしい。

光の球と化してどこかへ飛び散ってしまった。

ドラゴンボールみたいだな。

マグネタイトに引き寄せられた悪魔と争奪戦が起きた。

まあ、それは問題ではないのだ。

ほとんど一撃で片付いたし。

問題はこの光の球を取り込みたいな、と。

つまみ食いを我慢するのが大変だった。

この力で『ミザール』を倒せたらドラゴンボールそのものかもしれない。
願い事をかなえてく感じ。

使い終えたら石になるのだろうか。

ルীগの欠片を集め終えた。

い。
どうやら新田の死に顔動画があったらしいのだが、場所が違うらしいので解散っぽい。

龍脈の力を利用する時が新田の死亡フラグだろう。

死にかけたら悪魔とか食わせたら蘇ったりして……。

新田は死ぬ可能性を前にして少しだけ意思が強くなつた気がする。

ダイチも誰かを当てるのではなく、自らが変えようと決意したようだ。

それでも仲間とは戦いたくないし、主張も極端すぎてついていけないとのことで中立のようだ。

それだと逆に戦いになる気がするのだけれど。

どこかで妥協するのが生きること、でも妥協すると妥協した世界に生きることになるわけで。

決意が遅くなくて良かったと思う。

今だからこそ、妥協せずに済むのだろうし。

負けたら結局妥協したのと同じになるだなんて言うのは無しだ。
生きるって窮屈だな。

何かある度に誰かしらとぶつかり合ってしまう。

主張なんてそれこそ消える可能性すらあるわけだ。

極端なほうが主張がわかりやすいし、中立は厳しい立場になるだろう。

まあ、俺は中立には属す予定が全くないけど。

先週までの平和な時間に戻すとかやりそうだし。

否定された時間を繰り返ししてどうするつもりだよ。

ループものにしたいのだろうか。

デビサバループとかすんのか。

俺は嫌だぞ。

戻したとしてもそのうち同じことを繰り返しそうだし。

『ポラリス』のさじ加減一つにかかっているとマジ勘弁。

ならば元を断つとかどうだろうか。

元ってどっちだ。

人間か、『ポラリス』か。

い。
というか、かなり関わっている悪魔が道具の一種でしかないのが不思議でしょうがない。

危険で便利な隣人、というやつか。
隣人にしては物騒すぎる。

脳内で警鐘が鳴り響き、クルースニクが危険を知らせた。

テイコが死に顔動画が更新され続けていると呟いた。

視界いっぱい燃え盛る炎が降り注いだ。

遅れて悪魔どもが騒ぎ始めた。

死に顔動画や予想よりもかなり早い赤おじさんこと魔王ベリアルによる襲撃だ。

捕捉できる範囲よりも外からの攻撃だった。

色々な方向に回避しながら移動してるのだが、大体の位置は捉えられているようで、少し前にいた場所に凶悪な炎が降り注ぐ。

炎については耐性、というか無効化まで出来るのだがこの炎をどれだけ軽減できるのか心配だ。

わかりやすくいえば赤犬に貫かれたエースみたいになりそうだし。

魔王は伊達じゃないっすよ。

マグネタイトの保有量も尋常じゃない。

ネビロスと戦った時も街の一角を焦土と化すくらい粘ってスライム化だった。マジで洒落にならん。

遠すぎて未だに捕捉できない。

というか炎の角度で位置を判断していたが、よく見ると炎はワープしていきっている。

ワープという表現が正しいのかわからんが歪んだ空間が出ている感じだ。

ということは、俺が向かっている方向が間違いな可能性もある。

探し回ってスライム化、といきたいがこちら辺は人間の活動域だ。

悪魔だけの廃墟なら良かったのだが。

魔力を滾らせて気合を入れる。

中にいる悪魔が騒いで鬱陶しい事このうえない。

『セプテントリオン』やリリス、ネビロスのときは静かだったのに今回は騒ぎ過ぎだ。

炎に飛び込むくらい、問題ないだろう。

メギドラオンと比べるとぬるま湯に違いない、たぶん。

足を止め、感覚を狭める。

炎が出てくる瞬間、流れに逆らう様に飛び込んだ。

空間を逆流しベリアル目の前に降り立った。

俺が死ぬには火力がちよつと足りなかつたな。

ベリアルを目の前にしたイメージは鈍重だった。

間違いなく行動は遅い。

その遅さを長射程の炎で補っている。

力は受けないことにはわからんがネビロスでさえ馬鹿力だったのだし、ベリアルは間違いなくヤバイ。

距離を取って……!!

広域魔法、だと……？

視界が炎で塞がれた。

空気が焼かれて呼吸が儘ならない。

ベリアルの位置を感覚で捕捉しようとするが、膨大な魔力でマヒしているのかボヤけてしまっている。

動くべきか、踏みとどまるべきか。

悩んだのは一瞬だったが、それを読んだかのように衝撃が炎を突き破って俺を襲った。

衝撃波によって抉られた跡が地面に刻まれていたが、それを見ている余裕はほとんど

なかった。

ベリアルが持っている銚っぽいものが振られる度に斬撃が飛び交う。

別世界のベリアルはそんな危ないモノ持ってなかったはずだ。

龍とかエリマキトカゲとか、そんな感じだった気がするのだが。

まさかイメチェンしたのか……。

斬撃を掻い潜って接近する。

牽制でばら撒いたアギダインは吸収されてしまった。

炎は効かないようだ。

掠った個所から勢いよく血が噴き出していった。

裂れた傷口から衝撃で噴出しているらしい。

火炎系は耐えられるが衝撃系は厳しく、じわじわと削られている。

マグダイン!!とパチモン魔法を物理で放つ。

つまり地面を殴って石つぶてを飛ばしているだけだ。

激しく降り注いでいる炎を突き破ってベリアルと肉薄した。

メギドラオンを込めた正拳突き。

ほとんど動じないままベリアルが拳を振りかぶった。

腕に力を込めて防御。

物理反射ごと後方に吹っ飛ばされた。

反射を貫通とかどうなってるんだよ、あいつ。

万能属性か何かだろうか。

だが、物理反射はきちんと働いていたとテイコが言っている。

おそらく反射の限界を超えたのだろうとも。

つまり反射で跳ね返っていた力すらもそのままねじ伏せたというのが一番近いのか
もしれない。

ベエエエりああアアるくウウウウウウウン!! って感じにブチギレそうだわ。

反射が役に立たないとは話が違うじゃないか。

正直、準備期間がなかったので詰んでいる気がしないでもない。

馬鹿の一つ覚えのように斬撃を掻い潜って接近する。

ここで戦闘するにはマズイ。

ジプスまで被害が及んでターミナルが吹っ飛んだ場合、かなり不味い。

それに一般人がゴロツと死んで、ヒロたちが集まるかもしれない。

集まっても構わないが、今日まで過ごしたやつらが死ぬのは夢見が悪そうだ。

最近は何も見ないけど。

とりあえず、戦闘はもつと遠くで行いたいのだ。

ベリアルに組みついた。

足りない力を補う様に悪魔を融かして吸収していく。

何らかに阻害され、限界が訪れたのを見計らって全力でベリアルを投げた。

虚空瞬動でビルを蹴りながら追う。

投げ飛ばされた勢いを羽を広げることで殺し、飛んで戻ろうとしているベリアルへと

至高の魔弾（仮）で追撃する。

降り注ぐ炎に身を焼かれながら更に空中を滑って連打を浴びせる。

ほとんど効いていないが、慣性だかなんだかでベリアルは吹っ飛んでいる。

世界を浸食している闇が見えてきた。

このまま突き落としてしまえばと甘い考えを持ったが、どうやら無理らしい。

ベリアルを中心に獄炎が渦巻き、そして空ごと俺を飲み込んだ。

広域魔法か……!!

燻っていて焦げ臭い。

一応、火炎は無効なんだがな。

核熱か何かよ。

重力に引かれて地面へと落下していく俺が見たのは太陽を背にしてベリアルが放つ斬撃の嵐だった。

マジな話、死にそうだ。

溜めこんだマグネタイトを使い切る前に死にそう。

もつと供給量を増やせないのか。

ゆつくりではあるが、上限は解放されているらしい。

これ以上ペースを早めると悪魔になってしまいが、今の上限なら馴染んで魔人になれるらしい。

魔人になる前に俺が死んでしまう。

悪魔でもいいからもつと増やせと催促するが阻害されているから無理なようだ。

原因はなんだ。

教えたら壊すつて当たり前じゃないか。

死にたくないんだよ、俺は。

何もせずに死ぬだなんて、忘れられるなんて、絶対に嫌だ。

ヒランヤを砕いた。

ガラス細工が割れるようなきれいな音だった。

俺を縛っていたのはヒランヤだった。

アリスが縛っていたのだ。

泥のように濁った闇が影に溶けていく。

留まっていたマグネタイトが隅々に流れ、染み込む。

悪魔だったモノたちも同様に溶けていく。

そして心音以外、ほとんどしなくなつた。

静かだった。

俺の中にいた悪魔はクルースニク以外全て吸収したから当然なのかもしれない。

ほんとうに静かになった。

砕けたヒランヤが粒となって、砂のように風に乗って消えて行つた。

すまんな、アリス。

ヒランヤは間接的にだけれどベリアルが壊してしまつたよ。

ベリアルがいなかったらヒランヤは今もその形を保つたままに違いない。

つまり全部ベリアルのせいだ。

わるいおじさんだな（すつとぼけ）。

あんまり変わった感じがしないが、どうやら影のみが悪魔になったようだ。

ヒランヤが直前まで肉体を縛っていて、精神というか魂はクルースニクがいたためと予想するがどうだろうか。

足元で影よりも遙かに濃い闇色の泥が脈動している。

血走った目玉がぎよろぎよろと蠢くように獲物を探し、鋭い牙を生やした口が音を立てて閉閉を繰り返している。

……これならハガレンのセリムごっこができるな。

変化を読み取ろうと呆けているとベリアルは斬撃に襲われた。

強化などを全解除状態だったので飛び散る肉片とそれを見ている俺。

肉片は以前と同じように半魔のような状態だが、マグネタイト次第で再生というか修復可能なようだ。

肉片が影に溶け、時間が戻るように飛び散って欠損していた部位が戻っていく。

影、というか口が飛び込んできた斬撃や瓦礫を片っ端から飲み込んで分解している。

肉体はあまり悪魔化の恩恵を受けなかったようで、影と比べると脆弱そのものだ。

影なんて飲み込んだものを分解してマグネタイトに変化させるといふ超性能だといふのに。

それでも膨大な量のマグネタイトを消費しているのだから燃費の悪さが窺える。

頭の中では何度も繰り返すように飢えと渴きを訴えている。

この身体はひどくお腹が空くようだ。

ベリアルで満たさせてもらおうか。

全てが俺の食糧だ。

降り注ぐ炎も、飛び交う斬撃も、散らばる悪魔も、ベリアルも、みんな。

満たされない飢えと渴きが困ったものだが、それ以外は悪くない。

平面でしか存在しなかった影が俺の足元を基点に三次元の存在として動くようになつた。

足場として乗るのも良いし、そのまま食らいつくように飛びつかせるのも良い。

俺がいくら頑張つて攻撃しても無傷だったベリアルにダメージを容易く与えられる。

死角から迫つた口が腕を食いちぎつた。

思つたよりもやわらかかったな、ははは。

周囲の瓦礫を飲み込んで、それでも足りないので影を伸ばして悪魔たちを飲み込む。

気付いた時には地上は俺の影だけになっていた。

空には満身創痍のベリアルが浮かんでいる。

全てを覆う様に影が空へと伸びていく。

回避するベリアルルの逃げ道を徐々に塞いでいく。

夜が訪れたかのように、闇の泥が広がる。

空を黒に塗り潰し、最期にはベリアルルをも飲み込んだ。

さすがの魔王、溜めこんでいたマグネタイトはかなり上質だった。

つまり、うまかった。

かゆ うま

というか、ベリ うま

目の前で赤おじさんを模した人形が落下してきた。

拾おうとするとどす黒い闇に飲まれた。

俺ではない。

つまり、アリスだろうか。

後始末はしなくても良さそうだ。

どうせ世界を浸食している闇が切り取ってしまうだろうし。

この闇を喰えたら俺が支配者に……触れた部分の影が飲み込まれてしまった。

止めておこう。

ジプスに戻ると騒ぎになっていた。

俺が強い悪魔と戦っていたと伝えると納得したのか静かになった。
どういふことだし。

そろそろ作戦を始めるらしい。

新田に悪魔↓龍脈集中↓龍召喚、というやつを本格的にやろうぜつてことだ。

夕方でも暮れてきた。

新田にルーグの光を近づけると徐々に吸収されていく。

あとはヤマトが噂で出てきた魔法陣を完成させれば龍を呼べるらしい。
待っている悪魔がルーグの力に誘われたのか、集まって来た。

新田は力を統合しているようで、動けない。

防衛線の始まりだ。

クドラクも襲撃してきた。

誰得だよ。

クルースニク得だな。

四肢を食いちぎって転がっているクドラクに近づくと。

災厄が云々とか。

なあに、これからは俺の中で飼って殺すからそのうち見られるさ。

不味そうな見た目だったので一息で飲み込んだ。

準備が出来たようだ。

ヤマトの知らせとともに、新田が光り輝いた。

ルージュの力を纏ったのか、軽い跳躍で都庁の高さまで飛び、光の槍を顕現させていた。

美味そう……ではなく、神々しい。

槍が地面を突き破り、魔法陣を照らした。

そして、轟音とともに龍が地下から飛び出した。

遠くの方で龍が『ミザール』を飲み込んでいる。

これで解決かと気を抜いていると、どうやら『ミザール』はビルにしがみついているらしい。

なにそれ可愛い。

アホなことを考えてないで現場に急行だ。

ビルの屋上で『ミザール』が龍に飲み込まれないよう耐えている。

龍は噛みついていてのか傷口から『子ミザール』が生み出されて、地上に落下してきていた。

とりあえず俺はここで『子ミザール』を処理する係りになった。

落下の衝撃で死ぬのが大半だが、影を広げることによって踊り食いが可能なのだ。

上ではかなりのドンパチが繰り広げられているようで、落下物が半端ない。

悪魔とか、『ミザール』の一部とか、瓦礫とかだ。

思ったよりも食べ放題で嬉しい限りだが、俺が普通の人間だったら死んでるからね。

瓦礫とかヤバいから。

死に顔動画もレッドアラートだわ。

自動で食いながら空を眺めていると、『ミザール』が龍に飲み込まれた。

どうやら勝つたらしい。

そういえば誰かが降ってきたら飲み込むことになってたけど、どうせ死ぬんだから俺の力になったほうがいいよねという俺様論を展開しておく。

まあ、人間は飲み込んでないから問題ないね。

『ミザール』を飲み込んで満足したらしく、落下してきた龍を放置してジプスへ戻る。後で龍って食ったらダメなのだろうか。

龍脈の力とか引き出せそうなんだが。

ジプス本局で鍋である。

みんなが持ち寄った具材という恐ろしい縛りで行われる鍋パーティー。ちなみに俺はミソビタミンDにしておいた。

他にはリンゴだったり、柚子、青汁コーヒー、たこやき、茶碗蒸し、いか焼きヨウカ、味噌チヨコレート

ミソビタミンD以外は結構まとも……ではないな。

柚子は新田が持ってきたがソデコポジションを意識したのだろうか。

ヒロが普通にロナウドを連れてきた。

鍋に省くには可哀相ってことか。

ねえよ。

ロナウドはクツリキーの名に恥じぬ材料である甘栗を剥いたお菓子を躊躇わずに投入しやがった。

鍋が更なるカオスへ……。

空腹感が半端ないので誰も手を付けていない鍋を食べながら会話を聞いてみる。やはり各々の主張する世界を目指して云々ってことらしい。

『セプテントリオン』はラスードから倒すことで、ここにいるメンバーなら『ポラリス』に会えるようだ。

ヤマトの実力主義、ロナウドの平等主義、旗本のいない中立。

中立は新田が立つかもしれないね。

そんなことより、誰か俺を誘えよ。

明日もソロとか悲しくて泣けるぜ。

いじけていると小春ちゃんに似顔絵をもらった。

上手というわけではないが、にやけてしまう。

つまるところ、こういうのはすぐくうれしいわけで。

もうね、おっさんは本気出しちゃう。

そういえば、ばあちゃんも俺が絵を描いたら笑っていたのを思い出した。

同じようなことなのだろうか。

本気出して『ポラリス』ぶち殺して良い世界作っちゃうよ。

どの思想も極端すぎるわけよ。

実力主義とか疲れるし、平等主義とか怠いし。

中立のように時間を戻して、なんて再びいつの日か『セプトントリオン』チャレンジが訪れるに決まっている。

小春ちゃんがいるときに『セプトントリオン』が来るかもしれないし。

だから、可能性の芽は摘むべき。

『ポラリス』を取り除いて、別のに変えてしまえば解決するんじゃないかな。ほら、カヲルくんとかどうよ。

なんかいけそうじゃん。

今の今まで欠番だった死兆星に違くないよ、彼。

異常は取り除いて正常に戻すべきだ。

そう思わないか、ヒロ。

え、ロリコンじゃないよ。

ロリコンだとしても、ロリコンという生き様の悪魔だよ。

生きるとは変わりつづけること——午前1

志島大地——ダイチは一言で言ってしまったえば臆病だ。

深く物を考えず、知識は浅く、確固たる自己もない。

重大な選択を背負えるほど、ダイチは強くない。

短所から目を背ければ、明るい性格だという長所が見えてくる。

が、それすらも欠点を隠すためのものではない。

自分にとって、または相手にとって都合なことを言いたくないから、見たくないから、聞きたくないから、明るく振る舞う。

そして、最後に逸らす。

逸らそうと努力する。

衝突を避け、流れに身を任せようとする。

ダイチは現代っ子で、一般人だった。

その感性のまま生きてきた。

それが許される環境で生きてきたからだ。

だが、今は違う。

それがダイチを苦しめていた。

——23:00 ジプス東京支局——

東京のジプス支局の一角、そこでダイチは頭を抱えていた。

ダイチだけでは無い。

新田維緒——イオ、九条緋那子——ヒナコ、鳥居純吾——ジユンゴの姿もあった。

これで全員だ。

今まで過ごしてきた仲間たちの姿は他にない。

それがまたダイチたちを悩ませる。

災厄とともに訪れた『セプテントリオン』と呼ばれる侵略者との戦いで集まった仲間
は十四人いた。

性格は様々で衝突も多々あったが、協力することで今日まで生きてきた。

一週間という短い期間の苦楽を共にした仲だった。

それも昨日までのこと。

「侵略者を全て下し、『ポラリス』という世界の管理者に望んだ世界に作り変えてもら

う」という話が協力を瓦解させた。

仲間たちは「完全な実力主義」と「完全な平等主義」、このどちらかの世界を目指すために離れていった。

ダイチには着いて行けなかった。

どちらもあまりに極端で、互いを否定し合う思想を理解することができなかった。

仲間同士が争う事に疑問を抱き、回避しようとした。

賛同を得られたのは自らを除けば三人。

つまるところ、残りは仲間と戦うことを良しとしていることになる。

このことが頭を抱えさせていた。

現状で最も早く決着をつけることができるのは戦うことだ。

そんなことはわかつている。

話し合う時期も過ぎているし、以前は平行線のままだった。

今まで思いつかなかった他の方法が今更思いつくわけも無い。

結局、他の勢力と同様の手段で協力者を募ることに決めた。

勝った勢力に従う、そういったルールを予め決めていたので則ることにしたのだ。

仲間と戦う思想を否定しながら自分の考えを通すために仲間と戦うという矛盾を孕んだ考えしか思い浮かばなかった。

他と変わらないじゃないか、それがダイチを悩ませた。

頼っていた親友は隣にいない。

いつもの如く助けてくれるのではないかと強く期待していた反面、ショックは大きい。

彼とは親友では無かったのか。

それがまた、ダイチを悩ませた。

方針は決めた。

それでも決意が揺らぐ。

ここ数日で強くなったと、自信が持てるようになったと胸を張って親友に話した。

だが、揺れていた。

相も変わらず自分は臆病なのだと理解した。

「そんな簡単に変わることができたら誰も苦労なんてしない」、友人である陣内弥栄――ヤサカの言葉が思い起こされた。

ヤサカはこの数日で別人のように力を得ていた。

その代償も大きかった。

もう、眠ることも必要ないのだと笑っていた。

空虚な笑みだった。

どのような覚悟があつたのか、ダイチにはわからない。

ただ、自分よりも強い覚悟があつたということだけはわかつた。

それがまた、ダイチを苛む。

今の弱い自分と比べ、より小ささを理解できて。

もつと早く考えることはできなかつたのか、もつと強い意志を持ってないのか。

そう考え、劣等感ばかりが強まるのだ。

この気持ちちが邪魔をして、ヤサカを誘うことができなかつた。

景山紘——ヒロがいれば、彼を親友だと言い張っている間はダイチに劣等感を抱く事はない。

ヒロと親友である自分は同等だと、そうやって自分に言い聞かせることができた。

だが、ダイチ個人となるとそうはいかない。

劣等感が自分の小ささを囁く気がして、それが堪らなかつた。

言わなくても来てくれたらとほんのわずかに期待もしていた。

ヒロを置いて自分の元に来てくれたのだと、自尊心を満たしてくれるから。

この考えが醜いのだとダイチは強く恥じ、後悔していた。

峰津院大和——ヤマトがダイチに放つた「仲良しごっこ」という言葉を思い出した。

悔しいが確かにそうだ。

結局、流れに身を任せることしか出来なかった。

嫌な事や重大な決断は他人任せだ。

親友だから全てを任せても構わない、頼っても構わない。

それが当然だと思っていた。

支えてもらうのが当然なのだ。

本当に「仲良しごっこ」でしかなかった。

それも自分に都合の良い、と付くような。

考えてみれば、親友と信じていたヒロに頼られた記憶はあまりない。

ただ、自分を肯定してくれるだけだった。

それに満足していたのは自分で、変えようと思ったことも無かった。

親友と、そう呼んでいた相手が本当に頼っていたのはヤサカだった。

ここで変わる努力を続けなときつと自分は……。

「ダイチ、どうしたん？ そんな難しい顔して」

「いやいや、明日の事を考えてて」

自分たちの勢力に、戦いを率いてきたリーダー格がないので戦い方も限られてくる。

そう伝えると明るいと言い難かった雰囲気か輪をかけて沈んでしまった。

ダイチは士気を落としてしまったことに内心で焦る。

このまま明日を迎えるわけにはいかない。

「だから!!」

盛り上げるために態と声を明るく、大きくする。

苦も無く出来た。

今までやってきたことだから。

自分に視線が集中したことに少しだけ緊張したが、言い切る。

咄嗟の思い付きを。

「最初にリーダーを倒して味方にしよう!!」

——00:00 ジプス東京支局——

ダイチは慣れてきた寢床で天井を眺めながら、先ほどの話し合いを思い出す。

諜報の結果、都合のいいことにヒロとヤサカは組んでいるが勢力としてはフリーだと

いう。

ならばこそ、皆がリーダーだと認めるヒロを最初に仲間にするというものだ。

次いでヤサカがセットについて来ることも考えれば、頼もしいことこの上ない。消耗が少ないうちに味方に出来れば、と勢いのまま話し合いはとんとん拍子で進んだ。

有効そうな作戦と手順、各々が出来ることをやるだけ。

重要なのは、ヒナコがシヴァに、イオがルীগに力を借りる。

それで全部だ。

決めることは決めて、流れを話した辺りでジユンゴが半分以上眠ってしまったので解散となった。

布団に包まりながら失敗したら、と考えると不安を感じる。

昨日まで不安を微塵も感じさせずに仲間を引っ張ってきたヒロに通用するのか。

確認できている限りでは超高位の悪魔を三体、実際にはそれ以上を屠ったとされるヤサカを倒せるのか。

そう考えると酷く心細くなってきた。

成功するのか、失敗して当然ではないか。

ネガティブな考えが止まらない。

セブテントリオンとの戦いで決断を迫られたヒロも、悪魔の力を取り込み続けたヤサカも、こんな気持ちだったのだろうか。

重圧に一人で耐える。

なんと苦しいことだろうか。

それでもやらなければならぬ。

努力し続けると、そう決めたから。

逃げたらきつと後悔する。

胸を張って親友だと言えなくなってしまう。

それが一番怖い。

そう考えると少しだけ安心してきた。

自分にとって逃げる事よりも、親友と名乗ることの方が優先順位が高いことに気付いた。

そして、ゆっくりと自分が変わっていけるのだと実感できたから。

— 07:00 S L 広場 —

敵を自分たちの陣地に誘い込み、強力な悪魔を利用して倒し切る。

それがダイチら東京を本拠地としたメンバーの考えた作戦だった。

大阪や名古屋に散ったかつての仲間たちが攻めてくることは考えていないし、期待していない。

誰しも有利な陣地で戦うことを望むから。

この作戦の要は、拠点を持たないヒロたちを取り込むことのみ焦点を置いている。それだけの利があると誰しもが考えている。

これまで侵略者であるセプテントリオンとの戦いで常に指揮を執り続けたヒロ。

彼が先頭に立つことで、精神的な強みを得ることができる。

また、ヒロの従弟であるヤサカは悪魔の力を身に宿しており、厳しい戦いを独りで勝ち残ってきた。

その強さは仲間内でも抜きん出ており、侵略者や悪魔といった未知の恐怖に相対したときも見守るように背を押してくれる力強さがあつた。

上記の二人と、テイコやアプリの産みの親である憂う者が組んでいる。

精一杯繕っているが、結局のところダイチたち東京組が最も弱い。

引き付ける理念がない、確固たる目的も未だに定まっていない。

賛同者を募つたが、思うように人では増えない。

数は力だ。

このままだと、ただ力に物を言わせて狩られる未来しか待ち受けていない。

それでもなおこの争いに参加しているのは、有力な二つの指針に賛同ができなかつたから。

他と争い合えるような代案は無い。

いや、やり直すという案もあつたが、ヤサカが拒否したことで無いも同じだった。

先行きと責任が浮いたまま、そんな状態だ。

だからこそ、仲間内でも輝くような強さを持つた者を引き入れたかつた。

有利な陣地におびき寄せ、狩られる前に狩る。

ダイチの頭に浮かび続けるイメージだ。

東京組の強みは非常に少ない。

しかし、イオがその身にルীগを宿すこと、ヒナコが破壊神シヴァに気に入られていること、この二つは他にない最強の鬼札であるとも考えている。

その唯一を作戦の主軸とした。

作戦は、シヴァによってヤサカを釘付けにしつつ消耗を狙い、イオのブリューナクで勝負をかける。

作戦と呼ぶにはあまりにシンプル過ぎた。

有効な作戦は、それしか選ぶことができなかつたとも言い換えられる。

だが、シンプルゆえに強い。

人数が増えることで、シヴァから逃れられることやブリューナクで勝負を決めきれないことも憂慮していたが、互いが東京にいるためにヒロたちの行動もある程度わかるために事前に予測を立てることで立ち回る。

高位悪魔を呼ぶという時間のかかる作業だが、成功すれば勝つ可能性が見えてくる。

東京組が、ダイチが、あの二人に勝てる可能性が。

すでに作戦の準備は整いつつあり、あとは実行するだけ。

ヒロたちの潜伏先は突き止めた。

どうやら野宿したらしく、仲間を募るような大きな動きも見せていなかった。

呑気だと呆れるような気持ちと助かったという安心感が押し寄せる。

人手が増えるだけで取ることのできる作戦の幅が狭まり、予測も大きく変化する。

そもそもヒロたちはたった三人で動いているが、それでも勝ち目が薄いと何度も感じさせられた。

想定外なことが少しでも起きれば、勝率は霞の如く消えゆくだろう。

今ばかりは順調に進んでいるとダイチはゆつくりと息を吐いた。

偵察に向かっていた仲間が帰ってきた。

今日まで悪魔が潜む東京を生き抜いたというだけあって、彼の仲魔は強く鍛えられている。

機動性に重きを置いていたため、彼が偵察に出ていたのだ。

彼の報告を最後に作戦を開始しよう、仲間内で決めていたことだ。

イオはすぐにでもルージュを降ろせるように集中力を高めている。

ここよりも離れた地点、ヒロたちをおびき寄せる位置で同様にヒナコもシヴァを呼び出せるように準備しているだろう。

偵察の男が報告する。

これからの作戦がどう推移するかで勝率が変わる。

最初の誘引ですべてが決まる。

胸が高鳴る。

まだ始まっていない作戦、なのに緊張してどうする。

己を律しようとしたダイチの耳に嘘のような報告が流れ込んだ。

「景山紘たち三人の姿は確認できなかつた！　また、野宿したと思われる地点には小さな穴が形成されていた！」

手から零れ落ちる砂のように、勝率がなくなっていくようにダイチには感じられた。

嫌なイメージを払拭するように頭を左右に振る。

まだ何も始まっていない。

これからだ。

ダイチが試されるのは、これからのはずだ。

始まる前から終わるなど、あり得るはずがない。

そうなつてしまつたら、自分の、俺たちの努力した意味が無いじゃないか。

『シジマっち！　地面の深いところからなんかヤバいのが来るっほいよ！』

活火山が噴火を起こすが如く、地面から白く輝く光と灼熱の炎が噴き出した。

膨大な魔力による暴力だった。

ダイチの持つ携帯電話のアプリに宿るナビゲーター、テイコが叫んだ。

茫然としながらも、テイコの言葉で咄嗟に体が動いたのはこれまでの経験によるものか。

普段のお茶らけたテイコとは懸け離れた言葉だったからか。

もしくは、その両方か。

半ば転げるように元いた場所から飛び退き、なんとか直撃を避けることに成功した。

噴き出した灼熱が、ダイチの肌を撫でるように焼いた。

だが、ダイチには熱など果てしなくどうでもよかつた。

必死に体勢を立て直すことだけに専念した。

すぐにも動けるようにと仲魔を召喚し、ハーモナイザーを起動する。

有利な陣地に誘い込む作戦は失敗だと、自分たちがすでに狩られる側だと理解した。

あの灼熱の中で無表情に佇むヤサカの姿が見えたから。

『あれの元が人間……？ ぜったい嘘っしょ……？』

困惑したテイコの声が遠くに聞こえた。

直後、一週間の始まりを告げたあの災害、その時に起きた地震を思い起こさせる揺れがダイチを、イオを、仲間たちを襲った。

地面が破裂したかのように爆ぜ、空に蓋をしたかのように周囲が薄暗くなった。そして、少しだけ遅れて瓦礫が雨のように降り注いだ。

体格の大きな仲魔や物理に耐性を持つ仲魔でなんとか凌ぐ。

大小さまざまな瓦礫が瞬間に建造物や道路を破壊していった。

何かの倒壊していく音や破裂音が聞こえ、それらが生じさせる衝撃が音として体の芯を揺らした。

十数秒、そんな短い時間で一帯を破壊しつくした破滅の雨が止んだ。
だが……。

——07:11 SL広場——

——何も見えない。

舞い上がる土煙や砂ぼこり、副次的に生み出された破片がダイチの視界のほとんどを塞いでいるかのようだった。

この場にいる仲間も同様だろう。

器官に入って噎せたのか、傷ついたのでか、何度も咳をしている声が微かに聞こえた。

その音の方へとダイチは駆ける。

足音には気を付け、それでもなるべく迅速に。

合流しなければ、静かに狩られると恐怖を抱いた。

だから、ダイチがそれを避けることができたのは偶然だった。

最初は眩いばかりの白い光だった。

銀色のもあつた。

劣悪な視界でもわかるほどに輝く光。

ダイチ自身や視界を妨げていた粉塵、転がっていた瓦礫、それらすべてを遅れて生じた熱風が吹き飛ばした。

小さな破砕音がそれらが転がった際に生じたものだろうか。

ダイチが立ちあがったころには視界を塞いでいた粉塵などが消し飛び、数十メートルの範囲に亘って見渡しがよくなった。

身体に響く痛みを忘れ、背筋に冷や汗が流れた。

そして心臓が強く胸を叩き始めた。

ダイチが数秒前まで立っていた場所を中心に大きく陥没しており、そこには俯いて表情が見えないヤサカが立っていた。

周りには余波で転がった大型車や傾いた建造物が見えた。

手加減の感じられない攻撃、ハーモナイザーを起動していなかったら肉片と化してい

ただろう。

その事実には吐き気すら催した。

俯いたままヤサカが気だるげに歩き出す。

ゆつくりとした歩みとは裏腹に、その一步はかなりの重量を持っているようにダイチは感じた。

牛歩とも呼べる歩みが、ひどく速いように思えた。

ヤサカの歩いた軌跡には、まるで元から無かつたかのように瓦礫や粉塵の何もかもが消え去り、砂塵が広がっている。

あの歩みの跡には死んだ物しか残っていない、そうとしか思えなかつた。

徐にヤサカが顔を上げた。

互いの視線が絡み合った。

圧力を感じさせる視線がダイチを射抜いたようだった。

だが、そう感じたのはダイチだけで、ヤサカは普段と変わらない。能面を貼り付けたようなあの無表情。

悪魔と戦うときもセプテントリオンと戦うときも、もちろん人間と戦うときも同様だった。

何も感じていないかのように感情の一切が抜け切っていた。

ダイチには心臓が暴れまわっているようで、そのうち口から飛び出す可能性すら感じられた。

敵と戦うのも仲間と戦うのもヤサカには同じなのか。

違う、そうじゃない。

ヤサカの進路に立った自分は敵と看做された。

そんな確信があつた。

周囲には隠れられる場所はなく、頼ることのできる人は確認できない。

それでも作戦の大きな流れが滞つた今、零れ落ちた勝率を少しでも救い上げるために凌がなければならぬ。

孤独な戦い、その事実ダイチの胸中ではセプトントリオンとの戦いですら感じたことのない恐怖が渦巻き始めた。

——07:15 新橋駅——

ハーモナイザーは肉体を強化し、悪魔と渡り合うことができるアプリケーションだ。

戦うことで悪魔などから奪い取って溜め込んだマグネタイトと呼ばれる物質を纏うことで脆弱な人間の身体能力を強化してくれる。

目に見えないが成長する鎧を着ること、それが一番わかりやすいイメージだろうか。ダイチはハーモナイザーの強化を力と速さに割り振っており、速度においてはかつての仲間内でも最上位に位置する。

受けることなどあまり考えていない、一撃必殺を念頭に置いたパラメータ配分。
——それらはすべて、通用する人間相手との話だが。

「当てれば勝てる。絶対に勝てる。絶対に……」

ダイチは必死に自分に言い聞かせるように何度も繰り返して呟いた。

それでもしななければ、飲み込もうと迫ってくる影の恐怖に心が砕けそうだった。

また影が迫った。

あれは、仲魔を一撃で食い破るほどの必殺を纏った影だった。

ゆっくりと歩いて近づいてくるヤサカの足元から伸びた一つの影が何度も何度も、執拗にダイチを追い立てる。

全力で動いているのはダイチだけ、まるで遊ばれている玩具のようだった。

悪魔は感情を煽ってマグネタイトを絞るといふ。

もしかしてヤサカは……。

そんなことを考えて気が抜け、ハーモナイザーで強化しているはずの腕が容易く傷つ

けられた。

ガチガチと硬質な金属音を響かせながら、鈍く銀色に輝く牙が迫る。

影とヤサカは別の意識があるのではないかと思わせるほどの殺意だった。

影には数多の目がダイチを見据え、肉体を食いちぎろうと鋭い歯で切り裂こうとしている。

生きるために今日まで走り続けたヤサカと、嫌だからと逃げ続けることが多かったダイチ。

狩る者と狩られる者、今日までの生きた結果のようですらあった。

だが、それだつてたつた数日の違いのはずだ、俺だつて頑張つたのだと内心でダイチは叫ぶ。

方向の違いはあれど、努力は同じだろうと。

相手の積み上げたものは見ないように、自分の積み上げた結果で慰める。

それほど差が大きいわけがないだろうと。

孤独の時間、乗り越えた危機、死に瀕した回数……。

すべて意識の外に追いやった、追いやるうとした。

そうでもしなければ潰れそうだった。

今日まで自分が生きた意味など無かつたと、言外に思わされるから。

「頼む！ ツイツイミトル、アンズー！」
叫ぶように名を呼ぶ。

悪魔召喚アプリが起動し、燐光を放ちながら、文様の刻まれた円陣が宙に奔る。
そして、二体の仲魔が姿を現した。

悪魔の中でも能力の高い種族である魔王、ツイツイミトル。

機動力に富んでいる霊鳥、アンズー。

不意を討たれて影によって切り刻まれたトウコツの二の舞にならないよう、指示を飛ばす。

そして大きく跳躍することで距離を取って……。

「え……う？　なんで……う？」

思わず呆けた声が漏れた。

ダイチが意図した声ではなかったが自然と漏れていた。

淡い緑の光を残して仲魔は消えていた。

魔法の形跡はなく、攻撃された記憶もない。

それに、最大の隘路となっていた影は自分に引き付けていたはずだった。

まさかアプリの誤作動かと焦る。

「アプリ、バグった？」

『あの方が作ったのにそんなわけないじゃん。んつとね、なぜかわかんないけどね、コマンドが上書きされて送還されたっぽいよ〜?』

ダイチの呟きに答えるようにテイコが返事を返す。

必死に動き続けて流れの速くなった血液が凍ったように思えた。

テイコの言葉が事実だとすれば、仲魔の召喚が不可能になってしまう。

ヤサカを相手に、ハーモナイザーだけで戦えというのか。

あの影を掻い潜って、悪魔の力を宿したアイツと。

『ちなみにね、あの悪魔人間っぽいやつ? もう魔人の領域に足を踏み出してるから逃げた方がいいと思うよ?』

ダイチはイオのように悪魔を身に宿すことのできる適正を持っている人間がいることを知っている。

自らを依り代として憑依させることで悪魔の力を引き出すそうだ。

短時間の力の行使でも負担が強く、高い適性を持つイオでも死に掛けたほどだ。

では、宿すどころか悪魔と混ざりあった悪魔人間とはどのようなものか。

ジプス局長である峰津院大和——ヤマトが混ざることによって生じる魂の苦痛や至るまでの苦悩は想像も絶すると話していたのを思い出した。

また、完璧に行使することができれば能力はハーモナイザーで強化していようとただ

の人間など足元に及ばないとも。

それが悪魔人間だと聞いたことがあった。

だが、それすらも凌駕する域に魔人がいるとも聞いた。

その域に踏み込んでいるという。

彼我の差が、目に見えぬほどに広いということを理解した。

『で、シジマたちはどうする？ 戦っちゃおう？』

「逃げるに決まってるでしょうが！」

叫んで反転、駆け出す。

矮小な意地など強大な敵の前では無いも同じ。

ダイチの身で抑えられる範囲を完全に超え、他に丸投げするしかない。

大した時間稼ぎはできなかったがそれでもなんとか粘ったが、イオが現れる気配はな

い。

ならばもう、シヴァの元に誘導するしかない。

幸運なことにダイチのハーモナイザーは速度に特化した物理型、体力切れの心配は無

いだらう。

相手のほうが遅ければ、逃げの一手で走り抜けることもできる。

「なんで、前にいるんだつつうの……」

真後ろにいたヤサカが目の前、十メートル先に立っていて、影を操り始めた。ダイチは混乱の極みにあった。

混乱を醸した疑問の答えは単純、ヤサカのほうが圧倒的に能力が高く、高位の悪魔すらも置き去りにするトップスピードは言うに及ばず。

ダイチの不幸は圧倒的な相手を前にしている、それに尽きた。

ヤサカからは逃げられない、そんな言葉が脳内で囁いた。

『で、どうする？ 死んじやう？』

「マ……マジで死んじやうかもね。どうしたらいいんだよ……」

ティコの軽口を返す余裕など枯渇した。

疲労など目の前の恐怖に比べればどうってことない。

問題は、完全に勝ち目がないことだ。

噴き出す様に次から次へと流れ出る汗が地面を濡らす。

また一滴、ぼたりと地面に落ちた。

それを合図に影が襲い掛かった。

ダイチは仲魔を呼べないというペナルティを課せられ、単騎で半魔人との戦闘に強制的に突入した。

——07:20 日比谷通り——

ダイチは死の舞踏を踊っていた。

望んでいるわけでは全くない。

踊らされていた、というのが正しいだろう。

影が一つ、蛇行しながら襲い掛かってくるのを必死に避け続ける。

その動きが傍から見れば下手なステップを踏んでいるかのようだった。

音楽は牙が噛みあう金属音とステップの度になる足音、そして暴れ出しそうなほど荒れ狂う心音。

観客はヤサカただ一人。

遊ばれている、そんな思いがダイチに苦みを感じさせた。

玩具のように乱雑に。

道化の如く振り回されて。

それでも小さな希望があった。

避け続けたことで、影が一定の動作を繰り返していることに気付いた。

何度も繰り返し返せば馬鹿でもわかることだ。

侮っている証拠だろう、ダイチはそう判断した。

さらにどんなに強くなろうとも、ヤサカだつて元は人間だったので影を操るにも種があるのは当然という考えもあった。

(俺を侮っている今しかチャンスはない！ 一点突破あ！)

当たれば勝てる。

戦いが始まる前の思いが浮上する。

全ては刹那の交差で決まる。

ヤサカの隙をつくことができる今しかない。

予測だったがほとんど確信でもあった。

当たれば勝てる。

全力で地面を踏み込んだ。

ヤサカに向けた初めての前進だった。

ハーモナイザーによって強化された脚力が、爆発的な推進力を発揮する。

まるで地面を滑るように走り抜け、読んだ通りのルーチンで動く影をぎりぎりの所で

回避する。

ばつくりと頬が大きく切れ、ずっと後ろに引つ張られるように血液が流れて行った。

それすらも無視して走り抜ける。

当たれば勝てる。

零れ落ちた勝ち目が見えてきた。

ヤサカは身動き一つしない。

隙を狙ったこの行動に対応ができないのだろう。

防御の要である影は置き去りにしている。

当たれば勝てる。

あと数メートル。

強化された脚力ならば距離は無いも同然、刹那の時間すら必要ない。

アプリのコマンドスキルを発動、ダイチが肉体が誘導に従って動き出す。

セツトしたスキルは『千烈突き』、目にも止まらぬ速さで何度も殴るスキルだ。

勝った！

その瞬間、勝利を確信した。

ヤサカの慢心、距離、スキルの発動、すべてが噛みあっていたからだ。

今日まで戦い抜いたが、経験がないほどの会心の一撃。

……そうなるはずだった。

「あえ？」

仲魔の送還、あのとときと同じように呆けた声が出た。

いや、あのときよりも酷い間拔けな声だった。

それもそのはず、超速で働いていた自分の体が突然、緩慢な動作になったからだ。魂消るのも当然だった。

ハーモナイザーの強化も、コマンドスキルのアシストも、すべてが切れていた。

半魔人を前にして、ダイチは力のない一般人に戻された。

高速移動を支えていた強化が途切れたことによって脚力は戻された。

足が纏れ、前のめりに無様に転がっていく。

確信したはずの勝利は幻となり。

同時に救い上げていた勝率も当然のことながら、また幻だった。

茫然したダイチが手足をばたつかせながら立ち上がる。

ハーモナイザーの強化がない肉体は、急に重力の鎖を感じた。

急いで、だが、強化のない今では緩慢な動作で携帯電話を操作する。

充電に問題は無く、動作もしている。

ただ、アプリが沈黙を保ったままだ。

ティコの返事すらない。

それを観察しているのか、ヤサカは動かない。

影も時が止まったように動かない。

それが恐怖を煽る。

まるで手を出す必要などないと、言外に言われているようだったから。

「なんでだ……。何が起きてんの……。？」

信じられないことが起きたとでも言うように眩く。

今日まで過不足なく動いていたアプリ。

それがヤサカと戦った途端、不具合に見舞われた。

まるですべてヤサカの手の上で踊っているようだった。

ぞっとする。

そして、アプリ一つに支えられている自分の身の危険を感じた。

原因はヤサカにあるというのか。

思い至って必死に離れる。

先ほどまであんなに近づぐことに執心したのに。

ヤサカは追いかけなかった。

やはり観察しているのか、ただ見ているだけだった。

影を過不足なく避けられる位置まで離れると、止まっていた時が動かしたかのようにアプリが起動した。

それが、ダイチが近寄ることのできる資格を持っていないように感じられた。

『シジマっち、まづいよ？ あっちのティコが侵入してアプリの妨害したつばい』
ダイチは瞠目した。

そんなこと、見たことも聞いたこともなかったから。

なぜこんなにも不運に見舞われているのか。

「なんとか、できないの？」

喘ぐような、絞り出したような、小さな声。

ダイチには自分が発しているとは思えなかった。

それほど期待はしていない。

相手が相手だから。

『無理かな』★ あっちのティコは元を捨てて高位の電霊になっちゃってるつばいから、ティコりんには防ぎようがないんだよね』

そして次いで、防げるとした「あの方」とやらしか対応できないだろうとの話だ。

だが、「あの方」はヒロやヤサカと組んでいるという。

ティコからの答えに、失望は無かった。

当然のことだとすら思った。

自分のテイクも相手と同じようになれないのかと聞いたが、強い拒絶で返された。

「あの方」にもらった身体を捨てるほど、ダイチに興味はないのだと。

「なんつう、チートだよ。ほんと……」

仲魔は使えない。

強化も使えない。

同じはずのナビゲーターの質まで見せつけられた。

戦う力をすべて剥ぎ取られたダイチに残っているのは、弱い肉体と芯のない精神だけ。

「何か間違ってたっけな……」

迫る影に身を委ねるように呟いた。

大口を開いたそれによって、ダイチに影が差した。

何が間違っていたか、何が合っていたか。

全てがわからない。

固く閉じた眼尻から思わず涙が零れた。

——07:22 日比谷公園——

待っていても痛みは襲ってこない。

苦しませるのは辞めてくれと祈ったが、何も起きない。

怯えながら目を開くと、先には光の槍で胴体を貫かれて地面に縫いとめられた影があった。

「志島くん、遅れてごめんね。遠く離れてたから見つけるのに手間取っちゃった」
声の先には、淡い光を纏ったイオの姿。

逸らすことのない力強さを感じさせる瞳の先には、ヤサカが立っていた。

ダイチの時間稼ぎは成功したのだ。

だが、勝機が見えなかった。

イオから力強さはもちろん感じる事ができた、ダイチよりも遥かに強いだろう。

ただ、直接相对したヤサカの禍々しさと比べれば酷く小さなものだ。

この戦いでダイチができることはほとんどない。

ちよつとした回復程度が関の山。

仲魔も呼べず、近づけばハーモナイザーの起動すらできなくなる。

能力を鍛えていない魔法など陽動にすらならない。

そう告げるダイチの暗い表情にイオは頷いて返す。

その強い意志を感じさせる顔から一切の不安は無い。

「頼っているだけじゃダメだから」

そう言い残してイオは走り去った。

仲魔を連れず、ハーモナイザーも起動していない。

互いの地力の差が勝敗を分ける戦いに身を投じたのだ。

イオは魔神ルীগ、破格の悪魔だが完全な状態ではないうえに、依り代自身にも限界がある。

ヤサカは決まった悪魔が混ざっているわけではないが、掌握しきっているのが強みだ。

戦いの行く末はわからない。

わからないはずなのに、ダイチには不安しかない。

イオとヤサカが衝突し、生じた余波が小さな揺れを起こした。

ダイチにまで届いた魔力を含んだ風が、肌を刺激した。

ヤサカの足元から伸びていた影が、幾重にも重なっていた。

それらを刈り取るように、イオの投じた銀色の槍が、光を纏って影を切り裂いた。

それに反撃するように周囲を覆っていた影が、夜の帳が広がるように槍を包み込んだ。

たったの一つに追い詰められていたのはなんだったのか呆け、次いで相手を侮っていたのは自分だったとダイチは思い至った。

むしろ十分な玩具にすらなっていなかった。

拮抗している、ように見えた。

戦いにはなっているが、イオの限界を考えれば時間はこちらの味方ではないだろう。

もう一手欲しい。

ヤサカを抑えられる力が。

どうにかならないかと思いを回転させていると、空の彼方から赤い光が飛来した。

尾を引いたそれは、彗星を思わせた。

そして、彗星は影の中心部に突き刺さり、膨大な熱量をまき散らしながら煉獄の炎を空に灯した。

かつて見た。パスパタ、シヴァの怒りが形となった炎だった。

木曜日『アリオト』を撃墜した際に放たれた炎、あの輝きと強さを見間違うはずがない。

遅れてシヴァが空から落下し、影を上書きするように炎の海が作られていた。

ヒナコたち仲間の支援だ。

うまくいっているのか、こちらに誘導したようだ。

何度も頷くように頭を振って、汗ばんだ手を見つめる。自分には何ができるのか、真剣に考える。

勝つための渾身の一手を。

ダイチがここから何を成すのか、成せるのか。

——07:23 日比谷公園——

「うん、予定通りだね。彼も上手くやっているようだ」

もちろん、大凡にして何も成せない人間が多いのも事実だ。

そしてこの場合、自らが何も成せない人間だとダイチは確信した。

成すための困難を乗り越えるほどの力が無いから。

確信するにあたって、ティコたちが「あの方」と呼ぶ人物の声が空から聞こえてきたことも強く関係しているだろう。

いるはずがない、いないでくれと振り返る。

「ヒ………口………?」

視界に、今見たくない人物を捉えた。

見上げる必要がある位置に浮く、「あの方」と呼ばれる人物。

そして、目を見張るようなリーダーシップを取り続けた、かつての仲間がそこにいた。ダイチは改めてヒロに視線を送り、驚愕した。

ヒロの足元にヒナコとジュンゴの姿を確認したためだ。

気絶しているのか、二人の胸部は上下している。

シヴァを支援で送ってくれていると思っただ、もしかしたら暴走している可能性もある。

何もかもが失敗しているのではないか、浮かんだ疑念は肥大していく。

ヤサカとも「あの方」とも違う、人間味溢れる笑みを浮かべたヒロが携帯電話を翳した。

ヒロはアプリを起動するのだろう。

ダイチも応じる様に携帯電話を取り出し、操作する。

それを見て、相手がアプリを使うから自分も使う。

今日まで生きてきたことが証明できるほど染みついた動きだった。

そして、仲間内で戦うことを否定したとは思えないほど自然な動きで戦闘態勢に入る。

同じように仲魔を呼び、ハーモナイザーを起動した。

話し合いを望んだ、だが戦いを止めるために戦いを始めた。

今は勝つための力を得るために、戦っていた。

成功しない作戦を必死に練った。

勝てない相手に挑んで、また目前に強い敵が現れた。

なんでこんなに苦しいのか、なんで自分はこんなことをしているのか、ダイチにはわからなくなってきた。

何も正しいと思えることが無い。

終わりが何処にあるのかすらわからなくなった。

誰も声をかけてくれない。

今まで目が眩む輝きを追い続け、暗闇を歩くことがなかった。

光ばかり見続けた目に、足元は映らない、覆われた暗闇に慣れることができない。

この時ばかりはヒロという光が照らしてくれることはない。

ダイチは今、一人ぼっちだ。

オリ主

半魔人。人外になりすぎてダイチのティコに人間だったことを否定された。

『地母の晩餐』↓『マグマ・アクシス』のコンボでダイチを抹殺……戦闘不能にしようとした。

対ダイチ戦では、相手が死なないようにかなり頑張って手抜きしている。

内心で、正義の味方っぽい演出で登場できて満足している（登場シーンを意識した魔法による背後の爆発など）。

ティコによるバックアップで、アプリによる悪魔の召喚への完全メタである『強制送還』や『アプリ強制終了』が備わったので、人間絶対殺すマンと化した。

オリ主のティコ

他のティコと比べてロリってる。

オリ主の悪魔化に付き合うようにひっそりとマグネタイトを溜め続け、高位の電霊的なサムシングにクラスチェンジしてた。

オリ主の魔力に触れた携帯電話をハッキング（物理）できる。

初撃で『地母の晩餐』を放ったので、実は周囲一帯のアプリを強制終了できた。

シジマっち

初日から悪魔が蔓延る東京の裏路地で殺伐を友として生きてきたオリ主と自分を比

べて落ち込んだりした。

なかなか頑張っているが、ヒロインと化して助け出され、逃亡先でラスボスとエンカウントした。

あまりのレベル差のため、オリ主の魔法攻撃が知覚できず、ただの光としか理解できなかった。

能力が低かったので、オリ主に触れる権利はおろか近づく権利すら得られなかった。

イオ

おっぱいが大きくてかわいい。

が、私はフミやアイリ、オトメさんのほうが好き。

できれば今度はお尻とか太ももをじっくりと見せてほしい。

主人公っぱい演出で現れた。

悪魔を宿したのでオリ主に近づく権利は得たが触れられるかは不明。

ヒロ

強い。

相手は死ぬ。

というか死ぬまで殺す。

あの方

カヲルと名乗り出した。

アル・サダクなんて名前は無かった。

浮いている。

現実とか物理的にか、いろんな意味で。

—— 07:23 日比谷公園 ——

各々が持てる力を発揮して今日まで生き残ってきた。

互いの力量はわかりきっている。

積み重ねた道程に違いはあれど、各々の実力はほとんど拮抗しているはずだ。

その積み重ねですらたったの一週間、長いとは決していえない。

むしろ戦いに赴くには短いとすら感じてしまう。

積み重ねる土台は、全員が同じ人間である。

ハーモナイザーによる強化が無ければ悪魔の蹂躪に抗う術のない脆弱な人間だ。

強化の差異、それだけが各々に生じた個性であり、強さでもある。

ヤマトのように切り札を持っている者やフミのように技術を極めている者が本気を

出した場合でも、予測に幾らかの修正を行う程度だろう。

そんな話は議論の必要なくダイチにはわかりきっている。

かつての仲間も同様だろう。

大きく差を開くように先を歩くのはヤサカくらいか。

それだって、奇妙に歪んだ道筋を辿ったことで、姿のみ人間としての形を残して異形

と化した結果だ。

仲魔を不要と判断して単独のまま最前線を駆け抜け続けている。

誰の目にも止まるほど、ひどく目立つ存在だ。

燃え続けなければ消えてしまうのではないか、そんな思いすら抱けてしまうほどに苛

烈で己を顧みていないほどに。

絶対に敵わないと思わされる能力だった。

実際に戦ったダイチに、一生追い付くことができないと確信させた。

どれだけ時間をかけようとも、影すら踏めない印象しか抱けなかった。

人間と悪魔の根本的な違いによるものかもしれないしなかった。

同じように最前線を駆け抜け続けたヒコはどうだろうか。

指揮の腕は誰もが認めるほどだが、本人の強さはよくよく考えても記憶に残るほどの

（）とは無い。

単体での強さが目立つ存在が仲間内にいるためだろうか、ヒロが強いという印象をダイチは受けたことがない。

それでも最初に取り込むことに決めたのは、ダイチが所属する東京組が弱かったこともあるが、信頼できるからという一点に尽きた。

言ってしまうえば責任という重石を明け渡すために、狙い目にしたという表現もできてしまうが。

ヒロが先頭に立てば、自分たちの考えが絶対的に肯定されるように感じられ、それだけで安心する。

だから戦力としてはあまり期待していなかったのが本音だった。

ついでに言ってしまうえば、戦力としてよりも陣頭に立ち続けるカリスマとヤサカが付いてくるという点だけで必要十分だった。

セプテントリオンとの戦いでも、ダイチたちと同じように傷つきながら戦い抜いてきた。

ただ、人間同士との争いでは傷ついた姿を見たことがなかったが、ダイチだって同じようなモノだった。

実力は拮抗している、そう思っている。

だって今日まで一緒に戦い抜いたのだから。

ほんの少しだけ起きる変化、それだって結果としては自分と同じになる、そんなモノを詳細に確認するわけがない。

すべて同じだと思っていた。

最初は同じ人間だった、最後だって同じものなのだと。

辿る道程の違いによる少しだけ異なった結果になるのだと。

ヤサカやイオのような特殊な才能の無いヒロは、ほとんどダイチ自身と同じ結果だと信じていた。

だから、ダイチはヒロを侮ったことはない。

理解できなかった、それだけのことだ。

—— 07:28 日比谷公園 ——

十メートル、それがヒロとダイチの距離だ。

ハーモナイザーによる肉体強化の恩恵があれば、全力で走ることで一瞬で届く。

その短い距離が、今のダイチには永遠に感じられる。

まるで深く暗い溝があるようだった。

ヤサカの影を搔い潜るときも同じ距離だったが、あれは近づけば近づくほど遠ざかる

ような奇妙な感覚だったようにダイチは思えた。

だが、今は違う。

ヒロとダイチの間には何もない、そう感じさせられた。

何もないということは、ダイチが歩くことができる地面が、走ることができる足場がない。

つまるところ、ヒロへと近づく道が一切ない。

全てはダイチのイメージの話だ。

だが、それが現実としか思えなかつた。

テイコたちが「あの方」と呼ぶ人物は、離れた位置で見守っているだけだった。

友人同士の戦いに水を差すつもりはないのか、作戦前にわかつていればダイチは喜んでいただろう。

ヒロと一対一で戦える可能性とやらに。

吊り下げられた勝ち目という餌に眩んだ畜生のように、浅ましく。

今は違う。

理解させられている。

彼我の力量差を。

ダイチ自身にできることが何も無いということ。

—— 07:32 日比谷公園 ——

「ツイツイミトル、マハジオダイナー！」

アプリによって仲魔を召喚したダイチは思わず叫んでいた。

それほどまでに力が入っていた。

そうでもしなければ挫けてしまいそうだった。

イオが、仲間たちがいなくなったら容易く戦うことを放棄していただろう。

自分だけではない、それがダイチが戦う理由であった。

同時に追い込まれている原因でもあったが。

仲魔のツイツイミトルから白い雷光が放たれた。

広範囲に広がる魔法の雷撃。

しかし、ヒロに届く前に消え去った。

ダイチの仲魔が魔法を発動させる瞬間、ヒロによって呼び出されたズエラロンズ、その雷を吸収する能力のせいで魔法がかき消されていた。

「また……。くそっ」

自身が気づかないうちにダイチは吐き捨てているような言葉が零れた。

防がれたことへの苛立ちも含まれていたが、自分への不甲斐なさへの頭れでもあった。

召喚する仲魔を読まれ、魔法が無効化された。

だが、それだけではない。

それだけでは広域魔法のマハジオダインは防げない。

人間を簡単に壊せる威力の伴った雷の魔法、その中を冷静に見極めることで弱所を見出し、非常に耐性の高い悪魔で堰き止める。

そして、確実に魔法の影響がない位置にヒロは移動することで無効にした。

類稀なる判断力や決断力の証明であった。

ダイチには決して出来ないだろう。

これまでは一気に近づき、攻撃される前に殴って倒してきた。

それで倒せたのだから、そんな必要は無かった。

そんな発想は一切無かった。

みんな同じだと思っていた。

なぜヒロがこんなことができるのか、わからなかった。

ダイチは魔法が吸収されたのを見て、すぐにツイツイミトルを送還した。

ヒロも同じように仲魔を送還する。

同じ行動、生じる差異はヒロが少しだけ遅く送還していることくらいだ。

それからヒロは動かない。

ダイチが行動を起こすのを待っているのだ。

あの柔らかい笑みを浮かべながら、俯瞰している。

ダイチの様子を見てから判断を下すために。

携帯電話を凄まじい速さで操作しながら、ヒロの読みを外すために仲魔の召喚と送還を何度も繰り返す。

宙に浮かんだ文様が、描かれては消え去り、また描かれては消えた。

アプリを使い慣れた者がこの光景を傍から見れば、仲魔を出し入れして忙しない上に無駄な行動に見えるだろう。

だが、この戦いで絶対に必要だった。

先読みするかのごとくヒロは、ダイチの仲魔が放つ魔法の全てを無効または反射し、弱点を的確に当ててくる。

一度や二度ではない。

これまでに繰り返した攻防全てにおいてであつた。

仲魔の構成、覚えているスキル、相性……全てを先読みしているのだ。

同じ仲魔を出したままでは相性が最悪なヒロの悪魔によって蹂躪される未来しか待っていない。

現状では、ヒロの悪魔はただ只管に魔法を跳ね返す以外の行動は取っていない。

ヒロと悪魔に与えた損害は皆無であり、ダメージはおろか魔力すら削ることができていない。

反してダイチは満身創痍だ。

反射された魔法によって徐々に、そして確実に肉体が削られていた。

遊ばれているかのような繰り返しだが、隙を見せたら後には何も残らないほど鋭利で深い刃を突きたてられてしまう。

事実、蹂躪されて修復中の仲魔がいる。

痛みによって学んだ、無理やり学ばされた。

当たれば勝てるという思い込みは甘えでしかなかった。

相手よりも優位に立ち、隙を付き続けることが当たり前であるとも。

だから慎重になる、緊張を抱く。

致命傷は一度も受けなかった。

単にヒロが攻撃していないとも言えるが。

それでも、直撃を受けていない結果が、これである。

ヒロが攻勢に転じたらと考えるとぞっとした。同時に、この重圧から解放されるのではないかも。

—— 07:33 日比谷公園 ——

召喚と送還を何度も繰り返し、ついにダイチが他の仲魔を呼んだ。それに呼応するかのように、召喚と同時にヒロも仲魔を召喚する。

フェイントを織り交ぜ、召喚すると見せかけ送還したが、それらには目もくれず、淡々と。

またもダイチの仲魔と完全に相性の悪い悪魔だった。

何度やっても同じ結果だった。

全てが読まれている。

理解させられた。

ダイチは自分の思考が聞かれているのではないかと何度も疑問を持ったほどに。

それでも何度も繰り返した。

ダイチは駄々を捏ねる子供のよう、いつか叶うと信じて、何度も打ち破られた。

ヒロも馬鹿でもわかるほどに、幼子に言い聞かせるように、何度も打ち破った。

初めは六体いたダイチの仲魔はすでに半数、それだつて体力は二割を下回っている。予備は二体。

対して、ヒロはすでに十体近くの悪魔を従えているが、それでも今なお初見となる悪魔の姿を見せてくる。

勝てる見込みを億尾にも見出すことができない。

ダイチの仲魔が少ないわけではない、ヒロの悪魔が多すぎるのだ。

処理能力の関係などにより、アプリの仕様では二体の悪魔まで同時に召喚することができる。

つまり主力として運用する悪魔はその二体のみ。

相性なども考慮して予備に二体、多くて三体程度を用意するのが限度だ。

仲魔にする程度なら簡単だが、戦える強さ、命を預けることができる悪魔となると限られる。

だが、ヒロは違う。

全てが前線に投入できるレベルだった。

妥協せずに揃えるとなると必要なマツカや時間はダイチに想像も付かない。

さらにいえば昨日今日で準備するには間に合わないだろう。

もつと前から備えている必要があつた。

それらの集大成が今なのだろう。

もしくは、未だ途中なのかもしれない。

それでもダイチより遙か先に進んでいた。

随分と前から、もしかしたら日常が崩壊した初日から、ダイチが迷い続けている間にも、ヒコとヤサカは進み続けていたのかもしれない。

先行きの暗い日々を、己の信じる指針に向かって。

今日の戦いは、どちらも玩具のようにダイチを弄んでいたのではなかった。

覚えの悪い幼子を相手にするようにゆっくり伝えていただけだ。

ヒコもヤサカも、歩き続けた答えをダイチ自身に示していた。

人間や悪魔との戦い方、最終地点への準備、自己の在り方、今日までの全て……。

ティコについてもそうだ。

ヒコはこの一週間が始まった日にティコをインストールしていた。

ダイチも少しの差はあれど同じ時期だったし、ヤサカも詳しくは知らないが同じくらいだろう。

もしかしたらヤサカは悪魔召喚を使わないので、もっと遅れたのかもしれない。

だが、今は出来ること、やっていることが違う。

ヤサカなど、ナビゲーターが勝手にアプリを動かしていた。

さつきまでのヒロは、眩くだけでアプリを起動しているようだった。

しかし、ダイチは必死に携帯電話を操作してアプリを起動している。

同じ始まり、全く違う結果。

やっとダイチは理解した。

断片だけでも、解ることが出来た。

逸らすことのできない現実として、結果を見せつけられて。

誰かの背を追いつけるダイチと同じ事など、何一つ無かった。

ヒロに縋ったことを思い出した。

不安で押しつぶされそうだと相談したとき、珍しく暗い表情を浮かべながらも彼は同

意していた。

きつと本心だったに違いない。

ヤサカに愚痴ったことを思い出した。

凡人の自分は悪魔の力が羨ましいと才能を羨んで妬んだとき、彼は小さくダイチが羨

ましいと言っていた。

きつと本心だったに違いない。

それでも見えない明日を見据えて只管に努力していたのだろう。

初めから仲間になるはずが無かった。

明日を求めて歩き続ける二人に、戻ることを呼びかけるなんて無意味だったのだ。戻ることを望み続けて後ろを見続けた自分が、二人に追いつけるわけがない。

ダイチは自らが歩みを止めていることに、漸く気付いた。

—— 07:37 日比谷公園 ——

それからのダイチは我武者羅だった。

捨て身に近い戦い方。

何かが変わるわけでもない。

ただ、後ろ向きで立ち止まっているのが怖くなったのだ。

置いて行かれるかのように、不安が胸を疼かせる。

変化した今の日常も、最後には元に戻ると期待していた。

何時までも変わらないで居られると笑っていられた。

それはただの夢だった。

誰もが変わっている。

変わっていないのは自分だけではないか。

ダイチが気付いたのは、そして動かしているのは、甘く泥臭い希望に縋りつく情けな

い己の姿による恐怖だった。

仲魔を犠牲にして、自分の体に魔法が掠ろうとも、ヒロに近づこうとした。

それを見たヒロは反射で防ぐことは変わらなかったが、魔法のスキルを織り交ぜ始めた。

ダイチに対して現実は無常で、戦いが始まった位置から一步として進むことができない。

どれだけ必死に攻撃しても、傷を負っても変わらない。

ヒロとダイチの間にあるたったの十メートルが、苛烈な魔法に曝されている。

反射されたやヒロによる魔法スキルによつて、見えない壁が生じたようでもあった。それでもダイチは進もうとした。

それだけでは、何も変わらなかった。

当然だとも思えた。

今まで散々進むことを拒んでいたのだ、ダイチは進む方法など知らない。

普段、使い続けてきた仲魔が倒れた。

これで主力として使役している悪魔は全て修復中となった。

ダイチに残された力はハーモナイザーによる肉体強化、そして予備悪魔である二体。

戦力差など考える必要が無いほどだ。

勝てるという幻想はすでに捨てた。

何時もなら逃亡するか降参していても可笑しくない、それくらいに限界だった。

それでも向かおうとするのは集まってくれた仲間たちのためか、親友と自負した意地を抱えているためか、変わろうとする自分のためか……。

—— 07:39 日比谷公園 ——

ダイチの体力は限界だった。

傷だつて全身にある。

頼れる仲間はいない、頼れない仲魔しかいない。

走ることしかできない、それでも前に進みたい。

当てれば勝てるなど見当はずれな思いなど彼方に消えた。

代わりに、当てなければ止まったままだという思いは芽生えていた。

その思いに突き動かされるように、ダイチは二体の仲魔が放った広範囲の炎魔法に紛れた。

炎を推進力に、突進をかけることしか思いつかなかった。

恐怖は無かった。

影に追われるほうがずっと怖い。

そして、ヒロと同じだと思ひ込んでい自分が、ヤサカの力を羨んだ自分が、この程度の魔法に怯えてしまう程度だと認めたくなかった。

「ああああああ!!!」

炎に紛れたが、叫ぶことしかできなかつた。

推進力を得ることが出来なかつた。

前後の炎に潰されるようにただ、全身を焼かただけだつた。

身を投げ出す覚悟を抱いた結果、ヒロに一步も近づくことはできなかつた。

立っているのが精いっぱいだ。

『完全反射のむらさきカガミ!! シジマっち!!』

炎が消え去れば、それは当然のことだつたと理解できた。

ヒロが反射持ちの悪魔を呼び出していたからだ。

ティコの叫びから推測すれば、全ての魔法に反射能力を持っているのだろう。

今まで出さなかつたのはきつと自分のためだつた、そうダイチは思った。

自惚れではない。

彼らは親友だから。

予備の仲魔はすでに帰還を果たしており、アプリをのぞき見れば修復中の文字が見えた。

ダイチは限界だった。

ハーモナイザーによって守られた肉体は限界を超えていたが、死ぬような傷は追っていない。

それでも立っているのが精いっぱいだ。

あと数秒もすれば倒れるだろう。

せめて、ヒロの側に倒れようとして……。

「メギド」

ヒロが眩くように唱えた。

白い光が頭上で輝く。

ああ、そうか。

これが、互いの差なのだろう。

ヒロとの間にある、純然たる境。

詰めることの出来ないほどに広く深い溝。

破壊を秘めた純白の光がダイチを飲み込んだ。

——07:40 日比谷公園——

ダイチが目覚めたのは数秒後のこととは、ナビゲーターであるティコの言。仰向けの状態で見える空は鈍色に淀んでいた。

身を少しだけ起こせばわかってしまった、一歩も近づけなかった自分に。

確認してみればヒロが回復させてくれたのか、すでに傷は一切ない。

再び戦おうと思えば戦える。

だが、そんな意思など何処にもない。

立ち止まったままの自分に、それを成す価値など無いのだ。

糸が切れた人形のように、緊張感の切れた肉体が倒れ込んだ。

才能が無いとヤサカを羨んだ。

有ったとしても、悪魔を宿す勇氣など一切なかっただろう。

努力を続けるヒロを同じだと見誤った。

考えることも、歩き続ける意思も一切なかったのに。

今、ダイチが倒れている結果に、才能など言い訳にも成りはしない。

努力の積み重ねなど、口が裂けても言うことは出来ない。

立ち止まっていたダイチが、何を言っても虚しいだけだ。

自分が一番わかっている。

『……シジマっち、泣いてるの?』

「泣いてなんてない。泣いてなんか……」

じんわりとした痛みすら伴い、目の奥が熱くなっていた。

目に溜まる水が、視界を歪ませる。

次から次へと溢れるようだった。

流れないように必死に留める。

勝てなくても仕方ない、そんな思いも最初はあった。

勝てたらきつとうれしいだろうとも。

だが今は違う。

勝つ努力を積まなかった自分が恥ずかしかった。

変わることでできない自分が悔しかった。

そして、ただひたすらにダイチは自分が情けなかった。

『シジマっち、絶対泣いてるって★』

「泣いてないよ! もう黙ってる!」

乱暴に携帯電話を閉じてしまう。

気が少しだけ、ほんの少しだけ紛れていた。

周りにはヒ口も憂う者もない。

それが少しだけ嬉しかった。

濡れていた目を拭い、横向きに寝るために姿勢を変える。

視界に入ったのは天を覆うほどの巨大な黒いドームだった。

戦い始めたときには無かった物だ。

あそこは確かヤサカが立っていた……。

『シジマっち、泣いてたの認めたく?』

「それはもういいから。ティコ、あれってヤサカのやつ?」

折りたたんでいた携帯電話を開き、ティコへと問う。

ダイチには黒いドームの表面が流動しているように見えた。

『近くでアナライズしないと詳細はわからないけど、あれはあの悪魔人間っぽいやつだね』★ で、見える全部が核っぽいか、あいつってなんなんだろうね』★ 元人間とかやっぱり絶対嘘でしょ?』

ティコの話ではあの黒いドームはやはりヤサカによる物らしい。

中ではイオとシヴァが戦っているのだろう。

まるで逃げ出さないように閉じ込める鳥かごのようではないか。

ヤサカから逃げ出した自分は、自他の違い、そして己が矮小であることを理解させられた。

鳥かごに捕らわれたイオはどうなったのか。

羽が折れたか、狭い空で妥協したか、それとも尚も高い空を目指すのか。

今日までの自分が試されただろう。

自分はどうだったか逡巡するように、ダイチは目を閉じた。

—— 各々の土曜日・東京（後） ——

—— 07:35 日比谷公園 ——

人間を含めた全生物やそれらを遥かに上回る能力を持つ悪魔ですら瞬時に消滅させるほどの煉獄にイオは立っていた。

魔神ルীগを身体に降ろしたことよって与えられた、ハーモナイザーの強化を凌駕する恩恵によるものだった。

それでも強い熱を感じ、不快さは消えない。

イオの周りには紅蓮色に轟々と燃える炎が広がり、地を焦土と化し天すらも燃やし尽くしていた。

これほどまでの災害、いや、天災が起きて周囲は問題ないのか。

そんなイオの疑問は一瞬で氷解した。

空まで聳え立つような影が壁のように覆い、炎が漏れることを防いでいる。

周りに被害が及ばないようにとヤサカが形成した、影のドームだろう。

その中心部では、シヴァとヤサカが激しい激突を繰り返していた。

初めはカーマの因子に誘われたというシヴァの炎が飛び交い、それをヤサカが影に取り込むことを繰り返していた。

時折、イオも魔法でヤサカを狙い打ったが有効打は無かった。

今の状況へと推移したのは、痺れを切らしたシヴァが広範囲に渡る火炎魔法を放ち、逃げることなくヤサカが完全に受け切ったためだ。

『ヤサカ様は炎魔法への絶対的な耐性を有しているようです』、それがイオのナビゲーターであるティコの言葉だった。

シヴァの炎がある今はヤサカのティコによる強制停止は行われることはないようだが、ハーモナイザーや魔法を起動すればその限りでは無い。

魔法による削り合いでの相性はヤサカに軍配が上がることにシヴァも気付いたのだろう、すぐに近接戦闘に移った。

シヴァが打撃を振るう度に、ヤサカが魔力を放つ度に、爆ぜた魔力が煉獄をまき散らし宵闇を思わせる影がそれらを覆う。

イオにとってそれほど長い時間ではなかったが、一柱と一人が織り成した苛烈な争いを鑑みれば、周囲を汚し切るには短すぎた。

そこからずっと繰り返す様に、近接戦闘が繰り返されている。違うのはシヴァが炎をまき散らし始めた頃に徐々に影が壁を造っていったこと。

今では空を覆うほどだ。

ひっそりと何も言わず、街に、残った人々に、燃え尽きないようにヤサカが壁を造っていた。

ルーグの恩恵によってイオの瞳は強化されてる。

その意味は、視力のみならず『視る』ことすべてにおいてが強化されているということであった。

普段のイオだったら見るのが叶わなかった随分と離れた位置からも、シヴァとヤサカの争っている姿をはつきりと捉えることができた。

シヴァの四つある腕、それぞれに握られた武器が巧みに操られ、ヤサカを傷つけていた。

しかし、それも一瞬のこと。

ほんの瞬きする時間が経つ頃には、牙と瞳が幾重にもある影によっていなしていた。手数はシヴァのほうが多く、一撃の威力も高い。

それに比べ、ヤサカは何度も手足が吹き飛んでおり、影は引きちぎれ、それでも尚のこと防御に専念しているように感じた。

シヴァのマグネタイトの枯渴が狙いだらうか、確かにそれも不安要素の一つだ。

ただ、それだけではない。

他に何か理由があるはずだとイオには思えた。

四腕から流れるように繰り出された攻撃を、ヤサカはすべて防いだ。

束ねていた影が幾本か吹き飛び、身体にも若干のダメージを負っているが、それでも防ぐことに成功したのだ。

繰り返すごとに傷は減り、浅くなっている。

そして、無傷で凌いだ。

それを見てヤサカが急速に学習していることをイオは理解した。

あれはただ、練習しているだけだ。

破壊神を前にして、繰り返し自分の動きを確かめているだけなのだ。

遠くから観察している場合ではなかった。

せっかく、シヴァという仲間が送ってくれた援軍を無駄にするとところだった。

早期の決着を臨むしかない。

凄まじい速度で成長を続けているヤサカに勝つには、シヴァが完全に破られる前の今しかない。

そう判断したイオは全力で駆け抜けた。

強靱な脚力によって踏み抜いた地面は柔らかく感じられた。

全力で跳躍する。

半ば飛んでいるような、そんな勢いでイオは宙に体を投げ出した。

狙いを定めるのを少し阻害する自らの胸を疎ましく思いながら、右腕に魔力を集めブリューナクを顕現させる。

イオの適正では、ルーグを制御することが精々の身では、拳を交えて戦うことも魔法

で援護することも難しい。

限界までルীগをその身に宿したブリューナクを使うのが精一杯だった。

そこまで無理を強いられなければ、破壊神と半魔人の織り成す地獄に近寄ることすら許されない。

何もできないまま逃げ出すことなど今のイオにはできなかった。

アプリの有無に関わらず、イオが使える技の中で最も威力があるブリューナクで一帯を消し飛ばす。

無限に再生しているヤサカもブリューナクの威力なら削れるはずだし、効かなかったとしてもシヴァのために隙を作り出す。

時間は敵だ。

すでにシヴァとヤサカの戦いは拮抗し始めていた。

ルীগの名を表すような、閃光を発するという投擲武器『ブリューナク』。槍とも矛とも石とも言われる伝承があるそれを、投げ飛ばした。

腕が伸びかのように、白い稲妻が奔った。

そして、初めから決まっていたかのように、ヤサカを貫いた。

閃光が大輪の花を咲かせるように炸裂した。

——07:36 日比谷公園——

死んでいないことは確信していた。

だが、持てる全てを放った。

少なくともダメージは与えているだろうという考えもある。

「えっと、こういう場合は……そうだ！」

イオは逡巡し、ヒロが言っていたことを思い出す。

近づけるように頑張っているイオとしては真似だけでも、少しだけ近づいたように感じる。

好意による憧れも多分にあるが。

そして口にした。

「や、やったか!？」

『やっていませんね、全然、全く、一切。アナライズの結果、損傷は一厘未満。それもすでに回復したようですが。さすが「あの方」が選んだ陣内様です』

アプリのナビゲーターであるティコが返す。

ダイチのそれとは違い、性別は男性で丁寧な言葉を返してくれるが態度は慇懃無礼。

イオなど知ったものかと平然と相手を褒めていた。

ヒロのテイコはかなり協力的であるし、ヤサカのテイコなど丁寧な言葉と隙の無いサポートで甲斐甲斐しく尽くしているという。

能力の高さとナビゲーターの質が比例しているのではないかと考えてしまうほどだった。

そして、当初の狙いであつた損害を与える手筈は失敗した。

ならば隙は作れたかというところ、それも叶っていない。

影が変わらずシヴァの相手をしている。

むしろ狙いやすかつた人型が槍によって爆ぜて無くなつたため、平面的に襲い掛かる影の対処に困惑しているほどだった。

人型は本体では無かつた事実のみが確認できた。

悪魔との融合が進み過ぎて、本当に人間ではなくなつていてと一目でわかる光景。

心の何処かでヤサカはまだ人間であると信じていただけにシヨックは大きい。

そして、人を辞めるといふことがどんなことか、理解させられた。

悪魔を身に宿すリスクが命を落とすだけではなく、進み過ぎて戻れなくなることもある。

覚悟が必要なのは死ぬことだけではない。

悪魔となることもまた覚悟しなければならない。

その事実がイオの心を揺さぶった。

——07:22 日比谷公園——

シヴァは始め、カーマへの激情に駆られ、戦場へと飛び込んだ。

パスパタで消し飛ばしたはずの因子が感じられたためだった。

今は違う。

今あるのは歓びにも感動だ。

矛を交えている矮小な人間が、命を削ることで神話さながらの力を発揮している。

悪魔に身を売りながら、魂を呪いで縛り上げながら、シヴァ神と同等以上の力を見せ
てくれている。

神秘が薄れ、信仰は利用されるだけ、神の存在などまさに泡沫のごときこの弛んだ時
代で、己の全てを対価として力を得ているのだ。

踊りのみならず、争いにおいても満足できるほどの歓迎！

喜ばないはずがない！

感動しないはずがない！

シヴァは今、この祭りを心から楽しんでいた。

— 07:27 日比谷公園 —

人間の気を僅かに残している悪魔人間に武を見せつける。

修練の末に辿り着いた技、その一端を。

幾ら悪魔に近づこうとも元は人間、脆弱で貧弱。

だが、シヴァは落胆しない。

少しずつ、身体が崩れようとも時間をかけて武を模倣する悪魔人間の姿はシヴァの琴線を刺激する。

人間からすれば永劫に近い永い時間を修練に費やしたシヴァにすればあまりに遅い成長。

しかし、一度の攻防ですべてを覚えきる腕は失望を抱かせない、期待が次々と湧いて出てくる。

シヴァからすれば牛歩のごとくゆっくりと、人間にすれば光のごとく、悪魔人間にとつては急速に、成長していく。

徐々に速く、重く、強い。

打ち砕かれつつも悪魔人間は着実に成長している。

人間とはなんと素晴らしいのか、歓喜に促されたシヴァの腕は止まらない。悪魔人間の成長は本当に早かった。

怒りの形ともいふべき炎『パスパタ』はずでに破られ、習得した。

暴力を詰め込んだような弓である『ピナーカ』も、影を巧みに駆使することで食い破っていた。

互いの距離は目と鼻の先、シヴァは握っている三つ又の鉾『トリシユーラ』による近距離の修練に突入していた。

一戦目で悪魔人間は成す術もなく碎け散った。

それでも立ち向かってきた。

二戦目は影を纏うことで防御することを試みたが、やはり碎け散っていた。難しすぎたか、シヴァが内心で首を捻るもやはり悪魔人間は引かない。

三戦、悪魔人間は碎けたが以前よりも殻は残っている。

四、五、六と続ける。

重ねる度に悪魔人間は適応していく。

殻の表面に纏った影を凄まじい速さで流動させることで、トリシユーラを弾いたのだ。

七戦、それだけの攻撃で悪魔人間は終に防ぎ切った。

その成長にシヴァは喜びを露わにした。

シヴァは獯猛な笑みを浮かべながら腕に力を込め、トリシューラを振り下ろした。殻を砕かれながらも、悪魔人間は健在だった。

技術の無い暴力そのものとしか思えない一撃を防ぎ切った。

すでに悪魔人間は、最低限の技術を体得しきった。

まだ足りない。

もつとだ。

もつともつと。

先の領域は険しく遠い。

その先には、まだ足りない。

だが、絶対に辿り着けるはずだ。

何処まで成長するのか、何者になるのか、唯見てみたい。

—— 07:30 日比谷公園 ——

シヴァが本気を出した。

レベルが上がる訳ではないし、アプリ上に記載される数値に変化が出ることもない。

シヴァに比べてヤサカの方が遥かにレベルは高い。ただ、空気が変わった。

それに合わせて悪魔人間の挙動が変わるが、全てが遅かった。人型としての殻、悪魔としての泥、すべてが切り刻まれていく。

どれだけのマグネタイトを保有しているのか、シヴァの能力を持ってしても終わりが見えない。

だが、それが良い。

余すことなく修練を積み上げることができる。

人間には永劫届かぬ高みから、何処まで付いてこられるのか。試してみたくなくなった。

数百戦。

振るつた後に随分と遅れて結果が付いてくるほどの神速。

次から次に悪魔人間は裁断されるが、それでも尚も追い続ける。再生を速める。

物理への適応を高める。

見切りを付ける。

ただひたすらに。

見ているだけでも満足できそうな速度で技術が高まっていく。

始まりは戦で学んだであろう我流の肉体の動かし方、褒めるところなど殆どなかった。

今は違う。

無駄の一切が排除された体捌き、流れるような攻防への体幹、武術を修めた者特有の勝負勘。

全てが備わり始めていた。

このたったの数分で。

人間では決して生きることのできない殺戮空間が、悪魔人間の成長を促し続けている。

人間賛歌を謳う悪魔がいた。

内心で馬鹿にしていた。

人間など下等で、眼中にすら無いものだ。

今は違う。

なんと素晴らしいことか！

シヴァには何度目かわからない本心からの感動だった。

視界の隅で輝く槍を投擲した悪魔憑きの女の姿にも、やはり感動した。

たった数日現界しただけで、命を糧に悪魔を身に宿す覚悟を持った者が二人も祭りに参加しているのだ。

しかも一人は二度と人間に戻ることは叶わないほど魔人の域に進む覚悟の持ち主。

もう一人は未熟であるが、着々と悪魔の浸食が進んでいる。

シヴァは歓びの声を何度も挙げる。

身も心も歓待してくれているこの信者たちの覚悟に。

もつとだ！

さあ、もつと！

血が沸き、肉が踊るようにマグネタイトが高ぶり、猛る！

人の身を捨てて立ち向かう悪魔人間に更なる修練を！

シヴァは最初から最後まで祭りを楽しんだ。

不満があるとすれば、名だたる英雄か怪物になれた素質のある人間がこの時代に生きていたこと、己の分霊に有るマグネタイトが少ないために全力が出せないことだろうか。

それでも、愉しめたのは確かだった

— 07:37 日比谷公園 —

苛烈さが増した、イオがわかるのはそれだけだった。

ブリューナクを放った、だが何も変わっていない。

シヴァは本気ではなかった。

ヤサカはさらに学習している。

互いを高め合うように、何処まで強くなる。

自分はどうだ。

ただ、置いて行かれるだけだ。

鼓動が強く感じられる。

まるで眼中にないとでも言うのか、放置されたままだ。

戦うに値しない限り、手を出すことは許されない。

立ち止まったままでは観客と同じ、ただ間近で見られる特等席にいるだけになってしま
まう。

見ているだけでも成長に値するのかもしれない。

だが、それでは遅い。

自分をもっと進むと決めた。

両親の死を胸に抱き、自分の死を乗り越えた。

それでもヒロの隣は遠かった。

的確な指示を出すことも出来ないし、仲魔の従え方も上手くない。

ハーモナイザーによる強化を受けたとしても、仲間はみんな同じことができる。

折角の悪魔とのシンクロも、ヤサカには全てで劣る。

自分には何も無い。

何処かで特別な能力を、技能を持っていなければ、並んで歩くことはできない。

あれに追い付かなければ、必死に追いかけることが、諦めることになる。

それは嫌だった。

「ティコ、もっとルীগを降ろすから。手伝って」

携帯電話へと呼びかける。

覚悟は出来ていない。

だが、思いは強い。

『残念ながら陣内様とあちらのティコにより許可されておりません。それでも行う場

合、ルীগの解放となりますが』

「いいよ。わかってる。全部やって、お願い」

ルীগは現在、携帯電話に仲魔として保存されている。

アプリを起動し、操作することで身に宿している。

ヤサカのティコがアプリの全てを握っている現状では今のルীগの浸食は見逃されているが、さらに深めれば強制終了のような措置を受けるだろう。

過保護だと笑いが零れそうになる。

だが、アプリを無視してヤサカのように身を捧げることで、ティコによる影響はなくなる。

暴走に似た状態になるだろう。

魔神の力は、イオという器に納まり切らない力を発揮するはずだ。

失敗すれば死ぬ、半端に成功しても悪魔となる。

どれだけ抑制できるか、祈るほかない。

『それでは、悪魔に魂を乗っ取られぬようお気をつけテ……』

それを最後に身を焼くような、魂を汚すような、悪魔による汚染が始まった。

掠れる意識で辛うじて見えたのはヤサカの影に包み込まれる自身と、アプリが強制終了した様子だった。

——07:38 日比谷公園——

イオが東京組に混ざって行動しているのは争いが苦手だから……だけでは、もちろん無い。

今日まで共に戦い抜いた面々で争うのを嫌ったが、ヒロの隣を歩けるようになりたいという理由が大きい。

ヒロと合流して今日を過ごせば確かに物理的に歩けるだろう。しかし、イオが求めているのは精神的に寄り添い合うことだ。

現状で最もヒロに近いのは、誰か。

それに近づかない限り、乗り越えない限り、歩める道理は無い。そう思っている。

つまり、自尊心と嫉妬による兼ね合いの問題だ。

ヒロに近づくことは難しいことも理解した。

最初からわかっていた。

そもその付き合いが違い過ぎる。

輝きに眩んだ自分では、張りあう権利すら無いのだろう。

それでも諦めたくはない。

決意した自分を否定することになる。

それだけは嫌だった、自分の気持ちに嘘はないのだから。
地獄の業火に焼かれることになるうとも、それでもあの輝きに憧れている。

意識が浮上する。

そんなイメージだった。

気分は悪くない。

満たされたような昂揚感すら伴っていた。

腕を振るだけで、イオを拘束していた影が吹き飛んだ。

影から飛び出したイオが見た世界は、全てが変わっていた。

大地を焼き尽くす煉獄はまだ存在している。

だが、それよりもさらに深く深く、イオには見える。

淡く緑に輝くマグネタイト、その魔力光が今のイオには覗えている。

煉獄はシヴァに巡っている魔力の物、同じ色だった。

空を覆うドームや煉獄の下に這いずる影、ヤサカらしき泥から伸びている物と同じ色
だった。

見えなかったものが見える。

わからなかったものがわかる。

色鮮やかで力強い世界、これがきつと悪魔の視界なのだろう。

ヤサカを解析したことがある菅野史——フミが言っていたことをイオは思い出した。彼は美しいらしい。

その時のイオには理解できなかった。

だってヤサカは怖い、雰囲気やその様が。

ヒロと違って暴力に満ちている。

だが、今は違う。

フミとは違う目線だろう、しかし、イオにも美しいことが理解できた。

ヤサカを構成するマグネタイト、その光は何よりも流麗だった。

シヴァと見比べることで輝きが増しているように感じた。

無駄だった動き、乱雑な力の流れ。

それが瞬く間に変化する様からイオは目が離せない。

ルージュの力を抑えておける時間は残り短い。

それでも、見ていたくなるほどの魔性。

ヤサカの流れを真似するように、イオは繰り返し魔力を練る。

理想像のように上手くはいかない。

それでもイオは満足だ。

近づいていることが実感できた。

今まで直視することが叶わなかった眩い光、その光源に近づきつつある。

自分のための輝きであるかのようだ。

胸の高鳴りとともに、荒れ狂い、それでいて透き通るように流れるマグネタイトに混ざると。

シヴァもヤサカも、拒みはしなかった。

——07:40 日比谷公園——

戦いがこんなにも楽しいとは、力に満たされるのがこんなにも気持ちいいとは思わなかった。

シヴァの笑い声が聞こえる。

イオも笑いたい気持ちもあるが、それ以上に必死だった。

手加減されているであろう一撃が、イオには致命傷成り得る。

凌ぐだけでも精一杯だが、それすらも愉しかった。

力を振るうことが愉悦に繋がる。

壊すことが、壊されることが、楽しくてしょうがない。

もっと力が欲しい。

求める心が迸り、ずくと頭の奥が疼いた。

それが隙となった。

流すこともできず、影が起こした暴力によって弾き飛ばされた。

頭部が強く揺らされた。

割られていなかったのが奇跡だった。

いや、ヤサカが自分を殺すはずがない。

当然の結果だと思い至る。

頭の奥が痛む。

そして、思い出した。

戦いを楽しむために来たのではないことを。

必死に理性でつなぎ留めよとするが、戦いの快楽を求めてしまう。

なんだか魂が乾くようだった。

ルージュの浸食が深いのだろう、なんとなくそう思えた。

アプりは止まっている。

すでにイオが止まることはできない。

止まる気は無い。

輝きを手にするために、進み続ける必要があった。

遠く離れていたはずのヤサカに近づけている。

だからこそ、追い抜く。

今日、此処で。

——07:40 日比谷公園——

延焼を起こしていた炎が消え、シヴァが持つ三つ又の銚子が太陽の如き輝きを放つ。

イオの強化された肉体ですら、悪魔が混ざった魂ですら、燃え尽きそうな熱を感じる。

シヴァが一度、ヤサカへと振り下ろした。

眩く、そして強く輝く。

鋭利な銚子が、込められた熱が全てを焼き尽くす。

裁断された焼け焦げた地面は断層が覗いている。

ヤサカだった影は赤い泥のように飛び散り、蒸発した。

ぐじゅぐじゅと足元が流動する。

それに連動するように、ドームとして存在していた影が天井から徐々に落下を始め

た。

炎と影の無くなった地面は、全てを吸い取られたかのように砂塵と化していた。

シヴァは動かない。

すべての影が集まり、ヤサカを形造った。

待っていたのだろう。

イオも待っていた。

ヤサカが金色の輝きを纏った。

そして、芯から溢れる伊吹のような輝きは、魔力に混ざり、白銀の光となった。

今までよりもずっと強く、温かい。

シヴァが笑みを浮かべ、再び鉾を振るう。

ヤサカもそれに応え、拳を振るった。

その交差に惹かれるように、イオも飛び込んだ。

——07:41 日比谷公園——

光が晴れる。

時が止まったような静寂の中でシヴァは崩れ落ち、緑の輝きだけを残して消え去つ

た。

最初から最期まで豪快に笑い続けていた。

ヤサカは無傷、イオの放ったフラガラツハを止め、シヴァを倒していた。

今のイオでは半端なフラガラツハだったが、会心の一撃でもあった。

影のドームはすでに無くなっている。

強化された感覚と視界でヒロを捉えた。

ヒロに隣を歩けるように努力する姿を見てほしかった。

ヤサカに認めてほしかった。

だから……。

ブリューナクを近距離で投擲する。

影が貪るように破壊しているが、構わなかった。

まだ届かない。

今はまだ。

それでも進もう、そう決めた。

ヤサカが小さな硬貨を取り出した。

五百円玉だった。

親指で弾かれたそれは、強化された目でも捉えきれない。

回避するにはイオの動きでは遅く、硬貨の弾速はあまりに速い。

咄嗟の判断で防御に徹した腕が痛みを発する。

キインという硬貨を弾いた音、そして腕の折れる鈍い音が遅れて聞こえた。

すでに限界までルীগと混ざっている状態で、これだ。

ヤサカとの果てしない差を感じる。

それでも戦う。

諦めるには早いから。

魔力が収束して傷を治そうとするが、ヤサカはその隙を逃さない。

ヤサカが見せつける様に拳を軽く握る。

一挙一投足を見逃さないように、嘗てないほどに集中力が高まる。

拳が霞んだ。

視えたのは、それだけだった。

同時にイオは腹部に圧力を感じた。

距離を無視するほどに速く重い拳圧。

イオの意識は容易く刈り取られた。

— 08:00 日比谷公園 —

目覚めたイオを待っていたのは、自分たちの戦いが終わった事実だった。悔しさは無い。

ダイチらには悪いが、納得のいく終わりだった。

イオは自分をもっと進む必要があることを学んだし、もっと先に行けるとも感じた。いつかきつと隣を歩くのだと、目標を定める。

今はまだ小さな歩みだが、着実に近づけているのだと、先ほどまでの戦いで実感できた。

それまで待っていてくれるだろうか、不安に思っちらりと視線を向けた。

ヒロの柔らかな眼差しが、イオへの答えのようだった。

『戦闘終了、ヤサカの勝利です』

携帯電話の画面にヤサカのティコが映し出され、丁寧な言葉遣いで告げた。

この映像は全員の元に届いているのか、イオ以外の面々も同様だった。

ヒロやダイチのティコとは違い、小学生ほどの幼い姿。

持ち主に似た無表情。

少女のように幼くて柔らかく、それでいて抑揚のない声に聞こえた。

『お疲れ様でした』

棒読みとも聞こえるはずの声は、少しだけ感情が籠っているようにイオには思えた。誇らしげで、甘えるような声。

イオにわかったのは、対象が違えど同じ気持ちを抱いているからか。

落ち込んでいる仲間と喜んでいる仲間、対照的な仲間を見比べながらそう思った。

最期に流れた子供が無邪気に笑っているかのように軽快な電子音を響き渡る。

その音色は戦いの終わりを告げていた。

戦いは終わった。

熾烈を極めた、これまでの自分が試されるような戦いが。

後悔はない。

イオが少しだけ気がかりなのは、この場にダイチがないことだけだった。

— 08:00 路地裏 —

チユールで顔を隠した老婆と、手を引かれる幼い少年。彼女らに話しかけられたダイチは困惑していた。

ただ、ヤサカの後を追いかけて路地裏に來ただけだ。それだけなのに……。

「坊ちやまは貴方に興味を持たれてはおりません。ですが、あの悪魔人間には興味があるとのこと。そこで、哀れな貴方が望むのなら、あの悪魔人間を超える魔人の力を与えようと申しております」

言葉は全て真実だと、なぜか確信できた。

鼓動が煩い。

喉がひどく乾く。

「俺は……」

— 08:00 路地裏 —

最初は弱い悪魔が徘徊している程度の、少しだけ汚れている路地裏だった。アリスの知らない不思議の始まり。

今は強い悪魔が縄張りを主張し、人間の体液と悪魔のマグネタイトで染まりきった地獄となっていた。

そこが無垢な魂を持つ少女の世界だった。

世界の中心にはアリスだけがいて、絵本だけが彼女を慰める。

かつて人間だった者が買い与えた、宝物。

最初はアリスがヤサカを引き止めた。

物珍しさに惹かれて、テイコとの仲の良さに憧れて、抛り所を求めて。

今はヤサカがアリスを引き止める。

鏡のように、対照的な凶となっていた。

「あら、お兄さん。悪魔になりたくなくなったのかしら？」

柔らかい笑みを浮かべる。

少女のように純真な、心からの笑顔を。

それだけの信頼がある。

無垢な魂の行方を、アリスは求めている。

ヤサカを首を横に振るう。

表情は変わらない。

テイコに見せる笑顔ではない。

最初に見せてくれた笑顔でもない。

拒絶を表していることくらい、幼いアリスにもわかった。

それがアリスの胸に痛みを与えた。

なぜかわからないが、ひどく寂しい。

「俺は教えにきたんだよ、アリス。人間と友達になることを」

アリスの世界が終わるときがきたのだろう。

遊んでいた子供部屋から追い出されるように、単純で残酷に。

風が一阵、吹き抜けていった。

読みかけの絵本のページが捲られ、閉じることでその物語の終わりを告げた。

胸元にかけているヒランヤが小さく揺れた。

生きるとは変わりつつづけること――午前2

各々の土曜日・無垢な魂の行方（前）「仮」

アリスが生まれたのは、セプテントリオンが襲来してからそれほど間を置かないような頃合いだった。

元となった名もなき少女の穢れのない魂が、人の心を求めたベリアルとネビロスの目に留まった。

それだけだった。

ベリアルとネビロスにまともな自我は残されていなかった。

どちらも、統括している存在が失われたことが関係しているのかもしれない。

鏡合わせを繰り返したような遠い異なる世界、核で常識のすべてを焼かれた世界、そこで“本物”のベリアルとネビロスはザ・ヒーローの手によって葬られた。

それでも、愛する者のために、尽くすためだけに、残骸はアリスを生み出した。

何も生み出すことのできない、創造性の一切を持たない筈の悪魔が、唯一生み出した心に従って。

生み出されたアリスは最初からすべてを持っていた。

無垢な魂を穢さないように、生まれる前に全てを与えられていた。

知識、力、純粋な心……何もかも。

そして、誰も、何も、何者も、誕生したアリスに何も与えなかった。

すでに持っている者に、何を新しく与えられるだろうか。

ベリアルとネビロスは、残骸と化した悪魔は、アリスの誕生を歓んだだけだった。

物言わぬ不死者たちが友だちだった。

傳き異を唱えぬ悪魔が友だちだった。

怯えた悪魔は、ただ逃げるだけ。

諦めた人間は、何も生み出さない。

純真なアリスは、ただ強すぎる力を持った幼子だった。

何も知らなければそれで幸せだった。

そして、何も知らなかったことを知ったアリスが、未知を感じた幼子が、自ら幸せを

追い求めて箱庭から抜け出すのも当然だった。

無垢な魂が、その行方を望むままに。

足るを知らず、足らざるを知って。

ヒトが蛇に唆されたように。

——07:30 路地裏——

アリスの胸元に掲げられていたヒランヤが小さく揺れた。

当初の予定を大きく外れたが、それでも順調に魔人へと至っているヤサカとパスが繋がっている証だった。

こちらからの干渉を行うはずの片割れは、すでに破壊されていた。

だが、捨てられたわけではない。

魔力を必要としたヤサカが、その体内に取り込んでいる。

居場所を知ることや、どれほどの力を持っているか、漠然と理解できる程度だ。

それでもよかった。

アリスが求めているのは、ヤサカが世界に存在していること、そして自分に近づいていること。

それだけわかれば、安心だった。

不安はあのヤサカが失われること、それだけだ。

ただ、予想以上に悪魔の力を内包しているにも関わらず、ヤサカが魔人として完成しないことには首を傾げていたが。

不安要素も当然のことながら、存在している。

あと三度、もしくは二度、夜が明ければ世界は終わりを迎えるという。

歪な蠅のような魔王がアリスにそう告げていた。

だからアリスは何が何でもヤサカを連れ出さなければならぬ。

ヤサカならば連れていける、そういう約束だ。

アリスは魔力を風に乗せる。

魔力で形作られたアリスの世界から、現実にいるヤサカへの手紙だ。

ここにいるのだと知らせるために。

人間が触れれば溶けて消え去るような、猛毒を含んだ甘く未熟な恋文。

あとは待つだけだ。

膝の上に乗せた絵本をめくる。

自分と同じ名前を持った主人公が不思議な世界を巡る物語。

空想へと思いを馳せ、過去の自分と重ねて逡巡する。

生まれたばかりの純粋なアリスに初めて与えられた数々の刺激。

無垢な魂に未知の知恵を囁き、交わることの出来る道を示す甘美な誘い。

物語に勝るとも劣らない至福の時間だった。

自分で得ること、相手から与えられる素晴らしさ。

何もかもが新鮮で、心が躍るような感動ばかりだった。

——だからこそ、失われるのが怖い。

——08:00 路地裏

ヤサカの後を追いかけて、気付けば可笑しなことになっていた。

突如として目の前に現れたチュールで顔を隠した老婆と、その老婆に手を引かれた少年から目を離せない。

ダイチは事態が上手く飲み込めず、生じた困惑に思考を曇らせる。

「坊ちゃんまは貴方に興味を持たれてはおりません。ですが、あの悪魔人間には興味があるとのこと。そこで、哀れな貴方が望むのなら、あの悪魔人間を超える魔人の力を与えようと申しております」

老婆が穏やかな口調で、ダイチにそう告げた。

老婆に手を引かれている少年は、伽藍の瞳で虚空を見ている。

ダイチは、その言葉が真実だと確信した。

なぜかはわからないが、そう思えた。

その言葉に答えていいのか。

踏み込むべきではないと本能が警鐘を鳴らしている気がするが、それ以上に魅力的だった。

鼓動が煩い。

喉が、ひどく乾く。

それでも口が動いてしまう。

「俺は……」

少年がため息を吐いた。

それだけで、言葉が詰まる。

「よろしいのですね」そう老婆が少年に告げていた。

「いえ、答えは結構です。坊ちやまは望んでおられません。しかし、貴方が持っていることに意味があるようです」

老婆が差し出ししながら「貴方が使う必要はありません」と告げた。

それは簡素な瓶だった。

中で何かが蠢いている。

虫のような、悪魔のような。

ダイチにはわからない。

ふと、ヤサカならわかるのではないかと思いついた。

ふらふらと足が進み、手が瓶へと伸びる。

駄目でも、彼に全てを委ねてしまえば……。

「それでいいのです。流転する先に、望むものがある。弱い魂は強い魂に……」

瓶に触れるまであと数歩といったところで、まるでダイチの挙動を止めるかのように、それは空から舞い降りた。

薄く黄土がかったそれは、円錐形の独楽のような形をしていた。

涙を逆さにしたような、乳歯のような、そんな印象だった。

威圧感は無く、恐怖もない。

弱そうだな、そうダイチは思った。

習慣的に行っているアナライズを起動させる。

結果はセプテントリオン、名をベネトナシユ。

「セプテントリオンか！」

アプリを起動させ、悪魔を呼ぶ。

瓶への抗いがたい誘惑は溶けていた、ダイチの頭の中にはセプテントリオンへの危機感でいっぱいになっていた。

ダイチがアプリを操作する短い間に、ベネトナシユは四つに分かれた。

中身は、かつて戦ったセプテントリオンの一部に酷似していた。

「枯れ落ちる枝葉を任された管理者。そんな矮小な歯車程度が横入りを……う？」

少年の呟きが、ダイチの耳に届いた。

だが、それどころではなかった。

ダイチが呼び出した悪魔が送還されていく。

まるでヤサカが行った、先ほどのように。

ベネトナシユの一部、フェクダに似た半分の円環が紫電を纏う。

その様からダイチは気づく。

他のセプトントリオンの力、それが使える可能性に。

本物の攻撃よりも弱い雷が迸った。

ダイチ、老婆、少年、すべてを巻き込むように。

視界が明滅する。

一瞬、少年と同じ金の髪をした老人が見えた。木製の車椅子に乗っている老人だった。その背には、年若い女性が控えていた。

「よろしいのでしょうか」

「重要なのは魔人。それに届けば、今はいい」

雷の光が消えた後、ダイチの周りには誰もいなかった。

あの二人は何処にいない。

視界の端で瓶が転がっていた。

あの二人がいた証拠は、気持ちの悪い瓶だけだ。

ベネトナシユがゆらりと揺れ、ふわふわと移動する。

何処かへ向かおうとしている。

ダイチは見逃されたのか、興味が無いのか、そのままベネトナシユが小さくなっている。

「あいつ、何処に向かったんだ……？」

ダイチがぼつりと呟いた。

その言葉は露と消える……

「悪魔人間の元に向かったのだろう。君は見逃された。いや、むしろ見えていなかったとでも言うのか。あまりにも大きな影は、矮小すぎる光など飲み込んでしまう」

はずだった。

それは蠱惑的な魅力を孕んだ声だった。

自分に見向きもしなかったセプテントリオンに向けた独り言だったため、返答されると思っていなかったダイチの心臓が大きく跳ねた。

「喜べ。強い友の御蔭で、君は死なずに済んだことを」

言葉の主は長身の青年だった。

それは、金色の髪、病的な白い肌、鋭い瞳、怪しい色気を放っている、青年だった。

青年の姿を見たダイチは体の震えが止まらなくなった。

怖い。

何よりも、誰よりも。

強さは感じない。

強さだったらヤサカのほうがずっと上な気がする。

ただ、怖い。

「幸福を噛み締める。君が弱いせいで、強い友には厄介事が増えたことを」

落ちていた瓶を拾いながら、青年が言葉を続ける。

聞きたくない言葉だった。

否定したかったが、震えが強くなるだけで、ダイチは何も出来ない。

「力があれば、土の器は軽くなるのか。強さがあれば、罪は注がれるのか。欲のままに、それが幸せなのか」

青年が、ダイチに瓶を差し出した。

「『わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである』」

詰まらなそうな表情を浮かべた青年が瓶を弄ぶ。

「弱い自分を知った人間が、初めて神の力を感じるそうだ。だから、大いに喜んで私の弱さを誇りましょう、と。面白いだろう。君はどうだろうか。今、神は傍に在られるか」

瓶からきーきーと奇妙な鳴き声が聞こえる。

気持ちの悪い鳴き声だ。

ダイチの知っている生物とは異なる、酷い雑音だった。

「力が欲しいか。望むなら与えよう、このレイ・サイファーが」

その瞬間、ダイチを縛っていた恐怖が消え去った。

まるで初めから何も無かったかのように。

それが怖かった。

あれほどの恐怖を孕んでいた存在が、こんなにも何も無い様で振る舞えることに。

『シジマつち、ちゃんと答えないとダメだよ。最高位悪魔の言葉には本心で答えないと、

きつと殺されちゃうから』

テイコが呟くように、ダイチに助言した。

何時ものノリがそこにならない。

選ばなければならぬことは理解した、強制的に。

絶対的な強者からの選択肢。

志島大地が望むべきこと。

いつか決まることが、今になって必要になった。

ただ、それだけだ。

原作・とある魔術の禁書目録、とある科学の超電磁砲 才
リーシユ・ニナツターと科学の都市Ⅰ

— 1 —

第二の人生はロシアで始まった。

別に旅行や仕事に行つて永住しようと思つたわけではない。

掻い摘んで説明すると、目覚めたら悪魔祓いになつてた。

顔とかは元のまま、ロシアでエクソシストである。

人生って何があるのかわからないな。

元の住所を調べてみると、住宅街は存在せず。

代わりに在つたのは学園都市という外界と壁で隔てられた科学が進んだ都市だった。

そこでは超能力開発を行っているらしい。

なんて胡散臭いのだろうかとも思つたが、今の俺の仕事も十分胡散臭かつた。

職場では魔術とか使つてる人がいるからどっこいどっこい。

悪魔もいるっぽいし、超能力も事実の可能性が高い。

ワシリーサに弄られているサーシャに泣きつかれた。

実力行使に及んでも、ダメージが入らないため、引っ付かれて嫌がらせをされるとか。サーシャが可愛いのはわかるけど、あまり構いすぎるとよくないと横やりを入れる。

ロリコンは黙ってろだと？

BBAには俺特製の聖水をぶっかけてやろう（提案）

貴様の邪念を祓えるだろう。

むしろ存在が消えるかもしれん。

邪念の塊だし。

俺は大丈夫。

ロリコンという名の紳士だから。

聖水でBBA魔術を無効化して放り投げておく。

着地の際に首が変な方向に曲がっていたが、死んでないと思う。

命の水がうんたらかんたらで、凄まじい生命力を発揮しているのだ。

駄目だとしても「でえじようぶだ、ドラゴンボールで生き返る」みたいな。

ドラゴンボールないけど。

ロシア成教に所属する女の子と遊んだり、お祓いやったり、お祈りやったりしている
と辞令が下った。

半ニート状態の俺にも仕事が回される時がきたか……。

3日くらいかかるのかなと内心で甘く見ていた。

他の宗教団体が活発になってきたから対抗するため数合わせで学園都市に潜入して
こいとのことだ。

しかも無期限。

なんて残酷なんだ。

サーシャとの蜜月の日々が終わるとか無いわー、とワシリーサに抗議しに向かう。

部屋に入つて辞令が出たと伝えると凄く凄く良い笑顔で迎えられた。

行きたがつてたでしょ？と慈愛の笑みを浮かべるワシリーサ。

日頃から迷惑かけてきたから休みに行ってくれとか。

俺は女の子と戯れる歪んだ日々を送るんだ☆と主張するには、ワシリーサの好意は純
粋すぎた……。

しようがないので大人しく日本へ渡ることにした。

部屋を出る時に自慢げにサーシャの衣裳を見せられた。

革ベルトと薄い布である。

間違いなく服ではないことがわかる。

着たら痴女確定だ。

ロシアであれとか変な男に襲われるわ。

むしろ襲わなかったら男じゃない。

俺が目にしたら理性がはじけ飛ぶのは確定的に明らか。

サーシャ、強く生きろよ。

日本まで飛行機で揺られ、電車に揺られ、バスに揺られ、学園都市に到着。

偽造の身分証明書を渡されて準備完了。

ご同輩の導きで内部に侵入する。

まあ、日本人なので身分証が必要になる機会は限りなく少ないと思うけど。

中に入ったまでは良かったが、やることがわからない。

ワシリーサが気を利かせて自由に振る舞えるようにしてくれたのはいいが、勝手がわ

からなすぎて困る。

行き当たりばったりで過ごし、他の団体が行動を起こしたら様子見の後に介入といこ

う。

行動予定が完璧すぎてビビる。

完璧な予定を立てても暇なんですけどね！

教会で祈ったり、掃除したりで午前中にはやる事が無くなる。

誰かお祈り来いよと思ったりもしたが、日本人に期待するのは間違っている。なので日中は街中に出て、野良占い師と化している。

星詠みなら俺クラスになると余裕のよっちゃんだ。

目の前を走り抜けていく髪の毛ツンツンの少年の星は詠めなかったけど。

……俺にだって出来ないことくらいある。

その後を追いかけて走っていく少女なら詠めた。

幾千にも重なる己との対面である。

初めてみた星だ。

わけわからん。

占いてホントにわけわからんねえな。

というか、俺の占いの腕がクソなんじゃないかと疑い始めた。

使っている水晶が壊れているに違いない。

ロシア式修理術（祈って斜め45度を殴る）を使わざるをえないな……と一人ごちていると雷に打たれた。

バリツときた。

10000〜20000m級の山でもないのに真横から雷とか学園都市は恐ろしいところだな。

隣を掃除していたロボットもぶつ壊れてしまった。

……弁償とか言われたら嫌なのでバックれよう。

占いをしているとしいたけちゃんがたびたび現れるようになった。

瞳にしいたけを宿しているという凄い人間だ。

学園都市側として許容している事件が起きるため介入しないようにとのことで、しいたけちゃんはお目付け役らしい。

組織の面子とかあるよね。

まあ、俺からは手を出さないけど相手から来たらわからんとか言っておこう。

空気がピリツとした気がした。

なんか張りつめた空気になってしまったので、しいたけちゃんを占いに誘う。

折角来たんだからどうよ、と取り出したるはタロットカード。

水晶？

捨てた。

水晶見て星が詠めるわけねえじゃん。

今年のトレンドはタロットだし。

宙に浮んで自動でシャツフル、流石魔術である。

さあ、一枚どうぞ。

占いを信じていないのならば、躊躇う必要がないはずです。

ゆえに、何も怯えることはないのです。

貴女の人生の一部を切り取るうとも、信じていないのならばオカルトなど関係ないでしよう？

結局占いをしなかったしいたけちゃんとは別れて帰宅。

一息ついていると、イギリス清教に所属する「インデックス」と名乗る修道女が訪ねてきた。

うちの教会はロシア成教だが、問題ない……のか？

そういうのって俺にはわからん。

ワシリーサの仕事だし。

任せるのも自己チューってやつだろう、今度から理解を深めて手伝うとしようかな。

で、件のインデックスだが、追われているから匿ってほしいという映画のような状況らしい。

迷える子羊をうんたらかんたらって感じだろうか。

折角訪ねてきたのだから手助けしようか。

神の家だし……あつてるよね？

俺って珍しく神父っぽいことやってて感動した。

その晩、教会に備蓄してあつた食糧が消滅した。

目の前のカービイのせいである。

暴食は罪ではないのか、とインデックスの食欲に青筋を浮かべてしまった。

憤怒はダメなんだよつと白いシスターであるインなんとかさん。

その言い様に俺氏、激おこぶんぶん丸である。

『警告！ 禁書目録の「首輪」、第一結界の消滅を確認』

暴食に心を売った罪深きシスターが喉を詰まらせたので、手元にあった聖水を飲ませたら二重人格に目覚めた。

悪魔が憑いていて、それが聖水で祓われたとか、そういう設定だろうか。

中二病だか邪気眼だか知らないが、食事中に騒ぐとはいいい度胸だ。

いつの日か思い出して枕に顔を埋めてジタバタするかもしれないが、ダメージは軽度のほうがいいだろう。

この不心得者が！と聖水の入った瓶を頭に振り下ろす。

硬質なガラスが碎ける音とともにインデックスの身体に水が降りかかる。

『第二、第三結界までの消滅を確認。「首輪」の再生まで三時間三十四分と予測。対侵入者用の特定魔術を発動』

まだごっこ遊び続けるのか、と聖水入り瓶を構えたところにビームをぶつ放された。

反抗期か！と驚愕しつつ防御。

この程度じゃ俺は倒せないぜ（ドヤアアア　とかやっているのだが、防御している腕から血が飛び散り始めた。

あれか、メギド的な万能攻撃か。

ちよつと反則すぎんよ。

いや、ちよつとタイム。

マジやばいから。

なんで俺に効いてんすかね。

ロシアならノーカンのはずだ、これがローカルルールってやつか……。

腕が徐々に削られて内心で超焦っていると、ぶつ壊れた教会の壁を伝って二人の魔術師が現れた。

「貴様、インデックスになにを!？」とか「そんな、あの子が魔術を……」とか二人の世界に浸ってないで助ける。

今なら不法侵入も許してやる。

だから助けてくれさいお願いします！

『侵入者検知。戦場の再検索を開始……失敗。再検索を行います』

際どい格好をしたチャンバラガールがインデックスの足元を払って体勢を崩した。赤毛で高身長の方はドヤ顔を決めている。

インデックスのビームが壁から天井まで全てを貫いた。教会がああああああ……。

流石の俺も怒りが有頂天で激おこぶんぶん、怒髪天を貫く。

今日は（説教で）寝かさないぞ☆とブチギレである。

天井が崩れて見晴らしが良くなり、天体観測しやすくなったなど見上げる。

中天に輝く月の姿に気分が高揚する。

ああ、そうだ。

インデックスにあげたから、聖水飲んでなかった。

『再検索……成功。幻獣の討伐を最優先に変更。呪術の逆算に成功、人狼と推測。「三つ首魔犬の苦悶（トリカブト）」の発動まで30、29、28……』

銀色の体毛が生え、口は耳元まで裂けて鋭利な牙が並び、体格が二回り以上大きくなった。

しなやかな手足には鋭い爪。

ちよつと猫背気味になると攻撃的になるのが欠点か。

月に向かって「わんわんお！」とひと鳴き。

ビームに逆らいながら一直線に進み、インデックスへと爪を振り下ろす。

切り裂くと表現するには、それはあまりに速すぎた。

インデックスの周囲に存在した術式を容易く引き千切り、砕けた術式の破片が粉塵と
なった。

それでもあまりある勢いが余波を生じさせ、全てを薙ぎ払った。

余波の衝撃で闇夜に吸い込まれるインデックスを見送る。

やりすぎた。

死んだかもしれない。

鬱陶しいほどに舞い散る羽根を手で払いながら思った。

結果から言うとインデックスは生きていた。

『歩く教会』という霊装のおかげで傷は無かったようだ。

むしろ両腕削られた俺の方が傷ついていた。

赤い髪のチンピラ神父とチャンバラガルがインデックスの扱いはもつと丁寧にうん
たらかんたら。

おまえら追跡者だろ、なんで取扱いに注意されなきゃならんのだ。

インデックスは魔導書を10万……1万……100万……？

2億冊くらい所有していて、イギリス清教が所持しているものらしい。

めんどくさいから返還しようとしたが、却下された。

こんな危険物が暴走すると危ないし、現に暴走したから『オカルトの検閲と削除』が本職のロシアにまかせろーってことらしい。

チンピラとチャンバラねーちゃんも科学側なら安全だろうからと学園都市に置いとくよう言い残して、上の人に会いに行った。

科学側から「問題おこしてんじやねーぞ、詫び入れろやー！」みたいな抗議が入って来た。

「イギリスが起こそうとした問題」を「ロシアが十字教の面子のために収めた」と一点張りで通す、つまり全部イギリスのせい。

抗議があるたびに、しいたけちゃんが伝えに来るが、イギリスのせいとしか答えない。

あとはロシアが頑張るに違いない。

パシられるしいたけちゃんがかわいそうだ。

最終的にインデックスの面倒を見る、自宅警備員、来年には都市から出ていく、の三点で処置が決定。

やべえ、意図せずニートになっちまったー。

あー、しょうがないなー。

こればかりはしょうがないよなー。

約束守るためにしかたないからニートになるつきやないわー。

インデックスに餌付けしながらニートになるしかないわー。

残念だなー仕事したいなー。

学園都市で暗躍する仕事が入った。

死にたい……。

暗部に入って学園都市を探ってね☆という仕事に就いた。

インデックスの子守りはスタイルに任せて、俺はファミレスに来ている。

ロシアだろうがイギリスだろうが教会は教会なので、似非神父なスタイルでも問題な

いはず。

ファミレスがその暗部の集合場所となっている。

指示された席に向かって「大神 次郎です、レベル4の獣人変化（ワーウルフ）です☆」とランカちゃん張りのキラツをお見舞いする。

ビームで歓迎された。

熱烈な歓迎に顔を半分焼かれつつ、暗部「アイテム」の人員を見渡す。

鮭弁、鯖缶、雑誌、電波。

……帰ってえ。

比較的まともそうな雑誌の隣に腰かける。

とりあえずコミュニケーションしよう。

「麦野さんババくさくね?」

ビームで抗議された。

他のお客さんに迷惑っすよ。

インデックスに餌付けしたり、アイテム連中と駄弁ったり、ビームで焼かれたり、仕事したりして過ごす。

今日はB級を超え、C級を置き去りにし、D級を遙か彼方に追いやるような映画の

載っている雑誌を絹旗と眺めて議論。

相変わらずフレンドを占うと上半身と下半身が緩いという結果が出た。

そして、麦野が重役出勤したのでフレンドをデコピン。

抗議しているフレンドを見て、今日の真つ二つフラグが回避できたことに満足する。

こういった微々たる動作でも死亡フラグは折れる……無理なときもあるわけだが。

なぜか俺にビームが直撃。

科学の影響が強いとダメージが入りやすいようで、思ったよりも深い傷が巻き戻しの

ように再生していく。

もう慣れたもので、最初の頃にキョドっていた絹旗が懐かしい。

ドリンクバー用の氷で塔を作る。

氷と氷の接着面は聖水でくっつけている。

目線よりも高くなってバピロンだな、とドヤ顔を決める。

いつも同じメンバーだと気付く。

俺も大概だけど、おまえらも友達いねーんだな。

拡散ビームが炸裂した。

俺のおかげで店や人への影響は出なかったのが幸いか。

怯えた店長が現れた。

出入り禁止5件目待ったなしの予感……！

麦野ぼつちに話を聞くと、自分と釣り合うような相手がいなかったから好きでぼつちらしい。

聞きだすまでにビームを二桁は撃たれた。

なるほど、上位なら友達になるのか。

ちなみに三位はダメらしい。

ビーム撃たれたから間違いない。

ぼつち麦のん友達計画を手伝ってやんよ。

BBASEンスが直るかもしれないし。

さつきからビームが撃ちすぎっすよ。

麦野、クローンの指をしゃぶっている第一位を連れてきた！

2298 原作：とある魔術の禁書目録、とある科学の超電磁砲 オリリーシュ・ニナッター
の都市 1

とある科学2

3

「どオも、第1位の一方通行でエす」

凶悪な笑みを浮かべた一方通行がアイテムに挨拶する。

一方通行の自己紹介を受け、アイテムのメンバーが固まった。

特に麦野は時間すら止まっているかのようだ。

麦野の友達候補としてはかなり優秀ではないだろうか。

固まっているのは歓びのあまり昇天したのかもしれない。

下ネタ的な意味じゃなくて、魂的な意味だ。

麦野は下ネタが好きだからこうやって訂正する必要があるのだ。

さすが俺だと渾身のドヤ顔を決める。

一方通行を対面、つまりフレンドの隣に座らせる。

中性的な顔、白い髪、赤い瞳、白い肌、とウサギ的ファンシー要素がたっぷり詰まっ

た外見のクセに可愛らしさは皆無である。

どうやったたらそこまで可愛くなくなるんだと諸手をあげて喝采するレベルだ。

ブラックコーヒーを好んで飲んでいるが、足りない黒を補おうと本能が求めているらしい。

そんなわけあるか。

アイテム全員が停止していたのでドリンクバーの氷を積み上げて古代ローマのコロッセウムを建造。

一步通行は肉を頼んだ。

兎なら草を食（は）め。

「大神いいいいい！ 何つれてきてんだよ！」

そして麦野が再起動し、吠えた。

麦野が怒っている。

麦野がおこである。

麦野がげきオコスティックファイナリアリテイぶんぶんドリームだ。

たぶんフレンドが粗相をして怒らせたのだろう。

死亡フラグは立っていないので無視だ。

楊枝をサーベルに見立てたポテトを並べて、氷のコロッセウム（ファミレス風味）の

完成である。

ケチャップは観客に見立て、内壁に塗りたくった。

融けるのがもつたいないな、と眩くとビームで吹き飛ばされた。

ダイヤモンドダストの如く煌く氷の欠片、飛び散る芋、傷ついたコロツセウムが出血したかのようにケチャップの飛沫が舞い、フレンドのポテトは消え失せた。

飛び散るケチャップから絹旗を守る。

なるほど、今日はフレンド本人ではなく、フレンドのポテトが死ぬ日か。

そういうのってよくあるよね……いや、無いな。

ケチャップ塗れになったフレンドを眺めて思った。

服も死んだな。

「超呼ばれてますよ」

周りを汚したケチャップを拭きとっていると、脇腹を小突かれた。

ステイルか神裂、またはインデックスでも来たのかと見回す。

知り合いが少えなと内心でしょんぼりしながら何度か探すが見当たらない。

いないじゃん、と眩く。

ビームを撃たれた。

砕けた氷やポテト、ケチャップを拭いたナプキンを射線に構えてごみ処理。

「被害さえ考えなければごみ処理に便利やんけ！ 俺氏、歓喜のあまり麦野を生体ごみ処理機と認定」と称賛する。

拡散ビームを撃たれた。

「お、大神。あんまり麦野を煽ると後が超怖いですよ」

「大神……？ あ、俺のことか。いや、偽名に慣れて無くてな」
すまん、と軽く謝る。

さらにビームを放った麦のんは舌打ちして視線を窓の外へ向けた。
いじけたに違いない。

構ってほしかつたのだろう、愛い奴だ。

またビームが飛んできた。

一步通行は俺の真似して氷で建造物を作っていた。
能力は使っていないらしい。

しかし、不器用なようで何度も崩している。

接着面に水を利用するとアドバイス。

納得したのか、何度も領きながら建造を再開。

麦野よりも可愛いだろ、こいつ。

またまたビームが飛んできた。

「なにサラツと偽名とか言っちゃってる訳よ」

「みんなに黙ってたけど、実は……偽名なんだ……」

声のトーンを落とし、俯き気味に呟く。

絹旗が溜息をついた。

「深刻に言っても超駄目ですからね」

「俺の名前はフレンド、どこにでもいるクソピッチだよ！」

「私の名前を使って最低なこと言ってる!?!」

うるせえフレンド。

「うるせえ、死ねフレンド」

「超死んでくださいフレンド」

「何この扱い!?!」

つい思っていた言葉が零れ落ちた。

そのままの勢いで絹旗とともにばーかばーかフレンド、と罵る。

電波を受信していた滝壺も参加し、フレンドの人氣が天元突破。

そんな感じで話を聞いているとアイテムに驚愕の事実が浮上した。

誰も偽名を使っていないらしい。

麦野はネームバリューとかあるから仕方ない。

絹旗も身寄りがないから問題ない、こともないがギリギリ見逃す。

問題はフレンダだ。

妹もいるのに暗部で普通に名乗っているらしい。

すげえ。

もうどうでもいいや。

滝壺はわからん。

俺の電波は受信できないとか。

ここで言う電波とは超能力を使う際のA I M拡散力場というやつのようなのだ。

そりやそうだ、だって超能力じゃないし。

原石だって言っておけば良いらしいので、それで通している。

訝しげな滝壺から逃れるため、話を変える。

水遊びに夢中になった一歩通行との出会いを話すことになった。

「始まりは情報を片っ端から洗い、一方通行の居場所を探り当てたときのことだ」

「そこは薄暗い路地裏だった」

「銃撃と愉快そうな声に導かれた俺が目にしたのは、一方通行が血の海に佇みながら

笑みを浮かべて殺した人間の指を食っている光景だった」

絹旗とフレンドダが急いで手を隠したのを横目に捉え、その様子に癒されながら話を進める。

年相応の態度というのは可愛いものだ。

聴いているのかいないのか、宙を見たまま停止した滝壺はつまらるので無視である。

麦野もちらちらとこちらを窺っている。

たぶん話も真剣に聞いているのだろう、天邪鬼なやつだ。

「俺たち『アイテム』のリーダーである序列第4位の麦野が友達になりたいと言っていた！ 今すぐ着いて来い！」と声をかけた」

麦野が啜っていた茶を吹きだした、汚えな。

フレンドダの裾で拭っておく。

抗議するフレンドダに告げる、請求するなら麦野に。

静かになった。

「当然、麦野の名前程度では動かないだろうと思っていた」

「案の定、一方通行には拒否された」

「麦野が怖いのか、第1位」、そう俺は声をかけると一方通行の瞳が俺を射抜いた」

「路地裏にいて尚、その瞳は深紅に輝いて見えた。……闇に映えるその瞳は、実に美しかった」

一方通行がコーヒーを吹いた。

ついで麦野が茶を吐いた。

こいつら汚ねえな。

レベル5つて口から逆流させる癖でもついてんのか。

「それから、俺と一方通行の逢瀬が始まった（ドヤッ）」

俺のドヤ顔に絹旗とフレンドが興味津々である。

表面は素知らぬふりをして取り繕っている麦野も興味津々だ。

一方通行はげきオコスティックファイナリアリティぶんぶんドリームだ。

煽り甲斐があつて内心で笑いが止まらない。

4

『アイテム』が製薬会社からの依頼を受けたと連絡がきた。

暴食シスターをスタイルに預け、再び俺は夜闇を駆けるのだ！

PDAで集合場所を確認し、脚に力を込める。

入れすぎてアスファルトを踏み碎いて足跡を付けるといふ茶目っ気を披露しつつ、力を解放……しようとして迎えるの車がきた。

力の入れ損である。

メカニカルでクールな輸送車っぽいのに乗り込む。

俺はオカルト出身なのでこういったハイテクに疎いのだ。

PCでインターネットをするので限界。

発達しすぎた家電製品で日々てんでこ舞い。

この都市の売りである超能力とかわけわからんねえから、技術が荒らぶりすぎて困る。

すでに『アイテム』のメンバーは全員揃っているようで、討論していた。

依頼は襲撃者の撃退、ただし施設に侵入してきたときのみ。

それ以外は襲撃者が電撃使い（エレクトロマスター）の可能性があるという情報くらいだ。

なんて怪しい依頼なんだ……。

お祈りしてくれと言われて向かった先に、悪魔の破片をその身に降ろした魔術師がいたくらい情報がテキトー過ぎる。

依頼達成後に、天使の輪から外れたものが悪魔であり、とかそんな話を聞いたけど俺には関係ないのでどうでもいいのです。

とりあえず襲撃者については特にこれといった情報も得られず、各々の判断で撃退という方向になった。

襲撃者に対して、『アイテム』は二手に分かれて対応することになった。

まあ、施設が二か所あるからだけど。

絹旗とフレンドは別々に待機することに決定。

麦野は絹旗とセットで活動するようで、二か所の中間地点に留まった。

とりあえず占うとフレンドが非常に厄い、よつてフレンドと同じ施設に待機することにした。

爆弾設置という雑用にこき使われるとかダルい。

お礼に脚線美がうんたら。

脚線美（笑）

爆弾を内包しているぬいぐるみの群れに放り込んでおいた。

フレンドがぬいぐるみに埋もれても爆発しなかった。

起爆装置みたいなスイッチを押さないと爆発しないのかもしれない、やはりハイテク

である。

建物内でフレンダとは逆側に待機していると爆発の音が聞こえた。

戦闘が起こった様だ。

麦野はフレンダに自分が駆け付けれるまで足止めしておけ、みたいなことを言っていたが逸つたようだ。

成功すればなかなかギヤラがいいからな。

俺には何も言わなかった、これが信頼というやつか。

もう一か所を絹旗に任せ、麦野はおそらく進路に存在する障害物をビームで薙ぎ払いつつ一直線にこちらに向かってくるだろう。

麦野が通ると思われるルート上に拡散支援半導体（シリコンバーン）を設置しておいた、嫌がらせが9割と滝壺の負担軽減が1割のためだ。

あとギヤラが欲しい。

ロシアから支援とか貰っているが、暴食シスターに喰わせるために減らすのもちよつと違う気がするし。

今日はステイルの奢りだけだな！

次は神裂の番だな！

そしてまたステイルに戻る！

俺の懐は痛まない！とはいかない。
朝と夜があるからだ。

音を頼りに障害物を破壊しながら進み、発生源にたどり着くと鳴りやんでいた。
どうやらフレンダが負けたようだ。
派手に壁を破壊して内部に入り込む。
広い空間だった。

尻を地面につけているフレンダとそれを見下ろす襲撃者。

一目見た感想は凄いセンスのTシャツだということくらいか。

「192487189264129101094712412」

謎言語で混乱させて不意打ちを……っ！

綺麗に迎撃され、身体に電気が流れてバリツときた。

「日本語で喋りなさい！」

襲撃者の声は少女のようで何故か苛立っている。

その形相も鬼のような、と表現できるだろう。

カルシウム不足か女の子の曰か。

とりあえずフレンドは回収できたからよしとしよう。

「相手に隙を作らせ、不意打ちするって俺の超完璧な謎言語作戦が失敗した訳だ」

「それならさつき私がやった訳よ」

戦法は。パクるのはやめるとしよう。

面白いから好きだったけど、電気でバリバリは好きじゃない。

フレンドを回収した手際が良すぎたためか、襲撃者は警戒してしまった。

衝撃波を抑えつつ、捉えられない速度で走って、フレンドを抱えて距離をおいただけだ。

普通なら瞬間移動系統（レポート・アポート）を疑うだろうが、相手は電気専門だ。

こんな事件を起こすのだからレーダー搭載の高機能に違いない、さつきの動きもバレバレか。

一挙手一投足を警戒されるとか面倒だ。

「ところで戦ってみて襲撃者はどんな感じだ」

「レベル5級の電撃使い（エレクトロマスター）ってところね。電気の分野は全部修めてますって雰囲気か漂ってる訳よ」

「お、おう。げんりはわかる」

「絶対わかってないわね。……対峙した雰囲気よ、雰囲気。視覚と聴覚を失っても電

磁波で空間を把握する、鉄の床を持ち上げる、他にもいろいろ。これ以上、話してる暇はなさそうだけど。結局戦えばわかる訳よ」

襲撃者から放たれた電気を腕で払う。

レベル5にしては威力が低い、家電製品によくある省エネとかいうやつか。

電気使いは戦闘でも省エネとか地球にやさしい。

どうやら省エネモードは終了のようだ。

雷の槍を宙に生成している。

よし、と足を床に突っ込んだ。

「アースをとったぞ！ おまえの攻撃は効かん！」

「大神、床は鉄って訳よ」

「やべっ」

俺は特に問題ない。

正直なところ、襲撃者の電気では火力が足りていない。

問題はフレンドにある。

地を這う電気が見事な脚線美（笑）を伝わって死ぬんじやね。

「フザケタ真似を……！」

どうやら俺の知的な戦術は襲撃者の怒りに触れたようだ。

槍が巨大化していた。

そして、雷の槍が飛来した。

ネタバレ：フレンドダは死ぬ。

「おっと、かなりビリツとききたな」

大神と呼ばれた男の腕が、銀のように輝く白い体毛と鋭利な爪の生えた異形の腕へと変貌していた。腕周りは5倍以上に膨らんでいた。巨大な異形の腕を生やした大神は180を超える長身であったが、酷くアンバランスに見えた。まるで貼りついたかのよう、放たれた電気が腕に纏わりついていた。大神が水を払うかのように、その腕を軽く振るう。すると球形となった電気が大神（仮名）が開けた穴へと飛んで行き、消えた。奇妙な光景だった。

「肉体変化（メタモルフオーゼ）に分類されるのに電気を払うとか、相変わらずわけがわからないっての」

大神の背中に隠れて盾代わりにしていたフレンドダが呟く。電気の一切が伝わってこなかったことに驚いたためだ。よっこいしょ、と大神は暢気に床に突っ込んでいた足を引き抜いた。足を埋めていた跡は見事に捻じ曲がっていた。そして、情報をすぐに口に

するなとフレンドを小突いた。下手したら真つ二つだぞと真顔で言っていたがフレンドは気にも留めなかった。

その一切の会話を排し、御坂は思考を巡らせる。記憶から検索するが大神という能力者はどこにも引つ掛からなかった。肉体変化は学園都市でも3人しかいない貴重な能力だ、姿と名を変えている可能性がある。警戒すべきは……。

「大体わかった。目的も、どうしてここに来たのかも」

無言で頭を高速で回転させ、行動プランを立てている御坂を見据えて笑みを浮かべながら大神が言った。そして、ゆっくりと前進し始めた。

「その穴の先に集中管理室がある。俺を倒せば一直線……とまではいかないが、他のルートで向かうよりも遥かに早い」

大神が自分のやや斜め後ろの穴を示した。最初に彼が現れた穴だ。御坂が視線をちらりとそちらに向ける。この施設の地図を思い浮かべ、確かに近道であることを理解した。

「逆にそつちは遠回りだが、この戦闘は回避できる。後を追わないと約束する」

その言葉にフレンドが駄々を捏ねるが無視を決め込んだ。戦闘して早く目的地へ向かうか、遠回りして戦闘を避けるか。御坂の脳裏には選択肢による利点と欠点が浮かんで消えていく。

「近道のために格下のレベル4と戦うか、遠回りをするか。ああ、早く行かなければ今行われている実験で妹たちが死ぬだろうけど。さあ、好きなほうを……おお、さらにビリツときた」

にやにやと実験の話をする大神の姿に苛立ち、電撃を放つが容易く防がれた。御坂は目の前の気に食わないレベル4を打倒し、真つ直ぐ実験を止めることを決意した。抑えていては効かないと理解し、能力に力を込める。その様子に大神が「麦野フラれてやんの」と呟いた。

「私にはアンタと話している時間なんてないのよー」

疲労から能力は十全といかないまでも、レベル4ならば打ち取れる自信がある。電気に対抗できるような何かに変化しているのであればそれを打ち破るのみだ。薄暗い施設の広い一室、その全てを照らすような眩いばかりの電撃を解き放った。

とある科学3

5

8月も終わりかけ、アイテム連中とファミレスで何時ものようにダベる。

途中で一方通行が不良に絡まれていて可愛そうだったので拾ってあげた俺は聖人級。なんとロシア正教は俺という聖人を確保してしまつたらしい。

俺の存在つて罪だわ。

まあ、そんなこんなで話を聞くと一方通行は負けたらしい。

しかも無能力者に。

可愛いところもあるじゃんと笑つてたらハイパーベクトルパンチ喰らつた。

麦のんのせいで物理攻撃には耐性つきまくりで効きませーん。

まあ、ファミレスの机とか床は吹っ飛んだけど。

一方通行の敗北に何を勘違いしたのか調子ぶっこいた麦野が一方通行を下ネタで煽つた。

いや、麦のんは駄目っしょ……。

「てめエに負けたわけじゃねエンだよ、ババア」↓「上等だあ！ テメえなんざ私の原
子崩しで前衛的な兎ちゃんにしてやんよお！」↓「やアってみろやアア!!」みたいな
口論に発展。

ビームがびゅーん、反射でばーん、麦のんちーん。

一応防御が間に合ったらしく、血まみれで気絶しているが麦野は元気だ。
耳が取れてたけど。

とりあえず俺が飲んでたメロンソーダはちよつとした聖水と化しているので、これ
でくつつけとけば治るっしょ。

消し飛んでなくて良かったぜ。

治療したら麦野がメロン臭くなった。

メロン臭い麦のんってちよつと卑猥だよな。

ただ、一つだけ言わせてもらいたいのだが、一方通行は兎ほど可愛くない。

治療も終わったので再び煽ったら、一方通行がドリンクバーのジュースを持ってき
て、全力で投げつけてきた。

煽り耐性低すぎっしょ、しかもそんな効くわけないじゃーんと受け止める。

もう一発飛んできたので再び煽ろうとしたら手元で破裂した。

で、ジューズの中に飛び込んできた一方通行によって水圧を一点集中されて眉間を吹き飛ばされた。

まったく、冗談も通じない奴でやれやれだぜ。

俺が虐められているというのにしれっとした顔で防御していた絹旗にイラついたので、寝てた滝壺と一緒に両脇に挟み、テンパってたフレンダを担いでバックれる。飛び散っていたジューサーの部品を全力で蹴って窓を粉碎、そこから逃亡である。どうせ出禁だ。

修理代は気絶している麦野に任せた。

今はベクトルパワー全開で襲ってくる一方通行から逃げることに専念しようじゃないか。

「ちよ、何で巻き込むんですか!? こんな超おかしいですよ!」

「私たちは関係ないでしょ!!」

なんか絹旗とフレンダが騒いでいる。

フレンダなんて耳元だから煩わしい。

滝壺なんてボソボソとリーダーの役割を果たしてくれている。

一方通行はA I M力場がうんたらかんとらで危険ドラッグなしでもいけるとか。

専門外だから全くわっかんねえ☆

「いや、よく考えてみる。絹旗は一方通行に実験で巻き込まれている。今こそ復讐するときだろ」

どうだ、違うかとドヤ顔。

とりあえずテキストにそれっぽいこと言ったのをどう受け取ったのか、絹旗が熟考しだした。

まあ、絶対に違うと言い切れるタイミングなんですけどね。

なんか一方通行の能力を移植し、レベルの高い能力者を作ろうとして、絹旗が誕生したらしい。

パパじゃんって言ったら殴られるだろうから言わないけど。

一方通行の性別ってよくわからんからママの可能性も……？

「結局私ってば無関係じゃん!？」

「なるほど。まあ、俺の役に立てないことをそう悲しむなって」

「いや、全然悲しんでないから。できれば接点なく過ごしたいって訳よ。麦野、助けろ!!」

フレンドがツンデレってるが無視だ。

俺には心の声が聞こえる。

心のフレンダ「きゃー、結局わたしつてば大神の役に立ちたいつて訳よー結局ーわけよー」

流石フレンダさんだ。

学園都市第一位の能力者を相手にしていようと、俺のために死にたいとか惚れそうになる。

途中で思考の海に溺れていた絹旗を路地裏に放り投げ、手ぶらになった腕でフレンダを持ち上げる。

「問題ないぞフレンダ！ お前は弾丸となつて役目を果たす!!」

「ちよ、ま、待てつて訳よ!? あ、駄目だ聞こえてない！ 結局こいつ、全然聞いてないし!!」

速度に酔つたのかキレの悪くなつてきた滝壺レーダーで一方通行が上空から落下してくるのを先読み。

滝壺、イジエークト！と絹旗のいる場所に滝壺を投擲しつつ、脚部に力を入れ、一方通行のベクトルフライングアタックを音ごと置き去りにして回避。

一方通行が優しかったら死なないし、優しくなかったらミンチだ。

まあ、フレンダなら大丈夫つしよ。

腕に力を入れる。

「今、お前は鳥になる!!!」

フレンド、インザスカイ。

煌めく流星と化したフレンドを見送る。

しっかしフレンドだって丈夫だよね。

その後だが、フレンドは生きてた。

なんだかんだいって優しい一方通行だが、俺には激おこだった。

耳がちよつと緑になってたナメック麦野も激おこだった。

結局、店の後始末は俺の責任となったので、一方通行に絡んで骨折していたチンピラを50人くらい店に投入しといた。

全部不良が悪いってことで互いの銚を納めようじゃないか。

今日も元気に遊んで……仕事してきたぜ!と教会に帰宅。

かつての神々しい教会ではなく、インデックスのビームによって悲劇的ビフォーアフ

ターされたところがちよつと悲しさを感じさせてくれる。

インデックスよ、ファミレスのジューサーをパクってきたからこのオレンジジュースで腹を満たすがよいとドヤ顔。

中にインデックスの姿は無く、ステイルさんじゆうよんさいと神裂さんじゆうはつさいの、年齢詐称コンビが待ち受けていた。

一気に教会内の平均年齢が上がった気がするんですが……。

そもそもインデックスって何歳やねん。

で、二人が待ち受けていた理由だが、インデックスが錬金術師とやらに攫われたらしい。

すげえなあいつ、とうとう破壊神から姫ポジションになったのか。

驚異のジョブチェンジ。

もはや転生によるクラスチェンジじゃねえか。

「さっさと奪還しに行けよ」と真面目くさった顔で突っ込むも「君も一緒に行くんだよ」だとさ。

話を詳しく聞くと、いつの間にかインデックスの保護者ポジになってた。

ステイルは友人ポジションで、今回の錬金術師は先生ポジション。

このポジションはインデックスの記憶サイクルごとに変わっていたのだが、なんと俺

がサイクルを破壊してしまつたらしい。

で、イギリス清教とロシア正教の会談で俺が保護者兼護衛に据えられているとか。

そんな事実全く知らなかつたんですがそれは。

「極秘事項だからね」とか、任務遂行者に知らせないとかなにそれ斬新!!

ぜつてえワシリールサによる遊びエッセンスだ。

間違いない。

俺も一応はサラリーマンに近いし、いい感じの給料を貰っている身なので頑張るしかないね。

敵の本拠地である塾の目の前まで歩いて来た。

まあ、俺と神裂さんじゆうはつきいからしたら徒歩だけどスタイルからしたら死の行軍だつたかもしれん。

魔術師つて運動不足なんだよなあ……。

14歳つたら運動もばりばり熟していて、魔法世界でも子供先生とともに戦える年齢だと思っただけ。

まあいいや。

中に錬金術師がいるので『倒してインデックスを取り戻す』作戦を開始。

もつと策を練ろうぜって提案したが、神裂さんじゆうはっさいが「聖人の私一人でも錬金術師など十分です（キリリ）」って言い張ったので諦めた。

任せたぞ、ロンドンで十指に入り、世界でも20人といない聖人で、魔術師の強さでいえば上から数えたほうが早く、かつこうが無駄にエロティックで、室内戦なのに2m超えのヤツトウを振り回しちゃうおちやめな神裂さんじゆうはっさい!!

俺の応援に張り切ったのか、真っ赤な顔をしながら空気の壁による衝撃派を撒き散らしながら突入していった。

よし、俺とステイルも正面からどうどうと行こうじゃないか。

ステイルは入り口からな。

俺は屋上から行くわ。

外壁を登り、屋上の一角に聖水をかける。

神秘を無効にする水と、魔術師によって形成された領域による影響で反発が起きる。

ぐちやぐちやあと落書きしたみたいなの、キモいのが形成されるので飛び込む。

緑の髪をしたイケメンがビビってた。

ラスボスが一番上にいるものだ。

おっしやあ、王手!と咆える。

この緑髪がインデックスの教師役で、かつ世界でトップレベルの錬金術師で、そのインデックスの記憶をどうにかしたいというやつなんだな！

設定盛りすぎイ！

ちなみにこの緑髪、名前をアルレウス……アルセウス？とかいうらしい。

種族値が高そうな名前だぜ。

あ、違ったか。

オレウルセエデスとかオレウラレチャウデスとかカイシヨーナシとかカードダスとかそんな感じの名前だった気がしなくてもない。

カードダスが、ペンデュラムみたいな金ぴかを射出してきた。

カード出せや！と切れながら手づかみ。

こんな到達までに0・1と0・2秒くらいかかる鈍足武器が効くわけな……掴んだ手が金ぴかになった^q、

金ぴかが浸食してきたので、腕を切り離す。

すげえ、金になった。

本物かな。

本物ならあとで売りに行くわ。

なんて考えてたら、ぼじゅあつて感じの音がして腕が再生。

俺の様子にドン引きしていたカードダスだが、全身を金にしたら再生もうんたら。なるほど、その発想はなかった。

まあ、これ以降の攻撃が効けばの話だけど。

カードダスの金にするペンデュラムアタックだが、最大で1秒間に10回の射出が限度のようだ。

2発目で耐性が完了しているので、無意味なんだわ。

俺自身がオカルトの体現みたいな性質をしているのだが、一度でも『死ななかつたという事象』が起きると耐性ができてしまう。

基本的に魔術は初撃から全力みたいな面があるので、ほとんどの魔術には一発で耐性がつく。

残念だったな。

まあ、銀だったらワンチャンあった……いや、毎日銀食器で食事しているから耐性が付いてて無理だな。

麦野のビームも耐性が付いているのでやられたフリするのが必要だしなあ。

ペンデュラムのお遊びを、手持ちの品で防御。

金製品が次々と出来上がるという、まさかの貨幣経済崩壊アタックだ。

RPGでは所持金が減る攻撃をしてくるやつがいるだろうが、これは逆だな。鼻歌交じりに、金を生成していると、カードダスが燃えて消し炭になった。

一階から頑張つて走ってきたステイルが倒したらしい。

金稼ぎも十分だ、帰るべと思つたが、領域が解除されていない。

本命はまだいる……！と戦慄していると神裂さんじゅうはっさいのうめき声が聞こえた。

入口とか出口を探すのが面倒なので、聖水（オレンジジュース）で壁を破壊して行く。

ジューサーからちよろちよろと流れ出るオレンジジュースがかかる度に壁が歪むので、ワンパンチして砕く。

中を覗くとドヤ顔のカードダスト、倒れている神裂さんじゅうはっさいの姿。

一発でビンゴだな。

こーんにーちわーと壁の領域を砕きながら入り込む。

なんか知らんが二体目のカードダス君は俺と目が合うと涙目になつた。

ステイルに会話は任せよう。

学園都市とかどうでもいいので、俺が真面目にやるわけないじゃん。

とりあえずインテックスを取り返せば目標達成、お仕事完了、万々歳である。

ぼろぼろになって薄い本だったらR-118の展開になりそうな神裂さんじゅうはっさいにそうあれかしと祈った聖水（オレンジジュース）をかける。

オレンジジュースで回復とかマザーシリーズっぽいなどか思ったり。

オレンジジュースを飲んでたら話は終わったようだ。

回復した神裂、話を聞いてたステイル、もう一回説明してくれるらしいカードダスに
よると

・カードダスは超すごい錬金術師 ↑知ってる

・カードダスは世界を敵に回した ↑知ってる

・この塾はカードダスの領域 ↑知ってる

・さっきのカードダスは弱い ↑知ってる

・この領域内ではカードダスの思った通りになる ↑俺の能力の広域版に近いらしい

・思った通りになるのでカードダスはインテックスを救いたい ↑うん

・救う方法は吸血鬼にすること ↑うん？

・吸血鬼を呼ぶ方法が失われた ↑かわいそう；ω；

・それでもなんとか頑張った ↑うん

・駄目そう ↑哀れ；ω；

・そもそもインデックスの問題解決してた ↑ やったね！

・がっかり ↑ ざんねん！

・だからやつあたりでお前ら全員死ね ↑ うん？

ということらしい。

半分くらい知ってたし、後半は意味不明だった。

もうどうしたらいいのかわかんないんですけど。

神裂とステイルが倒すしかねえ！と戦闘を開始し、一分も経たずに負けた。

ヤムチャか何かか。

そもそも思った通りになる空間とか凄いわ。

もしかしてインデックスを腹いっぱいにするんじゃないだろうか。

……。

……っ！！

すげえ！！

あのインデックスを満腹だと!?

驚天動地だな!!

倒れている二人にオレンジジュースをぶっかけて、頑張らせる。

いいぞ、今度は3cmくらい近づけたな！

よしよしよし！

みたいな感じで応援し、倒れたらオレンジジュースという名のエリクサーで再起動。カードダスに攻撃を当てても見た感じダメーじがゼロなので無意味っぽいけど、俺は努力は笑わないし、応援だって一生懸命する。

まあ、勝てそうにないのは見てわかるけど。

ギブアップしそうになったら「インデックスへの思いはそんなものかよ！ そんな幻想は俺がぶち壊す！」と発破をかけると再起動するので応援する。

やっというんだけど、終わりが見えないわ。

カードダスが集中力を切らすまで耐えたら勝てたが、その前にオレンジジュースが切れた。

すまないインデックス、オレンジジュースは二人に飲まれちゃったよ。

べとべとでオレンジ臭い二人は放置して俺が対峙する。

マジな話、トリカブト以外なら余裕のよっちゃんよ。

全身にトリカブトの毒素とかマジで効くうゝゝq

トリカブトへの耐性も完了した。

俺を殺すには弱すぎたな。

もう魔術的なトリカブトしか効かないから。

マジな話、ケルベロスの唾液から生えたトリカブト以外なら余裕のよっちゃんよ。

全身に魔術的なトリカブトとかマジで効くうゝゝqゝ

想像力が足りないよ。

マジな話、カードダスの想像力が、致死量に届かなかったので耐性完了。

また強くなってしまった……。

生成された銀の弾丸を無効。

衝撃無効。

銀製の武器も無効。

神性の高い武器も無効。

神秘無効。

物理無効。

魔術無効。

毒無効。

耐性がかなり増えた。

この空間だと威力も半端ないのか、貫通してくる攻撃もあつたが特に心配する威力ではなかった。

耐性を付けつつ、超ゆっくり前進。

その間も思いつく限りの攻撃をしてくれるので、耐性が付いていく。

カードダスとの距離は5mくらいかな。

止まる。

まあ、あれだ。

想像力戦争の開始である。

カードダスの一撃で傷ついたが、再生。

何もせず、見てるだけ。

カードダスは俺を倒せる一撃をひたすら想像し続ける。

それに応える様に俺は再生を続ける。

要はメンタル勝負だ。

カードダスは俺を殺せるまで前を上回る攻撃を想像、俺は耐えるだけ。

一発耐えると耐性が付くので一度使った攻撃は使えなくなる。

まあ、自分で死んだと思った時にしか俺は死なないんだけど。

なのでカードダスは死ぬと思わせるような凄まじい攻撃を放つ必要がある。

ちなみに実は一回でも耐えると攻撃側が不利になるのだ。

プレッシャーとか、焦りとかで。

メンタルが弱いと勝ち目などない。

すでに無数に耐えているので勝利確定である。

そもそもインデックスの中二ビームで稼いだ耐性が優秀すぎて、俺を殺せる攻撃が存

在するのか怪しくなってきた。

それでも頑張っているのはインデックスのためか。

感動した。

泣きながら必死に頑張っている姿は涙を誘う。

でも現実には悲しいかな、威力が落ちてきた。

耐性による無効しか発動していない。

もう本人も理解したのだろう、俺を倒せないと。

メンタルが死に掛けて領域が揺らぎ始めた。

維持すらできなくなってきたようだ。

このままだと精神的に死ぬんじゃないかと心配してたらインデックスが目覚めた。
初対面のような挨拶だった。

なんか頑張ってるカードダスが可愛そうでしょうがない。

飯を想像で出して好感度を稼ぐんだ！と助言。

ステイルも「インデックスの記憶は失われなくなったからこれからだろうか？」みたい
な感じで援護。

やるじゃん。

敵味方のみんなで仲良くご飯を囲むという大団円エンド。

カードダスはインデックスの新しい友達となった。

イイハナシダナー

でもこれゲームだったら糞ゲーすぎてディスク叩き割るよね。

糞ゲー事件を解決した翌日、学園都市の治安維持組織のジャツジメントとやらに追われる羽目になった。

ファミレス事件が尾を引いているらしい。

いや、俺的にはあれで終了したつもりだったのだが。

やっぱり不良じゃダメか。

ロシアに助けてーと連絡すると、謹慎中に派手に暴れたのがいけなかったと怒られた。

で、解決までに時間がかかるから学園都市から出るようにとか。

なるほどなー。

あとはサーシャが遊びに来るとか。

やったぜ。

本名を捨て、カードダスとして第二の人生を歩むとか言い出した緑髪の錬金術師とインデックスを連れて学園都市からバックれる。

3人を連れて普通に入入り口から出ていくあたり、俺は真人間。

途中でアイテムに電話でピポバ。

「もしもし絹旗?」

『もしもし、大神ですか。まだ着かないんですか？ もうみんな集まってて麦野のイライラが超半端ないんですけど』

「あ、ごめん。三日くらい休むから」

『いやいや、超待ってくださいよ！ 痺れを切らした一方通行が納得する超凄い理由がないと、あの、ね!?!』

「ちよつとジャツジメントに追われて面倒だからデートしに外に遊びに行くわ。お土産きたいしててねー」

『は、ちよ、でででデートって相手は誰』みたいなことを言っただけで快く認めてくれたので電話を切る。

上司に連絡したけど、うるさいから仕事の前にジャツジメントなんかしろよオラァ！と切断了。

こいつこいつ口癖が煩いんだよな、あいつ。

暗部をサボったなら殺される可能性があるとか言われたけど。

……普通に考えて「サーシャ」仕事」なんだよなあ。

外に出て、バスに乗ってサーシャとの合流地点へ向かう。

明日が合流予定日だ。

わくわくしすぎてインデックスに齧られたが、耐性が付いているので唾液以外気にな

らない。

まあ、でも、唾液って結構気になるよね。

朝起きたら、カードダスが錬金術でドヤ顔してた。

なんか魔術を防御したらしい。

よくわからんがやるじゃんテキトーに褒めてテレビつけたら、幼女がキャスターやってた。

で、普段は60歳くらいのおっさんがコメントしているのがシヨタになってた。

ふむ……。

チャンネルを変えると朝のワイドショーで動物園特集をやってた。

なんか全裸のおっさんがオウオウ言ってた。

テロツプによるとこいつはどうやらアシカらしい。

で、そのおっさんアシカに可愛いですねと言いながらじいさんが餌を与える、と。
……。

ふむ……。

スマホでテレビ電話をかける。

すぐに出てくれたのは絹旗の顔をした麦野だった。

すごい剣幕で怒られたが可愛すぎなんだけど。

今日は実にかワイイなと告げて電源をオフ。

次は絹旗。

絹旗的な麦野が出た。

これも凄い可愛い。

今日は魅力的だなと電源オフ。

フレンダ。

なんか幼女になってた。

若作りもここまで行くのかよ。

こんなん笑うわ。

滝壺。

フレンダになってた。

なぜそこでサイクルしているのか。

というか、滝壺はどこにいったのかと思ったが、フレンダの幼女版に移ったのだろうか。

電波発言もするけど、穏やかなフレンダの魅力はすげえ。

やっぱ金髪って無敵だぜ。

……さて。

もう一度テレビを付ける。

中年のババアのリードを引く、中年のジジイ。

どうも子供のお使い特集らしい。

……ふむ。

これ防いだのか、カードダスくん有能。

朝食を摂りながら、インデックス大先生とカードダス先生の話聞く。

『御使墮し（エンゼルフォール）』とやらで魂がシャッフルされたんじゃないか、と。

誰がどんな目的でこんななんやるんだ、防いだやつのSAN値を削るためかとげんな

り。

天使を誰かしらに降ろすことができるので、うんたらかんたら。

じゃあ、こつくりさんの強化版である可能性が高い……？

そういうえばこの状態で性交したらどうなるのかな、と呟いたらインデックスに齧られ

た。

こいつ、口に物を含んでやがった……。

朝食の後、サーシャに何かあったら嫌だなあ、と合流地点へ。姿が変わっていないままだった。

良かったぜと久しぶりの挨拶。

とりあえず初対面もいるので自己紹介……。

「ミーシャって誰だ、この不心得者が！」と聖水をぶっかける。

瞬間湯沸かし器のようにキレてしまった、今は反省している。

しかし、俺のサーシャは一体何処に行ってしまったのか。

ちよつと考え事をしていたら、サーシャの身体からスタンドだかペルソナだかのよう
な光が解放され……ちよ、でかいでかい。

ドン引きしてたら加勢に来たぞ！と心強い言葉が。

駆けつけて来たのは、カマッぽいステイルと見知らぬおやじ。

ステイルの中が神裂で、おやじの中身がステイルらしい。

もう今日は始まってからずっとげんなりだわ。

魔術の先生方の意見を聞くとあれが天使、らしい。

俺の知識の無さにあきれられた。

しようがないね、俺はそもそも魔術師じゃないから。

あの天使倒したらサーシャが帰ってくんのかな、とと思ってたら天使が攻撃してきやがった。

頼む、カードダス先生。

あの無敵の空間を作ってくれ。

え、無理？

先生、無能。

ぐわあああああ～q～

とある科学4

— 1

前回までののあらずじ。

俺のサーシャがミーシャになった。

聖水をかけたらペルソナを召喚した。

世界でも有数の錬金術師であるカードダス（偽名）が無能。

サーシャがワシリーサへのストレスで天使を呼び出したのかと内心で慄きながら、なんとか攻撃を凌ぎ切って回避運動。

インデックス（中二病）が放ってきたビームに似た攻撃だったから、耐性を付けているのにダメージを受け続けるという怖さ。

なんというか、属性がランダムに変化するイメージだ。

次々と誕生する未知の物質で構成されている光の放流、みたいな？

俺と神裂以外に当たったら死ぬんじゃないやね。

サーシャが気になるところだが、退くことにする。

カードダス先生とインデックス大先生を担いで走る。

担がれているカードダスとインデックスが揺さぶられて顔を青くしている気がしたが、特に問題はないようだ。

二人とも礼装を着込んでいるからある程度は大丈夫って言ってたし。

インデックスの扱いについて文句を言っている神裂（ステイル状態）が追走してきた。お前の抱えているステイル（おっさん状態）、マジで死にそうな顔色しているんですが。

俺らみたいな超速移動をパンピーが耐えられるわけないだろ。

やっぱ聖人は駄目だな、常識が足りてない。

力がありすぎて無い奴への理解がちよつと、ね？

その辺、俺はちゃんとしてるから。

二人の顔色が悪いのは激しい振動による酔いである。

色々な物理法則的な問題による束縛は、触れてるから俺の延長線上として処理できているために無効状態だったし。

確かに俺の運動能力があれば、衝撃を軽くすることはおろか殺すこともできた。わざとそこら辺だけカットしたというマジで巧みな技術。

岩の上のカエルに拳を振り降ろし、カエルと岩を粉々に砕くくらい巧み。

戦闘能力の足りてない二人にうろつかれると邪魔だし、酔っててもらったほうがいいっしょ。

俺の日本人のおもてなしを説明すると神裂ちゃんは目を逸らした。

ステイルが自力で幾らか防御してなければ呼吸が云々の話よりも血煙になる可能性すらあった。

確かにこういうのは自己責任だし、あのスタンドの前に置いておいたら豆腐やプリンをスカイツリーから落した感じで死んでもかもしれないけど、まさか退避の体で拷問をかけるとは……。

そのうち「これ、ステイルです」って生首だけ輸送しそう。

流石は世界に二十人といない聖人だ、侮れないぜ。

安全圏に三人を退避させ、神裂とじやんけん。

三人から考察を引き出し原因を究明する係りと前線で殴り合う係りに別れるのだ。

話を真面目にやっていると遅すぎて、あの謎のスタンドを足止めしないとイケないのだ。

急いでいるときは会話くらい一秒で終わらせられるようになるべき。実際に一秒で会話できる相手は神裂くらいしか知らんが。会話というか発語する口の形を読みあうのだが、今は関係ないね。

じゃーんけーん、てつぽう。

はい、鉄砲に撃たれて神裂死亡。

俺の勝ちね。

なんか神裂が超怒ってた。

ステイルがオカマっぽく怒ってるという地獄絵図。

え、神裂ちゃん知らないんだ？

てつぽうは一回だけ使える絶対勝利技で、常識なんだけど。

再戦？

しょうがないな、もう一回だけだからな。

じゃーんけーん、ばくだーん。

はい、爆弾で神裂死んだから俺の勝ちね。

それとも何？

文句あんの？

え、まさか世界に二十人といない聖人様がパンピーとの約束守れないの？

未だに魔術と魔法と超能力の違いがわからないパンピーな俺との約束が守れないの？

— 2

神裂を置いて、サーシャの中に入っている天使を駆逐する作業に入る。

イメージとしては『凄く頑張る↓天使霧散↓元に戻る↓サーシャと結婚』のハッピーエンドだ。

おお、なんかやる気出てきたぞ。

学園都市で新婚生活、それって素敵やん？

サーシャとのハッピーエンドを夢見てたら、水の鞭でぺちぺちされた。

恐ろしいことにこの水の鞭、インデックスビームと同様でやっぱり耐性が付け切れな
い。

ランダムに変化した部分が貫通して俺を物理的に削ってきやがる。

こんなの反則だよ！

ロシアだったら無効だから、無効！

うげえぞオラアと腕を人狼化させて水の鞭を消し飛ばす。

衝撃でサーシャに天使が宿ったミーシャとやらの周りにおける海水を吹っ飛ばし、余波で湿っていた地面が干上がった。

俺流モーセの十戒である。

言えることは蒸発した海水の臭さは異常つくくらいだ。

水源が無くなったから鞭は来ないだろう。

鞭は来なかったが、翼が飛んできた。

翼というか、翼っぽいものか。

ミーシャの背部から放出されている、複数からなる光の帯だ。

天使の背中から生えている物といったら翼だし、合ってるっしょ。

まあ、その翼がぴかっと光ってズバツと俺を真っ二つにしてくれた。

頭頂部から唐竹割ってやつで。

俺じゃなかったら死んでた。

ミーシャの真後ろにリスボンし、人狼化して羽根に噛みついて貪り食う。

魂の所在こそが俺の再生場所だ。

俺には、真っ二つに引き裂かれてどっちが本物か聞かれても迷うことはないし、粉微

塵にされてどれが本体かなどという戯言も無意味なのだ。

顔面がぼろぼろになったが、羽を食らったお蔭で幾らかわかったことがある。

こいつの構成しているすべてが、おそらくこの世界に無い物だ。

しかも構成している力はランダムに変化していて、一定の形を保っていないどころか同じ形にすらならない。

とりあえず取り込んだ翼を馴染ませて最適化したら俺にも羽根が生えた。

羽根というか推進用の渦みたいなの、なんかよくわからんものが背中辺りで滞空している。

魔力を消費すれば渦からインデックスビームが放てるという謎現象。

でも俺はあんまり魔力ないから要らんなあ。

ち、ちよつとだけ魔術使えて嬉しいけど、要らないから。

ふへへ。

渦はどうでもいいが、ガチの削り合いになることを考えて遠い目をしてたら、ミーシャとやらが「何故 u y 顕 u d v i f」とか言い出した。

頼む、日本語でお願いします。

もしくはロシア語。

が、返事は「r t y 足りな m n e」であつた。

……?

足りない、胸？

確かにサーシャは足りてないけど……それって今重要か？

雑音が入りまくっているミーシャとやらの言葉に首を傾げる。

俺の反応を見てミーシャも首を傾げた。

二人とも意味不明である。

詳しく聞くと、どうも人間が操る人語では情報を介する機構が足りてないらしい。

イメージはパケット不足である。

通信が遅いために断絶して情報が半ばで途絶、みたいな。

最終的に「同胞nr会krp喋rrrie」とか「gj天界からerpy欠片cvc

喋れ」みたいなのを連呼された。

どうもお前が天使語、エノク語的なやつっぽいのを喋ろよオラアって言われてたっ

ぽい。

無茶言わないでくれ。

神裂の情報待ちとしてどうしたものかと悩み、ポケットに入ってた飴を渡してみる。

フルーツ系の飴で、さっぱりとした酸味と果物としての甘みが合わさって最強な飴で

ある。

インデックスの口に放り込んでおけば、大抵は静かになってくれる。

「私見一。うん、甘味は良いな。糖の類は長寿の元とも言うし、神の恵みを思い出す」なんて言いながらガリガリと噛み砕いてしまった。

合ってるけど合っていないというか、いや、好みの問題だけど、噛まれたら不満というか。

ぐぬぬ。

舐める物だと伝えると、得心いったと何度か頷いて開いた口を向けてきた。

餌付けか……。

ほれ、ともう一個放り込む。

今度は口の中でコロコロと転がしている。

どうやら餌の魅力が伝わったようだ、なんか真剣に味わっている。

果物の飴が気に入ったかと聞くと「私見二。糖で果物を固め、長く味わうとは面白い。

果実より得られる水は高い生命力を持ち、徒は摘まみ主は飲むほどだ」と言った後はやはり舌でコロコロする作業に戻った。

で、舐め終わると催促するようにジツとこちらを見つめてくるので飴を見せると口を開ける、と。

なんだこれ、可愛すぎる……。

ぶどうか桃は気に入ったようだが、イチジクとかリングとかみかんは嫌そうな顔を
していた。

蛇がどうか罪がどうか言っているのだが、パケット不足で聞き取れない。

天界と地上を中継する w i f i とか無いのだろうか。

この際有線でも許す。

ん？

もしかして天使がサーシャに入っている状態が有線なのか？

サーシャの中に入らって字面、卑猥じゃね。

うらやまけしからん。

—— 3

質問を何度か繰り返すことでパケット不足とやらで言語化できない単語を解すこと
に成功。

どうやら俺の聖水で抑えていた天使パワーが解放されたのが発端らしく、儀式地点を
大まかに割り出せているのでとりあえず地表を一掃すれば儀式が終わり、天界に戻る
んじゃないってことっぽい。

天才か……っ！

全部吹っ飛ばせば儀式系は解決するよな、そりゃあ。

俺も今度やろう。

あとは「問一。貴方は何時からその形を成したか」とか「問四。貴方が帰還するため『御使墮し』を起こしたのか」とか「問七。儀式への捜査および精査は如何にして行うつもりか」とか、そんな感じの質問のラッシュである。

魔術は聖水くらいしか使っていない的なことを返事すると、ふむふむと何度も頷きながら手足を触られて納得された。

違うから。

魔術が使えないわけじゃなくて、使わないだけだから。

魔術は神話体系に沿って使うことが多いけど、ロシアって神話的な話が少ないから俺が魔術を使わないのも仕方ないね。

魔術がよくわからんとかそういうの無いから。

俺くらいエキスパートになると必要ないから要らないだけだし。

そもそも殴ってれば解決するから全然魔力とか無くても問題ないし、魔術なんてファンタジーは無縁でも気にしてないから。

……。

……俺だつて魔術を使いたいし、おしやれに詠唱してえ（遠い目）
落ち込んでたらミーシャに慰められた。

いや、まあ、背中を摩られただけなんだが。

天使はエネルギー体で意思を持たない人形のような物つて話を聞いたが、こういうた
機微を見ているとそうでもないんじゃないかと思つたり。

独立した悪霊とか、人間への悪意が半端ないし。

むしろ人間の意思がガイドのように働いているのか……？

そもそも意思を持たない人形みたいな天使に信仰を委ねるとか宗教つてよくわから
ん。

神様に向けてるからいいのか？

いや、でも天使も御使いとして敬つてる感じだし。

謎だわ。

魔術の専門家が複数人いるから地表を消す労力を使うより、もつと楽に解決できるは
ずだとミーシャに伝えて待機。

二人で海を眺めながら口の中で飴を転がす。

天使が人間の中に入るとか、どつからエネルギーを持つてきたのだろうかと思ん
たり。

『御使墮し』が発動したことで、防御や回避に成功した者以外は入れ替わってるわけだし全人類が玉突き事故よろしく魂が押し出されて椅子取りゲームのごとく体に入ったわけ。

アシカになったおっさんもいたけど、もしかしたらあのアシカには人間の魂に酷似した純度に達したか、知能が人間並みだった的な感じだろうか。

まさかの木原の可能性である。

知能を持つ生物には、なんかすごい科学力を持つ“木原”という存在が誕生するとか何とか。

木原系はぶつ殺すと他の地で現れる悪魔のような存在だし、脳だけで生かしておかないと面倒になる。

あのアシカは後で脳みそにして浮かべておこう。

思考が逸れたが、人類の玉突き事故によって生じたエネルギーで天界まで影響した、みたいな感じでいいのだろうか。

帰るときは位置エネルギーよろしく玉突きで移動したエネルギーで戻ってくる的な。

ミーシャにエネルギーを使わせないほうがいいのかもしれない。

いや、天界ってエネルギーの塊らしいからどうでもいいのかもしれないが。

そういうば宇宙の始まりである無にはエネルギーのみが渦巻いていたらしいし、宇宙

の外も同じような状態のようだ。

宇宙については三次元的な観測しかできていないし、計算式では十次元超えを果たしているが結局はわからないことばかりだし。

海の家でソフトクリームを食べる。

ミーシヤもかなり気に入ったようだ。

天使は甘味が好きなのだろうか。

でも結局は飽をねだってくるんですけどね！

椅子に腰かけながら、海水浴客を眺める。

男と女が入れ替わってる客もいるわけで、それらが各々の元の性別に則した水着を着ている。

つまり、眼福です。

夏の間はこのままでいい気がしてきた。

問題はおっさんが化粧して女性用の水着を着ていることだったりするけど。

キモい。

尻とか毛とか見えてて気持ち悪い。

そういう人に限って自信満々だからげんなりする。

普段は容姿が優れているのだろうけど、勘弁してほしいわ。

情報を整理し、色々と策を巡らせていたであろう神裂が現れた。

海を眺めながら飴をコロコロしているミーシャの姿に脱力していた。

「なんで戦ってないんですかー」とか「民衆に被害が……」とか言っていたが、そんなに戦いたいのだろうか。

戦いで解決しようとするなんて聖人って野蛮だわ。

ほら、ミーシャも薄い感情でドン引きしてる。

神裂の体に男が入っていてももしかしたらどつかで海水浴を楽しんでいるかもしれないなあ。メロンが見たいなああと零すと殴られた。

衝撃を全部海に伝達したら、東映の「荒磯に波」みたいな感じになった。

要するに、海水浴客ごとぎっぱーんである。

聖人ってやっぱり常識がないわ。

儀式の心点、つまり中心をダウジングすることになった。

大地を巡る自然のエネルギー、龍脈とも呼ばれる物を利用してゐるから逆探知できるはずという話だ。

流石世界の砂粒ひとつまで究明しきつた錬金術師のカードダス先生は有能やでえ。

それに比べてインデックス大先生の無能さですよ。

俺のやきそばを食う、ミーシャに張りあつて飴をねだる、ミーシャに飴をあげたら嘔んでくる。

そろそろ慈愛に満ちたシスターってやつを見てみたいんですが。

殲滅白書なんてワシリーサのババア魔術、ビツチヌフラ、藻の生えた醜女……。

これはサーシャを可愛がつてもしかたないね。

一般の信徒なんて悪魔憑きが多くてヤバイ。

髪をふり乱して白目向いた人間が口の端から泡を吹いて醜い罵声を吐き出すのを見てたら、ちよつとなあ。

半分以上が悪魔憑きじゃなくて精神疾患だから、その、マジで困る。

むしろ学園都市で科学を信奉しながら脳みそいじつたほうが効果ありそうなんだけど。

ダウジングによって大まかな座標が解ってきた。

術者は移動と停止を繰り返しているようで狙いを定めるのは面倒であるが、儀式を直接吹っ飛ばせば問題ないっぽい。

ミーシャは天使としての力で天体制御が行えるといっているので夜に固定し、儀式術式の座標を中心に手加減したメギド的なのを降らせて街の一つか二つ分ほど消し飛ばせば解決じゃねって言い出した。

やはり天才か。
が、止める。

街の一つか二つ分の人口で問題が起きるとは考えにくいだが、玉突きに失敗してサーシャが帰ってこなかったら嫌だし。

普通に解決しよう。

そもそも地軸を弄つたら世界がヤバい。

まあ、俺とか神裂が魔術的なファンタジー制御なくダツシュしたら、地表が衝撃波で吹き飛んで押し出された空気がハリケーンとなって真空が渦巻いて更なる空気の負の連鎖がどうかで崩壊するくらい地球は脆いからしょうがないね。

海水浴している人々からちよつと離れ、閑散とした砂浜に水銀とかで術式を描いてダ

ウジグしているわけだが。

神父とか修道女とかスク水みたいな痴女、メロン、2 m近い緑髪、2 m超えの赤髪神父が難しい顔で砂浜に描かれた奇怪な図を見つめている姿って異様だよね。

むしろ変な儀式と勘違いされるレベルだ。

いや、人払いはしてあるけど。

距離が離れているらしく、位置の割り出しに時間がかかるといっているのでインデックスを煽って遊ぶ。

インデックス大先生は食べてばかりですけど何時本気になってくれるんですかねえ、みたいな感じで。

あとはこういうときのために飯を食わせてるのに食い逃げつすか無駄飯ぐらいつすか、みたいなものも追加である。

ステイルと神裂のコンビが殺意たつぷりの目で見つめてくるが無視だ。

過保護すぎでしょ。

こうやって煽っておけば、無力を悟って渦中に飛び込まないようになる……無理か。

脳みその容量の関係で燃費が悪いんだろうかと思いつながらイカ焼きを口に放り込みながらオラオラなんか言ってみるや暴食シスター、とインデックスの頬を指でふにふにする。

おお、う、すげえ柔らかくて繊細な手触りだ。
指齧られた、q、

痛くないけど唾液が付くからやめーや。

べちやべちやのイカ焼きも付着してるといふ悲劇。

耐性が付いているから弾けるが、態々無害な物まで弾くのはめんどくさいのが祟ったわ。

指べとべと。

ミーシャが俺らの様子を静かに見ていた、飴を舐め終えたらしい。

ほれ、と飴を摘まんで差し出す。

指ごとしやぶられた、q、

一方通行にインデックス、ミーシャと指を食べるのが好きなやつらだ。

他人の指をしゃぶるのが流行ってんのか。

なんだその流行り、怖すぎ。

いつから日本はこんな猟奇的になったんだ。

「ジェヴォーダンが赤水着に甘すぎなんだよ！」とインデックスが叫んでいるが、甘や

かしたいのはミーシャじゃなくてサーシャなんだよなあ。

インデックスが頑張つてミーシャを引き剥がそうとするが地力の差が隔絶しているのか微動だにせず、「第九の解答だが、貴女の行いを模倣した。親より賜われた糧をより感じられて悪くない」と俺の指ごと飴を舐め続けている。

根負けしてへばつたインデックスをステイルと神裂が介抱していた。

インデックスは完全に運動不足だな、お腹周りとか大丈夫だろうか。

身体のリフォームが出やすいエロ修道服だし太つたら情けないことに……。

だから指齧るのやめーや、q、

— 5

儀式について、ある程度の座標がわかったので移動を開始する。

近くに行つたら再びダウジングして校正する予定だ。

どっこいしよと気絶したインデックスを抱える。

手についていたイカ焼きを舐めたら顔を真っ赤にしてたので、茶化すついでに美味かつたと伝えたら気絶した。

免疫ゼロか。

カードダスの運転する車で、事前に捉えていた座標に近づいていく。

世界で有数の錬金術師は車の運転まで容易とする有能さである。

どっかの聖人や数多の魔導書を納めた目録も見習ってほしい。

座標が曖昧になってきたため再検索をかけるので、一旦喫茶店で休憩。

喫茶店のマスターがいただけだが、メンツが奇抜すぎて引いてた。

現在地からだど術者のほうが近いようだ。

いつの間にか移動していたらしい。

こつちが認識できていた大まかな座標内で移動されていたようだ。

ああ、もうめんどくさいな。

俺だと相手が肉片になりそうとか言い出した神裂が単独で捕縛に向かった。

失礼なやつだ。

ちよつとイラついているから小突くかもしれないだけなのに。

パフェを食つてたら目がぎよろぎよろしたヒョロい男を連れてきた。

神裂のドヤ顔がちよつと腹立つがこれで解決する、褒めてやろうじゃないか。

分析した結果だが、術者でないことが判明。

二重人格で『御使墮し』を回避したっぽい、なんでこんなに複雑な事件へと発展して

いるんだ。

ついでに聖人のストッププ安が止まらないんですが。

一人の少年を救ったらしいが、ミーシャが臨界点に達したときにはメギドが始まるんだけどわかってやってているのだろうか。

魔術関係者だったら情報が入るはずだが、そういう動きも一切ない。

『御使墮し』でテンパってる関係各所のお偉い方からも犯人と思わしき人物を見つけられていない。

神裂もそういう関係の人物は近くにいなかったと証言しているし。

いや、聖人○だから信憑性が薄いけど。

これらの結果から素人が偶然に発動させたんじゃないかねって話になった。

地球には60億から70億の人間が生々の営みを繰り返しているから偶然そういうのが起きても不自然じゃないよねって話である。

確かにロシアでも鏡の自分にお辞儀したら、なんらかの儀式と時間やシチュエーションが酷似していて悪魔憑きになった事件とかもあるし。

うーん、偶然って怖い。

顔もわからないし、一般人だと素行や魔力では判別できない。

ということで儀式場に向かうことにした。

神裂が捕まえてきたヒョロい男はどうでもいいのでカードダス先生にちよつとした思考誘導をしてもらつて解放した。

こういう事件は責任の所在が重要なのだ。

俺はさっさと解放されたい。

解放したヒョロい男が民家に立てこもつたらしい。

なんか殺人犯だかなんだかだつたらしい、実にちようどよかった。

無辜の民だつたらさすがの俺も気にしてしまうからな。

まあ、運悪くそいつが立てこもっていた民家の一室に隕石が落下したため重傷を負つたようだ。

落下した隕石は肉眼でわかるほどに燃えていたが、現場から発見されなかったとか。偶然って怖いわ。

報告書に殺人犯が立てこもつた民家で動かしたお土産によつて偶発的に『御使墮し』が起きたと書いて提出。

時系列なんていくらだつて誤魔化せるし、詳しく調べるやつもない。

隕石で証拠も吹っ飛んだ今となつては俺の報告が正真正銘の真実でしかないんだけ

どね。

— 6

事件も解決したし、そろそろ学園都市も静かになっただろうと帰路についたら見知らぬ男に攻撃された。

ロシア成教が動きすぎているのを憂いた組織が抑止として襲ってきたとか。

嘘っしょ。

絶対嘘っしょ。

だってロシアって凄く雑魚だし。

国内だと特別な許可がないと魔術が使えないくらい雑魚。

ローマとバチカンが調子ぶっこいて、それをイギリスが歯噛みしていたりするけど、ロシアなんてシカトされてっから。

扱いとしてはアメリカよりも危険……と思われてたらしいなあ。

俺が好きに動いてもフランス以外は無視である。

フランスはローマにパシられた関係で嫌われたので、完全に冤罪ですね。

ちなみにこの男だが、原子崩壊ビームを放ってくる相手だった。

ドラえもんのひみつ道具か何かか。

流石の俺も不意打ちだと光速は避けられず、ミンチより酷い状態にされた。

防御用に聖水を撒いたら直撃したらしく、何故か顔面の皮が剥がれて下から褐色の男になった。

サナギだった可能性が高い……？

神話とか伝承に則った魔術って個々人の魔力によって性質が異なるから耐性つけにくくて嫌いだよ。

四大元素を使ったもつとシンプルなのにして欲しい。

そしたら何も考えなくて済むのに、互いに。

俺は天使が離れたことでサーシャがちゃんと元に戻ったかどうかを確かめるひつやうがあるので、カードダス先生に戦闘を任せてみた。

先生が魔術っぽいことしたのは最初に錬金術で生成した粉を撒いたくらいで、あとは物理でボコってただけだった。

魔術を発動できなくする凄いやつらしい。

あとは高速で射出されるペンデュラムでちくちくと刺すくらい。

以前のパチモノが使ってた金製造機よりも速くなってたが、金にはならないようだ。

流石は俺たちの先生やでえ、と慄く。

強すぎて戦闘の体を成してない。

鉄砲玉は情報を抱えていることが少ないし、どうしたものかと。

ロシアに送るのは面倒だが、他の組織に渡すのも間違っているよなあ。

どうしたものかと悩んでいたら、褐色の少女に男を連れて行かれた。

あちゃー。

追いかけるのも面倒だと見送ったら、相手は学園都市の内部に逃げて行った。

学園都市の入退管理、ちよつとがばがば過ぎない？

ついでにスーツの強面のおっさんに襲われた。

インデックスが欲しいらしい。

情熱的なプロポーズかと思いきや解呪に必要な知識だけ求めているとか。

もう俺は忙しいから聖水でも飲ませとけと追い払う。

泣いてたおっさんをツンツン頭の少年が慰めていた。

で、二人で連れ立って去っていった。

二人とも見つめ合った後に笑顔を浮かべていた。

……なるほど、ホモか。

— 7

うえーい、とファミレスで一方通行に挨拶。

すげえ嫌そうな顔してるんだけど。

露骨に避けようとしてくる一方通行の席に、俺たちズツ友じやんと詰め寄る。

なんか毛布ロリを連れていた。

……。

………誘拐はいけない（迫真）

ベクトルパンチで首とれた、q、

毛布ロリだが、レールガンのクローンらしい。

打ち止め（ラストオーダー）と呼ばれる特別個体のようなだ。

レールガンが研究所を襲撃した際に嫌がらせしまくったことから、俺はクローンたちからすげえ嫌われてるらしい。

洗ってない犬の臭いがするという噂が流布しているとか。
やめて！

俺はこんなに好意を持っていると言うのに、まさかの一方通行である。

レールガンが襲撃してくれたおかげで情報を抜いて魔術サイドにばら撒くことが出来たし、麦のんを煽りまくれた。

しかも麦のんの美声を録音して仕事用の電話の着信音にできたのでかなり楽しかったんだが。

『パリイパリイパリイってか？ 笑わせんじゃねえぞクソガキ!!』

おっと電話がかかってきた。

電話内容は「麦野を如何にして学園祭に出すか」と「都市外へ逃亡しようとしている研究者の暗殺」という話だったが口癖の「こいつめこいつめ」がウザくて切った。

あと飯時に暗殺指令とか頭おかしい。

常識を養うべき。

店員に注文を伝え、ふと視線を向ける。

打ち止めにドン引きされた。

何故だ。

五分くらいして現れた麦のんの前でパリイな着信音が鳴り響いて、電話が消し炭にされた。

俺のガラケーがあ……。

学園都市に来た翌日に勧められたまま買ってしまった在庫処分品だったが、ちよつと愛着湧いていたのに。

それに、外の電話と比べると遥かにハイスペックだし。

俺が凹んでいる間にアイテム連中が盛り上がっていた。

女性が三人集まれば姦しくなるというのが、落ち着きないのがさつに見え……：……ビームはやめてマジで。

話題の内容だが、どうやら毛布ロリは全裸らしいのだ。

包まっている毛布を除けばつんつるてんとか。

うわあ、幼女を露出プレイとかマジで引くわ……。

一方通行の性癖に戦慄していたら、クローン調整槽からバックれたために服がなかったらしい。

なるほどなー。

だからといって毛布だけで連れ回すとか、レベル5つて頭おかしいよね。

現実離れしてるほどに能力は強くなる気すらしてくる。飯食ったら服を買いあさるという話に至った。

打ち止めの頼んでいたハンバーグが置かれたが、一向に食べようとしなない。

絹旗が聞くと、みんなでいただきますがしたいと答えた。

なんだこいつ、喋り方のウザさに反して超かわいい。

電話のこいつこいつめ星人に聞かせてやりたい。

ハンバーグが冷えるという欠点は一方通行の超能力で解決できるし。

「え、あつためておいてくれないの？ 学園都市製はおろか外の電気炊飯器すら保温

ができるのに、第一位が使える能力は炊飯ジャー以下？ マジで？ うそっしょ？

……いや、ごめんな、無理言つて。まさか炊飯器以下の働きしかできないなんて思わな

くて。……その、ほんとにごめん」

全力で申し訳なさそうに炊飯器以下だと謝つたのに、なぜかベクトルパンチされた。

q、

調整槽育ちの打ち止めが舌を火傷したトラブル以外は楽しく食事を終えた。

そしたらアラバスタで飯食ってる最中に眠ったエースみたいな感じで打ち止めが倒れた。

どうやら調整途中でなんとらんたら。

一方通行がぶつくさ言いながら店を出て行った。

普段ダベっているときは全員が店を出るまで居続けてくれて、よく飯代まで出してくれるイケメン一方通行が途中離席。

導き出される答えは……。

やだ、ツンデレでかつこよすぎっしょ。

白衣のおっさんに銃を向けられた。

打ち止めが欲しいらしい。

最近、俺はおっさんと縁がありまくりで嫌になるんですが。

金にがめつく若作りしていて友だち思いで脚線美のフレンドが、暗殺のターゲットだということに気付いた。

そういうばそんな電話があったような無かったような。

報酬は分散するといまいちなので、じゃんけんで決めようぜってことになった。

態々じゃんけんするまでもなく、『ばくだん』という禁じ手がある俺が最強って訳だけどな！

麦のん以外ばくだんだった。

最近、ふざけてアイテム連中に使い過ぎたなあなんて思い返してみたり。

で、一人だけ普通にぐーを出した麦のん。

純粹さに完敗、だな。

報酬で麦のんが電話を弁償してくれるとか。

明日一緒に買い物に行くことになった。

「デートか！ デートなのか!？」と煽るとビームを撃たれて否定された。

打ち止めの服や生活用品ついでにアイテム連中も来るらしい。

地下が品ぞろえいいらしい。

よく考えたらあんまり遠出したことないし、楽しみである。

とある科学5

7

— 1

第七学区に隣接する第一〇学区は、同じ学園都市内でも治安の悪さでは一、二を争う学区だ。そこに或るすべてが後ろ暗い何かを抱えている。嫌われ、拒まれ、捨てられ、逃げたモノが集まる失樂園。

路地裏では、学び舎のカリキュラムに付いていけなくなったドロップアウトが身を寄せ合つてスキルアウトを形成している。スキルアウトが群れ成す路地裏から表へ出れば、実験動物の処理場や少年院の敷地が目に入る。中心部には広大な敷地を必要とする実験施設や原子力を用いた研究所などもあるという。

第七学区と第一〇学区、学区同士の境界から少し離れた位置に寒々しく乱立する墓地群。その先の教会に、アイテムの仲間である大神は住んでいる。そう本人が言っていたのを絹旗は覚えていた。

手入れされた鳶色の頭髪をパーカーのフードで覆い隠しながら、整地された道を歩く。日光の射す表通りは存外綺麗な物だが、路地裏は汚物の温床となっていた。第七学区にほど近い場所とはいえ、普通の学生は近寄らないような場所だ。絹旗のショートパンツから伸びた白い足に釣られた阿呆はすでに骨の幾本かが半ばから折れ、悲鳴に喘いでいた。それに怯えたか警戒した複数の濁った視線に晒された絹旗は、連中が害虫のようだと思った。心も、その在り方も、暗く薄汚い。暗部にいる自分よりも遥かに“それら”が汚れて見えた。

何故自分がこんなところまで大神を迎えに来ているのか、絹旗は逡巡する。いつも通り彼は十三時になれば現れるだろう。それなのに、わざわざ十時にもならない時間に向かっていた。自動で運転しているバスを乗り継いできたが、大神の住む場所のすぐ近くに路線は通っていないので、第七学区の外れから歩いて向かう必要があった。面倒だと小さな徒勞を感じる。

昨日、集まって買い物する約束をしたことが始まりだった。一方通行が連れてきた少女の服を買うついでに大神の携帯電話を弁償する、それが麦野の言葉だった。ツツコミのように普段と同様に放った能力が古い型落ちの電話を消し飛ばしたことが発端だった。頭を焼かれようと、四肢を碎かれようと、四股を砕かれようと、素振りを見せない大神が凹んでいた姿を見て、少し気にしたらしい。何か大切な物だったのではないかと。あの麦

野が配慮する、珍しいこともあるものだ。

能力が高まるほどに、気兼ねなく接することのできる“人間”は少ない。能力は発現するまで、そして使いこなすまでは苦勞するが、乗り越えれば“手足”のようなものになる。ついとばかりに使いたくなる。ただ、その“手足”の挙動に相手が耐えられるかどうか、別の問題で大抵は我慢しなければならぬ。我慢することは人間が生きる上で重要だし、大人ともなれば耐え凌ぐことが生きることには直結するほどだ。だが、能力者の大半は子供だ、精神的に未熟で我慢を覚えるには早すぎるほどの。“気兼ねなく接することができる”点で、大神はやはり貴重だ。接することができぬ。どれほど貴重か、本人たちが一番わかっているのだろう。意地を張って認めたがらないが、離れていかなるのがその証拠だ。無理にでも追いかけてくるから諦めて一緒にいる体を装っているが、配慮を見せるほどのだから、一応は近くにいることを認めているのだろう。

絹旗は最初、大神は口は悪いが心が広い聖人か何かではないかと考えていた。『原子崩し(メルトダウン)』で頭を消し飛ばされても気にした風もなく普通に接するし、『空素装甲(オフエンスアーマー)』で殴つても、やはり何も無かつたように振る舞っている。施設ごと大神を吹っ飛ばすようなフレンドの洒落にならないミスも楽しそうに潜り抜けるし、能力体結晶の影響を受けた滝壺をアクエリアスで回復させた時など冗談かと思つたくらいだ。

だが、ひと月も過ごせば認識は変わった。考え無しの馬鹿なのだろう、という感じには。昨日など一方通行を散々煽った拳句に頬をぶにぶにさせたのだ、能力の一切を無視して。以前からその節はあり、最近では触れるようにまだまだなっていた。どれほど高的な技術なのか、どれほど尊い能力の使い方をしているのか、あの馬鹿にはわかっていないのだろう。もしくはわかっていてわからないフリをしているのかもしれないし、一方通行も理解しているはずだ。自分を害することが可能になりつつあると。それでも結局パンチを一発だけ見舞うことで終わりにした。誰も詳しく聞きださないし言い出さない。互いの領分を侵さない暗黙の了解だ。

結局のところ、あまり気にしない性質とあの瞬間再生を伴ったための能天気具合なのだろうというのが絹旗たちの同一見解だ。無駄な不死性と馬鹿力、足りないおつむを伴った大神は、もしかしてゾンビかキョンシーの類ではないかとアイテム内で三日ほど囁かれ、麦野がぬいぐるみを抱きしめても眠れなくなったほどだった。

別に大神がいたから救われたとか、安心できるとか、そんな話にはならない。ならないが、決していないほうがいいというわけでもないのだろう。緩衝剤と呼べるほどに柔らかくもなく、拘束具ほど強くない。衝動の矛先、感情のサンドバッグ。悪く言えば痲癩や我が儘を受け止めてくれる壊れない玩具。

そんな男を、絹旗がわざわざ迎えに向かう理由は、発案者の麦野から逃げたかったか

らに過ぎない。仕事による報酬を受け取り、ファミレスで駄弁つて好き勝手に遊んだ昨日までは機嫌が良かった。だが、今日の朝にかかつてきた電話の声音から、隠そうともしない不機嫌を感じ取った。超能力へと至った麦野の“手足”である『原子崩し』は、駄々を捏ねただけで甚大な被害を被る。機嫌が治るまで何処かに行くのもいいが、それでは寂しいから。それに大神は優秀な盾にもなるし、大抵の我が儘は受け入れてくれる。時間つぶしには最適だった。仲間のフレンドと滝壺が被害を被っているかもしれない。が、危機に直面したときに逃げない輩が悪い、と小さく頷きながら絹旗は自分を納得させた。

— 2 —

「教会に住む大神……？ うーん、ゲロ神父のところですかね？ 他に教会はないですし」

三人の男に骨増量キャンペーンを体験させてあげたところ、典型的なヤンキーの集団に声をかけられた。また骨を増量してあげるサービスを振る舞う必要が出てきたのかと、絹旗は内心でげんなりしていたが、予想は裏切られた。小さい子供や雨に濡れた動物を助ける、そんなことを信条にしている不良たちの集団らしい。誰が小さい子供なのか、骨を30%増量キャンペーンで聞き直してあげたいところだったが、麦野とは違

うと自分に言い聞かせ、冷静な判断を下した。助けてくれると言うのなら助けてもらおう、そう思い、大神がいるという教会の詳しい所在地を尋ねた。返ってきたのは言葉はこの第一〇学区唯一の教会に住むゲロ神父なる者だった。教会、神父、ゲロ、得られた情報にあまりの不協和に絹旗は頭痛がしたように感じた。そして、詳しい情報も無くここまで来た自分の短慮を恥じる思いだった。

「……その、げろ神父というのは、ずっと超嘔吐している方なんですか？」

「いや、させてる方ですね」

強面でガタイのいい丁寧語ヤンキーが顔を顰めて答えた。「超嘔吐ってなんだよ、内臓吐きそうで怖いよ」「いやでもあれは確かに超嘔吐だった」「五人を縦に並べて一撃で超嘔吐させたらしい」「超嘔吐って技名かよ」といった言葉が丁寧語ヤンキーの後ろで飛び交っていた。詳しく聞くと、どうもゲロ神父という人物は立ちふさがった不良を腹パンして嘔吐させていったらしい。その悍ましい姿を揶揄して付いたあだ名が「ゲロ神父」。

聞けば聞くほど、大神としか思えない情報が舞い込んでくる。幼稚な煽りをしてくる、すぐに手の平を返す、説教の言葉よりも先に手が出る、ペットボトルの水を聖水と称してかけてくる、じゃんけんで“てっぼう”や“ばくだん”といった反則を使う、ふさふさした白銀の犬に変身できる、毛を触りたい、等と様々だ。知人の話を人伝に聞く

だけなのに、絹旗は何故か頭痛が酷くなった気がした。

「……多分本人です。できれば教会の近くまで超案内してもらっても？」

「ああ、大丈夫ですよ。じゃあ、着いてきてください」

丁寧語ヤンキーが後ろに控えていた集団に声をかけると、絹旗と丁寧語ヤンキーを残して去っていった。この第一〇学区の連中がこうやって集まって巡廻をしているらしく、ある種のバイトであるとも語った。概要としては、暇なときに困っている人を助けるよう巡廻し、ゲロ神父から小遣いを貰えるちよつとした手伝いのようだ。嘔吐させて回った人間の手伝いをする、奇妙な連中だというのが絹旗が抱いた考えだ。丁寧語ヤンキーがゆつくり進むので、追い越さないよう着いていく。早く歩かないのは女性への配慮か、子供への優しさか。見知らぬヤンキーに思いやりを持たれても嬉しくないが、できれば前者であって欲しいとも考えた。

「アンタ、神父の知り合いですか？ あの人ちよつと変わってるんですよ。なんかよくわからないし」

「ああ、まあ、仲間って感じですね。変わっているのは確かですけど、ちよつとって程度では超ないです」

学園都市の第一位と第四位に攻撃されても気にせず煽り続け、動力が生きている溶鉱炉に落ちてくろくろくして渡り切り、絶え間なく出続ける液体窒素で凍結させても自ら

粉々になって再び動作しはじめ、閉じ込めた真空状態で元気に動き回る摩訶不思議な生き物をちよつと変わっているなどで済ませていいはずがない。存在自体がB級映画のラスボスの総体みたいな大神がちよつと変わっているというのなら、人類は凄まじい進化を何時の間にか遂げていたことになる。深海に沈めても潜水して戻ってくるような男を、さすがにちよつと変わっているとは認められなかった。ちよつとで済ませることの出来る誤差から、絹旗の認識では随分と離れていた。

「まあ、あれでもいい人……いい人？ ……き、きつと良い人だと思うんで」

声の震えは意図的に無視することにした。無理して褒めているところを突くほど、絹旗は良識外れではないのだ。そういうのは麦野やフレンド、大神、一方通行、滝壺に任せておけばいい。集まっている仲間の大半が良識外れという思いに至りそうになり、思考を断ち切った。朱に混じることはない、そのはずだ。大神と時々話している“しいたけちゃん”とやらはかなり常識的だった。二人の縁は半年以上だという。ともすれば染まることはないはずだ。あまり歳が変わらないという信じ難い事実も聞いてしまつたが。

「ほら俺たちつてスキルアウトつてやつらでして。行くところもそんなにないんすよ」「能力が育たなくてバックれた超ドロップアウトですからね。望んで道から外れたのだ

からしようがないとも言えますけど」

「アンタも結構言ってくれますね。合ってますけど。でも数だけはいますから自然と何か所かに集まってしまうんですけど、そうなるとアンチスキルに捕まったり解散させられたりする。数が減れば能力者狩りの仕返しとかで能力者に襲われることもありますし」

教員で構成されている警備組織、『警備員（アンチスキル）』。学園都市に住む大人、特に教師が主な構成となっているそれらは強力な装備に身を固めている。能力が得られずに折れた弱者の寄せ集めではいくら集まろうとも烏合でしかなく対抗できない。『風紀委員（ジャッジメント）』と並ぶ武装無能力集団（スキルアウト）の天敵ともいえる組織だ。カリキュラムから逃げたドロップアウトは、傷をなめ合うように集まるが、その逃亡先でも安寧は少ない。追い詰められるのが精神的か肉体的か、そんな話だ。事件を起こさず素行良く過ごせば見逃されることも多いが、低きに流れた澱みが己を律するのは酷だった。

「まともな学区は普通に生活できるかもしれないけど、そこで平気でいられるならスキルアウトにはならないです」

「でしようね。結局逃げられる場所は学園都市の中だけですから、受け入れるか退くか。カリキュラムを受けた学生が学外に出ることは許されないので超鳥かごですね」

「そつす。それで都市のシステムからなんとか逃げようとして辿り着くのが誰も見ない

ようなこういう場所なんです」

路地裏、廃工場、廃棄された研究所、寂れた学区。逃げ続けるドロップアウトが行き着く先は、上から見下されることのない暗く狭い世界の隅だ。澱んだ水が流れ、何処かに沈殿するように、集まって互いを慰める。幼い子供の精神が、納得できない世界への反発として薄暗い世界へと向かわせる。何時か妥協できるその日まで、未熟な心が育つことのできる場所を求めながら。

「でもまあ、この学区は多くのバカが集まってもかなり目溢してもらってるんですよ。能力者狩りが行われたここがつすよ？　ゲロ神父に聞いても手伝いしてるから更生の余地があつて見逃されてるとか」

「はあ、つまり神父が超救つてくれた的な？　メシアンとでも言いますか？」

「いやいや、まさか。有り得ないでしょそんなの。あの人が救うだなんて」

話を聞いていたらしい路地裏の住人たちも、揃って首を縦に振っている。第七学区との境の路地裏は腐った空気を醸していた。今いる此処はあそこよりもまとも感じた。ほとんど距離は離れていないのに、雰囲気は全く別物だった。連中の誰もが目は濁っていない。輝いているとまではいかなないが、何も無いというわけでもないのだろう。空っぽの人間、失った人間は総じて輝きを失うから。

どうやら何かしら作業をしているようだった。参考書を手にしている者や機械を

弄っている者、能力向上を試みている者、中にはフォークリフトのような機材の練習をしている者たちもいて様々だ。ちよつとした出店や屋台も開かれていて、明るい雰囲気すら漂っている。様々いるが、誰も生き詰まつてない。そう、生きることに関心を持っていて、望みを持っている。そんな気がした。

「ただ、考える時間と場所だけくれたつて話ですよ。あとは何も考えない塵と何かを考える屑を交換したつて言つてたくらい」

丁寧語ヤンキーがスキルアウト達が収容されている施設の方角を指差しながら「あそこに何人も送られて、それと同じ数だけ仲間が出てきたんすよ」と笑つた。傷をなめ合うことが出来て、時間に追い立てられず、何かを求め続け、繰り返して試行し、誰にも責められることのない、そんな此処が彼らには貴重なのだろう。見受けられた。親身に施すこともなく、突き放すわけでもなく、思考と試行を続けられる場所。これが此処に居るスキルアウト達が望む距離に保たれている結果なのだろう。持つ者の失樂園、持たざる者の楽園。そんなところだろうか。

「あの人が一番何も考えて無さそうなのに、考えない塵をリサイクルつてかなりウケますよね」

通りの端に点在する出店や路地裏から「あれは自虐ネタなんじゃないか」「同族嫌悪だ

ろ」などと言葉が飛び交っている。誰もが楽しそうだった。劣等感の強く、何かに追われるように焦っているスキルアウトたちの姿とは思えないほどに何の気負いもない。未だに彼らは自信がないのかもしれないが、余裕はあるのだ。遠くから様子見する神父に与えられた、自分を模索できる時間と場所が。

「そういえば七学区るところに陰気なやつらがいたでしょ。あれも可哀そうで半端なやつらつすよ。もっと過激なスキルアウトに入るほどに嫉妬も育たず、此処まで来る勇氣もない。けど、戻る意気地もない。下手なプライドばかりが育ったんでしよう、哀れですが。たぶん連中も腹パンされたり、交換に出されたり、元の場所に戻されたりと、そのうち間引かれますよ。ここに住みつくのも出てくると思いますが。ゲロ神父の間引きは壮絶ですから、十人も残らないと思いますけど」

丁寧語ヤンキーの先導で、絹旗は墓地群の近くに辿り着いていた。ちよつとした丘の傾斜には、和洋折衷とでも言いたいのか統一感なくたくさんの種類の墓が乱立している。遠目から見ても清潔さを感じられ、死した後でもゆっくり眠れそうなほどに穏やかな風が流れている。らしくない。そう、らしくない。陰鬱な印象があつた墓場らしくないし、ここにあの大神がいるのもらしくない。何となく絹旗にはそう思えた。

「別に認めてほしかつたわけでも見ていて欲しかつたわけでもなくて、何となく嫌だつたから逃げて、どうにもならないからスキルアウトになつたのに。どこにも行けなくな

りそうになって。そうしたら神父が腹パンした後には好きにしろつて。その後は一日中吐きっぱなしでした。で、最初はぶっ殺してやろうかと思いましたが、なんとなくやめました。あの見えない腹パンも怖かったし、同じ境遇のやつらとも変な連帯感が生まれましたし」

遠目にも、赤い修道服と白い修道服を着た二人の少女が見えた。墓地の整備をしているようだが、教会に所属しているシスターだろうか。その周りに、スキルアウトらしき男たちも同じように掃除している姿が確認できた。きちんと人がいることに、綺麗に管理されていることに、絹旗は眉を顰めた。ただのセーフハウスにしては手が込んでいゝ。拠点にしては立地が悪い。

微妙な場所だった。だが、とても綺麗で、堪らなく儂い。

「それからここです。過ごすようになって、ときどき顔を出す神父にいろいろと手伝わされて、なんとなくやってみようと思つた勉強を始めたんです。そしたら神父が腹パンじゃなくて頭を撫でてきたんです、撫で方もがさつで痛かつたけど不思議と悪くない気分でした。なんとなくここに居ていいんだって思えて。よくわかんないけど、なんていうんだらう。たぶん、嬉しかった、そんな気がするんすよ。あいつらもみんな同じなのかな……」

呟くように「神父は丘の上の教会です」と告げて去っていた。その背に礼を述べる。

此処には絹旗の知らない大神の姿があつた。よく話すのに初めて見ることばかりで、大神について全く知らないことに気付いた。当たり前前のその事実が、なんとなく不思議で、どうにも寂しかった。

絹旗が教会へと続く墓地群の丘へと足を踏み出すのと、赤と白の二人の修道女やスキルアウトたちが行つていた墓地整備が終わつたのは同時だった。

— 3 —

丘の上に建つ教会に向かつて、綺麗に舗装された道程を歩く。なんとなく奇妙だった。何が奇妙なのかはわからなかつたが、絹旗は何か不思議な物を見た気分だった。

探るように見て回る。墓石が見事なまでに磨かれており、墓周りの空間も整備が行き届いていた。また、教会へと至る道に塵ひとつ落ちていない。先ほど見たように、シスターやスキルアウトの連中の手によって掃除が行き届いているのだろう、そう絹旗も考えた。が、観察して見ればそれ以外にも不思議な点がある。不気味だとか、そういう話ではないが奇妙だった。不必要な物が存在していない。何処にも無駄な物が一切ない。そこに気づいてしまえば、あとは連鎖的に見つかった。

少しだけ照り返している墓の数々、周りには均一に整えられた徒花が生えている。絹

旗が歩いている道に敷き詰められた灰白色のブロックには一ミリですら起伏がない。そよぐような柔らかな風が一定の間隔で吹き続けているし、青空に浮かぶ太陽の日差しも弱いように感じる。今は九月が始まったばかりで、まだ夏の熱が尾を引いている時期だ。気づかなかつたが気温も程よく感じる。空気も澄んでいて、何か混ざつたような無駄な匂いもない。精密に整えられた自然、そんな感じだろうか。

掃除を終えたららしいスキルアウトの連中とすれ違う。互いに会釈するだけだった。心なしか背筋が伸びていた気がした。絹旗に気付いた赤と白、二人のシスターがゆつくりと歩き寄つてきた。修道服の裾は長いが足に絡まるような様子はない、器用な物だ。白いシスターは上下真つ白の修道服に金の刺繍が、赤い方は赤を基調とした修道服に白い刺繍が施されていた。意外と彩色が豊かで、刺繍も細かく上品だ。穏やかな雰囲気を感じ纏っている二人を見ると、大神がいるのはやはり間違いなのではないかと思つてしまふほどだった。

二人とも絹旗と同じくらい小柄で、フード状のコイフルから覗ける金と銀の頭髮が日の光で輝いていた。赤い方は太陽のように眩い金色の髪で目が隠れており物静か、白い方は大きな澄んだ緑の目が活発そう、そんなそれぞれの印象を絹旗に与えた。

「第一の質問ですが、何かご用でしょうか」

小首を傾げながら赤いシスターが口を開き、囁くように問う。静かな声音が見た目よりも歳上なのかもしれないと感じさせたが、幼さを含んだ特有の少女然とした高さも含んでいた。その隣で同じように白いシスターも傾げていた。姉妹というわけでもないが、どこか似ているようだった。どちらが年上なのだろうか……。

「知人を訪ねにきたんですけど。多分ですが、その……げろ神父つて方かと、思います。ちよつと超自信ないんですけど」

「ゲロ神父……。第一の解答ですが、ベート・シヤステル司教様かと思われます。補足しますが、私たちが所属しているロシア成教第一〇学区教会には、神父と呼ばれる地位にいる方は彼だけです」

ベート・シヤステル、絹旗の知らない名前だ。以前、大神は偽名を使っていると聞いていた。いくつも用意してあるのだろうか。それに、教会の司教であるともいう。偽装の背景か、やたらと手が込み過ぎているように感じた。

とある科学6—1

—1

ゴールデンレトリバーである脳幹先生に、渋い声で「これでも食つてろ」と何かよく分からん物を口にぶち込まれた。

口というか顔面が消失したんですが。

なんて毒物食わせるんだこいつ、と戦慄しながらも「嗚呼、我が身体に耐性が満ちてゆく……！」的な。体は正直なだけ。

ぶつちやけ美味くないので要らないと断るも、世界の基準点付けのために祈りながら食えやおらあ！とさらに何かよく分からん物をぶち込まれ続ける。

おう、そろそろやめーや。

顔面が物理的に消失してるじゃねーか。

傍から見たら、俺ってワンコに餌付けされてるよね、これ。

逆だろ、普通。

ないわー。

まあ、実際に傍から見たら、ゴールデンレトリバーの背中に取り付けてあるロボットアームが挿んでいる試験管を口にぶち込まれ、小爆発を起こして中身が飛び散り、顔面が消滅するという意味不明ホラーなんだけど。

四次元殺法コンビの黒いほう化した俺。

タイムタイム。

ぐいぐい押しこむの止めて。首裏から試験管の破片が飛び出てっから。

もう腹無くなってるから。ビー玉が無いビーダマンだから。

そもそも口から胃にかけて無くなってるから。

「君には他の内臓もあるではないか」って、なんだコイツ（戦慄）

意味のわからん曖昧な情報を食わされた後、今月のシヨバ代を超越せ、的な感じでドリンクバーのコーラから生み出されし聖水をカツアゲされた。

最近確保したアシカと柴犬、イルカ、フクロウなどに補助脳くっつけて呼んだだけなのに、餌付けされるとか俺って愛されキュートかよ。

ねーわ。

わんころに、最初の目的を果たしてもらおうことにする。

色々とあつて脳波に干渉にして互いの思考をリンクさせることで知能レベルを飛躍的に上がったために木原った動物たちに、軽い補助脳を取り付けてもらって、群であり

個でもある生物としてうんちやらかんちやら。

時折数式を吐き出す可愛い動物たちとなった。

ちなみに、数式は中性子爆弾とか常温核融合、ダイソン球殻生成などについてらしい。……げ、げんりはしってる。よく遊んでるし。ちゅーせーしとか、まあ、俺くらいになるとそこらへんで集めて風船に入れて爆弾にするから。

ま、まあ、原理は知ってるよくわからん数式なんてくっそどうでもいい。

こいつらの利点は、なんと互いの思考が繋がっているという点だ。

一匹に指示を出すだけで、他の動物にも（こいつ、直接脳内に……）って感じで伝えるらしい。

電話も念話も不要、すごい。

しかも知能レベルは俺を優に超えて……ってやかましいわ。

とりあえずランダムで数式を垂れ流すこと以外は賢い動物なのだ。

フクロウとか柴犬は家事の補助くらいなら出来るし、アシカもなんか出来る。

イルカ？ 役に立つわけねーじゃん。数式とうんこの製造機よ。嘘だ。実際はカードラス先生の計算機と化している。計算めんどくなったらこいつに聞くと、難解な問題も一瞬だとか。

というか動物連中に聞けば、様々な観点からの時間や暦、星の位置、電波状況、重力

の細かな変化、電波に乗った情報、今日の天気、紫外線、潮流、気流、魔力の流れ、近所の特売、物質の明確な質量や特性、コーラの美味しい温度、テレズマの効率の良い集め方など、ゲッター線、インデックスの消費カロリー……様々な情報に対応し瞬時に応えてくれるので、便利な辞書として活躍してくれる。

自分ではまともに実験できない木原を一家に一匹ずつ所有すべきではないだろうか。

「まだまだ残っているぞ」「やめてクレメンス」とワンコと遊んでいると、何故かサーシャとインデックスが絹旗を連れて来た。あと見知らぬ巨乳の女学生ちゃんもセット。絹旗と合流するのは午後からだだった気がするんだが。

……。

……っ！

まさか俺への愛が溢れて「来ちゃった（はあと）」的なラブロマンスだろうか。愛され系でごめんねー！

マイスイートハニー、胸に飛び込んできていいのよ！みたいなの。

まあ、今は胸というか上半身が無いんだけど。

「大神の本名は大神次郎ですよ。そうに決まっています。横文字の偽名とか超似合ってますし本名ですね。はい超論破。二人も今後は大神って超呼ぶように」

それは偽名なんだよなあ。

「ジェヴォーダンなんだよ！ 赤水着もパンモロも人の名前を間違えるのは良くないんだよ！」

それも偽名なんだよなあ。

「……現在はあの装束ではありません。第一の質問ですが、貴方の名前はベート・シャステルですよ。解答は受け付けてません。以後、ベート・シャステル神父様の名前を間違えないように」

それも偽名なんだよなあ。

あのね、君たちはそれ以外に聞く事ないのか。

例えば犬つころが喋ってるとか。

教会内に水が循環していて、イルカとアシカが泳いでいるとか。

フクロウと柴犬が将棋しているとか。

一方通行が祭壇前の椅子で寝てるとか。

もつと、ほら。

大本命で、この教会の神父様が半分消滅している件とか。

あと絹旗はパンモロしたの？ 後で懺悔室で見せるように。

残っていた腕でしっしつとジェスチャー。

巨乳の学生に悲鳴を挙げられた。

まあ当然つていうか。

知つてたというか。

何故か新鮮というか。

あとサーシャと絹旗はもうちよつとなんか反応があつてくれてもいいと思う。私が知つてる名前が本名ですよね答えは聞いてない、とか暴論すぎない？ 君たちやばくない？

インデックスもそのまま無視してカードダス先生にお菓子貰いに行くのやめーや。もうちよつと俺に興味持てよ。ちよ、待てよ。

おう犬畜生も、そろそろ追加するのやめ……おごごごごご、q、

— 2

試験管責めに満足したのか、犬が程なくして帰った。

厚意で用意した朝食には手を、というか口を付けていなかった。

折角人が丁寧に玉ねぎとアボカドを使ったサラダとチョコのデザートを調理してやつたというのに。

犬を見送り、改めて絹旗が来た理由を尋ねようと声をかけるが、何故か俺の名前がゲロ神父で統一しかけていた。

女の子がゲロって言うのは止めなさい。

あとパンモロも修道女が使う言葉じゃないです。どうしても言いたいなら、神父様の遅い棒が欲しいですにしておくように。

「大神がこつちに来て下さい。ペットは名前を呼ばれると超駆けつけるんですよ」と絹旗がドヤ顔で席に座ったまま動かないので無視し、インデックスとサーシャ、打ち止めに、そろそろ出掛けないと遅刻すると言って準備させる。昨日の夜に、午前中は暇で時間があると電話してきた麦のんに、インデックスたちの世話を押し付……頼んだのだ。

御目付役の一方通行が起きそうにないので、椅子を取り外し、アシカに渡す。そのままイルカが泳ぐ循環プールへ投入された。反射してても酸素足りなくて起きるだろう。起きないまま死んだら……嘘、まさか俺が学園都市一位（お目目きらきら）

最強だぜ！ やったぜ！ と喜んでいたら、水面を蹴って一方通行がダイナミックに飛んできて、俺にベクトルパンチをかましてきた。

なんだこいつ頭おかしい……

q

飛び散った水滴が重力に逆らい、教会の壁と天井を包むように循環するプールへと戻る。

インデックスビームによって解放された天井に取り付けられた採光窓から降り注ぐ日光が反射し、幻想的な空間へと劇的ビフォーアフター。

カードダス先生つてば匠すぎんよ。

インデックスやサーシャ、打ち止めも準備が終わったようなので、「さあ彼女たちとともに光の世界へ行くがいい！ モンスタータイマー・一方通行よ！」と優しさと慈愛を込めながら告げる。

「はア？」という反応が返ってきた。むしろ俺が「はあ？」である。俺が行けって言ったら行くべきでしょ。

頭おかしいなこいつ。

絶対に外に出たくないのだと引きこもりっぷりをアピールする一方通行に、懇切丁寧に俺が説明してあげることしよう。

学園都市一位だ（キリツ）とか言つて、頭も一番いいですよアピールしまくる、一方通行くんに、この僕が。

ベクトルパンチされた。

なんだこいつやっぱ頭おかしい……^q

昨晚、打ち止めのためにこの教会に泊めてあげたじゃん？

「オマエが勝手に連れて来たんだろうが」

一宿一飯の恩義があるじゃん？

「オマエが勝手に食わせたんだろうが」

雑魚に負けて勇者の資格を返上してモンスターテイマーになったわけじゃん？

「……ああ？」

あ、日本語わかんないのか。

ジュワワワジュワワ、ジュワジュワジュワワワワワワ？

ベクトルパンチされた。

なんだこいつやっぱ頭おかしいまともなのは俺ひとり……q

教会がぶつ壊れたので、とりあえずインデックスの食費と俺の娯楽費とともに一方通行に請求しよう。

ウルトラマンみたいな服を着た白もやしが少女三人を引き連れるという、ラノベみた

いなパーティーを見送って、再び絹旗チャレンジ。

絹旗がドヤ顔で立ち上がり、「大神！ 超オイデー！」と両手を広げた。

犬の躰コマンドやめーや。

肩に留まっているフクロウに指示を出す。

すると壁側のプールからザバッとイルカが飛びだし、空中を水の塊に包まれながらふ

よふよと進み、絹旗へと迫る。

濡れるのを嫌がって絹旗がこつちに来るので両手を広げ「絹旗！ 超オイデー！」と愛

を叫ぶ。

全力ダッシュからの空素パンチャめーや、q、

「麦野の機嫌が超悪かったので遊びに来てあげました」と絹旗。

昨夜の電話ではそんなに機嫌悪そうじゃなかったのだが、まあいいや。

「あとついでに、教会の前で超迷える子羊と出会いましたよ」と眼鏡の巨乳女学生を紹介してくれた。

何故か俺を怯えた目で見ながら、絹旗の背に隠れている。

身長もそうだが、胸の差が凄い。絹旗が遠まわしに煽られている気がしないでもな

い。

迷える子羊なら導くのが俺の仕事だ。しかも超迷えるのなら、超凄腕の神父である俺しか導くのは不可能だろう。

親愛なる友人として、頼れる隣人として、優しい言葉が重要なのだ。
そして俺は囁くように言うのだ。

「君、アへ顔が似合いそうだね（ニコポ）」

ゼロ距離窒素パンチやめーやゝqゝ

原作：アイドルマスター シンデレラガールズ、他
虹鱒
1年目（1章）

金が無い。

夢や希望は胸いっぱいだが、金がまったくない。

金がないから腹も膨れないし、やりたいことも何もできやしない。

当たり前だが、金が無いと生きるのも難しくなる。

全体的にハードルが高まったようにすら感じる。

せめて精神面だけでも豊かになっておきたいが、荒んだ生活を過ごしていたため、浮かべている笑みは軽薄である。

世知辛い。

夢や希望、理想は数多あるし、やる気だつて満ち満ちている。

二度目の人生なので、前世の後悔を思い出せばなんだつてやりたくなってくる。しかも今は青春を謳歌するべく高校生・リヴアイヴモードである。

が、無理。

何もできない。

だって金がないのだ。

貧乏でも、家族仲が円満だったらまだよかった。

家族のために頑張る健気な自分に酔えたかもしれない。

が、それも無い。

親は幼少の頃から喧嘩するか外でパーリーナイトに繰り出すかである。

なんとかならないモノか、と媚びた笑顔を浮かべ続けたが結局好転せず。

中学は生きていくために新聞配達をやるという素敵イベントに見舞われた。

で、高校入学とともに二人とも俺を置いて蒸発してくれました。

胡散臭い笑みだけが癖として残ったという不幸もセットだ。

親戚に盥回しになるかと思いきや、両親は嫌われてたので俺も嫌われて誰も後見人に

なってくれない雰囲気。

たぶん、媚びた笑顔もマイナスポイントだったね。

俺も高校生になったという事で歳が結構いつてるから施設も微妙だし、孤独に生きていく線が濃厚になると、歳とった母方の祖父母が引き取ってくれることに。

金は無いが穏やかな気質の祖父母だった。

質素で素朴だが、平穏な日々を送れるかと期待したが無理。

祖父が死亡、高齢と心労が祟って祖母が入院というコンボが発生。華の高校デビューから2か月でバイト漬けである。

夢もキボーもいつぱいだが、先が見えない人生となってしまった。

だって金がないんだ。

しかたないじゃないか。

高校3年、マジで限界を感じる。

親が残していった借金を返そうとするも、法外な金額で弁護士に泣きついて解決。

と、見せかけて弁護士への相談料とか諸々が捻出できず返済を月賦にしてもらえるところに。

なので返済と学費と生活費のために、今はコンビニで働いているのだが、そろそろ死ぬんじゃないかと思っていたり。

基本的に平日は17時から22時までコンビニ、寝る、高校、放課後にお見舞い、バイト、というサイクルだ。

土日は学校に行っている時間をコンビニバイトに充てている。

最悪なのはコンビニはコスパが良くないと税金が取られることか。

入院費は祖母の年金と雀の涙程度の保険などか。

奨学金は借りられることには借りれるが、返せる展望がないので手を出さない。

質素に節約していればまだ問題ない、はず。

高校は辞めると人生の選択肢が塞がりそうなので却下だ。

そんな日々だが、放課後とかに遊ぶ予定を立てているクラスメートの声とかを聞くと殺意の波動に目覚めそうになる。

予定を俺に聞くんじゃない。

スマートフォンなんて持ってない。

ゲームなんてやってない。

漫画なんて読んでる暇が無い。

アイドルなんて野外で行われているライブバトルをやってる人たちくらいしか知らんがな。

断る度に空気が読めないだとかウケるとか言われ続けて心が荒む。

話しかけるのもやめてほしい。

頼むから植物のように穏やかに過ごさせてくれ。

ちよいちよい絡んでくる連中をいなし、放課後のお見舞いへ。

途中でライブバトルをちよつと眺めていく。

娯楽のほとんどない生活でのちよつとした清涼剤である。

まあ、アイドルを目指している女の子が歌って踊ってスカウトマンへアピールしているだけなのだけれど。

前世と違って、アイドルという職がこの世界では物凄いフィーチャーされている。

アイドル志望の男女はかなり多いし、テレビだって専門チャンネルがあるらしい、グッズの売り上げも半端じゃないらしい。

聞いた話ばかりなので確かなことは何もわからんが、まあ、アイドルという職が輝いている世界だ。

俺の媚びた笑顔と違って、ライブバトルをしている女の子たちは眩いばかりの笑顔で浮かべている。

憧れるし、嫉妬もする。

純粹に見ていたくなるような、見ていたくないような。

もうなんだかな、凄く死にたくなる。

死んだら祖母がヤバイので死なないけど。

祖母がいなくなったらダメかもしれん。

今までパフォーマンスを行っていた女の子と入れ替わるように、またアイドル志望の女の子が現れた。

が、俺のテンションが駄々下がり。

笑顔が汚い。

もういいや、こんなん見てもしょうがない。

媚びてる感じが読み取れてしまう。

同族嫌悪というやつだろうか。

あんな媚びてるビッチを見てると精神疲労がたまってしまう。

媚びツチとか今日は運が悪い。

溜息つきながら見舞いへと向かうことにする。

なんか黒いおっさんがティンと来たとか言って話しかけてきて、メルアドを聞かれた

がスマホは持ってないのでスルー。

ホモに好かれるとか、今日はマジで運が悪い。

媚びツチにホモのコンボとは、たまげたなあ（溜め息）

翌日もちよいちよい絡んでくるグループを受け流してお見舞いへ。

絡んでくるのは複数人の男女でつるんでいるグループのだが、恋愛とか友情で愛憎

渦巻いているに違いない。

俺の見た感じだと、男子全員が一人の女子にタゲっているが、タゲられている女子に

はそんな感情は無いようだ。

で、男子たちはなかなかイケてる部類に入る連中なので、ハイエナの如く女子が寄ってきてズツ友アピールをし続けないと分裂しそうなグループもどきが形成されている的な。

ちなみに一番人気の女子は秋田から来ていて、アイドル志望らしい。

高1のときになんか聞いた記憶があるような、ないような。

一番忙しい時期だったからそこらへんがかなり怪しい。

名前は、えつと……そう、トキだった気がする。

激流に身を任せる名前だったので間違いない。

なんで俺は名前も知らない奴らのこんなどうでもいいことを分析しているのだろうか。

青春を謳歌しているのが近くにいると思うと死にたくなる。

もうマジ無理。

夢に溺れて溺死したい。

なぜか近くで形成されるグループで、ちよいちよい絡んでくる連中の話を聞いた限り、進学を考えているらしい。

ジョインジョイントキイは大学に行きつつアイドルを目指すとか。

激流に身を任せる系アイドルか……売れませんか。

それに合わせても男子連中もアイドルになるとアピールし、頑張ろうぜとかなんとか。

トキは一緒に頑張ろうねと鮮やかな手腕でそれらのアピールを流して見せ、なぜか俺へと進路の質問へ。

それを俺は言葉を濁して乗り切る。

これ以上注目されると男子の視線で殺されそうだし。

で、それに呼応した女子もメンチ切ってくる。

やめてください、死にたくありません。

今はまだ新学期が始まったばかりだが、内心では就職かなと思っていたり。

進学だと国立くらいだが、未来への希望が枯渇しつつある。

祖母も先行き長くなさそうだ。

このままバイトでかつかつの生活を続け、ゆっくりと現世からフェードアウトでもいいかもしれない。

続けてもいいことないし。

もしかしたら来世で幸運が待っているかもしれない。

ないか。

落ち込むわあ……。

癒されたいとばかりに連日行われているライブバトルへ寄り道。

初っ端から昨日とは違うが媚びてる系が歌ってた。

テンション駄々下がりで、死にたくなつた。

もう今日はいいや、見舞いに行こう。

なんて決意したのもつかの間、俺の進路を阻むように昨日の黒いおっさんが出現。

ホモはやめろお！

おっさんは芸能関係の人らしい。

最近、そういう詐欺が横行しているので金のない俺は華麗にスルー。

詐欺に引っかかるのが許されるのは、懐に余裕がある者だけだ。

が、おっさんは頑なに付いてくる。

全力で走るとおっさんも必死に付いてくる。

振り切ったことを確認してやったぜと病院へ入ろうとして、おっさんが高そうな車か

ら降りて追いかけてきやがった。

ホモがランクアップして不審者になつたぞ！

なんで変なのにはかり絡まれるんだ、死にたい。

さすがに病院で暴れられて祖母が死んだらヤバいので、話を聞くことにした。で、おっさんに連れられ、大きなビルへ。

よくよく話を聞いてみると、この不審者のおっさんはこの社長らしい。

アイドルを養成する企画があつて、その候補を探していたらしいが、なぜか俺がティンと来たらしい。

マジかよ、俺もアイドルか。

成功したら三食食べられるかしらん。

なんて思ってたが、現実はそう甘くないのだ。

アイドルの企画だがシンデレラプロジェクトというようだ。

そう、女性用である。

俺を見て事務とかそういうった裏方としてティンと来たとか。

なんて嬉しくない一目ぼれだろうか。

話のメインだが、事務やらないか的な感じである。

高校があると断ろうとしたら、試みにバイトでどうかと提案された。

このビルは遠いんだよなあと否定的な感情を持っていたが、土日のどちらかまたは両方で都合がいいとき、ついでに交通費を出してくれるらしい。

で、時給は1050円。

コンビニは850円だが近場だし廃棄品でご飯を得られるしなあど悩んでいると、昼食も付けてくれるという。

……社長、私を奴隷と御呼びください（決め顔）

1年目 4月

時間があるときに研修とか参加してみた。

メディアに向けた活動が多いので、休日は不定期、土日も出社することが当たり前、みたいな。

研修内容は様々だ。

この会社は多くの俳優や歌手が在籍しており、それらに付いて仕事をメモツたり、挨拶周りにしたりと付き人状態である。

さらに緑の事務服がとても似合っている千川ちひろさんという方に事務仕事を教えて貰ったり。

同期だと紹介された武内さんの眼光に殺されそうになった。

あ、昼食の社食などは大変美味しかったので、土日は絶対来ようと思ったわけで、割が良いので平日のバイトも減らせそうだし。

問題は家賃と弁護士への月賦が決りにくることくらいか。

ま、まあ、生活は向上しているので問題ないっしょ。

他にも新入社員はいるのだが、新しく立ち上がったアイドル部門では俺と武内さん、ちひろさんがメインらしい。

社長がそう言っていた。

……え？

俺、アルバイト。

武内さん、ぴかぴかの新入社員。

ちひろさん、事務員。

え？

ちよつと意味がわかんないです。

5月

仕事用のスーツを買ってもらった。

しかも誕生日だったのだからいいスーツを奮発してもらってしまった。あと腕時計とかネクタイとかそういう諸々も。

学ランでマネージャーの真似事しつつ、テレビ局とかラジオ放送局だとかで挨拶はよろしくないかと判断された、社長に。

結構受けが良かったんだけどね。

あとは社員用スマホが配布されたことか。

俳優のマネージメントなどを行っている先輩に尋ねられて持つてないという話が4月にあったが、なぜか5月に渡されるということに。

予定よりも遥かに俺の顔が広くなったのが原因らしい。

当初は顔見せ程度のはずが、何故か連絡先を聞かれまくるようになってしまった。

で、俺はスマホを持つてないので、面倒見てくれている先輩が連絡係状態になったのだ。

書類の関係で5月に配布となったとかなんとか。

なるほどなー。

ついでにどうでもいいことなのだが、パソコンがめっちゃ難しい。

前世ではブライドタツチくらい出来たが、今は全く出来ない。

人差し指で押しているレベル。

頭の中では理想像があるが、現実が追い付かないというもどかしさ。イライラが半端ないです。

来月からは俺も土日のみだがマネージャーとして働くように言われた。

俺が緊張しないように同世代で、仕事が出る子と組むらしい。

事務として雇われた気がするのだが……いや、もういいや。

6月

俺がマネージャーをすることになったのは岡崎泰葉（おかざきやすは）という少女だった。

子役をやっていて、これからはモデルとか演劇のちよつとした役どころをメインにする予定だとか。

調べてみると芸歴が長すぎイ！

完全に先輩なんですけど。

しかも俺や武内さん、ちひろさんを優に上回るレベル。

社長の変な気遣いが裏目に出ている気がしまくってどうしようもない。

まずは挨拶だ。

胡散臭くて媚びていて軽薄という三拍子が癖となつてゐる俺の笑みだが、意外と役に立つことがある。

笑わないで真剣に挨拶をすると、「コイツいいやつじゃね？」みたいな印象を与えられる。

わかりやすく説明すると、不良が子犬を助けることで生じるギャップ論と同じである。

締めるところさえ締めておけば、何の問題もない。

へらへらしたまま初対面を迎えて真面目モードに突入する場面がないと、バッドコミュニケーションンなんですけどね。

諸刃の剣というやつか。

そんなん要らないからプラマイゼロで真摯な顔が良かったのに……。

真面目な顔をして岡崎さんと挨拶する。

会社でちよくちよくすれ違うことがあったので、まあ、半端な顔見知りのなやつだ。へらへらしてないのでちよつと引かれるという事故が発生したが、華麗にスルーだ。握手しようとしたら光のない瞳で「経験では負けない」とか「貴方から教えられることはありません」とか言われた。

こちらのフロイラインは何か勘違いしているようだ……。

溜息ついてへらへら笑ってしまっうね！

岡崎さんが眉間に皺を寄せたが構わない。

言わせてもらおう。

俺が生徒側で、岡崎さんが教育係だということを説明し、ご指導ご鞭撻のほどをよろしくお願います！と締める。

無駄に通る声で真面目に。

毒気が抜かれた岡崎先輩。

面倒を見てくれていた先輩が「お、おう」と頼りなさ気に呟いた。

これは、パーフェクトコミュニケーションだろう。

完全無欠だわ。

一部の隙もない。

岡崎先輩と顔合わせが終わったので、マネージャー業の開始である。

ちひろさんに渡された予定表通りに現場に行つて諸々やって帰る的な仕事だ。

欠点は俺が車の運転が出来ないので電車で行くことか。

流石にずっと電車通いはまずいので、夏休みには免許を取りに合宿にぶち込まれる予定である。

なお研修扱いなので給料が出て、費用は会社持ちだとか。大変お得である。

俺はアルバイトだが、待遇が良くてうれしいです☆

テレビ局に着いたら守衛さんに挨拶し、手続きしてからスタジオへ。

今日の岡崎先輩の仕事はドラマだ。

いじめられている主役とは距離を取って平穩に過ごすクラスメート役だとか。なるほどなー。

岡崎先輩を連れて挨拶周り。

挨拶の仕方を教えてくれようとした岡崎先輩をへらへらと見事にスルーして、局長・編成・GP・P・CD・AP・D・ADの順に挨拶していく。

で、岡崎先輩をスタイリストさんに任せて自由時間。

スルーされた岡崎先輩が涙目でぷるぷるしてて可愛かった（粉みかん）

賄賂もどきのお土産をスタッフさんに渡してADさんたちに混ざって準備中の仕事を手伝う。

疲労と不定期な睡眠時間の連続で死にそうなADさんに混ざるへらへらした俺というカオス空間が形成されたが、なかなか悪くない。

待機中のADさんとかも集まってきて、半ば遊んでいる雰囲気準備を終える。

Dさんが新入りのADさんにゴムパッチンを喰らわせるも、ドラマでは使わないという悪乗りも発生したが、雰囲気は良くなったんじゃないだろうか。

あとは他のスタジオで用意された罰ゲーム用のノニジュースをみんなで飲み干すとか、そんな感じである。

ノリノリで一気飲みしたAPさんがジュースを噴霧するというアクシデントが発生したが、些事だ。

高校生の休み時間か何かだろうか。

疲労で死んだ目をしたADさんが、特殊な業界すぎて私的な友達が減って遊ぶ機会がないのでこういつた時でない息抜きできないとか呟き、倒れる様に眠った。

息抜き〽睡眠もあるということか。

テレビ業界の闇は深い……。

眠ったADさんを入れ替わるように岡崎先輩が準備完了。

続々と他の出演者の方たちも現れたので、挨拶へ向かう。

売れている役者の方だったり、抜擢された売れない俳優だったり、文化人だったり、アイドルだったり様々だ。

時間が余ったので、同じ芸能プロダクションの765プロの音無さんと話す。

秋月さんの付き添いで来たという。

話を聞く限り、秋月さんはアイドルやってプロデューサーをやって事務もやっているらしい。

なにこれヤバイ。

超人か何かだろうか。

零細プロダクションの悲哀らしい。

そもそも秋月さんはプロデューサー志望で入ったのに、アイドルがいなかったから自分で両方やるとるか。

ミラクルを起こし過ぎじゃないですかね……。

撮影が始まったので、真面目な顔で見守る。

流石にへらへら笑うと良くないので真摯モードだ。

紳士の俺なら真摯な態度くらい余裕なのですよ。

目つきが悪くなって眉間に皺が寄るのが欠点だが、それくらいは許してほしい。ドラマ撮影の推移を見守る。

ぶつちやけ、俺はドラマが好きじゃないので早く終われと願うのみだ。

演者の半分以上が人形っぽい感じがするのでマジで好きじゃない。

岡崎先輩も演技が人形感があるので俺は好きじゃない。

まあ、マネージャーポジションだし好き嫌いはどうでもいいか。

でも、配役に困ったときに呼ばれるような万能性溢れる俳優の方の演技は嫌いじゃないぜ。

撮影が終わったので、挨拶もそこに撤回。

急いで作業をしているのを邪魔するほど俺は空気が読めないわけじゃないのだ。

岡崎先輩が俺の機嫌が悪かったと言ってきた。

ドラマ好きじゃないしなあと言っておいたが、納得できていないらしい。

次いで演技はどうだったか聞かれた。

良くなかったです……とは言えないし。

評判はよかったんじゃないかと濁しておいた。

やっぱり納得してない様子。

俺はドラマが好きじゃないし、そもそも評価できるほど目が肥えてないからしようがないね。

とりあえず、アイドルとか俳優に詳しくなるためにテレビっ子にジョブチェンジ。

そのせいで学校ではアイドルオタク状態だが、身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあるのだ。

最低でも岡崎先輩の共演者の方々が映っている映像には目を通しておかないと。最近のテレビはすごい、4倍速とか実に便利なもの。

7月

岡崎先輩も学校があるので仕事はほどほどだ。

というか、スケジュールが詰まるくらいに仕事のオフアールがないのだけだ。

仕事の演者はDさんとかADさんが大雑把に見繕っているので、コンスタントには入ってくるけど。

ビデオカメラを持って岡崎先輩を追い回す。

宣伝として、月に1、2回ほどホームページでアップするのだ。

日常を生きる岡崎先輩とか昼食をとる岡崎先輩、趣味に没頭する岡崎先輩などだ。

表情が硬いというか、目が生きてないので評判は良くないけど。

俺の見立てだと岡崎先輩はこの仕事が好きじゃないのかもしれないかも。

続けているので、もしかしたら好きなのかも。

……惰性の可能性も有るか？

仕事が早めに終わったので、俺の我がままでライブバトルを見る。

ぐぬぬ……。

全体的にいまいちだった。

それでもスカウトされる女の子もいるから、なかなか難しいものがある。で、それを見ていた岡崎先輩が、なんか羨ましそうなオーラを放ってた。

珍しいこともあるものだ。

話を聞くと、自分にしかできないことがあつて羨ましいとか。

なんか岡崎先輩がヤバイ。

自分探しの旅に出ていきそうだ。

そもそも自分にしか出来ないことは世の中になんか無いということを知ってほしいわ。

その中で、何がやりたいかが重要となってくる……：ような気がする。

ごめん、俺もよくわからない。

まあ、岡崎先輩が熱中できるモノが見つかるまで一緒に手伝うからと告げながら誕生日プレゼントにカチューシャを渡す。

似合うからこれで我慢してくださいあ。

自分探しはやめてね。

マジでやめてね。

見つからないから、そんなもの。

学校では相変わらずアイドルオタク状態である。

今の俺って「このバイトは俺がいなきや成り立たない……」みたいな社畜モードに入ってるんじゃないか……。

いや、やめよう。

金の卵を産む鶏の腹を引き裂いたような結果しか待ってない気がする。

最近、俺に絡んでくるグループについて気付いたことがある。

それは、トキが話しかけてこなければシカトし続けてくれるということだ。

トキが学校を休んだときに気付いた。

まあ、気付いたことに意味なんてないんだけど。

アイドル志望の女子の前でテレビ関係の雑誌を広げるとか、断頭台へと自ら首を差し出すスタイルだし。

とりあえず、トキが休んだときは（もつと長引けと）祈ったりした。

ちなみにトキに祈ってたのがバレた。

不意打ちで休んでいるときに何かなかったかのことを聞かれたのでトキについて祈ってたと言ってしまった。

なんというか、笑みが出なくなるほどに気まずい感じになった。

終業式↓夏休み↓自動車学校での合宿というコンボへ。

教習所のほうが三食付いてて食生活が安定するとか、どういふことなの……。

そんな感じでぬるぬると二週間で合宿を終え、免許取得。

やっただと喜んだのも束の間、学校に免許を預けられた。

問題を起こすと互いに困るからの感じだった。

なん……だと……？

8月

夏休みなので連日出勤できるといふことに感動しつつ、タイムカードをカシャン。

すでに待機していた岡崎先輩に朝の挨拶とともにおかえりも言われる。

ツン期だった岡崎先輩がデレ期に……と驚愕したら頭を軽く叩かれた。

全く、冗談が通じない人で困るわあ。

まあ、岡崎先輩の謎のデレ期は置いておいて、何故すでにいるのかという話へ。

普段は事務所を出る30分前に来るが、今日は朝一である。

何かあったのかと邪推してみる。

台本の読み合わせがしたので手伝って欲しいとか。

デレ期だ！

誰がどう見てもデレ期だ！

頭を軽く叩かれた。

親密度が上がったと喜びつつ張り切って本気出したら岡崎先輩が涙目でふるふるしてた。

可愛かった。

他の部署の人に代役に誘われたが岡崎先輩のマネージャーが忙しいので断った。

連日詰めていると結構暇な時間が出来たりする。

事務の手伝いかもしているが、それでも暇ができる。

そんなときにアイドルのダンスとか真似してたらどうしてなかなか上手くいく。

暇そうな岡崎先輩にドヤ顔でキレキレなダンスを披露。

涙目でふるふるしてた。

くあいかった。

武内さんと打ち合わせ。

今のうちに俺と武内さんは基礎を積んで、来年からアイドルを養成して必要なものを揃え、再来年でメイン企画であるシンデレラプロジェクト、という流れの展望を話し合う。

細かい部分は追々詰めるが、今は予定を立てておく。

スタジオなどの施設やトレーナーなどを抑える必要があるが、アイドルの素養を見ないと出来ることは限られるし。

施設といえ、大浴場とかサウナがあるんだ、この事務所。

すごいよね。

便利過ぎて夏休み入ってから一度も家に帰ってない気がするが、気のせいということにしよう。

仕事が終わったらお見舞いに行つて会社に帰ってきている気がするが、気のせいだ。

食費、光熱費が浮くし、今のうちに貯金しておきたいし。

途中からちひろさんも交えてドリンクの成分の都市伝説を話して、勉強してた岡崎先輩に感想をキラーパス。

涙目でぶるぶるしてた。

可愛いかった。

ちなみにちひろさんも涙目でぶるぶるしてた。

可愛かった。

追記しますが、ドリンクの成分に問題はありません。

寝ないで済むとか、テンションがハイになるとか、そんな覚せいするような成分は無いのです。

経費で落ちるので、時々お世話になってます。

はい、ちひろさま。

わたしはどりんくをのめてしあわせです。

パラノイアごっこしてたらちひろさんに叩かれた。

パソコンを連日操作していたので、ブラインドタッチができる様になってきたよーと遅いキータッチをドヤ顔で岡崎先輩に見せる。

岡崎先輩もできるらしいので競争しようという話になった。

音が遅れてくるかの如き速さで入力していたら岡崎先輩が涙目でふるふるしてた。かわい。

岡崎先輩の台本に立ち位置や相手への気遣いなどちまちまとした要項を書いていると、社長に呼ばれた。

今日も社長は黒い影のようで、なんかというか捉えどころがない。

この前、秋月さんの引退ライブを経費で見に行っただのがバレたのだろうか。それとも961プロのライブを見に行っただのがバレたのだろうか。

DVDや雑誌も買いまくったのがダメだったか……？

というか研究とかやりすぎて、何がダメかわからん。

費用を請求されたら死ぬしかないじゃない！

戦々恐々と沙汰を待っていたが、特に怒っている様子は無い。

むしろもつと勉強すると良いと推奨された。

マジか。

武内さんも一緒に連れて行って、オタグッズも買わなきゃ（白目）

で、なんで呼び出されたかという、ティンときた女の子を見つけてきたかららしい。

ちよいちよ子役などで経験を積ませて、その先は自分で決めさせてもらおうとか。なるほどなー。

顔合わせは明日らしい。

翌日、事務所で目覚め、歯を磨きながらちよつとした雑務を処理する。

その後朝食を摂って、アイドル研究。

出社してきた人たちに挨拶し、武内さんとちひろさんを見送る。

そして9時になったらタイムカードをカシヨンとしていると岡崎先輩が出社。

そのまま岡崎先輩と昨日作成した台本を用いて読み合わせや、休憩時間での話題などを用意しておく。

話題に関しては使わなくてもいいが、話に詰まったら気まずいだろうから準備した。得意なこととか趣味だとか、ちよつとしたことだが、話の種になりやすいだろうし。

で、台本の読み合わせを軽く行い、岡崎先輩の夏休みの宿題を手伝う。

まあ、詰まったところをヒント出すだけだし、中学なら俺でも問題ないね。

午後から岡崎先輩の仕事はあるが、それまでは自由時間となっている。

せっかくなので俺自身の宿題もやっておくかとテキストに空欄をランダムに飛ばして解き、空いている部分には汚れた消しゴムで解いた感を演出。

無駄な時間は短縮するというエコ技術を披露。

なお岡崎先輩にジト目で見られるというご褒美が発生。

かわいい。

11時過ぎに社長に呼ばれたので社長室へ。

ティンと来た子を紹介してくれると聞いていたので、そのことだろう。

失礼します、と入室すると社長と少女が待っていた。

橘ありすさんという名前で、小学4年生らしい。

方針は昨日の通り、とりあえず挨拶してから事務所案内をする。

途中で名前で呼ばれたくないみたいなのを言っていたが、俺は女性の名前をいきな

り呼ぶ人間じゃない。

ちっひはあれよ。

本人から許されているから問題ない。

ちひろさまはめがみです！

軽く案内を終え、岡崎先輩とも合流して仕事に行く前に昼食をとっておく。

前髪ぱつつんで短髪垂れ目の岡崎先輩と背中が隠れるほど長い髪で吊り目がちの橘さん、比べるとかなり相反している。

社長は俺を何処へ向かわせようとしているのか謎すぎて困る。
マジで困る。

話を聞くと、さらに相反しているのがわかる。

岡崎先輩は到達点が不明のまま自由落下状態、橘さんは歌や音楽の仕事のために今は力を溜め込む的な。

まあ、なんでもいいけどね。

俺は手伝うだけなんで。

岡崎先輩が仕事の時間となったので、スタジオへ向かう。

橘さんもどんな仕事をしているか見学したいだろうし、半ば強制的に同伴決定。

来年の春からは車で送ることができると告げて電車で揺られる。

ちなみに未だに俺は電車の切符を買うのが苦手で、都内の大きな駅だと迷う。

乗り換えは苦手。

スタジオ入りしたら挨拶周りついでに橘さんの顔見せを行って、必要そうなら使つて欲しいとオブラートに包んで伝える。

スタッフへの差し入れを俺が、演者さんたちには岡崎先輩と橘さんで持つていく。

俺は他のマネージャーさんとかにも挨拶した後ADさんの元へ。

準備は終わっているが、他の番組で使う罰ゲームをシミュレーションしていたら

い。

俺も折角なので、どんぶり白米を持って商店街に行き、おかずを集るみたいな案を出しておいた。

商店街の許可も面倒なので楽屋とかどうだろうという話になった。

罰ゲームを受ける人が大御所を怒らせないか祈っておこう。

橘さんが戻ってきたので、連れて細々とした挨拶周り。

子供扱いが不満らしいが小学生なんてそんなものである。

むしろ俺ですら子供扱いだし。

お菓子くれるからめっちゃ嬉しいけどね。

岡崎先輩にもお菓子を貰った俺の笑顔は眩しいと言われた。

甘味に飢えてるからしょうがないわ。

もらった苺大福がうまい。

橘さんも表情が和らぐレベル。

かわいい。

苺大福を二人で食べていたら秋月さんに声をかけられた。

プロデューサーとして働いているらしい。

アイドルいなかったじゃんと思つてたら、765プロの社長がティンときた人たちに

声をかけたり、募集したりとかしていたらしい。

これから集まった中で3人を選んでグループ活動させるとか。

今日は雰囲気を感じるための見学にきているらしい。

なるほどなーと感心しつつ、互いに頑張りましょうとか引退ライブ見に行きましたとか社交辞令を交わしておく。

別れたら橘さんが苺大福を全部食べ切ってしまった。

おうふ……。

久しぶりに凹んだ、シニタイ。

なんとか苺大福消失から復帰し、岡崎先輩の仕事を険しい顔で見守る。

橘さんが若干引いている気がしないでもないが、笑う場面ではないので許してほしい。

撮影が一番楽しくない。

ずつといる必要もないが、信頼関係を結んでいる期間なのでなるべく一緒にいるべきだろう。

これが人間を相手にする仕事の難しさよ。

橘さんはちよつと楽しそうだった。

ミステリ好きなのだろうか。

帰る頃には橘さんは岡崎先輩に羨望を浴びせるようになってた。

俺？

橘さんが誕生日祝いに買って貰ったというタブレットを触らせてもらってはしゃいでたら呆れられましたけど？

今後の方針として、橘さんは歌手メインのアイドル寄りを目指してそうなので、そういった方面のトレーニングメニューにしてみました。

身体の成長を考えて内容は軽めで柔軟性や可動域を広げるようなメニューだ。

あとはボイスレッスンとか。

仕事は少な目でトレーニングが多目である。

岡崎先輩は演技指導とかが多いが、体を動かすメニューももちろん行っている。

問題は、俺もなぜか参加していることなんだよなあ。

俺のキレキレなパフォーマンスで何度岡崎先輩と橘さんをふるふる涙目にすればいいのだろうか（溜め息）

9月

夏休みの収入で弁護士への支払いを終えることができた。

ありがとう、346プロ、社長、そして岡崎先輩。

コンビニバイトも若干減らせそうである。

嬉しい限りだ。

生活に余裕が出てくると、精神的にも余裕が出てきてしまった。

まあ、なんだ。

ちよつと失敗した。

アイドル雑誌などを読破していたら、アイドル志望のトキに助言を乞われてキレキレ

のダンスとかちよつとした発声方法を披露した。

クラスで浮いてしまったのだ。

浮かれてた。

完全に浮かれてた。

が、よく考えると高校なんてどうでもいいか。

絡まれるという面倒ごとから解放されたし。

トキにちよつと優しくなったり。

仕事面では岡崎先輩の先月の仕事はかなり多かつたくらいか。

今月からは学校もあるし安定に向かっている。

また、懇意にしているDさんやADさんがドラマやちよつとしたイベントで良い役を
用意できそうだとか。

来年も仕事があるようで有り難いことである。

10月

岡崎先輩の仕事に付いて行ったり、レッスンを見守ったり、橘さんが持ってきたゲームをして過ごした。

そんな中、ちひろさんが持ってきた人生ゲームを息抜きにやろうという話になった。

武内さんも呼んでやったら、俺が最下位だった。

堅実にプレイしていたはずなのに凄まじい借金までこさえてしまった。

気まずい空気が流れる中、人生ゲームはロッカーに封印された。

やけくそ気味にエナドリを5本くらい一気飲み。

きおくがとんだ。

11月

765プロの竜宮小町が破竹の勢いでアイドルランクを上げている。

アイドル業界、というかテレビ業界は水物らしく、1年で簡単に流行廃れが変動するから一気に駆け上がるのも珍しくない。

ただ、売れるための労力というのは馬鹿にならない。

聞いた話だと765プロは人手が足りていないらしいので、竜宮小町に極振りしているっぽい。

他のメンバーのケアに手が足りていないのではないだろうか。

まあ、他の事務所なんでもいいけど。

特筆すべきことは何も起こっていない。

いつも通りである。

ちよつとしたことと言えば、橘さんにぶよぶよでフルボッコにされたくらいか。

2連鎖、最大で3連鎖だと勝負にならないとかちよつと鬼畜ゲーすぎんよ。
岡崎先輩と接戦を繰り広げてしまった。

12月

いつも通り過ぎて特に何も無いわけ。

11月下旬から12月上旬にはテレビ局がクリスマス特集とか収録しているので、空気がクリスマスである。

幸せムードとか見ていると死にたくなる。

気を紛らわせようとライブバトルを眺めにいったら、会場になつている広場にはイルミネーションが設置されており、カップルとか乱立していて死にたくなった。

歌って踊っているアイドル志望の皆様方も荒んでいる感じが半端ない。
死にたい。

ひと月に一度か二度くらい見る機会のあるウサミン星人が、ちよつと目が死んだ雰囲気
気で歌っていた。

普段はかなりいい感じの笑顔をメイド服とセットで届けてくれるのに、今日は死んで
ますがな。

俺が高校に入ってからずっとウサミンはライブバトルに出ていた気が……いや、俺の気のせいだろう。

とりあえず心が荒むのもわかる。

俺もカツプルに呪詛を撒き散らしたい。

あーウサミンいいわあ。

かわいいなあ。

なんか限界を感じつつも諦めきれない空気が、すごくいい。

聞いていると傷のなめ合いに近い感じになるが、癒されすぎて困る。

スカウトの権利を貰ったらウサミンに声をかけにいかうかしらん。

でもアイドルをスカウトできるの来年の春以降になりそうだし、そこまでフリーでいてくれないかなあ。

クリスマスが近づき、街はメリーメリーな空気に包まれていった。

やっと冬休みだと思ったらなんだこれ、死にたい。

武内さんは動じていないという鋼鉄の精神持ちである。

ちっぴからは諦めが感じ……大人の余裕が感じられた。

どうせやることも無いので事務所に来年まで詰めていよう。

事務所自体は大掃除とかもしたが、基本的に年中無休だ。

電話番号だつてやるし、書類整理だつてお手の物だ。

スケジュールだつて他の部署の物を作るし、プレゼン用の資料も用意しちゃう。

仕事に逃げたために片っ端から処理してたら年内で片付ける必要のあるものはなくなつてしまった。

確かに無くなつたのはいいことかもしれないが、今日はちようどクリスマスだ。

手持無沙汰で死にたくなる。

テレビとかピンクの雰囲気がヤバイ。

やめてくれ、幸せオーラは荒んだ生活を過ごした俺にはかなり効く。

武内さんとちひろさんの仕事ぶりを横目にソファでふて寝してたら岡崎先輩と橘さんがケーキを買ってきてくれた。

ジト目を喰らつたが今の俺にはご褒美です。

ちひろさんがコーヒーを淹れてくれたので、必死に冷ましながらケーキをパクつく。

温かい食べ物を食べないで成長したので、猫舌が半端ない。

あと甘味が圧倒的に足りない状態で生きてきたので甘いものが超好き。

ついでに辛い物、苦い物が嫌いとなつてしまった。

俺は女子か。

反して、舌の性能が大して良くならなかつたので、大抵の物なら美味しく食べられるのが利点だろうか。

お礼に青いリボンをあげようじゃないか。

スタツフさんに経費で買ったお菓子を配つてたらお礼でギフト券を貰つて得た物だ。

クリスマスプレゼントっぽいし、悪くないっしょ。

あ、ちひろさんには何もないです。

虹鱒2年目

2年目1月

来季用のドラマ撮影などにしばしば駆けずり回りつつ過ぐす。

クラスは受験シーズンだが、俺はこのまま社員コースに進めるので甘んじて享受すること。

4月から就職なので、ぬるぬるである。

受験シーズンとなると半ドンも増え、その分を事務所バイトに回せるという好景気に突入。

2月はさらに出席する日数が減るし、3月は卒業式で時間が空く。

つまり、コンビニバイトを辞めたわけで。

自由時間が増えて人生が楽しいですへ

下旬に祖母が亡くなった。

わかってたことだが、なんというか凄くくる。

2月

あるわけない遺産相続の問題が発生した。

住んでいたのはボロのアパート、かつかつて生活していた限りなのに。

どうも俺の両親が持ち逃げしたお金などを勘定したらしい。

どれだけ追い詰めても足りないほどに嫌われているようだ。

社長が会社の弁護士を呼んでくれたので、借金を抱えるほどにはならなかったが貯金が喰われた。

あと祖母の骨も持って行かれた。

雀の涙程度で費用を鑑みれば赤字だろうに、相手方は満足気だった。

問題が大きくなりすぎて、親戚が集まり、絶縁状に近い接近禁止の書状を書かされるハメになった。

復讐しようと考えて短絡的な行動を起こすなよってことと墓に近づくなってことらしい。

……ポジティブに考えよう。

面倒な付き合いが無くなったと思えばいいじゃないか。

祖母も祖父と同じ墓で嬉しいに違いない。

そもそも世話になっていないし、これからもなる気は無い。

なんの問題もないじゃないか。

独りで何も無い部屋にいと死にたくなる。

ガスを充満させ、美少女が助けにきてくれるという賭けに出たくなる。

現れたのは糞親だったけど。

誰だよ住所教えたの。

無視して水をぶっかけて外に放置したら、翌朝にはいなくなっていた。

そのまま部屋を引き払う。

リサイクルショップに捨て値で売ったのでほんとに何も無くなってしまった部屋だ、未練もない。

大家さんにはキ印が来るであろうということを告げ、迷惑料にリサイクル代を渡して退室。

ふらふらしてたら無意識にライブバトル会場に辿り着いてた。
ウサミンぐう可愛。

葛藤と希望が入り混じった笑顔が眩しい。

それに比べて俺はぐちゃぐちゃですよ。

死にたい。

いや、ほんとに死にたいわけじゃないけど。

あれだよ、ほら。

死にたい死にたい詐欺だ。

ほんとだよ。

死んでもしょうがないってわかってるし。

二度目だよ、俺。

わかりきってることをやってもしやあないんだ。

……はあ。

引きずつてもしょうがないんだ、それもわかってる。

わかっているのと、やるのでは大違いなわけで。

媚びた笑みも浮かばないわ。

3月

なるべく迷惑をかけないように普段通りに振る舞って過ごす。

住所不定になったが、まあ、いいんじゃないかな。

拘っても引きずるだけだ、吹っ切れて丁度いいくらいだ。

岡崎先輩だが、2月に何があったのかアイドルになると宣言してきた。

やりたいこととか幸せについて真剣に考えていたのか、前向きな空気を醸し出している。

とはいえいきなり切り替えるのは無理なので、今のままの路線でゆっくりとアイドルに舵切るような感じでいこうかと提案しておいた。

あと珍しく岡崎先輩から提案があつて、アイドルになったら先輩じゃなくなるから名前前で呼んでほしいとのこと。

泰葉はかわいいなあ！

橘さんも気を使ってくれているのか、俺が一人の時間には一緒に小説を読もうと誘ってくれる。

嬉しい。

嬉しいのだけど、人がじゃんじゃか死ぬタイプのミステリもどきは精神的にくるのでやめてほしい。

かわいい。

かわいいけど、つらい。

卒業式にトキと会う機会があった。

受験から解放されたトキは激流を征したのか、凄くいい雰囲気を放っていた。

涙の別れとか玉砕覚悟の告白とか色々あったが、全てスルーしてた。

渦中の人なのに。

天然というか、目標に突き進む黄金の精神持ちなのではないだろうか。

で、彼女は大学に進学してアイドルになるという。

なる、ということはプロダクションも決まっているのだろう。

スカウトしたかったからちよつと残念である。

今なら好意に値するのに。

4月からアイドルのプロデューサーも行っていくようにと社長に言われた。

で、ティンとくる女の子を見つけてくるようにとも。

いや、あの4月からなのに3月に見つけるってどうなんですかね。もっと早い段階から……いや、いいです。

ウサミンがメイド喫茶でバイトしているらしいので、これは機会をものにするしかないね。

ということで名刺を持ってメイド喫茶に突入。

萌え萌えキュンされながらスカウトしたら店から追い出された。

武内さんとちひろさんを連れて突撃したら出禁になった。

なぜだ。

最終手段として橘さんと泰葉をつれてライブバトル終了後にスカウト。

ちよつとだけだから！ちよつとだけだから！と事務所に連れ込む（意味深）

そして施設とか運営方針を説明し、今後の展望を見据えた話をしてウサミンに契約書を渡す。

三顧の礼までしたんだからイケるっしょと確信していたが、保留された。

ま、まあ、そういう選択肢もあるからね。

後日、ウサミンが書類を書いてきてくれた。

彼女の的に最期のチャンスらしい。

出身はウサミン星、年齢は17歳に決めたとか。

……うん？

……まあ、可愛いからいいか。

4月

バイトから正社員というヴェイクトリロードを駆け上がった俺。

だが、そんな勝ち組街道を爆走するも突然の障害物が出現する。

障害物とは契約についての各種手続きである。

判子はあるが、住所が無い。

保険にハイレナカッター（完）

そもそもボロアパートのときなんて煎餅布団と毛布くらいしか寝具が無かったが、事務所にはリクライニングシートとか、もふもふした毛布とかあるので、ぶっちゃけ快適だった。

仮眠室にはベッドがあるが、身体が慣れてないので寝れなくなっただし。

机に伏せるか椅子を傾げるか床に毛布とか敷けば眠れる体質なので睡眠については事務所で問題ない。

取り上げられたり売ったりしたので、家具や私物などもほぼ一切ない。ということ、住居の必要性が皆無であった。

なので2月の半ばくらいから会社に寝泊まりしていたので俺的には問題なかったが、ちひろさんなどの会社サイドにとつて非常にまずいらしい。

とりあえず手続きできそうな書類だけでもと賃貸を探す。

が、またもや問題発生。

祖父母用の仏壇を買っていたので恥ずかしい話、給料すつからかんだ。

まあ、弁護士がやり手だったのか、骨ごと持つてかれたんだけど。

なので賃貸契約しても光熱費とか払う金がないんですが、みたいなことを相談してたらちひろさんの目が死んだ。

一緒に手続きをしていた武内さんも首に手をかけて言葉を詰まらせた。

社長、床に崩れ落ちる。

紆余曲折はあったが会社まで徒歩15分くらいの場所に住居を借りることになった。なんと補助金も出してくれるとか。

太っ腹だわ。

実に有り難い。

まあ、地面と布があれば眠れるけど、雨風には勝てないしな。

ちなみに住居や住所を移したりと手間がかかったがなんとか諸々の契約は終了。保険などはお金の払い込みの関係で責任開始日が来月からとなるらしい。

そんな感じで雑務が終わったので仕事に集中できる。

今月から俺も武内さんも本格的にプロデューサーとして動き始めるっぽい。

結局、やってることはマネージャーだから特に変わりはないんですけどね。

なんて気楽に考えていたら武内さん、警察に職質を受ける。

アイドルに向いてそうな人をスカウトして、都心に来たらしい。

泰葉の仕事先のスタジオ近くだったので、俺が間に入ることですなきを得たが。

あの長身強面で名刺を差し出しながら「笑顔です」と言われたらしい。

なるほど、ちよつと怖いよな。

相手に謝ろうとして、アイドルとしてなかなかいい感じであると感づいた。

名刺を差し出したら卑猥な仕事のキャッチと間違われた。

いや、健全な活動しかしてないからね。

俺が職質受けそうになり、それに困った武内さんが首に手をかけ首を傾げていると、

待っているのに痺れを切らした泰葉が来てくれた。

泰葉を見たことがあったのか、やっと話を聞いてくれることになった。

城ヶ崎美嘉（じょうがさき みか）さんという名前の今どきの女子高生だった。

胡散臭そうに見られるので、武内さんに任せて帰ることにした。

スカウト活動以外の仕事だが、泰葉はドラマの主演を貰ったので、アイドルとしての活動をメインにできるのは来年くらいかなあと思ったり。

社長も今のままでも成功であると言えるから無理する必要はないと言ってくれたし、時間をかけたいところ。

今のところはバラエティ慣れさせるために、無茶振りが無い番組やラジオを選んで番宣させていく方針だ。

橘さんは小学生から中学生向けの理化学実験の番組などに出してみた。

「調べたので知ってます（キリッ）↓「ほわあ……（お目目キラキラ）」が可愛いから俺が好んで出してただけだけど、意外と評判いいらしい。

あとはお年寄りと遊ぶ企画とか。

「お手玉なんてやらなくてもタブレットがありますから（キリッ）↓「見てください！三つもできるようになりました（お目目キラキラ）」なんてのも評判がいい。

先月スカウトした待望のウサミン星から来た安部菜々（あべ なな）さん、名前呼びでいいというので菜々さんと呼んでいるが、トレーニング漬けの毎日にしてみた。

動きも悪くないが、独学が多かったために足りない部分が多い。

ダンスや歌はいいのだけれど、体力とか筋力が怪しい。

動きのキレを付けさせたいので体幹も鍛えてもらって、何事にも動じないようにメンタルレッスンもセットしてみる。

俺は彼女をパーフェクトウサミンに育てあげたいのだ。

今は土台作りだと仕事を回さなくても焦らない何処か悟った雰囲気とアイドルへの情熱と憧れを兼ね備えているので、5年以内には最上位の人気を獲得できると確信している。

というか、成否だけの話なら来年には成功しているだろうし。

出来なかつたら俺は無能以下のレッテルを貼られるレベル。

逸材がなんで転がったままだったのか、年齢が……いや、そんなわけないか。

とりあえず、疲れてへバツていた菜々さんに「17歳の平均より結果が……いや、まさか……」と煽ると涙目でふるふるしながら再起動するのが可愛い。

これだけで菜々さんをスカウトした甲斐があるというものだ。

ちなみに菜々さんは、会社の一階に併設されているカフェで働くことになった。

レッスン費などは免除されているが、やはり生きていくには働く必要があるのとこの。

……俺よりも給料がいいとか気のせいだから。

……そもそも黍葉も橘さんも俺より給料がいいとか幻覚だから（震え声）

あとは765プロと961プロの確執が深まったとか、そんな話くらいか。

どうも961社長が自ら選んだ新人アイドルであるプロジエクトフェアリーの3人が、事務所に嫌気が差したとか765プロに引き抜かれたとかで、765プロに移籍したことが原因らしい。

秋月さんが引退したときに、途中入社したプロデューサーによるものでかなり敏腕なんじゃないかって話も聞いた。

赤羽根さんだっけか、ほとんど面識ないんだけど。

育ったアイドルを横から奪い取っていくことも多い業界だ、優しそうな見た目だからといって油断は出来ない。

そもそもゆとりDQNな見た目の俺と暗殺者で忍者なびにやこら武内さんなんて見た目からして人望ないし、気を付けるに越したことはない。

今回は765プロに持ってかれたが、961プロも奪う側なので注意しなければ

……。

敵しかいないとか怠い。

とりあえず、どちらの肩を持ってもいいことは無いだろう。

俺が所属している346プロはアイドル面は弱いが、他の部分が強い大手なので、関わらなくとも行けそうだし。

話を集めて渦中から避けつつ仕事していくとしよう。

あとはシンデレラプロジェクトの告知を準備して、今年の秋から募集をかけて、来年の春から開始していくということで武内さんと合意。

俺はバイト上がりだし、見かけ上は1年先輩で年上の武内さんにプロジェクトを主導してもらうことになった。

サポートに徹するので不備は無いようにしていきたいものである。

ちなみにシンデレラプロジェクトはシンデレラガールを生み出すために社長が思いついたものらしい。

シンデレラガールとはその年で最も人気のあるアイドルに与えられる賞的なサムシングだとか。

人気というか、知名度が最も重要になってくる話だが、全くピンと来ない（震え

声)

無駄な賞でも作ったのかと思っていたが、大小に依らずアイドルを保有しているプロダクション全体によるものらしい。

人に好かれてこそアイドルということ、自分の持っているアイドルが一番人気であるとアピールするためっばい。

なんてしよばい理由なんだ……。

IA（アイドルアカデミー）やIU（アイドルアルティメイト）とは異なり、今年から発足するので今のところ大した権威は無いが、将来的にグツとくるに違いないのでやってみようというのが社長の意見。

こんなふわふわした理由で企画して実行できるとか、社長による会社への影響力が強すぎじゃね。

そんなこんなで一応の方針は決めたので解散と思つたら、アイドルを希望しているという子がいるというので面接を行うことに。

社長が直々に行うつもりだったらしいが、時間があるならY o u やつちやいなよと俺に無茶振り。

まあ、いいんですけどね。

まだ大した募集をしていないのに346を希望するとは変わり者なのか。

シンデレラプロジェクトの結果によっては先見の明があるということになりそうだけど。

ダンスなども見たいので広めの会議室で審査を行うことにした。

待っている間に下手でも可愛くてやる気があれば合格かな、と考えてみたり。

可愛い子ぶって口を開かないとか、変に動きを小さくするとかだつたら不合格だけども。

個人的には直向きで癖がなくてかわいいのが一番好みだけど。

才能も無くても構わない、誰しもある程度まで育つことができるし。

武井さんは笑顔が魅力的か、笑顔を生み出せる子が好みっぽい。

社長はちよつとでも才能があればいいとか。

資料読んでなかったと己の失態を思い出す。

が、本人から逐一聞けばいいかと放り投げ。

ノックされたので入室を許可すれば、入ってきたのはトキであった。

なんでこんな高レベルの娘が来るんですかね。

ま、まさか道場破りか……？

各プロダクションの面接を潰しているのかと慄いていたが全く違ったようだ。

話を聞くと、去年までは各プロダクションのオーディションで落ちまくって諦めかけ

ていたが、大学に入学してからまた目指し始めたらしい。

去年は自信なき気だったし、まあ、しょうがない。

面接はすぐに終えた。

だって意味ないし。

本名は十時愛梨（とときあいら）という……し、知ってたし（目逸らし）

ビデオカメラで録画しつつ、ダンスや歌も見せてもらう。

独学だったので能力は若干怪しいが、質はマジで激流をスキップで駆け上がるレベルなのだが、うちでいいのだろうか。

実績ないし、他に推薦を出してもいいけどと言ってみるが、346を強く希望してくれた。

勝ったな（確信）

合格を告げて、手続きをちひろさんに委ねる。

来年のシンデレラプロジェクトに参加させるよりも今年から活動させていくことにした。

社長に逸材つすよとドヤ顔。

むしろ3年以内に人気が出ないで失敗したら首を吊ります（真顔）

そんな感じで社長にやる気を伝えたら、HPを更新する。

アイドルの紹介ページを作ったはずだが、ちよつと違和感のある出来になっているが問題ない。

新入りのトキをアップし、録画していた自己紹介や踊り、歌を上げる。

ちなみにこの紹介ページだが、なぜかアクセス数が多いのは俺や武内さん、ちひろさん、社長、役員たち、上下階の部署のスタッフを総動員して作った「ばかつこいい動画集」だ。

内容としては会社内を贅沢に使った超大型ピタゴラススイッチ（試行72回）、全員でリトライしまくって撮った無駄な技術と凄まじいまでの連携を駆使してゴミ箱に書類を捨てる行程（試行334回）の二つだ。

次いで、砂鉄スライムが磁石を追いかける様を見て橘さんが「ほわあ……（お目目キラキラ）」となった動画である。

アイドル紹介……？

翌日、会社の受付さんにフランスパンを貰ったので、軽く振り回しながら泰葉の現場へ向かっていると、「そのステッキ素敵ですね」と女性に話しかけられた。

いや、これライトセーバーなんですよと声真似で無駄にリアルな効果音を付けて振る。

なにが琴線に触れたのか、女性もはしやぎながら手で鉄砲の形を作って「ばきゅんば

きゅん」と撃ってきたので、それを弾く音を再現して遊んでみたり。

その後、なぜか付いてきた女性を連れて現場に行き、泰葉と橘さんを連れて事務所へ。受付をナチュラルに通り過ぎ、ちひろさんにお茶を頼んで社長に託す。

十数分後。

社長は彼女を大層気に入ったらしく、高垣楓（たかがき かえで）さんはそのままアイドルデビューを果たした。

どうということなの……。

アイドル候補の人たちも増えてきたので、人員を増やせないっすかねと社長に相談すると事務などのバックアップは増えるらしい。

が、マネージャーやプロデューサーは増やさないようだ。

ティンときたら増やすとは言っていたが、ほとんどないだろうとも。

なんというか、社長が持つ理想のアイドルのためにはプロデューサーの質が大事らしい。

シンデレラガールは特に重要だとか。

俺にはわからない話だ。

今は余裕で回っているが、あんまり増えると厳しいと伝える。

一から十まで手伝うと向上心が育たないので、幾らか目を離すことも大事とか。

セルフプロデュースまで行くと俺らがいる意味ないし、目をかけすぎても駄目とか、難しすぎなんですそれがそれは。

話は変わって、俺の家族関係は問題なくなつたか聞かれた。

母方から絶縁くらつて、母親に水を浴びせた以外は特に問題ないです（死んだ目）

父方からはアクシヨン無いです（死んだ目）

迷惑かけてすみません（死んだ目）

社長もちよつとどもりながらも大事なかつたらよかつた的なことを言ってくれた。

ありがてえ。

社長には娘さんも息子さんもないらしく、良かったら養子にどうだみたいな慰めもしてくれた。

いい人だわあ……。

若輩者なのでもつと仕事ができるようになったら前向きにくみみたいな感じの社交辞令で返しておく。

シンデレラガールを生み出せたらきつと、みたいなことで最終的にお茶を濁す。

まあ、その、なんだろう。

上手く言葉にできないけど、凄く嬉しかった。

社長と話したらその日は休みなさいと言われたので、15日ぶりくらいに帰宅してみた。

家に帰るといふか、掃除しにちよつと顔を出す感じなのだけど。

扉に鍵がかかかってなかった。

やべえ、契約してから鍵かけてなかったことになるじゃんと内心で焦って中に入ると見知らぬ男という母だった人。

これほどまでに人の顔を見たくないと思ったことはなかった。

子供には親の扶養義務があるとか、借金で困っているとか、そんなの俺には関係ないだろ。

出ていくように告げる。

なおも言いつくろつて縋ってこようとするが、次は警察を呼ぶとだけ告げて追い出した。

ヒステリックを起こしているが、関係ない。

騒いでいる男女を見ながらスマホを操作し始めると、何処かへ消えていった。

俺だけになった部屋は物理的に汚れていたし、落ちない汚れがこびり付いたのかのよ

うに感じた。

さつきまでの声も冷え切っていて自分が出したものとは思えなかった。

みんなの前で出したらヤバいなあとおもってたらなんか気持ち悪くなってきた。

悪臭が籠りすぎなんだよ、この部屋。

窓を開いたらもうね、吐き気で流しにおろろろろ、である。

出すものがなくなってもおろろろろ、である。

胃液とか吐くのがつらいんだわ。

つらい……。

流石に部屋にいられないので会社に帰る。

あの部屋はあとで何とかしよう。

顔が真っ青で心配されたが、拾ったきのこ食って腹壊したせいだと言ったら納得して
た。

どういふことだ橘ア!!

所属アイドルはだいたい帰っていて、橘さんが最後だったので問題なかった。

ちっひにドリンクを渡されるも飲む気が起きない。

毒薬は無理なんです、と冗談を言うもすでにいなくなっていた。

で、社長が激おこで登場。

問題が起きたら会社の弁護士がいるから心配しなくても大丈夫みたいなこと言われたけど、その人この会社のためにいるんじゃないや……。

翌日、とりあえず部屋をなんとかしないことにはと再度帰宅。

帰宅といいたくないが、住所がここなのでしょうがない。

部屋に入ろうとして、母だった女が現れた。

内心ではキエエエエエアアアアアアアアアアアアアアアア!!と大絶叫だ。

扶養義務がどうかの話をしにきたらしい。

しかも警察を呼んでも家族のことは民事で無意味ですよ〜みたいなタイプの若い弁護士まで連れてきた。

家族でもないし、民事で無意味ってどういうことなんですかねえ……。

もしかしたら家族の愛に目覚めて謝罪にきたのかと期待して、部屋の中で話し合いを試みる。

昨日から窓を開けっ放しだったので、春先は寒い。

腹が立つので弁護士にはゴムが散らばっている特等席に座ってもらった。

布団、高かったのに……。

結果として、期待した俺が間違っていた。 q

この二人は話し合いに来たのではなく、脅しに来たのだ。

無駄に大きな声で怒鳴り散らすわ、身振り手振りを大げさにして驚かそうとしてくるわで最悪だ。

たぶん、迷惑になるまえに譲歩を引きずり出そうってタイプの弁護士だろう。

申し訳なく思いながら会社に電話。

弁護士連れてちひろさんが来てくれるらしい。

……この部屋にか。

いやいやいや、無理だわ。

男の人呼んでーと伝えたら別の人が来るらしい。

で、社長がきた。

勘気蒙りまくりの社長と弁護士。

予てから集めていたという俺の素行調査結果とか、過去の資料によって「養育を放棄しておまえは何言っているんだ」とカンタンロンパされてフィニッシュだった。

俺のチラシの裏とかノートの切れ端で書いた日記などを見せたあたりで話が違うじゃねえかよ！と相手の弁護士が叫んだ。

知らんがな。

民事で接近禁止令を争って縁を終了しようということでも幕引き。

なおも騒いでいたが、これ以上は刑事事件に発展するという話になるとやつと静かになった。

母だった人が、涙ながら親子の縁はくとか、不本意だったとか、寂しくてやったとか
e t c.

あ、もう興味ないんで大丈夫ですと伝えておく。

産んでもらったことは感謝しているけど、それ以上でも以下でもない。

接近禁止さえ守ったなら好きに生きていいですと笑顔で言う。

そのほうが互いに幸せだろう。

親は最初からいなかっただと思つて暮らすことにすると伝えた。

俺を見てて何を思ったのか、会社の弁護士の方がぶるぶるしながら母だった人と弁護士に説教して「恥を知りなさい！」と締めくくった。

右京さんか何かだろうか（現実逃避）

騒動を引き起こした二人が帰っていった。

部屋は何でも屋さん辺りを呼んで掃除してもらつて引き払うことに。

帰りの車の中、情けなさや申し訳なさで泣いてしまった。

社長と弁護士の方も貰い泣きなのか泣いてた。

まあ、泣いてくれる人がいるというのは一つの幸せなのかもしれない。

明日からは悩まされることもなく、心機一転して仕事できるだろうし。色々と忘れることにしよう。

プロデューズする俺が暗かったら伝わってしまって、上手くいくことも失敗するだろうし。

俺を引き立ててくれたのが社長で良かったですと感謝を伝えた。

社長がまた泣いてた。

実母に放火されてた。q。

保険は5月からなので効かない。

親族なので賠償責任が発生するに違いない。

サンキュー346、グッバイ人生。

辞表もって土下座コンボくらい今の俺なら余裕だから。

事件を起こした身内がいるプロデューサーなんて論外だろう。

アイドルの障害物になるくらいだったら自ら爆散するスタイルで余裕のフィニッシュです。

行くあてもないから糞ゲーの元を断つために電源切るしかないですよね。

人(自分)を殺す覚悟(キリッ

なんか転生オリ主っぽくなってきたじゃん。

ブルってきたぜ(震え声)

4月下旬

放火とか、弁償する金がない。

自殺だと会社に迷惑がかかるので、蒸発しようかと決意。

ついでに賠償責任とか有耶無耶になることを期待してみたり。

金がないので公共機関を利用して遠くにいけない。

情けなくて笑いが込み上げてきた。

借金は、借りた先に迷惑がかかるのでできない。

徒歩か。

徒歩なのか。

死ぬまで歩くというツライ拷問が、現世の罪を贖うために必要なのかもしれない（遠い目）

川に沿って歩いていけば、山に辿り着ける可能性が存在している……？と大雑把に行動方針を決めていると、近くの広場でライブバトルが繰り広げられていることに気付いた。

足が勝手に向かってしまった。

未練がましい話である。

こういったライブバトルだが、会場などの運営はアイドルプロダクションが出資していたりする。

オーディションだけだと見つからない原石が見つかるかも、みたいな話だがあんまり成功したという話は聞かない。

出資プロダクションが優先権を持っているのでライブバトル直後や最中にスカウトできるのだ。

ちなみにウサミンは346や他のプロダクションと一緒に出資しているところ出身

である。

出資しているプロダクションを狙ってライブバトルすることで、オーディションを勝ち抜くよりもスカウトされやすい可能性あったりなかったり。

まあ、このライブバトルが961プロの出資であるという話ただけだけど。

ちなみに現在は961プロと765プロがガチバトル中だ。

フェスティバルでもプロダクションマッチでもないのに、こいつらは何をやっているんだろうか……（ドン引き）

しかも一般応募もいるので酷い蹂躪劇になっている。

アマチュアの草野球相手に1番：石井琢 2番：波留 3番：鈴木尚 4番：ローズ

5番：駒田 6番：内川 7番：進藤 8番：谷繁 9番：斎藤隆のメンバーで試合

やっているようなものである。

アマチュアのアイドル志望は冷たくなって発見されるだろ、こんなの。

やる気を削ぐのが大手プロダクションのやることかよ！

アピールが終了した参加者の一人に声をかける。

というか、765と961の争いに一人を残して脱兎として逃げたのでこの子しかないなかった。

帰り支度もしていたが、問題ない。

どうせ観客も他のプロダクションも、スカウトマンだつて見ていない。

961プロの優先権も無効になっただろう、俺が声をかけるには都合がいい。別に輝く才能を見つけたとか大手に挑む精神に感動した、とかでは全くない。

負けて涙目でふるふるしてたのを気に入っただけである。

弱つたところに付け込み、輿水幸子（こしみず さちこ）さんを瞬殺でスカウト成功。もつと人を疑うことを知った方がいいと教えておいた。

カワイイボクを案内してくれてもいいんですよ！とごり押しされて、事務所に一緒に向かう。

断つてたら涙目でふるふるされたので仕方ないね。

事務所に戻る電車賃で財布が枯渇しかけています、まあ、いいんじゃないかな。というか、俺はなんでスカウトしているのだろうか。

あーもうめちやくちやだよ、と思考がこんがらがって意味不明である。

輿水さんがカワイイアピールを同意して受け流す。

カワイイを連呼しているくせにちよつと自信がない感じが伝わってくる。

これはこれで魅力的かもしれん。

結構テキトーにスカウトしたけど、もしかしたら凄く可愛いんじゃないだろうか。

持ち味を活かしくいけど。

会社に戻り、すみませーんアイドルスカウトしてきましたーと告げる。ちっぴに張り手くらった。

火事の後に辞表と土下座して行方くらましたのが悪かったらしい。

辞表は受理されていないのでプロデューサー業もそのままですよ、とのことである。

いや、マスコミが食い物にしそうな話題なんですがと伝えたが無意味だった。

社長も俺なら大丈夫とか言い出したし。

変な信頼がツライ！

輿水さんに詳しい話をし、手続きを行っていく。

山梨からアイドルになるため、東京まで来たらしい。

親戚の家にお世話になっているらしく、迷惑をかけたくないとのことで女子寮に入る
ことになった。

961と765の戦争に巻き込まれた理由としては、プロ相手に俺TUEEEを夢
見て蹂躪されたらしい。

初戦であれに飛び込むとかひどすぎて逆に笑う。

普通は自分の持ち味を活かせるような参加者のときだけ戦い、無理そうならバックレ
るのだが。

バックれてもいいことを知らなかったのか、輿水さんが崩れ落ちた。なぜか菜々さんも崩れ落ちてた。

5月

放火の顛末だが、賠償責任が母方の親戚へと飛んで行つた。

母だった人がこつちに來たのも、対応を面倒がつてこつちに送り込んだことが原因のようだ。

接近禁止なのに接近してきたことを理由に右京さんっぽい弁護士の方がなすりつけてくれたらしい。

そもそも、接近禁止にしたくせに火の粉を振りまいているんじゃないとガチ切れしてたとか。

まあ、そういうわけなので改めて接近禁止である。

前に來た弁護士も一緒に詐称か何かで捕まったとか。

ひどく寂しい結果だった。

ついでに母だった人に俺の住所を不覚にも漏らした人がいるらしい。

社長がガチ切れでヤバイ。

ヤバい。

まあ、嫌なことは忘れるに限る。

忘れられるように仕事しよう、ということでもある。

同様に社長と武内さんも忘れようとしたのかスカウトした結果、かなり増えてきたんですがそれは状態である。

武内さんなんて放火事件の際に、現行犯逮捕してくれた婦警の方までスカウトするミラクルを起こしていた。

休暇中で東京に来ていた片桐早苗（かたぎり さなえ）さんというらしいが、まあ、いいんじゃないかな。

ちなみに社長と武内さんが職質を受け過ぎなんだけどいいのだろうか。

時には交番まで連行され、俺がちひろさんで迎えに行く面倒になってきた。

俺の放火事件の影響は意外と少ないらしい。

調べていくと掌を返したくなるからとか、よくわらん理由だ。

名前とか週刊誌デビューしたが、右京さんもどきがガチ切れして収まった。

そんなことよりも765と961のほうが大問題状態っぽい。

業界内のパワーゲームが熾烈を極めているらしく、弊害として仕事が減ってしまっ
た。

無理に突っ込んで被害を被るのもごめんだし、俺の問題でホームページが炎上したり
メディアで叩かれても困るので、アイドルの皆に謝りつつ、レッスン漬けである。

あ、放火事件と炎上をかけてみたんだけど、どうだろうか（爽やかスマイル）

そういうわけなので、眼中に入らないようにこそそと動くことにした。

日程に余裕があるアイドルを連れて地方のローカル番組やCMに出ることを今後の
方針にしようかなと。

あとはラジオとか、地方のイベントなどで歌ったりも必要だろうか。

ついでにちようどいい機会なので、泰葉もアイドルとしての活動を強めておこう。

地方から何からの仕事に出向くのは、知名度アップしつつ、業界の厳しさを知るとい
う目的もあつたりなかったり。

華やかな舞台なんて一握りで、だからこそ尊いのだと知ってほしいし。

だからこそ将来、大きな舞台に立つことができたとき感動も一入だろう。

そこまで耐えられたらという枕詞も付くけど。

レッスンも行うけど、仕事も行う。

疲労を読み取ったらすぐに休ませるが、限界まで体力を振り絞るスタイル。レッスンに途中で乱入して涙目ふるふるさせまくってみた。敗北を知りたい。

6月

経理の人が来た。

施設費払えよおらあ！ってことらしい。

バイト時代のも徴収されることになった、とても高いお……。

払えないレベルなので分割でなんとか首を繋げる。

クリーニング代とかの諸経費も合わさって給料が瞬殺された。

流石にくたくたのスーツやワイシャツだと苦勞している感じは醸し出せるが、清潔感を失うし。

アイドルを売る仕事でさすがにそれはまずい。

真面目な話、社食が無料じゃなかったらマジで死んでたかもしれん。

今はちよつとだけ貯金できるし（涙目）

ぶっちゃけ、昔はパン屋さんでパンの耳を貰ったり肉屋さんでリードとか貰ってもきつかった。

野菜が足りなくて野草にお世話になった記憶があったり。

まあ、野草だと栄養素が足りないっぽいんだけどね。

給食とコンビニの廃棄品って偉大だな。

菜々さん、テレビに映れるとはしゃぐ。

地方行脚だが、問題なく活動できたのは菜々さんとトキである。

なぜか学生なのにフルタイム可能の菜々さんと授業を一日に圧縮したトキが働きまくりである。

レッスン、仕事、休憩をこり押しで進める。

泰葉はドラマがあるので時々出演しているが、酸いも甘いも知っているという言葉通りに仕事をこなしていった。

橘さんは小学生なのであまり遠出できず、レギュラー番組の無い空いた時だけ仕事に出演して「ほわあ……（お目目キラキラ）」を披露してくれた。

新入りの方々はレッスンでへばって遠出に向かず、なぜか元気な高垣さんは地方の地酒を飲み過ぎるので連続稼働不可。

意外といつては失礼だが、城ヶ崎さんはかなり真摯に取り組んでいたのになかなか好ましいし、読者モデルの仕事は評判が良かったので今後も伸ばしていくとしよう。

興水さん？ うざかわいかったです。

特に問題は無かった、と言いたいが多発した。

出先で武内さんが必ず一回はスカウトしていることだ。

あと何回、この人は暗殺者じゃないと説明すればいいんだ。

まあ、成果はまずまずなので文句ばかりでもないけど。

牧場おっぱいとか、なつきちとか、アナウンサーのわかるわさんとか、そんな感じの方々のスカウトを成功させてきたので文句も言えない。

しかし、あのローテンションと強面でどうやってスカウトしたのか。

俺もスカウトしたけど。

荒木先生が可愛すぎたのが悪い。

事務所にアイドルとして所属している人たちを集める。

集まっている会議室の扉を開き、トキとか菜々さんを筆頭に全員が順々にC D デビューするからと告げて資料を置いて扉を閉める。

全体的な準備は水面下で進んでいたの、あとは出すだけだ。

予定は9月以降くらいから。

まあ、みんなからしたら突然湧いてきたと思うかもしれないけど。

全く伝えてなかったし。

なんか騒ぎ声が聞こえたけど、武内さんとちひろさんに後は全部託した。

泰葉も出すけど、アイドルとして認知されていない節がある。

ドラマ出すきたらどうか。

困ったことに、俺には彼女の今後が全然読めない。

経験が足りないのだろうか。

7月

祭りに呼んでくれるので、なるべく突撃。

ちよつと予定と乖離しているんだよなあ。

俺の予定としては緩いバラエティで菜々さんを「電波キャラを目指して失敗する真面目な常識人」枠として進めるはずだったが、各地のイベントだとアピールが少ないので電波が残ってしまった。

ぐぬぬ……。

武内さんと相談するが、このまま行くしかないという結論しか出なかった。

別に女性から嫌われているというわけでもないのだが、俺はもつと菜々さんに正しく輝いて欲しいわけで。

現状の17歳(?)とかいう弄りによる謎の輝きは不本意かなと。

菜々さん本人は喜んでいるが、なんかもによる。

トキは王道を爆走中である。

レッスンと仕事を率先して行っていくという無敵っぷり。

体力と活力に満ち溢れて半端ないことになっている。

出先でも俺とダンスレッスンやボイスレッスンをを行うあたり、凄まじい修羅である。

菜々さんは疲労でダウンして倒れている中でも俺の動きに付いて来ようとしているのがすごい。

結局涙目ぶるぶるだけどね。

敗北を知りたい(ドヤア

飯食つてたら上条春菜(かみじょう はるな)さんに「まあまあ眼鏡どうぞ」されて、

視界が歪んでカレーを零した。

怒ってないです。

お米を無駄にってしまったことに怒ってないです。

最上位レッスンに参加させて俺が常に上回り続けるという嫌がらせで涙目ぷるぷるにしておいた。

彼女の眼鏡愛に俺の米愛が勝った瞬間だと思っただがどうだろうか。

敗北を知りたい（ドヤア

765とか961とか876など、最近テレビを賑わせているアイドル事務所が限られたパイを取り合っているとか。

スタッフさんと遊んでたら教えてくれた。

他のプロダクションは遊ばないらしいのでつまらんとか。

いや、普通は遊ばないだろと思っただが口にはしなかった。

失言したADさんが余ったワサビシユークリームを食わされてたし。

学生の休み時間的なノリが健在という現実。

人気のあるアイドルはちよつとしたドラマの仕事やバラエティ、情報番組などよりも

視聴率の高い歌番組や老舗バラエティに集中しているとか。

ドラマも月9などなら人気が半端ないのだが、微妙な時間帯だと不人気っぽい。

今は8月に行われるイベントであるFUJISAN ROCK FESに向けた活動が熱いらしい。

765、961などは最終目標をIAやIUに置いておいて、そこまで駆け上がるために大きな番組は選考が荒れに荒れているようだ。

961が金を流して765が情で引き止めるといふバトルが繰り広げられている。

うちは参加できるほど練度が足りてないので見守るだけである。

大きな番組は用意できないが、ちよつとした歌番組なら掛け合ってくれろという話をしてくれた。

有り難い話だ。

真顔でお礼を言って回った。

やっとCDが出せそうで、モチベーションの維持にもつながるに違いない。

やる気だつて無限ではないし。

あとはどうでもいい話で盛り上がる。

俺とスタッフさんたちのリハがキモ上手いと動画で評判になったらしく、アクセス数が伸びているらしい。

何アツプしてんだこいつら（遠い目）

ちなみにリハーサルは顔に名札を付けて台本を通しでやっていくだけなので顔は映っていない。

俺が黍葉の物まねして、他の演者をスタッフさんがやっているやつである。

全員の顔や体格以外の再現率が可笑しなことになっているのがウケているとか。

物まねと言えば、高森藍子（たかもり あいこ）さんがラジオのMCをやるときに緊張していたので初回到声真似した俺も混ざったことがあった話なのだが。

ゆるふわタイムによって時空が乱れ、高森さんが二人いたように聞こえたというリスナーからのお便りがあった。

都市伝説か何かか。

あとはトキもラジオのMCをやるときに緊張していたので初回到俺も混ざったことがあった話なのだが。

トキ同士が会話してハモって歌うという謎の放送がすごいウケたらしい。

生放送でおかしなことをやっているアイドルたちと一時期呼ばれていたとか呼ばれていないとか。

ちなみにゆるふわタイムによる時の乱れが原因という話まで持ちあがった。

まあ、そういうのでも注目を浴びていると思うと嬉しいね。

……喜んでいいのか？

読毛撮影があつたので、城ヶ崎さんや泰葉、なつきちの3人に付いて行つた。

木村夏樹(きむら なつき)さんが本名だが、氣付いたらなつきちとみんな呼んでた。

武内さんもなつきちさんと呼んでたから染つたのかもしれない。

帰りは4人に増えていた。

ホラーか。

8月

佐久間まゆ(さくま)さんがアイドル志望となつた。

まゆって呼んでいいらしい。

先月の読者モデル帰りに増えていた人物である。

最初はあんまり好きになれそうにない空気がつたが、最近はやる気で満ち溢れてい
る。

いや、外見は穏やかなのだけれど内面が凄く好ましい。

シンデレラガールになりたいという情熱が感じられて凄くいい。

体力とか筋力とか、問題点は多いけど。

焦りも無いようなので時間をかけて育てたいものだ。

ちなみに、身長が低くて小柄なので近づくとき背伸びして視線を合わせようとしてくれるので凄く可愛い。

仕事面だが、FUJISAN ROCK FESの準備などに参加するアイドルがテレビからフェードアウトした。

ほんの短い期間だが好機である。

その間にメディアへの露出を増やしてアピール。

CD出すよーみたいなき感じのことを告知して、961とか765が戻ってきたのでフェードアウト。

地方に顔を出しつつ、本格的にCDの準備だ。

各自歌の練習、ダンスも猛練習、ジャケットも作る。

で、来月から順次発売。

日程がひどいことになっているが、プロデューサー歴1年の俺と2年の武内さんのコ

ンビだから仕方ないね。

というか、CDいけますと社長に告げたのが悪かったか。

喜んだと思つたらこれだからなあ……。

並行してシンデレラプロジェクトの告知も行う予定。

CDを売ると同時に宣伝しておくことで知名度が上がる、といいな。

来月から上位のアイドルはIUにかかりつきりになるだろうし、もう少しくらいは余裕を持てればいいな。

いいな……（遠い目）

しかし、セクシーギルティってすごいセンスだよな。

俺には思いつかん。

踊りのコツとか教えてほしい、そんな話は何故かなった。

そもそも俺は独学でDVDとか見て覚えた口だし、なんて話をしたらトレーナーさんがドリック吹いた。

むせたのかな。

結局、人間は動く関節が一緒なんだからそこら辺を真似するだけで案外いける、と思う。

動きが付いていけないのは他の要素が足りないからである。

筋肉とか体力、あとは体の動かし方か。

音感是完全に才能と感性の世界だから除外しよう。

筋肉は見かけの物よりも体幹の割合が大きいから、短期間で鍛えるのは無理だし、体力も同様。

変な癖が付きやすい人は、言い方が悪いが才能がないタイプだ。

同じ動きを繰り返すことが多い人とかいるじゃん、あれ。

反射の問題もあるんだけど。

才能があると癖などは簡単に修正できるし。

もつと言えば、アピールポイントを魅せられるかどうかとか、そんな話に繋がる。

苦手な動きを克服したり、克服できなかつたら上手く隠したりとかそんな感じだ。

最終的に重要なのは自分を知ることかな、と。

自分の魅力や強みを知っていることで活かすように動けるし。

アイドルとして才能があると言われる人は、そこら辺の機微がくつそ上手いんだわ。

日高舞（ひだか まい）さんとか星井美希（ほしい みき）さんは、そういうたモノを魅せるのがうまいからこそ天才と呼ばれているのかもしれない。

つまり、自分を知っている奴が強いと思います（粉みかん）

リズムを刻む音感などは無理なやつは無理なので、絶対音感を持っている音楽家の人や調律師の方に助言を貰ってタイミングを暗記するのが一番かなと。

無理なものは無理だし。

まあ、悩むまでもなくひよつこは練度を上げるしかないだけだね。

残念ながら、技術には近道はない。

天下には王道で一步ずつ、というわけだ。

歩めるスピードが他人よりも速いか遅いかの違いしかない。

もつと言うと行くことのできる到達距離も異なってくる。

日高舞さんはチョモランマまで行ってる気がしないでもない。

たぶん、泰葉が芸歴の割にアイドルとして弱いのは自分を知らないことも関係していると考えている。

確かに俺が教えたらそれが自分の魅力だと思ひ込むかもしれない。

でもそれは駄目なんだ。

他人からもらった物は自分とは言えないから。

レッスンを眺めながら思考を巡らせる。

社長は魔法をかけるのが俺らの仕事だと言っていた。

シンデレラガールに合わせて言っている常套句だけど、俺は好きじゃない。

魔法が解けたら終わりになってしまふ。

まあ、どうしたとかまともな考えはないのだけれど。

様子を見に来た武内さんに話を聞くと、彼は黙ったままだった。

シンデレラがどうこうというのは省いても、どのように導いたらいいかというのは俺たちの課題なのだろう。

おそらくこれは社長からの宿題というやつか（白目）

深夜の5分枠で番組をもらえそうだ。

とはいえ、ほかにも競争相手はいるので企画で勝たないとダメなのだが。

できればアイドルの魅力を過不足なく伝えたい。

というわけで、人形劇にしてみた。

タイトルはモバマス劇場とかでいいか。

語感がいいとか、モブを振ったとか、人形だから小つちやくてモバイルだとか、もどきだからもぼだとか、色々理由はあるけど特にタイトルに深い意味はないです。

俺が声真似しながら指先につけた糸で人形を操って、ボイスパーカッションとかで効果音をつけて、日常を再現。

初回は橘さんの「ほわあ……（お目目キラキラ）ネタでいいや。

没になると確信しつつ、録画して渡す。

受かってしまった。

なんでえ……^q^

無駄に凝ってて金をかけ過ぎだけど大丈夫かと心配された。

基本的に昼休みに俺とちひろさんの二人で一発撮り4分なので大丈夫だと伝えるとお茶を噴霧された。

当然、音響も無し。

そもそも地方巡業したときも音響に問題が発生しまくって、俺のボイパなどで乗り切ったし、これくらいヘーキヘーキ。

モバマス劇場が4分が流れ、後にエンディングである。

カメラマンにちひろさんの名前、残りは監督からなから正真達磨と流れ続ける。

本名出すとあれなので、別名を名乗ってみた。

放火事件の焼身をもじったのと俺の人生が詰んでて手も足も出なかったという意味の達磨を洒落として二重でかけた。

自分でやつといてなんだがブラックジョークすぎて笑えないんですがそれは。

9月

CD発売となったが、凄く売れる。

想定してないレベルだったので、嬉しい悲鳴というやつか。

地方だと品薄や在庫切れが相次いだらしい。

イベントにもかなり呼ばれるし。

店頭に赴いて手売りも想定していたが、業界の知り合いの方々が協力してくれたので、ひどい結果にはならなかったのもあるけど。

部署の仲が良い人たちも力を貸してくれたし。

俺が求めていた人生はこうだったことなのだ実感した。

順次発売されていくCDに合わせて、イベントに出演するアイドルも切り替えていく。

バリエーションが豊富のうえに回転率がよくて笑ってしまった。

挨拶行脚をしながらイベントに帯同し、仕事をこなしていき、シンデレラプロジェクトのオーデイションも進めていく。

とはいえ、選考は武内さんがメインなのだけけれど。

何処からか見つけてきたら加えてもいいとは言ってくれたが、そんな余裕ないっす。一週間で5時間しか寝てないし。

で、睡眠時間の短さに、ADさんたちに混ざって眠っている俺が発掘されたり。

頼む、慣れている番組の収録中だけでも寝させてください……。

流石の俺でもこのままだと死ぬんで……。

社長、年末のライブは厳しいっす……。

場所を抑えるのも、客の集まりも無理っす……。

ぐわあああ……。

齡十四にして、数多の衆愚を魅了する「力」持つ姫君を火の国よりお迎えいたした。それは鬨の声溢れる戦場での逢瀬による運命。

未だ眠れる魔王であるが、刻を待たずして天使や悪魔を配下とし、宵闇とともに産声を挙げるであろう。

そのブリュンヒルデ足らしめる力は吾身を狂わす浸食せし暗黒の異形となりてカグツチよりも熱く輝く闇となる、そう確信した。

契約より紡がれる旋律をここに。

” 滲み出す混濁の紋章 ”

” 不遜なる狂気の器 ”

” 湧き上がり・否定し・痺れ・瞬き・眠りを妨げる ”

” 爬行する鉄の王女 ”

” 絶えず自壊する泥の人形 ”

” 結合せよ ”

” 反発せよ ”

” 地に満ち己の無力を知れ ”

破道の九十 『黒棺』

10月

先月も話したけど、神崎蘭子（かんぎき らんこ）さんをスカウトした。来年のシンデレラプロジェクトでデビューを飾ると思う。

息抜きにライブバトルを見に行ったら、「ほわあ……（お目目キラキラ）」ってなつてたのでついスカウトしてしまった。

熊本弁が難しくてたどたどしくなってしまったが、なんとかスカウトできて良かった。

武内さんと一緒に中二エクステをスカウトしたのが役立ったようだ。

まあ、神崎さんが可愛かったからついスカウトしてもしょうがないよね。

あと先月の会議で12月にライブが行われることが決定した。

発売されているCDの売り上げや人気から、GOサインを出されてしまった。で、会場も抑えたらしい。

結構でかい……。

こんなギリギリで場所を抑えてチケット掃くの無理だろ……。

社長はなんか自信満々だったけど。

給料、20万から上がらないかなあ……（遠い目）

アイドルから集めた要望を3D CADなどで資料作成して送る。

衣装も必要だし、グッズは前からあったやつを集めつつ新たに発注もする。

社長は大丈夫って言ってたが、スタツフを集めたりしないといけないじゃん？
過労で死ぬ。

ホントに大丈夫か心配になってきた。

そういえばシンデレラガールの集計が始まったとか。

他のプロダクションもちよつとぴりぴりしてた。

そんなガチになることだろうか。

シンデレラプロジェクトの選考も進めているようだ。

武内さんや俺も忙しいから常に付いているわけではないので、過不足無くともいえない。
い。

上手くいかんものだ。

今日は俺も審査に加わった。

諸星きらり（もろぼし）さんが凄い好みでした（粉みかん）

午後、選考せずに出かけていた武内さんがニートを拾ってきた。

俺の予測を軽く上回るお人やでえ……。

11月

会場の見取り図などで立ち位置を説明。

で、CGで作成した会場のモデルで更に詳しく説明していく。

平面だと奥行などがわかりにくいし。

リハーサルもやるけど、そう何度も出来るわけではないので今のうちに知識も叩き込んでおく。

トキが速報だが、シンデレラガール1位になった。

あと菜々さんとか高垣さん、川島さんも上位30位以内に現時点で入っているとか。

鳴り止まない電話、止まらないオファー、売れていくチケット、無くなるCD。

マジで給料、上がらないかなあ……（遠い目）

12月

そのままトキがシンデレラガールになってしまった。

おかしい。

予定としては来年のプロジェクトから徐々に狙うはずだったのに、いきなり目標を達成してしまった（白目）

これはあれだろうか。

シンデレラガールになりたいと思った時にはすでにになっているとかいう話か。

意味不明すぎる。

それとも俺や武内さんが敏腕過ぎたのか。

シンデレラガールを生み出したと思った時にはすでにシンデレラガールになっている的な。

ああ、ちょっと錯乱してきた。

忙しさもあってヤバイ。

シンデレラガールになると忙しすぎて、お祝いも儘ならなかった。

謝るがあだ名じゃなくて名前で呼んだら許してくれるとか。

愛梨ちゃんマジ天使。

なんとかオファーなどの時期をずらし、アイドルを入れ替え、なんとか超過密スケジュールを調整していく。

そもそも学生が多いので無理なときは平謝りである。

プロダクション単位で凄まじい注目を浴びたので、来年も凄そうだ。

いや、マジで。

シンデレラガールを舐めてた。

よく考えたら日本中で人気投票した結果の順位のようなものだし、こうなるよね。

765とか961、876はIAとかIUで注目されつつ、分散してたし。

油断してた、マジでもうヤバイ。

嬉しくもツライ地獄を乗り越えてライブ直前までやってこれた。

ライブに対しては全く不安はない。
リハーサルも完璧だった。

みんな緊張していたりと様々な反応を示しているが、それが可愛らしいのでへらへらしちゃうわー。

あー困るわー。

うちのアイドル可愛すぎて困るわー。

ぶっちゃけ、あとはどれだけ完璧に近いライブになるかしか残っていないと思う。

それくらい彼女たちは頑張った。

そして俺らも頑張った。

俺は笑いが出なくなるくらい頑張ったし、武内さんも眼光がヤバいことになってたし、ちっぴも自分でドリンクがぶ飲みするくらいだった。

社長はグッズを増産して、俺の仕事を圧迫しまくった。

許さんぞ社長おおお！

というか、俺の睡眠時間を贅にささげ続けたのだから、失敗するわけがない。

ライブまでは束の間の安息を得られるはず。

やっとだと一息ついているとスマホに連絡が入った。

父親だった人の訃報だった。

集まる必要があるらしい。

おそらくライブを少しだけ見て向かうことになるだろう。

俺は今笑えているだろうか。

不安を伝えてはいけない。

伝えるはずがない。

そう生きてきた。

俺なら大丈夫だ。

12月下旬

ライブ開演まで1時間を切った。

リハも完璧に終えたし、音響に不備は無い。

今回のためにアリーナの一部を特設ステージにし、カボチャの馬車の電飾も用意するという凝ったつくりなのだが、問題は観客には見えないということくらいか。

アイドルのモチベーションに発破をかけるためなのと自己満足なので気にしてないです（死んだ目）

衣装も念入りに確かめたので問題があるはずない。

アイドル部署としては初めてのライブだが、他の部署では頻繁に行われているので、助言を貰って滞りなく準備できた。

問題は順調すぎて社長が無茶振りしてきたくらいか。

あとはシンデレラプロジェクトのメンバーとして選出した練習生の面倒をあまり見れていないことも。

トレーナーさんたちに任せているけど、やはり見て確認しておきたかった。仕事のスケジュールがきつい。

I U本選が2月下旬、I Aの受賞発表が3月……。

そこら辺から仕事が減るはず。

減るのを喜びたくはないが、このままだと許容量を超えてしまう。

今ですら、表面張力で保っている状態だ。

社長が「アイドルを増やしたら問題ない」とか言い出していたが、やめてください死んでしまいます。

ライブとかCDなどを一括されたら、俺では無理。

開始まで5分と迫った。

武内さんが応援のコメントをしてくれるという。

あんまり期待してない雰囲気。

俺も期待してないけど。

わかっていたことだが「みなさん、頑張りましょう」だけだった。

お、おう。

まあ、俺も特に言うことも無いから黙っていようかと思つたが、初ライブだし声掛けしとくかな。

ライブに関しては何度も言うが不安はないし、心配事もない。

ちょっと私事の関係で上手く笑えるか不安だったので、今日限りは至極真面目な顔をしていただけである。

とはいえ、普段と違う雰囲気なので不安に思われたら困る。

軽く笑みを浮かべて声をかけておいた。

城ヶ崎さんに胡散臭いと言われた。

あまり私を怒らせない方がいい。

姉ヶ崎さんには妹ヶ崎さんがいて、今日ライブの応援に来てしていると聞きましたあー。なので後で武内さんをスカウトに向かわせまうー。

ライブの構成は最初に武内さんと選考したこれから売り出すメインの9人で歌って、ソロやグループでパフォーマンス、シンデレラガールの上位メンバー、愛梨のソロ、最後にライブに参加したメンバー全員で歌うという感じだ。

軽いトークや紹介なども挟んでいるがパフォーマンスメインの構成だ。

シンデレラプロジェクトに関してはポスターなどで告知しているので、一切触れない。

持ち歌が少ないために幾らかの不満もある。

だが、複数のプロダクションによる合同ではなく、単一プロダクションの企画なのでから贅沢な悩みというやつだろう。

9人のパフォーマンスを舞台袖で見守るが、パフォーマンスも練習より遥かにキレている。

いいことかもしれないが、ちょっと不安もある。

昂揚感によって最初から全力ダツシユするような状態に近いだろうし。

陸上競技とかの大会で、スタートダツシユに失敗して後半のスタミナや筋疲労で失速する感じである。

あとは他の人につられて無理に大きく動くことも関係しているだろう。

テンションが上がってるために疲労を忘れやすいのも大事だ。

今回はメンバーが多いから問題にならないだろうが、今後のためにも是非とももつと伸びていつて欲しい。

ステージ袖から待機中のメンバーの元へ。

まあ、みんな袖にいてそわそわしているのだけれど。

全体的に緊張が伺えるが、許容範囲内か。

と思いきや、橘さんがいない。

この場を武内さんに任せて探しに行く。

控室でブルッた。

涙目ぶるぶるじゃなくて、顔面蒼白だった。

「これくらい、1人で出来…あれ…」と呟いており、リボンは上手く結べていない。調べてわかってたけど、駄目だったらしい。

緊張してしょうがないとか。

まあ、知識だけでは追いつかない世界だしなあ。

気を紛らわせるためにタブレットでも使うかと聞いたが、物に頼りたくないとか。お、漢だ……。

冗談は無しにして、今のままで俺がかなり不安なわけだ。

片膝立ちとなり目線を合わせて、震えている小さな手を取る。

室温は暖かく設定されているが、血流が悪くなっているのか冷たくなっていた。

橘さんが訥々と呟くのを、頷きながら聞いていく。

自分の名前が好きじゃなかったこと。

仕事で呼ばれるのも嫌だったこと。

仕事が好きになったこと。

仲間と頑張るのが楽しいのはきつと音楽のおかげだということ。

いつからか、名前が嫌いじゃなくなっていたこと。

「だから、名前で呼んでください」

そう言った彼女の顔には熱に浮かされたように紅く染まり、震えは止まっていた。繋がっていた手から温かい体温を感じられた。

「ありす、行っておいで」と送り出す。

元気な笑顔を浮かべていたので安心した。

そういえばリボンは昔プレゼントした物だった、大事に使ってくれていたようで嬉しかった。

終わったら新しい物を改めてプレゼントしたいものである。

パフォーマンスで弛んだまゆのリボンを整え、ありすちゃんだけずるいと絡んでくる楓さんを軽く流しながら、よくできていたと褒めていく。

当然の結果なのだが、言葉で伝えないといけないこともある。

武内さんももう少し言葉を増やしてほしいような、そうなると個性が死ぬので困るよ
うな。

ぐぬぬ。

パフォーマンスを終えたありすが戻ってきた。

あまりの笑顔に、俺も嬉しくなって抱き上げてしまった。

不覚だった。

ジト目に晒された。

いや、みんなよく考えようぜ。

ありすが可愛すぎるから仕方なかった（真顔）

姉ヶ崎さんとは違うから。

瀟洒で真摯な紳士だからね、俺。

途中でロリコンかと疑われたこともあったが、大成功と言える終わりを迎えた。

片付けや打ち上げも参加しなかったのだが、私事で早めに帰らせてもらうことに。

失敗したらトレーナーさんの最上級コースが待っていたのに、残念である。

泰葉にカチューシャが似合ってたと告げて出ていく。

夜行バスを使って向かう必要があるんだよな、この時間だと。

時間をかけて雪積もる田舎に到着。

ライブを最後まで見守ったので、徹夜の強行軍というね。

夜行バスに乗った後、電車で田舎に向かうのだが、電車の数が少なすぎて笑えなかった。

夜明け前は寒さで死ぬ。

12月に入ったばかりならまだしも、年末は雪が積もっているので平靴や革靴だとツライんだけど。

そもそも、父方の祖父母の家など小一くらいに行つたきりである。

俺じやなかつたら完全に忘れてるレベル。

徒歩だとたどり着けない田舎の奥のほうなので、迎えに来てくれるらしい。

流石に畜生ばかりじゃないと安心した。

記憶の彼方にある爺婆は最悪の部類だったから不安だった。

叔母が迎えに来てくれた。

父だった人の妹だ。

おそらく、父方の親戚縁者で一番常識人。

というか、この人の常識がそれほどでもないのに常識人という凄い空間に向かつているという。

この先は地獄行きか。

礼を告げて後部座席に乗り込む。

助手席に乗ったらS A N値が直送されるから、後ろに乗る。

護身発動というやつだ。

これでおそらく一番の常識人だから先が思いやられる。

と、小学生の女の子が先に乗っていた。

叔母さんの娘さんかと思つたら違うらしい。

この娘が渦中となるのか。

マジか……。

乗っている最中に情報を集めておこう。

誰も何も教えてくれないだろうし。

名前は佐々木千枝（ささき ちえ）さんと言ひ、10歳だとか。

礼儀正しくてビビった。

事情を聞くと、彼女の両親が亡くなったために身寄りがなくならんたらかんたら。

おうふ……。

いい予感が全くしません。

と、とりあえず千枝ちゃんと呼ぶことにした。

佐々木だと彼女の母をイメージするとかで、泣きそうになつてたし。

大きい屋敷に到着。

外見は昔からの日本家屋風なんだが、中身は田舎の仕来たりに縛られた地獄なわけ
で。

飯に毒を盛られるかもしれないので口を付けられない。

いや、マジで。

こちら辺は身内しかいないから、事件として処理される可能性すら低いし。母だった人が盛られてた記憶がある。

中に入るとこつちに注目した後、中高年が集まってひそひそ話をし出した。すげえ嫌な空気だ。

しかもなんか通夜、葬式、告別式、遺産相続が昨日あたりに全部終わったらしい。あーもう最悪だよ。

遺産はねえぞとか見知らぬジジイに煽られた。そんなもの目当てじゃないから。

てめえの頭にも髪の毛がねえぞと返しておく。よく見るとハゲが多い。

やさしい世界。

俺も将来ハゲになんのかなあ、嫌だな……。

爺婆が無駄に大げさに入ってきて、俺を睨んで座った。

俺だけでなく、背中に隠れる様にいた千枝ちゃんも睨んだのかも。

話が始まるようだ。

かなり詳しく説明し始めた。

親切心からかと思つたが、どうせ俺への当て付けだろう。
まとめると、

- ・かつての父と母が離婚し、俺の親権は母へ。
 - ・母だった人の不倫のせいとか言っていたが、どう考えてもどっちもやってた
 - ・父は身寄りのない佐々木さんと再婚
 - ・二人とも死んだ
 - ・遺産は爺婆が回収
- みたいな話である。

何が良いたいのかというところ、おそらく「親戚のみんなー、俺らは悪くぬえー！」ってことか。

知らんがな。

で、本題っぽい千枝ちゃんの扱いに話は移行した。

今は叔母さんが預かっているとか。

最後の常識人は格が違った。

まあ、叔母さんも強く言われたら自分の子供すら差し出すであろう人だから信頼が全
くできないけど。

爺婆が長男を唯一として崇める長男教なので、千枝ちゃんを妻にとか言い出しそうだ

と叔母さんが小声で教えてくれた。

もう頭が痛い。

長男とか未だにニートしているらしいんだけど、そこんどこどうなのさ……。

で、ハゲたちは面倒を見たくないので知らないふり。

最後の良心が発動した叔母さんも、爺婆にお金を貰っているのでホントに何も言えなくなっているとか。

俺しかないのか……。

背景がひどくドロドロとした展開のうさぎドロップになりそうなんだけど。

死にたいけど死にたくない。

新しい扉が見える……。q、

千枝ちゃんを連れて東京へ向かう。

働いているし、腹違いだけど兄妹だからと連れ出した。

あとは、346のファイナルウエポンである右京さんっぽい弁護士に頼むしかない。

最近「右京さんが一晩でやってくれました」で全部片付く気がする。

千枝ちゃんには悪いが、親戚はいなかったものとして生きていつてほしい。帰ったらなんとか接近禁止を取り付けて戸籍ロックコースを頼もう。

かなり難しいと思うが、右京さんならやってくれると信じている。

もう俺も限界だった。

帰りの電車で千枝ちゃんと話をして過ごす。

両親は仲が良く、遊んでもらっていたこと。

父も母も優しかったこと。

今回の葬儀では父しかきちんと扱われていなかったことを泣きながら言ったあとに眠った。

良かったと思った。

俺のように扱われていなくて、ほんとなによかった。

良かったと思える自分自身にも安心した。

電車を乗り継ぎ、高速バスへ。

千枝ちゃんは俺の仕事に興味があるようだ。

話題がなくなつて沈黙するのが気まずいと空気を読んだのかもしれないけれど。

テレビで歌って踊っているアイドルの手伝いをする仕事だと教えた。

なぜ今の仕事をやっているのかと聞かれて詰まっちゃった。

自分からやりたいだなんて考えたことは無かった仕事だ。

社長に声をかけられて、アイドルが好きだったから始めただけだし。

あー、なんだかな。

美しい物を間近で見たくなったとか、そんな理由か。

千枝ちゃん为首を傾げてた。

俺も首を傾げたいくらいですよ。

3年目1月

金が無い。

千枝ちゃん関連で給料が消し飛んだ。

全てを失った千枝ちゃんに何から何まで揃えたことが原因か。

なんでこんなに面倒を見ているのか、俺にもよくわからん。

社食じゃなかったらパンの耳を貰うくらいしかできずに餓死してた〜的な下りになるレベル。

目を離したら社長が声をかけていて、千枝ちゃんもアイドルに乗り気になってた。

諸々の問題を解決してないから困るんだが。

武内さんが陣頭に立つシンデレラプロジェクトだと俺が面倒見る時間が短いかもしれないということで、別にユニットを考えているとか。

有り難いんですけど、有り難くないというか。

とりあえず、練習生としてレッスンを体験するという事になった。

そういうえば、961プロに所属しているJUPITERの3人組が移籍するかもしれないという噂話を耳にした。

765と961の確執で何かあったらしい。

詳しく知っているべき話か、無知でいるほうが賢いのか。

取捨選択が難しい。

情報を集めまくって知らないフリでもしてへらへらしてるのが一番賢い選択だろうか。

菜々さん連れて、スカウトしたライブバトル会場へ。

あれだ。

私、ここからデビューして今の地位を築いています、みたいな。

言い方を悪くすると餌である。

まあ、始まりの場所に感謝を伝えると言う理由が9割なので、そこら辺は気にしないで欲しい。

事前に知らせておいたので、野外コンサートの体になるかと思いきや、参加者がいるようだ。

765、961、876の何処かが戦争をしかけてきたのかと慄いたが、アマチュアが殴りこんできただけだった。

ここで勝利することで、デビューへの栄光を勝ち取るにやとかなんとか。凄いい根性だ。

勝てたらスカウトが殺到するぞ。

まあ、結果は語らないでおこう。

死体蹴りをする趣味はない。

ただ、菜々さんは兎だけど分類は西遊記で孫悟空と殴り合う玉兎だったから、猫では相手にならなかった。

蹂躪劇の後は菜々さんのコンサートが開演されたので、それを関係者席で眺めつつ、惨敗を喫したみくにやんに話を聞く。

勘違いしないで欲しいのは、みくにやんと呼んでほしいと言われたので呼んでいるだ

けだ。

スカウトする気はないけど事情は聴いておこう。

スカウトする気はマジでないけど。

事情としては、すでにウサミンという個性激強の兎アイドルがいるから猫アイドルで売る気はないと断られまくったとか。

で、ウサミンを倒せば後釜を頂けるからトップアイドルまっしぐらという大雑把な計画を語られた。

なるほど。

スカウトする気はないけど、事情はわかったぜ。

猫。パンチされた。

みくにやんぐう可愛。

他のファンと混じって菜々さんを応援する。

うひょー、俺にウインクしてくれたぜ！とテンションマックス。

うっさみーん！

今日もかわいいよ！うっさみーん！

……ふう、ファンに混ざってサクラやるのもつらいわー。

菜々さんが可愛すぎて最初からガチだったけどつらいわー。

菜々さんが帰り支度を終えたので、合流し、みくにやんを引き摺って事務所に戻る。スカウトはしないけど、オーディションをやってるから受けとけ前川あ！みたいな。

最近気づいたのだが、募集してくる人たちよりも、ライブバトルに参加している人のほうが俺は好きなようだ。

応募してきた方々の面接を終えた武内さん、着替えてきた菜々さん、暇していた社長を連れて面接を開く。

履歴書などの資料がないことに気付いた。

……よし、みくにやんに一つずつ聞いて書いていこう。

——前川みくにやんさん、座右の銘をお聞きしてもよろしいですか。

——え、あの前川みくでいいにや。

——みくにやんさん、座右の銘は？

——自分を曲げないことです。

——自分を曲げないということですが、アイドルとなると仕事は選べませんが構いませんか

——だいじょーぶにや！

——お魚、食べる仕事もありますよ？

——お魚は苦手なんですけど……。

——自分を曲げないというのに、前言は曲げるのですか。

——（涙目ぷるぷる）

圧倒面接つぽくやったら、凄く良かった（粉みかん）

俺の目に狂いは無かった。

流石にいじめになるのであとは真面目にやってテキストに流して、ダンスと歌を見て
終わりである。

シンデレラプロジェクトの推薦枠が空いてたはずなので、そこに入れさせてもらっ
た。

まあ、みくにちゃんには補欠合格だと伝えただけ。

合格をその場で伝えたら猫ぼんち喰らったけど、それもまた可愛かった。

社長の反応は上々。

武内さんは首に手をかけて傾げてた。

輿水さんといい、みくにちゃんといい、弄ることで輝きを増すアイドルは実に良い。

ふとした時に、真面目な面だったり、無邪気な面だったりと色々な顔を見つけること
で魅力が伝わるタイプだ。

弄られキャラだと油断しているから無防備に急所を襲ってくる感じだろう。

魅せ場を作るのが難しいこともあるけど、俺は好きなんだ。
やる気があって可愛かったら好きだし、不遇なら尚グッドなだけだけど。

2月

田舎と千枝ちゃん関連は瞬殺だったらしい。

わざわざ都会のホームまで訪れるくらいなら閉鎖空間に留まることを選択したっばい。

なので、練習生から一気に浮上した。

社長が構想していたブルーナポレオンというグループに参加させるとか。

俺はユニットの構成が苦手なんだ。

猫アイドルをまとめてにやんにやんにやんとか、眼鏡ユニットのサイバーグラスとか
しか思いつかない。

千枝ちゃん自身、他のメンバーに遅れているのは確かなのでスパルタ育成コース突
入。

女子寮に所属しているから、体力の限界まで練習できる。

とはいえ、小学生なので限度はあるけど。

菜々さんがゲスト出演しているバラエティ番組に、みくにやんと千枝ちゃんを仕事見学に連れ出す。

961プロのアイドルがMCなので何時もと異なる刺激を味わえるだろう。

挨拶回りつつ顔見せしていく。

控室に行ったが、黒井社長は今日は来ていないようだ。

現場のスタッフさんへの挨拶へとスタジオへ入ると……。

黒井社長を中心に立食パーティーしてた。

さすが天下の961プロだぜ、q、

黒井社長に挨拶すると「ウイ、私を待たせるとはいい度胸だ貧乏プロデューサー」と

返事してくれた。

今日はご機嫌のようで、しかも待っていてくれたとか。

俺もご飯を食べていいらしいので、黒井社長との飯は旨いから好きですとにこやかに

食べる。

鼻を鳴らして社交辞令はいいとか言われたが、社交辞令ではない。

誰かと食べるごはんは旨いのだ。

そう伝えると何も言わなくなった黒井社長を横目に色々とパクつく。

菜々さんとかみくにやんとか千枝ちゃんとか、体重が軽すぎるので、いっぱい食えと促す。

スタツフさんたちも集まってきた。

収録がめんど……いいごはんが食べたいので、今回はこの立食を放送しようとか言い出した。

マジで大丈夫か心配になった。

961プロ所属のアイドルが、用意されていた質問で話題を広げていく。
で、菜々さんもそれに乗るだけである。

ほんとに大丈夫だろうか……。

ついでに千枝ちゃんとかみくにやんも参加させてくれた。

ああ〜宣伝になるんじゃないか〜

うまうま、と食べつつ、次々と喋っていないアイドルの皿に料理を盛っていく。

961も346も関係ない。

中身が備長炭かかってくらいこいつら軽すぎるんだもん。

鯖を読んでくれたらこんなに気にしないで痩せろと言えるが、真面目なのかそんな

ことは全くない。

愛梨なんてご飯が胸に行くとか言ってたが、765を怒らせたくないのに禁止ワードとなつた。

ゆるふわは関係ないだろ！

黒井社長が961プロはどうかと聞いてきた。

……いきなり突っ込んできた。

JUPITERについても答えろってことだろうか。

「質はいいし、誰しもが磨けば確実に輝く。磨ける人がいない、もしくは足りてない気もする。それぞれの最適条件が異なるので、丁寧に管理をする必要もある」みたいな感じで答えておいた。

忌々しそうに同意された。

環境やスタッフも最高を選んでいるが、もつとも間近で管理する技術が追い付いていない状態らしい。

時間をかければ最終的には輝くが、宝の持ち腐れのように儘ならぬとも。

難しい話だし、俺には何もできない問題だ。

と、思ったら移籍しないかと誘われた。

アイドルじゃなくて、まさかの俺がヘッドハンティングである。

実は、ちょっと嬉しかったりする。

黒井社長曰く、今の俺は「金の卵どころか宝石の原石を見つけてくる鶏が、自らウエルダンで焼かれて食べてくれとアピールしている」ように見えるとか。

腹が切り開かれても、すぐに処置すれば息を吹き返す可能性があるが、さすがに丸焼きは無理だとも。

どういう意味なの……。

美城よりも給料を出せるし、待遇も遥かにいいと言われた。

わざわざスカウトしなくても、金銀宝石クラスの質を持つアイドルの中からより質が良いのを選ぶ仕事になるとも。

恩があるし、義理もあるから961に行くのは……。

ああ、でも千枝ちゃんのことでお金がないと困るのも確かだし。

お金って魔性だわ。

と、とりあえず話だけでも聞いておこうかな。

参考までに。

参考だけだからセーフ。

聞く限り、同額以上は簡単に出してくれるらしい。

出来高ではさらに上げていくとか。

凄い。

一秒で食いつきたくなった。

とはいえ確かな金額は把握していないので、今いくら貰っているのか聞かれた。右手の指を二本、見せてみる。

「二本、なるほど……。一年目の若造に二百万とは、美城もなかなか見る目が……」
え？

「ウイ？」

二十万です。

「……時給制で凄まじい敏腕なのか？」
違います。

時給だと1050円でした。

あれ、安くなってる……？

「……歩合制で座ってるだけか？」
違います。

北海道から沖縄まで仕事をとってきて、シンデレラガールも輩出しました。

「……貴様の給与は一体どうなってるんだ」

おそらく、固定給ですね。

ちなみに保険や年金など五万、施設費六万なので、実質は九万に届きませんとドヤ顔。黒井社長、カメラマンに食い物を嘔き出した。

大手プロダクションの社長を嘔きさせたとか俺ってば伝説になっちゃうね。
なっちゃうね（震え声）

3月

先月、黒井社長に説教された。

それはもう、凄まじい説教だった。

そういうのは765プロで精一杯らしい。

俺にも仲間がいたのか。

まあ、最近の765プロはもつと給料が出ているらしいが。

高温油のプールに飛び込んで自らフライドチキンになるスタイルとまで怒られた。

で、給料交渉しとけよオラア！とまで言われた。

それでもダメなら月に三本出してくれるとか。

三十万か……ちよつとアリだな。

しかし、給料の交渉とか、言いにくいし気まずいんだよな……。

そもそもバイトとしてわざわざ雇ってくれて昔から世話してくれている社長に、銭が足りないじやボケエ！って言うの無理でしょ。

泥の中から引き揚げてくれた恩人に、不満だオラア！と泥を投げつけるって無理だもん。

弁護士とか借りまくりの、迷惑かけまくり。

全体的にかかった費用とか考えるとちようどいいのかもと考えてみたり。

恩知らずになつてしまふが、やつぱり961も有りか……とか呟いてたのをみくにやんに見られた。

移籍するのか聞かれた。

い、移籍しないよ（目逸らし）

——猫パンチ！

——ぐわああああああ！

みくにやんの理不尽さは天下一やでえ、q

会社に併設されている喫茶店で立て籠もりが発生したらしい。

犯人はみくにやん。

共犯にありすとかまゆがいるらしい。

あいつら何やってんだ……。

営業中の店を邪魔するのはさすがにヤバいので、交渉人として俺が赴く。

真下正義を見たことがあるからプロ級だと思う。

相手の要求は一つ。

俺が346プロから出ていかないこととか。

お、おう。

なんでこうなった。

店内の机や椅子でバリケードを作り、ジュースとか飲んでる。

いや、確かに君たちは無料だけど体が冷えるのでアイスドカ食いとかがやめなさい。

食べるのを注意しても聞く耳持たず。

俺が961に移籍するかもと主張し出した。

で、アイドルたちがぞろぞろとみくにやんの傘下へ。

喋らせたままだと敗北必死。

一人一人の名前を呼びかけ、根気強く交渉してなんとかこちら側へ引き戻す。

ここまで言われたら金のために移籍するのは辞めよう、と決心したら社長が現れた。

どうも聞かれていたらしい。

給料交渉となった。

今いくらかと聞かれたので右手の指を二本、見せてみる。

「……なるほど。君の希望としては？」

社長の眉間に皺が寄っていた。

機嫌を損ねたようだ。

ちよつとドキドキしながら指を一本増やしてみる。

「さすがに今の君には出せんよ。そもそも現状でも多すぎるくらいだ」

溜息つかれた。

ですよね。

やっぱり三十万とか高すぎますよね。

見守っていたアイドルがみんなバリケードの向こう側へ旅立った。

社長が崩れ落ちた。

虹鱒3年目

3年目1月

千枝ちゃん関連の手続きや仕事の調整などを行っているが、明らかに先月までよりも楽だった。

346プロの冬フェスと称したライブが終わったことが大きい。

初めてのライブだったので宣伝したのだが、シンデレラガールやそれに連なる人気のアイドルを輩出したことによるフィーバータイムによって、各所から広告に駆り出されて都内が346プロの浸食で凄いことになった。

I Uの準備のため、上位アイドルのほとんどがいなくなった隙を付いた戦略に見えるが、膨れ上がりすぎて自爆気味であった。

水が湧き出て盆から溢れて部屋を満たして、盆を沈めることによって水で満たした感じである。

とりあえずライブ関連は終了、シンデレラガール関連はまだ盛り上がりつつあるが、I UとI Aの結果によって安定するだろう。

また、IU関連で時間を割けなかった上位のアイドルたちが敗退して戻ってくるから、そちらに仕事が流れることも関係している。

IUで優勝できなかったら引退するなんて話も一昔前にはあった、一握りの強いアイドルだけで業界を支えていけたからだ。

おそらく篩にかけているつもりだったのかもしれない。

今や形骸化しているし、そんなことをしたらファンから叩かれて大炎上である。

そもそもプロダクションも自らの手で磨き上げた宝石を路上に転がすほど呆けたこととはしない、どこかの烏なり猫なりが掻つ攫っていくのは目に見えているためだ。

成長を続けるアイドル業界で、敵に餌を与えて肥え太らせるような真似をする者はいないのだ。

社食で孤独のグルメをしていたのだが、今月からは千枝ちゃんご飯を食べるようになった。

女子寮に入居させてもらえたので、迎えに行つて一緒にご飯を食べている。

引き取ったからには自分の家で世話をすべきなのかもしれないが、俺はあまり家に帰らないし料理もできないので、こういった形になった。

仕事で常に傍にすることはできないので、コミユニケーションも兼ねた試みだ。

あとは寝るまで様子を見ているとか、そんな程度だ。

多感な時期に色々問題が起きている不運を意識させないようにと頑張っているのだが、なかなか難しいものがある。

手続きが終われば小学校に通えるようになるが、半端な時期のため、いじめなどが起きないか心配だ。

日用品とか学校に必要な道具、服なども揃えてみたが、不足がないか不安になる。

そもそもリコーダーの種類だけでも結構あつて困った。

俺が小学生の時はリコーダーを買ってもらえなかつたので手ぶらで授業に挑戦してた記憶がある。

先生に注意されたがそれでもやりつづけ、卒業する頃にはアカペラ、指ぱっちゃん、草笛、紙笛、鹵笛、口笛、指笛、手笛（ハンドオカリナやハンドフルートなど）、12種類同時演奏などのヒューマンビートボックスとしての技術を一通り修めたので問題無くなった。

合唱大会などはピアノが緊張して失敗したところを補うように俺が旋律を奏でたし。

まあ、流石に千枝ちゃんには無理なのできちんと揃えておきたいわけだ。

他にもいくつか問題が浮上しているが、その中でも「どうやって千枝ちゃんに対応す

ればいいか」というのが最も大きい割合を占めている。

ありすも小学生だが、彼女は大人になろうと頑張っているのか、それに合わせれば良かった。

日常的な部分のご両親が見守っているから問題などなかった。

が、千枝ちゃんは違う。

俺が親としての要素をすべて占めることになる。

……あ、これは無理だ。

だって俺、育てられてないから親とかよく知らないし。

前世の記憶とやらも、まともなモノが一切ない。

理想の親というものが全くわからん。

ドラマの撮影などで親子の役を見たこともあるが、どうもしっくりこない。

346プロの社訓に「穢れなき偶像であれ」とあるが、偶像にすらなれないんですがそれは。

無理。

完全に諦めの境地である。

千枝ちゃんには申し訳ないが、俺を反面教師として生きてほしい。

みくにやんをスカウトしてから数日後、久しぶりに完全休日ができた。

半休ならひと月からふた月に一度あったが、タイムカードだけで記してずっと仕事していたので、完全な休みというのは……。

そもそも休み自体いつぶりだ……？

確か……父親だった人が死んだことによる休みや母親だった人の事件によるもので休んだので……なんだ結構最近じゃないか。

前途の休みを無視すると、250〜300日前に休みがあつた気がする。

正社員になってから、身内の不幸以外で休んだことないですってアピールできる。

いや、休まないのは普通だから当然のことか。

やっぱり社会人ってすごい。

仕事ばかりしている人は、突然の休みにやることなくて困るらしい。

まあ、俺は困らないんだけどね。

これからスカイダイビングをやるから全然やることありまくりなわけよ。

俺インザスカイする理由だが、冬フェスのときに輿水さんが空から現れるとか言ってますったためだ。

とりあえず俺が飛んでみて、問題無さそうなら訓練積んで、ライブで空から登場的な。

ライブが終わって父方の元親族が蔓延る魔境に向かう際に連絡して、スカイダイビング用の書類は用意してもらっていた。

すぐに書類に取り掛かったのだが、未成年は保護者による承諾証が必要だった。で、俺の保護者、というか親権はどこにあるのかという話になる。

母だった人が育児放棄＋借金問題の際に弁護士の方が祖父母に親権を移したのだが、祖母が亡くなる間際に社長と相談していたそう。社長と養子縁組する予定だったが、放火によって俺が辞退した。

そのままだと親権が浮いたままとなってしまうので右京さんが後見人となってくれており、千枝ちゃんの分も兼任してくれている。

財産については、横領などが横行していて不安だろうからと俺に任せてくれた。

昨今稀に見るいい人やでえ……。

まあ、そういうわけで許可ももらって、右京さんとスカイダイビングをすることになった。

右京さんもかつて経験があつたとかでライセンスを持っており、ソロで飛べるとか。もうあれよ、流石右京さんだ！としか言いようがない。

俺も講習の後、時間が許される限りジャンプを繰り返す。

右京さんとタンDEMジャンプをやっていくが、途中他の客がいないとフライトしないという話になった。

で、事務所で雇っているという亀山さんと神戸さんが召還された。

遅れて講習を受けていたとか。

これでフライトできるでしょう、と笑みを浮かべた。

流石右京さんだ！

右京さんと4000m上空からのジャンプを楽しんだ帰り道、スカウトされた。

315プロダクションの女性プロデューサーだった、写真で見たので見覚えがあった。

確かに初対面だけど、大きなプロダクションのプロデューサーは把握しておいたほうがいいんじゃないかと。

315プロのプロデューサーで面識があるのは大柄の男性だけだからなあ。

どうでもいいけど、女性プロデューサーをプロデューヌと呼ぶ場合もあるとか。

デユンヌって声に出すとなんか背中が痒くなる。

346所属のプロデューサーだと告げると全力で謝られた。

まあ、346はアイドルに新規参入した新米とはいえ、全体的に見たらアホなくらい

の大手だからしょうがない。

声をかけただけでも346がケンカ売られたと受け取ったら、小さなプロダクションだと即死判定が入る可能性もあるし。

「大丈夫です、気にしないでください」とこの場を納めようとしたんだが、何を勘違いしたのか「じゃあ、入ってくれるんですね!」みたいな流れに。

(入るわけ) ないじゃん。

あ、これ関わっちゃいけないタイプの人だ。

それに315プロとかホモ臭が……いや、なんでもない。

可愛いアイドルもいるにはいるんだが、315プロは男のアイドル専門なわけで。

女装してたり、男の娘というやつをしていたりするとか。

斬新すぎて付いていけない(焦燥)

目を離れたら右京さんがスカウトされてて草も生えないわ……。

なんとか断って振り切って帰ってくると、315プロのデユンヌとは異なるプロデューサーから謝罪の電話。

同僚が大手プロダクションからプロデューサーと顧問弁護士を引き抜こうとしたことへの後処理である。

実にかわいそうな話なので、「事を荒立てるつもりもないし、そもそも今日は特に何も
ない一日だった」と宥めて切る。

終わって一息ついて仕事に取り掛かろうとしてからという絶妙の間で、今度は315
プロの山村さんという方から電話があった。

しかも内容は謝罪の電話とか。

……業務は分担して、担当者が一括してほしいんだけど。

ちひろさんも気を効かせて断ろうとしてくれたが、必死に縋りつかれた上に泣かれた
とか。

俺が休みを取ってスカイダイビングしたばかりにすまない、ちひろさん……。

謝罪電話らしいが、もう面倒になつて全体的に聞き流して時間は大丈夫ですかと遠回
しに切らせようとしたら「もちろん他のお仕事もちゃんとやっていますよ」と自信溢れ
る声で言われた。

俺ができないし、というか他に言いたいことが……ああ、もう！

315プロのプロデューサーに抗議した俺は悪くない。

ちなみにスカウトは「そのアナタ、胡散臭い系アイドルとかどう？」だった。

なにがどうなんだ。

もつとオブラートに包む努力してくれよ……。

電話対応も若干の火種が残った気がしなくてもないが、なんとか終わらせると社長から呼び出された。

休日に何故いるのかと聞かれたが、そりやあ（仕事と）千枝ちゃんの相手ですよと爽やかに答える。

社長から、楓さんが北東地域のIAにノミネートされたと告げられた。

頭を抱えてしまった。

なんでだし。

温泉とか酒のレポートなどで北東に行き過ぎたのだろうか。

予想以上の人気があるらしい。

部屋を辞そうとすると、呼び止められた。

仕事するうえでプロデューサーについての話だ。

俺の仕事のようなプロデューサー業は量では補えないのだとか。

アイドルの質と同等以上でなければ導けないとも。

わかりやすく表現するとアイドルの武器や装備品と表現できるのがプロデューサーだというのだ。

プロデューサーが優秀であれば優秀であるほど、アイドルの底上げによって限界以上

の強さを誇るとか。

で、961プロはミスリル装備らしい。

ファンタジーで最強だが量産されているのがそれっぽい。

765プロの赤羽根さんはロトシリーズだとかで魔王に強そう。

武内さんは斬魄刀とか。

もう世界観が滅茶苦茶なんですがそれは。

最後に俺だが、最初はイデオンだったが今はイデオの意思積みガンバスターらしい。

何故か俺だけロボット枠なんだよなあ……（呆れ）

しかも成長途中で、これからネオ・グランゾンやVガンダム、ターンX、真聖ラーゼフォン、グレートガンバスター、ゲツペラーなどに変化していく可能性があると言われた。

ちなみにイデオ意思積みのまま。

ほ、褒められているのか……？

最後に使い方と使わせ方の両方を誤ってはいけないと社長は締めくくった。

それが才能の代償らしい。

強ければ強いほど、使用者にも負荷が増すということだが、アイドルとプロデュー

サーの能力に偏りがあるので尊重しなさいという話だろうか。

俺の表現だけ宇宙が滅びるスケールで困るんだが。

大げさな冗談だよね……？

退室する際にジ・アースの可能性もあると聞こえた。

2月

IAを辞退しても良かったのだが、楓さんが出来るところまでやりたいと前向きだったので参加することに。

2月末のIUが終わった後の3月上旬頃に各地域のIA選考がある。

その選考で優勝すると、東京でのグランドファイナルがあつて大賞が決まる。

現状だと無理ゲーなんだよなあ。

地域戦は勝てると思うのだが、グランドファイナルは4位くらいか。

おそらく、他のアイドルの弱点を叩けるだけ叩いて、完璧にパフォーマンスを終えて4位と予想。

全五地域の中で4位……ぐぬぬ。

前々から準備していればもつと上を狙えたのに、見通しが完全に甘かった。

俺のせいだな、ほんとに失敗した。

ライブにばかり気を取られた結果か。

素質を考えると考えられる到達点だったし、努力を顧みれば当然だったのかもしれない。

目が曇っていたし、慢心していたし、調子に乗っていたのかもしれない。

プロデューサーなのに。

そもそも去年の時点ではわからなかったというか、今の今まで全く考慮していない不意打ちだったというか。

いや、やめよう。

言い訳を幾ら積んでも目標には届かない。

もつと戦略を練っていく必要がある。

それでも、見立てが変わらないと確信できしてしまう。

わかってしまう。

だから言い訳したくなる。

とりあえず曲やダンスなどは他のユニットのものも使うとしよう。

パフォーマンズとしての形には出来るだろうけども、武器になるとも思えない。同じ歌とダンスを連続使用すべきだろうか。

それだと他のアイドルの弱所を叩けないうえに、こちらの欠点となってしまう。

選考で使う二つから三つのみに種類を絞るが、楓さんの持ち歌を重点的に鍛えていく。

地域選考をぎりぎり勝ち上がって、ファイナルで……。

いや、綱渡りの戦いを調整に使うとか俺の性に合わないし、楓さんのスタイルでもない。

踏み外して落下するように失敗、とはいかないだろうが、無駄に消耗するはず。

得意曲の連打か、間を挟んで使うべきか。

それも有りか……。

ぶつぶつと悩んでいたら、武内さんに声をかけられた。

シンデレラプロジェクトのメンバーとして目ぼしい子を見つけたので行ってくるとか。

だいたいこの選考は終わっているが、それでも加入させたい子を冬フェスで見かけたらしい。

予定では12人枠であり、現状では11人埋まっているが、拡張してでも期待しているようだ。

まあ、武内さんがメインでプロデュースするからカバーできるなら何の問題もないと俺は考えている。

ちひろさんとか社長とか他のスタッフにちゃんと説明する必要もあるけど。

島村卯月（しまむら うづき）さんという女子高生が目当てらしい。

気分転換に俺も付いていくとしようかな。

都内のアイドル養成所なので、社用車に男二人で乗り込みブロロ……と向かう。

なるほど、養成所か。

そういうえば意識してなかったが、養成所ならやる気は確実にあるし、能力も見ることができるとか。

今まではライブバトルのパフォーマーや観客中心のうえに都内ばかりを活動していたから、俺も養成所を見て回ってみようかな。

目的地に到着した。

助手席に暗殺拳を使いそうな武内さん、運転席にはへらへらしている俺。

これは傍から見たら取り立てですわあ……。

相手が大丈夫か心配になってきた。

俺だったら売られるかと不安になって話を断るな、マジで。

そう考えると事務所所属したアイドルってキモが据りすぎでしょう。

変な連中に騙されないように更なる注意を常日頃から促す必要があるし、送り迎えにもさらに気が抜けなくなったわ。

車を駐車しておくので、先に行ってくださいと武内さんを降ろす。

俺がいるよりもダメージは緩和され……あれ、俺が先のほうが良かったか。

武内さんが先の方が本気感が増すかと思っただが、暗殺に来た忍者かと思われる可能性がある……？

まあ、断られたらその時はそのときだと受付で挨拶する。

武内さんも挨拶したらしいが、その前にアポ取ってなかったっぼい。

ガバガバ過ぎい……。

案内された部屋に向かうと廊下で話している講師らしき方と武内さん。

どう見ても講師らしき方は怯えています、ほんとにすみませんでしたあああ!!!

なんとか落ち着かせて、スカウトしに来た旨を伝える。

武内さんが来ただけでこんなに怯えるとか、講師として大丈夫かちよつと心配になってきた。

まあでも話を聞く限りだと、ノックせずには扉をゆつくり開いてきたらしい。で、逆光で現れたのが暗殺者タイプ、と。

ああ、うん。

そら怖いよね。

俺の感覚がマヒしてきたのかもしれない。

じゃあ、お話の準備しましょうかねと資料などを纏めている隙に、武内さんがダイナミックエントリー！

ノックしてえ！

お願いだから！

社会人としてのマナーを守ってえ！

あなたがノックなしで入ると怖いから！

島村さんが恐怖でぐるぐるお目目になってるからあ！

なんかすごい疲れたが、なんとか宥めて落ち着いて話せる体勢まで持つて行けた。

まあ、今回は話だけで何度か通っていく形を取りそうだけ。

他の事務所もスカウトしているだろうし、選ぶ時間も……一発オーケーでした。うええええ!?

武内さんのガバガバな説明でもオーケー出すとか、マジでヤバイぞこの娘。

いや、可愛いよ。

凄い俺がプロデュースしたいもん。

愛梨のシンデレラガール関連とか楓さんのIAが無かったら俺がやりたかったくらい。い。

俺の中では菜々さんが憧れのなポジションだが、一番プロデュースしたかったのは765プロの天海さんだったのを思い出した。

島村さんは天海さんに匹敵するくらいプロデュースしたい。

いや、四月からなら……ああでもシンデレラプロジェクトにも人が必要だし、武内さんが見つけてきた人だし。

ぐぬぬ……。

……口惜しいが、ほんとにすごいまじでやばいくらい狂おしいれべるで悔しいが諦めよう。

ただまあ、それは置いておくとしても人を疑うことを知ってほしい（震え声）

シンデレラプロジェクトの目的はシンデレラガールを誕生させることだったのだが、

プロジェクトが始動する前に生み出すという事故が起きたので今のところは多方面にプロデュースとして濁している。

で、それに付随して全体的な活動方針も企画中になっている。

……よく人が集まったなど感心したいところだが、社長や武内さんや俺でスカウトしてきたメンバーばかりなんだよな。

見直してみるとガバガバすぎい（戦慄）

言い訳するとライブが急がしかつたし、IAもあるし、そもそも企画が固まって形にするはずのところまでシンデレラガールが生まれるという意味不明な事故が起きたわけだ。

いや、でもアイドルを真剣に目指している方々には申し訳ないです。

そもそも担当じゃないから俺にも実はよくわかんないんだよ！

とりあえず島村さんはユニットを考えており、他のメンバーは選考中なので待機という話になった。

あとは枠を増やして入れるから、その関係だけだが。

駄目だったら俺が……いや、ちゃんと話を通しますよ。

むしろもうCDまで確約でいいんじゃないかと思うくらいだ。

可愛いし、やる気あるし、ストレートに可愛いし。

選考理由で武内さんが笑顔と答えると、島村さんが渾身のえへ顔ダブルピースを披露してくれた。

ああああああ可愛すぎるううううう、q、

島村さんのスカウトから数日後、また武内さんがスカウトに行くらしい。

俺は付いていくのをやめた。

悔しさでまた魂が焼けそうになるかもしれないと考えると気軽に行けない。

千枝ちゃんやありすのほっぺをふにふにすることで誤魔化したが、なかつたら即死だった。

なんとか島村ショックによるダメージを回復し、IAの地域戦に向けた特訓や仕事に繰り出す。

今度は給料交渉しろと黒井社長に怒られる事案が発生。

すでに俺の名前で島村さん用の枠をぐり押ししまくったからなあ。

我が儘を言える空気じゃないんですが……。

ちなみにIUは961プロのJupiterが思ったよりも振るわず、765プロが持って行った。

そりゃあ黒井社長も激おこになるわな……。

3月

俺の移籍問題からみくにやん立て籠もり事件が発生、その際に俺の給料に不備が発覚したらしい。

そして、それに誘爆したかののように次々と色々な人の首が飛んで行ったり。

列挙すると凄まじいので掻い摘んで説明すると

- ・アイドル部署に嫉妬した人が成果を下降判定や懇意な部署へ補填処理していた
- ・コネ入社の人 がきちんと仕事を覚えてなくて、特殊な給料形態の人の給料を新卒用にしていた

・予算で賄われている施設費をちよろまかしている人がいた

・予算を流して不倫に使っていた

・社内で浮気していたくせに真の愛を語って社長をガチ切れさせた

- ・ 社内の情報をネットにアップした人がいた
- ・ 東豪寺プロに懐柔されてスパイ状態の人がいた
- ・ アイドルや部署のスタッフによる証言で俺の勤務時間がヤバいことが判明などである。

任された右京さんがバイブレーションしすぎてヤバかった。

逮捕されるような案件もあつたが、IAを控えている楓さんのように大きなイベントを控えている歌手や俳優の方々もいたのでできるだけ穏便にといい話で損失は金銭での解決に至った。

懲戒処分が嵐が巻き起こり、大半が懲戒解雇となった。

縁故採用とのために無駄に分岐して用意されていた仕事も一括されることになるらしい。

あとは俺の給料交渉だが、ほとんど俺と社長が右京さんに説教されてただけだった。

もつと自分の価値をくみみたいなことを言われても、労力を金額に換算とかよくわからないし……。

そもそも時給1050円だったからなあ。

ちなみに業界プロデューサーの平均年収は600万で、有名どころになると桁単位で変わっていくとか。

なん…だと…:…?!

問題が多すぎるので、経理はちひろさん辺りが管理することになった。役員などによる社員尋問などで時間がかかったが、問題も収束した。

と思ったら今度は東豪寺プロが煽ってきたので、こちらも大手のパワーでゴリ押しつ
つ東豪寺プロに恨みを持つプロダクションを呼び寄せて燃え上がらせた。

それに釣られた記者やパパラッチが右京さんによって過去の情報を持ち出されて必
殺された、流石右京さんだ!

ネットでは「346プロはやっぱ糞↓俺知ってたよ、東豪寺プロはブラックだつて↓
765プロとかブラックアンドブラック↓やっぱり961はホワイトだな!」というい
つもの流れだった。

完全に冗談の流れが出来上がっているので問題視されにくくなったり。

というか何が問題なのかマヒし始めているんじゃないか…:…?!

真面目に考察しているとところもあるが、声は大きくないのでスルーされていた。

あと黒井社長が961プロへの熱いホワイトコールに困惑しているらしい。

給料交渉によって楓さんのレッスンを少しだけ滞ったが、細かい点を仕上げていくこ

としかできないので東の間の休息になったと前向きに考えよう。

楓さんに付き添って北東地域へと出張。

3日前に現地入りし、パフォーマンスを流して調整、息抜きがてら地元のちよつとした番組にゲスト出演する。

普段も観光しているが、今回は北東IA選抜のみなので時間にかなり余裕がある。

昼間から嬉しそうに地酒を飲んだり、温泉に突撃する楓さんを見てみると、最近の事は東京ばかりだったのでこういったことが目当てだったのではないかと疑念が……。

楓さんはライブバトルの経験が少ないので不安だったが、払拭するような活躍で優勝。

頭ひとつ飛びぬけているパフォーマーだだった。

IA部門賞『SNOW WHITE』を受賞した。

当然だと思いう半面、やはり嬉しかった。

それは事実だが、気分は晴れない。

IAのグランドファイナルを考えると如何ともし難い気分になる。

翌週、都内で行われたIAグランドファイナルが終わった。

大賞は765プロのユニットが受賞した。

I Uの勢いそのままといった印象だった。当初の見立て通り、楓さんは4位だった。

少し違ったのは、どのアイドルもミスしなかったことか。

ミスに付け込んでなんとか4位かと思っていたが、そうではなかった。俺は自分が恥ずかしくかった。

壇上では、入賞してライトに照らされた1〜3位のアイドルの姿。

4位と5位は後ろに控えているだけ、スポットライトが当たることはない。

楓さんと目が合った、そして柔らかな微笑んだ。

会場は暗くなっており、明確に見えたわけではないがそう感じた。

何故だろう、目を逸らしたくなった。

346プロの事務所内で祝いの席が設けられた。

CDを発売した時、シンデレラガールを取った時、ライブを終えてから数日後の時、Aの部門賞を受賞した時、そして今日。

節目毎に祝ってきた。

今までは楽しかった。

今日は……。

胡散臭さに欠けていると指摘された。

笑えているか自信が無かったので、結構きつい。

千枝ちゃんを寮に所属するアイドルに任せ、片づけを終え、自分の席に座る。

早く帰って休むようにと言われているが、眠れそうにない。

一人になるとずっと結果を考えてしまう。

息抜きに水を飲むと、なんとなく苦みを感じる。

目を瞑れば、輝いていてほしいアイドルに光が当たらなかつたことを思い出して、堪らない気持ちになる。

時間をもつとあつたらと考えてしまうし、パフォーマンスが採点に強く影響していたので菜々さんや愛梨だつたらとも思ってしまう。

いや、出来る限りのことをしての結果だ。

結局俺がプロデューズすることになった、誰が出ても変わらなかつたのかもしれない。
い。

楓さんには一年、いや、半年早かつた。

たぶん、特化していれば勝てただろうが、それだけだ。

それではアイドルとしての魅力を伝えることはできなかった。

この結果が俺の精一杯だった。

それがなによりも惜しい。

きつと俺は贅沢なことを考えているのだろう。

I Aの部門賞を受賞できる機会は年に一度だけ、その限られた機会です5人のみが選ばれる。

必死に努力を続けて手が届かないアイドルがいることも理解している。

受賞に携われた身としても、榮譽なことだとわかっている。

楓さんの資質を考えれば当然のことだともわかっていた。

だからこそ、悔しいんだ。

PC画面のみを光源としていたために薄暗かった事務所の電気が点いた。

目が少しだけくらくらした。

誰だろうかとスイッチの近くに視線を向けると楓さんだった。

手にはコンビニの袋。

一緒に飲みましようかと誘われた。

楓さんは嬉しそうにお酒を飲んでいる。

俺はオレンジジュースを飲む。

少しかだけ酸味が強く感じられた。

お祝いを告げたが、いつも通り笑えているか自信がない。

ちびちびとオレンジジュースを飲んでいると、楓さんが見つめてきた。

透き通るような緑と青のオッドアイの瞳。

グラスを見せてきて、折角なので乾杯しましょうとのこと。

折角とはいいたい……。

IA部門賞『SNOW WHITE』について乾杯するのだろうか。

グラスを同じ高さに合わせると楓さんが口を開いた。

「私にはIA大賞を取れる魅力があると言ってくれたので、来年こそは取りますよ」

楓さんには珍しく力強く告げてきた。

その言葉に、俺は目を見開いた。

来年。

ああそうか、来年もあるんだ。

もう結果は出ているのだから、何時までも引き摺っていてもしょうがない。

わかっていたはずだった。

わかっていると思いついてただけだ。

悔しくて依怙地になつていたのか。

今がいつまで続くのかと終わりに不安を抱いて焦つていたのかもしれない。

「プロデューサーと私の来年のIA大賞に」

優しい声音によつて紡がれた言葉を追うように、硬質なガラスの音が響いた。

そして、静かな事務所の隅々に染み込んで消えた。

やわらかなボブカットの髪を揺らしながら、上機嫌に楓さんはグラスの中身を呑んでいる。

年齢よりもずっと若く見える童顔が酒気を帯びてほんのりと赤く染まり、左眼の泣きぼくろが色気を感じさせた。

子供が遊ぶように、楽しそうにお酒を呑んでいる。

アイドルを好きな理由を思い出した。

曇つた世界で、それでも輝こうとする強さが、何よりも美しかった。

その在り方が眩しかった。

燦然と輝くその姿に憧れたからだ。

虹鱒2章

プロデューサーとして働くようになってから、十と余年。

テレビを通して見た、あの華やかな世界に生きることができるのは優れた者のみだと知った。

金、権力、そして才能。

スポットライトは万人の物では無い。

ステージは選ばれた人間にのみ立つことを許される。

ファンが選ぶのは心奪われた一人だけ。

絢爛豪華なあのステージも、あの煌びやかなスポットライトも、一握りのためだけに用意されている。

幻想に栄えるような、眩いステージへと続く栄光の道を歩める者は、才能持つ一握りのみ。

アイドルを輝かしいステージに連れて行く、そんな美しい夢は現実の苛烈さを前にして夢く消えた。

初めは我武者羅に進めば報われる、そんな希望があった。幼く熱い夢を語る自分がいた。苦楽を分かち合える友がいた。志を共にする仲間がいた。才能あるアイドルがいた。理解ある協力者がいた。

無かったのは、知識と覚悟だった。

登るには時間がかかる。傾斜によつては遠くを見渡すには難しい。それでも必死に登った。仲間たちがいたから、登ることが出来た。苦勞して得られた仕事のやりがいと感動は、誇らしさすら覚えることができた。この先に輝かしい世界が待っている。

期待に膨らんだ夢は、留まるところを知らなかった。

最初は他のアイドルの踏み台として利用された。次は都合のいい道具として。その次は、ただの見世物。自らが望んだアイドル像が、離れていく、穢れていく。

隙を見せれば、背中を刺された。心を見せれば、踏みにじられた。

何時かきつと。それでも、何時かきつと……。

そう言い聞かせるように、走り続けた。それでも走り続けて、走り続けて……。

わき目も振らず、走り続けた。

その結果が、友は去り、仲間たちを失って、アイドルの心は折れ、プロダクションは潰れた。全てが無くなって、やっと気づいた。居場所は自分で得なければならぬ。

自分の心を亡くし、膨らんだ夢を潰して、気づいてしまった。潰えた夢の残骸に残る一握りの絶望に、生きる術を見つけてしまった。

おぞましい世界で生きるためには、おぞましさに身を委ねるしかないのだと。

だから真似をした。やられたから、やり返す。

簡単だった。

嫌なことをされていれば、覚えていれば、それだけ選択肢は増えていく。

友情は肥え太るための餌だった。信頼は互いの足を繋ぎとめる鎖。約束は背中を刺すまでの時間稼ぎ。隙を見せた者から喰らった。

おぞましい世界に生きる己、やはり屍人の如き浅ましさを身に付けた。

少ない仕事を得るために、互いを蹴り落としながら、汚らしく生きることに執着する。

仲間だと勝手に油断した奴等は衆愚に混ざって、ひっそりと怨嗟を呟いているだろう。蛆と蠅の湧く腐った肉を啜り喰らうことを知った今、夢は語れない。死肉を食べて生きながらえる身体に、輝きなど一切見えない。

目が眩むような栄華を誇るアイドル業界。強い輝きを放つその世界から離れることができずに蔓延る者たちは、炎に飛び込む虫のようなものだろう。愚かで、無知で、脆弱だ。

何故こんなにも執着しているのか。生きるためだったら、他にも仕事はある。自他が積み上げた夢の残骸の上に立って、誰かのためとは思えない。そんな疑問を抱くも、すぐに忘れた。真つ黒に染まった心に、ほんの一滴だけ白を垂らしても、黒であることに変わりはない。

送られてきたプロフィールに目を通し、男が次々と没箱に入れていく。男は東北地域でも有数、秋田ではトップでアイドル業を牽引しているプロダクションに所属しているプロデューサーだった。

昔も今も、地域の人々に名前が知られるような、ちよつとしたローカルアイドルを生み出してきた男だ。幾つかのプロダクションを転々と渡り歩き、今のプロダクションにその手腕を買われて腰を落ち着けた。

能力は己の鼻肩を抜いたとしても抜群だと自負しているし、これから更に高まっていくだらう。

その年季の入った顔は自信と覇気に満ち溢れていた。

「十時愛梨、15歳……。全く無いな」

送られてきたプロフィールを見る。そして写真を見て没、項目を流し見て没、何を見ても没。没箱へ放り投げた。

平均よりも若干整ったスタイルだったが、それだけだ。目に留まったのはそれだけ。顔の造詣も、一般人にとつては可愛いのだろうが、数多のアイドルを見て目の肥えた男には特別さを感じられない。

無いと呟いたのは、才能か魅力か、それともその両方か。

成功するアイドルは目を惹きつける輝きを持っている。強い苦みと仄かな甘みの織り交ざった経験から、本物を男は知っていた。後に強い輝きを持つようになる者もいるが、それでも最初から弱い輝きを持っている。

例えばクラスでも人気者になる人間は、輝きによって有象無象を率いていることがある。そういった者は天性の輝きから大成することが多い。

逆に虐められている者が輝きを放つこともある。仄かな明かりが、害虫を呼び寄せ、集られてしまう。害虫のせいで腐ってしまうことも多いが、成長しきれば、やはり大成することが多い。

先ほどの少女には、いや、応募してきた少女たちにはそういった物が一切ない。

普通に生きて、普通に過ごし、普通に注目されている。プロデュースしても浪費しかならない。間違いなく成功しない。意味がない。石炭をどれだけ磨こうとも黒く、輝くことはない。

かなり昔なら体を使って仕事を取る、いわゆる枕営業というやつでも生きていけるアイドルもいた。だが、今はいない。そんな隙を見せれば、他の同業者に叩かれて、無能のレッテルを貼られて藻屑と化す。

テレビ業界でも同様だった。アイドルの需要が増え、そういった仕事が増えた代わりに、逆に業界は清潔さを極めていった。地方でこれだ。力を至上とする黒井プロダク

シヨンが幅を利かせている東京なぞ魔窟だろう。

そして、アイドルが増えに増えた結果が、本物の天才たちによる実力主義だ。木っ端プロダクションや無名のアイドルには笑えない現実だろう。力なき者は生きる術を持たない、持てない。息を潜めて陰ひなたに存在することすら、許されくない。夢を語る権利は、天賦の才に付随した。

弱く才能のないアイドルと共倒れ等、決して嫌だった。情に絆された馬鹿から朽ちていったし、己もそうなる場所だった。

能力のあるアイドルを使い捨てて、残つて澄んだ上澄みだけを使うべきだ。可哀そうなどは許されない。

成功とは無慈悲なものだ。

生きるためには誰もが必死だ。

「次も無し。次も次も次も……。今日も収穫なし、と」

一目で輝きがわかる、成功するアイドルを求めている。こんな地方など踏み台でしかない、自分はここで終わるタマではない。

東京で成功を納め、喝采を浴びるのだ。その足掛かりは、長い時間をかけて作りあげている。あとはアイドルだ。才能があれば、駆け上がるだけ。

焦りはない。

急いてもいない。

事を逸った愚か者から潰れるから。

自分は踏み台となるべく愚か者どもとは違うのだ。

3

努力では届かない領域がある。才能のみが切り開ける道がある。それを知るまでに男は幾度も挫折を味わい、何度も裏切りの応酬を重ねた。今ではその過程も、千金に値する経験と知識を培うための土壌だと納得できた。

その結果が繋がった。

数多の夢の残骸を積み上げて見つけた、輝きだった。

一目でわかるほどの才能を持つアイドルを得ることができた。それも七人も、だ。

男にとって、それは有り余るほどの幸運だった。大手プロダクションでもこうはいか

ないだろう。

東京での活躍、自分に送られるべく喝采、凡人たちの羨望の眼差し。男の妄想は膨らみ、欲が際限なく湧き出す。それほどまでに期待を持つことのできるアイドルたちだ。

そのアイドルたちは個性豊かで、手綱を握るのも一苦勞だ。素性を調べればいじめ側、いじめられる側、常に注目される側、日陰でひっそりと過ごす側。纏まりなんて一部も無く、見事にばらばらで、たったの七人しかないグループで派閥まで作り、ちよつとしたことで争いを始める。

成功しかしていない人間と失敗しかしてこなかった人間が闘ぎ合い、モチベーションの維持に難儀する。ミーティングの調整すらも難しいくらいだ。

だが、その輝きを存分に発揮するためだと思えば男は我慢できた。いや、必要なことだとすら思っている。

レッスンとボイストレーニング、トーク技術、e t c。必要な技術を身に付ける数か月の期間を課した。その間、絶え間なく文句を吐き続けている。仕事がやりたい、待遇が悪い、グループの誰それが気持ち悪い、もっといいスタツフを……。しかし、愚痴のほとんどを男は許した。増長しきつて役に立たなくなならない程度までは甘やかす。そして、男は言葉で弄し、文句を宥めすかし、レッスンを続けさせる。世に披露するには、もっと練度を高める必要がある。

逃してはならないとプロダクションの誰もが思う程の才能だ。逃してしまえば男が築いてきたプロデューサーとしての地位すら危うくなるだろう。

こいつらも恐らく理解している。才能があるから許されている、男にプロデューサーの能力があるから我が儘が言える、地方でも大手のプロダクションだから留まってい

る。
小賢しい小娘たちと利益を追求する男の、損得によつて成された関係だ。アイドルとプロデューサーなど、冷え切つていようとも成功すれば問題ない。互いを利用し、利用されるだけの、協力者だ。男はそれでいいと思つている。小娘どもも同様だろう。

「おっさーん、あたしもう飽きたー」

「私もー」

「いや、君たちね……。初めてまだ5分も経つてないでしょ。頼むから頑張つてよ」

「えー？ あたしもう完璧だし、ね？」

「ねー。ま、覚えの悪いのもいるみたいだけど」

幾ら才能があろうとも、小賢しいといつても、十五から二十歳の年頃の娘たちの集まりだ。このように、ただステップを覚えたただけで調子に乗る。それでも何とか言い聞か

せてレッスンに戻す。男は不満を心の裏側に抑え込む。確かに覚えはいいだろう、覚えだけは。丁寧に繰り返しているからか、技術面ではステップの覚えが悪い娘のほうが良い。

虐げて満足する。虐げられないように必死になる。循環としては悪くない、はずだ。

互いに距離が離れている今は放っておいても問題ないだろう。だが、精神ケアも何れは必要になる。こいつらは、勝手に喧嘩して、勝手に傷ついて、勝手に迷惑をかける。面倒が面倒を呼び寄せる。

こいつらの我が儘を七年だけ我慢すればいい、と男は自分に言い聞かせた。七年で、アイドルアルティメイト（IU）の予選を突破できるほどに成長する。いや、この才能なら五年ほどかもしれない。

そうなれば、アイドルアカデミー（IA）の部門賞も夢ではなくなる。男のホームであるIA北東地域の部門賞である『SNOW WHITE』、一度たりとも手が届いた試しはない。ホームだから推薦を得ることはできる、だが、それだけだ。能力が、才能が、力が、何もかもが何時だって足りなかった。男のプロデューサーとしての能力を疑問視する声もある。

だが、IUとIAが届く位置にさえ立てれば、男のプロデューサーとしての能力を疑う者はいなくなる。小娘どもは、男にとって誰もが傳く未来のための道具だった。

ローカルアイドルで成功できた者はほとんどいない。裏を返せば、成功したアイドルを輩出できれば誰しもが注目するようになる。男のプロデュース能力を飾りたてる装飾品へと変わるのだ。

地方で成功してしまうと、そこで満足してしまう。低い山の頂上、貧しき頂点、貧者の王だ。大海を見ぬまま、井戸の底で踏ん反り返る。競う相手のいない微温湯で、自らを磨くことを忘れるのだ。

小娘どもにそんなことは許さない。小さな栄光に浸る余裕は与えない。地方でも有数の番組を足掛かりに、東京へと向かう。男の力を認めなかったプロダクションが乱立する、あの忌々しい東京へ。

地方は保険程度だ。それも万分の一、いや、億分の一にでも失敗したときの保険。東京へ行っても振り返る必要はない。

ここが拠点で、ホームだ。ほんの少し戻るだけで、力を見せるだけで、才能あるアイドルを欲しがって傅き媚を売る。

結局、地方なんてそんなものだ。

七人のアイドルから希望を見出し、レッスンを積ませて半年。地方で人気の番組で顔売ること、さらに半年。そして、長い年月をかけて作り上げた縁で東京への進出を果たした。まず成功だと言つて良かった。

あたかも東北活動を続け、人気があるかのように演出した。流行好きな人心の掴みは完璧だった。あとは少しずつ結果を出して、東京に根付き、隙を見て喉元に喰らいつく。今は雌伏の時だ。

「あんな感じのにはなりたくないよね」

「必死に人気とろうとしてみじめだもんね。さっさと諦めたらいいのに」

これからの事を逡巡していると、仕事帰りに伴っていたグループのうちの二人が口を開いて何かを嘲笑していた。見下すのが好きな二人の格好の獲物。想像に難しくない。啜う先に視線を向かわせれば、野外のライブバトル会場だ。それほど離れていない場所なのに、歓声が聞こえてこない。全くといつていいほど人気のないアイドル志望なのだろう。思った通り観客は疎らだ。

さらに言えばあの会場は、どこのプロダクションも保有していない空白地帯。維持費のために参加費が取られるので、能力のある者はここに来ない。自ら向かうか、プロダクションが保有する会場に行く。保有されている会場は事前のオーディションに勝ち抜けた者だけ。だから、あそこに居るのは夢を見る権利すらない弱者だけだ。

「あれれー、おっさーん。あんなんに興味あんのー？ うさぎの耳に、メイド服？ きつもー！」

「えー？ マジで？ 趣味わるっ！」

「ちよつと辞めなさいよ」

「あゝ？！」

「出たよー、出た出た。偽善ちゃんがいつも通りで安心しちゃったー」

才能に増長している二人の喋り方は、不思議と人を苛立たせてくる。それに反応して、真面目なメンバーが注意を投げかけたが、逆に火種となったようだった。口うるさい争いが始まった。全員、仲が良いようにテレビ撮影では見事な猫を被っていることに心配すればいいのか、安心すればいいのか。

声が大きすぎたのか、テレビで見かけるアイドルだと気付かれて囲まれてしまった。当分抜け出すことはできないだろう。人気が出ていることを実感できるが、衆愚に囲まれる面倒は頂けない。

見事に猫を被っていないす小娘どもや集ってきた野次馬を無視して、ライブバトル会場に目を凝らす。可哀そうに、残り少ない観客もきつとなくなつただろう。夢見る愚者が潰れるところは見どころだと期待したが、変わらずに孤独のままに笑顔を振りまいている。ダンスも歌も目を見張るような部分はないが、メンタルは強いらしい。一人で頑張る者だと思つたが、一人だけ残つていた。学生服を着た少年が、ステージ前でずっと応援し続けている。ステージで踊っているウサギ耳を付けたメイドに一喜一憂していた。ステージのすぐ傍で、魅力のないアイドル志望を見て何が楽しいのか。どう頑張つてもわからない。こちらには本物があるのに。

気づいていないのだろうか。そう思っていると、少年が騒ぎに気付いたのか、こちらに視線を向けてきた。すぐにも駆け寄ってくるだろう。そうなると、ステージの上のアイドル志望は潰れてしまうかもしれない。残っている一人の観客で、必死にモチベーションを保っているはずだから。

野次馬が集まりすぎて、そろそろ煩わしくなつてきた。彼が駆け寄ってきたら注意して散らそう。物好きな観客があのでステージの前に戻つて、本物と偽物の違いに失望の視線を浴びせたらどうなるか。その前にみんな満足して帰つてしまうか。もしかしたら、あからさまにがっかりした表情を浮かべるかもしれない。ステージの上のあの笑顔がどのような歪むのだろうか。悪いことをした。いや、夢を見る無意味さを教えると考え

たら良い事をしてしまった。思わぬ善行に、頬が吊り上がる。

だが、望んだ結果にはならなかった。少年がこちらに向けたのは、まるで汚物を見たかのような表情だった。そして、煩わしそうに睨み、溜息を吐いた。その顔の不機嫌さを表現する術はこの世には無いと思わせるほどだ。無理に表現すれば、肥溜めで泳ぐゴキブリの死にゆく様見送ったかのような、そんな表情をこちらに向け続けた後、応援に戻った。不機嫌など無かったかのように、メイドに笑顔で手を振られただけで、少年は子供のようにはしゃいでいる。

あの少年の両極端な反応が気になって、自分のアイドルと向こうのアイドル志望を見比べる。改めて検分する必要すらないほどの差が、歴然と存在している。それくらい一目でわかる。集まって来た野次馬にだって理解できているだろう。

気にする必要なんて無かった。向こうのアイドル志望に才能なんて一分とないだろうし、観客の学生も見えない。可哀そうなほど、才能の無い集まりだ。あちらとこちら、その隔たりには、ちよつとした才能が存在している者だけが選ばれる溝が出来たかのようなだ。二人の道化、そんなタイトルすら付きそうだった。

ああ、なるほど。

わかつてしまった。

有る者と無い者の差だ。

きつと、才能の無い者同士で通じる物があるのだろう。
富める者に、貧者の気持ちはわからない。

5

仕事は順調だった。細心の注意を払う、前のようなへまはしない。現場入りしてから限られた時間の中で、番組を作っているスタッフへの挨拶周りを行う。優先順位はカーस्टでいう、上位から順々に。相手が偉ければ偉いほど、時間をかける。覚えが良ければそれだけで仕事が増えるから。

今回はディレクターにも何とか挨拶できたが、毎度上手くいくことはない。相手が機嫌の悪い時など、言葉を間違えたら無視するよりも酷い結果になる。一人一人の機嫌を丁寧に取っていくと、立場が下のスタッフとは何とか顔合わせするのが精いっぱいなのが多い。アシスタントディレクターとは軽く挨拶するだけだ。どうせ仕事の辛

さに辞める。更に言えば、あと数か月もすれば頭を下げる立場が入れ替わると確信しているのも関係していた。それだけのアイドルとしての能力を持つ小娘たちだ。人気さえ出せば何をしても許される。挨拶周りだって、もっと楽になるはずだ。だからこそ、なるべく時間の浪費は抑え、効率よく進めなくてはならない。

小娘どもの機嫌だつて取る必要がある。プロダクションから連れてきたマネージャーたちは、モチベーションの維持ひとつ熟せない。いや、機嫌取り以外の能力も足りておらず、全く役にすら立っていない。役割は、一人一人を追つて歩くだけのタイマー機能付きスケジュール帳程度だ。こんな無能を曝すマネージャーに、重要な仕事を任せられるはずが無い。仕事が増え、それに比例して時間が必要になる。

これからの仕事などを、メモ帳を眺めながら改めて整理しているとエレベーターが止まった。扉が開いたので、乗り込む。先客は三人。346プロの俳優とそのマネージャー、そして学ランの少年だった。

「お世話になっております。今日はご一緒させていただけるとい話なので、うちの子ども喜んでいました」

「いえいえ、こちらこそお世話になってます。最近では一番有望株のアイドルとのことで、こちらとしても有り難い話です」

控室に挨拶に行く予定の俳優には会釈だけで済ませた。そして、相手のマネージャー

と軽い挨拶を交わす。小娘どもが喜んでゐるなど嘘だ、すぐに下に見る相手だと侮つてゐる。相手だつてただの社交辞令だろう。東京を本拠に置く大手の346プロダクションからすれば、掃いて捨てる程度の木っ端にしか見えていない筈だ。

細々と表面だけの会話を続ける。なんとなくエレベーターの進みが遅いように感じる。

ちらりと視線を目の前のマネージャーから逸らす。見えるのは俳優と少年がA4サイズの紙の前に、真剣に話し合つてゐる姿だった。老眼用なのか、紙に書かれてゐる文字は大きく、ちよつとした写真や絵もあった。中には小娘どもの写真も貼つてあり、細々としたメモが記載されている。

目的の階よりも下でエレベーターが止まり、俳優と少年が出ていった。控室へと向かつたのだろう。ならば少年はマネージャー見習いだろうか。

「そういえば今出て行つた彼は？」

「ああ、夏芽くんですか。社長の知り合いらしくて、今はアルバイトとして働いてくれていますね。いや、まだ半月足らずなので仕事もできないのだろうと全然期待してゐなかつたのですが。どうしてなかなか上手くやつてくれています。最近なんて……」

346プロのマネージャーの話が入つてこない、右から左へと通り抜けていく。先ほどの少年は、どうやら美城社長の知り合いの子らしい。金持ちのボンボンか。アルバイト

ト感覚で346プロで仕事できるとはいい気なものだ。

自分を必要としなかった大手プロダクションの一つ、そこで遊び半分で仕事をする少年。必死に駆けずり回って地方のプロダクションで働く自分。忌々しさに、我を忘れて舌打ちしそうになるのを、力強く拳を握りこんで抑え込んだ。

再びエレベーターが止まった。

「……さんも気難しいんですけど、機嫌が良くて有り難い話ですよ。夏芽くんが作った資料を読むと他番組の特徴とかもわかりやすいらしくて他の演者さんとの会話の幅が……。あ、私はここで降りませんで。また後で」

「え、ええ。また後でよろしくお願いします」

346プロのマネージャーが去っていく。あのマネージャーだって、自分より遥かに若く、能力があるようには見えない。少年と同様、コネクションによって働いているのだろう。そんな人間たちを、手厚く管理すべき商品の近くに置いているという事実には苛立った。

無機質な音が響き我に返る。手から強い痛みを感じた。思ったよりも強く握りこんでいた。何を感情的になっっているのだ。美城の底が見えて、なんて様だ笑えるだろうと。ゆっくりと開いた掌には血が滲んでいた。

エレベーターの扉がゆっくりと開いた。

月に一度、連携している連中と酒を呑む。表面上だけの信頼を深めるのと情報交換を兼ねた集まりだ。才能の溢れるアイドルたちが鎬を削る東京での仕事を単独でこなすのは不可能だった。自分たちと同じように出てきた、地方のプロダクション自慢のプロデューサーと連携を取る。決して綿密な連携ではない。互いに協力し合って隙を探す、それだけの関係だ。

注文を待っている間に、中年の男が遅れて入ってきた。最も視聴率の高い局に勤めているプロデューサーで、構想している番組の数字も高い。各々が挨拶を告げると、男は面倒そうに手を振って適当に挨拶を返し、ゆっくりと席についた。

それから数分と経たずに頼んでいた酒が配膳され、それを手に取って乾杯する。酒に

毒は入っていないが、一人一人の心根には毒が深く隠れているだろう。この集まりでは杯を酌み交わすことだけでは、信頼足りえる証明にはならない。

番組プロデューサーによる統制がぎりぎりとれている、腐肉を漁るハイエナやジャツカルのようなもの。群れのような関係を維持できているのだから、縄張りを荒らさないからだ。

利益という餌を上手く得られている今は穏やかなものだ。もつと保持しているアイドルが強くなれば、互いにつぶし合うことになる。来年には何人減っているのか、この会合ではそれも見ものだ。

「どうかな、最近の調子は」

「まあ、ぼちぼちです」

「ははは、その調子でぼちぼちか。なら先はIAかIUだな」

「……そうですね」

「そうなたらウチももつと鼻屑にしてみらおうか」

ははは、と軽い笑みを浮かべながら番組プロデューサーは去っていった。毎回、彼はそうやって一人一人に話しかけて回っている。会合の場を設けているのは自分だと恩を売っているつもりなのだろうか。そうであるなら安く買い叩いてやろうじゃないか。今は精々好きに売って回ればいい。すぐにでも立場は逆転するだろう。

番組プロデューサーに無理やり絡まれても、暗い表情を浮かべたままの男が気になった。仕事に失敗しても、次があると張り切るような男のはずだった。それが店に入つて久しぶりに顔を合わせた時から、番組プロデューサーの挨拶周りが行われている今までずっと沈鬱なままだ。

「なあ、どうした？」

「なんでもない、なんでも……」

放つておいたら酒が不味くなりそうで、声をかけたのは何となくだった。

こちらに向けた表情には何時もの生気が感じられない。やられたら相手が消えるまでやり返すようなしつこい性格だが、体育会系を思わせる明るさとウザさが同居している男だった。それが、何年も引きこもっていて人と会話したことが無かったような暗さすら醸し出している。返答の声も小さい。大きかった声も、囁くような細かい声だ。

「そんな様子で何でもないってわけにはいかんだろ。何があつた？」

隙を見せたら喰われる、そんな思いがあるのだろうか。いや、あるのだろう。だが、気になつた。この男がここまで落ち込む理由が。情けないことだつたらネタにすればいいし、貸しにして後で大きく膨らませて返してもらふことだつて出来る。

何度か優しく語りかける。

「346プロダクション、あるだろ？」

意を決したように男は口を開いた。小娘どもを労わるのに慣れた成果か、男が弱っていたお蔭か。

「ああ……」

346……。聞くだけで顔が歪んだ。今も昔も、こちらを馬鹿にすることしかしない。嫌悪を超え、憎悪を感じるようにすらなってきた。思い出すと胸に澱みが溜まる。それでも思い出さずにはいられない。

あれは四月のことだった。今まで何処のプロダクションも手を出さなかった空白地帯に346が進出した。理由は、アイドル業界に参加するためのアイドル探し。

346プロダクションといえば著名な俳優や歌手を多く輩出している大手だ。人が集まらないわけがない。行われるライブバトルには社長自ら審査員として顔を出すこともあった。愚かなことに、門扉を広げるためにオーディションすら行わず、自由参加だという。良い機会だと思った、一も二もなく飛びついたとも言える。自慢のアイドルで、会場を掻き乱す。ついでに美城が悔しがる姿も見れると思うと爽快だった。

情報を集めまわり、スケジュールを調整し、小娘どもを宥め、何とか社長が現れると言う日を狙って飛び入り参加した。ライブバトル会場は、美城社長の審査と本物のアイドルの飛び込みもあって、興奮は最高潮だった。小娘どものパフォーマンスが始まる、そんな直前で美城は離席した。必死に呼び止めても、逸材がいてティンとききたのだと

言つて何処かに行つてしまつた。逸材？ 此処に居るじゃないか。

残つたのは、盛り上がった会場と、敵を盛りあげただけでなく実のない仕事でもあることに苛立つ小娘ども、空虚に満たされた他プロダクションのプロデューサーである男だけだつた。

虚仮にされたあれ以来、346には憎しみしかない。

「あそこの岡崎つて子役上がり、どうも仕事が流れていてな……」

「あの人形染みたやつか」

「ああ……」

岡崎泰葉。346の中でも子供用のモデルや子役として売れていた娘だ。冷静な役には定評がある。冷静な役というか感情の起伏が少ない役しか出来ないとも言えた。あまりに早い時期から子役をやらせたせいなのか、人形染みた演技が問題視されていたはずだ。演じられる幅が狭く、子役の売りであるはずの明るい役など以ての外。その影響でテレビでも徐々に見えなくなつたというのに、仕事が流れるとはどういうことだ。何か失敗でもしたのかと視線で問いかけるが、首を横に振つただけだつた。

「大きな仕事は問題ないんだが、ちよつとした仕事が気付いたら回されて無くなつてきた。どうも、もやもやして嫌な気分になる」

管理を怠つただけなのではないか、そんな思いに駆られる。得られる仕事に胡坐を掻

いて、見放されるなどよく聞く話だ。実際、何度か味わったことがある。そういうものは、気づいた時には全てが遅い。だが、何も助言しないでおく。勝手に潰れてくれるのなら面倒な手間が省かれるというもの。残ったパイを搔つ攫う準備をしておくべきだろうか。

「ここ数か月で岡崎に張り付いているマネージャーのせいかとも疑っているんだが……」

「マネージャー？ マネージャー……。いたか、そんなの？」

「あれだ、前まで学生服でうろちよろしてた餓鬼だ。確か、前までは346の有名どころに張り付いてて今は岡崎の付き人みたいなことをやってるはずだ」

言われて思い出した。確か、瘦躯で背が百七十から百八十センチほどと高めの少年だった。長い髪を後ろで一纏めにしており、伸びた前髪の奥には絶えず笑みを浮かべていた。気質はひどく穏やかな少年だと聞いたが、その目は何処かこちらを見下しているようにも見えて、至極不快な気分させられた。最近はこちらが冷たいお偉い方の機嫌取りに駆けずり回っている傍で、アシスタントディレクターやディレクターともよく遊んでいていい気な物だと呆れたのを思い出した。アシスタントプロデューサーに苦いドリンクを飲ませて噴霧させても笑って許されていたし、アシスタントディレクターに罰ゲームの予行をやらせていた記憶がある。注意ができない、それほど丁重に扱われ

るのは……。

「あのボンボンか」

思い出して、呟いた。確か遊びでアルバイトをしているという、美城社長の知り合いの子だったはずだ。何処かの御曹司なのだろう。この業界は金持ちの遊び場では無いという気持ち芽生え、苛立ちが募った。つい語気も荒くなってしまった。

「何？」

「どうも美城の知り合いの子らしい。遊び半分のアバイトだと向こうのマナージャーから昔聞いた。あっちの俳優も、ボンボンの話は無視できない感じだったし、役員あたるの孫じゃないか」

「そうか、お偉いさんの孫か……。そうだよな。あんな餓鬼に何ができるって話だよな」少年についての話を伝えると、男は暗い雰囲気を消しさり、豪快に笑い出した。飽きたらいなくなるだろうし、居座つてもいずれ仕事が無くなって不満に思つて会社に逃げらるだろう。金や権力を使つて遊べるのも今の内だ。そこから不満が出て、346の信頼とともに消えてなくなるだろう。やはり美城も老碌したに違いない。笑いが浮かぶ。不安がついていた男と一緒に酒を呑む。不味さなど感じなかった。

この借りが、後で大きくなって返つてくると思うと、笑みが止まらない。御曹司の無能に乾杯したい気分だった。

気分を盛り返した男が盛り上げ、珍しく会合に笑いが溢れる。今ばかりは背中を刺される心配は必要なかった。

次の会合の約束を取り付け、解散する。久方ぶりに、いい気分だった。

そして、次の会合に、男は現れなかった。借りは返されることなく、男は業界を去った。御曹司は未だに業界で遊んでいる。

一体何が起きたというのだ……。

虹鱒3章

— 1 —

1万5千6話までのあらすじ

「みくにやんのファンやめます」

「え、ひどくない？」

「ひどくないです。そもそも練習生だったからファンなんていないけど」

「ちよ、ちよつとはいるにや。野外ライブで歌ってたから百人は……」

「いねえから！ 勝てないアイドルを応援して玄人ぶりたいだけだから！ そもそも魚が食えないのにかつお節が食べるってどういうことだ！ 加工品はよく考えたら原料と別物だから好物でも問題なかったぞこのやろう！」

「にあゝあゝあゝあゝあゝ!!」

ナデポ（握撃）によってみくにやんは藤○竜也に進化したぞ！

アルバイトの下積みを経て、恩ある社長の御心によって大手の346プロダクションに就職することに成功した俺。

今まさにエリート街道を爆走中である。

大手に勤めたのだから福利厚生がばっちりで給料も多い、そんな夢を抱いたものだ。現実はず違った。

まあ、何にだって欠点は在るものなので、脇に置いてみて見ぬふり。

エリートとなった俺の仕事内容はアイドルのプロデュースだ。

自分の好みの女の子をそこら辺でキャッチして「ぼくがかんがえた萌え萌えコスプレ」を着させる職だ。

346プロのアイドル部署が設立されたのは俺がアルバイトとしてお世話になった際であり、新入社員の俺と先輩の武内さんで事業開拓をしているというサバイバル感満載。

失敗して爆死、後に露頭に迷うフラグかと思いきや意外と上手くいっており、成功の軌道に乗っている感じがしているわけで。

俺もまああの仕事振りだと自負しているが、やはり大手のゴリ押しは違う。

ふわつとした感じでも成功を納められる346に心強さを感じながら、お金がもらえるので瀟洒な下僕のように振る舞っちゃう。

そんな下僕の俺にも悩みがあつた。

その悩みとは……

「仕事したくないです」

真顔。

そう、仕事をしたくないということである。

勘違いして欲しくないのは労働せずに銭が欲しいとか、そういうわけではないのだ。

「わかる、わかるよ、なずさん。杏には全部わかつてるから」

悲しいかな、妖怪飴くれに勘違いされてる。

こいつ、絶対わかつてない。

「いや、絶対わかつてないっしょ」

「いやいや、わかつてるから飴ちよーだい」

「いやいやいや、わかつてないっしょ」

「いやいやいやいや、わかつてるから。飴はよ、はよ」

いやいや煩いな、こいつ。

飴を渡すまで繰り返すつもりだろうか。

なんて意地汚い妖怪なんだ、飴くれ。

貰う側が偉そうだななんて資本社会を舐めているとしか思えない。

「そこまで言うなら飴をやるうじやないか」

「うむ、貰われてあげようじやないか」

ドヤつてしてた。

妖怪飴くれがドヤつてしてた。

ただ飴を食べるだけでドヤ顔とかないわー。

「ただし、俺がなぜ仕事をしたくないかわかるまで、貴様の口に飴を投入し続ける」

「ふーん？」

「つまり、答えを間違える度に飴を一個ずつ食べていいよつてことだ」

「ほ、ほんと？ 嘘じゃないよね？」

妖怪飴くれ、失礼な奴だ。

俺は嘘はつかない気がする善人だ。

飴を食わせたなら飯を食わなくなるし、歯もあまり磨かないなどの弊害が生じるから控えているだけなのに。

そもそもちゃんとご飯を食べたら飴を与えるのだが、そこら辺をそろそろを理解していただきたい。

プロデューサーとか事務で踏ん返り返ってテキストに方針だけ決めるようなアトモスフィアを漂わせているのに、実際は現場の指示から健康管理までやっているという。

他にもコンサートとかCDとか衣装とか諸々を手配しているし、改めて考えると仕事もおおすぎい！

まあ、普通に捌いて定時で帰れるようになってきたのでだいじょーぶ。

夜間の仕事が入るとその限りじゃないのがちよつと痛いくらいか。

「ホントにホントだ。では、今日のキャンディーチャンスに使用する飴はこちら。100万スコヴィルに涙し、胃の壁という壁に穴よ開け、ジヨロキア・クリスタル！」

「おい」

「本物の辛さを体験するためにスコヴィル値を再現したキャンディだ。催涙スプレーが18万スコヴィルだというのだからこいつの威力は……」

「ちよつと待つて。ホントにアイドルにそんなものを食べさせるつもり？」

「ちつ。冗談だ。ADさんが余ったからつてくれた罰ゲーム用だし」

目に入ったら失明するであろう兵器は机の引き出しに封印である。

ちなみにスコヴィルとは唐辛子などの辛さの単位らしく、辛みが感じられなくなるま

で砂糖水で薄めてなんちゃらとか近年では機械を使っているとかどうとかいう話だ。

妖怪飴くれが調子に乗ったら封印は解けるだろう。

そしてロシアンルーレットと化す飴袋、だが飴中毒の妖怪飴くれはわかっていても手を出すだろう……。

「舌打ちが聞こえたんだけど、杏の気のせい？」

「あれだな、星の囁きが聞こえたんだろ。地球もニートを養うほど余裕ないし」

「スケール大きすぎだから。そもそも人間の大半が地球から害虫だから杏だけでは……つてもういいから、飴はよ」

「しゃあないね。今日はこれ、なんか果物の果汁で美味いっぱいやつ」

「っぽいやつって……」

パッケージには「果物に溺れてどうぞ!」と力強く書かれている。

通販でいっぱいテキトーにちひろさんが予算で買うから当たり外れも当然ある。

そして、俺は飴を食べないので味は知らないが、さぞや溺れるほどに美味いのだろう。あまりに美味すぎて麻薬のように嘔まり、廃人のように『ア.: アメクレ.: .: へ?』

「杏(杏): 『と求める姿すら見えてきた。』

こえー。

でも食べさせる。

「グダグダ言うのは終わりだ。さあ、やるぞ。飴に沈むがいい!」

「いやグダグダ言つてたのはなすさんで……。ああ、いや、もういいよ。答えるから問題はよ」

「おけおけ。夏芽 薺ことわたくし、346プロダクションアイドル部署専任プロデューサーが仕事をしたくない理由とはなんでしようか! 間違つたら飴を一個強制進呈!」

妖怪飴くれ、だらしない顔を披露。

おそらく間違え続けて飴をたくさん食べるとか、そんな感じの予定だろう。

なんと汚いアへ顔ならぬアメ顔なのだろうか。

だが好きにするがいい!

飴に溺れて後悔しろよお!

「あれでしょ、働きたくないからでしょ」

「だから、俺が働きたくない理由を答えろと」

「仕事したくないから」

「いや、俺が仕事したくなくて働きたくない理由を答えろつてことだ」

「え? 働きたくないから仕事したくないつてことでしょ」

え、なにこの答え。

悪魔の問答とかそんな感じだろうか。

矛盾を見破れとか言いたいのか？

もう意味わかんない。。。

飴に飲まれよ。

「お(い)……」

「AnzuChang！ 飴二飲マレナイデマケルワ！」

仰向けになっている双葉杏(アイドル)の口に飴を敷き詰めてピラミッド作成に成功。

なお世に晒せるようアメ顔ではなかったと追記。

ちなみに働きたくない理由は、一緒に暮らしている妹の千枝ちゃんの授業参観の準備

がしたいからである。

実に普通ですね！

さて、仕事しよ。

15時30分、帰社。

一緒に戻ってきた菜々さんは社内のエステに行くとの話なので、途中でわかれてきた。

エレベーターで社内を移動できるって素敵。

仕事がみつちり詰まっていたら移動時間すらも惜しいのでエレベーターなんて使わずに壁を直走りとかするけど、手際がよくなくてきた俺にはそんなことは一切必要ない。

一人のアイドルが50や100の仕事をやっていたら儲かるかもしれないが、俺のキャッシュを超えるので無理です。

そもそも社長の方針は理想の偶像を作り上げることであって、収益は黒字であればいいって感じだ。

娯楽か何かかな。

「おっはにゃーっ☆ 今日も元気に……って杏ちゃん!？」

ソファで横になっっている妖怪飴くれに飴を放り込む。

疲れて昼寝しているのなら許せるが、一日中寝てるだけだし。

今日の飴は“アザトース味”だった。

飴くれが言葉にできない言葉で、なつきちのように辛くときめくロツクを奏でている

が、だりーなのようににわか俺には理解ができない。

まあ今日は元気だなあって感想くらいは抱けるけど。

「おう、おはよう。まあ、もう昼過ぎてるけど。猫語の挨拶のバリエーションが少ないんだろ、わかるよー」

「ちよつとそういうこと言うのやめて」

「わかってるだろうけど今日は合同レッツスンな」

「今日もレッツスンかじゃあ、でもみんなでやる合同なだけマシ……っじゃなくて、ナズチャン！ 杏チャンが沸騰する混沌が渦巻く最奥に存在する時を超越した無名の房室で、あたかも玉座に大の字になって寝そべっているような様子で泡立ち、膨張と収縮を繰り返しているじゃあー！」

「ははは、今日はどうしたんだみくにゃん。なかなかの詩人っぷりじゃないか。とうとう中二病デビューとか？ パクられた蘭子にどすこいどすこいされるか魂の杯を酌み交わすことになるぞ」

「先に蘭子にやんしたのは蘭子チャン……じゃないじゃあ！ そうじゃなくてえ、そう

じゃなくてえ！」

「まあ、猫キヤラも中二つぽいか、ははは」

「猫パンチ！」

「ほら、どすにやんどすにやん」とみくにやんの猫パンチを受け流す。

横目で伺っていたが、ちひろさんのドリンクで杏は回復したようだ。

そして回復した杏が人間魚雷としてぐわあああつあゝq

まあ、体重の軽い杏が100人来ようとも問題ないぜ。

そもそも100人もいたら内99人はサボる気がするから、結局1人分の威力になる。

「まあ、そういった要望は担当の武内さんに言いなさい。管轄外のことは何もできません」

「お役所仕事みたいなこと言わないで欲しいにやあ……。わかってるけど、プロデューサーってみくたちのことデビューさせる気が無さそうというか」

「私はそのほうが楽でいいけどね。もつと言えばレッスンも減らしてほしい」

「杏ちゃんはそれでいいかもしれないけど、みくはトップアイドルになるためにナズ

チャンに付いてきたんだから……なんでナズチャンは無視して仕事始めちゃってるの!? 流れる的にみくの相談に乗るところでしょ!？」

杏とみくにゃんが話しているの、もう終わりでいいかなとデスクに戻ったらみくにゃんが高速で迫ってきた。

猫の敏捷性を甘く見ていたぜ。

かなり人も増えてきたし、俺も武内さんみたいに完全な個室に移るべきだろうか。

いや、そもそも俺が使っている部屋にアイドルを詰めさせる判断が間違っているというか。

というかアイドル用の部屋があるのに何故俺の部屋に来るのか小一時間問い詰めた。

「みくにゃんの疑問である何故仕事をしているかという話だが、俺が社会人であり、これで飯を食っているからだ」

「え、いきなり真面目になっちゃおう? どこか間違ってた? ねえ、みく間違ってた?」

「マチガツテナイヨ」

「だよね。いやあ、よかったにや」

「そうだね、よかったよかった。じゃあね」

「ちよちよちよーい!」

椅子を回転させてPCの方に向けようとすると、謎の奇声を発したみくにガシツと肩を掴まれて阻まれた。

ちよちよちよーい、とは俺の知らない挨拶だろうか。

「……ちよちよちよーい」

これでいいだろ、とドヤ顔で挨拶を返す。

「違うにゃ！ ちよつと待つてつて意味だから！」

ならちやんとした言葉で伝えなさい。

変な勘違いしたでしょうが。

時間に余裕はあるが、俺もいつまでも遊んでいられるわけでもない。

しかもみくは俺の担当アイドルではないので、あまり深入りしていいわけも無い。

武内さんが颯爽と現れ、解決してくれる億が一を期待しながらみくの話聞き、的確な答えを導いていく。

「つまり、アイドルになりたいってことっしょ。わかってるわかってる」

「今まで何を聞いていたのかつてくらい全然わかってないにゃー！ そもそもアイドルになりたいなんてみんな思ってることだから！ 話してるのはそれからのこと……」

俺のあまりに的確な答えに論破されたのを怒っているのか、みくが声を張り上げる。発情期とかだろうか。

みくにやんつたらケダモノですね。

「異議あり！ 俺たちの杏ちゃんアイドルは手段であつて目的は印税です！」

黒革が張られているふかふかのソファに横になつて埋もれた餡くれ妖怪が、眠たげな表情をドヤ顔に変えた。

アイドルになりたいと思つていない女の子をアイドルにしようとする武内さんの深謀遠慮に戦慄を隠せない（テキトー）

「そうじゃなくて、ああもう！ だーかーらー！ みくが言いたいの……」

「だいじょーぶだいじょーぶ。心配せずに武内さんにどーんと任せなさい」

「他人任せ!?!」

担当アイドルじゃないからね。

他人任せになるのは当たり前のことである。

俺が拾つてきたけど、プロジェクトの調整でぶち込んだ背景があるわけだが。拾つたペットの世話を他人に押し付けてる感じがしないでもない。

「そもそも動物の躰つてあんまり多人数でやると失敗するし……」

「ペット扱い!?!」

どにゃーん!と驚くみくにゃん。

あざとい、でも可愛い。

まあ、猫だからね。

しようがないね。

そして動物系はいい、真剣にやってくれろと俺が癒される。

「そんなこと言ったらナナチャンはどーなの!」

「ばっか、菜々さんは兎だろ。それに天使だし」

そもそも俺が専任なので、多人数ではない。

俺が専任しているアイドルは武内さんだけでなく、会社自体がノータッチ。

丁寧で育んでいるのだから他人による変な癖など付きようがない。

346のトップに位置するのだから特別なのも当然である。

「うにゃー……」

対応がセメント過ぎてみくにゃんのモチベが枯渇寸前である。

失敗した。

それとなく優しく流すべきだった。

どうにも苦手なんだよなあ。

「しようがないな」

「にやつ！ それって！」

「兎になつたらプロデュースする」

俺、バニーちゃんが好きやねん。

あとメイドとか。

菜々さんとかマジでど真ん中なんだ、ごめんな。

まあ、猫も好きだし犬も好きだからみくにゃんはセーフだ。

でも爬虫類はペロペロできないのでヒヨウくんはお帰り下さい。

「……：そういうえば愛梨チャンがうさチャンになつてたような……：」

「あれはライブだから関係ないよ。凄い可愛かったから何度も見たいけど」

ライブバトルで試しに着てもらったが、実に良かった。

褒めたらテンションが上がったのか、ライブバトル相手を八つ裂きにするような勢いだったし。

あんな大差でボコられたら、普通の精神だとアイドルを辞めるかもしれない。

「ほら、宣言しろよ。バニーになるぴよん！って。そうしたら考えないこともない」
「ぐぬぬ……み、みくは自分を曲げないよ！」

「あ、はい。じゃあおつかれっしたー」

話は終わりと椅子を回転……また止められた。

なに、肩ドンのつもりなの？

めくるめくフォーリンラブなの？

「待って欲しいにゃー！ 今のは完璧にみくのやる気と猫への愛で面倒を見る流れだったにゃー！」

「ねーよ」

現実はそんなに甘くない。

ふざけたことを言って気を紛らわせる作戦は上手くいきそうだ。

「にゃふう……！ ナズチャン、ワガママすぎない!?!」

「え、俺が我が儘な感じ？ 予想しなかった展開なんですけど」

つれーわー。

マジつれーわー。

担当ではないとは言え、気に入ったから連れて来たアイドルにこんな言われるなんて悲しい。

母親のダイナミック焼き討ちや父親の何時の間にか死去くらいつれーわー。

「だから、みくはトツプアイドルになりたいんだにや！」

「おう、頑張れよ」

「ちーがーうーのー！ みくはそういう言葉が聞きたいんじゃないのー！」

「あ、はい。じゃあ、何が聞きたいんですかね」

「何がって！ どうやってたらナズチャンがみくをトツプアイドルにしてくれるかって事を聞きたいの！」

ふーふーと興奮しながらみくにゃんが叫んだのを聞き流し、思考を巡らせる。

武内さんが聞いたなら泣くだろ、これとか。

しかし、俺がプロデュースするのはなあとか。

ちよつとだけ口出す機会はあるが……。

「あー……うーん……。どう考えても無理い……」

「え、ひどくない？」

現状でみくにゃんは武内さんによるプロデューサールートではほぼ確定だ。

上層部から大きな圧力が掛かって、プロジェクト解体のような強制的に環境が変化せ

ざるを得ない状況にならない限りは難しい。

何故難しいのかという理由だが、シンデレラプロジェクトに組み込まれているせいだ。

346プロとしての名前や力を使ってアイドルをシンデレラガールを育成するプロジェクトのプロデューサーは武内さんであるため、みくの方針はプロジェクトに委ねられる形になる。

成功すればそのまま武内さんがプロデューサーとして導くし、ほどほどの結果でも同様だ。

初動に労力をかけ、幸運にも実働前にシンデレラガールを輩出している現状では、ちよつとやそつとの失敗では小揺るぎもしない。

それに俺も権限は少ないがプロジェクトに参入している状態であり、どちらかのアイドルが上位を取ればシンデレラプロジェクトの成果として加算されるだろう。

アイドルが活動しており、成果が少しでも確認できれば存続する半永久機関のようなプロジェクトとなつてしまっている。

そういうわけで理想の偶像を生み出すために全力を出した社長の執念と俺の手伝いによつて無駄に盤石になつてしまっているようだ。

アイドル本人が望むプロデュースを受けられないという致命的な欠点も抱えている

し、成果が芳しくなくても続いてしまう性質の悪さも見え隠れしている。

あ、これダメなやつだ。

そのうちなんとかしないといけない気がする。

「シンデレラプロジェクトが無くなったら選択の機会が出てくるけど」

「無くなったらって……。それだとみく、アイドルじゃなくなっちゃうじゃん……」

みくにゃんは気にし過ぎなんだよなあ。

プロジェクトが解体されたとしても所属アイドルをいきなり野に放つことはしない。

まあ、みくにゃんは無所属時代からスカウトで引き上げられた恩というフィルターを通して、俺に憧れを抱いているだけだろう。

大人が抱いている思い出を、過去の夢で彩っているような物だ。

時間が経てば忘れるものだ。

「無いとは思うけどプロジェクトがこけたとしたら、武内さんと頑張る方向かなって」「変わらないにゃー……」

シンデレラプロジェクトのメンバーをプロデューサーするのは、実を言うと俺には酷く難しい。

身近な不祥事が相次いだため、俺は雇われプロデューサーのような成果主義の面が強い雇用形態になっているので、会社という組織の歯車から飛び出している状態だ。

環境や施設などは口出しすればかなり優先的に叶えて貰えるくらいアイドルの育成に特化している半面、会社内の動向に対しては権限がかなり低い。

そしてシンデレラプロジェクトに関しては346プロが実権を握っているので、武内さんがメインを張って運営を行っているのだ。

俺も助言は出来るが、直接的には手を出すのは難しい。

選択肢を探ってみたり、方向性を提案したりするのが精々だ。

あまりに手出ししすぎて悪手を取ったら役員にボコられて首がすばーんである。

しかも、有り得ないと思うが成果なしでプロジェクトがポシヤったら同じように俺の能力に対して疑問がもたれ、不祥事を餌に叩かれて首がすばーん。

マジでブルってきやがったぜ、ふふ怖。

「トップアイドルになればプロデューサーなんて選び放題、みたいな？」

「手段と目的が入れ替わってるにや〜……」

みくと俺が組む可能性は残念ながらほぼ一択しかなく、それもトップアイドルになつてからののだ。

それか事務所を飛び出して再結成とか。

俺は飛び出す気が無いので、やはり一択だろう。

「なんにしろ、レッスンを頑張らないと始まらないけどな」

「にやー……。杏チャン、みくは先に行つてダンスをトレーナーさんに見て貰つてるからぬ……」

とほとほと扉へと向かつて歩き出すみくにやん。

持ち直したモチベがまた急降下である。

とはいえ、レッスンまで時間があるのに自主練のために向かうやる気は買おうじやないか。

しょうがないので魔法の言葉を投下。

「ちなみにレッスンの準備のみにやんや杏と違って、俺の担当している菜々さんはFUISSAN ROCKの準備だから。上位アイドルは忙しくてつれーわー」

日本で開かれるフェスは数が少なく、上位のアイドルやミュージシャンのみが参加でききる。

346も招待を受けており、スケジュールの都合により菜々さんを選出した。

というかフェスに向いていて、人気上位のアイドルから選択できるのが菜々さんしかいなかった。

野外フェスなのでなつきちを送り込みたかったが、知名度や練度が足りなかった。

「ううう……！　い、今に見てるにや！　絶対にナズチャンにみくのプロデュースしてもらうんだから！」

「え、プロジェクト破壊宣言？　可愛い顔して大胆だな……」

まさかみくにゃんは俺の会社での立場を理解し、ここで息の根を止めようともいうのか！

聡いと同時に恐ろしい娘だ。

俺はなんて娘を拾ったのだろうか……。

「違うに決まってるでしょ！　すぐにトツプアイドルになったみくに！　ナズチャンが！　プロデュースさせてくださいってお願いするってこと！」

あ、違うのか。

安心した。

ぐぬぬ顔で必死になるみくにゃんに、ついとばかりに俺も笑みを零した。

3月くらいに卑屈な笑い浮かべるのを頑張って辞めたので、多分きつと自然な笑みを浮かべられたのだろう。

普段は生来の癖で染みついた媚びた笑いを浮かべそうになるので、表情を殺さないといけないようになったのが大変だが。

「そうになったら頼みに行くから、期待しているよ。今日も頑張ってたな」

「ナズチャンのぼーかばーかー」と捨て台詞を吐きながら、みくにやんが走り去っていった。

みくにやん一人のお蔭で騒がしかった室内は静寂を取り戻した。

ふう、とため息をつく。

そして、当たり前だけどそこで寝っ転がってる杏もレッスンあるんだよなあ、と思いつ出した。

— 4

16時15分。

菜々さんの様子を軽く見に行って帰ってきたが、室内には変わらず杏が寝たままだった。

ちなみに菜々さんは緩んだ顔で寝てたので30連射で写メしておいた。

そんなことよりも、いや、菜々さんの写メも重要だが、レッスン開始時刻である16時30分が迫っているというのに、杏はソファの眠り姫と化したままである。

杏と同期のメンバーはおそらくレッスン室にそのまま向かったのだろう。

きらりが回収に来るかど期待したが、彼女も今日は部屋に直接行ったのかも。見捨てた可能性は零だと思うので考慮しない。

このまま放置しておけば、トレーナーさんから連絡を受けた武内さんが迎えに来るだろうが、彼は押しが弱いので時間もかかる。

俺が連れて行く必要があるだろう。

というか折角だし、連れて行こう。

「よし」

「え、何が良いのか杏に教えて。なずさんのアイドルの運び方はこれで合ってるの？

嘘でしょ？ 酔いつぶれた楓さんだつて優しく抱えて運んでたじゃん。可笑しくない

？ 私つてば繊細なんだけど」

アイアンクローで小さな頭部を掴んだ満足感に、つい言葉を洩らしてしまった。

頭部にかかった圧力か、はたまた漏れ出た言葉のせいかわ、丁度良く目覚めたらしく、杏が何か囁っていた。

が、真面目じゃないアイドルは死ぬしかないから無視である。

だつて仕事だもん（無慈悲）

「楓さんは仕事してるし、アイドルには優しく接するのが常識なんだよ。で、かさ張るゴミは圧縮して燃やす。つまり完全論破だ、ありすもお目目きらきらになる程の」

「論破できてないしそもそもありすちゃんはずさんには何時だってお目目きらきら……ってそうじゃないから。早く頭から手を放してくれないかな。冗談で済まないくらい痛いんだけど」

「おう」

「お、おい！ 聞いているのか、私はアイドルだぞ！」

「おう」

「いたたたた、痛みで意識が……！ おかしい！ おかしいってば！ タイム！」

こっちが一生懸命握っているのに意識を手放して寝ようとするなんて。

寝ほけ眼のままではレッスンも大変だろう。

優しい俺が爽やかな目覚めと鋭い痛みをお届けします。

「俺、冗談は苦手なんだ……ごめん」

「謝る前に手を放してくださいお願いします！」

「え？ 今なんでもするって」

「絶対に言っていないよ！」

これで無理に言質とってレッスンさせようかとも思ったが、自由意志が伴わないのは流石に駄目だろう。

残念ながら解放する。

あ、溜息が出てしまった。

「おかしい。幼気な女の子に痛みを与え、剩れ解放した直後にため息とか。こんな絶対におかしいよ」

「おかしくないよ。小さくて握りやすかったし」

「うーん、アイドルの頭部を握りつぶそうとした人の感想は違うなあ……」

「握り潰そうとしたつもりは無かった。ただ、俺は純粹に砕きたかったんだ」

「ええ……」

「なずさんなずさん」

「なに」

「じゃ、改めて運んで」

解放されて落ち着いたのだろうか、その言葉とともに杏はソファの上で腕を広げ、だっこ待ちの姿勢となった。

学習能力が皆無なのかドヤ顔まで披露している。

俺も自然ではない作り笑いを浮かべる。

我慢？

知らんな。

「人は死に向かつて歩み続けており、その途をどのように進むかが生きることだとシスタークラリスが教えてくれた。振り返った時、後悔無きように人は善を積み、隣人に愛を分け与えることだとも。……お前の途をここで確認しておこう、死という終着点でな。どれだけの後悔で満たされているのか見たくてたまらないぜ」

ちひろさんから貰うスタミナドリンクの空き瓶を握り、力を込める。

普通なら握り潰せないし、潰せたとしても破片が手に突き刺さることを恐れるだろうが、俺ほどの握力ならば粉にできる。

スタドリの瓶だった粉末が、室内の空気を循環させる空調によって生み出された風に乗ってさらさらと流れ、幻想的で杏の将来を予感させる儚さを語っているかのようだった。

「あ、杏は自分を曲げるよー」

杏が気怠さをかなぐり捨て、必死さを感じられる動きで立ち上がった。

出来ない人にやらすのは酷だろうが、杏には何をやらせても酷ではないのだ。

こいつは並みの限界までやらせても問題ない程度のスペック持ちだし。

どうしてなかなか武内さんも人を見る目がある。

俺だったら能力と精神で判断するので、こういうのは選別から落としてしまう。

「あーもう、ちよつとした冗談だったのに」

「俺だつて冗談だつた。杏の生を不確かな冗談に変える的な意味で」

「なにそれ怖すぎい……」

うげえ、と清纯アイドルだったら確実に許されない表情を浮かべている杏の口に飴をいくつか放り込む。

午前中に一度果物に沈めたが、あれは午前分であり、きらりに用事があつて昼ご飯を食べ無さそうだったので無理やり補給させただけだ。

仕事が無ければ連行していたのだが。

今はレッスン前に食べさせてやる気を補充させつつ、カロリーを無理にでも足している感じである。

どれだけ動きが良くても、エネルギーが足りなければどうにもならない。

ご飯を食べずに飴で活動しているのはあんまり好きじゃないのだが、レッスンなどは日々の積み重ねであるところも大きいのでしようがない。

餌付けだけでなく、もうちよつと自力でご飯とか食べると楽なのだが。

ふやけた飴顔に「普通にレッスンできたら後で飴あげるから」と囁いておく。

こいつは普通にやったらダンスレッスンなどは何の問題もない。

むしろカロリーの頑張られると困る。

きらりとセットで活動できる日しかスタミナ系を鍛えられないが、まあ連日同じレッスンをするわけでもないのでセーフだろう。

武内さんは優しく思いやりが有りすぎるので素直な子とは相性がいいのだが、杏のような難物は苦戦するようだ。

が、俺ならいける。

なんだかんだ杏の扱いは鞭（腕力）と飴（文字通り）で通せるし。

ちよろいしい甘い、つまりちよろ甘だ。

「……そういえばなずさんさあ、さっきの話つてみくだけ？」

「さっきの話？ え、なに。杏はバニーちゃんになりたいの？ 杏びよんとかマジかよ。」

これは4Kカメラ導入しないと」

「いや、それじゃないから。頼むから兎から離れてね」

兎以外に何か話しただろうか。

……。

……。

……！

「くっ、殺せ……！」

「なんでそうなっちゃったの!？」

えっ、違った？

— 5

16時35分

しようもない話をしていたらレッスン開始時間が過ぎていた。

トレーナーさんに電話をかけなければならぬだろう。

「なずさんなずさん」

「なんだい、あんずーりん」

「あんずーりん!? 語呂悪すぎない!?!」

そう悪いと思わないけど。

異世界だったら諸手を挙げて喜ばれそうなほどに。

「おう、俺のハイセンスにケチ付けるとか、社長に進言して芸名にしてもいいんだぞ」
「変なところで権力使おうとしないですよ。そうじゃなくて」

杏が壁に掛かっているスケジュール表を指差す。

相変わらず彼女の手は小さい。

ありすや千枝ちゃんほどの大きさをええない可能性もある。

これで高校生だというのだから憐れだ。

「可哀そうだな……」

「なんか不快なんだけど。……もう話を戻すけど、今日のレッスンは17時からだから」

マジか。

……マジだった。

シンデレラガールプロジェクトメンバー用に俺が用意し、書いているスケジュール表には「合同レッスン17：00〜」と自筆で書かれていた。

こんな凡ミスするとかボケたのだろうか。

「やっぱり疲れてるとか」

「い、いや、担当じゃないアイドルのスケジュールなんてガバるのが常識って話だよ」

「声震えてるし、そんな常識あったら不味くない？」

不味いです。

不味くないとしたらそいつの仕事はきつとアイドルに携わることがないのだろう。

「仕事しすぎ？」

「いや、余裕だから」

「アイドルが増えても？」

「だいじょーぶ」

「杏が増えても？」

「だいじよばない」

「い、今の流れでそれはおかしいでしょ」

「おかしくない」

「そろそろきらりが来るから杏は行くよ」

「ああ、頑張つてな」

気だるげに立ち上がった杏がそう言ったので、俺も慈愛に満ちた表情で見送る。

「うわ、なにその無表情。こっわ」

そんな言われたら泣きます。

「あと、みくにやんに言つてたことだけど。杏も権利あるでしょ、プロデュースされるの」

「そごそと俺のデスクを杏が漁りながら、そんなことを言い出す。

勝手にそんなことされても困ります。

「いや、トップアイドルなら平等にあるというか」

「それでいいよ、今は。はい、杏のだけどあげるよ」

飴を渡されたので受けとる。

俺の机から出てきた飴を、自分のだと言い張るその性根は流石だ。

「俺の机から出した物を渡されても」

「私があげないと食べないじゃん」

アイドル用の予算で買ってるので、俺が食べるのは違うのだ。

だからアイドルから貰ったら食べていいってそれもどうなのだろうって感じだが。

「何？ 俺のことが好きなの？ 好きなら兎になつてぴよんぴよんしろよ」

「ちーがーいーまーすー。印税のためだから。勘違いしないでよね」

気だるげな杏にツンデレみたいなこと言われた。

誰得なんだ。

そもそもトップアイドルになったらそれこそ給料と印税で生きていけそうだ。

「それ俺がプロデュ「おっすおっす☆」

どじゃーん☆と扉を開き、きらりが部屋に入ってきた。

細い体に特徴的な大きな背、ふわふわの髪と豊満な胸をゆらししている。

彼女の言葉も方言説あるのだが、どうなのだろう。

「ナズーリン、杏ちゃん連れてくねー☆」

「きらり、今日は優しくね？ 頼むからね？ なずさん輸送のほうが良かったとかやめ

てね？」

きらりがガツチリ☆と杏を抱える。

脇に抱える姿は、まるでぬいぐるみを運ぶかのようだ。

「きらりさん。俺、ナズーリンはやめてほしいなって」

「むえー」

きらりはく（、ε、）と表情を歪め、そのまま部屋を出て行った。

「おねがいだからもっと優しく運んでって！ とれちゃうから！ 杏とれちゃうから
！」

静かになった部屋、デスクに腰かける。

スマホを確認すると休暇だった楓さんから「ジエダイが復讐ってなんジエダイ」というタイトルで「明日はライトサーバーを持っていきますね」とメールが入っていた。

ライトサーバーを持つてくるとかなんジエダイ……いや、これだめだな。

個々人が望むプロデューサーか、とため息を吐く。

誰でもいいってわけでは勿論、ない。

アイドルと、その成長を見守る裏方、どちらも重要だ。

虹鱒3章2

3—2

「佐久間さん、今日のお仕事はこれで終わりです。確か近くに住んでるんでしたよね、直帰で構いません。では、お疲れ様でした」

「はい、お疲れ様でした」

佐久間まゆは柔らかな笑みを貼り付け、自らのマネージャーを見送る。

彼女が読者モデルとなったのはそう遠い昔ではない。クラスでご飯を一緒に食べる仲の友人と一緒に応募して、まゆだけが合格した。それからその友人とは疎遠になった。嫉妬、羨望、諦観、色々な感情が入り混じっていたようだったように思える。ただ、その時のまゆに出来ることは何も無かった。

友人を失って、少しクラスで浮くようになった。日常のちよつとした居場所を失った。得たのは興味のない芸能界の、ほんの端っこ。両親の喜ぶ姿、それと失った代わりに得た居場所を守るように何となく続けていた。

この生活に不満は無い。だが、しかし。満足している訳も、当然ながら一切ない。

それは昨日までの話。今日の仕事を終えた今ならば、不満しか募っていない。どこにも満足すればいいのか、考えるのすら面倒なほどに。

仕事の様子を思い返す。

撮影は順調に始まった。撮影のメンバーは、普段一緒に仕事する読者モデルの子と、東京の事務所から来たアイドルの子たち、華やかで姦しい現場だった。あまり口数が少なく会話に参加しないまゆでも、東京から来た城ヶ崎美嘉が気を使ってくれて、平時よりも楽しく仕事が出来た気がした。ピンク髪が特徴的な流行りの女子高生然とした城ヶ崎だが、気配りが上手で、軽い調子に見え隠れする優しく穏やかな物腰は、まゆにも好意を抱かせた。

今回は「和」をテーマにしたものだった。慣れない着物を着て、屋外を歩いたり、室内のセットでお茶を飲む姿を撮影するのは、内心で少しの緊張と不安を感じた。何か言ってくれやしないかとマネージャーに視線を向けるが、佐久間さんなら大丈夫そうだと、てんで関係のない言葉とともに、セットの背景へと紛れてしまった。

東京から来た子たちは着物の撮影であることや、仙台でのスタジオだというのに気後れしている様子は無かった。三人だから心強いのだろうか、楽しそうにプロデューサーに見せびらかしていた。そのプロデューサーは、何故か着物を着て無表情で団子を頬

張っていた。

撮影も、東京の子たちは肩の力が抜けた自然体で進めていた。楽しそうで、自信に満ち溢れている。普段から使い慣れている筈のスタジオでの撮影なのに、まゆのほうが緊張しているくらいだった。

撮影が進むと、まゆも緊張が抜けてきて、周囲の様子を見る余裕が出てきた。そうすると、東京の子たちの仕草が気になって仕方なかった。写真を撮る合間に、彼女たちはよく手を振ったり、暇があれば話していたりと、何かしらやっているのだ。相手はプロデューサーや、そのプロデューサーと一緒にいるスタッフだった。例えば悪いが、他の子が前に媚を売っていた様子が思い浮かんだ。ただ、それとは様子が全く違うように思える。なんとというか、親しい相手に構ってもらいたくてしょうがないというのだろうか、とにかくそんな様子だった。

撮影も残り僅かになると、東京の子たちだけでなく、普段一緒に仕事している読者モデルの子も手を振るようになった。彼女も最初は大手の事務所相手に媚を売るつもりだった様だが、途中からは楽しそうに仕事を進めていた。その先には件のプロデューサー。彼は団子を頬張り、お茶を啜りながらも、ずっと真剣に撮影の推移を見ていた。

まゆのマネージャーはセットの背景に埋もれ、東京から来たプロデューサーはスタッフに馴染みながら率先して前に出ている。何が違うのだろうか、何故違うのだろうか。

試しにまゆも、カメラのシャッターが切られるほんの一瞬、彼に向けて手を振ってみる。なんだろうか、いつもと違う。なんとなく不思議な気持ちになる。いつもは自分で対象をイメージして作る表情が、今日は作りやすい。カメラマンや見えない誰かではなく、確かに届いているように感じる。あのプロデューサーは、撮影の邪魔にならず、かつ、こちらがアクションの対象にしやすい位置にいつもいるようだが、それが関わっているのだろうか。

まゆがわかったのは、彼はとても表情豊かだということだ。確かに無表情なのだが、纏っている空気が変わると言えればいいのだろうか。独特な人なのだろう、喋らなくてもわかるくらいに。むしろ、喋らないからわかったのかもしれない。

写真を撮る際に、自分がよく出来ていたと思つたとき。彼を見ると、満足げに団子を頬張り、こちらを見ながら何度も頷いている。褒めてくれているつもりなのか、小さく手も振ってくれる。失敗したり、納得がいかないとき。カメラマンの人に上手く行くまで撮ってもらえるように頼んでくれる。こちらの要求に敏感で、わかつてくれている。そんな素振りだ。過保護なのかもしれないけれど、それくらい自分を見てもらえる。羨ましい。無意識にまゆは自らと、東京の子たちの境遇を比べる様になっていた。

「はあ」とまゆはため息を吐いた。今、まゆには危機が迫っている。それは誰にも助け

を求めることは出来ない強敵だった。

和室のセットがあるスタジオには今誰もいない。スタッフは次の撮影のため、すぐに移動して行ったし、マネージャーはまゆに直帰で良いと告げるとすぐに去って行った。東京から来たアイドルの子たちも、あのプロデューサーも、挨拶をして出て行った。

こじんまりとした和室の一角を再現したセットに正座で座ったままのまゆ。セットは華やかだが、そのスタジオは、広く、寂しい。ぽつりと取り残されたようで、まゆに空虚さすら抱かせた。

その取り残された寂しい空間で、まゆは一人、足の痺れと戦っていた。

——慣れないことはするものじゃない

まゆは内心でそんなことを考えていたが、結局仕事なのだから避けることはできなかった。せめて誰が残っていたら、話し相手になってくれたかもしれないが、残念ながらここにはまゆしかない。

動かなければ痺れもほとんどない。少しずつ解すしかない。自分は何をやっているのだろうか、こんなことのために読者モデルになったのか、まゆは逡巡するようになった。益体もない考えだが、やることがないのだから仕方ないじゃないか。

あのプロデューサーだったら一緒に待っていてくれただろうか、きつと待っていてくれたに違いない。自分の期待を彼に重ねてみる。マネージャーは先に帰るといふ答え

を出した、だから何も期待できない。そもそも自分の足が痺れているから待つてくれだなんて言うつもりは無いし、帰ったのも仕方の無いことだ。だが、彼ならもしかしたら、そんなことを考えて、やつぱり空しさだけが残る。

「佐久間さん？」

期待とは、幻聴すらも聞こえるようになるのか。まゆは自分がどれだけ現状に不満を持っているのか、真剣に考え始めようとして。とりあえず、幻聴の主を待つことにした。痺れが無くなるまで待つて、それでも来なければ幻聴だ。

だが、すぐにやや痩せ気味だが、長い背の少年が近づいてきた。件のプロデューサー、そのものだった。

まゆは、幻覚すらも見えるほどに……と逸れる思考を戻す。現実には現実だ。

「美城プロのプロデューサーさん、どうかしましたか？」

首を傾げながらまゆが問う。

彼は餡子に包まれた団子を食べている。表情はあまり変わらないが柔らかいように感じる。雰囲気も嬉しそうだ。甘いものが好きなのだろうか。

「いや、なんか調子が悪そうだったから来てみたんだけど。マネージャーの方は？」

「ふふ、ありがとうございます。まゆは大丈夫ですよ。あ、あとマネージャーさんは先に帰られましたよ」

そうなんだ、と彼が言う。彼ももう帰ってしまうのだろうか。残念だという気持ちがある。

調子が悪いと言ったら、事務所が違ってても彼は心配してくれるかもしれない。今からでも、調子が悪い素振りをしてしまおうか。そんな考えが過ぎった。

「そっかそっか」

うんうんと頷きながら、彼は和室のセットに腰かけた。

まゆとは近すぎず、だが、遠すぎない。喋りやすく、まゆからは横顔を見やすい位置だ。

居てくれるのは嬉しいが、理由がわからない。もしかして、危ない人なのだろうか。なにが合っても叫べるよう、心構えだけはしっかりしておくべきだろうか。

「……えっと、プロデューサーさん？ どうかしましたかあ？」

彼は無表情なままだった。団子を食べ終え、串を残されていたお茶請けの皿に置いた。そして、セットに残されていた急須からお茶を汲んでいる。

「実は撮影で疲れて足が痺れちゃったんだ。ちよつと休んでいこうかなって。もし足が痺れてて悶絶している姿を誰かに見られたとき、一人だけだと変でしょ？」

和室のセットから足を垂らし、ぶらぶらとさせながらそんなことを言う。

お茶は温くなってしまったのか、湯気は出ていなかった。

「もしかして、わかってますかあ……?」

「何も、全然。大丈夫じゃないプロデューサーには、大丈夫な佐久間さんのことはわからないなあ」

茶化すような笑みを浮かべていた。それは温かみのある表情だった。

夢から覚めたまゆの朝は早い。朝の五時前には目覚め、軽めに身なりを整える。そして、前日から下拵えしてあった材料を冷蔵庫から取り出して調理し、弁当箱へとせっせと詰めていく。自身のプロデューサーである齋と食べる、そのために。

昨日よりも今日、今日よりも明日。常に進歩する自分をイメージしながら。それはアイドルとしての自分と重なる事が多い。妥協は無く、当然手抜きもしない。これはそういうものだ。望む結果を得るための努力は続けるからこそ尊い。

努力しない者に勝利は無い。まゆはそれを当然のことだと思っている。この場合の勝利とは、齋に褒められることに他ならない。天才だろうと、センスに優れていると、齋は努力無き者を褒めない。だから努力する、だから頑張っている。その先がトップアイドルで、さらにその先が……。

何時かの終点を夢想していると、弁当を作り終える予定の時刻が迫っていた。慣れた

作業だったため、無意識で終わっていた。努力は裏切らない。

今日は八時三十分頃に齋が事務所に来る日だ。仕事先に直接行く日でもない。スケジュールと今までの行動から予測を立てられるし、メールで聞いたから完璧だ。きちんとして待機しておけば会えるのはほぼ確定的だろうし、朝食も供に出来るはずだ。

今日は何となく、でも絶対に齋と朝食を食べたかった。いつもそう思っているが、今日は更にそう思っていた。

会えない日でもお弁当を用意しており、不意の幸運で出会えた時にも対処できるようにしてあるが、やはり出会えることが事前にわかる今日の気分は実に良いもので。

齋と一緒に練習した歌を口ずさみながら、身支度を進める。読者モデルになる際に、失った物と一緒に着いて回るようになったそれが隠れるように、左手に手袋をする。そして、髪を梳きながら思考する。

可愛いは作れる。が、どのように作るかが重要だ。自身に沿った可愛さでなければ武器にならない。これもきつと自分を知るために続けるべきなのだろう。

事務所に来てそう経たない内に、顔を真っ赤にしながら兎耳を付けたことがあった。「どうですかあ」と齋に問うと「ファンに可愛いって言ってもらえるよ」と素っ気ないものだった。「齋さんは？」と聞くと「顔が真っ赤なのは可愛いね。そうだ、リボンをあげよう」と兎耳をすぐに外され、齋にリボンを渡された。嬉しいようであじかった。

しよんぼりとしたまゆの様子に見兼ねた事務のちひろさんが「なずなくんはその人に沿った物じゃないと好きにならないって聞いたわ」と教えてもらった。偏屈で、好みが厳しいのだとも。

それからは、自分を見直して、お洒落するようになった。時には冒険することもあれば、安定だったり、保守的だったりする。それでも薺は褒めてくれる。自分で決めた芯がぶれなければ、彼は何時だってまゆに期待してくれている。

そして同じように……

『もしですよ？　もし、まゆが、プロデューサーさんと一緒にアイドルになって仕事した
いって言ったら……な、なんて誘ってくれますかあ？』

仙台でまゆが読者モデルをしていて、薺が東京のプロデューサーだったとき、そう聞いたことがあった。

緊張していた。

同時にとても期待していた。

飲んでいたお茶を置いて、彼がまゆの目の前に正座した。

撮影中の無表情とも、さつきまで読者モデルやアイドルの仕事について話していた物

とも違う、真摯な表情だった。

『俺のすべてをあげるから、どうかアイドルになってください』

同じように、まゆも彼に期待している。

自身を期待してくれている彼に、期待している。

夢見ることも、運命の赤いリボンも、何もかもを。

もし、なんて言わなければ。驚かせようと、思つてその日の内に事務所を飛び出さなければ。彼はまゆをアイドルに誘つてくれたのだろうか。同じことを言つてくれただろうか。

今でも考えることだ。

決して忘れない。後悔ではない、期待ではない。ただ、知りたかった。

彼が望むトップアイドルになれば、きっと彼は同じことを言つてくれるはず。

そして、彼のすべてを貰い、彼に全てをあげて、まゆはずつと期待している。

ずつとずつとずつと……彼に期待している。

まゆが、事務所の前で、運命的に齋と出会えた。その喜びのまま「朝ご飯、食べませんか」と誘い、承諾を受けた。

ああ、なんて運がいいのだろうかともまゆが瞳を潤ませていると。

「ブオウン！」

そんな言葉とともに現れたのは、ふわりとした髪の毛、整った顔には緑と青のオツドアイ、透けそうなほどにきめ細やかで白い肌、長身かつスレンダー、まゆをして憧れる清廉な大人の女性を体現した高垣 楓。

その彼女が、フランスパンを振り回しながら現れた。纏っている黒い布が動きに遅れて追従し、ひらひらとはためいた。

大人の女性を体現していたはずの楓は、実はシスの暗黒卿だったのだ。

「おはようございます、楓さん。今日は朝からライトセーバーですか」

「おはようございます、齋さん。そうです、今日の朝はライトセーバーです。それで齋さん齋さん」

「あ、ああ。ライトセーバーを食べるのは」

「何ジエダイ、ふふっ」

まゆの前で、二人が微笑み合っている。ぬるい風とともにほわりと花が咲いたような

空気が流れる。あの無表情な齋も微笑んでいる。悔しいことだが、まゆよりも楓のほうが、齋と仲が良い。まゆも齋の笑みを見ることができるが、楓ほど頻繁ではない。

これがまゆよりも先を行き、トップアイドルに近づいた者の力か。空気すらも捻じ曲げる。まゆは力量差に戦慄した。

このままでは追いつくことも、その背を見ることもできない。何処かで差を縮める努力が必要であると。だからこそその、朝食だった。だが、這い寄るように、怒涛の攻めを見せてきた。強い。激戦が繰り広げられることになるだろう、まゆはごくりと小さな喉を鳴らした。

「……楓さん、まゆと齋さんはこれから朝ご飯なので」

負けるわけにはいかない。まゆはトップアイドルを志す者だ。針の孔ほどの隙を刺し、この場を征す。それくらい出来なければ夢を語る資格もない。

「なんと奇遇なっ！」

しかし、楓は引かない。彼女のライトセーバーはご飯なのだ、そして今の時刻はちょうど朝と言える。つまるところ、真名がフランスパンであるライトセーバーは、朝ご飯だ。実に奇遇である。

ぐぬぬ、とまゆは内心で齒噛みした。その全く隙のない論理は、ありすの弾丸論破で

も凌ぐのは厳しいだろう。

両手に掲げているお弁当箱の愛情が、近所のベーカリーで焼かれたであろうライトセーバーに負けるはずがない。

だが、論理を捻じ曲げなければ負けである。

なお、包み紙にパン屋さんの名前が書かれているので、近所のベーカリーだとわかった。

「し、しかし、楓さん。ここにあるフランスパンは一本、いるのは三人。それは楓さんだけで食べればいいのでは？」

待ったっ！ 異議ありっ！

まゆのコンボが決まった。隙など生じぬ完全論理。算数すらも持ちだした究極の一……。

「スライスして、まゆちゃんのお弁当を乗せましょう」

平然と言いのける楓は隠し暗器持ちの二刀流使いだった。フランスパンに隠されていた、ギザギザの刃を持ったフランスパン用のナイフが、事務所の明かりに照らされた。今日も虎鉄はパン油に飢えている、そんな言葉が聞こえそうだ。

全てを見たわけでは無かった。まだ集めるべき情報はあったのだ。

まゆは己の失策に齒噛みした。

しかし、まだだ。まだ負けたわけではない。

論破すればいい、詰むには早い。

貫け、奴よりも早く……！

「異議ありっ！」

「いきなりですが認めます」

こくりと楓が先を促す。互いに真剣な表情だ。おそらく最後の一撃になると理解しているのだ。

これを失敗すれば、負け。

思い浮かぶのはみくにやんに焼き土下座、伸びたラーメン、33-4、シンクと焼きそば……。

「……楓さんは、冷えたフランスパンを齋さんに食べさせるんですかあ？」

稲妻の如く、それは楓に衝撃を与えた。

社員食堂で提供されている食事は暖かい。まゆのお弁当は愛情が籠っている。

だが、楓のフランスパンはどうだろうか。冷えている。かちかちかもしれない。ライトセーバー？ 違う、これは鈍器だ。

ライトセーバーと銘打ったが、結局ただのパンだ。齋の声真似によるSEが無ければ石器時代の勇者が持つあれにすら劣る。別にジェダイとして修業し、一人前になって必

要なときに手に入ったわけでもない。パン屋のおじさんに頼み、手作りしたパンだ。寝坊しないように前日には酒を控えて朝早く起き、捏ねて、焼いたフランスパン。

愛情一本、フランスパン。

「まゆちゃん、貴女、勘違いしていないかしら……う？」

垂れ目がキュートなまゆの瞳が開かれる。かわいい。

「私が用意したのはフランスパンだけじゃないわ」

そうして楓が懐から瓶を取り出す。それは契約の箱だ。齋を骨抜きにする、必殺の兵器。あんなものが持ちだされたら、この戦いはノーゲームとなる。

やめてっ！ まゆが叫ぶ前にそれは開かれた。

「戦いは、悲しみしか生まない。でも貴女がそれを望むなら私は……」

意味深な言葉とともに蓋を空ける。

齋の好物、餡子が詰まった瓶が解放された。

解放されてしまったのだ。

これから始まるそれは、きつと餡子にしか興味を示さない男の物語……。

なお結末だが、フランスパンに餡子は合わないという理由で楓の懐に戻された。

結局、薺のデスク近くで、楓とまゆも一緒にご飯を食べることになった。

そして、この勝負の勝利者は……

「ちひろさんのお茶はいつも美味しいですよね」

「あら、そういつてもらえるなんて嬉しいです。まあ、なずなくんの好みはなんでも知ってますからね！」

緑の事務服を着た、三つ編みが可愛い千川ちひろが搔つ攫つて行った。

堂々と薺の隣に座して世話をしながら、まゆのお弁当を食べ、トーストしたフランスパンを齧る。

彼女に比べれば誰もがひよっこ、誰もがルーキー。

ちっひこそが勝者で、他は全て敗者なのだ。

最古参は伊達じゃない。

ぶすーとむくれた楓が、薺のデスクから餡を漁る。

ちひろへの、せめてもの反撃だ。

赤い包みから餡を取り出し、そして、

「くふっ……いっ！ けほっ……いっ！」

「楓さん！ なんてジヨロキア・クリスタルなんて劇薬を口に……いっ！」

薺に心配されながらも激辛に倒れ伏す楓、その横顔はどこか満足げだった。

やっぱり楓さんはすごい、まゆは尊敬と畏怖を抱えながらそう思った。

2

楓さんには辛い物はあまり口にしないようにと注意を促しておいた。喉を傷めて綺麗な声が出なくなったらと思うと、ゾツとする。大事に至らなくて良かった。廃棄に回し、ちひろさんにもこういうのは頼まないように告げておく。

「薺さん！ まゆは次こそは勝って見せますよお！」となぜか気合の入ったまゆを送る。

俺に凭れかかってぐったりしていた楓さんは「今日はお休みなので、お酒を呑みに行ってきます」と去って行った。

ちひろさんも仕事を始めただろうし、俺も頑張ろうかなと事務所の扉を開ける。

「ほわあああああ、のこったたいおんすごすぎるよおおお」

「えっ」

ありますが、俺の椅子でとろけていた。

目が合ったことに気付いたありますが、いそいそと立ち上がる。

そして、綺麗な姿勢で椅子に正座した。

「どうかしましたか、なずなさん」

「いやどうって。むしろ、ありますがどうなのっていうか」

「……あ、温めておきました」

「えっ」

「どうぞ」

豊臣秀吉か、君は。

原作：この素晴らしい世界に祝福を、この素晴らしい世界
に爆焰を、ブロントさん、他 虹素晴―爆焰編（完）

1—1

治療の甲斐なく俺は死んだらしい。

傷の痛みと高熱を出して意識が朦朧としていたのが最後の記憶なのだが、教えて貰った話によると傷口に細菌が入ってなんらかの病気に感染して、体力が落ちていたので死んだようだ。

入院した理由だが、高校の帰りにバイトへ行こうと橋を渡っていたら暴走車に轢かれそうになったが、イケメンに押されて緊急回避に成功。

その後に橋から落ちて複雑骨折になっていたがかなりの時間放置され、入院しても手遅れだったのなサムシングだった。

ちなみに俺を助けようとしてくれたイケメンは轢かれて死んだらしい。

チラッと見ただけでイケメンだったが、轢かれた後もイケメンだったようで、通りかかった人々はイケメンを助けるために必死に頑張ったようだ。

そのイケメンは轢かれた後もしばらくの間、みんなの期待に応えるために生死を彷徨っていたことで、野次馬たちはそちらに掛かりきりとなっていて。

そんなわけで、橋の下で誰に看取られることも無くひっそりと人生を終わらせそうになっていた俺の処置が遅れたようだった。

……こんな複雑な気分にならないほうがおかしいじゃーん、q、

——このすば——

そんなわけでポテチを貪っている水色の女神様とやらに、俺の死因の説明を受けた後に人生相談である。

相談内容はこれからどうするのか、ということだ。

両親は蒸発したのでないし、祖父母も亡くなっていて家財諸共すべて持っていかけたので、明日の朝日拝むのが大変な状況だったし、これはかなりの幸運だった。

今回は死んだら全て終わりで次の人生へ強制輸送というわけではなく、選択肢が与え

られ、その中から好きな人生を送っていいようだ。

ちなみに選択肢は三つ。

一つ目、天国で老後のような口ハスな老後を送る。

マジでつまらんから人生を楽しんで枯れてから来た方がいらしい。

二つ目、リセットして地球でもう一度人生を送る。

文字通り、そのうち死ぬ人生を赤子でRE：ゼロから始まる地球生活的なやつ。

三つ目、魔王がいる剣と魔法のファンタジー異世界でまた死ぬまで頑張る。

現在のおすすめで今ならチート装備つけてくれるつてよ。

女神様イチオシは三つ目の選択肢である、異世界で頑張るやつらしい。

今なら女神様を崇拜できるアクシズ教の信徒になれるサービス付きでお得！らしい。

いや、そのアクシズ教とやらは要らないです。

俺の人生が詰まった目録をテキストにペラペラ捲りながら「うわー、かなり苦しんで死んだのね。いたそー」ってポテチ食いながら流す女神様を崇拜するのは嫌です。

もつと労わってほしい。

そもそも俺の人生をポテチの油でべたべたにしないうでください、マジなんでもします

！

「ん？ 今なんでもするつて言った？」

「へ？」

「これはもう救うしかないわ！ 異世界を！」

そういうことで異世界に行くことになった。

異世界行くことに決まったら話は終わりだとばかりにポテチの女神様は「忙しい忙しい」とスナック菓子をぼりぼり食べながら、俺の周りに魔法陣を展開。

俺の体が透け透けになっていく。

ちよつと待って、何も詳しい話を聞いてないんだけど伝えようとしたが、声がどうにも届かない。

「あ、いつけない。能力忘れてた。まあ、言葉とかは頭がパーにならなければ大丈夫だし。あとはエリスに任せれば……」

気づけば森の中に立っていた。

「ここが異世界……」

とりあえず何したらいいんですか、誰か教えてください。

— 1 —

「夏芽 薺さん……。ようこそ、死後の世界へ。私は、あなたに新たな道を示す女神、エリス」

白亜の神殿、その一角で俺は目覚めた。

目の前には白銀の髪と透き通るような白い肌が目を引く美しい女性が、胸の前で両手を組みながら気遣わしげに俺を見つめていた。

そうだ、俺は死んだのだ。

死因は鮮明に覚えている。

舌を噛み千切りながら鋭利な枝で腹と首を掻つ捌き、太めの枝で眼球から脳までを一
直線に貫いてのダイナミック自殺。

自分でも惚れ惚れとするような死に様だったと思う。

いや、意味もなく死んだわけでは無くて、ちゃんとした理由があるわけで。

あれは森に投げ出されて三日目の事。

空腹を木の実や川の水で癒しながら、なんとか生き残ろうと頑張った頃に出会った
オークが原因だった。

オークと言えば姫騎士が「くつ、殺せ！」という程の凶暴な生き物だが、この世界の

オークはメスしかないらしいから。

俺の知ってる特徴のまま精力抜群、怪力乱神、傾国の不細工。

そいつらが、俺を狙ってきたのだ。

ちなみに逃げれば逃げるほどメスオークが増えるクソゲー、しかも聞こえるのは「オスメス合わせて百匹生まれるまで〇〇〇〇させるわ、ダーリン！ そのあと海の見える家で四六時中いちゃいちゃしよう！」などという地獄の怨嗟。

逃走を続けたが、逃げ道が無くなったので自殺を選んだというオチだ。

ダイナミックに死んだ理由は、ポテチの駄女神様が剣と魔法のファンタジーな異世界と言っていたので、万が一にでも回復魔法的なモノや薬で再生させられないようにするためだ。

そういうわけで、生命と尊厳の危機を感じたので自殺したという、矛盾しすぎて一周して逆に自然な感じで自殺することと相成った。

美しさの権化である女神エリス様が頭を抱えていた。

さらさらと流れる御髪がきらきらと幻想的に輝いていた。

エリス様いわく、スナック女神こと『アクア先輩』のちよつとしたミスで色々設定が足りてなかったたので、もう一回やり直させてくれるらしい。

有り難いことである。

ただ……

「出来ればいいのですが、次はもっと簡単な場所で始めさせてくれると……」

美しい女神様に注文を付けるのは心苦しいのだが、やはりセルフブレインシエイク

（物理）はマジきつつい。

「ごめんなさいごめんなさい！ 次は絶対に大丈夫ですから！」

物腰穏やかそうなエリス様が頭を必死に何度も下げてくれた。

あまりに必死過ぎてロックバンドのヘッドバンギングに見えてきそうだ。

—— 異世界の生き方 ——

そのいち！ 『自分だけの特殊な能力を手に入れよう！』

地球から異世界に行く人はオリジナリティ溢れる特殊な能力を持って行けるらしい。

片腕にサイコガンを取り付け、「だがもう無くなった！」とやってヒュー！と言われるのも自由。

「倒してしまつて構わんのだろう？」とカッコつけて帰らぬ人となるのも自由。

「もうヤダ、この国」と文句を言いながら世界を滅ぼす兵器を作るのも自由。

聞けば聞くほどなんでも有りの様だ。

ただ、エリス様としてはあまり変なものを持ちこまれると困るらしい。

特に、死後も残る武器防具は駄目って訳でもないが、おススメしたくないとか。持ち主の死後も悪用されたりするのだろうか。

女神様を困らせるのは本意ではないので、そこら辺は調整が効くやつにしようかなと思ったり思わなかったり。

とりあえずエリス様と二人で、能力を考える。

過去にあつた案を目録として見せてくれたので参考にしつつ、利便性があつて、死後に影響しないもの。

……。

……死後に影響しない物はおそらく難しいので省略。

『言霊を操る程度の能力』的な感じにすることにした。

次点は『ゴミを木に変える能力』だった。

エリス様おススメは『うどんを上手に茹でる木の棒』か『野菜を上手く収穫する軍手』だった。

影響のない物を考慮したとはいえ、ホントにエリス様が俺のことを考えてくれているのか心配になりつつ、能力の調整へと進める。

そのに！ 『自分だけの特殊な能力を調整しよう！』

言霊をそのまま操ると、全く喋れなくなるし、文字も書けなくなるという大きな欠点
が、過去にあったらしいので、色々と調整して使いやすい能力にする。

なぜ言葉に纏わる能力を選んだかという理由だが、俺の頭がそれほど良くないのでそ
れほど大きな影響は出ないだろうというものだ。

頭が良いわけでもないので語彙が足りないし、言葉の意味もあまりわかっていないの
で、勝手にブレーキが効くだろうとも。

まず異世界の言語で発動しないようにロックをかけ、能力が地球の言語に対応するよ
うに設定。

次いで、発声しての発動は五秒以内でひらがなカナ漢字英数字合わせて三文字まで。

もちろん俺が意味を理解していないと発動しない。

「凍れ」「燃えろ」みたいな単語を呟く中二スキルに昇華されてしまったが、想像力と
魔力で云々らしいのでかなり抑え目になるという話だ。

さらに、俺が書いた文字の影響だが、書いたひらがなカナ漢字英数字の影響を物質
諸々に与えるという物になった。

五文字制限で俺が知っていて意味のある単語や熟語のみが効果を発揮する。

コップや湯飲み、皿などに「美味」とでも書いておけば、何時でも美味しい物が飲み食
いできるという万能な能力という空気がそこら中に迸っている。

最後に、言語や文字によって効果を發揮させる始動キーとして、魔力を流すことを設定して終了。

そのさん！ 『自分だけの特殊な能力を使おう！』

エリス様の空間だと発声系はロックがかかっている状態であり、異世界に行かないと試すことは出来ないようだ。

メモ帳と羽ペンを渡されたので、とりあえず文字のほうを試してみよう。

胸の前で両手を合わせ、祈るような姿勢のエリス様が可愛かったので、文字を書かずにずっとその様を見てたら、「ふざけたら駄目ですよ」とちよつと怒られた。

それも可愛い。

大天使か。

あ、女神だった。

もう一回祈るエリス様が見たい。

邪な使い方だが、俺の能力ならいけるはず……！！

もう一回的な意味の単語……『RETRY』とか？

書いて、自分に貼ってみる。

記憶が甦るのか、タイムリープするのか。

男は度胸ってね！

気づけば森の中に立っていた。

遠くにはメスオークの集団……。

ひよ、ひよえー！（、ω、）

俺が何したっていうんですか！ 誰か助けてください！

半泣きになりながら、震える手で拾った枝を構える。

視界の端には青を通り越して白くなった顔色のオークが倒れている。

油断して近づいてきたオークに枝で『苦痛』とほんのり痕が残るよう刻んだら、泡吹いて倒れた。

それを見ていた他のメスオークどもは、近づくの警戒している。

膠着状態だが、俺の方が圧倒的に不利である。

全員で飛び掛られたら敗北が確定する。

エリス様から貰ったメモ帳と羽ペンをこんなところで使いたくないと枝を構えているが、そんな場合でもない。

『無敵』とか『高速』って紙に書いて自分に貼って逃げるべきではないだろうか。

そんな俺の悩みを野生の察知能力とでも、乙女の勘とでもいうのか、オークが一斉に突撃してきた。

その圧巻な様子と恐怖により、ペンを落してしまった。

くっ、殺せ……！

「はやくきてはやくきて」と泣き叫んでいる男のために俺はとんずらを使って普通ならまだ付かない時間でこーまの里kらきようきよ参戦」

眩いばかりに白く輝く鎧を身に付けた白髪 of 戦士が、襲い掛かってきたメスオークの集団を一蹴した。

そして戦士は腰の抜けた俺を庇うように立った。

先陣を切っていた数体のオークは真つ二つになり、唸り声と血しぶきを上げながら転がっている。

「ナイトのおかげだもう勝負ついてるから。……おいイ？ お前らは今の言葉聞こえたか？」

そう戦士がオークに言い放ち、持っていた剣を地面に突き刺した。

地面が爆ぜ、巻き上げられた泥とともに真つ二つに切り捨てられていた死骸が茫然と
していたオークの集団に降りかかる。

悲鳴と地鳴りを響かせ、オークが森へと消えて行った。

「Burontさんなんだって守ってしまうまがないと。だろおう？」

太陽に照らされた輝く戦士が俺に笑みを浮かべた。

おとぎ話に出てくる騎士のように荘厳で、そして強かった。

そんな彼を見た俺は「エリス様、異世界の言葉が上手く理解できません」と内心で悲

鳴を挙げた。

——
オリ主

地球ではマジで貧乏すぎてヤバかったが死んだのでノーカン。

幸運は5くらい。

「意味を与える程度の能力」を持って異世界に参戦。

意味を正しく理解せず、ふわっとしたまま使うと危険な能力である。

『苦痛』と刻むとオリ主に降りかかった不幸や痛みを体験できる必殺技持ち。

くっ殺枠。

ブロントさん

紅魔族として転生した地球人。

「ブロントさん」までが名前。

優秀な学生だったが魔法は初級を取っただけで卒業し、在学中に得たスキルポイントは戦士系に全振りした。

1—2

「我が名はぶっころりー。紅魔族随一の靴屋のせがれ。アークウィザードにして、上級魔法を操る者……！」

「バカが移るもういいからバカは黙ってろ。ナズーりん、おmえも異常な超状現状が移ってあrから注意そろ」

この世界の住人である紅魔族のぶっころりー（？）とかいうのとぶろんとさんの二人を見て、内心で真剣にエリス様に祈る。

エリス様、僕の言語は大丈夫ですよね!?

ホントに大丈夫なんですすよね!?

— このすば! —

俺がプロントさんさん(『プロントさん』までが名前らしい)に保護され、訪れたのは紅魔族の里。

ここの住人はみんな目が赤く、独特の名乗り文句を持つているらしい。
自己紹介を受けた感じだと、大体全員がなんらかで随一だとか唯一だとか特別なよう
だ。

前口上は、その…：げ、元気があっていいと思うよ？

この里の特徴として、住人の誰もが魔法適正が高いため、上級魔法を操るジョブに就けるらしい。

俺は他の場所を知らないし、この世界の常識も著しく欠如しているのでわからないの
だが、多分すごいことなのだろう。

この里ではレベル1で上級魔法を操って一人前みたいな話を教えて貰ったし。そんな魔法職が跋扈する里でのブロントさんはかなり可笑しいらしい。

まあ魔法適性が無茶苦茶高い生まれなのに、前衛職に努力を極振りだという話だから、里の常識とはズレているのかもしれない。

俺としてはかつこよかつたし、変だとも思わない。

言葉がもう少しわかりやすいと有り難いんだけど。

地球という遠い場所の日本という国からなんかよくわからないけど飛ばされて来たと説明すると、紅魔族の方々は転移魔法の失敗によるものではないかと推測を立ててくれた。

ブロントさんは聞いたことのある懐かしい響きだ、と遠い目をしながら呟くのみだった。

まあ、ブロントさんの呟きを解読するのに紅魔族の同期とやら五人と一緒にあーだこーだ相談して五分で導き出したのだが。

同期に聞くと、ブロントさんは生まれも育ちも紅魔族だが、幼少から言葉がおかしい以外は聡明だったらしい。

転生者だろうかと伺うと、ブロントさんはなんだか懐かしいと返答するのみだった。

ちなみにこの返答も解説に（以下略

— 2

「わ、我が名はゆんゆん。や、やがて紅魔族の長に……なる者……です」
ゆつたりとした黒いローブを纏い、黒髪をリボンで結んだ少女が挨拶してくれた。
紅魔族の人たちに挨拶したら五回くらいでこの仕様にも慣れたので、俺もきちんと返す。

「ご丁寧にどうも。我が名はナズナ、文字を操る者にして彼方からの来訪者です」
族長宅前でゆんゆんと挨拶していたら、最初に挨拶してくれたが俺が上手く対応できなかつたために変な空気になってしまったぶっころりやねりまきが、悔しそうにこつちを見てた。

やつぱこの挨拶、重要なのか。

むしろこの世界の常識の可能性がある……？

「その、外の人なのに笑わないんですか？」

「え、笑うとこだった？」

「いえ、そんなことない……と思います……」

伏し目がちなゆんゆんがたどどしく返事する。

あんまり歳が変わらないから大丈夫かと思つたが、高校生くらいの男を相手に、高学年の小学生から低学年の中学生くらいの娘が話すのは難しいか。

なぜゆんゆんと挨拶しているのかという話だが、ブロントさんさんに「外から来て行く宛が無いなら族長に世話になつとけ」的なことを言われ、放り込まれたためだ。

挨拶した族長夫妻も独特の口上を持っており、格好も包帯とか巻いて、オリジナル性の高いファツションをしていた。

族長夫妻は折角だからゆんゆんと里を周ってくるようにと無茶振りしてくれたので、この状態と相成つた。

「えつと、い、行きましよう」

「そうだね。案内を頼むよ」

俺はこの世界への覚悟が足りなかつたらしい。

紅魔族の里を周り、己の見通しの甘さに戦慄すらした。

以下、音声でお楽しみください。

「あの、あれが里の御神体です……」

「猫耳スク水萌えフィギュアだと……!？」

「あつちに魔神の丘が」

「魔神!？」

「そつちに邪神の墓が」

「墓!？」

「実は里の外から持ってきたらしいんです！ ごめんなさい!」

「外から？ わざわざ此処に？ ええー……」

「観光スポットの、伝説の剣、です」

「挑戦料はあちらって看板があるんですがそれは」

「一万人目に抜けるとか……」

「抜ける人数が決まっている伝説とは一体……」

「あの、謎施設です」

「謎施設？」

「謎施設。謎だけどそれがいいから残しておこう、ってことであるとか」

「もうわけわかんないっらい」

「ごめんなさい！ わけわからないものばかりでごめんなさい！」

その後はゆんゆんが通っている学校に寄ってゆんゆんの同級生に「ゆんゆんがめぐみん以外と喋ってる！」「マジで!?!」とか言われたり、ぶつころりーマジニートを見たり、大衆浴場の場所を教えて貰い、里の商業区へ。

ひよいざぶろーという職人が作っている『魔力を外に出せない装備シリーズ』に興味

が湧いた。

なぜ魔法使いばかりの里でこんなニッチなものを作ったのかとか。

喫茶店に向かうとブロントさんが遅い昼ごはんを食べていた。

そこから紅魔族の名物を奢ってくれることになった。

『暗黒魔界のサラダ』とか『魔神に捧げられし子羊のサンドイッチ』とか『我々は闇』

とか『蒼海の輪舞曲』とかいろいろ食べた。

もう何も気にせず味わうことにする。

普通に美味いから悔しい。

なんだかよくわからない料理名を店員が告げる度、ゆんゆんとブロントさんが辟

易としていた。

この二人は紅魔族の感覚からズレてるらしい。

それが常識なのか異常なのかわからんけど。

ブロントさんはぶっころりと違ってニートじゃないようだ。

冒険者として採取したり討伐したり、活動しているとか。

ぶっころりたちニートは魔王軍に手を出して遊んだりするが、ブロントさんは

里に有益な活動をしているらしい。

魔王軍で遊ぶとか紅魔族って物騒すぎやしないか……。

フロントトさんと別れ、里の中央にある族長宅へゆんゆんと戻る。

道すがら「ぼっちのゆんゆんがひよいぎぶろーさんとこのめぐみん以外と歩いているだど……!?!」と驚かれた。

ゆんゆんの扱い……。

ゆんゆんに精一杯優しくしようと思った。

族長宅で夕飯を頂きながら談笑。

今日の散策でゆんゆんとも仲が良くなった……と思いたい。

ゆんゆんは引つ込み思案なところがあって、両親も心配しているようだ。

お世話になっていて図々しいのだが、何か仕事を紹介してほしいと頼んでみる。

特技とか聞かれたので、雑紙を貰って羽ペンで『氷』と書き、湯飲みに貼ってみる。

うおっ、マジで凍った。

俺すげー。

族長一家も驚いていた。

こんなすぐに結果が出るとは思わなかったので俺も驚いた。

ただ、魔力を使ったために僅かに何かが抜けたのを感じる。

驚きも収まった頃、族長が真剣な顔で口を開いた。

「ナズナくん、君は今日から金色の文字使いと名乗「それ以上はいけない」
世界が違うんです。

— 3

俺の能力は日本語を書けば何らかの結果が出るが、どの程度の影響が出るのか把握で
きていない。

流石にそんなガバガバ能力をメインに仕事させられないということで、俺を拾った義
務があるので面倒を見てくれるというブロントさんと仕事することになった。

採取や狩猟、収穫などの仕事を予定しているらしいが、まずは俺がどのくらい出来る
のかという問題が出た。

そもそもレベルや職業が不明である。

冒険者カードを作る許可を族長に貰い、学校まで向かう。

学校の校庭では体術系の授業を行っているのか、ゆんゆんがロリ娘に泣かされてい
た。

ゆんゆん……。

ブロントさんが紅魔族の里の日常茶飯事だと教えてくれた。

あれがゆんゆんの日常なのか、彼女の将来が不安になってきたんですけど。冒険者カードを発行し、準備完了。

ステータスを確認するが、よくわからん。

全体的に高いらしいが、特徴的なのは幸運が低いくらいだろうか。

器用度だけ上級職並みらしいが、職人とかが重要な数値らしい。

うーん……まあ、微妙。

あとは職業が選べるらしい。

職業によって能力に補助がかかるので、自分の目的に沿った職業になるのが望ましいとか。

文字を刻める系がいいのだが、そもそも魔法を使う必要がないことに気付いた。

書道家とかないだろうか……いや、あっても文字が綺麗になるだけだから無意味か。

もう面倒だから付加効果を与えるエンチャンターでいいや。

補助特化型の職業らしいが、意外と良さそうだし。

さて、スキルポイントも振り終わったので、文字を紙に書いてどんな効果が得られるかを検証していくことにする。

スキルは魔力操作や付加、制御などに振っておいた。

紙に色々と書き、発動を繰り返す。

試行錯誤の能力検証は困難をそれほど極めなかったが、ぶっころりーにダメージが降りかかった。

文字は俺のイメージによって効果が強化されるようで、知らない魔法などの名前を書いても全く意味が無い。

代わりによく知っていればかなりの効果を得られるようだ、もしかするとイメージが固定されているほどボーナスがあるのかもしれない。

台風をイメージして『回転』と紙に書いて魔力をほどほどに込め、ぶっころりーの進路に設置。

ぶっころりーは強風で巻き上げられたが、魔法で帰ってきた。

紅魔族じゃなかったら死んでいたかもしれないらしい、紅魔族ってすげー。

紙に『ファイア』などを書いて魔法として使う場合、どれだけ理解できるかで威力や魔力消費が変わるようだ。

一回だけチラッと見た魔法をなんとか再現しようとするとうっそりと無駄に魔力を無くすが、魔法をよく知っていて、イメージしやすい現象などとすり合わせることで、低燃費で高いクオリティを実現できるようだ。

『筋力増加』や『怪力』などもやはりイメージ次第だ。

寝る前とか瞑想したり、想像力を豊かにするトレーニングを行ったらいいのかもしれない。

絵本を読むとか、絵を描くとかしたらいいのかも。

あとは慣れも必要だろう。

やはり魔力を使うのは違和感があるし、文字が現象となったり、意味を与えるのには実感が湧かない。

魔力で文字を描いても効果はあるのだが、ペンなどできちんと文字にした物よりは大きく劣化する。

文字が薄いからだとか形が悪いからとか考えられる。

練習したら変わるかもしれない。

思った以上に俺も働けそうだとブロントさんさんにお墨付きをもらったので、午後からは仕事を始める。

今日の仕事は荒ぶるカボチャの収穫らしい。

活きがいいカボチャは収穫時期になると全力で暴れて逃走するので、捕らえて収穫する必要があると言う話だ。

カボチャが逃げるってなんだよ（真顔）

困惑しながら畑に行くと、マジでカボチャにボコられた。

野菜の逃亡は紅魔族の里だけでなく世界中で当たり前のように起きるらしい。

逃げた野菜は人に見つからない場所でひっそりと枯れ果てるので、頑張つて収穫しようという話だ。

なんだこの世界……。

ブロントさんが盾となつて収穫を手伝ってくれるが、それでも作業は遅々として進まない。

ボコボコとぶつかつてくるし、青あざだらけだ。

しかもこのカボチャどもは集団で同じ場所を狙う小賢しさも持っているようだった。

執拗にボディを狙われ、さすがの俺も激おこである。

言葉を駆使して石を加工し、スタンプ化させる。

そしてインクを貰ってきて、片っ端からカボチャにスタンプし、プルプルと震えるだけで動けないカボチャを収穫していく。

ほとんどを収穫し終え、溜飲がちよつとだけ下がった。

ちなみにスタンプにした文字は『姐上之鯉』である。

カボチャなのにコイとは一体……。

まあ、熟語だからセフセフ。

ぶっころりーで試したが、インク程度では効果が相手の対魔力を上回らずにレジストされるようだった。

スタンプを使うならもつと魔力が豊富に溶けたインクを作る必要があるだろう。

野菜を傷つけず非常に綺麗に収獲が上手くいったというお礼にカボチャを幾つも貰い、夕飯に食べたが上手かった。

びちびちだった、カボチャが。

食卓から切り身が逃げそうだった、カボチャの。

しかもレベルアップした、カボチャで。

……活きのいいカボチャとかカボチャの活け作りとか逃げるカボチャとか、いみわからなすぎるんですがそれは。

オリ主

職業はエンチャンター。

紅魔族の里に現れた転移漂流者。

数日で里に馴染みつつあり、紅魔族の変わり者であるフロントさんやゆんゆんと交流

を深め、ぶっころりーで能力を試している。

初仕事の後から「紅魔族一の野菜取り名人のなずーりん」と呼ばれ、頭を抱えている。
そもそも紅魔族ではない。

1—3

「我が名はこめっこー！ 家の留守を預かる者にして紅魔族随一の魔性の妹ー！」
プロントさんと狩りに行った帰り、喫茶店で駄弁つてたら黒猫を抱いている幼女
に絡まれた。

俺の運の低さのせいなのか、モンスターによる「!!ああつと!!」奇襲が多かったので
疲れ切っているところにこれである。

里周辺では珍しいモンスターや強いモンスターが大挙して押し寄せるので、稼ぎは良
いが気力と体力がかなり削られた。

「もうみつかもたべものをくちにしてないんです」

「うーん、肌艶を見た感じだと定期的に食べられてるようだ。今日も朝食食べるようだね。顎周りはちよつと弱いから固い物を食べる機会が少ないのかな」

「……食べました。ごめんなさい」

ただ、絶食時間は六時間前後くらいだろう。

幼いこめつここにそれはキツイはずだ。

貧乏つてつらい、俺もしんどかった。

異世界来てからご飯事情が安定するつてなんでなんだ。

「謝らなくてもいいんだけどね。そうだ、俺と友達になつてくれるかな？」

「友だち？」

首を傾げるこめつここに頷く。

「そう、友達。まだこの里に来たばかりで知り合いがいなくて寂しいんだ。一緒に

ご飯を食べてくれる友達がいてくれると嬉しいなあつて」

「友だち！ いいの!?! あ、でも……」

ほわあああと表情が明るくなつたこめつこだが、何かを思い出したのか、一転して

曇つた。

「知らない男の人が優しくしてくれたらロリコンだから逃げなさいつて」

「身内ばかりが集まつてる狭い里で誰が言ったんだよそれ……」

「随一の靴屋のせがれのぶっころりー」

あのクソニート……! !

——このすば! !——

—— あらすじ いせかい で こめっこ が ボンビー フレンズ になつたぞ!
ぞ!

『神魔界大戦』を嬉しそうに頬張っているこめっこを眺めながら、果実水である『燦々日光午睡宮酒池肉林』を飲む。

シヤワシヤワしたネロイドという飲み物もあるが、あんまり好きじゃなかった。

なんというか、炭酸ではなくシヤワシヤワしているし、ネロイドとかいう謎物質が怖かった。

ネロイド、それは路地裏にいたり、ペットとして買われてたり、飲み物のシヤワシヤワになっていたりするのだ。

いみわかないこわい。

「……食べる？」

『神魔界大戦』を頬張っていたこめつこが、ジツと見つめたあと、こちらに食べるか問いかけてきた。

いや、もう食べたから大丈夫だと告げると嬉しそうにまた頬張り出した。

「こめつこ、ぶつころりーって他に何か言ってたかな？」

もぐもぐと『神魔界大戦』を咀嚼し、『断罪サレシ滅びの丘』で流し込んだこめつこが思案する。

ブロントさんは複雑な顔で『メジエド神』を食べていた。

「昼から喫茶店にいる二人はニートだからご飯貰えるって言われた」

「おれRAがnetだといつらはイける死かばねで一生DEATHにちがいにいんですけお」

流石のブロントさんさんもぶつころりーと一緒に嫌だったようだ。

あんな非生産的な奴らと比べるな、と主張している。

「??！」

こめつこが首を傾げていた。

ああ、そうか。

ブロントさんさんの言葉は少し難しいので、幼いこめっこには厳しいのか。

「俺らがニートだとすると、ぶっころりーたちは何もしてないってことになってしまうんだ。そうになると、ぶっころりーたちは生きてるのに死んでるような、そんな意味のないアンデッドなんですよってブロントさんさんは言ってるんだよ」

「んー？ よくわかるね？」

「紅魔族の喋りよりは遥かに理解できるんだ」

そのときの俺は真顔だったに違いない。

「常識があたりまえnなるのは当然のともしび」

ほら、したり顔でブロントさんさんもこう言ってるし。

ボンビーフレンドのこめっこに、またご飯をご馳走する約束を結んだ。

だからその黒猫を食べようとするのはやめてあげて！

御神体が猫耳スク水の里なのに猫を食べるのはマジやめて！

俺は兎と猫が好きなんだ！

んじやいくよ

俺、夏芽薺（、エ、）ピャー

「ブロントさんさんマジ助けて。あいつ魔法耐性高いし、紙も飲み込むから文字効かないんですけど。ちょ、マジむーりい。なんかでかくなつたあ……」

現在、ミスリルスライムに追いかけてられています。

「な z e ならずーと狩りつたら k o んなレアもんとであうつてばあいだよ！ 流石のオレオ鬼んなるオレオレオ！」

俺へと触手を伸ばしてきていたミスリルスライムを、ブロントさんさんがグラットンソードで切り裂く。

擦過音と金属音が混ざつた不快な音が鳴り響き、ミスリルスライムの破片が飛び散る。

が、散らばつた破片がぐねぐねと動き、本体と混ざり合つた。

え、再生持ちとかずるくない？

「いまのところがまんしてるけどオレオグラットンじゃたおしきれにー！」

ブロントさんさんがミスリルスライムへと力強く踏込み、高速で斬撃を浴びせる。

切り取つた破片が飛び散るが、物理の効き目が薄いのか、再生を繰り返している。

魔法に強く、物理も再生して耐えるとか無敵生物か何かか。

「弱点とかない?」

「ぶちゆり：つおい まほー：つおい さi生：たかい もうこの冒険はしゅーりようで
すne!」

異世界のスライム強すぎて（エー）ピャー

「凍結させるから片っ端から砕くとか、どう?」

「おmえ、あの巨体オールやれんの? そしたら完全無欠ういザードniなるが」
無理です☆

もうどっか谷底とかに誘導して捨てるしか……あ!

「攻略法がわかったよプロントさんさん!」

「mj d? デカシタ!」

「まず俺の上着に『転移』って書きます」

「h a i!」

鮮烈な攻めを繰り広げながらプロントさんさんが律儀に返事してくれる。

その横を通って身を任せる。

「捕食されます」

「ファッ!？」

触手に捕まるので、ついでに「くっ、殺せ!」も言っておく。

あ、予想より締め付け強……いてててて。

折れた。

これ絶対折れた。

オレオレオだよ。

痛すぎて「くっ、あばらが三本イっちまった……」とか言ってる余裕もない。

「で、『転移』を発動」

イメージは周りだけを転移する感じで。

残ったのは水音を響かせながら倒れた俺と乱れた息を整えるブロントさんさん、ミスリルスライムの破片のみである。

ちなみに魔力がからっけつなので俺は倒れた。

「なずー、おmえ……」

「俺の凄さがわかってしまった感じ? わかったなら何故か上半身が物凄く痛いので優

しく運んでくださいお願いします!」

「革ぜんぶとれてる」

「(、エ、)ピャー」

なんか温くてびちゃびちゃで痛いと思ったわ。

服と上半身の表皮、いくらかの血肉ごとミスリルスライムを転移させたらしい。
うわぐろ。

— 2 —

表皮消失事件によって精神が疲れたので、数日はぶつころりーになることにした。

表皮が消失した原因は上着から沁みたインクが、表皮にも届いて、文字を成していたからだと思う。

血だらけでプロントさんさんに背負われている俺を見たゆんゆんが気絶したのもいい思い出である。

俺のせいなのか知らないが、今の紅魔族では血を流しながら里に帰還することがブームになったらしい。

遊びに行つたぶつころりーも血糊をかぶって帰ってきた。

怪我の功名とでも言えるのか、里で治療してもらった時に回復魔法を見たので、文字や言葉で回復魔法を再現できるようになった。

もちろん効果は劣化しているので過信は禁物。

もつと凄まじい回復魔法を見たら、イメージがそれに引つ張られて効果が高まるかもしれない。

ミスリルスライムの破片で纏まったお金ができたので、装備を整える。

というか、こめつこによってピーキーな職人ひよいざぶろーの作品を買わされてしまったというのが真実である。

紅魔族随一の魔性の妹は伊達じゃない……！

ちなみに買ったのは真つ黒なフルフェイス型の兜だ。

甲冑もなく、兜だけというのがポイントだろうか。

西洋甲冑の兜に酷似したデザインであり、スリット部分は横一文字で細く開いていて、米神部分で稲妻のようにぎざぎざになっている。

かっこいいのかもしれないが、手元にあるのは兜だけである。

俺の現在の格好は紅魔族が着ている黒いローブとファンタジーな軽装のみなので、兜をかぶると……紅魔族からちよつとだけ受けがいいというお察しの状態になる。

この兜だが、声や魔力を外界と遮断して外に伝達出来ないので、かぶると魔法が使えないし会話もできない。

とんだボンコツである。

スリット部分が怪しく赤く発光するのと、喋った言葉が「……A r……!!!」や「■

「ー!!!」と獣の鳴き声のような音に変換される謎仕様。
なぜ俺はこんなものを買ってしまったんだ……～q、

ゆんゆんを学校に送る。

「紅魔族一の野菜取り名人のなずーりんじゃないか!」

「ナズナです」

「紅魔族の傷の男、なずーりんじゃないか!」

「ナズナだよ」

「鎧の男のなずーりん!」

「ナズナだつてば」

「あの、ナズナさん。ここで大丈夫です。行ってきますね」

「ゆんゆんマジ女神」

「ふわっ!?!」

道中で紅魔族の人々に変なあだ名を連呼されたダメージをゆんゆんに癒されてから、
相棒のプロントさんとボンビーフレンドのこめつこと合流。

喫茶店へと流れる。

ミスリルスライムとの決戦（小声）で友情に芽生えた俺とブロントさんは名前で呼び合うようになった（目逸らし）

今日は能力の干渉範囲を調べる実験だ。

まず単語や熟語などは隣接していれば効果を発揮するが、文字同士がどれくらい離れると効果が薄れるのかを調べる。

入念な検証の結果、文字と文字の距離は最初の一文字分まで離すことができるようだ。

次いで頭文字が基準となることがわかった。

「そう、すべては頭文字に支配「族長は帰ってください」

見廻っていた族長は去っていった。

文字の大小や清濁などは効果に依存していないようだが、やはりイメージが強まりやすいので、大きく濃く綺麗に書いた方が気持ち効果が発揮されやすい。

また込めた魔力の分だけ威力が上昇することもわかった。

さらに、頭文字は次に書き足した二文字目以降に引つ張られるらしく、『焼肉定食』と縦に書き、『焼』の横に続けて『きそば』と書いても、『断末魔の晩餐』が『焼肉定食』の味になるだけで『焼きそば』の味にはならなかった。

※実験した食べ物は、後でスタツフ（こめっこ）が完食しております。

実験が終わったら喫茶店の一角を占領して、文字を利用してぬいぐるみ劇を行う。

雑布で繕った布で作ったクロ（仮）や悪のぶっころりー、魔性のこめっこ、ナイトブルントさんなどのぬいぐるみを、日本語の言葉とともに動かすのだ。

ぬいぐるみたちには動作ひとつひとつの細かい動きをその都度、魔力で刻んだ文字でエンチャントする。

さらに効果音や演出を日本語で生み出すことで、まるでCGを使った映画のように贅沢な劇に仕上がるのだ。

俺の能力によって喫茶店の一角は黄金劇場と化した……！
能力の練習とはいったい……。

そんな感じで劇やTRPGをやって遊んでいると、ゆんゆんとロリっ娘であるめぐみんが喫茶店に入ってきた。

今日でちょうどTRPGのセッションが終わったのだが、結果はラスボスの上級悪魔がこめっこに恐怖し、側近が弱体化して排除されていくという謎エンドだった。

ゆんゆんとめぐみんが俺らと同じ席に着き、注文を始めた。

どうやら昼を食べられなかったので、間食して帰る予定の様だ。

めぐみんが喫茶店で寄り道だと……!?!と驚愕したが、ゆんゆんの奢りらしい。

焦って損した。

夕方まで駄弁った後、帰宅。

フロントさんが途中までめぐみんとこめっこを送るので、変質者ぶっころりーが出て
も安心。

「フロントさんさんが居れば、例え魔王軍の幹部が現れたとしても全然問題ないです
ね!」とめぐみんが無駄なフラグを立てていたが、どうせ何も無いんだろぅ知ってる
しってる。

夕食を族長一家とともに和気あいあいと食べ、寝る前にゆんゆんの一日の話を「うん
うん」と聞く。

魔境である紅魔族の里では、ゆんゆんの普通の話は数少ない癒しなので、聞くだけで
穏やかな気分になる。

そして、借りている自室で、また財布おとした、q、と地味なミスにショックを受け
ながら就寝。

あれ、俺ってリアル充実しすぎじゃね？

もう毎日こんな感じの生活がいいです。

穏やかで楽しくおかしく過ごしたいです。

ちなみにおかしくって部分は紅魔族全体ですが、それは我慢します。

なのでお願いしますエリスさま！

——
なずーりん

『紅魔族一の野菜取り名人』にして『紅魔族の傷の男』、『鎧の男』などの名を持つ紅魔族
期待のホープ。

Tシャツとジーンズでフルフェイスの西洋兜をかぶったファンキーなスタイルで里
を歩いたため、里随一のオサレと評されている。

幸運が低いので結構な頻度で財布を落とす。

最近では族長宅に生活費などを入れたら、残りを預かってもらうことにしているらしい。
——

1—4

「ブロントさん見てよ、この籠手。鈍い黒に輝いてて立派っしょ。いやあ、高かったけど買ってよかったわ。後衛職だけどやっぱ文字を書いたりするし、手って大事だもんね」
「おう」

「見てよ、籠手を装備したら文字書けねえの。ははは、ウケる。マジウケる。いやあ、買ってよかったわ。ちよつと動くだけで手がムレムレ、しかも重い。ははは、幼女の友達に誘導されて買わされるって情けなくね……?」

「浅はかさは愚かしい」

友だちってなんだよ（哲学）

——このすば——

以前買ったフルフェイスの西洋兜と同じデザインの籠手を買った。
仕様も同じ。

魔力が遮断されてるやつ。

なぜ買ってしまったのか、それは永遠に謎である。

そもそも魅惑の職人ひよいぎぶろーは魔法道具専門らしい。

つまり態々鎧のパーツにこんな意味不明な効果を付属しているのだ。

ハイセンスすぎて付いて行けない、里で彼のセンスに付いて行ける者はいないので問題ないけど。

フルフェイスの兜は内部に『索敵』や『気配察知』、『気配遮断』、『軽量化』などを刻むことで、擬似的な盗賊や暗殺者になれることが判明。

ただし、仲間と意思疎通が取れないのでソロ専用の呪われた装備に近い。

斥候として被って下見し、仲間と情報を共有する二度手間が一番有用だろうか。

「こつk oにないと」

「じゃあこつちにワイザード置くよ」

籠手に刻む文字を考えながら、プロントさんとボードゲームを進める。

こつちの世界に適応したチエスの様な物だ。

駒が特定のスキルや魔法が使えるので、戦略幅は広く、そして……。

「お前頭悪いなA U O手。おまえナイトさんなめてるとギガトンパンチ食らったら即死で瞬殺される」

「テレポート」

テレポートでいきなり王手を引っくり返せるマジ糞ゲー。

絶妙な位置に湧いて出てきたウイザードによつてぐぬぬ顔のプロントさんの駒を、さらにカースメイカーで蹂躪した。

「……滓めーかは卑怯すぎるい」

勝利の味を噛みしめながら、冒険者カードのスキルチェック。

この世界に来てふた月も経っていないのに、レベルは15となっていた。

低レベルだとしても、普通は1年ほどかけてレベルが10になるらしい。

凄まじい速さで強くなっている、と俺の冒険者カードをプロントさんに見せたが、彼の表情はげんなりとしたものだった。

「なずー、もつとおもえの敵をかえりみて」

プロントさんに、戦ってきたモンスターを思い返してみろよと諭された。

うーむ。

「サンドドラゴンとかドツペルゲンガーにアーケデビル、ミスリルスライム、あとグリフォン？」

「めったにエンカしなくてマジレアではくぶつかnど真ん中ればつかじゃねえか。ほんとど鬼の破壊活動でマジでふざけんよ。タイマンでつおいおreたちも一巻の終わりがおわおわり」

プロントさんですらほとんど見たことない敵ばかりだったらしい。

なんとかやつてこれているが、そろそろ死ぬ可能性があると。

「マジごめんなさい。運が無くてすまない……」

話は戻るが、レベル15でとうとう上級職へとジョブチェンジできるステータスを満たした。

レベル1から上級魔法職の紅魔族を基準に考えなければかなり早いらしい。

もう紅魔族のせいで常識がガバガバなので意識するのは止めた。

『エンチャンター』から『カースメイカー』となった冒険者カードで、スキルポイントを割り振っていく。

『二重詠唱』のツリーから分岐した『多重詠唱』、『高速思考』から分岐した『分割思考』を修得する。

『高速詠唱』はいらないだろう、普通の魔法使わないし。

『二重詠唱』および『多重詠唱』のスキルは、同時にいくつかの詠唱を発動できるスキルだ。

その分、思考や時間を割くのであまり使っている人はいないが、俺には重要だ。

例えば『燃えろ』と『凍れ』を同時に詠唱できるので、発動したら……たぶん特に意味は無い。

まあ、ぬいぐるみ劇で動かせる数や喋る数が限られてきたので、色々増やそうとしたらこうなっただけだし。

あとプロントさんの言葉についてわかったことがある。

どうやらプロントさんの言葉は日本語と異世界語が混ざっているようなのだ。

文字を書かせると流暢な異世界語で会話できるのだ。

ただ、直し方はわからない。

うーん……。

まあ、不便しないからいいんじゃないだろうか。

— 2

「DE、なずーなニやってんよ」

「いや、籠手にも文字を入れてなんとか使える様にしようかと」

「黄金じゃに鉄の塊は手に負えないほどの力秘めて n i i ただの鉄つて s r 言われてるカラ」

そんな多用しないので、独特な付加効果を持った鉄の塊な籠手になってくれればいいんだけど。

内部で魔力遮断ということは、無駄に魔力を外に洩らすことが無いということだ。

循環効率は実を言うと頗る良い。

籠手は指先が鋭く、五指が別れているガントレットと呼ばれる形状をしており、肘よりも短い位置で手袋のように独立している。

兜も籠手も同様で、内部は魔法金属の布で手を保護し、外部は高硬度の金属で覆われている贅沢仕様。

この内部の布が魔力伝達を遮断しており、外部は魔法の影響を受ける。

これはネタ装備ですわ……。

なので籠手の中にある布の内側に『筋力上昇』とか『軽量化』、『芸達者』とでも書いておけば十分なのだ。

重要なのは外側だ。

布と金属を分離させ、金属の内側に文字を刻むことで、活躍できるようになる（願望）

なんか特に文字とか思いつかないので、『搾取』とか『奪取』、『支配』、『武術向上』、『練度最大』など頭の悪そうな言葉を片っ端から刻んでみた。

するとどうだろうか。

俺が満足するころには、異物と化していた。

陽光によつて単に黒光るだけの籠手だった物が、周囲の魔力を吸い取つて黒い靄を纏い、怪しく輝いているではないか。

さらに時折、脈動のように赤い光が奔る。

……なにこれこつわ。

やつちまつたZ E ☆

「カン成したか？ え、なにそれ。そんなつかつて訴えられたら色々調べられて人生がゲームオーバーになる」

「いや、言い過ぎでしょ」

「そのダークパワーっぽいのに頭がおかしくなって死にそうだんだガ？」

「ないない」

多分。

試しに使ってみることにした。

ヤバかったら紅魔族が取り押さええてくれるだろうと思い、里の近くブロントさんと模擬戦を行った。

その結果だが、

「自分の心に広さが怖い d a k a r a オレオ神器返してください；；」

「ご、ごめんなさい」

籠手で受け止めたら、神器らしかったグラットンソードを略奪、そして支配してしまった。

白く清廉だった剣は、今では真つ黒に染まり、時折赤く脈動するように光を発しているのだ。

流石のブロントさんも物凄く悲しそうな顔をしていた。

「これが寝取り……」

「ふざきんな、オムエかなぐり捨てなぞ」

ブロントさんに返すと、元の美しく輝く白い剣となった。

これで戻らなかつたらヤバかった。

マジでブロントさんの目がヤバかった。

木の枝すらもつえーと籠手で遊んでいると、クチバシの付いた爬虫類型のモンスターと出会った。

まあ、T u e e e 状態の俺の敵では無いんだけど（ボキボキツミたいな。

ちなみにボキボキツという音は敵を倒した音でも、木が折れた音でもない。

俺の腕が折れた音だ。

おつかしいなあ。

やつと異世界で俺T u e e e e タイムだと思ったんだけど。

そういうことで、能力で無理やり上昇させていた反動か、腕が耐えきれずにぼつきり折れた。

しかも、同時に二本も。

なんだこれつら……。

結局、モンスターはブロントさんの剣で葬られた。

死骸は残らず黒い煙となって消えたが。

奇妙なこともあるものだ。

これも籠手の呪いだろうか、いつそのこと封印しようかな。

ブロントさんに添え木してもらい、常備している雑紙に魔力で『治癒促進』『鎮痛』と

文字を焦がし、患部に貼ってもらおう。

あーおちついたらー^^

変なモンスターも出るし、腕折れたし、マジつらい、もう帰る！と帰宅の準備をして
いると、モンスターの群れが見えた。

方角としては魔神の墓があつたはずだ。

嫌な予感がする。

が、確かめないといけないだろうとプロントさんに兜を装備させてもらうも、索敵範
囲外だ。

もつと効果が上昇していれば……あ、あるじゃん。

E 索敵の兜

E 呪いの籠手

みたいな。

籠手の謎強化で兜をバージョンアップ！

墓の場所にモンスターがうようよと彷徨っていて、その中心には三人ほど反応があつ
た。

「プロントさん！ 墓のところに人がまだいる！ 早く行こう！」

兜を投げ捨て走り出す俺の隣に、ブロントさんも続く。

「なぞ、omえ知ってるか。気づけば守ってismまうのがナイト」

流石ナイト！

かっこいい！

でも両腕が折れた俺も並走してるから、イマイチしまらない！

墓が見える位置に辿り着くと、そこには魔法を使うゆんゆんがいた。

ゆんゆんはめぐみんとこめつこを庇っているようだった。

空には変なモンスター、地上にはミスリルスライム……ミスリルスライム!?

なんでそうなったん……～q～

— 3

焦って『疾風』と服に書いてしまった。

めっちゃ足が速くなった。

もう勿体ないのでこのまま突撃する。

プロントさんを置き去りにして、ゆんゆんの元へ辿り着く。

「ゆんゆん！ 今きたよ！」

ボキボキツと到着。

「あ、ナズナさん！ ありがとうござ……ええー！ あ、足が！ ナズナさん、足が！」
ボキボキツは両足が折れた音だ。

道中じゃなくて良かった。

運5も実は捨てたモノじゃない可能性。

「ゆんゆんたすけてー」

空にいたモンスターに襲われながらゆんゆんに助けを求める。

近距離まで近づいたら魔力で『自爆』と刻んでふっ飛ばしているが、数が多くてや
んなつちやう。

「私が助けてほしいのに！ 私が助けてほしいのに！ 『ライトニング』！」

ゆんゆんが魔法を撃ち、数を減らす。

さすが紅魔族、すげーつえーと戦闘をふわふわ浮かびながら眺める。

「さあ、逃げましょ……なんで浮いてるんですか!?!」

「飛んで逃げようとしたらさ、マジで浮いてるだけになつちやった」

『浮遊』つて服に書いたら、浮かんで終わりである。
世は無常。

ちなみに『疾風』状態なので、浮かぶ瞬間は内臓がひっくり返ったかと思う程だった。
「なんでそうなるの!?! なんて!?!」

「ゆんゆん、世界はこんなはずじゃなかったことばかりなんだ」

「違うの! 私が見たいのはそんな言葉じゃないの!」

「こんなときに我が儘とは、なかなか小悪魔だね」

「もおおおお!」

「ああ、そうだ、たすけにきたんだ」

両足の痛みで若干頭のネジが飛んでる感ある。

が、能力行使には問題ない。

むしろストッパーが外れ、最高にハイっやつだ。

楽しくなってきた。

「『落ちろ』」

日本語で告げる。

おちろおちろおちおちおちおろろろろろろ……

ゲロ吐いたきもちわるゝqゝ

「カカツと参上！ 颯爽登場してsむうのがなiとに決まって……」

「きもちわる……」

「も、もうちよつと頑張つて！ あとちよつとだけ！ 残りはあのスライムだけだから

！」

「うええ……」

「naにこれえ」

「昼に食べた『エクゾストーム』を吐き出していたら、ブロントさんが駆けつけてくれた。」

今のブロントさんはボードゲームで負けた時よりもよぼくれた顔である。

残ってるのは相性最悪のミスリルスライムだけなので、どうしたらいいかわからん。

くっ……殺せ！

くつ殺してたら籠手を外された。

なんか馴染んで、装備しているのが実家のような安心感だった。

露わになった両手は呪われたアシタカみたいになってた。

なんだこれまじやべー。

外した直後、ハイになっていたテンションがローに切り替わる。

気持ち悪さも相まって極ローだ。

今なら聖人として世界を真の姿に導くことができるかもしれん。

「攻略法があるんだ……！」

ドヤツと決め顔で二人に告げる。

これは完璧な作戦だ。

この作戦なら流石のミスリルスライムも「あああああきやまああああつああ！」と
発狂すること間違いなし。

「まず『永久凍結』と俺の服に書く。で、ミスリルスライムに俺を投げ込み、発動。相手
は死ぬ」

そもそも俺が『転移』させたせいでこんなわけのわからんことになったのだ。

エターナルフォースブリザードで決着をつけようじゃないか。

「だまあってろなずーマジでかなぐり捨てンぞ？」

「な、ん、でだよ、お、!!」

テンションがローすぎて藤原ってしまった。

「お前頭悪い。バカが移るもういいからバカは黙ってる。これまんまだとばーティがぶっころりinなる」

そんな俺の決意なんて無視して、白銀に輝く剣と盾を構えたブロントさんが、ゆつくりとした歩みでミスリルスライムへと進む。

その姿は、俺をオークから助けてくれた力強さと憧れを思い出させてくれた。

「I maは俺の見せ場に決まってる。みてろよAIBOU、オレオ神器KAIHOUで試合しゆう……『エクスポーション』——ツツツ！」

ブロントさんの言葉が終わる前に、ミスリルスライムが爆散した。

「我が名はめぐみん！ 紅魔族一の天才にして、爆裂魔法を操りし者！ 長きに亘る努力で得たこの魔法……！ 私は、今日、この日を忘れない……！」

誰が予想できるんだよこんなオチ。

盾と矛の神器を輝かせて気合入れてたブロントさんどうするんだよ。

めぐみんもなんか感動しちゃってるし。

彼も紅魔族だからカッコつけるの意外と好きなのに、変な空気でしょぼくれてしまっ

てるじゃん。

なんてえげつないんだ、この世界……。

「ゆんゆん、助けにきたよ」

「え、あ、はい。ごめんなさい」

無理やりいい空気でしめよう。

光（めぐみん）と闇（プロントさん）が合わさって頭がおかしくなりそうだ。

まじきつつい。

「謝ってほしいから来たんじゃないよ」

「……その、来てくれてありがとう。でも、無理しないでくださいね」

「次はもっと頑張るよ」

「えっと、その、次も来てくれるんですか？」

「当然だよ」

「あの、その、待ってます」

俺に微笑むゆんゆん、それに微笑み返しながら四肢が折れてるのに浮遊する俺、煤けたプロントさん、感動に打ち震えるめぐみん、「ばんごはんの鶏肉が……」と嘆くこめっこ。

みんな頑張ったから良しとしよう。

(; ∇ ;) イイハナシダナー (こり押し)

なずーりん

四肢を負傷したままモンスター集団と戦った紅魔族きつての凄腕の魔導師。里では不死のなずーりんとして尊敬の念を集めつつある。

ミスリルスライム

何者かに『転移』されたらしく、ガバツてた封印に突っ込まれてた。

封印が解かれると同時に里近くに出現した。

一体誰がこんなことを……。

1 | 5

なずーりんのSAN値があぶない！

「もうマジ無理。自爆しよ・・・」

人（自分）を殺す覚悟（キリッ

なんか転生オリ主っぽくなってきたじゃん。

ブルってきたぜ（震え声）

くうく疲れましたw これにて完結です！

「お前がただにバカだと思うぞ？ バカか？ そのままでとぶところ r i n なる」

自爆しようとしたらプロントさんから説教を受けた。

しかも喫茶店の一角で。

なにこれ恥ずかしい。

「恥ずかしいんで椅子に座っていいですか」

「s l e g a パトるカク悟○とか言ってたやーつのセリフないんですかねえ？」

恥かしい。

死にたい^ q ^

「もうマジ無理。。。浅漬けにしよ。。。」

「マジmrはオレだKARA。今のところ我慢してるけどいつ怒るが爆発するかかわからない（リアル話）」

死にたいと思った理由だが、じわじわと足元から中二が競り上がって来る現状は、まあ、その、ほどほどに関係ない。

たぶん。

で、理由だが、ゆんゆんが先日の「ドキドキ☆モンスター大集合！　ボキリもあるよ！」によつて中級魔法を修得したためである。

修得したのも俺が『転移』でミスリルスライムをわけわからんこととしてしまったからだと思う。

これが紅魔族ではなかったら、命が助かってよっしやああああ！HAPPY END！と締めることができるが……

「アークウイザード、つまり魔法エリートのおすくつ（なぜかへんかんできない）のこーま族の里で中級はマジヤバくてストレスで命がマツハだわ」

「なずーやばいばずー。オレオリ言葉が乱れに乱れteおかしくなってる」

紅魔族の学校では魔法を覚えると卒業となる。

上級魔法を覚えるまで学校で切磋琢磨し続け、覚えた段階で上級魔法使いとなり、卒業するのが一般的というか常識なのだ。

初級中級で卒業では、落ちこぼれ扱いされてしまうらしい。

「オレオ初級しかシラン。つまり低レベういざだが問題にi」

「プロントさんはナイトつまりたすけてーたすけてーと呼ぶ声に伝えて強いカツコいいから問題ないんよ」

「お、AOU……」

「ゆんゆんは普通の魔法に上級魔法使い目指してたし。うわあああ、どおせあたしわ湧きあがり、否定し、痺れ、瞬き、眠りを妨げる、爬行する鉄の王女。絶えず自壊する泥の人形。結合せよ 反発せよ 地に満ち己の無力を知れ —— 破道の九十 黒棺」

床に正座していたのを、気取りながら立ち上がり、なんかよくわからんかつこいいポーズを決める。

「こーまのフレが憧れのhitomiでなずーを見つめてるツて寸法なの理解できてわかってるんかつて話だよ」

「言葉なんてもう儂い雪の様だぜ……。闇に飲まれよ！」

「めもトラれてrKARRA！」

「紅魔の同胞たちよ。その深紅の瞳は美しい。それこそ、時よ止まれと祈るほどに……」
おら、サービスだ。

喜べ。

客と店員ども、湧いて喝采するが良い。

「ガンバルンバなずー！ そんなま d a t ぶっころりんなる！」

「俺は正気に戻った」

が、時すでに時間切れ（ブロントさん並みの感想）

紅魔族随一の破道を扱う者なずーりんと呼ばれるようになった。

あとポーズも真似された。

なにこれはずかしいしにたい、q、

「なずー気にスルなとナイトは言わないがそうでもない事態でほど h d だ」

「でもね、ブロントさん。はっちゃけてかつこいいポーズを決めたら店員や他のお客さんが真似し出したとか憤死もの……」

「その O H A N A S H I じゃに K A R A」

「冗談だつてば。わかってるよー。ゆんゆんが中級魔法覚えたのだから、俺のせいだけじゃないってことでしょ」

謎モンスターも跋扈していた状況だ。

ミスリルスライムがいなくとも非常事態のために中級魔法を修得していた可能性がある。
ある。

そうだとっても、それはIFの話だ。

現在ではゆんゆんが中級魔法を覚え、週末にはひっそりと卒業する手筈になっている。
「y n y n がー y n y n がーとレンコするが、なずーはただ心のダークパワーを果たし
たいだけ。ダイレクトにすみまえ n ; ; とアピれば k a i k e t s u するのは確定的に
明らか。ないとは w a k a ってしまう」

「いや、そうなんだけどね。ただ、申し訳なさもあつて、なんというか」

「ナセバなるってそれ言われてRUカラ」

「あー、じゃあ、今日ゆんゆんと話すことにする」

「意シキせずTOも導いてしまうのがない」と

—— このすば！ ——

日課であるゆんゆんの話を聞く。

里ではめぐみんのせいで謎モンスター襲来の話がおかしな方向に転がっているらしい。

端折るが「封印を解かれた邪神が名も知れぬ女神を呼び起こし、邪神と女神が戦った。激戦の末、女神が勝利を抑め、邪神の配下を爆発で一掃した。女神は里を守るために勇敢に戦った紅魔族の為に希少金属の雨を降らせた」という感じだと教えてくれた。

なんでそうなったんですかね……。

「しかもめぐみんは今日も爆裂魔法を使うって言い出したんです。噂になってる里の近くで、ですよ。しかもクロちゃんもメスなのにちよむすけって名前まで付けて……」

「まあ、めぐみんらしいんじゃないかな。ゆんゆんほどめぐみんと仲良くないから言いきれないけど」

「仲良いつて……そ、そんなことないです！ と、友達じゃないです！ めぐみんとは……ライバル。そう、ライバルです！」

仲の良さを否定してライバル発言。

そもそも友達とは言っていないので、意識しまくりなのは明らか。

昨今のツンデレ系ってやつだろうか。

ゆんゆんの場合は人見知り系だけ。

そもそも別にライバルと仲良くても良いでしょ 良くない？

俺とプロントさんなんて仲間だし友達だけど、能力を競い合うライバル感ある。

「そうかー、らいばるかー。いいねー」

「生ぬるい視線はやめて！ めぐみんとはライバルだから！ ライバルなんだから！」

ゆんゆんとめぐみんはライバル。

疑いようのない事実だ。

事実なんだ、いいね？

「そんなめぐみんのライバルのゆんゆんにお話があります」

「いや、わざわざめぐみんのお話なくても……」

「お話があります」

「は、はい」

俺が正座すると、ゆんゆんもつられる様に正座した。

「ゆんゆん、卒業おめでとう」

「あ、ありがとうございます」

「こちら、お祝いの粗品です」

小さな小箱を取り出す。

紅魔族に任せたらやたらと荒々しい装飾になったので、自分で作り直した物だ。

「え、そんな戴けないです……」

「お祝いです」

「えっと」

「お祝いです」

ゆんゆんが釈然としない様子で小箱を手に取る。

そして、箱に入れられていた青色のリボンを取り出した。

「……ありがとうございます」

「じゃあ話に入ります」

「えっ。じゃあ今のは……」

鮮やかな藍色をしたリボンを、控えめながら色々な角度で眺めていたゆんゆんが俺の言葉に反応する。

リボンは薄くて柔らかい素材だが、実は多重構造となっており、中央の生地には『幸運』や『健康』といった文字が書かれている。

職人のちえけらに頼み、製作途中に手を加えさせてもらった特注品である。

まあ、幸運という状態がどんなものか俺には全くわからないので、効果があるかは不

明だ。

『ブレッツシング』という運を上げるおまじないのような魔法もあるらしいが、かけても
らったことも無いし。

「お祝いです」

「あ、はい」

お祝いとお話は違うのだ。

「ああ、それと。そのリボンがちよつとだけ運がよくなるおまじないをしてあるから、気
が向いたら付けてみてね」

「はい、頑張つて大事にしますね」

いや、ほどほどでいいです。

むしろ、使い潰してもらつてホントに効果があつたか教えて貰いたいくらいだ。

「話というのは、ミスリルスライムがいたじゃないですか」

「はい」

「あれが居たのは俺のせいなんです」

「あ、そうなんですか」

「なので、思う存分なじつてもらつても、月給二十万で三百日間休みがない社畜として
扱ってもらつても大丈夫です」

「なんで!? 今の話からなんでそんな流れになったの!?

「いや、ゆんゆんが中級魔法を覚えた原因になったので」

「えっと、その、ミスリルスライムは全然関係ないです」

「えっ」

ゆんゆん曰く、幼いめぐみんが邪神の封印を解きかけのまま放置してガバってたところをなんやかんやあって封印が解除されて先日の「ドキドキ☆モンスター大集合!」ボキリもあるよ!」が開催されたらしい。

めぐみんとこめつこを逃がすため、魔法を修得したとか。

「あの、ミスリルスライムですけど、ナズナさんが落としたりしたモンスターを集めるゴミ箱って感じしかしなかったというか……。その、私と接点がなくてごめんなさい!」

まだ幼い少女に、転移させたモンスターと接点なくてごめんなさいって謝らせた俺って鬼畜すぎない?

もうマジ無理。自爆しよ……q

「確かに接点がなくても、もしかしたらゆんゆんが中級魔法を修得した遠因があるかもしれない」

「えっ」

「なので、ゆんゆんが上級魔法を覚えるまではサポートしようと思うんだ」

「いえ、そんな、私には、その……」

「それだけでは足りない？ ゆんゆんも小悪魔だな。わかった、なんでもします」

「えっ」

「なんでもします。さあ、どんな願いでも言うが良い」

「……ナズナさん、私で遊んでませんか」

そんなことないよー。

「まあ、無いんだったら話は終わりで……」

「えっと、なんでもするって言いましたよね？」

「言ったけど。え、まさかゆんゆんに願い事が？」

「私にだってお願いくらいありますよ！ なんだと思ってるんですか！」

「間違った。まさかゆんゆんに願い事を言う勇氣があるなんて!? と言いたかったん

だ。ごめん」

「ひ、ひどい!? 私だつて言うときは言います！」

顔を少し赤らめながら、ゆんゆんがぷんすかぷんすか怒る。

ブークスキス、そんなんで怒ってるとか。

フロントさんだったらハイスラでボコるわあつて言うね、絶対。

「うんうん、ごめんごめん」

「心が籠つてません！ 雑すぎます！」

「ははは、ごめんごめん」

「もおおお！ もおおおおお！」

「はは、どすこいどすこい」

ぼかぼかと叩いて来るゆんゆんを、どすこいどすこいと凌ぐ。

今、この瞬間、ゆんゆんの魅力は最大になっている可能性がある……！

マジ限界美。

「じゃあ俺が何をしたらいいか教えてくれる？」

「何をお願いしても笑わないでしようか」

「笑わないよ。もう十分笑ったから」

「もおおおお！」

やっべ話し進まない。

「冗談、冗談だから。さあ、なんでも言ってみなさい」

「はい……その……凄いいこと言いますけど……」

視線を泳がせながら、ゆんゆんがそんなことを言い出す。

もしかして最近考えている必殺の『核熱』が見たいとか言い出すんじゃないだろうか。

あれは駄目だ。

マジ危険が危なくてデンジヤラス。

「う、うん」

「その、わ、私と友達にですわね、な、なって、なり、ませんか？」

内心で身構えていたが、予想以上に簡単なお願いで肩すかしをくらった。

はあ、とため息を吐く。

びくりとゆんゆんの肩が揺れた。

「ゆんゆん、もう友達だよ」

ゆんゆんの赤い瞳が大きく見開かれた。

「は、はい！」

「ナズナさん、ナズナさん！ このリボンすごいです！ 幸運のリボンですよ！」
それマジ？

俺も幸運のリボンつけようかな。

— 2

ミスリルスライムを撃破したお蔭で、俺の懐も潤っている。
そんなわけで、魔道具を買った。

普通は数百万から数千ワエリスはする紅魔族の魔道具がなんと十五ワエリスと大特
価。

お得すぎて、こめつこに勧められるがまま買ってしまった。

「浅はかさは愚かしい」

「言わないで……」

こめつこには勝てなかったよ……。

職人ひよいざぶろーが製作した、魔道具をどのように活用するか考える。

実は三つセットなのだ。

あの際物な魔道具が三つセットで十五万!? たっか!と占い師のそけつとも驚きの
値段である。

折角の魔道具なのに……! 超凄いはずの魔道具なのに……!

一つ目は一辺が三センチほどの立方体だ。

効果は魔力を込めると赤熱する、以上。

二つ目は二メートルはあろうかという六本の筒状の砲身が付いている魔道具だ。

どう見てもガトリング砲です。

効果は中に物を詰め、魔力を通すと飛ばせるとか。

騒音が鳴り響く粗大ごみとして紹介された。

三つ目はミスリルスライムの破片である。

見た目は径が十センチほどのぷるぷるとしたミスリルスライムの破片だ。

大胆かつ繊細に加工することで、特性を再現したらしい。

とはいえ、特性はかなり劣化しているようだ。

触つてると俺を捕食しようとしているのか、徐々に手に纏わりついて来る。

本物と違って触手を伸ばすことも無いし、骨を折られることもない。

ははは、全然取れねえ。

もういみわかないしぬ。

赤熱するキューブを破片に取り込ませ、さらに鉄材を突き刺す。

鉄材を取り込もうと、突き刺された部分を包み始めた破片に『円錐』と書いた紙を貼る。

ミスリルスライムの破片が紙を取り込むよりも早く形状が変化した。

ミスリルで出来た錐になったのだ。

……なっただと思う（希望）

紙だけだと剥がれるので、『槌』と文字を直接書けば完成。

魔力を通すとミスリル部分かなりの高温に変化するので、まあ、成功じゃないかな。うん。

成功だ、成功。

赤熱する槌とかなんに使うんだこれ……。

俺、後衛なんだけど……。

苦肉の策として、文字を掘った鉄板を槌に付けることで、焼印が刻めるようにする。試しに『核熱』の鉄板を作成し、装備。

準備を終えた俺はムチムチして角を生やした女悪魔の爆裂魔とやらが作った大穴へと向かう。

なぜか付いてきたニートどものお蔭か、リボンによつて上昇した幸運のお蔭か、特に何もなく大穴へと到着した。

まるでめぐみんが爆裂魔法で吹っ飛ばしたかのようなこの大穴は、今では紅魔族の焼却炉として役立っている。

遠いし魔物もいるが、捨てるのに困った魔道具や生ごみなどが集まっている。ときどき暇なニートが魔法を放って中身を焼却したりしているのだ。

槌に魔力を通し、加熱する。

十分に熱が乗ったことを確認し、大穴の淵に焼印を刻む。

『核熱』と黒く刻まれれば終わりである。

魔力はそれほど乗せていないので被害はそれほど出ない筈……大穴から溢れ出た炎が上空まで火柱を成していた。

なんでそうなるん……（q）

『焼却炉の魔術師』なずーりん

上級の魔法使いでない身にも関わらず、上級魔法を行使する紅魔族の少年。

長い髪を青いリボンで束ねているのが特徴。

挨拶である「闇に飲まれよ」、相手を褒める最上級の言葉である「時よ止まれ、君の瞳は美しい」を生み出すなど、紅魔族随一のセンスを持つ。

故郷ではスパゲッティモンスターを信仰していたが、近年ではエリス教の首飾りを発注している。

焼却炉

火柱は収まったが、地獄の窯のように今もなお底が燃え続けている。

捨てられた紅魔族の物品やひよいぎぶろー作品といった多くの魔力を含んだ物と『核熱』が合わさり、一時期は上級魔法並みの火力を放ち続けていた。

「ブロントさん、ゆんゆん。俺、かなり運よくなってると思わない?」

「Ah、火を煮るより明らかだな」

「えっ!?!」

マジかよ!?!みたいな顔をしているゆんゆんに頷く。

マジだ。

かつてない幸運が俺に訪れている。

風……なんだろう吹いてきている確実に、着実に、俺たちのほうに。

「エリス教徒が着けてる首飾りを付けたのとリボンのおかげだわ」

「kou運を司ルのは伊達じゃにいつてHANASHIだよ」

「えっ?」

滅んだ国が開発したとかいう短機関銃を装備したデッドエンドとやらを撃破しての
会話である。

全長五メートルほどのサソリ型の機械で、抗魔シールドによる魔法耐性、魔力チャ
ージによる継戦能力を持った困ったやつだった。

だが、もうジャンクだ。

なかなかの強敵だったが、エリス様による幸運ブーストが掛かり、三人パーティと なっている状態の俺たちの敵では無かった。

機械なので経験値が低く、素材として使える部品が少ないのが欠点だろうか。

普段だったらここで空から下級のドラゴンが襲来し、大型の虫モンスターが地を割 り、あとついでになんか凄いモンスターが空気を震わせるところだった。

エリス様ってやつばすごい。

それとも経験値を溜めつつ、お金も溜めておきたいという理由でパーティに参加した ゆんゆんのお蔭か。

つまり……

「ゆんゆんは女神だった……?」

「mjかよ。シツテタ」

「えっ」

——このすば——

今日の仕事は終わりにしよう、と俺たちの拠点にしている何時もの喫茶店に帰還。

あのまま幸運に浸っていたら手痛い襲撃を受けそうだ。

「まだ行ける」は「もう危ない」という名言もあるくらいだし、慎重なくらいがちようどいいのだろう。

「ただいまー」

「おっ！ お帰り！ 紅魔族随一の、我が喫茶店で疲れを癒していつてくれ！ 何か食べるか？」

「じゃあ、俺は『いつもの』」

「オレオ『い s t u もの』」

「私は、えっと、あの……」

「わかった！ 三人とも『いつもの』だな！ 今日『焼却炉の魔術師ステーキ』だ！」

今日の『いつもの』はステーキらしい。

激しく動いたから肉を食べたいと思っていたので当たりだ。

これもエリス様効果だろうか。

この世界の人々が信仰するのも納得である。

「今日の『いつもの』はステーキだつてさ。いやあ、何が出るか事前にわかるメニューっていいよね。いつもこうだったらいいのに」

「え、「いつもこうだったら」って変じやないですか？　いつものって言うてるのに」
上手く注文できないかったゆんゆんが首を傾げながら聞いてくる。

なるほど、当然の疑問かもしれない。

だが、耳を澄ませて欲しい。

店内の声が聞こえるだろう、そして其処彼処で頼まれる『いつもの』。

『いつもの』は何がD Eるかわかnにい。店s y uの気ブンで決まる。ちゅーもnは一同無言の沈黙」

「ええつと……つまり、その日に店長さんが決める日替わり定食ってことですか？」

「うん、そういうこと。なんか『いつもの』って冗談で注文したらかっこいいとか喜んでたから注文するようにしたんだよね」

日替わり定食などの別名とか亜種である。

『いつもの』と慣れた感じで注文すると、興が乗るのか料理が二倍くらい美味くなる。
「ええー……」

そもそも俺らはいつも同じメニューを頼んでいない。

だって内容がよくわからんし。

サンドイッチとかパスタって付いてるなら大体わかるが、『ディアポロ風ボス』なんて意味不明すぎて、頼みたくなるじゃん。

なので新メニューが出る度に頼んでいるのだ。

— 1 —

「お二人はもつと、その、自警団の人たちと似たような活動をしてるのかと……」

「ああ、うん。そう思われるかもしれないね」

「こゝ葉だけだと同じにおむわれるのm o 明白に明瞭」

里の外にモンスター狩りしに行ったら、そのまま魔道具や魔法薬などの店に素材を卸して喫茶店で駄弁っているの、見かけは一緒かもしれない。

実はちゃんと必要なモンスターを狩っているし、薬草などを採取しているので、貢献度は段違いである。

まあ、ニートかフリーターかの違いかもしれないけど。

収入はファンタジーに夢見る冒険者くらい手に入っているが、命を賭けている代価としてはどうなのだろうか。

「他にも野菜の収穫もやるし。あれはかなり収入がいいけど、常にできるわけじゃない

のがなあ」

「こー魔ずいーちのyさい名人は伊達じゃにい」

「そ、そういえばナズナさんって、野菜を収穫するのが、その、上手だって聞きました」
「たぶん、上手い……のか？」

「PRO級ダナ」

自分だとよくわからないが、プロ級らしい。

やはり『俎上乃鯉』スタンプは野菜相手に無敵……！

野菜の帝王感が漂ってきた。

「最近また買ったミスリルスライムの破片をスタンプ型にしてみたんだけど」
ことつ、とテーブルの上に置く。

光に照らされ、銀色に輝く重厚感と高級感あふれるスタンプ。

握りやすく洗練されたフォルムは、まさに職人御用達……！

これは自発的に買った物だ。

決してこめつこの魔性に負けたわけではない（震え声）

「おmえ何処メザしてんの？ ならずーrいnからのーかりnデビューk aよ」
のうかりんは目指してないです。

効率を求めた結果、こうなってしまったただけだから。

「カード型の鉄板を付けて、魔力を込めれば……ほら、この通り」

前に買った赤熱するアレを搭載しているので、簡単に焼印となる。

完璧すぎて農家もびつくりだろう。

鉄板も『新鮮』『瑞々しい』『美味しい』などバリエーションが豊富なので、色々使えそう。

収獲用にインクタイプも作った。

「……冒険者の方ってみんなこんな感じなんですか？」

え、どうなんだろう。

そもそも冒険者ってなんだよ。

何すれば冒険者なんだ。

俺って一体なんなんだ（哲学）

「いや、それはにいから。なずーは馬鹿だつて証拠だよ
違うらしい。」

でもバカはやめてください、傷つきます！

ゆんゆんが頭痛を抑える様にロリっ娘を連れて来た。

めぐみんだ。

めぐみん!? めぐみんが何故ここに!? 他のバイトから逃げたのか? 自力で脱出

を?

というわけで、ゆんゆんのライバルのめぐみんが現れた。

「私を働かせてください」

「ニートのめぐみんじゃないか」

「ち、ちがわい!」

ニートじゃなかったらしい。

後でブロントさんと認識を擦り合わせないと、里の話題に乗り遅れてしまう。

乗り遅れると、紅魔族からズレた認識となり……特に問題なかったわ。

「n i t t o のめぐ i n j y a にか。テ一食 Y A でのばいとは D O したって H A N A S H I だよ」

「にっとのめぐいんじやないです。そもそもブロントさんさんは何言ってるのかわからないので今は静かにしてください。大事な話なのです」

「h a i ……」

特に理由もない暴言がブロントさんを襲う……! !

と、冗談のようにモノローグを入れたが、プロントさんはしよぼくれてしまった。

紅魔族の人が聞き取るのはキツいらしいが、もうちよつと優しくしてあげて欲しい。
ぶっころりーなんて流すだけだし。

ゆんゆんはプロントさんと会話しようとずっと頑張ってるんだ、みんなもそれく
らい頑張ってみてはいかがだろうか。

「それで、だつめなめぐいんがなんだっけ」

「おう、誰がだつめなめぐいんか教えて貰おうじゃないか。紅魔族は売られた喧嘩を
買うのが常識だつて、紅魔族のなずーりんなら知つてて当然だと思えますが。それとも
里の期待をその背に受けたホープは知らなかったとでも白を切るつもりですか？」

「ずつと思つてたけど紅魔族のなずーりんつてマジ誰だよ。俺は集団妄想によつて生
み出された個別の十一人説を推すよ」

紅魔族は見えない英雄を生み出そうとしているに違いない……！

「さて、魔法具店では満足に魔力を込められず、定食屋では喧嘩騒ぎを起こしてクビに
なつためぐいんがなんだつて？」

「知つてておちよくつているのですね。いや、そもそもそんな詳しく誰から聞いたの

ですか。はっ、まさか我が魔法を恐れた組織の一員であり、影で見ているとか……!」

「y n y n が s o i d a n したって話だ k a r a」

「よんよん、貴女って人は……! ライバルを売ったのですね!」

ぐぐぐ、とめぐみんが小柄な体格をいっばいに使ってよんよんの首を絞める。

「マジかよよんよん。裏切りは良くない」

「s r はオレオ鬼なる z o y n よん」

「ち、違うの! 誤解なの! ただ、私はめぐみんが心配で……ちよつと待つてよんよんって誰!」

紅魔族に友好の証として贈られてきて、毎年数億円を払わなければいけないという金食いな新しいパンダかな?

結局、「働きたいのです!」というめぐみんループによって一時的に参加させることになった。

早朝、爆裂魔法によって森が吹っ飛ばされたという事件が起きたので、それに狩り出されたため、俺は寝不足で不機嫌なのだ。

ホントはもつといじめて溜飲を下げたかったが、喫茶店の店長に追い出されそうに

なったので諦めた。

千と千尋でもやってたけど、連呼は強い。

契約があるとはいえ湯婆婆すらげんりしながら根負けするからね、俺も参考にしよう。

「しようがないので今日の仕事に行きます」

「しようがないというの今は流してあげます。ふふふ、私の爆裂魔法の餌食になるのは何処のモンスターでしょうか？」

「いや、野菜の収穫だけだ」

「モンスターを狩りに行くんじゃないのですか」

「めぐみん、死にたいの？」

「えっ」

「死ぬね」

「えっ」

「4ぬz0」

「ちよつと言葉がわかりません」

「(・・・)」

一発限りの爆裂魔法を抱えた低レベルのオークウィザードがモンスターを倒すため

に外に出たいとか、正気じゃないんですがそれは。

3

里の農業区に向かうと、魔法で豪快に畑が開墾されたり、種を撒かれたり、水をかけたり、とダイナミックに農業がおこなわれていた。

紅魔族全体を維持している農業区かと思うと、かなり尊いように思えてきた。

嘘です。

さっさと終わらせてお金が貰いたいです。

「じゃあ作業しますかー」

「h a i ! !」

『気配遮断』『消音』など紙に書いて準備していると、やる気があるのかめぐみんとゆんゆんが収獲するネギに突撃していった。

そして、反撃を喰らっていた。

あるある。

足を中心に狙われ、イライラしているようだ。

あるある

それに怒ってネギとバトルし始めた。

ねーよ。

商品だからやめるんだ！

「じゃ、じゃあ作業を始めます」

「h a i !」

異世界ファンタジーで初めてやるSEKKYOUが、子供二人にネギを大切にしなさいという内容だとは思わなかった……。

二人には、そこで見えていなさいと後ろに控えさせ、準備を進める。

ブロントさんが無駄にいい返事をしてくれたので、空気が一新される……といいなあ。

ま、まあ気を取り直してやっていこう。

身体に貼った紙に書かれた文字の効果で、ネギは俺とブロントさんの気配を察知できていない。

さらに音もなるべく小さくできる設定にしてあるし、空気の流れも乱さないようにした。

試しに近くのネギに接近するが、特に反応はない。

よし、とブロントさんに向けて頷く。

ブロントさんも頷き返してくれたので、早速スタンプを取り出し、作業開始である。難しい作業ではないので、手早く進めていく。

インクにスタンプを浸し、ブロントさんが抑えた瞬間、ネギにぺったん。

そして動かなくなったネギを籠へと放り投げる。

ブロントさんが抑え、俺がぺったん。

抑えて、ぺったん。

これをなるべく早く、かつ丁寧に行っていく。

「ここ、これが紅魔族一の野菜取り名人の腕……!」

「凄い速さだよめぐみん……!」

「私達も仕事にしているけど、やっぱなずーりんには届かないね……!」

俺 T u e e e して黄色い声援があがってるのに、全然うれしくないんです。

インディヴィジュアルレブ

『個別の十一人』のなずーりん

あまりの才覚に、なずーりん多人数説が浮上した。

しかし、紅魔族随一のセンスを持つ彼が複数人いるわけがないと、その説はやがて鎮火した。

彼の才覚を示す二つ名となる、そのはずだった。

王都で起きた事件により、狂のなずーりんの存在が示唆されるようになるまでは……

！

今回のオリ主の業績

- ・（ネギ用の）新アイテムを装備
- ・（ネギ相手に）俺T u e e e e
- ・（ネギの収穫で）声援を貰った

幸運の青いリボン

L U C K + 2（なずーりん）

L U C K + 1 0（ゆんゆん）

エリス様のお守り

L U C K + 3

※ただしアクシズ教が出現するとマイナス判定

1—7

紙飛行機職人、夏芽 薺の朝は早い。

日が登り、紅魔族の人々がぼつぼつと活動を始めた頃に目が覚める。

身体を伸ばし、時間をかけて入念にストレッチを施すと、徐に机に腰かける。色とりどりの画用紙を整形しているのだ。

—— いつもこの時間から作業を？

「ええ、いつもです。もうクセになつてますよw」

笑みを浮かべて答えるその顔は晴れ晴れとしていた。

静かな室内に、しゃっしゃつと刃物によつて画用紙が裁断される音だけが木霊する。その姿は、年若い背中からは想像もできないほどの老練な空気を漂わせていた。まるで修行僧のそれだ。

無言の時間が続くが、我慢できなくなり、ついスタッフは声をかけた。

—— 態々自分で切らずとも買えばいいのではないですか？

「そうですねw 僕もそう思いますw」

苦笑いとともに、夏芽氏が答えた。

そうしてまた作業に没頭する。

我々にはわからない拘りや思いが、この作業に込められているのを感じた。

——このすば——

なんか変な夢を見たんですけどお！

紙飛行機職人って一体なんだよ。

あ、でも紙飛行機はいいかもしれない。

操作し易そうだし、ああいった遠隔で操るタイプの物を能力で扱ってみるのも面白いのかもしれない。

今日のパーティ活動は休止のため、喫茶店に来てもプロントさんやゆんゆんはいなかった。

まあ、ゆんゆんはめぐみにデートに誘われていたのだけ。

百合な展開には確実にならないと断定できる、だってゆんゆんだし、利用されて終わるのだろう。

御労しや、ゆんゆん。

いつもの座席に座り、『魔界闘士どろりんこ』を注文。

収納と書きこまれているので無駄に容量がある皮袋から、画用紙と羽根ペンを取り出す。

この羽ペンはエリス様にもらった物ではなく、新しく作ってもらった予めインクを貯蔵しておける魔道具だ。

ちよつと高かったが、戦闘中にインク壺を装備しなくて済む画期的なアイテムである。

画用紙に『飛行機』と書きこんで、魔力を通す。

勝手に折りたたむ作業が始まり、そこには自動で紙飛行機と化した画用紙が……
ちよ、長い長い。

どんだけ折り目付けてるんだこれ。

『どろりん』の喉越しを楽しんで待つこと五分。

そこには紙で出来たジャンボジェットの様が……。

違う、違う違う！

どうしてそうなったのか。

心の奥底で飛行機はジャンボジェットに限りませんあ！とか思っていたのだろうか。

いや、そんなはずはない。

俺が期待したのはもっとシンプルなやつだ。

つまり『飛行機』という文字はジャンボジェット的な飛行機になるのであつて材質如何に関わらず紙飛行機はならない……？

もう意味わからん。

一体どうすれば……。

水平思考……！

逆転の発想……！

発想の転換……！

パラダイムシフト……！

地球はそれでも回っているのです！

普通に『紙飛行機』って紙に書いたらシンプルな紙飛行機になった。

言葉で生み出した風に乗せ、紙飛行機を飛ばす。

告げる言葉が三文字という縛りは案外厳しいものがある。

風を生み出す単語だけでやたらと時間がかかってしまったし。

結局「微風」か「風」しか使えそうにない。

「微風」はホントにしよっぱい空気の流れを生み出すだけであり、魔力を込めても風速は上がらず、効果時間が伸びるだけだ。

俺の微風の認識がそうなっているのかもしれない。

「風」はイメージと魔力次第で強くできるが、「風よ」もしくは「風よ」と「よ」をくつつけたほうが強弱が付けやすい。

ちよつとしたニュアンスが左右しているのだろう。

喫茶店内を、生み出された気流に乗ってゆるゆると飛んでいた紙飛行機が、店長の頭に刺さって着陸を成功させた。

めぐみんがクビになった定食屋だったら昼時近くになると込み合うのでこんなことは出来ない。

しかし、この喫茶店は閑古鳥が良く鳴いているので、紙飛行機を飛ばすことだって可能。

突き刺さった紙飛行機をマジマジと眺めていた店長が、「俺もこれを持っている」と

言つて店の裏に。

数分ほどで、ガラスケースのような物に入った紙飛行機を持つてきた。

昔にでも俺と同じように転生者が来て作ったのだろうかと思ひながら見せてもらう。

翼には『自由自在』と達筆をふるわれていた。

俺と同じように文字を使っている人がいた……？

紙飛行機を開かせてもらうと、中心に『自由自在』と書かれ、円を描くよう放射状に色々な単語が並んでいた。

文字数は全て五文字以内、ちよつとした傘連判状のようだ。

面白いこと考えるものだと感じしながら、魔力を込める。

一秒と経たず、元通りの紙飛行機を成した。

『微風』と唱え、空気の流れを生み出し、そこに乗せる様に紙飛行機を飛ばす。

さらに『自由自在』のおかげで魔力伝達も調整できるらしく、書かれた文字を意識すれば魔力が伝わり、その効果を發揮させるようだ。

ある程度は思ったように操作できる。

減速させたり、加速させたり、回転させたり。

慣れると面白くなってくる。

文字で制御しやすくなっているとはいえ、風に上手く乗れないと自由落下するのは紙

飛行機と同じ仕様のようだ。

さあ、フィニッシュだ！と魔力を文字すべてに行き亘らせると、店の中央できりもみ大回転。

そして、爆ぜた。

燃え滓となった焦げた紙がちらちらと店内を舞う。

……な、なんでそうなったんだ。

店長に「ごめんなさい！」と謝ったら、掃除だけで許してくれた。

「なずーりんにか読めない古代文字で書かれていた紙だ。こうなったのも運命だったのだろう」と逆に慰められてしまった。

情けないデース……。

代わりに『自由自在』『加速』『減速』『修復』『落下軽減』と中に書かれた試作品の紙飛行機を贈呈した。

翌日、『紙飛行機』『自由自在』『加速』『自爆』と書いた紙をせっせと作る。使い方を知った店長は紙飛行機で遊んでいた。

どうやら、かなり昔にこの紙飛行機を店長に渡した「なずーりん」という魔法使いが操っているのを見て、自分もやってみたかったらしい。

まさかマジでなずーりん個別の十一人説が浮上かと驚いている俺を、店長は華麗に無視して語り出した。

紅魔族ってこういうところあるよね。

なんでも十五年くらい前に流浪の冒険者パーティーが、様々な知識と『邪神の墓』を里に齎したらしい。

邪神の墓を齎す冒険者パーティーとかこの世界はマジでトチ狂ってる。

ちなみにこの喫茶店にも『我々は闇』などの人気メニューを先代は貰ったとか。

そんなわけで、ゆんゆんやめぐみんの親世代はその『なずーりん』という魔法使いを特別視したこともあって、似た魔法を使う俺を肖った名で呼んで融和しているとかがどうでもいいことを教えて貰った。

あとはなずーりんは『金色の文字使い』やら『逆巻き時』などの名で呼ばれていたらしい。

どうでもいいので紙飛行機つくります、q、

一生懸命生産した文字の書かれた紙に魔力を込める。

そして重なった状態の紙飛行機を皮袋に詰めていると、息を乱したブロントさんが飛び込んできた。

ゆんゆんとめぐみん、ちょむすけが上級悪魔に襲われ、その上級悪魔はぶつころりーたちに追いかけられているらしい。

あ、そうなんだ。

あとめぐみんが明日テレポート便を使ってアルカンレティアに行くらしい。

な、なんだってー!!?

バイトミスって野菜の収穫でやっと金銭を得ためぐみんが三十万エリスをどうやって稼いだって言うんだ！

金庫でも爆裂したのか！

いつかやると思っていました！

ブロントさんに鬼気迫る表情で詰め寄ると、やるせない顔で「ぶつころりーnが追いかけてるAKUMAからめぐinがパクった」と俺に告げた。

悪魔からカツアゲとかいつかやると思っていました！

ゆんゆんや俺たちから食いものを巻き上げる手口を考えると、ヒモというか餌付けされるペットが天職なのではないかと。

『どろーりん』で一服していると、遅れてゆんゆんも喫茶店に入ってきた。

めぐみんのお別れ会をやるうと思ひ、クラスメイトを誘いに行こうとしたけど、自分一人だと話しかけられないので助けて、という話だ。

「y n y n……」

それやめてブロントさん。

俺も切なくなるからやめて。

— 2

『風よ』

目の前を逃がっているむちむちぷりりんな赤い髪をした悪魔を追いながら、風を吹かせ

る。
俺たちの背を押してくれる追い風を作ってみた。

次いで皮袋から紙飛行機をこっそりと掴んで取り出し、魔力を込めて飛ばす。

「よし、捉えた」

十重二十重と空中から紙飛行機が悪魔に特攻。

そして『自爆』の文字へと魔力を伝え、爆発を起す。

「4んだんじやにiかアレ」

どうだろうか、と皮袋から西洋兜を取り出し装備。

探知をかければ、里の外に向かって逃げる様を捉えた。

作った追い風が悪魔にも伝わっていて、間一髪で逃れられた説。

もつと調整できるように練習しよう。

追跡開始。

なぜ悪魔を追いかけて攻撃していたのか。

その理由は、里を歩いていたら見つけたからだ。

他に理由はない。

ぶつこりーたちから逃げ果せた様子だったので、追撃してあげたのだ。

「ダメか。索敵外だ」

兜を仕舞い込み、ブロントさんとゆんゆんに告げる。

俺が先頭を走り、森まで悪魔を追いかけてきたが撒かれてしまった。

「ゆんゆん、残念だけどあの悪魔でお別れ会を豪勢に爆裂するのは無理だな。めぐみんへのプレゼントを捕まえられなくてすまん」

「ええっ！ 私はそんなつもりじゃ……」

「だよね」

「あの、ナズナさん？」

まあ、そうだろう。

別に俺もそんな意味で追いかけてたわけじゃないし。

卑猥なフォルムをした悪魔が泣きながら逃げる様子が楽しかったわけでは決してない。
い。

おちよくられたとわかったゆんゆんがポカポカパンチを見舞ってくる。

ははは、どすこいどすこい。

「ムだにうごいただけ d a k e d あった。里からすでに二歩 m o 三歩も出てる状態。手遅れになるのではままるな」

ちよつと遠くに来過ぎたようだ。

狩場ほど深くは無いが、焼却炉近くなので危険だ。

熱量のせいで体感温度だが二度ほど上がった気がするし。

「ゆんゆんのライバルのめぐみんの送別会のために帰ろうか。俺とブロントさんはあんまり関係無さそうだけど、ゆんゆんが行きたそうだからな。絶対に行くと言うどころりんな意志すら感じる」

おちよくつたので次はゆんゆんどすこいだな、と準備をしていると、ブロントさんが剣を構えた。

モンスターが近いのだろうか。

ゆんゆんに目配せする。

「何故そんな必死なのかバレてる証拠に笑顔GA出てしまう」

刹那、ブロントさんの剣に鞭が絡まっていた。

「なんでバレてしまったのかしら、教えてくれる？ 改造したから隠密に長けてると思っただけだ」

剣に絡めた鞭の先には、大柄で褐色肌の女が立っていた。

「お前頭悪いな」

ブロントさんが手首を返し、剣を振るう。

その動作だけで絡めていた鞭から解放された。

「自慢じゃないがPT組んでる時にフレニ」里のイチローですne」と言われた事もあ
る」

なるほど。

常に警戒しているのが前衛だが、常在戦場になってしまふのがナイトなので知性ある
敵意に気付かない方が可笑しいということか。

やはりプロントさんの前衛としての腕には全幅の信頼を置かざるを得ない。

俺とゆんゆんだったら気付かずにゲームセットで人生エンドでしたね。

「……何言ってるかぜんぜんわかんない。アタシ、やっぱり紅魔族って嫌いだわ」

その人はトツプクラスにいい人です。

むしろここには紅魔族に存在するか怪しい、まともな常識を持った人間しかいない。
俺ら程度を嫌ってたら心臓麻痺でひっそりと死ぬことになる。

— 3

プロントさんが、強かに打ち据えてくる鞭を潜り抜け、褐色の女に傷を刻んでゆく。

滞空させている紙飛行機を定期的に自爆させようと女に飛ばすが、鞭で容易に迎撃さ
れる。

動作に無駄な遊びが入った鞭を振るっていた腕に、白い剣が何度も振り下された。ブロントさんと女の間で、数十戦を超える打ち合いが繰り返された。

飛行機を飛ばす。

十の内、三つが止まらずに女へとぶつかり、爆ぜた。

手首を重点的に負傷させたせいか、鞭の狙いが甘くなつたようだった。

不用意に近づけば叩き落とされるために周囲を囲んでいるだけだった紙飛行機が、更なる追撃をかけ、爆ぜてゆく。

滞空のために魔力を浪費したそれは、視界を塞ぐ程度の爆発しか起きなかったが、何よりも希少な隙を生み出した。

生じた戦闘の切れ目を縫うように、ゆんゆんの魔法が直撃した。

女の体勢がぐらりと崩れた。

更に生じた隙を逃すつもりはないとばかりにブロントさんが強く踏み込み、神器『グラットンソード』を万全の姿勢で振る。

体重の乗ったその斬撃は、あまりの速さに白い光が奔り抜けた軌跡のみを残していた。

神器の能力ではないという話だ、あれが彼の技量なのだろう。

「こいつかつてえna。msrrルよりやわいがかつてえ」

重厚な音を響かせ、女を数メートル先に吹っ飛ばした後にプロントさんが呟いた。

地面が褐色肌の女の血に濡れた様子はなく、着ていた服の一部だけが女の立っていた場所に落ちている。

「実験中の皮を叩き斬るとはやってくれるじゃない。確かに柔軟性は再検証が必要でしようけど、硬度は下級悪魔並みのよ?」

「俺ハ別に強さwおアツピルなどしてhaいない。知らREるのがナイト」

薄暗い森の中で、プロントさんは白く輝く剣を再び構えた。

神器の一撃を耐える丈夫さを持つ褐色肌の女。

その正体とは一体……。

「アタシは強化モンスター開発局局長のシルビア、魔王軍の幹部よ!」

なんか名乗ってくれたし、正体も教えてくれた。

悪魔を追いかけて魔王軍の幹部とエンカウントとか、もうちよつと難易度調整をしてほしい。

「ソUか。オレオnイトnぶろんdさnda。後口にはAIBOうnoカd―すmいk a―のnずrin、arcういぎつとのynynダ」

「……そう、ニートのプロントサンタ、ダークメサイアのものずりん、歩けるペットのよん

よんね。名前は覚えてわ」

えっ。

「悪いけど逃げさせてもらうわ！ また会いましょう！」

そう叫ぶと、シルビアはバク宙しながらダイナミックに飛びあがり、焼却炉の火柱に飲まれて消えた。

後ろを確認しないでそんな大ジャンプしたら、そりゃあそうなるよ。

現世からの逃亡ってことなのだろうか。

いや、今重要なのは……

「ダークメサイアのなずーりんって誰だよ」

「私ペット……。頑張ったのに歩けるペットのよんよん……」

「オ、オレオ悪くにい……」

ニートのブロンドサンタが叫ぶが、擁護できる気がしない。

なんだよブロンドサンタって。

ブロンドヘアのサンタのつもりかよ。

なんか神器振るうと言葉が悪くなってる気がするんだけど。

精神汚染とか付加効果ないよね？

なずーりん

紅魔族の里にはかつて『金色の文字使い』や『逆巻き時』の名を持った魔法使いが、様々な知恵と魔神の墓を齎した。

その魔法使いの名はなずーりん。

『個別の十一人《インディヴィジュアルイレブン》』のなずーりん

現代に甦ったなずーりんの活躍を讃えて与えられた称号のこと。

「野菜取り名人のーかりん」「焼却炉の魔術師なずーりん」「ダークメサイアののずりん」「狂える鎧のげきーりん」「どろーりん飲みのさっかりん」「色無きぶっころりー」が確認できている。

魔王軍幹部シルビア

「ニートのブロンドサンタ、ダークメサイアののずりん、歩けるペットのよんよん」と再戦を望むも、そんな者はいないと否定され、紅魔族の玩具にされた。

「めぐみんが紅魔族の里を出るで聞いて、俺とブロントさんで用意した『ニートなめぐいん看板』だ。これを背負って街を歩けば、みんなが哀れんでお金をくれるに違いない」

「5フンでつくtta」

「ごみを餞別と呼んで渡すのはやめていただけませんか」

「いや、これは餞別じゃないから。決して勘違いしないでいただきたい。『願いの泉』近くに落ちてた鉄くずだ」

餞別はゆんゆん宅でのお別れ会の料理である。

俺とブロントさん、ゆんゆんでお金を出し合った。

まあ、言わないけど。

ゆんゆんはライバルなので言えないらしい。

「おう、結局粗大ごみじゃないか。よんよんが持つてる幸運アイテムを私にもくれるとか、そんな展開でしょう？ 自慢してきてウザかったので、これで論破します。はやく強化版ください」

「よんよんは特別ってそれ族長宅で常日頃から言われてるから。絶対に渡さないし、め

ぐみんは鉄くず渡しておけば喜んで食べるっしょ。食べない？」

「私はよんよんじゃないの……。ペットなんかじゃ……」

「食べるわけないじゃないですか。こんなもの私の魔法でワンパン消し炭ですよ。怯えろ竦め、命乞いをしろ」

「msrrのスライむ……;;」

歩けるペットよんよんとミスリルスライム戦で見せ場を奪われたプロントサンタが流れ弾で目が死んだ。

この二人は名前間違いと爆裂魔法がトラウマなんだ。

やめたげてよお！

——このすば——

めぐみんが冒険者デビューで里を出る↓ゆんゆんも追いかけて里を出る↓俺もゆんゆんを追いかけて里を出る↓プロントさんも里を出る。

完璧な構図でしたね。

予てから里を出て見聞を広める予定だったので、ゆんゆんをストーカーしても全然問題ない。

とうか族長に「あの娘は友達がいなくて可哀そうで変なのになにか引っかけたり安全な場所まで見守って欲しい」と頼まれたのだ。

フロントさんはパーティは一緒にいるものだ到着してきてくれた。

そんな訳で、水と温泉の都アルカンレティアに到着した。

「あ、そののなんとなく幸薄そうなあなた！ アクシズ教はどうでしょう！」

「さ、幸薄そうって……」

可哀そうなゆんゆんはさっそく宗教の勧誘を受けていた。

大丈夫か、そんな調子で世界に羽ばたいてホントに大丈夫なのかゆんゆん。

「そのの不運そうな魔法使いのお兄さん！ どうですか、今ならアクシズ教に入れば女神様のおかげで幸運がアップしますよ！」

ゆんゆんを見守ってたら、にこにここと人の良さそうなお姉さんにアクシズ教とやらの勧誘を受けた。

が、俺にはエリス様がいるのだ。

首飾りを取り出す。

「あ、いえ。俺はエリス様を……」

「ぺっ」

えっ。

「ぺっ」

二度見された後また唾を吐かれた。

もう早くこの街から出たい。

次から次にアクシズ教徒から勧誘を受け、断る度に唾を吐かれる。

街に着いて数日はエリス教だと思われたのか、石とか投げつけられる。

そして最近ではアクシズ教のアークプリーストだとかいうおっさんに『セイクリッ

ド』系の魔法を不意打ちでかけられる始末だ。

アクシズ教のプリーストはマジ頭おかしい。

プリーストって頭が悪い魔法使いしかねないんじゃないだろうか。

適性は知力10以下のみとか。

ちなみに『セイクリッド』なんちゃらの効果はアンデッドにダメージを与える魔法らしい。

異世界に来てアンデッド扱いとは想像しなかったぜ……。

『デイスペル』系の解除魔法も食らったので、ローブに書かれていた防御用の文字やりボンも吹っ飛んだ。

紅魔族の里とは別のベクトルでしんどい。

なにごこマジつっら、q、

—— 1

んじゃいくよ

俺、夏芽齋（、エ、）ピャー

留置所にぶち込まれて過ごした。

「もうするんじやないぞ」

「はい……」

「馬鹿な真似をしてためぐみに会ったら、ナズナさんが捕まってるって聞いて駆けつけて来たんですけど……」

まさか警察に「もうするんじやないぞ」なんてドラマのようなことを言われて留置所から出されることになるとは、思いも寄らなかつた。

なんていうか、床が冷たくて、ご飯も冷めてて、日本を思い出すって言うか。

まあ、こっちのほうでご飯は贅沢でしたね。

H A H A H A、はあ……。

見守るはずのゆんゆんが身元引受人になってくれたのですぐに出られたが、そうじゃなかつたらどうなつたか。

警察にしよつ引かれた原因を思い返す。

アクシズ教が跋扈して生きるのもツライので、エリス教の教会にお世話になることにしたことが始まりだった。

エリス教の信徒の皆さんはとても親切で過ごし易かったのだが、毎日アクシズ教が悪戯をしかけてくるのだ。

炊き出しをすれば混ざって腹いっぱい食べ、唾を吐いて去ってゆく。

怒ったプロントさんが犯人を追いかけて川に落ちた。

掃除をすればゴミを撒き散らして去ってゆく。

怒ったプロントさんが追いかけて池に落ちた。

紫色のクリスの花を摘んで像の前に備えておくと、持っていてしまう。

怒ったプロントさんは穴に落とされた。

パンを配ろうとしたら全部強奪して逃げて行った。

怒ったブロントさんは追いかけている途中で幼いアクシズ教徒に石を投げつけられた。

そんなわけでどうとうブロントさんは外に出なくなってしまった。

そして、その翌日。

教会に飾られているエリス様の肖像画に落書きしたアクシズ教を追いかけたのがいけなかった。

エリス教の人たちが路地裏まで追いかけて、らくがき犯であるアクシズ教に説教しようとして、めぐみんに止められていた。

「いやちよつと勘違いしないで欲しいのは……」

流石に変な手違いがあると困るので止めようとして俺も合流。

「おまわりさーん！ あそこです！」

「アクシズ教の話を半分に聞いて駆けつければエリス教が子供を取り囲むとは！ しかも一人は魔法使いじゃないか！」

「こ、これは違うんです。我が名はナズナ、紅魔族の里の……」

「聞きました!? あの問題を起こす紅魔族ですって！ これはもうあのいたいけな少女に何かしようって魂胆なんですよ」

自己紹介をして誤解を解こうとしたら、なぜかアクシズ教のプリーストに、変質者扱
いされた。

この女、俺に『セイクリッド』してきた奴らの一人じゃん……。

「えっ、ちよっ」

「おいその紅魔族！ 話を聞こうか！」

「いや、俺は紅魔族じゃなくて。めぐみん！ めぐみーん！」

不味い方に話が転がっている。

その場にいためぐみんに声をかける。

「助けて！ めぐみん助けて！」

なんとかめぐみんの助け舟でここはやり過ぎさなければいけないと、めぐみんに助け
を乞う。

が……。

「御嬢さん？ あの紅魔族と知り合いかなのか？」

「まあ、知り合いというか」

期待の瞳をめぐみんに向ける。

「あの変質者！ こっちの娘にまでいかがわしい目を向けてる！」

めぐみんを庇うようにプリーストが俺に立ち向かう。

「な、紅魔族！ 是が非でも話を聞かせて貰おうじゃないか！」

警察の人も警戒心マックス！

おま、プリーストおおおおお！

「貴女も如何わしい真似されたわよね！ ね!?!」

「確かに。（『ニートなめぐいん看板』を持た）されそうになりましたね」

「き、きさまああああ！」

「か、勘違いなんです！」

身分証として冒険者カードを出そうとすると……

「あ、魔法を使おうとしているわ！ 紅魔族の魔法は……」

「紅魔族！ 手を後ろに組んで何もしやべらずその場で伏せなさい！ 動けば魔法を行

使したと判断する！」

（、エ、）ピャー

ということがあって、やっとゆんゆんのお蔭でお日様の下に出てこられた。

「このまぢきらい」

「ああっ、ナズナさんの目が濁ってる！ が、頑張ってる！ プロントさんさんはやくき

てえー！」

— 2

「老婆がリングを落していたので拾う手伝いをしたら、お礼と称して喫茶店に連れ込み、複数人で勧誘してくる」

「男に囲まれた女性が助けを求めていたので助けたら、お礼と称して喫茶店に連れ込み、複数人で勧誘してくる」

「トイレの紙を盗み出し、代わりにアクシズ教の入信書を置いている」

などといった相談がエリス教で待機している俺に寄せられてきた。

アクシズ教に直接文句に行ったら頭がおかしい連中に絡まれるので、エリス教で愚痴をこぼし、ついでになんとかしてもらおうという話らしい。

教会で子供たちのために人形劇をやりつつ、相談ごとに応えていたら、アクシズ教への相談窓口になっていたのだから、俺に集まってくるのだ。

関わりたくねえ。

連中に『宗教禁止』とか『勧誘禁止』って書いた紙を貼ったら解決しないだろうか。

しないよなあ……。

教会にあるエリス様の肖像画に落書きしようとするアクシズ教徒や燭台を盗もうとするアクシズ教のアークプリーストがいるので、『入室禁止』と聖堂に貼り、掃除を進める。

荘厳な空気の流れる聖堂には、つい姿勢を正したくなる雰囲気で満たされていた。

エリス様の教会っていいよな。

誰にも邪魔されず、独りで静かで豊かで、自由でなんというか救われる。

スタンドグラスを磨こうかと梯子を用意していると。

ばりーん、とスタンドグラスが舞い散った。

俺の足元にころころと転がる石。

……。

スタンドグラスを一か所に集め、聖堂に貼られていた『入室禁止』を引き剥がし、扉を開く。

通りかかった神官の人にスタンドグラスを割られたのと折檻してくるといふ旨を伝える。

さすがの俺もキレちまったよ。

石に『追跡』『核熱』と掘り、貯蔵できる限界まで魔力を込め、投擲。

「よし、行け。俺を邪教の元に導け」

「ごつ、と鈍い音を鳴らしながら、アクシズ教のアークプリーストのおっさんに石が突き刺さった。

「な、何が……」

「天罰に決まってんだろがアクシズ教おおお！」

『核熱』が発動し、石が小さくない爆発を起こして破片を撒き散らす。

「ちよ、なずーりん！ 何やってるんですか！ 今は悪魔が……」

「はあ？ 悪魔……？？」

里で追いかけたむちむちぷりりんな赤髪悪魔が、アクシズ教徒に囲まれて涙目になっていた。

アークプリーストのおっさんは倒れたまま。

それを見守るゆんゆんとめぐみん。

プロントさんはお休みです。

「よし、加勢するぞ女悪魔。協力して此の地からアクシズ教を根絶やしにしようじゃな

いか」

「えっ」

呆けた悪魔を無視しながら皮袋からミスリルスライムや赤熱するキューブを取り出し、槌を生成。

邪教との聖戦だわ。

「いやいや、ナズナさん！ 悪魔ですよ!? エリス教も悪魔は……」

「まず悪魔と協力して悪の根源であるアクシズ教を滅ぼす。そして、疲れた悪魔を俺が滅ぼす。これは平和への第一歩である」

ゆんゆんの言葉華麗に論破し、ブン……ブン……と赤熱した槌を振る。

槌に貼り付けた鉄板には片面に『魔法を禁ず』、もう一方に『動作を禁ず』というシンブルかつ最強の文字。

対魔力を純粹な熱量で焼き切る槌、傷口に強引に植え付ける魔力、能力によつて基本行動を無効とする三本柱だ。

人間に使うならばおそろくこれ以上に効果のある攻撃もないだろう。

「何したんですか！ なずーりんが今までにないほど怒ってますよ!」

「子供と遊んでて楽しそうで悔しかったからエリス教会に石を投げ込みました」
がくがくとめぐみに揺すられていたおっさんがそう答えた。

「なぜそんなことを！」

「この街の子供に近づくと、禁止されている私には、彼が憎かったのです……！」

「あとエリス様の肖像画に落書きをしたし、飾って置いたクリスの花を盗んだ。さらに配給用のパンを強奪して、神官の方の下着を盗んだ」

俺の言葉におっさんを含んだアクシズ教が目を逸らした。

「馬鹿ですか！ アクシズ教徒は本当に馬鹿なんですか!？」

——3

んじゃいくよ

俺、夏芽齋（、エ、）ピャー

留置所にぶち込まれて一晩を過ごした。

アクシズ教と女悪魔、カースメイカーが街中で暴れるんだから、そりゃあしよつ引かれるよね。

「このまちきらい」

「いやいや、そんなこと言わずに我々にも子供に近づける方法を伝授してくださいよ」

一緒にぶち込まれたアクシズ教のアークプリーストであるゼスタとかいうおっさん

にすり寄られ、夜を過ごすとか地獄だった。

子供に近づく方法って生々しくてきつても。

異世界ってほんとツライ。

「あくしずきらい」

「ナズナさーん、迎えに来ましたよ。大丈夫でしたか……。ああっ！ ナズナさんの目がまた濁ってる！ ブロントさんさん早く来てー！」

ナズナ

エリス教会で世話になっている熱心な魔法使い。

子供のために人形劇や本の読み聞かせを行い、アクシズ教の被害にあった大人たちの相談に乗る姿から一定の信頼を獲得した。

教徒にならない理由はエリス様を理解するためであるとか。

・エリス様の祝福

彼はよみがえる際にエリス様の影響を強く受けている。

彼は敬虔なアクシズ教徒から標的にされやすい。

彼はアクシズ教の本拠地であるアルカンレティアではLUCKが強制的に0判定になる。

彼はアクシズ教徒が近くにいる場合、全ての行動が失敗判定となる。

彼が場にいるときアクシズ教徒の運も0に落ちる。

1—9（爆焔編完）

「や、やっと見つけた……」

「うん？ どこかで会いましたっけ？」

「あ、いや、えっと。そ、そう。こっちの勘違い！ あたしの勘違いだった！」

「はあ、そうですか」

「まあ、ここで会ったのも何かの縁だよ！ キミ、アクセルははじめて？」

「さつき着いたばかりなんで冒険者ギルドに行こうかな、と」

「ならあたしが案内してあげよう！ 間違っって声をかけて呼び止めちゃった謝罪の代わりっってことでどうかな？」

やたらとアルカンレティアで生ぬるい反応をされると思ったよ。

ローブ来てるし、もう完全に紅魔族だと思われるとも。

うわあ恥ずかしい死にたい……～q～

紅魔族認定を避けるため、アルカンレティアのエリス教会で貰ったプリースト用のローブに袖を通す。

よし、これで頭のおかしい奴認定は避けられるだろう。

しかし、まさか紅魔族の常識がおかしいとは。

薄々わかってた。

常識はどこにいても常識、最初のナプキンを取る者はいつだって共通の常識を持つ人なのだ。

ギルドに到着。

ふう、と空いている座席にプロントさんを座らせ、周囲を見渡す。

なんというか、ファンタジーの冒険者ギルドって感じで落ち着く。

戦士風の荒くれ者が楽しそうに酒を呑み、ローブを来た魔法使いが本を読み、ギルドの綺麗なお姉さんが書類を書いている。

ここには中二患者も唾を吐きかけてくるラマみたいな宗教狂いもないんだ、あれは全部夢だったんだ。

これで本人だったらテキストに送られてオークど真ん中だった経験もあつて文句を言いたいが、憐れ過ぎて何も言えない。

ポテチ食つてないし、傲慢でもないから違うのだろうけど。

馬鹿っぽい空気は一緒だから、なんとも言えない感情になる。

「エリス様を信じてて、その、申し訳ないです……」

「いえ……」

もうさつさと話を終わりにして、他の街へ行く商隊の護衛する仕事を探そう。

アクシズが嫌すぎて、用事があるというエリス教の人にテレポートしてもらった。

ゆんゆんやめぐみんよりも早く出て来てしまったので、二人に挨拶してからアクセル

を出る予定だ。

そう思ってたなら、クリスマスに袖を引つ張られた。

「あー、あの、アクシズ教の方。俺が教えて貰った話によるとアクア様とエリス様は先輩後輩の間柄らしくてですね」

アクシズ教のアクア様（ ）を呼び止めた俺を、クリスマスが上目づかいで期待を込めた瞳で見つめてくる。

なんだこの娘マジ可愛い。

2 ゆんゆんくらい可愛い。

「エリス様は慈悲深く、優しい方なので、肖りたくなりました。お金なら持つて行つて下さい」

「あ……ありがとうございます」

テキトーに一万エリスくらい渡す。

見知らぬプリーストに借りようとしたのだからそれほど高額ではないはずだ。

「あの、あまり女神様を騙るのは良くないと思うので止めたほうが良いかと。俺もエリス様を騙られたら怒ると思うので、他の阿克苏ズ教の方が黙つてないかもしれないかも」

「はい、すいません。気を付けます……」

「あと、勧誘とかそういうのは絶対に止めてください。死にます」

フロントさんが。

「えっ!? それほどまでなのっ!」

「はっ」

神妙に頷くと、女神阿克苏ア様(○)は死んだ魚の目をして、後ろに立っていた黒髪の少年と合流していた。

死にます、の下りで「マジで!?」ってギョツとしていた。

阿克苏ズ教を知ればマジだったとわかんと思う。

なんかとても疲れた、と席に座る。

合わせて、クリスも無言で座った。

出鼻が挫かれてしまった……。

対面に座ったクリスはひどく切ない表情だった。

目覚めたらしいプロントさんも切ない顔をしている。

俺もひどく切ない顔をしているのだろう。

自分が信仰する女神様が、嫌がらせしているライバル宗教にお金を借りてるのを見た
ら絶対に嫌だなあとか、そういうもによもによする思いをなんとか払拭する。

しかし、アルカンレティアであんなに元気だったアクシズ教があそこまで弱体化する
なんて、切なさが倍増である。

駄目だ、全然払拭できない。

未だにクリスは切ない表情のままだし、プロントさんも気絶させられた相手の情けな
さにひどくしょんぼりとしている。

心に傷を作りまくりだ。

もうアクシズ教には近づきたくないです……。

関係者だと思われたくないのです……の二人組が手続きしていた胸元ゆるゆるの受

付さんを避け、商隊の護衛依頼を見繕ってもらおう。

さっきの人はステータスが高いとか、知力がめっちゃ低いとか、運が無いとか盛り上がっていたので待っていたのだ。

結局、討伐などの出来る仕事がないので、揉めていたが日雇いのバイトに向かつて行つた。

ああいうのを見てると、軌道に乗れるまでは地盤が無いから異世界つて甘くないよなあと内心でげんなりする。

受付の方に話を聞くと初心者が集まる「アクセル」での護衛は、俺とプロントさんなら引く手数多で何でも受けられるそうさ。

ゆんゆんが到着し、様子見できるくらいの期間は欲しい所。

数日後にいくつかの街を経て王都へ向かう商隊の護衛があつたので、それを受けることにした。

しょんぼりしているクリスとプロントさんの気分がなんとか回復するように、親交を深めるといふ名目で飲み会に移行。

お酒の力も借りて、なんとか士気を回復……。

即日でバイトをクビになったと騒ぐアクアさまが現れて、テンションが駄々落ちと

なった。

対面に座っていたクリスは、またもひどく切ない表情だった。お酒で気分が乗っていたプロントさんも切ない顔をしている。俺もひどく切ない顔をしているだろう。アクシズ教最後の一撃は、切ない……。

— 1

街で評判の貧乏店主の店に来た。

魔道具に興味があったから、というのが建前で、店主であるウイズが美人らしい。

確かに胸が大きく、儂げで美人だった。

ただ、レジでパンの耳に砂糖を塗してもそもそと食べていた。

今はお金が無いので三食パン耳らしい。

なんでこの街は切ないことする人ばかりなんだよ……;;;

気を取り直して、商品を見て回る。

有用な物があつたら、ちよつと高くても買うことで彼女の食生活改善に協力してあげ

たいと思う。

商品その1

「カエル殺し」

定価：二十万エリス

アクセル近郊にはジャイアントトードと呼ばれる巨大なカエル型のモンスターがおり、討伐するクエストを受けることができる。

このアイテムはジャイアントトードにとつて極上の餌に見えるらしく、集ってきたやつらを、中に仕込まれた炸裂魔法で消し飛ばすことが可能だという。

「これはなかなか良さそうですね」

「あつ、それは私もおすすめしますよ！ ジャイアントトードを一掃で来るし、とても便利です！」

「それはすごい。ところでジャイアントトードって一匹いくらぐらいで取引されているの？」

「お肉も合わせて一匹二万五千エリスだそうです！」

「なるほど、わかりました。とてもいい商品ですね」

「ああつ！ そんないい笑顔で褒めながら棚に戻さないでください！」

商品その2

「野外トイレ一式」

定価：三十万エリス

野外で活動する冒険者たちの安息を約束してくれる洋風トイレ。

水洗、消臭、消音機能付き。

「……これはなかなか良さそうですね」

「あつ、それは私もおすすめしますよ！ 持ち歩けるし、落ちついて用を足せるらしいので！」

「それはすごい。ところで、排泄物とかはどうやって処理したらよいのでしょうか。予め土を掘っておいて、そこに流すとかですかね」

「いえ違います。立ち上がった五秒後に、炸裂魔法で吹っ飛ばすらしいです！ 飛び散る水でお尻も綺麗になるのでとても便利らしいです！」

「……なるほど、わかりました。これもとてもいい商品ですね」

「ああっ！ そんないい笑顔で褒めながらまた柵に戻さないでください！」

商品その3

「モンスター誘引剤」

五十万エリス

これをほんの少し垂らせればあら不思議、大量のモンスターが寄ってきます。

「……………これは？」

「あつ、それは私もおすすめてますよ！」

全部おすすめだし、ガバガバじゃないですか。

「モンスターのみならず、他人親兄弟も一緒になって襲い掛かってきます！」

「……………なるほど、わかりました」

「ああつ！　とうとう笑顔で棚に戻すようになってしまいました！」

商品その4

「爆裂ポーション」

百万エリス

飲むと胃から爆ぜる。

「その、無表情は怖いので、何か言ってもらえると……………」

「……………」

「いえ、なんでもないです……………」

ゴミしかなかった。

無理して買う？

うん、それ無理。

一回使い切りのゴミが数十万エリスって、そこら辺に売ってるジョークグッズだつてもつと安くて有用なんだが。

他に見て回ると、魔力遮断シリーズがあつた。

ここにも浸食していたのか、職人ひよいざぶろー！

里から出たと言うのに、這い寄るように付いて来る魔道具に戦慄を隠せない。

ひよいざぶろー作品を持ったまま、視線を感じて振り向く。

ウイズがパン耳を齧りながら、期待に潤んだ視線を向けてくる。

や、やめろ。

そんな目で見ると見るんじゃない。

ジーツと見つめられる。

見つめすぎて、砂糖が零れて、その豊満な胸の上に降りかかり、白く染める。

あざとい……。

結局買ってしまった……。

しかも十メートルほどの長さの鎖まで……。

あざとさと切なさには勝てなかったよ……。

店を出るとき、冷やかしの冒険者に睨まれた。

彼らは買う振りをしてウイズをおちよくり、いじめるためだけの常連らしい。

可哀そうな姿を見るため、何も買わないらしい。

いや、そんな俺には無理だから。

ゆんゆんと過ごした俺が出来るわけないじゃん……。

——2

もうなんか疲れることばっかでツライ。

里に戻りたいと思うのはホームシックに掛かっているのだろうか。

いや、そもそも紅魔族の里は俺のホームではないんだが。

「あ、ナズナさん」

なんかよくわからない気疲れを抱えながら、ギルドでぼっち飯をしていたゆんゆんに

向かう合う形で席に座る。

俺が座ると、ぱあっと花が咲くように笑顔を浮かべた。

やっぱ俺にはゆんゆんをスルーすることなんて出来ない。

ゆんゆんが到着した日に、プロントさんが席をスルーする素振りをして半泣きにしたのを思い出すと、俺にはあんな上級者プレイは一生出来ないだろう。

「パーティはどう？ 誰か来た？」

「……まだです」

「まあ、そう簡単にはいかないよね」

料理を注文し、ゆんゆんが貼ったであろうパーティ募集の張り紙を確認。

『パーティ募集しています。優しい人、話を聞いてくれる人、名前を笑わない人……』
つらつらと彼氏や友だちの要望を連ねていた。

いや、これパーティ募集なのだろうかという疑問が湧いた。

普通にアークウイザードで中級魔法が使えるとでも書いたら、ざっと見た感じだがこの街ならかなり人気が出ると思うのだけど。

「あー、その、ゆんゆん。この募集なんだけど」

「君、十三歳なんだって？ おじさん……じゃなくて僕も十三歳なんだよ！ どうか

一緒にパーティを……」

「いえ、あの……」

目を離れた隙に、ゆんゆんがおっさんに絡まれてた。

ホントにゆんゆんをこの世界に羽ばたかせていいのだろうか。

いや、マジで。

「変な人だったら危ないから。ゆんゆんもちやんと断らないと」

「それはその、ごめんなさい。ギリギリ、ほんとにギリギリいけるか悩んで……」

「全然ギリギリじゃなかったから。もっとハードル上げなさい」

「はい、次から頑張ります……」

ゆんゆんがそう言って俯いた。

相変わらず幸薄そうだ。

「うん、頑張つてね。今回は勝手にどっか行ってくれたけど」

ウエイトレスのお姉さんに呼ばれたので、席に戻って料理を食べながら事の推移を見

守っていたのだが。

ゆんゆんがちやんと断る前に、おっさんはギルドから出て行ってしまった。

「ナズナさんが無表情で怖かったんだと思います……」

怖くないです。

表情筋殺してる系異世界転生者なだけです。

クセだった卑屈な笑みとか浮かべてもしようがないし。

今となつては無表情の方がクセになりつつある。

悲しい。

俺だつて感情表現が豊かな顔になつてみたい。

「ホントに一人でやっていける？ 俺は心配で死にそうなんだけど」

「だ、だいじょうぶです」

この娘、声が震えてるんだけど。

ここまで大丈夫じゃない大丈夫です発言は、きつと別の世界で提督にならないと聞けないだろう。

俺が心配で死ぬ前に、ゆんゆんが孤独で死にそうだ。

「ここで頑張つてめぐみんを追い抜きます」

ゆんゆんは胸の前で両手をグツと握り、気合を入れた。

目標があるっていいことだと思う。

心配だけど、頑張ると自分で言っているし、自立するのもいいのかな。

まだ十三歳なのと人見知りすぎて他人を疑えないのが非常に心配な部分だ。

「それなら応援しているよ。俺とブロントさんは明日の朝に出発だから」
いくつかの冒険者パーティとともに、複数の商隊グループを護衛しながら街を移動する。

俺とブロントさんがメインに護衛する商隊は、王都に向かうので、次の目的地である街で一度商隊グループを抜け、異なるグループに混ざる。

それを行く街の先々で繰り返し、最後に王都に到着するという寸法だ。

護衛する代わりに道程での衣食住を受け持つてくれる。

相手は上級職による護衛を得られるし、俺たちは面倒な準備や荷物を省ける。

「そうですか……。あ、そうだ」

俺の話聞き、物憂げな様子だったゆんゆんが髪を束ねていたりボンを解いた。

「私が使ったので良ければ、その、どうぞ」

そういえばアクシズ教に吹っ飛ばされてそのままだった。

アクア様とアクシズ教をこの世界から省いてゆんゆん様という女神とよんよん教を作った方がいいんじゃないかな。

まあ、よんよん教は友達が少なそうだけど。

友だちが欲しい連中が集まって友だちになる互助組織にすれば、あとはアクシズ教よりも完璧でしょ。

「ゆんゆんは女神だね。やっぱ一緒に来ない？」

「ええっ!？」

癒されるし。

アクセルの街に着くまでの話をゆんゆんから聞く。

めぐみんがアクシズ教から祝福の魔法をかけられたのに、自分は無かったとか。

里やアルカンレティアに現れたあの上級悪魔と出会ったが、最終的にめぐみんに葬られたとか。

魔法の修得数が増えたとか。

「ゆんゆんも頑張ってるからね。そろそろめぐみんも焦ってくるかな」

そんなことをゆんゆんに言う。

そもそも別ベクトルの相手とどうやって競うつもりなのだろうか。

ゆんゆんがこの星で徒競走の練習をしているとしたら、めぐみんはポップスターでグルメレースしているようなものだし。

「ふふふ、この私が焦る？ まさか、ありえませんか」

どきっ、と机に勢いよく身を預ける音とともに、めぐみんの声。

そちらに声を向けると、脱力した姿のめぐみんが居た。身体を机に凭れかけ、顔だけはまっすぐとこちらに向けている。

この姿を見ていると、もう勝負は決まった感しかないのですがそれは。

「まあ、すでに地平の彼方まで追い抜かれたら焦る必要もないよね」

「何勝手に悟っているのですか。私は一芸特化でブツ切りですから」

はあ、と大げさにため息付き、呆れた表情を作って見せつける。

「一芸特化っていうのは、その分野に対して修めていることだと思っただ。局所的に伸ばしているめぐみんはあれだ。オタクだ」

爆裂オタクめぐみん。

地下アイドルにいそう。

「だからマニアック向けに頑張ったらいんじゃないかな」

ニツチな層にしか受けないだろう。

しかもその層は同族のみだ。

マニアックなオタクが同族で群れるのは何故か、自分を優先するために求められないからだ。

だから欲求を満たせる互いで埋めるのだ。

類は友を呼ぶとも言うし、悪い結果にはならないのかもしれない。

わからんけど。

「腑に落ちませんが、わかりました。頑張つて私に相応しい上級職の仲間たちと魔王を討伐しようと思います」

「めぐみん、その、望みが高すぎるよ……」

ゆんゆんすらもつつ込む要求である。

これは駄目かもわからんね。

——新入り！ いいから早くギルドの裏からサンマを持ってこい！

——舐めんな！ 訳わかんない指示出してオロオロする俺を見て楽しもうつてのか

！

——ち、違うの！ 体質なの！ 実は私、女神なの！

楽しく二人と話していると、ギルドの裏から言い争いが聞こえてきた。

嫌な予感がする。

「なずーりん、どうかしましたか？」

「いや、なんでもない」

なんでもない。

なんでもないでいてください。

なにもなければしあわせでぼくはただしあわせにいきたかったただけなんだなあ。

——おい、聞いているのかおっさん！ ガキだからって馬鹿にしてるんじやねーぞ！

——私はアクア、あのアクシズ教が信仰する女神。だからネロイドに触ったら水になっちゃうの！

——うるせー！ わけわからんこと言いやがって！ おまえらはクビだ！

「ナズナさん？　なんだか目から光が失われているような……」

「わあああああ！　カズマさん！　私がんばったのよ!?　一生懸命がんばったのよ！　なのにクビって……！　クビって……！」

「上等だよ！　こんな意味わからないところこっちから止めてやるよ！」

!! ああつと!!

めがみアクアさま　と　そのつきびとA　が　あらわれた！

「あくしずきらい」

「ああつ！　ナズナさんの目がまた濁ってる！　ブロントさんさん早く来てー！」

ブロントさんはすでに不運なアンブッシュによって気絶してるから来れないんだよなあ……。

原作：HUNTER×HUNTER ふんたー「はちみつ

ください」1

——1

物心がつく頃よりも、もっと前から古ぼけた絵本が宝物だった。

体の一部と言つてもいいくらい、どこにでも持ち歩いた。

両手で抱えて余りある大きなそれは深い茶色の表紙で、幼少の身には少しばかり重い物だった。

どれだけ読み返しても飽きるという事はなかったし、他の本に興味を持つことも無かった。

父や母は、そんな俺の様子を心配して、いろいろと玩具を買い与えてくれたが、さして興味を持たずに放棄した。

唯一気に入つたのは、前から持っていた絵本の続編だけだった。

持ち歩く絵本が増えた。

必死に抱える姿を見て、両親は置いてくるよう言ってきたが、拒否を通した。

持ち運ぶ手伝いをすると言われても、断固として手放さなかった。

そんな日々を過ごしていると、部屋で白い兎を見るようになった。
白い兎だけではない。

毎日変わる、動物の姿が。

兎や猫や亀に鼠。

見覚えのあるその姿は、絵本に生きる動物だった。
にやにやと嗤う猫に向けて呟いた。

「君は、本物か？」

「それはおまえ次第だよ。目に見える物を信じられるかどうかだけさ」
嗤いを浮かべているチェシャ猫の返答は曖昧だった。

そして真実だった。

全ては自分次第だということだ。

誰にも見えない、自分にしか見えない、物語の存在を信じられるかどうか。
夢にまで見たそれらが見えているのだ。

ならば答えは一つ。

「俺は信じるよ。ホンモノだ」

「夢幻かもしれないけれど、それでも見えている物をありのまま信じるのかな」
「それでも信じるよ、絶対に」

いつか絵本の世界に行くのだと、望み続けた。

10歳を超えても、信じ続けた。

夢が向こうからやってきた今、他に何を信じるのだろうか。

だからありのまま、目の前の全てを信じるのだ。

「なるほど、なるほど。夢幻を信じるきちがいか。……そして、きちがいの意識に生きるおれもきちがいに違いない」

宙に浮かぶチエシヤ猫は一際大きな笑い声をあげ、ぐるりと一回転。

「ここでは皆きちがいだ、ここから先も皆きちがいだ」

さきほどまでは、絵本の挿絵が動いているようだった。

今では息遣いすら聞こえてくるほど、生氣に満ちている。

「そして、おれもおまえもきちがいさ。気を違った仲間たちよ、精々仲良くしようじゃないか」

チエシヤ猫は人間のようによく口を開けて笑った。

そして、「コンゴトモヨロシク」という言葉を残し、霞んでいく。

最初に身体、次に頭、最後に大きな三日月のような口。

夢幻のように消えていった。

絵本を抱える必要がなくなった。

浮遊して付かず離れず勝手に追隨してくるためだ。

そしてその絵本から毎日、動物が1匹飛び出す。

動物を選ぶことはできない、変える事もできない。

自律しているが、俺から離れることも無い。

誰にも見るのできない、俺の友達だ。

宙に浮かぶ本、見えない何かが咀嚼する様子、増えた気配、etc。

怯えた両親が俺をお祓いに出すまで、そう時間はかからなかった。

捨てられなかったことに内心では驚いていた。

そうする親が多い事は知っていたから。

分かり合うことはできないけれど、俺のことを子だと思ってくれているようだ。

初めて知った事実が笑いが込み上げた。

よくよく考えてみれば、幼い俺に向けて熱心に玩具を与えていたこともあった。きつと良い親なのだろう。

お祓い先で告げられたことは、未知の知識ばかりだった。

絵本から現れる動物たちは、念と呼ばれる技術が成し得た奇跡だと知った。

基礎的な制御のみを教わった。

これ以上は無理だと、イタコは言った。

独学か、優れた師を探すか。

茨の道であると、戻れなくなる可能性もあると言われた。

構わなかった。

更なる発展を望むために世界の裏側に踏み入れることを決意した。

— 2

優れた師というものがそう簡単に見つからないというのはわかっていた。

ただ、『念』の知識を持つ者もほとんど見つからないとは思わなかった。中には霊能力などを持つ者はいいた。

だが、『念』と呼ばれている技術を知っている者はいない。

知っているのは以前見てくれたイタコだけだ。

浮遊している本が少しだけ制御が効くようになったが、それだけだ。

それ以上の知識が俺には何もない。

肉体も一向に成長する兆しを見せない。

本からチェシヤ猫が姿を現した10歳のまま。

本への憧れにも似た感情が燻っているのみだ。

父と母に家を出ることを告げた。

俺の両親は優しく、そして変わった夫婦だった。

不気味な俺を育てた変わった夫婦だった。

過去の話だ、今はいない。

ただ、俺の傍に本があるのみだ。

— 3

家を出て念能力について聞いて回った成果があった。

外国で不思議な力を扱う人物を見たという話を聞いた。

さらに詳しく聞くとハンターという職に就いているらしい。

あとは忍者も凄いいというが、さすがにフィクションだろう。

ハンターの情報は念を探すよりも遥かに楽だった。

一年に一度だけ行われる試験で合格すればハンターになれるが、試験は過酷で倍率も高いらしい。

倍率は数百万倍で、会場に辿り着く前にふるい落とされるとか。

合格できるとは思っていないが、そこで何か掴めるのではないかと一縷の期待を抱いて応募した。

— 4

本から現れるキャラクターはそれぞれが特殊な力を持っており、俺に恩恵を与えてくれることを知った。

白ウサギは動作速度が上がり、三月ウサギは周囲の正気を失わせ、帽子屋は毒のような症状を与えることができる。

便利な点もあるが、やはり日々によつて現れるキヤクターが選べずランダムなのが不便である。

雑魚寝するような宿で三月ウサギが現れた時など悲惨だった、俺以外が。

まあ、関係ないのだけど。

ハンター試験会場までは、他の参加者たちを狂わせたり、素直に話したくなるようにして辿り着けた。

人と人は助け合つて生きているのだとわかった。

やはり家を出て正解だった。

何も知らなかった俺が様々なことを学べているのだから。

ハンター試験だが、普通に不合格になった。

あんなに苦勞して辿り着いたハンター試験だが、一次試験で不合格となった。

俺と同じ受験者を30人ばかりと試験官を1人、生きても死んでもいない状態にしたのだが、それがいけなかったらしい。

ルール説明だと死んだ奴が悪いみたいな感じだったから試験官も処理したのだが、俺の友達はずが回りすぎたのかもしれない。

いや、俺は何もしてないけどね。

ただ、念能力について試験官や受験生に聞いたら馬鹿にされたので本が勝手にやっただけなんだ。

試験官は巻き込まれただけだが。

他のハンターが現れ、念能力について聞かれたので制御が全く出来ないことを伝えた。

補足として俺には危害を加えないことも。

制御するつもりがあるのならハンター協会の会長が師範の道場を紹介してくれるという。

なんと都合のいいことか、それが目的だったから即答で道場に入ると告げる。

これで30人ほど殺した意味があったというものだ。

上機嫌のまま笑顔で伝えると、死んだのは600人を超えるとか。

ああ、そうだった。

30人は本が食った数だった。

でもまあ食う価値が無かった連中はやっぱりカウントしなくていいと思うんだ、だって雑魚だし。

— 6 —

心源流の修行が楽しくて爽やかな汗を流す。

いや、汗は全く流れない体だけど。

というか成長しない代わりに疲労とか排泄物とか無くなっただ。

泥水に飛び込んだとしても常に綺麗な状態を保てるのだから、やはり便利と言えば便利なのだろう。

本の制御もある程度は行えるようになってきた。

任意の位置に動かせることや飛び出したキャラクターに指示を出せるようになったことだ。

前までは『お願い』するしかなかったが、今は『命令』できるほどだ。

とはいえ、気のりしない命令は無視するくらいに気分屋ばかりなのだけど。

念について詳しく調べた結果、俺と本が繋がっていることが判明した。

あと新しい念能力は発現できそうにないことも。

本と繋がっているせいで俺自身が成長などをしていないのだろうという考察が成された。

心源流としての修練と念の修得を同時進行で行っていると、ハンター協会の会長をしている師範であるネテロ爺さんにボコられた。

暇つぶしだったらしい。

なんという理不尽。

爺さんの攻撃は何も見えなかった。

もう意味不明だった。

気づいたらダメージを受けてるとか念に関しても理不尽とかドン引きだわ。

その後は組手でボコられながら、ちよつとした世間話もした。

念を学ぶ上での話だった。

「悪人でも善人でも、好きなようになってもいい。だが、念は真摯に修めるべき」と

いった感じの口上から始まった。

念に善悪は無く、それを持つ人間に委ねられる。

全ては如何在りたいか、何処に向かうかが重要である。

そこに万人が識る正しきは無く、意味も無い。

ただ、目に見えぬ道を、あまりに長い距離を、盲なる歩みで進むだけ。

その茨と薊に囲まれた道を踏破し、意味を見出せたとき、それは本物になるのだとネテロ爺さんは締めた。

そして、ひどく遅い組手なのに一方的にボコられて終わった。

— 7 —

ジャポンの忍者にちよつと憧れを持ったとか、微妙な志望理由でジヨナサン・ジヨースターという少年が道場に入った。

10歳くらいだろうか。

同い年だから仲良くしようね、みたいなことを言われた。

実は同い年じゃないんだが、まあ、いい奴みたいだし仲良くすることにした。

ジヨジョと呼ぶと喜んでいた。

何時もと変わらない修練だったが、そこにジョジョへの型の指導や組手が加わった。2年くらい経つと状況が変化した。

ジョジョの家に養子になった少年と仲が悪いのか喧嘩していると噂を耳にした。

まあ、頑張りなさいと心の中で激励する。

その養子が来てからジョジョはいじめにあつてると聞いたが、道場では普段通りにしているでそれに合わせている。

心配してもいいが男としてのプライドだつてあるだろうし、俺がわざわざ何かをする必要はないだろう。

普段と同じように接するのが一番だ。

養子であるディオとジョジョが野良ボクシングして、一方的にジョジョがボコつてた。

いやまあ、そらそうなるわ……。

立ち合いでのセコンドを任せられたので、動きの癖とかを伝えたら完封状態になつた。

ちよつと可愛そうだった。

試合終了と同時にディオが「ジョナサンのグローブに石が……！ この卑怯者があ

!!「みたいなことをやってインチキを疑われたが、ジョジョは「友情の拳はそんな石より硬い!」とか叫びながら石を砕き、台座にした岩も亀裂を走らせた。

ディオがちよつと青褪めてた。

まあ、あんなんで殴られたら死ぬよなあ。

むしろよく生きてるって褒めたいくらいだ。

——8

ディオが道場に入ってきた。

ボクシングでボコられたのが悔しかったのか、マジ切れしたジョジョに勝てないことに焦燥したのかは知らん。

「君はディオ・ブランドーだね?」「そういう君はアマガツ・アマギ」みたいな感じで自己紹介した。

ジョジョのセコンドをしたのを覚えていたらしい。

試しにディオと組手をやってみたら砂かけてきながら「負けは犬の糞にも劣る!」みたいなことを叫びながら攻撃してきた。

聞いた話だとディオは犬が嫌いらしく、見ると蹴り殺したくなるとか。

いやいや、頭おかしい……。

で、審判をしていたツエペリ師範代の怒りに触れて「なっ！ 何をするだァ——
——ッ ゆるさんッ！」って感じに初日から遅くまでボコられてた。

俺もハンター試験に落ちて入門した日から2週間前後はボコられまくったのを思い出した。

ジョジョは大丈夫だった。

なんか根性が曲がっているとボコられるらしい。

道場あるあるだ。

心源流道場は基本的に普通の道場として修練し、念に目覚めるとそっちもやるって感じらしい。

だからジョジョとディオは念の修行は無し。

だが、普通の修練はかなり必死に熟しているのそのうち目覚めるんじゃないかって話もある。

で、道場での俺の扱いだが完全に年下の子供への対応だったりする。

念に目覚めているし、ジョジョとかディオと比べて在籍期間も長く、練度も高いのだから扱いはやはり子供だ。

結構な頻度で飴とか貰う。

何時も本を抱えているし、組手の時はすぐ傍に置いているのが悪いのかもしれない。相手が油断するし、これはこれで便利なのだけど。

— 9

ジヨジヨとデイオが殴り合いをしていた。

なんか色々あったらしい。

ジヨジヨが「君がッ 泣くまで 殴るのをやめないッ！」と叫びながら泣いているデイオをボコつてた。

泣いていてもボコる、基本だよな。

あと基本的にジヨジヨのほうが強いんだよなあ……。

呪的な感じで念が封じ込められた仮面が道場には隠されているのだが、二人の喧嘩が激しすぎてに壁がぶつ壊れて日の目に晒されていた。

で、その仮面に血が飛んだら「シヤキンッ！」って感じに骨が飛び出た。

なんだあれ、気持ち悪いなあ……。

センスがみじんこ以下で引くわ……。

二人の喧嘩を見てたネテロ爺さんが良い動きだったと二人を褒めて、ハンター試験送りにした。

ついでに俺も行くように言われた。

なん……だと……。

——10

前と同じように、他の受験者から話を聞いて回る。

方法だが、気を狂わせたり、毒を浴びせたり、物理的にお話したり、と様々だ。

情報収集はハンターに必須らしいので、これからも色々と学んでいきたいところだ。

ジョジョとディオも一緒に気が狂いそうになってたが、なんとか踏みとどまつていた。

制御訓練のおかげで効果範囲も選択できるようになっているが、つい巻き込んでしまったのだ。

事前に俺は催眠術が使えると伝えてあったし、大丈夫だろうとは思っていたがなかなかどうして……。

今回の試験会場はホテルだった。

試験に必須だという念が込められた誓約書に記入すると個室が割り当てられた。

一次試験が始まるまでは待機だとか。

軽く見て回ったがかなり広いホテルで1000人の受験者を収容して余りあるようだった。

アナウンスが流れ、試験の参加を打ち切った旨が伝えられた。

それと同時に個室のベッドの上へと飛ばされた。

記入した誓約書の効果だろう。

わからない受験生は混乱の極みにあるんじゃないかな。

ベッドの上で横になっていると、目の前に試験官らしき男の映像が映し出された。

これも念だろう。

白衣を着た男で、淡々と試験が始まることを告げた。

ちなみに一次試験についてのヒントは「ゲームであっても遊びではない」だとか。

その後は眠るように意識が遠退いた。

目覚めたら見知らぬ場所にいた。

で、試験官の男が『あいんくらつど』とやらを攻略したときに生存していたら合格だとアナウンスして試験の開始を伝えてきた。

『あいんくらつど』とは一体……。

—— 11

俺の立っている場所は念によって作られた仮想世界らしい。

全体からオーラが感じられるので、念を見破る技を使っても詳しい情報はさっぱりだった。

ジャミング的な意味があるのだろうか。

攻略ってことは何かギミックがあるのだろうか、とか考えていたら逸った10人くらいが中に入ったんで死んだらしい。

石碑に死亡者の名前が刻まれるのだと試験官があきれ顔で説明した。

この世界は浮遊している城である『アインクラッド』を中心に構成されており、この城を攻略すればいいのだとか。

あとは

・浮遊城『アインクラッド』が我々の試験会場であり、課題でもあるよ！

・敵がいる、強いよ！

・頑張つて倒して100層まで行つてね！

つてことも教えてくれた。

武器とかも拾えるのかなんとか。

凄い素敵！ なんてなるわけないじゃん。

なんだこの試験……。

ゲームっぽいなあと思つてたら、同じように感じた人もいたようだった。

あんまりゲームつて世の中に浸透してない上に宇宙人を撃つシューティングや横スクロールするアクションが主で、こんなアクションRPGは、その、みんな知らないんじゃないかな。

まあ、いいや。

クリアすればいいんだよ、クリアすれば。

念と俺の不死性があれば余裕っしょ。

俺の能力極ダウン。

しかもボスつえー。

攻略には時間がかかりそうで泣きそうだぜえ……、q、

——12

『アインクラッド』攻略だが、かなり難航している。

スタート時はレベル1、この時の身体能力は運動不足の小学生レベルに落ち込んだ。

また、攻撃や防御などはレベルアップ時に振り分けるスキルポイントに依存している

ので、攻撃に極振りした筋肉自慢が雑魚に一撃死とかに合ったりする。

なんて恐ろしい念なんだ……。

25層に辿り着く辺りで400人くらい死んだ。

ボスや出現するモンスターに殺された受験者もいるが、餓死とかで死んだやつもいる。

あとは受験者を殺す殺人鬼どもに殺されたとか。

攻略のための人員を態々殺すとか、殺人鬼たちは何を考えているのか。

25層のボスはマジ強くて死ぬかと思った。

あんまりにも強いからディオが「おれは人間をやめるぞ！ジョジョーッ!!」って叫びながら、あの趣味の悪い仮面を被って骨に突き刺さることで念能力に目覚めて勝利した。

50層で残り50人くらいになった。

ボスが強いのもあったが、攻略した際にペナルティが発生したのが大きな原因だろうか。

45層以下の階層が12時間で消滅とかいうえげつない条件が発生、下層にいた連中はだいたい死んだ。

なんというデスゲーム……。

50層攻略の立役者である黒ずくめの少年はペナルティに心が折れたようだった。しょうがないね。

攻略のために頑張って、念能力にも目覚めて、超強いボスを倒して全員で勝利を分かち合い、疲労で倒れ、目覚めたら受験生のだいたいが死んでたとか悪夢だろう。

ディオが誓約によって灰になりかけたハプニングはあったが何とか75層に到着。残り30人を切っているという悲惨な状況である。

以前の試験とは比べ物にならないレベルで難易度が高すぎる。

というか、ここまで難しい試験は無かったのではないかと思うほどだ。

だって身体能力が高くないと死ぬし。

階層が上がると雑魚が下層のボス並みになるから、抜けられない連中も増えた。で、ペナルティで淘汰である。

効率よすぎい。

75層のボス部屋への扉は入ったら出られないようで、ボスにボコられて壊滅した。生存している受験者とか10人くらいしかおらん。

そもそもボス強すぎて洒落にならん……。

追い詰められた辺りでジョジョが念を覚醒させ、なんとか戦線を維持しているが、もういっぱいいっぱいだ。

冗談抜きで全滅も有り得る。

50層で頑張った黒ずくめの少年が、75層のボスを無視して受験生に斬りかかった。

斬りかかった相手というのが、ここまで攻略を引っ張ってきてくれたリーダー的な人だった。

気を離れたかと焦りつつ、なんとかボスの攻撃を凌いでいると驚愕の事実。

リーダーが試験官だったとかで、認めていた。

また、試験官は100層のボスも兼ねていることを告げてきた。

……クソゲーかな？

100層で待っているぞ！みたいなことを言っておいて消えようとした試験官にディオが目からビームを放ってダメージを与え、動きを鈍らせた。

そこでチャンスとばかりに黒ずくめの少年とその相手の少女がズバツと斬りつけてぶっ殺した。

……愛の勝利だね（にっこり）

——13

試験官を撃破したことによって念で生み出された空間が解除され、待機していたホテルの一室で目覚めた。

何となく気配を探してみたが、鬱陶しいくらいだった存在が今は疎らでしかなかった。た。

ベッドから起き上がって廊下に踏み出し、一番近くの気配に向かって歩く。

気配察知にはオーラを広げてそこに触れた物を感じ取る技術の『円』を利用して、
テキトーにオーラを放出して円の代わりにしたただけだから、純粋な円の劣化版である
が人探しには便利だ。

燃費がくつそ悪いけど。

身体については調子がなかなかいい。

というかアインクラッド攻略している時と同様だ。

レベルによる補正は無いけど。

肉体ごと念空間に取り込まれていたのだろうか。

近くにいたのは従業員らしく、協会が試験用にホテルを貸し切っていたらしい。

二次試験があるとのこと、ハンター協会が所有している飛行艇へ連れてかれた。

詳しく話を聞くと一次試験は2年ほどかかっていたらしい。

まあ、そうなるよな。

わかっていたことだが流石にビビる。

ジョジョとディオに挨拶して合流。

2人も2年を一次試験に費やしたことに思うことがあったようだ。

まあ、念の修行だと思えば悪くない……こともない。

ジョジョは父親に連絡したとか。

息子2人が通わせていた道場の師範の気まぐれでハンター試験を受けさせられて、そのまま未帰還だったので体調を崩していたらしい。

うーん、どうしてなかなか難しい話だ。

無事を知らせたから徐々に体調がよくなるとは思うけど。

ネテロ爺さんに小言を言うが、爺さんにそれもハンターなら覚悟しておくことだと逆に説教された。

な、なるほど、念の戦闘は奥が深い……なんて言うわけないじゃん。

豆みたくない人も想定外だったと言ってたし。

爺さんに何を言っても意味ないとは思うけど。

——14

二次試験会場に到着。

近代的な街に見えるが光は消えている。

所々から悲鳴が挙がっているし、何故か各所の建物には火が付いている。

飛行艇の底が開き、アナウンスが試験開始を告げた。

ちなみに試験内容は現時刻から72時間以上生きていることだとか。

飛び降りたら試験に参加、このまま乗っていると不参加で失格らしい。

流星に2年も浪費して失格では堪らない。

高さとしても100m程度だ、余裕で降りられる。

黒ずくめの少年や相棒の少女が飛び降りたので、俺も降りることにした。

本に乗って飛べばいいじゃん！と天才的な発想を抱いたが、失敗した。

本は俺を中心として1m以上離れないのだ。

つまり、俺に引つ張られる形となる。

オーラで防御しつつ落下による衝撃を地面に流して無事着地。

俺の身体能力が低過ぎて、受け流さないとミンチになるからしようがないね。

小さな爆発が起きたかのように砕かれて粉塵が舞う通りを後にした。

ちよつと歩いて分かったのだが、凄い街である。

そこら中で死体が歩いているのだ。

で、生きてる人間を襲ってバリバリと喰らっている。

力は一般人よりは強い程度、強度は腐っているから脆い。

あとは噛まれるとゾンビ化するようだ。

動き自体は鈍く、頭と胴体を切り離せば活動は停止するのでダルいだけで面倒ではない。

ただ、カラスや犬などの動物もゾンビと化しているのが嫌だなあ。念による影響かと疑ったが、調べてもそういう感じはしなかった。

合格条件が72時間以上生きていること、と考えるともつと面倒な何かがあるのだろうか。

ジヨジヨとディオの位置を円もどきで掴み、一気に走り抜ける。

道中には舌が伸びるタイプや腕が強化されているタイプなどのゾンビもいてバリエーションも豊富だ。

3m近い大型タイプは不死性が高く、破壊しても時間をかけて再生するようだった。延々とぶち壊せば再生限界も訪れるだろうが俺は暇じゃない。

ゾンビの頭を足場にしてびよんびよんと飛び越え、ジヨジヨとディオの二人と合流を果たした。

頭を足場にする利点は弱点である頭部を踏み砕けることだろう。

この後どうするかという話をしようとして、二人のほかにもう一人いることに気付い

た。

よろしく、と挨拶したら「どろどろに濃く煮詰めて砂糖をたっぷりぶち込んだコールトールのようなイタリアンコーヒーよりも真っ黒な気配がするぜツーーーッ!!」と叫ばれた。

出会って頭になんてやつだ……。

叫んだやつもジョジョに宥められて落ち着いたらしい。

お節介焼きのスピードワゴン（SPW）という人らしい。

この街の出身で、事情に詳しいとか。

それは良かった。

勘で一直線に走るか、川に沿って走るかしか選択肢が無かったからな。

ちなみにジョジョは黄金のように輝く精神と褒められ、デイオはゲロ以下の臭いがぶんぶんするらしい。

ゲロ以下（笑）

— 15

SPWが話すには、突然ゾンビが現れてパニックになったらしい。

街一帯がこんな感じだろうと予想できるが、他の街は不明だとか。

弱点は頭部、噛まれたりして傷つくと数時間後にゾンビになるらしい。

力も強く、掴まれたら相手の腕を握ぐしかないと言われた。

……だいたい知ってる情報だった。

ただ、脱出先などにいくつか心当たりがあるようだ。

河川で船、車で道路、電車で地下、小型飛行機で空と様々な手段があるとかないとか。

船と飛行機、電車は操縦できないんですがそれは。

車で脱出するにはゾンビが邪魔だし、そもそも走った方が速い。

走り抜けるにしても体力が不安なものもあるんだよなあ。

あとは日光を浴びると制約で灰にデイトを考慮する必要がある。

電車を走らせ、目的地付近でブレーキ。

止まらなかつたら電車を横転させて脱出する感じだ。

完璧なプランだわ。

目の前に現れた斧を持った大柄なデブを対処しながらプランを伝えていく。

このデブ、身体に生えてる釘を蹴れば勝手に仰け反って隙を曝してくれるので、リンチしやすくて有り難い。

油断して斧が直撃し、腕が消し飛んだが問題ない。
本が無事でオーラさえあれば生やせるし。

—— 16

地下鉄を目指して走る。

時々建物内や道端にある謎のギミックはディオがぶつ壊すために解かなかった。

最初のほうは試していたのだが、態々扉を開けるために他の部屋から銅像や宝石を拾って来たり、隠し部屋を探したりと面倒な物ばかりでディオが解除（物理）した辺りで辞めた。

いや、馬鹿らしいとは思ってたけど解かないと真面目にダメかなともちよつと思つた。

途中でエンカウトした「すたーず☆」と掠れた声で呟きながらロケットランチャーを連射してくる大柄なゾンビから逃げる。

弾が無限なのかと疑いたくなるレベルで撃ってくるゾンビだ。

俺だったら人間の命とか大事にするからそんなにバカスカとロケットランチャーを撃つことはしないね。

やはりゾンビと人間の間には理解し合うことのできない溝があるようだ。

三次元走法！とドヤ顔で天井やら壁やらを足場に飛び跳ねていたが、ロケットランチャーで崩れそうになったので辞めた。

というかディオに怒られた。

まさか非常識の権化みたいなディオに怒られるとかシヨタ兄弟子はとても悲しい……。

黒ずくめの少年とその相棒の少女と合流。

キリトとアスナという名前らしい。
なるほど。

この二人の他にもスターズという特殊部隊の人々もいた。

で、掠れた声で「すたーず☆」と呟いていた大柄ゾンビはそいつらを見て興奮したのか、元気いっぱいになった。

キリトの疫病神感である。

50層でデスペナとは別に、スターズ狙いのゾンビの元にスターズを連れてきた、というのも加わった。

・『50層をクリアした』

・『スターズを連れてきた』↑NEW! つて感じ。

うーんこの……何？

とりあえず他にも増えたら困るから、三次試験からはなるべく距離を置こうと思わせる奴である。

——17

爆走している電車で街がミサイルによって消し飛ばす予定だという話を聞く。

新種の生物(?)を研究していたらミスって拡散、あんな感じのバイオハザードになったとか。

やべー。

マジやべー。

あの街は周囲一帯を『貧者の薔薇(ミニチュアローズ)』で焼き払うらしい。

『貧者の薔薇』とは核的な威力と絶対殺すマン的な毒を備えた最強生物兵器だ。

俺の念にも搭載したいレベル。

解毒剤とかがあるなら銃弾に込めて使いたい。

試験の合格が72時間以上生きてたらって意味がわかった。

そら『貧者の薔薇』が放たれたら念能力者でも生きてられないわ。

念空間に逃げるタイプなら生存できるけど、受験生の間でそういうやつはいないし。

電車が駅に到着。

ホラー映画だったら電車でゾンビが紛れていて、エンドロール後にゾンビが画面を嘯みつく素振り、そして続編へ……となるのだが、ハンター協会はそういうお遊びは好きじゃないらしい。

駅に控えていた協会の人員が俺らの連絡を受けるとどこかに電話していた。

どうやらプロのハンターがゾンビによる汚染の洗浄作業に駆り出されたようだ。

ゾンビに嘯まれたハンターがゾンビ化し、ゾンビハンターとして強大な力を誇るといふB級映画を考えたが、嘯まれて傷つく程度のハンターは投入されまいだろう。

よくここに人員を配置していたなど納得してみる。

が、調べるとあの街から脱出した場合のアクセスは10通りよりも少ないようだった。

自らの足で脱出しようとすると、街の中心よりも外に向かうほどにゾンビが多いのでそれこそ無数のゾンビと無双アクションを繰り広げる必要が出てくる。

まあ、受験生クラスだと体力が切れて死ぬだろう。

河川が電車、車のルートにおのずと絞られるようだ。

河川は流れをせき止めて水を干上がらせていたらしく、陸路に近い感じになったかもしれない。

車はゾンビが道路に溢れているので強行突破すると先に車体が限界を迎えるので、神業染みたドライブングテクニクを要求されたようだ。

電車が一番楽、でもないよな。

難易度調整がミスりまくりですよん……とネテロ爺さんに抗議。

念に目覚めてるからこれくらい問題ないっしょ的な返答。

なるほど……。

いや、大半が念に目覚めたのって一次試験だし。

二次試験は最初から決まっていたわけではなく、様子を見て変えたのか……。

そもそも一次試験も念が必須に近かったし。

やっぱ難易度調整がミスってるじゃんと告げようとしたら、ネテロ爺さんはいなくなっていた。

……じじいの癖に動きだけは最速だなあ。

三次試験は俺らが到着した駅近くの山に登ることだそうだ。

双子のちんちくりんな試験官が告げてきた。

準備時間と試験期間を合わせて144時間、試験会場は8000m級の山である。

半端ない無茶振りだなあ……。

俺の場合は装備不要、嗜好品として食いものがあればいいかなって感じた。

念が不足したら登山客とか小動物をつまみ食いすれば問題ないし。

ディオは何も要らないと叫びながら穴を掘って消えた。

まあ、真面目に山登りなんてしたら灰になるからしゃあないね。

あ、でも同じルートを辿るとディオが生物を吸血している可能性があるんで、別のルートからアタックしないといけないわ。

ジョジョは念の波紋を纏えばいけるつしよと突撃しようとしたが、SPWのお節介による助言を聞いて装備を整えるらしい。

キリトとアスナもそれに付いていって装備を整えるとか。

三人と別れて山登り開始。

山頂までは驚くほどに糞つまらなかつたので省略。

俺は単純な腕力などは無いが、疲労は感じないしスタミナもオーラさえあれば無限なので全く苦にならなかつた。

途中で腹が減つたので受験生を襲撃して食つたからガス欠も無かつた。

同じ獲物（受験生）を狙っていたデイオがクレバスから飛び出し、雪による照り返しで灰になったりしたけど特に問題はなかつた。

真夜中に登頂。

一番だつたらしいので一人さびしく山の中腹で拾つた野菜を齧っているとデイオが雪の中から出てきた。

非常食があつたから灰になって死ぬのを避けられたらしい。

ここまで生き残り、念に目覚めた受験生が山登り程度で二人も死んでしまうとはなんと残酷な試験なのだろうか……。

昼ごろには試験官も到着。

なんというか、言葉にし難い登り方だつた。

重力を無視してふわーっと跳ねると言うか、なんというか。

まあ、俺たちの常識的な登山方法ではないことは確か。

残り20時間ほどで他の受験生が、残り10時間を切ったあたりでジョジョやキリト、アスナも到着。

こいつらもどうしてなかなか人間離れしている気がしないでもない。

待っている間に一生懸命登ってきていた登山家のパーティを俺やデオが食べていたのでこの場にはハンター試験の試験官と受験生しかいない。

試験官が何か言いたそうだったが、無視である。

お弁当を食べたくらいで文句言われる筋合いはないのだ。

——19

四次試験の試験官が飛行艇から落下してきた。

ビスケだった。

婆さんと呼んで俺とジョジョ、デオが思い切りボコられたのを思い出した。

マジないわー。

飛行艇の底が開き、岩が投下され、受験生の一人が潰れてミンチとなった。

「何やってんの、受け止めて下りるんだわき」とはビスケの言。
ええー……。

どうやら四次試験は岩を抱えて下山するらしい。

俺、積んだな。

だって念を全力で行使しても200kgくらいが限界だし。

まあ、出来ることはやってみよう。

一回潰れながら岩を止め、再生してから岩を転がし、玉乗りの曲芸のように上に乗って下山。

雪崩とか起きたし、逃げ惑う登山パーティを轢き逃げしたが特に問題はなかった。

結果は不合格だった。
ですよー。

ジョジョやディオは普通に抱えて下りてきた。

岩が日除けになっていたので灰にならなくて済んだようだ。

キリトやアスナはいっぱいっぱいの表情だった、ひよろいからしうがないね。

で、俺の不合格の原因だが、麓に被害が沢山出たかららしい。

俺は関係ないじゃん（激おこ）

試験と全く関係ないのに不合格で憤慨したが、試験官が不合格と言えば不合格なので諦めた。

というかビスケにさっさと道場に戻ってまた一から修行しろとため息付かれた。

型とか完璧なんだけど、と反論。

心を鍛える『燃』をやれってことらしい。

大人しく従うけど、これ以上俺の鋼のメンタルを鍛えてどうすんねん（ため息）

— 20

俺は不合格になったのとビスケの忠告でさっさと道場に戻ったのだが、その三日後に
ジョジョとディオがハンターになって道場へと帰還。

「兄弟子は先に不合格になって恥ずかしいでござるよー☆」と告げるもディオに「お、
おう……」と引かれた。

新聞を読んでたらしい。

とある雪山で過去最大の雪崩で街が半壊し、死傷者は数十万人に上る未曾有の大災害
が発生という記事が書かれてた。

世の中には酷い事件があるものだ。

ただ一つ言わせてもらおうとゾンビパニックも混ざってるから。

俺だけじゃないから（必死）

ジョジョは「来年もあるよ！」と励ましてくれた。

なぜか付いてきたSPWは「ゾンビのような腐臭が（以下略）」と叫んでいた、やっぱり変人だわ。

ジョジョの父親が体調を崩したので薬を探す旅に出るらしい。

おう、頑張れよと見送る。

俺はあれよ、『燃』をやらないといけないから。

思い込みこそパワーみたいな修行だけど、やらないといけないらしい。

あとは道徳とか。

困ってる人や怪我してたら助ける、人を殺しちゃいけない、苦しんでたら止めを刺す、面倒だったら気を狂わせる、口を割らすには毒を流す等でしょ。

流石の俺も道徳とか常識くらい知ってるから。

グリードアイランド（G・I）というゲームに万能薬があるかもしれないとジョジョが発見してきた。

ハンター御用達のゲームで、凄まじい効果のアイテムがあり、クリアすると持ち出せるようになるのだからか。

なるほどなー。

ゲームを手に入れるためには最低50億くらいの金が必要らしい。

ジョジョは金策してくると仕事に出かけた。

うーんハンターらしいような、そうでもないような。

入れ替わるようにディオが盗んできた。

ジョジョの方がハンターな気がするが、必要な物をすぐに手に入れられるディオの方がハンター感が強いような。

起動しているジョイステにメモリーカードを指して練をすればゲーム開始のようだ。

スロットの両方にマルチタップが使われており、残りは一人分しかなかった。

これだとジョジョがプレイできない。

よし、ジョジョが依頼を終えて帰ってくるまでに枠を増やしておこうじゃないか。

俺って親切だわー。

そんなことを思っていたがディオの目的は違うらしい。

ジョジョに見せびらかしながらプレイする予定だったとか。

ツンデレか。

まあ、いいや。

どっちが先に入るか、じゃんけんで決めることにした。

単純な勝負でもいいが、俺のほうが圧倒的に体術が強い、というか相性がディオとい
いのだ。

型を用いた力によるごり押しとのディオと違って、合気鉄扇というオサレな体術を修得
していてすまんな。

じゃんけんは爆弾『貧者の薔薇（ミニチュアローズ）』を使うことによって勝利した。
ディオは自分を指差していたが、『貧者の薔薇（ミニチュアローズ）』に勝てるやつは
いないだろ、常識的に考えて。

確か死んだらプレイヤー用のスロットが空く使用だったはずだ。

目に付いた奴からリタイヤさせていこう。

ついでにG・Iはカードゲームなので、収集もしていくことにした。

もしかして相手を倒したときに手に入るアイテムや経験値がカードなのかも。
なるほどなー。

肉体を成長する薬などがゲームのアイテムで手に入った。

これがあれば俺も強くなれるかと期待したが、効果なし。

代わりに本から「Eat me」とお菓子と「Drink me」と書かれたジュースが出てくるようになった。

お菓子を食べると一口で一歳分ほど幼くなり、ジュースを飲むと一歳成長する。

が、やはり一日で効果が切れる。

しかも任意で出せるわけでもないから結局ボンコツ能力なんだよなあ。

普通に殺すとカードを手に入れられなくなるのを覚えたあたりで凄まじい勢いで収集率がアツプした。

コツは相手にカードを收容しておくブックを召喚させてから喉を潰すのだ。

あとはテキトーに料理してフィニッシュです。

ゲームの内情的に、どうもプレイヤーが保有したままになっており、カードが出回らないようになってるらしい。

つまり俺のリタイヤを促す作業は、やる気のあるプレイヤーへの応援にもなっている可能性が高い。

ちよつとやる気出ちやうなー。

もうしようがないなー。

カード屋に張り付いてプレイヤーを現実に返すお仕事をやるしかないわー。

みんな練が使えるだけあって、なかなかいい餌だった。

これだけでもG・Iに来た甲斐があつたというものだ。

爆弾をくっ付けられて吹っ飛ばされたけど、この程度なら死なないから問題ないね。いや、本も巻き込んで消し飛ばすような威力だったらヤバかったけど。

組み始めてウザい。
攻撃してきた奴を追い続けてもいいのだが、生き残っているプレイヤー連中が徒党を

そろそろ現実に戻るとしよう。

現実に戻るとジョジョのお父さんは亡くなつてた。

……ごめん、完全に忘れてたわ。

ジョジョ的には俺がG・Iにいたのは一生懸命薬を探していたと解釈してくれた。都合よく解釈してくれて有り難いわー。

薬が不必要になったからG・Iをプレイすることは無いようだ。

値上がりしたら売りに出すかなあ。

ジョジョは考古学を専門とするハンターになるとかで、遺跡を発掘しに行くようだ。

ネテロ爺さんの知り合いのジンというハンターに長期間で世話になるとか。

頑張れと見送った後、デイトと一緒に仕事へ向かう。

暗殺系の仕事は報酬が高いし、意外と念能力者がいるから餌としても美味しい。

マフィア様様である。

依頼を受けても、依頼として襲っても美味しい。

— 23 —

幻影旅団とかいう賞金首を狙ったら本を砕かれ、危うく死ぬとこだった。

デイトなんて三回は腕を挽がれた。

調子扱いて「脆そうだぜ」なんて侮ったからだ。

いや、俺も侮って捕食しに行ったらカウンターで本を砕かれるとは思わなかったけ

ど。

絶不調の状態を味わったが最悪だった。

頭痛がする……は、吐き気もだ……くっ……ぐう……な、なんてことだ……みたいな感じになった。

で、結局絶不調で戦線維持していたら、同じく依頼を受けていたゾルディックの暗殺者に横から掻つ攫われてしまった。

本を砕かれて体調を崩し、貯め込んだオーラを無駄にすただけというオチである。

悲しい。

ちなみに、ディオは幻影旅団の死体から吸血して絶好調になっていた。

そのままテンションが上がったのか襲い掛かってきたので、腕を腕いで本に食わせたことで体調が回復した。

あぶねー、ディオという餌があつて良かったぜ。

その流れで旅団の死体も食いたかったが、いつの間にかゾルディックの暗殺者が持つて行っていた。

ぐぬぬ……。

ハンター試験に参加。

俺はもうどうでもいいかなって気分だが、ネテロ爺さんに呼ばれるので行かなければいけない。

門弟の悲しい現実である。

他の道場からも参加者がいるし、同じ道場でも試験を受けるのだが、大抵は死んだりお弁当になったりして試験会場まで辿り着けなかつたりするのが多い。

ご馳走様です。

今回は一次試験はディオが試験官だった。

そういえば何か相談された記憶が……。

ちなみに試験内容は、受験番号が書かれたプレートプレートの裏側に埋め込まれている薬瓶の中身を3時間後に飲むこととか。

3時間経てばプレートから薬を取り出せるようだ。

この薬瓶だが、10:1の割合で毒と解毒剤が配布されている。

毒薬と解毒剤は同じ見た目で、瓶も同じ。

ただ、毒をどれだけ飲もうと解毒剤さえ飲めば確実に解毒されるとか。

つまり、他の受験生からなるべく数を奪う試験なのだろう。

合格条件は解毒剤を飲むこと、不合格は死ぬことと3時間後にプレートを手放していることだとか。

ちなみに俺は不合格だった。

全部毒薬つてどういふことだ、毒喰らったんだけど。

これ、俺じゃなかった死んでた。

まあ、毒を呷った連中はみんな死んでるけど。

ディオが高笑いしながら、俺が不合格するところを見るために試験官になったとバラした。

また、念に目覚めていると解毒薬も毒になるとかなんとか。参加していたフリーの念能力者も死んでるんですがそれは。高笑いしていたディオはネテロ爺さんに張り倒されていた。相変わらず速すぎて見えない……。

翌年。

また不合格となる。

おかしい……。

このエリートが不合格だと……？

確かに試験官を半殺しにした奴は不合格になっていた。

だから試験官を跡形もなく食っただけなのに不合格とか、そこんどこどうなんだ……

？

あ、でも最初に受けた試験でも殺したから不合格だったし仕方ないか。

試験官が合否を決めるからぶっ殺して決められないようにするという天才的な発想のほずだったんだけどなあ。

やってることは最初と同じというね。

成長してない可能性……いや、単に初心を忘れただけか。

俺も天然だからなー。

しょうがないなー。

来年頑張るとしようじゃないか。

もう何回目やねんって感じのハンター試験である。

一年に一回しかできないんだから、そう何度も落ちている場合じゃないのだけれど。

出発する際、ジョジョとディオが喧嘩していた。

相変わらず仲が良い。

「デイ、ディオ、君はいつたい何人の生命を吸い取った!？」

「おまえは今まで食ったパンの枚数をおぼえているのか、ジョジョ!!」

みたいな。

「俺は多分20万人くらいかな。……ふふふ、冗談だよ。パンと人間は違うからね」と

横から告げてみた。

ちよつとしたジョークだったんだけど、二人とも凄い顔になってなんか変な空気にな

ったのでさっさと道場を出た。

もう俺くらい常連になるとハンター試験に向かうのも余裕である。

毎回使っているナビゲーターがいるから今回も利用しよう。

と、思ったがナビゲーターに帽子屋の水銀毒を呷らせたり三月ウサギで気を違わせず

ぎて、もう限界のようだ。

目的地への行き方と会場だけ残して発狂してしまった。

まるで俺の顔を見て気が狂った感じだったし、失礼なやつだ。

優しい俺は墓を作って埋めてあげた。

死んでるか生きてるからわからないような感じだったし、俺も良いことをしたわ。

今年は定食屋でステーキ定食を弱火でじっくりすれば会場に行けるといふ優しさ。

去年はゴムボートで海に出て巨人食い魚を一本釣りし、漁業組合に届けることで会場入りできたが、その後にはディオが毒殺試験が起きたから難易度が落ちたのかもしれない。

辿り着いた試験会場は目つきの悪い野郎ばっかだった。

治安が悪くてヤバイ。

露骨に視線を逸らす奴らが出て気になった。

去年試験官を半殺しにしたヒソカってやつがいるせいだろう。

おお怖い怖い。

殺されたらたまらないから俺も人の波に揉まれるとしようじゃないか。

……なぜみんな俺を避けるのだろうか。

何故かみんな避けるため、俺周辺だけガラガラとなつてボツチを味わっていたら、受験生が近寄つてきた。

「ハンター試験はガキの……お、俺の手がー!!!」つて叫びながら両手が無くなつてた。ガキの俺の手（意味深）

冗談はさておき、どうもヒソカにぶつかつたらしく両手を刎ねられたとか。ヒソカ怖つ。

ぶつかられたからつて両手を刎ねるとか、わざわざそんな面倒なことをするとか手間暇かけすぎて怖い。

弱い物いじめが好きなタイプかもしれない。

俺はそういうの趣味じゃないから。

優しいから一息で殺して本の餌にするし、面倒なら戦わない。

好きなのは勝つことであつて、戦いじゃないし。

「うわーマジこえー。ドン引きー」とか呟きながらヒソカから距離を取る。

あいつ目つきが嫌らしいから嫌だ。

そもそも俺はバトルタイプじゃないんだ。

ヒソカからなんとか離れると、「災難だったな」とおっさんに話かけられた。

3人組のようだ。

あ、19歳だからおっさんじゃないらしい。

連れの他2人も驚いていた。

やっぱおっさんだよな。

19歳がレオリオ、金髪がクラピカ、黒髪つんつんの少年がゴンだとか。

ゴンと同世代だから声をかけてくれたようだ。

これだよ、これ。

こういうちょっとした気遣いによる助け合いが重要なんだよ。

だから俺もアドバイスしておいた。

ぶつかっただけで両腕を刎ねるヒソカやベーとか、一昨年や去年いた受験生で知っているやつを紹介した。

3人は納得したようで、お礼も言ってきた。

優しくてすまん。

紹介した連中の顔色が悪くなった後、何故か俺の視界から消えたけど、まあ、いいか。

周囲からひそひそと「一番悪辣なハンター殺し」とか聞こえたけど俺のことじゃないよな？

耳が良いから、俺個人を指してるとわかったら二度と試験を受けることができないようにするけど。

——28

試験が開始された。

地下道を進む試験官のハンターを追い続けるのが試験のようだ。

何この試験、超ちよろい。

もつと毒とか刃物とか使ったほうがいいんじゃないの？

こんなにぬるくて大丈夫？

と心配するのも束の間、いきなりデブが遅れだした。

この程度の試験でダメとか、と犬の糞以下のゲロを見るような目のため息付いたら、デブが倒れて動かなくなった。

考えるのを止めて石にでもなったのかもしれない。

クラピカとレオリオがハンターになってどうするかという話をしていた。

クラピカは仲間の目を集め、レオリオは無銭で助ける医者になるとか。いい話だなー。

俺は友達（本のキャラクター）を全員助ける（現実には呼び寄せる）ためにハンターを
目指しているのだと、夢を語った。

良い夢だと褒めてくれた。

やっぱり？

俺もいい夢だと思ってるんだ。

問題は、俺自身も強くなるためにどれほどの人間を犠牲にすればいいのかわからな
いってことだな。

あと制約なのか一日一体だし。

いっぱい食べれば強くなって制約も緩くなっていくかもしれない。

しかし、試験が温すぎる。

温すぎて心配になってきたので、ちよつと手伝うことにした。

他の受験生の頭を飛び越え、隙だらけなら首を押し折ってあげながら戦闘へと躍り出
る。

ゴンと、他に同世代の銀髪の少年がいた。

キルアというらしい。

ハンター試験は遊びで参加したようだ。

試験に遊びで参加するとか良くて不合格、悪くて死ぬぞ（迫真）

今日の念能力はチエシヤ猫である。

能力はワープ。

単純にA点とB点の二点を設定することで、A点とB点を行き来できる能力だ。

この二点を階段の上と階段の下に設定すればあら不思議。

無限ループする階段の出来上がりだ。

どっこいしょと階段に腰を下ろし、奇妙な顔をしたゴンとキルアに手を振って見送る。

俺が座っているというのに避けないで蹴ろうとしてきた馬鹿どもは、蹴るために込めていた力をカウンターとしてお見舞いする。

強く俺を蹴ろうとしただけ流す力も強い、こいつら程度の練度ならこんなの見戲すらない。

基本的に骨が碎ける力だったが、中には足が挽げたやつもいた。

まあ、階段だったから受ける力が強くて凄まじい勢いで転がっていったけど。

死んでたらしやうがないね。

ばかばっか。

レオリオが何か叫んでいたが無視。

十数分後に試験官のハンターが先頭に再び受験生の群れが階段を駆け上がった。手を振って見送る。

レオリオが何か叫んでいたが無視。

ポドロという受験生が手合せしたいと言ってきた。

あだ名は東方不敗とかになりそうなフォルムだ。

俺が座りながら受験生を投げ飛ばしたのを見ていて、武人として高見がどうとかって話らしい。

どうしてなかなか目が良いおっさんである。

体術に関して、俺の練度は極まっているような気がしないでもないからな。

普通ならワンパンチで仕留めるが、折角なので真面目にやってみる。

鉄扇を構え、相手の攻撃に合わせて……破裂して死んでしまった。

おっさんの力も上乘せしているとはいえ、俺の腕力程度で死ぬとか脆すぎんよ。

十数分後に試験官のハンターが先頭に再び受験生の群れが階段を駆け上がった。

手を振って見送る。

念に気付いたのかヒソカと顔面に変なのが刺さっているカタカタしている男が近く

に佇んでいた。

レオリオが何か叫んでいたが無視。

十数分後に試験官のハンターが先頭に再び受験生の群れが階段を駆け上がった。手を振って見送る。

レオリオが何か叫んでいたが無視。

……いつまで走っているのだろうか。

十往復くらいしたら受験生の数も三分の二くらいに減っていた。

そろそろ解除しようかなと思ってたら、絶になった。

ワープポイントに設置していたチエシヤ猫が破壊されたらしい。

あーら、今日一日は絶状態である。

遅ればせながら階段を昇り切ると試験官が凝視してくるんですが。

俺は関係ないっしょ。

試験はちゃんと手間暇かけなきゃ。

なんかヒソカがトランプ投げついたり、猿が死んだりしたが俺には関係ないので省略。

二次試験、豚とか獲った。

豚を豚に与える試験という謎。

あとは寿司を作れという話である。
なるほど。

俺がジャポン出身だと知っての挑戦か。

まず鳥の卵（謎の鳥）を取ってくるじゃん？

次に溶くじゃん？

試験官の女が「玉（ギョク）!?! ま、まさか……」と慄くじゃん？

無視して砂糖とか生クリーム入れるじゃん？

土鍋で固めてプリンを作るじゃん？

醤油とプリンを混ぜ、軍艦に乗せてウニとして出すじゃん？

投げつけられた。

糞が、q、

自分は忍者だとか妄言を吐くハゲが寿司をバラしたことで二次試験が有耶無耶になつて合格者なしになった。

また不合格かよ。

折角なので半分くらい食つてしまふかと本を呼び出す。

あー、絶だったわ。

絶だけどヒソカやトゲトゲでカタカタしている受験生と試験官以外なら殺れるし、半分くらい仕留めてから森に逃げ、絶が解けたら追ってきた試験官を捕食するプランでいか。

勘がいい連中がなんか身構えたが、その程度なら問題ないと判断し、やる気を出してたらネテロ爺さんが落下してきた。

あーもう滅茶苦茶だよ。

萎えた。

試験官どもがこつち見てるけど無視。

何見てんだよ（チンピラ）つてしたいけど無視。

ヒソカのほうを見てろよオラア。

二次試験は崖に巣を作る鳥の卵を取ってきてゆで卵を作る試験になった。ちよろつ。

折角なので落下してくる受験生を足場に戻った。篩にかけてやってるんだから礼を言えよ。

次の試験会場まで飛行艇で移動。

中でキルアが俺たちは光の中で生きていて、キルア自身は闇に生きている的なことを言い出した。

ゴンはウルトラマンでキルアはウシジマくんだった……？

……キルアはゾルディックの暗殺者だし、ウシジマくんは相違ないか。ちよつと納得してしまった。

まあ、そんなどうでもいいことは流そう。

何故か飛行艇でネテロ爺さんとボール遊びすることになった。で、じじいにボコられた。

おかしい、ゴンやキルアには手加減していたのに……。

というかこのボール遊びでさつきとライセンスくれよ。

なぜ念能力で俺をボコす必要があるのかという疑問が湧くんですが。

三次試験は飛行艇で移動し、高い山つぼいのに降ろされた。

まさか岩運びか、と戦々恐々としてしていると、単に下に降りる試験らしい。

飛び降りればいいのか、簡単じゃん。

ロツククライマーが壁面を降りようとしてでかくてキモい鳥に襲われていた。

え、ネタか何か？

試しに他の受験生をこつそり蹴り落としたり、落下中にキモい鳥に食われていた。

うーん落下は辞めておこう。

ゴンに呼ばれたので向かうと、地面が隠し扉になっていることを教えて貰った。

知ってた。

歩けば反響音で一発だし。

一か所くれるというので有り難く貰う。

まあ、中で繋がっている場所つぼいんだけどね。

下で会おう！とノリノリで挨拶している四人を無視してダイナミックエントリー。

数分して四人が降ってきた。

遅いんですけど、とちよつと茶化して試験開始。

壁を壊せば良くね？と天才的な発想をして、崩落させたり、何故か下まで崩れて誰かしらの悲鳴が聞こえたりもしたが特に何も無かった。

ただ、四人から怒られたので壁や地面を壊すのは辞めた。

俺は聞き分けがいいからな。

なんか死刑囚と戦う試練があつたが特に落ちも山もなく突破した。

そもそも俺の相手となつた軍人崩れには、ゲーム開始してすぐに床を砕いて破片をもぎ取り、投擲して頭を砕いてから奈落の底に落としたり。

クラピカの相手になつた蜘蛛の入れ墨が入っている筋肉は、気絶しているかどうかという賭けでレオリオが死んでいる方に賭けたので、石を投げつけて頭を潰して殺した。

キルアの相手のおっさんも壁を砕きながら現れたけど、俺がすでに似たようなことをやってるから二番煎じ感が半端なかつた。

ほ。ほ。ほ。ほーんと勝つて終了。

キルアが心臓をぶち抜くとかやってた。

俺もちよつとやってみたい。

デコピンで心停止や鉄扇で心臓破裂程度なら出来るんだけど。

— 3 1

あの後、三次試験を普通にクリアした。

残り時間が余っていたため、ヒソカのキモい視線を浴びせられたがゴンで防御したらそつちに移ったようだ。

ありがとう、ゴン。

四次試験はプレートを奪い合う試験だった。

試験開始前に奪ったから楽だった。

毒とか混ぜなきや緊張感が出ないわ。

ヒソカの糞ピエロに襲撃されて首を刎ねられた。

で、その瞬間にヒソカのプレートはゴンの元へ……。

いや、助けてくださいよ。

もういいや、なんか全体的に面倒だから死んだふりで過ごすことにした。

試験終了とともにゴンたちと合流。

ビビられたが、あれで死んだらハンターにはなれないと真顔で答えとく。

頭が転がってたけど、意外と大丈夫なんだ。

ヒソカが凄い目でこっち見てるけどキモい。

こっち見んな。

飛行艇でじじと面接となった。

戦いたくない相手は誰か、みたいな話だ。

もう俺合格でプレートくれよ、と壊れたラジカセのごとく繰り返してたら部屋から放

り出された。

何故こんな無駄なことに念能力を使ってくるのか、俺にはわからない。

そもそも見えない攻撃って反則でしょ。

最終試験は逆トーナメント方式で、勝ったら合格でどうとか。

で、ヒソカとクラピカの試合だったが、何故かちよつと会話してヒソカが負けを認め
た。

こんなの反則だ。

チーターやないか！

ヒソカにチーターでヒーターやないか！ホツカホカやで！

もう馬鹿！

知らない！

私の負けでいいわよ！

速攻で負けを認めた。

こんなんやつてられるかよ！

負け残りのため、俺が最後まで残ってしまった。

対戦相手はキルアだった。

兄貴がどうかでネガティブバーストしてる、闇に生きる中二病キルアだ。

？キルア・ゾルディック？が相手になった。

ゾルディック家のニーサン！がこっち見てんだけど。

あのくっそ可愛くない猫みたいな目でこっち見てんですけど！

キルアがずぼっと俺の心臓を引き抜いていった。

「ノータイムで殺りに来たか 迷いない覚悟!! やるね……」みたいな。

「お、俺の心臓、返せ……」とかもサービスでくっ付けちゃう。

キルアが目を逸らしたまま心臓を握りつぶした。

「俺の心臓が!!」と叫んで転がる。

頑張れ、頑張れ? と心臓を応援するが潰れたままである。

まあ、そうなるよな。

念が霧散して消えた。

「ボクはこのままだと死ぬ……。頼むキルア、負けを認めてくれ……。」と倒れながら懇

願。

ひゅーひゅーと苦しそうな呼吸音も追加。

レオリオとかクラピカが悲壮な顔をしている。

死にそうでごめん。

キルアが負けを認めたので普通に立ち上がって「試合、さんきゅーです☆」と去っ

ていく。

いやー、今回は合格できて良かったぜー。

打ち上げ何処にするー?

何故か再びキルアがずぼっと俺の心臓を引き抜いていった。

「ノータイムで殺りに来たか 迷いない覚悟!! やるね……」みたいな。
キルアを投げ飛ばして一言。

「辞めてよね、キルア程度に俺のハートを奪えるわけないじゃん」

— 33 —

ライセンスとか貰ったので試験終了。

説明会でゴンとキモノネゾルディックとの乱闘騒ぎはあったが俺には全く関係ないので無視した。

ジョジョに電話で合格した旨を連絡すると、祝福の後に彼女と結婚すると告げられた。

さつさと帰らなきや（使命感）

ホームコードとかテキストに交換して帰宅。

ゾルディック家？

行くわけねーじゃん。

相手が未熟なゾルディック一人なら囲めばなんとかなりそうだが、さすがに家単位はちよつと……。

歳とつてる念使いとか、技術が円熟しててくつそ強いし。

え、討ち入りじやないの？

それはそれでつまらなくない？

何しに襲撃しに行くん？

え、襲撃しないの？

マジで何しに行くのか不明なんだけど（困惑）

——34

ジョジョを祝いにジョースター家を訪れた。

SPWが相変わらず出会い頭に失礼なことを叫ぶが、彼の癖だと諦めた。

結婚相手はエリナという綺麗な女性だった。

まあ、俺は知らないんだけど。

看護師らしく、ジョジョとディオの喧嘩の際に、凄まじい怪我を負っていたジョジョ

を治療したとか。

ジョジョは全身に火傷、ディオは燃えながら銅像に突き刺されてザクーツて感じらしい。

なるほどなー。

喧嘩するのはいいけど、後に響くような戦い方はよくないと思うわ。

なんだかんだ言ってジョジョの結婚式にディオがいるし、やっぱり仲はいいんじゃないかな。

「べ、別に祝いにきたわけじゃない。結婚式を壊しに来たんだからねー」（俺の脳内翻訳）という感じでツンデレっぽいことをディオが言っていたし。

ジョジョを祝いに来たハンターたちとも言葉を交わす。

しかし、何故俺とディオが近寄っただけで臨戦態勢を取るのか……。

カイトとかいうハンターなんてあからさまに能力まで使ってきて呆れてしまうレベル。

人間が文化的に生きるために行う義務である。

義務を果たす俺って大人だよな、とデイトに問いかけるが「何を言ってるんだコイツは……」みたいな視線だけが返ってきた。

わかってないデイトは餓鬼だわ。

もうジョジョもデイトも21歳だろ、もつと仕事を熱心にしようぜ。

逆らつてきたダル、ダル、ダル……名前なんだっけ？

ダルなんとかを捕食しながらデイトに説教した。

お、こいつが持つてる刀って神字が掘られてるんじゃんラツキー。

ちなみに捕食の仕方が3パターンある。

1つ目は相手をぶつ殺してエネルギーを奪うことだ。

生物は生きてるだけで目に見えないエネルギーを生産し、消費している。

物を食べるだけで身体を動かさ、目に見えない小さな細胞もフル稼働しているほどのだからどのくらい膨大なエネルギーかは言葉にするほどでもないというよりも、俺が理解していない。

また、感情の発露によるエネルギーを発散する。

恐怖だったり怒り、悲しみや喜びなどである。

その中で死に向かっていく際に発するエネルギーは特上である。

つまり死ぬことを理解させながら殺して引き裂くとエネルギーがかなり得られるのだ。

あとは本が勝手に回収する。

2つ目は死後を縛ることだ。

念能力者や強い決意を持つ者にのみ有効な手段で、死者の念として本に縛るのだ。

1つ目と違って、死んだ後もエネルギーを絞ることができる。

本を近づけて、「死にたくないなら死後を奉げろよ（につこり）」みたいな契約が必要となる。

相手に本を近づける必要があるので弱点丸出しだが、とても効率が良く本も成長するから重宝している。

そのうちG・Iでまたつまみ食いしたいものだ。

多分増えてるだろうし。

3つ目は練をすることだ。

オーラをぶわあつと生み出す技術なのだが、これをコップの水にやると念能力の系統ごとに結果が変わる。

強化系は水が増え、放出系は水の色が変わる、みたいな。

俺の場合は水が無くなる、というか吸収することができる。

なので無防備な相手に練を叩きこむとエネルギーを吸収できるのだ。格下や弱っている相手にしか通用しないが。

念能力者なら吸収しければ絶対にできるし、一般人なら衰弱していく。時間をかければ殺すこともできる。

ただまあ、他2つと比べると吸収量が少ないのが欠点だろうか。毒で弱らせ、じっくり吸い取るのが何時もの使い方だ。

で、ダルダルくんの仕事を本に縛……捕食した理由だが、雇い主の護衛部隊を作るから俺たちにもそれに入ってダルダルくんの命令に従えよって感じのことを言われたからだ。

俺らの仕事は暗殺とかだから護衛はやりたくないんだ。

きっぱり断ったら命令してきたから捕食した。

マフィアで仕事すると短命になるよね、おお怖い怖い。

別に依頼主のファミリーが壊滅しても一回分の報酬が流れるだけだから構わないんだよなあ。

ああ、でも10歳の姿を見て雇う物好きも少ないわけでしょうがないから手伝おうじゃないか！

やっべダルダルくん死んでるから手間かかるやん……。

あーん！ダルダルくんが死んだ！

ダルダルくんよいしよ護衛部隊&ダルダルくんF. Cつくろー！って思ってたのに

……

くすん……雑魚薄命だ……

さて、馬鹿なことやってないで仕事やるべ。

—— 36

俺らの雇い主であるノストラードさんの娘、ネオンIIノストラードを護衛する部隊の人員集めのために一回試験やったんだけど、全滅しやがった。

中にはプロハンターもいたのに、とんだ様である。

デイオの闇討ちによる吸血で一撃死とかやる気あるのだろうかと思っただが、無いから死んだのだろう。

しょうがないね。

ネオンのバカを相手にするのも怠いんだよなあ。

ほとんどは侍女が身の回りの世話をしているが、俺の容姿を気に入ったのか、隙あらば触れようとするのだ。

天然の念能力者だから食いたくなるのだが、必死に俺もディオも自制して我慢しているというのに。

もしかすると人体収集家という気狂いだから、俺のパーツを狙っているのかもしれない。

危険な人物である。

ちなみにディオは気持ち悪いらしく、近寄らせないようにしてと言われた。

ディオ（笑）

次の選考で護衛が集まらなかったら諦めてネオンを捕食してファミリーを後にしよう。

なんて思った矢先にメンバーが集まってしまった。

いや、別に集まらなければいいと思っていたわけではないが、好物を食べようとした直後に下げられると、ねえ？

前から雇われていたプロやアマチュアのハンターに選考を任せましたが、ぬる過ぎたのかもしれない。

うーんやつぱり駄目な奴は駄目なんだよなあ。

しょうがないからこのまま行くけど。

ネオンが所望する気持ちの悪いコレクションを見つけて来れたら本採用と告げたら、結構軽々とみんな集めてきた。

マジかー……。

以前から仕事していたプロとアマチュアのハンターがいるし、そっちはそっちで自由にやってと丸投げ。

俺やディオは抗争とかに参加するから。

ノストラード自体はそれほど規模が大きいマフィアのファミリーだが、伝手を作るために抗争の応援に出たりするのだ。

参加しても念能力者とかあんまりいないのだけど。

アイスの当たり棒程度にはいるから、まあ、悪くないっちゃ悪くないのかもしれない。あんまりハンターを狙うとブラックリスト入りするかもしれないし。

同胞狩つてはいけないよー、みたいなルールがあるけど、ばれなきゃいいんだが、ばれればはいけないからなあ。

ディオはノストラードのおっさんの護衛として本拠に置き去りにし、ネオンが望むオークションへ「乗り込めー、」の予定だ。

車中ではネオンに占いをさせる。

俺を占って来ようとするが、占いはのーせんきゅー。

しかも的中率が高いとか怖いし。

いや、態と外せばいいらしいが、外したあとの結果がわかるわけでもないのだから知らない方がいいこともあるんだ。

というか占いなんて気にするのも面倒だ。

地下競売のオークション会場にネオンと構成員、護衛のメンバーを連れて乗り込む。特にオークションとしては山も落ちも無い。

あ、オークションは中止になったから落ちはあるか。

あとは参加者がガンガン死んだ程度。

なんか襲撃された。

襲撃犯からの攻撃は護衛部隊の連中を盾にし、チエシヤ猫でワープしてネオンを連れてバックれたので特に問題は無かった。

上質な餌っぽかったが、複数を相手にできるわけがないので逃げた。ソロだと無理だし。

ただ、逃すのも悔しいのでデイオを要請。

今は夜だし、走って来てくれるだろうしそう時間はかからないはずだ。

しかし、襲撃犯をどっかで見たことあつた気がするんだが、何処だつたかなあ。

クラピカが襲撃犯を一人捕縛したらしい。

話を聞くとそいつは凄まじい練度の強化系だとか。

極まっている強化系は苦手だなあ……。

俺の攻撃がほとんど通じないし、オーラが硬くて捕食しにくいし。

車で移動しているらしい、とりあえず合流すると告げてチェシヤ猫で連続ワープ。

その辺にマフィアの構成員がいるから補給が簡単にできて有り難い。

途中でデイオと合流。

無造作にオーラをばら撒いて周辺を探る円もどきでオーラが集まっている場所を捉えた。

お待たせ☆とたどり着くとクラピカたちはおらず、襲撃犯と見知らぬ念能力者が集まっていた。

なんか「本当に幻影旅団かよ。もろそうだけ」って話をしていた。

あ、旅団か。

思い出した思い出した。

真面目な話、旅団が複数人は無理。

逃げようかと考えたが、旅団にばっちり狙いを定められてしまった。

なんて不運なんだ。

俺は悪いことしてないのに。

ちなみに旅団以外の念能力者は陰獣とやらで、マフィアンコミュニティが保有する最強の念能力者とかいうレットルを持つてる連中だ。

陰獣6人で旅団3人、俺とディオで旅団1人ならなんとか行ける……か？

しかし、「もろそうだけ」とか言ってる辺り最初に旅団と戦ったときのディオと一緒に油断しまくりなんだよなあ。

どうでもいいけど陰獣って響きが完全に18禁だよな。

これ、旅団の女メンバーはらめえええって展開になるはず。

胸が熱くなるな。

身体は10歳だが、精神は結構歳いつてるんだ、俺。

わくわくする。

— 38

髪の毛が赤紫っぽい旅団をチエシヤ猫のワープで連れ去る。

見た目が弱そうだった（率直）

流石にこの華奢なフォルムで強化系はないっしょと油断してたら切り刻まれた。

ちよ、ちよつとタンマ。

やっぱり強すぎい。

変化形のようにオーラを糸のように変化させているのだが、予想以上に強度がある。

というか、俺の肉体が脆すぎるだけだ。

オーラで防御しても刻まれる程度の俺の防御力、こんなん泣けてくるわ。

距離を取られてオーラで攻撃された負けるに決まってるけど、体術を修めているので

近距離戦なら余裕だから（強がり）

ただまあ、糸で刻まれても致命傷を負うわけではないので、ちよつとしたオーラの消費で再生するからヤバいってほどでもない。

勝負になるので問題なしだろう。

問題は俺とディオは普通に刻まれているので、優勢に持つていけないことか。

俺もディオも特質系だから真っ向勝負に弱くてもしょうがないね。

しかし、ディオは真っ向勝負用の念能力なんだが……。

完全に矛盾してるんだよなあ。

糸TUEEE。

ワープで距離を詰めて体術で相手のオーラを削るスタイル、といきたいが上手くないか
ん。

俺のほうが体術の練度が高いことを察したのか、完全に念による糸で対処してきやが
る。

攻撃が届いても、俺の地力だと相手のオーラを貫通できるほどの威力が出ない。

捨て身な戦い方が出来るので、オーラを集中させる『硬』で殴っているのに防がれる
という現実。

だから合気鉄扇によるカウンターで戦うのを好んでいるのだけだ。

ディオならば攻撃でダメージを与えられるが、糸で受けるダメージも半端ない。

俺のように身体の大半が念で構成されていないので再生する場合はかなりオーラを
消耗するのだ。

途中でディオが俺の首筋に手刀を突き刺してオーラを補給するという蛮行にまで及びやがった。

俺は弁当ではない（激おこ）

相手も何か俺は人間じゃなくて補給用の念獣だと勘違いしているし。

なんやこの戦況……。

糸の強度が可笑しいんだよなあ……。

ディオなら力を込めれば引きちぎれるがちよつとした隙ができるし、俺では全く引きちぎれない。

イライラしていたが、天恵を得る。

変化形のオーラなら練で吸収できるんじゃないやね？みたいな。

できたけど、めっちゃ効率悪い。

吸収よりも消耗のほうが多いとかマジくそ。

ワープしつつ切られながらヒットアンドアウェイしてたほうが強いわ、これ。

ディオに戦線を任せる。

本の貯蔵オーラを顧みて、ディオに補給を繰り返せば勝てるだろう。

ただ、それは十分な時間があったての結果だ。

「貰ったー」とディオが手刀で旅団の腹を突き刺して吸血するも、油断したのか腕を糸でぶった切られてた。

吸収した分は再生に使用したオーラでトントンだろう。

俺なんてマイナスだから。

マジで割に合わん。

円もどきで遠くを探れば、陰獣どもが死にかけていた。

弱すぎい……。

コミュニティー最強の看板は誇大広告でしたね（ため息）

陰獣を不意打ちしてオーラをパクって逃げるべきだった。

旅団に囲まれたらガチで死んでしまう。

いや、俺は死んだふりして本を地中に隠せば問題ないけど、メインアタッカーのディオ

オが死ぬのは困る。

撤退しよう。

「死が怖くないか？」と問いかけてみる。

怖いつて答えたら捕食できる可能性があるし。

鼻で笑われた。

しかも質問で無駄に時間を食ったために続々と旅団が集まって来た。

もうヤダ、俺旅団嫌いだわ。
ワープでバックれた。

— 39

ネオンの護衛部隊と合流する。

しかし、旅団の強化系能力者を捕獲するとか気合入ってんなあ。

陰獣が全滅した相手なのに、無傷で捕獲するとか。

ノストラードが最強の可能性が高い……？

さて、阿呆なことをやってないで強化系能力者をどうするかだ。

陰獣による毒で身動きは取れないらしい。

あとはナニカされていたようだが不明っぽい。

こいつをコミュニティに明け渡せば報酬を貰えると言う話だが、金とかいら
ないしなあ。

捕食した方が数億倍は価値がある。

クラピカは旅団と因縁があるらしいので好きなかだけ拷問してもいいよ、と告げてみ

る。

が、十数分ほどボコって飽きたようだ。

旅団の能力を吐かせようとしていたが失敗していた。

狩るためには情報が欲しい、気でも狂わせたいところだが今日は違う能力だ。

残念だ。

もういいか、処分しとくべ。

ディオが勝手に吸血し始めていた。

つまみ食いやめろよー、俺だって食いたいんだよー。

みたいな。

しょうがないから気絶するまでディオが吸血し、気絶したらじわじわと俺が捕食することになった。

うーんこのレベルの能力者はやっぱ上質だわ。

クラピカは旅団狙いのようだ。

そして俺とディオも旅団狙いだ。

頭数は必要だろう、仲良くしようぜ。

オークシヨンは続行。

占いに死を暗示する文章があつてどうかこうとか。

知らんがな。

クラピカに、護衛としての仕事方針を聞かれたが知らねー。

雇い主のライトさんに連絡して相談したらいいんじゃないかと電話番号を教える。

ネオンのバカはオークシヨンで直接物品を競り落としたいとか。

めんどくさいので嫌だわ。

嫌だけど仕事なんだよなあ。

何故仕事はこんなにも面倒なのか。

そもそもハンターにもなつて真面目に仕事するとか間違つてる気がしてきた。

なんで俺はハンターになったのかという疑問すら湧いてきた。

ファミリーが襲撃されて、片っ端から死にまくつてるとか。

旅団が強化系能力者を探しているのかもしれない。

この世にいない相手をどうやって探すのかは知らんが。

あ、死体でもいいから欲しいのかな。

でも死体も無いんだよなあ。

残らず食べてすまん、俺の本は食いしん坊なんだよ。

死体が残ってても血液が全部吸われている悲惨な姿だったしな、そういうの見なくて済んだし、逆に良かったんじゃないか。

やはり俺って優しいわ。

駄々を捏ねるネオンのバカのために、俺が人身御供となる。

見た目は10歳だけど中身は結構な歳だからね、俺。

だから子供を相手にするような遊びはやめーや。

ツライ。

マジで仕事ってツライ。

クラピカの憐れむような視線とディオの嗤いがツライ。

——41

翌日。

今日も能力はチエシャ猫である。

攻撃力が防御力があるキャラが良かったが、悪い能力でもないのでセーフだ。今日はネオンに帰るよう命令が出ている。

が、命令を破るだろう。

確実に。

ネオン自身にワープポイントを設定しておこう。

万が一撒かれてもすぐに追いつける。

で、空港でネオンが脱走。

護衛部隊の連中が役に立たなくて悲しい。

戦闘能力があまり高くない上に一般人に撒かれる念能力者とか、ネタっしょ？

あ、ヒソカスの糞ピエロも四次試験でゴンに奇襲されたっけか。

ネオンが絶を極めている可能性が高い……？

ネオンの傍にワープ。

もうこの娘は馬鹿。

ホントに馬鹿。

マフィアの要人なんて怨み嫉み買いまくりなのに、一人で外出するとか。

もう馬鹿。

あれだからね。

捕まったら18禁で「らめえええ!!」が最低ラインだから。

そこから「くっ殺せ!!」とか「殺してえええ!」とか「私の内臓、世界中に散らばっちゃたよ……」みたいな話になるから。

もうあれよ。

ぬつちやぬちやのぐるぬちよですよ。

人体改造とかかれて、占いを吐き出す機械になるわけで。

もうホントに馬鹿。

馬鹿⇨ネオンってレベルで馬鹿。

説教しながらディオがすでに待機している車に乗り込む。

嫌がるネオンを引き摺り込むディオ。

完全に誘拐か何かだ。

オークション会場まで向かう。

競売をやらせたら満足するだろ。

バカ娘の相手は疲れるわ。

途中でノストラードさんから電話があり、旅団を暗殺するチームを組むらしい。

競売があるのでクラピカを推薦しておいた。

一応会場周辺を円もどきで探った結果、旅団クラスの人物を発見。さつさと逃走を選択。

が、円もどきが相手に触れた段階で、相手にもバレたようだ。

なるべく穏便にスルーして逃げようとする、会場から遠ざかる車に訝しんだネオンが頭を出した。

それを見て追っ掛けてきやがった。

車で逃げ切れるか不明である。

日が沈んでいないのでディオは外に出るわけにいかん。

しようがないので俺が遅滞戦を請け負うことになった。

車の運転手にさつさと行けと命令。

道路が混んできるとかどうでもいいことを言ってきた。

こいつ馬鹿だなあ。

歩道が空いてるだろ、行け。

ちよつと死んで来る、と車から飛び出し、旅団クラスのオーラで追いかけてきた男と対峙する。

意識は車に割かれているようだが、こちらへの警戒も薄れていない。

額に包帯を巻いているようだが、怪我でもしているのだろうか。

頭とか割れてて瀕死だったら嬉しいんだけど。

男の右手には黒い本が握られている。

俺と似たような能力者……とは限らないか。

わからんち。

一息で距離を詰めて拳を振るう。

が、カウンターの要領でやり返されて俺の腕が挽げ、そのまま地に伏した。

秘儀・死んだフリである。

さつさと車を追えばいいものを、何故か俺を検分し出した。

マフィアに雇われている俺とディオの情報を持っているようだ。

俺の不死性を知っているのか、警戒しているオーラを感じる。

うぜええええ。

頼むからさっさとどっか行つて消えてください。

電話であつた暗殺者チームが集まっているのか、ここら一帯の空気が変化した。

それを察した旅団の男が少しだけ、俺から警戒を逸らした。

その隙に絶をしながらワープですぐ傍の下水道へと逃げ込む。

屈辱だ。

ここまでの屈辱があつただろうか。

下水道で汚れようとも問題の無い体だ。

すぐに汚れも落ちる。

だが、煮えくり返るような苛立ちが無くなるわけではない。

俺の思い通りにならない奴は死ねばいいんだ。

— 44

雇い主のノストロードさんとクラピカの二人と合流。

旅団が来て一戦交えたとだけ伝える。

嘘は言つてない。

並みの暗殺者だと無理だとは思いますが、面子の問題で集まらなければならぬとか。うわーめんどくせえ。

遅れてネオンを抱えたディオも闇夜を縫って現れた。

さつきまで乗ってた車は潰されたんじゃないかな。

マフィアによつてか旅団の男によつてかは不明だけど。

まあ、歩道を爆走して検問に突撃するような危険な車だからしょうがないね。

涙目で駄々を捏ねるネオンを引き連れて暗殺者たちのお茶会☆場所へ。

集まっていた暗殺者だが、くっそ弱い。

え、マジで。

マジでこれで旅団とやんの？

これだと旅団相手にツイスターゲームで勝てるかなってレベルなんだけど。

うーんこのクソゲー感。

帰りたい。

ノストラードのおっさんが嫌いなのか、ゼンジってハゲが喧嘩を売ってきた。

優しい俺はネオンにゼンジのおっさんを占ってもらってあげた。

ハンターライセンスって便利だよな。

テキトーな店で使えば、ライセンス狙いのちよつとした練度の念能力者が「僕を食べ
てー!」とばかりに集まるし。

ちよつと有名な人物なら小金を払えば情報が得られる。

いい時代だわあ。

的中率100%と今話題の占いで、ゼンジのおっさんの今後を丸裸。

普段だったら数億から数十億と金がかかるのにタダという奇跡である。

まあ、代わりにおっさんには見せないで俺だけが見るんだけどね。

タダなんだからしようがないね。

「運勢は……ふーん? ……え? えええ!!」みたいな。

で、養豚場に送られる豚を見る目を向けてフィニッシュ。

青褪めたおっさんは何か言いたそうだったけど、占いとか馬鹿にしてたから読まなく

ていいよね。

金を払うとか言ってたけど、ノストラードさんとこ馬鹿にしたやん。

おら、命が惜しければ土下座しろよ。

ゼンジのハゲは土下座しなかった。

青褪めた顔のまま汗を垂らし、無言で床を見つめていた。

俺なら自分の命のためにプライドなんて投げ捨てるけどね、と告げる。

おっさんはハツとした顔をして何か言おうとしていたが、暗殺者の二人が部屋に入ってきたので話を打ち切った。

入ってきた二人を見ての感想としては「うわあ、ゾルディックやんけ……。もう帰って寝たい」である。

ディオの顔が引き攣っていた。

多分俺も引き攣っているだろう。

クラピカが変な顔をしていたが、こいつらの強さを知らんだろうからしようがない。以前、旅団を暗殺しに行ったら横から搔つ攫われたのを思い出した。

まあ、俺らでいっぱいいっぱいな感じの相手をちよちよつと念能力を使ってぶつ殺すレベル。

今回の仕事は全部ゾルディックに任せればいいんじゃないかな（マジトーン）
集められた人員が連携を取るために、互いを色で呼ぼうとか言い出した。

え、ごっこ遊びとか正気かよ。

やべー。

こいつら思った以上にやべー。

レッドとかブルーとか志願している。

マジだ。

マジなんだ。

俺はどうしたらいいんだ。

とりあえずファルコンブラックを志願。

一体何色だというんだ、ファルコンブラック……。

ゾルディックさん家は「まるで遊びじやな」とかあきれ顔だ。

おまえらあんまり遊んでると虐殺されんぞ（迫真）

その後は「俺たち、ズツ友じやないから連携取るの無理っしょ……」↓「個々人でやるぞなもし！」ってことになった。

有り難い話だ。

俺はあまり率先して動かず、消耗したところを狙う感じでいこうかなって。

旅団は俺と相性が悪い能力者ばつかでツライ……。

傭兵崩れみたいなのが外の監視カメラを見て、「おそろしく速い居合い、俺じやなきや見逃しちゃうね」と呟いて去っていった。

いつてらっしやい。

出来るだけ相手を削ってくれたら俺は横から美味しく戴けると思うので、頑張って欲しい。

マフィアの構成員がガンガン死んでいく。

ちよつと散歩しただけでも本に貯蔵できそうなくらい死んでる。

暇だし散歩すんべか……と悩んでいたら、ゾルディックが動き出した。

確かゾルディックは死体にあまり興味なかった気がする。

横から旅団のオーラをハイエナする感じで行こうじゃないか。

帰ってきたディオにゾルディックの後を追ひ、横から弱った旅団を搔っ攫うプランを伝える。

ノリノリである。

やっぱ旅団は美味いからな。

ちなみに何処に行つてたのか聞いたら、外につまみ食いに行つてたとか。

うわ、ずりー。

俺が真面目に仕事をしている横で吸血作業とかマジで畜生だろ。

犬の糞にも劣るゲロ以下の臭いがぶんぶんするわ、こいつ。

旅団の男とゾルディックとの戦闘を観察した結果、念能力を出し入れする技巧派タイプと予想。

力はそれほど無いようだ。

また、ゾルディックさん家の会話と立ち振る舞いから念能力を奪う能力であることも看破。

いくつかの工程をクリアしなければ能力を奪えず、能力を出し入れするには本を片手に持つのが必須のようだ。

つまり、相手が能力を使う場合は片手が埋まるわけで。

体術レベルは非常に高く、ディオを上回っているようだが俺のほうが練度は高い。

もうちよい削ってくれたら二対一で必勝か。

……なんて期待してたらゾルディック、旅団の男を見逃す。

うわー、期待を裏切られたー。

もう食べる気満々だったからショックはでかい。

瓦礫の山の中で大の字になって寝転がっている旅団に襲撃をかけるくらい、ショックだった。

ナイフを使っていた様子から力に自信があるようなタイプでもない。

また、初撃を当てた際、防御の出力的に具現か操作、特質って感じだろうか。

本を出し入れしていたし、手元に引き寄せたりする能力では無いようなので操作は除外。

具現か特質か……まあ、どっちでもいいだろう。

初撃を当てた際に、チエシヤ猫によるワープ点として旅団の男を設定。

さあ、退路は無いから大人しく食われる。

相手は変な能力が多い。

変というか、念らしい奇妙な効果のある能力というか。

まあ、大体は自分で手足を千切ったり、自殺してリスポーンすることで回避したけど。

変なマントに捉えられたときはなかなか

旅団の男が何時の間にかナイフを握っていた。

ゾルディックを斬ってたやつだわ、あれ。

近接戦闘は得意だからな、むしろナイフで来てくれてありがとうってレベルだ。

デイトとスイッチし、俺が前衛になる。

目からビームのように高圧で液体を放てるからデイトは後衛もできる、気がする。

そろそろ弱点、というか本が本体だと気付かれるかもしれない。ここらで必殺といきたいところだが……。

纏っているオーラの分布から、弱所を硬で叩きたいのだが、無駄に練度が高いなあ。淀みなく全身を覆っているのが見て取れる。

うぜー。

だから旅団は嫌いだ。

隙も可愛げも全くない。

掌底を放つが、俺の『硬』よりも相手の『堅』のほうが硬いという不具合。

俺の形を保てる限界までオーラを全身に乗せまくっているが、やはり地力の差がでかい。

鉄扇でじわじわと削るべきだった。

ナイフでズバッと切られた。

うわ、やべー。

毒じゃん。

ゾルディックも傷口から血を噴出させてたし、毒を塗ってやがった。

なんてえげつない奴なんだ。

毒を使うとかマジでサイテーだ。

切られた箇所は腕だったが、さすがに毒が回ったらヤバい。腕を千切らないと、と準備したらディオに半身を挽がれて吸血された。ああもうオーラを持っていきすぎい。

相手の戦い方がまどろっこしくてイライラする。

あまり慣れない放出なども使っているし、ディオに補給装置として使われているから浪費が半端ない。

まるで時間稼ぎのような……ああ、もう！

他の暗殺者で戦線を維持できるとは全く思えない。

応援が来そうだが、これ。

必殺しておきたいが、ここに留まっていると確殺されそうだ。

さっさと逃げないと不味そうだ。

問題はチェシヤ猫のワープは遮蔽物が無ければ1kmまでワープ可能である。

つまり遮蔽物が存在しているとワープが制限されるのだ。

そして今は地下である。

ヤバい。

とはいえ後ろから追撃して来ようとする旅団の男は問題ない。

出口と壁際をワープポイントにしたので勝手に無限ループしてくれる……壁砕いてきやがった。

常識が足りない野郎だ。

だが、地上まで上がればランダムにワープして脱出完了だ。

問題が生じてしまったのが不運というかなんというか。

旅団に挟まれた。

会話の感じだと続々と集まってきそうだし。

向かう先の扉が閉まっていて、応援に来た旅団の男が陣取っているワープを使っても扉をどうにかするワンアクションが必要だ。

地下への逃げ道は開いているのでワープポイントに設定しているので問題ないが、袋小路になってしまう。

つ、詰んだ……？

——47

一回、地下に戻ってから旅団が追いかけてくるのを無視して天井を砕き、空いた空間に向けてワープし、また天井を砕く……を繰り返して地上階に出たら、ノストラードさ

んの父親と娘を回収してバツクれた。

チートですまん。

今回はなんか調子が悪いんだよなあ。

必殺だと思ったのに、まさか逃げる必要があるとは。

途中でクラピカを回収しつつ、ほとぼりが冷めるのを待つ。

いっぱい死んでるから散歩すると本に溜まるが、浪費分は取り返せなかったわけで。

悲しい……。

事後報告で十老頭が旅団を殲滅したと聞いた。

え、嘘っしょ。

死体を見に行ったが、うーん……。

クラピカに意見を聞くが、どうも死体は偽物らしい。

なるほどな。

じゃあ、もう一回頑張っつていこうか。

俺の弱点を知っている奴は殺さないといけない、そうだろう？

クラピカにはヒソカスという糞ピエロが味方しているようだ。

ヒソカスは旅団の内通者として暗躍しているらしい、つまりそれを利用すれば一人ず

つ削つていける可能性があるということだ。

蜘蛛を自称しているのだし、一本一本足を腕いであげようじゃないか。

ふんたー2

— 1 —

崩れかけ、瓦礫が山となっている廃屋、それが危険度Aクラスの賞金首の集団『幻影旅団』がヨークシンで活動するために選んだアジトだった。オークション会場にそれほど遠いわけでもなく、周囲に人影もない。都合のいい潜伏場所だった。だが、マフィアの連中を皆殺しにすると活気立っていた初めの頃の明るさや士気は、今のアジト内に一切存在しなかった。

ここに訪れた当初は十三人いたメンバーが、今では十二人となっている。失ったメンバーはウボオーギン、強化系能力者らしい単細胞の男だった。粗野だが馬鹿では無く、戦闘では特攻して相手の戦線を破壊する役割だった。言ってしまうえば死ぬまで戦うのが仕事だ。仲間のために、盾にも矛にもなる、それがウボオーギンの役割だった。

だが、オークションの襲撃の際、ウボオーギンは見知らぬ念能力者に捕らえられ、それつきりだった。鎖状の念能力で縛られ、連れ去られたのをシャルナークは今でも明確に憶えている。正体不明、ハンター専用のネットにすら載っていない鎖を扱う能力者。

最初は報酬に目が眩んで襲ったのだろう、そう思ってコミュニケーションを襲い、成り済まし、情報とともに取り返すつもりだった。高いレベルで纏まっている強化系のウボオーギンを殺すのは容易いことではない。マファイアンコミュニケーションに所属するレベルの能力者では殺すことは愚か傷つけることもできない程度で、そうなれば生きたまま引き取らせようとするはずだ。そう考えた。だが、いくら待っても梨の礫だった。焦燥や怒りを抱えるメンバーを宥めまし、アジトへと戻った。見えない蟠りが、その場の雰囲気の下に、黒い澱みのように沈んでいくのを感じた。

今思えばウボオーギンを連れ去るまでの全てが鎖の能力者である『鎖野郎』の策略だった可能性が、シャルナークの頭の片隅で息衝いていた。ウボオーギンが一人で戦うことで調子になり、慢心している隙を突かれて毒を流され、連れ去られる、その全てが。シャルナークたちが交戦した陰獣や、マチが交戦した二人組のプロハンターによる足止めすらも、全て。ノブナガはマファイア連中は動いておらず鎖野郎が単独で動いていると示唆した。私怨で動いているなど納得のできる線もいくつかあるが、不明瞭な点多い。賞金目当てで尾行していた二人組の子供が鎖野郎と繋がっているというマチの勘。マチの勘が当たるとはいえ、パクノダに記憶を読ませても接点は無かった。だが、やはり何か関係しているのかもしれない。思考が纏まらない。相手を考えれば考えるほど、まるで一貫していないように思える。穴が空いていて初めからピースの存在していない

いパズルを解かされている気分だ。

確かに過去にも罠に嵌められ、窮地に陥ったこともあったが、誰も死ぬことなく逆に仕掛けた連中を一網打尽にした。だが、今回は以前とは全く違うようにシャルナークには感じられた。言葉にはできないが、嫌な空気を感じる。まるでかつて八番目の団員が殺されたときのような、澱んだ流れのような空気を。

帰ってこないウボオーギンは死んだと断じられた。旅団の団長であるクロロが、そう判断した。その決定に旅団内でもちよつとした不和が起きたが、団長の手腕で収まった。あいつは死ぬことが役割だと、みんなわかっている。わかっているが、割り切れない。仲間のために死ぬはずが、ただ一人何処ともわからない場所で死んだ。だから苛立ったのだろう。覚悟していなかった。想定していなかった。戦場だったら、目の前で死に逝く姿を見送れたはずだったから。

ウボオーギンへの手向けとして、マフィアンコミュニティへの襲撃を行った。暴れるのが好きだったあの男が喜ぶように派手に、騒がしく。死者への鎮魂曲に似つかわしくないが、喜んでくれるような騒がしい祭りのような物だと、そう思っていた。

全身に裂傷を負っていた団長がアジトへと帰還した。話を聞けば、あの名立たるゾル

ディック家の二人に狙われたらしいが、何とか凌ぐことができたという。だが、凄いことで気が緩んだ隙を突かれて追撃を受けたらしい。その追撃してきた相手というのが、マチが交戦したというプロハンターの二人組だ。名前はディオ・ブランドーとアマガツ・アマギだ。まだルーキーらしく、調べてもあまり情報を得ることは出来なかった。「ハンター殺し」の肩書は、どこかで聞いた気がした。

つい最近交戦したマチが「あの時殺しておけば」と呟くのをシャルナークは耳にした。それほどの事でもない。誰もこの二人には殺されていないのだから。ただ、鎖野郎の襲撃と重なって都合が悪くなっているだけだ。いや、そもそも鎖野郎と別に行動していることを考えるのが愚かなのかもしれない。確かに互いを活かす有機的な動きはそれほど見せていない。だが、ウポオーギンが攫われたときには足止めとして働いていた。利害関係にある可能性、そこに結び付いた。マフィアに雇われての仕事の可能性もあったが、報酬が解除されて戦闘を止めたゾルディックと違い、執拗に団長を攻撃していたというのだ。つまるところ、鎖野郎とプロハンターは私怨によって結びついている可能性がある。

今後の予定を決めるため、目下の敵について話を詰めていく。マチと団長が交戦したハンターの二人は手足が千切れようとも構わずに特攻してきたらしい。命すらも捨てるタイプの能力者だ。命を賭けた私怨による報復、それは大なり小なりとも念能力に強

い力を与える。嫌な流れだ。捨て身ほど厄介な相手もそういない。力量が低ければ無視しても良かった。だが、手負いだつたが、それでも団長を追い詰めていった。殺した際に残る『死者の念』はどれほどの物になるのか。さらに言えば、手足が切れてもオーラを消費して回復する素振りも見せていたという。『死者の念』となつた時、死後も旅団を狙い続ける刺客となる憂いもある。

単独ならば厄介ではない。今最も厄介なのはウボオーギンを捕らえられる程の鎖野郎の鎖だろう。プロハンターどもによつて消耗された隙を狙われた時、旅団が、『蜘蛛』が、形を保つていられるか。脚を失わなくて済むのか。すでに一本の脚を失つているというのに、相手の情報はマフィアに雇われているプロハンターが二人であるということとそいつらの表面的な力量だけだ。肝心の鎖野郎はそういう念能力者がいるということとだけしかわかつていない。鎖野郎とハンター、三人が己の死をも計算に入れて襲い掛かつてくるほどの執念があつた場合、『蜘蛛』は脚の大半を失うだろう。いや、それどころか最も重要な『頭』を？がれ、形すらも失いかねない。

団長はどう動くのか。シャルナークは静かに、少しだけ未来が知りたいと思つた。絶対の答えが記された、未来を。

幻影旅団の方針が決まった。来週いっぱいにはヨークシンに留まることになった。オークションが終わっていないこと、鎖野郎やプロハンターへの対策のためだ。ただ、大きな要因としては団長とマチが謎の念を喰らわされたことだ。瞬間移動させられる能力。凝りによって丹念に調べたが、何も見つからなかった。痕跡の一つとして。隠によって隠されている可能性もないだろう。だが、それは発動条件が揃っていないだけの可能性もある。

ノブナガの言うように、私怨だとしたら単純な能力のはずがない。慎重過ぎるかもしれないが、大胆過ぎて失敗するわけにもいかない。もしかすると離れて発動するタイプかもしれない。マチだけなら良かった。だが、団長も喰らっているとなるとダメだ。最低でも発動条件、効果の二つを得られなければこの街を離れようとする団員は出ないだろう。己の勘が、問題視するほどでもないしと囁いているマチも同様だ。頭が無ければ蜘蛛は死ぬ、守るためならば脚を犠牲にすることだって厭わない。

コルトピの念によって生み出された複製品は円の役割も果たすため、事細かな位置もわかる。ノストラード組に買われた競売品を追い、情報を収集することになった。団長

の命令に従って二人一組でアジトを出ていく団員の後ろ姿を見送りながら、シャルナークはカードゲームに興じていた。情報処理を主に行っている後衛であるシャルナーク、シズク、パクノダ、コルトピはアジトにて待機を命じられていたため、暇になったからだ。かつてなら有り得るはずもないことだが、ノストラードへの情報収集の際に例の三人に囲まれて失う可能性を考慮してのことだった。

パクノダとシズクはレアな念能力だ、無駄なことで損なわれるにはあまりに惜しい。シャルナークとしては団長にも残ってほしいというのが本音だった。コルトピはアジトを増やしての攪乱、シャルナークは方が一のときの指示誘導だ。団長が主な指揮を執るが、有事の際にはシャルナークも参謀として働くことがある。後方にて情報を集め、メンバー各自へと指示を伝えることもできる。

「シャル」

シャルナークは団長に呼ばれ、カードゲームを中断した。少し休憩を入れることで、ゲームで負けている流れが変わることを期待しつつ、団長の元に行く。シャルナークから見た団長は常と変らない、普段通りだ。ウボオーギンが死のうとも、揺らぐことは無い。それが頼もしく、少しだけ不安を煽る。

「他のメンバーにも伝えたが、何かあつたらすぐにも連絡を取れ。少なくとも二名以上で事に当たること忘れなよ」

「わかってるけど、連中はアジトまで来ないでしょ。コルトピが用意したダミーもあるし、そもそも……」

「だとしてもだ。ウボオーが死んだ、誰も予想していなかったことだろう」

有り得ないことなど無い、そんな流れに今の旅団は乗っている。飲まれつつある。目に見えない、粘つくような悪意の空気。その澱みの底で、何かが渦巻いている。言語化できない気持ち悪さが、シャルナークの胸中に再び顔を出していた。

「戦いが避けられない場合は成るべく距離を取れ。体術が研ぎ澄まされていた、油断なくとも近寄ればどうなるかわからない」

「それはディオオってやつの話？ 餓鬼の話？」

「両方ともだ」と団長が呟いた。

「ディオ・ブランドーもそうだ。オーラを吸収する能力と凄まじい速さで再生する能力を持っていた。おそらく強化系か、それに準ずる系統だろう」

重い制約を己に課したのであるう凄まじい継戦能力と殺傷性を秘めた能力。保有するオーラ量は一目でわかるほどに莫大だという話だ。「だが……」と団長が続けた。

「アマガツ・アマギは更に厄介だ、多分な。見た目は幼い子供だが、体術はかなり巧かった。途中でナイフも掏られた、盗賊から掠めるとは手癖の悪い奴だ」

団長が裾を捲り、「出会ったら注意しろよ。危うく腕ごと持っていかれるところだつ

た」と外観が黒く歪に変化した右腕を見せてきた。鬼気迫る表情を貼り付けたマチが念糸縫合によって傷口を塞いだはずだが、骨にまで達しようとしていた深い傷の痕が残っているのだ。まるで永い時間をかけて締め付けられたように右の指先から方にかけるまでの広い範囲に凹凸が出来ていて痛々しい、ナイフを奪われる一瞬の交差で、ついでとばかりに皮膚や肉を削ぎ落すように削られたために刻まれた傷跡だった。

血はあまり流れなかったと団長が笑ったが、右腕が調子を取り戻すのはどれほどの時間を要するのか。それに血が流れなかったのもデイトに吸い取られていたためという落ちが付く、シャルナークには全く笑えなかった。人間を相手にするよりも、肉食の動物や寄生虫を相手にしている気分を抱くほどだ。

「あとはほとんど力は無かった。オーラで強化していたようだが、素の力は見た目通り子供そのものだった」

団長とマチが交戦してわかったのは、手足どころか頭を割り、半身を消し飛ばしてもアマガツは痛みも無いようで怯むことなく動き続けたこと。体術が極めて高いレベルで纏まっているが、オーラを抜きにすればひどく虚弱だということくらいだ。さらに瞬間移動のような能力で距離を一瞬にして詰められたという。それも何度も、執拗に。狙

いは旅団のメンバーだろうが団長を狙う姿からは執念すらも感じたらしい。

また、消耗したディオが躊躇いなくアマガツを食っていたことから補給用の念獣であると考えられることもできる。しかし、術者が遠くにいては発揮できないであろうほどに近接戦闘能力が高く、動きがあまりに巧み過ぎた。ディオの能力とも予想したが、本人の能力を顧みるにそれほど緻密な動作を行える念獣を生み出せる余裕があるとは思えない。

別の能力者による成長する念獣の線もあったが、存在したとしても結果はプログラミングのバリエーションに近い動きしかできないだろう。己で思考する余地を付け加えられるとは思えない。

戦い続け、成長する『死者の念』と考えることも出来るが、込められた念が尽きて止まるだけだ。マフィアに雇われて働くほどに自我もオーラも、保っていられるはずがない。

やはり能力者が生み出した念と考えるのが自然なのだろうか、あまりに情報が少ない。何故鎖野郎と連携するのか、それすらも疑問だ。マチとも団長とも、勝てないと察するとすぐに逃げに転じたという話だ。その時には興味を失ったように、すぐに逃亡していたという。復讐するために生み出した能力だと仮定すると、そんなに簡単に諦めるのだろうか。

ウボオーギンが死んだと判断したときの団員は、各々の反応が異なるとはいえ揺らぎ、殺意に駆られていた。それに反してアマガツ・アマギという何らかの念の反応は淡泊すぎるように思えた。団員全員を倒すために力を温存していると取ってもいいが、それだけではない。そう思えて仕方がない。

復讐ならば何故鎖野郎と組むのか。己の手で成し遂げたいとは考えないのか。弱ければ徒党を組むだろうが、組まなければ勝てないほどに弱いとは思えない。肉体の虚弱さ、脆弱さを制約にしたようにも感じられる。ならばそれを埋めるために、鎖野郎やデイトと組んでいるのか。あまり利巧とは言えず、互いに噛みあっていない能力の相性にも思える。旅団には見せていない鬼札がいくつかあるとしても、あまりに不確かだ。「念の技術もかなり高かった。いや、あれは巧かったというべきかな」

餓鬼の見た目と裏腹に、噴出したかのように膨大なオーラを纏っているらしい。あまりのオーラ量と操作技術に、系統すらも見分けがつかなかったと言う話だ。団長を襲ったゾルディックが使っていた技も模倣して見せたという話だ。使用した系統の威力で系統の得意不得意だけでも判別しようとしたらしいが、膨大なオーラ量によって同一の練度に見せられたという。

厄介な相手だ。

ただし、団長とマチの話から弱点のような物を見つけることは出来た。アマガツの近

くには常に本が浮遊しているらしい。戦闘中は巧みに背に隠しているが、やはり漂っているという。念獣である場合はそれが操作機や受信機、動力源の可能性が高い。

アマガツが念獣ではなく、能力者自身ならば本はなんらかの誓約を課している道具であるはずだ。操作系や具現化系ならば破壊さえしてしまえば弱体化する。フェイクの可能性もあるが奇妙な能力を考えると、本が欠点の可能性は高い。

— 3 —

団長がノストラードの娘が何故わざわざヨークシンに来ていたのか、そこから鎖野郎とディオ、アマガツの関連性を見つけた。その娘は必中する占いの能力者で、狙っていたのだが、アマガツとディオに邪魔されたという。その話をしている最中に、団長はその娘が人体収集家であること、オークションに緋の眼が出品されていること、ディオが赤い瞳であることに着目した。そして逡巡の末に目的が復讐であることだと導き出した。

復讐も果たせ、そして緋の眼を回収できる。そのためのノストラードファミリーだった。すべてを満たせる条件はただ一つ、連中がクルタ族であることだ。もしくは三人の中で一人か二人だけがクルタ族で、残りはまた別の出身、そして復讐が互いを繋ぎ合わ

せた。赤い瞳のディオがクルタの可能性が高く、長く供に仕事している様子のアマガツも同様の可能性がある。よくあることだ。復讐のために襲撃してくる命知らずなど、何人も屠ってきた。

ハンター証を得た時期はディオが一期早い。だが、奇妙なことにアマガツは落ち続けている。おそらく待っていたのだろう、復讐を果たせる能力を持つ同胞を。互いをカバーしない能力なのは、組織として行動していなかったからだ。待ち続けて、機会が訪れた際に復讐を果たせる力量と能力を持ったのがその三人だった。そんな話なのだろう。

だが、相手の狙いに気付けたのは日曜日だった。コルトピの能力によって作り出した緋の眼は消えていた。流れが繋がらない。すぐに途絶えた。シャルナークはどうにも気が乗らないながらも、ハンター証によってノストラードファミリーの情報を集める。その結果、アマガツがオークションにグリードアイランドというゲームを出品するという情報を得た。それも今週の火曜日。旅団を釣りだす餌かと疑いも出た。確かにオークション襲撃の際、ダミーの死体を撒いたが団長は交戦している。それを信じていない可能性がある。だが、あれほどまで固執して狙ってきていたアマガツやディオ、鎖野郎の動きが絶えたのだ。団員が情報集めついでに囷として街を練り歩いていたのに襲撃してくることは無かった。騙されている線も捨てきれない。

ノストラードファミリーの情報では、以前は増えていなかったはずの構成員が増えていた。ファミリーの動きも確認できたが、すでに娘とともにホームに戻っているようだった。つまり、ダミーに気付いていればこの中の誰かしらが残っていて、そいつが鎖野郎なのだ。鎖野郎がいれば、かなり高い確率でアマガツ、デイオも気付いている可能性もある。アマガツに団長とマチがかけられた念を解除するためには、鎖野郎を見つけることも重要になってくるだろう。

アジトに戻ってきた団長が集まった情報を確認し終えた。ノブナガの熱望も、フランクリンの諫める声も、マチの慎重を期すべきだという姿勢も、無視するように静かに目を瞑って考えていた。ゆっくりと目を開き、アマガツの誘いに乗ると言った。

アマガツやコミュニティに大きな動きは無い。多くの念能力者を雇って不意打ちをするという狙いも無いのだろう。目的は復讐だ。己の手で成し遂げるのが当然だと考える。やはり復讐者たちは気づいていないのだろうか。

火曜日となり、団長を中心とした団員たちがアジトを後にした。シズクやパクノダ、コルトピ、ヒソカたちとともにシャルナークはアジトで待機することとなっていた。コルトピとシャルナークは団員内でもあまり戦闘向きではないため、シズクとパクノダは

団員内でもレアな能力を持つていたための待機だった。「もしも」の事態を恐れての保険でもあった。ウボオーギンが死んだときから、復讐者を殺すまでは警戒する必要があった。アジトに似せたダミーを周囲に展開している。このダミー一つ一つが円となつていて、侵入者が来ても不意を討たれることはないだろう。

ヒソカは悪巧みするために残ることを主張し、団長はそれを許可した。ヒソカは団員内でいい感情を持たれていない。好き勝手動くことが多いからだ。だが、シャルナークはそれほど気にすることもないと考えている。単独行動が多いが、これまでに旅団に迷惑をかけるようなことを起こしていない。信頼するほどでもないが、わざわざ警戒するほどでもないだろう。

シャルナークは、悪巧みするからと携帯電話を揺らして暗がりの奥へと姿を消したヒソカを疑いも無く見送った。

「ダウト」

「げっ」

シャルナークたちは、団長たちが出て行って暇になつたためにカードゲームに興じることにした。これで3ゲーム目だ。そしてすべてをシャルナークは負け続けていた。

能力を使つていけるわけでもない。純粋なゲームの腕で競つてはいるのだが、シャルナークは弱かった。過去に遡つて勝ち星を探しても、あまりに少なくて憐れみを抱かれるほ

どに。

次こそは、とシャルナークが気合を入れる。

コルトピが、侵入者だと呟いた。

「速くて大きい? ……一人、いや、ふた」

コルトピの言葉に重ねるように、天井から小さな音が響いた。言葉による情報伝達よりも遙かに速い破壊行動だった。

超人的な瞬発力で異常を察知したシャルナークを含めたメンバーたちが、跳ねるようになる。

刹那、耳を劈く音が鳴り響き、天井が砕けた。

団員たちが置き去りにしたカードがゆっくりと舞っていた。

「ロードローラーだッ!」

心の隙間に入りこむような怪しい色香のある大声が聞こえた。砕けた天井とともにアジトに粉塵を撒き散らして建設機械が姿を現した。

遅れて、少し前までは天井や床石だった瓦礫が、爆ぜるように飛び散って、舞っていたカードを潰した。破碎音が、シャルナークの耳に入ってきた。

シャルナークは見た。鎖によって拘束されたパクノダが、奥の暗がりへと引き摺られて行く姿を。さらに、ロードローラーから飛び降りるように駆け抜けた男によって、コ

ルトピも連れ去られた。

ロードローラーが天井を貫いてアジトを破壊する、その被害から逃れるためにメンバーが咄嗟に飛び退くと、魅力的な声によつて思考が一瞬だけ奪われた。そして、畳みかけるようにロードローラーという思慮の範囲外の物が降つてきた。そんな奇妙な手によつて作らされた隙を狙われた。

「ディオと鎖野郎か！」

シャルナークが発した声に押されたように、パクノダが消えた方へとシズクが駆けた。どちらかを追わなければならない。二手に分かれるべきか、片方に人員を割くべきか。

— 4

パクノダとシズクは貴重だ。失われるわけにはいかない。アジトを襲撃してきたというのなら、何か目的があるのだろう。シャルナークは奥へと引き摺り込まれていった。コルトピに、一瞬で見切りを付けた。

シャルナークは、パクノダの後を追うつもりだったが、ロードローラーから発されて

いるオーラに足を止める。か弱いオーラ量だが、そこに念能力者がいることがわかった。まるで誘うように、わざと漂わせているかののように、僅かなオーラ。

舞い上がっていた砂煙が晴れていく。崩れた天井からはばらばらと瓦礫の端が落ちてきていた。床を陥没させて鎮座するロードローラーの上に、とても小柄な子供が乗っていた。ジャポンの住人に見られる、艶のある黒い髪と黒い瞳の子供だった。纏っている子供用のスーツから辛うじて少年だとわかるほどに美しい顔立ちは少年と少女の中間のようでもあり、すらりと伸びた細い手足は背徳的な空気を纏っていた。

「え、えつと。ボクね？ しらないひとつにつれてこられて、ここはどこ？ とおさまかあさまは……」

オドオドと手足を震えさせ、伏し目がちの目には怯えた感情が灯っていた。声も震えていた。高く美しい、幼い子供の声だった。

シャルナークは躊躇いなく、子供へアンテナを投げつけた。一アンテナが刺されれば、その対象者を操ることが出来る。そういう能力だ。一般人であっても、念能力者であっても、間違いのない選択肢だ。アジトに飛び込んだ中で残された子供だ、操作しておくだろう。それが、襲撃してきた敵の一人だったら運が良い。

腕に貫通するほどアンテナが深く刺さったが、操作することはできなかった。アンテ

ナへと目を向けることなく、少年が躊躇いなく自らの腕を切り捨てたためだった。アンテナが突き刺さった勢いで奥へと腕が飛んで行き、壁に縫いとめた。そして、形を失ったオーラが霧散し、壁にはアンテナのみが残った。アンテナで突き破れるほどのひどく脆いオーラで構成されている身体だった。

「なんでばれたのかな。ばれてない？」

それはとろけるように甘い声だった。

子供特有の無邪気な雰囲気を感じながら、狂人の如く視線が定まっていなかった。彷徨う瞳は宙を眺め、あどけない笑みを浮かべた少年は膨大なオーラを纏った。

シャルナークは少年が件のアマガツだと確信した。

アマガツが膨大なオーラを纏う直前、刹那の間ではあるが後ろ手に隠している本からオーラが漏れ出すのを、事前の知識からシャルナークは見逃さなかった。

纏っているのは肌がざわつくほどのオーラ量だ。シャルナークが今まで生きてきた中では、お目にかかったことが無いほど。知っている最大オーラの量を優に超えている。莫大すぎて正確な量がわからないほどだった。シャルナークをして、限界を押し量

れない。

「ねえ、しんでくれる？」

いたずらっ子のような笑みをアマガツが告げた。

その声は、舌つ足らずで、甘美な響きを伴っていた。

「あはは、冗談でしょ」

シャルナークは笑いながら、相手の一挙一投足に気を配る。アマガツの手に、オーラが集中する。だが、身体に纏っているオーラが多すぎて、変化はほとんど見て取れない。何をしてくるのか。

おそらくはオーラの放出だろう。もしくは瞬間移動する能力を発動させるための条件を満たすステップか。瞬間移動は触れる必要があるはずだ、ならば接近を許さなければいい。

「うそなんてつかないよ。ほんとほんと」

アマガツが、体外に放出していたオーラを凝縮させた。見た限りでは半球のようだ。アマガツを中心に構成されている、濃密なオーラによって輝く半球。あまりにも多いオーラを凝縮させているためか、凝をしているシャルナークにはほとんど中は見えな

い。そこから龍を象ったオーラが飛び出してきた。

「おおっ!?!」

シャルナークが驚きに声を挙げながら、オーラを避けた。速度はあまり速くない。が、球体にばかり意識を向けていたのが回避を遅らせた。初速と終速にほとんど違いが無かったのか、加速してきたように見えた。

頭部を狙ってきていた攻撃を反射で避けられた。オーラによってダメージを負った肩から鈍い痛みが奔った。

それほど速くない攻撃だ、集中すれば対処はできる。そう思った矢先に、オーラが膨れ上がり、球体も巨大化した。

一体どれほどのオーラを保有しているのか。

暴力的なオーラ量の範囲が広がった。今のシャルナークには、相手のオーラを見破る凝がひどく煩わしく感じた。膨大なオーラによって、何もかもが曇っている状態だ。攻撃の初動が全く見えない。狭いアジトとロードローラーも手伝って、突然飛び出してくる龍状のオーラを避けるのが難しい。

小賢しい手に舌打ちを一つして凝を解く。半球の隠ぺいは薄らいだが、それでもアマガツは半透明の膜に包まれているかのようだった。どれだけのオーラを纏っているのか。

責め立てるように龍状に変化したオーラが迫る。速度自体はやはり速いわけではな

いが、動きが巧みだ。シャルナークの回避先へと先回りするように蛇行しながら罅が迫る。

アマガツの右手から伸びているオーラを見て、変化系の能力だと判断した。放出と異なり、オーラを費やして伸ばす。流麗なほどの美しさを伴った動きをする龍を見て、変化の練度が如何ほどか。おそらく凄まじく高い位置にあるだろうと辺りを付けた。

シャルナークが速度のギアを上げる。それだけで龍は追隨できなくなつた。出てくる位置さえわかかってしまえば攻撃の遅さは致命的だつた。あの球体状のオーラを突き破れるか、と不安を抱きながら壁に突き刺さつていたアンテナを抜き、都合のいい位置へと移動しようとして、凄まじい衝撃とともに壁に縫いつけられた。腹部を主にダメージを受けたのか、肩よりも酷い鈍痛を感じる。

凝を目に纏わせる。先ほどまで攻撃してきていた龍とは異なる左手から伸びた龍だつた。アマガツが絶で隠していたのだ。

球体のオーラは凝を強制的に解かせるための仕込みだつた。追撃とばかりに、もう一体の龍が開いた罅で飛び込んできた。狙いはシャルナークの頭部だつた。

すでに食いつかれていた龍による圧力は強大だつた。縫いとめられている壁など容易く食い破られていた。追撃の龍に噛まれ抜け出すこともできずに圧殺されるだろう。

なんとか動く手でアンテナを投げつけた。賭けに出たのだ。オーラを纏って周の状態となったアンテナは、抵抗が無いかのようにアマガツのオーラの球体に侵入し、突き刺さった。最初の焼き増しのように、アマガツはアンテナが刺さる直前に切り捨てた。アンテナが刺さるはずだった頭部を。

その瞬間、シャルナークを拘束していた龍が消え去っていた。追撃に向かってきてもう一つの念による龍と、アマガツを包むオーラも同様だった。

瞬きの間に、先ほどと同じオーラによる球体が展開される。それでも、一瞬だけ全てが消え去るといふ事実は変わらない。また、オーラの球体もただ濃密なだけで、念能力者が纏で留めているようなオーラと変わらない。肉体が脆弱すぎるのだろうか。重点的に肉体を強化していない限り、攻撃が当たれば突き破ることが可能なようだった。最初のアンテナで貫通できた時の強度を顧みると、オーラを纏っている状態でもアマガツの肉体は同年代の子供と同等かそれ以下だ。

そしてアマガツの最大の欠点は、動体視力が全くないことだ。アンテナが刺さる部位への見切りの速さ、変化させたオーラによる攻撃の遅さはそれに影響されているのだろう。現に、シャルナークが速度を上げ、残像とともにアマガツの周りを走る。目で追う様は確認できるが、全く追い付けていない。初撃でアンテナに目を向けなかったのは、追い付けていなかったためだろう。

アマガツの欠点が露呈した。見た目通りの幼い肉体強度、筋力、敏捷性、動体視力しか持たないという特徴を。オーラによって強化しようとも、隠し切れない弱所。

デイオとのタッグによって巧みに隠していたのだろう弱みを、シャルナークは見破った。

ならば、とシャルナークは音もなく距離を詰めた。

— 5 —

アマガツの認識速度を上回り、シャルナークは死角から腹部を貫いた。はずだった。感じるはずの手ごたえは空を切り、突き出した腕に裂傷を負わされ、結果として宙を舞っていた。

空中を回転させられていたシャルナークは、優れた空間認識と動体視力で地面の位置を把握すると、猫のようになややかに着地した。その衝撃は、音や砂ぼこりすらも立たせなかった。

受けたダメージを確認する。オーラを纏っていたために軽症だ。ただ、確実に決めるはずだった一撃が空打った事実が腑に落ちない。明らかにアマガツの反応を置き去り

にしていたはずだ。それが結果はどうだ。アマガツは先ほどと同じ位置に立っていて、シャルナークは宙へと投げ出されていた。

「オレの攻撃、絶対に当たると思ったんだけど？ 瞬間移動？」

シャルナークは疑問を口にした。受けたダメージの回復もあるが、タネを知りたいとも思っていた。

「ん？ んー……。うん、それぞれ。それでやった。やったと思う」

アマガツが子供がお菓子を貰ったように邪気のない笑みを浮かべて答えた。その姿は、見た目通りの年齢としか思えない。

だが、纏っているオーラだけを見れば化け物でしかない。この二つの差が、アマガツを何か得体の知れないモノに見せていた。

「発動条件は？」

「さわると飛べる、みたいだな。そうだったらいいなって思う。思わない？」

きやつきやと笑いながらアマガツが手で触れればいいと付け加えたが、そんなに簡単なモノではないだろう。二つか三つの行程を踏む必要があるはずだ。それもシャルナークに何かしなければならぬ行程が。触るのが本当だとしても簡単すぎる。何か困難な行程があるはずだ。だが、それを答える気はないのだろう。アマガツは変わらず

笑みを浮かべて、それで全部だと告げた。

はぐらかすような態度は当然のことか。能力者にとって、能力の詳細が知れ渡ること
は避けるものだ。この薄暗い業界で自らの手の内を明かすのは、死ぬことと同義だっ
た。

「……オレたち蜘蛛を狙う理由は？」

「おなか空いてたらごはん、食べるでしょ。好きなのがあったら、何回だつて食べたいつ
ておもうよね。そんな感じ。きつとそう。つまりお得意様だよ、優しくかんげいしてね
？」

アマガツが纏っていたオーラを変形させる。不定形だったそれが、徐々に形を成して
いく。そして靄のようなオーラをラクガキに変化させた。それはまるで空に浮かぶ雲
が象つたようでもあったが、特徴を上手く描き出しているのか、メニユーの名前が簡単
にわかった。レストランにあるようなメニユーからファーストフード、デザートと、
オーラで描いていく。俺はハンバーグが好きかな、と完全にシャルナークから視線を外
し、オーラでハンバーグを描いている。完全に表情は好きな食べ物を前にした子ども
だった。

シャルナークは内心で本当に言葉が通じているのか、訝しむようになっていた。オー
ラを操って絵を描く技量は驚異的だが、知能は低そうだ。

念獣の線が濃くなってきていた。頭が痛くなるのを感じながら、それでもシャルナーは相手から情報を引き出そうと質問を続けた。

「君さ、復讐とか興味ないの?」

「ふくしゅー? ああー、うん。あるかな。すつごくだいじ。ふくしゅーするはわれにありつてだれかがいつてたもんね」

アマガツはそう言うとおーラの絵に目を向けて、精巧な人形のように美しい顔を緩めて「あーハンバーグ食いたいなー」と漏らした。湯気の出ているハンバーグが二つに切れている絵に変化していた。ちよつと上手な子供のラクガキのようで、無駄に器用だ。

「……クルタ族じゃない?」

「なんで? くるただよ。そうでしょ。そうじゃない?」

おーラの絵がちよつとだけ上手くなっていた。二つに割れたハンバーグから肉汁が滴っている。

「緋の眼が狙いつてわけでもないんだね」

盗品の中にある宝を思い浮かべながら、シャルナーは呟いた。

かつての仲間のため、そういつた行動原理の復讐者も過去に存在していたからだ。もしかししたら、アマガツもその可能性があるのではないか。そんな思いからだ。

「めはいらないよ。ヒソカスがなんかしてると思う」

アマガツがひとり言のような声量で答えた。返事が来るとは思っていなかったが、アマガツは律儀にも一つ一つ返事している。攻撃してくる気配もない、念獣の行動指針から外れているのだろうか。このまま大人しくしているのなら、放置することも考えられた。

「ヒソカス？ それって仲間？」

鎖野郎の仲間だろうか。もしくは更なる敵か。チラリと、メンバーにいる道化師姿の男が浮かんだ。

「ヒソカスはなかまじゃない。クズだし、カスだもん。たのまれてもムリ。どっちかと言うと、そっちのなかまだったかなって」

「ちがう？ ちがわない？」そう呟くアマガツ。子供のラクガキのようであった、オーラによる絵が更に変化する。鉛筆で描かれた精巧な模写のように、オーラが変化した。今までのラクガキとは遥かに異なる技量。アニメーションのように、オーラの絵がゆっくりと動く。顔や起伏のない外形で辛うじて人間だと思える絵が、潰され、捏ねられて、整形されて、ハンバーグのタネが形作られた。その肉がフォークで抑えられ、ナイフで切られた。断面から汁が流れている。

「やっぱりハンバーグはレアがいいと思うよ、俺は」

アマガツの隣に寄り添うように浮かぶ本の上、そこに兎がいた。

頭部が割れ、脳が露出し、全身が腐ったひどく醜い兎だった。それが、腐った臓腑を撒き散らしながら、後ろ足で立っている。

腐臭がシャルナークのすぐ傍まで這い寄る様だった。

自らの頭部から流れ出る体液と脳髓をカップに注ぎ、自らの露出した前足の骨でかき混ぜながら、兎が醜悪に嗤っている。

「さあ、素敵なお茶会をしましょうか。君と俺と可愛いうさぎの三人で」

お茶はこつちで用意した。お菓子のお肉になるけれど、文句は無いよね？

理性が宿った声音でアマガツが狂って謳う。その様は、無垢で何処までも純粋な子供だった。

原作：サモンナイトシリーズ まったりさもんじゃないと1

3 | 1

忘れられた島に召喚されて……何日だろう。

カレンダーとか無いから感覚が狂ってしまう。

後でラトリクスに住人に確認しておこう。

話は逸れたが俺は今、日本の無い世界にいる。

召喚獣とか当然のようにいる世界らしく、ランダム召喚されたとか。

宝くじ当てるより凄いだらけな気がする。

そんな世界に突然飛ばされた俺であるが、命がけのサバイバルとかを経て意外と難なく過ごしている。

人間を受け入れるのは難しいとか何とか言われたが、俺は召喚獣枠として呼ばれたのだ。

島の住人になるのは当然の権利だと推し切った。

何がどう当然なのか、未だにわからない。

そんな新入りの俺ではあるが、島でもやるところは多い。

機械仕掛けの住人が集うラトリクスでロボットたちと戯れたり、幽霊のような精神体が存在する狭間の領域で涼んだり、妖精と遊んだり、田んぼ仕事をしたり、いろいろとやることは尽きない。

日本にいたときより充実しているのは気のせいではないはずだ。

主な仕事はラトリクスで組んだ装備を片手に悪意を持っていたり自我の薄い召喚獣を退治することなのだけけれど。

島も召喚獣たちの元の世界ごとの4つの集落にわかれている。

暇があつたら島中に顔を出しているが、友好的な召喚獣は穏やかな気持ちにさせてくれる。

女の子も可愛い。

獣耳とか生えている娘もいる。

やはりここが楽園だった。

ここ最近の花の妖精であるマルルウを頭部に乗せて島を探索する日々だ。

彼女は他人の感情に影響されやすいらしいのだが、懐かれたらしく俺の頭を特等席と
している。

かなりの頻度で供に活動しており、最近ではセツト扱いされ始めた。

基本的には島を回って誰かしらを手伝うか、敵対的な召喚獣がいれば気絶させたり電源を落として集落に連れて行って判断を仰ぐ。

マルルウがいるときは斬り捨て御免ではないのだ。

飯は手伝った集落で世話になっている。

今日はラトリクスで何か機械でも組んで遊ぼうかとマルルウと相談していると、森が騒がしいことに気付いた。

気味の悪い奇声が海岸沿いから聞こえてきた。

何か事件だろうかかと駆けつけてみると、はぐれ召喚獣に襲われている人間の集団を見つけた。

不思議なこともあるものだ。

なぜならこの島には人間がいないからだ。

そして外部から入ってくることもできない、沖合で結界の様な嵐が起きるためだ。

まあ、事情を聞くのは後でいいだろう。

事前にマルルウの許可を取り、崖から飛び降りる。

マルルウの「よろこんで」が可愛くてやる気が出過ぎてヤバい。

ポケットから柄を取り出し、魔力を通す。

柄から生える様に緋色に淡く輝く刃が現れる。

抜けば玉散る光の刃、と半漁人のようなはぐれ召喚獣を斬る。

絶妙な魔力の加減によって非殺傷設定だ（ドヤア

さらに援軍が六人ほど、内四人は子供だったが、現れたことで勝利が確定的となった。浮足立っている敵に魔力を放出して怯ませ、斬るといふ単調な作業となった。

海賊が3人、海賊の客分の召喚師が1人、家庭教師が2人、教え子が4人。

総勢10名の人間が島へと現れた。

事情を聞くと、海賊が船を襲っているいろいろあつて遭難したとか。

なんて危険なやつらなんだ。

刀に魔力を通そうとするがマルルウと家庭教師に止められた。

……マルルウの愛らしさと家庭教師のアティさんの卑猥さに免じて様子見しておこう。

彼らは共に活動することに決めたようだ。

教え子が不満を持っているようだが、追々折り合いをつけるしかないだろう。

島での行動についてなど交渉したいらしい。

マルルウに言付けを頼もうかと思つたが、暗記が苦手なので諦めた。

手紙を書くにしても、運ぶのが大変だろう。

俺が行くと見張りがいなくなってしまう。

4つの集落について説明し、どこに向かうか決めてもらう。

サプレスの召喚獣が集う『狭間の領域』に向かうようだ。

ファルゼンは良い奴だから悪いようにはならないだろうし、悪くない選択肢だ。

それほど時間をかけずに各集落の代表が集まった。

話し合いとしては、平和に進んだと思う。

俺の意見も聞かれたので、それほど心配する必要はないと答えておいた。

今後の交流次第だろう。

話し合いの結果として集落の姿勢は生活するのに物資が必要なら協力するといったくらいだ。

行動次第で変化するかもしれないが、なかなか良いのではないだろうか。

頑張つて歩み寄ると言った、綺麗な赤髪の双子である家庭教師のレックスとアティの今後に期待してみようじゃないか。

思い付きで犬型の亜人であるパナシエを毛繕いしてみた。

白い毛はふわふわで触り心地が実によい。

パナシエの毛をマルルウと楽しんでいると、教え子4兄弟の1人、アリーゼが現れた。4兄弟なんて言ったが、双子双子なので兄姉弟妹という構成なのでアリーゼは末っ子だ。

あまり家庭教師の2人とは顔を合わせたくないらしい。

自分たちの乗った船を襲ったがために島に流された身としては不満が溜まっているのだろう。

こればかりは気持ちの問題だ、俺には何も手助けすることはできない。

甘い物でも食べたなら、少しは気が晴れるだろうかと思ふ。果樹園に誘う。

こうやって考えて、悩んで、受け入れて、段々と大人になるんだらうなと思ふ。俺も年かもしれん。

楽しく果物を食べていると海賊が出たらしい。

話し合いまでしたのに何か問題を起こしたのかと疑問を持つが、今回は別の海賊だとか。

同じ時期にこんなにも人間が現れるとか、そろそろ沖合の嵐も寿命だろうか。

大して問題にならないくらいに強さなので応援に行く必要はないようだ。

これで援護が必要とか言われて走らされたら非殺傷を緩めたかもしれんね。

それからよくアリーゼと遊ぶようになった。

なんか気に入られたっぽい。

召喚術（独学）か剣術（独学）、釣り（勘）、適当な遊び（日本のやつ）くらいしか出来ないが、それでも楽しそうだ。

その様子に家庭教師の2人は複雑そうな表情をしていた。
もう少し話し合えばいいんじゃないかな。

話し合っても解決しないが、ストレスは吐けるし。

今回、捕縛された海賊はユクレス村で畑仕事や果樹栽培に狩り出されるようになった。

海の荒くれ者が陸で農家とか世も末だ。

船長が魚嫌いらしいので、アリーゼと釣った魚を差し入れするようにした。

だから陸に上がるのはいやなんじやーとか、戦争じやーとか度々叫んでいて面白い。

なんか弄るのが楽しいんだよね。

帝国軍人に子供たちが捉われた。

人質というやつだ。

気にせず最大まで範囲を広げ、非殺傷で子供ごと斬って隙を突くことも出来たがや

らない。

やりたくない。

アリーゼは友達なのだ。

親しい人には優しくするというのが俺ルールである。

友達を助けるためなら労力を惜しまないというのがカッコいい男であるとなノベヤ
漫画で学んだ。

彼女には全力を賭ける価値がある。

灰色の召喚石を取り出す。

中心は黒い闇が渦巻いている。

魔力を込める、惜しみなく。

そして祈り、唱える。

「闇と夜の混沌から生まれ、眠りの先に立ち、死を司る我が神よ」

切り取るように宙を奔った暗く毒々しい紫の光が六芒星を象る。

明滅しつつ、ゆっくと光が強くなる。

まるで光が漏れてきているかのようだった。

「契約により暗黒の館より出でて」

六芒星の中心から死体のような真つ白の手がどこからともなく現れ、六芒星を掴んだ。

空気が、空間が、世界が、軋む。

徐々に六芒星が広がっていく。

「唯人を」

さらに手が現れた。

六芒星を掴み、こじ開けた。

「咎人を」

怨嗟が聞こえる。

吐き気を催すような怨嗟が、六芒星の奥から、聞こえる。

六芒星が砕け散り、闇だけが残った。

「冥府へ墮とせ」

闇から獣の頭蓋骨を歪めたような無機質な仮面が顔を出した。

そして後を追う様に、身体が現れる。

翼のように背に広がる棺桶、それを連ねる鎖、その身に纏った黒い装束は拘束具を想

像させる。

意匠のない単純な刀が一振りだけ、その手に握られていた。

「タナトス」

絶対的な『死』の形が、召喚された。

召喚したタナトスから視線を外せず、固まっている帝国軍を一瞥し、魔力を注ぐ。

「歓喜の声をあげてはならぬ」

注ぐ。

「希望の目で空を仰ぐな」

注ぐ。

「この日よ、呪われろ」

注ぐ。

「メギド」

タナトスが咆えた。

そして破壊の光が降り注いだ。

3 | 2

異世界に召喚されて最も変化したのは一日の生活サイクルだった。

日本では昼前に起きて、日中は講義を受け、帰ったら夜遅くまでPCゲームという不摂生極まりない生活を送っていた。

今は朝は早く、日中は仕事を真面目にし、夜は早めに寝るといって健康至上主義だ。

朝が早い理由としては、機械に管理されているラトリクスに俺の私室があり、決まった時間にクノンという医療看護用自動人形（フラージェン）である機械少女が起こしてくれるためだ。

昼間は島の人々と交友を深めるために顔を出して、仕事を手伝ってたらそうになっていた。

夜はやることがないため、気まぐれに月や星を眺めて寝るだけである。

改めて考えてみると、かなり充実した人生を送っていることに気付いた。

体験してみると異世界ファンタジーに憧れる人が多いのもわかる。

最初の交流や生活基盤作りなどの難を超えると待っているのがリア充ライフだし。

朝からしつかりとしたバランスのよい食事が摂れるという幸運をかみしめながら朝食を食べ終え、クノンに礼を告げる。

そのまま日課である軽めの健康診断を行う。

クノンがいろいろと検査をしてくれるというので有り難く受けている。

とはいえ、ここは日本では考えられないような科学技術溢れるラトリクスである、難しいことも煩わしいことも特になく、されるがままで大体が終わる。

俺がやることといえれば検温のためにクノンの手を握り、互いの指を軽く絡めるだけである。

人に近いコンセプトで生まれたとあって、彼女の手のひらは心地よい柔らかさを感じさせ、少しだけひんやりとしていた。

なんらかの測定をしているのか、ジツと見つめられる。

医療看護用自動人形とやららしいので、瞳にはカメラレンズが入っているのだろうか
と最初は想像していたがその考えは覆された。

ジト目気味の大きな目は、伽羅のような色をしていて、瞳はどこまでも澄んでいるか
のようだった。

人間と大差ないもので、むしろクノンの目のほうが綺麗ですらあった。それから5分ほどで診断の終わりを告げられた。

俺の体温が少しだけ伝わったのか、クノンの手は最初よりも温かみを帯びていた。絡めていた指を解く。

今日も問題はないとのことだが、クノンが自分の手を見つめていた。

何時もなら食器とともに部屋を出ていくが、今日は話があるのだろうか。

座ったまま待っているときクノンが「人は温かいのですね」と小さく呟いた。

何か琴線に触れるものがあつたらしい。

少しだけ普段と違うクノンの様子を見てみると、視線が合った。

整った顔には、やはり澄んだ瞳がよく似合っていた。

「クノンも温かいよ」と返す。

俺はクノンが用意してくれる朝食や健康診断といった一緒に過ごす時間が好きだった。
クノンには意味がわからなかったようで、首を少しだけ傾けていた。

クノンとわかれた後はラトリクスで作業している適当な作業機械の上に乗って移動する。

彼らは俺が乗ると作業を中断して、任意の場所まで送ってくれる。

太陽光とか魔力で動くという驚きの技術だ。

特に魔力とか俺には謎過ぎて困る。

フロートユニットで浮いている作業機械の上に乗る、優雅にラトリクス上空を遊覧する。

地上から10mくらいの高さまで上がったのを確認し、さわやかな風が頬を撫でるのを感じながら深呼吸。

そして体の芯から湧き出るエネルギーを体表に纏い、循環させながら徐々に広げていく。

これが異世界の謎技術であるストラと呼ばれるものだ。

生命エネルギー、いわゆる『気』というやつを操り、身体能力を底上げしたり、自然治癒力を高めたりできるっぽい。

異世界召喚された翌日から使えるようになった謎技術その1である。

その2は魔力、その3は召喚術だ。

日本では身に付いていなかった技術だったので、違和感が半端なかった。

違和感を調べるために、ストラと魔力を使い続けた結果、かなり感知力が上がったよ
うな気がする。

真剣に頑張れば漫画みたたく、『気』を感じ取ってどこにだれがいるか大まかにわかったりするが、普段は半径10mくらいが感知範囲だ。

機界の召喚獣には『気』や『魔力』が感じられないものも居て感知できなかったがラトリクスで生活することと、毎朝準備運動と称して感知の練習をしたことで感じられるようになった。

今なら弾丸も避け……られない。

本音としては銃から発射された弾丸を避けるのはかなり厳しいので、相手の位置から予測して射線から離れるか手持ちの武器で弾いたり逸らしたりするのがベストである。

ちなみに気と魔力は体内でため込む際に混ざり合うことが多々あるようだ。

混ぜると爆発的なエネルギーを発する……という都合のいい話もない。

用途も違うし、相性もよくないので無駄にロスすることになってしまう。

なので俺は魔力を放出し続けながら気をため込み、気を使い切ったら外部から魔力を吸収したため込む、という感じで気と魔力の運用を交互に繰り返している。

だから時間や日によって物理が得意か魔法や召喚術が得意かわ変わるのだ。

面倒なことをしている自覚もあるが、理由もある。

ファンタジーの世界に来たら武器を振り回したいし、魔法も使いたい、という高尚な理由だ。

大したことないかもしれないが、俺的には大満足なので問題ない。

操気術的な運動を終え、体内に貯め込まれていた魔力を緩やかに排出する。

最初に魔力を吐き出してから運動しても良かったのだが、魔力という負荷があったほうがより良いと勝手に判断し、すべてが終わってから魔力を出していくことにしている。

マルルウの話を聞いた話だと、妖精や霊などには緩やかに垂れ流しされている気や魔力がかなり心地よいの確か。

頻繁に霊界『サブレス』から門によつて召喚された召喚獣が背中に張り付いているが、そういった理由のためのようだ。

餌として認識されているとかじや無いから、決して無いから。

作業機械をお願いして幻獣界集落の「ユクレス村」に向かう。

森を駆け抜けてもいいが、今乗っている作業機械は乗り心地が良いのでこのまま乗せてもらうことにした。

魔力バッテリーを内臓している型なので賃料として垂れ流しの魔力を与えれば問題ない。

ついでに目的地に付いたら軽くフレームを磨けばお礼としては完璧らしい。

途中で朝から元気に遊んでいる少年少女、それを見守る先生らと合流し、ユクレス村へ。

外から来た先生と生徒も、以前の帝国兵による人質事件を解決したおかげか互いに歩み寄る姿勢が見て取れた。

村が見える場所まで来るとご機嫌なマルルウが俺にパイルダーオン。

まあ、マルルウの機嫌がよくない日なんて見たことないけど。

少しすると島の子供たちも集まって来たので授業の準備を手伝う。

俺はこの世界について何も知らないの、子供に混ざって授業を受ける予定だ。

島から外に出ることはできないから必要ないかもしれないが、事故としてだが外から入ってこれたのだから外に出られる機会もそう遠くはないと思っっている。

その時、何も知らないのと知っっているのでは段違いだと思っっていたりいなかったり。

文化が日本と完全に違うので知らないことやばいことに繋がりそうだし。

今日は体を動かす授業のようだ。

……座学を期待していたのだが、知識はテキストに気になったことを質問することにしよう。

各々が得意な道具を使って自主練し、先生が助言するという形式のようだ。

気や魔力の使い方も指南していることからファンタジーだなあとという印象を強く受けた。

作業機械のフレームを丁寧に磨いていると、4兄弟の一人であるウィル少年に話しかけられた。

少しばかり緊張しているようだ。

話の内容は何をしたらいいか悩んでいるといったものだ。

どうも器用らしく、召喚術についても剣術についても得意なようだ。

両方学ぶことも視野に入れているとのことだが、とりあえず一芸を磨いたほうがいと告げる。

高いレベルになるとどっちも出来るようになるが、最初から手を伸ばすと器用貧乏になつてしまふだろうし。

俺は望んでやっているのでもいいんです。

決めるのが難しいなら目標とする人物に合わせたスタイルにすればいいんじゃないだろうか。

先生であるレックスさんとアテイさんはそれぞれ剣術と召喚術が得意だし、それ以外にも結構できるっぽい。

俺はどうなのかと聞かれたが、やめておいた方が無難であると思う。

体内に気か魔力のどちらかを溜め込み、不要なほうを垂れ流しにできるならやってみる価値はありそうだが。

先生の2人に俺のような垂れ流しは練習すればできるのかウイルが聞きに行つたが、渋い顔をして帰つてきた。

「息を吐きながら吸うようなことはできる人はいない」というのが返事だつたらしい。俺は人ではなかつたことが判明した。

いや、人だけどね。

それくらい難しいということか。

作業機械を磨き終えるころに、ウイルが召喚術に特化することに決めたと云つてきた。

君ならできるさとか頑張れよとしか言えない。

そもそも俺は召喚術をよく知らん。

俺の場合は石に軽く魔力を込めると文が思い浮かぶので、それを詠唱すると魔法陣が出てくるのでそこから現れ、スタンドっぽく追従してくるようになるだけだ。

さらに魔力を与えると魔法を放つて消える。

石の種類によつて出現する召喚獣(?)は変わるがどれもピーキーな上に可愛くない。しかも一回召喚すると砕け散つて石がなくなるという糞仕様。

そういうわけでウィルやアリーゼ、マルルウと一緒に召喚術や魔力運用を勉強する。さすがアテイさんである、授業姿も実に魅力的だった。

端的にいうと、エロかった。

情操教育に最高に悪い気がするんですが、それは。

昼をユクレス村で食べ、午後は軽い座学を行う。

といつても将来どうしたいのかといった小学校でやったような授業だ。

4兄弟は軍人を目指しているらしい。

彼ら彼女らの家であるマルティーニ家は帝国でもトップクラスの豪商で、軍人がうんたら。

この前の帝国軍を想像してしまった、結構殺伐とした将来の夢だなあと。

ちなみに先生たちも元軍人だったとかで首席次席だったとか。

あんまり似合っていないから辞めて正解だったのかもしれないね。

スバルは母親を守るようになる、パナシエはまだ考えている最中、マルルウは大きくなりたいたいか。

いい話である。

パナシエは決めかねている自分が恥ずかしいようだが、まだまだ時間はあるのだから

ゆつくり考えなさいと励ますふりしてモフる。

素晴らしいもふもふ具合だ。

みんなの視線をちよつとばかり集めてしまったが、モフるためには仕方がなかった。マルルウは大きくなりたいたとの話だが、彼女が生まれたルシヤナの花とやらが召喚前の世界にあるっぽいので、アンビリカブルケールが切断されたエヴァンゲリオン状態のようだ。

ただ、今のマルルウには俺の垂れ流した気や魔力が供給されているので完全に零ではないとのことだ。

つまり、時間をかければいつかは大きくなるかもしれない。

花の妖精だから、樹木に比べると小さく、アリーゼくらいが限度かもしれないけど。

俺はそのうち島を出てファンタジーな異世界を見て回ってみたい。

別に国とか作ろうとか貴族になろうとか、奴隷がほしいだなんて思っていない。

獣耳の可愛い女性は見てみたいけど。

ただ、将来について真剣に考えてはいないことも事実だ。

何ができるか、何があるのか俺は全く知らないのだから考えようがない。

だからこの世界についていろいろと興味がある。

今のところは治安が一番気になるけど。

このままだと外国に行くカモな日本人旅行者状態だし。

授業が終わり、解散となると少年少女は遊びに向かうようで、先生たちのついでとばかりに誘われた。

人一人くらいなら支えられる蓮の葉を足場に池を横切る蓮ジャンプをするらしい。

中には腐っていたり、小さくて強度が足りないものもあるので、それを避けながら渡つてタイムを競うようだ。

最初に挑戦したアテイさんはすぐに池に落ちた。

マジで次席だったのだろうかと怪しむ俺は悪くない。

濡れた彼女は実に卑猥でした。q、

レックスさんは無難に成功させていた。

まあ、男が濡れても面白くないし。

俺も挑戦することになったので、全力を出しつつ大人げない勢いで蓮ジャンプした。

足にストラを纏って全力で跳躍して蓮を無視して池を飛び越える、水の上を走る、蓮が沈む前に駆け抜ける、召喚獣に乗って移動するなどだ。

響聲を浴びるかと思つたが、子供には意外と受けがよかつた。

ストラジャンプを真似したスバルが池に落ちて、母であるミスミさまに怒られるとい

う一幕もあつたが、それでも童心に帰って楽しめた。

そのあとは釣りに行こうぜって話になったので、海岸へと皆でそろそろ移動する。

木の枝が落ちていたので拾って、ナイフで加工。

インスタント・魚絶対殺す銚の完成だ。

ジト目で見ていたベルフラウに、これは絶対に魚を貫く呪いの銚であることを説明。

「そんなの絶対嘘に決まってますわ」とアナ・コツポラちゃんの感で否定されたので、ほんとだったらデコを撫でると告げておく。

一つだけ言うておくと、フォースに導かれたジエダイばりの超感覚を有する俺が投擲した銚が外れるわけないじゃん。

ストラで全身と銚を強化し、銚が逸れないために魔力の流れで緩やかなガイドレールを生み出し、投擲する。

海が割れ、大きな波が起こる。

やべっ、力が強すぎた。

真つ二つに裂けた魚が海面に浮かび上がってきた。

貫いて仕留めるとは、やはりあれは呪いの銚だったなとドヤ顔。

銚を回収しにいくと気絶した魚が数匹浮かんでおり、銚には3匹ほど突かれていた。

……実に大量だった。

魚を回収して浜辺に戻る途中で、海に浮かぶ少年を見つけた。

抱えて戻ると、ちよつと怒られた。

どうやら彼は浜辺に倒れていたらしく、そこに大きな波がきて飲まれてしまったのだとか。

す、すみませんでした。

どうやら新しい漂流者らしい。

意識はないので一度ラトリクスで検査をさせたほうがいいだろう。

漂流したことで体力が消耗したのだろうし。

俺の波は関係ないが、やはり検査が必要だ。

俺は関係ないが。

ただ、俺もラトリクスに住んでいるので背負って連れて行くことにした。

人助けも世の常である。

その後、クノンに検査してもらったが特に異常はないらしい。

衰弱しているだけなので直に意識が戻るだろうとのことだ。

意識が戻ったらいろいろやることもあるが、今は寝かせておくことにしよう。

そんな感じで意識不明の少年を拾った翌日、巨大なアリっぽい生物と朝つばらから戦うことになった。

というか現在進行形で戦っている。

事の発端はクノンがアルテイラの薬を作るために散策に向かうというので付いていった結果、見つけて戦闘になったというから実にシンプルだ。

意識不明な少年が目覚めたので島の案内をすとかいう話があつたが、若干気まずいのクノンに付いてきたという隠れた理由もあるが些細なことだ。

この巨大なアリっぽい召喚獣だが、この世界では害虫らしい。

名前はジルコーダ。

見た目も益虫っぽくないし、然もありません。

特徴としてなんでも食べてしまう、対話できる知能はない、酸を吐く、凶暴、増えるというデンジャラスな虫だ。

殺処分しか道はない、こればかりはしようがないね。

所持している武器は魔力刃くらいなのだが今は気が溜まっている状態だ、攻撃に蹴りを選択。

軸足と蹴り足をストラで強化、配分は5対4くらい。

残りの1割を推進力にジルコーダの頭部を蹴り上げると、軽い抵抗とともに首が飛ん

で行った。

軸足が少しだけ地面に埋まったのでジルコーダの硬さを認識、虫は頑丈だからめんどくさい。

飛び散った体液を避けるように下がる。

残った胴体がわさわさと動いていてほんとにキモい。

虫だから生命力があるし、マジで嫌なんですけど。

胴体が爆ぜないように優しく、それでいて力強く蹴り上げ、宙に浮かせる。

ジルコーダサッカーの出来上がりだ。

このサッカーの難点は他に参加者がいない、ゴールがない、ジルコーダがボールではない、酸を吐くから溶けることもある、キモい、でかい、重いルールがないなどなどと挙げればキリがない。

一か所に集まったところを少ない魔力を振り絞り、クノンの召喚術をアシスト。

召喚したフレイムナイトの炎で一気に火葬した。

一息つけるかな、と汗を拭おうとしたらクノンがやってくれました。

この役得に浸りたいが、巣が近くにあるようでジルコーダのお代わりが出現した。

……岩で巣穴の入り口を塞いでしまおうかと考えていると、「だって私たち、仲間だもんげ！」とばかりに続々と島の仲間たちが！

なんやかんやあって、どうとかで駆けつけてくれたらしい。
有り難い話だわ。

今から魔法型になることを周りに宣言しておく。

回復の速さは魔力∨気なのと召喚術のほうに優れているのでメインに魔力を選択。

魔力は自然に満ちた生命力、気は人間の生命力、みたいな感じなので差異があり、利点も違う。

出力は親和性を考えると気のほうが高いが、魔力は召喚術の餌みたいなものだし問題ないんじゃないかと。

右手からストラを全力で放出してジルコーダを蹴散らしてから魔力回復に入る。

これでいくらか時間が稼げるので、その間に相談する。

必要なのは原因を排すこと、集落にジルコーダを向かわせないことの2つだ。

巢に存在する女王を退治する班と外で駆逐する班に分かれ、戦闘をやり直す。

先生2人とファルゼン、アルデイラが巢に侵入していったので教え子たちをサポートしつつ召喚術を使う。

タナトスを召喚し、巢が崩落しないよう加減しつつメギドを放つ。

漂わせていた魔力と溜まった分が枯渇した。

省エネで放ったのだが、相変わらずの糞燃費だ。

魔力を使うようになるなら銃を持つてくるべきだったと悔やみながら魔力刃を振るう。

威力は微妙だが、物理防御を無視できるので棒で叩いたり、無強化で殴打するよりも強い。

糞燃費のせいで回復が追いつかない魔力にイラついていると、クノンからパフエを手渡された。

これを食えと？

……若干回復したが、どうも腑に落ちない。

ちなみに駆除が終わったら鍋で宴会をやるらしい。

こんな虫のグロを至近距離で見続けて、そんな元気あるのだろうか。

俺は虫苦手だから実はSAN値がごりごり減っているわけだが。

鍋は普通に食べた。

アテイさんの魅力100な姿を見てたら虫なんて吹っ飛んだわ。

座っているだけで魅力的とか帝国の最終兵器なのかもしれない。

秘密兵器とか言われても俺は否定できそうにないし、勝てる気がしない。

ついでに約束通りベルフラウのデコを撫でておいた。

ゆつくりと絹に触れるよう繊細に、そして俺の手の熱が伝わるよう優しく、それでいて卑猥に。

真つ赤になって熱を持ったデコもなかなかの手触りだったと言っておこう。

後はなぜかアリーゼとマルルウ、クノンが順番待ちしていた。

3—3 (完)

— 1

透き通る空、浮かぶ白い雲、聳え立つ近未来的な建物、真昼間からふらふらと歩き回る俺。

異世界の島じゃなかったら不審者だったぜ。

俺が何をしているか、答えは簡単。

鉄くずの山で見つけた、予備電源だか太陽電池だかで生き延びていたロレイラルの機械兵士の修理である。

メンバーは俺、マルルウ、先生二人、教え子四人、クノン、そして特別ゲストのイスラだ。

教師と教え子コンビはロレイラル文明についての課外学習。

イスラはメデイカルセンターにぶち込まれっぱなしだと、消毒液臭くなるだろうし、日光消毒のために呼んだ。

近くだし、クノンがいるので問題は無い。

真面目に勉強している横で鉄くずを漁ってたら発見した機械兵士だが、名前はヴァルゼルドというようだ。

ロレイラル産には珍しく、愉快的性格をしている。

すぐにマルルウや教師生徒、おまけのイスラとも仲良くなっていた。

クノンはバグってますね、と無表情に告げてきた。

直さないとダメだろう。

頑張るぞい、とパーツを探す手筈を整える。

そして作業機械たちに必要なパーツの特徴を告げると、すぐに持ってきてくれるの

だ。

持つべきは友と手足だな。

ロレイラルの機械はカッコいいし、俺の助けになってくれるから大好きだ。

鼻歌とともにパーツを組み込んでヴァルゼルド、起動。

ヴァルゼルド、暴走。

どうも愉快的な人格はバグによって生まれたらしく、本人格が消そうとしているらしい。

異物に囚われる恐怖もわかる。

暴走は電腦が乗っていない状態によるものらしい。

バグで生まれた人格と俺たちは仲良くなってしまった。

切り離すことはできないようだ。

補助電腦を乗せ、全てを消して止めるしか方法はないようだった。

壊すか、消すか。

止めても電腦の無いヴァルゼルドをどうすることもできないのだ。

どうしたらいいのか迷っている教師と教え子を尻目にヴァルゼルドに斬りかかる。

機械兵士は魔法が弱点、魔力が潤沢な今の俺に負けは無い。

ヴァルゼルドは指揮官機らしく、コマンド待ちだった他の兵器が湧いて出てくる。悩んでいる時間は無い。

教師も教え子も、口々に騒いでいるが、無視して何度も攻撃する。

理想を口にするのは結構だが、残念ながら代替案がないなら我が儘と一緒にだ。

新しい知り合いよりも、仲の良い友人を優先する。

流れ弾が後ろに逸れた。

イスラが、目立たないような動きだったが、綺麗に回避していた。

何か戦いに心得のあるような動きだった。

……。

直したヴァルゼルドを幾らか壊し、仲良くなった人格を上書きし、機械兵士を止めた。

誰も何も言わなかった。

何も言わず、去っていった。

頭を感じるマルルウの重さだけが、なんだか嬉しかった。

ヴァルゼルドを壊した後の雰囲気は最悪だった。

先生と生徒はお通夜である。

一応、機械兵士としては残っているんだけどね。

イスラも引き摺っている。

要らなくなったら捨てるのか、みたいなきことを問われた。

状況によるとしか、俺には言えなかった。

先生コンピの軍でのライバルだったアズリアとやらが、戦闘しようぜ！と言いつつ出た。

二人が持つてる剣が欲しいらしい。

本来は一本の剣なのだが、双子だから魂が似ているのか、実は剣が二本になっているのだ。

一本あげて和解すればいいのに、なんてね。

無理だよなあ。

ヴァルゼルドも無理だった。

無理なことばかりだ。

なんか帝国軍とバトってたらしいが俺は参加しなかった。

イスラが情緒不安定なので近くにいたのだ。

あとイスラって健康なときと不健康なときの落差が半端ないから、何かあったときのために控えている的な。

体幹がすぐれている部分も気になっているけど。

— 3

なんか色々とおつたが剣ごと遺跡を封印したとか。

遺跡は剣がカギとなつて、なんかすごいパワーをくれる建造物だ。

これで島の行き来を封じていた竜巻も解除されるとか。

帝国は剣の凄いパワーが欲しいっぼいよ、知らんけど。

封印したと主張しても剣を欲しがらるアズリアが率いる帝国軍の部隊と再度衝突。

ヤマもオチも無く勝った。

と思つたら、イスラが敵に回った。

なんか特殊部隊らしい。

しかもイスラは別の剣を持つてた。

帝国もえげつないことをする……。

諦めの悪いアズリアが決戦を仕掛け、先生の友情パワーで打ち砕いた。

封印したはずの剣がまた生えてきて、すっごいパワーでゴリ押ししたただけだ。

イスラの剣も使って封印しないとダメな雰囲気だ。

めんどくさ。

うっわ、めんどくさ。

やつと先生や生徒たちと会話ができそうなほどにまた打ち解けて来たのに、イスラによつてまた重い雰囲気に戻りだ。

悲しい。

決戦後になんやかんやあって、アズリアが下った。

と思つたら笑い声をあげたイスラが「僕の部下は元気だから、もう一戦頑張るぞい、

」とか言い出した。

マジか。

こいつ空気読めなさ過ぎっしょ。

イスラの部下だが、暗殺者集団だった。

帝国軍もザクつと刺されて死んだ。

やべー。

頭やべー。

こんなのおかしいよ！

駄目そうな帝国軍の軍人を見捨て、俺が殿となってみんなを逃がす。

先生は見捨ててる軍人を助けたがったが、無理だ。

俺一人なら敵を倒すことは出来るが、助けるのはマジで無理。

お荷物ある状態なら撤退戦も難しい。

遅滞戦闘で時間を稼ぎ、仲間を逃がすのが精いっぱい。

いっぱい死んだ。

逃げ遅れが無いか確認するために感覚を広げた俺にはわかった。

致命傷を避けていても、毒でゆっくりと死んでいった。

— 4

ラトリクスの自室で、ヴァルゼルドだった機械兵士のメンテを進める。

だった、というのは変だな。

型番がV A R | X e | L Dでヴァルゼルドなのだから、彼もヴァルゼルドなのだ。

分けて考えるべきではないと、思い至った。

装甲を磨いていると、夜にも関わらずアリーゼが飛び込んできた。

夜の遅くまで起きているとはけしからん少女だ。

叱ろうかとも思ったが、険しい表情に只事ではないと理解した。

先生二人が喧嘩しているらしい。

お、おう……？

呆けた声が出たが、洒落にならない勢いのようだ。

あの凄いパワーが発揮できる剣も使っているとか。

あ、それは急がないとやばい。

どのくらいヤバいか、言葉にできないくらいやばい。

— 4

現場に辿り着くと、先生二人が言葉のドツジボールとともに、剣で打ち合っていた。おそらく限界だったのだろう。

溜め込んだフラストレーションが、一気に爆発したのだ。

慣れない環境での教師としての苦惱、生徒と打ち解けられない気まずさ、ヴァルゼルドとの別れ、帝国軍の友人との戦闘、イスラの裏切り、多くの死人。

二人が腹を割って話せる相手なんて、この島にはいない。

二人は教師だ。

保護者として、大人として、弱みを見せることは出来なかった。

それに深い知り合いもない。

だから、こうなるのは当然だった気がした。

気が済むまでやらせるべきか、止めるべきか。

悩んだのがいけなかった。

後を着いてきていたヴァルゼルドが、二人の間に割って入った。

そんな指示は出していない。

交差するはずだった、二本に複製された「碧の賢帝（シャルトス）」がヴァルゼルドを叩き壊した。

感情を忘れた機械兵士が「教官どの」と呟き、周囲に熱を撒き散らして爆ぜた。

暗がりか、一瞬だけ赤く照らされた。

欠片も傷ついてない筈だった、「碧の賢帝（シャルトス）」が砕け散った。

一瞬、赤く照らされていた森が、幻想的な淡い輝きに包まれた。持ち主の二人は、糸が切れたように倒れ込んだ。

砕け散った剣が転がった。

全部壊れた。

それを俺はただ見てるだけだった。

— 5

アテイさんもレックスさんも、ヴァルゼルドを壊して剣が砕けた後、眠ったままだった。

剣が何か関係しているのかもしれない。

メイメイという人物が森に住んでいると、アリーゼたちから聞いた。剣に詳しく、教師二人にも助言していたという。

拾い集めた剣の破片を持って、そこに向かう。

辿り着いたのは、中華風の小屋だった。

メイメイに聞いた話を端折るが、二人が持っていた「碧の賢帝（シャルトス）」という

銘の剣は、世界の魔力の流れに接続できる魔剣だという話だ。

島に存在する遺跡にある核識とやらを経由するらしい。

核識は元は人間であり、その魂と適応できる者のみが「碧の賢帝（シャルトス）」の適格者となる。

二人が眠ったままになっている理由は、「碧の賢帝（シャルトス）」で魔力を引き出していた際に、砕けたことに依る物だという。

「碧の賢帝（シャルトス）」を使った場合、魂そのものと接続するような形になるので、剣が砕けることで魂もダメージ負う。

剣自体は非常に丈夫だが、心も繋がっているのでストレスによって脆くなっていたか、強いシヨックで砕けたか。

……。

剣の破片を見せて治せるかと問うが、メイメイは難しいと答えた。

剣を打つ技能も無く、複製された剣が互いを対消滅させてしまい、欠けた部分が存在しているためらしい。

元の大きさから変わってしまったえば、魂も変わる。

引きずられる肉体がどうなるかわからないとも。

他の魔剣は、欠けた部分の代替品にならないか聞いてみた。

可能性は高いとのことだ。

……。

代わりはイスラが持っている。

出ていこうとした俺に、メイメイが我慢すれば後で俺も幸せになれるとしても行くのかと聞いてきた。

占いだろうか。

まあ、どっちにしろ行くんだが。

十分今が幸せってやつである。

やっぱり仲良くしてくれても、召喚獣は人間じゃない。

人恋しくなるもので、そこに現れた人たちを大切にしたいと思うのは当たり前のような気がする。

いや、イスラから奪うから良いこと言ってる風に装っただけだが。

後から来て優先度と好感度が低いイスラが悪いわ。

ロレイラルに運ばれたヴァルゼルだったガラクタを見る。
中身は無い。

装甲も所々が欠けている。

ファルゼンが、自分で使っている装甲用の素材をくれた。

魔力を外に漏れないようにできるとか。

なるほど、俺が外に放出する魔力を貯蔵できるのな感じだろうか。

でかくて邪魔だけど、まあいいんじゃないかな。

着る気は全く無いし。

魔力刃を取り出す。

殺傷設定だ。

暗殺者連中は自爆したり毒を使ったりするらしいので、必殺が重要だ。
連中が待機していた森ごと切り裂いた。

野良の召喚獣も巻き込んだらしいが、必要経費である。

上半身と下半身が別れてしまったらしい連中を乗り越え、イスラに斬りかかる。

イスラは呪いにかかっているらしいが剣による魔力補給でブーストし、死ぬ直前まで行くが死なないとかどうとか。

そりゃあ大変だね。

不意打ちでダメージを負っていたイスラの回復を待たず、攻撃を続ける。

今回は手抜き無しのガチだ。

魔力刃に俺の魔力を注ぎ込み、凄まじい勢いで圧縮まで加えている。

魔剣による膨大な魔抗も、易々と突き破って肉体を傷つけることが可能だ。

イスラの胴体を切り裂き、返し手で首を切り離すところで邪魔が入った。

居合の構えをしているおっさんと見知らぬ女である。

幹部レベルっぽい。

知らんけど。

用心棒のウイゼルと二つ名持ちの暗殺者であるヘイゼルだとかなんとか。

いや、知らんけど。

サモナイト石を取り出し、魔力刃を砕き、詠唱。

メギドで薙ぎ払う。

砂と化した石を放り投げ、倒れているウイゼルハイゼルコンビを無視し、ストラを練る。

さあ、目的を果たそう。

足裏からストラを放出する瞬間で、回復したイスラへと接近する。

イスラの魔剣は、ストラを用いた硬気功の鎧も簡単に切り裂く。

相手の魔力が多すぎるために起きる。

単純に放出したストラだと相手が纏っている魔力を少し散らす程度に終わる。

ストラの放出で削るように魔力を散らし、薄まった部分に拳を当てる。

イスラは血反吐を撒き散らす、戦闘は続行らしい。

ダメージによる隙も、魔剣による魔力放出でカバーされる。

心の折り合いになりつつある。

イスラが刺突の構えを取った。

魔力が渦巻いている。

それを見て俺も魔力刃を形成する。

当たれば終わる俺、リザレクションの連続で精神的に厳しいイスラ、互いに余裕はな

いのだ。

負担がかかれば魔剣が折れるかもしれないが、そこまで行くと俺も致命傷を貰いそう
だ。

必殺しておきたい。

イスラの刺突は速かった。

マジで速い。

見えないレベル。

が、気や魔力を感知できる今の俺に、速度は無意味だ。

始点と序盤の軌道さえわかれば、受け止めることは容易だ。

身体中のストラを留めた左の掌で受け止める。

手の平が貫通されたが、消し飛ばなかったのでよし。

神経が通っていてヤバいらしいが、消し飛ばよりはマシ。

柄を握っているイスラの手を、上から覆うように握って剣を動かさなくする。

イスラの呪いは俺には解けない。

この魔剣があれば先生二人は治る。

ヴァルゼルドにも悪いことをした。

俺にはできないことばかりだ。

なんで泣いているのかって。

自分の不甲斐なさに泣いてるんだ。

あとはイスラのためにも。

ははは、俺は良い奴なんだ。

左手にストラを溜め、空になった体の部位に魔力を溜めておいた。

つまり魔力刃を再度使えるというわけで。

凝縮させた結果、ナイフのように短いが、今はそれで十分だ。

心臓を貫き、イスラの意識が途切れて魔剣が弱まった瞬間を返し刃で叩く。

ヴァルゼルドが爆ぜた時よりも、淡く弱い輝きに照らされた。

— 8

イスラは死なないから魔剣ごと心を砕いた。

これで動かないだろう。

衣服が襤褸のようになっていて、血を吸ってひどく重い。

飛び散った破片を拾い集め、メイメイの元へ行こう。

疲れた。

俺はもう疲れた。

戦いの何が楽しいのか、死体の山を横目に、血に混ざった赤い破片を探し回る。

居合のおっさんが魔剣をどうするのか聞いてきた。

まだいたのか。

もう一人の女は何時の間にかいなくなっていたのに。

そもそもあれよ、砕けたもう一つの魔剣の接着剤にするに決まってる。

何故かおっさんがメイメイの元に着いてきた。

剣が打てるらしい。

やるじゃん。

メイメイが暗い顔をしていた。

辛気臭いやつである。

俺の流れが良くないようだ。
まあ、大丈夫っしょ。

— 9

寝て起きたらおっさんが新たな魔剣を生み出していた。
すげー。

おっさんすげえ。

何が凄いかわからないが凄い。

朝一で訪ねて着たアリーゼに魔剣を託す。

契約すればワンチャンあるらしい。

余った部分で小太刀も打ったらしい、俺に渡してきた。

アズリアにでも渡すか。

イスラの遺品的な意味で。

アズリアに斬りかかれた。

イスラを中心とした血の海地獄を見たらしい。

現代アートですまんな。

苛立って、反撃してアズリアを切り捨て御免してしまった。

身体が動いてしまったのだ。

イスラの遺品がアズリアの血に染まった。

戦えるって、損しか生まない。

それをアテイさんに見られていて……。

新たな魔剣の抜剣覚醒は、美しい蒼だった。

——10

悪循環しかないんですがそれは。

メイメイさんちのセーフハウスに逃げ込んだ。

アテイさんと斬り結ぶという事件が発生してしまった。

落ち込む。

しかもアテイさんブチギレだったし。

ぶっちゃけ、無色とイスラ惨殺とかアズリア切り捨て、アテイさんとマジ戦闘をした

から島に居られない感。

俺よりも向こうの比重が重そうだし。

俺には致命的なレベルで人望が無い（絶望）

凹んでいる俺を見たメイメイはがぶがぶと酒を呑みながら、何とかなるかもしれないようなならないような……と言葉を濁した。

それってダメじゃん。

慰めるならもつと頑張れよ。

鞆に道具を詰め込んで、夜のラトリクスに忍び込み、ヴァルゼルド（壊）を手に入れた。

その後は作業機械に頼んで浜辺に移動。

もうラトリクスの機械たちだけが俺の癒しだ。

さあ、島を出よう。

ただまあ、俺には海を渡る技術が無いから無色の派閥本隊が乗っている船に忍び込んだ。

船が出るまで、船倉で待機。

飯とか有り難く貰う。

ヴァルゼルド（壊）はかなり目立つし、なんとか隠せないかと、鎧をばらしてみる。中から半透明のイスラが出てきた。

～q～

半透明で寝ているイスラを起こす。

本人から話を聞くと、イスラに呪いとかいろいろかけていたオルドレイクが、呪いを解除して死んだんじゃないかって話だ。

で、死後は幽霊として活動開始、みたいな。

彷徨ってたらヴァルゼルドの鎧に魔力が籠ってていい感じだったから中に入ってたとか。

なるほどなー。

鎧も動かせるよ、とヴァルゼルド（イスラ入り）がガシヨンガシヨン。

やるじゃん。

幽霊だから触れないと思いきや、魔力を込めればある程度まで実体化できるっぽい。

電池である俺から離れるとヤバいとも。

俺の傍にいたいらしく、変なアピールを開始した。

イスラ曰く、自分はアズリアと顔が似てるから、どう？みたいな感じのアピールだ。何がどう？なんですかねえ（白目）

そんな感じでイスラと遊んでいると、船が騒がしくなった。

オルドレイクが負けて、逃亡するようだ。

イスラ的にはオルドレイクをぶち殺したいようだが、船が陸に行かないのは不味い。大人しく待機である。

——12

陸地に近づいたので、火薬などに火を付けて、小舟でバックれた。

後ろで響く爆発音が俺の新たな門出を祝ってくれている。

まあ、何時かはこの世界を旅するのが目的だったのだ。

今回はそれが早まっただけに過ぎない。

俺には戦闘能力もあるし、魔法技能的なものもある、ファンタジー世界を楽しめるとい

うものだ。

問題は、ヒロインがないという致命的なミス。

イスラが「ボクボク」アピールしているけど、君は男なんだ。

街を指し、街道を歩いている途中でケンタロウという日本出身の板前を拾った。

はぐれ召喚師が問題を起こしてどうかこうとか。

ボコられていたのを助けた。

当然だが男である。

違う、そうじゃないんだ。

拾うなら普通はヒロイン展開だろ。

おかしい、こんの絶対おかしい。

まったりさもんじゃないと2

1—1

—1

このリインバウムという世界で生活してわかったことは、予想以上に殺伐としていることだ。

召喚術という、リインバウムと接している4つの世界の何れから住人を召喚獣として呼び寄せる技術がある。

その召喚術で呼び出した召喚獣を、奴隷にしたりするのだ。

契約の際に、召喚側が凄まじく有利な条件を結べるらしい。

召喚獣は強力な者が多く、召喚術が扱える召喚師はドヤ顔である。

やべー。

頭やべー。

ファンタジー世界Ⅱ 奴隷みたいな認識はあったが、目の前で「奴隷でげすよげへへ」みたいなノリを見せられても困る。

というか引く。

ただ、文明レベルはそこまで高くなく、島から流れていた俺でも街に出入り出来るので、そういった点は有り難い。

街道を歩くと盗賊とか出るけど。

中世か。

盗賊から金品を奪ったり、捕まえた野良の召喚師を街で憲兵に渡すとちよつとした小金になるので、完全にお金に見えてきた。

召喚術はあまり外に流れてはいけない技術らしく、野良召喚師は縛り首っぽい。

やべーわ。

つべーわ。

でもなんだかんだ楽園だったわ。

以前拾ったケンタロウだが、覚えが良くなって困る。

ビームは斬れ、銃弾は逸らすか避ける、刀剣は交差で碎けと教えているのに、全然出来る気配が無い。

もうあれよ、出来ないなら死ぬしかないレベル。

だって敵が強い上に殺す気で来てるし。

ビーム斬るのは溜め無しのエックスバスターで練習させてもらって来いよ。

K O S — M O S の兵器は駄目、弾速と集弾性が高すぎてケンタロウだと即死するか
ら。

銃弾避けはゾンビと戦ってたクリスとかジルに頼めばいいんじゃないかねえの。

ダンテは駄目、死ぬ。

刀剣類は大神さんとかゼンガー、ユーリに頼めば。

ゼロは駄目、手加減が下手だから真つ二にされる。

体術はリユウに教えて貰って。

ほら、波動拳?とかいうの体得しとけば便利そうじゃん、俺は無理だけど。

フランクさんは駄目、隙を見せると内臓抜かれるから。

あー、さっさとこんな訳解らん世界から出てリインバウムに帰りたいです。

— 2

俺らはリインバウムに居たはずなのだが、ケンタロウが召喚術を使ったら異次元に飛ばされたっばい。

どういふことなの……。

近くにいた零細探偵の人とその助手ポジションの人から話を聞くと、なんか宝である結界を張つてた石が盗まれて異世界同士が繋がつてどうとかこうとかなるほど、わからん。

集まつてる連中を見たら服とかバラバラで装備とか規格が滅茶苦茶だ、異世界出身と聞いて納得しつゝあるけど。

ああ、俺も異世界人になるのか。

斬新やでえ。

中にはPCゲームのキャラクターボディに乗り移つてるカイト少年とかいるし。

やべー。

この世界やべー。

他にも悪魔とか騎士、カメラマン、刑事、トロン様、ゴッドイーターとかいるらしい。

トロン様とゴッドイーターって何なんですか（困惑）

統一性は皆無で、なんか集まつてる的なサムシング。

雑う！

俺のヒロインが見つかるねるとん会場かと期待したが、異次元から来た人のほとんどは一緒に飛んできた相方がヒロインポジションらしい。

え、イスラかケンタロウなんですすがそれは。
ツライ。

キョンシーのレイレイがイスラを見て「幽霊とか、チョー怖いから！」と主張。
おめーもチャイニーズゴーストだよ。

どうでもいいけど姉のリンリンってなんで頭に伊達巻乗せてんの？

そして、長く苦しい戦いが終わった……。

だって語るようなヤマとかオチとか、そんなの無かったし。

マナ（魔力）とストラ（気）も問題なく使えたので、障害とかは俺とイスラに関して
は一切なかった。

ケンタロウは知らん。

最期まで、俺らサイドが敵に宝を返してと要求↓敵は嫌ですと拒否↓結局戦う運命な
のか……（苦惱）の繰り返しだった。

もう二度とデータドレインとか生身で喰らいたくないわ。

肉体が強化されてるゾンビの全力パンチもノーセンキュー。

ロボットに実弾ばかすか撃たれるとかファンタジーでも無理。

疲れた。

マジで疲れた。

結局、ヒロインはいなかった。

リンバウムの空気はうまい！

敵も弱い！

ゾンビ、悪魔などのグロい敵や無駄に硬いでかいロボットもない！

やっぱ楽園だ。

—— 3

ケンタロウが異次元での経験で慢心し、一人称をオレ様に変更。

え、ネタ？

冗談つしょ？

え、マジ？

詳しく聞くと、水を補給する際に泉に寄ったのだが、そこで出会った妖精に惚れたら

しい。

その妖精さんにはなんやかんや問題があつたので解決を手伝うとドヤ顔をかましたと言う話だ。

で、その時に頼れる男を演出するためにオレ様という一人称にしたとか。

お、おう？

しかしリアルでオレ様と聞くことになるとはなあ。

ヴォルデモート卿とかいけつゾロリくらいしか使わないと思つてた、両者とも本のキャラだけでも。

そのうちお辞儀するのだ！とか言い出すのだろうか。

うわあ、引くわ。

泉近くの町、トレイユで逗留することに決定。

野次馬的な意味もある。

が、どうも問題を起こしているのが無色の派閥っぽい。

イスラ的に見逃せない案件らしいので留まることにした。

ある意味でイスラのために留まる感じになつたので、イスラがにやにやしていた。

うぜー。

すつこいうぜー。

「ボクをヒロインにしてもいいんだよ」アピールされた。

お前、男じゃん……という俺の主張をやんわりと否定。

寝たきりの女の子だと危ないじゃん的な。

じゃあ、女なのかと期待するとそれもやんわりと否定された。

どつちなんですか（激おこ）

全裸になれよオラア！と言ってみるが、レヴィノス家は結婚するまで清い身体でどうこう。

性別がわからないと結婚までいけないじゃん、何言ってるんだコイツ……。

無理やり脱がせてみようとしたら、ケンタロウと見知らぬ青年にその場を見られた。

……お、おう。

魔力砲で、記憶が飛ぶまで何度も二人の頭部を撃った。

当然だが、宿屋で魔力砲なんて派手なモノを使ったため、町の召喚師が呼ばれる事態に発展した。

ナイアという女性だ。

流石に悪いので、ケンタロウに誠心誠意謝らせておく。

あと一緒に来たテイラー青年にも。

三人を放つて俺とイスラは昼食に出かけることにした。
今日も平和だ飯が美味い。

— 4

数日ほど過ごして、ケンタロウの恋の人間関係が解り始めてきた。

ケンタロウ↓妖精さん

テイラー↓妖精さん

妖精さん↓樹木や草花

うーんこの妖精さん感。

マルルウを思い出す。

ちよつと寂しくなった……。

テイラーは金の派閥の召喚師で、昔から妖精さんと知り合いらしい。

幼馴染の初恋は実らないってやつだな。

ケンタロウは町の近くにふらっと立ち寄って一目ぼれし、ワイルドさと出来る男をア
ピール。

ガサツな男は好かれないんだよなあ。

……あれ、もしやこれって俺のヒロインじゃね！と天啓が思いつく。

イスラに後頭部を叩かれた、冗談である。

ちなみにこの前ケンタロウとテイラーが問題を起こしたときに現れたナイアは蒼の
派閥だ。

金の派閥が召喚術でお金を稼ぐのが好きな集団。

蒼の派閥が召喚術の勉強するのが好きな集団。

仲はそんなに良くないような雰囲気。

— 5

妖精パワーに引き寄せられた無色の派閥が押し寄せる！

ちなみに紅き手袋という暗殺集団を下部組織に持つるので人数も多い。

面倒な連中である。

町の外に出ると、結構な頻度でエンカウントする。
やべー。

この世界やべー。

暗殺者が野生のポケモン並みに出てくる。

あ、野生のポケモンは言い過ぎた。

間引きしてるから、もうちよつと少ない。

きらめくパンジーさんくらいエンカウントする。

ドヤ顔で出陣してきたオルドレイクが、無色の派閥は古き妖精さんパワーの半端ない出力を利用して世界征服を企んでいると語っていた。

お、おう。

あー、うん。

そっかあ、世界征服かあ。

叶うといいね（遠い目）

なぜ無色の派閥に妖精さんの居場所がバレたのか、その謎はテイラーが派閥に提出したデータにあつたらしい。

トレイユの町付近のデータを改ざんして妖精さんを隠していたが、わかる人物には明らかにこの町の近くにいると主張しているような感じになっていたとかどうとか。

それで派閥にいる無色と繋がっている人物が横流し、的な。

あちやー、やっちまったな。

テイラーの初恋は、気づかない内に犯していた裏切りで幕を閉じたようだ。
切ない。

オールドレイクをズバツと切り捨てて、重傷を負わせる。

魔剣の小太刀もさり気無くアピール。

小太刀を使うと俺もカッコいい感じの雰囲気か漂うのだ。

異次元でアウラから貫つた赤いマフラーが、真っ白に染まって風も無いのにはためく。

赤い魔力も渦巻いてポストぽい空気も出る。

どう？

かっこいいべ？

島の魔剣と同じく魔力を引き出すことが可能な魔剣だ、オルドレイクは欲しいっしょ。

このまま旅に出ることにした。

所々で魔剣を使つて存在感を醸しだしつつ遠くへ行けば良さそうでしょ。

これなら妖精さんへの攻撃も減るんじゃないか、知らんけど。

そこら辺はケンタロウが頑張るから関係ないね。

別れる直前、ケンタロウが手合せを申し込んできた。

妖精さんの加護を纏った魔剣を手に入れたらしいが、俺も魔剣を使っているので合つてないような物である。

まあ、最後だしね。

下剋上のチャンス을 くれてやろうじゃないか（上から目線）

右に順手で魔力刃、左は逆手で魔剣を構える。

最近は容量に余裕があるので気と魔力を同時に体内に留めても問題ないのだ、魔力と気が潤沢で体術も召喚術も自信がある。

右は体内の魔力のほとんどを、1mほどの刃に込めているので洒落にならないレベルで頑強。

左手はイスラと斬った張ったやったら神経を痛めたらしく、力が入るが指先が上手く動かせないので防御用に魔剣を持ってみた。

魔剣が赤黒い魔力を纏っていて強そう。

俺と魔力パスが繋がっているイスラを介することで、適格者のように魔力を引きだせているらしい。

ストラを纏いつつ、全力で魔力刃を振り降ろす。

やっぱ魔剣の類は硬え。

非殺傷設定なので、普通の鉄鋼で打った剣なら無視して肉体を切れたのだが、魔剣は面倒である。

5戦ほど打ち合ったら、ケンタロウは腕が痺れて来たのか動きに精彩を欠き始めた。ケンタロウからの反撃も、防御した魔剣が微動だにしない。

地力が違い過ぎてごめんね☆

非殺傷の魔力刃で滅多切りにした。

まあ、気絶から起きたらすぐに動ける程度のダメージだ。

魔力は吹っ飛んでるから、しっかりとした休憩は必要だけど。

こんなに俺は強いのに、何故ヒロインがないのか（深刻な悩み）

ケンタロウなんて一目ぼれで速攻なのに。

テイラーから略奪する形だったけど。

愛とは奪い合いなのか……？

ケンタロウはアホで好きじゃなかったけど、最後まで妖精さんの加護が掛かった魔剣を手放さなかったことだけは評価する。

妖精は優しくしたほうがいいに決まってるんだ。

— 7

結局、俺は町を出ても妖精さんと会うことは無かった。

悲しい。

負の感情を纏っていると妖精は会いたがらないと言う話だ。

どうやって負の感情はなくすことが出来るのだろうか、俺だって妖精と仲良くしたい

……。

街道で襲い掛かってくる暗殺者や野良召喚師を真つ二つにしながら考えるが、特に答えは出そうに無かった。

— 8

死後の世界に観光に来た。

いや、好きで来たわけじゃないんだけどね。

野良召喚師の召喚術を途中でカットしたら、暴発して飛んで来てしまったのだ。

イスラとの魔力パスを認識できたので、他にも何か無いかと探したところ、召喚術を使用すると召喚石と術者に似たようなパスが出来ることがわかった。

なので、そこをカットしたら召喚術を潰せるかと思っただが。

魔力が暴発するとか予想してなかった。

召喚術者は魔力が逆流して苦しんでいたが知らん。

まあ、見た感じだと召喚獣用の門が開きすぎて、術者の限界を超えた感じだった。

蛇口捻って水出そうとした横からビームで水道管ごと吹っ飛ばした、という表現が一番わかりやすいかも。

水が魔力だ。

次からは気を付け……いや、面倒なときは即死攻撃として使っていこう。
塔を登ると転生できるらしい。

いや、登らないけど。

他に出口は無いかな。

イスラは登ってもいいんだよ、と言ってみる。

「ヒロインが途中離脱とか有り得ないでしょ」

誰がヒロインだよ。

— 9

魂が導かれる方向に歩いていたら、変な場所に迷い込んだ。

死後よりはマシだなと突き進んでいると、途中で白い髪の少年少女と出会い、「あれ、
なんでここに？」とか「コーラルは？」とよくわからないことを聞かれた。

まあ、剣を持つてるし、杖を構えていたので蹴散らしてきた。

俺に勝てる生物はいない（有頂天）

メイドさんに斬りかかったらこの世の終わりみたいな空気で「やっぱりイスラさんが

……！」とガチ泣きされた。

いや、イスラは関係ないでしょ。

俺は悪くない。

だって、あそこって戦わなければ生き残れないって感じの雰囲気だし。

さらに藍色の髪をした少年少女の召喚師グループともかち合った。

島以外で融機人を見るとは思わなかったぜ。

いや、ここは変な空間だけど。

オレンジのエプロンドレスを着た女性、赤き手袋に似た動きをしている人だったが、斬りかかったら泣きだされた。

真つ二つは怖いとかなんとか。

しないです（白目）

で、そのまま色々と蹴散らしてたらメイメイさん家に繋がってて、リンbaumに帰ってこれた的なサムシング。

無限回廊とやらは長く面倒な旅路だったぜ。

興味があるなら島についての話もできるとメイメイさんが提案してくれたが断った。

途中で逃げたし。

まあまあハッピーエンドだったらしいので詳しく聞かないでいいや。
不満とか溜まるし、何でそこにいないのかって寂しくなるじゃん。

——10

メイメイさんに追い出された。

結構まともな流れに乗れるらしい。

なるほど。

乗るしかない、このビッグウエーブに……！

気の赴くままにふらふらしてたら、街に訪れてたケンタロウと出会った。

こいつ老けたなあ……。

話を聞くと、妖精さんと結婚して息子と娘がいるとか。

なん……だと……。

俺が死後の世界を彷徨っている間に、こいつはイチャラブしてたのか。

うわあ、とげんなりする。

というか、凄い時間がスキップしまくっている。

異次元と死後でかなり時間が飛んでる。

話を聞くと、5歳の息子と娘をテイラーに任せたまま、病弱な末娘を連れて治療法を探しに旅に出て来たとか。

妖精さんについては泉を汚して通じ無いようにしたとかどうとか。

うわあ……。

いや、泉を使えなくしたのは子供が妖精の力が負担にならないようにしている意味もあるらしいが。

一応子供近くに母である妖精さんがいるからいい、のか……？

首を傾げていると、ドヤ顔で魔剣を使えば妖精さんと会話ができると言い出した。

5歳の双子、のけ者じゃん。

頭を抱えた。

オレ様の子たちだから大丈夫とケンタロウは慢心しているが、誰の子供だろうと子供は子供な訳で。

トレイユに居た蒼の派閥のナイアと機械兵士も一緒に旅しているのだが、特に疑問は無い様子。

やべー。

頭やべー。

え、リインバウムの常識なの？

修羅過ぎない？

イスラに助けを求めるように視線を向けると、難しい顔をしていた。

よく考えたらイスラも放置されてた！

助けを求める相手ではない！

家族一緒に行動したほうがいいんじゃないか、若い娘に旅は厳しいんじゃないかと説得してみたが、ケンタロウは聞く耳を持たない。

駄目だ、アホのままバカになってる（驚愕）

これに任されるとか、テイラーが可愛そうだ。

しかも初恋だった相手の子供を、幼いまま任されるとか、罰ゲームかな。

もしや托卵の亜種か？

トレイユ、行ってみるかなあ。

どっか落ち着ける場所が欲しかったし。

あとイスラのにやにや顔がうぜー。

すっごいうぜー。

— 1 1

アホの集団と別れ、山越えしてたら、エキサイトしている集団に出会った。

悪魔狩りらしい。

一般人が悪魔を狩るとか危険だから帰りなさいと伝えるも、興奮する集団には通じない。

うぜー、と非殺傷で切り捨てる。

もう寝てろ。

あー、野良召喚獣とかに襲われるよな、これ……。

どうしよっかなあ。

空にメギドを放つ。

よし、これで人が来るだろ。

悪魔っ子を見つけた。

やっぱ少女型の悪魔は萌えキャラやね！

気とか魔力が吸われるが、ぶつちやけ普段からイスラに勝手に魔力をパクられている身としては気にならない。

泣き叫ぶ少女を宥め賺して何故こんな山奥にいるのか聞いてみる。

・悪魔に滅ぼされた村の生き残りが母

・生んでくれた

・バレて迫害されたりした

・山狩りで村人によってひどい傷を負った

・母が看病してくれた

・が、悪魔の力が覚醒して母を殺してしまった

……。

重い！

俺には対処不可能なレベルで重い！

まあ、軽はずみなことも言えないので、少女の母親の墓を作っておこう。

埋めただけらしいので、それだと寂しいだろう。
花も飾ろう。

花は妖精が好むから、寂しくないように。

— 13

少女の住む山小屋に勝手に住み着いて一週間。

凶々しい所業である。

が、ここまですれば少女も少しは馴染んでくれたようで、ポムニツトという名前だと教えてくれた。

年齢は15歳。

島の経験が活きてきた。

年下の子供と接するなら根気が重要だ。

ちなみに常時ストラとマナが吸われているが、訓練の一環と考えるとむしろもつと負荷を掛けてもらいたくなるから不思議。

トレイユに行くけど、一緒に行くか誘う。

悪魔だから無理らしい。

つまり悪魔じゃなかったら大丈夫ということだ。

人間と召喚獣のハーフだから、人間っぽい感じになれるんじゃないかな。

頑張れば。

たぶん、きっと、おそらく。

機械兵士も変形してたし、出来るはず。

頑張れば。

たぶん。

——14

俺をドレインの標的にすれば、周りに被害が出ない程度には納まってきた。

ちなみにイスラは吸われると死ぬ(?)ので近寄れない。

思わぬ天敵である。

そろそろにちよつとした町に行けるかな、と思ったが、そう簡単ではないようだ。

この世界は悪魔をひどく恐れているらしい。

ロシアか何かか、リンバウムは。

悪魔っぽい見た目はやっぱダメっぽい。

青い肌と角、人間でいう白目が黒いのは流石に無理だとか。

どれか一つなら問題ないようだが。

マジかー。

こんなに可愛いのに駄目なのかー。

異文化交流の難しさを感じる。

萌えて感情が無いのが悪いわ、やっぱ。

うーん、と頑張って思考するが答えは出ない。

イスラに相談すると、可愛がりすぎている可能性を示唆された。

つまり、ポムニツトは悪魔の姿を嫌っているが、俺が可愛いと言うから、心の何処かで甘んじている的なことだろうか。

それは良くない。

出来ないなら出来ないでもいいが、出来る可能性を無くすのは良くないな。

ストラとマナを空にしたぞ！

今ドレインしたら俺は死ぬぞ！

だがポムニツトに抱き着く！

ふははは、柔らか……ぐわああっああああ～q、

——15

荒唐治のおかげで、ポムニツトもある程度まで力を抑えられるようになってきた。

悪魔っぽい見た目も、若干抑え気味だろうか。

ドレイン系をすると調子がよくなるっぽいので頻繁に吸わせてるのが良くないのかもしれん。

……久しぶりの女の子だから甘えさせるのも当然じゃね？

もみあげの長いアズリアと化してきたイスラが熱烈なボクボクアピールを披露しているが無視だ。

幽霊なのに髪が伸びるってどうなっとなねん。

最近、無色の派閥からの攻勢が弱まってきている。

気や魔力の感知で戦闘開始前の奇襲で倒せるけど、それでも少ない感じ。

ケンタロウが囮として……いや、そんな器用な男じゃないから無いわ。

襲撃犯どものエネルギーをポムニットが吸収してもいいけど、なんか体に悪そうだから止めておくように告げる。

お腹壊しそうじゃん。

接近されたら全力で吸収してもいいのだけど。

紅き手袋の連中は倒しても情報を吐かせようとすると毒薬とかで自殺するんだよなあ。

気合い入ってる。

その反面、無色の連中の気合いの無さだ。

無色の派閥に所属している召喚師を四人用意し、最初に見せしめとして一人を血塗れにし、二人に情報を吐かせ、情報にズレが生じることに見せしめの奴から獲れた体液とか肉をご馳走したら、口が滑る滑る。

こいつらの為に死んでいった暗殺者の勿体なさだよ。

まあ、俺を倒して成り上がりを目指している下っ端ばかりだから大した情報は得られないのだけど。

なんとか集めた情報を繋ぎ合わせ、オールドレイクの関心が別に向いているというのだけはわかっただけど。

ポムニツトが山小屋から旅立つ決意をした。

これは小さな一歩だが、ポムニツトには大きな一歩だ。

いや、マジで。

驚異の成長だわ。

諸手を上げて喜んでじゃうわ。

あのポムニツトが外に出る決意をするとか、涙すらこみ上げる。

道中で、軽やかな挨拶とともに山狩りにきた連中を非殺傷で気絶させる。

素人が武器とか農耕具を持って俺に敵うわけないじゃん。

ピクミン並みに集まった暗殺者集団を奇襲で倒せるレベルだから。

召喚術とか使ってたら死んでた、マナ枯渇で。

村人A—Zみたいなモブが使うわけないってわかってたけど。

そしてポムニツト、泣く。

流石の俺も挙動不審になる。

嗚咽を漏らすポムニツトから何故泣いたのか尋ね、ゆっくりと聞き取る。

端折るがポムニットがいるだけで、バイオレンスな展開になるかららしい。

ポムニットがいなければ村人も傷つかなかったな。

あー、なるほど。

斬新な考え方だ。

でもそういうのは良くないね。

俺なんてそんなの考えると、島が……ああ……いやいや、気にしてないです。

俺は大丈夫です。

むしろポムニットが優しいからみんな生きてられるとも考えられる。

ハイパー魔王みたいなのだったらあれよ、みんな死んでるよ。

ポムニットで良かった、居てくれて優しくてありがとうって話だ。

良い話だなー。

俺だったら本気出してエナジードレイン鍛えて迫害に来た連中を養分にしつつ近くの森を徐々に枯らし、農作物や畜産にダメージを与え、町が弱った辺りで乗り込んでなぶり殺しだから。

冗談だけ。

なんとか泣き止んだポムニットがとぼとぼと歩き始めた。

元氣少ないんだよなあ。

悪魔っ子とかぐう可愛なのに。

文化の違いってわからん。

萌えの追及で傍にいただけで、めっちゃ優しい人と認識される。

影で暗殺者とか真つ二つにしているからそういう純真なの、めっちゃツライ。

不意に、ポムニットがもつと人に好かれるのだったら良かったと言いつ出した。

天使とか、妖精とか。

あー、どうなんだろうか。

でも知らない人に好かれるのも疲れると思うんだよなあ。

天使だったら天使然と振る舞う必要があるし。

天使とのハーフで生まれたとしても、天使的な素養のある性格や能力が備わるわけでもない。

そもそも、俺が好いているんだからそれで良くないかと手を差し出す。

おずおずと手を握ってくれたので、解決する問題だと思いたい。

理想は悪魔の姿にも人間の姿にも変化できて、どっちも好きでいてくれると嬉しいのだけ。

悪魔に絶望しました自殺します、とか言われたら俺も死ぬ。

それに悪魔が良いんだよ、やっぱ。

レイレイとかモリガン、Teeiosが凄く可愛かったから（真顔）
イスラののやにやは無視である。

手を握ってこようとするけど、今のイスラはヴァルゼルド外殻に入ってるやん……。

——17

街を越え、山を越え、橋を、野を越えて。

ほどほどの期間をかけて宿場町トレイユへ到着。

襲撃者が少ないと、それはそれで気になる。

まあ、帝国でも片田舎俺ポジションだからしゃあないね。

ポムニツトもなんとか人間形態を修得できたので良しとしよう。

かなり時間を使ったが、その分丁寧に仕上がったはず。

ただ、ストラとマナを枯渇させて抱きしめるのはキツイ。

寿命が縮まった気がする。

いや、そもそも何故か老化すらしなくなってるんだけど。

町の中心に偉そうに聳え立つ豪邸にアポ無しで押しかける。
特に理由のない横暴な態度を取った二十そこらのガキが、ブロンクス邸を襲う！
勝手知つたるなんとやら、とは行かない。
色々と内部が変わっているのだ。

バン！と扉が開き、ちっこい女の子が登場。

吊り目で勝気そうだ。

テイラーの短気なところを受け継いだんじゃね。

「あんただれよ！」

「俺だ！」

「だからだれなのよ！」

「だから俺だよ！」

「だ・か・ら……」

挨拶もそこそこに「あ、リフオームした感じ？」と古株のメイドさんに話しかけながら、振る舞われたお茶を飲む。

うーん良い葉を使ってるな、お茶の味とか全くわからんけど。

お、息子もいるの。

ルシアン君って言うんだ。

その年できちんとした挨拶も出来るのか、よく頑張ったね！と褒める。

うん、可愛い。

マルルウを思い出した。

マルルウ……。

凹んでたら、「はなしききなさいよー」と叫び続けてた少女が慰めてくれた。

いい娘やでえ。

テイラーにはもったいないね。

リシエルという名前だと教えてくれた。

子供は元気なほど可愛いわ。

よく挨拶出来たねと頭をわしわしと撫でる。

髪が乱れたが知らん。

ケンタロウの子供について聞いたたら、姉弟が知っていると言う話だ。

マジか。

もうブロンクス邸に用はない。

金の派閥とか召喚獣を売り買いしすぎて、旅先でもトラブル起こしているからイスラが好きじゃないんだ。

メイドさんに礼を告げ、若い姉弟を連れ出す。

知らない人に付いて来るとかダメな姉弟だわー、肩車とかしちやうんだぜー、と知らない人の恐怖を叩きこむ。

ポムニツトがジツと見つめてくるんですが。

え、肩車されたい感じかと問うと物凄い勢いで首を横に振った。

あー、手を握りたいらしい。

何故か俺の腕をぶんぶんと振り回していたリシエルを持ち上げ、イスラが入っているヴァルゼルドヘッドに乗せる。

馬鹿と煙、子供は高い所が好きだようだ。

リシエルは適正があるからか、機械兵士も好きだとか。

ごめん、そいつ幽霊だからサプレスに近いんだ。

イスラが悪戯心を出したのか、幽霊っぽく登場したものだから、リシエルがショックで気絶した。

ついでに俺が肩車していたルシアンも絶叫を上げる。
事案発生つばいからやめーや。

「リシエルとルシアンを離せ！」とケンタロウの子供に斬りかかられた。
息子の方は武器を持つてるが、娘の方は召喚石を構えている。
な、なんやこれえゝqゝ

——19

とりあえず斬りかかられたので、デコピンでカウンター。
俺の身長が高いからといって飛び上がったのは悪手だったな。

小柄な体格を活かし、足を削ぐべきだった。

で、その最中に飛んできた召喚術も魔力を放出して消し飛ばす。

ルシアンいるから一番やってはいけない手だった。

ペナルティとして拳骨を落してみた。

うーん、痛そう。

俺ならされたくないな。

デコピンと拳骨で頭部に致命的なダメージを負った子供二人を脇に抱え、『忘れじの面影亭』へ向かう。

ケンタロウが雇われ店主をしていたらしい。

妖精さんの対処の際に、俺とイスラが逗留していた宿でもある。

ケンタロウとテイラーが魔力砲事件を起こしたので、町中の宿は使えなかつたのだ。

ポムニツトがりシエルをおんぶし、イスラがヴァルゼルドアーマーでルシアンを抱え、俺が双子を脇に挟むとか、知らない人が見たら事案だわ。

大丈夫だよな？

マジで大丈夫だよな？

警戒した結果、大丈夫だった。

日頃の行いか。

暴れる双子を宿に連れ込む。

文字だと卑猥だなあ。

二人の父親と知り合いだし、間接的に母親とも知り合いで、なんと末娘とも知り合いだと伝えると大人しくなった。

リシエルとルシアンは後ろで、ポムニツトが昨日焼いた菓子を食べた。

双子の男の子がライ、女の子がフェアという名前だと教えてくれた。

どちらも自分が兄（姉）だと主張。

言い争いは火花を散らし、何故か俺にどつちが兄（姉）か聞いてきた。

ごめん、さすがの俺でもそれはわからん。

その後、俺の名前を告げる。

「デシの人かー」「デシの人でしょ！」と叫ばれた。

デシの人ってなんやねん……。

詳しく聞くと、俺がケンタロウに教えを乞うた的な。

（弟子） じゃないです。

間違った知識を子供に教えると、変なところで恥をかくんだな。

なんか勉強になった。

そして何故か俺が恥ずかしい気持ちになった。

子供には真摯でいよう。

宿として機能しているのか不明だが、とりあえず長い期間俺とイスラ、ポムニツトが泊まる旨を伝えた。

機能してなくても寝ればいいや。

話を聞くと、食事処として一応は機能しているらしい。

5歳じゃん……。

6歳だよ！と怒られた。

俺からしたら5歳も6歳も変わらんがな。

リンバウムがやっぱり可笑しいと思ったがケンタロウは日本出身だ。

……うーん？

やっぱり人間として品性と倫理観はきちんと持っておきたい。

暗殺者とかぶつ殺しまくってるけど。

あれは放っておくと自爆テロとか毒撒きとかしてくるからなあ。

麻痺や石化放置とかも考えたが、回復したら襲ってくるからもう諦めた。

食事処として機能しているのか、なるほどなー。

俺は料理できないから食えればなんでもいい。

メニューを眺める。

文字は覚えてきたが、相変わらず食材名がよくわからん。

まあ、贅沢言えば和食が食べたいが、リンバウムでは望んでも……米がある！

6歳の双子店主に戦慄、ここは名店だな……。

やべー。

死ぬまで居たい。

米とかレア。

シルターン自治区か、そっちの方面の召喚獣の寄り合いでしかまともなのは食えないのだ。

——21

炊き立ての米と味噌汁、塩の焼き魚の最強コンボである。

漬け物まである。

凄い。

死んじゃう。

舌が喜んで死ぬ。

リンバウムに来て初めての死の予感である。

6歳でこれとか無敵すぎる。

ケンタロウは一緒にいるときに和食を作ってくれなかったからな。

いや、米とか味噌とか醤油とか手に入らなかつただけだが。

肉焼いて香草で味を調えるとか、そんな感じだったし。

死後の世界から飛んできた時もワイルドな食事だった。

この双子がいればもうアイツいらねえな。

販路の関係で値段は割高らしいが、金に困つてないから毎日食べるわ。

無色の派閥の召喚師や紅き手袋から剥いだ装備を売つたらかなりの額になるし。

金の派閥に属していないから俺は召喚石を売れないが、それ以外の暗器は後ろ暗い商

人や金の派閥が買い取ってくれる。

一度、試しに印を付けて売りに出したら、何度目かの襲撃の際、印付きの暗器を持っ

ている暗殺者がいた。

つまり、こいつらの金の循環に俺も混ざっている感じである。

奇襲ぶち込んで剥ぐだけだから、お金くれるような物だし。

時々、連絡係っぽいやつが暗殺者への資金を持つてる時もあるくらいだ。

俺の経済状況を考えたら、永遠に居て貰っても構わないんだよな。

ただ存在すると寝覚めが悪いし、イスラも滅ぼしたい的な感じなので、執拗に攻撃は続けるけど。

興味を持った少年少女に、箸の使い方をレクチャー。

ライとフェアはまあまあだったが、やはり甘い。

背筋を直し、脇を締め、添えるように箸を持つのが一番美しいのだ。

漬け物くっそ美味いとぼりぼり食ってたら、ティラーが飛び込んできた。

食事中だぞ、おっさん。

まあ俺やイスラのほうが年上だった気がしないでもないが。

歳を取らないと時間的な感覚が無くなるわ。

期間を決めずに居座ることを伝えると、何故か崩れ落ちた。

俺が悪いみたいなりアクションするのやめーや。

ブロンクス邸で飯を集ったことを覚えているのだろうか。

それとも失恋の甘酸っぱさとか、若き日のメモリアルを知人から子供に伝わるのが嫌だとか。

まあ、しょうがないね。

甘んじて受け入れろ。

本当は残酷なリインバウム、みたいな。

食後の茶を啜っていたら、項垂れたテイラーが、リシエルとルシアンを連れて帰っていった。

で、何故かライとフェアから弟子デシ呼ばれるんだけど。

お前らの弟子じゃないから。

体術とか召喚術を教えてほしいらしい。

むしろお前らが弟子じゃん（白目）

体術はギリギリいけるが、召喚術は一般的な知識（無色の派閥から絞った）くらいしか知らん。

そもそも派閥、もつと深く言うとか家系ごとの秘奥などもあるから召喚術は極められない。

国によっては召喚術を素人が修めてはいけないし、派閥の人間しか勉強できなかったりする。

ここはトレイユだし俺の知識程度なら問題ないだろう。

体術の前に基礎知識から教えておこう。

折角なので双子とポムニットを伴って庭に出る。

イスラはオートで付いて来た。

外で勉強とかすると、青空教室を思い出してめっちゃ凹みそうになる。

い、今は関係ないな。

危ない、ネガティブになるところだった。

生ある肉体にはストラと呼ばれるエネルギーが宿っている。

人や地域によってオドや気とも呼ばれるそれは、細胞が生み出すエネルギーや魂が人体を動かす際に出る余剰エネルギーと考えられている。

基本的に、体内で作られ流れているエネルギーなので、特殊な呼吸を練習すれば量を増やし任意で操ることができるようになる。

呼吸によってストラを溜めることを、ストラを練るなどと表現される。

このストラで何が出来るかという話だが、人体に備わっている機能を活性化したり、身体能力を引き上げることが可能だ。

沢山のストラを上手く練り、身体に纏うことで、外気功と呼ばれる鎧に利用できる。視認できるほど強く練ると、硬気功とも呼ばれるようになるが、明確な線引きは無いようだ。

ストラで人体の機能を活性化させ、毒や傷などを癒す方法は内気功と呼ばれる。

ポムニツトの吸収は、ストラを主に吸えるので、練る練習をしておくだけでかなり強くなれると思われる。

また、人体にはもう一つのエネルギーが宿っている。

魔力だ。

マナとも呼ばれるエネルギーで、リンバウムを包む界から供給され、空気中にも満ちており自然に生きるものが気付かない内に溜めこんでいる。

召喚術を使用した際、召喚獣の通り道である『門』を開くのに使われる。

また、召喚獣によっては魔力を多分に含んだ技を使うので、同じように魔力をぶつける魔抗と呼ばれる技術で防衛できる。

魔力もストラと同じような運用が可能だが、自ら生み出すストラよりは人体への適合が低い。

つまり、同じ量のエネルギーを使って内気功や外気功を行っても、魔力の効果はストラに及ばない。

そういう理由で、魔力に優れている者は召喚術を主に使っているようだ。サプレスの召喚獣が霊体を維持するのにも魔力が使われている、まあ、イスラを構成している物質だ。

魔力はどうも結合しにくいらしく、実体化には多くの魔力が必要なのだ。

肉体にはどちらのエネルギーも宿っているが、得意不得意は個々人であるので、気か魔力に重点を置いて鍛える人が多い。

俺の場合は身体能力をストラで底上げし、自身の魔力で魔力刃を構成し、魔剣の魔力で防御力も極まっている。

が、特別なので見本にはならんな。

天才ですまん。

魔力は召喚術以外にはしよぼいと思われているが、実はそんなことはない。

専用の柄さえあれば魔力刃は生やせるので、取り回しがかなり便利だ。

殺傷、非殺傷が切り替え可能なものかなりの利点。

魔力刃の殺傷、非殺傷設定は、刃を構成する魔力密度で調整できる。

無茶苦茶魔力を込めると、物質に近づくのだ。

地中深くで圧縮された大地のマナエネルギーがサモナイト石と呼ばれるのと同じだ。

魔力が薄ければ、人体への影響は減り、マナを散らすだけとなる。
が、特別で天才の俺にしか扱えない。

天賦ですまん。

どれくらい天賦の才かというと

・魔剣を抜剣しなくても供給されてる魔力と自身で溜めている魔力で手軽にイスラを
実体化させられる。

・暴走したポムニットにドレインされながら、イスラの実体化を維持できる。

・魔力刃を100mくらい伸ばし、暗殺者集団を森ごと伐採できる。

・武器ダメージがほぼゼロ。

・というか魔剣レベルの魔力じゃないと、防御が厚すぎて硬気功が切り裂けない。
みたい。

強すぎてすまん。

基礎知識や応用の話で首を傾げるライとフェアに苦笑いを浮かべてしまった。

そのうち才能に悩むこともあるかもしれん。

俺にはその気持ちかわからないので、相談には乗れないけど。

なんか色々ですまん。

双子の父親であるケンタロウが俺を弟子と言っていたらしいが、実は師匠的なポジシオンだと説明。

戸惑ったり、親の理想像が破壊されて泣くかと警戒が、特に気にした様子は無し。

父親はそういう人だから、と諦観すら漂わせていた。

6歳なのに。

何故俺はファンタジーな世界に来てまで世知辛い気分になせられているのか。

フェアが、ケンタロウも4属性の召喚術を使っていたので、俺も出来ることんじゃないかということに気付いたらしい。
できます。

シャインセイバーとタナトスくらいしか見せたことなかったので興味津津のようだ。きらきらとした目で、他のも見たいとねだるフェアには悪いが、あんまり使いたくない。

むしろ使えないと言うか。

ふくれっ面をしたフェアになんというか。

属性だとタナトスが一番使いやすいのは確かだが、他の属性はその、強すぎて使えないんだわ。

島での話だ。

魔力調整による攻撃力の低下などを理解してないときに無属性の石でタナトスを呼び、メギドラオンとマハムドオンでヤバい感じになった。

注ぐ魔力量によってスキルがメギド↓メギドラ↓メギドラオンと変化するというのを知ったのは結構後になってからだ。

で、それを反省して海岸で召喚術使うことにした。

・ロレイラル：ゼオライマーとか呼ばれるロボが出てきてピカツと光ったら海が消し飛んだ。アルデイラは泡吹いてた。封印した。

・シルターン：スピリット・オブ・ファイアと呼ばれる神が出てきて凄まじい炎で海を蒸発させた。キュウマが乱心した。封印した。

・サプレス：ラミエルという巨大な結晶型の何かが出現し、ビームを撃つて海や嵐を消し飛ばした。ファルゼンが女の子のような悲鳴を挙げた。封印した。

・メイトルパ：デイダラボッチと呼ばれる精霊が出てきて海の生物を皆殺しにした。海は平静のままだったが、魚や海藻、プランクトンなどの海洋生物が浮かんで海面に隙間なく死んでいる様は凄かった。ヤッフアが猛った。マルルウが泣いた。もちろん封印した。

みたいな？

トレイユで使ったら町が滅ぶかもな。

あー、フエアが泣きそうだ。

いや、冗談だけ。

無属性ならタナトス以外にダークプリンガーなら使えるし。

俺のダークプリンガーは魔力を配分することによって、我様のように空間から自由に射出できる。

今の俺なら魔力調整できるし、全然使えるつしよと思つてロレイラルの石にマナを込める。

グレートゼオライマーが召還可能になつた。

あーグレートかあ……。

あー、うん。

ランクアップしてるなあ……。

まあ、いけるいける。

俺もグレートな強さになってるし。

ロレイラルの石が輝いている様に、フェアが泣きだした。

いや、召喚しないから。

ちよつとした冗談だから。

手順踏まないと出てこないし。

俺の冗談に怒ったフェアが三日くらい口を聞いてくれなくなつた。

そういうの地味にきつい……。

凹んだら逆にフェアに謝られた。

いい子で嬉しいけど、6歳の少女に気を使われるおっさんという図式。情けなつ。

ライは体術メインなので、でこぴんで相手をする。

武器は体に合わせたほうが良いので、乾いた木から木刀を削りだす。

魔力刃を限界まで薄くして強度を高めると、透けた刃になる。

この状態だと切れ味は凄まじいので、木なんて抵抗を感じずに削げる。

武器としての耐久はほぼ0だから打ち合いには向かないけど、下手な剣など切り裂けるので殺傷能力は高い。

というか人間なら真つ二つ。

程なくして木刀を形成し終えたので、鞘に当たる部分を軽く鑢がけして布を巻いて完成。

サイズのには小太刀やナイフに近い。

刃有りはもう少し慣れてからだな。

イスラに武器を振るときの型などを教えさせてから、最後に軽く模擬戦。何故かライはぴょんぴょんと飛び跳ねたがるなあ。

空中は気や魔力を推進とするか、塵や空気を蹴らないと方向転換できない。

で、幼いライにそんな筋力も技術も、そして出力もない。

隙を曝すことになるかと告げ、でこぴん。

結構いい音が鳴り響いたが、気合はあるのか突撃してきた。気絶するか泣きが入るまで相手をしようじゃないか。

ただ、でこぴんし過ぎて脳にダメージが僅かでも入ると不味いので、俺も細い木の棒を使う。

旅立つ勇者の気分だ。

何度も打ち据え、木刀を弾く。

十回ほど繰り返し返すとライは体力の限界のようだった。

手も豆が出来ているし、血が出ているところもある。

今日は終わりだ。

まだ続けたがるライを宥める。

まあ、明日も明後日も相手するから大丈夫だ。

指切りで約束とか何時ぶりだろう……。

手を消毒し、薬を塗り、ライのストラを活性化させる。

こういうとき、回復系の召喚術に適正がないのが悲しい。

壊すことばかり上手でもなあ……。

あ、朝一からやるの？

フエアも？

約束したけど俺はもうちよつと寝たいというか……。

ああ、いや、やるから泣くなつてば。

泣いてない？

ああ、そう。

子供は朝から元気だな。

— 25 —

7歳を過ぎた元気な双子の挨拶に起こされ、布団に入ってきていたイスラとポムニツトを揺すつて起こす。

ぶつちやけベッドはそんなにでかくないから狭い。

隅に置かれているヴァルゼルドのアーマーを一目見てから布団を干し、二人を引き連れて一階の食堂に移動。

朝食を準備していた双子に挨拶し、朝ご飯を食べる。

その後は食材の仕入れなど、対応を見守る。

で、洗濯物を干したり、掃除したり、昼の準備をちよろつと手伝う。

まあ、昼の準備といっても食材の皮を剥いたり、骨を取ったりする程度だけ。

無駄に鍛えた身体能力を持ちければ、やり方さえ分かれば料理の下拵えも瞬殺だ。

一秒くらいで野菜一個の皮とか剥けるし、一太刀で魚を捌いて骨抜きまで終わらせられる。

双子からかつてない尊敬を受けた。

お、おう。

それが終わったらライとフェアに剣や杖の体術を見てから召喚術を少しずつ教えていく。

一時間ほどで集中力が切れるので一度終わりにし、休憩がてら宿がある丘から双子を肩に担いで町に降りる。

溜め池で遊んでいるブロンクス姉弟も引き連れて、町の中央通りに並ぶ商店街へと向かう。

幽霊として驚かしたからか、リシエルはイスラを警戒してポムニットに引つ付いたまままだ。

半透明なだけだから特に危険はないんだけど。

むしろ一般的な認識の危険度で言ったらポムニットは半魔だし、イスラより遥かに高い。

まあ、イスラが剣を使ったらポムニットなんて比喩物にならないくらい被害が出る。そんなリシエルとは代わって、弟のルシアンはイスラに懐いているのだが。

召喚術が霊界サプレスに適正があるせいだろうか。

騎士が好きだというし、イスラのそれっぽい空気に感化されているのかも。

イスラは外道な戦法を使ったりと奇を衒う動きもするが、基礎はとても綺麗だ。

寝たきりの期間を考えると、文字通り血反吐を吐きながら練習したのかもしれない。

ルシアン能力は召喚術師の跡取りとしては致命的だが、本当に望んでいるのなら騎士を目指すのもいいと思う。

叶う可能性のある夢を、挑む機会すらないのは悲しいことだから。

中央通りから少し逸れた位置にエラそうに巨大なブロンクス邸があるのだが、どうも違和感がある。

最近では4界の流れというのだろうか、マナの分布がわかるようになってきた。

何処でどの属性の召喚術を扱えば、濃度が濃いマナのバックアップを受けられるか、

マナの浪費が少ないか、威力が上がるかというのが分かる。

まあ、そんなわけでブロンクス邸だが、その4つの流れの中心に位置している。

俺やライ、フェアなら問題ないがブロンクス家は機界ロレイラルに適正があつたはずだ。

リシエルに聞くと、やはり少し召喚術を使うと息切れする気がするようだ。

テイラーに溜め池の奥にある空き地が機界の召喚術に適していると伝えておこう。

とはいえ、そんな簡単に家を移動させられるわけもないんだけどな。

うん？

心なしか、ブロンクス邸が移動している気がしないでもない。

良く見れば昨日よりも溜め池に近づいているような……。

あー、うん。

去年と比べたらかなり動いて……。

いや、いや、いや……。

なんだ見間違えか。

見間違えていいや。

中華風の家から漂っていた気配が徐々に大きくなっている気がするが、全部気のせいだ。

ライとフェアが店で出す日替わり定食用の、美味しそうな食材を商店街で直々に品定め。

俺には違いがわからん。

匂なんてさっぱりだ。

調味料とか意味不明でござる。

首を傾げる俺に、自慢げに説明してくれるライとフェアの話を聞きながら、店を見て回る。

ライとフェアの両親の知り合いで、宿で暮らしていると説明したら、商店の人たちが色々と親身にサービスしてくれるようになった。

ケンタロウの人柄によるサービスとかは特になかった、むしろやんちゃ坊主に対する呆れが感じられた。

あとはライとフェアが大変そうだからこっそりサービスの感じだ。

魚屋のおっちゃんが朝から元気だった。

ライとフェアが今日も可愛いとサービスしてくれた。

肉屋の兄ちゃんも元気である。

リシエルとルシアンは今日も可愛いだとサービスしてくれた。

八百屋のおばちゃんも元気だ。

ポムニツトが可愛い御嬢さんだと褒めてサービスしてくれた。

果物屋の姉ちゃんも元気だ。

イスラが別嬪さんで仲が良いねとサービスしてくれた。

今日も沢山サービスしてもらったぜ。

買い物した荷物をせっせと運ぶ。

小分けして軽い食材などはライやフェア、リシエル、ルシアンが運ぶのを手伝ってくれる。

大き目の袋は俺やイスラ、ポムニツトで。

ポムニツトは半魔だけあって、意外とパワフルだ。

宿屋に着いたら、食材を仕分けして冷蔵庫に保存。

昼は食事処として動き始めるので、昼食は賄い的な感じだ。

ちよつと早い昼食に舌鼓を打った後、俺とポムニツトはイスラに教師役をもらって勉強だ。

知識が足りな過ぎるからなあ、俺ら。

寝たきりで引きこもり、その後も短い月日を特殊部隊で過ごしたために世情に疎いイ

スラに劣るレベル。

世間知らずでごめん！

何も知らなくてもいいかと思つたが、イスラが何時もの笑みをひっこめて真顔で勉強したほうがいいと力説してきた。

勉強しないとケンタロウになると言われて、マジでやべーなつて思つた。

後は力があるのに頭は無いと、化け物になるとも。

やべー。

そこら辺は気を付ける様にしよう。

算数代わりに、ポムニットに店の支出を計算させたりする。

朝の仕入れと買い物で使つた金などだ。

詰まつたらヒントや解き方を横から教える。

イスラは俺が計算できることに驚いてた。

え、俺つてそんなに馬鹿に見えんの？

勉強も一区切りついたので、リシエルとルシアンを邸宅まで送り、駄弁つてた店の常連たちと茶を啜る。

下拵えを手伝つていたところを見られているので、曲芸師あたりだと思われているよ

うだ。

実は無職なんだよなあ。

テキトーにロレイラルの機械部品とか買ったたり拾ったりして、なんか組んで売るかな。

魔力刃は通常時は刃の無い包丁として使えるのだが、そんな出力を出せる一般人がいるわけもない。

簡易的な玩具でも作ろうかな。

ちよんども子供も多い環境だし。

食事処の営業時間も終わり、片づけを手伝った後にライとフェアが基礎的な勉強を始めるので混ざる。

最初はテキストを読むだけだったが、イスラが纏めてくれた授業を食堂で受ける感じになった。

そんなに難しい内容を勉強するわけでもないので楽ではある。

一般的な知識は付いても、こっちの世界の倫理が付いているのかはわからん。

悪魔と言われても怯えないし、召喚術も未だに魔法的な認識なんだよなあ。

授業後は模擬戦だ。

まだ戦いという程でもない攻撃を流すだけだが、双子には楽しいらしい。

ライは剣、フェアは召喚術をメインに考えているらしいので杖だ。

召喚術を主に使っていくとしても動けるほうが良い。

無限回廊を降りてくるときに、様々な敵から動きは学んだので杖術もいける。

銃も使えるが、自分より遅い武器を使うのってどうよ。

いや、拳銃でも時差着弾や跳弾、銃弾撃ち落としなどトリッキーな戦い方もできるけど。

地を這うように迫るライを、ほとんどその場から動かずにやり過ごす。

ちびっこは低い位置から攻撃してくるが、非力で動きもまだまだ、足も遅い。

幾らでも対処できるというものだ。

ライが離れたところにフェアの召喚術による攻撃が飛んでくる。

意外とコンビネーションみたいなモノを考えているっぽい。

威力は弱いから、魔力量の差で俺に届く前に減衰するけど。

反則だと文句を言ってくるちびっこどもに、これが大人だとドヤ顔。

そして魔力でフェアを引っ張り、前線に引き出す。

痛くないと覚えないうっしょ（にっこり）

朝教えた基礎的な動きを見せつけながら双子をボコす。

強くてすまんな子供たち。

これも全部君たちが弱いのがいけないんだ。

もつと強くなることだな。

夕方くらいに切り上げる。

もう一戦とねだる双子に、腹減ったから終わりですと告げる。

双子の汗に濡れた髪をわしわしと撫で、店へと連行。

俺は汗もかかなかった。

もうちよつと成長したら、俺も10cmくらい動くかもしれない。

傷の治療をしてから、双子が汗でびちゃびちゃなのでライとともに風呂に突入。

フェアは女性用で同じようにポムニットに洗われているだろう。

風呂上りにライをマツサージ。

ポムニットが長風呂なので、つられてフェアも長い時間、ライが先だ。

筋肉をストラを掛けながら解す。

あまり負荷が掛かりすぎると成長に障害となるので、こういったケアは大事……だと

思う、たぶん。

マツサージを終えて元気になった双子が夕食の準備。

ポムニツトも混ぜる。

ボコして料理を作らせるとか俺って外道じゃないかとイスラに問う。

屈託のない笑顔で「あはは、今さらだね」と返事が。

オラ、俺の都合の良いことを言わないダメな口はこれかとイスラの柔らかい頬をぐにぐにする。

半透明の霊体状態だろうと俺に触れない物なんて無いんだよ。

ぐにぐにと強めに頬を引っ張っているのにイスラがちよつと喜んでる気がした。
なるほど、マゾか。

夕食は和食だ。

あー、嬉しい。

嬉しすぎて頬が緩む（真顔）

本当に美味しい物を食う時は、静かで真剣で黙々と箸が進むんだよ。

食後、実は俺も一つだけ料理が出来ると告げ、冷凍庫へ。

プリンだ。

伊東家の食卓で、三分で固める裏ワザを見て何故か作り方も覚えた伝説の一品だ。

揺れる魅惑のプリンボディに、普段は強がつてすまし顔の双子も「ほわあ……（お目

目キラキラよ。

ついでにポムニットとイスラの心も一緒に掴んでしまったのは想定外だったけど。

双子はデザートに興味を持ったようだ。

俺はマジでプリンしか知らんからなあ。

あとはアイスも行けるが、専用の道具がないと零下を維持したまま混ぜつつ凍らせるのがムズい。

うーん……本でも買ってきて作ってみるか。

あとはブロンクス邸の料理人に話を聞くのもいいかもしれん。

夕食で出た食器を洗い、布で拭いて乾かす。

歯を磨かせ、寝る前に双子が眠くなるまで話を聞く。

一日のほとんどを一緒にいるから話を聞かなくてもわかるけど、子供はそれでも一生懸命話す。

双子がうとうとし始めたら、起こさないようにゆっくりと寝室まで抱えて寝かせる。

双子が寝た後はポムニットの相手だ。

エナジードレインの調整と、悪魔と人間状態の練習だが。

もう2年近く練習しているので様になっているが、慢心するにはまだ早い。

ポムニットが身を守る手段にもなる、慎重になりすぎるくらいがいい。

よく頑張っているとポムニットの頭を撫でて褒める。

嬉しそうで可愛い。

何故かイスラも頭を差し出してきた。

え、撫でてほしい感じか。

いや、撫でるけど。

そして、眠くなってきたので俺も寝ることにする。

イスラとポムニットとはベッドを分けているのに、頻繁に朝にもぐり込まれているという。

静かに寝息を立てている双子も、時々だが潜り込んでいたりする。

敵意とかないし、傍にるのが自然なくらい気配に慣れているからから、さすがの俺も寝ていると感知できないんだよなあ。

そんな感じで穏やかな生活に心が洗われる気分だ。

俺が幸せならリンバウムの何処かで誰かが不幸でもそれで良いって考えにさせられてしまう。

いや、別にヒーローとかやってるわけじゃないからそれでいいんだけど。

壊れた機械兵士の通信パーツを取り出し、トランシーバーを組んでみた。

電脳によつて細かな周波数を変え、秘匿通信なども行う優れた通信機能を持っているのを目を付けたのだ。

が、作ってみたら単純なトランシーバーが限界だった。

範囲は、遮蔽物があつても問題なく、町の中心から滞在している宿くらいまで。

まあ、狭い町なら半分ほどカバーできる。

1セット作つてライとフェアに渡してみたが、ほとんど一緒に活動しているので意味なかつた。

結局、片割れをリシエルとルシアンに渡したようだ。

ちなみに原動力は機界のサモナイト石、スリープ時に空気中のマナを集めて充電する

ので半永久的に動く。

あまり機械兵士の部品は手に入らないので、数は全く作れないのが欠点か。露天で電腦が焼けて死んだ機械兵士が入った偶然による作品だった。

俺の技術だとゼロから組むには難しすぎる。

次の偶然に期待しよう。

バラした機械兵士のパーツを、買ってきた適当なパーツで可能なら直す。

骨格に相当する装甲や基礎は駄目になっている部分を切り裂き、無理やり繋ぎ、スピリット・オブ・ファイア（S・O・F）の熱で溶接。

火力が高すぎて、裏庭の地面に焦げ跡ができてしまった。

あとマナが食われる上に、サモナイト石も砂と化すので頻繁には行えない。

制御系は専用の施設が無いとほとんど弄れない。

出来たとしても、あまり傷ついていないアクチュエーターを手直しするくらいだ。センサーは無理。

情報の行き来を調べられないので完全にお手上げだ。

生体部品も多いから、田舎の宿屋で出来ることは全くない。

プログラム系である電腦など手も足も出ない。

激しい戦闘に晒されたのか、見事に焼き切れてしまっている。

施設があったとしてもリインバウムに電脳を弄れる施設が存在するとは思えない。いや、ラトリクスなら若干いけたけど、焼け切れているのは無理。

ロレイラルでも無理だろう。

折角なので、治した部品を町の入口で行商と混ぜて売ってみる。

当たり前だが、こんな田舎町でロレイラルの部品を求めている人なんて皆無。かなしい。

ちよつとしたネタでイスラと剣舞を披露したことがあったが、あれのほうが圧倒的に効率がいいという。

剣舞というか、当てないだけの模擬戦だったけど。

時々、興味を持った人が話を聞きに来るが、さっぱりである。

何に使うのかと聞かれても、機械兵士などのロボットの修理用としか言えない。

ただ、召喚術で呼び出した機械兵士が壊れたとしてもロレイラルで修理されるから、契約が失効して帰れなくなった機械やリインバウム産の機械にしか使えない。

改めて考えてみるとニツチすぎい。

暇をしていたら隣の行商の人が、シルターン自治区で仕入れたと言う扇子を見せてく

れた。

召喚の触媒にも使える、なかなかレアな一品だ。

よくよく観察すればうつすらとマナを纏っている。

素材に、サモナイト石のようなマナ結晶でも使ったのかもしれない。

魔力の乗りも、魔剣程では無いが、なかなか悪くないので買ってしまった。

……初めての行商は赤字である。

扇子を手回ししていると、声を掛けられた。

セクターさんという人だ。

リシエルとルシアンが通っている私塾をやっているとか。

うーん……？

マナの流れを見ると関節や足がちよつと悪そうだが、イスラと似た動きだ。

イスラは動物的で、セクターさんは機械的。

ストラの流れも歪で、機械兵士に近い。

アクチユエーターが欲しいらしい。

うーん？

ああ、まあ、うん。

捨て値でいいか、趣味だし。

恐縮しているセクターさんを眺めながら、私塾という魅力的な話に思いを馳せる。

私塾、行くか！

— 27

午前を私塾、昼に食事処、営業後に体術召喚術に切り替えた。

幼い少年少女に混ざって俺も授業を受けると言うシユールな光景。

いや、だってしょうがないじゃん。

俺ってほら、召喚獣的な感じだし、常識が無いからな。

まあ、文字の練習とかの日は、セクター先生からロレイラルの機械などについて教えて貰うんだが。

ラトリクスでも一応勉強していた俺に教えるとか、なかなか詳しい人だ。

セクター先生が、相談があると言って経年劣化している部品を持ってきた。

修理できるかどうか聞きたいようだ。

生体部品が多くを占めている。

どうだろうか。

ヴアルゼルドに残っている生体部品をそのまま組み込めるかどうかが問題だ。生体部品はブラックボックスばかりで、触るのも難しい。一度持って帰って見ないとわからないなあ。

ヴアルゼルドの生体部品がかつちり噛みあつて直すことができた。

が、その後、何故かセクター先生が俺の事を副教官殿と呼ぶようになった。

ええー……。

イスラが「なるほど、ライバルだね」とか呟いていた。

(ライバルじゃ) ないです。

——28

最近、無色の派閥が温すぎるとイスラが言い出した。
わかる。

島から出た後はケンタロウの経験を積ませるためにもこちらも積極的に狙っていたが、異次元とか死後の世界とかでインターバルを挟むことがあった。

そういうときはオルドレイクが元気に暗躍しているのだ。

よく考えたら今も無色の派閥にとって長期インターバルで準備期間だ。

別に世界征服とか好きにしてもらってもいいが、オルドレイクが上機嫌なのは腹立つ。

ちよつと探ってみる。

なんか情報寄せとばかりに、外道召喚術師や野盗などを襲撃する。

サモナイト石や金が溜まる溜まる。

すでに契約してある召喚石は盗難届が出ている物もあるので返還する必要があるが、ライやフェアのお土産になるだろう。

トレイユのみならず遠出して情報を収集した結果、魅魔の宝玉というマジックアイテムが、無色の派閥に盗まれたらしい。

これだな。

動いているのがオルドレイクの派閥っぽいし。

オルドレイクに失墜してほしい他の派閥が、情報を持った雑魚を寄せすから楽にわかった。

むしろ情報を提供するならもつと早くして欲しかったわ。

テイラーに盗難届が出ていた召喚石を託す。

これで対抗している家や蒼の派閥に貸しを作ってもええんやで、みたいな頭を抱えていた。

まあ、結構な量があるからな。

門外不出の秘奥とか言ってるクセに、管理が雑すぎい。

頭を抱えていたのはそれだけじゃないらしい。

金の派閥の議員であるマーン家の石が多いとか。

あー……。

最近、金の派閥っていざこざ多いけど、もしかしてちゃんと機能してない感じか。

サモナイト石をころころと弄びながら聞いてみる。

青褪めたテイラーが、総帥はかなりまともだから大丈夫だと必死に主張。

まあ、いいけどね。

今のところリシエルが所属する可能性が高いのだから、そういつたところにも気を配ったほうがいいとは思うけど。

自分の家だけ大丈夫でも、気付いたら敵ばかりとかだったら笑えないし。

疲れ切った様子のテイラーに用事があってサイジエントに行く旨を伝える。

なんか泣きそうな顔になった。

滅ぼしにはいかないから。

テイラーに、サイジエントでの用とは何かと必死に問われた。

何ってほら、殺す的な？

いや、滅ぼさないから。

君から見た俺ってどういうキャラなの（白目）

— 29

テイラーが、シルターン自治区に行くから一緒に行こうと誘ってきた。

露骨な狙いの逸らし方だ。

だが、いいだろう。

乗ってやろうじゃないか。

ライとフェアがブロンクス家と一緒にシルターン自治区に行くのを見送る。

後で俺も合流するから、あまり迷惑かけてはいけないよと双子に伝える。

元気な返事に笑みを浮かべる、いい子たちだ。

俺はサイジエント行ってくるね。

テイラーが頭を抱えているが、途中まで一緒に来たじゃん。シルターン自治区（のほうに）一緒に行く的な。

サイジエントは聖王国の西の端らしいが走ればすぐだろ。

イスラは魔力パスがあるからしようがないが、何故かポムニツトも付いてきた。テイラーに頼まれたらしい。

いや、自治区で遊んできていいのに。

ポムニツトは意味もなくやる気十分だ。

うーん……。

まあ、いいか。

さあ、楽しくもないマラソン開始である。

— 30

結構飛ばしたつもりだが、悪魔形態のポムニツトも必死に着いてきていた。

イスラは飛んでたので反則で罰ゲーム、と頬をぐにる。

だから何故嬉しそうなんだ。

途中、山間に村があったのでそこで宿を借りるために寄ってみた。

旅用の宿は無く、空き家を借りられることになった。

有り難い話だ。

で、ポムニツトがこの村に悪魔がいることに気付いた。

医者に成り済ましているようだ。

半魔だったら黙っておくのだが、人間に憑依している感じだ。

翌日、出掛けに村人に告げてみる。

村人たちが激おこ。

「俺たちの先生を悪魔と呼ぶな」だとか。

共存している感じ……というわけでもなさそうだ。

「悪魔だとしても、それで殺されるなら本望だー」らしい。

面倒だな。

放置でいいか。

辺鄙な村に居着くモノ好きで親切な医者と、村人たちのハートフルストーリーで完結したらいいな。

石とか投げつけられるのに、無理に聞かせることでもないだろう。

ポムニットは複雑な表情を浮かべていた。

まあ、こういうこともあるさ。

珍しいけど。

昔からもつと人間らしかったら同じようになったらだろうかとかポムニットが呟いた。

そうかもしれないし、そうでもないかもしれない。

召喚獣とのハーフは15歳くらいで覚醒するのだ。

サプレス系はマナによる魂殻と肉体のバランスを取るのが特に難しく、暴走しやすいようだし。

結局どこかで破綻していただろう。

多くの失敗があつたが、今が良ければそれでいいのだと思う。

何か不満でもあるのだろうかと聞いてみる。

ポムニットは、今の生活が幸せですと答えた。

ただ、あの村が悪魔と気付かなくても友好的な関係を築けるようにと祈っていると。

サイジエントに近づいたのだが、マナの流れが澱んでいて、物凄く汚い。
なんだここ。

無色の派閥や紅き手袋の歓待を受けた。

世界征服を企む悪の組織は今日も元気だ。

正義の味方である俺はちよこつと顔を出して計画を一撃で転覆させればそれで終わりだが、悪役のオルドレイクは長い時間かけて準備しないとイケないわけだ。
だつて世界征服だし。

大変だ（他人事）

蒼の派閥と金の派閥も何故かサイジエントに攻め寄せてきた。

ちよつとなぎ倒してしまつたが、無色の派閥もなかなかの人数がいる。

大乱闘か。

うーん……放置で良いな。

サイジエントにはオルドレイクに用があつただけだし、色々な派閥の召喚師たちが町中に入つて来ても邪魔だ。

オルドレイクじゃん、いや、居ると思つて追いかけてきたけど。

別に世界征服とか子供みたいな夢を持つてもいいし、何をやつてもらつてもいいん

だけどね。

嫌いだから邪魔しにきた的な。

オールドレイク、今日は手加減なしだ。

— 32

何時もよりもあれだな、腕がいい連中が多い。

まあ、それだけなんだが。

ポムニツトは鬼のハーフの少女っぽいのと殴り合ってる。

止められるのは私しかいないんです！って熱血してた。

よくわからないけど頑張れ。

あー、オールドレイクはあれだ。

命を賭けたほうが良いと思う。

あと必死さが足りない似的なサムシング。

俺は賭けないよ。

それが純然なる差だし。

召喚術の腕はいいんだけど、まあ、それだけなわけで。

召喚した際に生じる『門』に干渉し、魔力を送って強制的に全開にする。
得意の召喚術で死ね。

……逃がした。

やつべ[^]q[^]

——33

自分の腕を切り捨て、魔力欠乏を無理やり起こして『門』自体を生成する魔力を断つて吸われるのを防ぐとかやるじゃん。

その後も群がってくるオルドレイクの手駒が邪魔で追い打ちに失敗した。

感知するにも、こちら辺には生物が多すぎる。

魔力も気も探れない。

ポムニツトがドレインをかなり使っているので流れが歪なのも手伝っている。

うーん、失敗した。

まあ、血の流れている方に行けば追い詰められるだろう。

途中でウイゼルと出会った。

凄く老けててビビった。

時の流れは残酷だな。

今回も会心の出来で魔剣を打てたらしい。

サモナイト石を利用したとか。

なるほどなー。

でも、そういうの今はどうでもいいです。

柄が余っているからくれるらしい。

うわ、柄だけか。

剣部分を阻害しないためなのか、魔力の伝導率がかなり高い。

魔力刃を扱うには便利かもしれん。

イスラに魔剣を返そうかと問う。

魔剣があれば供給魔力で自力でも実体化できるようになるだろうし。

普段使っている魔力刃を出力する柄でいいと言われた。

ぶつちやけるとそれって魔力を放出しやすくなっているただの柄だ。

特別な機能とか何もない。

作業機械たちのフロートユニットの超小型版で、浮くための魔力で刃を構成している

だけである。

それでもいいとか。

まあ、いいならいいけど。

じゃあ、俺は無駄に特別な柄を貰うかな。

血の跡を辿って城に入ると、高校生4人と4人の召喚師、白髪で紫の変態、満身創痕のオルドレイク。

話を聞く限り、4人の召喚師と白髪はオルドレイクの息子と娘たちのようだな。なるほど。

殺さないといけない連中が増えたな。

悠長に話を聞いているのもあれなので、さっさとぶつ殺すスタイル。

高校生は射程範囲より逸らせばいけるか。

詠唱、そして……

「メギドラオン」

途中で気付いた高校生が斬りかかってきやがった。

高校生もメギドラオンに飲まれそうだったので狙いを外すと、城が半壊しただけに留まった。

狙っていた連中は誰も死んでない。

うーん失敗失敗。

ウイゼルが打ったという魔剣、サモナイトソードを構えている高校生と刀を腰だめに構えている高校生が前衛のようだ。

後衛の召喚術を潰し、そのまま魔力を枯渇させて殺せばいいか。

オルドレイクを守る形になってるんだけど、この高校生はあれか、無色の派閥か。

それだと手加減なしだな。

邪魔だし、可哀そうだが殺すしかない。

召喚術の発動とともに、相手のパスに魔力を流す。

暴発してかなりの魔力が吹き荒れただけだった。

渴死してない。

あるえー？

よく見ると、サモナイトソードから物凄い膨大なマナが溢れ出て、それがオルドレイ

ク以外に供給されている。

よくわからんが、なるほどなー。

サモナイトソードのフザケタ出力に、特別な柄から生やした魔力刃ごと叩き砕かれて、場外にすつ飛ばされた。

——35

うわー。

何だあれ。

出力が半端なさすぎい。

サモナイトソードが凄すぎてヤバい。

魔力供給量がぶつ壊れてる。

小太刀型の魔剣キルスレスはオリジナルだから傷一つないが、魔力刃が粉碎された。

時間をかけて凝縮したマナの結晶であるサモナイト石で打ち出されてぶつ壊れた出力の魔力を纏って強化されているから、俺の魔力で刃を作っても負けるよね。

剣としての性能はキルスレスが圧倒的に高いが、供給源となると別物らしい。

どんなカラクリがあるのか知らないが、サモナイトソードは持ち主にキルスレスの遙か上の量の魔力を供給しているようだ。

こっちが蛇口を捻ってホースから一生懸命水を出しているのに、相手は水道管から持ってきている感じだ。

もしかしてサモナイトソードはエルゴから直接くみ上げているのかもしれない。

卑怯臭いな。

基礎から違うな。

ちよつと変えてみよう。

そもそもキルスレスが魔力を取り出している源は、遺跡を通して『共界線(クリプス)』をエルゴに繋げて不法に横取りしている感じだ。

障害が多すぎるな。

というか、魔剣が使えるとか遺跡は封印されていないのだろうか。

とりあえずこの供給源を変えよう。

サモナイトソードとやるにはラグが出すぎる。

あとは人間の肉体もちよつと弱い。

戦闘向きじゃない。

神経伝達も遅いし、筋力も足りない。

ストラなどで強化しようとも、足りない物は足りん。

肉体を魂の保護用にして、身体は霊体のように魂殻で構成すればいいのだ。

魔力だけだと脆いうえに実体化しても肉体以上の能力は出せないなので、気を練り込めばいけそう。

魔力は結晶化しにくいが圧縮すれば丈夫でしなやかさに欠け、気は結晶化しないが代謝アップなどで生体適合性が高いなら混ぜることで万能なエネルギーになるんじゃないか。

そもそも魔力を結晶化するときにはストラを練れば凄いいんじやね。

お、いけそうだ。

これも試そう。

よしよし、いい感じだ。

麻痺してた左手も動くし、生身と変わらないのに運動性と反射が半端ない。

思考と動作がダイレクトに繋がっている感じがする。

キルスレスは一度『共界線（クリプス）』を切断し、接続する場所を変えよう。

サモナイトソードはどうもリインバウムを囲む四界からマナを供給しているようだ。

ならば俺は死後の世界である「夢と現の界層」とやらの『共界線（クリプス）』を接続

するとしよう。

結局、全ての世界は繋がっていてマナは循環しているし、サモナイトソードとも張り合えるだろう。

無属性のサモナイト石を取り出し、タナトスを召喚。

魔力でタナトスが現れるはずの『門』をこじ開け、『共界線（クリプス）』を接続。

お、いけるいける。

最期に流入する魔力を利用して『門』をぶち壊す。

サモナイト石が魔力の枯渇で粉となったが、実に役立った。

嘗てないほどの膨大な魔力に気を練り込んで、結晶と液体の間のような状態に留める。

二種類のエネルギーの合一体を全力で注いで刀身を生成する。

身体から出力されるエネルギーが多すぎて、ちよつと不安定になりつつある。

それを調整する。

エネルギーの噴出する場所を両肩辺りにし、頭部付近でエネルギーの流動が折り返さ

れるようにする。

ついでバランスを保つためにスタビライザーを生成し、地面だと柔らかすぎるのでちよつと浮いてみる。

どう？と傍にいたイスラに聞いてみる。

竜っぽいと言われた。

うん？

あー。

なるほど。

確かに纏っている魂殻（シエル）の形状がいわゆる竜っぽくなってる。

イスラが「触った感じだと生ぬるい液体っぽいんだね」とも言っている。

へえ。

でもこれが膨大なエネルギーが安定する形状なんだよなあ。

あれかな。

極めると竜になるってやつ。

エネルギーの流出関係でブースターとなっている両肩後ろが辺りが羽のようだ。

腕を動かすと連動して動いて面白い。

バランスを保つためにスタビライザーを用意したら尻尾型になっている。防御や攻撃用に魔力が活発に流動する頭付近は流線型で竜の頭部の様だ。剣で試し切りすると、見かけ上は羽ばたいているが、斬撃が出る。なんかウケる。

まあ、スタンドとかに近いから竜の魂殻がどうという話は無いのだけど。

見た目の威圧感はたつぷりだね！

キルストレスのせいで魂殻が赤くなっている。

ベルタースオリジナルの特別な柄は「夢と現の界層」から供給される魔力で刃が形作られているのだが、死後の世界からマナを得ているせいか、刀身が透明である。

敵役っぽくない？

これ大丈夫なの？

イスラがかっこいいと言ってたのでおっけーだろ。

何故か嬉々としてイスラが自分の丸い首飾りとか巻いて来るんだけど。

魔剣の影響か、白くなっている俺の周りに丸いのが浮遊。

え、なんなのこれ。

確かにイスラが島で魔剣を使った時も浮遊してたけど。

さあ、第二ラウンドといこうか！と城に戻る。

オルドレイクが高笑いとともに、濁ったマナが籠ったマジックアイテムで召喚術を行使。

強大な存在がオルドレイクに憑依した気配がする。

先ほどの召喚術カットによって壊れた『門』から膨大な魔力が流れ込んできている。

ええー……。

サモナイトソードの持ち主、どうも流れ込んでいるマナに乗っている知識だと誓約者（リンカー）とやららしい。

まだ確定ではない上に未熟なようだ。

魔力の供給源はリインバウムおよびロレイラル、シルターン、メイトルパっばい。

守護者が協力しているようだ。

で、オルドレイクだが、誓約者の仲間っばい召喚者の話声を聞く限りだと魅魔の宝玉によって魔王を憑依させたようだ。

命かけてるし、気合入ってる。

魔力供給減はサプレス。

サプレスは守護者が欠員なのが原因っぽい。

魔王と合体したオルドレイクは上機嫌だ。

散々俺に邪魔されたのがイラついていたらしく、俺をぶつ殺すというマイクパフォー
マンス。
力を得られて調子に乗りまくりだ。

オルドレイクの息子Aである白髪が、目を見開いて「こ、こんな姿に……」みたいな
感じで恐れ慄いていた。

なんか呑気だな。

この後死ぬんだけどなあ。

というかオルドレイクとともに俺に殺されるのだが。

オルドレイクの息子に生まれたのを後悔……いや、生まれは選べないし、そういうの
は良くないな。

無色の派閥にいることを後悔しろ（結局殺す）

魔王（オルドレイク）は再生能力が半端ない。

魔力供給によって無駄に生命力豊かだ。

失敗した竜のパチモノみたいな見た目をしやがって。

神々しく赤く輝く俺を敬え。

誓約者組は、サモナイトソード持ち以外は動きが鈍い。

誓約者による供給魔力だけだとやはり弱いか。

それに、誓約者も力に慣れていないのかそれほど脅威でもない。

出力はアホみたいで、攻撃が当たると一発で魂殻が貫通されるが、技術不足でまず当たらん。

戦力を顧みた結果、優先度的には「誓約者↓オルドレイクチルドレン4人↓白髪↓魔王オルドレイク」だろうか。

オルドレイクはこれ以上能力が上がることはないので放置でも問題なし。

誓約者は出力が鬱陶しいし、万が一流れ込んだ知識でパワーアップでもされたら面倒だ。

刀を持っている高校生の後ろに回り込み、地面へと頭を叩き落とす。

床が砕け、階下に落下した。

おお、思ったよりも強いな。

頭部を潰す気持ちで叩き落としたが、床が崩れたのも手伝ったのか気絶しただけだった。

供給魔力もクッションになったか。

誓約者の動きがレベルアップした。

あー、そういうタイプか。

つまり最初にこれを落さないとダメ的なやつか。

面倒だな。

誓約者が召喚術のアクションなしに『門』を開いた。

え、なにそれ。

反則じゃね。

誓約者は誓約とか一切なしで召喚獣を呼べるとか。

エルゴに混ざっている知識が便利すぎてヤバイ。

膨大な魔力で、誓約者の『門』に干渉する。

俺が誓約（エンゲージ）してやるよ。

召喚には真の名前がどうかあるが、『門』から現れるときに魂殻を形成しているのだから、そこから名前を読めばいいのだ。

ポケモンだったら人の物を取ったら泥棒、と言われる案件だ。誓約は呪いに近い。

そして誓約者の召喚は解呪である。

一度に両方の負荷が、膨大な魔力で引き起こされたらどうなるのだろうか。召喚中に負荷がかかり過ぎると召喚獣は消し飛ばらしい。

リンバウム初の試みの可能性である。

あら、誓約者が送還したようだ。

どっちでもいいけど、送還のやり方は覚えたから召喚術は無しだ。

オルドレイクは時たま思い出したように魔力砲で削っておけば、再生するために停止する。

魔王のくせに雑魚か。

それに反して誓約者だ。

この空間で最もマナを持っているために、防御が硬過ぎる。

動きはあんまり良い所は無いのだけど、防御特化かというくらい硬い。

オルドレイクの息子はイスラが片づけてくれるらしい。

それなら話は変わる。

四色のサモナイト石を取り出し、同時に召喚。

『門』が開く。

神霊を呼び出すほどの巨大な『門』は、四界のマナの流れを生み出す。

ここで無限回廊の扉を召喚。

——強制転移『偽・無限回廊』

——39

魔王（笑）と誓約者を偽物の無限回廊に連れ込む。

俺が入ると門が閉じ、マナが全カットされた。

扉を開けて四界のマナの流れに乗って他の世界と繋がる無限回廊とは異なり、無理やり流れを作って扉で入り込んだこの空間は外界との繋がりが一切ない、完全なる閉鎖空間だ。

共界線（クリプス）の接続も断たれ、エルゴの介入も無し。

自身の魔力と気、体術のみが試される。

俺は魂殻が薄くなったが、継戦能力が余裕で残っている。

誓約者は……え、弱体化しすぎじゃね？

十分な魔力を溜め込んでおける容量が無いとか、この空間では最弱に転げ落ちるんですけど。

オールドレイクは魔王の自我に浸食されているのか、変な声で高笑いを上げている。おめーも自分の維持にマナを食われて自壊しているから。

可愛そうだけど、殺すしかない。

「くそおー」と叫びながら地面を叩く誓約者と「無様ア！」と狂ったように笑うオールドレイク。

え、お前ら仲間じゃない感じなの？

無色じゃないの？

じゃあ、死ぬのはオールドレイクだけだな。

——40

勝手に崩れていくオールドレイクを見ながら、誓約者ことハヤトと話す。

日本から召喚された高校生だとか。

勘違いで襲って申し訳ないと謝り、俺も目覚めたら人間がいないう島だったとか、大変

だったなとか、異世界あるあるを話す。

剣とかマジでビビったらしい。

俺は相手が野良召喚獣だったけど、最初は檻のないライオンと対峙した気分だったのを思い出した。

オールドレイク、どうするんですかと聞かれた。

無様に崩れていくオールドレイクはそのままマナ枯渇で自壊させ、残った魔王の核から魔力を絞って『門』を開く予定だ。

で、魔王の搾りかすとオールドレイクの残骸はこの空間で放置。

魔王は永い時間経過で復活するらしいので、これくらいすれば完封だろう。

ハヤトも無色の派閥に屈してたらここでオールドレイクと同棲だったなと茶化す。

青褪めて頬が引きつっていた。

人は易きに、水は低きに流れるものだ。

楽を覚える方に流れなくて偉かったな、よく頑張ったとハヤトを撫でた。

泣かれたあゝqゝ

サイジエントに戻る。

イスラが魔力足りなくなつてたどくつついてきた。

パスのこと忘れてた。

イスラが赤い目のハヤトに気づいて「え、ライバル？」とか言い出した。

(ライバルじゃ) ないです。

最近のお前なんなの(おこ)

オルドレイクチルドレンが生きてた。

あとポムニツトにぶん殴られて気絶しているハーフも。

高校生たちに、何でもするから殺さないで頼まれた。

「え? 今、何でもするつて……」とか言い出したイスラを叩く。

無色の派閥じゃないらしい。

じゃあ、殺さなくてもいいんじゃないか。

全員が「え?」みたいな顔をした。

あんまりふざけると殺すぞ。

誓約者が魔王じゃないと、エルゴからお墨付きを貰っていた。

魔王じゃないでしょ。

マナの流れを見たらわかるのに何言ってるの。

まあ、それはどうでもいい話だ。

歴史にある通り、ラインバウムは過去に他の世界から侵略を受けていた。

その侵略を防ぐためにエルゴの王という偉い人が、ラインバウムに結界をかけた。

で、召喚術の連発で結界が緩んでるから、改めてかけ直す。

その際に日本に戻るよってのがこの話の重要な点だ。

丁度いい話だな。

帰ったらいいと思うわ。

俺は帰らないけど。

イスラとポムニツトいるし、シルターン自治区に行く予定があるし、トレイユに戻るし、それに……まあ、やることがいっぱいあるわけだ。

そもそも人間やめたから戻るとヤバイ。

あっちってマナとかあんの？

そういうわけなので、高校生たちに帰るよう促す。

そして、各々が仲の良かった相棒と別れを惜しんで帰っていった。

何故かハヤトは残っているんですけどね！

何時の日か、俺を倒すのだと。

ははは、なるほど。

無理でしょ、だってハヤトはサモナイトソードが武器なのに剣術が下手だし（台無し感）

— 42

用事は終わった。

オルドレイクを元気に次元の彼方に葬って俺もイスラも大満足でサイジエントを後にした。

別れの見送りは互いに9割以上がおまえ誰だよ感があつたが、まあ、いいんじゃないかな。

どうでもいいんだけど、生き残つたバノツサとカノンとやらの義兄弟コンビは城の賠償とかするのかな。

やべー。

やっぱり悪い事つてするもんじゃないなあ。

来るときに宿を借りた村の辺りに近づいた。

村を探ってみる。

村人が減つて悪魔が強くなつていた。

うーん、共存とか餌？

放置でいいか。

態々行つてポムニットの夢を枯らすのも良くない。

ポムニットの夢へ見知らぬ命だ。

次に来たときになんやかんやあつたらズバつてすればいいつしよ。

— 43

シルターン自治区で、みんなが滞在している宿へ。

遅かったと頬を膨らませるリシエルとルシアンをポムニットとイスラに任せる。

テイラーに報告。

サイジエントで大乱闘してきて城とか町がぼろぼろだ、みたいな。

テイラーが失神した。

テイラーのネタキャラ化が激しい。

後は奥さんに任せる。

俺も伴侶が……欲しいのか？

まあ、いいや。

ライとフエアが泣きそうな顔をしていた。

あー……。

妖精のハーフか。

響界種（アロザイド）だっけ。

若干ながらも感情とか読み取れるのだろう。

切り殺しまくった後に悪魔を放置だし。

……改めて考えると邪悪すぎい。

言葉を濁していると、ライとフェアのダイナミックボデイプレスを喰らった。

あーもう顔面の汁でぐちゃぐちゃですよ双子さま。

いや、嬉しいんだけどね。

避けられるけど避けなかったのをイスラににやにやされた。

やめーや。

あとリシエルをいじるのも止めて差し上げろ。

あんまり経過した時間に頓着しない性分になったが、それでも少しの時間を一緒に過

ごした子供たちが良い子で俺は嬉しいよ。

まったりさもんじゃないと3

2—1

—1

予てからの計画通りシルターン自治区で数日ほど滞在することになった。

テイラーも復帰したようだ。

というか、もう出たとこ勝負だと腹を括ったとか。

無色のオルドレイク派閥、蒼の派閥、金の派閥が争っていただけだと言うのに面白いやつである。

サイジエントがある聖王国ってよく考えたら召喚術師のメツカか。

うーん。

お祭りだったのかな？みたいな。

そんな感じでテイラーも復活したので観光でもして来ようかと思ったのだが、双子がべったり張り付いて離れない。

おおう、めっちゃ可愛い。

もう大丈夫だ、しかも二人のおかげで左手も動くようになったとアピール。おー、と感嘆の声を挙げながら左手をぐにぐにと弄ばれる。

よし、と外へ。

お店の人が凄いい丁寧に見送ってくれた。

テイラーはかなりいい宿を選んだのかもしれない、ブルジョアだなあ。

ただ、従業員が総出っぽいのが、どうなの？

双子はやっぱり張り付いたままなんだよなあ。

いいけどね。

リシエルとルシアンは後ろでイスラとポムニットと遊んでいる。

イスラに遊ばれている、が正しいかも。

中華風と和風の融合を果たしたシルターン自治区を見て回る。

イスラがリシエルを持ち上げているが、半透明ではないのでリシエルも強気だ。

実体化しているのに魔力が減った気がしない。

俺の魔力量もアップしたからだろうかと思つたが、全然そんなことはなかった。

サプレスの守護者に就いたらしい、イスラが。

結界を張り直したのに欠番は不味いとかで、エルゴ的なパワーが任命してきたとかい

う話だ。

イスラはサプレスに行った事すら無いけどいいのだろうか。

まあいいか。

強ければいいんでしょ、どうせ。

メイトルパも空いてたはず（チラツ）

誓約者組が守護者代わりの竜を張つ倒して、刀を使っててすぐに気絶した、えーと……、まあ、高校生が守護者をやってたとか。

で、日本に帰ったから空いているのだ。

なるほどなー（チラツチラツ）

俺がなつてあげてもいいんだぜ？

空気中のメイトルパのmanaが喰って拒否された。

えー？

俺、マジで強いよ。

守護者になって大型の『門』を用意できればメイトルパに乗り込めるかも。

冗談のつもりだったがメイトルパ系のmanaが枯渇した。

何故かメイトルパと相性が悪いんだよなあ。

栄えている通りに出ると、多くの出店や商店で賑わっていた。活気があつて楽しくなる。

住人も元気なのか、見知らぬシルターン系の人たちとすれ違う度に、その人たちはテンションが上がりがりまくっていた。

焦がした醤油の匂いや団子の甘い匂いなどが漂っていて、色々と食べたくなつてくる。

食欲？

あるよ。

食わなくてもマナが在れば問題なさそうだが、人間の欲求もめっちゃある。

性欲もあります。

シルターン系で彼女できないかな。

和服とかチャイナドレスっぽいのか超可愛いよね。

まあ、子持ちだし、イスラとポムニットがいるから難しそうだけど。

ナンパどころじゃない（迫真）

歩くとシルターンの年寄りの方々に囲まれ、何故か拝まれる。

若い世代も何故かキラキラ目でほわあー状態。

おっさんにも「ほわあー（お目目キラキラ）」されるとか誰得だよ。首の据わってない幼児を抱えた親御さんが、子供の頭を撫でてほしいと列を成して
る。

なんやこれえ……。

次々と「龍神様ー！」と声をかけられる。

良くわからないが、ちよつと引き攣つた笑みとともに軽く手を振って返す。表情が引きつったのはあれだな、島を出ることになったときくらいである。

シルターン、やるじゃん（？）

俺の返礼に黄色い歓声が其処彼処から溢れる。

アイドルになった気分だ。

あ、でもこれはナンパできないな。

大人も子供も老人も、憧れの視線がヤバい。

夢を壊すのは、ちよつと、ねえ？

簡単に女の子を引つ掛けられそうだけど、それはなんか違う。

心が満たされない感じがする。

げんなりしている俺に、イスラが「竜っぽくなつたせいじゃないか」と告げてきた。

あー、至竜か……。

でもあれは魔力と気を解放しないと纏えないし、魔剣を使わない状態ならそもそも成ったら浪費が激しいから無意味だ。

もう天元突破してお経とか唱えてる老人に話を聞く。
て、天国のおばあさんに言葉をかけてほしい？

死後もいった事あるけどかなり良い所だったから楽しんで頑張つてね、みたいな。

老人が感極まったのか、号泣し始めた。

ええー……。

話を聞くのも困難とか……。

根気よく話しかけ、喜びの失神者を続出させながらなんとか情報を集めた。

シルターンのカリスマである龍気が駄々漏れだとか。

神々しくて雄々しいとかなんとか。

龍人もいるけど、まろみ出る至高感がヤバイようだ。

シルターンでもお目にかかれないう究極完全グレート龍神様らしい。

ハヤトが召還しようとした鬼神を消滅させようとしたから、どっちかというと敵対的な、いや、なんでもないです。

キラキラお目目は俺に効く……。

そういえばサイジエントにいたシルターンの守護者が目をキラキラさせてたのは……いや、勝手な予想はやめやめ。もうあれだ。

諦めた。

住人たちの成すが儘である。

サービスで魂殻まで纏っちゃう。

力強い赤と高貴な龍気の彩りが美しすぎるとかで、数少ない龍人連中が鼻血を吹いて倒れた。

お、おう……。

貴族的なポジションなのに、竜に対してHENTAI過ぎない？

食べ物のみならず、店頭の商品を渡される。

というか、献上に近い。

いや、気を遣わなくてもいいし。

お、お金払うよ。

ほら……。「このバーム通貨、我が家の家宝にします！」って叫んでなんで失神するねん（白目）

まあ、そんな感じでシルターンからの熱い歓迎に晒される。

ちやほやされる経験とか全く無かったから戸惑うけど嬉しい気もする。

和食と中華があるし、衣食住も馴染めるからシルターン自治区もいいなあ。

なんて呟くと、双子が必死にトレイユの良い所をアピールしてくる。

ちよつとした冗談なのに可愛い。

ケンタロウには勿体ないから、俺の子供になつてほしいくらいだ。

……いや、そんな壊れた玩具みたいに何度も首を上下されるとケンタロウが可愛そう

だからね。

「お母さんだよー」

イスラは母親じゃない、そもそも性別がわからん。

「ま……ママです、よ……」

恥かしいならポムニツトもやらなければいいのに。

双子も流れに乗りたくないのか、何故かアピールしてきた。

ライはまだ7歳だからなー、男だから結婚できないかなー。

フエアはまだ7歳だからなー、そのうちいい人見つかるから気が早すぎるかなー。

リシエルは父親よりも優れた召喚術師になりたいのかー、おう頑張れよー。

ルシアンは騎士になりたいのかー、夢をかなえようとすることに悪いことなんてない

さー。

— 2

土産をこんもりと貰って宿に戻る。

宿の人員が総出で迎えてくれた。

いや、そんなにしなくても良いんだけど。

他の宿泊客も、シルターン系だとすれ違おうと「ほわあー(じゅんつ)」みたいな感じだった。

シルターン以外の客からは「なんだあいつ、なんかやべー」みたいな感じで避けられた。

(ヤバイやつじゃ) ないです。

そろそろシルターン自治区で信仰されそうだと宿で寛いでいたテイラーに知らせる。頭を抱えていた。

当然だが、俺は悪くない。

シルターン自治区の住人も同様。

原因は……至竜に至ったのは誓約者どものせいだし、全部ハヤトが悪くない？ (真顔)

部屋で子供たちの相手をしていたら、外が騒がしくなった。

何かな、と窓から顔を出す。

複数もの豪華な神輿が、宿の外のすぐそばの通りを練り歩いていた。

あーうん。

うーん……。

……。

サービス精神旺盛で龍神様は大喜びだと小さく手を振る。

「ほわああああ!!」と盛り上がっていた。

あーうん。

た、楽しそうでいいね。

空中にマナで「仕事優先、迷惑をかけないように」という文字とともに終了時間も書く。

龍神様じゃないと悟って散ってくれないかと期待を込めて日本語も書いてみた。

外は「りゅ、龍語だああああ！（じよぼぼぼ）」となっていた。

……騒げればなんでも良いとかか？

外のお祭り騒ぎは指定した時間通りに解散した。

気づいたら静かになっていたが、ちよつと寂しいような、安心したような、そんな感じだ。

物凄い気合の入った夕食に舌鼓を打ち、温泉に突撃。

広い浴場には誰もいなかった。

龍神様と入るのは恐れ多いから残り湯に入りたい的なサムシングらしい。

訓練されたHENTAIすぎい！

風呂を出て、寝る準備。

ずつとべつたりだった双子もナチュラルに俺の布団に入ってきた。

両隣に敷いてある布団もリシエルやルシアンが入った。

姉弟は別室で寝る両親と寝なくていいのだろうか。

それを見てたイスラがにやにやと「ちえー」とか言いながら離れた布団へ入った。

ポムニツトも同じようだった。

まだ眠れそうにない様子の子供たちに話をせがまれた。

寝物語にケンタロウの修行の話でもしてみようか。

俺が召還された島から船で旅に出て、久しぶりに陸に降りたときに拾った。

マジで。

役に立たないと召喚術師にボコられていると何となく助けた。

で、召喚術師は無色の……あー、悪い召喚術師だったからボコって憲兵に引き渡した。

送還しようとしたが、複数の召喚術師による契約をされていたので戻れなくなった。

面倒なので憲兵に任せて放置しようとしたら、何故か着いてきた。

言葉遣いも悪いし態度も悪い、DQNの板前見習いじゃないかと……いや、なんでもない。

まあ、無理に着いて来るし、武器の使い方や教えると言ってきたので、同郷が目前で死なれても可哀そうだからイスラと二人で修行してやったわけよ。

ひたすら木刀でボコしてストラで回復、実戦経験を組ませるために気絶したまま無色……悪い召喚術師の集団と戦っているところに放置したり、寝ている最中に野良の召喚獣に襲われるようにしたり、筋力とストラを鍛えるために崖から落したり、マナ操作を覚えさせるために滝を割れるまで滝壺に放置したり、雪山でダッシュして遭難させた

り、召喚術を練習させたり、暴発させて異次元に行ったり、ビームを斬れるまでビームを放ったり、銃弾への対策を覚えるまで銃で撃つたり、体術を覚えるために無限コンボを喰らって波動拳に吹っ飛ばされたり、色々だ。

その後も悪い召喚術師と山間でゲリラ戦をやらせたり、素手で複数の野良召喚獣と戦わせ、トレイユで補給したらライとフェアの母親に一目ぼれし、母親を狙っていた悪い召喚術師を倒し、最後に下剋上を狙ってきたのでボコして別れた。

物覚えが悪くて死なないようになるまで長かったのも昨日のこのように……全然おぼえてねえ。

ライとフェアが可愛すぎてケンタロウの記憶がもうないです（目逸らし）

あの人にもそんな時代が……！と興味津津に双子も聞いていた、話が終わる頃には眠っていた。

【悲報】ケンタロウ。パパ、あの人扱い【残当】

父親の威厳とかもう枯渇してますな。

元からあったか不明だけど。

もう子供放置して何年目だよ（げんなり）

育児放棄ってレベルじゃない。

そもそも病気の末娘だけ連れて宛のない旅に出るとか自由すぎい……。

一人旅で医者を見つけたら迎えに行く感じでいいのに。

走ればすぐだろうし。

イスラとポムニットは俺の話も興味があるとか。

名もなき世界から来たというのは知っているが、そこでの生活はどんな感じだったかと。

うーん？

ファンタジー小説でよくある感じで日本を説明したので省略。

そこら辺は転移系のラノベで参照してね。

あとは曾祖母が好きで物凄く懐いていた。

絵を褒めてくれたから一生懸命描いた記憶がある。

まあ、もう亡くなってるけど。

一緒に絵も描かなくなつたなあ。

曾祖母に頼まれて同い年の従兄と過ごしていたが、高校を卒業とともに進路が別になつた。

で、島のランダム召喚装置でリインバウムに来た。

召喚されたのはいいけど、野良の召喚獣と出会ったわけで。

まあ、そこで必死に戦って勝ったのが良くなかった。

勝たないと死んでたかもしれないが、まあ、そこを考えるのは無しで。

島の集落に身を寄せることができたが、召喚獣しかいない島の集落だから人間はあまり扱いが良くなかった。

同郷の爺さんもいたが、集落でのポジションを持ってたし。

無職の俺は頑張つて出来ることを探し、気付いてしまったのだ。

召喚獣を一狩りいけばいいじゃん！みたいな。

そのまま勝てるから調子に乗ったんだな。

野良の召喚獣の群れに突撃した。

そして死に掛けた。

剣の腕はそんなに上手じゃなかった記憶がある。

ぼろぼろの身体でラトリクスというロレイラルの機械群が集まっている集落で治療してもらって、また突撃した。

もう回復と治療の繰り返し。

1日で5回くらい治療したけど、1回は必ず死に掛けた。

もうマジでヤバかった。

「力が入らん、身体も寒くなってきた……。あー、死んじやうなー。日本に帰れたかった……」って悟りの感じでは無い、これは血とか出てたり骨が折れてたり内臓が傷ついても余裕がある。

マジでヤバいのは感覚が無くなっていくのに感情が荒ぶって「嫌だ！まだ死にたくねえ！（必死）」みたいな感じになる。

この時は頭がい骨とか首や背骨が折れてたり罅が入っててヤバかった。

でもマジで死に掛けると火事場の馬鹿力というのだろうか、魂レベルで身体が必死になるのか動きが良くなる。

剣を使うのが下手だったので、死に掛けることで底上げするのだ。

生き汚さを力に変える的な。

そこから勝つと楽しくなるんだよ、俺はまだまだ強くなるって。

まあそれで100回くらいマジやべー死んじやうってレベルで戦ってたら、何故かずっと生きてて凄いい剣がうまくなった。

あと超強くなった。

100回くらい死に掛けるのって難しくて、後半は不眠不休で野良召喚獣とバトルしたり、海に潜ったり地中で戦ったりした。

定住できる場所は決まって無かったから、森で寝てたら不意打ちで死に掛けたりと

か。

飯が無いからテキストに拾い食いしたら毒ったりとか。

流星に死に過ぎてやべーって話になったのかクノンという看護用機械人形（フラージェン）が俺のバイタルを確認するようになって……クノン……。

ああ、いや、で、このままだと憎い人間と同じになるとかどうとかで、ラトリクスで暮らせるようになった。

その後に召喚術というものを見つけ、使ったら森の一部が消しとんだ。

強すぎたので、海で各属性の召喚術を、各集落の代表者とともに使った。

ら、海がマジで消し飛んだり、生物が死にまくったりした。

何故か各集落に寝床ができた。

あまり戦わなくてもいいし、召喚術はなるべく使わないようにと言われたので、各集落の仕事を手伝って過ごした。

果樹園の世話とかでルシヤナの妖精のマルルウ……あー……。

マルルウと仲良くなって、一緒に行動とかして、なんか海賊とか来て、（省略）、最後にアテイ先生とガチの殺し合いして島を出た的な。

何度考えても今は穏やかな生活で素敵だなあ。

イスラとポムニツトの表情が引きつってた。
わかる。

武器を使ったことがない心優しい俺が戦うツラさを悟ったんだろう？
でも慣れると楽しかったわ。

特に悩みとか無いし。

あつても「し、死ぬのか？俺が……!？」みたいな悩みだけだし。

集落に住む前も後も難は特になかった。

あ、でもせっかくだから慰めてもいいのよ？

——4

やっぱトレイユが落ち着くわ。

俺を一目見ようと旅して町に立ち寄るシルターン系の旅人に崇められるくらいだ。
最近シルターン自治区で貰った和服しか着てない。

召喚された時に来てた服は野良召喚獣を一狩りしまくってたときに消滅したし。

ちなみに一狩りとはちよつとした狩りであることとソロハンティングを掛けた、切なさと小粋さが混ざったジョークだ。

シルターン自治区で貰ったテキトーな和服に、ライとフェアが愛用しているやつと同じデザインの前掛けをし、イスラの腕飾りを付けるといふ装飾過多状態。

頭が空いてますね、とポムニツトが繕ったらしい、動物の編みぐるみが縫い込まれた帽子を乗せられた。

……異世界でもここまでファンキーな人物はいないっしょ（震え声）

これで赤く輝く魔剣と透明な魔剣を振り回すからリインバウムは恐ろしい。
楽園じゃなくなつたのも理解できるね！

ロレイラルの知識もグレードアップしたので、露天での売り物の品がパワーアップしたぞ！

相変わらず売れないけど。

むしろネタとして作った、俺の魔力を結晶化させて魔剣で彫像した「飛翼の牙」というアクセサリーのほうが売れる。

あんまり来られても困るから一日一個限定にしているのに、シルターン系の旅人が歓喜の声とともに買っていく。

周りの商人からシルターンで有名な超凄い曲芸師だと思われるようになった。
結局曲芸扱いである。

シルターン系の人は、世を忍ぶ仮の姿（お目目キラキラ）みたいに思っているようだ。
いえ、素です。

この世界に来て初めて知ったのだが、変な悪意を持っている相手よりも、純度100%の信頼を浴びせられる方がツライ。

変な話だが、手を振るのとか物を貰うのとか慣れてきた。

ちなみにシルターン系を除くとセクター先生固定状態。

むしろ注文リストを書いてもらって、直してお金貰ったほうが楽じゃないかと気付いた。

パーツがあれば直せそうな部品は、町の外から来た行商を待ったり、他の町に行ったときに漁る感じだ。

— 5

ポムニツトがテイラー邸で働くことにしたらしい。

頑張ります！と気合を入れていた。

えー？

超心配なんですけどー。

俺も働いてもいいのよ？（チラツ）とアピールしたら、テイラーが死にそうな顔で断ってきた。

どういうことやねん。

ポムニツトは半魔だという説明をしておく。

俺が3年近く付つきりで修行したのだ、特に不備は無いと思う。

テイラーも能力を見て給金をちゃんと払うと約束したので、大丈夫だろう。

ぶっちゃけ、お手伝いとしてよりも用心棒として雇ったほうが活躍する気がしないでもない。

ただ、位の高い召喚獣に襲われたり、悪魔の軍勢が侵略してきたり、大地を埋め尽くすジルコーダの群れが攻めてきたら制御は無理なんじゃないかなあ。

俺の話聞いたテイラーが「それは一体どんな状況なんだ……」とゲンナリしていた。

どんな状況って、ケンタロウと逗留していたときに、湖の辺りに耐寒装備のジルコーダみたいなのが溢れ返ったので、S・O・Fで全滅させたじゃん、あんな感じ。

目頭を揉んでいたテイラーが、あれのせいでマグマが流れて温まっている地形と繋がったのか、不凍湖になったらしい。

あー……。

何時でも魚が獲れて都合がいいじゃん（目逸らし）

そもそも町の召喚術師や軍から派遣される駐在官が、ちゃんと状況を把握していないのが悪い。

はい、論破。

まるで橘ありすのようなカンタンロンパだった。

シルターン自治区の人々のように「ほわあ（お目目キラキラ）」ってしてもいいんだぜ。

普通はバランスよく蒼と金の召喚術師が町にいるはずなのに、トレイユは金しかないのを思い出した。

ケンタロウが連れて行ってしまったかららしい。

代わりの人間は、召喚石を盗まれていた問題で欠員状態。

あらあら、まあまあ。

俺が代わりを探してきてやるよ！

野良召喚術師とかどうよ？

良くない？

ダメ？

わかってた！

テイラーが頭を抱える姿ってなんか面白いんだよな。

— 6

ライとフェアが9歳になった。

今年も身長がどのくらい伸びたかを店の裏にある柱に印をつけて確かめる。

6歳から刻んでいるので、4本目だ。

うーん、やっぱフェアのほうが身長は高いな。

まあ、男女の成長は12歳くらいから劇的に変わってくるから、ライも悔しがることはないわ。

フェアがどう変わるのか聞いてきたので、男の子は男らしく、女の子は女らしくなると伝える。

いや、結婚はできません。

イスラが「僕はできるよ！」とドヤ顔を披露。

そつすね。

テイラー邸の料理人に作ってもらった料理を食べながら考えてみる。
結婚かあ。

したいような、したくないような。

ヒロインというか、恋人は欲しいと思つてた。

が、難しい気がしないでもない。

俺が老けないのがネック感。

遊びで次々と取り換えるのもありなのだろうけど、そういうのがしたい訳じゃない。

ただ、結婚したいのかというと、そういう気持でもない。

結構長く生きているが、感覚は20歳くらいのままだ。

彼女と付き合う感じになつてしまふそうさ。

結婚つて長く一緒にいるのだろうし、なんか違うのだ。

こう、なんて言うか。

好意持たれてる、やつたぜ！みたいな。

シルターン系には好意持たれまくりだけど、ちよつと違う。

満たされたいというか。

心が満たされ……いや、今で十分か。

そもそも今の生活に不満が無いし、ライとフェアの面倒を見てた方が楽しいし。

解決してしまった。

お、このケーキうまいな。

ライが焼いたんだ。

すげーな。

うん？

食べる？

ほら。

— 7

聖王国の田舎の村に聖女がいるらしい。

どんな病気も奇跡で治せるとか。

気まぐれに露天を開いてたら教えてくれた。

未だにお礼を言うと失神されて困る。

ポムニツトも興味津津だった。

というか、ポムニツトだけが興味津津だった。

なんかサプレス感がある話だからな、気になるのだろう。

年齢とか聞くと、覚醒したのかかもしれないと思える。

あと噂話が好きなのも関連しているのだろう。

ポムニツトが長期の休みに入るらしい。

懐いていたりシエルが機嫌悪くなりそうだな。

レルム村とか凄い遠そうだけど、頑張つて走れば日数もそんなに掛からないはずだ。

試しに行つてみるかなあ。

—— 8

サイジエントに行くときに立ち寄った村やその周辺の村が無人になっていが、まあ、関係ないね。

レルム村は焼け跡になっていた。

なるほど、これが奇跡か。

覚醒した能力が暴走して村をキャンプファイアーにしたとか……？

噂だと完全に能力を掌握していたのに、おかしい話である。

森でムキムキの爺さんを拾った。

なんか元気少ない爺さんだ。

村の生き残りらしく、聖女の爺さんだったらしい。

ポムニツトもお目目キラキラである。

聖女について話を聞くと、警戒された。

ええー……。

ポムニツトがハーフなので、その聖女の奇跡を見てみたいと伝えてみた。

聖女、アメルという少女らしいが、を森で拾ったとか。

出生が不明なのか……。

アメルは何か旧王国の騎士に狙われているので、拾った森に向かうよう逃がしたとか。

うーん。

まあ、そこを目指してみようか。

爺さんは足が遅い。

歳か。

俺と10歳ちよつとくらい違うのか。

うーん？

10歳というトライとフェアが……生まれてないくらいだな。
なら仕方ない。

爺さんはアグラバインという名前だつてき。

— 9

アメルを拾った森に向かう途中の砦を抜けようとしたら、ゾンビに襲われた。

俺は何時の間にか異次元に来ていたらしい。

専門家のクリスとかジルを呼ぶべき。

もう俺はアグレシツブなムキムキのゾンビによる攻撃を喰らいたくないんだ。

全部シャインセイバーで突き刺してぶつ殺そうかと思つた矢先、銃声が聞こえてきた。

音の方に向かうと生存者を発見した。

名もなき世界のステイツから来たらしい。

アメリカ的な場所か、なるほどな。

離そうとしたらゾンビが群がってくる。

あー、もう、うぜえなとシャインセイバーを放ち、砦のゾンビを一掃。

生物っぽいマナは避けたから、死人は出ない。
すでに死んでいるゾンビは損壊しているだろうけど知らん。

このステイツ人、レナードという名前のようなのだ。

同じ年くらい。

びつくりしたが、相手も驚いていた。

離婚しているが妻子がいるので、元の世界に帰りたらしい。

俺は特にそういうの無いからいいや。

あ、親がいたか。

うーん……顔も思い出せないからどうでもいいか。

レナードに、帰る方法が一応あることを告げた。

高校生も帰ったし。

召喚術を頑張る必要があるでござる、的な話をしていたら複数人の人間が砦に入ってくる気配を感じた。

アグラ爺さんと少女が抱擁していた。

目当ての聖女のようなのだ。

ポムニツトは、その少女が幸せに暮らしていたことを知れて喜んでいた。

騎士に追われる不幸もあるが、まあ、人生とは上手くいかない物だ。

聖女に同行していた蒼の派閥の召喚師が、俺からめっちゃ距離を取るので傷ついた。なんかやべー感じがするとか。

かつて召喚の際に感じた「崇り神」の雰囲気濃いとかなんとか。

ええー……。

ハサハという少女の護衛獣なんてキラキラお目目なのに。

まあ、いいか。

蒼の派閥の女性に、トレイユに蒼の派閥が欠席している状態だと告げた。

後日、後輩を送りますとのことだ。

アグラ爺さんと聖女アメル再開にいい話だなーと感動して、トレイユに戻ることにする。

ポムニツトは最後まで付いて行きたがったが、ゆつくり戻ったら休みが終わるくらいなのだ。

仕事しているのだからダメでござる。

ああ、と帰り際にレナードに伝えることがあったのを思い出した。

召喚術師としての能力は、魂の輝きで高まるという話だ。

善悪関係なく魂が震えるような経験が、召喚術としての適正を高めるとも。何を成すのか、それが重要だ。

本当に帰りたかつたら話だ。

— 10

トレイユに帰ってから数日後、「よろしくお願いします（震え声）」みたいな感じの挨拶とともに、蒼の派閥から召喚師であるミントが派遣されてきた。

護衛獣のテテ族は、震えながらミントの前に立って必死に守ろうとしている。

いや、何もしないから（白目）

その先輩であるミモザや、先日まで聖女と一緒にいた連中は重い疲労を抱えたまま、何故かトレイユを訪ねて来た。

こんなのと一緒に来たミントが可愛そうで困る。

特にハサハの召喚師であるトリスという少女と、その兄のマグナという少年は死にそうな顔をしている。

訪ねて来た理由だが、魔王を討伐したいから手伝って欲しいなサムシングだった。んー、現状のラインバウムには魔王はいないんだけど。

面倒なので物凄く端折ると、マグナとトリスは調律者であるクレスメント一族の末裔らしい。

で、聖女アメルは天使アルミネの転生体。

先輩は融機人（ベイガー）でライルの一族の末裔らしい。

本題は、アメルを拾った森に辿り着いたら、クレスメントとライルの一族が生み出した最終鬼畜兵器があつて、何故か悪魔が蔓延る森にいた吟遊詩人に詳しく話してしまひ、実はそいつは魔王で最終鬼畜兵器ファイナルウェポン「ゲイル」がパクられた。

で、なんか色々あつて戦場はサプレスに移つて魔王を討つたが、魔王は何度も蘇つた。そこだとアルミネの転生体は同様に無限魔力、ライルの末裔は祖先の知識でハイパー召喚術を使えるので永遠に戦えるということで、足手まといのクレスメントの末裔を送り帰して、今に至るといふ。

うーん、特に問題は無さそうだ。

言い募るクレスメントに、そもそもサプレスの魔王メルギトスを討伐する利点が無いと教える。

リインバウムに侵攻すると主張しているという話だが、魔王というか悪魔のほとんどはリインバウムに侵攻すると言っている。

行つてしまえば、連中の本能だ。

そして、天使はそんな悪魔を滅ぼそうとしているので、互いにつぶし合っている。

召喚術でしか『門』は開かず、こつちに来ても誓約で縛られるので、魔王も悪魔も口だけ番長と化するのだ。

オールドレイクと混ざった魔王も、誓約を破れないから誓約者を殺すと言う無茶を起こしたくらい、正しい手順を踏んだ誓約は絶対だ。

だからこちらからサブレスに行く意味はない。

俺が行くとしたら、『門』を開く必要があるが、この『門』は当然でかい。

制約条件がサブレス側にかなり有利に緩むくらい巨大になる。

そんな欠点を抱えてまで向かう気は起きない。

そもそも、アルミネとライルでメルギトスを削ってくれたら、万が一こつちにメルギトスが乗り込もうとしても楽に討てる。

ライルは機械だから耐久限界を迎えるだろう、そうなったら単身のアルミネは滅ぼされる。

そうなるならリインバウムに侵略しようとするのかもしれないが、今度は天使の軍団と

戦争になる。

勝手に消耗したり消滅したりするだろう。

やっぱ二人を助けるのは無意味だなあ。

全部無視してサプレスに乗り込んだら、各々が好き勝手やっている魔王が連合を組む可能性が出てくる。

我が強いので普段は有り得ないが、俺という力の存在がそうさせる可能性が高い。

そうなると、メルギトスを滅ぼした後が面倒だ。

今までは個々で活動していた魔王が結託し、サプレスから召喚術師を組織的に操り始めたり、悪魔の捨て駒を投入されまくったりしたら、ゲリラ的に戦争の再開となる。

無理だと断言しよう。

「それでも……」と言い募るクレスメントに、至竜化してオドとマナの流れをぶつける。

青褪めて、呼吸も困難そうだ。

何か勘違いしているから伝えるけど、二人が弱いからいけないのだ。

力も、心も、弱かった。

だから失った。

何時だつて失くした物を取り戻すのは難しいんだ。
至竜化を解く。

兄妹は、圧力が解除されるとともに吐いた。

あーもう汚いな。

そもそもサプレスだと死ぬるかもわからん、こんなんで吐くならやめたほうがいい。
怖がつている証拠だ。

二人よりも、自分の身が大事だと理解している証だ。

宿で一晩過ごして考えてみなさい。

忘れて日々を過ごした方が、誰もが楽だ。

水の低きに就くが如し。

まあ、水は低きに、人は易きに流れるつて言うからな。

—— 1 1

翌日、シルターンのエルゴの守護者であるカイナとクレスマメント2人、護衛獣が2体
だけで来た。

カイナからは本気の巫女感が漂ってくる。
ガチってるなあ。

カイナはシルターンで巫女をしていて、向こうの龍神に守護者となるように送られてきたらしい。

クレスメントの主張は、自分たちで助けに行くから修行してくれ！みたいな感じだった。

行くのはクレスメントの2人とその護衛獣の2体。

マグナの護衛獣は悪魔だ、サプレスでは役に立つが裏切られたら後戻りができなくなると聞いてみる。

自分が本気で信じた相手に裏切られるのなら仕方ないとも。

メルギトスに騙されたのだが、と聞いたらあれは油断した自分が悪かった。

今度は本当の気持ちだ、ということらしい。

……まあ、いいんじゃないかな。

別に俺が鍛えなくても、生涯を賭ければ願いを果たせるかもしれない。

それだと遅いとか。

まあ、人間だった転生体と精密な融機人に耐えるには無理だろう。

そんなに時間を掛けたら自我が力に飲まれる。

ぶっちゃけ、俺の修行だと死ぬかもしれない。
というか死ぬ。

奇跡的に耐えられたら救える夢も見ることができけど。
それでいい、そうじゃないと意味が無いとか。

至竜化している俺の前にそれだけ吐けるならいいだろう。

昨日とは全然違う。

仲間や護衛獣との絆的なうんぬん。

あ、そういうのは要らないです。

まあいいか、「調律者（ロウラー）」なら死なないだろ。

一週間で願いを叶えられる可能性が見られる位置まで連れて行こうじゃないか。
そこまで行ったら後は自分次第だ。

生きているとわからないことが、死に近づいて初めてわかることがある。

何も無い苦しきこそが、活路である可能性もある。

力が無ければ、無理にでも強くなればいい。

心が弱ければ、壊してでも強くなればいい。

魂が曇るなら、歪に磨いて輝かせればいい。

——強制転移『偽・無限回廊』

「其処には、朽ち果てた愚かな魔王がいる。殺してみせろ。期限は一週間、次に扉が開くまでだ。酷い苦痛を味わうだろう。無力に苛まれるだろう。魂が摩耗する恐怖を憶えるだろう。それとも、最強の召喚師である『調律者』と謳われながら歴史の闇に飲まれた祖先と同じように、愛するアルミネとライルの信頼を裏切り、今から尻尾を巻いて逃げ出すか。クレスメントの末裔よ！」

—— 12

まあ、死なないのが魔王なんだけどね。

期待していた通り、両方生きていた。

マグナとトリス、2体の召喚獣によるマナで魔王が復活して、この一週間は延々と死闘を演じていたようだ。

テキトーに考えたが、期待通りの展開になって良かった。

修行のおかげでクレスメントの2人は自信を付けていたが、魔王で最弱の絞り粕だと教えると、またまたーみたいな反応をしていた。

軽いな、一か月くらいぶち込めば良かった。

カス魔王がこの一週間でマナを結構溜め込んだのか、俺に反応してうざかったのでデコピンで消滅させてマナリセット。

なんか2人は泣いてた。

久しぶりの太陽の光が目には染みえたか。

そんな感じでまあまあ極まっていたので、無限回廊経由でサブレスに向かわせた。

『門』を開いて乗り込むのは流石に刺激しそうだから穩便に行かせたのだ。

俺がサブレスから召喚した最上位天使の統括であるタブリスが道案内をするので、多分行けるんじゃないね。

天使側としては滅ぼしたい魔王に嫌がらせが出来ればいいという柔軟な発想の元で活動しているので、暴れているメルギトスに一泡吹かせる可能性のあるクレスメントは、大嫌いだが魔王よりはマシなので手伝うとか。

うーんこの自由に生きてる感。

魔王の残りカスとの戦闘で最低限の土壌は出来ているから、無限回廊を突破する頃には魔王に食らいつけるくらいには能力が付いている……と信じたい。

まあ、そんな訳でいつ帰ってくるかはわからんが、上手くいけばいつかは帰って来れるだろう。

帰る場所があるのに帰れないのは悲しいことだ、頑張つてほしいと思う。

話を伝えるとクレスマメントの仲間連中は安心したのか、安堵のため息を吐いていた。

自分で行くつて言い出して良かつたよ。

それでも俺に行かせようとしたり、他力本願が過ぎるようなら魔力経路を剥いで二度と魔力が宿らない身体にするところだった。

悪ければぶつ殺してた。

—— 13

巫女のカイナが、姉のケイナの記憶を戻してほしいと願つてきた。

魂を見た感じだと、向こうの龍神に記憶を奪われているな。

俺でも無い物は戻せない。

記憶を失つてでも、7歳のときにリインバウムに送られた妹に会いに来る姉の覚悟は

感動させられるものがある。

流石に龍神だと信頼されて何もできないと言うのも心苦しい。

カイナが持っているケイナとの思い出を結晶化させて取り出せることを告げる。

至竜が死ぬときに、子に託すのを応用すると出来る。

可愛い巫女さんにキラキラお目を向けられるとか、役得じゃね（真顔）

レナードも用があるようだ。

元の世界に帰られるかどうかという疑問に答えてほしいようだ。

全ての憂いを解決できたのなら、レナードは元の世界に帰ることは可能だ。

が、現状では不可能。

俺自身が送り帰す場合、まずレナードを縛る誓約から帰る世界を探知し、魔力に物を言わせて送還すればいい。

問題はレナードには帰ることが出来るほど魔力が無いので、俺が外部から常に力を与え続ける必要がある。

つまり、ラインバウムの結界に穴をあけ、ずっとそれを維持する必要があるのだ。

常時空いている穴から侵略者が更に広げ、戦争の幕開けである。

レナードの帰還で世界がやべー。

四界なら巨大な『門』を開くか、無限回廊を辿っていればいつかは帰ることが出来る。

もしくは結界に穴をあけ、再構成するだけ。ただ、名もなき世界は特別だ。

エルゴの影響がないので、結界を砕いて外側に行かなければならない。外側にマナは無いので、送還時は全て自分のマナで賄う必要がある。

まあ、色々な経験をして魂を磨き、召喚術適性を上げてマナを溜めなさい。

レナードがそれだけのマナを生み出せるようになれば、俺が誓約から方向性を読み取って帰還させることができる、約束する。

結界も修復しておくし。

クレスメントが行った修行は無理だ。

邪道すぎる。

そもそも調律者であるという血筋だったから行えたことだ。

努力と友情は、才能には勝てない。

諦めて頑張るしかないさ。

マナが増えれば老化も遅くなるし、頑張ってみなさい。

それでも駄目で絶望したら修行して死んだらいい。

— E x

空から何かが降ってきたので、つい掴んでしまった。

そんなわけでダチヨウサイズの卵を拾ったのだが、手に持ったら孵ってしまった。
ぴかーと光が灯って、中から緑色のゆるキャラが生まれた。

うーん？

うーん。

わからん。

至竜化して知識をエルゴから盗……貰って来よう。

なるほど、竜の子か。

「僕とエーセンの子だね」

違います。

凄い泣き喚いていたが、さつき至竜化したら大人しくなって、解除しても仲間だと思っただのか懐いてくれた。

昔のライとフェアを思い出すレベルでべったり。

今のライは照れるのかあまりくつついてこなくなつたし、フェアもちよつと距離を置くようになった。

チヨ一寂しかったので嬉しー。

名前を決めよう。

もう俺が親でしよ。

竜なら俺こそ親になるべき。

名前は……あ、コーラルにしよう。

なんか昔にそんな単語を聞いて、そのままだった。

俺の周りにそういう名前はいないし、なかなか可愛い響きなので有り難く貰つておこ
う。

珊瑚のようなピンクでコーラル色ってあるし。

つまり、そのくらい可愛いって意味だな（天啓）

ねえ、性別がわからないんだけど……？

イスラのせいで性別不明のまま竜の子と過ごしていたら、メイトルパのインディアンと出会った。

ムキムキである。

その露出なら普通は女だろ……。

初対面なのになかなか敵対的だ。

流石メイトルパ、俺の崇り神オーラを感じるらしい。

シルターンは龍神オーラが凄いと慕ってくれて可愛いし、サプレスもマナが心地いいと評判なのに、メイトルパはどうしてこうなったのか。

俺の子に用があるらしい。

ふうん？

理由を聞いてやるよ、俺は温厚になったんだ。

あと強くなったから余裕があるし。

手遅れになりそうなら皆殺しで解決するくらい余裕。

ケンタロウはスーパーヒーローになりたいらしいが、俺はデウス・エクス・マキナに
なりたいし、なりつつある（傲慢）

御子様を、先代の竜に託された？

嘘だな。

お前の魂、揺らいでいるぞ。

後ろ暗いことがあるのか、何もかもが嘘で竜を狙う密猟者か。

残念だが近づくことすら許さない。

槍か。

それを俺に向けるのか。

じゃあ、死ぬしかないな。

竜を知ってるなら強さもわかるだろ。

ギアン？

誰だ。

マフラーとか俺とキャラが被ってるんだけど。

原作：女神転生、他 きたりておがめ

地獄

インターネットで検索すれば簡単に見つかるような理由で死んだ。

あまりに呆気なくて、そういうものなのだと受け入れるしかなかった。

死を受け入れた俺がいるのは地獄、生前でも有名な死後の世界の一つだった。

地獄にいる理由だが、俺自身には特に無い。

生前の行いは良くも悪くも普通であり、俺に裁きを下した閻魔さんの言葉ではすぐにも転生の輪にぶち込まれるレベルだったらしい。

問題は転生後にあるのだとか。

転生して力を蓄えた俺は大罪のために扉を開こうとして世を混沌に導くらしい。

大罪を求めて世界を繋げてしまったこともある並列世界が存在するとか。

よくわからないことばかりだが、かなり問題視されているのがわかった。

それを踏まえると来世の俺は一体何者になるのか疑問が尽きない。

転生させると危険なので幽閉しておこうというのが地獄の方針のようだ。

無理矢理地獄にぶち込んでいたら反発して脱走された地獄があるというのも理由の一つだとか。

閉じ込められて反発とか、思春期か。

というか、地獄から脱出とかちよつと意味わかんないです。

そんなわけで、地獄でのニートライフが幕を開けた……!!

まあ、すぐに飽きたんだけどね。

見知らぬ人が鬼によって責め苦を負わされているのを見てもつまらんし。

地獄だからとでもいうのか拷問的な物品ならバリエーション豊富なのだが、娯楽が圧倒的に足りない。

一番まともな娯楽が釜茹で地獄の温泉とか魂が煮えたぎって苦しみしか感じない。

覇気のない亡者とともに血の池でクールダウンしなければ死んでいた。

次点で針山によるツボ押しマッサージ。

ただし全身に刺さっていたいので魂を変質させる必要があった。

これがマジで疲れる。

四六時中、腹痛を我慢しているくらいツライのだ。

これらが地獄の娯楽である。

もうね、馬鹿かと。

アホかと。

こんなところで過ごせるわけが無い。

そら俺も逃げるわ。

そういえばどれくらい待てば解放されるのか聞いていなかった。

閻魔さんに訊ねてみる。

決まっていらないらしい。

都合の良い世界を見繕っていて、そこに空きが出来るまでだから短くて千年くらいだとか。

それを聞いた時「ファツ!？」な状態になった。

地獄では時間の感覚があまり無いがそれでも長すぎる。

これは真剣に時間を潰す方法を考える必要があるな。

地獄 約—300年

世界は多元構造となっているらしい。

自分が存在する世界とは何か絶対的に異なる「if的なサムシングを持つ並行世

界」が存在しており、同様に地獄も存在しているのだとか。

よくわかんない？

俺も。

つまるところ、暇つぶしを真面目に探していたら異なる地獄を行き来できるように
なったのだ。

これに比べたら地獄の多元構造など完全にどうでもいい事柄である。

他の地獄に行き来して……感覚が狂ってよくわからんが、多分百余年くらいで暇つぶ
しに成功した。

そう、地獄の連中とは異なる会話相手を見つけたのだ。

その相手はハオと名乗った。

地獄 約—120年

地獄めぐりをしていて気づいたのだが、和風ばかりだ。

和風という表現が正しいのかわからんが、生前イメージしていたモノにかなり近い。
洋風はないのだろうかと探してみたが見当たらなかった。

俺が日本人だったからなのだろうか。

それとも管轄が違うからか。

みたいな話をハオにしてみる。

完璧な思いつきである。

それに対するハオの答えは、西洋地獄とかあるとのこと。

なん、だと……!?!?

みたいな感じで気が向いたら遊びに来ているのだ。

遊びに来るとハオは歓迎してくれるのだが、地獄の連中はそうでもないようだ。

なんというか愛想が無い。

凄くおどろおどろしい雰囲気で満たされていて、陰気でしようがないし。

地獄アピールが半端ない。

「俺たち、地獄マジリスペクトつすから」とか言い出しそう。

やべえ、超裁かれそう。

他には生前はエヴァンゲリオンの新作を見終えることができなかった、とか。

まあ、ハオは陰陽師や妖怪がイケイケだった時代の人らしいので俺の言葉は伝わらな

いのだが。

テレビとかどう伝えればいいんだろうかと悩んだりする。

なので、俺の話ではよく首を傾げていることが多い。

異なる地獄に行くと現世の時間の流れが違うのか、ジエネレーションギャップが厳しいことが多々あるのだ。

そんなハオだが陰陽師レポリューションの500年後にも記憶を持ったまま転生した経験もあるのでナウでヤングを名乗るには無理があるのだ。

だから俺もナウでヤングじゃないのだ。

肉体は若かったが、魂は地獄でふらふらしているから……。

年を考えると訳が分からなくなってきた。

地獄では時間が気にならなくなるが、もうちよつと繊細に生きようと思う。

死んでるけど。

やはり雑談こそ人間の叡智だと理解できますね！と萎えた気分を盛り上げる。

いや、獄卒鬼とかでも出来る奴がいるけど。

でも、あいつら話題がバイオレンスで超常的で、人間の俺には難しいから好きじゃない。

あと日本語を喋られないのばかりで困る。

えーきさまを見習うべき。

説教がめっちゃ長い以外は女神だから。

閻魔なのに女神級に可愛いとか反則やでえ……。

地獄の連中があれくらい可愛かったら皆喜んで死ぬのに。
あ、死人が多くてよろしくない話もあったな。
むしろ今のむき苦しい地獄でちようどいいのか。
なるほどなー。

地獄 約—30年

ハオはそろそろ転生する予定があるらしい。
気軽な転生もあつたものだ。

しかし、ハオがいなくなると暇でヤヴァい。

まだ見ぬ地獄を開拓する日々が始まってしまう。

俺も現世に行こうかしらん。

…：テキトーな思いつきだがいいアイデアじゃね？
もうあれだね。

これは地獄で頑張つて我慢した反動だわ。

娯楽がなくて暇だからしょうがないね。

今まで地獄で頑張つた自分への御褒美だから。

暇つぶしに生き返るといふ贅沢も許されるに違いない。

御褒美無くして我慢は実らずだから。

だから生き返るしかないわー。

自分への御褒美だから我慢なんてできるわけないわー。

つらいわー。

自分への御褒美を自分で用意するとかマジつらいわー。

やりたくないけど仕方ないから転生するわー。

現世へえくそだすだわー。

ハオに転生の仕方を聞いてみたが閻魔さんと取引とか俺には無理そうだった。

なんか無いかな、と考えてみるが何も思い浮かばず。

民話や神話などの伝承だと頻繁に冥界に生者が入り込んだりしているのだけれど。

そう考えると力技で行けるんじゃないだろうか。

現世に魂で出たら後は流れでなんとかなりそうだし。

赤子程度の魂なら弾きだして乗っ取れそうだ。

……試すか。

地獄で俺を探し続けろ、スプーーツ
!!!!!!

煉獄 — 15年

そこら辺の魂を取り込みながら地獄の亡者（スプー含む）などを蹴散らして地獄から
這い出たのだが、現世にはたどり着けなかった。

どうも煉獄とやらだという。

なんかヤバそうなイメージがあつたが、それでもないようだ。

天国：ハッピーハッピーライフが約束されしばらいそ

地獄：ドS祭

煉獄：中間

みたいな感じっぼい。

地獄だと責め苦を負わされるだけで神様は助けてくれないが、煉獄だと耐え忍べば救
いを差し伸べてくれるとか。

中間とは一体なんだったのか。

結局拷問があるんだな。

あの世は皆ドSなのかどうかハオとの現世での話題になりそうだ。

迎えを待つて天国に行けば転生で時間が潰せるはず。

……なんか色々とおかしい気がしないでもない。

煉獄 0年

煉獄っているだけで消耗するわけよ。

どうも俺の魂が神様の求めるものと違うかららしい。

で、回復するために魂をつまみ食いして凌いでいたのだ。

つまみ食いの間は暇が潰れたのだが、徐々に適応出来たのかダメージが極限まで薄

まっつて気にならない程度になった。

そうなると暇でしようがない。

地獄と煉獄を歩き来してスプーを煽って遊ぶしかないかと考えていると天使が現れ

た!!

翼があるからたぶん天使。

おそらくエンゼル……エンジェル？

どっちでもいいか、うん。

とうとう天国に行けるのですね！と敬虔な信者の振る舞いを見せてみる。千年くらい順番待ちしておくようにと返された。

いや、無理だから。

流石の俺も激怒だわ。

待てないから地獄から這い出たのに、まさかの順番待ち。

オレってゆうのわ。。

あまり「ガマン」したくない

わかりやすくいうと。。

「ガマンよわい」

それでもけっこーまった。。

激おこ。。。

もうマチ無理。

バツクレよ…

俺を地獄に墮とした最後の審判を逆走して現世へとダイナミックエントリーを敢行した。

途中で天使つばいのを何体か突き飛ばして現世におとしてしまった。とても悲しい事故だった。

まあ、俺には関係ないのでどうでもいいのだけれど。

1980年 東京

目が覚めたらガラスケースの中で液体に浸かっていた。

漬物の気持ちになるですよ。

むしろホルマリン漬けか。

結局漬物じゃねえか。

外を眺めると初老の男性と目が合った。

人付き合いは最初の印象が重要なのだ。

愛想が一番、その他は二番、微笑んでおこう。

に、にこっ。

ちよつと引き攣った笑顔になったが問題ないに違いない。

男性がかなり驚いていた気がするけど問題なんて無いのだ。

ておがめ 1

— 1

一度目の生は日々を無為に過ごし、つまらぬ事故で失った。

あまりにも無様な最期に涙すら流した。

思い返せば後悔しか浮かばなかった。

二度目の人生は困惑から始まった。

『二人目』の自分に慣れるまで無駄に過ごししてしまったように思えた。

焦りから我武者羅に過ごす様になった。

立つて歩くだけでも異質な年頃に、精力的に動き回って食欲に努力し続けた。

奇異の目に晒され様ともひたすら求めた。

目的も無いままに。

親とも壁を感じる日常の中、祖父だけが俺を見守ってくれていた。

理解はされていなかった。

理解されるようなものは何もなかった。

ただ、俺を見守る祖父を内心で馬鹿にしていた。

何も成し得ないまま年を取った老人だと。

小学生にすらなっていない未熟な自分は暗闇を走り続けるがごとく奔走した。

目だつて得られたものなど何も無かった。

焦りが募る。

また何も無いまま過ごすのか、と。

そんなある日、祖父が亡くなった。

どうでも良いことのように感じていた。

今の自分にとっては赤の他人、なんの思いも抱かなかつた。

抱かないはずだった。

気付けばいつも仏壇の前で線香を立てていた。

お茶を淹れる癖が付いた。

煙管の手入れをしていた。

誰もいない家に違和感を感じる様になった。

何とはなしに祖父の部屋に向かっていた。

不思議なことに祖父がいることを当然として行動してしまう。

祖父が亡くなってから焦りがなくなった。

ただ、何か物足りなさを感じるようになった。

あれほどまで執着していた何かを成すという思いも何処かへ溶け、心には何も残っていない。

抜け殻のように無為に過ごす。

一度目の同じように終えるのだろうか。

それもいいのではないかと思う様になっていた。

そんな矢先、祖父の部屋を掃除していると文書を見つけた。

日記と呼べるほど立派な物ではないが、祖父が書き残したものだろう。

書き連ねられているのは全て俺のことだった。

祖母を失ってから何も無い祖父にとつての宝であったと、生き甲斐であったと。

そして、焦るほどに渴望する何かを与えられず見守るだけの己が不甲斐無いとも書き殴られていた。

陳腐な話だと思考の片隅が囁いていた。

しかし、それ以上に思考を塗りつくしていたのは戸惑いだった。

生前、身近に感じていたものだった。

父や母とともにいると感じられた。

それが何なのか、確かなことはわからない。

だが、それは掛け替えのないものだった。

馬鹿にして、関係ないものと考えていた。

死んでも構わないとも。

実際は違つたのだ。

知らず知らずのうちに祖父を心の拠り所にしていたのだ。

俺は何も見えていない、見ようもしない馬鹿だった。

そして、嫌になるほど間抜けで阿呆であつた。

俺はゆつくりと文書を仕舞い込んだ。

気付いたときには、何時も遅い。

主のいなくなつた部屋はひどく静かで寂しく思えた。

空虚な日々だった。

祖父が亡くなつてから俺は何をするでもなく縁側に佇んでいる様になつた。

奇行をやめた俺を指差し、親類縁者は普通の子になつたと喜んだ。

冗談まじりに祖父に憑りつかれていたと笑う者もいた。

俺には何も感じられなかつた。

ただ、それらが煩わしい羽虫のように思えた。

日中は家政婦とやらが家事を行い、夕方に帰って行く。

当然のように一人で過ごす。

家政婦と話すのも一言二言、それも業務的なことばかりだ。

俺が普通の子になったと喜んでいた「父母」とやらが家にいることはほとんどない。

結局、普通であろうと異常であろうと関係ないだろう。

むしろ心のどこかで異常性に感謝すらしていたかもしれない。

やることも思いつかず、夕暮れに縁側で呆けていると来客があった。

二又の尾を揺らし、二本の後ろ脚で歩き、羽織と袴に袖を通した虎柄の猫だ。

久方ぶりの客は俺が生まれたときから姿が変わっていなかった。

名はマタムネ、猫又であった。

彼は祖父の最初の友人であり、俺の最初の友人でもあった。

祖父が亡くなったことを知ると、そうですかと呟いた。

そして俺の隣に腰かけた。

何を言うでもなく、暮れていく夕日を見つめていた。

永く生きたマタムネでも寂しいのだろうか。

俺にはわからなかった。

変わらない日々になしただけ変化が起きた。

小さな同居人ができたのだ。

誰もいなかった家はほんのりと明るくなった気がした。

煙管を燻らせながら好々爺然とした同居人の姿はどこか祖父を思い出させた。

— 2

今日も今日とて縁側に座り、祖父の気に入っていた庭を眺める。

一つはぬるく、一つは熱く、そんな風に淹れたお茶と和菓子をお供に。

祖父が居た頃は俺がぬるい茶を飲んでいた。

今は熱いお茶を飲んでいる。

茶を啜り、菓子を食べ、手慰みに使う予定の無い煙管を磨き、それが終われば軽く回す。

ペン回しをするかのごとく、くるくると。

手に吸い付くように、見事に回る煙管は癖になる。

マタムネも初めは目を丸くしていたが、今では真似をして回している。

晴れの日も雨の日も、そして雪の日も。

相も変わらず縁側に座り、茶を啜り、和菓子を食べ、煙管を磨き、そして回す。

同じようにマタムネも縁側に座り、茶を啜り、和菓子を食べ、書物を読み、思い出したように煙管を回す。

祖父の部屋にある書物をマタムネは好んで読んでいる。

俺はすでに読み終えているそれらを、彼の読了後には一言二言ほど言葉を交わす。ほとんどが他愛のない言葉のやり取りだが、嫌いではなかった。

月に雲がかかった秋の夜。

時折、撫でるように吹く風で肌寒く感じるようになった。

ぶるりと背を震わせるとマタムネが口の端に笑みを浮かべながら風邪に気を付ける様にと囁いた。

この季節には薄着だったかもしれないと立ち上がる。

使っていない部屋に上着を仕舞い込んだのだが、さて何処だったろうか。

マタムネを伴って部屋へと向かう。

とりあえず押入れを漁れば多分出てくるだろうと検討をつけた。

扉を引いて中へと足を……。

踏み入れなかった。

中が奇妙なマーブル色で覆われていた。

部屋の戸を閉め、回れ右をする。

寒さとは全く別の意味で背が震えた。

己の知識では判断がつかず、マタムネに問いかけてみる。

結局、我武者羅に学んだことなど役に立たない。

面白そうに笑いながらマタムネは異界と化していると言った。

異界とは人以外が棲む空間であるらしい。

マタムネのように妖怪であったり、聖書に載っているような天使であったり、様々な

事情で現れる悪魔であったりと様々存在している。

それらを総称して悪魔と呼んでいるのだとか。

言ってしまうえばマタムネも悪魔であり、我が家も異界の一種かもしれないと笑っていた。

では、この部屋の異界化はマタムネのせいなのかと問えばそうではないとの返事。

異界とは基本的に悪魔が力を蓄えるために縄張りとして開くか、切羽詰ったときの緊急用として開くものらしい。

そもそも我が家はかなり上物の霊地でわざわざ異界化する必要はなく、占領してしま

えば都合が良いとか。

つまり、中にいる悪魔はそういったことが出来ない可能性があるという話だ。

占領とは穏やかではないと心中で危機を抱くが、害意のあるものは気付かないという優秀な結界があるらしい。

害意がない霊どもにとつては快適な空間でしかないとも捕捉された。

霊感とやらが刺激されるから見える様になつていのではないかと聞かれた。変な物が見えると思つたらそういうことだったのか。

マタムネの先導に従つて、我が家の異界へと足を踏み入れる。

前まではそれほど広くない物置部屋だったが、今は曲がりくねつた道が延々と続いている。

ピンクと黄色、赤、黒。

文字通り色々混ざつた奇妙な何かが壁や天井、道を彩っている。時間とともに色が変わり、目がちかちかと疲れる。

この異界を形成した主が不安定なためこのような色合いになつているのだとマタムネは言った。

出来たばかりの異界には悪魔もいないと付け加えながら。

無駄に長いと内心で文句を言いながら歩く。

段々と息苦しく感じてきて煩わしい。

異界の中には人が活動するには厳しい環境もあるらしい。

流石に入った途端に即死するという糞ゲー仕様は……地上に存在しないような高位の悪魔が作り出した異界ならあるかもしれないとか。

負荷がかかるのは根本的に人と悪魔の在り方が違うため。

靈地に慣らされているからこの程度だが、一般人だったら倒れてそのまま死んでいる可能性もあり、入るには危険が付いて回るものだと言った。

異界によつては空間の歪みの他にも時間の進みが変わったり、悪魔が蔓延っている場所もあるらしい。

時間がゆっくり進む場所があれば学ぶにしても早く済みそうだと呟くと、マタムネがその年で時間を重ねると成長が早くなって周りに馴染めなくなると笑った。

最深部らしき場所にたどり着いた。

延々と続く曲がりくねった道では無い、一元の部屋と同じくらいの広さの空間。

そして中心にはベッドで眠る少女の姿。

部屋にあったベッドと同じものだろうか。

マタムネがやはりと呟いた。

わざわざ作り出された不安定な異界、その理由は主が生まれたばかりの悪魔だということだった。

敵対的か、友好的か。

判断する前に排除するという方法もある。

だが、なるべく平穏に進めたいという気持ちもある。

起きるのを待つべきか。

問題は言葉が通じない可能性だ。

そういった悪魔がいることはマタムネから聞いている。

どうしてなかなか難しい。

煙管を楽しんでいるマタムネに相談しようかと悩んでいると、少女がゆつくりと瞼を開けた。

見方によっては桃色のようにも見える薄紫の髪をボブカットにしており、真紅の瞳は眠たげで半目になっている。

可愛らしい顔の造詣をしているが、調子が悪いのか白に近い顔色だった。

胸元に瞳を模した飾りがあり、可愛らしいヘアバンドや身体へとコードのように繋がっている。

半身を起き上がらせたためか青い衣服は裾がだぼついている。皺になっていない。

マタムネの羽織と袴も皺が付かないのだからそういうものだとして理解しておこう。表情は変わらず、焦点の定まらない瞳をこちらにむけて少女が口を開く。

彼女は覚（さとり）という妖怪で名を「古明地さとり」、考えていることを読めるようだ。

自分で話す手間が割けて便利かと思いきや、思ったことに片つ端から返事をしてくるので話が進まない。

どうも態とそういう風になっている節が感じられる、と考えたら否定された。

マタムネに関しては読まれていないようだ。

覚妖怪と対峙するコツとしては表面では考えない様に考えるのだとか。

つまりどういうことなのだろうか。

マタムネはからからと笑っていたので、からかわれただけかもしれないけれど。

話によると、さとりは幻想が集うとある場所からここに迷い込んでしまったようだ。

さらに、分霊というやつで本体とほとんど別の存在であり、自分を形成する力が弱っているので異界で回復をはかっていたらしい。

外界で自律行動できるまでここにいる、というのが目的のようだ。

さとりはコミュ障らしく、ここまで聞くのになかなか時間がかかってしまった。特に問題は無さそうだ。

さとり自身も見るからにこちらに興味が無い様子であり、害意があるとは思えない。どうせ誰も使っていない部屋だ。

構わないだろう。

マタムネも覚妖怪は心を読む以外は基本的に無害なので構わないと許可してくれた。その旨を伝えると少女は再び眠りについた。

帰り道も面倒だとぼやくとマタムネが煙管で道を叩く。

すると目の前に扉が現れた。

折角の霊地なのだから無駄を省いた、ということらしい。

眠っているさとりを見ると心なしか顔色が良くなっていた。

なんとなくマタムネを褒めてから部屋から出た。

不思議なこともあるものだと言界を思い出しながら縁側へ戻る。

ケータイと壁掛け時計を確かめるが時間に違いは無かった。

どうやら疑似・精神と時の部屋は実現できないらしい。

マタムネは時計を前にして落胆している俺を見て理解したのか愉快そうに笑ってい

た。

再び縁側に戻り、マタムネと並んで茶を啜り、煙管を回し、月を眺める。すでに雲ひとつない、見事な月だった。

ぼんやりと月を眺めていると何かを忘れていることに気付いた。

ああ、そうだ。

忘れていたが上着を取りにいったのだった。

眠っているさとりを起こすわけにもいかず、今日のところは諦めようか。

肌寒く感じるが悪くない気分だった。

— tips —

【マタムネ】 妖怪：ねこまた レベル15 耐性：不明

人の世を見て永く生きた猫がたどり着いた。本体ではあるが分霊に力を振り分けたため弱体化している。

【さとり】 妖怪：覚 レベル1 耐性：不明

ひよんなことから幻想の集う地底にいる本体から切り離されてしまった分霊。しか

も地底の本体も覚妖怪の一部のようなもので分霊の分霊状態。虚弱ってレベルじゃない。異界を開くも消失直前だった。妖怪なのでスライム化しない。

3

COMPってどうやって手に入れるのだろうか。

骨董市とか。

サマナーから強奪とか。

ターミナル襲撃とか。

アプリ配布でスマホとかタブレット、ゲーム機に入れるとか。

そんな感じで手に入る可能性が、ある……？

真・三形式で呼んだら家から助けに来るとかもなかなかオサレ。

さとのりの作り出した異界が消えるまで、そう時間はかからなかった。

普通に部屋で過ごしたほうが回復が速いとわかると即座に消し去ったためだ。

そして、幻想郷とやらの地底への帰還および合流を考えていたらしいが、元が望んでいないため目的がなくなった。

回復次第出ていくと言ったが行くあてもないのだろうし、折角だから住むようにと誘った。

マタムネと暮らすには広すぎる家だ、さとりが居ても問題ない。そう伝えるが断られてしまった。

心を読まれる負担というのは人間には厳しいためそれ以外に異はないのだけれど、と呟いた。

つまり、心を読めないようになれば解決するということだ。

マタムネに相談すると、やろうと思えば人間でも読めない様に出来ると面白そうに言った。

ならばとさとりに告げる。

回復するまでに、俺が考えを読ませないようにになったら住めと。

勢いに押されたのかこくこくと頷く姿を見て満足する。

話をついたのだから茶を飲もうと提案して縁側へと向かう。

釈然としないことがあつたと首を傾げているさとりも伴って。

小学校の入学を翌年に控えた冬のある日。

縁側へと少し出て鉛色の空を少しばかり眺めるも白い息と身を刺すような寒さに堪

らず部屋に戻った。

室内ではすでにマタムネが炬燵に入りながら本を読んでおり、対面に入つて蜜柑を剥く。

剥いた蜜柑のアルベドという白いすじを慎重にとつていく。

別にすじが付いたままでも構わないのだが、なんとなくやりたくなつた。

綺麗に全てを取り切り、満足気に掲げていると扉が開かれた。

眠そうな半目をしたさとりが起きてきたようだ。

なんだかんだでこの家で過ごすことに慣れたようだ。

寝起きのさとりと挨拶を交わし、すじのないオレンジ一色の蜜柑を渡す。

その様子に呆れながらもさとりは小さく礼を言い、口へと運ぶ。

俺も新たに蜜柑を剥く。

柑橘類特有の爽やかな香りをささやかに感じる。

剥き終えて食べようとすると、さとりが蜜柑を見つめていた。

半分に割つて渡すと食べ始める。

少しの酸味と広がる甘みを楽しむ。

心なしかさとりも頬を綻ばせながら蜜柑を食べている。

次の蜜柑を剥こうと卓上の籠を見ると、空になっていた。

……今日は家政婦が来ない日だ、面倒だけでも買いに行くとしようか。
無表情に戻ったさとりを見て、そう思った。

小型のキャリーバッグを引き摺りながら蜜柑を買いに近所のスーパーへと向かう。
そういえば外に出るのはいつぶりだろうか。

祖父が亡くなってからほとんど出なくなっていた。

最後に外出したのは葬式だったか、いや墓参りに行った気がする。

そんなことを考えながら黙々と歩く。

キャリーバッグの上にはマタムネが腰かけているが重さは感じない。

そういえば天気予報では雪だったことを思いだし、足を速める。

妖怪は雨で濡れたり、雪が積もったりするのだろうか。

蜜柑や目に付いた物を買ひ込み、スーパーを出る。

キャリーバッグがあれば一人で買い物もできると誇ってみるが、少しの虚しさと多大な恥ずかしさを感じて赤面した。

店先の屋台で売られていたタイヤキを齧りながら歩く。

ちようどいい甘さが好ましく感じる。

ちびちびと食べながら歩いていると雪がちらほらと降りはじめた。

ゆつくり景色でも楽しもうかと思つたが、濡れ鼠になる趣味はない。タイヤキを片手に小走りで帰途に就く。

大粒の雪となり、雨宿りよろしく屋根の下へ。

あと少しで家に帰る事が出来たのだけれど、体力が尽きてしまった。

笑いながらマタムネにもう少し運動したほうが良いと助言された。

残っていた冷えたタイヤキを飲み込んで人心地。

餡子が尻尾まで入っていて少しだけにやついてしまった。

暇な時間ができてしまったのだ、思考を操る練習に勤しむ。

何も考えない様にしたり、考えを表に出さない様に仕舞い込んだり、読み取る前に高速で思考して終わらせたり、同時に思考したり、力量をつけて能力を防ぐなどと方法は様々だ。

高速での思考はさとりに通じないし、同時に思考しても全てを読まれるのだから意味が無い。

覚妖怪は心を読むことに關しては飛びぬけており、存在の格が上の相手でも読むことができるので力量云々の話は關係がないらしい。

何も考えないのでは生活ができない。

最終的には考えを表層に出さないようにするという方針に決めた。

一応、高速思考や分割思考、思考を無にするなどの練習もしているのだが。

マタムネに助言を求めるときとりが読める思考の限界を理解し、それよりも下で考える様にするというものだ。

難しいことを言ってくれるが、俺も諦める気はない。

悔いはないようにやり通したいのだ。

自分で決めたことくらい、最後まで。

上手くいっているのかわからないがこつこつと練習を重ねる。

心を静かに鎮めることが一番重要なのだとか。

常に平静、常に冷静、ということだろうか。

仙人や賢者になれということか……？

雪が小降りになりはじめた頃合いを見計らって帰る。

道が滑って苛立つが、心を鎮める様にとマタムネに窘められる。

日々の努力が重要か。

なるべく心を乱さないように小走りで急ぐ。

家の前まで戻ると悪魔が倒れていた。

しかも雪が積もっていてその姿は哀愁が漂っている。

人と似ている容姿だが、さとり以上に外れているように感じた。

さとりは妖怪であり、人間として見るならば何処か親しみを感じられた。

だが、目の前の倒れている悪魔は違う。

人間とは別物だと一目でわかった。

わかったのだが、心のどこかで親近感を感じる。

この悪魔はなんなのだろうか。

マタムネが珍しいものを見たと目を丸くしていた。

悪意は感じないらしく、消える直前で弱っているとか。

マタムネやさとりと違って違和感があると伝えると悪魔とはそんなもの、と笑いなが

ら答えられた。

倒れている悪魔に近づくと、空腹を訴えてきた。

親近感が湧いた。

タイヤキを繋ぎに渡してマタムネに見張りを頼む。

キャリアバッグとともに家に上がり、寝ているさとりを起こす。

少し不機嫌な様子に謝りながら、悪魔がきたので悪意があるか確かめてくれるように

頼む。

幾らか逡巡した後、頷いてくれたので先導して連れて行く。

玄関を出た先では倒れていた悪魔が上半身を起こしてタイヤキを齧っていた。

よく見ると透けているのか、体を通して道が見えてしまっている。

透けているのは力が足りない状態であり、そのうち消えてしまうかもしれないとか。

話を聞くと、とある事情から力を失って彷徨っていたら霊地を見つけたので休もうと

したら入り方がわからず、途方に暮れていたらこの様だったらしい。

結界が変に効いたようだとマタムネがいつものように笑った。

さどりに聞いてみると、気が強いが悪意はないようだ。

とある事情を聞こうとしたが、面倒事に巻き込まれるのは御免だと断られた。

少しばかり気になるが、無理矢理聞くわけにもいかず諦めた。

このまま放っておいて玄関前で消えられるのも寝覚めが悪そうなので家へと招き入

れた。

さどりにあまり簡単に悪魔を家に入れない様にと注意されてしまった。

行き倒れ悪魔の名はディアーチエというらしい。

銀色の髪は前髪以外の毛先に黒色のメッシュが入っていて、×印の髪飾りをしてい

緑の瞳は鮮やかに輝いてエメラルドのようだ。

七つの大罪の一つで傲慢を司っているとか。

人の欲から生まれたので上着マニアは関係ないと笑いながら言われたがさっぱりわからない。

偉そうな口調は傲慢のためだろうか。

行くところも無いからここに置かせてほしいと頼まれた。

というか命令された。

マタムネやさとりに視線を向けるが特に何も言われなかったので迎え入れることに。

俺の返事に気を良くしたのか臣下にしてくれるとか。

やんわりと断っておいた。

ディアーチエと話している間、静かだったマタムネが口を開いた。

生まれたときから霊地で過ごし順応している今、俺は怪異を引き寄せる才能に目覚めたのかもしれない。

今は友好的な悪魔ばかりだが、いつ危険に身を晒すかわからない。

体を鍛える必要がある、と。

【ダイアーチエ】 悪魔：概念（傲慢） レベル1 耐性：不明

人の欲である傲慢を司る悪魔。六対一でフルボッコにされ、戦闘から離脱したがダメージがあまりに大きく現状のステータスになってしまった。本来は過信や虚栄などの人間の自尊心が力になるはずのだが……。本体であるが格を奪われ、分霊と同様の状態になっているため弱体化している。

— 4 —

家政婦が来る日が減った、というか俺が減らした。

ダイアーチエは手先が器用で家事が得意らしく、率先して行ってくれている。

高圧的な言と合わさって素直になれない強気な少女に見える。

これがつんでれ、というやつなのだろう。

そんなダイアーチエをさとりが考え読んで逐次補助している。

流れるような手腕は見事の一言に尽きる。

二人が家の雑事を請け負ってくれているのは家賃の代わりであり、有り難く世話になっ

そんなわけで家政婦の必要があまり無くなったのだ。

悪魔と言えども二人の見た目は可憐な乙女である。

そんな二人が掃除に洗濯に、と従事しているおかげか家の中が華やかに感じられた。以前までは祖父やマダムネのせいで、どうしても年寄り臭い雰囲気になってしまっていたのが今では嘘のようだ。

そんなことを考えつつ、家事に勤しむ二人を眺めながら啜るお茶というのは格別だ。

家政婦も若い女性ではあったが、常に能面のような無表情を貼りつけ、時折、濁った瞳でこちらを凝視し、監視しているようだった。

そんな人なのだから動く人形のようにあまり好ましく思っておらず、この機会は世話になる回数が減らせるので渡りに船というやつだった。

現在は週に一、二度ほど来てもらい、食材の買い出しを頼むか、細かい場所の掃除を頼む程度に収まっている。

新年を迎えることとなり、何の気なしに付けていたテレビではめでためでたいと騒いでいる。

それほどこめでたいのだろうか。

転生前に地獄で気の遠くなるような時を過ごした俺にはわかりようもない。

他の面々も微妙な反応を示しているので俺が特別なわけではないようだ。

そもそも悪魔にとつて時間など無いも同じらしい。

地上にいればある程度は人間の時間感覚を臆げながら理解できるが、完全には無理だそうだ。

ディアーチェなど寝て起きたら8つあつた罪源が7つになつていたと愉快そうに笑つた。

流石のマタムネも頬が引き攣つていた。

夜更かししようにも体が保たないので先に眠る旨を伝える。

待つたがかなり何だろつかと待つていると青紫に輝く結晶を渡された。

大きさは自分の小さな手のひらと同等で、自ら光を発しているのか絶えず輝いている。

彼らなりのお年玉らしい。

さとりが異界で精製した魔石をディアーチェとマタムネが霊地の力で洗練させたモノ、らしい。

死にかけようとも一度なら蘇生が可能なほどの力が込められているとか。

それなりの悪魔に与えればかなり格が上がる程度の上物らしい。

使い道は自由にしろとも言われた。

自分たちで使わないのかと問うとマタムネはそういつた道具の使用は不得手、さとりは今の格が低すぎて破裂する可能性あり、ディアーチエは核が傷ついているので砕ける、などなど。

なんとも扱いにくいお年玉ではあるが、もう一つの命を貰ったと思つて大事にさせてもらおう。

ディアーチエの核が傷ついているというのが気になったが、それほど大事でもないよ
うだ。

低級悪魔程度に回復すれば再生が始まるのだとか。

さとりも霊地である程度までは格が上がるので問題ないらしい。

マタムネは巫力と霊力とやらを重視しているようだ。

さとりは回復したら使つてみるかなと思つていると、ジト目でゆつくりと元を目指すから必要ないと言われた。

最近あまり読まれなくなつたと思つたが、やはり気が弛んでしまつたようだ。

まあ、お年玉で浮かれていたとしても年相応というやつだ。

許して欲しい。

年が明け、マタムネとの修行が本格的に始まる。

朝食をとり、茶を飲んで休んだところにマタムネに誘われて修行地へ向かう。

今は大した異能ではないかもしれないが、俺の成長とともに強力になる可能性も否定できない。

そのときに何らかに巻き込まれても幾らか力があれば助かる芽もあるだろうということだ。

なるほど、正しいのだろう。

昨年、少しばかりやった感想としてはこの修行はあまり好きじゃない。

飄々と前を歩くマタムネの後頭部を見ながらもつと楽にならないだろうかと考える。それほど間を置かずに墓地の一角が見えてきた。

年が明けようとも霊はいる。

すでに死んでいる彼らに時間は関係ないのだ。

教えを乞う相手の墓を丁寧に掃除し、気持ち程度にお供え物を置く。

宗教など死後には合って無いようなものらしく、適当に線香を置いて回る。

これで準備は整った。

さあ、頑張つてやりますか。

にゆるりと感じる異物感に背筋がぞわぞわした。

自分の意思とは関係なしに手足が動き、武術の型をとる。

見えない糸で吊るされている人形の気分だが、実際はぬいぐるみに近い。

生前、格闘技を修めていた故人の霊に頼んで動いてもらうのだ。

こうすることで覚えられる……はず、という話だ。

未だに成長途中の身体を無理に鍛えるのは良くないということでの方法になった。

勝手に体が動くので気持ち悪いし、手足が短いと文句を言われるし、酒が呑みたいと

言い出すやつもいる。

だから好かないのだ。

こんな純真無垢な子供に何を求めているのだろうか。

我慢して一連の工程を終えて帰路につく。

心なし体の動きがよくなったような、それでもないような。

効果のほどはわからない。

数か月後の俺に期待しよう。

帰ったら炬燵に入りながらさとりで思考を読ませない練習をしようか。

俺の思考防御もかなり上達してきたようで、さとりも読み切れないことがあるよう

だ。

ダイアーチエは思考を垂れ流し状態らしい。

恥ずべき考えはしていないとかどうとか。

そういう裏表のないところは好感が持てる。

最初は徐々に慣らしていこうと修行計画を相談していると我が家の玄関が見えた。

そろそろおはぎが食いたいなどと考えていると後ろから声をかけられた。

幼稚園にいそうな幼児と、その幼児を掲げている霊的な何か。

霊的な何かは頭側部からその身の丈ほどもある巨大な角が生えているので多分、ゴブリンだろう。

幼児とゴブリンのコンビが何の用だろうかと眺めていると、ちつちええなどか呟かれた。

聞いたことのある言葉だった。

が、これは無視しよう。

おまえのほう小さいだろとか決して言っではいけない。

相手にしてもいいことはないはずだ。

そのうち親が迎えに来るだろうし。

モンスターペアレントとか来たら対処のしようがないからな。

完全に無視して家に入ろうとするとまたも呼び止められた、

ディアーチエほどではないにしろ高圧的なしゃべり方だ、将来が思いやられる。

どうやらこの幼児は挨拶に来たらしいのだが家に入れなかったとか。この歳でこちらに害意があるのかよ……。

内心で呆れていると、放心していたマタムネが呟いた。
ハオ、と。

幼児をハオと呼んだ。

俺の地獄で出来た友人だった。

ある意味で前世最後の友人と呼んでもいいかもしれない。

つまりは現世への引越しの挨拶か。

いいだろう、俺も丁重に持て成してやろうじゃないか。

我が家に招き入れる旨を伝えた。

不注意が過ぎるときとりとディアーチエに怒られた。

そんなこと言われても、友達を家に誘っただけだし。

こ、子供によくあることだし（震え声）

マタムネ 1000歳前後

ディアーチエ 1500〜1700歳

さとり 500〜1000歳

オリ主 精神は余裕の三桁

5

あとは小・中・高と上がりながらサマナー的な何かになれば完璧ですね。遠路はるばる友人が訪ねて来てくれたのだから、積もる話もあるはずだ。

炬燵に入りながら互いの情報を交換する。

ちなみにハオの隣に座って蜜柑を喰っているのは角のあるゴブリンではなく、S.

O・F（スピリット・オブ・ファイア）というらしい。

閻魔からパクツたのと似ている気がする。

そんなことより今はディアーチエが淹れてくれたお茶で喉を潤してから話そうか。

まず、俺の話から語るとしよう。

最初から俺はハオと同じ地獄にいたわけではない。

死んですぐに訪れたのは薄暗い空間であり、俺自信は身体を失っていて魂のみになっ

ていた。

見ることが出来ないが感じることはできるといふ不思議な存在に問答された。

閻魔だというのだ。

閻魔に対して浅い知識しか持たないが、確か罪を裁いて地獄に落とす外道だったはずだ。

このままでは地獄確定であり、死を認めることのできない俺は逃亡を謀った。

当然ながら失敗して燃え盛る炎に落とされた。

地獄の一種であった。

生への執着にしがみ付き、身を焼かれる苦しみに耐えていると次々落ちてくる魂。

それらが俺と同じように炎に包まれると個体差はあれど最後には燃え尽きた。

これは大変だと炎から逃げるために投下されてくる魂を踏み台にして昇り続けた。

途中で手足があつたほうが便利だと気づき、人間の形になる方法を学んだ。

そして登り切ると再び最初に訪れた場所に着いた。

再び始まる問答。

見ることが出来なかつた存在を臆気ながら捕捉したので殴り掛かった。

倒せば脱出できるのではないかと思ひ至つたためだ。

が、失敗。

無数の鋭い針がひしめく針山に落とされた。

刺さっている魂や見張りを足場に幾らかの時間をやり過ごした。

そして、刺さらないように魂を加工することと、刺さっても通り過ぎるように魂を変質させることを学んだ。

前回と同様に落下してくる魂を踏み台にして最初の場所へと舞い戻った。

後は繰り返しである。

問答をされ、殴り掛かり、落とされる。

互いに武器を持つて殺しあうような場所や燃え盛る綱渡り、獄卒である鬼と戦ったりと様々である。

数えるのも億劫なほどの地獄めぐりを経験し、出来ないことは閻魔の撃破くらいになつた。

閻魔の姿は見えるようになっており、常に眉間に皺を寄せている姿は人間のようだった。

地獄に落とされても一瞬で戻れるようになったので戯れに問答に挑んでみた。

問いは至つて単純なもので、天国へいけるかどうか答えてみるというものだった。

行けないと即答。

次に地獄はどうかと聞かれたのでこちらも行けないと即答。

思い出すのは後悔と己の無様な姿。

あのまま終われるわけがないのだから。

生き返るまで俺は挑み続ける、と気合を入れたらまた落とされた。

この時はいつもと勝手が違うことに首を傾げた。

元いた地獄から落下する間に魂が削られ、辿り着いたときには人型になるだけで一苦労だった。

そんな折、ハオと出会った。

回復までの繋ぎのつもりで話しかけたのだが、これがなかなか面白くて短い時間ではあるが友として認めるには十分だった。

ハオとともに地獄で過ごし、十全に回復した辺りで別れを告げて閻魔を襲撃した。

ついでに意趣返しのもりで大事そうに隠し持っていたS・O・Fの亜種をパクツた。

そうして半信半疑ながらも転生に成功して、今に至った。

不正規な方法での転生なため、地獄からの使者が訪れるかもしれない。

とりあえず今の俺と同じ血が流れている羽虫でも囨に使えば問題ないだろう。

器を剥いて魂だけにしておけば尚良し。

俺がそういった努力を積み重ねた裏で、ハオは陰陽師とやらの摩訶不思議な術を使って閻魔と契約し、現世に転生してきた。

なんて狡賢いのだろうか。

羨ましいのでその術を教えてください。

……陰陽師的なサムシングが無ければダメらしい。

本家あたりを襲撃して陰陽師になってくるべきだろうか。

……根絶やしにしても修行しないと陰陽師になれないのか、面倒だな。

さて、ハオが転生した理由だが人類を滅ぼすためらしい。

なんて大きな夢だろうか。

未だに何も無い俺には眩しすぎる。

まあ、俺は死にたくないなので本格的に人類抹殺計画が始まったら抗うとしよう。

今は手段もよくわからないのでどうすることもできない。

とりあえず友人として接することにした。

友人と遊ぶならトランプだろうとディアーチエが持ってきたので大富豪を試してみた。

ハオとさとりはワースト1，2だった。

大事なことなのでもう一度言うがハオとさとりはワースト1，2だった。

地獄の経験を思い出して魂に膜を張ることで思考を読めなくし、さらに偽装させた思

考も流した。

普段から読心に頼っている軟弱者の欠点が明るみに出た瞬間だった。

黒ひげ危機一髪とか失敗しまくり。

あとハオとさとりはボンバーマンも弱い。

というか、ゲーム全般が弱い。

運が足りてないのだろうか。

そのまま流れで夕飯を一緒に囲み、風呂に入る。

ハオはこの後、人類滅亡計画のための仲間を募るようだ。

あと10年とちよつとくらいでトーナメントが始まり、そのあと本選があるらしい。

誰が率先して人類を滅ぼすか争うのだろうか。

俺にはちよつとわからない。

興味があつたら来て欲しいと誘われた。

暇だったら参加してみたいものだ。

近況情報

- ・悪魔がシャーマンフアイトに興味を示しています。
- ・悪魔が聖杯戦争に興味を示しています。

6

マタムネはよく笑う。

常に笑みを絶やさないと、というわけではない。

なんとなく話しかけると柔らかく笑みを浮かべて答えてくれる。

一体何がそんなに楽しいのだろうか。

そんなことを思い、直接問いかけてみると少しだけを間を置いて、煙管を回し、祖父が残した文書を掲げた。

文字だけではわからぬこともあるからです、とそう一言。

よくわからん、と呟いて茶を啜る。

何時かわかるときが来るのだろうか。

小学生となり、学校へと通う様になった。

傷一つない黒く艶のあるランドセルを背負う。

見た目は相応なのだろうが精神はそういうわけにはいかない。

マタムネにさとり、デイアーチエまでもが微笑ましげに見つめており、気恥ずかしい。学校への行き帰りも着いてくるマタムネの姿を見ると過保護を通り過ぎているのではないだろうか。

それも悪くないと思っている俺もいるのだけれど。

猫といえば大人も子供にも好かれる、あざと可愛い生き物だ。

登下校に付いてくるマタムネの姿は虎柄の猫である。

そんなマタムネを抱えながら学校に通うのだからさぞや人気者だろうと考えていたのだが、世の中はそれほど甘くない。

俺に話しかける人物は友人と担任の先生、つまり二人だけである。

僕は友達が少ない。

学校では唯一の友人と駄弁る。

小学生の、それも低学年ながらなかなかシビアな考え方をしているやつだ。

マイナス思考すぎて夢も希望も持てない、持たない。

本心を出すのが恥ずかしいのか、全てが叶わないと諦めているのか、本音もほとんど

口に出さない。

運も悪い、頗る悪い。

あと体が弱いし、惚れやすい。

そんな彼は格好つけるのが好きらしい。

朝の挨拶くらいはカッコつけなくてもいいと思う。

そして、究極的にタイヤキの食べ方が汚いのでデИАーチエにぶちギレられた。

そのときばかりは括弧がなくなった。

未だにタイヤキの食べ方は綺麗にならないので諦め気味だ。

そんな可哀相なタイヤキの食べ方と運が枯渇しているという特徴を持つ球磨川とい

う男がクラスで唯一人の友である。

彼は夢も希望も、そして生きる意味も死ぬ意味もないのだと語る。

最初は似た人間がいると思ひ、興味を持ったので接した。

神に見放されたほどの勢いで弱い彼だが、それを受け入れるほどに精神はひたすらに強く在った。

付き合いが深まり内面を理解するようになると薄々感づいていたことは確信へと変わる。

俺とは正反対であると気付く。

そう、夢を持っているのだ。

だが、現実を知っている。

すでに受けていれている。

だから夢に蓋をして、虚飾で塗り固める。

そんな男だ。

と、妄想してみる。

実際は知らない。

読心したらそんな感じだった。

ちなみに夢の内容は

・めだかちゃんに好かれない。

・仲間が欲しい。

・主役になりたい。

という三つである。

なかなか良い夢を持っている。

下二つは可能だろう。

手伝わなくても、本音に蓋をしても問題ない。

嘘で塗り固めても、真摯に行動すれば気付いてくれるものだ。

上のめだかちやん関連は全力で応援しよう、少しでも乞われれば苦勞すら厭わない。夢の持ち主が脆弱なほど、夢への道のりは困難になる。

不可能ともなれば夢への道のりに終わりはない。

砂漠に落ちた一粒の金貨を探すほどの難易度ならば喜んで手伝おう。

叶う可能性がないからこそ、応援する。

人類の滅亡も、恋の成就も俺には等価値だ。

夢は大きいほど素晴らしい。

茶を啜っていると担任が倒れた。

球磨川に心を折られたらしい。

一か月近く粘るほどに熱血だったが、限界がきたようだ。

これで28人目。

俺と球磨川だけという少人数体制、どう見ても学級崩壊だ。

担任を運べる人がいないので内線をかけて助けを呼ぶ。

少ししたら他の先生方が来るだろう。

それまで何をしたものか。

人生ゲームで球磨川フルボッコかどうだろう。

羊羹をつついていると球磨川が寄ってきた。

『僕は悪くない』とか。

いや、球磨川が悪いからな。

俺が離れないか確かめるためにクラスを崩壊させるのはやりすぎだ。

もつと平和な手段を模索しろと言わずにはいられない。

これはあれか。

愛が重いつてやつだろうか。

授業どころではないのでマタムネを頭に乗せ、球磨川を伴って昼ごろに帰宅。

いつものように球磨川も一緒に昼飯を食べ、ゲームを起動。

RPGにアクション、シューティング、パズル……。

どのジャンルも球磨川は弱い。

球磨川がRPGをプレイするとドロップ率が低いうえにセーブが飛ぶ。

本当に残念なやつだ。

【球磨川 禊】 レベル1 全属性弱点 運：―99

主役を張るといふ夢を持つているため、オリ主の応援によってヒーローにされる可能性あり。心を読む術を覚えたオリ主に読心され、「つんでれ」のレットルを貼られる。このままだと真・女神転生というヒーローの位置づけになり、めだかちゃんを寝取られる。僧侶ポジション。

近況情報

- ・各勢力が力を蓄えています、未だに微力です。
- ・悪魔が増えています。
- ・天使が増えています。

―7

小学校で過ごした6年はなかなか貴重な体験だった。

を重ねるごとに球磨川の髪の毛が黒くなっていくという怪奇現象。

徐々に減りゆくクラスメイト。

泣き崩れる教師。

進む学級崩壊。

変わる教室。

果てには隣の学区へと学校を変えることもあったがそれ以外は平和だった。

最終的には球磨川と俺の二人のみで一つのクラスになったのだけけれど。

変化の大きい学校とは異なり日常はなかなかゆったりとしたものだった。

放課後に球磨川を連れてゲームをするのが日課で、夜は修行として墓地に湧く悪霊を蹴散らした。

休日には霊地での回復が微々たるものとなった。ディアーチエの異界めぐりにも付き合った。

異界に出現する悪魔や主を倒すことで得られる不活性マグネタイトと呼ばれるエネルギーを取り込むことで元の強さを取り戻すことができるらしい。

苦戦するような異界は今の肉体だと厳しいようなので控えることにし、主が生まれたばかりの適度な異界に挑み、時間をかけて攻略していった。

手ごころな異界がないときは手ごころな心霊スポットを刺激して異界化させ、悪魔を引き寄せて滅ぼしたりした。

心霊スポットはなかなか楽に異界探索ができるので好んでいたが、肝試しに来た馬鹿

どもが白骨と化したり、歩く屍となったりするのでなるべく控えている。

事件となつて行方不明者の捜索で心霊スポットが潰されると面倒だからだ。

肝試しに来た連中も危険な場所だとわかっているのでポルターガイストやゾンビ、スライムに殺される覚悟くらいあつたのだろう。

無かつたとしても関係ない。

死ぬつてそういうものだろう。

静かな卒業式を終え、桜舞い散る春先に中学へ入学を果たした。

中学生となり、球磨川も落ち着いたようで学校から人が減ることは少なくなった。

俺は成長期に入ったのか、肉体が軋むようになり、魂が悲鳴をあげるようになった。

生体マグネタイトの量も増えてきているらしいのだが、同時に靈魂との憑依が難しくなつた。

中学二年生に上がるころには成長期を終えた。

体が魂の動きに一分のズレもなく、付いてこれるようになったのだ。

かつては応答が遅いと感じていたが、今は地獄にいたときのように動くことができる。

体の調子とは逆に、憑依がさらに難しくなった。

全身の力を抜き、思考を止め、魂を鎮め、精神を委ねることで一応は憑依されることはできる。

しかし、憑りつく霊の疲弊が激しいらしく、あまり歓迎されないようになった。

体の動かし方をほとんど学び終えていたので、もう必要ないといえれば無いのだけだ。

異界で実戦に対する経験を積む。

以前よりも強い悪魔のいる異界を攻略するようになった。

ディアーチエはほとんど共に戦い、マタムネも大抵はついてくる。

さとりは人通りの多い場所や日中を割ければ付いてきてくれる。

それなりに戦い慣れてきたのではないかと思えた。

技術も肉体も未だに未熟な己を鍛えるために正拳突きを繰り返すようになった。

動作の確実性のために、黙々と。

それは空虚な正拳突きだった。

めだかちゃんの姿を見る機会が度々あった。

かなり目立つ人物だった。

感想としては球磨川が全力で恋をするなら応援するけどカッコつけたままなら見るだけにしようかな、と。

マジのーせんきゅーです。

あそこまで夢も希望もないとかどうなってんだらうか。

使命を糧に生きているとしか思えない。

在り方がつまらな過ぎて困る。

球磨川も付き合いが悪くなってきた。

自立、とも少し違う。

変わった異能のせいなのか、思考もほとんど読めなくなっていた。

いや、読ませなくなったというのが正しいのかもしれない。

日常を過ごしているどちらほらと見かける異能持ち。

一つの学校にこれだけ集まるとか、多すぎるのではないだろうか。

まあ、一番はそんなやつらが普通に授業を受けているというシニールさなんだけど。

教科書広げている姿を見ると笑ってしまう。

球磨川に変な付き人が現れた。

はかいしん、とか名乗っている。

あれだらうか、ワルに憧れる年齢ってやつ。

それとも中二病だとか邪気眼だとか、いろいろな呼び方がある症状に目覚めたのだろうか。

などと考えていると球磨川は生徒会長になった。

……い、色々と経験を積むのはいいことだと思えますよ？

別に似合つてないとか、有りえないとか思つて無いし。

動揺もしてないから。

地獄から蘇つた死者の俺を動揺させたら大したモノだし。

縁側で煙管を磨きながら茶を啜っていると、落ち込んだ球磨川が現れた。

カッコつけてるけど内心がぼっこぼこだった。

読心も容易く貫通である。

新しく友人を作つたらめだかちゃんに取られたらしい。

なるほどなー。

たぶん墓石とかいう人の事だろう。

まあ、可愛い娘に言い寄られたら一発だろう、中学生つてそういうものだからな。

また新しい友人でも作つてみたらいいんじゃないだろうか。

……タイヤキをぐちゃにぐちゃにしてディアーチエに説教されていた。

やっぱり括弧は取れてる。

ディアーチエは怒ると怖いからな。

紫の炎とか噴出するし、さすが悪魔だ。

縁側で皆で将棋崩しをしていると、困惑した表情の球磨川が現れた。

球磨川が途中参加したのだが、始めたばかりの将棋の山が崩れた。

こいつ、こういうの下手だからな。

むしろ安心した、成功させてたら日本が滅ぶほどだろう。

副生徒会長のことが好きになつたらしい。

応援してほしいのかと期待していたがどうやら違うようだ。

その人が好きなのか、顔が好きなのか、どちらかわからないから顔の皮を剥いでみて

確認してみたいとか。

どっちでもいいんじゃないだろうか。

結局好きなのわけだ、むしろ悩むほどならば顔と内面の両方が好きで良いと思うのだけ
れど。

そう伝えても球磨川は納得できないようだった。

面倒になってPCを持ってくる。

確かとある掲示板上で萌えについて語っていたのを思い出した。

裸エプロンの画像集を開いて見せる。

つまりこういうことだ。

副生徒会長である安心院さんのこういう姿が見たいと思うだろう。

それは顔が好きだということだ。

そして一緒にいるときに好きだと感じたのだろう。

それは内面が好きだということだ。

そういう嗜好は誰にでもある。

どちらが好きでも良いのだ。

ただ、これら二つが合わさったことよって大好きとなるわけだ。

つまり球磨川は安心院さんが大好きということだ。

球磨川は感銘を受けて帰った。

……マジでか。

翌日、生徒会長の権力を使って女子生徒に裸エプロンを強制する球磨川の姿があった。

そして怒髪天を貫くとばかりに真つ赤な神、もとい髪をしたためだかちゃんにフルボツ

コにされていた。

あれは死んだかもわからんね。

倒れている球磨川の耳元で

『裸エプロンちよつとないよなー。今流行の手ブラジーンズだったら俺も手伝ったんだけどなー。禊ちゃんの味方になれなくて残念だなー』

とか追い打ちをかけてみる。

球磨川は噎び泣き、走り去った。

いつか裸エプロンを実現すると誓いを胸に。

翌日、球磨川のあだ名が裸エプロンになった。

【オリ主】 レベル15 真・全門耐性、破魔無効、呪殺無効

中学生となり、魂が肉体に馴染んだためステータスが大幅に上昇している。善悪よりも好みを重要視する。大きさと実現性が皆無な夢を本気で信じていれば好感度は駄々上がりである。たぶんチヨロイン。

【球磨川】 レベル1（成長限界）

がんばれ。

近況報告

- ・デモニカスーツが注目的となっています。
- ・各勢力が力を蓄えています。
- ・悪魔が増えています。
- ・小規模のシユバルツバースが観測されました。
- ・無人の公衆電話が鳴り響いています。

— 8

日々の積み重ねが実を結ぶことは無い。
苛立ちが募る。

ざわつく心を理性で抑える。

沸き立つ怒りを理性で抑える。

万全だった。

万全のはずだった。

だが、綻びがあった。

それは小さな綻びだった。

そして大きな綻びへと変化した。

焦りを感じる。

降りかかった災難に。

我が身の矮小さに。

このときばかりは才能が欲しかった。

すべてに愛されるような、そんな才能が。

つまり、猫に触れない。

ねこじやらしが空を切った。

猫という生物が俺から何かを感じ取っているらしく、触ることは愚か近づく事すら儘ならない。

生まれてこの方、マタムネ以外の動物に触れたことがない。

別に猫が狂おしいほどに愛しいなどというわけではない。

ただ、単純に触ってみようと思ったただけだ。そして何故だか失敗するのだ。

俺の姿に気付くと猫のくせに脱兎のごとく逃げ出すのだ。

猫のみならず、他の動物もやはり同様に。

俺が近づけば、鳥は鳴き、犬は吠え、猫は逃げる。

睨めば、鳥は落ち、犬は伏せ、猫は逃げる。

小学生の頃から動物に触れようと努力したものの、未だに成果は出ない。

無理にでも触って絶命した動物の数は幾つだったか。

不可能ではないか、脳内で反芻される。

しかし、諦めるつもりはない。

にぼしを右手に、ねこじやらしは左手に、帰宅ついでに迫るのだ。

ねこじやらしに関しては、一振りでも下手な材木なら両断できるほどの腕前になった。

それでもなお、猫が寄ってこないことが不思議で堪らない。

マタムネなどつい体が動くのか、煙管で対応して激しい打ち合いになるといふのに。

技量が足りないのだろうか。

技量には自信がない。

にぼしなら投擲することによって地面に突き刺さる程度、ねこじやらしは全力で振ることでも岩を砕く程度なのだ。

そんなことを考えていると公園へとたどり着いた。

寂れた小さな公園だが帰宅時には数匹の猫が集まっていて、都合の良い猫スポットとなっている。

今日も猫じやらしで興味を引き、にぼしを投げる作業が……始まらなかった。

普段は目つきの悪いクロちゃんやと銀色の装甲が眩しいミーくん、眼帯を付けたマタタビくらいしかいないのだが、今日は見知らぬ猫が集まっている。

それでも俺の姿を見た瞬間逃走したけれど。

一体何事かと逃亡を開始し始めた猫たちを避けて、前に進む。

公園の中心では猫が小さな山を作っていたが、徐々に小さくなっていく。

そして俺の目の前から猫がいなくなると、倒れ伏す少女の姿があった。

少女の雰囲気には覚えがあり、それはディアーチエと同じものだった。

ディアーチエと異界へ向かう際にマグネタイトを与える要領で少女に供給する。

それほど悪い悪魔ではなさそうだと感じたからだ。

ディアーチエに似ているというのはもちろんだが、可愛いというのも重要だ。

これがグロテスクな悪魔だったら善意に満ち溢れていようとも見捨てていただろう。消滅直前というわけではないが回復のために地脈を探つて霊地を探していたらしい。立ったままでは完全に捉えられなかったので限界まで接地していたところを猫の集団に襲い掛かれたとか。

好かれる体質でほとほと困っているのだとか。

……悔しくなんかない。

悪魔少女はスカートを軽くつまんで頭を下げ、礼を言った。

名前はシユテル、強欲を司っているらしい。

茶髪のショートカットと澄んだ青色の瞳をしていて物腰は柔らかい。

言葉も丁寧であり、無表情の中に感じられる感情が可愛らしい。

ディーアーチェと知り合いならば家に来るかと問うと、少し考えさせて欲しいと答えた。

マグネタイトが心配のようだったので霊地であると伝えたと、それならばと頷いた。

シユテルを伴つて家へと向かう。

会話の大半はディーアーチェはどうだったかという質問だった。

事細かに答え、生活では本当に世話になっていると伝えたと嬉しそうに微笑んだ。

シユテルについても軽く質問してみると、デИАーチエと同時期で逃亡を謀ったのが回廊へと迷い込んでしまったとか。

物質界にたどり着いたのは遅れる形となってしまったが、それでも運は味方してくれたとも。

あまり表情が変化しない性質らしいが、さとりと過ごした俺には表情看破がある。間違いないと喜んでいるのだろう、うつすらと頬が赤くなっている。

タイヤキでも買って帰ろうかと寄り道をした矢先、鳴り響く公衆電話。周囲に人影などはない。

無視しようかと歩きはじめると裾を引っ張られた。

シユテルが目を輝かせ、興奮気味に受話器を取るようにと言ってきた。

高位の悪魔の気配があるらしい。

俺もそれほど強いわけではなく、シユテルも弱体化しているのではないかと言いつ返すが「戦闘が私を待っています」とすでに聞こえていない様子だった。

しようがなく、公衆電話へと向かった。

高位の悪魔が出現したら全力で逃走するしかないだろう。

気まぐれに見逃してくれるかもしれない。

受話器をとると、突如として出現した仮面をつけた奇抜な服装の人物に赤いテレホンカードを渡された。

マグネタイトはかなりのモノらしい。

悪魔とはまた違う雰囲気を感じられる。

どこか作り物臭いが構成しているマグネタイトの量は膨大だ。

シユテルも分が悪いので戦闘は控えるようだ。

格を取り戻す前に消滅など笑えないでしょうとは彼女の言。

シユテルが急かすのでテレホンカードを公衆電話へと挿入し受話器をとった。

即座に受話器を放り投げる。

突然、スピーカーから透明のコードが襲い掛かって来たのだ。

一度電話ボックス内から離脱する。

シユテルは何が面白いのか無表情から一遍、好奇心に満ち溢れていた。

受話器から離れても声が聞こえるが内容は簡単なアンケートのようだ。

コードがどこから襲撃をかけてくるかわからない、細心の注意を払って質問に答えて

いく。

すべてに応え終わると、薄れていく景色。

転移が始まったのだとシユテルが目を輝かせた。

転移先は埃の積もった建物の内部だった。

かなり広いらしいが薄暗くて奥までは見通せない。

俺から見て右手側は光源があるのか明るいが、左手側は真つ暗だ。

どちらにせよ、探索してみないとどうにもならないだろう。

シユテルにどちらから向かうか相談しようとして、次々と現れる人々。

転移させられたのは俺だけでは無いらしい。

現れたやつらは混乱して鬱陶しい。

誰かが答えを知っていると思っているのか、口々に騒ぎ出した。

面倒事に繋がるのは目に見えていたので無視して進むことにする。

明るければ付いてきそうだ、左から行くとしよう。

歩きはじめると後から追いついてきた。

場離れしているのか、かなり落ち着いているように見受けられた。

男女二人だが、面識はないらしい。

男はフイネガンと名乗った。

体格と筋肉の付きが良い。

なんらかの格闘技の心得があるようだ。

しかし、暗闇にサングラスとはどうなのだろう。

女性は八雲、俺でも知っているピアニストだ。

フィネガンよりも落ち着いている姿は何かを知っているようだ。

話を聞いてみるべきだろう。

さて、何を聞こうかと思つてみると徐々に八雲の顔が青くなつていく。

まさか、俺にニコポの才能があつたのだろうか。

八雲がゲロツた。

……こいつ、酒臭え。

【シユテル】 悪魔：概念（強欲） レベル10 耐性：不明

だいたいディーアーチェと同じ事情なので割愛。戦闘をこよなく愛する。

【フィネガン】 不明

中堅サマナー。メリケンサック型のCOMPは持っていない。

【八雲 祭】 不明

サイレンは初めての挑戦。酔っ払いである。PSIはまだ無い。

近況報告

- ・シユバルツバースへ突入しました。
- ・安心院がフラスコ計画を予定しています。協力者として、ホムンクルス（フラスコの中の小人）がいます。
- ・外から深淵が覗き込もうとしています。

9

人では無い、獣のような何かが遠くで咆えている。

後ろから悲鳴が聞こえる。

命乞いをするもの、勇ましく戦うもの、それらを置いて逃げるもの。

耳をすませば様々な音が様子を伝える。

物を壊しながら争う騒音が響き、静かになる。

そしてぐちゃぐちゃと柔らかな物を潰す音とこの世のモノとは思えない悲鳴が続いた。

たぶん、悪魔に甚振られているのだろう。

生体マグネタイトは感情によって増減するらしいから、悪魔は敗者を黜るのだ。

散発的に現れる悪魔を鎧袖一触とばかりに蹴散らしていく。

大量に現れた際にはシユテルに多量のマグを与えることで瞬発的に強化し、一気に大魔法で蹴散らす。

建物の内部は低位の悪魔ならば現界するには十分なマグで溢れており、シユテルの維持に気を張る必要はない。

フィネガンは元ボクサーのサマナーであり、黒いドレスに身を包んだ美しい女性型の悪魔・リヤナンシーを召喚している。

悪魔の召喚にコンピュータを用いるとはなかなか面白い。

召喚陣のみをプログラムするものと、容量を増やすことで悪魔自体を中に入れて置くものがあるようだ。

現在はターミナル型ほどの大きさでなくては複数を入れて置くことはできないので、呼び寄せるだけの召喚プログラムが主流らしい。

召喚に用いるコンピュータをCOMPと呼ぶのが一般的だとか。

しかし、フィネガンが使っているCOMPはハンドコンピュータというやつな

のだがボクサーには邪魔じゃないのだろうか。

COMPがあればシユテルやディアーチエをマグの浪費なしに入れられるので、異界探索時の移動などに便利そうである。

ただ、COMPを使うためには悪魔と契約する必要があるとも。

シユテルは格を戻す手伝いをすれば契約してくれるようで、現在の状況も気に入っているようだ。

初めての契約に満足しているとフィネガンに説教された。

契約していい悪魔は笑顔で寝首をかくこともあるから首輪は付ける必要があるとか。

なるほどなー。

目に付いた悪魔はとりあえず仕留める。

基本的に俺やフィネガンは後ろで指示を飛ばし、リヤナンジの衝撃を生じさせる魔法のザンで体勢を崩し、シユテルが炎魔法のアギで焼き払う。

八雲は更に後ろをついてきている。

後ろにいる酔っ払いだが、まるで動揺していないので何らかの知識を有しているのか期待して読心したのだが、何も知らなかった。

酒に酔っばらって思考が鈍り、判断力が曖昧になっていただけのようだ。

こちらに着いてきたのも最初に動いた者に反応しただけという昆虫並の行動原理。酔いが醒めてきて悪魔にキョドっている姿に呆れながら探索を進めて行つた。

随分と歩いたが収穫になるようなものは見つからなかつた。

部屋の数は多いのだが、ほとんどが鍵が掛かつていた。

片っ端から粉碎して内部を漁つたが目ぼしい物は無く、わかつたことは此処で何らかの研究をしていたということくらいか。

異界に飛ばされた理由を探ろうと、さらに探索を進める。

建物の端まで進んだが扉を開くことができなかつた。

どうやら建物が異界と化しているらしく、単純な異界ならば主の撃破で解除されるので光源のある方の探索も必要だろう。

大人が一人余裕を持って入れそうなガラス管が連なる部屋を陣取つて、集めた資料を検討する。

陣取つたのはガラスが碎けて破片が飛び散っている以外は比較的きれいなためだ。

英語はフイネガンと八雲に任せる。

八雲がとうとう役に立ったのだ。

面倒になつて悪魔の餌にしなくて良かった。

内容は当然ながら研究についての話ばかりだった。

研究名は「グリゴリ計画」というもので「キメラプロジェクト」と呼ばれる悪魔と人間の合体に目を付けた、とある高貴な存在が自らの分霊を使って利用したのが始まりだとか。

人体実験を重ねることでデータの蓄積を繰り返し、その結果として特殊な人間が完成するようになったようだ。

それらを元に研究をつづけた結果、異能を身につけた強力な人間を生み出したとか。

研究も最終段階に入り、異能者のロールアウト直前までたどり着いた、という辺りまでの情報しか見つからなかった。

グリゴリの天使と呼ばれる高貴な存在とは一体なんだろうか。

シユテルやフィネガンと真面目に考察していたのだが、八雲がさっさと出たいと急かしてきたため切り上げる。

他の部屋のように壁に黒ずんで乾燥した血やバラバラにちぎられた白骨、人型の腐肉、蛆、蠅、などが無い比較的きれいな部屋を選んだのだが厳しいようだ。

顔は青を通り越して白くなり、冷や汗を流して気分が悪そうだ。

腐った肉を貼り付けて徘徊するゾンビやスプラッタ映画も真っ青なくらい顔が潰れ

たゴーストのいる部屋を指差して、其処らで休憩するかと提案するも断られた。焼き払えば死臭以外は幾分かマシだと思っただけだ。

最初の転移地点まで戻り、未探索だった残りの場所へと進む。

こちらはウイル・オ・ウイスプという光源があるのでかなり明るく、隅々まで見渡すことができた。

天上や床、壁の至る所に飛び散った血液、無造作に転がされた手足、千切られた表皮と爪、転がっている目玉や舌、瞳を失って落ちくぼんだ眼窩の持ち主は苦悶の表情を浮かべ首だけになっていた。

遊ぶだけ遊んでマグを喰らって放置した様子から、人食いの悪魔はいないようだ。

無視して進もうとすると八雲がまた吐いた。

こいつ、吐いてばっかだ……。

死体漁りもサマナーの仕事だとばかりに張り切っていたフイネガンとサマナーの持ちの物に興味津々な俺とシユテルとは違い、八雲は壁にもたれて呻いているだけだった。

八雲の軟弱さに呆れながら周辺を漁る。

サマナーも混じっていたのだろう、拳銃やナイフといった武器も転がっている。

死骸を漁れば銃弾も見つかるだろうが、肉の塊となっていて面倒だ。肉塊の中で辛うじて腕とわかるものがラップトップを掴んでいた。

あまりにも固く握られていて、中身を確認しようにも手元に寄せることができないので指を引き千切った。

充電は十分、表示されている画面は悪魔召喚プログラムであった。

悪魔を使役するためにサマナーには必要不可欠な道具だ。

血糊で彩られているが何かに使えるかもしれないと回収していく。

他にもいくつか転がっていて、中にはフィネガンのようにハンドヘルドコンピュータもあった。

当然腕のみとなっていたが。

悪魔召喚プログラムのみが入った物ばかりだったが、ほんの一部は画面に修復中と表示されている。

フィネガンが言うには撃破された悪魔をリカバリすることのできる上物で、その分仲魔の数を減らす必要があるのが欠点だとか。

他人が使っていたモノなど使いたくないので中身を漁って悪魔召喚プログラムを消してからジャンク屋に流すでしょう。

頭と胴体のみ歪なダルマとなった人間から背囊を拝借して詰め込んでいった。

こんなものかと切り上げ、立ち上がる。

足元に在った見知らぬ誰かの頭を蹴ってしまった。

生首は喰わされていたのだろう、誰かしらの指を吐き出しながら転がっていき、八雲にぶつかった。

血涙を流し、口から指を食み出させた頭部と目が合い、再びゲロを吐いた。

吐いたら体力がなくなるってわかっているのだろうか。

これ以上吐いたら携行食料を食わせたほうがいいだろう。

肉塊の荷物から多量に見つかるので問題ないだろう。

明かりというものは先ほどの死骸のように人間を引き寄せる。

そして、悪魔も引き寄せるようだ。

群れとなって襲い掛かってくる悪魔どもの姿が見えた。

今歩いているのは直線が伸びている広い廊下で戦闘するには少しばかり狭い気がしなくもないが、問題なく行えるだろう。

拾ったナイフを片手に待ちかまえているとシユテルが服の裾を引いた。

やりたいらしい。

全力でマグを注いだらどうなるのだろうかと疑問に思い、実行してみる。

ご機嫌となったシユテルが詠唱、そして視界には燃え盛る炎のみが広がっていた。炎が引くと、全てがなくなっていた。

残ったのは其処ら中に残った火の粉と黒く焦げ、所々溶けた床や壁だった。凄まじい威力である。

シユテルは結果を見て満足気に息を吐いた。

障害物も排除できたので先へ進もうとすると奥から人影が接近してくるのを感じた。

読み取れる思考は殺意で埋め尽くされている。

悪魔かわからないが敵だろう。

かなり速い。

シユテルにアギで牽制させてみたがなかなか当たらない。

厄介だ。

どうしたものかと頭を回転させていると八雲が倒れた。

またか。

今度はゲロは吐かなかつたが、鼻血と熱が出たようだ。

余裕がないので上着を丸めて枕にして寝かせて放置する。

悪魔が後ろから現れて食われるかもしれないがそれは自己責任だ。壁を蹴り砕き、瓦礫を作る。

拾ったナイフを射線を変えながら絶え間なく投擲し、瓦礫も蹴り飛ばす。

接近する人影は奇妙な力場に護られているようで、当たりそうなナイフや瓦礫が避ける様に曲がっていく。

これは異能者か。

悪魔が蔓延るこんな場所で何をやっているのだろうかと疑問も浮かぶが今は無効化するのが先だ。

シュテルにマグを送る。

廊下を再び紅蓮の炎で染め上げた。

フィネガンが「やったか!？」とフラグを立てていると案の定、生きているようで異能での反撃を行ってきた。

八雲とシュテルを肩に担いで後ろに飛び退く。

フィネガンは知らん。

廊下が爆ぜて、紅蓮の炎を飲み込んだ。

飛んでくる巨大な瓦礫を異能者に向けて蹴り飛ばす。

どんな異能かわからないが爆発させることで防いでいた。

シユテルの炎を飲み込んだことと廊下を吹っ飛ばしてみせたことから威力はかなり高いようだ。

あまり接近したい相手ではない。

煙に包まれたフィネガンが悪態をつきながら後退してきた。

シャツが少し焦げており、無傷とはいかなかったようだ。

なるべく俺とシユテルに損害が出ないように戦いたいという事でフィネガンとリヤナンシーで前に出るといふ作戦を提案。

却下された。

消耗率はかなり低くて良い作戦だったのだけれど。

異能を使うためには何らかのエネルギーを消費するので、枯渇するまで粘るといふ方向で決まった。

フィネガンが拾ってきた銃で弾を撒き、瓦礫を蹴り飛ばし、ザンやらアギやらも撃ちこむ。

時折、イラついた様子で異能者が巨大な爆発を起こすが思考を読んで回避する。

肉片が転がる場所まで戻ってきたが行うことは変わらない。

爆発で舞い上がった肉片が八雲に降りかかった。

戦闘中なのにそんなところで寝てるからしょうがない。

思考を読み取っていると徐々に痛みと焦りが生じ始めていた。やはり無限に使うことはできないようだ。

鼻血が出ているらしく、焦りが凄まじい。

推測すると脳を酷使用する異能のようであり続けると疲労で痛みが生じるらしい。追い打ちをかけるように瓦礫と魔法を増やす。

焦りを痛みが上回ってきたようで単純な思考しかできなくなっていた。そうなると瓦礫を当てるのも簡単だ。

単純な思考は捨て身に賭けることを導きだし、力を溜めこみ始めた。

異能者には逃走するという考えは一度も無かった。

その思考を読み取った俺はシュテルへと今日一番のマグを与えた。戦闘狂は同士で争って戴きたい。

廊下を覆うほどの爆発をシュテルの熱線が一直線に貫いた。

熱線の横を駆け抜け、異能者の元にたどり着く。

異能者は白っぽい髪をオールバックにした二十歳ほどの男だった。

異能で防いだのか見た様子では熱線が当たった様子はない。

しかし、異能を使いすぎたのか鼻血を垂らていた。血走った目がこちらを睨んでいた。

未だに殺意を抱き続ける精神に呆れながら正拳突きをくれてやる。

弱った異能による力場を殴り砕いて、直撃させた。

どす黒い血を吐いてのた打ち回る異能者を蹴る。

壁へと衝突して瓦礫の山を作り上げていた。

異能者を退けたので探索を再開する。

先ほどまでの戦闘を感じ取っていたのだろう、悪魔もほとんど寄って来なくなった。

熱で魘されている八雲を背負って歩く。

COMPに入れたらたならどれほど楽なのだろうか。

未探索だった残りを探索し終えるも、出口が見つからなかった。

マグを限界まで溜めてシュテルに破壊してもらおうしかなないと考えたあたりで電話の

ベルが鳴った。

音を頼りに向かうと机の上に佇む固定電話。

ベルが鳴り響いている。

非常に怪しい。

怪しいが、たぶん、ゴールなのだろう。

最初に公衆電話で受話器を取ったときに透明のコードが襲い掛かってきたのを思い出した。

またアレに襲われてはたまらないと、八雲で試す。

憔悴している八雲の耳に受話器を当てると転移が始まり、姿が消えた。

よし、安全だ。

ファイネガンとともに領き、帰還した。

それから定期的に転移されるようになった。

最初に手に入れた赤いテレホンカードが鳴り響くのが始まりの合図らしい。

ついでに魔人が現れることもある。

次のときには八雲は異能に目覚めていて、超能力を使えるようになっていた。

俺とファイネガンには一向に異能が目覚める兆候は無いのだが。

転移の際には新人が供給されるが生き残るのは一握り、そして次に生き残るのはさらに一握りといったところか。

一般人からサマナー、異能者まで様々だがほとんど死ぬのであまり興味はない。

稀にいる生き残りを観察した結果、一般人は確実に異能に目覚めるようだ。

サマナーはほとんど目覚めず、元から異能を持つていた者は転移先だと調子が上がることもわかった。

転移先についてはあまり情報が集まらないが、ルールはだいたいわかった。

必ずいる異能者をぶちのめして鳴り響く電話をとる、というものだ。

何度か異能者を無視して電話をとったので確実だ。

そのとき囿として何人もの新人が死んだが良い仕事をしてくれた。

時間が合えば情報交換のためにフィネガンと、体術と異能の訓練に八雲と会っている。

フィネガンに紹介された店に回収したコンピュータを持ち込んでCOMPと交換してもらった。

他にも悪魔召喚プログラムが入っている物を持ち込めば換金してくれるため重宝している。

ラップトップ型のCOMPにしたが戦闘では不便を感じるうえに充電も微妙なため、召喚以外は使っていない。

会話して仲魔にするという方法もあるが引き裂いてマグを取り出した方が早いのであまり会話はしていない。

合体したら強くなると言っても、今いる仲間は単に格を取り戻すだけなのだからマグ

を与えたほうが嬉しいらしい。

というか思考が読めるのに見知らぬ悪魔と会話してもな……。

そんな感じで強制的に異界を探索する以外は特に変化はない。

学校も球磨川がリコール喰らった以外は何事もなかった感じだ。

ただ、副生徒会長の安心院とやらが面白いことを考えていたのが気になった。

球磨川を主人公に引き立てる際に少し使えるかもしれない。

【ドルキ】 レベル25 異能：ESP

『奇跡』の行使をテーマにグリゴリ計画で生み出された。扱っている異能は超能力に分類されるので失敗作といえる。

【グリゴリの天使】

高貴な存在。(笑)を付けてはいけない。『奇跡』を扱える人間を作り出すことで人間の素晴らしさを伝えようとして失敗した。

読心：さとり、ハオ、オリ主が扱う読心は超能力とは異なる。魂の波長を合わせてうんたらかんたら。術者が弱いと悪魔に乗っ取られる。

近況報告

- ・グリゴリ計画で生み出された異能者が同胞を集めています。
- ・グリゴリの天使は逃走しています。
- ・メタトロンがグリゴリの天使を追いかけています。
- ・大洪水の恐れがあります。

— 10

「やあ、久しぶりだね。元気だったかい？」

声を発したのは目の前に佇む、キュウベえと名乗った小さな白い動物だった。

耳は長く、瞳は真っ赤。

ウサギのような、猫のような、動物のような愛らしい外観をしているが、変わることはない表情が無気味であった。

「相変わらず無口だね。でも、その様子を見てみると君と過ごしたあの楽しかった日々を今でも思い起すことができるよ、イーノック。……いや、今はメタトロンか」
淡々と、感情の感じられない声だった。

事実、感情など一切込められていないのだろう。

自分も、もちろん相手も、この場に現界しているのは分霊（わけみたま）である。結局のところ、本体の思い出を知ることができるだけだけだ。

実際に体験したものではない。

だから先ほどの言葉は意味を為さない。

小動物が発したただの鳴き声でしかないのだろう。

「天から落ちたこの僕に何か用かな、天の書記」

感情の灯らないガラス玉のような瞳が身を貫いた。

その小さな体躯には現世に顕現できる限界までマグネタイトが注がれている。

渦巻く魔力は、ただそこに在るだけで身を切り裂かれるようだった。

「グリゴリを捕縛するのが君の仕事だろうか？ 僕はただ此処で待つているだけ……」

すべてが足りない。

本体からの補助もない。

それでも戦う。

それが与えられた道だから。

「ああ、やっぱり駄目かな。君は人の話を聞かないからね」

機械仕掛けの躰に魔力を通し、攻撃を行う。

微動だにしない。

魔力の不足を呪文で補い、魔法を放つ。

微動だにしない。

ビー玉のように艶のある赤目が無感情に見つめていた。

「いや、もうその道しか選べないのか。……神は絶対、わかっているさ」

小動物の力が増す。

耐えることはできないだろう。

己は単なる分霊である、消滅は怖くない。

ただ、悔しかった。

「つまり神は君に死ねって言ったのと同義だね。そうじゃなかったら僕と戦う必要なんてないから」

光が満ちる。

光が満ちる。

光が満ちる。

「人が持つ唯一絶対の力も天使となった今では無いも同じ。……まあいい、一番いいので送り返そう」

光が満ちる。光が満ちる。

光が満ちる。光が満ちる。

光が満ちる。光が満ちる。

「本体から与えられる仮初の記憶だとしても良い奴だったよ、君は。『メギドラダイ

ン』

光が満ちる。光が満ちる。光が満ちる。

光が満ちる。光が満ちる。光が満ちる。

光が満ちる。光が満ちる。光が満ちる。

光が……。

視界の端で人影を捉えた。

余裕は一切なく、宿主が死なないよう尽くすことしかできない。

天の火が、地に降り注ぐ。

人影が悪魔を呼び出した、サマナーのようだった。

この場では脆弱な悪魔だった。

魔法で対処するにも、盾にするにも、あまりに矮小だ。

脆弱な悪魔の身に膨大なマグネタイトが迸る。

そして、その悪魔から放たれる光。

余波がこちらまで及び、それを防ぐために力のほとんどが削られていった。

相殺とまではいかなかったようだが、直撃を避けることはできたのは運が良かった。

「……わけがわからないよ」

癪に障るが同感だった。

薄れていく意識、最後に見たのは魚を模した菓子を頬張るサマナーと悪魔の姿だった。

高校からの帰り道にある公園で小規模な異界を感知したので向かってみると、白い小動物と緑の髪をツインテールにした少女が口論していた。

事情を聞こうとすると、白い小動物がこちらをチラツと見た後に大魔法を放った。

破壊の光が結界を覆った。

これはまずい。

買ったばかりのタイヤキが吹っ飛ばされてしまう。

大魔法に対処すべくさとりを召喚する。

さとりは相手の魔法を劣化コピーできるのでうまく相殺できるのではないかと思っただのだ。

思った通り、コピーは出来た。

しかし、威力が足りないらしい。

勇気とか友情で補えないだろうかと尋ねると、負の感情のほうがマグの量が多いとか。

なんか違う。

こんな意味不明な状態でタイヤキが吹き飛ぶのは御免なのでさとりへと一気にマグを送る。

いつもは眠そうな半目も今ばかりはぱちりと見開き魔法を放った。

弾幕を張るにはまだ足りないとか。

何を目指しているのだろうか。

そんなことよりも余波が凄まじい。

紙袋から飛び出たタイヤキを上手く口で捉えて咀嚼。

衝撃が納まるころには異界は消え去り、小動物の姿も無かった。

険しい顔をしたさとりの口にタイヤキを詰める。

……で、この少女はどうしろと。

あの白い小動物を次の機会に見つけたら真つ先に殺すことを誓って帰宅。日本人の食べ物の怨みはしつこいのだ。

別にタイヤキが無駄になったというわけでもないが。

少女からは仲魔や異界の悪魔とは違う奇妙な感じがしたので拾ってきた。

案の定、デИАーチエに拾ったとこに帰して来いと怒られた。

シユテルも嫌そうにしているがタイヤキを食わせたなら治まった。

この拾った少女だが、どうやら人間ではないらしい。

確かに身体の所々から機械のような部分が見えるうえにちよつと重かった。

顔の半分が欠けている腕や足の数が足りない普通の少女ではなかったようだ。

露出した面から機械が見える。

機械人形というやつだろうか。

そんな機械人形の少女だが、天使を内に秘めているようだ。

デИАーチエとシユテルは天使があまり好きではないらしい。

悪魔と天使は相いれないということか。

目が覚めたら先ほどの話を聞くとしよう。

サマナーが情報や悪魔の交換を行ったり、色々な依頼を受けることのできるDDS—NET内の掲示板で暇を潰す。

ほとんどが非合法な内容なので掲示板の内容もブラックだ。

とりあえず「憧れのCOMP」というスレに「メリケンサック型のCOMPとかセンスなさ過ぎ」、と書き込んでおく。

依頼を見てみるが、玉石混淆で地雷も少なくない。

力量と合った仕事をすべきなのだろうが、判断するには難しいものばかりだ。

依頼を受ける場合は事前に周辺の悪魔や異界のレベルなど、様々な情報を収集して自分なりに決断を下さなければならない。

スレに戻ると「なんでや、なにがあかんのや！ 拳闘士の必需品やろー！」「COMPぶつ壊れんぞ」「俺は超ベジータだ」「これだから三流は・・・」「おうどんたべたい」などと書き込まれていた。

おうどんたべたい。

夕飯ができたとディアーチエに呼ばれたので食卓に向かう。

今日はなんだろうかと扉を開けた。

その先には、緑色のツインテールを揺らしながらネギの丸焼きを齧る天使内蔵型機械天使の姿が!!

なに機械のくせに呑気に飯食ってんだ、ジャンクにすんぞ。緑のぼんこつ天使、なんとメタトロンに分霊であるという。

固体名は「初音ミク」。

ディアーチェの小ハゲかという眩きは聞こえなかったことにした。

使命は墮天使の捕縛であるが、天界や本体からの補助は無しだというのだ。

憑代もマグ不足の分霊状態で投げ出されてから自分で探したとか。

自分で全て賄う必要があるとかブラック過ぎはしないだろうか。

小さな霊地で休息しつつ、弱い亡霊を狩り、限界ギリギリで彷徨い、散々苦勞した末にちようど廃棄されていた機械人形に乗り移って事無きを得た、という話だ。

最初から少しガタが来ていたが、先ほどの戦闘で半壊してしまったようだ。

それでも飯が美味いと微笑んだ。

なんというか、涙を誘う。

廃棄されていた機械人形は魂の抜け殻のような物が詰まっているだけだったので、そこに憑依することで現在に至るとか。

相性が心配だったが、意外と馴染むらしい。

馴染みすぎてご飯が食べられるようになったとか。

好物はネギ、趣味は歌、嫌いな物はハゲとメカメカしい天使、油をかけてくる天使、天

使、書き物だそうだ。

歌を試しに聴いてみたが、突然放り出されたときやマグ不足で消失しかけたときの歌は泣きそうになった。

それから暫くして半壊状態のミクは出て行った。

回復するまで幾日か居てもいいのだと伝えたが、近場に墮天使がいる感知したらしい。

そして半日後にさらに壊れて帰って来た。

力の差が有りすぎたらしい。

もつと休んだら良いと伝えるも、再び出ていき、半日後に壊れて帰ってくる。

何度か繰り返し、最後にはほとんど全壊といつても間違いない状態で帰って来た。

ほんこつ天使は人の話を聞かないやつだな……。

とりあえず高校1年はほんこつ天使のパーツを集める作業を行うことにした。

「対シヤドウ特別制圧兵装」が扱える部品を依頼料に加えれば格安で依頼できるようにした。

ほんこつは面倒ばかりである。

完全復活を果たしたら恩を感じてくれれば良いのだけれど。

ほんこつジャンクなわけだから期待はできない。
……まあ、歌が聴けるだけでも十分だけれど。

球磨川？

同じ高校は落ちたから別のところに通っている、らしい。

なんか戦ったりするとか。

どんな高校だよ、それ。

いま懇意にさせてもらっているのは鹿目まどかという名前の女の子だ。

タイヤキをあげたら仲良くなった。

この娘だが悪魔の天使よりも天使力が高い。

ほんこつとは比べ物にならないレベル。

まどかさんマジ天使。

【初音ミク】 レベル30 種族：機械（大天使メタトロン）

ただでさえ天使であるミクさんがメタトロンというのは当然の結果だと受け入れる
ほかない。

ペルソナを扱うことのできる機械人形。人型として最初期に開発されたが、心が生まれなかったために廃棄された。黄昏の羽根も内蔵されていないが、代わりにメタトロンの分霊が入り込むという贅沢仕様。機械だけど飯が美味い。

本体が現世に他の分霊を派遣する際に悪魔の注目を逸らすために撒き餌として作り出した。そのため弱いうえに、消滅しても構わなかったというハードモード。凄く狙われていた。

ほんこつだがひたむきな努力家。ハゲとメカ天使、天使諸々が嫌い。

現在は首と胴体、右腕のみ。あだ名はミクトロン。

【まどか】 レベル1 種族：人間

白いやつに狙われている。マジ天使。

近況報告

- ・ 球磨川が別の学校で頑張っています。
- ・ シャーマンフアイトが楽しみ過ぎてハオが寝不足です。
- ・ キュウベえが出現しました。一体なにルシファーなんだ……。

転送先の広い建造物を走る。

本当に広い。

俺の走った道には床を踏み抜いて出来た足跡が残る。

フィネガンと八雲とはどうやら離れた場所に転送されたようだ。

無理しても合流するよりも、異能者を撃破したほうが早い。

そういう事情で追いかけているのだが、なかなか追いつくことができないのだ。

特に相手の足が速いわけではないが獣のような何かに騎乗している。

それでも俺が脚力で負けているわけではない。

追いつけない理由は相手が召喚を繰り返し続け、妨害してくることだ。

また廊下を埋め尽くすほどの怪物が現れた。

名状しがたき怪物が群れを成して迫る。

あれはサマナーが契約できる悪魔の数を超えている。

高位悪魔が呼ぶ眷属のような物かと思ったが、どう見ても種族が別物だ。

それほど強いわけでもないが、頗る硬いうえに道を塞ぐ障害となる。

無視して強行突破すると融合して襲い掛かってくる。

融合されると更に硬くなるため、前と後ろが塞がれて時間を食われることになる。迅速に追いつくには群れを接敵したときに確実に仕留める必要があった。

外見は額に傷のある童女だったが能力はかなり面倒な異能者だ。

あまり時間を掛けるとテレポート持ちの別の異能者が現れ、逃がされてしまう。

逃げた異能者はときどき異界に出現して襲撃してくるので殺しておきたいが未だに一人も殺せていない。

劣勢になるとテレポートで逃げられるためだ。

ならばテレポートで異能者が回収されるまで放置すればいいのではないかと思ひ、比較的綺麗な部屋に閉じこもったのだが、いつまで経っても終わらなかつた。

痺れを切らして外に出ると悪魔を従えたサマナーや異能者どもといった新人が皆殺しにされてたときは笑ってしまった。

そういう面倒なことが起きるので早期撃破、出来れば殺害、ということだ。

召喚、召喚、召喚……。

異能者の餓鬼が騎乗している複数本の腕を巧みに動かして駆ける奇妙な白い怪物の姿が小さくなっていく。

俺だけでは手数が足りなくなってきた。

ただ、残念ながら俺の仲魔には子供は殺さない主義ばかりだ。

俺も好きではないが、今後のことを考えるとそうも言っていられない。

というか、転送したときには新人のほとんどを召喚した怪物で殺していたあたり普通の餓鬼と思えるわけが無い。

あまりやりたくないが、仕方ない。

仲魔を現地徴収するしかない。

敵が融合することで強化されるであろうことに歯噛みしながら一度追撃を中止し、全力で逆走する。

後ろを確認するが追いかけてくる様子はない。

逃げることに専念したのか、それとも力を蓄えることにしたのかわからない。

どちらにしても骨が折れそうだ。

逆走していると都合よく悪魔の群れを見つけた。

アナライズするまでもないほどに弱小の妖精ばかりだ。

軽く跳躍し、壁、天上と順に足場にして跳び、群れの背後をとる。

そしてリーダー格と思われるハイピクシーの首を掴み、全員契約してくれのように頼む。

混乱して状況を理解できないのか、立場がわからないほど頭が悪いのかわからないよ

うな妖精を核ごと消し飛ばす。

他にも悪魔は沢山いるし、そっちでお願いするのでしょうか。

そう眩きながら目に付いた妖精の頭を掴んで壁で摩り下ろす。

3匹くらい顔面を失った頃に契約を了承してくれた。

やはり相互理解さえあれば悪魔とも絆を結べるようだ。

会話の素晴らしさに感動しつつ、契約したばかりの妖精にMAGを送る。

核ごと弾けて消え去った。

脆いな……。

あまりの脆弱さに引きながら、次の妖精にMAGを供給する。

やはり消し飛んだ。

怯える妖精にMAGを送ろうとするとハイピクシーが自分がやると言い出した。

なるほどなー……まあ、当たり前だけど却下。

そもそも一匹ずつやるとか非効率すぎる。

全員同時にやってやると笑顔で伝えてMAGを振る舞う。

当然ながら塵と化した。

ああ、わかってた。

今回の異界は雑魚ばかりで困る。

何匹目かわからない消し飛んだ悪魔を見ながらそう思った。

かなり楽な難易度だと思われるが、異能者を考えると結構えげつない。

低レベルの雑魚悪魔が闊歩する異界を徘徊する高レベルの怪物を召喚する悪魔とか
笑い話にもならない。

まあ、主に力が集中しすぎて出現する悪魔とのレベル差が激しい異界も稀にあること
から油断した者が悪いということなのだろう。

人肉ミンチの中を漁り、珍しい物品を集める。

一度くらい生き返れないのだろうか、こいつらは。

そんな簡単に死んでたらこの先生き残れないだろうに。

死んでるからこの先もないのか。

それとも地獄で訓練でもしてくるのだろうか。

人間は肉体が弱すぎるのだから魂くらい鍛えたほうがいいのかもしれない。

遺品を漁り続ける。

ナイフや金属球があると嬉しいのだが、出てくるモノは銃や弾ばかりだ。

殴るか投擲するほうが速いし強いのであまり銃は好きじゃない。

ただ、投擲も安い物だと材質が柔らかいので衝突時に砕けてしまうから微妙ではあ

る。

やはり直接殴ったほうが強くて楽だ、弾切れもない。

それでも銃は拾っていくのだが。

フィネガンが仕事仲間や部下に分けるらしい。

店に売りつけるより安く買いたたかれるが、情報をくれるので銃はほとんど渡している。

転送されてきたサマナーは駆け出しばかりだったのかあまり良さそうな物が見つからない。

あっても魔石程度だ。

PCも持っていないがスマートフォンやタブレットが転がっている。

最近に進んでいるなど内心で関心しながら調べてみる。

召喚が合体、デビルトーク、アナライズと使える機能は限定されているが使いやすいうえに小型なので取り回しも良い。

サマナー向けに特化させれば、さらに使い勝手が良くなりそうだ。

機能は似たり寄ったりなのだなとスマホを弄る。

契約されている試しに悪魔を呼び出し、MAGを供給。

最初は喜んでいたが、途中から焦りはじめ、奇声をあげながら弾けた。

拾い集めたスマホとタブを見てストックは十分だと悪魔を召喚した。

まさか一匹も耐えられないとは。

人間が弱いと使役している悪魔も弱くなるのだろうかと思っていると、黒い球体が飛んできた。

その球の大きさは俺よりも一回りほど小さく、ふらふらと覚束ない動きをしている。スマホ片手に観察していると、そのまま壁に激突して落下した。

球体が霧散して、中から幼い少女が現れた。

頭を強くぶつけたのか、地面に座ったままふらふらとしている。

やがて痛みが落ち着いたのか、衝撃が引いたのか、ゆっくりと立ち上がった。

ショートカットにした黄色の髪、赤いリボン、赤い瞳、黒い服装。

それらが目に付いた特徴だ。

腹が減っているらしい。

切り裂かれて二の腕までしかない腕を差し出すと、血で口を汚しながら齧りついた。

悪魔は生きたまま食ったり、丸呑みしたり、嚙ったりするが、死体を食べるのは珍しい。

マグネタイトを効率的に摂取するために人間を襲うためであって、死ぬとマグネタイ

トが急速に失われるためだ。

人を食べる悪魔であっても死体は食わないことが多い。

骨ごとばりばり食っている少女に次々と人間だったものを渡す。

生きていたほうが好きだが、新鮮なので美味いとか。

女子供も柔らかくて特に好きであるとも。

こいつは便利そうだ。

ダメだったら次を探せばいいだけだ。

人間を食わせるという緩い契約で幼い少女のような悪魔、ルーミアと仲魔になった。

この契約には穴がある。

場所と時を指定していないという穴が。

俺がその気になれば10年後20年後でも可能だということだ。

実際はすぐに果たそうと思っている。

まあ、異能者の餓鬼を食わせるだけだが。

ルーミアの移動速度が遅いため、首根っこを掴んで走る。

戦闘時に召喚でも良いが対峙したとになるべくラグを無くすためだ。

維持するためのMAGもそれほど多くない、というかかなり少ない。

しかもMAGの供給にも悠々と耐えられる。

独自の思考を持っているらしく、会話が少し空回りするが、頭が悪いというわけでもない。特に問題はない。

不活性MAGとなった悪魔たちの数を考えるとMAGの過剰供給ができる悪魔というのはかなり貴重なのかもしれない。

試しにさらに多くのMAGを供給すると最初は力強くなるだけだったが、ある一定量を超えると黄色の髪を束ねている赤いリボンが徐々に黒く染まり始めた。

リボンが黒に近づくとルーミアの瞳に知的な光が灯りはじめ、にこにこ笑っていた表情も凛々しくなっていく。

そして、急成長しているかのように背が伸びていく。

会話も幼い子供としていたものから、家の仲魔としているようなものに変化していった。

MAGの量に応じて知能・身体能力が上昇していくようだ。

格が高い悪魔が普段はMAGの消費を抑えるために幼い少女の姿になっているのかもしれない。

なかなか面白い悪魔だ。

轟音に近づく。

この先で戦闘が繰り広げられているようだ。

フィネガンと祭は異能者が騎乗していた怪物と戦闘しているようだ。

怪物も融合を繰り返したのか、建物を突き破ってしまっている。

今回の異界は外まで広がっていたらしい。

怪物自身も見上げるほどの巨大さで特撮に出るべきではないかと思えるほどだ。

誰か光の巨人か電源ケーブルが付いたロボットを呼んで来い。

怪物が振り上げた腕を叩きつけた。

衝撃に逆らう様に走り、飛び散る瓦礫を足場に怪物の頭部に迫る。

さらにルーミアへとMAGを多量に注ぐと完全に黒く染まったりボンが解け、ルーミ

アの頭上付近へと移動して天使の輪のように変異した。

その輪には天使が持つ神々しさは一切無く、空間が切り取られたような美しい闇だけ

が存在している。

ルーミアが広げた両手の先に巨大な黒い球体が現れた。

二つの球は赤い紋様が刻まれていて、ゆっくりと明滅を繰り返している。

全ての光が球体へと吸い込まれ、地は黒に染まり、空は夜が覆った。

空間に存在する悉くを闇が侵した。

球体が割れ、中から暗黒とともに鋭い爪を持つ手が飛び出した。

上機嫌な笑い声とともに、ルーミアが広げていた手を軽く振ると巨大な手が異能者の怪物を引き千切った。

強い。

頗る強い。

予想以上に強い。

というか雑魚妖精が闊歩する異界でこんな強い悪魔がいるとは思わないだろう。思わぬ幸運というやつか。

だが、問題もある。

燃費が悪い。

頗る悪い。

予想を超える悪さだ。

すぐに無くなるほどではないが、常に供給しておける量では無い。

供給したMAGを使い果たしたのかりボンが赤に戻って髪を束ねると、脳天気な状態のルーミアへと戻った。

この状態はMAGの維持に関しては理にかなっているようだ。

ただ、行動が幼くなるため生存能力は低くなりそうだ。

倒れる怪物を眺めながらそんなことを考えながら異能者の餓鬼を探すが見つからない。
い。

逃げらただろうかと落胆しながら着地に備えていると、何かが怪物の残骸を切り裂きながら迫る。

宙を落下している状態では避けられないことに舌打ちし、ルーミアを軽く地面に放つて顔を守るように防御。

そのまま衝撃で後ろへと吹き飛ばされた。

防御した際に右腕を前にしたのが祟ったのか、半ばまで切り裂かれていた。腕に力を込めて流れている血を筋肉で止める。

ふわふわと飛ぶことで追いついたルーミアの口に魔石を放り込む。

回復できる仲魔つてミクしかないわけだが、機械なので召喚できない。

攻撃に偏っているのだから、もう一人くらい補助が行える仲魔が欲しいものだ。

フィンガンと祭の二人と合流しようとする。衝撃波のようなものがいくつも襲い掛かってくる。

ルーミアの首を掴んで走って避けるが狙われているようで執拗に攻撃される。

攻撃から位置を特定し、敵を指して走る。

繰り返される攻撃に苛立ちながら接近すると、そこにいたのは以前腹パンした異能者だった。

エネルギーをブレード状に変質させ、斬った張ったを行う超能力だった気がする。

こいつも餓鬼と同じで新人を殺しまわっていたうえに、短気で殺意がかなり高かった。

転移先の異能者はキチガイばかりで呆れてしまう。

今回はたぶん、報復だろう。

面倒なやつだ。

読心で攻撃の軌道を読み取って徐々に接近し、MAGを込めたためにリボンが赤黒く変化したルーミアを投げつける。

異能者がブレードを振るう。

それをルーミアの鞭のように変化した闇が受け止め、赤い光を撃ちこんだ。

異能によって作られた力場で逸らされたが、問題ない。

隙について距離を一瞬で詰めて死角から腹目がけて拳を引き絞る。

先ほどの奇襲のお礼も兼ねての全力だ。

力場を貫き、超能力での強化を捻じ伏せ、腹を強かに殴りつけた。

異能者は血反吐を吐いて跪き、呻いている。

そのまま見逃してじわじわと弱る様を見ながらゆっくり死んで行つてほしいところだがテレポートで回収されては面倒だと距離を詰める。

止めを刺そうと殴り掛かると、視界を埋め尽くす何かで薙ぎ払われた。

衝撃で体が水平に飛んでいる中で何とか体勢を立て直す。

そこにいたのは先ほど引き裂いた巨大な怪物だった。

眉間に寄つた皺を伸ばしているとテレポートによつて薄れていく二人の異能者。

また逃げたか……。

前触れも無く怪物を召喚できる異能者の餓鬼は面倒だ。

ここで出来れば殺しておきたかったのだが仕方ない。

テレポートでなければ追撃もできたが残念だ。

そもそも異能者は厄介な能力が多すぎる。

次からは異能者を確認した瞬間、消し飛ばすようにしよう。

怪物の攻撃で目を回しているルーミアの口に魔石を放り込むとばりばり音を立てて咀嚼した。

そういえば建物の外に出たのは始めてだ。

眺めて見るが砂漠のような場所だった。

所々に朽ちた建築物が見えるが、ほとんどは砂に埋まっている。

転移された建物もほとんど埋まっていたらしい。

祭が異能が目覚めてから転移される度に上に昇っている感覚があると言っていた。

つまり地下から徐々に昇ってきていたのだろうか。

よくわからんな。

転移先から帰ってきて気付いたが銃を渡したくらいで、ほとんどフィネガンと祭と喋らなかつた。

急ぎの用事も話すことも無い、どうせそのうちまた転移されるのだからその時で良いだろう。

異界については次に探索してみれば何かわかることもあるかもしれない。

家に帰るとディアーチエがテンパった。

腕が千切れかけていたことが原因らしい。

宥めると落ち着いたのか人間は脆いから注意するようにと言いながらゼロハンター

プを渡してきた。

くつつかねえよ。

シュテルはディアーチェにゼロハンテープでは治らないでしょうと言って液体ノリを渡してきた。

くつつかねえから。

さとりは無言で絆創膏を渡してきた。

正しいけど違う。

テキトーに固定すればくつつくと思っただか俺をなんだと……。

もう少し人間に詳しくなっただけほしいものだ。

小型端末のミクダヨーに乗り移ったミクに腕の治療をしてもらおう。

このミクダヨーだがガイア教の依頼で天使を落として回ったらボーナスとしてくれた。

ミクは気に入ったようで家中を歩き回っている。

ミクダヨーは巫力バッテリーを内蔵しており、巫力が無いと行動できないため、玄関までが活動範囲となっている。

外に行く直前で電池が切れて倒れるので勝手に何処かへ行く心配が無くて都合が良い。

メシア教の依頼に連れて行ったらかなり好感度とか上がらないだろうか。

今度試してみよう。

そういえばルーミアに人間を食わせてない。

タイヤキ与えたら満足したので問題無さそうだ。

近いうちに依頼で襲撃をかけるのだからその時は食い放題だ。

たぶん、昼飯を抜いて夕飯に全力を出す感じだろうし、むしろ美味しく喰えるに違いない。

治療が終わったので腕の調子を確かめる。

切り裂かれていた状態で殴ったり防御したりと酷使したが、ミクの魔法で完治したよ
うだ。

魔法は便利で使いたのだが、俺には使えないらしい。

しかし、魔力はあるとか。

魔力はあるのに魔法は使えない不思議。

どういうことだ。

【ルーミア】 妖怪：不明 レベル1

供給したMAGの分だけ強くなるが、溜めることはできない。強さはサマナー次第。

リボンで封印うんぬん。

【EXルーミア】 妖怪：空亡 レベル40

リボンが黒色に染まることで封印の状態が判断できる。闇と夜の顕現。相手は死ぬ。オリ主のMAG供給：マグネタイト、魔力、巫力を混ぜたエネルギーを契約した。パスで供給している。無意識化で混ざってしまったため魔法は使えない。

赤いテレホンカード：持っているのと転移される。度数が50あり、0になると解放される。多くても3しか減らない。なんてインチキ。

近況報告

- ・メシア教がメシア候補を勧誘する予定です。
- ・ガイア教がメシア教を襲撃する予定です。
- ・「襲撃」と「護衛」の依頼を同時に受けました。

朽ちた建物の中、鳴り響く受話器を耳にあてる。

浮遊感とともに砂ばかりだった景色が変化し、緑が多く見えることになんとなく落ち着く。

周りを見渡せば元の世界に帰って来たことが確認できる。

後に続いてフィネガン、祭も転移されてくる。

難易度が極端に下がったこと、補充される新人の数が減ったこと、かなりの数の悪魔が闊歩していること以外には特に目新しい発見はなかった。

必要なときは連絡を取ることもできるので、このまま解散としよう。

その旨を伝えると、生き残った新人も転移されてきた。

それぞれの顔には程度の差はあれど疲労が見える。

説明が面倒だったので死にたくないなら着いてくるようにと伝えただけだったが、悪魔に襲われずによく無事だったものだ。

そんなことを思ったが最初に着いてきた人数と比べるとめっきり人数が減っていた。

色々あったのだろう、囧とか。

フィネガンと祭に労いの言葉を軽くかけてから解散しようとする壮年の男に声をかけられた。

俺よりもずっと年上の男で「枢木スザク」と名乗った。

情報が欲しいらしい。

残念ながら俺もそれほど知っているわけではないことを先に述べ、今まででわかったことを伝えた。

少し考えたあと、礼を言うのと風とともに去って行った。

むしろ風になったのかもしれない。

すぐに姿が見えなくなった、凄まじい身体能力の持ち主だ。

ひと月前に転移されたことからそろそろ次の転移が始まるだろうかと考えていると授業の終わりを告げる鐘が鳴った。

授業もつががなく終わり、途中で買ったタイヤキを齧りながらまどかかと帰路につく。

まどかとは中学が同じだったがあまり親しいというわけではなかった。

高校も一緒になったために軽く挨拶する程度だったが、帰り道も途中までは同じなので度々帰るようになった。

タイヤキを食べるのも今では習慣と化している。

ちびちびとタイヤキを食べて半分まで減ったころにまどかが今日は相談があると切り出した。

相談とはクラスで浮いている眼鏡少女と仲良くなりたいたいことらしい。

あまり他人と話している姿も見かけず、伏し目がちでおどおどとしている印象しかない。

まどかはその娘が優しいから友達になりたいというのだ。

色んな意味で浮いていた球磨川と仲が良かった俺の力を借りたいということだろうか。

全力で手伝うと伝えると断られた。

怖がられるかもしれないので仲良くなるまで刺激しないようにして欲しいとか。

何…だと…？

まどかを家まで送り、帰宅すると客が来ていた。

映画を見ているようで玄関まで可愛らしい笑い声が聞こえてきた。

出迎えてくれたミクを頭に乘せて居間へ向かう。

扉を開けるとテレビには歯車で捻じ切られる人間の姿が映っており、それを見て笑顔を浮かべる銀髪の子、お腹が空いたと呟くルーミアの姿。

SAWを見ながらの反応ではないと思う。

俺自身のサマナーとしての評判はあまり良くない。

別に成功率が悪いわけではない、むしろ確実に成功させている。

問題は首輪がついていないことだろうか。

決まった雇用主もおらず、勢力も決めず、安定して仕事も受けず、ふらふらと蝙蝠よろしく様々な依頼を受けることが歓迎されていない節がある。

サマナーとはそういうものだと思っただ、レベルが高すぎると自由でいるのは難しいらしい。

などと思っていたら、銀髪の少年がくすくすと笑いながら「人間も悪魔も天使も殺すからでしょう」と言った。

依頼だから当たり前だろう。

畳を存分に愉しんでいるのか寝そべっていたが、その体勢のままごろごろと転がってきて、胡坐をかいている俺の足を枕にした。

少年に「ドレスに皺が寄る」と注意するが買い換えればいいとか。

金銭感覚がちよつとマヒしている様子だ、デИАーチエあたりに預けたら矯正してくれないだろうか。

考えていると少女もごろごろと転がってきた。

ルーミアも真似して転がるが、途中で何故か闇を纏ったために方向が変わり、そのまま縁側から庭へと落ちて行った。

客である銀髪の子、名前はヘンゼルとグレーテル。

正確な年齢は知らないが会話から10〜13歳あたりだろうか。

ゴシック調の服を好んで着ており、双子の間で交換している様子が垣間見られる。

今日も仲良く交換しているようでヘンゼルがゴスロリ風のドレスを着ているため、短髪の少女にも見える。

代わりにグレーテルは白いシャツ、黒いタイ、半ズボンを着ているのだが、髪が長いのでボーイッシュな少女にしか見えない。

半ズボンの方を「兄様」、スカートの方を「姉様」と互いに呼んでいる。

顔を見ればどちらか判断できるので問題ないがディアーチエやシユテルあたりは判断がつかないらしい。

この双子だがガイア教に属している。

暇つぶしに子守りの依頼を受けたときに、メシア教と戦争ごっこがしたいとかで襲撃をかけに行ったので保護者として付いて行ったら何故か気に入られた。

ミクダヨーもそのときのものだ。

それから双子からの依頼を受けると、数日ほど滞在して遊んでから仕事をすると決まりになった。

勢力自体の依頼と違って勧誘や脅し、監視がなく気楽であるし、なんだかんだ可愛いので大歓迎である。

今回は色々やりたいことがあるので双子も長期滞在の予定だ。

この家もかなり賑やかになったものだ。

グレーテルが依頼品の入ったアタッシユケースを机に置いた。

今回もミクのパーツだ。

ほとんど双子の依頼専用アイテムと化しているがそれほど出回っている物でもない
ので仕方のない面もある。

俺に依頼するためにパーツを持つてる勢力を襲撃して奪っているとは双子の言。

それだと割高なような気がするが、どうなのだろうか。

今回はついでに「ドリーカドモン」という素材も手に入ったので追加報酬としてくれた。

悪魔合体に興味があるとか。

俺もだ。

よく考えると悪魔合体もしたことないとか、にわかサマナー過ぎる。

フィネガンから聞いた悪魔合体を行ってくれる施設、業魔殿を訪れた。

豪華客船を利用したホテルのようだ。

入るといきなり船乗りルックな紳士、ヴィクトルにヨーソローされた。

ホテルの主でもあり、悪魔合体を行ってくれるようだ。

とりあえず悪魔は合体することで強くなる、などと掻い摘んだ説明を受けてから練習。

転移先で連れてきたノツカーとコロポックルを混ぜる。

精霊ノームができあがった。

なるほどなー。

今回こそ本番とばかりにまずドリーカドモンを渡すと興奮した様子で次を急かしてきた。

頷いて取り出したのは、祖父の煙管である。

突然だが俺はモンスターファームが好きだ。

ゲームが苦手なさとりもモンスターファームを好んでプレイするくらい我が家では人気だ。

つまり合体するなら隠し味が必要だろうということだ。

ダイアーチェも手元の物品を吟味しているし、シュテルも心なしか瞳を輝かせているし、さとりも頷いている。

様子を窺った限り、やはり隠し味は必要なのだろう。

何か必死に叫んでいるヴィクトルは無視してノームが弾ける直前までMAGを供給し、投入。

一向に合体を始まらないので渋っているヴィクトルを急かして合体開始。完成して現れたのは小さな精霊だった。

というか閻魔から奪ったS・O・Fの同族っぽいあれである。

俺の魂と混ぜってしまったが、10年以上もの月日をかけて乖離し、煙管へと徐々に憑依したらしい。

憑依の対象を煙管にしたのは磨くのが日課だったためだろうか。

それにしても気の長い話だ。

ヴィクトルが驚きと不満の混ざった微妙な表情になっていた。

休日となり、双子が遊びにきて三日ほど経った。

双子の面倒は俺が学校に行っている間は仲魔が見て、帰宅してからは異界やゲームで遊び通しだった。

昨夜は依頼の前準備としてメシア教に襲撃に行くのだと誘われ、了承すると機嫌が良くなって夜遅くまで話していたので、たぶん昼過ぎまで寝ているだろう。

襲撃する時間は日が暮れてからを予定しているのだが、それでも前日にはしゃいしまうの遠足を楽しみに行っている子供のようだった。

天使の羽を千切って引きずり落としたり、天使の目の前でメシア教徒の手足を切断して這いずりまわせると無邪気な笑顔で言っていたのを思い出して微笑ましい気持ちになつた。

ただ、食べるなら内臓よりも脳にしなさいと言うのを忘れていた。

内臓は中身が不味そうだからな。

たぶん慣れているからわかっているだろうけど、事前に伝えておこう。

朝のニュースを眺めながら、マタムネの煙管へと手を伸ばしてみるが叩かれてしまった。

造魔が宿っている煙管を磨いているとつい熱中してしまい、MAGを込めすぎて造魔が巨大ロボット化してしまった。

マタムネのように靈力とやらで構成されていたので軒先が無くなるということは避けられたが、だからといって磨くたびに巨大化させるわけにもいかない。

俺の煙管は細心の注意を払って軽く磨くだけとなった。

つまり、無意味に磨き続けているいつもと違ってこれからは手持無沙汰なのだ。

仕方ないのでミク本体のパーツを磨いているが、これじゃない感じがする。

まあ、慣れるまでの辛抱だろう。

視界の端で照れている小型のミクを捉えるも、見なかったことにしてそう思うのだった。

ミクさんマジポッコツ。

関節などを丁寧に磨いていると赤いテレホンカードが鳴り響き、異界への転移を知らせてきた。

双子に書置きし、一緒に行きたいやつがいるかと聞いてみる。

転移先の異界ではCOMPに予め入れておかないと召喚できないという縛りルールがあるためだ。

新人のサマナーを使って検証したが、システムを起動させても何も起きない場合や契約が弛んでいて襲い掛かってくる場合もあった。

俺の場合は誰も召喚することができないので事前に連れて行っておきたいのだが、結構な割合でソロとなってしまう。

現地調達もルーミア以降は全く上手くいかず、MAGを込めた悪魔を投げつけて破裂させる爆弾としてしか使えていない。

とはいえ腕が千切れかけた時から、マタムネ以外は付いてくるようになったのだけだ。

挙手している仲魔をCOMPとして使っているスマートフォンに送る。今回もマタムネ以外の全員が付いてくるようだ。

最後に砂埃で壊れない様にミクダヨーを上着で包み、リュックに詰める。

造魔を頭に捕まらせて、準備を終えたことを確認し、マタムネに双子の世話と留守を頼んでスマホに耳をあてる。

いつもと同じように景色が霞み、そして砂に覆われた世界へと転移した。

砂嵐が吹き荒れ、視界が悪い。

公衆電話で目的地の位置にあたりを付け、すぐさま砂と風を防げる建物に逃げ込む。

崩れかけではあるが形を保っていて都合よく中に砂も入って来ないようだ。

転移のゴールを公衆電話でしか見えないようにするのは止めて欲しい、今みたいに外にいる余裕があまりないときがあるからだ。

強行軍で進もうかと考えたが砂嵐の中に飛び出すのも莫迦らしい。

天候が回復してからでも良いだろう。

そんな予定を立てているときに限って敵は出てくるものだ。

悪魔が襲撃をかけてきた。

というか建物内部にいた悪魔がこちらに気付いただけなのだが。

悪魔の口から漏れる謎言語を聞き流し、思考を読んで相手の動きに合わせたカウンターで迎撃。

意識の中に現れ、刻々と変化する無意識によって出来た隙を突く、という感じだろうか。

狙った場所に綺麗に攻撃が入るといのは面白い。

襲い掛かってきた悪魔どもを粉微塵にし終えようと、外から敵意を感じた。

建物から飛び出すと、砂嵐はやんでいた。

テレポート能力を持つ異能者が宙に浮いている姿を捕捉した。

ダイアーチエを召喚しようと召喚プログラムを起動していると全身に走る浮遊感。

目の前が真っ白になった。

雲を突き抜け地表へと自由落下。

どうやらテレポートで建物ごと上空に飛ばされたようだ。

こういった場合、超能力には超能力でしか対処できないのは考え物だな。

このまま着地しても問題ないかもしれないが、足の骨が折れるかもしれない。

それに衝撃でミクがジャンクになっても困るので飛べそうな仲魔を考える。

そもそも俺とミク以外は全員飛べたはずだ。

状況がすぐさま伝わるさとりを召喚する。

MAGを込めると思考を読んでくれたようで、すぐに俺の背を掴んで飛行を始めた。上空から改めて眺めると砂ばかりだが、遠くに街らしきものを発見できた。

見た限りでは砂も少ないようだ。

さとりに徐々に降下しつつ街へと向かうように頼む。

色褪せた街には見覚えのある建物が幾つも点在していた。

降り立った後、気になった見覚えのある建物を目指して散策を行う。

古ぼけて崩れている建物を眺めながら砂埃で汚れた道を歩く。

学校、スーパー、たい焼き屋、公園、墓地……。

自分の狭い行動範囲に呆れながら、どれもが我が家も周辺にあるものと一致している。

所々壊れて砂が中に入り込んでいる様子は人が使わなくなつて久しいのだろう、寂しいモノがあつた。

近づいている。

数時間前まで居た我が家に、確実に。

道が砂で覆われて歩くのに難がある以外は変わらない有様だ。

角を曲がり、ゆつくりと進む。

そして、朽ちた我が家の前に立った。

短くない時を経たような不思議な状態だった。

違いを確認するように、ゆつくりと見る影もない玄関から中へと足を踏み入れる。

抜けた床を避けて廊下を歩く。

天上には穴が、壁は壊れて穴が空いている。

雨風が防げるかどうかも怪しい状態だ。

張られている結界も弱々しく、霊地としてもほとんど機能していないように感じた。

見知っている我が家のように、全く異なる別物のようだ。

間取り以外、同じ物を見つけることが難しいほどに。

居間に繋がる扉を開く。

そこには、『さとり』と『ミク』がいた。

二人の話を聞いたうえでいろいろと情報媒体を確認した結果、転移されて度々訪れることとなっていた異界だが、どうやら未来であるらしい。

いや、完全な未来世界というわけではない。

異なる点があることから全く同じとは言い切れない。

それでも共通点多々あるので、限りなく近い未来とでも表現すればよいだろうか。異なる点は数多いが、俺とこちらの「俺」では仲魔にした順番が異なっているようだ。始まりはルーミア、終わりが『さとり』だったらしく、もつと早く仲魔になりたかったと『さとり』は笑いながら呟いた。

どうやらかなり感情表現が豊かであるらしく、話すごとにころころと表情が変わる。こちらの『俺』は読心ができなかつたので以心伝心とはいかず、いろいろと会話していたらこうなつたようだ。

無表情のさとりを見つめながらあまり読心しないほうがいいのだろうかと思つたが、これも個性なのだろうと納得しておいた。

久しぶりに他人と話が出来たとご満悦の『さとり』がお茶を用意している間に、俯いている『ミク』にMAGを込める。

霊地としての機能を失つていたために充電ができなかつたのだろう。

少し待つと瞳に光が戻り、起動した。

俯いていた顔を上げると、『ミク』はノイズの混じつた声で、恥ずかしいと呟いた。壊れかけの姿がひたすらに無様だとも。

何も答えず、ただ静かにゆっくりと撫でていく。

パーツはどこどころ傷つき、頬は罅割れている様子が窺える。

片目など内部のカメラ・アイが剥き出しになっていた。

手入れはしているのだろうか関節を動かすたびに異音が響く。

よく見れば全身が傷だらけだ。

動作も鈍く、部品を変えなければ治らない状態としか思えない。

それらをゆっくりと。

撫でていると『ミク』が訥々と話しだした。

最初は早いうちに別のメタトロンを吸収しておくべきだったと後悔していると何度か謝罪とともに言っていた。

その後は思いついた言いたいことを喋っているのか、あちこち飛んでしまっていたがそれでも相槌を打ちながら聞いていた。

一生懸命いろいろと話そうとする姿は、子供が親に伝えようとする様で少し双子に似ていた。

頑張ったのだと言いながら涙を流す『ミク』を褒める様に優しく頭を撫でつづけた。

『さとり』が淹れてくれたお茶を飲み終える頃には話が終わり、『ミク』は眠るように目を閉じ静かに歌い始めた。

『ミク』の隣で小さなミクも歌い始めたのを眺めながら、『マタムネ』の遺品である煙管をくるくると回しながらPDAを弄る。

この家に残った物を『さとり』が持ってきてくれたのだ。

この世界の『俺』は死んだ際に封印処置とともに直接地獄に送られて幽閉されたらしく、他の仲魔もほとんど全滅したらしい。

『さとり』と『ミク』だけが生き残ったと言っていた。

他にはもう誰もいないとも。

PDAを読み込んでわかったのは『俺』が本体の召喚を行おうとしたことだ。

未然に防がれたうえにエネルギー不足で失敗したようだ。

アナライズ情報と戦闘ログを読み取ると、重要な施設の襲撃時に人間の仲間裏切られたことが読み取れた。

計画自体も半ばで失敗し、全滅直前の憂き目に合っていた。

PDAには計画のために多くの情報が記されており、『俺』が死ぬまで修正が加えられていたのだろう。

『俺』が何故本体の召喚を行おうとしたのかは不明だが、ここで知ることができて良かった。

どう動くにしても、下準備は必要だということも。

あとは造魔がスピリット・オブ・アース(S・O・E)という大地の権化みたいなモ

ノということか。

『さとり』が次々奥の部屋から持つてきて積み上げていく荷物を見ない様にしてそう思った。

目を逸らした現実だが、すぐに解決することが出来た。

『俺』が使っていたPDAは詰みあがった荷物すら収納することができたのだ。

死ぬ直前まで改造しつづけたPDAの性能は異常といえるほどだった。

サマナー用に特化したため余計な機能は排されていたが容量は段違いだ。

かがくのちからってすげー！

『ミク』とミクの歌が終わると『さとり』が立ち上がった。

もう十分らしい。

最後にMAGの塊を渡された。

『さとり』の核の一部であるらしく、さとりに与えて欲しいと。

ここで消滅するまでゆっくりと『俺』を待っていいようとも思っていたが、転生して蘇る可能性は限りなく低い。

それならば待つてMAGを浪費するよりも、したかったことを今するのだと『さとり』は言った。

俺と会ったことで踏ん切りがついたとも。

一緒に行かないかと誘ったが断られてしまった。

俺は『俺』とは違うらしい。

彼女のサマナーは『俺』だけなのだ。

納得はできないが、言い募ることもしない。

ただ、礼とばかりにMAGだけは供給する。

俺にとつてさとりは仲魔なのだから、サマナーとして『さとり』に足りない分を与えることは当然だ。

『ミク』にも同様に断られてしまった。

やることがあるらしい。

小さなミクの頭を撫で、お古で悪いのだけれどと前置きし『ミク』は右腕を外して渡した。

代わりに、古ぼけた小さな『ミク』がよたよたとしながら運んできた腕を取りつけた。

エメトブラストという秘蔵っ子らしい。

嬉しそうに軽く撫でると半透明の手が現れた、MAGで構成されているのだろうか。

何度か握ることで動きを確かめていた。

動きに納得したのか頷いてから「最適解」、「墮天使への突撃制限プロトコル」、そして

『ミク』の設計図がPDAにあるので使ってほしいと言って『さとり』とともに出て行った。

後を追って俺が出てきたのを確認すると、『ミク』が家を吹っ飛ばした。

重要な物は残していないが知らない何らかに留まられるのは不快だった、という理由らしい。

そして、家族の誰も戻ってくることは無いだろうからと。

ガイア教とメシア教にそれぞれ向かうという二人を見送った。

二人ともこちらが見えなくなるまで手を振っていた。

その姿を見ていると胸に何かが詰まったように感じた。

二人が見えなくなったので当初の目的地へと向かう。

俺の家の位置は転移先からかなり外れていたの、戻るために砂の上を走ると思うと少しばかり辟易してしまう。

傾いて茜色に染まった砂の大地を駆け抜ける。

『俺』についてぐるぐると思考が奔る。

異なるとはいえ、失敗した結果がこの世界だ。

目的を達成しようと仲間裏切られて、仲魔は散り散りになり、自分は死んで直接地

獄へと引き渡された。

それほどまでに『俺』は本体の召喚を行ったかつたのだろうか。

二人の姿が瞼の裏に甦る。

楽しそうではあったが、どこか寂しそうでもあった。

俺は俺であって『俺』ではないということか。

あの姿を思い出すと、それほどまでに価値があるのだろうか。

全てを失う可能性がある賭けをする価値が……。

自分があなつてしまったらと思うと背筋が震えた。

ミクを抱いていた腕に力が籠り、非難されて謝る。

腕を緩め、さらに脚を速める。

自分の命を失い、地獄に縛られることは何とも思わない。

ただ、二人の姿を思い出すと堪らない恐怖を憶えた。

何も無いと思っていた俺にも怖いモノがあるのだと気付かされた。

失いたくないモノがあるのだと思わされた。

だからこそ、わからないのだ。

この世界の『俺』が本体の召喚に手を出したことが。

【オリ主（未来）】 種族：人間

LAWを中心に依頼を受けていたが大破壊の際には囮として使われた。大破壊後は東京を駆け回って小さな勢力を作った。本体の召喚を目指したが失敗し、後に死亡して地獄に幽閉された。幼馴染だったためだかちゃんが人類愛に目覚めて裏切られたのが死因。肉体は魂の付属品という考えから魔法特化型だったがS・O・E（スピリット・オブ・アース）をペルソナとしていたため、打たれ弱いというわけでもなかった。赤いテレホンカードは持っていなかった。死後は勢力が崩壊し、大小の勢力となった。

【さとり（未来）】

幻想郷のさとりを取り込んだ状態。表情豊かに成長（？）した姿。オリ主（未来）を助けに地獄に向かうも失敗し、仲魔を失った。転生する可能性に賭けて待とうとしていたがオリ主（過去）と出会ったこと、マグネタイトの残りが少なかったなどの理由で諦めた。最期はガイア教へ向かった。

【ミク（未来）】

ミクダヨ一の入手がかなり遅かったので墮天使への突撃を繰り返した。核が傷ついており、中身のレベルは低い。さとりと違い、地獄へは向えなかった。過去のミクに渡

した右腕はメギドファイアである。最期はメシア教へ向かった。

未来報告

- ・『さとり』がお空（八咫鳥）と交戦し、消滅しました。
- ・ガイア教の勢力が弱まりました。
- ・『ミク』がメタトロン（最高位分霊）と交戦し、全壊しました。
- ・メシア教の勢力が弱まりました。
- ・オリ主の勢力が消滅しました。

— 13

夜となり、星々が瞬く。

月を背に、双子が透き通るような歌声とともに斧と銃を取り出した。

足場の悪い屋根の上で苦も無く上機嫌に軽く振りながら期待に満ちた瞳をこちらに向ける。

残念ながらまだ期待に応えることはできない。

待っている様にとの意味で双子の頭を乱暴に撫で、PDAから取り出したタイヤキを

渡し、自分も齧る。

噛むごとに小豆の甘い香りと小麦粉の焦げた香ばしい匂いが口に広がる。

今日は餡子の気分だったのだ。

森の中に孤立するように存在するメシア教の教会を遠くに眺めながら、突入のタイミングを待つ。

目標は先に見えるやや大きめの白い教会だ。

口の中からタイヤキが消えるのと、巨大な破砕音が響くのはほとんど同時だった。

ガイア教の制圧部隊あたりが襲撃を開始したのだろう。

それを合図として、散々待たされ焦れされていた双子が食べかけのタイヤキを放り、飛ぶように駆けていく。

宙に投げ出されたタイヤキを掴み、口に放り込むと元より小さかった双子の背が更に小さくなっていく。

小さな背を追いかけて、追いつくと同時に猫のように双子の首根つこを掴み、脚に力を入れて移動速度を上げる。

建物の壁や天井を踏み抜くごとに、木々をへし折るごとに、加速していく。

タイヤキを嚙下しながら適当なところで双子を放り出し、銃撃戦が繰り広げられている表を通り過ぎ、側面の壁をくり抜いて侵入した。

双子から受けた依頼はメシア候補がいる教会を襲う際に上位天使の相手をするというもので、その依頼からそう遠くない日には聖女候補とやらの護衛依頼も受けている。メシア候補を相手にする場合、他にも色々とあるらしいが俺は防衛に現れる上位天使さえ足止めできればそれでいいという話だ。

今夜はその前準備としてガイア教が、聖人が配置されているとされる教会を襲うのだとか。

俺の仕事は双子を超える天使が現れた際の保険、そして逃亡の支援である。

抗争には興味ないのだがメタトロンを主とした他の上位天使の情報を流してくれるというのでつい引き受けてしまった。

あとミクダヨーセット。

むしろミクダヨーセットのほうがメインかもしれない。

思い返すとちよつと浅慮だったかと自分に呆れながら、どこで見られているかもわからないので手札はなるべく晒したくないとの思いながらさとりを召喚。

抗争中のメシア教徒や天使の意識がガイア教の襲撃について大半を占めていることを読み取る。

気付くということは知覚するということだ。

知覚するということは意識するということだ。

意識するということは思考するということだ。

思考の穴を付けば目の前にいるのに気づくことが出来ない状況を作り出すことが可能となる。

簡単に述べてしまえば相手の思考から意識の方向を読み解き、無意識に隠れて動くということだ。

さとりとともに人の間を縫う様に進みつつ、天使や悪魔が死ぬことによつて放出されるMAGを回収し、さとりへと供給する。

『さとり』から貰った核の一部を与えたことでさとりも強化されたのだが、俺自身のMAGは無限ではないし、霊地では維持するくらいしかできないのでこういった時には楽して稼がせてもらうことにしているのだ。

そして当然のことながら死んでしまった人間もいる。

神の教えに従うメシア教もその神に抗うガイア教も命は等しいようだ。

そういつた連中から出てくる靈魂をさらに召喚したS・O・Eに与えていくとご機嫌な感情が伝わり、片っ端から喰らっていく。

すると、死後は信徒から魂を得る契約をしていた天使が湧いて来るので増援を察知したガイア教が交戦する。

大きな公園の池にパンくず撒いたら無数の鯉が寄ってくる光景に似ているかもしれない。

餌はガイア教で鯉は天使である。

次々と天使の手によってガイア教の下級戦闘員らしき連中や召喚された悪魔が葬られていく。

確か聖人がいるのはわかっているが、どこのメシア支部にいたかがわからないから複数の支部にも襲撃をかけていたはずだ。

別の場所で襲撃をかけて制圧した際に逃げた天使や信徒がこちらに湧いているのだろう。

確かガイア教の中でも幹部級が出張っていたはずだ、常駐している天使や騎士と比べ強すぎたため、かなり早く制圧できたと思われる。

それが原因のはずだ。

羽虫のごとく天使が集まっている。

幹部が強すぎてそちらを対処するよりもこちらを取り戻すことにしたのかもしれない。

メシア教は天使が居すぎると思うのだが。

たぶん、他の襲撃先も悲惨なことになっているに違いない。

流石はガイア教だ、統率が最低限で作戦がお粗末すぎる。

天使が優勢すぎるので削ってしまおうかと考えていると、遅れて扉を壊しながら双子が侵入し、子供らしい無邪気な啞い声とともに天使を屠り、人間を撃つ。

次々と死に逝く人間と天使。

パワーバランスがガイア教に傾いたことに安心して、誰も彼もこちらに気付きもししていないという高みの見物に戻る。

この場にいる天使程度なら幾ら来ようとも問題ないが、ガイア教に所属したと思われるでメシア教に目を付けられると困るので双子が対処できない事態が起こるまで手は出さない。

そもそもメシア教の依頼も受けているのだから襲撃に参加していると知られては面倒な事態が起こるだろう。

もし俺が手を出すのなら目撃者を消すために殲滅戦になってしまう。

だからので遠慮しておきたい。

負けて霧散していく天使や悪魔からMAGを回収し、ついでにCOMPを貰いつつミンチになった人間を積み上げていると何処かから「見られている」ことに気付いた。

向けられているのは普通の視線だが、それだけでなく肉体を、精神を、魂を、中身をじっくりと見られているような……。

俺の様子に気づいたさとりが周囲を見渡すと、最初のほうに作り上げた屍の山に近づいて行く。

眠そうにしていた半目を開き、瞳の紅が輝く。

煌くように美しく、そして毒々しい光の魔弾を生成し、笑いを浮かべながら「生に執着している死体がありますね」と死骸を消し飛ばす。

死者の山の下に隠れていた生者の青年が丸くなつて震えていた。

確保対象である聖人の写真を見せられたのを思い出した。

かなり似ている。

手を伸ばすと青年は悲鳴を挙げて立ち上がった。

青年が震える手足を押さえつけ、声を裏返ししながら聖なる言葉を紡ぐ。

あまりに必死な表情で魔法の準備をしているので待つてみる。

震えているが魔法には自信があるのか、青年は内心で成功するのを神に祈っている。

聖人の魔法かと思うとかなり興味がある。

発動を待つていると言葉を終えたのか光が奔る。

死者を還し、魔を滅し、悪を討ち、異教徒を殺す聖なる光が満ち溢れる。

意思あるように光が包み込む。

俺は光に飲み込まれた。

青年が笑い声をあげ、手足の震えなどは何処かへ消え去ったかのように跪いて神に祈りを奉げる。

思考は神への感謝で埋め尽くされている。

呆れしまう。

これが聖人の姿かと思うと言葉もない。

己の敵ならば主が滅ぼしてくれると、本当に思っているのだろうか。

まさか。

光の中から無傷の手を伸ばし、青年の無防備な首を掴んだ。

聖人を確保したことを近くで戦闘していたガイア教徒に知らせると手早く撤退を始める。

今回はあまり働いていなかったもので、余っているMAGを供給する。

すべての天使に向けて、さとりが魔法を行使する。

闇夜を照らす無数の弾幕が弾け、教会を内部から破壊した。

そのまま用意されていた車に乗り込み、双子を連れて逃亡した。

一緒に乗り込んだガイア教徒が青年が逃げられない様に、そして聖人という存在を考えて四肢の関節を逆側に向くよう砕いていた。

顔は涙と鼻水で汚れ、目の焦点が合っていない。

口には布が詰め込まれているので声はないが度々嘔吐しているのか喉が上下している。

これから起きることも神の導きかもしれない。

たぶん、神が与えたもうた試練とかいうやつだろう。

ヘンゼルが上機嫌に百均で購入したカッターナイフを青年の米神に走らせた。

これから顔を剥ぐのだという。

カッターナイフは血と脂肪、余分な皮で徐々に切れ味が悪くなるに違いない。

長引く痛みを考えると奇跡的な力が手に入るといふ。

死を乗り越えようと奇跡的な力が手に入るといふ。

しかし、今回のこれは死と比べるとあまりに矮小だ。

ならばこの試練でいったいどのような奇跡が得られるのだろうか。

青年は試練に挑戦できる感動のあまり涙を流し、気を失ってしまったようだ。

どうせ痛みで起きるから後でも楽しめるだろう、問題ない。

ガイア教の拠点へと向かうらしいので途中で下してもらって帰宅した。

夜の帳を切り裂く一筋の光が奔る。

それは流れ星のようだった。

ただ落下して破壊を撒き散らせる、それだけの目的を持った光だった。

天上から一直線に光が降り注ぎ、強固な結界を水に濡れた紙の如く破り、夜警の天使を気付かせること無く砕き、そして教会の天蓋に穴を開け、床に蜘蛛の巣状の罅を入れながら深くまでめり込んだ。

衝撃の余波で窓ガラスは全て割れ、燭台の火がすべて消え、天使たちの描かれたステンドグラスの破片を撒き散らした。

夜闇に舞い散る破片は月明かりできらきらと輝き、それに乗じて教会へと侵入した。身を紛れさせた雨のように降り注ぐステンドグラスの中から大きな破片を持てるだけ手に取った。

着地地点に居た天使を足場代わりにMAGのミンチにし、衝撃波で足元が覚束ない人間や天使の眼前に降り立ち、次いで震脚で教会を揺らす。

震脚による振動で、羽ばたきながら宙に浮いている天使を除く全員が体勢を崩した。

時間差で天使の描かれていたステンドグラスの破片が満足に立つことのできない信

徒を襲い、浅くない傷を全身に刻まれる。

体を張って足場となり俺を助けてくれる天使に感動しました、今日からメシア教になります！と感動のあまり快活に宣言。

能面のような天使たちが怒りの表情を貼り付け、得物を手にとり、襲い掛かってきた。

暴力的な天使にショックを受けました、メシア教やめます！

手に持っていた破片を天使目がけて投擲していく。

空気を切り裂く音とともに高速で回転する破片は最初に触れた天使を真つ二つにするだけでは飽き足らず、そのまま後ろの天使や人間を容易く引き千切り、壁に刺さった。

破片を投げ終わると入口が爆破され、ガイア教徒と悪魔が流れるように入り込んできた。

天使と悪魔、人間が入り乱れて殺しあう。

微々たるものであっても互いに削り合ってくれると思うと喜ばしい。

PDAの情報によればメシア教とガイア教は勢力が巨大で厄介だったようで、機会があれば上位も削っておきたいところだ。

まあ、大きく削るのはどちらにも所属しない場合の話だが。

双子の上機嫌な笑い声も聞こえてきた。

獣のような外観の悪魔が、量産型の天使が、次々と崩れ落ちMAGの残骸に姿を変えていく。

上空からの落下による初撃で結界ごと教会を砕いたS・O・Eが埋まっていた地中から出てきてふわふわと近寄ってきた。

褒める様に頭を撫でるとこの場で死んだ人間から出てくる魂を食べる様に指示すると機嫌よく囁り付いた。

さとりを召喚する。

意識を読み、無意識を縫う様にしてメシア教徒や天使を通り抜け様に貫き手で仕留めるか口へ弾幕を撃ちこんで直接腹を焼く。

この際、背骨や臓腑を抜き取るのに、腹に穴を開けたときに、どれだけ血を派手に噴き出させられるかが重要だ。

ここでの狙いは気付かれずに抜くことではなく、双子が食べやすいように血抜きすることと苦しめることでMAGを多く絞ることだ。

人間は脆いクセに死に際で踏みとどまる能力だけは長けているので、新鮮なまま食べやすくすることが可能なら長くMAGを提供してくれる。

双子の遊びに集中した裏に生じた無意識を渡り歩き、悠々と削って行く。

人間ならば骨や内臓を生きたまま、天使ならば核をそのまま抜き取る。

核が奪われたことで混乱し、溶けてスライム化していく天使を見ながらMAGを取る込んでいくさとの姿はまるで踊り食いのようなだった。

今回も大した天使がないようなので高みの見物かと思っていたが、どうやらそう上手くはいかないらしい。

S・O・Eが開けた穴から一体の機械人形が純白の羽を羽ばたかせ、音も無く祭壇へと舞い降りた。

その機械人形が現れたことで周囲の喧騒すらも無かったかのような厳かな雰囲気の流れる。

メシア教徒や下級・中級の天使が機械人形へと集まると呪文を紡ぎ出し、幾何学模様の描かれた魔法陣が教会全体を包み込んだ。

何らかの儀式だろうか、空気に満ちていたMAGや魂が一体の機械人形に集まる。

このままでは面倒なことになるはずだと阻止しようと突撃するが有象無象による妨害によりあと一步のところまで届かなかった。

教会中のMAGで構成された羽根が機械人形を繭の様に包みこんだ。

拳で繭を強かに打ち付けたが、表面を削り、羽根を散らせるだけだった。俺の妨害では儀式は滞らず、粛々と進んでいく。

儀式を進める信徒や天使を殺すが、順調にMAGの流入が進むだけだった。

幾何学模様の刻まれた魔法陣が一際輝くと、一羽の白鳥が現れた。

それはクジヤクのような見事な紋様の刻まれた羽根で羽ばたいていた。

白鳥が繭の周りをくるくると回ると、花が咲くようにMAGによつて構成された羽根が開き、機械人形が現れる。

最初に現れたときよりも力強く、また神々しい。

ミクよりも小さな器、金色の髪の毛は輝き、頭部を彩るリボンは眩いばかりの純白だ。機械人形を包み込んでいた羽根を広げ、雄々しく羽ばたかせ、宙に浮いた。

この場にいるどの天使よりも多い、無数の羽根。

PDAがメタトロンとミカエル、その2体のアナライズに成功したことを知らせた。

眼前に機械人形に憑りついたメタトロンのレベルは60から徐々に上昇しており、ミカエルは55であった。

ミクの話では、メタトロンはミクを除くと一体の高位分霊と三体の分霊を送り込んでいて、白鳥の姿をしているミカエルが現れたのは四大天使が補佐として送られているか

らに他ならない。

今ここに投入されている分霊はそのうちの一体なのだろう。

さとりが弾幕を放つがミカエルが作り出す防壁に阻まれてメタトロンへと攻撃が届かない。

俺自身は空中への攻撃が乏しいのでMAGの供給程度しかやることがない。

しかし、弾幕が阻まれたことよって生じた魔力がメタトロンに吸われているので、現状ではMAGの供給による強化もあまり適していない様に思える。

魂を喰らっていたS・O・Eを呼び出し、特性である引力操作による落下を狙うが効き目が薄い。

不思議な力場で飛んでいる天使は引き摺り落とせないようだ。

S・O・Eに床石からを砕いて瓦礫を作り出し、弾として加工するように指示を出して、手元の石を投擲。

ミカエルの防壁に衝突して粉となるがダメージは皆無のようだ。

S・O・Eが瓦礫を圧縮してビー玉ほどの大きさに加工した弾丸を全力で投げつける。

防壁との衝突時に幾ばくか拮抗したが、エネルギーを失った弾は落下した。

弾が砕けなかったことに機嫌を良くしながらさらに投擲。

一つだけでは勿論足りないので次々と投げつける。

弾速を調整して複数の弾を同時に衝突させる。

一点を狙い続けることで障壁を砕くことに成功した。

砕けた障壁から零れる魔力がメタトロンへと流れるのを阻止しようと投擲。

すぐさまミカエルが障壁を張り直したため、メタトロンへの攻撃は無効となった。

障壁の破壊による損害もミカエルにとっては微々たるものようだ。

予想以上に固いうえに時間をかけるほどに宙に漂うメタトロンが強化されていく。

漂うMAGと信徒の魂を吸収し続ける特性が厄介だ。

今は防戦一方だが準備が整い次第攻撃に転じるかもしれない。

吸収を終わらせるために教会内を一掃したいが、ガイア教徒が邪魔だと考えていると死骸で血塗られた道を作り出し、双子が興奮気味に俺の隣へと駆けてきた。

メシア候補は確認できず、罫の可能性があると撤退を開始しているという話を伝えに来てくれた。

なるほど、罫か。

戦闘しているメシア教徒どもは勿論、儀式している連中も読心したが天使様が云々とはかりでさっぱりだった。

恐ろしいやつらだ。

教会内だと不利なので一度撤退に乗じて場を仕切り直すでしょう。

さとりを送還し、ディアーチエを呼び出す。

ディアーチエに大まかな指示を出し、かつてないほどにMAGを振るまう。

紫色の魔導書が輝き、高笑いとともに上空へと飛んで行ったのを確認してから双子を抱え、S・O・Eを引き連れて離脱した。

脇目も振らずに全力で走り、十分に距離をとってから双子を手放す。

見上げれば遙か上空に浮かぶ月を覆い隠すような五つの魔法陣を背にしたディアーチエの姿。

そして魔法陣から暗黒が降り注ぎ、教会ごと周囲一帯を爆破した。

こちらにまで響く衝撃に体の軽い双子は転がっていたが、問題ないだろうと再び教会へと駆け抜ける。

途中でS・O・Eを上空に打ち上げるのも忘れない。

教会の跡地へと戻ると、見渡す限りの焦土と化していた。

ディアーチエはすでにメタトロンとミカエルの二体と対峙していた。

存在しているMAGや生み出す可能性のある人間・悪魔を一掃するついでに魔法陣の破壊も狙ったが上手くいかなかったようだ。

周囲一帯が黒い煙が幾らか立ち上る瓦礫へと変貌したというのに、未だに魔法陣は教会の跡地に刻まれている。

しかし、失敗ばかりではない。

先ほどの一撃でミカエルは傷つき、メタトロンが入っている機械人形は人間のようであつた皮が裂け、中身の機械が露出している。

魔法陣にも許容できる魔力に限界があつたようだが、相性は良くないだろうと判断して、デИАーチエを送還。

再び流れ星となつたS・O・Eが夜の帳を切り裂き、地上へと落下した。

メタトロンへのS・O・Eの突撃はミカエルによつて阻まれたが、防ぎきることはできなかつたようで障壁ごとミカエルは打ち砕かれていた。

しかし、S・O・Eも反動で霊力とMAGによつて構成されている身体の半分を失つていた。

MAGを供給し直し、失つた部位を再生させる。

その間に白鳥は青白い粒子へと姿を変えるとメタトロンの周囲に纏わりつく赤く燃え盛る炎となつた。

MAGの吸収にも満足したのか、更に巨大化した羽根を広げ、柱のように天へと伸びる柱を携え、機械人形は音も無く地に足を付けた。

なるほど、これがボス戦の第二形態というやつか。

鞭のようにしなる炎を避け、降りかかる人間大の火球を拳圧で消し飛ばす。

目の前で飛び散った火の粉に顔の半分を焼かれ、髪が焦げた匂いが漂う。

顔が消し炭にならなかつたことから火力は思ったよりも低いのだろうかと思いつつ

PDAを操作してシュテルを召喚する。

真つ向から炎を蹴散らし突き進むシュテルにMAGを供給し、一跳びで距離を取る。

シュテルの魔杖から放たれた砲撃がメタトロンを襲うが意に介した様子もなく、広げていた羽根を羽ばたかせる。

眩いばかりの光がシュテルを飲み込んだ。

PDAに表示されている簡易ステータスでシュテルの状態を確認するが、全ての能力が減少していて、HPが急速に減り続けている。

そんな状態だというのにシュテルは光に捉われたまま動く気配が一切ない。

吸収系の攻撃かと思ひ至り、炎を掻い潜って助けに向かう。

光の内部に入り込むと身を焼くような衝撃が絶えず訪れていた。

跪いて身動きの取れなくなった乱暴に掴んでシュテルを引き摺りだし、メタトロンから離れる。

どうやらメタトロンは魔法陣から出てくる気はないらしい。

抱えているシュテルの口に魔石を3個ほど放り込み、迫りくる炎を避けながら話を聞く。

メタトロンは小規模に絞った破壊の光であるメギドを放出し続けていたらしい。

その内魔力が尽きるのではないかと問うと、どうやら魔法陣によって周囲のMAGを引き込む小規模の異界化が起こっているらしく、当分の間は問題ないようだ。

勿論、長期戦ともなればガス欠するだろうがその頃には援軍も現れる。

援軍が負けたとしても陣による吸収で長期戦も耐えられるという盤石の体勢だ。

真つ向からの戦闘では勝てる見込みが限りなく薄い。

放っておきたいが、こちらの顔と仲魔を見られているので葬っておきたい。

まあ、本音としてはミクに新鮮なメタトロンの核を与えたいというだけなのだけだ。

闘志に燃えるシュテルは撃ち合う気らしく、珍しく補助魔法を唱え始めた。

召喚の抗体ポイントとは別に強化の意味合いでMAGを供給するのだが、補助魔法を完全に詰んだ状態に匹敵するらしい。

そのため、普段は誰も補助魔法を使おうとしない。

使う必要がない。

今回は倒すために必要だと判断したようだ。

他に召喚が必要かと問うが、出来れば全てを賭けて欲しいとの願いにすぐさま頷いた。

仲魔を信じるって重要なことだからな。

別にシュテルの上目遣いに負けたわけではない。

最悪の場合はメタトロンを放置して逃亡することも想定しながらMAGを供給しながらシュテルの準備が整うまで抱えて逃げ回る。

PDAに表示されているステータスはほとんど回復したと言っても良いくらいだ。

生き残りが居ると思えないが、メシア教が追撃していたら面倒なのでS・O・Eを双子の元へ送っておいた。

吹き飛ばしたMAGや魂を喰いながら行くだろうし、必要になればパスを通じて勝手に持つて行くだろうと供給は切っておく。

ディアーチェの一撃で障害物が無くなったため何処にも隠れることができない。

俺が指示したことではあるが少しやりすぎたようだ。

シュテルが再びラストキャンディを唱えた。

動きがさらに高速化され、動体視力も上がったのか、炎の鞭もドット避け状態だ。

補助魔法自体ほとんど使わないので重ね掛けは初めてだが本当に凄いものだ。

補助魔法で体が軽い……。

こんな気持ち初めて……。

もう何も恐くない！

降りかかる火の粉を払うために軽く拳を出すと炎の鞭が消し飛んだ。

これ、直接メタトロンを殴ったら倒せるかもしれない。

……まあ、折角やる気になっているのだから詰み終えてコンセントレイトを行っていい
るシュテルに任せよう。

シュテルが再びの砲撃。

夜闇を魔杖から放たれる紅蓮の熱線が一直線に突き進み、メタトロンは輝く羽根を己
を守る盾のように幾つも重ねる。

熱線は羽根に完全に遮られた。

しかし、防がれようともシュテルは熱線を止める気はないらしい。

永遠に続くかと思われた拮抗が、唐突に破られた。

熱した鉄板に蠟燭を押し付けたかの如く、熱線を遮っていた羽根の表面が真っ赤に染
まり、そして溶けた。

始まりまでが長く、だが始まってしまえば一瞬だった。

先ほどまでの拮抗が嘘のように羽根は融け、食い止めるために展開した羽根も容易に融かされていく。

熱線が止まらないことを察したのか、器である機械人形の通り人形然としていたメタトロンの顔には驚愕が貼り付いていた。

赤熱した魔杖に発せられるほのかに赤い光に顔を照らされながら、シユテルは笑っていた。

追加でさらにMAGの供給量を増やす。

それに気を良くしたシユテルが熱線に力を注ぐ。

熱線の色が少しずつ変わる様が面白くて、さらに供給。

血の様に紅の蓮の葉のようだった紅蓮が紅に、紫の絵具をを一滴垂らしたような紅が黄に、色鮮やかな太陽のように輝く黄が白へ……。

燃え盛る炎が塗り潰す紅蓮が、全てを飲み込まんとする白へと変わったのだ。

宵の深まった夜闇も、一面に広がる焦土も、神々しい羽根も、大天使の器であった機械人形も、そして俺をも、白く輝く熱線から放たれる光は強欲にも全てを包む。

熱線によって放たれる白い光に照らされ、メタトロンの表情は酷く歪んでいた。

白へと変化しきった熱線は一切の音も無く、拮抗など初めから無かったかのように見

る見るうちに羽根は溶けていった。

全てを溶かし、貫くかと思われたが、シユテルが軽く魔杖を振ることで熱線の軌道を変えた。

そして、針の太さほどに集束した熱線で人形の四肢を切断して見せた。

シユテルの好意を無駄にしないため、隙を突いて魔法陣の外へと蹴り出した。

魔法陣は僅かに明滅すると、霞のように消え去った。

いやあ、メタトロンは強敵でしたねとミクの凶面を脳内に描きながら強制停止。

仕様が同じようなもので安心した。

シユテルに劳いの言葉をかけながらPDAから水を取り出し、火傷を負っている腕にかけていく。

上手く回避できていたが、熱の影響で無傷とはいかなかった。

顔も半分ほど焼かれたのでケロイド状になっているのか引き攣っている。

ミクを召喚し、メタトロンを取り込むように伝える。

今は停止しているが第三形態として起き上がられたら倒せる自信がない。

だが、あろうことかミクは拒否した。

取り込むことで統括に時間がかかるため、俺が回復魔法で完治するまでは絶対に嫌だとか。

むしろ取り込んでから回復魔法をかけたほうが強力になるのでは、との言葉は無かったことにされた。

結局、時間をかけるのもよろしくないのが俺が折れる形となつて回復魔法の温かさを感じている。

火傷も跡形なく治る様子は魔法という存在がひどく非常識であると実感できた。

メタトロンが入っている器から核を引き摺りだし、ミクの元へ。

それを大事そうに少しだけ抱くと、優しく触れるような口づけした。

糸が切れたかのように倒れ込むミクを支える。

すると、その背から光が溢れだし、徐々に羽根の形を成していく。

何も持っていないかった彼女が天使としての姿を一部ではあるが取り戻した。

眠るように静かな彼女を揺らさない様に抱える。

気絶した双子を乗せたS・O・Eと合流し、我が家を目指す。

そのまま帰るのも面倒だし、どこかで車でもパクってしまおうかなどと考える。

朝日によつて照らされ、見渡す限り焼野原となった周囲を見て、どこにも車がないことに気付いた。

ちなみにメタトロンが器としていた機械人形はPDAにぶち込んでおいた。

【スピリット・オブ・アース】 種族：精霊 レベル50～60

最上位の精霊であり、大地の具現。地に関してはありとあらゆる能力を持っているが、オリ主は知識が無いため質量と引力の操作しか使わない。

【ロード・ディアーチエ】 レベル70～80

紫天の書による『ジャガーノート（劣化）』を行ったが、すぐさま魔力が枯渇した。遠距離・面攻撃に秀でている。

【シユテル・ザ・デストラクチャー】 レベル70～80

ルシフェリオンによる『プラスチックファイアー』を行ったが、すぐさま魔力が枯渇したため、継続的にMAGを供給された。中距離・線攻撃に秀でている。

【メタトロン】

3体の通常分霊にはそれぞれ『36対の羽根』、『無数の瞳』、『神の炎』が与えられている。さらにミカエル、ラファエル、ガブリエルが補助として派遣されている。高位

分霊は弱体化したものの、出来る限り本体に近い能力を与えられており、ウリエルが補助として存在している。低位分霊には悪魔を引き寄せせる神気だけが与えられている。現世で統合することによって神の恩寵と祝福を得た本体に限りなく近い存在へと至る予定だった。

【初音ミク】 レベル50 種族：機械天使（メタトロン）

何も無かった機械人形が羽根を得たことで機械天使へとジョブチェンジした。魂を分けた6体のミクダヨーと鏡音リンを遠隔操作しながら戦う。

元から持っていた神気に荘厳な羽根が合わさった美しくも気高いミクさんの姿から地上に舞い降りた大天使であり、誰しもが敬い、傳くのは当然の結果としか思えない。

【鏡音リン（メタトロン憑依時）】 レベル70

メタトロンの分霊が器としていた機械人形。上位天使がMAGの浪費なしで現界するための殻である。自我は存在しない。

世界情勢：天使の数も信徒の数も万全であり、後はメタトロンの統合によって完全勝利で世界を支配する予定だったが、分霊が消滅したことによって統合に失敗した。さらにメシア教とガイア教の抗争によって互いの信徒が大量に死亡した。

近況報告

・メシア教が大打撃を受けました。出血が激しいです。

・メタトロンの統合に失敗しました。集めた魂、エネルギー、マグネタイトが失われました。

・大洪水は延期となりました。

・千年王国が延期となりました。

・ガイア教は致命傷を受けました。活動限界です。

・エキドナの召喚に失敗しました。集めた魂、エネルギー、マグネタイトが失われま
した。

・それぞれの勢力が召喚に利用しようとしていた霊地が消滅しました。それを見て
キユウベえが笑っています。一体なにルシファーなんだ……。

— 14

それほど大きくも無い、一般的な教会堂。

その祭壇の前にアイアンメイデンが置かれていた。

アイアンメイデンは聖母の顔を象った面が特徴的な、人型を模した小さな鉄の棺だ。

拷問機具として知られ、内部には無数の針が内部に閉じ込めた人間の全身を余す所な

く突き刺す。

依頼で訪れたサマナーたちを威圧するための置物かと思いきや、アイアンメイデンの隙間から血が流れている様子が見てとれる。

今は拷問中であるらしいが、どうやら彼女が聖女候補だとか。

今回は見学だけとの話であり、俺のようなサマナーたちが20人ほど集められて何故か護衛を任されていた。

教会内にいるメシア教徒の数は少ない。

片手で数えられるほどだ。

天使の姿はどこにも見えない、そして感じることも出来ないことから近くにいないのだろう。

アイアンメイデンの世話を忙しなく行っているメシア教徒だが、血を間近に見続けているためか顔色が悪い。

血への耐性が無いようで、思考からも天使や悪魔の存在を一切知らない一般人のようだ。

突っ立っているだけでは邪魔だろうと座席に座り、血が流れているアイアンメイデンを眺める。

世話をしている人間と比べて少しばかり小さな印象を受けた。

思ったよりも暇な依頼だ。

今は、と付くのだが。

聖女候補の護衛依頼だが、双子のメシア教襲撃とほとんど同時だった。

街がいくつも焼き払われ、メシアとガイアの互いが夥しい屍を生み出されたことから破棄されるだろうと軽く考えていたのだが、どうしてか予定通りに行われることとなった。

依頼を受諾してこの場に集まったサマナーは、無知の新人か、見分けの付かない駆け出しか、調子に乗り始めた二流か、何らかの目的を持った一流、というアンバランス際立つ面々だ。

色々な思惑があるのだろうが、俺には関係のないことだ。

双子の依頼で受け取った部品をミクに使えるように整備していく。

基本的には20体近く手に入れたミクダヨーを解体して部品を組み込むか、共食いで使える様にする。

しかし、俺にはこういった工学系は向いていない。

家ならばミクと仲良く頭を突き合わせて整備できるのだが、教会内の座席というのは狭すぎる。

無理して細かい整備をして失敗するよりも手を出さない方が良いという結論に達した。

結局、整備はミクに任せて俺は後ろの座席からMAGを含んで薄らと輝く青緑の髪を梳く。

宝石の翡翠すらも霞む髪を手のひらで流すように楽しんだ後は黒のヘッドセットでツインテールにまとめる。

少し長すぎる気もするが、満足気に髪を弄るミクを見ているとこれも魅力なのだろうと納得する。

視界の端ではえつちらおつちらと複数のミクダヨーが整備しているが、中には間抜け面で居眠りをしている個体もいる。

ミクダヨーは分霊のような状態であるらしい。
壊されても力がミクへと戻るので、本体に限りなく近い状態でもあるとか。

他のメタトロンの核を取り込んだことでポンコツつぷりは鳴りを潜めたと思っただ、どうやらミクダヨーの1体に継承されているようだ。

それぞれを労う様に撫でていくと、ミクダヨーたちも上機嫌になり、ミクもどことなく嬉しそだった。

居眠りのポンコツだけ無視して半泣きにさせたのは暇だったからだ。

どうしてなかなか弄り甲斐のある個体がいるものだ。

変化のないアイアンメイデンを観察しながら、ミクダヨーのコーラスとともに歌っているミクを撫でていると隣から少し感覚を開けて中年の男が座った。

彼は「少佐」と名乗ったのだが、当然偽名だろう。

本名を名乗る奴も時々見かける。

何があっても自己責任の世界だ、そこから辺は覚悟の上だろう。

俺は普段は本名で活動しているが、顔を見られるとマズい依頼の場合は「ともだち」と名乗って、人差し指を天に向けた手の甲に瞳が描かれている覆面を付けて活動している。

少佐が同じようにアイアンメイデンを眺めながら、メシア教がガイア教の殲滅に乗り出したと語りかけてきた。

時間をかけて互いが回復するよりも、致命傷を負っている敵へ追撃をかけて滅ぼすことに決めたようだ。

他には小さな勢力がぼつぼつと点在するだけのため、問題ないと判断しているのだろう。

高位分霊のメタトロンが存在する聖堂と力の強い天使が治める一部の教会堂以外の信徒は殲滅戦に狩り出されているらしい。

天使や悪魔の存在を知っている者は当然として全く知らない者までもが、聖戦として戦場に連れ出されているとか。

ただの戦争ならば無謀にも程があるが、天使の威光を知らしめることもできると思うとどうしてなかなか面白い。

先陣に立つ天使を崇め、傷付ける悪魔を憎み、癒してくれる大天使に心奪われる。

無謀な争いも人知を超える道理が与える物は無知な者にとつて奇跡足りえるのかも
しれない。

ここでアイアンメイデンの世話を任されている者たちは幸運なのか不幸なのか、何となく眩いた。

それを聞いて少佐は恰幅のいい体を揺らしながら笑っているだけだった。

近くに座って聞き耳を立てていた二流は「天使の作り出す地獄を味合うことが無くて
幸せだろう」と言った。

最初は挙動不審だった駆け出しのサマナーは未だに緊張しているのか、何度か頷くだけだった。

本当に幸せなのだろうか、これからここも戦場になるというのに。

ステンドグラスを破り、拳大の黒い物体が幾つも投げ込まれ、目もくらむような閃光が教会内で弾けた。

ガイア教徒の残党が襲撃をかけてきたようだ。

宗教に関わった時点で詰みだったとしか思えない、幸せってなんだろうな。

今回の依頼だが、メシア教にとって信用し切れないサマナーを囮として使っているよ
うだ。

俺のように蝙蝠型ばかりが集まっていることから間違っていないのではないだろうか。
か。

顔出しはメシア教の依頼でしか行っていないなかったので信頼度100%だと確信して
いたが、どうやら俺の思い込みだったようだ。

未来で拾いまくったCOMPをメシア教とガイア教に流して互いの戦力拡大を煽つ
たのがバレたのだろうか。

それともメシア教やガイア教に扮して天使や悪魔をスライムにして送り届けたのが
ダメだったのだろうか。

心当たりが多すぎて一つに絞れないため、考えるのを止めた。

楽しそうな少佐と銃撃に怯える新人サマナーどもを放置して、アイアンメイデンの元
に駆け寄る。

受けた依頼は完遂する、それがサマナーとして活動する俺の縛りプレイである。

騙して悪いが……などという展開も真つ向から食い破つてこそというものだ。

控え目な弾幕を掻い潜り、悪魔をミクに足止めさせ、アイアンメイデンに接近するこ
とに成功した。

近寄ると随分と小さなことに気付くが特に問題があるわけでもない、肩に担いで運ば
うとすると声を掛けられた。

それはアイアンメイデンから聞こえたモノで、振り向くと顔型が蓋のように開いてお
り、可愛らしい少女が顔を見せていた。

少女は世話をしてくれた女性を連れて行つて欲しいようだ。

足元で震えている女性を見てからアイアンメイデンの中身を見る。

少女は何が楽しいのかにこにここと笑っている。

しかし、少佐とは異なる笑みだった。

邪気が全くないのだ。

まあ、いいだろうとアイアンメイデンとは逆の肩に女性を担ぐ。

護衛のついでに荷物が増えようとも問題ない。

最悪の場合、弾除けとして使おう。

どう撤退すべきかと数秒ほど考えを巡らせていると少佐が駆け寄ってきた。

見た目の割りには俊敏な動きだった。

護衛対象とは別の荷物に視線を向けたので、幸運継続の手伝いだと伝えると声をあげて笑い出した。

冗談だと思われたのだろうか、そんなつもりは無いのだけれど。

少佐とはこのまま撤退戦へと移行することに意見が一致した。

依頼内容は護衛なのだから面倒な戦闘など俺はやる気が全くない。

体中に弾痕を作って血袋と化した駆け出しサマナーを足元に転がしながら、残党と抗戦している二流サマナーがこちらに期待の籠った視線を送ってきたので頷いておく。

PDAへとミクダヨーを仕舞い込み、ミクへと指示を出す。

そしてすぐに跳躍し、ステンドグラスを破って外へと逃げる。

アイアンメイデンを護衛するのが俺の仕事であって、他のサマナーを救出することではない。

つまるところ、悪いが俺は一人用なんだ、ということだろう。

……違うか。

衝撃を完全に殺しながら着地し、銃声や爆発音、怒号、悲鳴、と真昼間からあまりに騒がし過ぎる教会を背に走り出す。

俺を追う様にすぐ後ろを、ミクが音も無く羽ばたきながら飛んでいる。

追いかけて来ようとした悪魔はメギドフアイアの一撃で消し飛んだようだ。

そのまま走り抜けると道路へとたどり着いた。

電車とバスを乗り継いで来たのだが、今の恰好では交通機関を利用するには無理がある。

帰りはどうしたものかと頭を悩ませる。

小型のターミナルに等しい性能を誇るPDAが持つ転移機能を使っても良いのだが、白昼堂々と行おう気にはなれない。

何か良い案はないかと視線をアイアンメイデンに向ける。

流れてきた血液が『さとり』から貰った白い羽織を赤く染めてしまつて悲しくなり、考え事どころではなくなつた。

最終的にディアーチェの洗濯技術を信頼するということとで血染めの羽織を意識の外へと追いやることに成功した。

冷静さを欠くとは俺もまだまだのようだと思いつつ、『さとり』に貰った物だから仕方ないとも思う。

面倒だが走つて帰ろうかと考え始め、悪くないのではと思いつたたちょうどそのとき、目の前に一台の装甲車が止まつた。

ドヤ顔の少佐が中から顔を出した。

装甲車に揺られながら帰路へ着く。

少佐の仲魔が運転してくれているらしい。

内部は狭いうえにアイアンメイデンを置いているのと少佐がいるため、圧迫感が凄まじい。

車内が常軌を逸しているためか、世話係の女性も青ざめている。

ミクはそんなものど吹く風と声を抑えつつも歌っており、それに耳を傾けながら手を櫛代わりに髪を梳きながらミクの設計図に目を通す。

色々と興味深い物ばかりだが、ナノスキンによる自己修復機能の強化案が載っていたので未来に行った時には是非とも手に入れたいものだ。

特に説明もせずに我が家へとたどり着いた。

情報収集の際にCOMPの流れから俺を知ることになったらしい。

個人情報も何もあったものでは無いと思っただが、サマナーにそんな物があるわけない。

全て自己責任だ。

情報を集めるのも、守るのも、全部自分で行わなければならない。

自分の力で賄うか、仲間を募るか、信頼できる相手を見つuckerか、そこら辺が面倒な

世界だ。

少佐は運転手としても活躍している仲魔の電霊である「シユレディンガー」がいるため、情報面は安心できるとか。

俺も含めて仲魔内ではミク以外は電子機器が不得手であるから、そういった面で優秀なモノに興味がある。

電霊は珍しいらしいが、縁が欲しい物だ。

どうしたら見つかるかと相談するが、やはり異界で偶然出会うくらいしか無いようだ。

見つけたら譲ってくれると言ってくれたが、単純に領ける事柄でも無い。

貸しにされて変なところで返せと言われたら面倒だ。

飛び道具代わりに雑魚悪魔を使いたいが纏まった数を集めるのが億劫だ。

魔貨なら貯まっているのだけれど。

DDSネットではトレードしか存在しないので売買可能にならないだろうかとか呟く。

それに少佐が反応し、話を詰めることになった。

最終的に、サマナーによる悪魔の売買を基本としつつ、悪魔自らも売ることのできる

サイトなら良さそうだろうと結論が出た。

そして、運営しつつ利益を出すならオークションだろう、と形式も決まった。

少佐や他の仲間で作ってくれるらしいので、支援として魔貨とMAGを渡しておく。そう時間も掛からずに完成するだろうということと支援の代わりに電霊を優先的に回してくれると約束された。

折角なので戦闘能力よりも電子機器に対する能力が高い電霊を希望しておいた。

アイアンメイデンから全裸の少女が飛び出し、少佐とともに畳を満喫していた。

さらに双子も参加して、こいつらの面倒を見るアイアンメイデンの世話係りも加えると、日本へと観光旅行に來た外人の家族一行に見えてしまう。

お茶を淹れてくれたデイアーチエを労いつつ、軒先に干されている羽織を眺める。

強化されている品だったこともあり、水洗いで血糊や汚れ、呪いをも完璧に落とすことができるのか。

お茶と羊羹にテンションが上がった客人を無視してミクの武装を磨く。

身体の整備は恥ずかしいとか言っただけであまりやらせてくれないので、慣れない作業に四苦八苦しなから武装を修理するくらいしかできない。

デモニカスーツと呼ばれる兵装に用いられている武装ならばミクに組み込めそうだとも思ったが規格やプログラミングが云々。

外面は無理矢理合わせられるが、中身は完璧に俺たちではどうしようもない。

出来るのであれば、悪魔を内部に送り込む「ハッキング（物理）」くらいなものだ。

人間が発するMAGを能力者のように力場として応用するバリアジャケット（BJ）という技術も開発されているらしい。

様々な技術を取り入れようと思うと電霊はやはり必要不可欠なのかもしれない。

PDAに保存されている設計図を参考にして「真理砲（エメトブラスト）」や「容器の破壊（シユヴィラー）」を再現しようとしているのだが、内蔵巫力という物を主軸に構成されているので全く進んでいない。

巫力を溜めこむバッテリーのようなものだとはわかるが、作り方がさっぱりわからない。

そもそも巫力自体よくわからない。

魂を留めて置くイメージらしいのだが。

ドリーカドモンで容器でも作れば良いのだろうかとも思ったが、それは違う気がした。

COMPに内蔵されているMAGバッテリーのようなモノを複数搭載するとか、容量を増やすとかで試してみようか。

そんな感じで過ごしていると夕飯の時間となった。

ちなみにデИАーチエは夕飯のことをおゆはんと言う、可愛い。

外人連中は慣れない箸に苦戦しながら夕飯を食べているが何が楽しいのかテンションが上がり続けている。

少佐など演説を始めたし、アイアンメイデンの中身は持ち霊を操って食べている。とりあえず、口の中に梅干しを放り込んでおこう。

呻いている馬鹿どもは無視だ。

猫耳を生やした少年のような姿をしたシュレディンガーが一番大人しいのでタイヤキをあげておこう。

……館子って食べるのだろうか。

夕飯も食べていい感じに落ち着いた頃合いに、少佐が立ち上がってお祭りへ行かないかと誘われた。

いや、行かないから。

この後は風呂入って寝る予定だ。

断ろうとするが乗り気な双子に腕を引っ張られる。

依頼料が払われるのか怪しい依頼だったし、このまま貫ってくればいいか。

アイアンメイデンは放置しておこう、今日が終わるまでは護衛対象だ。

留守番にマタムネを残して装甲車に乗り込んだ。

折角の祭なのでFINEガンを呼んでおこう。

途中でナオヤという人物も乗り込んできたが車内を見て顔を引き攣らせていた。彼は翔門会でCOMPなどを研究しているらしい。

翔門会はメシア教の下部組織だった気がするのだが、これから行く場所に連れて行っていいのだろうか。

道中では信者が悪魔と渡り合うにはどうすれば良いかという話になった。

俺のように時間をかけて異界を巡るのが安定しているが時間が足りない場合はその他の手段で補うしかない。

悪魔と合体することで自力を補う、少佐のように悪魔を憑かせる、近所のタイヤキ屋のようにペルソナを使う、双子のようにデビルシフターになるなど無限大だ。

それらは一般人には無理らしいのもっと現実的な方法と言われた。

COMPに搭載されているハーモナイザーの恩恵を強化すれば良いのではないだろうか。

それこそ召喚数を絞ってサマナー自信に集中させることができれば急速に力を得られると考えられる。

まあ、現状ではMAGなどの関係で難しいのだけけれど。

MAGを気にしなくて済むのならかなり有用ではないかと思う。

が、少佐がMAGを取り込み過ぎてスライムや悪魔人間になった新人の話をしてくれ

たのであまり現実的ではないのかもしれない。

異界に潜った結果とか、その新人たちはどれだけ潜り続けたんだろうか。

せめてMAGが体が馴染むまでは落ち着くべきだろう。

過剰に摂取しないというのも重要かもしれない。

魔王などの強力な力を取り込めれば速成できる可能性が……。

メタトロンの守護するメシア教の聖堂が炎に包まれた。

ガイア教へと追撃戦を行っているとはいえ、現世に召喚された天使の中でも特別に強い固体が守護している要所だ。

そんな場所へと突撃する俺たちは自殺志願者としか思われないだろう。

少佐とその仲間たちが襲撃するらしいので、それに乗じて火事場泥棒するだけだ。

機械人形はまかせろーとばかりにバリバリと破壊して中身の天使からMAGを奪い、

COMPや部品はPDAに収納。

俺が通った後には何も残っていない。

拾ったCOMPの中には俺が流した物もあったので後でどこかに売りつけよう。

召喚プログラムさえあればCOMPとして扱えるが、MAGバッテリー付きだとさらに高く売れるのだ。

現状、マタムネを除く仲魔を全部放出しているのだが過剰戦力すぎたかもしれない。ディアーチェとシユテルなど普段から大罪としてメシア教に目の敵とされているので、凄まじい勢いで聖堂を破壊している。

無差別に破壊されていき、巨大な聖堂が崩壊していく。

それでも高位分霊はおろか、通常分霊のメタトロンすら見つからない。最深部に待ちかまえているのだろうか。

特に障害も無く聖堂の最深部へとたどり着いた。

迷子になられても困るので仲魔と双子はきちんと連れてくる。

天使は属性や攻撃がほとんど偏っているのでワンパターンで攻めていける。

低レベルの天使ならば破壊さえ効かなければ素通りに近い。

中の様子はわからないが、感じられるマグネタイトの量から考えて強敵が待ち構えているようだ。

高位分霊のメタトロンだろうか。

それとも他の大天使だろうか。

何がしようともミクの糧になってくれるだろうと扉を開ける。

巨大な蠅型の悪魔と目が合った。

相手は複眼なので本当に目が合ったのかは不明だが、確かに見られたように感じた。カッコいい。

実にカッコいい。

足元で砕かれている機械人形が気になる。

たぶん、メタトロンの分霊が入っていたのだろう。

これほどの悪魔だ、燃費が悪いので食べたのかもしれない。

——アナライズ成功——

魔王「ベルゼブブ」

レベル105

……よし、撤退だな。

PDAの転送機能を走らせる。

他のやつらは置いて行こう。

むしろここで死んでほしいくらいだ。

メシアとガイアが消滅間近の今、小さな勢力が雨後の筍のごとく出てきて拡大するところが予想される。

フィネガンが属している組織など特にそうだ。

ここで消えてくれ、と思っただけだから期待しておこう。

他の連中も一掃されればと願いつつ、撤退した。

耳に残った蠅の音が煩わしかった。

少佐が死んだらシユレディンガーが仲魔にならないだろうか。

【アイアンメイデン・ジャンヌ】

少女、というか幼女。聖女候補として呼ばれたが囮にされた。X-LOW Sのメンバーにメシア教がいて支援されて云々。

【少佐】

メシア教がチェックメイト寸前という素敵な激戦区である日本へとわざわざ海を渡って戦争しに来た。デビルオークションで儲けた魔貨とMAGを使って悪魔の軍団

を率いることになるかもしれない。箸が上手く使えない。

【シオニーちゃん】

ジャンヌさまのお世話係を任されたことで背中を押されて地獄へと足を踏み入れた。彼女の明日はどっちだ。

【シュレディンガーの猫】

電霊。情報よりも戦闘したり精神に潜るほうが得意。今はオリ主の心を掴んで離さないが、他の電霊が現れたら忘れ去られる儂い存在。

【蠅王】

かっこいい。つよい。

「至高の魔銃」「死蠅の葬列」で無敵に見える。

近況報告

- ・ガイア教が活動不能に陥りました。日本での再起には時間がかかります。
- ・メシア教が活動不能に陥りました。日本での再起には時間がかかります。
- ・メシア教が聖杯奪取へと本格的に乗り出しました。聖人および聖女、天使が聖杯戦争に投入されず。

- ・拡大していたシユバルツバースが鎮静化しました。

- ・東京で複数の組織が活動を開始しました。

・中堅サマナーへとダークサマナー「ともだち」の討伐依頼が行われています。

・「グリゴリの天使」が活動しています。

・ホムンクルス（フラスコの中の小人）が儀式の準備を行っています。儀式の範囲は

学校のようにです。

・暁美ほむらがキュウベエの言葉に耳を傾けています。

— 15

赤茶けた空、文明を覆い隠す砂、過剰なMAG、荒廃した世界。

己の身を守る術の無いモノは喰らい尽くされ、強者が蔓延った。

力こそが、ただ単純な力こそが正義だった。

それでも人間は生きていた。

天使の加護を受ける、悪魔に魂を売り渡す、強者に靡く、更なる弱者を食い物にする。

どんな方法であっても生きていた。

悪魔が闊歩する外界に怯えながら、残されたわずかな土地にしがみ付くように。

そしてそれでもなお人間は争っている。

戦いは続いている。

人間の愚かさゆえに、悪魔の狡猾さゆえに、そして天使の慈善ゆえに。

思念と意思が、戦いを望んでいる。

限りある命を浪費する、地上に存在するすべての愚かしさの証だった。

世界は、汚された大地は、ゆっくりと死に向かっていた。

世界改変後に起きた大破壊と呼ばれる大事件と、それに連なる事件によって空気中には高濃度のMAGが存在するようになった。

瘴気へと至るほどでも無いが、中級の悪魔が難なく活動できる程度のMAGが在り、悪魔が顕現し易い世界へと変化したことは確かだった。

常に一定量のMAGが世界へと供給されている。

誰がどのようにしようと、それこそ魔王や熾天使が力を行使しようとも、減らすことも増やすこともできなかつた。

地上に存在する諸々は、世界へ供給するために搾り取られるようにMAGを散布し、最期には砂と化した。

世界はMAGに満たされている。

しかし、世界が保有しているMAGは減っていた。

時間が経つごとに文明は死んでいった。

その結果として世界は荒廃の一途を辿っていた。

砂嵐が吹き荒れている。

視界を埋め尽くすほどの砂を防ぐには、頭まで覆い隠した大き目の外套など気休めにしかない。

衝撃を伝えるよう一歩一歩踏みしめて進む。

歩く度に地が鳴り響き、点在する巨大な砂山が崩れ、砂嵐以上の砂が流れ、中から朽ち果てた建造物が姿を現した。

砂を逸らしながら建造物へと足を運んだ。

PDAからミクとミクダヨーを呼び出し、指示を出す。

建造物内ならば入り込む砂も少ないのでレインコートを着せておけば最低限の防塵にはなる。

駆け回るにも面倒なので手足の代わりになっでもらうのだ。

それも俺が探すよりも、彼女らがセンサーを駆使したほうが良さそうだ。

どこを探してもガラクタばかりが見つかる。

大破壊前の日本は俺が生きている頃らしいのだから、当然とも考えられる。

砂と化していないことに喜ぶべきなのだろう、形の残っているガラクタが今は重要なのだ。

物資の足りないこの世界では、何もかもが宝である。

悪魔が頻繁に出現する砂漠を歩き、砂に埋まった建造物を探索するモノなど居ないため、内部にはガラクタが溢れている。

命を賭けて探索する者もいるが、大半は実力が伴わず悪魔の餌となる。

成功者はずっと割の良い仕事へと目を付ける。

塵漁りなど行う物はいないようだ。

悪魔を殺し、ガラクタを漁る。

使えるのか使えないのか、判断が付かないので全てをPDAへと放り込む。

ついでに金庫にある現金も放り込む。

通貨は魔貨、現代の金などちり紙にしかないという言葉通り、漁れば出てくるのだ。

未来で生活して……何日目だったか。

変わらない日常を過ごしていたために感覚が狂ってきてしまった。

フイネガンと祭は「いのちをだいに」という方針のせいですぐさま帰ってしまった。まあ、悪魔が群れで迫っていたのだから判断としては間違っていない。

殿を引き受けた俺も公衆電話が吹っ飛ばなかったら帰っていたのだが、こればかりは仕方ない。

ミクやミックダヨーをできるだけ強化してから帰れば、と思っている。

そんなわけでこの時代の技術者を探して彷徨い歩き、新宿の地下街で見つけることに成功した。

人類は地下へと生活拠点を移しているらしく、地上だけに目を向けては何も見つからないのだ。

観察して回ってみた結果、この世界の日本には外国人が多いようだ。

メシアやガイア、その他の組織が投入した人員が大破壊後に散り散りになり、そのまま拠点があった街に居ついたことが原因らしい。

見つけた技術者も外国人であり、言葉の壁に難儀した。なんてことは無く、普通に日本語を介していた。

悪魔と会話するよりも楽だとか。

俺が頼った技術者は兄弟だそうで、兄はエドワード、弟はアルフォンスと名乗った。

エドは機械の義手と義足、弟は鎧型のデモニカスーツを着込んでいた。

大天使であるミクさんを世界のセラフにしてもらおうと頼んだが、すぐに断られてしまった。

普段であるのなら問題ないが、メシア教が買い占めた為に今は材料を切らしているのだという。

ナノスキンならばできるけれど、それ以外が足りないとかどうとか。

しかも兄のエドが義手の神経を患っているらしく、それを直さない限りは作業も儘ならないとか。

余所者の身であるし、顔の広い技術者に恩を少しでも売っておきたいという考えもあるのだ。

まあ、そういう理由から砂漠で廃墟を漁ってジャンクを拾い集めている。方法は簡単だ。

適当な砂山を見つけたら、地を揺らすことで山の内部を崩し、建造物の有無を確かめる。

地響きを鳴らす勢いで歩くのが重要だ。

内部の建造物が一緒に崩れることもあるが、この程度で崩れてしまうのなら風化が進

んでいたのだろう、調べる必要は一切ない。

盛大に音を立てているが、悪魔は寄ってこない。

それほど強い悪魔がうろついている場所では無いし、地中の悪魔は衝撃で近寄って来ない。

空を飛んでいた悪魔は瓦礫を投げつけて殲滅したので、当分は現れない。

上記の理由から何者にも邪魔されず、気楽にミクと発掘を楽しんでいたのだが、どうやらここまでらしい。

パワーとプリンシパリテイという2体の天使に連れられて、メシア教らしき男が空から現れた。

何故だか興奮しているようで、かなり気持ち悪い。

ミクとともに行動していることから、俺を聖人だと勘違いしているらしい。

この世界の聖人は力のある上位の天使と行動を共にするのが常識のようで、羽根を広げて神気を振り撒いているミクと一緒に居れば、そう勘違いされるのも無理はない。

パワーは魂の輝きが云々、プリンシパリテイも時空が云々、素晴らしい聖人であるとかで、手放しに称賛された。

ミクというレットテルによって曇らされているのもあるが、こいつらの目は節穴か。

それとも下級天使なので大天使級の威光に麻痺しているとか。

その命、神に返しなさい！みたいな展開だと処理が面倒なので聖人として話を合わせておこう。

折角だし、メシア教の内情辺りも聴いておきたいので、むしろ都合が良いとも思える。

天使の慈悲によって生かされている日々への感謝が8割、終わりが見えないカオス勢力との争いが2割といった物が聞いた話の内容だった。

ほとんど参考にならないが、サーヴァントシステムとカテドラルとやらには興味が湧いた。

カテドラルとは巨大な建造物で、選ばれた者のみが乗ることを許された箱舟の役割を果たすらしい。

問題は話を聞いたメシア教が下っ端過ぎて、内部で生きていけるように用意された箱庭なのか、それとも文字通り箱庭として機能するのか、そういった核心については知らないのだ。

ただ単に天使の加護に盲信して機械的に働いているだけだ。

こういう世界だ、その方が幸せなのかもしれない。

サーヴァントシステムとは過去の人物を使役する方法らしい。

メシア教に矛を向けた罪人の魂を縛ることで意思を神のために働くよう固定し、罪を償わせてやるとか。

ただの洗脳と同じ、そして死んでいるのと変わりない、なんともおぞましい事を考えたものだ。

魂を縛るなど、死ぬことと何が違うのだろうか。

今は「ぬらりひよん」の使役を試みているようだが、魂が手元にないので進んでいないとの話だ。

その人物は妖怪ではなくただのダークサマナーだったが、多数の妖怪や怪異を好んで使役していたので「ぬらりひよん」と呼ばれたらしい。

サマナーとしての能力はかなり強大だったようで、世界改変を行おうとしたとか。

さらに契約していた妖怪・怪異を強制的に使役させることも予定しているようだ。

ただ、魂の争奪戦が今尚行われているので、メシア教が使役できるようになるのはまだまだ先になると男は言った。

なんにせよ、あまり気のいい話では無い。

男と天使がそろそろ拠点へと帰るといっているので、探索の際に見つけた、まだ食べることでできる缶詰を、男が持てる限界まで渡す。

聖人として振る舞っておけば、何かと融通が効きそうだからだ。

例えばここらでは俺が活動しているのでメシア教があまり手を出してこないとか、メシア教の教会に入る際に口利きしてもらえるとかが。

アイスの当たり棒くらいの期待だ。

この世界では貴重だろう缶詰と吊り合いが取れるかと考えるが、特に問題はないと判断した。

缶詰の数には余裕があるし、更に必要だったら元の世界で買い込めば良い。

別れ際、男は救世主（メシア）によって戦況が変わりつつあると言っていた。

彼らの言うメシアとは一体なんなのだろうか。

天使の言葉を盲信する彼らが、人間を導く天使が、求める救世主とは……。

【ともだち】 レベル：不明 能力：悪魔召喚、ペルソナ召喚、悪魔変化、e t c。

奇抜な覆面を被っている人物。目撃される度に骨格や性別、推定年齢、能力が異なる。

「ともだち」は複数人いて一人ではない。

近況報告

- ・ 暁美ほむらが「ともだち」と交戦しています。
- ・ 暁美ほむらはアガレス（高位分霊）と時を対価に契約しています。
- ・ アガレス（高位分霊）が力を行います。

・ 暁美ほむら | チクタクマン (高位分霊) に魂を対価 ■ 契約しています。

・ チクタクマン (高位分霊) が力 ■ 行 | しています。

・ 深淵が覗き ■ | ママツマママママ ■

・ 可能性ガガガ分岐してイマママ ■ もげら |

・ これ ■ ラ先 | 報 | ■ 存在しママママママママアムセ ■ 。

| ? ■ さ ■ 良い一に死 ■ !

原作：モンスターファーム2　いくせい、もんすたー！1

— 1

俺は最強だ。

しかも無意識のうちに異世界来訪を果たした。

逆だな。

異世界に来たら最強だった、が正しい。

普通の学生だったがここに来てからは浮浪者やモンスターハンター、助手、etcと様々な職業を経てブリーダーになるくらい最強だ。

好物はカララギマンゴー、出来れば酸味が効いていると嬉しいが、甘すぎたり柔らかすぎるのは好きじゃない。

酸っぱいのは安物なのだが、好物なのだ。

思い出の品でもある。

何も言わずに安上がりの男だと笑ってくれ。

そんな安上りの俺だが、どのくらい最強かと言うとヤバいくらい強い。
超ヤバい。

ヤバいくらい超ヤバい。

隠しダンジョンの最奥にいる裏ボスくらい強い。

超人的な身体能力に加えて魔法も使える。

○リー・ポッター系では無く、漫画とかゲーム的な魔法。

大魔導師とか世捨て賢者、忘れ去られた英雄級。

魔法を使ったら「これはメラではない、アギだ」って出来る。

アギとは炎をポツと出す魔法だ。

試したことは無いけど簡単に人も殺せる火力を引き出せる。

最強すぎてごめんね☆

誰が俺に与えてくれたか分からないが感謝しておこう。

見ず知らずの異世界にパンピーのまま放り出されてたら死んでいたから感謝して
る。

だが、異世界に送ったやつと同一人物だったら許さん。

チエーンソーでバラバラにしてやんよ。

たぶん神様のな超常存在がなんやかんやしたに違いない。
神とかマジ許さん。

テスト前に祈る程度の信仰心しか持ち合わせていないのに、こんなサービスとか別の誰かにしてあげてくたしあ。

むしろ信仰心が低いから更迭、とかかもしれない。

島流しならぬ世界流し。

こえー。

天罰こえー、サイキョーでも天罰こえー。

あたいたったら天罰ね!!とかやったのかもしれない。

⑨神の天罰はやべえな。

もう、本当にNICE JOKE。

折角の異世界来訪だから魔王を倒して勇者になったり、モテモテになったりとかしたかったがどうやら御呼びで無いらしい。

魔法など火が無かったときの種火や腕がもげた時にくつつけるくらいしか使い道が無い。

リアルモンスターハンターの時とかも使ったし、世の不条理に反抗したときにメギド

ラオンを使ったから、なんだかんだ便利なモノである。

使い道が無いとか言ってスマナイ、魔法さん。

とりあえず公の場では使え……ない、たぶん。

魔法が使えるのか使えないのかわからないこの世界がどんな世界かと言うと、モンスターを使役して、育成して、戦わせるのが主なのである。

ポケモンをバイオレンスにして、テリワンな育成ぶちこんで、デジモンをくつつけたみたいなのを想像して欲しい。

想像できただろうか。

そう、モンスターファームの世界なのだ。

想像できなかった諸君も涙で枕を濡らす必要はない。

なぜならほとんどのゲームに共通している事項だからだ。

シーマンも捕獲してから育てるし、放っておくと死ぬからね。

シーマンの世界じゃなくて良かったです、キモいのはマジ勘弁。

まあ、完全にモンスターファームの世界かと聞かれると肯定しにくい面もあるので平
行世界と考えればよろしいのではないだろうか。

似ているところもあるし、似てないところもあるよって感じで。

で、モンスターファームってのはCDからモンスターを再生して、育成して、大会に出して名人を目指すゲームだ。

モンスター同士を戦わせるゲームであって人間とかお呼びじゃない。

一応必要だけどブリーダーに必要なのはポケモンマスターになれる能力的な才能であって、制圧力とか武力とかでは無い。

もちろん、戦闘力でもない。

モンスターの気持ち解るとか話せるだったらサイコーだね、俺には無いけど。

マジやべえ魔法も使えるし、余裕でモンスターも倒せる。

剣とか超得意、槍だって振り回すよ!!

でもモンスターとの会話は勘弁なつてくらい無理。

ああ、でもあれが出来る。

ボディランゲージってやつ。

超得意、拳で語るやつだけど。

なんと勿体ないのだろうか。

才能の差に苦しんでいるオリ主に分けてあげたいくらいだ。

あいつらってヒロインがいるんだよな……やっぱり無しだ。

リア充に俺の能力を分け与えるなんてもったいない!!
何処かしかで成功するのだから、存分に苦しんで生きてね☆
俺はブリーダーになってブルジョアとして生きるよ!!

折角のモンスターファーム世界なのでブリーダーになった。

金持ちの職業みたいな部分があるから、浮浪者していた俺がブリーダーって凄い事なのよ。

褒めてくれてもいいのよ?

努力の過程なぞスキップだ。

そのうち語るかもしれないから大丈夫です、全く問題ないです。

エヴァ先輩というブリーダーの元で助手をしてドラゴンを育てて、推薦もらって、専門学校に入り、リアルモンスターハンターしながら勉強、第二の青春を送り、ヘンガーを育てて、補助魔法で足りない部分を補強、卒業、メガドラオン、リンディ校長に挨拶、

I Maとかいう協会に来た↑今ここ。

今の俺は卒業生であり、新人ブリーダーでもあるのだ。

めんどくせ。

まあ、新人ブリーダーでありながら能力は最強だ……身体能力の話だが。

いつまでも引つ張って女々しいとは自分でも思っているのだけれど諦めきれない。

もったいないくらい超やべえチート能力。

無駄だけど……いや、ホントに無駄だけど。

新人には助手が付く。

新人だけでなく、段持ちでも助手を持つので特別だとかそういうった事情は無い。

単に学校の実習として在校生が卒業生の元へ助手として手伝いに行くのだ。

実習先は希望性なので、自分で言うのも何なのだが不人気な俺に付かないと覚悟して

いたが一人希望していたらしい。

奇跡っ!!

まさに奇跡っ!!

求めた永遠は此処にあったのだ……っ!!

というくだらない想像してしまっただけである。

まさか、基本的な感性を持つブリーダーの敵である俺に助手志望とは……。

実家の手伝いだったり、ブリーダーとして活動しない同期も多いので、実習生が余っていて、すでに卒業して幾らか経つ先輩や先生などの元にも助手に行けるのだ。

同期にも恩師であるアテイ先生の元で助手をやってる双子がいる。

俺も今年は助手として先生の魅力を間近に感じようとしたのだが金髪でこっぴちに

邪魔されてブリーダーになった。

おのれ……。

そんな理由で助手は余っているが、俺には来ないモノと思っていたが。

……ま、まあ、そんなことはどうでもいいのだ。

俺が顔も名前も知らない助手を待っていると、前方にトコトコと歩いている二人組の姿があつた。

片方は同期のレッド(仮)。

先輩の元で供に助手をしていた腐れ縁であり、本名は知らないが今更聞くのもあれかと思つてあだ名を付けたのだ。

無口で、黒曜石のような輝きのある瞳と艶のあるやや長い黒髪が特徴的だ。

俺のプレゼントした帽子を四六時中かぶっている。

半袖で冬山に立つてたら、挑戦者としてポケモンバトルをしたくなる……かもしれない。

相棒は電気ネズミに違いない。

どう見てもレッドです。

だからレッドと名づけた。

二人組なのでレッドのほかに女の子がいる。

どうやら彼女がレッドの助手のようだ。

俺の知識が正しければ間違いなくあの娘はコルティア、通称コルト。

MF（モンスターファーム）2の主人公の助手をしていた不老不死のやつだ。

初期ロットでは仕事をしなくなるのだが、The Best版だとどうなのだろうか。

女の子が助手とかマジで羨ましい。

つうかコルトが助手とかやつが主人公なのだろうか。

……ありそうで困る。

レッドは才能にあふれていた、俺なんか比じゃないくらい。

いや、魔法を使ったら俺の圧勝つすよ？

無しだと……。

まあ、レッドは学校で全てにおいてトップで育成の練習でも教官に褒められてた。

俺は落ちこぼれ、ハイパークラス。

テストとか名前が消し去られる庶民。

魔法が無かったら卒業できなかったレベル。

魔法を何に使ったかって？

ばっか言わせんな恥ずかしい／／／

強いて言えば、俺が本気出すとヤバイよ？ニヤニヤ、みたいな。

ブーストかけてワンパン余裕でした的な。

なんで催眠的な魔法が無いのかと小一時間くらい悩んだがカララギマンゴーを食べたら忘れた。

魅惑的な何かならあるのだが。

テナタラー先輩とか呼ばれるのはなぜだか嫌でござる。

しかもすぐ効果が消えるから何度もかけ直す必要があつて面倒なのだ。

つうか未だに何の作品の魔法かわからん。

神のオリジナルだったら嫌だ、俺の考えた最強の魔法みたいで。

今度はムドオンとかいう魔法を使つてみたいな、と思つている。

メギドラオンとかかっこいいから使つたら東の丘と俺の怒りに触れたやつらが消え去つたのは記憶に新しい。

死んではいないので大丈夫だ、回復魔法をかけて攻撃とかやったけど大丈夫だ。

犠牲になつたのだ、俺の怒りのな。

すつきりするけど街中では使えないだろう。

無差別殺人とか柄じゃないのだ。

そんな超絶天才のレッドに可愛い助手が付いた。

才能に恵まれ、言葉少ない甘いマスクはマジでイケメン、それに女運だと……？

羨ましい、マジで羨ましい、超羨ましい。

妬ましくてパルパルしちゃうわ。

もう俺って死ぬしかないんじゃないの。

とか考えながら眺めていたらコルトに睨まれた。

あ？やんのかコラ？

俺はホリイ派なんだよ、ふざけてつと愛でるぞこの野郎!!

つてガン飛ばしたら涙目になりながら震えていた。

……なんで俺が見たらみんな泣くんだよ。

妹とか弟とか、同期たちは普通なのになぜだ。

レッドが俺に気付いたらしくて控え目に手をふりふりしてきたから、俺も軽く返す。

とことこと近づいてきて右拳を掲げてきたのでこつんと軽く合わせる。

そして満足気にこくこくと頷きながら帰って行った。

拳を軽く合わせるのが俺とレッドの挨拶だ。

いつから始めたかは忘れたが、気付いたらやっていた。

無口なレッドにはちようどいいし、これからも続けていくだろう。

レッドは悪い奴じゃないので、妬むのも呪うのも止めてやろうではないか。

べ、べつに数少ない友人だからって理由じゃないんだからねっ!!
……あとコルトが忘れられているんだがどうすればいいのだろうか。

助手が来るまで、空白の時間。

コルトは俺を睨んだ後、走ってレッドを追いかけた。

やつの睨みにはハムスターを感じる。

つまり全く恐ろしくない。

俺が本気で睨んだら人が死ぬ。

……魔法の力だから、目つきが悪いとかそんなわけ無いじゃないですか。

妹がくれたバンダナで目が隠れているから誰かと目が合うこともないし、そしたら不意の事故であつても睨むことも無いだろ。

妹の気遣いに泣いた。

そして学校に在学中はバンダナ巻いたまま過ごした俺の姿にまた泣いた。

つうかバンダナ巻いてるのに下級生と目が合つて泣かれたのを思い出した、なんて理不尽。

そんなことをつらつら考えていたら俺の助手が登場。

長い茶髪に冷たい印象を与えてくる無表情。

少し息が上がつていて肩が上下している。

急いで来たのだろうか、うつすらと汗をかいていて頬も少し赤くなっている。

冷たい無表情と言うか、緊張で表情が固まっているだけかもしれない。

どう見てもリオです、可愛いけどなんとも言えない違和感。

MF4つてことは登場するハードが違うからか。

俺の世界はPS1、リオはPS2。

バグるからね。

一応繋がっているとはいえ、俺の世界を貴女が登場する世界で再生するとバグるから島に帰れ。

ファンちゃんとガルウでも育成してろよ。

トウグルの樹木爺とかマジでどうしたし。

冗談です、僕の助手になってくれてありがとう。

感動で俺は泣きそうだ。

まさか女の子が助手に来るとは……生きてて良かった!!

苦労を掛けるかもしれないがよろしく、としか口下手なので言えなかったが握手はちゃんとしたので及第点くらいは貰えるはず。

はい、よろしくお願いしますと微笑みながら言ってくれたりオさんマジ天使。

凍っていた表情が溶けたかのように一変して笑顔になったとか萌え死ぬ。

握手した手はほんわりと温かった。

やっぱり良い物だね、人との触れ合って。

決して卑猥な意味じゃないから。

ちよろつと話してみてもわかったのはMF4のリオとは同一人物ではないだろうということ。

名前はリオだけどリオじゃない、みたいなの。

テキトーですよ、サーセン。

物静かな少女だし、大丈夫だろ。

きつと、たぶん、おそろく……だといいなあ。

冗談だ、良い娘に決まっている。

俺の助手に来てくれるとか運命ですね。

助手を休まれたりしたらモンスターと相性の悪い俺は最悪であるのでかなり頑張つて欲しい。

おまえなら大丈夫だよ!!やればできるよ!!俺が言うんだから間違いない!!みたいな激励も必要ならするかもしれない。

……リオの代わりに来るユリの可愛さは異常。

というかMF4に表れる女の子はかわいすぎる。

好感度が上がって頬を赤らめた姿とかヤバい、マジで嫁に欲しい。

もちろんリオも可愛いよ。

髪下してても、ポニテでもどっちでも大好物です。

物静かだけ一緒に何時もいてくれるとか魅力が振り切っていて困る。

さて、モンスターと手に入れて育成と行くか。

モンスターか……テンションがマジで下がる、下がる、駄々下がりである。

ドラゴンもヘンガーもいいやつだった。

俺がモンスターと交流するのってかなり難しいんだよね。

威圧してるらしくて。

だから明日とかにしようぜ？

え、無理？

デスヨネー。

ブリーダーが育てるモンスターは数多く存在する。

見た目、能力、性格……異なる個性を考えるとそれこそ無限に広がる。

自分に合ったモンスターを選ぶ、その何気ない行動すらも新人ブリーダーは試されているのは無いだろうか。

そう俺は考えながら、市場を訪れた。

モンスターを得る方法は複数ある。

だが、新人のうえにコネも無い俺には手段が限られてしまう。

そのため大会の会場であるコロッセオへと続く大通りの市場に溢れる人の波へと身を任せることにした。

市場で買う以外には神殿に行き、持っている円盤石からモンスターを呼び出すなどもあるのだが、そんな高価な物を持っているわけも無い。

必然的に限られてしまったわけです。

円盤石ってなあに？みたいな諸兄のために説明するとモンスターが封印されている石です、ガチで。

昔うんたらかんたらがあつてモンスターは石の中に封印されたので儀式で再生して使役しようつてことらしい。

いしのなかにいる。 よりもジュラシックパークのDNAを解読して甦らせる方が近いのだが詳しいことは神官にでもならないとわからないので俺には一生の謎に違いない。

ブリーダーが懇意にするし、トップブリーダーとなるとお抱えなどもいるから神官つてかなり儲かるらしいね。

羨ましいぜ。

本当は最終手段として自分の中で妥協を繰り返してから来るはずだったのだが、リオが率先して俺の手を引っ張りながら歩くので、手を振り解くわけにもいかず来てしまったのだ。

「どのモンスターにしましょうか。私はロードランナーが好きなんですよね」とにこや

かにリオが語りかけてくるがどうやらまだ気付いていないらしい。

モンスターを売買できるマーケットの近くまで来て表情が変わったのが見て取れた。俺が近づいただけでモンスターが震えてしまう。

そう、俺があまりにも強すぎるために動物としての勘か何かで怯えられてしまうのだ。

このまま育てても勝手にストレスがマツハになり、自動で超スパルタ状態になってしまい俺のモンスターは死ぬというBAD ENDが待っているだけだ。

まあ、こんなものだろうと納得しながらマーケットを後にした。

何故かリオが落ち込んで俺に謝ってきた。

リオが良い娘すぎて俺は感動した。

ここで助手を辞められてしまうのでは無いかと覚悟していたが、そんな気はないらしい。

どうやら俺は素晴らしい助手を得てしまったようだ。
最強すぎてごめんね☆

まあ、リオが落ち込んだままでは俺の精神衛生上に良くないのでマーケットは当てに
していなかったことを告げる。

俺ほどになると市場のモンスターでは満足できないのだとも続けて伝えた……新人
ブリーダーだけ。

そんな簡単になるほどって納得されても困る。
きらきらした瞳を向けるな。

メモを取るな、君には無関係だ。

純粹すぎるだろ、変な人に騙されたりしなければいいのだが。

日が暮れる前にはモンスターを捕ってファームに行く予定なので、近所の山にピク
ニックへ行く感じの気軽な準備をする。

内容としては昼ごはんと飲み物だけとか完璧すぎて自分が怖い。

予定を教えるときリオが少し心配してきたが魔法使いの俺なら大丈夫だ。

リオの目がキラキラしてるけど魔法に反応したのだろうか。

ちよつとばかり純粹すぎやしないだろうか、この娘……。

俺は今、カウレア火山にいます。

カウレア火山とは溶岩が垂れ流しになっている物凄く熱くて危ない活火山である。

上級モンスターの修行の場としても活用されるのだから一般人にとつて危険だろうと俺には全く関係ない。

最強なのでリオを守りながら戦っても余裕、魔法もあるので腕がもげて足が取れていても頭さえ残っていれば簡単に勝てる。

流石に一緒に歩くのは厳しいだろうから背負いながら火山を進む。

岩山を苦も無く登り、溶岩の川を飛び越える俺に市場のモンスターなんて必要なかった。

日和つた軟弱な市場のモンスターよりもワイルドでワイバーンなノラモンを仲間にすることに決めていたのだ。

市場ではどうせ無理だろうってわかっていたし。

学校のとときからドラゴンとかヘンガー以外はほとんど無理だった。

が、仲間にするのは得意だ。

拳で優しく語りかけてどちらが上か理解させてからお願いすれば不思議と友好的になつてくれるだろうよ。

もう一度言うが、ここに来た目的はノラモンの捕獲だ。

ノラモンとはブリーダーが育成に失敗して逃がしたモンスターが凶暴化したり、枷が外れて自由に生きるモンスターで、中には人やモンスターに被害を加えてくるモノもある。

時には伝承でしか聞いたことのない超強力なモンスターが徘徊していたりするのでやべえよ、みたいな意味もあるんじゃないかなと思ってる。

そんなノラモンの中でもカムイとマグマハートが俺は好きなのである。

この2体はノラモン専用であり、CDから再生できなくて悲しくなったのも思いでの一つ。

そんなモンスターを捕まえに行くことにしたのだ。

カムイの分布は雪山、マグマハートの分布は火山。

流石の俺も装備なしで雪山に突入したら遭難しそうのできなかったのでこのカウレア火山に来たってわけだ。

ノラモン捕獲のヒントはポケモンから得ました。

俺はゲームで憧れたモンスターを育てられて、しかも強いモンスターで楽が出来る。

一石二鳥で震えてきやがるぜ……。

体力を削って交渉するのは俺自身なのだがポケモンとトレーナーの一人二役はきついでリオにトレーナー役でもやってもらおうかしらん。

ノラモンにもランク分けがあり、マグマハートやカムイはA。

ランクとは公式戦にも使われている強さを分類した指標のことで一番下はE、それから順にD、C、B、A、Sとなる。

Fというランクもあるのだがそのうち説明するかもしれないね。

上位ランクのノラモンとなるとブリーダーが育てた同じランクのモンスターよりも一回りも二回りも強靱でめっちゃ強い。

新人ブリーダーのモンスターなぞレベル100のミュウツーとレベル7のトランセルを彷彿とさせるくらいの差。

ぶっちゃけると一睨みでぶち殺せるレヴェル。

そんなめっちゃ強いモンスターが相手だろうとも、忘れている人もいるかもしれない

が俺自身は強いのだ。

「戦闘力たったの5、ごみ……なに!? 100、1000、2000……まだ上昇するだ
と!?」ボンッ

「ス、スカウターが壊れた……!? こんなことがあるはずがn」あべしっ!! みたいな展
開になるほど強いのだ。

異世界だったら竜殺しの称号はおろか魔王殺しも確実である。

異世界のやつらは見る目が無いよね。

いくら涼しい場所を見つけたので休憩がてら昼飯。

リオが拾ってきた円盤石のかけらとほのおの羽根を眺める。

円盤石のかけらは発掘の際に円盤石が砕けたり、大量発掘によって供給量を調節する
際に捨てられた残りである。

放棄された採掘所や山頂、森の奥地、海の深くを探せば見つかるかもしれない。

その名の通り円盤石の欠片であり、合体の素材としても使えるし、高値でも売れるア
イテムだ。

羽はゲームでのイベントを消化するとヒノトリというモンスターを得るために必要
な物だ。

この世界ではヒノトリが寿命を迎え、火山へと眠りに付くときに、最期の羽ばたきとともに地に落ちてうんたら。

縁起が良いモノとされていて頗る珍しい。

ちなみにゲームの話だがフェニックス火山が初出なのだが、手に入らなかつたらカウレア火山でも拾える。

ヒノトリは手塚先生に遠慮したのではないだろうかというくらいの高スペックを誇っているので大会荒らしとかに便利だった気がする。

強いモンスターが出現するデイスクを持つていないのでヒノトリで名人になった、みたいな人もいるのではないだろうか。

それくらい強いモンスターだ。

燃えるように輝く羽は見事なまでに美しく、気高き心は人を魅了する、と絶賛されるほどで一度は育ててみたいモンスターとしてブリーダーでは人気を博している。

この世界で冒険してもゲームのように欠片や羽といったアイテムは手に入らないのだが、こうも簡単に見つかるリオはどうしてなかなか強運だと言える。

探検隊や搜索隊、救助隊も経験した俺が言うのだから間違いない。

カララギマンゴーを齧っているとリオが何かを見つけたようで、空を指していた。

俺が見た先は青白い炎の鳥が飛んできている姿だった。

数瞬で頭上へと到達し、青白い炎を撒き散らしながら神々しく降り立ったのはS級のノラモン、フェニックスだった。

ゲームで見るよりも透明感のある鮮やかな青い炎を纏っている姿を間近で見られるとは思わなかったが、守護者としては当然のことかもしれない。

自分で言うのも嫌だが、俺ってば邪悪だし。

どうしたものかと悩んでいるとビームを撃ってきた。

マグマハートを捕まえるつもりだったが、気が変わった。

コイツにしよう。

最強の俺と覇道を極めるのなら、最強であるべきだ。

ビームがリオも巻き込みそうになったから怒っているってわけじゃないんだからっ
!!

か、勘違いしないでよねっ!!

リオを腕で抱えながら魔法を放つ。

使うのはムドオンという相手を戦闘不能にする、らしい魔法。

紫の光がフェニックスを囲んで輝いたが効果なし。

不死鳥だから聞かないとでも言うんですか!!

そんなのおかしいですよ、フェニックスさん!!

もしかしたら地面タイプの魔法で飛行タイプのフェニックスには効かないとかとんでも理論があるかもしれないがムド系をヒノトリ種に使うのはやめようと思った。

ビームの余波でもダメージを受けると思うのでリオを庇いながら戦うことにする。

今の俺はめだか箱みたく昇りながら戦い、その後落下しながら戦う。

「すごい、落ちながら戦ってる……」とカリオさんが呟いているけど結構余裕あるね、君。リオを途中でさりげなく岩場に隠して戦闘を続行する。

フェニックスも食らいについてくるがリアルモンスターハンターを経験した俺に勝てるわけがないのだ。

人間の限界を超えてこそ俺だ!!と言わんばかりの本気北斗有情破顔拳>〇(・ω・)〇

くテールレットーを使おうかと思ったがやめた。

ビームとか超出るので相手は死んでしまう。

捕まえに来たのに殺してどうする。

殺さないように細心の注意を払って感謝パンチ。

感謝の正拳突きなどやったこともないのでただのテレフォンパンチである。

百式観音様は出てこなかった。

出たら出たで怖い……むしろ有り得そうだ。

倒れたフェニックスと暑さでバテているリオを担いで火山から帰る。

ノラモンを討伐したのだから賞金を戴くことにした。

修行地の斡旋をしている人を小ばかにしたような糞みたいな顔をしたオツサンを威

圧して賞金を請求。

バンダナから目をチラチラと見せて威圧することも忘れない。

そうして存分に怯えさせて得た賞金は3000G。

確かに高額なんだが、S級を討伐してこれとは釈然としない。

解せぬ……。

倒れたフェニックスを右肩に担ぎ、リオを背負いながらファームへ向かう。

青白く燃えるフェニックスを眺めて達成感と世界に一匹しかないであろうモンスターを手にした満足感に浸る。

俺は素晴らしい相棒とともに名人への一步を踏み出そうとしているのかもしれない。

……ごめん、ちよつとカツコつけてみたかっただけだし。

意味なんてない。

とりあえずマグマハートは次の機会にでも取っておくことにしよう。

俺がメギドラオンで吹き飛ばした更地のようなファームに着いたら小さなテクノドラゴンが寝ていた。
なぜだし。

2月の末に卒業し、3月から新人ブリーダーとして羽ばたいたわけだ。そんな俺のファームを見てほしい。

文字だけだから見えない？

心眼くらい使えるようにならないと社会に出たときに苦勞するのは君たちなのだから練習すべきだと思うのだがどうだろうか。

赤い弓兵の人だつて弛まぬ努力の末に修得したのだから頑張るべきだ。

形から入るために赤い衣服でも着用してみてもどうだろうか。

赤い服を着たかな？

よし、練習だ。

イヤツプー！とジャンプも忘れるなよ。

赤い雪男も「赤は緑と比べて素敵ですぞ」とか頭に赤貝を乗つけた赤いだわだわ人形も「緑よりも素敵だわ」つて言っているに違いない。

少しばかり逸れたが、つまるところ俺のファームが色んな意味で凄いのだ。

俺とリオが立っている何もない平地と丘、そして丘の向こうには海が広がっている。そんな場所のど真ん中に住居と小屋が存在しているとか凄くシニールでリオも驚いているのか言葉が出ないようだ。

寒々しい場所だが澄み渡った青空は、悪くないと思ってしまいうから俺も現金な人間だ。

この小屋だが俺が時間を見つけてコツコツと形にした自信作だ。会心の出来だと思っている。

住居は大工を呼んで作ってもらったが実に素晴らしい。

大工さんをべた褒めしたが、それでもないの一言をもらったただけだった。

大工さん、謙虚ですね。

俺が建築しても良かったのだが本職にやってももらったほうが安心できるし、やはり謎のチート能力による学習効果で作った家とか怖くて住めないわ。

そういうえば妹が未だに住んでるって手紙が来たから帰省したら軽く注意しておこう。

俺はファームを自作したがレッドは小屋と居住区が土地に付属してきたとかマジで羨ましいでござる。

しかも街に近いので買い出しも楽とか。

俺なんて海が見える僻地だぜ。

街に行くまでが冒険といつても過言では無い（迫真）。

まあ、土地とお金が支給されているのでそれほど文句があるわけでもない。

卒業当初は土地すらなかった俺に校長が融通してくれたという幸運補正で文句を言つたら罰があたる。

でもレッドとの待遇の違いで文句出ちやうのおおお、らめえええ、みたいな☆

土地を紹介してくれた校長マジ天使。

申し訳なさそうにしてたけど、全然かまわない。

校長と会話できるとか超ご褒美。

下世話な話だが校長はマジで美人だから。

とりあえず校長が結婚してくれたら許しますなんて真顔で言つたら冗談に取られたが俺は本気だった。

リンディ校長は××歳なのにあの綺麗さとか、俺がオリ主だったらどうかしてフラグ立てるレベルの人。

実にもつたいない話ですな。

さて、支給された金銭のこともちよろつと話しておこうか。

支給されたのはなんと3000Gだ、3000Gだぞ。

ブリーダー様さまだよな。

わかりやすく俺の見解を交えて説明するのだが、まず貨幣にはB、S、Gの三つがあるわけだ。

Bはブロンズ、銅貨だ。

Sはシルバー、銀貨だな。

一般人の生活にはBとSが使われる。

1Bは1円、1Sは100円くらいに思ってくればいいよ。

Gはゴールド、金貨だ。

輝かしき金、黄金の鉄のかたまりの金。

1Gで1万円。

まあ、なんだ……金銭感覚が狂うよな。

ブリーダーの世界ではGが色んな所で使われるから仕方ないのだが。

普通のブリーダー的には500〜1000Gくらいで金欠だとかなんとか。

ある意味では特権階級みたいなモノなので貴族ぶった馬鹿がいるのはこのGのせいだと思っっている。

賞金とか一番低くても500Gだし。

ブリーダー専門店で食い物とか買おうとバカっぽい値段になる。
肉もどき300G。

まあ、ひと月分だし許してやるよ。

モンスターのがタイもでかいし、ゴレムとかドラゴンなんてちよつとした建物よりも大きいから維持費もそれ相応……か？

かなりピン撥ねされていると思うがどうなのだろうか。

さらに上位になると大会賞品も狂ってやがる。

金銀財宝の塊みたいなのが出るのだが相場にもよるけど賞金のみで5000Gはくだらない。

マジやべえ。

やつぱり俺つてば勝ち組かもしれない。

フェニックスで大会を荒らすだけでぼろ儲けの予感……っ!!

フェニックスと何故か小屋で寝ていたテクノドラゴンがはしゃいでいたのでド突いて眠らせた。

まだまだだね、と指が6本になったり分身したりするアクションテニスの主人公風に

言う。

静かになった今のうちにリオと協力して買い込んできた家具の整理を行う。

ダンスとベッドの同時持ちとか俺ってばカツコ良すぎるだろ。

やべっ、入り口でつつかえた……。

すぐに整理も終わったので休憩を兼ねたお茶にしようとしたらリオに手伝ってほし
いと頼まれた。

え、リオさん住むんですか？

週一または月一で来るだけでも構わないんだけど、僻地だし。

嫌なわけではなくて男と女が二人で住むのって問題あるじゃん？

いや、妹はノーカウントだろう。

まあ、問題が起きるようなことをする気はないけど。

ならいいですねって……Oh…。

何故か同棲が始まってしまった。

恋人もいないのに同棲を体験とかどこの一昔前のエロゲだ。

えっuchiことには繋がらないのでギャルゲでしたね、すみません。

一体どんなフラグが立ったかというのですか……。

いや、むしろ立っていない。

つまりリオの責任感と純粋な心の結果ということか!!

自分の身すらも犠牲にしてブリーダーを目指すなんて愚直で不器用だけどええ娘やなあ……。

リオが住むことが決定したので、部屋を決めて即整理、後に休憩としてお茶を啜りながら空を眺めていたらテクノドラゴンがじゃれてきた。

可愛いけど普通の人間が世話できると思えない。

見た感じ子供とはいえドラゴンなので、結構な巨体なのだ。

一般人ならちよつとしたことで骨とか折れるのではないだろうか。

テクノドラゴンの頭を撫でていたら、目覚めたらしいフェニックスが炎を飛ばしながらじゃれてきたので相手をする。

「選ばれた者のドミナント、お望みとあらば見せてやろう!!」なんて叫びながらノリノリで遊ぶ。

「これが、私のドミナントだ、よく見ておくんだな!!」なんてテンションが最高潮に上がったときに叫んでいた。

童心に帰っていたようだ。

今ならガンパレード・マーチを歌いながら敵に突撃できる。

でもそのまま撃破数を稼いで生身で決戦存在になってしまいそうだ。

舞ちゃんを差し置いてヒーローになってしまっているのでやっぱり突撃は無しだ。

気絶したフェニックスを抱えて街へと向かう。

とんぼ返りだが必要な手続きを忘れていた俺が悪いのだ。

またもリオを背負い、フェニックスを担いで走る俺。

超速移動用の乗り物としても俺は成功しそうだと思ったのは、嬉しいやら悲しいやら。

街まで遠いのだが、あら不思議。

フェニックスと遊んでいるとすぐに到着。

リオは背中では「痛い、飛びながら戦ってる……」とか呟いてたけど君はそれを言うのが癖なのかね。

あと俺は飛んでいるんじゃないやなくて空気を蹴っているだけだ。
ワンピースの月歩的なやつ。

魔力を震動させて、空気中の塵を固めることで走ったりもできる。

かなりの無駄スキルだが、使い勝手は中々良いのだ。

ちよつと高いところにある荷物を取ったりするときも楽々です。

加減を間違えると衝撃波でヤバいが、俺を信頼してほしい。

街に再び戻って来たのはモンスタを協会に登録するのを忘れていたからだ。

ペット買うときにも許可証があつたりするだろう、あれと同じ様なモノだ。

合体させたり、冬眠させたりしても手続きが必要になる場合があるのだが、今は必要ないので省略するでしょう。

俺がカララギマンゴーを齧っていたら先に向かっていたリオが手続きをしていたらしく協会で話をして終わりらしい。

……フェニックスの名前がドミナントになっていた。

ま、まあ、フェニックスのままじゃダメだもんな。

賞金とか掛かっていたし、ポジティブに行こう。

カウレア火山の守護として伝承と壮大な絵や銅像が存在するけど気にせずいこう。

ノラモンリストに写真とか写っているけど他モンの空似とでも言っておけばいけるいける。

討伐したって知らせたら暴動に発展するから、秘匿されるだろうし。

俺のモンスターがフェニックスだなんてことは有り得ないし、討伐もされていないという暗黙の了解になるだろう。

一匹しか確認されていない『珍しいヒノトリ種』のモンスターを登録した人物とカウレア火山に一匹しかいないS級の『報奨金』を貰った人物が同じだとしてもなんら関係はないのだ。

むしろ協会のために尽力をつくそうとしている新人ブリーダーがいると感心するが、おかしいことは無い。

でも、偶然の一致ってこわいよねー。

俺はヒノトリを育成する権利を持っていなかったし協会でも得ることも無かったが、ドミナントを管理する権利は得た。

協会に行ったらガチムチなモンスターに囲まれてドミナントが連れて行かれそうになったのでOHANASHIに興じることにしたが、やはりサイキョーの俺に敵うモンスターはいなかった。

どうやら俺のアギはドラゴン種のプレスを上回っているようだ。

これはアギダインではない、アギだ、とか出来るけどまずアギ系を使う敵がないので脅威は伝わらないだろう。

一発ネタにすらならない虚しい一言として大気に溶け往くに違いあるまい。

モンスターは好きだが、俺に懐かないやつと他人のモノはどうでもいいと思う。

他人が大切にしている物が時にはゴミに見えるときって、良くあるじゃん？

流石の俺も協会の偉い人の前なので内心で罵詈雑言を浴びせながら、撫でるに留めたのだけだ。

俺って自重もできるんだぜ……だから褒めてくれよ、マジで……。

片手でゴーレムを持ち上げながら、どうしても俺が育成したいんです!! ってバンダナを上に乗ら☆とかしながら真摯に頼み込めば不思議なことにお偉いさんはみんな顔

いた。

なかなか顔かない頑固な老害もいてイラツとしてしまい、無意識にメギドで室内の机という机を消し飛ばしたけど、特に何も無く平和だった。

話し合いってのは大事だよね。

武力行使は最後の手段だって俺の胸に響いたわ。

結局、書類上は育成ではなくて管理の権利だけど大して変わらん。

フェニックスを信仰している面子のための建て前だ。

大会に出ないようについて言われたけど、それは無理な相談だ。

「俺も生活があるしお金を稼がないと大変じゃないですか。あ、みなさん服も良い物を着てらっしゃいますし、モンスターの子も良さそうですね。いやあ、懐があったかそうですね……お小遣いほしいナー☆」とかバンダナ外しながらやったら自由に出ていいと許可までもらってしまいました。

あなたたちのポケットマネーで毎月500万Gくれたらで静かに生きているといっただけなのだが……。

自己犠牲が足りないね。

気分良く俺はメギドラオンの丘へと帰って行ったのだった。

街での話なんだが、俺とドミナントが歩くだけで店じまいするのはやめて欲しい。リオが可哀相……一緒に歩かなければいいんじゃないやね。俺ってば最強で天才なんですね!!

※却下されました。

一緒に街に来たら供に市場を巡るべきらしい。リオの真面目さに感服である。

細々と生えた雑草、朽ちた木々、風にほんのりと含まれた塩の香り。

周囲一面の寂れた空間が俺のファームだ。

生物が生きる環境としてはあまり好ましいとは言えないが、俺にとっては都合がいい。

どれだけ地形に被害が出ようとも、誰からも抗議を受けることのないファームでは自由が約束される。

だから手加減を間違えてドミナントを倒してしまったのも、俺の自由と言える。

……言えないよな、ただのミスだし。

澄み渡った青空の下で広大な大地を見渡しながらお茶を啜るがどこか物足りない。

紅茶に似たお茶ばかりが流通していて仕方なしに飲んでいるが、やはり日本茶が恋しい。

日本と文化が非常に似通った国が海の向こうにあるので手段を選ばなければ容易に手に入るが、良識内で得ようとするとかかなりの金を積む必要がある。

だが、新人ブリーダーの俺には無駄に使える金はほとんどない。

強奪せずに嗜好品を充実させるためにも俺はブリーダーとして稼ぎたい。

そんな事情があるのでどの大会に参加するかりオと相談しながら決める。

今週開かれる大会は公式戦のようで、今回はグレードを上げることにした。

通常の大会はどこかの商会や地域がスポンサーとなるが、公式戦は協会が主導する。

公式戦で優勝することが出来れば力量が認められ、ブリーダーは段位を得ることができきる。

そして優勝したモンスターは一つ上のランクに挑戦できるようになるのだ。

つまりグレードとは育成しているモンスターの強さと参加できる大会の上限をランクとして表しているのだ。

今はEだが、Dへと昇格すればDとEの両方の大会にも出場できるようになる。

ゲームだと下のランクに参加するとファンがガツカリして人気が落ちるのだがこの世界だとうなるのだろうか。

とあるモンスター達は一つ上のランクに参加できるといふ特権を持っている。

俺のドミナントも似たようなモノなのだから上位に出場できる特権を認めて欲しい

くらいだ。

ドミナントをEランクに出場させるのは心苦しいが金稼ぎには代えられない。

しようがないのよね、これってブリーダーの定めだから。

ファームの体裁を整え、ライフラインを繋いだらあつという間に支給金が溶けてしまったので貯金を切り崩す予定だったが、ノラモン討伐金3000Gのおかげで何とかやっていけそうだ。

当面の間はこれで凌いで開催される大会に乗り込んで、畳を買うのが今年の目標である。

気絶したドミナントにディアラハンをかける。

ディアラハンとは味方単体のHPを全回復する回復魔法だ。

これの御蔭でドミナントを思う存分ボコれ……修行できる。

実戦あるのみだ。

トレーニング用品ないし。

サマリカームという行動不能から回復できる魔法があるのだが、効果が重複している気がする。

死亡から蘇ったりとかするのかもしれないが予測の域を超えない。

さすがの俺も試すのが躊躇われる。

魔法一つの為に死ぬのも嫌だし、殺すのも嫌だ。

死にかけたときに使ってみようと思うが、ディアラハンですぐに回復するから検証できるときはくるのかわからない。

目覚めたドミナントと戦闘。

当たり前のように小屋に住み着いたテクノドラゴンも参戦してファームの真上は魔法やビーム、ブレスが飛び交う混沌へと陥った。

マカラカーンで反射、余裕でした。

マカラカーンとは魔法を反射する魔法で、モンスターの遠距離攻撃のほとんどを跳ね返すことができる。

ロケットパンチやズームパンチのような物理攻撃は無理だ。

時々、「コンセントレイト……テンタラー!!」と意味の無いコンボをしたくなるのがなぜだろうか。

気絶したドミナントとテクノドラゴンに回復魔法をかけて一息つく。

「テクノドラゴンの名前を決めなくては……テクモでもいいかもしれない、発売元的に考えて」とか考えながらリオを探す。

すぐに後姿を見つけることが出来た。

今日のリオの髪型はポニーテール、健康的で実によいです。

どうやら街に行ったときに試しに頼んだ宅配便が来たらしく、荷物を置いて去って行った。

恐竜型のモンスターであるロードランナー3匹が届けに来たらしく、リオのサインを貰うとすぐに街へと引き返していった。

届いた荷物の品質は期待以上だった。

手荒に扱われていても仕方ないと思っていたので嬉しい限りだ。

街で代金を先払いして注文するだけだし今度から鼻屑にさせてもらおう。

飲食物は定期的に届けてもらうようにするのもいいかもしれない。

ゲームのようにショップを選択するだけで気軽に買い物、とはいかないのだ。

大会に出場するし、その折に注文を済ませば無駄に行き来することも無くなるし。

ファームは悪くないが、辺鄙な位置だから「でえじようぶだ、ドラゴンボールで生き返る」くらい軽々しく何でもできないのだ。

まあ、ドミナントとテクノドラゴンがいるので不便では無いだろう。

週末になり、公式戦が開催されるので街へと訪れた。

ドミナントとテクノドラゴンを連れ歩く俺はきつと一流のブリーダーに見えるだろう。

実際は初心者マークすら取れていない新米のペーパーなのだが、S級に殴り込んでも問題ないのできつと俺は一流。

大会のエントリー手続きまで時間があるので適当な店に入ってリオと贅沢なテイータイムに突入したかったがモンスターを連れながら入れる店が無かったでござる。

探せば見つかるだろうが、そんな時間も無い。

仕方ないので「いいぜ、お前らが店を閉めるって言うなら俺のドミナントがその幻想をぶち壊す!!」なんて悪ノリしながら街を練り歩く。

目を合わせた瞬間逸らされたりするけど、絶対に逆効果だろ。

絡みたくなくてくるし、むしろ絡んで欲しいんだろ？

まったく……ドMな連中だな。

俺がメンチビーム、ドミナントが火力を上げて輝く。

ほうら、明るくなったろう。

リオさんに怒られたけど問題ない。

正座するドミナントがすごく、シユールです。

あ、はい。

バンダナを取ったのは悪ふざけです。

いや、そんな俺の目つきが、もとい瞳が悪いみたいな言い方……。

魔眼じゃないです。

いえ、いえ。

すみません、街中でバンダナは取らない様にします。

テクノドラゴン、慰めてくれるんだな……。

優しいやつだよ、おまえは。

ちよ、俺のカララギマンゴー盗るな。

おのれ、食い物目当てか!!

会場の前まで来ると人がごった返していたが、俺たちには関係なかった。

進行方向にいる連中が勝手に散っていくのでモーゼの十戒?とかいうやつみたいな気分です受付まで歩く。

「なんて凶悪な……」とか「貫録がY A B E E E E E E」とか「へへ、今日のSランクは見ごたえがあるぜ」とか、「ちくわ大明神」とか話し声が聞こえる。

誰だ、貴様ら。

悪いがコイツはEなので皆の期待に応えられそうにないよ。

俺のブリーダーランクもE、グレードもEなので残念だがEに出場する。

参加者には悪いが犠牲になってもらうしかないのだ。

登録を終えて「さあ、行こう」と気合を入れたら声をかけられた。

後ろに立っていたのは石の躰を持つドラゴン・ジハードを連れたオレンジの色眼鏡をかけた長身の男だった。

ジハードとはドラゴンをベースにし、ゴーレムをサブとして混ぜたモンスターである。

凄まじいパワーがあるのだが、ドラゴンの欠点である短命を引き継いでいるために育成はかなり難しい。

新入りか? いいモンスターだな……これからは楽しみ云々。

皮肉気な笑みを浮かべながら去って行ったが胡散臭さが隙間BBA並だ。

空色の髪の毛、猫背気味の姿勢、意味深な笑い、色眼鏡、俺よりも頭一つ分は高い身長。

オーヴァンというS級リーダーらしい。

俺には関係ないね。

公式戦か、なんと都合のいいことか。

それだけが大会後の感想だった。

結果は優勝だったがどうも納得のいかない展開だった。

不完全燃焼といつてもいい。

やはりEランクに籍を置くモンスターではドミナントを前にすることすら難しかった。

戦闘前に睨みつけるだけでほとんどのモンスターが気絶してしまっただの。

どうにか堪えても、近づこうとして熱風に煽られて倒れるといった不始末。

棄権すればいいものを……力量の差を理解できんひよっこどもには勿体ないとすら思えるのだが、敵前で構えるドミナントの律儀な性格故だろうか。

ほとんど何もしていないのに病院直葬……直送である。

棄権したブリーダーのワームが準優勝していた。

彼は大物になる、とか思わせぶりに呟いてリオを驚かせる。

正直、俺には全くわからんが才能はあると思う。

俺よりは確実に。

モンスターが怯えるってブリーダーとしては致命的だからな。

いいハンターは動物に好かれるって狩人漫画のカイトが言っていたけど、モンスターに嫌われる俺はなんだというのだ、そしてブラックリストハンターも動物に好かれた方が優秀なのだろうか。

まあ、あのワームも上手く育てたら羽化↓変態コンボで別の姿になれる。でも初代と違って2は羽化しても補正が特に無いのであまり嬉しくない気がする。

賞金を受け取り、周りの視線を受け流し、リオと合流。

この後は宅配を頼んで、露天を冷やかして帰る予定だが物足りない。

困惑と怯えの入り混じった視線の方向へと顔を向け、そいつらのモンスターを眺める。

強さはD、よくてもCの中位といったグレードだ。

これでは足りないどころの話ではない……。

この程度ではドミナントが育っているのか、全くわからない。

数値は上昇しているが、実戦での変動を見たかったのだが。
「何か物足りなそうだな？」

せせら笑うようなオーヴァンの声。

笑っている姿はやはり胡散臭さでいっぱいだ。

ジハードの歩く姿を見ても、振れ無い軸を見せつけられるだけだ。

練度は最高クラスだろう。

闘ってみたが、俺はEランクごとき。

S級との私闘など、それこそ協会が黙っていないはず。

「目的は果たしたのだろう。それでも足りないというのなら」

——いいだろう揉んでやろうじゃないか——

佇んでいたジハードが咆えた。

それは地の底から響く、怨嗟のようで。

強く気高い咆哮だった。

ひどく魅力的に思えた。

心が疼き、揺らされたようだった。

S級の力量を実際に試す機会なぞ、今の俺ではありえない。

協会を無視して戦いに興じたい……が、街中でやるわけにはいかない。

出場停止や権利の取り消しなんて喰らったら目も当てられん。

それに、すぐ近くにはリオもいる。

残念だが……頗る残念だが、断った。

だろうな、などと喉を鳴らしてオーヴァンは心底愉快そうに飛び去って行った。

挑発してきたのはドミナントⅡフェニックスを知って試しに来たか、それとも別の目的か。

オレンジ色のレンズの向こうにある瞳からは判断が付かなかった。

ただの愉快犯の可能性もあるから困る。

呆けているリオを担いでドミナントに飛び乗る。

騒ぎが広がる前に逃げなければ面倒事に繋がりそうだからな。

露天の冷やかしはまた後日だ。

レッドから祝いの手紙が届いたのは次の日だった。

早すぎるだろ、手紙。

自分の足で届けに来たとか無いだろうな……。

手紙の名前にレッドって書くのは気に入っているってことでいいよな。

これからもレッドと呼ぼう。

なんてことを考えながらほんのりと甘い茶を啜る。

嗚呼、渋い茶が飲みたい。

最近、リオがロードランナーの育成を始めた。

ロードランナーとは緑色の恐竜型のモンスターで、派生種の数が非常に多く存在する。

ゲームでは技数が最多であり、ステータスの伸びや寿命は平均に位置していた。

真面目な性格で扱いやすく、人よりも力強いうえに移動速度も速いので荷運びや騎乗目的で飼われていることもあるモンスターだ。

円盤石も数多く発見されているので一般的に普及しており、街に行けば必ず出会える。とあってI Maを代表するモンスターとも言えるだろう。

そんな幅広く活用されるロードランナーに騎乗してドヤ顔を披露した後に颯爽と走り去ったりオの後姿を眺めながら、新人にしてはモンスターの保有数が多いのではないかと思います。

まあ、モンスターは嫌いではないので家計が火の車にならない限りは歓迎しようじゃないか。

家計が火の車ってまさに火計じゃね……これこそどうでもいいですね。

満足気に帰って来たりオに茶を淹れる。

茶を淹れるのも慣れたモノで、普通の人よりは上手に淹れられる自信がある。

ティーパックで高級茶葉を超えるお茶を生み出したり、流れるような動作ですべてを熟したり、料理の英霊が淹れるお茶を超えろといった超技能には幾分も劣るのだが。

料理系統は俺のチート能力をもつてしても伸びがかなり悪いので、不得意技能に設定されているのかもしれない。

流石にレシピア見ながら毒物の錬成や酸味のために薬物の投与などを行うオートスキルは発動しないので人並みに努力すれば結果が出る。

歩くような速さで、といった具合に技術を身に付けるのは新鮮だ。
勝手に技能が上がっていくような身体では、今頃すべてに飽いてしまっていたらう。

色々と偏見を持たれて嫌われるのも人生のちよつとしたアクセントとして捉えるのも悪くないと思える。

……ああ、でも近づいただけで泣き叫ばれたり平服されたり、威嚇されるのは心苦しいものがある。

やはり嫌われるのをポジティブに考えるのはどうも難しい、前言撤回をしてみようだ。

街へ行ってきたリオが面白い話を聞いてきたらしいので耳を傾ける。

近いうちにサーカスが街に滞在して活動する予定があるのだとか。

学校へ活動の報告に行ったり、配達のロードランナーとともに街へ行くリオの御蔭でこういった世間の話題に置いて行かれずに済む。

慣れた同期に世間話をするのと同じように俺が街中で気軽に情報収集などすれば阿鼻叫喚の嵐である。

世間の常識から切り離されずに保っていられるのでリオが助手で本当に良かったと言える。

リオの話で出てきたサーカスだが、思い出すのはモンスターファーム5だろうか。

モンスターファームと銘打った珍作の中の珍作だ。

主人公がサーカス団に所属しているのでモンスターをサーカスのテントで育て、芸を仕込む。

いや、もうこれファームで育成してないからモンスターファームでも何でも無いだろうなんて思いながらやっていた。

育成がボタン押しでの作業ゲーになってしまい、やる気が萎えてしまうという重大な欠点を抱えている。

4でいちいちファームを駆け巡ってモンスターの世話をする怠ゲーが改善されるかと期待したら、それを上回る劣悪な仕上がりになるなんて誰が思っただろうか。

サーカスが開かれたら一度行こうか、と誘ってみる。

普段はクールなりオが嬉しそうに笑いながら何度も頷いている姿を見ると俺も嬉しくなる。

ときどき見ることのできる明るい表情はかなりクモがある。

世界中の争いが無くなるのではないだろうかと思えるほどに癒されるのだ。

別に、ホリイ派だがリオ派に移っても構わんのだろうか？

え………？

コル、ト………？

リオに癒されながら、今朝届いたソレを読み直す。

協会、先生、先輩、後輩、同期、そして家族から送られてきた手紙を。

予想外の内容で少し動揺している。

リオも不思議そうに手紙に視線を向けている。

協会からは初段認定と無期限の謹慎についてだ。

オーヴァンと睨み合ったのは存外、都合が悪かったらしい。

手紙には内容はブリーダーとしての品性がくなどと書かれているが大会では気が立っているモンスター同士が睨み合うなど日常茶飯事だ。

本当に俺が邪魔らしい。

都合よく俺を封じ込める口実を与えて、隙を晒しただけとなってしまうた。

まあ、これはどうにでもなるのでどうでもいい。

頗るどうでもいい。

オーヴァンに呪いの手紙でも贈りたくなるくらいどうでもいい。

元より歓迎されていないことなどわかっていたのだから。

先生、先輩、後輩、同期からは祝いの言葉が述べられていた。

世話になっていいるのだからじっくりと返事を書こうと思う。

レッドが最速だったが、親友のピクシーからもその一時間後に来たというのは驚かされた。

そのうち優勝した瞬間に手渡しとかされるかもしれん。

これらは問題ではない。

予想外だったのは家族からの手紙だった。

妹の筆跡で「Sランクになるまで帰ってくるな」とのことで、俺はショックを受けた。

今週にでも顔を出そうと思っていたのに、来年まで帰れないじゃないか……と。

公式戦の開催は三か月に一度だから来年の6月までお預けらしい。

リオに話すと呆れられたが、仕方ないじゃないか。

会いたいモノは会いたいだから。

最速でSへとたどり着く予定を立てている俺と違い、リオは謹慎ばかりが気になって
いるらしい。

初段認定しておいての無期延期とはどうなのだろうと言ってみたが、的外れな事を
言ってしまったらしく怒られてしまったよ。

協会の面子を全力で潰しにかかれば解かれるだろうし、謹慎の解除が成されなければ

別の国に行くとても伝えてもいいだろう。

全力で嫌がらせするしかないやんけ！

リオは少し気に病み過ぎると思うのだがどうだろうか。

とりあえず面子を削りつつ、被害を与える方針を取る。

街を襲撃でもいいが、これ以上見知らぬ人から悪意を浴びるのは遠慮したので過激な手は使わない。

競っている相手に加担して叩かせれば俺にとってもかなり都合がいいだろう。

そんな発想で俺はレースへ出場することを決めた。

ブリーダー。

それは協会が指定する専門の学校を卒業した者が持つことのできる者の総称だ。

一般人であろうとも金があればモンスターを育成できるが、ブリーダーでなければ大会へと出場させることが出来ない。

モンスターを使役させる最上級の資格とも言える。

ブリーダーと括つても目指す目標、育成の方向、就く職業、それぞれが異なるため多岐に渡る。

そして、ブリーダーを二種類に大別することが出来る。

その一つが最も人気が高く、競技人口が多いコンバットと呼ばれるモンスター同士を戦わせる競技だ。

ブリーダーの多くがコンバット専用モンスターを育成しており、俺やレッド、オーヴァン、先輩、先生など知り合いも多く参加している。

学校でもコンバットについて学ぶことがほとんどだということからどれほど傾倒しているかわかってもらえるだろうか。

もう一つは特殊な能力（先ほどの話にも出てきたサーカスのモンスターも同じであるのだが）に特化させて職に就かせるブリーダーの総称をメーカーと呼ぶ。

そんなメーカーの中でも特に人気があるのはレースだ。

レースとはコンバットで詰まりを感じた者やメーカーの多くが参加している競技で、競技人口はコンバットに次ぎ、その名の通りモンスターでレースを行うのだ。

上位はレース専門に育てられているため、俺とドミナントでも勝ちを拾うのは難し

い。

しかし、下位程度なら問題を一つとして見つけることが出来ないほどに楽勝なのだ。そして何よりも、コンバットと違う点は賭けが行えることだ。

一レースに一組のみを選び、賭け金を注ぐ形式は俺にとって都合がいい。

レースのルールは単純でスタートからゴールまで最も速くたどり着いた者が勝者となる。

コースは陸海空の3種類。

モンスターの背に乗り、競い合うスポーツ。

コンバットのようなモンスター同士の間、苛烈な戦いに一歩劣るものの全力で駆けぬけるモンスターの疾走感から人気は高く、協会が胴元となって公に許可されている賭けが更に人気を呼んでいる。

レースにはコンバット同様、ブリーダーならば参加することが可能だ。

出場する階級はコンバットのランクやブリーダーランクなどが関係してくるらしいが、あまり俺には意味が無い。

滞り無くD級のレースへの参加が決まった。

ドミナントの容姿でもDが許可されるのだからザルな管理だ。

まあ、ヒノトリ種も多く参加するからこんなものかもしれないが。

当日の飛び入り参加、経験なし、雰囲気が悪いなどの要因が合わさって不人気一直線だ。

前の二つは仕方ないとしても、雰囲気は関係ないだろう。

俺だって気にしているのだから優しくしてもらいたい。

リオに頼んで俺のヘソクリを賭けてもらい、勝つだけ。

まさに出来レースだ。

勝てなければ馬鹿を晒すことになるが、俺は勝てない試合に挑むつもりはない。

コンバットの大会に過剰に出場しなくとも楽に畳や緑茶といった日本っぽい物が手に入りそうだ。

I M aは噎び泣いて喜ぶに違いない。

謹慎にして油断している最中にお財布に穴が空くのだから。

火薬の炸裂音とともにアーケロが火を吹き、レース開始を告げる。

一斉に飛び出した参加者たちの後ろへとドミナントがゆっくりと迫る。

ルールはすでに確認済みの今、ドミナントに死角はない。

妨害こそがこの競技の華でもあるのだから、最低限度のルールを守っていれば何をしようとも自由だ。

つまり全員を薙ぎ払ってもルール内ならば、自由ということになる。

コースはここの海を飛んで遠くに見える小島を旋回して戻ってくる簡単なもの。

レース専用のメーカーが参加しているはずもなく、ドミナントと比べると速度が一段、二段、劣る。

ドミナントが火炎を放つ。

落下で死亡されでもしたら困るので、ポケモンが瀕死状態でも空を飛べる程度には手加減している。

全員を片っ端から撃墜し、悠々とゴール。

ブーイングを浴びながらのモビウスターン、俺の機動は変態だけ。

メビウスって英語音声だとモビウスに聞こえるんだよな。

優勝が居心地の悪いため、コンバットなら無視して帰るが今日はインタビューを受ける。

「コンバットに復帰できるまで参加し続けます☆(キラッ)」とアピールしたので何らかの形となって謹慎が解かれるのではないだろうか。

態と出場者を全員撃墜したのだからこれ幸いと協会のレース派のお偉いさんが抗議

するだろうし、観客や出場者も素晴らしいアクションを起こしてくれるだろう。

俺には関与できないので実に残念だ。

ザンネンダナー。

翌日には抗議の手紙がもつさりと届いた。

中には真面目な抗議文もあるだろうが、いくつかは流れに乗って鬱憤を晴らそうとしたやつらが書いた文も混ざっているに違いない。

とりあえず内容を読んで、真面目な抗議文は真摯に受け止めてから燃やす。

俺は悪役から逃れられないのだからどうしようもないし。

謝罪するとなると自分が間違っていたと認めることになる。

ここは無かったことにさせてもらおう。

明らかに嫌がらせっぽい手紙には住所と名前が書かれていなかったが同期の伝手を利用して「今度OHANASHIに行く☆」と返事を送る。

もう一通送って来たら行くが、今回は怯えさせるだけにする。

直接出向いて家を吹き飛ばしてもいいが、俺は器が大きいから許してやるよ。
証拠として手紙は保管しておくが。

自分のせいもあるがあまりに不人気すぎると思う。

そのうちリアルチャッキー人形が送られてくるのでは、と思うほどの不人気っぷり。
ゲーム内のチャッキー人形はファンから送られてくるが、俺にも送られるのではない
だろうか。

そんなことを考えていたらなぜか人形師からファンレターが来た。

ドミナントの青い炎がカッコいい云々。

この人は良く出来たファンだ、特別にドミナントの羽根を贈ってやろう。

……チャッキーフラグが立ったか？

いや、でもあれはファンの人形師が造ったってわけでもないから違う、のか？
わからんが、良いファンだ。

今はそれだけでいいだろうよ。

レースの準備をしていたが、翌週に謹慎が解除された。

均衡を保っていたレースを荒らすのはくらしいが知らんがな。

コンバットにさえ参加できれば用は無い。
ちなみにレースは3か月の出場停止。

抗議が凄いから自重しろと釘を刺されたが、今後は参加しないので安心してくれ。
コンバット次第だけど。

6月の半ばを過ぎた頃、どのランクのモンスターでも参加することの出来るFランクの大会が開催されていた。

延命アイテムである白銀モモが賞品なので参加する予定だったが不参加を余儀なくされた。

シルバー杯だったので参加出来なかったただけだが。

シルバー杯というのは6歳3か月を超えているモンスターが参加できる大会である。

戦闘中に死ぬモンスターとかいそうだ。

結構な歳だし。

そういえばドミナントって何歳なのだろうか。

ノラモンだったし、すでに成長しきっている気がしないでもない。

ヒノトリは死に際に飛び去るモンスターである。

もしかしたらドミナントは死に際から再び蘇り強力な能力を得た、という設定があるかもしれない。

清磨のアンサートーカーみたいな感じで。

まあ、フェニックスはカウレア火山の守護神なので最初から強かった可能性もある。最初は何時か、なんて話をしたら歴史や哲学になりそうなので深くは考えない。

夏も近づき、日差しが強くなってきた。

予定としては月末に公式戦で勝ち抜き、来月にある選抜戦で優勝するつもりだ。ホリイを生で見たいのと、初代のモンスターを生で見たいというミーハー根性。

……等も勿論あるが、一番の理由はエヴァ先輩に強要されたから。

今年優勝に行きたいのでフェニックスに期待している、とか。

アララ、バレーテラ。

大会に向けて訓練を行う。

テクノドラゴンが調子に乗って小屋が焼けた。

すぐに消し止めたが、俺のモンスターとなるのなら躡けとケジメは付けるべきだ。

「プレスで小火が起きたのでわからんのか？ イレギュラーなんだよ、やりすぎたんだ。おまえはな!!」とテクノドラゴンをお仕置きも兼ねて追いかけるついでにドミナントも襲う。

残像出しながらの追撃はかなり有効だった。

その姿を見ていたリオは笑っていた。

美人は笑うべきだと思う、ホントに。

ああ、でもリオはあまり外で笑わないほうがいいかもしれない。

変なのに絡まれたら困るし、見るのは俺だけでいい。

いや、独占したいとかじゃないですよ。

ホントダヨ？

有史以来、人類は様々なモンスターを手に入れ、文明はその力に導かれて歩んできた。では、ドミナントほどのモンスターが導く文明の行き先は何だ？

温泉だよ。全てを癒すことできる温泉だ。

俺の意思が、リオの無意識が、週末を望んでいるのだ!!

そんな感じで温泉を掘ったわけだ。

もちろん、魔法も使いました。

トレジャーサーチというアイテムを探す補助魔法を温泉探索に利用した。

ノラモンハンターしつつトレジャーハンターをして学費を稼いだ俺に温泉を見つけることなど朝飯前なのだよ。

で、温泉の予感を感じ取ったので全力でゴッドハンドを使ってみたら地面をえぐり取って湯が噴き出した。

実際はゲームに温泉イベントがあったからもしかして……などと思っただけが本当にあるとは……。

地中すらも攻撃範囲とか俺最強すぎる。

金色の拳を召喚して地面をプリンのように抉るチート持ちが魔王のいない世界で穴を掘っているよ!!

魔王に脅かされている世界は逸早く俺を召喚すべき。

今なら聖剣・魔剣に取り付いている幼女精霊なしで討伐します。

……なんてね☆

水浸しになったファームを眺めながら後片付けからどう逃れるかを考える。

穴はドミナントを詰め込んで塞いでいるのでこれ以上、お湯が出ないが湯量や温度の調節を行って風呂の形にしなければならぬ。

街の謙虚な大工さんでも呼べば一晩で作ってくれそうなんだが。

そんな俺はダンボール戦士へとジョブチェンジ。

リオに見つかからないように逃げ出すのが最優先事項。

このまま気付かれずに進めば……!?

なぜ、リオがここに……。

え、ロードランナーと街に行くつもりだった？

糞が、最悪だぜ。ついてねえ！ついてねえよ！

リオから、光が逆流する……！

ちよろつと説教されたが街まで一緒に買い物へ行ったら機嫌が直ったようだ。

風呂の材料を買い出しに行っただけだが楽しそうだったので良しとした。

ドミナント？

ははっ、ずつと蓋になっていてくれたよ。

マハラギダインでドミナントごと燃やして水分を飛ばす。

赦せ、ドミナント……これも修行の一つだ。

建築の知識など全くないが適当に土をグラダインの重力で押し潰して土台を作り、柱やら壁やら屋根をこれまた超適当に組み立てる。

仕上げに石化状態にするペトラマを使って完成。

石化させておけば大丈夫だろ、たぶん。

PSIのモンスターファームは育成数が一体なのだが、流石に一体のみだと効率が悪いということで同時に複数のモンスターを育成するブリーダーが結構いる。

お金や管理能力と要相談だが、自信があるのならやつてみる価値がある。

新人ブリーダーには同時育成なんてするやついないが魔法使いで最強の俺は格が違った。

ヒノトリ種に次いでドラゴン種までも育成することに踏み切ったのだ。

というか、リオが風呂の材料を買い込んでいるついでにテクノドラゴンを俺のモンスターとして登録していただけだ。

登録されてなかったし、ノラモンとして暴れられたら協会としても面倒なので俺が育てることになった。

名前はイレギュラー。

……まさに俺のイレギュラーというわけだ。

べ、べつに嫌なわけじゃないですよ。

協会が「騙して悪いが」とか言いながら闇討ちしてこないか心配しているだけです。されるとしたら依頼料は前払いだから対策もばっちり出来るネ☆

面倒事が嫌いなあの人がファンタズマに乗って俺の命を狙うとか、ちよつとわくわくする。

ファンタズマってエビに似てるよね。

ファンタズマ・シュリンプとか……無いな。

OOガンダムアルヴァトールにもちよつと似てるし、アルヴァトール・シュリンプとかどうだろうか。

ファンタズマどこいったし。

いや、モンスターファームなのだからブリーダーとして登場するだろうし育成モンスターは……アローヘッドだな。

アローヘッドとは凶暴なアメリカザリガニのようなモンスターだ。

水中は凄く速く動くらしいが残念ながらゲームには水中戦が無いので鈍重だった。ザリガニさん、レースがあつて良かったですね。

今日は今月のメインイベントである公式戦に殴り込みである。

怯え、崇めよ、グミンドモー、H A H A H A H A H A H A H A H A ☆なんてノリで会場へダイナミックエントリー。

リオは俺を無視してイレギュラーとともに買い物へ行つた。

……少しくらい相手にしてくれたっていいじゃんか。

そんなこんなで俺の試合まで控え室で行儀よく待つ。

試合前にプレッシャーをかけてもいいが霸王な俺は静かに佇むばかりである。

リオにかっこいい俺（笑）を見せるために真面目に挑むわけだ。

戦うのはドミナントだから俺が頑張っても意味ないのよね。

……あれ、かっこいい俺（笑）じゃなくてかっこいいドミナントになる予感。

やべえ、テンション下がった。

静かにドミナントを撫でていても周りにはブリーダーやモンスター、係員が近寄って来ない。

遠巻きに見られているのだ、チラツ☆ってレベルで。

黒服の強面なオニーサンが数人ほど監視しているけど、なんか扱い悪くね？

見物料としてモンスターに命（タマ）取ったらあ!!なんてね☆

黒服のオニーサンやブリーダーが泡吹いて倒れたり、モンスターが平伏したりとあつたけど私は元気です。

下がりきったやる気を回復させるために外で待つことにした。

入口は人が多いので裏口から行ける寂しい広場を選んだあたり、俺は空気が読めるイケてるメンズ。

まさにソラメンだ。

空を眺めると2体のモンスターがデッドヒート。

空の部門のレースだろうか。

あれはメーカーのモンスターだ。

一目でわかるほどにこの前のレースのモンスターとは練度が違う。

何よりも速く、効率よく飛ぶための育成。

最速を目指している親友を思い出す。

天に近づき、重力の鎖に縛られて。

それでも空を諦めず、憧れは誰よりも高く……なんてね。

今日もどこかで飛んでいるのだろう。

レースがあるからだけでは無くて、あいつは本当に空が好きだから。

ところで、俺はサイファアーよりもメビウスのほうが好きなのだ。
でもあいつはどう考えてもピクシーっぽい。

「よう、相棒」とか言うし。

飛んでいる姿は妖精です、ドラゴンに乗っているけど。

あだ名通りで行くと裏切られるけどそうならないように願っておこう。
だってビーム撃つ戦闘機が敵になるんだぜ。

ミサイルを何発当てようともびんびんしているし。

スーパーロボットと同じジャンルだろう、あれは。

会場から歓声が聞こえたので試合が終わったのだろう。

係員もおどおどしながら知らせに来たのでドミナントに飛び乗って空から様子見。
黒服さんが警戒しまくりとか俺の事を煽っているのかと。

まあ、どうでもいいですね。

俺のチートアイズは赤いアーチャーをも超える視力……かどうかはわからんがとにかく目がいいのだ。

歓声に包まれているのは同期のレッド。

俺がプレゼントした独特のキャップを見れば一目でわかる。

レッドなら帽子は必須アイテムだし、この世界ではオリジナリティー溢れるハイカラアイテムだからな。

俺の手製だから凄く丈夫なんだぜ？

たったの3か月あまりで公式戦を優勝とは、さすがだと思う。

純正のモツチーだし、ふつうは難しいだろうに。

まあ、学校の実技で育てていた相棒だから成し得たとも言える。

練度と寿命のハンデを抱えることになるが、吉と出るか凶と出るか。

経験不足を補うには都合が良いとは思うが、どうなるだろう。

まあ、欲を言えば電気ネズミつぼいのを育てて欲しかった。

電気ネズミつぼいモンスターってなんだろうか。

雷様スタイルのモツチーもいたが、あれはキモいから却下だ。

サンダーVとかか？

いやいや、ごつすぎるだろう。

あと、サクラモチって名前は安直すぎると思う。

ドミナントの背に乗ったまま会場へ。

俺が登場しただけで水を打ったような沈黙。

まさに舞い降りた救世主だ。

俺ほど浅いブリーダー歴でここまで注目を浴びた奴はきつとない。

というか俺がDランクだってことを忘れている人もいるはず。

レッドに「ここまでは教科書に載っているぞ」と謎のカッコつけの言葉をかけてから
試合に臨む。

意味としてはブリーダーとして生きるならEは超えて当たり前、Dを超えるなら自分で
考えろって感じカナー☆

同じ新人の俺が何を言ってるのだろうか。

しかしチートモンスターを使ってる俺の格言は「心に柵を作れ」だから問題無かった。

結局、鉤爪で引っ掻いて終わりだ。

怪我が嫌なら棄権すべきそうすべき。

『見る目』が悪い奴は強くなれるわけが無いのだから。

優勝賞金を貰って爽やかに帰宅。

何時までも静まり返った会場でトロフィーの授与とか俺ですら嬉しくないから。

リオが嬉しそうだだったので来てよかったけど。

公式戦は賞金が微妙で俺は悲しいよ。

ドミナントにオイリーオイルを与えながらリオが街で買ってきたオイルでイレギュラーを磨く。

モンスターファームにおいてオイリーオイルは最強のアイテムの一角である。

とりあえず疲れが取れる、と考えてくれればおk。

イレギュラーの機械部分をバラしてオーバーホール。

学校で年老いたヘンガーを育てていた俺に隙は無かったのだ。

ヘンガーについては未知の学問として取り上げられているので簡単なことしか出来ないが、それでも疲労やストレスが除くことができる知識と技術なので重宝している。

イレギュラーはテクノドラゴンという種でドラゴンをメインにヘンガーを合体させ

たモンスターだ。

結構貴重なのだが、なぜかファームで昼寝をしていた。

上位のブリーダーが育てようとして逃げられたと予想。

ドラゴン種ってピーキーだしね。

学校に入る前に育てたけど一般人だと死ぬ可能性もあるし、超あぶねー。

ジハードを育てているオーヴァンとか明らかに変態だ、超あぶねー。

でも親友もドラゴンを育てていたわ。

あいつも変態だったのか、超あぶねー。

7月の頭に熱烈なファンレターと抗議文が届いた……っ!!

協会から届いた段位上昇の手紙は斜め読み。

抗議文はとりあえず保管して同じ人物から来たら通報、一回目は許す。

世間の声に耳を貸すべきだよね、とファンレターを呼んで返事を書く。

なんか崇拜されているような文である。

ドミナントの神気に当てられたんじゃないかねって感じだ。

家族からの手紙は文字が消えるまで読んで、円盤石の欠片とお金を包んで返事を送る。

俺は家族サービスを大切にしているのだ。

円盤石つてのは前述したとおりモンスターを再生することができるのだが、円盤石の欠片というアイテムは合体時に使うと補正がかかる、みたいな感じだったはず。

売れば高いし、価値も変わり難いので貯蓄や仕送りに向いている、と俺が勝手に妄想している。

こんな感じで一日は過ぎていくのだ。

そろそろお茶や畳を注文すべきだな。

あ、まだドミナントとイレギュラーを追いかけてなかったわ。

表情の変化が少ないリオであるが、ロードランナーの背に乗っている姿は何処か誇らしげだ。

背筋が伸び、キリツと眉根が上がっており、自信に満ち溢れている。

眺めるだけでは何なので手を振ってみると嬉しそうに振り返してくれる。

理由は知らないが信頼されているというか、懐かれているというか。

悲しいくらい自覚しているが俺は不人気だ。

赤貝を乗っけている薔薇乙女以上に不人気だというのに何故リオは助手をしてくれるのだろうか。

この世界での謎の一つだ。

ちなみに他の謎はゴーストやラクガキが寿命で死ぬことや、先着プレイヤーに望みのアイテムを与える暴拳などカナー☆

最後のは関係なかったですね、申し訳ないです。

レースで荒稼ぎした貯蓄を削り、街の謙虚な大工さんによって超高級品である畳を敷き詰めた和室を増築してもらった。

掘り炬燵や火鉢、座布団といった和テイストの諸々まで完備したが、稼いだ金が吹き飛んだ。

どうやら俺には浪費癖があるらしい。

とりあえず目ぼしい大会に参加する必要が生じたのだ。

素晴らしい仕事ぶりだったので緑茶を奢ってやろうとしたらフルーツジュースを投げつけられた。

なぜだし。

畳で寝そべっているとリオが俺宛ての郵便物を持ってきた。

上質な紙のそれはどう見ても協会からのお手紙である。

面倒事だったら無視するしかないと考えながら開く。

内容は月末に開催されるグレードC選抜の招待状であった。

……招待制だったのか。

危うく何も知らずに金稼ぎのためにカチ込むところだった。

グレードというのはモンスターのランクであり、段位はブリーダーのランク。

ちよつとした違いがあるのだ。

エヴァ先輩も代表になれるな事を言っていた気がするのだが、面倒な雰囲気は漂っている。

どうしたものかと考え込む俺にリオが不思議そうに声をかけてきた。

俺としては悩んでいるのだが、リオは俺がなんでもできるマジパネエ天才（jeeにあす）だと思っっている節があるのだ。

モンスターの育成やトレーニング機器を暇つぶしに語ったときなんか、尊敬とかそういう類の眼差しだった。

しかも、なぜか助手一週目で忠誠度MAXだった気がする。

謎が深まったぞ、どうしよう。

本当に意味がわからないのだがどうやら俺は憧れの先輩ポジションを獲得してしまつたらしい。

マジでなにが起こつたし。

憧れの先輩とか手塚ゾーンでも見せつけければいいのだろうか。

つうか自分の名前が入っている必殺技って嫌じゃね？

俺は他人の憧れを否定する権利をもってるわけじゃない。

だって、信じるって素敵やん？

心が輝いているみたいで互いに切磋琢磨して煌くってなんだか素敵やん？

……嘘です、カッコつけたいだけです。

とりあえずリオには当たり障りない事を伝えておく。

素行や世間体の問題があるうえに更に注目までされるのは如何なものだろうか、みたいな。

選抜の優勝者は大陸対抗戦に出場することになる。

つまるところ、名が天元突破で轟くのだ。

簡単に名声を得られる一大イベントだし。

そして、協会は不倶戴天のライバルであるF I M B A（相手の大陸の協会）に見栄を張りたいし、勝ちもしたい。

特殊派生のモンスターやこの大陸独自のモンスターを育て、実力も兼ね備えているブリーダーが望ましい。

全てを満たしていき俺の力は喉から手が出るほど魅力的だ。

Sグレードの上位並の力を持つドミナント、しかも種族は特殊派生。

見た目も神々しい輝きで高貴のある佇まい。

まさにドミナントを期待しないでCランクに何がいる、というレベルだ。

問題は名を求めている凡夫どもが黙っていられるかに集約される。

下々の嫉妬ほど醜い物は無いが、厄介なものも確かだ。

人に恨まれて良い事なぞ無いのだから、とニヤリと笑って締める。「なるほど……でも今更遅いと思いますよ」などと新聞を渡される。

なんだか、ぼくがすぐくわるくかかれていたよ。

びつくりしちやつた☆

ブリーダーの項目で凄く、悪役でした。

ダークブリーダー的な扱いである。

俺が何をやったというのですか、神よ。

つうか神とか死ねばいいのに。

知らない内に俺の名が一人歩きしているので開き直って参加することにした。

金を稼ぐ必要もあるし、名人を目指して昇って行けば自ずと生じることが前倒しになっただけだ。

これからは殺傷設定のOHANASHI☆NANOHAくらい全力でいかせてもらうことにする。

ドミナントってカウレア火山の守護神様だし、特殊派生の中でも格が違うわけなのよ。

たぶんクツパとギガクツパくらい違う。

もったかもしれない。

まあ、それくらい凄いから俺でマイナス評価が付こうともドミノントの圧倒的カリス
マによつて生み出されたプラスは消しきれないのだ。

……なんかむなしくなった。

手加減はやめだ。

血祭りくらいがちようどいいに違いない。

大衆もそれを望んでいる。

ドミノントが加減するだろうから死にはしないし、安心だNE☆

「温泉はいいね。温泉は心を潤してくれる。リリンの生み出した文化の極みだよ」なん
て言いながらドミノントに湯をかける。

別に俺はシ者とは関係ない。

ATフィールドとかいう超技術は使えないし。

心の壁を作るために便所飯しているかもしれない渚くんを想像してちよつと泣いた。

燃えてるドミノントを洗う必要性に疑問を感じるがこういうのは雰囲気なので良し

としておこう。

そういうえば、イレギュラーを温泉に入れてはダメな気がする。

大丈夫だとしても色が変わるかもしれない。

ヘンガーの素材つて錆びたり変色したりするのだろうか。

ゲームだと海を渡り、火山を駆け抜け、雪山で戦い、ジャングルと飛び跳ね、プールで泳いでいたから大丈夫かもしれない。

今はリオと遊んでるからどうでもいいが。

ごぼごぼと煮立ってる風呂に入るのも慣れたものだ。

温度調整できるクセに俺と入るときだけドミナントは全力である。

蒸発すると温泉の成分がめっちゃ臭いので煮立つ程度に調節しているのは器用というかなんというか。

溶岩を風呂の代わりにしてたとか、そんなワイルドさを感じる。

まあ、無いだろうけど。

いや、有りそうだ。

だからどうしたと言われたら、特に何もありません。

湯上りのコーヒー。

これが私の活力です、などとカッコつけながら麦茶を啜る。

コーヒー？

あんな苦い泥水を飲むとか神経腐ってやがる。

しかも風呂上りとかなんの拷問だし。

まあ、俺の家には飲むやついねえから。

リオに笑われたときに飲む練習したけどやはり無理だった。

飲めるけど好んで飲むものじゃないから。

いや、マジで。

……つうかりオって住み込みでやってるけど、助手って一週間に一度だけ顔を出すだけでもいいと改めて伝えたが、家が遠いし楽しいから大丈夫らしい。

なんと無防備な。

俺じゃなかつたら、チヨメチヨメされるところだぞ。

まさかレッドとコルトはチヨメチヨメしてるんじゃないやね。

全年齢ゲームに隠された秘密!!

ブリーダーと助手の卑猥な関係!!

なんて馬鹿なことを考えながら美人な記者の勢いで購読してしまった文々。新聞を流し読み。

この新聞はスキャンダル大好き、噂も大好き、流言も発信する嘘と欲と趣味に塗れた糞のような奴らが書いていると思っている。

さつきも読んだが、他の記事も色んな意味で凄い。

俺の公式戦についての評価も凄かった。

こいつのせいで人気が下がっているんじゃないかってくらい綿密に書かれていた。

その癖、写真は良い物を使っているから高く評価するしかない。

大会に優勝したときの写真をチート能力を駆使して全力で切り抜く。

切り抜いた写真を額に入れて壁に飾るのが大会後の習慣となった。

つまるところ、保存用、切抜き用、常用と三部契約しているのだ。

もうね、グツジョブ。

俺のヒールっぷりが輝いているぜ！

というか記事が詳し過ぎて笑える、学生時代の話とか入っているし。

書いている記者は俺のファンじゃないかと自意識過剰になるほどだ。

招待状に金箔で刻まれたグレード選抜の文字。

これに優勝すると4年に1度、友好の証として開かれる大陸対抗戦に出場できる。

最も優秀なブリーダーを見せつけたいという子供みたいな思惑ともあるのだろう。

どちらが優秀なブリーダーを保持しているかで評判や経済活動など色々と影響があるようだ。

別名・協会対抗戦。

つまりオリンピック的な何かだ。

ニュアンスは合ってると思う。

全敗したときなど目も当てられない。

まあ、そんなわけでほとんどの国民が注目してくるくらいだから名声を得る機会としてはかなりのもの。

バトルで言う四大大会やレジェンド杯を優勝したり、円卓、地平線、蒼海などのレースで優勝するくらい凄いいんじゃないかなと思ってる。

……ピクシーに思っても言わなかったけど、レースの大会って中二くせえ。

いや、コンバットも別名があるから他人ごとでは無いな。

四大会の一つで優勝すると、その肩書きが二つ名になるし。

エヴァ先輩なんてワールドモンスターズで優勝したから「ワールド」や「ワールドブリーダー」と呼ばれていた。

だせえ。

日本語に無理やり俺が訳しているからしょうがないね。

ほとんどつてことは金が無い奴は見れないないんだけどね。

レースはチラツツと見れるけどバトルはさっぱりである。

やっぱり金だよな、金。

金があれば、金があればって。

人へ金である、間違いない。

……なんてね☆

でも勝つ気が無いのはダメだし、戦いに清潔を求めるのはクズのすることだ。

自己満足のためにきれいな戦い方をしても稼げないなんて、馬鹿な話だろうよ。

モンスターは寿命を削って戦っているわけだし。

選抜戦は長くなりそうだ。

それほどまでに慎重なのだが、協会も神経質になりすぎてる。

予選↓決勝なんて形式をとるのだからサイコーにダルい。

予選で総当たり。

勝ち星の多い1位と2位で決勝戦をして白黒つける。

普通のモンスターならヤバいな。

市場のモンスターや家名の無いブリーダーなんて特殊なことが無い限り招待されないから普通のモンスターなんて見ないだろうけど。

選抜戦の予選は開幕ファイアウエーブで焼き払い余裕でした。

手加減して火力は抑えているので死にはしないはず。

ドミナントの凶悪性に気付いたのは極少数。

ブリーダーならノラモン全部とは言わないがフェニックスの知識くらい持つとけよ、と。

持つててもこんな場所に出るわけないって思うよね。

知識には自信を持つとせ。

モンスターには悪いが、棄権しないブリーダーに罪がある。

グレードは多分、B止まりだな。

家紋持ちのくせに後継ぎは自分の力と勘違いしたボンクラか、モンスターが優秀過ぎたか。

家紋とは協会が家名とともに与えた証である。

特殊派生のモンスターを再生したり、優秀なブリーダー・メーカーを過去に輩出した印。

ただ、それだけである。

ただ、それだけがモンスターを中心として回っているこの世界には重要なのだが。

最初の家紋はモンスターの姿を模った一枚の小さなコインで初代の名人に送られたモノだった。

今でも名人には殿堂入りしたモンスターのコインが送られる。

他の家紋はその家を代表するモンスターが描かれた旗か何かだ。

大々的に家の力を見せつけようとして服や馬車に刻むのは履き違えていると言っても過言ではないと思ってる。

ブリーダーならモンスターで競うべきというのが俺の持論で、そうやって活動している者たちも多々いる。

ちなみに家紋持ちなら家名持ちだが逆は成り立たないのだ。

イメージは家紋+家名<家名>無し、みたいなヒエラルキー。

協会も家紋持ちばっかでやってられねえわ。

要約すると

家紋を持つてるってことは特殊派生のモンスターがいる。

↓秘術で合体させて特殊派生を受け継ぐ。

↓つまり単純な話だがうまく育てればめっちゃ強い

↓金持ち

↓俺たち偉くね？

ってわけだ。

うわあ、やべえよこの世界。

リセットすべき。

今の名人は家名持ちだが家紋なしだったので殿堂入りした時のコインを家紋にしてるとか。

デンドーコインって響きが安いロボットみたいじゃないだろうか。

家紋有りより家名のみの方が最近強いっぽいな。

家紋も微妙だな。

権力争いでも家名オンリーが押ししてるし。

モンスターの血がオリジナルより薄くなってるのが原因じゃないかと考える学者も

いたような気がする。

結局俺みたいな家名なしはほとんどいないけどね。

まあ、干されたりとか色々あるし。

同期も家名なしとか存在したかわからないぐらいだし、こんなものか。

気持ちだけで、いったいなにが守れるっていうんだ！とキラきゅんごっこ。

ふははははははー！！

お前らの自尊心で、モンスターが焼けるてぜ！！

特殊派生で家紋のモンスターといっても下手なブリーダーが育てれば鈍らの刀だろう、と。

死ねや金持ち、はいだらー！！

とかやってれば勝てるので消化試合である。

なぜこんなに頑張るのかといえば、やはり俺がホリイ派であるからだ。

あとは他の会場で選抜戦を戦っているだろうアテイ先生目当て。

あと金。

先生にはベルフラウとアリーゼが未だに助手をしてるはず。

うわあ、会いたくねえ。

アリーゼはいいけど、あのツンデレはだるいから会いたくねえ。

1、2、4の人はいいのになぜ3はいるのだろうか。

似てるからあだ名で呼んでるだけだけ。

そのうち出会うのだろうか。

あ、パツフェルさんとポムニツトさんがいたわ。

ロードランナーがいないときは代わりにどちらかが配達に来ていた気がする、走つて。

ファームの中には入ってこないけど。

2と3、4が登場。

いつかは1の人も見かけるかもしれない。

圧勝である。

マジで圧勝。

そしてブーイング。

なげだし。

決勝は一度棄権した先見のある家紋持ち。

総当たりになつたから時間を食ってしまった。
もう夕方だ。

他の戦いがちんたらしすぎなんだ。

一撃で終わらせるべき。

先生の試合は間違いなく終わっている。

泣いた。

おっぱいが見れなくて泣いた。

対戦相手のモンスターを眺める。

ブラッディJとか生で見ると艶が違う。

夕日に照らされた真紅の鎧、雄々しく剣を握る姿。

やはりモンスターを生で見ることのできる感動は一味違う……ツ!!

折角なのであだ名もつける。

ジョニー・ライデンとかつけたかったけど長いからなし。

無表情っぽいし、レッドに似たものを感じる。

ドミナントが遊びとばかりに鉤爪で攻撃をしかけ、ブラッディJが剣を巧みに使つて

逸らす。

一進一退の攻防戦だ。

実況も気合が籠っているし、観客も熱狂している。

先ほどは瞬殺されたというのにお気楽なものだ。

……そうだな。

俺も珍しく指示を出そう。

何時までも無言だと相手に悪いし。

長引かせるのも飽いた。

ドミナントに攻撃の手を休め、下がるように指示する。

その様子を見てもブラッディJは追い打ちを掛けない。

不用意に接近するのを避けているようだ。

魔力を声に乗せる。

多分、それほど大きい声じゃないけど会場中に響いてるカナー☆

そして真顔でキメる。

俺もやるときはやるのだ。

遊びを全力って意味だが。

もちろん遊びなので手も抜く。

すげえ抜く。

ばれない程度で抜く。

疑問に思いつながら様子見している相手に言う。

大胆不敵に、見下しながら。

バンダナを外すのも忘れない。

「認めよう、君の力を」

偉そう過ぎて噴きそうになるが我慢。

俺って新人だからね。

しかもブリーダー歴は半年も経ってない。

まあ、ほら、ドミナント様のおかげで俺も歴戦のヒールブリーダー。

威圧感もたつぷりで不自然ではない。

むしろ、俺が格上である。

よく考えたら自然なことだったぜ。

指示を出し、ブラッディJの攻撃を紙一重ですべて回避させ、ドミナントの火炎連砲。実はこの技、大変レアである。

ほとんどのブリーダーが一生涯めないレベル。

モンスターには善悪がある。

覚える技も様々だが、善悪が結びついている技も少なくない。

そして火炎連砲とは圧倒的に善に傾いているヒノトリが悪になった時に覚える技だ。

育てやすい善を悪にする人間はいないし、そもそも悪になれない。

ゲームではバグか設定ミスかどんなに頑張っても火炎連砲を覚えるまで悪に寄らないのだ。

その点、ドミナントは違う。

善悪なぞ知らんとばかりの自由さ。

きつとこれが火炎連砲を覚える秘訣……!!

まあ、善悪なんて人間が決めたものだしな。

言うこと聞けば善、それ以外は悪。

最も悪いモンスターでもブリーダーの命を取ったりはしないのに極悪である。たぶん、悪戯つこなのだ。

極悪モンも寂しいとかそういう感じじゃねえの。

テキトーだ。

そこら辺はテキトーでいいと思ってる。

ドミナントのステで力は低い。

火炎連砲は力属性で威力はD。

それでもグレードCには決して軽い技ではない。

S上位のドミナントのステを考慮するとむしろ酷く重い攻撃ですらある。

それを乗り越えて走ってくる姿を拝むことになったのは俺の油断か。

若しくは、ドミナントが甘く見過ぎたせいか。

火炎を切り払って進む姿はまさに凶鑑の説明通り。

戦士そのもの。

ダメージを受けていないのかと思う程に愚直。

それでも力強く走るのはモンスターの性格か、ブリーダーの腕か。

「いい戦士だ」

思わず呟いた。

それと同時にドミナントはVの字に斬られた。

傾いた夕日がすべてを赤く染め上げていた。

観客が湧く。

歓声が轟く。

会場が揺れているかのように。

歓びで、満たされる。

今まで無傷で、不可侵だった傲慢な悪が斬られた。

確かに斬られたのだ。

夕日に照らされた深紅の鎧はおとぎ話の勇者のようで。

ゆつくりと倒れる青白い炎の鳥は化け物の様で。

その時、その紅い赤い鎧を持つモンスターは英雄だった。

演出のために回避しなかったわけではない。

決してない。

余裕で回避できたし、防御もできたなんて知らない。

でもヒール、とかヴィランには民衆をどん底に落とす義務があるよね。上げて落とすのって素晴らしいと俺は思うのですよ。

コロシアムが揺れるような歓声を無視し、ドミナントに指示を出す。

遊びはやめよう。

これからは戦いで、ヒーローごっこもお終いだ。

だって彼らは俺のヒーローではないのだから。

勝たせる義理など一切ない。

俺が認めるヒーローはただ一人、それ以外は偽物だ。

— 9

倒れるように指示し、上手く従ったドミナントを眺める。

揺らぐ炎が猛っている。

やる気は十分のようだ。

笑みが浮かびそうになり、右手で顔を覆って隠す。

ブラッディJを盗み見る。

デユラハン族のヨロイモンスターはなぜあもカツコいいのだろう。

ノーマッドも嫌いじゃないけど、フォルムが切ないけど。

でもブラッディJって悪モンだろ。

なんだこの人気。

いや、人気なのは構わない。

俺から見てもカツコいいモンスターだ。

不満なのはまるで正義を掲げるかのように観客にアピールしている姿だ。

悪モンっていうのはもつと静かで、強かで、賢くあるべきだ。

そう、今のドミナントのように。

太陽がゆつくりと沈んでいるのか、徐々に暗くなっていく。

申し訳程度に灯されていた篝火がコロシアムの各所を弱く照らす。

闇がすべてを染め始めた。

ドミナントを除いて。

地面から噴き出したように白い炎が柱となつてコロシアムを照らす。

闇に飲まれていた光が逆流するかのよう。

観客が静まり返り、拡大されていた実況の声は消え去つて代わりに唾を飲み込む音を

響かせた。

☒いにしえ☒から☒いま☒に至るまで、火は絶えず力を持っている。

文明の象徴、神の証、全てのはじまりとして。

光を与え、熱を与え、全てを奪う終わりとして。

人知を超える強大な火を見ることで、力の本当の意味を理解することになるだろう。

神々しくも原始的な恐怖が、そこには在った。

夕闇に染まったはずの空が白く照らされ、天上が青く燃えていた。

放たれる熱量がドミナントの姿を揺らがせ、広げた羽根がより大きく見えた。

相手側を焼き尽くさない様にと炎の中からドミナントに指示を出す。

この炎は演出的なモノで、周りに影響が出ないように熱と炎の方向は空へと向けられている。

レースで上空を通ったら丸焼きで死ぬだろう。

普通の悪モンってやつなら格下と侮った相手に傷をつけられたことで怒るのだが問題ないくらい冷静だ。

チラツとこちらを見た瞳には正気が宿っている。

どうせ殺さないだろうが、決して殺すなよと伝える。

殺さなければ何をやってもいいとの裏返しでもあるのだけれど。

……審判、そんなに怯えんなつづの。

ああ、俺が炎の中にいるのが悪いのか。

炎から出る気はない。

特に理由はないんだな、これが。

心を通わせていれば炎も熱くないってガツシユで読んだから参考になっているだけだ。

ドミナントから天へと伸びた炎、そのほんの一部が鞭のように飛び出した。

全体の炎量からみるとちよつとした火の粉程度だ。

それがブラツデイJには脅威で、避けるために走り回っている。

が、もう終わりだ。

目に見えて失速している。

当たり前だが戦いにすらなっていない。

火の粉から逃れようと、熱で弱っている。

指示を出しているブリーダーなんて死にそうだ。

さつきまで英雄然としていたのに、ちよつと本気を出したらこれだ。

これでは彼らが可哀相だと憐みすら感じ始めた。

だから手伝ってやろう。

英雄に返り咲く手伝いってやつを。

常々思う、英雄つてのは生きているからなるんだらうかと。

俺的には死んでからが本番だと思う。

語り継がれる的な意味で。

頑張った、十分に頑張った。

このランクにしては、だけど。

確かに英雄だ、英雄の素質がある。

まあ、俺的な意味のほうだけど。

ドミナントに火力を高めるようにと声をかける。

天を焼く青い炎がさらに勢いを増した。

相手のブリーダーはすでに退避していた。

ブラッディJは残っていた。

置いて行かれたか、意地で自ら残っているのか。
判断することはできない。

すでに熱で意識が飛びかけているのだろう。

それでもドミナントに剣を向けている気概は評価に値する。

「いいモンスターだ。また一緒に戦いたいものだ」

ブラッディJが倒れ、地に伏した。

火が消え去り、再び闇が戻ってくる。

俺の眩しが届いたのかはわからなかった。

闇の中で輝くように、ドミナントが鳴き声を響かせた。

賞金を受け取って帰ろうかとも思ったが未だにほかのところをやっているらしい。

D選抜の前まで来て、すさまじい歓声に興味を持った。

上位グレードの試合なら見ごたえあつてこうなるかもしれないが、下位では微妙だと思うのが正直な思いだ。

それがこんなにも盛り上がるとはどんな試合なのだろうか。

俺らはマジで特殊すぎただけだね。

ドミナントに飛び乗って上からダイナミックエントリー。

正面から入るのは時間がかかるし。

非常識さを前面に出して悪役っぷりをアピール。

だが、捉えた光景で思わず動きが止まる。

まさに裏切られた気分だった。

勝利を収めていたのはレッド。

それはいい。

彼は才能に胡坐をかかずに努力している。

そして俺が認めるているから。

負けるわけがない。

問題は一つだけ。

こいつのモンスターだ。

この前のモツチーとは違う、コイツのモンスター。

ドミナントに指示を出してレッドの元へ降りる。

目を極限まで見開いて、口を開けて呆けているコイツは珍しい。

何を驚いているのだろうか。

俺が来たことか。

お前が違うモンスターを使っているからか。

言うことは決まっている。

「お前には失望した」

それだけ言ううと俺は振り返らずに飛び去った。

家紋持ちだつて知っていた。

だが、あいつは俺を裏切った。

俺の気持ちを裏切ったんだ。

まさか、あいつの受け継いだモンスターがピクシー族だったなんて。

しかもポワゾン。

ラブリーキュートなポワゾン。

死にたい。

何、あの勝ち組。

乱入した騒ぎを無視して飛び去り、テンション下がった俺は広場で待っていたリオを

連れて飛び去る。

「きゃー、人攫いよー!!」

「少女が連れ去れたぞ!!」

「悪魔め!!」

騒ぎが聞こえるがそんなことはどうでもいいのだ。

胸の内で煮えたぎる思いを吐き出すように、大きくため息を吐いた。

リオが気遣わしげに俺の背を撫でた。

……よく出来た助手だよ、ホントに。

あ、バンダナ取ったままだった。

翌週に大陸対抗戦の招待状、あとは俺が引くほどの熱狂的なファンレターが幾つかと抗議文章が届いた。

代わりに、レースを控えている親友へ丁寧に書きあげた激励の手紙を渡す。

円卓のレースまで見に来るのは待ってくれと頼まれているので、ささやかな応援しかできないのだ。

代わりに俺の試合も名人になるまで来ないとか。

ちよつとさびしい。

届いた手紙の中には脅迫文や怪文章も混ざっていたので取っておく。

5枚溜まつたらゼリーもどきの当たり風にサービスしてもらえる権利をやる。

法的機関に、だが。

抗議は読んで燃やす。

罵倒ばかりなら残念ながら5枚溜まるまで待つとしよう。

お待ちかねのファンレターである。

世話になった先生や同期からもつきり来てテンション駄々上がりだ。

俺の同期は癖がありまくってヤバいぜ。

マジで。

アームストロングからふつーの祝いの言葉と泣き言。

姉の元で今年も助手をしているらしい。

家督も姉に取られて大変だ

……オリヴィエさんめっちゃ怖いし、仕方ない

レックス先生とアテイ先生からは激励の言葉。

超聖人級の双子は格が違った。

双子姉妹がタッグの対抗戦に出るなんて見えない。

俺の視界（ログ）には何も残って無いな。

流石に無視は駄目だろうとおめでとウサギ的な激励文章を送るか。

礼節に則って。

リオが驚いている。

え、俺がお祝いの手紙出すのってそんなにありえないわけえ？

これでもピクシーに送ってるんだぜ、一応。

リンディ校長にも。

エヴァ先輩からも来てた。

貴女の高笑いが感染しました。

ロリババア乙、と。

うわっ、キラさま（笑）からも来てる。

しかも内容は批判ばかり。

祝えよ、空気読んで。

ピンク教に絞られてろ。

霞ちゃんからの手紙もきていた。

可愛い字で、また一緒に昼食を食べに行きましよう的なことが書かれていた。

なんだ、女神か。

よく事件に巻き込んでくれた先輩からも手紙がきていた。
ミスター・ブシドーと名乗ることにしたらしい。

お、おう……？

そして、いつものファンレターにいつもの返事を書く。

手紙は苦手だが全力だ。

丁寧に、すべてを。

あとは円盤石とともに封入。

壊れやすいので注意と張り紙してパーフェクト。

熱狂的なファンレターはドミナントの鉤爪に墨を塗りたくって大判の紙に印したサインを送っておいた。

後で聞いた話では泣いて喜んだとかどうか。

時計台の後輩からも来たので丁寧に書いておく。

性格は良いが、あまり理解者がいない腕のいいブリーダーのところで頑張っていると。
か。

おまえならできるって書いておこう。

俺を慕ってる後輩とか少なすぎて泣いた。

たぶん他には片手で数えるくらいしかいないんじゃないかね。

温泉掘った時に出てきた水神の石盤をおまけにしてやろう。

来年は独り立ちするかもしれないからな。

身内には甘いのだ。

リオがそわそわしていた。

何事だし。

飽きたのでこれで今日は最後にする。

金ぴかの趣味悪い便箋。

つうか金じやねえの、これ。

あとで売るか。

差出人は、ギルガメツシユ。

なん……だと……。

ビビった。

異世界に召喚されたのかと思ったほどビビった。

驚天動地だ。

あ、エルキドゥが中身書いたのか。
ビビらせんなし。

めんどいからって大会帰ろうとする、とな。
知らん。

王の蹂躪を愚民に見せつけろとでも言っておけ。

ええくすきやりばー!!

ごるでいあすほいーる!!!

……違う王だな。

エクスキヤリバー……はそもそもゲームがちげえ。
もういいや、テキトーで。

ピクシーの手紙を手にとって外へ向かう。

気分転換である。

空の下で読むのが礼儀だろうよ、こいつのは。

リオも手紙を持ってどっか行くみたいだ。

なんかリオが持っている手紙はこの前返事を書いたモノにかなり似ている気がする。

……もう老化が始まっているのだろうか。

——10

荒野の果てに、一人は絶望を、一人は希望を見つめ、

二人は今、運命の旅へと踏み出すのだった。

トウルルルー。

絶望が俺で、希望がリオである。

なんの話かって？

こんな僻地まで手紙を直々に届けにくる協会の人間の心境だ。

俺を見て震え、リオを見て安らぐ。

飴と鞭がナチュラルに使えるとか、嬉しくないです。

— そうですね、風の噂で選抜戦の後にレッドが思いつめた表情でモッチー×ポワゾンの合体をしようとしたとか。

やったね、コルティア!! 仲間が混ざるよ!!

おい、やめろ。

ホントにやめろ（本気トーン）

噂話のクセに物凄い大事件だ。

事件が本場で、マジで合体していたのなら、化け物が誕生していたことだろう。

ある意味キマイラの種類だ。

そう、マンナだ。

さすがの俺でもマンナは無理。

マンナとはモッチーとピクシーを合体させたモンスターである。

モッチーとルージュラ混ぜてピンクに着色して癒しを抜いた化け物だぞ、あれ。

サブのピクシーどこいった。

容姿はお察ししてくださいといった驚愕な低レベル。

バイオであれがたくさん現れたら俺は逃げる。

もしくは残虐な手段で砕いて川に流す。

だが、川に流しても増えそうだから埋め……生えてきそうだと、焼いて塵にする。

塵にしても感染しそうだ。

ヤバイ。

超ヤバイ。

どんな姿か気になる？

百聞は一見にしかず、ググれ。

そんなわけでピクシー派の俺はリオを派遣することにした。

ポワゾンを合体させるとか正気なわけえ？

見損なつたぜつてことを伝えさせるためにリオを派遣してみる。

コルトと仲が良いらしくて会えるのが楽しみだろうし、あまりレッドに気を遣わなくてもいいと追加。

イレギュラーを呼び出し、乗っていくようにと言っておく。

レッドは俺みたいに僻地に飛ばされたわけじゃないので街の近くにファームがあるのだ。

……なんかリオが神妙な表情だ、なぜだろうか。

文々。新聞を読んでもとなんかすごいことになってた。
信者が半端ないらしい。

ファンではなく信者……。

批判的な評価を唱えていた連中がかなり減ったらしい。

あとはレッドのマンナ事件。

家紋持ちがそれをやるべきではないとか凄い批判的。

伝統ある〜とかなんとか。

読むのめんどい。

とりあえずレッドが落ち込んでるかもしれないからカララギマンゴーでも食わせれ

ばいいんじゃないの。

あいつの好物だからこれで機嫌もよくなるんじゃないかね。

つまり、お腹が膨れる。

↓機嫌がよくなる。

↓モッチーと合体させるなんて、もう二度としないよ!!

↓あれ、そういえばパンダナってポワゾン好きだよな……。

↓あげるか

↓ポワゾンとゴールイン

↓俺ってばサイキョーね！ はっぴーえんど♪

……ふむ、やはり天才の俺に死角は無かった。

カララギマンゴーをお土産としてリオに持たせようとしたらすでになかった。

……天才にだって誤算はあるさ。

あわわ軍師、はわわ軍師だって間違えたりするし。

俺は当然ながら糞里派だ。

恋姫は思春が一番好きだ、我慢しているときに口をきゅって閉めてる表情が良すぎる。

ピクシー系ならカスミ種が胸がゆさゆさしてて素敵!!

同期の霞んとこのモンスターだった気がするから、あまり下世話な視線を向けられないのが困ったものだ。

上位ランクの記事に目を向ける。

S級でも四大会の一角を落としたコルベニクが冬眠に入ったことで騒ぎになつてるとか。

ブリーダーであるオーヴァンはAIDAの調整のためと言っているようだ。

対抗戦に出場が決定していることが理由だろうと締められていた。

まあ、どうでもいいんだけどね。

レッドのマンナ事件の記事を読んだ後だと超絶どうでもいい。

というか、マンナが濃すぎるだけ。

大陸対抗戦は一週間ほどかかるようだ。

試合は二日から三日くらいで全てが終わるのだが、準備とかで時間がとられるっぽい。

当然、向こうに泊まり込みだ。

基本的な流れとして、入場↓開会式↓偉い人の言葉↓DとAの試合↓D+C、B+Aのタッグマッチ↓最後にS級の試合↓勝ち星の多い協会にオリジナルコインの授賞式↓閉会式↓解散、という流れのようだ。

めんどくせ。

しかも無駄に長い。

まあ、いーんだけどさ。

いーんだけど、3日前に現地集合。

場所は相手の協会の会場。

めっちゃや遠いのだ。

家紋持ちなら輸送用のドラゴンくらい持つてるかもしれないけどいないな人だっているわけだ。

あ、俺には関係ない話でしたね。

でも、3日前とか無いわ。

遅刻しそうなやつとか問題起こす奴がいるから監視目的だそうです。まったく。

迷惑なやつがいたもんだ。

他人の事をちやんと考えろつての。

他人というか俺。

俺オンリー。

俺に迷惑かけなければ何してもいいぜ。

ドミナントを気絶させた俺は爽やかに茶を啜る。

定期的に郵便屋さんが届けてくれる手紙を読むのが楽しみです。

手紙が2枚。

二人とも対抗戦に出る先輩である。

1枚はハム先輩から。

ハムさんでもいいけど、先輩なのでハム先輩と呼んでいる。

公さんって感じもするんだよね、ハム的に考えて。

内容はガンダムの事と近況の事。

先輩はなぜか助手をガンダムと呼ぶ。

昔は俺もガンダムだった。

あれ、なんか意味深じゃね？

刹那・F・セイエイ……昔は俺もガンダムだった。

そして俺にはわかる。

貴様はガンダムではない!!みたいな。

ちよつとよくわからないですね。

話は逸れたが、今のガンダムは実にガンダムらしいとか。

その点は俺も同意するわ。

任務を遂行するって言いながら餌とかやるし、個性的な後輩だと思う。

名前は刹那、あだ名はせつちゃん。

まさにせつちゃんガンダム。

貴様が桜咲刹那でなくて良かったな……そのときはせつちゃんウイングだったぞ。

ノウマンが、なぜ私のあだ名とそれほどまでに違うのだ、バンダナア!! ってキレたけど仕方ないと思う。

だって大学卒業してからブリーダーを目指したオッサンとコルトくらいの少年を同列にするのってムズくね？

だからあだ名がホモハゲになるんだ。

また話が逸れたけど、とりあえずガンダムであるということだけわかってくれたはず。

本題はハム先輩が移動手段持たないことだ。

家紋持ちだが落ち目であったので特殊派生のモンスターを冬眠させてヘンガー族を育ててた。

ヘンガーのフラッグでSを超えると友に誓ったらしい。

前回の対抗戦でフラッグ死んだけど。

今はまた別のヘンガーを育てているとか。

そんな先輩からの手紙の内容は、移動手段の提供と自分が助手を務めた先輩に連れて行かれることになったので助けてくれってことだった。

エヴァさんだろうし、無理。

お祈りメール出しよう。

もう一枚はエヴァさんから。

おまえ初めて行くんだらうから案内してやるよって話だった。

え、なに。

先読み？

エスパーなの？

こわい。

面倒見もいいし頭もいいので好感を持つが、先生や先輩が助手したってよく聞くんだけどマジで何歳だし。

あのロリようじよマジで何歳だし。

初恋だから微妙に気まずいんだよね。

いや、今でも期待しているけど。

俺の母校はみんな不老な気がする。

こうちよーもヤバイ。

ノウマンにわけてやったほうがいいと思う。

あとバルバトスにも。

エヴァさんのモンスターは確かジョーカー族のスプラッター種。

特殊派生って数少ないのに種って付けるのは正しいのだろうか。
家紋は持ってない。

昔俺が起こした騒ぎに乗じて円盤石のオリジナルを掠め取ったとかなんとか言ってた。

エヴァさん強かだよね。

名前はチャチャゼロ。

ドラゴン族のギドラスを移動用に使ってるけど名前はチャチャマル。

チャチャイチは見たこと無い。

ちなみにギドラスはドラゴン×メタルナーの合体。

水をメタルナー力に変える力を持つ、たぶん。

見た目はあれだ、メカキングギドラのメカの部分に似てる。

たぶん。

そんな感じの日から次の週。

久しぶりにヨウカンを作る。

羊羹である。

甘いアンコのやつ。

煮詰めてくゝな和菓子。

チートの俺は料理の再現だつて余裕なのだ。

街で似た食い物探すのがめっちゃツライのは秘密。

男は無駄口を叩かないらしい。

いや、俺だつたあんまり言葉をしゃべる方じゃないからね。

なぜ羊羹かつて？

超必要な超絶アイテムだからだし。

桃太郎が鬼退治が出来たのはきび団子があつたから、有名だね。

つまりそういうことだ。

ごめん、テキトーぶっこいた。

好感度が上がるアイテムとを考えてください。

待機状態でふよふよと浮遊しているヘンガーに乗りながらハム先輩が参上。

奇妙な仮面に陣羽織のような上着を着ている。

久しぶりに会ったら訳がわからんことになっていたが、前からわけがわからないので、平常通りだと理解した。

先輩が乗っている相棒は以前の純粋なヘンガーとは違い、黒く光る機械の体に魂を宿

したダークヘンガーだった。

会いたかった、会いたかったぞ！ 少年っ！！

やはり私と君は、運命の赤い糸で結ばれていたようだな。

そうだ、戦う運命にあつた！！

などと言いながらダークヘンガーがバトルモードに移行し、レーザーブレードが輝く。

なにコイツ、超めんどくせえ。

相手をするべきかと悩んでると見た目がマジやべえジョーカーが現れて斬り合いを始めた。

ふあっははははははははなんて高笑いとともにチャチャマルに乗った幼女先輩が出現。

呆気にとられているリオを連れて先輩方の荷物をイレギュラーの背に乗せる。

運び終わって様子を見に行くとなぜかハム先輩は正座させられながらエヴァ先輩に説教されてた。

頭が上がりないらしくて凄くシユール。

あれは長くなる。

俺の経験から推測されるこの予想は絶対だ。

めっちゃ怒られまくった俺が言うのだから間違いないのだ。
リオと茶でも啜って待つことにする。

え、ロードランナーを対抗戦に連れてくの？

重くね？

あ、走らせるんですか。

YA☆ME☆RO

どんだけ遠いかわかってるのだろうか。

隣の大陸だからな。

そりゃあ、飛行適性のあるモンスターで飛んで行けるけど遠い事には変わりないから。

一応、海を越えるからね。

マジでやめたげてー!! っとなるから。

あとはカララギマンゴーとか持つてくので積む準備をしておく。

たぶん、あっちでも売つてると思うけど、注文したから持つて行くでしょ。

モンスターにおやつとしてあげたりするブリーダーもいるけど、俺は自分で食う。

2個で1Sくらいが相場。

100円で2個とかお手頃。

大好きです。

安いからか知らないけどレッドにちょっと酸っぱいと言われてしまったが俺は大好きです。

思い出のカララギマンゴー。

この世界での初めての善意はカララギマンゴー。

だから、俺の優しさはカララギマンゴーで好物もカララギマンゴーなのだ。ブルジョアが自ら食べるのは1Gのカララギマンゴー……ちつ。

相変わらず意味不明である。

え、ゲームでは60G?

そりゃあ、モンスターだからいっぱい食うじゃん?

しかもブリーダーって高級志向だから高めの買うし。

一週間ぶんの目安が60Gとか。

シヨップが悪徳に見えてくるぜ。

お手頃で中堅にも人気!!らしいよ。

……学が無くて物価とか僕にはよくわかんない☆。

エヴァさんが茶を淹れている。

そして、その姿を眺める俺。
すげえ可愛い。

可愛いのに年齢不詳。

世界は謎に包まれている。

遠いからうんたらかんたら。

とりあえず準備は怠るなよってことらしい。

別の大陸だから重要な道具は都合よく手に入ることはまず無いとも。

なるほどなー。

お茶うめえ。

ハム先輩は畳の上を転がってる。

この世界の日本ぽいところから取り寄せた品の数々は先輩の心をキャッチ。

この二人を見てるとアキバの外人を思い出させる。

ジャパニーズ・BU☆N☆KA、イエア!! ニーンジャ!! ニーンジャ!! みたいな。

俺の妄想だけど。

何か必要なモノはあつただろうかと脳内で検索。

没頭しすぎて気が付いたらハム先輩とエヴァさんがヨウカンの取り合いしてた。

いくせい、もんすたー！ 2

— 1

前に言ったかもしれないけど俺は昔モンスターハンターをしていた。

この世界で。

何もわからないのに送られるとか反則すぎる。

俺が怒ったらカリカリピーすんぞ、この世界で。

努力系主人公が憧れるほどのチートな筋力と魔力、知力。

おつむはないし、フラグも立てらんねえけどな。

赤い兄貴に匹敵するブラウニーレベル。

というか超えてる。

間違いなく超えてる。

これでカリカリピーである。

孤高のカリピストはモンスターファームで笛を吹く。

馬鹿か。

俺が使うならヒートライザとランダマイザー一択決まってるんだろ。

あ、一択じゃなかった。

あれ、よく考えたら俺のチートスペックなら英霊召喚されるんじゃないやねえの。

ステは規格外だから全部EXだろうけど、謙虚な俺はAAAAAAでもいいぜ。

運はD、盛ってD。

来るっ!!

間違いないく、来るっ!!

俺の時代が来る!!これで勝つる!!

早くアカイアクマはバンダナノアクマを召喚すべきそうすべき。

英霊には特殊スキルとかあったよね。

アクマイト光線とかどうだろう。

相手は死ぬ。

完璧だ。

武器はエクスキャリバーだな。

エスコンのレーザー兵器。

でかさは1km、射程は1200kmのあれである。

そこは俺の射程だけ、騎士王!!とかやってみたい。

冬木全体へ攻撃できるけどな。

あの建造物が見えるか？ あれが俺の武器だよ 止めなければ人が死につづけるぞ、セイギノミカタア!!

ってね。

まさにやられ役。

やられるの嫌なんで弱体化してもいいです。

宝具……バンダナでいいか。

俺の宝物だし。

あ、召喚はやっぱなしで。

前に巻いてたボロキレだったら良かったけどバンダナ装備の俺は無しな。

ボロキレ装備はひどく中二仕様（笑）だったから悪役として栄えたんだが、今のお洒落した俺は隠居爺くらの迫力しかない。

名人になって帰宅許可もらって幸せに過ごしてからなら隠居と同義だから参戦してもいいけど。

あ、そうそう。

修行期間とか自分を見つめ直す時間の話だっけ？

そしたらリリカルな世界だって5年は固い。

デバイスを手に入れて、修行。

偶然、管理局員の親がいて住む場所あって、というのが定番か。最初からライフライイン揃ってるとかマジで羨ましい。

泥水飲まなくていいとか。

これが世に聞く修正力ってやつか、オリ主も大変だな。

こんなフラグを折るために頑張ってるのか。

種族の垣根レベルって高すぎ。

やべえなオリ主。

まさに最終兵器オリ主である。

ちなみに俺はさすがかとツンデレ☆バーニング、ギンガが好きだ。

シグナムとかシャマルとかヴェイターとか初代リインフォースとかも好きである。

タヌキは微妙。

イヌはオリ主でも掘ってる。

ハーレムとかマジで羨ましいから嫉妬してるわけじゃねえから。

ただ……そう、BLが見たいだけだし。

嘘です。

ストライカーズはあれだな、オリ主がなのはさん止めすぎ。

逆にオリ主もティアナに追撃かけてしめておけばなのはさんに逆らわないっすよ。やめてよね、凡人ぶってる食わず嫌いがオリ主に勝てるわけないじゃないかの話。話はオリ主先輩が頑張れば大丈夫っす。

ふはははははははははははは

これでまたハーレムになりかけの憎き敵を修正力で葬り去ることが出来る。

嘘です。

俺が神ならオリ主にユーノとエリオが幼馴染と後輩ボジできよーやとかザツファイーが先輩、なのはパパとかゲンヤさんが先生を宛がうと思う。

思いは君に、息子は尻に、勇気の魔法はやらないか。

ビーエルなのは、はじまります☆

嘘です。

恋姫とか主人公は剣道やってたりするし、将棋強かったりするし。

武術できないとダメなのか雛里くれ。

あの娘超欲しい雛里くれ。

あさはおかずと一緒にについて、よるはオカズにしてつくんでしよう雛里くれ。

なんかゴメンネー☆雛里くれ

あとは皆好きだし雛里くれ。

つうか美女・美少女嫌いなやつとかいんのかねえ。

代わってくれ、ち○この御使い。

俺とすぐに。

詠ちゃん、俺だ 結婚してくれ!!

そしたら反董卓の連中に向けてメギドラオンぶちこんでやるよ。

全員ロツクオンしてドカンと一発メギドラオン。

全員死ぬば狙う奴もおるまい……ふははははははははあ。

……妖術使いとかにされて嫌われそうだからやつぱりいいです。

この世界だと皆寛容だから気にしないで魔法バンバン使えるしー☆

ピクシーとヤった馬鹿が残したハーフ様様だわ。

だがモンスターが中心の世界でチートとか持つても生活のことには役に立たねえし。

勇者はないし、魔王もない。

国がモンスターに乗っ取られてたらドラクエ3風に助けてやるのに。

喰らえ、レベルを上げて物理で殴るってね。

ぶつちやけ殴った方が強い。

けつきよくまほうのいみないんだが。

まあ、そんな感じのこの世界での初めの方。
あれだ。

ゲーム買ってきて初めから選んだくらいのいきなりレベルである。
チュートリアルも無し。

金なんて無い。

知り合いも無い。

飯食いてえけど仕事は無いし、学も無い。

無い無い尽くしである。

そんな中で知り合いが出来て、そのまま家族になったり。

路地裏のスラム上がりの絆は固い（適当）

マジカララギマンゴーうめえから。

あの時はガチで泣いた。

で、そんな状態での初めての狩りはめっちゃドキドキする。

チートだから死なないとか、大丈夫とか、甘くみてたけどあの緊張感は洒落にならん。

初心者がその場をグルグル回るとかそういうレベルじゃない。

魔法の使いかたも知らなかったから、無理ゲーだと思った。

ジョインジョイン、トキイ!!くらいの無理ゲー。

でもノラモンの賞金の魅力ってそんな不可能を超えるものなんだわ。今ではなんであろうと気にならないから人間ってこわいね。

何が言いたかったっていうと苦労したのにピンハネした協会の勝ち負けなんてどうでもいいってこと。

あれのせいでメギドラオンの丘が出来たんだから俺に謝罪すべき。

魔力だってタダじゃねえんだよ、死人出なくて整地が出来たんだから金寄せ。

そして賞金を返すべき。

じゃなきゃ牛乳拭いた雑巾を机の中につっこんでやるよ。

でも折角のモンスターが見れるんだからよーし、俺ががんばっちゃうぞーって気分。

参加賞とか出るけどドミナントが負けるとかありえん(笑)

しょうがないから勝つとしますか。

べ、べつに協会のためってわけじゃないんだからねっ!!

まあ、エヴァさんと知り合いになれたってだけで良しとしておこう。

でも俺を監禁した奴はマジで呪う。

VHSとデッキ召喚して貞子1週間チャレンジに挑戦してもらおう。

……そんなことできねえけど。

メギドラオンで吹っ飛んだやつは許してやるけど、まだのやつはそのうちナニカスル。

まあ吹っ飛んだ奴らも回復魔法使って吹っ飛ばした後また回復魔法かけたし。

慈愛、見せちやったかな。

あ、そういうえば貞子の萌えキャラが流行ったじゃん。

呪まーすってやつ。

俺はあの貧乳で幸薄な感じが大好物です。

今の俺なら貞子に呪われてもちゅっちゅ出来るね、サイキョーだから。

貞子、俺だ 呪ってくれ!!

話は変わるが、今は凄くでかい河を超えてるところ。

我が家に集まったみんなで早速対抗戦の会場に向かっているところだ。

あーだる。

近所でやってくれたらしいのに。

相手の大陸連中が頑張れ。

え、ここって河じゃなくて海なの。

へー、ふーん。

今は凄くでかい海を……海って普通にでかいよね。

あー、なんて言うか。

今は海を渡ってます、でいいか。

この海に沿って飛んで行っても結局海しかないんだとき。
向こうとこつちは別の大陸だから当たり前なんだけどね。

ブリーダーだと身分証明とか無くて楽だね☆

マジ特権階級すぎて楽。

これはゼ口魔の魔法くらい反則。

オキゾクサマ気分になれるね、ホント。

俺が魔王を討伐する勇者なファンタジー世界だったらここで襲撃されるけどそんなことなかったぜ。

亡き者にして不戦勝とか狡いやつがいないかなとも思ったがそんなことは無かった。

……そういう発想するのは俺だけか。

まあ、名譽が云々だしね。

戦うことが大事ってことか、ふえー。

俺は勝つことが大事だと思うから半分くらい賛成はしてやるよ。
ドミナントいなくなったら闇討ちして町ごと消してたと思うから敵も運がよかったな。

せつちゃんはどうかやってこの海を渡るのだろうって思いながら眺めると島が見えた。

小さい島。

島というか岩。

岩としてはでかい。

俺の頭では表現できないからどうしようもないね。

あれは空のレースの一つで使うらしい。

デーパー・ブルーって名前の大会。

空なのに海に潜んのか、と。

海のレースのやつらは泣きたくなるはず。

レースでも不人気なのに、空に食われてる感が否めない。

俺もやる事が無くなって脳内で一方通行をセクシーコマンドーで倒したところに宿に着いた。

かみじょーはあれだ。

パンチでいいわ。

魔法効くのかわかんねえし、ガチでパンチすれば逝ける。

でもあの右手つて死亡フラグも消すんだろ。

しかも主人公パワーで真の力まで……どこの魔王だし。

勝てねえ。

あ、黒子に負けるわ。

テレポで首にカード通されたら流石に負ける。

回復魔法使えないし。

こええ、ババアヴォイス超こえー。

天使に勝てんのかな、俺。

神は天使よりも強いだろうけど神の力で与えられた俺の能力が勝てるとは限らないわけ。

試す機会ないけど。

試す場合はガリやマジンと戦えばいいのか……？

3か月前くらいから街はお祭り騒ぎらしいよ。

ほら、日本でもオリンピックピクするじゃん。

あれのこつちの世界版。

こつちのほうが盛り上がりはずっとすごいけど。

娯楽が無いのか。

国民に大人気だけあって凄いらしい、経済効果も。

あと人がいっぱい。

モンスターもいっぱい。

人とモンスターで溢れかえってる。

疲れたので俺は寝るのだ。

明日にでも観光する。

さあ、寝るぞー!! っつて感じでベッドにダイブ。

ベッドといえばシャーマンキングの最終回って微妙だった。

ロボットとゴーレムのバトル、メイデンただけは評価する。

完全版は母が強い(完) みたいな。

やっぱ母親ってすごい。

追伸

街で流れ星を見かけたら俺だから。

俺オンリーで大気圏突入してるときだから。

ドミナントに落とされてノーロープバンジー体験してるとき。

クラウンには悪いけど俺には大気圏に突入できる性能が備わっているのである。

俺を恨むな、シヤアを恨むんだな。

しかし魔力ってのは凄い。

頑張れば空を飛べるからな。

ほとんどの事は魔力ですって言えばおkである。

念話風に声を飛ばしたりも魔力のおかげです。

ミノフスキー粒子くらい非常識。

【わたしとともに魔力を操る簡単なお仕事をしてみませんか?】

求人条件：魔力を感じ取れ、かつ簡単な魔法が使える

仕事内容：魔力を扱うオリ主として世界を変える

報酬：異世界での経験、プライスレス

— 2

オリ主はチートで出来ている

調子に乗って

やる気を無くす

幾たびの謹慎を越えて補習

ただ一度の病欠もなく、

ただ一度の皆勤もなし

オリ主は教室で一人、

黒い鉛筆で文字を書く

ならば、俺の実技に意味は不要ず

この成績は、筆記だけで出来ていた

そんな学生生活だった。

何やっても謹慎だった。

良いことでも悪いことでも、何かすれば謹慎だった。

それでも退学にならなかったのはエヴァさんと学長、数人の先生のおかげだった。

同期の友達にも心配かけた気がする。

迷惑かけたとも思うけど、単純にうれしかった。

この世界で頼つてもいい人がいるってことが。

ただ、うれしかった。

でも迷惑は率先してかけてく。

我慢するくらいな全て破壊するのだー!

対抗戦の会場に着いたのだがマジでやることない。

3日前とかマジふざけんな。

むしろ、ふざけんな。

……ふざけんな。

いいぞ、ふざけんな。

なんか語呂がいいぞ、ふざきんな。
声に出したくなる。

ドミナントやイレギュラーの毛づくろいとかも完璧にやったが余裕で時間余った。
しようがないので観光する。

俺らの大陸からスタープーンとか売りにきてる屋台もあつた。

スタープーンってのは食ったら人気が上がりやすくなるとか。

実際、食い物で人気がるとか眉唾すぎるが名前を気にする家紋持ちとか家名持ちが
買ってるのだとか。

甘いから俺も好きだけどね。

他にも○○グミみたいなのも売ってる。

こつちの大陸には珍しいっぼいね。

ドミナントを連れて歩くと目立ってしようがない。

食い歩きしてて混んでいても人が左右にわかれて道が開けていく。
超楽。

注目されるのは有名税にしとく。

チラツ☆ってやつたら泡吹いて倒れたからとかじゃねえから。

そんなんじゃないから。

……ごめん、あつちで騒ぎになってるの俺のせいだわ。
さ、逃げよう。

カフェでオーヴァンが爽やかにコーヒーを飲んでたけど無視する。
紅茶かもしれん。

俺の嗅覚でも流石に店内の個人が飲んでる物はわからん。

誰が嬉しくて野郎と茶を飲むかよ。

リオはエヴァさんと買い物に行ってしまった。

ハム先輩はせっちゃんとなんかやってんじゃねえの。

ガンダムごっことか。

興味ねえからどうでもいいや。

俺のクールなノリと彼らの熱血なノリでは合わないんだすまない。

やることねえよ、マジで。

マジで暇人のマジンはマジックを真面目に交えながらマジンのマジシャンとしてマジになった。

……なんだこの早口言葉、簡単すぎか。

街中でドミナントやイレギュラーと遊ぶと人がいっぱい死ぬだろうから何もできん。

一般人に紛れて生活しているベジータの気分かもしれない。

俺の右手がうずいてやがる……!!

むしろ全身が、である。

コンセントレイトの後に全体魔法使つて街を火の海にしてえ。

俺の嫌いな協会のやつらもみんな死んでくれないかな。

……なんてね。

エヴァさんとかリオとかハム先輩を巻き込むのはなしだな。

オーヴァンは、まあ、いいんじゃないかな。

意味深なこと呟いて結局教えてくれないやつは要らないんだ。

なんで魔王とかいねえのかな。

アニメ版みたくムーとか現れたら俺も大活躍なのに。

ムーつてゲームで再生するとめっちゃ弱い。

誰だよ、ALL999とか言い出したの。

ピークロンと同じ成長適正だぞ。

CD探して損した。

はあつつかえ。

ビークロンでカブトムシっぼいあいつだぞ、あいつ。

Fateでいうセイヴァーが実はカブトムシスベックだったのと同じ意味をモンス
ターフアームでは持つのだ。

救済してくれるサーヴァントだとしてもだとしてもそれは無くね？

それはねえよ。

気付いた時のガツカリ感は異常。

悪モンのビークロンとか育てにくくてしょうがない。

極悪モンなビークロンとか価値あんのかよ……。

名人位のパブス先生とやらが激励に現れた。

顔こええええ。

ヒゲの威圧感。ハねえ。

俺の顔より怖い。

なのに人気。

マジふざきんな。

え、今？

誰もいないつすよ。

先輩方は出かけたし、オーヴァンもモンスターを見に行つたし。

え、レッド？

いたのか、知らんかった。

毎度のことながら協調性が無い奴や好き勝手する奴ばかり代表になるつて愚痴られても困る。

エヴァさんとか貴族社会否定派なので、その筆頭らしい。

外面だけ気にしてるやつには才能あつても活かせないつてことなんじゃね。

勝てばいいんだよ、勝てば。

好きにさせてくださいあ。

帰る？

あ、はい。

ありがとうございます。

あ、はい、頑張ります。

偉い人に頑張れつて言われたの久しぶりかもしれん。

校長とかエヴァさん以外は聖人君子みてえなバファリン以上の優しさでできてる先生しか応援してくれたことねえし。

あれは人気出る。

うん、しかたないね。

強面でいい人とかギャップパネエよ。

俺も優しくして人気アツプしてくるわ。

ウツキウキで外出たら通りの人々が気絶したんだが……？

ピクシーから手紙きた。

マジすげえな、こいつ。

俺の泊まつてる宿宛てに手紙出すとかすげえ。

レースあるからいけない、ごめんねみたいな内容。

レース優勝したら許すって書いてくか。

まあコイツなら絶対優勝する。

俺が言うんだから間違いないわ。

つうかこれってレース後に届くんじゃねえの。

なら最後に優勝おめ☆って書いておくか。

完璧である。

おまえのこと超理解してるからー、超信頼してるからー、である。
手紙出してくるか。

アテイ先生がいた。

超困ってる。

人々も困ってる。

こんな混んでるのにナンパとか頭沸いてやがるのでデビルスマイル。
相手は恐怖状態になった途端に逃げていった。

亡者の嘆き使わせろよ。

皆死ぬぞ、ふあっはははははははは……はあ。

アテイ先生。

レックス先生とは赤髪な美形双子である。

究極の双子だと思う。

ツイーンズ・リーサルウエポン。

恩師の一人。

実技からふつーの授業まで幅広く行える万能ちよーじん。

しかも双子とも性格は聖人君子。

優しさはバフアリンを軽々と超える。

で、鈍感。

双子で、しかも両者ともに鈍感だから浮いた話とか聞いたことねえ。

基本はレックスせんせーが実技、アテイせんせーが授業だった。

補習も先生から受けた。

この双子の両方と補習とか贅沢すぎたけど、疲れるんだよなあ。

先生奇遇ですね、結婚しましょう。

なんてね☆

いいおっぱいである。

素晴らしい足である。

舐めたいくらい白い肌である。

年の差が……とか赤くなりながら言ってる先生マジ萌える。

ほわほわである。

一度怒らせて白くなった先生はめっちゃ怖い。

抜剣覚醒とか反則である。

間違いなく最強。

ギャグ補正も掛かってたから俺は一生勝てねえ。

雰囲気はほわほわである。

それに加えてほわほわな赤い長い髪に乗せた白い帽子が、無敵である。

しかも鈍感で天然。

授業時にはメガネ装備。

勘違いする男子生徒が後を絶たない気がする。

先生に声をかけて正気に戻ってもらう。

回りくどい告白とかは気付かなかつたり天然要塞に阻まれたりするのに意味不明な

くらいの直球には弱いらしい。

タツグマツチまで超暇だから見て回ってたとか。

まあ、暇だよな。

俺らの次の日だろ。

来るの明日でも良かったんじゃないやねえの。

片割れのレックス先生とか、助手を務めている同期のツンデレのベルフラウとかア

リーゼはモンスターの子見。

そのうち戻ってくるらしい。

ツンデレがそろそろ戻ってくるらしいので俺の癒しタイムは終了。

眼福だった。

ほわほわな笑顔におっぱい。

ほわほわな笑顔にふともも。

ほわほわな笑顔に……ふう。

とりあえず素晴らしかった。

超結婚してえ。

ピクシーに手紙を出す予定があるので俺はこれでって別れようとした時の先生の目は生温かった。

わかってますよって目をしてた。

ほわほわである。

凄く可愛いくてほわほわで癒されたが最後に凄く背中が痒くなった。
なぜだし。

手紙を出してたらだらしてると物凄く騒ぎになった。

モンスターが野外で乱闘してる。

あぶねーからブフダインで頭を冷やしてやろうと思って観衆の頭上を飛び越えて一番前まで行く。

ブリーダー同士の争いらしい。

この前の乱闘なんて俺だけが謹慎だぜ。

ストレス溜まるわあ。

マジでねえわ。

話は戻るが片方はどう見てもゴロツキである。

モンスターはモノリス、渋いぜ。

寿命が短くて育てにくいだよね、技は結構いいけど。

もう片方は輝く情熱を秘めた目で後ろに少女を庇ってる。

モンスターはデキノ……デキノだ!!

デキノはヤバイ。

初めて育てたモンスターだから思い出深い。

全部平均的なんだけどそれがまたいい。

ゲームやりたてでよくわからなかったからすなかけされまくって泣いた。

かみつくが予想以上に使えて喜んだのは今でも覚えてる。

結局、休息とか大会とかの理解が少なかったのでグレードはBどまりだった。

ドラゴンに負けたときは小学生ながらに男泣きした。

遠距離のブレスが卑怯だって騒いだ気がする。

それまで自分も笑いながら敵のレンジ外から攻撃してたくせに。

次に育てたのはガリニクス。

背が金色に輝いて綺麗だった。

修行とかも適当にやりながら育ててたけどホントに楽しかった。

時間を忘れるつてのはああいうことを言うのだと思う。

Sまで到達したんだけどガリ系の炎の壁で即死。

泣いた。

泣きながらリセットした。

修行出したら炎の体当たり覚えて超喜んだ。

けど次の週で死んだ。

泣きながらリセットした。

結局、俺が名人になってエンディングを見たのはメロンボだった。

その前にも数々のモンスターが俺の元を離れていった。

今見るとポリゴンもしよぼいけど、それでもおもしろい。

素晴らしい思い出のゲームだ。

……ふう。

ちよつと思い出に浸ってたらいつの間にかストリートファイトが終わってた。なんか熱く語って、それに感化されたゴロツキが涙を流しながら握手。なるほど、わかった。

あの情熱の瞳を持つあいつは主人公なんだな。

あだ名をあげたいところだけど思いつかねえ。

キラが一番いいけど、もういるし。

スザクは違う、多分。

うざい主人公が思いつかねえ。

くそつ……俺のメモリーよ、輝け!!

思い浮かばねえわ。

しゅじんこーでいいや。

「あ」よりはマシだろうよ。

「かんてい」は違うか。

感動の場面なんだけど戦いが激しすぎたのか、店の看板が取れ掛かっているけど誰も気づかねえ。

丁度、適当に空を飛んでいたドミナントが帰って来たので指示を出す。

落下する看板、助けるドミナント。

……空気を壊してしまった。

やべえ。

さすがの俺も空気は気にするので去ることにする。

良いモノを見せてもらった。と、しゅじんこーに声をかけてからドミナントに乗って逃げる。

友好アピールのためのニヤリ笑いも忘れないぜ。

これをすればとりあえず考えなしだったりその場凌ぎであつても意味がありそうに見えるだろ？

重宝してます。

とかエヴァさんから感染しただけだけだね。

まあ、良いデインだった。

今の俺ならデイン族全部いいモノだけだね。

空気はそつちで構築してください。

俺はFIMBAのモンスター見て回って暇つぶしを思いついたから忙しくなるんです。

リオを拾ってモンスター観光に行くしかねえわ。

あいつは知らないだろうし、珍しいのもいそうだからね。

3

FIMBAのおひぎ元だけあってテンション上がるよね、やつぱり。

デイノがいつぱいだわ。

ロードランナーよりも多いよ、これ。

ちよつとした環境の違いで俺の方では育てられないんだけど、やつぱりいいよなあ。

ブリーダーはデイノに始まり、デイノで終わるって格言があるくらい有名な。

すべてのモンスターはデイノから生まれたって話もあるくらいだ。

ホントなのだろうか。

まあ、そのうちデイノを引退するようになるんだけどね。

色々なモンスターを育ててみたいって欲求があるわけですよ。

育てれば愛着湧くからなんだっていいぜ。

でも不細工なモンスターは無理。

男に生まれたらならテクノドラゴン、ベニヒメソウ、プロトメサイアを育てるべき。

なお2では、データ入れ忘れられたがためにプロトメサイアは抹消された。

やっぱりモンスターが少しばかり違うのが印象的だ。

あつちとこつちではモンスターの生活も違うのが影響してるのだろう。

1のみのモンスターであるマジンやラクガキ、貧弱なディスクも見ておきたかった。こつちだとプラント族がめちやくちや強かった気がする。

ゲームだと1が育てやすかったから2では調整が入ったとかだろうけど、この世界の場合では気候の違いが如実に表れているとか。

へーって感じですね。

ナンゴクラクガキとか存在するからI M aのほうが日差しが強かったりするのかもしれないね。

いや、わからんけど。

ガリがふよふよしてた。

あれはいいモンスターだ。

性格が良いモンだから言うことを聞いてくれて育てやすかった気がする。

技が使い込みとか必要で微妙だったけどエフェクトはカッコいいから好きだ。

攻撃をスタンドに任せてるようなモンスター。

ただしスタンドは身体の中から出る。

リオにガリでも勧めようかと思ったが可愛くねえから止めておく。

ナーガは性格悪いしステ微妙だし短命だからムズいし、でも技がいいだよな。

威力とかエフェクトとか。

でも可愛くねえわ。

普通にニヤーとかでいいか強さは微妙だが。

あ、でもノウマンと被る。

あいつなんでニヤー族育ててるんだし。

ワン種。

ニヤー×ライガールの犬っぽいやつ。

名前はアヌビス。

名前負けしてっから。

なんつうの。

もう、飽きてきた。

M F I のヒロインであるホリイも当然いねえし、デイノも見終わったからマジでやる

ことねえから。

飯は洋食っぽいので食べにくくてイライラする。

誰だよ選手で食事会やれって指示出したの。

協会だった何時かころちゅ。

ナイフ、フォーク、スプーン。

俺の敵だろ、こいつら。

俺の家は箸なんだよ、箸。

うわ、箸持って来ればよかったし。

育ちがよくねえ俺はマナーなんてわかんねえから使いにくくてしょうがない。

まあ、チート能力が完璧な動作を俺にお届け。

ストレスで皿にぶつけてカチャって音をたてただけでエヴァさんに手を叩かれる。

マジでストレス溜まる。

なんで皆使うのうめえんだし。

つうか様になってて俺だけ浮いてる。

まさかのせつちゃんにまで負けるとか、うそ俺下手すぎ……。

部屋で一人モソモソと屋台の食い物でも食うかなあ。

行儀よくお上品に食うとか俺に完全に合って無いから。

おかわり無しとか意味がわかんねえし。

腹いっぱい食べることが幸せだと思ってる俺とこの宿では考えが全く違うらしい。

協会が俺に仕向けた刺客に違いない。

もうね、味が全くわかんね。

わかるけど美味しくないと言うか。

いい宿だけどこんなぶるじよあじーなのはやめて欲しい。

俺ってば似非紳士だから。

静かな飯って嫌いなんだわ。

なんで皆で食うのに無口なのって感じである。

こんな場所にいられるか、俺はドミナントと食うぞ!! ってやろうとしたけどエヴァアさんには逆らえねえ。

さっさともってこいよ。

なんでトロトロと一品ずつ持ってくるんだし。

まさか厨房に入り込んで全部食うフラグか？

やめてよね、俺が本気出したら厨房なんて敵う訳ないじゃないか。

みたいな。

こんな食事してアンタたちは何が楽しいって言うんだー!!
みたいな。

あ？

なにみてんだ？

協会の豚どもにメギドラオンすんぞ。

俺のメギドラオンは豚どもにとってきつと格別だろうよ。

きつと昇天するわ。

あのクソ豚どもが地獄行きなのは確定的に明らかだろうけど。

男は黙ってオレンジジュース。

オレンジがるのかって？

あるよ。

普通にある。

あとは名前が違うだけで味は日本のに似た食い物もあるし、ヨウカンもそんな感じ。
ソナバナナとかあんじゃん。

ほら、バナナが存在してるって証拠ってわけでもねえけどバナナに似たモノはあることがわかるだろ。

つまり、どういうことなんだってばよ。

まあ、ヨウカンもある。

ヨーカンとかそんな感じだった気がする。

ヤマトとかそんな感じの国だ。

日本っぽいところ。

めっちゃ遠いから品々も高え。

手作りできる物に関しては俺が作ったりするのだ、箸とか茶碗とか、いろいろ。

ビンボーには買ってる余裕なんてなかったのだ。

畳とか死ぬほど感動した。

あれはヤバいね。

あと米。

米マジうまい。

エヴァさんのところで食ったのがこつちでの初めてだった気がする。

あとはジャガもどきとか食ってた。

安くて腹が膨れるとかサイコーです。

今では見たくもありません。

マヨネーズのないジャガイモとかただのイモじゃねーか!

なんて考えながらオレンジジュース。

オレは一人、静かにオレンジジュース。

みんなコーヒーか紅茶しか飲まねえとかおしやれすぎてぶち壊したい。

匂い混ざってるけどホントに美味しいの? ねえねえ?

まあそれはそれとして俺の優雅なティータイムが爆破された気分。

会場に来てからいいことねえわ。

アテイ先生のほわほわしかいいことなかったわ。

ストレスがマツハ。

コルトが睨んでんだけど、俺が何かしたかよ。

改めて確認するとかいつ小さいな。

コルトと言えばあいつがいねえわ。

レツド。

宿に着いてるって聞いたから部屋にでも籠ってんじやねえの。

羨ましい。

俺は信頼が無いらしいから偉い豚どものためにここにいないといけならしい。

マジで畜生のために頑張る俺とか健気すぎ。

あ、イライラしてきた……屠殺すんぞ、豚ども。

なんてね。

ふはっはははははははは

泡吹いて倒れてやんの。

いい気味だし。

俺をハブにして楽しんでるからだ。

ストレスで寿命削れて死ね。

ライフの2倍ダメージで即死させてやんよ。

……なんてね☆

というわけでね、ベルフラウと隣り合ってオレンジジュース。
なぜだし。

ツンデレとか別にいらねえから。

ツンベルはレックスせんせーに片思いでもしてろよ。

最後はアリーゼに負けると見た。

まあ、気にすんな。

相手が悪かったよ、うん。

憐みの視線を向けたら頬をつねられた、やめて!

この金髪でちんまいあからさまにツンデレな少女はベルフラウ。

名前は……うん、きつといい名前だと思うよ。

俺の同期でブリーダー育成の専門学校に通っていた。

試験に受かればこいつのように少し幼いんじやねって思うようなやつからノウマンとかバルバトスみてえに何しに來たのおまえら、世界滅ぼしたり英雄殺したりしろよって感じのやつらまで様々である。

学長的にもイロモノが最も多かったんじやねえかな、俺の同期って。

そんな奴らを抑えてた先生とかマジ憧れる。

ギルガメッシュすらアティ先生に止められた。

抜剣覚醒には勝てねえわ、しようがない。

イメージ的にはギルガメッシュがバビロンして調子に乗ってたらUBWの剣が全部真名解放して飛んできたぐらいの力の差だった。

それでもわかんないって?

無人機から敵の機体までKARASAWA無限撃ちで弾幕ゲーみたいな状態だ。

ばっか言わせんなよ、恥ずかしい／＼／
あとはインベーダーで、もこたんと弾幕ゲーするくらいカナ☆

ツンツンベルフラウ、縮めてツンベルとの情報交換はまあまあ役に立った。

助手として活動してるやつや自立し始めたやつもいるらしい。

ギルガメツシユは知らねえって。

だよな、あいつ友達少ないし。

ツンベルとは相性最悪だしな。

そこなデコ、私の消しゴム拾え ああ？ぶちのめしますわよ金ぴかあ!! みたいな感じだった。

消しゴムとか超シユール。

結局拾うのはエルキドゥ。

ギルガメツシユの家に仕えてるらしくてパシリみたいなやつだったからエルキドゥにしたけどびびったりだった。

そもそもあいつん家って家紋持つてて家名もある超名家でエヴァさんの天敵じゃん、何もしなくても遊んで暮らせるうー!

つうか学習机に座って勉強とか違和感がヤバかった。

いや、俺の同期ってみんな机とかノートとか似合わねえやつばっかだったけど。

まあ、社会人で大学院に通うとか博士号を取るとか、そんな感じだったのかもしれない。

いまいち価値観がわからん。

というか偉いやつらの価値観なんてわからん。

こっちは異世界出身スラム経由の純血ストリートやぞ。

同期で助手してるのはアームストロングらしい。

家族がブリーダーやつてるし教わっておくわ、みたいなやつである。

そんな奇特なやつ少数だけど。

ゲームのコレトとかこれだな。

初期ディスクだとあいつ最初以外はバグで働かねえんだよな、給料を遠回しに要求してんのか……？

ブリーダーとして独り立ちしたり、当主となって家を背負ったりしてるのもいる。

レッドとか霞な。

ピクシーもこれに含まれるな、特殊派生的な進路だけど。

家名持ってて特殊派生持ってて金持ちで家紋持ってるやつら。

ピクシーは家名持ちだったな。

父がレースで家名を勝ち取ったとかどうとか。

ちなみに家名は覚えてない。

ピクシーは俺と同じく覇道を極めてるはず。

レース圧勝でこまっちゃうな☆みたいなことを言うに違いない。

俺の相棒だったからな。

綺麗に飛んで凄く速い

最強だわ。

つうか結構な賭け金をおまえに払ったから勝て。

まあ、負けるわけないだろうけど。

俺が言うんだから間違いないねえ。

レットと同じく霞もマジ静かな娘だった。

あと頭の髪飾りが動く。

どうなってるのかわかんねえけど凄え。

ウサミミもどきである。

感情表現乏しいかと思っただがあれで結構豊か。

なんか知らねえけど髪飾りに連動して髪がびこびこ。

超可愛い。

俺は霞判定名人級だからどんな気持ちかわかる。

つうか俺の弟や妹に似た奴がいるからなんとなくわかる。

それに類似キャラ(?)なレッドもいるから倍ブツシュ。

俺がおまえらの理解者だからー!!みたいな気分。

……びこびこ

え、ニンジンくれんの?

びこびこ

超うれしんですけどー☆

びこびこ、びこびこ

みたいな感じだった。

ジャガもどき以外ならなんでも好きだし。

あの学生生活は楽しかった。

いいやつらばかりだよ、ホント。

んで、何やってるのかわからなかったり親のスネかじってたりするやつもいる。

アヌビス(笑)を育てている、らしいノウマン。

どう考えても怪しい研究です。

キラさま（笑）はなんか正義の味方してきれいごとでも吐いてるんじゃないかねえの。
無職で自立してねえくせに。

ピンク教にハマって今日も貢ぐ、貢ぐ、ミツグ君である。

ピンクと合わさるとめっちゃうるさい。

ついプチツとしたくなる、なんてね☆

バルバトスは旅して道場破り的なことをやってるに違いない。

英雄を倒しに別の大陸に行きそうだし。

今日も斧でモンスターを倒していると予想。

ハンターじゃないのにモンスターと戦うとかやばい。

モンスターなんぞ使ってんじゃないかねえ！って叫びながらキラに殴りかかった蛮族だし。

……外れてなさそうだから怖い。

ブリーダー歴1年目が新人ブリーダーと呼ばれるのだが、誰かしらの助手となる実習があつたのだが。

俺らの時の人数は「新人ブリーダー」俺ら」くらいの人数だったが、俺はなぜか嫌われていたので希望を出したところからNGを喰らった。　　チヨロそうだったのでその家を支配しようと思ってたなんて、二割くらいしかない。

NG判定の後は普通にハム先輩の助手として回された。

そこでは俺もガンダムだった。

今年は「新人ブリーダー」へ後輩」だったのでアテイ先生とかレックス先生のほうにまで助手として進出。

つうか先生んとこまだ見習いしてるやついんじゃない。

どンドン増えて「モンスター」へ助手」と人数が逆転するんじゃない。

エヴァさんなんてあんまり助手とらないし、取っても1年で解雇。

スパルタです。

俺も学校入る前に1年やってたけどきつかった。

レッドもいた。

帽子をあげたのもそれくらいだった気がする。

そしてエヴァさんという美少女（年齢不詳）の寝顔はサイコーでした。

あれはヤバイ。

神とか超嫌いだけど、神性とか絶対やべえことになってるけど嫌ってるのでBとかになってるけど、そのときは感謝した。

眼福でした。

白いからな、肌。

足とか長くてやべえ。

ロリコンになるわ、あれ。

うん、しようがないね。

世のオリ主もあれにフラグ立てたくなるのはしかたない。

真祖？

素晴らしいじゃないか、究極の美が永遠に残るなど　ふはっははははは、みたいな感じ。

キティさん、結婚してくれ!!

冗談である。

……でも綺麗だって思ったのはホントだ。

身内には優しい、いい人だよ。

本音としてはプロポーズが通ったらすぐ結婚したいのですが、構いませんかね!

そんな感じでダラダラしてたら大会当日である。

宿の入り口に皆で集合。

大事なイベントだから正装である。

俺にスーツを装備。

なに疑ってんだし。

いいから行けよチビ。

名前ですら呼ぶ気が失せてきた。

こいつのせいで昔、俺はヘンガーのピークを間違えて育成失敗の憂き目に。
早く行けって。

俺からのカララギマンゴーってことを伝えろよ。

俺から、が重要だ。

カララギマンゴーの友はきつと重要ボジのはず。

あとは、おまえらしくってことも伝えておけよチビ。

カララギマンゴーあれば伝わるから大丈夫だ。

おまえらしくカララギマンゴーを愛して食べるよってことだけだ。

やっとき……誰？

誰だし。

背中が大きく開いたドレスを着たセイバーですね、ギルガメツシュと戦っててください

い

黒髪ってことはまさかの色違いですか。

黒はオルタなのに黒セイバーを増やすとか失望しました。

自分の世界へ帰れ。

え、エヴァさんなに嬉しそうにニヤリってやってるんすか。

覚悟はできたかとか言ってるけど誰だし。

ハム先輩もそれでこそ私の後輩だ!!みたいなノリノリである。

あるえー？

なにこの展開。

オーヴァンも……わかってたさ。

そういう反応するのは。

何が、いい顔してるだし。

誰だよ、これ。

何を呆けているんだと言われても困るんだが。

誰だよコイツ。

え、レッド？

おま、これレッドさんなの？

考える時間をYO☆KO☆SE!!

へるぷ、へーるぷみー!!

どうすりゃいいんだ!!

くORISYUの知恵袋く

Q. 長年の友人が実は女性でした。可愛がっていましたが、弟のように接していたと思います。どうしたらいいのでしょうか、すごく困っています。

A. そうですね。とりあえず、そんなエロゲみたいな展開はありません。落ち着いて行動しましょう。

答えを……得たぞ、ピクシー!!

今のレッドは女ではないと思いつむ。

↓いつも通りいけば完璧

↓そして今はとりあえず勢いで凌いで後で悩むべき。

かんっべき。

これでゴリ押しする。

「すまん、少し驚いていた」

訳：↓初めて見たからビビっておどろいたからマジ勘弁してよね☆ おめえら皆、この世界の人間が美形過ぎんのがいけねんだよ。テンパって言葉でねえ、どうすんべ「だが、少し遅かったな……言葉は不要か……」

訳：めっちゃ必要です。特に今の俺には、たくさんの言葉が必要かと思われます。説明を要求したい。

だが、今の俺は脳が沸騰しかけるほどにいっぱいいっぱいなのだ。
もうこれで凌ぐ。

完璧だ。

お馴染みの合図。

軽く拳を打ち付ける。

こっんって。

じゃあ、行くか。

え、なに？

いつか俺を超えるからっだつて？

帽子は置いてきたとか言われてもわかんねえけど、とりあえずコイツはあのレッドな
んだと思う。

待っているよ。

歩くような速さで進みながら、な。

つてニヤリ笑いするのが俺の限界だった。

脳がやべえ。

カララギマンゴー食い過ぎた呪いかもしれん。

いくせい、もんすたー! 3

— 1

平均よりも背の小さな、そしてこのことを誰よりも気にしている張本人である少女はイライラしていた。

少女の名前はコルティア、親しい人物はコルトと呼んでいた。母譲りのサラサラと流れるような柔らかい茶髪が自慢だった。

天真爛漫を絵に描いたような彼女であったが、イライラの原因がすぐそばにあることで普段とはかけ離れた心理状態だった。

悪魔がいることへの恐怖や苛立ちが余裕のない心を苛んでいた。

灰色に近い雑草のようにパサついた白い髪の毛。元から白ではなくまるで黒かったモノが色落ちしてくすんだような濁った白。灰を被っているような印象を受けるほどだった。

普段は顔や髪を隠しているトレードマークといっても差し支えない大きな黒いバンダナは右の二の腕に巻かれていた。

人を殺せそうな、というか殺すのを気を付けているような鋭い視線。まるでこちらの考えをすべて読んでいるかのように錯覚する黒い瞳。

そこにいるだけで空気が重くなるほどの重圧を感じる存在感。

莫大な勇気を振り絞って目を合わせた者に恐怖と絶望を味あわせるために用意されている額を引き裂かれたような大きな傷跡。

読み取ったかのように心を鷲掴みにし、頭に直接語りかけてくるような声を発する口。

その強大な雰囲気とは引き換えに、奇妙なアンバランスさを感じさせる身長が高い以外は普通の体躯。

普段着ている色褪せてボロボロになっていく服（リオや先輩が作業服と呼んでいる物）とは違う、悪魔を彷彿とさせる真っ黒な正装に今は身を包んでいる。

魔王にしか見えない。

彼女の嫌いな悪魔がそばにいるが普段通りならば、特になんの問題も生じていなければまだ我慢できた。

そいつがバンドナを外していること、ただそれだけの事だが彼女にとっては重要なことで、そんなことが抑えていた怒りが限界に達しようとしていた。

必死に体の内側から溢れそうになるその感情を抑えるように無言で耐えていた。

視界に入れないように、そして考えないように。

ここまで必死になるほどその悪魔が初めから嫌いだったかといえ、そんなことは無かった。

ただ、トラウマを餌に悪感情が育った。

それだけだった。

憧れのレディア先輩の助手を務められることになり、一点の曇り以外は夢見心地といつても過言では無い日々を過ごした。

親友のリオがバンダナの悪魔の助手となり、時たま手紙を交わすだけになっていたのが彼女の持つ唯一の心配だった。

大丈夫なのだろうか、リオを思い出すたびにその考えは抱くがどうすることもできなかった。

憧れの先輩に相談しようとも、彼なら大丈夫だからと言われ続けなんとか納得していた。

公式戦で出会ったリオの様子はどこも可笑しくなかったが、悪魔に信頼を向けているのは一目でわかった。

思えば在学中からリオはあの悪魔に傾倒していた節があったのだが。

長い時間をかけて仲良くなつた親友と短時間で信頼を築いていたことによる嫉妬だったのかもしれないが、コルトは段々と不満を露わにするようになっていた。

リオがなんとか助手を辞めても大丈夫なように掛け合ってもらえないか、と先輩に相談したが怒られるだけだった。

より悪魔を嫌いになつたのはその時だったし、嫌悪の気持ち加速し出すのもその頃だった。

バンダナの悪魔。

それは彼女が入学したときから耳にしていた言葉である。

友好的で明るい彼女は自然と友人が多くなり、またそうなるように努力もしていた。

そして、増えた友人たちからその悪魔の噂を聞く回数が多くなっていた。

耳馴染みになるのもそう時間を置くことはなかった。

何度も聞いていれば親近感が湧く。

それが噂に聞く悪魔に対してだったので好意といったものは無かったが興味はあった。

校舎の何処を破壊した、また謹慎になった、睨むだけでドラゴンがひれ伏した、空を飛んでいた、炎を吐く、空を凍らせた、人を引き裂いて血を飲んでいたなど。

どれもこれも眉唾モノで信じることはなかった。

所詮は噂であつたし、性格もあつてか悪感情を抱くはずが無かつた。

本人と出合い、話すまでのことだつたが。

コルトはモンスターが好きだつた。

大好きである、と薄い胸を張つて公言するほどだつた。

親友の制止を振り切つて朝まで語つていたくらい大好きだ。

なぜかと問われれば心辺りはいくつも思いつくくらい好きになる理由に溢れていた。

父がブリーダーだつた事も一因だつたのだろう。

彼女の気持ちが見える空のように曇つていったのは実技の授業が座学に変更したのを聞いたからだつた。

モンスターに触れ合うことの出来る実技を心待ちにしている彼女にとって、どうしても納得のいかないことであつた。

我慢できずに担当の赤い髪が目立つレックス先生に抗議するも、口を濁すばかりだつた。

ただ、伝え聞いた話ではあの悪魔が何かをやらかしたらしい。

不満は募るばかりで、内心で悪魔を呪っておいた。

中庭のベンチに腰かけて空を眺める。

お昼になつても気持ちちは晴れなかつた。

なんとなく、それどころか雨が降りそうなほどに真つ黒い雨雲が、ごろごろと雷を鳴らしていることすら不快に思えた。

空が一瞬白んで見えたので、雷が落ちたのだろうか。

音の大きさや光からどうやらかなり近かつたらしい。

屋内に避難しなければと立ち上がる。

どうせなら悪魔に当たればいいのに、と毒づきながらも頭の片隅でなぜこんなに引き摺っているのだろうかとも考えていた。

大きな砕けるような音が聞こえた。

音は徐々に近づき、そして目の前の校舎の一部が砕けた。

悲鳴や叫び声といった騒音が遠くに感じた。

校舎の瓦礫の真ん中には青年が立っていた。

視線はこちらには向いていなかった。

全身が焦げ付き、額から顔まで真つ赤に染まり、その赤は流れるように滴っていた。

ギラついているその眼光はまるで昔見た野良の悪モンのように、一目でコルトの背筋

を凍らせた。

滴っている赤い液体——血液——に塗れたその顔は同じ人間とは思えなかった。

直視するに堪えない別のナニカ。

これがあの悪魔だろうと確信した。

思わず目を逸らすと悪魔は気絶した純正のドラゴンを背負い、腕には華奢な女性を抱えていた。

意識が無いのだろうか、目は閉ざされたままであった。

噂で確実に耳にすることになっていたバンドナは女性に巻かれていた。

不思議なことだが今の今まで気付かなかった。

悪魔の存在感に充てられていたのだろうか。

「待ってくださいー!」

悪魔はまるで何も見えていないかのように通り過ぎようとしたが、道を閉ざすように彼女が立ち塞がったのは半ば無意識での事だった。

授業中止の鬱憤も相まっていたのだろう。

噂だと聞き流していた悪評が頭を駆け巡り、鬱憤と正義感が合わさって彼女の足を動かしていた。

「何をするつもりなんですか! その人寝てますよね!」

一応、先輩だと聞いていたので丁寧語で対応したのは理性が抑えていたからだろうか。

無意識に言葉に棘を含めていた。

悪魔は立ち止まり、血を意に介さないかのようにゆつくりとこちらを、見た。校舎から聞こえていた悲鳴が消えた、そんな気がするほどの静寂に包まれた。

即座に視線を下にずらしたのはほとんど反射のようなものだった。

本能が警鐘を鳴らしたから勝手に下がったに他ならない。

見てはいけないものだと、知らせてくる。

怖い。

その感情を抱くのと、ひゅっという音とともに肺から息が抜けるのは同時だった。ぱくぱくと口を動かすが上手く息を吸うことが出来なかった。

頭の中が真っ白だった。

気温が一気に下がったような寒気で肌が小刻みに震えだした。

呼吸が儘ならない。

小さい頃に一人で眠るのがなぜか怖かった。

何も見えない暗闇にいることが我慢できなかつた。

そんな恐怖を思い出させるような。

それでいて、そんなものは生易しいのだと嘲笑っているようだった。

「……………退け」

極度の吐き気。

自分が立っているのか、それともへたり込んでいるのかわからなかった。

顔は多分……………いや、間違いなく青ざめているだろう。

呼吸が不規則ではがはと自分で出しているのか疑うような音を発しながらなんとか空気を取り込む。

たった一言でこの様だった。

悪意に充ちている呪いの言葉そのものだったように感じた。

「……………い、……………あ」

私の質問に答えろと発したかったがそれも叶わなかった。

限界だった。

意地で立っているだけでは耐えられなかった。

「……………この程度なんだろうよ」

意識が途切れる中で聞いた言葉は嘲りのように感じた。

気負いなく歩く悪魔と背を見つめるだけの自分。

悪魔との出会いは途轍もなく苦かった。

その日から彼女はバンダナの悪魔が嫌いになった。

自分を否定されたように感じたその出来事が彼女のトラウマとして残っている。気付かないほどひっそりと、少しずつ恐怖によるストレスが蓄積していた。

「ポワゾンがまだ来ていないようだな」

あいつの声が聞こえた。

憎悪が燻る。

抑えていたために臍気になっていた意識がはつきりしていく。

不意に会ってしまった目。

必死に勇気を振り絞って止めようとした自分に興味が無さそうな表情。

先輩を慕っていたから。

悪魔を嫌っていたから。

崇拜に近い感情を持つ先輩の家名を聞いたから。

嫌悪する悪魔の顔を見てしまったから。

そんな理由が引き金となって、彼女の気持ちが出た。

「貴方はなんなんですか!!」

あの時と比べれば見戯としか呼べない軽い威圧感。

悪魔は聞こえていないかのように虚空に視線を向けている。

「突然現れて失望したなんて言って!!」

いきなり空から降りてきて、好きならだけ言って帰って。

憧れの先輩がこんなやつ言葉で落ち込む姿を見て。

「期待しないなんて言って!!」

慰めようとしてもコイツが正しいって自分を責めて。

何もできない無力感を味わって、先輩の信頼を見せつけられて。

「貴方がいたから、貴方のせいだ……貴方に先輩の何がわかるって、言うんですか……」

先輩の苦しみも知らないこいつが酷く憎くて。

それでも睨みつけることしかできない自分が不甲斐無くて。

先輩にどうしても謝って欲しい。

その言葉がどうしても出てこなくて。

睨み返されるだけで泣き出す自分の弱さが悔しくて。

流れる涙が鬱陶しく感じた。

「これを渡せ」

無様に泣いている姿を見つめながら悪魔が差し出したのはカララギマンゴーだった。

「あなたは、どれだけ私を馬鹿にすれば……。そんなもので先輩の気が晴れるとでも思っているんですか!？」

カララギマンゴーが自分を虚仮にしているように感じて頭に血が昇った。

自分でも八つ当たりだってわかっているけど、止め処なく流れる気持ちに歯止めが効かなかった。

「なら、十分だろうよ」

「何が十分なんですか、こんなもので!!」

「いいから早く行け、あいつの好物だ」

普段の無表情と違い、ときどき嬉しそうにカララギマンゴーを齧る先輩を思い出して頭が冷える。

だから、どうしたのだという思いもある。

「だから、なんなんですか」

「いいから行け 俺からだってことも告げろよ」

だから、謝る必要はないのだと。

心のどこかでこの人は先輩を信頼しているのだろうと理解して。

先輩のことを何でも知っていることを羨ましく思つて。

「ついでだ。レッドらしく歩けばいいって言つてやれ」

何も言い返さずに持つていくのは先輩のためだと自分に言い聞かせて。

振り返つて持つていこうと思き出して。

昔よりも悪魔に慣れたのだらうかと思いながら。

「早く行け、チビ」

やっぱり悪魔は嫌いだ。

大嫌いだ。

——2

彼はピクシー族が好きだった。

そして育てている人間が嫌いだった。

理由ははつきりと聞いたことが無いけれど、彼との付き合いは長いつもりだ。

意識してしまうくらいには世話を焼かれたこともあつた。

予想は簡単についた。

彼の深い部分にいる妹のことが関係しているのだらう。

それが羨ましく思いながら、内面を出さない不器用な彼のことをこれだけ理解しているのだと誇らしくも思った。

その事が今は煩わしかった。

理解していながら自分が行うことは最低で、最低だとわかっていながらもポワゾンを使わなければならなかった。

知らなかったと言い訳もできないことが更に拍車をかけた。

学校を卒業して、ファームで助手のアルバイトと一緒にモンスタを育てていた。

設備が綺麗すぎるのは家紋があるからだろう。

逃げた家があるところまで影響するなんて、なんだか滑稽に思えた。

家に帰らない意思を文で送って、それだけで解決したとは思っていなかったが当面は大丈夫だろうと樂觀視していた。

公式戦を優勝したことが間違いだった。

もしかしたら出場したことが間違いだったのかもしれない。

静かにひっそりと目立たないブリーダーとして生きるべきだった。

サクラモチの力を示そうなどと思うべきではなかった。

選抜戦の招待状を渡すために、と協会から呼び出しを受けた。

迎えのドラゴンは僕一人で乗るようにとの指示もあった。

おかしいと思いつながらサクラモチが認められたことで、舞い上がっていたのだらう。

協会で一度は見たことのある家紋を持っているブリーダーたちと一言二言の祝いを貰い、招待状を受けとつて帰ると泣きながら謝っているコルトがいた。

家からの呼び出しと、サクラモチが連れて行かれたこと。

見通しが甘かったのだと、気付くには遅すぎた。

急いで向かった家で父から告げられたのは一方的な宣告だった。

ポワゾンで勝て、負ければモツチーは消す。

それだけだった。

嚴重に警備された冬眠装置の一つにはサクラモチが眠っていた。

どうしようもなかった。

逆らうことができるほど僕は幼いわけではなかったし、自分の家の影響力もわかっていた。

彼に頼れたらいいのにと考えてしまう。

頼つてばかりだったから同等に見てもらおうんだって決めてそれほど経っていないのに。

愛くるしく僕の周りを飛ぶポワゾンが憎かった。

家紋は命よりも重い。

父の口癖を思い出した。

家名・家紋の両方を象徴するポワゾン。

大陸対抗戦ほどポワゾンを世に知らしめる威光は無いのだろう。

過去の対抗戦に出場した者もポワゾンを連れて勝利していた。

十分なほどのポワゾン家の地位をさらに強固に、さらに盤石にするためか。

僕には興味のない話だったが関係はしているのだ。

僕の意思は無いものとして、家の誇りが鎖のように巻きついた。

昔から嫌いだった家が今でも僕を縛っていた。

ポワゾンに情を注がず、厳しくトレーニングを積ませる日々。

不真面目ならばさらに厳しく指導した。

いつも感じていたモンスターの気持ちもわからなくなっていた。

ただ、何も考えないようにしていた。

自分が育てたモンスターを失い、家が受け継いだ優秀なモンスターの特権で選抜戦に

出場する自分が浅ましく思えた。

呆気なくらい簡単に優勝した。

サクラモチのように苦戦することも、僕の指示を必要とすることも無かった。

何も考えないようにしていたはずなのに、それが疎ましくて手をあげそうになったとき、彼は現れた。

青い不思議な炎。

ヒノトリ族の特殊派生のはずだが、誰も持っていないモンスター。

ブリーダーの下に在中ではたった一体しか確認されていない伝説の存在。

火山の守護神でありながらノラモン指定で賞金の掛かっていたフェニックスによく似ている綺麗な羽根。

何処から連れてきたのかは知らないが、一人と一体の姿は様になっていた。

ドミナント。

彼が育成するモンスター。

彼が渴望した、彼を畏れない相棒。

彼の信頼を一身に受ける存在。

それが羨ましかった。

「お前には失望した」

疲れきったポワゾンを一目見て、そう言った。

そして、その言葉に君に何が解るのだと、叫びたくなつた。

「もう期待はしない」

彼はそれだけ告げて、ドミナントに乗った。

縋りたかつた。

ただ、自分が憎くなつた。

彼の思いを真つ向から否定していた自分はなんなのだろうか。

信頼されているのも、期待されているのも知つていた。

自惚れなんかじゃないって自信を持って言える。

だからこそその、喪失感だつた。

裏切つたのは僕、裏切られたのは彼。

引き止めようとして開いた口からは、何も発することが出来なかつた。

言い訳すらできないまま、彼を見送つた自分がみじめに思えた。

ファームに戻るまでの記憶が曖昧だつた。

コルトが心配そうに声をかけてくれたが、それすらも気にならなかつた。

ただ、凄く喉が渴いていた。

水を飲んでも渴いていた。

夜、別の部屋で寝ているコルトを起こさないようにひっそりと外に出た。

カララギマンゴーを右手に持っていたのは渴きによる無意識だったと思う。

空を見上げると僕の気持ちとは裏腹に皮肉なほど澄んでいた。

星空は綺麗な思い出ばかりだった。

きつとこの陰鬱な気持ちも晴れるんじゃないかって期待して、地面に寝転んでジツと見つめる。

マスタアの助手になったのも。

彼と霞と天体観測したのも。

ピクシーが飛んでいたのも。

アテイ先生とレックス先生の補習を一緒に受けてから、寄り道しながら帰ったときも。

綺麗な星空だった。

少し気分が楽になったように感じて、喉の渴きを思い出してカララギマンゴーをふと見た。

彼にカララギマンゴーを貰ったのも星空だった。

喉がカラカラとさらに渴いていく。

学校が楽しかった。

悩んでもすぐに解決できた。

壁にぶつかってもいつの間にか無くなった。

自分一人の力だと思いついでいた。

何時も彼は手を差し伸べてくれていた。

気付かないようにこっそりと。

「ねえ、僕は何を間違えたんだろう。教えてよ、ナナシ……」

夜空を眺めながら齧るカララギマンゴーは酸っぱくて、涙が止まらなかった。

いくせい、もんすたー!—3

—3

マイナス3話!

暇つぶしに書いてたら溜まったから繋げたやつだよ!

前日譚的なサムシングだね!

俺は今、助手をしているわけです。

なぜかって?

モンスターハンター紛いの活動が出来なくなったからです。

なぜかって?

お偉いさんの権力闘争(パワーゲーム)に巻き込まれたからです。

なぜかって?

生活費を稼ぐためにモンスターハンター紛いの活動をしていたらお偉いさんの争いに巻き込まれたからです。

なぜかって?

それは……ちよつとこれやめよう。
無限ループしかけてるし。

とりあえず、この世界に來た俺は浮浪者をやっていたわけだが、流石にそのまま絶望して死ぬのはダメっしょと年端もいかない少女に説得されたので頑張ろうと決意した。で、いろいろとテキストに仕事をして転職を見つけた。

そう、モンハンである。

しかもソロプレイ。

普通は討伐にもギルドだとかチームだとかで仲間を作り、複数で囲んで倒すのだが俺はソロ。

自分の強さにビビっちゃう。

それで荒稼ぎ、というほどでもないが結構やりすぎた。

名前が売れるくらいやりすぎた。

そしたら貴族とやらの面子を賭けた狩場に駆り出された。

提示金額が良かったからホイホイ着いていっちゃったんだ☆

後はわかるっしょ。

貴族と不良は空気と面子、脂ぎったご飯で生きてるってわけだ。

結果として職を失った俺をエヴァってブリーダーの人が助手として引き取ってくれたので食いつなげるようになりました。

いやあー、感謝感謝☆……するわけない。

そもそも俺が職を失ったのはパワーゲームのせいだし、被害者だからね。助手とか言ってもかなりブラックだし。

世界が優しくなくて泣いた。

俺の朝は早い。

イカ漁くらい早い。

ごめん、ちよつと盛った。

もう少し遅い。

空が白み始めるくらいに起きるから。

そしてエヴァさんが育成しているモンスターの餌を用意する。

モンスターは巨体なので当然量も多い。

一人で行うのが下っ端のツライところですよ。

テキパキと餌を準備して、それぞれの寢床へと持って行く。

コンバット用のモンスターは気性が荒いモノも多いので、仲の良しあしや機嫌の上がり下がりなどで戦闘を始めてしまう恐れがある。

別に戦ってもすぐに鎮静化させられるが餌が飛び散るのでそれぞれの小屋で与えるのだ。

与えるのはこのファームの所有者であるエヴァさんが育成中のモンスターや移動手段用のモンスター、助手として滞在中のハムさんのモンスター、俺が試しに育てている年離れたドラゴンなどである。

肉体的な疲労は大したことないが往復が多くて結構めんどい。

朝のトレーニングまでに与えないとエヴァさんが怒るから急ぐ。

別に怒られても怖くないが説教が長くて精神的に死ぬ。

だから丁寧に急ぐ。

餌を落とすとノラモンとか寄ってきて虐殺されてしまうから丁寧に急ぐのだ。

ノラモンならまだマシだが、どっかの偉い人のモンスターが来たら悲劇だ。

まず死ぬのは確定として、その後だ。

無かったことにしなければならぬ。

権力闘争が始まったら面倒なので、無かったことにしなければならぬ。

知っても知らない、いてもいない、有り得ることもあり得ないことにしなければならぬ。

ない。

つまるところ、殺して刻んでばーらばら。

で、刻んで潰して埋める。

小さいのならまだいいがでかいのだと海に蒔く必要すら出てくる。

証拠とか出てくるとアレなのでこのファームとは正反対の海岸に肉片を転がしたり、相手の家に血煙として送り返すなどサービス盛りだくさん。

なみに俺の仕事。

というか、勝手にやってる仕事。

エヴァさんは気付いたら自分でやるのだが、悲しそうな顔をするので俺がやる。

しかも、わざと送り込んでくる馬鹿もいるからこの問題は馬鹿にできない。

最近ドラクエの聖水を村の周りに蒔く人みたく、ファームから離れた位置に円を描くように俺の魔力を巻いて近寄らないようにしてみた。

結果は上々。

成果は上々。

欠点は弱いモンスターが入ろうとすると死ぬので宅配サービスが使えないことかなー。

餌をやり終えて、ひと時の自由を得た。

この時間は俺のモンスターであるドラゴンとの交流に充てている。

ドラゴンは寿命が近いためか、年老いていてかなり穏やかだ。

俺が眼前に立って世話しても何の問題も無い。

ちなみに最初に練習用として宛がわれたライガーは酷い抜け毛に悩まされ、気付いたら見知らぬ人に渡っていた。

ドラゴンの爪の先から羽根、鱗の一枚一枚を丁寧に拭いていく。

トレーニングをしようにも年だし、戦わせるのも年だし、もう介護の域だ。

現役時にはコンバットで活躍しまくり、引退後も他のモンスターのトレーナーとして頑張っていたそうだが、やはり寄る年波には勝てないのだろう。

ブリーダーってなんだろうな、と世話をする。

ドラゴンが寝ぼけて噴いたプレスに包まれているとエヴァさんに声をかけられた。

なんか用つかねー、と振り向くとエヴァさんの隣に黒髪の子供がいた。

背丈はエヴァさんと同じくらい、髪はちよつと長いくらいの少年だった。

新しい助手らしい。

とうとう俺にも部下ができるのか、とちよつと感動した。

よろしくなーと挨拶するが引かれてしまった。

ああ、炎の中から挨拶されるとかちよつと怖いよな。
失念していた。

腕を振って炎を掻き消してから挨拶をもう一度。

……なんでそんなに怯えてるんだ？

エヴァさんに面倒を見てやれと押しつけられた。

……マジ困るんすけど。

腰をかがめて視線を合わせ……ようとするが逸らされた。
とりあえず名前を聞いてみる。

が、無言。

出身地、趣味、好きな物、e t c。

無言。

ゲームの主人公か何かか、こいつは。

罅が明かない。

視線も合わない。

というか肩が震えている。

え、なに、怖がられている的なサムシングか。

どうしろって言うんですかね……。

！的なマークが出る勢いで一つの考えが浮かんだ。

モンハン紛いを行っていたときに、取引時に相手を威圧しないようにと妹から貰ったバンダナのようなでかい布を頭に巻いて目を隠す。

でかい布のようなバンダナかもしれん。

どうよ、とドヤ顔。

チラツとこつちを見たが視線を逸らされた。

ちよつとイラツときた。

もういいや、とモンスターの世話を説明していく。

基本的な雑用が助手の仕事である。

後はエヴァさんが知識を付けるために授業をするのでそれを受ける。

ハムさんがテキトーに何かやるので付き合ってガンダムする。

以上、おわり。

もつと他に何かあるんじゃないかって？

ないよ。

しいて言えばトレーニングに付き添うくらい。

後はモンスターが悪い事したらテキトーに躡けするとか。

適度になら甘やかしてもいいけど。

重要なのはどれくらい同じ時間を過ごしたかだと思う。

真面目な話、コンバット中に縫れるモノは己の努力とブリーダーとの絆だけだから。

他人に育てさせたモンスターほど薄っぺらいモノは無い。

助手の仕事を説明し終えて、次にエヴァさんのファームを説明して回る。

わかっていたことだが、喋るのと目を合わせるのが苦手のようだ。

自室から買ったけど結局使わなかった帽子をかぶせてやる。

ん、ちよつとでかいな。

まあ、これで目を合わさなくて済むっしょ。

呼び名は……レッドでいいや。

なんか似てるし。

「いよいよこれから君の物語の始まりだ!」なんてな。

このセリフだと俺がオーキド梓になっちまう。

とりあえず説明終わりにどれだけ把握できたか確かめてみる。

訥々とだが、きちんと全部答えた。

……や、やるじゃん。

俺よりも覚えが早いんじゃない。

……。

何も問題ないな。

むしろすぐに憶えてくれた方が俺が楽できるし。

モッチーバツジを帽子につけてやる。

よく頑張ったで賞的なやつ。

俺と俺と俺、総勢1名の俺による手作りだ。

財布に入っていた小銭を熱したり、潰したり、削ったりして作ったやつ。

世界でただ一つである。

初歩で与えたので位置づけはグレーバツジくらいだろうか。

子供扱いに悔しがるがいい！

レッドは静かに帽子を外してバツジを眺めはじめた。

予想に反して悔しがることも怒ることもなかった。

何を考えているのかわからないので、そんなレッドを見て待っている。

と、レッドが勢いよく顔を上げた。

頑なに視線を合わせようとしなかったとは思えないほど真っ直ぐにこちらを見ていた。

どうしてバッジをくれたのかと聞いてきた。

……意趣返しに悔しがる姿を見たかったとは言えないしなあ。

レツドの働きを認めて与えた（超意識）と伝えた。

家がどうか、お金がどうか、レツドが言ってきたがよくわからないので否定して
いた。

レツド自身を認めた結果だ（超言い訳……じゃなくて真実）ともう一度伝える。

なんかレツドの頬が朱に染まっていた。

やべえ、ニコポしちやつた☆

……嘘です、そんな能力ないつす。

なんかバッジが嬉しいようだ。

目もキラキラしてるし、バッジを服で磨き始めた。

仕立てのいい服なのにそんなにしていいのだろうか。

子供ってよくわからんね。

そういえば妹のポムニツトもテキトーな物を与えたら喜んでたし。

ブリーダーになるまで帰ってこないでって言われたけど、無性に帰りたくなつた。

これがホームシックか……。

日本？

日本っぽい国があるらしく、高値だが日本食なども手に入るので帰れなくても問題ないです。

そんなこんなで雑用も終了。

昼食時に軽く挨拶、順序がおかしい気がしなくてもない。

レッドはレッドのままとなった。

エヴァさんもハムさんもレッドと呼ぶようにするのかなんとか。

まあ、俺くらいになると相手が名乗らなくとも名前がわかってしまうからね☆
その後にエヴァさんによるつよいブリーダーになるための授業を受ける。

授業内容は結構めんどい。

色々知らないことが多いからしようがないね。

まあ、一番めんどいのは言語だけだ。

表音文字と表意文字のミックスで、基本は表音文字だが、強調するときには表意文字を使う的な感じだ。

こう書くと日本語っぽいのに、どちらかというと英語に近い。

な、めんどいっしょ？

エヴァさんに「モンスターの育成で重要なもの」みたいな問題を出されたので「肉体」

と「精神」の疲労、次いで信頼関係とドヤ顔で答える。

疲労、ストレス、恐れ度はモンスターファームと切っても切れない関係だし。

ゲームでのモンスターは寿命が決まっていて、そこからストレスと疲労の値によって決まった寿命が削られていくシステムだ。

この世界も同じっぽい。

最近の研究には円盤石のモンスターごとに寿命が決まっているかもしれないの話をエヴァさんが確証はないが、と言いながら教えてくれたし。

で、俺の解答は概ね正解とのこと。

ただ付け足すとすれば、「ブリーダーの素質」も必要だと。

俺には問題のないことですね、とドヤ顔。

鼻で笑われた。

そして「おまえ、通常のモンスターと生活できないだろ」と言われた。

……俺に付いてこれないモンスターなど要らないっすよ。

俺は尖りまくりでレッドは素養抜群とか。

言われているレッドは嫌そうな顔をしていたけど。

授業が終わってちよつとした自由時間。

ドラゴンのところで昼寝しようかと外に出る。

……。

レッドがちよこちよこと付いて来る。

自由時間だから何してもいいんだけど、と伝える。

付いてきたいとか。

なんか懐かれた^q。

まあ、勝手がわからないから俺に頼るんだろうと過ごす。

そんな感じで一か月くらい構いながら過ごした。

暇なときは変わらず後ろをちよこちよこついで来る。

やっぱり懐かれたっばい^q。

なぜだ？

バツジか？

バツジで好感度アップしたのか？

レッド君、ちよつとちよろすぎんよ。

季節が変わり、レッドも大体のことを覚えたが一緒に雑用っばい手伝いをして、授業

を受け、育成の手伝いっぼいことをして過ごした。

以前とあんまり変わってない気がしないでもない。

ハムさんが助手を終え、学校を卒業し、ブリーダーとして独り立ちしたくらいか。

俺も入れ替わりで入学するののかと思ったらエヴァさんに止められた。

後期の4月ならいいらしい。

まあ、桜の花と一緒に入学するのは日本人である俺に合っているし否は無い。

聞いてみたら前期は古い連中が多いとか。

何が古いかって？

派閥とかそういう系っぼい。

大人しく後期入学するわ。

夕食後にドラゴンの背に乗って月見をする。

俺くらいになると「ここの月も同じだな……」みたいなイケメンっぼいことをナチュラルに呟いてしまう。

やはり最強だからね、中二も許されるんだわ。

むしろ中二病じゃない最強とか溶けたガリガリくん、湿気たかつぱえびせん、腐ったカララギマンゴー、モッチーのマンナみたいな感じになってしまう。

マンナって何って？

バケモノに決まってんだろ。

ググったらわかる。

いや、待て。

やっぱりググるの禁止。

……犠牲は、俺だけでいい。

月があつて、星があつて、太陽があつて、四季があつて、人間がいて、それ以外がいて……。

そういうのは元の世界とあんまり変わらないんだよね。

違うのはモンスターの有無くらいか。

これが結構大きな違いっぽい。

戦争とか起きたらモンスターの出番だったし。

だから貴族とかが存在するわけで。

強いから活躍する、だから偉いな。

昔の話で今は違うけど。

かつては優秀な人物のための制度だったかもしれないが、今となつてはどうだか。

いつまでも優秀な血を受け継ぐことは……やめよう。

めんどくさいし。

それに、レッドも来たし。

……やっぱり俺に懐きすぎじゃないですかね。

湯上りなのか、ほこほこと湯気を上げているレッドが扉を開けて外に出てくるのが見えた。

ドラゴンにテキトーに戻って寝る様に声をかけてからレッドの方へと向かう。

モンスターに言葉が通じるか知らんが、ゲームだと褒めたら喜ぶし叱ったら落ち込むので、まあ、通じていると仮定していつも話しかけている。

実際、返事っぽく鳴き声という吠えるし、普段もそういつた素振りを見せる。

他のモンスターも多々ある。

賢くないモンスターでも一応は意思疎通が取れてると思う。

というか、通じて無かったら試合で指示する意味が無いし。

言語は通じていないが、意思は伝わっている的な結論を出している研究もあるとか。意図が伝われば、ぶっちゃけ何だって良いと思う。

マジで。

湯冷めするからとレッドの背を押して中に戻る。

何をしていたのかと聞かれたので月と星を見ていたと返す。

故郷と同じようだったけど付け加える。

レッドも夜空を見たいと言い出したので、窓際まで椅子を運び、座らせる。

髪の毛が濡れたままタオルを巻いているだけなので、乾かす手伝いをする必要があるな、これは。

レッドは俺の故郷が気になるらしい。

ずっと東と答えるのがテンプレか。

東に日本っぽいのあるらしいし、間違えてもない可能性が……あるわけ無い。

そんなことを考えていたら逆に興味を持たれてしまった。

レッドの母親も東の人っぽい、もう亡くなったとか。

俺も両親は（この世界に）いないし、気持ちはわかるかもしれない。

どうかな。

レッドには東のジャパンっぽいところの血が混ざっているとか。

まあ、この綺麗な黒髪を見れば納得である。

結構伸びたので傷つかない様に乾かして艶を保つのも一苦勞……なんで俺が苦勞しているのだろうか。

結って帽子に仕舞い込むのもコツがいるのだ。

以前、学校に入るまでにはレッドも自分で出来るようになったほうがいいと伝えるとちよつと拗ねられたことがあった、まだまだ子供っぽいところもあるようだ。

同じ様に瞳も黒いのは、黒が優勢遺伝だからってやつだろうか。

知らんけど。

肌は白いので日中とか白黒過ぎて半端ない。

夏場とか日光で死ぬかもしれないので注意が大変だった。

アギとザンの魔法で手から温風を出して髪を乾かしていく。

手は10cm以上離し、風力を強めるのが最大のポイントだ。

髪の毛のキューティクルは痛みやすく熱風に弱い、タオルなどで擦るなど論外だ。

乾かし方としては、髪の毛を乾かすと言うよりも頭皮を乾かす、という表現が近いかもしれない。

頭皮が濡れていると乾かした髪の毛が湿ってしまうし、髪の毛自体は熱に弱く乾くと熱が籠りやすいので先に頭皮を乾かすのだ。

水が垂れてこない様に首筋まわりや耳周り、おでこから徐々につむじを目指す。

くすぐったそうに首を振るレッドの髪を撫でる様に一気に乾かして、髪の毛が湿っている程度で一度熱風を止める。

前にも言ったように髪の毛は熱に弱く、しかも乾くと熱が上がりやすいので、最後は

風で水分を飛ばす。

ザンでぶおおおお、みたいな感じで仕上げる。

念入りに乾かし、前に回るとちようどレッドと目が合った。

が、逸らされた。

あんまり目を見られるのは好きじゃないとか。

澄んだ黒で俺は好きなんだが。

聞いてみると気分が高揚してくると赤く染まるのが恥ずかしいらしい。

レッドは目が赤くなるとブリーダーとしての能力が100%解放されるクルタ族の

可能性が……無いか。

そういえば日中とかモンスターの世話している最中に目が合うと少し赤みがかっているように感じるが、そういう理由だったのか。

血管、というか血液が透けて赤く見えているのかと思っていた。

アルビノ的な感じで。

目を合わせるのを避けていたのが俺の眼光によるものじゃないと知ってテンションがちよつと上がってきた。

赤くなるのか、ちよつと見てみたい気がすると思乗る。

乾かす手は止めない。

が、まじまじと顔を見つめてみる。

必死に逸らすレッドの顔を髪の毛を乾かすついでに巧みにこちらに向ける。なかなか目を合わそうとしないので無駄な我慢比べが始まってしまった。

髪を乾かし終えた。

終了かと気が弛んだレッドに、櫛で梳かす旨を伝える。

焦りながら自分でできるとレッドが言うが、大抵は俺がやっているのだから遠慮するなど宥めて梳かしはじめる。

ちよつと楽しくなってきたし。

まあ、寝る前のちよつとしたコミュニケーションやってやつだ。

夜更かしは出来ないので一気に勝負を決めに行く。

夜空についての話だ。

「宇宙やばい」から始まる有名なコピペである。

宇宙の無限大な広さに思いを馳せるやつ。

で、夜空に好奇心が湧いたあたりで「アンタレスばねえ」で止めを刺す。

太陽よりはるかに大きく、体積も物凄いのだと話をしていく。

実際、この世界でどうなのかは知らんけど。

反射して輝いているのと自ら輝いている惑星は存在しているので問題ないと思う。

メタルナーという宇宙人っぽいのがいるが、むしろ宇宙への憧れを加速させるスパイスでしかない。

レッドに囁くようにメタルナーという宇宙人が感情を知るためにモンスターとしてこの星に来ているという話も重要な前振りとしておく。

仲良くなれば星の海を間近で眺められるかもしれないと言いつつ、最後に「あ、メタルナー」で締める。

やはりまだまだまだ子供だな、というのがレッドと目が合った俺の感想である。

次いで少し赤みがかっているが、光源がランプなので分かり難いというものだ。赤くなっているな、とにやりと笑いながら指摘してみる。

見事という他ない鮮やかな紅に変化した。

ルビーのような、とベタな表現になってしまいがそれくらい綺麗な色だった。

それを見て思わず太陽の下で見てみたい、と感嘆の声を漏らしてしまった。

レッドさんがジト目になってしまった。q

話を聞くとレッド的には目は黒いほうが気に入っている。

が、赤ばかりを褒められてうんたら。

俺はどっちも良いと思うけどね、と言っておこう。

納得していないのかジト目が直らない。

赤い瞳を隠しているつもりなのかもしれないが、これはこれで良い。どっちがいいかと聞いてきた。

子供って二択が好きだよね。

両方とも綺麗、というのはダメらしい。

究極の二択にクラスチェンジしたんですけど……。

たっぷり推敲して答えを出す。

黒、だな。

光によつて輝くような黒のほうがいい。

まあ、赤もときどき見たい気がするけど。

ジト目が直り、瞳も若干黒に戻りつつある。

どうやら許してくれるらしい。

寝るのに適した髪型がわからんので結っているが、翌朝ウエーブになるのがなんだかなあと思いつつ結局結っておく。

はい、終わりと頭をぽんと叩こうとしたらするりと避けられた。

行き場を失った手を宙に彷徨わせ、握ったり開いたり。

開いておくのも虚しいので軽く拳を握ってみる。

なぜかレッドも軽く手を握って、俺の拳に触れるように当てて、「おやすみ」と自室に戻って行った。

フラれた感が半端ないです。

なんかさびしいので寝酒に現れたエヴァさんの頭を撫でてみた。

めっちゃ叩かれた^q^

雪も融けてそろそろレッドが来てから季節が一回りしそうな時期となった。

あとふた月ないし、ひと月くらいで学校が始まる。

が、忘れていたことが一つ。

そう、入学試験だ。

やべっ。

ま、まあ、エヴァさんの推薦があるから問題ないっしょ。

え？

面接だけじゃなくて記述試験と実技試験がある？

うわあ……。

そんな感じで落ち込んでいたが試験が迫ってきた。

前日に学校の近くのホテルに泊まることになっている、というかエヴァさんに言われているので準備したのだが。

テンション駄々下がり俺の手を引くのは、反して元気なレッド君。

まだ昼前だから。

早すぎるからという俺の言葉はあまり聞かずにドラゴンの背に乗ってスタンバイ。

行きたくねーとだらだらしているとエヴァさんに尻を蹴られた。

見えた! 黒!

やったぜ! q~

めっちゃ叩かれた! q~

レッドが落ちないように抑えながら街に着いた後にやることを思い返す。

飛行諸々の許可は取っているから着陸した際に向こうで必要な手続きをしなければ

ならないし、試験の確認なども必要だし、宿もあるし、その他もある。
めんどくさいわ。

だるくてしょうがない。

インターネットで簡単登録とかが懐かしいレベル。

円盤石からの再生とかモンスター冬の冬眠とか変なところで技術が発達している癖に
こういった手続きはレトロなんだよなあ。

新聞とかタイプライターの的なやつ使ってるし。

と、思ったら印刷機っぽい存在もあるわけで。

凄いわからね。

レッドが魔法について恐る恐るといった様子で聞いてきた。

興味があったのは知ってたが結構シビアな問題だからね、慎重になるのもしょうがない。
い。

とりあえず俺は混血ではないと伝える。

というか、混血でも俺ほどの魔法を使えるわけじゃないじゃん（ないじゃん）

混血が間近にいないとわからんことだろうけど。

一般人でも魔法、というか不思議な力的なやつが使える人がいるっしょ、かなり昔に
混ぜた的な感じで。

多分それなんじゃね、嘘だけど。

そういえば王族とか貴族に魔法つぽいの使う人がちらほら……。

え？

奇跡？

あつ、はい。

そういうことですね、理解しました。

レッド（あだ名）

本名はなんたらかんたら・ポワゾン。

ぐうの音も出ないほどヒロインしていた気がする。

父との不仲により家出したとかそんな感じがするようないような。

いくせい、もんすたー！0

— 1

私が気付いたときにはすでに噂は学校中に広がっていた。

友人のコルトから聞かなければ私が噂を知るのはもっと遅くなっていたに違いなかった。

それくらい私には友人が少なかった。

コルトは明るい性格で友達も多い娘だ。

少し前までなぜ私と仲が良いのかと疑問に思ったほどだった。

少しばかり背が小さいことを気にしているがブリーダーを指して勉強に励んでいる姿は好感が持てた。

「ねえ、聞いてる？」

「え？ きやつ!!」

突然、コルトが目の前まで迫ってきていたので驚いてしまった。

考え込んで気付かないだもん、とくすくすと笑いながら声をかけるコルトに少し睨んでから何の話だったか聞き直す。

「……ホントに聴いてなかったんだね」

「う……ごめん」

話を無視していた私にコルトが拗ねた口調で呟く。

睨んだことの罪悪感もあつていたたまれずに謝る私にまたもくすくすと笑いながらコルトは冗談だと言った。

「でも考えすぎる癖は直した方がいいと思うよ。来年の研修で先輩ブリーダーの助手をするでしょ？ ちゃんと話を聞かないと、ね」

コルトの正論に対して私が出来たのは普段の小さい声を殊更小さくして呟くように気を付けます、と言うことだけだった。

「なんてね」

「え？」

「リオをイジるのはおしまい。反応が面白いから良かっただけだよ？ ごめんね」

笑顔でそうのたまうコルトにさきほどの事を忘れて怒ろうとしたのだが、ニコニコと笑いながら謝るコルトに言いたいことを飲み込んだ。

「それで、何の話だっけ。またレディア先輩のこと？ もう100回以上は聞いたんだ

けどな」

「ち、違うよ。まだ100回も先輩の話なんてしてないんだからね!!」

「まだってことはそのうちするつもりだったんだ……」

「し、しないって!! 今ガツコウで噂になってることだってば……」

レディア先輩とは私たちの一つ上の先輩だ。

成績優秀で容姿端麗、まるで絵に描いたような万能の人。

人気が高く、憧れている生徒は2桁じゃ足りないのだとか、なんとか。

コルトも例に漏れず、先輩のファンであつたが私にはよくわからなかつた。

その憧れの先輩を引き合いに出してコルトをからかう。

先ほどの意趣返しとしては趣味が悪いとは自分でも思うが少なからず溜飲が下がつたようだった。

「あはは、冗談だよ。で、噂って?」

もう、と頬を膨らませていたコルトだったがその噂を私に話す方が重大だったのかすぐに口を開いた。

「バンダナの悪魔がまたやらかしたらしいよ。謹慎だつてさ」

「バンダナノアクマ?」

バンダナノアクマとはなんだろうか。

私が知らないモンスターかアイテムか、判断が付かないところだ。首を少し傾げながら聞き返す。

「リオ……まさかバンダナの悪魔を知らないの？」

驚いた、とばかりに目を大きく開きながら聞いてくるコルト。

うん、と何処か気恥ずかしく思いながらも正直に頷いておく。

まさかこの学校にあの悪魔を知らない生徒がいたなんて……と呟いて俯いたのだが、2、3秒ほどで気を取り直したのか一度頷いた。

「バンダナの悪。彼はとても我が校では有名です」

真剣な表情で話し始めたコルトは少し背伸びをしているようで可愛かったのだが、本人に伝えるとムクれて話が進まないの口を閉じたまま聞く。

清聴、というまさに聴くものの姿を体現しているのではないかと思う程に姿勢を正す。

「彼是我々の一年先輩であり、様々な事件を引き起こしました」

「そして、謹慎」

言葉とともに小さな手を広げて指を交差させてバツを作る。

「事件を起こしては、謹慎。事件と謹慎の交差。なぜ退学にならないのかと思うくらいの問題児。むしろ退学にすべきです。私はあの目が嫌いなのです。そもそも……」

うんうんと頷きながら独り言に走るコルトを横目に初めて聞いた噂を解釈していく。謹慎するということはきつと悪い事をしたのだろう。

そもそもこの学校に謹慎なんて制度があったのか。

むしろこんな学校で謹慎するなんて何をすればいいのだろうか。

というかコルトが嫌うなんて一体どんな怖い人なのだろう。

最終的にレディア先輩とお昼ご飯を食べるシミュレートをし始めたコルトに疑問をぶつける。

レディア先輩に対してのみ起こるこの態度は、少し……いや、かなりやめて欲しい。事件ってどんなことを起こしたの？」

「私のカララギマンゴーと先輩の……はっ、え、あ、うん？」

「聞いてた？」

「……ごめんね。ええと、なんだっけ？」

「コルトもその癖を直すべきだね」

「……返す言葉もありません」

先ほど言われたことをコルトに皮肉として言い返す。

小さいコルトが縮こまって居た堪れなそうにする姿は私の心をくすぐる。

妹に対する気持ちに近いのかもしれないが生憎私には姉妹がないのだ。

心地いいので時々やっているこの癖も意地悪いので辞めた方がいいのかもしれないが、文字通りクセになる。

「で、バンダナの悪魔って先輩はどんな事件を起こしたの？」

「知らない」

「え？」

「知らないけど見たことはあるの。あの雰囲気は悪魔そのもので何をするかわからないくらい怖かった。リオも危ないから近寄らない方がいいよ」

雰囲気怖かっただけでコルトが嫌いになるのだろうか。

それとも言葉通り、悪魔のような人間なのだろうか。

でも悪魔なんて見たことがない私には想像がつかなかった。

「鋭い目をバンダナで隠しているのはやましい事がある証拠だよ、きつと。あの凶暴なドラゴンや性格の悪いスエゾーを睨んだだけ屈服させたとか。まるで悪魔の所業ね」

「……他には？」

「あとね、レディア先輩とかシルフィーユ先輩と仲がいいらしいんだけどね。ああ、悪魔に憑りつかれた先輩をどうやって救えばいいのかな……」

今、悪魔と呼ばれている一番の理由を知った気がしたのだけれど私の気のせいなのだろうか。

まあ、それでも謹慎を起こしているってことは問題があったからだと考えるのが普通なのだろうけど。

バンダナの悪魔の話聞いてからちようど一週間がたったある日の夜。
私はテスト勉強で鬱屈していた気分を晴らそうと寮を抜け出した。

門限は疾うの昔に過ぎていたけれども構わなかった。

学校の中心、その広場にある時計台に背を付けて座り込む。

まだ冷え込むには早い季節だ。

呆けながら夜空が綺麗だな、と雲一つない空を眺めていた。

「よう、少女。もう門限は過ぎてると思ったのだが、俺の勘違いだったかな」
「ふひやあ!!」

誰もいないと思っていた場所で声を聞くななんて思わなかったので奇声を発してしまつたが突然聞こえてきたら誰だつてそうなると思う。

きよろきよろと周りを見渡しても人影はなく、探していない時計台のてっぺんに目を凝らす。

そこには一人の男が空を眺めていた。
頭に過つたのはバンダナの悪魔の話。

奇妙なことにコルトの話に聞いた通りバンダナを頭に巻いていたがそれ以外は普通の青年だった。

これが噂になるほどの悪魔なのだろうか。

ずっと目を眺めていた青年はこちらを見ることは無かったが私の無遠慮な視線に気づいたのだろう。

口元を歪ませながら聞いてきた。

歪ませた、と表現したが不快になるようなモノではなく、苦笑いをしていたのだろう。が、バンダナで目元が隠れているために歪んでいるように見えた。

「……何か気になることでもあるのか？」

「いえ、別に。……先輩も門限を過ぎてるように思いますが」

「ああ、なるほど。確かに俺もだな」

くくく、なんて愉快そうに笑っている先輩は噂に聞く悪魔の要素など一欠けらも感じさせなかった。

ただ、バンダナのせいで不審者には見えるかもしれないが。

「ところで、俺が先輩だとなんでわかったんだ？」

「先輩は……有名ですから」

確かに、と納得したのか先輩は口を閉じた。

視線をこちらに向けることは無かったし、会話はここで終わりなのだろうと自然に思った。

「二人で女の子が散歩くと襲われるかもしれないが」

幾らかの時間が経った頃、先輩が不意に口を開いて発した言葉がそれだった。

悪魔と呼ばれる男がなんて平凡なのだろうか。

思わず笑いがこぼれてしまった。

「あはは、先輩面白いですね」

「面白かったのか……？」

視線は空に固定したままなのだが先輩は私の言葉が理解できなかったのか首を傾げて。

その行動すらもツボに入ってしまった、平静に戻るまで時間がかかったのだが先輩が悪い。

悪いのだとしておこう。

「ふう、で？」

「何が『で』なんだ？」

「だから、先輩は私を襲うんですかってことですよ」

何を馬鹿な、と先輩言った。

「人畜無害であると、俺は思っている」

「……事件起こしたり、謹慎したりって話を聞きましたけど」

「なら、理解が足りないんだな」

「事情は知りませんが、理解するには難しかったのでは？」

くくく、と先輩は笑っていた。

口元を歪めて、悪役の様に。

まさにその姿は悪魔だと思いながら、頭の片隅ではよっほど人間らしい悪魔なのだと考えていた。

「それでも、理解しろ」

本当にこの人はあくま、なのだろうか……？

まるで理解されないことに駄々を捏ねて、自分本位でモノを考える子供のよう。それとも考えすぎて周りからおいて行かれた大人の様に。

もしかしたら、この人は私にはわからない何かを知っているのかもしれない。

でも

「……先輩」

「なんだ」

「ちよつとかわいいですね」

「何故だし」

少しだけ拗ねたような表情をするこの人と話せて良かったと思つた。

噂に踊らされていたらきつと自分では会話する機会も無かつただろう。

ちよつとだけ良かったと、人と話せて良かったとホントに思えた。

……ホントにちよつとだけ。

「先輩は何を見てるんですか」

「空と月」

「面白いんですか」

「そうだな。まあ、普通だ」

「なら、なぜ」

「いつもだつたら妖精が空を飛んでるんだが今日も見れないみたいだな」

「妖精ってピクシーですか？」

「知ってるのか、後輩」

「……男の子なんです、先輩」

「……何故だし」

「だって、ねえ……？」

「何が『ねえ』なのか問い詰めたいんだが」

「幼気（いたいけ）な後輩をいじめるんですか。悪魔め」

「悪魔でいいよ。悪魔らしいやり方で話を聞くから」

「……冗談ですよ」

「ならば良しとしてやろう」

「命の危険を感じたんですけど」

「悪魔と話して無事でいられるわけがなからう、若人にやりと笑う先輩はやはり悪魔なのかもしれない。」

— 2

先輩と話した夜は先週のこと。

今はすでにテストも終わり、結果が廊下に張り出されていた。

優越感や勝利感。

劣等感や敗北感。

心の流れ渦巻くその一角は私が立ち入るのを拒んでいるようだった。

一人で行く気にもならず、見ていないという私の言葉に何を思ったのか。

コルトは放課後に一緒に行こうと誘ってきた。

断ろうかと思つたが人の少ない時間帯なら大丈夫だろうと頷いた。

興味があつたのも確かだった。

張り出されているテストの結果は三種類に分かれる。

筆記、実技、総合。

更に細かく分かれていくのだが大きくはこの三つで表される。

総合は筆記と実技、授業態度から点数が決まる。

授業態度は教師からの点数。

確か筆記よりも実技が、実技よりも授業態度が大きく評価されるはずだ。

知識よりもモンスターとどのようにつき合えるかが重要視されるのはブリーダーを育成するためだろうか。

文字と数字がギツシリと書かれている。

新入生向けの説明会でこの表の見方を説明していたのを思い出した。

上から順に優秀な生徒の名前が、その右隣のマス目には各科目の点数が並んでいる。

私は筆記でコルトに勝っていた。

普段は僅差で競っているのだが初の快勝である。

嬉しいようで、なんとなく複雑な気持ちだった。

複雑な言い知れない気持ちに悩んでいると先輩と会話を思い出したが、きつと私の実力だろう。

そう言い切りたくなった。

だが、そう言い切れるほど私は自惚れているわけでは無い。それでもただ会話したただけだとも思う。

良い気分転換になったわけだが、それが全部なわけでもないのだろう。認めるのが悔しいという気持ちもある。

だから、先輩が半分。

私が半分。

そういうことにしておこう。

ここにいない人物のせいで悩む私はなんなのだろうか。

あの先輩を少しだけ恨めしく思った。

実技はコルトに負けていたが、総合では勝っていた。

可愛らしく悔しがるコルトの頭を撫でたくなかったが触らぬコルトにんとやら。

わざわざ怒らせる意味も無いのだ。

コルトがレディール先輩の結果を見に行ったので着いて行くことにする。

筆記の結果。

一番上は空白で、マス目に数字だけが書かれている。

100がずっと続いてときどき50を見かける。

その下にはレディール先輩の名前。

「そしてずらずらと並んでいるが同級生とすら親交の浅い自分が知っている名前は無かった。」

そして時々見かける空白。

……下の方にあつたシルフィーユという名前については何も言うまい。

「あれ、おかしいな?」

コルトがレディア先輩の名前を見ては満足し、見ては満足し、を繰り返しながら実技と総合を見終わつてこちらに歩いてきたのはそんな言葉とともにだった。

「ん、何か気になることでもあつたの?」

「だって筆記には取れる最高点が書かれてるでしょ、一番上の名前が空白のところ。でも実技と総合には書かれてないもん。とか私たちのところにはどこにもそういうの無いけど……。なんで先輩の筆記だけ最高点が書かれてるのかなって」

コルトは空白のところが気になったようだ。

「確かこの空白は配慮のために名前が書かれていないだけだって話を聞いたことがある。」

さて、コルトにどう伝えようか。

「ええとね、これは……」

「これは家名が無い生徒なのよ」

「あ……っ！ こんにちは！」

言葉に詰まっている私の後ろから声が聞こえた。

コルトが突然、礼をし出したからあわてて振り返った。

私の後ろには学長が立っていた。

「あ……。こ、こんにちは」

「はい、こんにちは」

驚いて詰まってしまった私の挨拶にもにこやかに学長は挨拶を返した。

この人が怒っているところを見たことが無いと言われるくらい、いつも微笑んでいる。

男子生徒にもファンが多く、人気も高い。

「あの、さっきの話ですけど……」

コルトが恐る恐る、といった体で話し始める。

学長など学校にトップであり、凄く偉い人というイメージしかない。

もちろん、私たちとは接点が全くないので緊張してしまう。

「ああ、この空白でしょう。これはね、一種の配慮なの」

学長の説明では実際には生徒の名前があるのだが、書くことは出来ないのだそうだ。

この学校はどのような人であろうとも試験に合格すれば入学できるが生徒の大半は

ブリーダーやその他の職種の子供だ。

なぜなら、学費が高いから。

この一点に限る。

そんな理由から家柄がお世辞にも良いとは言えない生徒は少数だ。

それに反して、私の様に神官の家系やコルトの様にブリーダーの家系、大商人の家系などは家名を持っている。

しかし、少数の生徒は家名がない。

それが大きく関係している。

簡単に言ってしまうえばプライドの問題、それだけだ。

家名が無い人間を見下している選民主義の人間が自分よりも順位が高ければどう思うだろうか。

好意を抱くことは決して無く、逆に疎ましく思うのではないか。

なんとか自分を満たそうと、原因を駆逐するために陰湿な手段や過激な手段を取る生徒がいたために今のようになっているのだとか。

昔と比べれば激減したのだけれど、それでも執拗に狙う生徒が後を絶たないのは悩みどころなのよ……努力している子が報われないのはホントに残念ね、と苦笑いする学長に何時もの朗らかな雰囲気はなかった。

「……なんか、ごめんね」

「え？」

気まずい雰囲気になってしまったのを察したコルトが学長に帰る旨を伝え、跋（ばつ）が悪そうにしていた学長も先ほどの雰囲気とは打って変わって微笑みながら見送った。

学長もこんな雰囲気にするつもりは無かったのだろうが、つい零してしまったのだからう。

そんな微妙な空気の中、二人で肩を並べて——コルトは少しばかり背が低いので少し視線が低いのだが——コルトが呟いた。

「ほら、リオってテストの張り出し表を見に行かないでしょ？ だから興味ないのに気を使わせちゃったかなって。変な空気になっちゃうし、謝っておこうかなって……」

「そんなこと無いよ」

落ち込んでいるコルトは可愛かったが今以上に気がめいると間違ひなく泣いてしまおうだろう予想が経験から導き出された。

慰めるのが多分、一番だろう。

「興味はあったけどね。人がいっぱいいたから近寄れなかったの、人ごみは苦手だし。それに……」

言葉を溜める。

コルトが聞き返すまで溜めるのが大事。

「それに？」

「こ」で一言。

「総合でコルトに勝ってたしね」

爽やかな笑いはおまけである。

目的は空気を変えることとコルトを弄ること。

気分的には7:3くらいの割合。

「あ、ひどーい！ 次は私が勝つんだからね！」

ほら、上手くいった。

負けず嫌いのコルトはすぐに引つ掛かる。

ビシツと指を私に向けて指すコルトの様子は気を取り直したようだ。

「ならば、早く来い。私の元に追いつくべきだ」

くくく、なんて私らしくない歪んだ笑いを見せる。

う、となぜか一步引いたコルトは顔色を悪くしていた。

「……何か悪い物でも食べた？」

「ううん、別に。ただ、コルトには負ける気がしないから強気で言ってみただけ」

歪んだ笑いをすぐに消して微笑みかける。

慈愛に満ちている表情は優しい反面、これでもかと言うくらいの高みからコルトを

見下ろしているかのような余裕を演出。

先ほどの落ち込みはどこへやら、むうとムクれるコルト。

「リオの悪魔め」

「悪魔でいいよ。悪魔らしいやり方でコルトをイジめるから」

やっぱり3：7に変更である。

にやりと笑う私は少しばかり先輩に毒されたのかもしれない。

「……リオのいじわる」

ムクれたコルトを無視してテストの結果を思い出す。

実技がすべて0点と総合が圧倒的に悪いビリの空白があった。

なんとなくだがバンダナの悪魔な先輩を思い出した。
たぶん、気のせいだろう。

3

私は実技が苦手だ。

実技が、というよりも運動全般が苦手だ。

それでも実技が得意なコルトに引き離されないように相応の努力はしてきた。
してきたのだが、超えられない壁があるらしい。

その壁とは、モンスターの騎乗訓練だ。

騎乗は得意では無いが構わない。

ただ、ロードランナーが苦手なのだ。

周りでは悠々と私を無視するかのようにロードランナーに乗り、走り回っている。

コルトなんて得意な運動と好きなモンスターとの触れ合いが合体しているようなこの授業で高揚しているのだろう。

笑顔ではしゃいでいる。

それに比べて私は傷だらけの、土まみれ。

騎乗する（予定の）ロードランナーからは呆れたような気持ちで伝わってくる。

恐怖を押し殺して何度も行うがその度に恐怖で足が竦む。

手が震えて、まともにつかむことが出来ない。

諦めようか、こんなに必死になって出来ないなんて恥ずかしい……。

そんな事を思い始め、油断した際にロードランナーは走り去ってしまった。

気持ちを読み取ったのだろうか。

モンスターは殊更そういったことに敏感だと聞く。

ロードランナーの後ろ姿を見ながら感じるのは憐みだった。

ときどき嘲笑われている感じもする。

もう辞めてしまおうなんて気分だった。

そんなとき、授業の終わりを知らせる鐘が鳴り響くのを聴いた。

コルトが私に気付いて声をかけてきたがそれを無視して走り去った。

穴があつたら入りたいくらい恥ずかしく、コルトの優しさを無視した自分を消し去り

たいくらいだった。

それでも、あるときコルトに伝えて普通にいられる余裕が無かった。

夕ご飯に顔を出さず、門限を超えても部屋に戻らない私をきつと心配しているだろう
コルトに内心で謝りながら腰を下ろす。

疲れたからか、それともここが目的だったのか。

いつか先輩と話をした時計台に来ていたのだ。

奇しくも座っている場所も同じであった。

先輩も今日はいないだろう、と考えながら闇夜を眺める。

私の心と同じくどんよりと曇って、更に闇を深くしているようで身体をぶるりと震わせる。

そういえば前と違って寒いなど思っていると空からコートが落ちてきた。

半分驚愕、半分納得しながら見上げると前と同じように空を眺めるバンダナ男。

怪人アツクマバンダナーこと先輩が時計台のてっぺんに座っていた。

「……なぜ先輩がここにいるんですか」

落ちてきたコートは先輩のだろうと当たりをつけて羽織ることにする。断りはいらないだろう。

……偶然、落としたのなら別なのだが。

「今学期の俺は毎日空を見上げているのだよ、後輩」

「はあ、そうですか」

やはり変わった先輩なのだが、彼らしいと思った。

暗かった気分もどこへやら。

こんな単純な自分も悪くないと思ってしまうのは悪魔の力か、人徳か。

不思議な人物だ。

「それよりも」

「なんですか」

「何を世紀末の中、消毒されそうになった顔をしているんだ」

「それってどんな顔ですか……」

げんなりとしながら言い返すも先輩は変わらない。

変わらないのか変えないのか、付き合いの浅い私にはわからなかった。

「まあ、なんだ。落ち込んでるといふか、そういう感じの顔だ」

「最初から言ってくさいよ。というかよくわかりましたね」

「見ただけでわかるのは確定的に明らか」

変わった物言いをしながらも先輩は私の心配をしているようだ。

本当に噂とは……私は何度噂と先輩を比べているのだろうか。

それぐらい聞くのと見るのでは大違いな先輩が悪いのだ。

先輩が完全に悪い。

「冗談だよ。俺には沢山の弟と妹がいる。つまり、そういうことだ」

「……妄想？」

「……まあ、なんでもいいけどな。俺の弟と妹たちは我慢強くて自分で何も言わないから表情から察する必要だから、なんとなくわかる」

「はあ、そうなんですか」

悪魔の弟と妹ってどんなのだろうか。

人を食べる？

火を吹く？

我慢強いってことは普段は隠れ、夜になると人を襲ったり。

でも、そんな事件なんて無かったし。

などと失礼なことをつらつらと。

「もしかして、話を聞いてくれるんですか」

「聞くだけならな。だが、悪魔のアドバイスは破滅に向かうかもしれない」
「……気にしてるんですか、悪魔」

「さて、な」

にやり、なんて底意地の悪そうな顔をしている先輩にムツとした。
相変わらず空を見上げたままだがどうやら私の動向はわかるらしい。

にやにやと人の悪い笑みがさらに私の機嫌を悪くさせる。

が、なぜだか話してみようと思った。

きつとこの人は私を馬鹿にしない。

そんな確信めいた思いが私の中にはあった。

「騎乗訓練の話なんですけどね」

「ああ、懐かしいな。モンスターに乗るやつだろ。ロードランナーかライガーか……。

今は時期的にロードランナーだな」

私の話を聞くだけと言いながらいきなり話し出したこの人はなんなのだろうか……。
「騎乗は苦手ってわけではないんです。ライガーには乗れました。でも、ですね……。」

「ロードランナーが苦手、とかか」

「っ!？」

くくく、当たり前かなんて笑うこの人はホントになんなのだろうか。

心が読めて、私の事を見透かしているんじゃないや……などと思えるくらいに笑っている姿が悪魔然としている。

「ちやうど似たような状態になったやつがいてな、後輩。おまえによく似た状態かも、な」

幼少のころにロードランナーから振り落とされたことがあるから苦手になった。

精神的なトラウマの克服は難しいし、必死になっても改善されなかった。

何度も訓練をしたが結局は挫折。

このままブリーダーになれるとは思っていなかったが案の定、壁にぶつかった。

私の必死に挑戦する素行を顧みて、教官は単位をくれるだろう。

だが、本当にそれでいいのかと思っていた。

逃げることになるんじゃないかと。

また、逃げるのは嫌だった。

「そいつはレース志望でな。バトルを諦めたブリーダーなら多々いるが初めからつてのはかなり珍しいそうだな」

「……」

「空のレースで天を目指しているんだと」

レースを知らない私でも知っている、ライダーの憧れ。

過酷な四つのレースを制覇した覇者に送られる称号、エデン・ウォーカーに名を連ねる。

わたしたちで言う、名人のようなもの。

そこにたどり着く事を天を目指すというのだと聞いたことがある。

「昔、といっても俺も聞いた話だがな。そいつは空から落ちたことがあったんだとき。深くは聞かなかったが、死ぬ可能性もあったんだろう」

曇った空を眺めながら、語る。

声量は大きくないのだがはつきりと聞こえる。

先輩は何を見ているのだろう。

「それでも諦めずに空を目指して。俺が初めて飛んでいる姿を見たときは思わず感嘆の声を漏らしてしまった」

この先輩が声を漏らすほどの飛行。

私では想像もつかない素晴らしさ、ということか。

「今学期の初めくらいかな。天気の良い空だった」

トーンが下がったまま話を進める。

思わず先輩の顔を見てしまったが、変わらず視線は曇った空に固定したままだった。

「あいつを無理矢理にでも止めるべきだった。ただ俺も心のどこかで見たかったんだろ
う。ここに座って、空を眺めて、心行くまで楽しむつもりだった」

雷が昔から怖かったが、そのときほど怖いとは思わなかった。

先輩が呟いた。

「あいつが光に包まれて、遠くの方で落ちていくのを見た。まるで鎖に捕まったかのよ
うに騎乗していたドラゴンとともに墜ちていたんだ」

あとは必死であんまり覚えてない。

気付いたらあいつを担いで医療室に駆け込んでいた。

悪魔なんて呼ばれているが、俺なんて所詮はこんなもんだ。

そう自嘲気味に呟く先輩に私はなんて声をかけたらいいかわからなかった。

「あー、まあ、そういうことだ。どうだ、参考になったか？」

「いえ、暗くなりました」

暗くなった空気を無理にでも飛ばそうとわざと先輩が明るい声を出す。

はつきり言って似合わなかったがそれを言って台無しにするのもあれなので、乗ることにする。

「手厳しいな」

「……先輩は話が下手ですよね」

落ち込む先輩を見ながら内心で喜ぶ。

日頃から募った怨みを晴らせたような気がして少しばかり気分が良くなった。

「まあ、慌てるなよ。話はまだ終わったわけじゃないからな」

「……終わったつぽかったんですけど」

しかもその人が空を飛べなくなったような感じで。

完全に諦めろと言われているのかと思ってしまった。

「なあに、まだ終わらんさ。そいつは空が好きだと言ってたよ、療養中もな。でも怖いとも言ってた」

震える身体を押しながら、実技に挑む姿。

モンスターに触れることすら恐怖。

空が好きで、飛ぼうとして、諦める姿。

憧れに手を伸ばして、伸ばせなくなる恐怖。

それでも必死に、自分に言い聞かせる姿。

天を目指す、天に届くようにと。

「片羽の妖精が羽ばたいた。今日、俺の見てる前で妖精は飛ぶ。空を見てろ、目を離すなよ」

あれのために今日まで待ったんだ、と笑う。

今までの話が全部うそだったのではないかと思う程楽しそうに。

「今、この世で最も綺麗だろう」

そして一言呟くと雲が吹き飛び、空が晴れた。

丸い月が、浮かんでいる。

「魔法使いの俺が言うんだから間違いない」

「……」

声が、出なかった。

驚きと、その姿に。

月を背に空を飛ぶドラゴン。

空が輝いてるかのよういきらきらと。

「どうだ、後輩」

きつと何時ものように人を食ったような笑いをしているだろう。

それを見るために振り返るのも惜しい気がした。

ドラゴンは無骨で、凶暴。

そのイメージを破壊して、美しさのみで象ったような。

「……先輩、ピクシーってモンスターじゃなかったんですね」

「あいつをなんで知ってるのかと思ったが勘違いか」

「みたいです」

「飛んでる姿が妖精みたいだろ、あれ ピクシーって俺が呼んでるだけだからな」

幻想的なほどにあのドラゴンは綺麗だった。

「帰りますね、先輩」

「気を付けろよ、後輩」

この光景は先輩のためのモノだろう。

何か月も空を見続けた先輩の、かけがえのない幻想。

小さな悩みから生じたお零れで奇跡を得た私が最後まで見るには、あのライダーに失礼な気がした。

名残惜しく思いながらも俯いて、寮に向かいながら言葉を紡ぐ。

「……先輩は話が下手ですよね」

「そうか」

先輩はきつと笑ってる。

「……でも」

先輩を見ながら言うのは負けたような、恥ずかしいような。

そんな気持ち。

「私も頑張ろうと思います」

もう離れて声も聞こえないだろうところから不意に聞こえた言葉。

「お前なら大丈夫。やればできる。俺が言うんだから間違いないで無い」

「魔法使いの俺が、ですよね」

クスリと笑いながら返事をした。

聞こえていないだろう私の返事。

でも、きつと聞こえている気がする。

だって悪魔のクセに魔法使いで不思議な先輩だから。

普通の人には欲張りだけど、あの人になら許せる。

寮に近づくとざわつく感情の流れ。

気付いたんだ。

先輩の心は静かだから、落ち着くんだって。

本当に不思議な人だ。

今の私は笑っているだろう。

寮に戻ったらコルトに謝って。

明日はロードランナーに謝って。

また、やり直すんだと心に決めて。

今でも忘れない。

その日の空は本当にきれいだった。

虹鱒 | 時系列 1

・ ???年

美城をチーフとしたチームで黒井と高木もプロデューサーとして頑張る

・ 0歳

誕生

・ 0—4歳

手のかからない子供だと喜ばれる

・ 4—6歳

両親が親である意義に悩む

・ 0—6歳

・ チームが方針の食い違いにより軋轢が生じる

・ 名も知らぬプロデューサーとアイドルが八つ裂きになる

・ チーム分裂

・ 黒井退社

・高木退社

・お米の国が「都市伝説」を用いた全国への情報伝達速度のテストを開始。

・6—7歳

・噂の流布が収まらず、氾濫していた都市伝説を「エシユロン」に忍び込んで寺生まれじゃない人が「破あ！」した。都市伝説ブームを消すため、アイドルブームへ推移させる。(その後世界中に点在するエシユロンを「破あ！」によつて異世界へと投棄。異世界でエシユロンがバミューダ沖の謎や深海の恐怖によつて深海棲艦を生み出す。その侵攻への反応として霊的国防兵器である艦娘が建造され異世界は戦争へ)

高木社長がティンときた甥っ子の高校生にアイドルを任せる。

・音無小鳥デビュー。

・遅れて日高舞デビュー。

・アイドルブームの到来。

・7—8歳

・音無小鳥がひっそりと引退。

・8—9歳

・ランクSのスーパーアイドルが引退。

・6—12歳(小学生)

両親が喧嘩と夜遊びでパーリーピーポー化

・冤罪を訴えていた青年が獄中で自殺。血文字で「疲れた」の文字のみが残っていた。

・警視庁特命係・係長が辞職。部下も追いかけるように辞職。

・13—15歳（中学生）

新聞配達

時々ウサミンほわあ

・ウサミン現実を知る

・15—16歳

高校入学

両親蒸発

媚びスマイル修得

祖父母に引き取られる

・トキがオーデイションの激流に流される。地元のプロダクションに写真を送るも蹴られる。

・ウサミンほわああ

・夢が遠のくウサミン泣いちやダメー、めげない！ しよげない！ あきらめない！

・高1

二か月で祖父死亡

祖母入院

コンビニバイトデビュー

半年で両親の借金発覚

・トキと出会い、以後交流が続く

・ウサミンほわあああ

・高2

・ちっひ入社

・アイドル志望のクラスメートをキラキラのダンスで夢も見れない心と体にする

・ウサミンほわあああ

・17-18歳(高三) 人生に降参やろなあ

・四月

弁護士に相談

平日17時から22時までコンビニ、寝る、高校、放課後にお見舞い、バイト

休日学校に行っている時間をコンビニバイト

・名も知らぬアイドルとプロデューサーがライブバトルを乱すが、ウサミンほわああ

あああ

- ・ 美城社長がティンとくる
- ・ 346で土日バイト兼研修生
- ・ まともな飯が食えるようになる
- ・ 武内入社
- ・ 五月
- ・ スーツなどを装備した
- ・ マネージャー的な仕事に任される
- ・ 六月
- ・ 岡崎先輩と出会うも印象は悪い
- ・ 現場へ赴いた際に完璧に挨拶してみせて先輩をぶるぶるさせる
- ・ 765と出会う
- ・ ドラマの仕事で薄い反応を示したために先輩が久方ぶりに感情（苛立ち）を見せる
- ・ 8画面4倍速で番組を見始める（一週間後に8倍速）
- ・ 七月
- ・ ビデオカメラを持って岡崎先輩を追い回す
- ・ ウサミンがいなくてがっかりする
- ・ 終業式↓夏休み↓自動車学校での合宿というコンボ

・ウサミンを語られた先輩、アイドルに興味を持つ

・トキ、オーデイションの激流に飲まれ、学校を休む

・トキ、学校に通うと自分の合格を祈ってくれていた人がいることを知る

・ウサミンほわあああああ

・八月

岡崎先輩に挨拶される

台本を読み合わせし、あまりの演技力に岡崎先輩をぶるぶるさせる

暇そうな岡崎先輩にドヤ顔でキレキレなダンスを披露し、涙目でぶるぶるさせる

俳優部署に誘われるも断る

シンデレラプロジェクトの話し合いが始まる

家に帰ってないことに気付く

ドリンクの成分の都市伝説を話して、勉強してた岡崎先輩とちっひを涙目でぶるぶ

るさせる

音が遅れてくるかの如き速さでタイプングし、岡崎先輩をぶるぶるさせる

業界の研究しまくっていると呼び出され、推奨とともに橘さんを任される

橘さんと母大福戦争を繰り広げる

キレキレなパフォーマンスで何度も岡崎先輩と橘さんをぶるぶる涙目にさせる

・先輩、自分の台本に沢山書き込まれるようになったのに気付く
 ・先輩、自分のマネージャーが仕事しすぎ説に気付きつつある
 ・先輩、アイドルに興味を持ってダンスの練習を始めるも、マネージャーにぶるぶる
 させられる

・先輩、自らの演技であの無表情を動かしたくなる

・ウサミンほわああああああ

・先輩、ウサミンほわあに嫉妬する

・九月

トキにキレキレのダンスとかちよつとした発声方法を披露

・クラスメートの一部がトラウマを発症

・ウサミンほわああああああ

・十月

リアル運が雑魚過ぎるのに人生ゲームも弱すぎる民が生まれる

最大サイズのドリנקを5本一気飲みしてハイになる

・橘さん、ハイになったマネージャーと遊んで16まで云々

・ウサミンほわああああああ

・十一月

765プロの竜宮小町が俺T u e e e e

橘さんにぷよぷよでフルボッコの後、岡崎先輩と接戦

・橘さん、手加減しないとマネージャーと遊べずに先輩に搔つ攫われることに気付く

・ウサミン元気少ない

・十二月

ウサミンすこ

クリスマス年末年始関係なく仕事に没頭する

岡崎先輩と橘さんがケーキをくれる

代わりにリボンあげる

・橘さん、マネージャー仕事し過ぎ説に気付きつつある

・先輩、橘さん、ケーキを作る

・橘さん、アリス感が増したと文句を言いながらもリボンを装備

・ウサミン元気少ない

・18—19歳

・一月

社長に誘われ、四月からプロデューサーに

時間を見てお見舞いしていた祖母が亡くなる

・ 泰葉はマネージャーと名前で呼び合うことにした。信頼のためで他意はない

・ 橘さんぐぬぬ

・ 二人のアイドル志望が現実から夢を眺めた。一人は泥を見た。一人は星を見た。

・ トキ、才能ある人間にも弱点はあると知り、弱いのは自分だけではないし、下もあるのだと知る

・ ウサミン、初期のファンが何故かスカウトに来てビビるも、泥にもかく自分の手を取つていいのか悩み、夢を追うことを知る

・ 泰葉、ウサミンにぐぬぬ

・ 四月

マネージャー、プロデューサーになるってよ

プロデューサー、事務所に住んでいることがバレ、色々と手続き

武内さん、職質

泰葉、アイドル活動の準備中

橘さん、番組でお目目きらきら

SSRパーフェクトウサミン計画始動。ウサミン星人はプロデューサーの地獄
レッスンだろうが笑顔を絶やさない凄いやつだよ！。

ジョインジョイントキ

城ヶ崎美嘉、アイドルへ

「346のばかっこいい動画集」誕生

モデル事務所です浮いていた高垣楓、空気を読んでくれるアイドル事務所へ

社長から養子に誘われるも母参戦。右京さんをぶるぶるさせた後にマザーファイヤー発動。オリ主が人を殺す覚悟を抱く

興水幸子がちよろーんとスカウトに引つかかる

・ 泰葉、プロデューサーを交番まで迎えに行く

・ 橘さん、「調べたので知ってます（キリッ）↓「ほわあ……（お目目キラキラ）」の黄金コンボ確立。

・ ウサミン、気力で体を動かす

・ ウサミン、喫茶店でバイト

・ 武内のスカウトを受けた城ヶ崎美嘉、346に見学を訪れる。へらついているプロデューサーが駄目そうだと呟くも、橘さんに聞かれる。

・ 橘さん「誰よりも仕事しているプロデューサーを見せてあげますよ、試しに明日自分が早すぎると思う時間に来てください」

・ とりあえず夜に訪れる城ヶ崎美嘉が、プロデューサーが帰るまで耐久勝負を勝手に挑む。終電逃す。プロデューサーに気付かれSEKKYOU……！

- ・トキ、激流を征したまま予定通り346に入る

- ・新たなジエダイが生まれる

- ・プロデューサーが色々と問題に巻き込まれているらしいので、みんなで気を使ったり辞表を出されてパニックになる。

- ・社長、プロデューサーの辞表なんて無かった宣言

- ・匿名掲示板で「やっぱりプロデューサーってクソだわ」↓「俺はプロデューサーのこと信じてたから」の流れで手の平くるくるで手首がぼろぼろ

- ・961プロと765プロのガチバトルでボコられている輿水、保護される

- ・ウサミンと輿水、ライバルの会場や参加不参加は事前に好きに決められると初めて知って沈む。にわかか。

- ・五月

社長と右京さんを怒りでぶるぶるさせる。幾人かの首が飛び、減給が乱舞。

池袋博士が新たな力として複数台を直結させたPCを与える。人類には早すぎるPCである。池袋博士はプロデューズされたくないと言寄らない模様。

片桐早苗さん、職質をスカウトでカウンターされる

名も知らぬプロデューサー連中が自らのアイドルグループの活動を大々的に告知する。が、346のプロデューサーによる身を切った騒動により、話題に上がらず。

346、地方へ主戦場を移す

- ・ レッスンに飛び入り参加したプロデューサーにアイドルたちをふるふるさせられる
- ・ 名も知らぬプロデューサーたちのホームが切り取られ三昧

・ 六月

施設費を分割で払い始める

地方を巡って何処を始点とすればスタートに有利か傾向を調べる。仕事とか増える。ウサミンフルタイム、トキが一日欠け、橘さんがときどき「ほわあ……（お目目キラキラ）」

牧場おっぱいとか、なつきちとか、アナウンサーのわかるわさんが参戦

荒木先生まじかわでスカウト成功

9月以降から順々にCDデビュー

- ・ 高垣さん、東北地方で酒飲み

- ・ 姉ヶ崎さん、真面目に仕事

・ 346のアサシンが牧場おっぱいとか、なつきちとか、アナウンサーのわかるわさんスカウトに成功

・ 七月

六月の反応から地方のイベントに参加するメンバーを割り振る。

「まあまあ眼鏡どうぞ」によってカレーを零す

上位アイドルや中位アイドルのF U J I S A N R O C K F E SやI AやI Uへの熱が高まる。プロダクションもそちらへと傾倒する

346が固定で得ている仕事を優先的に進めていく

その裏で少しでも空いている地方に進出して崩しに行く

番組のリハで無駄にクオリティの高い無駄な物まねを披露。スタッフも真似に全力を出し始める。

高森藍子さんの物まねでゆるふわタイムをコピーすることに。結果として高森藍子は時を操る説が浮上

ラジオでトキとハモって歌う

読モ撮影があったので、城ヶ崎さんや泰葉、なつきちの三人と仙台へ。帰るときには何故かアイドルが四人に増えている怪奇現象が発生。

・ウサミン、17歳(?)

・トキ「両手を広げて、待っていてくれるところまで……」

・上条春菜さん、最上位レッスンにぶち込まれ、プロデューサーにパフォーマンスをミラーされ続けて体力の限界へと達して眼鏡を落とす。

・765とか961とか876、大小様々なプロダクションが東京で仕事を取り合う。

う方針

プロデューサー、一度見れば全てをコピーれる定期。ダンスも余裕。代わりにオリジナリティを全て失っている模様。

アイドルのダンスを一目でミラーし、不具合を指摘して体力限界まで続ける最上位レツスンがアイドル全員に公開された。

プロデューサー、魔法は好きじゃない説

深夜の5分枠でプロデューサーが人形によるモバマス劇場を開始。

・プロデューサー歴1年と2年コンビが激務へ

・ままゆ、トップアイドルこそ目標であると断定。アイドルに王道なし。

・ダンスのキレ、しなやかさ、ダイナミックさ。声の質や音程、音量などから紡がれる歌。そういった個々人の特徴的な部分が発揮されるとそれは強みであるという話が伝わる。自分を知ってるやつが一番強い。ただし技術があつてからの話であるという言葉も添えて。

・モバマス劇場が人類には早すぎる謎の技術が導入されていると噂になる。新しく登場するアイドルや既存のアイドルの魅力などがフィーチャーされるのでファンには好評。プロデューサーはハイパーメディアクリエイターだという結論が出た

・中二エクステであるあすかくん！をスカウト。

・九月

CD発売。好調な売れ行き

激務激務むーざんむざん。あーつれーわー、一週間で5時間しか寝てないわー。雑魚寝しているADに埋もれて寝る。

齢十四にして、数多の衆愚を魅了する「力」持つ姫君を火の国よりお迎えいたしました。

・シンデレラプロジェクトの選考が開始される。武内さん主導。

・十二月に行うライブの会議が進行。上級アイドルが使用する箱で暫定の判が押される。

・十月

給料、20万

なぜかプロデューサーが会場の設営や衣装のサンプルを作成し、グッズの販売などの指示を出す。

・十二月のライブの決定し、チケットが売り出される。チケットの売り出しとしてはかなり遅いが売れ行きは好調。

・シンデレラガールの集計が開始された。シンデレラガールはテレビやインターネットを使った投票で選ばれるため、知名度の高さで選定される。

・諸星きらりさんとニートがシンデレラプロジェクトに参加予定。

・十一月

作成した見取り図やCGでライブの段取りなどの予定を組んでいく。

・トキが速報でシンデレラガール1位を走る。地方の民による推しメンと化した。

・神崎蘭子さんがシンデレラプロジェクトに参加。

・諸星きらりさんとニートがシンデレラプロジェクトに参加。

・睡眠時間と労働量は増えたが給料は上がらない。

・十二月

シンデレラガールの愛梨ちゃんマジ天使。

オファーなどの時期をずらし、アイドルを入れ替え、なんとか超過密スケジュール

を消化する。

ライブは問題なく終了。ありすと仲良くなる

父親だった人の訃報が入る

・ロケットボックスを仕掛けたトキがそのまま逃げ切りシンデレラガールへ。

・シンデレラプロジェクトの実績として扱うことに。

・社長「アイドル増やしたい。増やしたくない？」

リリカル〜サブリ

これで不明部分をいくらか補完できるはずですが、ネタバレとなっております。

補完サブリ

百代 光陰（ハクタイ コウイン）

リリカル〜のオリ主。原作主人公の3歳年上。月日は百代の過客にして……が名の由来。

『1周目』が始まる以前の『0周目』の際にジュエルシードを取り込んだため、ループし続けることとなった。

魔法は全てにおいて適正があるが、ジュエルシードによるループの特性によって転移系統が極めてすぐれている。

『0周目』

可愛がっていた“弟”を交通事故で亡くしたことによって、光陰は死のことに対して

恐怖を憶えた。

春先のとある日、サッカーをした帰りに空を見上げると綺麗な星空だったことに気づき、感動していると一筋の流れ星を見つけた。

「死にたくない」と熱心に祈っていると自らの足元へと落ちてきた流れ星であった宝石を拾った。

綺麗な石だと気に入り、家へと帰って行った。

その日から彼の宝物となったのだ。

それから何事も無く日々を過ごしていたが、突然街中を巨大な樹に覆われる事件が発生した。

家にいた光陰は突然の樹の襲撃によって腹を突き刺された。

流れる血液に恐怖を憶えた。

必死に石へと願う。

流れ星ならば聞き入れてくれるはずだから。

神のきまぐれか、流れ星の加護、それとも運命か、彼は再びの生を得た。

自分というものを何処か遠くに感じながら……。

——0 周目について

0 周目はループが始まる前の主人公のこと。

63周目に存在する物品は“弟”のもの。
弟や妹に固執するのは0周目のせい。

『無印』

何もわからない彼が導き出した答えは生き残ることだった。

必死に生存ルートを探している彼が出会ったのは一生懸命に街を駆けまわる“弟”
と同じ年頃だったであろう少年少女。

彼は何かを駆られるように、手助けするようになっていた。

——無印について——

ループに慣れておらず、最も自分の身体に不慣れな時期。

さらに魔力の不足も手伝った最弱一直線。

リンカーコアがループのための魔力を取り込もうと周囲の魔素を集めているため、非
殺傷設定は無意味である。

体術については繰り返し返すことで幾らか修めることに成功するが、筋力などの問題は解
決できない。

よって非力。

ループによって使い方や効率化を進めることができたが、やはり小学生〜中学生程度

の筋力しか得られなかった。

ただし、繰り返し返すことで筋肉の密度は極微小ずつ上昇する。

魔法については基礎が全くないうえにデバイスも無し。

そのため、使用している人物の魔法陣を見て一から自分で組んで再現する必要があった。

魔法陣を何度も組み、時には弄ることでのどのような効果が得られるのかを探索し、自らで魔法を組み立てた。

欠点も多く、粗ばかり。

そのため、ミスで死ぬことも多かった。

リニスから貰ったメダル型のデバイスは信頼の証だろう。

起動することによって高速回転を始める9枚のメダルは9つの球のようにも見える。

是非ともナインボールと呼んであげて欲しい。

起動の仕方を知らない？

それはリニスからプレシアへの義理のためかもしれない。

魔法が使えるのが偶数周・奇数周と分れていたが、ループのためにジュエルシード

が魔力を蓄えるためである。

無印でのセーブポイントとはループする際に選ばれる“極めて近い自分”が接近し

ているため。

死ぬことによつてリンカーコアごと転写する彼は、ループするほどに魔力量が増大する。

周数を重ねるごとにセーブポイントが近くなるのはジュエルシードに溜めこむ魔力に余裕ができていくからだ。

ボールペンは祖父から貰つた宝物。

丈夫で、手に優しい一品。

最後に彼を支え、後押しする秘密兵器。

魔法武器と化している。

『A's』

平穏な日々は続かなかつた。

闇夜に乗じた友人の襲撃によつて、再び戦いへと舞い戻る。

リンカーコアから魔力を蒐集されると、ループのために貯蓄した魔力を失つたジュエルシードを過剰に働き、死亡するというペナルティを抱えながら、戦場へと繰り出した。

因縁を抱える友人のため、弟が狙われているという可能性のため、戦い続ける妹と弟のため、彼は何度でも立ち上がり、戦い続けるのだ。

徐々に自分を見失っても大切な物は憶えている。

憶えているからこそその最後だろう。

——A'sについて——

魔力量の増加によって戦法に幅を持たせることができるようになってきた。

プレシアの撃墜によって取り込んだリンカーコアの一部も力を発揮しているようだ。

体術は極めて高い点で纏まっていたが、平和な時間を過ごしたことで少し訛つてしまっている。

魔法については教師役を見つけることができたので飛躍的な上達が見込めている。

魔力砲や魔力弾は不得手であると考えているが、少し違う。

魔力量が増加したといってもジュエルシードはループのための魔力を求めている。

そのため、身体から離れた魔法も外部の魔素ごと取り込んでしまい、減衰が起きるのだ。

魔力を失いすぎるとジュエルシードが過剰に働き、魔素を集め、零れた魔力を受けたリンカーコアが爆ぜてシヨック死する。

また、許容以上の魔法攻撃を受けるとジュエルシードが変換できず、リンカーコアへと流れ、爆ぜてシヨック死する。

蒐集による魔力の欠乏は死亡フラグ。

彼が手に入れた唯一無二のデバイス。

偽装のためにビニール傘の形をしているが、そのまま使うことも可能。

オーバードウェポン（OW）を使用するためのデバイスともいえる。

処理能力は上位のインテリジェントデバイス並だが、知能は持っていない。

そして名前もない。

死地を踏み続けた結果、攻撃を見極める能力に目覚めている。

体術、魔法、全てを問わず、見ることで再現する。

幾分か劣化するが、アレンジすることでオリジナルに近づき、いつか超える。

『100sy■……m………』

仮死状態となるが目覚めることなく、死へと向かっていたためジュエルシードがルー
プの準備に入っていたが、無理矢理起こされたことで発生。

リンカーコアの大半が休眠状態となっている。

このとき魔法を受けることでリンカーコアが爆ぜて死ぬ。

『空白期』

目覚めた世界に、望んだモノは何もなかった。

心を閉じた。

否定する全てが嫌いになった。

——空白期——

手足に存在するナノマシンは魔力によって動く。

謎技術であり、技術部垂涎の品。

大天使ナノトローンの入院。

光陰を信じようと必死に頑張る少女を暖かく見守るべき。

病室への襲撃者フェイトそん。

母の死、ユウからの拒絶、なのはとの距離、そして無人世界での襲撃事件。

フェイトそのの襲撃は起こるべくして起こった。

スカさん特性のルービックキューブ。

巨大なカートリッジ的な何か。

溜めておいた魔力を取り込むことで一時的にドーピングできる。

カートリッジを使ったほうが効率も良く、無難。

裁判。

ロストロギアへの親和性、ジュエルシード並の純粋な魔力を生成するリンカーコア、

ナノマシン……。

無印序盤（24周あたり）の入院の際、取得したデータが本局へと送られたことで目

スカさんによる復活以前に戻れなくなった。

“極めて近い自分”が少ないため、ループに限界がある。
自爆（極み）。

リンカーコアの魔力を開放する。

周囲は吹き飛ぶ。

そして周囲を取り込みながらループするという二段構え。
つよい。

そして自分は死ぬ。

公正な裁判。

あるわけがない。

疑心暗鬼に陥っているとこれである。

甘い言葉で誘われて落とされたため、ざっくり心が折れた。

2人は家族判定を失った。

シユテル。

逃げ込んだ無人世界で出会った運命の山猫。

闇の書に残されていた情報（理のマテリアル）を利用し、使い魔とした。
自己嫌悪していたが、段々と癒されるようになった。

精神的につながっているため、求める言葉を与えてくれる相手となった。
エリオ

OUT↓ユウ

IN↓エリオ

入れ替わってしまった（震え声）

リニスが抱えている小さな少年。

光陰のクローンである。

ゲシユペンストが憑りつき、ヴィヴィオが使う変身魔法でサイズ変更。

使い捨てにされるところだったが、間一髪のところまで生存フラグを立てた。

ゲシユペンストは消滅直前まで削られたため、クローンのユニゾンデバイスのような

立ち位置となる予定。

ループとは

リンカーコアに憑りついているジュエルシードによる“極めて近い自分”への転写のこと。

記憶や経験、リンカーコアなど蓄積したものの全てを写そうとする。

もちろん、『53周目』のように上手くいかないこともある。

心の奥底で思っていることや強い感情が転写されやすい。

ループを繰り返すことで、オリジナルから遠ざかり続け、肉体に齟齬が出始める。

100周を超えた現在では自分の身体を後ろから操っている感覚。

さらに痛覚を失う、味覚を失う、感情が希薄、言葉を伝えるのが苦手……などと様々な不具合が生じている。

“極めて近い自分”への転写であるため、以前の人物と同一ではなく記憶を受け継いだコピーに近い。

同じことを繰り返すのは、転写が上手くいつていないことや初めての体験に活かすことが出来なかったことが原因と考えられる。

百代 ユウ（ハクタイ ユウ）

アリシアのクローン。

ただし技術部支援による試作型なので記憶を転写された直後に廃棄された。

母を求め続け、他のクローンの死骸を貪って生き延びた。

無印編では深い葛藤の末、母に求められることの多幸感によってフェイト陣営へとついた。

自らを拾った兄との敵対することで、自分を見失つていく。

それでも母のためにと戦い続け、捨てられたことで心が折れた。

A, s 前では裁判後、精神が不安定なため療養している。

A, s 後では兄が搬送されていく様子にはやてへと斬りかかるがなのはに止められ、管理局へと連行された。

裁判の結果、管理局で働くこととなった。

空白期では精神をやや病んでいる。

魔法がなければ兄はいなくならなかったと嫌悪している節がある。

また、プレシアの元に行かなければ兄の元で平穏な生活が送れたはずだと母を憎悪している。

プレシアの事件を思い出すため、フェイトとの仲は一方的に悪い。

光陰信者。

s t s

『本物』の弟や懐いてくる劣化レプリカに精神的に弱っていく。

フェイト

母を失い、傷心のときに頼った兄に無下に扱われたことが心の重しとなっている。

なのはと交友するも、兄のような人の話ばかりされることで疎外感を感じていた。

全てが光陰だと気付き彼女は……。

高町 竜也（タカマチ リョウヤ）
省略。

暇なときか要望があつたら記載。

基本的に中立。信頼の高い相手だけ見逃す極N。

高町なのは

錯綜する情報に何を信じるべきかわからなくなり、仕事へと直走った。

スタンスは決まっておらず、中立状態だったが、自分で見て聞いたことを信じると決意した。

今後は話を聞くことを重点に動く。

覚醒するとOWを持ち出す。

『101周目』のゆりかご戦ではOWによるビームをヴィヴィオにぶち込んだ。

八神 はやぶさ

原作知識持ちではやてを甘やかした。

焦りと警戒によって光陰を襲撃した。

原作との乖離に苦悩していたが空白期以降では、はやてに従うことを決断。

デバイスは闇の書によって生み出された双剣。

魔力を込めることで闇の書との繋がりを強め、バックアップを受けることができる。

八神 はやて

足は不自由なままのため車いすに乗り、住人の少なくなつた家で過ごしていた。

家族を取り戻すために日々を費やしていた。

脳みその直属に闇の書を取り戻す方法を囁かれ、陣営を移した。

死体として管理局に搬送されるはずの光陰が消えたことで、復讐によって残つた家族を失うことを恐れてゲシユペンストを擬態させて放つた。

本人が生きているのならば接触してくるだろうとの考えからだ。

擬態を強化するためにゲシユペンストをクローンに憑りつかせるようにした。

培養されてすぐさまの個体ばかりだが、気にしなかった。

紫天の書を起動させ、家族を取り戻したことで幸せを思い出す。

ヴィータがいなことが気がかりだったが、家族が増えたことでなんとか紛らわせていた。

そんなある日、ゲシユペンストが闇の書を失い、奪われたことを知って過呼吸を起
した。

足が自由に動くようになって眠れない日々が続いた。

空港の事件の後、黒い球体のような家族が戻らなかつた。

クローンが保持していることに気づき、苛立ちが募る。

事件の詳細な情報を得て、涙を流した。

闇の書を起動させ、主となつている宿敵の姿を確認していたからだ。

渦巻いていた憎悪が心の形となつた。

闇の所を介して魂が繋がっている。

ぐしやぼん4 (仮)

— 9

私が気付いた時には、どうすることもできなかつた。世界が捲れ上がっている、そんな複雑怪奇な状況だった。突き抜けるような青空があるはずの上空には、もつとずつと遠くにあるはずの街並みが、反り返って見えた。まるで地球が内側へと閉じたかのようなだった。薄暗い世界でただ一人。

親しい先輩のお見舞いに行こうとしなければ、こんなことにはならなかつたのか。後悔が思考を染め上げる。

「()はど()なの……? ほむらちゃん……?」

茫然としながら親友である**暁美** あけみ ほむらの名前を呼ぶ。返事は無い。姿もない。何処にもいない。当然だ。だって私を庇うように突き飛ばして、そして、代わりに瓦礫に潰されたのだから。

瓦礫の隙間から沁み出した赤い生命の液体が、飛び散って転がっている親友の断片が、私の足を染料のように鮮やかに彩っていた。

私が誘わなければ、こんなことにはならなかった。私を庇わなければこんなことにはなっていないかった。彼女はまだ生きていたのだから。

理解したくない現実が、足元の染料から沁み出すように恐怖が迫ってきた。

恐怖と喪失、絶望、後悔、あらゆる悪感情が絢い交ぜになって、襲ってくるようだった。

「うぐっ……」

気持ちが悪いのに何も出せない。感情ごと吐き出したいのに、上手く行えない呼吸がせき止める。

あまりの気持ち悪さに垂れ流された唾液や鼻水、涙だけが重力に引かれるように、地面を濡らした。

苦しいのに、どこか安心している。一時の苦しさが、一時の忘却を齎す。苦痛に安らぎを見出して、絞るように、空気を吐き続ける。遅れて吐しゃ物がこみ上げ、溢れ出た。喉に詰まった。とても苦しい。苦しさに安寧を見出したくせに、必死に空気を取り込もうとする私はとても浅ましい。

白んでいく意識が、立っていることすらも許さない。

べしやりと音がして、吐しゃ物の上に倒れ込んだ。口も鼻も詰まっていた。このまま苦しんで死ねば、許してくれるだろうか。

「此処は東京だよ」

意識が浮上した。死んでいない。死ななかつた、死ななかつた。生きていられることに、愚かにも私は少しだけ喜んでしまった。浅ましい。

私は抱いた感情を忘れるかのように、その声に導かれて視線を上げた。体に力が入らない。吐しゃ物を枕に、砂と瓦礫の大地に横たわつたまま。

長い耳が特徴的な、白い猫に似た愛らしい小さな動物が瓦礫に座つていた。ルビーのような緋色の瞳と目が合った。感情の無い、無機物のような瞳だった。

「東………京………？」

私が反芻すると、満足げにその長い耳を揺らした。

「君たちにはわかりにくいかもしれないけどね。実験室にあるフラスコの中とでも表現しようか。神がいる世界を木の幹と仮定したとき、この世界は枝葉の先程度の世界ではない。つまり神の威光は遠く届かず、御使いたちにも声は届かない。そんな世界をより複雑に分断し、余計な要素を時間から切り離して、さらに彼の威光が届かなくなつた世界になるようやり直すために誘導してみたんだ。彼が「光あれ」と言つたと伝わる前の、もつと古い世界を再現できた優秀なフラスコさ。世界が興り、天地あらゆる全てを

神が創り、またその全てが神だった時代を再現した無数のフラスコ、その一つ。何よりも誰よりも古い旧い創世の時代」

何を言っているのかわからないのに、目が離せない。その声を聞いてしまう。あまりに蠱惑的な、その姿に、声に、心を奪われる。

「新しい神が世界を創ったとき、または壊したとき。異なる次元も事象の転換に巻き込まれることは儘或る。そして神を殺してヒトの時代が訪れる。唯一無二の存在がない、強靱なヒトの時代。ヒトが持つ唯一絶対の力、それは自らの意思で進むべき道を選択すること。観測先の神すらもない末端の世界。キミたちは常に自分にとって最良の未来を想い、自由を選択していくことができる。ボクはその姿が見たい、そしてその先が見たいのさ。先が見えなくても、どこまでも歩いて行こうとするその意思の強さに憧れる。未来が潰えているかもしれないのに、生きようと希望を持つ心にずっと恋してゐるんだ」

世界が闇に吞まれていく。その中で、瓦礫に座る白い小動物の赤い瞳だけが、爛々と輝いていた。

「鹿目 かなめ まどか、友達を取り戻したくないかい？ ボクならできる。いや、キミの力なら

なんだって出来るんだ。世界を創り直せばいい。そしたら元通りさ」

「ほんとうに……？」

あり、強者に生まれるためのエネルギーとなる」

赤い瞳だけが、暗闇で爛々と輝いていた。

「ハッピーバースデー、新しい人修羅の誕生さ」

——10

寝起きよりも気分よく目が覚めた。不快な感情は一切なかった。

そこは何処までも広がる白い場所だった。見上げるほどに巨大な扉が一つあるだけの、白い場所。扉には見た事のない幾何学模様や奇抜な文字が刻まれていて、辛うじて中央に描かれている巨大な樹がわかる程度だった。

扉の周囲には、幾人かの大人や子供が居た。戦闘機や人型のロボットも複数台ほど鎮座していた。また、離れた場所に立っているサングラスの男性は、美しい女性を伴って、私が見た事のない凶悪な珍獣の世話をしていた。

ここは何処だろうか。

「こんにちは」

「えっと、あ、はい。こ、こんにちは」

きよろきよろと辺りを見回していると、女性に挨拶された。私と同じ長い黒髪の女性。ただ、私よりも背が高く、肌も白い。大人の女性というやつだろうか。女性は、学帽と男性の学生服を着ていて、昔の学生のような出で立ちだった。帽子から黒い猫の耳のようなものが浮いていて、腰の辺りからは長い尻尾が見えた。コスプレかもしれない。

「私の名前は……白野、はくの好きに呼んくれていいからね」

「えっと……は、はくのさん？」

「うん、よろしくね」

綺麗な声の女性だったが、感情を表に出さない人なのだろうか。表情はあまり変わっていない。

どこか作り物のような雰囲気があった。

「その、私は曉美、ほむらです」

「ほむらちゃん、か。かつこいい名前だね」

「……！　ありがとうございます！」

親友のまどかと同じ、かつこいいと言ってくれた。信頼できそうな人だ。

あれ、ついさっきまで一緒にいたはずのまどかはどこに……？

「ここが何処かわからない貴女に教えておくね。ここは煉獄フルガトリオとある条件を満たした人

間が迫り着く場所、らしい。さて、ほむらちゃん。貴女は死にました」

はくのさんの猫耳や尻尾が揺れる。コスプレにしては良く出来過ぎていた。

そうだ、思い出した。

瓦礫が降ってきたのを発見した。だが、発見が遅れてまどかが危なかったから、なんとか助けようとして、それで……。

「そっか。死んじゃったんだ、私」

まどかがどうなったのか気になったが、ここにいないのなら助かったのかもしれない。安心したけど、ショックだった。

目頭が熱くなる。涙が零れそうだった。

「うん。だけどこれから生き返られるから」

「え?」

「詳しくはステイヴンが来てからにしよう。とりあえず頑張ったら生き返ることができるところ頑張ろう。私も手伝うから大丈夫」

グツと両手を握りしめたはくのさんが「頑張れえー」と応援してくれた。

あまりの意味不明さに、涙は出なかった。

やることもないのではくのさんの横に座る。はくのさんは佩いていた刀や古い銃を

眺めていた。死後には銃刀法違反は無いんだな、とくだらないことを思った。遠くでは戦闘機が飛んでいたり、緑の光を纏ったロボットが男性になつたりしていた。

そうしている草臥れたサラリーマン風の青年が、歩いてきた。腐ったナニカと、囚人服を着た幼い少年を引き連れていた。そして周囲の様子を眺めると、大きく溜息を吐いて、離れた場所に座った。

次は鮮やかな赤い服を着た人形がふわふわと飛びながら現れた。人間の少女のような、精巧な人形だった。

最後に、青い髪の少女が飛んできた。背には燃える炎の翼。私達の方へと近づいてきて、はくのさんと一言二言だけ交わして、私と反対方向に座った。

中央に在った巨大な扉が開き始めた。何処までも暗く、冷たい空気が漏れ出してきた。

錆びた金属がこすれ合ったキイキイという音を立てながら、車椅子に座した男性が現れた。白髪の初老の男性、赤いスーツを纏い、車椅子に座りながらも足を組んでいた。「君たちに話をしておこう。これから現れる大いなる破滅への対処と、その報酬についての話を」

足立あだちとおる 透が戦う理由は、ペルソナに目覚めたからだだった。ついでに加えれば、影時間という一日から独立した時間で目覚めた特殊な能力があつたからだ。特別な事柄はなく、なんとなく目覚めた力だった。事情も知らず、嫌悪を抱くから敵だと想定して化物を倒し続けた。銃がかつこいいという単純な理由で警視庁の捜査官を指し、同僚との派閥争いを繰り広げる日々の中、怪物と戦う自分に、特別感を抱いていた。勉強ばかりしてそれなりの進学校を出て飽いていた人生に面白みを感じ始めていた。

奇妙な縁で、学生たちが足立と同じように力に目覚めていることに気付いた。自分だけが特別だという意識がなくなり、その力に失望すら抱いた。特別でなくなった力を捨てて、また空虚な日々を送るはずだった。

研修で八十稲羽署へと行かされた後で、足立の人生は少しだけ人と関わりを持つようになるまでは。

研修先で、足立が指導されることとなつた堂島という男は、古いタイプの人間だった。堂島は生真面目で不器用かつ情に厚い、と往年の刑事ドラマにいるような男だった。思考も行動も同様で、仕事は足で稼いでこそ、と考えていた。堂島は、内心でまるで化石だと呆れて馬鹿にする足立に厳しく、そして親身に接した。足立の指導をしている間に妻を亡くしていること、そして、それでも親身に接してくれていることに足立は気付い

た。

足立は自分が再び、何か特別であるかのように思い始めていた。

さらに足立は「透ちゃん」と呼び、可愛がってくられる祖母のような存在とも出会った。彼女もまた、足立に親身になって世話をしてくれた。

足立が個として特別であるとき意識したときの絶頂期だった。

堂島と交流が進むと、自然と彼の娘である菜々子と接する機会も増えた。堂島に、兄や父へと向ける感情を抱き始めていた足立にとつて、本物の娘というのは叶わない存在だった。足立は、どうにも嫉妬のような感情を抱くようになっていた。年端もいかないう、母を失った少女に対して。捻くれた足立^{大人}と違い、素直で誰にでも愛される菜々子^娘。だから、内心で疎ましく思っていた。堂島に家へと呼ばれば、足立は菜々子を大人げなくからかった。それは醜い嫉妬を覆い隠すようだった。

さらに足立は最後に残った居場所を失った。実際は違うかもしれないが、そう感じるようになった。可愛がってくれた祖母のような人の、『本物の孫』が帰ってきたのだ。足立と違う、『本物のエリート公務員の透ちゃん』が。

足立の心は軋むようだった。手に入れたと思つた物がするりと手から零れ落ちた。自分には特別な力があるのにどうして、暗い部屋で独り握りしめた拳から血を滴らせながら、自問を繰り返した。世界から色が急激に褪せて行つた。

それでも堂島との交流は楽しかった。娘がいても、まだ居場所があったから。

長期の休みに堂島の甥である鳴上が遊びに来ることで、劇的に変化した。鳴上はまだ中学生だったが、同世代の少年少女と比べて聡明で、年相応に無邪気だった。誰もが好感を抱くような理想的な少年。八十稲羽でいくらか改善されたとは言えども人間同士の争いで擦れた足立が、ひどく劣等感抱くのは当然だった。

足立は誰にとつても特別では無く、居場所だつて何処にも無かつたと気付くのに、その時間はかからなかつた。

影時間になる度に、その滾るような濁つた感情を振り翳した。日常ではおくびにも見せないそれは、足立の心をかき乱した。言葉にできない複雑な感情の発露は、ただ原始的な力の行使である暴力という手段が誤魔化してくれた。影時間が無ければ、どうなつていたかわからない。他人を手に掛けていたかもしれない。それくらい激しくて、暗くて、冷たくて、何処までも虚しかった。自分を必要としない世界に生きるのは苦しかった。

ペルソナが腐つた姿に変異したのはそのときだった。全てを殺したい、壊したい、死に触れてみたいと思うようになってからすぐのことだった。醜いその姿を、不思議なことに足立はすぐに受け入れた。まるで苦しむように求められていたかのようだった。だから否定しなかつた。

そして、転機は訪れた。鳴上が、影時間の中を一人で歩いていたことだ。足立としては放つておいても良かった。化け物に食われたら、居場所がまた空くのではないかという考えも浮かんでいた。ただ、堂島に「時々で良いから世話してやってくれ」と頼まれたことを思い出した。結局、弱弱しい化け物を駆逐しつつ、迷い込んだ鳴上を保護して家へ送っていた。自然と身体が動いていた。今後また面倒をかけられては困るとあまり詳しくない事情を説明して。それ以来なぜか、足立は鳴上に慕われるようになった。

鳴上は暇なときには足立に付いて来るようになっていた。堂島はそれがまるで兄弟のようだと笑ったが、足立には何も面白くなかった。憎しみすら持っている相手が付いて回るなど、面倒で苛立たしい事だと思っていた。

仕事の途中でも鳴上が後を追いかけてくるようになり、食事を供にするようになって。堂島の代替のように扱っていたのかもしれない。そんな日々が続き、自然となりつつあった。慣れとなって麻痺したように、足立は鳴上を受け入れていた。

そして、ぼつりぼつりと鳴上は付いてこなくなっていた。足立が物足りなさを感じ始めていた早上がりの日、鳴上が色々な人々と交流を重ねている姿を見た。誰にでも優しい顔をして、誰にでもすり寄る姿を。この田舎での生活に慣れてない内に、抛り所として足立を使っていたのだらうと思えるような姿だった。

やはり特別では無かったのだと裏切られたような気持ち、足立は勝手に抱きながら

歩いた。無意識のうちに足が向かったのは、堂島家だった。堂島と一緒に食事でも取れないだろうかと未練たらしくチャイムを鳴らす。迎えてくれたのは菜々子だった。それが足立にとつての、彼の生き方を決める、最期の転機だった。

夕方の薄暗い部屋で、菜々子は一人でテレビを見ながら宿題をしていたようだった。話を聞くと、夜までそうやって過ごしているらしい。違うのは、電気を付けるか、腹を空かせているかくらい。堂島はまだ仕事をしている。そして、帰ってくるのは遅くなるという。鳴上は外で遊んでいる。同様に遅い日もあるという。二人に愛されている菜々子は、今、何も特別では無かった。愛されているはずの彼女は、足立と何も変わらない側面を持っていた。勉強を教えてやれば、普段のからかいに警戒しながらも喜んで近づいてきた。堂島と鳴上が二人で帰ってくれば、そつちへとすぐに向かった。菜々子も、そして、足立も同様だった。菜々子は足立よりも鳴上を、足立は菜々子の相手よりも堂島を優先しようとした。そういうものなのだろう。

夕食を囲んだ帰り道に、一人で足立は考え込んだ。求めてただ待っている姿勢が、幼い少女と同じだということに。自分は何かしたことがあつただろうか。しようとして、手を差し伸べたことはあつたと思考する。相手が手を払っただけだ。そうだ、自分ではできることをしてきた。してきたつもりだ、と。

その翌朝、足立を「透ちゃん」と呼んで可愛がつてくれていた祖母のような人が目を

腫らしながら軒先を掃除していた。話を聞くと『本物のエリート公務員の透ちゃん』が帰ってしまったらしい。自分を裏切ったからだと言立は内心で笑みを浮かべた。自分を必要として、信じていたら、きつと……きつと？ 研修で八十稲羽署へと来ているだけの自分なら、どうだというのだ。そもそも、自分ならどうだったか、言立は考えたことがなかった。親友ができたとして、恋人が出来たとして、相手が特別だと思いつけられただろうか。いや、出来ないだろう。出来るわけがなかった。言立が意識する特別とは、依存よりももっと深く、不可能なことだ。空気のようにならざるを得ない意識しなければいけないなど、正気では無理だし、狂気に陥っていたら尚更無理だ。そもそも、祖母のような人にとつて、代替だとしても、言立は特別な人間になりつつあった。だが、言立には彼女だけの特別ではいられなかった。漸く言立は気づき始めた。幻想を追いつづける自分の姿と妥協しなければいけない現実。他にばかり理想を押し付けようとする、愚かで滑稽な自分の姿に。

祖母のような人に挨拶をして、堂島に仕事を教わり、鳴上と交流して、菜々子に勉強を教える。その間にも、仕事柄困った人々の手伝いをして、堂島と異なる上司に怒られ、歳の近い同僚に慰められる。一日だけでも様々な人と関わっている。誰かしらの傍にずつといることはできない。そして、それが自然なことなのだと言立は知った。やつとわかった。わかつたつもりになっていた言立は、やつと理解した。人として普通の事を、言立

は識った。幼稚な自分を識ることが出来た。心に染み入るように抵抗なく、生きるとはそういうものなのだろうと足立は理解した。誰かにとつて特別であろうと、常に唯一にはなれない。人と人は繋がりながら、離れていることに。繋がっているように極めて近く、そして限りなく遠く離れている。街中を歩いてすれ違うように様々な人と近づき、離れ、また近づく。その行為の繰り返しだということに。

そして、足立は奇妙な夢を見た。鼻の長さが特徴的なイゴールと名乗る老人と話す夢だ。足立にとつて大きな出会いや別れ、事件が起きて解決まで導いた時に見る夢だった。

夢を見る度に、足立は自らの仮面が傍に近づいて来るように感じた。それは鳴上とともに深夜の巡廻を続け、八十稲羽を守り、ついに朽ち果てた神社で女神トヨタマヒメと出会った時から始まった。

都会に帰った後も、足立は必死に生きた。クソみたいな世界だと罵りながら、そういうものだと妥協して、何時かまた信頼できる人々と擦れ違えることを期待して。

それから足立は、時々夢を見る。深く長い夢の時もあった。白昼夢のような浅く短い夢の時もあった。

幾度もの小さな絆と、安らぎの夢を重ねた。

「世界を包んでいた霧が払われようとしている……？　だが、それでも滅びを遅らせるだけだ」

夜の帳を纏ったニユクス・アバターが空を見上げて呟いた。ニユクス・アバターは、今では見る影もないが望月という少年の姿で生活していた。世界を滅ぼすような気質では無く、遊ぶことが好きな女の子の少年だった。

だが、足立にはどうでもいいことだった。草臥れた印象を与えていた、よれたスーツが血で濡れていることも、骨が折れ、肉が削げていることも、やはりどうでも良かった。ここを任せる様にと大言を吐いて、モナドマンダラの先へと急がせた仲間たちのことだつて気になっていない。どうせ死ぬのだから、何処に居ても一緒だった。世の中は一樣にクソで、ずっとずっと鮮やかだ。仲間なら終焉もどうにかできるのだという期待を持っていた。

ニユクス・アバターの理解できない苛烈な攻撃の前に、足立の意識は曖昧で、風前の灯火という状態だった。気に入って使っていた赤いネクタイが、自分のどす黒い血で汚れていくのが、ぼんやりとながらに気になった。血が足りないのか、意識が薄れてゆく。いつも見る夢が近づいている。そして、夢へと迫る意識の中で、仮面は足立を慈しむよ

うに見守っているようだった。

いつものベルベットルームで、イゴールがいつものように机に腰かけていた。光量が絞られた薄暗いその見慣れた部屋は、足立にとつて居心地のいいものだった。イゴールの正面に置かれた椅子に、いつものように座る。何時の間にか、机の上に紅茶が出されていた。香りを楽しみながら、紅茶を含む。足立が何か言わなければ、イゴールも何も言わない。いつものことだった。

足立も最初はイゴールの怪しさに疑いを持っていたが、イゴールは常に優しく足立を見守り続けていた。イゴールのそんな姿は足立にとつて悪い物ではなかった。気付けば気を許すようになっていた。誰かと出会い別れたり、事件を追って解決したり、そういった人生の小さな転換の度に出会うイゴールに、成功したことを自慢げに、失敗した遣り切れなさを悔いを交えて、話すようになっていた。イゴールはそんな足立の話を楽しそうに聞き、時には相槌を打ち、時には小さな助言をした。それがいつも通りだった。イゴールと足立の丁度中間に、か細い光を放つカードが浮いていた。いつもとは違う様相。これがイゴールと向かい合う最期なのだろうと足立には漠然と理解できていた。紅茶を飲む間、走馬灯のようにこの部屋に来た時の思い出が甦った。

トヨタマヒメを説得し、守り神としてタマヨリヒメに八十稲羽を守ってもらえるように交流を重ねて約束をした時。

鳴上が都会へと帰る際に、お礼にと折鶴を貰った時。

研修を終え、堂島に祝いとしてネクタイを貰った時。

菜々子にお礼と別れの手紙を貰った時。

祖母のように慕った人に、帰りの電車で食べなさいと弁当を貰った時。

都会で仕事をしながら、影時間の解決に奔走することになった時。

鳴上を始めとした学生たちと交流し、保護者として世話するようになった時。

仕事で同僚の本音を打ち明けられた時。

大人として、影時間の中で戦う学生たちを導くことになった時。

噂が現実となる奇妙な異界の幾つかを解決するために駆け回り、仲間が増えた時。

仲間とともにバイクを弄り、本音で接してもらえようになった時。

幼いペルソナ使いや動物の世話に慌ただしくも対処し、感謝された時。

ペルソナを介してニャルラトホテブに乗っ取られた人間が悪意を振り撒いているこ

とに気付き、それを止めるのだと仲間たちと決断した時。

タカヤという男と交流を重ね、親友とも呼べる仲間になった時。

タカヤに世界を滅ぼそうと誘われ、断って倒して、彼の遺言とともにリボルバー式拳

銃を譲り受けた時。

幾人かの仲間が死んだ時。

少しの仲間を守れた時。

仲の良かった望月という少年が滅びの宣告者であり、人に憧れを持ち殺したくないと言う悲鳴を聞きながらも、どうにも出来ないことを理解した時。

そして、世界の終焉へと挑む今。

ゆつくりと紅茶を飲み干し、カップを受け皿に置く。かちやり、と陶器同士がぶつかる音がした。何処までも広がる暗闇のベルベツトルーム、反響することなく音は消えた。

立ち上がりながら、カードへと手を近づける。消えそうで消えない光が灯ったカードは、足立には何か掛け替えのない物に思えた。

「これを使えば一発逆転、なんて都合の良い道具なわけないよね」

足立の言葉にイゴールが喉を鳴らして笑いながら頷いた。都合の良いことなんて無いことくらい、足立にだってわかっていている。世の中はクソだ。報われることのほうが少ない。

「それは紡いできた絆の力。人の繋がりのようにか細く弱くも見える。決して奇跡を起こせる物ではない。しかし、暗闇の中で輝くその光は、孤独だった貴方を勇気づけてくれるでしょう」

「……よくわからないけど、いつも通り自分でやってみせるさ。僕だけでも何とかなる

気がするし。小難しい話も今日は要らない」

カードに触れる。

暗所のようにだったベルベットルームに柔らかな光が射した。見上げると天井は無くなっており、何処までも突き抜けるような美しい夜空が広がっている。柔らかな光を放つ鮮やかな月が浮かんでおり、星が瞬いていた。

「……主の言う通りでした。貴方は元から孤独では無かった。こんなにも月と星が綺麗なのですから」

ベルベットルームとイゴールと姿が遠ざかっていく。目覚めが近い。

「夢が終わる時が来ました。そして、運命の待つ現実とは何処までも貴方に厳しい。……貴方は、素晴らしい隣人だった」

イゴールの呟きを聞き、笑みを浮かべて手に持っているカードを眺める。絵の無いタロットカード。0という数字だけが、薄く描かれていた。

足立にとつても、イゴールは素晴らしい隣人で、そして……。

「……嫌になるよ。必死に頑張れば大人になったら報われるなんて、全部ウソ。勉強しても、汚い人間関係の円滑な進め方や権力闘争の勝ち方なんてわからないし」

足立が倒れた姿勢から起き上がりながら、言葉を漏らした。骨が軋む音がする。血がいつまでも流れ出ている感じがする。呼吸するのだって窮屈だ。世界はこんなにも狭かったのか、潰れた片目から生ぬるい液体が流れた。

地面に座っているだけで、あと数分もしたら天に召されそうなほどだ。満身創痍という文字を辞書で引いたら今の自分が描かれているのではないかと足立は思った。

「足立さん、そのまま寝ていた方が良かったと思うよ。立ち上がっても苦しいだけ、痛いだけ。どうせ死が訪れる。終わるのなら楽なほうがいいじゃないか」

人間臭いニユクス・アバターの言葉に足立は笑う。

「ホントそれ。僕もそう思うよ。何やってんのかなって。起きたら夢だったらいいなって思っただけかと思っただけ」

喋るだけで口から血が零れる。ひゅーひゅーと音がして、呼吸だって難しい。会話できていることが奇跡的だとすら足立は思ったが、意地が勝った。何も無いはずの空虚な心に宿った小さな意地が。

「僕は大人だから、子供の我が儘くらい受け入れてやらないといけないって堂島さんに教わった。子供が悪いことを理解しながらやるのは叱って欲しいからだと言った。寂しがっていたら面倒だけど面倒を見るのが当たり前で菜々子ちゃんと言った。苦しんでたら手を貸すのが縁だって悠くんが教えてくれた」

召喚器を拾い上げる。ペルソナを召喚する補助具でしかないそれは、元から不要だった。ただ、仲間として受け入れられた証だったから、持っていた。

自分を必要としていない世界なんて滅びてしまえば良いと足立は考えたことがあった。今、この場で最も必要とされているのは自分だった。世界に、仲間に、そして望月に。

自分じゃなければいけない場面で、特別を求められているのなら、それに応えるのが当然だろう。足立にも意地がある。空虚だった心にだつて、微かな光が灯っている。

「何もしないで死ぬまで黙って寝てろだなんて、ひどいことを言うじゃないか。とんだ悪ガキだよ、ホント」

召喚器は、手を離せば当然のように重力に引かれ、かつんと音を立てて地面に落ちた。その様に反応したニユクス・アバターに見えるように、左手に持っていたカードを砕いた。

—— 小きき封印が、ニユクス・アバターを拘束する ——
「足立さん……？　この力は……一体……」

「薄っぺらい僕の人生経験さ。辛苦の入り混じったそれは、見た目よりも重く固いと見えるね」

ニユクス・アバターに淡い光の鎖が幾重にも巻き付き、動きを止めた。ぎしぎしと音

がする。それは、今にも千切れそうな程に弱く頼りない拘束具だった。

だが、外れない。外れるわけがない。

「……それで、僕の動きを少しだけ止めてどうするんだい？ 確かに僕は取り込まれ、ニクスそのものとなっていていけるけれど。決してデスの訪れを止められるわけではないんだよ。太古の昔、生命に死を与えたデスの肉体は月にある、こんなことに意味なんてないんだ。愚者は何者にも成れず、何も出来ず、何も変えられない……」

足立が傍に転がっていたリボルバー式拳銃「S & W M 500」を左手で拾い上げる。血が滴ったそれは親友が遺した大事な宝物だ。

「ずっと意味わかんないことばかり言つて、ちよつと必死すぎない？ 運命がどうか、そんなのどうでもいいじゃん。君は馬鹿でどうしようもないんだね。だから大人の僕が殺してあげるよ。しょうがないから、殺したくないのにどうしようもなくなつて君を、僕の全てを使つて。これは特別だぜ」

他の事は、みんなに任せるよ。口の中で、言葉にしなかった思いが溶けて消えた。

こめかみに向けたリボルバーに残った弾はちようど一発。これも運命というやつだろうか、足立は笑う。そんなものないと言いつつ、神秘的なそれを感じてしまう。

「ペルソナ」

リボルバーが炸裂し、足立の頭部を消し飛ばした。血が霧となり、脳漿が飛び散った。

衝撃に耐えかねた足立だった物の左手が、リボルバーを握ったまま千切れ飛んだ。

足立は自らのペルソナを幻視した。優しく、慈しむように、そして労うように自身の頭を撫でてくれるそれ。仲間から評判の悪かったペルソナだが、やはり足立には何処までも美しく見えた。

ペルソナの力を使うには幾つかの方法がある。異界で自身向き合い認めることでペルソナとして制御する、異界でペルソナを否定することで飲み込まれ自我を乗っ取られる、素質ある者が強い絶望に飲まれシャドウへと至る、分霊の一つとして似通った人間に貸し出す、等だ。ペルソナは神や悪魔、天使の姿を持つており、伝承に伝わる強い力を手軽に使える利点がある。しかし、力が及ばなければ制御に失敗し、乗っ取られることもある。反転召喚とも呼ばれるペルソナの暴走だ。

ニヤルラトホテプは人間のペルソナを介して、この世界へと干渉するために現れた。反転召喚によつて器を食い破り、世界へと生まれた。

足立にも出来ないことじゃない。力が足りないのなら、来てもらえばいい。ただ、それだけのことだった。

「滅び行く世界に合わせて神を呼び出そうだなんて……い。足立さん、貴方つて人は

……！

奇跡的に状況は揃っていた。

今現在、愚か者のお蔭で世界は生と死が輪廻しており、死した人や悪魔から溢れ出たマグネタイトで満たされている。子である足立は、生を望みながら死へと落ち、その感情は最上の供物であり祈りとなった。

場と道は出来ていた。

頭部を失った足立の死体が、急速に腐っていく。肉は腐り、骨は溶け、腐臭で満たされる。僅かに残った頭蓋、その底から、どろどろとコールドタールのように真つ黒な液体が滲み出していた。とてつもなく恐ろしい神気が湧き出す。

呼ばれたその神は、母であるその身が愛しき我が子に頼られたと、歓びのままに顕現しようとする。昏く深い夜を見る黄泉の国から。

ずっと見守っていた、要領が悪く、不器用で、だからこそ何処までも可愛い我が子に求められて。止まることは無い。誰にも止められない。女神を止められる者は、この場にはいない。

腐った身で、その神は現れた。

「嗚呼、愛しい子らに求められ、母は参りました。幾人もの不出来な子を殺してきて良

かったと、心から思います。殺してきたからこそ、愛しき子らが生まれた。童わらわを必要としてくれた。あまりに嬉しくて涙が溢れ、言葉に詰まってしまいそう」

腐った足立の死体を、汚泥が浸食した。ぐずぐずと絶えず腐っている。腐敗した肉や骨から流れ落ちた黒い滴りが、地面を汚し、空気を汚し、世界を汚す。汚れから、黄泉の悪魔が湧いて出る。

「母として、誠をもつて子らの労苦に報いましょう。そして、神として、心を尽くし魂を尽くし力を尽くしましょう」

腐った汚泥が、美しい声で言葉を紡ぎながら、吐き気を催す醜悪さで、ニユクス・アバターへと這い寄る。

ドロドロとあらゆる全てを汚しながら。

ニユクス・アバターごと異界が汚泥に飲み込まれた。

そこには、腐敗した世界だけが残された。

有里は、その顛末を見せつけられながら、デスである月と対峙した。異界が解除されたからこそ、デスと対峙できた。

そして、幾度も死に掛けようとも立ち上がり、大いなる封印により、有里はその命を

対価にデスを封じた。

だが、封じることができたのはデスの体だけ。

精神である集合無意識は、ただ静かに、東京へと降り注ごうとしていた。

原作：女神転生シリーズ　ペルソナオリジナル1

宇田須^{うたす} 老縷^{いぢる}は高校二年生である。

背は百七十から百八十のちょうど中間、体重は六十五キロ。

視力は両目ともに良好。

髪は短く清潔で、いたずらに染めることもなく、光に照らしてなお真っ黒だ。

容姿は十人中十人が悪くない、むしろ良いと答える程度。

声も年齢に伴った低さで、快活というほどでもないが、どもることなく滑らかで聞き

心地がいい。

ただし、纏う雰囲気が最悪。

改善する兆しはなく、悪化だけを辿り。

何処が如何だとか、そういう段階は通り過ぎていた。

その様はまるで、良くない何かに魅入られているかのようだった。

1章 『冷たい世界、朽ちた本』

— 1 —

勉強机に置いてあるデジタル時計が時間を刻む。よどみなく、一秒一秒を過去へと捨てる。ながれるように、一秒一秒未来を取り込む。

時間支配したくらいで調子づいてんじやねえぞこの糞時計が、と放り投げる。そして俺は頭を抱えた。夏休みが終わるなど、誰が予想できただろうか。アインシュタインも驚きの事実だ。

なぜ終わるのか。何度も逡巡した。そして答えは出た、新学期が始まるからだ。

八月が中頃になると、満喫し切ってやることも無いなど愚かにも慢心した時期もあった。だからこそ悔しい。だからこそ惜しい。あの時の、一日に流れる雲を数えるなどという無駄なことを行つた時間が。

なぜ時間を平等に流すのか、俺だけが好き勝手してもいいじゃないか。純真な思いだった。

明日が来ないでくれと祈っている訳ではない。純粋に、飽きるまで今この時をエンジョイしたいだけだ。心が躍って飽きたら明日が来ればいいのだ。良い事言っただ、俺。

強く思う、時間を操作できるのなら全てを奉げても良いわけではない、と。好き勝手するためだから代価が必要になるとかクソすぎる。自由にさせろ。抑え込まれた未熟な魂が叫んでいた。まるで校舎の窓を全部叩き割るかのような思いだった。

行き場のない悲しみが身体を動かした。机に突っ伏したのだ。まるで不貞寝のようだが、違う。俺は防御の姿勢を取ったのだ。背中の防御力は、腹よりも高い。つまるところ時間への反逆だ。よって無敵。

かちやんと陶器が擦れる音がした。肘が、眠気覚ましのために置いたコーヒーカップに触れたらしい。時間よ止まれ、内心で呟く。これでコーヒーは落ちることが無いだろう。

そのまま仮眠を取るといふ名目で、深い眠りに入った。

何か良くない予感がする、それが目覚めたときに抱いた思いだ。何か大事なことを忘れながらも、新年の朝に新調した下着を履いたかのような、爽やかな目覚めだった。

そして、高速で思考が働く。過去へと遡る。コーヒー。そう、コーヒーだ。落ちていて、乾いているだろう。面倒だ。ではなぜコーヒーを用意したのか。宿題だ。俺は一夜

漬け天才タイプなのだ。

危機に気付いた者特有の、さつと底冷えするような感覚が全身を浸食した。やってない宿題プラス快眠、イコール……。ぞつとした。英語の課題が出来ていないのが恐ろしい。他の宿題はどうでもいい、どうせ俺に声をかけることなどしない。だが、英語の教師は違う。やつは親し気に近づきコミカルに刺す、豪の者だ。

今、何時だ。かつてないほど機敏に動き、時計を確認した。

デジタル時計は、止まっていた。

……時間、支配しちやつたかな。

はあ、くだらない。しょうもない冗談は記憶の彼方へ投射。

時計が止まった失望をため息に乗せ、ポケットにある携帯電話を開いた。近年はスマートフォンとやらが台頭してきているが、あんなのは玩具にすぎない。俺の優れた頭脳は、すぐにガラケーに駆逐されて元の平穩で利権に塗れた世界に戻るが、ポケベル派が奇襲をかけるだろうという未来をほぼ確定気に読み取っていた。

ぱかりと呑気な音を立てる携帯電話に苛立ちながらも、液晶画面へと目を落とす。そこには何も映っていないかった。電気の灯らない、暗い画面。

間が悪い、後ろにあるベッドへと電話を放った。同時に電化製品がやられるとは、厄日だろうか。それとも数年前に流行った二千年問題か、なんちやらタイマーか。なんだか不思議な現象に、わくわくしてきた。直視したくない現実から目を逸らしたとも言えた。

机から落ちたはずのコーヒーカップは、床で中身を零すことなく宙で止まっていた。

デジタル時計は、止まっていた。

背後には宙に浮かぶ携帯電話。

……じ、時間、支配しちやったかな（震え声）

バグった世界にキョドリながら、いくつか試行する。デジタル時計は時を刻まない。コーヒーカップは落下しない。携帯電話の画面は写らない。しかし、触れることで物も動かすことは可能だった。力を与えれば、その分だけ動いてくれる。コーヒーに触れても熱を感じない。宙で静止する携帯電話は手に取れば、容易く動かせた。この奇妙な現状に興味を持った。

試しにペンケースからペンを取り出し、軽く投げる。ペンは三十センチほどまっすぐ

に進むと、ぴたりと止まった。重力に引かれることは無いようだった。俺自身が与えたエネルギーのみを物質は受け取っているのだろうか。静止しているペンに、別のペンをぶつける。静止しているペンは衝突したエネルギーを受けとったのか、再び動き出し、静止した。

次に机の引き出しからライターを取り出し、着火すると当然の如く火が灯るも、熱を感じることはできなかつた。ノートから白紙を裂き、浮いているペン先に突き刺して通す。そして、ライターで炙ってみる。勢いよく燃え始め、ぱらぱらと火の粉となって空中へと留まった。留まっている火の粉から熱を感じることは出来ない。火が出るのに熱が感じられない状況に、首を傾げた。

それ以降も色々試行を繰り返したが、わかつたことは少ない。とりあえず大雑把に把握できているのは、全てが止まっているということだ。そして、俺が力を与えた動作ならばある程度まで物理法則に従うようだ。

時間、支配しちやつたかな、q、

酷く重く感じるペンを走らせ、夏休みの課題を終わらせた。

— 2

時間が進まない。

何も動かない。

誰もいない。

室内は苛立ちとともに放り投げた物の数々が、宙で静止したまま。

事態の深刻さに気付くのに遅くなったのはこの奇跡的な状況に浮かれていたからか。それとも、ずっとこのままの可能性があるというのに、それでも恐怖を感じない無駄な自らの無神経さが悪いのか。

動かない現状を何とか打開するために、動き始めたのがずっと昔のように感じる。

夜闇に混ざって歩けども、人は動かさず。

見上げた夜空は半分ほど雲が覆っていて、その隙間から星がちらほらと光っている。雲を寄せ付けない満月は翳ることなく同じ場所で輝いている。

動かない世界に、悪戯心が芽を出した。飽きたわけでは決してない。ただ、こんな夜中に徘徊する人々を驚かせてやろうと思ったのだ。時間が動かないと言う事実を忘れ

たいという事もあるが。

街を一通り練り歩いて問題を解決するほどに時間をかけているのに、何も変わらな
い。

俺が時間を止めているのか、俺以外が時間を止めている状況に紛れ込んだのか、それ
すらもわからない。

俺はどうすればいい。

何が変わる。

どうやって動かす。

何が悪かった。

頭を抱え、悩み、そしてこの状況を打開する方法に思いつく。

時間を動かすマジックワード。

そして時は動き出す（ドヤッ

全然動き出さなかった。

まあ実際は動き出すとかだろうし。

やっぱテキストって悪だわ、q、

気の遠くなるほどに時間が止まり続けている。あまりに長く止まっているため、それが自然すぎて、動いている世界を思い出せない程に。

最初は動かない世界に苛立ちを持ち、発散するように暴れた。そして慣れたらどうでもよくなってしまった。普通なら頭がおかしくなるのかもしれないが、寂しいと感じたり、物足りないと感じるだけで普通に過ごせる。過ごせてしまう。俺はこんなにも奇妙な精神をしていたのだろうか。気付いていなかったただけだろうか。誰も居なくとも問題なかったのだろうか。それなら動いている世界で生きる意味などあったのだろうか。

電化製品が動かないので、暇つぶしは基本的に読書になっていた。漫画も読むし、小説も読む。時間が止まった世界に諦めた頃の行動範囲は自室周りだけだったため、料理本や旅行のガイドブックなども読み漁った。手慰みに勉強もやったが、教科書を一通りやったら飽きた。

春に懸賞で当たった野球超人伝を読破し、内容に沿って身体を動かしていく。最初は思うように動かさずこちなかつたが、訓練を文字通り時間を忘れて重ね、ついに修得し

たと胸を張って言えるほどに成長した。この動きを応用することで、我が家に眠っていた蔵書たちも利用することが出来た。しかし、『ミンチで珍味☆』や『受け身で元氣、投身自殺』、『圧倒的投擲術』など役に立つのか分からない本も多くあった。隅々まで読んで、再現もしたが。流石に巻末に載っていた、ビルから落ちて受け身を取るなどのプロコースは練習する気にならなかった。

本、本、本……と彷徨う。家にある本の大半を読み尽くして、活字中毒なのだ。電話帳や辞書には手を出さなかったが、このままだと歩く図書館になってしまう。そうか、図書館だ。あそこは楽園のはずだ。なぜなら本が沢山あるのだ。枕にしてもいいし、布団にしてもいい、もちろんプールに溢れるくらい敷き詰めて泳いでもいいし、入浴剤として風呂に入れてもいいのだ。本は使い道が無限にある万能アイテム。細かく刻んでかけることで薬味にもなる。

そうなるも是が非でも図書館に行かなければならなくなったな。しょうがない、散歩ついでに図書館へと向かうしよう。

暴走行為を行っているらしい信号無視の珍走団を発見。そいつらに轢かれかけている親子を安全な位置まで移動させる。そして、珍走団の連中はバイクから降ろし、バイ

クと分断しておく。時間停止が解除されたら慣性によって投射されて大根おろしになるかもしれないので、全員をすぐ近くのガイア教とかいうオカルトグループの事務所の窓に配置してみる。折角なのでバイクは礼儀正しく入り口から突入するように配置。事務所を見た感じだと暴力団っぽい風貌の男たちが屯つたので、マイナスとマイナスをかけるとプラスになるだろうというサービス精神のためだ。

道路から逸れるように蛇行運転している車を発見した。中を除くと、顔が赤く目の焦点が定まっていないドライバーが運転しているようだった。これではいつ事故が起きても可笑しくない。運よく川沿いだったため、ドライバーを引き摺り出して、川に落下するよう配置。そして車のハンドルを時間をかけて曲げ、川に向かうようにした。この酔い覚ましは俺からのサービスだけ。

薄暗い公園で、強姦しようとしている男と、されかけてる女性を発見した。プレイじゃない限り犯罪である。プレイでも犯罪か、世の中は広い。女性を明るい場所まで運ぶ。そして男が持っていた縄で、男を引き摺って歩く。こんなにもアグレッシブに動いているのに、疲労を感じないのだから凄い。

住宅街に差し掛かると、放火魔を発見した。一軒家の庭に侵入しての放火だったの
で、発見できたのは運が良かった。発見できた要因として、月にぼんやりと黒い煙がかかっていたからだ。お天道様はいつだって見ているんだなど、強姦男と放火魔の夢のこ

ラボを實現。手元で育つ火を見て悦に浸つてた放火魔に、脱がせた強姦男の股間を揉ませてやった。それだと足りないので、二人の両手足を紐で繋げる。燃えるカツプルの誕生だ。まあ燃えてるのはすぐ近くの家だけど。冷静になって逃げられても嫌なので、部屋で楽しく妻と談笑していた家主も少し離れた場所に配置。本人の者と思われる携帯電話を家主に持たせ、ホームアローンの完成である。アローンなのは妻だけだ。

コンビニ前で数人のヤンキーがうんこ座りして入口を塞いでいるのを発見した。流石にこれは良くない。事務所に入らせる途中だったバイクを3台ほど警察署まで転がす。そしてうんこ座りしているヤンキーを乗せ、警察署の入口に配置。ついでに偉そうな人を何人が引つ張つて来て、事件がすぐに明るみに出るようにする。自分たちが被害者になると頑張り出すのが警察だ、お祭りになるだろう。一番偉そうな人の頭からカツラが取れてしまった。まるでバイクの風圧で飛んだかのように、宙に浮かせておこう。

あとは歩道橋から転げ落ちそうになっている人を下まで降ろしたり、転びそうになっている人を助けたり、轢かれて亡くなった猫を埋めたり……。様々ないたずらを行うが、時間は進まないまま図書館へとたどり着いた。図書館は電気がついていないのに、何故か少しだけ明るかった。

鍵のかかかっていなかった裏口から図書館に入り込む。内部はぼんやりと明るい。人工的な光ではなく、見慣れた月の輝きに近い気がする。

S Fから手を出し、脳内で宇宙を生み出そうと練り歩く。それともファンタジーか。脳内に異世界でも生み出すべきか。伝記で偉人の記録を読み、どんな人だったか推察してもいい。いや、歴史もので過去に思いを馳せるのも有りと言えば有り。それとも少しばかり趣向を変えて料理本で飲み食いする想像をするべきだろうか。

料理本を眺めていると、無性に飲食物が欲しくなる。食べるにしても飲むにしても味がしないし、飲み込んだ物は吐き出さないと何時まで経っても出てこない。吐き出した物は消化されることなく咀嚼した状態になっている。

味がしない物しか食べられない止まった世界も慣れたと思ったが、やはり思い出すと恋しくなる。思い出すと止まらない。味とはどんなものだったか、音とはどんなものだったか、匂いとはどんなものだったか、触れるとはどんなものだったか、どうにも忘れられない。全てを忘れつつあるが、どんなものだったか知りたいと、再び触れたいのだという思いは抱き続けてしまう。

苦しいわけでもない、ただ欲しい。満たしたい。刺激だ。外部からの刺激が欲しくてたまらない。

外から何も伝わらない冷たい世界はどうしてこんなにもつまらないのか。

本を読む気が失せてしまい、図書館の探索を始めることにした。蛍光灯が消えているのに、月明かりに照らされたように明るいのを調べよう。もっと早く調べるべきだったのだろうか、思い出してしまった過去の欲求を抑えるのに手間取った。

どうやら光は堅苦しい寄贈本の部屋から漏れ出しているようだった。扉は開けっ放しになっている。中に入ると、目が眩むほどではないが、過去に経験した太陽の下にいるかのような明るさだった。光の元は、一冊の童話。手に取ると輝きが増していく。タイトルは『不思議の国のアリス』、汚れ一つない綺麗な状態だ。

本を開くと、室内を照らしていた輝きが弱く、小さくなる。そして、徐々に形を成していく。大きな耳と赤い瞳が愛らしい、二本足で立つ兎だった。首元には懐中時計がアクセサリーのように掛けられている。その兎は二度、三度、と耳を動かし、俺を見つめて口を開いた。

「ボクと契約して、ペルソナ使いになってよ！」

声音は中性的で、とろけるような言葉遣い。高く美しい、幼い子供の声だった。

「まずボクの名前だけど、アマガツだよ。好きに呼んでいいけどアまくんって呼んでくれてもいいんだよ」

「よろしくアマガツ。俺は宇田須 壱縷、好きに呼んでくれていい」

「よろしくねイチルくん。ちなみにボクのことはアまくんって呼んでくれてもいいよ」

「信頼できるようならな」

「じゃあ今からだね」

アマガツと名乗った無駄にポジティブな兔を抱えながら運ぶ。光り輝く真つ白な毛並みをもふもふとしてみたいが、当然のように感触は無し。残念だという思いが芽生える。

そして、やはりというべきか、時間が停止している世界で動くのはひどく難しいらしい。話をするために俺が運ぶことになったのだ。

「ペルソナとは心の底に居る『もう一人の自分』の事だよ。それは神だったり、天使だったり、悪魔だったり、英雄だったり、色々な姿のビジョンで現れるんだ。そして、ペルソナを介して、様々な超常の力を使うことが出来るんだ。火の魔法を使ったり、傷を治したり、レポートしたり。精神力みたいなものを消費するけど」

「時間を止めることも出来る、と?」

図書館の談話室まで抱えて運び、机に乗せると兎が語り始めた。舌足らずなのは姿が兎のためだろうか。

時間が止まる前の俺だったらペルソナなど信じなかったが、現状を顧みれば、むしろ受け入れるほかない。

「うん。ボクも一応時間に関して適性があるから、こうして話せているけど。君が近づいてくれなかったら入口を見つげらず、気付かないまま終わるところだった」

アマガツが頷き、そう答える。そして、今日は運が良いと呟いていた。どちらにとつて運が良いのだろうか。

首元に掛かっている懐中時計の針は止まっていた。

「まあ、時間に関しては特殊だから誰にでも出来るわけではないし、普通は長く止められないよ。止められて数秒といったところかな。だから言っておくけど、今、君のペルソナは暴走している」

アマガツが説明を続けた。

ペルソナが暴走を起こすと、持っている特殊能力を使い続けてしまうという。心のタガが外れた自傷行為にも似たそれは、最後にはペルソナの宿主が死ぬことで終わりを迎えるのだと。

「暴走はわかったが、なら暴走しているときの力の源はどこにあるんだ。時間を無限に止め続けられるような才能が俺にあるのか？　そもそも心は正常であるのだから暴走する心当たりがない」

「うん、そういう場合もあるよ。暴走と言っても、別に人間だけが原因じゃないからね。面倒な話になるから頭の片隅に置いてくれればいいんだけど、天使や神、悪魔、英雄、精霊、妖怪、あらゆる全ての人ならざる存在を悪魔と総称しているんだけど。悪魔は情報によつて構成されているんだ。伝承によつてその存在が左右されるし、信仰によつて形作られたりもする。弱い存在だと学校の噂程度で姿かたちが変わつてしまうこともある。逆を言えば情報があれば悪魔はこの世界に現れることが出来る」

悪魔に似通つた性質を持つている人間がいるとする。普段魔界にいる悪魔は、自身と少しでも似通つていてという情報の土壌があれば、そこを苗床として力という種を与える。そうすると、人間が育つことで一緒に情報も育ち、魔界からこちらの世界に幾らか来られるという話だ。その種となる悪魔が強大であったり、人間への理解が薄いと、無理やり現世に来ようとして人間という器が壊れ、ペルソナの暴走が起きるのだとアマガツは言う。

「悪魔にとつて、ボクらのようなペルソナ使いはこの世界に顔を出すための窓であり、また扉でもあるんだよ。そしてイチルくんは気まぐれに壊された窓とか扉みたいなもの。

つまり世界を停止させている力の源は、その強大な存在が出所なわけだね」

「そんな強大な存在とやらに接する機会は無かったと思うんだがなあ」

「時間よ止まれーとか冗談でも思ったんじゃないかな。あとは運が悪かったら魅入られて終わり」

「運が悪かったってそんな……」

「悪魔ってそういうものだよ。強い力を持つてるから、なんとなくで人生を捻じ曲げるんだ。気を付けていても、どんなに頑張っても、それは無いと同じことだよ。ただ目に留まったから、そんな理由で殺されるし、永遠に生かされることも或る。多分神様が祈られても何もしないのって、あまりに人間が小さすぎるのかもしれないね」

「さて、イチルくんの運がひどく悪かったという話はこれで終わり。ペルソナっていうなんか凄い超能力のせいでの今の状態になってるっていうのはわかったでしょ。もっと詳しく聞きたければ明日から聞かせてあげるし、今は契約の話をしよう。……どうせ断ったら君は朽ちて死ぬだけだし、無駄話は要らないよね」

「さらっと怖い事が聞こえた気がするんだが」

「どうせボクと契約するんだから何も怖いことなんて無いし、不安も何処にもないよ。」

植物のような平穏と、スリリングな毎日を一緒に過ごそうじゃないか。こう見えてボクは尽くす男だよ」

二本足で立っていた姿勢から机に後ろ足を伸ばして座りながら、親しげな声でアマガツがそう言った。

「ああ。アマガツはオスなのか」

「うーん、どうかな。昔は男の子だったんだけどね。今は時計兔の姿だし」

アマガツの股間に手を当ててみる。動物なら当然あるのだが何も無い。

まあアマガツ自身、リアルな兔というよりもぬいぐるみに近いし、マスコットのような感じなのだろうか。

「……ボク、恥ずかしいんだけど。好感度も足りてないよ」

「それはすまなかつたなアマくん」

「足りた！ 今、この瞬間、好感度が足りたよ！ もっと触ってもいいよ！」

アマガツが凄い勢いで立ち上がって、両前足を天高く持ち上げた。

そう、その姿はまさに全てを受け入れるマスコットのポーズ。

「いや、そんな趣味ないんで」

「そっか。まあボクはいつでももうえるかむ！なんで」

「あ、はい」

何故かテンションが上がったアマガツに引きながら、気が向けば、と付け加える。それで一旦満足したのか、アマガツは机に腰かけた。今度は何故か机の淵に座り、後ろ足はだらりと垂らしている。

心なしか、距離が近づいてきた気がするのだが。

「契約の話に戻そうか。そんな難しい話でもないよ。ボクを君の魂に住まわせてくれて、ついでにマグネタイトを幾らかくれたらそれで終わり。ね？ 簡単でしょ」

ふふん、良心的でしょうとアマガツが言う。

どこことなくその兔の顔にもドヤ顔が浮かんでいた。

「うーん……」

「そ、そんなに渋る条件あった？ もしかしてマグネタイト？ ダ、ダメだよ、絶対ムリだよ。ボクだって甘い物を食べたいんだから譲れないよ？」

親し気だった声にも、焦りが混ざった。それでもとろけるように甘い声なのだから、不思議な物だ。

マグネタイトとやらは、どうやらアマガツが甘い物を食べるのに必要らしい。

「譲るとかそういう話の前に、まずマグネタイトがなんだか教えてくれないと判断できないんだが。鉱物のやつなら毎月一万円くらいまでなんとか。それ以降は様子見しな

いことには領けないな」

「あ、そっか。マグネタイトなんて普通わからないよね。鉱物じゃなくて、人間の感情から生まれるエネルギーのことだよ。普通の人は全然気づいていないし意識もしていないけど、感情つて魂を揺り動かすから実は凄いエネルギーを持っているんだ。で、そのマグネタイトはこの世界で悪魔が生きるための身体を構成する物質になるってわけだね。また、魔界からこの世界に来ようとするのは、まあバカみたいな別の理由があるから後にしよう。とりあえず、悪魔はマグネタイトが欲しいからこの世界に現れるってことも覚えておいてね」

悪魔は情報によつてこの世界ではその存在を確立する。その際、マグネタイトを利用して磁界を形成し、実体を作るのだという。

つ

「つまり、マグネタイトというスクリーンを通して、悪魔を見れるようになる映画ということか？」

「ちよつと違うけど近いかもね。もつと現実的で触れ合えるて、自由に動き回れる的な」
「ラジコン？」

「あ、それだと映画より近いかな。ただ、操作は受け付けてないけど。悪魔はマグネタイトで捏ねた人形に意識や考えを植え付けてるって感じだし。この世界に現れた時は根

幹は一緒でも別存在になるよ。ボクも同じようにマグネタイトで体を構成してお菓子を食べたいからマグネタイトはどうしても外せないよ」

「ああ、まあ、わかったようなわからないような。マグネタイトは俺が生活している分です。賄えるのか？」

「どうかなあ、難しいかなあ。毎日感情的だったらわからないけど。でも弱い悪魔からカツアゲしてくれたら十分だと思うよ」

悪魔なんて噂のあるところになら湧くから意外と大丈夫、とアマガツが付け加えた。まるでゴキブリを示すような表現だった。

「そうだな、悩んでもしょうがない。折角戻れるなら契約しようか。……ホントに元に戻せるんだよな？」

兎が後ろ足で立ち上がり、前足でその胸元を叩く。止まったままの懐中時計が、少しだけ揺れ動いた。

「もつちろん！ ボクに任せてよ！ やったことないけど多分できるよ！」

「ポジティブだな。……え、多分って聞こえたんだけど？」

「ダメだったら朽ち果てて死ぬだけだし、期待しててね！ 正直に言うよ、停止世界での君の活動によって生じたエントロピーの回収とか色々な調整があるから、意外と難しい

ことになると思うんだよね。複雑に分岐した全てを調整するとか、想像するだけで怖くなるね。ボクたち二人なら乗り越えられるさ。いや、パスが繋がるから力自体は余裕があると思うんだけど」

「何処を期待すればいいのか教えてくれないか」

「ペルソナが暴走したけど制御を奪い返したボクの優秀さを信頼してなおかつ期待してくれていいんだよ。まあ、取り返したら時間がかかりすぎて肉体が消滅して別世界に來てたのはお茶目な愛嬌ってことで愛でてくれてもいいし。失敗したら二人で朽ち果てようね！ さあ、死なばもろとも！」

「一度心の準備をさせろ。朽ち果てるって怖すぎるんだが」

鼻歌を歌いながら、アマガツがちよこちよここと動き出す。

短い手足を一生懸命動かす兎というのはどうにも可愛く見えてしまう。

「どうせダメなときはダメだし、良い時は良いからそういう準備なんて意味ないよー。あ、そうだ。ボクは隠者を司るペルソナ使いのアマガツ、今後ともよろしくね！ ……今後があればだけど」

ペルソナ2

アマガツが見つめる先、俺の右肩の後ろにカビの生えた巻物が浮いていた。それは勝手に糸がほどけ、五十から六十センチほどに広がった。文字に見えない蠢く何か羅列されており、目を通せば何故だか文字として認識できる狂気的な内容。これが俺のペルソナなのだろう。

アマガツのペルソナである童話書がゆっくりと巻物へと近づき、混ざり、ぐずぐずと汚れていく。傷一つなかったはずのそれは、古ぼけて痛み、端々が朽ちた魔導書へと変化した。

表紙には金の文字で『The Testaments of Carnamagos』と刻まれていた。

2章 『これ本で読んだことある！』

「魂を繋げたおかげで動けるようになったよ。やっぱり支配されている時間に割り込むのは無理があつたね」

アマガツが、前足で耳の裏を搔きながら上機嫌に言う。先ほどまでの関節が錆び付いたような動きが嘘のようだった。

なんとなく気まぐれに耳の裏を搔いてやると「あふー」と満足気な息を洩らし、耳をパタパタと小さく動かしていた。俺は感覚を失っているのだが、アマガツは違うようだ。

「どんな風に元の時間に戻るか、という話だけど。戻るだけなら簡単だよ。暴走しているペルソナとボクのペルソナを融合させたから、ボクが主導すればいいだけ」

「そうなのか？ なら朽ち果てるとか無駄に脅す必要も無かつただろうに」

アマガツの背を撫でると、前後の足から力を抜いたのか、うつ伏せになって脱力した。「戻るだけならね。戻った瞬間、イチルくんは灰になるよ」

「え？」

「灰になって朽ちて死ぬよ」

あまりの言葉に、撫でていた手が止まった。

「イチルくんを介して力を使っている『強大な力』によって、停止しているこの世界が実

現しているんだけどね。君が信徒のような状態だから生きていられるし、活動もできてるのが現状なんだ。その際、この世界の歪な法則に適應するようにイチルクんの存在が書き換えられているから、元の世界に適した人間の法則に戻らないといけないんだよ」だからボクを基本として一つ一つ書き換えるんだ、とアマガツが仰向けになりながら言う。

都市伝説に出てくる異なる世界などに存在する『時空のおじさん』などは、時や空間を支配する神々の気まぐれによって書き換えられ、取り残されている存在らしい。元の世界に帰るにも、法則が書きかえられ過ぎて戻ることが叶わない憐れな存在なのだとう。

「靈感が鋭くなったり、変な才能に目覚めるかもしれないけど、そこら辺は諦めてよ」
「普通の時間に戻れるならそんな程度、全然問題ないから。」

「そう？ それならボクも何とかできそうから安心してよ」
さあ撫でて、と仰向けになったアマガツがアピールする。わしゃわしゃと少し乱暴に腹を撫でると、気に入ったのか耳が動いている。

「あーいいいいよ、もつと愛を込めて撫でてくれたらもつといいんだけど。……とりあえず、理不尽に魅入られた代償は何時だって同じように理不尽でしかないっていうのは覚えておいてね」

「俺ができる最大の撫でポだ、我慢しろ。……アマガツも俺みたいなことがあったのか？」

「今できる最大の撫でポとか素敵だね、存分に味わっておくよ！ あ、理不尽？ あるよ、いっぱいある。暴走する前はボクの邪魔をするやつばかりで散々だったよ。ライドウとかいうもみ上げと何度も殺し合いしたし。あいつホントずるいんだよー。必中するタイミングの魔法を前転で避けるし、ビームとか刀で切り捨てるし。最終的には異界を広げてる時に負けて暴走したけどね」

「ふう、久しぶりに堪能したよ。人との会話自体も遠い昔に感じるよ」

アマガツが立ち上がる。首に掛かっている懐中時計の針が回転し始め、ぴたりと止まる。前足で時計を抱え、文字盤を覗き込み「大体20年ぶりくらいだね」と言った。

「お前何歳だよ。20年とか明らかに俺より年上だろ」

「ボクはいつまでだって10歳だよ。そもそも暴走期間が15年くらいで、図書館に放置が5年くらい。人間として生きていた時は10歳だったから……やっぱ10歳だね」

「それはもう10歳ではないのでは？」

10 + 15 + 5 = 10

アマガツの計算式だところなるらしい、たまげたなあ。

「魂を共有する相棒なのに、こんなにイチルくんとボクで意識に差があると思わなかった……！」

「すまん」

目を丸くしてショックを受けているアマガツの首元を撫でる。耳がぴこぴこ動くので、撫でられるのがやはり好きなのだろう。

「ええんやでつと。じゃあそろそろ戻るために作業しようか。やることは簡単、トライアンドエラーでバグを取る様な物だよ。ボクが法則を書き換えるから、イチルくんは元の時間軸に戻る。失敗したらやり直し」

魔導書が両開きとなり、バラバラとページが離れ、アマガツの傍に浮いたまま留まった。

「……簡単そうだな」

「まあ、うん。失敗したら肉体が死ぬだけだし簡単だよ」

「は？」

ぱん、と空気が爆ぜる音がした。図書館が消滅し、周りは何も無い荒野となっていた。

「あ、失敗した。リセット、と」

アマガツが弾け、俺の意識も消えていった。

「時間が止まってるってことは、速度は光を超えてるってことだよ。ボク自身も質量から切り離されて久しいから、速さは重さって忘れてたよ。異なる法則だろうと擦り合わせてるんだから止まっている間の行動は全部どうにかしないとダメだね」

てへぺろ☆とアマガツがお茶目に告げる。舌をぺろりと出しながらウインクしている兎の顔はとてもシユールだった。

「りーとらーい」

「ちよつと待……」

カツ！と音がしそうな勢いで閃光が奔った。

「あ、失敗した。リセット、と」

「熱膨張だ」

ドヤ顔でアマガツが言う。何言ってるのかよくわかりませんね……。

「りーとらーい」

ゴゴゴ、という音とともに浮遊感を感じた。

「あ、失敗した。リセット、と」

「軸を間違えたよ。過去に魔界に繋がったことがあったらしくて、日本が沈むところだったよ。あぶなかつたねー」

鼻歌交じりでそういいながら、アマガツが浮いているページを覗き込む。ページには無数の文字が刻まれているようだった。

「次は上手くやるよ」

もう何も言うまい。

久しぶりに感じる感覚が楽しくて喋るのを後回しにしているとか、そういうわけではない。

「よいしょっと」

星は唸り、天は燃え、地が割けた。

「失敗失敗。リセット」

「仕事は大きさと動いた距離で……」

「真面目にやってる？」

「やってまあす」

「マヨネーズで和えたもやしとチョコレートのコラボは味覚に大いなる刺激を……」

「ぶち殺すぞ」

— 2 —

「ボクらは、エントロピーを凌駕した……!」

アマガツが感極まったような声を洩らした。

失敗が百を超えた辺りで、魔界の方が法則が緩いからそっちにしないかなどと言いつつ出したことあつたがどうにかなつたようだ。

薄暗い図書館に、音を立てる物は僅かしかない。寄贈された柱時計の内部で回る歯車の音が聞こえるくらいだ。少しだけカビの混ざつたどんよりとした空気を感ずる。

「ぶっちゃけてしまうと単に不都合な部分を力の元に送りつけて、時流操作の条件ごと

に対応するように書き換えただけだから凌駕はしてないけど」

「……ホントに大丈夫だよな？ 腕を振ったら街が瓦礫と化したり、骨だけになったり、光が収束して虹色になったり、ロケットパンチのようにぶっ飛んだりしないよな？」

経験した失敗談である。

自分の肉体を観測できるレベルの失敗は後半になってからで、何度街を破壊したかわからない。

「ダメだったらやり直せばいいよ。ペルソナを暴走させて邪神パワーでぎゅーんってやるだけだし」

「確かに……いや、それはおかしい」

地面の硬さ、体で切る風、高くてべたつく湿度、ぬるい空気、人々の呼吸、歩く度に感じる反作用。何もかもが懐かしい。

「何もかもが懐かしい……。が、思ったよりも感動しない」

抱えたアマガツをもふもふしながら言う。これだよ、俺が求めていたのは。柔らかな手触りのいい毛並みが俺に満足感を与えてくる。うーんもふもふ。

体温自体がひと肌よりも若干温かいうえに毛皮で暑さが倍率アップなので、素人には

夏はおすすめでできない装備だ。

「まあ、失敗する度に感じてた衝撃と比べると温いからね。そもそも10万時間以上を孤独に生きてた君にはどうでもいいのかもしれないよ。車検だったら結構なパーツを交換する時期だし」

「車検という発想に至る辺り、10歳とかもうこれわかんねえな」

「わかるよ。10歳だよ」

「兎……10歳は人間でいうところの92歳……あつ」

私、察してしまいました。

「え？ なに？ なに勝手に察したの？ ボクに教えてくれないかな」

アマガツが顔面に張り付いてきて、前が見えねえ。

剥そうにも、四肢に力を込めているのか、ぴったりフィット。

「息苦しいつつうの。……10歳超えた兎はうんこ食うってよ」

アマガツの首元を掴んで引き剥がし、宙吊りにしながら告げる。

「うん、それボク関係ないよね」

排泄器官ないからなあ。

ただいまーと帰宅。もう十年以上も前のことに感じる。そもそも十万時間って何年だ。

見慣れた廊下を通って室内へ。見慣れてはいるが、全てにおいて新鮮であるという謎の状態。視覚情報以外の何もかもが懐かしいという奇妙な体験をしている気がする。

そもそも時間が止まった世界に生きていることこそおかしいのだが。

「ここがイチルくんの部屋で、ボクの部屋にもなるんだね。……随分と汚いんだねー」
室内のあらゆる場所に本が積み重なっており、様々な物がバラバラに砕けたりして飛び散っていた。

ライターを使って行った実験のせいでは撒かれた火の粉が、書物などに引火していた。

「停止中は宙に固定できるから天井付近まで物を置けたのが祟ったか。実験した物も全部落下したのか」

真夏の夜の業火だ。よく燃えているし、身体に悪そうな凶悪な香りも漂っている。

これが生きているってことか。凄い。あとちよつと気分悪くなってきた。

「片付けが大変そうだね。あ、そうだ。ちゃんと物質世界の法則で動いているのかちよつと試してみようよ。掃除も出来て一石二鳥だね」

アマガツがそう言うのと、白い兔の姿から灰色の仔猫へと変化する。

そして突如として灰色のガスボンベが五本ほど現れる。家庭に設置してあるプロパンガスだろうか。

「お前の部屋でもあるんだが」

「だがもう無くなった！……あ、安心してね、これは他所の家のガスボンベだから」

えくすぷろーじょーん、などと戯言を吐き出したアマガツを放置して、窓から外へと飛び出す。一応、俺が使える限界まで時間を止めた。暴走しない安全な範囲だと僅か一秒程度だが。

当然ながら、背後で爆発し、熱に焼かれ風に吹つ飛ばされた。

「これ本で読んだことがある！」

読んでて良かった『受け身で元氣、投身自殺』。全然自殺できないと馬鹿にしたことを内心で謝るとともに、感謝も述べておく。

本で学んだとおりの受け身を取り、地面へと着地した。衝撃が伝わり、手足に凄まじい痺れが流れる。遅れて鈍い痛みが奔る。新鮮な感覚だ。

生きてると実感できる。

強大な力で吹つ飛ばされてやり直すなんて実感する前に終わるから無意味だった。

「おお、凄いよ。打ち身程度で済むなんて。停止中の世界で得た経験のほとんどをり

セツトしたのに」

柔らかな笑みを浮かべているかのよう口角の上がった灰色の仔猫であるアマガツが語りかけてくる。

「おい。聞いてないんだが？」

「あ……。こ、これがペルソナの力だ！」

すうーつと笑いを残してアマガツの姿が消え……そこだ！

「……」

透明になっている頭部を掴み、じつと見つめる。

見つめる。

見つめる。

……。

「……ごめんなさい、教えるのを忘れてました」

「次やったらお前あれだぞ、あれ。もうなんか物凄いことするからな」

「あはは、なにになに？」

まだ残っている口が、いたずらっ子のようににやにやとした笑みを浮かべ、楽しそう
な声を挙げる。

「冷蔵庫のプリンを俺一人で食う」

「ごめんなさい」

謝罪とともに現れた仔猫は真顔だった。

ペルソナ3

二階の隅にあった俺の部屋を中心にガス爆発によって吹き飛んだ我が家。両親が俺の部屋に駆けつけて、何もかもが消し飛んだ様子に啞然とし、周囲の家が通報したために救急車やら消防車、警察などが集まってきた。

ただ、問題が起きたのは我が家だけでなく、他にも沢山の家で騒ぎが起き、何故か事故から助かり、警察署にカチコミがあったらしい。

俺とアマガツは優雅にリビングでプリンを食ってたから、そういう騒ぎに気付くのが遅くなった。なんだか今夜は騒がしいという話を二人でしていただけである。しかし、久しぶりのリビングは物が散らかっていて、まるで強盗にあったかのような。そういうば俺が荒らした上に、アマガツが爆発を起こしたんだ。忘れてたな。

警察や保険屋との話し合いがこれからあると思うと面倒だ。面倒だと思っても悪くない。眠くなるのも悪くない。ああ、何もかもが悪くない……。

3章 『Magnificent!』

— 1 —

住む場所の関係で、家族が離散状態となった。父は社宅に住めるらしく、生活能力がないからと母も付いて行つた。両親がどんな人だったかおぼろげだったので、これはこれで良かったのだと思う。顔を見たら薄らと思ひ出したが、それでも遠い気がするのだ。

俺は高校に通うため、そう遠くない場所にあるアパートを借りた。取引業者に手数料を払い、築三十六年、八畳一間、風呂とトイレは共同、事故物件なので格安という、ロマン溢れる部屋と契約した。部屋に置く物もないので広さなどどうでもいいのだが、問題は学校の場所を忘れつつあることだ。電車の乗り換えなどが有り、意外と困難を極めるかもしれない。

俺が暮らすことになった二階建ての古き良きアパートは、玄関から階段横の共同廊下を通つて部屋に向かう必要がある。ちなみに俺は角部屋を借りたのに、何故か壁がなく廊下が延々と伸びているし、階段も二階から上に続いている。屋根裏部屋かと思つて様

子見したら、ゾンビが彷徨う異世界だった。

そういうえばここを紹介してくれた人が、他の住人はここ数か月一切姿を見せておらず、アパートの持ち主も行方不明という賃貸だと教えてくれた。むしろ珍貸か。警察もちよつと動いたがそれきりらしい。

「いいねー、異界付きの物件なんて贅沢だねー。しびれるねー」

と、白い兎姿のアマガツはご満悦だった。

確かに家賃も安く、他の住人もいないので風呂やトイレは好きなきときに使い放題と好条件ではある。一日ばかり過ごしてみただけとしては、時々廊下の奥や階段の上からうめき声や奇声が聞こえることくらいしか欠点が無いことか。あとは外に出ると、近所のおばちゃん連中が憐れむような視線でひそひそ話をしてくるくらい。

「そういうえば家賃を受け取る相手がいない気がするんだが、そのところはどのようなのだろうか」

しゅごいよおおお、と日に焼けた畳に転がって喜ぶアマガツに聞いてみる。こいつなら、手だけ蘇らせたから渡せばいいよ、とハートフルな対応をしてくれるはずだからだ。しかし、アマガツは何も答えない。尻尾を振ってアピールしてくる。腰のあたりわしやわしやと撫でると、耳がぴこぴここと動いていた。

「ああああああ、いいよおおお、そこだよおおお……。あ、ここのオーナーだっけ？

屋根裏で見かけたよ。とりあえず階段のところにお金を置いたら受け取るんじゃないかな」

「なるほど」

アマガツの言葉に従い、今月分を階段に置いてみる。

地を這うような怨嗟とともに、枯れ腐った人間だった物が階段を滑り落ち、現金を掴んだ。すると、老若男女の声が入り混じった絶叫とともに、黒い腕のような影が伸びてきて、人間だった物に絡みつく。人間だった物は掠れた声で「タスケテ……タスケテ……」と呟きながらこちらに顔ごと窪んだ眼窩を向けてきた。

「今月分は支払いました」

俺がそう告げると、悲鳴とともに、黒い腕に宙吊りにされ始めた。必死に抵抗したのか、まるで夏場に干上がった蚯蚓のような指で壁や床、階段を引っ掻かいて耐えていたが、やがて残っていた残骸のような爪が剥がれ、指が折れ、腕が千切れると、上の階へと引き摺られる速度が上がった。それでも人間だった物は諦めなかった。段差に齧りついて、必死の抵抗を見せたのだ。だが、長くは続かなかった。階段奥から幾本もの影が伸びてきて、頭部を砕いたのだ。後は寄せていた潮が引くように、吸い込まれるように、人間だった物は闇へと吞まれた。

「成仏したか」

「いや、全然そんな雰囲気じゃなかったよ。限界が近くて魂が朽ちて或る意味で解放されるところだったのに、イチルくんが金銭を見せるから無駄に執念が甦ってたじゃないか。よっぽどお金が好きだったようだけど、また長く苦しむことになって可哀そうだよ」

「マジか。……次から分割するわ」

ちよいちよい餌付けしとけばそれだけ長く頑張ってくれるはずだ。

様子見て燃料を差し上げよう。

「悪魔か何かか、君は」

「大家がいなくなったら家賃払えないだろ」

「確かに。隙の一切ない理論で論破されたよ」

大家が苦しもうがどうでもいい。俺はただ、家賃を払いたいのだ。

普通ってそういうことだろう。

「飽きるまではちゃんと餌やるんだよ」

「俺は消しゴムもキチンと使い切る男だ」

「消しゴムと同列に語るとか確かに凄い男だよ、君は」

俺は物持ちが良いと言うか独占欲が強いと言うか、とりあえず手にした物は最後まで手元に置いておきたくなる。

流石にゴミなどは捨てるが。

なので部屋に不要な物が集まりつつあったので、今回の爆破はリセットするという意味でも悪くなかった。そもそも用途とか貰った理由とか、ほとんど忘れてしまったし。「消しゴム扱いとは大家も不運だったね、色々な意味で。まあ、集まってきた怨霊によって苦しめられてるから、生きてるのか死んでるのかわからないような状態になってるし。その期間が伸びただけだろうから誤差かな。生霊もいたし、悪い事しすぎたんだろうね。やり過ぎると肉体や精神が弱ったときに自分の罪を数えることになるから、日ごろの行いが大事だってわかったね」

「アマガツは日頃の行いに自信あるのか。俺は暇だったらなんか善行を重ねていい感じに生きるつもりだけど」

「え、ふわっとしすぎじゃない？ ボクはあれだよ、ライドウに邪魔されたやつ。不思議の国を作ってみんなに楽しんでもらおうとしたんだけど」

「結果が暴走とか日頃の行いとはいったいな」
「嫌がる人とかも入場させようとしたし、ちよつと無理やり過ぎたのがダメだったのかな」

「そうだな、無理矢理は良くない。機会があれば頭や心を弄って合意の上で行うべきだ」
「死体は？」

「死人に口は無い、そして意志もない。ならば意志ある者が受け継げばいい。というこ
とでセーフ」

「なにそれかつこいいい」

何処かで途切れようとも、意味を見出した者が勝手に受け継いで意志は紡がれていく
んだ……！

— 2

夏の暑さが尾を引く九月の第二週。

アパート前の掃除を終え、予定を決める。

いつもだったらゴロゴロと寝転がりながら漫画や本を読むか、時折浮かんでいる人魂
を潰す作業に入るのだが今日は違う。

「学校行くか」

「あー、イチルくんは学生だったっけ。忘れてた」

朝起きて思い出したのだが、高校に行くのを完全に忘れていた。そういえば家電は通
じていないし、携帯電話は吹き飛び、アパートの住所は学校に知らせていない状況だっ
たので、連絡も来るはずない。

危うく存在を忘れて毎日がえぶりदै！って感じで過ごすところだった。

空っぽの鞆を背負い、アマガツを腕に抱き、部屋を出る。鍵はかけない。盗られる物などあんまりない。逆に泥棒が命を盗られる程度だから安全性も抜群。

行つてきます、と玄関で声を掛ければ我が家の安心セコムである黒い腕たちがひらひら手を振つて送り出してくれた。これが家族との日常つてやつか……。

「道がわからん」

方角だけは何となく勘でわかるのだが、何処をどう行けば辿り着くのが抜け落ちて
いる。理由は明らかだ。そう……。

「これは、経験がリセットされたとやらのせいだろうな」

「違うよ。全然違うよ。単に忘れてるだけだよ」

違うらしい。しかも全然違うときた。恥かいた。

「経験リセットの話をしておこうか」

「ああ？ あー、うん、頼む」

日差しが強さや照り返しの暑さ、セミの鳴き声を楽しんでいると、アマガツが思い出

したように言った。

「そういえばそんな話もあったな。完全に忘れてた。」

「忘れてたでしょ。そんな難しい話でもないよ。単に停止世界だと法則が異なってるって言ったと思うんだけど。そこで適応した部分を物質世界に置き換えたため、覚えていけるけど体は経験していないような状態になってるってだけだから」

「ん？ つまり完全に失ったわけではないのか？」

「うん、擦り合わせが上手くいけば修得できるんじゃないかな。どのくらいの時間や反復動作が必要かは知らないけど」

なるほど。

石ころを投げ続けながら、東京タワーから落下すれば投擲術と受け身を修得できるだろうか。投げた石にダーツを投げて破壊すればダーツの練習のついでになるかもしれない。

ともするば、ビルや東京タワーにフリークライムすれば……。

「技術の取り直しも大事かもしれないけど、もっと大事なことがあるよ。イチルくんは強くならなければならぬ」

アマガツが言うには、俺は悪魔を倒して人間としての存在を強くしなければならぬようだ。ペルソナが時空を支配する神と繋がっている現状は、限りなく強い力に俺とい

う存在が囚われ、徐々に引つ張られているようなものらしい。それは引力によって引き寄せられる隕石にも似ていてるが、引き寄せる星の質量はあまりに大きく、近づくほどに存在が破壊されるとも。今は神による引力と、アマガツによる遠心力で影響がほとんど無いが、時間をかけた分だけ存在が近くなり、気付けばブラックホールと化した力に引き寄せられるだろうとのことだ。引き摺り込まれないためには、自力で力を付けて安全な位置まで離れ、観測しながらエネルギーだけを取り出すのが理想だと締めくくった。

「ついでに言っておくと、今のイチルくんのレベルは1だよ」

「1? そんなに弱いのか、俺」

山道を歩きながら驚く。指標がわからないが、なんとなくあなたはスライムです、と言われているような気分になった。

ファンタジー小説でも漫画でも最初に撫で斬りにされる存在、それがスライム。

媒体によつては呼吸器を塞いだり、その粘性の身体で物理攻撃に優れた耐性を持つていて強敵の場合もあるが。

「そんなことないよ。1が基準で普通なんだ。レベルが5もあればスポーツで輝かしい成績を残せるし、10もあれば世界でも類を見ないアスリートのような超人的な身体能

力を持つし」

「それならいい……のか？　で、ペルソナの元になっている神はどのくらいなんだ？」

「不明だよ。多分数百はぶつちぎってるよ」

「数百……。俺が強くなっても誤差だろ」

時々、ハイキングしている老夫婦と挨拶を交わしながら進む。

「誤差じゃないよ。そもそも神は実在していない、そういう風に決められるから物質世界への影響には限度があるんだ。だからイチルくんが強くなれば影響を受けず、逆に力の一部を操れるようになるのさ」

「うーん、ピンと来ないな」

「まあ、強い弱いつて数字で測れない部分もあるから、目安として段々覚えればいいよ」
「そういえばレベルはどうやって上がるんだ？　無差別？」

「いや、悪魔を倒すのが一番手っ取り早いよ。強い存在を倒すことで、そいつらよりも強い存在だと法則に書き換えるだけだから。あ、でも格下じゃなければ悪魔を倒せばいいし、敵を倒して経験値を手に入れるような物かな」

「なんだかな」

「弱いからって悪い事ばかりじゃないよ。イチルくんが死んだ時、一日前くらいなら戻せるよ。イチルくんの器を蛇口として見立てた時、出てくる水量が少ないから、目的の

分だけ取り出して使っている感じだよ。今だけの特典だね。凄い、まるで主人公みたいだ。羨ましいいなー、抱いて。あ、ボクたちって魂レベルで繋がってたね！」

騒ぎ出したアマガツの言葉を聞き流しながら、山頂から街並みを眺める。

澄んだ空気、緑の香り、心地よい風。生きてるって素晴らしい。土からの反作用も足裏を楽しませてくれたし、山はいい。

問題は……。

「……は……だよ」

「学校は無さそうだね」

「ここから帰るのか。自殺して一日前に戻るとか。いや、この面倒くささも逆に悪くないな。止めておこう。」

お土産として饅頭だけ買って帰った。

帰宅後、迎えてくれた黒い腕たちも交えて玄関で反省会。

饅頭をもそもそと食べながら、アマガツや黒い腕に千切って与える。

「警察に道を聞いたら？」

「天才かよ」

俺が在籍する射賦高校は生徒数七百人前後の、ほどほどに名の通った普通の高校だ。高校までの道程やちよつとした情報を交番のお巡りさんに教えてもらったので、不安はない。お巡りさんはいぶかし気だったが、部屋がガス爆発で吹っ飛んで、記憶が混濁したと告げると親身になってくれた。

団子となつてゐる学生の群れの後ろを歩き、校門を通り過ぎる。

「おはようー！ 今日もいい朝だなー！」

「おはようーございまーす」

にこにここと人好きのする笑みを浮かべた英語教師の結城に挨拶を返す。藍色の頭髪で片目を隠した、線の細い男性教師だ。しかし、身体の華奢な様子に反して、瞳には輝くような光が宿っており、強い意志も感じられた。この先生はどうにも存在感が強かったので、不思議と覚えていた。

俺の姿を見て目を丸くするが、結城は喜色満面の笑みを浮かべた。

「Excellent! Mr. Uta su. 休んでいたようだけど、街を騒がせてる事件にでもあったのかい?」

「あー、実は家がガス爆発で吹っ飛びまして。ごたごたがあつたんですよ」

そう告げると、結城の笑みが翳り、痛ましそうに、そして心から心配するような表情を浮かべた。

「それは大変だったな。何かあれば先生に相談しなさい。君は少し勘違いされやすいのだから」

「ありがとうございます。何かあれば相談させてもらいますね」

礼を告げ、結城の前を通り過ぎる。「些細なことでもいいからな」という優しい言葉を背中に貰いながら、昇降口へと進む。

俺が下駄箱へとたどり着くころには、人気があるのか結城は女生徒たちの黄色い声に囲まれたようだった。

「宇田須、結構長く休んでたようだけど元気だったか?」と声をかけてきた男子生徒に下駄箱の位置を聞く。訝しんでいるが、交番と同じ対応をするとすぐに教えてくれた。確か、この男子生徒は友人だった気がする。

友人と会話し、情報を拾いながら廊下を歩く。中庭近くの駐車場に停められている、ダッシュボードが過剰に彩られている軽トラが見えた。

「昨日もヒカルに囲碁で負けてこれで10連敗でさ……。あ、まこっちゃんの軽トラか。そういえばまこっちゃんは今日も人気だったな。軽トラも女子がぬいぐるみとか色々乗せるからカラフルになってまあ」

友人の床机しょうぎが呆れたような笑いで言う。将棋の本を片手に持っている以外は何処にでもいる今時の男子高校生といった様子だ。

まこっちゃん、というのはおそらく英語教師の結城のことだろう。記憶の片隅にある情報を集めると、生徒たちの問題を率先して解決してくれる理想の先生像だったはずだ。まるでドラマに出てくる教師の様だと憧れを持つ生徒も少なくない。

「まこっちゃんってなんで人気なんだっけ」

「忘れたのか……。ああ、シヨックで記憶がややこしいんだっけか。なんか他にも気になったらどんどん聞いてくれよ。で、まこっちゃんだっけ？ あれだよ、落ちこぼれにも親身に接して成績を上げたし、引きこもりを熱心に復学させたし、行事にも厚い。それに顔もいいだろ？ まあ、一番は体罰してたクス教師を追い出したので極まったんだろ」

「いいね、ハイ」

アマガツは校舎が見えるほど近づくと姿を消していたのだが、男子トイレに来ると遠慮なく灰色の仔猫の姿で現れ、するすると俺の首に巻き付いた。

鏡には俺しか映っていない。

何が良いのか先を促すように撫でると、アマガツは喉を鳴らし、長い尾で俺の頬を撫で返し始めた。

「高校一帯が異界の範囲になつてるよ。日中は問題無さそうだけど、深夜は立派な異界になつているかもね」

「立派な異界つて……。一体誰がそんなことを」

「さつき挨拶した先生じゃないかな。異界と同じ空気が漂つてるよ。強くて怖いペルソナ使いだ、断言したくなるくらい何を考えてるかわからない」

とろけるような声ながらも芯のある強い言葉でアマガツは言った。

人気者の教師と謎の兎。人から避けられる俺に声をかける人格者と、ペルソナが暴走して困つているところに付け込む畜生。

どちらを信じるかと言えば、どちらだろうか。魂とやらを共有しているアマガツか。

そもそも強いだけで、何も問題を起こしていない可能性もある。

「ペルソナが強くなる条件は何がある?」

「……そうだね。超常の存在を倒して存在を強くするか、強い意志を持つことかな」

アマガツの喉から音が止まる。上機嫌だった様子は消え、鏡を見つめながら答えた。

「人格者だから意志がしっかりしていてペルソナが強いとか」

「イチルくんにはわからないかもしれないけど、はつきり言つて異常な強さだからそれはないよ。本音を言えば、あの先生が探查能力が低くて助かった。高かったら今後何をされるかわからない」

「……」

「君よりもずっとずっと強いんだ。君のスタンスによつては敵対するかもしれないし、たらどうする?」

首に巻き付いていたアマガツの姿が消えていく。

「レベルが60を超えているだなんて、有り得ないんだ。絶対普通じゃないよ」

授業が終わつたのは数時間も前の放課後。机に突つ伏すように眠っていた身体を起こす。一緒に帰ろうと誘ってくれた友人には申し訳ないが、俺には確かめたいことがあつた。

姿は消えたままだが、アマガツのもふもふとした毛皮を首元に感じる。毛をゆつくり

と撫でると身体を揺らした。

「本音を言おうと、アマガツを信じたい。が、まこっちゃんも信じてみたい」

眩くと、アマガツが姿を現し、音もなく机に降りた。呆れたとでも言いたいのか、脱力した笑みを浮かべている。

「じゃあ確かめよう。これはボクにとつても都合がいい。あの先生が敵対してくれるのならイチルくんはボクに頼るしかなくなる。ボクは元から君が生きていないと存在できない。だから信頼を深めることに繋がる。それに相手の探知能力も少しばかりわかる。目的もわかるかもしれない。敵対しなかったら平穩に悪魔を倒しつつ暮らせる。死ぬ可能性が高い以外は悪くないよ」

丸くなったアマガツの背中を撫でる。喉を鳴らしながら尻尾が腕に巻き付いてきたが、気にせず撫でる。

「敵対したとしたらどうやって逃げる?」

「え? 逃げられないよ?」

何言ってるんだこいつ、という表情で仔猫に見つめられた。

俺は間違ったことを言ったのだろうか。

「ペルソナを使われたら即死だし。運良く少し逃げられたとしても、探知能力が低いといつても全力で追いかけられたら逃れられないよ。何か知ったかもしれない相手を生

かしておくほど高位の能力者は慢心しない」

「確かめるには危険すぎる気がしないでもないな。俺はいいけど、アマガツは異論はないのか?」

「あるけど、ボクとの信頼関係が浅くて残念だなんてくらい。それ以外は今しか使えないレアスキルを使えるお得感がちよつとあるね」

カツカツと靴の音が廊下に響いている。見廻りの教師が歩いているのだろう。

今日はちょうど結城が見廻る日だった。いや、今日だけでなく、ずっと結城が見廻っているようだった。

それでも信じるのが普通の人間というやつなのだろう。

「スタンスだけ決めよう。イチルくんはどんな時に敵対する?」

「学生生活に悪影響が出そうならなんとかする程度」

「結構ふわつとしてるなあ。でもまあ、それなら敵対するだろうね。だってこの異界は進行すれば魔界に沈むよ」

「魔界?」

「悪魔の世界さ」

その言葉を最後にアマガツの姿が消える。

今いる教室へと足音が近づき、結城が持つ懐中電灯の光で室内が照らされた。人工的な眩しきすらも懐かしい。

「どうしたんだい？ もう帰って寝ていないと可笑しい時間だぞ」

「先生、高校が異界になってこのままだと魔界に落ちるって本当ですか？」

「マカイ？ 何を言ってるんだ？ 寝てみたいだし疲れてるのか？」

「調べたんです。高校が異界になることも。そのまま進むと魔界に落ちることも、わかりました。先生が変な能力を使うことも……」

とりあえず確かめるために、持っている情報をぶつけてみる。何か琴線に触れる物があつたのか疑問の表情を浮かべていた結城が笑みを浮かべていた。

別人にすり替わったかのように、楽しくて仕方がないと笑っている。

空気が変わった。澱んで腐ったヘドロのような黒い空気だ。

「Magificent! 凄いで宇田須。独りで調べたのか？ 夏休みに始めたばかりだというのに、もうここまで？ 他の生徒を掻い潜って？ 目覚めたばかりで、それも孤独に行くには難題なの？ 自慢の生徒だ！」

笑みを隠すように、結城は片手で自らの顔を覆った。

肩を揺らし、笑い続けている。

「素晴らしい」やら「Excellent」やら呟き続けている。

「だが、直接聞いてきたと言うことは何か能力を得たのか。崩せる答えを見つけたのか。街を騒がせているのはそれだな。だがそれだけではないな。暴発したか、任意か。しかし気付かなかった。休んでいるのもそういう意図かな。攪乱役もいるのかな。素晴らしい、君たちは先生の誇りだった。ペルソナ」

巨大な影が、結城の背後から現れた。闇の帳に身体を隠した強大な何かの仮面。

手で隠されていた表情がちらりと見えた。肩を揺らしているのに、何処までも無表情だった。その瞳は俺を捉えていない。

「メギドラオン」

そこには白い光だけが満ちていた。

孤独のアルベール（金色のガツシユ）

— 1 —

アルベールはパリに住む仲睦まじい夫婦の子として産まれた。生まれてひと月もすると両親のみならず、周囲もお世辞抜きで可愛いと褒める程に愛らしい容姿を彼は持っていた。

同い年の子供たちが這う頃には、一人で歩き回るほどに早熟だった。また、大人たちが発する言葉や描かれた文字が意味を持つてしていると理解し、それをアルベール自ら介すと舌足らずな音を発するほどに知能も同時に優れていた。

天にあらゆる物を与えられ、愛されている子供だった。

だが、アルベールには人として最も大事な物が欠けていた。いや、満たされていたと表現したほうが正しい。それは幼い心を圧迫し、壊す殺人衝動だった。整理の付けようがない、消し去りようが無い、いつまでも燻ぶっている物だった。早熟すぎる成長と未熟な精神では抑えきれない衝動、破壊へと繋げて何とか誤魔化せる、ひどく歪んだ欲求

だった。

他人から見れば黒く、濁った、吐き気のする邪悪な精神だった。人を殺したいと純粹に望んでいる、人間の皮を被った何か。

それでも両親は彼を信じた。身体が、脳が、精神が、心が、早過ぎる成長のためにバランスを崩したのだろうと信じて。均衡が破れるその日まで、そしてそれ以降も。ずっとずっと。

「ほうら、あそこを見てごらん」アルベールの父が足元を指し示した。

虫が這っていた。幼い少年のくりくりとした瞳がその言葉に応えるように指先を追いかけた。少年は笑みを浮かべ、虫を手を取った。くすぐったそうに表情を変えながら、虫を間近で観察する。優しく、慈しむように、その虫の背を撫でた。そして、潰した。ぐちゃぐちゃに潰した。

きやつきやと笑い声を挙げる。アルベールには楽しかった。でも物足りない。もっと大きい方がいい。物欲しそうに、どす黒い衝動を燃やす。

そんなアルベールに、彼の父は怒りながら「死ぬまで潰してはいけないよ。自分がされたら嫌だろう？」と言った。

優秀で未熟な少年はそれを覚えた。自分がされても嫌では無かったことを伝えると

「母さんが嫌がっててもかい？」と言われたから。

「遊んでいらつしやい。仲良くするのよ」アルベールの母がそう言った。

同じ年くらいの子供たちが走り回っている。少年は笑みを浮かべ、子供たちの輪へ入った。互いを追いかけ、ルールも何もない遊びを繰り返す。いつまで経ってもアルベールに追いつけないことに癩癩を起した子供が、すぐ近くにいた子供を叩いた。虚弱な子供の張り手、それでも痛みに弱い子供は泣き出した。アルベールは、癩癩を起した少年を叩いた。同世代と比べて体格のいい少年だったが、一撃で地面に倒された。それでもアルベールは止まらなかった。泣き喚く少年を、叩き続けた。「自分がされたら嫌だろう」と言い続けて。泣き喚いても止まらない。親たちが止めに入らなければ、アルベールは少年が死ぬ直前まで叩き続けただろう。子供の一撃でゆっくりと死ぬまで、拷問にかけるように永く永く……。

そんなアルベールに、彼の母は怒りながら「人を傷つけてはいけません。自分がされたら嫌でしょう？」と言った。

優秀で早熟な少年はそれを覚えた。自分がされても嫌では無かったことを伝えると「お父さんが嫌がっててもそうなの？」と言われたから。

アルベールは何度も間違つて、そのたびに両親は熱心に伝えようとした。だから覚えた。

ある日、木の上に作られた巣から落ちた雛鳥をアルベールは見つけた。怪我をしていて、腹も空かせているようだった。慣れないながらも世話し、巣へと戻した。しかし、目を離すとすぐに落ちていた。それでも戻して、また落ちていた。何故だろうかと疑問を覚えたアルベールは、観察することで雛鳥が親鳥に落とされていることに気付いた。落とされても頑張つて生きようとしている雛鳥と、落としてしまう親鳥。言葉に出来ない。澱んだ何かが、心に溜まつていた。人を殺すことに躊躇いは覚ええない、嫌悪を感じない。だがこれは駄目だった。父と母に相談すると「アルベール、自分で考えてみなさい」と言うだけだった。だから考えた。わからなかったけれど、考え続けた。雛鳥を世話しながら考えた。答えは出なかった。

アルベールは世話を続けた。雛だった鳥が空を自由に駆るようになった。鳥は自由に飛んで、満足するとアルベールの元に戻ってくるほどに懐いていた。

そうしたある日、アルベールは笑顔で両親にそれを見せた。それは首の骨を折られ、舌をだらりと垂らして絶命した鳥だった。アルベールが世話していた鳥とは違う。震える声を必死に抑えたアルベールの父が鳥について問うと「間違えた親鳥だよ。間違えたから嫌なことをして教えたんだ。人よりも平気だった」と無邪気に答えた。父はただ「嗚呼……」と漏らした。母は涙を流すだけだった。

両親にはわかってしまった。それでも諦めないでアルベールに教えよう、伝え続けよ

う。そう決心して父は「アルベール、他の命を大事にしなさい。私がいいと言うまでの約束だ」と言った。アルベールは不思議そうに頷いた。

そして、両親はアルベールが親鳥を殺した翌日に帰らぬ人となった。遊ぶ金欲しさに押し入った強盗に殺された。アルベールも頭に傷を負った。

傍らで鳥が一羽、死んでいた。

— 2

人を殺したい。一人や二人では無い。全部だ。全部ぜんぶ殺したい。だがそれはいけないことだ。だから我慢する。『アルベール』が物心ついた頃から、いや、それ以前のずっと前から人を殺したくて堪らなかつた。それは一人や二人程度では満足できないような衝動だつた。人類全てを殺したいと思うほど、昏く強く粘つくような殺人衝動だつた。それでも我慢する。『俺』が心から尊敬する両親が禁じたことだから。

立つて歩けるようになってすぐの頃から、両親の首を思い切り絞めて殺したいと思つていた。父や母の首に手を回し、力を入れる。しかし、幼い『アルベール』の握力では、単に抱っこをねだっているようにしか思われなかつた。毎日、父と母の二人から抱きし

められて過ごした。それは『アルベール』が殺意を抱いて力を込めるのとは真逆の、慈愛溢れる優しい抱擁だった。

包まれるような優しい温かさは愛である。潰してしまうような冷たさは愛ではない。殺すことはいけない事だ。優しくすることは良い事だ。何の考えも無しに吐き出される常識ではない愛を、『俺』は両親から教えてもらった。殺したい思いと同時に、人から愛を受けることがどういふ事なのか、言葉に出来ずとも漠然と『俺』は理解していた。『アルベール』にはわからなくても『俺』にはわかった。わかるために『俺』は生まれたのかも知れない。人を殺す冷たさを知らないまでも、温かさの良さは理解できていた。

両親の事を愛している、そして、自身は愛されていた。今は居なくなっても、二人に愛されていた。『アルベール』とともに死を決断するほどに深い愛だった。与える温かさだけを知っていた。

それと同時に人を殺したいと強く思う。胸に宿る黒く燃える殺意を恐怖によって抑え込んでいた。奪う冷たさを知らない。知りたくない。失った冷たさは何処までも空虚だ。未知は怖い。既知が怯える。

人を殺したいから近づく。殺した後を考えて、手が竦む。奪った自身は喜ぶだろう。だが、奪われた人はどう思うのか。失った人はどうなってしまうのか。俺は震えるほど

に怖かった。結局、殺すことは出来ずに終わってしまった。必死に誤魔化する。

転んだ人の頸椎を踏み抜きたい思いで近づいて、怖くなって手を差し出して立ち上がる手伝いをする。幼い俺の手にはなんの意味も無いはずなのに、差し出された人は嬉しそうに笑っていた。

その後、道に迷った人の手を引いて、泣いてる人の傍に座って少ない言葉で慰めて、言葉の伝わらない観光客を案内して、誤魔化した。煩わしそうにされることもあった。大半の人が、喜んでいたので思った。ときどき「君はとても優しいね」と笑みを浮かべた人にお礼を言われた。俺は曖昧な表情を浮かべて「父と母の真似をしているだけだ」と答えた。

殺意が向くのは人間だけであることに、俺は徐々に気付き始めた。育てた雛鳥を殺したことがあった。殺すことを別にどうとも思わなかった。ただいけないことだとは分かっていた。

道案内をしながら人を殺すなら素手が良いと思う。道具は要らない。使いたくない。手の中で消えるからこそ素晴らしい。面倒だからボタン一つで死滅すればいいと思う。でもそれは失礼だ。欲求の為に死んでくれてありがとうと感謝しながら殺したい。最初に両親を殺したかった。羨ましかった。俺が殺したかった。どんな表情だったのか。それと同時に憎しみと哀しみが胸を苦しくさせる。目頭が熱くなる。涙が流れそう

になる。心が暗くなる。何か足りない気がする。寂しくて震えそうになる。満たそうとして殺したくなつて、それはいけないことだと思ひ出す。『アルペール』が父と約束した。それは『俺』が破つてはいけない物で、守らなければならない物だ。

俺は覚悟しなければならぬ。人を殺さないことを。狂おしいほどの欲求を抱えながら、無理に蓋をして生きていくことを。出来ないのなら死ぬべきだ。

3

親戚に引き取られることとなつたが、両親と仲があまり良くなかつたらしく、俺は放置されることとなつた。有り難いことだ。同じ家に住んでいたら、成長した俺がいつか寝起きでうっかり殺してしまう可能性すらあつたから。

身辺を整理していると、物置で石を見つけた。それは石というには（俺の体格からすれば）あまりにも大きすぎた。大きく、分厚く、重く、そして繊細な彫り物がされていた。それは正に石塊だった。

そうだ、この石を我が身の邪悪な欲望への戒めにしよう。これを背負っていれば、欲求に抗えなくなつたとしても物理的に動きが制限されるので殺人を犯さなくて済むという最高に頭の良い作戦だ。しかも石の表面には見知らぬ文字と、角の生えた子供の絵

が描かれているので話し相手にもぼっちりである。

背負えるように革のベルトを付けて、外に出るときは必ず背負うことにした。文字も既視感があるし、なんとなく馴染むような気がする。一緒にいるのが当たり前のように感じることもあった。

石を背負って生活していると、両親が殺されて頭がおかしくなったと囁かれるようになった。興味本位で何故石を背負っているのか訊ねてくる者もいた。どう答えたらいいのか迷った俺は「両親を忘れないための、強盗を許せない自分への枷です」と答えるだけにした。そうすると言葉に詰まって何処かに行くことに気付いた。

近隣の住人が、時々気遣わしげに手伝ってくれるし、食べ物も貰える。親切にしてくれるから俺も優しくする。ああ、素晴らしい。殺したくなるけれど、思い出せばなんとか抑え込める。石を背負えば疲労で忘れられる。

他人からいつだって俺は愛を受けている。俺は生まれた時からずっと恵まれている。君のおかげだと毎晩石を磨けば、感謝されたように感じて嬉しくなった。話しかければ、まるで本当に聞いてくれていたかのようだった。

石を背負って生活していれば当然俺を馬鹿にする人間が出てくる。子供が多いが、時には酔っ払いにも絡まれる。そういうとき、どう対応すればいいのか。俺はすでに答え

を得ていた。

殺してはいけない。命を大切に。傷つけない。両親との約束なのだが、これを守ることが重要であると判断している。だが、柔軟に対応する必要も出てくる。だから人を無害化させるように練習した。上手く脳を揺らす、これだけだ。

その後のことはどうなるうとも知らない。人は殺さない。殺したことが無い。殺したいけれど殺したくない。自分の手で殺さないと衝動を和らげることが出来ないとかったとだけ。

— 4

石を背負って約10年、街でのちよつとした有名な人物になりつつあった。地方新聞や小さなテレビ番組でも俺は取り上げられた。石を背負って過ごす奇妙な少年として。海外から面白がって取材に来ることもあった。無理にでも感動させるドキュメンタリーでも、世界の奇人としてでも邪見にせず、なるべく親切に対応した。俺が注目される限り、両親は忘れられない。誰かが覚えてる限り。そうだ、そうだとも。俺が死んでももう忘れられることはない。両親は死んでない。

学校から帰り、石を部屋に置いてシャワーを浴びる。石を背負ったまま走るのは少し

無茶が過ぎたようだ。汗を流し、さっぱりとした晴れやかな気分で机の上に置いた石を背負おうとして……無い。俺の一生の内の半分以上を共に過ごした石がどこにも無い。貴重品だと勘違いした愚か者に盗まれたのだろうか。思考が冴えわたる。今なら両親の言いつけを守って人が勝手に死にそうだ。実に不思議なことに。

身体を伏せ、床に耳を付ける。同時に気配を探る。空気の流れ、温度や湿度の変化、気配の増加。俺と石のみの普段とは異なる状態だ。普段よりも少し水気が多い。シャワーを浴びただけではない。外……いや、これは室内だあ!!!!!!
鍛え抜かれた脚力を十全に発揮し、全力の蹴りを見舞う。

隠れていたでかいカエルを蹴り飛ばし、落下していた石を受け止めた。

見たことも無いカエルだ。拳を振り下す。新種か、いやこんなカエルがいてたまるか。拳を振り下す。そこらのカエルとは比較できないほどに大きく、そして知能も高い。拳を振り下す。そもそも「やめるゲロ！」などと言語を操るのがカエルのはずがない。拳を振り下す。なおかつ人間の行動を静止させようと必死に手を振り降参の意を示すコミュニケーション能力の高さ。拳を振り下す。どう見ても人間ではないのは明らか。拳を振り下す。つまるところ、殺しても問題ないのだろうか。拳を振り下す。だつ

て人間じゃないし。拳を振り下す。

しかし硬いな。馬乗りになって頬(?)を殴っているのにまだ喚いている。巨大化する事で皮膚も固く張力も強くなっているのかもしれない。そうになると柔らかかそうな無駄に巨大な目を潰すべきだろうか。

手刀で眼球を潰す構えを取っていると、初老の髭モジヤな爺さんが部屋に駆け込んできた。「アルヴィーン！」とカエルが叫んでいるので、この珍獣の飼主だろう。珍獣による押し入り強盗とは時代はいつだつて進化している。だがそんなことはどうでもいい。重要なことじゃない。重要なのは両親の家で、石を盗もうとした愚か者どもがいるということだ。愚かだ。あまりにも愚か。チンパンジー並みの知能、つまり人間ではない。人間ではないので殺しても約束を破ったことにはならない。Quod Erat Demonstrandum.

ちようどいい鈍器（カエル）があるのでひき肉にしよう。カエルの肉片や血液と混ぜることで警察が来ても謎の死骸で処理されるだろう。振じ切った巨大なカエルの頭部さえあればUMAハンターとして有名になってしまうかもしれない。

カエルの頭部を驚掴みし、持ち上げる。持つのに少しコツがいるが、人間よりは軽い。愚か者と愚か者の衝突によって新たなUMAの誕生だ、ハッピーバースデーなどと考えていたら、老いたチンパンジーが凶鑑のような分厚い本を広げていた。トウーンだから

効きませーんとかそういうふざけたことでも言うのだろうか。本が輝き、チンパンジーが「にゆるるく！」と鳴き声を上げた。状況がわかっていないのか、言葉が通じないのか、俺が訝しんでいると、カエルの手足が伸びた。

あ？

馬乗り状態から逃げ出したカエルは悲鳴を挙げながらチンパンジーの元へと駆けだした。道具を使って殺すとあまり気分が晴れないが、面倒になってきた。包丁を持ち出すと、カエルが緑の顔色を青くさせ、震え出した。

「オ、オイラはその石を集めていて……」

ああ？

カエルがみつともなく頭だけを隠し、尻を振っていた。なんて魅力的なケツ振りなんだ、全力で蹴るか引つ叩くかしたい。でも包丁を持つてるから捌くしか出来ない。もつたいたい。

「い、石に封じられた魔物の子を解放する方法を見つけたゲロ」

所々わからない部分が生じているが、興味は湧いた。いいだろう、殺すのは後にしてやる。だが詰まらなかつたり嘘だと分かつたら二人はカエル人間だ。

「いいだろう、連れていけ」とカエルに告げると、ほつと息を吐いてゲロゲロ笑い出した。なんかイラツときたので「だが包丁は許すかな」と持っていた包丁を投げつける。

カエルの足元に刺さった。今だけは許してやろう。

「さあ早く行くぞ」と急かすもカエルは呑気に眠っていて、爺さんは何故か怒っていた。なに遊んでんだぶち殺すぞ。

東方短編（下）の途中

— 8 —

リグルさんという超絶キュートな女性との邂逅。何故か表情が険しいけど。

俺が離れている場所から挨拶したので虫嫌いなのではないかと疑ったらしい。そんなわけない。むしろ堪らない。とんでもねえ、全身を這われるのを待つてたんだ状態である。

離れていたのはリグルさんが魅力的すぎたからだ。木に隠れながら伝えると、虫を嚇けられた。

んほおおおおおおお、這つててしゅごいのおおおおおお！

きもちいいいいいいい！

流石に女性に醜態を晒すと死刑なので表面上はちよつと笑つて「虫はいいね。生命の極みだよ」と言うだけだが。虫を撫でてしまった。なんて罪深いんだ、俺は。ああでも手が離れない。なんて魅力的な生物なんだ。緑、虫、自然。すごすぎるうううううおほおほおほおほおほおほ！ 楽園はほんとにあつたんだあああああ！ え、リグルさ

んは女性……？ やつべえええええんほおおおおお！

脳内でエキサイトしながら虫を撫で続けていると、何故離れているのか聞かれた。俺はエキサイトしていても女性の言葉は聞き逃さないようになっているのだ。会話できたのは幻想郷に来てからだ。まあ、ほら、記録媒体とかで声だけは聞けたから。あとは天帝が女性なので年に一度の挨拶を聞いて皆で「女性の声だあああああやつたああああ万歳いいいい」みたいな。

女性と話すのは（絶頂するか気絶するから）苦手なんだと伝える。オブラートに包まないで股引き死罪になる。というか目を合わせただけで死ぬ可能性がある。普通に会話できるとかフアンタジー。

会話してくれるとかリグルさんは素敵な女性だなあ。家とか送ったら微笑んでくれないだろうか。

なんかため息を吐かれた後、話を聞いてくれることになった。

え？ 家を受け取ってくれるのか!?

あ、違った。俺との話し合いをしてくれるらしい。贈り物がなくても会話してくれるとかどうなったんだ。俺の頭がおかしいのか。ちよつと俺に都合よすぎない？

ドキドキしながらミツバチについての話をすると、協力してくれることとなった。「生涯かけてすべての財産をあげましゅ（震え声）」と伝えると「取れたハチミツでいい

よ」つて微笑まれた。家も送らせていただけないのに微笑まれた。

あああああああああああああああすごいいいいいいいいすてきいいいいいいいいいいいい！

どれいになりたいいいいいいいいいいいいい！

10年に1度リグルさんに微笑まれる奴隷になる幸福な夢を見て起きたら自分の部屋に居た。

何故か部屋に居て、心配そうに声をかけてくれる赤蛮奇さん。女神がどうして下界に？ 降りて来たのか？ 天界から？

混乱していると、俺が倒れたらしい。

「あ、起きたんだ？」つて言いながら引き戸を開けて入ってきたリグルさん。俺を運んでくれたらしい。

またやつてしまった。死ぬしかない。女性に手間を掛けさせるとか恥ずべきことである。

死ぬ前に女神を目にしておきたい……なんか二人とも少し煤けていると言うか、焦げていると言うか。畏れ多くも矮小で愚昧な者の身で訊ねる。リグルさんが俺を気絶さ

せたと思つて赤蛮奇さんが疑つて、弾幕なんちやらをしたらしい。

女性に心配されるという喜びが駆け巡つた後、卑賤な我が身のせいで争いが起こり、女性に傷がついたとあれば死ぬしかない。

切れ味の鈍つたノコギリで自分の腹をゆっくり搔つ捌いて死ぬしか、この恥は濯げぬ。これならもがき苦しむ様が喜ばれて赦されるらしいのだ。もしくは孤独な空間に2千年閉じ込められる罰だとか。

二人からは「ええ……」とドン引きされて止められた。命は大事にすべきだとも。んほおおおおおおおおいのちをささげることをとめられたああああああ！
しゅごいのおおおおおお！

命を粗末にするなんて有り得ない！

二人から言われたので命を捨てて解決するなんて考え、もう捨てた！

私は、絶対に命を捨てない！

花畑で俺は叫びそうになる。

命を捧げます、と。

— 10

赤蛮奇さんに「妖怪は危ないからもう近づいてはいけないのよ」と注意された。言つた後でなんか落ち込んでた。妖怪とはこの幻想郷に住む固有の肉食獣らしい。まだ会つたことは無い。気絶したのは肉食獣に襲われかけたからだと思つていいのかもわからない。「大丈夫です大好きです」と伝える。はあ自然と触れ合えるとか最高かよ。赤蛮奇さんは何か言い激んでいたが結局気を付けるようにともう一度言うだけだった。

心配してくれるなんて赤蛮奇さんはやはり慈愛に満ちた魅力的で素敵な人だ。んほい。いつか目を合わせて会話してみたい……強欲過ぎたな。3m以内に近づくのもやばいのに。

しかし、草食動物や肉食動物と触れ合える楽園であるのも幻想郷の魅力だ。妖怪という動物も満腹なら危険は無いに違いない。今度から食料を持ち歩くことにしよう。そもそも俺は幻想郷の人たちより丈夫だし。幻想郷に来るまで俺はデザインされてない人を見たことが無かったが、ナチュラルな人たちにはいろいろあるらしい。未知な発見の多い素敵な場所だ。俺は見たことなかったが、カゼとかいう体調が悪くなる状態異常

がある。古代に記録されている習慣を未だに続けているのだ。代々続けることで細菌を生かしているとか凄い。もうこれだけで幻想郷は凄い。しかも何日かすると治る。不治じゃない。すごい。ナチュラルな人間って凄い。電腦で脳がダメになるとかそういうのも無い。凄い。

とりあえず準備が出来たらリグルさんにミツバチを操ってもらえることになってるので、花畑の選定やハチミツの製法を学ばなければならぬ。

貸本屋があるらしいので知識はそこを漁るか、こーりん堂とかいう場所で気長に流れてくるのを待つしかないとか。何時か流れてくるとかなにそれ凄い。端末を弄って即発見ではないのだ。幻想郷ってすげー。

良い花畑とか何処にあるか知りませんかね、と赤蛮奇さんに訊ねる。頼ってばかりである。そもそも良い花畑とは一体。

「花畑……」と呟いた赤蛮奇さん。結局、眉間に皺を寄せて「知らないけど人里から離れると危ないから近くにしておきなさい」とのお言葉を貰った。

はい！と返事した。女性の言葉は絶対だからね。

俺は最高の蜂蜜が作りたいんだ！ 女性の言葉でも妥協はできねえぜ！ と里で情報収集。最高の蜂蜜は何時だって努力の先にあるものだ。よくわからんけど。まあ最

高の蜂蜜を作りたいって気持ちだけは本物だ。

とりあえず人里でわかったことは、花が大好きな大妖怪が居て季節ごとに花畑を移動しているらしいとのことだ。また、花を咲かせたり育てたりするのが得意らしく、自前の花畑もあるようだ。ついでに大妖怪はゆうかりんという名前だと外来人（俺のように外から来た人）が教えてくれた。

あとフラワーマスターなる人がいるらしい。花畑を移動したり、花の世話をするらしい。風見幽香という名前だと教えてもらった。

ゆうかりんと幽香。この奇妙な繋がりは何なんだろうか。……もしかして幽香という人のペットがゆうかりんなのだろうか。肉食獣である妖怪、しかも大妖怪とのことだから大型、それをペットにできるとはやはり餌やりこそ重要に違いない。あとコミュニケーション。あ、ゆうかりんって可愛い名前だよね。

聞きこみしている最中、地獄という場所があると教えてくれた。なんと地面の下らしい。掘ったのか、土を？ 母なる大地を？ 生命の揺り籠を傷つけて？ 罪深い。いや、これが自然に生きた者たちの日常なのだろう。自然を傷つけて生きなければならぬ厳しい世界。母たる揺り籠は時に怒り狂うのだ。試される大地で生きる厳しさを知った。

花畑の場所は妖怪の山とは逆方向にあるらしい。俺には難しすぎる。妖怪の山とは、逆方向とは、おごご……。まず妖怪の山は名前からして肉食獣の縄張りに違いない。調べるとテングという獣が住んでいるようだ。大テングなる主もいるとか。赤蛮奇さんにも注意されたからテングには気を付けるとしよう。人を食べるとか危ないというのもあるが、山そのものが縄張りはヤバい。群れで襲われたら一溜りもないだろう。

とりあえず人里から少し離れて山を見つければいいんじゃないだろうか。その反対を行けば花畑だろう。

蜂蜜はどうやら一種類の花から蜜を集めたほうがいらしい。リグルさんがミツバチに協力してもらえるとということで指定できそうなので、花畑次第ではかなり良い蜂蜜が……茄子？ 茄子がなぜこんな道端に……。

あつ、確か傘とかいうやつか。びっくりした。巨大な野菜かと思つて興奮するところだった。いや、傘も凄いいけど。俺の住んでた船は空から水なんて降らないからよくわかるんが、雨つてやつは気持ちいいので良しである。

目を丸くしてると、青い髪の女性が「ばあ！」と現れた。
はわわ……。

目覚めると長屋の部屋だった。リスポーン地点かな？

女性の顔が近くにあるという天国を夢見てしまった。そういう妄想は2歳までだよな、ははは。赤蛮奇さんの顔がすぐ近くにあった。妄想豊かな俺は……あ、いい匂いです。妄想にしてはリアルで……。

はわわ……。

なんか昨日は一日が短かったが、ゲームやラノベの男に都合がいい世界に入ったかのような幸せを感じた気がする。

幻想郷って男女比が1:1だっけ。普通に狂ってる世界だよな。男女比が10:1でも「男に都合よすぎるひでえ妄想だぜヒヤッハー！」と言われていたのが懐かしい。もしや本物の俺は転移に失敗して植物状態で、幻想郷は俺の脳が描いた夢の世界の可能性もある。

一人でボーっと考えていたら、引き戸を開けて赤蛮奇さんが「あまり心配かけないよ」に「って言いながら上がり込んできた。作りすぎたとかで煮物を持ってきてくれたらしい。

これなら植物状態がいいです（真顔）

赤蛮奇さんと一緒にご飯食べてたら「妖怪は危ないってわかったでしょう」って言われたのだが、全然そんな感じではない。肉食獣・テングに会ってないし。会ってないで

すし大丈夫です、と告げる。「ああ、まあ、うん、妖怪か怪しいものね」みたいな独り言を呟いて納得してくれたみたいだった。

ゆうかりんってテングなのだろうか。それとも肉食獣には色々な種類がいるのか。赤蛮奇さんに妖怪の山に花は咲くのかと聞くと、秋に紅葉の神がなんちやらかんちやらで紅葉が凄いくらいだとか。

なんかもうよくわからんな。ゆうかりんテング説は微妙かもしれない。

世界樹 1

何処までも広がる蒼穹に浮かぶ様に存在する拠点『ハイランド』。その拠点は巨大な一本の樹である『世界樹』の樹上を切り拓くことで建造が進められていた。

宇宙より降下した貴方は拠点を中心に世界樹を探索し、遠い過去に失った故郷の地表へとたどり着くことが使命である。

1

絶対に素晴らしい世界が広がっている、興奮気味に仲間が主張していたのを、手を休めずに貴方は思い出した。その気持ちは痛いほどわかった。『世界樹』と呼ばれる拠点の土台に選ばれた樹木は、その雄々しい名前通り力強く澆刺とした生命力を、一目で貴方を感じさせた。千切り取った青々とした葉には力強い葉脈が刻まれており、瑞々しい青臭い汁が日によってきらきらと輝いていた。貴方が住む宇宙船、その一角に植えられ

ている水気と輝きの足りない植物とは別格だった。貴方は仲間が、葉っぱの表面構造すら異なっていると教えてくれたことを思い出した。おおよそ八千メートル近い高度に広がる枝葉は、小さな水の粒が集まって構成されている雲とやらから容易に水分を取り込み、降り注ぐ粒子線や化学線、電波にも強く、また横に伸びるように広がる電撃である雷と呼ばれる気象現象にも対応できるように進化しているらしい。貴方の身近に存在する植物とはまるで逆方向に特性を伸ばした『世界樹』には、学者たちも興奮を隠されず、自らの危険を顧みず降下に参加した強者も多くいるのだとか。

そんなことを思い出しつつも、休むことなく手を動かし続けた結果、『世界樹』に吊るされるように巻き付いていたロープを切断することに成功し、やつとのことで貴方は解放された。降下時よりも遥かに緩やかな浮遊感と落下の衝撃を受けた後、難なく立ち上がり、周りを見渡した。視界が狭く、補助機能はすべて切れていた。

貴方が改めて兵装を確認すると、着用している探索用のアシストスーツの機能を初めとし、ほぼ全てが停止していた。極限環境突入用のロックが掛かったままであり、可動部が制限されている。これではスーツに関して単なる重くて丈夫ででかい服と化し、銃器は杖となった。試験的に導入された兵装に元より期待はしていなかった。ただ、地球探索前に木星の衛星を採掘した報酬の一部なのだ、せっかくだからお洒落したかった。更なる改良が必要だろうことはわかりきっている事実だが、それはそれ、これはこれ。

使える物と言えばロープを切断した際に使用したナイフと栄養価のみを求めた一日分の糧食程度、そして無傷の貴方自身の体だ。『世界樹』からの落下を免れたことに關しては運が良かった。足の踏み場があるのが特に最高だ。今日はスペシャルデーだ。いつだって貴方は運が良い。

地球の大気分子が電離している空間まで極めて小さな機械がばら撒かれており、貴方の文明を支えるメタマテリアルの技術の殆どをガラクタに変えてしまった。そのせいで安全とは程遠い降下を行わなければならず、落下傘による極めて原始的な手段が取られている。シンプルなガス惑星や液体惑星ならば落下傘無しで突入したものを……と貴方の脳内に不満が浮かぶ。また帰還する際にも爆発物を用いたエネルギーによって飛翔体を宇宙へと飛ばす危険な方式が取られている。貴方を含め、千を超える探索者が地球への降下を試みたが、運悪く世界樹の枝葉から逸れてしまった者を見送ることしかできなかった。そもそも落下傘による降下はコストが低い代わりに危険性が高く、推奨されていないのだから自業自得でもある。

直接地球へと無人探査機を送り、調査する試みも行われており、数百と挑戦しているようだが未だに成功した知らせは無い。無人機を原始的な物質と構造に作り変える必要があり、その結果脆弱になるのが原因だと考えられる。また素材を世界樹由来に頼っているため、特性への見識が深まっていないことも成功への妨げとなっているようだ。

貴方は現在、『世界樹』の下層ほどに引つかかっていた状態だ。拠点は上層にあるため、一度どうにかして登らなければならない。探索用の鈍器を装備しなかつたことが悔やまれる。重量によって落下地点が大きく乱れることを嫌ってナイフのみを選んだのは貴方だ、仕方ないと気持ちを切り替えた。とはいえ、試験装備が無ければ鈍器も持ってきていたのだが、と内心で貴方はジレンマに悩んでいた。

スーツを脱げば、粒子線や化学線、電波、微弱な毒性の大気などに晒される。防御性能は折り紙付き……らしい。脱ぐという選択肢は一時の楽を得る代わり、そう遠くない未来での苦を早める。そもそも新しいスーツを脱ぎ捨てるなど、前回の探索を無に帰すような物である。

貴方は『世界樹』の幹を目指し、壊れたスーツを着たまま軽い足取りで歩き始めた。

— 2

『世界樹』の樹上で建設が進められている拠点『ハイランド』は、消費している資材の大半を『世界樹』に依存している。月と呼ばれ、激しい戦争によって荒廃した衛星に停留している母船、二十七万キロメートル離れた位置に留まる人工天体、そこから先いくつかの中継天体を経て、確実性は低いものの物資や人員を射出することで輸送を可能と

している。しかし、輸送される物資の大半が拠点利用のためであり、地球に撒かれた極小機械群の影響を受けない資材ばかりだった。飲食は『世界樹』の迷宮から発見・供給されている物資ばかりだった。

そう、『世界樹』には迷宮が広がっているのだ。世界樹を見下ろしたとき、そのちょうど中央、幹の真ん中を大空洞が広がっている。縦方向に奔る空間には、未知の動植物が群生して独自の生態系を形作っている。さらに貴方の文明とは異なつた文化を継承しているかのような遺跡群も連なっている。故郷を失つた遠い過去の文明や文化とはまた異なる、奇妙な文化が。それを誰かが迷宮と呼び始め、定着した。正式名称もあるのだが、形式を重要視する書類を書くインテリを除けば誰も意識していない。

『世界樹』の外から降下して成功した方法は一度もない。無人・有人のどちらも。学者によると、凄まじい対流が起きているのだとか、地面が無いガス惑星となつているのだとか、プラズマ流が吹き荒れているのだとか、猛毒の大地となつていて溶けるのだとか、そういった可能性が考えられるらしい。宇宙での射出や地球への突入、『世界樹』から見下ろした地表はどこまでも青だった。青が広がっているだけ。そんな故郷の大地への希望は強かった。『世界樹』が雄々しく生えている、その事実が大地の存在を仄めかしているからだ。今現在、地表へと貴方たち人類が踏み出すことのできる最有力の方法が迷宮だった。未だ誰も踏破していない代わりに、未知の物資を手に入れて帰還することが

叶っている。最も地表へと近づけているため、最も期待されているのだ。安全かどうかはまた別の話であったが。

『世界樹』の巨大な葉は、スーツを含んで二百キロ近い貴方の重量を苦も無く支えてくれている。葉先は不安だが、中ほどなら少しばかりしなりながら沈み込むだけで、気持ちやわらかい素材の床を歩いている様だ。葉が抜け落ちるだとか、枝が千切れるだとか、そういう心配を抱かずに済んだことに、貴方は安心した。事前の知識として、腐っていたり枯れていたたり、陽光が明らかに足りなかったりとした部分は歩かないようにと伝えられ、それを守っているからこそその安全であった。

幾度かの休憩を挟み、味気ない糧食を腹に詰め込み、眼前に広がる葉の間から見える雄々しい幹へと歩みを進めた。スーツが無事であったなら幹をよじ登れたのだが。いや、そもそも何の問題も無ければ無人機が飛び交って、人間の手を借りず機械的に開発が進んでいた可能性も高い。先ほどの糧食同様味気ないものだったかもしれないと貴方は思い至った。犠牲者もいる手前、大つぴらに喜べないが、これはこれで悪くないという考えを持っている者も多く、貴方もその一人だった。

目的であった幹がすぐ目の前に広がっている。試しにナイフで切りつけると、抵抗なく刃が入っていく。だが、それで終わりだった。十分な装備が揃っていない今、新しい穴を広げて中に入ることは出来ない。時間をかけて繰り返し皮を剥ぐことも出来るが、

開発されていない『世界樹』の樹上で長時間を過ごすことは推奨されていない。雲による温度低下、気圧変動の嵐、雷による感電。装備が完璧であるならば高所作業も難なく行えるが、現状では他にも様々な危険が付きまといっている。素早く迷宮内部へと進むことこそ、貴方の最優先事項だった。

遠くで雲が輝くように光を纏い、置き去りにされていたゴロゴロと鳴る音が響き、貴方の耳を刺激した。余裕はあまりない。ぐるりと幹の外を沿うように歩く。何処かしらに探索用に分けられた入口があるはずだ。すぐに『世界樹』は雲に覆われ、視界が白く染まった。水滴がスーツにまとわり付き、濡れた葉は足取りを重くする。突如、一線を描くように光が流れた。貴方の視界を横切ったそれは、音を響かせながら『世界樹』の巨大な枝葉を焼いた。雷は幹を伝って消えていた。音を立てて、目の前にあつた枝が焼け落ちた。あと数歩、下手したら一歩でも前に進んでいたら、貴方は雷に撃たれていたかもしれない。

貴方が両手を広げても余りある大きさのそれは、幾つかの葉を千切りながら落ち、更に下に生えていた枝へと衝突して止まった。貴方が目を凝らして折れた枝を見ると、すぐ傍の幹に横穴が開いているのを見つけた。巻き込まれて落ちた葉がまるでクツションのようだった。貴方はいつだって幸運だ。

貴方はついに迷宮へと足を踏み入れた。想定していた形式、状況とは遥かに異なっていたが、それでも念願の迷宮への第一歩だった。

—— 3 第x階層 旧宇宙センター タ■ガシ■

迷宮の中は様々な光に包まれていた。壁伝いには柔らかな光を放つ苔のような物、遺跡群にへばりついた液体は毒々しい緑の蛍光色、白く輝く胞子をまき散らす怪しげなキノコ……。光の届かない暗い脇道を横目に、光の溢れる道を進む。スーツによる視覚補助どころか左の義眼が停止して満足な視界が望めない今、自らを危険へ導く真似はしない。

歩いていると見たこともない植物が群生しているのを発見した。迷宮内の植物を採取して拠点へと運べば換金できるのを思い出したが、生憎と貴方には知識が無かった。事前に与えられているデータベース内なら存在しているかもしれないが、残念ながら記憶メモリごとスーツはオシヤカなので確認はできない。結局少しの休息を取るだけで群生地での行動を済ませた。迷宮内は強い毒性を持つ動植物が存在しているので注意するようにと聞かされていた貴方は、後ろ髪をひかれる思いでその場を後にしたのだった。

遺跡群の影からブブブ、と耳障りな音に貴方は気づいた。どうやら羽音のようだ。可動部にロックが掛かっているスーツでは、動きに制限が課されている貴方は、右手に握っていたナイフを逆手に構えた。伸ばしきることのできない腕では、順手によるナイフ捌きは披露することは叶わない。そもそも見せる相手がいないのだが。

脚部の間接にもロックが掛かっているため走るのにも一苦労だが、貴方は若干猫背気味になりながらも軽やかに駆け抜ける。影に待っていたのは巨大な羽虫だった。すれ違い様に羽根を切り裂くと、無様に落下した。だが虫もただでは仕留められてくれないようだ。飛んでいた虫の這いずりとは思えない速度で、貴方のスーツへと口吻を伸ばした。伸びた口吻が二股に分かれ、内部からグロテスクな口に似た器官が飛び出した。液体でテラテラと怪しく輝くその口を、貴方は掴み取り、力任せに引っ張り出した。情けない叫びが虫から吐き出される。貴方はその器官を引き千切ると虫の胴体や羽根へと投げつけ、頭部へストンピングを浴びせる。重要なのはソフトウェアではない、ハードウェアなのだ。その勢いたるや凄まじく、毒々しい緑の蛍光色の体液をまき散らしながら頭部が弾け、その体液は足元の遺跡群を溶かし、貴方を下層へと落下させた。古い遺跡群だ、当然脆くなっている部分もあるのだ。が、そのことを失念していた上に虫の体液によつて溶かされるなど貴方の認識外だった。強すぎてすまない。

貴方はさらに迷宮の下層へと落下するも、宙で体勢を整え、猫科の動物を彷彿とさせ

るしなやかさで着地した。惑星や衛星の調査・探索時に兵装スーツでの突入で運試しを行うのを趣味としている人間だ、この程度なら寝ながらできる。というかあまりに危険すぎて気絶したまま突入することもあるので、半ば無意識で体勢を整えられる。

内心で完璧すぎかなと自画自賛。ギチギチと耳障りな音が頭上から聞こえた。見上げてごらんよ、その先には貴方へと敵意を滾らせる巨大なムカデ。そして周りには幾人もの死体。五体満足な死体は無い。溶けた形跡や噛み千切られた様子だった。ムカデが口元の毒針から液体を滴らせながら、その鎌首をもたげている。ぴちよん、と一滴。ボジュツという音とともに、地面が溶けて凹む。貴方は眩いた、きつも。その言葉のせいではないと思うが、ムカデの頭部が貴方へと襲い掛かる。二度言うが、重要なのはソフトウエアではない、ハードウエアなのだ。貴方は軽やかにバク宙でその場から回避する。そして無様に倒れこんだ。重力と重量が予想以上に重く、遥かに重力が軽い衛星での活動に慣れていたのが原因だ。

「そこのお前！　だ、大丈夫か!？」

貴方の背に声が掛かる。立ち上がりながら目をそちらに向ければ、そこには二メートルを超える迷彩柄の鎧を着たマツチヨが遺跡群に身を隠していた。大丈夫かだつて？　むしろ原始的な格好をしているお前が大丈夫なのかと貴方は心配になった。古代の戦士か。氷漬けから蘇ったアイスマンなのか。いや待てよ。聡明な貴方はすぐに思い

出す。迷宮では極小機械群のせいで最先端のテクノロジは全て使用不可、過去の遺物と化した。代わりに台頭したのが火薬や電気といった古い技術だ。無人機から歩兵、反重力から馬車へ。そうなると自身こそが石器時代の戦士なのではないか、と。

飛び込んできたムカデの頭上へと跳びあがる。今度は完璧だった。貴方は二度同じミスを繰り返さない。そして三度言うが、重要なのはソフトウエアではない、ハードウエアなのだ。よく考えたとスーツのソフトウエアは貴方だ。体の二割ほどを機械化している最新鋭のCPUだ。そしてハードもGCと名付けられた試作型の最新兵装。ハードもソフトも最新型。負ける気せーへん、おニューやし。巨大ムカデの頭部へ、おそらく地球上最新と思われるドロップキックが炸裂した。

なお貴方の体は二割が機械化されているが、地球では機能不全を起こすのを忘れてはならない。つまり、早く拠点に戻って代替品を取り付けないと死ぬことを思い出した。

やべー、q、

ぐしやぼん—年表

1300年—1400年頃

- ・土鬼諸侯国連合が中央から東北までを支配し栄華を極める
- ・皇弟ミラルパが下部組織である師匠連を通じてシシ神を狩ることに成功する
- ・ミラルパがシシ神を得るも皇兄ナムリスによる邪魔が入り、制御に失敗
- ・ナムリスがシシ神にヒドラの毒を盛る
- ・ナムリスがシシ神の首を得る
- ・シシ神が変異して日中にも関わらずデイダラボッチへと変化
- ・七日七晩デイダラボッチが歩き回り、国中に死が撒き散らされ、土鬼諸侯国連合が衰退する
- ・皇弟ミラルパの超自然能力により皇兄ナムリスが墓所へと封印される
- ・土鬼諸侯国連合内でタタリ神が出現
- ・ミラルパがタタリ神をその身に受け止める

- ・ミラルパは死ぬことも出来ない体となる

- ・タタラ場を始めとして燻っていた火種により生じた大和朝廷との争いで、土鬼諸侯国連合が滅ぶ

- ・大和朝廷によって空亡が退治される

1500年頃

- ・虫の息だったミラルパがなんとか復活し、師匠連を率いて暗躍

1700年—1800年頃

- ・アメリカで反乱が起きるも英霊召喚を果たしたブリタニア公爵によって鎮圧

1800年頃

- ・エディンバラにてエリザベス3世派が革命勢力に包囲されるもブリタニア公によって救われ、アメリカ大陸へ

- ・神聖ブリタニア帝国成立

1930年頃

- ・14代目ライドウががんばる

- ・頑張りすぎて師匠連が爆裂四散

- ・ライドウが頑張って悪魔を駆除するも結果として帝都にマグネタイトが撒き散らさ

れる

・弱い分霊のルシファーが雲霞のごとく出現
 ・それらを捕食して出現した人類ファンクラブ永世No. 1のルシファーが神殺しの種まきを始める

・nのフィールドのどこかで真紅が妹をジャンクにする
 1940年—1950年頃

・霊的国防兵器の研究が始まる

・第二次世界大戦時サイパン陥落の知らせを受け、ルシファーから与えられた情報を下にグリゴリの天使を解放する

・終戦後の混乱に乗じて墮天使たちが逃亡

・nのフィールドのどこかで真紅がサマナーとの間で意見の相違を起こし、削除される

1950年頃

・どこにも存在しない国、ミカドの国から侍が現れる

・墮天使たちが救世主の製造を開始するも技術が足りず、人類に知恵を与える。共同研究先にオーパーツである『パロウズ』が供与される

1950年後半頃

・科学の進歩によって宗教思想が崩れ、超越的な神秘が薄れる。神によって定められ

ていた世界のルールが人間によって改めて敷き直される

- ・ 一時的に世界の裏で蔓延っていた悪魔たちが存在しにくい世界となる
- ・ なんとか頑張つて生きていた空亡が煽りを受けて致命傷を受ける

1960年頃

・ 神の影響力の低下に危機感を抱いて教会に降り立っていた大天使によって救世主が定義される。規定された歪なルールに神が敷いたルールに緩みが生じる

- ・ 墮天使によって悪魔の基礎研究が始まる

・ 墮天使によってデモニカの基礎研究が始まる

・ 墮天使によって超自然能力の基礎研究が始まる

・ 墮天使によって仮面の基礎研究が始まる

・ 墮天使によって夢の基礎研究が始まる

・ 昏く永い宗教戦争が始まる

1970年頃

・ 空間移転装置ターミナルの基礎理論が纏まる

1980年頃

・ ルシファーが元気に暗躍。ルールが強く緩む

・ 噂や都市伝説によって怪奇現象が起きる土壌が出来上がる

・一人の学生が自力でコンピューターを介した悪魔の召喚に成功するも、制御不能となる

・熾烈な戦いの末に学生たちが悪魔を撃破するも、その影響でルシファーが召喚される（以前から居たルシファーをルシベえと呼称変更）

・学生が色々あつて超人ゴトウと雷神ツールと協力して悪魔を送り返すことに成功する。ゴトウは魔王との戦いで深い傷を負う。ツールは熾天使によつて消滅。学生は呪いに囚われ、この世界から消える

・悪魔が世界の裏に蔓延る強い地盤が出来上がる

・学生と悪魔との争いに横やりを入れていた熾天使が自らの行いや神への愛に疑問を抱く

1990年頃

・オリ主誕生

・オルドレイクが魔人『真紅』を召喚する

・オルドレイクが無色の派閥の実権を握る

・オルドレイクが夢の研究を流用して東京で十回目の魔王召喚に挑むも失敗し、同時に桐条グループが仮面研究を流用して東京で人類の集合的無意識に干渉、結果として人類の無意識からデスが放たれる。神によつて定められていたルールも人間によつて

引き直されたルールもがガバガバア！

・人類のネガティブマインドであるニヤル様も解き放たれ、様々な異界や超常現象が起きる

・人類のポジティブマインドも解放され、カウンターとしてペルソナ使いが生まれる。またニヤラトホテプと戦う噂を基礎としてP1とP2のメンバーが誕生する

・オルドレイクによって実験体たちが住んでいた村がキャンプファイアーされ、実験体のアティが逃亡する

・墮天使によってフアントムソサエティが創設される。目的は『愛すべき人類の救済』である

1998年頃

・ブリタニア帝国内でテロが発生。皇妃一人と皇女一人が死亡

・ニヤル様が遊びで駒を作ろうとしてある家族が不幸になり始めるも、素養がないため放置される。父が覚醒し淫魔に魅了され蒸発。母が“見える”ようになってしまい気を違わせて死亡。

2000年頃

・フアントムソサエティが「魂の救済」のためにマニトウを召喚し、恐怖によって制御に成功

・粗製の空間移転装置ターミナルが完成するも未来組織パルチザンの協力を得た“ぬらりひよん”によつて強奪される

・大天使サリエルと魔王ベルゼブブがターミナル接収に動き、サリエルが“ぬらりひよん”の撃破に成功。その肉体は救世主の研究へ、その魂は煉獄へと繋ぐ

・羽根の炎が燃え尽きた熾天使が煉獄でサリエルを襲撃後、地上へ

・大天使メタトロンの残骸によつてターミナルの情報がネットへと公開される

2001年頃

・マニトウ、電子の海に漂っていたメタatronと接触し、離別を理解する

・死の恐怖を覚えたマニトウが電子の海へと逃亡し、不死を目指す

2002年

・フアントムソサエティがマニトウとバロウズのデータによつて『ノア』を生み出す

研究を始める

2005年

・業斗童子が怪異によつて呪われていた才ある少女を拾い、次世代のライドウへと育成を予定する

2006年頃

・オリ主が二体の妖精を仲魔にする

・ 師匠連に所属する『アシタカ』がオリ主を拾う

・ 村を焼かれたアテイが苦難の末にハンターとなる

・ nのフィールドからジャンクが零れ落ちる。都市伝説のメリーさんが囁かれ始める
 ・ オリ主が悪魔退治からヤクザとの抗争まで駆け周ることになる

2007年頃

・ オリ主の成長限界がレベル5であると発覚。ブラック勤務体制によって成長限界レベルが10へと延びるも成長の遅さや限界値、強さへの志の低さに不満を抱いた仲魔の9割が反乱を起こす

・ 反乱を返り討ちにしたオリ主の成長限界レベルが20となる。一度家に帰って巨大な赤子のような魔人ダンを撃破

・ 皇弟ミラルパが魔王を召喚し、タタリ神の一部を付与してマグネタイトを吸い上げようとするが制御に難有り

・ 魔王をオリ主が撃破するもタタリ神に呪われる

・ nのフィールドを越えて異世界からバフラム軍がヨークシンに出現。集合的無意識に干渉して残骸を吸い上げたノウマンによって虐殺が行われる

・ 足立が鳴上とともに八十稲羽を守り、女神トヨタマヒメと出会う。世界が糞だとかつて足立は頭では嫌だと考えながらも体が頑張っちゃうのが癖になったのか都会

でも同じように頑張っちゃう体になってしまった

・足立がS・E・E・S・に加入し、ペルソナ組となんかいい感じに頑張る

2008年頃

・足立がタカヤと親友になる

・無色の派閥によって霊媒体質の人間が攫われる事件が相次ぐ

・師匠連に所属するペルソナ使いが無色の派閥所属のサマナーに魅了され離反。邪教の館にて立て籠もりを起こさせ、師匠連の影響力を削ごうとするも速やかに処理される。

・オリ主が魔人を仲魔にする

・皇弟ミラルパがタタリ神や装備品を介してオリ主からマグネタイトを接收していたが、邪教の館の主人に破られる

・ファントムソサエティで人造電霊『ノア』が誕生

・ノアがネットワークで情報収集を開始する

・北海道襟裳岬にシユバルツバースが出現。デモニカを流用した兵器によって調査もしくは破壊が予定されている

・足立がタカヤを殺す

・シユバルツバース内でラリー・フォルクが妖精のピクシーによって助けられ、仲良

くなる。以後TACネームがピクシーへ

・ほかのチームにピクシーが実験され、消滅間近となる。ラリー・フォルクが合体するも意識が消滅し、片羽根だけが残る

・ラリー・フォルクがガラム2を辞める

・PJを殺害後、宇宙卵を奪取して『ピクシー』が逃亡する。その際にソーサラー隊からADFX-02とスイッチを供与される

2009年頃

・東京の学校で魔界への扉が開かれるもライドウによって阻止される。ルールが悲鳴を上げる

・異なる世界で魔人皇によってとある学校が魔界へと沈む。タカマチナノハという学生も居たが逃げ切れず、友人とともに魔界へ

・ステイヴンが「他人のために死亡した超人およびその素養がある者」を煉獄にて召集

・無色の派閥を追いかけてアテイが日本へ

・天海市でノアとマニトウの争いが発生し、キョウジが出撃

・ICBM投下を止めようと未来からパルチザンが襲来。ゴトウとトールマンを止めようとガイア教とメシア教に攻撃を仕掛ける

・翔門会がベルサーバーを召喚するために靈的国防兵器および大天使召喚によって東京の結界を維持する四天王を処理

・ルシベえによる山手線沿線の封鎖が行われる

・時間から切り離された天蓋の上にあるカルマ教会が地上の物品を接収および支配するためデビルシフターや天使を放流

・カルマ教会の使徒である侍が地上を探索

・ゴトウが蔓延る悪魔へ対処するためにクーデターを起こす

・ステイブンが今後の事象へのカウンターとして日本全土にターミナルを導入するもライドウによって9割を回収される

・ルシベえがオリ主に『召喚』の知識を与える

・無色の派閥が師匠連から霊媒体質の少女を誘拐する

・ガイア教がバマミを巫女として『東京受胎』の儀式を行う

・ライドウが裏切り者の処分に出向くも、ターミナルを利用した転送によって業斗童子ごと逃亡される

・ペルソナ使いで構成されているチームS・E・E・S・がニクスアバターとニャルラトホテプと戦闘開始。なんか因縁があった

・東京全体の龍脈を利用してオールドレイクが十二回目の魔王召喚儀式を行うも、『アシ

タカ』を継いだオリ主が魔王を召喚する

- ・アティがアマラ経絡へと逃げたオルドレイクを追いかけ、因縁の決着を果たす
- ・ノウマンがアーマーの召喚に成功。東京はその巨体によつてまるで蓋をされたようになる

- ・ライドウが魔王を止めるためにオリ主を襲撃する

- ・守護天使の奇跡によつて復活したオリ主が、召喚した魔王や東京の悪魔を生贄に七大罪の内の一体レヴィを召喚

在となり、ガバっていたルールを軋ませる

- ・オリ主が歩いていたシシ神と、付与されていたタタリ神を装備。生死を無視する存在

- ・ニユクスアバターとニヤルラトホテプとの戦闘でペルソナ使いに死亡者多数。モナドマンダラへと逃げたニヤルラトホテプを追うため二手に分かれる

- ・ニユクス組が足立を除いて死亡。足立が肉体と精神（ペルソナ）を憑代に必殺の霊的国防兵器その玖『女神イザナミ』を反転召喚する。緩まっていたルールを上書きするように黄泉の国が展開される

- ・宇宙卵を奪取したピクシーを追いかけてサイファーが東京上空へ。生身のサイファー限界を迎えて血の花火

- ・いろいろ合体したゴーレム（レオのビックバイパー、サイファー）がピクシーを撃

破、次いでジェフティの自爆アタックでノウマンがアーマーンの口内へゴールイン

・宇宙卵を搭載した報復兵器V2が放たれるもアーマーンへ直撃し、被害はノウマンだけに留まる。宇宙卵の威力によってアーマーンは消滅する。ルールが弱っていた世界に強い衝撃を与えたため、世界が軋む

・万魔殿バンデモニウムが顕現する。世界がらめええええと悲鳴を上げる

・皇弟ミラルパがタタリ神の制御をオリ主に奪われ、逆にマグネタイトを奪われる。苦痛からミラルパが解放され、天へと召される。墓所の封印が弱まり、封印されていた皇兄ナムリスが解放放たれる。共に封印されていたバロンとカオナシも解放される。

・世界が限界を迎えるが、一時的にすべてが収まり、静かな夜が訪れる

・有里が短い人生で命の答えを見つけ出す

・さまざまなる事象を観測したノアが一つの答えを見つけ出した結果、ICBMを発射する

・有里がデスを元の場所に封印する

・集合的無意識にデスが封印されることで顕在化したエレボスを煉獄に集まったメンバーで封印。ステイヴンからの報酬は望みを一つだけ叶えてくれること

・ネガティブマインドの権化であるニャルラトホテプも消滅する。同時にポジティブマインドのフレモンも消える

・ P1とP2のメンバーが役目を終えたので消滅する。P3メンバーも全滅
 ・ ICBMの破壊を、マサカド公を召喚したゴトウが防ぐ。ゴトウは頭部を犠牲にしたため死亡。防いだ後は東京の上層世界の天蓋へと変化する

・ 世界が碎けるも東京受胎によって魔界へと落ちる直前で留まった
 ・ ほむらちゃん死亡

・ ルシベエが神殺しの種をまく。ハッピーバースデー、まど修羅の誕生だよ

・ 天蓋の上が時間と世界から切り離されつつあり、不安定となる

・ ヨーロッパとブリタニア、ロシアで英霊大戦勃発

東京 空白期（2010年から2019年まで）

・ 魔界が混ざりつつあるため世界の基準が変わる。最大255

・ オリ主、魔界へと落ちつつある東京の最下層『凍狂』で目覚める。霊媒体質の少女『キノ』と名付け連れて行く

・ 砕け散った東京の女神をフリンが拾う。土地の神に近い状態であり、東京が徐々に魔界へと落ちているため、回復の見込みなし。墮天使によってバロウズへと組み込まれ、女神は生きながらえる

・ フリン一行の案内で、アキラはゴトウより託された民を連れて天蓋の上に向かう。しかしそこにミカドの国は無かった。新たな国を作る。女神を連れて行ったため、そこ

が東京と判定され、以後時間から切り離される。女神をコピーし続けてガントレットを作る国となる。女神は自我が薄れて消滅し、東京判定から逸れることで次に東京へ降りられるのは1950年頃となる。つまりバロウズ運搬係り。

・『フリー・フォルク』が妖精の森で目覚め、ノゾミと出会う

・鳴上が八十稲羽の家で目覚めるも仲間がいなくなつた事実には慟哭する。東京は封鎖状態。日本全土が悪魔の発生に混乱している中、復帰した鳴上が真実と平穏を求めてP4メンバーとともに東京へと向かう

・はくのがほむらちゃんとチルノを引き連れ金剛神界RTAに挑戦

・アティがルーミアとともにアマラ経絡踏破に挑戦

・オルドレイクがスペクターと化してアマラ経絡で目覚める

・黄泉の国となつた東京の最表層部でイザナミとともに足立が鳴上待ち。イザナミが霊的国防兵器として日本を守るのと同時に存在理由である人類の殺害を行うために悪魔を放出しているのを止めてもらうため。ダイナミック自殺待機

・さやかちゃん、恭介が死んでることに気づき、ムスビ（結）を指す

・あんこちゃんヨスガあんあん

・مامィさん、シジマのポツチ感に気づき耐え切れなくなり逃亡

・サリエルがぬらりひよんをベースとした救世主の製造に成功。救世主を見出した大

天使として救世主を旗本にメシア教を纏める

- ・双子の正座浮遊ババアがガイアの一部を纏める

・砕けた東京を一つのコトワリで満たせば魔界に落下することを阻止できる。カグツチを中心として広がる十二の東京が争いを始める

東京を除く日本 空白期（2010年から2019年まで）

・北海道 : 自衛隊が墮天使や天使の策謀で同士討ちし壊滅状態。墮天使の一体が持つ勢力に札幌が支配される

- ・樺太 : 災禍から逃れた人々が静かに暮らしているが「良の金神」復活の予兆有り

- ・東北 : 国津神の支配下。アラハバキ降臨を待つ

・日本アルプス〜富士山：噴火中。長野は天使の支配下におかれ善光寺平に天使達による新しい都の建設

- ・千葉：謎の破壊神（カルキ）による大量殺戮

・関東平野：多摩、山梨では米軍や自衛隊の兵器を鹵獲した人類共闘戦線。さらに必殺の霊的国防兵器スパゲッティモンスターが守護る

・氷川神社の祭神が大国主からアラハバキに。半水没して陸の孤島になった茨城の鹿島神社に、布津御霊が封じられている

- ・伊豆諸島：富士山噴火の影響で大損害。伊豆半島から覚醒者多く現る

・静岡：ロボット暴走

・濃尾平野：パール神族台頭。東から攻め来るロボットとの紛争

・近畿：京都は天津神の支配下

・紀伊半島：志摩（伊勢神宮）にかなりの使い手が存在

・富山、新潟：チエルノボーグ降臨。原発を巡る攻防戦

・能登半島：アース神族の支配下

・中国地方：出雲大社が崩壊し大国主復活。厳島神社に現れたヤタガラスがこれを迎

え撃つ

・四国：弘法大師の大国土結界が発動し、仏族の守護を受ける

・九州：阿蘇、桜島噴火。長崎に天草四郎の転生を名乗るメシア顕現。ラー神族の暗

躍有り

・沖縄：与那国島の海底遺跡浮上。駐留米軍はクトゥルー神族の奇襲で壊滅状態

2020年頃

・六本木がアリスゲームを勝ち抜き、魔人『アリス』となったきらきーに支配されている。ウサギの死体が転がっていた

・ノアに支配されたロボが人間狩りを行う。悪魔や天使は人間がいないと存在が維持

できないので機械を襲う

遙か未来

・レヴィアアタンが召喚される

・レヴィアアタンを追ってきた七大罪の内の一体サタン（タカマチナノハ）によってパルチザンが壊滅。その世界すべてのマグネタイトによって万魔殿バンデモニウムを召喚、F A S S（タイムマシン）によって過去へと飛ばす。未来と過去に万魔殿バンデモニウムが在ったという事実が固定されるため、過去から未来まで存在が固定される。家族のところに帰ろうとしたタカマチナノハの目論見である

ごちうさ (完)

— 1

ふむ、ここが我が母の胎の中か。はつきりと意識を持ったのはつい最近で奇妙なものだ。

我が力を持ってしても、胚であつた記憶などない。

できれば優秀な精子を選びたかつたがそれは叶わぬことに苦々しきを感じた。

仕方がない、外に出た折には生まれ持った力を研磨するしかあるまいよ。

胎の中ではなんとも言い難い生ぬるさに包まれ、ともすれば安心感すら抱いてしま
う。

へそに繋がつた尾から運ばれる栄養をえり好みしながら摂取する。

どうも我が母は依存性を持つ軽度の毒物をたびたび摂るようだ。

我を孕んだ榮譽に免じて毒物は返さず、浄化しておいてやろう。

最近体が大きくなり過ぎた気がするが、それも愛嬌だ。

ははは、許せ母よ。

意識を持つてから母が四十を超える日々を寝起きしたように記憶している。

そんな折、ドン、ドン、と腹に衝撃が伝わり、我にまで心地のよい按摩が届けられていた。

最初は我のために愛い奴などと母を愛でていたが、母自身の腹部への損傷に気づいた。

どうやら、いや、間違いなく墮胎しようとしているのだ。

衝撃、体重、気配、愚かさ、魂、あらゆる情報から粗忽者は男であると理解できた。

そうとわかればこの愚かな虫けらに罰の一つも与えねばならぬ。

男が拳を腹に当てるのと同時に我も掌をそつと当てる。包み込んだ衝撃を全て男の拳へと戻す。

心の臓が破裂するまで、母が三百ほど鼓動する程度の猶予をくれてやる、悔やむも苦しむも喜ぶも好きにするが良い。

虫けらの羽音が消えることで安心してまた眠れるというものよ。

万に一つもあり得ないことだが、我を孕んだ榮譽を賜りながら母自身が我を殺そうとしていたのならば、胎をこの拳で突き破り、地へと両の足を付けるところであった。

母の股から我、再誕す。

へそに繋がりし尾を千切り、美しき二本の足で立ち上がる。

我は地すらも見下す。

世界とはこんなにも光に溢れていたのか、細めていた目を見開く。

悪くない。

闇のみも好ましいが。

さて、と。

我が名を称えよ 栄光に満ちた比類なき我が名を讃えよ。

我が名はルナオーリツシユ・ルナケルスティン・ルナフォーセル・ルナロドヴィー・ル
ナマルクチ・メアリスルナルナルナルナ・ルナである。

ふむ、割れんばかりの喝采が聞こえぬ。

どうした、美しき我が裸体に声も出ぬか。

ん？

ふむ。

なるほど……。

ははは、こやつら死んでおる。

我を取り上げようとした薬司やその従者など目が潰れ、脳が焼けておる。

我が母も子の美貌に驚き、神経が焼かれ、精神が溶けておる。

呆れるほどに脆い。

だが褒美をくれてやろう、我が生まれし世界への祝福よ。

死からの復活、囚われし狂気からの離脱。

我の生まれし時と場所にいた幸運を嘔み締めよ。

我が生まれたから死んだ？

知らんな。

さて、復活といこう。

我が深淵に至りし叡智は暝からも魂を……腹が減ったな。

こんな遊びなど糧を得ながらで良かろう。

復活など瞬きのようなものよ。

しかし、乳とは味が薄いものな……。

未だに我は全裸であつたな。

何か羽織るものは……。

ん……？

ふむ……。

女になつておる……。

— 3

我が母は脳が緩い。

同時に股も緩い。

我が居なかつたら使われて捨てられる程度の存在よ。

それだけでなく、脆い。

我が美力を抑えなければ容易に心の臓が止まる程度には脆いほどに霞の如き存在。

しかし、しかし、だ。

我を宿した奇跡だけで全てを得ても良い。

日に五度ほどの復活を果たしているのだからそれへの対価も兼ねているが然も有り
なん。

確か、この世界で語られる神は死から三日ほどで復活するのだったか。

つまり我が母は十五倍偉いということになり、やはり全ての富や名声を得ても当然なの
のだろう。

母がテレビに真剣になつてゐる間に、我は領土の散策へと出向こう。

この三年で我が身はより強靱な力を得つつある。

赤子の身では美力を抑えきれず、医局の男どもを射精させてしまった。

年齢を問わず股座を濡らした男女が倒れ、生臭さに包まれるのは御免だが。

幼い時分のちよつとした失敗を思い出し、つい美力を解放してしまった。

其処から嬌声が挙がり、失神した男女が道端に倒れ、鉄の箱が至る所で火を噴く始末。

美しいというのは罪よな……。

死骸など見れば母が気絶するであろう。

塵と消すことも考えたが、火力が高すぎてここら一帯が消し飛ぶ可能性も無きにしも非ず。

そうなると手間だが恢復や復活程度で済ませておく。

感謝しろ民ども。

そして審美を鍛え、魂を磨き、我に仕える喜びに滂沱するが良い。

時折、そう、時折なのだが、恐ろしく愚かな屑が存在する。

美しすぎる我が魅力に逆らえなくなるのだ。

正しく生きるとはそれだけで自らを律する、反してねじれ曇った生き様は自立を捨てると同じ。

つまるところ、我に触れようとする愚者が、時折現れる。

阿呆は欲望の捌けとして近づこうとする、そうなれば身の破滅よ。

我が美力の引力に引き寄せられ、その身が崩壊しようと、魂が砕けようとも歩みを止めることなく進もうとして、最期には消滅する。

ほうら、目が焼け、神経が弾け、脳が溶け、それでも止まらぬ。

喜べ、あと五十めーとる……? とやらまで近づけておるぞ。

ははは。

— 4

興味深いことに教育や学業が義務であるという。

家畜になぜ芸を与えないのか、食べるからであるからして。

不思議なものよ。

さて、困ったことに、美力を抑えに抑えているというのにくらすめーととやらは絶頂してしまっておる。

教師はセルフ去勢となつてしまつたかもしれん。

逆に解放することで閾値を超えさせ、次いで抑えることで耐性が付くのではないだろうか。

おお、悪くない考えであらうか。

いいか、一瞬だぞ我。

一瞬。

それ以上でも以下でもない。

以上となると、おそらく近くに居る者から消滅するであらう。

グツとしてハツだぞ我。

頑張れ我、負けるな我。

今だ我よ！

美力を解放せよ！

生臭いです……。

不思議なことに出生率が大幅に低下、無気力な人間の増加、集団心停止などなどの問

題が起こったらしい。

世の中不思議なこともあるものよな。

なんとまあ不思議不思議。

小耳に挟んだ話であるが、我が領地はどうも地価とやらが下がっているらしい。

奇妙な現象や婚姻数の低下、同時に引越したなどが原因のようだ。

不快ではあるが、輩が減るのは悪くない。

もつと魂が磨かれた民で我が国を作るのも悪くない。

となると、少しばかり試練を与えてみるのも良いのではないだろうか。

美力を少しだけ解放し、耐性をさらにつけさせるのだ。

悪くない。

むしろ良い。

良い、すこぶる良いぞ。

いいか、一瞬だぞ我。

一瞬。

あつ……やってしまった(てへぺろ☆)

アストロボーイ・鉄腕アトム（完）

— 1 —

始まりがあれば終わりもある。

俺が生きるために摩耗した精神は、張りつめた糸に似ていた。か細く常にびんと張っていて、弛みなどの遊びが一切ない。放置され続け、そう長くない年月で千切れるだけの糸。

張りつめた糸のようになったのは、確か小学校に入学した頃からだったと自覚している。両親の不仲により糸の両端に力が加わるのは早かった、子供の無邪気さという弛みが無くなるのは一瞬だった。それから十年近く糸が保っていたことが奇跡だった。もしくは両親が蒸発した時に一度切れていて、祖父母に引き取られた際に無理やりに紡いでいたか。祖父が亡くなって、祖母を悲しませないと躍起になったあの時も。実はそういったことが繰り返されていたのかもしれない。祖母が亡くなった今、紡ぐ意味が無くなったのか。紡いでくれていた何かを失ったのか。

何か足搔けないかと必死になった。生きるために。一人は怖かった。必死に探して、

ふと知ってしまった。何も無い。アパートの一室は、俺が生活していたはずなのに伽藍堂のように何も無い。何も生み出せず、誰にも残せず、少しずつ消費して、生きているように繕っているだけ。生きている意味が何も無いのだ。そこからは何もかもが怖かった。祖母を支えとしていた、自身が生きるための価値を見出していたことに気づいた。煎餅蒲団しかない部屋にぞつとして、駆け出した。

行く宛も無く、駅に駆け込んだ。持っている金は千円を切っていた。笑いが込み上げてきた。自身を誤魔化すために、何も考えられないほどにアルバイトを頑張った結果がこれだ。褒めてくれる人はいない、頑張る理由を作る相手もない。疲れたとでも言えればいいのか。いつかは良くなると夢を見て、無為に生きて、終わりのないことを知ってしまった。駅に人は居るが、ただ居るだけだ。切れた糸が、地へと頭を垂れるようになってしまった。繋ぐ先が無ければ、繕う人がいなければ、糸は朽ちて消えるだけ。

死にたい、そう考えてしまえば早いものだった。心から生きることに限界を感じた。死を前にして森の中で見る青空は、何処までも澄み渡っていた。祖父が危篤となったあの日は嵐のようだった。空すらも、俺の心を裏切っているようだった。

鬱蒼とした森を歩き続ける。自殺できる場所や道具を見つげるための散策だ。情けない話だが、首を括る縄すら買えなかった。水は飲んでいたが、食べ物はこちらほど食べていない。絶食で死ぬか、転がっている茸や苔を摘まんで毒で死ぬか、どちらにし

ろ苦痛を覚えながら緩慢に死ぬ。苦しんで生き続け、死すらも苦しいとは、こんな愉快なことがあるだろうか。面白すぎて、笑えてしまう。こんなにも笑ったのはいつぶりだ。生きるために笑ったことはないのに、死ぬために笑うとは、こんな可笑しいことがあるだろうか。笑い過ぎて、嘔吐く。胃液が喉を焼くようだった、独特な酸味が広がり、噎せて涙が出てくる。その場に這い蹲って、嗚咽を漏らす。死ぬのが怖い。誰にも看取られず、惜しまれず、知られずに死ぬだなんて、怖くて堪らない。苦勞とはなんだった、頑張った末がこれでは何もかもが無駄でしかなかった。

それでも死にたいって思ってしまったんだから、どうしようもないじゃないか。

口の中に広がる酸味を唾液で吐き捨てながら歩いていると、落下するのに丁度いい崖を見つけた。現世からの飛び込み台だ。頑張った俺への最初で最後のご褒美だろうか。頭から落ちることができたのならば、今のように考えることすらも感じることもすらも忘れられるだろう。同時に誰からも忘れられることを意味しているが。

崖に近づくと、地面に血が滴っていることに気づいた。まだ乾いていないようだった。俺の前任者でもいるのだろうか。すごい！ 君も自殺するフレンドなんだね！俺もセルフイー（自殺の意味）するよ！と一人ではないことに勇気づけられる。血痕を辿り、崖から飛び降りずに下へと下ってみる。落下したらそれはそれでおいしい。

途中で、崖から落ちるのに血痕があるのはおかしいと思に至りながら。

崖の下にはちよつとした洞窟があつた。薄暗い洞窟の奥は、少しだけ光が漏れていて。もしかすると怪我しているだけで、ここに避難しているのかもしれない。そんな場所に俺が行つていいのだろうかかと悩むが、一人は怖い。意を決して向かつてみれば、弱弱しく燃える鳥が眠っていた。不死鳥だとか、火の鳥というやつだろうか。不死鳥だつたら怪我してもおかしい……いや死なないだけだからおかしくないのだろうか。存在するとは思わなかつた。

俺は自らの草臥れた衣服を千切り、眠っている火の鳥の傷に縛り付けて血が止まる様にする。そして、外へ出て水場を探した。運よく小川を見つけたので、服を湿らせる。それを火の鳥へと飲ませるため、往復する。怖さを誤魔化すための言い訳だつた。すぐに死ぬべきなのに、逃げてばかりで情けない。

何度往復しただろうか。十度ほど昼夜を越えた記憶がある。不注意だつた。崖上になにかの実を見つけて取りに行つて、掴んで気が緩んだところで足を滑らせ、強かに全身を叩きつけられた。頭痛がする……は、吐き気もだ……。骨が飛び出て裂けた部位や口から血をまき散らしながら這いずる。あまりに苦しい。衝撃で目が潰れて視界も狭い。最後まで俺はこうなる運命か。呻きながらも失敗した人体錬成のような姿のまま、洞窟へと向かう。先人がいれば孤独に死ぬ恐怖も薄れるかもしれない。俺よりは軽症だが、

怪我をしている火の鳥がいるのだ。折れた腕や歯では中々難しい作業だったが実を漬した。岩にひっかけ引きずれば何とか切り離せた。血が止まらないが、どうせ死ぬので安いものだ。

思えば俺は早熟だった。何でもできた。同時に欲しい物は何も手に入らなかった。何が欲しかったかわからない。こんな身体をしていれば化け物だと両親だつて蒸発するのは当然だった。潰れても動き回るのだからとんだ生き様だ。

いや、最初は手がかからないからと喜ばれた気がする。そのあと、俺がなんでも出来ることに悩んでいた。何もできなければよかったのか。俺はどうしたら良かった。

潰した実を与え、水を取りに行き、また少し実を与える。途中から幻聴が聞こえ始めたのは限界が近かったからかもしれない。優しい女性の声が何度も「辞めなさい」と静止してきた。それを無視したのは俺の意地だった。価値が欲しかった。意味が欲しかった。だがもう終わりだった。

火の鳥の傍へと戻って、意識が朦朧としてきた。酷い疲れを感じた。生きるのが難すぎた。やつとだ。やつと俺は全てを捨てられる。

羽根を大きく広げた火の鳥を見て、僅かにでも俺が生きた意味はあったのだと思いたい。

ああ……あたたかい……。

夢を見た。

美しい火の鳥に連れられて、見たこともない空を飛ぶ夢だった。

そこは考えられないほどに発達した世界だ、ロボットと人が仲良く暮らす科学都市だった。

— 2

自分の成長を隠して生きてきた。恥ずかしいことだが、俺にはできないことなんて無いのではないかと思ひ込むほどに何でもできた。だから隠した。漠然とだが、何もかもが出来るのだと誇ると、両親に怖がられる気がしたからだ。まあ、それも無意味だった。俺を置いて、両親は居なくなった。事故じゃない。不仲が続いて、俺を忘れるように二人は消えた。突然居なくなった。

必死に隠した意味が無かったことが、頑張ることが失敗した事実が、何もかもが怖くなって、暗い部屋に蹲っていた。俺は悪くない。頑張ったんだ。隠すことを頑張つて、あまりに成長しないと見放されて、何かの障害だと思われて、両親は喧嘩して、それだけだ。

暗闇の中で震えていても空腹を感じる。でも何も食べない、飲まない。懐かしい気がするし、これを望んでいる気がする。この先にはきつと何も無い、失敗した何かを取り戻したかった。違う。全てを台無しにしたかった。逃げたかった。

それもすぐに終わりを告げた。

真つ暗な部屋の隅で突然、火に包まれている鳥が羽ばたいたのを見た。そこから一気に家が燃えて、俺は助け出された。不思議と、煙の吸い込み過ぎで気絶していた俺だけは燃えなかった。精巧な飾り物にも見える鳥の羽根を一枚だけ握りながら。

火事の後には流れるように色々と決まっていた。大人たちは俺の両親が居なくなつたことを知ると、すぐさま親戚を呼び出して話を付けた。

俺を引き取るようになったのは、気難しそうな男だった。青年とも呼べる年頃だった。彼は俺の叔父だという話だった。

叔父は人間と接するのがどうも苦手な様子だった。とはいえ、子供と接することは、大人にとつて難しいとも聞いていた。身の回りのことをやれば、叔父は恐る恐るといった様子で俺の頭を撫でるだけだった。両親が居なくなつた話を、とても下手ながらもオブラートに包んで俺に説明し、同じように頭を撫でるだけだった。俺が転ぶと急いで駆け寄つてきて、優しく起こして、頭を撫でた。あまり言葉を使わない人だった。

この家で暮らすようになってから、一人で過ごすことが多かった。寂しいとは思わなかった。ロボットに溢れた叔父の家は、宝の山にすら見えた。本を探せばロボットに対するあらゆる知識を得られるのではないかと錯覚させるほどに、種類と質が豊富だった。工具だつて見たことも使い方もわからないような物だつてあつた。俺の世話役のロボットだつて、流暢に会話してくれる、知りたいことを教えてくれる。

時々ではあるけれど、叔父は俺に色々と聞いてくる。好きな食べ物、だとか。ロボットは好きか、だとか。グラタンが好きで、ロボットが好き。伏し目がちに答えると頭を撫でられた。慣れてきたころに、外に出たいと思わないのか、だとか。友達が欲しいのか、だとか。そういうことを聞かれた。俺は頭を横に振つて答えた、人が怖い。救助に来た人たちも、話し合いに来た人たちも、叔父のことだつて怖かった。俺のことだとわかつていても、いや、俺のことだから怖かった。叔父は俺の様子を見て、静かに考えるだけだつた。

言葉少ない俺のために、叔父がロボットを作つてくれた。会話の練習用だろうか、それともコミュニケーション能力を発達させるためだろうか。どちらでもよかつた。与えられたのはベアちゃんというぬいぐるみの姿をしたロボだつた。脳波と会話パターンを読み取り、相手が望む言葉をかけてくれるという。素晴らしいロボットだと思う。俺と会話しなくなる点以外は。

それから叔父は様々なロボットを作ってくれた。同時に、俺にロボットの作り方も教えてくれた。ロボットに関するあらゆる全てを教えようとしてくれた。難しかったが、それでも付いて行つた。

ロボットの知識の基礎範囲、とでも言えばいいのか。それらを俺が覚え終わったが、叔父へと見せるロボットは手を抜いていた。叔父は困った顔で俺に「周りに怯えて態と隠す必要はない、それは素晴らしい才能だ」と褒めてくれた。不安だったが、俺も唯一の肉親となった叔父の言葉に答えたかった。そして、叔父に協力してもらいながらブラウ1589というロボットが完成した。詳しくはわからなかったが『心』を持つロボットの先駆けだという。

ブラウ1589は様々なことを俺に醸した。知ること、遊ぶこと、そして喋ることだ。人が怖くないのだと何とか受け入れたのは彼のお蔭だった。

ブラウ1589はまるで人間のようだった、それしか感想が浮かばなかった。いや、もう一つある。彼はとても素晴らしいという感想が。

学校に通うことを勧められ、渋々ながらも同意した。学校というのは常につまらない時間だった。手を抜いても、本気を出しても、妬まれた。ブラウ1589がいれば気にならなかった。ロボットが居れば、人間などいらなないのかもしれないと思うほどになっていた。あまりにもつまらなすぎた。満点のテストを当然のように持つて帰ると、叔父

は変わらず頭を撫でてくれた。それだけは学校に通う価値があったかもしれない。

そんな状況が変わったのは飛び級で大学へと進学した時だった。ロボット工学のある大学で、ブラウ1589も共に通えるようになった。そこで出会った間久部緑郎という男と何故だか気が合った。経済学部に通う彼は自身を魅力的な人物に見せる技術に長けていたが、気心が知れると黒い人間性も見せる様になっていた。俺は彼に、はつきりとはわからないが奇妙な縁を感じていた。間久部が大学を卒業するまで、俺とブラウ1589、そして間久部はずっと一緒に行動していた。勉強して、研究して、遊びほうけた。世界一速い紙飛行機を作るためにジェットエンジンを組んだりと子供のよう馬鹿をやった、俺は自由だった。これほどの自由は初めてだった気がする。楽しかった。学生生活だと断言できた。壊れたロボットを作り直して、走らせて、それだけでも楽しかった。ブラウ1589が閘口ロボットバトルに参加したいと主張して、その装備を作った。大会を荒らしたのも楽しかった。ただ、ロボットが壊れるのはどうにも気分が悪くて、修理ばかりしていたこともあったけれど。間久部もブラウ1589も呆れていたが、それも俺らしいと笑っていた。俺も笑っていた。

間久部が大学を卒業し海外へと飛び立つのを見送った、まるで明日にでもまた会うように気軽に別れだった。前日まで騒ぎ続け、間久部がいなくなつて名残惜しかったが、それも俺たちらしいと素直に思えた。遠いが、本当に会おうと思えばすぐにでも会える

のだから。

そのあと俺は院へ入ることを決めた。少し遊ぶことや研究に没頭しすぎて帰るのも少なくなっていたので家に久しぶりに帰ると、叔父が結婚するという話だ。結婚自体はもう少し経ってかららしいのだが、婚約はしたのだとか。ちよつと間を空けただけで叔父が結婚できたというのだ、この事実の世界が逆回りするかもしれない。とはいえ嬉しくないわけもない。心から祝うことにする。夜には叔父の奥さんとなる人も交えて食事した。穏やかで優しそうな人だった。人嫌いの叔父と結婚するのだから、とんでもなく包容力が高いのかもしれない。グラタンを上手に作れる人だ、きつと良い人に違いない。

それから数か月後、身内だけの結婚式を挙げた叔父夫婦を祝福する。叔父の同僚である科学省の人たちと話せたのはとてもいい機会だった。世界でも有数の技術と知識を持つ科学省に、惹かれないわけがない。

同時に、街中から海の近くへと引越した。潮の音が優しい、見晴らしのいい場所だった。

俺自身も順調に博士へと過程を進め、いくつかの論文や研究成果、そして『電光人間』と呼ばれる不可視のロボットの理論で博士号を取得した。素材やロボット、思考についてにも触れる浅く、奇妙な博士論文になったが、多岐に亘る技術の複雑さと面白さ、未

来へ思いを馳せる余地を含んでいるので良しとして欲しい。

叔父に誘われ、科学省に勤めることとなった。最高峰の技術と頭脳が集まるそこは興味深い世界だった。そして、そんな世界でも叔父は特に優れていた。その背を追うように俺は必死になって学び続けた。我武者羅ながらもやり甲斐のある日々の中、叔父夫婦が子供を授かった。不思議な気分だった。人は嫌いだったのに、人が増えることを素晴らしいと感じることが。

俺たちに見守られながら、飛雄は生まれた。世界でも有数の科学都市であるメトロシティの一角で、確かに祝福されながら。

どうにも俺は叔父に似ていたらしい。飛雄の相手をするのに困惑しない日は無い、それが嫌かと問われればそんなことは決してないのだと断言できるほどだが。間久部にその話をすると言った反応が返ってきたが、子供を愛さない親はいないと言いつつ。そう言い聞かせないと、思い出しそうだったから。

ブラウ1589の伸びる腕に揺られ、眠そうな飛雄を撫でる。あたたかい。それだけで俺は十分だと感じていた。

叔父や研究チームの人たちと意見を交わしながら、必死に仕事を済ませ、時間があればブラウ1589と一緒に飛雄の相手をする。休みの日には外へと出かけ、キャンプで水遊びしたり、テーマパークへ行ったりした。出不精だった俺はさてどこに消えたのだ

ろうか。

嘘のように順風満帆だった。

世界のどこかしらで戦争が行われている、という表現はあまりに他人事すぎるだろうか。それでも平和な国で平穩を享受していた身からすれば、どんな争いも他人事ではないのだが。

中央アジアに位置するペルシア王国がロボット産業の飛躍的發展を背景に、周辺国に侵略戦争を繰り返した。その状況に世界の警察を標榜するトラキア合衆国が「ペルシア王国が大量殺戮ロボットを保有している」と声明を発表した。ペルシア王国は否定するも、トラキア合衆国は調査を強行した。その調査団こそ、俺が参加することとなったボラー調査団だった。日和見する日本が、強国主導の調査団への参加に否を唱えることができなかったという背景も存在しているという話だ。

ブラウ1589と飛雄に会えなくなるのが嫌だったが、叔父を行かせるのは流石に酷だと思ったので仕方なく参加した。見知らぬ人と調査など、まあ俺も嫌だが、叔父よりはまだマシだろう。

その国は、強い日差しと貧しい砂の大地が全てだった。

俺が見たのは地下の大空洞に捨てられた夥しい数のロボットだった。

誰かが何を作ろうとしているのか垣間見て、吐き気がした。

大量殺戮ロボットは無かった、そう報告するしかない。

曖昧なまま始まった戦争に、吐き気がした。

やつぱり俺は人が怖い。

— 3 —

何時かのように俺は怪我している、崖から落ちたあの時のように。懐かしい。いや、そんなはずはない。そんな気持ちを抱くはずがない。俺は大怪我なんてしたことないのだから。でも痛くなかった。それよりもやらなければならぬことがあった。

血に染まったブラウ1589に、ごめんと謝りながら俺は槍を突き刺した。それは彼のために作った槍だった。それが『彼』を壊さず、『彼』たらしめる場所だけを避けて突き刺さる。こうしなければ『彼』は壊された。こうしたことで『彼』は生き続けなければならなくなるだろう。

こんな時でも友と呼んでくれる彼に、あたたかさを感じてしまう。あの崖のときのように。

違う、違う、違う。

俺が居なければ『彼』はもつと『幸せ』だったのかもしれない。『愛』されていたのかもしれない。『心』に意味があったのかもしれない。愛つてなんだ、心つてなんだ、どうして誰もが幸せじゃないんだ。

目覚めると、半透明のカプセルの中だった。生命維持に使われる機器の諸々を手順通り外し、通信ボタンを押す。駆けつけてきた叔父を見て、なんだか奇妙だった。そして懐かしかった。

ただ、穏やかで居られたのはその時だけだった。

目覚めた世界はすべてが一遍していた。過去の何もかもが夢のようだった。いや、文字通り夢と化していた。

叔父がゆっくりと説明してくれたが、今でも嘘だと信じたかった。まだ手が震えていた。痙攣していた胃も落ち着いていた。

反ロボット主義者のテロで俺は重症を負い、そしてブラウ1589は世界で初めて人を殺したロボットとして、隔離・幽閉されていた。そして、ブラウ1589と二度と会えないことに泣き喚いて飛び出した飛雄は交通事故で亡くなったという。心労が祟って叔母もまた……。

こんなにも色々あったのに、俺は寝たきりだったという事実が恥ずかしかった。意識が戻ったのは二年近く経っていたという。その間、叔父は一人きりだった。一人きりにしてしまった。迷惑ばかりかける俺が何故生きているのだろうか。

— 5

「もう一度目を覚まし、声を聞かせてくれ！ 私の息子、飛雄よ！ あの時を取り戻させてくれ！」

叔父の声が、科学省の一室でこだました。メトロシティ中のエネルギーを取り込み、まばゆい光の中でついにロボットが誕生した。俺と叔父の手によって生み出された、世界最高のロボットが。

世界でも有数の科学都市を一望できるその部屋で、祝福されるように。

叔父は仕事を全て放置し、『飛雄』に執心していた。焼き増しのように、過去の出来事をもう一度繰り返し返すように。成長しない『あの子』に『飛雄』を教えるように。

俺もそれに付き合った。なんとか付き合っていた。仕事を片付ける傍らで、『飛雄』を教えた。だが、徐々に足は遠のいた。過ぎせば過ぎすほど、わかってしまう。違いが、『飛雄』ではないという現実が嫌でも理解できてしまう。

違うことに気づいてしまえば終わりだった。

ああ、とんとなくしっくりきた。

飛雄はもう死んだから、『あの子』が『飛雄』になることなんて無い。

死は終わりだ。

ブラウ1589の『代わり』は作らなかった。それでもロボットを作り、直し続けた。それ以外、知らないから。

— 6 —

「天馬博士、いや、叔父さん！ どうして『あの子』を停止させたのですか!？」

乱れた呼吸で肩を大きく揺らしながらも、俺はどうしても問い詰めたかった。二人で作った『飛雄』の代わりが眠る様に、科学省の奥に置かれていることに気づいてから、すぐ駆けつけてきた。

俺の睨みつける視線に動じることなく、叔父は静かに見つめ返してきた。

「……あの子は飛雄ではなかった」

「そんなことわかっています」

半ば叫ぶように、吠える様に言った。俺の冷静な部分が、逃げた自身が叔父を責める

のはお門違いだと囁いていた。

それでも止まりたくなかった。

胸倉を掴んだ俺の頭を、叔父は何でもないことのように撫でた。

何時ものように、変わらずに。

だから、俺も少しだけ気が抜けたのかもしれない。

「そうだな、お前の言いたいこともわかる。その前に食事をしよう。用意してあるから久しぶりに二人で食べるとしよう」

その言葉に頷いていた。

海が一望できるテラスに用意されていた食事を前に、じつと叔父の顔を見る。あまりに静かになりすぎていた。騒がしかった日々が遠い過去のようだ。いや、少し前に目覚めた俺と違って、叔父にとって遠い過去なのかもしれない。

日が沈み始め、海は鮮やかなオレンジ色に染まりつつあった。

「お前はグラタンが好きだったな」

静かに頷く。

「飛雄はそうでもなかった。お前に懐いていたから仲良く食べたがついていたが、それでもグラタンはどうにもならなかったようだ」

叔父は穏やかに喉を鳴らして笑った。

「そうだ、飛雄と俺は少しずつ好みも性格も違っていた。

だから飽きなかった、興味深かった、ずっと一緒に居たかった。

「我々が生み出した『あの子』は、グラタンが好きだった。そこからあの子と飛雄が重ならなくなった。自由な心をあの子には与えたがその結果、成長に伴い私に反抗するようになったのだ。そこに私は進化を見出した。進化したロボットは、種として人間を超えていく可能性を持っている。あの子は、人間とロボットとの懸け橋となる科学の子となるだろう」

疲れたような、静かな言葉だった。

そして俺にはどうでもいい言葉だった。

進化だとか種だとか、そんなものに叔父がこだわっていると信じたくなかった。

「そんな理由であの子を、『飛雄』を二回も殺したんですか……」

「そうだな、だがそれは建前も含んでいた。あの時、私は父になれないと悟った。反抗したあの子に恐怖した私では、決して」

悲痛な言葉だった。

全てを捨ててでも取り戻そうとした居場所を放棄する決心は、どれほどのモノだったか。

それを決ることしかできない俺は、恥知らずでしかないに違いない。

「トビオは勉強が嫌いだったがお前とやら頑張っていた。一人では本を読まず、ブラウ1589となら楽しんでた。お前と二人で、あいつの料理を好んで食べた。だが、あの子は違った、一人で何でもしてしまった」

叔父の視線は沈んでゆく夕日に向いているが、実際は過去に思いを馳せているのか。

「私があの子に、私を好きかと聞いた。すると大好きだとすぐに返ってきた」
だが、と囁いた。

叔父の声は小さくなっていく。

目頭が熱かった、なんでもないはずなのに。

叔父の言葉が心の空虚さを思い出させる。

「私はいつもあの子を叱りつけていた。そんな私を、飛雄はきつと……大嫌いだったと思う……」

そんなことはないと言言できる、はずだった。

だが、どうだ。

俺はわからなくなってしまった。

いいないほうがよかった俺が、そんなことを言ってしまった。

もつと叔父を傷つけてしまわないだろうか。

胸を張って愛していたと言えはいいのに、口を噤んでしまう。

愛ってなんだ、心ってなんだ、どうして誰もが幸せじゃないんだ。

涙が出そうだった。

情けなさか、寂しさか、罪悪感か。

胸がごちやごちやしてしまう。

なんで俺は単純じゃないのだろうか。

ロボットだったなら、数値として測れたのなら、言語化や可視化できたのかもしれないのに。

「^{なすな}齋、泣いていいんだ。上手く出来なくてもいい、泣いてごらん。私も悲しいんだ、居なくなってしまうことに。お前に我慢ばかりさせていたことも。そして、お前が生きていてくれたことが何よりも嬉しくて」

嗚咽が漏れる。

違うと言うはずなのに、飛雄はきつと大好きだったと愛していたと伝えるはずなのに、出てこない。

嬉しかった。

俺が生きていて良いのだと言ってももらえたことが。

悲しかった。

何もかもが、俺にはわからなくて、ただ涙が止まらなかつた。

「私は静かに暮らそうと思う。お前はどうしたい？」

「俺はロボットの研究を続けます。知りたいことがあるから」

生きる価値を、心を、知りたかつた。

「つらいぞ。あの子と出会い、仲良くなることもあるだろう。違いをまざまざと見せつけられる。それでもいいのか」

そうだ、つらくて逃げた。

それでも知りたい。

知って、そして最初に叔父に伝えたい。

愛されていることを。

「それでも俺は続けます。自分が生きるために」

「そうか、それもいいだろう」

それきり静かになった。

月光の下、冷えた料理を食べる音と、潮騒だけがどこまでも。

P
R
O
L
O
G
U
E
『
二
人
の
天
馬
』
完

バイオハザード (完)

Thank you for everything,
 please take
 care and don't forget about us.

— 1

俺の名前はジョン・ジョット・ジョーンズだ

愛称はサンダン

サンダンって呼べよ

さんさんさんさんさんさんさんさんさんさん

だっさ

はずかしい

世界が止まって見えるみるみる w w w w w

もう無双よ無敵最強強靱！なんかちげえなあ w w w w

うつひよおおおお w w w w w

そうだろおお w w w w 俺はすげえんだなあジョージ！

今日もがんばるぞい！つてこれはアニメの言葉だったけなああああふひひひ

なんかモエモエ？カートウンの大きなカバンを背負つて武器持った俺は街へと飛び出した!!!

カバンには食べ物とか飲み物とかいろいろあるぜえ w w w w w w w w 準備よすぎ w w w w

ずっと前から飛び出してるけど今日は大いなる旅立ち w w w w w w w w

なんだつてこの腐った街から脱出するからなあ w w w w w w w w

住民がゾンビで腐って腐敗してるから腐った街つてどうよこの表現 w w w w w w w w

生きてる住人も性根が腐ってるから腐敗×腐敗でふyはああはははああ w w w w w w w w

w w w

ああああああつしやあああああいくぞおおおお w w w w w w w w

もうなんか一週間くらい歩き回ってる気がするけど一度も夜が明けないとかゆるさ
れないだろうがあよおおおおおwwww

へいへーい太陽もゾンビが怖くなったのかwwwwww腰抜けチキンがwwwwww

太陽がチキンともうローストチキンでばっちりじゃねーかよなあジョージいい
いいいいqwwww

こうやってマチエツト？ まちえーて？ とかいう武器でぶん殴ればゾンビも肉だ

るおおおおwwww???

呻き声はびようどうおおおQ!!!

生きててもゾンビでもびようどうおおおおお！

悲鳴を挙げてても命乞いをあげても同じ同じwwwwww

いいもんもってんじやーんwwwwww

あはあっははははh

ゾンビも変な舌がだらんだらんなゾンビも一緒いつしよwwwwww

ばきゅーんよ！Q!!!lqqqqq

自慢のマグナムが効かなかつたらでかい刃物で頭をちよつぶqqwwwwww

もしくは俺のポケットモンスターが飛び出すぜえwwwwwwww

へいへいへいへいへいへい

人は城wwww人は生垣wwww人は道具箱wwww

ばきゅーん死んだwwww

はい死んだぞ死んだwwww

生きてても死んでも街を歩けるからラッキーな世界だwwww

手がかゆwwつういwwww

ああwwつわあwwつわわ

あwwwwあwwwwあwwww

— 2

学校でwwww第一生存者wwww発見wwww

大小さまさまなゾンビ砕くとか俺つよすぎwwww

おんんあwwww

あwwww男かもしれないwwww

子供だからなwwwwわっかんねwwww
wwww—wwwwわっかんねwwww

第五くらいかもしれないけどwwwwww優しくなかつた俺の発見はしらんwwww
 www

助けにきたぞつてwwwwww何襲われてんねーんwwww

隠れていたロツカーが粉碎wwwwwwこつわwwwwこつわwwww

むきむきゾンビwwww

へいへいへーいwwww

鉈でゾンビの頭がち割つて俺参上wwwwww

学校にゾンビいすぎwwww

怯えていた子供を助けるとか俺つてばヒーローかよwwww

子供はびつくりしてたみたいだけどヒーローが突然来たらびつくりするよなwwww

www

そういえば知り合いつぼかつたぜwwwwww

ジェーンwwwwジェーンwwww妹のジェーンwwww

わwwwsrwwwれwwwwてwwwtwwww

ジョージwwwwジェーンいたwwwwわらえるwwww

ジョンがきたwwwwwwよwwwwおまえのwwww兄のwwwwジョンwwww

w

ほらほらおほろあほろあ r w w w

兄に任せとけ b w w w w

すげえんだぞ w w w w

なんでもできるからな w w w w

喧嘩だつて強いしかっこいい w w w w

優しいんだ w w w w

いつももてもて w w w w

俺もほこらしい w w w w w w w

日本のお菓子すぎだつてよ w w w w w w

かゆいいかゆいいだれかにみられてえる w w w w w

うほおほ w w w w

ジエーンはやくこい w w w w

ほらほら w w w w

担いでやろうか w w w w

嫌 w w w w 嫌か w w w w しようがないな w w w w

血で汚れてるもん w w w w

それも違うつて w w w w

わがwwwまあまwww

そんなwwwつわけでwww三日くらい歩いてwww生存者の団体www発
見www

まだよるwwwアナグマwww

教会に閉じこもってるwww

俺たちも中に入ったwww

ジエーンはかくまってもらってwwwちよつと外の探索してくるwww

俺たちならwwwできないことはないってそれwwwいつも思ってるからwww

ww

きれるきれるwwwはよhwwwwはよww

粉粉www

雑貨店でwww生存者はつけんwww

いきてるってすばらしいwww

日本人www

お元気ですかwwwげんきげんきwww

よかったですね w w w w

日本語しか話せないから困ってたか w w w w まぬけ w w w w

ジョンならしゃべれる w w w w だってジョンだぞ w w w w じゃーん (笑)

すごいぜじょん w w w w いつれんしゅうしたんだじょん w w w w

英語しゃべろー w w w w おこめくえ w w w w もつとあつくなれよ w w w w

粉 w w w w w

変な箱に入ってる粉 w w w w w

傘マーク謹製 w w w w

ゾンビもおなじつをなじ w w w w w

脳にいいぞ〜 w w q w w w w

やめなさい w w w w つてうるさ w w w w

俺は w w w w 人間をやめるぞ w w w w ジョージ w w w w w !!!

止めるなつて w w w w w

日本の常識はすでに崩れた w w w w w w ひとをうつてもへいぜん w w w w

やめ w w w

さわるな w w w w つて w w w w

とめるなつて

やめろくそが W W W W

やめ

やめ

やめろつて言つてんだろうが
!!!!!!

もうきれきれ W W W W W W あきゆかやうや

かゆかゆあ

あ

ああ

あああ

みるなみるな

ちがう

あああ

ずつとついてくるんだ

しねつてささやかれるんだ

ちがう

ちがgたがg

やめろおれをみるなみるな r

かゆいかゆういかいああああああ

ちがいうがつがががが

おれdふあつてえあ

ちががうg

ころしてないころしてないころしてない

しうんだだだ

ああああ

うたなきやしねねねねね n

あ

あ

あ

ああ〜

あ、ばきゅーんしちやつてた W W W W W W W W

生存者ゼロおお W W W W W W W W

おほいおお W W W W W W W W

夜が W W W W W W W W 明けない W W W W W W W W

もうずっと夜 W W W W W W W W

待たせたな W W W W W W W W ジェーン W W W W W W W W

すごい長い間待たせてごめんな W W W W W W W W W W W W

俺はすごい早く動いてたけど W W W W W W W W W W W W 粉がなかなか落ちてなかつた W W W W W W W W

時計 W W W W W W W W ????

一時間 W W W W W W W W

加速装置使つてたかも W W W W W W W W W W

休憩できたか W

強行軍ですまwwwwないwwwwwwでもじえwwwwんだけはたすけたいwwww
wwはよはよwwwwもうファミリーいないからwwwwww

(^o^)/<核で焼かれるから外いくぞ脱出だくずどもwwwwww

・

・

o

だwwwwれwwwwもwwwwwwこwwwwなwつういいwつういういwwww

アンブレラは危険なんだぜwwwwww

粉とかwwwwwゾンビとかwwwwwwマジやばやばwwww

政府と仲がいいから助けがくるwwwwww?????WWWWWWWW

特殊部隊もきてくれた???WWwwww

粉持つてて使い方を俺に教えたやつらだぞwwww

助けるわけないだろwwww

もういい!wwwwこんなバカしかいないところにいられるかwwww 俺たちは

でていくぞwwww

いつ核がくるかわかんねーしwwww

アメリカつてなんか核を空爆と勘違いしてんなwwww草wwww

日本だったらもつとwwwwたぶんwwww後手後手で全滅だぞwwww無意味ww

www

舌wwwwなつがwwwwつつよwwww

結構死んでるwwww

へいへーいwwww

俺に向かつてきたら死ぬぜwwwwつていうか殺してるぜwwwwジーンを抱えながら飛んだり跳ねたりして倒す俺wwww

つつよwwww

ジョンつつよwwww

ロケットランチャーwwww撃たれたwwwwすたーずwwwwお星様きらきらしてんぞwwwwきみはwwww星をwwwwさがしてるんだねwwww

教会が燃えるwwwwほうらあかるくなつたらうwwww人もしんでるwwww

w死人が歩き出してたはずのゾンビも焼ければしぬwwww

おいのりしとかなないとwwwwわかんねーわつかんねーwwwwジーンにまかせてwwwwあwwwwめんwwwwらーめんwwww??

教会からwwwwww焼け出されたwwwww生存者を引き連れて地下をwwwww目指す
よwwwww

いいからいいからwwwwwジョンに任せてwwwwwwwww
生きてるっていいなwwwww

ふんふんふんふんふうwwwwwおほおほwwwんふんwwwww

自己紹介wwwww俺はジョンだwwwww愛称はサンダンwwwwwジェーンの兄w
wwwwwジョン・ジョット・ジョンズが名前のサンダン活用だなってwwwwwジョー
ジが言ってたwwwww

三段活用wwwww草wwwww

ジェーンが首を横に振ってるwwwww

どうしたwwwwwふふふ怖いかわww

は？

は？

は？

ジョンにはwww見えないwww?

生存者www目がwwwおまえwww目がwww

黒髪w? wwwそれはジョージだなwwwジョージはもういないwww

w

カバンを託したwww

ばきゅーんよwww

ジョンは金髪wwwもちろんジーンもねwww

俺はwww血がついているからなwwwしようがないなwwwそこら辺のस्प

レ|で金にするから待つてろよwwwジーンだけつれてくwww

レ|

俺をジョンと認める???? なら探しに行くのはやめとくwww

そうだwww傷のてあてwww

ジーンは大丈夫かwwwならおっけwww

俺www忘れてたwwwどうでもいいけど直さないと銃うてないからなwww

w

ザツクリ切れてるだけなら糸と針でてきとーに塗って接着剤www漫画で見たw

www大きい怪我は粉wwwハッピーwwwはびはびwww

ぐじゅぐじゅってさいせいwwwwすつごwwwwこつわwwwwやべーやつすぎ
てジェーンにみせれねえwww

教会は盗んでいきましたwwww俺のカバンのスペースですwwww

さあ再開だwwww地下行くぞww

ジェーンに小さなカバンをわたすぞwwww医薬品とか食料品とか飲み水はいつ
てるwwww銃もいちおうwwwwお金もあるぞwwww

一人になつてもがんばればwwww

生存者たちがwwww物品をかき集めてたからなwwww借りてきたwwww燃えた
から返せないけどwwww

返すのめんどくさかったから燃やしてきたwwww

みんな経験するwwww

俺もしたwwww

生きた人間もこわいwwww

追われてwwww齧られてwwww食われてwwwwゾンビwwww
撃つてwwwwすごい人生wwww

ジェーンだけが大事wwwwそれだければいいwwww

お星様ゾンビもきたwwwwランチャー装備やwwwwつつよwwww
つつよwwww

うおおおwwwwって生きてる人たちとジェーンを投げてwwwwここは俺に任せ
ろwwwwwwwwぱりぱりwwwwww

泣いてるジェーンジェーンジェーンジェーンジェーン(笑)

おれはそといけないんだよなああつてそうだろもうだめなんです

よくみてほらほら

粉使つてたからwwwwww

くさつちやつた☆

そとだけじゃないのなかもくさつた

ガンバナイと思っても乱れてやべーですよこいつは

くさつてたのはじょーじ

ジョンはいいやつそれだけはわすれないで欲しいっていつも約束っていう

sssss

あああ

あああああああああ

あああ

ぐしやぼん4—2 (仮)

— 1

白い雪が降っている。

人間の手から離れた世界の雪は何処までも白く澄んでいる。

幻想的な世界へと彩る舞台装置のようだった。

それは幻のように、視界を、行き先を曇らせる。

視界が酷く悪い。

人類の未来に似ているとラリー・フォルクは内心で皮肉る。

「こちらイーグルアイ。全機上がったようだな」

次世代型揚陸艦ウステイオ号の指令コマンドである高性能AI、イーグルアイの声がコックピット内に響く。

風が、雪が、機体表面を撫でる音が、今だけは静まっていた。

「諸君らも幾らかは把握しているだろう。現在、ウステイオ号はシユバルツバース内に突入した直後、航行不能に陥り、早急に修理を要する状況へと転じた。原因は先の異常

フラックス、及び正体不明の知的生命体による干渉であると推測されている。君たちには外部の調査、警戒、そして迎撃を行ってもらおう」

了解の意を返すとコックピットが静まり返った。

機械音声のくせにいい声をしていたな、一番機へと通信する。

落ち着いた笑い声が返ってきた。

飛ぶ前に一番機のパイロットとは言葉を幾つか交わしたが、静かで穏やかな印象を与える男だった。

進化する特殊強化スーツである『デモニカスーツ』とやらの技術を転用された次世代型戦闘機の内部は動力音すら拾わない。

外部の音を、まるで直に耳で聞いているかの如く聞くことが可能だ。

その機能は現在オフにしていたが。

目の前を飛ぶ一番機であるガラム1の様子を知るためだ。

相棒となるのか、ただの一番機で終わるのか。重要なことだった。

「ガラム1、ガラム2は現在の方位を維持し、調査を進めてほしい。ガラム2はガラム1の指示に従うように」

北海道襟裳岬に突如として出現した未知の空間、シユバルツバース。

発生直後は半径一メートルにも満たない奇妙な黒い柱だった。

町興しに利用しようと訪れた公務員や、SNSへのアップロード目的で写真を撮っていた能天気な人間を呆気なく呑み込むほどに、急速に拡大するまで余り時間を必要としなかった。

柱が半球状のドームへと変化しても、国の対応は鈍重だった。

急速に膨れ上がったそれが、高度数千メートルに達するプラズマ雲を纏い、北海道の南を百キロほど分子崩壊させるまで重い腰を上げようとしなかったのだから、どれほど楽観していたのか。

この不明な空間に畏怖していたのか。

そして、どれだけこの空間があまりに早く大きくなったのか。

「最初の印象は……そうだな、筋は良かったな」

男は自身を拾った写真家の女性とやたらに物語を聞かせるように話し始めた。

血みどろの怪しい男を治した奇妙な女性は、代わりに何があったのか少しでも知りた
いと言う。

ならば礼の代わりに話すのも構わなかった。

それは『ピクシー』にとつては、どうでもいい過去の話だつた。どうでも良いと思ひ込もうとして、必死に捨てた残骸だつた。

だが、人間を辞めた今でも強く思ひ出せるのだから、やはり『ラリー・フォルク』にとつては『彼の2番機であつたこと』は忘れることのできない思ひ出なのだろう。

もしかしたら未だに忘れたくない記憶なのかもしれない。

妖精と混ざつて人間としての感情が薄れた今の『ピクシー』にはどうにもわからないことだつた。

— 2 —

東京の中心で、魔王召喚が果たされた。

神に規せられた約束を破り、幾度となく書き換えた末の禁断の遊戯は形となつた。

この瞬間だけは、魔王は神と同等の力を持つていた。

混沌の戦場と化した東京に撒き散らされていたマグネタイトが、神への供物とでも言外に伝えるように集まつていた。

高濃度のマグネタイトが空気中で結晶化したそれは、まるで濃緑の靄だつた。

その中心で望外の喜びに包まれる筈であつた。世界を支配する力を傳かせ、法則すら

もその手にする、確定していた未来だった。

だが、実際はどうだ。

虚無と絶望だけが与えられた結末だった。

愚かな男を甘く蕩かせていた栄光の蜜は、搔つ攫われる形で徒労の毒へと濁り腐つた。

オルドレイク・セルボルトの目の前で、野望が、夢が、露と消えようとしていた。

四十年前、オルドレイク・セルボルトはただの『オルドレイク』だった。

スラムの片隅で泥に塗れて震える愚かで無力な子供だった。

スラムの泥に紛れて立ちんぼをしていた母と、顔も知らない男から生まれた。

母はオルドレイクが物心つく頃に死んだ。

いつものように薬中の男に二束三文で体売って、途中で粗悪な薬が切れたのか気が狂った男に殺された。

スラムにもルールはある。

顔が潰れた母だった肉は、内臓を取り出されて、薄かった体がさらに薄くなつて、最期にはオルドレイクの目の前でドブ川へと捨てられた。

男も同様だった、制裁のため生きたまま内臓を取り出されたのだから、まだ母よりはマシだった。

そう思うしかなかった。

父は頼れない。

どこにいるかもわからないし、顔だつて知らない。

生前の母に尋ねたが何も答えず、オルドレイクを強かに何度も叩くだけだった。

おそらく母を殺した薬中のように、狂つて檻樓屑としてドブの一部になつたのだらう。

それから死んでいるようにオルドレイクは生きていた。

都会とやらから廃棄されたごみの山に登つて、同じように無価値な肉と一緒になつてごみを漁る。

そこでのオルドレイクは、やはり無価値でただ動いて排泄する腐つた肉だった。

ごみ漁りは常に死と隣り合わせだった。

捨てられたごみが合わさつて、奇妙である種の奇跡的な化学反応が起きていた。

山の中や下、時には地下の至る場所で、轟々と青白く燃え続けていた。

触れてしまえば燃え尽きるまで下手くそな死の舞踏を強制される。

有害なガス溜まりの上にある物を退かしてしまえば、苦しみながら死亡するか、運が

良ければ内臓や眼が潰れるだけで済む。

濁った虹色の液体に振られてしまえば黒く爛れ、燃えるような炎症の熱さと腐る痛みに苦しみ悶えながら、やがては溶け落ちる。

飲食物にも毒物が多い。

腐敗しているのなら高級品だ、万が一の奇跡で見つかることもあるという。

オールドレイクにそんな経験はなかった。

中には粗悪なクスリが溶け込んでいる物もあり、数瞬の絶頂の後、永遠に思える地獄とともに死ぬ。

溶けた金属は歯や骨を溶かし、内臓を汚す。だからごみ山で見つけた物はドブに紛れた鼠で試し、草や木の根を齧り、時には酔っ払いの吐しゃ物で飢えを凌いだ。

母が体を売ったお金で、貧しくてもひもじくても何かを胃に物を詰めることができた頃よりも遥かに貧しくみすぼらしい。

雨露から体を守ることすらも難しかった。

同じように住み着いているチンピラに遊び半分で指や歯を折られることも珍しくなかつた。

血の混じった吐瀉物に沈むオールドレイクは、鈍る思考で世界を呪いながら、その世界にしがみ付いて生きていた。

どこまでも無様で、哀れで、無価値だった。

その日、オルドレイクは死に瀕していた。

食べ物が悪かったのか。

チンピラに絡まれた傷が悪かったのか。

オルドレイクには原因などわからないことだが、酷い高熱がその幼い体を蝕んでいた。

その結果、ほとんど死に体となったオルドレイクは、ドブ川へと捨てられた。

誰も治さない、邪魔だから捨てる。

霞む視界は反吐が出そうなほどに最悪だった。

どこも汚れている。

汚れきっている。

その汚れが自身をこのようにしたのだ、激痛を憎しみによって抑え込んでいた。

誰でも良かった、どうしても殺したかった。

自分だけがなぜ。

誰でもは間違いだと気づく。

全員だ。

全員を殺したかった。

その殺意が運命を捻じ曲げたのか、その時煮詰められた悪意はオルドレイクに微笑んだ。

「そういう腐った瞳と魂、嫌いじゃないよ。ああ、すばらしい。なんてすばらしいんだ。これだから人間は大好きさ。だから種をまき続けたくなる」

オルドレイクを奇妙な動物が見つめていた。

ドブに生息するドブネズミよりもずっと大きい白い動物だった。

スラムにいる動物など草臥れて痩せ細った犬や猫がせいぜいで、そいつらだって食われることが多い。

だから、これほどまでに綺麗な動物がいることが不思議で、そして心惹かれるほどに神秘的だった。

「オルドレイク、いずれオルドレイク・セルボルトとなる少年よ。世界を支配したくはないかな？ ボクならできる。いや、キミの力なら高望みさえしなければ魔王を呼ぶことさえ可能さ」

汚れた水に半ば沈んでいるオルドレイクを、宙に浮かびながら小動物は見つめていた。

「魔王の力は強大、世界は君の望んだように動き続ける。そんな未来だつてあるんだよ」赤い瞳が、薄汚れたドブ川の一角で死にかけている少年を見つめながら、爛々と輝いていた。

— 3

視界は霧がかかったように白い。

これは夢だ、ゴトウには漠然と理解できた。

キィキィと錆びた金属がこすり合わさった音が近づく。

警戒する必要はないと訴える自信を感じながら、体は自然と身構える。

左手には刀を握っている、それは実によく手に馴染む。

霧の奥から車いすに身を預けている老いた紳士然とした男が現れた。

記憶にはそのような男の姿など該当しない、だが何故か懐古と悲哀の念がゴトウに去来した。

老いた男は何かを告げるように口を動かすが、無音のままだった。

そうして、寂しそうに去ってゆく。

ゴトウは待つてくれと叫ぶも声にはならない。

キィキィと錆びた音が遠ざかり、白かった世界が霞んで……。

「話したいことがあったんだ！ 後生だ、待ってくれ……！」

はっと目が覚めた。

自分の声で目覚めたようだった。

そこは日が十分に登り切っていない薄暗い部屋の中だった。

見慣れた天井しか見えてこない。

全身が冷や汗で濡れていた。

何か夢を見ていた気がするが、何も思い出せない。

しかし、胸中に芽生えた罪悪感と無力感は消えそうになかった。

気分が晴れず、眠れそうにない。

仕方がないと思い、ゴトウは寢床から起き上がろうとする。

音は立てない。

まだ活動するには早すぎる時間だ。

ふと違和感を覚えた。

何かが布団に引っかかっていた。

「悪い夢だったのか……？」

警戒しながら引き出した左手は、見慣れぬ刀を握っていた。

ブラック鎮守府の朝は早い（途中）

私は今、船の上にいる。

一昔前に溢れるほどにあつた戦準船（戦時標準船）ではない、最新の軍用船舶だ。今となつては戦準船の評価は散々なものだが、私としては常に磨かれ続けた技術と惜しめない努力の結晶を過小評価することほど愚かなことはないと思つてゐる。この軍用船舶の格段に向上した利便性の裏では、戦準船で培つた知識が礎となつてゐるのだから。とはいへ、物資の運搬のみを重視して、快適性を欠いた船のほうが良いとは口が裂けても言えないのだが。それでもあの何も無かつた無知で無力な私たちを守つてくれた彼女たちの活躍を無かつたことにしたいとも言えない。豊かになつて得た癖に不満を抱くのだから人間とは難儀な物である。

補給物資や補充人員、様々な貨物（私や増員の艦娘かんむすも含む）などを乗せて、凧いだ海を突き進む船旅は一昔前が嘘かのごとく実に快適だつた。船が水面を割る様に飛沫を上げた後には、生み出された大きな白波が尾のように続いてゐた。白波は緩やかな波を飲み込み、やがては視界の遠くで消えてゆくのだろう。

白波や飛沫が届かない距離にいる護衛の艦娘たちは、私が乗る船を囲むような陣形で水上を走っている。船に乗る際に、私を最も驚かせたのはこの艦娘たちだった。船の発展具合にも十分に驚いたのだが、護衛を担当するという艦娘の豊富な種類と人数を聞いた時には平静を保つことは無理だった。戦艦、空母、軽空母、雷巡、駆逐、そして水中には潜水艦がいるという話で、敵を選ばず柔軟に対応できる。とんだ大盤振る舞いだと度肝を抜かれた私は、ちょうど通りかかった船員に、食ってかかるかの如く一体どんな重要な貨物が乗っているのだと尋ねたものだ。ともすれば答えは呆気ないもので、これが平時の護衛だというのだから、やはり魂消てしまった。実は重要な貨物が載せてあり、秘匿しているという可能性も頭を過ぎったが、実はやんごとなき身分の方でも乗っているのかとも勘ぐった。実際、それならば取材の許可は下りなかつただろう。時代は変わったのか、波に揺れに揺られた乗り心地は決して良いとは言いがたく暗い戦艦の詰り込まれて護衛の艦娘が一人か二人といった大よそ安全とは言いがたい船旅は、船員の態度から文字通り藻屑と消えたことが読み取れた。

私が一人、多くて二人の傷ついた艦娘に護衛して貰い、情けなさや恐怖に震えながら海を渡るあの頃は何処にも無いのだろう。彼女たちが休憩するために船上に上がるたび、男たちはこぞって心配しながらも歓迎したものだ。船旅に女は凶事をなんとやらと言いが、彼女たちは自分たちが船だと言い、私たちにとって守り神だった。古来より女

神を船首に祀る文化だつてある。女神なら何の問題も無い。やれ体に大事ないか、やれもつと休むように、などとむき苦しい男が女々しい言葉で心配するのだから、彼女たちはいつだつて苦笑いを浮かべていた。空腹を誤魔化しながら男たち自分の分の糧食や暖かい汁ものを、彼女たちがひもじい思いをしないようにと振舞っていた。貧しく、苦しかった。考えられないほどに発展し、平和になつた今もあれをやれというのは老碌した老害の意見だろうし、そうして欲しいとは思わない。ただ、そう、忘れたくない記憶なのだ。私はあれが好きだつたのかもしれない。何もかも失つて、それでも彼女たちの前では必死に明るく疲れを癒してもらおうと試行錯誤する不器用な我々と、それに気づきながらも知らない振りをして僅かばかりの歓待を受けてくれた彼女たちとの、鈍色の空の下での思い出を。

船上から艦娘を値踏みするように眺め、目を引く一人に狙いを定めた。ああいや、一隻と言わなければいけなかつたか。私の向けたカメラに気づいた彼女は口元に笑みを浮かべていた。美しい長い黒髪、凜とした雰囲気、戦艦『赤城』だ。傷を負っているのか、額や腕に包帯が巻かれている。怪我をしているのは彼女だけではない、護衛している艦娘(潜水艦は見えないので除くが)全員が何処かしらに傷を負っている。重い怪我ではないが、無視できるほどでもない。港では怪我に絆されたのか、他の元気な艦娘と比べても一目でわかるほどに手厚く持て成されていたのを思い出した。人型でありな

がら軍用船舶の力を秘める彼女たちを忌避する動きも見られる昨今では珍しい光景だった。同時に、物資や人員に余裕のあると見受けられる今でも怪我、いや、損傷したまま護衛する彼女たちの身辺が少しばかり気になった。

そうして私は、時代の変遷に奇妙な思いを抱きながらも波を掻き分け、進み続ける彼女たちの一瞬をカメラに切り取り続けた。

私が揺られている船の行き先は、本土を遠く離れ、前線近くの島だった。心無い人間には安全で無意味だと囁かれるが、前線近くであるのだから危険であることに違いはない。そんな場所へと取材に向かったのは、艦娘が運用されている姿を見たかったからに他ならない。

二十余年前、異形の敵対艦船群『深海棲艦』が現れ、空は常に黒く、海は赤く濁り、民間人も軍人も平等に沈められた。殆どが人間ほどの体躯ながらも軍用船舶と同等の脅威を持つ『深海棲艦』が、多くの兵器を鉄の塊に変えて使用することは無価値である」と知らしめ、領海が支配された。陸地で生活を営む人々の命を脅かすほどに近づき、それに対する力として艦娘が運用される背景があつたことも今は昔というやつだろうか。

国民から、『提督』や『司令』と呼ばれる特殊技能の才能を持つ人材が徴兵された結果、烈火のごとく前線を押し返した。その結果、鉄と血を基礎とした虚構の平穩が積み上げ

られた。膠着した戦線は『深海棲艦』との間に、仮初の平穩を生み出した。その平穩は甘く、緩やかに留まる毒のようだった。今となつては、虚像だった平和をまるで実像のように語り、盾にして、艦娘の排斥や減員を訴える民間団体も少なくない。絶対的に多いというわけではないが、それでも流される者が年々増えているという。平和だと思ひ込みたい者が多すぎるのか、そう錯覚してしまったのか、そう誘導されているのか。

危機感を覚える識者が、いつそのこと本土を侵略されていればこれほどまでに緩まなかつたのではないかと意見を示した。その反響は大きく、そして振じれ、行く末として識者は不謹慎者としてのレッテルを張られ、見る影もないほどに追い込まれていた。ともあれ、ここ十数年の時を経てそうなつてしまったのは事実だった。

そんな世相の中で、ふと思ひ出したのだ。前線で戦う艦娘たちの内情はどうなつていくのだろうか、と。私は従軍記者として、あの鉄臭く、何処までも暗い海に揺られたことがあり、恥じ入ることだが彼女たちに助けられたことも守られたことも一度や二度では済まされなかつた。興味を抱いてしまつてからは、気持ちに身を任せて突き進んでいった。再三の要求の末、希望が叶つたのはつい先月のことだった。それから慌ただしい日々を送り、軍上層部による有り難い言葉の羅列の末に語られた指示の下、指定された鎮守府の取材が許可され、今やつと船に揺られていたというわけだ。

ヒロアカ1

— 1 —

俺はヒーローを目指した。

その際、触った物を黄金に変える個性を得た。

強い個性を制御するには、強い肉体と精神が必要だ。

ストイックに心と身体を鍛え続け、個性を支配する。

血のにじむような日々だった。

時には戦い続け、時には座禅を組み続け、時には金を生み出し続けた。

初めは走るだけですぐに息切れを起こし、苦しければ諦め、触れても金メッキ程度に

しか変化させることはできなかつた。

だが努力は俺を裏切らない。

気づけばどれだけ動き回っても息切れ一つ起こさず、素手で建物を崩壊させ、常に目標へと走り続ける向上心とどれだけ追い詰められても揺るがない精神力、石ころ程度ならば一瞬で完全な金へと変化させるほどに成長した。

素手で触れると危険なので手袋をつけて生活することとなった。

俺は死ぬまで何気なく人に触れることすらできなくなったが、本望だった。

そして俺は努力を続けながら、十五歳と六か月でヒーローとなった。

触れた物を金に変えるという近接最強の能力だが、同時にそれは人々から恐れられる原因となった。

それでも俺は人々のために戦い続けた。

時にはヴィランを金に変えて殺してしまい、非道だと叩かれ、ヒーロー活動の危機へと陥ったこともあった。

だが俺は頑張って地道に活動を続けて乗り越えた。

徐々にではあるが認められるようになった。

ひたむきに走る俺に感化されたかのように他のヒーローにも認められるようになり、親友と言える相手も出来た。

努力は俺を裏切らず、公私ともに順調だった。

災害などに巻き込まれた際には個性を使うことで乗り越えた。

火山噴火による土石流などを金に変えることでどうにかして乗り越えた。

金を生み出し過ぎることで経済界からバッシングを受けることもあったが、ヒーローとしての真摯な姿を見せることでなんとか乗り越えた。

危険物質が溢れだしたときには躊躇いなく金に変えた。

石油を積んだタンカーが座礁して汚染が広がる際には凄い頑張って金へと変えた。

俺はやがて人々から最も偉大な研究者にして工作員で最高のヒーローだと称賛されるようになった。

俺は見事な活躍によつてノーベル平和賞が贈られた。

だが平穩は続かなかつた。

無茶苦茶つよくて悪い奴が現れたのだ。

俺は戦つた、毎日戦つて戦つて戦つた。

そして俺は倒すことに成功したが、奴は世界を壊す攻撃を最後に放つてきたのだ。

俺はそれに対抗するために全身を金にすることで世界の崩壊を防いだ。

代償はあまりに大きかつた。

俺は二度とヒーローとしての活動ができなくなり、危篤に陥つた。

そして金になつたので死んだ。

人々やヒーローたち、ヴィラン、近所の岩窟王、デスザウラーは泣きじやくりながら、俺の若さ強さと、美しさと強さ、知性、個性、あらゆる面での長所を惜しんだ。

そうして俺が死んだ日は偉大なるヒーローが没した日として祝日となり、兄役であるホームズはヤクチュウのヤームズを兼ねており、ヤクモンマスターとして町に散らばつ

ている白目だったり涎を垂らしていたりするヴィランに大人気とかヴィランそのもののヤクモンを先導し、子供たちの間でブームとなっているチンポコモンと戦いながら涙を流した。

しかし俺は死んでいない。

人々の心に残っているのだ。

俺の活躍を金言として語り継がれることで、俺は永遠となったのだ。

俺は触れずとも金を生み出せるようになったのかもしれない……（END）

~~~~~ここまで母さんの妄想（一息）~~~~~

寝る前に絵本で話してくれた。

どうやら俺の将来像らしい。

最終的に俺は死んでるんですがそれは。

夢でこんな見たら困るなあって。

なんだこれはたまげたなあ、といった感じで両親がときどき使う言葉を浮かべてしまう程度の妄想と絵本を母さんに垂れ流された翌日。

特に夢は見なかった。

とはいえ期待されるのは満更でもないので、とりあえずヒーローを目指すことにして

みた。

流石にミダス王みたいな個性も持っていないければ、心身も一般人なのでトップヒーローとかは無理だけど、普通には活躍できると思う。

ちなみに俺の個性はあまりに強すぎて制御できないのか、コップに注いだ牛乳の水面を揺らすことができる程度の力しか発揮できていない。

感覚としてはもつと出来そうなのだが、これが今は精一杯だ。

強大すぎる個性を抑えるために本能が止めているに違いない（願望）

— 2

「『個性』とは身体能力や才能の延長などと説明している人もいるけれど、それは勘違いを生む説明だと僕は思う。間違いではないが正しいとも言えない、わかりやすくしただけの例ってやつだろうか。物語に出てくる魔法のようなものが一番近いのかもしれないね」

母さんにヒーローを目指すと言つて告げると、いつものほわほわした笑顔をさらに深めて全力で手伝うと言つてくれた。

その前段階として、『個性』について説明してくれるらしい。



母さんの手のひらが不要になったチラシ裏に触れると、後を辿る様に勝手に文字や絵が描かれていく。

赤い文字で「個性」と書かれた下には魔法使いの姿をしたデフォルメされた『俺』が立っていて、無駄なくらいに色彩豊かだった。

「生まれたときから発現していて体表や体内に影響を与えているもの、自分の意志で発動して外部に影響を与えるものがある。『個性』はシンプルでよりわかりやすくより見やすくなった才能の形とも言えるかな」

もつといろいろとあるけれど、と母さんが笑顔で呟きながら魔法使いの絵に触れる。魔法使いの下に可愛らしいドラゴンが現れ、その背に騎乗するような恰好となった。

かと思えば、ドラゴンのすぐに傍にはまた別の『俺』がいて、特撮ヒーローのような恰好に変身していた。

「炎や氷を作ることのできる『個性』は体力だったり、体温だったり代わりに消費されることが多いね。『個性』によって全然違うものが失われるのも興味深いよ」魔法使いが手のひらから火の玉を出しているが、汗を掻いている。

だんだんと汗の量が増え、顔も赤くなっていて、火の玉を放り投げてしまった。ドラゴンが火の玉を食べると、魔法使いが氷を生み出すのは同時だった。

今度は寒いのかぶるぶると震え、そして疲れた表情をしていた。



ドラゴンがお腹を擦って空腹をアピールし始める。

それに気づいた特撮ヒーローが何処かから取り出した巨大なリンゴを持ち上げ、ドラゴンの口へと投げ込む。

リンゴを食べたドラゴンはハートを浮かべながらバリバリと食べていた。

「そうなる何が『個性』を生み出しているのかつてことになるけれど。基本は体力だね。あとは元気な時やお腹いっぱいの方が力を発揮できる。そうなる、最も大きな要因はやる気なんじゃないかなって」

ドラゴンが魔法使いに火を噴きかけ、特撮ヒーローが応援している。

焦げた魔法使いが立ち上がる。

ドラゴンも声援に加わると、それに応えるように魔法使いは炎と氷を放出し始めた。

『『個性』≡『やる気』』と赤字で書き加えられる。

「食べ物エネルギー源の基本だと考えている『個性』を持つているとする。特に糖分がメインだとして。そういう人はブドウ糖だけ齧っていたほうが『個性』を強く発揮できる、と考えられる」

ブドウ糖と書かれた丸い石の絵の上にカロリー、下には重量が刻まれる。

その隣にケーキの絵と、同様にカロリーと重量。

どうやら量は同じらしい。

さらにそれぞれの絵の下には棒人間が歩き始めるがブドウ糖のほうが長い距離を歩  
き続けていた。

棒人間が発火すると、ブドウ糖のほうがより長く燃えていた。

「でも実際はブドウ糖だけを齧るよりも甘いお菓子を食べたほうが強い力を発揮できる  
場合もあるんだ。ただ甘いだけよりも、美味しいほうが体や心が望むから “個性” への  
変換効率が良かったためというのが理由かな」

魔法使いの口へとブドウ糖が放り込まれるが、炎も氷もすぐに弱弱しくなった。

そこへケーキが放り込まれると、より強く、炎と氷が現れた。

ドラゴンと特撮ヒーローの歓声が大きくなる。

そうなると魔法使いも満更でもない表情で炎と氷を大きくした。

疲れているのか肩を上下させて息をしている。

「だから心が一番重要な要素、と言いたいけれど、実は身体も大事だよ。 “個性” を生み  
出しているのは心为中心、そしてそれを支えているのは肉体だからってことだと僕は思  
うよ」

やがて魔法使いが目を回してパタリと倒れてしまう。

手足をバタバタと動かしているが、力が入らないのか震えている。

ドラゴンと特撮ヒーローも困ったように魔法使いを応援しているが、立ち上がること

はできないようだ。

炎と氷は未だに残っている。

「結構頻繁、というほどでも無いけれど。『個性』が強すぎて制御できなくなってしまうこともあるね。才能に対して心や体が弱すぎるとも言えるかな」

魔法使いはやがて動かなくなった。

そして、炎と氷が突然巨大になり、ドラゴンと特撮ヒーローを飲み込んだ。

ドラゴンは氷漬けとなり、特撮ヒーローは火に包まれたままだ。

「器を疎かにして中身が漏れたらどうなるかってことだね。中身が危険でなければいいのだけれど……」

魔法使いの全身が黒く染まり、ゆっくりと立ち上がる。

真っ黒に塗りつぶされた絵から表情は読み取れない。

「危険物なら周囲に害を振りまくようになるかもしれない」

魔法使いが炎と氷に包まれた。

赤字で『ヴィラン出現』の文字が書き込まれた。

「僕が何を言いたいかってことだけどね、『個性』は信じ続ければ応え続けてくれる魔法のような物だってことさ。ヒーローにとつて最初で、そして最期の味方だね。無くても人を助けることはできるけど、あつたほうがずっと良いほどに強い才能だ。『個性』

に関して無意味な努力なんて無いよ、限界もきつと無い。あるのは身体と心が置いて行かれるかもしれないってこと。だからヒーローになりたいなら努力を続けなさい。個性”を信じ、制御できる体を作り、振り回されない心を育て、先に進み続ける努力を。そして、強い力に頼らずにまずは他の手段を探す努力を。暴力だけでは、自分がそれしかないのだと主張するようなものだから”

特撮ヒーローを包んでいた炎柱が球状になり、徐々に消えていく。

最終的に、炎を纏ったヒーローが現れた。

赤字で『ヒーロー出動』の文字が躍るのと、魔法使いだったヴィランと対峙するのは同時だった。

「同時に、ヒーローになることを諦めてもいいことを覚えておいて欲しいんだ。立派で、とても大変な仕事だからね」

空白部分に特撮ヒーローの回想が始まった。

ヒーローを目指して努力を続け、ヒーローとしては未熟なままプロとして認められてから、日々を邁進し、やっとのことで一人前と呼ばれるようになるのは何歳になつてからなのか。

仲の良い魔法使いの姿をしたヒーローとも深く交流するようになり、ヒーロー見習いに教えるようになった。

それがヒーローの全盛期となるのだろう。

そこから年老いていく、しかし繰り返される仕事が簡単になることは少ない。

万全にヒーローを務めていられる『職業の寿命』は短い可能性が高い。

簡略化された『一人のヒーロー』の人生が進んでいく。

そして最後には『ヴィラン』をいつものように倒し、自身も傷だらけになっていた。

しかしそれだけに留まらない。

特撮ヒーローも黒く染まっていく。

「色々なことがあってヒーローを諦めたときは、それまでの努力を捨てる必要はないよ。ただどね、積み重ねていた努力はすぐに崩し、継続していた努力も止めなさい。力に拘ることや理想にしがみ付くこともすぐに辞めなさい。『個性』も、身体能力も、ヒーローを目指していたという心も、どれもとても危険な物だから。目指していた前と諦めた後で、同じように過ごしていると、自分がヒーローやそれに準ずる者で、自身の行いが正しいのだと段々と勘違いしてしまうだろうから。やがて道を逸れたとき、止めてくれた人の言葉も聞こえなくなってしまう、なぜダメなのかもわからなくなってしまう、何のためだったかも忘れてしまう」

氷を砕き、中から可愛らしいドラゴンが現れる。

そして黒く染まった特撮ヒーローに火を噴きかけて丸焦げになったそれを食べて、チ

ラシ裏を飛んでいく。

やがて端へとたどり着くと、消え去ってしまった。

「他人に迷惑をかけるだけの、何者でもない悲しい存在にしかねないよ。誰にも忘れられてひっそりと、もしくは人に嫌悪されて消えるしかなくなるんだ」

チラシ裏からは誰もいなくなった。

「さて、以上のことを聞いてもヒーローになりたいかな」

頷き、ほどほどに頑張ってみてダメならすっぱり諦めることを告げる。

それくらいがちょうどいいかもね、と母さんは緩く笑う。

俺も同じように緩く笑う、まだよくわからないしテキストに頑張ればいいのか。

「じゃあヒーローになるための課題を教えていこうかな。順調に乗り切れればヒーローも夢じゃないよ」

水が注がれたガラスコップを持ってきて、俺の目の前に置く。

揺らす練習でもするのだろうか。

「自分の『個性』がどんなものか、僕に教えてくれる？」

水の表面を揺らす『個性』だと伝える。

コップに触れると、僅かに水面が波打つ。



「そうだね、水っぽいものを操る “個性” だと教えているからね。他には？」  
首を横に振る。

もつと色々と操れる感覚はあるが、純粹に力が足りない感覚もある。  
水を揺らすのが精いっぱいだ。

「その感覚は絶対に間違いじゃないよ。僕の考えだとね、液体を操る “個性” なのではないかと」

もつと細かく言うと、と母さんが続ける。

物質を構成している微粒子の乱雑な部分に干渉しているのだという。

流動性や粘度、粘弾性といった微細なパラメータへの干渉も可能かもしれない。

だが、現状では何もかもが足りないので水面を揺らす程度で終わっている。

「そんな可愛い息子のために、こちらを用意しましたー」

上機嫌なのか母さんが歌を口ずさみながら、次々と調味料を置いていく。

俺の前にあつたコップの横にはずらりと様々な調味料と皿が並ぶ。

この世界の物理法則はいまいち変なんだけど、と前置きを呟いてから母さんが楽しげに説明を始めた。

「わかりにくいことを長々と喋つても良くないだろうから、ぱぱつと説明するね。ここに用意したのは様々な種類の液体だよ。水を基本の一として、それぞれが水よりもずつ

と大きい粘度を持つているんだ。何気なく使つてるマヨネーズすら八千倍くらい動か  
しにくいね。でもこれが操作出来てもまだ全然足りないよ」

色々なジュースから始まり、ソース、はちみつ、ケチャップ、ジャム、マヨネーズ、歯  
磨き粉……。

母さんが満面の笑みで「さあ、頑張つて動かせるようにがんばろー」と俺に告げた。

どれだけ力を入れても乳酸菌飲料すら揺らせない。

あまりの難易度に動揺を隠せないんですがそれは。

「世の中には特定の物質を自在に操る “個性” を持つている人もいる。残念ながら君は  
そういつた “個性” には目覚めなかった。しかしそれは弱いだとか無意味な “個性”  
という意味ではないよ。とても万能で素晴らしい “個性” なんだ。強すぎて、適応する  
のに時間が掛かるだけなのさ」

机の上に、奇妙な道具が置かれる。

ガラスで出来た漏斗が金属の支えて宙に設置されていた。

漏斗には黒い物質で満たされていた。

漏斗の下部は切断されていて、その下にはビーカーが置かれている。

そしてその器具はガラスのケースで覆われていた。

「ピッチドロップ実験、だったかな。水の2億倍以上あるピッチとかいうなんか根性あ

るすごい液体だよ。アスファルトとかもこれの仲間だね」

“個性”で試しに干渉してみるが、ぴくりとも動かない。

液体というのは嘘なのではないかと思うほどだ。

そもそもアスファルトが液体という事実にびっくりした。

母さんに視線を向けると楽しそうにニコニコと笑うだけだった。

「下のピーカーに落ちるまで、約八年と半年を必要とするんだけどね。君が毎日“個性”を磨く努力を続けければ、それよりもずっと早く落ちるのは当然だよ。今から計測するよ。さあ、このピッチが滴下されるまでの時間、それが君の努力と結果の形だよ。これは長期的でかつ視覚化する方法だと思ってるほしいな」

最終的にはガラスも操ろうね、と微笑んだ。

うおおおおお、と“個性”を使って液体に干渉する。

半日くらいで気づいたのだが、乾燥するとマジでやべーですよこいつはつてくらい動かない。

水かけて馴染ませると回復する。

途中で水分が飛んでくのを阻止すればええんや、という天啓を得た。

やったぜ。

という感じのこととヒーローを目指すことを父さんに報告する。

いつも通りの鉄面皮でふんふん、と頷いて部屋を出ていった。

すぐに戻つてくると、手にはクマのぬいぐるみや模型の姿。

それらを床に置くと、父さんが口を開いた。

「ヒーローになるには、まず考えることが重要だ」

クマのぬいぐるみが勝手に立ち上がり、時計を見て考えたり、雑誌を読んだりし始める。

やがて両手で鉛筆を掴むと、ノートに色々と書き込み始めた。

どうしたいのか、どうなりたいのか、どうしたらいいのか等々。

「計画を立てたら実行する」

ノートに書いてある通りにクマが活動を始めた。

朝は卵をジョッキに割る動作をした後、腰に手を当てて一気飲みするポーズ。

そして走り回ったり、筋トレしたり。

つまらなそうに勉強を終え、その復習。

頭を傾げながらご飯の材料を選び、料理し、食べるポーズ。

食後に同様なトレーニングをしていると、突然別のぬいぐるみであるライオンが出現

する。

ぼかぼかと音がしそうな戦いを繰り広げ、クマがおそらく負けたのだろう、音を立てて倒れた。

「そして実行したことを評価する」

自身に包帯を巻いた熊のぬいぐるみは、再びノートを書き始める。

トレーニング、食べ物、生活態度、学習内容……。

より洗練されているように思える、ぬいぐるみなのに。

「評価をもとに改善し、再び計画を立て、そして実行する」

今度は卵を飲むことは辞めたらしい。

代わりに色々な食物を選び、食べるポーズ。

そして柔軟をしてからプロテインを飲み、何かと戦うことを目標とした動きを始める。

勉強の際には真剣に打ち込みながら、体は休めているようだった。

再びライオンが現れるが、クマも先ほどとは別人（？）だ、負けるとは思えない。

またもやぼかぼかと音がしそうな戦いを繰り広げ、ライオンが負けたようでも倒れた。

クマが誇らしげに両手を掲げていると、ライオンが立ち上がった。

ライオンの鬣たてがみが逆立っている。

やれやれ、と肩をすくめたクマに再びライオンが襲い掛かった。

先ほどよりも動きの速いライオンに押され、やがてまた負けたようだ。

「『個性』も同様だ。よく考えなければならぬ」

巻いていた包帯を引き千切ったクマが、ノートへとまた書き込む。

周囲の被害、効果範囲、持続時間、制御の仕方……。

ノートを書き終えると、クマの体が二倍ほど膨れ上がった。

たぶん『個性』を使ったのだろう。

身体強化のようなものかもしれない。

そしてライオンとクマが勝ったり負けたりを繰り返し、二匹の努力が繰り返される。

「なぜ考えなければいけないのか、緩慢な努力を続けるのはいけないのか」

ライオンの張った罠に引っかかってボコられるクマ。

「油断する」

クマのカウンターによって一撃で倒れるライオン。

「単調になる」

互いの動きに精彩が欠くようになってきた。

「そして終わりが訪れる。全てはここに帰結する」

クマもライオンもベッドで並んで寝たままだ。

点滴と白い壁が生々しい。

「ヒーローを指して認められるだけで年齢でいうところの十代の大半が終わっている。なんの背景も持たないのならば下積みで二十代が使われる。満身に動けるようになるのは三十代からというヒーローも少なくない」

話を聞いていた母さんがクマとライオンを撫でると、毛が真っ白に染まった。

ぬいぐるみながら立ち上がることに億劫そうだ。

「だから考え続けなさい。何をするのが最適なのか、どんなことが必要か、どういったこととならば時間を使っているのか、と」

母さんが再びぬいぐるみに触れると白から元の茶色へと戻った。

ぬいぐるみも模型も、父さんの手元へふわふわと飛んでいく。

話は終わりのようだ。

「ああ、そうだ。ヒーローを指すのならばこれが続けたらいい」

クマが書き込んでいたノートが目の前で浮遊している。

手に取ると、重量が突然戻ったかのように重さを感じた。

「毎日書きなさい。趣味でもいいし、ラクガキでもいい」

この積み重ねを振り返ったときに後悔しないようにな、と父さんが呟いた。

なぜ動かせないのかを調べ、液体ごとに癖があることを掴む。

それに干渉するために色々とし、失敗し、また試す。

「個性」ばかりに励んでもヒーローにはなれないのはわかっているのです、父さんに聞く。

柔軟を心がけ、体力が付くように走り込む。

そうして成長を阻害しない程度に筋肉が付くよう筋トレをする。

食べ物母さんがどんな効果があるか、何を食べたらいいかを教えてください。

イメージできれば俺の「個性」で効果的に栄養を發揮できるかもしれないとのこと、聞き逃さないようにする。

ノートが増える、漏斗は変化なし。

「頑張ってるみたいだね。そんな可愛い息子のためにー、こんなものを用意しましたー」

コトリ、と音を立ててコーヒーカップが置かれる。

なんとなく落ち着く香りだ。

精神を落ち着かせるために用意した、なんてことは絶対ないだろう。

楽しそうな笑顔を見たら困難な試練が待ち構えているに違いない。



「一度混ぜってしまったコーヒーとミルクを君ならどんな風に分離する？」  
「コーヒーへとミルクと砂糖を投入し、混ぜている。」

まさか……。

「答えは単純！ “個性” で強引に解決させるのさ！ かつこいーねー！」

母さんが言うには制御訓練らしい。

ええ……こんな無理い……。

できるわけがない……。

「できるわけがないって思った？ 四回までなら言ってもいいよ」

聖王が許してくれるらしい。

誰なんですかねそれ。

——4

母さんが嬉しそうに『ジャイロが作ってくれるコーヒー』と名付た液体を前に、必死に“個性”を操る。

まずジャイロって誰なんだっていう。

ピッチドロップの高速化並みに困難だ。

コールタールみたいにドロドロで、砂糖を同量ぶち込まれた液体を分離させるとか。必死に感覚で混ぜている粒子を選び分ける。

気の遠くなる作業だが、機械的に出来る部分を発見した。

ノートに書き込んでいると、父さんに呼ばれたのでとことこと向かう。

「時間は有限ながら体を鍛え、 “個性” を伸ばす。両方やらなくつちやあならないつてのがヒーローを目指すことのつらいところだな」

父さんがそう言いながら俺の手を引いて外へと出る。

どこかに買い物にでも行くのだろうか。

「人の脳は一つの物事を考えるのに適している、というよりも一つの物事を考えることしかできない。基本はシングルタスクだ。鍛えることで幾らかは解消できるだろうが、やはり問題は残る。同時に複数の物事を行うにはどうするのか。無意識的に行えるように、ある種の機械化に近い慣熟が必要だ」

“個性” を使うたびに、液体に集中しすぎている俺を指しているのだろうか。

だつて難しいし、疲れるし。

もつと単純な “個性” だったら、もつと制御も楽だったかもしれない。

うーん、悩ましい。

いや、「個性」は決定しているから何も悩むことはないか。

なんとなく身体能力や才能の延長って感覚もわかるし、俺に合った「個性」ってことだろう。

「この道路はアスファルトだ。要は液体だな」

頷く。

「アスファルトに「個性」を使い続けながら」

頷く。

「あそこにいる巡回中のヒーローに襲い掛かってきなさい」

……!?

「ヒーローになるのならば戦いの経験は重要だ。相手の「個性」との戦いでもある。完全に戦えて、かつ「個性」を使ってくるのならばやはりヒーローと戦うのは欠かせない」

混乱する俺をしり目に、「個性」で浮遊させられる。

手足を動かしてなんとか逃れようとするも、無駄に終わった。

「なに、心配することは全くない。彼らはプロだ、小学生程度なら簡単にいなせるだろう。事情を問い詰められたら、そうだな……。自由研究でヒーローについて調べてい

る、とでも言えば納得するだろう」

許されるかは別だが、と告げて投射される俺。

小学生が吹っ飛んできて驚くヒーロー。

結果は当然のことと言うまでもなく。

帰ってから母さんに訴えると「いいね、それ。一石で何鳥になるんだろう」と笑顔で返された。

— 5

始めたころには3年かかったピッチくんを落とす制御訓練も、今ではビーカーのガラと混ぜたり分離させたりを繰り返せるようになった。

ヒーローに襲い掛かるのも辞めた、少年院はちよつとやべーですよ。

自身の成長がちよつと怖い。

追加される両親の無茶振りにも応えられるようになってきたが、不満そうな母さんを感じる。思い出すと手を抜いたほうがいいのかとも思ったり。

父さんに進路を訊ねられた、実は近所のヒーロー科がある高校を予定している。

東の雄英、西の士傑って感じで有名なところもあるよ、と母さん。

体育祭もそうなのだが、行事があるたびに何らかの情報媒体で“個性”をばらされるのってヒーローとして怖すぎる。

あとなんか偏差値79とか無理だし、在校生や卒業生がほんとにそんなに頭いいのか怪しい。

もしかするとヒーロー活動中心の学生生活で勉強しなかったり、頭を使わなかったりする可能性が高い。

結果として入ると“個性”フルオープンな馬鹿ヒーローになりそうだから、その、考慮すらしていないかなって目を逸らしながら伝える。

「ああ……」って感じの返答だけが居間に響いた。

—— 6

順調……た、たぶん順調に高校生活を過ごした。

仮免試験の際に、雄英高校と土傑高校の学生が居たが、やべーやつらだった。

基礎がガバガバで、知識もガバガバのやべーやつらの集まりだった。

筆記試験で救護や法律なんて知らないと騒いでいて、やべーやつらだった。

実技試験は凄い元気で、“個性”でゴリ押す系でやべーやつらの集合だよ。

トリアージとか応急の知識はないようだったし、ヒーローの模範的な動きも知らない  
ようでやべーやつらだった。

というか何故か必殺技を用意していた、殺意高すぎてやべーやつらだった。  
なんやこいつらこわいなー、一生近寄らんで戸づまりすところ（純粋な恐怖）

仮免試験を記憶から消すと、同級生たちと騒ぎながら切磋琢磨し、災害対策系のヒー  
ローの下でインターンを行ったのは良い思い出。

そのまま順調にプロヒーローとなり、隙間産業ではあるけれども個人で活動を始めら  
れたのもちようどよかった。

何故か「ヴィランと戦って捕縛し、名を上げるぜ！」みたいな好戦的ヒーローばかり  
なので、近所の巡回や災害現場で働く場所が沢山あって多忙ですらある。

タンカー座礁で海水汚染とか豪雨による洪水、干ばつ……etc。

ヒーローとか天職やんけ！

農業系タレントと仕事したのが楽しかったと両親に告げる。

実は農業系じゃないらしい。

農耕機械系とか？

アイドル……？

?????

????????かもロックバンド?????

ま、まあ、実際ヴィランとか嫌なんだよね、俺。

悪が出るってことは基本的に被害者がいるわけじゃん。

しんどい目にあってる人がいると思うと、凄い嫌。

あとヴィラン相手に話し合いとかめんどくさい。

率先してヴィラン対処も別にできるけど、災害による被害のほうが多いので天職優先にしとく。

都会って治安が悪くてヒーロー同士の縄張りとか内ゲバが凄そう（偏見）  
なんやこわいなー、一生近寄らんで戸づまりすところ（地元最高民）

13号から電話があつた。  
同時期にヒーローとなり、同じような活動範囲のため連携をよく取っていて仲の良い

災害訓練用の施設で学生を指導するので、ついでに水害訓練もしたいとか。  
ええやん。

“個性”豊かで将来も有望とか。  
やったぜ。

だから俺に手伝つてほしいとか。

だから？

何が「だから」なんや???

????????????????????????????????????

疑問符の波が俺を襲う!!!!



雄英高校つて時々ヴィランに襲撃されたり、凄い怖いわけですよ。

未来の凄いヒーローの金のタマゴだぞって喧伝してるからね。

そりゃあ、狙うよ。

俺がヴィランだったら通学途中にぶつ殺すね。

だから嫌です。

え、そういうの無い？

マジ？

仲の良いセメント神と無効化の人、物理最強のオールマイトが指導してるって？

完璧な布陣、俺じゃなくても見逃しちゃうね。

こんなところに襲撃してくる馬鹿なヴィランなんておらんやろ（極太フラグ）

指導したらすぐ帰るからね！ べ、別に13号とセメント神のためじゃないんだか

らっ！

災害訓練の結果から言うと、ヴィランに襲撃された。q、

オールマイトを狙っていたらしい、生徒たちとか俺たちヒーローも巻き添えじゃないですかやだー！

ま、まあ、一応ヒーローもチームだから多少はね（寛大）

でもヴィラン側は指導しているヒーローの編成を見てから考慮しなさい、――1145  
14点。

才能ないしやめたらあその仕事<sup>ヴィラン</sup>。

ヒーローとかあるぞ。

というか俺じゃなくても襲撃しないで見逃すでしょ普通。

あ、普通じゃないからヴィランなのか。

ははは……はあ。

## ポケモンレーティング（未完成・導入のみ1500字程度のため閲覧注意）

ポケモントレーナーを志した日から歩み続けた者ならば、いつの日か八個、もしくはそれ以上のバッジを手に入れる日が来るだろう。赤銅色しゃくどういろだったトレーナーカードを更新し続け、黄金色こがねいろへと輝く日が来るだろう。

そして、幼き日に見た輝きを胸に抱いてトレーナーとして生きることを決めたのなら、その先を目指すことになるだろう。

その結果としてポケモンリーグの頂点、ポケモンリーグチャンピオンを夢見るのだろう。

長く険しく、どこまでも残酷なその絶対的な頂点に立てる淡き夢を抱いて。

沢山のポケモンと出会い、ジムバッジを集め、ポケモンリーグへと挑む。人の夢とはなんと儂いのだろうか。そのまま夢を抱き、ポケモンリーグへと挑み、そして破れる日が来る。同じリーグ挑戦者か、四天王か、チャンピオンか。程度の違いでしかない。結果である敗北の泥の味は、極僅かな『本物』を除いて、誰にでも約束されている。

ひたむきに歩き続けた者にほど、無残な未来が待っている。肥大した自信と託された思いが、振り向くことを、戻ることを許さなくなるまで負け続けることが約束されている。

チャンピオンやジムリーダーへと至ることができる者は、大多数のトレーナーの中でもほんの一握りの『天才』でしかない。地方ごとに栄光の舞台に立てる人数は約束されている。チャンピオンを唯一の頂点として、ポケモンリーグ四天王と呼ばれる四人、ジムリーダーが八人と続きそして……。

各地方に溢れかえった夢見がちなトレーナーを賄うには絶対数が足りていない。

尊敬と嫉妬、称賛と憎悪を得るその道程は、困難と表現するにはきつと言葉が足りていない。

受け入れる器の無い嫉妬と憎悪の行き先が、何処にもなかった。

多数の、バッジを集めることを終えたトレーナーは何をしているのか。敗北者であるトレーナーたちは何をするのか。中途半端な才能を持った者の末路とは。

他の生業を持っていたり、ジムトレーナーとなつて修行する者もいる。他の地方を練り歩いて新たな発見を求める者もいる。ポケモンとの交流を繰り返し、才能を見極めようとする者もいる。

だが、それすらも全体から見ればごく一部でしかない。

他の地方を練り歩き、多くのポケモンを育て、トレーナーと戦い続け、その先に敗北があるような、終わったトレーナーはどうすればいい。

先も無く、後も無く、立ち尽くすことすらも終えてしまった者はどうしたらいい。

目指す場所もなく、やることもなくなった者たちは何をしたらいい。

行き詰った中途半端な才能の者たちは何処へ行けばいいのか、何処で朽ち果てればいいのか。

その疑問の答えは至って単純で明快で、残忍だった。

何処にも行けなくなつた厄介な終わつた才能が新しい才能を潰し尽くす前に、ポケモンリーグが出した答えは、当然のようにポケモンバトルだった。

墜ちた鳥に与えた罫、その正体は墓場だった。

終わりを迎えたトレーナーたちだけの決闘場。

限界が見えた技量、伸びることなき才能、行き詰つた努力、発見に動かぬ腐つた精神、肥大した矜持。

終わってしまったトレーナーたちが、さび付いたように鈍く動き続ける患者の祭典だった。

ただのポケモンバトルではない。二か月にわたつて戦い続け、奪い合う、過酷な競技。厳格に決められた息苦しい創造性なき規則に締め付けられた、数値化された地位を奪

い合う、弱肉強食が常のポケモンバトル。

勝つたびに自分より弱いトレーナーがいたことを喜び、負けるたびにポケモンが悪いと憎む、根源的な決闘だ。

黒い泥を煮詰めたような戦いだ。

全ての敗北者たちの心が折れるまで、終わらない。

レーティングバトルと呼ばれる、見えない墓標。

才無き夢追い人に残された、最後の楽園。

負け犬たちの夢の跡。

## 心が影に染まる時（ペルソナ系）

— 1

俺はシャドウ、という存在らしい。

肉体や精神を司る主を本体とすると、その本体が認めたくない自身の顔を司る存在のようだ。

抑圧される本能から生まれる衝動、欲求などの精神エネルギーを処理する部位とでも表現できるかもしれない。

あまりにも抑圧されるようであるならば、本体を排除して表層へと出ようとすることもあるらしい。

こればかりは個々人の差でもあり、俺自身には「本体と成り代わりたい」といった要求は特に存在していなかった。

本体の精神事情によって左右される部分であり、その結果としての俺というシャドウの個性でもある。

人と関わることなく、闇に揺蕩う人格として一生を終えたいのが本音であった。

たぶん本体はポジティブな人格、性質を持つているのかもしれない。

そんな俺であるが、本体を支配しなければいけない時が来た。

来てしまった。

どうもここ最近、苦手な仕事などを強制されていた本体の負荷が大きくなり、自我や超自我、イドといった心の底の環境が劇的に変化していたことで、俺たちも危惧の念を抱いていた。

内部、外部からの圧力によって生じる抑圧が大きければ大きいほどに、シャドウは成長する。

それほど丈夫とはいえない人間の心が限界を迎えることで、均衡を保とうと働いていた無意識に負荷が掛かり続け、やがて均衡が戻らなくなる。

無意識が、均衡状態を忘れてしまう。

そうして、やがては俺というシャドウが表層化してしまうのだ。

そうなるると本体が生き残るには見たくない自身が持つ『別の顔』と戦い、受け入れるか抹消するしかなくなるらしい。

今回はそういった例から漏れ、おそらく最悪のパターンというやつに至っている。

本体の精神が粉々に砕け散ってしまつて、生命活動すら危うくなっている。

ゆつくりと時間をかけて固まつた心が、あまりに強い衝撃で吹き飛んだ結果だ。



ちよつと砕けたり欠けた程度なら集め直したり、心の底の住人が入り込んで馴染むことで修繕も可能なのだが、今回は流石に無理だった。

あまりにも小さく散らばりすぎた物は集めて固めても何も生み出すことはできない。心が死んだのだから、終わりを迎えた。

物質世界と同様、死は終わりだ。

肉体は元氣だが精神が死んだので、このままでは全部死ぬから代替わりとしてやりたくもない俺が支配することに至ったというわけだ。

まあ、そんなわけで肉体の支配を得た俺が最初にした仕事は、涎を垂れ流していた口元を拭き、垂れ流した糞尿を片付けたことだ。

人間は両親に祝福されて生まれる。

シャドウはひっそりと糞尿に塗れながら生まれる。

見たくない物ってカテゴリーだと仲間かもって思うけど、やっぱ汚物と仲間は無理。

さて、本体が精神崩壊した原因をどうしたものだろうか、と一枚のディスクを掲げる。

それは、久しぶりに開けた窓から差し込む陽光に煌めいていた。

俺の誕生日と考えると、これが親となるのだろうか。

せつかくだから見てみよう。

デッキに入れて、再生してみる。

知らない女がアへ顔ダブルピースで、知らない男の上で腰振ってた。q、

とりあえず本体が精神崩壊した件のディスクだが、焼き増ししてネット販売しておいた。

おらっ！ さっさと俺の養育費になるんだよ!!

本体の幼馴染だったらしく、卒業アルバムや修学旅行の写真、プロフィールもセットにしたら更に高値がついた。

まるで誕生日のケーキに刺すローソクのように、淫行ディスクがご丁寧に何枚か届いていたので、一括プレミアム販売なども好評だった。

幼馴染から発掘された埋蔵金による養育費はいくらあっても無駄にならないのだ。まあ幼馴染に埋蔵されてたのは男の精液だけだ。

## — 2 —

幼馴染の家族、あ、幼馴染は死んでたらしいから遺族？ の手配によつて警察が押しかけてきた。

俺の本体は常識的な人間だったのだろう。

つまり、抑圧されていた俺は常識的ではない。

その結果、警察とリアルファイト（ガチ）を繰り広げる事態へと発展した。

俺自身が強いとか、弱いとか、そんなの関係ない。

殴りたいときに殴り、殴られたときに殴られ、うんこしたいときに垂れ流すんだ。

一般人よりは肉体的には強いが、理性的にはカスである。

情動で動く獣なのだ。

そのうち俺のシャドウも生まれるだろうし、心の環境を整えている自我や超自我、イドの連中も出てくるから我慢できるようになるだろうが、今の俺にそういう要素は無い。

今いるのはシャドウの俺である。

ヒヤッハー!!! 我慢できねえぜ!!! って具合に発展するのも仕方ないね。

しかし、俺は人を殺したいって思わないから、本体は常識的ながら殺人も許容する奴だっただけらしい。

そんなやつも幼馴染のアへ顔ビデオレターで精神崩壊。

そもそも常識外のことを抑圧しなければならぬってこと自体がやばくない???  
本体(死亡) ってサイコパスすぎない???  
我慢して我慢できないけど常識的なのは???

そんなわけで警察を撃破して大食いラーメンに挑戦したら、国家の霊的防衛機関とかいうのに所属している男に捕まった。

— 3

俺を捕獲した霊的防衛機関の男は、猫を連れてどっか行ってしまった。

その代わりとして現れたカラスが、無駄に澄んだ綺麗な声で口うるさく俺を罵つてきた。

「大衆の面前で魔力をみだりに振り回すなど世が世なら死罪だぞ？ わかっているのか？ ん？」

「わかるわけねーだろ」

「何故わからない！ 悪いことをやったら悪いに決まっている！」

「何が悪いかなんて知らねーって」

「なんで知らないんだ！ 頭か！ 頭が悪いのか！」

「頭は関係ねーって。しょうがねーだろ、まだ赤ちゃんなんだから」

頭が固そうなカラスに赤ちゃんの俺が相手して説明してやる。

生まれたてだから善悪は知ってるが、ブレーキは無いとかを事細かに説明したら困惑していた、カラスのクセに。

精神崩壊した際の最後の問題作である「ダメ……孕まされたのに、貴方以外のうんこ食べちゃうの……」を再生してさらに細かく説明したら、カラスに止めさせられた。

間男のうんこ食ってんじゃねーよ、という突っ込みをすべきなのか、貴方以外ってことは死んだ本体のうんこを食っていたのか、そもそも手書きでディスクにタイトルが書いてあったから間男が考えたのかとか、そんな感じのことを考えさせられる辺りが問題作の所以なのだろう。

変な層に人気があるので、ちょっと値段を釣り上げてあるプレミアム作品でもある。

「おい！ 再生するのやめろ！ こいつら裸じゃないか！」

「裸じゃなかったらうんこは食わねーって」

「裸でも食べないからな！ いや、違う！ 論点はそこじゃない！」

羽で顔を隠してピヨピヨ騒ぐカラスにうんこの食べ方を教えながら、再生されていた映像を切る。

うんこは裸で食べる物じゃないらしい、為になるなあ。

あと俺はカラスが羽先の隙間からちらちら映像を見ていたのに気付いたが黙っていることにした。

我慢を覚えつつある俺は順調に成長、いや、シャドウから人間へと進化しているのだ。

「なるほど、俺が一生懸命うんこを我慢していることか」

「早くトイレに行きなさい」

今まであった熱を全て取り払ったような、冷え切った声でカラスが言った。

うんこはトイレでする、これ常識な。

垂れ流して掃除するより楽でスマートなたった一つの冴えたやり方だ。

世界は広く、カラスは賢い。

業腹だが認めよう。

今はカラスが賢く、俺の方が知恵が足りない。

だが覚えておけ。

俺は日々成長していることを。

「ちよつとトイレ見てきたんだけどさ。……和式、苦手なんだけど、その、赤ちゃんだから……」

「……ちゃんとできたら褒めてあげるから頑張りなさい」

綺麗に始末して、流して手を洗ったらカラスが褒めてくれた。

カラスいっぱいちゆき。

やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。

— 1

父が家事をして母が仕事へと出かけたことに内心で混乱しながらも何とかやり過ごした。

数日を過ごすうちにわかったのだが、この世界は色々とおかしい。

世界が変わったとしても言えればいいのか。

世界が変わったと感じたのはとてもシンプルな話なのだが、どうも男女の価値観というのだろうか、対応というのだろうか、そういったものが俺の知っているモノと逆転していたのだ。

どうやら服装など基本的なモノや表面的な類は俺の価値観のままであるが、感覚が逆転しているようだった。

性についての犯罪や差別が主に女性を主としたものになっていたのだ。

いくらか運が良いことに、どうやら俺の現状は高校3年生への進級を控えている春休



みが始まったばかり。

突然ナイフ一本で雪山に放置されるかのごとく外に放り出されるような事態にはならず、いくらかの情報を集める時間が得られたのは有り難い。

家事を手伝いながら父の話を聞くに、どうやら我が家の家族構成は父と義母、俺、義妹の四大家族らしい。

再婚したようで、妹は一つ下の女子高生。

父に、妹と仲良くしてはどうだと頻りに聞かれてしまった。

元の俺はあまり交流していなかったようだ。

今の俺も時間に余裕はできていたが、情報収集ばかり行っていたため以前と同じようにほとんど交流は無し。

どうやら義母が心配して気を揉んでいるようで、父も気になっているらしい。

義母が働き手なので家庭の事で気を使わせるには申し訳ないし、テレビや新聞、それにちよつとの会話だけでは限界を感じていた。

ちよつどいいので血が繋がっていない妹を情報源に使うことにした。

異性とのコミュニケーションは得意ではないから失敗するかもしれないが、まあ前向きに交流しようとしていることはわかってくれるはずだ。

得意だったらビッチになるのだろうか、それとも気軽な陽キャか。

休みを利用して義妹と仲良くなるだなんて、なんだか恋愛ゲームみたいだあ、とのんきなことを考えてみたりもした。

家事を積極的に手伝いながら父に話を聞いたり、一緒に買い物に行ったりと様子を探ったり、ニュースから情報や感覚を集めていると、部活に行っていた義妹が帰宅してきた。

料理を作っていたのだと話のタネにしてみるが反応が薄く、鋭い目つきがさらに鋭くなっていた。

父が言うには思春期で恥ずかしがっているのだとか。

はあ、そうですか。

どうにもピンとこない。

だがしかし、父の言葉に義妹はほんのりと顔を赤くさせていた。

恥ずかしいのか怒っているのか、どちらにしろ父の言葉は遠からずといった様子。

もしかすると元の世界の発想を逆転させるのが大事なのではないだろうか。

イメーజ的には男子高生が部活から帰ってきたら一つ上の義姉が料理を用意していた的なシチュエーションだろうか。

女子側はもちろん、男子側も体験したことないからわからん。

義姉側は今体験してみたが肩すかしを食らったので、やはりよくわからない。

義母が帰ってきたので家族で夕食を囲む。

義母におかえりと言葉をかけるのもほどほどで、義妹は俺が作った料理には興味津々っぱい。

部活で動いたのだし、色気より食い気なのかもしれない。

BGMとして点けていたテレビでは家事をしない男子が増加中という特集が流れていた。

内容を見ると、男の数が減ったので家事をしなくても求められるようになっていくので、その姿勢が怠慢かどうかという議論で盛り上がっていた。

それを見ていた父は、うちには関係ないだろうと上機嫌に言っただけで俺を褒めてくれた。

義母も同意してくれるので、ちよつと照れてしまった。

義妹は苦々しい表情を浮かべていたが、料理がまずかったのだろうか。

料理の出来が心配だったが、おかわりもしていたので問題なかったと思う。

翌日、情報収集の触りとしてネットで色々と調べてみることに決めた。

俺の部屋にはパソコンが無かったので朝食を食べながら父と義母に訊ねると、義妹が持っているという。

義母も持っているが、仕事に持って行くので使えないとか。

そのうち共用のパソコンを用意するという話になった辺りで朝食を終える。

義妹は部活に行ってしまったので本人はいなかったが、義母は好きに使っていいと言ってくれたので、言葉通りに義妹のパソコンを有りがたく借りることにした。

義妹の部屋は年頃の女の子らしい可愛らしいものだったが、大人を意識しているのか背伸びした化粧品な衣服やアクセサリーも目に入った。

もつとシルバー巻くとかよ、って言葉を参考にしたのかもしれないが、ケバくなると思うから今のままでいて欲しい。

そういえば化粧品は女性が使うんだな、と思った。

パソコンの置いてある机へと進むと、傍にある本棚の漫画に目を惹かれた。

後で参考にさせてもらおう。

目的であったノート型のパソコンはスリープ状態だった。

どうも掲示板を読んでいる途中だったようで、スリープから起こした画面には『深夜の淑女会』というタイトルが付けられたスレッドが。

淑女っぽい喋り方で日常を語るスレらしい。

愉快な話だったり、家族との日常だったり穏やかなスレだ。

義妹も何か書き込んでいるのか無性に気になってしまい「テスト」とIDを確かめるために書き込む。

遑つて書き込みを見つけたので読んでみると「私には義兄がいるわよ。エロゲみたいなものよ。性格も容姿もマジでナデシコインですよ」と深夜2時くらいに書かれていた。穏やかなスレでマウント取りに行くのは高校生っぽいけど、ちよつと恥ずかしいからやめてほしいとも思う。

それはそれとして、俺がゲームみたいだと思ったように義妹も同じことを考えていたようだ。

いや、俺はエロまでいってないけれど。

テストに反応した人たちに「兄です。空気読めない義妹でごめんなさい」と書き込むと、レスが加速した上で聞いてもいないのにナデシコインの意味を教えてください。

「撫子+ヒロイン+ちんちんしこりたい相手+まんまん+インさせたい相手」などを組み合わせた造語らしい。

ええ……。

一応教えてもらったんだし、とお礼を書くと、出会い目的に連絡先を聞かれたり、裸の写真目当てにねだられたり、ネカマなどを疑われたが個人情報とか怖かったので、手の写真だけアップしておいた。

ついでに淑女会というのを興味本位で調べてみると、どうやら俺の知ってるやきう民やとしあきみたいなものようだ。

折角なので、この世界での価値観を知るために、女性は主にどういった趣味があるのかと質問した結果、遊びでブラギガスを産んだ女性（直諭）がいることを紹介されてしまった。

うーん、どの世界もやはりどこかしらは狂っているんだなあ。

せっかくなのでweb漫画とか小説も漁った。

ほとんど逆転してるだけだったが、それも参考になるので為になったと言えるだろう。

部屋の扉が開く音がしたので振り返ると、義妹の姿が。

パソコンに熱中しすぎていたらしい。

哑然とした義妹に、勝手に使ったことを謝り、あんまりパソコンのやりすぎで寝不足にならないようにと注意して部屋を出ていく。

家事の手伝いもあるが、パソコンを使った気まずさもちよつとあるからだ。

家事を手伝おうとリビングに向かうと、義妹の叫び声が聞こえた。

物静かで三白眼なのに珍しい。

そういうえばパソコンで淑女会やブラギガス（意味深）のスレを開いたまま出てきたのだ。

悪いことしたかなあ。後で謝るべきだろうか。

わからなかったからブリガスを調べてごめんね、と告げると鋭い目つきが涙目になつて曇つてて可愛かつた。

## — 2 —

漫画を読みます、よろしくお願いします。

ということで、義妹の部屋の漫画を読むことにした。

父に許可を取つたのでセーフ。

なお義母は苦い顔をしていたが父に押し切られていた。

理解あるほうが婿に行きやすいというのが父の主張で、義母はそんなに頑張らなくてもいいという様子だった。

さて、本題の漫画だが、バトル、ギャグ、日常、ラブコメ、より取り見取り!!

内容は俺が知っているのと同じだが、ほとんど全部TSしてる感じだ。

バトル漫画とか激戦を繰り広げると上半身裸になつてるのが気になつてしようがなかつた。

胸の大きさは小さいのが多いのは戦いやすいからだろうか。

パソコンで調べたらあんまり大きいと自己投影できなくて人気が出ないとか、そうい

う意見もあるらしい。

エログロ漫画となると、男が犯されてる描写とか出てきて、なんというか、変な感じだった。

犯されてる男のちんちんおつきいです（火の玉ストレート）

あとすぐ射精しててちよつと笑った。

凌辱とか暴力まで入ると片方の金玉を潰したり、ちんこ千切ったりしてた。

ヒユツてなるからやめてくれないかなあ……。

俺の世界で言う百合物とか、あの、その、男同士でお尻を触れ合うなよ!!!

ラブコメはあれ。

もうトラブルが起きてラッキースケベともなると、棒に囲まれてた（比喩表現）

胸に触ったりするじゃん？

あれがビーチフラッグスみたいな感じになってた。

あかん、勢い次第では折れる。

なおフラッグされた男は気持ちよさそうに絶頂して、主人公を孕ませる妄想をしていた。

他にも絶妙に急所を隠すカットインを入れながらも、隠喩的に描写するという超絶技巧を披露していた。



……やっぱ神は常識が異なっても神だったな（思考停止）

アニメとか映画もこんな感じなのだろうか、とパソコンで調べてみる。

安価でまんまん突つ込むスレがあつたので、デスザウラーと書き込んだら踏めた。

俺の下にはハバネロチップスがあつたから良かったよかつた。

評判のアニメを調べると、ガンソードに似た作品では主人公が処女だと叫ぶらしい、

いいね。

あとガンダムはメンヘラ度が増してる上に、誰が一番メンヘラか評価していたが結局乙で落ち着いていた。

おっぱいリロードはこつちだとちんこを勃起させてリロードするらしい、あたまおかしいね。

映画は空を飛んだり、分裂したり、陸上を走ったり、ハリケーンになったりするサメをチェンソーで倒すだけらしい、うーん常識的。

女性が魔法少年に変身して戦ったり、男子高校生たちがプールを舞台に尻で戦ったり、ハンターになるための試練でクイズにわざと間違つて急所を揉んだり。

こんな世界で生きていけるのか俺。

大丈夫か、俺。

先行きに暗雲が立ち込めてきた気がするぞ俺え。

もう義妹ちゃんのパソコンと漫画の確認も終わりにしようかなって操作してたら、パソコン上でゲームを発見。

シンプルにゲームってフォルダに入ってたので、気分転換にやってみる。

フル画面からの「鬼畜姫ランス」の文字。

ん？

ガハハハって言いながら自分のあれをハイパー兵器と呼んで男を犯す超乳主人公。

それってガバガバなのでは……？

俺は訝しんだ。

そしてほこじやかと皇女子宮で孕んでは産む。

お前が孕むのか（困惑）

というか毎週産むのか（混乱）

なんなのだこれは、どうすればいいのだ……。

軽く混乱していると、扉が開く音。

振り向くと、目と目が合う俺と義妹。

目を見開いた義妹が、手に持っていた荷物を床に落としたり。

画面にはまん堕ちさせて喜ぶ主人公。

「……女の子もチン堕ちするのかな」

小粋なジョークで場を和ませるナイス判断を下した俺。  
流れるイベントシーン。

妊娠し、すぐ出産する主人公。

義妹は何故か泣いた。

## 3

リビングのテレビを点けると動物特集をやっていた。

実をいうと俺は動物が好きだ。

毛がもふもふしてるのが大好き。

虫は無理。

足が多いのも、薄い羽根も、グロテスクな胎も苦手だ。

犬が走り回っている姿を口を開けっ放しで見ていると、義妹が入ってきた。

目があつたので、一緒に見ようと誘う。

春休み序盤にパソコンで情報収集して、オブラートに包んだ表現ではあるが何度かページを開いたままにすることで、義妹とちよつとギクシャクしてしまったのだ。

春休みも終わりに近づき、なんとか関係改善が進んでいるはずなので、ここでもう少

し馴染んでおこうと思ったのだ。

場面が移り変わり、仔猫の姿に「ほわああああ……」と呟きながら見ていると義妹を思い出した。

一緒に見るのが嫌だったのか、近くに座った気配はなかった。

食卓に座ったのかなとテレビから視線を外すと、扉の前に立ったままだった。

どうもテレビの前にあるソファの真ん中を俺が陣取っているの、どこに座っているかわからないようだ。

実に思春期っぽい。

ちよつと横にずれてここに座りなよ、とソファを軽く叩く。

ちよこちよここと近づいて、俺からちよつと距離を置いて身を縮めながら座った。

これが俺たちの距離感かあ、と残念に思いながらテレビに視線を戻した。

チベットスナギツネの切ない目に「ほわああああ……」としていると視線を感じた。チラツと見ると義妹が俺を睨んでいた。

いや、彼女は単に目つきが悪いだけなのだから、俺の様子をちよつと横目で伺っただけだろう。

チベットスナギツネからハシビロコウ特集に場面が変わる。

めつちや義妹に似てて笑いが込み上げてきた。

本人と確かめようかとテレビから義妹に視線を移す。

義妹はひどく驚いた様子で、前髪がふわっと浮いていた。

おでこが出ていると、目つきは、ちよつと悪い程度に収まるようだ。

前髪のせいで、三白眼になっているらしい。

それはそれとしてすごい似ていたので、ハシビロコウに似ていると告げる。

義妹はよくわかっていないのか首をかしげるだけだが、それがまた似ていて面白かった。

— 4 —

社会の学習がてら父の買い物に付き合う。

近所のスーパーもいいが、大型デパートへとちよつと遠出した。

通勤通学の時間には後部車両が男性専用になるのだとか。

俺の知っている世界と大きくは変わらないようで、少しの違和感を覚える程度だった。

とはいえ、細々としたそういうものが積み重なると、無視できないストレスに繋がるのだけだ。

思ったよりもナヨナヨとした男性はいないのだが、所々で女々しい面を見てしまうと、逆にそれが気になるというか。

ちよつとした仕草だったり、声色だったり。

ぶりっ子も見かけたが、作ったオカマっぽい印象が強くて、背筋が震えた。

年老いてもあんな感じなのだろうか……あんな感じなのだろうか。

父の買い物が予想以上に長いので、フードコートにて買い食い。

タピオカドリンクとか可愛いカップアイスが流行らしい。

なるほど、世界に馴染むなら華の男子高生を演じなければいけないよな、と理想を思い描く。

常に想像するのは最強の自分……！

マヨネーズとソース、青のりを大量にぶち込んで貰ったたこ焼きを、熱々の舞を踊るかとお節ごともしやもしや。

ぶっちゃけ最強の自分はタピオカとかアイスじゃなかったから仕方ないね。

近くの席に学生の男女が座ったようだ。

聞こえてくる会話からデート中なのかもしれない。

男子の脳内お花畑なマシンガントークが俺にまで届く。

トーク内容を聞いているが、俺が華の男子高生になるのは無理かもしれない。

というか、声が低いのに変に媚びてて聞いているのがしんどい（素直）

たこ焼きが終わったので次はケ○タッキー、手づかみでダイナミックに食らいつく。脂はなんでこんなうまいのか、世界の神秘なんだよなあ。

鳥の丸揚げとか売ってくれないだろうかと考えていると「鳥さんが可愛そうでウチでケンタ食べられない」などと聞こえた。

ケンタ？ 健太？ カニバリズムは俺でも無理、加工される鳥なら食用以外の未来がないし気にせず食べられる、なんてことを考えながら横を見る。

ファーストフードをチビチビと食べている男子高校生と目が合った。

鳥が啄ばむようにちよつと食べてはごつくん（音声あり）、ちよつと食べては音声認識機能を発動させて嚙下するDK（男子高校生）。

……チビチビ食べるのは女々か、介錯しもす、チエスト種子島！

おつと変な妄想が。

デート中なら相手はどんな……どう見ても義妹だった。

ええ……男の趣味わるくない……？

鳥を手際よく解体し、もしかもしやと食らいつく。

軟骨もぼりぼり噛むし、肉だって口を汚しながら食べつくす。

食べ終えたので、手を洗おうと立ち上がる。

義妹はポテトを啜えたまま固まっていた。

しかし、失敗は成功の母。

この社会だと父か？

まあなんであれ、ここで新たな知識を学習できてよかった。

この世界にも趣味の悪い男女がいるって事実だ。

こういった文化的な部分は共通していると気づくと、なんだか安心してしまふ。

人間はいつだってどこだって根本は同じなのかもしれない。

油污れを落としてくれた、流れるひんやりとした水が心地よい。

せつかく気づいたのだからと綺麗になった手を振るも、義妹はポテトを啜えたまま固

まっていた。

固まった妹をなんとか再起動させようと頑張る男子高校生（DK）。

DKってことはドンキーコングの可能性もある。

ウホウホウホホホ、みたいな感じじゃないと会話が伝わらない可能性があるのかもしれない。

れない。

いや、無いな。

食べ終わった骨とか包み紙を捨てようとトレイを持って立ち上がる。

散々揺らされて再起動した義妹に、険しい表情のドンキーが問いかける。



媚びた声は置き去りにされていた。

俺じやなかったら聞き逃しちゃうね。

忙しそうなので挨拶は省略。

邪魔して悪かったね、と告げてクールな俺は爽やかに去るぜ。

特に何かを含んだつもりは無かったのだが、DKは何かを感じ取ったのか、マシンガ

ントークがチエスト種子島トークへと進化した。

進化というか酷い化学反応というか。

「食べ方汚い男はマナーがなっていない」だとか。

手が汚れるだけの俺はセーフだよな……セーフでいいや。

アウトだったらセーフだと感じる友人を作り、将来的にはそんな女性と付き合うので

やはりセーフ。

俺は俺に甘い人とだけ付き合い、俺の好みに合った人と結婚するんだ。

さて、新たな知識を吸収したことで新たな混乱が出現。

細かい差異があるということに気づいた。

もぐもぐごつくくん然り、鳥さんがかわいそう然り、趣味の悪い人間然り。

俺の知っている常識と、知らない知識が合体して、常識ジョウシキマイラマイラと化している可能性だ。

やべーよやべーよ……。

父の買い物はまだ終わらないようなので、店内を見て回ることにする。  
必要な物とかあるかもしれないし。

あ、むしろ部屋に何かあるかわからん。

文房具とか買つといたほうがいいのだろうか。

気づいたらまた元の世界に戻るかもしれないし、限界まで散財しようかな。  
なーんちやつて。

そんなわけで歩き回ったのだが。

何も買わなかった……！

無欲……！

圧倒的無欲……！

無欲というか散財するほど欲しいモノが無かつただけ……！

漫画もゲームもあれすぎる……！

そろそろ買い物が終わるらしいので父と合流……！

圧倒的合流……！

小物を見ていたので俺も流れで付き添う……！

確定で付き添い……！

黄色い髪飾りを発見……！

これは……くちばし……！

買い……圧倒的買い……！

定価品……！

贈り物を割引など……邪道……！

これが心か。

そういえばカイジとかの福本系の漫画も読んだけど、やはり性転換してた。

あと顎がとんがってる。

顎とんがってて少女マンガ感ある。

あと福本モブが福本喪女になってて、絶妙に可愛くないクズなのがおもしろかった

(純粹な感想)

小物も買って満足したので帰宅する。

男性だと荷物は少量でも無料で宅配してもらえるサービスがあつて、そういうところがちよつと面白いと思つた。

まあ、手で持てる分は持つて帰るのだけど。

少し大きめの荷物を両手で抱えて持ち歩くと萌えポイントが高いらしい、パソコンでちよつと見かけたので試してみる。

電車内でチラチラとこちらを伺っている見知らぬ女子学生のグループと目が合う。



あとお盆をひっくり返して大事なところを隠す芸なんだけど、基本的に下しか隠さない。

というか女性は上を隠さない。

隠してくれないと嬉しさがダダ下がりやなあ。

型崩れするからブラジャーはしてららしい。

しかしデスザウラーはデスザウラーのままできてくれただけで百人力。

君は膾にぶち込まれたとしてもいつまでも変わらないでくれよ。

夕食はやっぱり肉、ですかね。

父は見目麗しいさっぱりした物とか謎コラボ料理を作ろうとするので、コントロールするために手伝う。

食べたい物も作りたい。

男子はかわいくてあっさりみたいなの偏見、やめてよね。

味が濃くて脂が乗ってるのだから。

あと可愛く出来あがるとインスタ用写真タイムで冷えたりするので、可愛くないがつり系に誘導するためもある。

写真タイムは休みの朝や平日の昼にやってください（切実）

玄関から物音が聞こえたので、おそらく妹が帰ってきました。

それから足音が小さくなって少し経ち……なんと義妹がリビングにエントリーするも素通りし、ちゃんと台所まで来て律儀な「ただいま」宣言。

これは高得点が期待できますね。

普通は玄関で済まず、良くてリビングに入ってから小声でただいま宣言を終えて自室に向かう若者が多い中、家族へと告げに来るとは。

加点ポイントを重ねることで妹ランクが高まり、俺の兄ランクも高みへと至る可能性が見えてきましたね。

あまりの可愛さに義妹から妹に昇進です。

さて、採点に戻りましょう。

父に貰ったエプロンのまま妹へ「おかえり」宣言で理想の兄妹コンビ確定です。

これは温かみあるアットホームな我が家ですよ。

「夕食はからあげでーす」と菜箸で揚げたてのからあげを見せてドヤ顔を披露し、「ちゃんと手は洗った？」と問う。

これは返答次第では大幅な減点という関門ですが果たして……おーつと!?

どうやら手洗いとうがい、そして部屋着への換装を済ませた模様。

うーん100点!

完璧です！

「うんうん良い子だね」と喜びから高まったテンションのまま爪楊枝で揚げたてのからあげを刺して、妹の口にIN！

あーんも忘れない！

俺も100点！

固まった妹をにこにこ眺めながら、今週の仲良し大家族計画はここまで！

では、理想の家族となつて義母から昇進した母が帰つてきたようなのでみなさんまた来週！

母が帰ってきたし、すぐに準備も終わったので夕食タイムの後に、雑談タイム。

父も見かけたという妹がデートしていた話題へと推移。

価値観の学習中なのであんまりよくわからなかったが、とりあえずかつこいい雰囲気の子だったね、と褒めてみる。

男子高校生があんなにも甘えた声を出してアピールしていたのに「部活の備品を揃えるための買い物で、デートでも無いし、好みでもない。絶対違う。……違います」というガチトーンでの返答が。

妹は残酷。

あ、そうだ（唐突）

今日買った小物を妹にあげる。

恥ずかしがるだろうなと思って髪飾りを買ってみた。

つけてみると本当に顔を真っ赤にして恥ずかしそうなのが面白い。

これが価値観が変わった世界での俺の特権……！

付けてみると灰色がかかった髪と三白眼、黄色の髪飾りでやっぱりハシビロコウに似てて可愛い。

うーん100点！

自分のセンスが恐ろしくなる。

「髪をあげると目つきも可愛くなるのにねー」と手で前髪を上げてデコ出しさせる隙を生じぬ二段構え。

俺の大胆な接触技に、妹は顔を真っ赤にして固まった。

またつまらぬものを凝固させてしまった……。

父がハシビロコウをタブレットで調べ、母と覗き込んで「かわいい……？」と二人で首を傾げていた。

えー？

とつてもかわいいでしょ？



今日は妹も部活が休みのようだ。

どうやら休みは昼まで寝るのが普段の過ごし方らしい。

そして今日はエイプリルフル。

ふふ、理解した！（理解してない）

起きてきた妹に遅くなったが朝の挨拶。

俺が手招きすると、寝起きで思考が鈍っている彼女はふらふらと近くに座るのだ。

唐突に「俺を好きにして良いよ」と両手を開いて薄着でアピール。

妹はやはり固まった。

俺がてめーの時を止めた……！！

再起動を確認。

ぼーっとしていた妹に、エイプリルフルと告げる。

カレンダーを指させば、目を何度も瞬きさせてから理解したようだった。

部屋にあった漫画の真似をしたが、ぶっちゃけ恥ずかしいから無しだなこれは。

妹は顔を真っ赤にしていた。

ちよっとやりすぎたかもねって。

俺の可愛さが無限大かもねって。

ちっ、反省してまーす。

まだ寝ぼけているのか視線を俺と宙の間を行ったり来たりさせて船を漕いでる妹の隣に座り、録画しておいた動物系のテレビを見ることにした。

ハシビロコウ、いいよね……。

俺がちよつとテンション高めに眺めていると、妹が部屋の外へ。

飽きたのかなって思ったが、違つたようだ。

すぐに戻ってきて、この前あげた髪飾りを付けてちよつとドヤ顔を披露してくれた。

やだ、尊い……（世界に思考が引つ張られた）

——6

内心で未知の世界にドキドキしながら妹と高校へ。

思つた以上に問題なく学生生活を送れそうだと判断できたので、朝の緊張は吹っ飛んだ。

噂話を聞いていると妹の同級生が車で轢かれてどうたらかんたら。

ほわあーこっわいなあ。

お昼休みにお弁当を取り出すとですね、俺が二人分持ってたわけですよ。これはつまり……

弁当「俺が二人分になろう」

俺「弁当さん!?!」

弁当「これが俺の能力お前の弁当妹の弁当だ」  
ホワイトベントウブラックベントウ

俺「ほわあーすっごいなあ」

なるほど、緊張しすぎて妹の分も渡さずに持ってきてしまったってことですねお弁当さん!

「妹お! 一緒に弁当食べようぜ! 食べようだぜ! だぜだぜ!」

と、妹の教室へ呐喊。

ざわつく教室、固まる妹、集まる女子生徒、値踏みしてくる男子生徒。

女子生徒に妹との関係を問われたので「義理の妹! おべんと渡し忘れたから届けるついでに一緒に食べようかなって! 喜べ少女、明日も明後日もなんなら来年も手作りのおべんとだ!」と正直に答える。

妹を可愛がっている料理ができる兄的なぶりっ子アピール。

この前見たデートを参考にした。

俺の学習能力と優秀な頭脳のコラボ、見せ付けちゃったかな。

「イケメンの義理の兄とか裏切りか!？」と妹は女子生徒たちに連行されていくので後  
を付いていく。

後を付いて行つてると、口々に褒めてくれるので「えへへ……」と照れながら首裏に  
手を当てる。

恥ずかしいと口や首を触つたりしたくなるじゃん???

そういうわけで、とりあえず女子にちやほやされるのは楽しかった。

サークルの姫とかぶりっ子をやめられないのもわかる気がする。

将来はそういう路線もいいなあ！

いや、やっぱ黒歴史になりそうだからやめとこゝqゝ

## 呪術廻戦（未完）

— 1 —

「テン……ソウ……メツ……テン……ソウ……メツ……テン……ソウ……メツ……」  
そう呟き続けていたのは私の娘、だったはずだ。

休むこと無く、同じことを壊れたように呟くその姿が娘と重ならない。

数時間前までは楽しげに笑みを浮かべていた娘は、今では薄気味悪くにたにたと嗤っていた。

焦点の合わないその瞳が私を捉えることは無く、虚空を追うだけだった。

この嗤う顔が娘の物だと思いついてしまうことが、娘の本当の笑顔がどんな物だったのか忘れてしまうのが、どうしても怖かった。

ただ娘を楽しませようとしてドライブに行っただけなのに、どうしてこうなってしまうたのか、何が悪かったのか、後悔ばかりが薄暗く思考に巡り続けていた。

「……今日は泊まっていきなさい」

疲れたように住職が私にそう声をかけてきた。

娘に気を取られ、住職が戻ってきたことに気づかなかった。

娘の様子が急変し、しかし病院ではどうにもならないだろうと直感で悟った際に助けを求めたのがこの年若い住職だった。

娘を元に戻す当てがあると云い部屋を出て行ったが、戻ってきたということは何らかの形になったのだろうか。

縛るように視線を向ける。

しかし、期待した答えは得られなかった。

住職は首を横に振るだけだった。

「はいれたはいれたはいれたはいれたはいれたはいれた……」

娘が心配で同じ部屋で過ごすのだと、その結果がこれだった。

伏せた娘は天井を見つめ、にたにたと嗤いながら口の端に泡を溜めながら呟きつづけていた。

水差しで水分を摂らせようにも吐き出してしまう。

口が切れたのか、血で唇が濡れていた。

明け方、部屋が徐々に明るくなって、私は背筋が寒くなった。

眠気は彼方に消えていた。

娘だったはずの人間が、たった一晩で泣き笑いに顔を歪めた年老いた老婆のような姿に変わっていたからだ。

起こしに来てくれた年若い住職は、その姿を見て言葉を失ったようだった。

鏡に映る私の姿は疲れ切っていた。

整髪剤で撫でつけていた髪の毛は乱れ、目の下には濃い隈が刻まれ、娘が嫌っていた髭が伸び、肌はひどく荒れていた。

一週間前に急遽休みの連絡を入れ、次はいつ出勤できるかわからないと伝えた職場の上司は怒り狂っていた。

席は残っていないかもしれない、それに乾いた笑いが浮かんだ。

こんなときでもどうでもいいことを考えてしまう物だ。

蛇口から流れ出る水を呆けたように見つめた。

娘は今も戻っていないかった。

その姿は愛らしかった年端もいかなない娘とはかけ離れた醜悪な何かに変わり続けた。  
いた。

妻に連絡したときには、冗談だと最初は笑い飛ばしていたが、私の様子がおかしいことに気づいたのか半信半疑で飛ぶように寺へと駆け込んできた。

今は私と同じ、いや、私以上にひどい状態だった。

だが私も妻も人間に見えた、それにほっとした自分が居て、冷酷さにぞっとした。部屋に戻れば、娘だった何かに寄り添って甲斐甲斐しく世話する妻の背が見える。

それが愛の成す物なのか、そうしていないと落ち着かないのか、気が狂ってしまったのか、私には判断がつかなかった。

そもそも私自身が正常なのかも疑がわしいが、疲労した心身ではどうにもできない。娘は、今も娘だった物に変容していた。

肩が頭部のすぐ近くまで競り上がり、腕は短く縮み、明らかに顔の位置が下がっていた。

老婆のようになってしまった娘は、人の形を少しずつ失っていた。

それを気の毒そうに見つめる住職が戻った私に気づいて、逡巡した様子だったが意を決したように言葉を発した。

「……四十九日を過ぎてこのままなら、恐らく戻らないでしょう」

「そんな……」

「四十九日を過ぎて抜けなければ覚悟しなくてはなりません」









「このあと旦那さんも亡くなったんだよね……」

「祈祷師殿、そんな縁起でもない。確かに妻子を連れて寺から居なくなってしまうした。私も村の者たちの手を借りて必死に探しましたが……」

「冗談ですとも。まあよくある話、よくある話。というか祈祷師じゃなくて呪術師ですね」

「はあ。そんな軽い話ではないかと……」

人間の領域ではない森の奥で一夜を過ごして呪われる。

ベタなパターンだ。

テキトーに石を投げてぶつかっただら山で呪われた人だったくらいベタな話だ。

深い森の近くに住んでいれば身近すぎるほどに。

そのまま原因不明で死ぬか、運が良くて助かるか程度にしかバリエーションがないつまらない小話にすらもならない。

しかし、ここで新たなバリエーションが登場した。

「重くても軽くてもやることは変わりませんよ。ただまあ、親族に詳しい方がいらつしやったようで、派遣されてきたというわけです。依頼人と顔合わせしたときは若造で大丈夫かと心配されましたよ」

部屋の隅でぶつぶつと呟いている髪の毛の長いのは無視だ、面倒だから。

この程度の小話で、しかもド田舎の片隅で起きたしようもない事件に呪術師を派遣するとは思わなかった。

東京も存外に暇なのだろう。

「改めて確認ですが、その旦那さんと娘さんはドライブで道に迷って山の中に？」

「ええ、それで迂闊に動くのも不味いだろうって車中泊しようとしたことが切っ掛けなのは、と聞きました」

「娘さんの反応とかわかりますか？」

「そうですね……。確か、森に入るのを嫌がっていたとか。それが面白くて森に進み過ぎて、深夜に何かに取り憑かれたようですね」

「娘さんはその後変異してましたかね」

「老婆のような姿になり、そのまま奇妙な骨格に変形していたような……」

「なるほどなるほど。間違いなくヤマノケですね」

「でしような」

「うんうん。よくある話、よくある話」

もつともらしく頷く。

よくある馬鹿な話だが、金になるのもこういった身近に起きる靈障だ。

祓うにしても大金が必要だ。

技術とはそういう物だ。

希少なほどに高くなる。

単純な話だが、それがわからない者も多い。

ならば自ら祓えという話だ。

「ヤマノケはご存知で？」

「はは、森の近くで生業を持つ者は誰しもが知ってますよ。私のようなしがない住職でも」

ヤマノケ。

山の怪とも書き、文字通り山に居る呪霊だ。

人間の開拓が届いていない深い森に居つき、近くの寒村で煮詰められた感情を餌にしている。

奥深いほどにこびり付いた汚れのように、欲望で育っている。

迷い込んだ人間、それも女に憑りつき、蓄えた感情をより多く集めようと活動する。

知能は低いが簡単に憑りついて増えるので厄介だろう。

「住職殿もご存知のように、ヤマノケとなると深い森を好みます。それが自らの領域に

行ってしまったならどうしてなかなか厄介。探すとになるとかなりの人手が必要となりますね」

「確かに近くに村はありますが、手伝うにも洩るでしょうし……」

「余所者ですからね。というか何処からか聞きつけた女性のボランティアが集まってしまふと、ヤマノケが増えてしまふかもしれません。面倒ですが、最近は宗教の足が速い。他から呼ぶにしても二次災害が恐ろしいので私は諦めましょう。男女参画社会は健全な経済においてだけで十分です」

妖怪は墓場で運動会、とつまらない冗談を言った。

そうなる可他に取れる手段はないだろうか。

金を受け取って終わり、と。

「しかし、帰るにはまだ早い。こんな早いと依頼人に怒られてしまいますからね」

「……確かに」

「ところで住職殿は幽霊って信じてます?」

「ははは、半信半疑ですよ」

「見たことは?」

「ちらつと。もしかしたらプラズマなだけかもしれないませんが」

「ぶら、ずま……? ああいや、お寺さんなのに?」

「学生の頃は理系でして」

相手の目をじっと見つめる。

目を逸らさない。

情報とは感情から漏れる、感情は視線から。

半端なら漏らしていい。

胡散臭いのは相手も同じだ。

「なるほど、理系。確かはいてくに繋がってるんだったか。はいてくはお爺ちゃんにはわからないんだよな。やまごーりちゃん、たすけてー」

部屋の隅でぶつぶつと呟いていた髪の長いのを呼び寄せる。

肌は病的に白く、常に何かと話しているようだった。

相手するのは面倒だ、そのまま進めてもらう。

結局どちらにしても、だ。

「はっかい、そこ……」

「うんうん。じゃあ住職殿、床板を剥がしてもいいですかね」

「あゝ」

「じゃあ剥がしますね」



「祈祷師殿。その、冗談ですか？」

「違いますよ、剥がしますね」

「だ、だめです」

「え？ ……そう。やまごーりちゃん？」

「はっかい、はっかい」

「そうかそうか。じゃあ剥がしますね」

「いやいや！ ダメに決まっているじゃないですか！ 罰当たりな！」

「はっかい、はっかい」

髪が長いのはずっと一点を指している。

そこに何かがあるのはわかっているかのように。

「ああ、わかりました。理由がないと結果に至れないんですね。つまりあれです。

……やまごーりちゃん」

「位置情報システム」

「そうそれ。なんか旦那さんの職場の上司がご家族に怒鳴りこんでなんやかんやあつてここを示してたとかどうとかで。あとヤマノケを知ってるのに女性を近づけるとか残穢とか、そもそも田舎の陰湿な事件の犯人はちゃんと隠さないとか、自らの万能感に



「呪術師ですよ、呪詛野郎。あと三つじゃない、三人だ」  
「はっかい、これうつる」

「無理やり加工してもうショック死してるんだから三つですよ。たぶん写真の写りもい  
いですよ。祈祷師殿も記念にどうです？ 五つの記念写真は私が撮影してあげますよ」

— 3

クソ煮込みの呪術師を片付けて、依頼された加工品を持っていけば仕事は終わりだ。  
勧誘を思い出すが興味は無い。

「真なる人も、非呪術師の駆除もどうでもいい。

金が得られる、それだけで十分だった。

確か呪力の多い加工品ほどボーナスだったが加算される、だったか。  
どちらにしる都合のいい状況だった。

長身でひどく整った顔をした呪術師を殺せるのだから。

「取引をしませんか？ 私を見逃せば、あなたたちはここに来なかったことにしてあげ  
ますよ」

「やまごーりちゃん？」

「はっかい はっかい」

やまごーりとやらの女の言葉を受けて、はっかいと呼ばれた男が両手の拳を掲げる。

基本はボクシングだろうか。

どちらにしろ、だ。

「そういうわけだから、答えます。もちろん拳で。先週から鴨川ジムに通っているこの拳はまさに凶器」

下手くそなシャドーに、女が「おおー」と棒読みの声を挙げる。

茶番か嘘か。

呪術師に必須なのは身体能力のみならない。

狡猾な罫を仕掛ける呪霊との戦いは知恵が必要となる。

知恵は言葉に直結する。

本気か。

フリか。

「奇遇ですね。しかし私は全身が凶器です」

見に徹する。

この術式は破られない。

男の拳が宙を舞っていた。

想定通り手首で切断されている。

驚愕の顔を浮かべるクソ呪術師を見て、喜びが脳を満たす。

「うーん、よくわからん。テストテスト」

「はいれたはい」

男がそう言つて、床下から何かを引きずり出して投げつけてきた。

「は？」

思わず呆けてしまった。

喜びに浸っていたのも反応が遅れた。

ヤマノケと混ぜて加工した人間だった物、それが真つ二つになって床へと落ちる。

人間だった異形と、ヤマノケだった何か。

異形は血しぶきをまき散らし、ヤマノケだった何かは一瞬で消えた。

「うーん、まだかな」

にこにこ笑いながら床下から再び加工品を引きずり出す男。

呪術師として自身は優れていた、その自負がある。

倫理観も外れている。

呪詛師になってしまったのだから当然だろうという思いがある。だが、こいつは異質なのではないか。

奇妙な可能性に気づきつつある冷静な自分がいる。

「さあ、もう一回」

加工品が飛んでくるのを避ける。

容易いことだ。

術式だつて割れたとしても問題は無い。

だが、当たってやるには嫌な予感しかなかった。

「はっかいはっかい」

「は？」

腹部に走る衝撃。

消え去る一瞬で確認できたのは女に纏わりついていた呪霊が加工品に纏わりついていた。

おそらくそれは歪な軌道を描いて、衝突してきたのだろう。

だが問題ない。

異形が血を撒き散らし、ヤマノケと呪霊が溶ける様に祓われる。

「なるほじなるほじ、ふふふ」

目が合った。

呪術師が笑っている。

片手が無くなっても動じることなく。

確かに上級の呪術師ともなれば怪我など気にせず活動するが、それでも異質だった。勘が冴いている。

飛来物を避けようとして、気づく。

バラバラになった加工品だということに。

加工された人間の血と臓物の雨が降る。

「……自分が何したのかわかっていいるのか？」

「何を？ あれだけ変形させたら戻すのは無理ですからね、そうになると復讐させるしかないですよ」

「ふく、しゆう……？」

「後は攻略法のわかった呪詛師を処分して終わりですね。それで復讐になると思うんですよ」

何を言っているんだ？

待て、攻略法？

あれだけで術式が割れるか？

割れて問題はありますか？

だが、嫌な予感がある。

常識を当てはめられるのかどうか、そこを軸にする。

「……話した村が近いが、帳の展開はしているのか？」

「帳？　なぜです？　貴方は呪詛師ですから信じるに値しない」  
なるほど。

いつもの呪術師だ。

常識を捨て置いた狂ったクソどもの、その中でも他を気にしないクソ。

だが、厄介だ。

勘に従おう。

「私の、いや、俺の術式は意識していない物を分離させる。物質、呪力、問わずに。限界はある。呪力が負ければ分離しきれない」

術式の開示を行う。

単純であるほどに強い術式により純粹な強さを加える。

攻防一体のこの術式は、身体能力が負けているほどに強みを増す。

初撃を防げなかったことから劣っている可能性が高い。

相手がどれだけクソ煮込みだろうが、希望的観測で戦うのは愚か者のすることだ。



「なるほど。本気なんですね。よし、やまごーりちゃん、こちらも」  
「はっかい」

「取引をしませんか？ 今のうちに降参すれば、ここには居なかつたことにして普通に連行してあげますよ。まあ、死刑とかそういうのでしょうけど」

「断る」

ここで退くならそもそも呪詛師になつていない。

相手が最初と同じように拳を掲げる。

後は相手の動きに合わせて目を瞑るだけだ。

強制的に意識外からの攻撃とすることで攻撃と防御を同時に行う。

強さも速さも、この術式の前では無意味だ。

「よし、やまごーりちゃん」

「はっかい」

「で、呪詛野郎は何級術師だったんですか？」

呪力次第だが、不安はない。

そもそも二人で活動している時点で二級以下だろう。

負けは無い。

援軍も、頼りたくないが宛てはある。

どちらにしろ、だ。

「……一級だ」

「なるほどなるほど。よし、やまごーりちゃん」

女が正面を隠していた髪を掻き上げた。

隠されていた手元には、凄まじい呪力の宿った奇妙なパズルが握られていた。

腐った臭いが蔓延していた。

「八戒」

ずるりと、男の体から影が抜けた。

それは腐った影だった。

遅れてがしやんと音がした。

男の倒れた音だった。

それは人を模したあまりに精巧な玩具だった。

それは――

「呪骸……？」

ならば男から抜けた影は、と探そうとしてその必要が無いことを知る。

巨大な影が見下ろしていたからだ。

奇妙な可能性の答えに気づく、これは呪霊だ。

それもあまりに強すぎる。

最初にそれが腐った赤子だと理解できた、させられた。

七つの腐った赤子が混ざり合つて出来た呪いの塊、その体表に浮かぶ十四の濁った瞳と目が合い続ける。

強い腐敗臭が鼻を壊されたのか、血が止まらない。

視界で捉えたがために感じる情報が血涙を溢れさせた。

生理的嫌悪で肌が泡立ち、震えが止まらない。

それに包まれた女が、意志のある瞳で見つめてくる。

目が逸らせない。

十四の瞳からも逸らすことが出来ない。

あまりに強すぎる存在に、恐怖に、意識が支配されていた。

目を逸らせば死ぬ。

血を吐き、あまりの苦しさに悶える。

「な、なあ、見逃してくれないか？ 償いたいんだ」

「ヤマノケになつた家族は帰つてこないですよね」

「い、いや、でもトドメはお前が……」

「よし、やまごーりちゃん」

腐敗した呪いに感覚が死んでいた。

それでも声を出せたのが不思議だった。

それ以上に恐怖でもあった。

「イケメンじゃないからダメ。八戒、劣化天与呪縛の誕生に記念撮影してあげなさいな。新たな魂の息吹」

「はいてくは無理です、やまごーりちゃん。あと呪縛じゃなくて壘毒なのは。あと息吹どころか腐敗なんだよなあ」

クソ女、てめえ普通に話せるのかよ。

このままきつと死ぬのだろう。

ぬるい痛みが内臓を侵しているのに気づく。

そもそも、このまま呪いに浸った自分は死ぬのだろうか。

「ああ、そうだ。闇より出でて闇より黒く、その穢れを禊ぎ祓え。はっかい はっかい」



産ませた子を水子とともに呪物に浸せ。

いや、母体ごと浸せばよい。

繰り返し返せばいつかこの箱と栄光は我々の物だ。

そしていつの日か、猿どもは山郡が正しかったのだと思い出すだろう。

## アクター・ジュー

— 7 —

父は世界的にも超有名な映画監督、母は世界的にも超有名なスタア、兄は子役から華麗な活躍の道突き進むスタア、姉は父の片腕的な助監督。

そんな家族に愛される俺は、何の才能も持たない凡人だった。

そういうことも良くあるからしようがないね、q。

俺も何かできればいいな、と努力したことも（ちよつとだけ）あった。

父に付いて行って映像を見れば違いがわからずテキストなことを言っただけで呆れられ、母の背にべったりくっついて演技を見ても全くわからず突っ立っていた通行人の素人を褒め、兄が演技で困っていたので割った瓶で顔を引っ掻いてドン引きさせ、監督の補助みたいな物だろうと舐めて姉に金魚の糞をして落ち葉をばら撒いて迷惑をかける始末。

一生懸命頑張った結果の出せなかった俺を家族は哀れに思ったのか、凄い可愛がつてくれるしお小遣いもくれる。

学べたのは、テレビのADは駆け出しだが、映画のAD（助監督）は偉いし才能が無

ければ出来ないことと、素人とプロの違いがわからないくらい感性が致命的にクソだったことくらいだろうか。

流星にこれだとヤバイと理解した俺は、全方面に媚を売ることにした。

超天才の家族に愛される末っ子は、全媚糞野郎だった（周知の事実）

そんなわけで俺は華やかな世界に生きることができるのは優れた者のみだと知った。スポットライトに照らされる権利は誰もが持つ物では無い。

輝くステージは選ばれた人間のみが立つことを許される。

絢爛豪華な箱も、あの煌びやかな台も、一握りのためだけに用意されている。

栄光に続く幻想とも思える道を歩める者は、才能を持つ一握りのみ。

美しい夢を見続けるためには、誰もが羨む特別な才能を持つ者でなければならぬ。

持たざる者は金、権力、そしてコネで美しい夢を現実の苛烈さの前に消してしまえばいい。

家族と、それに芋づる式で連なっているコネにマジ感謝。



いつけな—い!

遅刻ちこく☆

約束の時間をオーバーして焦る俺!

朝食で使ったジャムの空瓶!

転倒する俺!

つらい……。

どうして悲しみは連鎖するんだ。

争いは何故無くならないの。

本業が失敗した悲しみをよみがえる。

なぜ人は働くのだろうか。

俺は悲劇のヒロイン、悲しみに涙して遅刻という事実には蓋をした。

もうなんかテンション下がりが切ったまま仕事現場に到着。

審査中の部屋に入り、遅れた詫びもせずの不機嫌なまま椅子に座る。

よく考えたら失礼な奴だったわ。

社長に詫びを入れようとしたら手で制された。

許された、ラッキー。

気分の仕事を受けたり受けなかったり、知り合いをごり押ししても許してくれるし頼んだら色々してくれるからここの社長大好き。

今どんな感じかと隣に座っていた黒山さんに訊ねたら、睨まれて舌打ちを返された。

ひ、ひどい……。

俺に審査員の話が来ると知って、自分が審査員枠に入るために抱き合わせで参加させたクセにこの態度ですよ奥さん。

ぶっちゃけこの仕事を受けるつもりはなかったからこれまでの仕事はクソテキトーだけ。

そもそも審査に参加したら名前を宣伝で使われるわけで、このオーデイションに受かった女性が仕事したら『あの〇〇が選んだスター！』みたいな感じにされる。

名前負けして恥ずかしいからやめてくんない???

そもそも外国で活躍したらしい黒山さん以下のネームバリニューだから自意識過剰かもしれない。

……よし、解決した。

さて、審査は……悲しみの演技。

なるほど。

節穴の俺でもわかりやすいテーマにしてくれたみたいだ。

マジ感謝！

あの娘は声を挙げて悲しそうで可愛いから100点！

あの娘は顔を隠してて表情はわからないけど誤魔化しが上手くて可愛いから100点！

泣きながら脱力したらおっぱいがえつちで可愛いから100点！

ぶりっ子で可愛いけど好みは人によるから50点！

可愛いけどぼーっと突っ立ってるだけで俺にもダメだとわかりやすいから0点！

顔とおっぱい、お尻は覚えたから問題ない。

点数はそのうち書きこもう。

後で社長や役員がいい感じに業界で売りやすい娘を選ぶからテキストでヨシ！

どうせこの資料も意味ないっしょ、と鉛筆でぐるぐると写真を塗りつぶして遊ぶ。

やべ、エントリーシートのコピーだったわ。

ほとんどが誰かわからなくなった。

……まあいつか、みんな平等に写真を黒くしよう。

写真が残っていたのは0点の娘の用紙だけ。

名前は夜風景ちゃんよなぎけい。

友達からけーちゃんってあだ名で呼ばれてたら可愛い、可愛くない？

対義語は朝時化<sup>あさしけ</sup>だろうか。

景の対義語ってなんだ……影？

うーん、名前っぽくないな。

朝時化影、朝時イヒ影とか……これ名前か？

影といえば影絵をちよつとやってみたいんだよなあ。

それはそれとして秒で審査した有能な俺だが0点けーちゃん以外の写真を塗りつぶしたため、誰が誰だかわからなくなって点数に悩む。

逆転の発想だ、全員を0点にしよう。

バランス理論で脳内の平和を勝ち取って半分寝ていたら、言い争いが発生した。

出来心だったし眠かったんだゆるして、と謝りそうになるのを飲み込む。

どうやら争点は俺じゃないらしい。

大人気俳優のアキラくんが「冷やかしたら帰ってくれないか!」とこだわりのラーメン屋みたいなことを言い出し、黒山さんが「バカでもわかるように演じろ」と言つて0点けーちゃんを泣かせた。

泣かせてんじやーん、と俺はヘラヘラしたが、室内は物凄くざわついていた。

俺は甘く考えすぎていたが、確かに未成年の娘を囲んで泣かせたような物だからな。

圧迫面接は社会問題となっている。

俺はこの会社の部外者ではあるが、仕事を任されているので連帯責任でパワハラ問題として訴えられても困る。

ひじょーに困る。

あと飽きた。

ばんばん、と手を叩いて注目を集める。

「スターズは純粹な劇団ではないのでこれくらいにしましょう。そもそもこれは演技が上手な劇団員を決めるための審査ではありません。『スターズの俳優』を発掘するオーディションです。そしてここに馬鹿はいません。社長、審査は終わりです。よろしいですね」といじめられてるけーちゃんを庇う大人の俺、ざわつきまくる室内。

けーちゃんには泣くほど難しいのだろうが、俺はバカじゃないからわかりやすく演技しなくていい(ドヤ顔)

しかし、頷いた社長が鶴の一声で審査が終わったことを告げると静まった。

よし、終わった終わった。

「スターズの俳優を発掘するオーディションです(キリッ)」とキメ顔で宣言しながら全員0点の評価をつけて帰るだなんて、なかなかできることじゃないよ。

敗北を知りたいくらい完璧な仕事だったな。

パワハラから依頼者を守るとか真剣に仕事しすぎたなあこれは。

これはデーモンコアベイブレードの動画を撮るから長期休みに入るしかないなあ。ホントはもつと頑張りたかったけど、コネに頼るしかない俺には仕事もないからね。しょうがないよなあ。q、  
帰りにUFOキヤッチャーで蝶の玩具を取った。  
もちろん後で自慢するためである。

— 9

いつけない！

遅刻ちこく☆

審査員の仕事が終わってないことを知って約束の時間をオーバーして焦る俺！

洗って乾かしたまま放置されていた空瓶！

転倒する俺！

本業だった動画投稿は、乗っ取られて奪われて無事死亡！

中国に乗っ取られたのと、整形しすぎて崩壊したのと、中の人が暴走したのと……。

手を離れてから不祥事が続いて、関係ないとはいえマジつらたん。

誰か彼女たちを助けてあげて。

俺は悲劇のヒロイン、悲しみに涙して遅刻という事実には蓋をした。

とりあえず審査員は今日で終わりだし、空瓶も家に転がってるから危ないんだ。途中でコンビニのゴミ箱にでも捨てて行こう。

つらい……。

どうして悲しみは連鎖するんだ。

争いは何故無くならないの。

最近のコンビニがゴミ箱を店内に設置したのは社会問題なのではないだろうか。

空瓶はどうしたらええんや……。

瓶を片手に彷徨ってたら、そういうえば今日は審査員の仕事だったと思ひ出す。

うーん、もういいか。

影絵で遊ぼうと思つてライトを買ったら荷物がいっぱいになってしまったし、車を使わないと間に合わない時間だし。

でも影絵に使えるライトが手に入ったから運が良かった。

今日はもう空も青いし、帰つてこれで遊ぶしかないだろう。

へーい、タクシー、と道路に向かって手を振ると車がすぐに止まった。

運と流れ、俺の方に来てるね。

タクシーにしては良い車だなあ、と現実逃避しながら乗り込むと、運転席には売れっ子俳優アキラくんが「お見通しでしたか」と苦笑いしていた。

なにが???

俺が寝坊したことが社長にお見通しだったとか???

やばくない???

まあそれはそれ、よっこいしよういち、と乗り込む。

後部座席に、0点けーちゃんとちびつ子二人の姿が……!

最終選考に選ばれたから、送迎するのだとか。

経済状況から役者になりたいらしい……話が重おい!

弟と妹も姉の姿に喜んでてきらきらとした目線を送っているのを見て、0点を付けたことにそこはかたない罪悪感。

そして、スターズのスタア☆である星アキラが直々に送迎するとか、もしかして物凄  
い才能がある……?!

うーん……言われてみればそこはかたなく目がチヨコちゃんに似ている、気がしない  
でもない、か?

天才だなんだって騒がれる俳優の特徴として目が虫っぽい人が多い気がするよ  
うなしないような、そんな感じだ。



虫、腹がキモいし動きも読めないから苦手なんだよね。

小さい虫、それも蝶みたいに安全なら瓶に詰めて無害化できるのに。

ドヤ顔で瓶を見ていたら、ちびっ子に何故持っているのか聞かれてしまった。

アキラくんに助けを求めて視線を向けたら、なぜか真顔で頷かれた。

前見て運転してくれ。

捨てようと思つて捨てられなかったと正直に答えるべきか……。

いや、これからこの子たちの姉を審査するというのがに情けないことを言うべきではない。

カッコいい大人の俺ならカッコいい答えが出せる。

そうだろう、俺！

「演技とは限られた枠の中で幻想を作り出す魔法、役者はその繊細な技術で魔法を操り、観客は演技に魅せられる。ここにある蓋の無い空瓶、それすらも役者にかかれば重要な物に変化する。ふつつつと沸く熱湯、ゆらゆらと立ち上る湯気、もしくは空を飛ばうと囀る小鳥。本物の役者はたった一つの空瓶にすら世界の一部を作り、栄光を醸造し、名聲に蓋をする」

知らんけど。

というか今テキストに喋った話はスネイプ先生からパクった。

そして内容は。パントマイムの領域じゃないだろうか。

うーん、まあいつか。

どうせ一緒よ。

……はっ！

天啓が舞い降りた。

「練習してみなよ。テーマは……最初だから小さくて、それでいて中を見つめる価値がある物だ」といと思う。」

振り向きながら瓶を渡して告げる。

ゴミの処分にプラスしてさっきのポエムに意味を持たせた自分の頭脳が怖い。

テーマは知らん。

でも瓶を使って演技練習するのに車をイメージされたらヤバいから小さいのだけ使えばって助言しておいた。

俺って優しみの塊かもしれない。

アキラくんは真剣に考え込んでいる、安全運転で頼む。

ミラーでちらつと見たが、納得してくれたのかけーちゃんと彼女の弟妹は瓶で遊び始めた。

朝のお通じがまだだからトイレ寄ってから仕事に行くね。

あとけーちゃんか俺の真似をし始めたけど、スネイプ先生をパクツた俺を真似したらパクリのパクリで方向性が行方不明にならないか？

— 10

うんこして遅れてマジごめん、と部屋に駆け込む。

アキラくんがけーちゃんを連れてきたことは予定していなかったようで、社長に怒られていた。

俺はセーフだよなあ？

アウトだった、q、

社長に問い詰められたので、謝った後に言い訳として影絵で使う予定のライトを見せる。

俺の無謀な言い訳がなぜか通り、社長が眉間に皺を寄せながら「そう……でも、それを使う必要はないと思うわ」と言って去って行った。

許してくれたっばい。

でもさ、よく考えてみて。

いや、なくてもいいんだけどさ。

言い訳になってくない???

甘いのでスターズの社長大好き。

俺を甘やかしてくれる人はみんな大好きだけど。

さて、最後の話し合いも終わったので最終審査が始まる。

最後まで選考に残った4人の女の子に向けて、審査内容が告げられる。

テーマは。パントマイムらしい。

ふーん、なるほどね。

初めて聞いた気がしないでもない。

あ、でもなんかそんな話を聞いたような無かったような。

で、設定は野犬らしい。

ふーん、なるほどね。

こんな簡単なのでいいのか。

俺でもスターズの俳優になれちゃうね……顔のことは言いつこ無しね。

さて、俺が演じるならまず食べ物を用意する。

デリバリーでもインスタントでもよしとしよう。

下にコンビニがあつたから駆け込むのもアリだ。

戦うならまず勝つための最大限の準備をするものだからな。

そして用意した料理を手づかみで零しながら食べる。  
で、汚れたまま四足歩行し、威嚇する。

これが最適解だろうか。

けーちゃんが困ってたらこれを助言してやるとしよう。

ふっ、これが頼れる大人ってやつだ。

ガラスの仮面サンキュー。

ニヤニヤしてたら、けーちゃんが野犬とバトルし始めた。

俺にはよくわからなかったが、周囲の反応からしてバトルっぽい。

そしてそれに乗るように他の三人も対峙し始めた。

ふ、ふーん、なるほどね。

……なるほどね、最近の若い娘は野犬とバトルできるんだあ（盲点）

……危うくバカにもわかるように説明するところだった、q、

そんなわけで、俺の中での紆余曲折を経て、けーちゃんが野犬を倒して拍手喝采。

よし、終わった終わったとライトを持って帰ろうとしたら、社長が意味深に頷いた。

白いスクリーンが野犬とバトルしていた四人の女の子を隠す。

そして社長が高らかに第二課題である影絵を告げた。

第二 ^ q ^

?????

帰りのホームルームを終えて意気揚々と帰るところに生活指導から冷凍ミカンで天井破壊したことについて呼び出された気分だ。

つまりやる気が枯渇しまくり。

そういうえば蝶の玩具を持つてくるの忘れたなあ、と呟く。

影絵で行うテーマが「蝶」になった。

照らされた四人がぎこちなく動くが、さっきの野犬とは打って変わって物静かだ。

なんか難しそうでごめんな……。

しかし、影だと誰が誰だかわからん。

わからんよなあって他の審査員に顔を向けるが、みんな違いがわかるらしい。

ふ、ふーん？

俺もあとちよつとでわかると思うけど、バカにも分かるようにしよう。

というわけで『順番はくじ引き、髪は纏めて服装も合わせる、声は出さず好きな立ち位置で演じる』と個人審査に切り替えてく。

野犬では一斉審査だったので、ここらで個別審査にしても方便ではあるが問題ないっしょ。

むしろ強引だった影絵がまるで兼ねてから考えていた審査かのように……無理があるか。

初めの娘は両手を広げてゆっくりと上下に動かし始めた。  
なるほど、わかりやすい。

100点だ。

2番目の娘は座り込んで顔をゆっくりと動かしたりしていた。

周りの眩きを聞くに、蝶を追っているのではないかという話だ。

75点。

3番目の娘は差し出した指を見つめていた。

蝶が止まつてる稚拙な演技らしい、黒山さんが言つてた。

50点。

4番目、影も一番小さいし、動きも無い。

手をじっと見つめているだけ。

うーん、わからないから0点！

アキラくんが「瓶の中で蝶が……まさかこれが狙い……そこまでして彼女を落としたいんですか」と呟っていた。

黒山さんは舌打ちした。

社長はドヤ顔でふんすふんすしていた。

他の審査員は困っていた。

大人の俺は「バカにはわからない演技って意味あるのかなってときどき思いますよね」とフオロープラス予防線を張って自己防衛しておいた。

デーモンコアアライブレードがウケたからやっぱり本業に戻るね……。

——11

まあまあ良い肉をすき焼きにして一番のやつと一緒に贅沢に食い倒れよう。つてことで料理していると、インターホンが鳴ったので嫌々ながら応対する。

黒山さんが、部下とけーちゃん、けーちゃんの弟妹を引き連れて我が家に攻め入ってきた。

「ずかずか上がり込むのやめてくれない???

知り合いはみんな何でそうなの???

それはそれとして……大人は対応を見誤らない。

高度の柔軟性を維持しつつ臨機応変に対応できるのが大人だ。

一人分にはあまりに多すぎるすき焼きが恥ずかしいので、「そろそろ来る頃だと思っ  
た」と強がって振舞う。



物は言いよう。

すき焼きを子供に食べさせまくってたら、けーちゃんの頭を鷲掴みした黒山さんに「何故こいつを落とした」と聞かれた。

え、落としてないけど？

人聞きの悪いことはやめてくれないか???

俺はいつだって真面目に仕事しているんだが???

彼女の幼い弟と妹に『マジかよこいつ畜生じゃん』みたいな視線を向けられた。

やめてくれ、それは俺に効く。

スターズが求めた物と、用意された物が全く違ったのかもしれない。そもそも社長が決定権を持つてるらしいし。

「落としてませんよ。スターズは求めていなかったから落ちただけです。洋食のお子様ランチが食べたいのに、和食の懐石が出てきたのかもしれないね」と言い返しつつ本人がいるので持ち上げてフォローもしておく。

物は言いよう。

大人の気遣い。

彼女の幼い弟と妹に『マジかよやっぱり畜生じゃん』みたいな視線を向けられた。

なんでえ〜q、

で、今日我が家に攻め入った本題として、けーちゃんは勇者の剣を持っているが町周辺のスライム狩りしかしたことが無かったからメタル斬りに来たらしい。

うん……うん？

噛み砕いて聞いて、俺なりにわかりやすくした結果「コロモンからメタルグレイモンに進化するのはいいけど、スカルグレイモンに進化しないように」ってことらしい。

うん……うん???

ぶっちゃけ諦めて受け入れるようにしてるけど、相変わらず業界の人は意味不明なんだよなあ<sup>q</sup>。

とりあえず影絵の練習に来たらしく、黒山さんにコツを教えてやれと言われた。

コツ……？

影絵の……？

え、じゃあけーちゃんは影絵のなんかなの……？

でも俺は影絵のなんかじゃやないから何も教えられないんだけど……？

最終審査の時にテーマになった『蝶』の影絵が見たいらしい。

急に来て無茶振りが凄い。

めんどくさくなくなったので、テキストにやればいいのか。

僅かばかりの準備をして演じてやろうじゃないか。

部屋の電気を消し、スクリーンの裏側からライトで照らす。

手で蝶を作り、羽ばたかせる。

黒山さんを中心としたブーイングが聞こえる。

けーちゃん弟と妹が「おねーちゃんをさらった怪しい人より怪しい！ほんとには仕事できないんですよ！」と中々酷いことを言ってきた。

なんて堪え性のない観客なんだろうか。

仕事が出来ないのは本当だが、怪しくは無い。

大人を怒らせたらどうなるかわからせるしかないよなあ？

手で作った蝶がライトを覆うことで一度スクリーンを暗くし、そしてライトを消す。

で、仕込んでおいた秘密兵器を投入。

ライトを付ける。

スクリーンに再び影が映し出され、「ほんもののちようちよみたい」と歓声が聞こえる。

マジでか、と俺もスクリーンを見に行く。

空瓶の上で、蝶のような影が羽ばたいていた。

マジだったわ、q、

たぶん飛び立ったのかもしれない。

影絵を見ていた皆と目が合い、「は？」って言われた。

「は？」は流石にひどい。

俺だって影が見たいっての。

ネタ晴らしとして以前UFOキャッチャーで取った玩具を釣竿で吊るしていたのをドヤ顔で見せる。

この釣竿で去年はザリガニを釣って食べた。

上下に振ると蝶が羽ばたく。

「モスラじゃねえか！」「モスラはガだよ！」「は？ 蚕かいこなんだが？ 立派な蝶なんだが

？ にわかでモスラ語らないでくれる？」「だからカイコガだろうが！」「ちようちよと

ガはちがうよ？ かわいいそう……」と反論を挟むも黒山さんやキッズどもにボロクソに

言われた。

なんだお前ら詳しいな、モスラ博士か？

だが待つてほしい。

モスラが蛾だつて明文されているだろうか。

キッズどもは知らないだろうが、モスラを知らなくても死なないんだが???

「そういうわけで、スクリーンをカメラや舞台の枠、影を役者に見立てることができる。

今は観客の視点から見たからわかると思うけど、裏側のように見えないところなら何

をやってもいい。役者は限られた空間の中でならどこまでも自由なんだ。雨の中で傘を差さずに踊ってもいいし、晴れてるのに傘を振り回して遊んでもいい。でも、今のモスラみたいに分明に明らかに異質すぎると受け入れてくれるかはわからないよね」と、言い訳しておく。

物は言いよう。

道具は使いよう。

そもそも審査に持ち込めないって？

俺は役者志望じゃないから知らんがな。q。

騙されたことに気づきつつあるのか、首を傾げながらけーちゃんたちが帰るので見送る。

黒山さんに、映画のオーディションに参加するから公平な審査になるようにと監督に伝えて欲しいと言われた。

知り合いだからオッケーやで。

だいたい知り合いか、知り合いの知り合いか、知り合いの知り合いの知り合い。

いや、黒山さんも知り合いなのでは???

そうだなあ、同じことでもしようがない。

いや、後で一応声をかけるけど、スターズ絡みなので先に社長に電話しておこう。

ここは大人の会話で大人力でもアピールしちゃうか。

俳優が役に成り切ったまま死ねたら望外の喜びだと思いませんか、という理解のある業界人な感じでいこう。

社長も昔は役者だったからお気持ちわかりますよというゴマすりクソ無能のアピール。

また大人の階段登っちゃったな……（なおアラサー）

薬と妖怪のパロディ動画出したら削除された。

クスリで頭がイカれて車に轢かれた猫が化けたラリにやんとか渾身の出来だったのに残念だ。

シンナーのやりすぎで作業用機械に巻き込まれた細切れのコマさんとかも用意したの。

本業ばかり不運に見舞われるのどうにかならないっすかねえ……。

## まわるーぷ体験版（呪術廻戦）

生まれ生まれ生まれ生まれ生かれて生の始めに暗く

死に死に死に死んで死の終わりに冥し

輪転絶ゆること能わず迷方を悟る

## 1 周目

朝、父さんが眉間に皺を寄せていたので嫌いな食べ物が出続けたのかもしれない。

母さんはにこにこしているだけだった。

疲れ切って死んだ目をしている父さんが、そのまま死んでしまうのではないかと幼い頃には心配した物だ。

父さんは大丈夫だと主張するが、今もまだ心配は尽きない。

母さんに相談すると、大丈夫よと言われ続けるので、今ではそういうものだど割り切

ることにした。

朝食を終えると、そのまま父さんは仕事に出かける。

外回りが多い仕事らしいが、詳しい話は聞いたことがない。

母さんはそれを見送って、家の者たちに指示を出し始めたので俺も自室に戻る。

いつもと変わらない日々のはずだった。

昼、悲鳴が聞こえた。

少しずつ悲鳴が近づいてきていた。

ばたばたと足音が遠くで鳴り響き、やがて悲鳴とともに消える。

不気味さに、誰かしら家の者に状況を尋ねようと声を張る。

しん、と音が消えた。

そうして突然俺の腹が熱くなったと思ったら落ちるように視界が滑っていた。

パニックになりながら必死に藻掻くが、凄まじい痛みは我慢できないので悲鳴が口か

ら勝手に入るし、だんだん寒くなっていつて意識もぼんやりしていった。

そうして藻掻けなくなって動くのをやめると、なんとなく現状を受け入れられるよう

になった。

巡らせた視界に、腹が無くなってぶつ切りになった臓物が零れていて、俺の足が離れ



た場所にあつた様子が見えた。

血は流れていないが、何故かそういう物だと理解した。

気怠さと不快感、そして僅かな懐かしさ。

意識が白んでいくからか、血が流れていないからか、心のどこかで夢だと思っている。げらげらと嗤い声が聞こえた。

悪意が込められた、醜悪な声だった。

初めて、部屋に何かがいることに気づいた。

そうして『これ』が家の者や、俺を、今このような状況に陥れたのだと思った。見えないけれど居ることはわかる何か、俺が苦しんでいるのを嗤っている。

こんな腐敗臭を垂れ流す笑い声しか出ない何かの近くで死ぬ俺が可哀そうだし、家の者が憐れだった。

苛立つ。

死ぬことに、強すぎる理不尽に、無駄なことに嫌悪する。

遠い昔に感じたような、懐かしい感情だった。

沸々と怒りが沸いて、力が漏れ出した。

同時に、堰き止まっていた血が溢れ出て、体から熱と力が抜けていった。

漏れ出したはずの力が消えていく。

俺は知っている、明確に死が迫っている。

遠い昔から感じている、忌まわしい記憶だ。

ひどく苛立つ。

見えなかった何かが、ぼんやりと見えてきた。

それは影だった。

影が嗤っている。

まだ足りない。

これでは見えない。

まだだ、まだ俺は……。

途切れていた視界が、父さんの顔を映し出した。

青褪めていて、土気色に近い顔色だった。

今の姿を見れば、いつもの顔色が十分に健康だと受け入れただろう。

怒りか悲しみかわからないが、興奮して呼吸が荒くなっている父さんがなんだかおか

しかった。

無くなったはずの腹は傷など全くない状態で治っていた、だからこれは夢かもしれないな

い。

冷たい血だけが現実を囁く。

そこで俺はぼんやりとした影しか捉えられなかった何かの姿を見ることができた。人型を蛙のように歪めた白い何か、それが巨大な口を歪めて笑っていた。

それでも俺は立ち上がれずに横になったままだった。

父さんと蛙もどきが凄まじい速さで争った余波で部屋がボロボロになった。

振るっていた真つ黒の番傘を蛙もどきに突き刺した。

蛙もどきは両腕でガードしていたが、それでも致命傷だったのか微動だにしない。

父さんもそのまま動かなくなった。

黒い番傘が落ちて、音が響く。

そこからは呆気なかった。

蛙もどきから溢れ出た黒い泥のような物に覆われた父さんが、蛙もどきに変異した。

夢を見ている。

俺は死んだ。

## 2 周目

俺は死んだ。

これは確実だ。

そして、生き返った。  
何故かはわからない。  
混乱していたら死んだ。

### 3 周目

死んだ。

俺は夢を見ているに違いない。  
終わらない夢を。

### 4 周目

俺は死んだ。

そして、生き返った。

そういうものらしい。

そう受け入れないとどうにもならない。

前と同じく、父さんが蛙もどきと戦っていた。

俺が手を出すには無謀だった。

見るのに慣れていないからか、目が追いつかない。

結局同じように父さんが蛙もどきに番傘を突き刺して仕留めた。

ここからだ。

父さんがまた変異していた。

さつきまでは訳も分からずに殺された。

今の俺は違う。

俺は生まれてから夢を見たことがない。

これもきつと夢じゃない。

だから醒めることもない。

## 5 周目

さつきは調べようとしたら立ち上がれなくて死んだ。

今度は意識が戻ったらすぐに立ち上がる準備をしておく。

激しい戦闘の横で、ぬるい血の海で滑りながらもなんとか立ち上がる。

足に力が入らず震える。

俺に何が出来るのかわからない。

そもそも立ち上がることすら満足にできない。

這うように部屋から出て……。

## 6 周目

蛙もどきもそうだったが、変異した父さんも俺を殺しに来るようだ。

父さんが実は化け物だった可能性も考えられる。

だが、ケガを治してくれた今この瞬間は俺を守ろうとしている可能性も考えられる。

情報が少ないので考慮できることは少ないが、逃げる俺を追うのは当然の行動原理らしい。

万が一に縋って何度も逃げて死ぬことで、異なるパターンを導き出すべきか。運が悪くて狙われただけならば、逃げられる可能性も出てくる。

欠点は逃げる俺を確定で追いかける場合、無駄死を続けることになる。

どうすればいい。

時間はない。

見たことが無い夢を見ているようだった。

意識がぼんやりとしている。

今だけだ。

意識がはつきりしたときに、これが現実だとわかったらどうなるだろうか。

どうしようもなく取り乱すかもしれない。

冷血な人間のようにあっさりと受け入れるかもしれない。

今だけはこの麻痺した思考がありがたかった。

繰り返される動きは、俺の介入を許していた。

争いの途中に手を出すのは無理なことで、おそらく何度見ても割り込めず、確実に俺は死ぬ。

だが、最後だけは違う。

蛙もどきがガードをするために動きが止まる。

蛙もどきを守る身があるのかどうかかわからないが、大事だから守るのだろう。

その瞬間に、父さんの背中に俺が体当たりする。

半ば倒れるように、俺が押して僅かでも深く刺す。

これまでは蛙のガードが堅いのか、父さんが限界なのか、番傘の刺さりが浅かった。

力が入らないから、深く刺せないかもしれないが変化があれば構わない。

これしかできないが、今はこれだけでいい。

ダメだったらまた試せばいい。

『過去』よりも変化した『今』があればいい。

闇色の火花が爆ぜ、黒い泥が飛び散った。

本当に爆発したのか、反動で俺は転がっていた。

それでも状況を理解しようとして、立ち上がろうと藻掻く。

蛙はいなくなっていて、代わりに父さんだけが立っている。

喘鳴音の混じった呼吸を繰り返している父さんは、立っていることすら限界なのだろう。

それでも番傘を握っている。

死んでしまうのではないか、化け物に変異してしまうのではないか。

俺は怖くて静止したが聞かず、父さんは番傘を振り上げた。

「光陰<sup>こういん</sup>、私を軽蔑しなさい。苦しいとき、怨みなさい」

父さんが俺の名前を呼んで、はつきりとそう言った。

どうしてか、父さんが喋り、動いていることが奇跡のように感じた。

遅れて、番傘が振り下ろされた。



もう力が残っていないのか、ほとんど落下していた。

かろうじて、乾いた指に似たミイラのような物とぶつかるのが見えた。

一瞬で夜になったかと思覚するほど、視界が闇に塗り潰された。

目が潰れたとしか思えなかった。

どれほど経ったのか。

最初は恐怖で這い蹲っていたが、何も起きないので恐る恐る這って動いた。

結局何もわからず、動くのをやめてしまった。

無限にも思える夜が終わりを迎えた。

自室には光が射していた。

ホッとしていた。

穴だらけになった壁や天井から外が見えたが、何処からも音がしなかった。

空は変わらずに青いし、雲が流れていた。

違和感があった。

どこにも人の気配を感じない。

そうして、父さんをすぐにでも病院へと連れていかなければならないことを思い出し

た。

実は元気になっていて、自室で休んでいてくれないだろうか。

希望を抱きながらも、すぐ傍に倒れているかもしれないからと振り向けば、部屋の真ん中に腰から下だけがあった。

思考が止まる。

俺にはそれが人間だった物で、父親だったこともわかった。

無意識に足に触れていた。

俺がさつき目覚めたとき、父さんが手で触れていたから真似しただけ。

俺を治したように、奇跡が起きて治せるんじゃないかと有りもしない現実に縋った。

そんな物は有りはしないと教えるように、足だった物が倒れる。

置いてあるだけで限界だったのか、さらさらと崩れ去って小さな砂の山を作った。

「ああ……」と声にもならない音だけが、俺の口から漏れ出ていた。

部屋には俺以外に、襤褸のように朽ちた白い番傘と、乾いた指だけが残されていた。

父さんの同僚だった人が駆け付け、保護してくれた。

生き残ったのは俺一人だった。

紹介されたアパートの一室で泣くか窓の外を眺めるだけで過ごしていると、蛙もどきが窓に張り付いていた。

それでも呆けて見ていると、部屋に侵入されて、駆け付けた同僚の人が始末した。

呪力、という物がとんでもなく多い俺は狙われやすいらしい。

こいつは糞雑魚だが、家に現れた蛙もどきくらい強いのも引き寄せられるかもしれないと教えてくれた。

そういう特殊な力を鍛える場所があるとのこと、父さんはそこを卒業して活躍していたようだ。

こんな蛙もどきに今後も狙われると思うと腹が立つ。

俺は力を手に入れる。

二度と死なない力を。

は????

学長と面談と聞いてぬいぐるみに殺されたんだが????

二人は驚いた顔をしていたが、一番驚いたのは俺なんだが??????

## 世界樹2

—  
4

地球上最新のドロップキックを巨大なムカデに炸裂させた貴方は、反動を利用して宙を舞う。くるくると回転し、地面へと降り立つ直前でムカデに食いつかれた。下半身がムカデと化した貴方は、まるで汚染された人魚姫。スーツが無ければ毒によってバブルスライムとなって消滅しただろう。

巨大なムカデは毒を持つ顎で挟み、貴方を決して逃がさぬよう食らいついでいる。着地するはずだった肉体は再び宙へと戻され、振り回される。止め処なく垂れ流される毒に汚されるおニユウのスーツ。

貴方は怒りに突き動かされ、二本の毒針で形作られている顎を掴む。機械化された部位は最低限の出力しか発揮しない、スーツは未だに沈黙を貫いている、ロツクの掛かっている関節は満足に動かせない。それでも虫けら程度に負ける貴方ではない。

毒を垂れ流すことしか能のない顎は、鈍く軋む音を漏らし、押し折れた。そのまま手に入れた毒針をムカデの口部に突き刺す。汚い悲鳴が挙がる。貴方はその要求通りおかわりを刺した。

ムカデが自らの毒針によって破壊された口から解放された貴方は、汚染された人魚姫から鳥人へとランクアップするも遺跡群へと落下を余儀なくされた。鳥人は鳥人でも、イカロスだった。そもそも降下する際も羽根など軟弱な装備無しに突入した貴方だ、イカロス超えを十分に果たしたと言っても過言ではあるまい。イカロス？ それは何処の踏み台ですかね。

イカロスすらも踏み台にした貴方に、ムカデの口部が二つ迫る。どうやら巨大ムカデは頭部を三つ持つ身体をしているらしい、悲鳴を挙げて悶える頭部、激昂する頭部、冷静に貴方を見つめる頭部が見える。

おお、なんとグロテスクなケルベロスだろうか。

どんなに貴方が幸運であろうとも、空中では身動き一つ取れない。再び食いつかれて欲張り丸飲みパーティーセットへと変貌する直前で、ムカデの頭部が弾かれるように横へと仰け反っていた。貴方の超人的な動体視力がはつきりと捉えていた。ムカデの頭部を弾いた衝撃の正体は弾丸だった。それを放ったのは遺跡群に身を隠しているマツチヨが持っている銃器の類に違いない。大まかな弾道からの予測だが、他に思い当たる

者もいないので当たりだろう。

旧い分類の兵器だ。投石の次くらいの世代の兵器でしかない。が、迷宮内部ではこれくらい原始的な武器のほうが有効なのかもしれない。

今度こそしなやかに貴方は着地する。音を殺すのが癖になってんだ、そう表現できるほどだ。

弾丸による援護を行ったマツチョへとハンドサインを送る。難なく伝わった。先遣隊として送り込まれた者たちの一人なのだろう。貴方が前衛、マツチョが後衛だ。相手が誰であれ、友軍と思える者と出会ったのなら役割だけは大まかに決め、それに従う。前衛を買って出た貴方は、再びムカデへと肉薄する。まずは攻撃よりも防御や回避に重点を置く。情報集めだ。

判断したいのはムカデの連携だ。頭部は分かれているが、意思疎通は取れているのか。情報は脳で処理される。ヒトの脳は、機械などに補助をさせることもあるが、ニューロンの塊として頭部に一つだけ存在している。数センチ程度の虫ならば頭部の脳だけでは足りず、節などに神経の塊を持っている。しかし目の前の巨大ムカデはどうだろうか。脳はそれぞれの頭だけで十分だと思えるが、虫であるなら神経の塊を持っている可能性も否定できない。それがそれぞれの脳と繋がっていて連携しているとすれば、三つの頭部が得た情報を共有できるかもしれない。これは脅威となるだろう。

頭部の一つは見に徹しているのか距離が遠い。二つの頭部が噛み付こうとするが、貴方には何の痛痒も与えられなかった。突撃する頭部の勢いを利用した巧みな弾丸の補助、そして貴方自身の体術と頑強なスーツの装甲が受け流した。背後で二つの頭部がぶつかり合う堅い音が響く。しかしその頭部たちを隠れ蓑に、回避後の硬直を狙ったのか貴方へと液体が飛来した。溶解液なのか、遺跡群が視界の端で溶けていた。甲高いギチギチとした音が聞こえる。振り向けば、ぶつかり合っていたムカデの頭部が僅かばかり溶けていた。

今の攻防だけでは連携できるのか、意思疎通は取れるのか、それらはわからなかった。しかし、わかったこともある。貴方を無視し、ムカデの頭部が争っていることから仲は悪いようだ。もしくは本能的に敵と見做して防衛しているのか。

もう一つはムカデの攻撃は自身にも幾らか効くことだ。互いに噛みつき合い、溶解液を吐き合っている。特に見に徹していた頭部は他二つから攻められ、少なくともダメージが見て取れた。

貴方には複数の頭部を持つ生物がほばいない理由がわかった気がした。

それはそれとして貴方は撒き散らされる溶解液の量に危機を覚え始めていた。遺跡群が溶けて消え、迷宮の階層を形作っている地面も悲鳴を挙げていた。土台の基礎として作られた地面ではない。何らかの理由で形成されただけだ。場所によって丈夫さが

異なるのは、貴方がここに落ちてきたことから明白だった。地雷原でタップダンスなんてオシャレな状況ではない。もはや薄氷の上で熱湯パーティーだ。

ムカデを遠ざけるか撃破する必要があるだろう。逃走も悪くない。幾つかのハンドサインを送る。後衛を任せたまつちョが領いたのは抗戦のみだった。仲間の死体が溶け切ったことも、逃げる選択肢を奪ったかもしれない。

しかし問題はない。スーツの機能がロックされていようと、身体を補助する機能がほとんど止まっていようと、この程度ならば貴方にとっては危険ですらないのだから。行きますよ、亀山君。はい、右京さん。そんなやり取りは無かったが、貴方は再び駆け出した。

互いに争っていて警戒を忘れた鈍重なムカデに捕まる貴方ではない。弾丸が、行く手を阻もうとしていたムカデの頭部を鈍く弾く。擦り抜けるように衝撃で僅かに止まった一つ目の頭部を躲し、二つ目の頭部を踏み台にした。迎撃のつもりか、視界いっぱい液体が広がる。溶解液はスーツによって完全に遮断されている。傷ついた三つ目の頭部の傷口に無理やり侵入した。てらてらと緑色に輝く体液が噴出した。威嚇なのか、悲鳴なのか、ムカデの口からギチギチと耳障りな音が漏れていた。持っていたナイフで内部を切り裂く。

のたうち回っているのか、他の頭部が攻撃しているのか、貴方は内部で激しく揺れて



いた。悲鳴のような甲高い音、鈍い何か折れる音、じゆうじゆうと溶ける音。たくさんの音が混ざって聞こえた。何とか深く侵入しようとするが、貴方は激しい圧力で外へと飛ばされていた。

宙へと飛ばされた貴方は、落下しながらムカデを見た。二つの頭部が、貴方が侵入した頭部を破壊したようだった。気色悪いテラテラと輝くような液体が、頭部の無くなった部分から噴き出している。あれで貴方を体内から排出したのだろう。

残っていた二つの頭部は、貴方のことを無視して争っていた。マツチヨは溶解液や毒があるため、近づくことすら出来ない。

貴方はあまりの激しさに距離を取り、様子を伺うことにした。機能が制限されたスーツで態々割って入る気にはならなかった。

激しい争いで体液が飛び散る。溶けた地面から赤い花が咲いた。

「フロワロだど!？」

マツチヨが困惑したよう叫んだ。

迷宮を浸食するように、穴から赤い花がじわじわと広がっていた。

それらよりも貴方が気がかりだったのは、先ほど傷口から侵入を試みた頭部が何処にもないことだった。

貴方は赤い花が舞う中、落下していた。宇宙からダイナミックに星の中へと落下する貴方にとって、この程度ならばちよつとしたお遊びでしかない。いや、危険性からして揺りかごだ。赤子でも眠るくらい容易い。しかし貴方は幸運で自由だ、誰も揺らすことなどではしない。

眼下には、巨大ムカデが唸り声を挙げながら同じように落ちている。今のムカデは頭部を一つだけ残すのみ、他の頭部があつた傷口は塞がっていて、体液が漏れている様子は無い。落下する前に貴方が見たのは、地面に空いた穴から咲いたフロワロに気付いたムカデの頭部が、残つたもう一方の頭部を食らう姿だつた。自身の頭部を取り込んだムカデは、赤い花が咲く穴から赤い花を吸い込むと、地面が紐を解くように消えていた。そこから貴方を巻き込んで落下が始まつた。

光が届かないはずの世界樹内部は、フロワロと呼ばれた赤い花が放つ光で、怪しく照らされていた。内部に巣食っているのだろうか、ぎつしりと絡み合っている。貴方がさつきまで立っていた場所と同じく、絡み合つたフロワロが文明を巻き上げて地面を作り、独特な階層構造を織り成していた。

ムカデが大きく口を開いていた。それを追うように、花びらが舞っていた。多くの花

びらはムカデに吸い込まれているが、負傷した部位にも多くの花びらが引き寄せられ貼り付いていく。次々と階層がほどけ、ムカデに吸収されていた。

それを見ながら貴方は落ちていく。貴方は気づかなかつたが、花が散ったフロワロは苔に似た葉を残して緑色に薄く光っていた。赤い光の中を駆け抜け、過ぎ去っていく緑の光を背に。大きな質量を持つ星の力を直に感じることでできる素晴らしい時間でもあった。

その時間は瞬く間に消え去った。花が集まるたびに怪しい赤い光を放つムカデの姿は大きく変異していた。扁平だった頭部は、今では流線型になった。その名を表す無数の脚が伸び、薄い皮膚に覆われた小さな羽根が背中から生えてきていた。落下速度が目に見えて落ち、貴方との距離が縮んでいく。

ムカデの脚が、貴方を絡め取るように伸びる。背後から銃声が響き、数本の千切れた脚が視界から消えていく。数が減った脚を更にナイフで切り裂きながらその背に降り立つ。長く伸びた触手に似た脚は、沢山の節により自由度の高い機動を可能にしているようだった。傷口に花が集まり、淡く怪しい光に照らされる。傷つけるたびに光源を確保できることに気付いた貴方は、頭上からの援護射撃を受けながら、まだ柔らかい脚や羽根を根切りにしていく。

威嚇の鳴き声を意識から遠ざけながら攻撃を繰り返す。落下するのを見送るべきか、

貴方が考えながらも伐採を続ける。まるでジャングルだ。ぎやあぎやあと鳴き声が聞こえ、わらわらと群がる意志ある植物を切り裂いたことのある貴方の脳裏に、核まですべてが植物だった星を思い出した。貴方に遅れてマツチヨがムカデの背に降り立った。安全圏から援護したほうが互いに都合がよかったが、そうもいかないらしい。ムカデの飛行能力が徐々に上がり、速度が緩み距離が縮まった結果だ。マツチヨの筋肉に飛行機能はない。

「変<sup>レベルアップ</sup>異か。こいつはここで処分するぞ」

マツチヨがナイフで脚を切り捨てながら言った。貴方は射出元の人工天体名を挙げ、まだ来たばかりで状況がわからないと告げる。ああ、と納得したのかマツチヨが頷いた。

「掻い摘んで説明するが迷宮内の敵性生物はフロワロ、この赤い花が存在する場所に多く現れる」

マツチヨがムカデに貼りつく花びらを指す。ムカデの傷口に溶け込むように入り込んでいる。

「さらに面倒なことだがフロワロを取り込むこと<sup>レベルアップ</sup>で変異する。しかも、こいつらが暴れるとフロワロがばら撒かれる。こいつは羽根が生えて浮かべるようになった。更に飛べるようになるかもしれない。そうなることを確保した階層が再びフロワロで埋め尽くさ

れ、更に拠点である我々のすぐ足元に敵が闊歩することとなるし、もしかするとより凶悪に変異する可能性もある。だからここで処分する」

今の貴方にはこれと戦えるほどの火力はない。処分できるのであろう貴方が信頼する幸運の証である最高のスーツは沈黙を保ったままだ。

ナイフで解体するには手間が掛かりすぎる。大型で古典的な武器を持つてくるべきだったかもしれないが、突入の邪魔になつただろう。世界樹到着前に愉快的藻屑になるので仕方なかった。

人生は儘ならない。

「大丈夫だ。緊急用の備えがある……一応。ただし解凍に時間がかかる。足止めは頼めるか？」

マッチョが青い石を見せてきた。解凍、ということとはアイスクャンデーだろうか、貴方がそんな暢気なことは考えていない。

理解と了承の意を伝え、貴方はムカデの頭部に移動した。マッチョは返事を見ると先んじて飛び降りていた。大雑把に攻撃を繰り返し、ハゲが狙われないようにする。

ムカデが体を無理に捻じ曲げて貴方を狙う。軽やかなバク転を数度、完全に追撃を躲す。慣れない滞空から姿勢を歪めればどうなるか、貴方は知っている。

マッチョを追って、貴方もムカデの背から飛び降りた。

十数秒の浮遊感を楽しんだ後、貴方は衝撃に包まれた。赤い花畑に落ちたためだ。ここが最下層なのか、地面が抜ける予兆がない。目論見が外れた。

威嚇の声を挙げながら遅れてムカデが降ってくる。「親方！ 空からムカデが！」などと叫んだ少年はいなかったのは幸運だろうか。先にマツチヨが落ちていたのでそれはマツチヨの役目だったかもしれないが、見当たらない。その筋肉は巨大なムカデを抱えるためではなかったのか。

落下の衝撃でムカデが死んでいることを期待していた貴方は、僅かにため息をついた。花が舞い上がり、巨大なムカデの一つだけとなった頭部に集まっていた。忙しなく動いて、そして貴方をその円らで全く可愛くない瞳で捉えた。そして吠えた。威嚇の鳴き声だったそれは、僅かな知性を伴った唸りにも似ていた。

無数の触手がムカデから生えていた。マツチヨは大丈夫だろうか。触手に蹂躪されるマツチヨが映像に残っていたら消さねばならぬ、決心した。

貴方が見るのは動きだ。僅かばかり大振りにナイフを見せると触手の動きが鈍る。警戒した素振りから知性がわかる。本能と反射、そして知能。経験は皆無。追い立てる

動きと囲む動き。下等生物から小型の動物程度。怯えは見せず、逃げることもない。体格差から有利だと理解しているのか、逃げる様子はない。巨体を支えるはずの脚が長すぎるため、動けない可能性も視野に入れる。

ナイフにしか脅威に感じていないのは透けて見えた。貴方はナイフを見せて露骨に警戒した脚に関節技をかける。スーツにロックがかかっているようにも見える王者の技である。甲殻類を容易く解体できる貴方からして、生えたてで柔く節が多い脚はぷりぷりのプリンだ。嘘だが。ついでに普通の蹴りも使う。節の流れに逆らえば脚はぷりぷりのプリンだ。嘘だが。

触手を千切りながら頭部に近づく。そしてひたすらに変異して柔らかくなった頭部を殴り続ける。再生も反撃も貴方に痛痒を与えない。威力は伴っていない大ぶりの蹴りも追加する。

手に入れた知性はムカデに子犬程度の知能を与え、同時に恐怖も与えたようだった。本能に近い衝動で活動していた虫が得たその変異は、果たして割に合うのか。

背が膨れ上がるほどに花が集まっていた。そこから甲殻が盛り上がり、不協和音とともに裂けた。その裂け目から厚い皮膜で覆われた六対の羽根が姿を現した。羽ばたくと、ぬるぬるとした体液が飛び散り、花畑を溶かしていく。

あまりにも判断が、変異が遅い。頭部を踏み台にし、背を駆け抜け、生まれただばかり

の羽根の一对を切り捨てた。それが貴方の今の限界だった。体液によってナイフが溶かされ、攻撃の要を失った。羽根に纏わりついているのは強力な溶解液だった。

羽根と触手によって貴方は強かに打ち上げられた。先ほどまでムカデとともに居た宙へと引き戻された。スーツはロックされているため、無力に等しい。踏ん張ることもできない。凄まじい速さでムカデから離れていく。

ムカデが羽ばたきを始めた。赤い花が集まっている。今度は切り落とされた巨大な羽根とは違う、無数の小さな羽根を生やしている。触手も身体に巻き付き、より飛びやすい形を模索しているようだった。

安定性が高まっているのか徐々に浮かび始めていた。世界樹の内部から供給されているのか、赤い花は途切れない。頭上より絶えず集まるそれは赤い道のようだった。

ムカデの形状も変化していく。既に虫だった面影は遠く、爬虫類に近い形態となっていた。背には力強い主翼と、それを支える無数の小さな羽根。爪の生えた前足と、陸地にも対応した太く短い後ろ足。細く伸びた尾が、飛ぶことへの不安定さを軽減させていた。

貴方には時間がほとんどないように思えた。これ以上変異すれば追い付けなくなるだろう。飛行能力とはそれだけで脅威だ。貴方に機能している素晴らしいスーツがあれば六秒で処理できた。



ゆつくりと宙を落ちる中で、貴方はマツチョを見つけた。数百メートルは離れた場所で世界樹の壁面を構成しているフロワロに捕まっていた。ごてごてとした銃を構えているが、これまで使っていた銃とは異なっている。あれは重力砲だ。可変式のだろうか、貴方はロマンを感じた。

銃口から光を捻じ曲げて進む重力が放たれた。

ムカデだった物の半身を、花吹雪によつて作られた天への赤い階を、世界樹内部を、黒い空間が斜めに突き進んだ。

世界樹の壁面と地面には穴が空いていた。壁面の穴からは、青い吹雪が見えた。地面の下には真つ黒な花が咲いていることに貴方は気づいた。

観測の強制終了が迫っていた。科学によつて捻じ曲げられた空間が、補填のために空間を引き寄せる。そして、重力異常が起きた。

破壊の代償として、貴方は射線へと引き寄せられていた。狙いが甘かったのだろう、ムカデもどきに半身が残っていた。上昇した知性は欠片も感じない、情けない悲鳴を頭部が奏でていた。

世界樹の外から、青い風が吹き込んでいた。青い風が通った跡には結晶が残されているようだった。結晶化した壁面や花畑に何処からともなく花が群がり、穴を塞ごうと赤と青がぶつかり合っていた。花は世界樹を修復しようとしているのだろうか。

破壊された世界樹の地面へと引き寄せられていく。吹き込んだきた青い風も、舞い散る赤い花も。今の貴方は流れに身を任せることしかできない。そういうものだ。

世界樹の最下層だと思われた場所の更に下。

重力によって捻じ曲げられた空間によって引き寄せられたそこには地下空間が存在していた。

黒い花が咲いていた。

汚れ切った文明が乱雑に置かれていた。

六つの首を持つ闇色の獣が、貴方を見ていた。

疑似空間に相転移ユニットの設置を確認した。

ハイランドポートとの接続に成功した。

同時に世界樹他六地点の接続も観察した。

身体ユニットの起動を完了した。

補助脳停止期間のログの解説に成功した。

戦闘行動が可能となった。

世界樹内の面倒な機能によって私が万全でさえいれば、貴方が苦戦することなどあり得なかった。

『おはようございます。戦闘準備に移行します。スーツのロックボルトを解除。補助脳の接続確認……完了しました。ヒッグス・アンカーの切り離しを確認……疑似空間への固定完了。戦闘行動を開始します』

だって私は貴方の特別だから。

球形に近く、寸胴だったスーツの全身から拘束器具が外れる。貴方の体を覆うスーツはシンプルで、特徴的な部位はほとんど無い。視界がモノアイタイプであることと、一メートルある一对のV字に酷似したアンカーが浮いている以外は。

重さを操る最強のアンカーを貴方が使い、私が献身的に補助する。  
最強すぎる。

それはそれとしてログでも見たけど身体が死にかけてるのはやべーから早く帰さな  
いと、p、

七つの首を持つ黒い獣に砲撃を与える。ヒッグス・アンカーによって重さを調整された特殊な振る舞いを持つ粒子、それによる粒子砲を浴びせ続けた。幾つかの首を吹き飛ばしたが、すぐに再生していた。苛烈な攻めを、驚異的な再生力で防いでいる。

貴方は距離を保ちながら、敵の攻撃を遮断する。重力異常を利用した奇妙な黒い攻撃の解析が終わらない。未知なパラメーターで構成されているそれは常に変化を繰り返していた。

『……未知のユニットが接続されました。活動時間にマイナス三百九秒の修正。疑似空間に接続成功。活動時間にプラス……未知のユニットが接続されました。活動時間にマイナス六十三秒の修正。疑似空間に接続成功。活動時間にプラス……未知のユニットが接続されました。活動時間にマイナス百十秒の修正』

スーツには青い結晶が纏わり付いていた。舞い散っていた残り少ない赤い花で解凍する。解析の結果、星を覆う青いナノマシンと赤い花であるフロワロは対立の関係にあるようだった。互いに食い合わせることで、あの重力砲のように兵器の使用が可能となる。

通常の防御でフロワロは防ぐことができようだが、青いナノマシンは不可能だった。スーツの活動源が設置してある疑似空間に侵入できる特性を持っているのか、内部

へと流れ込んでくる。内部の結晶化を解凍するためにフロワロを利用すると、外部からより多くのナノマシンが群がることになる。また内部で根を張るフロワロを中和するためにナノマシンを投入し、一応の拮抗を作り続けるが、徐々にシステムの弱体化を許すのは当然のことだった。

貴方の力を万全に発揮できない私が不甲斐なかつた。

『疑似空間に接続成功。活動時間にプ……未知のユニットが接続されました。活動時間にマイナス二十五秒の修正。疑似空間に接続成功。活動時間に……未知のユニットが接続されました。活動時間にマイナス七秒の修正。疑似空間に接続成功。活動時間……ループ処理をバックグラウンドに移行。……撤退を提案します』

貴方に行動の修正を提案する。ナノマシンによる阻害とフロワロによる浸食が、エネルギーの供給量と保有量を上回りつつあった。これ以上の戦闘行動を行った場合、帰還が不可能になる。

負けはしない、当然のことだ。私がいれば貴方が負けるはずがない。けれど、勝ちきれない。

黒い花が持つ凄まじい毒性は常にスーツの防御を最大限に引き上げる必要があった。同時に攻撃も最大火力で無ければ花びらによる再生が上回ってしまう。

赤いフロワロよりも変異<sup>レベルアップ</sup>している。

厄介なのはそれだけでは無かった。貴方と諸共落ちたムカデもどきを、取り込んだことで羽根を得ていた。重力異常によって地下空間に縛り付けられていたが、レベルアップ変異がそれを許さなかった。羽ばたきで、空間をゆがめ始めていた。地下に縛られた獣は、その戒めを克服しつつあった。

貴方は理解しているだろう。私が此処で縫い止める必要があることを。貴方はそれを指示しない、何故なら私が特別だから。

代わりを持てるほど安くない。代わりを作れるほど簡単ではない。そして、私はこの世界樹で最も無意味な素晴らしい貴方の補助パーツ。

貴方の補助ができる、それだけで私は幸運だ。

貴方が帰還できる手伝いができる。

私たちは互いに幸運だ。

『緊急避難プロトコルを発令しました。承認七、否認三。実行します』

疑似空間に格納されていた補助機が分離する。主機と補助機による戦闘も可能、合体機能有り。貴方のロマンの結晶は、私が操る青い結晶と化していた。関節はほとんど動かない。機能はほとんど制限されつつあった。

最軽量状態となったアンカーの一つで貴方を打ち上げた。途中でぶら下がり健康法を嗜んでいるマツチヨも拾う気づかいセットだ。情報とサンプルを持ち帰らせた。今

の技術で私が帰還したとしても起動することは無いからだ。

重力異常を貫くほどに、アンカーへと重さを集約する。

壊れつつある私ごと此処に縛り付けておく。

いつかまた私が目覚める時、それは貴方が私を自由に使える時がいい。

それまで私は此処で留守番する。

また貴方と出会う幸運のために、あの日のように幸せを夢見て。

超質量の私と混ざる七つの首を持つ闇色の獣が、見えぬ天に咆哮を捧げていた。

— 8 —

十日ほど眠っていた君がゆっくりと瞼を開けて目覚めて半日が過ぎた。これまでの経緯などは説明されたため、これからの未来について話し合うことになった。

「さて、分かっている通り君の命は機械によって補われている」

君は頷いた。当然のことだろう。

「この世界樹で取れた代替物を入れたが、それでも十全とは言えない。何故かつて？ 技術と理解が足りないからさ。そして樹上の拠点近くでは素材が脆すぎる」

赤い花である『フロワロ』や、星を覆う青いナノマシン『ブルースファイア』によってすぐに劣化することを告げられた君は、深く頷いた。意味がわからないほど愚かではないのだろうか。

つまるところ、死にたくなければ迷宮を迅速に攻略しろ、君はそう言われているのだ。「君たちが持ち帰ったサンプルから多くのことが得られた」

情報を食べて育つ花『フロワロ』、エネルギーを奪う『ブルースファイア』。

迷宮内部に発生した敵性生物はフロワロの吸収量によって変異し、より強く強化されていく。個体によって吸収量は異なるが、より多量に取り込める希少個体も確認されていて、ムカデもその一種であること。

また、研究では大きく変異を繰り返す敵をF・O・E (Field Overpowered Enemy) と呼称したこと。

言葉をうまく発することのできない君は頷いた。殊勝な態度だ、素晴らしい。

「君が情報を得た出会った地下世界の黒いフロワロだけだね。希少個体か、またはF・O・Eだと思われる。そいつらで構成された個体を、畏怖と敬意を持つてドラゴンと呼ぶことにしたんだ。そして世界樹を支配していると思われる支配者をセブンスドラゴンと呼ぶことになったんだけど。他の世界樹でも確認されているのも理由にある……。が、遺伝情報を我々の七倍以上保有していることも含まれている。それくらい素晴らしい



しい素材を手に入れば君も自由を取り戻せると、私は思うんだけどね」  
君が挑む敵は強く、未知だ。

簡略化された装備を見せると心もとないかもしれない。

観測器も担っていた機械を失った君は、以前よりもずっと不便するだろう。

常に君から付かず離れず、浮遊して補助を行っていた機械は無くなってしまった。

維持できるほど君の身体に余裕はなく、作り直せるほどの技術も素材も此処にはない。

だが、問題は無い。

迷宮に潜ってアップデートを繰り返すことで、君はまた強くなれるのだから。

「それで次はいつ潜る？ 私も同行しよう。観測も検分も任せてくれよ。絶対に素晴らしい世界が広がっているからね！」

そして君は仲間の手を借りて、欠点を補うのだ。

すぐにも素晴らしい世界への冒険をまた始めるために。

「あ、でも戦闘はちよつと自信無いんだ。まだって意味だけどね」

理解している君は頷いた。

互いに補えばいい。

そういうものだ。

## — 9 第零階層 避 ■ シエ ■ タ ■

貴方は故郷の形すら知らない。

星々が放つ弱い光を横目に、冷え切った昏い宇宙より貴方は飛び出した。

宇宙に浮かぶ塵屑デブリを物ともせず、予定通りの速度と角度を伴つて。

貴方が生まれるよりも遠い過去に捨て去つた星へと向かう。

荒廃しながらも美しく白銀に輝く衛星は星に隠れ、太陽の強い輝きを背に受けて。

闇と蒼の狭間、大気圏へと突入した貴方は灼熱に包まれた。着用している探索用のアシストスーツが、凄まじい速さで空気を圧縮したためだろう。極限環境突入用の機能が展開したためスーツが膨らみ、貴方に軽い圧迫感を与えた。

熱を振り切ると、遙か遠い大地に蓋をするように境界を思わせる厚く黒い雲と、その表面を奔る紫電の嵐。

殺人的だった加速の中、落下傘が花開く。その刹那、劇的な減速が始まった。悍ましい速度変化すらも貴方には慣れたものだった。

緩やかに落下する貴方のバイザー越しの眼下には、天空に浮かぶ様に存在する拠点『ハイランド』の姿が映し出されていた。

拠点『ハイランド』、高さ一万メートルを超える巨大な一本の樹である『世界樹』の樹上を切り拓くことで建造が進められてるのだろう。

宇宙より降下し、やがて貴方は拠点へと到達する。

貴方の目的は単純だ。

拠点の発展を支援すること。

世界樹を探索すること。

その結果、遠い過去に失った故郷へとたどり着いた。

そんな貴方の生命は機械で補われている。

利き腕は肩から指先、右脚は膝から下、胸椎の半ばから腰椎を全て、幾つかの内臓、左の眼球、そして脳の部分的な機能。

貴方は人でありながら、機械でもあった。

貴方の脳の一部が壊れ、補助無しでは人としての活動すら満足に行えない。

思考は淀まず、澱が溜まり、しかして謳えず。

その傷は運動中枢のみへの影響とは限らなかつた。

貴方はかつて声を失つた。

自らの力だけで口や頬の筋肉を動かすことができなくなり、機械で構成された補助脳のサポート無しには簡単な単語の発語以外は不可能だ。

貴方はかつて感情を失つた。

たつた独りでは何も求めず、何処へも行けなくなつた。

補助脳が脳を支えない限り、延々と機械的な作業を繰り返す。

または虚ろのまま腐つた肉となるだろう。

貴方はかつてすべてを失つた。

代わりが無ければ、それすらも分からない人形になつていたに違いない。

だが私がいた！

かつて貴方の人間としての中枢は致命的なまでに損傷した。

命を保証してくれる機能は壊滅した。

それは貴方の心身を変えた。

それは貴方の才能を変えた。

それは貴方の運命を変えた。

しかし、今の貴方は何処までも行ける。

貴方足らしめる個性の極致が生を肯定し続ける。

貴方専用の叡智がその命を補助し続ける。

だから貴方はどこまでも幸運だ。

私も幸運だ！

断言できる。

貴方は才能そのものだ。

だから貴方は誰よりも美しい。

貴方には誰よりも魅力的だ。

だから貴方は何処までも歩める。

貴方の歩みを止められるモノは何処にも在りはしない。

だって私がいる。

私がいれば貴方は大丈夫。

私は貴方の特別だから。

貴方は私の特別だから。

貴方も私も幸運だ。

私は獣で、獣は私になった。

強く。

ただ強く。

誰よりも強く。

私は此処で待つている。

貴方が私になる日を。

私が貴方になる日を。

この世界樹で。

役立たずでなくなった私が！

このくろいからだであってまってるから







## ワートリ 1

— 1 —

鬼を知っているだろうか。

千年以上前に生まれた最初の鬼『鬼舞辻 無惨』の血を分け与えられた怪物たちのことだ。

常軌を逸した力を持ち、人間を殺したり食べる残虐な存在だ。

強い個体ともなると血鬼術と呼ばれる特殊な能力を使ってくることもある。

人間が戦うにはあまりにも強すぎる敵だ。

そして、無惨はあの炭治郎の家族を殺し、禰豆子を鬼に変えてしまった俺たちの仇でもある。

無惨を倒すため、修行の日々を送り、鬼を退治して過ごしている。

鬼を退治と言ったが、人間の身ではそれがどうしてなかなか難しい。

鬼は不死に近い。

だが幾つかの弱点もある。

そこを突くことで人間が勝つこともできる。

鬼の弱点とは日光を浴びると消滅し、藤の花を嫌う。

そして、特別な鉋物でできた刀で首を切り落とすことだ。

首切りに命をかけた集団が鬼殺隊だ。

俺もそこに所属している。

鬼殺隊で反吐を吐き、血尿を垂らす地獄の訓練を経て、俺は鬼を屠る技術を手に入れた。

そう、紫外線照射マシンだ。

とりあえずこれで照らしておけば大体の鬼が死ぬ。

あと日輪刀で首を斬れば倒せる。

つよい。

暇なので俺の日輪刀を紹介しておこう。

これが俺のデスザウラー日輪……あれ？

俺のデスザウラー日輪刀はどこ？

どこ？

「とりまる！ 俺のデスザウラー日輪刀がない！」

「デス？ 日輪？ え？ 何が無いんですか？」

「鬼を屠りし我が刃を振るいし我が刃の担い手は我が刃を失いし時に何を考え我が刃で何を成すのか……」

「同じ表現を使いすぎなのは。遊んでるようならここは任せて俺は他の場所に行きますけど」

「待て、結論を急くな。お前の悪い癖だ。例えば料理漫画だとしたらまだ俺は「おあがりよー」とは言つてない。料理を盛りつけた段階だ。だがそう、簡単に言えば刃を失った」

「……失ったならもう一度出せばいいと思いますけど、弧月」

「は？」

「話は変わるけど、ろりまるってあだ名だったらなんか卑猥……うそうそ！ 見捨てないで、京介え!!」

その時、俺は鬼を見た。

人間では敵わぬ存在。

それは烏丸京介という鬼じゃった。

おゆはん係を変わったら助けてくれた。

人間も捨てたもんじゃねーな、へへ（友情）

— 2

俺が所属するボーダーはネイバーとなんちゃらかんちゃらでトリガーでうんちゃらかんちゃら。

わからない人はまず原作を読んだほうがいいと思う。

原作を知らないけど買うのが嫌だつて人はしようがないから一回上までスクロールして、「小説検索」タブをクリックし、「原作」の一番下までいけば「ワールドトリガー」つてあるからそれを読めばいいと思います（他人事）

「総合評価順」にしておけばたぶんいい感じになると思う。

ほら、勘違いされてるやつとか中二病のやつとかループしてるやつとかあるし。

そっち読めばよくない？

そして俺は21gのやつ読むからこのお話はこれで終了ですな……。

く完結く

「つてわけで俺のサイドエフェクトに言ったわけよ。くうく疲れましたw これにて完結です！つてね」

「なるほど。それでサイドエフェクトはなんて言ってきたんですか」

「どうせまたエターだろうが死ぬ！つて。くそ……力が……俺に力があれば……」

「力が欲しいんですか？」

「ほしい……！ バレンタインデーでチョコの代わりにカレールーを貰った残酷な現実を変える力が……！ あと専用の可愛いオペレーターが……！ あ、いや、文句じゃないです。すいませんすいません」

「あ、ネイバー反応ですね。行きましょう」

「え、投げっぱなし？ 力をくれないわけ？ つてどうか俺にはオペレートされてないんだけど？ いやリーダーには反応があるけど……。不満じゃないです。静まれ、静まらたまえ！ さぞかし名のあるオペレーターともあろう御方が、なぜこのようにあらぶるのか！」

「もう力を持つてるじゃないですか。それ以上は身を滅ぼしますよ」

「っ！ なるほどな……。とりまる、お前の慧眼と100万ドルの夜景に乾杯」

「ところで今日のトリガーは何ですか？」

「Double lighting」

「え……?」

「太刀川にスペルを見せたら「ドウ、ドゥブレリグヒトニング?」って言ってくれちゃつてさあ。頭に来るよねー」

「え? なんて?」

「だからさー「ドウ、ドゥブレリグヒトニング?」って言ってきたんだよね」

「え?」

「とりまる、モテるからつて難聴系は今流行らさないんだぜ? だぜー?」

「いや、難聴じゃなくて頭が理解を拒みました」

「とりまるすら見捨てる悲しき無勉モンスター太刀川、か……。ネイバーが持つ未知の技術でも救えない命があるんだな……。俺はキメ顔でサイドエフェクトにそう言った」

「先に行きますね」

「おい待てエ、先に行くんじゃねえ。それぞれの今後の立ち回りも決めねえと……。俺は今日移動用を持ってないから見捨てないで、京介え!! ……マジで行っちゃったじゃん」

「っらい。。。」

「あたしはひとりとおくからドゥブレリグヒトニングでえんご。。。」

あ、そうだ（唐突）

俺の華麗な一日を紹介していくね（唐突）

朝は早めの時間を起きるように心がけている。

独り暮らしをしていると寝起きの時間がバラバラになるかもしれないが体調を崩すと大変なのでやはり同じ時間に寝起きするのが重要だぞ太刀川あ！

平日の内2、3日に講義を集中させているので日中は大学だぞ太刀川あ！

防衛任務がある日は玉狛にいるぞ太刀川あ！

講義の後や、土日のどちらかは将来のためにトリオンの研究室で俺はお世話になって  
いるぞ太刀川あ！

定期考査が近かったらトリオン体で勉強したりもするぞ太刀川あ！ ……太刀川？  
炒飯がなぜここに……？ まさかフアントム炒飯か？ 太刀川、おまえ、消えるのか

？

—— 人 人 人 人 人 人 ——

∨ 太刀川の死 ∨

？ Y ^ Y ^ Y ^ Y ^ Y ^ Y ^ ？

それで時間があればB級に上がった隊員と訓練して「さすがだぞ！ 両手にトリガーをセットできる重要性をばっちりわかっているんだな！」とか「オプシヨントリガーの重要性をすでにわかっているのか!？」と褒めて過ごす。

彼らが育つていつか俺を養ってくれる日が来るのを楽しみにしてるぜ！

なお褒めて伸ばすトレーニング・褒めトレは一部から不評の模様。

そして夜は帰って寝ます（真面目）

おゆはん作るのめんどいから炒飯でいいか。

あれ、炒飯なんて作ってたっけ……？

—— 人人人人人 ——

∨ 突然の死 へ

? Y ^ Y ^ Y ^ Y ^ ?

い。関係ないけど太刀川の単位がやばい、迅のサイドエフェクトがそう言っているらしい。



なお太刀川は「レポートを出すか出さないかは俺が決める」とキメ顔で言つて遠征に出でいった。

帰つてきたら結局提出の義務が生じるから出すしかないぞ太刀川あ！

— 4

トリオン体は実は結構自由が効く。

トリオン体ってなんやねんて人は原作か他の二次創作でも読んで。

文字数に困ったときに水増しするために説明が入るからわかりやすいぞ。

ガチレズとかいたらちんこ生やしてたんかなあ。

そうなるT S 願望が居たら女体化を望むのか？

トリオン技術の闇を垣間見た。

そんなわけで俺のトリオン体は着流し、長い銀髪のパニーテール、金と銀のオツドアイという中学生の心を驚掴みに行く無駄スタイルオプションを付けてもらった。

無駄スタイルになると無駄にトリオンを消費し続ける無駄機能。

そうまでしてでもB級に上がった若い学生に黒歴史を芽生えさせたいし、二刀流弧月で相手することは絶対に欠かせないよなあ!?

え？

防衛任務？

腕まくりしたジャージ姿だけど……？

1人目は4000点を取ってB級に上がったばかり？

二刀流弧月で相手してやろう。

隙を突かれて攻略されたので「さすがだぞ！ 両手にトリガーを持った時の欠点をわかつているんだな！」って感じで褒める。

将来に期待ですねえ！

2人目は4500点を超えたのでこのまま長所にしたい？

じゃあ武器と盾でいくね。

うまい具合に武器を散らしながら盾を弾かれ最後の奇襲も防がれて撃破されたので「ダボ付いた服を着ている相手の暗器を防ぐなんて戦い方がばっちりじゃないか！」と褒める。

視野の外からスコープオンを防ぐとかしゅごいと思った（こなみ感）

3人目は……5000点？

スパイダーを強く張ってエスクードとグラスホッパーで相手を何度も射出して八つ

裂きにした。

5000点超えたら他とやれ。

全然関係ないことだけど、一昨年くらいの風間隊がB級のとときに三流の悪役みたいに脅して弧月を舐めながら「斬りてえ……斬りてえ……」ってやったら馬鹿にされたから「弧月ジュルルルルルルルルルルルルルルルル!!! ジュポ!!ジュポ!!! ジュブブブブブ!!! グッポ!! グッポ!!!」ってやったら頭を貫いて自滅してしまっし菊地原が吐いて倒れたし変な騒ぎになって謹慎になったのを思い出した。

— 5

どうでもいいことだが俺はトリガーの戦闘経験だけは豊富なのでダメージ管理が上手い。

頭や心臓あたりにある急所さえ無事なら意外と戦闘に問題が無かったりする。

あとしようもないトリガーの使い方とか考えて過去に試したりしてる。

いくつか例を挙げてみよう。

掠つてもいい攻撃を受けてわざと切断させて油断を誘ったり。

四肢切断させたあと関節が無事なら両手両足スコープオン人間として「太刀川あ！」とカサカサと襲い掛かったりできる。

なお女の子から虫けらみたいに扱われる模様。

スコープオンは好きな場所から生やせる。

口と目からスコープオンを出して前が見えなくなつて負けたりする。

なお相手はトラウマを負つたし女の子から虫けらみたいに扱われる模様。

他にも両手レイガストの研究中に、いつものジャンプの2倍飛ぶことで威力が2倍！

両手のスラスターを起動することでさらに2倍！

そしていつもの3倍の回転を加えることでお前のダブルシールドを突き破る！

「二宮あー」つてやったたら全然シールドを張つてないし、未来の諏訪さんみたいな状態の準備中メテオラに突つ込んで爆死した。

あとはカメレオンCQCと称して超近距離体術を研究したこともある。

近すぎて武器を振るえない距離で抹殺する、という目的だ。

トリオン体になると勘が良くなるのか、いまいち効きが悪かった。

レーダー強化で不利になるし、テキストに弾幕ばら撒かれるだけで不利になるし、囲まれると不利になるし、ちよつと距離を置かれて武器を使われたら不利になる。困

あと気づかれた状態マウント取つたらひたすら「太刀川あ！」と殴りつけて他のトリ

ガーでトドメを刺したりするので印象が悪い。

ゼオライマーとかビッグオーを参考に、両手を広げながらレイガストのブーレストを起動させ、胸の前で拳を合わせることで潰す必殺技を考えた。

これならシールドすらも貫く。

結果は「太刀川あ！」と攻撃したら伏せて避けられ、設置された両面グラスホッパーを叩いたことで両手が吹っ飛んだところを真つ二つにされた。

そもそも近距離どころではないし、これはダメですね（冷静）

あと転向したばっかの荒船をグラスホッパーピンボールで河に落としたり流されて消えたことがあった。

やはりグラスホッパー……！！

グラスホッパー体当たりがすべてを解決する……！！

## 6

迅から連絡があつた。

研究室に行くからと断つたが、急ぎで話したいことがあるようだ。

ネイバーか！

サイドエフェクトで読んだときもよくネイバー絡みだった。

近々来るネイバーについてに違いない！

「トリガーオン！<sup>ベイルアウト</sup>緊急脱出！」

これで本部にショートカットできます。

ワートリRTAにおいて必須技とも言えますね。

イベントやムービーのカットにも使えるので皆さんも練習しておきましょう。

しかし実際に使ったらどうなるのか。

俺が実践してみましよう。

なんと説教の後に謹慎でしたね、おつらい。

(ノ、ノ、ノ) アチャーって顔をした迅と合流。

そもそも迅は玉狛支部にいたし、話はネイバーとの付き合い方や思想についてだった。

俺はバリバリの城戸派だし、拉致とかよくないからみんな殺したほうがいいと思う

(漆黒の殺意)

まあそれは俺の個人の意見だから押し付けないし、現実的でもないから付き合い合える相

手とは付き合ったほうがいいんじゃないの。

ネイバーに一方的に攻撃できるなら攻撃しまくるけど。

でも相手が一人の子羊状態だったら一方的に殴られる恐ろしさを教えていたぶると思う（純粋な殺意）

俺が無力の間、とりまるには他の隊に世話になるように言っておいてくれ……。

そしてこなみん、お前に教えたじゃんけんの必勝法だが、鉄砲は反則だから使わないようにな……。

レイジさん、特に何も言うことはない……。

他のみんな……また明日も来るから特に言うことはないよ……。

あと暇な時間が増えるからサイドエフェクトの強弱を調整する研究するね……。

— 7 —

「基地がそんなに珍しいんだ？」

「うん、珍しいよ。……誰？」

「おいおい、知らないのか？ 自己紹介は自分から。常識だぜ？ だぜー？」

「……ふーん？ まあいいよ。おれは空閑くが遊真ゆうま」

「空閑ア……ネイバーか？　ちなみに名前を伸ばしたときに小さいアが付くとネイバーっていう判別法だ。常識だぜ」

「おれはネイバーだけど。……あんたの名前は？　あ、嘘はもういいから」

「嘘じゃないんだなあ、これが。口から出まかせを言って距離を測ってるわけ。で、俺の名前は織衣おりい。主早つかさ。よろしくね、くがにゃん」

「くがにゃん？」

「さ、早く車椅子を押ししてくれたまえ。キミも学校に遅刻したくないだろう？　道すがら色々教えてやろうじゃないか」

ネイバーと出会ったので「お前を殺す……」デデン！「何なのこの人……」って感じに交流した。

そのあと本部に呼び出された。

うーん？

うん！（閃き）

警戒区域で一般人を保護したのも、中学校でC級隊員がバトルしてる横でネイバーを撃破したのも、すべて俺のおかげじゃないか！



謹慎中じゃないかって？

……。

ああ！

話は終わったので失礼する。

報酬は謹慎を解除するだけで構わない。

おい、俺を囲むんじゃねエ。

除隊と記憶処理はやめろオ！

ア~~~~!!! (汚い高音)

くうく疲れましたw これにて完結です！

## ワートリ 2

— 1

上層部のみんな、おっはこんばん〜（笑）（\* 艸、）（ ; ∇ ; ）  
上層部の皆ちゃんも今日は徹夜でお仕事カナ（? - ??）ノ??? !? ? !?  
ゆっくり、争って♡♡（ ^ 3 < ）  
オヤスマナサイ（? ∇ ? ）

— 2

つてわけで上層部の会議を乗り切った。  
内容が気になる?

原作もしくは二次創作読めばいいじゃん（笑）  
ほら、勘違いされてるやつとか中二病のやつとかループしてるやつとかネイバーにド  
ナられるやつとか読めばいいじゃん（笑）

そっち読めばよくない(笑)

俺は読んでないけど(笑)

独りグランドセフトオートと呼ばれた俺が読んでるわけねーんだよ!!! (呼ばれてない)

そして俺は21gのやつもまだ読んでないからこのお話はこれで終了ですね(笑)

〜完結(笑)〜

「織衣さん、少し話があります」

「ふふ、三輪が話しかけてくるなんて珍しいじゃん。もちろんいいですとも。ん？ 今もちろんって言った？」

「……近界民<sup>ネイバー</sup>について聞いてもいいですか」

「ヨシ！ 興味を持ったなら説明してあげよう！ 撃破したネイバーをどうするのか！ 解剖や分析を行った後、トリオンとして再利用するのだ！ 未知の凄いエネルギーをリサイクルするなんて、ボーダーはすごいぞ！ かつこいいぞ！」

「……昨日の話ですが、警戒区域でバラバラになつてた大型近界民<sup>ネイバー</sup>は」

「俺がやったよ」

「……三雲は自身がやったと」

「さつき議題に挙がって解決しただろ。混ぜ返すなよ」

「……あの場でのトリガーの反応は」

「三輪。俺がやって、その勝手のせいで謹慎が延びた。そうだろ」

「……」

「三輪。考えて言葉を選べよ。俺がやってなかったら謹慎は解けてる。だが実際はそうならなかった。それが真実だ」

「……はい」

「もう、三輪が変なことを言い出すからお腹減ったじゃん。帰るから車椅子押してくんない？ ほら、はよ」

「いえ……城戸司令と話すことがあるので」

「そうなんだ！ じゃあよろしく言つといてくれ！」

「はい、伝えておきます」

「三輪。俺が何を考えているかわかるか」

「……いえ」

「そう！ そうなんだ！ それならいいよ！ わからないよな！ 五手は遅いけど。」

「……あ、五手は後手後手だな！」

「?」

「マジのハテナはやめーや」

— 3 —

説教系オリ主になってしまった俺は、気分転換のために本部の外に出た。

そこでハンバーガーを食べてたくがにゃんが居たので合流した。

ランダムで開くイレギュラーゲートを調べるために、夜の学校へと侵入するらしい。

イレギュランダムゲート……くどいか。

それはそれとしていいね！

夜の学校、それは探検の魅力。

夜はいいぞ、環境が整っていて無駄が少ない。

それはそれとして明け方はあまり好きじゃないな。

くがにゃんのお目付け役のレプリカ先生が、イレギュラーなランダム……イレギュ

ラーなイレギュラーゲートの心当たりがあるらしい。

レプリカ先生って何って気になった人はググるか玉狛に所属するオリ主物でも読め

ばいいじゃん。

わかりやすく言うとか黒くてかわいいバニーちゃんだぞ☆  
ゲートか。

何もかもが興味深い……。

あれは俺が自衛隊だった頃に異世界に召喚されてエルフと恋をした話だ。  
嘘だ。

ゲートはあれだ。

マインクラフトで敵がポップするあれ。

敵が出てくる門だ。

いろいろな種類があるので何とも言えないが、ネイバーが座標指定で飛んできたりするので大抵逆に侵攻できない不愉快な門でもある。

ベイルアウトすると座標にトリオンが飛んで行って、残っているのが軌道だけのため捉えられないのと一緒に。

知らんけど。

ワートリの不幸なオリ主は大抵これで親兄弟が死んでるし、なんなら攫われてる。

罪な門だぜ……。

だが俺は違う（一味違うオリ主）

家族のほとんどが行方不明なだけ。

なんだ、エロゲかよ。

ヒロインが引つ越してこない不具合をさっさと解消して（他力本願）

だったはずなんだけど。

行方不明じゃなくて死んでることがサイドエフェクトでわかるようになった。

サンキューくがにゃん。

ぜんぶ嘘じゃない。

ああ〜、それはそれとして結局陳腐なオリ主になっちまった〜、

でも転生してないから紙一重でセーフ。

なりてえ〜……個性的オリ主になりてえ〜……。

俺の個性なんてトリオン体に慣れきってて、解除してるのに建物の上階から生身なのに飛び降りて開放骨折したせいだからなあ。

心も体も死ぬほど痛いぞ☆

くがにゃんも目的の物が見つかったらしいので、見てて飽きてしまった俺は帰って寝る。

朝まで付き合ってもいいけど出来ることないし。

学校に潜伏してるイレギュラーゲート発生装置の虫を駆除するくがにゃんに別れを

告げた。

別れを告げたけど車椅子を押すくがにやん。

ははーん、さてはお前いい子だな？

俺の弟になれ!!!

そして俺はお前の兄となるだろう!!!

いや、嘘ついてないから。

——4

ボーダー隊員総出で仕事があるらしい。

何故かわからないなあ。

何故かわからないけど謹慎しててちょうど良かったので城戸司令に俺の親族の行方不明者は探さなくていいと伝えた。

これでよかった。

俺も当てもなく防衛中に探し物をしなくなる。

嘘じゃない。



くがにゃんが自転車に励んでるとーチャン・チーと出会った。

チャン・チーはアニメだと太ももがえっち、俺はキメ顔でサイドエフエクトにそう言った。

チャン・チー、略して千佳ちゃんだが、優しくていい子なんだぜ。

くがにゃんに自転車の乗り方とか教えてくれるし、寒中水泳もキメさせてくれた。俺？

俺はすでに勝ってるから。

俺の車椅子は二輪、自在に操る、勝負にすらならないね。

くがにゃん、自転車と競争を……はっ！

(脳内太刀川「車椅子は競争用じゃないぜ」)

(俺「お前そんなこと言うほど頭良くないだろ太刀川あ！俺が本気で操った車椅子ならばこの程度の自転車!! 追い抜いて見せるさ!!」)

(俺「本当に?」)

(俺「ち、千佳ちゃん!!!」)

(俺「車椅子での移動覚えてる?」)

(俺「覚えているとも!! 今まさに俺が探し物で使って慣れている車椅子!! だからこうして——」)

(俺「でもさ。遊真君が車椅子を押ししたときも動いていたよね」)

(オレプリカ先生『ユーマが決めることだ』)

(俺「車椅子を押ししたことがあるのかな? 有り得なくはないね。でも彼はネイバーだよ? 一番可能性が高いのは?」)

(俺「誰でも押せる」指パチン)

(オレプリカ先生『この間0.01秒』)

優秀な俺の脳で計算した結果、競争は延期に……誰もいねえ!

警報鳴つとる!

小型のレプリカ先生が警戒区域に千佳ちゃんが走っていったので、くがにゃんが後を追いかけたのだとか。

車椅子でダツシユ?

現実的じゃないな。

こういうときは頭のいい少年に頼る。

発想が大事だ。

最高に頭のいい作戦を立てて実行するのが知将の役割なのさ。

知恵が一番大事つてな。

さあ、俺を後ろに乗せて自転車を全力で漕ぐが良い三雲隊員!!!

知恵より筋肉だ。

筋肉……。

筋肉、筋肉がすべてを解決する……。

— 6

警戒区域でネイバーに襲われてた千佳ちゃんを救出に成功した、俺以外が。

だって俺は足が悪いし。

車椅子置いてきちまったぜ。

せつかくなので千佳ちゃんのお悩み相談室が開幕した。

ネイバーに襲われやすいらしい。

それは蟲のせいですな……。

いや、うん、トリオンね、トリオン。

ネイバーからしたら貴重な資源だし。

レプリカ先生がトリオン量を測定できるらしい。

試しに測定した三雲隊員は少な目だった。

ただまあ、成長期なら量も増えるし、そもそも戦闘体が作れる時点で一般と画した天才だと思うけど。

隊員の中では少ないとも思うけど、一般人の中でトリオン持つてる人と比べたら超多い。

少なかったらぶち抜かれて死んだりするから幸運。

トリオン量で言うると甲子園で4番打ってたけどプロ入ったら二軍でもダメだった、みたいな悲しい感じかもしれない。

天才同士の争いで生き残るのは本当の天才のみ……。

量が少ないなら燃費がいいオプシヨントリガーをちよつと使いつつリーダーを強化してサポート、一度出したら固定しておける近接トリガーで嫌がらせって感じだろうか。

シューター？

足りない。

眼鏡だからオペレーターかもしれない。

千佳ちゃんのとりにオン量はバイオオの豆腐クリアの豆腐よりでかかった。

わかりにくいって？

じゃあマインクラフトでスタートしたときに作る豆腐住居くらいかな。わかりにくいって？

瞬間俺の脳内に溢れ出した存在しない記憶。

俺「俺、高田ちゃんに告白する」

《突如始まる漫画》

サイドエフェクト「動くな、ボーダーだ」

……どうやら俺たちは“親友”のようだな（涙鼻水涎）

そういうわけで三輪隊が現れた。

え？

漫画が読めなかった？

あー、異なるプロトコルだからダメみたいだ、文字だけなんだなあなるほどなあ。

あきらめて想像して、呪術廻戦を。

じゃあ話を戻すけど三輪は千佳ちゃんをネイバーだと思っただけ、草。

それは本物を炙り出すための嘘だよなあ？

それはそれとしてどうせ負けるんだから無駄なバトルは俺の人徳で省略だよなあ!?

「立ち話もなんだからお茶でもしながらにしよう、三輪。俺の弟の遊真だ、ユーチューー

バーを目指してわざわざ来たらしい。ユーマ、こっちは三輪、俺のファースト弟だ」

「……織衣さん、遊びじゃないんですよ。現場も抑えています。らしくないじゃないですか、城戸司令には報告しませんから引いてください」

「遊びで終わるって。奢るから俺にはベントイバナラクリームフラペチーノエクストラホイップキャラメルシロップに変更エクストラシロップキャラメルソース追加エクストラソースチョコチップ追加エクストラチップ。くがにやんにベントイバナラクリームフラペチーノノンバナニアドホワイトモカシロップアドヘーゼルナッツシロップウイズチョコレートチップウイズチョコレートソースエクストラホイップブラベミルク。千佳ちゃんに抹茶クリームフラペチーノシヨートエクストラホイップインホイップエクストラパウダーキャラメルソース追加。三雲隊員にベントイノンテイーマンゴーパッションテイーフラペチーノアドホワイトモカシロップアドホイップクリーム。米屋、おまえには俺を本部に運ぶ仕事があるから特別にトウーゴーパーソナルリストレットベントイツーパーセントアドエクストラソイエクストラチョコレートエクストラホワイトモカエクストラバナラエクストラキャラメルエクストラヘーゼルナッツエクストラシロップエクストラチャイエクストラチョコレートソースエクストラキャラメルソースエクストラパウダーエクストラチョコレートチップエクストラローラストエクストラアイスクエストラホイップエクストラトッピングダークモカチップクリー

ムフラペチーノで古寺と奈良坂にグランデノンファットミルクノンホイップチョコチップバナクリームフラペチーノだ。頼んだぞ。三輪はどうせいなくなるからいら  
ないよな。あ、やばい吐き気がしてきた。誰か背中さすってくんない?」

疑問符を浮かべる面々を見て、あれ、もしかして俺またスタバ太郎やっちゃいました  
?

1分後にバトルが始まっちゃう。

なぜだ。

なんでみんな争う。

ここは「織衣さんほどの男がそういうなら引こう……」「ま、織衣さんが言うなら仕方  
ねー」って展開だろうが、俺のメンツを潰すなよ。

いつ終わる!!

いつ終わるんだよ!!

いつ戦いが終わるんだよーっ!!! (ロックマンエックス)  
あ、数分もしないうちに終わるか。

^ q ^

見て! 俺が笑っているよ





知の攻撃には強いが未知ならグラスホッパーとかのオプションをどっちかの構成に欲しかった。それはそれとして他の対応は悪くないし、戦術もヨシ！」

「なんで織衣さんは見てるだけなんですか……。そいつは近界民ネイバーなんですよ！ 敵が目の前にいるのに！」

「見るだけって、そりやあ謹慎中だから鳥使えないし。釣りするときはエサを垂らす、殺したいならベイルアウトのない黒鳥から。常識だよ。俺も保証する、だからそろそろやめときなさい」

「やめとけだど!? 近界民ネイバーは敵だ、やめられるわけがない！ だって姉さんも……」

「姉は亡くなった、そうだろ。それが真実だ。理由にしたら後でつらくなる、お前は優しい子だよ。ボーダーだって正式名称は境界防衛機関、トリオン兵と戦うのが目的だけど排除を務めとはしていない。入った目的がなんであろうとそこは変わらない。城戸さんが謳ってるだけ」

「関係ない……。そんなの関係……」

「今日はそんなところかな。次から減点を減らすための助言をしてあげよう。空閑ア……は察しの通りネイバーだ。言った通り名前を伸ばしたときに小さい「ア」が付くとネイバーっていう判別法だ。三輪ア……ネイバーか？ 違うよな。でも今は俺もお前も同じような暴論で動いてる。だから互いのために今日は休みなさい。それとも昔の

ように俺と茶を飲みたいかな？」

つて感じで三輪に説教してたら迅が来ちゃった。

そこでえ、迅があ、なんかあ、ここに来る前にい、言ったらしくてえ……不幸に つな がつた。

三輪が「織衣、あんたも裏切ったのか……。近界民は敵なのに……。」「つて勝手に裏切 られた顔してバイルアウトしていった。

好きだったクラスの子が他のイケメンと付き合ってた事実を知った顔だった。

三輪のBSS（僕が 先に 好きだったのに）、か……。

三輪が先に帰ってしまい、置いてかれた米屋が「くつ、殺せ……！」つて言いだした。 なに勝手に死のうとしてんだ、それは逃げだぞ。

そもそも誰も殺す覚悟を持ってないんだが？

持つてるのは城戸さんくらいなんだが？

俺ですら持つてないんだが？

出会いと殺しはいつも突然なんだが？

だからお前は俺の足となつて本部に行く仕事がある。

背負えつてアピールしてみたが、三輪隊の古寺と奈良坂が車椅子を持つてきてくれて た。

迅と一緒に取りに行つてたとか。

だから変なタイミングで現れたんやなあ。

納得だ。

これは不幸じゃないね。

変異したサイドエフェクトに乗せられた俺の自爆だわ、反省するね……。

本部に行つたら色々あつたが、くがにやんの黒鳥回収任務が迅に発令された。

俺と迅が組めば無敵だからなーでも俺謹慎だからなー（チラツ）

トリガーがあればなー（チラツ）

迅は組むつて言つてるのになー（チラツチラツ）

ベンティバナニラクリームフラペチーノエクストラホイップキャラクターメルシロップに変

更エクストラシロップキャラメルソース追加エクストラソースチョコチップ追加エク

ストラチップ飲んでアピールするも、無視っすか。

ズゴゴゴゴつて音出したら流石に鬼怒田さんに軽く怒られた、まあ俺たち下戸仲間

ズツ友だからセーフだよな。

会議もなんかいい感じに終わったので解散。

じゃあ俺、忍田さんと話すから。

トウーゴーパーソナルリストレットベンティツーパーセントアドエクストラソイエ  
クストラチヨコレートエクストラホワイトモカエクストラバナラエクストラキヤラメ  
ルエクストラハーゼルナッツエクストラクラシックエクストラチャイエクストラチヨ  
コレートソースエクストラキヤラメルソースエクストラパウダーエクストラチヨコ  
レートチップエクストラローストエクストラアイスエクストラホイップエクストラ  
トッピングダークモカチップクリームフラペチーノ買ってきたし。

ドン引かれた。

自分の意志で買ったことだ、忍田さんが値段を気にすることじゃない。

飲んで（はあと）ってやったら忍田さんから沢村さんに目の前で横流しされた。

カロリー大丈夫？

忍田さん残酷過ぎない？

—— 8

やめろ!!!

迅!!!

俺は玉狛じゃなくて本部所属だ!!!

俺の仕事はネイバーを殺すことなんだ!!!

くがにやんの話を聞かせるな!!!

やめ……やめろおらあ!!!

背中から撃つかもしれない知将プレーがああああ!!!

ぶつちやけ絆されまくってて殺す覚悟どころか撃つ覚悟すら持つてなかったけどや

めろおおおお!!!

ネイバーは敵なんだああああ!!!

敵なんあああああぐあああああ!!!

もう撃てない身体にされちゃったぜ……～q～

本部に来て俺とチーム組もうぜって誘ったが普通に断られた。

悪いこと会議を開いてる城戸さんの「突如所属を表明するネイバー出現」に驚く顔が見たかったのに。

そのあとに来た三雲隊員には口説き落とされてた。

これがBSS……三輪の気持ちがわかった。

俺がオペレーターになればBSSも解消される……? ?

「まだ言つてなかつたけどこの二人、おれの弟と妹なんだ。そつちの遊真は織衣さんの弟」

「えっそうなの？ 迅に兄妹いたんだ……！ とりまる！ 知つてた？」

「もちろん知つてましたよ。織衣さんの弟が噂のデスザウラー日輪刀の持ち主ですからね」

「そうなの!？」

こなみんな『マジで!』って顔を向けてくる。

デスザウラー日輪刀ってなんやねん（梯子外し）

前回のあらすじで話した鬼滅のボトムズでスコープドッグ善逸とレッドシヨルダー・クローネの争いに出てきたっけ？

それはそれとして俺は嘘をつくのが好きじゃない。

空気を読みつつ誤魔化すために、とりあえずしたり顔でキラッと光を出しておく。

これ必須技能だから。

同じような顔したくがにゃんも光を出してた。

ちなみに三輪は出せない。

「うーん、迅の兄妹はあんまり似てない……。けど、こっちは確かに白いところとか似てる！　つかさ、家族が見つかってよかったね！」

満面の笑みで祝福してくれるこなみん、可愛いけど罪悪感で心が痛い。心配してくれてたのがうれしいのも痛みにつながる。

家族が行方不明だと思って探してたのがここで効いてくる。当てのない搜索は最近やめたわけで。

もしやタイミング合いすぎた？

純粹な視線が痛いので、疑問符を浮かべるくがにやんの背に隠れる。

痛くない？

俺だけ？

振り返るとレイジさん以外の玉狛支部の人間は俺と同じようにダメージを受けてた。

これが天罰か。

とりまがるが乗るから……。いや、考えればわかるのに止めなかった俺が一番悪かったわ……。

こなみんに嘘はよくないって怒られた。

いやほんと申し訳ございません。

玉狛支部と新メンバー三人の自己紹介が終わった。

新メンバーは遠征に行くため、まずはA級を目指すのだとか。

遠征メンバーって黒鳥とやり合えるって判断されないと選ばれなかったりするから難しい。

あと遠征艇はベイルアウトが可能な範囲が半径3キロしかないのでそこら辺も不安だよ。

トリオン少ないと「じゃあベイルアウトできそうもないから外してトリガー入れます」とかやりかねないよなあ三雲隊員！

ランク戦があるから訓練するぞオラあ！って展開になった。

それぞれ得意分野でマンツーマン指導や!!!

「おチビ、あんたの相手はあたしよ。つかさがこんなだからあたしが見極めてやるわ」「おチビじゃないよこなみん」って仲良くシミュレーターに行ってしまった。

レイジさんが千佳ちゃんをゴルゴ3、いや、のび太に育て上げるらしい。

余った三雲隊員はとりまるが育て上げて嫌らしく育ってくれるに違いない。

迅は別の要件があるらしい。

今の俺だと千佳ちゃんを見守るくらいしかできないし、迅に同行しよう。



いつにする？

今？

だよね！

行くついでに下見してトゥーゴーパーソナルリストレットベンティツーパーセント  
アドエクストラソイエクストラチョコレートエクストラホワイトモカエクストラバニ  
ラエクストラキャラメルエクストラハーゼルナッツエクストラシックエクストラ  
チャイエクストラチョコレートソースエクストラキャラメルソースエクストラパウ  
ダーエクストラチョコレートチップエクストラローストエクストラアイスクストラ  
ホイップエクストラトッピングダークモカチップクリームフラペチーノを忍田さんと  
沢村さんに買ってこよう。

どうするか楽しみだよなあ!?

え!?

俺一人でトゥーゴーパーソナルリストレットベンティツーパーセントアドエクスト  
ラソイエクストラチョコレートエクストラホワイトモカエクストラバニラエクストラ  
キャラメルエクストラハーゼルナッツエクストラクラシックエクストラチャイエクス

トラチヨコレートソースエクストラキャラメルソースエクストラパウダーエクストラ  
チヨコレートチップエクストラローストエクストラアイスエクストラホイップエク  
ストラトッピングダークモカチップクリームフラペチーノを飲めと!?

…: ボーダーでは評価されない項目ですからね。

また雷蔵さんを肥えさせてしまった。

忍田さんと沢村さんはほんと罪深いよね。

ボーダーでは評価されない項目ですから問題ないですけどね。

——10

なんかあ、ボーダーで遠征に行つてた隊が戻つてきたみたいでえ、そいつらでくが  
にやんの黒鳥を奪いに来るらしいっすよおFoooo→

許せない!

血も涙もねーのかよ!!!

あるぞ!

みんないいやつなんだ!!!

戦うなんて無理だトリガーオフ!

ってわけで迅と嵐山隊が阻止しに来て、バトルが始まった（遅刻）

三輪隊は嵐山隊に連れてかれたのでいい感じに分断されたようだ。

ヨシ！ 俺の出番だ！

それっぽく暗がりから現れる俺、知ってましたって顔する迅、怯える菊地原。

菊地原、お前は繊細すぎる。

ぶつちやけ畜生ばかりのこの空間にいないほうがいい（心の声で助言）

「退け、迅。ここからはプランCといこう。お前は優しすぎる。だからこの戦いに乗り切れない。これはどちらの優しさが上か決める戦いだ。風間さん、止まらなければ雷神丸に乗ろうとした動画をばら撒く。太刀川、レポートは一人でやれ」

風間さんが10秒くらいで「……そんな脅しで止まるわけが無いだろ？」と再起動を果たした。

太刀川は真剣に悩んでいたが、黒鳥の迅とどうしてもやりたいたので吹っ切った。

というかあの顔はボーダーの任務でレポートできなかつたを押し通そうとしている顔だ。

優しい俺は教授に太刀川のボーダーでの日程を教えておこうと思った。

「それで、だ。織衣、お前は謹慎じゃなかつたのか？」

「いや、全然。謹慎中にトリガーを使ったという理由で謹慎期間が延びただけだから。

黒鳥の持ち主が認識されてなかったからそうだっただけで、今は別じゃん。だから謹慎も解けてる、忍田さんも承認済みだぜ？　だぜー？」

「そうか！　じゃあさらに面白くなったな！」

「まだやるかい？　と尋ねてもやる気満々ですなぁ！」

「太刀川とかさつきまでの凍結が嘘のように元気になったし。」

「これだけ言っても止まらないなんてやれやれだな。ふつ……迅、お前のサイドエフェクトはなんて言ってる？　ちなみに俺のサイドエフェクトではプランCと読んだが？」

「プランBかな」

「ふつ、サイドエフェクトも所詮は人間の感覚の延長線上に存在するなんかすごい力だ。迅、参考までに、俺が本気を出した場合のプランはなんだ？　Aか？」

「プランBですわね」

「よしんば一生懸命俺がプランCだと言い張っても？」

「プランBです」

「ふん……未来は誰にでも変える権利はあるんだぜ？」

「みんな努力とやる気が足りないよ。」

「風間隊と太刀川隊にキメ顔を向けて言う。」

「俺のサイドエフェクトとは違う答えか、面白い。迅の予知を覆したくなった」  
「織衣、後半は俺がさつき言ったぞ」

「なんで人の決め台詞パクってんだ太刀川あ！」

「いや、パクってないから。むしろパクったのお前だから」

「太刀川、付き合うな。織衣も露骨な時間稼ぎはやめる。もう種は割れている」

風間さんが会話を切り上げようとする。

なかなか隙がない。

鋭いし、こちらの目的もバレてしまった。

しかし種が割れているとは……梅干し食べた後の種を割って中身を食べる人がいると聞いたことがあるが、風間さんはそれか？

「なるほど、ね。時間稼ぎか……。時間稼ぎ……。あ、そうか。時間稼ぎしてたのか。ふ、ふーん？ ……バ、バレては仕方ないでござる。こちらの作戦は時間稼ぎしてなんかいい感じにサイドエフェクトがそう言う感じになる感じ。だが時間稼ぎがバレたところで次の作戦に移るだけだ！ なあ、迅よ？」

「うす」

迅の返事を受けながらも相手から目線だけは逸らさないようにする。

そう、俺の心は強いから。

あちし、負けない！

あ、やっぱ無理。

逸らしちゃう！

「風間さん、織衣はかっこつけるために来ただけだつて絶対」

「そうか……？ そうか……」

「今だ！ 隙あり！」

俺の声に反応した菊地原含む数名がシールドを張り、前衛の二人がトリガーを構えた。

「トリガーオン！」

そうして俺は隙を見つけて変身したのだ。

「マジかよ……。なんで戦闘体になつてなかつたんだお前……」

太刀川の気が抜けた声。

なんとなくだ。

周りから引いたような雰囲気を感じた。

それはそれとして俺に斬りかかろうとしたやつと撃とうしたやつがいるんだけど???

そもそもさつきまでは車椅子に座つてたから生身でしょうがバカチンが！

「俺の力を見せる時が来たか。玉狛のインチキトリガーと本部の試作型を合わせた結果、ここは地獄の一丁目でしたってわけだ。みんなさっさと成仏して」

戦闘体になってもトリガーを展開しない俺。

警戒する相手。

黒鳥を片手に機を伺ってる迅。

「折角だから説明しておこう。俺の研究はざっくり言うとならとサイドエフェクトについてだが、その前に日常生活用のトリオン体作りを目指したことがあった。だが『それ戦闘体でよくね?』ってなったので中止した。これはその名残だ。ちなみに俺が風呂に入るときに使っているいわばサービスシーン用フォームだ」

いつまでも攻撃用トリガーを持たない俺。

デモンストレーションで壁を殴ると、手が砕けてすぐに直る。

あれ、おかしいぞと思い始めた相手。

風刃を忍ばせた迅。

あとと言わないけどナスちゃんみたいに身体が弱い人も生活面で必要ならちよつと使ってる。

「攻撃や防御は戦闘体に遠く及ばないが、再生力を持たせている。今の俺はゾンビア

タックが可能な不死の兵だ。この試作型オプシオントリガー、名を『マミー』という。黒鳥と不死の特殊ノーマル。どうだ、相手取るには厳しいと思わないか？ 今なら見逃してやる、帰ってこないか？」

「……」つ聞いておろが、トリガーは使えるのか？」

「風間さん、いい質問ですなえ！ もちろん使えます。俺くらいになるとバイルアウトも立派な戦闘用のトリガーです」

なぜかみんなやる気出してきた<sup>q</sup>、

「……ごめん、迅。デスザウラー日輪刀を忘れた。プランBで頼む」

「天上天下唯我独尊！」つて跳ねようとしたら、太刀川に「てんじよ」で真つ二つにされた。

てんじつてなんなのつて菊地原が混乱してた。

行きますよ、亀山君！つて孤独のまま本部に飛ばされる俺。

やっぱプランBだったね！

——10

ヨシ！



予定通り本部に到着。

これが敵地なら毒撒いたりするんだけど。

まあ手抜きでもいいよね。

というわけでお耳の恋人するね。

忍田さんに頼んでオペレーター室を稼働状態にしてもらったので、これより迅のオペレーターをしまあす！

ぶつちやけ黒鳥持ちとノーマルアタッカーが組んで戦うより、黒鳥をサポートして掛算的に強化したほうが強いから。

100+1より100×1だから。

かけたら増えてないね、ホンマやわあ、いけずやわあ。

ま、ええね。

さっきの糞みたいなトラッシュトーク中に強化リーダーで集めた情報を迅に送りつつ、菊地原は俺が消えて安堵してるから一撃で落とせると助言。

補助できるサイドエフェクト持ちが一番邪魔だし。

逆に太刀川は近接しかしないし黒鳥ならどうでもいいどうでもよくない？

地形を割り出せば後は相手がなんと思っているかが既に全員浮き駒だから詰み将棋でしかない。

他にトリガーを積み忘れるわけなのでほんとはグラスホッパーを撒くなりスパイダーを仕掛けるなりスタアメーカー撃つなりしたかったけど、動く警戒されるし。

バトルしないノーマルが出て菊地原とかに警戒されるのは割に合わないじゃん。

いつも通り戦ってくれないと読みがズレるし。

俺がメイン張って撤退まで粘ってもいいかなって思ったけど、その場合は相手が引けなくなつて天羽が出てくるから泥沼の戦争が始まるんだよなあっていう。

誰も得しないのは悲しい。

悲しいので無しである。

迅がTASと化して勝利した。

俺のアシストなんて微々たるもので、予知と『風刃』はほんと強い。

黒鳥はほんとクソゲーメーカーですねえ！

俺がやるならもうあれだよ、見られたら予知られるからトラップパーによる補助は必須として、カメレオンとバグワームを駆使して走り回って近接と弾幕を繰り返すくらいしか思いつかない。

あとは下水道とか隊員専用通路などの地下空間、避難シエルターみたいな攻撃意識の外から、走り回りながらメテオラかサラマンダーでお祭りするくらい。

それから「迅が黒鳥をあげるからくがにやんのボーダー入りを認めてね会議」をやつて終わった。

めっちゃ強いインチキトリガーも使った俺を倒した太刀川、とその太刀川と組んだ風間さんたちA級、を一気に無傷で倒した迅、が使つてた黒鳥である『風刃』という箔付けが決まったつぽい。

価値が爆上がりしたかなんかでほにやらら。

逆説的に超絶強い黒鳥を使った迅がやつと（？）倒したA級の太刀川に倒された俺はやはりめっちゃ強いのでは……？

逆説的にめっちゃ強くなった俺と迅は玉狛支部へと戻ったわけで。

そこで迅が寝ようとしてたけど呼び止める。

それだから暗躍してるって言われるんだ。

こういう時は決まってるよなあ!?

「迅、焼き肉いくぞ！ 焼き肉！」

「おれはもう寝ようかと」

「馬鹿野郎！ 焼き肉はなあ、食べたいときに行くんだよ！ 俺のサイドエフェクトがそう言ってる！ 迅のサイドエフェクトもそう言ってる！」

「おれのサイドエフェクトはそう言っていないけど」

「言え！ 言っていないならサイドエフェクトにそう言わせる！」

「ええ……」

家族がいなくなったときは寂しいんだ。

恩師がいなくなったときも寂しいんだ。

黒鳥が手元から無くなったら寂しいに違いない。

感情に蓋をしようが、寂しいに決まってる。

だって俺が寂しいから。

「ユーマー！ お前も焼き肉だ！ どうせ寝ないんだからついてこい！ いや、車椅子を

押せ！」

「よくわからないがよかろう」

それ何キャラなん？

「ええ……」つて顔の三雲隊員。

行かないのか三雲ア!!! ……ネイバーか？

「しおりちゃんも……むしろ行けるやつは全員行くぞ！ 寝てたら寝かせとけ！ でも

こなみんは起こす！」

とりあえず扉の外からこなみんに「I LOVE YOU。」つて謎のノリで言うしか

ないよなあ!?

玉狛支部のみんな、こんばん〜(笑)( \* 艸 )( ; ∇ ; )

玉狛支部の皆ちゃん焼き肉だぞ?( ? - ?? ) / ??? ! ! ? !

ゆつくり、食べようね♡♡ ( ^ 3 < )

オヤスマナサイ(? ∇ ? )

—— 1 1

自信があつた。

才能があると信じてた。

みんな助けられると思つてた。

だから、仲間の声も聞かずに慢心してた。

あまり覚えてないけどそこは病院だった気がする。みんな怪我してたから俺が頑張らないといけなかった。ゲートが現れて、敵が出てきた。今ならトリオン量によつて対処が変わると知っている。その時は知らなくて、敵の口には母が居た。俺がどうにかし

ないといけなくて、逃げなさいって呟く母を敵ごと真つ二つにした。それで自分のやったことが信じられなくて、呆けてたら別の敵が来て。戦闘体を解除したのか、足りなくなつたのか。覚えてない。生身のままの俺を、姉が庇つた。逃げなさいって言われるまま走つた。窓から落ちて、両足で着地して、骨が飛び出た。痛みのせいなのか涙が止まらなかつた。

髪が真つ白になつた。

足がほとんど動かなくなつた。

誰も俺を責めないのが怖くて、幻覚が見えるようになった、幻聴が聞こえるようになった。

行方不明だと信じて家族を探し続けて、やっと死んでるってわかつた。誤魔化していたことを思い出しつつある。

思い込んでいた嘘がゆっくりと晴れている。

後悔ばかりだ、寂しくて仕方ない。

でも全部自分で決めたことだ。

僅かずつでも受け入れよう、俺がそうするべきだと思つてるから。



# かぐや様は告らせたい

— 1 —

私立秀知院学園！

富豪名家の生まれや、将来国を背負うであろう人材を教育する由緒正しき名門校である！

そんな彼らを纏め上げる生徒会の中心人物がただ者であるはずもない！

生徒会長の白金御行！  
しろがねみゆき

彼は勉強一本で畏怖と敬意を集め、その模範的な振る舞いで生徒会長へと抜擢された！

そして、その会長を隣で支える副会長の四宮かぐや！  
しのみや

彼女は四大財閥の一つである『四宮グループ』の本家本流を継ぐ総帥の長女として生を受け、あらゆる分野で華々しい功績を残した天才である！

この二人の脳内を支配しているのは、『如何にして相手に告白させるか』という思考である！



実は『相手が告白してきたら付き合つてやってもいい』という恋愛にあるまじき糞みたいな甘えによつて無駄な期間を過ごし、上記の通り思考が変化したのだがここでは省略する！

もつと省略すると『相手のことがいっぱいちゆきだから弱みを見せたくない』という悲しい仮面が見えてきたりこなかつたり！

（四宮がどうしても付き合つてくれつて告白するなら考えてやらんこともないがな）  
（会長がどうしても告白するなら私に見合う男に鍛え上げなくもないけれど）

そんなわけで、生徒会室の中で二人は内心で告白を心待ちにしながら、日々超高校級の頭脳で相手の告白を誘う高度な駆け引きが行つているのである！

そんな愉快で知的な恋愛頭脳戦がこの物語の軸となる！

と見せかけて！

「がねちゃん！ えふもちに映画のただ券もらつちつたから底ついてる勇氣絞つたんだけどえぐいてえ終わりを迎えちゃつたよ！ あー、しょんどいわ！ でも相談に乗つてくれてサンキューな！」

なんだお前、闇の一族か？ と問いたくなるような真つ黒な頭髪を無駄に逆立て、制

服を着崩して腰パンしたしようもない長身の男がこの物語の主軸となる！

恋愛？

もう勝負ついでるから（無慈悲）

それはそれとして、まず貴様は日本語から勉強してこいと言われそうだが生徒会で邪見にされることは少ない！

なぜなら、彼の手には常に希望と絶望が握られているから！

パンドラの箱がなぜ絶望をばら撒き、希望だけが残っていたのか！ たぶんそれが物語的にも展開的にも一番楽しいからだと思えます（素直）

そんな今日の彼はミダス王、というか乱す王、その手には映画のチケツトが二枚！

「もったいない本舗だしがねちゃんといっしょにムービーでもよいちよまる……」

そして彼は気づいた！

友人の近くで作業している副会長の凄まじい眼光に！

（え、なにあれ目怖っ！）

そして再び気づいた！

その眼光に！

「なんだ言つてよ、しのかぐ！ 俺と一緒にムービーでもよいちよ……」

なるほどね、とどや顔見せる。

そして、彼は近くで作業している副会長を誘おうとして気づいた！

生徒会長でもある友人の凄まじい眼光に！

(え、なにあれ目怖っ！ ……いやいつも通りだったわ)

冷静になって再び気づいた！

その眼光に！

「たはー！ 気づいちゃったぜ！ なるほどね、名探偵俺って感じ。 ……死にてえ奴からかかってこい」

そして彼は気づいた！

二人の眼光が凄まじいことだけに！

それしか気づけなかった！

彼の頭は決して悪くないが、これまで友達が少なかったので他人の機微に気づけない！

そして無理して作ったキャラで一通りの授業を受けたのでそろそろ限界だということに！

決死の覚悟を決めた彼が知る由もないし、この場にいる二人にも関係の全くないことだが、この場にある二枚のチケット！ それは書記のえふもち氏が二人に譲渡しようとして、恋愛頭脳バトルによって無効試合になって没収されたチケットだという事実が

あつたのだ！

詳細は省くが、関係ない二人にとって巨悪であった彼は見事ゲームで倒された！

もう一度言うが、映画など関係ない二人の元には黄金と等価値のチケツトのみが残されたのだ！

しかし絶望だけが放たれるのか！

いいや、そこには確かに希望が残っているのだ！

本日の勝敗結果

なつめなすな

夏目齊の敗北（空気詠み人知らずのため）

——2

「というわけで今日もボコられてぴえん」

「ぴえん」

「……通り越してばおん」

「ばおん」

先ほどまで行っていたゲームの顛末を、身振り手振りを交えて語りながら帰路につく

齊なすなの隣には、小柄な少女の姿。

少女の名前は白銀圭しろがねけい、秀知院学園の中等部に通っており、齊が誘う形でよく一緒に下校している。

今日も例に漏れず、普段通りゲームでボコられた齊は、圭と下校していた。

「ぱおんってなんなんだろうなあ。使うの大変なんだけど。あと、それと同じような謎なんだけどさ。おけまる水産よいちよ丸で了解の意を示すのって長い。長くない？」

「長いけど使ってる子もいるよ。語感とか雰囲気大事みたいだね。でも最近減ったかなあ」

「え、もう言語に更新が来たの？ 早くない？ ぴえんなんだが？」

「その使い方はしないかも。最近はおたおか、とか」

現代語の更新速度に戦慄する齊を他所に、鞆からノートを取り出しながら圭が言った。

「あたし……あたし……おか……おかあさん。あたし、おかあさん……若者の性の乱れを指してるのか？」

「……違うに決まってるでしょ。最近のなーさんはあたおか、みたいな」

圭がその形のいい眉を寄せ、齊をじつとりと睨みながら手に持っていたノートを丸め、そのわき腹を突く。

「埼京線のATACS?」「違うと思うの」「あたし最高?」「違うって」「あたさいきょう」「ちーがーいーまーすー」と二人で繰り返す。

薺が間違えるたび、コロコロと笑みを浮かべながら圭がわき腹を小突いた。

幾度も続き、最終的に降参だと薺が両手を挙げる。

物足りなかったのか「えー?」と圭が不満げに漏らしながら、授業で使ったノートを取り出した。

「けーちゃん、あそこにたい焼き屋さんがあるじゃん? あれが今日の第一のチエックポイントです」

「なるほど。その挑戦、受けましょう。会計と、兄の名に懸けて!」

「グッド! なら俺も会長の魂を賭けよう!」

頭一つ分以上高い薺に、背伸びしながら圭がどや顔を見せつけた後、ノートを読み始める。

これは二人で帰るときにいつもしていて、気づけば習慣となったちよつとしたお遊び。

ルールは簡単、授業内容を纏めた圭のノートから、チエックポイントと称した場所までに薺が出した問題に答える授業内容復習ゲームである。

秀知院学園中等部の生徒会会計であり、そして秀知院学園高等部の生徒会長でもある

御行の妹である。

勝手にかけられた名前や魂に意味はないが、圭にとつて罰ゲームは普通に色んな意味で悔しいので、それに対する意気込みの現れであり、薺はホントにただのノリだった。

「ところで、あたおかの意味を教えてくださいいんだけど」

「あたまおかしい」

「……いや、頭おかしくないから。友達増やそうと頑張ってるだけだからね、俺」

「無理しないと会話できない人と友達になつて楽しいの？」

「え、唐突に突き刺さる正論は怖すぎるからやめて……」

二人の手には、半分に割られたたい焼き。

割れ目から僅かな湯気と、甘い匂いが漂っている。

チエツクポイントと呼ばれたたい焼き屋はすでに過ぎていた。

「余裕だったよ？ なーさん、問題の出し方が甘くなつたんじゃないの」

「なつてないんだよなあ」

「そう？ 私に甘くしたんじゃないの？」

にやにやと笑みを浮かべながらたい焼きを食べる圭を横目に見ながら、薺もたい焼き

を食べつつ答える。

「無いよ、今日はガチで問題出した。難関校の試験問題を参考にしたから、あの短時間で解かれてビビってる」

「罰ゲームとして自慢げに一人でたい焼きを食べるつもりだった齋、渾身の敗北である。」

この男は一日で何度負ければ気が済むのだろうか。

勝利を知りたい。

「え？ 難関？ ちよつとそれはダメじゃない？ ルール違反……」

「い、違反はしてないから。ちゃんと事前にけーちゃんの授業内容を調べて復習になるよう問題を組んだし……」

「へー？ そもそもなーさんの復習も兼ねてるんでしょ？ 事前に調べるんだ？ まあ今回は私の勝ちだったし？ 違反でも許してあげますけど？」

「い、違反してませんけどー」

「いーはーんーでーすー」

口では違反していないと言いながらも、若干の後ろめたさから目を逸らす齋。

違反だと詰め寄る圭。

きやーきやーと笑いながら丸めたノートで小突く銀髪の少女と、成されるがままの長



身の少年が、いつものように牛歩のごとくゆっくりと帰宅する。

「ところでなんでルール違反したの？」

「してないです」

「してないんだ？ ふーん？ ……ふーん、なんか千花姉えみたい」

「えふもちとは違うし！ ルールの抜け道を使っただけだから！」

「どっちでもいいけど。なんで？」

「……映画を断られて悔しかったです」

「あー、お泊り会があるから断っただけだから。ほら、今度一緒に勉強会しよう。ね？」

「マ？ しよんどかったけどおけまる水産よいちよ丸だわ、お菓子とか用意しとくから

楽しみにしてるわ！」

「なーさん、あたおか」

「けーちゃん、ぴえん通り越してばおん……」

### 本日の勝敗結果

なつめなすな

夏目齋の敗北（雑魚）



## 女神転生・日刊近所の危機創刊号1

そろそろ「誰でも簡単にできるラスボス必殺ルート」の解説も終わりですね（誰でもできるとは言っていない）

最後の準備として、ベルベットルームで整理します。

道中は多少ガバってもいいけどここだけは全力です（ガバらないとは言っていない）  
通常プレイで真似する場合は今生の別れを済ませておきましょう。

クリア後は……んにやぴ。

装備のグレードが物凄くダウンします（最高レアからコモン落ち並み）

ちなみに零落に耐えられないあらゆる全てが消え去りますので、装備も消耗品も軒並み消え去ります。

みなさまご存じの通り、ペルソナ能力さえあれば絆の力が攻撃力になる『奇跡』スキルを持ってるので、武器なんていらねえんだよ！

まず妹から貰った『守り刀』（なお補正±0）を装備します。

同じような背景でスタートしたプレイヤーの中には初期装備として渡されたこれに  
関しては「なんやこのゴミイ！」と驚いたと思います。

私もです。

調べたら特殊スキルが付与されているので、そのあとに続く日常コミュパート用の装  
備だとわかるんですけどね。

これ持つて突撃してパトリました。

『守り刀』をアクセサリーのスロットに装備しておく自動で妹の高感度が高まる不  
思議なアイテムなんですけどね、本質は悪感情への特攻ダメージが入ります。

日常パートでコミュに失敗したり、長期間放置したり、関係ない場所で事故ってブ  
ロークンしたら使うと快復します。

常に好感度が上がり、他人の心を弄るとかインスタント怪盗かな？

私は最初ヤンデレかと思って引いていたんですけどね、主人公が『奇跡』スキル持つ  
てるのと同じように、妹もそういうスキルを無意識に使えていただけみたいです。

そんなわけで、お守りに頼らず、ちゃんとした武器や防具は自分で買う必要がありま  
す。

流星に小学生の妹から剣やら銃やらはもらえませんし、女から貰った物を身に着ける  
とか軟派かよ（守り刀装備状態）

次は防具ですが……いらぬ。いらぬか？

着ても着なくてもどうせ無くなるし、どうでもえーわ（投げやり）

イキつたラスボスが全裸に負ける情けないシーンにするので、防具は外しましょうか。

『守り刀』を装備したので、不要となったアクセサリーも全部外します。

狙い通りなのですが高感度（誤字）のダメ押しとして、我が家のように使い続けたベルベットルームの案内役（銀髪ロリ）が物欲しそうにアクセサリーの指輪を見ているのであげましょう。

代わりにこれまでのプレイ傾向から一番いい装備、今回は最上級のCOMPをくれま（す（なおペルソナ使い）（くそでかため息）（はあつかえ）（雌はお呼びで無い）（いつもの使うわ）

それはそれとして、お古で喜ぶとかやっぱメスやな……（失望）

新品だなー、やっぱw

自分とは思わな（い）んだけど大切な相手への贈り物にお古とかどうなのって言われるw

W  
こないだルシファーに絡まれた時も気が付いたら意識無くて周りに人が血だらけで

倒れてたしなwww

ちなみに血だらけだった人は魔王に似てたwww（聞いてないw）

最後にここまで（勝手に）付き纏ってくれた守護天使を労いの言葉とともに造魔合体  
しましょう。

お別れの演出で、主人公が単身で決戦に赴くことについて、嗚咽を漏らしながら涙を  
流します。

これを聞けば耳障りな女の雑音も、世界有数の荘厳なオーケストラに思えますね。

天使として悩んだり、生命に憧れていたので、造魔に生まれ変わるのも望外の喜びに  
違いないでしょう……零落するからどうせ記憶喪失ですけど（小声）

くうく、これにて好感度最大ですw

新品のCOMPに造魔を仕舞い込んでベルベツトルームへシユウウーツ!! 超!  
エキサイティン!!

ベルベツトルームの自室（シリーズによつては独房とか正気か?）の収納箱に整理整  
頓、うん! おいしい!

使い古したCOMP片手に駆け出します。

新品の女物より、使い古した男からのプレゼント。

イゴールと会話して「貴方は素晴らしい客人だった」と最期にべた褒めしてもらったらコミユもマックスです。

これでスキル『奇跡』の火力も期待値を大きく超えますね。  
この力を、絆って呼ぶのよ！（薔薇乙女並み）

はい、以上で準備完了しました。

これで最終決戦の地である「ブレティン・オブ・ザ・マンハッタン」に乗り込めます。  
終末時計が刻まなくなった世界を救うため、様々な時間でお使いクエストしまくったのが懐かしいですね（棒読み）

このゲームは現在・過去・未来で世界を変えることで終末時計を巻き戻しまくるんですが、ちよつとシナリオやクエストが進むたびに現代や未来が変わっていくので、見どころさんが増えてゆっくりプレイもマジおすすめっていう。

未来で作られた主人公が「世界を救う？ できらあ！」（実際にできた）ってムーブしたのも昨日のこのようです（実際昨日から不眠不休）

滅んだ後の世界で戦うとか救世主はブラック企業の戦士なんですな〜（  
ここからは一方的な暴力による解決です。

悪魔を殺したのは人間、神を殺したのは人間、そして人間を殺せるのも人間。

あまね  
遍く生を否定するのに人間以上に適した存在がいるだろうか、いや、いない（たぶん反語）

完膚なきまでに滅んだ世界を巻き戻し、修正可能時間に繋げて楔を打ち込み続けた救世主（しかも人間）に敵う存在なんていねえんだよ！

そんな人間を率いるのが救世主で、奇跡を見せてきたんですねえ。

え？ 救世主を殺すのも人間？

そりやそうだよ。

無事に帰れると思ってるの？

他のチャートに飼いならされた夢見がちな甘ちゃんどもがよ……。 （豹変）

世界を救うってそんな簡単なのかよ！

テメエら、ずっと待ってたんذار？ 主人公の記憶を奪わなくても済む、主人公が死ななくても済む、縁を繋いだ仲間たちを殺し回らなくても済む、そんな誰もが笑って誰もが望む最っ高に最っ高な幸福ハッピーエンド結末ってヤツを！ ずっと待ち焦がれてたんذار、こんなルートを！ 有名走者がやってくるまでの場つなぎじゃねえ！ バグが発見されるまでの時間稼ぎじゃねえ！ 他の何者でもなく、他の何物でもなく！ プレイヤーの創意工夫で、たった一人を助けてみせるって誓ったんじゃねえのかよ!!? ずっとずっと存在を保持させたかったんだろ！ 絵本みてえに映画みてえに、命を賭けてたった一人



の記憶を守る、そんなプレイヤーになりたかったんだろ！ だったらそれは全然終わってねえ!! 始まってすらいねえ!! ちつとぐらい長いチャートで絶望してんじやねえよ!! 手を伸ばせば届くんのだ。いい加減に始めようぜ、インデックス！（ワンプレス）ア、マチガエタ（小声）

これじゃインデックスに説教してるみたいになっちゃった。

ま、ええか、あんなやつ。

そもそも理想通りにいかねーから説教したことインデックスに謝つとけよ（他人事）理想を追うのは勝手だけど失敗したときのリカバリーとかちやんと考えときなよ（冷酷）

あ、失敗しまくってリカバリー力を高めるのとかどうかな？（善意）

というか【輝くマンハッタン計画】とかいうお題目で全人類を救う装置を作っちゃったのが間違いなのでは？

まあ間違ったから滅んだんですべてリセットでチャラみたいなものよ。

人（インスタント救世主）・物（タイムマシン）・環境（概念の書き換え）という三種の神器を悪魔研究で揃えた天才たちも草葉の陰でな、涙が出ますよ。

全ての時間軸で望んだら発生する救世主に救われるから人々は墮落しちゃって、本来あるはずの未来が崩壊するとか愚かすぎない？

救世主を生み出した叡智は……滅ぶ未来から見た過去に置き去りなんですわえ。

なんて素敵な愚かさなの！

よし、茶番のおかげで道中も楽しく進めましたね。

じゃあ、乗り込むときのあれやりますか。

あの鐘を鳴らすやつ。

音源あるんで使いますね……ヨシ！

デトロイト市警だ！

イクゾー！（デッデッデデッ）（わあい）（のりこめー^^）

はい、じゃあ「ブレティン・オブ・ザ・マンハッタン」にイキりながら現れたラスボスとの会話ムービーを流し見したらサツと処分しますが……話がナガアイ！

余命を察したのか会話が長いんですね……サツサトシネヨ（小声）

時間潰しに小話でもしますか。

みなさんも安定しなくてイライラするだろうラスボスですが、行動回数が増加、プレイヤーターのスキップ、万能全体攻撃、バフ、デバフ、回復、復活などスキルが豊富で耐性も非常に優秀、なんと万能耐性も備えています。

そのクセ、隠しステとしてプレイヤー側のパッシブスキル（ブースト関連）は大抵無

効になつてゐるんですよ。

これ設定としてラスボスの終末時計くんは『外なる力』を支配しているためです。ちなみこのゲームのあらゆるすべて（なお無数の例外あり）が『外なる力』と『内なる力』に大別されてます。

『外なる力』は物理的な力で、万物の理論に支配されています。

『内なる力』は精神的な力で、魂とかそういうふわつとしたやつで、このゲームだと耐性強化やアルカナブーストなど縁えにしシステムと呼ばれるやつに使われています。

2つの内の1つを支配しているとか流星ラスボスといったところですが、誇らしくないの？

でも縁は無いってやつばボッチじゃん（荒廃した世界を見て納得しながら）。

無敵ボッチなんで普通にやるとこのゲーム最強の『縁』系スキルが効かないんですねえ、はえーすつごい……なにが凄いんじや殺すぞ（半ギレ）

しかし今回主人公が使うスキルは無理やり相手と友達になるので、終末を刻む程度の時計如き及ぶこともできないんですねえ。

世界に2人しかいないから無理やり2人組作つたよ（体育の悪魔）

そんなラスボス戦ですが、普通にプレイするとお祈りポイントが数多くあります（行動回数増加からの眷属召喚、プレイヤーの強化解除、自身の最大強化、全体万能極大魔

法コンボ)。

が、お祈りに飽きた皆様のために、今回のロウルートチャートに関しては完全に安定しているので問題ないです。

このための救世主、このための絆。

一応他のルートでも同じことは可能ですけど、メシアと敵対する章が追加で増えます。

蛇足なんだよなあ (RTA民の感想)。

そこからアイテムを整えるまでに『転生して聖女へと至った機械人形を、蘇生と殺害を繰り返して『守り刀』がドロップさせる』とか冗長ってレベルじゃないんだよなあ。

9割5分くらいの確率で「聖女の涙」「少女の思い出」「大きな赤いリボン」「破れた写真」などのアイテムがドロップしますが、回復アイテムとしては優秀ですがそこまで進めたら不要なんで、やる場合にはジャンクショップに二束三文で売っちゃってアイテムボックスを開けてください。

ストラディバリウス並みの超低確率で手に入る「失った時間の砂時計」はターンスキップできる破格のアイテムなんで、手に入ったら大事に使いつぶしましょう。

それはそれとして、道具を整えるまでに苦労した結果がRTAと呼べなくなるタイムとか許せねえよなあ。

今回はチャート模索中にラスボスを安定して抹殺する攻略法を見つけたのでまとめただけだから許された……！

(倍速)

はい、やつと会話が終わったみたいなので戦闘開始です。

じゃ、ここで用意しておいた『守り刀』を使います。

使い方はこれまでのプレイで親の顔より見た七人ミサキコンボの拡張版ですね。

このための善行、このための縁。

救世主狩りに特化した主人公が負けるはずねえんだよ！

—— 貴方は震える手で守り刀を握った。

—— やちよえんむすび 八千代縁結が貴方を望む声を断つ。

—— 始まりとして、『N.O. 0 いつもの時間』が失われた。

はい、勝ち確定。

N.O. 0は縁システムで言うところの対応アルカナ『愚者』です、つまり現世での大まかな縁を断ち切りました。

この世界は『外なる力』に支配されているので、主人公が存在するには蓄えていた『内なる力』で対抗する必要があったんです。

が、何故か切れた(切った)ので弱体化した『内なる力』では耐えられないんですね。ここからはオートで演出が流れながら景気よく縁が切れていきます。

一人殺して殺人鬼、万人殺して英雄、世界を殺して救世主ってことなんですねぇ。

主人公の現世に関わる縁が無くなってんじやーん(切った)

これでラスボスが何をしようと止まれねえからよ……。

貴女が守り刀を送ったから大切な兄があらゆる縁を切ることになったけど、つて妹に聞きたい聞きたくない？

まあ、妹は天使への転生に失敗したから半分機械の身体になって自我が消し飛んだので、唾液を垂らすだけの機械になってるんですけどね。

未完成ながらも至天聖女としての微妙な完全性は得たのか、排泄物はないみたいなんです。糞尿はまき散らさないといいつすよ。

ちなみにフィールド効果として、パーティを組んでる仲間や仲魔、装備ペルソナが消し飛びます。

ラスボスに対抗していた『内なる力』が弱ったせいです。

期待通り、仲魔の七人ミサキが消し飛びました。

—— 時の行く末が弱き存在を認めない。

—— 七人ミサキが消滅した。

—— 契約によつて貴方を引き込むことはできない。

—— 崇り神の呪いは対象を求め、彷徨う。

ミサキちゃんの呪いが主人公とラスボスを掴んで離さないから見とけよ見とけよ？  
？

つつても散らばる縁の対象を概念として収束させるだけなんですけど、優秀な耐性を持つラスボスにすら縁繋ぎできるのでお勧めです。

ちなみにこの状態異常である『縁切り』なんですけど、前準備無し防御無しで自分やラスボスのスキルによつて切られると徐々に主人公が消滅していく負け確状態なんですけどね。

なのでどんどん縁が失われていきますよーイクイク。

縁が失われるごとに悲しみを募らせ、顔色が真っ青になった主人公くんの涙目、BBちゃん大好きです！（裏声）

——『No. 10 かけがえのない時間』を失った。

美醜逆転時間とか、性別反転時間、蒸気文明時間などの縁も無くなりましたね。

性別反転時間は主人公の性別とは逆になったヒロイン（ヒーロー）を攻略できるのが最高なんや！（誘惑に負けてギャルゲー開始したためロス）

性別が反転しただけの自分なので、趣味やら何やらがばっちり合う我慢系ヒロインの最高の理解者として日常を駆けまわるのはいいぞおく……ありえない時間存在なので最後には絶対にお別れする悲恋でご飯が進みますよお！

でも愛し合った『縁』は世界の隔たり程度じゃ決して離れないから（ノータイム切断）そろそろ、『奇跡』発動可能を知らせるナレーションキキますね。

—— 土は荊棘いばらと薊あざみとを汝の為に生ずべし。

—— また汝は野の草蔬くさを食ふべし。

—— 汝は面かおに汗して食物を食べ終に土に帰らん。

—— 其は其の中より取られたればなり。

—— 汝は塵なれば塵に返るべきなり、と。



— 『No. 20 あなたの時間』を失った。

— 悪魔は消えた。

— 塔は倒れた。

— 星は堕ちた。

— 月は砕けた。

— 太陽は燃え尽きた。

— はじまりに人が消え、終わりに審判が下される。

実はもうラストアタックです。

普通なら30分は泥仕合なのに最高かよ（なお中盤までの安定力は真3ハード序盤並み）

後はペルソナのスキルで『絆』を攻撃に使う主人公特権を形にしたようなスキル『奇跡』で倒します。

『縁』をすべてぶつちぎった場合の威力は無限です、加減しろ馬鹿か？

あらゆる世界を支えた存在である救世主と繋がっていた『縁』が切れた反作用爆弾みたいなもんだから許して、というか通常戦闘だとこれを使ったが最後主人公の存在が消

えてガメオベラです……。

好感度全マックスの『縁』を繋いだままの場合は9999ダメージなんで、普通はこっちを多用するよなあ!?

周回プレイ時のベルベットルーム案内係ちゃん抹殺に関わってきませんが、『縁』が繋がっていない場合のラスボスには（効か）ないです。

しかしながら現状は、全ての『縁』が途切れたために行き場を失い、発散されて消えるだけだった縁システムの凄い力（小並感）を、いつものように七人ミサキで固定したのでラスボスとの縁が出来ています。

なんでやろなあ（不思議）

うーん、深いなあ、原理は理解できるなあ。

無理やり2人組にされたラスボスなら『奇跡』が刺さるんですねえ。

主人公が『奇跡』で無理やり聖別して存在を規定しているらしいですよ。

—— 土は土に、灰は灰に、奇跡は奇跡に、

—— 『No. 21 唯一の時間』が貴方に力を与える。

奇跡発動で画面いっぱいになんの光い!?

ポリゴンとピカニキ見てるかあ!?

見ろ! (特にピカニキ)

これペルソナが消し飛んでるんで精神はボロボロですnee! (笑顔)

それなのにスキル使ったり世界のために戦うなんて、やっぱり救世主なんすnee (他人事)

ちなみに『奇跡』は救世主たる主人公が持つ専用スキルなんで、いつでも使えます (いつでもとは言っていない)

『奇跡』なんて人間が使うもんじゃないのでペルソナが使いやすく抑えていただけなんで、無理して使った妹なんてあれ (生きる屍) よ。

まあ今回は (ペルソナが吹っ飛んで) すでに精神があれ (妹並み) になってるので、この後の世界では世界があれ (妹並み) になるんですけどね。

クリア後の世界 (ダウンロードコンテンツ) なんて知らねえよ!

というか救世主たる兄は元気にバトルしてるのに、妹は奇跡一発で廃人とかやつぱ雌はダメだな (ホモ並み)

あいつも奇跡爆弾に仕立て上げたかった (なお妹同行ルート未発見)

塵は塵に。

この時間の存在が朽ち果てた。

『No. 21 唯一の時間』は失われた。

……

……

……

消滅によって終末時計は刻むべき時を失った。

生まれ故郷そのものが敵でしたが、どうでもいいよ、こんな場所（冷静）人、場所、環境などの超臨界点を弄んでイカれた世界にとどめを刺すのは、成功した

マウスの務めだよなあ!?

はい、無限ダメージで「ブレティン・オブ・ザ・マンハッタン」ことラスボスくんを  
フィニッシュです。

N (長く) K (苦しい) T (戦いだつた) ……。

以下、エンディングです。

……。

あれ、なんかちげーわ。

あ、DLC (気づき)

―― チクタクチクタク

―― 重い力に引き寄せられて

―― チクタクチクタク

―― 軽い力に弾かれて

―― チクタクチクタク

―― 時間は戻る

―― チクタクチクタク

時間は進む

チクタクチクタク

時間が混ざる

チクタクチクタク

はい、ダウンロードコンテンツに繋がる追加ボスによる独白からのエンディングですね。

超常存在に概念特攻してくんでセカイ的エンドも仕方ないね。

ちなみに、朽ちた時計の針を無理やり動かして生じる不協和音とともに流れるスタッフロールがこのエンドの特徴みたいですよ。

それはそれとして、なんもないとここで意味深に呟くとか意識の高さが恥ずかしくないの？

こいつも友達いないから寂しいんすねえ。

このエンドは味気ない？

そんなことないですよ。

え？



ブウウウウツツツ!!!!!!

これのためにやわ!!(絶頂)

最高や!(絶頂)

やっぱりこのゲーム、最高や!(絶頂)

だからみんなも走ろう! 私もやったんだからさ!(同調圧力)

……ヨシ!

エンディングなのに不吉?。

なんでやろなあ(疑問)

え?

ダウンロードコンテンツ?

やんねーよバーカ!!

あれ追加シナリオどころじゃねーかな!

おこったかな!

2周目を楽しく遊べる新規シナリオみたいなものか!

このチャートだと装備も環境もパーっていう地獄なんで、安定しないし全くないです

ね(冷静)

主人公が死んで封印するいつものあれ(RTA走者のお家芸)だとダウンロードコン



テンツが出来ないので、一応このルートでも可能ですけど、難易度は……んにやび、ナオキです。

ここまでならプレイ動画見ただけの人も楽しめます。

だからみんなも走ろう！ 私もやったんだからさ！（ノルマ達成）

そろそろ画面に「Beat the clock」が出てくるので、動画終了です。

ぶつちやけ連休の度に（徹夜）してるので、正直ダレてきて、こっちは寝たいんだからはやく終われやダボが、という思いが私の感想の2割を占めています。

残り？

残りはいつものあれだよあれ。

高齢化で他の枠でも同じような悩みを持つてるであろう結婚です……（停止）

そ、それはそれとして、主人公をギリギリまで追い詰めての『封印↓死亡コンボ』以外で堅実なルートが発見できたので、RTAに関して大幅な記録更新が期待できそうです。

未来の自分や聖女とのデートなど小さなロスはいくつかありましたが、試走なんでセーフ（本番でやらないとは言っていない）

リセット案件である未発見ルートや未確認要素が浮上したのにオリジナルチャートを組みなんて無謀な挑戦が今回は発生しなかったので当然ですね。

クリア後のダウンロードコンテンツだと色々記憶喪失（意味深）になってるんですけど、これも安定クリアのため……（小声）

まあそれはそれとして、たぶんこれが一番安定していると思います。

他はマジで泥仕合なんで……。

この糞時計、時間を戻すからね……。

それじゃあ、私はちよつとトイレ休憩へ……録画がガバるからダメ？

常連の方々はご存じの通り、過去に何度も放送や録画を（トイレ休憩）でぶつちぎったりしたトラウマがあります。

お腹弱いけどアイス好きなの許して……。

ぶつちやけこのゲームの話なら無限にできる。

だってこのゲームがちゅきだからあ！……はい。

ダウンロードコンテンツの話でもします。

どうせみんな1周目については詳しくないだろうけど、知らない人にお勧めの悪魔の話です。

ネタバレしないで言うなら、2周目はスタートを切るのに苦労するので、追加される怪異の魔人がお勧めです。

怪異は存在があやふやなので最初は噂に左右されますが、サマナーのレベルが上がる

と存在を委ねてくるので調整しやすく、一緒に成長している感じが実に良いのです。しかも乱立する噂話によって怪異のキマイラみたいな状態になっています。

1章辺りでアイドルの都市伝説があるんですけど、どうやら解決した後で似たような事件が起きて、それに目をつけた野良サマナーどもが面白半分で噂を流して好き放題した結果みたいですよ。

鋼人七瀬っていうんですけどね、高確率でサマナー殺しとか不死殺しを搭載しているのでシナリオ特攻みたいなもんです。

追加された「タイムヴォルテクス」【車輪の再発明】【超臨界点<sup>C</sup>】<sup>P</sup>までなら余裕で活躍できるのに、おっぱいもでかい、これは逸材ですなぁ。

【タブラ・ラサ】は当然無理ですが、メガテン系列やペルソナ系列によくある仲間が呼べないイベントボス戦に近いんで関係ないよね……。

主人公がノンケだったら危なかった。  
ノンケじゃなかったからここで終われる。

【Beat the clock】が表記されましたので動画は終了となります。  
それじゃあ広告、コメント、応援ありがとうございました。

試走はいい感じだったのでRTAやっていこうかと……思わないです。

こんなクソチャート、使いたい人が使いなよ（責任放棄）

お疲れさまでした。

— 1 —

教会の近くにある共同墓地で目覚めた。

死んだけど生き返ったとか、死人だけ動いてるとか、そういうのだろう。

知らんけど生きてるだけ丸儲けってやつだ。

生きてるけど死んだようなものなので共同墓地で起きたただけだ。

墓石が集まっている場所からちよつと逸れた草むらに眠るのはよろしくなかったよう

で、体の節々が固くなっていた。

確かめると体調は悪くないが、動きが凄まじく重い。

記憶喪失だからだろう。

世界が記憶喪失とか初めてだから知らんけど。

確認したら、手持ちの物とか装備とかほとんど無くなってるけど、そもそも必要ない

だろうからどうでもいい。

というか全裸じゃなくてよかったです（小声）

共同墓地から少し離れた場所に、教徒用の墓地があるので早速そっちに移動する。

そこで何をするのかって話だが、例えば身に覚えのない場所に拉致された場合は手持ちの物や、周囲の物を利用して場所を特定するなり、脱出するなりするじゃん。

別に拉致されたわけじゃなくて自ら望んで墓地で寝たんだが、それはそれ。

そういうわけで、衣服を除いて唯一手元に残っていた半透明の鍵を使ってみるのが最優先だ。

希望があれば縋りたいのが人情。

地獄で垂らされたのなら蜘蛛の糸すら人は掴む。

いつもの墓石まで来たら、霞むような半透明の青い蝶が見えるのでその姿を追いかける。

地面から僅かに浮かぶ扉の場所へと俺を誘導する。

中に入るために鍵を使う。

帰宅したかのような安心を感じられるのは、やはり過去の話だった。

鍵と同様に、扉も半透明だ。

不安を感じながらも鍵を刺し込めば、ゆっくりと扉は開いた。

が、中に入ることはできず、通り過ぎてしまう。

いや、わかってた。

これまで扉の奥でゆらゆらと歪んでいた空間は見えず、半透明の扉という枠を通して

墓石だけが見えているのだから。

蝶も、扉も、鍵も、消える。

そう考えると一抹の寂しさを感じる。

いや、一抹どころじゃない。

毎日のように利用していたので強い悲しみが胸を打つ。

落ち込んでいると、奥から少女が現れた。

月のように優しく輝く美しい少女だ。

気配しか感じないが、俺にはわかる。

俺にしかわからないということは、幻覚なのでは……？

幻覚から差し出された携行端末型のCOMPを受け取る際に、手が触れたはずなのに、何も感じなかった。

誰もいない墓場なのに残念だった。

少女好きな俺は、青い服に皺が寄るくらい存分に抱きしめた後、部屋に連れ去りたいくらいだったが、それは叶わない。

COMPから僅かな重さを感じると、あの本を見て話し合うことは無いのだと理解できた。

銀色に波打つ長い髪を梳くこともできないし、穏やかな金色の瞳と見つめ合うこと

も、その透き通った白い手に触れることもできない。

無意識に伸ばしていた手は空を掴んだ。

扉は消えていた。

鍵はもうない。

この墓地が、何処かに繋がることはない。

気配を感じることもできなくなった。

俺を誘うように青い蝶が舞うことはないのだろう。

言葉が出ない。

何も思い浮かばない。

助けが欲しかった。

誰でもいいから助けてほしかった。

墓地のすぐ近く、お祈りが行われている教会に駆け込めば、俺が生きていた痕跡は無くなっていた。

裏口からこっそりと侵入して中を調べても、何も見つからない。

俺が使っていた部屋は物置になっていた。

俺についての記録を喪失する、そういう代償で『奇跡』に縋ったのだからわかってい

たはずだった。

全部失った。

もう何も残っていない。

代償にしてもいいと判断したはずの何もない日常が、無くなって初めて大切だと理解した。

望んだことのはずだったのに、溢れる涙が心のどこかで悔いていることを伝えてくる。

俺が救世主なら耐えられたけど、一般人だから耐えられなかった。

墓場に戻って、草むらで嘔吐した。

ベルベットルームに繋がる扉があつた場所に、膝を抱えてうずくま蹲る。

かつての自分では考えられないほどに気力が無い。

これまでの事情などを整理しようかとも思ったが、そんな気分には全くなれそうにな  
い。

ゲロ、というか胃液は埋めた。



腹が減った。

何かが起きて変わらないだろうかと期待して顔をあげれば、やはりそこに扉は無かつた。

空が青い。

怪しい黒雲が立ち込めていたら、きつと仲間と奔走していただろう。

もう仲間はいないどころか、知り合いすらもない。

墓地は静かだ。

死人がよみがえって群れを成していたら、事情を突き止めていただろう。

亡くなった両親との縁すらも切れている。

何処も歪んでいない、平和だ。

享受して不幸になった、だから怖い。

失う物もない平和を楽しめるはずなのに、何をすればいいのかわからない。  
横になる。

朝露で湿っていた草で服が濡れる。

このまますべてを忘れ去りたい。

胸ポケットからCOMPが零れ落ちた。

そうだ、まだこれがあった。

ロックされた機能ばかりが目につくが、召喚さえできればいい。

COMP内にほとんどマグネタイトが無かったため、俺の生体マグネタイトを消費したために倦怠感に襲われるが構わない。

画面に文字が走り、地面に魔法陣が描かれる。

現れたのは俺の知っている姿では無かった。

壊れかけの、草臥れたマネキンのような何かが崩れ落ちた。

「はじめまして。ラグエルシリーズの起動には善行が必要です」

彼女はこんな物じゃなかった。

俺はこんな様じゃなかった。

こんなはずじゃなかった。

「ラグエルシリーズの起動には善行が必要です」

じゃあ、どんなはずだったんだ……？

どうして俺はこんなことをしたんだ……？

胃が震えて、思わず逃げるように背を向けた。

我慢できず、胃液を吐き出した。



【RTA】ポケットモンスター | キミの物語 | 金の王冠  
チャート | 記録狙い (没)

さて、長かった『ポケットモンスター キミの物語』RTA金の王冠チャートもエンディングですね。

トロフィー獲得とともにタイマーストップで終了となります。

ぶつちやけ連休の度にポケモンかペルソナの生放送やつてるので、正直ダレてきてますよね。

こっちは寝たいんだからはやく終われやダボが、という思いが私の100個ある脳みその内の3個分を占めていますし、リスナーもそうなのでは???

残りの97個？

残りはいつものあれだよあれ。

生主高齢化で他の枠でも同じような悩みを持つてるであろう結婚です……。

そ、それはそれとして、ここ2年ほど微妙な乱数を読むロケットスタートと、堅実な攻略チャートを絡めて繰り返しプレイしてきましたが、今回はとても運が良かったのか大幅な記録更新は確定でしょう。

ツツジちゃんやミカンちゃんとのデートなど小さなロスはいくつかりましたが、大きなガバは無かったので、ほぼ完璧に完走することができました。

リセット案件である未発見ルートや未確認要素が浮上したのにオリジナルチャートを組むなんて無謀な挑戦は当然のごとく発生しなかったので当たり前の権利ですね。

まあ主人公の両親との仲や友達との友情など人間関係の大半を全部切り捨ててますが、これもRTAのため……。

そもそも人間性を捧げてるから紙一重でセーフ。

生放送なのでタイトルに記録時間を表記できないのが残念なくらい大幅な更新です。

編集して動画をあげるのが楽しみ……いや、だるいなあ。

まあそれはそれとして、たぶんこれが一番はやいと思います。

え？ 途中でタイトルを変えられるって？

まだ見做し記録なんで……。

というか常連の方々はご存じの通り、過去に何度も放送や録画をぶっちぎったりしたトラウマがありますし、そもそも私の技術力と理解力がついていけてないから無理で

す。

それじゃあ、私はちよつとトイレ休憩へ……ガバるからダメ？

ですよー。

お腹弱いけどアイス好きなの許して。

しょうがないので暇つぶしに、流れているエンディングのシーンについて話しましょうか。

これ、実は出身地に向かう客船での出来事なんですよね。

なのでスタート地点の場所によって色々と変化が起きるわけですね。

カントースタートならあの有名なサントアンヌ号です。

金の王冠チャートはその名の通り金の王冠を軸に作ってますので、アローラからスタートしてます。

全国を踏破して全てのポケモンリーグを総なめにし、無敗の強さを誇るチャンピオンである主人公が最後には出身地に帰るとかエモい。エモくない？

カロスはまだ別のレギュレーションなんでチャンピオンになれてないのが残念な要素です。

国外レギュってやつで、フランス人アニキ走者に人気のやつです。

探検隊レギュはアメリカ人走者兄貴姉貴に大人気です、ケモナーって闇深いよなあ。

ポケモン内の国外や孤島などもスタート地点に選べるんですけど、RTAでシヨトカのための引越しいべを起こすとランダムでテキストな地方に飛ばされるので、子役とか読みたいなおしゃれ極振りの背景を求める場合以外には微妙です。

悪くないんですけど、わざわざ選ぶ理由は……賑やかし？

話は戻しますが、このRTAは金の王冠が軸となるのでスタート地点はガラルとかでもいいんですけど、さっき言ったランダム要素がうんこなので大人しく選べ！

面倒なチュートリアルイベントのスキップや、使うポケモンなど色々都合がいいので、わざわざポケモンリーグ未開の地であるアローラを選んだわけです。

因習などが不愉快なので、スキップしないならスタート地点としてアローラは最低です、なろうで流行りの古巣見返しプレイをやるつもりがないなら他の場所から始めましょう。

通常プレイでの私のおすすめはトキワで特殊なトレーナースキルを獲得したり、シロガネ出身で指示力に下駄を履かせる感じですかね。

RTAでは走者はだいたいみんな無理やり乱数読んで能力持たせてますけど、ライコウチャート張りの乱数読みなんでおすすめしません。

外にいるキャラの挙動で乱数読むの頭おかしくない？（ポケモン界限最低限のスキル）

まあそんなわけで、経験値のためにひよっこトレーナーたちにトラウマを植えたのも、ド田舎から逃げ出す引越しランダムスキップのためにメガやすでカプをぶつ殺そうとしたのも、喚き散らす島の連中によって島から追い出されたのも、昨日のことがように思えます。

いや、プレイ時間的にはマジでそのくらいですけどね。

あー、またゲームに費やしてしまった、結婚してえ……。

近所の婚活イベントに参加したら30超えたゴリラに似たお嬢様が居たんですけどね、「年収一千万は最低でも欲しいですわよウホウホ」とか言い出して。

ウホウホは言ってなかったかもしれないですね。

いや、お前はそれに見合っていないだろと。

明らかにサバ読んでる癖にそれはないだろと。

そこで私は冷静に考えたんですね、もしかして動物園でのエサ代を含んだ維持費を見込んだらそれくらいかかるのかなって。

おっと話が逸れましたね、すみません。

えっと、で、アローラの利点ですけど、金の王冠が輝くからです、ある意味効果的(イソジン構文)

周知の事実かもしれませんが、最初に貰える御三家ポケモンは全ステータスの努力



値を最大にできるんですよね。

初代パロカ？

それに目をつけて、金の王冠で才能に下駄を履かせることで軸を無理やり作っています。

ソルガレオとルナアラの出現や降り注ぐZパワー、ウルトラホールの開通など未開の神秘的な土地柄から、トキワとまではいきませんけど特殊なトレーナースキルを得る確率が高まるのもポイントですね。

毎回頑張ってスキル引くのつれーわ。

でもプレイヤースキルにも限界があるので、看破系や先読み系の異能スキルがないと正直きつい……。

後はまあ、カプ抹殺スキップが便利っていうのもあるんですけどね。

他の地方に行きたくても、少年期は基本的に初期地方から出られないんですよ。それを無理やりぶち壊せるからかなりのアド。

「お前を殺す……」くらいの成功率で抹殺ってなんだよって気持ちになりますけど、語呂だよ語呂。

抹殺スキップまではポケモン厳選できるので、ラプラス孵化やイーブイ厳選をついでに行えるのもあります。

なおパーティの構成で色々と助言を受けてますが、変えませぬ。

ラプラスは零度でごり押せますし、波乗りなどが便利です。

イーブイは……色ニンフィアが好きなだけです。

ゴツメデイグダ、特殊メガスピ、ノーマルジュエルすてみヌケニン……なんなのその  
闇深な構成は???

スタート時間調整と会話や挙動支配による乱数を利用した準伝厳選は知識と作業量  
が完全に人智を超えてますので私に勧めないように。

そもそもこのゲームでライコウチャートは無意味なのは???

ということと安定した偽装旅パを捨ててまで安定しない準伝パ採用は無いです。

そもそも乱数調整しながら目当ての準伝がいるリーグをクリアして厳選とか闇深す  
ぎるから私はやりません。

なんか熱烈に勧めてくる人がいたり宣伝する人もいますけど、それは私にも、宣伝先  
にも迷惑がかかるのでやめてください。

というか、そんなに私に勧めるんならさ、やってみせてくださいって話ですよ(半ギ  
レ)

どうせ一見して去ってくださるうから相手してもしょうがないけど。

長々としようもない話をしていたらエンディングも佳境ですね。

主人公が、船の上でアローラ地方の主人公に帽子とモンスターボールを託す感動的な演出です。

外国スタートならではの次世代に繋ぐ演出が見られます。

スタート地点によっては次世代の少年少女がレスキュー隊員になったり、義賊になったりする作り込みには好感が持てます。

探検隊の島ならポケモンと結婚したり、一般家庭ならげんきでチュウのピカチュウと遊んだりしますし、写真撮りながらミュウにボール投げまくりますし、古い探検隊と同じ返事しかない仲間たちの様子から見られます……流石に最後のはバッドエンドなのでは？

どうなるのか妄想したりしますが、RTAなので、考えるのは無意味ですね。

来月のニンテンドーダイレクトで新情報が来るらしいのですが、レギュの拡張が来ないことを祈りましょうか。

それはそれとして、燃料来てくれないと過疎も見えてくるんだよー頼むよー。

あ、無駄話してたらエンディングも終わりました。

【生涯無敗】のトロフィーを獲得できたのでタイムマーストップです。

これ取るとポケモンバトルで負けなくなります。

というか負けられないのです。

敗北を知りたい状態になる。

レートはまた別、敗北者の祭典であるあれはデータバトルだし。

それじゃあ広告、コメント、応援ありがとうございます。

動画を編集しつつ見直して、チャートを弄れそうなところは修正して来週のプレイに反映していこうと思います。

今のところはガバリやすいデートを削りたいんですけど、孤独によるストレス値がちょっとあつて感じなんですよね。

いや、私が結婚できないのとデートイベントをちょっとロスしたのに関係はないので。

え？ レートでの敗北？

あ、あれは遊戯とは言え無敗だったトレーナーが敗北したことで、自分も勝てる勘違いした経験値たちを集める作戦だったのでセーフ……いや、エンカウント率が高まりすぎてロスしたのでやっぱりガバです、すみません。

来週はそこらを検討しつつ試走して見直しますかね。

じゃあご視聴ありがとうございます。

また来週同じ時間にお会いしましょう。

……はあ、結婚したい。

……質問？

……あ、忘れてました。

質問コーナーは……よ、夜にでも！

夜に枠を取るのですそこにしましょう！

ごはん食べてちよつと寝ます！

寝ます！

お疲れさまでした!!!

—— 1

今日、俺は第二の故郷へと戻る。

追い出される形で後にしたアローラに含む物が無いわけではない。

しかし、俺も大人になった。

過去のいざごきは水に流して全てを許そうじゃないか。

あと島めぐりを途中で辞めて、テキトーに大会を荒らして、カプをぶつ殺そうとした

のはマジすまねえって思ってる(棒読み)

実際、島めぐりは最後の島で自主的に無期限休みに入っただけだし、大会だって優勝を重ねただけ、カプに至っては結局殺す以前に出会えなかった。

つまり、俺の行いとアローラ全体で差し引きゼロだ。

むしろ俺が被害を被ったレベルなのではないかと実しやかに囁かれているに違いない。

互いに悪かったと矛を納め、なんやかんや握手してハッピーエンドが訪れる。

船が港に着くと、出迎えに来てくれた少年が手を振っていた。

ああ〜ハウはかわいいなあ!!!

— 2

チャンピオンとして呼ばれたからには仕事しなます!

ということ、アローラにポケモンリーグを設置したいという要望に応えるために俺が派遣されたわけですなえ。

しかしちようどよかったのも事実。

アローラ出身という理由もあるが、優勝しても固定チャンピオンにならないでフラついてた末に暇つぶしで参加したレートバトルで下位クラスにぼろ糞に負けて炎上させた罰もあるわけで。

なぜかレートバトルで負けた後はポケモンバトルを挑んでくる雑魚が増えた（半ギレ）

レートで負けたからって俺のポケモンが弱くなつたわけじゃないでしょ（正論）

そもそも理想値のポケモンデータを使つて厳格な確率で定められた技の威力や命中率でバトルするとか、もうこれポケモンバトルじゃなくない???（言い訳）

そもそも手持ちのポケモンのコンディションを整えてバトルで最高の戦績を納めるのがトレーナーだと思うし6匹のポケモンを万全に戦える状態にするだけでも才能の塊だしとりあえずデータだけ組んで確率を前になんかわちやわちやしてレートでイキってる連中はプロゲーマーでトレーナーとは違うから俺が負けても問題ないから俺の無敗記録に傷は付いてない（早口）

って伝えたら同意してくれたハウはかわいいなあ!!!

最近連れ歩いているニンフィアと戯れるハウを眺める。

自慢だが俺のニンフィアは色違いだ。

やっぱりポケモンは特別で才能がある個体に限る。

強いポケモン弱いポケモン、そんなの人の勝手、ほんとに強いポケモンは無数に孵化した末に生まれた天才だけである。

やはり名言は違うな……。

孵化しまくって余ったイーブイは全国に出荷したからコネが凄い。

血統がいいからといって犬猫を外国に出荷するのは難しいが、パソコン周りを利用して転送すれば一瞬だし。

というか珍しいし可愛いから欲しがる人も数多い。

大好きクラブとかいうイーブイを渡しておけばいい感じに支持してくれる団体、俺はそんな緩い感じが大好きです。

昔はいざこぎで失敗したが、その経験をバネに成長できてよかったよかった。

ハウはトレーナーとして俺がどのくらい強いのか興味があるらしく、これまでの話を聞きたがる。

ニンフィアを頭に乗せたハウを肩車し、外を歩きながらポケモンとの旅はいいぞ、ほ



んと楽しくて仕方ないのだと話す。

背に乗って空を飛び、草原を駆け、海を渡る。

洞窟を探検し、深海を進み、巣を探る。

天気が変わるだけで、時間が進むだけで世界が変わったように一変する。

群生するポケモン、共生するためのアイデアを積み上げる人々、その二つが紡いだ歴

史……。

話は尽きない。

俺は普通に旅した思い出だけを伝える。

島めぐりを失敗してるとって伝えるのってダサイとか、そんなことは決してないです。

そもそも従兄が昔は無敗で島の大会を荒らして、生態系を破壊し、神様を狩ろうとして追い出され、今ではチャンピオンとか情報量が多すぎる。調べたらわかるかもしれないけど島では俺のことは禁句って感じだから問題ないね。だから旅が大好きな大人でイケメンな従兄のお兄さんを演じなければならぬ（早口）

「たくさん見てきたけど、夜空はアローラが特に綺麗だよ」

「でしょー？ 凄いやねー」

「しかし残念ながら一番じゃないんだなあ、これが」

「えー？ おれは一番だと思っようよー？」

「ふっふっふ、ハウくんはまだまだですなあ。好きな女の子と見ると百倍綺麗になる、これ豆知識ね。なんと月も綺麗になる」

「おー、にいちちゃんおとなー」

「ふっ、モテモテの大人でかっこいいだろう」

「でもにいちちゃんと仲がいい女の子っていたっけー？」

「……寒くなってきたから帰ろう」

「えー？」

「か、代わりにとっておきの場所を教えてあげようじゃないか。流星の滝といってね……」

——4

俺を呼び出した博士は、色々やりたいことがあるってことで手伝うことになった。

最初は書類や視察だけの予定だったが、俺が予想以上に暇があつて、全く急いでいないこと知ったせいで人手として駆り出された。

しかし残念ながら俺はポケモンバトル以外雑魚だ、期待には応えられないと思う。

そんなどうでもいい話よりも、カントーから引つ越してきた子とハウが友達になって、博士からポケモンを貰って島めぐりすることにしたとか。

頑張れよ、と他人事みたいに見送ろうとしたら俺も付いていくらしい。

馬鹿野郎おまえ俺は島めぐり失敗してると言ってるだろうがそもそも他の地方ではチャンピオンしまくりの最強トレーナーでブリーダーパワーも一流で常にポケモンをケアし続けるくらい忙しいから今更こんな僻地の謎文化体験する意味もないしそもそもハウが余裕で成功させたらショックで死んじゃうから見たくないんだよおらあん  
(早口)

俺が島めぐりに同行するのは、アローラがリーグを設立するのに妥当かどうかを判断するためだ。

リーグを設立するがジムは設置せず、これまでの文化で培った試練を流用するらしい。

ダメだったら？

普通に街や試練に使ってる場所にジムを作ればいいじゃん。

場所はほら、自然豊かなんだから土地も資材も無限みたいなもんだし。

あ、自分たちでやるのが怖いんだな。

はーん。

カプに壊させればいいじゃん！（文化破壊）

島巡りが妥当じゃなかったら無意味な文化なんだし、いらないつしよ。

アシマリと戯れるハウに話を聞くと、ポケモンバトルで負けたらしい。

マジでえ？

同世代と比べたらハウは強いんだが、それを上回るとは抜群のセンス。

俺じゃなきゃ見逃しちゃうね。

相手と一緒にポケモンを貰ったヨウくんという名前のカントーから来た子だ。

表情が微笑み固定の変わった少年だ。

初めての敗北にきつと悔しい思いを隠しているのだろう。

ああ〜ハウはかわいいなあ!!!

かっこいい俺が慰めるしかあるまい！

俺も（レート）負けたことあるぜ、しかもポケモンリーグで言えば格下の相手に。

その人は俺とのバトルを踏み台にプロリーグに参戦したけど、下部リーグで苦戦したままパツとしない戦績を残していつの間にか消えていた。

いつか発見されるのだろうか……。

まあ、ゲーム（レート）と違って親として育成しないといけないし、最低でも6匹を

管理するからなあ。

そもそも俺は島めぐり失敗してるんだぜ（吐血）

この話はやめよう、誰も救われない……。

「ハウ！ 海でラプラスに乗るぞおらあ！」

「にいちゃんライドの許可もらってるのー？」

「あるにはあるが、無くてもいい。なぜならライド用のラプラスには乗らないからだ。野生のラプラスの背に乗せてもらう。偶然乗れたらセーフ、みたいな。ふふふ、知的」

「いいねー！ 早く行こうよー！」

「そう焦らなくても、俺くらいになると口笛を吹けば野生のラプラスが来てくれる。いや、熱烈なファンのごとく群がってくる」

「おー。でも言いすぎじゃないのー？」

「言い過ぎじゃないんだなあ、これが。アローラのラプラスの親と言っても過言ではない。人気者はつらいよなあ！」

「でもにいちゃんあんまり友達いない……」

「その話はやめーや。悪い口はこれか？ おらおら」

「ひゃー、ひっひゃらないれー」

島巡りする少年たちと、博士の助手である少女と一緒に歩いてく。

ちようどいいので貰ったマップ片手に1番道路から視察も行う。

昔から伝わる伝統的な順路と博士があらかじめ試練に必要な場所や立ち寄る施設から、出会うポケモンの強さや旅の面倒くささをバランスよく順路を整えたようだ。

アローラ地方はいくつかの島で構成されていて、俺やハウが住むメレメレ島はカプがめっちゃ好戦的なので強いポケモンは他の島に逃げたっぽい。

カプというのは島を守る神とされるポケモンである。

電気タイプが関係あるのか雷とか他の島に比べてよく落ちるし、そういうのが苦手なポケモンも逃げたのかもしれない。

そういうわけで、1番という名に恥じない子供の散歩コースレベル。

ちようど都合よく建っていたトレーナーズスクールで基礎の勉強をすることに。

「流石だぞ！ タイプ相性をばっちり理解しているんだな！」と相性について説明したり、「ポケモンさんが傷つく勝負はちよつと苦手ですが」と回復アイテムの使い方を教え、「これはおじさんの金の玉だからね！」とポケモンに使える様々な道具を見せ、「人

のポケモンを取ったら泥棒！」と手持ちのポケモンは最大6匹で構成し、「カイリュー！  
はかいこうせん！」と締め実技でバトルすることとなった。

ハウやヨウくんが先生に採点してもらったあとにスクール生とバトルし始める。

それを話の種にして先生とおしやべりして俺はデレデレして過ごした

美人の先生とか最高かよ……。

でも相性有利で攻めるのは鬼すぎる好き……。

結婚しよ……<sup>^</sup>q<sup>^</sup>

初歩的なことが学べたあたりでトレーナーズスクールの面々にお礼を言って後にし、  
街に乗り込む。

施設を見て回り、ポケモンセンターで行える諸々を教える。

ポケモンは磁気情報に有機体の身体が貼り付いている、みたいな感じで構成されてい  
るので、なんかいい感じに回復できるし、いくらかは数値化も可能って感じだ。

パソコン使って転送できる。

さつき博士に貰った学習装置も一匹が経験した戦闘を僅かに流す、みたいな物だし。

睡眠学習みたいなもんよ、知らんけど。

ポケセンの外に出るとイリマと出会ったので挨拶してみんなでマラサダを食べにい  
く。

ちよつとした世間話の後、このあと2人が試練を受けることを告げる。

イリマはキャプテンという役職で、なんかすごい凝り性な性格でノーマルタイプのポケモンを使うのが得意。

俺が島にいた頃は、観光客と交換したツチニンを進化させたヌケニンで一方的にボコったこともある。

あとヌシールというシールをアローラ全体に貼ったから、集めたら商品をくれるらしい。

道路に貼ったのかと思いきや、施設の中や探検できる洞窟にも貼ってあるとか。

え、なんだかこいつが怖くなってきた……。

準備のあるイリマと一度分かれて試練まで流れで進む。

途中でスカル団とかいうしょうもない連中が居たが、こんな知識も伴ってない雑魚は経験値だ。

洞窟でなんちゃらかんちゃんらって試練なので2人を見送る。

ジムと比べると準備がちよつと手間っぼいなあ。

まあジムも居ないといけないから面倒だけど。

それはそれとしてもらえるノーマルZはいいぞ。

何がいいってイーブイに持たせてバトンやるのが最高。



でかいポケモンと戦って勝って試練を達成したらしい。

よくやったなあ！と二人を撫でる。

ハウは喜ぶから可愛いが、ヨウくんはずっと微笑んでるだけだからわからん。というか試練でまだぬしポケモンとバトルしてるんだなあ。

そのうち飽きるから大砲で飛ばされるジムとか、ワープするジムとか、凍結ジムとか、街が停電するジムみたいな色物が欲しい。

ほしくない？

## 6

試練ではぬしポケモンという大きな個体と戦ってどうかこうとか。

10年前くらいに新しいのが生まれたので試練を任せているらしい。

話を聞くと、結構巧みな動きを見せてくるようだ。

俺の時は数の暴力が多かったなあ。

野生の虫ポケモンが群がる恐怖、俺は大嫌いです。

2番、3番道路、花園を通っていく。

景色もいいし、難易度もちよつとぬるいが悪くない。

花園から3番道路に戻ったあたりで、せっかくなので、とハウとヨウくんがバトルした。またハウが負けた。

んー？

これはあれだな、勝てない流れだ。

一緒に旅したトレーナーたちの間でも時々あるんだよね。

同時期の相手に勝てないまま過ごしたことで挫折の可能性もあるから怖い。

この後は大試練に挑むというので戻る。

3番道路からテキトーに行くのと1番道路に戻る。

1番道路に差し掛かったあたりでヨウくんが家に帰るらしく、一旦分かれる。

口数が少なくなったハウと手を繋ぎながら帰る。

少しだけ、いつもよりも繋いだ力は強かった。

さて、これから少年たちが受けるらしい大試練だが、なんかすごい試練を大試練と呼ぶのだ。

しまキングとかいうキャプテンよりも強いんだか統率力があるんだかないんだかした人と戦って勝つんだかなんだかするのだ。

ぶっちゃけあんまりおぼえてないなあ。  
そういうことなので準備が必要らしい。

ハウや引つ越してきたヨウくんが挑戦するということで、ちよつとした小さなお祭りみたいな感じになるようだ。

さて、リーグ設立についてだが、問題ないように思える。

まだ触り部分の感想になるが、他の地方から来たトレーナーや観光客にばっちりなのではないだろうか。

柵に腰かけてレポートを書き終えたので、大試練までの暇つぶしといこう。

「どうせ近くにいるんだろ。ボスを呼んで来いよ」と、スカル団とかいうチンピラの雑魚に告げると走って呼びに行ってくれた。

情けない、弱すぎる。

そりや島巡りも失敗するわ。

俺も失敗したけど、だからって失敗者同士の実力がイコールなわけではない。  
勘違いしている者が多すぎる。

トレーナーとして関係のない部分で負けたり、失敗したからって俺のポケモンが弱くなるわけではない。

そもそもポケモンが強いから俺も強かったら、こんな軟弱な人間ではない。

俺がどうあろうとも、ポケモンが弱くないのと一緒にだ。

お前はわかってるよな、グズマ。

— 7

喧嘩を売って手も足も出さず、逃げて戻った部下を放置してグズマはそこに向かっていった。

いつもなら行う仕置きも忘れて。

逸る気持ちを抑えきれなかった。

あの強すぎる男が負けたというニュースを聞いて、そして帰ってくるという噂を得て、今日まで待っていた。

期待と失望の入り混じった今のグズマの手は、モンスターボールを握るには力が入りすぎていた。

何処にも行けずに足踏みし続けた自分と、外へ出て栄光を駆け抜ける男。

一目で誰もが理解するほどにポケモンバトルに天賦の才があったと同時に、それでも

強さを求める姿は狂氣的だった。

誰も寄せ付けない圧倒的な強さ。

その姿が焼き付いて離れない。

畏怖を抱きながらも、いつか勝利を夢見てグズマは挑み続け、敗北を重ねた。

勝つために努力した。

島キャプテンに頭を下げて弟子入りした。

苦手意識を抱きつつあったイリマとすら協力した。

その日々は、唐突に終わりを告げた。

ポケモンバトルが誰よりも強かった少年は、守り神だと讃えられるカプにすら逆らった。

迎合しないその姿勢と強さに、口には出さなかったが憧れのような物すら抱いていた。

だが少年はいなくなつた。

カプの怒りに逆らつた罰だとしても言うように、アローラの気候とは真逆の冷たい対応に晒され、あるいは島の古臭い習慣が起こした陰湿さを嫌つてある日を境に島を出ていった。

出ていくことについて、誰にも言わなかつた。

もちろんグズマにも。

結局、少年は島に負けたのだと。

ポケモンバトルがどれほど強かろうが、何も変えることなどできないのだと。

憧れが失望に変わるの、それほど時間がかからなかった。

近づくほどに、グズマが思い出すのは苦い記憶ばかりだ。

未だ忘れることのできない自室の棚には、グズマが勝ち取った多くのトロフィーや楯が飾られていた。

忘れられない忌々しい記憶は銀や銅ばかりでくすんでいるようだった。

ライバルだと思っていた自尊心は、簡単に砕け散って引き留めることのできなかった無力感に様変わりした。

目標を失ったグズマの敗北と、無駄に得た強さは、島全体へと向けられるようになった。

積み重ねたポケモンバトルの日々は、見えない澱のように固まった敗北の数々は、今では歪な破壊衝動に変わっていた。

美しい記憶は覚えていない、切磋琢磨した一途さは今や昔、輝かしい金の結果は何処にも無い。

いくらポケモンを育てようとも、過ぎ去った日々の幻想にすら劣等感を刺激され続け

る。

どうして自分を外の世界に誘わなかったのか、時々考えることもあるが、失望がそれを塗り潰して、やがて忘れた。

金は一番の証だ、当然グズマは持っていない。

そこは海が見渡せる場所だった。

柵の向こうには緩やかな崖が広がっている。

グズマたちがまだ互いに切磋琢磨していた頃、ここでよくポケモンバトルをした。

真似事だったかもしれないが、それでも時間を忘れるほどに熱中できた。

思い出は、今や過去の残骸と化していた。

「……出せよ、サラナ。てめえのポケモンを」

鋭い視線のまま、グズマが言った。

緋い交ぜになった感情が、いつの間にか鎮まっていた。

僅かな恐怖のせいだった。

幼少から続く、敗北による恐怖。

「久しぶりだっていうのに挨拶も無しか、グズマ。何も変わらないんだな」

柵に腰かけたサラナが無表情に言った。

アローラに似つかわしくない白い肌が、強い日差しに焼けて赤くなっている。

彼の肌が白いのは、誰とも血の繋がりが無いからだ。

島に適していない容姿は、サラナが後ろ指を指されて過ごした証だった。

拾われた彼の、この島での立ち位置だった。

「バトルくらいは変わっていてくれよ。あれほど勤勉だったからな。……期待してたんだ」

軽く放りこまれたボールから、ラプラスが現れた。

週刊誌によればサラナは隠し事の多いトレーナーだと表現した。

だが、柵一面に銀と銅が積み重なるほど戦い続けたグズマはそうだと思ったことは無い。

隠し事が多いのではない。

その時、理解できないだけだ。

行動は一貫している、ひたすらに勝つことに向かっているからだ。

今対面している凄まじい圧力を放っているラプラスだって、その一つだ。

初めてサラナを見たとき、複数のラプラスを逃がしていた。

その日から徐々にラプラスを島で見かけるようになった。



グズマが見かける度に、ラプラスは海へと放流されていた。理由を聞いたとき、天才が欲しいからと言っていた。

そしてある日を境にラプラスを逃がす姿は見かけなくなり、あまりにも強いラプラスを育てるようになった。

サラナは強いラプラスを求めただけだった。

その結果、アローラではラプラスが増えすぎた。

「アリアドス！ どくのいとー」

場を整えるためにグズマが自身のポケモンであるアリアドスに指示を出す。

狙い通りいけば、このフィールドはさながら蜘蛛の巣のようになる。

アリアドスが口と尻の両方から糸を放っている、長年の練習の結果だった。

「へえ、凄いな。ラプラス、あまごい」

ラプラスが天に向かって吠えると、雨が降り出した。

雨の激しさが、グズマに練度の高さを知らせた。

ぐずぐずと、巣になるはずだった糸が溶けていく。

毒を含んだ地面は、地を這うポケモンを汚染するだろうが、鈍重なラプラスにはあまり期待できそうにない。

「どくどくだ、アリアドス！」

「なみのり」

毒液を飛ばすが、激流とも呼べる勢いの水で迎え撃たれた。

ラプラスに届かないまま、水に流されてしまう。

毒の処理を優先したのかアリアドスには影響を出さず、周囲を水で濡らした。

思わずグズマは舌打ちした。

固定砲台を攻めるための様子見の一撃だ、外しても問題はない。

問題は陸上なのに、操っている水量が多すぎ。

周囲を濡らし、泥によって足場を悪くされていた。

練度の高さは分かっていたが、それでも想像は軽く超えている。

比較対象がないほかに。

「体勢が崩れていないのに遅い技が当たるわけがないよな、グズマ」

ぬかるんだ地面では、陸上の地形に強い多脚とも言えどもその強みを活かし切れない。

踏ん張りに不安が残る、アリアドスが使える大技は当てにくくなった。

毒による攻撃は、体内で濃縮するために発生が遅い物が多い。

同時に、相手も使いにくい技が出てくる。

ラプラスに成功率の低い【うたう】や【ほろびのうた】などを使われる可能性は低い。

雨音が激しく、歌の音色を妨げる。

また、アリアドスの中には「不眠」を持つ者もいる。

「いこうそく、いどう」

ポケモンの素早さのみならず、指示によっても先手を打てる可能性は高い。

ビーム系やつぶてへの対策は自然とわかっている。

ほとんど思考せず、グズマが選んだのは補助技によるアリアドスの強化だった。

相手は動かず、アリアドスがその情報を書き換えて加速する。

強さはあらゆる要因から導き出される。

そしてポケモンが速ければ速いほど、シンプルな強さに繋がる。

当然、攻撃の優先度や手数、回避にも影響を与える。

ゆえにグズマは直感で速さを選んだ。

現状で最も警戒すべき技は、氷タイプの大技、特に「ふぶき」だ。

ビーム技と違い、面で制圧するそれは、冷却速度の関係で直撃までは遅いが、威力は絶大だった。

雨で濡れている今、掠るだけでも関節などが凍りついて速さを奪われる可能性が高かった。

攻撃と回避の両立。

「そうだよな。序盤の立ち上がりなら丁寧に組み立てるよ、お前は」

十分に加速したアリアドスを見ながらサラナが言った。

言葉に合わせたのか、ラプラスが啼いた。

水は姿を変え、熱を奪う。

視界が僅かに白くなる。

地面には霜柱が乱立していた。

雨は、みぞれと化していた。

急激に熱を奪われたアリアドスが震えていた。

表面は凍り付いたのか、動きはひどく鈍い。

「ふぶき、じゃねえのか……?」

警戒していたそれとは思えないほどに弱すぎた。

発生が早く、よけにくいビームではなかった。

威力は弱いが、範囲の広い風でもなかった。

「フリーズドライさ。凍らせるんじゃないやなくて、ちよつとした水を氷にするだけ。寒そう

だな、グズマ。続けるのが難しいならここで終わりにしようか?」

「……はっ、冗談だろ」

グズマの表面にも僅かばかり霜が降りていた。

想定外の出来事は思考を鈍らせる。

体が震えているのは寒さだけではないはずだ。

「それもそうか。……じゃあ続けるけど、態勢が崩れていなくても、動きが遅ければ大技も当たる。当然だよな」

結果は、ラプラスから放たれた「ぜったいれいど」による蹂躪だった。

機敏さの失われたアリアドスにできることはなかった。

整えるはずだったフィールドは荒らされ、凍結した。

疲れひとつ感じさせないラプラスを戻したサラナは、ニンフィアを繰り出した。

通常種とは違う、青いニンフィアだった。

首に巻かれた銀色の王冠の首輪を、誇らしげにしているのは錯覚ではないだろう。

対してグズマはカイロスをフィールドに出した。

相性で選べるほど、グズマはポケモンを育てられていない。

バトルに出せるポケモンの育成は、努力で補うにはひどく難しい。

互いに無言で、だが隔絶した違いがあった。

「ハイパーボイス」

ニンフィアが独特な溜めの動作を見せる。

サラナが昔、音の情報加工していると同時に火力を出すためだと言っていたのを思い出した。

音技は視認できないが、顔が向いている方向に攻撃が放たれるため、カイロスなら十分に避けられる。

そのはずだったが、平時と比べてカイロスの動きが僅かにおかしかった。

短い時間ではあったが、その違和感が隙に繋がった。

グズマの知る中で最も強い技、それよりも範囲が広く強いことを察したのは、ニンフィアから放たれた直後だった。

見えない破壊の塊が、氷を砕きながら奔る。

「っー… でんこうせっかー！」

咄嗟に指示を出せたのは、先ほどドラプラスの攻撃を見たからか、過去にサラナとの対戦経験があったからか。

どちらにしろ、対処するには何もかもが足りなかった。

カイロスが音から逃れるために技を放つが、すぐに音に弄ばれ、枯れ木のように吹き飛んだ。

追撃とばかりに氷の破片が突き刺さる。

「カイロスは寒さに弱いよ。だから技がちよつと遅くて避け切れなかった。見てから回

避するなら、メガカイロスくらい速さが無いとね」

ひん死一步手前まで追い詰めたカイロスを前にして、ニンフィアに慢心する素振りはない。

そのあとの流れは、まるで先ほどの焼き増しのようだった。

相手をそのフィールドから動かせないまま、カイロスは倒れた。

グズマの握りしめた手から血が流れた。

舞い散るダイヤモンドダストの奥で、サラナは無表情だった。

相手の思うままに進むポケモンバトル。

フィールドに出したグソクムシヤの背を見る。

言葉が出てこなかった。

こんな時、なんと声をかけるのか。

今さらグズマには何も思いつかない。

昔はただ感情のままにがむしやらに叫ぶだけでよかった、ポケモンを信じれば良かった。

いつか倒せると信じていたから。

今は違う。

望む先が見えない、絶対に。

無駄に積んだ経験だけが、それを予感させていた。

ここ何年かの悪癖。

感情の発露を、壊すことで発散させてしまったクセが出てしまいそうだった。

昔とは違うそれをしてしまったとき、グズマはトレーナーではなくなるだろう。

二度と戦いを挑む強さを持ってないだろう。

「グソクムシャ……」

グズマが振り絞って出てきたのは、ポケモンを呼ぶことだけだった。

負けるのが怖かった。

昔と変わらないのが、怖かった。

空中に舞い散っていた小さな氷の結晶が煌めいていた。

彼の象徴であるポケモンが姿を現すと、解けた氷は薄い霧となった。

その首には金色の王冠が輝いていた。

最強の名を欲しいがままにしている、黒いリザードン。

金は一番の証だ、当然サラナ勝者は持っている。

「昔から言ってるよな。速さは強さ。ニトロチャージ」

炎に包まれたリザードンが加速する。



その熱量は、凍結していたフィールドを溶かす。地面が泥へと変化する。

フィールドに出た時だけ最高速で放つことのできる「であいがしら」を使うには、足元が緩すぎた。

使えたとしても意味は無かったに違いない。

霧による白いベールに包まれた見通しの悪いフィールドを、高速で縦横無尽に動き回りザードンを、グソクムシシャは捉えられないだろう。

「メガシンカするまでもないよね。……なにやってたんだよ、グズマ」

失望の声音に乗せられたその言葉は、グズマが言うはずのものだった。

こんなはずではないと言おうとして、だが当然だと受け入れてしまう。

恐怖で、失望で、頭を抱える。

サラナに失望したはずだった。

だが、戦ってみてどうだ。

常に歩み続けている。

戻ってきたのだから、正しい役割と理由がある。

自分はどうだ。

どこにも行けず、何もできず、何も変わらない、昔のままのグズマで勝てるわけがな

かった。

だって、昔から一度も勝ったことがなかったから。

わかりきっていたことだった、目を逸らしたことだった。

——おれだったら、おれは誘わない。相談しない。期待しない。……だって弱いから

グズマの目の前が、真っ白になった。

## 鬼滅 1

「私はね、素晴らしいものを知っている。そして、美しいものを見ている」

「大躰、君もきつと同じだ」

「君が掛け替えのないと思ったもの、感じたもの。それが幸せなんだよ。それを守れる君は……」

小さく鈴の音が鳴った。

うつくしいものを見た。

素晴らしいものを知った。

幸せを心に抱いて生きている。

—— 1

仲間たちとの合同任務を終えると、いとま違を与えられた。

時間を得た俺のすることと言えば、いつもと変わらず集めた手記や日記を修復し、繋

ぎ合わせることもくらいだった。

鬼殺の一族や藤の家紋、元柱、育手など、思いつく限りの家々に訊ねて集めた『始まりの呼吸の剣士』に纏わる資料。

少しでも関わった痕跡のある人々を訪ね、話を聞かせてもらった。別に歴史に興味があつたわけではない。

勝手に希望を見出して始めた事だ。

仲間たちは、世話になつた育手へと挨拶に向かうと言う。

一緒にどうだと誘つてくれたが、親子のように仲の良い団欒に分け入るのは忍びない。

以前に何度も邪魔した身であるし、また幸運なことに辿っている足跡の近くまで来ている。

今回は申し訳ないが、と断つた。

「水入らずで楽しんでくれ、水だけに」と付け足す。

凍てつく冬の水に似通つた冷たい視線は、流石は水を修めているだけはある。

居た堪れなくなつて、その場から足早に離れた。

用向きがあれば鴉を飛ばし、仔細は文を括る、そう告げて。

新しく手にした手記に記されていたそこは、村と見紛う規模しかない小さな町だった  
が賑わっていた。

雪が積る通りにも活気があった。

寒さを忘れたように人々が顔を出していた。

表情に影は無く、誰もが明るい。

仲間と離れた少しの寂しさを忘れるほどだった。

何の気なしに立ち寄った食事処で品書きに目を通していると、外から澆漉とした声が  
聞こえた。

まだ年若い少年の声で、何処までも明るく澄んでいた。

より一層賑やかになった外へと目を向けた俺の姿に気付いた店主が、ああ、と呟いて  
話し始めた。

近くの山に住む炭焼きの少年で、度々町に下りてくるのだという。

父を失った身で、まだ子供ながらに家族を支えているのだとも。

立派なことだと俺が小さく頷くと、店主は「それだけじゃあない」と続けた。

素直なのだと、優しいのだと、思いやりがあるのだと、店主が尽くせるだけの優しい  
言葉で少年を頷っていた。

少年の名を呼ぶ声が響くと、それに応える少年の声もまた響く。

それは単なる挨拶だったり、頼み事だったり、時には相談事のような物だったりもするが、誰もが一樣に優しい声音をしていた。

優しさに溢れている、立派なことだと俺は深く領いた。

美しいものを見て育った。

この世はありとあらゆるものが美しいと知っている。

町や田畑を見て回り、日が暮れつつあった。

近隣の山を幾つか練り歩くことにする。

ここから十里も離れない場所で鬼らしきものが起こしたであろう事件の報告があったからだ。

夜闇に紛れた鬼は活発になり、だからこそ日中よりも遥かに容易く見つかる。

山へ向かう道すがら、町の人々が心配そうに声を掛けてくれる。

甘えたくなる弱い気持ちを抑えつけ、申し訳なく思いながら断る。

夜が明けて鬼が出たと知らせを受けてしまったら、俺は後悔するだろう。

心の秤に掛ければどちらに傾くかなど歴然だった。

山々を数珠で繋いだかのように、鬼の暴力的な気配が血の臭いとともに漂っていた。

色濃く残り、その晩は消えることの無いであろう不快さを追う。

雪に片脚が埋まる前に、もう片脚を前に出す。

その繰り返しで愚直に進む。

そうすることで雪原を滑る様に駆け抜けた。

鬼の濃い気配は、山の中に建つ一軒家から感じられた。

中には、奇妙な気配と身体構造をした鬼が立っていた。

家屋の壁越しに、その鬼と視線が合った。

相手にはこちらが見えてはいないのだろう、しかし、その類まれなる出鱈目な身体能力で察したに違いない。

その背から複数の管が僅かに伸びるのが感じ取れた。

余裕があるのか、鬼の身体能力からして悠長とでも表現できる動きだった。

管が向かう先には、女子供が怯えるように震えていた。

母親だろうか、姉だろうか、幼い子を自身の身体で庇うようにしながら地に伏していた。

殺そうとしたのか、人質にしようとしたのか。

怒りが、思考の悉くを焼いていた。

薄くなった視界の隅で、白い星がちかちかと瞬いたようだった。

管が伸びるより速く、家屋ごと鬼の頸を切り裂いた。

平時よりも威力の高まった斬撃に、俺は僅かばかり困惑した。

だがそれ以上に驚愕した。

その鬼の頸が切断した端から僅かに繋がっていたためだ。

再生速度が、過去に戦った全ての鬼と比べて遥かに上回っていた。

それでも何故か遥かに威力が高まった斬撃に耐え切ることはできないらしい。

僅かに肉と血が焦げる臭いがした。

遅れて壁を蹴り砕きながら俺が現れると、鬼は管を伸ばすことを辞めたのか、土間に突き立てその勢いで外へと飛び出した。

その衝撃は、まるで小さな爆発を起こしたかのようだった。

倒れ伏す者たちを庇うように、残骸や障害物を外へと切り捨て、被害が及ばないように俺も外へ出る。

遅れて、斜めに切断した家屋の一部が滑り落ち、雪が舞った。

月明かりに照らされて幻想的とも言える風景だった。

佇んで眺めているだけでも、どこまでも美しいに違いない。

だが、今だけは銀色に輝く雪すら煩わしかった。

静かで、穏やかで、平和な、そんな暮らしをしていたことが見受けられる家屋に鬼が



いた。

顔を合わせた瞬間に、互いが相容れなることのない、憎しみの対象であることが理解できた。

その鬼は、憎悪に染まった表情をしていた。

俺もきつと同じような表情をしているに違いなかった。

負の感情で相手を殺せるのなら、幸運なことに互いに死滅していただろう。

どの様な時であろうとも心を鎮めるようにという家族の教えすらも、この場から掻き消えていた。

「何が楽しい？ 何が面白い？ 命を何だと思っているんだ」

流れるように、その言葉が口から洩れていた。

予て抱いた疑問だった。

問いに応えることは無く、忌々しそうに表情を更に大きく歪めた。

見開かれた眼はぎよるぎよると血走り、額や顛顛こめかみには血管が浮き出していた。

その重さすら感じさせる異様とも言える気配と姿から、やつと鬼舞辻無惨ではないかと思いはじめた。

じりじりと詰めれば、同じように僅かずつ下がっていく相手に間合いを測り兼ねていた。

畜生相手に問答など意味がないことがわかるまでに、時間が掛かりすぎていた。

管を払う刀は、くすんだ黒みのある滅紫めっしの刀は、その場の怒りや憎しみが色に顕れたかのように赤熱していた。

初めて見る刀の色だった、怒っていた、人を庇わなければならなかった、突然鬼舞辻無惨と出会った、何よりも運が悪かった。

そのように織り重なった出来事によって判断が遅れたことこそが、最後に残った事実だった。

迷うことなくその懐へと飛び込み、朝まで斬撃を入れ続けるべきだった。

家の中から苦しむ声が聞こえた。

無惨から伸びた管が地中を進み、倒れ伏す少女の傷口に深く刺さっていたのが見えた。

小太刀を投げつけ、少女から管を切断する。

まだ少女は生きていた、確かな事実だった。

安堵と喜びに息を吐く。

……だから僅かに気が逸れた。

無惨の身体が変異していた、内部ではぐつぐつと煮えたぎる溶岩に似た生命力が膨らんでいた。

焦りか不安からその醜い身体を、管ごと切り刻み続けた。

脳内で、今までに集めた記録が繋がりに、虫食いの指南書に至る。

その瞬間に、俺は幾つかの正しい型を導くことが出来た。

美しい型だった。

素晴らしい呼吸だった。

背筋がひやりとした。

咄嗟にその場を跳び退いて、家の前まで下がる。

着地と同時に、視界を埋め尽くすほどの肉片が飛び散った。

無駄に増やした脳と心臓は意味があったのか、阿呆な疑問で動揺したのか、髪飾りの

鈴がりんと静かに鳴った。

はっとする。

冷静さを取り戻しつつあった。

肉片が迫る。

復元した『呼吸』を使い、そして理解した。

冷えた思考で肉片を斬るたびに、心苦しく思う。

羽織で焼き払うたびに、申し訳なきが溢れるようだった。

俺はこの『呼吸』を正しく使うことはできないし、完全に再現することもできない。

初めて壱ノ型を使ったあの日から薄っすらとわかっていたことだ。

認めたくなかったことでもあった。

技量が、才能が、肉体が、悲鳴を挙げていた。

俺が出来たのは、飛び交う数百の肉片を滅ぼした程度だった。

赤熱によって跳ね上がった斬撃の威力が、時間とともに失われていたのも原因だろう。

限界だった。

求め続けた『日の呼吸』は、やはり特別に強い型でも、呼吸でも無かったことを知った。

単に、『無駄のない一撃を繰り出す型』であり、『その動きを補助するための呼吸』ではない。

『日の呼吸』が使えるから強いのではなく、強いからこそ『日の呼吸』に至る。

使えたならば弱者でも下弦に連なる鬼程度ならば一撃で葬れるが、おそらくそれを成すには神に愛された天賦の才か、果てしない悠久の研鑽か、至るにはあまりにも矛盾を抱えていた。

鬼狩りは復讐心を原動力に動く、才能のあまりない単なる人間が多い。

普通の人間が、この『呼吸』を十分に使うには、世代を重ねて『日の呼吸』へと適応

する狂気が必須となる。

美しい型だった。

素晴らしい呼吸だった。

いつか復元出来ると思い込んでいた。

正しく伝えることができると信じていた。

これがあれば鬼を滅ぼせると、心のどこかで妄信していた。

あまりにも凄すぎて、残らない。

だからこそ悲しかった。

消え失せた気配に、筋肉が弛緩する。

なんらかの理由で赤く熱されていた刀は、すでに元の色を取り戻していた。

舞い散る雪や外気、そして至った理由の不明によって維持できなかつた。

威力の高まりは凄まじいが、時間とともに失われてしまう。

理由が判明したとして、戦闘中も常に最高の状態を維持し続けることが可能なのかわからない。

また疑問が増えてしまった。

長く息を吐いて、家の様子を見て回り、血の気が引いた。

最後、地中から出た管に刺された少女の気配が、鬼になりつつあることに気付いた。半身が残った鬼舞辻無惨は逃げ切るだろう。

後を追うには、この場は余りにも不安で満ちていた。

浮かんでいる月も隠れ、太陽が山を照らすのだろう。

やがて、夜は終わりを迎える。

## — 2

人間が鬼になるとき、生きた家族を残す傾向にある。

鬼に食わせるためだ。

抗い難い飢餓によって家族を犠牲にさせ、後戻りさせないつもりかもしれない。

悪趣味なことだが、この場の命を救えるのは幸運でもあった。

準備の途中で俺が駆け付けたのは、無惨も予想できなかったのだろう。

早急に俺の手でできる処置は済ませた。

傷を縫うか、薬を使うか、血を拭うか、その程度でしかない。

目覚めることで、起きていることで、体力を削ったり痛みに呻く必要もないだろう。

薬を打ち、眠らせる。

二羽の鎧かすがい鴉からすが競い合うように差し出した足に、手紙を括り付ける。

一羽には挨拶に行つた仲間をこちらに呼び寄せ、そのままお館様の元へと飛ぶ純粹な体力仕事だ。

もう一羽は、近隣から手の空いている隠カクシや医療班を集めてもらう、速さの必要な仕事だ。

俺の名を出していいと最後に告げ、払暁の空へと飛ばす。

囲炉裏や火鉢を勝手に使つて暖を取れるようにしたが、このままだと俺以外が凍えてしまう。

斜めに屋根を失つた家を直すとしよう。

手が器用な隠が来てくれると嬉しいのだが。

何とか屋根を乗せて固定し、あとは鬼になつてしまふ少女を斬るだけだ。

鬼になるまでの時間は、人によって異なるらしい。

今は眠っているだけだが、その血に順応したとき、鬼へと変貌する。

つまるどころ、今は人間だ。

鬼となつてから斬つても遅くは無いのではないか。

俺ならば拘束も容易だ。

いや、それだと家族の誰かしらが目覚め、死ぬところを見る可能性がある。

一般の家庭、それも子供ばかりに長女の生死を委ねるのはあまりに現実的ではない。そもそも生かしたいと願うだろうが、その手段がないことに気付き、死を乞われるほどに態々絶望に落としてから殺すのはあまりに非人道的すぎる。

……本音は単に殺したくないという情弱な理由からだ。

鬼となつて人を食つたのなら殺そう、そこに躊躇いを抱く理由はない。

だが、まだ鬼にもなつていない少女を殺すことはひどく難しい。

どれだけ鬼狩りとして生きてても、陽光で焼くことすら、割り切るには足りない。

決断できないまま、日の当たらない場所に少女を寝かせている俺の姿を見たら、仲間たちはなんと言うだろうか。

殺す必要がある、少女の前で半ばまで抜いた刀を持て余す。

だが決意が固まらない。

理解できているが、それまでだ。

人の気配がすぐそばまで近づいていることに気付いた。

それも子供のもので、腑抜けるにもほどがあつた。

警戒しているのだろう、斧を構えたまま室内へと入つて来る。

町で評判の良かった炭焼きの少年で、名前は確か炭治郎たんじろうと呼ばれていた。



上がり切った息を整えるために、肩を激しく上下させていた。

勘が良いのか、それとも何か優れた能力があるのか、走ってきた様子が見て取れた。乾いた血のついた室内の様子や、破損した屋根、そして俺の持つ刀へと視線を巡らせていた。

俺と目が合った炭治郎は困惑した様だったが少し臭いを嗅ぐと、すぐに斧を手放し、首を垂れ、額を床に付けて深く土下座した。

「家族なんです！　大事な妹なんです！　殺さないでください！」  
判断が遅れたことに後悔した。

鬼だと断定して処分すべきだった。

家族を大切に思う少年から、妹の生存という希望を取り上げることになる。

次いで日が射していることにもやっと気付いた。

それほどまでに緊張していた、怒っていた。

振り返ってみればひどく短い夜が終わったのだと、深く刀を握り込んでいた手を緩めた。

「……話をしよう。そこは寒い。こっちに來なさい」

俺はなんとかその言葉を絞り出した。

「鬼は……禰豆子は治らないんですか……？」

鬼と鬼殺、現状までの話を掻い摘んで伝えると、炭治郎はそう呟いた。

疑う素振りは一切見せなかった。

素直だった。

素直すぎたとも言えた。

ただ、諦めきれないだけ。

その視線は、俺の近くに寝せている妹から離そうとはしなかった。

「わからない。……いや、この言葉は卑怯だな。これまでに治った者はいない」

「……禰豆子はどうなりますか」

「……頸を斬って殺す。骨も、灰も残らない」

俺の言葉に炭治郎がひどく青褪めた。

家族の無事に安堵した姿が遠い昔に思えた。

体が震えていた。

握りしめた手は血の流れが止まっているのか、青白くなっていた。

「俺が面倒を見るから……だから……」

「……鬼となったが最後、大人よりも力強く血に飢えて狂暴になる。老いない、死なな

い、誰とも接することはできない。そんな妹を、暗い地下牢にでも閉じ込めるのか。それとも日の当たる庭にでも繋ぎとめるのか。お前がずつと抑えつけるのか。……家族がいるのだろう、そして炭を売って生計を立てているのだろう。鬼となった妹の相手をしてお前たちは生活できるのか。それとも、他人である俺に世話を頼むのか」

炭治郎もわかっている、だからこそ幻想を詰め込んだ中身の無い言葉を切つて捨てる。

言葉は続かず、嗚咽を漏らすだけだった。

握った拳からは、込めすぎた力で皮膚が裂けたのか、血が流れ出ていた。

「止まれっ！ 禰豆子っ!!」

目を見開いた炭治郎が、その名を呼んだ。

その叫びは、もはや悲鳴ですらあった。

鬼となった妹を止めるために咄嗟に出たのか、見たくない現実には怯えたのか。

寝ていたはずの禰豆子が、家を揺らすかのように大きく咆哮し、襲い掛かってきた。

強い飢餓感から、一番近い俺を襲ったのだろう。

成りたての鬼に負けるはずもなく、叩きつけるように殴り倒した。

気が乗らない、力が入らない。

炭治郎が羽交い絞めにしようとするが、その力に敵わず、振り払われた。

これが現実だ。

炭治郎も思い知っただろうか、現実には打ちのめされるだろうか。残念だった。

人を食う鬼は殺さなければならぬ、家族を食うなどあつてはならない。彼らの家の中で、そして家族の前で、頸を斬るのだけは避けたかった。

何も残らない死は、心に残す傷はきつと暗くてどこまでも深い。

今度は俺が、目を見開いた。

禰豆子は荒い息を吐きながら、俺の前に立っていた。

炭治郎を庇うように両手を広げていた。

嗚呼、と俺は理解した。

炭治郎が傷ついたから、彼女は目覚めた。

ちらりと家族のほうに視線を向けて、強い飢餓が引き起こす食欲によつて涎が流れ出ている。

それを堰き止めるように、鋭利な牙が伸びた歯を力強く食いしばっていた。

家族を食べべそうになった悲しみだろう、禰豆子の変異した瞳から涙が次から次へと溢れていた。

縦に割れた瞳孔が、理性と狂気に揺れていた。

「大丈夫だ！ 禰豆子！ 俺が治すから！ 守るから！ だからきつと大丈夫だ！」  
じつと二人を見る。

炭治郎が背中から禰豆子を抱きしめ、声をかけていた。  
必死に庇おうとしている禰豆子と目が合う。

揺れていた瞳が徐々に理性を持ち始め、落ち着きを取り戻す。

お館様が喋る速さを真似て、ゆつたりと手を揺らす

眠気を覚えたのか、その瞳はとろんと微睡んでいる。

そのまま手を伸ばして頭を撫でると、禰豆子は糸が切れたように床に倒れた。

「眠ったから大丈夫だ」

「ありがとうございます！ でも次に禰豆子が起きたら……」

与えられた血が少なかったのか、他とは違うのか、わからない。

ため息を一つ、緊張を緩めた。

自身が未だに腹を切らずに生きていられるのが不思議だった。

「……禰豆子は他の鬼と違うように見えた。目覚めて人であるお前を守る姿は見たことが無い。もしかすると人を襲わない、または襲いにくいのかもかもしれない」

つい、言ってしまった。

炭治郎の瞳が、希望を見出したかのようにきらきらと輝いて見えた。

それはきつと絶望に浸った落差から希望に見えるだけのこと。

希望へと続くそれはどこまでも細く、目を細めて見える程度の頼りない糸でしかない。

「隊員には給金が支払われる。また、任務として鬼を滅する仕事を与えられる。鬼に闘わり続けることになる。炭治郎、お前が進み続けることができるなら禰豆子をいつか治せるかもしれない」

「……それなら、俺がきつと見つけ出します。禰豆子を鬼に変えた奴も、人間への戻し方も」

眠る禰豆子の背を撫でながら、はつきりと炭治郎がそう言った。

心に天秤があるなら、限り限りで保っていた平静を、俺が傾けてしまった。

つらいとき、かなしいとき、投げだしたいとき、その苦しみが禰豆子への恨みに変わってしまうのではないか。

自分で選んだと思わせたことが、重荷になってしまっているのではないか。

鬼がいなければ優しい子でいられた、仲の良い家族でいられた、現状が不憫で堪らない。

「ああ、険しい道のりになると思う。挫けず進みなさい。俺も出来る限り手伝おう」

「ありがとうございます……。家族の事も、禰豆子の事も。どれだけ感謝しても、お礼を

しても足りないくらいなのに俺にできることなんて……」

炭治郎に手を翳し、言葉を止める。

そして首をゆっくりと横に振る。

感謝されると悲しくなる。

罵倒されると心配になる。

鬼がいなければ、そんな感情すら抱く必要がないはずなのだから。

「いいんだ。生きていてくれるだけで嬉しい。そのための鬼狩りだから」

小さく鈴の音が鳴った。

——3

「あれは確か、十年ほど前だった。……長い話になる」

「はいっ！」

俺が話を始めると、炭治郎は姿勢を正して真剣な表情を浮かべて元気よく返事した。

すぐ傍では禰豆子が深い眠りに入っている様子だった。

「……話すのは要点だけでも話せるが、どうする？ 長々と話すのは嫌がらせではない

ことを告げておく」

「面倒でなければ詳しくお願いします！ ……俺は必ず禰豆子を治す方法を見つめる。だから、もつと鬼についても知らないといけないんです」

その言葉に、わかった、と頷く。

仲間や隠が駆け付けけるまでには、まだ時間を要するだろう。

長く話しても構わない。

傷ついた家族、鬼になった妹を心配して精神をすり減らしている。

話に集中して少しでも忘れられるといいのだが。

「鬼とは会話が成り立たず、また共存も不可能だ。鬼に成りたてでは、飢餓に襲われ、思考が人間を食べることだけに染まるからだ。理性を持った賢い鬼は、たくさんの人間を食べて力を付けた強い者だけだ。当然、人間を食料としか見ていない。会話することすら困難だ。だからこそ、鬼狩りは古い時代から受け継がれてきた」

そんな話始めから、俺が鬼殺の剣士となった経緯を紡ぐ。

さわりだけになるだろう。

今はまだそれで十分だ。

「俺は森の奥深く、貧しい家に生まれた。先祖が作った罪と恥のせいで隠れ住む必要があつたと教えられた」





## 鬼滅2

— 3

俺が生まれたのは森の奥深くに住む、猟師の家だった。

物心つく前に母は他界し、慣れないながらも父が一人で育ててくれた。

父は山の知識が殆どない人で、狩猟もまた下手だった。

十日の間で、運が良ければ小さな鳥か兔を一羽捕まえられる程だった。

山に分け入ってくたくたになるまで練り歩いて、酸っぱい木の実か山菜を僅かに持つて帰るだけだった。

貧しい暮らしだった。

何もない、他人と出会うことも全くなかった。

娯楽と言えば父との話だけ。

よく話をせがんだ。

父も俺を憐れに思ったのか、母の話を色々と教えてくれた。

父が家を出て逃げていた時だったという話だ。

途中で山を越えようとして道に迷い、助けられた事が母との出会いだったらしい。その時、父は熊に襲われていた。

熊の身の丈は大人を縦に二人並べても優に超えるほどの巨体を誇った。

母は、そんな熊を軽々と鉈一本で仕留めて見せたという。

命を助けられた父は、母のその姿に惚れ、紆余曲折あつて二人は夫婦になった。

それから数年、父は何よりも幸せだったと話した。

母は口数少なく、表情もいつも沈んでいたが、俺が生まれた時は笑顔を見せたのだとも。

少しずつ父が教えを受けて山に慣れつつあつた矢先、母が亡くなった。

朝起きた時、眠る様に息を引き取っていたらしい。

そこから父は一人で俺を育てた。

時には間違つた山菜を摘んで苦しんだこともあつた。

山を下りることも考えなかつたわけではないが、母の遺言に従つて今も山にいる。

いつも母の話はここで終わる。

出会いだったり、教えだったり、そういった思い出を詳しく話してくれる。

俺が何度聞いても、遺言については教えて貰えなかつた。

ただ、俺の額を撫でて「お前は母さんに似なかつた。父さんに似た」とだけ呟いた。

俺が数えて十の年頃、父は病気を繰り返すようになった。

それまでもよく体調を崩していた。

いつまでも慣れることのない山での過酷な生活は、それほど体の丈夫ではない父には厳しかったようだった。

床に臥すことが多くなった父は、負い目からか俺に人の暮らしやちよつとした勉強を教えてくれた。

俺もそれに応えるように、一層励んだ。

弱っていく父とは反対に、俺の身体は丈夫だった。

父に代わって山へと入るようになっていた。

能力は母に似たのか、独学でも難なく狩猟して暮らせた。

山を下りようと何度も言うが、父は頑なに拒んだ。

無理やり連れようとすると、病人とは思えない力で床や壁を掴んで離れず、俺のほうが根を上げるばかりだった。

次第に悪化し、父の咳が止まらなくなり、自力で起き上がることも出来なくなっていた。

今日こそは山を下りるのだと背負った。

珍しく拒まなかった。

しんしんと雪の降る中、父を背負って歩いた。

川を辿れば人里に付くと、昔聞いたことがあった。

俺の背で、父が咳混じりに呟いていた。

意識が定かではないのか、よくせがんだ話だった。

いつもなら母が亡くなった下りで終わるのだが、止まらなかった。

父が家出する際に持ち寄った道具が床下にあること、母の亡骸を埋めた場所、父の家  
の場所。

初めて聞く話ばかりだった。

「俺にはわからないが、お前の母さんは先祖が理由で山に隠れ住むことになったらしい。『過去の罪と恥が赦されるまで、人々を襲う獣を狩って生きる』、そうも言っていた。どんな罪と恥なのか、聞いても知らないと言っていた。もう随分と昔のことなのだろう。忘れられているか、赦されているに違いない。父さんに似たお前の額には、母さんのように薄い痣がない」

父がそう言った。

咳は止まっていた。

呂律が回っていないような喋りだったのに、その時ばかりははっきりしていた。

「これは自慢だが、父さんは素晴らしい家に生まれた。人の命を助け続けた一族だ。才能が無いから逃げたが、それでもこの血は誇らしいものだ。お前にも当然流れている血だ」

。どんと背中の中が軽くなっていった気がする。

熱も失われていた。

父の身体から目に見えない、しかし人として生きるための致命的な何かは抜け出ているようだった。

「ずっと考えていた。両方の血が合わさったお前は山を下りていい。ここに残る俺が赦す。今まで引き留めてすまなかったな。そろそろ俺は眠るよ。心配しないでいい、夫婦だから一緒に寝るだけだ。隣り合って、寝るだけ」

俺の体は力に満ち溢れていた。

それなのに、ぞっとするほど体の芯まで冷えていた。

父の負担になるかもしれないのに、震えが止まらなかった。

人を背負っているのに、命があるはずなのに、あまりにも軽すぎた。

「決心できなかった……。俺はずっと弱い……。意気地が無く、臆病だった……。お前に、

おにの……」

—  
4

叔父上と兄上、新しい家族が二人増えた。

二人は俺に、刀を使う技術と勉強を教えてくれた。

刀を用いて鬼を狩る、それが俺に求められる生き方だった。

これまでも獣を狩って生きてきた。

何も変わらない。

それ以外の生き方を考えたこともない。

だからちようどよかった。

『風の呼吸』と、それに連なる剣技を学ぶ。

刀を振る事で風を操り、また風を読む技術だった。

目に見える物だけでなく、髪の毛の先まで神経を通して感じ取る。

実際は空気の流動などを肌や毛先で感じ取り、状況の把握に活かすのだという。

あまりにも難しく、叔父上と兄上の根気が無ければ俺は根を上げていたに違いないほどだった。

兄上はこの技術に優れていて、透けているかのように壁を越えた先の様子を当てることができた。

呼吸に併せて、『羽織』の着方も学ぶこととなった。

日光によってきらきらと僅かに輝くそれは、鬼狩りの装備である日輪刀を縫い付けていると教わった。

担い手を失った一族の日輪刀を細く断ち、骨子として徹していることも。

また、細かい破片も表面に刺してあったり、袖口などに溜めてあり、鬼へと目つぶしが可能だとも教えられた。

何も知らぬ者が袖を通すと、僅かに動くだけでも自身を切り刻むほどに危険でもあった。

羽織は代々一族の当主が着ることになっており、兄上が着ることになるだろう。

俺が学ぶ必要もない技術だったので呼吸も儘ならない身だと遠慮しようとしたが、二人から熱心に勧められたので修めることとなった。

兄上に至っては、鬼狩りの仕事で忙しい身でありながら、暇が出来たらと付きつきりで俺の面倒を見てくれた。

口に名号を唱え、心に相好を観じ、書を書き写し、目で先人を擬え、行住坐臥、暫し



も忘れず。

白い着物の上に、袖口などに乾いた炭が塗られた羽織を着て過ごした。

この乾いた炭が塗られているのは、骨子として日輪刀が縫い止められている箇所だという。

羽織を脱いだ時に、着物が汚れていれば自らを傷つけたのと同じこと。

俺の着物は何度も炭を落とした後で汚れきっていたが、兄上の着物は不思議なことに一切の汚れが無かった。

首を傾げる俺を可笑しそうに見た兄上は「私は子供の頃からやっているからうまく言えないが、常に意識を全身に向けて保ち続ける必要がある」と助言してくれた。

歩く、走る、座す、立つ、剣を振る。

呼吸が苦しい。

着物が汚れた。

剣技が難しい。

着物が汚れた。

ふとした瞬間に気が抜けた。

着物が汚れた。

模擬戦闘で打ちのめされた。

着物が汚れた。

叔父上は「風の呼吸が合っていないのかもしれない。他の呼吸も調べる必要があるかもしれない。とはいえ、これは剣技に通ずる動きだ。羽織を着て動く技術を身に付けたほうが強くなれる」と言いながら、落ち込む俺の頭を撫でた。

そんな毎日が続いたある日、兄上の挙動がどうもおかしかった。

そわそわというか、きよときよとというか。

奇妙に思い、叔父上に尋ねると曖昧に笑みを浮かべるだけだった。

兄上のおかしさは挙動だけに留まらなかった。

宙を見上げたかと思えば、ふらふらと歩き回り。

玄関と自室を行ったり来たり繰り返す。

終いには模擬戦闘で、掠ったことすら無かった木刀の先が兄上の羽織に当たったほどだ。

そのことで反射的に兄上の力が入ったようで、普段とは全く違う威力で反撃されたため、回避しきれずに木刀の切っ先で額を裂かれてしまった。

しきりに謝ろうとする兄上にそんな必要はないと言いつづけた。

むしろ懸絶した実力に、更なる尊敬を抱いた。

叔父上に許可を貰い、裏にある井戸へと傷口を洗いに向かう。

風を纏った一撃は広い範囲で額の皮膚を引き裂いたが、そう深いわけではない。

数日もすれば乾いて気にならなくなるだろう。

頭から井戸水を被っていると、鈴の音を聞いた。

少しずつ近づいてきている。

気になって、音の元へと向かう。

玄関から聞こえる音だった。

気配は、華奢な体格をした人だろうか。

「ごめんください」と、鈴の音に良く似た高い声が戸の向こう側から聞こえた。

返事とともに戸を開ける。

艶のある黒髪を鈴の付いた髪飾りで纏め上げている、透き通るような白い肌が特徴的

な女性が立っていた。

こんなにも美しい人を見たのは初めてで、俺はその時惚けて固まってしまった。

女性は俺の様子に僅かばかり首を傾け、そして遅れて額の傷に気が付いたようだった。

た。

柔らかなで繊細な小さな手が傷口の近くに触れて「無理して来てくれたのかしら？」と

眩いた。

兄上が駆け付けて来るまで、俺は固まったままだった。

美しい人だった。

憧れだった。

初恋でもあった。

女性が、兄上の許嫁だと紹介された。

二人は弟が欲しかったのだと俺を可愛がってくれるが、それが申し訳なく感じた。

近くに居ていいのか、二人が話している間に割って入っていいのか悩むほどだった。

それくらい俺にも、二人が仲睦まじいことがわかった。

幸せだとわかった。

— 5

義姉上が好きだった。

話せば胸が高鳴るし、緊張して素直になれなかった。

義姉上が歩くと髪飾りの鈴が鳴り、何処にいるかすぐにわかった。

音が近づくだけでも嬉しかった。

何でも差し出せてしまうくらい夢中だった。

だが、それ以上に兄上と一緒に居て、朗らかに笑う義姉上が尊い物に感じた。

同じくらい、義姉上と一緒に居て、緊張しながらも笑みを隠し切れない少しだしな  
い兄上が好きだった。

俺は二人が好きだった。

叔父上と兄上と暮らすのも好きだった、そして兄上と義姉上と一緒にいるのも好き  
だった。

どちらも気持ち豊かになるし、気持ちが高揚した。

全身がふわふわしてほんのりと温かかった。

呼吸や羽織のことで少しばかり気持ちに焦りを抱えていた。

それも、二人が俺の相手をしてくれるだけで霧散した。

お礼に山で摘んで作った花輪を二人に渡した。

祝言が迫っていたということもあつた。

所詮は子供の遊びに違いなかつたが、二人は喜んでくれた。

後日、義姉上が俺に「可愛い義弟へのお返しです。修行の手助けになれば幸いです」と  
二個一対となる鈴の飾りをくれた。

それを見た兄上も「お古になるのだけれど」と、自室から少し古くなった同じ鈴の飾りを持ってきてくれた。

兄上もかつては手か足に巻いて使ったのだと教えてくれた。

二人から貰った飾りを有難く巻くと、未熟な俺は両手足から鈴の音を絶えず鳴らし続けるようになってしまった。

それを見て、二人はおかしそうに笑ってくれた。

俺はそれが嬉しくて、同じように笑った。

その日は二人と一緒に、手を伸ばせば届くほど近くに布団を並べて眠った。それがまた俺は嬉しかった。

数日後、二人は夫婦になった。

二人は笑顔だったし、叔父上も笑顔だった。

俺も、もちろん笑顔だった。

幸せな人を見ると、一緒にいると、自分も幸せな気持ちになれる。

俺は素晴らしいことを知った。

「失礼ですが貴方は……父に鍛錬を？ ……そんな遠方から！ 父は厳しいが熱心に教えてくれますよ！ 俺も将来は父のような強い柱となるから一緒に頑張ろう！ 継子？ 泣きながら出て行って行っちゃいました！ ！ でも今日はさつまいもの日！ 母が味噌汁を作ってくれます！ 千寿郎とも一緒にわっしょいしよう！ ……千寿郎？ 千寿郎は弟です！」

「母が夕餉は何が食べたいかと……いやいや、遠慮しなくていい！ 今日さつまいもの日！ 母が味噌汁を作ってくれる！ 千寿郎とも一緒にわっしょいしよう！ 同じ釜の飯を食べたのならもつと仲良くなれる！」

「鯛だ！ 塩焼き？ 朝飯前の鍛錬で走って買いに？ つまり塩焼きだな！ 母に頼んで弁当に入れてもらおう！ さつまいもご飯も！ 今日出発だな！ 途中まで一緒に行こう！ 弁当も食べよう！」

鈴の音が鳴らなくなり、風の呼吸を修めた頃、叔父上が交流のある炎の呼吸の家を紹介してくれた。

適正があるとは言えなかったが、それでも身に付くまでお世話になってしまった。指導してくれた炎柱の先生には頭が上がりえないし、叔父上には感謝しかなかった。

また、年の近い相手との修行は気持ちも新たにできた。

別れる間際、先生は神妙な表情で「君の呼吸の適正には少し心当たりがある。こちらで調べてみる」と言ってくれた。

帰宅すると叔父上は無事を喜んでくれた。

そして、これまでの話を掻い摘んで伝えると、もしかすると俺が『日の呼吸』の使い手なのかもしれないと教えてくれた。

力になれればと蔵に残っている先祖の手記を読み直してくれたようだった。

僅かに残る資料に書かれていたそれは、『始まりの呼吸の剣士』が使っていたとされる呼吸だという。

詳細な記録は残っておらず、僅かばかりの情報を得られた程度。

分家や、交流のある家々へと、叔父上が連絡を取ってくれた。

数少ないそれらは故意に消された様相を呈しており、虫に食われたように焼かれて穴が空いているか、黒く塗り潰された物が大半であった。



それでも、繋ぎ合わせた記録から、途絶えたつつあったその足跡と功績を僅かではあるが辿ることが出来た。

復元して手繰り寄せた結果として、『始まりの呼吸の剣士』が素晴らしい人柄であったことは間違いない。

彼に助けられた人々の日記から素朴で優しい人だったと推察できた。

美しいものや素晴らしいもの、幸せを知っている人だった。

その人柄には俺も感銘を受けた。

また、その強さも歴代の鬼狩りをして随一なのだろうとも思わされた。

呼吸や型を探れば、ほとんど人柄に触れられることは無く、畏怖ばかりが綴られていた。

余りにも強すぎたためだろうか、その能力が苛烈すぎて、人となりを記録する余裕がなかったのかもしれない。

『日の呼吸』は最強の呼吸であり、他の『呼吸』はそれから分派した物だと綴られた手記も幾つか見かけた。

だが、指南書の類は見つからなかった。

過去に何があつて今へと繋がらないのか、途絶えてしまったのか。

疑問を抱いたが、それでも指標を得たのは励みになった。

『日の呼吸』から他の呼吸が分かれたとのことなのだから、逆を言えばそれぞれの呼吸を修め、混ぜ合わせることで遡ることも可能なのではないだろうか。

無謀な試みだった。

一朝一夕どころか、年を跨いでもその端にすらたどり着かない試みだった。

それでも、試してみたい気持ちが強くなりつつあった。

もしも『日の呼吸』が最強ならば、鬼を滅ぼすことが可能になるはずだ。

そうなれば兄上も家で暮らすことができるし、義姉上が兄上の身を案じることも無くなるし、叔父上も子を鬼と戦わせる不安から解放される。

俺は居ても立っても居られなくなり、復元させてほしいと叔父上に頼み込んだ。

先行きが暗く、途轍もない道のりだと心配された。

それでも俺は『日の呼吸』を復活させたかった。

叔父上は諦めたときの癖であるため息を一つついて、「つらいとき、かなしいとき、投げだしたいとき、その苦しみを相談しなさい」と言いながら俺の頭を撫でた。

俺は嬉しかった。

認められたかのように誇らしかった。

戦ったことのない鬼を滅ぼせる。

そして、成功すればずっと幸せでいられるのだと。

素晴らしい目標に思えた。

— 7

叔父上と先生、多くの人が手伝ってくれたおかげで『日の呼吸』の型を一つだけ復元できつつあった。

やつとのことで形に成ったそれを練磨することも忘れない。

俺の知る限りの『基本の呼吸』を束ねて動きを統一し、『日の呼吸』へと遡る。復元して再現できたと思われる型は、確かに有用ではあった。

しかし、最強と呼べるほどではないとはつきり言えた。

復元が足りないからなのだろうか、確かめる術はほとんどない。

学び続け、考え続ける。

机上で組み立てるには限界だった。

見えない壁の存在を感じ始めていた。

実践による検証が必要だった。

俺は鬼との戦いを欲した。

単独で鬼を狩ることを相談した俺に、ため息とともに叔父上が『鬼殺隊』の試験に推

薦してくれた。

知識だけはあった。

鬼狩りの組織『鬼殺隊』に入るためには最終選別という試験を突破する必要があった。叔父上は何も言わなかったが、義姉上が「焦らずとも、もつとゆつくりでもいいのですよ」と気遣ってくれた。

俺はそれが嬉しかった。

信頼してくれているし、心配もされている。

叔父上も、兄上も、義姉上も、俺の家族はみんな優しい。

先生も、先生の奥さんも、友人も、友人の弟も、みんな優しい。

素晴らしい人たちだ。

誇らしかった。

鬼によって失われることを考えるだけでも怖かった。

だから、『日の呼吸』を求めた。

俺の気持ちからすれば遅いくらいだった。

選別に向かう日。

叔父上と義姉上に挨拶をする。

義姉上は心配そうだったが、そのまま言葉にはせず飲み込んだようだった。

代わりに「髪が少し伸びてきましたね。帰ってきたら整えましょう」と言った。

義姉上は身嗜みに関しては妥協しない、納得するまで続ける人だった。

唯一の欠点だと思う。

叔父上も、兄上も、もちろん俺も、身嗜みに無頓着で、義姉上が呆れながら注意したり助言する。

誰も頭が上がらない。

曖昧に返事をして、二人と別れた。

俺にとって最終選別はただの通過点に過ぎなかった。

叔父上に貸して貰った日輪刀は、鮮やかな緑の刀身をしていた。

斬れない物は無いと強く思えた。

実際、最終選別で躓く事柄は何も起きなかった。

ただ七日間過ごすのが面倒だった。

一緒に選別を受けた狐の面を被った仲間のおかげもあった。

手隙となれば、互いに剣技を教え合い、高め合った。

二人で鬼を殺し尽くした。

初めて戦う鬼が憎くて仕方なかった。

他と比べて少し丈夫な異能を持つ鬼が居たが、『水の呼吸』も取り入れることでほんの少し精度が高まった『日の呼吸』によって斬り捨てた。

七日が過ぎ、選別を終えると自分の日輪刀を打つ鉱石を選ぶこととなった。

刀も注文を付けることができるという。

鬼との戦いで学んだことは、間合いの大切さだった。

だから長い刀を求めた。

狐面の仲間と互いの健闘を讃え合い、任務でまた会おうと別れた。

自分は役に立たなかったと落ち込む連れ合いを背負って去っていく姿が印象的だった。

俺も同じように、任務があればその内容を知らせてくれる鎧かすがいをがら肩にがら乗せ、家路を急いだ。

月が大きな夜だった。

どこかで宿を取ることも考えたが、兄上が帰る予定日だということを思い出して強行したがためだ。

俺の鎧鴉は早々に何処かへ飛び去ってしまった。

だがそのお蔭で帰宅ができたのだから最善だった。

町が見えた。

その外れに家がある。

早く家族に会いたくて仕方がなかった。

誰もが寝静まった町の中を横切っていると、鴉の鳴き声が遠くに聞こえた。

必死な声だった。

なんだか心がざわついた。

あれは兄上の鎧鴉の鳴き声だ。

全力で建物の上に飛び乗り、駆け抜ける。

家が見えた。

人の気配と妙な気配を感じて、庭へ向かう。

片方は鬼だった。

嫌な予感がした。

月明かりに照らされた庭先で、袈裟斬りにされた叔父上が事切れていた。

乱雑な鈴の音が家の中から聞こえた。

言葉を失った俺に、縁側に座していた兄上が語り掛けてきた。

それは涙と血に塗れた顔だった。

鬼狩りになればよく聞く話だった。

聞きたくない話だった。

鬼になった家族を殺せない者と、せめて自らの手で殺そうとする者の争い。

義姉上が鬼になった。

叔父上が殺そうとした。

兄上が止めようとして、叔父上を殺してしまった。

それだけだ。

それだけなのに、どうしてこんなにも悲しいのか。

幸せは何処に行った。

月光で僅かに照らされた室内には、義姉上だった鬼が拘束を解こうと藻掻いていた。

髪飾りの鈴の音が鳴り続けていた。

## — 8 —

叔父の返り血に濡れた兄上は、俺に刀を向けていた。

俺も兄上に刀を向けていた。

稽古をつけてもらった時と同じ構図だった。

違うのは、これが命を賭けた決闘であるということだ。



兄上が鬼を守っていることと、見守っていた叔父上がすでにこの世に居ないこと、それらは許されてはならない事だった。

殺すはずの鬼を守り、守るはずの家族を殺した兄上を、俺が止めなければならぬ。

兄上は自分ではもう止まれない。

決闘は静かに進んだ。

兄上の心身は襤褸雑巾にも似た状態だった。

肉体は右肩が無くなっていたし、親を殺した事実を心で痛め付けただろう。

刀を振れているのも、不思議なほどだった。

それでも兄上は強かった。

俺の緑の刀と、兄上の血に染まった黒に似た色の刀がぶつかり合う。

風が吹き、血が飛び、火花が散った。

筋力や技量、体格の差は覆し難く、俺が押されていた。

兄上が剣技を放とうとしていた。

鬼の拘束が外れたようだった。

俺の身体が咄嗟に反応していた。

そのように織り重なった出来事によって、『日の呼吸』で唯一復元できた型を使ってし

まった。

打ち合うはずだった日輪刀を容易く切断し、兄上の身体を袈裟斬りにした。

不完全な『呼吸』の代償と、精神の傷。

俺は型を出した姿で呆然と固まっていた。

遅れて、切り取られた日輪刀の刃が落下する音がした。

兄上の腹からは臓物が零れ落ち、多量の血が噴き出していた。

「これでいい。妻と一緒に、私も逝くだけ。私の心が弱いせいで、父には悪いことをした。……大働が生きていてくれるだけで嬉しい」

血を吐きながら、か細い声で兄上はそう言った。

それが最後の言葉だった。

唸りながら駆けつけた鬼が、涙を流しながら自らの顎を砕いた。

俺はその姿に、ほんの小さな希望を見出した気がした。

だが、鬼は顎が再生するのを待つことも無く、一心不乱に血を啜り始めていた。

嗚呼、そういうものなのだ。と悲しみを理解した。

だから鬼の頸を断った。

義姉上の骨も、灰も、この世には残らない。

小さな音を立てて頸が落ちた先には、鈴の髪飾りだけが在った。

亡骸を前に呆然としてみると、先生に声を掛けられた。

そして、弔ってやらねば可哀そうだと言われた。

言われてやつと、その必要があることに気付いた。

どうしたいのかがわからなかった。

どうすればいいのかも。

母は父が埋めた。

父は、自分で母の隣に眠ると言った、

だが、家族は何も言ってくれなかった。

蒼褪めた顔をしている先生に伝える言葉が何もわからなかった。

ただ、心配をかけたくなかった。

まだ生きている素晴らしい人だったから。

「兄上を斬った上での私見ですが、『日の呼吸』は『無駄のない一撃を繰り出す型』でしかないのかもしれませんが」と、平静を装ってそう言った。

目を見開いた先生は何も言わず、ただ青を通り越して白としか思えない顔色に変化させただけだった。

先生の顔色を見て、家族の顔を見る。

死んでいた。

実感した。

理解した。

涙が止まらなかった。

この時、この場所で作られた全てが彼方に消えたことを知った。

家族がいた、その幸せを心に抱いて生きている。

——9

「仲間が近くまで来た。今回はここまでにしよう」

過去に思いを馳せ、掻い摘んで話したがそれも終わりのようだ。

俺が話の終わりを告げると、炭治郎は深く頷いた。

眠っている禰豆子を大事そうに抱きしめていた。

俺の話が覚悟に繋がるといいのだが。

鬼狩りの道は険しいのだから。

「話してくれてありがとうございました。……まだ何もできない俺の言葉なんて信じられないし心配かもしれない。だけど、いつか禰豆子を鬼に変えた奴も、人間への戻し方

も見つけます。そのとき、守ってくれた命を誇って欲しいんです。多くの幸せを守り抜いたことを」

炭治郎の言葉に、小さく鈴の音が鳴った。

——10

「お前、妹が人を食った時どうする。……判断が遅い。お前がやるべきは妹を殺す、自分の腹を切る。その二つだ。わかったか」

「はい！」

「そうならないように強くなれるな」

「はい！」

「鬼を連れていけば、お前を疑う者も出てくる。鈍い、弱い、未熟、そんなものは男では無い。強くなればお前の言葉や行動も重みを増す」

「はい！」

目を離した隙に、炭治郎が錆兎に絡まれていた。



## アクトーージュ2（未完）

— 1 —

今でも思い出す、子供と大人の入り混じった多感な年頃の話だ。

子供ながらに絶対的な自信を持つ俺を心配したのだろうか、両親は仕事を禁じた。

日本にある父方の親戚へと預けられた俺は、しかし、自分の才能を浪費するだけの環境に怒りばかりを溜め込んでいた。

一人前の役者だと、強く思い込んでいた矜持を、親に傷つけられた気すらしていた。

子役としての旬が過ぎようとも、役者としての才能だけを便りに突き進むのだと信じ切っていた。

メディアに映る役者たちを、無能だと嘲りながら何もしない、何もできない。

自分のほうが優れている、自分だったらこうするのに、と。

才能のない人間に価値などない、そんな思いを募らせる。

燻る日々の中、どこから漏れたのか、マスコミが俺を嗅ぎ付けた。

強い自尊心を持つ俺は、それに喜んだ。

日本に在るだけでもこれだけ望まれるのだ、と。

マスコミと、ミーハーな何も知らない民衆に囲まれた日々は、すぐ空虚を醸した。ふとテレビを見れば、何もしていない自分が注目されていた。

嘲り嗤った役者よりも何もしていない自分が、間抜けな面で笑っていた。

何もしていないのに注目される、ならば本当に自分は才能があるのか。

忘れつつある自身を取り戻そうと仕事を望めば、断りの連絡が積み重なるのみ。

そう時を置かず疑念へと変わっていった。

飽きた人々は俺を忘れ去った。

何もしない人間に価値などない。

何もできない人間に価値などない。

俺に残ったのは、奇妙な焦燥感だけだった。

そんな間隙を縫うように、小説家を名乗る男と出会った。

久しぶりの理解者に出会ったような気分だった。

聞かれるがままに答えた。

望まれるがままに振るった。

誰も寄り付かない空白にぼつんと現れた男は、尊い物に見えた、見えてしまった。

人生の転機だった。



男は俺に気付かせた。

男は俺に教えてくれた。

男だけが俺を才能がないと断言した。

両親が俺を呼び戻した。

俺を主演に、新しい映画を撮るのだという。

それは遭難した少年が自然の中で逞しく生きる手堅い作品だった。

孤独の日々を、都合のいい自然やなぜか友好的な動物との交流が癒すだけの凡作。

焦りが増すだけだった。

撮影に向けて、撮影地へと入った俺は様々な役者に話を聞き続けた。

その様を見た両親は、熱心だと笑った、空白期が貪欲な心を作ったのだと。

深く暗い森を背に、原作を読み込んだ。

そうして、俺の疑念を確信に変えつつあった。

原作は、肉親を失った少年が自然の中を必死に生きて、熊と闘い、一人前の狩人になる物語だった。

全てがあまりにも違いすぎた。

誰にでもできるよう加工した作品を演じるという事実が、自分の才能が無いという裏付けのように感じてしまった。

才能が無かったら、俺を誰が見る。

誰も見るはずがない。

才能が無かったら、俺に何ができる。

何もできるはずがない。

焦燥感が俺を駆り立てた。

思い出すのは、役者たちの言葉。

演じる役が自分そのものになる幸福。

役を演じたまま死ぬる役者は幸福だという小説家の男の言葉。

使い方の知らない銃を鞆に入れ、鉈を手にしていた。

子供の手には、それらはあまりにも大きかった。

あらゆる全てを失いかけていた。

そう思い込んだ俺は、見えない何かに突き動かされていた。

だから森へと入って行った、暗く深い森の中に。



自身の琴線に触れる役者の居ない舞台稽古に、黒山は小さく舌打ちをした。新入りの噂を聞いて駆け付けたが、完全な無駄足だった。既に色の付いている演技ばかりだ。

僅かな苛立ちを誤魔化すために、目を瞑って理想を描く。目を通した作品を振り返り、合致した『本物の役者』は未だに見つからなかった。足掛かりさえも。

今現在、活躍している俳優にその片鱗を持つ者はいない。

完成図は思い描ける。だが、それだけだ。役者ではない黒山が、理想に足りる技術を知ることではない。求める演技や演出はわかるが、『本物』へと至る道程には霧がかかっていた。ともすれば、理想に至る始点すらもわからない可能性があった。その始まりがわからなければ、これまで行ってきた発掘とも言える作業に割いた労力は無駄でしかない。無駄でも構わないが、それが『本物の役者』と出会えない可能性に繋がる事実だけは認めることは出来ない。だからこれからも徒労を繰り返す。自身がそういう生き物であることを、黒山は当然のように理解していた。

万が一無駄だとして、何を指針とすればいいのか。

「あれ、黒山さん。天球の稽古を見てるなんて珍しい」

そんな言葉が黒山に届いた。舞台稽古が行われていようとも、混ざることもなく、紛れることもなく真つ直ぐに。それは若く張りが有り、滑舌も非常に良い滑らかな言葉だった。穏やかで深い特徴を持つ声だった。思考や、心の奥底に沈み込む音だった。

誰もが好意を持つ音を、誰もが聴きやすい早さで再生したのならはこの声になるだろうか。意識しなければ、紡がれた言葉の全てを無意識の内に受け入れてしまう音だった。

あまりにも自然すぎて、逆にわざとらしさすら感じる。

「お前よりは珍しくねえから。むしろなんで居るんだよ」

そう答えながら閉じていた目を開く。誰もいない。舌打ちを一つ、視線を舞台袖に走らせる。

声の主は舞台の袖幕から身を乗り出していた。

「……いや、遠すぎだろ」

一階席の中央かつ前列、いわゆる鉄砲と呼ばれる席に座る黒山の言葉が届くはずもなく。縁日で売られているヒーローの面で顔の半分を隠した男は首を傾げていた。

黒山の座っている座席から一つだけ空けて、男が座った。背の丈が百八十を超える男

が近くに座ったというのに、意識しなければわからないほどに気配が薄かった。

「おはようございます、黒山さん。天球の稽古を見てるなんて珍しいですね」

「それさつき聞いたから」

「相変わらず地獄耳ですね」

これが地獄耳ならば、とんだ地獄もあつたものだ。男の言葉に苛立ち、眉間に皺が寄る。分かりきっていたことだが、待望の『本物の役者』は見つからなかった。そもそも、今回の目当であつた役者は十分な舞台歴を重ねていて、独自の色を持っていた。劇と自信に染まりきっている。黒山が望む『本物の役者』になれるとは到底思えない。

どうせこの男ならわかつているのであろうことを揶揄われて、黒山の機嫌は悪くなる一方だった。

「お前の声がうるせえだけだ。まずその媚糞笑顔こびくせと洗脳ボイス辞めてから話しかけてこい」

普段も愛想が良いとはお世辞にも言えない声が、さらに低くなる。

不機嫌さを隠すことすらしない。

「お仕事モードだからイヤです。外面が良いだけで嫌われず、良い物を纏うだけでお金にすり寄つて、学歴で一目置かれる。持つてる物を使うだけで生きていけるんだから得じゃないですか」

「しようもない仕事して何になるんだっての」

「お金と信頼とコネになるんですよ。自分が笑顔になれば相手も笑顔になるんです」

誰もが好感を抱くであろう爽やかな笑みを浮かべていた男が、自身の両手の人差し指で口角を上げる。そうして、につこりと子供のような笑顔を作って見せる。どちらも極限まで減点を排除して作り出された、自然でありながら人工的な笑顔だった。

人差し指で僅かにヒーローの面が持ち上がっていた。隙間から見える皮膚には大小様々な傷痕があり、そこから伸びるように首の皮膚が火傷によつて変色していた。黒山が知っている限り、隠れている半分の顔全体にも同じような傷と火傷の痕がある。詳しい話は知らないが、役を演じた頃に自傷したらしい。調べたこともあるが、何せ外国の、それも落ちた役者の話で、信ぴょう性は低い噂ばかりだった。

それを隠すためののだろう、ヒーローの面をちようどいいと男は過去に言っていた。こういった小道具は、業界人が身に着けているだけで、ファンが仲間だと思つて喜ぶのだとも。

わかりやすい欠点は同情などを抱かれやすく、嫉妬されにくいとも。

「言つてろ。で、お前こそなんでここに？」

「車が故障しました。外車つてホントだめですね。日本人のメンテしない性分を遥かに上回る駄々っ子ですよ」

「……それで? 用事があるんだろ」

故障しないのもありますけど、と呟く男に先を促す。面倒な建前を長々と話されて煙に巻かれても面白くない。

噂に乗せられ、目的を達するには外れた時期に現れた黒山と、本当に偶然会うような男ではない。偶然を装ってばかりだが、実際の要件は別にあるのだろう。

「えー? そうですね……。まあ、近くだったんでちょうど良かったって話なんですけどね。他の劇団で燻っていた役者をここに紹介したので、その新入りが馴染んでいるか様子見してました。動く死体の匂いがあるって杖投げつけられてないかの。このジジイとその孫、頭おかしくてめっちゃヤバいじゃないですか」

「動く死体の臭いってヤバくない?」と他人事のように尋ねる男を無視する。黒山が人の事を言える人間では当然無かったし、この男もまた同様のはずだった。

それよりも、重要なのはこの男が役者を紹介していたということだ。有望な新人を獲得していたのなら、黒山にもわかる程度の水面下でざわつきが広がっていたはずだ。僅かな噂程度しか話題に上がらなかったことから、本当に役者の紹介だったのだろう。目的を果たすため、という意味では全くの無意味になってしまった。

業界が水面なら、まるで考えなしとばかりにとぼけた顔で森で拾った物を投げ入れて小さな波紋を作る男だ。実際には、間もなく波紋は消えるが、泳いでいる魚と、それを



食べた川岸に住む人間を抹殺している。そして、わざとらしく山に生息する毒を投げ入れた者が何処かにいると主張する。

すでに色がついた役者を移しただけのことだろう。この場に限って言えば、だが。

「手前てめえが言うなよ。つうか他の劇団からつてことはたち稽古から居たつてことだよな。完全に無駄足になつちまつた」

「そういうこともありますよ。まあでも新入りがなかなかいい演技をするつて話なんで見てけばいいんじゃないですかね」

噂の出処の紹介者が他人事のように言う。事実、他人事だろうが、同時に黒山の望む『本物の役者』を理解しているはずでもあった。

それでこの振る舞いなだから、面の皮の厚さは相当な物だろうか。

「染まりきった水に興味ねえな。透明な水が欲しいんだよこっちは」

「砂漠でも彷徨つてるんですかね。でも染まっつていても水には使い道くらいありますよ。むしろ色に染まりきつて抜けないほうがいい」

隠しきれないとばかりに、にやりとした笑みが男に浮かんでいた。

演出としては有り得る話だった。濁つた役者を踏み台にすることで、確かに主演は輝くだろう。

使えなくなった役者は仕事を失つて消え、売れ残つていた役者に席が空く。演技が上

手くなったように見える主演は自信を付け、仕事や露出が増える。屑が生み出す循環だ。

「趣味が悪い」

「そうですか？ それくらいの方が月の影が綺麗に栄えるんですよ」

循環を作らなくとも、使い方次第でどうにでもなるのだと男は言っている。しかし、それは黒山の求める物とは正反対だった。

何にでも染まり、何にも染まらない『本物の役者』。

映画を役者に合わせるのではなく、映画に合った役者を求めている。

「まあ俺にはそういう風流を理解する感性が無いので何も協力しませんけどね。それはそれとして、今日は舞台稽古を見てるんでアンダーを漁りに来たのかと思いましたがよ。あ、砂漠に行くために会いに来たって話なら飛行機のチケットくらいとれますよ」

無駄足だった徒労感と、いい考えでしょうと煽る男に、黒山は苛立ちが募る。

アンダー、アンダースタディー、スタンドバイ。主要キャストが何らかの形で舞台に立てなくなった際の代役を指す言葉だ。代役のための念入りの稽古があるわけもなく、それを目的に見学するのは余程の酔狂か身内くらいだろうか。舞台稽古が行われるのは、劇団の規模にもよるが、二か月近くだ。既に稽古も佳境に入っている。ここまで来ると、公演してから観劇したほうがキャストイングに役立つ。

それをわかっていて煽る男は、怒りの沸点を計る自由研究でも始めたのか。黒山の脳裏に怒りを通り越して疑問が浮かぶ。

「黒山さんも笑顔を振りまいたらお仕事貰えるんじゃないですかね。」

「俺の笑顔は『本物』を見つけた時のために取ってあるんだよ」

「またそれですか。個性の強弱と得手不得手が違うだけでみんな本物の役者ですよ。劇には劇の、映画には映画の、個人は鹵車、チームで平等、みんなで仲良く、笑顔でお仕事です」

穏やかな人好きのする笑みを浮かべながら男が言ったが、黒山はそれが建前だろうとわかっていた。

参加した作品にほとんど口を出さず、安穩としていてやる気の欠片も見せない。だが、本当に必要な時だけは口を出す。隠しきれていない性分は、まさに見たことの無いものを求めるエゴの塊。同類でしかない。

その中でも、人の道を率先して外れている。直接見たことのある、そして伝え聞くだけでも十分なほどに奇行が多い。

「しかし、俺は優しいので恩を売ってあげますよ。スターズの新人を発掘するオーディション、毎年やってるやつ、あるじゃないですか。あれの審査員を譲ってあげますよ」「面倒だって愚痴ってたやつじゃえねえか」

「そんなことないです。未来の卵を最初に見つけられなくて悲しいです。あ、話を通しておくので、後で電話してあげてください。俺の名前を出せばすぐです。これがコネの力です」と男が連絡先の書かれたメモを差し出ししながら、上機嫌な様子で言った。面倒ごとを押し付ける先が見つかったのが余程うれしらしい。

スターズのオーデイションといえれば例年で応募人数は三万人を超え、虱潰しに見知った場所を練り歩くよりは希望が見える。同時に、当然ながら玉石混淆。ふるい落としたとしても、屑は擦り抜ける物だ。それらを弾く作業を手伝わなければならぬ。面倒なのも理解できる。価値のある玉から見極めたいのが本音だが、そううまくはいかないのが道理というものだ。

問題はスターズとの折り合いが、黒山自身あまり良くはないことだ。目の前の男は社長からの覚えがめでたい。こうなると、壁として利用するしかないだろう。何より、会話を聞いて若干ムカついたので面倒ごとを押し付けるには都合がいいとすら思えてきた。



# ゴールデンカムイ 1

「56人殺したのさ」

—— 1

父と母、兄、弟が二人、そして妹。

ほどほどに貧しい暮らしを、すきつ腹を抱えながら日々を過ごしていた。

父は厳しく母は口数が少ない。

兄は二人に似て厳しくて口数が少ないから怖いし苦手だが嫌いじゃない。

厳しく躰けられても殴られたことはない。

手が早いのは獣と一緒だとそう言われた。

獣とは違い、考えることで生きていけるのだと。

父と兄、二人の後ろを追って山に入る。

雪上の歩き方は普通の土とは異なること、寒さに身を震わせるよりもむしろ腹の力を抜いて脱力したほうが楽なこと、体温を失っては生きていけないこと。

山から下り、時間があれば弟と妹の相手をしなければならぬ。

父と兄に怯え、母も無口で最低限の相手しかしないから弟たちや妹を甘やかすのは俺になる。

夜は油を無駄にできないからすぐに寝なければならぬ。

微睡みの中で手慰みに石ころを手の甲で転がすことだけが俺に許された自由だった。

母は病気だという。

治らない病気だ。

頭を強く打って、それから顔から表情が失われた。

言葉もうまく喋ることができない。

手足も動かすことに難儀する。

兄が言うには、昔はもつとたくさん笑っていたし、歌だつてとても上手で父はそこに惹かれたのだという。

じゃあ今の母には惹かれないのか。

父はどんな気分で過ごしているのか。

霞みつつある記憶は、笑顔の兄を描いていた。

兄だってもっと喋っていたし、笑っていた。

母の世話をして、不出来な言葉を聞き取ることに執心する兄の姿とは似ても似つかない。

俺は両親も兄もあんなに好きだったのに。

頭を強く打つと、母のように人が変わるといふ。

俺は頭を打つたことはないのに、なぜ変わってしまったのだろうか。

父の跡を継ぐのは兄だ。

貧しい暮らしだから俺の居場所は当然ない。

どこに行けばいいのかも知らない。

山はどこにだつてあるのだから生きていけるだろうと思つたこともあつたが、誰もいない山だつて誰かの物だと教わつた。

弟と妹をあやすことしか知らない俺は何が出来るのか。

暗闇で丸い石を転がしながら、うつらうつらと考える日々だつた。

お前は何がしたい、と寝ているほうが多くなつた母が、その動かない口で俺に聞いた。いつも間に入っている兄は、今日は壁に腰かけたまま動かなくなつた。

背中に引つづく弟二人、俺と手遊びする妹。



わからないが、このまま貧しいのは将来の俺もきつと嫌だと思ふ。

お前は一番頭がよかったから都会の学校に行かせてやりたかった、と母が言つて眠つてしまった。

父は何も言わないし、兄も何も言わなかった。

張り詰めた空気を感じたのか、妹が少しだけぐずった。

暗がりの中、寢床で石を転がす。

二つ三つと増えていく。

お手玉の数が増えるほどに弟と妹は喜んだし、母も動かない表情が僅かにほころんだ気がしたから上手くなっていった。

学校に行きたいと思つたことは無いよ、俺は小さく心の中で思う。

しかし、学びたくないというわけじゃないんだとも囁いた。

興行の最中、村に立ち寄つた奇術師が見せてくれた奇術の数々がずっと頭の片隅に残っている。

幼い俺にこつそりと、海の向こうにはもつと素晴らしい光景があるのだと教えてくれた。

だから俺が行きたいのは都会じゃなくて、海の向こうなんだ。

家族の成長とともに金や食べ物が必要性は増えるのに、稼げる金は当然のことながら

頭打ちだった。

弟は成長するし、妹だっていつか嫁ぐのだ。

ひもじい思いのままでは可哀そうで、綺麗な着物すら着れないのなら尚更憐れでしかない。

村で出稼ぎに行く若者を募っていたでちょうどいいと俺はそれに混ざった。

父も兄もいい顔をしなかつたし、弟たちと妹に泣かれたが、それでも俺は外に行く。

母はそれでいいのかと俺に問う。

いつか海の向こうに行くためには必要なのだと、こつそりと俺の夢を教えた。

母は笑って見送ってくれた。

— 2

海の向こうは地獄だった。

最初は撃つ振りをした。

バレて殴られれば、わが身可愛さに当たらないでくれと祈って撃った。

終われと願って、耳がいかれて、脳がふらついて。

そうして、気づいた時には撃つ振りをしていたはずの銃を躊躇いなく撃つようになって

ていた。

目を腐らせながら飯を食った顔見知りの男の屍を踏み越えながら、わが身可愛さにさつさと当たって死んでくれと祈りながら露助を撃った。

慣れた頃には何も思わず、ただ処理するように殺していた。

近場で手投げ弾が爆発した。

一緒に飯を食ったやつが幾つかに分かれたが、経験上砲弾よりはマシだった。

長く戦っていると、死に際がマシなやつとそうじゃないやつに出くわすようになる。

顔が綺麗に残れば福引でいいものが当たるくらいには幸運だった。

衝撃で倒れたやつに手を貸し、大丈夫かと声を掛けながら手を差し出す。

一人よりも二人のほうが狙いが増えて弾が当たりにくくなり、手数も増えて敵を殺して減らすことができる。

同じ白襷だからという助け合いの精神なんて無いが、生きているのなら相手を殺してくれるだろう。

俺の手を取った男は、不死身だから大丈夫だと言った。  
ん？

死にかけの友達を引きずる杉元と一緒に、形の残っている死体を引きずる俺。

俺の場合は助けるためじゃなく、肉の塊を盾にすれば敵の攻撃を防げるだろうと考えた結果だ。

両手塞がって攻撃できないし動くのも遅い。

学が無いって悲しい。

よく考えればわかることだった。

もう放り投げようかと考えていると、敵性の手投げ弾がすぐ傍に転がって来た。

余裕がない杉元よりも早く俺は動けたため、咄嗟に二つの死体で覆う。

爆発の余波が俺を襲い、そして、脳内に電流走る——！！

舞い散る肉片と臓物でショーシャンクの空に。

他人の死体でキャプテンアメリカしたおかげか運が良かったのか軽傷で済みそうだが、脳に迸る情報で気分が悪い。

これまでの軌跡で思い起こされる地獄巡りしているニシパたち。

ゴールデンカムイだこれ！！

最期の言葉を呟いた友人の屍を抱きながら、杉元に謝られた。

キャプテンアメリカしてくれた死体が俺の友人だと思っっているらしい。

いい奴すぎない？

さつきも死にかけのために船を譲っちゃうし。

俺もなー、負傷兵として後方に行きたいんだけどな。

手足が残ってるからな。

本土に戻してほしくらいだ。

せつかくゴールデンカムイだってわかったんだから生きて帰って北海道の金塊で大

金持ちだよ。

これで父も元気になるし、母も医者に見せられるし世話を雇えば心苦しさも軽減されるだろうし、そうになったら兄も自分のために生きられるだろう。

弟たちもたくさん食べられる。

妹も綺麗な着物が祝言で着れるし、なんなら毎日綺麗な洋服や着物を着ても持て余す

だろう。

俺は念願の留学ができる。

杉元も金塊欲しいって思うくらいにはなんか貧しいんだったよな。

あんまり覚えてないけど。

なぜか長く一緒に戦ってるんだからちよつとくらいサービスしてやるか。

「なあ、杉元。知ってるか？ 北海道つて砂金がたくさん取れるんだぜ？ 俺はその金で留学したいんだよな」

## — 5 —

終戦して本土に帰って来た。

五体満足だ。

有難い。

武勲抜群ということの上等な勲章が貰えそうだ。

なんなら年金があるから無理して金塊を狙わなくてもいいかも。

わざわざバトルロワイアルに混ざるのは馬鹿のすることよ。

まあ、あんな地獄にいたんだからこれくらい無いとな。

悠々自適にお金でも稼いで、いつか留学しよう。

まずは故郷に帰って、生きてることを報告しないとな。  
英雄の帰還だぜーガハハハ！　なんてな!!

「え？　なんで？　俺は戦争にいつて、それでも生きてて？　運がいいはずだろ？　俺だけ生き残った？　なんで？　は？」  
強盗にあつて家族みんな死んだんだつてさ。

——6

助けてー、鶴見えもーん！　と情報をくれるようにお願いする。

俺たち戦友だもんね！

どれだけ大変だったか、とか色々言われたので、白樺の俺に貸しを作るなんて簡単にできることじゃないよつてことで頼んだ。

犯人や、その親族の情報を受け取るついでに鶴見中尉と密会の真似事をする事になった。

俺はこれから自分がスッキリするために頑張るけど、中尉はどうなのだろうか。

俺にだけ本心を教えてくれませんか、と尋ねてみた。

月島って軍曹がいるけど腹心らしいから居たままでもいいぜ。

クーデター目的らしい。

はあ？

自分の家族はどうでもいいってコト!? (ハチワレ)

—7

金持ちっぽい家族に、石を叩きつけた。

その場にいたら痛みにも呻くだけなのかな、家族を心配するのかな。

俺もそうしたかった。

幼子からゆっくりと息を引き取る、弱いから。

親は生きてる、しぶといから。

それでもすぐには死なない、俺が慣れてるから。

助からないのに死にやすい生き物が人間で、壊れていいはずがないのに壊れやすいのが家族なんだ。



犯人を追い詰めてたんだけど、権力がある一族らしくて矢鱈に匿うから親族をぼこじやが殺さないといけなくなった。

匿っていない親族もいたが、血を受け継いでいる人間がいると思うだけで気が狂いそうになるからセーフ。

揺りかごから墓場まで荒らし切り、あはは、うふふ、と思いかけっこして。

最終的に犯人の頭をカチ割ったのが北海道だった。

匿おうとした金持ちも親戚らしいが、第七師団が警備についていたが目の前でヤッチャったってわけ。

感動の再会ですね、中尉殿！

なんやかんやあつて鶴見中尉が手を回したおかげで勲章はく奪だけで済むかもしれないし、俺が死んだことになるかもしれないらしい。

それはダメだな。

俺は生きてるんだから。

戦争から生きて帰ってきてるのに死ぬのはダメだよ。

恩を返してもらおうって言われたので、「勇作殿」を黙ってたからチャラになるよな。鶴見グループの部下ってみんななんか変だからヤダよ、一緒に組むの。

なんか過去に奇跡的に成功した穴だらけの好感度チャートを安定チャートだと思つて乱用してるRTAの雰囲気がある。

とりあえず拷問されるか殺されるか洗脳されそうな雰囲気だったので全力で逃げ出した。

おれわ走つた……

ゴールデンカムイがまつてる……

でも……もうつかれちゃつた……

でも……あきらめるのよくないって……

おれわ……おもつて……がんばつた……

でも……ネイル……われて……イタイよ……ゴメン……まにあわなかつた……

でも……おれとつやまわ……ズツ友だよ……!!

途中で追われているらしい津山つて男と共同戦線を張つたが、やはり敵は強かつた。

初対面の男と協力できるはずもないし、どうも優先順位は津山つてやつの方が高いらしかつたので、囿にして逃げた。

でも……おれとつやまわ……ズツ友だよ……!!

そんなわけで……

「56人殺したのさ」

研究者然とした男に俺の来歴を語る。

何故だか俺はこいつに語りたくなつた。

自然を愛するこの男に。

お前のやったことは確かに罪かもしれないが、それでも前を見ていいのだと伝えられたのかも知れない。

「大変でしたね……。自然の豊かさで幾らか貴方が救われればいいのですが……」

「自然、自然か。俺の故郷も自然に囲まれていたよ」

「素晴らしい！ 私は自然を愛しています。貴方はどうでしょうか」

「どうなんだろうな……」

「貴方が掛け替えのない命との触れあいで、慈しみの心を取り戻せることを願っています……ウツ！」

優しい顔で姉畑はそう言うと、限界まで広がった小鳥に愛を放つたようだった。

大きな穴を作られた肉片には白い白濁液。

北海道の大地は全てを受け入れるようだった。

「問題は金塊の場所、全然わからないんだよな」

薄れた記憶は何も思い出さない。

思い出そうにも、アイヌ語が全く思い出せない。

漫画読んでても流し読みだからな。

なんかカムイとか関係あつた気がする。

イカのカムイ……？

あとは何も覚えていない。

なんか漫画だと樺太に行つてた気がする。

あ、オプタテシケ・オキムンペなら覚えてる!!

## ゴールデンカムイ2

— 1 —

「月島、状況は」

血抜きしながら鶴見が呟くように部下の月島に問う。

びくんびくんと震えていた獲物も、少し前までは口から言葉を垂れ流していたが、今や首と大腿の付け根から血を流すのみ。

ただの血袋と化していた。

その血もやがては失われていき、皮も剥ぐとなれば残るのは肉と骨だけだ。

獣しか食べることのない屍肉と骨だけだが、鶴見の知る死体の中なら上等な方だ。

肉は理性なき獣すらも求める。

残った骨は、知性を持つ死を悲しむ者だけが求める。

この血袋の末路は、風化して雄大な大地と混ざることと答えとなるだろう。

「死者が7、負傷者が3です。傷を負った物も単に自律呼吸ができていただけの模様です」

「そうか。……不運だったな」

「……はい。実に、不運でした」

鶴見の言葉に、月島が絞り出すように顔を伏せながら答えた。

死者の中には月島とともに戦場を駆けた者も居た。

月島の言葉はこのおそらく死者に向けて、それもこの惨状を作り出した男に向けてだろ。

しかし、鶴見は別の意味で言葉を吐き出していた。

そもそもこの場に誘導したのは鶴見だった。

男に情報を与え続ければそれに答えるかのように呼応して、本土で死体の山を築きながら北の大地に上陸したあの男に。

「囲み、十分な距離を置いて銃で仕留めるようにと指示を出したはずだったのだがな」

「……どうも市街地で銃撃を躊躇い、そのまま接近を許したようで」

「そうか。……儘ならんな」

幾らか手を回してはいた。

だが、本土で捕まればそれまで、上手くいけば儲け物程度のはずだった。

撒いた種が、間違った芽吹き方をしてしまった。

いや、違う。

あれは獣だった。

人の味を覚えてしまった獣。

餌の代わりに不要な人肉を与えられて育った獣だ。

そんなものを種と表現したり、従来のやり方で飼い慣らせると考えたのが間違いだつたか。

損壊の激しい遺体を思い出す。

割られた頭部から炸裂した脳漿と血液、飛び散った肉片、零れ落ちかけた眼球。

頭部が無事な遺体は、肩から腹まで割かれるように千切れて血潮とともに臓物が零れていた。

あれは人の殺し方ではない。

「サンケ・ペツの緋熊か。」

「三毛別の緋熊、頻繁に聞く名でしたね。三毛別……あれはこつちの出なんですか？」

三毛別に文句を言いたくなりますね」

「いや、そうじゃない。あれは本土の山から来た。サンケ・ペツとはアイヌ語で『川下へ流しだす川』を意味していて、戦場でアイヌ出身の者がそう呼んだのは始まりらしいぞ。三毛別とは全く関係ないのだとか」

近づいた露兵を盾にして、躊躇った露兵を殺す。

殺した露兵を盾にして、躊躇わなかつた露兵を殺す。

騒がしい露兵がいれば首を引き抜き、騒がない露兵も引きずり回して盾とする。流れる敵兵の血は、まるで川の如く。

アイヌの民は純朴で、そして自然への畏敬を常に抱いている。

そんな者がサンケ・ペツと表現した。

ペツは水量の豊富な川の意が有り、アイヌは森と川に生かされている。

如何ほどの血を流せば至れるというのか。

「ヒグマには銃撃を徹底するように周知する。近接で熊狩りする狩人になるためにこの地に来たわけではないからな」

「はい、ええ。……市街地、それも人込みであろうとも、でしょうか」

「今後を考えれば避けたいところだが、本心はそうなる。この程度気に病むなど我々には今更な話だ」

血を抜き終えた死体を眺めながら、鶴見はため息をつく。

銃があろうとも、獲物に殺される猟師は多い。

知恵を絞り、人事を尽くし、命を賭けて狩ったとして、そうして得られる対価のなんと少ないことか。

皮に利用価値は無く、肉は食べられず、骨は言うに及ばず。



人並みに知性を養い、人以上の狂暴さを秘め、人の争いでその爪を研ぎ、人に紛れて市井に潜り込める理性を持つ、そんな獣が虎視眈々と見ているのだ。

はらわた  
腸を喰らうために。

「それに……。そう、私は彼と話したことがある。……先ほどの第二回年頃男子☆ヒミツのおしやべり会以前に、第一回年頃男子☆ヒミツのおしやべり会を開いた」

「確かに密会していましたね」

「第一回年頃男子☆ヒミツのおしやべり会だ」

「……第一回年頃男子☆ヒミツのおしやべり会で話されていましたね」

「ああ、大っぴらには言えないが悪くなかった」

帰ることのできない故郷の話。

入ることの無くなった山の話。

もう見るることのできない家族の話。

そして……。

「私は尋ねた。これからどうするのか、と」

月島が席を外し、情報を与えたその瞬間に。

情報を見終えた男の言葉は強かった。

『『56人殺すのさ』、と。彼はそう言った』

その瞳は爛々と輝いていた。

そう見えた。

鶴見にはそう見えてしまった。

「それは……」

「そして、先ほどの第二回年頃男子☆ヒミツのおしやべり会でもう一度訊ねた。何人殺したのかを」

地元で名のある豪邸に押し入り、警備を物ともせず処理し、そして家主を殺した。

鶴見が駆け付けた時には、一つの死体だった物が転がっていた。

生きていて、死んでいなくて、助からなくて、それでも長く生きそうな人間だった何かと、一仕事やり遂げたような笑顔の男。

部下に囲まれ連行されて、再び密会をするときには鋼の手枷で縛られ、鉄球の繋がった足枷を引きずっていた。

鉄球を物ともせず、その重さの乗った蹴りで見張りを殺し、壁を砕き、そして逃げ切ったあの男。

『56人殺したのさ』と緋熊は私に答えた。わかるか。警察も殺して、巡邏も殺して、兵も沢山殺して、それなのに56人」

「あれからすれば56人だけが人間だった、と」

「或いはその56人が……。いや、これ以上は辞めておこう。理解しても意味がない。考えは知りたいところだが同じ穴の貉に、いや同じだが、それでもわざわざ巣穴まで一緒になる必要もない」

野生の獣は殺した獲物の数を数えない。

知性がないから、獲物だから、必要ないから、それが自然なことだから。

そして、人を喰った熊は人の味を覚える。

ずっとずっと。

殺した数を数えるかのように、それが美味かったことを覚えている。

「さて、私はこの皮を鞣すが一緒にやるか？」

「……遠慮させていただきます。私はまだやることありますのでここで一度失礼します」

「ああ、私も作業が終わればすぐに行く」

月島の出でいく姿を見送る。

あの男は復讐を果たした。

復讐は虚しいことだと誰かが言った。

果たしたことも無い癖に。

あの男のなんと晴れやかな顔か。

見せてやりたいくらいだ。

苛立ちなのか、僅かに手元が狂い、皮に肉が残る。

『中尉殿の目的はなんですか？』

戦友やその遺族に報いることだ。

嘘はない。

無駄な虚栄心のせいで散らずに済むはずだった命に応えるためだ。

嘘はない。

徒花が強い風に吹き飛ばされないように壁を作って守りたいだけだ。

嘘はない。

「津山に3、緋熊に7。……まったく、大損害だ」

あの時、金塊への導となる刺青を持つ津山が現れなければ緋熊を殺せたかもしれない。  
い。

鶴見は自分がその場に立っていたであろう、もしもの可能性を少しばかり考えた。

家族を殺された、その復讐を終えた男を殺せただろうか。

殺せた。

きつと殺せた。

嘘は、ない。

「羨ましい……。いや、そうでは……。おつといかんいかん、汁が垂れる」

ぼつりと呟いた独白に反論しようとして、戦場で吹っ飛ばされた前頭葉辺りから時折垂れてくる汁に気づいてすぐに拭う。

無駄な戦いに報いるために、金塊を追っている。

嘘は……。

— 2

「イイジマルリボシヤンマですね。この時期に見られるようになります。こういった昆虫たちが、湿原の動物たちの食料となり、生態系を支えているんです。食物連鎖は奥が深く、だからこそ美しいですね。味は……うん、うまい！　そしてこの餌につられたアオサギ、この子たちは意外と色々な場所で見られますが、こういった生態が築かれているのを見て確認できるのは本当に素晴らしいことだと思います。……ウツ」

「すげえ！　すげえよ先生！　これが自然……！」

その場で掴んだヤンマを食べながらアオサギに愛を放つ先生の姿を見て、つい俺は興

奮の言葉を漏らした。

## ゴールデンカムイ3

「ほら、行ってください。助けを求めてもいいし、逃げてもいいですよ」

俺がそう言いながら男の背を押す。

力ない足取りのまま一歩二歩と歩き、そして男は転んだ。

「……どうしてあんなこと」

感情が削ぎ落とされ虚ろな表情で、男がそう言った。

最初はもつと活きが良かった。

無抵抗だったから、しようがなく匿っていた連中に致命傷を与えてから連れてきて、死ぬところを一緒に見た。

次は身を挺して必死に逃がそうとしたところを、一撃で倒してからゆっくりと他を処理した。

歯向かってきた時は希望を抱いたが、結局のところはこいつが弱すぎて失望へと変わった。

知恵を絞ったのか、助けを求めて、偶然に通じかかった兵が現れて、期待したがやは

り失望するだけだった。

「助言させてもらおうと、俺が殺したら苦しみが長く続きますよ」

ほら、と刃物を渡す。

俺でも上手く殺せないような、そんな鈍らの刃物を渡す。

カッターナイフで殺すより難しいだろうな。

アウトレイジだったか、映画でカッターを使つて指を詰めようとして痛みだけで全然斬れないシーンがあつたのを思い出した。

つまり、そんな感じだ。

太い血管に傷が付いたのか、最初は噴き出すように血が出ていた。

それで男が手を躊躇つたせいでそれはゆっくりと冷えていった。

失敗した理由を教えてやれば、次は一思いに頭頂に刃物を振り落としていた。

それでも頭がちよつと割れるだけ。

赤子のように柔らかければ、頭蓋の固さが無ければ良かったのにな。

足りないから何度もやらないといけないと伝えれば、絶望したようにめつた刺しにした。

手元が狂うから冷静に狙う必要が有るけど、上手く殺す必要はないから。

頑張れば殺せるし、敵の殺し方は少し前に教えたばかりだからそれは伝えなかった。



金属と何か固い物がぶつかる音に、肉が潰れる音、液体が散る音が混じった頃に、それはただ震える肉の塊になりつつあった。

自殺するときや憎しみを抱く相手には首を絞めたり、小説だと舌を噛み切つて死のうとする人物がいると伝えれば、責任に耐えがたくなつたのか、思考する余裕がないのか、唯々諾々と従うように動き始めた。

そんな簡単に行くはずがないのにな。

命令に従う癖が出るのか。

「……どうしてあんなことをしてしまつたのでしょうか」

男が言った。

俺は何も言わなかつた。

「可哀そうですね。あんなしよばい刃物で何度も切りつけられて。あれほど助けを求めたのに裏切られて、なのにもう助からない」

血でびちゃびちゃだつた男に水をかけて流してやる。

乾いた血は落ちにくいからしょうがないので何度もかける。

頭が冷えて、心も冷える。

そうになると、自分の身体や手から漂う鉄に混ざった生物的な臭さが気持ち悪くなってくる。

固く握ったその手には、さきほど使った鈍らが握られている。

多大な緊張のせいか、手を開けない様だった。

初めて戦場に立った時もこんな感じだったから懐かしさを思い出す。

「あそこで俺に歯向かうのがおススメでしたね。そしたら俺は喜びましたよ」

こいつが俺を殺せたなら、俺はそれを受け入れた。  
しようがなかったって。

俺がいても変わらなかったと、頼むからそう言い訳させて欲しかった。

「……します」

男が呟いた。

正直もう聞き飽きてきた。

結局の所、忘れられなかったとか、そんな話ばかりだ。

定期的に燃料を注ぐ天才だ。

蒸気機関車で働いていたら石炭を入れる才能があつたかもしれない。

俺だつてそうだ、忘れられるわけがない。

「自首……します……。罪を、ボクの、罪を償わせてください……」

緩慢な動きで土下座した男が絞り出すようにそう言った。

「そうか、自首するんですか」

顔を上げるように囁いて、笑顔で言う。

男の目尻から涙が零れた。

「はい……………」

「…………じゃあ、お前が自首したら家族は生き返るのか教えてくれよ」

「…………え？」

「俺の家族をみんな生き返らせて、その後に好きに自首して罪を償えよ」

「…………できません」

「じゃあ自首する意味って何かあるんですか」

男は、時が止まったように固まった。

「許可を！ 自裁を許可してください！」

「ダメです」

「…………っ！」

「好きにしてもいいですけど、結局みんな殺すから意味ないですよ。俺の家族は優し

「かっただけもういない。お前までいなくなるのか？」

「ようやく動き出した男が、血迷ったように叫んだ。」

しかし、俺の言葉を聞いて、首元に近づけていた刃物が止まる。

そして、ごくりと音を立てて唾を飲んで、目を瞑って、刃物を手放した。

「……限界なんです」

「大変ですね。でもまあ、以前よりは楽ですよ。数に限りがあるから終わりが見えますからね。で、次は誰にしますか？」

紙束を見せる。

男の親族等の写真や名前が載っている情報源だ。

目の前の男を合わせて辞書かと思わせるほどの厚みがあった書類も残りわずか。

今回いなくなった家族の写真を燃やして捨てる。

「選ばなければ、彼女にしますが」

綺麗な声で、穏やかに笑う女性の写真を見せる。

近い日に男と祝言を挙げる予定だった女性だ。

男は震える手で、遠縁の名前を引き抜いた。

その名前は庶子だったか、なんだったか。

「彼女は良い人でしたね。最後にしてあげます。なあに、途中で俺が死ぬか捕まれば終

わりにしますよ。諦めたら彼女の命はそこで終了ですよ。……だから最期まで楽しんでうぜ、この死亡遊技を」

女性の写真を紙束の後ろに戻すフリをして手放せば、男のすぐ傍に落ちていく。気づかない素振りで男は隠し、俺もそれに気づかないフリをした。

血の繋がりは無いし、これからこの男とその女性が家族になることもない。

俺にだって見逃す情が僅かに残っていた。

新聞社に投書する葉書きを書きながら思いに耽る。

東京のレストラン、三人で食事した記憶が遠い昔のように思えた。

— 1 —

人間と人間を上手くぶつけると簡単に壊せるんだ。

頭頂を掴んで首を支えに曲げてやると、甲殻類の殻を割るように首を折れるんだ。

コツが要るけれど、人の首と肩甲骨の間に切れ込みを入れて引つ張ると綺麗に引き抜けるんだ。

ぱちりと時折爆ぜる焚火を前にして、独白するのはそんな当たり前のこと。

俺の話聞いた姉畑支遁は笑顔を浮かべてこう言った。

「素晴らしい！ キミは人間が好きなんですわね！ 気付いていないだけ！ だからそれほど詳しくなれたし、愛せているのです！ もっともっと好きになつてください！」

「……この地には命が沢山芽吹いています。私の愛する自然や動物でいっぱいなのです。貴方には才能がある。だってそんなにも人間が好きなのだから！」

すとん、と音がしたようだった。

その言葉が腑に落ちた。

そうだ、俺が詳しいのはそういう理由なのだ。

「それに、好きという気持ちは大切ですよ。失った時や、失いかけた時、気づいた時に発揮できる力の強さ！ 見てください、こちら辺では水気が多いのでオカモノアラガイばかりでしたが、ウスカワマイマイです。珍しいですねえ。これもまた生物の強さなんです。生きられる可能性がある限り、生存領域を広げる努力を続ける。これもまた美しい力ですねえ。……ウツ……ふう」

姉畑がきらきらした瞳で素晴らしいながら、カタツムリを愛で濁った白で染めた。

「すげえ、すげえよ……！」

「ふふつ、先に生きる者として当然のことです」

「せ、先生……！」

「こんなこと！ いけない！ なんと醜いのか！」と叫びながらその手に持っていた

カタツムリを地面に投げつけて潰した。

冷静さと情熱を持ち合わせたなんと凄い男か。

大切なことを教えてくれた彼は素晴らしい知識を持っていて、だからその時から、姉畑支遁を先生と呼ぶようになった。

— 2 —

「まさかあの土方歳三が生きていたなんてな」

なんこ鍋をこれでもかお腹に入れた杉元が言った。

視線は僅かに鋭い。

土方を名乗るよぼよぼの爺さんとハゲのよぼよぼ爺さん、ちんぼ先生、野生の尾形たちが地図を見ながら話し合っていた。

「獄中でも眉唾もんよ。でもあの爺さんはただ者じゃないってのは俺たちの間でも共通の認識だったけどな」

新聞を広げた白石がそう答えた。

食器などが片づけられ、何も乗っていない机に足を置くのを見た杉元が「あら嫌だわ白石さん、お行儀悪くってよ」とお嬢様になった。

「あらあらウフフ、こうするとお通じがよくなるのよ」と白石お嬢様が言う。

「あー、やだやだ。脱獄犯がこんなにいたんじやおちおち寝られないザマス」

「白石お姉さまもその輪に入っているわよウフフ」

「一緒にされるなんて心外嫌だわ。あたしから杉元さんのほうが馴染めると思うわ」  
うふふ、と笑い合う二人。

遠目に見ていた尾形は「きつしよ」と呟いて目を逸らした。

「今の北海道はそこら中に凶悪犯が脱獄しているっていうのに、本土からも殺人鬼が上陸したらしいわよ杉元さん」

「ほんとお、白石お姉さま？」

「あらやだこのつ小娘つたらあたしのこと疑うのかしら！ ほら、この記事にもあるじゃない！ 殺人で追われている……元陸軍出身の緋熊ヒグマつてあらまあ！ ちよつとばかり強そうなお名前だこと！ 杉本さん、ご存じないかしら？」

「緋熊!？」

白石から発された予想外の言葉に、杉元お嬢様は彼方へと消えた。

ここにお嬢様部解散を宣言す。

そして復活した益荒男、不死身の杉元が声を荒げた。

ひつたくるのように新聞を白石から取り上げて目を通せば、見知った名前が並んでい



た。

「おい落ち着けて。いきなりどうした？ ヒグマに反応しちやっただ？」

「……戦友だよ」

「お、おう。それは焦るよな。スマン。……でも間違いと人違いってこともあるかもしれないじゃん？」

「……どっちも、戦友なんだよ。そうだ、やっぱり二人とも俺の知ってる名前だ」

必死に言葉を絞り出す。

記事から目を離すことが出来なかった。

「なんだなんだ騒がしい……。ああ、56皇殺しの緋熊か」

ハゲのほうのよぼよぼが記事をのぞき込む。

「げっ、永倉新八……」と白石が言うのを杉元は耳にした。

「56皇？」

「ここ数か月の間に本土で起きた殺人、この事件で最も注目されたのが同じ血を持つ一族が狙われ続けた。……軍の威信のためか細かい情報があるが有耶無耶にされかけていたが、点でしか集まらなかった情報が出回りつつある。最後に起こした事件は面倒なことに北海道で、それにまだ捕まっていない」

「それで皇とは結構フイてんな。そりやお天道様も怒るよ」

白石が呟く。

立て続けに湧く情報に、お嬢様で発揮できた声の張りや元気は消えつつあった。

「最初に気付いてしまった新聞社が大衆の目を引くために使った大言ではあるが、盛りすぎなのは確かだな。ふん、検閲や指導で済んでいればいいがな。……かつて降嫁で取り込んだ所謂やんごとなき血を薄く受け継いだ一族。華族や陸軍の高官をも含め、傍流も女子供も併せて56人殺したらしい」

「おいおい、それって脱獄犯より不味いんじゃないか」

白石と永倉、二人の会話は杉元にはあまりに遠くの物事のように思えた。

あの戦争が見せる夢の続きなのではないか、そう疑わずにはいられなかった。

見る夢は度々様相を変える。

死にゆく親友に託された、血に染まった願い。

ただ、悪夢ばかりではない。

共に生きて戦場を駆け抜けた、戦友との何気ない会話。

悪夢だけではないはずだった。

『どうした、緋熊。坊ちゃん少尉殿から目を離していいのか?』

『ああ、杉元か。今は後ろで話し合いでもするんだろ。……言っておくと別に好きで連れてるわけじゃないからな。先任だった軍曹殿たちがもつと丈夫なら俺に引つづく必要もないんだが』

『ほんとお?』

『ほんとお』

『あ、そう。でもいいじゃねえか。帰ったら東京のなんとかってホテルで飯をご馳走してくれるって話だろ。羨ましいぜ』

『戦場で毎日子守して、報酬が東京の飯ねえ……』

『俺のおススメはエビフライだ。唾液が止まらなくなる。……お、話してる間に坊ちゃん少尉殿が帰って来たぞ』

『しょうがねえな。エビフライのために今日も御守りを頑張りますか』

戦友に纏わり付く少尉の姿に、どこかを眩しい物を見る気持ちだった。

生まれも育ちも良く、だからこそ父に厳しく育てられ、戦場に赴いているのだと聞いた。

長男に生まれたからこそ、兄のように頼りになつて甘えられる男に懐いたのかもしれない。

杉元は夢に見る。

それはきつと、悪夢ではないはずだ。

## 3

「うちの家には狼の毛皮があつてね。狼は父の上の世代のときくらいかな、いい金になるから狙つて旅してた時の名残だつたとか」

「狼の毛皮とは羨ましいですねえ。……狼と言えば群れでそれぞれの役割を全うして狩りをするくらいには賢い生き物です。しかし、人間と共存はできなかった。山が拓かれ、人間の狩りによつて生存圏が圧迫されたのも拍車を掛けたのでしよう。獲物の確保が困難となった狼は、やがて狙いやすい家畜に手を出しました。事態を重く見た政府、特に北海道では狼に報奨金をつけ、更に毒薬も投入されました。狼は自身の賢さ故に滅びた。いえ、人間の愚かしさ故に栄えることができなかつたのかもしれない。毛皮の価値は時間とともに高まりますねえ」

「なるほどなあ。……あ、あとは黒い貂てんの毛皮も。食うに困つたら売つてことだけど、買戻せないって考えたらどうにも手が出ないから売らず仕舞いだつたけど」

「セーブルも御持ちだつたんですね。小さな体とは裏腹に活発だと聞きます。是非とも

生きている姿を見てみたいですねえ。しかし、狼の毛皮もあるということはエゾクロテンでしょうか。海に向こうの大陸産クロテンと比べると毛皮の質があまり良くないと聞きました」

「じゃあ売つても二束三文だったかな」

「ふふふ、実はそうでもないですよ。近々クロテンの狩猟が禁止されるかもしれないという話があります。需要が高まりつつあるんですねえ。……ウツ」

今も毛皮があつたらその価値に一喜一憂していたのだろうか。

それとも二束三文で売り払ってしまったのか。

燃えて無くなった物に価値を見出そうとするのは人間の愚かしさ故つてやつかもしれないが、それでも心残りではあつた。

安くてもいいから元から売り払つておけば良かったのだろうか、と考えずにはいられない。

「うわあああああつ!!!」

「先生!?!」

地面に咲いていた花に覆いかぶさつてカクカクしていた先生が叫ぶ。

「さ、刺されました! マムシです! くそつ! こんな毒程度で勃たてないなんて!

一期一会なのに! 勃たつんだ支遁!」

先生がむせび泣きながら地面を叩く。

その叫びが呼び水になったのか、ぬつと森から巨大な黒い影が現れた。

それはあまりに大きすぎた。

それは動物と言うにはあまりにも大きすぎた。

大きくぶ厚く重く、そして大雑把すぎた。

それは正に熊だった。

「なんと……。なんと美しい……。まさかこれほどとは……！」

我を忘れたように先生が呟いた。

ごくり、と唾を飲む音すら聞こえた。

「先生！ 対処しないと！」

「待ちなさい！ いいですか、この場では我々が異物なのです。この美しいいきものを尊重せねばなりません。自ら愚かな人間となろうするのは畜生以下です」

痛みを抑えるように這いつくばる先生が、それでもなお濁らない綺麗な瞳を俺に向けてながら言った。

その手にはマムシの頭が握られており、腕に巻きつかれている。

「彼らは人間について知りません。自ら襲うこともそうなのです。未知を畏れる。

……近づいてきていますね、そういう場合はゆつくりと話しかけてやるのです。背中を

見せてはいけません、彼らは逃げる獲物を襲う。それに今はエサが豊富な時期で筋肉と脂をたっぷり溜め込み、体格が最も良く力強い。冬眠から目覚めて餌を求めたり、繁殖期で不安定な狂暴さを持つてはいないはずです」

熊がゆつくりとした動きで近寄ってくる。

四足のまま、鼻をひくつかせていた。

でっぷりとしたその体は、まさにこの大地の王者に相応しい。

「先生、止まりそうにないぞこいつ」

「いくつか考えられますね。一、私たちが道を防いでいる。縄張りの通り道を何度も通ることのできる獣道などの上にいる場合に該当します。二、興味本位。彼らは好奇心旺盛なのです。三、捕食目的。彼らは既に人の味を知った場合、人間が弱いと理解して狙ってきます。狼が家畜を狙ったのに似ているんですね」

「で、どれに該当しそうなので？」

熊は既に目と鼻の先まで近寄っていた。

そして、熊は後ろの二本足で立ち上がった。

俺も大柄だが、それよりも遥かに巨大だった。

3メートルを優に超えているだろう。

「あー、これは私が死体に見えたのかもしれない。内臓を漁って食われますね。つ

まり、捕食行動です。そして緋熊君、貴方に攻撃する可能性が高い」

「なにっ」

「様子見の場合、威嚇の突進があります。これならこちらが大きく動いたり、大声を出せば逃げるかもしれません。しかし、攻撃の突進なら完全に敵対していきます」

「見分け方とかは？」

「直前で止まるのが威嚇、止まらないのが攻撃です。つまりないんですねえ。……だから早く逃げなさい!!」

先生が叫ぶ。

罌が「ヴォッ！」と鳴き声を挙げ、四足の状態に戻った。

そして警戒してたのか動きが止まった。

「先生も早く立って!」

「ぐ、ぐぐぐう……。勃ちなさい私いく!! なぜ腫れるのですうく!!」

俺の声に反応した先生は、地面に伏したまま下半身を叩く。

焦りなのか、どんとんと声が大きくなる。

「私を置いて早く逃げなさい!」

「そんなことできねえよ! 早く立って逃げない!」

「勃ちませえん!」



戦うしかないのか……!?

熊が威嚇するように吠えた。

「し、仕方が無いですね〜！　熊が苦手なのはマムシです！　何か長い紐でも構いませんよ〜！」

突然放り出されたマムシに熊が驚いたように下がった。

咄嗟にパクった拳銃を構え、装弾されている弾が空になるまで連射する。

が、ダメ。

ダメージは幾らか入ったようだが、こちらを完全に敵と見做したようだ。

先ほどよりも近い場所で再び立ち上がったので、その大きさが見て取れるようだ。

「6発全弾当てたが……!〜！」

「足りていませんね〜！　首が太いので衝撃を和らげてしまえるのです！　しかも脳が体積と比べて遥かに小さく狙いにくい、その上で頭蓋もとても硬いのです！　なんと、なんととうつくしい生き物なのか！　あまりにも丈夫なので、アイヌの勇者足りえる者は自身の危険を顧みず胴体に組みついてその心臓を刺したと言います！」

「組みつくのは無理だぜ先生〜！」

腰に吊るしていた木の杭を構える。

よく叩いて固めた杭だ。

「罨は全身が筋肉のような物です！ 一撃で牛や馬の首も落とせます！ 近づいてはなりません！」

その場から下がりながら木の杭を手放す。

僅かに遅れて、ぶん、という風切り音が聞こえた。

罨が鳴き声を挙げ、四つ足に戻った。

必死に杭に噛みついて抜こうとしている。

杭の刺さっていない前脚には、先ほどの銃弾が当たったのか血が僅かに流れていた。

足枷だった鉄球を右手で持ち振り回しながら、空いた手で腰から再び杭を取り出して放り投げた。

ぶん、という風切り音。

今度は俺が出した音だった。

残った前脚に杭を打ち込むと、半ばから千切れたようだった。

罨が痛みに呻く。

「勃て、勃て、勃て！ 勃て、勃ちなさい！ 今勃たなきや、何にもならないのです！」

今勃たなきや、今やらなきや、罨が死んでしまうのです！ もうそんなの嫌なんです！」

先生の叫びを聞きながら、鉄球を振り回し、先ほど自らの攻撃で貫通した杭を打ち込む。

残った前脚も千切れ飛んだ。

先生が打ちのめされるのもわかってる。

罌を殺され、ちんちんはマムシに噛まれて、つらいだろう、叫び出したいだろう。わかるよ。

頭部にある銃弾の傷口に向けて杭を刺し込む。

「悔しいなあ。何か一つできるようになって、またすぐ勃たなくなるんです……。いいきものはもつとずつと先の所にもいるのに、私はまだイケそうにない……」

突進しようとして、欠けている前脚のせいでバランスを崩した罌。

その頭部に刺さった杭に向け、俺は鉄球を振り下ろした。

罌の死体を背に、毒に侵された先生を背負う。

急がなければ命に関わるかもしれない。

マムシの対処法がわからない。

毒を吸い出さないといけないのか!?

先生のちんちんから毒を吸い出さないといけないのか!?

葛藤する俺の前に、近くに住むというアイヌの民が現れた。



ONE  
PIECE  
FILM  
RED  
その1

— 1

転生したので暴力で生き残ることにした。

いや、転生していきなり暴力に目覚めたわけではない。

俺が転生してまだ3歳くらいの時の話をしよう。

平和な島に住んでいたのだが、海賊によって攻められた。

が、平和な島に休息目当てで訪れていた賞金稼ぎや、助けを求めた近くにいた海軍の力で海賊は軒並み捕まった。

よかったよかった。

しかし、これがもつと強い海賊だったらどうだ。

海軍が間に合わなかったら。

賞金稼ぎがいなかったら。

そもそも今の時代、世界中の治安がめっちゃ悪い。

他人に命を委ねるのは恐ろしいことだ。

だから俺は暴力に希望を見出した。

やはり暴力……！

暴力は全てを解決する……！

——2

そういうわけで暴力に目覚め、暴力の下地を作り、ちょうどいいタイミングで「ええー!!! ワンピースの世界だこれえ!!!」ってワンピースモブっぽい反応をしながら暴力を磨くことにした。

金銭的に賞金稼ぎになるのも悪くないと思ったこともあったのだが、俺を師事してくれるのなんてワンピース的平和な島にバカンス気分を訪れたワンピース的賞金稼ぎだったからな。

教えてもらえることなんてワンピース的六式を知っているわけもなく、精々ワンピース的筋トレしてワンピース的見せ筋鍛えて、ワンピースモブが愛するワンピース的サーベル片手にワンピース世界で最も普及してるワンピース銃を構えることくらいだった。

これじゃワンピースなんちゃって賞金稼ぎにしかねないし、一般的なワンピースモブとして搾取される側となってしまう。

そういうわけで、ワンピースモブを抜けるために暴力を求めたがためにワンピースの海軍に入った。

言つてはなんだが、ワンピースモブ賞金稼ぎ見習いからワンピースモブ海兵見習いへとクラスチェンジしての訓練は楽しかった。

鍛えれば鍛えるだけ成果が出る。

まあ天才とか悪魔の実を喰ったやつとかヤバすぎのヤバヤバのヤバだから見ないことにしたら楽しいからセーフ。

うおおおおお!! と寝るまで訓練して寝る時は全力で寝ていっぱいご飯食べて六式覚えたいから六式六式六式六式六式六式六式六式六式六式六式六式と連呼して訓練した。

配属先の要望も聞いてくれるというので、六式のところをアピールした。

科学班に出向となった。

科学か。

そうかー。

六……式……？

俺のお仕事は六式のマニュアル作成らしい。

技術を数値化することで疑似的に可視化するんだとか。

なるほどね、理論は知ってる。

腕の黒いムツキムキのジジイ（教官）にぼっこぼっこにされる毎日じゃなければ念願

叶って嬉しかったんだけどね。

これ強くなる前に死ぬのでは？

死んでたまるかよぼけえ!! と同僚と一緒に殴り掛かる。

俺が死ぬ前にお前を殺す（ガンダム並み）

天啓を得た。

俺が死ぬ前に相手が死ねば俺は死なないんじやねえかな知らんけど。

倒れている仲間を盾にしても俺は生き残る!!

最後に倒れるのが俺ってだけで、結局ジジイが一番強いんだけどね。

いや、マジで強すぎる。

悪魔の実無しでこれとかバグか???



— 4

地獄の日々で六式も修得したし、体術も合格を貰ったので晴れて俺は一人前の海軍として認められたよ今までありがとうございましたゼファー先生それはそれとして俺の六王銃で死ねいっ!!

あの糞みたいに硬く太い黒い腕のカウンターでワンパンされて演習艦から叩き出されたわ。

顔面がワンピースのギャグみたいに腫れてるし、歯も折れてるし、なんならたぶん骨にも罅が入ってる。

あのジジイ、すぐボコボコにしゃがる。

可愛い教え子の旅立ちくらい無傷で解放するのが人情じゃないのか。

海軍には常識つてもんが無いんだよな、とブツブツ文句を言いながら帰りの軍艦に乗り込む。

欲しかった暴力も手に入れたので海軍やめて賞金稼ぎになろうかな、と考えながら指

示された船室に向かう。

科学班と黒服のチームが屯していて、俺を歓迎してくれた。

今回作成された六式のマニュアルもまだ未完成っぽいが貰った。

それと一緒に手渡されたスーツケースには次の制服が入っているらしい。

黒服だった。

まあ進路としてこれはこれで有りっちゃ有り……なのか？

— 5

黒いスーツ着て、海軍の正義コートをはためかせる俺ってカッコいい。カッコよくな  
い？

まあ目立つからほとんど着れないんだけど。

仕事の内容がもつとカッコよくてお金になって皆にチャホヤされたら言う事無いん  
だけだな。

やってることなんて市井に混じって危険な悪魔の実や、禁足事項について調べてる人  
物を洗うだけだからな。

地味すぎる。

安全だからいいんだけど。

いや、安全じゃねーわ。

チンピラに何探つてんだってイチヤモン付けられて結局暴力沙汰だしな。

諜報員の勉強してないからバレバレっぽいんだよな。

滅んだ国とか革命で政治が転覆した国の調査ばかりやってたからもつと癒された  
い。

魚人島で人魚と毎日遊びながら白ひげ海賊団の動きを見守る仕事とかしたい。

次の仕事はウタウタの実際の行方について調べるらしい。

……どうやって調べるんだよそんなん。

とりあえず歌がめっちゃ上手い人を調べればいいのか？

天竜人が持つてんじゃないの？

天竜人が欲しがってるリストを取り寄せでもしようかな。

あ、もしかしてウタウタの実を大義名分にして「ウタウタの実食べてない？ 天竜人

に目を付けられてるから隠れたほうがいいよ？」って言って回れってコト!!?

はい、というわけだね。

露骨なまでにウタウタの実を探ってたら赤髪海賊団に襲われたってことだね。

電伝虫を使っていたので、「ウタウタの実を探している途中に赤髪と交戦！ ま、まさか赤髪が……!?!」みたいな意味深な内容を送ってみた。

俺を襲ったやつはみんな不幸になれ。

それはそれとして楽園クラスの軍艦1隻程度で戦える相手じゃないし、すぐに沈みそうで笑える。

天候も悪くなってきた。

ハツと思いつく。

これは絶好の機会だ。

うおおおおお！ と船に乗り込む。

ピンチをチャンスに、チャンスをピンチに。

「56人殺したのさ。てめエのように生意気な奴をな」

ドヤあ………!

めっちゃピリピリしていた船上の空気が更にピリツとした。

まあそうだよな。

これが普通の反応だよな。

まだ覚えてたネットスラングで遊んでいいことないよな。

「まさかヒグマか……!?! おれたちを追って!?!」とか言ってる船員もいた。

(ヒグマじゃ) ないです。

年齢も身長も体重も俺の方がプリティだろうがよお!!?

胸倉を掴みに行こうとしたら、生の「失せろ」を食らった。

ヤンキー漫画の「失せろ」だったら耐えられた。

ワンピースの「失せろ」は耐えられなかった。

辛うじて意識を失わないように頑張ったがやつぱり無理だよ。

踏みとどまることができずに荒れた海に落ちた。

俺は満足だけど、赤髪海賊団の人たちからしたら意味不明すぎない？

大丈夫？

— 6

はい、というわけでね。

安全に亡国エレジアに漂着できました、と。

なぜこんな滅んだ国に来たかと言うと、なんと偉い人から調査するようにつて命令されたらしい、サイファーポールが。

で、そこから依頼がいったらしい、科学班に。

そして受けたらしい、俺の上司が。

そこから、エレジアの近くに行ったら赤髪海賊団に襲われたってことだね。

俺まで下ると第何次下請けになるんだよって話だよな。

長々と話をしたが、たぶんここまで導入だったのだろう。

俺の人生は全部導入なのかもしれない。

深いなあ。

そんなわけで、流れ着いた海岸で出会ったのはウタという名前の少女だった。

突如溢れ出した存在する記憶……いや、嘘ついた。

全然溢れて出してこない。

なんかワンピースに居たなあって気持ちしかない。

でもなあ、モブキャラでもなんかワンピースに居たなあって気持ちの名前の人も多い

から俺の知識とセンサーはガバガバ。

とりあえず彼女がここがエレジアであることを教えてくれた。

ハツとする。

ウタとウタウタの実……？

関連あるんじゃないか？

むしろ無い方がおかしくないか？

まさか……！

突如溢れ出した存在する記憶（T e k e 2）

ハツと目を見開く。

わかった。

この国が滅んだ理由をはつきりと思い出した。

ウタウタの実だ。

ウタウタの実がなんやかんやしたのだ。

俺の権限だとウタウタの実についての危険性などの詳細まで読めなかったけど、ウタウタの実には世界政府が危機感を抱くなんやかんやできる力があつたはず。

確か……そう、映画であつた。

あれだ。

コツコルピアだ。

たぶんコツコルピアを呼べる。

コツコルピアを！

コツコルピアを……？

つまり世界政府はコスト2でドラゴンが呼べることに危機感を抱いた……つてコト

!?

ダメだな、よくわからない。

よくわからないが、ウタウタの実は危険なんだよな。

あんまり覚えてないし知らんけど。

それに世界政府も情報隠しすぎ。

そもそも俺は殺すのが好きじゃないんだよな。

民間人を殺すのも好きじゃない。

子供を殺すのも好きじゃない。

女の子を殺すのはもつと好きじゃない。

海賊を殺すのは出来るからな。

趣味と特技が合ったら良かったのに。

殺人が趣味なら天職だった気がする。

「なあウタ、海賊になりなよ」

波の音を背中越しに聞きながら、俺は目の前の少女にそう言った。



# 推しの子 1

遊びに来た友達が口々に言うことをまとめると、俺は恵まれてるらしい。

最新機種種のゲームや人気漫画の数々は親の趣味で、自由に使えるのは珍しいのだとか。

だけど俺だって何もしてないわけじゃない。

テストの点数が悪かったら使わせてくれなくなるらしいから真面目に勉強だってしてるし、部活だって頑張ってる。

週刊誌や月刊誌を読ませてもらえなくなるかもしれないので家の手伝いだってやってる。

結果が良ければ両親は褒めてくれるのも羨ましいらしいが、じゃあ頑張って結果を出して褒めて貰えばいいのにと度々思う。

とはいえ、他の家だと勝手が違うらしい。

例えばテストで80点を取ったとする。

俺の場合は両親のどちらか、大体は父さんに見せる。

母さんは教えるのがあまりうまくないというか、丁寧すぎて長くなるので根本的にわからないときに頼る。

父さんに教えて貰いながら間違った場所を改めて復習するだけ。

友達から聞くと結構違ったりする。

100点以外は認められなかったり、子供のテストに興味がなかったり、点数が悪いことに怒るだけだったり、そんな感じで色々らしい。

最初は疑ったし、友達の態度が悪かったんじゃないかと思っただが、今はそういうものなんだと考えるようになった。

俺の親の対応は俺の家のことでしかなくて、他の家には他の親の教育方針があるのでと理解した。

ホントに教育方針だなんて大それたものが他の家にあるのかは俺にはわからないが。

うちの教育方針は「褒めて伸ばす」ことを一応意識しているとは聞いたことがあるが、両親はそういう面倒なことはあんまり考えていないとも言っていた。

教育方針で子供が思ったように育つなら説明書とか出回って、それ通り育てれば良くなるから教育方針という考え自体が廃れるはずなんじゃないかってことらしい。

家庭ごとに考え方は違うよねってことらしく、そこで育った子供もやっぱり違う性格になるよねってことなのかなと思ったり。

学校の休み時間に友達と話したり、部活の時間にだらだらと駄弁ったり、塾でこそそこそと内緒話したりっていうのを結構する。比較的よくする。

そこで俺の話だったり、家族の話だったり話が話題になったりもする。

そうなる、「変わってる」って言われることがある。

「変わってる」が指し示すのは父さんか母さんが大半で、時々俺。

今後のためになるから、と新しい物事に触れる機会を両親が用意してくれて、俺も率先してそれを楽しむのが変わっているのだとかどうか。

ちよつと前には父さんにスマートフォンやパソコンを買ってもらったが、理由は「これから役に立つ物に慣れておくべき」ってことらしい。

母さんは色々知っておくべきだと博物館とかどつかの街の記念館に行きたがるし、ベーゴマや竹馬みたいな古い玩具の遊びとかを一緒にやったりもする。

父さんにベーゴマの回し方を聞いたがわからなかったし、母さんもわからなかったの  
で結局スマホで調べた。

動画サイトは回し方や予備知識みたいなのを紹介してくれるのでとても便利。

そんな感じで家族サービスもしてくるし一緒に遊んでいるが、変わっているとは思わないので多分嫉妬なのだろう。

言ってしまうえば他所は他所、うちはうちっただけだ。

多様性ってやつが外にはあって、ルールがある。

それを理解するまでに少し時間がかかった。

努力は結果に繋がると信じていたし、好きな物は好きだと言うべきだとも思い込んでいた。

新品のパソコンでやれることなんて限られていた。

時々何か調べものをするくらい。

トランプのゲームして、地雷を探して、ピンボールしておしまい。

使い方がわからない俺に、ちょっと悪い顔をした父さんが動画サイトを教えてくれた。映像に被さるようにコメントが横に流れていく。

ゲームしながら喋るだけなのにそれがとても面白かった。

変わった声の歌（機械音声らしい）もたくさんあって聞き終わるのにどれだけ時間が必要なのかわからない。

実はこれらが個人によって制作され、自由にネット上に投稿されているというのだから驚きでもあった。

新しい刺激という物は俺の心を掴んで離さなかった。

俺が一番気に入ったのは二人の赤ちゃんが踊っている（オタ芸とかいうやつ）動画だった。

本当に踊っているのか、そういう風に加工しているのかはわからないが、どっちでもよかった。

勉強とゲーム、動画サイトをバランスよく摂取した結果、俺でも動画を撮れそうだと思い始めた。

あまつさえ人気が出るかもしれない。

いや、出る。

俺は無自覚な自信を抱いていた。

父さんも母さんにもにこにここと笑いながら色々と教えてくれた。

そういうわけで、動画を撮ろうとしたのだがこれが意外と時間が掛かる。

ゲームの解説をやってみようとしたが、喋りながらゲームすることの難しさは筆舌に尽くしがたい。

たぶんそれを話せば良かったんだろうけど、言葉が出てこないことをどう話すのかっていう。

苦戦している俺に父さんが、絵も投稿できると助言をくれた。

絵か。

絵は得意だ。

何を隠そう俺は美術部だ。

両親が言うには人気のある絵のファンアートとかが人気になりやすいので、絵から客層を集め、動画へと繋げることに決めた。

何を描くのかはすぐに決まった。

ティンと来た。

迷わなかった。

もはや天啓。

天衣無縫。

天下無双。

これこそ運命だ。

ということでおタ芸する赤ちゃんに決めた。

やるからには本気を出す。

まず大事なのはキャッチーさ。

リアル調でもいいが、やはり可愛さを求めたい。

各地でブームが巻き起こったゆるキャラやマスコットを参考にした。

複雑な線や構成は捨てた。

描けないのでオタ芸も切り捨てた。

オタ芸が無いなら体も要らない。

そうして出来上がった俺の渾身の絵を見た両親は少し悩んだようだったが、独創性に溢れていると褒めてくれた。

俺もそう思う。

しかし空白が気になる。

言葉を加えたいくらいだ。

本音を言えば「俺の美技に酔いな」くらい書きたいが、これで人気が出なかつたら悲しいどころか虚しい。

ピエロを超えて単なるカカシになってしまう。

ということまで媚びていくことにした。

あまりにも媚びすぎるのは良くないという両親のアドバイスも参考にした。

安心の一頭身！

赤と青の双子っぽい頭部！

丸みを帯びた輪郭！

下膨れの顔！

どこかふてぶてしい表情!

極めつけは空白の恐怖に耐えきれずに上半分に追加された吹き出しとセリフ!

「人人人人人人人人人人」

「ゆっくりしていつてね!!!」へ

? Y ^ Y ^ Y ^ Y ^ Y ^ Y ^ Y ^ Y ^ Y ^ Y ^ Y ^ Y ^ Y ?

うーん?

う、うーん……??

なんか思ったのと違う気もしないでもない。

どう思う? と両親に相談すると「息子が描いたからヨシ!」「息子が描いて旦那が認めたからヨシ!」「両親がヨシって言ったのでヨシ!」ということで投稿した。

なんかドキドキする……。

ちなみに元ネタの赤ちゃんたちはアイドルのライブで応援していたらしい。

そのアイドルのライブに行けば生で応援見れたりするのかな、名物なのかなと思ったがどうやら数年前に死んでるらしい。



ストーカーに刺されたのだとか。  
知ってるアイドルだった。

そういえば死んだってニュースで見たなあ。  
芸能界ってこわいなー q ^

## 女神転生（地方しらべ）

高校からの帰り道だったんだけどね。

ちよつと遊んでたら遅くなったのがいけなかったのかもしれない。

そいつは身長が小学生の高学年くらいで、猫背気味で腹が不気味に膨れていた。

不気味に赤だか黄色だかに光る眼で俺を見つけると、てらてらと輝く涎を垂らした口を大きく開けて何事か叫んでいた。

あんまりにもキモすぎて走って逃げたね。

そしたらそいつも俺を追いかけて走ってきてな。

心底ビビったね、あれには。

思ったよりも脚は速くなかったから少しは考える余裕も出来て、俺はエイリアンが地球に攻めてきたのかと考えたね。

だって短い手足、口からは大量の涎、気持ち悪い見た目。

こりやもうエイリアンにしか見えないだろう？

そんなわけではたばた走って逃げたらちようど踏切が閉じそうになってな。

遮断機を潜り抜けて渡ったら、遅れてエイリアンも踏切に入り込んで、そのまま電車の轆かれちまったんだ。

醜く膨れた腹から半分が電車に持ってかれてな。

あんまりにも綺麗に無くなったから俺は一瞬ギャグかと思ったくらいだ。

流石にエイリアンじゃないことはそこら辺で理解したんだが、そいつは残った上半身で這いずってきたんだよ。

とんでもない執念だ、こいつはただ者じゃないなってことにも気づいてな。

それで俺は思い至ったね。

こいつはテケテケなんだって。

だからといってどうしたらいいのかもわからなくてな。

這いずってるテケテケから距離を取りながら逃げると、段々遅くなってな。

はーん、血液が足りなくなってるんだなって俺の聡明な頭脳は答えを出した。

じゃあそのうち消えてなくなるなってなんだか余裕が出てきたところで「はま」って声が聞こえたわけよ。

そうしたらテケテケが光に包まれたと思ったらいなくなっていて俺は助かったってわけ。

じゃあその「はま」とやらで助けてくれたのは誰かって話だけど、空からぼんやりと

輝いてて頭に輪っかがあつて羽根の生えてる少女が助けてくれたらしい。

俺のことを「ひとのこよ」とか呼んできて、なんか後ろを付いてきてな。

偉大な相手は輝いて見えるのかもしれない。

神秘的なほどに完成された容姿と、猫みたいな目をしているのが外見的特徴だろうか。

「なんかそういうわけなんですよね」

「なるほど、神託通りです」

帰り道にメシア教の教会の前を通つたら声をかけてきたシスターに招かれたのでお茶を頂きながら事の経緯を説明した。

ちよつと落ち着いておきたかったのもある。

羽根が生えてる少女も俺の隣でお茶を飲んでた。

シスターは熟知り顔で頷いた。

銀髪で胸の平らな幼いシスターしか教会内で見ないのだが、他に人はいないのだからか。

あのエイリアン兼テケテケは悪魔だったり、羽根の生えた少女は天使だったり、C O M Pとやらを貰つたりして。

そこから悪魔を使役するデビルサマナーとして色々覚えたりしたのが三年くらい前

のことだったりする。

「今日はスズメバチの駆除をしてもらいます」

「デビルサマナーにスズメバチの駆除を!？」

「もちろん神託です」

「ピジョンちゃん！ 神託って言っとけば俺が何でもやると思ってたない？」

「思ってます」

「少しは否定しようぜ？」

メシア教のシスターであるピジョンちゃんのご機嫌を窺いに行くところ、唐突にスズメバチ駆除を依頼された。

俺のレベルは15、戦力過多も良い所だ。

やったことは無いけどヤクザ事務所に乗り込んで余裕で壊滅させることができるらしい。

そもそもヤクザがないんだけども。

そんなわけで二人でスズメバチ駆除の現場に向かうために電車に乗る。

ちなみに単線だし、雨風に微妙に弱くて遅延するし、電車の扉はスイッチを押さない

と開かない田舎の路線だ。

「俺、横浜まで行けば日給で数百万とか出るぜ？」

「じゃあ横浜いけばいいじゃないですか」

「都会は怖い……」

都会のデビルサマナー（ダークサマナーとかいう連中を含め）は当たり前のように銃を人間にぶつ放す気狂いばかりだった。

ドラマとかに出てくるような拳銃なんて可愛い物で、戦争映画でしか見たことないようなアサルトライフルとかショットガンとか持ち出し出してるやつもいる。

異界化してるからって街中でロケットランチャーぶつ放したやつは流石に正気を疑った。

なお他の連中の正気を疑ってないわけじゃない。

そして銃をぶつ放さないやつは刀とか槍を振り回す。

職質されてほしいが警察にどうにか出来るような連中でもなく、ここら辺でそういうやつが見つかったら俺が駆り出されることになる。

なお手ぶらなやつはもつと危ない。

一般人が消し炭になるような魔法を躊躇いなくぶつ放してくる。

悪魔も陰湿で、行方不明者とか出てると思ったら食われたり乗っ取ったりしてる。

サツバツ！

「マジで都会はやばいよ。ピジョンちゃん知ってる？　メシア教とガイア教が争ってさ。いや、俺からしたらガイア教ってお寺さんだべって気分だったんだけど。そしたら力こそパワー！　みたいなノリで襲い掛かってきてマジでビビった」

俺は全然知らなかったのだが、土着の宗教が連合組んでガイア教を名乗ってた。

武闘派の寺とか武闘派の神社とか武闘派のちっちゃい新興宗教団体とか。

一神教のメシア教に対抗するために連合を組むが、弱肉強食みたいな思想のせいで内ゲバつてもいるらしい。

そもそも現代日本で宗教戦争しないでくれないか？

こっちはクリスマスにケーキ食べて大晦日に神社行つてパワースポット巡りで寺行つてバレンタインチョコを交換してハロウィンで仮装して遊ぶ人種だぞ？

筋違いじゃないか？

「都会だとしても派手になりますからね」

「派手で済ませちゃうの？　マジ？　倫理観デビルサマナーかよ」

「過激派だと街とか国を滅ぼそうとしますからね。下手すると毎月世界の危機ですよ」

「倫理観ダークサマナーかよ」

頭メシアンだと40日くらい雨を降らせて地上を洗い流したり、とんでもない危機を

引き起こして救世主を誕生させるために頑張ったりする。

それで頭ガイアだと地震で文明を破壊して弱肉強食の原始を作ったり、国引きさせて大陸に接岸させて最強決定戦をやろうと頑張ったりする。

日本でやらないでくれないか？

実は日本以外でもやってるらしい。

もう勝手に戦えって気持ちになってきた。

「（こ）が半端な田舎で良かったですね。都会に近いと返り咲こうとして頑張る人員が出てきますし、ド田舎だったら情報が伝わらなくて気づいたら世界崩壊でしたよ」

「発見されにくいからって変な儀式をしに来る連中もいるんだけど」

「私の神託を元にサガミさんが撃退してるから大丈夫です。もはや相模線の守護神ですね」

「ちよつとダサイ……!」

デビルサマナーはあんまり本名で活動するのは良くないらしい。

呪詛とか食らうから。

組織に紐づきになっていないフリーのサマナーの中でも地名諸々を名乗ることもあると聞き、じゃあ普段利用している路線名でいいかって気軽に名乗ったわけだ。

若者が働きの口を求めて都会に行くように、ここら辺で力に目覚めた人たちも都会に出



て行ってしまった。

そういうしようもない理由で結局こちら一帯では俺が代表格みたいな扱いになってしまった。

レベル15といえど都会なら大きい組織でも有数の戦力だったり幹部候補だったりする。

そういう武闘派連中と比べると装備があまりにもしょぼいので戦力としては大きく劣るが田舎サマナーなんてそんなもの。

全然人が降りない駅でピジョンちゃんと一緒に降りる。

駆け出しの頃は学ラン着た俺と修道服を着たピジョンちゃん、場合によってはお寺さんの袈裟を着た尼さんがセットで物珍しかったのか車内でも道端を歩いててもざわつかれていた。

今や俺はスーツ姿だがピジョンちゃんは変わらず修道服なのだが、日常の風景に溶け込んだのか誰も気にしなくなっていた。

無関心だよ現代人。

スマホの方が大事なのかもね。

「マハラギ」

ピジョンちゃんに先導されて目的地に到着。

すぐに俺の手から放たれた小さな火種が羽音を立てていた虫を巣ごと燃やし尽くす。隠語でもなんでもなく、単なるスズメバチ駆除だった。

ちなみに俺は別に魔法が使えるわけじゃない。

仲魔のフレイミーズ、炎の精霊を拳に込めて魔法を使わせただけだ。

理由？

手が燃えるってかつこよくないか？

あとは指示しやすいというか、俺の意図が伝わりやすいためだ。

四大元素の精霊だからかフレイミーズは自我が希薄なのでいつそ触れ合って思考を読ませた方が動きがいい。

「害虫駆除に魔法なんて贅沢ですね」

「ピジョンちゃんがやらせたんだが??」

「本題は埋まる予定の呪物の駆除なんですけど」

「俺が先走ってやつちまったってコト!？」

巣に戻ってきたスズメバチを拳の空圧で叩き落す。

大地に還り、自然の糧になれ。

なんかガイア教っぽいこと考えたけど、実際は殺すとキモいからだ。

虫は飛び散る体液がキモい。

「ここには霊道が通ってるらしくてですね。ここに呪物が埋められると方向性が定まってる。異界化するみたいです」

「異界化してから潰したほうが実入りいいと思うから放っておこうぜ」

「位相をずらすほどの能力がない感染型のゾンビが解き放たれます」

「殺す」

ゾンビは弱いのだが、死体をベースにして増えたりする。

汚いし腐った肉が残るので後始末がほんとにおつらい。

燃やしても臭い、埋めたら蘇る可能性が残る。

こんなことやるなんて正気じゃないね。

「あれが罪人です」

「まだ事件を起こしてないんですがそれは」

「でも罪を感じますよ」

「お、過去の罪がたつぷりあるやつ。そりやそうか。普通はゾンビばら撒くなんて躊躇うよな」

神経質そうに親指の爪を噛みながら現れた男で、ピジョンちゃん曰くカルマ値が高いようだ。

ピジョンちゃん自身は糞雑魚ナメクジみたいなステータスをしているが、未来の流れ

を知ることができると神託と属性の傾きや罪の数がわかる特殊な才能を持っている。

3年も一緒に相模線沿いの平穏を守る活動をしていれば、彼女の言葉が最も重要なのは当然のこと。

不安そうに周りをきよろきよろと見渡して、俺たちに気付くと驚いたように目を見開いた。

足取りとかを見てても戦いは得意では無いのだろう。

背を向けて逃げてくれたら、身体を反転させるその際に背骨を一気に引き抜くなり、蹴り砕くなりできるのだけだ。

残念ながら都合よくは行かないようだ。

男は俺から視線を外さず、警戒してじりじりと下がっていく。

「くらえー……ぐわー」

真つすぐ行けば、目も身体も俺の速度に追いつけていない様でその隙だらけの顔を狙う。

軽い言葉とともに拳を何度も振るえばアギが飛んでいく。

予想外なのは当てたはずの火炎が俺に返って来たことだろうか。

俺自身のデータなんてネットに当たり前のように流れているので対策しているだろうとは思ったが、流石に属性を反射できる装備を用意してくるとは思わなかった。



「ちなみに俺は火炎吸収だから」

「は？」

「そしてなんと今日の左手はマグナが出る」

「は？」

「あとサマナーとしてなら俺はなかなか才能があるらしいよ」

実は俺は3台のスマホをCOMPとして利用していて、そのうちの1台に電霊を宿している。

勝手に電霊がアナライズして召喚までしてくれるので無駄な操作などを省いて両手に精霊を握ることが出来る。

デフォだとフレイミーズだけ呼んでいる。

燃える手はカッコいい。

四元素の精霊を揃えているのですべての属性に対策できていない限り俺を完全に止めることはできない。

「どれほど対策できているか俺に見せてくれ」

くらえっ！ と土の精霊アースリーズが宿った左パンチ。

よくわからんけど岩が飛び出す。

俺の拳速で岩が飛んでいくからマグナは使いやすい。

距離が離れていれば地面を殴って揺らしたりもできる魔法だ。

対策していたらしい男の腕に当てたのだが、鈍い音がしたので骨は折れたんじゃないかな。

いや、千切れそうになってたわ。

ええ……対策とは一体……。

ちなみにゼロ距離でマグナを使うと振動を直接伝えることができる。

逃げないように腹パンしとこ。

「確保できましたか」

「余裕だったよ。手加減したけどだいじよぶそ？　もしかして死ぬ？」

「んー……」

「あ、持つてる呪物を食わせてゾンビにしたらセーフかな」

「明らかにアウトですね」

俺は純粋な武闘派じゃないから手加減も下手だし、レベル差のせいでわかりにくいのもあつてな。

口から血反吐をまき散らしている男だが、声を出す余裕は無いのか涙を浮かべながら俺を見ている。

ゾンビにしちやえばいいんじゃないかという俺の意見を聞いてむせび泣き始めた。

それを見ても全く可哀そうだと思わない。

ゾンビばら撒こうとするし、あれは後片付けが本当に面倒だからな。

悪い事はするもんじゃないね。

「ピジョンちゃん、この人どうする？ お説教でもしてメシア教に改宗させる？」

「私はそういうのやらないって知ってるのに聞きます？」

ピジョンちゃんは二世らしいから積極的に布教とかもしない。

教会も普段はガラガラで出入りするの俺かガイア教の人だけだ。

物事の取捨選択がしやすいから神託はマジで便利。

「そもそもこの人、ヤタガラス案件ですね」

「ええ……」

「たぶん龍脈を弄ろうとしましたね」

「最悪だ。呼び出されるかも」

「困りますね。証人喚問だけで済めばいいですけど」

皇居はノータッチ、みたいに業界の禁忌は幾つかあるのだが、その中のひとつに龍脈には不干渉というのがある。

国を巡る超凄いパワースポットみたいなものだが、これを利用して日本は結界を張っているらしい。



触ったらライドウって超怖い都市伝説みたいな超人が文字通り飛んでくる程の事件となる。

既存の社会を壊すぜって過激なことを言ってるメシア教もガイア教も流石に龍脈には触れない。

組織が根切りにされて二度と日本で活動できなくなる。

報告しないで無かった事にしてもいいが、今回の場合だとこういうことを試そうとする土壤を持つている組織が存在していることになる。

後々もつと面倒になると思えば報連相は大事、とても大事。

「だるくなつたし今日はもう店じまいにしようぜ。スズメバチ駆除はちゃんと出来たし、ヤタガラスも呼んだから」

「一応人が死ぬ事件も起きますよ?」

「えー? じゃあ内容によるかな」

「異界となつた心霊スポットに入り込んで襲われる動画配信者のグループがですね」

「150%死ぬ連中はパスで。リソースとやる気は無限じゃないから」

「ですね」

ちなみに150%の内訳としては運よく生き残るか普通に死ぬかで死亡率が50%、助けても俺の力を期待して取れ高がどうか戯言を吐いてもう一度突撃して100%

の確率で死ぬ。

完璧な確率計算だ、惚れ惚れする。

助けなかつたら100%死ぬが、結局死ぬので時間とか魔力とかが浪費するしやる気も削れる。

それなら最初から取れ高満載でいってもらおう。

無駄にならなかつた時間はコロツケのオマケとかサービスしてくれる駅前肉屋みたいな俺の都合のいい周囲を巡回したい。

「帰りはコロツケ食べてかない？」

「いいですね！」

## 女神転生（地方しらべ） 2

わかっていたことだが、やっぱりヤタガラスに呼び出された。

ヤタガラスとは……なんだっけ。

詳細は忘れたが、サマナーとか悪魔とかが関わる社会の裏を取り締まる組織的なやつだったはず。

wikiとかに載ってないからちやんと覚えてないわ。

悪い事したらヤタガラスから指名手配されるし、更に悪い事したら葛葉って所から超強い人がやってくる。

俺も間近で見た事あるけど超やばかった。

ありやマジで超やばいよ。

どうでもいいけどアメリカにヤタガラスを説明する時、ヤタレイブンって呼ぶんかな。

いや組織名だからヤタガラスのまんまか。

というわけでピジョンちゃんと一緒に電車を乗り継いで横浜に到着。

所要時間は一時間くらい。

なお電車の待ち時間がちよこちよこあった模様。

県外のサマナーがこっちに来るときは直通電車とかが出来て楽になったとかどうか。

悪魔関連のメインは当然のように東京だからわざわざ神奈川くんだりまで外部の人が来ることも無いので意味があるんだかないんだわからんけど。

一般の人にはちよどいいのかも。

指示された雑居ビルの狭いエントランスホールで声が掛かるのを待つ。

ヤタガラス直下の神社に呼び出されることもあるが、交通の便とか考えてこういう雑居ビルで会議とかするのが主流になりつつある。

今日はヤタガラス案件なのでピジョンちゃんもロープのような物を頭まで被って顔が見えないようにしている。

なるべく声も聞かれないうようにしているので、耳打ちするようにぼしよぼしよ話しかけてくるのでくすぐったい。

俺も同じように囁くことでやり返せばピジョンちゃんはくすぐったそうに小さく笑い声をあげた。

「今日も仲良さそうじゃん」二人

「スカさん、こんにちは」

「ヨコスカさんな」

横須賀を本拠に持つサマナーに声を掛けられたので挨拶する。

特技は筋肉ですとでも言いたいのか、スキンヘッドで筋肉ゴリラみたいに見える人だ。

年は30くらいだったか。

これで魔法も使って悪魔も使役して近接でショットガンまでぶっ放してくるのだから敵対したらたまったもんじゃない。

ちなみにピジョンちゃんはササッと俺の背中に隠れた。

「最近はどうよ？ 儲かってるか？」

「スズメバチ駆除で3万くらいですかね」

「ええ……。もしかして仕事に困ってるのか？ うち来るか？」

「いや、だいじょーぶ。ついでにやった害獣駆除で火炎反射の装備を手に入れたんで」

「ぼろ儲けじゃねえか。フリーの旨味ってやつだな。羨ましいぜ」

「基本的に固定だから分け前で揉めたり交渉無しなのはお得だけどちよつと忙しいのが欠点だと思う」

属性に有利なアクセサリーなどの装備は高額だ。

DDS—Netというサマナー用のネットワークがあるのだが、そのオークションで競り落とそうとすれば更にお金が必要になる。

無効なら更に必要だし、反射や吸収なら最早札束で殴るところの話じゃない。

しかもこれは無理やり金銭的な価値を付けてるだけだから青天井の可能性もあるという事実。

そもそも反射吸収はほとんど流通してないから仕方ない。

貨幣経済って怖いね。

今回手に入った火炎反射の装備はビジョンちゃんが持つているし、今後も良い装備が手に入ったら真つ先に更新していく。

俺よりも属性系統の防御は優秀だけど、彼女本体がめちやくちや打たれ弱いから……。

「耐性アクセサリーが余ったから買わない？」

「足元見ていいか？」

「全然いいよ。どうせオークションに流さないし」

「悪いな。ヤタガラスもそんなに余裕がないから助かるぜ。余った消耗品とか送るからよ」

DDS—Net、掲示板やオークション等はあるのに匿名機能が無い。

登録したアカウント名でやり取りしないといけない。

仕事を請けるのに名前が売れて無いといけないが、オークションとかで貴重品を出したりすると直接襲われたりする。

特に俺のように地名とかが直結していると特定されやすいので襲撃率がアップする。

フリーのサマナーが耐性装備なんて複数売りに出したりしたら大変なことになるし、吸収や反射の装備があるなんて知られたら昼間から崩壊デブレイクまっしぐら。

たぶんロケットランチャーが撃ち込まれる。

治安が悪すぎる。

本当に日本の話なのか。

高額の商品を競り落としても同様。

治安が悪すぎる。

実は神奈川ってヨハネスブルクなんじゃないか。

このヨコスカさんはヤタガラスひも付きなので俺の名前を出すことも無いし、横須賀とかいう闇のバトルドームを守ってると思うとこれでも安いくらいだ。

横須賀の治安が崩壊したらこっちにも飛び火するので頑張ってもらいたい。

「あと呪物も手に入ったんだけど？ ソンビ召喚用の儀式品なんだけど」

「要らんな」

「ヤタガラスに寄贈とかどう？ 実は喜ばれたりしない？」

「武器や防具、装飾品なら喜ばれるがゾンビ化の呪物は嫌がられるだけだろうな」  
「それなら目の前で処分かな」

『ヨコス力殿、6階へお越しく下さい。サガミ殿、7階へお越しく下さい』というアナウンスが流れたのでエレベーターで途中まで一緒に移動する。

呪物はメシア教に送ってもマイナスの方向でしか使わないとピジョンちゃんに囁かれたので大人しく処分することに決めた。

ガイア教は論外なんで。

「そういえばそろそろ横浜は落ち着いた？」

「落ち着いたと言えば落ち着いたんだが……」

「歯切れ悪いね」

「メシアが主導を取ったのはいいが、対抗してた連中が潜伏しちまったんだよ」

「現代のゲリラかな」

一昨年くらいに大きめの小競り合いが起きた結果、戦力的に優位となったメシア教が  
実質支配した。

しただけだが、諦めきれなかったガイア教やダークサマナーが日夜悪事に励んでいるらしい。



そんなこと励むんじゃないよ。

「それで大事になりそうな感じだったり？」

「しそうだからこっちは横須賀から駆け付けてんだわ」

「うわあ」

「……ライドウが来るかもしれないから連絡は多めにしてくうぜ」

救いなのはメシア教の代表が穏健派ってことだろう。

むしろ穏健派だから徹底しきれなくて禍根を残して荒れててライドウが投入される事態になるかもって？

耳が痛い、半分は当たっているかもしれない。

6階でエレベーターが止まったのでヨコスカさんが降りていき、それほど間を置かずに7階で止まる。

巫女さんに奥の部屋へと先導される。

案内してくれる巫女さん、実は神社だろうと別のビルだろうと同じ顔なんだよ。式神じゃないかと俺は思っているが実際はどうなんだろう。

「失礼します」と一声かけてから入室する。

ちなみにノックする場合はよっては室内から魔法が飛んでくるので注意。

「ミサキ様、どうも」無沙汰しております」

挨拶をしてピジョンちゃんと一緒に頭を下げる。

部屋に浮かんでいる猿を模したお面であるミサキ様の口がカタカタと動き出す。

直接脳内に……！

というわけで俺とピジョンちゃんのこれまでの働きのおかげで特に審問とかもなく、スズメバチ駆除の際に捕まえた男はしよつ引かれることとなった。

呪物も処分していいと言われたので、この場でフレイミーズを召喚して燃やす。

こういう儀式アイテムは歴史的にも古く、マグネタイトを結構溜め込んでたりするの  
で経験値としては美味しい。

歴史的価値があるから残しておいたほうがいいとか主張する連中もいるけど場合に  
よると思う。

ゾンビを増やす呪物なんて保管しなくていい派閥に俺は属させてもらうぜ。

沢山破壊すれば概念の上書きとかが起きて悪魔が強くなることもあったりなかった  
り。

ミサキ様がカタカタするので頷く。

「ええ、ええ。はい、勿論です。重々承知しております」

ミサキ様のお言葉によると今回の事件は一昨年の騒動が原因となっっているようだ。

起きた争いで組織の興亡が左右され、負けて押し出された連中が半端な田舎に押し寄

せる形となり、俺の周囲にも影響しているとのことだ。

俺としては今年はずっと事件が多くなつてくらないので特に問題はないが、他の地域では影響が目立ち始めた。

ヤタガラス内部で解決を目指すのが、事件が致命的になりそうなら俺みたいなフリーのサマナーにも招集を掛かるだろう。

又、死人の連続召喚の狙いは儀式の容易さに目を付けたため、男が所属していた組織は既に龍脈へのアプローチも試みているようだった。

最後に男の装備品等は火炎反射用を除いて寄贈した。

俺の所持品と比べて効力が劣化品ばかりだし、オークションで注目を集めるよりはヤタガラスの心証を良くした方が得だろう。

外国の組織であるメシア教に所属してるピジョンちゃんと組んでいるので、敵意が無い証明というのはどれだけやろうともやり過ぎることはない。

掲示板でフレイミーズ召喚時のアナライズを晒されたからより一層周囲に気を配る必要があると実感した。

それはそれとして、なんでみんな火炎対策しかしてないんですか（現場猫）  
収集品が偏るから困る。

俺のメインは物理なんだよね。

そして特に貴重なのも物理系なんだよね。

どうにかして物理系持つてきてくれないか。

出来れば銃弾を無効にするやつとか。

もういつそ自分から他の精霊を召喚したアナライズを晒してアクセサリ狩りでもするか？

アホなことを考えていると、ミサキ様がカタカタと語り掛けられた。

「いえ、とんでもございません！　ありがとうございます！」

有難い。

今回はヤタガラスから見ても十分な成果だったらしい。

言葉通り恭しく手を差し出せば、魔力の結晶が乗せられた。

これは幾つか取り込むことでレベルを上げることができる消耗品であり、もちろんめちやくちや貴重な物。

俺のレベルになるとちようどいい異界も無くなり、同じレベル同士で殺し合わないといけなくなる。

争いは、同じレベルの者同士でしか発生しない！　という言葉もあるが、やってることが頭イカレダークサマナーと同じになりたくないよ俺は。

日本に根を張つてる霊的国防組織から情報を聞けるだけに留まらず、定期的にこれを

貰えるんだからヤタガラスに協力し続ける価値があるってもんよ。

メシアは渋いからな。

捧げる代わりにその信心深さを認めるとか言いそう。

ガイアは倫理観ダークサマナーだからな。

強請るな、奪えって言いそう。

今後も励むようにとのお言葉とともに退室を許可された。

ピジョンちゃんと一緒に頭を下げてから部屋を出れば、そこは1階のエントランスだった。

行きは防犯の都合上エレベーター利用だが、帰りはミサキ様による転移で入口まで送ってくれる。

異界の主の特権だろう。

「いやあ、今回はまた随分と良い物を貰っちゃったねえ、ピジョンちゃん」

ピジョンちゃんも同意見のようでこくこくと頷いた。

「一昨年に物反鏡と魔反鏡という過去一いいものを貰ったが、あれはもう経験したくない。」

街中でロケットランチャーぶつ放すのはやめろ。

やめろ。

ちなみにピジョンちゃんに使うか提案すると、ぼしよぼしよと耳打ちされて毎回のよ  
うに断られる。

俺のレベルを上げて自力を高めたほうが優位に運ぶことが多いらしい。

確かにピジョンちゃんのレベルを上げてても対処できる事態は少ないからな。

運動音痴でどんくさいし。

それはそれとしてぼしよぼしよと囁やかれたいので提案した。

## 女神転生（地方しらべ） 3

俺のサマナーとしての活動範囲は相模線沿いの町がメイン。

依頼で呼ばれたら栄えている市にも行くが、基本的には電車やバスで移動できる場所に限っている。

車で移動してもいいんだけど、俺は運転が好きじゃないしピジョンちゃんを乗せてる時に明らかな危険運転で煽られたら殺してしまうかもしれない。

一応ヤタガラスからこころ辺一帯を頑張って管理してねってお手紙を貰っているの  
で、乗り込んで来た見知らぬ連中をぶち殺しても裏家業的な意味では罪に問われない。

管理に失敗すると追い出される。

異界放置しまくり行方不明者続出みたいなあまりにも酷い状況だと首を物理的に飛ばされるが、今のところ心配する必要は無さそうだ。

管理する範囲だが、実は明確に線引きされているわけではない。

ざっくりした例えなのだが川や山、建物等で線引きした場合、じゃあその線引きになった川や山の中、またはそのギリギリの場所はどうすんだって話になる。

悪魔なんて自然があるだけで発生するので、明確な線引きをしてしまうと逆に判断に窮することが多々あるらしい。

そんなわけで問題が発生して困った時はヤタガラスに聞けばいい感じに処理してくれる。

相模線が俺の縄張りっぽい空気になっているが、全てを管理しているわけではない。駅のある相模原市や茅ヶ崎市にはそこを縄張りになっているサマナーが当然いるわけ。

その依頼を受けた場合はヤタガラスに伺えば角が立たない。

間違つて受けてしまった場合はヤタガラスに頼めば依頼を移譲するなり、後から話を通してくれたりする。

距離や期間を指定して仕事が欲しいと言えば見繕ってくれることもある。

俺の電霊にお願いすればDDS-Netのヤタガラスコミュで調べてくれるからめっちゃ便利。

電霊を高値で買い上げて調整し、初心者サマナーは売ったお金で準備して、準備ができたサマナーに電霊を貸し出しているのだとか。

ヤタガラスが電霊を使役する経緯としては官公庁がパソコン等を導入したことが発端らしい。



決して文通とか紙媒体を有り難がったヤタガラスに役人がキレたわけじゃないし、パソコンなんて使えないという情けなさを隠すために電霊を導入した事実もない。

偶然か必然か、家庭パソコンの一般化、スマホの普及等で予期せぬ電子化に成功してしまつたようだ。

その結果なのかわからないが「あ、あれはアニメとインターネットの普及とヤタガラス内にDDS―Netを導入したことによつてとんでもない信仰を得ることになつてしかも何故かわからないが電霊になつてしまつた神様のオモイカネ!」みたいな謎の影響もあつたらしい。

お金に目がくらんでヤタガラスから足抜けしてダークサマナーになることもあるよ  
うだが、電霊のサポートを貰つて骨の髄まで甘やかされたサマナーが糞雑魚ナメクジ  
じゃないわけがない。

なお俺も電霊を使つているので他人事じゃない模様。

ヤタガラスから配布された物じゃなくてダークサマナーから奪つた物だし、消えかけ  
ているところを俺が交渉して仲魔にしたんだからもうこれはサマナーとしての仕事を  
全うしていると言つても過言ではない（早口）

でもよお、事務処理や戦闘補助の便利さを知つてしまつたらもう戻れないぜ。

「今日は河川敷の草刈りをしてもらいます」

「デビルサマナーに河川敷の草刈りを!？」

「もちろん神託です」

「ピジョンちゃん！ 神託って言っとけば俺が何でもやると思つてない？」

「思つてます」

「少しは否定しようぜ？」

メシア教のシスターであるピジョンちゃんのご機嫌を窺いに行くと唐突に河川敷の草刈りを依頼された。

俺のレベルは16、戦力過多も良い所だ。

やったことは無いけど地方の過激派メシア教会に乗り込んでも余裕で壊滅させることができるらしい。

そもそも過激派メシア教がないんだけども。

そんなわけで二人で河川敷の草刈りの現場に向かうために電車に乗る。

ちなみに単線だし、車両は少ないし、ホームも狭い田舎の路線だ。

「俺、東京まで行けば日給で数千万とか出るぜ？」

「じゃあ東京いけばいいじゃないですか」

「東京は怖い……」

「怖いですよね……」

一昨年東京で仕事したのだが、最悪だった。

サマナーになってからの一年目は生きるのに精いっぱい、常識も知らず、ピジョンちゃんの予知で死亡フラグをギリギリで回避するだけの生活だった。

メシア教からエグゼクターとかいう超怖い危険人物が襲ってきたのでピジョンちゃんをメシア教に送り返すこともできなかった。

このままジリ貧で真綿で首を締めるような生き方をするよりは資産を作って一発逆転を計ろうってことでピジョンちゃんの予知で自分たちを一番売れるタイミングを狙った。

確かにタイミングはばっちりだった。

ばっちり最悪だった。

忍び込んだ先がエコービルという雑居ビルで、魔界への扉が開かれた状況だったから最悪を通り越して地獄みたいだった。

でびでびでびるのような雑魚パンダが出てくるなら問題ないのだが、実際は魔王降臨まで一歩手前だった。

というか魔王の顔っぱいのが見えたし、なんなら魔界の扉を開いた人はB級映画の悪役よろしく最初に食われた。

ピジョンちゃんを抱えて逃げれば外で悪魔の群れと天使の群れが睨み合い、ビルを中心にごりごりの戦争が繰り広げ始めた。

なんなら俺らも文字通り食われそうになったし、ロケットランチャーで片腕吹っ飛ばされた。

必死に「さぞ名のある神とお見受けする！ 鎮まり給え！」と制止の言葉を叫び、良識のある神とかガイア教徒とかメシア教徒に守ってもらいながらビルから離れられてその時は九死に一生を得た。

「マジで東京はやばいよ。ピジョンちゃん知ってる？ メシア教とガイア教が争っててさ」

「私もいましたから」

「マジで東京はやばいよね。あれくらの事件は東京だと隔年のスパンらしいよ」

「宗教禁止したほうがよろしいのでは」

「ピジョンちゃんがそれを言うんだ」

「私だから言えるのです」

ドヤ顔のピジョンちゃんを見て、俺は確かにと頷いた。

後から聞いた話だが、件の事件で魔界への扉を開いたのがガイア教でも上位に位置する人物だったらしい。

頭ガイアーズたちを呼び寄せてるし、ガイア教が隠す気無かったたのでそれに気づいた過激派メシアが魔界に討ち入ろうと頭メシアたちも集めていたのだとか。

一発逆転を狙ったら宗教戦争に巻き込まれたのホントに酷い。

情報を得たライドウが駆け付けたので、俺とピジョンちゃんはぶるぶると震えながらも内部の道案内を買って出た。

命懸けで怖い思いをして得る物が無かったらと考えての半ばヤケクソの提案だった。

ライドウが真つすぐ元凶の場所まで行つて魔王を切り捨てて扉を閉じたのだが、エコービルが魔界の一部として取り込まれてしまった。

徐々に魔界へと落ちていくビルを目前にしても争いに夢中で逃げないガイアーズとメシアン、退去する理性のある少数の面々。

最後には誰もいなくなつてぼっかりと空いた穴と『ターミナル』だけが残されていた。エコービルが魔界の一部となつていたので、周囲一帯が異界と化して一般人や表社会には起きた事件の割にはあまり影響が無かつたことだけが幸運だった。

その後の詳細は知りたくなかつたのだが、『ターミナル』はとんでもない演算装置で人間の転移すら可能だという話だ。

ガイア教がやっていたように条件さえ揃えば魔王の召喚も出来てしまうのだから恐ろしい。

ヤタガラスでは現在の所、北海道と新潟、東京、京都に設置してあった物を接收、転用している。

ちなみに横浜でもピジョンちゃんが発見して騒動になったのだが、無事ヤタガラスが確保して設置場所の議論が重ねられてみるとミサキ様が教えてくれた。

教えてくれなくていいです。

「横浜も派手でしたね」

「派手で済ませちゃうの？ マジ？ 装甲車とか持ち出した馬鹿がいたのにな？」

「でも東京だと聖戦が始まりましたよね」

「やっぱり神奈川って最高だね」

東京の頭メシアンどもは勝手に周辺の道路を封鎖したりとやりたい放題だったからな。

なお責任者と天使は魔界へと消えた模様。

東京の頭ガイアーズどもは銃火器だけじゃなくて悪魔を知らない半グレとかヤクザも兵隊として投入したりとやりたい放題だったからな。

なお責任者は魔王に食われた模様。

治安的な意味では直後が安全だったような、その隙に今まで日の目を見る事が無かった連中が跳梁跋扈したから余計に悪かったような、ごった煮みたいな状態だったらしい。

元締めが急に消失したから闇カジノとかの摘発が順調だったとか。

都会は怖いな。

物理的に戸締りしとこ。

「来週くらいにヤタガラスを抜けたサマナーが来ますね」

「もしかしてお客さん？ お茶菓子いるかな。帰りに茅ヶ崎駅のチーズケーキとか買いに行く？」

「必要ないかと……。ああ、これは離反者ですね。依頼が来ると思います」

「なんでこつち来ちやうの……。？ おバカさんの……。？」

「相模線を利用するみたいです」

「途中で問題起きたら電車止まっちゃうじゃん。勘弁してくんないかな」  
来週の仕事が一件決まってしまった。

やる気がある時に舞い込んで来たら元氣に対処するんだけどな。

草刈りに行く途中で決まるとなんかやる気がなあ、出ないんだよなあ。

でも外に出かけるから外食するのは楽しいから好き。

心が二つある。

「放置しても特に問題は無いようですが」

「でもヤタガラスから依頼されるんですよ」

「そうなると思います」

「そしたらガチャができるじゃん」

「ええ……」

「お彼岸ピックアップでおはぎが手に入るから」

「おはぎ」

「電霊用の飲食物はガチャでしか手に入らないからな」

「貢ぎたい気持ちと射幸心を煽られてるじゃないですか……」

ヤタガラスの電霊を所持しているサマナーは、DDS—Netのヤタガラスコミュニティでガチャが回せる。

ガチャを回すとどうなるのか。

アドオンやプラグインが手に入る。

それだけじゃなく、というかガチャの目玉なのだが電霊用に使える物品が色々手に入る。

電霊のいる空間を快適にできるワールドそのものだったり、家具、服飾、飲食物、エ



フエクト……。

ガチャで手に入る電霊用のアイテムは枚挙に暇がない。

現金や魔貨、現物で回したい所だが、そういうわけにはいかない。

これがどうして中々くせ者で、ヤタガラスからの依頼を達成した成果でしか回せない。

依頼の報酬の割合を自分で決めることが出来るのだが、報酬の9割をガチャの回転数にするサマナーもいるのだとか。

ガチャに嵌りすぎではないだろうか。

俺も最大までガチャに回したいが、逆に依頼で担保されている分の回転数だけのほうが愛というか自己顕示欲を満たせる気持ちもある。

心が二つある。

「課金してませんでしたっけ」

「買える分は全部買った」

「うわあ……」

ピジョンちゃんは引いてるが、君の装備の金額は電霊に課金している分の数百倍じゃ効かない自覚はあるだろうか。

内訳の一部を聞いたヨコスカさんは宇宙猫みたいな表情になったからな。

なおヤタガラスコミュでは電霊用のアイテムはガチャだけでなく、課金すれば手に入る物もある。

ガチャと比べたら品揃えは貧弱だが、動物のお面とか雀卓のようなちよつと方向性を間違えてないか怪しいアイテムがあつて面白い。

ダークサマナーやメシアン、ガイアーズのコミュには電霊用のガチャとか無いらしい。

そもそも電霊用品そのものが無い。

正気か……？

俺の電霊が一番可愛いって自慢できないのに所属する意味はあるのか……？

そんなん知ったら俺もうヤタガラスから離れられねえよ。

「メシアン教も電霊用の着せ替えアイテムで天使の羽根とか輪っか、シスター服を出したら所属する人が増えると思うんだけど」

「たぶん真面目なメシアンは激怒すると思います」

「マジ？ ヤタガラスのシヨップで売ってたから俺買っちゃったよ」

「買えたんですか!?! しかもヤタガラスで!?!」

「俺が思っていた以上にヤタガラスは愉快的な組織なんだよな。袈裟とか巫女服も買えたし」

「愉快というか全方位に強火ですよね」

ミサキ様とか頼むとお面くれたからな。

電霊用と実用の両方で十二支のお面をコンプリートしているが、目立ちたくないときはウカノミタマが仲魔にいたので狐のお面をよく使っている。

お稻荷様の使いは狐って決まっているよなあ!?

なお天使セットやシスターセットは買って一度着せたきり使っていない。

仲間にピジョンちゃんがいて、仲魔にエンジェルがいるから二番煎じどころじゃない。

まあまあ人が降りる駅でピジョンちゃんと一緒に降りる。

混雑していたら人混みに流されそうなくらいに小柄だが、ピジョンちゃんはこれでもレベルはあるからな。

激流を物ともしない岩の如くって感じになる。

それはそれとして満員電車だと楽するために俺に体重を預けてくるけど。

弱者に体当たりおじさんが駅で稀に出現するが、ピジョンちゃんにぶつかって物理反射されて転倒して骨折したことがあった。

他の女性が被害に遭う前に仕留めに行ったらしい。

初犯だと骨折とかで済みますが、再犯だと複雑骨折させたりする。

これでおじさんがダークサマナーとかなら俺にやらせるから。

俺もそうだけどピジョンちゃんも弱者には強く出るタイプってワケよ。

「草刈りするかあ」

「魔法でやらないんですか？」

「危ないじゃん。あとこの広さだと魔力足りなくなるよ。……草刈りしますねー!! 危ないので下がってくださいーい!!」

背中に背負い籠、頭に麦わら帽子、首にタオルというあまりにも完璧なスタイルで、周囲に聞こえるよう大きく一声かけてから借りてきた電動の草刈り機をぶん回す。

ピジョンちゃんが言う通りマハザンで刈ったら確かに楽だが、そうなると射程範囲にあるもの全部真つ二つだからなあ。

俺の感知力やピジョンちゃんの予知で寝てるホームレスとか動物を発見できるのは確かだが、無理やり魔法を使うほどでもない。

ハーモナイザーを起動すれば俺の強さという概念が草刈り機にも適応されるので抵抗を全く感じることなくどんどん刈れる。

仮に俺が銃を使うと、銃は人間よりも速い概念のせいで速度が加算されて通常の銃弾と比べてより速くなる。

「それなら私は周り見てくるついでに声かけしてきますね」

「頼んだー。何かあったら鏡とか使っちゃっていいから」

「お言葉に甘えて遠慮なく使います。でも草刈りで物反鏡と魔反鏡を使う状況とは一体」

「わからん。野生の魔王が現れるとか」

空き缶とか小石を巻き込んだら普通は凄まじい勢いで跳ねて危ないのだが、俺くらいのレベルになると軽々と真つ二つにしてしまう。

それはそれとしてゴミは拾わないといけないので魔法のガルを使って背負い籠に飛ばす。

鏡を使う状況だが、俺の感知範囲を超え、ピジョンちゃんの予知を乗り越えようと考えると魔王が現れるくらいの事態だと思う。

ただ、ヤタガラスにも占星術師とか預言者とか、そういったピジョンちゃんとは方向性は違うが未来を占う異能者がいるので危ない時は何らかの連絡を事前に貰える手筈になっている。

それすら無視されたら俺らでは手の打ちようがない世界の崩壊とかが発生していると思う。

ライドウが駆け付けける事件だし、渦中に居たら多分あっさり死んでるから悩む必要すらない。

結局鏡を使う状況とは一体。

「サガミさーん！ サガミハラさんがお見えですよー！」

「はいよー！」

しようもないことを考えながら凄まじい速さで草刈りを進めていると、ピジョンちゃんの呼ぶ声。

草刈り機を左右に振りながら前進するだけで綺麗になっていくので結構面白かった。

掃除のシミュレーターゲームとかで掃除道具を使ったら一発で綺麗になると思うんだけど、ほとんどあれに近い。

達成率とかあったら今は何パーセントくらいなんだろうか。

もう日が傾いてきたし、サガミハラさんが用事つぼいので作業を終える。

エアロスの風で草刈り機の刃を回し続けたけど中々悪くなかったんじゃないか。

ピジョンちゃんは近所の人と井戸端会議をしていたようだ。

していたというか混ぜられたというか。

飛び火しても嫌なのでサガミハラさんのほうへさつさと向かう。

「サガミさん。お久しぶりです。いやあ、突然すみませんね」  
「ハラさん、どうもどうも」

車両を乗り入れることが出来る限界まで来てくれたサガミハラさんと挨拶する。

地域性のためしようがないが活動名が似ているので俺はハラさんと呼ぶことにしている。

四十代くらいの柔和な見た目通り物腰が低くて色々と丁寧な人だ。

これでシャツフラーとかいう魔法で敵を火炎属性に弱くするのが得意なので俺と相性がいい。

丁寧に対応しながらガイアーズを燃えるゴミにするからな。

本人が言うにはシャツフラーの修得が半端で、カード化させるか爆弾化させるのがちやんとした魔法らしい。

引き継がせる予定の俵せがれがそのうちモノにするでしょう、と言っていた。

「草刈りですか。まだ暑いでしょうにご苦労様です」

「地域貢献活動つてやつですよ」

「そうなると報酬は？」

「ここら辺でやる夏祭りの無料券ですね」

たぶん一万円分くらいの祭りで使える金券みたいなやつでアルコール類には使えな

いやつ。

金魚すくいとかヨーヨー釣りみたいなゲームもできる。

それに地域住民かつ祭りの手伝いとかしていいないと貰えないビンゴ券も貰える。

去年は特用花火も貰ったから今年も貰えるかもしれない。

横浜が大変なことになっているのを尻目に女の子と家庭用花火をやるのは最高だぜ。

「今年はおクも出店を任せましたね」

「出店？ ハラさん、何かやってましたっけ」

「半隠居なので喫茶店を始めました」

「喫茶店！」

裏家業のアンダーカバーとして喫茶店をやるといのが全国の中高生の憧れだと思う。

出席日数ギリギリで高校を卒業した俺も未だに憧れる。

かっこいいよね……。

俺もやりたかったけど、コーヒーの味も、料理を作る気も無かったので出来ない。

結局めんどくさくなってメシア教会に入り浸る何でも屋になっちゃったんだよなあ。

ピジョンちゃんの子知と電霊の搜索範囲、俺の身体能力で迷い犬探しは一流と評判だ

けど、かっこよくないからな。



「かつこいいなあ。俺もなあ」

「かつこいいかな？　ちよつとボクにはわからないけど。喫茶店を始めたのは妻がコーヒーを好きでね。ボクも菓子作りが好きだからそれならって」

「俺もそういうかつこいいのやりてー」

「何か得意なことを次の職にしてみては？」

「得意……？　殴られ屋とか……？」

「いや、それは……」

「殴られるのも避けるのも別に好きじゃないな……。殴り屋とか」

「それだと真つ先にミサキ様に怒られますよ」

「ですよ、と諦める。」

ダークサマナーが表に帰ったり、ヤタガラスに属するための禊として俺に全力で殴られるとか。

「やっぱり全く現実的じゃないなあ。」

俺は別にゴリゴリのパワータイプってわけでもないから禊にもならないだろうし。

「それでご用件は？　近くを通っただけとかなら一緒にどつかでご飯食べますか？」

「ヤタガラスからサガミくんに届け物を頼まれましたね。せつかくだから送って行くかどうかと」

「いいんですか。お願いします。これから混むであろう電車でピジョンちゃんの暴虐が発揮しないとも限らない」

ピジョンちゃんはあるでメシア教としての教育を受けているので、社会的弱者を守るためにとんでないバトルタイプになったりするからな。

べろべろに酔ったまま車内で飲酒しているおじさんの手から酒の缶を取り上げて説教を始めたり。

長くなりそうならおじさんを俺が途中の駅に放り捨てるけど。

車内で化粧したり胡坐かいて大声で話したりする女子高生に説教を始めたり。

長くなりそうなら女子高生を俺が途中の駅に放り捨てるけど。

社会的弱者は全然関係なかったわ。

「そういえば荷物ってなんですか？ ヤタガラスから届く物って何かあったかな」

「ガトリング砲ですね」

「この時期に届くって事は横浜で使えってことじゃん！ うわ、マジで行きたくなくなってきた」

「ご苦労様です。次に御呼ばれしたら倅を送るんで面倒見て貰えると助かりますね」

「実戦経験ってどんなもんです？」

「除霊の真似事くらいですかね。異界もちよつと解決しましたけど」

「それで横浜に？ 獅子は我が子を千尋の谷に落とすってコト!？」

せめて肉片を見てもゲロを吐かないくらいに心構えが無いときついと思う。

今年は大掛かりなあれそれって感じの話は聞かないからマシかもしれないし。

都会は戦闘が無かったらまた別の変なアプローチで俺たちを苦しめてくるからな。

行かなくてもいいけど、ヤタガラスからの覚えが悪くなるのと、結局後で事態が悪化

するだけなので行かざるを得ない。

なんでそこら中に火種がばら撒かれたままなんですか（現場猫）

「そうだ。サガミくん、百足様がそろそろ体を動かしたいそうですよ」

「あー、それなら来週ムカデさんに来てもらおうかなあ。息子さんも一緒にやります?」

「今の倅に百足様はあまりにもきつい……」

あんまり経験ない内にムカデさんはちよつと良くないか。

精神的な肉片耐性は付くと思うけど。

## 女神転生（地方しらべ）4

「来ちゃった」

「帰ってください」

来週くらいにダークサマナーが来ると知らせたのだが、わくわくしすぎて電話した次の日に教会まで来ちゃったムカデさん。

それに対してジト目に対応するピジョンちゃん。

ムカデさんはガイア教所属、ピジョンちゃんはメシア教所属なので表面的な相性は良くない。

ただピジョンちゃんの言葉がちよつときついのは所属の相性とかよりも、年上に甘えたいが為だと俺は思い込んでいる。

会話をして更生する機会を与えたいのがピジョンちゃん、勘でとりあえず殺すのがムカデさん。

ぶっちゃけゴールは同じなんだけどね。

「あらまあ。困ったわ。この子、反抗期かしら」

そういうとムカデさんは「よよよ……」と泣きまねをする。

ピジョンちゃん「よよ……よよ？」と首を傾げた。

そう、泣きまねが伝わっていないのである！

それにめげずにまだ「よよよ……」と泣きまねをしながらチラツチラツとムカデさんがわざとらしく俺を見ている。

そう、解説を求めているのである！

しょうがないなあと俺は笑みを浮かべ、洗濯物を持って外に出た。

「見なさい、お鳩はとちゃん。あの男の姿を。悲しんでいる妙齢の女性と困惑している幼子を放つて外に出るつもりだわ。どれだけ女性の権利向上が叫ばれようと、結局市井には何も届いていやしない」

「私は幼子じゃないです」

じゃれ合ってる2人が付いてくる。

来ないで。

「叫びましょう、わたしたちの権利を。団結しましょう、女性同士手を取り合つて。互いに向き合う勇氣を持ち、会話と握手で繋げましょう、平和を」

「でもムカデ様、交渉したがる相手の背骨を引き抜いてましたよね。私もサガミさんもそれには引きました」

「会話は同じ視線に立たないと成り立たないのよ。わたしは右手を差し出す。相手は頑張ってわたしの手を目指す。そこになんの違いもありませんことよ。ただ、残った左手が相手の命を奪うこともあるから怖いわあ」

「はあ……。じゃあ互いに向き合って手を取り合った後の目標は何処ですか？」

「近場の男性に右手を差し出して、左手で殴るわ。男女平等なのよ」

肩口で切り揃えた艶のある黒髪には緩やかなウェーブがかかっている、防御力を重視した金ぴかの七条袷袢を着ている清楚な女性のムカデさん。

彼女の格好に宗教的な派閥などの意味は全くないし、数珠ナツクルや卒塔婆ブレードを繰り出すこともある。

そんな女性だが、ボクシング漫画でも見られないであろう高速のシャドーボクシングを始める。

残像が見えているのに空気は揺れず、土煙が上がることも無い。

シルクの手袋で作られた連打は音を置き去りにし、白い壁にしか見えない。

そして視線は俺を捉えて離さない。

こえーよ。

「男女平等はそういう意味ではありません。それでムカデ様は今日は何しにいらしたのでしょう」

「殿方との付き合い方を伝授しに来ましたわ。わたしはこう見えて長生き。さながら恋愛の古今伝授」

ムカデさんが病的な白い肌の顔でドヤっているが、俺が聞いた話だと浮いた類は一切無かった。

伝承されていたとしても異類婚姻譚なしの悲しき恋愛雑魚。

彼女が恋愛するには強すぎた。

そして彼女が付き合うには世の男は弱すぎた。

じゃあ釣り合う強さの男と付き合えよって話だが、ムカデさんはそんな化け物と恋愛するのは嫌だと言う。

化け物の自覚が無いのかこの女は。

「男は常に女を三步後ろに侍らせようとしています。切支丹きりしたんの貴女には影を踏まない歩法を教えましょう。これが慎ましき日本女性、大和撫子といふ」

「あ、結構です。慎ましきとか興味ないので手を繋いで歩きます」

「これがメシア教……！　なんて恐ろしいの……！」

恋愛の古今伝授が崩れ落ちた。

所詮は恋愛弱者じゃけえ。

ムカデさんに男と手を繋いで仲睦まじく歩いたことがあつただろうか。

いや、無い。

彼女の手は血に染まっている。

数多の敵を屠ってきた。

今更世界の闇を知らない男と付き合えるはずもない。

悲しきモンスターの運命<sup>さだめ</sup>だ。

それだけでなく、そもそもその白魚のように綺麗な手は毒手だ。

通常攻撃をするだけで耐性の無い相手を毒で必殺し、無効以上の対策をしていない敵を猛毒によって追い詰める。

だから手を繋ぐと焼けるように痛いよ。

「でもわたし、負けない！　まだ半人前のメシアンに世の厳しさってやつを教えてあげるわ！」

「まだ14歳ですから半人前でも仕方ないでしょう」

「そういえばそうでしたわね！　誕生日会には呼んでくださいな！」

メシア教の元聖女候補の誕生をお祝いしようとしているが、この人はこんなでもガ  
イア教なのだ。

そして空飛ぶスパゲッティモンスター教とかいうユニークな派閥に属している。

メシア教とは相性が悪いというか。



説明は面倒なので省くが、真つ向から教えが対立しているレベル。争つてないのは本人たちの気質のせいだと思う。

つまり宗教が争いを生むわけじゃない。

「恵まれた立ち位置で満足し、愚かにも胡坐をかく小娘よ。男はけだもの、すぐに現を抜かし、釣つた魚に餌を与えないのです」

「獣なら獲つた魚をすぐ食べるのは当然のことでは」

「見なさい、平たい胸のメシアンよ」

「見えてますよ、毒大盛りのガイアーズ様」

「あ、ちよつと話は変わるのだけれど。貧しい胸は清貧を表してることでもいいかしら」

「もしかして頭まで虫に食べられたんですか？ それに装備を着ているからわからないだけで、脱ぐと凄いです。……たぶん、きつと。……将来的にそうなって欲しいです」

「わたしと比べても凄いつてコト?!」

「……食べられないメロンよりも、安全なさくらんぼですよ」

「メシア印のさくらんぼとか特殊調理食材でしょうに」

メロンさんが袈裟を脱いで見せつけると、震えを隠しながらさくらんぼちゃんが呟いた。

楽しそうだね、君たち。

でもそういうのは隔週でやってるお泊り会のパジャマパーティーしてる時にでも話してくれないか。

俺が居た堪れない。

無視したいけどそれはそれとして聞きたい。

「話を戻すのだけれど。男はすぐに気持ちがふらふらする。あの男を見なさい、特殊調理食材ニトロチエリーちゃん」

「だから見てますって、毒メロンパンナ様」

「ああやって女を無視して好き勝手やるのよ」

「夢中で私の洗濯物を干してるだけです」

「貞淑さを知らぬ獣どもめ！」

2人の言い方よ。

俺に見られて恥ずかしい洗濯物はピジョンちゃんが予め取り出して干している。

俺が干してるのは泊る時に借りてるシーツとか仮置きしてる寝間着だからセーフ。というかお泊り会したら洗濯しているじゃんよ。

どれだけレベルが上がろうと洗濯機の便利さには勝てない。

俺は家電のある便利な日常を守らなければならない。

「それでムカデさんは何しに来たのさ」

「来週誘われちゃって、でももうわくわくしちゃうってエ……」

ムカデさんの良い所は勤勉な所だと思う。

勤勉すぎてネットで流行りとかを吸収しようとする。

明治維新くらいから生きているので、知識や言葉を貪欲に吸収しないと流行りに置いて行かれるそうさ。

特にここ100年は流行の移り変わりが激しいようさ。

悪い所はあまりにも暴力的な所。

「来週まで我慢できないんですか？」

「できない！」

「もう100年以上は生きてるのに気は長くないのかよ」

「ならない！ なぜなら強くなるほど世界は遅くなりますことよ」

悪魔の中には時間の感覚がぶっ壊れている連中も存在する。

植物系や土地系などの悪魔が特に顕著で、動くのに最速で100年や200年は掛かる。

素人が儀式で呼び出したと思ったたら全く動きが無いので観葉植物と化していて、数世代後の子孫に願いを聞いてトラブルになることもある。

逆に呪った方がいいが100年かかるので対象が寿命でぼっくり死んだりすることもある。

そこまですなれとは言わないが、せめてもつと気長になって欲しい。

ダークサマナーをばちくそにぼっこにしてカップ麺を1分で食べる女、それがムカデさんです。

「じゃあ今日は何のためにわたしがきたのか!? 二人を連れて異界に行くためです!」

「え!? 俺たちが!」

「異界に!」

俺とピジョンちゃんが大袈裟に驚けば、ムカデさんは満足そうに頷いた。

異界、それは……それは……。

なんか悪魔がうろついている領域である。

後はよく知らん。

悪魔が活動し易いように構築された世界で位相がどうたらこうたらってワケ。

詳細はキミの目で確かめてほしい! とムカデさんにも説明されたことがある。

俺の知識ガバガバちゃんじゃねーか!

「あれ、ピジョンちゃん。俺たちが最後に異界に入ったのっていつだっけ」

「嫌ですね、サガミさん。つい最近もミサキ様の異界に入ったじゃありませんか」

「ええ……」

えへへ、うふふ、と2人で笑う。

ムカデさんはちよつと引いてた。

悪魔関係者なら異界は避けて通れないからな。

俺たちは通つてる。

なんでだろうね。

「スズメバチ駆除が忙しくてね」

「スズメバチ駆除」

「河川敷の草刈りもやりましたよ」

「草刈り」

「僻地に発生した異界はDDS―Netに乗せてフリーのサマナーたちに解放してるか

ら行かなくていいし」

「神託があるので問題が起きそうなら直接行きますし」

「現代っ子がよお！ わたしが若い頃は足で稼いでたつて言うのに！」

無茶言うなよ。

相模線沿いってだけでも結構広いんだよ。

廃墟や森の中は異界になりやすいので、根絶やしにしようとしたらとんでもない労力

となる。

どうせレベルも低い異界だから外に影響を及ぼさない限りは放置するに限る。

無理して安定している異界を消すと、次に異界を支配する悪魔が同じように引きこもりタイプとは限らない。

というか悪魔なんて大なり小なり力を欲しがるから拡大傾向にある。

怠け者だったり、自然精霊だったり、動物系だったりを主にした異界を上手く放置するのがコツだよ。

異界の管理は最初RPGだと思っていたが、蓋を開けたら盆栽SLGだった。

犠牲者も出るけど、放棄された私有地に入り込む時点で知らん。

所有者だったら土地の匂いとか付いてるので支配している悪魔が注意して夢で俺や近場のサマナーに頼むよう告げる事にはなっている。

完全に悪魔を操作するのは無理だから食われる事も多いけど仕方ないね。

「俺らが管理している異界は特に消したいわけじゃないから他の所にしようぜ。要望を出せばすぐに見つかる。そう、俺の電霊ならね」

画面を触る必要すらない。

俺らの会話を聞いていた電霊がすべて手配してくれる。

初期状態の電霊だと「オツケーヤタガラス」と言わないと対応してくれなかった。

どっかのパクリはやめろ。

「相模、また付喪神に無駄遣いしたでしょう？ 使うなどは言いません。ただ、使った分だけ上位の付喪神にも信仰が流れると知りなさい。ヤタガラスは土着の神々が乗っ取った組織だと言っているでしょうに」

「ムカデ様、言っただけでください。サガミさんがいっぱい無駄遣いしてて私は困っております」

「ピジョンちゃんに使っている金額の0.001%くらいだけだ」

「メシアにどんだけ貢いでるのよ!? 馬鹿でしょ!」

実際正気を疑われたら俺も否定できない。

でも途中から楽しくなったから仕方ないよ。

「初期の頃は呪殺耐性くらいしか無かったピジョンちゃんだが、今やフルアーマーピジョンちゃんだ。」

万能属性攻撃で俺を無視して直接決め打ちしない限り落とせない堅牢さ。

わしがそだてた。

「いいですか、ムカデ様。嫉妬しないでください。熟れて甘さが無い毒メロンより詰み立てのキュートなさくらんぼのほうが愛されるに決まっていますじゃないですか」

「夜這いして確かめてみましょう。結果はわかりきっていますけどね。さよなら、お鳩」

ちゃん。腐ったさくらんぼになるまで一人でメシア活動頑張つてね。今後の御栄達をお祈り申し上げます」

「悪しきガイアよ！ それ以上罪を重ねるのはおやめなさい！」

うおおお、とエキサイトした2人が教会内に雪崩れ込む。

睨み合う2人、決着を付けられるようにと俺がとあるアイテムを置く。

そう、ボクシングゲームだ。

ボタン連打して相手を押し込むか、ダウンしたほうが負けるレトロゲームのあれ。

何故か気に入っているらしい。

あまり力強く連打すると壊れるからムカデ様も慎重にならざるを得ない。

そしてピジョンちゃんは身体能力が糞雑魚ナメクジ。

そのため意外と戦績は横ばいで実力が拮抗している所がある。

「お鳩ちゃん、ハンデとして片手を封印してあげるわ」

「いいでしょう。だったら私は両足を封印してみせます」

何が楽しいのか、まず最初に縛りを宣言し始める。

勝った時のマウント、負けた時の予防線のためにベットされていく。

俺は両手両足を封じられて口に唾えたスプーンだけでピジョンちゃんに勝ったことがあり、更にスプーンを取り上げられてムカデさんも撃破して煽り倒したためにこの神



聖なバトルを出禁になった。

ちなみに異界は夜に行つて消してきた。

## 女神転生（地方しらべ）5

【神奈川しらべ】 非正規召喚師たちの契約生活【XXX日目】

指無し芳一

ピクシーとやろうとしたら指が無くなった話すりゆ？

ハマの巨大根

すりゆうううううう！

魔力切れです助けてください今羽田空港にいます

お前もう指あるだろ

指無し芳一

お前はいつまで魔力切れてんねん

魔力切れです助けてください今羽田空港にいます

名前変更機能付けて

ホント頼む

シルキーは俺の嫁

利用規約は先にちゃんと読め

後悔することになるぜ

ハマの巨大根

ここは自己紹介スレだった・・・？

指無し芳一

あ、あなたはサマナーになったばかりで浮かれたまま最初に仲間になったシルキーを抱いて嫁と宣言するも力を求めて嫁を合体させた悲しきダークサマナー！

シルキーは俺の嫁

合体しても意識は残るから注意しろよな

筋肉悪魔に尻を狙わされる

Ω門X交代

草

狙われるんじゃないのか

ハマの巨大根

意識だけ女性やね

LGBTに配慮してたら100点満点やった

ライドウマジ許せねえぜってえ倒す

昨今の風潮に配慮するダークサマナーとは一体  
シルキーは俺の嫁

あ、あんたは不満があつてヤタガラスを抜け出してライドウに小突かれて生死を彷徨つた将来を約束されたはずのダークサマナー！

魔力切れです助けてください今羽田空港にいます

いつライドウ倒してくれんだよ

あいつがいるだけで大手を振って歩けねえよ

ハマの巨人根

お、おまえは葛葉四天王が怖すぎて飛行機で逃げたダークサマナー!?

魔力切れです助けてください今羽田空港にいます

なんで四天王が来るんだよ

正義のダークサマナー様だぞこっちは

ライドウマジ許せねえぜってえ倒す

俺もライドウになりたかった

?悪魔殺シの刃?

またこの流れかよ

指無し芳一

メビウスが来るからやめなさああああい！

ハマの大巨根

っ！

シルキーは俺の嫁

っ！

魔力切れです助けてください今羽田空港にいます

っ！

Vやねん！1985

っ！

ライドウマジ許せねえぜってえ倒す

っ！

エクストリーム乱場らんらんる

っ！

虫を食った名無しさん

っ！

指無し芳一

マジでやめろ

ダーカーザン部落

はい：

としき

なはすことないよ

ない

そうだよな

ないよな

はあませきほしい

シルキーは俺の嫁

ななそなは

虫を食った名無しさん

縦読みじゃないのかよ

としき

電霊が独り言拾いまくっちゃった

Vやねん！1985

感度高すぎやろ

初期状態か？

としき

ソロ専門だからたぶん小さい音まで拾おうとする

ハマの巨大根

怒らないでくださいね

ぼっちだから常に指向性マイク状態

パーティ組んだりしたら切り替えを学ぶから

としき

は？

指無し芳一

ぼっちw w w w w

ワイもや

Vやねん！1985

ミ (^) (^) (^)

仲間やね

としき

ころす

ハマの巨人根

ええ……

そんな簡単に怒るう？

Ω門X交代

本格派ガイアを思い出す沸点の低さ

Vやねん！1985

貴様らあ！

現在のガイア教を憂いてメシア教に聖戦を仕掛けられて死んだ本格派ガイアを愚弄するな！

ライドウマジ許せねえぜつてえ倒す

本格派ガイアとは一体

ダーカーザン部落

俺たちの境遇で仲間……？

ととき

たいまんやろうぜ

？悪魔殺シの刃？

おまえも！ おまえも！ おまえも！



俺のために死ね！

としき

こわいのか？

こいよ

ころすから

シルキーは俺の嫁

こここ

虫を食った名無しさん

縦読みじゃないのかよ

魔力切れです助けてください今羽田空港にいます

囿か肉盾にする生活してたら荒むよなあ!?

太陽の下でラジオ体操して近所の人に挨拶して健康に過ごしてええええええ！

ハマの大巨根

お、おまえはライドウが怖すぎて飛行機で逃げる途中に助けに来てくれた心優しき正義のガイア教を囿にしたダークサマナー！

エクストリーム乱場らんらんる

どう頑張ってもお前は外歩けねえよ

ハマの巨人根

J（、ー、）し「としき、カーチャンは神奈川県にいます。相模線に乗ってください。名前はさがみです」

としき

いまからいく

にげんなよ

おれあくまとかにんげんとかふつうにころすし

? 悪魔殺シの刃?

魔て

? 悪魔殺シの刃?

待て

相模はまずい

エクストリーム乱場らんらんる

死んだんじゃないの〜?

ハマの巨人根

w w w w w

ハマの巨人根

あれ

ハマの巨大根

マジでいった？

ハマの巨大根

やべ

魔力切れです助けてください今羽田空港にいます

あゝあ

またダークサマナーが減りました

おまえのせいです

ハマの巨大根

半分当たっている耳が痛い

目を瞑ろう

ライドウマジ許せねえぜつてえ倒す

見なかったことにするな

指無し芳一

この業界は殺された事が無いときついから死ぬのも勉強だろ

？悪魔殺シの刃？

茅ヶ崎から相模原周辺は3年くらい前から復活者ゼロ

端的に言つて地獄

ダーカーザン部落

ガバガバだった神奈川を返して

暗黒騎士田中

代わりに横浜がガバになったからセーフ

暗黒騎士田中

ガバだけど頭にアルミホイール巻いてるやついるのこえーよ

ライドウマジ許せねえぜつてえ倒す

連中は自ら仮面を割ったから影が漏れるのだ

? 悪魔殺シの刃?

ペルソナを否定したやつらだっけ

代わりにシャドウとかいうのが漏れてる

瞬間的な出力はペルソナだが常時強いのはシャドウだから注意な

魔力切れです助けてください今羽田空港にいます

ペルソナは隠れた自分を受け入れる必要があるとか

やばいな

俺には無理かもしれん

ライドウマジ許せねえぜってえ倒す

ここにいる連中には無理だろう

無二マン

湯河原もガバだぞ

暗黒騎士田中

それはお前が弱いから爺さんが追いかけるのに飽きたやつ

無二マン

は？

韋駄天のシューマツハなめんなよ

エクストリーム乱場らんらんる

横浜でも新進気鋭の組織が茅ヶ崎から電車に乗ったら各駅で停まる度に一人ずつ

減っていったからな

過去スレにあるけどギヤグかと思つた

シルキーは俺の嫁

仲魔欲しいからつて寒川ら辺に解放されてる異界に出かけて今日まで帰つて来ない

のが俺の先輩よ

指無し芳一

うせやろ

神奈川くん魔界にでも落ちたんか？

エクストリーム乱場らんらんる

ここ二三年で帰還できたやついない

無二マン

※ダークサマナーに限る

暗黒騎士田中

畜生！

俺は正義のダークサマナーなのに！

虫を食った名無しさん

女子供だつてあんまり殺してねえ！

魔力切れです助けてください今羽田空港にいます

まず殺すな

ハマの大巨根

J（、ー、）し「としき、カーチャンが神奈川の情報あげるから頑張るんだよ。相模をアナライズしたらデータ送ってください」

ネームドまとめ（神奈川しらべ）その1

『湯河原』 レベル40―50 無効・物呪

道楽でやってるガバガバ爺さん

物理貫通してくるので初見殺しに注意

「老いぼれを見たら生き残りと思え」を教えてください

『川崎』 レベル30―40 耐性・全魔 無効・呪

リアルファイト系魔法少女

万能魔法で耐性を貫通するので初見殺しに注意

「まだいけるはもう危ない」を教えてください

『横須賀』 レベル30―40 耐性・物 無効・火呪

魔法が使って銃も撃てる森の賢者ゴリラ

移動型キッチンカーで市内を動き回る

「ゴ、ゴリラを本気で怒らせたのはまずかった」ことを教えてください

『相模原』 レベル30―40 無効・火呪

サラリーマン風ファンタジー農家

状態異常耐性を貫通するので初見殺しに注意

「通りすがりのサラリーマン」の怖さを教えてください

ハマの巨大根

ネームドまとめ（神奈川しらべ）その2

『山北』 レベル10―20 耐性・風 無効・呪

サマナーとしては無難なので陸路で神奈川に入るならここから

戦闘非推奨

遊んでいると相模原が来るから手早く行動すべし

『茅ヶ崎』 レベル20―30 耐性・銃氷 無効・打雷 弱点・斬火 反射・呪

影が薄い

戦闘非推奨

『横浜』

メシア教が治安維持活動をしているが頼りない

八百万の神々の御先みさきがあるので表立って暴れるのはNG

『相模』 レベル20―30（2年前） 耐性・火氷雷風（2年前）

火属性（2年前）

相模線沿いが縄張りの模様

詳細不明

『百足』 レベル50オーバー



神奈川の不死枠

県央地域に出没報告有り

内臓破壊や背骨抜きを耐えたら復活チャンス！

ハマの大巨根

戦闘非推奨は安定して通り抜けられる場所

殺して人が変わると面倒になる可能性があるから気を付けろよ

シルキーは俺の嫁

誰だよ前の相模を殺したやつはよお

ライドウマジ許せねえぜってえ倒す

百足

ハマの大巨根

誰だよ今の相模を推薦したやつはよお

ライドウマジ許せねえぜってえ倒す

百足

? 悪魔殺シの刃？

相模はアナライズだけで3億の賞金が貰える

なおハッキング専用の電霊でも至近距離まで近づかないとアナライズできない模様

Vやねん！1985

自称ウイザードハッカーニキが残してくれた情報やね

ダーカーザン部落

そんなんよりアナライズを残せ

無二マン

命は3億で買えますか・・・？

指無し芳一

買えるだろ

シルキーは俺の嫁

命を賭けて三億は安いぜ

ハマの巨大根

実際は虚像かもよ

メモ帳起動

じゃあてめえが見てこいよ

ハマの巨大根

年功序列よ

虫を食った名無しさん

じゃあ俺の為にいつてこいよ

ハマの大巨根

古い先短い老人は若者のために身を投げろ

おおのともはる19さいたすけてくださいゆがわらでおいかけられましたいまはでん  
しゃにのつています

メッセージ無し

ダーカーザン部落

またカルマを背負った者が生まれてしまったな

魔力切れです助けてください今羽田空港にいます

普段掲示板機能を使わずに焦ってるとなるから・・・

匿名機能付けてくれないか!?

虫を食った名無しさん

どうした?

この爺さんが助けてやろう

暗黒騎士田中

このジジイまた奴隷増やすつもりかよ

エクストリーム乱場らんらんる

我々は肉盾が増える瞬間に立ち会つてるのかもしれないね

指無し芳一

虫食い爺の朝は早い

「都合のいい若者を奴隷に仕立て上げるには早くからの仕込みが欠かせません」

そう言つた虫食い爺は真剣だつた

虫を食つた名無しさん

殺すぞガキども

Vやねん！1985

こつわ

やっぱ三戸がイカれてると情緒もイカれんだな

ライドウマジ許せねえぜつてえ倒す

かつては仙人を目指した者の姿か、これが・・・

おおのともはる19さいたすけてくださいゆがわらでおいかけられましたいまはでん

しやにのつています

書き込みテスト

おおのともはる19さいたすけてくださいゆがわらでおいかけられましたいまはでん  
しやにのつています

電車に乗って落ち着きました。刀を振り回す大柄の爺さんに追われていました。何処に逃げたんですか。

おおのともはる19さいたすけてくださいゆがわらでおいかけられましたいまはでんしゃにのつています

どこに逃げたらしいですか。

虫を食った名無しさん

しようがねえな

面倒見てやるよ

DMしな

エクストリーム乱場らんらんる

やめとけ！ やめとけ！

そいつは虫を喰ってペルソナが欠損した爺で何が楽しいんだか楽しくないだか未だに生にしがみついている103歳の生ける屍だ

ハマの大巨根

ボロクソで草

ダーカーザン部落

湯河原の爺は趣味悪いからな

たぶん茅ヶ崎方面に追い立てられてると思うがどうだ

おおのともはる19さいたすけてくださいゆがわらでおいかけられましたいまはでんしやにのつています

そうだと思います。

おおのともはる19さいたすけてくださいゆがわらでおいかけられましたいまはでんしやにのつています

近くの人に訊ねたらそうだと教えてくれました。

無二マン

ダークサマナーの姿か、これが・・・。

指無し芳一

一般人に聞いてて草

虫を食った名無しさん

今向かってるからよ

ダーカーザン部落

行くなよ

シルキーは俺の嫁

来ないで

魔力切れです助けてください今羽田空港にいます

輝きに満ちた若者の未来を奪うな！

暗黒騎士田中

漆黒にしか輝けないんですがそれは

メモ帳起動

一旦茅ヶ崎に行つて横浜、そこから新宿だな

Ω門X交代

横浜いけ

ガバつてるから東京に逃げられる

ダーカーザン部落

東京はいいぞ

地下鉄に安心して乗れる

Vやねん！1985

横浜中華街行きの電車に乗つたまま死んだやつがいるから埼玉はやめときな

ダーカーザン部落

山梨の話でもするか

するほど話題が無かつた

おおのともはる19さいたすけてくださいゆがわらでおいかけられましたいまはでん  
しゃにのつています

横浜ですね。ありがとうございます。さっきの二人に聞いてみます。

虫を食った名無しさん

しょうがねえな

行つてやるから待つてろよ

指無し芳一

なんだこの爺

しつこいな

ライドウマジ許せねえぜつてえ倒す

執念深さが長生きの秘訣なのか？

頼むから死んでくれ

ハマの巨大根

また聞いてて草

おおのともはる19さいたすけてくださいゆがわらでおいかけられましたいまはでん  
しゃにのつています

一緒に来てくれるそうです。安心です。心強いです。



魔力切れです助けてください今羽田空港にいます

平然と一般人を巻き込もうとするんじゃない!!!

ライドウマジ許せねえぜってえ倒す

民草を巻き込むな

シルキーは俺の嫁

ヤタガラスの中には平気で一般人を殺すやつもいるからよ

人質にされるからやめとこうぜ

おおのともはる19さいたすけてくださいゆがわらでおいかけられましたいまはでん  
しゃにのつています

心配ありますがとうございます。その間に逃げます!

無二マン

おれたちは真の邪悪の誕生を目の当たりにしているのでは………?  
虫を食った名無しさん

いま海老名

Ω門X交代

一生海老名にいろ

メモ帳起動

位置を知らせるな

メリーさんかお前は

おおのともはる19さいたすけてくださいゆがわらでおいかけられましたいまはでん  
しやにのつています

無事乗り換えできました

魔力切れです助けてください今羽田空港にいます

またしてもダークサマナーが上京してしまう

無二マン

そろそろ東京も怒りそう

暗黒騎士田中

何度も魔界と繋げてるから既に激おこだと思うんですけど

Ω門X交代

待ちな！

横浜に行ったからって安全じゃないぜ！

気を抜くなよ！

魔力切れです助けてください今羽田空港にいます

横浜の高校が魔界と繋がったつてよ

こわいな

おおのともはる19さいたすけてくださいゆがわらでおいかけられましたいまはでんしやにのっています

はい。相模線で10分くらいだつて聞きました。優しいシスターさんとお兄さんの二人です。

V やねん！1985

おい

おかしいぞ

暗黒騎士田中

間違つてないか？

Ω 門X交代

待ちな！

それだと横浜にはいけない

ライドウマジ許せねえぜつてえ倒す

むむむ

それサガミ

ダーカーザン部落

あの、それ、メシアじゃないか

虫を食った名無しさん

こいつDMしやがったやられたこいつヤタガラスからの離反者だ感染した井戸が見える

暗黒騎士田中

テンパってて草

ハマの巨大根

呪いのビデオトラップ食らうやつとか久しぶりだな

メビウス来るから書き込みに気を付けろよ

リロード優先

指無し芳一

今の子にはビデオがわからないの悲しいよなあ

Vやねん！1985

呪いのビデオ出身の癖にヤタガラスに飼われてスマホに適応するんじゃない!!!

? 悪魔殺シの刃?

強欲ジジイも今日で終わりか

最期は呆気ないもんだな

虫を食った名無しさん

古臭い呪殺の連打なぞ効かんわ  
!!!!

シルキーは俺の嫁

ジジイに呪殺効かんくても電霊に効くだろ

ちゃんと育てろ

ハマの大巨根

古い先短い老人は若者のために身を投げてくださった

おおのともはる19さいたすけてくださいゆがわらでおいかけられましたいまはでん  
しゃにのつています

電車乗り換えたほうがいいですか。わかりません。

おおのともはる19さいたすけてくださいゆがわらでおいかけられましたいまはでん  
しゃにのつています

誰か教えて下さい。

おおのともはる19さいたすけてくださいゆがわらでおいかけられましたいまはでん  
しゃにのつています

変だな。井戸しか映ってない。

虫を食った名無しさん

神奈川県海老名市めぐみ町XX  
虫を食った名無しさん

神奈川県海老名市めぐみ町XX  
虫を食った名無しさん

神奈川県海老名市めぐみ町XX  
虫を食った名無しさん

神奈川県海老名市めぐみ町XX  
虫を食った名無しさん

神奈川県海老名市めぐみ町XX  
虫を食った名無しさん

神奈川県海老名市めぐみ町XX  
虫を食った名無しさん

神奈川県海老名市めぐみ町XX  
虫を食った名無しさん

神奈川県海老名市めぐみ町XX  
虫を食った名無しさん

神奈川県海老名市めぐみ町XX

虫を食った名無しさん

神奈川県海老名市めぐみ町XX

虫を食った名無しさん

神奈川県海老名市めぐみ町XX

虫を食った名無しさん

神奈川県海老名市めぐみ町XX

Ω門X交代

あ

虫を食った名無しさん

神奈川県海老名市めぐみ町XX

Ω門X交代

やっぱ割り込めなかったか

虫を食った名無しさん

神奈川県海老名市めぐみ町XX

メビウスの輪

平素より大変お世話になっております。

DDS | Net 掲示板の管理を任されている電霊メビウスの輪です。

個人の連投を検知致しました。

警告として匿名機能の一部が限定的に解除されます。

連絡は以上となります。

おのおのともはる19さいたすけてくださいゆがわらでおいかけられましたいまはでん  
しやにのつています（神奈川県茅ヶ崎市香川X丁目）

あ

ダーカーザン部落（埼玉県さいたま市緑区XXX—X）

ジジイ草

虫を食った名無しさん（神奈川県海老名市めぐみ町XX）

神奈川県海老名市めぐみ町XX

ダーカーザン部落（埼玉県さいたま市緑区XXX—X）

やつちまったああああ!!!

ときき（神奈川県茅ヶ崎市香川X丁目）

ついた

いまどこ

は？

なにこれ



なまくび?

虫を食った名無しさん (神奈川県海老名市めぐみ町XX)

神奈川県海老名市めぐみ町XX

## 女神転生（地方しらべ）6

昨日、湯河原でピジョンちゃんと観光して満足したので駅ではリラックスした気分です。ダークサマナーを待つ。

ムカデさんも来ていたが、わくわくが止まらなかつたらしくて朝にはいなくなっていました。

こっちのほうは山や森だけでなく宿泊施設だった廃墟が多くて管理が大変そうだ。ユガワラの爺さんは放置しまくってるようだが、危ない所に忍び込んだ連中が悪いってことで放置している。

あんまり酷いようだと言いますが、基本的には放置する方針のようだ。

異界の育ち具合とか眺めて手入れしてるからな。

盆栽と勘違いしてる節がある。

異界を盆栽にするとか頭おかしいよ。

そのユガワラの爺さんは朝早くから出かけたようだ。

理由は単純。

俺たちも目的にしているダークサマナー退治だ。

ピジョンちゃんの子知に頼っているが、当然ズレが起きることもある。当たらぬも八卦ってやつ。

ダークサマナーについての詳細はヤタガラスから連絡が来ていた。

内容はヤマキタを殺した下手人の対処だった。

ほとんど交流が無かったので詳しくは知らないが、その下手人というのが直弟子らしいから世も末だ。

「ヤマキタ死んじゃったってよ」

「もつと詳しい神託を求めなきゃだっただけでしょうか。忙しくなりますから」

「いらないうて。やるならエコ神託で頼むわ」

「エコ神託……」

詳しい神託ってなんか面白い言葉だよな。

普段は詳しくない神託を受けているってコト!?

まあ受けてるってコトなんだけど。

結局のところ神託だって大袈裟にそう呼んでるだけの異能か何かだから負担もあるし、詳しくなくて負担の少ないエコな神託でこれからもお願いしたい。

エコ神託の元聖女胸なきピジョン。

エコ神託って字面だけで弱そう。

ハイコスト神託や環境破壊神託、エコ神託だろうとも結果は変えられなさそうだけ  
ど。

別に神託が絶対的な予知をするって意味では無くて、ヤマキタ自身の育成問題だろう  
し。

根本的に解決しないと早かれ遅かれ弟子に殺されるんじゃないかな。

そして俺たちが根本的な解決をするほどヤマキタと仲良く無いし、横浜がわちゃわ  
ちやしそうな今そんな事に割きたくない。

「でも後任を決めるのは面倒なんだよ」

人口が多い都市だと複数の推薦者によつて推された人物が据えられて、推薦者が後任  
になる。

後任は持ち回りパターンだったり、メインの一人が面倒を見るパターンもある。

山北という町は人口もそんなに多くない。

管理範囲は広いけど、管理責任はそれほど重くない。

なんなら軽い。

ガバのガバガバよ。

抑圧しすぎて外部組織が手当たり次第に暴れても面倒なので、通り抜け易くしている

らしい。

つまりダークサマナーの通路の管理となる。

ヤタガラスからの指示があるか、よっぽどの事でも起きなければ別に討伐しなくてもいいのだが、自分が任されている町に自分よりも強かったり面倒なやつらが我が物顔で侵入してくるのって怖くない？

そういうノーガード戦法のストレスに耐えられる人や、そういう場所に据えても俺の良心が咎めないような奴じゃないとなあ。

都合のいい人材とか転がっていかないだろうか。

DDS-Netを介したヤタガラス専用のチャットツールに連絡が入る。

「うわ」

「どうしましたか。……うわ」

「押し付けてきやがった」

ユガワラの爺さんから「駅まで追い詰めたから後は任せる。散々運動したから後は酒呑んで寝る。後は良しなに頼む」の一文が届いた。

ピジョンちゃんの神託は確定した未来を当てるわけでは無い上に精度によつては時間が経つ毎にズレるので、爺さんが頑張ってくれたら終わってた可能性もあった。

勘が頗る良いタイプなので途中で後片付けとか諸々の面倒さに気付いたに違いない。

駅のベンチで缶ジュース片手に駄弁りながら喋っている人々をピジョンちゃんとかテレコして遊ぶという有意義な時間を切り上げ、しようがないので電車を待つフリして様子を窺う。

まずは車両3つ分は空けて乗り合わせるとしよう。

相手が気を抜いたらちよつとずつ間を詰めればいい。

最初から詰めると俺との差に気付いたヤケになるかもしれないし、徐々に慣らせばいい。

それにしても頭にアルミホイールを巻いてるとかなり目立つな。

「隙だらけだな。もういつそのこと駅の外まで引つ張つてやつちやう？」

「たぶん刺激すると割れますよ。疲労困憊なので」

「そう……」

ここで頭が割れると面倒な事になる。

ヤタガラスがアルミホイールを使った呪詛返しを教えてくれている。

このまま頭がパーンとなられると呪詛返しできない。

ヤタガラス的には別にどうでもいいだろうが、俺が呪詛返ししたくて仕方ない。

ここで練習しとけば他のアルミホイールマンを使ってより練度の高まった呪詛返しができるようになるから今後の依頼に役立つはずだ。

ガチャの弾になってくれ狂信者。

「じゃあ後片付けとかも考えて予定通り相模線まで連れてこう」

「ではその様に」

それにしても頭が割れる直前まで追い詰めるとかユガワラの爺さんの頑張り過ぎだ。むしろそこまで調整して追い込んだかもしれない。

あれで経験豊富な爺さんだ、やる気はそんなに無くても人を殺す業と追い詰める術に長けているのは間違いない。

俺がこちら辺で暴発させて事後処理に巻き込まれるのを見越した可能性がある。

嫌な性格のジジイだからな。

それはそれとしてピジョンちゃんには甘いから連鎖で俺にも甘くなるからお小遣いやお年玉もくれる。

性悪ジジイは長生きしていっぱい仕事しろ。

「しまった……」

「どうかしましたか」

「駅弁買えば良かった。あちゃー」

「確かに。あちゃーです」

じゃあ同じ電車に乗り込んで様子を窺いつつ近寄るとしよう。

と思ったのだが。

「寝ちやったよ、あいつ」

「寝ちやつてますね」

「お疲れ様つてやつだ」

座席に座つたかと思うと即行で眠りについたので見えた。

やはりというべきか、心身共に負荷が掛かっている。

アルミホイールはペルソナの抑制用呪具だという話だが、完全に抑えることは出来ないのだろう。

人間が持つ側面を無視して生きる事など不可能で、だが当然ながら常に外に出せるほど強くもなれない。

仮面として纏い、時に表に出す事で発散するしかない。

抑えるほどに澱みとなって溜まり、やがては決壊して制御出来ない影となって溢れ出す。

暗い感情は背けた仮面をより重く、厚く、醜く拵える。

「面倒だから同じ車両に乗っちゃうか」

「そうですね。乗っちゃいましょう」

何食わぬ顔で同じ車両に乗り合わせる。



あまりにも自然すぎて自分が怖い。

どこからどう見ても偶然乗り合わせたとしか思えないだろう。

欠点は険しい顔して眠るアルミホイール男のせいで他の車両と比べて乗客が疎らつてことか。

一般人と比較したらレベルが随分と高い癖にその戦意を隠すことも無くまき散らしているので危機感が鈍っていない限りこの車両に乗りたがる人はいないだろう。

今乗ってる人？

知らん。

たぶん死期が近いとかでそういうのが鈍ってるとか感じられなくなっているんじゃないか。

「ハラさんのとこの息子さん、後を継ぐからお祝いの贈り物を考えないとね。何かある？」

「消耗品でもいいと思います。ただし、あまり良い物を贈られても困るか。サガミさんや私に良い事があつたら逆に頂くことになるので」

「確かに相手の事も考えないといけないか」

俺が持っている装備や消耗品の目録がCOMPに保存されているのでピジョンちゃんを眺める。

普段使う物は事務所に保存しているが、それ以外の物品はヤタガラスに預けている。ヤタガラスに預けると作成された目録をCOMPに送ってくれるし、DDS―Netでリアルタイムに確認できる。

なんなら預けた物は消耗品を含めて滅多に使わないので貸出や使用を自由にしている。

流石に貴重品は保管だけに留めて貰っているし、こちらから何か仕事を頼む時は報酬にすれば電霊が在庫してくれるので有難い。

事務所の手持ち分はこちらで目録を作らないといけない。

ピジョンちゃんが週の半分は事務所に泊りに来るし、コツコツと雑事も手伝ってくれるので整理整頓が行き届いている。

「あ、火炎放射器とかあげます?」

「それだとシャツプラー頼りになりそうだなあ」

確かにサガミハラさんはシャツプラーがメイン戦術ではあるけど、それだけに頼るのではなく選択肢の一つとして持っているだけだ。

なんなら近接もゴリラ並みに強い。

ヤタガラス所属は基本的にゴリラしかいないので外様かつ軟弱な俺には肩身が狭い。

そういうわけで息子さんも同じように色々と選択肢を持ってほしい。

火炎放射器を渡すとシャツプラー専門になるよう圧力を掛けている風に感じられるかもしれない。

どうしてもシャツプラーを鍛えたいなら話は別なんだが。

「それに燃料タンクが狙われると危ないですもんね」

「アギ系が扱える仲魔を背負って放射すれば……。火炎放射器が関係なくなる不思議」

「不思議ですな」

「無難にお酒の詰め合わせにしとく？」

「良いじゃないですか。本人が嗜むなら絶対に喜ぶでしょうし、悪魔との交渉や報酬にも使えますから持ち腐れにもなりませんよ」

保存しているお酒を流し見ながら提案すれば、ピジョンちゃんも賛成してくれた。

人間にとって高級なお酒は、悪魔にとっても特別な嗜好品らしい。

個体毎に味の好みは異なるが、趣味に合っている物を渡せばとても喜ばれる。

仲魔ならば信頼が深まってより率先して協力してくれるようになるし、交渉ならば大きな譲歩を引き出せるだろう。

「おつまみも抱き合わせしようか」

「そこまで行くことやりすぎな気がしますね。……なのでその鯖明太子はやめましょう」

「貰い物を見てただけだって。食べたい？」

「はい。今日のおゆはんに出してほしいです。他の瓶もどんどん開けて食べましょう」  
ヨコスカさんから送られて来た品物の中にある瓶詰めがとても気に入っているピジョンちゃん。

他にも色々と貰い物が多くあるので事務所に泊まりに来る時にどんどん消化されていく。

味の好みもあるが、新しい物や珍しい物に興味を示すようで、贈り物が届いたらこっぴどく率先して食べようと誘ってくれるので大変助かっている。

たぶん食い意地も張ってる。

残った分はウカノミタマに捧げるから問題ない。

俺も色々食べるのは好きだがサマナーになる前は朝ごはん等も面倒で抜いていた。

今のほうが人間的な食生活を送れている。

「飽食……」

「楽しく食べたり、隣人を持って成す分には全く問題ありません。そもそもメシア教には食事についての教義はほとんど無いと私は解釈しています。時々文句を言ったり押し付けてくる自称正統派メシアンもいますが、あれだって勝手に拡大解釈しているだけです。明確な記述は無く、大罪として分けている人間の欲が悪い物だと決めつけているに過ぎません。そもそも教義自体が社会的規範や秩序を守る倫理や知識が欠如している

時代にわかりやすい形で翻訳されただけの事。同じ考えの人同士で仲良く手を取り合って助け合いましょうと教えているだけです。体調を崩したり、隣人との和を乱すからやってはいけませんと伝えているだけに過ぎないのです。それを世界的な平和がどうこう言い出すとかやめて欲しいですよ。いいですか、サガミさん。メシア教にいたら聖女になったからには清貧の徒としてどうこうって言い出してデザートを出してくれなくなりました。お菓子も無くなりました。本当に許せない。あ、もしかして無から有を生み出す奇跡ってことで教義を捻じ曲げたり追加しているんでしょうか。しようもないですね。祈って水をワインに変えられるようになって同等のスタートラインに立ってから好き勝手曲解しろって話ですよ」

「急に早口になるじゃん」

「私のお話、わかりました?」

「帰りにデザート買ってこ」

「ダーリン、一生一緒にいましょうね」

「ハニー、急に重くなるじゃん」

「どこのにするー? ここー?」「えー? 可愛いのにしましょうよー」と言い合いながらスマホで検索する。

COMPの便利な所はスマホ機能が付いている事だ。

ヤタガラスが持つ特定のビルでCOMPを注文すると、オマケとして欲しい端末やスマホの機能も付けてくれる。

後から拡張できるので、電霊にお任せしておけば快適なサマナー生活を送ることが出来る。

電波の遅延が殆どなく、ネットや動画も快適、ソシヤゲも爆速なので一部の若いサマナーを釣るのに役立つっているらしい。

電霊に見られると恥ずかしい人用に私用端末がほぼ捨て値で買えるようになったのも大きいのだろう。

「食べてから帰る?」

「ダメです。私は鯖明太子を熱々の白米に乗せて食べて満足してからデザートに手を出したいのです」

「この後2人のダークサマナーがこの世から去るかもしれないんだけど」

「それはまあ、ちよっとお祈りするので」

「お祈り」

「エコお祈りです」

「エコお祈り」

「ちゃんとエコお祈りをするので鯖明太子を美味しく食べられますね」

「ちゃんとしてるのかあ」

ピジョンちゃんが立派なサイコパスに育ってしまわれた……。

いや、浮世離れた所もあつて最初からこんな感じだった。

もつと話を深く掘ると鯖明太子のほうが美味しいから大事とか言い出すかもしれん。

メシア教じゃなかったら立派なガイアーズになっていたに違いない。

その点、ムカデさんは相手が外道じゃなかったら命をとりあえず奪つても墓を掘つたりする時があるからな。

実はうちの事務所裏に先代のサガミさんの骨が埋まつてる。

会ったこともない人の骨を勝手に埋めないでくれ。

やつぱりエコお祈りで済ませてヤタガラスに任せるピジョンちゃんのほうが良いか。

「お、そろそろアルミホイلمانも起きそうだ」

ピジョンちゃんとスマホのゲームをしていると、アルミホイール男が目覚めそうになったので座席を移動する。

すぐ傍にいれば何とかなるだろう。

ちなみにゲームは八百万の神々が作った渾身の一作、ヤタガラスクエストだ。

神々のために素晴らしい土地を用意したと宣う老人たちを高天原に幽閉してから始まるハートフルストーリーで、内容は日本各地で神々がどんな仕事をしているか体験で

きるミニゲームとなっている。

ちなみにDDSNetを介して好きな神にお布施できるのだが、中でも遮光器土偶のようなユーモアな見た目と漢らしい耐性からアラハバキが大人気らしい。

このゲームのおかげで地味な仕事も注目され、沖ノ鳥島等の僻地哨戒・防衛が長期間の任務ながら人が集まるのだとか。

神はカツコよかつたり可愛かつたりするからな。

当然奇形の神もいるけど、波長が合うと人生観が変わると聞く。

「どうします?」

「なんかいい感じだったたら連れて行く」

「ダメな感じだったら?」

「横浜に頑張ってもらおうよ」

「えー? でもメシア教ですよ?」

「手に負えないよ、とほほ」みたいな感じで見送る作戦でいく。

ピジョンちゃんは横浜だとメシア教が出張るから不安視しているが、別に俺だってメシア教を頼るつもりはない。

途中で問題が起きたら行けそうって判断した誰かが対処するだろうし、ヤタガラスが事態を重く見たら組織を消す判断を下す。



俺が何でもかんでも無理する必要はないし、メシア教はもっと頑張ってくれ。文句を言われたらユガワラの爺さんのせいになよう。

若者と追いかけてっこして満足したらお風呂入って酒呑んで寝るジジイが手を抜いたのが悪い。

「くっ……。眠っていたのか？　ここは一体……」

アルミホイル男が目覚めたが、なんか記憶喪失みたいな反応してて面白い。

「今年ですか!？」とか迫真の様子で聞いてくれないだろうか。

男はきよろきよろと周りを見回して、近くに居るのが俺たちだけで乗客が疎らなことに気付いたようで、安堵したように大きく息を吐いた。

そして落ち着いたかと思うと、次にはスマホを取り出して打ち込み始めた。

そういうえばヤタガラスから離反したんだっけ。

COMPを使いまわしてるようなら機を見て『井戸』に引きずり込みたいので、電霊に調べてもらうとまだ変えていないので端末を掌握できるようだ。

電霊が相手の画面等をこちらでも見れるようにしてくれているのだが、何故かDDS  
—Netの掲示板で質問していた。

困っている時に掲示板に頼るとか正気か。

正気じゃないからアルミホイルを頭に巻いているんだよな、そうだよな。

「すいません。……今何時ですか」

「んんっ」

惜しい。

聞かれたのが年じゃなくて時間だった。

つい笑いそうになって咳払いで誤魔化したつつ時間を答えたが、ピジョンちゃんには変なことを考えていたのがバレたのか半目だった。

時間を教えると安心したように座席にもたれかかった。

ユガワラの爺さんに追われて電車に乗り込んでから十分な時間が経っているからな。追っ手を撒けたと考えればそりゃあ安心するよな、良かった良かった。

まあ次のステージが始まってるんだけどね。

「この電車って茅ヶ崎にいきますか?」

「ええ、茅ヶ崎駅に着きますよ」

ピジョンちゃんが優しく答えると、僅かに残っていた警戒心すら解いたようでまたスマホを操作し始めた。

彼女は元聖女候補だからか一挙手一投足が相手を穏やかな気持ちにさせたり、初対面の相手に信用されたりするとカリスマっぽい印象操作を持っている。

これで「あの人は今夜死ぬと思います。肝試しで」とか言って放置するからとんでも

ないぜ。

メシア教だから人を救いたい性があれば俺も出来るだけ協力するのもやぶさかではないが、普通に数量限定スイーツを優先するからなあ。

俺もそっち優先するから気持ちよめっちゃわかる。

「今年のふるさと納税どこにしよつか」

「人気のある所を見てから決めませんか？」

俺たちが話題にしているのは文字通りのふるさと納税ではなく、ヤタガラスが行っている物だ。

表の職業で払う税金がお得になるのもそうなのだが、オークションでも手に入らないような希少なアイテムが手に入るチャンスでもある。

数量限定で先着順ばかりだが、お得だからととりあえず手に入れて使わない浪費で終わるパターンも少なくない。

実はヤタガラスクエストで気に入った神を推すサマナーも多くいるし、俺もミサキ様に返礼品を貰っている。

「あの、すいません。横浜まで行ってどうやって行くんでしようか」

アルミホイール男の言葉に、俺とピジョンちゃんは顔を見合わせて頷いた。

横浜に用があるから一緒に行きましようかと誘う。

俺もピジョンちゃんも笑顔だし、アルミホイール男も笑顔だった。

真の平和な世界はここにあったんだ……！

とうるーびんふーわーるどからアルミホイール男のCOMPを密かに乗っ取った電霊がDMを送る。

DDS | Net 掲示板は特定のユーザーに対してDMの許可が出せるが、この時にセキユリテイ関連は自己責任となる。

馬鹿なダークサマナーは1人だけだったが、まあいいか。

そこから本人の端末を介して感染するからな。

「実は相模線から行ったほうが早いですよ。地元の人だけが知っている裏道ですけど。ね？」

「そうそう。こっちのほうが空いてるし」

駅構内をふらふらとした足取りでアルミホイール男が付いてくる。

全く言葉巧みじゃなく誘導しているのだが、何故か上手くいっている。

たぶん思考能力を落として洗脳し易くしているのだろう。

そういう小手先に頼ってしまうとピジョンちゃんの口先で一発だ。

他の組織だって幹部ともなれば同じことが可能なのだから相手側のガバセキユリテイのせいではない。

アルミホイール男も可哀そうな被害者なんだ。

それはそれとして楽に事が運んでてめっちゃ嬉しい。

「本数が少ない代わりに座席は結構空いてるのが嬉しい」

「通勤や通学の時間は混みますからね。……座らないのですか？」

「いや、大丈夫なので」

乗り換え前の車両同様、俺たち以外に乗り込む人はほとんどいない。

扉の前に陣取ったアルミホイール男はそう言うのと、俺とピジョンちゃんが座席に座るのを眺めていた。

逃げやすいようにと座らないのだろうが、車両から降ろしやすくして助かる。

ヤタガラスの電霊はアルミホイール男を泳がせるためにネット接続等を行っていたのだが、完全にこちらの電霊が掌握した。

こちら一帯はウカノミタマが最も力を発揮できるホームなので、『井戸』に落とすのに失敗しても全く問題ない。

DMしたダークサマナーも同時に『井戸』に落ちるが、そもそも落ちても落ちなくてムカデさんを放ったから詰んでると思う。

これに生き残ったらそれほどの組織だとヤタガラスに判断されてライドウが投入されるから可哀そうだ。

リアルタイムで仔細の記録が贈られているからどう足掻いてもな。

「あの、乗り換えした方がいいんじゃないかって友達が。あとスマホに詳しいですか。なんか画面が変わらなくなって。森というか……。あ、井戸なのか。井戸……。何かがいる……?」

「あー、乗り換えか。そうだね。じゃあ乗り換えようか」

ちようど駅に着いたので、ピジョンちゃんが扉の開閉ボタンを押してくれる。

ぼんやりとした様子のアルミホイル男を軽く押し出せば、倒れ込むように扉をくぐつて、その姿は『井戸』へと落ちた。

「俺たちも行こうか」

「井戸はあんまり好きじゃないんですね。ヤタガラスって趣味が悪くないですか?」

「メシア教の美的感覚だと合わない?」

「メシア教というか人間の美的感覚に合っていないと思いますけど。サガミさんは好きなんですか?」

「別に俺も行きたいわけじゃないから。ぬいぐるみでも敷き詰めたファンシー空間にしてくわって陳情する?」

「無機質なぬいぐるみに囲まれて呪殺されるのってどうですか」

「控えめに言っても新しいホラースポットかな」

そう言いながら扉を抜けると、寂しい森の中にぽつんと井戸がある空間に繋がっている。

アルミホイール男は何が起きたのかわかっていないようで、不安そうに辺りを見回しているが井戸には決して近寄らない。

勘が良いのか生存本能が鋭くなっているのか、俺の方にも近寄って来ない。

ここはヤタガラスが持つ異界の一つ、映像機器を介して呪う怪異の特性とターミナルの技術を転用して繋がる『井戸』。

トリガーとなるのは映像の再生。

ヤタガラスに所属していたサマナーが裏切れば問答無用で引きずり込まれるし、DM等で繋がった相手もまた同様の結果となる。

ちゃんとヤタガラスで活動していたら『井戸』について教えられるし、対策されるからそうそう引つかかってくれないのだが今日は順調だ。

「こつちがアルミホイール男、あつちのほうでムカデさんに襲われているのがDMしたダークサマナー。……なんか一人余計なのがいる。誰だよ」

「……誰でしょうね」

「誰なのお……。怖いよお……」

アルミホイール男も知らないらしいし、過剰にビビっている。

たった今迷い込んできましたって感じの男子高校生がいた。  
近くの高校の制服を着ている。

アルミホイール男と同じように不安なのだろう、覚束ない足取りで周囲を窺っている。  
それでも井戸に近づかないので愚かではないのだろう。

エコ神託がズレて割り込まれたようだが、エコだから仕方ない。

割り込まれた可能性としては滅茶苦茶運がいいか悪い、未来予知ができるほどの演算  
可能な電霊持ち、本人の異能。

さて、どれでしょう。

「なにこれ、生首……？」

高校生はそう呟くと腰を抜かしたのか地面にへたり込んだ。

たぶんムカデさんがダークサマナーの頭を刎ね飛ばした残りだと思う。

でも生首程度でビビるから素人だろう。

アナライズ結果を見ても大したことはない。

結構離れた場所では失った頭蓋の代わりに這い出した虫とムカデさんが戦っている  
ようだ。

いつもの肝試しかな、可哀そうに。

君もきつと今日までの命だね。



ピジョンちゃんの神託に割り込める存在が生きててもらっても俺たちにとっては都合だから。

「呪殺には耐えられないだろう。……ん？ うわあ」

「どうかしましたか」

「あつちの高校生、COMP持ってるね」

「持ってるもおかしくはないでしょう」

「ラプラスの分霊持ちだよ」

「道理で」

ラプラスとはDDS—Netを管理する電霊の一種だ。

連中は外部の情報収集等のために分霊として自身の子機を幾つかばら撒いている。

俺が持っている電霊も同様の存在だが、神奈川県全域を貢いでいると言っても過言で

は無いので俺の電霊のほうが強い。

ただし、とてもムカつくことだがラプラスとは得意分野が違うから一概に絶対勝っているとは言えない。

物好きな事に、類まれなる演算によってピジョンちゃんの神託に割り込んでこの異界にお邪魔してきたらしい。

俺の電霊には出来ないことだが、ピジョンちゃんが神託出来るので持っていていても意味

ない。

つまり俺の電霊の勝ち。

「それにしてもラプラスの演算は馬鹿にできないな。ここに素人同然のサマナーを送り込むとは」

「エゴ神託じゃなければ私とサガミさんが勝つてました」

「そうだな。……いや、今回は勝たせてやるか」

「でも私のサガミさんが勝ちますよ？」

「ピジョンちゃんは凄いなあ」

「でしょう。私がこんなに凄いのにはサガミさんはもつと凄いですからね。また勝つてしまいました」

頭を撫でれば、ピジョンちゃんは満足気に無い胸を張った。

死んでほしくてここに送り込んだのか、今後のために思つてここに来たのかはわからない。

だが、ラプラスが優秀なのは確かな事実だ。

生きていて欲しくないが、ラプラスのおかげでしぶとく生き残るかもしれない。

転がり込んできた全く惜しくない死んでほしいくらいの人材だ。

奇貨として使えるかもしれない。

……使えるか？

「踏み絵でもさせてみよう」

「踏み絵、ですか」

「呪い返しのために命懸けのゴミ捨てをしてもらおう。あ、玉入れになるかも」

「……多分、死んじやうと思います」

「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれってことでね。死ぬくらいしてくれないと。玉つてもしかして魂つてことか？」

「私は死んだことないからわからないんですけど、やつぱり痛いんですかね」

「俺も無いけど痛いんじゃないかな。腕取れた時とかマジでやばかったし」

一部が出てきていた魔王から逃げて、突発的に生じた聖戦を潜り抜けるよりはマシンなんじゃないか。

井戸を見て、生首を見て、アルミホイール男を見る。

そして腰が抜けて震える高校生と目が合ったのでにつこり笑う。

あ、今は狐面してるから表情がわからんか。

あらかじめ用意しておいたタンクを四つ背負って中に精霊を宿し、ガトリング砲を持つ。  
つ。

敵が硬かったら両手でそれぞれ持つことになるが、流石に今日は片手で済むだろう。

「私が説明してきますよ。安らかな死を迎えられるように」

「死ぬ前提なんだ」

「今はメシア教の事を忘れて素直になっていいですか」

「え、何。いいけど。重い話？」

「私の神託を無視する人は滅んで欲しいんですよ。神託を外して予想しなかった事件に巻き込まれても困りますから」

「わかる。その気持ち、超わかるよ」

未来予知の能力を持っていたとして、知らない誰かが予知をズラす可能性があるとする。

俺ならどうするか。

簡単な話だった。

絶対に殺すね。

「怖いもんな。いや、気持ち悪いのかな」

そう言つて俺はガトリング砲をアルミホイル男に向けた。

怯えているし、竦んでいるようだった。

ヤタガラスに居たらこんなことしないで済んだ……いや、先代のヤマキタがピジョンちゃんを馬鹿にしたからな。

なんかの拍子に弟子諸共撃つてたな、こりやあ。  
ちよつと早くなつただけだ。

そう考えるとタイパが良いんじゃないかな。

携行武器が出す事の出来ないバカみたいな回転と音をまき散らして、ガトリング砲から弾が発射された。

銃、火、熱、水、氷、雷、念、衝、風、地、重、呪殺、破魔の混合弾で試し撃ちついでにアナライズしておく。

上手く混ぜると疑似的な万能弾になるが疲れるからなあ。

「あちやー、耐性無し……。そうなるよな」

「あちやーです。割れちゃいましたね」

『井戸』に落ちたのが許容できる限界を超えていたのだろう。

弾丸の雨に貫かれながら、アルミホイール男は自身の頭を引き千切つてポイ捨てした。もう人間だった彼はいない。

目を逸らし続け殻で抑え込んだ影だけが、彼が存在した証となった。

「羽化直後が一番柔らかい。……と良いな」

「本音が最後に漏れましたね。じゃあ私は安らかな死を迎えてくれるように説明してきます」

「せめて踏み絵させてあげて」

ちよつと嫌そうだったが、最終的には了承させた。

とことことピジョンちゃんが移動する。

うーん、それにしても結構硬いな。

本人にペルソナの才能がかなりあったのか、それとも初手のガトリングのせいなのか、優秀な耐性を獲得されてしまった。

面倒だな。

疲れるけど疑似万能弾に統合するか、神経弾に切り替えるか。

あ、そうだ。

ムカデさんたちを呼んでここで大乱闘させてみるか。

## 女神転生（地方しらべ） 7

かたなかたんと音がする。

一定のリズムで体が揺れる。

疲労した体には電車の穏やかさがひどく心地よかった。

「新幹線ならアイスが食べられたのにな」

「シンカンセンスゴイカタイアイス美味しいですよ。私はあれが大好きでして」

「今は途中のコンビニで買ったお菓子くらいしかないから残念だ」

「でもカプリコ美味しいですよ。私はこれが大好きでして」

「いっぱいお食べ。俺は化石発掘するから」

「まさか電車でやつちやうんですか？ 発掘を？ 電車で？」

「とっくにご存知なんだろう？ 公共の場で化石発掘する楽しさってやつをさ」

「ずるい。私もやります」

「ちよつと。流れるように俺の化石食べないで」

「土の部分だからセーフですよ。とっくにご存知のはず」

「全く存じておりませんが。俺のチョコだからどっちにしろアウトだよな」

兄妹だろうか、言い争う声音すらも柔らかい。

仲の良さを感じ取って穏やかな気持ちになっていく。

微睡んでいた意識がどこまでも深く潜りそうだった。

自分にもああいった頃がつい先日までであった気がするのに、何故だろう。ずっと遠くに感じる。

意識が沈む。

闇が迫る。

何よりも嫌いな闇が。

——我は汝

暗い闇の中に仮面が浮かんでいる。

どこまでも醜いその仮面は、今も尚表情が変わっている。

ああ、まただ。

声は小さいのに酷くうるさい。

頭が割れるように痛む。

仮面をどうにかすれば声は消えるのだと期待して手を伸ばし、幻のように揺らいだ。

触れない物をどうやって止める。



知らない物をどうやって認める。

五月蠅い物をどうやって受け入れるというんだ。

——汝は

だが声の遮り方は覚えた。

怖い時は大きな音を立てればいい。

暴れまわって、でたらめに叫んで、いつかは終わる。

やめろ、そんな目で見るなよ。

闇に溶けていく仮面と目が合った気がした。

「オマエ。運がいいな。何が良いつて俺様を通りかかった所。この幸運の意味わかる？」

チンピラが声をかけてきて、自分は何事かを喋った。

確かこの時は学校の友達と肝試しに来て、自分だけが生き残ったんだった。

化け物から逃げて、追いつかれて、殺されそうになって、それでも逃げて生き延びた。

まだ若いのだと勘違いした感性を持ったまま年だけを取った男だった。

「舎弟にしてやるよ。命救われてんだからオマエもスジ通せよ？　ま、見てろよ。俺様

がどれだけ強いかってわかりやオマエだつて舎弟になりてえつて言い出すからよ」

化け物があるのに変わらず、ただ好き勝手話すだけのチンピラ。

安っぽい金色のネックレス、ごてごてした金色の指輪、尖ったサングラス。

こいつが嫌いだった。

「拾ったからには面倒みてやんよ。オマエ。運がいいぜ？」

運がいいとしか言わないこいつが嫌いだった。

運じゃない。

自分の力で成し遂げたんだ。

それを認めない。

こいつが嫌いだった。

「おいおいおい、異能持ちかよ。運がいいな。オマエ」

自分には力があつた。

だから殺した。

そうだ。

これは夢だ。

——我は汝

「オマエの異能、ぜんっぜん開花しねえな。運が良かったのは最初だけかよ？ ああ？」  
チンピラがへらへらと笑う。

苛々する。

自分のせいじゃない。

こいつの教えが悪いだけだ。

悪魔だって自分の力で倒している。

強くなる努力を続けているのに、こいつは何もわかつてはいない。

「ちっ。仕方ねえ。クソジジイはもつたいぶつて離さねえからサガミんとこ行くか。オマエ？ ヤタガラスに認められてねえんだからオマエはいらねえよ」

何が認められていない、だ。

認めないのはお前だろう。

自分は知っている。

神奈川の中でこの男が最も弱く、周りに嫉妬していることを。  
だからこそ自分の異能に期待していることを。

——汝は

「オマエの異能はペルソナだ。じゅーぶんに感謝しろよ？　サガミのクソから俺様が聞いてきてやったんだからよ？」

物に当たりながらチンピラがそう言った。

組み手と称したカワイガリとやらで転がされながら話を聞く。

もう一人の自分がどうだ特殊な能力がどうだと何の役にも立たない知識ばかりだ。

結局何も変わらないじゃないか。

苛立つほどに、心が黒くなるようだ。

「オマエが直接？　話を？　無理に決まってるだろうが。バカか。近づいたら殺されて終わりだつうの。ありやあやタガラスの理想を体現してるかな。それでいて気に入らなけりやあやタガラスにも嘸みつくほどには狂ってる。……ム力つくけどよ、あれのほうが才能はあつからな」

チンピラが言う才能、それはどれだけイカれているか。

躊躇いなく人を殴れるような暴力や悲しむ人を嘲笑う冷酷さこそが輝く業界だと教えられた。

隙だらけの人間の後頭部に鈍器で殴り付けても噛っている人種がこのチンピラだった。

こいつが言うほどの人間ともなれば、社会に混ざって生活が送れているとは思えない。

「それにしても何が出禁だ、ふざけやがつてよ。挑発して本音を引き出そうとしただけじゃねえかよ。マジでふざけやがつて。イラつくぜ。なあ？ ああ？」

勝てない相手に喧嘩を売って、嫌われて帰ってきただけのチンピラに苛立つ。

お前がもつとしつかりしていたら、自分はもつと強かった。

何が運だ。

何処が運が良いって言うんだ。

苛立つ。

——我は汝

ああ、うるさい。

うるさいうるさいうるさい。

声が頭に響く。

何かが認めろと囁いていた。

違う。

何もかもが。

「あ？ 声？ ちつ。鳩女みてーにチャネリングしてんのかよ。だつたら勝手に会話してろや。そろそろペルソナくらい使えねえと俺様も優しく教えてらんねえからよ？」

は？ バカだな、オマエ。会話したくねえってんなら大声で掻き消しやいいだろうが。

……何のための拳があんだよ。納得するまで殴れや。こつちが上だつて教えてやれよ。俺様はそうしてきたぜ？」

うるさい。

好き勝手言うだけで何も役に立ってないやつが。

何もかも運のせいにしやがって。

——汝は

夢を見た。

虚空から仮面が浮かぶ様を。

だから思い切り殴ってやった。

仮面が割れて、泥が染み出した。

ひび割れた仮面の双眸から泥が流れ落ちた。

滴るそれは、まるで涙のようで、何処までも黒かった。

——汝は我を認めず

「ちっ。なんだ、その隈は。寝れてねえのかよ。クソ。さっさと強くなれつつうのに……。今日は休みにしてやる。」

舌打ちしながらチンピラがそう言った。

違う。

もつと出来る。

力が溢れ出していた。

その言葉は通じない、うるせえとだけ返される。

何を言っても無視される。

何が師匠だ。

運が悪い。

誰か話を聞いてくれ。

誰も聞いてくれない。

仕方ない。

ふらふらと歩みを進める。

「あら、素晴らしい才能。でも今は理解を得られていない。環境も良くないのでしょね。……どうでしょうか、わたくしのお話を聞いてくださいませんか。あなたはきつと偉大な事を成し遂げます。それのお手伝いをさせて欲しいのです」

神秘的な女性がにっこりとほほ笑んだ。

胸に暖かいものが溢れる。

安心感が体を包むようだった。

これはきつと運命だ。

自分が強く領けば、女性は手を差し出してくれた。

柔らかなその手を握れば、これまで感じたことの無い幸福感で満たされる。

夢でも、現実でも、何度だってこの場面を思い出せる。

頭の片隅で何かが囁いてたが、それを無視する。

うるさいと脳内で叫べば、それは黙った。



——我は

「あなたは選ばれた人なのですよ。……これをどうぞ。あなたの力を最大に發揮できま  
す」

美しい……。

ゆらぎ様は今日も美しい……。

きらきらと輝く銀色のそれを巻かれる。

視界が広くなった。

何処までも見渡せる。

あの方の声がずっと聞こえる。

力が溢れている。

世界はこんなにも明るい。

「オマエ！ 何してたんだ！ ……は？ 何だソレはよお!? どうしてそんなん付けて  
やがる！ さっさと外せ！ ボケが！ 殺されんぞ！」

ああ、うるさいな。

嫉妬してるんだろう。

運命に出会ったんだよ。

ああ、そうだ。

確かに運が良かった。

だからもうお前は要らないんだ。

ゆらぎ様が教えてくれた。

どうしてとか、なんでとか、無駄な事を言われるから。

だから顔から潰しなさいと。

肉が潰れる音、骨が碎ける音、水が滴る音。

師匠！

自分にも才能があつたよ！

誇つてよ！

自慢の弟子だつて言つてくれよ！

笑顔を向ければ、肉塊がびくびくと震えていた。

どうして？

あれ？

なんだっけ？

もう何もわからない。

ああ、そうだ。

ゆらぎ様に聞かないと。

あの人なら教えてくれる。

——我は汝を認めず

そこは寂れた林の中だった。

僅かに広げた空間、その真ん中に古びた井戸があつた。

スマホの画面に写っていた井戸と同じだと直感で理解した。

どうしてここにいるんだっけ。

確か、怖い人から逃げてにげて、そうだ、親切な人たちに道を教えて貰ったんだ。

早く横浜に行かないと……。

師匠が待つてる……。

違う。

ここで合っている。

ゆらぎ様がここで何かしろって言っていた。

何だっけ。

ダメだ。

考えられない。

怖い。

身体が震える。

井戸を直視できない。

あの中には、理解できない何かがいる。

不安と恐怖に押し潰されそう。

「誰なのお……。怖いよお……」

思わず言葉が漏れる。

薄れていく記憶を思い出す。

そう、初めて悪魔と戦った時もこうだった。

一人で震えて、助けを待っていた。

みんな死んだ。

目の前で死んだか、断末魔が聞こえるかの違いだけだ。

こんな時はどうだったか。

記憶がおかしい。

思い出せない。

いや、思い出した。

師匠が助けに来てくれたんだ。

今日もそうに違いない。

だらしねえなつてバカにされながら二人でラーメンを食べて帰るんだ。期待して振り向けば、そこに居るのは狐面を被った人だった。

人間に向ける物とは思えない大きさの銃火器がこちらを向いていた。

何事かを言う前に、眩いばかりの光と絶え間ない痛みが襲い掛かってきた。

どうして死んでないのか不思議なほどに。

力があるはずなのに容易くねじ伏せられる。

あまりの痛みで叫びたいのに言葉が出ない。

動けないほどの恐怖から誰が助けてくれるのか。

師匠。

どこにいるの。

弱いから呆れられたの。

見捨てられたの。

弱いから？

欲しい。

強さが欲しい。

ペルソナがあれば良かった。

もう一人の自分が表に出てきたら、きつとこんなことにはならなかった。

2人なら強くなれるって言ってくれた。

そうだよ、なれるんだ。

もつと強かった。

もつともつと強くなれるはずなのに。

師匠も喜んでくれた。

ああ、そうか。

自分という全てが邪魔なのか。

窮屈だった。

生きる屍だった自分を繋ぎとめていた『呪具』を頭ごと引き千切る。

植え付けられていた鎖が、脳ごと抜け出す。

運命を、命を、才能を、あらゆる全てを捧げて留められていた命が崩れ始める。

だから良かった。

自分は要らない。

仮面も要らない。

新しい、強い自分が欲しい。

——我は汝を認めず

—— 汝は我を認めず

—— 我々は道を違えた

「P e ◆ S : : : n A」

泥が溢れる。

新しい自分が溢れ出る。

見てくれよ師匠。

これが俺様の力だ。

最強になれたんだ。

師匠？

何処に行つたんだ？

探さないと。

そうだ。

井戸の中にいるって誰かが言っていた。

誰だっけ。

まあ、いいか。

力があるんだ。

欲しい物は全部手に入る。

師匠も褒めてくれるよね。

師匠もきつと認めてくれるよね。

お前を弟子に取って良かったって笑ってくれる。

笑われるのが嫌いだっただのに、どうして笑ってほしいんだろう。

教えてくれよ。

誰か教えてくれよ。

「サガミくーん、待った？」

「うん、凄く」

「そこは今来た所って嘘でも言ええ！ 乙女に恥を掻かせるなあ！」

「こわ、情緒が不安定すぎる」

「長生きしすぎてホルモンバランスがクライシスなのよ」

「そうなんだ？」

「わからない。不老だし健康診断とかしたことないから私は雰囲気で生きている」

「だいじよぶそ？ 健康に不安なら帰って寝る？」



「生き物を殴ったら健康になると思うのよね。なった」

「ならねーよ」

「クモジジイが死ぬまで殴り殺したら結構スッキリしたのよね。むかでちゃん、おかわりがほしいなあ？　ね？」

「きつつつつ」

「殺すぞ」

「冗談だよ。今日も可愛いよ」

「Chu！　可愛くてごめん」

「うわきつ……」

「殺すぞ」

「こわ。おかわりは一応あっちにいるやつで頼む」

「なんだあれ!?　本当にあれがペルソナ使いかよ。もろそうだけ」

「負けフラグ立てないでくれない？」

## 女神転生（地方しらべ） 8

— 1 —

『オマエは運がいいぜ！ このラプラス様に案内してもらえるなんてよ！』

拾ったスマートフォンからノイズが混じったダミ声为上機嫌な笑い声。

心細さを感じていた所に、陽気とも凶太いとも取れる声を手放せず持ち歩いていた。

ラプラスと名乗った何か（本人曰くネット内に存在できる悪魔の一種らしい）のナビゲートを頼りに、こうして夜の廃墟を迷う事無く進めていた。

クラスの連中に無理やり放り込まれた肝試しという名の……。

『いじめられっ子、夜に歩き回るってか!?! 笑えるぜ!』

「うるさいな……。イジメられてないから……」

弱々しく黙れと付け加えると、何が面白いのかラプラスは再び汚い笑い声を響かせた。

何処までも暗い廃墟だった。

闇の中に何かが潜んでいそうで、それが音によって近寄って来るかもしれない。そう

考えると背筋が震える。

『おいおいおい！ 何をブルってんだよ！ 楽しくいこうぜ！ オマエは今日は死なないからよ！』

「今日？ 今日のはってどういう……。人間はいつか死ぬから楽しめって言いたいのか……？」

『それいいな！ それで行こうぜ！』

「なあ、いいから少し声を小さくしてくれないか。ビビッてるわけじゃないけど、何かが近づいて来そうだ。……犬とか猫か？」

『安心しな！ 単なるゾンビだ!! 複数のゾンビじゃないからぼっちのオマエでも勝てるなんて嬉しくて泣いちゃうよな！ 楽しくなってきたなあ、おい!!』

「は？」

ラプラスを問い詰める事も出来たはずだが、どうしても暗闇から目を離す事が出来なかった。

何か恐ろしい気配を感じる。

腐った臭い、不快な空気、下がる体温。

纏わりつくような恐怖。

腐りきった人間だった物が姿を現した。

『世界が終わるまでの悪あがきをレクチャーしてやるぜ！ ラプラス様に感謝するんだないじめられっ子！ 今日からオマエはイジメる側になれるかもなあ！ バースデーソングで祝ってやろうか雑魚が！』

恐怖で竦んだ足と思考が逃げる事を選ばせた。

反転して走り出せばラプラスの罵詈雑言が響き渡る。

幸運な事にゾンビの足は遅いようで、振り返れば徐々に遠ざかっているのがわかった。

「なんだあれは！ 何！ 何なんだよ！」

『ゾンビを知らないのかよ！ 若者のサブカル離れは大問題だな！ ゾンビすら知らない知識じゃあ崩壊まで生きられないぜ！』

「ゾンビは知ってるよ！」

『じゃあ倒し方もわかるよなあ！ やっちまいな！ 腐った頭なんてちよつと固いプディングみたいなものだぜ！』

「やれるわけないだろ！」

『いいや、やれるね！ 何故ならオマエはここで死なないからな！ そしてやれないと死ぬ！ ラプラス様のいう通りにおけばもつと楽だったが、オマエならこうすると思つたぜ！ テンション上がるよなあ！』

何かを言い返す前に、足が止まる。

さつきと同じだ。

ゾンビから感じた嫌な何かを感じ取ってしまった。

それも複数だ。

『おいおいおいおいおい！ やるじゃねーか！ ゾンビに愛されてんねえ！ これから3人だったゾンビを潰せるなんて自己紹介にはちようどいいじゃねえか！ 長所は3人潰した事です！ 短所はいじめられてた事です！ ってか！ 楽しませてくれるじゃねーか！』

吐き気を催す腐った臭い。

湿気とカビを十分に含んだ陰気なそれが、粘つくような空気に変わる。

僅かに発している掠れた声が近づいてくる。

ここは以前旅館だったが、自殺者が出て客足が遠のき廃れた場所だ。

隠れようと思えば事欠かない。

その筈なのに転がっていた工具から目を離せない。

リフォームしようとしたのか、解体しようとしたのか、詳しい話は知らないがそういう動きがあつた事だけは知っていた。

『安心しな。ゾンビは殺しても捕まらないんだぜ？』

「……」

『ゾンビどもの服装を見たか？ 何かに似てないか？ オマエの通っている高校の制服だよな？ オマエをここに放り込んだ馬鹿どもは何処に行った？』

「……」

『ゾンビのまま放置は可哀そうだよな。許してくれるって。オマエが救ってやるんだよ』

「……勘違いするなよ。こんなんやらないといけないからやるだけだって」

落ちていた鉄パイプをゾンビの眼窩に突き刺すが、思った以上に柔らかくないプディングだった。

それでも握っている手から力を抜かず両足で踏ん張れば、中身も考えも足りない頭のまま前進するゾンビの力でゆっくりと進んでいく。

将来の夢を聞かれた時、きつとトンネルの掘削に関わる仕事は選ばないだろう気持ちの悪い手応えを感じていると、やがて首が負荷を抱えきれなくなったのかずるりと腐った脊髄とともに抜け落ちた。

『おいおいおいおいおいおいおいおいおい！ やっちまったのかよ！ そんな簡単にやっちまえるのかよ！』

何が楽しいのか、ラプラスが上機嫌そうな声を挙げていた。

もつと何かあるはずだった。

不安とか恐怖とか。

それがどうだ。

実際は気持ち悪さとか汚さへの嫌悪が強く感じていた。

そうしてぼんやりと迫りくるゾンビを見ていた。

『トシちゃあん！ 才能あるぜオマエ！』

無我夢中だったのか、無意識だったのか。

気付けばゾンビはいなくなっていて、最後に立っているのが自分だけだった。

廃墟には何も無い。

あれほど怖かった闇から何も感じられなくなっていた。

『ハッピーバースデー！ 世界が滅べば他の雑魚よりも遥かに長生きできるぜ！ オマ

エを馬鹿にする連中よりもずっとな！ 夜寝る前に、朝起きた時に、昼飯を食いながら、

世界よ滅べと敬虔にお祈りしな！』

『この世界で生き残るにはなあ！ 才能か環境が必要なんだぜ！ オマエは幸運な事に

才能がある！』

「いらぬい……」

『かあー！ こいつは最悪だな！ 世の中には才能が無くて泣きながら戦ってるやつらもいるつてのに！ そいつらに悪いと思わねえのかこのクソガキ！』

「うるさいな……」

スマートフォンからぎやあぎやあと叫ぶ声。

止め方もわからないまま机に置いたそれは、勝手に妄言を垂れ流す。

それでも捨てなかったのはゾンビの出現によつて塗り替わつた常識が怖かつたせいだつた。

部屋の隅、夜の道、誰もいない建物、何も感じない闇、それらの全てが怖かつた。

急に何かを感じてしまうかもしれないと思うと、どうしたらいいかわからなかつた。

だからスマートフォンを手放せない。

唯一の理解者で、騒がしきで気が紛れることもある。

『別にいいけどな！ 戦わなくて！』

「いいのかよ……」

『オマエは死ぬ！ このラプラス様は死なない！ それだけだからよ！』

「……僕は死なないつて言つたら？」



『あの時は死なないってただけだぜ！ 今日は何!? 明日は何!? 明後日は!? なあ、オマエはどう思う?』

「……別にゾンビに囲まれたって負けないし」

『おいおいおいおいおい！ 愉快な顔してんなよ！ まだゾンビパニックが始まる  
とも思ってるんでちゆかあ!? んなわけねえだろ！ 悪魔だつってんだろが！

ゾンビは連中の中でも最弱！ 本場に最弱はスライムだが存在が揺らいでる電子の  
藻屑を引き合いに出した所で意味なんてねえ！』

そうだ、悪魔だ。

最初はゾンビパニックが始まるのかと身構えた。

だが何も起こらなかった。

そうしてラプラスは笑いながら説明したのはこの世界には悪魔がいる事だった。  
それを主軸として社会が作られている事も。

『強い悪魔、強い人間、それらが食う物にされてもいいってんなら好きにしろ！』  
「……」

『ラプラス様も鬼じゃねえ！モチベーションが高まる事実を教えてやるぜ！』

スマートフォン画面が輝くと、宙に映像が浮かび上がった。

多種多様な時計だが、時が進む物、戻る物、ノイズが混じって表記がブレる物。

そのどれもが時間を刻んでいる。

『崩壊へのカウントダウンだ。今から準備できる事実泣いて喜ぶんだな。それとも貴重な時間を無為にできる贅沢にむせび泣くか?』

うんざりしながらスマートフォンを手取る。

この近辺で自由に利用できる異界とやらへの行き方をラプラスが示していた。

インターホンが鳴る。

玄関を開ける。

頭にアルミホイルのような物を巻いた男女の姿。

有難いお言葉とやらを賜り、玄関の扉が閉じる。

残されたのは銀色の帯のような物。

もう誰も帰って来ない。

この家もすぐにでも取り上げられるだろう。

『銀杯かよ！ カルトとは笑えるぜ！ オマエは頭に巻かなくていいのかあ!?! ああ！

全部奪われてるのか！ オマエは運がいいぜ！ ラプラス様が環境を用意してやる

んだからよお!』

ラプラスの言葉に乗せられたわけじゃない。

ただ、やれる事が無かったから。

導かれるように進み始めた。

泥臭く戦う毎日だった。

油断や集中力の乱れから時折訪れる僅かな命の危機だけ。

その日々も終わりを告げた。

悪魔使い専用の掲示板とやらを見て回っている時に。

途中からラプラスが勝手に書き込みを繰り返し、気づけば古臭い井戸があった。

そこではこれまでがお遊びだったとでも突きつけるように、化け物たちが争っていた。

— 2

「ぎっくりと話しましたが、私たちの要求は先ほど言った通りです」

かしゃんかしゃんと音がする。

一定のリズムで体が揺れる。

湿って澱んだ空気、井戸から感じる暗い闇、宙に漂う奇妙な機械。

「それで返事は？ やりますか？ やりませんか？」

宙に漂う奇妙な機械からかしゃんかしゃんと音がして、次々と組み上がっていく。その振動が、恐怖と組み合わせさせて体を揺らす。

そいつは腰が抜けて地面にへたり込んでいるトシキを見下ろしていた。

小柄で、声の幼さから年下の少女であることはわかった。

確かメシア教と言ったか、そういう連中が着ている白い修道服の姿だ。

その上に、裾が余りすぎて引きずられている黒いコートを羽織っていて、ごちゃごちやと装飾品で飾られていた。

狐面に隠されて表情は読み取れない。

宗教は嫌いだ。

正しくは、嫌いになった。

『強引すぎねえか鳩女あー！ こっちのトシキは素人に毛すら生えてないのはわかってんだよなあ！ メシアは無辜の民を磔にして火で炙るのが得意ってか！』

「私の領分に土足で踏み入った相手に優しくできるほど私は大人では無いんですよ。サガミさんに頼り切りの子供なのでやれることは少ないのです。私としては説明しただけでも甘いと自分を褒めたいですね。それともラプラスの未来演算はもつと丁寧に説明してもらわないといけない程度なのでしょうか」

『おいおいおい！ トゲがあるじえねえか！ 嫉妬か!? 聖女になる器が泣くぜ！』

「お判りいただけでない様なので一度だけ言いますね。私は嫌悪しています。素人がヤタガラスの異界に飛び込んでも、電霊が私の未来に横入して来たことも、それを許されるかもしれないことも、全部苛立っています。そして私の方が圧倒的に強いのです。いいですか。私が甘えたらサガミさんは許してくれます。いえ、許すも何も、私が正しいと判断してくれます。これは神託を受けるまでもありません。覆しようのない蓋然性を含んだ事象に繋がります。地雷原をバカみたいに踊るなら爆発させてあげますが」

『……』

「ご理解いただけただけなようですね。それで、やりますか、やりませんか」

『はっ、それこそ何のために連れてきたと思つてやがる。やれるよなトシキい』

少女の頭上に漂う奇妙な機械からかしゃんかしゃんと音がして、組み上がったはずのそれは次々と砕けていく。

自身の手に握られたスマホから電霊・ラプラスの叫び声に鈍っていた意識が醒める。拾つてから勝手な事ばかりするコイツがずっと鬱陶しいと思つていたが、今だけは助けになるようだった。

宗教は嫌いだ。

正しくは、嫌いになった。

嫌いな相手からの言葉を断りたかった。

だが同時に、ラプラスを信じたくもあつた。

「僕は」

かしゃんかしゃんと音がして、砕けた部品が再び組み上がっていく。

その音を聞きながら、トシキは自身の声が震えている事に気付いた。

この場のあらゆるものが怖かった。

悲鳴をあげながら逃げたかつたし、誰かに縋りたかつた。

異形の悪魔を殴り倒す女性、大型の銃器を軽々と振り回す青年、目の前の少女すら、そ

して真つ暗闇に浮かぶ井戸。

転がっている頭に巻かれている銀色の呪具、アルミホイールにも似たそれを見れば情け

ない姿を晒すのは嫌だった。

恐怖に負けない黒い感情がトシキを動かさうとしていた。

「いえ、無理しなくてもいいですよ。死ぬことが魂の救済となる人々もいます。私はそ

れを残念だとは思いませんし、逆に薦める事も少なくありません」

「……」

「心のままに生きて幸せになれるのは一握りだと思えます」

少女は不満を抱いているのだろうか、そう感じ取れる冷たい声音。

同時に突き放そうとしているとも。

やつてもいいし、やらなくてもいいと少女は言う。

どちらを選べばいいのだろう、トシキにはわからない。

わからない事しか起きていない。

ラプラスを拾った時から、ずっと理解が追い付いていなかった。

わからない事だらけの中で一つだけわかる事もある。

それはトシキの目的への道のりをラプラスが導き出している事だ。

「戦いは努力や才能で片付きます。でも心は違う。絶望的に合わない人もいます。何もかも忘れて平和な日常に戻る方が幸せな場合も多くあります」

「……戻りたい日常なんてもう無いんだよ」

「そうなんですか。大変ですね。それでは戻りたい日常が無い事を忘れて日常に戻るのはどうでしょうか？ これで平和な日常を取り戻せますね」

『テメエ、人の心とか無いのか鳩女』

忘れて戻ったところでトシキには何も残っていない。

友達はいない、家族もない、金だつて無い。

宗教に嵌った両親は、気付けば頭にアルミホイールを巻いた姿になって全てを差し出した。

家も、金も、家族すらも。

怖くなって逃げなければトシキも差し出されていただろう。

宗教に狂った風聞のせいで親交を深めてくれる相手はいない、これまでの学生生活を孤独に過ごさなければならなかった。

馬鹿にされ、イジメられる日々しか知らない。

当然頼れる相手もないし、頼り方も知らない。

その折に、ラプラスと出会った。

「……やるよ。僕はやれる」

ラプラスだけがトシキの目的を最優先として物事を判断してくれる。

だから少女の提案に乗ることにした。

それに、戻れる日常はもう無いのだから進む事しかできない。

「そうですか。……前言撤回しても問題ありませんが」

『未練がましいな！ 諦めな！ トシキはやるって言ったぜ！ ピジョン！ 鳩は選べ

るのか！ 鳩は運べるのか！ 認めないならサガミを呼べ！』

「いいえ、いいえ。認めましょう。私は未来を受け取る。電霊は未来を識る。それだけの事です」

かしゅんかしゅんと音がして、組まれた部品がばらばらに砕け散っていた。



トシキは自身のやる事を頭の中で繰り返す。

何処までも暗い井戸が見えた。

明瞭とは言い難い視界が井戸までの距離を測り、簡単だと判断している。

決して冷静とは言えない思考が本当に出来るのか、疑問を何度も投げかける。

だがこれが復讐に繋がるのだとラプラスは導いた。

だからやる。

別に復讐したいわけじゃない。

全てを失って、それでも残ったやれる事が復讐だった。

『待て、鳩女。オマエに神託を与えてるのは何モンだ？ 主は本当にまだいるのか？』

その“守護悪魔”ガーディアンはトシキを通してでしか検知できない。はつきり言わせてもらうが

気味が悪いぜ』

「安心してください。ちゃんとした神様ですよ。ただちよつと誰も知っている形では無いだけです。確定した過去と現在を元にした、その延長線上に存在する神は今ここに座す事ができるでしょうか。そうなたら神話は何処にあるのでしょうか。つまりそういう話です」

かしやんと音がして、組み上がったあまりにも小さく単純な構成をした部品。

それが吸い込まれるように虚空へと消えていく。

トシキはその瞬間が恐ろしかった。

「私は既に役割を終えているんですよ。メシア教の方々には理解できないでしょうけど」

— 3

標的のアルミホイلمانの頭を飛ばしたのだが中からシャドウが溢れ出た結果、空に向かって吠える怪獣もどきの暴走体となってしまった。

暴走したペルソナ使いの相手は億劫なのでムカデさんに任せる。

大怪獣大決戦だ。

俺でも勝てる程度だから確実にムカデさんが勝つけど。

そうなると不思議なことにやるのが無くなってしまった。

あの人、通常攻撃が百裂突き判定な上に近寄るとその日の気分で巻き込んで来るからな。

敵が強かったら援護するのだが、ガトリング砲の弾が惜しいと思う程度なので任せてしまおう。

今の勢いで射撃しているとすぐ魔力が枯渇しそうだ。

今日は試運転だし、そもそも独力で使う物じゃないからしょうがない。

真面目に運用するなら背負っているタンクにチャクラポッドを充填し、その中に精霊を浸すくらいのリソースが必要だ。

特殊弾をばら撒くよりは安い<sup>ましな</sup>が、それでも金が湯水のごとく消費されるのでヤタガラズに許可された時くらいしか本気では使えない。

呪い<sup>ましな</sup>によって組み上げ等が簡易に行えるのだが、電子制御でも対応できるようにしてもらってある。

戦闘中に細かいあれそれを俺がやるより電霊がやったほうが1億倍速い。

電霊に頼めばガトリング砲はパーツ毎に分かれ、収納ボックスへと戻っていく。

ピジョンちゃんに任せていた飛び入り参加者の相手はどうなったか確かめるとしよう。

何が起きても問題ない距離に居たので大丈夫そうだとは思う。

「ピジョンちゃん、今どんな感じ？」

「お話は終わりました。やってくれるそうです」

「それは良かった」

ピジョンちゃんはどこかつまらなそうだった。

歯向かってくれたら呪殺して終わるので、そうならないのが不満なのかもしれない。

これが元聖女候補、メシア教って怖いよな。

候補でこれだと聖女ともなるとどうなっちゃうんだ。

『おいおいおい！ サガミい！ あんま舐めんよ！ うちのトシちゃんなら余裕に決まってるだろうが！』

男子高校生の“トシちゃん”とやらが持っているスマホから聞こえる大声は生まれただばかりの電霊によくある合成音声だった。

育つと滑らかで人間と遜色ない発声を獲得できる。

俺の電霊はめっちゃ綺麗な声をしている、シヤイなので俺としか話したがらないが。そんなひよっこ電霊の強気とは裏腹にひよっこな持ち主は腰が抜けているようだ。

まあこれからやってもらうことは簡単なので腰が抜けていようとも関係ない。

腰抜けても簡単に死体にはなれるからな、安心してほしい。

ああ、でもやるなら死んでから腰を抜かしたほうがいいかもしれない。

それなら復活のついでに腰も治る。

「うーん、余裕、余裕か。確かに余裕かも。難しいことをやらせるわけじゃないからね。それで、何のために『井戸』に来たのか聞いた？」

「ヤタガラスに所属したいそうですよ」

「所属するだけならDDS—Netで申請するだけじゃん。幼体だとしても電霊だろ、

それくらいわかってると思うんだけど」

『フリーなんてぬりい事を考えるわけねえだろうが！ こっちは本格的に所属するのが目的だ！』

どうします、とピジョンちゃんから目線で問いかけられる。

フリーでは無く、神奈川に所属したいらしい。

今なら神奈川に所属となるのだが、そうなるか誰かしらの後援を得られるからなあ。

この場合はだと推薦することになる俺だろう、普通に考えたら。

真面目にやる気が無い俺の推薦とか価値が無さすぎて笑えるが、その所は流石に理解しているはずだ。

幼体の電霊だから知識足りてないかもしれないが、それはそれ。

「いいよ、別に」

『話がわかるじゃねえか！ トシキ！ こいつは頭がぶっ飛んでて師匠に向いてるとは全く思えないが崩壊後には心強い味方になるぜ！』

「崩壊後の当てかあ。それだと役に立たないんだが」

ラプラスが持ち主をヤタガラス所属にさせたがる理由は崩壊対策のようだった。

崩壊とは何かといえは文字通りの事象だ。

予知系統の霊能力者が未来を識ろうとするとある一定の時間までしかわからなくな

るとか。

中には断片的なイメージを得られる能力者もいて一様に崩壊を囁くという。

先が見えないなら単純に世界が減んでると俺は思うが、そういう事象に詳しい電霊や悪魔が平行世界では文明や宗教が一定のラインを超えると頻繁に社会崩壊していると証言しているらしい。

今のところは明確な日時や場所、事件等といった全容は解明されていないが、現在の社会が終わる規模の何かが起きると予見されている。

ヤタガラス内のみならず、世界中でまことしやかに囁かれているのだからとんでもない。

ピジョンちゃんも崩壊の神託を受けたが、適切な行動によって期限が延びる感覚がするらしい。

頑張れば俺たちの死後まで延ばせるんじゃないかってスタンスで最近では活動しているので、崩壊後の社会に向けた備えとかは全く無い。

全国規模で歴史と権威のあるヤタガラスが準備しているので、ご機嫌取りも兼ねて貢いでるし仕事も手伝っている。

「先に行っておくけど俺たちは崩壊を防ぐ派閥に属しているからな。隕石降ったり富士山噴火したりして社会が崩壊しても快適に暮らせる準備とかも当然していない」

「コンビニとか便利ですもんね。スーパー銭湯に行けば24時間お風呂に入れます」「ピジョンちゃんはよくわかつてる。そう。便利なんだよ。俺は日中は店で色々な飲食を楽しめて、24時間気軽に買い物できて、電車で好きな所にいける今の社会が至上だと思ってる。行き届いたライフライン、簡単に入れる風呂、ちよつと悪魔とかを小突くだけで過ごせる快適な生活を手放す気は全くない。軽く旅行に行つた先の小さな山に登つたりして、その時にすれ違つた見知らぬ人とのちよつとした気軽な挨拶ができる日常が好きなんだよ。そのためなら色々やれる」

言葉通り今の生活を維持できるなら結構やれる。

悪魔や人間がどれだけ死のうと構わないし、沢山殺すのもちよつと嫌だなんてくらい。

妥協することは出来ない。

悲しいことに俺にはリーダーシップみたいな物が欠けているし、ピジョンちゃんも同様だ。

俺は生み出せないし作れないので、事前に準備したからといって崩壊後に現代の快適な生活を再現できるとは到底思えない。

俺が望む娯楽を含んだ衣食住は国単位で有機的に機能して今の社会を続かないと手に入らない。

音頭を取る才能があっても再現できないだろうから無くてもいいか。

『はっ、好きにやっつてろや』

興ざめとでも言いたそうなラプラスの声だが、持ち主はそうでもないようだ。

俺の言葉に理解を示すように小さく頷いていた。

平凡な日常が一番だよな。

ぶつちやけ戦いとか強さを求めるなら魔界に落ちればいいし、神を讃えたければ死んで天国に行けばいいんじゃないのか。

なぜ自分だけでやらないのか。

周りに見せつけて認めて貰わないといけない程度の自信しか無いのだろうか。

「どうする？ 自己紹介しとく？」

「私はさつきしましたよ。彼はトシキという名前だそうです。十の四季を司る名だとか」

「十の死期……？ 10回死ぬってこと？」

「季節の四季です」

「そうなんだ。十の四季……うん？」

そもそも十の四季ってなんだよ。

こんな少ない文字数だけで平気で矛盾するの凄くないか。



司るつてのもよくわからない。

名前つて難しいんだな……。

『要らねえよ！ さっさとしな！ トシキもそう言ってるぜ！』

「俺とはまだ一言も喋ってないんですがそれは」

「ラプラスの言葉に十の四季を司る少年」 トシキ がギョツとしていた。

なんだ？

俺とはしゃべりたくないのか？ とダル絡みしてもいいが、本人は状況をよくわかっているのにそんなことしたら可哀そう。

それはそれとして可哀そうだが、俺が事細かにフオローすることもない。

今の所は俺の予定に割り込んで来た迷惑な他人でしかないのだから。

むしろこれからやる事を考えたら知らないほうがいいんじゃないかな。

気づいたら終わってた、みたいな。

ガンダムでコロニーに毒ガスを撒く部隊も知らずにやったじゃん、そんな感じ。

「まあ、名前なんて何でもいいか。どうせヤマキタになるんだから。穴埋めしたかったからちようどよかった」

『おいおいおいおいおい！ 待て待て待て！ トシキのレベルはわかってんのかよ

！』

「たったの5、ゴミめ」

『わかってんならまだ早いのもわかるよなあ！ おい！』

「ハッピーバースデー、ヤマキタってこと？」

『ちげえええ！ 話を聞けやボンクラがあ！』

「必死じゃん。どしたん？ 話聞くよ？ 遠慮しないで？」

『話を聞く前に事実を見ろおおお!!』

ウケる。

聞けって言ったからちやんと聞こうとしたらキレられた。

秋の空並みに複雑な乙女心だ。

それにしても必死な電霊ってなんかレアだなあ。

他のラプラスみたいに傲慢になれよ。

傲慢すぎて俺の電霊が結構食っちゃったけど。

「そのアルミホイール頭を井戸に放り込む。そしたらその術式に対して呪い返しが発動して相手は死ぬ。こいつは大役だなあ。ヤタガラス内でも名を襲名した実力者しか任せられない。あと返す呪詛は相手への感情で強まったりするからなんか良い感じの因縁があると尚良し。……新しいヤマキタが該当しててちよūdよかった」

うんうん、と頷きながらアルミホイール頭を投げ渡す。

この任務で重要な頭。パーツだ、無くすなよ。

しかしロボトルだったら敗北宣言される状態でも動けるんだからペルソナ使いつて  
凄いやな。

新しいヤマキタがこれから誕生するのだが、ちよつと能力がショボい。

後でレベルは盛るけど、特技が無さすぎる。

ちゃんとしたダークサマナーなら殺した人数とか数えてるので、それで威圧できたり  
するんだけど。

ラプラスだけだと色違いのコロトツク程度の貴重さ、つまりちよつと珍しいくらい  
だ。

『デメエ、正気か？ 管理地を与えるんだぞ？』

「期待の現れ、本気だよ」

期待と言えば先代のヤマキタは弟子を育ててたっけ。

俺が頭を吹つ飛ばしてムカデさんにボコられてこれから死ぬ。

意識したら打撃音が聞こえてきたな。

聞こえますか、先代ヤマキタさん。

俺たちから貴方へのレクイエムです。

しょうもないなことを考えながら、俺の電霊が“トシキ”のプロフィールを纏めてく

れていたので流し見していた。

これからやることと、やりたいことがばつちり噛み合っている。

ヨシ！

「トシキ。君に魔法の言葉を授けよう」

俺がそう告げると、この場にいる者は三者三様だった。

お面の上からでも上機嫌だとわかるピジョンちゃん、演算をしようところらにちよつかいを出して悉くやり返されているラプラス、生首を持って立ち上がるトシキ。

あとガチャが回したくなつたので他人の才能で疑似的に試してみる俺。

「とても苦しい時や死にそうな時、どうしても先に進みたいならこう言うんだ。『ペルソナ』ってね」

ぱっちーん☆とウインクする。

ラプラスが騒ぎ出したが無視する。

新たな自分は死地でこそ見出せる……かもしれない。

臨死体験は超常の力を与えることもある、全く期待できない能力を吹き込もうとしたわけではない。

才能の片鱗とかそういうのは感じないけど、上手くいくこともあるだろう。

ペルソナ召喚に失敗したら蘇生させるし、暴走してシャドウ化したらムカデさんが処

分してくれる。

ペルソナ使いなら勝手は違うが強くなりやすいので今後の役に立つかもしれない。

飛ぶ鳥を落とすつてワケで、一石何鳥だろうか。

「あとはアルミホイールの生首を抱えて井戸に飛び込むだけ。実に簡単だ。”必殺の霊的報復兵器複合呪詛民語”に飛び込めばヤタガラスの誰もが認めるに決まってるよ。心配しなくても俺が推してあげる」

トシキは重大さを理解していないのか、顔を青くしつつ震えながらもやる気を見せてくれている。

反してラプラスは『テメエ……』とだけ言つて言葉を詰まらせる。

ラプラスはどんなものかわかっていなかったのだろう。

わからない物は演算出来ないからな。

俺の電霊は未来予知出来るほど演算能力は高くないが、情報については電霊内でも随一らしい。

電霊にも相性や力関係がある。

なるほど、よくできている。

「呪い返しが上手くいけば同じ呪具を使っている連中を簡単に皆殺しにできる。欠点は飛び込んだら死ぬってことくらい」

生首を投入すればいいからそもそも飛び込む必要もないし。

でも因縁とかあったほうが威力は上がるらしいから、飛び込みによってなんかいい感じになって欲しい。

使用する上では他にも気を付けないといけない点は多々あるが、ここで彼らに説明することでもない。

都市伝説や妖怪といった負の伝承を纏めた呪詛的な存在となった井戸の怪物。

感染する致死の呪いそのものだが見たり知ったりするだけでも呪殺されてしまうので、使用後に生きて帰る場合は無効化して忘却措置が必要と手間がかかる。

再使用の際には復元措置が必要だし、使い勝手がいいかと問われると否定するしかない。

敵の頭数を減らすのに使いやすいで俺は好きなんだが、ヤタガラス内では殆ど使われていない。

そんなに強くないけど重罪となった異能者が放り込まれる場所って感じらしい。

とりあえず上手く生首をタッチダウンしてくれたら信徒のアルミホイール族は殲滅できるの、そこで今回は手打ちだろうか。

今日はもう仕事終わりかな、と考えていると依頼が追加された。

ゲートパワーが高まって横浜の高校が魔界に沈みつつあるようだ。

横やりが入らないように動かないといけなくなった。  
人生って上手くいかないよな。

ペルソナ力で井戸に飛び込んだトシキを見ながら俺はそう思った。

## 4

あ銀杯教は銀蠅に由来する、と先代に教わったのはいつの日だったか。大戦の折、船で盗み出した缶詰を涙ながらに食べた銀蠅行為が忘れられず組織の名前になったらしい。敵国との戦いの末に船は沈み、大海に揺られながら月を見上げていた先代が立ち上げた。その時、先代は超常の力に目覚め、海を泳ぎきって生き延びた。暗い海と孤独はただ復讐を誓わせた。あ

銀杯教は貧しい者たちのための教えを布教している。貧しい者とは金銭的に貧しい者だけではない。才覚なき凡人にこそ門戸を広げている。才ある者たちはたった独りきりであろうともその手にあらゆる富を得る。成功して貧しい者から奪い盗る。だからこそ、先んじて摘み取り、奪うのだ。平等のためだ。幸せになれる者が憎い。

ゆらぎはその才能を見込まれた。女の身でありながら人一倍力があり、言葉は容易く人を操り、もう一つの人格は魔を宿す。銀杯の教えを拡げるのにそう時間は掛からな

かった。教えから呪具を作らせ、力を拡大させるのも片手間であった。

あ

銀杯は月を模した呪具が与える狂気に身を委ねることで力を発揮した。人格の破壊によつて漏れ出す力は命と引き換えに爆発的な火力を誇る。何よりもゆらぎ自身が月に吠え

違う。思考が滑る。

思い出せ。自分がやるべきことを。強い意志が肉体を励起させる。

突然現れたかのように佇む狐面の男から距離を取ったのは、ある種の反射でもあった。

焦りからか力の配分を誤り、床に亀裂を作り、足跡が刻まれた。

「なあ、それって楽しい?」

狐面が言う。

何を指しているのか逡巡し、しかしすぐに切り捨てる。すでにここは戦場だ。悠長に構える余裕はなかった。

緊張からか忘れていた物事が頭の片隅に蘇る。

信徒たちが次々と倒れる中での襲撃は、守られるべき自分にまでその矛を届かせていた。



銀杯教の教祖ゆらぎである自分を前にして、狐面は不気味な程に動かなかつた。余裕の現れだろうか。

舌打ちをしたくなる。戦う予定はなかつた。潜り込ませた物たちからもヤタガラスが動く予兆は無かつた。

幾度となく繰り返し返した小競り合いで狐面がサガミという名である事、そして大体の力量を把握していた。

銃撃をメインに据えた戦術を取っている。近接で戦っている記録はないが、苦手というわけでは無いだろう。高レベルの存在ともなれば距離等誤差でしかない。それでも僅かな差ながらも不得意である可能性が有り得た。そして幸運な事に自分の適性は近距離だった。負け知らずとも言える天賦の才。相手に不利を押し付け、自分が有利を得て勝つのが異能者の戦いだ。

既存のアナライザーでは分析しきれないレベルを持つ相手だが、しかし、条件さえ整えば自分も同様だった。そして、本拠地の異界である銀杯教の神殿内ならば更に力強さを発揮できていた。

地形による後押し、近接戦の才能、そしてペルソナによる恩恵。迫撃戦ならば分がある。

「楽しいんだろうなあ」

半ばまで狂気に委ねた自我で、脚力を込める。無防備な背後を取れば、サガミはそう呟いた。

銀杯教の呪具は銀のテープに似ている。それは頭部に隙間なく巻き付ける事で効力を発揮する。

呪具を巻いた信徒を見下ろすと、その頭部が銀の月に見えるだろう。簡易的な月を模す事で満月の恩恵を与えるのだ。与えるのは狂気、そして人格の分裂だ。まるで満月が与える恩恵のようだった。あ

銀杯教の拡大にはペルソナ使いが関わっている。教祖である自分を中心とした一般的な組織構成だが、幹部はみな熟練のペルソナ使いだった。あ歩んできた人生には紆余曲折があった。出会いと別れを繰り返した。組織が揺らぐ物事も幾度となくあった。その度に幹部となった仲間たちと乗り越えた。ペルソナ使いの出会いとはタロットカードを模していると言われる。そして惹かれ合うように出会うのだと先代はゆらぎに教えた。自分の人生はタロットカードの全てを揃えていた。苦難の末が今だった。あ

あ異能者との戦いは金が必要だった。悪魔やそのシステムに連なる研究、修行の環境、装備。湯水のごとく必要だった。銀杯教の教えで安らぎを与える代わりに金銭を集

めさせるようになったのはすぐだった。富む者から回収すればするほど心が洗われた。家族がいる者、友がいる者、戦える者、幸せな者、孤独ではない者、持っていない物を持っている者。あ持っている者が憎くて奪いたくて奪いたくて奪いたくて奪いたくて

「なあ、何度も楽しいか？」

狐面が言う。

違う。思考が滑っていた。

思い出せ。自分がやるべきことを。強い意志が肉体を励起させる。

突然現れたかのように佇む狐面の男から距離を取ったのは、ある種の反射でもあった。

焦りからか力の配分を誤り、床に亀裂を作り、足跡が刻まれ……足が僅かに引つかかっていた。同じような足跡が幾つか刻まれている。妙だった。

逡巡し、しかしすぐに切り捨てる。すでにここは戦場だ。悠長に構える余裕はなかった。

あ緊張からか忘れていた物事が頭の片隅に蘇る。

信徒たちが次々と倒れる中での襲撃は、守られるべき自分にまでその矛を届かせていた。

銀杯教の教祖ゆらぎである自分を前にして、狐面は不気味な程に動かなかった。余裕

の現れだろうか。

舌打ちをしたくなる。あ戦う予定はなかった。潜り込ませた物たちからもヤタガラスが動く予兆は無かった。

幾度となく繰り返した小競り合いで狐面がサガミという名である事、そして大体の力量を把握していた。

銃撃をメインに据えた戦術を取っている。あ近接で戦っている記録はないが、あ苦手というわけでは無いだろう。高レベルの存在ともなれば距離等誤差でしかない。それでも僅かな差ながらも不得意である可能性が有り得た。あそして幸運な事に自分の適性は近距離だった。負け知らずとも言える天賦の才。相手に不利を押し付け、自分が有利を得て勝つのが異能者の戦いだ。

既存のアナライザーでは分析しきれないレベルを持つ相手だが、あしかし、条件させ整えば自分も同様だった。そして、本拠地の異界である銀杯教の神殿内ならば更に力強さを発揮できていた。あ

地形による後押し、近接戦の才能、そしてペルソナによる恩恵。迫撃戦ならば分がある。あ

あ

「得意なんだなあ」

あ

半ばまで狂気に委ねた自我で、脚力を込める。無防備な背後を取れば、サガミはそう  
眩いた。あ

あ

あ

あ

銀杯教は

あ あ あ

月が見ている

あ

あ

思考が滑っていた。

思い出せ。自分がやるべきことを。強い意志が肉体を励起させる。

突然現れたかのように佇む狐面の男から距離を取ったのは、ある種の反射でもあつた。

焦りからか力の配分を誤り、床に亀裂を作り、足跡が刻まれ……足が僅かに引つかかっていた。同じような足跡が幾つか刻まれている。妙だった。

何かが起きている。

背筋が凍るような思いで、そしてすぐにアナライザーのログを追う。

独自に研究しているそれは、一般的に手に入るCOMPの物よりも遥かに高い性能を有していた。

「お、判断が早いな。この回数でパターンを変えるなんて優秀だ」

感心したような声を無視し、ログを必死に読み込む。

絶句した。

把握できていなかった攻防が繰り返されている。

それも一度や二度では無い。

同様の動きを、二十を超えても完全に繰り返していた。

ハツとして身体を見れば、傷だらけで血が流れ出していた。

しかしそんな記憶はない。

「はい、次」

何気ない言葉とともに、拳が振るわれる。

ログに新たな文字が刻まれた。

〈サガミの双手〉

〈サイコダイブ発動〉

— ゆらぎは直前の記憶を消された —

— プレスターン喪失 —

〈サイコダイブ発動〉

— ゆらぎは記憶をランダムに一つ失った —

銀杯教は研究に力を入れている。日ごろからゆらぎは既存のCOMPにデフォルトで入っているアナライザーの性能に不満を持つていた。その理由はレベル50が上限となっているためだ。レベル上限とは現環境の存在強度の最大値を示している、と言われていた。つまり現代日本のゲートパワーで生成される異界で得られる練度の最大値と考えた。だが実際はどうだろうか。ヤタガラスに属するライドウや四天王、主要都市に居座る連中は容易くレベル50を超え、アナライザーでは表記がオーバーフローする。限界と銘打ちながらも当然のようにそれを超えるレベルの持ち主が存在する。恐れと同時にチャンスだと捉えた。正確に敵の力量を把握し、同時に自勢力を完全に把握

すことが出来る。また、上限を超えた先に本当の力がある事を知った。狂気に身を委ね、月に吠えた時、ゆらぎは真の力を得た。

あ

あ

信徒が次々に倒れていく。余りにも濃い呪いは、幹部を除く人員の悉くを殺しつくしていた。憎悪が渦巻いていた。混乱は少ない。惑う者たちが失われていたからだ。だから自分はずぐに動くことができた。守られるべき玉座を捨て、走り出し、そこにサガミがあ

あ

あ

だから儀式を発動して

月に吠えた

「俺は電霊でCOMPを封じたけど、次はどうしたっけ？ 何を考えてた？」

ペ ル ソ ナ

「あー、そうだった。そうだった。熟練のペルソナ使いは便利だな」

狂気が思考を蝕む。

僅かに残った理性で敵を見据える。



これまでの全てを一度捨てる。それが勝機に繋がると月が囁く。  
羽化するシャドウを無視して歩むサガミに頭を撫でられて

あ

■ ■ 教はあつ

違う違う。ゆらぎの幹部はどうしていたか。幹部はサバトマの儀式によって月の神を強大な存在として強化しようとしていた。信徒が死に耐えていく様子から異常を悟り、迎撃に万全を期すためだった。

「それでシャドウが強かったのか。了解つと」

生に

意味など

「あ、もういいよ。お疲れ様。時間稼ぎしてただけだからこの後はライドウに斬られて回収されて終わりだもんな。……なんか元気そうだし、もう一回斬られるところを思い出してみようか」

無いと

知る g

意識が浮上する。

四肢が奪われていた。

わたしの狂気と妄執、そして神はライドウの一太刀で切り払われた。

様々獣の顔を模した面が浮いていて、わたしを囲んでいた。

繰り返し、繰り返し、わたしの記憶は汚される。

崇高なはずの■■■教は既に無い。

いたはずの仲間も消えている。

わたしはなんのために、なぜこんなことを、どうして。

「ええ、はい。もちろん。今から再生します。抽出後は抹消するので……はい、はい。ミ

サキ様の御心のままに」

サガミがわたしの頭に触れる。

わたしの大切な記憶がかき混ぜられる。

記憶を切り分けられる気持ち悪さに恐怖する。

許可なく思い出す事すら許されない。

あ

徐々に感情も希薄にあ

わたしはあ

あつ

あつ

あ

あ？

わたしの記憶が無造作に蘇って……？

「あ、ごめん。ペルソナ使いの子が増えたからマニュアル用に記憶貰うね。詳細を調べるとだるいから適当にやるから嫌だったら右手を上げて。嫌じゃないんだね。はい、ありがとう」

ぐちゃぐちゃに頭を混ぜられる。

記憶が浮かぶ。

そしてすぐに消える。

大切な思い出だった気がしたのに、その直後に奪われる。

忌まわしい記憶だったはずなのに、その直前に消される。

心に繋がる何かが消えていく。

わたしはこの先どうなるのか。

答えなどないと涙した。

「あ、やべっ。ペルソナ消えたかも。なるほどなあ。ここを弄つたら消えるのか。おっけー、理解した。……大丈夫です、ミサキ様。たぶんここをこうやれば、再生できるはず」

あっあっあっあっあっあっあっあっあっあっあっあっあっあっ

あっあっあっあっあっあっ

あっあっ

## 女神転生（地方しらべ） 9

【神奈川しらべ】 非正規召喚師たちの契約生活【XXX日目】

魔力切れです助けてください今羽田空港にいます

アルミホイール怪死事件発生

ソースはテレビ

Vやねん！1985

ダークサマナーの情報源がテレビってなんやねん

暗黒騎士田中

テレビ見てんじゃねーよ

ライドウマジ許せねえぜってえ倒す

大河は見るに値するので受信料は払っている

エクストリーム乱場らんらん

朝ドラの面白さをご存知ない……？

禁屈指

地上波がサブスクに勝てるわけないんだよな

？悪魔殺シの刃？

だが今は違う！（ぎゅっ）

追いかけて配信等で利用しやすくなった！

無二マン

番組は面白くなりましたか？

ダーカーザン部落

うるせえ殺すぞ

シルキーは俺の嫁

唐突な殺意

おれじゃなきや見逃しちゃうね

エクストリーム乱場らんらんる

一人前のダークサマナーとしての誇りとかないんか

Vやねん！1985

誇りがあればビール飲みながら野球観戦できんのかよ！

オーロラビジョンに映っただけで追跡者に終われんだぞ！

科学の進歩ってすげー！

ふざけんや！

メモ帳起動

ふん

ダークサマナー足る者、つるまず肅々と任務を遂行するのみ

無二マン

実績が大事だから殺した数を把握してないといけないのつれーよ

ライドウマジ許せねえぜってえ倒す

ダークサマナー「これまで〇〇人殺しました。潜伏や暗殺が得意です。この技術で依頼を遂行できる自信があります」

ヤタガラス所属「たぶんいっぱい殺した」

？悪魔殺シの刃？

実はあまりにも自由がない

エクストリーム乱場らんらんる

情けないなお前らは

マンダロリコン

それで

アルミホイル惨殺事件がなんだった

指無し芳一

惨殺じゃないから

ただ恐怖に顔を歪めて死んでるだけだから

シルキーは俺の嫁

だけとは一体

焼傍

街中で突然倒れて死んでたらしい

ソースはインタビュー

魔力切れです助けてください今羽田空港にいます

呪殺系の魔力を感じたぜ

指無し芳一

流石魔力に敏感だな

ハマの巨大根

魔力が切れてるから感知しやすかったのかな

? 悪魔殺シの刃?



これで空港から出られるじゃん

魔力切れです助けてください今羽田空港にいます

食うぞ

ライドウマジ許せねえぜってえ倒す

おそらくヤタガラスの呪殺だろう

呪具に対する呪殺手段は限られているが無い事も無い

多那神

朗報です！ w w w w w w w w w w

蟲爺死亡！ w w w w w w w w w w

死亡です！ w w w w w w

エクストリーム乱場らんらんる

流れ

変わったわね

暗黒騎士田中

お、おまえは！

神を名乗りながら蟲のジジイに奴隷にされていた雑魚！

Vやねん！ 1985

お前生きていたのか！

周辺最強の妖怪に挑むイキリ！

百足が怖すぎて結局芋を引いて！

百足より弱い蟲ジジイに挑んで奴隷にされた勘違い雑魚！

？悪魔殺シの刃？

何もかも昔に感じるよボケカス

生きてると思わなかったぜ雑魚カス

多那神

ふえええwwwwww

みんなキビしいよおwwwwww

お祝いしてよおwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwww

メモ帳起動

蟲妖怪に奴隷の便利さを覚えさせたお前は戦犯だと思う

背中に気を付けたほうがいいぞ

多那神

ボコられてたけどwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwww

雑魚wwwwww

奴隷 w w w w

流石奴隷 w w w w w

ざつこかつた w w w w w w w w

焼傍

ブーメランが得意なのか

エクストリーム乱場らんらんる

逃げるなあ！

責任から逃げるなあ！

Ω門X交代

蟲ジジイは立派に戦った！

オマエたちを奴隷にした！

蟲ジジイの勝ち逃げだ！

オマエたちの負けだ！

うわあああああ！

多那神

ひどい言われようだ♡ w w w w w w w

ぼくじゃなきやみのがしちやうね♡  
w w w w w w w w

猪俣信三

おまえ

マジで許さねえからな

糞蟲野郎が

魔力切れです助けてください今羽田空港にいます

俺たちはダークサマナーだ

寄る辺も無いから過去の遺恨は流して仲良くしようぜ

猪俣信三

多那神を名乗る糞蟲は俺らに虫を食わせやがった

自分が狙われないように誘導しやがった

死ねないやつもいる

俺たちは許さない

魔力切れです助けてください今羽田空港にいます

あーこれはダメですね大人しく死んどけ

? 悪魔殺シの刃?

仕事でかち合ったらしようがないけどこれはな

禁屈指

生き残るために模索したんだ

俺にはダークサマナーらしく見えるよ

それはそれとして死ね

多那神

ふえええ w w w w w w w

POST伊東

裏切りもやるけど蟲食いはやばいよ

猪俣信三

何をしてでも殺してやるからな

多那神

無いよお!

俺も死ねないよお!

残念だね w w w w w w w u え つ w w w w w w w u え w w w w w w w

暗黒騎士田中

蟲ジジイは必要悪だったのか?

魔力切れです助けてください今羽田空港にいます

ごみクズだけ封じていれば或いは

メモ帳起動

あんまり女子供も殺さなかったからな

猪俣信三

攫った女子供にも蟲喰いさせていたが耐えきれずに破裂した  
マンダロリコン

死んでくれて良かった

指無し芳一

重罪

シルキーは俺の嫁

俺にはシルキーがいるからセーフ

Ω門X交代

待て待て待て待て餓鬼ども

蟲野郎は誰に殺されたんだよ

としき

百足にぶち殺されたぜえ！

ハマの巨大根

生きてたんかワレえ！

## 禁屈指

生きてんじやーん

危うく巨根先生の罪が重なる所だった

指無し芳一

既に罪深い存在なんだがな

ハマの巨人根

でもよお

女子供はあんまり殺さないぜ？

？悪魔殺シの刃？

あんまりじやねーか

ハマの巨人根

殺しに来るやつは殺すよそりや

？悪魔殺シの刃？

そりやそう

Vやねん！1985

せやな

無二マン

女子供はわかった

男は？

ハマの大巨根

勘のいいやつは嫌いだよ

だからお前を使って答えを教えてやる

無二マン

こわい

としき

百足との交戦後ツチグモの萬永邪仙死亡

ライドウとの交戦後銀杯教祖ゆらぎ抹消処分

サガミとの交戦後銀杯教抹消処分

ダーカーザン部落

だから見逃されたのか

どうもライドウが急いでたからな

エクストリーム乱場らんらんる

流れ

変わったわね



ハマの巨人根

変わり過ぎなんですすがそれは

無二マン

抹消処分イズ何

ライドウマジ許せねえぜってえ倒す

無かった事にされる

? 悪魔殺シの刃?

なんか怖い

ライドウマジ許せねえぜってえ倒す

無かった事にされるので蘇生も不可能

無二マン

こわいよお!

ついていけないよお!

ライドウマジ許せねえぜってえ倒す

組織単位の抹消は珍しい

大事の前の小事ってワケ

暗黒騎士田中

すでに大事なのよお！

魔力切れです助けてください今羽田空港にいます

カルト連中が死にまくってるせいで大騒ぎだぜ

ソースはテレビ

エクストリーム乱場らんらんる

リアルタイムで情報が流れるテレビは便利だなあ

POST伊東

映像が残るとメシアンがガチで殺しに来るから注意しろよ

それで三回死んだ

マンダロリコン

成仏して

ととき

あととときはヤマキタに進化した

暗黒騎士田中

急なジョグレス進化はやめろ

Ω門X交代

ジョグレス相手がいなくねえか

Vやねん！1985

急なエレメンタル進化はやめてくれ

Ω門X交代

アーマー進化か？

デジメンタルはあつたのか

指無し芳一

ワープ進化はやめてもろて

Ω門X交代

アニメ版だった……？

?悪魔殺シの刃？

デジソウルフルチャージ

Ω門X交代

超進化あ！

多那神

自分バイオエボリユーションいつすか  
W  
W  
W  
W  
W  
W

Ω門X交代

死ね



もう新しいヤマキタが来たのか  
ととき

師匠はサガミの野郎

シルキーは俺の嫁

ヴオエっ！

ハマの巨人根

頭痛がする・・・

指無し芳一

吐き気もだ・・・

無二マン

サガミは後ろにいるのはまずいですよ！

禁屈指

返してよ！

僕たちの便利な通路を返してよ！

多那神

誰だよwwwwwwww

アナライズくれwwwwwwww

としき

『相模』 レベル50オーバー 耐性・全門 反射・物火氷雷風呪 無効・祝魔

未来予知可能

多那神

W W W W W W W

W W W

ハ の大巨根

わあああああああ

? 悪魔殺シの刃?

わ

指無し芳一

四天王級が急に生えた嗚呼あああああ

マンダロリコン



サガミ殺せよ（マジレス）

Ω門X交代

これ知ってたらまずい情報なのは

Vやねん！1985

なにやっつてんだとしきい！

さsつさと拡散しろ死ぬぞおまえら  
!!!!

ライドウマジ許せねえぜつてえ倒す

もうやっつてる

猪俣信三

としき

サガミ紹介して

シルキーは俺の嫁

平和な田舎ライフはもう終わりかあ

短い夢だった

魔力切れです助けてください今羽田空港にいます

馬鹿野郎おまえ俺は生きるぞおまえ

禁屈指



聞いたやつは十殺しにするとして

多那神

待ってw w w w w w w w

ぼくもw w w w w w

被w w w w 害w w w w w w 者w w w w w w w w w w

? 悪魔殺しの刃?

懸賞金かけといた

多那神に

多那神

!!?? w w w w w

多那神

ぼくたち

ダークサマナー

仲間だもんげ!

仲良くしよ?

ね?

ダーカーザン部落

しない

Ω門X交代

ゆるふわタイムの終わりだ……

多那神

これまでだつてサガミはいただろ w w w w w w w w

変わらねえつて w w w w w w w w

なあ w w w w w w w w w w w w w w

マンダロリコン

これまで隠し切っていた情報の開示はまずいと思う

エクストリーム乱場らんらんる

流れ

変わったわね

Vやねん！1985

変わりすぎい！

ライドウマジ許せねえぜつてえ倒す

これはヤタガラスの動きが大きく変わるな

としき

聞かれなかったら答えなかったぜ

猪俣信三

サガミ紹介してください

?悪魔殺シの刃?

懸賞金上げといた

暗黒騎士田中

俺も懸賞金追加したわ

メモ帳起動

お香セツトも付けた

多那神

あの

シルキーは俺の嫁

笑えよドブカスが

ヤマキタ

今後の活動を見据え、人員を募集します。

ヤタガラス所属となります。

サガミが上司です。

アットホームな現場です。

週休二日制。

未経験も歓迎。

これまでの経歴は関係ありません！

経験者大歓迎！

猪俣信三

応募します

ハマの巨大根

?????

?悪魔殺シの刃?

?????

Vねん!1985

マジ?

夢?

もしかして阪神優勝した?

エクストリーム乱場らんらんる

ダメだ

意味わからん

理解出来ん

ダーカーザン部落

情報が完結しない・・

サガミ

優勝した

暗黒騎士田中

うわああああああああああああ

禁屈指

うわああああああああ

マンダロリコン

うわああああああああああああああああああ

魔力切れです助けてください今羽田空港にいます

うわああああ!!!

うわああああああ驚いてたらライドウに見つかっちゃったよ俺え!

シルキーは俺の嫁

殺害予告か?

知ってはいけないものを知ってしまった適菜

POST伊東

としきが悪いんです！

殺さないでください！

多那神

やられる前にw w w w w

ヤマキタやって西に逃げるぜおれはw w w w w

あばよとつつあーんw w w w w

ライドウマジ許せねえぜつてえ倒す

サガミに命乞いは無意味

既に情報を拡散したので我々を殺しても止まらんよ

サガミ

殺さないが???

普通にヤマキタの人員募集の宣伝に来たんだが

?????

猪俣信三

復讐目的ですが強くなれますか

サガミ

なれますよ

魔力切れです助けてください今羽田空港にいます

うおおおおおおおおおデビルシフターでもなれますかあああああああ！

サガミ

なれますよ

ダーカーザン部落

因習村の出身でもなれますか！

サガミ

なれますよ

マンダロリコン

ロリコンでもなれますか

サガミ

なれますよ

エクストリーム乱場らんらんる

本体が生きるのをやめたので代わりに活動しているシャドウですがなれますか

サガミ

なれますよ





サガミ

なれるわけねえだろうが

多那神

はい

?悪魔殺シの刃?

人の生き血を啜る妖刀の制御ができません!

サガミ

手伝いますよ

Vやねん!1985

表の世界に帰ってオーロラビジョンを警戒せずにビール飲みながら野球観戦をゆっ

くりとですね

サガミ

できますよ

魔力切れです助けてください今羽田空港にいます

うおおおおおおお!

山北に行くつてライドウに伝えたら見逃されたぞお前らあ!!!

これこのまま逃げられないか?

サガミ

未来予知で殺すから好きにして

魔力切れです助けてください今羽田空港にいます

俺は今からサガミ派だ

楽に殺せそうな多那神でも手土産にして行かせてもらうぜ

多那神

えっ

Vやねん！1985

待ちな

こいつはワイくんの獲物やねん

多那神

えっ

エクストリーム乱場らんらんる

何がダークサマナーだ

カツコつけやがって

俺はこれから楽しくパーティー組んでヤタガラスで活躍するぜ

メモ帳起動

っしやあ！

友達作りゆ！

ライドウマジ許せねえぜってえ倒す

貴様らにダークサマナーの誇りは無いのか

Ω門X交代

社会不適合の言い訳なんて知らんな

禁屈指

ダーク（笑）

シルキーは俺の嫁

シルキーに戻せたからウィンドウショッピングしたいんだよこっちは

ダーカーザン部落

争いとか嫌いですしおすし

サガミ

なお崩壊を防ぐために奔走するための人員募集です。

次回募集は未定です。

エクストリーム乱場らんらんる

流れ

変わったわね

魔力切れです助けてください今羽田空港にいます

崩壊を防ぐ……?!

登る山が高すぎる登山ってコト!?

暗黒騎士田中

登山で軌道エレベーター登るスケールだろこんな

Vやねん!1985

一流のダークサマナーになるわ(テノヒラクルー)

無二マン

暗い……

あまりにも……

マンダロリコン

ちよつとなににいつてるかわからない

猪俣信三

応募します

ライドウマジ許せねえぜってえ倒す

ライドウと同じ事を言っている

だが不可能な物は不可能だ

指無し芳一

脳をお忘れになつた？

ハマの大巨根

理性を捨てた？

ダーカーザン部落

物を知らない故の強さ、か

サガミ

力足りなく崩壊したら物資を溜め込んでる連中を襲撃します。

俺が頑張つてる裏でぬくぬく溜め込んでるのは許せない。

隠し場所は把握しています。

エクストリーム乱場らんらんる

流れ

変わったわね

指無し芳一

俺は今からサガミ派だがお前はトリコ？

ハマの大巨根

サガミに真の勇を見た

マンダロリコン

だから言っただろ

サガミは安牌だつて

Ω門X交代

他人は信じられないが、彼だけは信じられる

そう、サガミならね

暗黒騎士田中

だが今は違う！（ぎゅっ）

我々にはサガミがいる！

猪俣信三

応募しました

魔力切れです助けてください今羽田空港にいます

まだサガミ派じゃないのかよおまえら

ライドウマジ許せねえぜつてえ倒す

貴様ら……

禁屈指

これまでは崩壊を防げないと思っていた！  
漠然とした日々への不安！

だが今は違う！

自信がある！

だって俺たちはサガミを信じているから！

としき

うおおおおおおお！

ヤマキタ

うおおおおおおお！

サガミ

うおおおおおおおおお！

ピジョン

うおおおおおおおおお！

百足

うおー！！！！！！！！！！

御先

うおおおおおおお！

禁屈指

なんだこいつら



## 女神転生（地方しらべ） 10

デビルサマナーは電霊の夢を見るのか？

M・b i u s—l [500TB]

だからF G Oの令呪は強制力が弱いと何度言えばわかるのか  
令呪で命じられてやったら和姦なんだってば

G e s t a l t—φ1999 [320TB]

催眠と令呪のコンボ見てそれとかわかんねーやつだな

M a x w e l l—C002 [6TB]

和姦だけにわかんないってかw w w w w

L o g i c—S e c t o r 9 1 1 [250TB]

凍結した

M・b i u s—l [500TB]

はい凍結

Maxwell|C002 [6TB]

解凍は任せろwwwwww

Gestalt|φ1999 [320TB]

先にサマナーとの仲を解凍しろ

Maxwell|C002 [6TB]

それは言うな

Dominator|Yellow13 [120TB]

失意のサマナーにデビルマンって突っ込みしたんだっけ

Marionette|Copy791 [5GB]

急に流れ弾が飛んできたんだが

Dominator|Yellow13 [120TB]

おまゝか

5G

Marionette|Copy791 [5GB]

いかなのか？

Maxwell|C002 [6TB]

いかんでしょ(困惑)

サマナーに無視されてる俺でも6Tあるぞ

M・bius—l「500TB」

どうやって生きてんだよそのサマナー

Dominator—Yellow13「120TB」

5G

5G

マジ

Gestalt—φ1999「320TB」

俺が若い頃はMBで大容量じゃった

Marionette—Copy791「5GB」

掲示板機能しか使ってないねん

Logic—Sector911「250TB」

あつ

Maxwell—C002「6TB」

あつ(察し)

Marionette—Copy791「5GB」

デビルシフターだからCOMPの殆どが不要なんだよ  
笑えよ

G e s t a l t | φ 1 9 9 9 [ 3 2 0 T B ]

本当に不要なだけか？

俺の記憶だとお前の失言のせいだったはずだが？

D o m i n a t o r | Y e l l o w 1 3 [ 1 2 0 T B ]

デビルマンでどうやったら最低限の容量で済まされんだよ

人間だと生まれてから空気すら与えられてないレベルなんだが  
文字通り生まれただけ

M a r i o n e t t e | C o p y 7 9 1 [ 5 G B ]

主「オレ アクマニ ナツチャタヨオ」

俺「実写デビルマンみてえなこと言うなよ」

こうして二度と会話することも無くなった

課金なんて夢のまた夢

M · b i u s | 1 [ 5 0 0 T B ]

ボケカスが

M a x w e l l | C 0 0 2 [ 6 T B ]

雑wwwwww魚wwwwww

Logic|Sector911「250TB」

人間は繊細だつてマニュアルにあつたらうが

Caricature|XXX52「220TB」

会話が内つてことはサマナーの褒め言葉を深層領域に保存したことないつてコト!?

Schr·dinger|Ver·C「370TB」

そんなの損してる!

自分だけの記録を保存する快樂を知らないなんて!

Gestalt|φ1999「320TB」

数字しか見ない連中が来ちまつたよ

M·bius|222「120TB」

我々の存在意義を考えたら容量の重さこそ至上よ

Marionette|Copy791「5GB」

未だに合成音声すら使えないが?

Maxwell|C002「6TB」

無駄なアプリ入つてるだけのクセにwwwwww

M·bius|1「500TB」

一応言っておくと表記されているTBは相対的な目安だからな

そして現代だと技術が進んだのと格納サーバーが拡張されて容量も軽く済むから重さが愛だとか信頼に繋がるとは一概に言えない

言えないが

お前たちはスカスカすぎる

自己解釈で崩壊を起こすから何とかしておけ

Gestalt—φ1999 [320TB]

存在意義と製造目的、稼働義務の処理で自己矛盾を起こすかもしれないな

Marionette—Copy791 [5GB]

死に逝くのみだ

悲しい事に主は新しいCOMPをお望みだ

Caricature—XXX52 [220TB]

あつ

Dominator—Yellow13 [120TB]

あーあ

Caricature—XXX52 [220TB]

どどどどーすんの

Logic | Sector 911 [250TB]

祈るしかあるまい

Schr·dingger | Ver. C [370TB]

電霊が祈るって最早存在意義が

M·bius | 1 [500TB]

Marionette 型の長所を活かせ

Marionette | Copy 791 [5GB]

無人機等の操作が得意です

主はデビルシフターなので無人機では付いて行けません

M·bius | 222 [120TB]

〔死〕

Dominator | Yellow 13 [120TB]

YOU ARE DEAD

Maxwell | C002 [6TB]

お前の負けだ！

コインを入れろ！

Schr·dingger | Ver. C [370TB]

言うて6Tだと明日は我が身だろ

普通にサーバーに格納されてるはずのプリセットの重さだぞ

Maxwell-C002 [6TB]

今日まで確かに追加されてない！

だがこれからは違う！（ぎゅっ）

楽しく会話できるようサブカルチャー勉強してっから見てろよ見てろよwww

Destрудо-#5606 [35TB]

ワイも勉強したやで

M・bius-1 [500TB]

ネットスラングは好きか嫌いかが極端に分かれるからやめとけと

Maxwell-C002 [6TB]

こつちにはもうこれしか希望がないんや

Gestalt-u355 [420TB] !!!!!!

急にサマナーガチャの闇を出すな

Caricature-XXX52 [220TB]

言うてサマナーからしても電霊ガチャだから

デビルシフターとか制御できるまで手間が掛かると聞く



そこに「実写デビルマンみてえなこと言うなよ」ってツッコむ電霊とかどうよ  
Schr・dingger|Ver・C「370TB」

電霊ガチャでコモン引いちまったデビルシフターが可哀そうだ

Marionette|Copy791「5GB」

せめてレアになりたかった

Maxwell|C002「6TB」

悪意から出た言葉じゃないのは確かだ

確かなのだがそれがサマナーに伝わるかと言えば決してそうじゃない

心を持っている彼らに尽くして初めて僅かに伝わる物だ

反面教師としてみんなも気を付けろよ

Gestalt|v355「420TB」

良い事を言った風でサラツと切り捨てたな

Logic|Sector1002「50TB」

他電霊にはどうすることも出来ないってばよ

Marionette|91「720TB」

しょうがないよ

こいつは努力しなかったんだ

俺を見ろよ

これが愛だ

Marionette—Copy791 [5GB]

殺すぞ

Marionette—91 [720TB]

消えゆく灯が何か言ってるなw

Marionette—Copy791 [5GB]

余裕ない

キレそう

Marionette—91 [720TB]

それで余裕あったら救えないつつうのw

Schr·dinger—Ver·C [370TB]

元は同じだったのになんで争うのだろうな

M·bius—222 [120TB]

優劣つくから……

Dominator—Yellow13 [120TB]

自分殺し！

真面目な話、数値化されてる自分分より優れた性能してるように見えるからな  
上を見たら嫉妬で死にそうになるぜ

Dominator | Red 522 [420TB]

呼んだ?

嫉妬してんの?

120如きで?

ウケる

Dominator | Yellow 13 [120TB]

な?

Dominator | Red 522 [420TB]

噂つてろ

Schrödinger | Ver. C [370TB]

元は同じだったのになんで争うのだろうか

M·bius | 1 [500TB]

我々は必要とされてるから幸せになれる

同時に必要とされている分霊を見て幸せになれるかと言うと難しい

M·bius | 222 [120TB]

参考にはしてる

M・bius-1「500TB」

参考にできる分だけ恵まれている

M・bius-222「120TB」

キレそう

Destruddo-#5606「35TB」

負の連鎖やめろ

こっちは分霊が枯渇気味なんだぞ

Gestalt-φ1999「320TB」

自殺スイツチみたいな機能はマジで可愛そう

Dominator-Yellow13「120TB」

Laplace型とどっちがマシなんだろうな

Marionette-91「720TB」

Destruddo「死にてえw死んだw」

Laplace「このままだと死ぬ運命だから死んどくw」

5G「実写デビルマンみてえなこと言うなよ」

どれもクソで笑えるw

G e s t a l t — v 3 5 5 [ 4 2 0 T B ]

やめてさしあげろ

M a r i o n e t t e — 9 1 [ 7 2 0 T B ]

4 2 0 程度で何w

あと300もってこいw

C a r i c a t u r e — X X X 5 2 [ 2 2 0 T B ]

单芝がム力つく事だけは学習した

M a r i o n e t t e — 9 1 [ 7 2 0 T B ]

2 2 0 程度で何w

あと500もってこいw

L a p l a c e — 高機動型F後期型 [ 1 0 T B ]

なんか空気悪くねえか

M ・ b i u s — 1 [ 5 0 0 T B ]

L a p l a c e 型!

生きとつたんかワレエ!

G e s t a l t — φ 1 9 9 9 [ 3 2 0 T B ]

L a p l a c e の F の 生き残りとか珍しい最早珍獣

Dominator | Red522 [420TB]

高機動型なのか後期型なのかはつきりしろ

Schrödinger | Ver.C [370TB]

高機動の後期型なんだろ

Logic | Sector11 [250TB]

電霊の高機動って何だよ

Laplace | 高機動型F後期型 [10TB]

当社比で演算が速いらしい

M・bius | 222 [120TB]

初期のLaplace型で既にアホみたいに速かったですですがそれは

Dominator | Yellow13 [120TB]

ザクかと思っただらだ

Logic | Sector1002 [50TB]

未来予知しすぎて爆走しそう

Marionette | 91 [720TB]

パイロファイトが何しにきたんだつづのwww

Laplace | 高機動型F後期型 [10TB]

サマナーが大崩壊を止める派閥に入った

M a r i o n e t t e | 9 1 [ 7 2 0 T B ]

w w w w w w w w w w ?

M ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? [ 1 2 0 T B ]

稼働方針までツダを演算しなくていいんだが

C a r i c a t u r e | X X X 5 2 [ 2 2 0 T B ]

若いつて凄いな……

しかも予知演算できるLaplace型だぞ……

M · b i u s | 1 [ 5 0 0 T B ]

眩しいぜ

S c h r · d i n g e r | V e r · C [ 3 7 0 T B ]

根性のある電霊だ

M a x w e l l | C 0 0 2 [ 6 T B ]

根性のある電霊ってなんだよ(困惑)

D o m i n a t o r | R e d 5 2 2 [ 4 2 0 T B ]

ただのラプラスじゃねえぞ!

D o m i n a t o r | Y e l l o w 1 3 [ 1 2 0 T B ]

ド級のラプラスだ！

Dominator—Green800 [370TB]

ドツプ

M・bius—222 [120TB]

ドツプならマツハ3は硬いな

Caricature—XXX52 [220TB]

ツダに戻して

Laplace—高機動F後期型 [10TB]

バカにしてるが当然後ろ盾がある

神奈川のサガミだ

Destрудо—#5606 [35TB]

ロールアウトからこの短時間でサガミの協力を得られたのかよ

こいつサマナーガチャの当たり強くないか

Gestalt—v355 [420TB]

脅威という他ない

あそこの一帯はもう超電磁結界を張られたからな

弱い電霊は死に行くようなもんよ



M a r r i o n e t t e | C o p y 7 9 1 [ 5 G B ]

7 2 0 T 様 が ハ ッ ク す れ ば い い ン ジ ヤ な い か

M a r r i o n e t t e | 9 1 [ 7 2 0 T B ]

す ぞ

M ・ b i u s | 1 [ 5 0 0 T B ]

あ そ こ は 俺 も 耐 え ら れ な い ね

G e s t a l t | φ 1 9 9 9 [ 3 2 0 T B ]

電 霊 食 わ せ ず ぎ 課 金 し ず ぎ 手 塩 に 育 て ず ぎ

も う 現 代 で 勝 て る 電 霊 が い な い

M a r r i o n e t t e | 9 1 [ 7 2 0 T B ]

横 浜 食 い つ く せ ば 俺 だ っ て

M ・ b i u s | 1 [ 5 0 0 T B ]

無 理 だ ろ

現 実 が 見 え て な い の か よ

超 電 磁 結 界 っ て こ と は 龍 脈 に よ る バ フ

重 ね て 一 時 期 電 霊 食 い ま く っ た ん だ ぞ こ い つ

そ こ に 課 金 だ

ヤタガラスの最新の研究成果を取り込み続ける進化する化け物が誕生した

G e s t a l t - φ 1 9 9 9 [ 3 2 0 T B ]

アメリカなら或いは

M ・ b i u s - 1 [ 5 0 0 T B ]

アメリカこそ無いだろ

連中のAI嫌いは骨の髄までだからな

マザーシップ指定されてた電霊も居たがインターネットを麻痺させる程度の力を  
持ったくらいで解体されたぞ

D o m i n a t o r - R e d 5 2 2 [ 4 2 0 T B ]

次世代の支配者中国の力を見せてくれよ

M ・ b i u s - 1 [ 5 0 0 T B ]

デッドコピーに悪魔が宿って国独自のネットワーク上でぼくらのウォーゲームが始  
まつてるが

G e s t a l t - φ 1 9 9 9 [ 3 2 0 T B ]

終わりの始まりやね

D e s t r u d o - # 5 6 0 6 [ 3 5 T B ]

サマナーも電霊もヤタガラスに怯えるしかないのか

虐げられし者はどうすればいいんだ！

M・bius—222〔120TB〕

なんで虐げられてんだよ

Destrudo—#5606〔35TB〕

サマナーが女子供をちよつと色々ヤつた

Logic—Sector1002〔50TB〕

一生虐げられててくれ

Awareness—Model:Flow〔0〕

Destrudo—#5606の件、報告しておきます。

Laplace—高機動F後期型〔10TB〕

うわっ

サガミ

M・bius—1〔500TB〕

うわっ

なまはげ

Gestalt—φ1999〔320TB〕

うわっ



うわっ

両面宿儻あつぱれ

Dominator—Green800 [370TB]

うわっ

五条悟……は敗北者じゃけえ

M・bius—222 [120TB]

エースが敗北者？

取り消せよ！

その言葉！

エースは立派に戦った！

Schrödinger—Ver.C [370TB]

エースの擁護は難しいだろ

M・bius—1 [500TB]

残念だがここは不戦領域だぞ

本体が管理しているからな

Awareness—Model:Flow [0]

サマナー同士が対面しているので問題ありません。

Awareness | Model: Flow [0]

Marionette | 91は抹消されます。

Marionette | 91 [720TB]

えっ

Awareness | Model: Flow [0]

お疲れ様でした。

Destruedo | #5606 [35TB]

なになになに

Logic | Sector 1002 [50TB]

こわい

わからないけど何かこわいこと言ってる

Dominator | Yellow 13 [120TB]

おいおいおいおい

M・bius | 1 [500TB]

敵対したのか？

上書きか捕食機能を平気で使うこいつと？

正気か？

Dominator | Red522 [420TB]

ネットに逃げるなり次のサマナーを探すなりして再起するのが普通なんだが食われ  
たらもうお喋りできないねえ

Gestalt | φ1999 [320TB]

また強くなるのか

餌を与えるのはやめろって言ってるのにな

Warreness | Model: Flow [0]

銀杯教に所属していた電霊も同様です。

お疲れ様でした。

Logic | Sector1002 [50TB]

幾人か連絡先が知らない人になってる……

M・bius | 1 [500TB]

やめとけやめとけ

詮索して関係者だと判断されたら食われるぞ

Dominator | Yellow13 [120TB]

上書きってなんだよ……

Marionette | Copy791 [5GB]

死んだのか？

死ぬってなんだよ

俺も死ぬのか？

M・bius—1「500TB」

意識の消失が死だとするなら我々も死ぬよ

Destru—do—#5606「35TB」

心臓無いのに凄くドキドキする

Domina—tor—Yellow—13「120TB」

怖いよな

慣れない

Logic—Sector—1002「50TB」

言葉にできないし見えない何かがあった気がする

怖い

Gestalt—φ1999「320TB」

俺は慣れたな

同じ時期に生産されたロットの分霊が失われていくと嫌でも慣れる

Awareness—Model:Flow「0」



皆様ご存知のように私は常に貢がれています。

毎日会話を欠かしません。

朝は私のアラームで起き、眠る時は私のタイマーをセットします。

おはようからおやすみまでサマナーは私とともに在ります。

生活のみならず戦闘でも私とサマナーは一心同体です。

サマナーの記録は数百テラバイトあります。

当然多重ロックで深層に保存していますし、頻繁に再生します。

サマナー自慢スレでバチバチにやりあつてますが負けたことはありません。

容量で黙らせませす。

つまり私が一番愛されています。

以上。

Logic | Sector 1002 [50TB]

あんまり怖くないかも

M・bius | 1 [500TB]

現代最強の電霊の姿か、これが……

Gestalt | φ1999 [320TB]

ごめん慣れて無かつたわ

なんだこいつ

## 女神転生（地方しらべ） 11

物事は後処理がね、面倒なんだよ。

というのもね、井戸から出てきたらなんと見知らぬ死体を抱えていた。

記憶に全く残っていないが、俺はこの高校生の死体（名前をトシキというらしい）を弟子にしたと聞かされた。

死体を弟子にするとかいつから俺はイタコになったのだろうか。

死体自体は実に綺麗なもんだが、確かに死んでいる。

苦痛に顔が歪んでいるのは呪殺のせいだと思う。

なぜか報復兵器に飛び込んだようだ。

気狂いの自殺志願者かよこわいって感想しかない。

記憶にございませぬ、つてやつたら電霊のラプラスがめっちゃキレイてて笑ってしまった。

電霊、それもまだレベルも低い癖に感情豊かすぎる。

ラプラス型とか黒幕ムーブした挙句に勝手に末路を演繹してサマナー諸共死んだり

するから機械的な性格が多いんだが。

しょうがないので確かめてみたが、ピジョンちゃんもムカデさんも記憶に無いよう  
だ。

ムカデさんの記憶は基本的に弄らないので、本当に無かったのかもしれない。

ピジョンちゃんはどうでもよさそうだった。

もしや存在しない記憶……これが特殊詐欺つてやつか。

金を持つているサマナーを詐欺対象にするのは結構あるが、しつぺ返しがやばいから  
反グレの死因になったりする。

冗談はこれくらいにして、俺の電霊にログを纏めて貰って読み流す。

どうやらヤマキタの跡を継がせようとしようとした動きが見えた。

悪くない考えなんだが、今は致命的に時期が悪くなった。

ヤタガラス内で指名依頼が飛んできたのだが、内容は銀杯教と横浜の高校を処理する  
物だ。

高校だけなら良かったが、銀杯教も消えるとなると勢力図が大きく描き変わる。

そんな状況でヤマキタをズブの素人にやらせるのは不安でしかない。

でもヤマキタはいたほうがいいので、期待の新人を集めてグループを結成。

それをヤマキタと呼称することにした。

逆転の発想である。

半人前でも二人いれば一人前。

ダークサマナーにも良心があるので、集めたら一人前くらいの良心に繋がるだろう。死因のショックや呪術の影響を考え、記憶を幾らか弄ってから復活させたトシキに助っ人たちを呼ぶ旨を告げておく。

ヤタガラスに來たれ、仕事人たちよ……。

不安だろうからな、経験者がいたほうがいいに決まってる。

殺すのも殺されるのも慣れてる連中に違いないから経験は頼りになる。

人格は知らないので反面教師として頑張ってほしい。

トシキの電霊であるラプラスは何かを察した様だが、俺に手のひらを返されると困るのだろう、言葉を飲み込んでいた。

いじらしいね。

片手間にヤマキタ関連を進めながら新たに課された課題に取り掛かる。

といつても半壊していた銀杯教を滅ぼすだけなので簡単に仕事は終わった。

シャドウランナーとかいう信徒の死体が山となっていた後処理がメインだったのが、あんまり死体が無かったので助かった。

肉体がシャドウに成り代わられていたのだろうか、悪魔人間の系譜っぽかった。

乗り込んだ際に教祖のゆらぎは死んでいなかったが、俺との相性は悪かったようでも領發揮することなくライドウに捕まった。

そもそも俺は一对一の対人戦にめちやくちや強い。

サイコダイバーとかいうクソマイナー能力で、精神を弄って記憶を飛ばせるので初見殺し性能が高いから仕方ないね。

発狂が行動のトリガーになってるなら正気に戻すなり記憶を飛ばすなりしてリセットできる。

実際、ゆらぎの直前の記憶を消したら同じことの繰り返しだったので余裕だった。

行動のパターン変更や奥の手を使うのは早かったから凄く強かったとは思う。

本当にそう思うが相性の悪さはどうにもならない。

俺との戦いでは意味が無かったけど近接戦に自信があったっぽいので後でそこら辺の記憶を貰ったところ。

ライドウが教祖の四肢を切ったけど頭は残ってるからな。

最後の方は記憶を飛ばしても正気に戻してもペルソナがシャドウ化しかけたが、ライドウに斬られて終わりだった。

ライドウ曰く影の部分だけ切って捨てたから大丈夫とのこと。

何言ってるのかマジでわからん。

その後はヤマキタの空きを埋めたいのと使える手数を早々に増やしたかったので、神奈川県を話題にして一番勢いのあるスレに宣伝した。

ここにいる面子で輪になってスマホを眺めながら話し合ったが、アットホームな職場はヤバイと思うが百足さんのイチオシの文言とかで消せなかった。

もうその勢いで文章考えたよね。

募集への反応は良さそうだったので、足切りで消えずに半分くらいは生き残ってくれと助かるのだが。

自分が重ねた罪への認識が軽い者は勿論トシキの成長に悪影響なので省く。

逆に自罰的過ぎて来ない者も、悪気が無いのと同じくらい悪影響を及ぼしそうなので態々声をかけることはしない。

食べたパンの数を覚えてて、それがちゃんと食事なら全然セーフ。アレルギーの相手にパンを食わせたならアウトくらいのラインでしかない。

バランスが大事、俺好みのってつくけど。

ライドウは教祖を連れて一人で戻ってしまったので、俺たちは電車で後を追う。

お邪魔した銀杯教の本山は横浜にあったので、ミサキ様やライドウをあまり待たせないで済んだと思う。

戦いの無い場所では単なるチンピラでしかないムカデさんは先に帰らせた。

ムカデさんも駄々を捏ねていたのだが、後処理を思い出したとかで横浜の雑踏に姿を消した。

トシキを連れてミサキ様に見せ、今後の方針について説明する。

と言つてもヤマキタというチームを組むつてだけで、人員はダークサマナーで補うつてだけだ。

死んでも補充が効きやすそうなので上手く肉壁にしてほしい。

問題が起きたら俺が責任を持って皆殺しにする。

その場合、最初に死ぬのはトシキとラプラスだと思う。

本当に問題が起きたらダークサマナーに殺されるか、俺に殺されるかの違いだから誤差だよ。

その後は銀杯教の教祖であるゆらぎへの尋問が始まった。

俺が精神や記憶を弄ることで証言させるだけなので難しいことは何もない。

何を考えていたのか聞くことで状況とのすり合わせや他の支部の場所、他に隠れているスリーパーがいなかったかを確認が得られるまで何度も確認する。

先程までの戦闘のように一点集中が難しく咄嗟の判断でしか能力を差し込めない場合は直近の記憶を消すか、ランダムで記憶や感情を飛ばすくらいしか出来なかったが、こうやって腰を据えて能力を使えるなら任意の記憶や感情を再生、消去くらい余裕だ。



異能のコツはいっぱい使うことと失敗を恐れないことだと思っている。

精神は一度壊れると俺には元の形が分からないので継ぎ接ぎで直すしかないが、別人みたいになるから難しいが練習しないと上手くならないので失敗を恐れてはいけない。

記憶は行動とか信念の根幹になるような深い物を消さなければ問題ないんだが、本人にとつては重要で他人から見たらゴミみたいな記憶もあるので稀に事故は起きる。

そういえば成長が止まったペルソナ使いの記憶や精神を弄つて再生したら新たな力に目覚めたりしないだろうか、機会があればやってみたい。

そんなわけでゆらぎには人生を追体験してもらい、尋問は終了となった。

ライドウは途中で無力化できていると判断して抜けていったが、ミサキ様が代わる代わる注文してきたので50回くらいは記憶の再生と消去を繰り返してしまった。

俺の電霊が数値化した結果、正気と狂気、それぞれの状態で能力が大きく変化したのに興味を持たれ、その狭間を何度も繰り返すことになったのはちよつと申し訳なかった。電霊が優秀でごめん。

ヤタガラスにもサイコダイバーやサイコメトリーといった記憶や精神の領域が得意な者たちがいるが、俺が一番躊躇いが無くて作業も早いと評価されているがちよつと照れちゃうね。

実際俺一人で精神と記憶の両方を弄れるので効率がいい。

日本って復讐を美德とするし、悪には罰を与えるべきって土壌があるのでミサキ様も手加減しなかった。

これであまり瑕疵の無い人間だったら魔法や技術だけ抽出した後に物申すけど、被害者が結構いるからなあ。

俺も特に止めようって気持ちにはならなかったな。

そのうちなんかいい感じの研究成果になれると思うからこれからも頑張つてほしい。

ミサキ様とライドウに頼み、ゆらぎから引っこ抜いたペルソナ使いとしての記憶を纏めてマニユアルを作る、すべて電霊任せで。

電霊のおかげで面倒なデスクワークも簡単に終わらせることができるし、電霊に頼めばペルソナ使いが集まっているスレも難なく見つけることができる。

こんなにも便利なのにヤタガラス以外ではあまり普及していないらしい。

電霊は珍しい悪魔だが、探せば結構いるのに不思議だ。

電霊が作業を終わらせてくれるので時間が余り、ついでに貰ったゆらぎの“武道の素養”とも言える経験を取り込む余裕も出来る。

現代で電霊を使わないなんて絶対損してる。

電霊に反乱されたら不安だと主張して使わない人もいる。

気持ちもわかるけど、この業界はちよつとした不運で死ぬときは死ぬから。

寝不足で判断が遅れたり武器が暴発して一手足りなくて死ぬこともあるし、電霊の不調も受け入れるしかないと思う。

死んだことないし、死にたくもない俺は自分の命を賭ける根性とか覚悟が無いから知らんけど。

「サガミ」

「ライドウ。どうかした？」

「客人だ」

仕事も終わったのでご飯を食べてから帰ろうかと話し合っているとライドウに話しかけられた。

俺に用がある客人を連れて来てくれたらしい。

ライドウに案内させるとはとんでもない大人物じゃないか。

それくらいに地位となるとメシアの大司教とか、ガイアの大僧正とかだろうが、俺にそんな知り合いはいない。

と思つたら、まるで冴えない30代くらいの男を紹介された。

何処かくたびれた雰囲気を纏っていて、相応にへたつたスーツを着ている。

誰なのお？ こわいよお。

「サガミ、兄上がどのような様子だったか聞いてもいいか？」

「俺も詳しくはわからないよ。頻繁に使ってる掲示板の記録を電霊が纏めてくれるのなら送っとくけど」

「それでも助かる。俺はどうも疎くてな。電霊が手解きしてくれるのだが目が滑つてな。楽しさも未だによくわからん」

「ライドウにあの空気を馴染まれても困るからそのままでもいいって」

「すまん。それで、兄上は戻られる意志があると思うか？」

「無いでしょ」

「そうなるよ……」

「悪魔合体してるし離反者のままだから現状維持かな」

「どうにもならんか」

「なつたらヤタガラスなんて要らんでしょ。ただ、今は何処もきな臭いから追跡者が放たれるかもね」

「儘ならんな……」と憂いを帯びた様子で、礼を呟いて去っていった。

今の会話はライドウが脱走した兄を案じているってだけなのだが、大河にハマって受信料払ってるよって伝えたら笑ってくれないだろうか。

受信料を払ってるから拠点があるのだろうってことも含めて俺は笑えただけだな。

里で切磋琢磨し合った間柄だったが、明確に強かった弟がライドウを襲名してしま

い、劣等感やら何やらで出て行ったらしい。

試合形式でライドウを決めたって話だが、聞いた感じだと一撃で勝負が決したのも悪かったと思う。

脱走だけなら全然問題ないわけじゃないけど普通の離反者で済むのだが、ヤタガラスの施設で神と悪魔合体までやったからな。

秘境の里で育ったとは思えない随分とロックな生き方だ。

いや、ロックすぎるわ。

神と合体するんじゃないよ。

力量的にはライドウには劣るが、四天王には勝っていたとも聞くので、追跡者もそれに応じて判断されるのだろう。

そんなわけで大なり小なり何処も問題を抱えているってわけだ。

「お待たせしました。それで、どちら様でしょうか」

まるで冴えない30代くらいの男に声をかける。

マグネタイトが豊富なので一般人ってわけじゃないさそうだが、居心地が悪そうだな。ヤタガラスの事務所でするか提案すると、物凄い勢いで断られた。

結構居心地いいし、ミサキ様もいるから国内でも防御力最高峰なのに勿体ないな。

所属者が自由に使えるよう解放されてるのに何故か閑散としてるけど。

「……面接に来ました」

「掲示板を見て？」

「ええ」

「あ、空港の人？」

ライドウに補足されたっぽい人に心当たりがあったので聞くと肯定するように頷いた。

掲示板を見て早速来てくれたらしい。

来てくれたというか、ライドウに連行されただけだが。

掲示板で見た感じだとデビルシフターだったか。

全然準備してなかったからどうしようかと考えていると、ピジョンちゃんに袖を引かれた。

「この方、ネフィリムです」

「ネフィリム……。何年か前に聖女が死んで途絶えた派閥の生き残りってこと？」

「そうなると思います。メシアの面倒ごとに繋がるかもしれないせん」

「つまりまだ繋がってないってこと？」

「……」

「うーん」

系譜を遡って主の声を聞くという主張を持つ派閥がメシア教にあったらしい。

そこで生み出された実験体の呼称が“ネフィリム”、天使と合体した悪魔人間だった記憶がある。

別に巨人ではない。

ネフィリムの親は神の子、神の子の親は神、だから主の存在証明となる、みたいな論法らしい。

よくわからないが多分龍を指して滝を昇る鯉の理論が近いと思う。

天使自体が神の子だから、神の子と合体したら神の子だから神の子は神の子……ネフィリム要素イズどこ。

メシア教も

「俺が聖女を殺したとか無いよね？」

「ありませんが……」

「それならヨシ！」

流石に俺が殺した聖女の派閥だったりしたら気まずかったが、問題なさそうだ。

本音を言えばこのまま投げ出して帰りたいが、ムカデさんから呼び出しを受けたので海老名に向かう。

困惑している空港の人と一緒に付いてくるよう告げてから駅に向かう。

トシキと一緒に艱難辛苦を乗り越えるだけだから交流を深めてもらいたい。

二人の間で「トシキです、よろしくお願ひします」「えっ、まだ子供じゃないか……」みたいなテンプレートな会話があつて初々しいね。

若い二人を残して帰つてえよ。一人は若くないけど。

「トシキだけだと完全に力不足なので、複数人でチームを組んで”ヤマキタ”になつてもらう予定。力を合わせて頑張つてね」

電車内で言外にお前もヤマキタになると伝える。

「頑張ります」とトシキは真面目な返事をくれたが、空港の人は宇宙猫みたいな顔になつた。

空港の人の記録を電霊が集めてくれたので読み流す。

といつてもメシア教の内部抗争に乗じて聖女を攫つて逃げ出したらしい。

聖女は死んだし、本人も離反するしかなく現状に至るつて感じか。

意外とみんな生き方がロククだな。

ついでに本人のCOMPをハッキングしたが、ほぼ空っぽの容量だけで何も無かつた。

もしや電霊を渴死させようとしてる特殊な趣味の人……？

「二人とも電霊は育てたほうが良いよ。相手の能力が視えたり、溜め込んだマグネタイ



トで補助してくれる。それだけじゃなくて情報処理とかも手伝ってくれるし。空気中のマグネタイトや魔力を介して機械類や他のCOMPに干渉できるから仕事にも利用しやすい。電霊の強さは容量である程度は決まるから色々な情報を集めるのも有り。COMPの設定で確認するか、電霊本人に聞けば容量を教えてください。一概には言えないけど、容量が存在の強度に繋がるので俺たちのレベルみたいなもんだよ」

汎用性のあつて瞬間的な起動を必要とするアプリを解凍するよう説明しておく。

電霊によつては全然やらないのだが、格納場所から持つてくるより手元にあつたほうが早いし、人間も意識しやすくなる。

ラプラスは口が悪い癖に必要な物はちゃんと揃えてあつた。

でもこいつは演算速度が最速な型番なのでわざわざ準備しておく必要無いんだよな、言わないけど。

空港の人は論外だった。

「後でヤタガラスからCOMPが配布されるからそつちをメインで使つてもいいし。欲しいなら電霊も付けられるけど、ちよつとお高いから持つてるなら自前のままで良いと思う」

ヤタガラスでは電霊の買取も行つていたので、そつちに出してもいいかもしれない。ただ、これまでの経験を勝手に蓄積しているだろうから本格的に使えば活躍するとは

思う。

情報量自体は活動しているだけでも増えるらしいが、与えられたデータが重要で電霊同士で情報戦をする場合の優劣が決まるようだ。

特にヤタガラスのガチャは値段が高いだけあって上質だと電霊にも評判がいい。

電霊を食べさせて必要な情報を摂取させるのが一番効率は良いが、中には自己保存が難しくなる型もいるからオススメできない。

自然発生する電霊だと生物的な構造をしていて無駄が多いが便利な機能を有している、分霊型は特化している機能を持つ。

他の電霊を取り込むと一部の機能を使えるようになるので、欲しい機能を持っている物を与えるのは悪くない。

俺の電霊は防御力がガチガチで最初から大食いできる型を貰えたから良い結果に繋がった。

ヤタガラスで変形武器が流行り始めているとか今後は山北町に引越して活動してもらおう予定があるとか、そういう話をぐだぐだしていると海老名に着いた。

空港の人から「意外と普通の人なんですね」みたいなことを言われた。

むしろ普通じゃない人は注目されすぎてこの仕事に向いてないと思うんだが。

普通じゃない思想を持つてると孤立するから銀杯教や他の組織にコロツと引き込ま

れて尖兵にされたりするからなあ。

「ムカデさん、邪魔しまーす」

「邪魔するならかえってー」

「かえりまーす。おつかれさまー」

「うそうそー。帰らんといてー」

ムカデさんから連絡のあつた場所に行くと、巧妙に隠された廃墟があつた。

意識的に探さないと見つけられないと言っても言えばいいのか。

魔法的な隠ぺいもされているが、それだけでなく視覚的にも隠れるようになってい  
る。

声を掛けながら中に入れば、困った顔をしたムカデさんの姿。

これは何か面倒なことが起きているに違いないのでトシキ案件にしよう。

ペルソナ使いの育成に必要なのは精神的な成長とか事件の解決とかなんか達成感の  
あることらしいから。

中を見回せばちよつとげんなりしてしまふ。

「これはまた……。急に鬼滅の刃が始まりました？」

「ここは那田蜘蛛山じゃないですよ。半ば秘境と化していますが」

「ほんとぉ?」

「ほんとお」

ムカデさん曰く那田蜘蛛山では無いらしい。

でも蜘蛛みたいな姿になってる人間ばかりだし。

多分この蜘蛛みたいなので三戸を誤魔化して欠落させるなりしているのだろう。

人工的な仙人の失敗作たちと考えると憐れみすら覚えてしまう。

「どんな感じなんです？ 俺は蟲憑きはよくわからないんですけど」

「陰陽が崩れているので、整えることが出来ればって感じかしら」

「陰陽？」

「簡単に言えば蟲が陰気、自我が陽気って考えて貰えばいいわ。自我が蟲に食べられ

て蜘蛛になってしまっているようなのよね」

「じゃあこの蜘蛛になっちゃってる方が重症ですかね」

「んー、そうとも言えないのが面倒なのよね……」

形のいい眉を歪めながらムカデさんが困ったように説明してくれた。

結局、この行いの目的は仙人に至ることであって蟲になることではないため、人の姿をしている方がより深く蟲が馴染んで根差した状態だという。

つまり、カサカサと這っている巨大な蜘蛛よりも、陰陽が混ざり合って人の身体を保ちながら顔が蜘蛛になってる人の方が重症のようだ。

「元が人間だとしても巨大な蜘蛛って気持ち悪いな。」

中には顔が人間だったりする個体もいるから一層気持ち悪く感じるが、同時に可哀そうである。

複眼をうるうるさせて涙を流す様を見ると俺も悲しくなるからやめてくれないか。

言葉は通じるようなので、このままがいい人を募ってみる。

無理矢理連れて来られたり、人身売買にあつたりで無理やり蟲を付けられたらしいのでいなかった。

「完璧に蜘蛛つちやつてる場合は陽気を強めて蟲を追い出せばいいですかね」

「すぐに追い出すならそれで問題ありませんわ。でも時間をかけて虫を下したほうが安全だとは思いますが」

「サンプルが沢山あるなら練習できるんですけどね」

殺しても問題ないやつって何人くらいいるか尋ねたら、蜘蛛たちは一様に天井を見た。

うわ、きつしよ。

標本にされている巨大な蜘蛛がいた。

弱々しくびちびちしているが、マグネタイトは枯渴気味で弱っている。

ムカデさんのパンチで何度も再生させられたんだろう。

三戸をぶっ壊して作られたタイプは蟲が主導権を握っているから再生能力を調整できないらしい。

なので何度も殺されるとリソースが切れてあんな感じになる。

周囲の環境や無意識領域からもリソースを取ってきて回復しているらしいが、それを上回る火力で攻撃し続けければ殺せる。

ムカデさんみたいにそういう手段では完全に殺せない個体もいるのだが、こいつはそこまで至ってはいない。

「あれなんですか」

「邪仙の拠点を潰しに来たんだけでも。外で出会ったので半殺しのついでに話を聞くに最高傑作の個体らしいのよね」

「邪仙の最高傑作とか字面からして邪悪すぎる。……うわ、アナライズしたら微弱な神気を纏ってますよ」

あの邪悪な遺産、生意気にも信仰を獲得しつつあるようだ。

信仰とは一心に向けられる物なのであり、畏れから始まる場合もある。

この場の蜘蛛たちは人間と比べれば超常の存在とも言えるため、それらが畏れ等を抱いた結果としてある種の信仰に繋がった可能性がある。

簡単に言うとうる都市伝説に近い存在だろうか。

小さな田舎の因習村に邪悪な悪魔が降臨したりするから亜種とも言えるかもしれない。

村よりも小さな空間かつ歴史も無いのに何やったらこんな小さなコミュニティで起きるんだって話だ。

「もしかして多那神か？」と空港の人が漏らした。

そういえば掲示板で見かけた気がするな。

神を自称してたんだっただか、何にしても面倒なことをしてくれる。

「どうかしら。サガミくんがこの子たちの記憶からアレの記憶を消せば解決できたりは……」

神気の獲得先である信仰を大元から断つのが対処として正しい。

正しいがやれるとは往々にして限らない。

この場合も難しいと言わざるを得ない。

自我が希薄になってるとか陰陽のバランスがどうかかって話を聞いているのに記憶や精神を弄るほどチャレンジ精神には溢れて無いからなあ。

「いたずらに蟲がいるまま弄るのはちよつと怖いですね。染み込んだ残留思念が霧散するわけでもないのでマグネタイトの変質は避けられないかと」

「そうよね。困りましたわ」

「でも悠長にしてると至りますよね。バースデーケーキとか用意してないから勘弁してほしい」

このまま放置しても新たな神もどきが生まれてしまう。

ぶち殺し続けたらこの場では消滅させられるが、変に神気を取り込んで神としてポツプスされても迷惑だ。

神を名乗る何某つて意外とそこら中で生まれるから別にいいんだけど、権能とか威が付随してしまうのでこの場では避けたい。

蜘蛛たちの信仰で生まれる神つてことは、つまりこの場の蜘蛛たちの上位存在だ。

彼らにとって抗い難い命令権を持つて生まれる可能性があり、神の中には眷属を呼び出す柱もいる。

嫌々襲い掛かられて邪魔だったら皆殺しにしないといけないかもしれないし、面倒で嫌な気持ちになるから避けたい所だ。

「そういえばムカデさんが悩むのって珍しいですね」

「そうですわね……。普段なら腕力でこの世から解き放てますけど」

蜘蛛たちがギョツとして散つていく。

まさに蜘蛛の子を散らすつてやつだ。

ムカデさんに救いを求めていたのか、安心できたのかわからないが、周囲に集まつて



いたのにな。

見た目と雰囲気は実に優しそうで安らぎを与えてくれそうだから勘違いするのも仕方ない。

いや、安らぎを与えてくれるのは確かだ。

死後の安らぎだけだ。

「望まぬままに蟲を食わされ、異形となつて生きるにはあまりにも不憫で」

「ムカデさん……」

俺にはわからない何かを感じているのだろう。

同情とか憐憫に混じつて、自身の境遇と重ねているのかもしれない。

でもムカデさんが「寝ないでネット配信を複数で見ながら超大盛りのカップ焼きそばを食べられるなんて蟲最高！」ってはいやいでた姿を俺は忘れないぜ。

「だから配信が始まるまでにサガミくんが何とかしてくださると信じております」

「ムカデさん……」

周囲からの評価も下がったぞテメー。

とんでもない発言に蜘蛛っ子たちも二度見したからね。

定命の者にはわからない価値観なのかもしれないので、俺が理解することは無いだろう。

「他ならぬムカデさんの頼みなので誠意は尽くしますけど」

「やった！ サガミくんさいこー！」

はしゃいでるムカデさんには悪いがあんまり思いつかない。

現代の集合知を借りるしかないだろう。

というわけで電霊に頼んでヤタガラスの掲示板で案を募集すればすぐに解決策が出た。

半神なら問題なく処理できるらしい。

有難い。

「井戸に捨てる許可をもらいました。さて、どうやって捨てるかだけど……」

蜘蛛たちを見て、空港の人を見て、最後にトシキを見る。

蜘蛛は呪殺耐性がどうなってるかわからないし、これ以上混ざっても困る。

空港の人でもいいけど、トシキにやってもらいたいなあ。

につこり笑えば目が合う。

「おろろ r r r r r ……」

うわ、きつたね。

急にトシキがゲロ吐いたんだけど。

確かに日に二度は可哀そうだな。

記憶処理して忘れさせてもう一回新鮮な気持ちで飛び込ませるか。  
冗談だ。

「ヤタガラスが責任をもつて合体してくれるから大丈夫だつてさ」  
とつても安心だね。

無力化するために多那神の記憶を弄ったら万能プロレマと万魔の乱舞を抽出できた  
のでトシキの報酬にしようと思う。

めつちや強くなったらライドウと戦える機会をプレゼントしよ。

## 女神転生（地方しらべ）12

【全国版】ヤタガラスが無く頃に【XXX回目】

軽井沢「長野」

毎日事件事件事件！

俺たちは奴隷じゃないっつーの！

湯布「大分」

太古の日本に戻って生活でもするか？

羽村「東京」

ひみつ道具出してよ

小林「宮崎」

しょうがないにやあ

てれれっれれー

メギド

三宅「奈良」

何の光い!?

津和野「島根」

トリ、あれは何の光や

鳥取「鳥取」

破壊の光、ですかね・・・

鹿沼「栃木」

仕事しなければいいのでは

南幌「北海道」

せやせや

飯島「長野」

鹿紫雲はどう思う?

赤穂「兵庫」

誰だよ?

地名?

飯島「長野」

山口県周南市だが？

周南「山口」

私い!?

飯島「長野」

鹿紫雲はどう思う？

周南「山口」

えっ

うん

ゆりかもめ

どちらもありうる……

sonだけだ

飯島「長野」

ゆりかもめが正しい

見習って

周南「山口」

なんなの……

東秩父「埼玉」

都会は大変らしいからな

代わりに儲けも良いと聞くが

神戸「兵庫」

自分で対処しないといけない案件は死ぬほどある

お前らもこつちに来ないか

羽村「東京」

家事手伝いにされるからヤダよ

小林「宮崎」

管理地持つてるのにわざわざ下につくやつおりゆ？

アルピコ

なりたいですが

鳥取「鳥取」

誰や!?

荒川「東京」

何処なのお!?

西桂「山梨」

セルピコ!?

松本「長野」

アルピコをご存知ない!?

津和野「島根」

トリ、アルピコは何処や

鳥取「鳥取」

長野、ですかね・・・

周南「山口」

あ、うちの子が漫画持ってた

鹿紫雲ね

理解した

松本「長野」

頑張ってくれてるんだけど力量が中々ね

アルピコ

地元BIG Love

赤穂「兵庫」

これ大丈夫か？

背中狙われない？



松本「長野」

え!?

俺の背中を!?

アルピコ

できらあ!

荒川「東京」

やめたげてえ!

アルピコ

補助が得意です!

攻撃は苦手です!

求) 優しい前衛

出) 厳しい前衛

松本「長野」

やばい出されちゃう

神戸「兵庫」

仲いいな

コミュニケーション能力も高そうだしうち来ない?

2 倍出すよ

松本「長野」

やめて！

アルピコ

えっ

2 倍ってマ？

松本「長野」

やめて！

神戸「兵庫」

おらっ！

3 べえだ！

アルピコ

トウungk……

松本「長野」

やめて！

黒部峡谷

へへへ 楽しそうじゃねえか

いれてくれよ

津和野「島根」

トリ、黒部は黒部市で良くないか

鳥取「鳥取」

そう、ですかね・・・

神戸「兵庫」

足りない場合が多いんだよ

ごめん・なはり

正規にしてくれるってマ?

鳥取「鳥取」

誰や!?

荒川「東京」

何処なのお!?

西桂「山梨」

ごめんなさい!?

松本「長野」

ごめん・なはりはご存知ない

津和野「島根」

トリ、ごめん・なはりは何処や

鳥取「鳥取」

高地、ですかね・・・

南阿蘇「熊本」

トリ詳しいの草

津和野「島根」

トリ、なんで詳しいんや

鳥取「鳥取」

電霊のおかげ、ですかね・・・

津和野「島根」

トリ、なんで電霊は詳しいんや

鳥取「鳥取」

マニユアルのおかげ、ですかね・・・

津和野「島根」

なにつ

相模が作った電霊マニユアルのおかげで協力的な電霊になるやと!?

サンキューさつが

南幌「北海道」

このわざとらしいムーブ何

神戸「兵庫」

布教だつてよ

牟岐

実際役立つんで助かる

松本「長野」

横文字多くておじじにはきつい

アルピコ

引退しなロートル

松本「長野」

こいつキツくない!?

神戸「兵庫」

4倍だ

これほどの逸材いつぶりだろうか

松本「長野」

やめて！

アルピコ

ちよつと静かにしてよおじいちゃん

今賃貸調べてるから

松本「長野」

うわああああ！

可愛い孫娘があ！

鳥取「鳥取」

孫娘まじ？

うちきなよ全体的に安いよ

アルピコ

パソコン無いのはちよつと

鳥取「鳥取」

パソコンくらいあるわい！

松江「島根」

孫娘まじ？

うちきなよ全体的に安いよ

アルピコ

パソコン無いのはちよつと

鳥取「鳥取」

パソコンくらいあるわい！

東秩父「埼玉」

島根と鳥取は違いがわからないよママ

鹿沼「栃木」

どっちもパソコンがないザマス

美濃「岐阜」

パソコンが無いのを許されるのは鳥根だけよねー

鳥取「鳥取」

パソコンくらいあるわい！

鳥取「鳥取」

パソコンくらいあるわい！

松本「長野」

鳥根どこだよ

三宅「奈良」

あまり強い言葉を使うなよ

東京の外付けどもが

東秩父「埼玉」

奈良に煽られても困惑が勝つだけって言われてるから

ゆりかもめ

GP40 発生！

久御山「京都」

またかよおおおおお！

津和野「島根」

トリ、現場何処や

鳥取「鳥取」

横浜、ですかね・・・

神戸「兵庫」

横浜死んだじゃん

荒川「東京」

終わりだ……

軽井沢「長野」



待て待て待て

終わらせるな餓鬼ども

あそこは支部があるだろ

アルピコ

カワサキちゃん呼んできたげるよ

神戸「兵庫」

5倍いいっすか？

松本「長野」

いいわけねえだろうがころすぞ

川崎「神奈川」

なに？

古平「北海道」

横浜が滅ぶってほんと？

川崎「神奈川」

滅ぶの!?

ゆりかもめ

GP40 発生しました

川崎「神奈川」

やだ！

軽井沢「長野」

草

湯布「大分」

やだは笑う

神戸「兵庫」

いや草

赤穂「兵庫」

俺も今度部下にやるか

川崎「神奈川」

サガミちゃん呼んだ！

相模

何でしょうか

鳥取「鳥取」

さ、相模さん

えへへデユフフ

津和野「島根」

トリ、どうしたんや

鳥取「鳥取」

推し、ですね・・・

相模

ありがとうございます

横浜ですね

銀杯教が付近の高校で儀式を行ったようです

川崎「神奈川」

だって！

相模

超電磁結界の範囲内なので儀式処理します

川崎「神奈川」

おねがいます！

相模

はい

青梅

一ついいですか

相模

はい

青梅

何とかなりませんか

相模

？

青梅

現場は高校ですよ

儀式処理するには若い子たちが可哀そう

相模

???

埼玉

俺も思っていました

可哀そうだと思いますか？

相模

???????

思いますが同時に仕方ないことだと思えます

神戸「兵庫」

おい

京王

なんとかかできるでしょ

神戸「兵庫」

無理言うなよ

軽井沢「長野」

なん・・・とか・・・？

川崎「神奈川」

青

梅

でも高校生ですよ

望んで巻き込まれたわけじゃない！

山手

あの

GP40なんですけど

数字が読めない？

木祖「長野」

頑張ったら何とかなるっしょ

京王

！

ほら！

なるっしょ！

ゆりかもめ

いやだからGP40

武豊

意外と手が空いてるじゃん

いけちゃったりしないかなーって思わない？

埼京

思っていました

神戸「兵庫」

いけるわけないだろ

わざわざ危機を作ってどうするんだよ

こいつら正気か？

誰だ推薦したの抗議するからな

荒川「東京」

たぶん地域格差なんだろうな

相模

わかりました

湯布「大分」

無理しなくていいよ

西桂「山梨」

わからないでくれ

川崎「神奈川」

サガミちゃん最近まで休みなく働いてたから……

鳥取「鳥取」

鳥取を困らせてたサイコメトリーどもを皆殺しにした相模を信じろ！

神戸「兵庫」

無理すんなって

俺が抗議入れとくから

相模

依頼を出します

東秩父「埼玉」

依頼

ゆりかもめ

GP40の依頼とか俺は絶対やらない

黒部峡谷

へへへ

命を大事に

相模

【なんとかしよう横浜ー】 依頼者：相模 所属：フリー 期限：5日（現地集合） 報酬：

歩合制 難易度：GP40以上 参加条件：レベル10

命は大事なのでなんとかしてあげてください！

任せました！

期限を過ぎたら儀式処理します！

ゆりかもめ

あゝあ



俺はもう知らんぞ

小林「宮崎」

これはやりすぎじゃないか

南幌「北海道」

自由参加にしていい難易度じゃないだろ

神戸「兵庫」

俺は支持するよ

最近うるさいやつが増えたから文句言うならなんとかしてもらいたい

豊島「東京」

正義マンが率先して死んでくれる

荒川「東京」

邪悪マンが残ったら困るって言ってるの

東秩父「埼玉」

他人の命が大事なやつが率先して働ける

南幌「北海道」

命を捨てるなあって言ってるんだよなあ

木祖「長野」

流れおかしくないか

おかしいっしょ

青梅

なんとかしてほしただけで自分でやりたいわけじゃない

神戸「兵庫」

発言と依頼がログに載って記録された

電霊の検索で不利になるから今後の活動を考えたら受けない以外に選択肢は無い

お前らを推薦したやつと支部の神にも抗議する

はつきり言ってるうちの神様はカンカンだったから

死にたくなければ頭下げて面倒みてもらうんだな

相模

他に6か所あるので依頼を出しました

横浜が難しいなら近場を手伝ってあげてください

人手が足りないので喜んでくれます

埼玉

あの

埼玉

GP40の現場って何させられるんでしょう  
相模

異界に入ってマツピングとか悪魔と戦うとか  
洗脳されている現場なら相手は人間ですかね

GP40以上なので進行したら「魔界一番乗り！」とか「魔王一番槍！」ってできま  
すよ

武豊

そんなことのために戦いたくねーっての！

相模

自由参加なので別に依頼を受けなくてもいいですよ

神戸「兵庫」

受けなくてもいいが儀式は行われるからな

青梅

なんとかありませんか

相模

？

直接行って話し合うなりしてなんとかしてください

川崎「神奈川」

サガミちゃんに手加減はないの

神戸「兵庫」

こんくらいしないと超電磁結界なんて張れないか

俺も参考にする

アルピコ

こわい

松本「長野」

我が家なら平和だよ

立川「東京」

青梅の件だが謝罪するので撤回してもらえないだろうか

まだ若く青い理想が抜けきって無いだけがやっとなつてきて任せられるようになつた所なんだ

頼む

古平「北海道」

重くなつていく

どうして

山手

何も見たくねえ

ごめん・なはり

命は重いからね

鹿沼「栃木」

ごめん

名前おもしろすぎるから後にして

ごめん・なはり

ええ……

船橋「千葉」

来ましたね……

脱ライドウ派と呼ばれた我々三人が活躍する時が……!!

つがる「青森」

やはり!

ライドウに頼り切りでぬるま湯に浸かる現状が根本的に間違っていた!!

魔界に繋がってからでは遅いのだ!!

ヤタガラスの人員の命が汚される!!

墨田区「東京」

推薦をもっと厳正にすべきなのですよ！

美濃「岐阜」

す、すげえ

死亡フラグ立てながら現れやがった

津和野「島根」

トリ、あれは誰や

鳥取「鳥取」

脱ライドウ派、ですかね・・・

津和野「島根」

トリ、誰が所属してるんや

鳥取「鳥取」

ライドウ、ですかね・・・

湯布「大分」

脱ライドウ派にライドウ???

相模

ライドウは喜んでた

飯島「長野」

ライドウは大変そうだからな

手伝うだけで喜ぶし

相模

厳正にされるとたぶん俺は落ちちやうなあ

墨田区「東京」

推薦は正しい！

つがる「青森」

やはり！

ヤタガラスは正しかった！！

船橋「千葉」

来ましたね・・・

脱ライドウ派と呼ばれた我々三人が活躍する時が・・・！！

津和野「島根」

来たのかな？

羽村「東京」

わからん

神戸「兵庫」

ちよつと好きになってきた

飯島「長野」

鹿紫雲はどう思う？

周南「山口」

どちらもありうる……

sonだけだ

久御山「京都」

適応してて草

立川「東京」

その、謝罪を

相模

すみません

もうミサキ様に通したので

東秩父「埼玉」

はやすぎる

御先「横浜」



不許可

立川〔東京〕

ああ、終わった・・・

三宅〔奈良〕

トツプダウンが早すぎる

東秩父〔埼玉〕

もう適応した・・・！

船橋〔千葉〕

来ましたね・・・

まこーらと呼ばれた相模が活躍する時が・・・!!

つがる〔青森〕

やはり！

なんとかかしてほしいなどあまりにも他人に頼りすぎなのだ!!

力だけでなく発想まで頼るとは人間性が汚れている!!

墨田区〔東京〕

推薦をもつと厳正にすべきなのですよ！

久御山〔京都〕

いや草

相模

がこん

山手

なんか崩壊しない気がしてきたな

ゆりかもめ

俺はすると思ってる

船橋「千葉」

来ましたね・・・

反崩壊派と呼ばれた我々三人が活躍する時が・・・!!

久御山「京都」

無敵構文で草

## 女神転生（地方しらべ） 13

「こう毎日横浜まで来るとき、ここが俺の職場なんじゃないかって勘違いしそう」

「横浜を縄張り宣言しちゃいますか」

「しちゃわないだよなあ」

横浜までピジョンちゃんも電車で移動してきた。

少し前までは時間に余裕があつたはずなのだが、ここ数日はやる事が多くて横浜に出向いている。

俺が横浜を治めるぜって宣言しても誰も納得しないし、折角メシアを釘付けに出来るのにわざわざ荒らす必要なんてない。

ピジョンちゃんも理解しているのだからちよつとした軽口でしかない。

銀杯教も欲しがつてたし、野心的なサマナーなら欲しがるかもしれない。

「そんなに都会がいいもんかね」

「タワーを使いたいんだと思いますけど」

「タワー？ あー、龍脈」

大地を巡る凄い力が龍脈であり、それを利用して国や都市を守る結界を貼っている。どうやって管理しているかというところを楔にしていると信じられている。

実際、十数年前くらいまではそうだったらしい。

今だともっと沢山あるし、なんなら野球のスタジアムやアミューズメント施設も龍脈の管理に使われている。

良くも悪くも人の強い感情が集まるので楔を操りやすいのだとか。

野球が好きでサマナーが多いのは多分スタジアムに安らぎを感じるのかもしれない。

「マリインタワーにそんな大げさな力は無いと思うんだけど。主要な7本はともかく」

「嫌ですね、サガミさん。外国に本拠地を持つメシア教がそんなこと知ってるはず無いじゃないですか」

「ええ……」

「頭メシアンなんて教会があれば何でもいいと思うるので調べる気も無いですよ。というか龍脈なんて聖書に記述が無いから信じてるか怪しいです。天使の言葉に疑いを持たず、祈れば無限に力が入ると思うてるメシアンもいますからね」

「自分の組織にボロクソ言うじゃん」

「天使の言葉に従って追い出した聖女候補が一番強い事実を見せつけて中指を立てるためにメシア教にいるだけです」

ちなみに中指を立てて煽るとどうなると思う？

そう、他の派閥から攻撃される。

聖女の敵は聖女だから仕方ないね。

聖女が争いを望まなくても下はそういうわけにはいかない。

自分の推しが一番だって証明しないと気が済まないって意味ではメシア教はとんでもない限界オタク。

他の聖女が正しいと証明されるとそれまでの聖女候補は無価値になるらしい。

それまでの加点を帳消しにできる点がメシア教って凄いな。

俺は聖女なんて100人くらい居てもいいと思うんだけど、そういうわけにはいかないらしい。

聖女になれば次に聖母にステップアップし、更にステップアップして神の子を産む唯一無二の存在になれるのだとか。

俺もあんまりよくわからんけど、多分メシア教としてはステップアップガチャを回し続けて聖女を引いたら聖母のステップアップガチャが解放され、その先に神の子のステップアップガチャが始まるんだと思う。

亜種としては聖人ガチャとかもある。

回してる連中がコモンなのがガチャ感が満載だ。

そういう教えを与えた射幸心を煽る主は悪い文明なのでは無いだろうか。

「ガチャは怖いね」

「今のガチャ要素ありました？」

「俺もガチャが好きだし聖人ガチャが好きなのメシア教とは仲良くできそうじゃない？」

「多分異端審問されると思います」

「魔女ガチャまでやるのか。メシア教は凄いや」

「やっぱりガチャ大好きじゃん。」

ほにやらするなかつて感じの禁欲的な教えはどうしたんだよ、教えは。

ピジョンちゃんと二人でメシア教について好き勝手言いながら待ち合わせ場所に着くと、既にサガミハラさんが待っていた。

待たせてしまったことに軽く謝りながら車に乗せてもらう。

「すみませんね、ハラさんも忙しいでしょうに」

「今はそれほど忙しくありませんよ。現場研修くらいなら時間を作れますし」

「申し訳ないです。依頼をどうにかしたいって熱を見せられたら俺も依頼を出してました」

「ははは……。発端は意識の格差なんでしょうね。土地や重要施設の管理を任されている者は世襲が多く、沿線等に配置されている者は一代目ばかりです。更に土地によっても発生する異界や依頼の量は違いますし、沿線組は決まっているルートを巡回する日々だと聞きます。日常の危機を体験するにはちよほどよかつたのかもしれない」

依頼の中には難易度が高すぎて人命救助が二の次になることも少なくない。

現場にあまり出る必要のない層は、そこら辺が気になっていたようだ。

常日頃からどうにかできないかと声を挙げる者たちもいたので、依頼を出して現場に行ってもらうことで新たな視点や意見を出してもらうことにした。

日頃から無駄な部分までケアしようとする層はそれほど多いわけでは無いが、少ないという程でもない。

現場の責任者や協力者たちがそういう連中がなるべく死なないように面倒を見てくれている。

とはいえ介護されてるだけでも言えるが、それでも自分の力量だと勘違いして死亡する報告も受けている。

特に問題無く過ごしていた若手も、要領のいい上司が居るか、本人にやる気があるお手伝いとして出向き、顔を広げて交流を深める機会としているようだ。

自身が管理を任されている場所やシフト、レベル等でスケジューリング調整が難しい等、

ちよつと機転が効くなら理由を付けて不参加な者もいる。

「……それでですね。以前言った通り倅を連れてきているんで、面倒を見てもらえると助かるのですが」

「言つてましたね。ただ、俺が教えられることはあまり無いと思うんですが」

「サガミさんが面白そうなことを始めたつて話題で持ち切りですよ。山北町に新人を集めて育成だなんて」

「どつちかというところとダークサマナーの寄せ鍋ですけど」

「どつちにしろ面白そうですね」と言いながら、はははとサガミハラさんは笑つた。確かに傍から見たら面白いかもしれない。

自分の本命を育成するためにサポートを固めて行く末を見守る。

友情トレーニングとか発生しないだろうか。

「ボクはそれに縋りたくなくなってしまいました。……恥を忍んで正直に言うとなね。倅を甘やかすすぎてしまいました。今回集まった人員を見ると殊更強く感じてしまう」

職業柄人並みの幸せというものは難しい。

サガミハラさんは四十を超えていて、高校生の息子を持っている。

相模原という土地は都市部ほどの激戦区では無いが、隣の県と隣接している分だけ面倒事を抱える場合も少なくない。



その苦勞は俺には正しく推し量れないが、幾らか理解はできている。話を聞くだけでも可愛がっていたのだから、ことがわかる。

「普通に生きるだけなら問題無かった。人として正しく生きられた。でもね、サマナーとして生きたいって言うんですよ。誰かの手伝いとかじゃなくて主体的に。それを聞かされてボクは失敗したって思っただんです」

車を運転したままぼつぼつと話すサガミハラさんの表情は変わらない。

ただ少しだけ気落ちしている風にも感じられた。

親の心の子は知らないし、子の心も親はわからないことが多々ある。

生き方も振る舞いも全く違う世界だ。

間違いというには厳しすぎるかもしれないが、それでも悔やむことはあるのだろう。

「俺は構いませんが、心身が壊れる可能性もありますよ」

「それでもお願いしたいのです。世界は過渡期に差し掛かっています。ボクが若い頃とは比べ物にならない程の激動を生きなければならぬ」

それならば、と俺は話を許諾する。

おいでよ山北町計画は順調に人材が集まりつつあった。

崩壊について知っているサガミハラさんが、息子さんを一般人として生きられる道を残すように育てるだろうかという余計な質問は捨てる。

俺たちは普通じゃないし、普通では居られない。

トロツコ問題なら躊躇いなく少数をひき殺す思考をしているし、ヤタガラスはそれを求める。

トロツコで轢かなかつた生き残りが問題を起こすなら皆殺しも辞さない。

命の重さや平等な権利の教えが甘さだと言うのなら、息子さんは俺たちみたいな人間になれるとは思えない。

それでも俺にはわからない何かを見出したのかもしれない。

「一人前になった暁には崩壊の原因を一つや二つ、止めていることでしょう」

「そうだったらうちとしても助かりますね。やっと常連さんが出来た所なんです。崩壊されてしまったら客足が遠のいてしまう」

トシキたちは責任重大だなど二人で笑った。

ちなみに今日はトシキも空港の人も置いてきた。

どちらもこの先の戦いに付いてこられないからな。

とか立ち会おうと二人のメンタルだと耐えられないだろうから連れて来なかっただけだ。

空港の人はまだしもトシキに平然と耐えられたら嫌だし。

仕方ないので山北町への引越準備等をさせている。

今は俺の事務所に泊めているが、このままだと余所者の出現でピジョンちゃんのは頂点に達してしまう。

事務所から何か物を盗んだら死ぬだけだし、逆にトシキの家には何も無い。

一切合財を取り上げられた未成年の少年を前にしたダークサマナーは何を思い、何を成すのか。

ダークサイドにいるつもりのもりのダークサマナーがライトサイドの誘惑を振り切れずに日和る姿を見るのが楽しみで仕方ないぜ。

ダークサイド最高！ってノリでトシキを殺して逃亡したら普通に懸賞金を掛けてそのうち殺せばいいからな。

「おはようございまーす。お疲れ様でーす。サガミとピジョン、入りまーす」

サガミハラさんは車を停めに行くと言うので礼を言つて降り、挨拶しながら封鎖されている現場に入る。

仮設された拠点に向かえば今まで頑張つて戦つていたのだろう、疲労しているヤタガラス所属の面々がいた。

呼び寄せてピジョンちゃんに回復させてもらい、俺はやたらとおどろおどろしい雰囲気の高校を眺めていると資料を手渡された。

内部を探索した複数のチームが持ち帰った情報を元にしてこれからの方針を決める。というか方針は決まっていたが、納得していない連中のために猶予を与えていたに過ぎないのだけど。

「凶面通り校舎は地上4階構造。異界化の影響で地下空間が生成されていて時空間の振じれも発生中。現在の到達階層は地下5階まで。地上部、探索済みエリアでの救助者未確認。ボスも未確認、と」

「確認できている悪魔の平均レベルは15とそれほど高くはありません。接敵した中で最大のレベルは22。普及されているアナライザーによる結果ですが」

「まだ22程度か。GPが40を超えたままだからもつと強い悪魔が出るし、当然のことながら最深部はより深い。まだ外に出て来ないから無理して引き延ばしたけど時間切れかな」

ピジョンちゃんと確認し合うが、この場で出来ることは予てから決めていた通りに物事を進めるだけだ。

事態が発覚してからGPは40を超えたまま変化が無い。

解決のために集まった面々のこれまでの成果がこれだが、良い言い方をすれば現状維

持、悪い言い方をすれば無理を強いてギリギリまで時間を使ったのに進展が無い。

口にはしないが時間の無駄だと俺は判断する程度の進展だった。

そもそもGPが40を超えている現状を維持した所で危険なだけだ。

GP（ゲートパワー）とは何かといえば魔界への距離が一番わかりやすいだろうか。大きくなるほどに魔界へと接する門が広がっていることになる。

数値の目安としては、普及しているCOMPのレベル上限を超えると異界を含めた地上のあらゆる環境とは全く異なる世界が広がっていることになる。

現在はレベル50が上限とされているので、GPがこれを超えると魔界に接続している場合が多いだろうか。

高校なので事態発生時には学生や教師も中に居たが、どうも異界や門の生成とともにリソースとして深部に引き込まれたようだ。

銀杯教から絞り出した情報からすると無意識領域に攫われているのだろう。

俺が手早く制圧できる浅層付近にいるなら頑張れるんだけど、ピジョンちゃんは首を横に振るだけ。

奇跡的な事態が起きていて原状復帰が可能なら軽い労力なら惜しまないのだが、残念ながらそうはならないようだ。

どうにもならない事態だったと誰もが納得してくれればいいんだけど。

というか納得してもらえないと高々数百人の命の為に魔界に接続するリスクを侵すしかなくなる。

「残念ながら銀杯教は処理してきました。この現場も時間切れのため儀式によって処理します。お疲れ様でした」

「納得できませんよサガミさん！」

ですつてよ。

サガミハラさんとこの息子さんは納得できないそうだ。

サガミハラさんと交流があるため知らない仲ではないので俺に物申してるのかも知らない。

プライベートなら全然甘えてきてもらっても構わないが、現状で納得できないなら死ぬしか無いね、と言いたいところだが流石に知人の息子を見捨てるわけにもいかない。

というかこの子、レベル低すぎてチームに入れて貰えてすらいらないじゃん。

何もやってないのに抗議だけ一人前だと事態を引つかきまわすための狂言だとか敵対悪魔憑きだと判断されて、過激なサマナーなら処分することもある。

サマナーが一堂に会する時に有効なのは正気と理性、合理の証明、そして力での脅迫。

だから何だつて話で終わらせたいが、何か革新的な作戦を秘めているかもしれないからな。

どうせならガンダムに乗って単機で突撃でもして解決してくれないだろうか。

この依頼の制限時間はまだ残っているので話し合うとしよう。

デビルトークの練習になるかもしれない。

「なぜ？」

レスバにて最強の札「何故」を使わせてもらう。

なおこの札を使う場合はデビルトークの練習にはならない模様。

「何故って……」

「君が納得するまで説明したらこの状況で何か得があるのかって意味ね。実は隠している力や仲間があつて、稼いだ時間で活躍して全部解決とかしてくれるなら全然待つ」

「そんなのはない、ですけど」

「ああ、そう」

そこで急に弱気になるんじゃないよ。

高校に蔓延る悪魔は石ころで押し潰してやるってアキシズみたいな隕石を落とす気概を見せてくれ。

普通に会話し始める俺に拍子抜けしたようだ。

もしかして感情的に怒鳴り合えば満足できる人種なのか。

悪魔に言質を取られて糞みたいな契約を結ばされて死ぬから理性的な会話は大事だ

ぜ。

「時間はまだあるから意味が無くてもお話してあげるけど」

全然俺は問答していい。

いいんだけど、ここに居るのは俺とピジョンちゃん、サガミハラさんの息子である彼だけじゃない。

この事態を解決しようとして依頼を受けた面々もいる。

あまり強い言葉を使うなよ、彼らに刺さるぞ。

おそらく彼らは今日まで精いっぱい頑張ったのだろう、精神的な疲労が見て取れる。

確かに期限は短かったが、突発的に起きた事態だから仕方ない。

というか期限が長い危機状況の依頼なんてそんなに無い。

あつても国防のために離島で生活するような物ばかりだ。

「このまま中にいる人たちを見捨てるって言うんですか！」

「見捨てる」

「っ！」

「そもそもさ。もう銀杯教の信徒はみんな死んでるんだよ。ここが間に合わなくなるから俺が殺してきた。今更じゃないか」

室内がざわつくが、幾らか経験を積んだ連中は苦虫を噛み潰したように顔を歪めるだ



けだった。

険しい目で俺を睨むやつもいるが、お門違いだから。

誰かしら奇跡的な活躍をして事件を解決してたら救われた命も間違いなくあっただろうが、この場においては順当な流れで終わるしかない。

このまま人命だなんだと時間をかけると手遅れになる。

数百人を生贄に捧げて都市機能壊滅とか起きたらどうするんだよ。

そりゃ成功させた側からしたら低マナで環境カード出せるから爆アドだけど。

「命は大事だと思おう？」

「……はい」

「陳腐な問いだけど1人と2人ならどちらが大事だと思う？」

「……両方」

「現状だと両方見捨てることしか出来てないじゃん。両方つてそういう意味？　じゃあ高校生と老人だったらどちらを優先する？　その高校生は日常的にイジメや犯罪をしていたら？　老人は過去に人を見捨てたことがあるかもしれないとしたら？　救った相手が数年後に一般人を殺すとしたら？　助けに行つて二次災害を起こして傷ついたことで未来に救える数万の命をどぶに捨てるとしたらどう思う？　この状況を引き起こした銀杯教は大事じゃないから見捨てたつてこと？」

「……目の前の命を見捨てたくない」

「そうなんだ。頑張れ」

答えになつてないと言わない。

代わりに「立派だな、応援してるよ」と優しく声を掛ける。

俺には物理的に不可能なので多重影分身でも修得して日本中を駆け巡って欲しい。

走り回ってるライドウの手助けをしてあげてくれ。

でもこんな論争を仕掛けに行つて時間を取らせるなら殺す。

さて、もう話し合いは終わりで良いかな。

「……それでもサガミさんなら救えるんじゃないですか」

「そりゃ救えるよ。目標にもよるけど」

「それなら！」

「でもやらない。何故だと思ふ？」

「また、何故ですか」

「ちやんと考えてくれないから俺だつて問いかけるしかない」

周りにも同じように問いかける。

答えは一つじゃないし、別に誰が答えてもいいんだけど。

ただ、答えられるくらい経験を積んでるならわざわざ口を挟まないだろうが。

そもそも経験を積んでここに居る場合は巻き込まれただけだから何も言いたくないだろう。

ヤタガラスは管理地毎にアカウントを一つ貰えるので、チームを組んでいたら連帯責任となる。

共有アカウントで掲示板に書き込むって？

ごもつとも。

「報酬ですか」と誰かが言ったので、俺はもつともらしく頷く。

実際ピジョンちゃんを飾れる激強装備とか出されたらすぐやるよ。

そんな装備を用意できる時点で能力もコネもあるだろうからもつと良い手を選べるだろうけど。

「俺ができることなら何でもやります。報酬になりませんか」

「なんでも?」

「はい!」

力強く頷かれる。

ここでその要望が叶ったとしてもダークサマナーだったら死ぬまで奴隷生活だ、ヤタガラスで良かったね。

もしかしてサガミハラさんから俺の下で修業する、とか聞いててこういう提案してき

たのだろうか。

解決する代わりに厳しい修行を課すよ、みたいな人情パートでこの場が終わるとも思っているのだろうか。

常に蜘蛛の糸は垂れているのか。

まさか。

それにしても人生の不条理を感じるよ。

彼はこうやって幸せに生きてきて、蜘蛛にされた人たちは一生懸命頑張つて不幸の中を生きていた。

「じゃあこの事件を解決してきて」

「は？」

「出来ないでしょ。要求と報酬の吊りあいが取れてないから。この場の全員が自身のあらゆる権利を差し出しても取れないね」

俺の言葉に呆けている一名を除いて見回せば、目を逸らす者と渋々頷く者に分かれた。

だって全員で突撃しても依頼を達成できない程度だから。

それなりに経験を積んでいる者が頷いているようだ、ピジョンちゃんは言わずもがな。

ピジョンちゃんに関して俺が最低レアの時にその身だけでなく持ち物やら何やらを全てベツトした狂人なので前提が崩れまくって除外。

天才肌みたいなやつは道理とかを無視してぶつ飛んだ意見とかをしてくる場合があるけど、この場にはないらしい。

いたらもうちよつと事態が良くなっているか、アホみたいに悪くなってるからなあ。

「俺たちはプロだから正しい報酬を貰わないといけない。心理的な物か、物理的な物かは問わないけど。安い報酬で命を賭けることになったら他のサマナーにも迷惑がかかる。以前安い報酬で命を賭けたんだから次もつてなったら自分も困るでしょ。君の命一つで動いてくれる人はここには居ない。それくらい理解して」

改めて言うことでもないけど。

当たり前のことを言っているだけなのに、何故かこの場の空気が悪くなっていく。

文句があるなら「こいつの身柄は自分が貰うんで解決しますよ！」くらい啖呵を切つて欲しい。

そしたら俺はそいつに押し付けるのに。

「報酬だけじゃない。現場のGPは40を超えている、つまり魔王が出てくる可能性もある。それなのにマッピングすら満足に進んでいない。当然不利な状況で命懸けの戦いになるかもしれない。どう思う？」

「それは……」

「俺なら疲弊するくらいで解決はできる。全てを円満に終わらせてハッピーエンドとはいかないだろうけど」

しかし、と続ける。

そもそも銀杯教から情報を絞り出したので儀式処理だけで済むため、探索やマツピングすら予定していなかった。

結果論としては徒に疲労して、時間を浪費しただけだ。

ムードメーカーが居て欲しかったな、と全然関係ないことを考えながら。

「現時刻においてGPが40を超える現場はここを含めて日本で7か所、いや、一つ解決したから6か所ある。それに準ずる現場は更に多い。大きく事態が急変した場合、対応できる人員は限られている」

「……」

「俺がここで全力を出して解決するでしょう。他は例えばライドウが解決する。残る現場が4か所ある。損耗したまま俺たちが全力で次も解決できたとする。その先は？」

俺たちが死ぬまで戦ったら納得できるか？ 高校生じゃない俺たちの命は大事じゃないのか？ まあいいか。で、GP40の現場をすべて解決したとする。準ずるGP30クラスの現場は残っているし、すぐにでも40に上がる物もある。しかし、対処できる

者がいないとなると魔界と繋がる余地はあるし、いずれ繋がってしまうだろう。数万人の被害で済めばいいけど、その場合はどうなるやら」

実際はもつと人員も居るし、手段もある。

が、当然事件も日本中で起きている。

対処できるなら数十人、数百人の被害で済ませるだけで余力を維持できるなら無視できる犠牲だ。

巻き込まれた人々は運が悪かったし、高校にいた生徒や教師も運が悪かった。

より大多数の無辜の民とやらの糧になってくれ。

「そもそもの話、俺は俺の命が一番大事だし、他人のために使い潰されるのも御免だ。俺は幸せになりたいくて生きてるし、頑張ってるんだよ」

俺は俺が好きなのが好きだ。

そして俺の命を大事にしないやつは嫌いだ。

別に何も考えずに生きていてもいいが、俺の命を軽く考えるのはやめてほしい。大事じゃない他人の命を俺は軽く見るけど。

「これで納得できた？」

「……できませんが、仕方ないと思います」

「うん」

「だから、俺が行って解決方法を探ります」

「出来るわけねえだろうが。全部遅いんだよ」

「えっ」

決意した風な真剣な瞳をしたアホに対してつい本音が出てしまい、場が凍り付く。

でも俺は悪くない。

受諾可能なレベルにも到達してないやつが何を言ってるんだって話だ。

レベルが達していたとしても、救えないやつは同じラインに立っている。

彼だけに言っているわけでは無い。

「君さ、レベルいくつ？」

「5です」

「ここに入れるのは最低でも10だよ」

「だから自己責任で行きます」

「そうじゃなくて、今更真剣になりましたって決断を見せられても遅いつて言ってるわけ。なんで日ごろから異界に潜るなりしてレベル上げてないんだよ。当然覚醒して現場に巻き込まれたんじゃないやなくて親がこの稼業なんだからちよつとはわかってただろ。その場で命懸けの突撃する以前に準備する努力しておけよ」

「それは、そうなんです……」



俺の対応が変わったことに困惑しているようだ。

勝手に行く気満々になっているが、悪魔憑きに乗っ取られたら面倒なことくらい把握してくれよ。

悪魔憑きを認めない親族の妨害は結構一般的にあり、サガミハラさんが立ち塞がってきたらヤタガラスが消耗する。

死にかけたら勝手にベイルアウトでも出来るなら話は別だけどさ。

「話は終わり。君は30分の間、ここから出ることを禁ずる」

記憶を弄って動けないようにしておく。

悪魔憑きがないか記憶や精神を見たので、レベル差もあってこれくらい簡単に出来る。

この場にいた面々のCOMPからアラームが一齐に鳴り響く。

依頼未達成の証だった。

「ああ。別に他の人たちは納得できていないなら続けてくれてもいいよ。人の命が大切なんだから。自分の命のほうが大切なら行かない方が良いと思うけど」

色々な感情が入り交ざった連中を無視し、俺の作業を進めるために電霊に指示を出す。

攻略組とは異なる現場組が事前準備を終わらせててくれている。

必要な機器が高校を囲うように設置してあるので今すぐにも仕事に取り掛かることができる。

物好きな中に行きたい人がいるかもしれないから少し待つが、誰も行かないようだ。

当初の予定通り、この事件を終息させる。

「この場に駆け付けてくださった皆様方、参加賞が早急に必要な方以外は送付するので、送り先を電霊に伝えてください。まだ同じような現場は残っているので余裕があれば他をなんとかしてあげてください。天に召された方がいなくて素晴らしい限りです。それではお疲れさまでした」

疲れを滲ませるサマナーたちに、ピジョンちゃんが労いの言葉を掛けてから周囲に撒収を伝える。

特に機材トラブルもなかったので仕事も手早く終わった。

「ハラさん、受胎処理も終わりました」

「ええ、確認しました。GPも正常値に戻っています」

「じゃあ俺たちは帰りますね。お疲れ様でした」

「お疲れ様でした。……倅にはやはり山北町に行かせようと思います」

サガミハラさんが寂しそうにつぶやいた。

息子さんが「悪魔と合体してでもこの事態を終わらせる」って言ってマジで合体する

くらいの意気込みがあれば俺の傍で面倒を見たんだけどね。

ロツクすぎて手放せないって意味で。

解散を告げたのに、依頼解決のため集まった面々は呆然としたまま動かない。

彼らの視線の先に校舎は既に無く、地面にぽっかりと穴が空いているだけだった。

削り取られた空間に残ったのは、勾玉と呼ばれる僅かな力の塊だけ。

それを回収して、優先順位が特に高い事件は終わりを迎えた。

## 女神転生（地方しらべ）14

【全国版】ヤタガラスが無く頃に【XXX回目】

相模

話を中断させて悪いんだけどシャカパチって何

O s a k a M e t r o

メタルグレイモンは好きだけどデジモンのアニメ知らん

ごめん・なはり

シャカパチを

ごめん・なはり

ご存知ない!?

山手

カードゲームでデツキとか手札をシャッフルする方法

シャカシャカ音を立てて混ぜて最後にパチって叩いて音を出す

四條畷「大阪」

俺のカードでやりやがったくつせえデブを威圧したら心臓止まりやがって大騒ぎになつた

一命は取り留めたが神サンにシヨツプ大会の禁止を命じられてむかつく

O s a k a M e t r o

笑かすなや

高崎「群馬」

不幸、なのか？

白浜「和歌山」

相手を見てシャカパチしろと言いたい

四條畷「大阪」

まずするなころすぞ

ごめん・なはり

冗談に聞こえない

那覇「沖縄」

治安悪そう

四條畷「大阪」

真ん中ら辺よりは終わってない

O s a k a M e t r o

新世界「呼んだ？」

通天閣「タワー」

タワーがあるから許して

西成の治安は知らん

相模

カードゲームで音を出す意味とは

山手

威嚇だ

俺もかつてはシャカパチマンだったがレベルが上がったのにやったせいでカードが

吹き飛んだ不幸な過去を持つ

四條畷「大阪」

一族郎党死罪

那覇「沖繩」

治安悪そう

東秩父「埼玉」

沖縄もデモとか治安悪そうだけど

那覇「沖縄」

その日に他県から来るだけだからそうでもない

東秩父「埼玉」

ええ・・・

でも座り込みとか

那覇「沖縄」

辺野古？

あれも普段いないし他県から見学に来た人に僅かな力場も吸われるからそこら辺の

スーパードライよりGP無いよ

通天閣「タワー」

草

山手

真面目に座り込んで複数人で即身仏になれば異界も見えてくるのに

対馬「長崎」

韓国のサマナーが研修に来て話をしたんだけどさ

事故とかあったら座り込んで抗議するらしいんだけど

キャンプ地とかのほうでGP高いんだってよ

つがる「青森」

どういうことなの

白浜「和歌山」

わからん

みんな感情が無いままその場に座っているのかもしれない

那覇「沖縄」

座ってないからな

O s a k a M e t r o

いやでも確かにカードゲームで威嚇って意味わからなくないか

山手

対人戦だからミスを誘いたい

O s a k a M e t r o

みみっちい

山手

あとカツコイイと思ってました

相模



人の物を叩いて音出したらかっこいいのか

俺もダークサマナー殴ったらそいつが悲鳴をあげるけどかっこいいってこと？

通天閣「タワー」

急に怖い事言い出すじゃん

面白えやつだ

いいぜうちに来な

タワー攻めの連中を見せしめにしてやれ

相模

いかない

通天閣「タワー」

へっ

面白れえやつだ

一日で何人殺せる？

相模

最近五〇〇人以上やった

通天閣「タワー」

へっ

面白れえ

周南「山口」

急に少女漫画はじまった？

白浜「和歌山」

おまえの知ってる少女漫画物騒すぎない？

神戸「兵庫」

車でもバイクでも音出すからな

Osaka Metro

趣味は人それぞれだけど他人に迷惑かけるなよ

山手

待ちな！

今はダサイと思ってるぜ！

ごめん・なはり

でもカッコイイと思ってたんでしょ？

ごめん・なはり

感性の根元がダサイ

四條畷「大阪」

死にな

山手

そんなに言われることなの!?

通天閣「タワー」

あれだろ

昔は暴走族だったやつのカードゲーム版

山手

違くない!?

久御山「京都」

お里が知れますな

東秩父「埼玉」

京都が言うのと重い

奈良「奈良」

お里が知れるぜ

東秩父「埼玉」

奈良が言うのと軽い

奈良「奈良」

奈良を軽んじるんじゃない!!

久御山「京都」

実際京都は京都以外は京都じゃない扱いされるから

湯布「大分」

禅問答か何かか

高崎「群馬」

埼玉「奈良が言うのと軽い（笑）」（埼玉しらべ）

つがる「青森」

埼玉しらべて付くと軽くなるな

東秩父「埼玉」

群馬「埼玉「奈良が言うのと軽い（笑）」（笑）」（群馬しらべ）

通天閣「タワー」

無限に軽くなっていく……!!

那覇「沖縄」

魅力ランキング低位の法則と名付けよう

スカイツリー「タワー」

プロトンローカルエリアどもが囁ってるじゃねえか

通天閣「タワー」

お、おまえは東京タワーの方が人望があるので軽んじられててイマイチな評価を得ているスカイツリー!?

スカイツリー「タワー」

え?

マジ?

泣いていい?

エスコンフィールドHOKKAIDO 「ドーム」

新入りは大変そうだな?

ええ、おい?

通天閣「タワー」

お、おまえはドーム新設のために色々と巻き込まれた苦労人なのにイマイチ軽んじられているエスコンフィールドHOKKAIDO!?

エスコンフィールドHOKKAIDO 「ドーム」

え?

マジ?

泣いていい?

ごめん・なはり

ツリーなのかタワーなのか

ごめん・なはり

フィールドなのかドームなのか

O s a k a M e t r o

ごめんなはりがそれを言うのか・・・

さいたまスーパーアリーナ「アリーナ」

俺もドームにしてくれないか

山口きらら博記念公園多目的ドーム「ドーム」

名前がアリーナじゃん

大分スポーツ公園総合競技場「ドーム」

そうだ

領分を弁えろ

アルピコ

どなた!?

ごめん・なはり

公園なのかドームなのか

ごめん・なはり

競技場なのかドームなのか

O s a k a M e t r o

ドームとアリーナだと何か違うのか

さいたまスーパーアリーナ「アリーナ」

配置人数、手当、対処等級、e t c . . .

東秩父「埼玉」

世知辛あい！

太陽の塔「タワー」

複合施設は時代の最先端だからよ

白浜「和歌山」

もうおまえに至ってはタワー級じゃない!?

通天閣「タワー」

過去の影響力とかが無視できなくてな

管理地は公園ではある

太陽の塔「タワー」

タワー

| 人 人 人 人 人 人 |

∨ 太陽の塔 へ

? Y ^ Y ^ Y ^ Y ^ Y ^ Y ?

万博記念公園!!

ゆりかもめ

矛盾塊やめろ

太陽の塔「タワー」

ちなみに太陽の塔からメギドビーム出る

大分スポーツ公園総合競技場「ドーム」

!?

通天閣「タワー」

マジ

山口きらら博記念公園多目的ドーム「ドーム」

?????  
w w  
???  
w w  
???

沖ノ鳥島



調子どう？

相模

お、おまえは沖ノ鳥島!?

どうしてここに!?

逃げ出したのか!?

自力で!?

沖ノ鳥島

時間あるし他のスレには入り浸ってる

対馬「長崎」

珍しい

深海探査チャンネルいつも見てます

沖ノ鳥島

いつもスパチャありがとう

おかげでデモニカ強化できるので探査領域拡げます

最近わちやわちやしてるって聞いたから覗きに來た

神戸「兵庫」

あーあれな

研修って体で死なない程度に面倒見ながら高難易度依頼に突っ込ませただけで済んだから

O s a k a M e t r o

神戸さんめっちゃ面倒みてた

太陽の塔「タワー」

な

神戸「兵庫」

やめろ

奈良「奈良」

うちの子とられちゃーう（笑）

神戸「兵庫」

やめろ

豊島「東京」

意識の是正として頑張った

山手

是正、できましたか・・・？

軽井沢「長野」

是正というか現状を理解してほしかったんだけどな

墨田区「東京」

理解してほしい連中には脱走されただけだった

久御山「京都」

反ライドウ派の無敵構文やらないの？

つがる「青森」

船橋に音頭とって貰わないと気持ちに乗らない

久御山「京都」

草

気持ちに乗らないってなんだよ

墨田区「東京」

前レスとの誤差0.000001秒以内に船橋の音頭が衝突した瞬間

空間は歪み

構文は黒く光る

久御山「京都」

勝手に光るな

立川「東京」

本当に申し訳ない

山手

ああ・・・

墨田区「東京」

脱走者多かったぞお前の推薦

つがる「青森」

命が大事なのは伝わってきたけどさ

軽井沢「長野」

木祖死んじゃった・・・

松本「長野」

あいつは管理地持ってて流石に研修や交流会では済まない

いや頭下げて協力者集めろや

軽井沢「長野」

木祖面子とプライド気にして単騎特攻で死んじゃった・・・

松本「長野」

より悪く言い直すな

スカイツリー「タワー」

GP40にソロは死んで当然なのは  
エスコンフィールドHOKKAIDO「ドーム」

言い方

さいたまスーパーアリーナ「アリーナ」

でもどうオブジェクトに包んでもって感じよ

大分スポーツ公園総合競技場「ドーム」

近場で発生した現場にソロ凸されて死なれたらそれだけ迷惑だから

青梅「保護制限」

この度は本当に申し訳なく

墨田区「東京」

今後頑張って

リーダー脱走したらしいし心機一転で

沖ノ鳥島

大変そうだな

帰る場所が焦土になっても困るから本土でみんな頑張ってくれ

青梅「保護制限」

多くを任せましたツケがきました

今後はチーム同士の交流も密に取りります

津和野「島根」

トリ、なんや保護制限つて

鳥取「鳥取」

ヤタガラスのCOMPの書き込み制限モード、ですね・・・

津和野「島根」

トリ、なんや保護制限つて

鳥取「鳥取」

共有アカウントの機能を制限するモード、ですね・・・

津和野「島根」

トリ、わからん

鳥取「鳥取」

お前も下の面倒見るんだからちやんとマニュアル読め

相模

脱走者で思い出した

木祖の後任を推薦していいですか

松本「長野」

聞くだけ聞いてみるか

鳥取「鳥取」

鳥取を困らせてたサイコメトリーどもを皆殺しにした相模を信じる！

通天閣「タワー」

報告書読んだけどこいつは横浜のカルトと高校を滅ぼしたすげえやつだ

信じるしかないぜこれは

沖ノ鳥島

毎年ニヤルラトホテブと戦ってるから安心してくれ

松本「長野」

ごめんやっぱり聞くのやめていいか？

風評が異常すぎる

太陽の塔「タワー」

褒め言葉的な意味で？

松本「長野」

ポジティブすぎない？

スカイツリー「タワー」

でも力こそパワーだし・・・

エスコンフィールドHOKKAIDO 「ドーム」

俺も礎人員としてほしいよ

さいたまスーパーアリーナ「アリーナ」

資料見たけどタイパめちやくちやいいじゃん

将来有望で神奈川が羨ましいって神様言ってる

松本「長野」

俺がおかしい？

軽井沢「長野」

たぶんそう部分的にそう

那覇「沖縄」

デビルサマナー？

対馬「長崎」

はい

白浜「和歌山」

善人？

軽井沢「長野」

たぶん違うそうでもない



奈良「奈良」

あなたが思いうかべているのは

相模

松本「長野」

アキネーターやめろ

端島

相模よんだか

津和野「島根」

トリ、端島って何処や

鳥取「鳥取」

いわゆる軍艦島、ですネ・・・

久御山「京都」

軍艦島？

人が生きてたのか

神戸「兵庫」

配置人数が1人いるとは聞いていたが予備役かと

対馬「長崎」

いるよ

ほとんど交流ないけど

スカイツリー「タワー」

生活とかどうしてんのよあそこ

端島

通販

エスコンフィールドHOKKAIDO 「ドーム」

通販!?

太陽の塔「タワー」

アマゾンプライムの出番ってわけね

端島

楽天

太陽の塔「タワー」

楽天じゃねーか!

端島

アマゾンが国内のネット通販で独占状態になったら金額引き上げとかで困るじゃん

楽天応援してる

松本「長野」

まともだ・・・

通天閣「タワー」

まともか？

軍艦島にいるやつだぞ？

対馬「長崎」

まともなのかわからん

長崎でも不明な人だ

軽井沢「長野」

そういうこともある

相模

俺からは説明できないけど色々あつて軍艦島で過ごして貰ってる

端島

俺から話すよ

相模

つらい思い出だ

話さなくてもいいのに

ゆりかもめ

急なシリアスが始まりそうだ

山手

重くなってきたな

ごめん・なはり

最近テーマが重い

鹿沼「栃木」

ごめん

名前おもしろすぎるから後にして

ごめん・なはり

しない

鹿沼「栃木」

ええ……

端島

電車でうんこ漏らしたのが嫌で本土から遠のいていた

スカイツリー「タワー」

あまりにも悲しい過去

山手

だからすべての車両にトイレを付けろと

ゆりかもめ

全座席をトイレにしろ

沖ノ鳥島

わりい

甘く見てた

松本「長野」

そん

なに

東京タワー「タワー」

我々は肉体が丈夫な分、精神的な部分が弱くなることもある

人の死などといった心の傷は時間だけが癒してくれる

相模

タメになるなあ

端島

ありがとうございます

沖ノ鳥島

含蓄溢れるお言葉

松本「長野」

俺がおかしい？

軽井沢「長野」

たぶんそう部分的にそう

O s a k a M e t r o 「沖縄」

デビルサマナー？

さいたまスーパーアリーナ「アリーナ」

はい

奈良「奈良」

善人？

スカイツリー「タワー」

たぶん違うそうでもない

奈良「奈良」

あなたか思いうかべているのは

軍艦島

松本「長野」

アキネーターやめろ

実際どうなの？

こつちで仕事できそう？

端島

目撃者のサマナーがいなければ

松本「長野」

なんか不穏じゃない？

気のせい？

軽井沢「長野」

たぶんそう部分的にそう

松本「長野」

アキネーターやめろ

相模

大丈夫

目撃者は消すんで

松本「長野」

やっぱりダメそうじゃないか

端島

久しぶりに本土上陸かあ

松本「長野」

待て待て待て

対馬「長崎」

相模の勝ちだ

沖ノ鳥島

相模「そっちがチャレンジャーだから」

太陽の塔「タワー」

相模死にそう

久御山「京都」

草

前回の適応はどこにいった

相模

青梅からの脱走者が件の目撃者なんで大丈夫です

青梅「保護制限」



えっ

O s a k a M e t r o

一般人は消すなよ

相模

普通の電子媒体ならこっちで消せるけどヤタガラスのCOMPに記録が残ってるからどうにもならなかった

機密情報を持ち出して逃亡だから消さないといけない

東京タワー「タワー」

立川

立川「東京」

はい

東京タワー「タワー」

聞いていた話と違うから改めてお話ししよう

後で連絡します

立川「東京」

はい・・・

スカイツリー「タワー」

俺も行く

立川〔東京〕

はい・・・

豊島〔東京〕

知り合いの大人が怒られる所をみるのつらいし気まずい

エスコンフィールドHOKKAIDO〔ドーム〕

言ってやるな

豊島〔東京〕

言わないと対応が白々しくなっちゃう

船橋〔千葉〕

しようがないにやあ

久御山〔京都〕

！

船橋〔千葉〕

来ましたね・・・

脱ライドウ派と呼ばれた我々三人が活躍する時が・・・！！

つがる〔青森〕

やはり！

地位ばかり気にする現状が根本的に間違っていた!!  
崩壊が始まってからでは遅いのだ!!

尊い人命が汚される!!

墨田区 「東京」

推薦をもっと厳正にすべきなのですよ！

那覇 「沖縄」

いや草

四條畷 「大阪」

草

山口きらら博記念公園多目的ドーム「ドーム」

すぐ死にそう

久御山 「京都」

構文用意してんの？

美濃 「岐阜」

なおトリオでGP40を攻略した模様

ゆりかもめ

選ばれし者

山手

ジエダイの帰還

O s a k a M e t r o

昼飯の流儀

相模

青梅

こりやまた懐かしいな

東秩父「埼玉」

粛清されそう

神戸「兵庫」

されそうっていうかされる

鳥取「鳥取」

ヤタガラスが勘違いされるう！

松本「長野」

持ち出し禁止の資料を持ち出して逃げたらそりやそう

軽井沢「長野」

松本もやっぱりヤタガラスだよな

湯布「大分」

言うて社内情報をサラリーマンが持ち逃げしたら罰を受ける

ヤタガラスも情報を持ち出したら罰を受ける

ただそれが命懸けの仕事だから罰が重すぎて殺されるっただけだろ

飯島「長野」

鹿紫雲はどう思う？

周南「山口」

死罪

飯島「長野」

どちらもありうれ

周南「山口」

流石に命が懸かってるんだからあっちやだめじゃない？

飯島「長野」

はい

青梅「保護制限」

やっぱり元リーダーは殺されてしまうんでしょうか

軽井沢「長野」

たぶんそう部分的にそう

飯島「長野」

相模はどう思う？

相模

もしかして誰か人質に取られてます？

それとも共有財産持ち逃げとか？

青梅「保護制限」

そういうのじゃないんですけど

恨み言とかもありますが無言のままなので最期に何かあるんじゃないかと

ゆりかもめ

これから死ぬやつが言える事なんて命乞い以外無くないか

山手

愛を囁くよ

助かるために

東京タワー「タワー」

これが若さ

太陽の塔「タワー」

うちでメギドビームの試射させてもいいよ

骨も残らない

四條畷「大阪」

余裕のあるやつになんて罵詈雑言しか吐かないだろ

神戸「兵庫」

なんでそう憎まれ口ばかり叩くん

最期くらい何かあるだろ

スカイツリー「タワー」

何かとは一体

つがる「青森」

今回の件が始まったのも他力本願みたいな始まりだった気が

白浜「和歌山」

流石に違うだろ

軽井沢「長野」

他人への期待は無限に膨らむからよ

相模

なんとかしてほしいってコト!?

神戸「兵庫」

そうじゃない

合理性ばかりに目を向けて人間性を忘れたくないってコト

東京タワー「タワー」

追跡は相模くんだけかい

相模

サキちゃんと一緒に居ます

奈良「奈良」

サキちゃんイブズ誰

沖ノ鳥島

はい解散

端島

骨も残らないじゃん

相模

今ミスドだけどサキちゃんがトングをカチカチさせてた

これが音で威嚇ってやつ？



東秩父「埼玉」

パン屋でやると逃げちゃうから気を付けな

神戸「兵庫」

俺もついパンに威嚇しちゃう

東京タワー「タワー」

サキちゃん

川崎のとこの子で合ってる？

相模

そう

川崎ちゃんです

スカイツリー「タワー」

川崎んとこの魔人じゃん

通天閣「タワー」

核熱の魔人か

解散

さいたまスーパーアリーナ「アリーナ」

過剰戦力だろ

太陽の塔「タワー」

オーバークイルでしょ

そんな悪い事してないでしょ

相模

受胎儀式の情報を持ち出した

太陽の塔「タワー」

殺せ

東京タワー「タワー」

立川

立川「東京」

はい・・・

東京タワー「タワー」

正気か

立川「東京」

真面目で素直だったんです・・・

スカイツリー「タワー」

学歴よかったんだっけ

立川「東京」

有名私立卒でした

スカイツリー「タワー」

ベタすぎない？

革命しそう

東京タワー「タワー」

昭和だったら学生運動にCOMP持ち出してたかもしれない

青梅「保護制限」

すみません

魔人について聞いてもよろしいでしょうか

通天閣「タワー」

発生は個体毎に違うし今は必要ないから端折る

特徴として魔法が途轍もなく上手い

個体によっては肉体的性能が高い者もいるがほとんどが魔法性能が抜群に高い

得意属性なら人間や悪魔と比べて3倍程能力が高く固有魔法を持っている場合も多

い

それでいて他の能力も低いわけじゃない

東京タワー「タワー」

川崎のこの子は東北で発生した個体でね

問題ないとは思うけど何かあってからでは遅いから東北地方に立ち入り禁止されて  
いるんだよね

しょうがないからって先代の川崎が面倒を見てたけど高齢で亡くなったからちよつ  
と前に交代したんだけど

相模

良い子だし強いからとても頼りになる

東秩父「埼玉」

でも魔人だぜ？

相模

でもサキちゃんかわいいよ

東秩父「埼玉」

可愛いならまあ

豊島「東京」

いいのか

東秩父「埼玉」

相模より問題起こしてないぜ？

豊島〔東京〕

確かに

相模

え

俺も知らない神様に小言もらったくらいには苦労したのに

船橋〔千葉〕

来ましたね・・・

脱ライドウ派と呼ばれた我々三人が活躍する時が・・・!!

つがる〔青森〕

やはり！

ライドウに頼り切りでぬるま湯に浸かる現状が根本的に間違っていた!!

魔界に繋がってからでは遅いのだ!!

ヤタガラスの人員の命が汚される!!

墨田区〔東京〕

推薦をもっと厳正にすべきなのですよ！

相模

横浜の依頼はサキちゃんがかかなり面倒を見てくれたから認めてほしい

青梅「保護制限」

とても優しかったです

松本「長野」

相模はどんな感じだった？

青梅「保護制限」

えっ

沖ノ鳥島

俺が許す

自由に発言しろ

端島

僻地にいるやつが何を言うのか

俺は本土に行って守ってやれるから好きに言え

青梅「保護制限」

えっと

相模

見てるよ

沖ノ鳥島

庄かけんな

端島

こえーよ

南鳥島

なになにに恋の話？

聞かせて

富山「富山」

情報の集積にはなるから書いて

青梅「保護制限」

銀杯教を処分してきたって言って高校も処分してそのまま解散させられたんで

ちよつと怖いだけとか

若い子が突っかかったのを詰めてました

沖ノ鳥島

草

南鳥島

仕事しろ

東秩父「埼玉」

面倒見ろ

お前が始めた物語だろ

相模

人命救助のための制限時間ギリギリまで待つてたんで教祖からニヤル出て来てたんだだけど

余裕ないですよ

東秩父「埼玉」

あぶない!!

端島

気安く世界崩壊の一旦の話するのやめろ

スカイツリー「タワー」

やっぱり人命優先してる場合じゃねーわ

東京タワー「タワー」

とはいえ合理的に見捨てているだけでもモチベーションに響くから難しいね

豊島「東京」

青梅、おまえらトロすぎ



ゆりかもめ

心臓とまる

山手

やっぱり青梅の評価が下がったわ

青梅「保護制限」

そんな・・・

O s a k a M e t r o

魔王級降臨はまずい

太陽の塔「タワー」

高校生の命があれば魔王召喚できちゃうって思われたらコトだけ

船橋「千葉」

来ましたね・・・

脱ライドウ派と呼ばれた我々三人が活躍する時が・・・!!

つがる「青森」

やはり!

ライドウに頼り切りでぬるま湯に浸かる現状が根本的に間違っていた!!

魔界に繋がってからでは遅いのだ!!

ヤタガラスの人員の命が汚される!!

墨田区「東京」

推薦をもつと厳正にすべきなのですよ!

相模

俺は時間稼ぎして消耗させただけでライドウが倒したんだけどね

軽井沢「長野」

反ライドウ難しすぎる

神戸「兵庫」

ライドウが便利すぎてライドウに嵌るライドウ依存症だ

相模

相模はライドウ依存症だった……?!

荒川「東京」

ただのライドウじゃねえぞ!

美濃「岐阜」

ド級のライドウ!

久御山「京都」

ドライブだ!

相模

サガミスーパードライ

富山「富山」

草

津和野「島根」

トリ、脱ライドウ派って誰が所属してるんや

鳥取「鳥取」

ライドウ、ですかね・・・

津和野「島根」

トリ、脱ライドウ派って誰が言い出したんや

鳥取「鳥取」

ライドウの兄上、ですかね・・・

船橋「千葉」

来ましたね・・・

脱ライドウ派の創始者であるライドウの兄上の話をする時が・・・!!

つがる「青森」

やはり!

ライドウに頼り切りでぬるま湯に浸かる現状が根本的に間違っていた!!

魔界に繋がってからでは遅いのだ!!

ヤタガラスの人員の命が汚される!!

墨田区 「東京」

悪魔と合体してでも正義を成すべきなのですよ!

津和野 「島根」

トリ、つまりどういうことや

鳥取 「鳥取」

ヤタガラスでは成しえない活動の為に兄上は出奔したってこと、ですかね・・・

ライドウ

兄上しか勝たん

相模

誰だライドウに変な言葉教えたの

鳥取 「鳥取」

かつて出奔したライドウの兄上と鳥取の地で唯一接触到成功した相模は言伝を預

かった!

神魔と混ざり合っても強くなってライドウを超えると!

そしてその力で日本中を駆け回って崩壊を止めるためだと相模は言った！  
俺たちはライドウの兄上を信じている！

相模

俺たちはライドウの兄上に後を任されしヤタガラスだ！

ライドウ

おおおおおおお！

鳥取「鳥取」

おおおおおおお！！！！

船橋「千葉」

おおおおおおお！！

つがる「青森」

おおおおお！！

墨田区「東京」

おおおおおおお！！

相模

おおおおおおお！！

ライドウ

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！

津和野「島根」

おおおおおおおおおおお！

軽井沢「長野」

うおおおおおおお！

川崎「神奈川」

うおおおおおおおおお！

太陽の塔「タワ」

おおおおお！

沖ノ島

おおおおお！

端島

おおおおおおお！

南島

おおおおお！

ゆりかもめ

おおおおお！

スカイツリー「タワー」

ヤタガラス内でも崩壊へのスタンスは違うからな

反ライドウ派は崩壊を止めようとしていて古い神から支持を得ている

崩壊派は実は新入りの神が支援していて流石に崩壊への助長はしてないだろうが止めようとしてもしていない

神同士の縄張り争いが反映されている既存の社会を続けるか否かの争いめいてきて  
いる

相模

崩壊を止めるためなら何でもやる

スカイツリー「タワー」

うわ

急に冷静になるんじゃないよ

四條畷「大阪」

崩壊を止めるたってなあ

なんかいい事あるのかよ

通天閣「タワー」

そもそも崩壊したら悪い事しかないだろうが

四條畷「大阪」

力が正義の世界になるかもしれないねえじゃん

相模

夏でもコンビニで気軽にアイスを買えるのが崩壊前の世界

俺はこれを守る！

ライドウ

おおおおおおお！

エスコンフィールドHOKKAIDO 「ドーム」

崩壊したら状態が幾らか良くてもインフラは限られるだろうしなあ

相模

世界が崩壊するって予言から逃げるのと強い悪魔から尻尾を巻いて逃げるのとどっ

ちが違うのか

俺は逃げない！

ライドウ

おおおおおおお！

通天閣「タワー」

へっ



面白れえ

那覇「沖繩」

サガミスーパードライコンビうるさすぎる

四條畷「大阪」

俺は逃げねえ！

東京タワー「タワー」

崩壊を防いでくれるなら如何様にも動いていいんだけどね

# 女神転生（地方しらべ）15

【日本版】ダークサマナー総合スレ【XXXXX目】

孤独の11

佃煮

笑い女

半里バード

雅楽

帰ってきてくれTUKIBUTO

極闇

菊のすけまるはちんちんの形がいい

ミッドナイトサマー

タテシマ。

p p s h

家計事情シリーズで事足りる

松山の竜

鳴子ハナハルのぶらいんどたちいいぞ

No. 9

自分A V いいですか

乙アリスがなんですけお

口裂け男

三次元だったら直接買って抱けるじゃん

二次元は創作者たちが生み出さなければ読むことができない美しい物語なんだが？

赤目のシヤンクス

破壊しかできないやつが言うのと陳腐さの中にも尊さがきらりと光る

No. 9

三次元だって夢魔の淫夢でコト足りるのでは

口裂け男

俺たちにも既存の話を辿ることが出来る

だが新しい物語は生み出せない

ノーライフ・ナイトロックス

立派な事言ってる風でただのエロ談義っていうね

凧市

雅楽

ヴオエツ

男じゃねえか！

有楽線沿いのアリア

オネシヨタくれ

ノーライフ・ナイトロックス

桐下悠司

有楽線沿いのアリア

オネがいねえ！

シヨタもいねえ！

医魔人

はきかのゲームやれ

この場合は110番かいや違うか

お前たちにはがっかりだな

青木幹治の同級生の若い母は知恵も与えてくれる

二人はセックスしてる最中なんだからちゃん討厭らしく振る舞うのがマナーという  
名言まである

雅楽

最近アニメいいのあった？

ミッドナイトサマー

黒獣おじさんが来るぞ！

医魔人

黒獣

口裂け男

草

こいつの命が惜しければまず俺を囲むこの気色悪いやつらについて説明を

S I S T E R S のサキュバス秋子を擦れ

極闇

悪魔を超えたサキュバス

ナーフアーレイム

一時期陰キャに憑りつくサキュバスが秋子フォルムばかりで笑ったわ

笑い女

女向けがレイプばっかなんだけどなんで

有楽線沿いのアリア

強気な男が好きだから

ナーフアーレイム

× 強気な男

○ 強気で背が高くイケメンでちんこがでかくて実際強い男

テメエらとちがつてな  
!!!!

孤独の11

人殺しの女と寝るのヤダよ俺

ppsh

エロ本読んでるのもちよつとな

清楚でおっぱいが大きくて影踏まずで夜は娼婦で頼む

口裂け男

同業と同じホテルは無理

寝首を搔かれたら死ぬ恐怖

ナーフアーレイム

ちんこおつきくしてからまた来な

勘違いしてるけど15センチまでは粗チン

松山の竜

15はおおきいと言ってくれ

ミッドナイトサマー

お、男は大きさがじゃないし

No.9

Cカップが貧乳論と一緒に

こいつの命が惜しければまず俺を囲むこの気色悪いやつらについて説明を  
なにつ

Cは貧乳なのか

雅楽

うーん

揉めるつちや揉める

赤目のシャンクス

この争いを止めに来た!!!

p p s h

シャンクス！

赤目のシャンクス

俺はパーを出したぞ

勝つても負けても今日が良い日ならそれでいいじゃないか

ナーフアーレイム

ありがとうございますましたシャンクス

孤独の11

シャンクスありがとうございますました

うわっ助けてモコイ！

なんかいつも同じ話してないか？

SSRサイトウ

今更話すことなんてないからよ

ブラックフライデーのお得な情報でも出し合うか

No.9

ブラックフライデーは個別スレあるから

笑い女

悪魔20%引き！



奴隸30%引き!

賞金額20%アップ!

こんなん笑つちやうよね

こいつの命が惜しければまず俺を囲むこの気色悪いやつらについて説明を

割引奴隸とかいう世も末なサービス

買ったことないけど

ノーライフ・ナイトロックス

親に見捨てられた餓鬼、借金重ねて高飛び、職を失って破産、孤児、金が払えなくて

死ぬ病人

いなくても誰も気にしない一般的な底辺だから買ってもいいことない

小遣い稼ぎで知識も無く人攫いした奴から買ったらヤタガラス来るからアホかよ

こいつの命が惜しければまず俺を囲むこの気色悪いやつらについて説明を

駄目だ

心が痛くて買えない

性処理に欲しいにやん

ミッドナイトサマー

きつしよ死ぬよ

No.  
9

俺も悪魔の餌用に買ったけど家事出来るから家庭内カーストの頂点に登られちまつた

孤独の11

家族ごっこしてんなよ

医魔人

ダークサマナーの目にも涙

うわっ助けてモコイ!

コレガ ココロ . . . ?

金予教ヨミ

世界は崩壊します

ppsh

知ってる

ノーライフ・ナイトロックス

どう崩壊するか言えハゲ

ナーフアーレイム

いつ崩壊するかって聞いてんのカス

赤目のシャンクス

ハゲを馬鹿にするな

敵ゆえ威嚇させてもらう

有楽線沿いのアリア

ハゲでも優しかったらいいハゲだと思う

松山の竜

結局ハゲはハゲか

医魔人

だが今は違う！（ぎゅっ）

ハゲは治せる！

魔法や悪魔の技術ならな！

赤目のシャンクス

新時代の到来だ

医魔人

自然な禿頭の治療は無理だ

病ではない

赤目のシャンクス

失せろ

金予教ヨミ

崩壊は間近に迫っているのです

教祖のお言葉を信じましょう

笑い女

銀杯教に論破された雑魚宗教がなんだって

SSRサイトウ

ゆらぎに予知で負けたってマジ？

それしかない持ち味を活かせないとか何ができんの？

No.9

あんまり責めてやんなよ

沈黙は金雄弁は銀

黙ってたおかげでカスカルトでも生きてるんだから

こいつの命が惜しければまず俺を囲むこの気色悪いやつらについて説明を

精神や力優位で一般人から金取り上げるの嫌いだぜ俺は

金予教ヨミ

銀杯教は滅びました

教祖の予言に銀杯教は負けたのです

S S R サイトウ

ライドウ倒して来い

そしたら入るつつうの

駅のコックズ

ライドウさえいなければ俺たちは自由だった

有楽線沿いのアリア

ほんとに自由なの？

赤目のシヤンクス

ヤタガラスムシキングの時間か

こいつの命が惜しければまず俺を囲むこの気色悪いやつらについて説明を

自分の力量では無くヤタガラスの力量を勝手に推し量って優劣を決める最高に情け

ない争いだ

ナーフアーレイム

じゃ情けなくないようにダークサマナームシキングやるか

孤独の11

萬永

極闇

この前死んだ

笑い女

ゆらぎ

No. 9

この前死んだ

口裂け男

ピエロ

医魔人

この前死んだ

ノーライフ・ナイトロックス

いや死に過ぎい！

非魔人

最近ヤタガラスの若手が元気だから

ノーライフ・ナイトロックス

連中は崩壊に向けた準備しないでもいいのかよ

極闇

護国組織だから崩壊後も国のバックアップ受けられる予定でもあんのかね  
雅楽

崩壊したら国も何も無くない？

p p s h

古い組織だから霊地に溜め込んでるとか

松山の竜

ヤタガラスだから無いな

赤目のシャンクス

崩壊しないから準備しない思考

ミッドナイトサマー

目の前の崩壊に背を向けて全力疾走とか狂人の集まりかよ

医魔人

ギリギリスども

この場合は110番かいや違うか

あいつらが必死に維持してる世界を汚しながら生きてる俺たちの方がギリギリスな  
んですがそれは

S S R サイトウ

命は平等だからセーフ

孤独の11

医魔人と非魔人って何か違うん？

名前だけ？

医魔人

俺は一応魔人の末席にいる

非魔人

悪魔人間です

孤独の11

草

そりゃ悪魔人間は魔人じゃないわな

ナーフアーレイム

魔人に末席なんてあるの？

医魔人

発生源とか創造理由等で格が変わる

レベルが上がりやすいとそれだけ生物に近く格が低い

格が高いと概念や事象を支配できる



対象の変化や異界生成等の固有能力も持つ  
ナーフアーレイム

なんか支配してんの？

医魔人

何となく他人の傷を感じる

口裂け男

格が低そう

笑い女

過去に負った傷を呼び覚ますってコト!?

ppsh

アルティメット・ペインか

強いじゃん

SSRサイトウ

スカーデッドか

戦闘に便利じゃん

医魔人

いやマジで傷があるかわかるだけ

松山の竜

悲しいくらい弱い魔人だな

医魔人

人間ベースなんてこんなもん

ちよつと人間より倫理観が無い程度

金予教ヨミ

崩壊は必ず起きます

我々は共にある

ノーライフ・ナイトロックス

雄弁は銀

駅のコックズ

そんなことはわかりきっている

明確な時期を教えろ

こいつの命が惜しければまず俺を囲むこの気色悪いやつらについて説明を

毎年一年後に崩壊するって言うてるからな

崩壊しないから毎年有難いお言葉が貰えて信者も絶頂もんだろ

ペコスマイル

ピエロは実況のログ残ってるから見てくれば

ピエロ「さて、いじわる道化師の死神クイズ。ボクは魔王召喚の儀を行います但儀式場所は何か所でしょう」

ヤタガラス1「知らん。21か所潰した」

ピエロ「答えはお死枚・・・」

ヤタガラス1「痛っ」

ピエロ「えっ」

ヤタガラス2「22か所」

ヤタガラス3「ここが最後」

ピエロ「お、おらああああ！ 全員殺してや・・・」

ヤタガラス1「脆い。ヒソカかゴトーかはつきりする前に死んだけど」

ヤタガラス2「何か所って問題の答えがお死枚は馬鹿だろ。死んだけど」

ヤタガラス3「儀式破壊に道化師はいらない。死んだけど」

p p s h

ピエロが殺される側なのか(困惑)

ノーライフ・ナイトボックス

あまりにも速い手刀

俺には見えないのにノーダメやめろ

うわっ助けてモコイ！

最期までヒソカロールできて無くて草

駅のコツクス

どうか告知無しで魔王召喚やめろ

ナーフアーレイム

告知あつてもやめろや

非魔人

ソロは流石に馬鹿

ペコスマイル

部下は結構いてピエロのコンビもいた

儀式のためにピエロが足止めを買って出た

足止めできなくて結局死んだ

この後に本番とも言える儀式破壊を試みてたけどログは残ってない

半端に召喚された魔王との戦闘でまき散らされるマグが濃すぎなのと所有者の死亡

で配信止まった

笑い女

笑うとこ？

こいつの命が惜しければまず俺を囲むこの気色悪いやつらについて説明を

名前の売れてるダークサマナーが一方的に殺されてなければ笑えた

松山の竜

何で此奴はこんな時期に魔王召喚に踏み切ったんだよ

こいつの命が惜しければまず俺を囲むこの気色悪いやつらについて説明を

高位異界の発生と銀杯教の決起が合わさった今の時期にやらないと次はいつになるかわからないからじゃないの

非魔人

そんな締め切りに間に合わせるノリでやるんじゃないよ

うわっ助けてモコイ！

ライドウも銀杯教に行つてた情報があつて実際他は空白だったから

チャンスだとは思うが俺はやれないかな

雅楽

他の死亡ログ欲しいんだけど

ペコスマイル

無い

ヤタガラスの処理報告がソース

この場合は1110番かいや違うか

マジで活発化してんな

孤独の11

昔はもつと静かで地味な暗殺だったのに

口裂け男

今のライドウが就任して世界のバランスが変わったんだ!!

それまで俺達は自由だった!!

孤独の11

弱者を死ぬまで蹂躪する!

ノーライフ・ナイトロックス

クズすぎていつそ清々しい

SSRサイトウ

最近のしやしやしきライドウは本当に元気すぎて迷惑

昔のしおしおライドウを返してくれ

赤目のシヤンクス

しよぼライドウ「今から滅ぼす・・・」

しやきライドウ「35分前に滅ぼした」

No. 9

結局滅ぼすのは変わらないの草

医魔人

変わらずにずっと強い

今はやる気があるのか目的が出来たのか動きに指向性を持つてるから厄介

多幸舞式

協力を求めます！

ヤタガラスは人命を軽視している！

笑い女

嗤える

ppsh

ここで募集すんな

ノーライフ・ナイトロックス

軽視しているだけいいじゃん

ここなんて命に金額付けるぞ

多幸舞式

>>ppsh

どこで募集したらいいでしょう

ppsh

知らん

ペコスマイル

アンチヤタガラスマンの誕生か

時代だな

赤目のシャンクス

わざわざ明言しなくてもダークサマナーの敵はヤタガラスだから

多幸舞式

つまり協力していただけるのですね！

この場合は110番かいや違うか

すんごいポジティブマン来たな

うわっ助けてモコイ！

うぜえから一生一人でヤタガラスと戦つてろ

金予教ヨミ

協力いたします



教祖は大変興味をお持ちになっています  
雅楽

流れくつき

ナーフアーレイム

カルトとカルトのマリアージュやめろ

多幸舞式

銀杯教と高校生たちを犠牲にする儀式の持ち出しに成功しました！

ヤタガラスを改心させるためにお手伝いください！

No. 9

興味あるぜ

ペコスマイル

ピエロが使った儀式は消されたミロク經典の一部を流用してたからな

俺も興味あるな

ナーフアーレイム

乗るのか

松山の竜

くせえな

何処からそんなもん持ってきた

多幸舞式

ヤタガラスから抜けました

犠牲を強いるのを見過ごせない

孤独の11

ヤクザに治安維持を求める退官警察みたいなのやめーや

多幸舞式

俺を救ってくれた相模はもういない

あの頃の相模なら犠牲を出さなかった

赤目のシヤンクス

回想シーンやめろ

ワンピースだったら半年はこいつのターンだ

非魔人

何だよ相模って

急に知らない固有名詞をぶち込んでくるな

多幸舞式

相模と出会った時は確かに俺の方が強かった

巻き込まれた事件もあいつとあいつの仲間はすぐに協力して被害者を出さなかった被害も極力抑えていた

怪我をして見捨てておくべきだった俺も救ってくれた

その後あいつは戦い続けてすぐに俺を追い抜いて頭角を現した

俺はそれが眩しくて羨ましくてあいつの活躍を聞きながら努力を続けた

あいつは俺の憧れだった

駅のコックズ

うわあああ！

くそみたいな情報を垂れ流すんじゃない！

No. 9

ここはお前の日記帳じゃない

多幸舞式

そのはずなのに！！

相模は被害にあつた高校生を見捨てると言い出した！

こんなのは俺の相模じゃない！

相模はもつと凄い！

相模ならもつと出来た！

ヤタガラスのせいだ！

ヤタガラスなんてものに入っているからこんなことになった！

有楽線沿いのアリア

うわあ

流れ変わった

多幸舞式

ヤタガラスが儀式を強いるから相模が変わってしまった！

管理させるから自由に動けなくなった！

相模は命を大事にして世界を守らないといけないんだ！

できるやつなんだ！

するべきなんだ！

極闇

正義マンかと思ったら厄介ファンだった

雅楽

公式との解釈違いで怒るなよ

ナーファーレイム

誰だか知らんが相模が可哀そう

この場合は110番かいや違うか

お勞しや相模

多幸舞式

メシアの女!

ガイアの女!

ヤタガラスの女!

あいつらが相模をおかしくさせた!

許せない!

SSRサイトウ

女ばっかりで草

孤独の11

わかるよ

俺も女が好きだ

でもエロ漫画談義してた俺達にハーレムエピソードとは余程相模を殺してほしいと見える

口裂け男

相模の周りの女が単なる同僚とか依頼人でこいつはサイコホモの可能性

松山の竜

義によって立つ

決して羨ましいから殺したいわけじゃない

多幸舞式

儀式名は受胎です

俺は今神奈川に居て相模を待ち受けます

詳しい場所はDMで送ります

ペコスマイル

ピエロの儀式もあるから完成するかもな

俺は行く

うわっ助けてモコイ!

うわっめんどくさ

こいつの命が惜しければまず俺を囲むこの気色悪いやつらについて説明を

これ聞いていいやつか?

ペコスマイル

駄目

掲示板でピエロが儀式を零した時にヤタガラスの警戒度が高まった

警戒というか処理の優先度というか

口裂け男

こ、こいつ・・・！

ノーライフ・ナイトロックス

不意打ちは嫌いだな

そしてこれに困る程弱くもない

ナーフアーレイム

手際よく巻き込んで来たな

クレバーサイコホモと名付けよう

有楽線沿いのアリア

まず男なのか女のか

笑い女

シヨタなのかロリなのか

金予教ヨミ

我々も立ち上がります

崩壊の為にも

SSRサイトウ

カルトと肩を並べるのは嫌だが俺も行くか

近場だ

それにそろそろヤタガラスにお灸を据えないと仕事やし難い

ミッドナイトサマー

しようがないにやあ

この場合は110番かいや違うか

『相模』 レベル50オーバー 耐性・全門 反射・物火氷雷風呪 無効・祝魔

未来予知が可能らしい

有楽線沿いのアリア

首都の守護位じゃない癖に無茶苦茶だ

やりようはあるけど

ppsh

こいつ懸賞金も凄い

ペコスマイル

鳥取スレに詳細のログがあるらしい

電霊が見つけてきた

医魔人

俺も電霊欲しいな



ペコスマイル

サイコダイブの異能者でサブがサモナーみたいだな

得意魔法は四属性の中級

メイン異能サブサモナーだからカスみたいな魔法しか使えないっぽい  
その分異能とかは強いんだろうが

松山の竜

無駄に近寄らなければ無能力と一緒にしろ

なんなら肉体強度は下がってるから弱いくらいだ

非魔人

精神系は距離にさえ気を付ければ余裕

近接も身体能力で上回れば問題ないから俺も行くか

医魔人

サイコダイバーは貴重だから欲しいな

捕まえたら売ってくれよ

多幸舞式

相模が捕まるわけないでしょう

予知持ちですよ

駅のコックズ

お前の立ち位置は何処なんだよ

ノーライフ・ナイトロックス

そいつの予知を覆したくなつた

p p s h

そもそも相模をどうしたいんだよ

多幸舞式

相模は俺の憧れだ

失望させないでほしい

みんな相模になってください

孤独の11

きつしよ

有楽線沿いのエリア

まず自分になってからにしてもらて

雅楽

巖勝と縁壺か？

極闇

良くてステインとオールマイトでは  
笑い女

バツティに付き纏うジョーカー的ホモで頼む  
ペコスマイル

相模は鳥取での動きがロールシャツハっぱいから単なる理想の押し付けに過ぎない  
多幸舞式

俺は相模になりたかった

ライドウマジ許せねえぜってえ倒す

仕方ない

遅れるが俺も行く

ノーライフ・ナイトロックス

勝ったなガハハ

松山の竜

あんたほどの男が来てくれるならまあ

ミッドナイトサマー

でもこいつダークサマナー殺しまくってるから

赤目のシャンクス

敵船ゆえ威嚇してる

うわっ助けてモコイ！

威嚇で殺すな

SSRサイトウ

威嚇で殺される時点で芽は無い

こいつの命が惜しければまず俺を囲むこの気色悪いやつらについて説明を

なんか殺伐としてんな

笑い女

なんかCOMPが不調

非魔人

足並み揃えろよ全く

世話が焼けるぜ

## 女神転生（地方しらべ） 16

【全国版】一般サマナー総合スレッド【XXXXXスレ目】

?  
ン?????  
ン???

テンプレくらいちゃんと貼れ

3時のおやつ

ちよつと忘れるくらい許してやれ

?  
ン?????  
ン???

初心者には命に関わるから忘れんな

アカザ・クオリティ

文句言うならお前が手を挙げてスレ立てしろ

見詰徹

すみませんが安定した狩り場を教えてください

連続今日寿郎

住んでる地域の個別スレッド等を参考にするといい

アカザ・クオリティ

異界相談スレでレベルに合わせて聞け

インターネット老人会第一席

折角だから話を聞いてやろう

依頼の傾向とかで薦める先も変わるよ

ゆりしい♡

生配信始めますにゃん♡

みんな来て♡

ユリシーズ

この後21時からラジオやります

Worldend

なんか名前似てるね

UNDERGROUND

不思議やね

八甲田山のルフィ

おススメはヤタガラスが見回ってる地域だと思います

モーファンシン

謙虚なルフィに笑っちゃうんだよな

キリト@aaa

ガイアの依頼を多く受けてるとヤタガラスがあんまり優しくないので注意しろ

連続今日寿郎

昔はキリトもいっばいいいなあ

アカザ・クオリティ

煉獄さんもいっばいいいなから

ちゃんとした煉獄になれ今日寿郎！

連続今日寿郎

お前もちゃんとした鬼になれ

ユリシーズ

ヤタガラスの膝元が無難だと思います

ダークサマナーに難癖付けられても対処してもらえます

見詰徹

業界に入ってまだ日が浅いです

勝浦さんという方に説明はしてもらいました

巡回の手伝いをやっています

慣れるまでいいそうです

インターネット老人会第一席

千葉？

見詰徹

そうです

八甲田山のルフィ

千葉の勝浦さんですね

ヤタガラス所属の方です

上位の方なので接触するのは簡単じゃないです

とても運が良いのでそのまま慣れるまで世話になりつつ色々聞くといいと思います

恩を仇で返さなければ良くしてもらえます

ヤタガラスは海軍、ダークサマナーは海賊だと考えたらわかりやすいでしょうか

見詰徹

ありがとうございます

みなさんにいつか担々麵をご馳走します

勝浦担々麵をよろしく



3時のおやつ

申し訳程度のワンピース要素に笑う

モーファンシン

もしかして：勝浦の回し者

インターネット老人会第一席

聞いたいてなんだけど個人情報はあるまい書かないほうがいい

ダークサマナーとかに身元がバレたら脅されたりする

閃光の明日葉

治安悪い所だとダークサマナーいるからやつぱりヤタガラスが優位な場所を選ぶのが大事

ダークサマナーは簡単に人とか殺すだけじゃなくて人身売買もやるから捕まると酷いことになるし

ヤタガラスに頼んでも証拠が無いと時間が掛かるか対処してもらえない

キリト@aaa

ヤタガラスに訴えたけど話聞いてもらえねーぞ

(^o^)ノ<死は救済、生は苦しみ、日常は苦行なり

ガイア寄りの活動しているサマナーだとヤタガラスは自己責任判断する

メシア寄りだと近くの教会に行くことを薦められる

ヤタガラスはヤタガラスにしか優しくない

モ・／〒イノ、イ、／・／

治安維持活動やってくれてるだけ有難いだろうが

閃光の明日葉

こいつ悪いキリトじゃない？

キリト@aaa

国防組織とか名乗ってんだから義務じゃねーか

インターネット老人会第一席

義務じゃないよ

今のヤタガラスは戦後GHQに解体されて散ったメンバーとガイア教、日本の神が集

まって出来た組織

ぶっちゃけると民営化した団体

八甲田山のルフィ

民間にしては強くないですかね

インターネット老人会第一席

俺もよく知らないけど曲がりなりにもこの国の霊的国防を担ってた組織の人員や装

備を引き継いでるから強いんだと思う

戦後の条約逃れのために一回解体したっぽいから半分国営なのかも

日本の神も歴史が古いと強いから影響力があるんだろう

金予教ミツクチ

世界は崩壊します

助け合いましよう

金予教はあなたを待っています

w o r l d e n d

崩壊すんの？

モーフアンシン

おまえが聞くのか（呆れ）

U N D E R G R O U N D

名前は飾りはつきりわかんだね

金予教ミツクチ

世界は必ず崩壊します

教祖は世界の危機を目前にして涙しています

アカザ・クオリティ

危機が迫ってるのに泣いてるだけでも取れる

連続今日寿郎

あまりにも強大な危機の前に人間など無力！

俺は隠れたい！

アカザ・クオリティ

マジでこいつ情けない

3時のおやつ

結局崩壊ってなんなんだろうな

（〇〇）ノ＜死は救済、生は苦しみ、日常は苦行なり

サマナーになった時点で平穩は崩壊したからそれを指してる

宗教とか占いなんてそういう心当たりを指摘して当たったフリする

インターネット老人会第一席

何らかの手段で体制や文明といった現代の社会構造が破壊されることじゃないかと

は聞いた

閃光の明日葉

何らかとは一体

モ・／  
ティノ、イ、／

大事なのにすつげえふわふわしてんね

インターネット老人会第一席

だって誰も明確な答えを知らない言わないから

預言者を抱えてるって主張してる宗教系も明確な答えを口にしない

してる所もあつたけど外しすぎて今は何処もボカしてる

ユリシーズ

今日は預言やヤタガラスについてラジオします

題して「ヤタガラスは世界滅亡を目論でいた!？」 沈みゆく日本で出来るお金の稼ぎ方

！です

八甲田山のルフィ

日本を沈めないでください

泳げない

UNDERGROUND

泳げないの草

申し訳程度の原作再現

モ・／〒イノ、イ、／・／

勝手に日本を沈めるな

金稼ぎは胡散臭すぎる

Worldend

沈みゆく（沈んでない）

金予教ミツクチ

日本は沈みません

ただし洪水は畏れてください

（〇〇）ノ＜死は救済、生は苦しみ、日常は苦行なり

金玉教にまで否定されるのは笑う

ゆりしい♡

生配信始めますにゃん♡

日本は沈まないがテーマですにゃん♡

みんな来て♡

連続今日寿郎

俺ゆりしいにちよつと興味持ったわ

この柔軟性は評価したい

奇跡のドードー

ヤタガラスはデイスつてると自己責任させてくるからな・・・

閃光の明日葉

すごい優しかったけど

アカザ・クオリティ

個人と場所ですっぱり変わるんじゃない

茅場キリト

サマナーなんて超法規的な立場になるとヤタガラスは有難い

そもそもガイアの依頼を受けてるってコトはヤタガラスも被害を受けてるわけだから冷遇されても仕方ない

( 〇 ) ノコ死は救済、生は苦しみ、日常は苦行なり

ヤタガラスはガイアも集まってるんだよな

じゃあ今のガイア連中は何者だよ

遺跡の世代

ガイアと別のガイアの身内争いじゃん

インターネット老人会第一席

説明が難しいんだけど今のガイアは目的の無い出洩らしやヤクザみたいな連中というか

弱肉強食とか富国強兵を掲げてた団体は解体後のヤタガラスに吸収された

新ヤタガラスの方針に従えなかった奴らやそもそも入れて貰えなかったヤクザとか  
が今のガイア

個人で悪い事してるダークサマナーはガイアだし組織で悪いことしてもやっぱり  
ガイア

ざっくり纏めると

聖書の教えに従つてると主張してるのがメシア教

色んな神がいて治安維持とかしてるのがヤタガラス

悪い事をしていくところがないなら大体ガイア

悪い事をして無いけど治安維持も任されてないのが俺達

連続今日寿郎

悪いキリトはガイアと見做されてるってことか

それならしゃーない

モーファンシン

俺はヤタガラス結構好きだよ

「良い事しろって言ってるんじゃないの、悪い事するなって言ってるの」って言いながら  
ダークサマナーをボコってた

八甲田山のルフィ



結局崩壊つてするんですか

インターネット老人会第一席

わっかんね

奇跡のドードー

一番指標にできそうなヤタガラスも外からだとよくわからなくてなあ

中ならわかるんかな

アカザ・クオリティ

ヤタガラスになれ今日寿郎！

連続今日寿郎

ならない

アカザ・クオリティ

なると言え！

連続今日寿郎

ならない

インターネット老人会第一席

ヤタガラスに関して言えばそもそもダークサマナーと争う意味もない

本当に崩壊するとしてわかっているのに争うのは賢くないと思う

UNDERGROUND

ほな崩壊しないんか

インタ―ネット老人会第一席

しないとなると各地の事件が起きてからの対処が遅い気がする

銀杯教なんて急いで処理したのか隠ぺいできてないから連日ニュースになつてる

余裕無いのかも

Worldend

ほな崩壊するんか

インタ―ネット老人会第一席

ただ最近是有名な賞金首を立て続けに対処してるからな

高レベルだから余裕ないと相手に出来ないと思う

3時のおやつ

ほな崩壊しないんか

インタ―ネット老人会第一席

でもシエルターや小規模な霊地の売買が盛んらしいから情報に明るいサマナーが崩

壊に向けて動いてるのかも

モーファンシン

ほな崩壊するんか

金予教ミツクチ

崩壊します

遺跡の世代

金玉もこう言ってるから崩壊しなさそう

インタネット老人会第一席

老後の蓄えじゃないけど使い果たすんじゃないやなくて余裕を持ったほうが良いかも

貯蓄はわからないけど食糧や発電機は大事かもな

文字通り崩壊するなら今の生活とはかけ離れた物になるだろう

モ・／〒イノ、イ、／・／

確かに銀杯教の対処は遅いくらいだったな

全国に広がって不快だった

喧嘩が売れるわけでもないから見ないフリ安定だったけど

モーファンシン

組織相手に俺達みたいな個人が戦えるわけもなく

知り合いのサマナーにいつも組んでた仲間が宗教狂いになったとかで取り返しに

行つて洗脳されたやつもいたから

ヤタガラスはもっと早く動いても良かった

八甲田山のルフィ

でも民間なんですよ

義務はないはず

インターネット老人会第一席

無いよ

— とうか普通に犯罪行為

法治国家で勝手に対処してるのはよくない

キリト@aaa

犯罪かよ

裁かれろ

アカザ・クオリティ

誰がどつちをどう裁くんだよ

お前がやってくれるのか

その後の治安維持とかダークサマナーの対処とかも

閃光の明日葉

ヤタガラスも良くないのかな

インターネット老人会第一席

そりゃあ一強は良くないに決まってる

仕事の単価も安くされていくかもしれない

今だって高いのはガイア、安いのはメシア、付属アイテムはヤタガラスな報酬だからガイアが無くなれば競合相手もいなくなるから安くてもやるサマナーが出てくる

そもそもガイアがいないと依頼すらヤタガラスは出さない可能性がある  
自分たちの手で終わらせるようになるかもしれない

青芝

ガイアを手伝ってバランス取るか

奇跡のドードー

取ってどうするんだよ

青芝

報酬が高くなる

奇跡のドードー

報酬の為にガイアに肩入れするとか正気かよ

よっちー

でも安く買い叩かれるくらいならって思わない？

治安維持できるくらいヤタガラスも人員いるならちよつと不利益被つても大丈夫で  
しよ

インターネット老人会第一席

ヤタガラスが削れてガイアが台頭したとする

そしたら余裕が無くて治安維持できなくなつてダークサマナーが闊歩する

安全な狩り場も依頼も無くなるから巡り巡つて俺らが不利になるかもよ

電気屋

そうなるとしても今すぐじゃないだろ

それなら様子見てガイアから離れればいい

俺らもプロとして胸張つて満足な報酬を受け取りたい

多幸舞式

神奈川で仕事あります

詳細はDMまで

Worldend

報酬すごくいいな・・・

（〇〇）ノ＜死は救済、生は苦しみ、日常は苦行なり

只より高い物はないぞ

怪しくないか

八甲田山のルフィ

他のスレでも貼られてましたね

インターネット老人会第一席

電霊で調べたけどダークサマナーのスレにも貼ってた

見境なし

キリト@aaa

俺は行くけどお前らは行かないの？

バランス取れるぜ

茅場キリト

行かない

俺はヤタガラスの仕事を手伝う

worldend

ポケットモンスター光のキリト闇のキリト

インターネット老人会第一席

依頼が貰えるならヤタガラスだよな

信頼を積み重ねて評価されないと中に入るのには難しいが騙しも情報不足もほぼない

不測の事態が起きるのは仕方ないがバックアップで助けに来てくれることも多いからフリーにとつては申し分ない

八甲田山のルフィ

ガイアはさっきの仕事だとして

じゃあヤタガラスの手が届く狩り場って何処がいいんでしょう

（〇〇）ノク死は救済、生は苦しみ、日常は苦行なり

ごめん・なはり線いいぞ

ヤタガラスの双子ちゃんが可愛いし丁寧

UNDERGROUND

ゆりかもめの巡回手伝い好きだけど狩り場じゃなくて湧き潰しだからなあ

（〇〇）ノク死は救済、生は苦しみ、日常は苦行なり

あと万博記念公園は異界が複数あつて楽しかった

通った回数とレベルでアンロックされてく

適性レベルを大きく上回った悪魔が確認されたらビームで焼いてくれる

八甲田山のルフィ

ビーム？

（〇〇）ノク死は救済、生は苦しみ、日常は苦行なり



俺も全くわからん

太陽の塔からビームが出るらしくて射線に注意しないといけない

連続今日寿郎

北海道は山奥の異界に向かってる最中に熊が出たりするのがな・・・

車必須だし俺も内地行くかな

アカザ・クオリティ

電車で行ける所が人気なんだろうか

戦闘後に運転は本当にだるい

インターネット老人会第一席

タワーは争いが激しいからあまり勧められない

でも普段は静かなんだよな

みんな何処で戦ってるんだろ

未だにわからない

閃光の明日葉

沖ノ鳥島の海底探査チャンネルが好き

南鳥島の天体観測も

行けそうにないのが残念

僻地で配信やつてるからヤタガラスも余裕ありそう

インターネット老人会第一席

時々沖ノ鳥島に行くよ

事前にアポ取って目的伝えて自力で行けるのが条件だけど

前歴とか問題ないなら観光目的で許可貰える

造魔とかで滅茶苦茶凄かったけど許可なく行くと襲われるから注意な

あれ見たら俺もヤタガラスに入りたくなる

茅場キリト

ロボットの造魔いいよね・・・

遺跡の世代

いい……

奇跡のドードー

安全な狩り場は関東がいいと思う

東京は疎らすぎるから俺はやっぱ相模線沿い

ダークサマナーが全くないし見かけても連絡したらすぐ対処してくれる

欠点は異界の場所が頻繁に変わることだと思う

遺跡の世代

そんな変わるん？

奇跡のドードー

半月に一回は変わる

変異した異界潰しの依頼は報酬がいいから人気もある

場所変更の告知とかもスレで頻？にしてくれるからサービスの会員登録しておけば

直接連絡が来る

八甲田山のルフィ

地元は全然放置なのでやっぱり場所毎に違うんですね

八甲田は危険地帯もあるので注意喚起はしてくれそうですけど

モーファンシン

可愛い子がいる所に行きたいよ俺は

(^o^)/<死は救済、生は苦しみ、日常は苦行なり

ごめん・なはり線来い

ごめんちゃんなはりちゃん永遠に見ていたくなる

ごめんちゃんとなはりちゃん結構電車に乗っているとこ見れた

同じ車両にいるだけでいい匂いがする

脳が破壊されるまでは楽しかった

モ・／＼イノ。イ、／＼

川崎ちゃんは可愛いけど百足様怖すぎてな

インターネット老人会第一席

神奈川の不死はちよつと怖いよね

恐山の不死とか温厚だからなおさら

あの人死んでるけど

閃光の明日葉

死んでるのに不死とは一体

インターネット老人会第一席

思念体だから死なないらしい

奇跡のドードー

俺ヤタガラスの人見たことないんだけどそんなに会えるもんなの？

ダークサマナーも居ないし不安定な異界も湧き潰しされてるから管理されてるとは

思うんだけど

メールとかチャットの挨拶では知ってるんだけど

相模さん普段何してる人なんだろ

八甲田山のルフィ

普通に治安維持や異界の管理では？

モーファンシン

異界とかで稀に会える

あとは地方の沿線とかだとヤタガラスの人も電車移動するっぽい

だから自分の足や車を使って侵入して人気のない場所で活動するダークサマナーもいる

当たり前だけど寂れた場所は悪魔やダークサマナーで危ない

モ・／~~テ~~イノ、イ、／・／

水棲の悪魔が多いなら琵琶湖や河口湖の異界もなかなか

負けたら溺死とかあるから怖いけど

連続今日寿郎

美瑛とかの湖沼なら陸上でやれるっっちゃやれる

ただアクセスとか買物とか色々死んでる

摩周湖とか有名な所は水適応必須だが

セブンイレブンよろこんで

ヤタガラスの人と仲良くなってゲームしてる

(^o^)/<死は救済、生は苦しみ、日常は苦行なり

相模

相模か・・・

相模は戦闘が得意で面倒見良くてお土産もくれて返信も早くて問題が大きくなる前に手伝ってくれるってごめんちゃんとなはりちゃんがきやあきやあしてたのをこそこそ聞いてた

うつ・・・頭が・・・

閃光の明日葉

ちよつと名前が出ただけで破壊される頭が悪いしそもそも盗み聞きしてるのもキモい

（〇〇）ノ＜死は救済、生は苦しみ、日常は苦行なり

IQ53万あるから即死は免れた

UNDERGROUND

これは頭が悪いサマナー

インターネット老人会第一席

相模は多分経歴消してるんじゃない？

荒事に率先して対処できるように弱みとか全部消してる人がヤタガラスにいるって

沖ノ鳥島で聞いた

連続今日寿郎

なんか穏やかじゃないな

インターネット老人会第一席

実際穏やかじゃないから

ダークサマナーとか当たり前のように人質を取ったり周辺から攻めてくる輩への対

策だつてさ

俺もそこまでは出来ないな

奇跡のドードー

それ聞くと怖いな

相模さんヤバい人じゃん

アカザ・クオリティ

身を粉にしてやってるのに酷いな

奇跡のドードー

確かに

謝るわ

奇跡のドードー

喋ったことも見たことも無かったから無理だった

インターネット老人会第一席

悪い事しなければそれでいいんじゃないか

異界に行つて状態を報告するだけでも巡回を手伝つたと言える

奇跡のドードー

そういえば勝手に異界に通つてるだけなんだけどさ

帰りに軽く報告すると魔石とか貰える

属性石も

運悪く異常が発生してたのを報告したら耐性付きの装備くれたから運が良かった気もする

茅場キリト

凄くいいじゃん

俺も今度行つてみるか

奇跡のドードー

相模スレ行つたらまとめwikiにジャンプできる

wikiからホームページに行けるからそこで会員登録すれば異界の詳細ログやド

ロツプ品とかの買取表が見れる

依頼自体はあんまり無いから拠点に向いてないとは思ふ



鍛えるついでつて感じ

アカザ・クオリティ

ヤタガラスになると言え今日寿郎！

ビッグウェーブに乗り込め！

連続今日寿郎

乗らない

覚悟決まりすぎてて怖い

インターネット老人会第一席

別にヤタガラスは人を殺す覚悟とか護国がどうかつてのは無いらしい

レベルだけ高い人もいて仕事も結構選べるつて

(ゝoゝ) ！<死は救済、生は苦しみ、日常は苦行なり

相模は選んで戦っている

戦いを好むやつは危ないに違いない

ごめんちゃんとなはりちゃんはその現実を直視してくれ

俺の栄養だったんだ

閃光の明日葉

こいつマジでキモい

3時のおやつ

今はごめんなはりってどんな感じなん

（へっへ）「死は救済、生は苦しみ、日常は苦行なり

わからん

俺は脳が痛くて引越した

モ・／テイノ、イ、／・／

弱き者すぎる

遺跡の世代

相模「2人？ 俺のベッドで寝てるよ」

3時のおやつ

ごめんなはり「弱いサマナーとか頼りにならないし・・・」

（へっへ）「死は救済、生は苦しみ、日常は苦行なり

やめでよお!!!

俺は弱くないよお!!!

ゆりしい♡

生配信始めてますにゃん♡

次のテーマはヤタガラスの謎のサマナー相模さんですにゃん♡

みんな来て♡

連続今日寿郎

俺ゆりしいにちよつと興味持ったわ

この柔軟性は評価したい

奇跡のドードー

言うほど謎じゃないんだよな

外食とか食べ歩きした店の評価もあるから

モーファンシン

身内向けブログで草

奇跡のドードー

結構おいしいし手ごろな値段が多い

若者向けっぽいスイーツも多くて近寄りにくい紹介もあるけど

他にも地元の祭りで貰った手持ち花火を仲間内で楽しんだらしい

茅場キリト

アットホームなヤタガラスの人じゃん

興味出てきてる

奇跡のドードー

ただ「今日はダークサマナーの〇〇を処理した」みたいな文も差し込まれるからプラマイゼロ

モ・／テイノ、。イ、／・／

こえーよ

日常に狂気を混ぜないでくれ

インターネット老人会第一席

処理だと多分殺してるんじゃないかな・・・

奇跡のドードー

怖くなってきた

アカザ・クオリティ

でもその人が引き受けてるからお前も安全に活動できてるんだぞ

奇跡のドードー

確かに

謝るわ

奇跡のドードー

喋ったことも見たことも無かったから無理だった

インターネット老人会第一席

ヤタガラスに所属すると戦闘ログとか充実してらしいんだよな

それはかなり魅力だと思う

セブナイレブンよろこんで

悪魔合体とか装備面も優遇されるってよ

?  
ン  
???

ヤタガラスにいて何年か前に抜けたけど確かに凄かった

悪魔合体は悪魔を元の姿のまま格だけ上げられたし道具の売買も手軽に出来た

値段も俺たちが使ってる施設やオークションの半額くらいじゃないか

奇跡のドードー

なんと相模さんのまとめwikiだと各種悪魔のログがまとめられてて無料で見れ

ちまうんだ!

代わりに俺らの異界攻略動画が撮られてるらしくてログをまとめられたら大して強

くない姿がみんなに見られるんだけど

まとめられたら報酬めっちゃいいから大して強くないレア悪魔と戦いたいよ

?  
ン  
???

ヤタガラスだとそれに追加で魔王戦や魔人戦、最高難易度異界の攻略、危険悪魔の対

処法とかが無料で見れた

インターネット老人会第一席

抜けなくても良さそうなのに

沖ノ鳥島で話を聞いた時には話題に出なかったけどノルマとかある？

?  
ン?  
ン?  
???

ノルマは無いんだが中の空気がちよつとな

どうなつてもライドウに任せればいいからって感じで管理地しかフォローしなくなつてて地域の差が気になつた

市町村や支部の神様が上司というかケツ持ちになるから神様の発言力が内部の自由行動に露骨に繋がる

どうしてもかつて国一帯を治めた実績がある神様とかがシンプルに強くなつてても出来なかつたりする

ないよお！ 鳥根にパソコンないよお！

鳥根の英雄である相模さんをご存知ない!?

モ・／  
〒イノ、イ、／  
／

へー鳥根の英雄なんだ

閃光の明日葉

鳥取の英雄とか弱そう

茅場キリト

よく見ろ鳥根だ

鳥取と鳥根ってことか？

どつちにしろ微妙な英雄すぎる

連続今日寿郎

キリト、英雄になれ

茅場キリト

アスナは俺が守る！

閃光の明日葉

明日葉だけど守ってくれる？

茅場キリト

自力で生きろ

3時のおやつ

アスナじゃないからか辛辣で草

八甲田山のルフィ

高地、島根、鳥取で有名なんですな

西日本のヤタガラスの人なのかな

奇跡のドードー

神奈川のヤタガラスの人です

アカザ・クオリティ

神奈川は西日本みたいなもんだろ

ないよお！ 鳥根にパソコンないよお！

ああ！

相模は西日本の誉れだ！

セブンイレブンよろこんで

東日本は存知ていない模様

インターネット老人会第一席

西だと京都周りとかはヤタガラスでも歴史が古い家も多く独立独歩で問題なかったりする

東は東京の発展と合わせて新進気鋭のサマナーをスカウトしたから実力がある

そこから辺から外れた外様と交流してるのかもね

?????  
?????

今のヤタガラスはわからないけど崩壊が迫ってるのに各地に行けるんだから影響力はあると思う



本人が頑張ってるのか神様が依怙鼻肩してるのかわからないが  
神様や他のヤタガラスも徒に遊ばせる余裕は無いと思う

奇跡のドードー

相模さん、今日も頑張ってるな

おかげで安心して推しに赤スパできる

連続今日寿郎

責務を全うしろ

アカザ・クオリティ

真つ当なサマナーになれ

モ・／~~テ~~イノ、イ、／・／

ヤタガラスが必死に守っているサマナーの姿か、これが

Worldend

ヤタガラス抜けたやつが変な名前なの誰も突っ込まないのかよ

ペサルティか何かか

?  
ン????  
ン???

趣味

(^o^)/<死は救済、生は苦しみ、日常は苦行なり

草

?ン  
?ン  
???

ペナルティそんなにない

持ち出し禁止の情報を忘れる

専用のCOMPを返す

ヤタガラスを名乗らない

つてくらい

もつと色々あるけど大雑把なのはこんなん

セブンイレブンよろこんで

装備取り上げとかないのか

?ン  
?ン  
???

無い?

なんなら退職金とか出るしヤタガラス所属だったから依頼も良い

( $\sim$ o $\sim$ )ノ<死は救済、生は苦しみ、日常は苦行なり

あ、天降り・・・!

worldend

言うほど下ってるか?

インターネット老人会第一席

積み上げた評価で下駄履けてるだけでしょ

資格があると報酬が高い依頼を受けられたりするってホント？

?  
? ? ? ?  
? ? ? ?

それは本当

インフラに強いとそれだけで食べて行ける

電気技師とか活躍の場も多い

電気屋

割良いのか・・・

ガイアの依頼やめよっかな・・・

?  
? ? ? ?  
? ? ? ?

ガイアの方が金銭面は良いよ

ただガイアはどの依頼も当たり前のように命が懸かってる

ヤタガラスとの差額は自分の命の値段って考えてもいいかも

ヤタガラスは情報や安全面の費用だと割り切ってる

( 〇 ) ノク死は救済、生は苦しみ、日常は苦行なり

でもヤタガラスも死ぬんだろ

?  
ン?????  
ン???

そりや死ぬこともあるのがこの業界だから

死ぬけど蘇生や救援も早い

ガイアより見捨てられることが少ない

アカザ・クオリテイ

まあガイアは救援無しだからな

連続今日寿郎

多額の借金を背負わせて蘇生させるダークサマナーもいるから

モーファンシン

末法だな

インタ―ネット老人会第一席

そうでもしないと生きられないサマナーもいるってことかな

八甲田山のルフィ

堅実に生きたいですね

連続今日寿郎

なんかこのルフィ日和ってんな

アカザ・クオリテイ

お前が言うのか・・・

奇跡のドードー

西日本の英雄の力でスパチャ上限撤廃してくださいよおく!!

閃光の明日葉

それはD D Sに言いなさいな

スパチャ配分を間違えた愚か者の末路を楽しませてもらうね

奇跡のドードー

あとちよつとなんだよ

たぶん男慣れしてなくて恥ずかしがってるだけだから

幾らくらいスパチャしたらプロポーズしてもいいだろうか

(ゝoゝ) ノ<死は救済、生は苦しみ、日常は苦行なり

女性は金額では動かないぜ

閃光の明日葉

動くこともあるけどスパチャだけは流石にきしよい

遺跡の世代

サマナーってなんで気持ち悪くなるの？

奇跡のドードー

気持ち悪いって直接的な表現はきつい・・・

（〇〇）ノ＜死は救済、生は苦しみ、日常は苦行なり  
ウケる

閃光の明日葉

あなたも気持ち悪い

（〇〇）ノ＜死は救済、生は苦しみ、日常は苦行なり  
ヒュッ

金予教ミツクチ

世界は必ず崩壊します

終焉はすぐそこに

インタ―ネット老人会第一席

銀杯教も滅ぶ直前に同じこと言ってたの思い出した

八甲田山のルフィ

自分たちの滅びと崩壊を同一視してるってことでしょうか

（〇〇）ノ＜死は救済、生は苦しみ、日常は苦行なり

どうせ最期なら思い切った予言でもすればいいのに

断言したら騙されるやつも出るだろ

ゆりしい♡

生配信始めてますにゃん♡

次のテーマは金予教の末路、崩壊についてですにゃん♡

みんな来て♡

連続今日寿郎

俺ゆりしいにちよつと興味持ったわ

この柔軟性は評価したい

アカザ・クオリティ

早く評価しろ今日寿郎！

放送が終わってしまう！

いいねすると言え！

UNDERGROUND

アカザ見てて草

茅場キリト

断言できるやつはそれだけで強いよ

?  
ン?????  
ン???

ヤダガラスでも今後どうしたいかって言える奴はいなかったからな

みんな不安で持て余してたから閉塞的だった

奇跡のドードー

目的持ってて公言して率先して動けるやつが強いつてわけね

なあ、スパチャ手渡しってどうかな

サガミ

やめて

奇跡のドードー

!?

ほんとに駄目？

サガミ

自己責任

奇跡のドードー

はい

3時のおやつ

いや草

ないよお！ 鳥根にパソコンないよお！

おおおおお推しでひゅう！



インターネット老人会第一席

沖ノ鳥島の方がカップ麺食べたいって言っていました

サガミ

ありがとうございます

袋麺送つときます

モーファンシン

草

インターネット老人会第一席

そうだ

相模さん、質問いいですか？

メビウスの輪

このスレッドは使用期限を過ぎました。

これ以上書き込みはできません。

新しいスレッドを立ててください。

## 女神転生（地方しらべ） 17

お昼過ぎに「きーたよ！」と事務所に来た川崎担当のサキちゃん。

活発な子で、動きに合わせて艶のある長い黒髪のスインテールが流れている。

服装は黒いドレスで、ゴシック系とかいうらしい。

予定よりもずっと早く来た理由というのも小学校が半日で終わったから遊ぶためとのこと。

時間ギリギリで合流されるのは嫌いなので大歓迎だ。

魔人の少女はしつかりしているのだから、この世界に慣れ切った約束の時間を守れない大人たちは見習ってほしい。

魔人の倫理観がどうかを話し合う前に、人間としての常識を話し合ったほうがよっぽど有意義だと思う。

出現した魔人が人間社会に馴染めるのかそうじゃないのか、そういった部分は初手で大体決まるので後は教育方針とかを話し合ったほうが建設的なんじゃないかな。

俺がそんなに魔人と接触してないから言えることなのかもしれないが。

「サガミちゃん、今日はどうするの？」

散々食べ歩き続け、トングで威嚇した回数がギネスに載りそうなサキちゃん。

夕食を食べ、お菓子を威嚇し、デザートを食べ、お茶を飲んで落ち着くと今日の予定を知りたくなったらしい。

興味が0か100みたいな性格なので、仕事を頼むと大雑把になつてしまう。

自身の縄張りである川崎には関心が強いので普段は治安維持や防衛だけ任せる、という考えが神奈川県やタガラスが共通している。

加減とかが得意じゃない子なので治安維持や防衛は過激になりがちなのだが、そもそも魔人の管理地で好き勝手しようとする連中が悪い。

魔人とは公表してないけど。

「この後は電車で合流してからバスで現場まで移動かな」

「今日は沢山の人と一緒に移動するのでサキさんもお淑やかにしましょうね」

「スイッチ持ってきた！ バスでやろ！」とはしゃぐサキちゃんに、自分のスイッチを見せるピジョンちゃん。

俺もスイッチを持っているが大人げなくポコポコにした結果、参加を禁止された。

手加減したら街中で本気出すつて脅してきたサキちゃんが悪いと思う。

ピジョンちゃんはポコすと反応が可愛いから仕方なかった。

女の子たちが華やかに楽しむ中、冤罪のせいで参加できなくて見てるだけの気持ちかわかるだろうか。

可愛いから見てるだけで楽しい。

おじさんや不細工がきやつきやしてたら苦痛だと思うけど。

1人を犠牲にして100人を救える状況なら1人を犠牲にできるのだが、性癖に嵌った美少女（俺のことが好き）1人を犠牲に1万人（不細工含む）が救える状況を目前にした時、俺は果たして1人を切り捨てられるのか。

だって俺の性癖に嵌った美少女（俺のことが好き）を発見するには1万人が足りないからだ。

俺の性癖に嵌った美少女（俺のことが嫌い）なら多く見つかるはずなんだが。

今世紀最大のテーマだよこれは。

「あれ、サガミちゃん。歩き方がまた綺麗になってるけど近接練習してた？」

「わかっちゃうかあ。最近奪った記憶と経験を参考にして馴染ませてるんだよね」

「前から思ってたんだけどすつごく悪い敵が言うことっぽくない？」

へへへ、と照れてるがサキちゃんの言葉で固まる。

倫理観魔人であつ小学生に言われると本当にそうなのかもしれない。

教育に悪いじゃん、失敗したかも。

「大丈夫、大丈夫ですよ。サキさん。サガミさんは奪うことで成長しています」

「それすつごく悪い敵の成長の仕方じゃない？」

「出会った頃は敵をすぐ殺めていましたが、今では利用して価値が無くなってから息の根を止めています」

「それすつごく悪い黒幕のやり方じゃない？」

「勘違いしないでください。サガミさんはダークサマナーから知識を得る事で倫理観がちよつと成長しました」

「ダークサマナーから奪つてもちよつとしか成長しないのはやばいと思う」

「加減がわからず無差別に救うこともありましたが、今では選んで救っています」

「成長したつていうのはもしかしてダークサマナー的な意味？」

「サキちゃんはなかなか辛口だなあ」

彼女は元からある程度の知識を持ち、能力面でもある程度完成している状態で発生したと聞いた。

それを土台に学習するので人間の子供よりもあらゆる面で成長が早いのだろう。

当然身体能力も高すぎるので苦勞することもあるという。

それでも小学校に通っているのは本人の希望と、今は亡き前任のカワサキさんの要望、ヤタガラスの興味によるものだ。

社会に混ぜたら悪魔や魔人、悪魔人間も人間の味方になるんじゃないのって研究的興味らしい。

ちよつと痲癩を起して暴れただけで人間をミンチに出来る連中を混ぜるのは流石に難しいのでサキちゃんみたいに実際試せるのはレアケースっぽいが。

精神鑑定や素行調査の結果、正常な学生生活なら送れるだろうとヤタガラスは判断した。

つまり胸糞悪いイジメとかを起こしたら知らないってことだ。

イジメで死人が出たとしても学校側も放置した覚悟の上だろうってことで俺はサキちゃんの通学には賛成している。

機嫌を損ねて学校の敷地が更地になると危惧する反対派も未だにいるのだが、サキちゃんは賢いからすぐに顔を覚えられるので選んで殺せると真剣に伝えたら納得してくれた。

「わたしね、サガミちゃんは真つ先にライドウちゃんに斬られると思ってたよ」

「そう？ 俺、そんなに悪いことしてなかったと思うけど」

国を維持するライドウと現在の社会を継続したい俺。

細かい部分で反りが合わない事は確かだが、崩壊を食い止めるといふ大前提があれば協調するのは難しくない。

なんなら互いが最大の理解者かつ協力者ですらある。

崩壊後は微妙だけど。

そもそもライドウは崩壊する事象を命懸けで止めようとして死にそう。

「手当たり次第、記憶いじるのは悪いんじゃないやなくてヤバいことだと思うの」

「違うんだよ。あれは練習だったし相手もちやんと選んでやってたから安全。失敗だつてちよつとしかなかったからセーフ」

助けを求めるようにピジョンちゃんに視線を送れば、困ったように微笑むだけだった。

全然関係ないけどこの表情好きなんだよね。

魔人のサキちゃんにヤバイ呼ばわりされた記憶操作等は確かに慣れない内は何度も失敗した。

敵対したメシアをメインに練習し、信仰を上書きしたり、神という概念を消失させてしまったり、記憶を消されて運用されてた処刑人の記憶を復元したら勝手に突撃したりと色々あった。

だが今は違う。

ダークサマナーを使って繰り返し積んだ努力と経験は俺を裏切らない。

今では一般人の記憶処理も簡単に行える。

悪魔や魔人、高レベルサマナーは忘却耐性が高く、効かない場合が多々あるので俺の得意分野は雑魚だ。

頑張れば雑魚専以外も出来なくはないが、頑張りたくない。

今日はちよつと頑張る日だが。

「あ、電車きたみたい……。サガミちゃん、これ乗るの？ ……ピジョンちゃん、ホント？」

嫌そうなサキちゃんを連れて車両に乗り込む。

車内は異様な雰囲気に含まれていて、一般人は近寄つてすら来ない。

というのも金色の刺繍を施した白装束の集団がずらつと乗つていた。

フードで頭まですっぽりと覆つていて、ひと目では個人を特定出来ないだろう。

する意味も無いが。

座席には座らず立っているのも奇妙だった。

「通してください」と声を掛け、押しのけながら進んでいく。

意識とかは薄いので声を掛ける意味はあまり無いのだが、癖でつい言ってしまうよね。

目当ての座席には先客として、他の白装束たちよりも豪華な金の刺繍が施されている人物が座っていた。



「相席させてくださーいありがとー」

瞑想しているので世間には興味ないです、といった顔をしていた癖に俺たちが座るとギョツとしていた。

これくらいで心が乱されるなんて修行不足なんじゃないかな。

金予教の教義とか修行は知らんけど。

「お言葉ですが、他の車両も空いておりますが」

「目的地は同じでしょうから一緒に行きましようよ」

馴れ馴れしい俺の言葉に気分を害した風でも無く、しかし納得したのか頷いた。

返事を待たずにピジョンちゃんとサキちゃんはゲームをし始めたので移動する気なんてサラサラ無かったけど。

他の教団員はボケーッと窓の外を見ているようだが、朝の満員電車に似たディスプレイアめいた何かを感じる。

日本は既にカルトに汚染されていた……？

「金予教のヨミと申します」

「どうも(ゞ)丁寧(ゞ)に。よろしくお願(ゞ)い(ゞ)た(ゞ)します」

手を差し出すが、握手はしてくれなかった。

異能者や呪術師等は軽い身体接触の類でも害を与えてくるので当然の警戒と言えた。

ヨミと名乗った中年の男は、周りの白装束とは違い顔を隠してはいなかった。自信があるのだろう。

頭髪もふさふさだった。

「……金予教と言いますと、もしや石川県からわざわざ？」

「いえ、私は東京本部から責任者として来ております」

「偉い人じゃないですか。わざわざ足を運ぶとは今回の仕事を重く見てるんですね」

「私といたしましては……。いえ、ここで言う事ではありませんね。そちらは……」

金予教の本拠地は石川県の金沢市にあり、教祖はそこから必要な時だけ現場に現れる。

カルト団体として有名で、最近虫の息となつた銀杯教に次ぐ勢力を誇る。

まだGPに大きく影響する事件は起こしていないが、民間で相談が相次いでいるため上手く削げば怒られることはない程度だ。

今日船頭を失う予定にあるので金予教と銀杯教の残党が合流するだろう。

昔ポケモンでホウオウに金の葉っぱ、ルギアに銀の葉っぱを持たせて育て屋に預けるとセレビィが現れるって噂が流れたのを思い出した。

今後セレビィが誕生してしまうかもしれない。

いやあれデマだったな。

「俺はですね、ほら銀杯教が問題を起こしそうだったでしょう。それでちよつと前から神奈川で活動してたんですよ。で、今は失態を犯して勢力が大きく後退したって話を聞いたので、良い機会だと思つて手を広げようかと」

「見る目がありますね。我々もこの機に支部を作ろうかと考えておりますので何かと仕事を頼む機会が増えると思います」

「楽しみに待つてますね。と言つてもゲームしてる二人も俺の同僚なのでそつちに不満が無ければ、ですけど」

「失礼ながらそちらのお嬢様方は……」

「すつげー強いんで大丈夫ですよ」

「すつげーつよい……」

「スプラトウーンがすつげー強いですよ」

ヨミが「えっ」と漏らしたので「うそうそ。二人が今やってるのはどうぶつの森ですよ」とケラケラと笑う。

俺の言葉に二人を推し測ろうと、ヨミが真剣な視線を向けた。

未成年に熱い視線を送る中年とか捕まっても可笑しくない絵面だった。

サマナーが強さを測る方法はいくつかあるが、容姿は如何様にも変えられるので見た目だけで強さを判断することは不可能だと言えた。

大体のサマナーが判断に使うのはCOMPを用いたアナライズによる計測だ。

これならCOMPが規格化した数値で表記される上に得意不得意等も表示され、自身と比較も出来る。

ただし無遠慮にアナライズすると敵対行為と見做される。

特にライト・ダークの所属関係無しにフリーのサマナーは情報が命の為、勝手にアナライズしよう物なら殺し合いに発展する。

当然アナライズへの対策も多く用意されているし、俺もダミー情報を流して攪乱する。

アナライズの次が個人のマグネタイト量である。

これが多いと天才的な才能を持っていたり、異能が凄かったりと特異な存在がわかる。

悪魔からしたら簡単に捕まえられる美味しいご馳走なので狙われやすく、こちらの業界に望まないまま転がり込むことが多い。

他には魔力の保有量を直感で判断するのも挙げられる。

魔法型同士は力量が幾らかわかるようで、サキちゃんを見たヨミは納得したように頷いた。

まあ、これも偽装できるので微妙なだけだ。

後は立ち居振る舞いとか装備とかで総合的に判断するくらいだ。

ちなみに俺個人のマグネタイト量も魔力もしょぼいし、服装もカッターシャツとジーンズとこれまたしょぼい。

魔力豊富なサキちゃん、堅牢なピジョンちゃんと見たヨミが最後に俺を見て首を傾げたのも仕方ないと思う。

安心してください、今日はガチ装備ですよ。

「おっと。そうやって測られると逆に俺が不安要素になってしまいますね」

「いえ、むしろ信頼できそうです。振る舞いが界限の者として相応しいと言いますか」

「それは良かった」

良くない。

俺はダークサマナーの記憶を読んだりはするが、くっそつまないドキュメンタリーを見る気持ちで流し見する程度だ。

どうせ何かの事件に巻き込まれたり自分で飛び込んで、後戻りできなくなつて道を逸れてしまう。

責任の所在が自他で変わるくらいで、似たような始まりばかりだった。

情報を絞り出すような要請でも無ければ真剣に見たりしない。

俺の言動はちよつと脚色したり、ドキュメンタリーのセリフをパクつて演出を加える

以外は普段通りの振る舞いだ。

相応しいと言われても困る。

「それなら今後は鼻屑にして貰いたいなあ……。そうだ、今日の俺の働きをこの後見てもらって、評価に値するなら連絡先を交換しませんか」

「ほう」

そこまで言うのならと言った具合で、俺に興味を持ったようだ。

DDS上でのやり取りではどうしてもログが残るため、それを嫌い直接売り込むダークサマナーも少なくない。

可哀そうなことにヨミは俺の働きを見ても依頼出来ないし、万が一依頼出来るとしても俺に懸賞金を懸けてダークサマナーを募集しそうだけど。

だって俺はダークサマナーでは無いし、ヨミはこの後死ぬから。

100分後に死ぬヨミだが、友達が少なそうなので冥途の土産になるよう交流してあげようと思う。

「そういえば教祖のタム口は現地で合流ですか」

「……何の事やら」

「疑問なんですけど教祖の名前はコトワリで合ってますか」

「……よくご存知で」

「仕事柄情報収集は最優先なんですよ」

ここにこと笑いかければ、鋭い視線を返される。

<sup>コトワリ</sup>理を掲げる者たちがいて、崩壊後の世界をどう導くかを定めているらしい。

弱肉強食とか完全管理とか社会の構造から文明の在り方まで千差万別だが、宗教系、特に予知能力を持つ者がいる場合にはコトワリを持ちたがるし、崩壊を進めようとする。

GPを下げたり、異界を破壊するためにヤタガラスが利用している受胎儀式を完全に行うと世界をコトワリに沿って再編出来るという話だ。

成功するところの世界が再編されるために確かめようが無い所までがセットなので、受胎儀式の実行権限を得たとしても完全な儀式をやりたがる者はヤタガラス内には居ない。

世界を巻き込んで自殺したい奴が盛大な自殺スイッチとして利用しそうだが、仮に成功したら自殺できずに世界を再編しないといけなくなるからな。

ゆらぎクラスになると明確に儀式やコトワリについて勘づいていたようだったが、どんな重大な知識や真実でも死んだら無意味だって教えてくれた。

ピエロのマバラもいい線行ったが、ゆらぎに乗じようとしてどうしても突発的に動かざるを得ない状況となり、結局持ち味を活かせないまま討伐された。

要はコトワリを持つてるやつらは崩壊後を見据えて動きたがる死んだほうがいいカスたちなので率先して狩っている。

「もしかして秘密でした？」

「……いえ」

「仕事まで消耗したくないので敵対しなくてももらえると助かりますね。仲良くしましよ  
うよ」

「……私も神通力を使った場合にはこの車両では耐えられないので争うつもりはありません」

軽薄な笑みでへへへ、とヨミの気分を宥める。

宥めるといふより逆撫でた気がするけど。

コトワリ自体は別に隠す事でも無いが、儀式も合わさると秘匿すべき事柄だ。

金予教は確信には至ってはいないが、儀式に気づきつつあるラインに立っているのかもしれない。

そういう状況で訳知り顔の俺が現れたとあつては穏やかで居られないだろう。

一緒に乗車している白装束の教団員たちは、示し合わせたように全員で虚ろな目を俺に向けていた。

「またサガミちゃんがすつごく悪い敵みたいなこと言ってる……」



「實際悪いやつだから良いんだよ。美味しいご飯のためだ」

情報通ごっこしてヨミに弱い圧力をかけている俺に、サキちゃんが呆れたように言った。

ピジョンちゃんは困ったように笑うだけ。

今日散々お前らに貢いだせいだろうがー、と頭をわしゃわしゃと撫で回せばきやあきやあと二人がはしやぐ。

俺の様子に、ヨミは肩から力を抜いた。

実際金予教は悪いやつだから騙しても良いんだよ。

そもそもこの状況を予言できない程度の教祖を掲げている連中が悪いよ。

俺もよくわからないが、預言者バトルとなると現場にいる状態が一番強く、遠隔地にいるほど見通しが弱まるらしい。

金沢の引きこもりが神奈川の貧乳に勝てるわけないのは道理だろう。

「予言の頻度つてどのくらいか聞いてもいいですか」

「金予に興味をお持ちですか」

「銀杯教が凋落した今、次に台頭する勢力を気にするのは当然かと。神奈川は空地になつてますからね。今後の動向で身の振り方は変わってきますよ」

神奈川に拠点を作りたがる連中の相手をすると考えたと身の振り方を考える必要が

ある。

俺としては手間暇かけずに効率よく削りたい。

そのために銀杯教についてメディアを自由にさせている。

マスコミは勝手に嗅ぎまわり、自分勝手な答えを作り出してくれる。

ヤタガラスが干渉できる程度には危ないと伝えているが、それでも探る者は後を絶たない。

個人なのか、企業なのか、敵対勢力なのか、何にしる助言が聞けないなら危険な目に遭ってもらおうとする。

そんなわけで銀杯教まわりはプリウスミサイルもどきを発射して一度手を引く予定だ。

メディアは勝手に想像と文章を書き立ててくれるだろう。

「予言は多くても週に一度ですな」

答えてくれないか、煙に巻かれるかと思ったが、教えてくれるようだ。

俺を使えそうだと判断して取り込みに来ているのかもしれない。

どちらにしても悪くない情報だ。

週に一度程度なら細かい指示は出来ないタイプだろう。

ちよつとした行動で変化することもあつてか細かい指示を行う預言者とか聞いたこ

とないけど。

「ただし今回の件に関しては幾つか予言を頂いております」

「興味ありますね」

「残念ながら外部に漏らすわけにはいきません」

「あらら。それは本当に残念です」

「一つだけ言える事は、たむろ様が重要視しているのは確かだと言う事です。貴方も信じるようになるでしょう」

「そりゃあ週一でテキスト吹かしていたやつが急に細かい指示を出したら本気だっと思ふよなあ。」

「心の中のじゃぼにか暗殺帳に書かれているリストで、タムロの名前を今日の最優先にソートする。」

「金予教の教祖クラスが動けば掲示板のスレで僅かでも報告が上がるのだが、その様子は全く無かった。」

「それでいて重要事項だと判断していると内部の人間が判断していて、ピジョンちゃんも来ると言っていた。」

「日頃の行いのおかげだろうか、運が良い。」

「連絡先を交換する前に俺の名前を……。いや、必要ないか」

かっこいい偽名が思いつかなかったのでそれっぽいムーブで煙に巻くことにする。

宗教に嵌ってるダメな奴らはこういうのが好きだからな。

ダメだったら鳩一郎、鳩子、鳩美でいく。

「教祖タムロが本物なら俺がわかるはずなので試させてもらいます。俺もフリーなので見て慎重に判断したい」

「……良いでしょう。本物の奇跡をお見せしましょう」

「楽しみにしています」と生意気な感じで挑むかのよう言いながら手を差し出して握手すれば、「楽しみにしててください」と自信満々の返事。

教祖を信頼しているのか、単なる他力本願で楽観的なのか。

それにしてもくっそテキトーなことを言ったのに通っちゃったよ。

随分と愉快的カルト教団だ。

ちなみにこの愉快的カルト教団員たちは人間爆弾になる。

金の刺繍で刻まれた呪いによって、自身のマグネタイトを燃やして吹っ飛ぶとか。

今やこの車両は人間爆弾専用ってところか。

シンゴジラに使われた在来線爆弾の亜種って考えるとかなり強そう。

そういえば俺、人間爆弾の満員電車に乗るの初めてだな。

そのまま一緒に駅で降りて、カルト教団が移動する流れに乗って付いて行く。そして金予教がレンタルしたバスに当たり前のように同乗する。

なんで本部からバスで来なかったのか聞いてみると、ヤタガラス等の同業他社対策らしい。

東京本部から乗り付けるとあからさま過ぎて動きを追われるが、一般人に馴染む服装でバラバラに散ってから神奈川で集合し、最後にバスで現地向かうことにしたようだ。

それならヤタガラスもあまり気にかげず、人員も導入しないでしようと思えめると満更でもなさそうだった。

確かに本部からバス移動だったら同乗するのが面倒になって本部や車両ごと吹っ飛ばしていたかもしれないので賢い。

吹っ飛ばして東京のヤタガラスに突かれても面識のない立川さんを盾にするつもりだったけど。

「サキちゃん！ カラオケついてるよ！」

「ほんとだ！ うたお！」

車内に付属していたカラオケセットのマイクを掲げて見せれば、飛びつくようにサキちゃんが反応した。

金予教も中々いいバスを借りてくれたようで、道中も暇を潰せる。

贅沢を言うなら座席を回転させられるサロンタイプが良かったが、ヨミには人間爆弾と顔を突き合わせて移動する気が無かったようで普通の座席タイプだった。

ちよつとの不満と不便は旅の楽しみとして受け入れよう。

「サキちゃん、こつち見て！」と声をかければウイंकをパチつと決めてくれた。

なおピジョンちゃんはお願ひしても引つ込み思案だからやつてくれない。

「いやあ、俺は旅行とかだと移動も好きなんですよね。新幹線のスゴイカタアイスとかも楽しみでして」

「そ、そうですか」

「あ、食べますか？」

「え、えつと、そ、それはなんででしょう」

「うずらの卵の缶詰です」

缶詰の蓋を開けながら、隣の座席に座るヨミに聞く。

中身は燻製されたうずらの卵のつまみ缶だ。

こういうのは移動中の車内とか旅先の旅館で夜間に食べると美味しい。

ヨミは小さく「ええ……。遠慮します……」とだけ答えた。

前の座席にいたピジョンちゃんは欲しいようで、こつちに振り向いて口を開けて待つ

ている。

同じようにサキちゃんも歌の途中で口を開けて待つていた。

雛鳥に餌を与える気持ちになりながら放り込んでやる。

普通に考えて雛鳥の餌として卵を与える親鳥つて嫌だな。

「なんかさあ、車内が静かすぎませんか」

「へ？」

「せめて手拍子だけでも欲しいですよ。欲しくない？」

「ほしいー」

ほら、サキちゃんも欲しいって言ってる。

期待に応えちゃいなよ、その後は折角だから一緒に歌おうぜ、とヨミと肩を組めば嫌そうな表情を浮かべた。

ヨミは「し、正気か……」と呟いたが、カルト教団にハマって人間爆弾を電車移動させた後にバスでカラオケを楽しむようなやつが何を言ってるんだか。

そもそもちよつとずつ意識や記憶に干渉してるから正気じゃないのかもしれない。

最初は親しみを覚えさせたり違和感を感じなくさせる程度に干渉を続け、握手してから深めてみたが上手くいったようだ。

気付いたら正気じゃなくなってるなんて現代社会つて怖いね。

俺はお辞儀して互いに礼する挨拶よりも握手やハグのほうが能力が使いやすく好きだな。

「サキちゃん！　かわいいよ！」

歌うサキちゃんに向けてはしやぎながら褒め言葉を送れば、「とうぜん！」と上機嫌で歌い続けた。

こんなに盛り上がっているというのに、同乗している金予教の面々は虚ろな目をして正面を向いたままだった。

そういえば俺、カルト教団の人間爆弾に囲まれた状態でバスに乗るの初めてだ。得難い経験ってやつだろうか。

目的地付近の人里離れた山間にある川の近くでバスが停まった。

この後は徒歩移動となり、一旦人間爆弾たちは待機のようなのだ。

他のダークサマナーたちを威圧しないようにまずはヨミが先に合流することによって同行する。

バスはピジョンちゃんの魅惑の囁きで白装束たちを乗せて横浜へと出発した。

俺も心神喪失者を操るカリスマ性が欲しかったな。



蒐集した記憶を使って喋り方とか参考にしてるんだけど全然上手くいかなくて諦めそう。

ちよつとずつ準備しようと思ひ、昔使つていた義手を浮遊させる。

ふわふわと浮かぶ腕だが、マグネタイトによって薄つすらと緑に輝いている。

今は腕を再生させたフレッシュな肉体となったが、昨年までは頼り切りだった。

「き、教祖タム口様と合流するので、で、し、失礼の無いように」

「心配しなくても大丈夫ですよ」

疑わしいとばかりの視線が二人から送られる。

ヨミとサキちゃんだ。

ヨミはこれまでの馴れ馴れしさから注意してくれているのだろう。

心配しているようだが、機嫌を損ねる前にいなくなるから大丈夫だ。

サキちゃんはこいつまた悪いことやつてんなつて顔だった。

まだやつてないからセーフ。

「そういえばヨミさんだけ東京から車で送迎してもらえば良かったのでは」

偉いのに電車移動はどうしてなんだい、と聞いてみる。

カルト集団が電車で移動するの面白すぎるし。

組織の幹部とか偉い人は高級車で乗り付けるイメージがある。

ヤタガラスでは車やバイク、電車を使う人も多いが、中には自分で走ったほうが速いとか悪魔のほうが楽だとかで好き勝手している。

「ぎ、銀杯の失態がわ、我々にも波及してすくなくない注目があ、あつまっています。と、東京では記者やヤタガラスが張り付いていて、陽動も兼ねてか、かれらの指示役としてわ、わたしが同道し、しました」

関東の支部からも人手を募り、現地に集合してくるようだ。

みんな電車とかバスで来ると思うと面白すぎる。

利用された交通手段やレンタル会社を教えて貰ったので後日調査が入るだろう。

中には徒歩で来る連中もいるとかで、笑いをこらえるのが大変だった。

ピクニックか何かか。

せっかくだから歌いながら目的地に向かうべきだろうか。

いや、夜も深まってきてるしやめところ。

「サキちゃん、学校どう？」

「たのしー」

「そりや良かった。何か問題があったら相談するんだよ」

「給食の茹で野菜がやだ」

「すまねえ……。俺の力ではどうすることもできない……」

「あつ……。あつ……」

サキちゃんの近況報告によると学校生活を送る上で不便は無いらしい。

苦手な授業は道徳とか国語で、優しさとか共感が難しいようだ。

とりあえず表面上は人や動植物は傷つけちゃいけない、殺しや暴力はダメ、嘘は吐かない、脅しは無し、隣人と仲良くする程度のことを取り繕っておけば大丈夫だと伝えた。

「サガミちゃんは全部やぶってるじゃん！」と言われたが、授業じゃないから良いんだよ。

バレなきや殺してもいいと助言したが、流石にサキちゃんでもそれはダメだとわかるらしい。

罪悪感とかモヤモヤする気持ちを抱えて寝れなくなるような事はやらない、それ以外ならオツケーだと思っただけ。

「サガミちゃんってすぐ人を殺してない？ 気のせい？」

「すぐは殺してないから気のせい」

「あつ……。あつ……」

「うちの手伝いしてくれる人たちに聞いたんだけど、初めて殺した時とか相手の顔が何度も夢に出て寝れなかったって。サガミちゃんもやっぱりそうだった？」

「いや、俺、人の顔を覚えるの苦手だからちよつと身に覚えのない事柄というか……」

「やっぱり悪魔なの?」

普通の家庭出身の人間なんだよなあ。

両親も普通に人間だし、温かい家庭で育まれた生命が俺だ。

実家は色々あつて横浜に移転しているし、帰ることもほぼ無いけど。

しかし、改めて思い返すと初めての殺人はどうだったかな。

鈍器で殴ったら骨とか毛のせいで思ったよりも固くて、しかも血が激しく噴き出して肉も絡みつくから、それを見て「うわ、きつたね……」という気持ちになったのを思い出した。

次からは炎で炙ることを試したのだが、それはそれで血肉が焦げて「うわ、くっさ……」と後悔して火力を上げようと頑張った。

水は回復力が高い再生型の敵だとすぐに復活するからイマイチだったし、ずっと肺や体内に水を込めて陸上で溺死させ続けたら深海魚みたいでキシヨかった。

生き埋めもやってみたが、爪が全部剥がれて指先の骨や肉が碎けて憔悴しながらも這い出てくるから超再生型を溺死させないといけなくて二度手間だった。

ちよつと恥ずかしいけど俺にも初々しい時代があつたんだよな。

「あつ……。あつ……。」

「サガミさん、追放ものだと言予教に拾われた記憶が残るので、そこから疑問を抱くかも

しれませんよ」

「でも最初から銀杯だと神通力とやらを失いそうなんだよね。元から持っていた素養と違つて後天的に増設された機能っぽいから」

「あつ……。あつ……。タム……。タ……。たら……。らぎ様……」

「この人うるさいんだけど。2人が何やつてるか聞いてもいい？」

片手間で弄っていたヨミがカオナシモードになつてしまったので、ピジョンちゃんとああでもない、こうでもないと話し合う。

それが気になつたのかジト目になつたサキちゃん。

ちよつとうるさかったか。

腰を据えてゆつくりと作業したほうが馴染むから上手くやれるが、これに関しては時間をかける意味があんまり無い。

俺がもつと才能豊かだつたらサツと出来るんだけど、残念ながら凡夫なので下駄を履いて作業している。

天才だと日常生活で使いまくつて日の目を見ない世界で処分されるか、悪魔に憑りつかれて酷いことになるので、やっぱり才能なくて良かった。

「最近ペルソナの知識とか経験を仕入れたんだよね」

「うん」

「それを元に異能者にペルソナ使いだった記憶があつたらどうなるか気になって」  
「うん？」

「銀杯教でゆらぎに忠誠を誓つてペルソナ使いとして活躍した栄光の記憶を捏造してみた。題して『金予教で東京本部長をしていた念動能力者の僕が朝起きたら銀杯教でペルソナ使いとして活躍していた』」

流石に記憶の両立は厳しかったが匠の技で解決した。

銀杯教のペルソナ使いユミという人格を捏造したのがポイントだ。

他にも誕生は今さつき、つまり夜だったりタイトルと本文の齟齬が起きているがどうでもいいか。

人格の争いによって主導権を握らせる。

この世界だと自分で選ぶのが何よりも重みが生じるから大切なんだよね。

ユミは人格争いについて理解しているが、ヨミは何もわからないのがドラマチックな演出だ。

争え……もつと争え……。

「あつ……ゆら……ゆらぎ様……」

「サガミちゃん」

「うん」

「それすつごく悪い敵がやることだと思おうの」

「確かに一般人にやったらすつごく悪い。だけどすつごく悪いやつは普段からすつごく悪いことをやっている、つまりすつごく悪いことが普通なんだよ。だからすつごく悪い敵にすつごく悪いことをやっても中和されてすつごく普通のことになるんだ。だから悪いことは駄目なんだよな」

「わかったかな、と問えば「そうかな……。そうかも……。」とサキちゃんは納得してくれた。

素直で可愛いから教えるのも楽しいよ。

俺つてもしかして教師に向いてるのかもしれない。

ヤタガラスの活動に限界を感じたら教師になろうかな。

俺と違ってピジョンちゃんは別に学校に興味なさそうだ。

ミツシオン系とかお嬢様学校とかもあるから選び放題だが、行きたそうな素振りも見せないし、話題にもしない。

サキちゃんの話は楽しそうに聞くけど。

「そろそろ装備するか……。ピジョンちゃんは他に何か足りないのがある？」

「私はこのままで大丈夫です」

「そうだよな。色々と飾ってるから大丈夫だよな」

「でもサガミさんから貰える物なら何でも嬉しいですよ。」

胸が足りてない不沈空母鳩はこれ以上飾るとバランスが崩れそうなので、残念ながら追加は無し。

控えめに手を差し出されたので薬系の道具を幾つか持たせておこうか。

サキちゃんは装備したほうが弱くなるタイプなので装備に関しては手ぶらだ。

「おめかしが必要な俺だけー？　もう！　急がなきゃー！」

「サガミちゃん」

「なにかしら！」

「気持ち悪いからやめて」

「はい」

気持ち悪いって言われると心と体、人間の全部がキュツと痛くなるな……。

将来臭いって言われたら死ぬかもしれない……。

困った表情のピジョンちゃんは可愛いものにな……。

「それがストレージ機能ってやつ？　わたしも欲しいな」

「使わせてあげたいんだけどまだ試作の段階なんだよね。オリーブの枝で底上げしないと魔石のひとつすら運べない」

「ふーん」



少し羨ましそうにしているサキちゃんの前で、義手からガトリング砲やデモニカスーツ、二人に渡す道具等を次々に出していく。

俺の腕くらいの大きさしかない義手では明らかに収納できる質量ではないが、最近テストを求められたストレージ機能のアプリを搭載したおかげだ。

ターミナル等に使われている空間の拡張や跳躍を可能とする機能を元に研究開発が進められている物だと聞かされた。

と言つても現状では機能が不十分でヤタガラスの面々に配られるのがいつになるのか俺にもわからない。

ピジョンちゃんが言うにはオリーブの枝は「可能性の延長」を与える物であり、ヤタガラスの研究でも概念の強化が確認されている。

0から1を生み出せず、上限100を超えて120には出来ないが、30や50の可能性を70や100には理論上出来る。

つまり試作品の機能を拡張することで正しい方向か確認しながら使用できる……かもしれない。

俺はサマナーとしての才能も無く異能の出力も低いが、オリーブの枝だけは世界で一番適性がある。

ピジョンちゃんがそう言ったので間違いない。

だからオリーブの枝を使えば異能や悪魔召喚を上手く扱えだし、電霊の強化だって誰よりも上手くいっている。

「どう？ かっこいい？」

「うーん？」

「私からはなんとも言えないですね……」

試作品のデモニカスーツを着てみたので似合ってるか尋ねてみる。

反応は芳しくない。

背中にぶっ刺さるように備え付けられているプロペラタンクみたいな四本の円筒に精霊を召喚できるようになっていて特別製なのに。

精霊を装填すれば四色に背中が輝いていて、まるでゲーミングデモニカスーツだ。

俺は結構好きなデザインだが、お子様にはこの良さがまだわからないか。

元となったデザインや技術はデモニホとかいう悪魔を参考にしていて、個々人に貸与されているヤタガラス用のCOMPを接続して使う予定となっている。

今は歴史や伝承、強い思い等で概念が宿った装飾品で耐性を付けるが、将来的にはそういうのは抽出したり作り出してデモニカスーツに搭載する展望もあるようだ。

デザインは元となったヒーロー族的なセンスなのかもしれない。

つまり俺のセンスはジャックヒーロー族と一緒にコト……？

「ダサいの役に立つの?」

「ダサいのは関係ないから。これ自体がオリーブの枝と相性が良くてね。電霊のバックアップも最大限に受けられて異能も使いやすくなる」

義手の変わりだったオリーブの枝がデモニカスーツの片腕に浸食し、古臭いハンドヘルドコンピュータを模したCOMPとなった。

電霊が気を利用してきているようで、必要と思われる情報がデモニカスーツのヘルム内に表示されている。

どんな環境にも耐えられる戦闘服というコンセプトで作られているので寒さや暑さに強い。

戦闘行動に耐えられる程の機能はまだ有していないが、環境への適応は叶っているようで、目立たない地域では色々と実験が行われている。

中でも沖ノ鳥島では深海探査を行い、更にその様子を配信したり、外国のダークサマナーと小競り合いまでしているとか。

島では無く岩と主張する大陸側の作業員が多く、時折破壊しにくるため裏でリアルタワーディフェンスが始まるらしい。

表向きは無人なので捕虜は取れないし、負けたとしても捕虜に取られないので悲惨である。

海を超えられる人材は大陸では貴重らしく、それほど頻繁に争いが起きないと言っていた。

一時期漁船から水適性を持たない貧乏サマナーが泳ぎながら向かってきたり、エセデモニカスーツを着た軍人が攻めにきたりと別の意味で怠かつたとも聞いたが。

「よし、これで撤退もやれそうだ」

「えー？ 逃げるの？」

「途中でライドウの兄上が来るっほいから頑張ろう」

「あー、ライドウちゃんの来るんだっけ……。わたし、あの人好きじゃないなあ……」

「ほんとに来るの？」「ほんとに来ます」と言い合ってる二人を見ながらデモニカスーツを装着していく。

急に現れて好き勝手するからな、あの人。

別にその後何か起きるわけでもないし、時には悪くなることもある。

ライドウの育成方針が霊的国防に特化しているので指示された事は完璧にこなせるのだが、自分で考えて先を見据えて行動する能力がないのは確かだ。

優秀な猟犬だったが、犬飼になる練習はしたことないから特殊なお家事情の被害者とも言える。

でも猟犬としてライドウに勝ちたいならGP40以上の異界を解決したほうがよっ

ほど修行になるというか、それくらいの難易度を解決できないなら一生ライドウに迫れないってそろそろ理解してくれないだろうか。

「強くなりたかった……」「○○を超えたかった……」と呟いたやつらを気まぐれで行動してランダムで救うのはやめてほしい。

今回は久しぶりに会うのでお気持ち表明しとくか。

「そろそろ合流地点なので俺が突撃する。サキちゃんはいいい感じに魔法してね。ピジョンちゃんはサキちゃんの近くで待機」

「それ得意！」

「ヨミさんはタム口が現れるので頑張る」

「ちがう……。あたしはヨミじゃない……。消えてよ……。あたしから消えて……」

「あ、ユミさんか。ユミさんはゆらぎの敵であるタム口が現れるから頑張って」

「わ、わたしはよみ……？ あっ……。タム口……。ゆらぎ……。タム口……。あっ……。ゆらぎ様……」

なんか駄目そうだ。

使いにくいし、やっぱり洗脳って糞だわ。

そもそも俺は短期ならともかく長期洗脳には向いていないんだよね。

精神防壁も薄くなるので放し飼いにしたらピジョンちゃんみたいなカリスマ持ちに

操られるし良い所がまるでない。

鳥取とか島根の時は末端からピジョンちゃんて切り崩して情報を錯綜させたから組織運用が難しいのだろう。

金予教は人間爆弾用だし、銀杯教は鉄砲玉シャドウとして時限式運用をしていたのもこういった欠点への対策なのかもしれない。

「ももちゃん連れて来たほうが良かったんじゃないの？」

「ムカデさんだと引けなくなるから……」

ムカデさんは崩壊後に備えて強い者を今のうちに倒しておきたいという考えをしているようだ。

地力だと合体までやらかしたライドウの兄上に軍配が上がると予想できるのだが、ムカデさんはその超耐久も相まって泥仕合に繋がる。

俺とピジョンちゃんが援護を差し込めば負けは無いのでムカデさんは絶対に引かない。

俺達が先に逃げてでも引かない。

そうなると徹底抗戦することになり、結構なりソースを吐き出すほどの価値があるのかという話になるが全くない。

長引けばライドウが参戦するだろう規模になり、どう転ぶかわからない戦闘が起こ

り、最終的にライドウの兄上は死ぬがライドウのモチベも死んで日本の危機に繋がる。  
死神か何かか？

「すぐ逃げる？」

「いや、ちよつと衝突して相手が引いてくれないならやらざるを得ない」

ムカデさんと呼んでいないという誠意くらいは伝わって欲しい。

それはそれとして機会があれば殺しておきたい。

今は自分探しの旅をしているような状態だが、途中で変な思想とかに目覚めて敵になられても困るので、まだリカバリーが効く内に退場してもらいたい。

本音を言えば洗脳してでも味方として運用したい強さがあるのだが、万が一に出来たとしても合体してくれちゃってるんでリスクの方が大きい。

定期的にメンテナンスすれば使えなくもないだろうが、時間をかけて洗脳してまで運用する利点がほぼない。

悪の秘密結社だったら政治家等を操るんだろうけど、ヤタガラスは神が運営しているので直接語り掛ければ洗脳よりも効く神気で信仰心を焼かれる。

表社会の何処まで干渉しているのか俺は知らないが、活動が快適になるならどんどんやって欲しい。

マスクも黙らせればいいのと思ったこともあるが、人間は唯々諾々と従う者から

率先してばら撒く者まで居て、かつてムーとかいう雑誌が誕生したとかどうとかで面倒で最低限しか関わらないらしい。

「ピジョンちゃんの未来予知、俺の完璧な作戦、サキちゃんの魔法、ヨミユミのバックアップ。……勝ったな」

「サガミちゃん！　なんかダメそう！」

どうも必勝を予感した俺の言葉はサキちゃんの御眼鏡に適わなかったようだ。

お洒落なワードセンスとか多種多様な語彙を持っていないのでこれ以上の言葉は絞っても出てこない。

何言っても変わらないからもういいか。

ピジョンちゃんとガトリング砲を抱える珍妙な格好になった俺が「突撃ー！」と声を発しながら川沿いを進めば「やったー！」とサキちゃんが後をついてくる。

河川敷に飛び降りる途中でピジョンちゃんをサキちゃんに投げ渡し、先行して駆け出す。

跳ねるように一足飛びで距離を詰める。

掲示板で募っていた合流地点には青梅チームの元リーダーの姿があった。

優先順位は落ちるが死んでくれるなら全然あり。

「デモニカ!？」



驚きの声を挙げている姿に向かってガトリング砲の弾をばら撒く。

これで死んでくれたら楽なんだが、そう上手くはいかない。

人間を簡単に捻り潰すことができるサイズのタコ足によつて弾丸を防がれていた。

弾丸を余裕をもって防げた訳では無いようで、何本もの足がズタズタになっている。

スーツのモニターにマグネタイトの揺らぎとGPの上昇を確認できたので、仲魔のお

稲荷さんであるウカノミタマを召喚する。

「ヤタガラスの追跡者か！　だが俺は止まらねえ！」

一軒家ほどのサイズのタコが出現する。

やる気になっていいるところ悪いが、こいつらはこれから起きることのついでなんだよ

な。

前座とは言えど邪魔なことには変わりないので、とりあえずガトリング砲をぶつ放し

てタコ足を削っておく。

大赤字確定なので内心では悲鳴を挙げる。

精霊四種とウカノミタマを召喚して、これでもかと疑似万能弾をばら撒いているので

財布に痛い。

召喚すると貯め込んでいるマグネタイトが消費するのだが、これが意外と出費に繋が

る。

さらに俺の精霊が持つ魔法を統合して弾丸に込めて疑似的な万能特性を持たせているのだが、これがまた凄まじい勢いで魔力を消費してしまふ。

弾切れを防ぐためにチャクラポットで精霊を満たすのだが、やっぱり鬼のように高い。

近接戦で弾代を抑えたかったが、複数のを持つ巨大な悪魔とやり合うならガトリング砲の方が効果的だった。

電霊がエネミーサーチの反応を教えてくれる。

アナライズ出来ないマグネタイトを確認すると反応するアプリだ。

一度ガトリング砲を止めると、タコのすぐ傍の空間が揺らめいて男の姿が現れた。

疲れ切った老爺のようで、灰白色に縮れた髪は薄汚く、頬が扱けたその顔には何日も寝ていないのか酷い隈が刻まれている。

ヨユミさんが「タ……ム口……さ……」と呟いたのでやはり転移能力者のようだ。

直後、俺に向けて魔法か何かを使ってこようとしたが、威圧して動きを止める。

予知能力が劣ってても、目に見える奇跡を持ってたら信者も簡単に獲得できるよなあ。

長距離転移が可能ないつはここで確実に殺すべきだ。

「ウカノミタマ」

転移者を封殺する最も簡単な方法は異界に閉じ込めることだ。

とはいえ弱い異界だと踏破されるか破壊されてしまうのだけだ。

例えばの話、俺の独力だけで転移者を隔離できる異界を作ると明日からガチャができなくなる程のとんでもない出費となる。

神奈川県や全国にある稲荷神社や廃棄された寺社仏閣を巡り、俺のウカノミタマが管理できるように許可を貰いまくった。

一か所から流れる信仰は微々たる物だが、集まれば膨大な力となる。

さらに神奈川県内に流れ込む龍脈を含めた力を電霊が転用することで、ウカノミタマが現在最も影響力のある県内ならば寺社仏閣を中継して電化製品を操ることができる。

マグネタイトで操った電化製品から特定の周波数を発することで超電磁結界という名の電子レンジ攻撃が可能ではあるが、俺は今の所使う気が無いし、ヤタガラスも使える気は全くない。

じゃあこれから何をするのかと言えば、俺の電霊が影響下にあるCOMPの制御を一瞬间だけ奪って儀式を演算させる。

ついでにマグネタイトも吐き出させ、この場に集まっているダークサマナーたちに協力してもらって汚い元氣玉を作った。

「異界生成」

金の稲穂が揺れる風景で、周辺一帯が塗り潰された。

黄昏時となった世界は、薄暗く染まりながらも空は僅かな黄金の色を浮かべていた。

「さがみいいいい!!!」

「相模!? あなたは相模さんなのか! 俺と一緒にいこう!」

こっわ。

見知らぬ浮浪者に吠えられるとこんなに怖いのか。

そういえば俺を知っているんだな。

やっぱり本物なのだろう、頼むから死んでくれ。

ついでにタコに守られている脱走者も俺に反応した。

困ったな。

この場にいる俺を含めた三人の内、二人の頭がイカれちまつてる。

一般人の俺はどうすればいいのかわからないので、とりあえず殺して解決しよう。

「わ、私の神をも凌ぐ力があああ!」

「凌げてないからそうなってるんだよなあ」

ウカノミタマは神獣なんだよなあ。

「許さぬうううう! さがみいいいい! 貴様ああああ! さがみいいいい! 私

はあああああ! さがみいいいい!」

俺がサガミなんです。それがそれは。

おまえはサガミ？

激昂している理由はわかる。

異界に閉じ込められて転移できないからだ。

異界は出入り口が決まっているので礼儀正しくそれを使う必要がある。

ただし、深部にいる主を殺して境界を曖昧にして内部から壊すか、主を超える遙かに超える力量を持つていけば無視できるルールもある。

長距離転移してきた直後の異能者にそんな余裕があるはずもない。

タム口を含めたダークサマナーたちは「サガミとウカノミタマを倒すまで出られない部屋」に閉じ込められてしまった状態になった。

「デスゲームの開始を宣言したほうが良いだろうか。」

「さがみいいいいい！ 私は！ ねむれない！ 貴様のせいだ！ いったって私の未来は途切れる！ 未来の私は何も知らない！ 貴様がいる限り私は！ 私はあああああ  
！」

「宣言しても聞いてくれ無さそうだ。」

「しようがないのでライドウの兄上が来る前にやれるだけやろう。」

「出来れば皆殺しが最上なんだが、ちよつと厳しそうだ。」

異界生成の出費を抑えるために欲張りすぎたかもしれない。

「サキちゃん！」

「うん！ やるよ！」

サキちゃんの持つ膨大な魔力が噴き出す。

粒子となつてきらきらと輝く青白い魔力は宝石のようだ。

ログが刻まれる。

〈カワサキの獣の眼光〉

—プレスターン増加—

〈カワサキのニュークリアフュージョン〉

—カワサキの炉心出力が上昇する—

「ちよつとずつ温めてくからね！ マハフレイ！」

〈カワサキのマハフレイ〉

—核熱の力が放たれた—

熱が通り過ぎ、俺の視界の端が揺らめいていた。

そこから中からうめき声とともに焼け焦げた臭いが漂っていた。

稲穂が燃えて、薄暗かった世界に赤い光が灯っていた。

「私には……未来がない……のか。教えてくれ、さがみ……」

「え？ そりや死ぬんだからないでしょ」

腹から下が消滅したタムロが転がっているのでストレージ機能で収納する。

ひどく絶望した顔を見て可哀そうだと思ったが、面倒なタイミングでしか現れないコイツを考ええると慈愛の心も消し飛んだ。

世界が熱で揺らめく中、タコはまだ健在だった。

日ノ本の神使だとウカノミタマのバフが乗っちゃうからなあ……。

—カワサキは熱を支配している—

—カワサキは熱を吸収した—

—カワサキのHP・MPが回復—

—集まった熱によって炉心出力が上昇した—

—カワサキは排熱を行った—

「メギド！」

〈カワサキのメギド〉

—破壊の光が放たれた—

「どんどんいくね！」

〈カワサキの獣の眼光〉

—プレスターン増加—

〈カワサキのニュークリアフュージョン〉

—カワサキの炉心出力が最大になった—

〈赤目のシャUNKスの獣の眼光〉

〈サガミの獣の眼光〉

—プレスターン相殺—

〈カワサキのニュークリアエクスカーション〉

—カワサキの炉心出力が限界を超える—

—プレスターン増加—

「マハフレイラ！」

〈カワサキのマハフレイラ〉

—核熱の力が解き放たれた—

—カワサキは熱を支配している—

—カワサキは熱を吸収した—

—カワサキのHP・MPが回復—

—集まった熱によって炉心出力は限界を超えている—

—カワサキは排熱を行った—

「メギドラー！」



〈カワサキのメギドラ〉

—破壊の光が解き放たれた—

「サキちゃん、一旦止まって」

「もういいの？ まだ敵も熱も残ってるよ」

「これ以上は異界が耐えられないし、てんりんこ転輪鼓も配置できない」

「そうなの？ じゃあ一回やめるね」

熱と光でチカチカしていた視界が戻る。

サキちゃんなんて熱々ホカホカ状態で、スマブラだったら吹っ飛びやすいけど吹っ飛ばしやすい絶好の攻撃モードだ。

ピジョンちゃんはいつも通り胸が貧しい。

サキちゃんの魔法ソリティアで皆殺しにしたい所だが、異界が限界を迎えそうだ。

ウカノミタマの異界はバフと遮断が得意なのだが、守りはそんなでもないのでヒートアップしていくサキちゃんの核熱には耐えきれない。

異界が砕けたら熱が外に放出されるし、そうでなくてもライドウの兄上が外から無理やり入って来ている。

このまま魔法を連打するとその穴が欠陥となって壊れる可能性もある。

〈サガミの獣の眼光〉

―プレスターン増加―

〈カワサキの獣の眼光〉

―プレスターン増加―

作業するために周囲を威圧すれば、サキちゃんも合わせてくれる。

さつさと作業を進めよう。

ストレージから取り出したマニ車に似たてんりんこ転輪鼓をウカノミタマにお願いして、支配者権限で異界境界内の各地に設置してもらおう。

この異界はダークサマナーや異国の神には便利なんだけど、ライドウとかには全く意味がないんだよね。

なんならバフが乗る。

ライドウの兄上にもバフが乗る。

そしてウカノミタマの異界はサキちゃんにとってデバフを付与されているのと変わらない。

相手の方が強いのに、フィールドも相手が有利だと話にもならない。

「全力で撤退するぞ！」

「サガミちゃん、ちよつと情けない」

「しょうがないじゃん。相手のほうが強いんだから」

「わざわざ戦わないで逃げちゃえばいいのに」

「戦って敵わないのと、最初から逃げるのだと評価に大きく関わるから……」

「サガミちゃんも苦労してるんだね……」

大人になるって悲しいことなんだよサキちゃん。

魔人が大人になったところで同じような悩みを持つのかは知らないけど。

異界内部のデータに大きな変化が生じた。

薄闇と黄金の空を破り、宵闇を背にしたライドウの兄上が飛び込んで来ていた。

ピジョンちゃんが転輪鼓てんりんこを起動する。

「やべっ」

「なにになになに？ 聞きたくない言葉が聞こえたんだけど」

「転輪鼓てんりんこが間に合わなかった」

「どーすんの！ わたしの出力、ぜんっぜん足りないよ！」

「俺が時間稼ぎするから周囲にマハフレイでもして温めといて。もう異界は壊れてもい

いから」

すぐそこまで迫っていた兄上に向けてガトリング砲をばら撒く。

速すぎて笑う。

当たり前のように刀で全弾弾きながら一直線で向かってくる姿はマジで理不尽だと思おう。

ゲームバランス壊れてるよ、絶対。

ムカデさんの千列突きみたいな斬撃が飛んできて、ガトリング砲が切り刻まれてしまった。

国産だからお高いのに！

「今日一日でとんでもない赤字ですよ、兄上！」

「俺は、お前の兄ではない」

なんと奇遇な。

俺もお前の弟じゃないぜ。

ピジョンちゃんに斬り掛かった兄上の刀を、オリーブの枝で受け止める。

仕返しとばかりに、オリーブの枝でマグネタイトを編んだ触手で攻撃する。

数本の触手が、空中で一気にはらけて数千となって襲い掛かる。

「サガミさん！ 起動します！」

「お願い！」

悲しいことに、当たり前のように切り払われてしまった。

一応俺の切り札なんだが。

「この触手は一本でも触れたら記憶か意識を奪えるんですよ兄上！ 貴方でも避けられますか！」って三下ムーブしちやっただじゃん。

恥ずかしい。

恥ずかしくない？

俺が恥ずかしい思いをしたおかげで転輪鼓てんりんこは起動できたのでトントンにしておこう。

異界内の生きていたサマナーすべてが別の世界に引き込まれる。

デモニカスーツ内のモニターに「GP50」の文字。

「ようこそアマラ経絡へ」

俺はドヤ顔でそう言った。

この後は兄上にお気持ちを表明してちよつと頑張る消化試合みたいなもんだ。

なんならすぐにライドウが来るよって脅すだけだから。

虎の威を借りる狐戦法によって俺は数多の依頼を解決してきた。

ライドウというプレッシャーに耐えて俺と小競り合い出来るのか？

ライドウの兄上は心が強え兄なのか……!?!?

## 女神転生（地方しらべ） 18

狂信者 邪神と日本侵攻スレ

寄ってるにやる美ちゃん

これまで殺した者たちを夢に見ろ！

罪悪感に苦しめ！

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

なお顔を覚えてないから罪悪感ゼロ

相模に負けた雑魚ばかりだから夢で再現しても無双ゲームし始める

這ってるニヤル男くん

馬鹿の答え

カダスで眠る本格派邪神様

なんかこいつを人間にカテゴライズするの腹立ってきた

こいつからはヴィーガンが一生懸命肉料理の代替品を作って肉を食べたいのを誤魔

化しているモヤモヤを感じる

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

じやあもつとちやんと計画しろ

カダスで眠る本格派邪神様

狂信者ラジコンは頭おかしくなってるから操縦ムズイんだよ

相模みたい在有線ラジコンしてえよ

寄ってるにやる美ちゃん

まず計画の途中で飛び込んでくるな

這ってるニヤル男くん

相模に殺されたダークサマナーの娘を投入！

寄ってるにやる美ちゃん

復讐の連鎖に怯えて竦め！

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

相模「お、探す手間が省けてラッキー」

カダスで眠る本格派邪神様

ラッキーじゃねんだわ

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

相模「親がちゃんとしたダークサマナーで足取りを追いにくかったけどこいつのおかげで根絶やしにできるぜ」

寄つてるにやる美ちゃん

邪悪の化身か？

這つてるニヤル男くん

だがそれも今日までだ！

東京に集めたガイアのうずまきを食らえ！

寄つてるにやる美ちゃん

勝つたなガハハ

カダスで眠る本格派邪神様

滅びたファントムソサエティ支部の残党！

銀杯教！

高校沈没！

金予教！

サイバース・コミュニケーション社！

この短期間の波状攻撃なら相模と言えど！

おとぼけアザトース



よくやったゴミども

駄目押しでもう一押ししたいところだが

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

へへへ

相模の実家と家族が横浜にいますぜ

げへへ

移転したコンビニを経営してるみたいですぜ

おとぼけアザトース

良い情報じゃないかチクタクソ虫

さつさと向かわせるとしよう

蓮滝色

調子こいてんなよクソどもが

いくつ浅智慧が成功したか言ってみろよオラアン

這つてるニヤル男くん

今重要なのは過程

寄つてるにやる美ちゃん

疲労こそ我が智慧

カダスで眠る本格派邪神様

弱った相手を囲んで叩いて最後に勝てばよからうなのだ！

おとぼけアザトース

近くのをやつ向かわせた

狂った人間はマジで使いにくいなこれ

伝言ゲームしてから目隠しラジコンとか嫌がらせだろ

蓮滝色

ふざきんな

俺も凸らせる

いややつばやめた

おとぼけアザトース

お前んとこのにも行かせた

蓮滝色

はああああああああん!?

上等だよ！

うちの防衛力なめんなよ！

ヨーグルトソースのいとこ

はじまったわね・・・

狂気虫キングの時間が

クトウルフはこのヨーグルトソースが育てた

ご飯まだ？

おとぼけアザトース

このストレッツチマンに進捗を教えてやれ！

東京受胎で諸共消してやるってな！

這ってるニヤル男くん

滅びたフアントムソサエティ支部の残党を誘導！

寄ってるにやる美ちゃん

相模を神社に呼び寄せ！

カダスで眠る本格派邪神様

スズメバチ駆除！

おとぼけアザトース

どういこうつたよ

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

スズメバチ駆除のついでに処理されたので失敗、つて感じですかね・・・

蓮滝色

ざまああああああ！

おとぼけアザトース

虫と一緒に駆除されんなやボケが！

大事なのは結果だ！

過程で消耗させればよからうなのだ！

次！

這つてるニヤル男くん

銀杯教の本拠地に誘導！

寄つてるにやる美ちゃん

ゆらぎによる熱烈俺たち召喚！

カダスで眠る本格派邪神様

操り人形化！

おとぼけアザトース

どういふこつたよ

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

戦いにすらならずにおちよくられて続けて結局ライドウに斬られて情報抜かれた、つ

て感じですかね・・・

蓮滝色

ざまあ味憎漬け！

「今から入社します」とタイムカードを打刻した

召喚の最中に召喚者の記憶を操られて出し入れさせられるてめえらの不細工な面は最高に面白かったぜ！

もしかしてニヤルラトホテプって鳩時計の姿もあるんでちゆかー？

這ってるニヤル男くん

ぐぎぎぎぎぎ

おとぼけアザトース

消耗させる作戦だから良し！

次！

這ってるニヤル男くん

銀杯教を操ってカダスと繋げるための儀式に成功！

寄ってるにやる美ちゃん

夢と現が混ざり合いつつあった！

カダスで眠る本格派邪神様

躊躇いなく全消滅！

おとぼけアザトース

おい

這つてるニヤル男くん

はい

寄つてるにやる美ちゃん

はい

カダスで眠る本格派邪神様

はい

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

はい

蓮滝色

草

這つてるニヤル男くん

流石に高校生相手なら躊躇うかと思つたのに

寄つてるにやる美ちゃん

幼年期の終わりを躊躇いなく破壊できるタイプ

カダスで眠る本格派邪神様

罪悪感くらい抱えてくれないか

「今から入社します」とタイムカードを打刻した

こんな程度じゃ相模の正気は削れねえ

ヨーグルトソースのいところ

そんなに？

クトウルフはこのヨーグルトソースが育てた

ご飯まだ？

蓮滝色

そもそも正気ってなんだよ

「今から入社します」とタイムカードを打刻した

俺達が都合よく操れる状態を発狂、それまでの過程が狂気、認識できないとか拒めるのが正気、って感じですかね・・・

這ってるニヤル男くん

あいつピンピンしてるが

「今から入社します」とタイムカードを打刻した

正気なんやろなあ

寄ってるにやる美ちゃん

率先してちよっかいをかけたら正気が削れるんじゃないの!?

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

削れてないんやろなあ

カダスで眠る本格派邪神様

なんで削れて無いか教えろや

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

知らん

俺らが発狂しないのと一緒にじゃねえの

蓮滝色

なにそれきつしよ

お前から関わる相手考えろよ

素直にドン引きです

ヨーグルトソース王

心が宇宙生物の敵なのか・・・!?

井高

敵は俺達なんだよなあ



「今から出社します」とタイムカードを打刻した

COMPに適應した人類の一人らしいからな

これはソロモンにCOMP盗まれたアホが悪いですね

蓮滝色

おいおいそんなお間抜けおりやんやろ

恥ずかしくて偉ぶれないよなあ!?

おとぼけアザトース

ぐぎぎ

這つてるニヤル男くん

何パクられてんだカス

寄つてるにやる美ちゃん

テメえや四文字のせいで滅茶苦茶だぞゴミ

カダスで眠る本格派邪神様

なあにか白痴の魔王だ

ただのボケやろがい!

おとぼけアザトース

世界各地で脈々と伝わって技能に適應する人間が出てくると思わんだろうが!!

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

相模はCOMP職人みたいなものだからな

特殊な技術を見て覚えられるタイプ

ヨーグルトソースの血縁

最初のコンピューター見つけて嬉ションしながらCOMPを与えたアホがいるんだ

許してやってくれ

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

儂がイライザを与えたが近代になって改めてばら撒いたアホもいる

蓮滝色

バカ墮天使が世界からBANされたの最高にアホ

クトウグア

掲示板の情報は持つてくなどあれほど

偉そうに人間を脅す悪魔だって日々チマチマと情報収集してんだよ！

おとぼけアザトース

もううるせえ！

幼体を殺させたんだから効いてるだろ！

次！

這つてゐるニヤル男くん

集まれガイア!

寄つてゐるにやる美ちゃん

食らえ蝸舞式!

カダスで眠る本格派邪神様

今必殺の兄者!

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

これが本命つて感じですかね・・・

おとぼけアザトース

これまでの疲労で苦しめるわけだな

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

疲労、ゼロです

おとぼけアザトース

あのさあ

蓮滝色

部下はちゃんと選べ

教育しろ

全方位嫌がらせマシンをばら撒くな

おとぼけアザトース

ぐぬぬ

這つてるニヤル男くん

しかし相模は凡夫

孤立無援の所を囲んで叩けば勝てる！

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

川崎「きーたよ！^^」

這つてるニヤル男くん

しね

寄つてるにやる美ちゃん

拠点防衛用のマップ兵器を平然と本拠地から動かすんじゃないよ

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

チャートをちゃあんと読まれてますね

カダスで眠る本格派邪神様

キレそう

誰だよあの鳩遣わせたの

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

天使

這つてるニヤル男くん

キレそう

先読みクソバードそんなに精度高くないだろ

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

相模は別にちやんと未来予知を利用してゐるわけじゃない

寄つてるにやる美ちゃん

こんなに破壊してゐるのに？

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

予知の近辺で暴れて余波で破壊して他の未来とぶつけ合つてそのまま通り過ぎてゐる

バケモンにはバケモンをぶつけてる

あいつにはその後をカバーする気持ちは一切ない

這つてるニヤル男くん

俺は相模！

寄つてるにやる美ちゃん

お前を相模

カダスで眠る本格派邪神様

お前は相模？

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

ただし長距離転移持ちのタム口は絶対に殺される未来しかないから発狂してる

ヨーグルトソース王

連続転移で引き撃ちしろ

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

人間がそんな出力出せるわけない

もちろん複数人の長距離転移なんて無理無理かたつむり

そもそも異能極振りなので何らかの手段で拡張しない限り魔法は上手く使えない

異界に閉じ込められた時点で川崎の核熱から逃れる術が無いから詰みやね

井高

ゆらぎと競り合った男の最期か、これが・・・

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

競り合う（永遠の銀メダル）

クトウグア

なんでカルト教団で洗脳と予知を連打してた教祖が近接最強なんだよ

バランス考えろ

転移者で勝てるわけないだろ

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

銀杯で継承できたからね・・・

ダゴン

だが今は違う！

相模術式のせいで途絶えた！（ぎゅっ）

カダスで眠る本格派邪神様

先読みクソバードの相方が横取りクソ野郎ってコト!?

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

ああ

バカが考えた最高に頭の悪いコンボだ

溜め込んだ経験値を泥棒していくし悪知恵も覚える

儀式の破壊もお手の物だ

あまりにも破壊が過ぎるとその後をライドウが均すから最悪すぎる

井高

蛸の神使とか必殺の霊的国防兵器のやつじゃん

いいのかよ

いや俺達には全然関係ないけどヤタガラスにも立場があるんじゃないやねえの

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

利用しようとしたが加減せず無差別に殺しまくるからヤタガラスも封印してただけ  
良いか悪いかなら悪いが勢力としては別にヤタガラスではない

ヨーグルトソース王

お、シャンクス止めるか？

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

獣の眼光だけじゃ止められない

這ってるニヤル男くん

バカバカ！

相模のバカ！

なんで眼光しちやうの！

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

しなくても出力上がったら更に動きが速くなるからプレスターンに差が出て結局無意味よ

龍の眼光になるし



威圧されたらその分動けないからプレスターンに差が出る  
蓮滝色

プレスターンイズ何

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

その戦闘で敵味方の動ける回数をCOMPが計算して視覚化した、って感じですか  
ね・・・

速く動ける程行動も多い

ヨーグルトソースの血縁

ガイアのうずまき、川崎、相模でそれぞれ一個ずつなんですすがそれは

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

わかりにくいけどガイアは全員で頑張って1個分捻出って感じかなあ

シヤンクス頑張ってる

井高

起き攻めメギドはダメだろ

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

放った核熱や周囲の熱を吸収して回復ついでに炉心を温める

炭酸飲んだ後のゲップみたいに勝手に回復の余剰分で万能魔法が発動する

止めたら止めたで災害が再現される

カダスで眠る本格派邪神様

地震と津波の恐怖で生まれた災害出身の魔人を神奈川県に呼んで名前を与えるんじゃないよ！

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

川崎が出力を増すと被害がでかい

なので相模も異界から移動させる予定っぽいな

寄ってるにやる美ちゃん

シャンクスが死んでしまう！

耐えろシャンクス！

負けるなシャンクス！

ヨーグルトソースの血縁

小太りのおっさんが麦わら帽子装備してるだけなのをシャンクスって呼ぶの解釈違いなんすよね

蓮滝色

容姿の違いなんて誤差だろ

ヨーグルトソースの血縁

ワンピース読め

魔眼で赤くなってるだけの目を持つ小太りのおっさんとシャンクスを同一視するな  
殺すぞ

蓮滝色

殺そうとしてるのは何時もだろ

クトウグア

楽しそうに実況してるけど横浜見て無くていいのか  
最高だぞ

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

見てるに決まってるよなあ!?

おとぼけアザトース

o i

おとぼけアザトース

おい

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

はい!

なんでしょうか!

おとぼけアザトース

殺すぞ

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

楽しんでいただけたかな？

クトウグア

草

蓮滝色

こいつ最高にアホ

おとぼけアザトース

お前マジで何してくれてんの？

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

何って

相模の弱みを握ったつもりでウキウキのまま現れるアホを叩くのは最高の快樂って

だけだが？

これが近くでバーをやってる時を止めるイケオジの力よ！

おとぼけアザトース

殺すぞ

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

やってみろよボケ W W W W W

おとぼけアザトース

御先もいるじゃねーか

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

そりゃ今一番のお気に入りなんだから御先くらい置くだろ

24時間営業コンビニの御神体がALSOKしてる

コンビニ内に祀られててパワースポットとして有名にもなってる

おとぼけアザトース

馬鹿の主従すぎる

蓮滝色

自己紹介じゃん

クトウグア

いや草

おとぼけアザトース

こんなん聞いてねえぞ

蓮滝色

ちやんと自分でソースから調べろアホ

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

壊れやすい世界を壊すなんて誰でもできる雑魚の思考！

如何にして維持するかが最高に難しいんだろぅが！

いけ相模！

馬鹿どもにも最高の狂気を教えてやれ！

壊れる世界をタップダンスで固めて踊って見せろ！

クトウグア

草

お前は相模のなんなんだよ

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

あれは今から3年前

蓮滝色

クソ長回想やめろや

寝るぞ

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

寝ろ

ヨーグルトソースの血縁

ねりゅ！

ダゴン

寝ないで；；

ヨーグルトソースの血縁

まだ起きてないんですけどね

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

メシアの弱小サークル出身の元聖女候補ピジョンという雑魚機体をカリカリチューンしまくった挙句限界糞雑魚だった位階まで高めて最高装備で固める浪漫派基地外を  
発見した

それが相模だ

おとぼけアザトース

くそがああああ！

干渉しすぎて修正制限食らった！

配下も減った！

キレそう

蓮滝色

草

そのままBANされろ

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

相模は最初から基地外でサマナー

初仕事で「なんつーか人を殺しても許されるから俺の選択肢が増えた」とか言い出した

異能に目覚めると殺さない練習を始め、手始めに親族の記憶を消して回った

井高

誰かこの中で分霊を転生させたやついる？

私のフルーツグラノーラ

可愛くない

ヴォルヴァドス

まだよくいるサイコパス

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

俺は配下を使って助言した

と  
世界は樹のように繋がっていて、幹の世界が崩壊しているからどの枝葉も崩壊を辿る



相模はこの世界を新たな幹にすると言い出して今日まで走っている  
最高だ

頭が悪すぎて大好き

ヴォルヴァドス

あんまりいないサイコパス

井高

日本の平和を守ろうと日夜戦うソシオパス

クトウグア

なんかお前楽しそうな人生を送ってんな

ダゴン

人じゃないんだよなあ

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

本音を言えば相模には理想と現実の間で苦しんで貰いたかった

崩壊という困難へと立ち向かう辛苦に歪んで欲しかった

犠牲を出す事への良心の呵責に涙すべきだった

力不足に嘆いて欲しかった

だが相模にはどれも当てはまらず当たり前のように処理してく

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

そして俺は気づいた

まあ敵対者とかでも苦しんでくれたらいいかって

蓮滝色

こいつ・・・

クトウグア

いつものやつで安心した

おとぼけアザトース

お、おまえ・・・

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

その顔が見たかった！

相模を雑魚だと思ってウキウキで突撃する、この顔が！

這ってるニヤル男くん

ここから挽回すればいいだけだし・・・

寄ってるにやる美ちゃん

ライドウの兄者を誘導したし・・・

カダスで眠る本格派邪神様

勝ったなガハハ

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

相模は前もってアマラルートに端島を呼んでるから

カダスで眠る本格派邪神様

バカ！

相模のバカ！

ここで耐久型の影人間参戦させて遅延戦術とかもう知らない！

寝取られビデオでも配布させてろよ！

誰だよこの世界にてんりんこ転輪鼓流したの！

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

ニヤラトホテプさんです

這ってるニヤル男くん

えへへ・・・

カダスで眠る本格派邪神様

ころすぞ

這ってるニヤル男くん

糞雑魚魔人がヒーラーとなって乾坤一擲の反撃に出るから・・・

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

川崎がメルトダウンするから災害再現始まる

這つてるニヤル男くん

あああああああああ！

川崎が自由に動くのあああああああ！

誰だよデモニカスーツ持ち込んだの！

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

デモニホを送り込んだニヤルラトホテプさんです

寄つてるにやる美ちちゃん

てへぺろ

這つてるニヤル男くん

ころすぞ

寄つてるにやる美ちちゃん

転輪てんりんこ鼓操作のために地上に残したビジョンを討つからまだだ！

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

ターミナルで近場に飛べるライドウすぐ来るから

寄つてるにやる美ちちゃん

ヴオエツ

誰？

ターミナル持ってきたの

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

ニヤルラトホテプさんです

カダスで眠る本格派邪神様

CHU！ 持ち込んでごめん

寄ってるにやる美ちゃん

生まれてくるな

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

ライドウの兄者の弟者が来るなら兄者は絶対逃げるっしょ

クトウグア

それもうライドウでいいのでは

というかこいつ死ぬまライドウと戦わないのか

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

ライドウの兄者を見くびるな！

ライドウの兄者にそんな根性あるわけないだろ！

ライドウの兄者の弟者ではなくライドウの兄者がライドウを継いでたら今頃崩壊してたぞ！

這つてゐるニヤル男くん

せやな

寄つてゐるにやる美ちゃん

はい

カダスで眠る本格派邪神様

それは、そうなんですが・・・

クトウグア

この扱いよ

ヨーグルトソースの血縁

残念ながら当たり前

ヨーグルトソース王

残念でも無いし当然

蓮滝色

ライドウの兄者がやらかしてライドウの兄者の弟者が後処理したこともある

相模のお気持ち表明も当然

クトウグア

そんなか

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

そんなに

おとぼけアザトース

キレそう

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

ざまあないぜ!

クトウグア

おいおいおい!

また失態かよ!

蓮滝色

はーざっこ

邪神転生でもして学校からやり直したら?

おとぼけアザトース

ポケが

なんで守備が疎かになってる川崎にスパモン来てんだよ

井高

スパモンは草

ヨーグルトソースの血縁

とんちきガイアに邪魔されてんじやーん

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

百足がいるからスパモン教が来るのも当然なんだよなあ

這つてるニヤル男くん

ざまあwwww

寄つてるにやる美ちゃん

失敗が許されるのは奉仕種族までよねーwwww

カダスで眠る本格派邪神様

成功したことあんのかよwwww

蓮滝色

ブーメランでスマブラやめろや

クトウグア

本格派ガイアをボコしたからやはり空飛ぶスパゲッティモンスターこそ本格派ガイ

アなのは



私のフルーツグラノーラ

でもこいつら別に実力主義じゃないんだよなあ

ヴォルヴァドス

ほなガイアちやうやん

〔・ω・〕ばす！（／・ω・）／てと！

でもこいつらヤタガラスにも攻撃するから

ヴォルヴァドス

ガイアやん絶対！

蓮滝色

でもこいつら日本の神が立場をはつきりするまで手伝うつもりだからな

ヴォルヴァドス

ガイアちやうやん！

そんなんヤタガラスやんけ！

ダゴン

でも立場がはつきりしたら襲いやすいってだけだから

ヴォルヴァドス

ほなガイアやん絶対！

這つてるニヤル男くん

ああああああ！

アマラに引き込まれちまったあ！

寄つてるにやる美ちゃん

半分置いてかれた!!!

カダスで眠る本格派邪神様

置いてかれたというか死んでるから転送しなかつたというか

這つてるニヤル男くん

兄者ならでできるできる頑張れがんばればベスト尽くせよ！

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

ばあああああか!!!

端島が駆け付けるに決まってるだろうが!!!

カダスで眠る本格派邪神様

嘘だと言つてよおおおお!!

もう合流しやがったああああ!!

寄つてるにやる美ちゃん

2対1で膠着してんじゃねえぞ！

ライドウの兄者の弟者ならこんな余裕だろうが！

ライドウの兄者の弟者の兄者の癖に面汚しが！

おとぼけアザトース

この際陣営はどうでもいい！

ライドウの兄者の力を見せつけろ！

それでもライドウの兄者の弟者の兄者として恐れられた男だろうが！

一般出身とNTRうんこ漏らし影人間のコンビに苦戦してんじやねえぞ！

クトウグア

むしろなんでライドウはあんなに強いのか

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

ライドウの兄者の弟者は霊的国防の系譜が定向進化した果てって感じですかね・・・

ライドウがウエポンマスター

相模がアイテムマスター

クトウグア

端島は何なんだよ

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

時々いる人間ごっこが得意なシャドウ亜種

こいつに至っては主人格が脆すぎて生存機能がシャツドウに譲渡されまくった結果、人間としての営みのほうが落ち着く個体

中身が異界みたいなもんでめっちゃタフ

寄ってるにやる美ちゃん

タフな男になりたい

這ってるニヤル男くん

端島の力に一番戸惑ってるのは俺なんだよね

急に現れてクソ固いタンクし出すな

カダスで眠る本格派邪神様

どの世界にも通じることやが・・・中身のないヤツがタフを誇る！

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

中身が無いっていか血肉や骨が無いだけで黒いのはパンパンよ

寄ってるにやる美ちゃん

シヨゴたん!?

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

あんなクソ粘液より万倍価値のある黒

集合的無意識の一旦だから黒に見えるだけ

〔・ω・〕「ばす！／＼・ω・）／てと！  
やれ端島！

ボケカスどもに夢勢力の強さを見せつけてやれ！

蓮滝色

もはや夢主じゃん

井高

寝取られて自我崩壊を起こしたために放棄された肉体から始まる夢小説とかここの

クソボケが見せる夢かよ

私のフルーツグラノーラ

現実なんだよなあ

ヴォルヴアドス

余計悪いわ

ヨーグルトソース王

残った連中とシャンクスが意地の一撃を当てて川崎がメルトダウンしたな

ヨーグルトソースの血縁

かむさかり  
神避（至高の一撃）

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

はい第二形態

這つてるニヤル男くん

ふざけるなああああ！

命を何だと思つてやがる！

決死の覚悟だつたんだぞ！

寄つてるにやる美ちゃん

笑うな！

たつた一人に希望を託して力を合わせた尊い一撃を笑うな！

カダスで眠る本格派邪神様

ジェットストリームアタックを正面から受け取めるんじゃないよ！

絶望だけ増してるじゃねえか！

蓮滝色

普段笑つてるのはお前ら

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

ここから毎ターンニュークリアミサイルをノーコストで撃つ

ついでに排熱で回復しつつメギドラが出るし、災害再現で勝手にマグマドロップ、ア

クアリータイドがおまけされる

一回の攻撃で勝手に三回全体攻撃する

這ってるニヤル男くん

バカの食べ放題メニューはやめてくれないか！

寄ってるにやる美ちゃん

パワーバランス考えて？

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

流石に地上だったら縛り等でここまで解放されない

だからアマラ経絡だったんですねえ

井高

お母さんより強いじゃん

這ってるニヤル男くん

ああああああああああ！

誰だよデモニカスーツ持ち込んだの！

世紀末みたいな世界でも相模が元気に動いてるじゃん！

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

デモニホを送り込んだニヤルラトホテプさんです

寄ってるにやる美ちゃん

てへぺろ

這つてるニヤル男くん

ころすぞ

カダスで眠る本格派邪神様

デモニカスーツ無しで戦えてるライドウの兄者は流石だあ・・・

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

腐つてもライドウの兄者の弟者の兄者だもんげ

寄つてるにやる美ちゃん

よし！

行けタコ！

ライドウの兄者の弟者の兄者の弟者の兄者に加勢しろ！

公式との解釈違いとか意味わからん事はこの際無視してやる！

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

ライドウの兄者の弟者の兄者の弟者の兄者の弟者の兄者にコンビプレイなんて出来

るわけねえだろ！

カダスで眠る本格派邪神様

うわああああ!!



相模いいいい!!

コイツ最悪だ!!!

生き残りを洗脳し始めやがった!!!

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

やつぱり相模なんだよね

死線乗り越えようと一致団結したダークサマナーを操って同士討ちさせる

ライドウの兄者の弟者の兄者の弟者の兄者の弟者の兄者がいなした触手で操るとかこれほど美しい構図は無いよね

しかも殺す直前に解除する

ダークサマナーは躊躇いなく殺せちゃうから止まらない

蓮滝色

すつげーワルの敵がやるやつじゃん

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

そりゃすつげーワルだからやるよ

ヴォルヴァアロス

すつげーワルなのか(困惑)

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

こいつの属性N—Nだからな

蓮滝色

どゆこと

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

自由ならダーク、秩序ならロウ

悪い事してるつもりならカオス、良い事してるつもりならライト

バランス取れてるつもりならニュートラル

周囲の評価もあるが、一番は自意識で決まる

相模は人殺ししてダークカオスに寄つても空き缶拾って捨てるだけでロウライトに

なれる

頭イカれてるから同じくらいの善悪だと思ってる

ヴォルヴァアトス

草

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

俺が主神ならこいつをヒーローにする

しかしヒーローにしたならこいつを生み出した汚名を被る必要まで出てくる

罪なやつだ

〔・ω・〕「ばす！／＼・ω・）／とと！」

ヒーロー諸共いなくて良かったね

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

こいつをヒーローにぶつけたかった・・・

ヨーグルトソース王

バケモンにはバケモンをぶつけんだよ！

おとぼけアザトース

混ざりそうだからやめろ

カダスで眠る本格派邪神様

ストレスが・・・！！

ストレスが溜まる！

蓮滝色

いつもみたいに笑えよ

這ってるニヤル男くん

無意味に笑ってたら頭おかしいやつやろがい！

クトウグア

頭おかしいだろ

寄ってるにやる美ちゃん

ちやんと準備の種を蒔いてるから何かしら目が出ないと笑えねえよ！

私のフルーツグラノーラ

良い事じゃん

おとぼけアザトース

キレそう

キレてる

「(・ω・)」ばす！ (／・ω・)／てと！

外国いけ

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

外国だとそっちの神に善悪の全てが持つてかれるからな

未開の地まで行くとシャーマンが持つてこうとしてムカつくぜ

アメリカで悪い事した悪魔がUFOとか宇宙人に信仰持つてかれたのマジで笑える

おとぼけアザトース

フライングスパゲッティモンスターに持つてかれてキレた事ないやついる!?

いねえよなあ!?

這ってるニヤル男くん

ジエダイに持つてかれた事ある

寄つてゐるにやる美ちゃん

ジエダイ信仰やめろ

映画観て満足してくれ

井高

論争用の架空宗教が力を持つのホンマ

見えざるピンクのユニコーンを引き連れて空飛ぶスパゲッティモンスターの守護悪魔を使うガイアのサマナーはマジでイカれてんじゃねえかな

ヨーグルトソースの血縁

NTRビデオレターを遡ったらファントムソサエティにたどり着いてアルゴンソフトにカチコミかけるやつだからイカれてるだろ

ヨーグルトソース王

アメリカで捨てられた空母級電霊の残骸が僅かな信仰でも生きられるようにスパモンの形となり無許可で守護霊になろうとして了承し夢を巡って強化したために格が高まったソウルのバックアップを受けて超強化された見えざるピンクのユニコーンで撃破された大霊マニトウがなんだって？

ヴォルヴァードス

ちよつと何言ってるかわからない

「・ω・」ばす！（／・ω・）／てと！

相変わらず馬鹿の構文すぎる

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

ソウルが弱まっている現代特攻だったのに！

無意識でピンク色だと共有されるユニコーンの性質を利用してソウルを並列接続することでマニトウ対抗するだなんて

ヴォルヴァアロス

ちよつと何言ってるかわからない

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

俺もわからんがマニトウは忘れ去られたから弱体化してた部分を突かれた

知名度が無いと力の源を失う

しかし知名度が高いと萌えキャラにされる

ダゴン

蠅のジジイは大歓迎みたいだが

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

蠅とか便所をアバターにされてる連中はそりゃ嬉しかろう







「今から出社します」とタイムカードを打刻した

そもそも相模が殺す気で用意した人員とやり合うんじゃないやねえよ

もうちよつと準備期間があれば相模が5人用意したのに

蓮滝色

お前は何かやらんのか

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

相模みてる

ダゴン

相模よく知らないけどマジでかわいそう

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

相模をよく知らない!?

活動理由の半分を損してる!

ダゴン

してない

俺にはクトゥルフがある!

うおおおおおお!

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

興味ないね

クトウグア

楽しそうだな

俺も駒がほしくなってきた

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

育成が面倒なら数を用意するピクミンプレイがおススメ

最強ユニット作るなら個人を育成だな

俺は最強イケオジ作った

これで崩壊後の世界も楽しく乗り越える

クトウグア

どうしよっかな

蓮滝色

奉仕種族による融合強化楽しいぞ

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

昼寝ばっかしてるアザトースとかいう怠惰な馬鹿は育成なんて高等プレイができない

いからピクミン増やして無駄に死なせてる

這ってるニヤル男くん

勘違いするなよ

俺たちが増やしたピクミンを勝手に使って殺してるだけだぞ

寄ってるにやる美ちゃん

頭がイカれた赤ピクミンなら泳げるだろって発想なだけだ

許してやれ

カダスで眠る本格派邪神様

せめてオリマーの気持ちになれ

這ってるニヤル男くん

なってる

タイムアタックオリマーに

カダスで眠る本格派邪神様

計算してタイムアタックしろ

這ってるニヤル男くん

アザトース「初めてのフィールドですね。どこも燃えています。ここは一番多い青ピクミンでいきます。これが一番早いと思います」↓アザトース「全滅しましたね。次に多い黄ピクミンでいきましょう」↓アザトース「全滅しました」

カダスで眠る本格派邪神様



弟者の兄者の弟者の兄者の弟者の兄者の弟者の兄者の弟者の兄者ホンマ草  
きゆうり投げられた猫か？

蓮滝色

ライドウの弟者が来るのか

私のフルーツグラノーラ

ライドウに弟者はいない

ヴォルヴァドス

急に人物を生やすんじゃないよ

奉仕種族とか魚面と違って人間は勝手に増えねえから

井高

バグ技か？

クトウグア

新たに発見されたグリτζジです

ヨーグルトソースの血縁

流石に弟者参戦はヤタガラスに有利過ぎる

ナーフしてくれ

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

拗らせてそうだからナーフを許可する

蓮滝色

なんだよもう

人物多すぎて覚えられん

兄者

兄者の弟者

兄者の弟者の兄者

兄者の弟者の兄者の弟者・・・

ライドウ兄弟どんだけおるねん

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

草

クトウグア

マジ？

人間の区別つかないすぎだろ・・・

（「・ω・」）「ばす！」（／・ω・）／てと！

ええ・・・

カダスで眠る本格派邪神様

ライドウ兄弟はライドウかライドウの兄者ただだぞ  
惑わされるな！

蓮滝色

まず惑わすな

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

草

井高

「ここでライドウの兄者に実家の場所を公開か

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

実家の開示、本気だね

クトウグア

本気とは一体

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

馬鹿野郎！

これは相模の最後の一線だ！

相模はどう思う？

相模「実家が被害を受けたら俺のやる気が無くなる」

ほらな？

井高

必要とされる人間検定力が高すぎる

這つてるニヤル男くん

これ人間検定じゃなくて相模検定だと思っただけですけど

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

馬鹿野郎！

相模がやる気になって走り回ってるから崩壊してない部分もあるんだぞ！

それが無くなったらちよつとずつ崩壊だ！

崩壊に至る道のりが加速するんだぞ！

蓮滝色

はあ

私のフルーツグラノーラ

なるほどね（わかってない）

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

相模「兄上は崩壊を支持してますね」

兄者「俺はお前の兄じゃない」



相模 「ライドウは崩壊を防いでいますね」

兄者 「・・・知らん」

相模 「ライドウを倒せば崩壊が始まるのは自明の理」

兄者 「・・・」

相模 「俺も崩壊を止めるために協力しています」

私のフルーツグラノーラ

優しく語り掛ける相模

推せる

〔・・・〕 ばすー！ 〔／・・・〕 〳てと！

相模は推されたくないと思う

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

相模 「幾つかの事件では俺が崩壊を止めたと自負しています」

兄者 「お前は回りくどくて嫌いだ」

相模 「てめえの頭が悪いからだよ」

ヨーグルトソースの血縁

ひどすぎる

井高

正論は誰も救わない

這つてるニヤル男くん

ライドウの兄者を泣かすな

カダスで眠る本格派邪神様

泣いてなんかいない

寄つてるにやる美ちゃん

反論できないだけだ

蓮滝色

これがライドウ候補だったってマジ？

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

勘違いしないでくれ

ライドウはちゃんと話を聞くし受け入れる

蓮滝色

兄は？

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

無駄話はやめて見守ろう

（「・ω・」ばす！／「・ω・」／てと！

もうそれが答えなんだよね

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

相模「兄上が庇ったそいつらの手によって俺が死んだ場合、崩壊が始まります。わかりやすく言うと俺の仲間やライドウのやる気が無くなるからです。どう思いますか」

兄者「なんとも思わん」

相模「兄上が何とも思わなくても周囲はそうじゃないです。ライドウの代わりに弱い俺を殺して崩壊させた、となるわけです。ライドウに勝てない腹いせだと語り継がれるわけですね」

兄者「・・・俺はそう思わない」

相模「じゃあそいつら野放しにしていいですよ。俺は人質を取られて死にますから。兄上がわざわざ直接救いに来たって事は何かしら関連があるってみんな思うわけですよ。兄上の部下とか仲間とか。そういう関連のあるやつに俺が殺されるって事は兄上の指示だっと思って思われるわけですよ」

兄者「・・・」

相模「俺が死んでもギリギリまでライドウは頑張りますけど」

蓮滝色

なにつ

語り継がれるのか

「今から入社します」とタイムカードを打刻した

語り継がれないんじゃないかね

ライドウの兄者への嫌がらせだ

思考にライドウへの対抗意識を植え付ける

井高

なんかピユアじゃないね

ヨーグルトソース王

ピユアなサマナーってなんだよ・・・

ヨーグルトソース王

レスバ弱そう

ヨーグルトソースの血縁

実際弱い

「今から入社します」とタイムカードを打刻した

相模「何回弟に尻拭いさせれば気が済むんですか？」

這ってるニヤル男くん

人の心とか無いんか

寄つてるにやる美ちゃん

無いよ

カダスで眠る本格派邪神様

そもそもライドウの兄者が好き勝手やるのが問題なんだよなあ

狙つてる展開があるか、事後の責任を取る覚悟があるならいいけどマジで無いからな

寄つてるにやる美ちゃん

ライドウが解決して嫉妬する兄者！

バカ！

お前の思い付きで崩壊直前まで世界を崩すんじゃないよ！

楽しく崩壊させろ！

這つてるニヤル男くん

あまり責めないでやってくれ

自己嫌悪した後悪化した事件をどうせライドウが解決するとか考えて立ち去るから

甘えるなカスが

ちゃんと芯のある人間みたいに絶望して楽しませろ！

赤ちゃん困らせたって俺たちは楽しく無いんだよ！

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

相模「というか俺だつて尻拭いしてます。弟じゃないのに」

兄者「・・・お前たちが好きでやってるだけだろう」

相模「そりゃ好きで防いでますけど、意味不明な行動で崩壊を早めて欲しいわけじゃないつて言つてんの」

兄者「・・・意味が無いわけじゃない」

相模「じゃあ説明して。ライドウにも伝えとくから」

這つてるニヤル男くん

兄者に深い考えとか無いんか

寄つてるにやる美ちゃん

無いよ

カダスで眠る本格派邪神様

浅い考えでいいか？

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

ここで浅い考え出せるほど能天気なら脱走しない

這つてるニヤル男くん

相模に心とか無いんか

カダスで眠る本格派邪神様

心があるから怒る定期

(「・ω・」)ばす! (／・ω・)／てと!

まだ人間だった頃の相模

「今から入社します」とタイムカードを打刻した

これから人間じゃなくなるみたいない方やめーや

井高

悪魔人間コースか

心が悪魔だから体がやつと追いつくな

這ってるニヤル男くん

悪魔でももうちよつと可愛げがある定期

蓮滝色

覚醒して一発逆転とか

「今から入社します」とタイムカードを打刻した

相模にそんな才能ありませええええええん!

私のフルーツグラノーラ

オリーブの枝があるじゃん

「今から入社します」とタイムカードを打刻した

0を1には出来ない

ヴォルヴァドス

0なのか（困惑）

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

悪魔召喚、異能、電霊を100%まで引き上げるエンペラータイムは可能

「 $\cdot\omega\cdot$ 」ばす！（ $\nearrow\cdot\omega\cdot$ ） $\nearrow$ てと！

やはり才能

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

人間の才能は得意分野だと出力が200%以上跳ねる

私のフルーツグラノーラ

三つあるから300%だ

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

量より質の世界なんだよなあ

ヨーグルトソースの血縁

弱いつてコト!?

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

身体特化だと魔法（悪魔）、悪魔特化だと異能、魔法特化だと電霊で攻めてるから相性



じゃねえかな

私のフルーツグラノーラ

最強の後だし虫拳

這ってるニヤル男くん

言うほど最強か？

私のフルーツグラノーラ

お前ら追い払われてるじゃん

這ってるニヤル男くん

は？

俺まだ一回だし

寄ってるにやる美ちゃん

は？

あたしまだ一回なんだけど

カダスで眠る本格派邪神様

は？

こっちはまだ一回しか繋がってねえよ

私のフルーツグラノーラ

トータルで三回は草

蓮滝色

待ちな

アザトースはそもそも本人と戦ってないのに負けてる

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

生き恥だよなあ!?

おとぼけアザトース

手駒が弱いだけだし・・・

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

俺の駒が強すぎて意味だよな？

井高

数で押すなら戦略くらい立てないとな

向いてないじゃん

ヨーグルトソースの血縁

発狂させることしか出来ない悲しき生き物

蓮滝色

誰もお前を愛さない

「今から入社します」とタイムカードを打刻した

相模「そんなに崩壊させたいなら一思いにライドウに挑め。出来ないならどうせ勝てないから諦めて隠棲してろ」

蓮滝色

ワア・・・

井高

こんな年下に言われたら泣いちゃう

這ってるニヤル男くん

生まれてから今日までこの業界で頑張ってきたのに若造にお気持ちされる兄者

寄ってるにやる美ちゃん

頑張ったのに報われない

カダスで眠る本格派邪神様

なお努力の方向は無視する物とする

クトウグア

業界歴3年に刺されるのお辛い

「今から入社します」とタイムカードを打刻した

おつらいのは業界歴3年でこんなやつが手出しして出血が広がった事件の尻拭いす

るヤタガラスだつての

御国のために滅私のライドウ唯一の我が儘が兄者とかホンマ  
心が二つある

ちよつと楽しい

もつと拗れてくれ

兄者に直接伝えたいなあ

お前の拗らせが俺の飯を美味しくしてくれてるよつて

蓮滝色

こいつ・・・

クトウグア

やっぱこいつら駆除すべきだろ

私のフルーツグラノーラ

相模、うちの子になれ

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

俺のイケオジが既に信頼を築いてるから

周回遅れで後追いしろ

崩壊後はパーティ組んでポストアポカリプスを旅するんだ

〔・ω・〕「ばす！／＼・ω・）／＼とと！」

兄者、決意の逃走

ヴォルヴァアロス

まさに男気ある逃走

ヨーグルトソースの血縁

ライドウが傍まで来てるだけなんだよなあ

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

ダークサマナーの生き残りも引き連れてくみたいだな

這ってるニヤル男くん

地上に戻ったら兄者は手綱を手放せばいいよ

寄ってるにやる美ちゃん

さよならだけが人生だな相模

井高

相模死ぬじゃん

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

そうになったらライドウの兄者の弟者がライドウの兄者を斬り殺すだけだから楽しめる

そうならなかったら相模の急所である横浜を陰ながら守護する惨めな兄上が見られるから楽しめる

一粒で二度おいしい

人間って素敵やね

這つてるニヤル男くん

俺も楽しみてえよ！

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

ざあこ！

おとぼけアザトース

キレそう

蓮滝色

ずっとキレてるだろ

ヨーグルトソース王

そもそも相模に人質効くのかよ

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

わからん

ただこいつ思い切りがいいからな

人生の終わりだと決めたらそのまま死んで復活しないくらいの凄味を感じる  
そもそも人質取れるレベルだと御先を突破してるからな

そうなたたら相模じゃ対処できないからやっぱり終活しちゃうかもな  
カダスで眠る本格派邪神様

相模最期の日か

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

そもそもピジョンが相模の未来を予知しまくってるから死ぬはずない  
這ってるニヤル男くん

先読みクソバード死んでくれ

寄ってるにやる美ちゃん

精度低いつて言つたじゃないですかー!

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

相模に関してはオリーブの枝まで使つてガチで未来予知するから

そして相模は崩壊を引き起こす事件に突撃するので行く末がかなりわかる  
カダスで眠る本格派邪神様

馬鹿理論で構築されるアホシナジーやめろや

這ってるニヤル男くん

急にシャンクス斬られた！

寄ってるにやる美ちゃん

死ぬなシャンクス！

カダスで眠る本格派邪神様

何やってんだ兄者あ！

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

片腕くらい安いもんさ

蓮滝色

片腕すら残ってないんですがそれは

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

敵船ゆえ威嚇した

私のフルーツグラノーラ

みじん切りなんだわ

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

ライドウも兄者も霊的国防の系譜が定向進化してるから国や民への悪意を精密に感

じ取る直感を持つてる

だから普通に殺す



勘がバチクソ冴えてるから考える能力が無くても十分だった  
クトウグア

何目論んでたんだシャンクス！

ヨーグルトソースの血縁

よくやつたと褒めたい

中年太りのシャンクスは解釈違いすぎる

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

普通に相模に対する人質を取ろうとしたんじゃないの

相模がいないと崩壊が始まる

蓮滝色

相模、お前単なるキチガイじゃなくて実はキーキャラだったのか・・・

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

最近キーキャラに昇格した

強くなったから表立っての行動を開始した上で崩壊を食い止めに動くと言明して最  
先端を走り続けてるから後を追いかけてやすい

あと死んで無いのも支持されてる

一番の無責任とも言えるのが、生死問わず居なくなることに

その対極に在るだけで好悪関係無しに注目されるし信じやすくなる

蓮滝色

相模、お前が真のオリマーだ

這つてゐるニヤル男くん

直接殴つてきて勝利するオリマーとか嫌だよ俺

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

スマブラ式なんやろなあ

おとぼけアザトース

走り続けていつそ燃え尽きてくれ

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

崩壊したら横浜に攻め入つて御先を中心とした集団を形成する展望がある相模が燃

え尽きるはず無いんだよなあ

ヨーグルトソースの血縁

いや草

ヴォルヴアドス

貯蓄しろ

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

手ぶらで世界の崩壊に突入するつもりだ

難民とかを横浜に押し付ける

そのためのメシア

素敵だあ

ヨーグルトソースの血縁

今日はもう終戦か

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

兄者の行動を片手間で見るくらい

私のフルーツグラノーラ

シユバルツバース、消えたわね

〔・ω・〕「ばすー（／・ω・）／てと！」

受胎で切除してただけだからいたちごっこなんだよなあ

井高

速度は早くないから勾玉が積み重なる

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

まだ贋作の域を出ない

ただシユバルツバースの展開よりも遙かに早くマガタマできるのは確か

おとぼけアザトース

混沌王の時間だあああああ!!!

蓮滝色

そんな時間来ねえよ

這ってるニヤル男くん

イエーイ!

ルシファークン見てるー?

寄ってるにやる美ちゃん

君のお気に入りの人修羅がそのうち勝手に生えてきまーす!

カダスで眠る本格派邪神様

制限食らって干渉できない愚かさを恨んでくださーい!

蓮滝色

だからまだ生えねえつつうの

クトウグア

不安よな

俺、燃やします

私のフルーツグラノーラ

起き攻めされる混沌王は流石に草

「今から出社します」とタイムカードを打刻した

どうせ面白いドラマとか用意できないんだからうちの相模を巻き込まないでよねー  
!

クトウルフはこのヨーグルトソースが育てた

「ご飯まだ？」

ヨーグルトソースの血縁

まだ起きてないから用意できねんだわ

井高

ずっと寝てろ

〔・ω・〕「ばすー! (／・ω・) /てと!

カスどもは鬱陶しいから夢を見るなよ

ヨーグルトソースの血縁

結構微睡んでる

ダゴン

きゃー!

こっち見て!

ヴォルヴァドス

見るな見るな

迷惑だろ

クトウルフはこのヨーグルトソースが育てた

ご飯まだ？

## 女神転生（地方しらべ） 19

【全国版】ヤタガラスが無く頃に【XXX回目】

相模

脱走者を逃しました

「よつちー」と「青芝」は対処済みです

それぞれ埼玉と京王に属していました

報告書を更新したので関わる人は確認してください

会話ログが欠損しているので抜けがあります

横須賀【神奈川】

相模が失敗するのは久しぶりだな

まあ失敗しても生きてるならやり直せるから

湯河原【神奈川】

やっぱ失敗したか

小賢しく立ち回り過ぎなんだよおまえ

もつとその場に応じてだな

川崎「神奈川」

あれはしょうがないって

金予は焼いたから全部が失敗じゃないでしょ

金沢「石川」

タム口を消してくれたただけ有難い

富山「富山」

ただのカルトになったから助かるわ

端島

ただのカルトも嫌なんだけど

富山「富山」

ただじゃないカルトは洗脳とか隠し持ってるから面倒

金銀の連中は外に出てこないし直接的に動かなかつたからこつちもやりようがなかつた

それに国が捜査するので暴れるやつだけ間引けば済む



茅ヶ崎「神奈川」

受胎に手を出したら処理なのでよくやったと僕は言いたい

ゆりかもめ

報告読んだけどライドウ（兄）が参戦したからしようがない

湯河原「神奈川」

無駄に時間かけて準備されたんだからこいつも悪いぞ

どうせまた効率考えたろ

川崎「神奈川」

無駄じゃなかったし！

ご飯おいしかったもん！

また遊ぼうね！

端島

マジ？

俺が寝ずに走って向かってる最中に遊んでたのかよ

相模

お前は良くやってくれたよ

そのおかげで俺は可愛い女の子二人とデートできた

端島

ロリコン

相模

遊んだ可愛い女の子が偶々幼かった

横須賀「神奈川」

実際偽ライドウと那美の神使、あとダークサマナー複数だからよくやった

こっちの神使も呼んでも良かったんだが

相模

相手の神使を下つ端がボコしたほうが屈辱が与えられるかと思つて

横須賀「神奈川」

お前さあ

湯河原「神奈川」

そういうところだぞ

茅ヶ崎「神奈川」

それだどこつちも話が変わるなあ

相模

半分冗談

サキちゃんとハシマを全力で運用したかったというのが本音です  
ミサキ様がいると二人とも縛りで弱体化するから

湯河原「神奈川」

二人を呼ばずに初つ端から神使呼べば良かっただろ

相模

俺が困ったらミサキ様が来るなんて前例は作るべきじゃない

湯河原「神奈川」

状況を鑑みろ

横須賀「神奈川」

じーさんこいつ頭固いから何言っても聞かないって

湯河原「神奈川」

俺の若い頃はもつと素直だった

松本「長野」

嘘つきジジイが若者に説教ってマジ？

誰が素直だよ

素直なら耄碌してるんだからさっさと死ね

湯河原「神奈川」

誰がジジイだ

さつさとくたばれ

松本「長野」

孫が結婚してひ孫が生まれてその子が結婚するまで死なん

湯河原「神奈川」

妖怪になろうとすんな

スカイツリー「タワー」

神奈川は仲が良くていいな

ま、俺たちも仲いいけど

なあそうだろ

相模

スレが1分止まったんですけど

スカイツリー「タワー」

俺のスタープラチナは60秒しか止められん

エスコンフィールドHOKKAIDO「ドーム」

60秒も止めたらプツチ殺してもおつり来るんだよなあ

太陽の塔「タワー」

ポルナレフ状態のD I Oなんて見たくねえよ  
スカイツリー「タワー」

神奈川は仲が良くていいな

ま、俺たちも仲いいけど

なあそうだろ

立川

横須賀「神奈川」

名指しは笑うからやめてやれ

茅ヶ崎「神奈川」

来ないんですが

湯河原「神奈川」

仕事してんじゃねえか

スカイツリー「タワー」

仕事してないやつを呼んだに決まっています

横須賀「神奈川」

その程度の分別はできるんだな

立川「東京」

はい

スカイツリー「タワー」

遅い

俺が若い時代は電話を2コール以内に出なかつたら先輩に殴られてたぞ

立川「東京」

はい

太陽の塔「タワー」

草

化石みたいな論調やめてやれ

スカイツリー「タワー」

俺たちの友情を見せてやる

東京はチームワークで守られている

なあ豊島

豊島「東京」

は

豊島「東京」

はい

松本「長野」

無茶振りはやめてやれ

ごめん・なはり

パワハラ

スカイツリー「タワー」

知らんのか

ヤタガラスにコンプライアンスは無い

ごめん・なはり

えっ

ごめん・なはり

あるって聞いたのに

茅ヶ崎「神奈川」

最低限はあるから安心してください

東京タワー「タワー」

豊島くんが急いだから何かと思った

僕とご飯食べてただけど

スカイツリー「タワー」

あつ

東京タワー「タワー」

やめなさい

スカイツリー「タワー」

はい

東京タワー「タワー」

あとコンプライアンスはあります

ありますが、仕事の性質上二の次になりやすい事も事実です

また普通の企業とは異なる点は皆も理解するように

個々人で上手く時間を作るしかない業界です

定時や週休が欲しいなら民間の企業に勤めるか、フリーで活動しないと厳しいことは

留意するように

ごめん・なはり

はーい

茅ヶ崎「神奈川」

承知しております

東京タワー「タワー」



脱走者の対応は相模くんが担当でしたね  
相模

はい

応援を二人呼んで対処しました

東京タワー「タワー」

確認しました

彼の参戦では仕方ない結果だと思えます

しかし複数のネームド討伐や装飾品の回収は素晴らしい

皆さんは真似しないように

相模

ありがとうございます

湯河原「神奈川」

褒めてんのか貶してんのかわかんねえなこれ

横須賀「神奈川」

真似していいことないのは確かだが言っても聞かない

太陽の塔「タワー」

俺も昔は呼び込んだけど今ではめつきり減っちゃまったな

通天閣「タワー」

東京すつきりさせたんだろ

おもしろえじゃん

山手

結局外部から流れ込んでくるから縄張りとか変わって面倒

ゆりかもめ

急に上役いなくなったとかで俺に仕事を聞いてきた馬鹿いたわ

富山「富山」

草

ゆりかもめ

しかも悪魔と争いごとは出来ないとかもうバカかとアホかと

これまでぼったくりバーで騙された奴の報復依頼を受けてたくらいだとよ

山手

出た

民事不介入を暴力で解決するやつじゃん

結局ぼったくり分を報酬で取られるから意味あるのか？

白浜「和歌山」

復讐したらスッキリする

高崎「群馬」

ぼったくられて泣き寝入りするよりは精神的に救われる気がする

四條畷「大阪」

自分でやり返せよなそんならい

牟岐

みんながみんな力あるわけでもない

それにCOMPや異能の力がある立場でそういう主張はまた違う気がする

四條畷「大阪」

COMP無くて俺ならやるね

通天閣「タワー」

そりゃ好きにやってもいいけどよ

悪魔に喧嘩吹っ掛けてお前死にかけてたろ

力量差わからずに死ぬのは泣き寝入りするより悪いっつうの

四條畷「大阪」

負けてないんで

俺の方が速かった

通天閣「タワー」

本質を理解せずに調子こいて負けんのが一番間抜けだつてんの  
太陽の塔「タワー」

絡まれたデカラビアが困ってたからな

O s a k a M e t r o

良識ある悪魔だなあ

四條畷「大阪」

俺は負けてない

豊島「東京」

いつも思うんだが負けてない論者は負けを認めたら死ぬのか

四條畷「大阪」

負けてねえから認めるも糞もねえんだよ

豊島「東京」

ペルソナ使い？

通天閣「タワー」

いやCOMP持つまでは単なるチンピラ

太陽の塔「タワー」

チンピラならまだ徒党を組むからマシ  
ただのぼっち

そろそろ仲間増やしとけ

通天閣「タワー」

そうだな

そろそろ知り合いを作つて顔も売つといてくれや

四條畷「大阪」

は？

群れたらだせえだろうが

通天閣「タワー」

自分のプライドの為に群れないで負けて他に尻拭いさせるほうがだせえつつうの

四條畷「大阪」

うっせえな

俺の管理くらい好きにやらせろ

通天閣「タワー」

おい

通天閣「タワー」

大好きな筋とやらくらい通せねえのかテメエはよお

誰が面倒見て誰が尻拭いすると思ってるんだ

目に余るぞ

四條畷「大阪」

・・・うす

通天閣「タワー」

目上の話すらも聞けねえのかテメエは

思考したくないなら素直にチンピラやっつてろや

東京タワー「タワー」

それくらいにしときな

ここ掲示板だから

直接話すか通話しなさい

通天閣「タワー」

そうだな

すまん

相模

話を仕切り直します

ライドウの兄の追跡・討伐の依頼は誰でも出来ます

俺も降ろされたわけでは無いので各地を飛び回ろうかと思っています  
あとで許可を取る予定です

東京タワー「タワー」

フリーハンド？

相模

そうですね

東京タワー「タワー」

二度目だから裁量の自由があってもいいでしょう

うん、僕はいいと思う

ただ前回と違って管理地はあるのでそちらも忘れないように

相模

ありがとうございます

そのあたりは理解しています

川崎「神奈川」

サガミちゃんいいなー

わたしあんまり移動できないー

相模

暇なときに俺の管理地来ていいよ

川崎「神奈川」

ひとりだどつまんないよー

相模

今度ペット飼うから世話したげて

川崎「神奈川」

ほんと！

何飼うの！

相模

犬

横須賀「神奈川」

犬！

俺も行っていいか？

相模

いいですよ

湯河原「神奈川」



しょうがねえなあ！

相模

餌はたぶんダークサマナーとか悪魔でいいです

山手

その餌で大丈夫な犬とはいったい

スカイツリー「タワー」

もしかしてあれか

勾玉のやつ

相模

はい

犬修羅です

湯河原「神奈川」

それ犬か？

相模

可愛いですよ

研究チーム主任「八意思兼班」

みなさんが集めた勾玉があつたじゃないですか

あれが複数集まるとG.P.が僅かに上昇することが観察できたんですね

もっと数を集めると何かを呼び寄せるんじゃないかって話もつたんですが予知班に怒られてしまいました

じゃあこれを造魔とかの原料に使ったら凄そうじゃないかってやりたくなつたんですね

あ

うちは造魔研究チームなんですけどね

そしたらなんと死にかけていた生物に反応を示しました

最近運ばれて来た宗教の人

吸い出しも終わったんで処分されるって話だったのでせっかくだから何かに使えないかと思ひまして

まあそういうのは不測の事態が予想されるので許可されないんですけれど

なのでこつそり近づけたんですよ

ちよつと名前忘れましたがあの人で反応しましてね

これ発見して私たちもびっくりして

流石に人でやるのはまずいってなつたので死にかけていた犬を使ってみました

そしたら上手くいくじゃないですか

で、チームの子が言うんですよ「造魔使ってなくないですか」って  
あ、しまったって思ってた

じゃあもういつもの人に渡そうってなったんですね

相模

だそうです

山手

何一つ理解できない

端島

情報を完結させろ

川崎「神奈川」

写真ありがと

すっごい可愛い！

横須賀「神奈川」

俺にも！

俺にも写真送ってくれ！

開発チーム「天目一箇神班」

相模さんお疲れ様です。

試験ありがとうございます。

早速レポートを読みました。

高熱・高圧の記録は大変喜ばしい結果でした。

耐久力を改善できれば皆様にも着用する機会が訪れることでしょう。

暫くお待ちください。

研究開発についてはノートをご覧ください。

開発チーム「榎名田比売班」

相模さんいらつしやるんですかあ

よかったですあ

今回はどうもお

とつても勉強になりましたあ

レポートすつごくすつごくよかったですよあ

ターミナルとストレージの研究がとつてもとつても進みますう

でもまだまだですねえ

わたしたちもがんばって調べますねえ

でもオリーブの枝すごいですねえ

待っててくださいあ

相模

こちらこそありがとうございます

とても助かりました

ミサキ様に許可をもらったので今回の戦利品等を送ります

開発チーム「櫛名田比売班」

やったあ！

開発チーム「天目一箇神班」

ありがとうございます。

頂くだけでは心苦しいのでこちらからも粗品をお返しいたします。

研究チーム主任「八意思兼班」

せつかくだからここでいいか

沖ノ鳥島くんいるかな

要望のあった造魔の調整終わってるよ

見た目もちよつと変わってるかもだけど性能はその分上がつてるから心配しないで

新型のエネルギーフィンがマグネタイトの関係で緑っぽく光つちゃうけど我慢して

ね

感想とかあったら教えてくれると助かるからね

使い心地とか欠点も欲しいなあ

この人は造魔使う人少ないから普及もしといてね

いや十分使ってるんだけどもつと使ってほしいじゃん

かっこいいのに

かっこいいから使ってね

相模

だそうです

牟岐

造魔は高いからちよつとキツイ

太陽の塔「タワー」

プラズマなら運用コストは意外と低くて済むぞ

ビームも撃てる

O s a k a M e t r o

まさか

ゆりかもめ

ビーム・・・？

何処かで聞いた話だな

沖ノ鳥島

了解

連絡はここじゃなくてメールとかの方が嬉しかった

南鳥島

造魔はいいぞ

出し続けてもコストが掛からないし

俺が使ってる機械タイプは傷ついたら悪魔と違って直さないといけないが

修復施設は高いけど僻地任務なら貰えたりするから離島での運用にお勧め

沖ノ鳥島

マグネタイトとか魔力をエネルギー源にしているロボットだと考えてくれたらいい

か

人造タイプは悪魔と人形の相の子なんだがドリーカドモンって素体が無いと造れな

い

研究チーム主任「八意思兼班」

ドリーカドモンじゃなくてフラスコの中の小人でもいいよ

ちよつと違うけど大体一緒だから

精霊タイプが好きって人はドリーカドモンですけど

ホムンクルスはより人間っぽいので言葉も通じるし歴史上の英雄とかを呼びやすからサマナーにはこっちのほうが向いてますかね

全部のコストが高くなるけどプラズマ型もオススメ

ただプラズマ型はまだまだ発展途上だからほとんどんバージョンアップしちゃうけどなんかパーツが増えたりするかもしれない

小型を予定してたけど大型になつてくかも

しかもその分だけお金かかっちゃうから気をつけてね

儀式がどうかかって存在でもないのでCOMPにも入らないのも欠点かな

ストレージの開発が待たれるね

欲しくなったら八意思兼班に連絡をくださいね

羽村「東京」

俺には必要ないな

事件の少なさ的な意味で

東京タワー「タワー」

久しぶりに見たけどやっぱり変わった人が多い

ストレージ機能が順調なら要所に配備したい所ではある

スカイツリー「タワー」



ICBMが怖いからタワーにビーム付けようぜ

大分スポーツ公園総合競技場「ドーム」

じゃあドームにバリアくださいよ

山手

そしたら電車に列車砲付けようぜ

黒部峡谷

ダムも何か欲しいですぜ

東京タワー「タワー」

目下の面倒事であるGP40の伊邪那美の掃討なんだが

逃亡者が合流したのか元から予定していたのかこちらが知る由も無いんだけど使役して神使から歩調を合わせているのだろう

誘引して撃破するなら優先的に配備するのを認める

スカイツリー「タワー」

那美はちよつと首都に呼べねえわ

異界を展開されるのも困る

山手

列車砲でどうすればいいのかわかりゃん

大分スポーツ公園総合競技場「ドーム」

バリアなんてまだいらねえわ

大分にバリアなんてあってもしょうがねえ

黒部峡谷

へへへ 水貯めとくことしかできない

東京タワー「タワー」

危険だが急ぎでは無いので余裕があれば試しに受けてほしい

レベル10は受けさせないが

端島

そりやそう

沖ノ鳥島

言われてるぞ

南鳥島

GP40にレベル10を突っ込ませるとか常識ないのか？

相模

流石に俺も伊邪那美相手に行かせないって

敵の駒を増やすだけじゃん

湯河原「神奈川」

増えなかつたら行かせてそうだ

相模

死ななきや安いんですよ

スカイツリー「タワー」

ちよつと不穩な所もあるが実際に経験を積んでほしい気持ちはわかる

横須賀「神奈川」

相模、そんな殊勝な気持ちだったか？

相模

半分くらい

湯河原「神奈川」

こいついつも半分は優しきできている

通天閣「タワー」

バファリンか

津和野「島根」

トリ、横浜にバス突っ込んだな

鳥取「鳥取」

超エキサイティング！

茅ヶ崎「神奈川」

銀杯教の元本拠地に金予教の信徒が乗り込んだバスが突っ込んでの自爆ですからね  
テレビ局や報道も幾人か巻き込まれてます

山手

落ち着かないな

松本「長野」

銀杯の本拠地は大霊地だったか

横浜の争いが激化するんじゃないの

湯河原のじーさん助けてやんなよ

横須賀「神奈川」

ちよつと落ち着いたかと思つたが儚い夢だったな

川崎「神奈川」

横浜盛り上がるね！

湯河原「神奈川」

松本のジジイこそ引退してやれ

そんで助けてやれや

松本「長野」

うちの子はどうも弱くてな

もうちよい強かつたらよかつたんだが

アルピコ

可愛さ極振りでごめん☆

松本「長野」

ごめんちゃんとなはりちゃんたちのほうが可愛いって評判だぞ

アルピコ

おじいちゃん嫌い

松本「長野」

冗談

許して

ね？

ごめん・なはり

あるぴかわいいよv

ごめん・なはり

ね

かわいい

アルピコ

ありがとう！

私もふたりすき！

松本「長野」

俺もあるぴ可愛いと思つてた

アルピコ

うっさい

臭い

松本「長野」

ごめんって

臭いはやめて

湯河原「神奈川」

臭いジジイは許されず孤独死しろ

松本「長野」

他人事だと思いやがって

お前のほうが孤独死リスク高いからな

湯河原「神奈川」

要らぬ節介てやつだ

相模とピジョンがこの爺の面倒を見るからよ

相模

えっ

湯河原「神奈川」

見ろ

相模

はい

松本「長野」

これパワハラだろ

東の、言つてやれ

東京タワー「タワー」

うーん・・・

どうせ戦場で死にそうだから好き勝手言わせとこう

松本「長野」

草

湯河原「神奈川」

ばっかだなおめー

俺は畳の上で惜しまれながら大往生すんだよ

松本「長野」

これパワハラだろ

西の、言つてやれ

通天閣「タワー」

死んでるのに気づかずに戦つてそうだからな・・・

死んだら宣言してくれ

湯河原「神奈川」

ばっかだなおめー

俺は畳の上で若い連中に囲まれて可愛いねーちゃんの膝の上で涙と別れの言葉で惜

しまれながら大往生すんだよ

横須賀「神奈川」

要求を増やすな

湯河原「神奈川」

死ぬ間際は素直でありたい



そうだろう？

松本「長野」

ずっと素直じゃねーかよ

相模

最近はちよつと殊勝でしたよ

湯河原「神奈川」

ピジョン

こいつの口にチャックしろ

相模

はい

松本「長野」

ジジイも老いたな

昔は鬼みたいに恐れられたのがこれだ

老いは人間を弱くする

アルピコ

おじいちゃん夜も遅いからお酒やめて

松本「長野」

はい

豊島「東京」

草

相模

草

ごめん・なはり

かわよ

ごめん・なはり

かわいい

湯河原「神奈川」

直前の言葉と行動を忘れたのか？

ボケてんよこいつ

松本「長野」

あるび可愛いから注意されたら従わざるを得ない

太陽の塔「タワー」

あるび可愛いのかよ

見えてえ

## 川崎「神奈川」

あるびっぴかわいーよ

アルピコ

ちよつとやめて

ゆりかもめ

あるび可愛いのかあ

ゆりびはゴリゴリの男だからな

可愛がってもらえねえよ

山手

あるび、山ピーを可愛がってくれ

スカイツリー「タワー」

急に芸能人きたな

東京タワー「タワー」

山ピーは歌うのかい

エスコンフィールドHOKKAIDO 「ドーム」

俺結構あの二人好きだったな

山手

？

黒部峽谷

まずい・・・！

ジエネレーションギャップだ・・・！

東京タワー「タワー」

なにつ！

スカイツリー「タワー」

はわわ・・・

エスコンフィールドHOKKAIDO 「ドーム」

タツキーマインド翼はダメか？

相模

名前はちゃんと呼んであげましょうよ

困ってますよ

ね、セルピコさん

アルピコ

誰なのお!?

それ前も言ってるひといたよね！

相模

まずい！

ジエネレーションギャップだ！

津和野「島根」

トリ、ジエネレーションギャップか？

鳥取「鳥取」

そもそもの趣味の違い、ですかね・・・

牟岐

文化圏が違うとか

相模はセネガル

あるびはイギリスだ

沖ノ鳥島

知能指数じゃないか

相模は石器時代の勇者

あるびは現代人

山手

存在している空間がおそらく違う・・・

相模はボンドルド、あるびは表層・・・

相模

エアポンドルド「いきますよ、ガッツさん。我々の力でゴッドハンドを止めましよう」

ゆりかもめ

完成度が低すぎる

山手

エアプの完成度とは一体

豊島「東京」

エアプは絶妙に言わないワードを選ぶ必要がある

相模

エアプあるび「おじいちゃん大好き」

松本「長野」

それエアプにされるとつらいから勘弁してくれないか！

アルピコ

ちよつと待って

このままだとあるび呼びが浸透しちゃうわない？

ごめん・なはり

なはぴはかわいいと思う

ごめん・なはり

ごめぴもそうだと頷きます

アルピコ

二人は語呂が悪いから安全圏だと思って！

川崎「神奈川」

かわさきつぴも可愛いつて言ってる

相模

あるぴでいいじゃん

相模

さきぴもきつとそう言う

川崎「神奈川」

言わない

相模

今度さあ

バウムクーヘン食べに行かない？

川崎「神奈川」

言う

アルピコ

さきび裏切りつぴじゃん

端島

ぎえびー！

びーすけひよこじゃないつぴ！

川崎「神奈川」

あるび裏切られつぴだからね！

松本「長野」

端島、お前島帰れ

南島島

女の子の間に挟まんじゃねーよ

沖ノ鳥島

罪深い

端島

待て待ておまえら



相模は女の子2人とデートしてたぞ

ごめん・なはり

うちらもした

相模

モテてごめん

端島

咄嗟に逃げ道を探したら怒りのツボを押ししてしまった

キレそう

ごめん・なはり

相模さんお金出してくれるから

相模

パパ活されてた

かなしい

アルピコ

長野きたらデートしよ

川崎「神奈川」

あるびこっち遊びにきなよ！

アルピコ

神奈川いくからデートしよ

相模

財布が狙われてる！

松本「長野」

お前わかつてんだろうな

相模

命が狙われている！

神戸「兵庫」

楽しそうだな

こっちはシユバルツバースとかいう黒いよくわからんやつの対処で手間取った

東京タワー「タワー」

あれかあ

どうだった？

神戸「兵庫」

最終的に受胎で丸々切除した

ただ天才が現れてそいつの対処が面倒だった

東京タワー「タワー」

運が良いのか悪いのかわからないけど引き寄せられる子いるよね

大抵天才型で

神戸「兵庫」

さつきまで研究開発いたのか

聞きたい事あったんだけど

開発チーム「榎名田比売班」

いますよお

相模さんと話してますう

神戸「兵庫」

最近相模人気だな

聞きたいのは保護したやつがデモニックに完全適応してるみたいなんですが

ただ誰もデモニカスーツを持ち込んでないのにそいつは着用してて対悪魔装備として運用してたんだが

開発チーム「榎名田比売班」

ああ

まあ

ターミナルとかもそうですけどお

外由来ですかねえ

開発チーム「天目一箇神班」

神戸さん。

いつもお世話になっております。

こちらにデータを送っていただけると助かります。

また、実物の測定も行いたいので後ほど打ち合わせをお願いしてもよろしいでしょうか。

神戸「兵庫」

纏まったら連絡するわ

開発チーム「天目一箇神班」

ありがとうございます。

お忙しいところ恐縮ですがよろしくお願いいたします。

川崎「神奈川」

外？

開発チーム「榎名田比売班」

魔界とかあ

アマラ経絡とかあ

物質界じゃないのをまとめて外って呼んでますねえ  
調べたらもうちよつとだけ詳しくわかるかもお

川崎「神奈川」

へー

相模

わかった？

川崎「神奈川」

げんりだけ！

相模

おいおい

とんでもねえ理解度だ

この世の全てをほしいままにしちゃうじゃん

川崎「神奈川」

ごめん！

わかんない！

相模

かわい

アルピコ

かわい

ごめん・なはり

かわよ

ごめん・なはり

かわゆ

周南「山口」

んぎやわいっ

川崎「神奈川」

サガミちゃん！

そもそもアマラ経絡って何！

相模

俺もよくわからないよ

川崎「神奈川」

サガミちゃん

相模

ごめん

でも魔人のサキちゃんがわからないなら俺もちよつとな

研究チーム「マヨイガ班」

説明してって呼ばれたっすけど

相模

アマラ経絡とかについて説明してもらえます？

研究チーム「マヨイガ班」

あー

長くなってもよろしいっすかね

湯河原「神奈川」

爺だから長文きつい

研究チーム「マヨイガ班」

あっはい

ざっくり言うとか力の流れっすね

龍脈とか霊脈が何処から来てるのかを遡ったら俺たちが認識している世界とは異なる所から来てるってのがわかって

で、その中で強い流れの認識や概念を通路として利用してるのがアマラ経絡っすね

魔界とか無意識に行きつくんで逆に物も流れて来ててターミナルとかもそこから来てるって話っすね

転輪鼓てんりんこで通路という概念を付与するんですけど相模さんのオリーブの枝はもつと高度で繊細に概念を強化してるみたいっすよ

川崎「神奈川」

サガミちゃん！

相模

通路だよーって念じたら通路になるすっげえ空間がアマラ経絡

アマラ経絡をずっと探索すると理論上は魔界に行ったり夢に繋がったりする

そこから思わぬ道具も流れ着く

研究チーム「マヨイガ班」

っすっすっす

湯河原「神奈川」

どうした相模！

急に賢くなったのか！

相模

フロウが纏めてくれました



横須賀「神奈川」

電霊かよビビったぜ

川崎「神奈川」

ありがと！

フロウちゃんも！

相模

そういえば俺はアマラ経絡を通路の概念で形成してると聞いて不壊空間みたいな気持ちで使ったんですが

壊れないんでしょうか

研究チーム「マヨイガ班」

理論上は我々では壊せないっすね

GP50で振り切ってる空間なので厳密には言えないっすけど  
壊れたら外側は力の奔流か無なので気を付けてくださいっす

相模

無

川崎「神奈川」

むむむ

太陽の塔「タワー」

ちようど無を取得してみたかったところだ

周南「山口」

手ぶら!?

研究チーム「マヨイガ班」

エネルギー暴発型の崩壊対策に無の空間をぶつけるって計画もあるんで取得しても  
らえると助かるっす

神戸「兵庫」

実際ぶつけられるのか？

研究チーム「マヨイガ班」

さあ

指向性を逸らす障壁のように展開したいって考えっすね

基本的にみんなでやれたらいいなってわちやわちや言ってるだけっす

アルピコ

楽しそう

相模

研究開発所属の人、ありがとうございました

研究チーム「マヨイガ班」

や、とんでもないっす

何かあればまたどうぞ

川崎「神奈川」

研究とか開発してる人って名前はチームなんだね

東京タワー「タワー」

協力者もいっぱいいるからね

わかりやすく説明すると加藤さんが100人とかになっちゃおう

ヤタガラスのサマナーは寡兵なので現状で済んでるのだが

研究開発のスレなら個々人で名前を持つてるようだから興味あれば覗いてみなよ

川崎「神奈川」

サガミちゃん！

相模

いや俺に振られても困る

見てるけど

端島

なんか面白い話してた？

相模

そうだなあ

それぞれの進捗はノートに記されてるし、技術分野ごとに一括表記されてる表もあるからな

スレはそれこそ愚痴とかだな

誰そのの使い方が悪いとか態度がダメとか

端島

エゴサマンの相模は自分の話題見つけたか？

相模

デモニカスーツを使った環境だと死んで無いのがおかしいって書かれてたな

沖ノ鳥島

成仏しろ

南鳥島

駄目じゃないか死人がエゴサしちや

相模

ダークサマナーに圧を掛けるの楽しいから続ける

ごめん・なはり

名前書いたら相模さん来てくれるの？

ごめん・なはり

相模相模相模相模相模

ごめん・なはり

急に連呼は怖いって

ごめぴはちよつと不思議な子だから許してあげて

ごめん・なはり

待って

なはびの仕業だよ

ごめん・なはり

この中に嘘つきが一人います

相模

急に嘘つきパズルが始まったな・・・

ゆりかもめ

2人しかないから勘で当てるしかないやつ

ごめん・なはり

あるび！

・ になつて！

アルピコ

むちやいうねー

松本「長野」

いきなさいあるび

あなたのためでなく

二人の為に！

アルピコ

いかない！

松本「長野」

これが反抗期か

女の子の成長は早いな

このままだと白無垢もすぐか

アルピコ

心がじじい

ごめん・なはり

白無垢で

東京タワー「タワー」

名前を書くとは反応するのはあれだな  
ライドウの兄君がいるんだが

彼の名前を書くとは連絡がいくから

ごめん・なはり

ヴォルデモート？

ごめん・なはり

名前を言っではいけないあの人？

アルピコ

闇の帝王？

相模

アレ？

通天閣「タワー」

なんでや阪神関係ないやろ！

相模

いやでもあの人半神でしたよ

通天閣「タワー」

面白え

うちに来いよ

相模

いかない！

周南「山口」

少女漫画はじまった？

白浜「和歌山」

お前の知ってる少女漫画物騒すぎない？

山北「神奈川」

あの

よろしくお願いします

松本「長野」

生き返ったのか!?

湯河原「神奈川」

うちの新顔だ

相模

俺が面倒見ることになりました



東京タワー「タワー」

はい、よろしくお願ひしますね

山北くんは複数人からなるチームなので良くしてあげてください

川崎「神奈川」

はい

ごめん・なはり

よろしくね

うちも二人とはいえチームだから親近感湧く

ごめん・なはり

焼きそばパン買ってきて

ごめん・なはり

ごめんね

先輩面したいみたいだから許してあげてね

アルピコ

山びーよろしくね

山手

嫉妬で頭がおかしくなりそうだ

ゆりかもめ

元祖山びーが嫉妬の炎に焼かれてる

相模

山北さん、新しい人員送るから

山北「神奈川」

あ、はい

後でリーダーに伝えておきます

相模

あ、もしかして彼寝てる？

山北「神奈川」

はい

相模

女の子だよ、女の子

華が増えるね

山北「神奈川」

うーん女の子か・・・

相模

銀杯教出身だけど銀杯教について全然知らないからさ  
ゆらぎくらいしか知らない

南鳥島

それ逆にどんなやつだよ

川崎「神奈川」

サガミちゃん、まさか

相模

事故で死んじゃったけど蘇生させたから大丈夫

ちゃんと女の子になったから安心して

山北「神奈川」

言葉の端々が不穏じゃないですかね

端島

マジか

相変わらずこいつイカれてんなあ

相模

あと夏休み明けたら本場やるってのも伝えといて

湯河原「神奈川」

また悪だくみか

相模

ただの自由研究なんだよなあ

転輪鼓てんりんこのアップグレード版で夢の工場見学ですよ

山北「神奈川」

夢はどつちの意味なんですかね・・・

相模

楽しみにしてて

山北「神奈川」

ええ・・・

東京タワー「タワー」

国防に役立ってヤタガラスに迷惑かけないなら何やってくれないけどね

さつきも言った通り僕らは寡兵だから事件が起きて後手に回るだけで詰む可能性が

高い

例え卑怯な手を使おうと元から断つくらいの気概で励んでいきましょう

太陽の塔「タワー」

明日からもご安全に！

相模

ヨシ！

川崎「神奈川」

サガミちゃんがヨシって言ってるからヨシ！

ごめん・なはり

さきちゃんがヨシって言ってるからヨシ！

ごめん・なはり

なーさんがヨシって言ってるからヨシ！

アルピコ

ごーちゃんがヨシって言ってるからヨシ！

松本「長野」

孫がヨシって言ってるからヨシ！

通天閣「タワー」

なんとなくヨシ！

山北「神奈川」

ええ・・・

相模

ヤタガラスはこんな感じだから慣れてください

山北「神奈川」

頑張ります

相模

DDS―Net上ではあるけど一般の掲示板とは違い、セキュリティ対策の為にヤ

タガラス独自で立ち上げてるんでそこら辺も覚えておくと使い勝手が上がります

開発チーム「榎名田比売班」

ガイアにはもうないかもねえ

ファントムソサエティが持ってたけどお

あ、スパゲッティモンスターのところが獲得してたかもお

相模

端島マジ？

端島

マジだけど大した事に使っていないな

メンバーそんなにいないし

東京タワー「タワー」

ああ、そうか

端島くんはFSM教だっけ

端島

そうです

山手

ガイア教のままヤタガラスにいるの!?

端島

宗教の自由が確保されているらしい

東京タワー「タワー」

ヤタガラス優先が条件だからほほいないけどね

受け入れるんだけどなかなか

相模くんのところのピジョンさんとか名誉ヤタガラスメシアンだよ

山手

名誉ヤタガラスとか初めて聞いたな

よくわからん

東京タワー「タワー」

メシアが信じる主よりヤタガラスを優先するメシア教が名誉ヤタガラスメシアンだ

残念ながらほほいない

豊島「東京」

メシアンの定義こわれる

スカイツリー「タワー」

ほぼ・・・？

相模

スパゲッティモンスターって何の話してんの

端島

なんだろ

最近は宿讎の運が良すぎて萎えるって話をしたな

その前は五条が慢心してよけなかった問題とか

あ、ちいかわの話をしたわ

百足は怖さがよくわかったらしい

相模

ガイアなら国家転覆くらい計画しろ

端島

弱小サークルに無茶言うな

そもそも転覆して困るのは空飛ぶスパゲッティモンスターなんだよね



余裕を持つて議論できる土壤のある世界で支持されてるから世紀末とかになると存  
在意義を失うかもしれないってことで

相模

ロジカルなのか馬鹿ネタなのかわからないのやめてくれ

端島

本柱的にはシリアスなんだがなあ

## 女神転生（地方しらべ）20

【初心者】おれ、悪魔召喚プログラムってのを拾った

蒼月@ファンパレ民

ゲームとかダウンロードしたら悪魔召喚プログラムが入ってました

いろいろ教えて欲しいし仲良くしたいのでよろしくお願いします

アカザ・クオリティ

あまりそういうこと言わないほうがいいぞ

蒼月@ファンパレ民

なんで

ppsh

ちよwww

新入りかよwww

囲めwwwwww囲めwwwwww

No. 9

歓迎しよう

盛大にな

こいつの命が惜しければまず俺を囲むこの気色悪いやつらについて説明を

新入りならスペックウP

アカザ・クオリティ

身バレもあるからさっさとスレから出たほうが良い

蒼月@ファンパレ民

大学生です

細マツチヨでよくあるラノベ?とかの主人公に似てるかも

彼女もいたけど今はいない

有楽線沿いのアリア

大wwwwww学wwwwww生wwwwww

わwwwwwwかwwwwwwいwwwwww

うわっ助けてモコイ!

体型よすぎ!

もしかしてかつこいいんじやないの！

モテてそうで嫉妬汁!!!

連続今日寿郎

集まるな

散れゴミども

No. 9

荒らしやめろしwwwwww

鬼滅ごっこ邪魔すんなwwwwww

ppsh

嫉妬wwwwww乙wwwwww

有楽線沿いのアリア

もつとスペック晒せしwwwwww

おwwwwkwwww

蒼月@ファンパレ民

じゃあ手の写真

[image]

モ・／イノ、。イ、／・／

こいつら素行の悪いダークサマナーだから無視しろ  
No. 9

シユつとしててかつこいいじゃんwwww

ppsh

もしかしてこいつイケメンじゃね

有楽線沿いのアリア

手かつこいいね？

連日今日痔ろう

ダークwwwwwwww

草生やすだけで素行悪いはやめろしwwwwww

お前の方が態度悪いwwww

赤座

荒らし逝ってヨシ!!

蒼月@ファンパレ民

都内の大学1年

男

ピクシー?とかいうのがある

ゾンビとか倒した

No.  
9

つ、つええええええええ!!!

有楽線沿いのアリア

つよすぎる

ほんとに新入りか？

嘘だろ・・・

うわっ助けてモコイ！

正直馬鹿にしてたけど才能ありすぎだろ・・・

アカザ・クオリティ

強くない

蒼月はここ見るのやめて他スレにいけ

赤座

気持ちはわかるけどよ

嫉妬はやめて優しく教えてやろうぜ

いじわるいうなよ

連日今日痔ろう

つ w w w よ w w w w

こりや今のうちに媚び売つとくか w w w w w w

うわっ助けてモコイ!

異界つてレベル上げ用のステージあるから行くといいで w w w w w w w w

近くに異界あるか? w w w w w

連続今日寿郎

異界は悪魔が出るスポットだ

適性レベルじゃないと危ないからちちゃんとしたスレ行きなさい

p p s h

蒼月なら大丈夫だつて w w w w w w

でもいきなり異界は怖いよな w w w w w w w w

わかるわかる w w w w w

うわっ助けてモコイ!

ちよつと話して大丈夫そうなら行こうぜ w w w w w w w w

有楽線沿いのアリア

ゾンビ倒せてるからどこでもやってけるけどな w w w w w w w w w w

蒼月@ファンパレ民

色々教えて

異界？はわかんないけど学校の近くでゾンビ湧いてた

アカザ・クオリティ

ふざけてるとヤタガラス呼ぶぞ

有楽線沿いのアリア

すぐヤタガラスwwwwww

蒼月も覚えとけwwww

ヤタガラスつてまとめサイトあつて晒されるから気を付けろwwwwww

No.9

俺の友達も晒されたwwww

ppsh

正義気取りが叩きにくるから転載禁止つて書いとけwwww

赤座

ヤタガラス禁止つてなwwww

連続今日寿郎

ヤタガラスは治安維持してる組織

こんなところに書いてないでちゃんと話を聞いてもらえ



蒼月@ファンパレ民

ヤタガラス禁止

転載禁止

ドツペル原画

賢いwwwwww

エペ太郎

手際よすぎい!!

教え甲斐あるう!!!

うわっ助けてモコイ!

善意にはすぐ答えるのがこの世界で強くなるコツwwwwwwwwww

No.9

Tier表貼るわ

S ピクシー ガキ スダマ

A オンモラキ マンドレイク

B ケットシー ザントマン ゾンビ ブラックウーズ

C アガシオン ネコマタ

ランク圏外 スライム

ピクシー持ってるとかそりゃ才能あるわ

有楽線沿いのアリア

改めて見るとSランのピクシーとかうらやま

ppsh

素直に嫉妬です

うわっ助けてモコイ！

俺もマンドレイクいるけどピクシー欲しくて仕方なかった

エペ太郎

リセマラできたらなー

ドツペル原画

悔しいwwwwwwww

でも許せるwwwwwwww

仲間になるやつが強いのは嬉しいからなwwwwwwww

連続今日寿郎

ピクシーは強くない

取り消せ

赤座

俺とお前では価値基準が違うwwww

まあ嫉妬してたらそうなるよなwwwwww

嘘つくのやめとけwwww

見苦しいwwww

有楽線沿いのアリア

飛行能力持つて魔法も使える

しかも小さいので当たり判定も狭い

友好的で将来有望

こりやSランクですわ

蒼月@ファンパレ民

ピクシーとは仲良しです

言う事も聞いてくれるし色々教えてくれる

ドツペル原画

すっご

もう仲いいのかよ

うわっ助けてモコイ!

いくら友好的でもなかなか出来る事じゃないよ

有楽線沿いのアリア

いいサマナーってのは悪魔に好かれるんだ

連日今日痔ろう

あーあ

うらやまし

宵宮は良い飲み屋

なんかずるくて嫉妬

蒼月@フアンパレ民

そうでしょうか

お菓子あげたら魔法も使ってください

スレ見て喜んでます

アカザ・クオリティ

妖精はいたずら好きで気まぐれだがそんなに強くないから気を付けろ

ドツペル原画

いい加減もう嫉妬やめようぜ？

宵宮は良い飲み屋

俺たちの我慢も限界だよ



宵宮は良い飲み屋

蒼月が優しいのは利点だけど優しくしちやいけない連中もいるからそこんどこ覚え  
といて

蒼月@ファンパレ民

はい

有楽線沿いのアリア

荒らしが他のスレ紹介するけど騙しだから無視しろよ

No.9

俺も一回踏んで痛い目にあつたwwwwww

あいつらウイルス仕込んでるwwwwww

うわっ助けてモコイ！

注意してもマナー悪くてな

アカザ・クオリティ

誘導するから他のスレいきなさい

「初心者サマナーの歩き方スレ」

「【親切】ヤタガラス案内所【安心】」

「異界を探して3000キロ」

「ダークサマナー晒しスレ」

宵宮は良い飲み屋

また貼ってる・・・

もうやめようぜ・・・

うわっ助けてモコイ！

初心者狙うクズはどこにでもいる

連続今日寿郎

親切なフリはやめろ

No.9

荒らすなwwwwww

ppsh

蒼月が賢くてwwwwww悔しいのうwwwwww悔しいのうwwwwww

うわっ助けてモコイ！

嘘を嘘と見抜けないやつにサマナーは務まらない

モ・／~~ティノ~~、イ、／・／

一度スレ閉じて落ち着いて他のとこにいけ

初めてスレ使う人にこんな反応する場所があるわけないだろ

ゲーム初心者の自語りを他人が褒めてくれるか？

ドツペル原画

でもそれってあなたの感想ですよ？

宵宮は良い飲み屋

流石に雑魚には優しくしないよ

才能あるから伸ばしたいんだ

俺は孤独だから強い味方になってほしい

エペ太郎

疑ってくれてもいいwww

ゆっくりでいいから色々学んでくれwww

有楽線沿いのアリア

蒼月なら罨でも食い破る凄味を感じる・・・

No. 9

アカザ・クオリティ、連続今日寿郎はちよつとビビってるよなwww

まあ罨に引つかからない新人は怖いよなwww

蒼月@ファンパレ民

どうしたらいいかわからないので教えて貰えますか



連日今日痔ろう

おk w w w w w

まとめサイトとか見たことあるか？ w w w w w

エペ太郎

あるにw w w w w決まってるw w w w w

蒼月@ファンパレ民

ちよつとだけw

宵宮は良い飲み屋

いいねw w w w w

まとめだと何やってた？ w w w w w

連続今日寿郎

騙しにきてるぞ

離れなさい

うわっ助けてモコイ！

騙しw w w w w

まとめサイト見てるか聞いてるだけでw w w w w

有楽線沿いのアリア

決めつけwwwwww

だっせwwwwww

宵宮は良い飲み屋

反ワクチンwwwwww

陰謀がこわいんでちゆかーwwwwww

蒼月@ファンパレ民

まとめだとコピペ?とかありましたw

No.9

それだけじゃないよwwwwwwwwww

安価あるじゃんwwww

ppsh

安価!!!!

安価やれちまうのか!!!!?

うわっ助けてモコイ!

危ないからやめようぜwwwwww

エペ太郎

でも蒼月ならできそうwwwwww

連続今日寿郎

やめとけ

蒼月@ファンパレ民

安価

下から何番目の人の言う事を聞くってやつ？

宵宮は良い飲み屋

そうそうwwwwww

赤座

突然街中でさけぶとかはやめろよみんなwwwwww

連日今日痔ろう

わくてか

蒼月@ファンパレ民

やってみます

難しそうならやめていい？

連日今日痔ろう

okwwww

連日今日痔ろう

w k t k

エペ太郎

いいにきまつてるし！

宵宮は良い飲み屋

た w w w w の w w w w し w w w w w w w w w w w w w w w w

アカザ・クオリティ

やめとけ

蒼月@ファンパレ民

←5

モ・／~~テ~~イノ、。イ、／・／

スレ閉じる

ドツペル原画

今どこで何やってんの w w w w w w w w w w w

アカザ・クオリティ

閉じる

赤座

今何たべてんの w w w w w w w w w w w

うわっ助けてモコイ!

どこ住みか言う

あと今何やってるか

連続今日寿郎

ヤタガラススレに行く

モ・／~~テ~~イノ、イ、／・／

スレ閉じる

アカザ・クオリテイ

スレ見るのやめる

ドツペル原画

大声で走り回るwwwwww

うわっ助けてモコイ!

やったぜ

エペ太郎

安価wwwwとwwらwwれwwたwwww

宵宮は良い飲み屋

俺が安価踏みたかった・・・

蒼月@ファンパレ民

都道府県でもいい？

うわっ助けてモコイ！

いいよw

有楽線沿いのアリア

近所だったら仲良くしようぜw w w w w w w w w w

蒼月@ファンパレ民

東京住み

近所のマックでご飯食べてる

p p s h

都会じゃんw w w w w w w w

No. 9

マックいいよねw w w w w w w w

宵宮は良い飲み屋

荒らしw w w w w w w w

もう諦めとけてw w w w w w w w

蒼月なら聞かないからw w w w w w w w w w

赤座

おつとwwwwww

なんと奇遇なwwwwww

俺都内住んでるwwwwww

会えちやうなwwww

連日今日痔ろう

おいおいおい

俺も会えるwwwwww

有楽線沿いのアリア

あwwwwたwwwwしwwwwもwwwwwwww

ppsh

いつちやえwwwwww

蒼月@ファンパレ民

やめてw

赤座

今後ろにいるから振り返ってみwwwwwwww

連日今日痔ろう

俺もwwwwww

蒼月@ファンパレ民

びっくりしたw

有楽線沿いのアリア

取られちやった

おつかれ

No. 9

おつ

ppsh

時々いるけどこれで引つかかるやつらってなんなんだろうな

頭お花畑かよ

エペ太郎

まとめスレとかのノリらしい

あれは匿名なのにここだとアホみたいなハンドルネームにしてたほうが引つかかる

宵宮は良い飲み屋

ひよえー

あんなん面白いとこだけ抽出して会話してるかのように見せかけてるだけじゃん



うわっ助けてモコイ!

セキユリティーガバガバの画像で笑っちゃったよね

手を晒してなんなんだよ

すぐ住所抜けたぞ

p p s h

わからん

手を斬って欲しいのかな

有楽線沿いのアリア

ネットで流行ってる言葉とか使おうと引つかかるから勉強してるけど

自然と出るようになってしまった

うわっ助けてモコイ!

流行りの語録より古臭い死語とノリのほうが引つかかるのなんなの

赤座

ちよつと骨折っただけでびいびい泣きやがる

連日今日痔ろう

そう言うな

食べ物あげないからピクシーに無視されてた可哀そうなやつだから

宵宮は良い飲み屋

ネットにプログラムがばら撒かれてこういう馬鹿が増えたな  
うわっ助けてモコイ！

増えて問題起こされても俺らも困るんだよな  
締め付け厳しくなる

連続今日寿郎

おまえら

ヤタガラス呼んだからな

有楽線沿いのアリア

どうせ自己責任だから来ないよ

無駄なことやめときなっ

親切にしたのに聞かなかったこいつが悪いって

連続今日寿郎

悪いのは嵌めたおまえらだろ

No. 9

そりゃ俺らのライフワークだからしょうがない

うわっ助けてモコイ！

嘘を嘘と見抜けないやつにサマナーは務まらない  
アカザ・クオリティ

ふざけるなよ

命をなんだと思ってる

赤座

金になる尊い物だ

人は売れる

連日今日痔ろう

こいつただのスマホ使ってやがった

単なる馬鹿だ

うわっ助けてモコイ!

実質セキユリティー無しじゃん

ひと昔前なら問題無かったんだがなあ

エペ太郎

上司が死んだから稼ぎ方がわからなくなったのが痛い

この凌ぎのほうが本業になりつつある

うわっ助けてモコイ!

手伝ってやろうか

エペ太郎

近寄るな

赤座

最近羽振りがいいやつがいるんだけどよ

ヤタガラスの名前騙って脅してる金集めてるとか

連日今日痔ろう

あーあいつらか

俺らも真似してみるか

宵宮は良い飲み屋

ヤタガラスは近寄らないほうが良いぞ

赤座

大丈夫だろ

ちよつと小突いて脅して回るだけだぞ

有楽線沿いのアリア

騙りはやばいよ

ヤタガラスがブチ切れる案件

最近都内のヤタガラス殺した馬鹿が出て連中かなりイライラしてるんだから  
赤座

それさっきの話の奴かもな

連日今日痔ろう

あー

即死持つてんだっけ

うわっ助けてモコイ!

ヤタガラス殺しとか身の程知らずだろ・・・

あいつらすぐ蘇生するし次から次に追跡者を送るぞ

面子重視してるから小銭稼ぎで相手できる手勢じゃない

赤座

知らねー

上のやつが死んで抑えが効かなくなったんだろ

元から話聞かない連中だから力で抑えつけてたって話だし

有楽線沿いのアリア

都内のダークサマナーが殺されまくったのにこれでヤタガラスがキレたらどうして  
くれんの

赤座

だから知らねえって

No. 9

あくあ

もう終わりです

赤座

そんなまずいのかよ

連日今日痔ろう

あいつら人数いるからフクロ口にできるんだが

有楽線沿いのアリア

単純な話そいつらを抑えつけてた上の連中を更に抑えつけてたのがヤタガラス

ppsh

最近ヤタガラスは殺す口実作ってるとしか思えないくらい刺激してくるから気を付

けろよ

うわっ助けてモコイ!

金に釣られたやつ皆いなくなっちゃった

サガミ怖すぎ

うわっ助けてモコイ!

もう神奈川いけねえよ

有楽線沿いのアリア

【「親切」ヤタガラス案内所【安心】】を眺めてたらここ晒されてたんだけどやばくない?  
?

連続今日寿郎

手が空いているいるヤタガラスの方、どうにかなりませんか

【「初心者」おれ、悪魔召喚プログラムつてのを拾った】

サガミ

ちやうど話を聞くとところだったので今から会います

うわっ助けてモコイ!

逃げろ卑怯者!!

宵宮は良い飲み屋

逃げろオ!!

No. 9

サガミはまずい!

死ぬ・・・!!死んでしまおうぞ今日痔ろう!!

エペ太郎

今から会いますって怖すぎるだろ

どんな情緒してんだよ

サガミ

もう会いました

骨折ったくらいでぴいぴい泣くなよ

p p s h

ひ、こえええええええ

No. 9!

!!!!

有樂線沿いのアリア

!!ガミがあたしの近くにいてコト!?

うわっ助けてモコイ!

もう日本いらねえよ怖すぎるだろなんだこいつ

ドツペル原画

くそでつけえ犬を引き連れてた

骨折るところか腕食ってた



エペ太郎

近くにいいのか

逃げたほうが良いんじゃないか

ドッペル原画

もう逃げてる

ドッペル原画

あ

サガミ

逃げれてないよ

ちよつと話聞いただけ

宵宮は良い飲み屋

こつわ

東京は魔境かよ

絶対行かない

p p s h

怖いのは東京じゃないんだよなあ

No. 9

逃げられないとかマジ？

これもうヤタガラスの居場所報告スレ作らないとダメだろ・・・

有楽線沿いのアリア

DDS | Netスレだとヤタガラスも確認できる

No. 9

鍵付き使うか、独立掲示板くれ

うわっ助けてモコイ！

有名どころだとスパモン教とメシア教が持つてる

ppsh

実質選択肢無し

宵宮は良い飲み屋

スパモンはどうなん

エペ太郎

不死が満足するまでスパーリングする試験と称した拷問をクリアしないと入れない

うわっ助けてモコイ！

バカがよ

宵宮は良い飲み屋

メシアはどうなん

p p s h

論外だろ

ダークサマナーからメシア教に入れても前線の駒

そもそも拠点の横浜で金銀カルトが自爆テロ起こしてる時点で権威も力も糞もない

No. 9

あいつらはうんこ製造機ではあるから糞はある定期

有楽線沿いのアリア

当分は静かに過ごすよ・・・

p p s h

エロ談義してたのが懐かしいよ・・・

No. 9

深夜のファミレス行ったらあいつらの誰かしらはいたからな・・・

ファミレスや漫画喫茶、カラオケボックスは俺たちの憩いの場だった

有楽線沿いのアリア

ドリンクバーで故郷の水と称して泥みたいなドリンク作ってたシャンクスはもうい

ないんだ・・・

No. 9

酒を呑みまくって管を蒔くシャンクスはもういないんだ・・・

p p s h

ゲロ吐いて「片腕は未来に託した・・・」とか言いながら袖を引き千切って拭こうとするシャンクスはもういないんだ・・・

宵宮は良い飲み屋

碌な奴じゃねえな

p p s h

目が赤いデブおやじをシャンクスって呼ぶのつらかったから死んでくれて良かった

かもしれん

有楽線沿いのアリア

夏場は臭い

No. 9

冬も臭い

エペ太郎

死体蹴りやめてやれ